

ダンジョンで様々な出会いをするのは間違っているだろうか

ダーク・シリウス

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

気がつけば異世界にいた。どこ、ここ?と放心していると朱色に糸目の女性に声を掛けられた。

「自分、うちの眷族にならん?」

その一言で俺の異世界人生が始まって、後に直ぐ自分の身を顧みず強さを異常にまで求める金髪幼女、雨の中で同じ境遇の異邦人でありながら復讐を臨む銀髪の幼女と出会う――。

目次

キャラクター情報	1
短い間だが【ロキ・ファミリア】に入った。9年〜8年。	
冒険譚0	6
冒険譚1	24
冒険譚2	48
冒険譚3	69
冒険譚4	87
冒険譚5	109
冒険譚6	132
短い間だが【ヘファイストス・ファミリア】に入った。7年。	
冒険譚1	152
冒険譚2	171
冒険譚3	185
冒険譚4	205
冒険譚5	221
冒険譚6	236
冒険譚7	259
冒険譚8	277
冒険譚9	298
冒険譚10	316
冒険譚11	332
冒険譚12	346
冒険譚13	360

冒険譚 1 5

冒険譚 1 4

冒険譚 1 3

冒険譚 1 2

冒険譚 1 1

冒険譚 1 0

冒険譚 9

冒険譚 8

冒険譚 7

冒険譚 6

冒険譚 5

冒険譚 4

冒険譚 3

冒険譚 2

冒険譚 1

短い間だが【ガネーシャ・ファミリア】に入った。6年。

冒険譚 2 2

冒険譚 2 1

冒険譚 2 0

冒険譚 1 9

冒険譚 1 8

冒険譚 1 7

冒険譚 1 6

冒険譚 1 5

冒険譚 1 4

856

842

830

807

785

768

744

723

703

690

672

655

637

615

595

566

538

518

489

460

424

407

390

377

冒険譚 9

冒険譚 8

冒険譚 7

冒険譚 6

冒険譚 5

冒険譚 4

冒険譚 3

冒険譚 2

冒険譚 1

短い間だが「フレイヤ・ファミリア」に入った。5年ぐ。

冒険譚 30

冒険譚 29

冒険譚 28

冒険譚 27

冒険譚 26

冒険譚 25

冒険譚 24

冒険譚 23

冒険譚 22

冒険譚 21

冒険譚 20

冒険譚 19

冒険譚 18

冒険譚 17

冒険譚 16

124012261205118811761164115311371122

110510881067104410281015 999 983 967 946 934 921 907 887 873

冒險譚 3 4
冒險譚 3 3
冒險譚 3 2
冒險譚 3 1
冒險譚 3 0
冒險譚 2 9
冒險譚 2 8
冒險譚 2 7
冒險譚 2 6
冒險譚 2 5
冒險譚 2 4
冒險譚 2 3
冒險譚 2 2
冒險譚 2 1
冒險譚 2 0
冒險譚 1 9
冒險譚 1 8
冒險譚 1 7
冒險譚 1 6
冒險譚 1 5
冒險譚 1 4
冒險譚 1 3
冒險譚 1 2
冒險譚 1 1
冒險譚 1 0

1744171816991687166716471627159715681558153815271509148714721457141513831358133513151303128712731258

短い間だが色んな「ファミリア」の仮団員として入った。4年。

冒険譚 3 5
冒険譚 3 6
冒険譚 3 7
冒険譚 3 8
冒険譚 3 9
冒険譚 4 0
冒険譚 4 1
冒険譚 4 2
冒険譚 4 3
冒険譚 4 4
冒険譚 4 5
冒険譚 4 6
冒険譚 4 7
冒険譚 4 8
冒険譚 4 9
冒険譚 5 0
冒険譚 5 1
冒険譚 5 2
冒険譚 5 3
冒険譚 5 4
冒険譚 5 5
冒険譚 5 6
冒険譚 5 7
冒険譚 5 8

216721522137212221102099208420622053202420121996197919621947192619111894187918641838182017841758

冒險譚 6 1
冒險譚 6 0
冒險譚 5 9

221922062186

キャラクター情報

ダンジョンで様々な出会いを求めるのは間違っているだろうか
キャラクター情報編

主人公

兵頭一誠（イツセー）

今作のオリキャラクター主人公。いつの間にか異世界に来てしまい、愕然と呆然の境地にいて佇んでいるところロキに「ファミリア」の加入の誘いを受け、衣食住の確保と異世界の情勢を調べるため、『一年間』と期限の条件付きで「ロキ・ファミリア」に加わった。

結城明日奈（アスナ）

SAOのキャラクター。一誠と同様に異世界に来てしまった異邦人。眷属を求めていた女神アルテミスと出会い、元の世界に戻る手段や衣食住の確保を得るために「ファミリア」に副団長として入団した。同じ異邦人（人型ドラゴン）の一誠と出会いを経て度々交流をして過ごしていたが恋人の浮気を発覚して感情的になって一方的に別れを告げた後に「ファミリア」から飛び出し、同年代で一人暮らし（居候と同居人はいたが）して一誠の城で居候することとなった。老若男女と神に好かれやすい体質と数多の女性（異世界の女性も含む）と恋仲の関係であることを知り、一誠を通じて複数の女性と付き合っている様子を見ながら自分の気持ちを整理する中で元の世界で出会って不治の病で死んだ戦友が、一誠の世界にいる紺野木綿季（ユウキ）の存在と直接出会ったことが切っ掛けで、元の世界に帰らずかつての戦友との約束を果たすために異世界へ向かうことを決意する。

アリサ・イリーニチナ・アミエーラ（アリサ）

GOD EATERのキャラクター。一誠と明日奈同様に異世界に来た異邦人。アラガミという化け物が跋扈する世界で両親が目の前でアラガミに喰われたのを最後にいつの間にか雨降るオラリオにいた少女。そこで一誠と出会い、両親を食い殺した化け物に復讐するための強さを得たいと打ち明けたことで一誠に保護され、二番目の弟

子となって強さを身に着けていく。

転生者

大和太輔

別の世界で死んだ転生者。極東でアマテラスの都市を乗っ取ろうと太陽神の眷族を秘密裏に捕えてはなりすまし、天界の頃から不仲（一方的な追い掛け回し）のイザナギとイザナミに接触し、煽り、騙しては攻め入れさせた。途中までは企み通りに事が進んだが、たまたま食材集めに来た一誠の手で止められて戦うも敗北する。だが、イザナギとイザナミが起こす戦災の被害者の集落に助けられた事実が発覚して、真の目的は別にあると一誠とリヴェリアは踏んだ。その後、今までの罪を償う意味でアマテラス達に協力することになった。

武宮光司

別の世界で死んだ転生者。相手に触れることで「ステータス」を奪い己の力として糧にする特典を得てから、何十人の冒険者から「ステータス」を初期化にして奪い続けていた。必然的に神々達はこれを危惧して、一誠とアスフィの合同作の相手の情報を閲覧できる道具アイテムで転生者を追い詰める。最後は一誠に捕えられてこつぴどく酷い目に遭い、心をへし折られてからギルドの牢獄に収監される。

三人組の転生者。

別の世界で死んだ転生者兼「イシユタル・ファミリア」の眷族。それぞれ某アニメキャラの姿に不死身の能力をはじめ最強の能力を特典として得て我欲に肉欲、性欲を抑えずアマゾネス達と日々体を重ねて生活をしていた。実力は第一級冒険者のフリユネをも凌駕するが、三人の態度と傍若無人の言動に主神イシユタルをはじめ一部のアマゾネス達は忌避していた。それでも打倒フレイヤのために必要な戦力として好きにさせていたが、あまりにも好き勝手で身勝手なことをされ続けてイシユタルはついに行動に出た。目論見通り「フレイヤ・

ファミリア」のホームを壊滅、【おうちや猛者】オツタルも石化してフレイヤを捕縛するところまではよかった。しかしイシユタルの思惑に反して【ロキ・ファミリア】の男性団員を石化し、女性団員や町娘、他派閥の女神や冒険者達にまで手を出して強姦・凌辱のために誘拐した。ロキの通信で駆け付け事情を知った一誠が石化したフィンとガレス、オツタルを復活させて【イシユタル・ファミリア】のホームに強襲。地下空間で攫った女性達を強姦しようとしていた転生者達と交戦、圧倒的な力と実力で倒して女性達は救われた。その後、三人の魂を弱味にして大人しくさせたが『幽玄の白天城』の敷地に不法侵入され、二度目の侵入によってアジ・ダハーカ、ゾラード、ネメシス達と18階層で交戦の末に再び死んだ。

光輝勇

別の世界で死んだ転生者。勇者として転生を果たし、特典として最強で無敵の装備や魔法を得てからオラリオに向かうまでは旅をしていた。オラリオの門を潜り【ファミリア】に入団しようと最大派閥の【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】に拒絶された末に【アポロン・ファミリア】に入団（本人の意思に関係なく）。前回の戦争遊戯ウォーゲームのリベンジとして運動会に臨む【アポロン・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の交戦の最終決戦にて一誠と勝負するも手も足も出ずに敗北。

海堂剛

別の世界で死んだ転生者。元の世界でのマンガから好きな女性キャラクターを具現化して一緒に冒険者になろうと、特典で願いを叶えたが目論見が外れて、腹を空かせた女性キャラクターに蹴られて『異世界食堂』の扉を壊してしまった。その扉の弁償として半ば強制的に働かされる日々を送っている。だが、今では安定した生活を送られて満更でもないように積極的に働いている。

オリキヤラ。

ダオス・ラーズグリーズクリールフス。

王位継承順位百七位の王子。次期帝国の王を、前王の望みで世界中から連れてきた料理人の料理で決定することとなり、他の王位継承の王子が行きたがらないオラリオへ老執事の従者と共にやってきた。そこで『異世界食堂』を切り盛りする一誠と出会い、一誠を帝国に連れていくことを決意する。騎空挺で帝国に戻りその日の内に一誠は一柱の神と四人の従者に異世界の料理をごちそうしてからというもの、ダオスの順番が来るまで振舞うことになった。諸事情で順番が早く回ってきて前王に料理を振舞う際、帝国の前王は転生者であることが発覚。更に前王は一誠を連れてきたダオスを次期帝国の王に任命したが、本人は王になるよりも自国と領の治安維持と帝国が起こす戦争の停止と戦災の被害者の保護と援助を求めた。それから度々主神と前王に従者達と密かにオラリオへ赴き『異世界食堂』に足を運ぶようになる。最近では二人の姉妹も連れてくるようにもなった。

レイネル・ヴァーネ、レギン・イルヴィーネ

帝国で奴隷商人に捕まっていたアマゾネスの少女。両親に捨てられ売られた経緯を持ち、一誠とアルガナ達に助けられ（特にバーチエに懐く）オラリオに移住し【ロキ・ファミリア】の団員として『幽玄の白天城』に住む。

フィリラ・アークライト・ロライヤル

奴隷商人に捕まっていたヒューマンの女性。元【レティシア・ファミリア】のLv. 2の団員であり団長。二つ名は【剣の乙女】。帝国の圧倒的な数で責められ、王位を継承できた暁に妻として迎え入れる王子の計らいで奴隷商人に預けられていたところ、一誠達に救われる。オラリオに移住してから【ロキ・ファミリア】の団員となり『幽玄の白天城』に住む。

ラトラ・ハクコ

ワレタイガ

虎人の少女。白い耳と髪、尻尾が特徴で珍しいと称賛されるが、生まれた頃から目が見えずいつの間にか奴隷商人の牢屋に閉じ込められていたのだった。そこへ奴隷の開放目的で活動していた一誠達に助けられ、オラリオに移住した末に光を取り戻してくれた一誠に深い

感謝と敬愛以上の感情を芽吹き【ロキ・ファミリア】の団員となった。

バヴェル

オラリオの経済の中枢を担う三大商会の一角の【ファミリア】の主神。オラリオ外にも手幅広く商売することで一誠の目に留まり、軽く一億以上の報酬金額を出すので大切な顧客として契約する。結果としてお互い必要な取引相手として依頼するときは必ず声を掛ける。『奴隷国』にてこの世に一つしかない物（エロ本）を求めて一誠に騎空艇を乗せてもらうほど良好な関係である。

シルヴィー・ホワイト

家^{シル}妖^キ精^{キー}であり魔法^{マジック}種^{ユーザ}族^ザ。訳ありで『奴隷国』の高級奴隷として捕まっていた。最初は奴隷の開放目的で購入したが一誠の正体を知った上で『幽玄の白天城』に住み着き、メイドとして生活を送る。

???

ヒューマンとオーガの混^{ハイブリット}血^ブ種^{ット}。『奴隷国』の主神の眷族であり、自分を産ませた張本神によって闘^{テルス}国^{キユラ}と何ら変わらない生き方をさせられ続けた中でL.V. は5まで成長し、主神の計らいでオラリオの冒険者と交戦の末に敗北。一誠の提案（ほぼ脅迫か脅し）で改^{コンバージョン}宗^バ状^ー態^{ジョン}でオラリオに移住かつ『異世界食堂』の従業員として働かされるのであった。

???

世にも珍しい竜^{ドラゴ}人^{ニュー}の種^ト族^トの女性。高級奴隷として捕まっていたところ一誠に買われて故郷に送り返す提案も拒否、ならばと『異世界食堂』の従業員として働かされることになった。

短い間だが「ロキ・ファミリア」に入った。9年〜8年〜。

冒険譚 0

「ほい、終わったでー。これで自分はうちの眷族や」

女神の作業を終えるまで待つていた背部の鎧を晒し、背中に刻まれた道化が笑みを浮かべている徽章を鏡越^{エンブレム}してまじまじと一頻り見つめる少年は、朱髪に糸目の女神へ視線を変える。

「これが【ステイタス】・・・遊戯^{ゲーム}めいた成長記録を綴ることが自身で体感できるとはな。何とも言えない気持ちだ」

「うちは興味深々やでー？これから自分の子供がどれだけ成長するか楽しみにしながら見守る。それが神の勤めや」

特にアイズたんは楽しみや！と少女の成長する姿を想像しながら、グへへへ、と変態的な親父の笑みを浮かべる女神の第一印象が確定した。少年は「駄女神」と心の中で零して。

「そんじや、次はギルドに行つて冒険者になるんやーつて登録を済まさんとな。さっきの子と一緒に最大派閥^{ゴク}の副団長と行つて来いや」
「わかった」

短く肯定し、女神の部屋を後にした少年がいなくなるまで見送り、傍に置いた二枚の羊皮紙に目を落とした。二枚分のそれは今先程、女神の眷族になった少女と少年の【ステイタス】を写したばかりで基本的な能力値は全て0と記されているが女神は神妙な面持ちで呟いた。

「・・・なんやろうなあ、この『スキル』」

そんなこんなで俺、兵藤一誠は理由も分からないまま異世界、しかも冒険者の一人となって生きることになった。しかもだ。俺が知る男のロキではなく女のロキ。最大派閥つて主神の一柱とも呼ばれ、この世界の神は娯楽に飢えて下界に降臨したそうだ。解せん・・・大いに理解できない、神とは思えない人間臭さを醸し出してどこを敬えばいいのか首を傾げる。まあ、こっちはこっちで派閥に迷惑掛けな

い程度に好き勝手させてもらうがな。そーいう契約の一つだから問題はないだろう。貢献しなくちゃならんが。さて、異世界のダンジョン、白亜の摩天楼施設の巨塔『バベル』が蓋として機能しているその真下に件のダンジョンがある。俺は同期の幼女と歳も冒険者としても先輩の副団長を務める肩口に切り揃えた翡翠の髪のエルフと『大穴』と長い螺旋階段を降りて『上層』1階層に足を踏み入れ……『ギィアアアアアアアアアアアアアアアッ!?!』

飛び散る肉片、舞う血飛沫、打ち上がる断末魔の叫び。幼女がモンスターを、爆砕した結果を見て思わず唾然とする。その後、何かに駆られるようにして胸の奥から叫び同族の血の臭いに引かれ、モンスターの群れが迷路の先々に集まっているところへ向かって斬り掛つた。

「……俺の出番、ないなこれ」

「すまないな」

「まあ、強くなりたいてって気持ちは痛いほど分かるけど……我武者羅で自分の事なんて二の次って感じするな。あれ、放っておいたら早死にしそうだぞ副団長殿？」

新人の俺にまで言われてエルフの副団長は「わかってる」と幼女——アイズ・ヴァレンシユタインへ歩み寄った。その背中を見送り、アイズに話しかけるその様子はどこか親子、無理を言えば姉妹のようにも見えなくない。

「強くなりたいその憧憬……もしかしたら俺以上かもしれないな」
その原動力は何なのか定かではないがな。と心の中でぼやきながら真後ろから襲いかかろうとしたモンスター『ゴブリン』へ振り向かず、管理機関キドルドから支給された大剣で頭に『ギツ!』と突き刺し絶命させた。

「おい、お前の後ろにモンスターがいるぞ」

「ん? ……あ、ほんとだ。何か刺さったと思ったら」

(偶然か……?)

腰に差している鞘に大剣を収めようと失敗して、丁度真後ろにいたモンスターに当たってしまったとエルフの副団長は多分そう感じて

いるかもしれない。今はまだ……俺の実力を知られちゃ駄目だろうな。知られたら最後、面倒事になる。しばらくは手加減しておく。

「で、どうだったん？あの子らの様子は？」

女神の問いかけにエルフの副団長がありのままに事を告げた。ダンジョンで小一時間も籠ることも無く、幼女の武器が荒く扱われたせいで耐久度が半日も保てず壊れてしまい、早々に本拠地フエミリアに帰還したのだった。

「アイズの方は大方予想していた通りだ。自分の危険を顧みない。己の目的のために力に執心しすぎている」

「もう一人の方は？」

「あの子に全部狩られてしまつて一匹しか倒せないでいた」

終始、案山子のように棒立ちしていたと、女神を「あー、圧倒されたやろうなあ」と苦笑する女神の他にも苦笑いを浮かべている金色の髪に碧眼の小人族バルウムも「かもね」と相槌を打つ。

「明日は一人でダンジョンに行く』とどこか悔しげだったが、あの子の心情を見透かしたような事も言っていたな」

「ほう？それは何じゃ」

筋骨隆々に伸ばして蓄えた髯をさする初老のドワーフにエルフはこう言う。

「『強くなりたいたい』という気持ちは分かる』」

今まさにアイズと言う幼女が誰よりも憧憬していることだった。初めて出会い、初めて一緒にダンジョンに潜って、初めてモンスターを倒した幼女の気持ちを分かるものなのか？あの時は軽く流していたが改めてどうしてあんな言葉が口から出てきたのか不思議だったのだ。

「アイズ」

自分の部屋に帰ろうとしていた幼女は声をかけられた。振り返る

と、一緒にダンジョンにいたドラゴンを模した真紅の全身型鎧フルプレートの少年が朗らかな表情で近づいていた。

「お前の部屋はこっちか。俺もこっちだから」

それだけなら勝手に行けばいいと前に顔を戻した。たまたま行く道が同じなだけで他に何かあるのかと興味も関心もなくして少年への意識を消した。

「強さの果てに何を望む」

「！」

望んでやまない渴望の核心を問われた。逸らした意識をまた向け直し、兜を外して顔を晒して見下ろす視線と見上げる視線とぶつかった。同じ金色の瞳であるが、どこか異なっていて改めて見ると……。

この人の目の……私と似ている……？

獣のような垂直のスリット状の瞳から覗ける強い意志の光。だがそれだけじゃない、更にその奥を見ていると、黒い炎とは違う鮮やかな真紅の炎を孕んでいた。

「アイズは強さの果てに何を望む？」

「……それってどういうこと」

「強くなったらお前は何をしたい？と聞いている」

何がしたい……？そんなの、もう決まっている！アイズの瞳の奥に黒い炎が燃え盛り、少女を焦がすようになったものを口から意思の強さと共に示した。

「大切なものを取り返したい……ただそれだけ」

悲願の為にと心の中で最後に付け加え答えてみれば少年は苦笑いを浮かべていた。

「ふーん、不思議な願望だな。俺とは大違いだ」

「……？？」

俺とは大違い。この人も強くなりたいと思った時期があつたのだろうか。他者に対して関心を寄せず強くなる事にしか頭がないようにしていたアイズはこの時だけは興味を抱いた。

「……あなたも強くなりたいの？」

「強くなりたくない奴なんていないほうがおかしいだろう。でも、そ

の強くなりたいと言う気持ちの強さがお前と似ていた。それだけさ」「じゃあ、貴方が強くなりたい理由はなに？」

何となく聞いてみたら少年は「あー」とどこか困って言い辛そうに苦笑い。でも、口を開いた。

「うーんと、ぶつちやけ教えるとだな。俺はアイズと同じぐらい小さいときにな。同族の同世代の子供達の中で一番弱くて、よくイジメられていたんだ。実の兄にも兄弟の絆を捨てられるほど虐められた。しかも、その兄から殺されかける始末だ。だから弱い自分が許せず、見返す為にも強くなりたいと子供の頃から強くなる為の修行や特訓、鍛錬をし続けた。んで、現在もその最中で今に至る」

アイズにとつてくだらねー理由だろ？と自嘲する少年の話は馬鹿に出来ない小さく首を横に振った。強くなる為にこれからも自分と同様モンスターを狩り続けるのだ。くだらなくもおかしくもない。理由は違えど自分と自分^{アイズ}と同じ似た気持ちを抱いているならこの人は理解者だ。

「……少しだけ、分かった」

「そっか。ありがとうな」

無造作に頭を撫でられたその瞬間。父親に撫でられる時に感じる温もりが甦った様に温かかった。撫でられても不思議と嫌じゃなかった。

「んじゃ、強くなりたいアイズちゃんに強くなれる方法を教えようか？十代ぐらい成長していたらかなり強くなっているぐらいのな」

「！」

「同期でこの派閥に入っても人生の方は俺が一番経験している。何より世界中旅していたから強くなる方法は理解している。どうだ、聞きたいか？」

この次にどんな反応をするか分かり切って心の中で盛大にいやらしい笑みを浮かべている少年の目には、一生懸命身を乗り出そうとつま先を立たせて少年から強さの秘訣を聞き出そうとする少女が映った。

「教えてっ！」

「ああ、いいぞ。まず一番大事なのは戦いに関する知識だ。それもモンスターの情報がアイズを強くしてくれる。要は勉強しろって事だ」
「……勉強」

期待していた強さの秘訣とは全然違う。と、そう不満げな顔を隠そうとしないアイズは、聞いた私が駄目だったと歩き始めたその背中から。

「アイズ。強くなりたいなら、強くなりたい自分にとって必要な強さを色んな所からもらっておいても悪くない。強くなれる勉強は無駄かどうか、一度ぐらい勉強してから決めてもいいんじゃないか？」

「いい、勉強しなくてもモンスターは倒せる」

「確かに。でも、相手を知らないで自分のことすら知らないアイズは——一生、強くなった後に成し遂げたい悲願を達成することはできないな」

聞き捨てにならない事を言われ、歩みを止めて強く言い返す為に振り返った先に跪いてアイズと同じ視線を合わせている少年がいた。

「仮にお前の両親は冒険者だったとして訊くぞ。無駄だと決めつける勉強も含め、きつとお前の両親だって誰でもするような事をしていた筈だ。両親でもしていた事を冒険者になつたアイズがしないのはおかしいだろう？」

「っ」

「母親も料理を作る時は誰かに教わっていた、父親も冒険者になつたばかりは強くなる為にも勉強をしていた。お前の両親に限らず皆が何かしらの勉強をしているんだ。それをしないというのは生きるのも強くなるのも嫌だつて拒否することだぞ？」

分かりやすく諭され、言い返すこともできない。両親をダシに使われて、悔しげに少年へ睨むように見つめるアイズは拳をギュツと握った。

「もう一度言うぞ。強くなりたいなら強くなるために大事な事は全てやらなきゃ駄目だ。しなきゃ一生弱いままのアイズでいることになる。それでいいのか？」

嫌だ、強くなりたいのに弱いままなのは嫌だ。でも、勉強はもつと

嫌だと子供らしく心の中で駄々をこねるアイズ心情を露にも知らない少年は困ったように眉根を寄せた。

「どーせあの副団長の事だ。お前には心構えが必要だーとか言つて勉強させられるかもしれないぞ。勉強しなきゃダンジョンの出入りを禁止だーとかも言われるなんて、それこそ嫌だろう？」

「うっ……」

確かにそれは嫌だと呻く。悲願の為に強くなりたい願望を、更なる高みへの渴望の根源が禁止されることになれば本末転倒だ。しばらく考え込むアイズは何が大事で何が大切か自分なりの天秤を計つて……頭を垂らした。それから翌日の朝食後、翡翠の髪のエルフの自室にて何冊もの分厚い本が置かれたテーブルの前に座り嫌々そんな面持ちで勉強をする幼女とそれに付き合う若い少年がいたのであった。

当初、アイズの反抗を予測していたが意外な方、少年から「ついでに読み書きできないから教えてほしい」と乞われてしまい、二人の面倒を見る羽目になってからアイズは大人しくエルフの教授に従っているのだ。これには少々面を食らい、ペンを持って白紙のノートに書き留めていくその様子に不思議と怪訝な気持ちになるが取り敢えず良しと判断した視線の端では。

「共通語コイネーすら読み書きできへんなんてどんだけ田舎の中で育つたん？」

「うっさい、そーいうのと縁がないところで育つたんだよ俺は。悪いか」

「逆に珍しいわーって感心やー。後それ、違うでー。ええ歳して間違うなんてダサッ」

「……女神とは思えない貧乳駄目神に言われた。すんげーシヨック」

「誰が貧乳駄目神やあッ!?!」

アイズと少年以外に一人、この部屋にお邪魔させてもらっている女神が、少年に共通語コイネーを教えていたが売り言葉買い言葉、喧嘩にまで発展してしまい最後は五月蠅いとエルフの拳骨を（少年は主神を盾にし

た) もらった勉強の日は騒がしかった。

そんな勉強会が終わるとアイズはリヴェリアと共にダンジョンへ直行したのに対して少年は町へ繰り出した。そこで改めて気付いたことがあった。どこか気を張っている住人や巡回パトロールしているギルド職員や冒険者の姿。

まるでテロリスト、暴徒に対して警戒しているような雰囲気かヒシヒシと肌に伝わる。この都市に集団規模の騒動を起こしている輩でもいるのかとダンジョンの出入り口、『摩天楼施設バベル』がある中央広場セントラルパークから『冒険者通り』という東のメインストリートへ進んだ時。無遠慮過ぎる強い視線を感じ取った。

(この視線……あの女神と似ているなあ)

向けてくる無遠慮な視線を感じる方へ、白亜の巨塔の最上階へ鋭く睨みつけた。

真紅のドラゴンを模した全身型鎧フルプレートの者を、銀髪の女神は壁の窓張りに手を添えて 今も尚無遠慮な視線を注ぐ。

「見たことのない魂……多種多様な数多の魂を持った貴方の魂は色ではなく風景を見せてくれるなんて」

どこまでも澄んでいる美しい空、どこまでも広大でどこまでも深い大海原、どこまでも広く自然豊かな大森林、そして何ものにも照らし包む暖かい光を発する太陽……。それらを囲むのは複数の漆黒、金色、紫、赤、透明、深緑の魂達。

女神の銀瞳は愛玩具を得た子供のように輝き始める。今まで見たことのない本質を、才能を、輝きを『魂』に——一目で魅了されてしまった。魅入ってしまった。見惚れてしまった。この美の女神とあろう神がだ。故に——欲しい。久しく感じていなかったこの感覚。全身がぞくぞくと打ち震え、下腹部は疼き、恍惚の吐息が喉の淵から溢れ出してくる。あの魂を持つ者を今すぐ手に入れたい。そして死ぬまで傍らに置きたい。この胸の奥底から湧き上がる高揚感を抑えることはできない。否、抑える気は毛頭も無い。

「……関わるのも面倒かもな。ぶらりと町中を歩きながらギルド

に行つてダンジョンの地図を貰いに行こ」

と、目的を零し広場を後にする彼を最後に見た「ファミリア」は半年になつてもいかなかった。

「今日も、帰つて来ないでいるちゆうわけやな」

「他の団員達に聞いても『そんな人いましたっけ?』つて逆に聞かれてしまうほどにね」

執務机の上で胡坐を掻き独り言のように呟く女神は腕を組んで椅子に座っている小人族バルウムから本拠地ホームを留守にしている一誠の存在感の無さを伝えられ「マジで?」と反応した。

「この【ロキ・ファミリア】に入団して二日目以降からだつたかな? 戻らなくなつたのは」

「気付いたんのはアイズさんの一言やったな。『鎧の人、今日もいないの?』つて言われてうちらが揃つて顔を見合わせてからや」

「そうだったね。『闇派閥』イルヴィスや強制任務で忙しかつたから——なんて言い訳しても意味がない」

「それ以上に危ういアイズさんのことを結構気に掛けていたもんな。あの子は他の子供達と同様に扱つて他の子供達より特別にアイズさんに接していたもんなうちら」

苦笑いを浮かべる女神に自嘲的な笑みを浮かべる小人族バルウムも否定しない。よく見ていればアイズを鼻負している事がよく分かる筈だが、それを気付けないでいる他の団員達は多忙の真つ最中であり、今でも本拠地ホームから出払つている。

「ロキ、彼は生きているかい?」

「んーと、ん、まだ生きとるで。どこにいますかまではわからへんけどまさかダンジョンに籠つているわけ無いやろうな」

眷族達の背中に神イコルの血で刻んだ【神聖文字】ヒエログリフの【ステイタス】の気配を感じ取っている女神——ロキは生存を認知した。眷族の一人の生存を確認できた小人族バルウムはいない者の話を打ち切り、アイズの事に話を切り変えた。

「アイズはアイズで相変わらず、強くなる事に執心中か」
「いまはガレスとダンジョンに向かっておるでー」

ダンジョン7階層。正規ルートから外れた行き止まりの『ルーム』で監督兼サポーターも兼任しているドワーフの大戦士と共にアイズはモンスター狩りに没頭していた。その際の彼女は普段から感情が豊かではないが、ダンジョンにいる時は無表情に拍車がかかる。凍てついた相貌で、モンスターを屠り続けるのだ。

『人形姫』。

それは返り血を浴びてもなおも表情一つ変えず、ひたすらモンスターを狩り続ける少女を同業者がその戦い方を見て、嘲りつけた渾名だった。一誠がいなくなつてからこの半年間、感情を削ぎ落として徹底的に怪物どもを殺戮する「ロキ・ファミリア」の新団員の存在は、『ギルド』や下級冒険者の間では噂になっている。

同時に今年の大^ス型新^パ人^ル冒^キ険^キ者^キ候補の最有力だとも。しかし、少女はそんな事に関して興味もなければ意識もしていない。あるのは「強さ」を求める想いが具現化した黒い炎のみ。金眼の奥に燃え続け幾度も小さな幼女を死地へ追い立てる炎しか感じられず、強さを求め死ぬまで狩り続け屠つて来た化け物たちの死骸の上に孤独で立ち続けて行くだろう。

(……足りない。これだけじゃ、まだ足りない)

最後のモンスターが地に倒れるのとほぼ同時に、音を上げたように短剣が罅割れ、剣身を折る光景に視界が映る。アイズは乏しい表情の中で僅かに眉根を歪めた。

(……直ぐに壊れる。壊れない武器が欲しい。そうすれば……) もつとモンスターを倒せて強くなれるのに、と壊れる武器に対して嘆息するアイズはドワーフの大戦士から予備^{スベ}の武器を手渡される。因みに、本日のダンジョン探索の中で三本目だ。作る側の鍛冶師がアイズの武器の扱い方を見ていたら「武器を何だと思っているんだ」と嘆いていたかもしれない。

数年後、「ロキ・ファミリア」のクラツシャーの一人と呼ばれること

になっているが今のアイズはそんなこと露知らず。引き返すぞと言うドワーフの戦士に不満の色を浮かべ欲求すら取り合ってもらえずますます不満顔を露わにする。

(このドワーフもケチ)

翡翠の髪のエルフも最近もつとうるさくなってきた。小人族バルウムは一人でダンジョンへ行かせてくれない。ロキは変な名前で呼ぶ。と、日頃の負荷ストレスが蓄積していく中で脳裏に浮かぶ。

(鎧の人……どうしているのかな)

自分と同じ悲願を持ち、アイズの理解者の真紅の鎧の者を見なくなってから半年以上が経つ。どこで何をしているかなど分かる筈も無く、ただ一瞬だけちらっと思って終わりだ。背後からついてくるドワーフを尻目に道中警戒して現れるモンスターの気配を探って帰路に着こうとしていた時だった。

『うわああああああああああああああ!?!』

突如、迷宮の奥より複数の悲鳴が轟いた。顔を振り上げ弾かれたように駆け出すアイズとともに、ドワーフの戦士も叫び声の発生源に急行する。辿り着いたのは正規ルート上、6階層の連絡路前であった。

「だああああ!?畜生つ、ふざけんなっ!」

「多過ぎる!」

「誰かつ、助けてくれえええええええええ!」

異なる徽章エンブレムをつけた複数のパーティが相手取っているのは、蟻のモンスターの大量であった。『上層』の中でも滅多にお目に掛れない規模の敵勢に、下級冒険者達が大苦戦している。

『『キラアアント』の大群!仕留めそこなつた冒険者が、『怪物進呈パス・パレード』でもしたか!』

ドワーフの戦士は直ぐに事態を察した。巨大蟻キラーアントは体を傷付けられ窮地に陥ると、仲間を呼び寄せるフェロモンを発散する。大方詰めの甘い冒険者の失敗がことを大きくさせてしまったのだろう。正規ルート上、おまけに連絡路の前を塞がれては逃げの一手も打てない。興奮状態のモンスター達を見てドワーフの戦士は参戦しようとしたが、

「——ッ!!」

状況分析もせず飛び出したアイズの視界にも——真紅の光が飛び込んできた。

『ギッ!?!』

一匹の『キラアアント』の首が宙に舞う最中、真紅の光が残す軌跡が『キラアアント』の大群に飛び回り首だけを刎ね飛ばす。アイズが戦闘に介入する暇も与えない程、最初に宙に舞っていた蟻頭が地面に落ちた時は大群の『キラアアント』は絶命していた。

ドワーフの戦士の目も張る一瞬の間、全てのモンスターを屠った光はやがて止まったのを見届けた。一滴も蟻のモンスターの血を浴びてなくても血の様に真っ赤な真紅の龍を模した全身型鎧フルプレートの姿を視認できてますます目を張った。

見覚えのない金色の剣身を虚空に切り、蒼い鞆に納めると助けを求めた冒険者達を他所に屠った『キラアアント』の身体から魔石と灰燼と化したモンスターからドロップアイテムを採取する作業に取り掛かった。

「お主………」

「ん?あ……アイズ」

声を掛けられようやく気付いた——半年も本拠地ホームを留守にしていた一誠が反応で振り向いた。硬直する鎧の冒険者と言い逃れはできんと睥睨するドワーフの戦士、そして少女は目に焼きついてしまった。願ってやまぬ己が望む『強さ』に。

(この人なら私を……っ!)

「やあ、随分と長くダンジョンに潜っていたそうじゃないか?」

「どーせ俺の事なんざ忘れていただろうから問題はないだろ」

「否定はしないよ」

「マジで忘れていたのか。まあ、新人に対してその程度の認識だということはよく分かったよ」

「【ファミリア】の皆を率いる頭領だからね。上に立つ者としてやる事は色々忙しいんだ」

「その割には極一部の団員のことを気に掛けているようだな俺みたいなど違つて」

「まだまだ心と体が未熟だから仕方ない。この『ファミリア』に入ったからには皆平等に家族として受け入れる。アイズも家族だ、面倒見なきやね」

一誠と小人族^{バルウム}、ドワーフの戦士に翡翠のエルフ、主神ロキ、アイズが同伴して二人の会話を見守っていた。その後ダンジョンから本拠地^{ホーム}の執務室にいた小人族^{バルウム}の前に連行されたのだった。

「てか、副団長は分かっていたがお前が団長だったのかよ」

ドワーフの戦士も知らないと付け加える一誠は小人族^{バルウム}の団長を苦笑いさせた。

「ロキ・ファミリア」の団長を務めているフィン・ディムナだ。改めてよろしく」

「ん、よろしく」

「じゃあ、今までダンジョンに籠つて何をしていたのか教えてもらえるかな?」

「普通にモンスターを倒してただけだし」

「半年も?」

「オラリオの街並みを見て回つて道具^{アイテム}と食糧の補充もしていたから半年も、かな。何度かギルドに顔を出しているから確認してもらえばすぐに分かるし」

本当か嘘か……ロキに流し目で確認の意を求めると……糸目がちな目は薄らと開き、話^話に耳を傾けていた。

「ロキ?」

「ん、嘘は言っておらん」

真つ直ぐ一誠に視線を注ぐ姿勢は変わらない神の言う事は絶対。ならば信用してもいいと断定し、次の問いを投げた。

「ガレス……このドワーフから聞いた話じゃあ『キラアアント』の群れを倒したらしいじゃないか」

「アイズだって倒せるだろう」

「うん、倒せるだろう。だけど、君の戦い方とアイズの戦い方は明らか

に異なっているようだ。君は下級冒険者であるにも拘らずどうして上級冒険者並みの実力を発揮したのか気になるんだけど？」

「オラリオに来る前に小さい頃から武者修行をしていたからだろう。その最中に色んなモンスターと戦いに明け暮れていた」

「成程、既に『恩恵』を得る前から戦い慣れていたということか」

前の「ファミリア」で培った『技』と『駆け引き』……では無く自然に培ったソレだと主張する一誠。それでフィンは納得——する振りして碧眼を二つの筒型のバックパックに向けた。

「半年間、ダンジョンに籠っている割には戦果は普通の様だけど」

「ああ、これはちょっとしたからくりがあつて……」

一つの筒型のバックパックの蓋を開け、逆さまにして中身を落とす。

ドツ、ガラガラガラガラガラ……。

「「「「「「」」」」」」

規格外な大きい魔石から欠片サイズの魔石まで大量に山積みとなりながら執務室の床を占めて行く。長期遠征でもない限り得られない大量の魔石にフィン達は言葉を失った。半年でたった一人でここまで集めたのかと信じられなかった。とてもバックパックに入れる容量を超えている程の魔石は、ようやく出尽くしたようになくなった。床の3分の1も占めた魔石。一体どこまで階層を潜って行ったのか定かではない。フィンは質問した。

「君は……一人で何階層に行ったんだい」

「えつと……18階層を拠点にしていて、そこから希少だったり貴重なアイテムを探索したり……」

もう一つの筒型のバックパックの蓋を開け、取り出した綺麗な純白の一本角を見せつけた。

「レアモンスターを探し回っていたな」

「「「「「」」」」」

この瞬間、フィン達は一誠の実力は「ステイタス」で計っていないものではないと悟った。何故、どうして下級冒険者が一人で『中層域』まで進んで上位モンスターを倒すことができるのだろうか。床一面に

広がる魔石をバックパックに入れ直す一誠から……。

「見ているだけで手伝ってくれないか？」

肝が据わった凶々しい催促を受け、この場にいる全員でせつせと集め始めて十数分後。一誠は退室した。

「ロキ、彼の『ステイタス』に何か異変は？」

「一切無いで。寧ろあんのはアイズさんの『スキル』の方や」

「戦闘能力を向上させる『スキル』が発現していないで我々の想像を遥かに上回る実力を隠していただと」

「武者修行をしていたからとは思えないほどにな」

納得できない。だが、嘘を言っているようにも思えない。ここにきてイツセーという冒険者の出生が謎のベールに包まれ始めた。故に確かめなければいけないなくなった。最悪、自分達の敵に回ると言うならば処置もしなくてはならない。

「……フィン、どうする」

「シー、アイズに影響が無いといいけどね」

「無理じゃな。ダンジョンからずーつとあやつのこと見ておったぞ」

「私を鍛えてください何て言うかもしれないって？」

ンなアホな、と冗談交じりに述べるロキだったがフィン達三人は……有り得るかもしれないと気持ちが一致した同時刻。宛がわれた部屋がある塔の最上階へ半年振りに戻る一誠の後を追うアイズ。

「ねえ」

「なんだ？」

「ずっとダンジョンに籠っていて強くなった？」

純粹な気持ちで半年間の成果を実感したか訊ねたアイズに首を横に振って否定で返した。

「全然、俺より強いモンスターを何度も倒さなきゃ駄目っぽい。【ステイタス】の更新はまた今度だ」

「強いモンスターを倒せば、私も強くなれる？」

「人の成長の時間と速度は個々によって違う。けど、アイズも強くなれると思うな」

自分より強いモンスターを倒す。そうすれば強くなれるという情報を得て、強さを求める。意欲がフィン達の知らないところで増してしまった。四人の杞憂は終わらず、共通の想いを抱く者同士としてアイズはもつと話が聞きたいが為に部屋の中まで付いて来てしまった。

「ん、何だ？俺の部屋に来て何も無いぞ」

実際にそうだった。椅子と机、寝台のみの部屋は質素の一言に尽きる。珍しいものは一つも存在しない。こういうところも自分とそっくりだった。強さを求めるものに必要最低限なものしか用意していない感じはアイズに親近感を覚えさせた。バックパックを寝台の傍に置き、腰に佩いている剣を机の上に置く彼に言葉を投げた。

「その剣……」

「これか、俺の大切な愛剣だ。名前は『約束された勝利の剣』」

「勝利の、剣……」

恐る恐る、興味深々でその剣の鞘に触れ使い手が見ている目の前で少し鞘から抜いてみた。アイズと一誠の目と同じ色の金色の剣身が蒼い鞘から覗き、綺麗だと目を丸くして見つめ続けた。自分が使っている短剣とは違い丈夫そうな剣。『キラアアント』の群れを斬っていた剣に刃毀れは見当たらず、半年間も使い込まれていた剣とは思えない鋭さが光っている。

「……これ、頂戴？」

「だが断る」

何時の間にか鎧を脱いでいて真紅の長髪を背中に流し、右目に眼帯、金色の左眼から本気で譲らないと言う意志が籠っていたのをアイズは感じてしまった。非常に残念極まりない。

「団長達に言えばいいじゃん」

「言っても、別の武器を使っても直ぐに壊れる」

「それは単純にアイズが剣の扱い方が大雑把過ぎるからじゃないのか？手入れもしてないなら尚更だ。剣はただ相手を倒し斬るもんじゃないんだぞ」

剣は使い手の半身だ、とアイズには分からない言葉を送った。

「半身……ってなに？」

「もう一人の自分って思ってもいい。剣を一度握れば使い手を守る為の半身となる。でもアイズは強くなる為の道具としてしか見てないだろ？だから直ぐに壊れる」

スツと一誠はアイズの右腕を取った。子供の細腕ということを加味したとしても、細過ぎる。余分な肉が全くない。しなやかな筋肉と皮、後は骨だけ。まるで細剣つるぎのようだ。本来ならば美しい筈の金の髪も、今や荒れきっている。半年間もこの本拠地ホームに留守していた一誠でもこの少女はどんな生活を過ごしていたのか察するに難しくなかった。

「全く、俺ん時とは大違いだな。あの団長達は食生活まで面倒見てないのか」

「……」

呆れた風に顔を顰め、研ぎ澄まされた若干こけている頬に両手を添えて視線を合わせられる。

「もつと自分を大切にしろ」

頬を添える両手が淡い光を纏い、少女の全身を包み込んだ。すると次第に荒れきった金髪は潤い、研ぎ澄まされた頬は細過ぎる腕と一緒に健康的な肉体へ戻っていく。

(温かい……)

その心地のいい温もりに瞑目してより実感する。誰かに抱きしめられるような感覚と似ていて、それは今この場にはいない父親と母親の抱擁のようだった。少女は温かく懐かしくて無意識に頬を綻ばせ、強さを求めさせる黒い炎がこの瞬間だけ消失した。

「で、何時まで聞き耳を立てている」

腕の中で小さな寝息を立たせて年相応の寝顔を浮かべる少女から扉へ視線と言葉を向けた。一拍遅れて扉は開き、肩口に揃えた翡翠の髪の絶世の美女のエルフが、副団長が入ってきた。

「アイズが心配で来たか？」

「……寝ているのか」

「疲れが溜まっている証拠だろ」

入って来られる前に一瞬で鎧を着直した一誠は部屋に訊ねてきたハイエルフに「用件は？」と急かす様に問うた。

「お前が隠している実力を知りたい。明日、ガレスと模擬戦をしてもらう。断ればダンジョンの出入りも禁止せざるを得ないとフィンからの命令もある」

「勝手にしろ」

断固として拒む相手に副団長の綺麗な柳眉は寄り、取り付く島も無い会話の平行線は夢の中のアイズを受け渡され部屋から追い出されてしまった形で終わってしまった。

「さあて、行くか」

面倒事がまた来る前に。とバックバックと剣を所持し、窓を開けて躍り出る様にして抜けだす。

冒険譚Ⅰ

北西のメインストリート、通称『冒険者通り』へ足を運んでいた。己の実力もとい秘密を探られる恐れが浮上した為、「ロキ・ファミリア」のホームに長居は危険だと判断した。こうしている間でも何かしらの秘密を抱えているのだと教えているようなものだが、根掘り葉掘り問い詰められるよりはマシかもしれないと逃げるようになくなったのだ。

さて、これからどうしようか。と二つのバックパックを背負って行く宛てのない足取りで冒険者御用達の大通りを闊歩する。『冒険者通り』と名に違わず、同業者を標的ターゲットにした専門店がいくつも立ち並び、とある最大鍛冶師の「ファミリア」の支店もそこにあるのだが一誠は知らない。

——ポツ

「……雨か」

間が悪いことに水滴が降り始めた。灰色の雲に覆われた空は、瞬く間に強い雨脚を都市にもたらす。この世界でも雨の性質は同じなんだなと他人事のように思いながら虚空を歪めて作った穴から傘を取り出し、バサツと開いて雨を凌ぐ。横から殴り付けるような雨の中、目的も行く宛ての無い徒歩が続いている時、大振りの雨の中で路地裏から出てきた銀髪の幼女。傘どころか雨具もなく全身ずぶ濡れの姿でどこに向こうか分からないが、放つて事はできなかつた。

「おい、傘も差さずどうした」

「……」

足を停めて声を掛けた一誠に見上げた。幼女の澄んだ青い瞳に生氣の光が無かったことに真剣味が孕んだ顔つきとなつて跪いた。左目に続々と立体的に浮かび上がる幼女の情報を視ながら、驚くべき事実を知りつつも頼れる人間は今この場に一人しかいない故、手を差し伸べた。彼女は——一誠と同じ異世界から来た異邦人で、ロシア人であることを、ロシア語で声を掛けると幼女は静かに口を開いた。

「……………パパとママ、食べられちゃった」

開口一番に答えてくれたのは悲惨な出来事の吐露だった。それは子供の戯言、冗談でも夢物語でもないことをこの状況で言う筈が無いと考え相槌を打った。

「大きな怖い化け物にか」

「……………うん」

目の前で喰われたか、両親に守られて喰われたのか。どちらにしろ幼い子供にとって酷く衝撃的で酷なことだっただろう。慕っていた人の死は無関心でいられるわけがない。自分もそうだったように。

「……………大好きな人が死ぬ辛さは俺も知ってる。目の前で悪魔に殺されたことがある」

銀髪の頭の後ろに片腕を回して胸に抱き寄せる。

「これからどうしたい」

「……………どうしたい?」

「ああ、これから何がしたいのかどうしたいのか。お前の願いを聞きたい」

「……………私の、願い」

そうだと肯定する言葉は周囲や傘から伝わる雨音に包まれる。少女はその問いに対してどう答えようか悩み、考え……………結論に至った。

「パパとママを食べた化け物を……………倒したい」

灰色の雲から振り続ける雨に打たれながら走ってくる女がいた。褐色の肌に黒の短髪。この場にはいないお子様のアイズや副団長のエルフなど話しにならない程の体の凸凹を持っており、さらに包まれた豊満な双丘は走る度に揺れる。黒曜石のような黒い髪は額や頬に張り付いて直ぐにでも風呂に入りたい気分^{フルプレイト}に駆られるが、彼女は主神に呼ばれていたことに思いだした頃にはこの天候だった。

「……………ん?」

途中女性は、全身に金色の宝玉がある真紅の龍を模した全身型鎧の

者を視界に入れた途端、雨宿りするつもりで走っていた足を停めて、注視するような視線を送り始めたが一誠は気にもせず横を通り過ぎた。

「あいや待て」

傘を持つ手の腕を掴み何故か引き留められてしまった。よく見れば肩に幼女を乗せている。対して鎧を着込んだ人物は、何だと視線を向けながらさりげなくこれ以上体を濡らさないよう配慮して傘の中に入れてさせた。気を使われていることに気づいているか定かではない少女は鎧や傘を観察する眼差しを送る。

「お主、妙な鎧を着込んでおるな。それにこの雨を凌ぐ道具も手前は見たこと無い」

少女の言葉に「だから何だ？」と首を傾げる思いの相手の気持ちなど知らない女は、雨に濡れないようにしながら一誠の腕を引つ張り始めた。

「興味がある。このまま手前と主神様のもとへ来てもらえぬか？これを開いたままでな」

行く宛ても無い目的も無い男は予想外な展開に半ば啞然として引きずり込まれる。この少女は一体何者なのか、主神の目の前に連れ出されるまで取り敢えずついていくことにした。

「そんな理由で、どこの【ファミリア】の子達か分からないのに連れてきたのね」

「うむー」

呆れた声音で特徴的な漆黒の眼帯を左眼に付けてる少女に対して紅髪紅眼、右眼に覆う漆黒の眼帯の女性、否、女神の前に一誠と幼女は借りた布で身体を拭きながら立っていた。周囲を見渡せば本棚や壁に掛けられている数本の鎚、女神が肘をついている机には紙の束が置かれていて、ここはどうやら執務室の様であると察した一誠に、隣で盛大にその通りだと頷く少女に女神は溜息を零して「ごめんなさいね」と謝罪の言葉を送った。

「私は【ヘファイストス・ファミリア】の主神、ヘファイストスよ。こつ

ちは団長の椿・コルブランド」

「へファイストス……」

神の名前を知った途端、鎧の中で目を丸くした。己が知るへファイストスの性別が違っている故に耳も疑ってしまった。

「貴方、どこの【ファミリア】の子？」

「【ロキ・ファミリア】」

「……ロキの？」

へファイストスも意外な神の【ファミリア】の眷族だと知らされてキョトンとした。これだけ注目を浴びそうな鎧を着ていて話題の一つも上がらないのは不思議なのだ。

「新しい眷族なのかしら？ 何時から彼女の眷族に？」

「半年前から」

「半年？ 不思議ね、貴方の様な目立つ鎧を着ている子供なら、ロキの眷族だったらなおさら噂ぐらい聞く筈なのに」

「その半年間ずっとダンジョンに籠っていたから噂すら立たないんじゃないのか？」

半年もダンジョンにいた。下級冒険者が本当にそんなことしたのかと疑うが……。嘘か真かへファイストスは判断できないでいる。下界に降りて以来初めての経験だ。人類が述べる言葉が嘘か真か分からないなど。

（この子……。一体何者……。？ ロキは何を考えて……。）

「しかし鍛冶神のへファイストスだったか。ならちよつとお願いがあるんだけど」

「お願い？ オーダーメイド特注品かの？」

「んや、鍛冶の工房を借りたい。どこか使っていない工房とかある？」

奇異なことを言う。他派閥の冒険者が他派閥の主神に直接仕事場の一つを貸してほしいなど【ファミリア】を結成して以来初めて言われた。鍛冶の経験があるのだろうか。いや、あろうが無かろうがいくら馴染み深い女神の眷族とはいえ、へファイストス・ファミリア最大鍛冶派閥の仕事場を安易に貸すほど……。

「お主、鍛冶の経験はあるのか」

「なきや言わんよ。理由はしばらくホームに戻りたくないのと同期の仲間に剣を作ってやりたいんだ」

「粹な計らいをする。相分かった。手前の工房でよければ貸すぞ」

——ちよつと待ちなさい。心の中でエア突っ込みをするへファイストスが待ったを掛けた。

「椿、どうして今日会って間もないロキの子供に世話を焼こうとするわけなのか説明して頂戴」

「鍛冶を打つことができれば立派な鍛冶師のはしくれであろう主神様。何、タダで貸し与えようとは思っておらん。手前の仕事の遅延した分の対価を後日貰い受けるつもりでいる」

「んーそういうことなら……これでもいい？」

筒型のバックパックから取り出したのは何かの爪と純白の一本角。それをへファイストスの執務机に置かれるとその二つの内、一本角を見て何なのか察すると眼帯を付けていない目があらん限り見開いた。

「……これ、一角馬の角？」

「そ、で、こつちの爪は中層で見つけた竜から得たドロップアイテム」
「——『ヴィーヴイル』の爪かつ!」

どちらも希少種^{レアモンスター}であり、『ヴィーヴイル』に至っては竜種なだけあって戦闘力はかなり手強く、額にある莫大な富が約束された宝石を狙わんとしている冒険者達多くは被害を出して返り討ちに遭っている。

明らかにLv.1の下級冒険者が倒せる筈の無いモンスターだ。そのドロップアイテムを手に行っているとと言うことは、倒したと言うことになる。他の冒険者から譲ってもらった等の推測も立てれるが、レアなモンスターのドロップアイテムを無償で譲る馬鹿な冒険者はこのオラリオにはいない。

ならば、最も納得できる理由は……。「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者が希少種^{モンスター}を倒して得たドロップアイテムを持たせ、目の前の者に武器を作らせようとしている。そう考えてもおかしくも無いし自然だ。ただ、貴重な素材で鍛冶師の真似事をさせようとしているのは何故なのか疑問なのだ。

「……悪いけど、いくらロキの眷族の子だからと言って私の眷族の仕事を貸し与えることはできないわ。鍛冶師を目指したいなら改^{コンバージョン}宗して改めて来なさい」

主神として、鍛冶の女神として彼の者の申し出を断った。相手は素直に応じ、どこか残念そうに肩を落として幼女を連れ執務室を後にした。

「良いのかー？折角の貴重な素材を貰えそうであつたのに」

手前は構わなかつたのだぞ、と玩具を取り上げられたような子供のような表情を浮かべる椿に溜息を吐く。窓の外を見ればどんよりとした灰色の雲がまだオラリオを覆い、大粒の雨を降らし続けている。そんな土砂降りな雨の中、傘を差して北西と西のメインストリートに挟まれた区画へ来た一誠。そこには人っ子一人もおらず、誰かがここに来るような気配も感じさせない彼にとつて絶好の場所。

(そうだな……別に^{ロキ・ファミリア}あそこに住まわなくても問題ないよな)

半年後、自分は抜けるのだから。そう意味深に思いながら幼女をある場所へ連れて行つた。そこは第一級冒険者でも絶対見つけられないと断言できる場所――。

「これが……俺の家だ。今日からお前も一緒に住む家でもある」
「……一緒に住む、家」

「そうだ。それとこのあと強くなるために必要な儀式を済ませに行こう」

「……お願いします。……あの名前」

お互い、自己紹介もしていなかつたので名前は分からずじまいであつた。二人は顔を見合わせ改めて自己紹介し合つた。

「イツセーだ。お前は？」

「……アリサ、アリサ・イリーニチナ・アミエーラです」

その日、「ロキ・ファミリア」にアイズの他にも新たな幼女が入団を果たし、そう仕向けた一誠と共に忽然と消える事があつた。

「ロキ・ファミリア」に入団して八カ月。アイズは中庭で一人、剣の素振りをしていた。青空が広がる昼下がり、剣をもつて空間を切り裂いていく。

(あの人・・・また一人でダンジョンかな)

またしばらく顔を見せない者を脳裏に浮かべ、自由にダンジョンへ出入りできることに羨ましさと若干の嫉妬。仲が好いも関係も深くなくも無いのに何故か存在感だけは濃かった。全身に鎧を着込んでいるからだろうか。話をする時は何時も「強さ」に関してだからか。(強くなっているかな・・・)

前はどこまで階層を踏破したか分からないが「ランクアップ」間近まで経験値を得ている筈だ。・・・多分。だから、規制されている自分と違って長くダンジョンにいられる彼が羨ましく早くも更なる高みへ目指せる彼を嫉妬する。早く自分もダンジョンに行きたいと逸る気持ちが強くなる。ぶんつぶんつと剣を熱心に雑念を払うがごとく振り続ける。仮想の敵に向かって何度も切り結ぶ。虚空に向かつて剣技を繰り出す。

——と、突如巻き起こる一風がアイズの金髪を激しくたなびかせた。振るいだす剣技を一瞬だけ止め、何だと思いつながら閉じてしまった目を薄らと開けば、目の前に真紅の鎧を着込んだ者と見たことが無い銀髪に青い瞳のアイズと同じ年頃の少女が立っていた。

「よ、アイズ。久しぶりだな」

「・・・貴方は」

またしばらく本拠地^{ホーム}を留守にしていた、さつき考え事していた人物が前触れもなく、手には青い鞘収まっている剣を握って現れた。静かに金眼を丸くして驚く幼女へ庭に茂る草を踏みしめがちやがちやと鎧を擦らせ近づいた全身型鎧^{フルプレート}の者は・・・剣を持つ手を突き出した。

「俺の剣は譲ることはできないが代理品ならやる」

「・・・え？」

柄を握り鞘から解き放たれる長い剣の剣身は、今まで使っていたものより長い剣身は、アイズに合わせ作られた短剣のカテゴリといえど、彼女にとっては長剣と呼べる代物だった。剣身にはどこまでも穢れを知らない真っ白さとうつすらと青と金の波紋が走っており、滑らかな刃は確かめずともその切れ味のほどが分かる。一目見たアイズ

が「綺麗」と呟くほどの美しい剣に、受け取った。

「剣の銘は………祝福の風剣」

「祝福の風剣………」

剣の名を呟くように唇で転がす。蒼天を衝く最初の愛剣は、その剣身を輝かせた。

「………いいの？」

「言っただろう？お前の気持ちは理解できるって。なら、その背中を押させてもらっているだけだ」

後で団長等から小言を貰いそうだがな、と自嘲的な笑みを鎧から漏らす。この人は………本当に自分のこと知っていてくれる。自分と同じように誰かが強くなりたいと憧憬を抱いた彼の背中を押したのだろうか？それと同じことをして自分を被せているのだろうか？

「アイズ、いま暇か？」

「え？…うん」

「そうか、んじゃ俺と模擬戦をするか」

俺も暇になったからここに来たんだがなと腰に佩いている剣を抜き放って金色の剣身を太陽に煌めかせた。彼と初めて模擬戦をすることになり、受け取った剣でアイズも構えた。二人の間に静寂が訪れ邪魔する者は——木陰に隠れている主神以外いなかった。

「いくぞう？」

一瞬、相手の姿がブレ出して消えた現象に目を張り、がちやつと耳朶を刺激する音が背後から聞こえた。後ろを振り向く時間すら惜しいと、ほぼ条件反射で剣を真上に掲げた直後。か細い腕や全身に衝撃が襲った。そして感嘆を漏らす相手から素早く離れて剣を構えたアイズに対して彼の者はジツと見つめるだけだった。

「見ない間に随分と短期間で強くなっているんだな。本当に俺と違って強くなっている。団長達に鍛えられている感じかな？」

そう言いながら剣を振るってきた。ギリギリでアイズが反応できるほどの速度で一度振るってきたと思えば三度の斬撃が一度に襲われることもしばしばあった。時折軽い体術も駆使され、アイズは翻弄されたことも。「ファミリア」に入る前に世界中で修行をしていた、等

と話は聞いたがあなたが嘘ではないようだ。しかし、だからどうしたと言うのだ。幼い少女は肌にかすり傷や切り傷が付けられても決して退こうとはしない、押し負けないと必死に剣を振るい続ける。己の悲願の達成の為に。

「うあああああああつー！」

それから小一時間も経たずして少女は庭に横たわって疲弊しきった全身で荒い呼吸をしていた。体力の限界まで続けられて、動けなくなった相手に模擬戦は終わりだと告げるかのように中庭から姿を消した彼の者は主神に半年以上経ってから初めての「ステイタス」更新をしていた。

「自分は本当に急にいなくなっただけと思えば急に現れて猫かいな」

「猫か……今度、アイズを猫みたいな服を着せてみようか。絶対可愛いぞ」

「猫のアイズたんって……！」

くうくうっ！と想像しただけで身体を悶える主神は後日、猫の寝間着を着された少女の可愛さに思わず我を忘れて抱きしめようとしたが、張り倒されると言う光景を三人の亜^{デミ・ヒューマン}人と着させた張本人の前で見せた。

「で、イッセー。アリサたんを連れてきたかと思えば急に連れ去って自分、何がしたくて今まで何してたん」

「その内教える」

更新を目的に背部の鎧を無くし背中を晒す一誠に血の付いた人差し指で滑らし、「ステイタス」の更新を整える主神はそこで眉根を怪訝そうに寄せた。

「なんやこれ」

「どないしたん？」

ロキの口調を真似する一誠に答えず、ジーと背中を凝視する。だが、何時までもそうしているわけにはいかず、ささっと「ステイタス」の写しを終え、更新も終わらせた結果。

「——自分、本当に半年間もダンジョンに籠っていたんか？」

イツセー

【ステイタス】

L v ・ 1

力 : 10

耐久 : 10

器用 : 10

敏捷 : 10

魔力 : 10

「・・・」

ロキに渡された更新用紙を見て、信じ難いと硬直した一誠。この半年間、遊んでいたわけではないのにこの0という数字の変動の無さに愕然とした。

「うちもこーいうの初めて見たんやけど。あれだけアイズたんと模擬戦して何の変化も無いんっておかしい話や。でも、事実がこうして実証されとるからなあ・・・」

更新の手続きをした本人ですら声音に戸惑いが含まれていた。理由は不明。しかし、ロキと一誠はそれぞれ別の理由を隠している故に【ステイタス】は変わらなかった本当の理由は知らない。

「・・・しょうがない。もつと強いモンスターを狩る他ないか」

「だからってアイズたんみたいに無茶するんのは駄目やからな？
ちやーんとこの家に戻ってくるよ」

「善処するよ」

背中を晒していた背部の鎧が音を立てて覆い隠し、立ち上がる一誠はロキの部屋を後にし、アリサも更新を受けて完全にいなくなるのを待ってから独り言のように意味深なことを天井を見上げながら呟いた。

「この『スキル』。フィン達におしえとこーかな」

イツセー

【ステイタス】

L v ・ 1

力 : I O

耐久 : I O

器用 : I O

敏捷 : I O

魔力 : I O

スキル 異常不明^{アンノウン} 戦闘時のみ発動。階位^{レベル}、『基本能力^{アビリティ}』が反映・真価を発揮し、全能力の超高補正する。

「何なんやろうなあ．．．．イツセーの『スキル』」

神ですら把握できない未知。不思議と疑惑を通り越して好奇心がくすぐられた。

「あー失敗したわ！こんな『スキル』が発現するんなら、あんな契約を了承しなければよかった！」

初めて一誠と出会い、交わされた眷族^{ファミリア}になる条件——を思いだし、今さらロキは部屋の中で叫ぶほど後悔した。

『一年間だけお前の眷族になる』

既に半年以上が経過した。残り数カ月も経てば自分の手から離れて自分の道を歩むだろう一誠をロキは今さら後悔し朱色の頭を両手で抱えながらベッドへ倒れた。

「くそう、せめてあの色ボケ女神んところに行かせんよう言っておくかあ」

せめてのけん制と唸りながら考えるロキだった。あの女神の耳に入れば同格の派閥だろうがあまりの欲しさに仕掛けてくるかもしれないと杞憂する。後に一誠の『スキル』は団長達にも知らされ、留守をしがちな仲間の確保に息を潜める。

同日のその日の夜。加工された魔石の灯りが夜のオラリオの至る

所で蠢く影を捉えた。全員、同じ衣装で統一していて邪で悪意が満ちた目を持つ集団は人気のない路地裏や建物の陰で息を殺し何かを待っている姿勢で佇んだ。そこで待っていてしばらくして一人の女性が一人大通りに歩いているところを狙い、息を殺し身を陰に隠していた集団が大通りへ躍り出てその女性へ襲いかかった。

翌朝。とある店舗の扉にナイフで突き立てられた羊皮紙がこう記されていた。

『主神は預かった。天界に送還されたくなければ、ギルドや他の派閥に助けを求めず指定した数の武器と魔剣を用意しろ。逆らえば即座に主神の血が凶刃に染まると知れ』

脅迫状とも言える内容に主神を誘拐された眷族達は怒り、救出に赴こうとする眷族は多かったが逆にどこで主神は幽閉されているのか分からない故に従う振りをして他の「ファミリア」に救助を求めると冷静な眷族もいた。

言い争う団員達の前にして団長は主神を救う最善の選択を強いられる。が、女神の誘拐事件は何時しか、火のないところに煙は立たぬとして噂はオラリオに広まった。最大鍛冶派閥の主神の誘拐が。

「これより、誘拐された思しき「ヘファイストス・ファミリア」の主神を探索する。十中八九閥派閥イルヴァイスが関連している可能性はある。皆、悟られず怪しい人物がいたら深追いはせず逐一報告をしてくれ」

「ロキ・ファミリア」は「ヘファイストス・ファミリア」の団員達の心情を汲んだ上で、そして露も知らず行動に移った。団員達は本拠地ホームの正門前に立つ団長と副団長、ドワーフの大戦士から蜘蛛の子が散る様にして東西南北と各区画とメインストリートへ赴く団員達。彼等彼女等を見届けるその六つの双眸は川の流れのように逆らって泳ぐ魚のごとく入れ違う真紅の全身型鎧フルプレートを着込むもう一人の団員と幼女が、巻いた大きな布を持って姿を現れ、集団で町へと向かう同じ派閥の者達へ向ける視線を三人の亜デミ・ヒューマン人へ変えた。

「何か遭った？」

「長い間ここを留守にした団員とは思えない開口一番の言葉だね」

「ここじゃできないことをしていたからなあ。こっちはこっちでやりたいことがあったし、別に一人ぐらい本拠地ホームからいなくなっても大して気にしてなかっただろ」

「僕達が仲間を見捨てても気にしない、とそんな風に思っているのかい？」

「団員達を率いる団長達がそんな奴らだったら【ファミリア】としての結束と機能はここまで保ってないだろ」

話を戻し、現状を把握を求める一誠にフィンイルヴァイスは軽く説明した。

「【ヘファイストス・ファミリア】の主神が闇派閥イルヴァイスに誘拐されているらしい。僕達は女神の発見・救出を臨んで行動したばかりだ」

「ふーん？だから町で見掛ける冒険者達は気を引き締めていたのか」

中には怖い顔をしていた連中もいたし、と語る一誠からの情報に当然だろうとばかり首肯するドワーフの大戦士。

「で、三人は待機？」

「私達は最大派閥のトップだ。動けば直ぐに悟られる」

「でも、今さっきの連中だって同じだろ。いいのか？」

「【ファミリア】の徽章エンブレムを外しておるから直ぐには悟られんわい。で、お主はどうするきじゃ」

ドワーフから投げられた問いをこう述べた。胸を張って鎧の中でドヤ顔を浮かべて。

「アイズと遊ぶ」

「二「お前も探しに行くんだ」」

「異口同音で門前払いかつ」

肩と頭をかくりと垂らし、渋々とした雰囲気醸し出す一誠は徐に布を広げた。そして「分かったよ。探しに行けばいいんだろ行けば」と呟きつつアリサを預けてもらい、何故かその上に乗る腰を降ろして胡坐を搔くと——三人の目の前で布が宙に浮き、空へと飛んで行つた。開いた口が塞がらないフィン達は、目を見開いたまま誰かに声を掛けられるまで空を見つめ続けていた。

「……布が空を飛んで行つただと」

「マジックアイテム
「魔道具の類かな」

「信じられんわい……」

「ヘファイストス・ファミリア」の店舗テナントの執務室に団長の椿・コルブランドが気を張り詰めた表情で執務机に寄り掛り、沈黙を貫き静寂な空気を保っていた。主神を救うべく最善の選択を選んで現状は極めて遺憾ながら団員達に任せて武器の製造を当たらせている。主神の安全が第一だと考えてもこれで相手が素直に応じてくれるとは考えにくい。

だとしても何もせず主神を天界へ送還されては、鍛冶神の眷族として、一人の鍛冶師スミスとして許せない。闇派閥イルヴィスに従うなど癪であるが彼女なりの最善を選んだ結果である。が、結局のところ手掛かりも無い、誘拐事件も漏洩していて他派閥の団員達が探し回っている。今さら他派閥に搜索を止めると言っても聞いてはくれないと思えない。歯痒い思いを抱いて、主神の誘拐を許してしまったことに対して許せない自分は結局、何もできない無力さに痛感する。

ガンガン。

「？」

窓硝子を叩く音。漆黒の眼帯で覆われた左眼と一緒に黒い右眼を窓硝子の方へ向けた時だった。窓の外に真紅の鎧を着込んだものがジーと彼女へ視線を向けていたではないか。因みに執務室は二階にある。どうやってこの窓から覗いているのか分からないが、見覚えのある相手にギョツと目を張る彼女の目の前で壁に大きく穴が開き、そこから入ってくる一誠と対峙した。

「お、お主……今、どうやって壁に穴を……」

「まーそれは一先ず置いて、ヘファイストスのことは聞いてるぞ。

「ロキ・ファミリア」も探し始めた」

最大派閥も搜索に出た。椿は強力な協力者達にありがたいどころか、迷惑だと首を横に振った。

「手前らは頼んだ覚えはない。いい迷惑だとフィンに伝えておいてくれ」

「下級冒険者の俺に頼むんじゃなくて自分で頼んだ方が言葉に力があるぞ。まあ、俺も探せと命令されてな。ヘファイストスを見つける鍵を貰いに来たんだ」

なに？と信じ難い気持ちで怪訝な目つきで一誠を見つめる。そんな物がこの執務室にあるのかと椿は疑った。無理のないことだが、一誠にとつては自信満々だ。

「何を言っておるか。この中に主神様を見つめる鍵があるなら手前らはとつくに助けに行っておるわ」

「でも、分からないから探しに行けないだろう？」

「・・・知った風を言うな。下級冒険者のお主が何をしても手前らと同じで何もできん」

「んじゃ、俺が何してもお前は俺に異論も追及もしてこないでくれよ？」

何だ、この者の自信は。理解しがたい椿の気持ちを知ってか知らずか、執務机の前に移動して跪く一誠はどこからともなく用意したチョークで床に幾何学的な魔方阵を描き始めて椿は目を丸くする。

「何を・・・」

「俺を信じてくれるなら教えてもいいけど？ああ、普段ヘファイストスが使っている物はあるか？」

椿は動かない。何をしようとしているのか理解に追いつけず、ただ一誠を見つめることしかできない。声を掛けられても答えず魔方阵を描き終えてから一誠は立ち上がり、執務室の中を見渡したところで机にある筆を視界に捉え、それを掴み取った。椿が見ている手前で魔方阵に筆を置き、両手で魔方阵に触れ——魔力を込めた。

カッとチョークで描いた魔方阵に光が宿り、置かれた筆も光に包まれれば形を崩し、肉眼でも見える紅の光の粒子と化して魔方阵の上で宙を舞い続ける。

「こ、この光は・・・？」と戸惑う椿に光はぐるぐると回ってから壁をすり抜けて外へと飛び出すのを見計らって、一誠も壁に開いた穴から外へと飛び出した。

「お、お主っ！今の光は一体何なのだ。手前に説明してはくれぬか！」

「だったら一緒に来るか？早く行かないと見失う」
「っ！」

碌な説明もしてもらえず、こうして己が躊躇している間にもあの光はどこかへと行っているのだと言外する一誠からの誘いを、一か八か掛ける樁も壁の穴から飛び出し、宙に浮く布の上に乗った。

「そんじゃ助けに行くとしますか」

小さな魔石灯の光に照らされる薄暗い石造りの空間。床も壁も天井も剥き出しの石材で造られていて空間は広々としており、涼しさにも似ている冷気が漂っていた。そこに天井から下げられた何重もの銀の鎖で両手首を縛られている女神がいた。ここに捕らわれて何日、何週間が経ったのだろうか。

若干、頬がやつれており彼女は体力を温存と瞑目している。どれだけ時間が経とうと変わらない静寂な雰囲気醸し出す石造りの空間に窓はない。カビのような臭いも僅かに漂っている。壁に作り付けされた魔石灯の光が女神の横顔を照らす。紅の髪に左眼を覆う漆黒の眼帯——ヘファイストスの耳にここへ近づくと足音を拾った。薄らと紅眼を開き目の前の鉄格子に視線を向けた時には彼女を嘲笑する黒紫の外フレッドローブ套を来ている男が立っていた。

「やあ、ご機嫌はいかがなヘファイストスちゃん」

「……ええ、最高に最低な気分だわ」

「それは良かった。オレも今ね？最高の気分なんだよ。君の子供達させさせと武器をタダで作ってくれているから良い儲けをさせてもらってるよ」

フードの奥で邪な笑みを浮かべる男は見せつけるように一振りの剣を掲げた。その剣を見た途端、ヘファイストスの顔は強張った。あの剣の出来栄えは間違いなく……。

「魔剣もご覧の通り。ヘファイストスちゃん、君が我々イルヴァイス闇派閥に積極的に協力してもらっているおかげだ」

「こんなところで私を閉じ込めて協力なんてよく言えるわ。後できちりと請求させてもらうわよ」

「できるといいね。君の子供達が君を助けようと武器と魔剣は湧水のように作り続けられる。いい子供達を持つて幸せだね」

ニヤアといやらしい笑みを浮かべる男は……邪神と呼ばれる一柱の一人。ヘファイストスの誘拐の真相は、彼女の「ファミリア」が作る武器を手に入れる為であった。故に手っ取り早く効率的に手に入れる方法こそが主神の誘拐に他ならない。それを知った時の彼女は悔恨で顔を歪めた。

「これからも君を永遠に利用させてもらい続けるよ。闇派閥イルザイスの道具としてね」

「っ……」

自分の為に眷族達は武器を作らされ続けている。自分の為に眷族達は取り返そうと必死で鎚を振るい、涙を流しているかもしれない。それが悔しくて悲しくて、ヘファイストスは利用されている自分も許せないでいる。恨めしいと右眼を細めて邪神に睨みつける——と天井から紅の粒子が舞い降りてきた。二柱の神は不思議に目で追い、ヘファイストスの周囲を旋回しながら石造りの床に落ちて、集束すると光は筆になった。

「……これって」

見覚えのある筆と唇で転がし、どうして天井から筆が光となって女神のところへやってきたのか疑問で尽きる。邪神も同じ気持ちなのか、鉄格子の前に立っていた眷族に鍵を開けさせようとした。

ドオオオオオオオンッ！

「っ!?」

天井から激しい音が響いた。地上で何が起きているのか分からないこの場にいる全員は目を見開くしかなかった。邪神は可能性と予想を考慮して眷族に指示を下そうと口を開き掛けたが、ここへ焦燥に駆られて慌ただしく足音を立たせてやってきた邪神の眷族と思しき獣人。

「しゅ、主神様大変です！襲撃です！」

「襲撃？相手は何人？どこの「ファミリア」？」

「ふ、二人だけです！で、ですが一方的に我々の方が蹂躪されておりこ

こも危険です！早く避難を！」

誰かが……。ここを突きとめて開戦した？今まで誰もこの牢屋を探す手段は見つけられなかった——。いや、この筆が目の前に現れた直後に邪神達の拠点が襲撃された。しかし、一体誰が……。？
「……。しようがない。彼女を連れて逃げるしかないね。まだまだ利用したいし君達も襲撃する二人の足止めをしつつ例の場所に集まって。地上にいる同志達にそう伝えて」

「は、はっ！」

獣人は主神の命に従い直ぐにこの場を後にした。そして残った邪神とヘアリストスは牢屋の番人と静かに牢屋から静かに姿を暗ます少し前、地上では……。

「邪魔」

「「ぎやああああああああああっ!?!」」

紅の光を追って消えた先は地下へ繋がる階段の向こうだった。その前には隠蔽が施されていたがそれを看破して分厚い堅牢な扉をドオオオオンツ！と蹴り破って突破すると、地下に潜んでいたヒューマンと亜人に獣人達が一齐に襲いかかった。

次の瞬間。

敵に対して容赦なく真一文字に振るう剣技の前では紙きれのように吹き飛ばされた。

「闇派閥の拠点がこんな地下にあったとはな……。…」

「え、そこが感心するところか？」

「や、すまぬ。お主も下級冒険者なのかと疑う良い腕っ節であるな」
「それも違うような……。まあいい。ここにヘアリストスがいてっことは確かだからな」

光は更に向こうへと行ってしまった。襲いかかる種族異なる敵に一誠は一方的な蹂躪で寄せ付けず突破する。地下も石材で造られた空間で長い間ここを拠点として使用されているせいか、生活臭が濃く残っている。さらには膨大な水がどこかへと流れて行くのも窺え、ここは地下水道であると推測できる。

「ここに主神様が……。…」

「大方、ヘファイストスを連れて逃走していると思う。こっからが時間との勝負ってことだな」

「では手前も戦う。何か武器は無いか？」

手元に武器がない椿からの要求を一誠は一度立ち止まり振り返った。釣られて椿も足を止めてしまふ。目の前は今も自分達を追いかけ殺そうと襲いかかってくる敵を見据えながら金色の剣身の切っ先を床に突き刺した。

「選り取り見取りだ。——魔劍創造！」

ソードバース

椿の目は瞠目した。地中から数多の武器が飛び出し、闇派閥のイルヴァイス一団を襲ったのだ。身体を貫かれ、切り裂かれた彼等から悲鳴と悲痛の叫びが聞こえるが椿はそれどころではない。数多の武器が地中から生えたことに思考が停止して呆然としたのだ。

「おい、ヘファイストスを見失うぞ」

「はっ!？」

「さっさと武器を選んで行こう」

と行って先に行く一誠をしつかりと選んでいる暇もない椿は、大剣を二振り手にして追いかける。そして背後から追求した。

「お主！一体どんな魔法で武器を作ったのだ!？」

「追及はしてくるなって言っただじゃん」

「しないでおられるかっ！後で絶対に教えてもらおうぞ！」

行く道を阻む敵を切り捨てながら二人はヘファイストスを追いかける。似た空間の中を走り抜け、紅の光がとお他場所と思しき通路へ進むと異変に気づく。

「敵が襲ってこない？」

「きつと先程の者達が手前らの足止めの役をしていたからであろう。あれで全員とは思えないが……」

「となると、少し一歩遅くなっていると考えた方が良いか」

不意に一誠は黙り、何かを察した風な言葉を述べた。

「人の気配が二つ。俺達から遠ざかっている奴がいるな」

「何故分かる？いや、それがどうしたと言うのだ？」

「神の気配なんて分かるわけないし、もしもその二人がヘファイスト

スを連れて逃げているとすれば……」

「——っ！」

直ぐに察した椿は目を見開き、自分達から遠ざかる気配を追う方針を選んだ。それに異論はないと一誠はある行動をとった。

「んじゃ、椿。最速の道へ進むぞ」

「うむ！」

迷路のような地下水道の中を走る三人がいた。一人は邪神、残りの二人は邪神の眷族。大きめの亜麻袋を背負ってどこかへ目指している最中、邪神は愚痴を零す。

「もー、どーしてオレ達の秘密基地がバレたんだろうね。オレ、走るのはあまり得意じゃないってのにね」

「ですが、我々の同士が時間稼ぎをしてくれたおかげでもう少しである場所に行けます」

「まーそうなんだけどね。でも、誰だったんだろうね。ここ、裏切り者がいない限り絶対にバレない自信があつたのにさ」

その自信を打ち砕かれこうして走って逃げている。後で合流した眷族から聞き出し、どこぞの「ファミリア」に嫌がらせと称した奇襲をしてやると決意する邪神は、目的の場所に辿り着いた。いくつもの水道が流れて何本もの支柱がある地下水道の深奥とも言える場所だ。地下水道としての風景は変わらないも邪神達はここしかないものを求めここまで逃げてきたのだ。彼らしか知らない地上に住む者達にとって更なる道の場所がここに存在している。

「さ、さっさと開けて逃げようか」

亜麻袋を持つていないもう一人の眷族に話しかけ、開けさせようという指示を下したのと同時に。

「冥界に繋がる蓋のことなら俺達も手伝うぞ」

追手が彼等の真後ろに現れた。バツと振り返ると彼等の視界に椿と真紅の鎧を着込んだ一誠が立っていた。——速い、いくらなんでも早過ぎる。ましてや地下水道（こ）は迷路のように入り組んでいて長く居座つて無ければ構造も把握できない程広大だ。

それなのにこの二人は最初から知っていたかのように短時間で現れた。フードの中で頬を引き攣る邪神は芝居めいた風に両腕を広げた。

「これはこれは……ヘファイストスの子供じゃないかい。よくここがわかったね」

「闇派閥イルヴィスの邪神の一柱よ。直ぐに手前の主神様を返してもらおうか」

「それは困るなあ……彼女はオレ達の協力者、道具なんだ。返せと言われてはいそうですかって返すわけにはいかないよ。だからさ……ここで死んでくれるか引き返してくれないかな?」

二人の眷族が両手で武器を構える。一人は盗賊シーフなのか二振りの短剣でもう一人は拳を構えて体術使いのようだ。

「彼等は君より強いよ。何せLv. 5だからね」
「っ……」

「引き返すなら見逃す。逆なら今ここで殺しちゃう。さあ、どっち?」

そう言う主神は亜麻袋の縁を開き、詰められていた件のヘファイストスの首筋に剣を添えた。邪神の余裕がここで明らかになり、剣を握る手に汗がにじみ出る樁の隣で一誠は朗らかに問うた。

「樁ってLv. どのぐらいだっけ?」

「……第三級冒険者、Lv. 3だ」

「あーだから強いってことか?じゃあ、第一級冒険者の實力を見せてもらおうかな」

意気揚々と第一級冒険者の敵に近寄る。対して相手の二人は顔を見合わせ、体術使いの邪神の眷族が前に出た瞬間。どちらからでもなく、一瞬で横へ飛んで足場に移るや否や振り上げた足がぶつかった。

「へえ、これがLv. 5か」

「……」

相手の力量を知った二人の反応は異なる。交差したままの足を解き、距離を置く一誠の鎧が光と化となって消失した。樁とヘファイストスは初めて見る一誠の生身の姿。真紅の長髪に右眼を覆う眼帯と対極的に金色の瞳……。

「——この世界の強者と戦うのは初めてだ。楽しまなきやな」

金色の瞳孔が鋭く、垂直のスリット状に変わりまるで獣の瞳になった。相手は急に感じる威圧感に警戒心を最大にして腰を低く構えた。口元を釣り上げ、相手の構えと異なる構えをして飛び掛かった。

「……嘘」

ヘファイストスの信じられない眩きを邪神は拾った。

「何が嘘なのかな？」

「……あの子、数カ月前に冒険者になったばかりのロキの眷族よ」
「……」

「貴方の眷族がLv. 5、第一級冒険者なら私の言いたいこと分かるわよね」

駆け出しの最弱冒険者と第一級冒険者との実力の差は強さの次元が違う。例えば100人の下級冒険者が第一級冒険者と戦っても天地が引つ繰り返らない限り勝てる筈がない。勝てる筈も無いのに一誠は同等以上に戦って見せているのだ。

だからヘファイストスの気持ちだが邪神も伝わり有り得ないとフリードの奥で凝視する。「ロキ・ファミリア」の眷族に第一級冒険者はまだ3人しかいない。彼のデミ・ヒューマン人以外に第一級冒険者がいる情報は皆無だ。故意的に隠す理由も無い。ならば、今自分の眷族と戦っている子供は一体……？

「ふんっ！」

「がはっ!？」

それなりに戦い、楽しんだところで一誠は苛烈な肉弾戦を繰り広げた後。相手の懐に飛び込み、深く腹部に拳をねじり込み、電撃を与えながら殴り飛ばした。背中から天井にぶつかる相手へもう一発、爆発的な脚力で跳躍し足蹴りを食らわせた。天井に広がる蜘蛛の巣状の罠はあつという間に崩壊してその威力を物語らせた。瓦礫と化した破片は足場や水に落下して邪神の眷族も一誠の手で別の場所へと放り投げられた。

「ば、馬鹿な……!」

戦く邪神。愕然とするヘファイストスと椿。彼が下級冒険者？嘘だ、絶対に信じられない。Lv. 5を倒す下級冒険者がどこにいる!?

しかし、現実的に目の前で倒して見せたのだ。本来のL.V.に見合わぬ戦闘能力で打破してのけたのだ。

「次」

おいでと手を招く一誠の意識は短剣を武器とする敵に集中している。相方が倒される光景に怒りを覚え、飛び掛かった矢先、同じ末路を迎えた。ブレた腕に反応できず気付いた時は天井へ殴り飛ばされ、天井と挟まれた格好で視界いっぱい突如眩い光を見た後の敵の意識は途絶えた。

地上まで伸びる真紅の魔力はオラリオの全てが見た。神、人類があの光は何だ!?!と消失するまで瞠目した。

「……………」

天井を貫く無詠唱の魔法攻撃。三人はついに言葉を失い、手を掲げる一誠を呆然と見ることにしか思考に残っていなかった。あつさりとして二人を倒しそれでもまだ余裕そうな態度で周囲に光の槍を具現化する。

「へファイストスを返してくれるな?」

「…………ふふつ、参ったね。君は一体なんなんだろうね。君みたいな子供は初めて見た。いや、君は人間なのかな?」

邪神の失笑に一誠は不敵に笑みを浮かべるだけだ。今なら椿だけでもどうにでもなれる状況に逆転し邪神はへファイストスを盾にしたまま囲まれた。

「邪神よ。もうお主の眷族はここにおらん。潔く主神を返してもらおう」

「あーうん。そうするしかないよね。でもさ、オレはまだ天界に送還されたくないから……………しようがない、こうしちゃう」

椿の目の前で邪神は……………へファイストスを流れる水路の水へ落とした。亜麻袋ごと入れられたままでは泳ぐこともできない。水の中へ消え、沈む主神に椿の右眼は大きく見張り焦燥に駆られ大剣を放り出して自分も水の中へ飛び込んだ。

「……この地下水道の水は流れが速いから直ぐに助けて浮上しないとね。冒険者の子供はともかく神はそう長くはない」

冷笑を一誠に向けて水へ指さす。

「でも残念。この先からは一切水面に顔を出すことができない水路に繋がっている。ログ湖は知っているかな？あそこまで繋がっているんだよね。だからヘファイストスは死——」

最後まで聞かず一誠も水の中へ飛び込み、椿とヘファイストスの後を追う。残された邪神は作戦勝ちと邪な笑い声を発し続けた。

(主神様っ……！)

激しく流れる水流の中でヘファイストスを掴まえた。後は水面に顔を出すだけなのだが邪神の言うとおり、オラリオの外へ流れ出す水路に顔を出す場所は無かった。流れで激しく体のバランスが保てずこのまま流され続くことになればヘファイストスが溺れ死ぬのは必然だ。何か手はないかと辺りを見回す椿の背後から一誠が物凄い速度でやってきた。彼女の肩を掴むその瞬間、三人は光となって水中から飛び出した。

冒険譚2

闇派閥イルヴァイスの隠れ家に繋がる入り口前に真紅の魔方陣が円陣に光を走らせ、完成すると一瞬の閃光と共に地下水路から転移した三人が現れた。

「——ぶはっ!!」

「げほっ!げほっ!げほっ!」

冒険者の椿は器が昇華する度に身体能力が向上するが、咳き込む神は本来の力を封印して下界に降臨している故に人と変わらない身体能力。肺活量も人並みに等しくもしも一誠の助けが無かったら椿を残して溺死、天界に送還されていただろう。

「大丈夫か?」

頭から足先まですぶ濡れで声を掛ける少年に肯定や首肯する彼女達。

「ここは……さっきの場所であるか。だが、一体どうやって……」

「そんなことよりもお前の主神を心配しとけ」

何時の間にか手に持っていた外套を、濡れたことでより豊満な双丘の輪郭を浮き出しているシャツの上から羽織らせる。その時へファイストスが落ち着きを取り戻した。

「……ありがとう、助かったわ」

「どういたしまして。それと、今回の事は絶対に誰にも言わないでくれよ」

「何故……?あなたは一柱の【ファミリア】を救ったと言っても過言ではないのに」

不思議でならない、と気持ちを籠めて見つめる一誠の顔は苦笑いしていた。

「俺で無くても団長達も同じことをする。だから誰が見ても当然の事をしていた、それだけなのと主神達から問い詰められる面倒事を避けたいのが本音かな」

それだけ言い残して、置いていかれる形の半ば呆然とした二人が見送る間に一誠はどこかへと行ってしまった。そのあと直ぐに【ヘファ

イストス・ファミリア」の本拠地^{ホーム}へ帰還すると、団員達は主神の姿を見て男泣き、濡れた身体を外套で羽織る女神は謝罪の言葉をしながら泣く団員達に慰めと労いの言葉を掛ける。その主神の隣に寄り添う濡れ鼠状態の椿は安堵からくる笑みを浮かべる。

後日——鍛冶神へファイストス達から大量の武器や魔剣^{イルヴアイス}、闇派閥に渡す予定だったそれらが無償でお礼に送られた。正門前に積み重ねられた武器の前にロキはたじたじでいた。

「ほ、ほんまに貰ってええのか……?」

「ええ、貴方の子供達が私を探そうとしてくれたのでしよう? そのお礼よ」

「で、でもファイたんを助けたのはうちらじやないんやで……?」

鍛冶女神を助けたのは同派閥の眷族の話になっている。それは一誠からの頼みであり、実際に椿がファイストスを助けたような形にもなっている。だから自分のことは話さないでほしいと願われたので事の真相は三人のみしか知らない。

「それでもよ。後、別にロキだけ鼻肩しているわけじゃないから。他の派閥にもお礼を渡しに行かなくちゃならないし」

さばさばとした物言いにロキは口を閉じて黙りこむ。納得はできないが向こうがそう言うのなら……と感じて受け取る方針で固めた。

「ロキ、貴方も攫われないように気をつけなさいね」

「それはファイたんに言いたいわあー。もおー二度と一人で夜中に歩かんとときい?」

「分かってるわ。……それとロキ」

「ん?」と反応するロキへ何か告げようとしたへファイストスだったが、開き掛けた口を閉じた。地下水道の中で起きた戦闘、そしてL.V.に見合わぬ実力のことを教えようとしたが彼女は教えない方がいいと隠すことにした。何より本人がそうして欲しいと願ってもいたからだ。

「いえ、何でもないわ。ただ、あの鎧の子。変わってるわね? 直接工房を貸してほしいと言われたわ」

「ま、まあ……色々面白い意味のうちもそう思っておるけど」
一誠のことを話題にされ、心中はハラハラドキドキと冷や汗を掻きながら秘密を悟られないように返した。

「いまあの子はどうしてるの？」

「あー今はなあ。うちのアイズたんと空の散歩をしとるで」

「空の散歩……？」

ロキの人差し指が衝くオラリオの遙か上空……空飛ぶ布を改良して意匠が凝った絨毯の上に乗る一誠とアイズ。風を切りどこまでも青い空の下で楽しんでいた。

「どうだアイズ、アリサ。好い風で気持ちいいだろー」

「うん、凄くいい」

「凄い、飛んでる……」

金眼を輝かせ、驚嘆で目を見張り胡坐を搔く一誠の足の上に小さなお尻を乗せてぶつかかる心地の良い風をアイズとアリサは堪能していた。三人の傍にさらに空飛ぶ絨毯の上にそれぞれ乗っているフィン達も同行している。理由は単純。一誠が人数分を用意したからだ。空を飛べる絨毯に興味を持ち、乗ってみればオラリオを一望できた光景にアイズとアリサも含め目を丸くして驚いたのはまだ記憶に新しい。

「がっはっはっはっ！こいつは傑作じゃ！よもや空から地上を眺められる日が来るとはなっ！」

「まさか彼に魔道具マジックアイテムを作る才能があったなんてね。リヴェリア、どうだい？これも君が望んだ世界で間違いないかな？」

「ああ、まだ見ぬ世界が……この世界を見渡せる空の世界はとても素晴らしい」

豪快に笑う大戦士のドワーフ、一誠の才能に感嘆して副団長のエルフに訊ねるフィン、翡翠の双眸を見たことなかった世界の光景と風景に焼き付ける絶世の美女のエルフ。

「よーし、宙返り！そんで∞飛びだあー！」

「きゃああああああああつ!?きゃああああああああああつ!?」

「おーおー、あの小娘が叫んでおるわ。のう、初めてじゃろう？」

「そうだね。彼の前じゃあ『人形姫』も形無しのようにだ」

「まったく、あまり無茶なことを……」

それでも三人の顔に微笑みが浮かんでいる。こういう一時も悪くないと頬を綻ばせてもうしばらく一誠とアイズにアリサの空の散歩に付き合うのであった。

「ハフアイストス・ファミリア」の主神誘拐事件から早くも二週間が経過した。

「ん、ロキ。プレゼントだ」

「お、おー？何やイツセー。急にうちに贈り物なんて。てか、よお神語を知ってんなあー？」

「もう少しで俺は脱退するんだ。少なからず世話になってるからそれに兼ねてだ」

夜。突然の部屋に訪問し、片手に持ってきた高級そうな酒を渡す俺から不思議に思いながら嬉々として受け取ったロキ。理由を知り、真面目やなあーと思いつつも苦笑いを浮かべる。酒を大事そうに抱え、ロキはあることを言った。

「なあー、うちらから離れて次はどこか『ファミリア』にするん？」

「俺個人が自由に動ける派閥が良いな。だから縛られない派閥に行こうと思ってる。まだ決めてないがな」

「そっかー。なあーイツセー。もーちっとだけこの『ファミリア』にいてくれへんか？」

ロキの乞いに鎧越しで首を傾げる。入団する前に取り決めた契約を継続してほしいと願いに疑問を抱いた。

「何でだ？そう言う契約だろ」

「そや、確かに契約や。でもな、契約を続行することもできる。うち、イツセーを手放したくないーって気持ち湧いたんよ。特に色ボケ女神に目えつけられているかもしれないしな」

「色ボケ女神って……誰のことだよ」

「その内嫌でも分かる。で、どや？まだ契約を継続してくれへん？」

主神の問いにしばらく考え……首を横に振った。直ぐに決め

るのは早いと思つて。

「まだ一年も経つてない内に答えを出すつもりはない。契約期間が終了したその日に答えさせてもらう」

そう言つて神室を後にした一誠は他の団員達とすれ違うことも無く塔の最上階に宛がわれた部屋へと久しぶりに戻つてみると。部屋の中に——アイズだけでなくアリサもベッドの中にいた。

「何故に？」

自分の部屋と間違え——る筈も無い。自分の意思で来た他しか考えられない。普段空けている部屋に誰がいようと困る物は置いてもない。ただ、寝具だけは違い金色の羽毛で作った弾力抜群で寝心地が良い布団にしてある。まさにアイズはその布団を独占して、幸せそうな寝顔を浮かべている。

「……しよーもない。寝るか」

扉に魔方阵を張つて、誰も入らせないようにしてから鎧を解き自分も布団の中に入ると二人を抱きしめながら夢の中に旅立った。

そんな翌日の朝。目が覚めたアイズは、布団の中に潜るまでいなかった部屋の主と一緒に布団の中で寝ていたことに金眼を丸くした。寝ている間に帰つて来たのだろう、自分がこの部屋のベッドで寝ていてどんな反応していたのか定かではないが幼女の隣で寝ている一誠は鎧を解いていた。否、鎧のまま寝るのは窮屈だろう。

「……」

寝顔を見るのは初めてで、静かに一誠の顔を窺つた。こうして誰かと一緒に寝るのは随分と久しぶりのように思える。さて、これからどうするべきか。起こすべきかこのまま寝かせておくべきか。幼いアイズは頭を悩ませ、うーんうーんと一生懸命考え——扉が粉碎した。木製の扉がバラバラに木屑となつて部屋に散乱する。迫りくる木屑から布団の中に隠れてやり過ごした後、ギョツと瞠目するアイズは恐る恐ると扉へ目を向ける。

「まったく、いつの間にかこんな硬い扉にしたのだ」

「すまないなガレス」

扉を壊した張本人と頼んだと思しき者の声が部屋の中に入ってきた。

「アイズ——む、この者……イツセーか？」

「……」

「ガレス、リヴェリア……？どうして……？」

大戦士のドワーフと絶世の美女のエルフの名を呟くアイズ。どうして扉を破る暴拳を出たのか信じられないと、零した声にリヴェリアが溜息を吐いた。

「どうしても何も。もう昼時だぞアイズ。何時まで寝ているつもりだ」

「え、もうそんな時間……？」

「どうやらイツセーの部屋で寝ていたから起きる時間帯が狂ったのかも知れんな。ほれお主も起きんか」

リヴェリアにの説明を聞き、朝と思っていた時間が実は昼の間であって、アイズは自分でもそんなに寝ていたことに驚いた表情を浮かべた。大戦士のドワーフのガレスはアイズの隣で寝ている未だに起きない一誠を大きな手で揺さぶり起こそうとする。

「扉を壊したのって……」

「何故か開かなくてな。仕方なくガレスに頼んだのだ。何も壊すことも無かったのだが……」

「何を言うか。開けることもできんのであればこうする他にないじゃろう。他に手があるのならはお主がしていた筈じゃ」

後でその話を聞いた一誠はガレスの力とある悪魔の男と被らせたとほど驚いた。

「ほれイツセー、とつと起きんか！何時まで寝ておる気じゃ！」

先程よりも強く起こしに掛るガレスのやり方によく煩そうに左の眉根を寄せ、顔を顰めた一誠が寝言で一言。

「うくん……うるさい」

寝転がる際に固く握った拳が無防備なガレスの顔に思いっきり殴った。綺麗な翡翠の目を大きく開くりヴェリアと硬直するアイズに見守れる中でガレスは殴り飛ばされ壁を突き破りながら外へと落

ちてしまった。後に本拠地は騒々しくなり、『ガレスさんが落ちてきたー!?』『ちよ、貴方どつから落ちてきたんですか!?』とも悲鳴が聞こえてきた。

「……………んんっ」

左眼が薄らと開き、上半身を起こした彼は欠伸を一つ零す。アリサも今の音で眼を覚ました。そしてアイスとリヴェリアは壁に開いた大穴を見て……………。

「何の騒ぎだ?」

と聞いた瞬間にリヴェリアから拳骨を食らった。

10分後、執務室。

「あはは、ガレス。とんだ災難だったね。まさか寝相で殴り飛ばされるなんて」

「笑いごとでは無いわい。こっちは何度も天井と床を落ちながら壊してしまったんだぞ」

「いやいやガレス。これは本当に笑うしかないわー。あのL.v.6の第一級冒険者が下級冒険者の寝返り様で殴られて落っこちるって……………ぷふー!受ける、もーこれ、お笑いのネタにしかならんわー!」

「ええい笑うなロキ!」

苦笑するフィンに大笑いするロキ達に遺憾と食ってかかるガレスの顔に殴られた痕は無い。恥だとはかりポジションで直ぐに治したのである。壊した、壊れた個所は現在。一誠がせつせと片づけているその監督としてリヴェリアが付き添っている。アイスとアリサも同伴だ。

「じゃが、本当にあやつは何もんじゃ。警戒しておらんかったとはいえ儂を殴り飛ばすことは絶対に不可能じゃろ。下級冒険者なら尚更じゃ。あの打撃、第一級冒険者並みの威力はあったわい」

「それはうちも知りたいわー。未確認の『レアスキル』を発現してからイツセーがL.v.に見合わない強さを得たとしか考えられへん」

「シー、『異常不明』か……………。戦闘時のみの発動だけど、無理やり起こされてスキルが発動したのかな」

「それでガレスが殴り飛ばされて天井から落ちて来たって……ぷぷっ」

「おい、ええ加減にせい。これ以上笑ったら今直ぐお主の酒を全部割ってやるぞ」

冗談を感じさせない怒気が籠ったガレスの声音は、ロキの顔を引き攣らせた。そこで仲裁として「まあまあ」とフィンが宥める。

「とにかく、彼自身に秘密が無い限りこれは『レアスキル』による現象として片づけるしかない。同じ仲間に疑惑を持つてはいけないし、何よりアイズが彼に懐いている節がある」

「むう……己の身を顧みない事は変わらないが少なくとも笑うようになつておる」

「そこだけはうちも知つてるぞー。アイズたん、だからイツセーの部屋で寝ておつたんかな?」

実際は一誠の部屋にモフモフモコモコとした布団があり、その肌触りと弾力がなんのその……一度手を布団の中に入れてしまうと今度は両手、次は頭から入つてそのまま心地の良い布団の中で寝入ってしまったのである。三人はそんなことを露も知らず、一誠とアイズの仲の良さにこのまま心の均衡を保ってくれる存在になるんじゃないのかとどこか思つたところでリヴェエリアが執務室の扉を開けて入ってきた。

「おー、リヴェエリア。もう後片付けが終わつたん?」

「……ああ、修復作業は終わった」

「修復作業?」

ガレスが落ちた周囲の瓦礫の撤去作業の筈じゃ?とフィンは碧眼をガレスに向け、ガレスもその筈だと視線で返す。修復とは何なのかロキは机の上から訊ねたところ。

「イツセー曰く、魔法で元に戻していると言われたが私はあんな魔法は知らない。壊れた物を完璧に元に戻すなど実際にこの目で見るまでは信じられなかった。ロキ、イツセーの「ステイタス」に魔法は?」「発現すらしてへんのに魔法なんてありえへんわ!もーなんなんイツセーって!」

「シー、やっぱり彼自身に秘密があったのかな」

「とてもではないがそう考えるのが妥当なのかも知れんな。で、イツセーは今何しておる」

リヴェリアの口から「中庭にいる」と告げられていたその頃。一誠はアイズと模擬戦はしておらずバトミントンで遊んでいた。アリサは点数係or見学中。

「んっ」

「ほい」

「んっ」

「ほっ」

どちらかが羽を地面に落とすまで続ける地味な遊びだが、アイズの目は負けん気の闘志の炎を燃やしていた。もしもこの遊びに勝てば……。

「副団長達に内緒でダンジョンに連れてってやる」

と、アイズが今一番したいことを提示されたのでやる気が満ち溢れているのだった。小さな手と大きな手が空へ優しく弾くように打ち上げて相手へ送るその挙動はもう修復作業が終えてからずつとしている。

「早くっ、落としてっ」

「ふはははっ、そう簡単には落とせんよ」

「なら、こう、する」

アイズは思いつきりラケットを明後日の方へスパンと打つ。不意を突かれたその明らかな相手に落とさせせる行為は、「甘いな」と述べる一誠が一瞬で落ちる場所へ移動して落とさせなかったので失敗に終わり、あっさりと空へ打ち返された。

「おー、何かしとるなー。何してるんー？」

そこへロキ達が中庭に足を踏み入れてきた。それでもアイズはも勝つことに熱心で羽を空へ打ち上げる。一誠もラケットに落ちる羽を打ち上げる。ポーンポーンと飽きることもなく二人はラケットを振るい羽を打ち上げ続ける。

「あの羽の様な物を落とさないようにしているのかな」

「それが一体何の意味があるんじや？」

「何かしらの遊戯としか思えんが、アイズが必死になっているな」

介入することも無くただただ眺めるフィン達は「うちも交せてー
なっ！」と行動に移る主神を視界に入れた。

「落とすなよ？落としたらどつちかがロキの部屋の酒を割る約束して
るんだから」

「あはは、んなことアイズたんがするわけ……」

「今のアイズの目を見てそう言い切れるか？」

ダンジョンに行きたいと言う願望を金眼に負けん気の炎として燃
やし、ロキを見据えるアイズ・ヴァレンシユタイン（幼女 七歳）。本
当の理由を気付かずアレは本気だと悟るロキは頬を引き攣った。

「えーと、アイズたん……マジで？」

「早く、やる」

「な？めっちゃ本気だぞ。頑張れロキ」

「絶対に負けへんでえ〜!？」

どこからともなく用意された三本目のラケットをロキは受け取り、
「うおおおおりやあつ！」と酒の安全の確保の為に奮戦する主神。

「なるほど、複数人で遊ぶものか」

「ならフィン、お主もすればいいじゃろう。体格的にも丁度良い」

「彼がああの棒状の網を持っていればの——」

と指摘するフィンへもう一本のラケットを投げ渡された。子供用
のラケットの大ききでフィンの手によく馴染む。

「話だったけど、アイズに加勢しに行くかな。ロキ、構わないかい？」

「だったらうちはイツセーとコンビやからな！」

「勝負らしくなってきた。アイズ、本気を出させてもらうぞ。団長が
いるんじやそうせざるを得ない」

「絶対に勝つっ」

二対二の戦いが始まり、スパンスパンと打たれる羽は見えない虚空
のラインを超えて相手の陣地に落ちる。落とさせはしないと打ち返
す四人の動きに関心の目で見届けるリヴェリアとガレスに見守られ
る中、勝敗はどうなったのか数年後——思い出話として語られるだ

ろう。

楽しい日々もあり全てが順調に回っていた。一誠のいない間はフィンに師事し、リヴェリアに学び、ガレスに諭され、一誠がいれば三人と似たようなことをし、驚きと楽しさを、アイズは様々なものを得た。涙を枯らしたアイズは戦いの毎日に身を置き、自分を見守る大人達の前で多くのものを育てていった。都市は相変わらず騒がしく、破壊と混沌の歌声が聞こえてくるもの、そんな中でもアイズは自分を見失わず同じ志を抱く者と走り続けた。充実した日々だった。全てが順調に回っていた——筈だった。

アイズ・ヴァレンシュタイン

L v . 1

力：D 5 9 1 ↓ 5 9 3

耐久：D 5 9 9

器用：B 7 8 8

敏捷：A 8 0 0 ↓ 8 0 1

魔力：I 0

アイズの眉根が、歪んだ。ロキに渡された更新用紙を見て、思わず手に力が入る。兜を外した鎧姿の一誠もアイズと同じように見ているがアイズ以上に深刻な表情を浮かべた。

「アイズ、これは誰しもが通る道だ。深刻に受け止めるな」

『『アビリティ』は極めるにつれ、成長速度も落ちていく。決して君の伸びしろが無くなったわけじゃない」

「そうやなあ。【ステイタス】っちゅうもんはそういうもんや」

リヴェリアが、フィンが、ロキが何かを言っているが、耳を素通りする。ふと同期のアリサはどうなってるのだろうか？一誠の方もどうなんだろうと目線を上げた。強さに焦がれる共通の人物の成長具合を、気にして訴えるように視線を向けていると、その視線に気づく少年と銀髪少女は更新羊皮紙を金髪少女に見せた。

イツセー

L v . 1

力：I 0
耐久：I 0
器用：I 0
敏捷：I 0
魔力：I 0

アリサ・イリーニチア・アミエーラ

L v. 1

力：C 5 9 7 ↓ 6 0 0

耐久：D 5 8 7

器用：B 7 7 8 ↓ 7 8 0

敏捷：A 8 1 0

魔力：I 0

アリサの「ステイタス」は自分に負けないぐらい成長していたことを知った。一誠の「ステイタス」はアイズに諭したリヴェリア達は「これが誰しも通る道なのか」と無言で訴えられ、何も言わず辛い辛そうに口を閉ざし視線を反らしてしまう。ガレスすら何も言おうとしない。掛ける言葉が見つからないのだ。アイズも、自分の成長具合と比較するまでも無く低すぎる一誠の「ステイタス」に同情を覚えてしまった。何とも言えない部屋の雰囲気の中……一誠は肩を落とした。

「ロキ、どう見る」

暗い雰囲気を負って執務室からいなくなつた一誠の「ステイタス」の異様について、ロキに問い掛けるフィン。変動しない数字は明らかに何かがあると感じ取り、腕を組み悩む様子を窺わせる女神は推測を口にする。

「うちが刻んだ神聖文字ヒエログリフの「ステイタス」は間違いなく正常や。でなければ、アイズと同じ『レアスキル』なんぞ発現せんわ。となると『アビリティ』や熟練度が変わらない理由はただ一つになってしまう

んやけど……」

「……それは有り得ない。数カ月前に入団したばかりの者だぞ。もしもお前の考えが正しかったならば」

「あやつは——第三級冒険者、もしくはそれ以上の実力で下級冒険者になっている、というわけか？」

ガレスが信じられんと思いつながらも現実的な予想を告げた。だが、リヴェリアの言うとおり。数カ月前からの駆け出しの冒険者が想像以上の実力者であるなんて考えられない。ましてや、オラリオ唯一LV. 7の冒険者と同等の潜在能力ポテンシャルがあるとは考えにくい。

「仮にもガレスの言うとおりだったら。彼は意図的に実力を隠していることになる」

「その理由は？」とリヴェリアからの疑問に顎に親指を添えながら己の推測を立てる。

「彼自身が僕達には絶対に言えない秘密を抱えている、もしくは更なる強さを求めて僕達には内緒で実力に見合う階層に足を運んでも変わらないでいる。と、僕はそう思う」

「半年も姿を見せなかったのはその為うちゆうわけか？」

「いや、半年以上も我々の前に姿を見せようとはしないでいる、の方ではないか？」

「最近騒がしくしておるがのお。アイズを巻き込んでであるが」

四人の視線が絡み合い、謎が深まる一方であるがやはりこの謎と疑問を解くには……

「丁度いい。彼と模擬戦をしよう」

小さな笑みを浮かべ、一誠の実力を計らおうと団長は椅子から降りた。得物は自室にある為、取りに行かなければならない。ロキ達もフィンと一誠の模擬戦を見ようと意志を秘めて行動に移ろうとしている団長を見送る矢先。執務室の扉が開く。

「アイズ？」

金髪を揺らし、入って来て金眼を四人へ向ける幼女の入室に一度執務室を後にした彼女が戻ってきた様子に用でもあるのか——ダンジョンに連れて行って、と頼みに来たのかと思った彼等彼女等にアイ

ズは小さな口を開いた。

『しばらくダンジョンに行ってくるから戻って来ない』ってイツセーから伝言」

「……」

フィンの行動を見抜いたような機会タイムリミットでも留守にする団員。アイズを除いて目元を抑えたり、額に手を当てたり、溜息を吐くなどして――。

「……私もついて行っていい?」

「うん?まだ彼はいるのかい?」

「待たせている。フィンから許可もらってくるって言ってあるから」

この瞬間。極東の言葉で千載一遇の好機チャンスを得たロキは見逃すまいと主神命を発動する。びしつと幼女へ人差し指を突き付け疾呼する。

「アイズたん、イツセーを直ぐに中庭へ連れていき!できたらうち公認でダンジョン行くこと許可する!」

「!」

主神公認であればフィン達に許可を貰わずともダンジョンへ行ける。故に目を煌めかせダツと扉の向こうへと踵返して走って一誠を迎えに行つた。残された四人は、リヴェリアは言いたげな視線をロキに向けて異論を発した。

「……ロキ、私達は認めてもないぞ」

「ええやん。今回だけはアイズたんのお手柄ってことで」

「ダンジョンに行く彼に付いていきたい思いで言ったのだろうけどね」

「それでようやく分かることがあると言うわけじゃ。リヴェリア」

そんなこんなで、フィン達は模擬戦の準備を整えてから中庭へ赴いた。自前の愛槍を片手に目的の場所に足を踏み入れた目にした光景に碧眼は固まった。

「放せよ親方!その髭と髪切るぞ!?本気だかな!」

「おうやってみろ小童。その後できつい拳骨を食らわせてやる――」

――(ジョキリ)むおっ!?本気でやる奴がおるかあああああああ
あっ!」

「あひやあひやあひやあひやつ！（笑泣）」

「二………つ（プルプル（笑堪））」

ロキの命令でか逃げられないよう腕と脇で固めていたガレスと剛腕の腕に胴体を回され拘束された一誠。もがく一誠からの本気の脅しに不敵な態度でどつしりと構えるガレスだったが、腕の中でぐるんと回る一誠の両腕が光ったと思うと長年切らずにいた髪と（顎）髭が綺麗さっぱりに切り捨てられたことで大戦士のドワーフの本気の悲鳴と入り交じった怒声が中庭に響いた。眉毛を残し禿げになった眷族と仲間、腹を抱えて爆笑する女神や普段絶対に見れないギャップに二人の少女と副団長のエルフは必死に笑いを堪えている。

「………ン、あの状況の中に加わるのはちよつと躊躇するね」

と感想を述べるフィン目の前で、怒り狂うガレスとロキのように声を出して笑いながら本拠地ホーの中を逃げ回る一誠で結局のところ騒動を抑える方向で精を出す羽目になった。

「模擬戦だって？なんでまた………」

「君の「ステイタス」が変動しなかった理由を知りたいからね」

全ての收拾を治めたところで再び中庭に戻りフィンと一誠が対峙する。見守るのはロキとリヴェリア、アイズとアリサにガレス。槍を携えて朗らかに模擬戦を臨む姿勢の小さな団長に怪訝な視線を鎧の中で送る一誠はその気はさらさらないと首を横に振った。

「やる気がないなあ………」

「そうかい？じゃあ、どうやったらやる気がでるか教えてくれるかな？」

「ん……？んーそうだな………」

腕を組んで、フィン問いに答えを考える少年は何となくロキ達へ視線を向けると、何か思いついたのかガレスとリヴェリア、そしてフィンを見回し。

「ロキー、ちよつと」

「ん？うち？」

主神を呼び出し、中庭の隅へと移動して声を殺してヒソヒソと話し合いをする。

「……マジでできるん？」

「許可をくれればできるぞ。見たくないか？」

「見たいからOKや！」

話は決まったようでフィンの前に戻ってきた一誠からやる気が出る内容を教えられた。

「団長と副団長、親方は今度一日だけ俺と遊んでほしい。三人と親睦を深める意味で」

「それが君のやる気を出させる願いでいいのかな？」

それぐらいであれば何の問題も無い。寧ろ、一誠をより知ることができるいい機会ではないか。どんな遊びと称した行動をするのか、されるのか分からないが異論は無い。リヴェリアとガレスにも乞いを求める視線を向ければ、小さく頷いて返答をしてきた。これで同意を貰えたことで一誠の要望は通った。

「それで構わないなら僕等も構わない」

「よし、だったらやる気が出てきた」

「ではやろうか。君の気が変わる前にね」

槍の持ち方を変えて穂先を前へ突き出す。この模擬戦で一誠の實力が分かる。弱くても強くてもどちらでも構わない。把握することが大事なのだ。唯一、一誠だけ遠征も戦いも「ファミリア」として参加していないから知る必要がある。

「因みに手加減とかしてくれるよな？」

「君の實力次第だよ」

「……そっか、んじや」

確認の為に話しかけた一誠の心情を酌んで返した。臨戦態勢の構えで拳を堅く握り腰を落とし腕を後ろへ引く、實力が未知数な相手に傲慢や驕りもせず何時でも対応できる心掛けと姿勢にはいるフィン。合図のない模擬戦が始まって直ぐ一誠は離れた所から「ふんっ！」と気合が入った短い声と真正面へ突き出した。その挙動に首を傾げる気持ちでいたら、全身に凄まじい衝撃が襲い中庭を囲む壁まで吹っ飛びフィンは壊れた壁の向こうへと姿を消した。

「……なに？」

「なんじゃ、あやつのは攻撃は……見えない攻撃でもしておるのか」
見守っていたリヴェリアが瞠目する。一体何故フィンが吹き飛んだのか理解にできずただ眼を丸くするだけで、ガレスも見たただけでどんな攻撃なのか自分なりに推測してそう口にした。

「親方、それ正解だ」

「む？」

独り言として呟いた声を拾い、肯定した一誠が握った拳を見せつけながら説明口調で語った。

「俺は団長に見えない攻撃をした。カラクリを教えると空気に圧力を掛けて攻撃した。所謂衝撃波さ」

「衝撃波じゃと？ 衝撃を遠距離から放っているというわけか？」

「そーいうこと。だから団長は吹き飛んだり壁が壊れたんだ。まあ、親方みたいなドワーフなら堪えられるだろうがな」

種明かしを済んだところでフィンに話しかけた。普段の温厚で朗らかな顔ではなく、瞳を鋭くし戦士の顔に変わっているフィンが壁の向こうから一誠の前に戻ってきた。

「これで分かってくれたか？」

「ソーもう少して分かるかも」

そう言った矢先にフィンは小さな身なりを活かして地を這うように肉薄する。一誠の視界の下方から鋭く槍を突き出し、かと思えば足元を水平に薙ぎ払う。素早く小柄な小人族バルウムの少年に、一誠は鎧の中で笑みを浮かべた。真紅の籠カンドレットの両手から真紅色の光刃が伸び、容赦なく死角から突き出される槍を受け流し、逆に光刃を突き出せば間合いを見極め、距離を離し、嵐のように振り回し飛んでくる斬撃を初めて見ても、大胆に懐へ飛び込み、豪雨のような突きを放った。その突きを見極め受け流し、かわし、こちらからもと光刃を素早く突き出す苛烈な突きの応酬が始まった。

「ふっ！」

「はっ！」

時には横薙ぎに振るわれる光刃を柄で受け止め、槍が真正面に鋭く突き出されたかと思ったら直ぐに顔をめがけて穂先が上段に振るわ

れ、鎧の頭部に生える光刃を纏う鋭利な一本角で受け止め、背中に溜めた両腕が左右から真正面へ空気を裂く一突が繰りだし、突如親指が震えたフィンに距離を取らせたと同時に下段から振るわれた爆発的な脚力でもって発生した鎌風に柄で防ぐも、勢いを殺せず後退する直後。フィンの真後ろに瞬間移動した一誠。小柄な体に蛇のごとく腕を回しピタリと光刃を小人族バルウムの首筋に添えた状態で語りかけた。

「どうするまだ続けるか？これ以上したらホームが壊れかねないけど」

「……それは困るね。仕方がない、今回はこの辺で止めておくよ。次はダンジョンの中でいいかな」

これはただの模擬戦……。その筈なのに何故かフィンは模擬戦をしたように思えなくてはならない。愕然とするリヴェリアとガレス、開いた口が塞がらないロキ。形容しがたい気持ちで心が高揚するアイズとアリサを他所に「またやんのかよ」と嫌そうに言い返しつつ指をパチンと鳴らした。壊れた個所が見る見る内に一人で修復、時を巻き戻したかのように完全に元通りになった壁を見てリヴェリアとアイズにアリサ以外、フィンとガレス、ロキは目を大きく見張った。これがリヴェリアが言っていた光景だったのだらうと察したのは直ぐ後だった。

「イツセー。どうやってたら壁が勝手に直るのか教えてくれるかな」

「企業秘密」

「そこをなんとか」

「黙秘権を使わせてもらう。それよりも何か分かったことはあったのかよ」

話をあからさまに変えられ、やれやれと肩を竦み苦笑いするフィンの目は真剣そのものだった。

「確定したよ。君は第二級冒険者以上——僕達と同じ第一級冒険者並みか同等、それ以上の実力で下級冒険者になっている。その強さ、どこでどうしたら得られたのか気になるけれど教えてくれないんだよね？」

「それは俺の秘密に関わるから無理だな。今の関係が崩壊しかねな

い」

秘密……誰しも一つや二つは抱えているかもしれない誰にも絶対に口が裂けても公にできない実話を持っている。一誠にも秘密があることが分かり、フィンは優しい笑みで問う。

「どんな秘密を抱えているか分からないけど、僕達との関係が崩壊しかねない秘密だろうと僕等は受け止めるよ」

「無理だな」

間も置かず、ハッキリと断言した。

「受け止めることはできない。特にアイズが——俺を許してくれるとは思えない」

「アイズが、君に……?」

彼女との関係は良好の筈なのに何故許せないのだ? そう疑問を脳裏に浮かべ碧眼を金髪金眼の少女へ向けていた視線を一誠に向け直すと、何時の間にもアリサと姿を暗ましていた。

——翌日。

不思議なことに起床した時、切られたガレスの髪と髭が元通りに生えていたことを確認すると一人、心底安堵で胸を撫で下ろしたのは本人のみしか知らない。

さらにあの模擬戦の一件以来、アイズは鍛錬にますます熱を入れ始めた。同じ下級冒険者に遥か高みの頂にいる一人と戦って己が望む強さを見せつけられた。彼は言った。小さい頃から世界中を旅して修行していたと。

なら、神の恩恵フアルナを授かった自分なら?

なら、今から修行をしていればあの強さを得られるのでは?

そう考えに至った彼女は金眼に強い意志の光と決意を孕ませ、虚空に素振りをしていたところにも何も知らず本拠地ホームを留守にしていた件の少年と幼女がやってきた。

「俺がしていた修行をしてみたい、だって?」

「お願いっ。私は、強くならなくちゃいけない! 時間を無駄に過ごすなんて嫌、できない!」

「気持ち分かるけど……今からすると今よりダンジョンに行けなく

なるぞ。それでもいいのか？」

切なる思いをぶつけ袖を掴むほど縋りつき乞う、まだ幼い少女の心情を酌み跪いて視線を合わせる。

「俺がしてきた修行は数年で強くなった。16歳になった時には前の自分より強くなったと実感できた」

「16歳……」

「アイズは7歳だから9年後の話だな。それまでずっと一日も欠かさず俺の修行をやれるか？」

少女の決意に播らぎは無かった。真つ直ぐ強い眼差しを向け続けるアイズは強くなりたい一心で一誠に師事を仰いでいる。一誠のようには修行をすればいずれ自分も相応の強さを得られる。ダンジョンは勿論行く。だけど、他にも強くなれる方法があるならそっちの方面にも意識を向ける。伝わる意志の強さに一誠は籠ガンドレット手から伸びる光刃を見せつけた。

「これは人なら誰にでも持っている力で剣にしている」

「フィン達も？」

「そうだな、全人類が持っていると言っても過言じゃない。この力は『気』と言って、この根源は、生命エネルギー……んと、元気の源なんだ」

恐る恐る人差し指で光刃の腹を触れ、感触があることを知ると手の平全体で触れ始める。冷たさも温かさも感じない、硬いのに鉄や金属の様な感じでもない。心から不思議と感じさせる光刃だった。

「元気で剣を生やせるの？」

「元気は体力でもあるがな。体力を消費して作り上げているんだ。んまあ、今のアイズにちよつと難しい説明だから感覚的に覚えてくればいいか。まずは、自分の体の中にある気を出す練習だ」

アイズの前で胡坐を掻き、両手を合わせ「見てろ？」と意識を向けさせる一誠は、両手の間に集束する光が球体となって具現化した。興味深々で目を大きく開いて凝視するアイズの様子は好奇心旺盛な子供と変わらなかった。

「これが俺の元気の源だ。魔力じゃないからな？」

「魔力じゃない力……どうやって出せるの?」

「これは地味ーな程、ひたすら静かに集中して両手の間に出す意識をするんだ。何日も何週間も何年もな」

「……」

「俺も手伝う。コツさえ掴めれば何となくな感じで出るようになる。最後に聞くけど、俺がした修行は地味なのがばっかりだ。それでもするか?」

地味なことでも極めれば強力な技となる。剣の素振りもその類だとアイズは知っている。一誠も地味なことをして極めたから強くなったのだと共感したからこそ、頷いたのだった。

「よし、早速特訓だ」

「よろしくお願いします」

「私もする」

こうして始まるアイズ・ヴァレンシユタインの特訓の日々は、密かに記録として残された一誠の日記帳で明確に綴られていた。

冒険譚3

一誠を師と仰いでからも剣の素振りや稽古を欠かさず、気を引き出す特訓を今日も続けていたアイズは視界に入れる。銀髪に澄んだ青い瞳の幼い女の子を。何時も彼の少年と消えては現れる。【ロキ・ファミリア】のホームに住んでいるわけでもなさそうで、一体どこに住んでいるのかふと素朴な疑問として頭に浮かんだ。

「……二人はどこに住んでいるの？」

「藪から棒にどうした？」

「ホームにいてくれたらずっと一緒にいられるのに、修行もできるのに二人はどこで住んでるのかなって」

あと、半年間も帰って来なかった話しも聞かせて。

アイズの乞いを受け、アリサも話を聞きたいらしく興味津々に目を向ける。純粹無垢な光を孕む眼の前に「うーん」と少し悩む仕草をし、自己完結した風に頷く。

「それでもない話と驚くような話があるけど、聞きたいか？」

コクコクと首を縦に振る二人の幼女。姿勢を正しくして座り直し、聞く姿勢の構えをすればじつと話を打ち明けるのを待ち始めた。特訓は一時中断だなど心中苦笑いし半年間今までどこで、アリサと出会う前に何をしていたのか一誠は語り始める。

「まずはダンジョンの中の情報を集めなきゃな、と思って毎日のようにギルドに通っていた」

「モンスターの情報を？」

「各階層の構造と多種多様のアイテムもな」

だからよく付き合ってもらったアドバイザーには、またかと呆られていた。

「その階層を踏破すれば下の階層に潜って挑戦、壁から手に入れられる鉱石や金属も採取しつつモンスターを倒し続けていたよ」

面倒だから壁を殴って採取していたけど、と付け加えられたアイズとアリサをなんとも言えない気持ちになった。

「そうやって繰り返して小

インフアクト・ドラゴン

竜を倒して中層に進出、中層の階層も

そんな感じで探索していた」

他の冒険者と何等変わりもない行動をしていた、と二人に告げる。アイズの感想は、一誠の言う通り確かに大した話の内容ではなかった。語られる話の中で強きの秘訣でも聞けるんじゃないかと思っていたが実際に聞くと少し拍子抜け――。

「半年の半分はそんな感じでしたが、もう半分は他の事をしていたし、驚く体験をした」

「驚く体験？」

話を続ける一誠にオウム返し。それは何なのかと首肯する本人は人差し指を空へ立てた。

「空の果てまで飛んで、途中分厚い雲の中に入ってみたら空に浮かぶ島があったり、月まで一っ飛びしてみたら猫の絵が描かれている扉があつて、試しに入ってみると……そこは料理屋の中だったことがあつたんだ」

「……………」

そんなことあるはずがない。疑う目で見つめてくる四つの眼に対し、二人の反応を予知していた風に苦笑する少年。そこへ第三者、ハイエルフの冒険者が様子見と顔をだした。

「どうした、顔を突き合わせて」

「半年間いなかったイツセーの話を聞いてた」

「ほう、そうなのか」

話の途中なら加わって聞こうと、リヴェリアも輪の中に入り腰を下ろしたが、アイズやアリサから聞く一誠の半年間の空白には眉間に皺を寄せた。

「空に島など、ましてや月に店などあるはずがないだろう」

思い付きで話したのだから、とりヴェリアからそんな雰囲気を感じても話した等の本人は肩を竦めるだけだった。

「じゃあ、今度は副団長殿が何か話をしてくれよ」

「なに？」

「……………(ジー)」

水を差され話しをする気は無くなったわけではなく、純粹に興味本位

でリヴェリアの話しを聞きたい。一誠の機転に年長者の話しはどんなのだろうと好奇心の眼差しを向ける二人の少女。もう一つの視線も加わって三つの視線が絶世の美女のハイエルフに向けられ、困惑の色を顔に滲みだす。

「……私の話しなどつまらんぞ」

「つまらなくてもいいから」

と、催促する一誠。しかし他人から過去を教えろと言われてあまり気が乗らないのも事実。話しをうやむやにしてこの場から離れる機会がなくなる前に――。

「人の話にケチつけて自分だけ何も語らないのはどうかと思うぜ副団長殿？」

肩に手を置いて満面の笑みなのに陰りがある一誠によって無くなってしまい、少し逡巡したあとは観念した風に息を吐いたりヴェリアだった。

「……何が聞きたい」

とある日では、アイズとアリサに背中に重しを乗せて腕立て伏せをやらせている時。ガレスが不思議そうなものを見る目で近づいてきた。

「のう、何をしておるんじや？」

「見ての通り、腕立て伏せ」

「それは分かるが、背中に重たい物を乗せてどんな効果があるのじや？」

「筋力が向上する」

――一誠も自分の背中にどこから持ってきたのか、大きな丸太を乗せて（片腕のみ）腕立て伏せをしているのだから不思議でならないので、見たことのないトレーニングに蓄えた顎髭をさすりながら見つけた。本当に効果があるのかと気になったものの、実際その後、片手で数える程度であるが確かに力の能力値が向上していたので無駄ではないことを知った。

「ふむ、イツセー。儂が乗っても平気か？」

「ん、いいぞ」

丸太をどかすガレスが代わりに一誠の背中にどっしりと座りこんだら、何度も視界が上下に動きだす。ドワーフとして他の種族よりもやや体重はある方である。それでも変わらない速度で腕立てする一誠を見下ろしながら、こう思った。人の背中に乗る行為はこれが初めてで、何とも言えないがこういう鍛え方もあるのだな、と……。

「若い連中にもやらせてみるか」

いいシゴキにもなると薄く口元を緩めた。後にガレス指導の腕立て伏せの訓練で若い世代の団員達は、悲鳴を上げながらシゴかれる光景を空中回廊から眺める日はそう遠くないのであった。

ある日、【ロキ・ファミリア】の首領に呼ばれて事務室へ足を運んだ。その部屋は団長のもう一つの部屋だと言うことを知らないまま訪れ、事務机に座っていたフィンと対峙する。

「やあ、来てくれたんだね。てつきり蹴られて断られるかと思ったよ」

「朝っぱから酒臭い主神をどうにかして欲しいと思って来てみた」

「あれが彼女の日常だと受け入れる他ないよ」

それでよく眷族達から愛想尽かれないでいるな。心からそう思った一誠の心情を察したのか、苦笑いするフィン。

「イツセー、入団して半年以上経つがどうだい？」

「別に、何とも思わない」

そっけなく言い執務室を見渡した。魔石らしき結晶が内蔵されている大型時計^{オールクロック}。一誠はそこから本棚の向かい側、暖炉の頭上の壁に掛けられた絵画風織物^{タペストリー}に目を向けた。金糸や銀糸を多く用いたその壁かけには、一柱の女神の絵柄が織られていた。小人族^{バルウム}の間で深く信仰されていた架空の女神、『ファイナ』だ。彼女は『古代』にまで遡るとある騎士団が擬神化された存在である。彼の騎士団が小人族^{バルウム}の最初で最後の栄光——。しかし、本物『神々』の降臨を境に彼女の信仰^{ファイナ}は一気に廃れ、小人族^{バルウム}は心の拠り所を失い、そして加速度的に落ちぶれていった。

「それが気になるかい？」

タペストリーの女神像に目を向けていることからフィンの訊ねにこう言い返した。

「あれを織ったのは団長か？綺麗だな」

「オラリオに来る際に持ってきた私物の一つだよ。織ったのは同族の者だね。その女性は僕達小人族バルウムが信仰していたファイナっていう架空の女神なんだ」

過去形で語る団長に短く相槌を打つ。

「小人族バルウムの冒険者の、上級冒険者の名前は他の種族の冒険者より圧倒的に少ないよな」

「そうだね。僕達の種族は周りから偏見されがちで見下されることは少なくない。数多くの同族はサポーターとして冒険者になることもよくある。だけどそんな同族に勇気の光が無いからなんだよ。前へ進む強い意志という勇気が」

勇気の光？と視線を戻した相手に碧眼を壁に掛けてある得物の槍へ向けながら言葉を発する。

「架空の女神を信仰し続けた僕達の前に本物の神々が降臨して以降、心の拠り所を失って廃れてしまった。だから小人族バルウムの種族から英雄の存在が現れれば、また復興すると僕は信じてる」

目の前に立つ少年へ自分の信念を、志していることを打ち明け「よかったら冒険者に成った理由を教えてくれるかな？」と乞う。乞われた当人は淡々と返答する。

「ダンジョンの最後の階層をこの目で確かめてみたい——未知への探求心かな」

「そうか。だったら途中で死なないよう頑張らなくちやねお互い」

身に余る偉業を抱いている一誠のそれは、己の野望の成就する為に必要な要素の一つとして考えているフィンは否定せず頷きながらそう言い返した。

更にある日——二日酔いで苦しんでいるロキの声が一日の始まりとして迎えた。団員達にとって日常的なことだと幹部以外は大きく相手にもしないでいた。

「ううう、ママく頭がめっちゃ痛いであく……!」

「昨晚、程々にしろと注意した者の言葉を心に留めなかった者の自業自得だ」

「ぐはっ、辛辣なママの言葉でますます頭痛が……っ!よ、酔い止めの薬もなくなくなっていたからさらに苦痛があ……」

「いまガレスが『ディアンケヒト・ファミリア』印の薬を買いに行かせているからもう少し辛抱だよ」

「こ、今回は今までの比じゃない程に痛いんやあく。頼む、誰かうちの苦しみを癒してえなく。特に誰かの胸に顔を埋めさせてくれたら痛みは和らぐと断言できるんやけどお……ちらっ」

「フィン、どうやら心配するほど重症ではない」

フィンの事務室でそんなやり取りを繰り返している光景すら日常茶判事でもあった。神の助けを無慈悲に突っぱねるハイエルフの副団長は小人族バルウムの団長の補佐の仕事に意識を向け、長い耳に入る雑音もとい主神の苦しむ声に「心配無用」と断定した。その時、扉を開けて入ってきた一人も「ロキ・ファミリア」の日常の一つに加わった。

「ん?頭を抱えて悩み事か」

「お、おお……イッセーやないか。どないしたん」

「これからダンジョンに行くからアイズの同伴の許可を一応求めに来たけど大丈夫か?」

「気にするな。酒に溺れた者の末路に過ぎない」

リヴェリアの指摘に苦笑を浮かべるフィン。薬の買い出しに行つたガレスが戻ってくるまでずつとこの調子なのだ和一誠に教える。

「……神でも二日酔いするんだな」

「イッセー、その呆れた顔とうちをゴミを見るような目はなんや……」

「俺の中の主神像が木端微塵になったからだか?もう主神を主神として見る価値も無くなりかけてるし」

ひ、酷い物言いやつ!?!と叫んでは鋭い痛みに襲われて頭痛に堪える姿は見るに堪えない。ので、近づいて背中に添える風に触れた手を中心に淡い光が全身に広がりロキを覆う。一誠のその奇異な行動に

フィンとリヴェリアは釘付けになり、何をされているのか分からないがあれだけ苦しませていた二日酔いによる頭痛が段々と和らぎ、次第に痛みは無くなって快調した。

「……お？なんや、頭痛がもうしなくなっただんやけど……？」

「そうしたんだから当たり前前だろ。これを機に飲む酒の量も減らしておけよ」

「イツセー、自分、なにしたん？」

「秘密だ」

体調を回復し終えたロキからの問いやりヴェリアからの追究の視線、フィンの意味深な眼差しから逃げるようにとっとと退室した一誠は、入ってきたガレスと擦れ違う。

「ほれ、買って来てやったぞいって……なんじゃお主ら、奇妙な物を見る目をしておって」

「シー、ますますイツセーの謎が深まったなって思っていたところなんだよガレス」

「また何かしおったのか」

「ロキの二日酔いを何かしらの力の類で、私達の前で治したのだ」

そう言われても自分がいない間に何が起きていたのだと、古くからの付き合いの仲間疑問符を浮かべて首を傾げるガレスだった。

「ロキ・ファミリア」から離れて別居している二人の日常生活は他の冒険者と変わらず過ごしている。両親を殺した化け物に対して復讐心が芽生えつつある幼女はダンジョンで鍛えるべく今日も兄的な存在と潜りにいく。

アリサの得物はアイズと同じ短剣のもの。そして今は白い霧のよ
うな霧が広間に広がっている12階層に出現した豚頭オークと奮闘中で、悪戦苦闘を強いられていた。まだ幼い少女の上に短剣で肉塊のように肥えたモンスターの体を切り裂くのに一苦勞、そして幼女を叩き潰さんと振られる迷宮内を徘徊するモンスター達に提供する『迷宮の武器庫』、その中の一つ『天然武器』の棍棒も無視できない。

「っ」

『オオオオオオオオオオ！』

まっしぐらに向かってくるアリサにオークは棍棒を構えた。ついさつきまで枯木だった地面から生えていた物を抜き取ったそれは、強請った部分が丸く肥大したハンマーみたく、それを頭上に高く高く振り被る。

「っー」

はっとしたアリサは条件反射的に突進した。武器を下ろす攻撃は薙ぎ払いと冗談からの振り下ろし——その攻撃のモーションを片手で数えられないぐらい何度も何度も見て来た。そして相手の攻撃をする際の軌道を見極めてしまえば、回避はしやすい。地面に叩きつける故に連続攻撃の心配もいらぬ。

棍棒を引き上げるまでは、完璧に相手は隙だらけ。

——一気に、畳み掛ける！

『ブグウウウッ！』

「ああああああっ！」

『——ブギヤア!?!』

振り下ろされた棍棒を余裕をもって回避。突撃の勢いを緩めずオークの脇を駆け抜け、擦れ違い様に横っ腹へ斬撃を見舞う。裂かれた腹から緑色の鮮血が飛び散り、オークは堪らず汚い叫び声を上げた。

「えいっ！」

ガラ空きの背後から『教わった』通りに両足を狙った。両手で柄を握り締めて力を籠めて短剣の切っ先がオークの太い短足に刃が走る。

『——ッッ!?!』

耳を聳する大絶叫。バツクリと裂けた足からも鮮血が迸り、振り返るを浴びる前に跳躍して背中を強く蹴り出して草原に倒した。潰れる悲鳴にルーム全体を震わす衝撃。オークは悶えるが、アリサは止まらない。ダッ、ダッ、とオークの巨大な背中の上を駆け抜け、そして後

頭部。剣先が真下に向いた短剣を振り下ろす。鈍い音と貫いた感触が柄を握る両手にまで伝わりながら刃がオークの頭が貫通した。

『ギツ、ブゴオ……』

「——アリス、もう一匹来たぞ」

「!」

一度大きく痙攣してやがては絶命したモンスターから顔を上げ、見守っていた者の言葉通りこの階層にやってきた通路の逆方面から現れたオークを視認する。戦闘の音を聞き付けたようで、既に興奮しながら霧の海を掻き分けて来て、周囲の天然武器ネイチャーウェポンを装備しようとしてもい

ない。

「まだ大丈夫か」

「大丈夫だよ。まだ、いける」
掛けられた問いに言い返して後頭部から抜き取った短剣についての緑血を払いつつ水平に構え、臨戦態勢を取るアリス。

「私のもっともっと……強くならなくちゃ、ダメだから」

そう言つて地を蹴つて駆け出し、前に突き出した短剣を構えたまま矢の如くオークの胸部へ跳びかかった。

………
………
………
………
………
………
………
………

数時間後。

腕に嵌めた時計の大小の針が揃って12時を差した頃を見計らい、ずつと見守っていた者が再び声を掛けた。

「アリス、昼食の時間だ」

「はあ、はあ、はあ……うん」

インファント・ドラゴン

草原に横たわる小 竜 だった灰燼と化した灰の山の前に立ち、息を整える少女はドロップアイテムの回収を忘れずに戻ってきた。草原に敷かれた布の上で昼食用に作っておいた弁当箱を並べ待っていた真紅の全身型鎧フルプレートを身に包む人物Ⅱ一誠のもとへ。疲れた体に糖分はいいと甘い飲み物を手渡され、コクコクと飲んでいくと甘さが口

に広がり全身が癒された気分です。深い息が零れる。

「美味しい……」

「しぼりたてのミックスジュースだ」

「私、好き……」

浮かぶ笑みに嘘はないと一誠も口元の部分だけ開き、釣られた風になんて命の駆け引きをし富と名声、野望と欲望を叶う魔の巣窟の中でほのぼのと食事をする光景を醸し出す。二人がいる階層にも早朝から潜り込んで来ている冒険者達が更に下の階層へ向かったり、まだ駆け出しの冒険者達は自分の力量に見合う上層で成り上がらんとしている。そんな様々な冒険者達の邪魔にならない壁を粉碎して瓦礫の山と化しているその傍で昼食をしていた。

「今日は体力がもつと頑張れるようにスタミナ弁当にしてあるからたくさん食べておけ。このあと、上層の希少なアイテムを探しに行くからな」

「うん、わかった」

弁当の中身からは食欲をそそる匂いを出している。アリサが食べたことが無い料理が詰まって新鮮さと朝から作っていた一誠の料理の腕前は凄いと感嘆と称賛を心中で思った。

「イツセーってママより料理が上手なの？」

「んー、分からないな。でも、やっぱり誰かに作ってもらって美味しいのは嬉しいことだと思う」

「嬉しい……私もママの料理、好きだった」

「そうだな。俺も母さんの料理好きだったな」

「……イツセーも、ママに会えないの？」

自分と同じ境遇の人？と思つて訊ねたら「そうだな。アリサと似ている」と述べられた。

「生きているけれどももしかしたら二度と会えないかもしれない。だからアリサと似ているんだ。元の世界からこの異世界に来た人間——
——てな」

「異世界……」

自分達は本当に異世界に来たのか、幼いアリサはまだ実感しないで

いる。本当は同じ世界のどこかに存在している大きな町中にいるんじゃないかって思う時がある。

「私と同じ世界から来たの?」

サンドウイツチを食べながら首を傾げる。何かこの幼女に応えられるものはないかと軽く思考の海に飛び込んで考えると胃の中に送り込んで口の中を空っぽにしてから口を開く。

「アリサはどんなところで生まれただ?」

「ロシアって場所。怖い化け物が世界中に居て色んな場所がたくさん壊れているばかりだったよ」

「……ロシアか。その怖い化け物の名前は分かるか?」

分からない、と首を振るアリサ。彼女の世界の情報はそれ以上聞き出せないと判断をし、ジツと——彼女の情報を見出した。そして異世界ならではの真新しい情勢を知ることになった。

「なるほど……」

「?」

「ああ、軽くアリサの世界を調べたんだ。そしたらその化け物は——アラガミという名前らしい。この世界にも俺の世界にもいない凶暴な化け物だな」

初めて聞く『アラガミ』という両親を殺した化け物の名前を知り、小さな手をぎゅつと握りしめた。

「……パパとママを食べたアラガミはこの世界にいないの?」

「この世界に來ない限りは絶対だろうな。仮に來たとしてもこの都市には強い人達が多くいるようだし、アリサが大人になる前に倒してしまいかもしれない」

ただし、アラガミという人類にとって天敵に等しい脅威な生物の強さはどのぐらいなのか一誠は知らない。それでも簡単に倒されるほどヤワではないだろうと信じてアリサにそう告げたが、少女の心は複雑だった。顔にも出してしまふほどだったので心情を察して銀髪の頭に手を乗せた。

「……?」

「今は強くなることを集中しよう。元の世界に戻れる時は、昔の自分

より遙かに強くなった時の方が色々都合がいい」

「……うん」

もしも戻れるなら、アラガミを倒せる力を身に付けてから。それは同感だ。弱いままで戻っても直ぐに両親の仇は取れない。この世界で強くなつて何時か必ずアラガミを……。

オラリオに穏やかな気候が訪れ、季節は秋。食欲の秋、読書の秋、スポーツの秋、芸術の秋等が主に盛んになる日に成った。肌で次の季節に移り替わったことを感じ取った少年はとある食材を求め幼女を市場へ連れ回した。

「サンマ？なんやそれ」

「……知らないのか」

結果、惨敗したので主神達に問うた。が、不思議そうに首を傾げられた。

「うーん、それすら聞いたことが無い名前やで。フィン達、知つてる？」

「いや、聞いたことが無いね」

「私もだ」

「逆に何なのかこつちが知りたいところじゃ」

三人の亜^{デミ・ヒューマン}人達すら聞き及んだことが無いとロキの問いに答えた。この三人すら知らないなら「ロキ・ファミリア」自体、追い求める食材の入手先は知り得てないだろうと少し残念がった。

「突然戻つて来て聞きたいことがあるって言うから何やと思えば……ガレスの言う通りサンマって何なん？」

「刀のように細長く、背中は黒く腹は銀色の魚だ」

「ふむ、刀のように細長い魚とは聞いたことが無いの。で、それがどうしたのじゃ」

「市場に行つても無いから最大派閥なら何か知っているかなつて思つて」

「すまない。そう言う魚は僕等も食べたことが無いんだ。無論、見聞したことも無ければ触つたことすらない。因みにその魚はどのあた

りの海で収穫できるかな?」

「日本……いや、極東だ」

漁獲される国の名を出したところで、極東?とガレスが髭を擦りながら思い当たる節があるようで買って出た。

「極東出身の親を持つ者ならサンマとやらを知っておるかも知れん」

「心当たりはあるのか?」

「あると言えばある。そいつに聞きたいなら案内してやる。儂も丁度頼んでおいた武器を受け取りに行く予定じゃったからな」

椅子に座っていたガレスが立ち上がって訊ねた。そう言うことならお願いすると乞い、

「私も行っていい?」

アイズも同伴することでアリサも含め四人は極東出身の者の下へ向かうのだった。

ガレスの先導の下、彼等が歩いているのは北東のメインストリート。オラリオが誇る魔石製品製造の心臓部であり、ギルドに雇われた無所属の労働者から派閥の職人まで集まる都市第二区画——工業区が隣接している。生産系の仕事が盛んなだけあつて通り行く人々は作業衣を着た労働者が主だ。筋骨隆々の中年のヒューマン自ら機材を持っていくかへ運び、商人と並んで歩く獣人が手渡された注文書を見て怒声を放つ。そこら中の建物から響いてくるのは金属が弾ける甲高い音であつたり、あるいはドワーフ達の下手くそな掛け声の歌だった。まさに男の仕事場と言った雰囲気醸し出す大通りには、女性や子供の姿は全くと言っていいほど見掛けない。周囲から随分と浮いている幼女二人を連れて一誠はガレスの隣で歩みを連れ、メインストリートから第二区画の中心へと向かった。一度も訪れた場所が無い区画の周囲を好奇心と興味津々の眼差しを、初めて都会に来た田舎者のように見渡す内に辿り着いたのは、とある平屋造りの建物——工房である。

「……ハハハは?」

「鍛冶師の工房じゃ」

「鍛冶師の?」

掃除もされておらず煤だらけの工房の前に立つて質問に答えるガレスのゴツゴツとした大きな手が、ガラツと無遠慮に扉を開けた。扉を経てすぐ、広い鍛冶場に繋がる工房内は強い鉄の香りに満たされていた。碌に魔石灯を灯されていない空間は暗闇に包まれており、奥でぼうつと灯っている炉の赤い炎だけがまともな光源として存在している。屋上でも聞こえてきた金属の打撃音が、カアン、カアン、カアン、と耳を聳するほどより強くより高く鳴り響いてくる。工房に奥に進むガレス達は、やがて彼女を発見した。目を疑うほどの大型工具に囲まれながら、鉄床アンピルの上の精製金属インゴットを鋸でひたすら叩く後ろ姿。そばにある炉と弾ける無数の火花の光に焼かれる褐色の横顔は、無数の汗にまみれながらなお凛々しかった。整った容貌は今ばかりは女の美とかけ離れ、燃え盛る炎のような猛々しさと美しさ——職人としての顔を纏っては、「あつ」と見知った顔だったと一誠が漏らした。ガレス達の存在にも気付かない彼女は、ただ真摯に目の前の鉄と向き合っている、己の鋸を振り下ろし続けていた。

「・・・極東の出身の鍛冶師って、椿だったんだ」

「む。知っておったのか?」

意外そうに振り返るガレスに肯定と頷き、一人の鍛冶師スミスの姿を見守る。結わえている黒髪を揺らす彼女は、カアンと最後の鋸を振り下ろしを経て、手の動きを止める。そこから一呼吸も置かず鉄床アンピルの上できた剣身を鋏で持った。じゅううつ、と立ち昇る湯気。尖れ、磨かれる刃。素人が傍から見ても理解が及ばない作業を長い時間を掛けて行った後、即座の柄と鐔を組み合わせ、一振りの剣が完成する。片手に持つその紅の剣をまじまじと眺めていた彼女は、そこでようやく息をついた。

「椿」

首辺りまで伸ばしている黒髪を晒す後ろ姿に、ガレスが呼びかける。椿、と呼ばれた女性は振り返った。

「おおっ」

今になって気付いたように、ガレスの顔を、一誠の見るなり彼女は

右眼を丸くした。そしてすぐに、破顔の表情を見せる。

「おおつ、ガレスよりも珍しい客人がいるではないか。久しぶりだ イッセー、それにあのときの小娘も。む、その金髪に金眼のちっこいのはもしや巷で噂されている『人形姫』か？」

彼女は子供のように笑みを浮かべ、ずらずらと言いたいことを述べてくる相手にガレスが言う。

「こやつはお主なら知っておるかもしれんと思つてな。武器を受け取りに来た儂が連れて来たのじゃ」

「ほう？手前が知っていることなら何でも聞いてくれ。ああ、ガレスの武器は既に用意させてもらっている」

巨大な斧が掛けられている壁に指しながら「勝手に取って来い」と無造作なやり取りに鎧の中で目を瞬かせる一誠。それに対して特に何も言わず勝手知つたる様に工房の中を歩いて椿の言葉通り取りに行った。

「それで、手前が知っているかも知れんとは？」

「椿って極東出身って聞いたけど」

「うむ。手前と言うより手前の母親が極東出身であつたな。しかし、手前も極東から離れて実に久しい」

「じゃあ、サンマって知ってる？」

魚の有無を問うた瞬間。椿の右眼に鋭い眼光が走った。

「……イッセー、お主も極東の出身者だったか？」

「まあ、そんなところ」

「ふふ、同郷者と巡り合えていたとはな。ああ、質問に答えるならば肯定だ。あれは実に美味だ。あの時はまだ幼かつた故にまだ味はこの舌に覚えておる」

遠い目で語り懐かしむ椿の顔は極東出身の人として思い出していた。

「しかし、どうしてサンマの話を持ち出したのだ？」

「オラリオに無かつたから」

「あれは極東でしか漁獲されない魚だぞ？オラリオに持ち込む時は既に鮮度が落ち美味しくなくなる。迷宮都市のこの場所にまで運ばれ

ることはほぼないに等しい」

理由はそう言うことなのか。納得して理解した一誠は斧を片手に戻ってきたガレスへ視線を向けた。

「もう話は終わったのか？」

「ん、オラリオにない理由を聞いた」

「なんだ、もう帰るのか？せつかくだからもう少し話をしても構わんぞ手前は。特に……」

残念がりながら腰に佩いている蒼い鞆に収まっている剣を職人気質の目で向ける視線は、好奇心で満ち溢れていた。

「お主のその腰にある剣。とても不思議な力を感じるから手前はさつきから気になって仕方ないのだが」

「……これか」

金色の柄を握り鞆から抜き取る。意匠と装飾が凝った黄金の剣が椿の目に留まって——言葉を失った。目も凍結したように見開いたまま固まり、ガレス達は不思議そうに見つめた。

「終わりだ」

すぐに鞆に収めアイズとアリサを抱えながら踵を返して扉へ向かう。その姿に椿が我に返って制止の呼びかけをしたが、一瞬で姿を暗まされて叶わなかった。

「ガ、ガレス！あやつ劍は一体何なのだ！」

「ただの黄金の剣じゃろ」

「お主の目は節穴か！鍛冶師なら一目で見たら誰でもわかるというのに！」

「儂は鍛冶師では無いわい」と呆れながら言うガレスの言葉は聞こえず、逆に肩を掴んで「もう一度イッセーを連れて来い！」と催促する始末だった。だがしかし、その日から一誠とアリサの姿は見えず「ロキ・ファミリア」に顔を出したのは3日後のことだった。

見慣れない魚を持って来て魔石製品の発火装置を使わず、七輪と言う道具と四方形の金網で下処理したサンマを炭で焼き始めた場所は食堂の調理場。当然、ロキ達が顔を出さないはずが無かった。

「ほー、これが自分が言つとつたサンマっちゅう魚か。確かに刀みた

く細長いんやなあ〜」

興味津々で調理場で魚を焼く一誠の回りをうろつく主神よりも火加減の調整と焼き加減を専念しているため、敢えて気にしない。無視する一方、発火装置の上に置かれている楕円形の鍋の蓋が内側からポコポコと音を鳴らしていた。アリサは大きな大根を棘付きの板に擦り続け、瑞々しくふんわりとした大根の塊を作るために削る。

「ソー……魚の焼く匂いで美味しそうに感じるのはいつ以来かな」
「嫌いではないが、これだけ細いのではちと足りぬかもしれんわい」
「食べる気なのかお前達」

「……」

一人三尾分のサンマを焼き終えた頃には削った大根の塊も大量に出来ていた。鍋の蓋を取ると白い粒粒がびっしりと詰まっっていて、それを器の中へ盛って——四人に提供した。

「はい、サンマの炭火焼の完成だ。味付けは醤油におろした大根、塩も掛けてあるから何も付けず食べるのも悪くないから。ついでに食べやすいように骨は全部抜き取ってある」

調味料を入れた三つの小瓶も用意され、少し遅めの昼食が始まった。まだ居残っている団員達の周囲から奇異な視線を向けられる中、サンマの腹を豪快に頬張るか、ナイフで区切った身をフォークで指して行儀よく食べる二つの食べ方をする。味付けはどれを付ければ美味しいか興味を持った方から掛けて食べたり何も付け加えないで食べる。焼いたサンマの評価は……。

「魚料理は色々食べたことはあるけれど、これは美味しいね」

「うむ。この白い粒粒のと一緒に食べるとまた美味しいわい」

「焼けた魚の表面がパリッとし、中の肉厚は柔らかく魚本来の味が確り残っている。この大根の塊を付けて食べるとさっぱりと味になるな。少々辛みはあるが、それも調味料の一つなのだろう」

「美味しい……」

「リヴェリアは大根なん？うちは醤油を垂らして食べたなら美味しかったでー」

高評価であった。アリサの方へ視線を向けると、一生懸命ナイフと

フォークを使って身を切ってご飯と一緒に食べる姿が映り込む。既に二匹目のサンマの体を解体している最中だった。それらを見て満足げに口元を緩め、一匹丸ごと口の中に入れるという豪快な食べ方をした一誠に触発したガレスも真似て食べ始めた。

「のうイツセー。もしかしなくてもお主、極東へ行つたのじやな？」

「ん、アリサと一緒に。他にも極東の食材をかき集めたからしばらくは行かず極東の料理を堪能するさ」

「一体何時の間に……ギルドへ外出の手続きはしたのか？」

「え？申請しないとダメだったのか？門番が居眠りしていたから素通りしちまったけど」

「……イツセー、まさかだけど手を出してないね？」

「心外だな団長。本当に寝ていたんだ。な、アリサ」

うん、と首肯するアリサからの助言は嘘ではないとロキは悟った。警備がゆるゆるやなあくど他人事に思いながら塩を掛けたサンマを食べて「これも美味しい」と称賛する。

冒険譚 4

気と言う魔力とは異なるモノを引き出そうと始めて約半月が経った。過ごしやすい気候になった中で更に専念しやすく、集中力が高まる。師の助力と助言も受けながら手と手の間に気を引き出す特訓をして――更に半月の一カ月。二人の小さな手の中に淡い光が灯り出した。一誠も確かにそれを見届け、気を緩めるなど見守りながら指摘する。弟子達は若干焦り、逸る気持ちを抑えながら手の中で起きた現象を一心に集中……。そして、ついに石ころ程度の大きさであるが、確かに光球が具現化を果たした。

「……………」

揃って見上げるアイズとアリサ。成功した?と思いを籠めた眼差しを向け言葉を待つ二人は、一誠は顔を見つめられ続けると静かに首を縦に振った。

「——おめでとう。新たな強さの可能性を手に入れたなアイズ、アリサ」

「——ツ!!!」

一月も費やしてようやく気を引き出せた喜びを一誠に飛びついて露わにする。嬉しい気持ちを醸し出す少女達の背中をポンポンと触れて優しく自分から離れさせる。

「だが、まだまだ喜ぶのは早いぞ。今度は何時でも何所でも気を引き出せるように特訓だ。それから気の扱い方を教える」

「んー!」

「お願いしますっ」

その後、二人と別れてからアイズは始終嬉しさのあまりに巷で揶揄されている『人形姫』とは思えないぐらい隠しきれない笑みが顔に出て、ロキ達に「何があったのか?」と気にさせた。

「アイズ、新作の魔道具マジックアイテムを作ったんだけど、使ってみないか?」

「どんなもの?」

「魔法の翼だ。空を飛べるぞ?」

本拠地ホームの中庭で一誠の修行に励んで両手の間に光を集めることに成功したアイズ。その後でも何時でも気を引き出せるように特訓に励んでいる最中にそんな話を持ちかけられた。

「翼?どうやって翼を付けるの?」

「背中に張るだけだ。やってみるか?アリスの背中にも張り付けてあるんだ」

「うん」

いそいそと服を脱いでもらい、健康的な素肌を晒す背中に粘着性がある描かれた翼を紙から剥がしてそれを貼った。服を着直すアイズの背中には、自然と視界に入る前より伸びている金の髪。艶があり太陽光で輝く綺麗な色の髪は一誠を微笑ませた。黒い炎に強くあれと急かされ自身を顧みず傷つく体を労らなければ、荒れ傷んだ金髪が今では美しく背中に流れている。

「髪も伸びてきたなアイズ」

「そう?」

「ああ、このまま伸ばしていけばリヴェリアのように背中まで伸びるだろうな。俺の好きな長い髪にだ」

何気なく述べた一誠の言葉を聞いた時。何故かムツと面白くないと感じたが、何故そう思ったのかアイズは分からなかった。

「そうだアイズ。飛びながら一緒に買い物に行かないか?」

「買い物……?何を買いに行くの?」

「勿論。日頃お世話になっているフィン達への贈り物だ。きっと喜んでくれるぞ?」

一誠からの提案に四人の顔を頭に浮かべ、そうなのかなと思いつつも首肯した。背中に張られた魔法道具マジックアイテムはアーマードレスに隠され、後ろにいる一誠に振り向くアイズは「次は?」と視線で催促する。

「飛びたいと念じれば翼が出る。アリス、お手本として出してみてくれ」

言われた通り心の中で飛びたいと思いを込めて念じた時、幼女の背中が光輝き一対の金色に光る翼が生えだした。小柄の身体を覆うほ

ど大きい翼を視認すると。目を大きく見開き、綺麗な翼を見たアイズは信じられないと一誠へ視線を向けた。次はお前の番だと無言で見つめられ、金髪金眼の幼女も背中から翼を出す念をした結果。アリサと同じ光の翼が生えたのであった。

「翼が生えたっ」

「おう、作った本人でも綺麗だぞアイズ。まるで小さな——」

「アイズたん、アリサたんマジ【天使】テ・シーオみたいやあー!!!」

歓喜と関西弁の入り交じった声が中庭に轟く。聞き馴染んだその声の方へ振り向けば某盗人のごとく弧を描いて飛びかかってきた主神ロキの姿が……。

「ふんっ!」

「ごはっ!」

身の危険を感じて背に隠れたアリサを他所に、一誠も感心する幼女の細い足から放たれるローキックがロキの頬に炸裂した。横へ蹴り飛ばされる女神の後ろには何時もの亜デミ・ヒューマン人三人組が立っていた。彼等彼女等の六つの視線は金色の翼に注がれていることは容易に分かる。

「イツセー、アイズ達の背中から生えている翼は魔道具マジックアイテムのものか?」

「正解。これを背中に張った装着者に飛行能力を付加する。濡らせば直ぐに剥がれるから【ステイタス】更新も邪魔にならない」

リヴェリアからの問いに粘性がある紙に描かれた様々な形の翼を見せつけながら説明する。そんな一誠の脚に叩いて自分に意識を向けさせるアイズが催促する。

「次……」

「ん、次は背中に意識をして——」

コクコクと説明を真摯に聞きながら頷き、その通りに実践してみたアイズの足元が地から浮き始める。光翼から零れ落ちる光の粒子を残して幼女は浮きながらゆっくりと前後左右上下へと移動し、自分で飛んでいる実感を浸っている間。

「その翼の絵は僕達でも効果は出るかいイツセー」

「神ロキでも発揮するぞ」

「ほんまかつー！うちにも張ってーな！」

そんな話をしている時に中庭の隅で痛みに悶えていたロキが敏感に反応して復活した。神でも空を飛べるというのは中々貴重な体験であり娯楽に飢え下界に降臨したほどなのだ。だから空を飛べる玩具があれば喉から手が出るほど欲しい。

「じゃあ背中」

「ほいつー！」

ぺたりとその背中に張り付け、飛べる方法を説明すればロキも地面から浮き自分で飛んではしゃぐ。その姿に鎧で隠れた一誠の顔は神妙な面持ちで浮かんだ。綺麗な翼を付けているのに女神自身がとても綺麗な女神とは思えないと違和感を覚えさせられていた。

「因みにイツセー。それは売るとすればどのぐらいの値段で付けるつもりだい？」

「10万ヴァリス。剥がさない限り半永久的に使用可能で、1000の魔法の翼が描かれた紙が1枚でこの値段だ」

「ふむ、中々お買い得じゃな。では、あの空飛ぶ絨毯は？」

「大きさによって変動するな。まあ、数百万〜一千万ヴァリスでいいんじゃないか？荷物運びが楽になるだろ。で、いきなりなんだ？」

フィンに商談の話の切り出した真意を問いただす。別に売買するつもりで作ったわけではない。何でそんな話をと心情の一誠にこう語った。

「いや、【ロキ・ファミリア】に魔道具マジックアイテムを作り売買する道具屋があると面白いかなーって」

「仮にそうしようと思っても『今』はしたくない。物騒だからな。してほしかったら治安の改善を全力で頑張ってくれ」

「ああ、善処しよう。もしかしたら君にも手伝ってもらうけどね」

「あははは、団長殿。下級冒険者の俺に治安の改善なんてできる筈ないだろ？」

「さて、それはどうかな？」

ふふふ、ははは、と意味深にフィンと笑う一誠は徐に両腕を大きく胸を張る様に左右へ広げ、勢いよく両手を叩いた直後。中庭に発現し

た虹色の輪っかが幾重にも通路のように連なりながら何十何百何千とオラリオ中に展開した。オラリオに住まう人類と神々は虹色の輪っかの出現に目を丸くして見上げていることにロキ達は露にも知らない。

「んじや、空を実際に輪っかの中を潜りながら飛んで来てくれ」

「この中を潜るんか？」

「そ、潜ると音が出る」

どこからともなく空飛ぶ大きめな絨毯を用意してフィンに手渡し、一誠も鎧からアイズとアリサと同じ天使の翼を生やした。

「ほら」

お前らも行こう。と言外して催促する一誠に翼を得てないフィン達は絨毯の上に乗れ、アイズ達と共に虹色の輪っかの中へ——音を鳴らしながら潜っていく。虹色の空間を見飽きるほど通り過ぎ音を鳴らし続けて耳を澄ませば綺麗な音色が聞こえて、潜った拍子に輪っかから虹色のオーラがオラリオを輝かせていることも輪っかの隙間から見て取れる。

「不思議な魔法じや。こんな音楽を鳴らす魔法はあるのかりヴェリアよ？」

「いや……知らない。だが、イツセーの魔法は私達を驚かせてくれる」

「少なからずその驚かせる魔法で僕達も、そしてアイズにも楽しんでいるのは確かだ」

3人の周囲に飛行するアイズ達。音楽を鳴らし聞きながら空を飛ぶ。これを楽しんでいない者は今この場にいないぐらい、アイズとロキは口元を緩ませていて、フィン達は綺麗な音色の音楽に耳を傾け楽しんでる。混沌と混乱、闇派閥イルヴァイスによる暴徒で『暗黒期』を迎えている迷宮都市『オラリオ』に希望の光とも見受けられる虹色の光が粒子となって降り注ぎ、人々の心に驚嘆と感嘆の想いを抱かせた。

「椿、見えた？」

「うむ。大方あやつの仕事であろう主神様よ」

「ええ、それに綺麗な音ね」

「そうであるな」

「——そう、あの子はロキの子供だったの。惜しい、と思うのだけれどやっぱり欲しいわあの子」

「如何致しますか」

「近々ロキにお願いしてみるわ。正面から必要も無い争いなんてしたくないもの」

「はっ」

「あははは！ロキは面白いことをしているなー！」

「空飛ぶ絨毯と翼……」

「なんだ、お前も気になったか？」

「……少し」

「俺がガネーシャだ！」

「知っているよ」

「俺が、ガネーシャだあつ！」

「分かっているってば」

全ての輪つかを潜り抜け本拠ホームに戻った一行は、輪つかが弾け儂く散るその光景も眺め終えてから中庭に降り立つ。

「アイズどうだった。楽しめたか？」

「うん……飛び方も覚えた」

「感覚をもう掴んだのか。流石じゃな」

「また無茶な戦い方を覚えてしまったのかと思うと複雑だがな」

「流石にダンジョンの中では難しいと思うよりヴェリア」

「アイズさんの【天使】テ・シーオ姿は永久保存したでー！」

絨毯に降りながら、翼を粒子と化して消し各々感想を述べるとまた一誠が動く。

「永久保存を具現化にしてやろうかロキ」

「何や。また別の魔道具マジックアイテムがあるんか？」

「まあ、似たもんならな。副団長とロキ、親方は横に並んで、団長とアイズ、アリサはロキ達の前に立ってくれ」

てきぱきと指示をしてそれに従うロキ達。立つ位置に整える5人を他所に三脚立ての上にカメラを乗せて設置する一誠に揃って不思議そうな面持で小首を傾げる。

「何をしてる？」

「写真を撮る準備」

「んむ？しゃしん？」

何じゃそれは、とガレスの口が開き掛けた時はロキの隣にいるリヴェリアの隣へ寄り佇む。

「真っ直ぐアレを数秒見つめて。絶対に目を閉じないで」

「「「「??」」」」

あれを見て何になると怪訝に思いつつもカメラへ凝視して数秒後。皆の視界を一瞬だけ塗り潰す光が発した。思わず目を閉じてしまった何人かが後に恥ずかしいと抱くのだが今はまだ気付かない。一瞬の光がカシャツと機械的な音を鳴らした後、一誠が皆への説明もせずカメラに近づき何やら操作、色鏡レンズを用意した紙に照準を合わせてカシャツと再び機械的な音を鳴らした。

「イツセー、何してるの？」

「直ぐに分かる——ん、できた」

指で挟んだ紙をフィンへ投げ渡す。軽く指で挟み手にした紙へ視線を落とし、周囲から覗いてくるロキ達と一緒に目を丸くした。その紙には鮮明で鮮やかな色でフィン達の姿が描かれていた。羊皮紙で描かれる似顔絵より色鮮やかだ。

「ほー！」

「ふむ、ここまで鮮明に私達の姿が写すとは……」

「鏡で自分を見る以外にもこのような絵でも儂等の姿をハッキリと写すか」

「ああ、ギルドが提示する僕達の似顔絵よりよっぽど綺麗だね」

「「「「……」」」」

好奇心と興味深々で写真に釘つけな5人は当然の感じで一誠に説

明を求めた。これはどういう感じで写したのかと。それを待っていたかのように一誠も説明口調で語るのだった。

「それは被写体の光の反射を特殊な紙に焼き付けたもの。写真という」

「この紙が写真とな？」

「そ。それを作るのにこのカメラという道具が必要なんだ。このカメラは人類や神の怒気哀楽といった表情や言動、物、モンスター、風景や光景といった全てをそのまま記録にして特殊な紙に写すことで半永久的に記録として残すことができる。だから頭で記録に残すよりこつちの方が現実的じゃないかロキ？」

首肯するロキも物でそのまま記録に残るなら大切に残したい方だ。地上で永遠に人類と生き続ける神として想い出に残したいものは一つや二つはある。形あるものなら尚更だ。ただし、今までその目で見てきたものを形に残すことは紙や羊皮紙で描いて残すしかない。それを描くにも絵が達者なものでなければならぬ。故にこの写真はそれらの問題を容易に解決できる素晴らしい代物。

「イツセー、そのカメラつちゆうのうち譲ってくれへん？」

「別にいいぞ。ただし絶対に壊すな」

「え、マジでくれるん？冗談で言っただつもりなんやけど」

「これ以外にもまだあるから問題ない」

ぱあっ！と顔を輝かせ、受け取ったカメラを空に掲げはしやいで喜ぶロキは、これで色んな物を撮って記録に残すでー！と早速何かを撮りに行って、そんな主神を見送る5人。

「本当に良かったのかい？」

「いいって。寧ろ主神なら思い出ぐらいは作って残したいだろ。最大派閥なら尚更だ」

「そうだね」

1分後。カメラの使い方が分からないロキが騒がしく戻って来て使い方を求めてきたのは必然だった。そして一誠とアイズは予定通り、町へ繰り出して買い物に向かったその日の夜。ロキは酒を造るのに長けた神から購入した酒、リヴェリアには金の髪留め、ガレスには

ドワーフ専用のロキと同じ酒、フィンには腕輪がアイズから日頃のお礼と感謝として贈られ、彼等彼女等は驚喜と狂喜の二重の喜びを表した。

「イツセー、イツセーもうちらに何かないん？ほれほれ、アイズたんみたいに贈り物おー」

「ロキに対してはカメラを譲っただろう。で、俺は団長達に日頃の感謝もお礼も受けた覚えは、ない！」

「あはは……」

「まあ、確かにした覚えはあるかと言われればのお……」

「記憶にすらない……」

胸張って堂々と断言した一誠には苦笑いを浮かべる他なかったフィン達。逆の立場であれば少なからずフィン達は一誠に対して感謝とお礼の念があり送る側であるのだ。

「ん、イツセー」

「アイズ？」

アイズ・ヴァレンシユタインもその一人であり一誠に贈り物した。

「お母さんがたまにお父さんがしてたのをする」

フィン達に無い日頃の感謝とお礼はアイズにあり、ならば一誠に贈り物をしなければと義務や責務のような気持ちで自分もそれをしてみたいと不意に高まった。脳裏に過る両親の様子。母親は慈愛に満ちて温かい眼差しで微笑み、父親は照れくさそうに後頭部に手を回して頬をほんのりと朱に染めていたあの仕草を。一誠を跪かせ、鎧の兜の部分も脱いでもらった矢先にまだまだ小さな子供の両手が少年の頬を包み込み、小振りな唇が優しく頬に近づけ触れた。

「んなあつー!？」

「……………」

「……………」

「……………」

よもや、黒い炎を胸の中で燃やし続け強さを求める少女が乙女のようなことをするのはロキ達は思いもしなかった。このアイズの変わり様に言葉を失う5人は口付して顔を赤らめる幼女をあんぐりと口を

開き見つめる。もう一人はムツ！と兄的な存在を自分から奪いかねない相手だと嫉妬心を抱いた。

「……………イツセー、いつもありがとう」

「……………ああ、どういたしまして」

感謝の言葉を送るアイズに一誠は、朱色に染めつつ照れくさそうに頬をポリポリと搔く父親と似た反応をしていることにとても嬉しく思い——少女は久しぶりに笑った。一誠を除いてロキ達はその笑みを浮かべるアイズに目を丸くし、次は釣られるように微笑んだ。

曇りがちな天気で灰色の空に見下ろされる日。「ロキ・ファミリア」の門番の二人が最初は目を疑い緊張を走らせたが骨の髄、心まで『魅了』されたかのように恍惚とした表情を浮かべたその頬に黒い手袋が添えた。

「ロキのところへ案内してくれない？」

黒い外フーデッドローフ 套で隠しても隠しきれない『美』のオーラが門番の一人に纏まり付き完全に魅了に支配され下僕と成り下がった。ロキの眷族は全身を震わせ首を何度も縦に振って門を開け放ち、本拠ホームの中へと主神の了承も無く、『美』の魅了を放つ美しく微笑む女神と付き従う獣人達を他派閥の陣営のど真ん中に足を踏み入れさせた。横が駄目なら縦だとばかり建造された「ロキ・ファミリア」の本拠ホーム【黄昏の館】の中を案内されるその最中、金属同士がぶつかる音が聞こえた。ロキの眷族が模擬戦、稽古でもしているのかと興味を持ち門番に音がする方へ案内させる。

翼を生やし空中で模擬戦を臨んでいるアイズとアリサ、一誠。地上で戦うのと勝手が近い、足に踏ん張りが利かず吹き飛ばされれば壁にぶつかる。それでも何度も繰り返していくうちに身体は培った感覚と経験で空中戦を馴染み対応、一誠と剣を長く交えるようになった。この空中での戦いを覚え飛行能力を持つモンスターとの戦いに役立つと奮闘し激しく振るう剣がまた甲高く金属音を鳴らし火花を散らし

た。

「ん、慣れてきたようだな二人とも」

「んー!」

「うんっ」

少女達の剣を軽く受け止め、空中に浮きながら鏢迫り合いしながら戦闘技術を高めていく姿に過去の自分と被らせ鎧の中で笑む。こうして模擬戦をしている間にも「ステイタス」が今では伸びしろが進まなくなっているものの確実に経験として培っている。将来、彼女達は強くなって世界に名を轟かせる冒険者の一人になる、そう確信してアイズとアリサが疲れるまで繰り返り広げるつもりでいたが……。

「……」

「!?」

中庭に入ってきた見知らぬ女神と眷族達の登場に構える剣を解いて意識を向けたことで、二人も釣られて髪を揺らしながら振り向いた。

「こんにちは」

三人の反応を見計らってフードを取り払い、隠せなかった『魅了』はますます解放され色香が中庭を充満させた。美しく太陽光で輝く銀色の髪と同色の瞳の視界はアイズとアリサ、一誠のみしか映していなかった。研ぎ澄まされた剣のような金色と純粹無垢に輝く銀色、多彩な色と女神を魅了させた風景の魂の色は変わらず窺わせてくれる。

彼女の事を知っていたとしても、幼いアイズとアリサは耐性が無い魅惑に『魅了』を形にして具現化した女神に金瞳を凝視する。彼女等の様子を見て小さく口元を緩ませ一誠の方も銀瞳を向けた時だった。一誠の顔が明後日の方へ向けていて女神の視線もそちらへ向けた。二人の視界に入るその先には。

「おいコラ……なに勝手に人ん家に上がり込んでんねん自分」

淡色の朱色の髪と糸目が薄らと怒気の炎を孕んでいる髪と同色の目を開き、第一級冒険者の三人を引き連れて他派閥の女神達を睥睨していた。『美』の魅了を放つ美しく微笑む女神と付き従う眷族の姿に

不機嫌な顔を隠さないロキが女神と対峙する。

「そう怖い顔をしないで。女神の肩書きが台無しよ?」

「フザけんな?自分が直接他派閥の本拠ホームに足を踏み入れた時は大抵口くなくことが起きんのが周知の認識や。しかもそれは気に入った子供を引き抜く為に来たのと120%や。——まさか、うちの子に気に入った子供がいて欲しいから譲って欲しいなんて、アホ抜かすようなこと言うんではないやろうなあ?」

ドスの利いた声音と睨みをするロキに態度も表情も変えない女神、雰囲気为抓手と変わり、魅了の下僕となった門番は顔を青褪めさせて中庭から逃げるようになくなり、主神の不穏な気配にアイズ達も我に返った。

「……団長、取り敢えず訊くけど誰?」

「最大派閥の『ロキ・ファミリア』と対なる他派閥の女神とその眷族、と言えれば分かるかな」

「ああ、そーいうこと」

——『フレイヤ・ファミリア』。オラリオに存在する最大派閥の中で更に別格の派閥が『ロキ・ファミリア』以外にも存在して、共に二大派閥と畏怖の念と羨望の念を込めて称されている。ギルドにも聞き込みして初めて相見えた最強の他派閥を驚嘆し、一人の獣人を視界に入れる。

「つてことは、あの獣人が……」

「そう、オラリオ唯一のLv.7にて数多い冒険者の中で頂点に立つ男、オツタルだよ」

巖の様な巨躯の体を誇り、錆色の短髪から猪耳を生やす男を見据えるフィン。更にその彼の周囲にはフィン達より多い『第一級冒険者』達が立っていた。この一触即発と張り詰めた緊張感を感じ取るアイズとアリサは格上から放たれる存在感と威圧に精神が押し潰されそうになり、一誠の足の裏に隠れるようにして動いた。ロキとフレイヤの話ははまだ続く。

「ええ、実はそうなの」

「ほほう……因みにどの子か教えてもらおうか?」

遠まわしもはぐらかすことも無く微笑みを浮かべながら肯定する
美の女神フレイヤは、熱い視線を一誠へ注ぐ。

「あの子」

ヒクツとロキの頬が痙攣した。最も危惧していたことが起きてしま
まい、限りなく面倒な女神にふかーい溜息を吐きたい思いを胸中から
湧き上がるも「アホか」と一蹴する。

「イツセーに手え出させんで」

「そう、貴方はイツセーっていうの？」

「人の話を聞けやつ！」と叫ぶロキを脇に一誠の名前を唇で転がしな
がら呟き、改めて尋ねる。

「ねえ、私の眷族にならない？可愛がってあげるわ」

「うちの前で堂々と誘惑するなー!？」

頼むから色ボケ女神の色香に惑わされんように！と心から願う主
神の心情を知らない一誠は周囲から注がれる視線を一身に浴びつつ、
応じる。

「ロキの眷族だから鞍替えはできないよ」

「それでも、私は貴方が欲しいわ。ここまで私を駆り立たせた貴方の
魂とその才能を、何が何でも。そう心から本気でね」

フレイヤの眼が見開かれる。銀の瞳が妖しく輝く。その身体から、
異様な『神威』が立ち昇る。

『ツツ!!』

その時。初めてフィン達が顔色を変えた。冒険者として生きて以
来どんな敵にも、いかなる状況にも屈したことがなかった最強の冒険
者達が、焦りをあらわにした。

「アイズ、アリサ、目を閉じろ!!」

「えっ?」

なりふり構わないフィンの焦燥が孕んだ怒号に呼ばれた二人はす
ぐには動けない。ハイエルフとドワーフが彼女達に飛び掛かり、目、
そして耳を強引に塞ぐ。フレイヤの眷族達ですら主神の行いに愕然、
そして畏怖した。その『力』を使えば相手がどうなるか、わかってい
るからだ。

「さあ、平伏して私の手を取って?」

彼女の新雪の様な白皙の肌の手が伸びてそう優しく微笑んで促す。この瞬間、ロキの顔は青ざめ絶望した。あの色ボケ女神が『神威』を開放してまで欲しているとは予想外だ!と。

だが、更なる『予想外』がロキに襲う。

手を取ろうとした一誠を見て『神威』を放った結果に『虜』にしたのけたフレイヤは達観と虚しさ、これ以上のないつまらなさを感じた。欲するあまりに行使した権能で楽に手に入れては――。

ドスッ!

「っ!」

「効くかそんなモン^{魅了}」

銀髪の頭に籠手を着けた状態で手刀^{チョップ}をした。驚愕、愕然、啞然、呆然、吃驚^{びっくり}、等々その暴挙以前に美の女神の『神威』を前にして平然といる男の態度に一同は目を見開いた。思いつきり頭を叩かれて涙目のフレイヤ自身もそうだ。

「貴方、私の『魅了』が効かないの?私に『魅了』していないの?何故?どうして?」

「アホか、好きでもない女の『魅了』何かに俺の『魂』が奪われるわけではないだろう。俺をなめるな」

顔の部分のマスクを開いて素顔を晒す一誠。ますますフレイヤは酷く吃驚した面持ちで銀瞳を皿のように開いた。『魅了』して『虜』になった子供達の顔ではないのだ。先ほどからの言動や自分に向ける強い光を孕んでる眼差しは、権能の『魅了』を真正面から受けても変わらない意思でひれ伏さず不動で佇んでいるのだ。

「(なんて子――!)」

一誠の魂の景色が一変して、魂が赫赫と真紅色のように赤く火炎焔?のごとく燃え始め出した。この現象を直で見たフレイヤの心が打ち震えた。

「俺を欲しいなら心から全力で求めた方がいい。たかがつまらない『魅了』の力で手に入るほど、俺はだらしくもふぬけてもいないぞフレイヤ?」

強い意志の光を瞳に孕んでいる一誠の顔がフレイヤの銀瞳が鏡のように映り込んで見える。逆に言えばフレイヤの視界は一誠の顔で独占している。

「美の女神、愛や情欲を司るフレイヤと名乗るなら、そうしてくれると俺は楽しく感じるな」

華奢で色白の手を添えて持ち上げ、紳士の様な立ち振る舞いで手の甲に唇を落とす一誠。手の甲に微かに残る熱の残滓に触れる。完全にあの目は自分の『虜』になっただけでいなかつた。神でも下界でもモンスターでもフレイヤの美に逆らえず魅了される。その筈、なのに一誠は堂々と跳ね除け……否、受け入れながらもならなかつた。

フレイヤの美の下僕に。故に驚きと唾然、そしてまたあの高揚がフレイヤの中で湧き上がり、一誠からの挑戦と挑発に瞳を輝かせた。また覚える一目で見たときのようなあの感覚。全身がぞくぞくと打ち震え、下腹部は熱で疼き、恍惚の吐息が喉の淵から溢れ出してくる——否、それらを限界突破してしまったかもしれない。自分に真正面からそう言い切った神や下界の子供はいただろうか？いや、皆無だ。この美の女神に啖呵を切つたのだ。受けなければ美の女神として名折れだ！

「——フレイヤ様」

彼女の背後に佇んでいた猫キャットピープル 人の青年が静かな声音を口から発した。

「少しの間、お戯れをお許しください」

どうやらこの猫キャットピープル 人に一誠はさっきの言動で触れてはいけないものを触れたらしい。静かな雰囲気纏っているが、一度解き放たれば敵意を露わす牙が剥き襲いかかるだろう。——実際、フレイヤの許しを得る前に獣人の従者は一誠に向かって槍を突き付けた。第一級冒険者が放つ槍を条件反射で首だけ動かしてかわした。その際、右眼を覆う眼帯の紐が切れて外れてしまったと同時に、二撃目が鎧の胸部を小突いた。美神から遠ざけられた形で地面に転がる少年。格上の最初の一撃を下級冒険者がかわすのは相手が故意的にそうさせる以外、偶然か奇跡として片づけられる。実際獣人の青年はそうした。

「立て」

それでもまだこれで済ませようとはしなかった。崇拜する女神に奢った愚か者への処罰はまだ終わらすつもりはない。仰向けの状態で雲を見上げている少年は掛けた声をどこ吹く風の如く受け流して、小人族バルウムに話しかけた。

「団長、正当防衛ってことでいいか？」

「彼は遊んでいるだけだよ。だから君も遊ぶ程度にするべきだ」

「ソー、わかった」

ムクリと上半身を起こし、何事も無かったように立ち上がって剣を構えた。

「猫のじゃれあいにつき合うか」

その言葉に癩が触った獣人は長槍ジャベリンを構えて近づいてくる相手へ突貫する。アイズとアリサが目を見張り、一瞬で一誠の懐に飛び込んだ相手の動きを捉えることはできないでいた。世界に天変地異が起きようと下級冒険者が第一級冒険者に勝てるはずが無い。それが常識。それが全人類と神々の認識——のはずだった。この機会で見極めようとフィン達は真摯に二人の戦いを一瞬たりとも見逃しはしないと視界に入れ続ける。槍の穂先が薙ぎ、殴り飛ばそうとする意志が籠められていた。反応することも無くまた吹き飛ばされる愚か者に冷たい目と容赦のない一撃が。

突如、バイザー越しに突き付けられる剣の切っ先が目飛び込んで来た。思考が停止し掛けたが、直ぐに顔を逸らして後退する形で緊急回避をした。

「？」

剣を突き付けた相手は——心底不思議そうに勝手に遠ざかった己を見つめていた。何で逃げるんだ？といった風に。青年は相手の反応と自分の行動を考慮し、「己は何もされていないのに無自覚で下級冒険者相手に無様な姿を美神に晒したのか」と恥を覚え、顔を隠すバイザーの奥の双眸は怒りと屈辱で眦が裂き、奥歯を噛み締めた。

「シッ！」

瞬く間に攻撃の効果範囲に飛び込んだ猫キャットビープル 人の鋭い突きが繰り出された。最強の冒険者、第一級冒険者の名に恥じない槍の使い手として本領を發揮、一突された時には二撃、三撃の突きがされているという神速の攻撃をした。

「——ッ」

鎧に穴を空ける勢いの槍の一撃が……手応えどころか穂先から掠った感触すら何時までも感じない。相手が無防備に立って案山子のように突っ立っているにも——！

待て……無防備に立って……いるだと？

違和感を覚えた。攻撃の手を停めて臨戦態勢の構えをする青年の心情を察したのか、少年の表情は邪な笑みを浮かべて手の中にあるモノを見せつけた。

それは……見慣れた己の得物の穂先であった。

猫キャットビープル 人の青年はバツと手の中の得物の先を確認する。穂先がある筈の柄の先が何時の間にか鋭い何かに斬られていたただの棒と化していた。

「怒りで自分の武器の状態にも気付かなかったか？」

「っ!」

視界がより、クリアになった。顔を隠す意味も担っているバイザーもが真つ二つに裂け、顔から外れて地面に落ちた。一誠のしてやったりとした悪戯小僧のような憎たらしい笑みが深まる表情が視界に映る。

「その方がもつと周りが見えやすいぞ」

「——ッ!」

猫キャットビープル 人の青年の顔がついに歪み、四人の小人族バルウムの一人に「よこせー!」と疾呼すると槍が投げ渡された——と同時に音も無く懐に飛び込んできた少年は猫キャットビープル 人の男の頬に蹴りを入れ、吹き飛ばした。

「ぐっ!」

崩れた体勢は地面に槍を突き刺して吹き飛ぶ勢いを削り、蹴り飛ばした相手を睨みの視線を向けた矢先、肉薄し槍を両手で掴んでいた一誠の目と至近距離でぶつかった。

「槍から手を離した方が良いでしょう」

「舐めるなっ！」

槍を軸にし横から鋭い蹴りを放つ猫^{キャットピーパー} 人より大気を切り裂き、灰色の雲から稲光を発しながら落ちる稲妻が槍に直撃し、獣人の彼にも影響を与えた。偶然か必然か、避雷針のように天へ突き立つ穂先が雷を誘った。思いもしなかった天候の牙に全身を硬直し黒コゲになろうとも第一級冒険者としての強靱な精神力で意識を保ち、双眸に怒りも孕ませた猫^{キャットピーパー} 人の相貌は次に驚愕で歪んだ。何時の間にか槍が氷漬けになっており、得物を持つ手を伝って今も尚も氷に覆われている。更に足元からも氷が這う蛇のように氷が覆っていく。それらは不敵に片目を瞑ったまま笑む一誠の手足から発生していた。

「チエックメイトだ——凍れ」

「きゃ——！」

叫ぶ口は一気に覆う氷で遮られ、猫^{キャットピーパー} 人の男の氷像が出来上がり氷の牢獄に捕らわれた。一連の戦いの様子を見守っていたこの場に在る全員は目を大きく見張った。どれもこれも全て信じられない、有り得ないと己の目を疑うばかりで心が驚きの気持ちで一杯だった。

「「っー」」

驚きの心境に浸っている時間は短い、フィンと同じ槍を持つていない小人族^{バルウム}の以外の三人組が斧・鎚・剣を持って襲いかかった。肉薄しに掛る小人族^{バルウム}達に向かって爆発的な脚力で横薙ぎに振るった足から——肉眼でも捉える斬撃が飛んだ。思いもしなかった飛ぶ斬撃を防いでも勢いは殺せず中庭の壁を突き破って外まで吹っ飛んだ。

「この技の名前は嵐脚。爆発的な脚力で振るって鎌風を起こす技法だ」

「.....」

「武器は一つだけじゃない。体を鍛え、技を究めれば必ず自分を強くしてくれる。これが世界中で修業して成した一つだ」

そう言う一誠はフレイヤの背後に佇むオツタルへ視線を向けた。錆色の瞳に敵意や怒りなど微塵にも感じさせない。仲間を倒されても己の優先すべき事は他にあると俯瞰している様子だ。

「ん、戦う意思がないから残念だ。戦ってみたいのに」

「ふふ、戦わせてあげましょうか？私もイツセーの強さに興味があるわ」

「是非とも。とそう言いたけど……」

困った表情をする一誠の回りにフィン達が囲む。これ以上の戦闘は自分達が許さないとばかりに動かれたので肩を竦ませる。フレイヤも三人の意思と気持ちを察してくすつと唇をほのかな笑みで浮かべる。戦いは終わったな、と一誠は指を弾いて氷漬けにした獣人を解放し、フレイヤの前に放り投げた。

「で、さっきの話だけど分かってくれたか」

「ええ、いいわ……。乗ってあげる。何年も何十年も掛けてでも貴方を私の虜にしてみせるわ。貴方が死んで天界に昇るなら追いかけて抱きしめてあげる」

そう、全力で……。目の前の少年から視線を反らし、心から決意するフレイヤはフードを被り直し踵を返す。その姿に頭の後ろに両手を組んだロキは声を掛けた。

「なんや、フラれたからつてもう帰るんか自分」

「ええ、思いもしなかった楽しみができたから」

「ぶふー！負け惜しみにしか聞こえんわー。あのフレイヤが子供をオトせなかったなんぞ他の神連中が知ったらどんな反応するか目に浮かぶわー！」

何も言わず銀瞳を最後に一誠に向け、仲間を担ぐオツタルと壊れた壁から様子を窺っていた眷族達と来た道へ戻り中庭を後にしたフレイヤ達を見送るロキ達は警戒を解く。

「さてイツセー。流石にこれは君の秘密とやらを教えてくれないと困るかな」

「だが断る」

「いや断れても困るわい。第一級冒険者とはいえど、Lv. 5と6のあやつらを軽く戦えるほどの強さをどこでどうやったらえられるんじゃ」

「え、今の連中がオツタルの次に強くて団長達と同じぐらい強かった

のか?」

「その反応から察するにまだまだ余力を残していたのか」

「だってまだ本気も全力も出してないし……あっちも俺と同じで別に本気じゃなかったし」

底が計り知れない一誠の實力。フィン達も戦うことになればさっきの五人のように戦い渡るのだろうか。秘密を隠し持っている一誠の背後から近付いて肩に腕を回すロキは警告する。

「兎にも角にもイツセー、啖呵を切ったからにはあの色ボケ女神にだけは気をいつけや。てか、見惚れなかったん?冷や冷やしたでうち」
「普通に綺麗な女神としか思わないが?」

「いやいや、ありえへんって。普通に綺麗な女神ってフレイヤは美の女神やぞ?」

「じゃあロキは何の女神だ?」

その質問はフィン達に向けられた。三人は顔を見合わせ……。
「酒好きの女神じゃな」「女好きの女神だ」「以下同文だよ」

と、率直な答えを述べてくれた三人を一誠は纏めて感想を言った。

「……おっさん女神か。何で男じゃなくて女なんだよロキ。胸はまな板で男っぽい身体してんのに」

「うおおおおおおおおいっ!?!さらっとなんでもないこと言いよつてコイツめ!あとゴツい身体なんぞしておらんでうちはーっ!」

一誠の頭を脇固めしてド貧相な胸を押し付けるロキの目に悔し涙が。そんな主神に苦笑いと呆れが向けられ、何時しか笑いが生じる中で先程見せつけられた一誠の強さにアイズは『嵐脚』を覚える決意を胸に秘めた。

「でも、ホンマにイツセーの強さの秘密が知りたいわー。それとうちらの関係が崩壊する秘密もや」

「絶対に教えん!というかまだなこと覚えていたのかよ」
「そらお前、気になるやん。ほれ、教えてーな。さも**改**宗コンバージョンさせへんでー!教えてくれるまで契約は守る気ない!」

本人達しか知らない交わされた契約内容を改めて知ったフィン達が驚く脇目に、一誠は苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべた。

飄々とした態度でいやらしい笑みを浮かべるロキは更に言う。

「まあまあ、素直に話せんなら酒の力でも借りてすらすと話そうやー」

「酒だけはマジで勘弁!」

「お、なんや? 今までにない反応やなあー。自分、酒苦手なん?」

「……飲んだ矢先に何故か記憶が飛んで、気が付いたら回りが地獄絵図になっていた光景が出来上がっていた。それ以来、親から絶対に酒は飲むなって言われた」

それでも構わないなら飲まされてやる、と付け加えた一誠をロキ達は飲まない方が賢明かと悟った。昔、とある金髪少女が酒を飲んで大暴れした記憶がまだ新しい故に。それを知らない一誠はロキ達の心情なぞ露にも知らない。

「でもイツセー。僕達が君を忌避するような秘密を抱えても僕達は同じ【ファミリア】の仲間だ家族だ」

「……家族、だと?」

「何じや、何時も留守にしておるお前は儂等に対して同じ【ファミリア】の冒険者と思っておらんかったのか?」

「我々を別に避けているわけでもあるまい。こうして共に集って言葉を交わし合っている。お前が本気で避けているならば今この場に立ってはいまい」

諭すフィン達と共にロキも話に加わる。

「うちの【ファミリア】はこーいうもんやイツセー。互いが互いを大切に想うもんがいなきや【ファミリア】としてならんちやうかな」

「……」

「どんな秘密を抱えとんのかしらんけど、うちらがそう簡単にイツセーを嫌うことは絶対ない。せやから話してくれへん?」

主神と【ファミリア】を纏める古参の団長達の言葉は一誠の顔を顰めた。信じていないわけではないが、絶対にそれはできないと断言できる理由がある。アイズからも向けられる視線を感じながら首を横に振る。

「無理だ。絶対に俺を受け入れることはできない。知らない方が幸せ

だつてある。それが俺の秘密だ」

「何故だ？どうしてそこまで我々がお前を拒むと言える。我らとの絆はそこまで浅いか」

「信頼や絆の有無の問題じゃない。お前らが冒険者で、この世界の人類だから俺を受け入れることは不可能に近いんだ」

「儂等が冒険者でこの世界の人類だから……？イッサー、お主は何を言いたいんじゃない？」

不意に灰色の雲から雫が降ってきた。やがてそれが呼び水となりオラリオ中に雨が降り注ぐ。全身が濡れているにも拘らずロキ達は一誠を見据える。秘密の全容が明らかになりそうな雰囲気、真意を確かめる為に。ここまで話しても退く気配がない彼等彼女等に嘆息を吐いた。

「……俺が言いたいのは、こういうことだ」

真紅のオーラに包まれた一誠は、骨格が変わり体格も人から崩す際。鎧が包容しきれない体に堪え切れず破ける風に砕けていく。六人に見守る中で一誠は……異形の姿へ変貌していく。

「……………!?……………」

フィン達は前代未聞という言葉で脳裏に過らせた。目の前に立っていた人が人を止めた姿になって雨に打たれながら静かにその場で佇んでいる。その姿はまさに竜そのものだ。鋭利な一本の角を生やし、凶悪な牙を生え揃え、鋭い爪を伸ばし、背中に二対四枚の翼を広げ、太い尻尾を揺らし逆関節の足で中庭の地面に立つモンスターとして正体を現した。

『理解できたか。俺はモンスターだ』

冒険譚5

アイズは衝撃を受けた。一誠が頑なに秘密を語ろうとしなかった理由は本当の姿を晒すことだったのだと知ると今まで見てきた一誠の言動と仕草、感情が全て嘘だったかのように思えてならなかった。モンスターは人類の敵。人々の悲しみと涙を生む絶対の悪。

——アイズの大好きな人達を奪った絶対に許さない討つべきの存在。

(なんで、なんで、なんで……なんで!?)

かき乱される心と感情に歯止めがかからない。アイズの理解者が、アイズを強くしてくれる者が、アイズが心を開いた者が、アイズが——アイズが——アイズが——

(イツセーは、最初から……モンスターだったの……!?)
幼い幼女の心は激しく揺さぶられ、黒い炎が目の前を許すなど促す。自分だけでなくフィン達にも騙したモンスターはモンスターでしかないのだと。凶悪で、醜悪で、残酷な怪物に許してはならないと囁く。

「……それが、君の抱えている秘密だと言うんだね」

碧眼の瞳から穏やかさが無くなり警戒する目で一誠を見上げるフィンにリヴェリアとガレスは臨戦態勢の構えになって、何時でも対応できる姿勢に得物を握り締め身構えた。ロキはジツと淡色の朱の瞳を開けて耳を傾ける。対する一誠はまた嘆息する。

『だから言っただろう。俺を受け入れることは不可能に近いと。お前ら、俺が能天気な秘密を抱えていると思っていたのかよ?』

「正直言つて僕は君の秘密を慢心に捉えていた。いや、ガレスとリヴェリアもそうだったかもしれない。ロキもだ」

『人の悲しい秘密は大抵そいつが経験した人間同士で起きた悲惨な過去の部類でしかないのが大半だ。だが、完璧に人の皮を被ったモンスターが町中で我が物顔で闊歩していたなんぞ誰が思うか?しかもここはダンジョンがある都市だ。人類の天敵のモンスターの俺もお前らの敵として認識される。だから黙っていて当然だろう』

「ああ、そうだろう。だけど、腑に落ちない点がいくつかある。聞いてもいいかな」

構わないと鎌首を首肯する一誠に遠慮なく質問をぶつけ始めるフインは人差し指を立てた。

「君はダンジョンから生まれたモンスター、なのかな？ 理知を備え人語を完全に理解して喋っている。君の様なモンスターはダンジョンの中に他にもいるのかい」

『否、と言えば信用してくれるか？』

「……難しいね。こうして対話している間にも僕は驚いているんだ。モンスターと話ができる日が来るとは思わなかったのも事実。だから慎重に会話を臨んでいる」

『勇者』と名乗っている奴が珍しいな』

元の姿、人間の姿に戻ってフインを見下ろす一誠は頭を掻く。

「さて、俺がダンジョンのモンスターでは無い事実を証明しなくちゃならないよなあ。言葉で語らせてくれるなら何でも言えるが、嘘か誠か判断できるロキがそれをできないでいるから正直信憑性が欲しかった」

神の前で人類は嘘を吐くことはできない。それが絶対なのだ。それができないのだとすれば思いつきり嘘を織り交ぜて会話ができるので信用をすることは難しいのである。それを把握している一誠は困った顔で頭を掻くのだった。

「取り敢えず、話だけは聞いてほしい。その間俺からは絶対に何もしない」

「……ン、分かった」

少し考えた後であっさり了承したフインに驚きで「いいのか」とりヴェリアが訊ねる。

「ああ、彼が秘密を言いたくなかった時の言動と反応に理知を備えているモンスターを考慮すれば、少なくとも僕達から手を出さなければ何もしてこない。実際、彼は僕達に対して変わらない態度で接している」

「逆にお前達はもう完全に俺を俺としてでは無い接し方をしているが

な。だから嫌だったんだよ。教えたくなかったし結局教えればこうなるんだ。今絶賛、お前らは完璧に俺を警戒して笑って受け入れ難いでいる。どこのどいつだっけ？」

『僕達が君を忌避するような秘密を抱えても僕達は同じ「ファミリア」の仲間だ家族だ』

『どんな秘密を抱えとんのかしらんけど、うちらがそう簡単にイツセーを嫌うことは絶対がない。せやから話してくれへん？』

「——とか言っつて俺に秘密を明かすよう急かした奴。今その通りになっっているのかああん？」

「……」

ギロリと主にロキとかフィンとかロキとかフィンとか睨みつける一誠に当の二人は口を真一文字に閉ざした。その反応に不快と眉間に皺を寄せる。よもや自分はモンスターと言われるとは思わなかった結果だ。反応に困ってしまう主神と団長に同情を覚えるリヴェリアとガレス。

「……イツセー」

「アイズ……」

「教えて……」

と、顔を俯いていたアイズが衝撃が抜けないまま真意を問うた。

「イツセーは、モンスターだったの……？ずつと、私の願いを知って、私とおなじだっつて言っただあの言葉は……嘘だったの……？」

「……」

答える前に、人差し指を立てて円を描くように振ると「ロキ・ファミリア」の上空の雨雲だけが蠢き、避ける様にして青空を覗かせばかりと空いた雲の穴に太陽の光が差した。その雲の動きを見ていたロキ達は。

「まさか、天候を操ったのか」

「モンスターが……信じられん」

『迷宮の孤王』でもできないことを見て見せられ啞然とリヴェリアとガレスは漏らしている間、アイズの目の前で跪き、真摯な面持ちで答

えた。

「嘘じゃない。俺も昔はアイズのように弱くて強くなりたいと思っただ。だからアイズの気持ちは分かるんだ」

「嘘！モンスターが私の気持ちなんて分かる筈がない！」

「だったらアイズは俺のこと知ってるのかよ？俺の昔の事なんて聞こうとしなかっただろう」

「知らない！モンスターの事なんて、知らない！」

「だったら今教えてやる。さっきのずっとモンスターだったのかと答えは否だ。俺は元人間だ」

元人間、金眼が言葉を失って大きく見張り一誠を見つめる。

「元、人間……？」

「モンスターになったのは5歳ぐらいだったかな。そうなった理由もあるんだが聞いてくれるか？」

「……」

「嘘か本当か決めるのは話を聞いてからでも遅くない。当然ロキ達もな」

「分かった。こつちが教えてと言ったんや。大人しくしとるから聞かせてほしい」

ああ、と頷く少年はずっと閉じていた右眼を濡羽色の目を開眼する。覗き込み続けると自分が吸い込まれそうな錯覚を覚える真つ黒な瞳だった。

「右眼、あつたんだね」

「この目は俺の目じゃないんでね。開けていると色々不都合があつたんだが……」

右眼に意識をしている様子の一誠はどこか残念そうに肩を落とし、両眼を開いたまま話を続ける。

「立ち話も何だ。俺の中にいる奴らも含めて話を聞いてもらおうか」「なに？どういふことだ」

「こういうことだよ」とリヴェリアに答える一誠の右眼がロキ達に濡羽色の光を照らした。視界を塗り潰し意識が吸い込まれそうな感覚を覚えた時は目の前が真つ暗だった。しかし次に目を開けた時は、フ

レイヤが魅了した一誠の心の風景の中に立っていた。草原の上に足を踏んで佇み、森林や大海原、蒼い空が広がる別の場所に瞬間移動したかの様に驚いた。

「な、なんやここ」・・・うちら、何時の間にここにおんねん？」

「本拠ホームにいた筈なんだけどね・・・ダンジョンのモンスターがこんなことできるとは思えないや」

「じゃがあやつはモンスターであることは間違いないのじやろう？」

「ここで話をするということが」

「・・・」

しばらく周囲を眺め、真紅の光と共に遅れてやって来た一誠の姿を確認し対峙する。

「ここは俺の心の中だと先に言っておく」

「心の中？凄く穏やかな場所なんだね。居心地が良いと言うかなんというか」

「当然だろう。俺自身が穏やかだから」

「胸張って言うほどかいな」

「無い胸より逞しい胸板があるがな」

嘲笑い、ムツカー！と怒り心頭のロキやフィン達の頭上を一瞬遮る影。翡翠の瞳が何だと空を見た瞬間、太陽を背に巨大な影が一誠達を囲むようにして舞い降りてきた。巨大な翼を力強く羽ばたかせ、次々と地面に地鳴りを鳴らしながら降り立つ怪物達――。

「こいつ等も俺の証明となるからここで話すことにしたんだ」

姿や形が違えど、共通しているところもある。怪物達は何なのかフィン達は直ぐに悟った。

「改めて名乗ろう。俺の本当の名前は兵藤一誠という。この世界とは違う別の世界、異世界からやってきたドラゴンだ」

『階層主』より巨大で理知と理性を備えている怪物達、ドラゴンが囲みながらジツとロキ達を見下ろす。その内の一匹、三頭竜が一誠の後ろから顔を近づけた。

『我が主よ。説明しても意味は無いとは思うのだが』

「そーいうなって。少なくともこの世界で世渡りをする為には信用を

得なきやならない。信用なくても構わないが、こうなったら話さなきやならんよ」

『この世界では、我等は人類と神の天敵として成り立っているにもか？』

「この世界のモンスターが、だ。異世界から来た俺達ドラゴンは違うだろう。まあ、グレンデルやニーズヘッグはそうなくても仕方がないかもしれないけど」

一誠の視線の先には背中に翼を生やす巨人型のドラゴンと蛇の様な胴体に翼を生やす巨大なドラゴンが戦意と殺意、腐臭を漂わせる涎を垂らしギラギラとロキ達を見つめていた。

『おい兵藤一誠。こいつらと戦わせろ。第一級冒険者とかなんとかしらねえーけどつえーんだろ？戦って殺し合いがしたいぜ！』

《ぐへっ、ぐへへへへっ！力を封印した神ならオイラでも食べれる！た、食べてみたい！喰いたいっ！この世界の人間を食べたい！》

早速この言葉だった。額に手を当てて困ったような面持ちで呆れ果てる一誠と『墮龍が』と罵るアジ・ダハーカは揃ってため息を吐いた。悲鳴を上げるロキ。

「イツセー！なんや、ダンジョンのモンスターと変わらんドラゴンがおるんやけど大丈夫やろうな!？」

「あー大丈夫大丈夫。今のロキ達は意識だけを引っ張ってきただけだから本当に食べられても肉体には何ら影響は無い」

「それが本当だとしても、僕達はこのモンスター達の前じゃ手も足も出ないよね」

「うん」

「キツパリと首肯しよってこやつは……」

フィン達より強いモンスターに囲まれる状況の中で一誠は自分のこととロキと同じ名前の神々が存在する異世界のことを説明した。モンスターに転生した理由も含めてだ。全て秘密を教えられたロキ達は案の定、信じ難いという感想を抱きながらもアジ・ダハーカ達の存在を突き付けられては事実として受け入れる他なかった。

「……よーわかったわ。ますますあの色ボケ女神んところに行かせ

たくないわーって気持ちが高まったわー。それとな？因みに聞くんやけど。イツセーの世界のうちってどんな感じなん？やっぱり女？」
「や、美青年。悪神ロキって呼ばれてる。実際、俺が倒しちやつた」
「そっちのうちは男なんて世界は残酷やあーっ!？」と本気の悲鳴を上げては四つん這いになって泣いてフィンを苦笑いさせた。

「ロキが邪神みたいな呼ばれ方をしているのは意外だったけど、君の世界の小人族バルウムはどんな感じかな？」

「大して変わらんよ。中には強い勇者を目指している小人族バルウムもいるぞ」

「そうなんだ。会ってみたいねその同胞と」

「のう、ドワーフはどうなんじゃ？」

「ドワーフは鍛冶が得意とする種族でエルフと同じ秘境の地に住んでいるんだ」

「秘境の地、森の中か？」

「ん、人間が住んでいる場所から離れ静かな森の中で住んでいる。それとドワーフと同じで寿命が長い。中には1000年も生きているエルフもいるし、昔から戦争をして人間と敵対しているエルフ達もいる」

異世界の同胞のことを気になり訊くフィン、ガレス、リヴェリアは感心する。別の世界の同族といえども変わりないところがあると知ってどこか嬉しそうであった。

「で、俺に対する危険度はどうなんだ」

これだけ秘密を暴露したからには変化があってもいいだろ、と思いを込めて問い掛けたところ。フィンは朗らかに笑みを浮かべて頷いた。

「うん、この世界のモンスターではないなら、君に手を出さない限り無害だと認識したよ。モンスターに転生した理由も教えてくれた。自分の意思で人間からドラゴンになったわけではないこともね」

「ドラゴンに転生して後悔したことは無いがな」

とそういう一誠の後ろからアジ・ダハーカが誇らしげに喋り出した。

『我が主は俺の最高の唯一無二の存在。ましてや主がドラゴンに転生していたなど後に改めて思った時は笑いが止まらんかったぞ』

『我々は驚きましたかね。主はただの人間ではなかったことに対して』

『お前と我が主の因果と出会いには感嘆の一言だ』

金色の優しい声音の天使の様な翼を生やすドラゴンと凶暴で凶悪そうな顔の全身が紫のドラゴンの言葉に他のドラゴン達は様々な反応を示す。それにはロキ達は不思議に思い問う。

『何か他にもあるんか？イツセーに隠された秘密ーとか』

「んーまあ、あるにはある。俺も実感しない秘密だ。太古の昔に存在していた魔王の転生者なんだとよ俺は」

「ほー魔王か・・・魔王っ!？」

「うん、で、昔の俺、魔王はアジ・ダハーカを作った魔神でもあってな。だからアジ・ダハーカはかつての主の転生者の俺に忠誠心を向けているんだよ」

『そういうことだ。笑えるだろう?』。ロキに向けるアジ・ダハーカの言葉に「いや、全然笑えへん」と冷や汗を流すロキだった。

「あかん、めっちゃあかん・・・うち、とんでもない子供を眷族にしていたなんてもう生涯絶対に忘れられん驚愕ものや」

「生涯って、何億も生きてるババアが何言ってるんだよ?」

「ババア言うなっ!?!他の神連中に喋るで!?!絶対にお笑いのネタになって興味や好奇心で自分にしつこく追いかけて回すで!?!」

『してみる。我が主に襲いかかる人間どもは我らが根絶してやる』

威圧を膨れ上がらせるアジ・ダハーカ。その力と存在感は間違いない『階層主』を軽く凌駕している。顔色が青褪めるロキに、緊張で顔を強張らせるフィン達。武器も無しに格上のモンスターと戦うのは無謀に等しい。金色のドラゴンがやんわりと諭す。

『主は無用な争いは好みません。もしも、安易な気持ちで主の秘密を語ってしまったら主の居場所はもはやこの世界からなくなります。くれぐれも秘密を漏らすことのないようお願いいたしますこの世界の神ロキよ』

『付け加えて言わせて貰う。主を裏切ったり心を傷つけることもあれば、この粗暴なグレンデルとニーズヘッグを世界に放り出してオラリオを蹂躪してくれる。無論、我等もな』

「メリアはともかくゾラード。マジで洒落にならん事言うな。おいグレンデルとニーズヘッグ。本当にそうなってほしいと期待する目でロキ達を見るんじゃない」

紫色のドラゴン達の警告と危険極まりないドラゴン達に呆れる。

「……何て言うか、君も大変？なのかな？」

「俺という手綱が失えばもう好き放題するからなこいつら」

「分かったよ。君を裏切ったら恐ろしいね」

「はあ……恐怖と絶望に恐れてできた関係になりたくねえ……」

フィンの心情を察して零した溜息にガレスとリヴェリアも同感だと頷いた。ふと、ガレスはあることを訊ねた。

「訊くがイツセーよ。お主の家族は健在か？」

「多分、そうじゃないか？まあ、俺の家族は色々と凄いから心配しても問題ないけど」

「そうか。お前を好いている者達も心配しているだろうに」

「こんなモンスターの場合でも、な。対してこの世界じゃ俺の正体を知っても尚、異性として好きになってくれる女はいないだろうよ」

そう言うがアジ・ダハー力達の間では『主の魅力は天井知らず』『物好きな者もいるはず』と確信をしていた。フィン達は知らない。元の世界で一誠を慕っている者達の凄さをと一誠の魅力はフレイヤ並みかそれ以上だと言うことを。

「さて、話は終わった。現世に戻るぞ」

「せ、せや。はよう戻りたいわ！モンスターに囲まれるこの状況はもう勘弁したいわー！」

『同じロキの名を持つ神でも度胸がないな。ああ、女神だと言うのに胸も無いからか。はっ、笑える』

「うっさいわポケエツ！力を封じとらんかったら自分ら全員纏めて倒してるわ!?!」

モンスターにまで馬鹿にされて怒っては食ってかかるロキに不敵

の笑みを零すドラゴン一同。

『ほほう、それは楽しみだ。天界に殴り込みすればそれが可能か？』

『楽しみですねー』

『グハハハッ！異世界の神と戦える日が待ち遠しいぜ！』

《興味ある。兵藤一誠、天界に行ける術を模索しないか？》

「うん、お前ら一度黙ろうか。ロキが今にでも泡吹いて卒倒しそうだから」

怯えるどころか逆に好戦的なドラゴン達であった。実際に殴り込みされれば、ロキは確実に神々から非難の嵐の渦中に閉じ込められるだろう。その会話を最後にロキ達は一誠の手によって本拠^{ホーム}の中庭にいる自分達の体に意識を戻されて、現世でも一誠と対峙する。

「アイズ」

金髪金眼の少女に話しかける。今までずっと耳を傾けていた少女は金眼を見上げる。

「俺のこと知ってどんな気持ちを抱いた？」

「……」

「お前の言うとおりに、俺はモンスターに変わりがこの世界のモンスターと一緒にしてほしくないのが心情だ。でもアイズはそれでも強くなるためにはモンスターを倒さなきゃいけない。人類の敵のモンスターを許してはならない」

目線を合わせ、真っ直ぐ金眼に視線を送り言葉を掛ける。

「俺も許せないかアイズ・ヴァレンシユタイン？」

目を地面に落とし顔を俯く少女は肯定も否定もしない。一誠という存在の話を聞かされてから顔に迷いが浮かんで今もそれが消えていない。

「……分らない」

「……そつか。じゃあ、分からせる為にはやることはただ一つだな」
空間を歪ませ、ポツカリと空いた空間の穴から掴みだした今まで見たことのない大剣。宇宙にいると思わせる程の常闇に星の輝きをすする宝玉が柄から剣先まで埋め込まれてあり、刃の部分は白銀を輝かせ剣身の至るところに不思議な刻印が刻まれている装飾と意匠が凝っ

た金色の大剣をアイズに向けて突き出した。

「俺と勝負しよう。ダンジョンの12階層で」

「っ!？」

「極東の言葉には、剣と剣を交えて口の代わりに言葉を交わすつてのがある。それに倣って戦うぞアイズ」

困惑するアイズを置いて先に転移魔方陣で忽然と姿を消す一誠。更に当惑する彼女はリヴェリア達から促された。

「行ってきいやアイズたん」

「ロキ……」

「言葉だけでは確かに伝わり辛い時もある。イツセーはそれを分かっ
てて誰にも邪魔されない場所でお前を分かっ
てほしいのだろう」

「……リヴェリア」

「お主がいつまでもイツセーを受け入れるか否定するか決まらん限り
スツキリせんわい」

「ガレス……でも……」

「これはアイズとイツセー、君達の問題だ。僕達が介入しても彼はと
もかく君は心から納得できるかい？」

「フィン……」

決着は自分の手でつけるべきだ。そう言っ
てはばからないロキ達
はアイズの背を押す。皆からそう言われ、一誠の秘密を知った時から
混濁する気持ちを晴らす必要がある。少女は人型のモンスターと向
き合いこれからどうするかぶつかって確かめるべきだとロキ達の言
葉に意を決して皆に見送られながらダンジョンへ駆け出す。一誠と
アイズがこれから戦う、それがどんな結末になるのか不安に駆られた
のかアリサまでアイズの後を追いかけてしようとしたが、フィンに肩を掴
まれ静かに首を横に振られた。二人が帰ってくるまで待っていろ
うと。

雨の中を、剣を背負った少女が走っていく。そんな彼女を濃紫の瞳
は見つめていた。闇に沈むとある建物の中で、その神物は見つめてい
た。

「ねえ、『人形姫』って知ってる？」

「んだよ、他神様？知ってんに決まってるんだろう。フィン達のところが育ててる小娘だ。とんでもねえ速度で強くなってやがる生意気な新人冒険者……たく、いけ好かねえ」

フエアール冒険者……たく、いけ好かねえ」
毛皮付きの長外套に胸のみ覆う肌着、革の脚衣を着る女に訊ねた神物はヘファイストスを誘拐し武器の確保を企んでいた男神だった。そして闇夜に紛れているのは闇派閥の主神達と幹部であった。この男神の「ファミリア」を始め、邪神の使徒を名乗る他派閥の眷族達が、今日も都市に破壊と混乱を招こうと暗躍している。

「その『人形姫』がどうかしたのか？」

「オレさあ、偶然あの娘を見掛けた時から、気になってたんだよね。遠目からでも分かるくらい、瞳の中でくすぶってる……あのドス黒い炎が」

ボロボロの黒衣のフードの下で、神の瞳が少女を追う。眼下の街路を走っているその姿に、目を細めた。

「死の香りがさあ、するんだよ。香りが濃くて濃くて……死神としてほっとけないくらい」

退廃的な雰囲気醸し出しながら、男神は笑った。

「ねえ、今日の予定、変更しない？」

「ああ？」

「ちよつとさあ、派手に騒ぎを起こして来てよ。【ロキ・ファミリア】……いや、邪魔者がしばらくダンジョンに近づけないように」
通りを駆け抜けていく金髪金眼の少女が向かう場所、都市中央の『バベル』を眺め、死神はそんなことを提案する。

「他派閥の主神が指図するんじゃないやねえよ。計画を変更するんだつたら、まずは他の神共の許可を——」

「【ロキ・ファミリア】の、【勇者】へのいい嫌がらせになるかもよ？」

その【勇者】という言葉を聞いて、闇派閥の幹部女は押し黙った。やがて神意を悟った様に口端を裂く。

「この変態野郎め。あんなガキを狙いやがって」

「違う、違う。そんな下心ないって」

部下に変更の指示を飛ばし始める幹部女に背を向けながら、少女の後ろ姿を追う死神は、口唇で三日月を描いた。

「迷える子供を助けてあげるのも、神様の仕事でしょ？」

指定された階層にアイズは足を踏み入れた。『上層』12階層だ。周囲には白い霧が漂っていた。階層そのものも朝霧を彷彿させる薄暗さに包まれており、天然武器ネイチャーウェポンと化す枯れ木が無数に生えている。見覚えのある地形と今いる広間ルームの規模に、アイズは先にこの階層にいるだろう少年を目で探す。ここで自分とあのヒトと戦い自分の気持ちと向き合う場所——。モンスターモンスターの気配が途絶えた静寂の広間ルームの中で、アイズが一誠を探して回っていると……離れた場所から可視化されるほどの黒紫のうねりが——細い光の柱となって迷宮の天井に突き立つ。直後、『それ』はやって来た。

アイズとが12階層に辿り着く直前の時間に遡る——。

「んー？誰かと思えばヘファイストスを誘拐した闇派閥イルヴァイスの神か」

白い霧の中でダンジョンにいる筈がない神物を偶然にもバツタリと会い、どうしてここにいるんだ？と小首を傾げる思いの一誠が声を掛けた。眷族を率いる死神は己を追い詰め、第一級冒険者を返り討ちにした相手がここにいることなど予想外極まりないだろう、乾いた笑いを零した。

「これはこれは、久しぶりだねえ……できれば会いたくなかったけれど、まさか狙ってたとか？」

「偶然だろ。狙っていたわけじゃないし俺はここでやることがあるから来ていただけだ。だが、ここでお前を捕まえてギルドに渡せば少しはオラリオも平和になるか」

背負っていた大剣を手にして死神達に戦意を示す構えをし、今にも飛びかからんとする一誠。そんな彼に反応する闇派閥イルヴァイスの使徒が臨戦態勢の構えをして死神を守らんとする。

「ねえ、大人しくオレ達は下がるから見逃してくれない？」

「目の前にぶら下がる大好物の餌を獣が待つとでも？」

「忠誠心が高い獣ぐらいは待つてくれると思うんだけど……しよ
うがない。君に贈物プレゼントを送るから勘弁してよ」

鎧の中で怪訝な表情を浮かべる一誠と、うろたえながら一瞥して
くイルヴァイスる闇派閥の視線の先で死神は片腕を頭上に上げる。岩盤で塞がれた
天井を衝きながら、その濃紫の瞳を細め、笑った。

「受け取ってよ」

次の瞬間。神のもとから、抑え込まれていた『神威』が解放された
その直後。呻くように、唸るように、怒るように迷宮の大地が鳴動す
る。激しく揺れる地震の次に発生したのは迷宮壁の咆哮だった。白
い霧の奥、計三箇所、広間ルームの出入り口がある全ての方角から雪崩のご
とき音が発生する。この現象に愕然となる闇派閥イルヴァイスの使徒。一誠は眼
前の死神に問うた。

「何をした？」

「さあ？オレも始めてしたからわからないけど」

笑みを途切れない死神の視線は、身を絶えず襲ってくる自信を心地
よさそうに受け止めながら徐に、頭上を仰いだ。

「ああ——こうなるんだ」

一誠がその視線を追った、霧の奥に立つアイズが何かを感じて天井
を見た、直後。

ビキリッ、と。

「——」

迷宮の天井に亀裂が生まれる。雨のように破片が飛び、ダンジョン
に召喚される『それ』を目にした途端。一誠は死神から離脱するよう
に離れ、瞳を凍結しているアイズへ向かって跳躍した。

地上で微細な揺れが生じた事を、その原因を悟った神々は北東の魔
石製品工場イルヴァイスに闇派閥の襲撃情報も耳に入れた。これに対応する様々
な派閥の眷族達は素早く対応に追われる。

「ロキ、アイズは……」

「イツセーがおる。心配するなどは言わへんけど、信じるしかないで」

「あの三人が帰ってきたら宴やかな！」とフィン達に困ったものだと苦笑いを浮かべさせた。

「アイズ、無事か？」

「イツセー……これって、イツセーが？」

「うん、その認識は間違いだからな？俺がダンジョンをどうこうすることはできないからな？」

天井の真下で二人は合流したその間にも、それは無数の破片を飛ばして、迷宮より生まれ出た。鋭い爪、長い牙、夥しい鱗、歪な皮膜を有する翼。そして、全身は漆黒の色。上下阪様の体勢で、その長い首をもたげる存在に、アイズの心臓が絶叫を上げる。その存在に一誠の左眼は細まる。砕かれた岩盤より完全に姿を現した漆黒の存在は、天井から落ち、翼を広げるとともに宙空で咆哮を上げた。

「アイズ、アレを倒すか？」

突然提案される。あのモンスターを私が……？

「イツセーが倒さないの？」

「俺が倒したところで無意味だ。もう知ってるだろう？」

皮肉気に、自嘲的な笑みを浮かべた後。アイズに警告の言葉を置いた。

「相手は——ドラゴンだ。油断するなよ」

一誠の言うとおりだった。天井の岩盤から出たモンスターは『竜』だった。インファント・ドラゴン子竜を除けば『上層』には出現する筈のない、一対の翼を有する翼竜。

『ワイヴァーン』。

中層域に棲息するモンスター。長い尾を合わせれば全長は優に五Mに届く。斬りで覆われてなおはつきりと存在を認識できる姿は、紛れもない竜種であった。元来退紅色の体躯は、漆黒かつ強靱な鱗に覆われている。一目でもわかる『異常事態』、イレギュラー通常種より遥かな力を秘めた『亜種』だ。

黒き竜。

翼を広げ、遙か頭上に留まる漆黒の翼ワイヴァーン竜は赤い双眼を眼下に走ら

せた。対してアイズと一つになり、一緒に空中にいる敵を一誠は見据えた。

「アイズ、お前は一人じゃない。それだけは絶対に何が遭っても忘れるな。忘れていなければ想いの力でどんな強敵にも打ち勝てる」

「想いの力……?」

「そうだ。それが俺の力の根源だ。その剣に想いを込めて振るえ」

次の瞬間。真上から炎の息吹が放出される。真下に直撃した火炎流が土砂を突き上げ、地面から轟音という名の絶叫を上げさせた。凶悪な緋色の光が生まれる中、竜の首が薙かれる。とめどなく噴き出す火炎の濁流は、その噴出口の動きに従って広間全体に広がった。押し寄せる炎の荒波にアイズは一誠に抱えられ上空へ緊急離脱した。その僅差で高熱量の炎塊が少女と少年のいた場所を一過した。

『オオオ……』

凄まじい火炎放射によって、広間の霧は吹き飛ばされていた。いや、焼き滅ぼされていた。アイズは、上空からその光景に金眼を焼きつけて息を呑む。燃え盛る枯れ木と草原。身を焼かれる大樹が音を立てて倒壊し、地を震わす。霧の階層は僅か間に火の粉を撒き散らす焦土と化していた。

「ん、アイズ。あいつを倒すぞ」

「ん」

何時しか、よく聞く一誠の言葉が自分にも移っていることにすら気付かない少女は首肯し少年が光に包まれ姿形を変え——アイズを背に乗せる真紅のドラゴンになった。翼、竜の二倍誇る巨体で宙に浮き、こちらに視線を向けた竜に戦意を露わにする。その瞬間、目の前の同胞は母なる迷宮の意思を受けて生まれ落ちた存在ではないことを一目見て察した。——目の前の竜は完全な異常怪物。地上に輩出したどの同胞のモンスターでもない神と同じぐらい抹殺すべき存在だと本能が言う。

『オオオオオオオッ!』

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!』

凶悪な存在感を撒き散らす翼、竜のその威嚇の吠声を上塗りするよ

うな咆哮を上げ、身体を仰け反らせた。その瞬間が戦いの始まりの合図として動いた。アイズにぶつからないよう天井まで飛び、そこから真下に向かつて火炎球を連続放射する。上を取られ、迫りくる炎塊をかわしながら一瞥。地上に落ちた火炎球等は消失せず着弾したそばから天井を衝く灼熱の炎柱として燃え盛った。その炎柱の真上にいる翼ワイヴァーンは、急いで横にかわして避けたと同時に、真上から凄まじい勢いで降下する一誠の背中に乗っているアイズの目では見る見る内に大きくなる翼ワイヴァーンに倒す意思の強い光を目に宿し、眦を裂いた。

「あああああああつ！」

どこにそんなものを隠し持っていたのか、少女とは思えない咆哮を放ちながら、飛ぶ竜の真下に潜り込んだ一誠の考えを悟って、祝福リイン・フォースソードの剣を振り上げて、鋭い斬撃を放った。

『！』

「ぐつつ!？」

すれ違い様、凄まじい勢いからなる突撃の余波によってアイズの体が一誠の背中から落ちた。急旋回して燃え盛る地獄を連想させる焼けた大地から幼い少女掬い上げ空中に舞い戻る一誠。

「斬ったっ?」

『いや、浅い。——おっと!』

後方から火炎放射。偉大な翼に傷をつけた者達を許してなるものと通常の翼ワイヴァーンが繰り出す火球とは桁違いの火力、猛猛な火炎流が二人を襲った。翼を羽ばたいてかわすも後ろから追撃するは、五Mを超える豪火球。太陽を彷彿させるその火球に見開かれたアイズの視界が、金髪や全身も真っ赤に照らされた。少女に危険を晒させないと豪火球に振り返った一誠が、両手であろうことか触れるだけで焼き尽くし灰燼と化するだろう火力と熱量の塊を受け止め、横へ反らした。その直後。翼ワイヴァーンの突進を許してしまい、直撃を受けて必死に背中をしがみついていたアイズが空中に身を踊らさせた。その時、金眼が映った。翼竜が零距离から息吹を吐き火球を直撃させた後、首はアイズの方へ振り向き生えわたる無数の凶悪な牙を上下に口開き、開口する。止めを刺す気だろう。特大の火球をもって口腔の奥で燃え盛り、

輝きを放つ炎の塊。間もなく翼ワイヴァーン竜は慈悲なく、少女のもとへ大火球を撃ち出した。一誠が疾呼する。

『アイズ！言えつ、必殺の魔法を！』

翼ワイヴァーン竜の火球を食らってもピンピンしていた、炎塊が吐き出されるより早く、一誠は叫んでいた。己のもとに迫りくる紅蓮の炎に視界を焼かれるアイズは、それを聞く。

『目覚めよ』と！』

そして火炎が炸裂する直前。アイズの口は、その音をなぞっていた。

『目覚めよ』!!』

次の瞬間。アイズの中に在った『魔法』が解き放たれた。

「っ!!」

『?!』

巻き起こる大爆発。一誠と翼ワイヴァーン竜のもとにも届いた『魔法』の轟き。着弾した大火球は炎の破片を撒き散らしながら、その光景をあらわにした。確かに直撃を果たしたにもかかわらず、焼き払われずにいる少女の姿を。

「これは……」

落下の最中のアイズを、『風』が守っていた。その小さな体に付与されているのは気流だ。何ものよりも強く、何ものよりも流麗で、何ものよりも気高い『風の鎧』。その身に刻まれていたアイズの『魔法』。強さを求め、心の中の黒い炎に焦がされる少女を守る、風の加護だ。翼ワイヴァーン竜を殴り払い、直ぐに少女を背に乗せて宙を飛ぶ。

『……』

背中の少女が風の気流に守られる中、身体を打ち震えさせ、涙流す。少女の魔法は少女にとって深く特別なのだろう。彼女にしか分からないことに一誠が察することはできないが何時か分かる時が来ると信じて意識を本題に集中させる。

「……イッサー、お願いとやってほしいことがある」

『無理難題なことでもやってやろう』

「うん、ありがとう」

とアイズは要求した。少女の要求という願いを聞き届けた一誠が——空中で数多に分裂した。これには翼ワイヴァーン竜は目を見開いた。四方八方、前後左右上下、霧の空間を埋め尽くす数の真紅の竜に漆黒の竜は人間味溢れる、開いた口が塞がらない反応を示した。すると、数多の真紅の竜は右へ動きだす。台風のように大きく移動し真紅の球体に閉じ込めながら、中心に佇む翼ワイヴァーン竜に向かって、輪から次々と飛び出す。

『グッ!?!』

避け続け直撃を免れようと絶えず襲いかかってくる真紅の竜の猛撃は止まらない。時折どつくかれ、殴られ、尾で叩かれ、弄ばれていることに翼ワイヴァーン竜の睨は怒りで裂け、咆哮を上げ、己を取り囲む竜達に息吹を放とうと口内から炎の残滓が漏れたのを確認した——少女を乗せる本体の竜が真正面から肉薄仕掛った。

『行くぞアイズ!』

「うん!」

右の掌の中に跪いているアイズは風の鎧を纏った状態で——豪快に翼竜のもとへ投げ放たれた。『風』の力も借りて、アイズは颯風の矢となった。

「うわあああああああああああああ!」

準備態勢に入った特大の息吹が仇になった。高出力の攻撃を畜力するが故に翼ワイヴァーン竜はその場を移動することができない。防御も、回避も、迎撃も不可能だ。全ては竜の予測を裏切るほどの速度を持って肉薄を仕掛けたアイズの判断と、その『風』がもたらしたもの。竜の双眼が焦燥に血走り、口腔の輝きが膨れ上がる。アイズは咆哮を重ねながら、両手に持った剣に気流を付与した。祝福の風剣に。背中が熱い。背中が燃焼する。竜を討てと黒い炎が燃え盛る。けれど、それ以上に。アイズを包む『風』が猛る少女を守る様に、我が子を抱きしめるように。大丈夫だよ、と囁きかける。涙を散らしながら、全ての力を注ぎこみ、アイズは振り上げた剣に『竜巻』を生んだ。

『——オオオオオオオオオオオオオオオオオッ!?!』

零と化した間合い。畜力を終えて放たれようとする息吹。視界で

光り輝く爆炎を前に。アイズは、風の剣を振り下ろした。

「母の風よ」!!」
エアリエル

風砕。

「アアツツ!?!」

竜の顔面に振り下ろされた剣が風の力を解き放つ。叩きこまれた巨大な竜巻が上顎ごと口腔を粉碎し、行き場を失った火炎の濁流が大爆発を引き起こした。それを見て『うわー……』と思わず口を手で添えて、戦闘の際の火炎攻撃は危険だと教えられた気分な一誠は、火の粉と黒煙を突き破って少女の体が階層の奥へと落下していくのを見て、近づきに行く。気流の破片を散らしながら、なんとか『魔法』を制御して、アイズは着地した。地面を踏みながら近づくもう一匹の竜に振り向く。

「……イツセー」

『ん……』

「私、独りじゃなかった……」

嗚咽を漏らしながら訴えた。龍化を解き、人の姿に戻った少年は少女の前に跪いて真つ直ぐ目を向け耳を傾ける。

「ずっと、ずっとお母さんが傍にいてくれた。ずっと独りだと……」

「何言ってるんだ。お前はずっと前から独りじゃないぞ」

温かく語り掛ける少年に金眼を見開き、一誠の顔を見上げた。視界には優しい微笑みが浮かべている少年に「見てみる」と肩を掴まれ、後ろへ振り向かされた先には可視化する気流が人の形を成してその場に佇んでいる。

「あ——」

「お前の傍にいらなくても、常に誰かと絆があるのさ。この世界に来てしまえば、会いたい家族と二度と会えなくなるかもしれない俺でも、過去に過ごした家族との記憶と温もりは絶対に忘れることは無い。大好きな人達と笑い合った一時は心に残るものなのさ」

美しい女性のような出で立ちでアイズに微笑みかけた。次は片手を持ち上げ、人差し指を立て、何かを紡ぐように口を動かした。

『それが唱えられた瞬間、アイズの体を優しい風が包み込んだ。』

——あなたは独りじゃない。

体を包む風がアイズにそう囁いたような気がし、風に乗じて感じる温もりに抱きしめられたような気がした。金眼から涙が零れ落ち、頬を濡らす雫となって地面を濡らす。あつという間に人の形を成していた風が静かにアイズの前から消えてしまった。それでも少女は風に守られ続けるだろう。母の温もりを感じさせる風に……。彼女の強い憧憬が果たされるまで。

「おつ、帰ってきおつた!」

本拠ホームの正門のところで帰りを待っていたロキが一声。闇派閥イルヴァイスの襲撃も抑え、一段落させたフィン達もダンジョンから戻ってきた二人の姿に視界が入る。朗らかに四人は出迎えた。

「お帰り、決着はどうだったと聞いてもいいかな」

「邪魔が入った。ダンジョンにいた闇派閥イルヴァイスの神がモンスターを誘き寄せてそれぞれごろじゃなかつたし、次の機会にする」

「あー、やっぱそうなんやなあ……。つたく、面倒なことをしてくれるわ。で、そのモンスターは当然倒して来たんやろうな?」

無言で首肯する一誠は戦利品と黒い竜のドロップアイテムを見せつけ、それを満足げに頷くロキに一言。

「教えていたかどうかわからんけど、アイズに『魔法』を教えたからな」
「待て、何故お前がそれを知っていた」

思わず反応したりヴェリアは自ら『魔法』を発現していたことを肯定した。が、大して気にしないで不敵の笑みを浮かべる一誠。

「異世界の力を舐めるなよ副団長？俺が視界に入る全てのものの情報が手に入ることも可能なんだ。【ステイタス】もな」

「それ、チート過ぎるでイッサー！」

「異世界、恐るべしっ!？」と戦慄する主神に笑みを浮かべ続ける一誠だった。フィンはアイズに話しかける。

「アイズ、現れたモンスターと一緒に戦ったかもしれない。だからそれを前提に訊くけど、彼のことどう思った？君にとってただのモンスターだったかな」

「……」

漆黒の翼ワイヴァーンと戦った時のことを脳裏に過らせ、自分がこれからも狩り続けるダンジョンのモンスターと比較するまでもないと首を横に振った。

「……イッサーは、モンスター。でも……」
「ん？」

脚衣を引っ張って、跪いてほしいと視線で訴えられその通りにすると少女と目線が合う。「あ、これって」とデジャブを覚え、予感するロキ達の前で——少女の踵が上がった。

「……」

予期しなかった行動に一人除いて固まった。少女は人の姿をしたモンスターに一生に一度しか捧げれない初めてを捧げたのだった。わなわなと体を打ち震わせるロキに石のように硬直するリヴェリア、苦笑いが癖になったかもしれないフィン、「若いのう」と感想を漏らすガレス。ホームから出てきたアリサがその瞬間を見て凄まじい衝撃を受けた。

物語の絵本を読み聞かせてもらった際に知った知識を活用し、幼く小振りな唇を少年の唇に押し付けたアイズは左眼を固める一誠から離れ、ほんのりと顔を赤らめながら言った。

「貴方のことが……好き……」

自分の気持ちを整理した末に淡い恋心を抱いたのであった。

『やはり別の世界に行っても主は主であったな』

『初めてですね。幼い子供に好意を抱かせるなんて』

『当の主はそうさせた覚えは無いと言っただろうなこの後』
ドラゴン達も様々な感想を抱いて観ていた。

冒険譚 6

「アイズたんL V. 2キタアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ
!!!」

冒険者になってから実に一年という期間で一人の少女が異例の「リンクアップ」を果たした、場も弁えず声が吹く風で揺れ、笑みを浮かべる道化の旗が突き立つ最大派閥の本拠ルームに轟いた朝――。

「あやつは強いモンスターであろう。そこまで落ち込む方がおかしいだろうに」

「いやガレス、また『アビリティ』に変動がなかったことに絶望しているんだよ彼は」

「未だに0の数字が続く団員を見るのは最初で最後であろうな」

片や0という数字の穴が埋まらないシヨックに部屋の隅で膝を抱えて落ち込む少年の背中は影を落としていた。銀髪幼女に慰められる光景にフィン達はそっとしておこうと配慮をする。場所は執務室。先に「ステイタス」更新を終えてこの部屋に集うことにしている。何せ一年経った今日――一誠は「ロキ・ファミリア」から脱退する日でもある。

同時にこの異世界に突如来てしまっただけから一年が過ぎた意味も兼ねて、改コンバージョン宗が可能な時となりロキと交わした契約を果たすつもりが、眉間に皺を寄せることが起きた。リヴェリア達の目の前でロキが乞うたからだ。

「やつぱ、もう一年ぐらいいてほしいんや。ええやろ？契約で一年間だけの話やけど、再契約とか改めて更新とかできるはずやで」

「できるが、する気はないぞ」

「せやったらうちもせん！もう一年うちの【ファミリア】にいてもらいたかったらもらいたくないんや――」

駄々をこねるロキにいらっとする。こいつどうしてくれようかと睨んで思慮していると、あることをフィンから言われた。

「イツセー、こうなったロキは僕たちも手に負えない。何らかの条件付きでもいいからどうかもう一年だけいてくれないか」

「条件付き?・・・出来ることならお前らでも何でもか」

「酷い内容ではないならね」

「そこまで考えるつもりはないが、意趣返しができるならば・・・とロキに対する条件付きを考えた。

「・・・フィンの提案ならもう一年いてやってもいい」

「ほんまかつ!」

「条件付きだぞ。俺の条件を守らなかったら即座に改宗コンバージョンの手続きをしてもらうからな」

「よしっ!と握りこぶしを作るロキにフィン達も興味津々で条件付きとは何だろうかと耳を傾けた。

「で、条件はなんや?」

「うん、半年間は絶対禁酒」

「なんやそれぐらい——は?」

「いいな?これが嫌なら直ぐにでも改宗コンバージョンだからな」

清々しい笑みで条件を告げた一誠にこの世の終わりを見た顔で表情が凍りつき、フィンとガレスにリヴェリアは「同情できないな」と揃って首を横に振った。

「・・・他の条件に変えられへん?」

「アイズとアリサと一緒に一年後改宗コンバージョンを許すなら」

「ほ、他は?・・・!」

「一年間の毎日『自分は無乳神ロキやあー!』とオラリオ中で叫びまくる」

「それは絶対にできひん!?それ以外はないんか!」

「にこりと綺麗な笑みで「ない」とロキにとって悪魔のごとき絶望的な返答されてorzな状態になった。

結局、ロキは一誠のある条件を呑みもう一年「ロキ・ファミリア」に所属してもらうことにした。

「・・・ところでロキ、アイズのスキル増えてるな?」

「ちよっ、アイズさんの【ステイタス】を視るのはあかんでイツセー!」

そして一誠は階位昇華ランクアップを果たした少女の「ステイタス」を見て愉快そうに笑みを浮かべた。

【異龍騎士】

・特定のモンスターと共闘することで全アビリティが超高強化・超高捕正。

・種族問わず格上の相手ほど得る【経験値エクセリア】と能力値アビリティが激増する。

「特定のモンスター、言わずもがな」

「イツセー、お主の事じゃな」

「アイズがイツセーに憧憬を抱いているからかな」

「憧憬ね。はは、モンスターに転生した俺にとって複雑な気分だ。この世界にいるかぎりそれは素直に喜べんよ」

【ロキ・ファミリア】に入って二年目に突入した。日が経つにつれロキの顔から生気が失って一週間過ぎた頃には食事をとって部屋に籠るループを繰り返すのが日常的になってきた。半年も待たず一か月後だったらロキはどうなってしまうのだろうか、三人の幹部はちよつと不憫に思うようになる。

そんな主神の状態など気もかけないでいる者達はダンジョンの中で大暴れを繰り返していた。わざとモンスターを誘引させるトラップを使って多勢に無勢な戦いを臨ませ、時には魔法を使わせないでアイズとアリサより格上の中層域のモンスターを嚇けて戦わせ、階層主とも巡り合わせた。

成長促進の効果のスキルを得て日に日にアイズは昨日までの自分を置いてけぼりにする勢い。今では『能力値アビリティ』の項目すべてがE以上に成長している。未だ「ランクアップ」の目途も経ってないアリサはほぼ同じ時期で冒険者になった事実を考慮して、急激に成長して強くなくていくアイズに焦りと嫉妬を覚え負けじと一誠と二人の時に猛特訓を励んだ。

これが唯一アイズに勝る環境と優越感。共に一誠と常に行動する

優遇を得てレベルでは負けるがアビリティを極めんとする今のアリスの能力値は――。

アリス・イリーニチア・アミエーラ

L v . 1

力 : A 8 1 1

耐久 : A 8 3 1

器用 : A 8 0 1

敏捷 : A 8 2 0

魔力 : 1 0

着実に駆け出しの冒険者のアビリティを大幅に超えた能力を、これまでの日々を糧に強くなっているのが一目瞭然だった。だからお互い自分がないものを、自分ができないことを羨望して、それをフルに活用して二人は一人の少年と在ろうとする。

「イツセー、お腹空いた」

「そんな時間か。じゃ、アイズもいるし今日はホームの食堂で何か作ってやろう」

「うん」

複数の塔に囲まれる中庭での特訓を切り上げ、激しい運動をしていたぐらい汗を掻いている二人の幼女たちにタオルを手渡し、塔の中へ入りそのまま大食堂に赴いた。

「あ、またいた」

何時の間にか見掛けるようになった真紅の長髪の少年。自分より年上でお兄さんのような感じだが、一誠を見かけたのは片手で数えられるぐらいの猫キャットヒール人の少女は何となく思った。厨房にいる料理人達コックと交ざって、席に座っているたったの一年で「ランクアップ」を成し遂げたわずか八歳の少女と銀髪の少女に見られながら何か作っているが少女が立っている場所からでは見えない。獣人の少女は少し気になったが自分の分の料理を取りに足を運んだ。

「お、あやつがおるし何か作っておるぞフィン」

「イツセーの作る料理は興味ある。僕たちもご相伴させて頂くかな」

「イツセーが文句を言いそうだがな」

「ロキ・ファミリア」の団長と副団長、それにドワーフの老兵。古参の三人が珍しく揃って食堂に顔を出し、真つ直ぐアイズとアリサのもとへと足を運んでから真紅の長髪の少年にも近づき、一言二言告げると食器を乗せたお盆を持たせられた。二人はそれを席に座っている彼女達のもとへ運び配ってから座り、食器に被せられた蓋を取り外せば飴色の塊が目飛び込んできた。

「なんじゃこれは？」

「・・・見た限り、ネギとこの飴色の塊の下は肉と米があるのはわかる。肉料理か」

「見た目もこの香りも、とても新鮮だ。温かい内に食べよう」

と、フィンの促しで既に一心不乱で食べているアイズとアリサに遅れて食べ始める。一体この料理は一体どんな味なのだろうかとスプーンを手に取り、食べやすいよう一口サイズに切られてる肉ごと飴色にまで炒められた玉ねぎとご飯を掬い取った。そのまま口の中に入れた瞬間。肉の柔らかさと特製のタレが三人の口の中で実感する。「・・・力を入れずともあつさり噛み切れる肉の柔らかさ、味わったことがないソースが食欲を駆らせて、ご飯から香り立つ仄かな酸味でもっと肉が食べられるようになってるのね」

「加えて水と片栗粉でとろみがあるタレも味わいがもっとよくなっていくだろ」

この料理を作った本人もガレスの隣に座ってそう言ってきた。

「ああ、このとろとろがそうなんだね。食欲がそそってまだまだ食べられそうだ。この料理の名前は？」

「分りやすくステーキ丼って言わせてもらうよ。多分、誰も知らなければ俺しか作れないもんだ。アイズ、アリサどうだ？」

「美味い！」

大絶賛。幼女が声を張り上げるほどで、近くにいた団員達は思わずなんだと振り返る。

「うむ、確かに美味しいのお。特にこの米がさっぱりしておる」

「仄かな酸味な米・・・イツセー、なんだこれは？」

「極東で作られている梅という酸っぱい実の果肉を練り込んである。因みにこれが梅だ」

どこからともなく赤くてしわくちゃな小さな実を皿に乗せた状態でフィン達に見せつけた。直ぐに好奇心や興味津々で梅干しを見つめて「食べられるのか」と質問を投げると一誠は首肯した。

「食べられる。でも、人によって好き嫌いがあるからな。ま、食べて見れば？それと中には硬い種があるけど前以て取り除いてあるから気にせず食べていいぞ」

「そうか、では頂いてみる」

リヴェリアが最初に梅干しを食べる挑戦を試みた。スプーンで掬い取り口の中に入れて何度か咀嚼した時、奇麗な柳眉がしわを寄せた。

「・・・・こんなにはつきりとするのか、この酸っぱさは」

「ご飯と一緒に食べるのが一番美味しい方法なんだ。それだけ食べる人もいるから問題はない」

「・・・・そうなのか」

ステーキ丼の米も食べてみるが、梅が練り込んである米なので仄かな酸味がさらに強まってしまい一気に水で胃の中に送り込むことで一息ついた。

「!!!」

好奇心に撥られ梅干しを食べてしまったアイズとアリサが顔を酷く顰めて悶えていた。まだ食べていないフィンとガレスは彼女達の様子を見て逡巡するも、酸味を体験した三人から「食べる、食べないのはズルい」という眼差しを受けてそつと梅干を口にした。

「ぬう・・・・っ」

「ははは、確かに酸っぱいねこれ・・・」

「んー、口に合わないか」

最後の一つを掴まんでひよいと口の中に入れて、酸っぱそうな表情もせず平気で食べた一誠に感嘆の念を抱くフィン達だった。

「異世界の料理は他にも作れるのかいイツセー」

「材料があれば何とかな。それが？」

「うん、キミも『遠征』に来て異世界の食事を作ってくれたら嬉しいな
と思ってるね。イツセーも【ロキ・ファミリア】の者だし僕達とダンジ
ョ攻略の手助けをしても問題はないからね」

にこりと微笑みを浮かべたフィン。その笑みの裏に隠れてる深意
は何か、一誠に伝わったか押し黙り……観念した風に吐いた。

「わかった、【ロキ・ファミリア】の眷族として参加する」

「うん、ありがとう。それじゃ今回の遠征の料理番はすべてキミに任
せるよ。僕達によい食事を期待してるから」

期待にプレッシャーを混ぜて遠征の料理番を任命された一誠は疲
労感を醸し出す溜め息を吐いた。

「普段どんな料理を食っているのか教えてもらわないとな」

「それで参考になるのか？」

「保存が利かないダンジョンでは食材が限られてくるから。いつそ保
存が出来る道具でも創ろうかな。そうすれば持つてこられる種類が
増えるだろうし」

「創れるのか？」

「んー、色々とこの【ファミリア】の食事状勢を知ってからでないとい
来ないかな」

そんなこんなで一誠は初めて【ロキ・ファミリア】の遠征に同行す
ることになって、遠征当日には物資の運搬役員と交じって
『迷宮の楽園』と称されている18階層へ続く17階層との連絡道の道
を阻む巨人のモンスター、モンスター・レックス孤王の怪物のゴライアスと戦い突破した。

「親方、どこまで行くんだ？」

「深層の手前まで進む予定じゃ。【ロキ・ファミリア】の到達階層数は
下層域から越えておらんからの」

「皆のレベルを【ランクアップ】をしてからか？」

「そうじゃ、儂とフィンにリヴェリア以外は第3級冒険者しかおらん
からの」

【ロキ・ファミリア】の情勢を知り、納得して荷車を押し続ける一誠に

ガレスが蓄えた髭を擦りながら言い続けた。

「儂らは後方で起きる異常事態に臨機応変で動かねばならぬ。お主の働きを期待しておるぞ」

「しがない駆け出しの冒険者として扱ってくれるとありがたいなあー」

横から無理じゃ、と言われ自分が動かないとならない時が来ないことを心中で祈る。

が、そう問屋は卸せなかった。天井や壁面、地面が木皮で形作られた階層域。通路中に繁茂する苔が青や緑に発光し、見るものに秘境を彷彿させる光景を生み出している。通路の奥から轟いてくるモンスター^の雄叫びに身を揺らすのは様々な形をした葉や、銀の雫を垂らす神秘的な花々だった。

「あれ、そういえば27階層の階層主って出てこない？大丈夫か？」
「ギリギリじゃの。もしも出現したら即座に儂等が出張らなきゃならんが」

「そう、ならいいんだけど……ん？」

不意に違和感を覚えて声を漏らす。ガレスがそれに聞き逃さず、どうしたと訊ねた。

「凄く速さで接近してくる……モンスターだなこれ」

「分るのか？儂にはわからんが……」

「因みに大量だ」

「大量発生かつ」

ガレスが背負っていた斧を手に取り構えた直後、最後尾に位置にいる二人と舞台に襲い掛かるのは19階層から出現する火の海とかする希少種^{レアモンスター}の一種、『ファイアーバード』で、名の通り火炎攻撃を行う鳥型のモンスターだ。19階層以下の層域『大樹の迷宮』を度々火の海にして帰る厄介なモンスターで、現在進行形で火炎攻撃をしながら最後尾の部隊のガレス達に襲い掛かってきたのだ。

「駆けるぞおっー」

不運にも十字路のど真ん中に立っていて四方から炎^{ファイアーバード}鳥が迫ってきている。なのでガレスは皆に急がせて前へ方一点突破を計らうが、

残りの三方向からくるモンスターの対処は荷台を引く一誠に。

「イツセー、荷台は儂が持つからあの鳥どもを倒してこい！このままでは儂等が美味しく焼かれてしまうわい！」

「燃やしてくれるなよ！」

先行するガレス達を追いかける全長二Mを超す紅の大鳥が嘴の奥で燃え盛る炎で、真紅の龍を彷彿させる全身型鎧を着こんだ者にヘルハウンド黒犬を優に超える高出力の火炎放射を放って——炎ごと己を斬られた。眼前で灰と化して消え去った同胞に他の炎ファイアーバード鳥が嘴の奥から火炎の濁流を吐いて燃やし尽くさんとした。

「本物の炎の威力を味わえ」

「——ッ!?!」

一誠の掌からも放たれる通路いっぱい放たれる業火炎によって炎負けした炎ファイアーバード鳥は火炎に飲み込まれ灰も魔石も残さず焼失した。火炎の濁流が消えてなくなり、残り火が天井や壁面、地面に残って燻ってる中、まだまだ大量に飛んでくる紅の炎ファイアーバード鳥に殿の務めを全うする一誠は光刃を具現化して一閃する。

最後尾の部隊も事前に決めていた休憩レストする場所へ辿り着き、二人の幼女に出迎えられた。誰かを探す仕草をするがすぐいないことを知り、老兵のドワーフに尋ねた。

「……イツセーは？」

「異常事態イレギュラーに遭ってな、大量発生したモンスターを倒してもらってる」

詳細を聞いたところで待ち人が現れた。何事もなかったように真紅の鎧には傷跡ひとつもない姿で集合場所に合流した者に「大丈夫？」と小さな少女達は心配の声をかけた。

「大丈夫だ。一緒にいなかったから心配したか？」
「ん」

籠手で傷めないよう軽く二人の頭にポンと触れて荷台の状態を確認しに行く。当然のようにアイズとアリサも追従して休憩レストが終わるまで傍にいた。

巨蒼の滝の絶景を背後にフィンが25階層から27階層まで狩り場と定め、フィン達を除く第3級冒険者達は階層を降りていき、待機するメンバーは荷物番を任される。それ以外は同行する意志がある者を連れていかれる。一誠は待機組として皆の帰りを待つ気持ちで「いつてらっしやーい」と上級冒険者達の見送りを済ませ、踵を返して——「お前も来るんじや」と行く先の逆方向へ一誠の襟を掴んで引きずるガレスに連行される。

「料理番を任されてるのに何で俺まで……」

「夜になる前まで戻る。それにお主にはアイズの監視をしてもらうためじゃ」

「今のアイズなら親方達の言うことに従うだろ」

「そうじやろうが、あの跳ねっ返り娘は儂等よりお前の方が言うことを聞くじやろ」

金と銀の幼女が一誠を待っていたようでもまだ移動をしておらず、連れてこられた姿を見て近寄ってきた。一緒に行こ？という純粹無垢な眼差しを向けられて断るような卑屈の精神が否の一誠は鎧の中で小さく溜息を吐き、モンスター狩りに参加することに決めた。

「親方も来るか？」

「他の若いもんの見回りをしながら狩る予定じやわい」

「そっか、じゃあこっちは好きにさせてもらうから」

自然な動作でアイズとアリサの胴に腕を回し、抱え上げると何の躊躇もなく数百Mの崖から飛び降りて滝壺へ。突然の破天荒な行動にガレスは開いた口が塞がらず、あつという間に姿が見えなくなつた一誠に頭に手を当てて「アイズ達の将来が心配になってきおつた」と懸念の吐露を零したのであった。

しかし、しばらく時が経つた頃、『巨大過ぎる何か』が産まれ落ちるその前触れが生じた。

一誠達が出くわしたそれは『白』を纏っていた。

それは『二頭』の首を持っていた。

まるで『幻竜』という言葉を彷彿させる美しい巨軀は、しかしその
実、圧倒的な『暴力』と『破壊』の化身であった。

「イツセー、あれ……っ」

「……っ」

まだ格下の自分達からすれば最上級のバケモノの風格に恐怖で戦
慄し、アイズとアリサは硬直する。対して鎧の中で涼し気に彼の白双
頭竜の名を告げる一誠。

「27階層、『モンスターレックス迷宮の孤王』——『アンフィス・バエナ』」

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオツツ!!』

特大の咆哮が27階層、いや三層分に及ぶ『水の都』全体を轟然と
震わせた。『アンフィス・バエナ』の雄叫びに、アイズとアリサは髪を
なびかせ仰げ反る。そうさせる彼の竜はるほどの威容は二〇Mを越
える。横幅は大型級オウクの何十倍もあり、まさに階層主の名に相応しい。
総身は白い。白亜の鱗に包まれた体は大きさも相まって一種の荘嚴
さを感じさせる。だが、頭部から放たれるのは紛れもないモンスター
の眼光だ。理性など手放し、本能のまま破壊をもたらす凶悪な怪物の
それ。

「双頭の竜……」

特筆べきは、それぞれ独立しているように動く双つの竜頭である。
胴体の付け根から二股に分かれて伸びる長い首。その先端に有して
いるのは紛うごとなき竜の双眸。もはや一枚一枚が硬殻板プレイトといつて
差し支えない巨大な竜鱗に覆われており、左側の頭部には蒼い双眼
を、右側の頭部には赤の双眼を宿していた。

「——せつかく現れてくれたんだ。やるぞ、二人とも
「っ!?!」」

「俺はともかく、二人と一緒にあの階層主を倒したら「ランクアップ」
できると思う。それだけレベルの差が違うからな」

双頭の白竜に睥睨されている自分達を死に追いやろうとする一誠

吹き上がった炎の輪が、花の大輪のごとく幾重にも咲き乱れた。一誠の足元に突き刺した剣の刃は地面を伝い、炎の導線がアンフィス・バエナの足元に辿り着いた瞬間、爆炎の華を咲かせたのだ。巨体故、足元からの攻撃など想像しなかった白の双頭竜は燃え立つ紅蓮の火柱の奥に霞んで燃焼の哭声を散らせた。一分も満たぬ攻防に呆然だったアイズとアリサは首を動かして目と顔を一誠へ向けた。

「……………倒したの?」

「手加減はした」

「手加減……………?」

「まだ倒さず少し弱らせた。こっからは二人も一緒に倒すぞ」

火柱が程なくして消失し姿を現した双頭の竜。致命傷といったダメージは全身の竜鱗が炭化したような黒く焦げた程度だ。動けばロボロと鱗が朽ちた感じに零れ落ち、双頭の竜眼は瞋恚の炎を孕ませて三人を睨みつけていた。

「アイズ、黒い竜と戦った時の方法で倒すぞ。あの竜も炎を吐く。アイズの風魔法なら防ぎながら攻撃に転ずれる」

「んっ」

「アリサは赤い眼の竜の首と一緒に狙おう。あつちは魔法の威力を拡散、弱くする攻撃をするからアイズの魔法が通用しなくなるからな」

「はい!」

さあ——楽しい楽しい竜狩りの始まりだ。二人に倍加の譲渡、アリサに紅蓮の剣を渡し共に地を蹴って駆けた。

フィンが27階層に辿り着いた時は既に蒼い火炎を吐く姿勢のアンフィス・バエナの口腔へ三人が飛び掛かり、アイズとアリサに一誠が炎と風の力を解き放ち、叩き込まれた巨大な炎風の竜巻が上顎ごと口腔を粉碎し、出口へ放出されるはずだった火炎の濁流が行き場を失い大爆発を引き起こした瞬間だった。『魔石』ごと巨躯の身体が爆発し、次には暴れ狂うように体外へ飛び出る蒼炎の花が咲き乱れた。巻き起こる莫大な灰の噴火と蒼炎の爆発だ。凄まじい爆音を轟かせながら大空洞が一瞬、蒼熱の光に埋め尽くされる。

「まったく、やってくれたよ……」

爆炎から無事な姿を晒す一誠達は竜胆と竜鱗を手に取り喜びを噛みしめる。まだ幼い彼女達を過酷で危険極まりないことをさせた説教をしなくてはならないのと、たった三人だけで階層主を倒し退けたことに驚嘆の念を抱いて近づき声をかけようとした。別の通路から誰かが現れ、リヴェリアかガレスかと振り向いたその碧眼は丸くなつた。

「きみは……」

『遠征』中の主力の団員達がダンジョンに行っている間にロキは三カ月に一度に開かれる神だけの会合、デナトウス神会に参加して顔を出した。会合が始まって程なくして【ランクアップ】した冒険者達の二つ名の命名式が始まり――。

「うげえ!? 幼女が一年で【ランクアップ】ってなにソレー!」

「普通、早くても二年前後ぐらいなのにな」

「ありえねえー、いくらなんでもなあー」

「色々とトばしてるなーこの幼女ちゃんは」

半分疑い、半分驚きの反応を示す神々は「アイズたんなんてまだ可愛いもんや」と内心零すロキの心中を知る由もない。たった一年で【ランクアップ】を果たすよりも異世界から来た異邦人＋モンスターに転生した元人間の存在を知られれば、目の色を変えて全力で快樂主義の神々が駆け付けてくるかもしれないのだ。幸い、彼の男を知っているのは己の【ファミリア】の中で幹部と二人の幼女のみだ。だが――。ちらりと同じ卓に座っている銀髪銀瞳の女神へ流し目で向ければ、ロキに送っていたのか彼女の目線とぶつかり美の女神は美しい笑みを浮かべた。

厄介な女神に目を付けられたのは痛いロキはこのまま隠し通せれるとは思っていないが、せめて次の改コンバージョン宗コンバージョン先は別の【ファミリア】にしてもらうことを確固たる意志で決めた。

「ロキ、私のイツセーは元気かしら?」

「誰のイツセーや。うちの可愛い子供を自分のもんにすんな」

「今はそうだけれど未来はどうなっているのか私達でもわからないわ」

「仮にうちから離れるんだとしても自分とここには行かせへんからな」
「ふふ、それこそ今後どうなるか分からない話でしょ。あの子は全力で自分を求めると言ってくれたのだから——ちよつと悪戯を、ね」

意味深に織り交ぜる女神の言葉に糸目がかつと開きロキは「まさか」と隣に居座っている美女神に振り向いた。卓に肘を立てて組んだ指の上に顎を乗せて前を向いたままの姿勢の女神にドスの利いた声を発した。

『遠征』のあの子らに何をするつもりやおどれはッ」

「何もするつもりはないわ。ただ……私の子供達が『遠征中』偶然、階層を下っている途中であなたの子供達と出会っただけよ？」

27階層と繋がる連絡路から戦乙女の側^{プロフィール}面の徽章の旗を掲げる一団を率いる巖のような巨軀の獣人とフィンが接触した。この場に通りかかったのは『遠征』だからなのか？「ロキ・ファミリア」の『遠征』を知った上で？——否、フィンはそう決断をする。あの「ファミリア」が『遠征』の自分達と被せること自体があり得ない。逆も然りなのだ。そして、右手の親指が疼く。良からぬことが起きる前兆、その前触れを告げられ警戒の念を抱く。

猪人の獣人が近づいてきた。

「やあ、オツタル。偶然にしては絶好のタイミングで現れたね

「階層主の討伐の『遠征』の途中だ」

「それなら悪いけれど、彼等がもう倒してしまったよ。君達もどこかでその様子を見ていただろうけれどね」

「フレイヤ・ファミリア」の一団を率いる団長オツタルはフィンから視線を外し、真紅の龍を彷彿させる全身型鎧の者に、一誠に向かつて歩き始めながら背中に背負っている無骨な剛剣の柄を握った瞬間を見て、フィンは制しようとしたが牽制の一撃を振るう猫^{キャットビーター}人の槍に対応せざるを得なかった。その直後、他の団員達が一斉に動き出しこの場から逃がさないためか武器を構え円陣に囲い始め、周囲を把握して目

の前の青年の獣人に尋ねた。

「何のつもりなのかなこれは？」

「てめえらが狩るつもりだった俺達の獲物を横取りしたからだ。その報いを晴らしてもらおう」

「おかしな話だね。僕には別の目的があつて、偶然を装った理由を述べられた風にしか聞こえないよ。これは神フレイヤの、「ファミア」の総意だと受け取ってもいいんだね？」

「耳が遠くなつたか小人族が」

「生憎、僕はまだ歳を取つてないから正常な聴力だよ」

相手の戦意と敵意が孕んだ瞳の奥を伺い、油断も慢心もせずに真剣な面持ちで不敵に口元を緩ませるフィン。不意に背後から声がかかった。

「団長！。この状況、どうすればいいんだ？」

何故かオラリオ最強の冒険者に立ち塞がれている状況に一誠は団長に指示を仰いだ。派閥同士の抗争になり兼ねない展開に逃げるべきか戦うべきなのか、フィンに問うた答えが――。

「彼から逃げられるかい？」

「余裕で逃げられる」

「じゃあ、無用な争いは避けてリヴェリア達と合流してくれ」

「わか――つてあぶなっ!？」

オツタルに攻撃をされたようで短い悲鳴を上げだした。

風を切る音が絶え間なく鳴り響く。戦う気がない一誠は振るわれる全てが一撃必殺の斬撃を交わし続ける。相手はオラリオ最強の第一級、それも迷宮都市で二人しか存在しないLv.7の冒険者の攻撃に対してだ。駆け出しの最弱の冒険者がそんな動作をすることなど不可能なことをして見せている故にオツタルの心中は疑惑でいっぱいだ。

「団長から逃げろつて言われてるから戦わないぞ！」

「戦わなければその娘の安全は保障できないぞ」

「あーそうかい……そつちがそうならこつちも考えがある」

完全にして完璧にかわしていた男がアイス達を害する風に言われ、淡々と言つて目が据わった。横薙ぎの一撃を振るわれる前に跳躍して真上に高く魔法の翼を生やして飛び、両手を頭上に掲げ太陽を彷彿させる巨大な業火球、アンフィス・バエナに放ったよりも二回り大きいそれを具現化した。赤く染まり大気が焼けそうなほど熱く——。「团长、全力でアイス達と滝壺のところを！」

「とんでもないことを！」

第一級冒険者だろうと掠りでもただではすまない魔法攻撃を放とうとする一誠に戦慄する間もなく、槍同士の戦いを繰り広げていた猫キャットピール人から背を向け全力疾走で二人の少女へ駆ける。それを逃すことを許さんと猫キャットピール人の追撃の姿勢が業火球から飛び出した火炎の放射に阻まれてしまう。それは瞬く間に火の海と化になり、四人を囲んでいた【フレイヤ・ファミリア】の団員達にまで被害が及ぶ。

「アイス、アリサ、飛んで团长を掴め！」

「はい！」

小さな背中から魔法の翼を生やし、滝壺へ身を投げようとするフィンの両手を掴み、火の海から脱して上層へと飛びだった同時にオツタルへ業火球を投げつけた。

「！」

業火球が爆発する瞬間を、オツタルの状態を確認する暇もなく一誠も後を追いかける直前を狙ったか、火の海から槍が飛び出してきた一誠の頭部を掠った。上層へ飛び直ぐに三人のところへ、下から飛んでくる男を待つていた三人と合流を果たした。

「イツセー、さっきのは魔法なんだろうけどオツタル達を殺しちゃいないね」

「殺したら面倒しかないだろ。——全員地上に送り返した」

「地上に？」

真下から聞こえ続けるはずの巨蒼グレート・フォールの滝の膨大な滝の水の音に負けない音。それが何時まで経っても聞こえてこず首を傾げる思いを心中で疑惑するフィン。仮に本当にダンジョンからいなくなった【フレイヤ・ファミリア】の一団に【ロキ・ファミリア】の自分達は今後ど

うするか団長フィンに問うた。

「シー、取り合えずリヴェリア達と合流だ。ダンジョンの中で派閥同士の些細な抗争を受けながらの『遠征』は難しいから」
「了解」

——武装状態の「フレイヤ・ファミリア」が中央広場に突如発生した真紅の魔法円マジックサークルから現れ、地上にいた人々や送り返された本人達は当惑した。一人バベルの塔からこちらを見下ろしているだろう主神を見上げたオツタルは、一団を率いて南方へと足を進めた。

「そうか。奴らの狙いはイツセーであるのか」

「神フレイヤの考えとオツタルが彼を気になっていたら十中八九、間違ひなく不思議でもないと思う」

「儂以外にリヴェリアのところにも第一級冒険者どもを残して行ったのもそういう理由であるなら納得できるの。しかしまさかこのような手段で来るとは予想外以前に考えもしなかったわい」

「それぐらいイツセーの挑発を受け、本気で狙っているんだろう。ね、イツセー」

「……なんかスママセンでした」

18階層に戻り野営を整えたところ、主力にして「ロキ・ファミリア」の頭目たちからお呼びがかかり、「フレイヤ・ファミリア」の思惑を予測し、ここまで事が起きると思いもしなかった彼は深々と土下座をした姿勢で頭を下げた。変なところで素直になる一誠に三人のデミ・ヒューマン巫人達は神妙な面持ちで見つめる。

「フレイヤ・ファミリア」の一団の介入もあつた『遠征』の一日目は間もなく幕を閉じる中、料理番の務めを全うする。

持参してきた木箱から到底収まり切れないはずの食材や調理道具、食器など取り出して目を見張るほどの速さで調理を始めた。『遠征』に参加している「ロキ・ファミリア」の団員数は三十人程。複数人で各個それぞれ準備をしなくてはならないのに一人だけこなすその手早さ。ナイフを使わず皮をむき一口サイズに切り、火を使わず大きな

寸胴鍋の中で炒め入れた水を沸騰させ……。

『(いやいや、どうなっている?)』

異様な調理の姿に偶々通りすがりの団員達から奇異の視線を集めることになる。その輪にフィン達が好奇心で加わって見たことがない茶色のシチューを覗き込んだ。

「料理、なのか。見た目が少々アレだ」

「多種多様の香辛料を混ぜ込んだから見た目よりも味は抜群に美味しいから」

「シー確かに食欲をそそらせる嗅いだことがない匂いだね」

「そうじゃの」

十数後に完成した大人数向けの料理を、カレーを「ロキ・ファミリア」の『遠征』組に振舞って舌にピリツと甘口の辛さが刺激して未知の味を堪能させた。お代わりもあると言えば寝ずの番の団員の分を残して団員達はお代わりを所望する声が挙がる。

「ごちそうさまー」

「凄く美味しかった、また作ってねー」

称賛の声と共に木製の食器を片付ける彼等彼女等から受け取り、水魔法で汚れを洗い落とし木箱に収納し終え組み立てたテントの中へ入る。待っていたのかちよこんと座って待っていたアリサがいて、中に入ってきた一誠と添い寝をして夜を過ごした。

「イツセー」

「どうした、アリサ」

「私強くなれる?」

巨大な竜と一緒に倒して強くなった実感がまだ湧かない少女の額に額をくっつけ、至近距離で真っ直ぐつぶらな瞳を覗き込みながら一誠は言った。

「誰よりも純粹に強くなりたい気持ち忘れず、誰よりも頑張れば必ず強くなれる。これは元の世界の人達やこの異世界の人達が持っている絶対になれる可能性だ。アリサ、お前も強くなれる可能性を秘めているよ」

「イツセーもそうだった?」

「そうだよ。今のアリサと同じぐらい小さかった子供の頃から強くなるうと頑張っていた。だからアリサも必ず強くなれる」

「それをわかってくるようになるのはもっと身体が大きくなった頃だ」と自身の体験談を含めて語る一誠を信じて、小さな手を動かし一緒に寝てくれる男の服を掴む。

「……強くなる」

「ん、頑張れアリサ。明日も早いからそろそろ寝ようか」

「ん……おやすみなさい」

目を閉じるアリサの頭を優しく撫でながら眠ったことを確認してから一誠も眠り始める。

翌日。朝日を浴びれないダンジョンの中で起床。野営地を見張る番を除いて冒険をする「ロキ・ファミリア」がいる地下迷宮の上、地上では人知れずある小さな出来事が発生していた。オラリオから少し離れた草原に十数人の男性と女性が意識を失っているかのように眠っており、そこへ一人の美しい女神が近寄った。

「おい、こんなところで寝ていると風邪をひくぞ」

それが双方の初めての出会いであることを一誠と出会い語られるのはまだ先であった。

そして今後もこの世界に異世界からくる者達と出会い、時には友好を、時には敵対して過ごす。神々はそれを見届ける。神々にとって親愛なる子供等が紡ぐ最高の見世物にして最高の娯楽。――

【眷族の物語】ファミリア・ミイスを。

短い間だが「ヘファイストス・ファミリア」に入った。
7年。

冒険譚Ⅰ

冒険者になってから二年目の一誠が「ロキ・ファミリア」を脱退する時期が来た。本人はようやくかという思いで改宗コンバージョンをしてもらった際に更新した「ステイタス」の報告を受けて――。

階層主を協力して撃破したことでアリサの「ランクアップ」と真逆、未だに0という数字の穴が埋まらないシヨックに部屋の隅で膝を抱えて落ち込む少年の背中が影を落としていた。金と銀髪少女に慰められる光景にフィン達はそっとしておこうと配慮をする。場所は去年の続きをするかのように執務室で今日――一誠は今度こそ「ロキ・ファミリア」を脱退する日でもある。

「さて、イツセー。自分は何時でも他の派閥に改宗コンバージョンできるようにしてある。せやからどこに行くかももう決まっとるん？」

「フレイヤ・ファミリア」以外の……んー最大派閥か商業系「ファミリア」だな」

「最大派閥ならうちはファイたんを推薦するで？」

「ファイたん？」「女神ヘファイストスのことだよ」と一誠の疑問にフィンが答える。妙なあだ名で呼ぶロキに感性に神としての威厳は本当にあるのかと不思議に思ったところ、アイズが眉根を寄せた。

「本当にいなくなるの？」

「異世界から来た俺からすれば色々な神々を直で見て聞きたいんだ。何、他の派閥に行っても会いに行くよ」

「……………」

納得できない、不満そうに見つめるアイズは行かないでと風に脚衣を掴む。それを好機とロキが誘惑する。

「ほれ、アイズたんが寂しいって言っとるのにそれでも行くんか
イツセー？まだここに残ってもええんやで？」

ニヤニヤと顔を笑ませながら少年の肩に腕を回すロキに一瞥して

見上げ続ける少女に提案した。

「アイズとアリサ、一緒に他の派閥に行くか？そうすれば俺と一緒にダンジョン行き放題だぞ」

「!?」

「ダメやアイズたん達！イッセーの誘惑に惑わされたらあかんでえっ!?」

途端に目を輝かす少女を公私混合、色んな意味で危ういと全力で止めにかかるロキを嘲笑う一誠。デミ・ヒューマン 亜人の幹部達が感心とある興味を抱いて語り合った。

「抜け目ないのう。逆に引き抜こうとは。実際、アイズ達がそうしたいと願ったらどうする気じゃフィンよ」

「イッセーなら問題ないと安心して、二人の気持ちを尊重するよ。リヴェリアは？」

「あの子等はまだ幼い。まだ色々と教えることがたくさんある。ダンジョンばかりにカマけるようであれば私は反対だ」

と、三人の意見を他所に一誠は大きな道具を軽くロキの前に出していた。巨大な円盤がくつついた土台の横に催促し出す。円盤にはコイネー共通語でオラリオに住む「ファミリア」の名前が均等に間隔を空けながら書かれてあった。

「んじやロキ。ダーツをしてくれ」

「自分、何気なく普通にコレどっからだしたんのかを突っ込んでもええ？」

「そんなどうでもいい事を気にしないで、これで次の派閥を決めてくれよ」

「これで決めるとか自分。めっちゃ軽いわー。もうちつと考えて決めるべきなのに。でも、おもしろいからやるで！」

次の「ファミリア」を決めるちよつとしたゲーム的な感覚に乗り気なロキは、激しく回されるルーレットを真剣な眼差しで小さなダーツの矢を豪快に、腕を後ろに引いて上半身を捻り、高らかに叫びながらビュンツ！と投げ放って円盤に当たると一瞬消えたように見えた。次第に遠心力が弱まり動きが止まる円盤を手で完全に止めて矢が刺

さってるだろう【ファミリア】の名前を確認する一誠とロキ達一同。そこに書かれている次の一誠の改コンバージョン宗先の【ファミリア】の名前は――。

「ああ……次はここか」

北西のメインストリート、通称『冒険者通り』。多くの冒険者がダンジョンに挑む際、必要な道具や武具アイテムを求め闊歩することが多い大通りの中。隣接する左右の店と比べて、ふた回りほども大きい武具店。炎を思わせる真っ赤な塗装は、商店が並ぶこの大通りでも一際人目を引くその店の中にいるであろう神物に――今、真紅の長髪の冒険者が入って行った。

「……まさか、本当に改コンバージョン宗を求めに来るなんて思わなかったわ」

右眼を覆う特徴的な漆黒の眼帯を着ける紅髪紅眼の女神――へファイストスが呆れた風に息を零す。彼女の左眼の視線は背中を晒す一誠の姿でいっぱいだった。しかし、改コンバージョン宗を終えるまで静かに待つ少年の背中には、ロキを当惑させた【ステイタス】とスキルが必然的にへファイストスの左眼に映し、綺麗な柳眉を釣り上げた。

「ねえ……私の眷族になってそうそう悪いのだけれど、貴方の【ステイタス】、どうなっているわけなのか教えてくれる?」

「や……絶対に言えない。少なくとも今はまだ」

「そう……じゃあ、ロキは知っているのかは?」

それなら大丈夫だと首肯する。知り合いが知っているならこの疑問は別段気にしなくてもいいようだ。いや、凄くおかしなことであるから気になるが。取り敢えず、彼女が今するべきことが増えたその前に――。

「あの時はありがとう。椿から聞いたわ。あなたが不思議な方法で私を見つけたってアレ、まだ残しているからね?」

「あ、そうなんだ? てか、綺麗にしないでなくて悪かった」

「大丈夫よ。絨毯で敷けばそれほど気にするほどのことでもないし、また攫われるようなことがあればもう一度利用しない手は無いわ」

【へファイストス・ファミリア】の徽章が施された絨毯を尻目で見ると、絨毯の下に隠された幾何学的な魔方陣。女神から見ても監禁されて

いた自分を探す不思議な力は感じられなかった。魔力を流して常に使用されていたものが光、一人で飛んで行ったと椿からの説明を聞き耳を疑った。

「ねえ、もう一度私を見つけた方法をしてくれない？」

「や、近くにいるんじゃないかと効果は出ないんだ。できれば外に行つてくれないと」

「そうなの？にしても貴方自身の魔法とは思えない方法ね。【ステイタス】にも魔法は発現してないし・・・不思議ね」

言い辛そうに押し黙る一誠の背中を見つめ、一先ずこの疑問はロキに問い詰めて解消するべきだと判断し、話題を徐に変える。

「さて、私の眷族になったからには鍛冶師を目指しつつダンジョンの探索をしてもらうけど・・・今の貴方の【ステイタス】の異常を見て『鍛冶』のスキルが発現できるか怪しいところだけど。それでも【ファミリア】から貴方専用の工房を——」

「んと、それ、もう自分で用意しちゃったから大丈夫なだけど・・・とても申し訳なさそうに待ったを掛けた少年に左眼をパチクリと瞬きする主神。自分で用意した？どういうこと？という風に。

「工房を借りることができないなら、自分で用意すればいいと考えてもう工房を作ったんだ。だから用意してもらわなくてもいいんだ」

「・・・嘘でしょ？全然【ステイタス】が・・・」

「【ステイタス】については触れないで！こっちはすつごく気にしているから！」

目も当てられないんだ！と言ったそばから落ち込む一誠にどう返していいか困惑するヘファイストス。本当にこの子はどういうことなんだとロキに対する追及の意欲は高まった瞬間、この執務室にもう一人、左眼に眼帯をつけた冒険者＋鍛冶師が入ってきた。

「主神様、待たせた——むっ、おお、お主ではないか！久方ぶりであるなあ！」

「あ、椿」

「ヘファイストス・ファミリア」の団長ことツバキ・コルブランドが嬉しそうな満面の笑みを浮かべ、近づく。共に女神を救いに行動をした

者同士が握手を交わし、「ファミリア」に改宗コンバージョンしたことを説明されてますます機嫌が好きそうに会話を弾ませる。そんな二人を見つつ、ヘファイストスは問うた。

「ねえ、工房を自分で用意したってことは、何か作ったのよね？ それ、まだ工房にある？」

「うんや、アイズ——【ロキ・ファミリア】の俺と同期の少女に渡したが」

「そう、分かったわ。じゃあ、行きましょう」

「え？」

どこに行くのだ？と椿の疑問に対して、一誠は嫌な予感を覚えた。昨日の今日もとい数分前の数分後に、また前の「ファミリア」に戻ることになるうとは——【ロキ・ファミリア】の正門まで同行することになるうとは思わなかった。正門に現れるロキは一誠を見て、頬を引き攣らせた。

「……イツセー、なんや……？ どうしてファイたんと一緒にいるんや？」

「俺が知りたい……アイズはいる？」

「——アイズたんも引き抜きに来たんかファイたんっ!？」

「違うわよ」

一蹴する。

『人形姫』が持っている武器を見なくなっただけよ

ロキの怪訝そうな眉根を寄せる仕草。糸目の視線は一誠に向けられ、「どういうことや？」と籠めて送られ「知らん」と肩を竦め返す一誠。ヘファイストスの要望は問題ないと判断し、中庭に招けば丁度そこにフィンと模擬戦をしていたアイズやアリサがいた。

「おや？ イツセーに珍しい客人が来たね」

「息災の様であるなフィン。相変わらずちっこい！ 抱きしめてもよいか？」

「ははは、遠慮させてもらおうよ。それで、そちらに改宗コンバージョンを済ませた筈のイツセーと直接ここまで来て何か用かな」

「うむ、イツセーが打ったという剣を確認をしに来た所存。それか」

左右の目に眼帯を付けている女神と眷族の視線が、少女の手の中にある輝白に薄らと金と蒼の波紋が走っている剣身の剣を視界に入れた。そして一目で見て信じられないものを見る目で、目を丸くする。「椿、貴方から見てどう評価する？」

「評価するも何も・・・イツセーは下級冒険者であろう。有り得んの一言に尽きる」

ロキ達四人は不思議そうに小首を傾げる。アイズの剣は鍛冶を司る女神とその眷族の目にとめる程の業物か？疑心に満ちた紅い右眼をロキに注ぐへファイストスはずつと言いたかった質問を述べた。

「・・・ねえ、ロキ。この子の有り得ない【ステイタス】は何なのか教えてくれないかしら」

ギクリと全身を硬直させ、嫌な汗腺が噴出した。やつぱり見てしまったか、とこうなることを悟っていた様子のロキはへファイストスからの追及する視線から逃れるように一誠へ反らし「絶対に教えるな」と訴える目で視線を返された。

「い、いくらファイたんでも教えられへん……。少なくとも、イツセーにとつても安易で公にできひん秘密を抱えておるんや。それを教えてくれたのって一年経ってからなんや……」

「・・・？どんな秘密を抱えているのよ？それを貴方が受け入れているなら問題ないのでしょ？」

なら、自分も聞いても問題ないと断言する鍛冶女神に下から声が掛った。

「いや、僕達も最初は信じられず受け入れ難い秘密だった神へファイストス」

「え？」

自分を見上げ視線を向けてくる碧眼の瞳。何故か表情は真剣味を帯びていて、ただの秘密ではないことを、ある種の警告を発した。

「イツセーの秘密はそんな単純なことじゃなかった。彼の秘密は僕とロキ、ガレスにリヴェリア、そしてこのアイズとアリサだけしか知らされてない。他の団員達には教えられない、根本的にも信じられない事実を彼は抱えている」

「……………」

「だからロキの言うとおりに。もしも彼が一年後言う気になれば教えてくれるだろう。そうでなくても知らない方が幸せだということになるね」

「ロキ・ファミア」の一部しか知らない一誠の秘密。ヘファイストスと椿はまだそれを知る機会ではないとフィンに言われ、揃って一誠へ目を向ける。

「のう、フィンよ。お主とイツセーはどんな関係か聞かせてもらってもよいか」

「ああ、できればこれからずっと共にダンジョンを攻略したかった——仲間だよ」

「ふむ……………」(ということはイツセーの強さを知っておるのか?)
第一級冒険者を倒す実力を持つ下級冒険者。フィンもとつくに知っているのだろうと踏んで、これから先、同じ鍛冶師スミスとなるやもしれない少年との交流を楽しみだと思ひ馳せ、口端を釣り上げた。

「つまり、言わせる気にさせればロキ達が知っているあの子の秘密を知れるわけね」

「その通りやけど……………」訊かない方がええで?バレたら「ファミリア」にも影響できるかもしれんし、イツセーを悲しませるともつとあかんし……………」

「あの子が抱えるのは貴方がそこまで言うほどヤバいこと?まさか闇派閥イルザイスじゃないわよね?」

「それだったらどれだけマシだったか。でも、ちやうんや。それ以上のことやホンマ。取り敢えず今は何も聞かずイツセーを信用して好きにさせてえーな」

ヘファイストスへの説得をするロキとそんな二柱の神の会話を隣にアイズと模擬戦を繰り返す一誠に、それを見守る椿とフィンの図が出来上がっていた。

「はあ……………」分かったわ。秘密を抱えている子供って私の眷族にもいるかもしれないし、『今』は訊かないことにするわよ。それでいいのねロキ」

「ん、そーいうことや」

「なら、もう帰るとするわ。あの子の工房を見たいし」

何気なく呟いた言葉は「工房？」とロキが聞き逃さなかった。

「私がお用意しようと思ったのだけれど、自分で用意した工房で貴方の娘の剣を作ったそうじゃない。知らなかった？」

「マジで？ てつきりファイたんかゴブニユんここに特注品したんかオーダーメイドと」

元主神すら把握していなかった剣の出所。確かめに行くべきだと決意し、実務を放り出したままであることを頭の片隅に追いやつて——一誠の手から伸びる光刃でアイズとアリサに斬り掛る様子に眼を凍結させた。

「なんでロキ達まで来るんだよ……」

「ええやん！ 自分、何時の間に工房なんて用意してたんのか。こちらに黙って」

「教える必要もなかったと思うけど？」

北西と西のメインストリートに挟まれた区画、人の気配を感じさせない無人の廃墟の間を通り渋々とヘファイストス達を案内している。ただの工房に興味を持ってしまったヘファイストスの目は本気で断れないと判断し招くことになった。それに乗じてロキも見たいと護衛にフィンとアイズ、アリサまで引き連れて今に至る。静寂な空気を漂わせ、忘れ去られた場所のように破損している女性の像や誰も通うことも住まうこともない建物や道は荒れ果て、崩れていたりしていた。こんな場所に工房があるのか？ とヘファイストス達はまだ使えそうな建物を見つけても素通りする彼の背中を追う中で、足を止めた。止まった一誠に釣られて止まる女神達は「どうしたの？」と声を掛ける。

「……なあ、どうしても見たいのかよ。工房だぞ。ヘファイストス達からすれば何の変わり映えのない仕事場だぞ？」

「貴方の主神として知る必要があると思っただよ。他の工房と変わらないならそれはそれで構わないわ」

意思は変わらない。鍛冶女神の気持ち分かるほどに一誠は辟易に似た思いを溜息として零し、諦めの色を顔に浮かべて虚空に言い放った。

「開け、幽玄の扉。我が名は——」

超短文呪文のような言葉を呟いた。その直後。重圧な物の音が空気を響かせ、何も無い虚空が両開きで別世界を覗かせながら光を漏らす。眩い光に視界は真っ白に染まり全身もその光で照らされながらも別世界は両開きで解放された。目を開ければ、最初に目に入ったのは緑豊かな森林だった。石造りの建物や石畳の大通り、地上に進出するモンスターを防ぐべく巨大な白亜の魔天楼『バベルの塔』など殆ど石で創設されたオラリオに緑豊かな場所は極めて珍しいといえよう。森の中で生活する種族、エルフからすれば懐かしい気持ちを抱かせるかもしれない。

「入るぞ」

一誠の催促に皆は我に返り、森林の中へ足を踏み入れた。完全に森の中を歩いている気分ではアイズは金

眼を周囲に見渡す。自然で溢れた森の中を真っ直ぐ勝手知ったるような足取りで歩く一誠についていくその間。至る所に光り輝く水晶が森の木々に寄り添うように生えていて微弱に発光しているのを視認しつつ「すごい」と感嘆の声を漏らし歩き続けていると全長一〇〇Mの湖の前に辿り着く。

「む、これは……」

フィンが水晶にいるとある木々を興味深げに見つめ、木の正体が分かるや否や碧眼は見開いた。

「……白樹の葉？ダンジョンでしか採取できない原料を木と一緒にここで育てているのか？」

「ん、気づいたか。ダンジョンの植物を人工的に育てれないか一時没頭したからこの辺りはダンジョンの植物で一杯なんだ。この水晶もそうだ」

「そういうことは……」

「地上でも商業系【ファミリア】が欲しがるアイテムの人工栽培を成し

遂げた」

周囲を見渡す。白大樹ホワイト・ツリーの他にもダンジョンで実る雲菓子ハニークラウド、肉果実ミルリートなど高級、希少性の高い果実から木の実まで地面に根を張らせていた。その木のすぐ傍には巨大な台の上に膨大な液体が詰まった硝子の瓶が置かれており、ダンジョン産の木々に与える栄養ある液体なのか他にも幾つも設置されている。

「イツセー、ずっと留守にしておったのはこれらを作っておったからか？」

「初めて見たものに対して興味と好奇心、研究と観察をしたい性分だな。気が付いたら農家や植物園みたいになってた」

あははーと後頭部に手を回し笑う一誠にロキ達は言葉を失った。半年以上の期間の間、ただダンジョンに籠っていたのではなく、異世界しか手に入らないダンジョン原産のアイテムや果実を見て好奇心が湧いたのだろう。当時を振り返って思い出し、微笑んだ。

「つてことはイツセー……ここ、こちら【ロキ・ファミリア】の所有物つてことだったん？」

「は？ここは俺個人の家だ。【ファミリア】の物とはまた別の話だ」

「イツセーの家つて、うちの【ファミリア】にも家があるやんかっ！」「俺は縛られることは嫌いなんだよ。やりたいこともあるし【ファミリア】にも貢献するつもりだ。それでいいだろ」

「良くない（わよ）」

不意にヘアアイストスまで声をそろえたのでロキは不思議そうな面持で反応する。だが、敢えて深く聞かないことにし「家はどこや？」と一番気になることを訊ねたところ。人差し指を点に衝き立てだす一誠。

「上」

「……上？」

何も知らない一行は思わず真上に視線を変えたら、バベルの塔の次に高いんじゃないかって思うぐらい天を穿つ白亜の巨塔のような崖の遙か天辺には同じ白亜の城が建っていた。

「たっかっ……！」

「あれがホーム……でも、どうやって行くんだい？」
「こつち」

そう言つて一誠がなんと、目の前の湖の上を歩いた。それに続いてアリサも。皆、目を見開く。湖の上に歩かれては度肝を抜かされたのだった。

「ん？ああ、忘れてた」

中々来ない彼女達に振り返る。その場で足をトントンと水面に叩くと淡い光が発して一筋の道が出来上がった。そこがこれから向かう場所の道標のように。安全を確認し光の道に一步足を前に出す。足場があることで心の中の戸惑いの靄が消え、先に進んで待っている一誠がいるところまで歩き、さらに驚かせられる。足場が急に降下し始めたのだ。周囲の水は完ぺきに何かで隔てられていて水中を泳ぐ魚達を観覧できる中で一行を乗せた足場はギルド本部の様な大神殿の前に降りた。

「……アリサ、イッセーと住んでいる場所ってここなの？」

「うん、そうだよ」

以前聞きそびれた話の答えがようやく分かつて羨望と嫉妬の眼差しをアリサに向けるアイズを他所に一誠達は神殿の中を侵入すると、魔法円マジックサークルが光り輝いて一行を出迎えた。その魔法円マジックサークルの中にまで足を踏み込んだ矢先、光に包まれ視界が真っ白に染まる。その時間はあつという間に終わりを告げる。声を掛けられ瞼を挙げた途端に飛び込む景色は——高い場所だからこそ一望できるオラリオの町並みと青い空だった。今まで地上でしか見たことのある街並みは、一変して見たことのない街並みと化した。胴体程の高さの円形の胸壁に囲まれ、城に続く通路は一本道。その途中で巨大な黄金の鐘楼があるが、皆の意識はオラリオに向いている。

「おお……」

「凄い、オラリオが一望できる……」

驚嘆と感嘆、見渡せる迷宮都市を眺めている皆を置いて先に行く家主。一行が歩く先には白亜の城があり、一誠の手で鈍重な扉が開かれロキ達は中に招かれる。鍛冶の工房へ真っ直ぐ寄り道もせず向かえ

ばへフアイストスの目的の工房の部屋へと辿り着く。

「ここが貴方の工房」

変わらないのであれば驚くこともない。そう思ったへフアイストスは椿と工房の中へと入った途端に眼を丸くするのだった。中は鍛冶の工房とは思えない程の広さだが、それは別段と可笑しくはない。中には更に扉がない部屋が幾つもあり、覗き込むと鉱石や金属、爪や牙、鱗など大量にモンスターの名前や種類ごとに分けられ収納されていた。

「まつてまつて……どうしてこんなに純度の高い金属が大量にあるのよ」

「むむ、確かにこの希少金属レアメタルの純度は高いのお。むむっ！これは手前でも見たことのない素材！」

鍛冶師や女神を驚嘆させる代物が目の前にあった。武器の素材となる物を手にしてマジマジと観察・鑑定している間、ロキとフィンはやっぱり惜しいと感じていた。鍛冶ができる冒険者ほどの「ファミリア」にいても邪魔にならない。武器の手入れや整備、新たな装備を作る貴重な存在だ。わざわざ鍛冶師スミスに頼まなくとも「ファミリア」に一人でもいれば金銭的にかなり助かるのだ。そう考えているとへフアイストスと椿は部屋の中から出てくる。

「ねえ貴方。まさかとは思うけど『深層』まで行つてないわよね」

「ん？深い階層の方が純度の高い金属は掘れるって訊くし、普通は純度の高い方が良いだろ」

「……どこまで行つてるわけ」

単独で『深層』に行つていると言外する一誠を問い詰める視線で見つめる紅髪紅眼の女神。「えっと」と今どこまで潜っているのか、思い出す風に零す。

「確か、階層の岩盤を貫くドラゴンがいる階層まではとりあえず進んだな」

「——っ」

碧眼の瞳を見開くフィン。一誠が挙げた特徴の階層は、ガレスとリヴェリアとでならともかく未だに団体で進んだことのない「ファミリ

ア」の到達階層数をあつさり越えていたのだ。ロキとヘファイストスは熟練の冒険者の小人族バルウムにどの階層だと目で問うた。

「58階層……だよ。【ゼウス・ファミリア】達が体験と経験した上で名付けた『竜の壺』まで行ったんだねイツセー」

「ギルドの受け付けから地図マップをくれたからなー。最大派閥の名声を借りて調べたんだ。そんで実際行ってみたら驚かされた。ま、あつさり攻略したけどな」

「おまつ、うちらが知らんところでそんなことしておったんかい！」

単独でも問題なく『深層』を踏破する一誠の底が知れない実力。異世界から来たモンスターだからか、それともまだ隠している力を持っているのか……。

「で、主神様。俺の工房を見て知ったんだ。これで充分だろ？」

ここに来た目的は達成した。そう言うてはばからない一誠に認めるヘファイストスは一度は頷き、更に求めた。

「イツセー、今ここで何か作りなさい」

「……何故に？」

「ヘファイストス・ファミリア」に入団した者は自分の作品を売って、他の鍛冶師スミス達と腕を競い合うのが常なの。無名の鍛冶師スミスの一人となった貴方も私の方針に従ってもらおうよ」

うげ、とそこまでするのか「ファミリア」はと面倒くさそうな表情を浮かべる一誠。これならまだ好き勝手にできる「ロキ・ファミリア」の方がマシだったと後の祭りの気分を抱く。その後に疑問を抱く。

「俺が作った武器はどこで売るんだ？」

「『バベル』の中に行った事が無いのかしら？あそこにも武器店を構えている鍛冶師スミス達がいるのだけれど」

「知らなかったな。今度行ってみよ。で、今作らないと駄目なのか？」
鍛冶女神の首が縦に振った。今作れと言われても何を作ろうかと頭をガリガリと掻きながら悩んだ。悩んだ末、刀を打つことにして準備を始める。

燃え盛る炉、熱気で充満する工房。鋏で高温に熱した赤く染まった鉄床アンビルの上に置かれた金属に振るう鎚が叩くと、不純物が飛び散る火の

粉となり、それは空中に走る真つ赤な閃光ともなる。カアンカアンと金属を叩く音が飽きるほど鳴らし、炉から漏れる火照りに顔を汗流しながらも目の前の鉄と真摯に向き合っている、長髪を結った一誠の作業姿を見守るヘファイストス達。間合いを残して静かに終わるまで待つている彼女等の存在を忘れ没頭する姿の一誠は見たこと無いとロキとフィンには目に焼き付け、背中にある輝白の剣はこうして作られたのだと知るアイズ。それらの視線など介しない少年は、カアンと最後の鎚を振り下ろしを経て、手の動きを止める。そこから一呼吸も置かず鉄床アシビルの上にできた刀身を鋏で持って水が張った鉄器の中へ差しこむように入れた。じゅううつ、と立ち上る湯気。研がれ、磨かれる刃。素人が傍から見ても理解が及ばない作業を長い時間を掛けて行つた後、即席の柄と鍔を組み合わせ、一振りの刀が完成する——とガレスと椿の工房に訪れた際に見た光景を再現してみせた。片手に持つその桜色の刀をまじまじと眺めて、どこか残念そうに息を吐いた。ヘファイストスに出来上がったばかりの刀を、柄の方から突き出した。受け取り左眼の観察眼で確認する。

「どうやうファイたん？」

「・・・文句無しよ。できれば『鍛冶』のアビリティが発現してくれば文字列ログタイプを入れてもいいわ」

そうロキの問いに答えるヘファイストスの口から出た言葉。椿も異論は無いと頷く程、一誠の鍛冶スミスの腕は立派なものなのであった。一誠はフィンに話しかける。

「文字列？」

「【ファミリア】のブランド名のことさ。だけど神ヘファイストスが言うとおり、君が【ランクアップ】を果たして『鍛冶』のアビリティを発現しないと【ファミリア】のブランド名を自由に使えない」

「ふーん、今作ったのがブランドな武器になり得るほど良かったんだ」
どうでもよさそうな態度で理解した一誠。別に売る気は無いけどなあと思いを浮かべてロキとヘファイストス、二柱の女神達の会話に耳を傾けていれば、訂正と椿が声を掛けた。

「なり得るところではないぞ。【人形姫】が持つあの剣もお主が作った

のであろう。アレもブランド名を刻んでも主神様と手前は文句ない。お主は『鍛冶』のアビリティ無しで上級鍛冶師^{ハイ!スミス}以上、手前と張り合える腕と技術を持っておる」

「そうか?」

「おう、しかし、桃色の武器を作る鍛冶師^{スミス}は初めて見たぞ。一体何の意図でこうしたのだ」

ヘファイストスから受け取った刀に目を落とした椿に手を伸ばし、刀を取った一誠は徐に横薙ぎに振るったその直後。刀から可視化するほどの桜の花弁が一拍遅れて宙に舞い、幻想的な光景を見せて床に落ちる前に消失した。

「(っ)う(っ)こと」

「……」

魔剣の類なのか極東の花弁が振るった刀から出てきた。それには目の前で見せつけられた椿は右眼を見開き、刀を奪い取る様にして一誠の手から掴み、振るった拍子に桜の花弁が出て来て宙に舞い消失した。

「なんだ……この刀は、魔剣ではないのに、いや、これは魔剣なのか?花弁が出てくる武器など手前は見たこともないぞ」

「だからってあんまり振らないでくれるか?思いつきり振ったら……」

「む?どうなるのだ?」

振っても振っても刀から零れ落ちる様に出てくる花弁を見て、一誠の指摘を耳にした彼女の腕が思いつきり縦に振るうと比較にならない程の大量の桜の花弁が飛び出して壁天井、床を切り刻んで削った。後に消失した花弁に残された傷跡はヘファイストス達を唾然とさせる。

「そうなる」

あと、人の工房を壊すな。と付け加えて椿の頭に拳骨を食らわせた。地味に痛かったのか頭を擦り謝罪の言葉を述べる彼女と一誠をヘファイストスはロキと一緒に見てこう言う。

「……ロキ、あの子が秘密を教える気にさせればいいのね」

「……そうなんやけど、嫌わんといてや？」

「彼の言動次第ね」

そう言つて足を動かして眷族になつたばかりの少年に近づく鍛冶女神。

「イツセー。貴方にどんな秘密があるのか分からないけれど、今は訊かないわ。話したくなつたら何時でも教えてくれて構わない。だけど、私の「ファミリア」に入ったからには鍛冶師スミスとして生きてもらうわよ？」

「……了解。だけど、契約は忘れるなよ」

「ええ、勿論。それを承知で貴方を受け入れたのだからね」

小さく口唇を緩ませ、手を差し伸べた。その手を掴み二人は握手を交わす。その後、鍛冶の「ファミリア」に入った一誠は数々の武器や自覚なしに作った特殊武装スベリオルズを作つてはヘアリストスや幹部達を驚かせたのはまだ知らない。

「それじゃイツセー。貴方はここに住むなら工房と本拠ホームに部屋を用意しなくてもいいわね？でも、団員達にはそれとなく教えとくけれど、私と椿だけでもいいからこの家に入れるようにしてくれる？一応、貴方は「ヘアリストス・ファミリア」の一員なのだから主神を招かなきゃいけないのだし」

「……考えとく」

「うちらも入れるようにしてーなイツセー！あ、今夜ここで食べてもええ？ダメつて言つても食べさせてくれるまでうちはここにいます！」

駄々をこねる元主神に物凄く嫌そうな表情を浮かべる一誠だった。苦笑いを浮かべるフィンは、ロキの命でガレスとリヴェリアを呼び出しに行かされたその日の夜。フィン案内のもとで城まで来た二人の感想は。

「イツセーが長らく留守にしていた理由がよくわかったわい」

「流石の私も驚かされたぞ」

以下の言葉を送った。そして渋々ながらも少なくとも人数での食事会の為に作った一誠は、大きめの円卓に皿を並べた。皆々の前に置

かれたそれは鼻腔を刺激し、食欲をそそる野菜や肉が茶色の液体状に白い粒上のものが皿に盛られていた。皆、見たことのない料理に不思議と興味を抱く。

「のう、これはなんじゃ？」

「カレーという。数多の調味料を混ぜて煮込んだ辛い料理。今回は甘くしてあるからそれほど辛くない筈だ」

「ほう、カレーとな。手前は初めて見る料理だ。では、いただきます」

椿を筆頭に銀色に輝くスプーンを持って一同は、口の中にカレーの味を知った瞬間。

「へえ……！」

「何やこの味、確かにそれなりに辛いんやけめっちゃうま過ぎるでー！」

神の舌を唸らせ、太鼓判を打たせた。

「ふむ、手前はもう少し辛さがあってもいいと思うのだが」

「儂も同感じゃ。イツセー、もう少し辛くできんか？」

「できるけどいいのか？」と訊かれるガレスと椿は揃って頷き、一誠は席を外して調整しに行った間にカレーを完食してお代りができるか分からない状況の中で待っている、二つの鍋と大きな釜のようなものを台車に乗せて押して持って戻った一誠。

「イツセー、お代りしたい。できる？」

「そう言うと思つて多めに炊いたから大丈夫だ」

皿を寄こせと言わんばかり差し伸ばす手にアイズは皿を持って一誠に近づく。受け取った皿に蓋を開けた釜から取り出す白い粒上のそれを持って、甘くしたカレーを掛けて少女に渡すと既に待ち構え列を作っていたロキ達。要望通り、ガレスと椿の二人だけは激辛のカレーのルーを掛けて、いざ二人が食べると。

「二からあーっ！だが、美味いっ！」

己が望んだ辛さが舌に合ったようで、辛い辛いと言いながらも笑いながら食べる。そんな二人に興味を抱くアイズは一誠に訊ねた。

「……ガレスが食べてるカレー、美味しいの？」

「止めておけ。今のアイズにはまだ食べない方が良い辛さだ。ドワーフだから食べられるようなもんだし、椿は……ってヒューマンか

？」

「違うわ。ハーフトワーフよ」

成程、と椿の種族を知っても気にせずカレーを食べる一誠の目を盗んで、アイズは席から降りて皿を持ったままガレスに近づいた。

「ガレス……」

「んむ？何じゃアイズ。食べてみたいのか」

「ん」と頷くアイズは差しだす皿にガレスから一口のカレー貰った。そして辛い辛いと言いながら美味しそうに食べる彼のカレーを「ちよつ、アイズ待て！」と制止の声を気にせず辛いカレーを口に含んだ結果。

「~~~~~っ?!?!?!」

金眼がカツと見開き、口の中があまりにも辛いカレーで舌と唇が辛味で痺れ、口から火が噴くんでは無いかと錯覚を覚えた。慣れない辛さは幼女の全身を震わせぶわつと汗も湧く。仕舞には皿を落として床にゴロゴロと転がってロキにカメラを激写されつつ爆笑、「だから止めておけつて言ったのに」と嘆く一誠と「まあ、いい経験だと思っよ」と苦笑のフィンに「やれやれ……」とリヴェリア。

「アイズ。ほら、これを噛まずに口に含め」

辛さに苦痛を覚え地獄の中に仏がいた様な嬉しさがアイズ。形振り構わず口の中に入れられた瞬間、辛いだけの口の中は真逆の冷たさで占めて気持ちを落ち着かせた。とても硬くて冷たいものを舌の上で転がしていると液体——水になったそれをちよつとずつ喉に通す。

「……冷たい」

「氷だからな。まったく興味を持ったからって食べるもんじやないぞ。もう少し成長してから食べるな」

「……ん」

しかし、成長したアイズは甘いカレーしか食べようとしなかったのは未来の話だった。それから夜食を終えたロキ達は一誠の家を後にし、それぞれの^{ホーム}本拠へ帰路する。

「椿、彼のことだけだ」

「おう、言いたいことは理解しておる主神様よ」

蒼い夜空に浮かぶ満月の光が、北西と西のメインストリートの区画に挟まれているはずの『バベル』の次に高い白亜の城を照らされていない虚空に目を向ける。椿の目が細まる。

「どんな秘密を抱えておるのか知らないが——あやつが作る武器は至高の武器だ」

「ええ、ロキ達も今日まで知らなかったあの子の腕には私も驚かされたわ。椿、貴方と張り合えると言った言葉は過言ではないのでしょうか？」

「無論だ主神様。くくつ、手前も主神様も敢えてあの場で言わないでおいたが、イツセーめ。手前らとは異なる技術で至高の武器を作りおつて、血を騒がせてくれる」

口の端を吊り上げ、笑い声を殺したように小さく漏らしたあと。主神へ「そこでだ、主神様よ」と椿は提案する。

「手前をイツセーの傍に置かせてはくれぬか？」

「彼の技術を盗むつもり？」

それはただけないと、「ファミリア」の方針を反することで左眼を細めるヘファイストスだったが「違う」と椿は首を横に振った。

「あやつに心底興味を持った。技術を間近で見ても手前は盗まん。手前の心を高ぶらせたイツセーの隣で共に神の領域を目指してみたい。こんな気持ちは生まれて初めてだ」

子供のように純粋な笑みを浮かべ、ヘファイストスは困った子のように胸の下で腕を組み息を吐いた。好敵手^{ライバル}——一誠を勝手にそう認識した椿に明日、物凄く嫌そうな顔か困った顔か、驚いた顔を浮かべるだろう少年の反応を予想して同情する。

冒険譚2

「フレイヤ様、報告がございます」

白亜の摩天楼施設の最上階。硝子張りの窓からオラリオを眺める銀髪銀眼の美の女神に巖の様な巨躯の獣人が静かに述べた。

「ロキ・ファミア」から一人「ヘファイストス・ファミア」に改宗コンバージョンした者がおります」

「そう、でも大して珍しいことではないわね。ロキの子でもなくても他のところに行っても不思議ではない——」

「あの者、フレイヤ様が見初めたイツセーが改宗コンバージョンをしたと報告を受けました」

改めて補足するように獣人オツタルが背中を見せる美の主神に投げる。窓硝子越しで背後に佇む眷族の姿に静かに町から変えて銀眼は彼を捉えた。

「どういふことかしら？ロキのところが不満で変えたのかしら？いえ、何故なのオツタル」

「わかりません。あの女神が何も考えずあの者を手放すとは考えにくいかと」

「そうよね……」と顎に指を添えるフレイヤ。第一級冒険者を匹敵する者を自分の手から零す様な女神では無いのは重々理解している。フレイヤ自身も優秀な者、それも彼女が気に入った冒険者は他派閥から引き抜いて自軍に加えるほどだ。自分だったらそんな悪行はするつもりはない。

「気になるわね……ロキの派閥から他の派閥に移る理由があの子にあるのかしら」

単に一年後脱退すると言う契約を知った時はその程度だと知り、ならば次は自分の派閥に来なさいと美の女神の願いは届くかどうかは娯楽に飢えた神々でも分からないのだった。

「ヘファイストス・ファミア」の眷族となって早くも一週間が経過した。大通りには無所属の一般人やヒューマン、デミ・ヒューマン 亜人の冒険者が変

わからない朝の中で闊歩し、仕事やダンジョンに赴いたり商業系の「ファミリア」は店を開いている時刻。冒険者通りに数多の武器を詰め込んだ樽を肩に担いで歩く真紅の全身型鎧フルプレートの者が現れ、武器屋の中に消えた。

武器をたくさん持ってきた眷族を迎え、出来栄の良さを確認する団長の隣で鍛冶の女神は困った表情を浮かべた。目の前の眷族は下級冒険者で鍛冶師スミスの新米——その筈であったが、腕前は一流なのだ。他の新米の鍛冶師スミスと比較していいものではない。新米の者と一緒いっせにこれを販売させるわけにはいかなく、新米の冒険者が打ったものだと上級鍛冶師スミス達はその目で確かめるまでは信じもしないだろう。一々作る武器が団長椿も認める至高の武器では扱いにも困る。いざ、そのことを伝えもう少し武器の質を下げてくださいか頼んでみると。

「腕と技術を高め合い他の先輩と競争、武器を作って売るのがこの「ファミリア」の方針なのに、何で他の鍛冶師のレベルに合わせないといけないんだ？他の新米の人もそうなんだったら俺もそうするけどそうじゃないんだろう？」

全くの正論にぐうの音も出さず言い返すことはできなかつた。

「はっはっはっ、主神様よ。こやつも他の鍛冶師スミスと何ら変わりないよ。うだ。諦めて他の鍛冶師スミスの店の武器と交せて売って貰うべきだ」

「眷族になったばかりの子の作品がコレだと信じるわけないでしょ」

「ならば用意する予定だった工房の代わりに小さな武器屋でも用意して売買させるか？」

結局、話し合った末に他の店の中で武器を売ることになった。それからへファイストスと椿にある物を手渡す。宝玉がある金の腕輪だ。

「これは？」

「何時でも何所でも誰とでも話ができる便利な道具だ。何か話したい時や聞きたいことはこれを通してくれ」

操作の扱い方も教え、感嘆の息を漏らすへファイストス達とは用件

済んだとばかり執務室を後にしようとして踵返す一誠に声が掛る。

「今日はどう過ごす気なの貴方は？」

「ん、【ロキ・ファミア】んところに行つて同じ物を渡しに行く。その後はダンジョンで素材集めを没頭するかな」

「それは鉱石や金属も含まれておるか？」

肯定する意味で「当然だからなんだ？」と応じる一誠の話を聞き、右眼を輝かす椿はヘアアイストスに視線を向けた。言わずとも理解しているとはかり二人の主神は仕方なしと溜息を吐いた。

「イツセー、悪いのだけれど椿も連れて行つてくれないかしら。一緒に素材集めをしたそうなのよ」

「えー……うーん……俺が6で椿は4でいいか？」

「おう、構わんとも。あの上質な超高金属製アダマンタイトや最硬金属オリハルコンを大量に持つて帰る他、『中層』以下の階層に潜れるなら手前も行きたい」

「わかった、じゃあ30分後。バベルの前で集合で」

「承知した」と頷く椿から今度こそこの場を後にする一誠がいなくなった後。

「椿、分かつてるでしょうけど」

「この気に乗じて秘密とやらも探れと言うのだろう主神様」

「ロキ達も知つて受け入れているのだから私達も問題なさそうだけれど、それでも警戒はしてね」

「かくかくしかじかで、そう言う事だ」

「ほーほー、んーめっちゃ便利な道具アイテムを作つたなー自分」

ロキに会い、執務室で腕輪の性能を伝える一誠。同伴するフィン達の間で評価は高く感嘆を漏らす。見えない相手と連絡や会話ができれば、状況の把握もできる。細かい操作をしなくてはならないのだがメリットの方が大きい通信式の腕輪はダンジョンの中やオラリオの外でも有効的活用が望まれる。

「イツセー、これを指定した数まで作れるかな」

「時間をくれれば問題ない。代金は貰うぞ？」

「使い道があまりない金は惜しまないよ」

フィンはこの量を量産して活用しない手は無いと一誠に依頼した。団長のフィンのもとに逐一状況が遠くから伝えられ、周囲の状況と状態の把握が掴めると言うもの。それを思えばいい買い物をしたと自負する。

「それじゃ、用件は済んだから行くわ」

「ダンジョンにかい？」

「本当なら一人で行くつもりが団長まで来る羽目になった。まあ、素材集めだけだから『深層』に行っても問題ないだろ」

「というと、数日はお前と会えないか」

連絡はできるが、トリヴェリアの何げない一言は「ん？」と一誠の小首を傾げさせた。

「今日中に戻ってくるぞ」

「何を言っておる？『深層』までどれぐらい距離があると思っておる。

それに地図^{マップ}なくてはそう簡単に行けるような階層でも無いわい」

「その腕輪に地図^{マップ}を記録させてあるから迷うことは一切ない。それに俺は異世界から来たドラゴンだぞ？『階層無視して目的の場所に移動できる』的な魔法があることも考慮していなかったか」

「[E:]」

とんでもないことを言い出した一誠。そんな好都合的な魔法が異世界にはあるのかと耳を疑った。しかし、現実味があるのは目の前の人の皮を被ったモンスターの存在か。フィン、ガレス、リヴェリアは目を合わせた。その真実をこの目で確かめるべきでは？と意図を込めて。

「ロキ、彼と一緒に行っても？」

「ええで、何かあった時はこの腕輪で連絡するから」

金色の腕輪を見せつけて許可を下す。そう言う時はあってほしくない心情を抱きながらもダンジョンへ行く準備を整えに動く三人と、「アイスも行くこうな」

「ん！」

少女もダンジョンに行く。強くなるという言葉憧憬を叶える為に。こうして【ロキ・ファミリア】と【ヘファイストス・ファミリア】の混

成パーティーが出来上がり、『バベル』前の中央広場セントラル・パークで椿と合流を果たす。

「おおつ、『ロキ・ファミリア』の幹部が勢揃いでどうした?」

「久しぶりだね椿。彼と一緒にダンジョンに行くそうだけど僕達も同行させてもらうことになった」

「イツセーが良ければ手前も構わん。してイツセーよ。今日はどこまで進むつもりだ?」

『希少種』の素材も集めるつもりだから『深層』まで行くつもり。んじゃ、早速行こうか」

7人の足元に真紅の魔方陣が展開し、瞠目するフィン達の全身は光に包まれると一瞬の閃光と共に中央広場から姿を消した。

視界が光に塗り潰され視力は奪われてからどのぐらい時が経った? ハッキリと経過した時間は分からないままゆっくりと目を開ける。幼い少女の目を写す光景は黒鉛の壁と天井が長方形を描く巨大『ルーム』であった。視界を遮る遮蔽物が無い広大かつ単一の空間であり何故か肌寒さを感じさせる冷気が漂っている。そして金眼はそんな空間の中に棲息しているモンスターを捉えた。

『オオオオオオ……ッ』

二本の脚で立ち全長十Mの巨軀を誇る、大紅竜である。数は優に五体を超えている九体だ。

「っ!」

漆黒の翼ワイザーアーン 竜よりも巨大な竜と数に金眼は凍結する。自分達は完全に取り囲まれている状況を把握するのに時間も掛らない。

ヴァルガンゲ・ドラゴン
「砲 竜 ……」

「まさか、我々は58階層に来ているのかっ……!」

「さらにこの下の階層は『ゼウス・ファミリア』が踏破した59階層……イツセー、とんでもないね」

そして三人の第一級冒険者は思った。いきなりモンスターのど真ん中に自分達を連れていくなど心が一致した矢先、四つの大火炎球が放たれた。四方から迫る炎塊に瞬時で身構え対応しようとするフィ

ン達より早く、
『魔劍創造』！』

劍を黒鉛の地面に突き刺す一誠の口から技の名称を叫んだ直後。交差する巨大な四対八の斧が大火炎球の直撃を轟音と同時に炎の残滓を散らしながら防ぎ、さらには砲竜の足元から十Mの劍が飛び出して魔石ごと胴体を串刺しに貫いてたつたこの一度だけで『深層』のモンスターは全滅。全て魔石を破壊されて灰燼と化したモンスターの成れの果てに残された武器素材を前にし。

「よし、一旦終わり」

と満足げに告げた彼にガレスから突っ込みが入る。

「終わり、ではないわいっ！」

「シー、地面から武器が出てくるなんてね……………」

「あまりにも非常識な……………魔法、なのか……………」

「……………」

地中から飛び出した武器を触れ確かめるフィンに翡翠の瞳を啞然として見つめるリヴェリアは眩き、おっかなびつくりをするアイズ達に「その気持ちは手前もよく分かる」と腕を組んで何度も頷く椿。だが、彼等に休息の束の間は無い。遙か彼方の58階層の壁面から一誠達を取り囲む壁の前面に亀裂が生じた。

「待て、これは流石に……………」

『異常発生』と脳裏に浮かべる。いかに第一級冒険者がいようと階層を無視して分厚い岩盤を貫く火炎の砲撃をする紅巨竜。一体一体が『迷宮の孤王』みたいな存在感を放つモンスターが一度に大量に産声を上げ産まれ落ちる光景は戦慄ものだ。

「ん、これでお終いにしよ。素材もたんまりと手に入るし」

ただ一人だけのんびりともう一度地面に劍を突き刺す。

『魔劍創造』

58階層の壁に覆う氷壁で一掃に冷気が漂っている空間を後にして『ドロップアイテム』を回収し終えた一行は、鉱石や金属を採掘する。その方法は、鶴嘴を使わず拳で殴って粉碎する壁一面から岩の破

片と交じって目的の物やそうでない物が零れ出る——一誠の豪快なやり方だった。

「……イツセー、お前はそうやって鉱石や金属を手に入れていたのか」

「一々一点だけ掘っていたらモンスターが来るし、壁を壊してればモンスターは産まれてこない。おまけにこうしてお目当ての物が手に入る」

光沢を輝かせる希少金属レアメタルを手にながら呆れ果てるリヴェリアに指摘する。

「それにここは『深層』だ。滅多に他の冒険者が来ないから採掘し放題だ。迷惑もかけてない、正式ではないルートで何をしてても問題は無いだろう?」

自分なりに正論を言ったつもりだが、絶世の美を誇るハイエルフは何か言いたげな視線を少年に無言で送る隣で筋骨隆々のドワーフは豪快に笑っていた。

「うむ、儂個人で言わせてもらえば嫌いではないのお」

「言うと思ったよガレス。それと意外にも豪快なところもあるんだね君は」

「効率を追求したに過ぎない」

「だから壁を殴って採掘する冒険者は絶対におらんと手前は思うぞ」

と、呆れ笑う椿も純度と質の高い鉱石や金属を見つけては背囊に入れる。アイズとアリスもせせせと岩の破片に埋もれてるだろう一誠が望む物を探す。

「ここにいるけど」

「胸を張って言うことか、つとまたあつた。ここが発掘できる場所の様であるな」

椿の背囊は既に満タンに近く、口から砲竜の『ドロップアイテム』が飛び出している。さらに金属と鉱石まで詰められてもう入りきれそうにないにも拘らず、一誠の背囊は何故か異様におかしいのだった。右眼はその異様を捉える。

「のう、お主の背囊はおかしいぞ。何故容量を超えておらんのだ」

「……」

その指摘にアイズとアリサに三人の回収が終わるまで見張っているフィン達は気にしていたようで耳を傾けた。今でもひよいひよいと入れているのに、砲竜の『ドロップアイテム』を同じ背囊に入れているのに何故か膨らみもせず入り切れず顔を出さない。そんな物を背負っている少年はあらかた回収し終えたのか、肩に担いで振り返り答えた。

「これも魔道具マジックアイテムの一つだ。背囊の中の空間を弄っていてな。どれだけ物を入れても容量は超えず同じ重さで持てる優れ物さ」

「なんと!?それは真なのか!」

手前が欲しいぐらい素晴らしい道具ではないか!と目を輝かせる。フィン達も感嘆の息を吐く。

「普段使っている物を魔道具マジックアイテムにしていたとは驚いた」

「ああ、だからあんなに入れられるのだな」

「そうだね。イツセー、それはどのぐらいの値段で売ってくれるかな?」

「ファミリアにとって何でも入れられ、どれだけ入れても容量は超えないバックパックは確保したい希少道具レアアイテムで、フィンの意図を察したか一誠は頷いた。

「大きさによって値段変えるぞ。何千万ヴァリス分の魔石や『ドロップアイテム』が入れられるんだからな」

「分かった。後で交渉させてもらうよ」

「手前も、手前も欲しいっ!」

拳手して自己主張、便乗する椿に「分かった分かった」と応じる一誠の様子から眼を反らし、何となく通路の奥へ金眼を向けた矢先、一本角を生やした純白の馬が一頭、別の通路へ移動して横切ったのを見た。それを一誠に教えた直後。真紅の軌跡を残してモンスターが移動した通路へ向かっていった。そしてすぐに戻ってきた。『ドロップアイテム』と思しき一本の角を持って嬉しそうに笑みを浮かべてだ。
『一角獣の角』ユニコーン「ゲットだ」

「む、あの希少種か。商人に売れば高く買い取ってくれるだろう」

「いや、それは貴重な回復アイテムにもなるぞ。魔導師専用の道具にも使える」

需要があるそれを手に入れた一誠はまさしく幸運の持ち主だ。リヴェリアの関心は次に絶句に塗り替わった。

「あ、そうなんだ？アイズの剣に使っちゃったんだけどな。数本ぐらい」

「「「「「」」」」」」

輝白の剣身の剣を背負い硬直する少女に視線が集まる。希少価値の高い角を数本も使って武器に変えた暴挙が具現化した剣へ。リヴェリアの頬が引き攣り、フィンとガレスは間拔けな顔を晒し、椿はどこか納得した面持ちで顎に手を添えていた。一誠は彼女に訊ねた。

「団長、アイズの剣は売るとしたらどれぐらいだ？」

「うむ、貴重な角を数本も使った剣ならば軽く数千万はするであろうな。手前の見立てでは7000万ヴァリスといったところか」

「」

一誠が打った武器の価格は物凄い重みに似たプレッシャーとして覚えた幼い少女。今まで壊してきた武器なんかより切れ味も耐久度も鋭く凄い剣であったのは理解していたが、実際に値段まで付けられると我が物顔で振るってきた剣の真価は軽いものではないことを知り、頬に嫌な汗が流れる。慌てて剣を手にして確かめる。傷は……無いが、若干の汚れがあった。

(か、帰ったら洗わなきゃ……っ)

まだ10歳も見たない少女にしては不相応な宝剣をこの瞬間、心から大切に扱おうと刻んだ。弁償はしなくてもいいのだが、これを打った者に対して失望をさせたくない一心で思ったアイズだった。そして『ユニコーンの角』の価値を知っても尚、一誠は考えを変えていなかった。

「んー、またこの角を使って今度はどんな武器を作ろうかな」

「止める、貴重な素材を武器にする暴挙など魔導師や治療師が悲鳴を上げる」

「ん？リヴェリアも悲鳴を上げるのか？」

何気ない一言を発した一誠の前でハイエルフの女性は目をパチクリした。

「お前、何故私の呼び方を変えたんだ？」

「へ？だって、もう別の派閥に異動したし何時までも副団長と呼ぶ方がおかしいだろ？元副団長とか華のない呼び方で呼んでほしいのか？」

何を言っているんだ？と至極当然のことを言ったつもり少年の言い分は何も間違つてはいなかったが、こうもあつさり切り替えて不意を突かれたような感じをリヴェリアは少し驚いただけだった。

「いや、確かにお前の言うとおりで。敬意を忘れてなければ呼び方は自由にしていい」

と、本人の了承を得た時。頭の中であることを思い浮かべ、人差し指を立てながら提案した。

「ふーん、じゃあ、敬意を忘れずにリヴェリアの名前から可愛らしく『リリア』って渾名と愛着を籠めて言うな？」

「なんだそれは」

人の名前を勝手に変えるな、と翡翠の柳眉を寄せて異を唱える。仲間の新たな愛称の名前にフィンとガレスは、感心したように笑みを浮かべていた。

「王族ハイエルフの彼女をそう呼ぶ冒険者は愚か、人すらいのないにある意味勇気があるよ。全てのエルフを敵に回しかねない発言だ」

「これはロキにも知らせたら笑うであろうな。のう、リヴェリア。儂らもイツセーに便乗して呼んでもよいか」

「ふぎけるなガレスっ。……待てアイズ、その羨ましそうな目は何だ」

都市最強の魔導師が珍しくうろたえている。下から見上げる金眼からの視線に困惑し、古き仲間の二人からも意味深な笑みを向けられる。危険なダンジョンの中なのに和んだ雰囲気か7人を包み込んだところで探索を続行した。

「そう言えばイツセー。昼食はどうするんだい？」

「昼食、かぁ……。本当ならアリサと探索する予定だったから二人分

しか作って無いぞ」

その二人分と例える一誠とフィン達の差の違いが直ぐに明かされた。

一気に『中層』18階層に戻った時の時刻は『昼』。階層の天井には、無数の水晶が隙間なくびっしりと生え渡っていた。光り輝く水晶で埋め尽くされていて、まるで咲き開いた菊のように、夥しい量の水晶が隅から隅までに生え渡っている。中心には太陽のように輝くいくつもの白水晶の塊、そしてその周囲には優しく発光し、空を思わせる蒼色の水晶の群れだ。咲いた菊のように大輪を連想させる水晶がそれぞれ光を放つことで、18階層には地下でありながら『空』が存在している。そんな階層の中には冒険者やならず者達が築いたならず者達の街こと『リヴィラの街』があり、ここは冒険者もモンスタースターにとっても『迷宮の楽園』なのだ。

「.....」

この中で唯一、中層まで来たことのないアイズは人類の天敵、モンスターの巣窟にこんな目を奪わせる光景が待っていたとは今の今まで知らず、目を大きく見開いて言葉を失っていた。10人は乗ってもまだ余裕な巨大な空飛ぶ絨毯の上で。

「イツセー、確か二人分しか作って無いと言ってたよね。なのにこれ、全部君が食べるつもりだったのか」

感動と驚愕で目を奪われている少女を脇に五重層の弁当を絨毯の上に用意した少年に目を疑うフィン。そして調理された料理の数が多い。明らかに二人で食べる量を超えている。まるで自分達と一緒に食べることを前提に作ったとしか思えない程に。狙っていたのか？と疑ってもしようがない。

「これだけ食べれば休む間もなく一日中は素材集めに専念できるから」

「しかし、どれもこれも見たことのない料理だ」

「それ、単に似たようなモンしか食べてないからだろ」

白い粒、ご飯を人数分に用意した皿に入れて五人に箸も手渡す。

「ところで、何故こんな空中で食べるのだ？」

「モンスターがいるところでのんびりと食えるか」

椿の疑問を一蹴する。そして手を合わせる一誠を筆頭に食事の祈りを済ませて昼食の時間を迎える。

「むっ、この肉を挟んだパンは中々……」

「手前はこの肉の塊が気に入ったぞガレスよ」

「ンー、店に出してもいいぐらいな美味しさだ」

「ああ、『遠征』の際にも食べたかもしれないな」

「……っ（モキュモキュ）」

「好評で何より。ああ、二人とも。頬を膨らませて食べる姿は可愛いな、パシヤリと」

皆で食べる食事の風景を写真で記録を収めることも忘れない。後でロキのアルバムに加えるつもりのもりのようにその行動に椿が興味を抱いた。

「それはなんだイツセー？」

「カメラと言ってな——」

かくかうしかじかと機能と性能を教える。その素晴らしさが伝わったようで感嘆の息を漏らした椿。

「まあ、それだけじゃなく宣伝にも使えるんだけどな」

「宣伝？どんな風にじゃ？」

「実際、相手が知っていて自分達は知らない事はよくあるだろ？そんな知らない者達に知ってもらおうと記録として撮った写真に詳細を書いて読んでもらえば宣伝になる。で、人から人へ細かな情報も伝わっていくのさ。【ロキ・ファミリア】の団員達の名前と顔の写真があれば誰でも知ってもらえるようにな」

「ふむ、その写真が世界中にも配られれば農等の顔もより鮮明に分かるようになるというわけか」

名前だけ知って人の顔は知らない。それだけではない。オラリオから出れば国と建物、食材、自然、モンスターもだ。実物を見ることのできないのが自然。なら、どうやって知ることができるのかと問わ

れば写真が答えになり得る。見聞したモノを記録として写真で残し、後世の者達に伝える方法もある。別の世界でも太古の昔から培ってきた経験や情報も残されているほどだ。ただし、カメラというより色鮮やかで鮮明に記録を残す手段、ものがあるか無いかの違いで差が出るが。

「団長が鍛冶をしている様子を撮れば「ヘファイストス・ファミリア」の宣伝にもなるし、フィンが巨大なモンスターを倒した光景を残して皆に見せれば、フィンの凄さをより伝えやすいと思う。だから記録を残すつてのは、扱い方次第ではそういった使い方もできるんだ」

カメラと写真の奥深さを感じたフィン。記録を残す技術は勿論のこと、異世界では最大限に活用するカメラの扱いが長けた者達がいる。今ではすっかり首からカメラを下げて、写真を撮られて不思議そうな顔をしている眷族達の記録を残している日常と化している。

「カメラ……いや、写真の奥深さを知った。では、手前らの仕事の様子の一部を記録して、何らかの形にし、「ヘファイストス・ファミリア」の大まかな情報も記し、人の目が届く場所に張れば手前らのことの詳細がわかるというわけか」

「全部、つてわけじゃないがな。知って相手に興味を持たせる、意識させることが写真の役割でもある。特に初めてオラリオに來た初心な輩達からすれば、どこにどんな神と冒険者の「ファミリア」があつて、店があるのか——」

スラスラと説明口調で語っていた口が不自然に止まり、次に両手をポンと叩いた。何か閃いた様子で左眼を妖しく輝かす。

「ん、次の魔道具マジックアイテムはオラリオの地図マップにしよつと」

「僕達にくれたこの腕輪の中にある各階層の地図マップの次はオラリオの全体図か」

彼の者の魔道具マジックアイテムが完成したら是非とも拝見したいと心中で零し、サクサクとした茶色い衣に覆われた魚介類のような食べ物に白いソースを付けたままプリツとした歯応えを口の中で覚えながら食べるフィン。

「イツセー、これは何て名前のお食べ物かな。初めて食べる味と触感だ」
「ん？エビフライって言うんだけど……お前ら、俺の分も残してくれよ」

話している間に弁当の中身が思いのほか早く無くなり掛けていた。その原因はガレスと椿が筆頭に未知の味を占めて食べ、控え目ながらも二人の次に自分の舌に合う料理を主に食べ尽くすリヴェリアとフィンだった。説明している間に弁当の現状を一誠の落胆した表情にフィン達は揃って気恥しげに、申し訳なきそうに苦笑いした。アイズに至ってはふんわりとじていて甘い味がする厚焼き卵を銜えたまま固まった。

そんな昼食の一時は一誠にとって「こいつらとまた来ることになったらもつと作らなきや駄目か」と学習して終わった。その日から一週間、マジックアイテム魔道具作成で籠っていた一少年はとある少女と出会いを果たす。

冒険譚3

廃墟の区画の風景と溶け込んだ透明の城の鍛冶の工房とは別の作業部屋。綺麗でありながらどこか物が置けず乱雑に置かれていたり、二重の意味でつまれている部屋はこの世界の様々な物が所狭しとあった。ある種、ヴァリスやダンジョンから得た宝よりも異世界にしかない物が一誠にとって宝物であった。原産や現地しか得られない物は希少なコレクションとして集めている。そんな物々とした中で新たな魔道具マジックアイテムの開発を試みている少年は、点滅した腕輪の宝玉に気付く。通信相手に繋げると紅髪紅眼の女神の顔が映り出した。

『こんにちは。それにしても本当に繋がったわ。貴方の顔もよく見れる』

「試作品だろうと不備は無いぞ。用件は武器か？」

『ちよつと違うわ。とある冒険者が貴方の武器を見て貴方を紹介してほしいってバベルの店から報告が届いたの』

なんだそれは？と不思議そうにヘファイストスを見ると『よくあることよ』と女神は小さく口の端を上げた。

『椿もロキのところの「重傑」エルガラム』と直接契約してるし、貴方も紹介してほしい冒険者から契約を申し込んでくる可能性もあるわ』

鍛冶師として大切なことよ、と「ヘファイストス・ファミリア」の末端の鍛冶師スミスの名が売れる機会でもあると言外する彼女だったが、当の本人はそんなこと心底どうでもよくて。「えー……面倒だなあ……」と面倒臭そうに顔を顰め、ヘファイストスと呆れさせた。それでいいのかと、鍛冶の派閥に入った鍛冶師スミスとは思えない発言だった。

「俺が打った武器になんか不満でもあるなら聞きたくないんだけど？つーか、使い手が悪いだけじゃないかって話なんだけど」

『それは直接貴方が言いなさい。いいわね？今日、貴方の武器が売っている店に待っているとの事だから会いに行きなさい。主神としての命令よ』

「……行かないとダメ？」

『いきなさい』

立体映像に映るヘファイストスの顔がドアップする。絶対に行かないと許さない、と気持ちが一ハッキリ伝わり、渋々と頷き重い腰を上げた。

「ヘファイストス・ファミリア」の店は北西のメインストリートにある支店だけでなく神が住まうバベルの中にも構えられていることを説明を受けた一誠。ダンジョンの出入り口のバベル一階の広間の中心にある、いくつも存在している円形の台座、その一つに乗る。大量の『魔石』が取り付けられて昇降する台座を、一誠から言わせれば昇降設備だと思わせるそれで目的の階層に向かう。場所は四階層――

「直接来るのは初めてだけど、えーと」

「いっぱい武器がある」

陳列窓の商品を一瞥しつつ値段を見ればこの階層は上級冒険者以上専用の装備が販売されていた。どれだけ安くても一〇〇〇万ヴアリス。高くて五〇〇〇万ヴアリスは越えようか越えまいかの値段が付けられている。自分が打った武器等はどれだけの値段で販売されているか知らないままアリスを連れて、ヘファイストスから教えられた店の前に辿り着いた。陳列窓に視線を向けると、「あ、売られている」と作った武器が数千万ヴアリスの値段で付けられていた。そして名前と属性付加済みとあの時一つ一つヘファイストスの前で説明した通り詳細が記されていた。きつとこの属性付加の武器に興味を持った冒険者が製作者に会ってみたいと思っただろう。だが、一誠にとつてはやはりどうでもよく、さっさと会ってさっさと帰ろうという思いで店内に入る。綺麗な装飾と意匠が凝った店内は先達の鍛冶師達^{スミス}が作っただろう武器や武具が並べられていると同時に、未だに誰かの手に渡る気配を微塵も感じさせない物ばかりの雰囲気醸し出している店の中には二人組の男女以外誰もいなかった。高過ぎる手が出せない店は大丈夫なのかと杞憂するが自分には関係ないと――

「ねえ、このヒョウドウイツセイってどんな人だろ……」

「うーん、勘違いだろうけど極東出身者ってことなんだろうなあ」

「どうやらあの男女が己を呼び出した本人らしい。全身型鎧フルプレートを着こんでいる一誠の存在は子連れのための客として認識されているのか、一瞬目を向けてきたが直ぐに目の前の武器——製作者の名が刻まれた一誠の武器を眺めていた。男の方は黒髪に黒眼の中背中肉のヒューマン、もう一人の女の方は山吹色の長髪に同色の瞳のヒューマン。なんとなく、二人の情報を前もって確認しようとした一誠の視界に飛び込む「ステータス」。そして、更に奥深くまで調べた結果。鎧の中で目を見開くほど絶句した。もしもこの情報が間違っていなければ、あの二人組は……」

「お前らか、俺に会いたいと言う奴は」

「え？」

黒髪の少年が振り返り一誠の姿を視界に入れた。少女もそうして真紅の龍を模した鎧の者に啞然となって目が丸くなった。よもや、子連れの全身鎧を着た人が鍛冶師スミスとは思っていなかったのか、二人揃って言葉を失っていた。

「君が、ヒョウドウイツセイ……なのか？」

「今はイツセイと名乗っている。その名前はうっかり本名を刻んでしまっただけだ」

「本名……あの、あなたは極東の出身の人ですか？あ、自己紹介がまだだった。私はアスナ、こっちはキリト」

「よろしく。その答えに答えるとまあ、極東出身になるな。お前らもそうなんだろう？その顔立ちは俺が知っている極東の容姿だ」

「握手を交わしお互い極東出身者であることで会話が成立した。」

「で、俺を紹介してほしかった理由は？直接契約か？」

「え、いや、この武器の製作者の名前が何となく俺とアスナが知っている極東の名前で、どんな人なのか会いたかったんだ」

「要は興味と好奇心。鍛冶師スミスとして呼び出されたわけではないと深い溜息を吐いた。」

「……興味本位で呼び出されたらいい迷惑だ。こっちは忙しいっ

てのによ」

呆れ顔でそう言われ、罪悪感を覚えたようで「あ、ごめんなさい……」とアスナが申し訳なさそうに謝り、キリトも謝罪の念を込めて頭を垂らす二人に「だが」と付け加えた。

「来ても良かったと今は思っている。因みに聞くが、お前らだけか極東から来た人間は」

「え、いえ、他にもいますけどどうしてですか？」

どうして他の仲間のことまで訊くのだろうかと思いながらも教えたいアスナ。更に質問がされる。

「オラリオに来て何年目だ？」

「去年の春頃だ。今年で二年目になる」

「成程、俺より一年遅くか」

「あなたは三年前から？ 鍛冶師に？」

「違う、最初の二年は最大派閥にいたが他の派閥にも興味があつてな。今年から鍛冶師になった」

そう聞いて「今年初めて鍛冶師でこの武器の出来は凄いな」と感心したキリトの隣でアスナは提案をした。

「あの、忙しいところを呼び出したお詫びと言つては何ですが。もしよければ昼食を一緒にしませんか？」

「昼食？ どこでだ？」

「勿論、私達の『ファミリア』。『アルテミス・ファミリア』にご招待します」

柔和に微笑んで食事に誘うアスナ。キリトも異論はないと一誠とアリサを誘い、連れて行かれる形で東と南東のメインストリートに挟まれた区画——地上の迷宮『ダイダロス通り』に来てしまった。度重なる区画整理で秩序が狂った、広域住宅街。都市の貧民層が住まうこの複雑怪奇な領域は、一度迷い込んだら最後、二度と出てこられないとまで言われている。区画整理を担当した当時の設計者の名が付けられたこの住宅地域は、人を惑わすという点ではある意味ダンジョンよりよっぽどダンジョンらしい。二人の『ファミリア』はそこにあると言うのだから少し目を疑った。

「ここ、初めて拠点として構えた時は毎日のように迷って大変だったんだ」

「キリト君が極度の方向音痴になっちゃったのかと迷いに迷って心配になっちゃった程にね」

「違うって。慣れない場所は誰だって迷うものさ。ナビ……地図が無いこの住宅地の中を最初から迷わず行けっただけだ」
「はいはい、そういうことにしてあげます」

——この夫婦円満みたいな幸せオーラを醸し出す二人に拳を握って思わず口走った。

「イチヤつくなら俺のいないところでやってくれないかリア充共。帰るぞオイ」

地上迷宮の前で立ち止まって思い出話を楽しげに笑う二人は、申し訳なさそうに謝罪をしてようやく歩き出す。入り組んだ迷路を最初は迷ったと言った二人だが今では我が物顔で確りとした歩調で慣れた道のみ進んで行くこと数分が経った時。地上の迷宮の中に廃墟の教会が四人を出迎えた。教会の外には木製の机や背もたれがある丸太の椅子が数多くある。椅子の数からして十人以上の「ファミリア」の構成員がいることが把握できた。

「今何か作ってくるからキリト君と待っていてください」

アスナは一足早く教会の中に入っていなくなった。残された少年少女達は丸太の椅子に座り静寂な雰囲気を一時だけ保った。

「イツセーさんはL.V. どのぐらいだ？」

「まだまだーだ。お前は？」

「俺もそうなんだ。でも最大派閥にいたのなら意外と早く「ランクアップ」していそうなのにな。ほら、「ロキ・ファミリア」のところにいる少女何かがそんな感じで」

「ああ、アイズか。そりゃ当然だろ、『偉業』を果たしたんだから俺の目の前で」

既にアイズの「ランクアップ」の事はオラリオに知られている。弱小の「ファミリア」が知っていてもおかしくない情報を目の前で立ち合った当事者が何ともなさげに述べたが、キリトの方はそうでなかつ

た。

「え、最大派閥って【ロキ・ファミリア】だったんですか?」

「ん、そうだ」

「そんな凄い【ファミリア】にいたのに何で他の派閥に移ったんですか……?」

「色んな神様がいるんだ。直で過ごして知りたいだろ」

分からなくないが、別に移らなくてもいいんじゃないかと思いつながらもキリトは一誠と雑談をかわす。オラリオに来て初めて戸惑い、右も左も分からなかった自分達に美しい女神が天の助けとばかりに手を差し伸べて冒険者となって今に至っている話や、同じ仲間の話を語ったり、今日まで過ごしてきた中で何が大変だったのかもアスナが戻ってくるまで会話は続いた。

「おまたせー。はい、イツセーさんとキリト君」

「おおっ、待ってました」

「ん、サンドイツチか。美人妻の手料理は美味しんだよな」

「や、やだ美人妻って……っ。まだキリト君とはそんな……」

うん、やっぱりこいつらはリア充で間違いなしと目の前で二人して照れる様子をガン無視する。

「そういえば主神はどうしてる?会ってみたいんだけど」

「女神様はバイトに出かけてるの」

「俺達はまだ駆け出しの冒険者で弱小の派閥だから仕方がなくな。でも、俺達を助けてくれたあの女神様に感謝している」

関係は良好の様であったが、神がバイトをしているなど思いもしなかった事実は受け入れ難かった。半ば放心状態で「神の威厳はどうしたんだよ……」と嘆く一誠や不思議そうに声を掛けられてようやく覚醒した。顔を覆う鎧の頭部をガチャと外し、真紅の長髪を背中に流し、右眼に眼帯を付けた金色のスリット状の左眼を晒す一誠の顔が二人の視界に入った。

「……もしかして、同い年だったりするか?」

「いや。今年で19になるな」

「あ、年上なんだ」

顔の若さから推測して、恐る恐る訊ねるキリトに一誠の年齢は自分達より上だとアスナは朗らかに述べた。

「じゃあ、敬語はいいかな？年上だけどフレンドリーな感じで話したいから」

「別にかまわないぞ」

「そっか。それじゃこれからよろしくなイツセー」

同期の若い子供同士の食事が始まる。パンにサラダや肉、チーズ、特製のソースを掛けたサンドイッチを咀嚼し、素直に美味しいと感じた。

「アリサ、美味しいか？」

「うん、美味しい」

「よかったー。いっぱい食べてね？」

「この子はイツセーの家族か何か？」

「そうだな。そんな感じだ。ん、想像通りだ。美味しい。家事はアスナがしてるのか？」

「他の女の子の友達もしてるの。男の人、キリト君たちじゃあちよつと心配で……」

「ああ、一人暮らしをして何時も簡単にパスタだけで済ませちゃいそうな感じだもんな」

アスナが顔を驚きで目を丸くした。

「凄いつ、うん、当たってるよ」

「……どうして初対面の相手に人の私生活を看破されるんだ」

「……雰囲気？」

キリトは頭を垂らし肩をガクリと落とした。隣で苦笑いするアスナが弁明もしないのは事実だからだろうか。故に一誠は呆れる。料理を作るならもう少し手を加えろと。

「言われなくてはならないとなキリトの字」

「それも待て、どうしてその名前を知って……っ！」

「え、本気で言われてんの？適当な渾名を言っただけなんだが」

「ぶっ、くふふふ……っ！」

二人の会話のやり取りに笑いを堪え切れず噴いた少女に何とも居た堪れない気分のキリト。何故か恥ずかしくなつて背を向けてサンドイツチを頬張る少年に「ごめん、ごめん」と謝るアスナは目尻に溜まった涙を指で拭う。

「ふうーん？仲が良いんだな本当に。二人の出会いはどんな感じだったのか教えてほしいもんだ」

「……………えっと、それはちよつと言えないかな」

「なんでだ？別に恥ずかしいわけでもなからうに」

「いや、酷い言い方をするけどイツセーには言えないんだ。本当にどうしても」

申し訳なさそうにアスナが言い、困った顔でキリトは言葉を硬くして拒んだ。二人の甘酸っぱい出会いを秘密にするほど、過去に何か遭つたのか——と勘繰るものだが一誠だけは気づいている。

「そっか、それは仕方がないな。同じ穴の貉同士、話を聞きたかったが」

意味深な言葉を耳にし「「え？」」と漏らす眼前の二人を他所に見えないところからある物を亜空間から取り出し、テーブルの上に置いた。

「これで理解する筈だ」

ソレは、二人にとつて馴染みのある物だ。ソレは、この世界には絶対に無い『機械』の塊だ。そしてソレを目にした瞬間。二人は目を驚愕で見開いた。

「嘘、何で……………っ!？」

「……………もしかして……………『お前も』なのか……………?」

キリトとアスナの反応に一誠は大いに満足げに笑みを浮かべた。

「ん、お前の想像通りだろう。ただし、俺と同じなのは別だが」

「別……………?だけどこれは、この世界には無いものだろう」

「そうだ。だけど、一度ぐらいは考えた事はある筈だ。世界は一つだけじゃない事を」

「—————」

確信した。キリトとアスナは——この世界に迷い込んだ異邦人

でありながら一誠がいた世界とはもつと別の異なる世界から来た異邦人なのだ。

「それと同じ穴の貉は俺達だけじゃなく、この子もそうなんだ」

「え、アリサちゃんもっ?」

「アラガミって化け物が世界中に跋扈している世界から来たそうだとキリト達の世界には存在しているか?」

「いや、そんな名前の化け物は聞いたことも見たことも無い」

否定してアリサや一誠と異なる世界の人間だと知る。そして同時に他の可能性も浮上する。

(となると、別の世界から来た他の人間もどこかに点在して生きているな)

たまたま二人やその仲間達はこのダンジョンにいたに過ぎない奇跡と偶然に、己の境遇は二人だけのものではなかったことに安堵感を覚えたところで、キリトが真剣な面持ちで話しかけた。

「イツセー、君も俺達と同じ境遇なら元の世界に帰る方法を模索しないか」

「人間がそんなことできるのか?次元レベルだぞ。神様じゃなきゃどうにもならんぞ」

「分かってる。だけど、何時までもこの世界で生きていくわけにはいかないんだ」

「絶対に帰れなかったらこの世界で骨を埋める他ないぞ。それでもか」

「うん、今は仕方がないけど。今希望が見えた気がした。私達と同じ異世界から来たイツセーがいるなら、この世界には他にも異世界から来た人がいるって。その人達を探して皆でそれぞれの世界に帰る方法を探せるって」

アスナやキリトの目から強い憧憬の輝きを宿し、本気で言っているのだと一誠に伝える。

「貴方も帰る場所がある筈だよ。それは私達も同じ。だから、一緒に探さない?」

「それができる具体的な考えがあるなら話は別だ。けど、今は無いん

だろう?」

「今は、ね。でも、この世界には神様がいます。神様の力で何とかなるんじゃないかって私達は考えているんだけど。どう思う?」

淡い希望を抱くアスナの気持ちに眉根を寄せた一誠。

「神の力を封印して娯楽に飢えた人間臭い神連中なんか期待しても無意味だ!」

「強く否定したっ!?!」

素っ頓狂に声を上げたあと「いや、そこは期待しようよ?」「ああ、神様なんだぜ?」「俺達が知っている神はバイトなんかするかよ?」「それを言われると強く言い返せない」等と混迷する話は程なくして終わった。

「取り敢えず、二人……いや、お前達の気持ちは否定する気はない。俺も元の世界に帰る気持ちはあるし理解できる。だけど、仮に次元を超えることが可能になったとして望んだ場所に行ける確率は低いぞ。逆に元に戻れなくなって宇宙の中を彷徨う可能性もある。俺はそれが嫌だね」

腰を上げて立ち上がり、「ごちそうさま」と告げる。

「ごっちはごっちで元の世界に帰れる方法を探す。それでお前達の世界の地球に戻すこともできるだろうからな」

「俺達と協力はしてくれないのか?」

「冒険者としてなら協力ぐらいはしてやるよ。同じ穴の貉のよしみだ。お前達の世界の話も聞きたいし友好的な関係を築きたい」

亜空間から亜麻袋を取り出し、二人の前に置いた。

「俺からの餞別だ。それで少しぐらいは生活の糧をとるだろう」

「え、これってお金……? いいの?」

「世界は違えと同じ境遇の者がこの世界で死ぬなんて後味が悪い。だけど、今の俺は「ヘファイストス・ファミリア」の団員だからきちつと代価を払ってもらおうぞ?俺が打てる最高で格好いい武器の一式が欲しいと言うならな」

「……ローン払いでもいいなら」

格好いい武器という誘惑に心が揺れ、「ちよつ、キリト君!」とどこ

か悲鳴を上げるアスナの反応がおかしくて一誠は笑った。

「ふうむ……イツセーの世界とは違う、また別の世界から来た子供達がおったとはうちも初めて知ったで。アルテミたんもおったことも初耳や」

「ん、そうか。しかし驚いた。俺と同じ境遇の奴がいるなんてな。ロキ、この世界はどうなっている？——まさかと思うが天界の神が面白半分^で他の世界からランダムで喚び寄せているんじゃないだろうなあ」

「む、無実やで!?地上におるうちら神々はそんなことできへんし、天界にいる神連中も異世界なんぞ存在すら知らへん!せやからうちを睨まんといて!」

キリトとアスナの存在を伝えるに「ロキ・ファミリア」に訪れ、アイズも含めフィン達も執務室に集まって事の詳細を伝える一誠の口から出た言葉には驚いた。他にも別の世界から来てしまった人間がオラリオにいることは本当に知らないでいた様子だった。可能性の一つとして^{デウス・デア}超越存在の神々なら神秘の召喚の形で別の世界から招くことは可能だと理が適う発言と一緒に睥睨する一誠にタジタジなロキ。

「娯楽に飢えた神だからやりそうなお……」

「ガレス、それを言われるとうちら神は説得力が無くなるから止めてえな!」

「娯楽に飢えてる神々だから全力でやりかねないけれどね」

「ロキ……」

「む……」

「……」

「うおおおおいっ!?!うちはホンマに無実やで!?!」

必死に弁解するロキは、ぜえぜえと疲労困憊してまで無実だと訴える。だが、実際にそんなことできそうなのは神々ぐらいだ。疑いたくなるのも分かる。

「イツセー。その者達もお前と同じ存在だったか?」

「半々だろうな。俺とアリサがいた世界、あいつらがいた世界とは、同

じどころはあるけれど違うところもあるようだ」

「なに？アリスもだど？」

あ、言っただけだったわけ？と今更のように思い出してアリスも異世界から来た異邦人だと伝えた。

「お前、何で黙っていたのだ。それと神アルテミスは知っているのか分かってるのか？」

「俺の正体を教えるまでロキ以外信じないだろう？それとあの二人は素直っぽそうだった。信頼と信用で結ばれているなら知っているさうだが、俺と同じで秘匿している可能性もある」

「普通は黙っていればバレることもないやからなあー。ってイツセー、『俺の時はお前らが言わせただろうが』的な視線を向けてくるの止めてくれへん？」

事実だから仕方がない、とフィンは執務机の上に行儀悪く胡坐掻いて座るロキに対して苦笑いしつつ口を開く。

「イツセーと彼等のように敢えて抱えている秘密を明かそうとしない人間は数多くいるだろう。その中で異世界からやってきた人間を探り当てるのはかなり至難の業だ。今回は君の名前に興味を持ったから見つけた様なものだけど、この世界中のどこかに存在する同じ境遇の者達はそうじゃない。イツセー、君はどうする？」

「どうするって今までどおりじゃないか？この世界に来てしまったからには自力で生きる他ないだろ。元の世界、故郷に帰れず無念を抱いたまま死んでな」

「君もその一人になるかもしれないのに？」

フィンの指摘に対して肩を竦めるだけで何も言わない一誠。徐に窓の外へ視線を向け、遠い目で見つめる。

「まあ……俺はこの世界の人類の天敵だ。故に本性を明かしたらその瞬間から俺は人類の敵と認識されるから誰かと一緒に暮らすことはできない。アリス以外とはな」

「……」

孤独——それが今の一誠に突き付けられた現実……。己の意思で別の世界に来たわけではない。人型のモンスターの幸せはこ

の世界では得られないと感じている一誠を、ロキ達は一様に口を閉ざしてただ目を向けることしかできない。ずっと一緒にいたいと述べたアイズも結婚をしたいかどうかは別の話になる。人間とモンスターが子供を成すなど精神が狂っていると言われても当然のこと。それらを全て考慮した上で一誠は一緒に暮らすことはできないと述べたのだった。フィン達もそれを悟って押し黙る。

「……………なあ、イツセー?」

「んじや、俺は帰るな。邪魔した」

扉から出る間もなく、足元に展開した魔方陣でいなくなった一誠に最後まで言えなかったロキの開き掛けた口は虚しくも閉じる。溜息を吐くガレスが開口一番に言う。

「同情、なぞしたら怒るかもしれないな……………」

「現実と事実は変えようがない。それでも、彼は今後のことを考えて孤独な運命を進むか」

「言葉と心は通じる。しかし、それは仮の仮面を被っているから成せる」

「下界の子供達が全員、イツセーと打ち解けるわけじゃあらへん。寧ろ大いに逆や」

この世界での一誠はマイナスの存在でしかない。ダンジョンのモンスターより醜く見えてしまう恐れもある。人の皮を被ったモンスターがのうのうと人類と同じ土俵の上に立っているなどあつてはならない必然の摂理だ。どうしようもない関係と状況。

「フィン、もしも【ファミリア】の皆にイツセーのこと教えたらどうなると思う?」

「誹謗中傷は間違いなく受ける。知っていて尚、どうして討伐しなかったのかと言われてもおかしくない。そして信用と信頼はガタ落ちだ。僕とロキ、団長と主神としてもね」

「んーやっぱ、そうなるんやなあー」

言える筈のない秘密を明かすことは確実にデメリットが発生する。主神としてそれは絶対にあつてはならない事で困った顔で天井を見上げる。

「イツセーの世界はモンスターと共存できる環境だったから幸せだったかもしれないなあ」

「残酷な世界に来てしまったのはもはやどうしようもない」

「自分を殺して相手の為に生きる彼がモンスターだなんて未だに信じられないけどね」

「世渡り上手ってことじゃろう。必要のない戦いを避け、余計な血を流したくない為に」

なんと憐れな人型モンスターなのだろうか。その一言で尽きるロキ達を見つめた顔を床に目を落として俯くアイズ。自分と同じで親に会えない、それどころか人類の敵として誰かと一緒にいることはできない孤独さが永遠に纏わりつくその辛さは計り知れない。一緒に寝た事があるが、あれはモンスターとは露にも知らなかった時だ。それでも漆黒の翼ワイングとアーンの共闘を経て、一緒にいたい気持ち湧いて好意に気付いた。しかし、やはり結婚まではまだ考えられない。でも、それでも……

「……」

アイズはロキ達に見守る中で静かに執務室を後にする。

「ソー、ロキ。ちょっと僕と賭けをしない？」

「ええで、うちも吹っかけようと思ったところや」

彼女が完全に執務室から離れる気配を感じてから、困った顔をしながら片眼を瞑ってロキを見るフィンといたずらっ子の様な笑みを浮かべるロキを、古くから付き合いの長いリヴェリアとガレスも何となくだが察する。

——その日の夜。闇夜に紛れて【ロキ・ファミリア】の正門から小さな影が出てきた。夜間の門番が正門にいないことを怪しんだが、バレーズに済むなら越したことはないと言われて膨らんだバックパックと愛剣を携えて夜の街に向かって背中から魔法の翼を生やして飛ぶ。目指すは北と北西のメインストリートの区画に挟まれたあの廃墟の場所だ。地上と空からの移動の距離は段違いで速く直ぐに辿り着く。なので、翼を生やす影ことアイズは驚きで目を丸くした。

「ロキ・ファミリア」の団員達が何故か開いている透明の門の前で、物々しい得物を持って仁王立ちしているのだ。

「あ、来たぞ家出娘だ！」

「アイズちゃん、一緒に家に戻りましょー！」

直ぐに理解できた。そして連れ戻そうとある人物の命令でいるのだとことも。ならば、この場にこの状況の元凶もいるだろうと悟つても、

「邪魔・・・！」

押し通る。団員達も言葉で通じない相手ならやることは一つだと後衛や建物の陰から魔法を放った。空中に飛ぶ様々な属性の魔法がアイズに集中砲火する。下から縄や鎖などが投げられ捕らえようと動き出す。

「母の風よ！」

全てを弾き、突破を図ろうとするその浅はかな考えは、団員達に紛れて隠れていた一人の筋骨隆々のドワーフの拳で潰された。

「うっ!？」

風ごと殴られ、咄嗟に構えた剣を持っていた手が痺れても吹き飛ばす体は何とか宙で留めた。その直後。真下から矢のごとく飛んできた小柄の小人族の槍が光り、魔法の翼が見るも無残に裂かれ瞠目するアイズに浮遊力が失つてしまい、地面に落ちてしまった。

「な、何で・・・。」

「分からないのかい？なら、敢えて口で言わせてもらおうよ」

槍の柄でトントンと肩に叩く小人族は口を開く。

「無断で荷物を纏めて家出するいけない子供を迎えに来たんだ」

「そう言うことじゃアイズ。今回はちっとばかりし何の理由もなく家出なぞリヴェリアではなくとも儂等も黙ってはおれんわい」

「フィン、ガレス・・・。」

フィンとガレス、そして団員達。「ファミリア」総出であろうがなかろうが、今日に限ってどうしてここまでするのか理解に苦しみ混乱する。少女の家出を邪魔する最難関の相手に分かってもらえるわけがないと思いながらも言うしかない。

「家出、なんかじゃない」

「では、なんだい？」

「私は、イツセーと一緒にいるって言った」

「もう彼は【ロキ・ファミリア】じゃない。「ヘファイストス・ファミリア」の団員だ。関わるなどは言わないけど、それでも派閥同士の問題を起こしてはいけない決まりがあるのは教えられて知っている筈だアイズ。その荷物を持ってイツセーと一緒に暮らすと言うのは团长として見過ごすことはできないよ」

「じゃあ、アリサは？ずっとイツセーと住んでた」

「まだ【ロキ・ファミリア】だったから許していた。でも、今はそうじゃない。現在アリサの引き取りの説得をロキとリヴェリアがしている真っ最中だ。そこに君まで住み着くことになろうとすれば团长として看過できないよ」

至極尤もな理由であり、当然の行動だと話を聞いている第三者がいれば納得できていただろう。が、アイズも言われずとも分かっている。その上で、アイズは行動をしているのだった。荷物を地面に置いて剣を構える。実力行使だ。

「皆に迷惑を掛けない。だから、そこどいてっ」

「シー、どけない」

「どいてー」

「退いてほしかったら僕達を倒して行くしかないよ。でも、それは無謀という話だアイズ。今の君は絶対に僕とガレスという壁は超えることもできない」

スツと槍を夜天に衝き掲げた。その意味は直ぐに分かった。

「まずは家出をしようとした君へのお仕置きだ」

槍をアイズに向かって振り下ろし、狙いを定める様に突き付けた矢先。魔法の咆哮が放たれた。明らかにフィン達の言動がおかしい。しかし、悠長にそれを考える時間は無い。迫りくる魔法の雨に風を纏って移動する。フィンやガレスと戦っても勝てないのは身をもって経験済みだ。なら、戦わずして行くしかないとどうしても思うわずにはいられない。魔法の雨を弾き、横から遠回りに門の向こうへと

行こうとするも。

「止まって見えるよアイズ」

「!?」

門から漏れる光を背後にアイズを捉える碧眼の瞳は、横薙ぎに槍を振り払って風の防御がないような凄まじい打撃を与え、弾き飛ばす。石柱を壊しながら吹き飛ばす少女は意識を必死に繋げ、意志の強い光を絶やさずフィンを見据えながらも別の方角から行こうとする。しかし――。

「考えがぬるいわい」

もう一人の巨大な壁に阻まれる。ドワーフという種族とは思えない目では終えない動きでアイズの頭を鷲掴みするほど大きな手の張り手は風ごとバンツ！と幼い身体に叩かれまた吹き飛び瓦礫と化した壁に激突する。槍の打撃よりよっぽど体中に響いたようで地面に横たわる体に纏う風の魔法が弱弱しくなった。

「あ……くっ」

激痛に体が苛まれるも、まだ諦めの色が浮かんでいない顔と死んでいない光を孕ます双眸が剣を地面に突き立て、ゆっくりと立ち上がる少女から見て取れる。それでも二人は阻む。三度目の魔法の雨がアイズに向かって降り注ぐ。また同じように弱弱しい風の勢いを戻して――フィンとガレスに飛び掛かった。

「ああああああああああっ!!!」

「自棄になったかな?」

「そうは思えんがのお」

彼女の考えが分からずともやることは変わらないとガレスが動く。これで完全に止めると腕に筋肉を盛り上げる。多少の痛手は仕方がないとフィンも目を瞑った。そして、アイズとガレスが直撃する直前。アイズは全力で剣にだけ風を纏い、駆け出した足を全力で止めて後ろへ飛んだ直後に剛腕な腕が風を纏う剣に直撃した。本来のダメージを何割か減らした『技術』にガレスは驚いたように目を丸くした。それでも第一級冒険者の力は確実に少女の体にダメージを与えた。それでも――。

(あきらめ、ないっ)

全身が千切れそうなほどの痛みがアイズにこれ以上戦うなど警告を発するが、奥歯を力の限り噛み締めてそれを無視する。吹き飛ばされている体はある場所にぶつかろうとしている。その場所を一瞬で確認して体勢を整える。これが最後だと言わんばかりに風を吹きあがらせる。宙で回転し両足を崩壊しかけている壁に着壁する。この感じはあの時と同じだ。一誠の手で漆黒の竜に向かって投げて貰った時と同じ——それを一人で再現しようとアイズは金の双眸をガレスとフィンに強い眼差しを送った。

——いま私が出せる最大出力!

「^{テンベスト}母の風よ!」

「——ふむ、どうやらお主らは幼い子供に寄ってたかって大人げないことをしているな? まあ、行って来い小娘よ」

どこからともなく吹く風の猛威が突如、ガレス達に襲いかかった。声と共に荒ぶる風が開き続ける門へ向かって一直線に飛び出すアイズを包み込んで背を押し、小型の嵐となってフィン達に突貫する。その凄まじい風は周囲のものを吹き飛ばし、団員達は培った経験上「あれはヤバイ!」と察知して左右に緊急回避する中でもガレスは最後の砦として阻む。

「どいて、ガレスッ!」

「どいてほしくば儂を超えてからせんかこの家^{バカ}出娘があっ!!!」

神風の嵐の咆哮が唸った。両腕を広げ猛り狂う風を受け止めるガレスとの三度目の衝突は、あまりにも凄まじい風の激流を凌ぐのに必死で冒険者達が顔を腕で覆い、フィン以外は結果を見逃してしまっ

た。
「^{テンベスト}吹き荒れろ!」

「むううううっ!」

——風は誰しも止めることは絶対に不可能。受け止めていた体や掴みかかろうとしていた手と腕がアイズを包む風に弾かれ、自由な

風の通り道たる門の向こうへ他の団員達を吹き飛ばしながら行ってしまった。その後、直ぐに何者かが門の中に入って行った。

「あ………っ！」

ついに門の中に入り、アイズを守る風は解かれ、地面に滑り落ちる。もう全力中の全力を出し切ったからだからは力を込めることはできない。『精神枯渇』マインドゼロにも等しい症状が襲う。

「っ………」

いか、なく、ちや………。

体が汚れようと無様な姿を晒そうと、強さを求める以外の少女を突き動かす原動が目の前にある。手放せない剣が今になって凄く重く感じる。それでも両腕を前に出して体を地面に擦らせながら移動する。朦朧とする意識で目の前が霞んでいても目的の湖はまだ遠い。だが、全身に蓄積しているダメージと体力と魔力の激しい消費で少女は何時しか重たい瞼に抗えず目の前が真っ暗になった。

「むう、気絶しておるのかこやつ」

一拍遅れて左眼に眼帯を付けた褐色肌の少女がアイズを見下ろす。

「しかし、理由は何であれ見事であったぞ【人形姫】」

あのドローフを吹き飛ばすとは！と一人で笑い、アイズの体をパンパンに詰まっているバツクパツクの反対側の肩に担ぎ、歩き始め森の向こうへと姿を消す頃。

「ガレス、大丈夫かい？」

「まったく、何故あやつがこのタイミングでやってきおったのだ。ここに来させんよう見張っていた連中は何をしておったんじゃ」

大の字になって夜空に輝く満月と星を見上げる己に見下ろすフィンへ向かって愚痴を零す。今回の件は周りにも騒動で迷惑を掛けるかも知れない配慮で、あらゆる考慮を想定して対応したつもりが二人でも予想外なことであったようだ。

「大方、強行突破されたんだろうね。理由は多分似たようなもんだろうけど本当に横槍を入れられた」

上半身を起こした、癖になってしまったかもしれない苦笑いをガレスに投げかけ、「まったくじゃわい」と溜息を吐くドワーフは、怪我人の搬送と事の收拾を片づける団員達を見渡す目を最後にフィンに向けた。

「で、賭けの方はどうなんじゃ」

「ソー、引き分けかな。彼女の介入があったもののあの娘は自力で僕らを超えた。僕は止められる方で賭けていたんだけどね。ロキは止められない方だ」

「あやつのせいで引き分けとは、アイズも酷じやな」

「勝手にあの娘を対象に賭けてる僕等はずっと酷いけどね」と非を認める小人族パルウムにドワーフはもう一度息を吐く。

冒険譚4

運び込まれた気絶しているアイズを空き室のベッドに横たわらせ一誠はロキとリヴェリアから説明を受けた。ロキ達はアイズがここに移り住む気であることを悟って、本気でいるならそれ相応の対応をするフィンとガレス達の壁を超えることができるかできないか、彼女の今後の事を考えた上で賭けをする。

「ファイたんの子供がまさか介入してくるとは思わなかったからなあ。きつとフィンも引き分けと判断しと思う。まさかイツセーの差し金とちやうやろうな？」

「阿呆か。人ん家の前でドンパチされた方だぞ。寧ろお前らが連絡をしてこなかったらこつちが大暴れしてた方だ。それと団長のその荷物は何だと俺は訊きたい」

今まで黙っている彼女に話を振り、訊ねる。椿はバックバックに触れながら理由を語った。

「うむ、手前もここに移り住むつもりで用意した荷物だ。主神様の許しも得ておるから異論は聞かん。団長命令だ」

「ここまで横暴な女は何時以来だ……」

抗議をする気力も失せた、と心の底から溜息を吐いて頭を垂らす。会いに行つて文句の一つでも言おうと考えたところでロキとリヴェリアにも訊ねる。

「で、違う派閥の個人的な家に住まわせる気なのかお二人さんは。賭けごと云々無しでだ」

二人は顔を見合わせ、少し困った表情で肩を竦める。

「相手がファイたんの子供かうちの知らん子供だったら反対やで？ま、イツセーなら問題ないと思つとる。脱退するわけでもあらへんしな」

「ここまで派手にやらかしてしまった手前だ。連れ戻したらこの子はまた去年の様に反発して家出するだろう」

暗に一誠だったらいいと気絶してるアイズの想いは成就した。普通は駄目だろ、と思いいながら椿に視線を変える。

「他派閥の冒険者が一緒に住むことになるらしいけどいいのか団長さんよ」

「手前は問題ないが？直接派閥に関わるのであれば考えたが、この小娘はそうではなからう【九魔姫】？」

「ああ、その子がそうする筈もないしする理由もない」

であれば、問題無いと断言する椿に諦めの嘆息を零す。

「寝泊まり程度ならともかく、アリサ以外誰かと住むなんてする気なかつたのに」

「その上でアイズは、お前と一緒にいたかつたのだ。好かれている証拠でもあるのだぞ、少しは喜べ」

「うん、複雑極まりないと返しておこうかりリア」

聞き慣れないリヴェリアに対する呼び方を椿は「リリアとは？」反応する。

「リヴェリアの名前から取った渾名と愛称やで」

「ほう、かのオラリオ最強の魔導師にそう呼ぶ者が現れるとは感服する。お主ら、手前が思っているよりも仲が良いのだな」

カラカラと笑う椿に「こいつが勝手にそう呼んでいるだけだ」と溜息を吐くリヴェリアは言い返すが、椿は笑みを固める。一誠も呼び方を変える気はないし、ロキも止めようとするどころか可愛いと称賛する始末だ。さつさと諦めた方が賢明か、と悩む彼女の心情を知らない三人に話をあからさまに戻す。

「だが、アイズはまだ子供だ。椿とイツセーは他派閥の団員。問題が無いにしろそんな中で一人だけ住まわせるわけにはいかん。しばらくは私もここに住まわせてもらうぞロキ、イツセー」

「え」

驚かない椿を除いて二人は間拔けな反応をした。ここで思いもしなかつたリヴェリアの申し出には、後で言われたフィンとガレスも少なからず驚かされたその日の夜から一夜を明けて——翌朝、アイズは目を覚まし、持ってきた荷物もあることと一誠から昨夜で決まった話を聞かされ、把握した。

「迷惑……だった？」

「驚いた方だ。そして、複雑だな。モンスターの俺とここまでして一緒にいたいだなんてさ」

「……貴方を独りにしたくなかった。私は独りじゃないことを気付かせてくれたイツセーが独りだなんて」

「しようもないことさ。この世界じゃあな」

自嘲的な笑みを浮かべる少年に幼い少女は「だから」と口を開いた。「貴方も独りじゃないって、私もいるってことを伝えたかった。異世界から来たモンスターの貴方はこの世界のモンスターとは違うって分かったから」

「モンスターなのは変わりないがな？」

「でもイツセーは元人間だった。だから、人間の心を持つてるあなたとならずと一緒にいたい」

手を伸ばして一誠の手を握る。小さな手だった。人の皮を覆っているモンスターの手を人間が触れている。人の温もりと変わらない何故か安心する温かい手を頬に寄せた。

「ん、温かい……お父さんみたいな優しい手」

「……」

酔狂な、と野暮な思いは抱けない。少女の本心が伝わり、否定することもできやしない。まだ感情も幼い少女の成長を見守り、数年後改めて問おうと己の手をすりすりされる感触を覚えながら考えた数十分後。荷物を纏め持参してきたリヴェリアがやってきた。

「ほい、アイズとリヴェリア、椿の腕輪に転移の魔法も加えておいた」何も変わらない金色の腕輪を返された。三人は受け取りどこか変わったのかと腕輪の変化を探す眼差しで調べても目立ったところはなかった。

「魔法が掛けられてる様子はないぞ」

「自分で魔法を発動するんだから目立った変化はないに決まってる。やり方は通信する時と同じだ。転移場所先という選択が増えるから」

宝玉に触れ、立体化した影像に指で動かし、確かに増えている。コイネー共通語で転移場所先と。それを確認と押して見ると「幽玄の白天城」

と名前が直ぐに出てきた。

「確認はできたな？この城は俺以外合言葉を言わない限り扉は開かない。だからそれができないリリア達は、魔法による移動で直接入らなきゃいけない。それを可能にしたのがソレだ」

「何故にそういう風にこの城を造ったのだ？」

「企業秘密」

それ以上話を聞けない三人は、一誠からこれからどうするんだと訪ねられた。答えは必然的なものだった。

「手前はもう少し部屋を整える」

「ん、私も」

「来たばかりの私もだぞ」

本来の本拠ホームから移り住む自分達の部屋作りを一日費やす三人とは違う一誠は、手助けをしようかと訊くと揃って頷かれた。

「持ち切れなかった物や家具はまだ『ファミリア』に置いてある。取りに行かなければならないのだが」

「分かった。繋げるから運ぼう」

「繋げる？」

何も知らないリヴェリアは小首を傾げ、何でどこを繋げるのだろうか頭上に疑問符を浮かべた。アイズと椿もいる手前で一誠は手を誰もいない虚空に掲げ、空間を捻じ曲げる。グニヤリと歪む空間は穴を作り、別の場所へと繋がった光景を見て、とても見慣れた場所と繋がったことでリヴェリアとアイズ、アリサの目は丸くなった。

「私の、部屋？」

「これで楽だろ？」

唖然とするハイエルフの背後に回って背中を押し、彼女の部屋を繋げる穴の中へ潜る。潜った穴の向こうからアイズを手招き、手を引いて部屋に入れる。

「……………どうなっている。これもお前の魔法なのか」

「ん、ちよつと違うかな。これは魔方陣で介して移動する方法とはまた異なるやり方だ。何て言えばいいかな。リヴェリアの部屋から執務室まで距離はあるだろう？その距離を無くす方法でこうやって来

てるんだ」

そう言つて一誠はまた同じやり方で別の場所を繋げる。机の上で座り、事務の仕事をしているフィンに雑談をかわすロキとその会話に交るガレスの姿が目に入る。

「ん？　なんや、この穴——つてイツセーとリヴェリア？」

主神が気付くと二人も穴の向こうにいる二人の存在を知つたところで、バイバイと手を振る意図的に一誠が穴を閉じた。

「こんな感じだな」

「……」

異世界の魔法、もはや何でもありだな。瞼を閉じて静かに吐息を漏らす。「神の恩恵^{ファルナ}」で発現した魔法では空間魔法など希少魔法^{レアマジック}を得ることは極めて難しいかもしれない。異世界の魔導師^{メイジ}達はそんな行為の魔法をほいほいと行使できるのだろうか？　気になって訊ねてみたところ。

「んや、普通は魔方阵で移動する方が常識なんだ。空間を介して行うなんて上級者がするもんだよ」

「なら、お前は魔導師^{メイジ}ではないのに何故できる」

「練習あるのみ」

努力で頑張つてできるようにした、と言わんばかりに言い返されてしまった。実際にどうやってできる様にしたか定かではないが、一誠は努力家で頑張り屋さんなのだとこの瞬間知った。椿も穴から潜ってきたところでリヴェリアの荷物運びが始まる。それからアイズと椿の部屋作りにも精を出して日が暮れる前に終わらせたのだった。

「イツセー、思っていた以上に早く終えることができた。感謝する」

「手前も感謝するぞ」

「ありがとう」

三者三様から感謝の言葉が送られ、軽く相槌を打つ。

「さて、俺はそろつと夕食の準備でもしてるから後はのんびりと過ごしてくれ」

「因みに、何を作る気にいる」

「ンー、そうだな」と献立を頭の中で考えようとしたところで一誠の腕

輪の宝玉が点滅し、触れてみると光と共に目の前で浮かぶロキの立体映像。

『イツセー！今夜の夕飯はなんや？うちらそつちで食べに行くから多めに作っておいてやー！』

言いたいことだけ言い残して通信を切るロキに無表情な一誠。「すまない」と一応謝っておくりヴェリアに。

「のう、主神様も食べにくるそうだが良いかイツセーよ」

椿からもヘファイストスの来訪の話がされて、「俺の家は居酒屋か料理店か何かかよ」と深い溜息を吐いた。

「……そういえば、ジャガイモがまだ大量に残ってるんだったな」「ふむ、で、どんな料理をするつもりだ？」

椿が問い、視界に彼女が入ると意味深に黒髪赤眼を見つめ献立を決めた。

「……うん、おふくろの味にしよう」

「『おふくろの味？』」

興味深々だが訊き慣れない料理名に四人を置いてリビングキッチンに向かう一誠にやはり疑問符を浮かべるリヴェリア達。どんな料理なのか分からないが好奇心で作る姿を見たいと後を追う——数時間後。

すっかり暗くなったオラリオの時刻は夜の六時過ぎ。欠けた月が顔を出して幻想的な月光を地上に照らして夜の街に繰り出す一般人や冒険者達を見下ろす。仕事を終え、仕事帰りに酒を一杯飲み、気を許した者と酒をかわし、料理の味を楽しみ今日という日をメようと騒ぐ光景は変わらない街から視点を変えて、一誠の家に集まる二柱の女神とその幹部の眷族達はテーブルに置かれた大量のジャガイモと人参、玉葱や隠元、肉など盛られた光景に言葉を失う。

「イツセー、これがおふくろの味というやつかの？」

「通称は肉じゃがと言う。極東の料理でもある」

「手前の故郷の料理……」

Ⅱ 異世界の料理と繋がられるのは【ロキ・ファミリア】のみの話になる。人数分の箸と蓮華、ほかほかと湯気が昇る大盛り小盛りの白い

極東原産の米を入れた茶碗を配膳されたら食事前の祈りをする。

「いただきます」

と、言った一誠がすつと蓮華を取って山盛りの肉じゃがから掬って受け皿に入れた後で白いご飯と一緒に美味しそうに食べる。それを見てロキ達も見よう見まねで食べてみれば。

「ほう……何故か分からんが、食べて安心する料理など思ってもみなかつたわい」

「温かくて安心できる料理……ね」

「うくん、まさしくママの味やなあ……」

美味しい以外にも食べた人の心も温かさを伝える。ジャガイモをそつと割ると、程良く煮続けられたことで荷崩れせずに汁気をたっぷり含んだ芋は、芋本来の味の他にもあまじよっぱい汁の味がしつかりと浸透して美味しい。これが何時も食べているジャガイモなのかと疑うがこのねつとりとした触感間違いなく芋だ。ここまで味の染みた味わいの料理は初めかもしれないロキ達は、途中から席を外していなくなつた一誠から新たな料理をテーブルに置かれる。

「これも極東の汁物に海の子藻を入れた。味わってくれ」

と、茶色の汁物の中に深緑の子藻が漂っている。試しにとずつと音を立たせて飲むと。

「これもまた、味わつたことのない独特な味だが美味しいな」

好評を受け、嬉しそうに微笑む一誠だった。茶碗の中が空となると、一誠にお代りを求める声が挙がる。

「肉じゃがの方もまだまだ作つてあるから遠慮なくな」

「うむ、手前はここの肉じゃがが気に入つたぞ。遠慮なく食べさせてもらう」

「イツセーの料理は美味しいね。前回のカレーも美味しかったけど、この落ち着いた料理もいい」

「あの何でもかんでも力で解決する不良店主が作れんじやろう料理じゃわい」

「本人の前で言うなよ」

「……つつつ」

「この子、震えているけれどどうしたの？」

「あ、あー。アイズたん、ちよつと店の中でおイタしてなあー。拳骨をもらってしもうたんや」

客を殴る店があるのかと二柱の女神の話に耳を傾けて啞然とする一誠だった。想像が安易に浮かべられるのは不思議でしようがなかったのはどうしてだろうか。

しばらく経った頃。大量に作っていた肉じゃがは殆どなくなった。予備に作っていた肉じゃがも完食され、三皿目の肉じゃがを食べたところで皆の箸がテーブルに置いて誰も食べようとはしなかった。

「多めに作っておいてと言ったうちなんやけど、流石に作り過ぎとちやうかあ〜？」

「ガレスと団長が一番食べそうだったから」

「おう、間違いなく食べたわい」

「しばらく芋はいらん程にの」

ジャガイモの感触はもう覚えたと言外する二人の言うとおり。一誠の予想も当たって三分の二まで減ったがまだそれなりに残っている肉じゃがはどうするか、既に処理方法を思いついている少年は徐に残り物になろうとしているそれを手にした。

「んじゃあ、温かいうちに知り合いにもおすそ分けしてくるわ」

「知り合いって・・・あ、アルテミたんとかか？」

「え、アルテミス。彼女がいるの？」

「うん、ダイダロス通りに拠点を構えてる」

一誠の背後の空間が大きく歪み、ポツカリと開いた穴の向こうは暗闇に包まれた教会の外。そして、外で夕餉の時間を楽しんでいる少女と男性、一柱の女神の姿をロキ達は確かに見た。穴を潜る際、鎧を纏って外へ出て開口一番。

「よー、お邪魔するぞー」

「え？って、イッサーっ!？」

携帯用の魔石灯の光で灯りと確保しての食事をしていた少年が背後の少年に気付き、素っ頓狂な声を上げた。アスナや他の団員達も食事を止め、何時の間にか現れた相手に度肝を抜かされた。

「用件を単刀直入で言わせてもらおう。コレ、食べない？」

「……肉じゃが？」

「そ、余ってな。捨てるのももったいないしどうかなって」

「お、おお……ありがたく貰うよ」

「ご協力感謝する。そんじゃ、また何時かな」

ほぼ一方的な話で、まだ熱が籠っている肉じゃがをキリトに手渡し、颯爽と空間の穴の中へと戻り閉じた。一方、手の中の料理を他所に半ば啞然と立ち続ける少年は少女に意識を戻される。

「キリト君。取り敢えず、温かいうちに食べましょう？折角懐かしい料理をくれたんだから」

「そうだな……あいつ、元の世界の料理も作れるのかよ。羨ましい限りだ」

「調味料とか分けてくれるならもつと私達の世界の料理が作れるのだけれどね。今度会ったら頼んでみようか一緒に」

「それはアスナに任した」

リヴェリア、アイズ、椿が『幽玄の白天城』に移り住んで早五日が経過した。だんだんと住み慣れる間は、仕事の通勤のように本拠^{ホーム}へ戻るハイエルフを見送り、少女達は連絡が来るまで自主練をしていたり、少年の仕事の手伝いをして時間を過ごしている。一誠の方は「ヘファイストス・ファミリア」の団員として武具や道具作製に時間を費やし、主神や椿を驚かせる。そして鍛冶をしている一誠の隣でジツと赤眼を向け様子を見守る椿。今彼女は血のように赤い槍を完成させた末端の鍛冶師^{スミス}の姿を見て訊いた。

「随分と赤い槍であるなそれは」

「炎属性にしたから赤いだろ」

完成した槍をその場で振るうと槍の穂先がボツと命が吹き込まれたかのように炎が発生した。続けて激しく振るえば炎の輪が出来上がり、渦巻く炎が槍から解き放たれ天井にぶつかった。

「……それは魔剣か？」

『鍛冶』のアビリティもないのにどうやって打てるんだ?」

火の粉が舞い散り、霧散する工房の中で槍の出来栄えに満足する一誠は、「ファミリア」に納品する為に作っていた他の武器と一緒に樽の中へ入れた。

「団長でもできるだろこれぐらい」

「うむ、無理だな。何故か知らんが手前とイツセーの打ち方はどうやら異なっておる。真に不思議だ」

「ふーん、そうなんだ」

(であるからお前に興味を持っているのだがな)

一人の鍛冶師^{スミス}として一誠の鍛冶の技術を見極めんという椿の心情を露知らず、納品する分の武器をまた作り始める一誠。今度はどんな武器を作る為に異なる技術を振るうのか隣で邪魔はしないと静かに見守る椿。

「イツセー、ここにもう一つ手前用に鍛冶場を増やしてはくれぬか?」

「だったら道具を全部持ってこい」

後日、増設した工房の中。一誠の隣で「ヘファイストス・ファミリア」の団長と一緒に武具を打つ姿を小さく笑いながら見守るヘファイストスがいた。

——とある日。

リヴェリア達三人はそれぞれ「ファミリア」の用事で家からいなくなった日のこと。久しぶりに二人になった日に限って特にやることがないまま街に出向くことにした。アリサと魔法の絨毯の上に寝転がってのんびりとして行く宛ても目的も無く、摩天楼^{バベル}施設の最上階^ルからおかしそうに見ている美の女神を他所に移動していた。絨毯の上で久々のゆとりを満喫していたそんな一誠達を照らしていた太陽が突如、黒い影に遮られた。

「?」

影が絨毯の上に踊る感じで乗って少年の視界に——水色が見えた。それが何の水色なのか始めは理解できず「水色?」と呟いた。

その後。

何故か、体に衝撃が走って絨毯から蹴飛ばされ、そのまま大通りのど真ん中で周囲の民衆や冒険者達がギョツと目を見開いて視線を集める中で潰れた蛙のように落ちた。ざわめきに囲まれる中、どうしてこうなったのか分からず、自動的^{オート}に飛び続ける魔法の絨毯は「イツセー！」と顔を出しながら叫ぶ幼女を乗せたまま生みの親を置いてどこかへ行ってしまう様子を視界に入れる。周りのどよめきなど感知もせず絨毯のみを意識する。少し膝を折って、凄まじい脚力で跳躍、あつという間に移動を続ける絨毯の真上に戻った。その際、アリサと己が地上に叩き落とされた原因とその元凶が碧眼の双眸を見開いていた。

「おいこら、よくも蹴落としてくれやがったな」

——^{アクアブルー}空色の髪に碧眼の瞳の少女の前で「俺は怒っているぞ」と雰囲気纏って睨みつける。相手は誰だか知らないが、いきなり乗り込んで蹴られたら誰だって好い思いはしない。真逆の方だ。

「お返しだ」

ここから蹴落とすと右足を女性に対して容赦なく振るった。地上に落ちて彼女がどうなるうが知ったことではないと気持ちで華奢な体に蹴る——。

「ま、待ってくださいー！」

少女の悲鳴染みた制止の叫びに思わず条件反射で脚を止めた。鎧の中で怪訝な目をして足の甲が彼女の脇腹と触れるか触れないかの距離を維持して口を開く。

「何だ？謝罪なら受け付けないぞ。ここから落として仕返しぐらいしなきゃ気が収まらない」

「あ、貴方を落としてしまった事は申し訳ないと思ってます。で、でも貴方が私の……」

「……？」

私の、何だ？と訳が分からない一誠は心底から小首を傾げる。しかし、鎧で顔の表情が見えない少女はしらばっくれているのか、と勘繰ってしまいそうになるがこの状況は自分に非があると喉から出そ

うになった思いを抑え込んだ。

「……………何でもありません。ですが、謝罪をさせてください」

「いや、謝罪はいいから用件を言ってくれるか。蹴落とすぞ」

「わ、分かりました……………」

足を戻して少女の話を聞く。少女は名乗った。

「私は「ヘルメス・ファミリア」の団長、アスフィ・アル・アンドロメダです。貴方に接触したのは主神の命で貴方を連れてくることでした」

「その割には俺を蹴落としたりよな。それともなんだ、随分と野蛮な連れ方をしようとしたのか？」

「そ、それは——！本当に貴方は、その、何も分かっておられないのですか？」

「だから何がだよ？こっちはいきなり人の絨毯に乗られて訳も分からないまま蹴飛ばされたんだぞ」

うっ、と申し訳なさそうに体を委縮して「すみません」と謝罪の言葉を発する。どうして彼女、アスフィが一誠を蹴落としたのは羞恥で思わずとしか言えない。

「それで、申し訳ないのですが私の主神様のもとへ来てくれますか？」

「一発殴って良いなら」

「構いません」

清々しいほどアスフィが心から了承したので、鳩に豆鉄砲をくらったような顔となる一誠は思わず訊ねた。

「他派閥の主神を殴ったら問題になるんじゃない？」

「大丈夫です。ヘルメス様ですから。私の代わりに思いつきり殴って下さい」

「……………」

関係は良好じゃないのかなあ……………。そう思わずにはいられない彼女と神の間柄にちょっと心配になったのは別の話。それから旋回してアスフィの主神がいる大通りに案内してもらおうと、羽付きの鍔広帽を被る橙黄色の神と同色の瞳、旅人の軽装束を身に包んだ優男神が手で傘を作って魔法の絨毯に乗っている二人を見上げている姿が

見えた。

「お疲れアスファイ。何かヘファイストスの子供が絨毯から落ちたけど何かあったのかな？」

「……聞かないでください」

全面的に悪いのはこちらなのだからここで説明をしたら隣にいる少年から嫌味を言われるのが目に見えている。そしてその少年が言葉通り行動した。

「ふんっ！」

ゴツ!!!

「え、えっとー俺はヘルメス。アスファイ達の「ヘルメス・ファミリア」の主神だ。よろしくねヘファイストスの子供君。イツセー君って呼んでもいいかな」

帽子を取らないといけない程、男神の頭部は巨大なタンコブができていた。神の命で自分のゆとりの一時を邪魔された揚句、こうして会わされることになって思いつき殴るのではなく踵落として決めさせてもらった。アスファイの表情はどこか今までの鬱憤が晴れた様に少し満足げだったのは気にしない一誠。

「で、何か用なのか。俺に会いたいと言うんだからくだらない話だったらもう一回殴る」

「あはは、それは嫌だな。うん、もう痛いのはゴメンだから単刀直入に言わせてもらうよ。イツセー君の作った魔道具マジックアイテム、もしよければ「ヘルメス・ファミリアち」販売させてくれないかな？」

男神の目的。それは今まで一誠がロキ達に作った魔道具マジックアイテムの売買の交渉だった。

「俺の「ファミリア」は探索系が主流だけど、商業にもちよつと手を出してもいる。主にアスファイが作った道具アイテムだね。これでもうちのアスファイの名前は商業系の「ファミリア」の間じゃあそれなりに有名なんだ」

「主神は何かしないのか？」

「俺はヘルメスだ。「ヘルメス・ファミリア」に持ち込まれる依頼を請

け負い、依頼人の要望に応えて全うする。俺自身も必要あらばオラリオの外に出て情報や物など持つてくるよ」

どこぞの何でも屋の家族の友人を思い出す一誠。ヘルメスと言う神もあながち違いは無く、どこか飄々としながらも思っていたよりも墮神ではなかったことに安堵で胸を撫で下ろす気分を浸った。

「で、どうかな？正直、この空を飛ぶ絨毯は個神的に欲しいんだ。コレの上で移動できれば山を越え海を越え国すら軽々と越えられる。俺も仕事が捗るってもんさ」

「ふーん。でもこれ、非売品なんだけど。それに——」

そこで腕輪の宝玉が点滅した。一柱と一人に見られながら宝玉に触れるとヘファイストスを映す立体的な映像が浮かび出した。

『イツセー、今大丈夫かしら？あー、そこにいるのヘルメス？久しぶりね』

「おおっ！何だこれは、ヘファイストスと話ができるのかい!?これもマジックアイテム魔道具なのか!」

『……顔近いわよヘルメス。今はイツセーと話をしたいのだから邪魔しないで』

鬱陶しいそうに顔を顰める現在の主神と会話を臨む為絨毯の上に乗る。

「どした？武器の納品のことか？あれ、この流れ前もしたような……」

『ええ、武器の納品の事だけれどもう用意してある?』

「大丈夫、用意できてるぞ」

『わかった。ただそれだけを聞きたかっただけだから。それとヘルメスは何を考えているか分からない神って私達の印象だから一応気をつけなさい?』

酷いなーと背後で苦笑いを浮かべている男神に対して首肯する一誠。ヘファイストスとの通信はそこで終わり、映像を切って振り返る。

「で、この絨毯の話だったな。さっきも言いかけたけどこれは非売品だ。誰にも売る気はないよ」

「じゃあ、俺だけに創ってはくれないかな？もしも創ってくれるなら俺は君限定で依頼の報酬は無しで何でも依頼を請け負うよ。君が望む全ての物をこのヘルメスが持つてこよう」

芝居がかかったように帽子を持って胸に添え、紳士のように立ち振る舞うヘルメス。その提案にアスフィは二人の間で立つて見守り、様子見する。そして一誠は静寂を保ち、三本の指を立てた。「条件が三つ」と唇に転がして男神に向かって言った。

「一つ、俺だけじゃなく何時か結成するかもしれない俺の『ファミリア』限定でさっきの条件を呑んでもらう。二つ、依頼した際の期限は最高でも一カ月以内だ。この二つの条件ができないなら絨毯は創らない。どうだ？」

「ああ、分かった。約束しよう。ヘルメスの名に懸けて。それで、三つ目の条件は？」

三本指を立てていた手を広げ、ヘルメスに差し伸べた。

「『ファミリア』の徽章エンブレムが欲しい。それが三つ目の条件」

数日後、十人は余裕で乗れる「ヘルメス・ファミリア」の徽章エンブレムを基に織った絨毯を完成させ、一誠との永久契約が交わされた。

「気に入ったー！これ、俺の宝物にするよイツセー君！それじゃ、早速俺は旅に出かけるから使わせてもらおうよ。じゃあね！」

意気揚々と魔法の絨毯に乗り颯爽と飛んで行くヘルメスを見送るアスフィと一誠。こうしてヘルメスは超高性能な足と言う翼を手に入れたのであった。

「なんだか申し訳ございませんでした。主神様の我儘で非売品の物を創って貰って……」

「他の主神だったらしなかったがな。あの神様だったらまあ、役に立つからしたに過ぎない」

「何気に買っているのですか？」

「神格はどうかなーだけど、行動力の広い神は素直に称賛している。オラリオだけが世界じゃないからな」

「……そうですね。その考えは私も同感です。あのイツセー」
「ん？」

「これからもできれば私と交流をしてくれませんか？同じアイテムメイカー魔道具製作者、二人で様々な道具を作ってみたいです。私達しか作れないだろう最高の道具を作ってみたいです。私達しか作れないだろう最高の物を」

綺麗に微笑む少女の乞いは面白そうだと、彼女の手を取って腕輪を置いた。その腕輪はロキ達も腕に差して同じ機能を持っている代物だ。

「え、これって……」

「それがあれば何時でも何所でも俺と話ができる。用がある時だけ使ってくれよアスフィ」

冒険譚5

37階層は『白宮殿』ホワイトパレスとも呼ばれている。その名の謂われは白濁色に染まった壁面と、そしてあまりにも巨大な迷宮構造だ。上部の階層これまでとは度合いスケールそのものが異なり、通路や広間、壁に至るまでのすべての要素が広くて大きい。この階層には休息レストに使用できる小部屋など例外も存在するが、殆どの道や『ルーム』は幅10Mを優に越えている。また円形の階層全体が城塞のごとく五層もの大円壁で構成されており、階層中心に次層への階段が存在する。37階層はその広大さもあってモンスターの数は40階層以上の領域では群を抜いており、インターバル次産間隔も非常に短い。

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「流石は深層、モンスターの強さと数が明らかに違うことを感じ取れるなっ!」

前衛は一誠とフィン、中衛はリヴェリアとアイズとアリサ、後衛は椿とガレスの配置で37階層のモンスターと戦闘を臨む。巨身のモンスター『バーバリアン』のモンスター専用、ダンジョンの一部の天然武器ネイチャーウェポンごとく一刀両断して灰に変えた。資料で得た情報通り、この階層では戦士系ウォーリアーのモンスターが多く出現する。猛牛ミノタウロスの体格を誇る『バーバリアン』、19階層から現れる蜥蜴人リザードマンの上位種『リザードマン・エリート』、黒曜石の体を持つ『オブシディアン・ソルジャー』と人の体と同じ構造を持った中型級以上のモンスターが白宮殿ホワイトパレスを跋扈して

「!」

「アイズ、前に出過ぎるな!」

中衛の三人に三匹の『リザードマン・エリート』が奇襲する。37階層のモンスターはLv. 3、あるいはLv. 4にカテゴライズされる。Lv. 2のアイズにとっては絶対の強敵の筈。それが複数同時に襲われることになれば苦戦どころじゃない。Lv. 1の冒険者が

ミノタウロスと戦っているような感じだ。でも、その冒険者とアイズの違いは心構えが出来ているということとこだ。

「母の風よ」！エアリエル

攻防一体の風の鎧を身体に纏い、祝福の風剣を両手に産まれたてのモンスターへ飛び掛かった。『リザードマン・エリート』の盾が構えられ小さな風の塊を受け止めんとする。リヴェリアの制止を振り切って、下段から上段に剣を振り切る。

「ガッ！」

ナイチャーウエボン

天然武器の盾で防いだ『リザードマン・エリート』の体に血飛沫が迸る。だが、残りの二匹が左右から死を誘う得物が振るられた。金眼が鋭く格上のモンスター達の攻撃を瞬時で膝を折って体勢を崩し瞬間。紙一重で数本の金髪が宙に舞うだけの些細な犠牲を払った少女は、お留守の脚を狙って横薙ぎに剣を振るって両断した。体を支える支柱の軸が無くなると立ってはいられなくなり、バランスを崩して地面に倒れ込むモンスター達を見逃さず、一撃必殺の魔石を狙った攻撃をする。天井に向かって飛び、天着するアイズは矢のように跳躍し、胸部を切り裂いた。灰燼と化するアイズが屠った頃には一誠達も既に倒し切っていた。しかし、そんなパーティに休息の束の間は訪れなかった。椿が何かに気づいたように顔を動かす。ビキリ、と壁に亀裂が入る。モンスターが産まれる予兆だ。一行を包むほどの音と共に壁に生じる亀裂が広大に――。

「ん、またか」

「うむ、そのまたかのような。――怪物の宴だ」モンスター・パーティ

天井、左右の壁面から一気に『バーバリアン』や『リザードマン・エリート』。流石に囲まれた状態で戦うのは――。

「魔剣創造」ソードパース

面倒くさいの一言に尽きる一誠による、ダンジョンの地面から数多くで様々な武器が飛び出して串刺しの刑。天井まで伸びてモンスター等は武器の餌食と成って灰と還す。

「.....」

「おお、やっぱり摩訶不思議であるぞこれを見る度に」

目の前で飛び出す武器にアイズは茫然と立ち尽くし、興味深々に魔剣に触れる椿。

「名前を付けるなら鍛冶殺しか？」

「手前らの存在意義を失わせるか。それは何とも皮肉な」

苦笑を浮かべる椿に釣られて笑む。ほどなくして全ての武器は勝手に砕け散り、まだ灰と成っていないモンスターの死骸が落ちる。魔石とドロップアイテムを収集し終わると移動を再開する。迷宮の陥穽ダンジョン・ギミックから静寂が支配する通路を進んで行くと、やがてこれまでより大規模な『ルーム』に辿り着いた。アイズを庇いつつ広間の中にいた大量のモンスターと交戦するものの数分でモンスターを全滅させる。一息つくど、そこへビキリ、と。「またか」視線を床に下ろし、亀裂音が響き蜘蛛の巣に似た罅割れを広げながら、次には十以上のモンスターが地中より生まれ出る光景を目の当たりにする。肉も皮も存在しない、白骨だけの姿。

「骸骨？」

見た事のないモンスターに率直的に思った事を口にしたアイズ。肋や骨盤が剥き出しになっていて、全身の骨格は随所で鎧のように鋭く隆起して、尖っていた。それぞれが骨の剣や骨の斧、骨の盾を最初から装備して現れたのは、骸骨のモンスター。椿が言う『スパイルトイ』

「はい、ソードパース魔剣創造」

広範囲攻撃で一気に殲滅。あつという間に静けさを取り戻してその場で腰を下ろす。

「結局ここまで来たけど、フィン達も来ることは無かったと思うぞ」

「でも、アイズも一緒に行きたいと求められたんだろう？お目付役として僕達も同行する以外にも君の戦いぶりをこの目で見たかった」

「イツセーと行けば手前も一人では直ぐに収穫できない武器素材を手ドロップアイテムに入れるのだ。ダンジョンに行くのであれば手前はついていくぞ」

二人の思いを聞き、それ以上何もいわなかった一誠はこのパーティーでダンジョンに行くことになった経緯を思い出す。それは数時間前のこと――。

「イツセー、模擬戦したい」

「わかった。でもその前にダンジョンに行きたいからその後でもいいか？今日は目的の『ドロップアイテム』を集めたいのとあの日だから」
「あの日？」

「ん、階層主が出てくる日だから魔石と『ドロップアイテム』を手に入れたい。そう時間も掛けないから直ぐに戻ってくる」

リヴェリアと椿の前で今日の予定を打ち明けた朝食時。食べ終わって食器を片づける少年に乞うた少女がダンジョンという単語を耳にした矢先、椅子から降りて一誠の脚衣を掴んでクイクイと引つ張った。

「私も行ききたい」

「駄目だ」

すかさずリヴェリアが許さなかった。目を瞑っている己の師の一人に不満げな顔と目を向けるアイズに彼女は諭す様に言う。

『深層』に行くならば私が許さない。イツセー、どこの階層に行く気であるか教えろ」

「そのまさしく『深層』。ウダイオスを討伐しに行く気だ」

「む、そこまで行く気なら尚更手前もついて行くぞ」

挙手する椿も同行したいと願う。目的は二つ、打った試作品の試し切りと怪物のお宝の収拾に他ならない。椿ならまだいい。だが、アイズはまだ幼く強く在りたいと言う強い憧憬を抱いて自分の体を顧みない危ういところがある。それなのに『深層』に行かせたら身を滅ぼしかねない。「まだお前は早すぎる」とアイズの安否を考慮した上で反対するリヴェリア。が、当の少女は「行くつ、連れてって」と一誠に駄々をこねる。アリサも強くなりたいと目で訴える。

「アイズ、お前が行けばイツセーの足手まといになる。邪魔をしかねない。何より、あの階層主と戦うなど私が絶対に許さん」

「邪魔なんてならない、足手まといにもならないつ。イツセーと一緒にダンジョンに行きたいつ」

「アイズッ」

我儘を言う娘に母親は心を鬼して怒る。鬼気迫る勢いで立ち上が

り、近づいてくるハイエルフの彼女に必死の抵抗とばかり全身を使つて一誠の脚に抱きつくようにしがみついた。

「イツセー、お前からアイズを説得しろ」

「イツセー、連れてって！」

何この状況。まるで母と娘から求められる父親の様な凶だどこの瞬間、椿もそんな感想を抱いていた心が一致した時——腕輪の宝玉が点滅した。通信相手はフィンだった。金髪に碧眼の小人族パルウムの姿が立体映像に映る。

『やおはようイツセー。今話しても大丈夫かな』

「今丁度、親娘喧嘩の渦中に立たされていたところだ」

現在の状況を知らせるとフィンは苦笑を浮かべた。どこに行っても二人は変わらないね、とそんな表情だった。

『何となく推測できるよ。だからこそ僕とガレスは今やることがないから一緒にダンジョンにでもどうかなって君達に誘いを持ちかけてみた。どうかな？』

「……フィン」

「……！」

タイミングが悪かったな、と顔を片手で覆い嘆息するリヴェリアに對して目を輝かすアイズと相反する反応にそう思った一誠。

そんなこんなで結局はアイズの願いが叶って終始ご満悦だ。そして張り切ってモンスターをバツバツ斬り伏せていく。残骸として残る『ドロップアイテム』は椿の背囊の中に収められていく。彼女もご満悦だ。アリスも格上のモンスター相手に四苦八苦して一誠達に守られつつも魔石破壊で何とか倒す。

「ところでイツセー、『オブシディアン・ソルジャー』のアイテムだけ集めているようだけど、また何か作るのかな？」

「魔法の耐性があるんだろ？俺もその専用の武器や武具を作ってみたくなった」

「だから『深層』にも足を運ぼうとしたわけか」

「まだまだ量が欲しいから付き合ってもらおうぞ三人とも。そんでこの

戦いにもな」

不意に。小さな、本当に僅かな振動が、皆の体を揺らした。その現象の意味は何なのかアイズとアリサ以外の皆は知っていた。

「来たようだな」

「アイズ、アリサ。お前達は絶対に私達の傍から離れるな」

立ち上がり、戦闘準備をした。地面が揺れ、少しずつその振動は大きくなっていく。やがて——ビキツ、と。岩の悲鳴と共に、夥しい亀裂が生じた。地割れの如く、大地が割れる。周囲に走り抜ける裂け目は留まる事を知らず、次には目を疑うような漆黒の巨石が地面を破り、はるか頭上までその身を伸ばしていく。巨石に引つ掛かった岩と土砂が揺れ落ち、土石流のよう降り注いだ。広間の揺れは一向に収まらない最中、獣——モンスター^{モンスター}の牙の様なものの中から岩の表面を突き破り、亀裂音が生じる巨石は牙かと思つたそれに左右へ剥がされる中で姿を露わした漆黒の怪物。

「……………こいつが、この階層の主か。噂通りの姿であるな」
「……………」

全貌をさせる37階層に君臨する『^{モンスターレックス}迷宮の孤王』。

L v . 6、『ウダイオス』。

『スパルトイ』をそのまま巨大させたかのような骸骨のモンスター。全身が漆黒に染まっている。黒い骨格は見ているだけで中に吸い込まれそうであり、不気味とも剣呑とも取れる鋭い光沢を帯びていた。下半身は地面に埋めたまま、骨盤から上のみの体はそれだけで10Mに迫るほどで、前のめりに折れ曲がる背骨——^{オウガ}無数の椎骨が震えながら意思を持ったように波打っている。頭部には鬼を彷彿させる捻じれた二本の角を生やしており、闇が充満する眼窩の奥では、朱色の怪火が小さく揺らめいていた。巨軀の中心、胸部内部では、今まで見たことのない規格外の大きさの魔石が太く分厚い胸骨と肋骨に守られているように存在している。初めて見る階層主を対峙するアイズとアリサは心底から戦慄する。あれは今の自分では絶対に勝てない怪物だと得物の柄を握る手が固く握りしめながら恐怖する。父親達^{モンスター}が相手にしていたという階層主と相見えて初めて怖いと感じた。

『ルウオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!?!』

腕を交差して魔力の砲撃を受け止めるウダイオスは、地面から漆黒の剣山、逆杭バイルを放つて一誠を貫いた。下からの奇襲に対応が遅れたのか、真紅の砲撃が突然止む。両腕全体に罅が生じて動かせば軋み、破片が零れ落ちる。だが、相手は今の攻撃だ確実に——と眼前に差されている筈の人間の姿は無かった。交差する漆黒の逆杭バイルだけが残っていた。——奴はどこに?と眼窩の奥で灯る怪火ひとみは真紅を探そうとした。直後。顎の下から視界が激しく揺さぶられる衝撃が襲った。「はっ!」

すかさず回し蹴りで、ウダイオスの胸骨に罅が生じながら後ろに倒れ込んだ。同時に一誠は皆の所へ戻った。

「……普通に問題無く戦ってるね。L.V. 6の潜在能力ポテンシャルのモンスター相手に」

「じゃあ、俺はそれ以上だつてことだろう?」

不意にウダイオスが吠えた。まるで母体ダンジョンに呼び掛けるように地面へ手を当てて咆哮し、次には、王を守る雑兵のように大量の『スパルトイ』が地面から生まれ出た。武器を携えた白骨の戦士達が一誠達に行く手を阻む。

「そんじゃ、雑兵の相手は任せるぞ」

「さっさと倒してこい」

黄金の剣、約束ユクされた勝利の剣カを腰に佩いていた鞘から抜剣し数多の『スパルトイ』に飛び込んで、一緒に来たガレスとフィンの斧と槍の一振るいで生きた屍は殆どただの屍と化して宙に舞った。白い破片の中で突き進み、近づけさせないと漆黒の逆杭バイルが飛び出して伸びる最中に切り捨てられる。それだけで終わる筈もなく四方八方から射出する死の長槍に貫かれ——る前、瞬間的に一誠の姿が掻き消えた。

「黒き骸王ウダイオス。王と名乗るなら剣をまた手に取り戦えよ」

そのまま超高速による攻撃をするまでも無く、眼前に立ち止まって剣をウダイオスに突きつける一誠。

「お前を簡単に屠ることは容易いけどそれじゃダメだ。だから願い望

む。王と称されているならば、王と名乗るならばまた剣を手にしろ、そこから這い上がって——心躍る最高の死闘を繰り広げようウダイオス！」

モンスター相手に何を言っているんだ、常識的な冒険者達がここにいれば呆れ果てていただろう。相手は階層主。殺戮と蹂躪、破壊衝動しかない人類の敵だ。一誠の口頭に応じる筈が……。

『ウウウ……』

漆黒の骸骨は、眼窩の中の炎を燃やしながら、一本の逆杭パルスを大地から召喚する。一誠の思想に応じたのかどうか定かではないが、伸びて、伸びて、まだ伸びるそれは長大な漆黒の柱としてウダイオスの眼前に現れた。轟く漆黒の指骨が掴み、抜き取る、同色の柱——一本の剣。全長は六M。一誠達からすれば極厚の長剣。ウダイオスからしてみれば細枝にも満たない短剣。その短剣を持つ反対側の指骨が地面に当たった。スパルトイを召喚するかと思っていたフィン達だったが——ウダイオスは咆哮しながら、力を入れるように上半身を震わす。ズ……ズズツ……！骨盤の下から地面に埋まっていたウダイオスの下半身が、植物の根っこを地面から引き剥がされたように少しずつ、少しずつ脚の長骨を覗かせ始める。

そして、ウダイオスは——初めて冒険をする。

『!!』

『ルーム』全土が攻撃範囲だったウダイオスが自らそれを放棄し、37階層に君臨する『骸王』として『二本の足』でさらに威厳と王としての風格を得た。十数Mの巨躯を誇るようになったウダイオスと歓喜の瞳を左目に宿し、黄金の剣ことエクスカリバーを前に構える一誠。

「ウダイオスが、立った……?」

「有り得ん、そんな情報はギルドにですらなかった」

「じゃが、目の前の現実を受け入れる他ない。まったく、イツセーとおると毎度毎度驚かされるわい」

「よっしやー！来いウダイオスツ！」

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!』

「あやつ、心底楽しがっておるようだの【人形姫】」

「……私も、強くなる……っ」

「わ、私だって……！」

そう言つてアイズとアリサが——ウダイオスに飛び掛かって、あつさり足蹴りを受けて「「「アイズ!?アリサ!」」」と椿を除いて一誠達に悲鳴を上げさせたのであった。

一行の探検は極めて異例で異常な光景を最後に終わった。ギルドには敢えて伝えない。伝えたところでこれからもあの階層主が同じ行動をするとは限らないとフィンの考えで決まった故に。一度【ステイタス】の更新にロキのもとへ戻るアイズと別れる一誠もヘファイストのもとへ訪れた。

それから【ヘファイストス・ファミリア】に転属して一カ月後。何度も『遠征』を経ても——。

「……全然変わんないわね、貴方。本当に今日もダンジョンに行つたの？」

「……Oh」

相変わらず【ステイタス】が伸びない堪った不満と鬱憤で——工房に籠つて『オブシディアン・ソルジャー』の『ドロップアイテム』と希少金属レアメタルを主に素材として何かを作り出す一誠を、吹き抜けの扉から顔を覗かせる四人。リヴェリアとアイズ、アリサは一誠の停滞の理由を知っているが、それを何も知らない椿に口にすることはできず慰めの言葉を送れずにいた。

「今日で一週間目であるぞ。そろそろ手前はイツセーの料理が恋しくなってきたと言うのに、あやつは何かに取り憑かれたかのように一心不乱に打っておるが……」

「不眠不休ですつとあの調子だ。何やら盾のようなものを作っている

ようだがな」

「イツセー……」

「……」

心配そうな目で見守られていることすら気付かず、熱した塊に振り上げて振り下ろす鎚で力強く叩き、不純物を取り除く一誠の顔は鬼気迫っていたので声を掛けることはできまいとそつと工房から離れる四人だった。

彼の者の状態をヘファイストの耳に入った。どうにかならないかと椿からの相談で顎を組んだ両手に乗せて、執務机に肘をつけて「そうね……」と相槌を打つ。

「何も変わらないけれどももう少し様子を見守った方が良いんじゃないかしら？完成したら否が応でもあの子は動くでしょうし」

「やはりそうなるか。しかしそれだと何時になればイツセーの手料理を食べれるのだろうかと思ってしまうぞ主神様よ」

「貴方、それが一番心配してるでしょう」

何時の間に鍛冶師スミスから食道者グルメになったのかこの眷族は、と嘆息する。よつぽど気に入ったのか、これまで食べてきた料理の感想と説明をし出す始末だ。それこそ鍛冶神が食べたことが無い物ばかり。あからさまに自慢話を聞かされている感じでならないので、仕方なく、仕方なくだ。

「……分かったわよ。そこまで言うなら私から一言だけ言うわ。それでいいでしょ」

「おお、ありがたい。では早速」

丁度昼前、腹が空腹を訴える前に行動をする。あわよくばそのまま一誠の手料理を食べようと女神はちよつぴりだけ思ったのは椿が知る由もない。

そんなこんなでヘファイストスは椿と共に今でも工房で籠っているだろう一誠のもとへ侵入不可の家に腕輪の機能でやってきた。真っ直ぐ工房に足を運んで見るが、一誠の姿は無くもぬけの殻だった。

「いないじゃない」

「朝はいたのだが……」

部屋か？と予想で工房を後にし、少年の自室に椿はヘファイストスを案内して行ってみる。上階へ繋がる階段を上って通路の中部当たりの黒檀の扉まで近づき、静かに開けてみたところ。部屋の中に顔だけ入れて周囲を見渡す紅眼は天蓋付きのベッドの中で寝ている一誠を見つけた。

「寝ておるわ」

「一週間も不眠不休でしたのでしょ？寝ていても不思議じゃないわ」

部屋の中に入り、直ぐ隣まで近づき寝顔を見下ろす。疲れの色が出ている一誠の顔。深い眠りに入っているようで一向に起きる気配はないので周囲を見渡すと椿は大きな盾を見つけた。

「主神様よ」

「それがそうなのね？随分と変わった盾ね……」

身の丈ほどもある十字架型の盾が椿の手に握られる。一目で見ても希少金属レアメタルが使われた防具であることがわかる。触れば十字架の部分は超硬金属アダマンタイトの刃、盾の部分は最硬金属オリハルコンでどちらも魔法に対する耐性の効果を持つ黒曜石が交ぜられている。

「攻守一体の盾と言うわけか。それに魔法の耐性を持つ盾は珍しくは無いが、盾に刃を備えさせる発想は手前でも思いつかん」

「持ってみてどうなの？」

「重い。ドワーフか力に自信のある冒険者にしか扱えんよこれは」

その場で軽く盾の内側につけられているグリップの部分を持って振るい回すと、通常の盾ならともかく刃付きなので安易に近づくことはできない。

「ふむ、イツセーは奇妙な物を作る。が、手前は嫌いではない。鍛冶師スミスの常識の斜め上を行き、常識はずれなことをするからかこういう物を作れるのだろう主神様よ」

「貴方にとっていい刺激になるかしらね」

椿は笑みで返す。やはり面白い。鍛冶師スミスとして一誠の言動と発想は刺激的でいっぱいだ。次はどんな発想をして常識を超える物を作

るのか、もつと傍で見てもたくなかった。

「それにしてもこの子、どうする？」

「むう、寝ているなら起こすべきではないだろうが……食堂の方へ行ってみる。何かあるかも知れんからな」

盾を置いて部屋からいなくなった椿を見送ったヘアアイストスは今も眠っている少年のベッドの縁に腰を下ろして、左の紅眼で見つめる。ロキが曖昧に言葉を濁す一誠の秘密は謎だらけだが、こうして寝顔を見ているとまだ幼いところが抜けていない気を感じさせる。ふと、眷族の寝顔を見るのは今回が初めてではないだろうか？だとすると、今とても貴重な状況だろうと眠る少年に珍しく悪戯心が湧いた。少年の一房を掬い取って毛先を鼻の方へ持つてくすぐり刺激を与える。

「……………んんっ」

「ふふっ……………」

とても嫌そうに眉根を寄せて女神に背中を向け反対側に寝返る。その反応が初々しくて、初めて眷族を悪戯するという好奇心にヘアアイストスはベッドに乗り出してもう少しだけ楽しみたいと、また鼻をくすぐる。

「うんんっ……………」

くすぐられる鼻が堪らないと布団の中に隠れつつベッドの縁まで再び寝返った。このままくすぐってベッドから落ちたら笑うのは必須だろうと彼女は——それが見たくて距離を詰めて隙間からくすぐる。そして、一誠は女神の想像通り……………とはいかなかった。布団からヘアアイストスの腕を掴む手が飛び出して「え？」と驚く女神は勢い良く引つ張られ体勢を崩されるとそのまま布団の中に引きずり込まれた。温もりが籠る薄暗い布団の中でこの状況に若干理解が追いつけない時、己を覆い被さる少年の開いた眼が据わっていた。眠っているところを悪戯されて不愉快と不機嫌な表情を浮かべてもいる。怒らしちゃった、と思ってももはや後の祭りだ。

「……………人の安眠を悪戯で妨害されると……………凄くイラつくんだけど」

「ゴメンなさい……もうしないわ。だから、退いてくれると嬉しいのだけれど」

「……嫌だ。俺もお前に悪戯をする」

仕返しだと一誠は……ヘファイストスに顔を落として、あろうことか何億年も守ってきた形で誰にも奪われたことが無い唇を重ねて奪ってしまった。

「――」

異性や動性すらしたことがない口付を眷族になってまだ数カ月の相手としてしまったその事実と衝撃は計り知れない。停止しかけた思考は、口の中で蠢く生温かい蛇の様な動きをする触感を嫌でも伝わって戻った。

「んん——っ!?!」

口付をしたことのない初心なヘファイストスは、椿が作り置きしていた揚げ物を半分ぐらい食してから戻ってくるまで、丁寧で優しく、そして激しく情熱的な一誠のキスに翻弄と蹂躪をされつくされ瞳は熱い眼差しで一誠に潤った瞳を晒し、熱く荒い息を断続的にしながら蕩けた顔、女の顔を自覚も気付くこともなく晒す。そして、二人の唇が離れ粘着性を持つ銀系の橋が出来上がった。これで終わり……?と淡い希望を抱いて安堵する女神の思いは裏切られる。

「……ヘファイストス、可愛い」

「あつ——!?!」

「あいや、すまんな主神様。待たせてしまった」

「……遅かったわね。あつたの」

「うむ、あつた。美味しそうであったのでついつまみ食いをしていたら遅くなってしまったのだが、顔が赤いぞどうした?首も押さえて」
「な、何でもないわ。それより私は急用ができたから店舗テナントに戻るわよ」

「昼食は?」

「いらないっ」

腕輪の機能で椿の目の前から姿を消すヘファイストス。一体どうしたのだろうかと思議で小首を傾げるが、持ってきた料理の香りに

意識を覚醒した一誠がゆつくりと身を起こす。

「……飯か」

「おお、イツセー。起きたか。ほれ、お前が作った物を持って来てやったぞ」

「……他に誰かいたか?」

「おう、主神様が今さつきまでいたが用事で直ぐに帰ってしまったぞ」「ん、そっか。何か赤い眼をした女性とキス、口付をした夢を見たんだけどそれが凄く現実的だったんだ」

「……それはもしかして、手前のことか?」

「どうだろ、今曖昧で良く顔が浮かんでこない」

執務室に戻り、未だに引かない紅潮は紅髪と紅眼より赤かった。まさか、悪戯でキスをされることになるとは思っても見なく、抵抗できなかった筈なのに何故か抵抗しなかった自分に当惑して混乱する。指で触れる唇にまだ残っている少年の唇の感触。重なった唇の間で己の口は彼の少年の舌で弄ばれた。形容しがたい快感が女神の脳髓に焼き付け全て夢ではないことを突き付ける。それらが彼女の心臓を激しく、五月蠅く高鳴らせキスした記憶が鮮明に脳裏で甦る。

「——っ」

まだ好意を抱いてもいないのに強引で唇を奪われた。それは事実だ。しかし、ヘファイストス自身は本当に混乱していた。何故か嫌ではなかった。寧ろ成されるがまままでい続けたら自分はどうなっていたのだろうかと気になっていた。もしかして、自分は受け入れているのだろうか——?

「どうしよう……私、あの子の顔を見れないかもしれない」

熱くなっている顔を自覚しながら両手で包むように添えて、羞恥でいっぱいである彼女と同じ頃。終始見ていたドラゴン達が面白おかしくヘファイストスに何をしたらか説明させ、「俺は何てことを」と似た反応をしていたのだった。

冒険譚 6

その日、顔にひんやりと冷気を発する保冷が整った長方形の箱の中を覗くエルフの女王の朝で迎えた。

早朝——翡翠の長髪と瞳を持つハイエルフの女性が起床した。「ロキ・ファミリア」からアイズと共に「ヘファイストス・ファミリア」の団員の個人の家へ移り住んで短くない時となった日の朝をまた迎えた。

若干眠気がある物ものの年長者として二度寝などせず、寝間着から普段着に着替え、鏡台の前で髪を梳かし身だしなみを整え終えると今日は珍しく渴いた喉が潤いを欲した為にリビングキッチンに向かった。

いざ中に入るとそこに朝食の準備をしている筈の一誠の姿はいなかった。何時もならば先にキッチンで調理をしているはずが今回は自分が早かった様子。そう思いながら棚に近づき、収納されているグラスを手にも世界式の水道から水を入れてゆつくりと飲み干す。

冷たく透き通った水の味は乾きを潤わせた彼女に満足感を与えた。ここにいて一誠を待つのもいいが、部屋から本を持って読書するのも悪くないと考える思考とは別に視界は、長方形の箱を捉えた。

料理を作る際、食材を取り出している少年を思い出し、じつくりとその箱の中を見たことはなかったな、と思いが過ぎた時は長方形の箱の前に立っていた。華奢な指は扉を開けるグリッブを絡めて握る手はガチャリと引つ張って開け放った。

直後。冬でもないのにひんやりとした冷気が、白い靄がリヴェリアの顔を添えるように通り一定の空間で漂う。翡翠の双眸は冷気の靄に包まれた箱の中身をしっかりと視認した。野菜や果物、見た事のない食材が保管されていてとても不思議だった。

普通はその日の内に食べ終え、またその日の内に補充しているか長く保存できるように干して保管しているかのに、下の扉を開けてみれば、更に強い冷気に包まれていた様々で多くの肉塊が氷のように冷たく硬かった。

「何してんだ？」

感心と興味で箱の中身を見ていたりヴェリアの横から声が掛った。振り向くとそこには自分より遅れて起きてきた一誠がいた。

「イツセー、これはなんだ？どうして食材を冷たくしているのだ？」

「食材の鮮度を長く保たせ、腐敗の進行を遅くするためだ。そこから発する冷たい空気は、その二つを同時に効果を発揮している。因みにその箱の名前は冷蔵庫と言う」

「誰だって美味しい状態の食材を食べたいだろう？」と指摘し付け加える一誠の言葉に感嘆する。食材の保管の技術の結晶がこの箱に詰まっていると過言では無かった。異世界の技術、感服すると感嘆するリヴェリア。

「これはお前でも作れるのか？」

「んー、完成度は低いけど簡易的なものだったら。てか、長く保存する為には大量の水が必要不可欠なだけ？この都市の周辺に雪国があるかどうかかわからないし、あったとしても氷を運んでくる間は溶けて無くなるから無理か。ダンジョンも然りだろうよ」

ならば、残された選択はただ一つとなった。

「私の魔法の中には氷属性の魔法があるのだが。その氷でも使えるか？」

「待て、都市最強の魔導師^{メイジ}の魔法はそんな軽いもんじゃないだろう」

使えるけどさ、と突っ込みを入れる一誠に良いこと聞いたとリヴェリアは心の中で首を頷いた。

「で、いい加減閉めてくれるかそこ退いてくれるか。朝食の準備がでない」

「ん、すまない。あとイツセー。『遠征』でも食材を保管できる携帯用の冷蔵庫とやらは作れないか？」

もしも現実的に作れるならば【ロキ・ファミリア】がダンジョンに持ち込めれる食材の種類が増えて、更に作れる料理も増えて団員達の士気に良い影響が出るだろうと副団長として訊ねてみると。

「——氷の塊の中にブチ込めば一発で解決する」

俺はお前らの便利屋じゃねえ、と真顔でハイエルフの意図を悟って

否定して朝食の支度を始めるのだった。そんな物言いをされたりヴェリアの表情は「すまない」と苦笑いを浮かべる。が、その後日。簡易的な新しい冷蔵庫を作ってロキ達に贈った彼に素直じゃない奴だと感想を抱くのであった。

数十分後。朝食を済ませた一誠が「ああ、そうだ」と四人に一言述べる。

「今日ちよつと用事があるんだ。だから何かあつたら通信で教えてくれ」

当然ながら三人は不思議でならなかった。用事とは何だ？と、訊ねたら返答はこうだった。

「ただの買い物だ。ちよくちよく商人に頼んでいた物が今日と届くからさその受け取りに行くだけだ」

「買い物？ イッセーにしては珍しいな」

「ふーん？ 三人の為に料理を作れるのはその買い物をしているからなんだけど珍しいんだ？」

「待て、その含みのある言い方は止せイッセーよ」と若干焦る椿の反応に愉快気な笑みを浮かべる一誠。上品な紅茶を飲んでいたりヴェリアは唇からカップを受け皿に置きく。商人と繋がりを持っていることは今初めて知って、一誠が商人を頼るほど何かあるのかと探りの意味を兼ねて問うた。

「商人に何を頼んだのだ」

「オラリオに無いもの全般だな。希少な素材とか食材も含まれている」

なんなら、一緒に来るか？と誘う少年をアイズは二人より早く頷いた。二人も「気になる」と同行することとなつて玄関口で待ち合わせをしていると筒状のバックパックを二つ、ケースを持参して来た一誠と合流する。

熱い陽光の真下で絨毯に乗り移動する一行は南西付近に商人達が集う交易所へと向かった。海外から金で物を言わせて都市物流の玄関口でもあるそこには、様々な輸出入品—— 歓楽街への人身売買も

極秘かつ、頻繁に取引されている。そこへ商人や消費者達の邪魔にならない高度で飛んで行く最中。目的の商人らしき人物がロキと同じ糸目でニコニコと笑みを浮かべ、周囲に護衛らしき者達に囲まれながらこちらを見上げていた視線とぶつかう。絨毯は高度を下げ、その人物の前に停まると降り立つ一誠が握手を求めた。

「久しぶり」

「はい、お久しぶりです。貴方様がお求めになられた依頼品は全てご用意させてもらいました」

旅人の軽装の出で立ちの初老の男性から伸ばされる手を握り交わされる握手。物腰が柔らかそうな感じで笑う表情から一切変わろうとせず、『優しいおじいちゃん』と印象を抱かせる。

「ん、じゃあ見せて?」

「かしこまりました」

手を掲げる商人に呼応して護衛達はサツとどこかへ駆けだしたかと思うと直ぐに大きなバックパックを複数持って戻ってきた。それを一誠の前に丁寧で置き、蓋を開ける。少年はバックパックの中を一つ一つ突っ込んだ顔で確認した後、一人の少女のヒューマンから分厚い本を受け取り、軽く中身を読み——パタンと閉じた。

「ん、ご苦労様。ありがとうございます。これが約束の報酬金」

ここまで持ってきた筒状のバックパックを商人へ手渡し、彼も一誠と同じように中身を確認すると笑みを固めながら頷いた。

「ありがとうございます。確かに——2億ヴアリスを受け取りました」

「「ぶっ!」」

中身が大量の金Ⅱヴアリスであったことに噴いた三人を他所に、一誠はケースを徐に商人に向かつて開けた。中身は通信式の腕輪だった。しかも10個に説明書付きだ。それらとは別にもう一つを直接商人に手渡す。

「後はこれ、遠く離れていてもお互い連絡ができる魔道具マジックアイテムとその使い方を記した説明書。付け加えて言わせてもらおうと、その腕輪だけ直接俺と通信できるようにしてあるから壊さないでくれ」

「おお、また便利な代物をお創りになられたとは。はい、かしこまりました。ふふ、これでさらに活動範囲が広がるとうものですよ」

「なら、これからも頼んだぞ?」

「ええ、分かっておりますとも。今後とも——我が商業系【ファミリア】にご贖戻をお願いいたします」

ペコリと頭を下げる商人に倣うように護衛達も頭を垂らし、顔を上げた彼等は踵返して報酬金を大事そうに抱え一誠達から遠ざかるその背中を見るまでも無く絨毯にバックパックと一緒に乗る一誠。

「……あの商人達と繋がっていたのかお前は」

「ん?知っていたのか?」

「いや、どんな男神なのかは知らない。だが、億越えの報酬金を軽く渡すほどお前が依頼した物は貴重な物ばかりなのか?」

リヴェリア達も乗り込み、商人達や労働者達からの奇異な視線の中で空へ舞い上がる絨毯は、真つ直ぐ北と北西のメインストリートに挟まれた区画へ向かった。

「俺個人的だったらすうだけど、リリア達にとっては別にそうじゃないな」

「そうなのか?ならば、手前らにとって貴重では無い物と見合わぬ報酬金を渡すのだ」

「あの【ファミリア】の夢を知ったからさ。俺はそれが面白いと思ってこれで二度目だけど法外な報酬を渡している」

「夢?」と聞いてくるアイズに対して常夏の空を見上げる。果てしない空の彼方——そこに商人達【ファミリア】が望んでやまない理由がある。

「さて、今回の輸出入品はどんなもんかなー」

城に戻って早速広い空間のリビングキッチンでバックパックの中の品の一つ一つを本に記された詳細を読み、確認しながら分ける作業を没頭する。そんな少年の前には興味深々と椿達もいて海外の品々を触れていた。

「海外から取り寄せた素材とはまた珍妙な。この木材は確かとある工

ルフの森にしか手に入らない貴重な物ではなかったか？」

「さあ、俺は貴重な素材を集めてくれて頼んだだけだから実際どんな素材なのか実物とこの説明書を見ない限り分からないよ」

食材、木材や金属、鉱石、装飾品等々、様々な輸入品がバックパツクの中に詰め込まれていた。外の世界の一部を知ることができ品々にアイズは金眼を好奇心に輝かせてあれやこれやと触れて気になる物は一誠に訊ねる。

「しかし、これだけ集めるにも相当の消費の筈……よもや、報酬金とは別に渡しては無かろうな？」

「ん？2億ぐらい渡して買いに行かせてるんだけど」

「……お主、金銭感覚は大丈夫か」

そもそもその大金、去年の間どうやって稼いでいるのか逆に気になつてしょうがない。呆れ果てる椿に一誠は口を開いた。

「金より大事なものがあるのに金の方が大事っておかしいじゃん」

「……それが、これなのか？」

「これは別。これは俺の収集品だからな」

立ち上がり、何故か本棚に近づく一誠は一つの本をスツと押し込んだ。直後。本棚が鈍く重たげに音を鳴らしながら下に沈み込み、本棚は足場となり、壁面に無い筈の長方形の口が開いた。眼を見開く椿達は、直ぐに立ち上がって後ろから覗きこむと……。

膨大な量で山積みになされた黄金もといヴァリスを囲む陳列窓の^{ショーウィンドウ}数々に口をあぐりと開けた。

「そう言えば教えてなかったな？俺の趣味は珍しいものを集める事だ。つまり収集品だ」

ニヤリと笑みを浮かべた彼に信じられないものを見る目で視線を送る。自分達の知らないところで一誠は何かをしていると言う証拠がここに全てあった。だが、どうやってこの一年数カ月間の間、ここまで集めたのだろうか？

「イツセー、これだけの大金。毎日『深層』にでも行かない限りは得られはしない。一体どうやって貯め込んでいる？」

「そりゃ、冒険者と同じことをしているさ。それ以外あるのかと言わ

れば、一番の要因は賭博場で稼ぎしている」

「そ、そうなのか……」

金庫とも過言ではない空間から出て、再び海外の品々を調べて分け始める一誠に驚愕の衝撃がまだ残ってしばらく静かに立ちつくす三人だった。

「お——おお、これは使えるな」

その時、身の丈ほどある大きな黒い鱗を手に説明書を読み上げた一誠は嬉しそうに発した。その鱗の正体は何なのか。その鱗を見た瞬間、動悸が激しくなったアイズが何かを知っていそうだった。

「闇派閥の連中がここんとこ息を潜めて大人しくしとるのがきな臭いんやけど、暇やなあー」

「オラリオが平和であることじやろう」

「そうだね。こういう日が常日頃迎えるようにするのが僕らの役目でもある」

リヴェリアがいない執務室でほのぼのとした会話をする古くから付き合いが長い三人。何時もなら女性眷族にちよつかいというセクハラ行為をするが今はそういう気分ではなかったロキは少々暇を持って余っていた。

「グへへ、暑い時期だったら大賭博場のところの水泳施設に行つたんやけどなあ〜」

「止めい。最大派閥の印象が台無しになるわい」

この時期、最も人が集まりそうな娯楽施設に赴くことも構わないロキの未来の行動の予想は難しくなかった。それこそ変態っぷりに女性の柔肌を蹂躪しまくって警備に通報されてもおかしくない。それで最大派閥としての名声に悪影響が及んでしまったら困るのは眷族達の方だ。呆れるガレスと困った顔をするフィンに「冗談や冗談」と苦笑いする主神は不意に、ポンと手を叩いた。

「せやー！ イッセーがおるんやないか！」

「イッセー？ …… ああ、そういうこと」

聡明なフィンは直ぐに察した。この世界、それも人類や神々が思い

もしない楽しいことを知っているかもしれない一誠に教えてもらおうと言うことを。うきうきと腕輪を利用する主神は、元脊族に通信を繋げるのだった。

「楽しいこと？ 知っているには知っているけど、どんな風に楽しみたいのか教えてくれないと教えることができないぞロキ。多種多様だからな」

カアンカアンと燃え盛る炉の炎の前で鉄から不純物を除き、形を変えて武器や武具として完成に精を出す一誠の傍にロキ達が佇んでいた。今は巨大な両刃斧ラビュリスを打っているのが誰の目から見ても明らかで——ようやくといった息を漏らし、完成したその巨大斧を、もう一つの同じ斧を手にして柄の先の部分と重ね、捻るとカシヤンツと音が鳴った。

「ん、完成」

「異様な斧じゃな。なんじゃそれは」

「見ての通り、二つの刃が連結できる武器だけど。それを単純に斧にしたに過ぎない」

ガレスに投げ渡され受け取るとずっしりとした重量が手に伝わる。皆から離れ、軽く連結した斧を振るう。連結刃と同じだがそれを斧にした一誠の発想は奇異に思いながらも……。

「ふむ、悪くない。斧を外せるのじゃろう？」

「柄の繋ぎ部分を回せば可能だ。因みにそれ『アダマンドイト』で打ったから威力と強度は保障できるよ」

「お主、とんでもない金属でこれを作ったのか」

素材の無駄遣い、としか思えないのだがそれは作った本人の自由だ。呆れた風に息を漏らした後。

「イツセー、これはいくらで売ってくれるか？」

「買うんかいガレス！」

「まあ、実を言うと僕も彼の作品の槍を何本か持っているんだけどね。属性付きの槍は面白いからさ」

「あー、だから槍の補充を求められたのか。毎度あり。で、それは試作

品だからタダでいいよ。ただの思いつきで打っただけでそれを使いこなせる冒険者はたかがしれてるし」

ガレスは無料で武器を手に入れた！

「それで屋内と屋外、どっちで楽しみたいんだロキ？」

「屋内がええかな？」

「屋内ね。因みにこの世界で手軽に遊べる娯楽って何があるか知ってる？」

「カードとそれとチェス、それと外に行けば賭博場があるね。ロキが言う水泳施設もあるよ」

成程、と鍛冶の器具を片づけながら聞く一誠の頭の中では、様々な遊戯が溢れ返っている。一通り片づけ終えて三人に近づく。

「大抵は体を動かすことになるけどそれでもいいなら」

「構わへんで。異世界の遊戯はどんなのがあるのかうちは興味深々や」

「んじゃ、こつち。まだ椿達も知らない場所に案内する」

工房から出る少年の背中を追い、屋内用の履物で大理石の床を歩く。向かった先は三階で何故か一部屋しかなかった。そこに四人は入ると壁際に立てられた棚の中に様々な道具が収納されていたり、中には網が張ったテーブル、更に離れた空間の向こうにも二本の柱に細長い網が張られてあったり四角の板にリング状の網が高い位置に掛けられてもいた。周囲を見渡せば様々な物が設けられていた。見た事のない物が殆どのロキ達は驚嘆の眼差しで見る。

「ざつと俺が住んでいた世界の遊具と遊戯がここに詰まってる」

「つまり、ここはある意味異世界の空間ってことかな？」

「ん、そうだな。仮初の空間だが・・・さて、まずはどれを教えようかな」

「ならばイツセーよ。あの編みを張ってある物は何じゃ？」

太い指で指摘するガレス達に説明する。

「あれは跳ねる玉を使って遊ぶものなんだ」

「跳ねる玉じゃと？」

「そ」

まずはあれからだとい誠が動く。ロキ達もついて行き、ガレスの頭ほどもある玉を編み状に作られた鉄製の籠から取り出して、床に落とすと玉は一誠の掌に戻るように跳ねた。バンバンと音が鳴った直後に跳ね続け、一人で勝手に跳ねる様子を見て、「ほー！」と感嘆する三人。

「跳ねる玉なんぞ見たことも聞いたことも無いわい」

「そんで、それをどーやって使って遊ぶんや？」

「あの網の籠の中に入れるんだ。この玉、ボールを使ってバスケットボールと言う運動をして勝負する」

「勝負？対人戦か何かかい？」

「うん。基本的に身体能力だけで一対一だったり集団同士で遊んだり勝負したりするんだ」

ボールを床に落として弾ませながらゴールから離れた位置に移動したそこから慣れた手つきでボールを投げ、弧を描いてリング状のバスケットの中にスポツと入り床に落ちる。

「今見たとおり、ああやってボールを籠の中に入れて点数を競う。ただし、試合には必ず規則があるからそれを守った上で勝負する」

「むう・・・集団で、しかもボールとやらを籠の中に入れるだけで点数を稼ぐ。現物を見ず話だけであつたらちつとも理解出来んのう」

元より異世界のスポツだ。異世界に無いものを口頭で説明してもちんぷんかんぷんだったろう。蓄えた髭をさするガレスの心情は尤もだと同感するロキは他の物にも指摘する。

「それじゃ、他の編みを張つてあるもんも似たようなもんなん？」

「ん、そうだよ。まあ、他にも色々とあるから教えつつやってみたいと思う遊戯で楽しんでみようか」

「そうだね。頼んだよイツセー」

その日、ロキ達は一通り遊んでみて、これが一番だと大いに楽しんでた物は——太鼓で遊ぶ遊戯だった。流れる音楽の一定のリズムで叩き点数を稼ぐのだが、音楽を聴きながら太鼓を叩くのは新鮮だったと三人は語った。

「儂好みの熱くさせる遊戯はあるか？」

「遊戯、というより運動ならあるぞ？お互いの体と魂を燃やしてぶつかり合うようなものだ」

「ほほう、そんな心躍る勝負が異世界にあるとは是非ともやってみたい。イツセー、その勝負を儂としてくれぬか？」

特にガレスは相撲と言う運動をいたく気に入って、何度も一誠に勝負を申し込んだ。体と体を衝突し合い、汗が飛び散り、勝利への執念と熱い闘志を燃やし、魂をも激しくぶつけあうダンジョンのモンスターとでは味わえない一時を楽しんだガレスであった。

「がははっ！楽しかったわい！存外イツセーもやるではないか！」

「すまないイツセー。年甲斐もなくガレスがはしゃいでしまった」

「ほんと、この世界のドワーフって力が強いなど思ったよ。でも、ガレスは第一級冒険者だから一般のドワーフの力量はわからないけど。ロキ、それを無くしたり壊したりしないでくれよ」

「勿論や、この将棋と盤を貸してくれてあんがとーな！。帰ったら早速二人とやってみるで！それと今夜も飯たかりに来るからよろしく！」

満足した顔で木製の盤と数多の駒が入った二つの箱を持つロキ達は「ファミリア」に戻る。奥深さを知ったからには団長のフィン辺りがダンジョン攻略の為に模索するかもしれない。駒を仲間の団員と見立てて戦略を考えるように。見送った後、一誠は鍛冶の仕事でも戻ろうと振り返ったが。

「……………」

今の今までいなかった四人が、意味ありげな視線を向けて佇んでいた。

「イツセー、何やら手前らがいないところで面白そうなことをしていた様子だな」

「……………何してたのか、教えて」

「後で三人に聞けば分かることだが、な」

「何してたの？」

ハブられて面白くないとそんな雰囲気醸し出すアイズを筆頭に、椿とリヴェリア、二人から自分達も知る権利はある筈だと言わん

ばかり見つめられ、今度から一緒に誘うべきかと苦笑いする。

(今度から声を掛けよう)

数時間後の夜――。

「フィンー、ガレスー、イツセーの飯食べに行くでー!」

「全く、本当にたかりに行くのじゃな・・・」

「すっかり異世界の料理が好きになったみたいだね」

執務室の机に乗って扉を開けて入ってきた「ロキ・ファミリア」初期からずっと今日まで過ごしてきた古き子供の二人を開口一番で誘うロキに一誠も大変じやの、とガレスは溜息を零す。

「ンー、御馳走になりっぱなしだね。次はお土産でも持ってこようか」

「リヴェリアとアイズにも世話になったから。儂からも何か用意しよう。ロキ、お主もじゃぞ」

「せやな。そのぐらいせえんと愛想尽かれてしまいそうや」

辟易としながらも料理を作る一誠が突然くしゃみをしたのは三人の知る由もなかった。揃って腕輪を触れて転移先に『幽玄の白天城』と表示された場所の名前を押すと人一人分しか入れない魔方阵が足元に展開して、ロキ等は執務室から光と共に一瞬でいなくなった。

血のように赤い、ではなく深く濃い赤がグツグツと煮込んでいる音を立たせているところを金眼の視界いつぱいに映り込んだ。鍋の中で煮込まれた、深い深い色のスープの中には肉と野菜がまぎって、アイズとアリサの関心を引き寄せて止まない。乳を使ったスープ、シチューなら食べた事あるが深い赤色のスープは見た事無いと何時までも釘付けでいれば、このスープを作った料理人もとい一誠が話しかけてきた。

「今日はビーフシチューだ」

「ビーフ、シチュー?」

「食べた事が無いか?」

「うん」答えるアリサは木製の脚立に乗って鍋の中身を見ながら頷く。そっか、とそれ以上何も言わず別の料理を作っている一誠の手元にも視線を注ぐ。

「全くロキの奴。俺は料理人じゃないっての。料理作るの嫌いやないけど」

今夜、ロキが食べにくることは既に聞いている。最初は面倒臭そうに溜息を吐くがそれでも料理を作る意向は真面目で手を抜かない。さて、今彼は何を作っているのだろうか。脚立から降りてその脚立を別の位置に変えてまた乗って確かめると、鮮やかな明るい茶色と卵の黄色と白が混ざり合い4つのフライパンの中で煮込まれている。

「これ、なに？」

「ガレスと椿の飯だ。あの二人はビーフシチューだけじゃ物足りないかもしれないから念の為に作っているんだ」

大食いのドワーフと印象を抱いているのか、他にも料理を作って食べさせようとしている。まだ自分も食べた事が無い料理を。「私も食べてみたい」と願う幼女に「分かってるアイス達の分も作ってある」と言われ、嬉しそうに感謝の言葉を述べた時。リヴェリアがロキ達をこの場に招いてきた。その後、

「ちよつと、私は……」

「よいからよいから。主神様も一緒に食べようぞ」

半ば強引に誘ったヘファイストスを連れてきた椿。久しぶりに現在の主神と眷族が顔を見合わせ、恥ずかしげに赤らめた顔を反らし、気まずそうに頬を掻く双方にアイズ達は不思議そうな面持ちで見た。「そんじゃ、ほい、今夜のメニューはビーフシチューだ。先に食べてくれ」

「赤っ！うちとファイさんにイツセーの髪よりめっちゃ赤いつ！これがシチューだなんて奇怪や！」

「変な例えをしないでよロキ」

「これはこれで何とも奇怪な……」

各々の前に置かれるビーフシチューを奇異な視線で迎えた。だが、ロキの間では異世界の料理。それも一誠が作った美味しいものとして銀色に輝くスプーンを持っていただくことにする。深い赤色のスープを一口。

「む……」

「おー、もしかしてこれ。葡萄酒ワインを入れてるんイツセー?」
リヴェリアとロキがビーフシチューに使用された材料を気付いた様な反応をした。

「ご明察だ。軽く炙って限界まで煮込まれた肉の旨味とじっくりと煮込まれて甘みを増した野菜が加わって、さらに無数の香辛料や香草、赤葡萄酒ワインを加えて煮込んだ結果。凝縮され出た旨味が深い深いコクとなつて完成に至るのが、ビーフシチューだ」

調理の工程を教えられ感心するロキは一口。深いコクが下の腹に広がりまた食べたいと思わせる上品な味が胃袋を直撃する。

「ふうむ、葡萄酒ワインを使った料理なんて初めてやなあー。これ、デメテルにも食べさせてあげたいわ。イツセー、用意できるなら頼んでええ?」

「自分で持つて行くんなら一食分は用意する。てか、いたのね。豊饒の神様」

魔法の絨毯でかの豊穰を司る女神の本拠ホームに訪れ、「うちの元眷族ことどもが作ったシチューやで」と薦めて食べさせたところ、ふわふわとした蜂蜜色の髪と同色の瞳の女神が一誠に凄く興味を持ったのは余談である。

「このスープの味が染み込んだ肉も美味しいが、ビーフシチューとやらだけではちと足りんのお」

「手前もそうだ。イツセー、他に何か作っておらんのか」

案の定、一誠の予想通りの発言をする椿とガレスにアイズは意味深な視線を送った。まだ調理台のところにいる彼は台車を押してメインディッシュとばかり縞模様の井ぶりの存在を見せつけた。

「ンー、なんだかイツセーが料理人みたいで手際が良過ぎるよ」

「すまないな。ロキとガレス、お前達も謝れ」

「すまん。反省しているが後悔はしておらん」

「二人とも、謝ってない」

アイズ突っ込みに突っ込まれたー!と笑いが生じる最中でビーフシチューの隣に井ぶりを置く。

「さて、俺も食べよつといただきます」

丼ぶりの蓋を開けた。その直後。辺りに漂う香ばしく、甘い香りに一誠は自分で作った料理にご満悦な表情を浮かべる。第一級冒険者ともなれば嗅覚も優れるので、丼ぶりから解放された甘い香りが鼻を刺激し、食欲に後押しされる。自分達の丼ぶりへ手を伸ばし、蓋を開けると変わらない香ばしさが面々の顔まで上昇する。鮮やかな明るい茶色と卵の黄色と白が混ざり合った食欲をそそる色合いが目飛び込む。

「イツセー、これは何という名前の料理じゃ？」

「カツ丼。戦いに『勝つ』……『勝利』するって意味がある。材料は肉と卵に飯で栄養価満点だ。これは受け売りだけど、戦う男のメシなんだ」

話を聞き、聞いたガレスは、くつと笑みを零す。

「がっはっはっ！ 儂等冒険者からすれば縁起の良い料理の名前じゃわい！ そうか、勝利にカツ丼か！ がっはっはっはっはっ！」

呵々大笑の声を轟かせた。フィンも同感なのか笑みを浮かべていて、「良い料理の名前だ」と言った。

「ほら、冷める前に食べてくれよ。肉と飯と一緒にな」

「おお、そうだった。ではただこう」

縁起の良い料理が冷めてしまえば勝利が委縮しまいかねないとスプーンを持ってご飯と一緒に卵でとじられた肉を豪快に口の中へ入れたその日から、ガレスは「すまん、今夜もカツ丼を作ってはくれまいか」と密かに一誠に頼むようにするほど大好物となった。

「なあ……俺、冒険者止めて料理を作る店を構えた方が良いか？」

「だ、駄目っ！」

「手前も反対だ」

故にちよっぴり料理人になった方が良いかと考えてしまい、冒険者として、鍛冶師スミスとして続けるべきだと断固反対を申し出る三人に説得された。

「結局一食分残ったな。ほい、ロキ。会った事のない女神によろしく」「絶対美味しいって言うで？」

「その後どんな反応されるか想像出来んがな」

別れの際に交わす元主神と元眷族の会話はそこで終わり、冷める前に女神のところへ行くロキは先に戻った。

「イツセー、何時もごちそうさま。次来る時は何かお土産を持ってくるよ」

「リヴェリアとアイズの願いを叶えてくれておるからの」

「期待しないで待ってるよ」

フィンとガレスも遅れて「ファミリア」に戻りに転移魔方陣でいなくなつた。後はヘファイストス———と思つたが。

「主神様ならもう帰つたぞ。便所に案内しながらやり残した仕事があると言つておつた」

「何時の間に。気付かなかつたな。まあ、ようやく落ち着いたー。【ロキ・ファミリア】にいるんだか【ヘファイストス・ファミリア】にいるんだか全然分からん時があるぞ俺」

「どっちもその眷族が同じ家にいるのだからな。そうなくても仕方がない」

共に見送つたりリヴェリア達に振り返りどこか申し訳なさそうにハielフが申した。

「……私とアイズがいて迷惑か」

「……」

今さら何を言っているんだが。ふうと鼻で息を吹いて彼女の額に指を弾いた。

「っ……?」

デコピンされた額に手を添えて鳩に豆鉄砲をくらつたような顔をするリヴェリアに呆れ顔で言う。

「アホ、迷惑だったら迷惑だつてとつくに言ってるっつうーの。そうじゃなきゃ、今が楽しいから一緒に住んでいるじゃないか。アイズだつて俺がまだ【ロキ・ファミリア】にいた頃よりずっと笑っている方だぞ」

「……イツセー」

「リリアが俺と一緒に住むのが嫌なら一言『すまない、本拠ホームに戻る』で

十分だ。嫌じゃないなら俺とアイズの傍でずっとこの家で生きて過ごせばいい。違うか」

腰に手を当てて、リヴェリアに真意を訊ねる一誠の背中によじ登って、肩口から顔を覗かせるアイズもジツと彼女を見つめる。アイズの母親として師として、傍にいるこそが自分の務めだと考えているハイエルフは、ふっと困った顔で息を吐露する。

「本当にお前は変わったやつだ……ああ、嫌とは一瞬たりとも思っ
てない。これからも一緒にいさせてくれまいか」

「ん、それでいい。そんじゃ、俺は部屋で寝るよ。後片付けは椿がしてくれるしな」

いきなり話を振られ、目をキョトンとする椿。心底不思議でならな
いと口を開いた。

「む、何時の間になんかことになっておったのか。だが、致し方が無
い。世話されている手前、そのぐらいはしてやらんといかん」

「私も手伝う椿」

「私も」

三人も手伝いに買って出て、一誠は頼んだと自室に戻った。寝ると
言ったのは建前で、実際はオラリオの外で集められた素材をどんな形
にしようか模索する為、没頭を望んでいる。黒い扉へ辿り着き、自室
の中に入ると違和感を覚えた。

「……………」

誰もいない筈のベッドが膨らんでいる。警戒して手から光刃を伸
ばし、安眠する為の寝具へ近づくとつれ、誰がいるのか把握した。

見慣れた白い作業着の背中に紅髪。——何で俺のベッドにいる
？と怪訝な眼でその者に手を伸ばして起こすわけでもなく、一誠は
ベッドに乗り出し布団の中に潜り込んで、瞑目した。

「……………」

「……………」

「……………ちよつと」

「……………ZZZZ」

寝息で返事された。背中を向けていた筈の人物、ヘアアイストスは

姿勢を変えて反対に振り返りこの部屋の主の少年の顔を見た途端。左眼を開けたまま寝息を立てていた彼の者にドキッと体が震えた。目を開けたまま寝ることができると、そう思ったがそうでなかった。

「今度は起きてる」

「びっくりさせないですよ」

女神を釣る為の演技だった事を知り、深い息を吐いた。

「で、何故に俺のベッドの中に。椿からもう帰ったって聞いたけど」
「帰ったフリをして、ここで待っていたのよ……あの件について」
ケリをつけたいのだろう。彼女が言わんとしている事を察して「ごめんなさい」と先に謝罪したのは一誠だった。

「安眠を邪魔されると手が出るんだ」

「手が出るって……じゃあ、他の人にも？」

「いや、殆ど俺は寝ぼけてやってるから正直あんまり記憶にない。でも、男だったら殴って黙らして、女だったら口で黙らす的な感じで……うん、一方的にごめんなさい」

自分が全面的に非があると謝って済む問題ではないがとにかく謝罪の念だけでも伝えたかった一誠を、ヘファイストスも謝り出した。
「寝ているところを悪戯した私も悪かったわ。だからあは、自業自得だと受け止めることにしたのだけれど……寝ぼけて私を黙らそうとしたのね」

奪われ損じやない。と自嘲的な笑みを浮かべ、一誠はうつと見えな
い槍に良心が深く突き刺さった。

「……すみませんでした」

「もういいわよ。終わってしまった後の事だし、お互い謝った。いいわね」

「……そこまで言うなら」

双方が有耶無耶にせず件のことを水に流すことで終わった。が、女神が「奪われ損」という単語に気になって問うた。

「ヘファイストスは今まで好きな団員がいなかったのか？」

「……」

その問いを受け、彼女は静かに語った。

「求愛はされてきたわ。私を超える武具を、私に認めてもらえる最高の物を作ることができたらつて。でも、それが叶った子は今まで一人もないわ。でも、それ以前に私は女として失格なのよ」

疑問符浮かべる一誠に卑下するわけでも自嘲するわけでもなく、ヘファイストスは淡々と言葉にし、己の右眼——漆黒の眼帯に触れた。

「この下にはね、貴方がびっくりするほど醜い顔が広がっている」
「……」

「不思議でしょ、神なのに。私も散々思ったわ。天界では他の神に嫌厭されたし、笑われた」

彼女は顔の右半分を覆う眼帯に手を添えて、苦笑する。火と鍛冶を司る神は、神にあらざる醜い相貌を持っている。完全完璧である筈の神が有する欠陥。『神の力』アルカナムをもつてしてもどうにもすることのできない。彼女を鍛冶神ヘファイストスたらしめる素顔。男神女神かわらず、他神達には『醜顔』と嘲笑され侮られ、惨めな思いをしてきた。

「この眼帯の下を見て、笑ったり不気味がったりしなかったのは、たった一人の小さな女神よ」

「口キも不気味がったのか？」

それだつたらちよつと、話をしてくると言う一誠に首を横に振った。「やめなさい。全員が全員じゃないから安心して」と諭された。

「今話した通り。もう察したでしょう。この眼帯の下に隠された醜い顔を私に求愛した眷族達は怯えた。それ以来、誰も求愛はしてこなくなつたわ」

当然でしょうね、と自覚して眷族達の心情を責めるわけでも無く受け入れるヘファイストス。今でもその眷族達は彼女のもとで鎚を振るい、武具を打ち続けているようだ。話を聞き終えるまで大人しくしていた一誠は、何を思ったのかその漆黒の眼帯に左手を伸ばした。

「ちよ、ちよつとっ」

動じる声を見無視し、滑らかな紅髪に触れながら、あつさり眼帯を外す。ベッドの中で横たわり硬直するヘファイストス。初めて一緒

に見る彼女の両の眼。そして視界に飛び込んでくる女神の素顔。己より身長の高い、瞳を揺らす彼女をジッと見つめていた一誠は——
顔色変えず、呆れた風に息を漏らす。

「拍子抜けだな。この程度のことでは怯えて遠ざかるのか先輩達は。俺だったらお前の一部だと受け入れるのに」

その言葉に、目を見開くヘファイストス。

「ヘファイストスに鍛えられた覚えはないけど、敢えて言わせてもらうぞ」

更に彼女との距離を縮め、鼻先がくつききそうなほど金眼と紅眼の視線がぶつかり、自分の思いをぶつけた。

「凍りつかせるようなお前の顔を見ても鉄おれの熱は、こんな程度で冷めることは絶対に無い」

鍛冶師スミスとして主神に対する想いは不動だ、と断言する眷族の少年の言葉で頬がうっすらと染まるヘファイストス。しばらくして近い距離で見つめていた鍛冶神は、ポツリと言う。

「……返してちょうだい」

返却に応じた少年から眼帯を受け取り、起き上がって右目に眼帯を付け直した。顔の右半分を覆ったヘファイストスは顔を左右に振り紅髪を揺らした後、窓の外から差しこんでくる月光に浴びて見つめてくる。

「二つ聞かせて。事故とはいえ私と唇を重ねて、私の醜い部分を知ってから今どう思っているのか」

「気持ちが変わらない。醜い部分だろうとそれはヘファイストスの一部だ。てか、俺より醜くないから正直安心した」

「貴方が醜い？変な事言うのね」

「醜いさ。寧ろ、ヘファイストスがショックを受けると思うよ。——

俺は誰かに好かれることはあっても誰かと寄り添うことはできない秘密があるからな」

それが、ロキが知らない方が良いと言う秘密なのだろうと推測し、一誠の過去にどんな闇を抱えているのかヘファイストスはまだこの知らない。ごろりと背中を向け始める少年。寝に入るのか、それとも

己の醜い部分とやらを見せたくないのか彼女に振り返る気配は無かった。

「……何時か、その秘密を教えてちょうだいね」

「気が向いたらな」

その背中に優しく話しかけ、適当に相槌を打つヘファイストスと一誠はここで寝ている間にいなくなるかと思っただが。

「そういえば。ヘファイストスから見て俺の打った武器はどう評価しているんだ？」

ずつと何も言っただけでこなかった作品の評価。初めて家に招き打ってみせた刀にも良し悪しの一つも言わなかった。今日まで打ち続けた武器は二桁を超えている。鍛冶を司る女神の感想を聞いてから寝ようと一誠は起き上がったのでヘファイストスは素直な感想で答えた。「きつと椿と同じよ。純粹に武具を打つ鍛冶師達とは違って異なる技術で常識を壊す。他の眷族達でも見ても真似できない貴方の技術は私すら驚かせた。常識はずれな一つ一つの武具は私が認めるほどの作品よ」

「おおー……」

鍛冶神に認められていた。その事実に関心から喜び、更なる作品に対する意欲が増えて嬉しく笑みを浮かべた。

「……そうね。今日まで私を認めさせた作品を【ファミリア】に貢献し続けてくれた貴方に、椿の我儘でこの家に住まわせてくれるお礼を兼ねて何か褒美でもあげましょうか」

何がいいかしら？主神自ら打った武具か何かなら直ぐにも用意できると思いつつ、これまでの一誠の貢献に褒美を上げても問題無いと提案した鍛冶神に一誠は爆弾発言を言った。

「じゃあ……今度は事故じゃない方がしたい」

「え？……」

最初は理解できなかったが、薄々と意図を悟って、紅髪に負けないぐらい顔を紅潮させた。ここで冷静沈着で凜とした面持ちに動揺の色が誰から見ても分かるぐらい浮かびだす。

「そ、それは……ほ、他に無いの？」

「ない（キツパリ）」

ハツキリと言い返され、赤らめた顔で困った表情をしてチラチラと何度も一誠を見る。いざ本当にするのかと思うと胸の動悸が激しく高鳴り、顔は分かるほど熱くなる。さっき自分に対する想いを聞かされたばかりに意識がさらにしてしまふ。どうしよう、と戸惑っているそんな初心な姿を見せる鍛冶神に一誠はあの時と同じように腕を伸ばし、彼女の腕を掴んで布団の中に引きずり込む。

「イ、イツセー……ッ」

「褒美をくれるって言うなら。事故じゃなくて自分の意思でヘファイストスとしたい」

今度は寝ぼけてでなく己の意思でヘファイストスの上に覆い被さり、真っ直ぐ見下ろす一誠。

「他の先輩鍛冶師達スミスが鍛冶神や女神、主神としてでなく一人の女のヘファイストスから避けるなら俺が貰う」

「っ——!?!」

その言葉を耳にした途端。心臓が今までよりも激しく高鳴った。左の金眼を見ても本気なのだ強い眼差しを浮かべている。こんな醜い顔を持つ女神を強引に押し倒して直接口にする眷族はいなかったので彼女は動揺の色を目に浮かべる。

「ま、待ってよ。永遠を生きる私達にまわりつかれたって、損をするだけよ？家庭なんてものも作れないわ」

「永遠に好きでいてくれるなら大歓迎だ。作れないなら作れるようにすればいい」

「——ほ、本当に本気で言ってるの貴方……」

愕然に尽きる。醜顔を見せて怯えた眷族達と違う反応をされ、心底驚きうろたえる。褒美は口付が良いと言われてから話が妙な流れになつてしまつていることに気づいていない。二人ともだ。

「本気で言っている」

「っ」

いよいよヘファイストスも返事をしなければいけなくなった。真摯に求められ動揺する鍛冶神は己を上から見下ろす少年を見つめ、羞

恥で朱に染まる顔と潤う瞳で意を決して口を開こうとした時だった。腕輪の宝玉が点滅する。不満げに眉根を歪め、女神から遠ざかり、ベッドから離れた位置で通信を繋げると真剣な表情のフィンが映り出した。

『すまないイツセー。さつきリヴェリアにも伝えただけど闇派閥イルヴェイスが騒動を起こし始めた。僕等はコレの鎮圧にあたるが君の力も借りたい』

「……りよーかい。人の大切な時間を邪魔する輩には絶望を与えんとなあ」

『……もしかして、怒ってる？』

「そう見えるなら、そうだと思うぞフィン」

通信を切り、嘆息する。ベッドにいるヘファイストスに振り返らず、「聞こえていた通りだ」と話しかけた。

「今から戻るのは危ないからもう少しだけここにいてくれ。返事はまた今度で良いけど今回のことは椿にも言うなよ」

「……分かった。気をつけなさいね」

鎮圧に向かう一誠の姿が部屋から消えると、深く安堵の息を漏らした。緊張で高まる心臓の鼓動を落ち着かせようとギュツと胸の前に手を握る。

「……もう。あの子ったら強引なんだから」

暗い部屋の中で独白するヘファイストスの顔に、まんざらでもなさそうな笑みが浮かんでいた。

冒険譚7

ダンジョン『中層』17階層――。朝から張って狙っていた『迷宮の孤王』モンスターレックスゴライアスと一人の冒険者が激しい攻防を繰り広げていた。巨大な拳が唸りを上げて圧碎せんと構えられる十字架型の盾に殴るが壊れる気配は感じない。盾を持つ冒険者も同様だ。雄叫びを上げて微動だにしない不動の盾に苛烈な打撃を加えて冒険者の足をめり込ませていく最中。ゴライアスの足に激痛が走った。赤い相貌を下に向けると防具と一緒に体を纏う風がもう片方の足に直撃して無数の斬撃を与えられた。更にもう片方の足にも果敢に斬撃を見舞う銀髪の少女。明後日の方から冷気の吹雪が襲いかかって巨大な顔の半分が凍りつく現象にゴライアスは堪らないと張りついた霜を剥がそうと攻撃の選択を疎かにした時。盾を持つ冒険者が巨木の如く太い右の足を豪快に守りから攻と切り替える盾で殴り、体を支える支柱の軸を崩し、巨人のモンスターに尻餅を突かせた。17階層の空間が凄まじい衝撃と振動で轟く。一時行動が不能になった彼のモンスターの眼前に突如綺麗な桃色の花卉が。あつという間に視界が奪われ、敵の姿を遮られて手で薙ぎ払い、吹き飛ばそうとしても執拗に纏わり付き桃色一色が続く。そんなゴライアスの顔を覆う桜の花弁が発生する刀を操る冒険者は、巨体に切り刻んでいく三人の仲間の内の一に呼びかける。

「アイズ！」

「！」

高く跳躍する仲間を見た金眼は意図を察し、金髪をなびかせながら盾を持つ仲間のもとへ跳んだ。その瞬間、鬱陶しく纏わりついていた桜の花弁が一部のモンスターが放つ『咆哮』ハウルで吹き飛んだ。霧散する桃色の花卉に紛れて、小さな神風が『迷宮の孤王』モンスターレックスゴライアスの胸部にぶつかった。一撃必殺と過言ではないダンジョンの全モンスターの体内にある魔石破壊を狙った攻撃手段。輝白の剣が分厚い肉体を裂きながら貫き、切っ先に固い感触が両手一瞬で伝わるもそれすら通過点でしかないとばかり風の勢いは留まらず

「リル・ラフアーガツ！」

ゴライアスの背中から飛び出して突貫に成功した穴が風の通り道になった――。

「見事な一撃で合ったぞ【剣姫】よ。階層主の体を突貫する威力は魔法とその剣のおかげか」

「椿は試し斬と『魔剣』の出来栄えの確認だもんな」

「うむ！まだまだ改良の余地があると知れた。一先ず手前の目的は果たせた。【剣姫】も階層主を倒せたことで【ランクアップ】は果たせたいやも知れんな」

「そうであつたら嬉しいな」

灰燼と化した階層主のなれの果てから『ドロップアイテム』を回収し、砕けた魔石は本来よりも小さくなっているもそれも回収する。一仕事が終われば、ここまで同行を求めた第一級冒険者の三人にも話しかける。

「リリア達、待たせたな」

「いや、そうでもなかった。大体5分ぐらいで倒したぞお前達。邪魔が入らなかつたおかげだろう」

「僕達が他のモンスターを相手にしてたもあるけれど」

「お主……18階層に繋ぐ通路を塞ぐことも無かつたじやろう」
【ロキ・ファミリア】幹部達は揃って奥にある通路に顔を向けた。ゴライアスとの戦闘で崩れた――わけではなく、『街』^{リヴィラ}から編成された討伐隊が来るのを故意で戦闘になる前に一誠が壁を崩して通路を塞いだのだ。冒険者にもモンスターにも邪魔されない為にだ。ガレスは呆れた風に少年の思惑の意図を理解して指摘したのだが。

「邪魔されたくないからな。さて、俺も目的を果たしたから帰ろうかな」

「あれ、どかさないのかい？」

「18階層にいる連中がどかしてくれるだろ」

「二お前と言う奴は……」

瓦礫は放置、出入りしたくば自分達でどかせばいいと言外する一誠

にアイズを除いて『何だこの瓦礫は!? 邪魔で進めねえー!』『さっさとどかしてゴライアスをぶっ倒すぞ!』とかすかに聞こえてくる声達に同情を禁じ得ないフィン達だった。目的の為ならばゲスなことをするも厭わない一誠は帰路に急ごうと足元に転移式魔方阵を展開しようとする直前。この階層に他の冒険者がやってきた。誰だ? と他人事のように向ける視界に入る者達は。

「あっ」

顔見知り——同じ境遇の冒険者と久方ぶりにダンジョンの中で再会を果たす。

「改めて、久しぶりだなイツセー。元気にしてたか」

「こつちの台詞でもあるんだけどお互い息災で何よりだキリト」

^{リウイラ}街の青水晶と白水晶の二つが生えた広い場所で異なる世界から来た者同士が腰を落ち着かせる。キリト達と話をする為に通路の瓦礫を除去した後。スタコラサツサと17階層から逃げるように冒険者が築き上げた街へ入り今に至る。彼等【アルテミス・ファミリア】の一行である以前、異世界から来た一団がいると教えられたが、初めて対面して、自己紹介がされる。

「こつちの五人は【ロキ・ファミリア】の団長と副団長のフィン・ディムナとリヴェリア・リヨス・アールヴにガレス・ランドロック、アイズ・ヴァレンシユタイン、アリサ・イリーニチア・アミエーラ。そしていま俺が所属している【ヘファイストス・ファミリア】の団長の椿・コルブランドだ」

「……他派閥同士の干渉はしないんじゃないのか?」

「基本的はそうだよ。でも、絶対にではないし僕らは彼といるとそういう規則は気にしていられなくなる」

「主に俺の飯をたかりに元主神がくるからだかな」

「否定できんのお……」

何とも言えない会話の前にキリト達は最大派閥に対する威厳が和らいだ気がした。

「えつと、イツセー達は何をしていたんだ？」

「階層主の討伐に兼ねた作った武具の試し」

十字架型の盾と桜の刀、そして今まで使わなかった背中の弓を見せつける。

「その盾、随分と大きいな。扱えるのか？」

「それを試していたんだ。機能と性能は申し分なかった。売っても問題ないぐらいだ。数千万ヴァリスか一億でな」

「たかつ！と声が上がったが使ってる金属が金属なのでそれぐらいはすると、椿は心中同意していた。」

「ね、ねえあんたって鍛冶師なんだよね？」

「鍛冶師の【ファミリア】にいるのに、そうじゃなきゃなんだって話だけど、なんだ？」

恐る恐ると一人の少女がキリトの背中から話し掛けてきた。茶髪に同色の目、体の各部分に軽装の鎧アーマーやサポーターを身に付けメイスを装備している少女は申し訳なきように申し出た。

「あたし、鍛冶スキ——じゃない、鍛冶師スミスを目指しているんだけど、その工具とか揃えるのが大変でお金も掛かるのよ」

「？【ヘファイストス・ファミリア】に入れば解決できるだろ」

「いやー、ま、そうなんだけど……他の派閥に入団したらアスナ達と行動が出来辛くなるじゃん」

「む？イツセーは普通にフィン達【ロキ・ファミリア】と行動しておるからそれほどでもないぞ。主神方針によるが、そちらの主神アルテミスは厳しいのか？」

椿がこれまでの一誠の言動を顧みて、「ヘファイストス・ファミリア」もそこまで厳しくはない、と鍛冶師スミスになりなら入団すればいいと団長として言外、付け加えた。歯切れ悪く、曖昧に話を濁す彼女の意図を読めないまま。

「あーもうっ、あたしは鍛冶をしたいから工房が必要なの！だから、何とか貸してくれるか、用意してもらえないかお願いしたいのっ！」

「……？」

結局、一誠や椿は思うところは同じだ。鍛冶の【ファミリア】所属

の二人は不思議な顔を見合わせてから当然のように言った。

「〔ヘファイストス・ファミリア〕に入団するべきだ」

「……あたしが馬鹿だったわ」

謎の少女の頼みの綱は切れた、とばかりに頭を垂らし、肩を残念そうに落とすのでキリトが助け船を出す。

「リズは俺達の為に鍛冶師を目指しているんだ。その為にはどうしても工房が必要だ。だから鍛冶師のイツセーに頼めないかって話なんだよ」

噛み砕いて説明された一誠達は何を今さらな話だ的な雰囲気を感じ出す。

「んー、それはいくらなんでも虫が良過ぎるぞ。協力するとは言ったが他派閥の設備の増設まで協力する気はない。鍛冶をしたければ鍛冶を生業としている〔ファミリア〕に入団するか金を貯めて工房を増設するべきだ。それが普通じゃないのか?」

「……尤もだ」

言い返す言葉も見つからない、と正論を論破されたキリトは瞑目して一誠の言い分に肯定した。ならばいい、と椿に話を振る。

「実際、鍛冶師の工房ってどのくらいかかるんだ?」

「規模の大きさに寄るなあ。それに必要な器具を全て揃えると十万は軽く超える。工房を作ってもらうには〔ゴブニュ・ファミリア〕が一番であるから、手前の推測では一〇〇〇万以下、数百万ヴァリスが妥当だろう」

それを聞いて拍子抜けだと溜息を吐いた。

「何回か『下層』を中心に『ドロップアイテム』を集めて商人に売り続ければ直ぐな額だな。去年、真珠と珊瑚をたくさん集めたら三〇〇万ヴァリスは稼げたし、他にもマーメイドの血、体力回復効果がある希少な血は破格な値段で取引されるんだが」

ふと、あることを思いつきフィンに訊ねた。

「フィン、まだ時間に余裕あるか?」

「シー?まだ続行かな?」

「ん、マーメイドの血が欲しくなった」

また何か知らの道具アイテムを作る気になったのか、とこれまでの魔道具マジックアイテムを考慮して、極めて高い完成度の物が見られるかもしれない。その時、貰えたらいいなあーと淡い想像をしつつ首肯する。

「わかった。今日中に辿り着く階層でもあるし、時間の許される限り同行するよ」

「決まりだな。キリト、ついでにお前らを『協力』する」

「協力だって……?」

「俺達とくればお宝の取り放題だ。小さな工房ぐらゐは増設できるぐらゐの金額が手に入るかもしれないし、どうだ?」

突然の誘いに【アルテミス・ファミリア】は目を丸くする。最大派閥と同行して『下層』の『ドロップアイテム』を手に入れる機会はあるか無いかのこの瞬間。キリトはアスナ達を見渡し、意見を求める視線を来る。返事は直ぐに戻ってきた。

「分かった。協力してくれ」

「ついで、だからな」

【ヘファイストス・ファミリア】【ロキ・ファミリア】【アルテミス・ファミリア】の混同パーティが結成され、一行は25階層の『下層』へ――

――転移式魔方陣で一氣に移動した。

「はい、到着」

『……?』

呆けるキリト達を他所に、目の前は傲然と音を奏でる、凄まじいまでの大瀑布。谷や崖を形成するのは水晶の頂。霧のごとく飛び散る水しぶきとともに空中を飛ばたく半人半鳥ハービィや歌人鳥セイレーン。高い啼き声が高らかに響き、舞い散る羽の軌跡が開けた大空洞を横切って行く。大いなる25階層、通称『水の楽園』が、そこに存在した。

「すげえ……」

一誠達の後ろでキリト達も立ちつくし、その光景を目の当たりにする。ダンジョンの中に存在する大自然の景色に誰もが放心する中、特に皆の目を奪うのが、視界の正面に位置する大瀑布だ。離れているとはいえどうどうという地響きにも似た音が、何百Mも離れた一行のものにも届いて鼓膜を震わせてくる。

グレート・フォール
『巨蒼の滝』

下層域25階層から始まる文字通り巨大な飛瀑。目算でも幅は約四百M、高さは優にその倍はあるだろう。光の反射の関係か、流れ落ちる水は緑玉蒼色^{エメラルドブルー}。惚れ惚れとするほど美しい滝はここが危険なダンジョンであることすら忘れさせるほどだ。キリト達に感動と同時に胸に覚えるのは震えるほどの畏怖——恐怖でもある。滝とちやうど対面位置、一行が立つ水晶の崖の真下に広がるのは大きな滝壺だ。落ちたら上級冒険者でも一溜まりもないことはもとより、目を疑ってしまうのはその滝壺からさらに瀑布が下へと続いていることだ。そう、丁度階段のように、滝は25階層から下部の階層へ貫通しているのだ。

「さて、一固まりになつて搜索するより二手で搜索した方が効率的にいいと思うけど」

「アイズを除いて僕達と君は初見ではないから問題なくできるからね。僕とガレスが「アルテミス・ファミリア」と行動しよう。キリトという名前だっけ。君達のパーティから何人か彼等と行動してもらいたい」

「えっ、ああ、じゃあ……」

「キリト君、彼と話があるから一緒に行かせて？」

栗色の長髪にはしばみ色の瞳が特徴の——。

「え、キリトの美人妻がこっちにくんの？夫に嫉妬されて剣を振り回されたくないんだが……」

アスナが積極的に自分から加わると言うので、驚いたキリトに心底そう思った一誠がそう言った途端に、照れた彼女は「キリト君はそんなことしません！」と否定するが。

「へえ、君達は夫婦の関係なんだ」

「ふむ、最近の若い者は早いのじゃな。知らんかったわい」

「若いからこそ、早いうちに様々な経験をして良き関係を築くことができるようになるのさガレス」

「これは祝いの言葉を向けるべきか？」

「……お父さんとお母さんになるの?」

「えつと、おめでどう?」

フィン達から生温かい眼差しを向けられ、二人は居た堪れないと気恥ずかしい思いが胸に一杯となる。

「じゃあ、他の女達って——キリトの愛人?」

「ぶつ!?お、おまつ、何を言うんだ!そんなわけ——」

「えー?一緒に夜を過ごしたり、ピンチなところを助けたり、一緒に戦って心を開いたりしたら少なからずお前に対する感情と気持ちが変わると思うぞ?」

キリトはその指摘を受け、うぐつとぐうの音も出なかった。何気に自覚があるどころか……。

「……」

「うん?何でピンポイントに自分達のその時の心境を言うんだろうかこの男はって顔しているなその四人は」

「……本当に君って何気に言い当てちゃうから感心するよ」

「成程、アスナもその一人だったわけだ」

「っ!」

感嘆したが墓穴を掘ったアスナはかぁーと赤く染まり、そんな彼女等にフィン達からの眼差しは「若いね」「若いのお」「若い」と変わらない温かさで送られる。

「ちよ、み、皆さんそんな目で私達を見ないでください!」

「ははは、すまない。でも、若いうちに失敗しながら強く生きることが大切だよ。何時か二人の間に生まれる子供の為にもね」

「っ——」

「フィン、それはちよつと気が早いかなって。ほら、二人が顔を赤くしている……って、その反応はもう?」

「イツセー、敢えて訊くのはよくない。さっさと『ドロップアイテム』を收拾しに行くぞ」

促すリヴェリアの一言で、キリトのパーティからアスナと眼鏡を掛けた少女がフィンとガレスの代わりに同行することになった。

「よろしく。早速マーメイドがいる場所に行こうか」

十字架型の盾を持って、何故かその言葉は緑玉蒼色エムラルドブルーの水を直下させる大瀑布が落ちる先に向けられていた。リヴェリアは、まさか、と思つて訊ねた。

「お前、どこから行こうと考えている？」

「ん？こつから」

数百Mの滝壺に指を突き付ける。——落ちて直接向かうつもりでいる一誠に誰もが言葉を失った。

「駄目だ。そんな危険な移動は私が許さない」

「もしかして落ちて行こうって思われてる？」

「それ以外どんな方法で行くつもりでいるのだ」

「ん、こんな風に」

指を弾いて甲高く鳴らした。その直後。一誠の足元に魔方陣が展開し、そこから魔法の絨毯が出てきた。見覚えのないアスナや少女は不思議と訝しい目でこの絨毯をどうするのかと思つた。

「俺が作った魔道具マジックアイテム、空飛ぶ魔法の絨毯だ」

乗り出す少年に呼応して絨毯は一人で浮き始める。アイズとアリスと椿、溜息を吐くりヴェリアも慣れた動きで乗り、二人を待つ。

「おい、早く乗れ」

「え、う、うん」

催促され、アスナ達も緊張しつつも乗ってから絨毯はゆっくりとした動きで滝壺の真下へ直下する。キリト達に見下ろされ、見送られる隣では緑玉蒼色エムラルドブルーの水の大瀑布。今にでも襲いかかつてきそうな勢いの膨大な水に圧倒される最中。本当に飛んでいる絨毯に驚嘆する。

「これ、どうやって作ったの？」

「企業秘密だ。教えたところで作れるとは思えないけど」

「そうだね。それじゃ、お願いがあるんだけど。君が持っている調味料を分けてほしいの」

「商人に頼めば手に入る物があるんだがなあ。交易所に言った事無いのか？」

「交易所？ううん、行ったことが無いなあ……」

「ないのか。まあ、オラリオに来てまだ浅いもんな。来慣れた場所所以

外、中々行かないものか。この收拾が終わったら案内するよ。そうすれば手に入らないものも手に入る」

絶対に金よりも貴重な調味料は渡さんと心情の一誠を知らず、「ありがとう」と純粹に感謝の言葉を送るアスナ。絨毯が滝壺に降下して早数分。もう見慣れた大瀑布から響く轟音をアスナと雑談をかわしている時。汚い啼き声が翼を羽ばたかせ羽を落としながら近づいてきた。

「イツセー、モンスターが来る」

「だろうな。堂々と降りているから来ない方が不思議だ。てなわけ
で、ここで新武器の登場」

背中を弓を掴み、一体の半人半鳥ハービィに狙いを定めようとする少年に少女が怪訝に指摘する。

「矢が無いじゃない」

「必要無い。この弓だけで十分だ」

弦を摘むように引つ張った。矢を番えずただ弦を引つ張ってどうやってモンスターを射るつもりなのだろうと見ていたら、矢を番うところに光が収束し、鋭く細長い一本の矢と化したところで、手を離し、放たれた矢は半人半鳥ハービィの胸の魔石を貫き、風穴を開けたまま大瀑布の中へ飛んで行き消失する。

『シャアアアアアアアアアッ!』

『アアッ!』

同胞を消した敵に他の半人半鳥ハービィや歌人鳥セイレーンが気付き、空飛ぶ絨毯の上にいる六人に襲いかかる最中。もう一度弦を引つ張り、光の矢を番うと、更に弦を引つ張ったら矢が二倍にも大きくなった。その矢を人型モンスター等に見掛けて放った時、飛翔する矢が分裂し炎に包まれた。

『ア、アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!』

炎の矢に当たった『ハービィ』と『セイレーン』は、その身を炎に包まれ、体が燃え尽きる前に水を求めた結果。大瀑布に飛び込んでそのまま滝壺に落ちる凄まじい水の勢いに逆らえず飲み込まれた。あつという間の空中戦に彼女達は啞然とする。

「矢も無しになんで……」

「この弓の名前は魔導弓。文字通り、魔法の弓で使い手の魔力を消費して弓を具現化、自分の思念次第で太さや強度、属性攻撃が可能になる。通常の矢でも使えるから何気に使い勝手が良い。ついでに射程距離は大体二百M。『深層』の蜘蛛のモンスターから得た糸を特殊な編み方でしたからかなり丈夫だ」

商人が集めて来てくれた希少な木材の材質が良かったから作れた逸品だと、自慢げに笑む少年から手にする椿。

「……また奇妙な武器を作ったな。魔導師専用メイジの弓と言うことか」「魔力があれば誰でもできるし、通常の使い方もできるから特別専用でもない」

「なるほどな。つと、また来おったぞイツセー」

上空からモンスターの接近に気付く椿から弓を受け取ることは叶わなかった。アスナと同行する少女が「貸して」と横から奪うように取って立ち上がった。背中に掛けている大量の矢が入っている背囊から一本抜き取り、弦に番え、狙いを定めたモンスターから射る。空気を引き裂く一矢に気付いた時は既に遅く醜顔の眉間に突き刺さり、全身の力が抜けたように『巨蒼の滝』グレート・フォールの滝壺へ落下していく。また同胞がやられた様子を見る間もなく、ドツドツドツと三本の矢が三体の『ハーपीー』と『セイレーン』の肩、胸部、顔面に刺さって最初の一体と同じ末路を迎える。

一通り終えた狩りは大瀑布の轟音のみ聞こえない状況の中で絨毯の上に立ち、矢を射った少女は構えを解き冷静な面持ちで弓を見下ろす。

「いいわねこれ。ギルドから支給された弓なんかと全然性能が違うわ。良く飛ぶ」

静まる絨毯の上で独白する少女は一誠に顔を向けて提案を述べる。

「これ、欲しいのだけれど。どのくらいお金がいる？」

「……いや、それはタダでやるよ。俺を驚かせたサービスだ」

「……いいの？リズの工房の件を蹴ったのに」

目を丸くする少女の中で一誠は厳しい同じ貉の穴の人だと印象

だった。なのに、作った弓を無償で譲るお人好しの様なことをするのだから一瞬だけ何か企んでいるのではないかと疑ってしまった。

「あれは単に甘えてきたからだ。弓を譲るのは違う。使い手が良いなら安心して譲る。それ、一応試作品でもあるからな。完成した弓だったら数百万ヴァリスで売るつもりだった」

コレが試作品と聞き、これ以上の弓を作る気である一誠の好意を素直に受け取り、「じゃあ、遠慮なく使わせてもらおうね」とニコリと笑みを浮かべて弓を大事そうに持つ。

「あ、自己紹介してなかったわね。私はシノン。よろしくイツセー」

「おう、よろしく。今度魔法の矢でも作ってやるよ」

「……期待して待つてるわ。弓使いの見せどころが増えるしね」

握手を交わし合う二人は笑みを浮かべあった。二人のやり取りにどこか羨望な眼差しの目で見ても、コツソリと椿に訊ねるアスナ。

「……あの、試作品だったら私にも貰えるんでしょうか?」

「さて、今のように腕の立つところを見せれば可能性は無くはないと思うぞ? 試作品とはいえ、〔ヘファイストス・ファミリア〕の団長の手前が太鼓判を打つ武器であるからなあ。ダンジョンの搜索に当たって生還率の一つは武器の性能も左右すると過言ではない。だからお主も欲しいのであればやることは一つだ」

「そうですね。じゃ、頑張って認めてもらいますっ」

隻眼の一流鍛冶師スミスの話にふんす、と両手を握って張り切る意欲を見せるアスナ。ここで認めてもらえば今の武器より性能が高い武器が手に入るかもしれない。そうすればダンジョンの搜索も楽になり得るのだ。

「因みにお主の武器は?」

「レイピアです」

一方、地上組のフィン達は、25階層から27階層に出現する金属系のモンスターに分類カテゴライズされる『ブルークラブ』と戦闘していた。個体によって左、あるいは右の鉗脚かんきやくが異常発達したモンスターの鉄槌ハンマーのごとき攻撃は脅威であった。前衛ウォールが構えていた盾に罅が入るか冒険

者の体勢を崩す程の力がある他、キリトや赤髪の青年の斬撃をものともしない金属の鋼殻に傷一つ付かない。

「キ、キリの字！この蟹！蟹なのに前進するしめっちゃくちや硬えぞ！どうなってやがるんだ!?」

「分かってるー！ライン、繋ぎ目を斬るしかない！」

「お兄ちゃん、私もやるっ！」

「私もです！」

「蟹のくせに硬いなんて叩き潰し甲斐があるじゃないのよッ！」

「てめえら！蟹に負けてんじやねえっ！男を見せろおっ！」

「「「うっ、おおおおおおおおおっ!!」」」

アスナとシノンがいない【アルテミス・ファミリア】11名の戦闘をフィンとガレスは見守っていた。異世界の人間達の力を見てみるとキリトに提案したところで複数の金属蟹ブルークラブに襲われ、やむを得なしと対応に当たって今に至る。

「フィン、どう見る？」

「妙に戦い慣れているようだ。粗いけれど連携は中々といったところ」

「イツセーの世界のように神々がおる世界じゃからか、あるいは殺伐とした世界に戦いがあるのか」

「後で彼等に訊くとして、彼等のLv.にも疑問が浮かぶ。もしかしたら何か秘密があるのかもね」

去年結成した、一誠から聞いた【アルテミス・ファミリア】の団員達のLv.は殆ど駆け出しの冒険者並みの筈だ。ブルークラブ金属蟹の潜在能力ポテンシャルは個体によってLv.2か3。駆け出しの冒険者がとても倒せるとは思えないモンスター相手に踏ん張って、的確に繋ぎ目を斬り、確実に料理していく。そうやって幾度も無く戦ってようやく戦闘は終わりを迎えた。

「ぜえ、ぜえ・・・あんたら強いのに俺達だけ戦わせやがって」

「青二才が、まだまだへばるのは早いぞ。ほれ、さっさと『ドロップアイテム』を集めて陣形を組め。また次のモンスターが近くにおるぞ」
「僕とガレスは本当に危ないと思った時だけ戦わせてもらおうよ。僕等

が助けたら君達の成長を邪魔してしまうから助言だけはさせてもらう」

「流石は第一級冒険者、最大派閥の団長……シビアだ」

一緒に戦える、と18階層で感嘆した自分に会って「甘くないぞ」と言いたくなつたキリト。『ブルークラブの鋼殻』を3つ背囊に入れてキリトとフィンが前衛で歩き始める。

「水の中に落ちないように。モンスターは水の中で潜み、飛び出して僕達冒険者を襲うから警戒を忘れるな」

こうして培った経験を教授して25階層の中を探索するフィン。先達者の言葉に「アルテミス・ファミリア」の団員達は息を呑み、嫌な汗を掻いて自分達を虎視眈々と狙っているだろうモンスター達が潜んでいる、フィン達が進む通路と並んで、流れている水流に目を向ける。水晶の色を受けて美しい蒼色に輝く水面はまた幻想的だったが、彼の小さな勇者の言葉で認識が変わってしまった。

「仮に落ちてしまったら？」

「陸に上がることが最優先だ。人間が魚を陸上で調理するように魚が水中で人間を調理する。水中はモンスター達の世界だから、君達が水中で戦おうと言うなら圧倒的地形の不利の中で無残に殺されるだけになる。ましてや君達一人も『水精霊の護布』を用意していない」

冒険者の先輩としてフィンから指摘された『水精霊の護布』。キリトおろか他のパーティの少女と男性達は聞いたことが無いと気配を醸し出し、「それとも、知らなかったのかな？」と訊ねられる団長のキリトは困り顔で後頭部に手を回し、沈黙で肯定する。

「皆を纏める団長なら、もう少し調べるべきだ。地図だけ頼らず、ダンジョンの中で何がありどんなモンスターがいるのか情報収集も大切だよキリト。団員達を死なせたくなかつたら、元の世界に帰りたいかつたら尚更だ」

秘匿していた事実が露見されていたことに「っ、どうしてそれを……」と思わず訊き返してしまった。

「イツセーから聞いた。彼も君達とは違う世界から来た存在であることも【ロキ・ファミリア】の主神と極一部の団員だけ打ち明けてくれ

た。だから僕達は君達に興味がある。異なる世界から来た人類の實力を」

そう語ったフィンがキリトに顔を向けた時——水面が勢いよく『爆発』しキリトに向かつて牙を剥く長大な影——大蛇のモンスター『アクア・サーペント』。薄^{ライトグリーン}緑の鱗と蛇の頭を持つ大型級。大きな鱗を有する頭部の威容はいつそ竜にも見える。ギルドに蓄えられた情報によれば、その体長は——最大で一〇Mである。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオ』

双眸をぎらつかせながら顎を開く。フィンに隣に立つキリトが振り返って目を大きく見開き、背中の剣の柄を握る前に水中から出現したモンスターのキリトを噛み砕かんとする顎の方が早かった。しかし、それ以上に——。

高く跳躍したフィンが天井に着天、槍の穂先を真下の薄^{ライトグリーン}緑の頭部に目掛けて構え、天井から勢いよく跳躍して大^{アクア・サーペント}水蛇の顎まで貫きながら頭部を足で粉碎、キリトの眼前で仕留めて見せた。キリトからすれば、全然見えなかった。何時の間にか凄まじい勢いでモンスターの上から奇襲して倒した。それしか分からなかった。

「油断するな、イツセーだったらこう言うよ。僕もだけど」
「……」

「君達の世界はどんな世界なのか分からないけれど、ここはモンスターの巣窟がある迷宮都市。モンスターだけじゃなく邪な心を抱いている冒険者や人間、神すらもいる。決して油断してはならないよ。君の大切な友人達や妻が何時奪われてもおかしくない」

そう言いながら槍を抜き取り、キリトの横に飛び降りると息絶えた大蛇のモンスターは水流の流れに身を任せ水中に引きずり込まれて消える。あのまま流されていけば巨蒼^{グレート・フォール}の滝の滝壺に落ちて行く大瀑布へと向かうだろう。それを見送らず、点滅する腕輪の宝玉に目を落とすフィン。宝玉から立体映像が浮かび、一誠の姿が映る。

『フィン、こっちは目的の「ドロップアイテム」を手に入れたぞ。そっちはどうだ』

「こっちはまあまあかな。どうする？もう少し探索していくかい」

『まあまあならした方が良いだろ。このまま俺達は27階層に向かう。そこで落ち合おう』

「分かった。彼の妻に傷をつけないでいてね」

『分かっているよ。んじゃ、またな』

通信を切り、「これは本当に便利だね」と初めてダンジョン内で使用した腕輪の機能に感想を零した。相手の状況を知ることができる唯一の代物。今度の「ロキ・ファミリア」の『遠征』で大いに役立つだろう。

「シー、もう少しだけ作って貰えないかな」

——その数時間後。『下層』で大いに『ドロップアイテム』を手に入れ、数百万と言う額を一気に稼いだキリト達は『下層』の価値に圧倒された。地上に戻った時は既に空が夕日に染まり切っていた頃だった。

「うおおおおおっ!?すげえー大金!マジでか!」

「こ、これで工房が増設できたらなあ・・・なんて」

「私はしばらくこの弓で活躍するよ。魔力ってどうやって増やすんだらう?」

「え、シノンさん。その弓どうしたんですか?」

「イツセーから貰ったんだよ。私も試作品のレイピア、打って欲しかったなあ・・・」

亜麻袋を複数抱えて大通りを歩くキリト達。地上に持ち帰ったアンダー・コラール 迷宮珊瑚と迷宮真珠を商人に交渉したことで得た大金だ。三五〇万ヴァリス。【アルテミス・ファミリア】初の大金獲得である。

「だけど、一日でこんなに稼げたのはイツセーの魔法のお陰だよ。何、転移魔法って。凄く便利過ぎるじゃない」

「ああ、わざわざ歩かず一気に移動できる魔法だ。本当ならもつと時間が掛っていた筈なのに予想以上早く戻って来られた」

シノンの言い分に尤もだと褐色肌の禿げの男性が首肯し、付き添いとしてついてきた真紅の龍を模した全身型鎧フルプレートを着込んだ、自分達と同じ境遇者を見下ろす。

「なあ、お前の世界はどんな感じなんだ？」

「そんな話を民衆がいる前でするな。怪しまれるぞ。神々何か知られたらアルテミスに迷惑に掛る。娯楽に飢えた神はこの世界に無い唯一無二の物に目が無くて反応しやすいようだぞ」

「なんだそりゃ？」

「何だも何も、子供のように、全力で興味を持って全力でちよつかいを掛けたがるってロキから聞いた。物凄くニヤニヤしながらだって。だから俺達が異世界から来た存在だーって知られたら、娯楽に飢えた神々は全力で執拗にストーカーの如く追いかけて回される。——いやだろ？」

確かに……。キリト達の心は一つとなった。

「私達、自分達のこととはアルテミス様以外誰にも教えないようにしているけど、本当に言わない方が良いのね」

「当たり前だ。珍しいあまりに誘拐されても不思議じゃないって聞くし、自分が大切なら常に警戒するのが当然だろう。信頼できる相手しか言わないこと薦める。それともう一つ」

朱色の空へ指を衝き付ける。まだ何かあるのか、と耳を傾けた一行は。

「そんなあからさまに大通りのど真ん中、それも民衆がいる中でお前らは警戒心が無さすぎ」

そう言われた時。彼等彼女等が通る道の先から強面の男達、暗い路地裏から得物を手にして現れるゴロツキ達の登場で空気が一変した。

「な、なんだあこいつ等は？」

「ハイエナって言えば分かるか？」

「人が苦勞して手に入れた大金を横取りしようとするわけここの冒険者は!？」

信じられない！とリズが悲鳴染みた叫びを上げてメイスを構える。キリト達も武器を構え円陣を組む。一触即発と緊迫状態となった街中で、まさか地上でも戦闘が勃発するのかと臨戦態勢の中。

「なあ？その金を譲ってくれないかあ？俺達、金に困ってて大変なんだよ」

「ついでに綺麗な嬢ちゃん達も来てくれたらうんと可愛がつてやるぜ？」

「ヒヒヒ、今日はツイて——」

ヒュンツ！と一人のゴロツキが突如姿を消した。それだけじゃない、キリト達を取り囲んでいたならず者達も地面に開いた暗い穴の底へと訳も分からないまま成す術もなくあつという間に落ちてしまい穴は閉じた。

「……あの人達、なんだったわけ？」

啞然と呆けるシノンの一言に「さあ……」とキリト達。ただ一人、鎧の中で表情が見えない一誠は口端を釣り上げていた。——
——今頃、一階層のダンジョンの中でモンスターに追われているだろうと。

冒険譚 8

その日の夜。北部の北端に構えている「ロキ・ファミリア」に女神が訪れた。ウエーブが掛った蜂蜜色の長髪に垂れ目の瞳、フレイヤやヘファイストスを凌駕するほどの母性の塊もとい豊満な双丘。春のイメージのワンピースにサンダルを履いた女神の登場に門番達は目を疑った。

「ロキはいるかしら？ 話が見たいの」

女神の来訪に門番の一人は主神ロキに報告をしに行き、しばらくして正門にやってきた。

「おー、デメテルやん。どうしたん？」

知神に朗らかに「よっ」と手を挙げるフィンとガレスも連れてきたロキににっこりと微笑む女神デメテル。豊穣を司り、農作物をオラリオの郊外で育てて販売している商業系「デメテル・ファミリア」の主神は単刀直入に申し出る。

「貴方がくれたビーフシチュー、それを作った子と会ってみたくなくなっちゃったの。会えるかしら？」

「勿論やで。ちよいまっつてーな」

腕を掲げ、嵌めている金色の装飾品の宝玉を触れて操作し、直ぐに通信を入れると数秒後、繋がった。

「イツセー、自分に会いたい女神がおるんやけどええか？ つーか、今夜も食べに行くつもりやで！」

『お前は自重と言う戒めを知るべきだと俺は思う。で、どこのどんな女神？』

「デメテルやー！ ビーフシチューを食べさせた女神で、これから一緒にそっちに行くさかい。門を開けておいてや」

『……着いたらもう一度連絡してくれ』

それだけ言って通信は切られた。よし、と納得したロキはデメテルと一緒に北と北西のメインストリートの区画に挟まれた位置、廃墟と化している建物がある場所へ向かった。「また外食か」と門番達に思われ見送られる中だ。

「あ、そうや。ファイたんも声を掛けるけどええ？丁度通る場所にお
るから」

「構わないわ」

もう一柱を誘う気満々の朱色の髪の毛の糸目の女神は赤い屋根の武器
屋を見据える――。

こねた生地が円形状に薄く伸ばされ、巧みに動かす手と指でもっと
薄く広がって行く。軽く上に回しながら放り出し受け止めながらあ
る程度まで伸ばしていく少年の様子をアイズ達は驚嘆と感嘆の息を
漏らす。伸ばした生地を大の上に置き、白い粉を振り掛けた後は刻ん
だ野菜や燻製肉のベーコン、果実、チーズ、ソースを掛けて既に同じ
物が作られ、何枚も入れられている熱が籠った専用の炉の中に多種多
様な具材を受け止めている最後の生地を入れ込んで蓋を閉じる。の、
作業が終わるとアイズ達が話しかける。

「イツセー、今夜はどんな料理なのだ？」

「ピッツア、いや、ピザって料理だ。パンの生地を薄く広げたその上に
肉や野菜を置いて、ソースも掛けた状態で焼く食べ物だ」

「ピザ、ふむ、聞いたことのない料理の名前であるな」

「絶対に外食してないからだろう。探したらあると思うぞ多分」

「楽しみ……」

「ああ、楽しみにしてくれ。でも、食べる時は火傷しそうなほど熱いか
ら気を付けて食べてくれ」

焼き上がるまで十数分掛る。その間、今日も夕飯をたかりに来る者
達とは別に初めてこの家にやってくる女神の分のサラダを用意し、
稀少果物レアフルーツを使ったデザートデザートの製作に試みる。

数分後、ロキ達が家の前に来たと言う連絡が入り、扉を開けた。敷
地内の自然豊かな森と発光する水晶にダンジョン原産の稀少果物レアフルーツや
回復道具アイテムにも使用される原料等アイテム、人工栽培されている植物を目の当た
りにしデメテルは驚嘆した。見えない道を通り、水の中に囲まれた神
殿まで見えない足場が降下して建物の中にある転移魔方陣を経由し
て『幽玄の白天城』に辿り着く。

「来たでイツセー！」

「来たなたかりのロキとその御一行。まだ出来上がって無いから座って少し待ってくれ」

ちらつとデメテルを一瞥する一誠にニコリと笑う蜂蜜色の髪の女神。対して会話はせず、各々と席に座って夕食ができるまで待つことにした。

「リヴェリア、今夜の夕飯は何やー？」

「ピザだそうだ。パンの生地を使つて焼いた物らしい」

「む？それはパンではないか？」

「いや、野菜や肉、果実とチーズを乗せて焼いている。ただのパンではないようだガレス」

「へえ、そんな食べ物聞いたことが無いや。聞いたことが無い分、どんな料理なのか実に楽しみだ」

軽くピザの詳細を伝えられキッチンにいる料理人へ期待の眼差しを向ける。未知の料理に未知の味を堪能できるのは今この場にいる者のみ。今度はどんな味の料理が出てくるのかフィンが口にした通り、期待で胸が躍ると氷水が入られた透明の大きな容器と人数分の硝子の灰を持つてくる一誠が。

「取り敢えずこれと前菜としてきゅうりの一本漬けを食べてくれ」

深緑色で細長い野菜を切つたものを皆の前に箸と一緒に置きだす。キュウリノイツポンツケ？初めて聞く名前に見慣れた野菜に一同は小首を傾げる。だが、信頼している料理人が作つた料理は期待を裏切らない筈だと、摘んでシャキツとした触感と、程良い塩気。いや、塩味だけではない。美味しく説明できないが、一度味わつた野菜に伸ばす手が、止まらない。シャキ、シャキ、シャキ……。

「む、もう無くなつてしまつたわ」

「ああ、僕もだ。何時の間につてぐらい夢中で食べていたようだね」

ロキ達も同様か、空になった皿を前に座つて名残惜しそうに見ていた。

「……」

唯一、直ぐに食べるのは勿体無いとデメテルの皿だけはまだ三分の

一の両が残っている。瞑目して口の中で確りと味わう彼女は美味しそうに食べているのであった。

「——おまたせ、今日のメイン。ピザの出来上がりだ」

大皿の上に、更に焼いたパンの生地の上にこんがり熱せられた彩りある食材の数々が我が物顔でテーブルに置かれる。今の今まで鼻腔を刺激しなかった香りが、ようやく香ばしい匂いと共に湯気が昇る。赤と黄色、緑、茶色、白と様々な色で絵を描いたような料理から放つ香りに、ほう……と息を吐く。

「これがピザかあ。パンを具材の皿にするなんて珍しい発想をするんやないッサー」

「絶対にオラリオのどこかで同じのがある筈だから。無かったら他の国だ」

専用の器具でピザを人数分に裂き分けながら「同じ物を作っているに過ぎない」と言外する一誠の手で切り分けられる。

「見ての通り、全部で四枚だ。こっちは野菜を中心にしたピザ、こっちは肉とガーリックをメインにした、こっちは魚介類を主に焼いた。そしてこっちは海外から輸入してもらった果物とベーコン、コーンで焼いて見た」

四種類のピザに使用した具材を一つ一つ説明しながら皿を置き、一誠も座り出す。

「それじゃ、熱い内に食べよう。いただきます」

食べる前の祈りをする一誠に倣ってロキ達も同じ祈りをしてからピザに手を伸ばす。

「あら、溶けたチーズが伸びるわ」

「しかし、熱い。焼き立てだからだろうな」

溶けたチーズを伸ばしながら切れた、手を火傷しそうなほど熱いそれに皿へ移し、片手で豪快に開けた口の中に入れるか、上品に両手で持って食べるかそれぞれの食べ方で初めてピザの味を堪能する。

「ん!？」

一同揃って一口、ピザをかじった瞬間に硬直した。溶けたチーズの少し酸味がある乳の味と、確りと焼かれて程良く脂が抜けた、上質の

燻製肉の味。それを引き立てる、生のまま焼かれたのであろう玉葱の僅かな辛みと、上に乗せられた緑の野菜の独特の苦み。それらの具材の土台に使われている薄いパンは、表面は良く焼かれて堅くなっているが素晴らしく柔らかく、質のいい小麦と塩と水だけでこね上げられたシンプルで淡白なパンの味が、それぞれの具の強い合い味を支えている。さらに酸味があつて、同時にとても旨味を含んだトマトソースが使われているのでとても美味しく感じさせる。ロキ達はそのらの強調と味の秘訣はなんなのか知ってか知らずか、「うまい！」と歓喜した。

「好評で何よりだ」

「好評も何もないでイツセー！これ、パンみたいなもんやろ？こんな温かくて色んな具材をいっぺんに食べれるのはこのピザっちゅうだけだめっちゃ美味しいわ！」

「うむ、これは酒に合うとは思わんかガレス」

「そうじゃな。この独特の味のチーズがそう思わせてくれる。残念じゃ」

他のピザにも手を出し始めるガレスと椿にアイスとアリサは海外から取り寄せた果物で作ったピザが気に入ったのか、二枚目に突入していた。リヴェリアとデメテルは野菜中心のピザ、ロキとヘフアイストスは海鮮のピザにも食べ始める。

「この果物は食べた事が無いわ。これは何て名前の果物なの？」

「パイナップルって言う。多年草だから何度か収穫できるけどその度に身が小さくなって3年以上はあまり使えないんだ」

どこからともなくパイナップルの実物を取り出してテーブルの上に置くとすかさず横からひよいとロキが掴み取った。

「ふんふん、これがパイナップルちゅう果物か？どうやって食べるん？」

「皮を剥いで中心の軸も切り落として食べるんだ」

「成程なー。これ、後で食べるとしてデメテル。このパイナップルを栽培できるん？」

更にデメテルの方へ手に渡り、蜂蜜色の瞳は観察眼の眼差しを向け

るようになって調べる女神。

「見た目だけじゃ何とも。この栽培方法が分かれば子供達に任せられるのだけれど」

「ああ、土壤の依存がない株で二年以上育てて実る果物だ。問題は無い筈。株も商人に頼んで輸入してもらってあるからあげようか？」

新たな果物の株の提供の提案に目を丸くするが、豊穡を司る女神はオラリオに無い作物を育ててみたいと思いで少年からの提案を受け入れた。その後、サラダや稀少果物の水レアフルーツ晶クリスタル・ドロップ飴を用いたゼリーも出され、特にゼリーはデメテルを驚嘆させたほど澄んだ味わいであった。

「美味しいもの食べさせてくれてありがとう。パイナップルを立派に育てられたら誰よりも早く一番目に食べさせてあげるわ」

「ん、首を長くして待ってる」

食事の後、ロキとヘファイストス達は帰宅しようと敷地内に繋ぐ魔方陣の前に立っていた。箱の中にある数多の株を抱えて感謝の言葉を送る女神は行動でも感謝の思いを示した。

「これはほんのお礼」

一誠に近づき、顔を寄せて耳元で囁き、瑞々しい唇を少年の頬に押し付けた。

「デ、デメテル貴方……」

「ごめんなさいヘファイストス。ふふっ、この子のことが気に入っちゃったわ。もしも、改コンバージョン宗宗をする機会があったら私のところに来てくれるかしら？一杯可愛がってあげちゃう」

柔和に笑みを浮かべて残した言葉を最後に一足早く白の前からいなくなつたデメテル、

「イツセーつてもしかして色ボケ女神みたいに子供だけじゃなくて女神を魅了するんかいなー？」

「気に入られるならともかく、口付されるほど仲を深めた覚えはない」

「うん、それはよーわかつとる。ほんじゃ、また食べにくるでー」

ロキもデメテルを追いかけるように魔方陣の中へ入って消えた。

「……イツセー」

「おう」

最後まで残ったヘファイストスは、両手を伸ばし、眷族の顔を添えるように包むと、デメテルが唇を落とした頬の個所に上書きするように彼女も唇を押し付けた。

「貴方は私の眷族、私の子供。だから他派閥の女神に誘惑されないように気をつけなさい」

「うーん、誘惑はされないけど俺自身、両親が言うには同性異性問わず好意を向けられやすい体質だって言われてる。だからそれだけは目を瞑ってくれないかな？」

「何その変な体質は……でも、その体質は馬鹿に出来ないみたいね」

コンバージョン
改 宗を果たした後でも一誠と接触することを止まないロキ達。更に一誠と住みたいとアイス、リヴェリア、椿が同棲をしている。皆から好かれやすいと言う体質はあながち間違っていない。そして自分もその一柱——。

「……ねえ、私もここに住みたいって言ったら貴方は困るかしら？」

「は？店の方はどうするんだ？」

「この家から通えばいいだけよ。それでどうなの？」

「まあ、困ることがあるとすれば俺の秘密程度だし、「ヘファイストス・ファミリア」の団員として俺の家だから主神のヘファイストスが住んでいてもおかしくない。寧ろ歓迎。ただ、他の先輩達の反応が気になるけど」

と、要は住んでいいと了承を得たのでヘファイストスは「分かったわ」と言葉を最後に別れてこの場を後にした。

——その数日後。主神が引越してきた出来事に団長は目を瞬きし、ハイエルフと金髪金眼、銀髪青目の幼女は若干戸惑ったものの、日常生活に一柱が加わった程度で遠慮なく接するようになって言われたこともあり、何時も通りの生活を送ることになる。

(うーん、何だか賑やかになる予感が)

翌朝一年という期間でL.V. 2に「ランクアップ」をを果たした異

例の成長ぶりを見せる少女には驚嘆と感嘆、畏敬と畏怖の念が向けられていた。彼女に対する想いと感情は様々であるが、何年もダンジョンに冒険して来た彼等彼女等よりもあつさり器を昇華させた場も弁えないまだ幼い少女達に対する——嫉妬が一人の冒険者を突き動かした。

もう直ぐ「ヘファイストス・ファミリア」に入団して二カ月が経とうとしている。オラリオの街は相も変わらず闇派閥イルヴァイスの襲撃騒動から小さなイザコザまで起きて非力な民衆達に不安と恐怖を煽らせる。そんな民衆と混沌を臨む邪神とその使徒達の為にギルド側の派閥達が太陽が出る日中にも拘らず鎮圧せんと行動する。

「なあ、フィン？」「ヘファイストス・ファミリア」から鎮圧に駆り出されている冒険者つて一人しかいないって知ってたか？」

「うん、知ってるよ。いま僕の隣に立っている者こそがそうだ。ありがたい限りだね。直ぐに鎮圧活動が終わりそうだ」

手を上に掲げ、上空に展開する広大な魔方陣から雨のように降り注ぐ雷が闇派閥イルヴァイスの使徒達を直撃し、意識を狩る。彼等が請け負った区域で暴れている邪神の使徒は今の一撃で路地裏に潜んでいる者達も沈んだ。「ロキ・ファミリア」の団員達に捕縛の指示を下すフィンの隣でまだどこもかしこも悲鳴と戦鬨音が聞こえてくる報に顔を向ける。あつさり邪神の使徒達を倒したので別の区域へ足を運ぼうとする。

「ガレスんどこ行ってみる」

「分かった。ここはもう大丈夫そうだから行っていいよ」

最大派閥の团长空の了承を得たのでガレスが担当している地域へと跳躍して移動する。さつさとこの騒動を終わらせる為に。

「リヴェリア、今のあれ……」

「イツセーだろうな。詠唱無しであればどまでの魔法を放たれて敵対しているとはいえご愁傷様だ」

「凄……」

フィン、ガレス、リヴェリアと隊を三つに分け対処していた一つのリヴェリア達のところでも稲妻を放つ魔方陣が見えていた。闇派閥イルヴァイス

はあの魔法で一網打尽にされた筈だ。

「……できる?」

「いや、無理だろう。我々の魔法は『神の恩恵』^{ファールナ}で発現し詠唱・無詠唱で放つに対し、イツセーは魔法のスキルを発現しないままで無詠唱で魔法を放っている。我々の場合は後天的に得た魔法であり、イツセーは先天的に元々魔法を得ている状態なのだ」

最強魔導師も一誠みたいにできるかと暗に問われたことを察し、背中の中部当たりまで伸びてきた翡翠の髪を揺らしながら首を横に振る。それが一誠とリヴェリア達魔導師^{メイジ}の違いだと教えられ、熱い太陽の顔を覗かせる蒼い空を見上げる。もう一つの世界——アイズの想像を超えるロキ達同名の神がいる世界はどんな世界なのだろうか……。

「リヴェリア、異世界行ってみたい?」

「ああ、できるものならばな。私がオラリオに来たのもまだ見た事のない世界をこの目で見たかったからだ。言っておくが、冒険者になどなる気は無かったのだ」

ロキにハメられたのだ。と過去の自分を思い出し、若干悔しそうに声が低く力が入って無かった。意外な彼女の冒険者になった理由にアイズと「え?」と漏らすアリサは耳を疑った。

「私とフィン、ガレスのみの〔ロキ・ファミリア〕は顔を見合わせる度にいがみ合っていたものだ」

「嘘……」

「本当だ。生真面目で融通の聞かないエルフと野蛮で粗暴なドワーフ、小さな体のくせに不釣り合いな野望を抱き、生意気で上から目線で言う小人族^{バルウム}が何時もお互い認めようとせず、数えるのが億劫しい程、ロキに仲裁されたものだ」

その話をアイズから聞かされ、フィン達三人は一誠の手であることをされ一騒動が起きたのは少し先の話になる。

「信じられない話だろうか?」

「……うん。そんな風に見えない」

「だろうな。他の団員達に教えてもアイズと同じ反応をするだろう」

上空に広範囲の魔方阵が空に出現し、また稲妻が地上に降り注ぎ、
少なくない数の悲鳴が上がった。全員の意識はそちらに向き、副団長
の「あれは味方の魔法だ」と言う言葉で警戒心を解く。

「ん、リヴェリア。イツセーのところに行ってもいい？」

「居場所は分かるか？」

「飛んで探す」

「あ、私も」

背中から魔法の翼を展開して宙に浮く。広域で混沌をもたらす邪
神の使徒達を鎮圧している場所は少なくない。今でも戦いの空気が
和ららず、悲鳴と怒声、戦闘音が色んな場所から聞こえてくる。文句
を言いながら駆り出された一誠がさっさと終わらせる為に別の場所
へ赴いているかもしれない。擦れ違いになる考慮をして空から探す
ことにしたアイズとアリサにリヴェリアは了承する。翼を羽ばたか
せ、高いところから見つけようとする少女らはキョロキョロと真紅を
求める。

「.....あ」

金眼は真紅を捉えた、わけではなかった。危険区域内に一人の小さ
な少女が大通りの真ん中で蹲っている姿を見つけて漏らした声だっ
た。聞こえてくる泣き声にどっちを最優先するべきか、考えて申し訳
なさそうに片方を謝って.....。

「.....大丈夫？」

泣く少女に手を差し伸べる。アイズ達が声を掛けた少女は犬シアンスロープ人
だった。話を聞くと親と買い物の最中に闇派閥イルヴァイスの襲撃に直面して逃
げていたが、

「お母さんっ、お母さん.....」

泣きじゃくる犬シアンスロープ人がこの場で蹲っていた理由は、母親と思しき血
の海に沈んだ女性から離れようとしていなかったからだ。背中から
深い傷を負って出血多量で.....。

「.....」

——これで二度目だと直面する人の死。自分のことではないが
大切な人を無くした痛みと思いは同じだとアリサは犬シアンスロープ人の少女を

見つめる。この少女もまた悲しい事件で親を失い、自分と同じ境遇となった。その気持ちは痛いほどよくわかる。悲しみに暮れた自分を直ぐ手が差し伸べられた。だが、今この状況でこの子にそういう存在はいない。

——今回の件でこの少女は親を奪った者に怒りを抱くだろう。黒い炎に焦がれてしまうかもしれない。それは復讐——。大切な人を奪った相手を許してはならない憎悪にもなりうる。この少女もそうであつてほしくないのに、どうすればいいか分からない。モンスターを屠るだけなら簡単なのにどうやってこの子の心を救えばいいのか、その方法を知らない無力なアイズは悔しい思いで手を握る。

「——ゲゲゲッ！まさか、こんなところで会えるとはねえ〜」
「……えっ?」

地面を踏み鳴らす音と共に声がした方へ見上げた矢先。金眼と青眼が瞠目する。三Mを超える、巨漢ならぬ巨女。狩猟着に似た赤黒の衣装から覗く褐色肌の短い腕と短い脚は比喻抜きで筋肉の塊だった。身の丈もさることながら横幅も太いずんぐりとした体型で、手足と胴体との釣り合いがおかしい。極めつけは、その大きな顔。黒髪のおかつぱ頭で、ギョロギョロ蠢く目玉と横に裂けた口唇は、こう言つてはアレだが、アイズは思わずにいられなかった。ヒキガエルの様な——。

(地上に、モンスター!?)

(カ、カエル……?)

心の中で叫喚する失礼な反応するアイズとアリサを知らない巨女はニヤア、とえくぼ、と呼ぶには醜怪なほど頬にたくさんの皺が寄る。その笑みに何とも言えない気分陥り、母親を失ったばかりの犬シアンスローフの少女は恐怖で顔を青褪めていた。

『人形姫』。そしてお前も、最近調子こいているようじゃないかあ〜?そんなお前らにアタイら冒険者を舐めた態度をしているとどうなるか、この美しいフリユネ・ジャミールが直々に骨の髄まで教えてやるよおっ〜!」

『洗礼』という言葉を超らせる前に巨女フリユネが手にしていた大戦斧に血が

滴り落ちたのを見て悪い予感を覚えて聞いた。

「……………それは」

「あん？ああ、闇派閥イルヴァイス共にアタイの美に酔いしれて狂ったのか、襲いかかって来たもんだから美味しく頂いた後に殺したやつさあ〜」

一般人に手を出したわけではないと、アイズはどこか安堵して、敵意を向けてくる相手と戦いにこの少女を巻き込むわけにはいかなないとアリサと眼を合わせて頷く。

「喰らいなあ〜！」

他は眼中にないと大戦斧を振り下ろしたフリユネに目を見開き、二つの剣を重ねるように掲げた。が、直撃する斧から伝わる衝撃と重さにあっさり膝を崩してしまい、尻餅をついてしまったところで視界が褐色に染まった。ドツ！と小柄な体につま先が突き刺さり、あまりにも強過ぎる脚力で口から胃液と交じって血反吐が出る。

「かっはっ……………!?!」

「うっ、あっ……………!」

哄笑の声と共に蹴り飛ばされ、建物の一角にぶつかつた。意識が朦朧とする目に強い意志を絶やし、フリユネの動きが見えなかった、見た目に騙された気分を陥り、初撃を受けた瞬間、直感した。

フィン達や一誠みたいに私より強い——第一級冒険者かもしれないと。

「ゲゲゲッ！たった一年で『ランクアップ』したわりには、手も足も出ないじゃないか〜！当然さ！アタイはお前等より強く、お前より美しいのだからあ〜！」

小さな少女達を覆い被さる絶対の敵の影。散々痛めつけ、これ以上生意気なことはさせまいと冒険者の規則ルールに則って洗礼を与えんとする。

「ゲゲゲッ！ぶっ倒れちまいな！」

同時刻。

「ふむ、お主がやるとあつという間に終わるな。今後とも手伝っては

くれまいか?」

「こつちはやることがあるつてのにそうそう手伝えるかよ。今日の夜は豚カツにする予定だから買い物に行くつもりだったのに」

「豚カツ?カツ丼みたいな似た名前じゃの」

「実際そうだぞ。豚肉を使った揚げ物だからガレスが好むかも」

鎮圧活動はそこそこ終わりを迎え、明後日の方からやってくるフィン隊に手を挙げながらそう話す一誠とガレス。

「ほほう、それは楽しみじゃ。今夜もたかりに行くからよろしく頼む」

「なんだい、今夜の食事の話でもしていたのかいガレス」

「おう、今夜は豚カツと言う肉料理の様じゃぞフィン」

「そうか。でも、リヴェリアはあまり肉料理は食べないから作るのは大変じゃないかい?」

「へえ、そうだったんだ。じゃあ、リヴェリアだけは小さくして他のを作っておこうかな」

今夜の夕食の献立を考え、どんな料理をしようか脳裏に思い描く一誠と今夜も楽しみだ、とフィンとガレス達に絶世の美女のハイエルフが姿を見せて近づいてきた。

「何の話をしているのだ」

「うん?リリアが肉料理はあまり好まないって聞いたところ」

「嫌いではないが、あまりに肉料理が続くのは困るだけだが……アイズ達はいないのか?」

「二アイズ達?」と三人は顔を見合わせる。ここにいない二人の少女はリヴェリアと同じ隊に組まれていた筈。逆にそっちにいたのではないのかと目を向けると、事情を聞かされる。

「あらかた鎮圧は終わったのでな。イツセーのところに行くと言って飛んで行ったのだが、来ていないのか?」

「いや、俺はフィンのところが終わってからずっとガレスのところにいたぞ」

「うん、そうだよ」

「俺もイツセーの言った通り、ここを鎮圧しておった」

どちらにも二人の姿は見えないと語り、リヴェリアは目を細め

た。

「……あの子等の身に、何か遭っているのか」

三人は視線を一誠に向ける。空を見上げ、少しばかりそうしていると「いた」と言って駆け出す。

「フィン」

「ああ、頼んだよ」

長い付き合いだ。何を言いたいのかわずとも聞かずとも気持ち察してフィンはリヴェリアに許可を与える。ガレスも念のためにと二人で一誠の後を追うその十数秒前、一足早く少女がいる大通りに辿り着き、血の海に沈んでいる女性と涙流している幼女、巨女に一方的な攻撃を受けている二人の幼女を見て一瞬で判断した。

「そこまでにしろ」

若い冒険者達に振り下ろす大戦斧を片手で受け止め、フリユネを鎧の中で睨みつける。いきなり現れ、己の得物を掴み取った真紅の全身型鎧フルプレートの者に訝しい目つきで見下ろすフリユネだったが、

「お前、確か『人形姫』の腰巾着だったかあ？」

金髪金眼の幼女の傍には何時も竜を模した真紅の鎧を着込んだ冒険者がいる。そういう話や噂が忘れた頃に聞くフリユネは思いだしたように訊ねた。

「一つ聞く、お前が殺したか？」

「同じ事言わすんじゃないよお。アタイが理由もなく不細工どもを殺すほど暇じゃないのさア」

「……そうか、少なからず酌量の余地はあるようだな」

「あ？何言って——」

「いい大人が子供に攻撃するのは見逃さないがな」

掴んでいた手斧の斧身に罅が生じた瞬間、砕けた。

「お前、アタイの斧を——っ！」

「これ以上この二人を傷付けるなら、俺りゆうの逆鱗りゆうに触れることになると思え」

敵味方関係なく瞠目する。臀部辺りから九つの獣の尾が生えだし、その一つがアイズとアリサを守る様に包み込み、残りの全てはフリユ

ネに切つ先を向け、何時でも迎撃できる構えを取った。体勢を低くし、広げて構える両の手の平に炎が発現する。

「狐人ルナルっ!？」

頭部の鎧を突き破るようにひよこつと生えだす狐耳も見て、フリユネは素つ頓狂な声を上げた。極一部の地域に住まう魔法種族マジックユーザーの意味で口にした彼女は、彼の種族に九つの尾を生やす者がいるなど聞いたこと無いと絶句してもいた。

「フリユネ・ジャミール」

静かな声音で彼女を呼ぶ、一誠を追いかけてこの場に來たりヴェリアとガレス。

「一度だけ言う。早々に我々の前から立ち去れ。さもなくば、私とガレスより厄介な相手に蹂躪されることになる。それでも構わないのであれば我々もお前を、私達の「ファミリア」の団員を傷付けた正当な理由で肅清させてもらう」

「九魔姫ナイン・ヘル」に「重傑エルガルド」……

ちつ、と舌打ちをして使い物にならなくなった大戦斧を地面にたたき付ける。

「傷付けただなんてとんでもない言い草だねえ。暇だったからアタイの遊び相手にしてもらっていただけなのによお。だけど、遊びに出掛けた甲斐があつたつてもんさあ」

ギョロリ、と一誠に目を向け、ふかあい笑みを浮かべた。

「九つの尾の狐人ルナルウ……その綺麗な尻尾と同様にお前もさぞかし整った顔をしているんだろおう? ゲゲゲッ! アタイに会いたかつたら南東の歡樂街にきなあ? たあーつぷりと可愛がつてやるからよおー」

捨て台詞を言い残し、軽く地響きを鳴らしてこの場から遠ざかるフリユネを見送る一同。不意に、立ち止まって尻目で一誠を見つめ、哄笑しながら完全に去った。

「……」

ブルリツ、と今さら全ての尾が身震いした。尾に包まれているアイズとアリサはどうしたんだろう? と少年の背中を見つめた時。これ

は一種の恐怖で震えているのだと後に気付く。

「絶対行くもんかつ、ぜってえー骨の髄まで喰われるのが目に見えてるしー!」

「……………目をつけられてしまったな。同情に値する!」

「儂もあやつとだけは良好の関係にならんわ!」

溜息を吐き近づく二人。珍しくリヴェリアが同情の眼差しを送って一誠の肩に手を乗せた程、不憫に思ったのだろう。信じられないものを見る目で見ってしまった彼女のことを知らない少年は居ても立っても居られないと二人に問い詰めた。

「ていうか、あいつ誰?! あんなカエルのようなモンスターが冒険者なんて嘘だろ!」

「……………っ (コクコク!)」

地上に現れたモンスターと深く印象付けられたアイスとアリサも同意見だと尻尾の中で首肯する。初めて相對した三人の気持ちは分からなくはない、と心中で呟くりヴェリアは語った。

「あの者も歴とした冒険者だ。名前はフリユネ・ジャミール。『イシユタル・ファミア』のアマゾネスであり第一級冒険者の団長だ!」

「嘘だあー!?! 俺の知っているアマゾネスはあんな肉の塊じゃない! しかも第一級冒険者かよ!?! 完っ全に見た目だけで騙されたっ! 人生の中で一番でだっ!」

「……………そこまで驚くか。いや、儂らも当初初めて相對した時は似たような思いをしたのじゃが!」

フリユネの正体を知って半狂乱する一誠を呆れ顔で同感するガレスだった。

「それでお主、何じゃその尻尾は。本物か?」

「ん……………? ああ、これ? 本物だ。何か狐人^{ルナル}って言われたけど、この世界に狐みみたいな種族がいるわけ?」

「極東に住んでいると話や噂で聞いたことがある。実際に見た事は無いがな!」

「極東に、ねえ。ますます興味が湧いてきたところで……………」

尾からアイス等を解放してやって、既に生命が無い肉の塊と化して

いる女性のものとへ近づくと。耳と尻尾を隠す様に鎧の中に消えた直後、鎧が一瞬の閃光と共に消失して生身の姿を晒す一誠は跪いて犬シアンスローフの子供に話しかける。

「大丈夫だ、お前のお母さんは元気を取り戻すよ」

「………本当に？」

「ん、本当だ。お母さんに元気を上げるからちよつと離れててくれ」

母親をチラチラと見て逡巡する幼女の頭を撫でて、温かい眼差しと優しい声音、安心させる微笑みでそう囁いた後。アイズ達にそつと離れさせてもらい立ち上がった一誠に声を掛けられる。

「何をするつもりだ。お前が何をしようとその女性はもう甦ったりはしないぞ」

「俺さ、大切な人がどんな形であれ奪われるのは一番嫌いなんだ。その次に理不尽な運命に強いられるのが嫌いだな」

「イツセー、何を言っておる」

「俺の目の前で無関係な人でも大切な人を奪われる痛みと悲しさは分かるし、自分と被せてしまおうんだ」

徐に眼帯を外し、濡羽色の目を光の世界に開眼させると魔方陣を浮かべた。怪訝な面持で見守るエルフとドワーフに背を向けたまま、黒と紫の魔方陣が少年の左右に展開して、光と共に跪いた状態の二人の男が現れた。

「悪い、アレ、やるから迷惑を掛ける」

「はっ」

天に掲げる手の中に十字架型に三対六枚の金色の翼を生やす杖が眩い閃光の中から「お前もな」と杖に語り掛けながら手にする一誠にますます理解できない時——一誠の体が神々しい光に包まれ始まる。眩しいほどの光量ではない。淡い光の衣に覆われているかのよ
うな発光。その光は神聖——神が放つ輝きのような綺麗で美しいもの。見る者を一瞬、魅入らせ、見惚れさせる光に包まれた一誠に変化が起きる。真紅の長髪は金色に、左眼は蒼色に、極めつけは背中から六対十二枚の金色の翼を生やし、頭上に金色の輪っかが具現化した。その姿はまさしく——。

【天使】テ・シ・オ……………

神の使いとして語られる一つの存在を翡翠の目をあらん限りに見開くりヴェリアの口から漏れた。ガレスとアイズとアリサ、幼女も言葉を失ってこれから少年がすること邪魔してはならないと本能が告げている。

「——さて、やるか」

巧みに振り回して地面に突き刺した杖の翼が神々しく光を放つと呼応して、十二枚の翼も光り——女性の遺体と共に一誠から放たれる、地面に広がる金色の魔法円マジックサークルと異世界の『奇跡』の魔法の輝き。金色の魔力光は巨大で一条の光柱の光輝となって天へと昇る。蒼天の空に突き立つ光の柱を、オラリオにいる誰もが目撃した。

「主神様よ、あれは……………」

「神の送還? いえ、違うわ!」

店舗テナントから出て椿に示されたその光柱を目にしたヘファイストス。

「ヘルメス様、あの光は……………」

「奇跡に違いないさ」

魔法の絨毯を脇に抱えて眷族と天を仰ぐ旅行帽を被る男神は、目を細めた。

「……………」

とある老神は瞑目し、何かを悟った。

「ああ、ああっ! 何て素敵なの、何て素晴らしいの、あの子は?!」

巨塔から全てで見ている銀髪の美神は紅潮させた顔で興奮し、

「……………イツセーなのか?」

朱髪の女神は屋根の上で胡坐を掻き、予想する。

やがて、光柱は細まり、ついに消失した。その中心に立っていた少年は、最後の魔力を振り絞って、杖を展開した金色の魔法円マジックサークルに置く

と、杖が一瞬の閃光と共に豊かな金髪で美しい女性に変貌した。それを見届け、全て終わったとばかり——翼が霧散し、輪っかが虚空に消えて髪と目の色は戻って……地面に倒れる一誠の体を寸前で青年が腕で受け止め、慣れた手つきで横抱きに体を支えられる一誠は「すまん」と苦笑を浮かべた。

「お前達は一体……」

「俺の中にいたドラゴンだ」

「なんじゃとっ!?では、こやつらもそうなのか。じゃが、一体何のために……」

「我が主をお世話するのと、守るためです」

金髪の女性が翠の目を一誠に向けながら語る。

「主は今、全てを消費した状態であり、指先すら動かせません。なので、私達が現世に出て主を守らなければなりません」

「全てを消費した? イッセーは一体、何をしたのだ。あの光も一体、何だったのだ」

「今、それが分かります」

そう言う彼女は血の海に沈んだままの女性へ視線を変える。リヴェリア達も釣られて彼女へ目を向けた。もはや身動きしない軀を見て何が起きると言うのだ? 怪訝な気持ちで時が少しだけ過ぎた——華奢な指先が、気付いた風にピクリと動いた。そして、絶句と驚愕の目を見開かれ見守られる中で女性は血の海からゆっくりと起き上がり、朦朧とした表情で……。

「……何で私、生きて……?」

「——お母さんっ!」

歓喜極まり、涙を流して血で汚れても構わないと甦った母親に抱き付く幼女。母親も何が何だか分からないまま、抱き付く幼女を笑って抱きしめる。そんな感動の光景を信じられないと見守るリヴェリアとガレス。

「馬鹿な、死者が、甦っただとっ……」

「何たることじゃ。儂等は夢でも見ておるのか? いや、夢でも現実でも、直ぐに受け入れる光景ではないぞこれは」

「……………」

凄まじい衝撃を受けたリヴェリア達。——死者蘇生という唯一無二の希少魔法はまさに『奇跡の魔法』と呼称されても過言ではない。彼は、少年は、一誠と言う者は、今、死んだものを甦らせたのだ。

「分かっていただけましたね?」

成り行きを見守っていた金髪の女性は微笑みながら語り掛ける。

「我が主は、死んだものを生き返らす術を得ております。その代償は高く、命すら消費してしまうもの。それでも顧みず、主は他者を甦らすことに躊躇しません」

「待て、命を消費する?——自分の命を削ったってことなのかお前はっ!」

「代価も無しに人を復活させることはできないよ。等価交換ってやつだ」

「馬鹿者がっ!己の命を何だと思つて……………」

「我が主の事を知りもしないで知った風に説教など何様だドワーフ」

紫色の発光現象がする黒髪の青年がガレスを睨みつける。

「主の過去を知った程度で、己は我が主の全てを知っていると思つているのであれば笑止千万だ。甚だしい。あの時、あの場になかった貴様等が主が抱いた思いまで分かったつもりでいるなら、さらに許し難い話だ」

「なんじやと、喧嘩を売っておるのならば買うぞ」

「待てガレス!止めろ、この者達に手を出すな!」

「アジ・ダハーカ、主への忠誠心も行き過ぎれば他者に迷惑をかけます。主も望んでいませんよ」

「……………今は主を安全な場所に連れて行くのが最優先だ。さっさと行け」

剣呑な展開になりかねないとリヴェリアとドラゴン達が仲介し諭し、催促する。

「そう言うわけだ、アジ・ダハーカ。連れてってくれ」

「はっ、我が主よ」

黒い魔方陣を足元に展開して、少年と青年はリヴェリア達と別れ一

足早く家へ戻って行つた。それを見届ける二人のドラゴンも後を追おうとする。

「では我等もこれで。この場で起きた事は信用できる者のみにお伝えして下さい。神へファイストス達に主の状態を追及されても本当のことを言わないであげてください」

「随分と慎重なのじゃな。そこまでイツセーを大切であるか」

金髪の女性は綺麗な笑みでこう答えた。

「はい、この世界が滅んでも構わないぐらいにです」

「主は望んでないがな。自分の命を削って助ける極度のお人好し故だからな」

「ゾラード、そこがいいじゃないですか。主の魅了の根源はまさにそれではなくて？」

「助けられた相手は堪つたものではないだろう。メリア、そんな愛は重すぎると」

アジ・ダハーカと同じく転移式魔方陣でこの場から姿を暗ます最後に呼びあつたメリアとゾラード。人型ドラゴン達を見送る視界の端に、北西のメインストリートと、西のメインストリートの区画に挟まれた位置に何時の間にかあの家が見えていることを映し込んだ。

「……ガレス、あれを見ろ」

「む？イツセーの家が丸見えになつとる。もしか、魔力も無くなつておるからか」

「大きい壁に囲まれて、いたんだ……」

二つの方角の間に挟まれている区画まるごと、楕円形に立ち並ぶ百Mもある大きな壁から飛び出す崖の上に白亜の城が聳え立っている。それすらオラリオにいる誰もが目撃していた。あんな場所にあんな壁があると。

冒険譚9

全身を動かさなくなつて次の日。死者蘇生の反動が未だに影響を及ぼしている最中の朝を迎えた。静かな雰囲気醸し出す一室の天蓋付きのベッドの中でゆつくりと両眼の瞼を開けて、溜息を吐いた。「今日から退屈な日が迎えたか」

そんな少年の気持ちとは真逆に、外は大いに賑やかであった。どこかの【ファミリア】のホームでもなければ神の徽章すら飾つても無い。ならば無人の家であるのかどうか気になり、ギルド側も忽然とオラリオ内に姿を現した巨大な建造物の探索を強制任務として各【ファミリア】に伝達者を放つた。無論、それは最大派閥にも例外ではない。「と、そう言うわけで僕等もその任務を与えられてしまったのだけだど……どうしようか」

「反対や反対っ！ただの家捜しならともかく、あそこにおんのはイツセーやで!?!」

「できれば儂もしたくないのじゃが……神へファイストスはどうするつもりじゃ？一応あの家はあの神の団員の家じゃろう」

困った様子のフィンの手に、強制任務の内容を記されている手紙をヒラヒラと見せびらかす。任務放棄で罰則罰金を科されても絶対に関わりたくないとロキの言い分にガレスも気が進まないと言った顎髭を触れながら鍛冶神のことを訊く。

「分からない。彼女は彼女で動くだろうし、僕等は僕等でこの強制任務を参加の是非をした後の事を考慮したい」

「別にうちは名声が地に落ちようと【ファミリア】がなくなるわけじゃないから参加せんでもええんやけれど、フィン。自分はそうもいかへんやろ?」

「ああ、ここでどうして僕達だけが参加しなかったのかギルドに追及されるのが火を見るより明らかだ。何より僕等は【フレイヤ・ファミリア】と肩を並ぶほど注目されている。だから、結局は……」

「強制任務を受けざるを得ないわけか」

その通りだよ、と首肯するフィン。

「——って、そんな感じでフィン達も来るってリリア？」

「最大派閥の団長だ。ギルドからの依頼を正式に断れる理由もなければ従う他ない。どうする、ここはもうバレている」

オラリオにいる全ての者達にだ、と言外するリヴェリアと二人きりで天蓋付きのベッドの中で寝転がっている一誠は問題視などしていなかった。

「別にこの家に知られちゃいけない物は俺以外ないから特に気にしちやいない。それより——」

「なんだ？」

「俺がここになると知れば、ロキだけじゃなくフレイヤが何かしてきそうだ。それがちよいと懸念かな」

「……確かに。だが、状況は変わらない。このまま放っておくのか？」

思案顔で天蓋に描かれた真紅と濡羽色の竜に囲まれた地球の絵を見つめ、考えた結果を口にする。

「ここが安全な場所だったら問題無いんだよな当然」

「ああ、それはそうだが……策でもあるのか？」

「策なんてもんは無い。俺は【ヘファイストス・ファミア】だぞ？ここは俺個人の家だ。隠していたことそれ以外何の問題点がある？」

つまり、一誠がこれからしようとしていることは……

「まさか、入れるつもりか？」

「ああ、それでも家捜しをされるだろうから。触れられたくない物は全部、アジ・ダハー力達に魔法的な方法で隠してもらっているし造り変えてもらっている。そしてここを一番早く調査してもらいたいが」

濡羽色と金色の双眸がリヴェリアに向け、意図を察して頷いた彼女は腕輪の宝玉を触れ始める。その様子を微笑し、「役者は達者なほど役に立つ」と朱髪系眼の女神の顔を脳裏に浮かべる。

「——分かった。手筈は整えるから君達も戻って来てくれ」

腕輪から伝えられる、一誠の企みに承諾するフィンの顔は苦笑いだった。当然、会話の内容が筒抜けなロキとガレスも聞こえている。「ウヒヒ、イツセーのやつ、自作自演もええところやで。道化^{ビエロ}みたいでうち好みや」

「じゃが、あやつと関わり合っている儂【ロキ・ファミリア】だけでも調査をしてもギルドは納得できるとは思えん」

「せやからあの【ファミリア】も一緒に連れてするんやろ？フレイヤなんぞまでついてこられたらイツセーも堪ったもんじゃない筈やで」

懸念するガレスに悪戯つ子みたいに笑うロキは、一誠の意図を察して考慮する。執務机の上で胡坐を搔く彼女はビシツと指を突き付けて命令する。

「ほんじゃ、子供達はざっと10人程度でイツセーの家の搜索隊を編成！ガレスは直ぐにあのやかましい男神とこ行つて連携して依頼を受けるように！とーぜん、うちも行くで！」

「分かった。その前にこの腕輪は外しておこう。繋がりと知れるとこつちまで飛び火が飛んでくる」

「じゃな」

徐に腕輪を外し、執務机の引き出しの中に仕舞った頃、リヴェリアとアイズ、アリサが戻ってきた。三人にも話を伝えて腕輪を外してもらったところで行動する。しかし、物事は全て順調とはいかないものだ。例えば――、

「何時の間にこんな物が……?」

「それもそうだが、この壁、百Mはある。流石に届かないな」

興味や好奇心で既に傍まで来ていた冒険者達がいたり、そんな壁を楽々と空飛ぶ絨毯で超える主神と眷族達がいたり――。

「【ロキ・ファミリア】や【ガネーシャ・ファミリア】に任せても良いのでは」

「そうね。でも、あの黄金の輝きが綺麗だから」

第一級冒険者を率いて大通りを闊歩する【フレイヤ・ファミリア】までもが向かおうとしている。路地裏から黒い祭服を着た褐色肌の美青年がその様子を窺っていた。上空には透明な巨大な何か飛んで

いて都市の様子を監視するように見ている——空から不法侵入しようとしていた「ファミリア」を見つけたるや否や、襲いかかって壁の外へと追いやつたと報告を発する。

「…………マジかよ。面倒くせえ」

一誠に眉根を寄せた報告に豊かな金髪に翠の双眸のメリアがどうするか訊ねる。

「敷地内のアイテムの宝庫を奪われもされたら目も当てられない。メリア、椅子に乗せてくれないか？」

ベッドの傍にある車輪付きの椅子に、メリアの両手が少年の背中と足の裏を支えるように持ち上げられて乗せられる最中、彼女の豊かな胸とぶつかっても二人は平然とした様子で動き、動かされる。

「神へファイストスと彼女はどうぞ致しますか？」

「連れていく。で、メリアには頼みがあるんだが」

同時刻、壁の外側——。

「いきなり突風が吹くなんて、それにしても何かにぶつかったような……………」

「あの…………大丈夫ですか？」

「うん？あー、大丈夫大丈夫。どこの子供だか分からない君達もここに？」

橙黄色の髪を隠していた羽付きの鍰広帽子を押さえながら空を見上げる男神に黒髪黒眼の少年が声を掛ける。

男神の問いに首肯する少年も壁を見上げる。

「鍵穴らしいところがないので、どうやったら壁の向こうに行けるのか考えていたところなんですが」

「で、俺達の上から侵入を試みようとしたらいきなりの突風。そういうわけね」

お互い、興味を持ってここに来たとはばかりの共通の気持ちで集まった者同士として名乗り上げ出す。

「俺はヘルメス。彼女等の「ヘルメス・ファミリア」の主神だ」

「キリト、「アルテミス・ファミリア」の団長です」

「へえ、彼女もオラリオにいたとは知らなかった。今度会ってみたい

もんだ。さて、もう風は吹いていないだろうからもう一度再チャレンジと行こうかな」

一誠から譲り受け取った徽章付きの魔法の絨毯に乗り、眷族達と壁の向こうへと再び飛び越えようと挑戦した矢先だった。別の空飛ぶ絨毯がヘルメス達の上を飛び巨壁に向かおうとしたが、また突風によつて絨毯が吹き飛ばされ乗っていた者達が落下する。

「どわあああああああああああああっ!?!」

「ちよっ!?!」

丁度自分達に目掛けて落ちてきたので眼を見開くヘルメス。回避行動をする暇なくドサツと落ちてきて、落ちてくる人間達が積み重なって、重量オーバーなのか絨毯がヘルメス達を乗せたまま凄まじい勢いで地面に落ちてしまった。

「あたた……って、ロ、ロキ?どこから落ちてきたんだ君は」

「うっさいわポケツ!つうーか自分、この絨毯はどうしたんや!これはうちの子供しか作れへん物やぞ!」

「君の元子供から条件付きで作って貰ったんだよ。これで行こうとしたら君と同じで突風に吹き飛ばされてしまつてね。あー死ぬかと思つた」

百Mの高さから落ちても冒険者達は何とか生き残っていた。対して初めて高いところから落ちた衝撃と経験をして動悸が激しい中、生きている喜びを噛み締める。

「……で、自分。なんでここにおんねん。うちらはギルドからの依頼で来とるんやけど自分等はそんなもんで動いているわけ無いやろ」

「うん、好奇心で動いているのは事実だ。何か不都合なことでも?」

「大有りやつ」と内心舌打ちするロキ。清々しいまでに断言したこの男神というより、こんなに早く他の派閥が来るとは予想以上だったと打ち合わせ通りにならなくなつて――。

「ロキ、それに珍しくヘルメスもいるのね?」

「……げっ、自分も来たんかい」

最大派閥【フレイヤ・ファミリア】の主神と眷族達の登場にとうと

うロキは嫌そうな顔を浮かべた。絶対に一騒動が起きると確信して。「自分、うちかガネーシャに任せるんじやなかったのかい。そう予想しておったんやけどなあ……」

「この壁の向こうに綺麗な黄金の輝きを発しているの。それを直で見たくて」

「あーそうかい。んじや、うちらがその黄金を取りに行くからやる気無い色ボケ女神はここで大人しく待っておれ」

シツシツと手を振るうロキに変わらない微笑のフレイヤ達の上空から「俺がガネーシャだアツ！」と自己主張する象頭の仮面を被った筋骨隆々で褐色肌の男神とその眷族達を魔法の絨毯に乗せたガレスがやってきたと同じ時で赤髪の少女や覆面の冒険者と女神達が色々な所から集まってきた。

「……フィン、これは流石に」

「ンー、彼の手腕に掛ってるねこれは」

招集してしまった神と「ファミリア」の数に流石のフィンもコレをどうすることもできない。極力声を殺して会話をするリヴェリアとフィンは全て一誠に掛っていると悟る。

「あらロキ。面白い物持っているのね。どうしたのかしら?」

「それはお前、うちの子供が作ってくれたんや。欲しいといつてもくれてやらへんからな」

地面に降り立つガレスと男神達を乗せる絨毯を目にするフレイヤ。宙に浮く絨毯を魔道具マジックアイテムと認識してロキにくれてやるかと言われてしまっても、ヘルメスへ銀瞳を向ける。

「ヘルメスも持っているのね?」

「ああ、そうなんだよフレイヤ様。これはオレの宝物として大事に使わせてもらっているんだ」

「素敵。貴方の徽章まで編みあげられている。これほど素晴らしい物を作ったのはどこの誰なのかしら?」

「俺も教えてほしいゾウー!ヘルメス!因みに俺は「ガネーシャ・ファミリア」のガネーシャツ!!!だっ!!!」

「ど、どうも……」

自己主張の激しい男神に気圧されるキリトとアスナ達「アルテミス・ファミリア」。「群衆の主」として存在していた神を知っているか知らなかったか定かではないが、この瞬間ガネーシャの印象が「五月蠅い・騒々しい神」と植え付けられた。

「んなことより、うちらはこの壁の向こうの中をどうやって行くか考えるのが先決やろ。うちらとヘルメスは空から壁を越えようとしたんやけど、突風で邪魔されて落とされたんや二度もな」

「俺もロキも体験したから嘘じゃないよ。だから、こうなれば壁を破って突破するか穴を掘って壁を超えるかの2つの選択になっしまうが、ロキとフレイヤ様頼みになってしまおうと思うと俺は心が痛いぜ」

申し訳なさそうに帽子を取って胸に添え、恭しく腰を軽く折って謝罪の念を伝える彼の男神は墓穴を掘った。

「ほー、そんじゃ穴掘る時は自分も手伝え。心が痛むんなら神一倍掘って貰うのが当然やで」

「頑張つてねヘルメス。今手元に穴を掘る道具は無いから用意してくれるかしら?」

「フアイトだヘルメス!」

周りからの意地の悪い笑みと声援に対してやっちゃまったぜ、と乾いた笑みと引き攣る頬のヘルメスにアスファイ達は心底呆れた風に溜息を吐いた——その時、鈍重の音が響き始めた。音の発生源は、巨大な壁が左右に分かれ隙間を作って開かれようとしていたところだった。主神を守り得物を構える眷族達。扉の向こうから何が出てくるのか、警戒して人一人分ほど通れる広さに開いた扉の向こうからカラカラと音を鳴らして出てきた者と対面した。

「……………何、この集まりは」

「あら……………」

椿に椅子を押されて扉から出て来た一誠だった。意外な人物の登場に、銀髪の美神は顔を嬉しそうに浮かべ、ロキはすまなさそうに両手を合わせ、ヘルメスは興味深々で意味深な笑みを浮かべた。そして扉の奥からフアイトス、も出てきたことで把握した。

「ヘファイストス。この建物は君の、『ヘファイストス・ファミリア』の所有物だったのか？」

「少し違うわヘルメス。この建物はこの子の個人的な家なの。だから私達『ヘファイストス・ファミリア』の物とは別なの。私がロキから受け入れたその後にこの子がどうやって用意したのか教えてくれないのだけれど、ここに家を構えたの」

「というと、ロキ。君は知っていたのかな？」

「おい、なに聞いておんねん。うちの後やぞ。知るわけあらへん……つてそこ、色ボケ女神！イツセーを連れて行こうとすんなや！」

猪人の獣人に迫られている一誠を見て激しく突っ込むロキに突っ込まれたフレイヤは「まだしてないわよ」と余裕の態度で言い返した。

「それにしてもどうして椅子に座っているのかしら？」

「魔力枯渇マインドゼロでしばらく体が動かせれないから、俺を連れて行こうとするなよ」

「……そう、動けない体になっちゃったのね？」

「いいこと聞いた、と妖艶な微笑をする美神をめぐちやくちや不安に駆られる一誠は、指摘する。

「で、大方俺の家を調べに来たんだろ」

「ああ、そうだよ」

「イツセー、この男神の言葉は無視しとけ。全部嘘やからな」

「酷いなあ、と漏らして苦笑いするヘルメスを置いてロキは首肯する。

「まさかとは思うけれど、何かうちらに見られて不味いもんはあるわけないんやろうなあ？」

「綺麗な物ならたくさんあるけど……こんなに大勢来られちゃいい迷惑だ。だから、俺の家に入りたかったらそれぞれの『ファミリア』から神と団長と副団長だけ通らす。それ以外は通す気は無い」

「えっと、もしそれを無視して入ったら？」

「入ってみれば？そうしたら気付かない間に自分の大切な物が壊されていたりするけれど」

ニヤア、と邪な笑みを浮かべだした少年に冷や汗を流すヘルメスであつた。

「この家は俺個人の物だけどヘファイストスと団長の椿と住んでもいるから、見せれない場所もある。第二の「ヘファイストス・ファミリア」の本拠だと思つて下手なことをするなよ。例え中に何があろうとだ」

警告する一誠の前でロキ達は団長、副団長だけを選び、他は待機させる。打ち合わせ通りにならなかつたが、こうする他あるまいと一誠やロキ達は内心そう思つた。そして、決められた神と人数と一緒に扉の中へ戻り潜つて行く先は——巨大な森の大自然が一行を迎えた。真つ直ぐ続く土の道に進む一行を挟む巨大な木々や植えられている水晶の数々。剣と翼の徽章を身に着けた覆面の冒険者の空色の瞳は驚きで目を見開き、赤髪の少女と正義と秩序を司る女神も愕然と回りを見回す。森の中に入った瞬間、雰囲気ガラリと変わったような気がする。澄んだ空気が漂い包まれてる自然の中は、まるで神聖な聖域の地に踏み込んだような気を思わせる。

「故郷を思い出すな」

「……ええ」

リヴェリアの眩きに思わずと覆面の冒険者が相槌を打つた。それでも警戒しながらどこまでも伸びる土の道を歩き続けて数分経つた頃。直径百Mはある湖がある場所に辿り着いた。湖の周辺にはダンジョンでしか採取できない稀少果物や貴重な採取道具、回復道具にも使用される植物や宝石の実が育つ数多の宝石樹など様々な物が人工的に栽培されている事に度肝を抜かされた。

「イ、イツセー君……ここ、これって君一人で育てているのかな？」
「ん、そうだよ。わざわざダンジョンに行かずとも自分の手で育てて地上で商人と売買する、金を稼ぐ必勝の方法を考えた結果だこれだ」
自慢げに語つたあと「真似すんなよ」と意地の悪いことを言われても、ダンジョンから木を丸ごと地上に持ち出す労力は自分達に無いとアスフィと副団長は首を横に振る。そんな驚きの物が広がる光景の中で、ここが行き止まりだと悟る一行は聳え立つ崖の上にある城へ行

アアアアアアだああああああああつ!!!!

「五月蠅い主神で誠に申し訳ございません!」

「自分等、ホント苦勞する主神で大変やな……」

叫ばずにはいられないと口の周りを両手で添え、絶叫するガネーシャに団長と副団長が揃ってロキ達に謝罪するほど恥ずかしい思いをしているのであった。同情の念を禁じ得ないロキは「うっさいわボケッ!」と叫ぶ男神の背中に蹴りを入れる。

「……ヘファイストス、今の声を出したのがガネーシャ?」

「ええ、そうよ。天界でもあんな感じだったわ」

耳キーンになりかけたヘファイストス達は巨大な黄金の鐘楼を横切る途中でロキ達を待つ。やがて、男神女神、彼等彼女等が腰辺りまである胸壁の通路に進んで来て、巨大鐘を見上げ圧巻。

「イツセー君、これって本物の黄金でできているのかい?」

「うん、全部純金だ。総額は億ヴァリス並みじゃないか?俺の家の最大で最高の宝物だから、掘って持ち帰ろうとするなよヘルメス」

「あはは、オレが君に対してそんなことするわけ無いじゃないか」

君とオレの仲じゃないか、と笑って友人のように接するヘルメスにロキの辛辣が飛んでいく。

「この中で一番信用ができない神はヘルメスだけやから、イツセーが警戒と疑うんのも無理ないで」

「じゃあ、私が一番信用されているのね?」

「ぶっぷーっ、残念やなフレイヤ。うちが「フレイヤ・ファミリア」の主神は誰彼構わず魅了する危険神物だって伝えておいておるから一番避けられとるわ」

「ロキは女神なのに女神じゃない印象だけだな。主に女の象徴が無い時点で」

ガーンツ! 思いもしなかったところからの言われた一撃にとショックを受ける元主神に誰も慰めようとはいわない。変えられない、変えようのない事実を指摘されてはそうではないと言い切る神は皆無に等しい。

「イツセー、ロキを弄ばないの」

「でも実際はそうだろう」

と、事実の有無を問われた鍛冶神はフツと悟った目で語り出す。

「……そうね。天界にいた頃、ヘステイアって女神と喧嘩していでどっちも何が悲しくて自分のコンプレックスを傷付けられ、傷つけ合ってる皮肉な言い争いをしている光景は神々の間ではもう有名よ。顔を見合わせたらロキ無乳とロリ巨乳の言い争う見世物ショウが見れるって程にね」

「ファイたんっ!?今のは聞き捨て出来ひんで!?!」

この世界のヘステイアは体が小さくて胸が大きいのか、とロキの悲鳴がどこ吹く風のように別の事を考えていた一誠の耳には入っていなかった。家捜しをする筈なのに何故か賑やかになってしまい、真面目にできるのかと心配になってきた他派閥の冒険者は城の中へ通ずる扉の前に辿り着きながら見上げた。白亜の城でどこか遠い国の城の様だと思わせる造りを何故自分達は今まで気づかなかったのだろうかと思議に思っていれば扉が椿の手で開かれて行く。

一行はいよいよ城の中へ侵入を果たす。白亜の壁面と天井の下は大理石の床となっている。数本の巨大な石柱は間隔的に立てられているだけで他は変わったところは何もない。

「こっから先は靴を脱いで入って貰うぞ」

「え、靴を脱ぐ?何でだい」

「人の家に土足で上がられるのが嫌なだけだ。誰が掃除をすと思っっているんだよ。俺の家に入るからには俺の家の規則ルルを守って貰わないと困る。守る気ないなら出てけ」

椿に室内用の車輪付きの椅子に乗せ換えられながら、ヘファイストスと椿も靴を脱いで、裸足となって段差がある床に足を踏み込んだ。「しゃーないな」

ロキが渋々と、そんな演技をして靴を脱いでから大理石の床の上を歩く。フィンとリヴェリアも靴を脱いで玄関ホールと思しきこの空間の中を踏み入り催促する。

「ほれ、自分等もさっさと脱ぐんや。何時まで経っても調べられへんで」

「……そうだね。ここは彼の家だ。友人の言うことは聞かないとな」

「何時あの子の友人となったのですかヘルメス様」

「そりや、友情の印として絨毯をくれたあの日からだぜ？アスフィだつてあの子からその腕輪を貰っているから似たような関係なんだろう？」

左腕に嵌められている金色の腕輪を指摘された水色アクアブルーの髪に眼鏡を掛けた碧眼の少女は言い返す言葉が無く押し黙ってしまった。

「ふうん……あの子に絨毯を作つて貰つたのねヘルメス。それで友情を築けただなんて凄く世渡り上手ね。私も見習いたいわ。後で教えてくれないかしら……？」

「あ、あれ、フレイヤ様？綺麗で美しい笑みからかつてない怒気オーと殺気クラが迸つておられる？」

が、優男神に危険なオーラが。ヘルメスは知らない。今の銀髪的美神はこの世で一番欲しているものを。全てを魅了し虜にする側の美の化身たるフレイヤが魅了し、なおかつ第一級冒険者の眷族の一人を倒し己を啖呵を切つて挑発した初めての相手を、全力で手に入れる気持を抱いている事もだ。お気に入りの者からの贈り物をロキならともかく、今所属している「ファミリア」のヘファイストスにもともとなく、赤の他神が自分を差し置いて手作りの魔道具マジックアイテムを受け取つていたことに軽く、嫉妬はらがたつた。——ぶっちゃけ、フレイヤは一誠に片想恋慕ぞつこんなのだ。

「おい、こつちはそろそろ昼飯を食べたいんだからよ。さつさと終わらせてくれるか？」

「せや、さつさと終わらせてうちもイツセーの昼飯をありたいんやー」
「貴方は自分の本拠ホームで食べなさいよ」

と、ロキ達と一誠達は玄関に固まっている面々に声を掛けた。言われた通り、靴ブーツやサンダルを脱いで、大理石の床を裸足で歩き、一誠とヘファイストス、椿は広い玄関ルームから直ぐにあるリビングキッチンキッチンの扉を開け放つて中に入る。

「俺とヘファイストス、椿以外の部屋以外なら好きに入って調べても

構わない。後、この家には俺個人的で家族的な人間がいるから手を出すなよ」

「――主、丁度できました」

「因みに家族の一人がこのメリアだ」

白い皿に米と茶色い液体に様々な野菜や肉など交じっている料理の一品を持つてくる、豊かな金髪に翠の双眸、金色と白色を主にしたドレスを身に包む絶世のヒューマンを紹介する。

「おおっ！カレーではないか！」

「久しぶりね」

既に食べた事がある料理の名を嬉しそうに発する椿に、食欲をそそる香ばしい匂いに口元を緩ますヘファイストス。「ロキ・ファミリア」以外の神々と冒険者は、あんな茶色い食べ物は見たことが無いと興味深々で、鼻腔を刺激する嗅いだ事のない香りに好奇心を覚える。

「イツセー、うち等にも食べさせてほしいなーなんて……元うちの子供のよしみでえー。なっ？」

「えええ……じゃあ、俺の家は安全だって言ってくれるなら食べさせてやるよ」

「よっしやー！フィン、リヴェリア。うちがくるまでここで待機やー！」
「ロキ・ファミリア」が食べ物で買収された！主神自ら壁の外に待機しているドワーフと幼女達を呼びに飛び出していく様に啞然と見守るヘルメス。

「……イツセー君、意外と君って腹黒いね。神を買収するとか、オレ達がギルドに報告されたら困るんじゃないのかな」

「別に後ろめたさも見られて困るようなものは一切ない。主神へファイストスに誓ってもいい。それに買収とかそういうわけじゃない。言っただろ、元眷族のよしみで、だど。付け加えて言わせてもらえば、買収つてのは他の輩に知られてはいけない事実を隠蔽するためだったり、弱みを握られる承知の上ですか、自分に有利な状況にするためにするもんだ。寧ろ、ロキに信用されていないヘルメスの「ファミリア」に隠し事があるんじゃないのか？」

ジトーと見つめる一誠に「そんなことないよー」と朗らかに笑って

否定するも。

「——確か、神の前では人間は嘘が吐けないって聞いたんだけど、実際に本当かアスファイで試していい?」

「っ!?!」

ヘルメスの頬が引き攣つたのを見逃さない一誠は邪な笑みを浮かべ、ヘファイストスに横目で頼もうと口開こうとした瞬間。優男神が「さ、さあギルドの依頼を終わらせようじゃないか!」とアスファイと副団長を引つ張る形でこの場から逃げるようになくなった。あの慌てっぷりはもう肯定しているようなものであったので、「あいつ、何を企んでいるんだ」と疑心の目を向けられるようになる。その後、ガネーシャ達も家捜しを始めた。

「主、五人分を用意致しました」

「ん、ありがとうございます……そしてフレイヤさん。何故俺の隣にお座りになるのだろうか?」

「私も貴方を買収されてあげるわ」

当然のようにオツタルが背凭れ付きの椅子を引いて、座らせやすいようにして主神を一誠の隣に腰を下ろさせた。ロキ達の分のカレーをさも自分の為に用意されたと自然に銀色のスプーンを手にして、一口食べた瞬間。

「カレーよ!—うちは帰還した——ってうおおおいフレイヤ!—何自分、カレーを食つとんねんっ!?!」

右にヘファイストス、左にフレイヤと女神に囲まれた一誠の状況と食す美の女神に気に食わないと突っ込むロキ以上に、一誠の隣を奪われたとアイズとアリサが「むーっ!」とぷりぷり怒った。

「……今まで食べた事のない美味しいさだわ」

「そうでしょ?—彼の故郷の料理だそうよ。中にはワインを使った料理を食べた時は驚いたわ」

「葡萄酒^{ワイン}を……?」

スプーンを魔力で動かせれる程度ならば回復している一誠の、カレーを食べている様子に「そうなの?」と不思議そうに美神の視線が向けられる。

「ええ、ビーフシチューと言つてとっても上品な味わいだつたわ。フレイヤも気に入るかも」

「そう、興味が湧いたわ。その料理、私も食べてみたいのだけれど」

「無理。体が動かせれないから。あー、メリア。オツタル達にも用意してやつてくれ。道連れだ」

「畏まりました」

「うちの分も用意しといてやー!」

三大派閥の三柱とその眷族達と食事会が始まった不思議な空間の中で、カレーはやはり好評価だった。そんな一同を他所に生真面目に屋内の中を調べているヘルメス達も驚かされていた。

「コン、鍛冶の工房だと分かるんだけどさ。こんな無造作にゴロゴロと『オリハルコン』と『アダマンダイト』が大量に置かれている光景をオレは見た事無いよ……」

「私達もですよ」

工房の中を確認している「ヘルメス・ファミリア」と違ふところで調べている「ガネーシャ・ファミリア」は。

「……貴様等は何をしに来ているのだ？」

「……」

地下の水泳施設^{プール}で大いに下着一丁ではしゃいで楽しんでいる主神の姿に目も当てられないと団長と副団長は、監視を目的に廊下で出会った黒髪に時折紫色の発光現象を起こす金眼の青年に白い目ですう言われてますます恥ずかしさと申し訳なさで主神を問答無用に本拠^{ホーム}へ連れ戻すことにした。

「うーん、ここまで高いところはオラリオに来て初めての場所ねー」

赤髪の少女が熱い陽光に顔を照らされながらも誰にも止められない、阻めない自由に吹く心地のいい風を受けて髪がたなびく中で迷宮都市を全貌できる一番高い最上階に来ていた剣と翼のエンブレムの「ファミリア」の眷族と女神。特に何も無い場所の最上階であるが、『白亜^バの摩天楼施設^ル』の次に高い場所から窺えるオラリオの街並みを見ながら吹く風に堪能していた。赤髪の少女は高い場所を好み、調査している内にここを見つけたのだ。

「……アリーゼ、そろそろ他の場所も見なければいけません」
「あともうちよつとだけ。私、ここが気に入っちゃったんだから。いいでしょう？アストレア様」

「もう、仕方ありませんね。しかし、私達の目的は既に果たしました」
赤髪の長髪にドレスを身に包む女神もオラリオの街を眺める。

「貴方達が見たと言う昨日の光柱の正体はあの子で間違いないですね？」

「はい」と主神の問いに肯定する二人。突如、天に昇る光柱を目の当たりにして確認を急いで近くまで来たこの二人は、見てしまったのだ。血の海に沈んでいた女性が眠りから覚めたように起き上がったところを。そしてその直前に神々しい姿をしていた少年もだ。

「あの騒動で罪のない子供が命を落としました。しかし、その命をあの子供は天界に向かう筈の命を喚び戻し甦らせた……」

「今でも信じられません。ですが、私達は事実をこの目で見ました」
「ロキ・ファミリア」から転属して今では「ヘファイストス・ファミリア」の下級冒険者、イツセー。特に目新しく目立った功績はありません。が、やはり不思議と謎が深まるばかりです

下級冒険者なのに異常なことばかりが周辺に起きている。この家もそう、あの【天使】^{デシオ}の姿もそうだ。彼女等の常識を超えた何かが一誠に秘められているのだと察するのだが、結局は分からずじまい。何か接触を図ろうと考えていた時に千載一遇とばかりの強制任務^{ミッション}の発令がきたのだ。これを機に少年を知ろうとここまで来たのであるが。

「ヘファイストス・ファミリア」の団員であるから邪な者ではないのですが」

「なんか色んな神に好かれている印象だったわね」

「あのフレイヤもお気に入りたい。意外だわ、まだ手を出していないなんて」

口を付けたスプーンで「あーん」とフレイヤにさせようになっている一誠にとうとう爆発したアイズとアリサ。少年を懸けた女の戦いが勃発して一騒動が起きている事をアストレア達は気づかない。

「ギルドに報告しに行きますよ」

「え、もうですか？こうしていてもまだ調べる気でいたのですけど」

「ヘファイストスの眷族に悪しき考えをする子供は皆無に等しい。あのイツセーと言う子も例外ではなかった。それだけの話です」

——正義と秩序を司る「アストレア・ファミリア」は静かに去った。

そして、調査しに来た「ファミリア」は全員その日の内にギルドへ報告をした。口を揃えて『問題は無かった。「ヘファイストス・ファミリア」の団員の個人の家であった』と。皆からの報告を受け、ギルド長もこれを承諾。ただの家なら問題はあるまいとあっさり問題視をしなくなった。

冒険譚10

一誠の家の調査から早くも五日が経ち、何とか歩ける状態にまで回復した。久方ぶりに自分で歩き、朝食の準備をしようとリビングキッチンにフラフラと赴くと同じ通路の部屋からリヴェリアが出て来て、覚束ない足取りの少年の腕を掴んで己の肩を貸す。

「無理をするな。まだしつかりと歩けるまで回復してないのだから」

「それでも歩ける様になったから歩かなくちや駄目なんだって。何時までも寝込んでいたら不安がられて申し訳が無いんだよ」

「……人の姿をしたモンスターとは思えないな。お前はやはり」
「元人間だったから当然だろう？」

彼女達に心配は掛けられないと、強がり、見栄を張る少年をハイエルフは目的のリビングキッチンへ連れて行く。朝食の準備をするだろうと思いい、彼女も一緒に隣で仕度する。

「意外だな、リリアが慣れてるなんて」

「まだ私達が三人だった頃。交代制で料理を作っていた時にな。ガレスは大雑把でぞんざいで、焼いただけの酷い料理だった。フィンは健康的を重視した料理だが、ドワーフの腹の足しにもならず質素な料理だと不満と愚痴を零していた。私の場合は二人より酷かったがな。まったく料理と言うレベルにすらならない物を作ってしまうことが多々あって二人の顔は引き攣っていた」

「おお、そんな過去があったとは意外だ」

「アイズも言われたよ。仲が悪かった時の話をしたらな」

「あー、エルフとドワーフって性格と考えが真逆だもんな。俺の世界のエルフとドワーフもそうだったかもしれないけれど喧嘩してるところは見たことなかったなあ」

他愛のない、昔話を懐かしみながら一誠に語り、住んでいた世界に存在している彼女等の同族をリヴェリアに語っている内に朝食が出来上がりつつあった。

「私の様なハイエルフ、王族はやはりいるものか？」

「ん？ああ、いたなあ。ただ住む国によって人間を毛嫌いするエルフ

の一族やエルフを忌避する人間達もいたよ」

「そうなのか」

異世界に行けるものなら、言って真つ先に同族を会ってみたいなど
淡い願望を胸にした。未知の世界を見て回りたいと言う理由で故郷
から出た彼女にとって異世界はまさに未知に満ちた世界だ。

「……イツセー。もしも異世界に帰る時、私も連れてってほくれ
まいか?」

「え、でも【ファミリア】はどうするんだ?」

「私は死ぬまで冒険者として生きるつもりではない。無論、私の後釜
となり得る魔導師メイジを育てた上でお前の世界に行ってみたいのだ」

そう言って提案を述べるリヴェリアに、どこかに困ったように喉の
奥から笑う一誠。

「その後釜とやらが現れず元の世界に一足早く戻ってしまっても知ら
ないぞ」

「運が悪かったと諦めるしかないな。だが、予約はしたからなイツ
セー」

「あいよ。しつかし、そうなったら俺の世界の文字の読み書きを教え
る側になるかあー」

「だったら暇なときにお前の世界の文字を教えてほしい。直ぐに覚え
てやろう」

不敵に知識量が豊富だから頭の理解力も高いと自負する彼女に目
を丸くさせた。

「言っておくけど、俺の世界の文字と言葉は数十種類以上あるぞ? 漢
字という文字なんて数万以上だ」

「……なに?」

異世界の言葉の知識量が想像を絶するほど遥かに上回っているこ
とを、後に改めて現物を突き付けられたリヴェリアは驚きのあまりに
開いた口が塞がらなかった。

「イツセー、イツセー」

「ん? どうしたアイズ」

「尻尾、触りたい」

朝食の後、のんびりとゆとりの時間を満喫していた。永久社長兼主神のヘファイストスは支店に、椿は試作品に没頭中。リヴェリアは次回の『遠征』に向けての会議と準備でいない最中。部屋のベッドの上で寛いでいた時、部屋に入ってきたアイズとアリサに開口一番でそう強請られたのであった。

「ん、ほれ」

臀部辺りからシュルリと九つの狐の尾が生えだし、嬉しそうに眼を輝いて少女等はベッドに上がって一つの尻尾を触れたり、抱きしめたりと心行くまで楽しみ堪能する。そんな少女に尾を動かし包み込んでやったり、時折くすぐったりとして構った。

「あ、あはははっ、く、くすぐりたい、」

「イツセー……くすぐったいつ、くふふっ」

「笑わすためにくすぐっているんだから当然だろ？ほらほら、ここを擦れば——」

「あつあははっ、あははははは——っ!?!」

その一分後、全身で息をして無理矢理笑わされ笑い疲れた少女達は仕返しとばかり涙目で少年の体に飛び付くが、「甘い」と軽くあしらわれて枕をぶつけられた瞬間に枕ごと抱きしめられ、尻尾も背中に回され身動きができなくなった。

「うーっ!?!」

「俺の上に跨ろうなんて十年早い。まだまだ修行が足りんよ」

「絶対に強くなつて仕返しするっ」

「ははっ、ああ、首を長くして待ってるよ。お前はその素質は俺よりあるからな」

ポンポンと金と銀の髪に優しく触れつつ梳かす様にして撫でる一誠の手を感じながら不思議に感じた事を口にした。

「……イツセーがまだ人間だった頃。本当に私より弱かったの?」

「弱かったと言うか、俺の世界の神々は『神の恩恵』^{フェルナ}なんて技術がないから成長を促進する力は与えられず、自分自身の生身の身体と技、魔法と技術、才能のみで高め、高め合って成長していくのが常だったん

だ。だから『神の恩恵』を与えられた者とそうでない者の実力の差がハッキリと浮かんでいる」

それはアイズも自覚して認識している。今の自分は無所属の民衆達を何十人も相手にしても勝てる自信がある。その気持ちこそが神の眷族になった者とそうでない者の差であることも。

アリサも神の眷族に成ってから実力がメキメキとついてきた。本当に神の力は凄いと今でも驚嘆の念を抱いている。眷族に成る前の弱い自分を完全に置いて前へ進んで行ってしまっていることも。

「だから強くなれる素質があると俺は確信してる。俺が『神の恩恵』を与えられる代わりにドラゴンに転生してドラゴンの力を得たから強くなったようにな」

「……モンスターになれて、嬉しいの？」

「うーん、正直モンスターになれて嬉しいと言うより感謝の念が強い。甦らせてくれたから俺は誰よりも負けない強さが欲しかった。純粹にそれだけを思えるようになったからな」

強くなりたい。その思いだけがアイズと同じで、初めて会った時から自分とどこか似ていると共感した。

「だからさ、この体をくれたドラゴン達には感謝している。このドラゴンの体でこれからもずっと強くなって大切な人達を守って行く。それが俺の強さの秘訣であり望みでもある」

「守りたい人がいると強くなれるの？」

「当然だ。自分の為に強くなるのも、相手を倒す為に強くなるのもいい。だけど、誰かの為に強くなったその質が他と違って高く——英雄のように強くなる」

アイズは一誠の顔を覗きこんだ。優しげな眼差しが金眼から送られる。しかし、その瞳の奥には哀愁も滲んでいた。

「俺はモンスターだから英雄にはなれない。だから、大切な人を守るモンスターになることに決めた。ま、この世界じゃそれすらできないがな」

「イツセー……」

「っ……」

「お前等、幸せになる方法を間違えるなよ」

悲しい現実を突き付けられ、少女の心はチクリと痛みが。少年は正体を明かせば手の平を返す様にオラリオは天敵とみなし全力で討伐を臨むだろう。その時自分は——人間側に立たなくてはならないのだと思いい知らされる。

(私の幸せ……ってなに?)

もしも、幸せになれる方法を選べれるなら。自分は……どうするべきか、まだ幼い少女は早すぎる考えに悩んでしまった。

(分からない……でも、イツセーとずっと一緒にいたいって気持ち、嘘じゃないよ)

その日の夕方頃。中央広場を見下ろす、『バベル』の最上階からの銀瞳。銀髪の美神の視界に映る冒険者や民衆の魂の色はどれもこれも彼女に見初められず、北西と西の間の方角にある筈の建物に銀色の瞳を向けると、その家は何故か消えていた。

「ビーフシチュー……」

消えた家を見ながらお気に入りの子供が作る上品な味わいが楽しめる料理。不意にそう口に出して思い出した。そうヘフアイストスから聞き、今だ食べた事のない女神からすれば気になって仕方がない。あの少年は体を動かせれないから作れないと言っていたが、あれから数日も経った。今なら己の為に作れるのではないか?と淡い期待をしてしまう。

「オツタル」

「はっ」

二Mもある巖のような巨躯を誇る獣人は、窓際から離れた己が絶対の忠誠心を向ける主神の魔石昇降設備に向かおうとする行動に従ってついていく。

顔を隠しても隠しきれない『美』のオーラは老若男女、種族問わず本神はその気が無くても魅了してしまう。彼女が通った道は、微かな『美』の残り香にあてられた者達の魂まで魅了された顔と案山子のように立ち尽くしている。『バベル』から現れたフレイヤの姿を見て誰

一人、抗えず『美』の虜になってしまっても彼女は気にせず目的の鍛冶神の支店へ足を運んでいると、とある女神と鉢合わせした。

「デメテル？」

「あら、お散歩？フレイヤ」

豊穰を司る女神、豊かな蜂蜜色の髪と同色の瞳、フレイヤと会って足を止めた際にぷるん、と揺れる丰满な胸の持ち主のデメテルは柔和に笑って声を掛けた。フレイヤは彼女の問いに首肯する。

「ええ、ちよつとへファイストスのところへ」

「あら、私もなの。もしかしてへファイストスの子供に会いに行くかしら？」

デメテルの手に持っている物はバスケット意外に透明な蓋がある箱。自分と同じ目的であると発したデメテルに意外にそうに訪ねた。

「あの子と会ったことがあるの？」

「ロキからあの子が作ったって言うビーフシチューをお裾分けしてくれてね？その味が凄く美味しく興味が湧いたからロキに頼んでへファイストスを通じて会わせてくれたのよ。そしたら私が知らない味のピザをご馳走になっちゃって……とつても美味しかったの」

ほう……と恋する乙女のように熱い吐息を溢したデメテルの話を聞き、ロキはずつと前から一誠の料理をたかっているのだと分かり、あの強制任務時の言動は演技であったことすら、何となくであるが察した。

「それで、ビーフシチューを入れたこの箱を返して、ご馳走になったお礼に子供に作って貰ったパンやお菓子をあげに行こうかと思つてへファイストスの所へ向かっていたの」

「そう、それじゃ、私も便乗させてもらうけれどいいかしら？」

「ええ、構わないわフレイヤ」

ロキに色々と問いたださなければいけなくなっちゃったわね。と嫌な顔をせず、同行を共にすることを許したデメテルの他所に心の奥底から、そう思ったフレイヤは彼女と共に北西に構えられている武器屋の支店に向かったのであったが――。

「……ヘファイストス。ここ最近俺の家は神の来訪が多い気がするんだけど……」

「……どうしてでしょうね。私も薄々そう感じてきてるの」
一誠とヘファイストスは、チラリとある神物達へ視線を送った。

「こんばんわロキ。『今日も』イツセーの『手料理を食べに来た』のね？」

「うーん？なんのことやあ？うちにはさっぱり身に覚えのないことやでえ？」

「はい、ヘルメスも食べる？「ファミリア」で作ったパンとお菓子よ」

「ああ、ありがとうデメテル。いただくとするよ」

「俺がガネーシヤだあつ！」

「またこの顔触れで会うことになるなんてね」

——何故、五日前と同じ神々が人の夕食をたかりにきたのだろうか。

「……ヘファイストス」

「……ごめんなさい」

そして、ロキやデメテルならいざ知らず。まさかのフレイヤ達までもがヘファイストスのもとに訊ねて来て、この家に案内してほしいと頼まれ、断わり切れず連れて来てしまった主神に「何で連れてきた」と非難めいた目の眼差しは堪えたようで体を委縮する鍛冶神。

「まあまあ、イツセー。神ヘファイストスだって断わり切れなかったんだ。今回は仕方がないと思って……」

「これを機に毎度毎度来られたらこっちは堪ったもんじやないんですがねえ？つうか、お前がそれを言うかたかり二号のフィン？」

ロキ同様に夕食をたかりに来たフィンとガレスも似たようなもんだと睨みつけられて、苦笑を浮かべる小さな団長がカウンター席用に急遽設けられたその場所に座っている目の前で。

「——こっちはそのおかげで、急いで全員分の料理を作らなきゃいけない羽目になってるんだ！くそつたれめ！」

茹でた大量の麺を氷水で冷やしている間、野菜や燻製肉^{ベーコン}を切った

り、透明で精緻に意匠が凝った硝子の皿に氷を敷き詰めて、冷えた麺や野菜と肉を盛ると……。

「ほら、外はそろそろ暑くなってきたから冷えた料理——冷やし中華だ」

一口サイズに切られたトマトと千切りされた胡瓜と燻製肉ベーコンと厚焼き卵の下には綺麗な川のように一本一本細い麺が大量の水の上に置かれてこれ以上ない程冷えている。そんな冷たい料理は食べた事無いと常連のロキ達やヘアリストスと椿は当然として、フレイヤ達も一種の芸術品見たいだと凝視していた。

「それと、麺はこの液を付けて食べてくれ。麺自体に味はないから」
底が深い硝子製の器に入れられている黒っぽい茶色にも見える液体の事を言いながら一同の前に置かれれば、興味深々に見つめる。

「これ、飲めるん？」

「飲めることは飲めるが、味が濃過ぎるから飲むことはお勧めできないな」

「そんなものに麺を付けて食べろって、これは本当に美味しいのかい？」

「嫌なら食うな。帰れよ」

何時に無く辛辣な一誠に「ロキ・ファミリア」はこれ以上気を感じてはならないと食べる前に祈りをしてからフォークを手にして、麺を絡め、液に浸し、口の中へずると音を立てて吸って食べた途端。

「ん、んー！確かにこの液つつちゅうのは味が濃いんやけど麺と一緒に食べると薄まって美味しく感じる！不思議な味で冷たくて美味しいわ！」

「野菜も一緒に食べるとまたいいね。口の中で液の味とは違う野菜の味と感触がするよ。麺だけを飽きさせないってのが良く分かってくる」

「暑い日でも食べるもんは温かい料理か冷えた酒やサラダなんじやが、最初っから冷たいもんを食べれるとは驚いたわい」

「パスタとは違う作りで完成された麺は初めて食べた。しかも澄んだ味わいでこれはいい。私の好みとしよう」

「ん！」

と、【ロキ・ファミリア】からの評価を聞き、ヘファイストスと椿も食べては驚き、ずるずると夢中になって食べ続ければフレイヤ達もおずおずと食べ．．．．．。

「まあ！」

「うーん、ロキ達が夢中になるのも分かる気がするなあ」

「美味しいぞー！」

「うふふっ．．．．．」

「こんな味は初めてだわ。とつても美味しい」

男神女神達の舌を唸らせ、美味であると太鼓判を押させた。急いで作った甲斐があると溜息を吐き、自分も冷やし中華を一口食べて直ぐに「おかわり！」と求められた。

「もつと味わって食ってくれよ．．．．お代りするのもいいけど腹を冷過ぎて腹壊すなよ」

「む、そうじゃな」

お代りはあると分かり、注意もして2杯お代りした神や団員がいれば、3杯もお代りした者もいた。

「．．．．オツタル、普通に美味しかったんだな。4杯も食べるとは一番意外だったわ」

「気に入ったみたいよ？勿論、私もね？」

元々大食いか、それとも食べた事のない味の料理を堪能したからか思った以上食べた、食べるとは思わなかった獣人に驚嘆する一誠に微笑するフレイヤは乞うた。

「ねえ？今度私の為にビーフシチューを作ってちょうだい？お礼は何だってするわ」

「うん？ビーフシチュー？知らない料理の名前かな？オレも食べてみたいなー。ってフレイヤ様、笑みが怖いよ。イツセー君が怖がっちゃうぜ」

私の邪魔をするな、と気配を醸し出して笑む銀髪の女神に引き攣った笑みを浮かべ、やんわりと諭す優男神を他所に、デメテルが一誠の傍により、【ファミリア】で作ったお菓子を改めて渡した。

「美味しかったわ。私達が育てた野菜を美味しくしてくれて嬉しいわ」

「まだまだ野菜を使った料理はあるけどね。って言ったらどうする？」

「勿論、食べてみたいわ。貴方の料理を真似して【ファミリア】でも作ってみたい」

ああ、言った傍からやっぱりコレか。どこか後の祭りのように若干後悔する。一人くれば数人便乗してくるだろうと——今後もこんな感じが続くかもしれないと悟り、貰ったお菓子、リンゴを使ったパイを食べた瞬間に口の中でリンゴの風味が広がり、

「美味しいー」

少年が大好物のアップルパイを久しく食べれた喜びに、真紅の髪を分けて生えた狐耳と、臀部辺りから伸びた九つの尾が喜びを露わにフルフルと揺れる。子供のように目を輝かせ、パイを咀嚼し堪能するそんな少年が——突然小さくなった。ので「いやくん、可愛いー」
「え、ヒューマンじゃないのっ!? てか、小さくなった!」「あやつでもあんな顔をするのか」「種族を変えられるのですか……?」「可愛い……」「オツタル、捕まえてちょうだい。連れて帰るわ」等と騒がしくなった。最後に物騒な声が聞こえたので全力でフィンとガレスが阻んだのは別の話である。

「はふう……アップルパイ美味しかった……ごちそうさまデメテル……離れてくれない?」

「あくん、イツセーちゃんが可愛くて尻尾がフワフワして気持ちいい。もう最高っ……」

「イツセーと尻尾は、渡さないっ!」

もうすっかり小さい狐人ルドルになった一誠にメロメロなデメテルは尻尾を愛でて、金髪金眼と銀髪青眼の少女の嫉妬を買ってしまった。その瞬間を逃さないのがシャッターを押すロキであった。

「……イツセー、体が小さくなっているがどういうことだ」

「小さいとたくさん食べれるから効率的に体を小さくして食べるんだ。特に大好物のものだとな」

リヴェリアの指摘で、あつという間に元の大きさに戻って皆を驚かすが本人は知ったこっちゃないと態度をする。

「……アツプルパイ、ね」

「うふふ、アツプルパイ……」

が、しかし。不穏な気配を醸し出す神がちらほらと意味深な笑みを浮かべていた。

「うーん、ん、思いもしなかった好物をくれたデメテルにアレをあげるかな」

意味深な言い方でキッチンの方へ向かう一誠。大きな銀色の箱を開けてゴソゴソと漁り出した。それは茶色いソースがとろりとかかった、黄色くて柔らかな塊でそれを持ってデメテルに近づき手渡す。

「売られていると思うけど、プリンをあげる」

「……プリン？」

軽く動かすだけで皿の上のプリンは揺れる。デザートの種類か、ケーキやアイスの類ならば知っているが、こんな可愛らしいデザートは知らないと渡される銀色の匙を受け取り、茶色いソースに覆われた、卵色をしたプリンに押し当てる。それに対し、プリンはぷるりと震え……中に匙を潜り込ませる。そのままスプーンを上げ、プリンを掬い上げると驚くほど抵抗力がないように抉り取れた。銀のスプーンの上に築かれた、茶色と卵色の丘。それをそっと口に運び、舌の上へと載せて、転がす。舌の上に広がるのは、この菓子だけが持つ滑らかな触感、茶色いソースの少しだけ苦みを含んだハッキリとした甘さ、そしてプリンと言うデザート自体が持つ、濃厚な卵と乳の風味を含んだ甘み。ソースの味をプリン本体が柔らかく受け止め、プリンの味をソースが引き締める。この圧倒的な組み合わせ。口の中でとけていくそれに、デメテルを魅了した。

「~~~~~」

また、未知の味と柔らかくて冷たい感触に肩を震わせ、歓喜で蜂蜜色の瞳を輝かす。

「美味しいっ！まさしくこれは至高の組み合わせと言ってもいい

デザート
甘い物だわっ!」

周りが驚くほど、デメテルは声を上げて称賛した。彼女がここまで声を張り上げるのは初めて聞いたかもしれない。ヘファイストス達は、必然的にプリンと言うデザートに意識を向ける。好奇心、興味深々、食欲でもある。

「……イッサー、このデザート、私達のもある?」

「これは俺の分だから残りはヘファイストス、椿、リリア、アイズ、アリサの五つだけだ。冷蔵庫の中にあんぞ」

鍛冶神達の方だけならあると伝えられた五人は、冷気が籠っている箱へと向かい、お目当てのプリンを見つけ……。試食した。ぱくり、と口の中に入れた瞬間、苦みが含んだ甘みと、濃厚な卵と乳の風味を含んだ甘みが広がって。

「「「お、美味しい……。っ」」」

冷蔵庫の前で打ち震える女性達。もうこれは、気になってしようがないとロキ達が騒ぎ出す。

「イッサー、うちのものも、うちのプリンはないん!?ないんやったら今直ぐ作ってえな!」

「……デメテル、一口ちょうだい?」

「イッサー君。調理方法を教えてくれないかい?無論タダとは言わないよ。」

「デメテルが声を出すほど美味しいのね……。その、私も一口を」
「ガネーシヤも食べたいゾウ!」

賢い神は分けてもらったプリンの味に思わず体が震えるほど美味しいと反応する。一人で大いに食べたいと求める神は少年に懇願する。が。

「俺は料理人じゃない」

真顔で拒絶された。——しかし、再び彼は冷蔵庫の方へ向かう。既に完食したアイズ達の目の前で扉を開け、冷気の靄に包まれた箱の奥からズツとソレを取り出す。

「でも、ドーセお前らみたいな反応をヘファイストス達がするだろうと思つて大量に作つといて良かったよ」

「「おおーっ！」」

食べれなかったロキ、ヘルメス、ガネーシヤが感動の喜びを示したのは、完成しているプリンが入っている小瓶の数々を目にしたからだ。大きさはデメテルのより小さいがそれでもプリンであることには変わらない。自分達も食べられると喜びで一緒に持つて来られたスプーンを手にいそいそと食べ出す。

「——んあまーいっ！」

「はっはっはっはっ、思わず笑ってしまうほどの甘さと美味しさだ。今まで食べてきた甘い物とは異なってるよ」

「おかわりっ！」

「早いわボケッ！」「オウツ!？」と突っ込み、突っ込まれる二柱の神を脇に他派閥の主神の眷族達にも一誠から配られ、食べた瞬間。殆ど女性だった為、表情を変えないオツタル以外、目を丸くして驚嘆と感嘆の息を漏らす。

「うーん、イツセー君。お店を構える気は無いかな？オレ、毎日通っちやうよ」

「冒険者が店を構えるってどうよ？」

「うん？イツセーは知らなかったっけ？フレイヤんとこの子供が店を構えておるで？」

「へえ、意外だけど俺は絶対に料理人なんてなる気は無い」

腕を組んで「絶対にな」ともう一度、現状を変える気は毛頭もないと断固として発するそんな少年に、ロキは人差し指でツンツンと突き指摘する。

「でも自分。この味を知ってしまったヘルメス達がうちらみたいに毎日のようにたかりにくるで？まだ食べた事のない未知の料理を堪能しに」

「——」

しまった、と顔を浮かべる一誠は重大なミスをした。最初にロキがたかりに来るようになったのも一誠がビーフシチューやカレーといった神々が食べた事のない料理を作ってしまったからだ。娯楽に飢えた神々が地上に降臨してから千年経っても、何億年も天界で生き

ていても一口すら食していない未知の料理と味を。

「イツセー……店を構えようが構えまいが、やってることは同じやで。しかも、ガネーシャ達が他の神連中に言い回したら想像は難しくないんやけど、そこんとこどうする気なんや？」

そんな未来を脳裏に思い浮かべ……和気藹々と喧騒で盛り上がる店内。殺到する注文に忙しく手を動かして料理を作って持つて行けば出迎えてくれるヘファイストス達。楽しくはあるだろうが、その反面。それだと自分のゆとりの時間が無くなったのも当然であると悟る。——しかし、そこで突然思いつく。異世界の料理を知らないこの世界の神々と人類以外には同じ貉の穴の存在ともいえる異世界から来てしまった者達がいる。この料理の存在を世界中にいる同胞のところまで知れ渡り、何時しか良し悪し関係なく食べに求めて現れれば、情報を得られるのではないかと。

「……店か。悪くないか？でも、店を構えるにしても改コンバージョン 宗の後だな」

『っ!?!』

意外にもまんざらでもなさそうに述べた少年に鍛冶神は左眼を見開き、朱髪の女神は何か企んじると探る目付きで視線を送る。そして一年単位で別の派閥に移る気にいる心情を知らない神々と眷族達も目を丸くする。

「え、イツセー君。ヘファイストスの【ファミリア】から抜ける気にいるのかい？とてもじゃないが、最大派閥にいて不満は無いと思うんだけどなあ」

「ロキの時もそうだけど【ヘファイストス・ファミリア】が全部ってわけじゃないんだ。契約で交わした一年という期間が終われば、俺は自分の【ファミリア】を持つまで点々と別の【ファミリア】に改コンバージョン 宗する気にいる。去年、そんな感じで【ロキ・ファミリア】から脱退しているわけ」

理由は分からないし、一年毎に改コンバージョン 宗をする考えも精神も理解できない。だが——！

第一級冒険者以上の実力を持ち。

便利な魔道具マジックアイテムを作ることができ、ヘファイストスや椿も認める鍛冶の技術の持ち主。

作る料理はまさしく第一級。

加えて身長が高く容姿も整って誰からでも好かれる体質を持っている。

——この超優良物件が今年の一年を迎えることになれば、自分達の「ファミリア」の一員になるという可能性が浮上した瞬間。

(なるほどなるほど……これは良いこと聞いた)

(ふふっ、ふふふっ……!)

(毎日イツセーちゃんを育てて甘い物を作って……)

(ガネーシヤツ、絶対GETだぜっ!)

(あの娘達と共に平和と秩序を守って行く姿を見るのも素敵ですね)

「あ、ロキ。一度離れたからさ、またそっちに厄介になるかもしれないぞ」

「マジでっ!? ファイトん! 期待しとるから絶対にうちんどこに当ててえーなっ!」

「当てるって、どんな方法で選んでいるの貴方」

一誠を狙う神々は様々な思いと野望を抱き、僅かな可能性を信じて小さく笑みを浮かべた。もしも、「ファミリア」に来てくれたらその年の一年は間違いなく、楽しい思い出で溢れるだろう。

「んじゃ、もう解散。ヘルメス達はもう来ないように他派閥同士の間の規則ルールを守ろう」

「だが断わる」

「……この場で天界に送還してやろうか」

貴重な食材があつという間に無くなりかねない為、魔力で具現化した鎧を纏い、本気で光刃を構えた一誠にフィンとガレス、リヴェリアが何気なく必死で宥める労力を発揮するのであった。

「イツセー、諦めい。自分が料理を食べさせた時点でもう運命が決まったのも当然やで」

「澄ました顔で言うけどなっ。お前が食べられる料理の取り分をこいつらが減らしているようなもんだぞ。それでもいいのか?」

.....

そう指摘を受けて、自分にとって不都合なこと、その原因は何たるか一分弱も思考の海に飛び込んで考えた結論は、あまりにも横暴なことであった。

「うしっ！ヘルメス達はうちの許可なく食べたら【ファミリア】潰す、決定事項や。特にフレイヤ、お前は二度とくんな。異論は認めへんで」

「あら、そんなこと言われてしまうなんて悲しいわ。——貴方を潰さなきゃ『私の』イツセーの料理を食べれないなんて、仕方ないわよね？」

朱色と銀色の炎を背負ってオラリオ最強最大派閥の二柱が、戦意のという火花を散らし神威すら迸らせた。

「『イツセーの料理一つで派閥同士の闘争が勃発しかけるなんて.....』」

「めっちゃくちやくだらしない理由で？アホらしい」

異世界の料理、恐るべしとフィン達は戦慄、対して一誠は心底呆れ顔で息を吐いた。

冒険譚 11

——夏の到来。熱い太陽からの日差しを受け、猛暑が続く日を迎えたオラリオ。迷宮都市は熱せられたフライパンの中にいる様な息苦しさで嫌な汗を掻き民衆や冒険者、ギルド員と神々は熱さに参る時期を迎えた。日に日に気温が高くなっている中で大通りを行く市民は半袖など涼しげな薄着姿が目立ちつつあった。迷宮へ向かう冒険者はというと、いつも変わらず戦闘衣バトル・クロスと防具を纏い、頭上からそそぐ陽光にじりじりと焼かれている。中でも甲冑や重装を纏う大柄な獣人やドワーフの顔は汗だくとなっていた。熱さに屈し防具を薄手にした結果、命を失ってしまったのでは笑い話にもならない。日の光が届かないダンジョンにさえもぐってしまったえば、と中央広場セントラルパークに続々と集まる冒険者達の足は自然と速まっていた。そんな冒険者達の心情を嘲笑うかのように、『幽玄の白天城』では——。

「……この中に遊泳施設プールがあるとは知らなかったぞ」

「言つてなかったからな。まだまだ皆が知らない場所はあるし」

「いやはや、実に快適である。手前は泳ぐのは実に久しぶりである」

「……気持ちいい」

リヴェリア以外、水着を装着して——大賭博場カジノに匹敵する遊具施設も備わっている地下の遊泳施設プールにてのんびりと寛いでいた。切っ掛けは意外にもリヴェリアだった。時は数分前に遡る。

「アイズ、戦うこと以外お前は学ぶべきことが多くある。今日は水中戦を強いられた時の為に泳ぐ練習をするぞ。アリサもだ」

「泳ぎう・だったらいい場所あんぞ」

以下の流れでこの城の創造主たる一誠の案内で遊泳施設プールの存在が明かされた。水着は少年が用意した。アイズとアリサは胸部あたりコイネーに「あいず」「ありさ」と共通語で名前が書かれている紺碧の水着を着ている。椿は胸を巻くサラシではなく、燃えるような赤と純白の白のビキニで覆い、褐色肌を満遍なく晒している。対してリヴェリアは何時バトル・クロスもバトル・クロスの戦闘衣のまま、ただ浮き輪の中にすっぽりと収まっているア

イズとアリサを見下ろすだけだった。

「……私は泳ぎを教えたいのだ。どうして寛がせている」
「まずは水に慣れることから教えるべきだろ？ つーか、泳ぎ方を教えるって言ったリリアがどうしてプールの中に入って来ないのが不思議なんだけど？ まさか、口だけ言っただけで泳ぎを教えるなんて考えちゃいないだろうな？」

ジーと見上げる一誠に「どうなの？」と金眼の少女も視線を送り始める。二人からの疑心に満ちた視線にハイエルフは「その通りだ」と言いたいところ、更に一誠からとやかく言われそうな気がして――

「もしかしてリリアって泳いだことが無いから泳ぎは苦手か？」

「馬鹿にするな。私が泳げないなど――」

つい、条件反射で食って掛かってしまい。はっと気付いた時は既に遅し。論破される。

「じゃあ、さっさと水着に着替えて来い。教える者と教える側が同じ場所で指導するのが当然だろう」

最後の一言でリヴェリアは折れた。

「ロキに服を剥がされるか。俺に強制的に着替えさせられるか。オラリオ中にリリアが泳げないって吹聴されたいか。自分で着替えるか選べ」

「こ、このっ……!?!」

悪魔っ、とかつて自分をスカウト勧誘したロキと似た手口に思わず罵声を叫びたがったが真顔の少年に反論できず……肩を落とし、頭を垂らす。

結果。親族以外見せなかつたリヴェリア・リヨス・アールヴの裸体は、一誠達に晒す羽目になった。透けている黄緑色のベールを肩から纏い、緑一色の生地のパレオを腰辺りに巻き付け、6つの眼から送られる視線が妙に気恥しく、三人の視線から逃げるように羞恥で顔を赤らめ、局部を隠す様に両腕を交差するその仕草はとても美しく艶やかだった。

「リヴェリア、綺麗」

「ふむ。同じ女の手前でも称賛するほどの美しさだ。眼福眼福」

「色白の肌だなやっぱり。シミや汚れも無い。王族の名は伊達ではなかつたか」

「綺麗……」

四者四様の称賛に無視を決めつけ、さっさと教えてさっさと終わらすに限ると膨大な水の中に入ろうとするもそれすらジツと見つめられていることにまた羞恥で顔を紅潮させる。

「い、一々見るなっ」

「入るところすらとても絵になるものだったからつい」

「……(コクコク)」

ようやくリヴェリアが入ってきたことでアイズの水泳の練習が始まった。

「まずはアイズ、そこから出て泳ぐんだ。アリスは手本としてよく見ておけ」

「どうやって泳ぐの？」

「とにかく泳ぐ意識をすればおのずとできる」

マテ、と一誠は心中でツツコミを入れた。しかし、あのリヴェリアだ。口ではああだが、丁寧に手伝いながら教えるものだろうと自分がそうやって経験と体験をしたように、教えるかもしれないとしばらく様子見することにした。アイズは一先ず、小動物のように水面をばしやばしやと蹴って、浮き輪の浮遊力のお陰で少女でも足が付けれる場所まで進むことができた。浮き輪を外し、少し離れたところに立つリヴェリアに向かって『泳ぐ意識をする』を実行する。

しかし、リヴェリアの指導はスパルタであつた事をアイズはともかく、一誠と椿も知らなかつた。

アイズは足場から離れ、必死に顔を上げながら、足をばたつかせた。最初こそは数十cm前進したものの、徐々に体が水中に沈む。それでも懸命に足を忙しなく水面を蹴ってリヴェリアのところへ辿り着く前に——完全に皆の前から消えた。

「……のう、一向に水面から出て来んのだが」

「……」

少女の顔が出てこない代わりに、水面にはぼこぼこ気砲が出ている。水とは違う種類の水滴が少年少女の頬に流れ、二人して嫌な予感を覚えた。

「溺れた？」

数十秒後――。

お腹をパンパンに膨らませた少女が椿の両手で押され、心配をするアリサの前で何度も口から噴水のように出てくる図が出来上がっていた。一方その隣では。人型ドラゴンに正座されてガミガミと説教を受けているハイエルフがいたのだった。それを聞かされ、もう少し優しく指導させるようにしろと言われたロキ達は、ただただ苦笑いを浮かべる。曰く、彼女の性格ゆえにどうにもならないと。

「……よし、こんなもんか」

じゆうじゆうと、香ばしい匂いと火の通った豚肉の色合いを見て一誠は頷き、次の工程にかかる。先に刻んで下処理をしておいた野菜を入れる。人参、玉葱、里芋、大根……牛蒡といった食材に通り火が通り、豚の旨みがにじみ出たところで鰹と昆布の合わせダシを効かせたダシ汁を入れてしっかりと煮込む。そのまま灰汁取りを丹念に行い、煮えたところで……。

「イツセー……お腹すいた」

「あいよ。丁度出来上がったところだ。直ぐに用意するよ」

調理場に立って昼食用に作っている最中、物欲しげに見上げる少女達に空腹を訴えられた。頃合いが良い時に来た二人に準備していた料理を器に盛っていく。

「朝は水ん中にいたから温まるものだ。汁の方はトン汁、黄色い塊はオムライスだ」

「トン汁……」

「オムライス……」

団長の椿は一誠の工房に籠り出してから戻ってくる気配はない。アイズの保護者兼監督的なりヴェリアはホームに戻って留守。結果

三人だけで昼食の時間を臨むことになった。眼前に置かれたできたてで湯気が昇る二つの料理の品、それに釘付けな二人の少女の喉がゴクリと鳴った。

「それじゃ、いただきます」

「いただきます」

もう待ちきれないと合掌しあと、それぞれスプーンを片手にトン汁とオムライスを食べ始める。

色鮮やかな赤い線が引かれた黄色い塊にスプーンを沈みこませると、驚くほどあっさりと切れて中身を窺わせる。中からたつぷりと詰まった赤い具がアイズの金眼に飛び込む。彼女が知らない食材ばかり、まるで宝箱の中を開けた様な感じがして味の期待感が更に高まった。赤みを帯びたオレンジ色の具。それとは対照的に色鮮やかな緑色の豆。塩漬けにした鳥の肉。椎茸に細かく刻まれた野菜。まだ幼女なアイズにとっては手頃のサイズのスプーンの上に渾然と多数の食材が乗っているそれを口に運ぶ。

「~~~~」

美味が口の中に広がる。まず、最初に来るのはもちろん、焼いた卵。一体何をどうやって焼いているのか、絶妙の柔らかさの食感と共に乳とバター風味がして、わずかに甘い。それが酸味が強い赤いものの味と合わさることで調和が生まれ、素晴らしい味となる。だがそれだけじゃない、その後くる中の具がまた、旨い。塩漬けの鳥の肉は塩気を含んだ肉汁を、異界の茸は豊富な旨みをたつぷりと帯びている。細かく刻まれ、炒められた野菜は甘みを帯び、それを複雑に味付けされたオレンジ色の粒がふわりと受け止める。

(温かい・・・)

煮込みでスープに溶け出した肉の旨みとしつかり火が通って柔らかくなった熱い野菜。ちよつと癖のあるミソの風味と、それを柔らかく包み込むバターの風味。それらがアリスの口の中で充満、広がっていくのと同時に地下の水泳施設で冷え切った体が暖まっていくのが分かる。具材は人参、玉葱、里芋、大根、牛蒡、豚肉と種類と数が豊富で食べ応えもある。まるでママが作ってくれたシチューのよ

う……と懐かしみと少しの寂さと悲しみの気持ちが混ざって顔に出てしまったのか、大きい手が頭に寄せられた。前に眼を向けると朗らかに微笑む一誠がアリサの頭を撫でる。その行為すら父親に似て少し安心してしまう自分を自覚する。

(……頑張る)

頑張って強くなる、その為には腹ごしらえだ。そう思いながらトン汁からオムライスにチェンジ。アイズもトン汁へ手を伸ばし、そして口に入れた瞬間に美味しきで顔が綻んだのであった。

「むっ!? 手前を残して何を食べておったのだ! ズルいぞ!」

「昼頃には戻って来いと伝えたのに戻って来なかった団長が悪い」

「むうっ! 腹減った、手前にも何か作れイッセー!」

「もう作ってあるから。それを食べる」

後に戻ってきた椿に食ってかかれ、余めに作っておいたオムライスとトン汁を食べさせて大人しくさせる一誠の手腕に、自分でもよく分からないがなんとなく拍手を送るアイズとアリサ。

「何で拍手?」

「なんとなく?」

その日の夜も異世界料理をたかりに複数の派閥の主神と護衛を兼ねて侍従する眷族達が大量の酒を何故か持参して来訪。「また来た……」と辟易の思いをしながらもこの場にいる全員にピツタリな料理を作った。

「おっ、井ってことは今回は井の料理じゃな?」

「カツ丼じゃないけど、皆にピッタリな料理であることは断言できるよ」

縞模様の蓋と容器を見て期待で胸を膨らませたガレス。自分達のために作りだした料理は自分達にピッタリな料理だと言われ、不思議に思いながら興味と好奇心が湧く。皆の前に井が並べられると最後にアイズとアリサの間に空いている空席に腰を落として食事をする前の祈りを合掌と共にする。それから蓋を取る。ふわりと、甘さと塩気を感じさせる匂いが鼻をくすぐる。その香りに胃が締め付けられ

るのを感じながら、涎を飲み干して、銀色の匙を手に取り、その料理を見る。目に映るのは一面に染まった鮮やかな卵色。

「おー、なんやこれ？」

「親子丼っていう料理だ」

親子丼と呼ばれる、異世界の料理は純白の米の上に鶏肉の卵とじを乗せこんだ贅沢な料理である。ロキはその美しさを目で楽しみ、その匂いを鼻で楽しみ、その重さを手のひらで楽しむ。そこまでやったらもう、後は食うしかない。そつと箸を差込み、最初の一口を取る。銀色の匙、スプーンの上には大きめに切り分けられた、脂ののった皮付きの鶏の肉が適度に火が通って透き通った卵をまとい、茶色い汁を含んだ純白の飯が土台に敷かれている。鮮やかな緑と白の葱が彩りを加え、美味であるからすぐにも食えと訴えて来る。我慢できぬと言うように親子丼を口に運んだ。口に運んだ瞬間、ほろりと親子丼がほどける。口の中に広がるのは、複雑な旨み。鳥の皮が持つ脂と、柔らかな肉の旨み、葱のシャッキリした食感と、米の甘みに、あまじよっぱい汁の味。それらが一体となり食べる者の舌を楽しませる。

「美味しい……」

その味に思わず口からこぼしながら、噛み締める。

「イツセー、この料理の名前って何かカツ丼と同じ由来や意味が籠められてあるのかな？」

「うーん、大したことじゃないんだけどな。個人的に言わせてもらえば親子丼って親と子、一緒に食べるもんでな。この丼が家だとして鶏肉は両親、卵は子供——この家族が揃った状態でこうして家族と食事をする時間が更に美味しく感じると思うんだ」

「親と……」

「子……」

説明を聞いて自分達にピッタリな料理だと言った理由が何となく察した主神達は、愉快気に微笑みだした。

「子供達と食事をするのは当たり前なのに、改めてそう言われるとちよつとくすぐったいわね」

「でも、素敵なことだと思っわ」

「ふふ、言葉が籠っている料理なんて面白いわね」

「ガネーシヤ、大・感・激ッ！俺の大好物にする！」

「まさしくオレ達神々と子供達を表している一品だ」

「せやなあ、ファイさんの言うとおりに。子供と食事をするつちゆうことは当たり前なんや」

「だからこうして子供と食事を楽しむ一時は大切にしくちやいけない。いつ私達が天界に送還されても不思議じゃないから」

自然と眷族達に目と顔を向け、今まで自分を支え守って、付き添ってくれたことに感謝の念を言葉にして送った。ので、眷族達も様々な反応で返した。何を今さらだとか、これからもよろしくとか、色々。そんな光景を見せられ一誠は元の世界の事を思い出した。

「イツセー」

アイズが話しかけてきた。

「私、ずっとイツセーと一緒にいるよ」

「アイズ？」

「私も……イツセーと一緒にいる」

「アリサ……」

テーブルで隠れて見えないが小さな二つの手が少年の服を摘んで言う少女達。気を遣ってくれたのか、本心から言ってくれたのか、もしかしたらその両方なのか定かではないがその気持ちに嬉しく思いフツと小さく唇を緩めた。

「よくし、次は宴会するでー！イツセーはつまみをじゃんじゃん作るんや！」

「オーツ！」

「えっ？」

和やかな雰囲気のある食事会の次はテーブルに足をだんつ！と乗せて突如言い出すロキの言葉で宴会ムードに成り代わり、ヘファイストス達を巻き込み持参してきた酒でやんややんやと大騒ぎ。つまみを作ってくれ〜！とロキにしつこく乞われて酒に合うつまみを色々用意する一誠よって、宴会は盛り上がり『幽玄の白天城』から笑い声は

夜更けにまで絶えなかった。

「……この後の惨状、一体誰が片付けると思ってるんだ」

「手伝います」

「……許す」

白亜の摩天楼施設の目の前の中央広場。深夜の時間帯の今では富と名声を得ようと命知らずや酔狂な冒険者達が飽きず、モンスターの巢窟こと地下迷宮へ足を運ぶ軽装から重装備を全身に纏い、様々な得物と必要な道具を揃えて挑まんと臨むヒューマンや亜人の冒険者達はいない。静まり返った広場を始めオラリオは闇に支配され点々と灯す魔石灯しか明かりはない。『暗黒期』の現在、一人で夜道を歩く危険性と不気味な雰囲気醸し出す中——虚空に突如音も無く開いた穴。そこから片手では数え切れない影が悲鳴を上げながら落ちてくる。落下の途中、体勢を立て直して着地できた影がいれば無様に顔から突っ込んで落ちた影もいる。そして影を落とした穴が閉じていく様子を苦い顔で見ることしかできなかった。

「閉じたか……」

「くそ、一体何の『個性』なんだっ」

「ここがああの少年が言っていた異世界とやらの様だが……」

影達が自分達に立たされている状況を認知している風に言い、別の影達が不安そうに周りを見渡しながら訊ねた。

「せ、先生。……ここ、どこなんですか？」

「……信じられないだろうが、多分あいつが言うにはここは異世界のようだ」

「い、異世界って!?じゃあ、オイラ達はいつのように知らない世界に来ちゃったってことかよおっ！」

小人族のような小さい影が泣き叫ぶ。つまり、自分達は元の世界に帰れないと認識を他の影達にも伝播させてしまった。不安と絶望、悲しみに精神が押し潰されるのは時間の問題だろう。

「それにアイツ、オイラ達を見捨てやがって！絶対に許せないぜ！」

「……それは違うぞ。あれは俺達がそうさせた」

「な、なんで!？」

「それが合理的だからだ。それに俺達のことを知らせる者が必要だった。お前達が信用しているように俺達もあいつを信用して道連れにするよりは、片方が残って迎えに来てくれる可能性が極めて高い者を残した方が俺達も希望を捨てることは無い」

淡々と憤怒を露わにするその影を諭す様に「だから責めるなら俺達を責めろ」と言わんばかり見下ろすその目は真剣な眼差しを送っていた。そこへ影が指摘する。

「で、でも先生。俺的には一緒に来てくれた方が心強いんだけど」

「素直に言えば俺もそうだ。だが、元の世界に帰りたいなら不都合なことにも身に起きるものだ。どんな困難でも乗り越えるのがお前達が目指す夢と職業と同じだ。いいな、孤立無援の中あいつが迎えに来てくれるまでは俺達自身が何としてでも生き残る必要がある。弱音を吐いたところで結果は変わらない」

教師のように奮い立たせ、不安と緊張を完全に払拭できなくても一筋の希望は絶対に絶やさないと影が言う。

「それとあいつが残してくれたこの鎖こそ、俺達と常に一緒だって心に余裕を与えてくれる」

「え? あ……」

次元を超えて異世界に来てしまっても残っている物は確かにあった。体を今でも縛っている金色の鎖。それを触れて見ると力強い何かが秘められているのが温かさで何となくわかる。唯一、繋がりは決して絶えては無いと思わせるソレを感慨深く触れて、影達は気概を示す。

「よし……くじけずで何よりだ。では、早速合理的に行動をするぞ」

「と言っても、この世界はすっかり夜だ。じゃあ、どこか安眠できる場所を確保しよう」

「なるべく人が寄り付かなさそうな場所を探せねば」

宛ても無く行動に移そうとした影の一人に——声が投げられた。

「……あんたら、ここで何をしているんだ?」

暗闇の向こうから黒衣に剣を携える少年を始め、武装した集団がこれからダンジョンへ向かおうと気配を窺わせている。そこへ影達と鉢合わせして怪訝に思ったのか声を掛けた。

「Oh、君達は？」

「……俺はキリト、冒険者だ」

「冒険者？」

影達と接触したのは「アルテミス・ファミリア」の団員であり異邦人達のキリト一行であった。アスナ達も影達の姿を奇異な目で見回し、観察する。

「それであなたは？」

「私はオールマイト。ヒーローをしているのだよ」

「ヒーロー？ヒーローって、あのヒーロー？」

「そう、そのヒーローだよ。困っている人々を助けたり平和を乱し、世に混乱を——」

「オールマイト、相手に混乱を与える話ほしくない方がいい」

せっかくの話が通じる人間との接触を棒に振るいたくない影がオールマイトという兎の耳のように逆立てた金髪、筋骨隆々の大男を薄汚さが印象の首に布を巻いた無精髭の男が制した会話で、アスナが確信めいた言葉を述べた。

「もしかして、異世界から来た人達なんですか？」

「……何故だと聞いてもいいか」

彼女の察した風な言い方に聞かずにはいられなかった。真意を探る目付きとなった男にアスナはあっさりと言った。

「私達も異世界から来た人間だからです」

驚くべきことに同じ境遇者がいたとは思いつかなかったオールマイト達は目を見開いた。しかし、それなら自分達にとってありがたい存在でもあった。同じ境遇者ならこの世界の事、もしくは元の世界に帰る方法を探しているかもしれないからだ。訊ねようと口開く男よりも彼女は白亜の摩天楼施設、バベルの塔に指しながら説明する。

「あの巨大な塔の下に迷宮、ダンジョンがあつてダンジョンに棲息するモンスターを倒しながらお金を集める職業、冒険者がこの都市に沢

山いるんです。でも冒険者になるためには、神様の眷族になってギルドに登録しないといけないじゃないけど」

「そうして君達は今日まで生きていたのか。それで、君達は自分達の世界に帰れる方法は？」

「いや、まだ見つけてない。俺達もこの世界に来て一年目になるんだ」
元の世界に戻る手段を生きながら探しているキリト達的心情を悟り、自分達もそうして生きねばならないのだと察した。

「冒険者に成るために神の眷族に成る必要があるとはどういうことだ
い？」

「えっと、その前にこっちも聞きたいんだが……」

オールマイト達の背後、影達の容貌を一瞥して訊く。

「あなた達の後ろにいるのってモンスターなんですか？」

「いや、歴とした人間だ。俺達の世界ではどんな姿だろうと人間として産まれるんだ」

衝撃の事実——「アルテミス・ファミリア」一行は戦慄、言葉を失った。

「……異世界って、千差万別なのかな」

「違うよキリト君。そこに注目するところじゃないよ。あの、悪い言い方をしてしまうのが心苦しいんですけど。モンスター、えっと人の姿してない人はこの世界の神や人達からすればモンスターと認識されるかもしれません。だから身体に何か隠さないといけないと思いますよ」

「……?」

何を言っているんだこの少女は?と数多の影——少年と少女達の頭上に疑問符が浮かんだ。「どういうことだい?」とオールマイトの問いにキリトが説明に買って出た。

「この世界には色々な種族がたくさんいるんだけど……顔が鳥だったり、腕が何本も生やす種族、人間はいないんだ」

「つまり、君達にとって異形の姿をした者はモンスターと認識してしまふのか?」

「私達と言うより、この世界の人間や冒険者がです。だから討伐対

象……冒険者達に殺されかねませんから身体を隠した方がいいですよ」

冒険者達に殺される。異世界のシビアさを知った少年少女達は顔を青褪め——上着を脱いで下着姿になった一人の少女の体から布が出てくる光景を見てキリト達は愕然とする。が、男性陣から「おっ!?!」と予期せぬ嬉しい出来事に喜色の声を上げ、女性陣から白い目で見られたり一部、手で視界を遮る者がいた。される者も。

「キリト君、見ちゃ駄目ッ!というか、何で体から布が出て来るんですか!?!」

「えっと、君達は知らないけど私達の世界には『個性』という摩訶不思議な能力が存在するんだよ」

「摩訶不思議な能力? 特異体質とか超能力的な?」

首肯するオールマイト。程なくして全身を包めるほどの布は人数分手渡され身体を隠し終えた。

「さて、君達の助言があつて私達は助かったけれどももう少しだけ手助けしてくれるかな?」

「はい、いいですよ。ね、キリト君」

「ああ、異世界から来た者同士として助け合わないと」

ホッと安堵で胸を撫で下ろす。「アルテミス・ファミリア」の現在のホームは廃墟の教会であるが、雑魚寝をすればなんとか住めなくも無いだろう考えで異世界から来た集団の受け入れを了承した。

「俺達の家はまだ廃墟の教会だけいいか?」

「この際、雨を凌げれる場所があるなら文句など言わない。それに不備があるところはこちらで整える」

任せてくださいいっ、と胸を張って拳を握る身体から布を出した少女が気合を入れた。

「じゃあ、今夜はダンジョンの探索は中止だね」

「うん、また明日だな」

「何だかすまないね。それとまた聞きたいことがあるけれど、君達以外にも異世界から来た人間はいるかな?」

そう訊かれて二人の脳裏に浮かび上がる少年と幼女。頷いて首肯

すると「そうか」と納得した面持ちで相槌を打った。

「その人達も元の世界に帰る方法を探してるのかな？」

「探しているとは思いますが。でも、私達と一緒にまだ方法や手段も見つけてないみたいで」

「……異世界から元の世界に戻るといふのは思った以上に大変のようだな。まさか、俺達があいつのようにその側になるとは思いもしなかった」

深い溜息を漏らす薄汚い無精髭の男の気持ちを知っては、深く同感とキリト達は内心揃って頷いたあと「うん？あいつ？」と疑問を抱いた。

「あいつって誰の事だ？」

「私達の世界にもね。別の世界から来た少年がいるんだよ。その子も私達の世界でヒーローを目指しつつ元の世界に帰る方法や手段を探しているんだ」

「そ、そうだったんですか……別の世界に来てしまったその子も大変だね。私達のように苦労して」

「まあ、色々と常識はずれで最強のヒーローのオールマイトより越えてしまうぐらい色々と凄くて強い。苦労しているのかすら判断しかねるがな」

「さ、最強のヒーロー!?!」

素っ頓狂に揃ってオールマイトを見る目を変えた。H A H A H A H A！と笑った後——骸骨のように身体が縮んで痩せこけた姿になり替わった最強のヒーローを見て絶叫したのはその数秒後であった。

「……異世界、色々と凄いな」

「……うん、凄いな。あ、ねえ、教えた方がいいんじゃない？」
「ん？ああ、そうしよう。でも、全部落ち着いてからだな」

後に新たな異邦人の来訪と登場に【アルテミス・ファミリア】の団員数は五十人と超え、零細派閥から中堅の派閥に成長するのはそう時間も掛らなかつた。同時にキリトとアスナの紹介で一誠は——真に奇妙な出会いを果たすのであつた。

冒険譚12

湿った空気が漂う岩窟で、乏しい燐光が揺らめきを作る。うっすらとした光によって地面に伸びるのは武装した集団の冒険者達だった。数は約15人未満でこの魔の巣窟こと迷宮に足を踏み入る、酔狂かつ命知らずな侵入者たちを阻まんとするモンスターは一匹も存在しなかった。無数の道が錯綜する洞窟然とした迷路内を、冒険者達は迷宮に潜ってから一度も怪物の遭遇^{モンスター}をしていない。

「シー、ミノタウロスすら現れて来ない限り本当にソレは本物なんだね」

黄金色の髪に碧眼の小人族^{パルウム}の槍使いが斜め後ろに立つ真っ赤な全身型鎧^{フルプレート}を着こむ冒険者を尻目で見た。厳密には首に下げられてる黒曜石のように輝く黒い何らかの鱗のような欠片を首飾りにした装飾品に視線を向けていた。ソレを下げている鎧の人物は同感だと首肯する。

「あの商人はいい物を手に入れてくれた。説明書を読んでも疑わしかったがコレは紛れも無く本物のようだな」

「ああ、まさか——十数年前ゼウス・ヘラの「ファミリア」が討伐を果たせなかつた『黒龍』の鱗。ソレから放つ威圧的な物が他のモンスターを寄せ付けない効力があるなんて知らなかつた」

一欠けらでも中層のモンスターを寄せ付けない地からの気配に感嘆する。が、それを持つ当人は深い溜息を吐いた。

「まったく、主神からの執拗な命令に同じ内容の大量の冒険者依頼^{クエスト}を持って来て強制的に「ロキ・ファミリア」の長期の遠征に付き合わされる羽目になるなんて……」

数日前の朝の事を思い出すその声音から辟易していることが窺える。その「ロキ・ファミリア」の団長は申し訳ないね、と苦笑いをして会話を繋げる。

「君自身、今までホームを留守にして遠征にすら参加しなかつたんだ。そのツケを払ってもらわないとね」

「うん、全然そんなことと気にもしなかつた元団長が建前を言う辺り、

何か企んでいると分かっているからな。——なに、このクエストの内容

羊皮紙をフィンに見せつける。冒険者依頼の内容が綴られている
それを読み上げると……。「ロキ・ファミリア」の遠征中の装備の
手入れと夜の食事の仕度を求める。

「遠征中の武器の手入れならともかく、なんで食事の準備をしなく
ちやならないんだ？」

「あはは、君の料理を食べれば団員達の士気は向上するだろうと思っ
てね。あ、今夜はあのカツ丼とカレー、どっちか頼んだよ？」

「……フィン・ディムナの踊り食いを食べさせれば皆、士気どこ
ろか力も向上すると思うんだ」

腰に佩いていた鞘から剣身を覗かせ、殺気を放つその行為にフィン
以下の団員達が慌てふためく。

「因みにカツカレーだったら手っ取り早い」

「構わないよ。君の作る料理は第一級だからね」

そんなこんなで一誠は「ロキ・ファミリア」の遠征に付き合うこと
になっていたのであった。それからあつという間に中層——16
階層に到達。17階層に続く通路周辺で立ち止まる。

「他の皆が集まるまで待機。集合したら——17階層に進出、階層
主ゴライアスと一戦を交える」

最大派閥の団長として無駄なことはしない。効率よく長い期間を
懸けて団員の成長を導く。見張り役を数人配置させて合流地点のポ
イントにこのあと来るリヴェリア達同胞を待つフィンに一誠からあ
る物を手渡される。

「んじゃ、新作の物を使ってもらおうか」

「これは？」

「閃光弾。相手の視力を一時的に奪う魔法道具^{マジックアイテム}。ただし、無茶苦茶に暴
れられる可能性があるからこの対大型モンスター用のシビレ槍で
使って……」

説明を受けたフィンは、仲間の合流と戦闘準備が整い次第で17階
層へ突入。そして試しに閃光弾とシビレ槍を使ってみると巨人型の

モンスターを這う電流で動きが停まり、その隙を突いて一斉に武器を叩きこんで倒した安全策だったこの連携に一誠へ訊ねた。

「これ、他の階層主でも通じるかな？」

「試したことはないけど、ウダイオスとそれ以上の階層主は通じないと思う」

「ン、『アンフィス・バエナ』までか。でも、それでも効果があるなら使う手はないね」

「ん、毎度あり」

「ロキ・ファミリア」の主力と一誠がいなくなった数日後の地上——。【アルテミス・ファミリア】の団員達はギルドから出て来る異邦人達。周りの視線をあからさまに気にしながら早足で遠ざかるその姿は更に奇異な視線を向けられるが、キリト達がここにやってきていたのは冒険者登録をしいくためだ。ただし異形の姿をした者は手袋や全身に鎧を着込む方法で正体をバレないように工夫しないと外に出歩けないため、金属を擦りつけながら向かうしかなかった。

「うえ、歩き辛い」

「仕方が無いですわ。そうでもしないとバレてしまいますもの」

「だけど、これで俺達は冒険者になったんだな」

異世界の文字、共通語コイネすら書けない異邦人達は受け付けの人に変わって書いてもらって登録を果たした。少年少女達をここまで連れてきたキリトとアスナは何だか不思議な気分浸っていた。自分達に異邦人の後輩が出来たんだな、と。

「なあなあ、神様の眷族になったら俺達は今よりも強くなれるんだよな？」

「ああ、その通りだ。君達の世界にもゲームがあるなら、強くなれる手段や方法もわかるな？」

「モンスターを倒して経験値を溜めてレベルアップするんだろ？ゲームみたい簡単に強く——」

「簡単じゃないよ、強くなるって」

黄色い髪に色々と軽そうな少年に揃って否定する言葉で遮った。

足を止めて振り返ったキリトとアスナに対して「へ？」と間の抜けた声を漏らす少年はこう言われた。

「いま俺達がいるのは仮想世界じゃなくて現実世界だ。決してゲームの感覚でいちやならないんだ」

「この世界に生きる事もモンスターとの戦いも生半可な覚悟でいられるほど、優しくくないよ。気を抜いたら死んじゃうかももしれない」

真剣な面持ちで諭され少年は半ば啞然とする。

「他の皆も、死にたくなければ必死に生きる事を足掻く覚悟と努力をするべきだ」

「じゃないと、元の世界に帰れなくなるよ？私達も君達も、お互いね」
「……」

どんな世界でも死は平等。自分達よりも一年長くこの世界で生活をしていた二人は凄く逞しい事を思い知らされた異邦人の一行。

「さ、早速ダンジョンにでも行ってみるか？特殊な能力を持っているなら上層のモンスターぐらい倒せるだろうし」

「えっと、どんなモンスターがいるんですか？」

「ゴブリンとかウエアウルフ、カエルのモンスターとか影のモンスターとか色々だな」

「魔石の集め方も教えるね？冒険者もお金が無いと生きていけないから」

職業や就職、賭博して得られる収入の他にもダンジョンで集める魔石や怪物ドロップアイテムの宝で収入源を確保、収集しなければならぬことを事前に教わっている。異邦人達は全員、冒険者として生きる事を選んだことで冒険者の苦勞を今日から味わうのである。

「でも、上層の階層の下、中層はもつと手強いモンスターが存在するかから中層から先は命懸けの戦いの本番だ。強さに自身が無いなら中層に行かないことをお勧めするよ」

「キリトさん達はどこまで行ったんですか？」

「27階層の下層。とてもじゃないが、一日で往復できるような距離じゃない。ダンジョンの中で寝泊まりする必要がある。だから色々手間と時間、下準備を整えてからじゃないと27階層まで行って

戻っては来れない」

「だ、大丈夫なんですか？モンスターがいる迷宮の中で寝泊まりするなんて」

「各階層にモンスターが出て来ない階層、安全階層セーフティポイントが存在する。そこにいけば一先ず安全だが、それ以外の階層だと見張りをする人間がない中寝る事は難しいな。——例外を除いて」

例外？何のことだろうと思っていると、地下迷宮に続く摩天楼施設の塔に辿り着いていた。街のどこからでも見る事が出来る巨大で壮大な天を衝かんとばかりする塔。

「アスナ、人数を分けて行こう。時間は三十分後、またここで落ち合おう」

「うん、わかった」

ギルドから支給された武器で初めてダンジョンに挑む異邦人達は、この世界で生きる厳しさを思い知ることになる。純粹無垢な子供にとって例えモンスターであろうと『殺す』経験をしなくてはいけないことをこの時でもまだ知らないでいるからだ。

「右へ緊急回避っ！」

フィンの叫びと疾呼で団員達は焦燥に駆られた気持ちと死に物狂いの顔で避けたその直後。壁面から何かが飛び出して団員達が今さっきまでいた場所へ襲いかかった。が、直ぐに地面に穴を開けて潜り出した。その光景に「ロキ・ファミリア」達は戦慄と警戒の面持ちで見つめ周囲を警戒する。

「下層に来てまで厄介なモンスターに出くわしてしまった」

「初めて見るモンスターだ。あれは何だ？」

「深層出身の蛇型モンスター、『大蛇の井戸』ワーム・ウェールだ。冒険者達がつけた渾名もあって『凶兆』ラムトンとも呼ばれてる」

深層のモンスターがどうして上層、この下層に上がってくる？と不思議に思いながらも足の裏から感じ取れる移動する巨大な気配を感じと探知——。

「フィン、リリア達がいる地面から来る」

「君のその能力は称賛に値するよ。リヴェリア！そつちに襲いかかつてくる！」

「後退だ下がれ！」

三秒後、深い青色の何かがリヴェリア達がいた地面から飛び出してきた。一誠の探知の能力で回避できながら攻撃を加える上級冒険者と第一級の冒険者のドワーフに二人の幼女であるが、素早い動きの上に巨大で長大な体軀だ。狙いがズレれば決定打を与えられない。しかも『ワーム・ウエル』は蛇型モンスター。元来の生物同様、獲物を狙う執着心を兼ね備えている。全ての獲物を呑み込まんとするモンスター相手に――。

「――ア、アリシアが喰われたつす！」

【ロキ・ファミリア】でさえただでは済まないのである。犠牲者が出た報告が悲鳴と共に伝わり、フィン的心情は槍の柄を握ることで露わにする。

「生きたままならまだ大丈夫だな」

が、その隣であっけらかんと物言う一誠に真意を問う。

「どうしてそう言い切れる？」

「ん、俺も子供の頃そう言う経験をしたことがあるから。――横から来るぞ」

「……君は一体どういう人生を過ごしてきたんだい」

震動を察知し一人だけ前進する一誠に何とも言えない気持ちを抱くフィンは、団員達を後退させながらこう言う。

「頼めるかな？」

「ああ、お安い御用だ。魔石とドロップアイテムも持って戻ってくるよ」

秒を待たず、群れから離れた獲物を狙う狩人ハンターは側面の壁面をブチ抜いて『ワーム・ウエル』が突撃を仕掛けてきた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

そして一誠の姿が顎を開けた大口の中へと掻き消えた瞬間を、アイズとアリサは限界まで見開いて見てしまった。

「イツセー……!!?」

下層で起きた凶兆の出来事を上層にいる冒険者達にとっては関係のない話。キリトとアスナの班に分かれてそれぞれ初のモンスターとの戦闘を臨もうとしていた異邦人達。

「……キリトさん」

「どうした?」

「モンスターを倒すって、殺さないといけないんですか」

手始めにキリトがゴブリンを斬り捨てて、胸部から紫紺の欠片『魔石』を取り出すやり方を見せた辺りから異邦人達の表情は強張ったり引き攣ったりした。キリトはワカメ頭にそばかすがある少年の問い掛けに当然のように首肯する。

「そうだ。もしかして、ゲームのように勝手に消滅してくれると考えてたか?」

「……はい」

そばかすの少年の肯定にキリトは呆れも小馬鹿にすることもなく同意した。

「そうだな。その気持ちは俺も最初に抱いたよ。でも、この世界の人間……冒険者達はお前達の年頃の子供でもこうやってモンスターを殺して魔石を集めてお金を稼ぎつつ強くなっているんだ。俺達異世界から来た人間にとって衝撃的で残酷な話だけだな。けれど、冒険者として生きるなら他の冒険者と同じことをしなくちゃならないんだってそう思うと、自然とモンスターを殺すことに躊躇わずするようになった」

何時か元の世界に戻るために様々な覚悟を心して掛らないといけない。キリトの話を聞いていた異邦人達は促される。

「さ、今度は君達の番だ。冒険者になったからには自堕落な生活はできないからな。生活費も小遣いもその他諸々、自分の手で稼がなくなっちゃ」

一方、アスナの班でも似た反応をされていた。

「僕達はヒーローを目指す学生なんだけど!?この世界の冒険者はこんなことしているのかい!」

「私達も知った時は驚いたよ。でも、この世界の歴史の紐を解くと千年以上前からモンスターが人類の天敵として世界中に跋扈し続けていたんだって」

「せ、千年も昔から……っ!」

「うん、だからこうしてモンスターと命懸けの戦いを、死闘を繰り返して続けてきた人類にとってモンスターは戦って殺して当たり前前の認識なんだよ。あの白亜の塔がダンジョンの穴を塞ぐように建造されて、迷宮都市オラリオが完成されてからモンスターの地上の進出を防いでいるんだってアルテミス様からそう聞いたんだ」

『ギイツー!』

同胞を殺した侵入者へ爪を立てて襲いかかるゴブリンに、素早い突きで胸部の魔石を破壊した。すると色素が失ったように灰色と化して、次に灰燼と化したモンスターの末路を見せつけられる異邦人達は目を見開く。

「こうやって冒険者達は千年前から何千回、何万回、何億回もモンスターを倒し続けた。異世界から来た私達にとって壮絶で気が遠くなる凄いいことだと思ってるよ。しかも、ゲームや本でよく出るダンジョンの攻略を自分達もできる事に驚きと感動をしたのも事実」

異邦人達に屈託のない微笑みを向け、鼓舞を打つ。

「だから皆も頑張ろう?元の世界に帰るその日まで」

鳴り響く、岩盤を打ち砕く音。岩石の雨と共に巨軀が落下する。猛烈な空気を裂く音の後、地面から激突音が奏でられた。その衝撃に階層が振動する。舞い上がる煙の奥、できあがった窪地の中で蠢くのは青白い長軀。大蛇のモンスター『ワーム・ウエール』である。

『アアア!?!』

『凶兆』^{ラムトン}の名を冠する怪物は暴れた。この世で最も度し難い苦痛を与えられたかのようにもがき苦しむ。だが次の瞬間、体軀の青白い表面に光の軌跡が走った。一拍遅れて長軀の胴体が真っ二つに裂け、

『ワーム・ウエール』の最期の悲鳴は程なくして止まったと同時に力尽き、傲然と大地に横たわった。そして。真つ二つになった胴体からどろり、と体内にしまっていた臓物が紅の水と共に一緒に溢れだす。直後、内臓からバシヤバシヤと水を蹴るように音が鳴り、一息と共に出てきた。紅の血を全身で浴びたかのように真紅の鎧の冒険者が腕の中で意識を失っている耳が長い種族、エルフの少女を一瞥した。彼女の全身は溶けていた。露出した瑞々しいエルフの肌に醜い火傷にぼつぽつと犯されているのを始め、戦闘衣バトル・クロスも殆どが溶解し、服としての機能はもはや役に立たない。その綺麗な金髪も煙を上げている。最初に呑み込まれたモンスターの胃袋の中で、強烈な毒の酸が少女を焼いて両の手足も半ばまで消失していた。容体を確認した少女から視線を外し、今いる場所を把握したその目は、駆け出しの冒険者にとつて絶望と恐怖の象徴が映り込んだ。

「……………」

『……………』

潜在能力Lv. 6の階層主、ウダイオスの目と全身鎧の冒険者こと一ポテンシャル誠の目とぶつかりあった。——間の悪い事に自分達ふたりがいる階層は床や壁面、階層そのものの色は——白濁色。『深層』37階層であることが目の前の化け物の存在に気付かされる。

「……………えーと、どうも」

『……………(コクリ)』

ウダイオスも少なからず驚いていた。己の領域に突如岩盤から出てきた同胞がもがき苦しんでるかと思えば死に絶え、輪切りされた胴体からモンスターを産む母体に侵入する酔狂かつ命知らずの冒険者が現れた光景には、流石のウダイオスも目を疑った。そして声を掛けられて思わず反応してしまった。次の瞬間。先に行動した者こそが勝敗を決すると言つても過言ではなかった。

「先手必勝！」

『ツツツ!?!』

左目を妖しく輝かせウダイオスを見た瞬間。彼のモンスターが金縛りを受けたように全身が硬直状態の後、真紅の魔力の塊に頭部を粉

砕され数秒で撃破された。

「…………倒しても経験値にならないんだよなあ」

落胆の息を漏らす一誠。もしもこの場にフィン達がいたら失笑する発言だったが本人はそんなこと知る由も無く作業に入る。

「…………フィン」

下層の安全階層^{セーフティポイント}で野営の準備をする「ロキ・ファミリア」を見渡せる位置に居座る首領の小人族^{バルウム}に、金髪金眼の幼女と銀髪青眼の幼女が訴えるような眼差しで追究した。

「イツセーの事なら心配する必要はないよ。彼はこの階層に目指して向かって来ている」

「……………」

それでも目の前でモンスターに呑み込まれた光景を目の当たりにして、穏やかで色と言われてできるはずが無い。あれから数時間も経過している。生存の連絡も無く音信不通。二人の心情は不安とこのまま戻って来ないんじゃないかという恐れで気持ちが落ち着かない。それを察している様子でフィンは朗らかに笑みを浮かべる。

「彼なら大丈夫だと僕は思うね。それともアイズとアリサはイツセーの実力を信用してないかな？」

「そんなこと」

「ない」

間も置かず否定した二人の気持ちは嘘ではない。何時も一誠と一緒にいる時間が多いのは自分達^{アイズとアリサ}なのだ。師であり片想恋慕の相手を信用と信頼、絆はフィン達が思っているより高いのだと胸を張って自負したいほどだ。それを信用してないだと言われてちよつとお冠な二人は無言の抗議の視線を飛ばす。

「ふふつ、なら信じてあげないと彼が可哀想だよ？それに帰ってきたら心配させたお詫びとしていっぱい甘えればいい」

ザツザツザツ…………と、こちらに近づく足音が三人の耳朶を刺激する。誰が来たのかとアイズとアリサが足音の方へ目を向ければ、竜を彷彿させる真紅の全身鎧を着込んだ一誠が変わらない姿で

近づいて来ていた。

「なんだ、俺は死んだと思われていたのか？心外だなそりや」

「今まで音信不通だったから君の可愛いお姫様達がお冠だったんだよ」

「あーそりや悪かったな。蛇の胃液で溶かされちゃったんだ」

三人に見せびらかす形状がボロボロな金の腕輪。フィン達にこれで通信を繋げるといふのは酷な話だろう。理解した小人族バルウムの目の前で一誠に抱きつく幼女達を微笑ましく見つめた。

「それで彼女は？」

「黒髪のキャットピープルの少女に任せてある」

「【ロキ・ファミリア】の団長として仲間を助けてくれたことに深く感謝するよイツセー」

「どういたしまして。それじゃ、野営の準備がとつくに終わっているようだし夜食の準備をしなくちゃな」

踵を返してアイズ達に抱きつかれたまま野营地の方へ向かう。それから急ピッチで調理を始める際、食欲をそそる香りに釣られる団員達が集まった姿を小高いところから視認するフィンとリヴェリア、ガレス。離れた位置でも食べたことがある香りが三人の鼻腔を悟らせた。

「フィン、今夜はカレーか？」

「いや、カツカレーだってさ」

「なんと!?カツ丼のカツにカレーとは面白い趣向じゃ！」

後に——異世界の料理は【ロキ・ファミリア】の胃袋を鷲掴みにしたのは別の話である。そして何故だか……。

「あ、おはようございます！」

「今夜の食事楽しみにしていますよ！」

一部の団員達から料理のスキルの高さに尊敬の眼差しを向けられるようになった。それがある日、とある神の耳に入り神会デナトウスで暴走、『オラリオ一料理決定戦』等と催しを始めそれに巻き込まれることをこの時のフィン達はまだ気づくことはなかった。

「それにしても、よくあのモンスターから無事に戻って来たね。その

鎧も全然溶けてないし」

「これは魔力で鎧に具現化したものなんだ。モンスターの酸程度じゃ溶けないよ」

「異世界の魔力はそんなこともできるのか。とても信じ難い話だ」

「武器にも具現化できるぞ」

「おお、斧になりおったわい」

フィンが寝るテントの中で一時の遊戯を楽しむ四人。他にもアイズとアリサがいるものの、一誠の傍ですぴすぴと寝息を立てて寝ている。

「——ドロフォー！」

「悪いね、ドロフォー返し」

「同じくドロフォー」

「儂もじゃ」

「ノオオオオオツ!!」

UNOをしている四人は何気なく盛り上がりを見せていた。やり方を教わり、手始めにやってみると新鮮さと面白さが相乗して既に五回目に突入しているが、一誠が負け越しているのであった。

「……お前等、狙ってるだろ」

「「たまたまだ」」

三回目の敗北を味わい愚痴を零しつつカードをシャッフルする。

「うーん、カードゲームは戦略と頭脳戦だから楽しいや」

「儂はカードなど頭使う遊びは好まないが、こういうカードゲームは面白い」

「シンプル故にな」

高評価を貰っても勝たなければ面白くない。と思いつながら手札を配り、場にも数枚カードを置いて六回目を始める途中、老兵のドワーフが不意に口にした。

「そう言えば異世界から来た者達はどうしておるのじゃ?」

「ああ、キリトと言う冒険者とその仲間達か。イツセー、どうなんだい?」

「俺も久しく会ってない。でも、元気にしてるだろ。中層でも問題な

く進行したし」

「お前と同じLv. 1の駆け出しの冒険者であるのだが、あの者達にも何かしらの秘密があるのかもな」

それこそお前と同じように、と付け加えるリヴェリアに「あいつら全員、真正銘人間だからな」とカードを置きながらキリト達の保証を守る一誠。

「地上に戻ったら、元の世界に戻る方法を探してみようかな」

「どうやってじゃ？」

「その方法を探すんだよ。方法も手段も無い零からさ。まあ、この世界の魔法で次元と時空を超える様なものがあつたらいいんだけど」

「それはもはや神の領域だイツセー」

「シー、魔法は千差万別だからね。絶対にそう言う魔法はないと断言できないから強く否定することもできないや」

そうかと相槌を打ちながらリヴェリアに問う。

「『ステイタス』に魔法の空欄があるけど、魔法を習得する、会得する方法はあるのか？」

「スキルと同じ要領であるな。例外を除いて冒険をし続ければ魔法は突然発現する」

その例外は？と訊く少年にフィンが答えに応じる。

「知つての通りリヴェリアはエルフの中でも更に高位のハイエルフ、

デミ・ヒューマン
巫 人でもあり魔法種族だ。彼女の種族は儀式的な方法で魔法を習得したり種族所以に魔法を覚えやすいのが特徴だ。ただし、例外はこれじゃない」

「イツセー、魔導書を知っておるか？」

「……グリモア？魔導書のことか」

知っていると肯定する一誠の世界にも魔導書が存在することを知った三人は、本題に集中して語り続ける。

「魔導書は魔導と神秘のスキルを兼ね備え極めた者しか作製できない希少な道具」

「たった一冊だけでも値段は一億ヴァリス以上じゃ。その値段で落札されることは当たり前なんじゃ」

「その理由は強制的に魔法を発現するからだ。だが、一度使用するればグリモアは効能を失う奇天烈書ガラククタと化すがな」

そんな貴重な使い捨ての魔法の本があるとは知らなかった一誠は「へえ」と短く漏らしただけだった。

「それってオラリオでもあつて売られているんだよな？」

「無論だ。興味があるなら探してみるか？私が良く杖の整備を頼む店に販売されているかもしれん。そこへ案内しよう」

「あ、頼むな」

地上に戻る時が楽しみになつた一誠は魔法専門店の店だろうと察し、左眼を純粹な子供のように輝かせる。

「あ、UNOだ」

「悪いけどイツセー。そう簡単には勝たせないよ？ドロフオー」

「ドロフオー」

「お前等、嫌いだっ」

冒険譚13

長期の『遠征』で地上から「ロキ・ファミリア」の主力部隊がいなくなつて二週間経つた。キリト達は今日も変わらない朝を迎え、異邦人達とダンジョンへ繰り出そうとした。相も変わらず異形の姿をした異邦人は鎧やフード付きの外フーデットローブ套を着こみ、街中を歩かなければならない窮屈さを強いられているが身の安全のためだと我慢している。

「ところでキリト少年。少し教えてほしい事があるのだが」

「なんですか？」

「この都市には神アルテミス様以外にも神様がいるようだけど、ぶっちゃけどの神様が凄いのかな？最強の「ファミリア」とか存在しているのかな？」

オールマイトからの質問に対し肯定と答える。

「オラリオの中で一番強い「ファミリア」は二つあります。一つは「ロキ・ファミリア」、もう一つは「フレイヤ・ファミリア」。この二柱の神の派閥が他の「ファミリア」より戦力が高く、冒険者達の間では『二大派閥』と畏怖の念と称賛を籠めて呼ばれている最大派閥が存在します。他にも二大派閥に負けない最大派閥が存在しますよ。と言つても鍛冶系「ファミリア」の「ヘファイストス・ファミリア」や最大派閥の中で冒険者数を保有する「ガネーシャ・ファミリア」、「イシユタル・ファミリア」ぐらいしか知りませんが」

「h o、そうなのかい。因みに私達の「ファミリア」は？」

「下から数えた方が早いぐらいですね。でも、中堅の下辺りだと自負していますよ。人数が五十人以上もいますし、これから強くなれば中堅以上の「ファミリア」にもなりますからね。そしたらアルテミス様も喜んでくれます」

しかし、異邦人たる自分達が元の世界に戻る際は一気に勢力が失つて転覆してしまうことを思うと、非常に心苦しいほどに申し訳が無いと思つてしまう。今直ぐとは限らないが、自分達がこうしている間にも勧誘活動をしてできる限り「ファミリア」の勢力を保つ必要がある。キリト達異邦人と言う足固めされた地盤が最初に築いて、それか

ら少しずつ戦力と勢力を増やさねばと——中央広場セントラルパークに辿り着いた。

「あ、皆。道を開けてくれ」

「む、どういうことだ？」

白亜の摩天楼施設の出入り口、ダンジョンに続く建物の中から笑っている道化ジエロの旗を掲げて出てくる一段を見た矢先、キリトが皆を催促しながら制する。

「最強最大の派閥「ロキ・ファミリア」が長期の遠征から戻ってきたから」

「え、嘘っ!？」

「あれが、オラリオで一番強い【ファミリア】の冒険者達……」

先頭に歩く黄金色の髪に碧眼の小人族バルウムは「ロキ・ファミリア」の团长フィン・ディムナ。翡翠の長髪に同色の瞳のエルフは副团长のリヴェリア・リヨス・アールヴ、老兵のドワーフのガレス・ランドロツクがLv. 6の最強の冒険者であることを教えられるオールマイト達はオラリオの代表者達の姿を目に焼き付ける事が叶い——。

「おや、キリトじゃないか」

「どうもフィンさん。ダンジョンから帰って来てお疲れ様です」

「ああ、問題なく戻って来れたところだ。けれど見ない内に団員が増えたようだね」

「ええ、まあ……俺達と同類だと分かってくれますか？」

通り過ぎながら訊かされた意味深なキリトの発言に、碧眼が一瞬だけ丸くしたフィン。だが直ぐに察して誘いの言葉を掛けた。

「今夜、夕食を食べ終えたら僕達のホームに来てくれ。それから彼の家で話をしよう」

「彼って……イツセーの?？」

その問いにフィンは首肯するだけで団員達を引き連れて北部へと向かう。話とは何だろうかと思うがきつと異世界から来た異邦人のことで話をするかもしれないと悟り、長い行列が広場から遠ざかるのを邪魔しないようにダンジョンへ赴く「アルテミス・ファミリア」。

「リヴェリア、ガレス。聞いてたね？」

「ああ、また異世界から来た者達が現れたのだな」

「本当にロキ達が何かしたのではないかと勘繰ってしまうのお」

去年は一誠とアリサ、キリト達。今年は名も知らぬ異邦人達数十人。段々人数が増えてきた異邦人の来訪にフィン達はこの世界が何かがおかしいと考慮するも仕方が無かった。

「イツセーも驚くだろうね。新しい異邦人達の存在に」

夜、『幽玄の白天城』でフィン達がキリト達を連れて来るのを待つその最中。新たな異邦人の存在を教えても、相手は淡泊的な反応で相槌を打たれ、少し拍子抜けしてしまったりヴェリア。それほど重要視していないのか、興味が無いのか、はたまた両方なのか分からないが一誠は溜め息を零した。

「フィンも面倒なことをするな。別に話し合いの場を設けなくても何時か出会って話す機会が来るのに」

「今がそれではないのか。それに早めにお互い認識すれば色々都合がいいだろう」

「まあ、不仲な関係になるよりはマシだけだよ」

と、そう零す一誠を視界に入れるリヴェリアの腕輪の宝玉が点滅を始めた。フィン達が来たと言う合図で『幽玄の白天城』の主に巨壁の扉を開けてもらうよう願った。



「お、おおおっ!?!」

「何も無いところに森が……」

「摩訶不思議」

巨大な森林、地面や木々の傍で淡い燐光を灯しながら道標として生えている数多の水晶群^{クォーツ}。光る苔も確認できて幻想的な光景にも見えなくもなく、中まで潜ったことが無いキリト達も驚嘆と感嘆の息を漏らす。フィン、ガレス、ロキの先導についていく異邦人の集団は珍しさど好奇心で高まる高揚を抑えきれずキョロキョロと目を周囲に向

ける。ここはもう一つのダンジョンではないか？と思っても仕方が無いぐらいだ。

「キリト君、凄いねイツセー君の家って」

「ああ、同じ異邦人としての格の違いを見せつけられてるな。これ全部一人で造ったのか……」

歩いてしばらくすれば、巨大な湖がある場所に辿り着いた。そこでも淡い光を発する水晶クォーツで道具の原料アイテムとなるダンジョン原産の植物や宝石を実る木々や希少な果実等レアを照らし、フィン達を除く一行を驚かせた。更によく見渡せば、それらの周囲の地面に突き刺さって何かの液体が入っている巨大な硝子の容器があった。一つだけじゃない、複数以上もだ。まるで植物の栄養剤の様であるとキリト達が思い始めたのは少し先になる。

「お、おいキリの字。ありや、噂に聞く宝石の実を宿す樹って奴なんじゃねーのか？」

「フィンさん、どうなんですか？」

「うん、間違いないよ。あれは中層に生えて滅多にお目にかかれない宝石樹——僕達冒険者にとって金の卵もとい金になる樹だ」

「そ、それがあんなにたくさん群集しているんですかっ？」

赤や青、多彩な色の美しい宝石が実っている木々に目を奪われがちになってるアスナ。何度かその宝石樹を目的に探索したことがある【アルテミス・ファミリア】でも見つけることが困難を極め、結局は泣く泣く諦めたことは何度だったか……。そんな【ファミリア】を嘲笑うかのように片手では数え切れない宝石樹が群集している光景を目の当たりにされ、瞠目するなど言われても無理な話である。

「他にも地上に持ち帰って商業系の【ファミリア】や商人、ギルドに渡せば少くない額で換金できるものばかりだ。つまりこの一帯は彼にとつてお金を稼ぐ栽培場所なんだ」

「い、一本だけ宝石樹を貰えないかな……」

「ソー、君の交渉術がどこまで通用するかだね」

湖に光る足場の上に移動して中央まで進み一同が集うと、足場が昇降施設エレベーターのように降下する。

「来たな」

「そうなのか。しかし不思議なものだな。お前の探知能力はどうなってるのだ？」

「アイズやアリサに教えている気の応用。相手の気を遠くからでも感じ取れるんだ。流石に神の気は感じられないがな」

「それは修行すれば私達でも習得できるのか？」

「ん、できると思う」

そうして話している内に一誠達がいるリビンググキッチン扉が開き、キリト達を連れてきたフィン等が入ってきた。その後ぞろぞろと「アルテミス・ファミア」の顔見知りメンバーが入って来て、最後は見覚えのない、全身をフード付きの外套で隠したり鎧を着込んだ――。

「兵藤、くん…….?」

「っ?」

ワカメ頭のそばかすの少年が一誠の姓を信じられないように吐露した。言われた当人も最初は疑問を抱いたがキリトかアスナが教えただらろうと納得した直後。

「は?何でお前がここにいるんだよ兵藤!」

「ええええええええっ!」

「どういうことだ…….?」

少年少女達の一誠を見る目が明らかにおかしい。言動も自分を知っている風でフィン達やキリト達が「知り合いなのか?」と言う眼差しを向けて来る。本人もこれには怪訝な気持ちになる。おまけに鎧と外套を外した者達の姿が人と異なる出で立ちで、フィン達は驚きを隠せなかった。

「……お前等、誰なんだ?」

「はっ?」

「え?」

訊ねられた側は「何を言っているんだ?」的に不思議そうな気持ちで苦い笑みを浮かべた。

「お、おいおい。俺達の事を忘れたわけじゃないだろ？一緒にヒーローを目指している友達によ」

「ヒーロー？生憎俺はお前等が別の世界から来た異邦人だとしても誰一人お前等の事を知らないんだけど。てか、そいつらは人間じゃないだろ。よく街中を歩けるな」

「な、何を言っているんだい兵藤君？僕達に変な穴に吸い込まれそうになったところを必死に助けようとしてくれたではないか」

「変な穴？もしかしてお前等もそれでこの世界に来たのか。てか、助けた覚えなんてないし」

「じよ、冗談も大概にしろって！」

「いや、至極真面目に言っている。お前等、俺の何を知っているんだ？」

話しの食い違い、平行線が続き蚊帳の外に置かれているフィン達もこれには疑問を抱いた。片や知って片や知らない。ロキに新たな異邦人達が嘘を言っているのか目で訊ねると首を横に振った。彼等彼女等は嘘を言っていないということ実証した。

「……兵藤、少し確認だ」

「見知らぬ人に好きじゃない呼ばれ方をされるのは少々癪だな」

小汚い印象を与える無精髭の中年の男性にそう言い返し、その言い方、やはり自分達が知っている人物と同じじゃないか。と思わずにはいられなかった。

「お前の名前は兵藤一誠。違うか？」

「そうだ」

「お前は別の世界から来た——人型ドラゴン、セイクリッド・ギア神器という摩訶不思議な能力を数多く宿している。違うか？」

——ロキ達にすら打ち明けていない秘密の一つを看破する風に述べた男に一誠の中の警戒度が高まった。押し黙って沈黙で肯定する間にも訊ねてくる。

「お前の中には色んなドラゴンを宿している。その中で俺が知っているのはグレンデルと言う巨人のような化け物だが、どうなんだ？」

「……何でそこまで知っているんだって思うほど当たってるよ」

「ロキ・ファミリア」の一部しか教えていない一誠の秘密を知った風に述べる中年の男性に警戒する眼差しを向ける。そしてある推測が浮上した。

「・・・こんな事があるのか、思いもしなかったな」

「どういう意味だ」

それは異邦人達にとっても衝撃のことだった。

「そっちが俺を知っているのに俺はお前等の事を知らない。単純に考えれば俺じゃないもう一人の俺がお前等の世界にいると言うことになる。つまりは並行世界、パラレルワールドの原理だろうな」

「・・・お前は俺達の事を知らない、もう一人の兵藤一誠という存在。そう言いたいのか?」

「ああ、まさしくその通りだ」

絶句する異邦人達。そして今だに理解に苦しむ異邦人達もいればフィン達も疑わしいと質問をぶつけた。

「イツセー、僕達にも説明してくれるかな。君は彼等と同じ世界から来た者じゃないのかい?」

「違う。どうやら別の世界のもう一人の俺自身が今の俺と同じ状況——異世界にいるようだ。こいつ等の世界にな」

「んーなんや、わけがわからんでえ? 一体全体どういうことなん?」
後で説明する。とロキ達にそう告げて気持ちの整理をする意味も含めて深い息を吐いた。

「とにかく、お前らが俺の事を知っていようと俺自身はお前らの事は何一つ知らない兵藤一誠だ。俺の事は別人だと思ってくれ」

「でも、一誠君は一誠君なんやよね?」

「それこそ知るかって話だ。俺は俺だ。お前らが知る兵藤一誠じゃないんだ。もう一人の兵藤一誠と同じかもしれないだろうが、俺はお前らとは友達とかそんな関係でもない赤の他人だ」

もう一人の自ひようどういっせい分と被らせないよう、深入りさせないよう一歩二歩も線を刻んで隔てる。そうしなければこの異邦人達は勘違いすると一誠は確信していた。

「それと、俺は些細なことで助けるつもりもないぞ。自分達の力で生

き抜けこの世界を」

「ちよ、ちよつと待つてくれよ！じゃあ常闇達の姿とかもどうにかしてくれないのか!」

「姿? ああ、その姿じゃ満足に歩くこともできないか。それぐらいなら魔法の道具でなんとかしてやるよ。時間は掛かるけど」

「助かる。それとお前も異世界から来たというならば戻る手段はまだ見つけてないのか?」

「見つけてたらとつくに俺やキリト達はお前達を残して元の世界に戻っている。そう簡単に見つけられるかよ。舐めてんのか」

尤もな話で「すまん」と謝る中年の男性。それから異邦人達からキリトとアスナに意識を変える。

「結構な人数になったようだけどホームの方は問題ないのか?」

「ぶつちやけ、財政が厳しい。毎日ダンジョンに行かないと金が直ぐ底を尽く。主に食費でな。それに簡易の寝場所を作ってどうにか過ごしてもらっている」

「だろうよ。急激に大勢の団員を抱え込んだ末路だな。零細派閥として火の車状態になるのは火を見るより明らかだ」

リビングキツチンを後にし、「ちよつと待つてろ」と言い残していなくなる一誠がしばらくして戻ってきたら、肩下げの鞆を二つ持っていた。それを無造作にキリトへ投げ渡す。思った以上の重さに体の重心がズレて、床に尻餅をついた少年は何事かと目を丸くする。

「え、これって?」
「飢え死にで天界に昇天なんて笑えないからな。特別にくれてやるよ」

鞆のチャックを開けてみると亜麻袋がギッシリ詰まっていた。その袋の中身は何なのかと悟ると絶句の面持ちで一誠に顔を向ける。

「こ、こんなにくれるのか? でも、お前は大丈夫なのかよ」
「湖のところ、見ただろ。売れば直ぐに金になるから金銭問題に縁がない俺からすればはした金だ」

「……俺もいつかそういう言葉を言いたいな」

遠い目でどこか尊敬の眼差しも籠っていたキリトに「頑張りたまえ

少年」と朗らかに言う一誠であった。

「え、これ全部お金の？……大きな工房ができるわよねこれで」
「はわわわっ、す、凄いです。一気に私達お金持ちになっちゃいましたよっ」

「デキる男は違うのね」

「でも、後で取り立てにこないよね？」

「まさか、そんなことあるわけが。ねえ一誠君？」

もう一つの鞆のチャックを開けて中身を確認したアスナ達も驚きで息を呑む。不意に思った考えを口にして問うたら。

「ん？落ち着いたら返済してくれても構わないぞ。数千万ヴァリス」

ニヤリと不敵に笑う少年にアスナ達に戦慄が走ったのは言うまてなかつた。



「いいのか？」

「何がだ？」

臨時収入を得たキリト達が『幽玄の白天城』を後にしていく姿を見送りながら訪ねられた。

「お前ではないお前を知る者達だ。少なからずお前のことを理解してくれるのではないのか？」

「俺であって俺じゃない。俺を俺として見てくれないならこの家に住まわせたくもない。リリア達だけでいい」

そう言葉と一緒に視線を向けてくる一誠にフツと小さくリヴェリアは笑った。

「意外とお前にも幼いところがあるのだな」

「……敢えて聞かないからな」

「ふふ、言っても構わないぞ？」

「遠慮する」

森を抜け外に出た直後にズズン……と見えない巨壁が森林の

空間を閉じ込め、閉まっていくのを目にしながら見つめるキリト達。
【アルテミス・ファミリア】の財政問題が解決し心の中は安堵で胸を撫で下ろす気分だが、異邦人達オールマイルト等の心情は曇っていた。

「……………一誠君」

「あいつは俺達の事を知らない者だ。悲観に浸る暇は無い」

「でもよ相澤先生。せっかく兵藤と出会えたのに離れて暮らすのですか？」

【ファミリア】同士の接触は問題を起こしかねないと説明されたはずだ。今の俺達は【アルテミス・ファミリア】の団員。あの兵藤は別の【ファミリア】の団員だ。必要以上に深入りはできん」

「……………」

先行くキリト達が進む暗闇に前を向いて歩く無精髭の男性に諭される少年少女達。口を閉ざし、遠ざかりつつも名残惜しげに虚空へ視線を向ける。自分達の事を知らなくてもこれから知ってもらえば解ってくれる。そう思わずにはいられない心と気持ちをぐつと胸の中に押し込んで帰路に着く。

「行くぞ」

「……………」

† † †

新たな異邦人達との出会いを経て翌日——。リヴェリアは杖の整備を出している店へ一誠達を案内した。北西のメインストリートを曲がった路地裏の奥深く。地下への階段を下り、痛んだ木の扉を開けた先にその怪しげな店はあった。室内は広く、薄暗い。天井にぶら下がったまるで火の玉のような魔石灯が、作り付けの棚に置かれた蛇や蜥蜴、蠍などといった不気味な生き物の瓶詰を照らし出している。店の奥では何か煮詰めているのか、大きな黒い鍋から赤い湯気が立ち上っていた。

「お、おお……………」

この薄暗さに相まって醸し出している雰囲気と店内の商品や置物などがまさしくアレだったため、この世界に来て久しく感動と感激を覚えた一誠だった。

「……感想は？」

「魔法使いの部屋っ、懐かしいなあ……」
「そうか」

滅茶苦茶純粹に目を輝かせて物に触れないよう物色を始め出す。アイズとアリサもきよきよと落ち着きなく店内を見回す中、カウンターの奥から人影が蠢いた。黒いローブに長い白髪、そして鉤鼻に皺だらけの口の老婆がリヴェリアを見るなり話しかけた。

「なんだい、リヴェリア、また『遠征』で魔法石をダメにしたのか」
「いや、この店に連れを案内したのだ。レノアのところは魔導書があるかもしれないと思ってな」

「いひひっ、生憎この店には置いてないよ。ただ、近々魔法大国にいる知人からよしみで一冊分けてもらう予定はあるけどね」

「アルテナ？もしかして魔法の国のことか？」

カウンターに近づく好奇心が刺激した一誠に、レノアという老婆はこいつの事かと言う視線を送った。その視線に無言で首肯し、少年の肩に手を置きながら紹介した。

「レノア、聞いて驚くなよ。この冒険者はな、異世界から来た者なのだ」

「って、おい。何言い出すんだよ」

「安心しろ、レノアは信用に値する。イツセー、試しに魔法を見せてくれまいか？」

人の了承も無く勝手に秘密をバラしたハイエルフが何を考えているのか理解に苦しみ、何故魔法を見せなければいけないのかと思いつながらも六属性の魔法や魔方陣を発現した途端。レノアの目が丸くなった。

「これが異世界の魔法……久しく興味と好奇心が湧いたよ。他にも何かできたりするのかい」

「遠くの場所に移動する転移魔法とか離れた所でも相手と会話ができる通信魔法、無詠唱で攻撃と防御もできるし他にも色々」

「聞いただけではとても信じ難い魔法ばかりだね。魔法大国の魔導士や魔術師が聞いたら嘲笑されるよ。そんな魔法はありもしないとね」

「魔力があつて知識も備えてれば誰でもできるのになあ。あ、因みに異世界の魔導書って興味ある？」

「あるに決まっている」

レノアだけじゃなく生粋の魔導士のリヴェリアまで食いついた。

「あるのかイツセー？」

「異世界の文字で書かれてるけど、それでもいいなら」

空間に開けた穴に手を突っ込んで取り出した分厚い本をカウンターに置く。最初のページを開いて見せると、見慣れない外国の、異世界の文字に綺麗な柳眉を寄せながらも何とか理解しようとする。

「この図面は魔法の術式だつてことはわかるねえ。いひひつ、長生きはするものだ。異世界の魔法の知識をこの目で見られるとは。だけど、確かに読むことはできないねこれは。何て書かれているのかさっぱりわからないよ」

「確かにな」

ページをめくる手は止まらず、何時しか本の虫になり掛けていた魔導士と魔術師^{メイジ}の顔は魔導書の持ち主に向いた。

「小僧、異世界から来たのならば共通語^{コイネー}に翻訳できるだろう？翻訳した魔導書を作製してくれるなら、私のできることであれば何だつてしてやる。当然無償でだ」

「おお、本当に？じゃあ、魔術師^{メイジ}の技術を学びたいな」

「魔法石の作製もかい？」

「うん、全部——でこんなことあろうかと、異世界の魔導書の共通語^{コイネー}版を作製した甲斐があつたな。何時かりリアに見せる為に作ったんだ」

それもカウンターに置いて二人に見せると、異世界の魔導書と同じ内容が複製されていたことに驚嘆の息を漏らした。読み続けて一分後ぐらい経つた時、徐にこの世界の言葉に翻訳した魔導書を閉じたレノアは大事そうに抱えて一誠に誘いの言葉を掛けた。

「こっちにきな。毎度『遠征』で魔法石を壊すバカエルフにも私の苦勞を教えるいい機会だ。私の技術の全てを教えてやるよ」

「ありがとう！」

「……すまん」

うきうきとカウンターの奥に入る一誠と対照的にバツ悪そうに謝罪するリヴェリア。その二人についていくアイズとアリサ——その後、「ヘファイストス・ファミリア」から異様な武器が販売されるようになった。



「ふっふっふ、これでまた新しい作品が作れるぞ。魔法の剣を作れるかもしれないな」

「魔法の剣、だと？ 魔剣とはどう違うのだ」

「それは俺も分からん。これから高い完成度で出来上がったら……もしかすると魔剣を上回るかもしれない」

「ほう……拝見させてもらおうか」

「……」

魔導士専門店でレノアの持ち得る全ての技術を時間掛けて学んだ一誠は、自分で作り上げた魔法石を用いてきつそく武器の作製に入った。使用するモンスター素材は——自身の身体の一部であることをリヴェリアは気付かない。広い屋内の壁際、激しく燃え立つ大型の炉が真つ赤な炎を猛らせ、むわつとした熱気を立ち込めさせる。その中に居て眼前に居座り込む少年の手の中にある鎚が鉄床アンビルの上に置かれていた上質な精製金属インゴットに叩き込まれ、武器の鍛錬スミスに励んでいる。カアン、カアン、と高い金属音を響かせる見習い鍛冶師スミスの背中を、リヴェリアや椿、アイズとアリサはじつと見据えた。一つに纏めて結んだ真紅の長髪が鎚を振る度に緩慢的に揺れ、叩き込まれる金属は飛び散る火花と共に不純物を取り除かれ、鍛冶師の熱意と意志が代わりに籠められていく。そんな中、まだ幼い子供の合図とアリサが汗でべつとりと前髪が額に張り付き、暑苦しげに息を荒げ、熱中症になり掛けてもおかしくないと。薄ら汗を浮かべるリヴェリアと椿と比較し——猛る炎を前にして汗一つ浮かべていない一誠。人型ドラゴン故か熱に対する耐性が備わっているのかとどこかそう思うハイエルフの心情を知る由もないまま武器の完成に精を注ぐ——。

「ふー……んっ、完成！」

数時間も費やしてこの世に新たに作られた一本の剣。全体が炎のように赤い、それより鮮やかな紅色。刃の部分は黒い。剣の形状は大きく長いロングブレード。剣身に赤色の魔宝石が両面に計六つ埋め込まれており、これが一誠曰く魔法の剣である。

「奇怪であるな。魔導士が杖に備える魔法石に魔力伝導率が高い『ミスリル』で作り上げた剣とは。手前ですら思い付かない以前に打つたことが無い代物で——凄く興味がある」

「そうなのか？でもまあ、これなら付与魔法エンチャントが出来ると思う。アリサ、素材の保管庫から大きな竜の牙を持つてきてくれ」

深層のモンスタードロップアイテムで試し斬を臨もうとする。小さい体で保管庫から身の丈を超える牙を引きずりながら持つてきたアリサから受け取り、ロングブレードを椿に手渡す。

「試し斬を頼んだ」

「うむ、頼まれた」

ウキウキと両手で柄を握り前に構える次の瞬間。剣身が炎に包まれた。作り主が魔宝石に炎の魔力を閉じ込め、それを解放してみせているからなのだが、リヴェリア達はそれに気付くことはない。後でタネ明かしされるがそれでも魔導士と鍛冶師からすれば驚愕ものである。

「お、おおっ……！これが魔法石と『ミスリル』の相乗効果によるものなのか……」

「確かに、魔力が剣から感じ取れる。持ち主の意志に呼応して発揮しているのか」

「それも含めて他にも仕込んである。それじゃ団長、ほいつ」

「——せいっ！」

宙に放り投げた牙が放射線を描いて椿に向かう。慣れた仕草で上段から振り下ろして斬撃を牙に当てると、真つ二つに裂けた断面から燃え上がる炎。アイズとアリサは驚嘆の思いで目を丸くし、床に落ち炎に包まれて表面が黒く焦げるその光景を目に焼き付ける。

「どうだ団長」

「悪くない、悪くないぞイツセー。これは実に面白い、のだが……」

これが魔法の剣とやらなのか？」

想像していたのと違う、と不思議そうに燃える剣を眺める椿の心情を察し、左の金目がリヴェリアにまで向いた。

「今度はリリアの番、頼んだ」

「イツセー、私は魔導士であることを忘れたのか？」

「リリアに剣術や剣技なんて一瞬でも期待してない。ただ剣に魔力を込めながら思いっきり振り下ろしてくれれば十分だ」

何気にも中傷されたリヴェリアの手にもロングブレードが渡り、言われた通りに実践してみると……不思議なことが起きた。剣から炎が放たれ、火炎の濁流にもなつて逃げ場がない工房内を一気に焼きつくす。

「……」

「うん——予想通りの出来栄えのようだ。これぞ魔法の剣つてやつだな」

火炎の熱気で焼かれないよう結界を張って、リヴェリア達を守りながら魔法の剣の性能を見て満足のいく結果として一誠の中で評価は高かった。

「剣から魔法が……まるで魔剣ではないのか？」

「一定数を超えると壊れる魔剣と違ってこっちは魔法石に魔力を込めれば魔法を発動する。威力は劣っているかもしれないけど、今後改良を積み重ねれば魔剣を上回る魔法の剣が完成するだろうさ。——」

最後の一言に椿とリヴェリアが不思議そうに反応した。

「何故だ？手前でも文句のつけようのない出来映えであるというのに」

「闇派閥イルヴァイスの手に渡ったら目が向けられないからだよ。前回のこともある」

再びヘファイストスが誘拐され今度は魔法の剣を作れと言い出されたら堪ったものではない。と言外する一誠の真意を悟り納得する椿。リヴェリアもそれなら同意と目を瞑る。

「量産化をするなら敵が完全にいなくなつてからだ。それまでは魔法

の剣を打たない」

「では、それはお蔵行きというのか。実に惜しい」

「……んー、そうとも限らないぞ」

視線を下に、銀髪青眼の小さな冒険者が一誠のズボンを掴み、剣を物欲しげに見上げていた様子がリヴェリアと椿の目に映り込む。

「欲しいのか？」

「うん、使いたい」

「重いぞ」

柄の方を掴ませて持たせてみれば、顔が必死に全身を震わせながらロングブレードを持つアリサ。顔をひきつらせながら「だ、大丈夫っ」と言うあたり、重いのだ。

「持てないならダメだな」

「持てるよっ」

「そんな必死そうだとダメだ。剣に振り回されて傷つくのはお前だぞ。もう少し体が大きくなってからでも遅くない」

「絶対に使えるようにするから、お願い……っ」

手にしようとする一誠から取られたくないと頑なに欲しがるアリサ。そんな言動に翡翠の眼が金髪金眼の少女に向け、「お前と同じだな」と風に込めて送る視線に居心地悪そうに年長者のエルフから顔をそらされた。

「……アリサ」

「いやっ」

「いや、そこまで言うならあげるぞ」

返せと言われるのを思っていたところ、手の平を返す如く真逆な事を言われ疑わしい目で一誠を見上げる。

「……くれるの？」

「ただし、条件付きだがな」

膝を折ってアリサと視線を合わせながら条件を指摘した。

「それはお前に預ける。ただし自分の力で振るえるまでは使ってはいけない。それが条件だ」

「……」

「これはまだ弱いアリサのために言ってる。強い武器が欲しいならその武器を持つにピッタリになるぐらい努力をしなくちゃダメだ。大まかに言えば『力』のアビリティをC以上だな」

指定された『力』の能力値C以上。それは今の少女では過酷極まると思っても仕方がないことであるにも拘わらず、アリサはそれを受け入れた。

「いいな？」

「うんっ！」

「……アリサ、いいな。直ぐもらえて」

「お前よりアリサは物事を理解している。それでもイツセーは厳しくしているのだ」

「魔法石と『ミスリル』の組み合わせ……いはやは、これは手前もしてみたくなったものだ」

後にヘファイストスの耳に魔法の剣のことが入り、触れて確かめたら困った風に息を吐いた。

「武器を打つ度に完成度が高く増しているわね。椿、あなた近い内に追い越されるわよ。うかうかしていられないんじゃないかしら？」

「構わん。あやつは思いもしなかった組み合わせで可能性を見出したのだ。手前もそれに見習い様々な武具を打つてみるだけよ。最高で至高のな」

冒険譚14

彼は——ただの人間ではなかった。いや、なくなったと言うべきであろう。平凡な家庭に平凡な暮らし、平凡な人生を過ごすどこにもいる凡人の一人。学校ではちよつとだけ人気があつても成績は中の中。容姿も十人中四人が「イケるんじゃないか？」的に整っていた。そんな彼に出来ないことが起きた。学校の登校中に飲酒運転の人間から——学校一のマドンナを守った代償として死亡した。遠退く意識、水の中へ沈んでいく様な感覚と急激な眠気に襲われる最中、自分を見下ろし泣き叫ぶ少女を最後に見て目の前が真っ暗になった。——その直後、彼は不思議な場所に立ち、美しい女性との出会いを経て——新たな人生と凡人だった頃では得なかつた力に美女達を手にした。

「バラ色の人生キターー！」

白亜の摩天楼施設の前で美女達に囲まれながらそう叫び出す変質者を目撃者多数してから日が経たつた。極東では緑葉から赤、黄、橙へと葉色が変わり色鮮やかな紅葉や銀杏が山々を染め上げていた。残暑も無くなり穏やかな気温と心地のいい吹く風は初秋が来たと、四季の季節の変わり目が分からないオラリオに住む一人の冒険者だけが「ああ、もうこんな季節か……」とハツキリと伝わっていた。「……故郷の極東に行きたいですって」

主神へフアイストスにその申し出をした少年は首肯する。あまりにも突然の訪問の乞いに左眼をパチクリと瞬いたが、「どうしてなの？」と理由を一先ず訊ねてみた。

「この季節になると、調理すれば美味な料理が作れる植物が育っているんだ。その食材を採りに行く為」

「それはこのオラリオの市場、交易所にないの？」

「あるわけないじゃん。あつたら極東に行きたいなんて言わないし」

何を当たり前なことを聞くんだ、と呆れ顔で言い返され、無いなら自分で調達するしかないとその意図に食材の調達⇨料理する⇨食べたいと変換して悟り、鍛冶神は——最後に問うた。

「それはあなたの手に掛れば美味しいのかしら？」

「秋にしか育たない高級な食材だ。故に季節限定で逃せば来年までまたなくちゃいけない。そして、その食材の味を活かした料理は……絶品だぜ？」

不敵な物言いをする一誠は不敵な笑みをへファイイストスに向けた。自信たっぷりな眷族の言葉と季節限定の未知の味を楽しめることから鍛冶神の主神へファイイストスは二の返事を下した。

「期待を裏切ったら許さないから」

「期待にお応えしよう。俺の主神様」

と、言うことでギルドに色々と面倒で大変で申請する外出許可の書類等々——前倒しして。

「なあ、リリア？俺の言いたいこと、分かるな？分かるよな？」

「……心からすまないと思っている」

「いざ行かん！極東の高級食材を採りにいー！」

意気揚々とロキがリヴェリアに睥睨する一誠の目の前で、『幽玄の白天城』の扉の前で東方にビシツと指して張り叫んでいた。彼の女神がここにいる理由は二つ。しばらく異世界の料理が食べれなくなる、その理由は極東でしか採れない食材を手に入れに行く為。リヴェリアはロキの執拗な質問攻めに堪らないと言ってしまい、これで納得してくれるかと思いきや一緒に行くと言いだして今に至るのである。

「すまないイツセー。僕等も止めたんだけどね」

「本拠全体にまで聞こえる大声で駄々を捏ねるだけ飽き足らず、『うちも連れて行かんなら舌噛んで死ぬで！』と言いつつ始末じゃ」

「……はあ、いつそ本気で舌噛んで天界に行けばいいと思ったのは俺だけだよな」

護衛というフィンとガレスから話を聞いて溜息を零した。ここぞと言うところで我儘を發揮し、眷族達を困らせる主神で大変だろうにそう思わずにはいられない同情心を込めてまた溜息を吐いた。

「それで、極東に辿り着いたと仮定して君はどのぐらいいるつもりでいるのかな」

「とんぼ返りをするつもりは無いな。大雑把で一週間以内は戻るつも

りだ。だから数日は戻らないと思ってくれ」

「そうか。となるとロキ。最大派閥の主神である貴方が数日間も本拠ホームからいなくなれば団員達が騒ぐ。今日の内に戻って来なければ僕達は困る」

「うちもそこまでイツセーとおるつもりはないでフィン。イツセーの魔法でパパッと戻ってくるんから安心せえな。因みにこっから極東までどのぐらい時間掛るん？」

「全力で行けば多分今日中には辿り着くと思う」

オラリオから船で海を渡り、航海して海を跨いでようやく東方にある島国へ辿りつける。異世界に來た少年は推測して答える。

「というわけで、さっさと行かないと日が暮れるかもしれない。行くぞ」

傍で浮いている魔法の絨毯に乗れと促す。軽々と絨毯へ乗り出すロキに続き一誠やアリサも乗るとアイズ、リヴェリアまでもが乗ってきた。

「……お二人さん？」

「未踏の島国へ主神自ら行くのだ。護衛役を担う眷族は必然的にいないはならない」

「私も、一緒に行く」

と、建前を立てて同行すると言うリヴェリアにアイズも乗せる魔法の絨毯は、フィンとガレスに見送られる『幽玄の白天城』から遠ざかり、東へと飛行を始める。オラリオから南西、数キロ先にある漁業や海外から輸入される品々が交易所に送りだされる前に集まる港街——『メレン』を通り過ぎたところで一誠が立ちあがった。

「さて、絨毯でのんびりも行っても今日中に辿り着けないからな」

「うん？自分、何かするつもりなん？」

「こうするつもりだ」

四人の目の前で、あっさり躊躇も無く青一色の海原へ身を投げ出す。ぎよっと目を張る彼女等が絨毯から顔を突きだして下を覗きこんだ。直後。八つの目が真紅の光に染まった。あまりにも眩い閃光に腕で目を覆い、光を遮ったが、直ぐに消光したその直後。巨大な真

紅の塊が目の前に飛び込んできた。その正体は何なのか巨大過ぎて最初は理解できなかったが、ソレは一度ロキ達から遠ざかり己の全貌を晒し旋回し続けた後に戻り、真下に下がると巨大な頭部に絨毯ごと彼女達を載せる。そして、そのまま何事も無いように大海原の上で、大空の下で飛び続ける。

「ま、まさか……イッセル、なんなん？」

絨毯から動けず、震える声で呟いたロキの発した言葉は下からハツキリと返された。

『ああ、そうだ。この姿こそがある意味本当の姿だ』

「馬鹿な……お前はここまで大きくなかった筈だ」

『阿呆か。この巨体の状態で「龍化」したらオラリオは大騒ぎになるだろうが。体を小さくしていたんだよ』

「……『龍化』？」

『人からドラゴンの姿に変えることだ。その逆もドラゴンから人の姿に変える『人化』というものができる』

下から聞こえる一誠の声音は変わらないでいる。人類の天敵の姿に変わり果てても変わらないところがあつた。その声と心だけ変わって無いことを察してロキは安堵で胸を撫で下ろし、驚いたりヴェリアとアイズ、アリスも受け入れた。

「だが、この巨体で極東に近づけば嫌でも誰でも気づくぞ」

『こつちの方が早いんだよ。というわけで、そこから動くなよ。少し寄り道をする』

「寄り道？」

二対四枚の翼を羽ばたかせた一誠の体は、絨毯なんかよりも凄い勢いと速度で飛行したのであつた。三人に襲う風圧と衝撃は見えない結界によつて阻まれ、一誠がどれだけ激しく動こうと彼女等に影響は皆無だつた。

『はははっ！久々にこの姿で飛ぶのも楽しいもんだなっ！』

急に飛行する方角を——上に変えだし、ぐんぐんと天へ昇る一匹のドラゴンは分厚い雲の中へと飛び込んだ。どこへ行くつもりだと思いながらも一誠に身を任せるしかない彼女達は雲から抜け出し、蒼

天が一行を出迎えた。魔法の絨毯で地上の世界を見たりヴェリアは次にどこまでも広がる空の世界を始めて目の当たりにした。その翡翠の双眸は驚きで大きく見開き、目が奪われ心は感動で震える。そして笑みを浮かべた。空の果てと呼ぶに値するこの場所は神々でさえ来たことが無い。その場所にロキ達は来て——見てしまったのだ。

さらに上空から点々と見える小さくともはつきりと浮いている大地の塊の『ソレ』を。

「イツセー、あそこに何かが……」

『そこにこれから向かうところだ』

リヴェリアの思いに応えるように翼を羽ばたく。さらに上へ向かって飛び続けていく。速く、速く飛んで行くつれにどんどん小さい大地の塊は大きくなり、やがては下から崖のような壁を昇り、ついに飛び越えた。空に浮く巨大な大地の塊から。ロキ達は確りとその目に焼き付けた。岩壁に囲まれた緑豊かな森の上に浮かぶ雲。人工的に造られたのではないと感じさせるそれらは異世界から来た一誠でもこの世界の神と人類のロキとリヴェリア、アイズですら「自然に浮いている島」と認識する。

『ロキ、写真を撮らないのか?』

「お、おおっ、そうやなっ」

この目で見た物の証拠を収めようと首に下げたカメラで何度もシャッターを押し続けるロキやリヴェリア達は徐々に島へ降下して初めて気づく。民家らしき家や柵、門、畑などが視界に映り込み、平和そのものといった感じで暮らしている人と変わらない姿をしている人間達も見つけた。

「……うちら神々でもこんな場所に子供がおったなんて知りもしなかったで」

「何だと言うのだこの島は……」

「どうやって今まで生きていたんだろ……?」

「不思議……」

巨大な化け物が降りて来る様を気付かない村人はいない。青い草原に着地する一誠の下まで集まり出して——歓迎する姿勢で出迎

えた。

「ザンクティンゼル？それがこの島の名前なん？」

「ええ、こんな田舎風の島の名前なんて知らない方が当然かもね？」

麗しい女性と普通に会話も交わせる事ができる。心の中で驚きつつロキはこの島の事を知らうと村人達から根掘り葉掘りと訊きだす。その間、空の住人に色々と贈り物を渡している一誠以外のリヴェリア達は興味の眼差しで眼前の人間とこの島の風景を見回していた。加えてモンスターも受け入れる心の持ち主がいるのだという事実には凄まじい衝撃を受ける。

「長耳の女性は綺麗だなー」

「ああ、どんな種族だ？長耳族？」

「んな変な種族じゃないだろ。長耳なんて村の外にいる魔物じゃあるまいし」

何気なく自分のことは長耳の女性とエルフを知らない村人達の悪意のない言葉に、聞かなかったことにしようとして「長耳」と連呼され続ける中で無視を決め込むその時であった。

「おーい！オイラの仲間がいるって本当かあー？」

どこからか聞こえてくる声は人垣を飛び越えてロキ達の前に現れた。二本の角に一对の羽、小動物を彷彿させる体に尾が生えているその生物は人間では無く見た目だけで判断すればモンスターそのものだ。

「・・・トカゲ？」

「オイラはトカゲじゃねえー！寧ろお前の方がそっちだろー！」

「俺だってトカゲじゃねえよっ!?!どこからどう見てもドラゴンだ！」

同胞(?)からトカゲと言われてとうとう一瞬でブチ切れた一誠は龍化して牙を剥き、口から炎の残滓までも漏れる。普通に対話をしているモンスター同士をロキ達はもはや言葉も出ないでいる。

「なあ、あの空飛んでるモンスター。喋れるんやな？それに自分等を襲わないのってどういうことや？」

「モンスター？ビィちゃんは確かに魔物だけれど大人しいし可愛いか

ら、こういう魔物がいるんだって皆は受け入れているのよ」

「大人しい魔物やて？襲う魔物もおるんやろ？大丈夫なん？」

「うふふ、心配してくれてありがとう。でも、ビィちゃんはリングが大好きで優しい魔物だから私達を襲わないの」

ビィと言う魔物らしき生物は「まだ火を吐けていないのか！そんなこと出来ないお前の方がただのトカゲだ！」「なにをおーっ!」と低レベルな言い争いをして、村の人達からまあまあと宥められつつ苦笑いを向けられている。

「……斬つちや、駄目なのかな」

「どうやら駄目のようだアイズ」

「なんか、可愛いかも」

目を疑う光景であるがな、と内心当惑するリヴェリアも直ぐに受け入れ難い現実だった。人垣の足元から現れる金髪にピンクのワンピースを着た少女と出会うのも直ぐだった。

「で、一つ聞きたいんやけど。こーいう空に浮いとる島は他にあるんか？」

情報収集に精を出す。もしもここ以外にも島があるとすれば天界に生きる神々は認知していなかったことになる。必然的に地上で生きる神や人類、モンスターですら空にも世界があると言うことを知る由も無い。

「勿論あるぜ」

「ほー、そうなんか」

「あんたらも地上から来た人達なんだろう？話は聞いてるぜ」

「イツセーから聞いたん？」

「ああ、去年突然この島にやってきてな。彼は物凄く好奇心で色々と尋ねて来たん」

と、村人の発言はアイズ達にあることを思い出させた。【ロキ・ファミリア】の団員だった時、一誠はアリサと出会う前の半年間にいなくなっていたときにどこで何をしていたのかの話しの中で——空の世界に行っていたと教えてくれたことを。

(嘘じゃ、なかった?)

信じられなかった三人は嘘や作り話だと思い込んでいた。それから一年後、一誠が語った話しは真であるところして実証されては現実として受け入れなければならぬ。どうやら知らないようだった。

「ねえねえ、空の底ってどんな場所なの？教えておくれよ」

「住んでいる場所は？」

「どんな食べ物があるの？」

「もつといろんな話を聞かせてほしいな」

——ロキ達に質問攻めという集中砲火を受ける。それらを一つ一つ答えているとすつかり日が暮れそうになっている時間まで、好意で村人が用意してくれた料理や酒など飲食しながら留まってしまう。ロキは帰らなければならぬので、最後にビィも含めた村人全員での集合写真を撮影することとなった。それが終われば、一誠の転移式魔方阵で地上に送りだされる。見送られる中で帰ったロキの後、また再びこの地に来れるように村人の許可を得て転移式魔方阵を描く。

「それじゃ、俺達はそろそろ目的地向かわないといけないので」

「残念だな。泊っても良かったのに」

「またいずれ来ます。おいビィ、次俺が来る時は火を吹くようにできとけよ」

「へんだ！そんなのあつという間にできてみせるぜ！」

別れの言葉も言い残し、金髪の少女を一瞥して、空へ跳躍した瞬間に全長100Mはある真紅のドラゴンと姿を変え、アイズアリサ、リヴェリアを手の中に入れて空へと飛翔する。ビィは悔しげに巨大化した一誠を見送る。まだまだ成熟していない己の体よりなんて立派な姿なのだろうと思いを込めて空に向かって叫ぶ。

「くっそ〜！オイラだって絶対に大きくなってやるんだからなあつ〜！」

「……また、来てくれないかな」

『あのチビトカゲ。次会ったらどうしてくれようか』

「落ち着け。お前の凄さは私達が良く知っている」

「うんうん。イツセーは凄い」

「イツセーは凄くつよいよ？」

憤慨する巨大なドラゴンの頭部の上からハイエルフと少女のヒューマン達が宥める。ドラゴンがトカゲなどと言われて無視できないのだらう。彼の者にも誇りプライドというものがあつたようだ。珍しくイラついていて三人もよもや慰めることになるとは思わなかつた。それから一誠の上で飛び続け、朱色に染まる空の彼方を見つめながら唐突に耳にする。

『ああ、地上だけじゃなく空にも見た事が無い世界があるなんて、元の世界に帰るのが惜しくなつてしまった』

「そうか。お前もその気持ちを知っているのだな」

嬉しそうに微笑むリヴェリアは、まだ見ぬ世界を目にするため旅に出ていたのだとアイズ達は聞いたことがあつた。だから気持ちがあつて貰えたからか笑みを浮かべたのだらうか。空と大地。今だ誰も制覇した者はいないだらう二つの世界にはどんな出会いと別れ、発見が待っているだらうとアイズは大海原の彼方に沈んでいく夕日を見つめそう思つた。

「——ありがとう」

『ん．．．？』

「お前と出会わなければ、私は空にもまだ見ぬ世界があると死んでも気付けなかつただらう。だから、お前との出会いに深く感謝の念を抱いた」

岩肌のようにゴツゴツとした真紅の体に手で触れ撫でるリヴェリアは、出会いを司る神がいたら感謝せねばなど心の中で呟き、少女達が見ている手前で彼女は思ったことを口にした。

「だからこれからも、お前と一緒に同じ世界や景色を見て回りたい。何時かお前だけの「ファミリア」に改コンバージョン宗をしても共に世界を見て回りたいものだ。こうしてお前の背中に乗せてもらつてな」

一誠は軽い調子でハイエルフの隣にいる少女等にも指摘する。

『ははっ、もしも本当に「ファミリア」を結成したら、リアだけじゃなくアイズもアリサもロキから引き抜こうかな？』

「ほう、できるのならば期待して待つているぞ。この二人もお前と

離れる気は無いだろうしな」

「んっ！」

ハイエルフの提案にドラゴンは朗らかに笑って、二人の少女もその通りだと頷く。

『——さあ、速度を上げるぞ。極東の食材が俺達を待っている。な、アリサ』

「極東、久しぶりだねイツセー」

オラリオから遙か遠くにある極東、島国のとある都から数^{キルロ}離れた山の中。闇色に塗られたように外や森は心が恐怖に浸食してしまいうぐらい暗くなっており、灯り無くては大人でも山の中を歩くことを躊躇するだろう。そんな山から窺えば、山の麓にはいくつもの光が漏れている大小様々な建物に、広大な田畑と月明かりで照らされている川がある光景が一望できる。

その反対側には、山の麓の屋敷の裏山にポツンと社——神社があった。昔、誰かが建てただろう色んな所が古びているが雨を凌ぎ、雨戸は完備されて隙間風は殆ど感じさせず、それなりに広くて大きい彼の神社には現在、男神女神達の他、人格者の神々に拾われた孤児達が質素に暮らしていた。

「子供達は寝ているな」

「食料を援助してくれる子供のお陰で飢える思いもなくなったから」

黒い瞳に角髪^{みずら}という変わった髪方をしている男神と濡羽色の長髪、髪と同色の双眸の女神の視線の先は使い古したボロボロな布団の中で子供達がぐっすりと寝ている。そつと襖を閉じ静かに離れる際、時を刻んだ人の手が入った木製の床から悲鳴染みた軋んだ音を鳴らさないよう気を配って歩く。

「けれど、援助してくれている麓の屋敷の子供にこれ以上迷惑を掛けないようにね」

「迷惑を掛けた時はいくらでも俺の頭で良ければ下げてやる」

「神が簡単に頭を下げていいわけではないのだけれど……」

既に前科がある意味深で呆れた会話を交わし合いながら、自分達も就寝に入ろうと自室へ向かう二柱の神。そこで気付いた。闇に紛れてこの社の壁に影が四つ、音をたたさず静かに侵入しているところを。戦災に敗れて落ち武者になった者か、それとも盗賊の類の人間か。どちらにせよ守るべき者がいる社に無断で侵入したからには放っておけないと勇ましく男神は縁から降りて裸足で近づく。

「お前達、どこの誰だか知らないが入る場所が違うぞ。入ってくるなら正門から堂々と入れ」

ここで武器を取って襲いかかってくるのであれば子供達を置いて天界に送還されてたまるかと、神の力を封じた神の意地というやつを見せつけなければならぬ。四つの影に飛ばした声は、苦笑いする声で返された。

「ごめんな。何分、ここで一泊したいところだけど勝手に入ったら迷惑を掛けてしまうだろうなあと思ったところ、二人がいたから入って来てしまったよ」

近づいてくる四つの足音。雲に隠れていた満月が月光を地上に照らし始めた頃、男神と三つの影の姿が明らかになった。一人は翡翠の長髪に耳の先が尖った女性、もう一人は背中に剣を背負っている金髪金眼と銀髪青眼の幼女、そしてもう一人は真紅の長髪に右眼は眼帯で覆われ左が金眼の少年。

「初めまして、俺達とはある理由でオラリオから来た冒険者だ」

「冒険者？ 冒険者がわざわざ極東まで来てなにが目的だ？」

オラリオの冒険者。世界の中心とも世界で唯一モンスターダンジョンの巣窟、地下迷宮があるあの都市から来た四人組に怪訝な目で問う男神は聞いた。

「うん、秋の季節しか採れない食材集め」

「……はっ？」

何とも冒険者らしくない目的だったが、冒険者依頼クエストでもやってきたのかと考える。風の噂で力のない人間が冒険者に頼みごとをするということを耳にしたことがあったから故に男神は四人はそれで来た

のかも知れにと思った。

「で、お前達はどこの【ファミリア】なのだ？」

「俺は【ヘファイストス・ファミリア】、こっちの三人は【ロキ・ファミリア】」

「ぶっ!？」

さ、最大派閥の冒険者じゃないか!?!と思わず噴いてしまった男神に、縁のほうで目を丸くしている女神も驚いていた。何故、世界中でも有名な【ファミリア】がこんな極東まできて食材を集めに来るんだと度肝を抜かされた男神は本当に彼の【ファミリア】なのかと耳を疑ってしまうが、後に自己紹介されて嘘ではないと分からされる。

「そ、それでお前達は……何の依頼を受けて食材を集めに？」

「いや、個人的な私情^{プライベート}で集めに来たんだよ」

そんな話があるか?!?!と思わず口に出してしまった。最大派閥の団員がこの極東まで来て食材集めなんて財政難な筈がないと信じられなかった。本当に単純に集めに来たのであれば、四人の考えには理解ができない。

「まあ、ともかく今夜一泊させてくれないか?今夜のお礼は明日の朝食の準備をするってことで」

「料理が作れるのか？」

「作るのは俺。だから食材も調理する場所を見させて欲しいんだけどな」

提案を受ける男神は自分一人で決めることはできないと、感じて縁の方にいる女神に求める視線を送った。彼等を一泊させるか否かを女神も男神の視線に籠った思いを察して、静かに頷いた。

「分かった。ただし、子供達と社を傷付けることだけは止めてくれよ」

「ん、感謝する。えーと、誰だっけ？」

「ああ、自己紹介してなかったな。俺はタケミカツチだ。で、彼女はツクヨミ。よろしく」

——幸薄い雰囲気を纏っている男がああ『武神』なのだとなり、この世界の『武神』タケミカツチの存在を認知した少年は、酷く虚しさを覚えたのであった。俺の世界の『武神』の方が格好良かったのに、コ

レはないだろう・・・と。

冒険譚 15

小鳥の囁ささりがタケミカツチ達を目覚めさせる役割を担っていた。早朝、何時ものように朝早く起きたタケミカツチは一室の中で敷かれた上掛けの布団を押し退けて起き上がる。昨夜、ヒューマンとハイエルフの四人組が一泊を求め、了承して昨日の今日。朝食の準備をするという約束はどうなっているか布団を畳んで襖を開けて部屋から出た瞬間に鼻腔が感じ取った。

仄かにタケミカツチの鼻に美味しそうな香りが伝わってくる。瞑目してスンスンと嗅ぎ、花の甘い香りに釣られて引き寄せられる蝶や蜂のように歩く先は厨房。木製の横に開ける扉が開きつばなしであつた為、そこから匂いが出ているので、顔をひよこつと出して中を覗きこんでみる。厨房の中はというと——。グツグツ、コトコト、トントン、ザックザック、と一つに結び上げた真紅の髪の少年が朝早くから調理をしている様子が窺える。沸騰する鍋の傍で材料を包丁で切る姿が見受け……。

「イツセー。皮剥いた」

「んじゃ、口の中に入れられるぐらいの大きさに切ってくれ——待て、その剣でじゃなくて包丁でだっ」

「味見を頼む」

「……んー薄いな？もう少し醤油を匙2、3杯分入れてくれ」

「ご飯炊けた？」

「うん、あとは余熱で十分だから炭を端っこにどかしてくれ」

ハイエルフの女性と二人のヒューマンと共に調理をしていた。歳を関係無く見ていると、まるで親子のようにも見えなくもない。

「オラリオは今『暗黒期』の真っ只中と聞いているが他派閥同士のあの三人は仲が良いな」

「そうね」

「良い匂いがすると思えば、誰あの子達？」

「美味しそう……」

タケミカツチの頭の上から三つの頭が重なる様に出て来て厨房を

独占している三人へ視線が向けられる。ツクヨミ以外の女神達——
「アマテラスという神であることを一誠達は知ることになる。」

「約束通り、朝食を作った。温かいうちに食べてくれ」

「「おおお．．．．．！」」

豪勢、というまでにはいかないが、見慣れた料理があればそうでもない料理もある。タケミカツチ達神々や孤児の子供達は感嘆や驚嘆の声を漏らして机の上に置かれた数々の品に目が釘付けだ。「いただきます」と食べる前の祈りをする一誠達にタケミカツチ達も習慣としてしてきた同じ祈り方をして一味違う朝食を一口。

「う、美味いつ」

「この味付け．．．．．一体何なんだろう。舌の広がる風味が口の中でまだ残ってる」

「玉子焼きってこんなに甘くてふわふわしたものだったっけ．．．．．？」

「むう．．．．．」

神の舌を唸らせる料理の腕は極東でも発揮し、孤児の子供達は無言でがつついて満腹になるまでお代りを求めた。朝食中、タケミカツチとは思えない貧乏臭い雰囲気纏っている神を受け入れ辛く歯切れ悪く訊ねる一誠。

「タケ．．．．．ミカツチ、教えてほしいんだけどいいか？」

「おう、俺が教えられることであれば何でも聞け」

「じゃあ、この辺に大きな町——都とかある？」

都？少し離れたところに都はあるがどうしてだ？と思いが過つたが、秋しか採れない食材を集めに来たという目的を思い出し、首肯する。

「ああ、あるぞ。多分、お前達が欲しがっている食材もあるんじゃないかな？」

「なるほど。じゃあ、案内を頼めるか？前回は違う地域で集めていたけどこの辺りは全然土地勘が無いんだ」

「前日も来たのか？だが、見たところ特に何も持っていないさそうだが」
持つてきてある物を挙げれば得物程度である。どれも売れば数千

万以上はくだらない一級品の杖や剣。それ以外は見た限り何も持ってきていない四人に買い物をするにしてもどうするのだ。と思いをぶつけたところ。

床に穴を広げて、そこへ突っ込んだ両手を引っ張り上げると、大きなバックパックと超が付くほど肥満で太ったように膨らんでいる亜麻袋が出て来て見せつける。

「大丈夫、あるから」

愕然と開いた口が塞がらない神々をお願いする。

「都までの案内を頼めるか？」

「おおおー」

男神に頼んで連れて来てもらった都に辿り着いた。眼前に広がる光景はオラリオとは違う賑やかさが醸し出し、着物を着ているヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人が多く見受けれる。石造りの建物が多いオラリオとは真逆に瓦の屋根に木造の家が軒並に建っている。異世界から来た一誠にとって、この都は江戸時代にタイムスリップしたような感じではしやぐ。極東に初めて訪れたリヴェリアとアイズも、感嘆の息を漏らして建物や人々を見つめている。——都の民衆も然りだ。宙に浮いている魔法の絨毯の上に数千万ヴァリスは優に詰められているだろう袋を見て察した者やそうでない者の反応が二手に分かれるほど分かりやすい。

「ありがとうタケミカツチ」

「なに、礼には及ばん。想像以上の美味しい飯を作ってくれたからな」

「なら、今夜も泊らせてもらっていいか？また美味しい飯を作るからさ」

無料で宿泊できる寝泊まりの場所を抜け目なく確保する。四人を残したタケミカツチが社へ帰って行く姿を一瞥して目の前の光景に顔を向け直す。

「よし、今回も極東にしか無い物を大人買いするぞアリサ！」

「うんっ！」

「妙に高揚してないかお前達」

「楽しそうだね……」

異世界にも極東があることは知っている。そして、この世界の極東に来てどんな品々や人間、文化、建造物があるのか心底興味を抱いていることを気付いている。一誠ほどでもないが彼女達も初めて訪れる極東の都に興味深々だ。

「食材は後回ししてまずは物を買ひ込むぞ。二人とも、着物でも着てみるか？郷に入れば郷に従えってことで俺達も和服を着よう。去年もそうしていたんだ」

「……ありえなくはないが戦闘に臨むことになったら」

「俺が一瞬で片づける。三人に手出しさせないさ」

「ん……」

絨毯を引き寄せ、アイズとアリサの二人の手を掴んで引つ張り着物を販売している店を探し始める。

しばらく経った頃。「ロキ・ファミリア」の主神、ロキの腕輪に投影されるリヴェリアとアイズの着物姿に「リ、リヴェリアとアイズたん、アリサたんの着物姿キタアーツツツツ!!!」と言いつつアルバムに新たなページとして残すのだった。

「うーん、都合良く好みの着物があつたな。着心地はどうだ？」

「……お腹がちよっと、キツイ」

「その上、少々歩き辛いな。これではいざという時には本気で走ることはできない」

紅に金の刺繍が絢爛に施されている着物姿のアリサ。鶯が川の傍で生えている桜の木に座っている黄緑色の生地に着物に黒い金の刺繍が入った帯、長い翡翠の髪は後頭部に纏め上げられ金色の髪留めで結い上げたリヴェリア。清流の川を彷彿させる澄んだ水色と青色の生地の着物に窮屈なまで腹部を締め付けている白い帯を綺麗な金の柳眉を寄せ合っって触れるアイズ。二人とも普段履いている靴では無く草履だ。直接彼女達を着せ替えした女将や女性らしき店員達が店の出入り口から顔を出して「あそこまで着物に似合う綺麗な人初め

て……」「あの子も可愛いいく！」と黄色い声を出すほど、二人は美しく老若男女、種族問わず視線を独り占めしている。対して一誠は黒い肩衣と袴、紅い小袖を組み合わせた袴と言う和服を着こんで腰に刀を佩いている出で立ち。髪をポニーテールにし右眼を覆う眼帯と相まって凜とした雰囲気醸し出している。

「お前もその髪で目立っているな」

「自覚してる。さて、本来の目的を果たそうか。気になった物があれば買うから声を掛けてくれ」

「ん、わかった」

都の中心部、そこには石塚の上に建造された大きな城が一つだけ存在する。直径一Kの広い敷地を誇る城はとある主神が構える本拠ホームでもあった。城下町で買い物を楽しむオラリオから来た四人は露も知らず、本拠ホームに戻った主神は袴を着こんだ眷族達に出迎えられている。本殿の中へ入り、数段も重なれた畳の上に腰を下ろしたところで一人の白髪に黒眼、黒い着物を着こんだ女神の下まで近づくと老婆が恭しく頭を垂らす。

「お帰りなさいませ大神様アマテラス」

「ええ、何か報告はありますか？」

栗色の長い髪をサイドテールに結び、深い蒼色の双眸の女神アマテラスは眷族の一人に訊ねた。

「城下町の方は変わらず平和でございます。しかし、またあの神々が戦を」

「そう……」

この極東に君臨してから彼の女神以外にも多くの神々が極東に降臨し、土地を支配し人類を集め、町や都を作り発展、繁栄を齎した。だがしかし、何かしらの原因で仲が悪かったり元々悪かった神々が衝突をすると戦が始まる。それに伴って生じる災いが――。

(戦災――。まだ子供達に傷を残しちやっただのね)

眷族同士を戦わせ、対敵する「ファミリア」を滅ぼすまで戦を止めない神々を筆頭とする神は二柱いる。頭の中でその二柱の顔を思い

浮かべ、困ったように肘掛けで突いた肘に寄り掛るよう頬杖するアマテラスに報告は続けられる。着物の懐から白い紙を二つ取り出し見せつける。

「アマテラス様、また手紙を送られました」

「見るまでも無い。『自分達の陣営に加わり、敵対する【ファミリア】の打倒に協力せよ』。でしょ?」

もううんざりと嫌そうに溜息を吐いて捨てさせる命令を下す。辟易と顔に浮かぶほど彼女に送りつけられる手紙の内容は既に三桁は届きそうになっている。何時だったからか忘れてしまったが、最初は冗談ではないかと己が築き上げた都の発展と繁栄に真摯で励んでいた故に、極東に存在する三大都の一つと称される様になるまで成長したのだ。今さら戦争なんてして大事な都の住民に命を落とさせるなんてことは、向こうから仕掛けてこない限り絶対にしないアマテラスの思いは揺らいだ。

「……………違います」

「え?」

先に拝見をしたのか、老婆の表情は暗く曇っていた。予想した内容は異なっているか否定されて呆ける大神は続きを促す視線を送った。なにが違うのだと。糸目に皺くちやな顔に反して瑞々しい唇口が重々しく開き、手紙の真実の内容を零した。

『協力の要請を拒み続ける御神は不穏分子とみなし、【イザナギ・ファミリア】は【アマテラス・ファミリア】に対して遺憾ながら戦争を臨まんとする』……………こちらの手紙も酷似した内容でございました「なっ……………!?!」

度肝を抜かれた。焦燥に駆られて立ち上がり、畳の階段を一気に飛び降りて頭を垂らし、二通の手紙を差しだす老婆の手から奪うように手に取り、見る気もなかった二通の紙をそれぞれ見比べて信じられないものを見る目が凍結する。

「……………何故こっちにまで飛び火が……………」

手紙を握る手に力が籠る。愕然と立ち尽くす主神に頭を垂らしたまま声を掛ける。

「誠に申し訳にくくも進言します。どちらにも拒み続けなければいざれこうなることは、予想されておられた筈です」

「………」

「ご決断をアマテラス様。なんにもせずにいればたちまちこの都は二柱の神の【ファミリア】によって蹂躪され滅ぼされます」

——アマテラスは気づかない。人の手が入った木造の床に目を落とす老婆の唇口が三日月のように歪んでいる事に。一誠達も気付いていない。極東に訪れた瞬間、陰謀の渦に巻き込まれている事に。

「………リヴェリア」

「何も言うな」

女性は身支度を整えると同じぐらい買い物に時間が掛るといふ。外出して恥ずかしくない姿で楽しい一時を過ごしたい思いから納得のいくまでおめかしをするのだが、そんなものに無縁なドラゴンこと一誠は都でしか売られていない多種多様で多彩な品々を一軒一軒見て回り、蓄えられている在庫ごと全部買い占めて異様な興奮を冷めなのまま楽しんだ。

「おおっ、水飴じゃん！これは金平糖！はははっ！この世界にもあるものはあるんだなっ!？」

肉食の野獣のように視界に入るは、オラリオには無い珍しい品々に全力で反応して、たまに金で物を言わせて買い占め続けても持つてきた金の半分以下も使い切れないまま夜を迎えた。凄く嬉しそうだな、とずっと見守り続けていたハイエルフと幼女の傍には今日の成果の夜食用の食材が置かれてる。現在、空飛ぶ魔法の絨毯でタケミカヅチ達が住んでいる社へ向かっており、山の麓にある屋敷の裏山とは目と鼻の先まで近づいている。

「タケミカヅチ、ツクヨミ達。ただいまー」

「おお、戻ってきたか。目的の食材は手に入ったか？」

「いや、全然。見つからなかったよ。市場には出回って無いって言われたから地道に山狩りをする他なさそうだ。あと、これお土産」

バックパックから取り出したのは、赤と青、黄、白と小さい飴玉が

詰まった瓶を武人に投げ渡した。受け取ったそれは何なのか直ぐに悟り目を丸くする。

「お、おいこれ……」

「子供達に食わせてやれ。それと服も買つといたから後で着させるよーに」

ドサリと当惑する男神へ一方的に都で買い占めた山のような大量の服を預けさせる。あまりにも多さに服の山の中に埋もれながら、何故昨日の今日で出会ったばかりの自分達にここまで……と厨房へ向かう一誠に呼び止めて訳を聞きたいと服の山から顔を出して口開こうとしたがハイエルフに遮られた。

「気にするなと言うのは無理があるだろう。目的の食材が無い代わりに都で売られている品々を買い占めた後、まだ残っている資金を貴方達の為に浸かってこそ有意義があると買つたのだ」

「だ、だがっ。弱小もなにも「ファミリア」すら呼べないような俺達にここまでして何の得があると言うんだ？へファイストスは分かっているのか？」

「神へファイストスは分かかって無い。あいつの独断であり、あいつは損得など考えてもいない。ただの自己満足、偽善だろう。だが、あいつは——『そうしなかった』。その一言で私達の疑問を一蹴された。善意や偽善も関係ない。自分の心に従っただけに過ぎないだろう」

純粹。一誠は純粹に行動しているとリヴェリアから聞いている内に頭の中で過った。極度のお人好しにも聞こえるがタケミカツチは、善意の偽善も関係なく心に従ったという少年に間抜けな面を晒す。

「そら育ち盛りのお前達。今日は特別に作ったカレーを堪能しやがれ！」

泥の様な茶色いスープに人参、ジャガイモ、玉葱、肉と炊きあがった米が盛られた皿から食欲を促す鼻を刺激する香りがアイズと同じぐらいの年頃の少年少女達の前に漂う。社の中にある長大な木製の机の前に正座する面々、タケミカツチ達は見慣れない料理を前に不思議そうな面持で見下ろす。

「カレー……?」

「ロキやヘファイストスが絶賛する一品だ。俺しか作れないからある意味幻の様な料理だから食べてくれ。いただきます」

リヴェリアとアイズに挟まれて食べ始める。二人も匙を手にして甘辛いカレーを口に運ぶ。武人達も顔を見合わせ恐る恐るとカレーを匙で掬いあげる。

「……むうっ!？」

「まあ……っ」

生まれて初めて食べるそれに、大いに好奇心を刺激された。肉や野菜や多種多様の香辛料に大量の水で作り上げたスープから未知の味に神々と孤児達は目を丸くする。食べやすく辛さは控えめに調節されたスープの風味は口の中に広がり鼻からも伝わり、一度味を占めたら手が止まらなくなる。育ち盛りな孤児達は一生懸命頬張り、空になった皿を突きだしながら「お代り!」と所望する。

「早くもイツセーの料理の味に魅了されたか」

「私もお代り」

悟っていた風に述べるリヴェリアの長い耳に聞き慣れた負けじと少年に皿を突き出す幼女の声が届く。強さや人柄、原動、容姿で魅了するのではなく料理で胃袋と共に心を掴む彼のドラゴンを称賛に値する。そして彼女自身もお代りを要求するのだった。

「はあー、あんなに美味しい料理を食ったのは初めてだ。ありがとうヘファイストスの子供。オラリオじやあんな料理は作られているのか?」

「店を構えてないぞ。だから俺しか作れない幻の料理の様なものだから安易に食べれもしない」

「そっか。ロキ達も羨ましがりそうだな。知られたら後で怖そうだ」

社の中に浴場は無い。天然の露天風呂で入るタケミカツチ達は山の中へと行ってしまった女性人達が戻ってくるまで思い思いに寛いでいた。

「そう言えば、目的の食材って何なのか聞いてなかったな。どんなの

だ？」

「松茸と筍」

「ぶっ!？」

何気なく聞いたタケミカヅチが唾を噴いた。その二つのうち一つ、松茸はとある【ファミアリア】しか食べられない高級な食材で育つ山を丸ごと占領している故、城下町の庶民の口には無縁な食材として食べられることは絶対にならない。

「お、お前……なんてものを求めているのだ」

「だって秋の季節と言えはそういう旬の食材を食べる時期だろ？年に一度ぐらいは食べたいじゃんか」

「食べられないぞ。筍はともかく松茸は極東に君臨している神、その【ファミアリア】が独占してるからな。もしも無断で松茸を採ったら死罪か島流しにされるそうぞ」

オラリオからやって来た彼は知らないと三大都の一つの付近に住まう人間達を縛る規則レールを説明した武人の隣で縁に肩を並べて座る一誠は夜空に浮かぶ三日月を見据えながら零す。

「……たかが松茸されど松茸、か。だから買いに来たのに市場に出回って無いのはそう言うことか。しかし、おっかない法律を考えたのはどこの【ファミアリア】だよ？」

「——ごめんなさいね。おっかない法律を決めて」

突如聞こえた第三者の返答に反応する。横へ目を向けると共に朝食を食べた女神——アマテラスが近づいて来ていた。タケミカヅチは不思議そうに立ち上がって縁から声を掛ける。

「アマテラスどうした？忘れ物をしたわけでもないのにその日の内に二度も来るなんて珍しいじゃないか」

「そんなに珍しいのか？」

「ああ、極東の大神でもあるからおいそれと城から離れることは難しいんだ」

話を聞くとアマテラスは領地に住まう神々の様子を一定の周期で見にやってくるがあるらしい。そうなのかと納得した一誠を他所に女神は厳しい面持ちで口を開く。

「都が危機に陥ってしまった。だから、その危険を知らせに来たの」「なにが遭った?」

冗談で言う女神ではないと真摯な面持ちで訊ねる。「実は・・・」と語り始める彼女に静観する少年も耳を傾ける。協力を拒み続けた結果、二柱の神から同時に攻め込まれるという話を聞きタケミカツチは瞠目する。

「ここもいずれ戦場となるからタケミカツチ達も安全な場所へ避難して欲しい」

「安全な場所と言っても、俺達はどこへ・・・なんとかならないのか」

「急なことで城内は慌ただしく、迎撃の準備をしているわ。でも、二つの派閥が同時に攻め込まれたら流石に私の【ファミアリア】だけでは対応できない。この機に乗じて他の小・中堅派閥も攻め込んでくる可能性もある」

敗北は必須。絶望的な状況に立たされていると言っても過言ではないアマテラスはそう言外する。事の重大さを聞かされ何とも言えないタケミカツチ。悲しげに降臨した日からずっと築き上げた都を蹂躪される光景を目に浮かべるアマテラスも悔しげに——蚊帳の外に立たされている一誠から提案を述べられた。

「なあ、相手が一柱の【ファミアリア】だけなら何とかなるか?」

「え?ええ、それならなんとか・・・」

唐突に聞かれてしまい、一瞬呆けるアマテラスは戦力差だけならば戦争に明け暮れている二柱の神の【ファミアリア】より勝っていると暗に答える。だが、問題は質だ。

「オラリオから来た貴方は知っているかどうか分からないけれど、私の兵士にはオラリオという第二級冒険者はいるのだけど。都に攻め込んでくる二柱の神にはそれぞれ第二級以上の冒険者がこちらより抱えている」

「一番の多いのは?」

「【イザナミ・ファミアリア】の四雷竜と四炎蛇、八人の第二級冒険者の家臣がおります。対して【イザナギ・ファミアリア】には第一級冒険者

が一人に第二級冒険者が四人の家臣」

国産みと神産みの神々の名前が出た途端に「マジかよ……」と心中零す。

「……それが何か？現状、今さらどちら側についても状況は変わらない。多勢に無勢のこの戦況を知ったところであなたに何かできると言うの？」

「できる。敵将を倒して主神を捕まえれば相手も大人しくなるから」「なにを言ってるのですか？まさか、協力するなど言うつもり？」

「え、駄目？それでも実力は自信があるんだけどな」

朗らかに協力をすると申し出されアマテラスは怪訝な目で少年を見つめる。鍛冶最大派閥の鍛冶師（ヘラフェイス・フアマリア）が戦場に出て何になると思いがら問うた。

「貴方のL.V.は？」

「L.V. 1」

「……タケミカツチ。そういうことだから都からもつと離れた安全な場所へ避難して。私の城に匿ってあげたいところだけど」

話にならないとタケミカツチへ意識を向け、促すアマテラスは言いたいことだけ言って「貴方も早くオラリオに戻りなさい」と言い残し二人から遠ざかって暗闇に包まれた森の中へと消えていく。

「露骨にすげー呆れられたし」

「いや、仕方がないだろう。お前のL.V.ではせいぜい足軽程度にしかないぞ？」

「……そりゃあ、さ。L.V.だけ判断されても仕方がないけど、見た目で判断するなど言いたくなるぞ俺は」

しかし、一誠のことを知らない神や人類からすれば見た目で判断してしまう。行動で証明するしかない、身近で勃発する戦争を見過ごせず自身の力を行動で示す意思を固める。

「しかし、安全な場所にとってもな。港に行つて海へ避難でもしない限り……」

隣で難しい顔を浮かべ腕を組んでどこに避難すればいいか悩む武神。そんな苦悩する武神の肩をポンポンと叩く。

「一時的だったら俺の家に来るか？」

「家？オラリオにか？」

「ん、ヘフアイストスもいるから事情を説明しとく」

虚空へ手を翳し、歪みだす空間は別の空間の場所と繋がった。そこは丁度――。

「おいこら、俺のいない間に随分と……楽しんでるようだな」
人の家で酒盛りをして盛り上がっている七柱の男神女神に睥睨する。テーブルの下にはいくつもの酒瓶が転がっており、テーブルの上には自前で持ってきたのか様々な料理がある。神々の宴に同伴している眷族達は空間の穴の向こう側にいる一誠に気づくとヘフアイストス達も気付く。

「おつ、イツセー君じゃないか！それにタケミカツチ！久しぶりだな、相変わらず幸薄そうな感じじゃないか！」

「久しぶりに会った神に対して開口一番にそれかヘルメス！というか、ここはどこでどうしてお前達が酒を飲んでるんだ」

穴から潜って中に入る一誠と一緒にタケミカツチ。穴は開いたままで幻では無く現実的なものだとしめされ他派閥同士の主神が肩を並んで卓を囲み酒を交わし合っている様子は何かのパーティをしているのではないかと勘繰る。

「オレ達はイツセー君絡みで仲良くなっているだけさ。お前も何か食べただろ？今まで食べた事のない彼の料理をさ」

「……カレーのことか？確かに美味かったが」

と、そう言つてヘルメス達がこの場にいるのは、ここで少年の手料理を食べて味を占めた男神女神達がロキに絡まれている少年の帰りを待っているのかもしれないと何となく察した。

「イツセー！例の高級食材は手に入ったん!？」

「いや、アマテラスが独占しているっていうから交渉でもしない限り手に入らない。手に入れて戻るつもりだから安心しろ。つーか、酒臭いー!」

「久しぶりに聞く名前だわ。元気にしてた？」

「変わらずと言った方が良いか？それよりも極東で大変なことが起き

てさ」

他派閥の主神も交えて極東の現況を説明する。それ故タケミカツチ達をここオラリオに一時的に避難させることも加えて告げた。

「イザナミとイザナギが？アマテラスに戦いを臨むなんて……」
「天界にいた頃から仲が悪かったのか？正直、会った事は無いけれどそう思えないんだがな」

「……そうね。一言で言えば彼女、イザナミは私のように傷がある女神よ」

ヘファイストスに訊ね、イザナミは鍛冶神のように『醜顔』であることを言外する。完全完璧である筈の神が有する欠陥だと。

「それが原因で二人は仲が悪くなったって聞いたわ。イザナミはイザナギを憎むようになってイザナギはイザナミを恐れて逃げてる。顔を見合わせれば体力が続くまで追いかけて逃げるの鬼ごっこをしてたわ。ヘルメスを筆頭に今日は逃げ切れるか捕まえられるか娯楽として楽しんでもいたわね？」

「ヘルメス、サイテー。料理作ってやんねー」

「いやいや!?オレは何度か仲裁したってば!だから料理を作らないって言わないでくれイツセー君!」

慌てふためくヘルメスが立ち上がって、床に転がっていた酒瓶は椅子を押し退けた拍子にぶつかってしまった。クルクルと一誠の視界に入りながら回り、少しして回転力が失うと止まる酒瓶は……左の目が凍結するほど一誠が大切に料理用として保管していた上質のワインであった事に気づく。無言でそのワインまで近づき、手に取った。異様に軽い。感覚で確かめるまでもなく中身はすつからかんだった。

「あ、イツセー。その葡萄酒、結構美味しかったでー?他の酒もゴチになつたから」

「……他の?」

上機嫌に話しかけるロキの言葉にまさか、と嫌な予感を覚え……キッチンの方へ足を運んでその目で見てしまった。酒瓶を収める編み状の木製の棚にある筈の葡萄酒が殆ど無くなっていることに。あ

のテーブルの下に転がっている酒瓶は……飲み干された自分の物だと悟るのに難しくなかった。神々の胃の中に異世界の葡萄酒は最後の一本を残してなくなってしまった。その事実を実感した一誠は幽鬼のようにユラリとキッチンから出て来てヘフアイストス達の前に戻った。

「そうだ。イツセー君、折角戻ってきたのだからなんか作って欲しいな」

バキャンツ！

「——なんて……」

酒瓶を片手の握力で割って、甲高い音がヘルメスの話を遮った。顔を俯く一誠の様子がようやくやくおかしいと気付いた時は、既に遅かった。

「お前らが飲み干した葡萄酒、『調理用』にとっておいた上質の葡萄酒だったんだけどなあ……100年掛けて熟成したそれすら飲んでしまったわけか」

因みに——硝子片だけが床に散らばったその酒瓶こそが100年ものの葡萄酒だったのだ。

「イ、イツセー……?」

嫌な汗腺がダラダラと背中まで伝って流れる。酒で高揚した気分は急激に氷点下まで下がり、空気も重苦しくなってきた。敏感に威圧を発する一誠に警戒して主神を守る眷族ですら、頬に汗を浮かべている。

「ただの酒ならともかく、俺が愛用している調理用の酒を何も考えなく飲まれてしまうと——相手が誰であろうと許す気すらならないなあ」

ドス黒く禍々しい魔力が一誠から迸る他、彼の少年を中心に床や壁、天井、グラスや皿までに亀裂が入るか割れるかなど現象が起きて、ロキ達を驚かせる。部屋全体すら地震が発生したように震え、激しく揺れ始まる。

((——異世界のドラゴンの逆鱗に触れたっ!))

ロキとフィン、ガレスはそう感じた瞬間。無様な姿を晒そうと全力で説得や制止の声を張り叫ぶ。

「す、すまんイツセー！許してほしいとは言わへんから怒らへんで!」
「ここで暴れたら君はオラリオにいられなくなるよ。飲んでしまった葡萄酒^{ワイン}は弁償するか代わりを用意する。だから怒りを収めて欲しい」
「それでも気が済まないのであれば僕等がお主の言うことを何でも聞く」

あの「ロキ・ファミリア」が本気で説得している。目を疑う光景だが少年の怒りは尋常ではないことを悟って息を呑んで様子を見守る。
「……代わりの物を用意する?」

「せ、せやつ！百年ものの酒ならオラリオにもある！今直ぐ必要だつて言うなら——」

「——千年も熟成したのも飲んだよな?」

ひくつと頬を引き攣るロキの脇に、テーブルの下に転がっている1000と数字が書かれたロゴマークがある酒瓶を手にする。軽く振ると一滴しか残っていないことを悟り物凄く残念そうに嘆息した。

「あーあー……これで作ったビーフシチュー、美味しいのに飲んじやったわけか」

「え、えつと……」

「で、どうなんだ?お前らが飲んだ葡萄酒^{ワイン}。耳揃えて代わりを用意できるのなら許す。当然、千年ものの酒もだ。言つとくが、俺の目は誤魔化されないからな」

瞳の瞳孔が更に細まり、冗談ではないとロキ達を睨みつける。目だけではない。奔流し続ける禍々しい黒いオーラが凶暴で凶悪なドラゴンの様な顔に成り、血のように赤い瞳孔が開く。

『つ——!?!』

駆け出しの冒険者、Lv.1の人間が放つモノではない。可視化するほど少年の背後に浮かぶモンスターの顔のようなものを醸し出す目の前の人間は一体……。正体を知らない神と冒険者達は一誠に対して警戒と畏怖、好奇心を改めて覚えたところで、穴の向こうか

ら二人の幼女と絶世の美女ハイエルフが現れたと思えば徐に一誠の肩を掴んだ。

「次はお前が入る番だぞ。さっさと入れ」
「……………」

邪魔をするなど左眼で睨みつけられても、一瞬でも怯まず逆に真っ直ぐ見詰める。翡翠の双眸の奥に揺らがない強い意志の光を宿すハイエルフはもう一度催促する。

「お前が来ない限り事は進まない。ロキ達がお前に対して許されないことをしたかもしれないが、今はこちらの方が優先しなければいけない。その為に極東まで来たのだろう」

「……………」

「イツセー」

念を押すリヴェリアの目を睨み続け十数秒。禍々しいオーラが霧散した途端に重苦しい空気も和らいだ。重圧から解放されたロキ達はどつと安堵で胸を撫で下ろす気分に戻る他所でタケミカツチを肩で担ぎ上げ、極東へ繋がる空間の穴へと向かう途中。

「誰がお前らの為何かに極東の料理を作るかよ」

それだけ言い残して、リヴェリアとアイズと穴の向こうへ移動した直後。閉じた。緊張の糸が解れ言葉も出せれなかつた面々は各々口にする。

「アハハ……………イツセー君って、怖いね……………ロキ、ヘファイストス。あの子って何者?」

「知らないわよ。それよりもあの子の機嫌をどうにかして治さなきゃいけないでしょ」

「林檎のパイを作っても駄目かしら……………?」

「そんな単純な子供だったら絶対に苦労はせんで絶対に……………っ」

「ガネーシヤ、ちよつとチビつた……………」

「……………うふふっ、怒るところも素敵だったわ」

「フレイヤ、貴方も相当ね……………」

冒険譚16

極東で二日目の朝を迎える。今日も都で買い物をしようと足を運んだ四人の目には、恐怖と焦燥で家財や家具を荷台に乗せたり、背負ったり、抱えたりして一人から複数、家族と城下町を後にしようとしている光景が飛び込んできた。

「うーん……本当なんだな。他派閥に攻め込まれるって話」

「そうなの？」

「だから皆、慌てて？」

「ああ、戦いに巻き込まれたくないから安全な場所まで逃げようとしているんだ。これじゃ買い物なんてできるわけもない」

オラリオにも他国から何度も攻め込まれている経験はあるが、毎度その度に最大派閥を筆頭に様々な派閥がギルドからの強制依頼^{ミッション}を撃退してみせているので住民達は避難する必要もない。世界で唯一存在するダンジョンで器を昇華し、超人的な身体能力や魔法を得る冒険者と違い、他の国ではオラリオの冒険者のように強く成長することとは難しい。ので第三者側として見ればオラリオの冒険者が戦争で負ける事はほぼないのだ。住民達は何となくそれを理解し変わらないう安全で平和な日常を過ごせる故に、この都の民達のように非難をする必要は皆無なのである。現在身を置いている都市から離れ、この緊張感を肌と目で感じ取ったりリヴェリア達は真面目に現状を受け入れる。

「どうする。お前の欲する食材は手に入らなくなるが」

「ん、そりゃあ決まってるだろ？」

当然のように一誠は三人に向かって言いきった。

「横やり入れて戦争を何が何でも止める。食材の確保のためにな」

そう言い切りながら城の方へ目を向ける。リヴェリア達も釣られて一誠と同じ物を視界に入れ動き始めた。

「も、申し上げます！イザナギ、イザナミの軍勢が予想より速い進軍で各砦が突破されていきます！」

三柱の神の「ファミリア」が大規模な戦争を勃発する話は言伝や風の噂で瞬く間に極東中に広がった。攻め込まれる前に都を中心に近辺の村々に住むヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人達は持てれるだけの私財や家具を持って、それぞれが思った安全な場所へと求め大移動をする最中、沈黙を保つ城の中では切羽詰まった張り叫ぶ声や焦燥の色を浮かべる文官、役人達で慌ただしかった。

「な、なんだと、もう西門が突破され砦の陥落の報告がっ!？」

「東方の村々が敵「ファミリア」に蹂躪!」

「北方からも襲撃!援軍の要請!」

「傘下の「ファミリア」が反旗を翻しこの都に攻め入っているとの情報がっ!」

「同じく傘下の「ファミリア」が壊走!他の「ファミリア」も敵前逃亡!」

「な、なんじゃとっ!？」

眼下に繰り広げられる絶望的なやり取りを見守るアマテラス。戦力差に圧倒されるどころか、敗北が濃い戦場で最悪な事態がトントンの拍子で起き続けている。まだ都の地域外であるが自領の人間達が、己の神血^{イコル}で刻んだ『恩恵』がアマテラスの中でフツと次々に感じ無くなり続けていく。戦場で赴いて大切な者、大切な場所の為に命懸けて守るその思いを踏み躪るかのように消えていく。

(早すぎる……)

宣戦布告を受けて昨日の今日。前もって準備をしていたとしか思えない程迅速な進撃の侵略。否、相手が待ってくれと言っても待つ「ファミリア」と主神ではないことは承知の上だった。しかし、攻めてくることを想定して極東に降臨してから直ぐに建造した防壁や砦は容易く突破されている。天然の地形を利用した場所もあるにも拘らずだ。半刻も経たず都に攻め入る敵勢に何故か疑問を浮かんでしまう。

「わ、我が主神よ……このままでは一日も経たずこの都まで攻め来られます!何か手を打たなければ——!」

「分かっています。ですがその前に、この場にはいない彼女の行方は?」

「……未だに発見したとの報告はございません」

古参の側近の助力すら求められない。都を繁栄するためには戦もしなければいけなかった時、あの老婆の側近の戦略で何時も勝利を導いてくれた。アマテラスの要と行っても過言ではない存在がこの大変な状況で不在というのはおかし過ぎる。何か遭ったのではないのだろうかと思っただけでも、参謀の文官に乞われても今の女神に出来ることは何一つない。このまま何も出来ず、自分は天界に送還されるのだろうか『神の力』アルカナムを封じて無力である己を今日まで悔しいとは思ったことは無い。

「……………」

——んじや、敵将を倒して捕まえれば相手も大人しくなるかね。

——なにを言ってるの？まさか、協力するなど言うつもり？

——え、駄目？それでも実力は自信があるんだけどな。

「(今更ね…………)」

今頃になって昨夜の会話を思い出す。しかしLv. 1と足軽の兵達並みの実力しか持たない彼の少年に協力を求めても戦況が変わるとは思えない。「ロキ・ファミリア」の最強魔導師もいたが、他派閥同士は不干渉が基本。助力を乞うても主神に無断で応じることもできない筈だ。結局…………自分達にこの絶望的な状況を打破する術は元からなかったのだ。

「ア、アマテラス様！す、直ぐにお逃げください——」

汗だくで神座の間の空間に飛び込んできたこの城の警護をしていた者の言葉は、背後から苦無に首を切り裂かれ最後まで言えず息絶えた。

「っ!？」

文官や役人達の顔は蒼白となって、警護の者の首を引き裂いた黒尽くめの忍び装束を着込んだ一人の男を視界に入れる。

「も、もうここまで・・・!!?」

「馬鹿な!?他の防壁や砦を無視して攻め入ったと言うのか!」

一固まりになって感情が無い殺戮の人形と化した忍びの登場に他の忍び達も続々と神座の間に侵入して逃げ場を塞ぐ。彼らの目的は唯一つ。アマテラスの命。目に付く汚い囁りを放つ者達は無視して任務を全うする。ただそれだけで邪魔する警護の者達の命を屠りつつ侵入を果たしたのだ。多くの兵を戦場に向かわせ守りが手薄状態となったこの状況を逃さずにだ。

「ま、待ってくれっ!こ、殺さないでくれっ!」

「儂を誰だと思っておるツ!?長年アマテラス様にお仕えしてる由緒名高い家系の——!」

耳障りな雑音を抹消し、神座に立っている女神へ——毒が仕込まれた苦無を四方から投擲する。如何に神といえど、体を蝕み命を奪うほどの毒を掠りでもすれば命の保証は無い。この場に主神を守る腕の立つ眷族がいないことは把握している。忍び達は任務達成の喜びを浸ることも無く最後まで主神の天界送還の光景を目の当たりにするまで気を引きしめる。

「.....」

——ここでお終いか。

飛んでくる死の苦無を紙一重でかわしたところで第二の襲撃を間も置かずしてくるだろう。単純に天界に送還される時間が遅くなつたに過ぎない。自分がいなくなればこの都は、一体どうなってしまうのだろうか。それだけが心残りだと瞼を下ろし、女神の体に襲いかかる痛みを待った。

「——もう大丈夫だ、俺が来た」

しかし、待っていたのとは違う全身を包む太陽のような温かさで安心させる自信に満ちた声。四方から放たれた苦無は全て弾き返された。忍び達は信じられないものを見る目でアマテラスでは無く、彼の女神を守る美しい異形の人間を釘付けになる。金の長髪の頭上に金色の輪っかが浮かんでおり、右眼を覆う漆黒の眼帯とは対照的に左は蒼色の瞳。背中は女神を守る金色の十二枚の翼を生している。

なんだアレは、人か？モンスターなのか？

この場にいる全員が翼を生やす者に対して判断ができず当惑した。その翼に守られている当の女神も愕然と少年の顔を見上げる。見間違う筈がない。この子供は一昨日と昨夜、タケミカヅチ達の社に居座っている「ヘファイストス・ファミリア」の眷族だ。何故ここについて、何故無力な自分を頼んでも無いのに守ってくれたのか、何故——
—疑問が尽きない彼女に少年はただこう言う。

「人間の心を照らす太陽と言う光の象徴が極東からいなくなってしまう、この国は戦乱の渦中に飲み込まれて今よりもつと戦災で孤児が増え続ける。それだけは絶対に遭ってはならないことだ」

投擲では確実に殺せないと思ひ達は判断し、苦無の他に刀を構えて自ら襲いかかりに飛び掛かってきた。それを目の当たりにして少年は六対十二枚の翼をばさつと動かす。

「だから、お前を守る為に勝手ながら協力をさせてもらう」

刹那。全ての忍び達の肉眼が捉えきれない、金色の翼が一瞬ブレたかと思えば全身に襲う衝撃で布で隠された顔の表情は苦悶に満ちた。吹っ飛ぶことも無くその場で倒れ込み、駄目押しとばかり翼から発する雷に打たれ、舌を噛み切るといふ自害をする暇もなく気を失った。

ほぼ秒殺で女神の命を狩る影の使徒達を無力化した事実を目の当たりにする女神達。

「(Lv. 1の足軽並みの子供では無かったの……?)」

そう思わずにはいられないし何故か目が離せないアマテラスは、少年が手招く先に姿を見せる「ロキ・ファミリア」の最強魔導士と幼い剣士の少女達を視認する。

「それじゃ、行ってくる」

「ああ、直ぐに終わらせて来い」

女神の身の安全は渡された金色の杖から発する結界に守られた。下手な暗殺者が再び襲いかかっても彼女の命を場うことはできないだろう。守りを万全にしたあと、同行を強く望む幼女達を抱え金色の

軌跡を残して戦場へと飛びだった。

「イツセー、すごい数」

「あれ、全部人？」

「そうだ、と言いたいところだけでもうとつくに戦場と化しているな。途中で鉢合わせして衝突した感がある」

阿鼻叫喚、両陣営から放たれる魔法や弓矢、怒声に混じる悲鳴。集団規模の戦いをアイズとアリサは初めて見る光景で眼下の光景を目に焼き付ける風に凝視している。戦況は見る限り拮抗している様子だった。戦力はほぼ互角と感じて足軽の兵達が冒険者達と違う戦いざまを見させてくれる。だから強さを望む少女達にとって目が離せない戦場であった。

「さて、とつとと終わらせよう」

「戦うの？」

「残っていたらそうせざるを得ないかな」
「残る？」

二人からの疑問に「まあ、見てろ」と述べて——威圧を解き放つた。直ぐ近くにいるアイズ達は本能で感じ取って目を見開き絶句する。だが、相手を驚かすだけでおさまらなかった。戦場の殆どの兵士達が、白目を剥き口から泡を吹いたりして意識を失い、気絶する者が一斉に現れ地面に倒れる。あれだけ壮絶な戦いと騒音を繰り広げる戦場はあつという間に静寂となり嘘のように静まり返った。ただの威圧で人間を無力化した本人へ信じられないと言う目で見上げ「何をしたの？」と訊かずにはいられなかった。

「ただの威圧だ」

「いあつ？」

「ん、後で教える。今は目的に集中」

「うん、わかった」

その後の行動は素早かった。直ぐに終わらせる為に総大将と言わべき顔の半分を隠す仮面を被っている黒髪の女神と、上唇と顎に髭を蓄えている黒い長髪の男神の他、襲いかかってくる第一級から第二級冒険者並みの実力を誇る眷族を全員捕縛し、二柱の【ファミリア】の

軍勢を無力化して戻ってきた少年にアマテラスは完全に度肝を抜かれたのだった。

「イイ〜ザア〜ナア〜ギイ〜・・・」

「ひいひいひいひいひいひいひいひい!!」

第四勢力の介入によって都は守られた現在、アマテラス達は神座の間で集っている。戦後の後始末として「アマテラス・ファミリア」の都に攻め入った「イザナギ・ファミリア」と「イザナミ・ファミリア」の処罰、神罰を下す為に関係者以外立ち入りを厳禁にして。が、そんなアマテラスを前にして情けない悲鳴を上げる男神に仮面の女神は誰かに制してもらわないと近づこうとする。改めてヘフアイストスが言っていたことはあながち間違っていないなかつた様子で、アマテラスにどうする？と視線で訴えた。少年の視線の意図を察しているかどうか定かではないが、まずは再会の言葉を送る女神。

「こうして顔を見合わせるのお互い久しぶりね。それで、どうして私に何度も協力を求めた？」

アマテラスの質問に男神イザナギが唾を飛ばす勢いで返答した。

「イ、イザナミを私から遠ざける為だ!? 下界まで私を追いかけて来てもううんざりなんだ! だから天界に送還させたかったのだ!」

「・・・イザナミは？」

予想通りの返事だったのか意識を女神の方へ向ける。彼女はイザナギに向けていた顔をアマテラスへ振り向き言う。その声音は無骨な仮面を被っているとは思えない程、玲瓏で透き通ったものだった。「イザナギを捕まえるの手伝ってほしかった。イザナギを捕まえれば私は満足できる」

「捕まえた後、どうする気でいるの？」

「・・・何億年も私から逃げ続けた恨みを晴らす・・・っ!」
歯を剥きだしに積年の恨みを晴らさんと呪詛が籠り出す。アマテラスはどっちも案の定の理由ねと溜息を吐いた。

「私はあなた達に協力する気は無い。だと言うのにどうして物分かりが良い二人は私の都に攻め入ることになるわけ? 手紙を受け取った

その日の内に協力はしないと伝達者に手紙を送り返した筈のだけ
れど。しかも今日に限っては、今日まで戦争を繰り広げていた二人が
同時に攻め入ってくるなんてタイミングが良過ぎでしょう」

ここに来て両派閥が連携でもしない限りできない侵攻。仲が良い
のか悪いのか分からない同時に侵攻をしてきたのか気になっていた。
アマテラスのその質問に対し、イザナギとイザナミは怪訝に言い返し
た。

「……何を言っている？使者を送って金品や物資を用意すれば手
伝ってやらんことも無いと誘いかけてきたのはそっち」

「払えなければ相手側について攻め入るぞ、と脅してな」

「え？」

そんな脅迫みたいなことをして金品を巻き上げていた等、アマテラ
ス自身は全然身に覚えのない話だ。そんなことすれば攻められるに
決まっている愚かな指示をしたことすら一度も無い。

「待って、それは本当に？」

「本当だ。お前の徽章がある恰好をした使者と何度も謁見したぞ。
お前の子供である確かな証を前にして疑う余地は無かった。だから
要求を呑んで協力を要請したと言うのにお前は協定を破り拒み続け
た」

「そんな中……使者がやってきてこう言った。『お前達はまんま
と我が主神の計略に騙された。数日後、我等「アマテラス・ファミリ
ア」は同盟を結んだ「ファミリア」と攻め入ってくれる……』つ
て」

二柱の神から告げられる衝撃の実話。慌ててアマテラスは、使者を
向けた覚えも金品や物資を巻き上げた覚えは無いと必死に弁解する
が、イザナギとイザナミは彼女の言葉に耳を傾けない。

「……どうなってるの？」

「神アマテラスの反応からして嘘ではなさそうだが、神イザナギと神
イザナミも嘘を言っている様子では無い」

「だよな」

「んー……」

他派閥からすれば奇妙な話だ。アマテラスの家臣が二柱の神と謁見で要求を呑めば協力すると無断、それも独断でしていると思えない。三柱の会話を探る四人は耳を傾けながら疑問を浮かべるが、平行情線の話の聞いている内に解決の糸口は見つからないと判断し介入する。

「イザナギとイザナミ、アマテラスの眷族と謁見したって言うけどどんな奴だったわけ？それが分かればアマテラスも分かると思うんだが」

「分からない。全身の肌を隠してアマテラスの徽章エンブレムを付けた黒装束。神の前では嘘を付けないから真実。声は女だった」

「私のところに来た使者の声は男のものだったぞ」

——謎が深まるばかり。眷族達にも話を訊ねてみれば、その場に居合わせていたから間違いないと肯定した。

「どう思うイツセー」

「アマテラスの知らないところで陰謀のような感じがするかな」

「陰謀？神アマテラスの名を騙って堂々と二柱の【ファミリア】から金品と物資を巻き上げたと言うのか？」

「神の名を騙った、というのは嘘じゃないだろう。実際、本当にアマテラスの眷族が他派閥に乗り込んだ様子だ。となると、俺はこう思う」

人差し指を立てて己の推測を三柱の神々達にも聞かせるように口を開いた。

「イザナミがイザナギを固執、執念深く追い求めている、イザナギがイザナミから解放されたがっている。だけどお互いほぼ戦力が拮抗して中々決着がつかないでいる。——そこに両派閥のどっちかに第三勢力が加わることで戦況は一気に変わる筈だ。それを頭が回る上に狡猾で狡賢い誰かが【アマテラス・ファミリア】という極上の餌を目の前に釣り下げることでもんな要求でも続く限り応えてくれるだろうって察したんじゃないのか？」

アマテラスは自分の都の繁栄と発展に夢中で好んで戦争を仕掛ける女神では無い。その上で陰謀を企てた何者かが行動を起こしたのだと付け加える。

「で、散々絞りに絞り取られた二人が痺れを切らした頃合いを見計らって【アマテラス・ファミリア】に戦争を仕掛けさせた。敵対する【ファミリア】側についたと思いきませてだ。だから攻め込まれる前にこちらから攻めようとすると二つの【ファミリア】同時に攻められたら、流石に都は守り切れず彼女は天界に送還される」

「じゃあ、残された都はどっちの【ファミリア】の領地となる？それともアマテラスの遺志を継ぐ為、神の代わりに人の王が誕生となるか？

——この状況を心待ちにしていた他の【ファミリア】の神がこの都の王に君臨するか？」

長々と仮定と推測と予想を述べる少年にアマテラス達極東の神々は信じられないといった表情となった。もしも、それが真実であれば自分達は何者かの掌の上で踊らされていたということになる。だが、それは一体誰なのかは知る由もない。

「陰謀を企てた者が、私の眷族達の中にいる……?」

「そうなるな。でなければ、この二人がアマテラスの眷族と交渉したとは言わないし」

話を纏めるとそうなる、と思いを込めて首肯する。愕然と言葉を失い、凄まじい衝撃を受けたのか目が動揺で揺れている。彼女自身も気づかなかった企み。自分に長年仕えていた眷族の中に己の欲望の為に【ファミリア】を売った行為に等しいことをされて、深い悲しみと絶望が顔にありありと浮かびあがるアマテラスにイザナギとイザナミは責める言葉を掛けられずにいた。

「我が主神様、誠に申し訳ございません。失礼します」

そんな中、女の声が神座の間に静かに響く。アマテラスの許しを貰う前に入入り口から一歩だけ入ってきたのは、黒い着物を着こんだ老婆。女神の側近の一人だ。絶望から抜け出せないままその老婆に蒼色の双眸を向ける。

「今は大事な謁見……立ち入りは厳禁だと伝えられた筈。いえ、貴女は今までどこにいたの。都の壊滅の危機だった時に」

「申し訳ございません。急な用事ができてしまい城から離れておりました。そしてこの場に参ったのはそのお許しを得に……」

「私や他の同胞に何も言わず、都の壊滅の危機であることを知っていた上で己の私的を優先にするほどの用事とは何か、言いなさい。いくら貴女でも私達を見捨てたに等しい行為に看過できない」

厳しい面持ちで問いだたすアマテラスに老婆は頭を垂らしたまま。答えようとしない眷族に近づいて再度問い詰めようとした彼女の背後から声が飛んできた。

「貴女のその声……聞き覚えがある。私に交渉を持ちかけたアマテラスの眷族の声と同じ」

双眸を隠す仮面で老婆に向かってそう言う。声が女の使者が「ファミリア」に来たと言うイザナミと眷族だけが知る事実は老婆であると証明した。信じられないと反射的にイザナミへ振り返り否定的な発言を述べる。

「なん、ですって……イザナミ、冗談を言わないで。彼女は私に仕える眷族の中で古参の一人よ」

「間違いない。素顔を見るのは初めてだけど、声は何度も聞いたから分かる。でしょ?」

老婆へ向ける言葉に確信が籠っていた。ここで疑いを掛けられた老婆は頭を上げようとせず、ジツと姿勢を崩さない。アマテラスの問いと同様に答える気配をさせない。イザナミは絶対に口を開かせる問いを突き刺した。

「答えない? 答えられない? なら、これだけ答えて。私と会ったことがあるか否か。沈黙は肯定とみなす」

神の前では嘘は絶対に吐けない。真意を問うイザナミと応じなければならぬ老婆の会話のやり取りに、緊迫する神座の間で不安げで見守るアマテラスや一誠達。——すると、徐に息を零した老婆の口調が……。

「あああ、疑われない為に顔を出したのが失敗だったなあ……」

そう言いながら垂らした頭を上げた老婆は女の声音では無く、男の声音にガラリと変わり出した。それにはアマテラスは瞳を愕然と凍結。一誠達も老婆から男の声が出るとは予期もせず驚く最中、バラたら仕方がないと風に口から紡ぐは魔法の詠唱。

『夢は儚く目覚める』

老婆の相貌が崩れ、別の顔が本来のモノとして変わり始める。黒髪に黒眼と極東出身の人間である特徴を持つ男となり、黒い着物を剥ぎ取って軽装の衣服に早着替えをした。正体を現したその男に「お前は……」と呟くアマテラス。

「んーと、誰？」

「……一年前、兵として志願してきた子供。お前、私の古参の側近はどうした」

「成り済ます為に必要だったからまだ生かしているぜ。殺したら神のあんたら気付くんだろ？殺してあのババアに成り代わって近づいたら疑われちゃうからな」

「その声は、私のところに来たアマテラスの使者と同じ声！」

イザナギもイザナミと同じ反応をして立ち上がった。故に心中「はは、ほんと、狡賢くて頭が回る奴だったのかよ」と思わず苦笑を浮かべる一誠。だが、まだ生存していると分かって安堵で胸を撫で下ろすアマテラスは厳しい目つきで男に言葉を投げた。

「此度の戦争はお前が裏で私達を操ったのか」

「最初は随分と苦労したけど、その昔の男を追いかける女に、情けなく女から逃げる男の神との交渉は随分と楽だったよ。よっほど猫の手も借りたかったようだったし俺を疑いすらしなかった」

「私の眷族になったのも疑いをさせない為か……っ！」

「そうだ。神の前では嘘が吐けないんだろう？嘘に気付かれない為にはその神の眷族になる他ない。この都の王となる為に必要だったからな」

都の乗っ取り——それが真の目的であったと男の愉快に笑む表情はアマテラスだけでなく、散々物資や金品をだまし取られたイザナギとイザナミの怒りを買った。

「貴様っ、他派閥の手先であるのか!？」

「ないない、だって、この近くで一番有力な派閥はこの場にいる三つの派閥だけだし、他はよわっちい【ファミリア】や貧乏暮しをしている神だけだぜ？だから、手っ取り早く勝ち馬の【ファミリア】に取り入っ

て強大な「ファミリア」同士を潰し合わせてコッソリ裏から神を天界に送還させる——つつう魂胆だったんだけどよお」

男は心底気に食わないと言った表情で神や眷族達の縄を解いている一誠やリヴェリア、アイズにアリサと極東の部外者に視線を向けた。

「誰だよお前ら？ 良くも俺の愉快な作戦を潰してくれやがって。部外者は引っ込んでいやがれよ」

「知るか、俺達はただ松茸と筍の他に秋の旬の食材を集めに来たただぞ」

「はあっ!? たかがそれだけの為に俺の作戦は潰されたってのかよ!」

「それこそ知るか、だ。アマテラスが松茸を独占しているって言うから交渉しに来たらこの様だぞ」

やれやれと肩を竦められて男は苦虫を噛み潰したかのような表情で睨みを更に鋭くする。つまり、ついでで己の企みは阻まれたのだと言われたようなものだ。イザナギとイザナミから巻き上げた物資と金品を隠した場所へと赴き、それを持って野望を果たそうとした考えは二の次となった男は、憤慨で吼えた。

「ふっざけんなっ!? 神から特典貰ったまでは良いがこんな訳も分からないこの世界にトばされて、クソツタレな人生をこの都を奪って変えてやろうとしたこの俺の作戦はたかが松茸で邪魔されてたまるかよ!?!」

「……神? 特典? この世界にトばされた?」

怒りで訳の分からないことを口走ってアマテラス達を訝しませたが、唯一、愕然の色を浮かべ左眼を見開く者が一人いた。——一誠だ。

「気が変わった。この場でテメエラ全員ブチのめして神を天界に送還してやる!」

「貴方は足軽の兵達と同じLv.のままのはずよ。イザナギとイザナミの眷族相手にそれが可能なの?」

眷族の「ステイタス」の更新をし続けているアマテラスならではの把握と記憶力。どれぐらい更新をしていたのか一誠達には分からない

いが、まだ駆け出しの冒険者並みのLv. であると直接口にしたので察するに難しくなかったものの、男は余裕の態度で言い返した。

「はっ！この世界はLv. の強さが全てだろうがそんなの俺の前じゃ何の意味もねえ！」

「なら、試してやる。——殺せ」

「お前達も行け。私達を謀った怒りをぶつけてやれ」

イザナギとイザナミが眷族達で仕掛けさせた。第一級から第三級までいる十数人の眷族達がこの瞬間だけ共闘を臨み自分達を欺き、主神に害を成そうとする敵に素手喧嘩ステゴロで蹂躪しようと飛び掛かった。

「はあああああああああっ！」

男は気合の入った雄叫びを発した。その直後。髪と眉毛、目の色が可視化するほどの金色のオーラを全身から迸らせたと同時に変わった。腰を低く落とし前に構える突き出した両手から青白い光の塊が具現化した瞬間を見た一誠は、アマテラス達を転移魔方陣で部屋の隅へ移動した一瞬間の間に眷族達の全身に加護の魔法を張った。それでも敵は構わずそれを放った。眷族達の視界は真っ白に染まったと思えば真正面から凄まじい衝撃を食らい、そのまま押される形で神座の間の壁を突き破る大きな光柱は悲鳴を上げる間も無い眷族達を呑みこんだ。

「……………」

無詠唱の魔法、ではない何かの一撃が眷族を消した。壁にぼつかりと外まで穴が続いて外を窺える光景に思考が停止した。二柱の眷族達が一瞬で光の柱に呑み込まれて消えてしまい、言葉を失うほど目の前の光景を信じられなかったイザナギとイザナミ。戦いに明け暮れて器を昇華、「ランクアップ」してきた自慢の眷族がアマテラスが言うLv. 1の者に敗れるなど想像できようか。

「言っただろ。俺の前じゃLv. は無意味だつてよ」

「うん、同感だが死んでも無いぞ？」

当然のように倒したと言ってはばからない敵に対して当然のように言う一誠。

「……………なんだと？」

「加護の魔法を張っておいた。今の攻撃程度なら吹き飛ばされていくだけの筈。しっかし……まさかお前みたいな奴もいるんだな。これは警戒していた方がよさそうだ」

今度は自分が相手をしてやる、と男の前に移動して対峙する。

「お前、違う世界から来た人間だろ？」

「……」

「元の世界に帰りたいたいと思うなら帰る方法でも探さないのか？」

ある種——これが最後の警告であると一誠は男を試した。己やキリト達のように望んで別の世界に来たわけではないなら念の為に声を掛けた方が良さだろうと提案を述べたところ、男は鼻で鳴らした。

「元の世界に帰りたいたいなあ？冗談じゃない！」

「元の世界じゃあ女にモテるほど成績優秀、頭脳明晰、運動も万能ってわけじゃなければ容姿も整ったわけでもない。平凡に暮らすそこらへんの一般人と変わらない人間だったんだ」

「そんな俺が人助けなんて慣れないことをして死んでみたらどうだ。神と名乗る女が俺に願いを叶えるって言うじゃないか！」

「だから俺は望んだ！クソツタレな人生からバラ色の人生を謳歌できる容姿と最強の力を！」

芝居みたいに過去の出来事をペラペラと喋り、提案を拒絶する。

「今の俺はこの世界で誰よりも強い最強の人間！だから俺はこの世界で酒池肉林の人生を手に入れる！邪魔する奴は例え神であろうと許さねえっ！」

敵意と攻撃の矛先を一誠に向け「てめえもだっ！」と一步前に踏み込んだ瞬間に爆発的な跳躍力で懐に飛び込んだ。男が握った拳で振りかざし、殴ろうとする構えをした途端。頬に拳が突き刺さって——逆に殴られ、あっさり過ぎる殴り合いは拳を交えるまでも無く終わる。視界がブレた男の目は何が起きたのか理解できないまま壁まで吹き飛び、木造の壁を突き破った。

「……神から貰った最強の力……？——そんな力があるのに偉くお前自身は弱いなあい」

殴った握り拳を振った状態のまま期待外れもいいところだと風に呆れ顔を浮かべている彼は断言した。

「最強という座布団の上で胡坐を掻いているだけの奴は、大抵お前みたいに強者にやられるのがオチだ。井の中の蛙君よ」

返事は極太の気のエネルギー砲で返されたが、片手で真上に振り上げた手がバシッ！と甲高く砲撃の軌道を反らし天井の屋根を突き破って天へと消えていく。

「これが最強の一撃だって言うんなら……お前、最強をナメてんな」

「黙れっ！」

壁の向こうから男が飛び出して殴りかかる。虚仮にする人間は許すまじと拳に金色のオーラを纏って破壊力を底上げした打撃は、直径五十Mの岩塊を軽々と粉碎した威力を誇っている事を脳裏に過らせる。訳も分からないこの世界に来て以来、情報を集め、神の力を把握する為に村を襲う盗賊のような輩を相手にして点々と移動しつつ、村々を助けて過ごしている内に異世界の情勢を理解できた。故に、付ける隙があると崇めるべきの神を利用して最高の人生を謳歌しようと考えた男が取った行動は早かった。だが、男が思ったほど世界は甘くなかった。

「——宝の持ち腐れだ。零から出直してこい」

人の皮を被った化け物と言う異常イレギュラーに出会わなければ思惑通りに行っただであろう。

(なっ——)

幻視をしてしまったのかもしれない。殴りかかろうとしている相手から己がちっぽけに思わせるほどの威圧が具現化したように凶悪な牙を持つ巨大な真紅のドラゴンの顔が男の目にハッキリと映っている。

(なんだ、このバケモノは——っ!?)

『なにを』見て余所見してるんだ?』

「ッ——!?!」

我に返った時は既に目と鼻の先まで拳が近づいていた。顔面に突

き刺さり視界は黒一色――。男はまた殴り飛ばされた。

冒険譚17

それは、戦いであって戦いでは無かった。少なくとも戦場を駆け抜けてきた極東の冒険者、武士達からすればあまりにも一方的な蹂躪だったからだ。口と口で語る様に刃と刃で武士や侍は心を晒して相手と語り合う、そんな風に拳と拳が交わし合い語り合う筈の二人であつたが。

「く、くそつがっ！がっ、ぐ、ぼはっ!？」

顔面に殴られてから男の動きが鈍くなつてきている。殴る途中で淡い光を帯びている拳で殴り続ける一誠の一撃を食らう度に体に不調が起きているとしか思えないぐらい、鳩尾を狙った深く重い拳の一撃が突き刺さつた。それが止めだつたようで男の膝は床に付き、背中を丸めて苦悶に満ちた表情、悶絶を全身で表した。

「最強の力を貰つたわりには、弱いなお前」

「ぐっ……」

首を掴まれ、片腕で男の体重を軽々と持ち上げる一誠の左眼と男の右眼の視線が零距离でぶつかった。

「力よりもお前はお前より強い奴と全力で戦つて神の力とやらをモノにするべきだつたな。お前が見ている世界はそんなに狭くも無い。もつと視野を広げて強くなるべきだつた」

「——この俺に説教なんざするんじやねえっ!」

怒りが頂点に達して金のオーラ、一誠からすれば闘気、気のオーラが爆発的に高まつた男から警戒して距離を置いた際に相手は変化した。金色の髪が獅子の鬣を彷彿するほど豊かに増えオールバックの髪型になつてからの全力の砲撃を放つた。まともに食らい、イザナギとイザナミの眷族達のように呑み込まれた。目を見開くりヴェリア達の前で一誠がやられた——と思つたのも束の間。壁の外まで伸びる青白い閃光の中で真紅の光が煌めいた。

「——なっ」

愕然と見開く眼。伝わってくる。放出しているエネルギーの中から強い気配がどんどん膨れ上がり、自分を呑みこもうとしている何か

が。奥歯を噛み締め、それに抗う意思を込めてさらに力を解き放った。真紅の光は一瞬消えて呑みこまれたが、

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!」

青白い光の中から迸る真紅の光が一気に押し返して上衣の服が全く機能していないボロボロの格好の一誠が深い笑みを浮かべて、長髪をたなびかせながら男と同じ攻撃を繰り返した。

「て、てめえは一体……っ!?」

「ははははっ!こんな勝負は久しぶりだ!これこそ俺が心底楽しいと思う戦い方だよ!」

押し押しされて、拮抗する二つの光を中心に荒れ狂う神座の間。床は激しく抉れ、気流が乱れに乱れリヴェリアとアイズ、三柱の神々に襲いかかる衝撃で吹き飛ばされそうになるが、アマテラスが持つ杖から結界が張られ戦いの結末を見守る他できないでいる。

「お前も、神に転生された奴だったのかよっ!」

「転生——?否、俺は……」

皮膚が真紅の鱗に覆われ始め、頭部の形は異形へと変貌し、背中に二対四枚の翼と臀部辺りから尾が生えだし、手足も鋭い爪が伸びて——。

「この世界とは異なる別の世界、神々が存在している世界から来た元人間で人型のドラゴンだ」

男の気の砲撃を真上に弾いて肉弾戦に持ち込む一誠に、驚愕に囚われたまま応戦する男。

「ハハハッ!さつきよりマシに戦えるようになったな?なんだ、怒りの度合いで変化するってんならまだ隠し玉でもあるのか?ほら、惜しまずさつきと最終段階まで変化してみろ!」

「こ、このっ……!スリー3になった俺にまだ余裕なのかよ……!?!」

「ああ、お前に合わせてるぞ?俺もまだまだ隠し玉は残してるしな。例えば——こんな感じだ」

背中からズリユリユリユツ!と四本の腕が入り、計六本の腕で男に殴り掛り始める。ますます化け物染みた一誠相手に男の顔から完璧に余裕が消え失せて一方的に殴られるようになった。六本の腕に対

して二本の腕だけで対処するのは厳しい状況の戦いの中、男の意識から逸らされていた第七の手とも言えるもの（尾）が首に巻き付かれて締め付けられる。抵抗する暇も与えまいと床に何度も叩きつけられた後、放り投げられ体勢を直した直後に豪雨という真紅の気の弾丸を放たれた。攻撃に当たらないよう全身を駆使して逸らしたり弾いたり防戦一方と一瞬でも気を緩めない戦いに強いられる最中。力強く男に突き出された拳から強力な拳圧が飛んできて男を吹き飛ばした。城の外に間で飛び出ないよう、防壁の魔方陣で受け止めて床に平伏す男に話しかける。

「もう終わりか？神の特典とやらの力はこんなものか？」

「くっ、ちく、しょううううっ……！！！」

悔恨で身体を震わせながらも立ち上がろうとする男の意地を素直に感嘆し、まだ心が折れていない男の精神力にも称賛して口の端を吊り上げた。

「言っておくが、迷宮都市オラリオには俺以外にも化け物染みた冒険者は……まあ、それなりにいるぞ？お前のレベルは第一級冒険者、Lv. 5 っところだと思っけどな」

また男の首に尾が巻き付かれ持ち上げられる。戦う力は無くなっているのか無抵抗で顔を苦痛で歪めている敵に思いつき真上へ放り投げた。

「いや、冒険者と比べるものでもないか。——楽しかったぜ久々に」
大きく開けた口から極太の魔力を男に放った。迫りくる真紅の塊に成す術もなく直撃し、受け止める事もままならず絶叫の言葉を発しながら攻撃に呑み込まれてしまったのを最後に勝負の幕は閉じたのであった。

——その一分後。

完全に気を失っている男が落ちてきた。拘束をするわけもなくただ見下ろす一誠に三人は近づく。

「その姿になってまで戦わないといけない程強かったのか」

「いや、これは戦いに興奮して思わずなっちゃっただけだ。強いつてのは確かだ。いやー、本当に久々に楽しかったよ。で、二人は何か不

機嫌なんだが」

「……………」

ボロボロな神座の間でドラゴンに労うハイエルフと片方の頬を膨らませる幼女達。三人に挟まれて幼女の反応に少し不思議そうに首を傾げるドラゴンは三柱の神々に話しかける。

「言いたいことがあるなら、質問に答えるぞ。と、その前に戻しておくか」

異形の指でパチンと音を鳴らした。その音に呼応して戦闘の傷跡に光が帯びて壊れる前の状態に戻る。当然のように驚くアマテラス達は人の姿に戻った一誠を有り得ないものを見る目で視線を送るようになる。

「あ、貴方は一体……モンスターだったの？」

「元人間、のモンスターだ。モンスターに転生した人間だよ」

「子供がモンスターになるなど有り得ん、有り得ん！」

「異世界から来たんだから信じて欲しいとは思っても無いよ」

「神々がいる世界って言った。本当？」

「同性も同じってわけじゃないが、アマテラス達神々と同じ同名の神々がいる世界から来た。ちよつと俺が知っているイザナギとイザナミの関係は違ってるけどな」

「じゃあ、どういう関係なの？とイザナミが問うと。

「夫婦の関係。そっちはどんな関係なんだ実際？」

「んなあつ!?そんな恐ろしい関係に私は絶対になりたくないぞっ！」

「……………私も、私から逃げたこの男に対して怨みしか持ってない」

「まあ、詳しく聞かなくても分かるでしょ」

無言で首肯する。関係の良好は最低であって、本当に異世界の『国産み』と『神産み』の関する知識が違っていることから心底不思議がる一誠だった。

「でもま、こっちのイザナミとイザナギさん達も絶縁しちゃってるから違いは変わりにないかな。この世界のイザナギがイザナミから逃げてる理由と同じみたいだし」

「そちらの世界の神も同じであるのか……………っ！」

「……やっぱり、許さない」

「因みに、私は？」

同じアマテラスと名乗る異世界の神に好奇心で自分を指しながら訊ねたので、隠すことも無く自分の知る限りの情報を打ち明ける。絶対に予想を外さず期待通りの反応をしてくれるだろうと思いつながらだ。

「んと、太陽の化身って呼ばれてて——イザナギさんとイザナミさんの、ツクヨミさんとスサノオさんと同じく子供の関係」

「え、ええええええええええええええええつ!？」

「アマテラスとあの二柱が私とイザナミの子、だと……?」

「そっちの世界の私……意外」

もしかしたら今日一番の新事実で驚いたかもしれない三柱だったが、そこで呻き声を上げて意識を覚醒した男が目を覚ました。

「あ、気が付いたか」

「ぐっ、お前つ……!」

「言つとくが暴れるなよ?死にたくなかったらな」

手から光刃を伸ばして男の首を添える。目を覚ましても疲弊しきっている様子で体を動かさないでいる。それを機にアマテラス達は眦を釣り上げて近づく。

「おい貴様!良くも私を騙して色々奪ってくれたな!」

「今直ぐ返せ」

「私の大事な側近はどこに捕らえているか吐きなさい」

と口々に攻め立てる神々に対して男は顔を逸らして、徐に口を開いた。

「あのババアの居場所は教えるが、騙し取った金や物資はもう返せねえ。使っちゃまったからな」

「なんだとつ!？」

「……許さない」

お冠な二柱を他所にアマテラスは催促する。

「どこにいるの?」

「……とある村に生かしている。その村の住民に監視してもらっ

てな」

アマテラスは意外だったのか「村？」と鸚鵡返しをした。この都だけじゃなくイザナギとイザナミの都の周辺にもいくつか村があるのはわかっている。その村のどこかに彼女の側近はいるのだと予想する。

「随分と生易しい場所にいさせているんだな。てつきりどこかの地下牢か洞窟で幽閉しているのかと思った」

「五月蠅い、捕まえておくにも適した場所が見つからなかったただけだ。戦う前にも言っただろう。死んだら困るって」

「ああ、だから村か。納得したがどこの村だ？」

そう訊ねる一誠は男から居場所を聞き出した。その村の場所は意外にもイザナギとイザナミが過去に戦った場所の近くであったことが判明した。そしてもう一つ。

「金品と物資は何に使ったんだ？」

「そこまで答える必要はあるか？」

「別に？直接その村に行くまでだ。そこに今まで騙し取っていたものがあるなら、何に使っているのかも分かるだろうし」

魔方陣を展開して宙に浮く魔法の絨毯を召喚する。男をゴミのように乗せ、自分も乗るとリヴェリア達も乗り出す。

「そんじゃ、側近の人を連れてくるから——」

「私も行く！」

「私も行く」

奪われたものを取り返す為にと心を一つに魔法の絨毯へ近づく三柱の神々。若干困ったもんだと思いつながら拒絶はせず一緒に行くことに絨毯を動かした。規制されて神座の間へ行けなかった家臣達は、後にアマテラスの姿がいなくなっていることを知り、城の中は騒然と化し「イザナギとイザナミの【ファミリア】の仕業だあつ！」と叫びながら搜索をしていることに一誠達は知る由も無かった。

「す、凄いのね最近のオラリオって……こんな空飛ぶ布を作るなんて」

「俺が作ったんだ。別にオラリオが凄いわけじゃない」

「む、むう……これがあれば私はどこでも逃げられるというのに」「そうはさせない……イザナギ、今さら逃げれると思わないで」

イザナギの「お、おい！私だけ降ろしてくれッ!」という悲鳴を右から左へ素通りの、イザナミの暴走を抑えるリヴェリアを任せてる一誠は目的の村へ急ぐ。緑豊かな山々を何度も越え、風を受けながらしばらくその瞬間を過ごしていると一つの集落が遠目であるが視界に入った。

「あそこか?」

「……ああ」

男に確認を取って貰い、肯定だと示せば迷いなく集落へ降りていく。木造の壁と藁の屋根が片手では数え切れないほど建てられており田畑、農園、流れる川が見受けれる。

「こんなところに集落が……?」

「知らないのも当然だろ。ここはお前達の領地の境の間に挟まれた場所で新しく作られた集落みたいだからな」

集落の歴史はそう長くない、と意味を込めて吐露した男は地上に辿り着くや否や勝手に飛び降りてスタスタと歩き始める。その先には集落を囲む柵に門の様に閉じられている扉を守っている門番の二人がいる。その門番達を視界に入れるとお互い違った鎧を着こんで立っている。一誠達も男の後を追うにつれ――。

「あ、ああああっ!」

「な、なんでこんなところに……!」

門番達が神々を見て蒼白する。オラリオから来た一誠達からすれば「なんだ?」と風に不思議がるが、当の神達も不思議がっていた。

「その鎧……私の眷族の兵の者だな?何故こんな集落にいる説明しろ」

「貴方も、どうして私のところに戻らずここにいます。返答次第では許さない」

特にイザナギとイザナミが己の眷族であると認知して問い詰めた。門番達は悪戯をバレた子供の様に恐れ、逃げ腰になっている。追及す

るそんな二柱に対し、男が横から溜息を零しながら一言。

「毎回毎回戦争をしてれば嫌気も差すからだろうが」

「なに？」

どういふことだ、と言わんばかりに目を向ける男神と女神に呆れたとまた溜息を吐きだす。

「この集落は『イザナギ・ファミア』と『イザナミ・ファミア』の戦争で敗れた兵、落ち武者や戦争に巻き込まれ、戦災で住みかを追われた住民や孤児ばかりの村だ。この場所に辿りつけた奴は偶然か奇跡的、または風の噂で聞き付け来ない限り世間から見つかることのない場所でもある」

「成程なあ……世間にすら認知してない集落だから側近の人をこの場所にいさせたわけか。こりゃ、見つけろこない」

「そういうことだ。その上この集落は、この二人の神の眷族の戦争で傷つき合って被害に遭った人間が集った彼等彼女等の安息の土地ってわけだ。俺も昔、この住民に助けられたことがある」

短く挙手する男に委縮する門番達は扉を開けて一行を集落に迎え入れる。

「イツセー……もしかするとであるが」

「(ああ、多分リリアと同じ考えだ)」

ある予想を浮かべたリヴェリアと一誠。二つの派閥同士の戦は昔から続けられてきている。戦争に明け暮れて終わりが見えない血みどろの戦いに少なからず嫌気もするはずだ。特に戦場で命を落とし損ね負傷、重傷を負った、疲弊しきった心身の兵達は故郷へ帰る力は無く安息の地を求め彷徨うだろう。そうして偶然か奇跡、風の噂で聞いたとある集落へ向かって辿り着き数も増えていく。

「お前、この集落でどのぐらい住んでいる？」

その問いに「四年前からだ」と答える男の足は一ヶ所に集っている家へ向かうその最中。先程の門番以外人の気配を感じないことから「他の住民は？」と素朴な疑問をぶつけた。

「都に行つて買い出しや働きにでも行つてるだろ。ここは落ちぶれた人間が集まる場所だ。必要な物は金で買わなきゃ手に入らねえから

な」

「不用心じゃないか？盗賊でも現れたらどうする」

「言っただろ。その神達の眷族もこの集落にいるって。余程の人数でもない限り神の眷族達、総勢百人が守ってくれる」

そう言いつつ「この程度の規模の集落なら、五十人ぐらい守衛する奴がいれば十分過ぎる」と付け加えて集落は「イザナギ・ファミリア」、「イザナミ・ファミリア」の眷族達が主に守っているのだから。『恩恵』を受けた眷族が一つの集落を守る程度であれば盗賊を退けるぐらいなら問題ない。それが眷族になつた者やそうではない者の力の差と違いだ。

「と、そう言う理由でこの集落に留まっている自分の眷族達に対して感想は？イザナギとイザナミ」

「む、むう……」

「……」

何とも言えない表情で答え辛く、己の眷族達の敗戦や敗者の末路に責め立てる言葉が喉の奥につつかえていようだ。神が毎日の様に戦争を繰り返す理由は真つ当なものではない。天界の頃から続く追いかけてつこが下界に降りても続き、眷族達を巻き込んで無駄に犠牲を出しているようなもの。その犠牲者がこの集落に運よく辿り着き集つてできたのだとイザナギとイザナミは教えられた。

「うーん、騙し取られた金品や物資って、ある意味二人の自業自得的な感じがするのは俺だけか？」

「私の「ファミリア」まで巻き込んだのは未だに許せないけれど、元を辿れば二人が原因なのよね」

「……」

二つの「ファミリア」から巻き上げた金品と物資は、かつて戦争で敗れた眷族達の集落に持ち込まれている。そんな彼ら、死んでいたと思われていたが実は生き残っている眷族達の為に使われているのであれば、神として非難はできない。肩身が狭くなった二柱の神と共に集落から少し離れていて得物を持っている二人の住民、かつての眷族達が一軒家の前に立っているとところへ一行は辿り着いた。

「うげっ!?!しゅ、主神様が何故ここに……!?!」

「ま、まさかオイラ達を連れ戻しに……!?!」

門番と似たような反応を狼狽して青褪める眷族達。二度も歓迎されなかった主神の二人は押し黙る。

「……神に対してそんな反応とか。眷族達が二人に対してどう思っているのか何となく悟ってきたぞ」

「当然だろう。毎度毎度戦わせる身もなあって欲しいと思わない方が不思議だ。ラキアも大概だが、極東も極東で似たようなものか」

男が監視の任を解かさせて主神から逃げるように走る眷族達を一同は一瞥し、男を先導に中へ入る。

「——おい、ババア。お前に客だ」

無礼な物言いので家の中にいる者に言葉を飛ばした。彼女、老婆は部屋の中でジツと静かに正座をしていた姿勢を崩し、男の方へ顔を向けた時、アマテラスの姿を糸目がちな目に入る視界に飛び込み、眉根を寄せて申し訳なさそうに声を漏らし出した。

「おおお……我が主神様っ」

「黒井楚……」

この集落に捕らえられてどれぐらい経っていたか一誠達は知る由もないが、解放された眷族の老婆は主神の前で跪いて謝罪の念を言葉と共に向け、それを受け入れながら安堵の表情で丸めた身体を抱きしめた。一まず、一件落着でアマテラスの問題は片付かれた。残る問題は——。

「で、お前はこれからどうする?捕まる気なんてさらさらないんだろ?」

「当然だ。お前はそうするつもりはないだろうがよ」

「俺は旬の食材を求めに来たオラリオの冒険者だ。正式な依頼でもない限り片付いた問題にこれ以上首を突っ込む気は無い」

お前の好きにしろ、と籠めて向けられた目で見つめられる男は怪訝な面持で一誠を見返す。

「……一つだけ聞かせろ。俺達みたいに別の地球からこの世界に来た人間はいるか」

「ああ、いるぞ。オラリオで五十人以上も冒険者として、元の世界に帰える望みを抱きながら生きている。きっと他にの国々でお前の様に自分勝手にいきているだろうさ」

同類はいる。男は自分だけがこの状況に置かれている存在ではないと悟り、小さく息を零した。

「俺も聞かせてもらおうか。お前をこの世界にトばした神ってなんなんだ。どうして最強の力を与えられるのかもだ」

「俺が知りたい方だ。死んだと思っていたら神と名乗る女が唐突に『貴方で丁度一万目に人助けをして死んだ幸運の人です。これを祝福として特別に貴方の望む物を全て叶え、二度目の人生を与えます』と言いだして訳の分からないまま望んだ力を言った瞬間に穴に落とされて気が付けばこの国にいた」

「・・・なんだそりゃ？」

天界にいるヘファイストス達と同じ神々が別の宇宙の地球の人類と干渉してふざけた感覚で、この異世界に召喚でもしたのか？そもそもそんなことが神でもできるのかと疑問を抱くが、逆になんで二度目の人生はともかく、何でも願いを叶える様なチートを与えようとするのか理解に苦しむ。

「・・・貴方」

アマテラスが老婆と肩を並んで声を掛け、頭を垂らした。

「貴方が極東に来てくれなかったら今頃、裏切りで都は壊滅させられて奪われていた上に私の側近を助けることもできなかった。貴方は極東の、私の恩人。何かお礼をさせて」

「じゃあ、松茸と筍——今の時季でしか手に入らない食材を売ってくれ！」

報酬が貰える。その言葉を待っていたかのように左眼を輝かせて望みを乞うた。が、アマテラスは困惑した。それが望みなのかと。

「う、売って欲しいって・・・しかもお金じゃなくて食べ物欲しいの？」

「この男と一緒に俺は別の世界から来た。生まれた場所はここと同じ日本、極東でさ。極東の食材を扱う料理ができるんだ。それをオラリ

才で個人的に作りたくて極東に来たんだ」

「同じ同名の神々がいるだけじゃなく、極東も存在しているんだ」

「そう。だから極東の神々には興味があつただけど……色々と驚かされたよ」

「それは良いことか悪いこと分らないけれど、本当にそんなものでいいの？私の命の恩人なのだからもう少し欲深くても……」

都と主神、眷族を救ってくれた功績はかなり高いとアマテラスは考える。旬の食材だけ欲してそれ以外は無用だと言い切る少年に、他にはないのかと困惑する。

「……主神様、少し外へよろしいでしょうか」
「？」

老婆が主神を外へ連れ出す。何か大事な話でもするのかと思いつながらアマテラス達から意識を外し、イザナギとイザナミへ意識を向ける。

「で、今度は二人なんだけど。もうこれで懲りたら戦争なんて止めるよな。眷族を殺しているようなもんだぞ」

「だ、だがなつ。イザナミが私を放っておいてくれない限り抵抗しないわけには……」

「……イザナギを捕まえるまで戦争は続ける」

今回の事件の原因の一端でもある主神達に諭すが、どちらも相手はどうにかしない限り戦いは止められないとのこと。「だからこんな神だからこの集落ができるんだよ」と男がぼやき、呆れ返る。

「……イッセー、どうするの？」

「んー、どつちか天界に送還して手っ取り早く戦争を終わらせてもいいんだけど、それじゃ根本的に解決したわけじゃないからなあ」

「そうだな。戦争は二度と起きなくなるが、神同士の問題は解決したわけではあるまい。未だに怨恨が残つたままだ」

「でも、戦わされる人は可哀想だよ」

その通りだ、と首を縦に振る一誠は戦争と戦災を度々起こすこの二柱の神々に困つたものだと眉根を寄せる。これ以上関わるのはよくないと思いつつも、また戦争をしかねないイザナギとイザナミを放つ

ておくこともできない。

「イザナミ、イザナギをどうしたいんだ具体的に。積年の恨みを晴らすって言うが、肉体的にダメージを与えたいのかそれとも精神的にダメージを与えたいのかどっちだ？」

「両方」

間も置かず断言した女神は心の内を明かす。

「……私がこの醜顔になった時の痛みと、天界にいた頃に他の神の者達から怖がられ、侮蔑や嘲笑を向けられ精神的にも苦しんでいたのに、幼馴染のイザナギだけは私の味方だと思っていたのに……こいつは他の神と同じように怖がって逃げだした。その時の心の痛みをこいつに思い知らせる」

夫婦以前に幼馴染だったとは……。一誠は夫婦の関係だったと伝えた時に意外そうな反応した理由を理解した。イザナミの過去を打ち明けられてイザナギは居心地が悪く、居た堪れないと女神から目を逸らす。

「うーん、個人的な意見でイザナギが八割悪いと見た。怖がるのはしょうがないと思うが逃げるのはダメだな」

「可哀想」

「……」

一誠とアイズとアリサはイザナギが悪いと判断し、リヴェリアと男は無言であるが二人の判断と似た考えを浮かべていた。しかし、異議ありとイザナギが食って掛かった。

「な、ならばお前達もイザナミの顔を見てまた同じこと言えるのか！」「と、言ってるから見てもいいか？」

「……駄目、眷族にすら見させてない。見せられないこの酷い顔はきつと子供も怯える」

首を横に振るイザナミにもう一人の『醜顔』を持つ女神の名を漏らした。

「へファイストスの傷も見た」

「えっ……？」

「俺は「へファイストス・ファミリア」の眷族だ。彼女の昔のことを少

しだけ聞くことができな、その上で強引に『醜顔』を見せてもらったが拍子抜けだった」

一歩近づくと一歩後退したイザナミにさらに近づき、イザナミは近づいてくる一誠から逃げるように後ろへ下がる。

「俺より酷い顔じゃなかったから別に怖くなかった。何せ俺はモンスターだからな。人間や神より綺麗でもなければ美しくも無い、人を怯えさせるだけの恐い顔さ」

とうとう背中が壁とぶつかって逃げ場が無くなった。そして眼前は己の『醜顔』を晒そうとする者が。迫られ、醜い顔を見られたくないという意味表示を子供の様に体を縮める。無理やり仮面を剥ぎ取られる、とそう思っていたが女神の思いを反して黒髪に触れられた。

「.....?」

恐る恐る顔を上げると、優しい眼差しを向ける強い意志が籠っている青白いを直視した。

「ん、大丈夫。怖がる必要は無い」

青白い長髪に同色の輪っか、青白い六対十二枚の翼を背中から生やしてイザナミを包み込む。仮面の中で目を見開き、神の力を発する目の前の者に驚いている間。あっさりと仮面を顔から剥がされた。

「あ——ッ」

天界の神以外見せた事が無い女神の素顔が晒された。動揺の声を発したが既に遅く初めて見る彼女の両の眼。そして視界に飛び込んでくる女神の素顔。己より身長が低い、瞳を揺らす彼女をジッと見つめる一誠は、『醜顔』に手を伸ばし、神クラスの癒しの金色の光を帯びたまま温かく包むように添えた。

「俺の世界のイザナミさんも顔に仮面を被ってた。とてもじゃないが俺には見せられない素顔だっていつて見せてくれなかったけど、こーいうことか」

——初めての試みだけが、その傷を治してみせる。

「これ、どうしようかと」

側近と外で話をしていたアマテラスが突然神の力を感じ取って、中に戻ってみれば青白い翼が繭の様に成っていた。一体何なのか理解できないが、一誠とイザナミがおらずあの繭の中にいるのかとイザナギに訊ねようと口を開き掛けた時。青白い繭が解かれ、十二枚の翼を生やす、頭上の輪っかや髪、目の色が金色じゃない一誠や、仮面を外されているイザナミが現わす。

「あ、貴方・・・その神聖な力は・・・ツ」

「神の力を振るえる程度だ。神になったわけじゃない」

「い、異世界の神の力を・・・!?」

ちよつと違うけどなあ、と思いを過らせるが教えたらまた混乱させてしまいそうなので一先ず肯定も否定もせずイザナミの背中を押す。

「その力で試行錯誤して、何とか彼女の傷を治してみた。意外と治るもんなんだな」

魔方阵の展開して鏡代わりにイザナミに自分の顔を見させた。醜顔は完全に美しく変わり果てて、彼女のことを蔑む神々はもういないだろうと自負する一誠が思うほど以前の彼女では無いのだ。

「イ、イザナミ・・・」

「イザナギ・・・」

久しく見なかった素顔をイザナギは目を見開く。醜顔になってから仮面を被って見せなかったイザナミ――。

「――覚悟、できてる?」

「えっ、はっ!?ま、待てイザナミ!傷が治ったのだから逃げることはしない――つて、その包丁は何なのだ!?ま、待ってっ、待ってくれえええええええっ!」

「ウヒ、ウヒヒヒヒヒッ!」

何時の間にか出刃包丁を持ってイザナギに飛び掛かるイザナミは、仮面を被っているよりも積年の恨みが浮かんだ素顔の方が恐ろしかったと、集落で追いかけてこを始めた光景を見るアマテラス達はそう思わずにはいられず、その気持ちを抱くに禁じ得なかった。

「俺、余計なことしたか・・・?」

「何とも言えない・・・」

その日の夜——。三つの都を収める三柱の神々が同盟を結ぶ会談を行った。その際、様々な規則ルールが決まる。特に「イザナギ・ファミリア」と「イザナミ・ファミリア」は二度と戦争をせず、全力で戦災に遭った極東の民達を保護し、敵対する「ファミリア」に対しても協力して対応すると盟約が結ばれた。そして、今回の戦争を裏で暗躍した男の処遇は決して軽くない罪であるが、一誠からの助け船の甲斐があつて極東の三大派閥の為に惜しまず協力するのであれば可能な限り重い罪を軽減にすると決まる。

「最後に「ヘファイストス・ファミリア」のイツセー。前へ」

黒井楚の促しに正装を着こんだアマテラスの眼前に近づき、跪く。神座の間では重臣達やイザナギ、イザナミとその眷族達も集まって成り行きを見守る姿勢を貫いている。

「他派閥の眷族でありながら、貴殿は我等の主神だけでなく都も救ってくれた。この功績を無視して「アマテラス・ファミリア」はこの先も都を栄えることはできない。よって貴殿にはオラリオの冒険者であるが、貴族の称号、「アマテラス・ファミリア」が治める領地の一部と金品を授与する！」

授与式も程なくして終わり、三つの「ファミリア」の同盟に祝して食事会も行われる。あまり歓迎の雰囲気ではなかったが、戦争はもう二度と起きないその安堵感が重臣達から醸し出していた。その中でひっそりと、極東の料理をパクリと食べていた一誠は隣に座っているアマテラスに進言する。

「なあ、俺は食材が欲しいだけなのにどうして貴族の位と土地まで貰わなきゃならない？極東に住むわけじゃないんだぞ」

「貴方はそれぐらいのことをした。私を守った事実は皆知れ渡っている。何も与えず帰しては私が困る。だけどあれでもまだ足りないぐらいよ」

「部外者に大層な褒美を授与して納得できない眷族や大神に仕える者もいるだろう。それでもか？」

「役人達のことなら気にしなくてもいい。貴方がいなければ都は壊

滅、役人達の家も蹂躪されていただろうし寧ろ感謝するべき方よ」

オラリオでは箸を使つて食べることはあまりないが、そんなこと知らないアマテラスは綺麗に箸を扱つて料理を口の中に運ぶ。女神の食べている様子を横目で見ながら「そうか」と短く相槌を打った。何Mも長大な机を挟んで一誠の目の前に座るリヴェリアとアイズもアリサも極東の料理を静かに食べつつ味わっている。

「貴方の欲しがっている物は後日用意するのだけれど、極東には何時まで滞在するつもりでいる？」

「後四日以内だな。一昨日来て、昨日は買い物で一日を費やして、今日は戦争を止めた。だから残り四日は食材集めに専念するつもり」

と、今日の本来の予定とは違つてしまつたが、明日から仕切り直しだと言わんばかりに打ち明ける。

「そう、後四日……なら、こちらで求めている食材を集めておくから、その貴方……」

「イツセー、だ」

「えっ？」

「何時までも他人行儀で呼ばれてほしくないもんだ。こうして食事を共にしているんだから名前を呼んでくれたっていいだろう？」

酒は飲めず果実を搾つた飲み物をアマテラスに掲げる。最初は何をしたいのかキョトンと呆けたが、少し経つてようやく察した女神は酒が入つたお猪口を手にして掲げる。

「分かつたわ、イツセー」

「ん、アマテラス。乾杯」

軽く小突いて小さく音を鳴らす。また一つ、他派閥の主神と交流を交わすことができた一誠は笑みを浮かべ、釣られて笑むアマテラス達の背後に——もう一人の女神が音も無く近寄つてきた。

「むー……」

「え、イザナミ。貴女、眷族達と一緒にいたんじや？」

「アマテラス、ずるい。私もこの子と仲良くしたい」

後ろから首に腕を回して抱き付くイザナミ。集落であんなに走り回っていたと言うのに体力はまだまだ有り余っている様子で元氣

だった。猫のようにスリスリと頬を擦り付けるイザナミの顔には仮面を被っていた。

「貴女、彼に顔を治してもらったのにどうして仮面を被ってるの？」

「……ずっと肌身離さず被っていたものだから、愛着も湧く。それに、いざ外したまま誰かに顔を見られると何故か恥ずかしい。だから、この子の前だけ外すことにした」

ギユツと密着するイザナミは、イザナギを恐ろしい顔で追いかけていたとは思えない懐いた猫のように甘える。

「むーっ！」

「……むう」

膨れっ面で嫉妬心を剥きだしのアイズとアリサ。大事な宝物を奪われた気持ち芽生えてから普通の少女の様に感情を露わにするようになり、隣人の母親ことリヴェリアは嬉しいと思いつつながら薄ら苦笑を浮かべる。意外と嫉妬深い娘なのだなど。

「貴方の名前、教えて」

「え？ああ、自己紹介してなかったっけ。「ヘファイストス・ファミリア」の眷族イツセーだ」

「イツセー、イツセー……オラリオにまだ帰らないなら一緒にいて欲しい」

「えーと、まだ四日も帰らないのは確かだけど、やりたいことがあるからそれはちよつと無理だ」

申し訳なさそうにやんわりと断る一誠だがイザナミは退かない、食いつく。

「じゃあ、一緒に手伝う。そしたら一緒にいられる」

離れる気はないと行動でも示す。「んしょ」と一誠の胡坐の上に腰を下ろして胸に背中を預ける格好で座り出したイザナミ。アマテラスの目が見開く。

「ん、ふふ……温かい」

幸せそうに口角を緩むイザナミ。こんな彼女は何億年も見たこと無いと信じられないものを見る目で視界に入れ続けていると、アマテラスだけじゃなく一誠やリヴェリアの耳にプチンツと変な音を拾っ

たその後。食事会に金髪の少女が風を迸らせ、銀髪の少女が剣に炎を纏わせて暴れ出したことにより、極東の三大派閥の重臣達の間で、オラリオの冒険者は想像以上に恐ろしい奴だと認識してしまった。

「まさか、アイズ達がキレるとは思いもしなかったな……」

食事会の後、「アマテラス・ファミリア」の城のとある一室。今夜は泊って欲しいと女神の好意を汲んで、三人は別々に宛てられた部屋で一夜を過ごすことに決めた。

「まあ、昔のあいつ等と比べれば女の子らしくなってきたって思えば微笑ましいか」

ただ、嫉妬して魔法と剣で暴れるのは止めさせなければいけない。その度にリヴェリアの拳骨が炸裂して更に極東の主神の眷族達がオラリオの冒険者に対して畏怖の念を抱いてしまう。

「だが、問題はそこじゃない。俺やキリト達以外にも別の世界から来た人間がいる。しかも、神が干渉していたことだ」

ロキ達はそんなことはできないと言っていた。なら、あの男の望みの能力を与えてこの世界に二度目の人生を与えた神はどこ神だ？どんな理由でそんなことをしたのか会えるものなら会って聞きたい。薄暗い部屋の中、布団の上で仰向けのまま天井を見詰めたまま思考の海に飛び込んでいると静かに眠気が襲ってきた。考えても仕方がない、オラリオに帰ったらキリト達と話し合ってみようと自己完結して瞼を閉じて眠る——事は叶わなかった。

「……イッサー、起きてる？」

「うおおおおおっ!？」

天井の板をずらして覗き込んでくる幽霊、もとい仮面を被っている女神イザナミが静かに話しかけて一誠を驚かせた。どうしてそんなところから入ってくるのか、どうしてアマテラスの城なのに自分の城の様に天井に忍び込むことができたのか気になることが一杯になった。部屋に入ってくるイザナミは天井に向かって「ありがとう」と発すると、天井の屋根が一人でカタカタと動いて元に戻って啞然とその様子を見守っていた一誠は聞いた。

「……眷族と一緒に来てたのか？」

「情報を集めるのに諜報活動は欠かせない。私の【ファミリア】はアマテラスとイザナギより諜報が長けている」

白い和服を着こんだ姿で一誠の隣にちょこんと座る。

「で、何で普通に通路から来ないんだ？」

「同盟を結んだといつても、直ぐに信用されるわけじゃない。単独で行動すれば怪しまれる」

「天井裏から忍び込んできた方が怪しまれるって」

そうツツコムも「そう？」と首を傾げる女神は天然なのか？と思わせる反応をする。上半身を起こして呆れた風に顔を向ける一誠の前で仮面を外し、素顔を見せる。両の目は赤い眼だ。黒髪に赤眼、どこか幼馴染の武人と元暗殺者の少女を彷彿させる特徴に懐かしみの気持ちが湧いた。床に仮面を置いて暗闇の部屋の中で素顔を晒したイザナミは、四つん這いで近寄る。

「イツセーは不思議。モンスターなのに人の姿をしていると思えば、

【天使】^{テ・シーオ}の姿になれるし神の力を振るえる。貴方のこと、ヘファイストスは知ってる？」

「俺がモンスターで天使になれるのは、ロキとロキの幹部だけが知っている。でも、神の力を振るえることだけはオラリオの神々の誰も、冒険者すら知らない。俺の連れも今日まで知らなかった」

「じゃあ、私達はロキ達よりも知っちゃったんだ。フフフ……優越感」

暗い部屋の中だから暗い笑みを浮かべているのかもしれないと、そう思い込む一誠は肩を寄せてくるイザナミにイザナギのことを訊ねた。

「もう同盟関係だからイザナギを襲うなよ？」

「……分かってる。子供達をこれ以上戦わせない約束をしたからには、私もあの男神もアマテラスの様に自分の都を発展させなきゃいけない」

肩を並んで座る時間は短かった。女神は少年の肩を押し姿勢を崩してそのまま体の上に倒れ込んだ。長い黒髪がカーテンのように垂

れて一誠の顔を体と一緒に覆い、金眼と赤眼が暗い空間の中で見つめ合う。

「私の顔、今でも醜い？」

「何とか治しておいて醜い筈がないだろ。女神らしく綺麗な顔だよ」

「……そんなこと言ってくれる神や子供達はいなかった。だから貴方だけ、イツセーだけが私の心を開かせた。だから私は貴方のことが……好き、大好き、愛しくなった」

「俺はモンスターだぞ。人間でもなければこの世界で生まれた存在じゃない上に、神と人類からすれば天敵だ」

「構わない。私は貴方を受け入れる。ヘファイストスが貴方を受け入れなかったら、私が引き取る。そしたら一緒に暮らして一緒に都を発展と繁栄を築き続け、一緒に心と体を溶け合わせる日を、朝昼晩ずっとずっとずっと過ごして子供も百人ぐらい作ろう？」

気付いた。このイザナミと言う女神は——ヤンデレの性格だ。元の世界にいる家族の中には存在しなかった部類の性格の女性。それでも心から自分を好いてくれる女性は一誠にとって突き離さず迎入れ愛するに値する。

「この世界に来てそこまで熱烈な告白プロポーズをされたのは初めてだな」

「他の女神達の目が腐ってるからイツセーの良さが分からないだけ。でも、逆にそれは私にとって好都合かも」

「や、俺ってばフレイヤやデメテル、ヘファイストスとかアストレアやロキと交流していて、特にフレイヤとデメテル、ヘファイストスが俺を気に入っちゃってるから」

「……それって秘密を知らないからでしょ？秘密を知ってる私なら貴方のこと愛せるよ」

その証明をここでしてあげる、と言ってはばからないイザナミが和服に手を掛け、一気に脱ごうした気配と別の気配を感じ取って一誠は起き上がりそれを阻止した。それでも胸元が肌蹴こてしまって着やせする方なのか、豊満に膨らんだ胸に谷間が見えてしまってる。白い柔肌を覗かせる女神は寂しそうに喋る。

「……私じゃ嫌なの？」

「いや、横」

意味深に襖の方へ眼を向ける一誠に疑問符を浮かべた。何が？と釣られて視線を追って見ると。

「イザナミ……。勝手に部屋から抜けられると困るのだけれど」

腕を組んで、蒼色の双眸を上から目線でイザナミを睨むアマテラスが寝間着の和服姿で立っていた。一誠が起き上がったて服を脱がそうとしなかったのは彼女が来ていたからだとな納得できたが、邪魔して欲しくなかったと不満げに目を細めた。

「アマテラス、どうしてイツセーの部屋に？」

「その台詞、そのまま返していい？ 同盟を組んだ派閥の主神だからって私の城に独断で動かれちゃ他の眷族達が怪しまれる。行動を自重して頂戴。ましてや、イツセーとは話がある約束があつてこの部屋に来たに過ぎない」

……え、そんな約束した覚えは……。と彼女の言葉に疑問を抱くが女神達の口は閉じることはないまま言い争いにまで発展した。

「私はイツセーに告白プロポーズに来た。私なら貴方を愛せれると」

「イツセーは「ヘファイストス・ファミリア」の眷族よ。貴方がそうしたところで付き合うことはできない」

「ヘファイストスがイツセーはモンスターだと知らない。モンスターだと知って手放すなら話は別」

真正面から首の後ろに腕を回し肌蹴た胸元へ引き寄せて抱きしめるイザナミ。彼女の求愛行動にアマテラスと一誠はここまで今日初めての手相に心を開いたのかと心中驚かされている。

「この子は私の顔を治した。私の閉ざした心をも開いた。誰にでもできなかつたことをしてみせた『偉業』。私だけの英雄……だから、ヘファイストスが何時かこの子の正体を知って、手放した時は私の「ファミリア」が引き取る」

確固たる強い意志が言葉に籠っている。抱き寄せる力も増して、若干呼吸困難に陥る一誠を気付かない二柱の女神の間で何か譲れない勝負をしているかのように火花を散らしている。

「……折角同盟を結んで極東を共により良く平和にしていける仲間と仲良くできそうと思つた矢先に、譲れない勝負をすることになるとは思いもしなつた」

「アマテラス……?」

「この子は私の命の恩人。貴方達から都も救つてくれた私の英雄のような者。【アマテラス・ファミリア】の主神と都を守つてあの程度の褒美で私が満足するはずがない。アマテラスの名に懸けて、私は最大の褒美をイツセーに捧げる。その為に私はこの場に来た」

開けつばなしの襖を閉じたアマテラス。そして、部屋の中でどうなったのかは三人だけの秘密。

† † †

「み、みつからーんっ!!!」

翌朝のオラリオ。一誠のワインを勝手に飲んでしまった主犯の一人は千年も熟成したワインを求めオラリオ中に探し回つたが、結果は良くなかつた。最悪である。とある最大派閥の主神が鬼気迫る勢いで酒屋に訊ねているという噂が流れても本神はそれどころではない。「フィーン、ガレス……どないしよう。千年ものの葡萄酒ワインなんて、ウラノス達が地上に降臨した同じ時のもんを探す事態無理な話しや……」

「異世界の『太古』の人間達は、その昔から造酒技術があつたんじやろう。しかし、途方も無い永く造つて保存していた酒なんぞ、そうそうある筈も無いのが当り前じやて」

「僕達も彼の葡萄酒ワインを飲んでしまったからには同罪だ。価値ある物を同じぐらい価値がある物と代用して返す他ないけれど、千年の葡萄酒ワインの価値はどのぐらいなのか僕は分からない」

冒険者通りにトボトボと肩を落とす主神を護衛に兼ねて付き添う小人族パルウムにドワーフ。極東に仲間と一緒に食材集めをしているだろう元の仲間の少年の機嫌を損なわせてしまつてからというもの。連絡は来なく、逆にすることも躊躇して出来ない状況が続いている。このまま不仲の關係が続くことになれば、公的パブリックや私的プライベート、【ファミリア】としてもよろしくない。せつかく異世界のモンスターといえど交流を

以って仲良くなれているのに、仲違いにでもなれば関係は崩壊、絶好でもされればアイズは酷く落ち込むだろう。それだけは避けねばならない。今の少女は強さを求める以外にも意識を向けるようになって、初めてダンジョンから離れ世界を見ているのだ。だからこそロキは真剣に本気で少年の機嫌を直してもらえる葡萄酒ワインを探し回っている。

「他の連中も何を用意しているんやろう……」

「自分の力、『ファミリア』の総力を挙げて用意できる物だろうと、予想はできないね」

「神フレイヤは高価な物で間違いないじやろう。儂等でも手を出せない何かじやろうがな」

それで許してくれるかどうか分からず、一誠の判断次第だ。なればこそ。

「ロキが一年も禁酒で許されるなら僕はそれに叶えたい」

「同感じやわい」

「ちよつ、うちから酒を取り上げたら何も残らんわっ！しかも一年は長過ぎやつ?!一カ月もしない内に天界に送還してしまっ！」

焦る彼女にとって死活問題ペナルティな罰則に汗腺から嫌な汗が湧き出てきた。胸の前で拳を握り、祈る様に言うフィンの言葉を賛同するガレスは頷くのでさらに焦燥に駆られた時。冒険者通りから中央広場セントラルパークに踏み入れる前に建物の曲がり角からとある一柱の神と鉢合わせした。

首まで伸びる柔らかい金髪に、微笑めば異性は思わず蕩けてしまうだろう甘い美顔マスコ。硝子の色にも似た瞳を偶然で出会ったロキに見開いた。高価そうな服を着こなすその格好は貴族然としていて纏う雰囲気もそれに後押しをするように増している。神ではなく異国の貴族、もしくは王子ではないかと思ってしまう。そして「ファミリア」の団員なのか、彼の男神の傍には女性が付き添っている。

「……ロキ?」

「……ディオニユスか?」

ばったりと顔突き合わせた神同士は、久方ぶりに会って再会に喜ぶこともなく軽く「久しぶり」と声を掛け合った。

「あの樽は本当とはな。何やら上等の葡萄酒を探し回っているって子供から神々まで知られているぞ」

「知るかなもんっ！こっちは本気で困っているっちゆうにうちを暇潰しのネタに使っておって、神の気も知らん奴は能天気で困るばかり奴ばかりや！」

「はは、それは私も含まれているのか気になるところだが丁度いい。樽の中心の君と出会えたからには聞きたかったところだ。酒好きのロキが特定の葡萄酒を探し回っているのは何でだい？」

「欲しいもんを探し回るのは当然やろうが。それが無いんやから探しているんや」

「千年も熟成した酒を？流石に世界中から、『太古』の時から時間を掛けて造られた酒を見つけ出したとしても、片手で数えるぐらいか、全く無いに等しいと思うぞ？」

言わなくても分かっている事を改めて指摘されると腹が立つ、とロキは苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ、男神を睥睨する。

「自分、仮にも『太古』と同じ年月の酒があったとして、それはどのぐらいの価値があるか分かるんなら教えろや」

「ふむ……私の見立てでよければ……軽く一億ヴァリスは超えるんじゃないかな」

「い、一億超え……」

顎に指を添えて、価値を見出すディオニユスにヒクツ、と頬を引き攣らせた。だから一誠は調理に使う酒でもあんなに憤怒に形相を歪めたのだろうか、ますます同等の物を探さなければいけなくなつたロキ。

「もしかして、君はその誰かの千年ものの葡萄酒を飲んだことがあるのかい？」

「……だからなんや」

「——その味はどうだった？」

その場に居合わせれなかった事を悔みつつ酒好きなのロキの舌を信頼して、何気に真剣な表情で問うたディオニユス。ロキは何を呑気なことを言つとるんや！と言い返したかったが思わずその味を思い

出してしまった。

「……今まで飲んできた酒より別格やったわ。あの酒で作ったビーフシチューの味も、さらに上手くなるとイツセーが——」

「待てロキ、それ以上言ったら……」

「ビーフシチュー？イツセー？」

「……フィン、遅かったようじゃ」

聞き慣れない単語を不思議そうに鸚鵡返しするディオニユロス。ビーフシチューの味と言うからには葡萄酒ワインを使った何らかの料理であると推測したのか、両の手の平を口に当てて、いかにも『しまったっ！』と反応するロキを見て悟り、興味を持ってしまった。

「成程……そういうことか」

「わ、忘れるんやつ!?今うちは何も言つとらん、言つてないつたら言つてないんやつ!?!」

最大派閥の主神が脱兎の如く逃げた。その逃げっぷりに二人の眷族は揃って深い溜息を吐き、ディオニユロスと眷族の横を通り過ぎてロキを追いかける、そんな三人に数多の奇異な視線を向ける冒険者や民衆達と一緒に男神達も見送ると。

「イツセーという冒険者を調べるぞ」

「はー」

何かある、そう踏んでギルドに赴き「ヘファイストス・ファミリア」所属のヒューマンであることが分かったと二人の足は、再び冒険者通りに戻り、そのメインストリートにある武器店の支店で仕事をしている鍛冶神と面会し、にこやかに笑みを浮かべた顔で乞うた。

「葡萄酒ワインを使って作るビーフシチューとやらを食べてみたいのだが」

「……それ、誰から聞いたの？」

「親切に教えてくれた酒好きの美しい女神さ」

——ロキね。

ヘファイストスは断言した。そしてまた神が増えて眷族も含めて二人分も作らなきゃいけない羽目になった少年は、朱髪糸目の女神に何時までも睨み続けるだろう。口が軽くて余計なことを言いやがってからに、と未来予知をした。

「……イツセー?」

「いきなり鬻めた顔をしてどうした」

「何でだろう、オラリオに戻ったら面倒くさいことが増えているような感じがした」

「帰りたくないならまだここにいてもいいわよ」

「うん、居て欲しいかな」

具体的に分からずとも、直感でオラリオから遠く離れている極東の都で買物中の少年に嫌な予感を覚えさせた程、彼にとって面倒事が増えたのは確かだった。

「アマテラス・ファミリア」の都を巻き込んだ戦争から早三日目。極東に辿り着いてから六日目の朝を迎えた一誠はアマテラスの権力を借りて欲しい食材を根こそぎ掻き集めて、ご満悦の表情で積み重なっている米俵や用意された野菜、魚に抱き付いている。

「大麦、小麦にもち米に米——穀物、他にも調味料や海の幸の食材がまたこんな大量に手に入るなんて!しかも欲しかった物も!これだけあればあんな料理やこんな料理が、懐かしい料理が作れるーっ!ふふふ、あはははははっ!いよっしやああッ!」

「……本当に心から嬉しそうに喜んでる……」

極東の三大主神、リヴェリアとアイズとアリサが異口同音で言うほど、一誠は満面の笑みで若干引くほど夢中になって、様々な食材を触れたり抱きしめたりと喜びを体現している。ただ一人、一誠と戦った転生者の男は呆れ顔だった。

「たかが食材で喜ぶかよ普通」

「ふーん……俺はまだ未成年だから飲めないけど、大麦でビールが作れるのにそれすら喜ばない?」

「……(ゴクツ)」

男はこの世界では飲むことができない、懐かしの酒の味を舌で思いだしたようで唾を飲んだ。その反応に満足げな少年は「大人しくしていれば、完成した暁に最初に飲ませてやる」と約束を交わす。

「……絶対だぞ」

「納得できる酒ができたらな」

それが何時になるか分からないが、作ると言ったからにはとことん納得のいく酒を作るつもりの一誠は微笑する。

「ビールとは？」

「ラガーと同じ酒の一種。大麦の種類と酒造の仕方によって味と喉越しさが変わるんだ。完成するのに時間は掛かるが美味しいぞ。飲んだことないがな」

「何で飲んだことないの？」

「悪酒みたいで、飲んだあとの記憶がないしに絶対飲むなつて親から懇願された。というか、それ以前に俺は未成年だから飲めない」

「そうなんだ」

一体何をしでかしたのかこの男は、という気持ちの一つになったところで、腕輪の宝玉が点滅した。操作して通信を繋げてみれば、立体的な影像にヘファイストスの顔が映りだす。どこか不安げに窺う目で口を開いた。

『イツセー、今日あたりに帰ってくる……って、アマテラス達も一緒にいたのね。それにイザナギ、イザナミと一緒にだなんて……もしかしてとうとう捕まったのかしら？』

「捕まっておらんっ！同盟を結んだことで開放されたのだっ！」

どうということ？と疑問を抱いた様子の鍛冶神。極東の神々の事はあまり話題が上がらない為か、知らない冒険者や神は大半もいる。なので、極東で起きた戦争も一部を除いてオラリオに情報が入って来ないのだ。

「オラリオにとってはどーでもいい話だろ。で、今日中に帰ってくるつもりだ」

『そう……なら貴方に伝えなきゃいけないことができたから言うわね。ビーフシチューを食べたいって男神が私に訪ねてきたの。だからその神に作ってあげれない？』

予想は的中！一体誰が、ビーフシチューを教えたのだろうか。優しい（怒り）笑みを作ったオラリオから連絡してきたヘファイストスに問うた。

「誰が教えたのかな？」

『……とある神よ』

「わかった——そっちに帰ったら真つ先にその神の本拠ホームごと潰して天界に送還してやると伝えておいてくれ」

『ちよつ、待ち——』と焦りの声が不自然に途絶えた。通信を遮断して音信不通の状態に設定し終えると……。

「やってくれやがったな、絶対にそいつの神だけは激辛の料理を何時か食わせてやる」

とある神——としか言つてなかったのに、一誠は頭の中で言い触らした神は誰なのか一気に絞つて、優男神と変態女神セクハラの顔を浮かべた。故意であろうが不可抗力であろうが、言い触らした後に弁解しても既に遅い、と厳しい一誠は大切に保管していた調理用の葡萄酒ワインを無断で飲んだ挙句、懸念していたことが起きてしまった。料理を作ることに對して嫌ではないが、店を構えていなければ料理人でもないのに毎度毎度飯をたかりに來られては困ると言うものだ。まあ、美味しそうに食べられて嫌とは言えないが。

「はあ……冒険者やめて、店を開こうかな」

「っ?!いやつ、やめちや駄目っ……!」

「お願いっ!」

足元から切に彼の少年のポツリと零れた言葉は、少女を突き動かした。一緒にダンジョンで強くなりたくいと強い憧憬を抱いているが故に、慕っているドラゴンと共に戦えば強くなれるという、ロキにからかわれた『レアスキル』は彼がいなくては発動しない。冒険者を止められては自分の望みと幸せな一時が得られなくなり、それを嫌がるのだった。

「……お前、ビーフシチューを作れるのか？」

「食材が揃っているなら知らない料理以外は大抵作れると自負できる。なんだ、何か食べたいのあるのか？」

訊ねられた男の目が泳ぎ、逡巡するように押し黙って十数秒後。口を開いた。

「……牛丼、作れるか」

「トッピングは？」

「玉子と葱、七味唐辛子」

「OK、任せろ。夕食はそれで決まりだな」

数時間後、極東から三柱の神と異世界から転生した名も知らぬ男をオラリオに招くことが決まった。今日中に帰ればヘアアイストスも文句は言わまいと時間になるまで城下町を散策する一行。

「さーて、他のところも見て回るぞ」

「ああ」

「んっ」

朱色に染まり切る天空。加工された魔石灯に光が発して夜に支配される準備を整い始める。賑やかな大通りは冒険者や一般の民衆達の数が減っていくにつれ、穏やかに静まっていきやがて酒場から漏れる光に吸い寄せられる虫の如く、足を運んで大いに振る舞われる酒と料理を楽しんで今日一日の締めをしようとする。

それは人気のない寂れた廃墟しかない区画に足を運ぶ、片手では数え切れない神と眷族達も同じだった。

「……ロキ、君達が揃って何も無いこの場所に何時も来ているのか？」

「せやで、ほれ、この間ちつとばかり騒ぎになったことがあったやろ。突然出てきた『バベル』の次に高い建造物が」

「ああ、その後また消えたが」

「んー、消えたと言うより隠されたって言った方が適切やなあー。うちら神でも子供達でも目では見つけられないようにされとるんや」

隠した？一体誰が？新参のディオニュソスは不思議そうに硝子色に似た瞳を周囲にも向ける。主にダンジョンの入り口を塞ぐ役割も担わっているあの白亜の摩天楼施設パベの次に高い建物がある区画に来ているのに目立った物が無ければ異様なものも無い。いや、異様というほど呼ぶべきではないが気になる点があった。

「君達、一体何を持ってきているのだ？」

ディオニュソスの指摘に、何人か体を強張らせた。自分で持っても

いれば眷族に持ってもらっている大なり小なりの手土産のようなものを訊ねた彼以外全員持参して来ている。自分だけが重要なことを教えてもらえずハブられているのか？と勘繰ってしまうが、羽付きの鍔広帽子に指を添えながら苦笑いするヘルメスが答えた。

「オレ達が会う一人の子供に渡すものさ。この前、怒らせちゃったからその謝罪を籠めた贈物^{プレゼント}つてやつさ」

「子供？ ビーフシチューを作る子供のことか？ お前達は一体何をしたんだ」

「アハハ、そのビーフシチューを作る為に必要な葡萄酒^{ワイン}を飲んでしまったのさ。ロキに勧められてね」

「うちだけ悪者扱いすんなヘルメスッ！ 自分かて『代わりの物を用意すれば怒られないから大丈夫』つて言つてやたやろうっ!? 己、全部代わりの酒用意できたんやろうな！」

「一本だけ除いて、大枚はたいてなんとかね。で、そういうロキや皆は何を用意したんだい？」

空色の髪に知的な碧眼の少女の両手に数本の酒が入った籠を尻目で見ながらロキやフレイヤ達が持ってきた手土産を指摘する。蜂蜜色の豊かな髪を持つデメテルは一誠の好物の林檎パイ、象頭の仮面を被っているガネーシヤは同じ仮面の物、「絶対にいらないと云われる」と眷族が呟いていたのを気にしない。アストレアは手料理、ロキはブランドー、フレイヤは。

「魔導書^{グリモア}十冊」

『じゅ、十冊……っ!?』

総額十億は優に超える貴重な本を惜しみなく持ってきた美神に戦慄するロキ達。一冊、「ヘアイストス・ファミリア」の第一級装備品の同等の値段かそれ以上の価値ある本は——魔法を一つ習得できるといふ希少価値が高い魔導書^{グリモア}なのだから。

「待て待て待て、フレイヤ。一冊で十分やろっ、なに十冊も持つてくる必要あるんやっ」

「あの子の葡萄酒^{ワイン}は美味しかった。千年も熟成したものなんて初めて飲んだのだからそれ相応以上のお礼と、あの子に嫌われたくない謝罪

の印も兼ねて持ってきたの」

才能かそれに秘めた者の魂を色として見分けて勧誘、もしくは他派閥から奪うフレイヤを知る神々は、「嫌われたくないから」と言わしめる人間はこの先現れないかもしれないと思いを走らせた。

「フレイヤ様、イツセー君のことまだ夢中なんだね」

「ええ、あの子は私を夢中にさせてくれる素敵なものを持つてるものだから」

艶やかに色気を振り撒く美神は熱く潤う瞳で微笑んだ。そう、絶対に忘れるなど有り得ない魂の風景と景色。そして一人一つしかない筈の魂は、あの少年の中に多種多彩の魂が宿っていた。それだけでも十分自分を好奇心と興味を抱かせると言うのに、色ではなく景色を見せられては無視はできない。

「ああ……あの子を抱きしめて、あの子の温もりを感じたい……っ」

あわよくば、天使の姿でそうされたいと恋い焦がれる乙女のように……。

「ふ、ふふっ、ふふふっ、ふふふっ……！」

見えない扉が皆を迎え入れる為に開いている間、乙女を行き過ぎて不気味に笑う（神から見れば）怪しい神者になりかけていた。

同時刻。敷地内に神々と眷族達が侵入してきたことを察知しながら、興味深々や好奇心の視線に寄せられる最中の一誠。

何時も通り、料理を作っているのは一人——ではなく、

「くうっく！まさか、松茸が食べられるなんて夢じゃねえよなキリの字ッ！」

「夢だったら儂いよクライン。これは現実だ。……ごくり」

「大きさを重さによって一本万単位もする高級食材をよくもまあ集めてきたな」

「こら男共っ、自分達の仕事を集中しなさいよ。料理を作るのジヤマジヤマ」

「うくん、松茸って良い香りがするよ。初めて食べるからドキドキ

しちゃうっ」

「はい、私もです！松茸じゃなく栗ご飯も食べられますしね！」

「アスナ、味見してくれる？」

「いいよ。．．うん、バツチリ。イツセー君の調理場は色んな調味料が豊富だから色んな物が作れちゃうなあ、羨ましい」

別世界からやってきた「アルテミス・ファミリア」の眷族、キリト達（女性陣）も共に夕餉の準備をしていた。極東の食材を集めたから、手伝ってくれるなら食べさせてやる。と一誠からの提案に、松茸や筍を見せびらかされた彼等は開口一番に「手伝うツ！」と乗ったのだった。極東の食材、所謂郷土料理ソウル・フードはキリト達にとっても懐かしい忘れ難い母の味も含まれている。誘ってくれた少年に深く感謝してアスナ達料理が作れるメンバーは、故郷の料理を嬉しそうに作っていく。松茸や筍、その他の食材を使う炊き込みご飯を作る窯は数個、軽く二十人分も作れる程の大きい釜は簡易的な竈の中で燃え盛る火の上に設置されている。

「米俵一俵以上も初日から使う羽目になるとはなあ．．．」

「迷惑だった？」

「いや、迷惑だったら呼んでも無い」

「ふふっ、ありがとうイツセー君」

『幽玄の白天城』の敷地内にて、キャンプをしに来た一団が見せる風景を醸し出している一誠達を邪魔しないように遠くから見守る主神や極東の神々。料理が出来上がるまで昔話を語っている様子を一瞥し、暗闇に包まれる自然豊かな森を照らすダンジョンの発光する水晶クリスタルの道の奥を見つめる。来訪者を迷わさないよう淡く光の道標が誘うように間隔を空けて真っ直ぐ並んでいる他、森中にもありどこか幻想的な光景を見させている。そんな森に視線を向けていると数多の足音を鳴らし、森の中よりさらに明るい空間へ踏み込む者達の影が光に照らされながら近づいてきた。

「よ、よお．．．イツセー、久しぶりやな．．．」

「．．．呼んだ覚えのない奴等がいるな。それとも、もうあの件を忘れた能天気な連中だったか？」

鋭く睨み付けてくるドラゴンの怒のオーラが陽炎のようにゆらりと赤く醸し出した。辛辣な言葉で迎えられた神々と眷族達は主にビクツと委縮して、ここで許してもらえなければずっと不穏な態度で接せられる不安を胸に抱きながら、各々と持ってきた手土産を突き出す。

「……………なに？」

「勝手に飲んで悪かったよイツセー君。これはオレ達が謝罪の念を込めて選り抜きで持ってきた品々だ。これが君の酒の代わりになるとは思ってもないけれど、何時までもこのままじゃいけないってだけは思っているんだ。君もそう思っているだろう？」

皆の心を代弁して語るヘルメス。怪訝な目で耳を傾ける少年へ朗らかな笑みを固めて寄り、アスファイから数本の葡萄酒を受け取って手渡す。

「あの千年ものの葡萄酒は流石に手に入れられなかったけど、他の年代ものなら集めることができた」

「……………」

籠から一つ一つ取り出して確認する眼差しで向けていき、無言で男神を意味深に視線を送る。内心、冷や冷やしているヘルメスは何か言ってくれないかなくと居た堪れない気分と冷や汗が笑みで固めた顔の裏に浮かんでいた。

「……………二度目は無いぞ」

「あ、ああ、うん。勿論だ。このヘルメス、二度と同じ過ちはしないと誓うよ」

「したら天界に連れてってもらうからな？」

警告の言葉を零した後。暗に、地上から送還するぞと言われたことに察し、引き攣る頬と乾いた笑みを発するしかできないヘルメスの横を通り過ぎ、ロキ達からも受け取りに行った。

「……………首の皮一枚、つてところで仲直りできて良かったですねヘルメス様」

「下級冒険者の子供の筈なのに、嫌でもそうとは思えない立ち振る舞い、言動と存在感を放つからオレだけじゃなく他の神連中も対等の立

場で接しちゃうんだ。不思議な力だ。フレイヤ様のような魅了を持っても無いのに放っておけない魅力を感じてしまうがない」

だからだろう、極東の神々まで集めてこの場で食事を開こうとしているのは。ただの一人の冒険者が神も巻き込んでこうして集わせるのは今までであったことがない。

「……これも英雄の器に必要な素質なのか？……ゼウスよ」

「うんんまあああああいつ！」

食事はロキの絶賛の言葉を皮切りに始まった。極東の食材を主に作った料理は、食べた事のない神々や眷族からすれば、未知の味に等しい。ほかほかに炊きあがった米の中に交ざった松茸や筍、栗の炊き込みご飯。調味料を掛けたり足したりして素焼きにした魚介類、お吸い物や穀物で作った甘い物デザートやそれ以外でも。

「ほれ、牛丼だ。お代りもあるから残さず食べるよ」

「数年振りの牛丼っ……！」

獣肉と玉ねぎを甘く炒めつつ煮込んだご飯と合う一品が男の前に置かれる。歓喜と感動で目が揺れ、素早く一緒に用意されたトッピングに手を伸ばし、丼ぶりの中へ投入すると行儀が悪いと言われてもしょうがない、ガツガツと懐かしの味を口の中で一杯堪能しながら掻き込んでいく。

「……のう、イツセー。あの男が食べておるモノ、儂も食べて良いか？」

「駄目、あいつ専用のだからまた今度。ガレスはこっちの肉うどんを食え」

「む、肉うどんとは聞いたこのとない料理じゃな。おお、白い麺の他にも肉が入っておるわい」

幸せそうで美味そうに顔を綻ぶ男を見て興味が湧いたガレスは、メインの炊き込みご飯以外にも作って用意した極東の料理を突きだされ意識はそっちに向く。冷やし中華の冷たい液と似たようなものが今度は温かくされ、長くて子供の指と同じぐらい太さの白い麺や煮込まれている肉と葱、卵が入ってる底が深い器の中を覗きこみながら鼻

腔の中に嗅いだことが無い香りをまず味わい、そして口に肉と一緒に麺を一口食べた。

直接地面に座って食べるか、立って食べているかで夕餉の時間を過ごす一同とは違い、設けられたテーブルと椅子の一つを占領して、ずつとこの瞬間を望んでやまなかつたビーフシチューを前にフレイヤは香りを嗅いただけで恍惚とした表情で熱い吐息を零した。皿から芳醇な香りが立ち昇るその料理、美神を陶酔させる程の魅惑的何かが詰まっている。問題の味の方はどうなのだろうか？女神の銀髪的美しさを前にして劣る銀色の匙でスープを掬い上げ……一口。口の中に広がるのは、濃厚な、肉と野菜の旨みが凝縮されたスープ。葡萄酒も材料として使われている理由をたった一口で理解させ、胃袋に直撃を受けたその衝撃は女王に相応しい素晴らしい料理と出会った瞬間でもあった。そして困ったことに。毎日食べると飽きるかもしれないが、一週間に一、二度ぐらいなら食べてみたいと自分でも思ひもしなかつた食い意地を自覚して思わず美しく苦笑を浮かべた。

さらに美神を虜にしたビーフシチューを食べてみたのちの世、アイテム・メイカー魔道具製作者と呼ばれる少女や甘い美顔マスクの男神も虜となり、遠くない未来に構える変わった店の常連客となるのであった。

顔を輝かせ、林檎パイを小動物の様に頬を膨らませながら夢中で食べるちっちゃくなつた一誠の臀部辺り、九つの尾が嬉しそうに振つてるそんな彼をホッコリと穏やかな気持ちを抱く神々や眷族等がいた。ちやつかり、揺れる毛並みが良く温かな尻尾の傍に居座って当たる度、くすぐつたそうに顔を綻ばす金髪金眼の幼女や好奇心で尾を触ってみる極東の神、ビーフシチューを食べながら恍惚の表情で眺める美神。

新参の神と眷族にとって忘れられない一時はまだまだ始まったばかりだ。

多くの他派閥が一堂に集まるオラリオはまた寒い季節を迎えるのであった。

冒険譚 18

極東から戻ってきて元の日常を過ごす一誠達。変化のない充実した生活を送っている、本人達もそう思っている筈の、自然と力を寄せ付ける一誠の体質を知らない面々は静かにオラリオの変化を感じるようになる。

——変化その一、極東の三大派閥が戦力を高める絶好の場所とであるからと、数百人単位の規模でオラリオにやってきた。都市外から一度入ると出る時は困難なオラリオへ一度に多くの眷族達を引き連れたアマテラス、イザナギとイザナミに迷宮都市に永住する全ての者達は、大通りを埋め尽くす甲冑を着こんだ眷族達を目の当たりにして目を白黒させた。だが、一番驚いたのはギルドの職員達だった。突如の来訪にギルドは泡を食って「ファミリア」の申請と百人以上の冒険者登録に一日掛けて済ませたが、終わった頃には疲労困憊でこの時だけは、前触れも無く多勢を率いてやってきた神々に恨めしい気持ちを抱いたのは無理もなかった。

——変化その二、一誠の夜食をたかりにくる神が増えた。「アマテラス・ファミリア」「イザナギ・ファミリア」「イザナミ・ファミリア」の他に「ディオニュソス・ファミリア」。すっかり味を占めた神々は週に何度か「ヘファイストス・ファミリア」の主神と団員が住まう別居へ足を運ぶ人数も多くなった。当然、夜中に大勢で歩けば人目を集め注目する。指定された時間内に別々の道から来て集うことになってもちらほらと見掛ける冒険者や民衆はいるものだ。何時しか色んな派閥の主神が眷族を率いて自ら巡回パトロールをしていると言う噂の煙が立った。

——変化その三、一誠に新たなスキルが発動した。更新した主神は目を疑う。

「なに、これ……」

『恋愛一途』

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果維持。
- ・懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・魅了する。
- ・異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理 想達人』 クッキング・マスター・シエフ

- ・調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『神秘希少』 ウルトラ・レア

- ・道具アイテムの作製時、発展アビリティ『神秘』の一時発現する。
- ・一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。
- 「……………」

更新したヘファイストス。長らくご無沙汰だったからか、相変わらぬ『アビリティ』は一つも伸びなかったが、色々と突っ込みたいスキルが具現化してしまった。なのでこれを伝えて良いのかロキと会い、『黄昏の館』の庭園で二つの椅子に座って羊皮紙をロキに向けて置い

テーブル
た卓を挟んで顔を突き合わせている。お互い眷族を連れず、たった二人きりで言葉を交わし合ったところ。

「なんやねんこれ」

「……そう思うでしょ」

一度に三つ（五つ）もレアスキルの発現を証明する写した羊皮紙に糸目を落としたロキは思わず漏らした声に呆然の色が籠っていた。目を疑うようなスキルだが、今までの言動を考慮すれば発現してもおかしくないものばかりだ。

「フィンと似たようなスキルが発現しよったかイツセーの奴も。これは教えてもええと思うでファイたん」

「じゃあ、これは？」

『恋愛一途』

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想が続く限り効果維持。
- ・ 懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・ 魅了する。
- ・ 異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・ 神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

人差し指で当人が一番恥ずかしがるだろう『レアスキル』を示す鍛冶神から問われた女神は腕を組んで己の考えを口にする。

「んー……教えても問題あらへんと思うけど、問題が一つある」
疑問符を浮かべながら紅眼で「問題？どういこと」という意味を込めた視線を送るとロキはヘファイストスにこう伝えた。

「これ……フレイヤもやけど、他の派閥の神連中が見た途端、絶
対手放したくないと思うやろ」

特に女神や、とロキの指摘に沈黙して肯定と受け取らせるヘファイ

ストス。レアスキルの塊を抱えさせられた眷族の女神は、特に性質の悪い女神の【ファミア】に改宗コンバージョンを許してしまつたら……。そう思うと困り顔になつた。

「どうしたらいいのかしらね……イツセーは他の派閥に行くことを躊躇しないわよ」

「他の神連中に一年に一度は改宗コンバージョンするつちゆうことを知られてもうち、できればうちの間だけそうして貰いたいんやけど」

今度ダーツで決めるのはヘアイストスで女神の手腕が掛つていゝる。そして運頼みになつてしまふ次の派閥コンバージョンに対する改宗。たかり仲間の間であれば悩みもしいがそれ以外の【ファミア】も含まれてゐる次の行き先に二人は悩む。

「で、イツセーの奴は家におんのか？」

「椿と貴女の子供と27階層の階層主を倒しに行くつて言つてたわよ。【劍姫】、物凄く張り切つちやつてたわね」

「久々のダンジョンつてのもあるけど、イツセーと戦えば戦うほど強くなるつて嬉しいんやろうな」

「全然あの子のアビリティ数値は0のままなのだけれどね」

空は晴天。雲一つも無い天晴なほど空の彼方まで空色が續いてゐる一方、太陽の光が絶対に届かない地下迷宮では――。

「はああああああつー！」

風を纏い中層27階層の『迷宮の孤王』との戦闘中に酔狂かつ命知らずな冒険者達へ襲いかかるモンスター。小さな人間を四方八方から人間の腕を握つて折ることが出来る両の手や凶悪な牙を生えてゐる大口を開けて迫る『バグベアー』は、突然発生した幼女の全身を守る様に纏つた激しい気流の風の塊に弾かれたその瞬間。更に風の気流が乱れ、迸つた同時に全身を切り刻まれたその近くでは、左眼を覆う漆黒の眼帯を付けた褐色肌の少女が製作した『魔劍』を振つて属性攻撃の猛威を大いにモンスターへ放ち續けていた。使用回数を超えて碎けた『魔劍』の意識を直ぐに背囊の中に収納した新たな『魔劍』を手に性能と改良の把握を確かめる。炎を纏うロングブレードを振り

まわし両断した銀髪の少女のその瞬間を狙ったかのような他方向からの攻撃に、剣の腹で受け止め防戦一方に強いられる。力と数の暴力に耐え抜いて数秒後、体勢を崩されて地面に倒れた少女を大口開けて押し寄せてくるモンスターであったが、一閃の軌跡が斬撃の光の筋を残したモンスターの体が二つに分かれて絶命する。黄金色の髪を揺らしその碧眼の視線は次の怪物へ襲う照準を定めていた。そのどの種族よりも小さな体で活かした『敏捷』と『器用』でモンスターとモンスターの隙間を針穴に糸を通す感じで潜りながら勢いよく振り回す槍の穂先で化け物を屠り続ける。逆に『力』と『耐久』が高い種族の筋骨隆々に髭を蓄えているドワーフは豪快に斧を振るまくって斬り払い、薙ぎ払い、地面に向かってモンスターを真つ二つにしながら叩き付ける。

そんな地上を他所に空中で魔法の詠唱を唱えている翡翠の長髪の絶世の美女ハイエルフがいた。モンスターの爪や牙が届かない安全ば場所から魔力を高め一撃必殺の呪文を玲瓏な言葉で紡ぎ続けている。そしてこの階層の主こと『迷宮の孤王』、二つの首を持つ、白い『双頭竜』——『アンフィス・バエナ』は真紅の竜を彷彿させる全身型鎧フルプレートを着込んだ冒険者に、一方的に攻撃を受けていた。十字架型の盾を二つ、鎖と繋げられた状態で使い手に振り回されるその防具に刻まれたり、防がれたり、打撃を受けたりと蹂躪されている。双頭の口から発せられる攻撃に対しても堪え切り、時間を稼ぐことしばらく……。

「イツセー、準備が整ったー！」

黄金色の髪に碧眼の小人族バルウムの疾呼に、十字架型の盾を投げ放ってアンフィス・バエナの首に巻き付け突き刺す。そのまま鎖を思いつきり力のあらん限り引っ張って、己より巨大な怪物の体の体勢を崩そうとする意図を悟る階層主は、両足を踏ん張ろうともう一つの頭からでも攻撃を繰り出そうと——下からの衝撃まで対応できず、虚空の感覚を知ったあと。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!?』

産まれて初めて空を飛ぶ感覚を体感しながら、まだいる数多くの同胞の真上から巨体で影を作って激しい衝撃を起こしながら叩き付け

られた。体勢を立て直して起き上がる白双頭竜を中心に巨大な魔法^{マジック・サークル}円が発動・展開していた。

「レア・ラーヴァテインツ！」

ハイエルフが放つ炎属性の魔法は幾つもの炎柱を発生させ、27階層の空間は炎と熱の地獄と化し、忽然と胸部に深い穴が穿った階層主を始めとした数多のモンスター達が灼熱の炎に呑み込まれ焼失していく様子は天井付近から見守り、見下ろす小規模でありながら精銳のパーティの視界に映り込み続けた。

「えげつないな。リリアの魔法。オラリオを一日も掛らないで壊滅できるだろ」

「随分な言い掛かりだ。お前が私の魔法を見てみたいと言うから付き合っただけだよ」と言うのに

「僕もたまにそう思う時はあるぞリヴェリア」

「僕も受けたらこの体は灰燼すら残さず消失すると思っていた時があったよ」

階層主との一戦後、燃え尽きる前に回収した階層主の魔石をバックパックに収納し終え

転移式魔方陣であつたという間に地上へ戻り、『幽玄の白天城』へと戻る一行は途中、都市最強の魔導師の魔法の威力の評価を零して彼女の綺麗な翡翠の柳眉を少し寄せさせた。

「今度、リリアの魔法を堪え切る防具を作ってみようかな。そしたら都市最強の防具の誕生だ」

「私を挑発しているなら、まずはお前からその鎧で試してみるか？」

「魔法勝負するなら何時でもいいぞ？」

すぐ傍で二人が魔力を高め合うその危なっかしさに「まあまあ」よせよせこんなところで」と周りから制される。

「……いずれするぞ」

「ははは、その時が楽しみだなあ」

どちらも相手の魔法には興味があつた。リヴェリアは異世界の魔法とその種類と威力はどのぐらいなのか、一誠は最強魔導師の魔法と

その威力を知りたかった。互いの魔法はどちらが上なのか興味無くはなかった故に珍しく好戦的になるリヴェリアに内心そんな一面もあるのだなと不思議さを覚えたフィンとガレス。

「そう言えばイツセーよ。主神様に頼んで『ステイタス』の更新をしたのでは？結果はどうなった？」

「……相変わらず格アビリテイの数値は0のままだよ。だけど、主神の様子がちよつとおかしかったな。信じられないものを見る目で大きく目が見開いていたぞ」

「ふむ……？イツセーに新たなスキルでも発現したか？」

「さあ、確認しようにも直ぐに『ステイタス』は施錠ロックされてみる事ができなかった」

戻ってきたら料理を盾に問いだたしてやる。そう問い詰めること言葉で付け加えたところで、自分の存在を伝える、鎧をペチペチ小さな手で叩く幼女が口を開く。

「今日の夕飯、なに？」

「もう夕飯のこと考えているのか。この食いしん坊め」

「……食いしん坊じゃない」

時刻は昼前。まだ昼食を食べても無いのに数時間後の食事を気にする彼女は、からかいの言葉で指摘され、羞恥で頬を朱色で散らばせた。だからリヴェリア達も微笑ましげに口元を緩ました。好い塩梅だ、強さを求めることは駄目ではないが人間らしい生き方を忘れては駄目だと気にしていたものの、一つの出会いで彼女の在り方が好ましい方向で変わって行く。【人形】と揶揄されていた時の昔と比べると感情が表に現れている。

「イツセー、儂はカツ丼じゃ」

「私はピザを頼む」

「手前はカレーだ！」

「ンー、悩むねえ……」

好き勝手に今夜の献立を指名、決めつけるガレス達に「俺は料理人じゃない」と突っ込みを入れるも下から好みの料理を所望する声が飛んできた。

「コロツケ、食べたい」

「オムライス、オムライスが良い」

「ジーザス、お前等もかつ」

——結局、事前に予約されていた料理を含めてブツブツと愚痴を零しながら別々に指名された注文を全部作ってやって、フィン達を苦笑いさせたその日の夕食。牛肉を使ったハンバーグという肉料理をたかりに来た神々とその眷族達に振る舞って高い太鼓判を打たせた。「このデミグラスソースとかいうもの、葡萄酒ワインを使ってるかしら?」「舌が肥えているか。その通りだ。他の肉料理にもソースとして葡萄酒ワインを使っているぐらいは知ってるだろ?」

「……. . . そうなの?」

オイツ、と本当に知らないのか首を傾げる美神に突っ込みを心中でしてしまふ一誠。ステーキだつてソースに使っている筈だと異世界の料理知識で培った情報の引き出しから出して教授するが、こうも自分の料理だけが凄いとされるとこの世界の料理はそこまで遅れているのかと疑つてしまいそうになる。

「うーん、絶対店を構えたらオラリオで一番美味しい飯屋になるなあ。イツセイ君、どうだい。「ヘルメス・ファミリア」が出資する店で構えたくないかい?」

「それ、繁盛した分の利益はヘルメスんとこに流出するだろ絶対。俺が「ヘルメス・ファミリア」の団員になったら尚更だよな?」

そうなたつた未来を思い浮かべ「あざとい」と一誠にそう言わしめる優男神の腹黒さの企みはあっさり看破されても当の男神は朗らかな笑みで「そんなことしないよ。あ、ハンバーグとライスのお代りいかな?」と軽くはぐらかす。

「せやなあ。ファイさんの眷族になつてからイツセイ。自分の料理を食べにくる神や子供も多くなつとるで」

「——それはどこかの女神が、その原因の一因であることを気付かせてやる必要があるらしいな」

銀色のフォークをグニヤリと折り、出す声に威圧が籠つて朱髪朱目の女神を睨みつける少年の視界には、一柱の女神は、蒼白になつてい

た顔のまま、だらだらとすごい勢いで汗を流している。

「イツセー、怒らないの。落ち着きなさい」

「俺は冷静なんだが原因のもう一因の主神？」

お前も他人事じゃないんだぞ、と右眼で睥睨されて少年の隣に座っていた紅髪紅眼の鍛冶神は、バツ悪そうに左眼を彼から静かに反らす。「まったく」と言い返すこともできない女神等に呆れ、折ったフォークを何事もなかったように戻して豪快にハンバーグを齧る様に食べ、ご飯も口の中に放り込む。一瞬不穏な空気が醸し出していたが直ぐに消え去り、他の面々も程なくして自分のペースを取り戻し、食事を再開する最中、質問された事を忘れず、口を開きだす。

「お代りは用意してあるから。セルフサービスで自分でしてくれ。ハンバーグは一つな」

「ああ、分かったよ。用意周到だねイツセー君」

キッチンの方へフォークで指す。お代りの了承を得た神が現れると、自分もと皿を持って立ち上がりお代りしに行く者が続出する。

「そう言えば、皆知ってたかい？」

「何をだヘルメス」

「なに、他愛のないことだけど」と一度皆に問い掛けたヘルメスは濡羽色の髪に緋眼のエルフの少女と団長に挟まれる位置で座っているディオニュソスから問われ、席に座りながら世間話をするように口する。

「イシユタルのこのころのアマゾネスが男を囲って街中を歩いているところを見掛けたのさ」

「なんや、その程度のことなら別にどうでもええ話や」

「いやいや、まだそこが注目する話じゃないから聞いてくれよ。その子供さ、突然武装したあの第一級冒険者のアマゾネスの子供に襲われたんだよ街中で」

酒の肴にすらならんとどうでもよさげに持参した酒を飲むロキに苦笑いで話しの本題を切り出した。アマゾネスの第一級冒険者、それだけで一誠の全身が震えた。アイズもアリサもとあるアマゾネスだと思いだして眼を揺らす。

「……それがなんだと？」

「いやほら、あの子供って二つ名も相まって同じ身内でも襲いかかりそうな感じなのに、本気で襲いかかってびっくりしたんだよ。まあ、他派閥に干渉したら面倒事が起こるだろうから遠目で見守っていたから驚くべき光景を見ちゃったんだ——その襲われた子供が、第一級冒険者のアマゾネスを相手に無傷で倒したのさ」

ヘルメスから普通に信じられない世間話を聞かされ、場は一瞬静まり返った。その瞬間、一誠を見つめる神と眷族がいた。

「フリユネ・ジャミールといったかそのアマゾネスの子供は。自分、その子供が誰に倒されたか覚えにあるんか？」

「いや、完全なる無名の者だ。特徴を覚えてギルドにも調べたんだが、『イシユタル・ファミア』どころかほかの『ファミア』にすら属していない無所属フッリの子供であることぐらいしかわからなかったよ」

「……いやいや、おかしいやろ。ヘルメス、旅に出過ぎて幻を見たとちやうん？ 『下級冒険者』ならともかく、無名の無所属フッリの子供が冒険者の位の中で一番高い第一級の子供を倒すなんて無理な話や。それこそ、アルカナムうちら神が神の力を行使して肉体を改造しない限り絶対に有り得へんぞ」

ロキは真正面から否定した。しかし、それが本当だと証拠とアスファイもこの目でヘルメスの隣で見ていたと告げられて、嘘ではないと事実を突き付けられた神々。

「ヘルメス、あのおっかないアマゾネスはどうやって倒されたんだ？」
「おつ、イツセー君も興味深々なんだね？ とでも不思議な攻撃だったよ。何も無いところから多種多様な武器が出て来て矢のように鋭く、そして速く放ってフリユネ・ジャミールの体を刺したんだ。オレから見てもヘファイストスが驚くような綺麗な武器だったよ」

「何も無いところから武器を放つ？」

「私でも驚く武器を持つ子供なんて、聞いたことないわね」

ヘファイストスもヘルメスから聞かされただけでは何とも言えない面持ちで、フリユネを倒した謎の男に疑問を抱く。冒険者登録されていないなければ非戦闘員として「ファミア」にいるのであろうが、新

たな謎の人物の登場に一誠はアマテラスと共に来た転生者に首だけ動かして促した。二人は適当な理由を述べてリビングキッチンから出て、扉から少し離れた場所の通路で口開く。

「冒険者でもない奴が冒険者の中で最高クラスの輩を倒せるとは思えないな。しかも武器を何も無いところ、空間から放つって魔法程度も尚更だ」

「つまり、俺みたいに神に転生された奴が貰った特典でやったと？」

「俺達とキリト達みたいに別の世界から来た奴はいる可能性はあった。だからオラリオにいても不思議じゃない。だが、問題はお前が都を乗っ取ろうとしたように騒動と異変を生じさせることだ」

身内同士で起こす騒動なら身内で片づければ問題ない。そう思う一誠であるが。

「お前が死んだ直後に不相応以上の力を得た何の力も無い一般の人間は、力に驕り万能感に浸って傍若無人な言動をする可能性は絶対ないと断言できない」

「……自分にとってイメージした最強の力を振るえる感覚と喜びは、確かに何とも言えない心地よさだったな」

この世界に来て特典の力を始めて振るった時の記憶を過らせた男が漏らした言葉を、否定する風に首を横に振るう一誠。

「俺はそれを味わう暇も無く子供の頃から修行していたがな。だからこそ、俺は不愉快に思っている」

——努力もせずあっさり強くなって自分が最強気取りをする連中を見ると虫唾が走る。

「……耳が痛い話だな」

「当然だろう。いきなり最強になられちゃ、血と汗と涙、時間と労力、経験や体験を培ってし続けた俺達は無駄なことをしていると侮辱する話だ。これ以上のない侮辱だ。だからこそ、そんな力で別の世界から来た部外者の俺らが、有名になろうが金持ちになろうが英雄になろうが絶対にしちやいけないことがあるんだよ。これは正義感でも義務感でもない。欲望赴くままに生きる獣がいれば、俺はそいつを——

俺の大切な家族まで手を出すなら殺すつもりだ」

背筋が凍る冷たさを覚える。己より年下の少年から殺気と殺意が左眼から滲み出て、感じるプレッシャーで鳥肌が立つ。別の世界から自分と同じく来た少年が元の世界でどんな生活をしていたのか見当も付かない。

「ところで話が変わるけどさ。お前、気をコントロールできるわけだけど他になにかできるわけ？」

「ああ、特典でできるように願ってある。例えば分身を作ったり、遠くの場所へ瞬間移動したりとか色々な」

「なんだよ。何であの時色んな力を使わなかったんだよ」

全力で戦っていれば戦況はもしかしたら変わっていたかもしれないのにと、この世界で久しぶりに体術や格闘術を主に戦う相手は技を出し切らずにいたことに不満を持った。愚痴を零す様に拗ねた風に言った一誠に男は。

「いや、使う必要もないほど弱い相手ばっかだったし……待て、この肩に置く手はなんだ？何故そんなスマイル顔だ？」

「——ほうほう、使う必要もないほど弱い相手とは、俺もその類だったから使わなかったとは。これはアレだな。俺の強さの真髓をお前の骨の髓まで叩き込む必要があるようだ」

「ま、待てッ。お前は俺より強いということは体で覚えたからだだだだっ!?肩に力を入れるな! って、どこに連れていくっ! 引つ張るなっ、俺をゴミの様に掴んだまま引つ張るなああああああああッ!」

廊下から聞こえる男の悲鳴に、一応気になったが、気にするほどのことでもないだろうとあっさり意識を反らして夕食に集中する神々であった。その後、片方の肌が艶々して、片方の肌がゲツソリと疲れ切った表情で戻ってきた二人。

「……イッサー、何してたの二人で」

「楽しいこと。ああ、ヘルメス。さっきの話の男の特徴、俺達にも教えてくれ。興味湧いた」

「もしかしてイッサー君、そっちの気があるんじゃない……」

「——アスファイ、今度から一人で来てくれるか？ヘルメスなんて神

を出入り禁止するから」

「ごめんなさいっ! (ジャンピング土下座)」

「何て凄い土下座を……っ (極東三神)」

出入り禁止されては異世界の料理を食べられなくなる。その昔、とある武神が謝っていた姿勢ポーズをまねてして見せたその行為は、極東の三大派閥の主神を慄かせたのだった。だが、一誠は呆れた。

「そこ、反応するところか?」

褐色肌の足が大股で通路を歩くその歩調は苛立っていることが表していた。その足に装着しているのは金銀を使った装飾品の足輪の他に、腕輪、胸飾り、耳飾り、サークル冠。衣料と呼べるものは腰帯と腰布、憤りで鋭く動かす足に呼応して腕を振るう際揺れる豊満な乳房を隠す僅かな帯しかない。瑞々しい姿態にくびれた腰を始め、男を誘惑する褐色の肌を惜しみなく晒す姿は、国を滅ぼすとされる傾国の美女——それをも上回る美貌を誇っている女神の今の顔は怒りで歪んでいた。時折擦れ違う眷族を怯えさせ、目的の最上階の部屋に訪れると扉を壊さん勢いで開け放って——糸纏わず生まれた格好の愛らしい少女から肉感的な女性達を囲って肉欲を貪っている真つ最中の三人の男へ張り叫んだ。

「おい! フリユネが使い物にならなくなる寸前だったぞ! どうしてあいつに攻撃をした!」

「……ああ? んなもん、決まってるだろ」

激しく水音を立たせた後、ヒューマンの女性が甲高い色が籠った嬌声を上げてぐったりと倒れ込んだ。全身で息をしてこれ以上は堪え切れないと気配を醸し出す女性の気持ちなど知ったるかの勢いで再度激しい行為に及んだ。

「この【ファミリア】に不細工はいらねえんだ。俺達を満足させる肉欲をそそらせてくれる女だけいればそれでいいんだ」

「ふざけるなっ、あいつを倒せばお前達の存在だって知られるのだぞ。もしもあの女神の耳に入ったら——」

「うっせねえな。それ以上喚けばお前を先に殺すぞイシユタル」

金色に波紋が浮かぶ空間から神秘的な剣が顔を出して、女神の首筋に突き付けた。

「フレイヤ・ファミリア」の打倒に力を貸す代わりに、俺の要求を全て呑み全ての行動に目を瞑る契約で眷族になってやったんだ」

「大体、俺達のような人間が三人も集まれば、オラリオ最強なのに何時まで手をこまねいているんだよ？ さっさとあの最強派閥と戦おうぜ」

「そしたら俺はまっさきにフレイヤを襲ってやるぜ？ イシユタルより良い喘ぎ声で啼いてくれそうだ」

「あ、ずりい俺が先だぞ！」 「何言ってるんだ。同時に相手すれば同じだろ。始めは俺からだけだな」「オイ」等と好き勝手に言いながら女達の体を貪る行為を一切やめようとしな。相手が壊れようとお構いなしに己の性欲を満たす使い勝手の良い捌け口の道具として楽しみながらこんなことも言う。

「そういや、リヴェリアってエルフもいるんだっけ？ そろそろこの女共の相手には飽きてきたぞ」

「ああ、絶世の美女だ。まだ小さいけどアイズって金髪の幼女も成長すれば美少女になるぜ」

「そいつはいい！ 小さい体から調教しまくって俺達の肉奴隷ペットにしてやろう！」

「で、他にはどんな女や女神がいる？」 「ああ、それはだな。酒場にも」 「ははっ、犯し甲斐が漲ってきたぜ！」

主神である自分の存在を完全に無視して眷族達を犯す三人の男達に奥歯を噛み締める。当初の出会いの時、フリユネをサツ一対一で戦わせ、Lv. 5の団長を軽く倒しのけたその実力を目を付けたのが間違いだっただのか。「ファミリア」の非戦闘員扱いとしてギルドにすら秘匿し、準備が整うまで好き勝手にさせて目も瞑っていたが、あまりにも傍若無人な振る舞いをし続けられて銀髪の女神と同じ美の神、イシユタルは堪忍袋の緒が切れかかっている。

「(こいつら……ッ！)」

眷族に入れたのが間違いだっただか、出会った時点でこんなことになると知っていれば……いや、どれだけ考え否定や拒絶しようと

この三人は「イシユタル・ファミリア」に居座る気満々でいた。強い雄に惹かれやすい眷族達も無尽蔵の体力と精力の前では忠実な雌になり下がるばかりだ。それでも極一部、彼らの言動に忌避して肌を重ねない眷族がいることは救いか。元は己の部屋だった場所を自分の部屋のように占領して毎日朝から晩まで飽き足らず眷族を犯し続ける三人から踵返して最上階の部屋を出た。

「いいだろう。だったら今直ぐにでもフレイヤに抗争を仕掛けてやる。今まで楽しんだ分をキツチリと払ってもらおうぞガキ共ッ」



秋季は終わりを迎える直前。「ヘルメス・ファミリア」団長アス・ファイ・アル・アンドロメダはお暇を貰って腕輪の転移式魔法で『幽玄の白天城』の扉の前に一っ飛びを果たす。彼女の背中には道具アイテムを製作するための多種多彩で大量の材料が詰まったバックパックが背負っている。主神ヘルメスの宝物として重宝している空飛ぶ魔法の絨毯やこの相手と通信を交信、指定場所へ歩くことも無く魔法による瞬間移動テレポルトで向かうことができる腕輪は、『神秘』の発展アビリティを持つアスファイでも製作することはできない優れ物であることを認めている。彼の者の技術を学び、更なる可能性を見出そうと堅牢そうな扉に来訪者が来た合図で中にいるだろう者達を呼んだ。

「すまないな。イツセーは今手が離せないと言われて迎えに行けなくて」
「い、いえ。こちらも貴女に出迎えさせてしまい申し訳ない気持ちです」

「そう畏まるな。同じ冒険者だ」

少女を出迎えた都市最強魔導師のハイエルフの女性。最強派閥の副団長自ら城の中に招き入れられて心臓が飛び出しそうになったほど驚いた。大きな城の中は静まり返って無人の家なのではないかと思いながら進んで作業場に案内してもらおう最中。

「イツセーは何をしているのですか？」

「極東で入手した大麦と言う穀物で作る酒の製造に没頭中だ」

「お、お酒まで作ることができのですか？」

「さあな。ここしばらくダンジョンに行かないがアイズの相手をして籠っている事が多い。四苦八苦でもしているだろう。素人がしたこともない酒造など簡単にできる筈も無いからな」

玄関ホールからまっすぐ歩いて直ぐアスフィの手荷物を作業部屋の前に置き、一誠がいる同じ階の部屋へと赴く。

「ここだ」

「……前来た時は扉なんてなかった筈ですが」

「この城はイツセーが創った。新たに増設することなど訳も無いのだろうさ」

作業部屋から数M離れた壁に見覚えのない両開きの扉にこの城の構造は一体どうなっているのだろうと疑心を抱いて、中に入ればアスフィの碧眼は驚愕で見開いた。

扉の向こうは工場と呼んでも過言ではない、広大な空間に身の丈を超える何らかの装置や管が壁や天井付近、床にまで埋まっていると思わせる巨大な釜が設置されている。下に降りる階段があり自分達は高い位置から見下ろせる所に立っていると知った後、生まれてからもオラリオに来てからもこれほどの複雑で精密的な言葉では言い表せない何かを独りで作ったのか、どうしてここまで作られるのか心底愕然の衝撃を受けた少女は碧眼をリヴェリアに言いたげで視線を送る。隣のハイエルフはその視線に込められた意図を察して口を開いた。

「私も初めて見た時は驚かされた。あいつのスキルを考慮してもこれは逸脱していると思う」

「スキル……？」

「一時的に『神秘』の発展アビリティを発現できるスキルだ。ここ最近そういうスキルを得たらしくてな。それを知ってこの工場を作ったのさイツセーは」

自分と同じ『神秘』のアビリティを発現していた。つまり同じ土俵

に立ったと思えばあっさり抜かれていたことになる。これほど大規模な工場をたった一人で……。

「はは、競い合う前に負けた気分です。凄過ぎですイツセーは」

失笑するアスファイに同意と小さく苦笑を浮かべるリヴェリアの耳に突如聞こえてくる会話。

「——も、もう一杯飲ませてくれイツセーッ！」

「——駄目だ。残りはアマテラス達に飲んでもらう」

何やら騒々しくなった工場の向こうからチラリと真紅と黒、金と銀が見え隠れしつつ話声がどんどん大きく近づいてくる。そして、上階にいる二人の目の前に件の少年と最上級鍛冶師マスター・スミスの少女に金髪金眼と銀髪青眼の剣士の少女がやってきた。少年の肩に何やら小樽を担いでいて、その樽を物欲しそうに紅隻眼の視線を熱く送っている少女。「ん？あつ、いらっしやい。悪かったなりリア、代わりに出迎えさせちゃって」

「それはいいがイツセー。この場に連れてきたが構わなかったか」

「構わない。見られたって直ぐに真似して創れるようなものじゃない。壊されたら堪ったもんじやないがな」

「あの、その樽は一体……?」

アスファイの問いに「酒だ」と短く答えた。

「聞いているかどうか知らないけど、大麦と言う穀物を原料に使って完成させた。喉越しが良くてキレのある味かどうか分からないから……」

「イツセー……もう一杯だけ飲ませてくれえ」

「初めて完成させた酒を味見役として椿に飲んでもらったら気に入ってしまった」

「飲ませてやれ。目も当てられん」

少年の胴体に手足を巻き付け、しがみついて未練がましく強請る鍛冶師スミスに最強の魔導士も呆れたのだが。それ以上に一誠の方が呆れ顔で零した。

「十杯分も飲ませたんだぞこれでも」

「……この場にロキとガレスもないだけ幸運か」

酒豪の酒好きの女神やドワーフも加われば完成した酒がその日の内に飲み干されていただろう。比喩抜きで現実的にだ。だからリヴェリアの零した言葉には深く同意と力強く頷く一誠もその時の光景を瞼の裏に浮かべたくもなかった。

「最後の一杯だけでもいい、飲ませてやれ。後でヘソを曲げられては神へファイストスも困るであろう」

「……椿、最後だぞ」

「うむっ！」

どこからともなく取り出す向こうまで透き通って見える筒に取っ手をつけただけの、飾り気のない硝子の杯を意気揚々と受け取る椿は、樽の蓋を開けた瞬間零れ出る琥珀色の酒を零さないように空の杯に注ぎ込む。硝子の杯の縁まで入れ終えると白い雲のような泡がぶちぶちと音を立てるそれごと、彼女は思いつきりゴクゴクと音を立たせて飲み始める。

「——プハアッ！美味いっ！ドワーフの火酒や他の酒とは異なってるわこれはっ！冷やされた酒はこうも美味しいなど手前は知らんかった！」

たった一回で上唇に泡を付けたまま飲み干しては、心から美味しそうに眼を細めて感想を述べる。彼女をそこまで言わしめる酒は上質であることを示すそれは異世界の酒なのだと後に知るリヴェリアとアイズ。

「さて、アイズとアリサ。お前は勉強だ。椿、もう満足したのだからイツセーにこれ以上困らせるな。二度と酒を飲ませてくれなくなるぞ」

場の空気を読み、一誠とアスフィの時間を邪魔させない配慮で指示する。それを察して感謝の念を抱き、一誠はアスフィに付き合ってもらい、先に用件を済ませたいからと東部や北部へ向かった。そして四人の主神と出会い、転生者の男に約束通り最初に穀物で作った新たな酒ビール（ラガー）を飲ませたことで。

「くうっ……！久々のビールがこんなに凄く美味しく感じる……っ！」

「清酒と異なる方法で作るなんて凄い。もつと大麦を寄付するから私達の為に作ってくれない？」

「イツセーちゃん、大量の大麦が必要じゃない？」「ファミリア」からビールってお酒をたくさん作れるだけの大麦を用意するから受け取って？」

膨大な量の大麦を得る予期もしなかった結果に、ビールの貯蔵槽を増やさなければいけなくなったのだった。

「凄い評判でしたね。神々から直接太鼓判を打たせた酒は初めて完成した物だと言うのに」

「これでもかなり苦勞したほうだからな。だけど、俺なんかよりソーマって神に造って貰った方がもつと美味しくなる筈なんだけどなあ」「神ソーマ、ですか・・・あまり知れ渡ってない名の神ですね。オラリオに永住していますが」

話をしながら一誠は少女と横長のテーブルを挟んで道具作りに没頭していた。『幽玄の白天城』に戻り、作業部屋で彼女と共に互いの道具を作る作業を見せ合いながら手を動かし続ける。

「(彼の素材に使って創っているのは・・・カード?)」

手の平に収まる賭け事ギャンブルで良く使用される遊具の一つに意匠を凝らしている。幾何学的な六芒星の魔法マジックサークル円を札に描く時間は3分も費やし、それを描き続けていく目の前の少年に思わず声を掛けてしまった。

「そのカードは一体何に使うんですか」

「主に使うとすれば収納だ」

「収納?」

カードと収納の関係が上手く結べれない。あんな小さなカードに収納なんて、と訝しがるアスフィの目の前でその証明をしてやろうと一誠の仕草に注目する。この部屋に置いてあった万能薬エリクサーをカードの上に置いた。その後は彼の口から「アベアット」と紡ぐとエリクサーが光に包まれカードの絵柄となってしまった。

「アベアット」

似た言葉を直ぐに発するとカードから発する光からエリクサーが出てきた。アスファイは大いに不思議がって「ど、どうなって……」と碧眼の瞳を丸くする。

「見たとおり、このカードで収納するのさ。収納された物は半永久的に朽ちることも無く保存ができる。生物も例外なくさ」

「それは、魔力の有無も関係なく？」

「ああ、この魔方阵に魔力を込めてあるから子供でも扱える。収納できるのは精々一つだけとこのカードに触れた物だけだったり、収納できないのは生きた生物や人間だ。使い勝手は微妙なところだろうけど、これでもっと手軽に荷物を運べれる様になる」

そのカードを束になるまで作り続ける気である一誠はアスファイの手元を見つめる。興味深々の眼差しを送って見つめる。

「アスファイのは何を作ってるんだ？」

「ええ、これは……」

同時刻——南のメインストリート界限、繁華街のほぼ中心にその建物は建っている。神殿にも似た荘厳な造りの巨大な屋敷。盛り場である繁華街の中にあつて庭を始めとした広い敷地と高い四壁を有するその光景は巨富と権力、そして栄誉の表れでもあつた。南と南東の大通りに挟まれた第五区画、年北部に居を構える「ロキ・ファミリア」本拠、『黄昏の館』と対をなす位置にあるその館の名は『戦いの野』。都市最大派閥の双頭である「フレイヤ・ファミリア」、その本拠が——白昼堂々と燃え上がって、何者かによつて襲撃されている真つ最中だった。主神と团长不在中でも第一級冒険者は片手で数え切れない程いる他、銀髪の美神に見初められた精鋭達も「ロキ・ファミリア」に負けない程の人数がいる。が、しかし。たったの三人によつて第一級冒険者を除いて殆ど全滅状態となっていた。燃焼する本拠に雪崩れ込んでくるは褐色肌のアマゾネス達。必死に抵抗する僅かな美神の眷族等。

「貴様等ツ……！」

「我等「フレイヤ・ファミリア」に抗争仕掛けてタダで済むと思うな

よっ」

四つ子の小人族^{バルウム}、エルフ、ダークエルフ、猫^{キャットピープル}人の第一級冒険者。彼らだけが、自分達だけが「フレイヤ・ファミリア」の最後の要と眼前の敵対する「ファミリア」の三人の団員に飛び掛かった。対して嘲笑う口端を釣り上げて、攻撃の構えをしたその数十秒後……。

「はっ、あっけなっ！これが最強派閥の冒険者の実力かよ！」
「俺達が強過ぎただけだって。それよりフレイヤは本拠^{ホーム}にいないようだぜ？」

「あのバカでかい塔にいるんだよ。目的も達成したことだし、俺達もこの街の目ぼしい女共を捕まえに行かね？」

圧倒的な実力で無様に地面へ血塗れや血みどろの最強の冒険者を平伏させた無名の相手達は、崩れ落ちる最大派閥の本拠^{ホーム}だった建物を後にして欲望の赴くままの獣が動き出す。

『と、いうことだ。闇派閥^{イルヴァイス}か、彼の「ファミリア」と敵対している「ファミリア」なのかもしれない。まだ「フレイヤ・ファミリア」の情報の詳細は把握していないけど収集している最中だが、本拠^{ホーム}が炎上しているからただ事ではないと推測している。未だに信じられないけれどね』
「……まあ、フレイヤの傍にはオツタルがいるんだし問題はないと思うがそれでも警戒するんだろ？リリア達は？」

『ああ、緊急事態だからこっちに来てもらってる。アイズとアリサもね。一応同じ派閥の団員としてこういう状況に関してこちらに控えてもらわないとダメだからさ』

「そっか、一つ警告する。一応気をつけろよ」
『ふふ、イツセーに心配をしてもらえるなんて明日は槍の雨が降るかな？』

そう言われた後、フィンに通信を切られる。話しが終えるまで待っていたアスフィは申し訳なさそうに口を開いた。

「イツセー、今の話を聞いてホームに戻らないとダメかもしれません」
「ん、そうだな。俺もそうした方がいいと思う。相手が闇派閥^{イルヴァイス}なら「フレイヤ・ファミリア」も問題ないだろうが、まさかホームを全焼させ

られるとはな」

「ええ、彼の美神に喧嘩を売る様な【ファミリア】は殆どいませんから私も驚きです。……では」

街中の騒乱を聞き付け駆けつける冒険者達。この騒ぎに乗じて闇派閥イルヴェイスが強襲している可能性を考慮してギルドと連携する【ファミリア】は出動した。だが……肝心の闇派閥イルヴェイスの姿が見当たらない。「どういうこと？連中の作業じゃないの？」

「わかりません。ですが、こうも立て続け騒ぎが起きているのに姿を現さないのは不自然です」

「とにかく火を消そうっ」

【アストレア・ファミリア】も街の治安を守るために走った。そして、正義と秩序を司る神の眷族の前に不吉な影が現れた。

「おー、ここにもいたぜ」

「だな、釣り甲斐があるってもんだ」

「逃がさないようにしようぜ。逃げた女は犯し甲斐があるんだからよ」

ゲスな笑みを浮かべ、近づく三人の少年。彼女等は直ぐにこの騒ぎの元凶だと察して臨戦態勢の構えに入った――。

「闇派閥イルヴェイスかなキリト君」

「多分、あの派閥以外こんなことしないだろう」

逆に出しゃばらないよう行動を控えている【アルテミス・ファミリア】は街の異変に気付き、成り行きを見守る姿勢でいる。であるが、それを良しとしない異世界から来たヒーローの異邦人達が抗議をする。「なあ！街で何か起きているなら俺達も助けに行こうぜ！」

「ダメだ。勝手なことをすれば他の【ファミリア】の邪魔になる。それに俺達はただの冒険者じゃないんだ。注目を浴びるような真似はできれば避けたい」

「自分の身が可愛いから助けにも行きたくもねえってか」

「お前達のために言っている。それにまだイツセーから姿をごまかす

道具だって貰っていない奴まで人がいる前に出てみる。更に混乱させるだけだ」

「では、団長の君のような姿をしている我々なら表に出ても構わないのだね？」

「いい意味でも悪い意味でも注目しますよ。駆け出しの冒険者に見合わない力を発揮したら……ってお前、勝手に行くな爆豪！」

「うるせえ！誰がてめえの指示に従うかってんだ！」

「悪いけど、俺達はヒーローを目指しているんだ。異世界だろうと危険な目に遭っている人がいるなら助けに行かなくちゃヒーローになれないんだ」

「おうよー！」

キリトの説得も虚しく、口の悪い異邦人を皮きりに異形の姿のままの異邦人達までホームを後に騒乱の中心の街へ駆けて行ってしまった。

「……ダメか」

「どうしよう」

「どうするも何も……俺達も行くしかないだろ。連れ戻すんじゃないって加勢にな」

「……うん！」

とある酒場の中では、「アストレア・ファミリア」と一戦交え終えた三人の少年が押し掛け、数人の女性の店員を捕縛した後に怒りで殴り掛る恰幅の良いドワーフの女性を圧倒した。

「あなた達、絶対に後悔しますよ……っ」

「それどころか俺達はお前達に絶頂という快楽を教え込んでやるぜ」

店から出てすぐ手の平から火の球を発現して店員達の目の前で、店を豪華の炎に呑み込ませた。中にまだドワーフの女性がいるにも拘わらずだ。その行為に目を見開く店員の口から悲鳴の叫びが三人と共に転移式魔方阵で消え失せた。そして次に三人が現れたのは「口キ・ファミリア」のホーム。丁度フィンが一誠との通話を切った直後であった。まず行動したのがホームの破壊。これで冒険者達をあぶり出した矢先から攻撃を仕掛け、目的の人物に対しては動きを封じる

以外は行動不能に陥れる。そうしていると直ぐに小人族パルウムの勇者が槍を本気で振るってきた。

「おっと！」

が、狙った対象には自動オートだったのか見えない壁に阻まれて槍の穂先が貫くこともできず防がれた。これが一誠が言っていた。最強の能力なのだろうか。距離を置いてガレスとリヴェリア、アイズとアリサを筆頭に集まった団員達の前に立つ。

「ははは、効かねえなチビの攻撃なんざ」

「さて、それはどうだろうね。それと教えてもらえるかな？ どうして僕等に攻撃を仕掛けてきたのかを」

「ああ〜？ そんなもん、決まってるだろ？——目ぼしい女共を捕まえて性奴隷にするためだ」

邪な目的を告げた少年に対してフィンから温情が消え失せた。仲間を奪い蔑にする敵に容赦する以前に二つ名に懸けて生死問わず倒さなければならぬと判断した。

「男共には用はない。女だけよこせ」

「断るよ。僕の大切な仲間と家族に手出しはさせない」

「雑魚共が調子乗ると恥ずかしい目にあうぜ？」

「試すかい。僕等が雑魚がどうか」

「戦いは面倒だから遠慮するぜ。もうこつちの用件は終わったからな」

不敵な笑みを浮かべる男を見つめるフィンの耳に女性団員達の悲鳴が聞こえた。振り返れば虚空に生じる穴から出ている鎖に身体を縛られ、彼女達は穴の中に引きずり込まれ消えていった。

「リヴェリア、アイズ、アリサ！」

彼女達まで穴の中へ消えてゆき、女性だけ狙った犯行から救おうと行動に移ったが一步遅かった。残されたフィン達男性冒険者は何時の間にか空高く浮いている三人の男達に対する敵意と怒りで得物を握る手に力を籠める。

「そんなじゃ、女達は責任を持って可愛がってやるよ」

「じゃあな、無能な勇者さんよ」

「待てっ！」

「——と、その前に邪魔な連中はこうだ」

双眸を妖しく煌めかせた少年。その煌めく光を見たフィン達は次に絶句する。手足が、身体が無機質な石に覆われて行く。

「石化じゃと!?ぐっ……!」

「ギヤははっ!第一級冒険者も案外チヨロイな!次オツタルを倒したら俺達がオラリオどころか世界最強の人間になるぜ!」

見下して嘲笑う男の言葉に次々と石像と化する団員達を尻目に、首まで進む石化の呪いに対してフィンはいき切った。

「君達は気付いてないようだね。僕達よりも強い冒険者は何もオツタルだけじゃないよ」

「お主ら……踏んではならぬ竜の尾を踏んで逆鱗に触れたぞい。この後のお主らの事を思うと不憫でならんわ」

ニツと大胆不敵な笑みを浮かべた状態でフィンとガレスの石像と化した。結局こいつ等は何が言いたかった?顔を見合わせる三人は肩を竦めて次の標的へと向かった——のを怒りと悔恨で睨みつける糸目で朱色の神の女神が腕輪を操作して……龍に通信を入れた。

「イツセー、お願いがあるんや」



「……マジかよお前等」

コンコン、と軽く石像と化した彼等を小突く。反応は当然のごとく無い。どうしてこうなっているのか、連絡をしたロキから説明を受け直ぐ来たらこの状況。この場にいなかったことに若干後悔したが後の祭りである。フィン達に対する罪悪感の念を向けた一誠に石化を免れた団員達を背後に元主神が乞うた。

「イツセー……フィン達を元に戻せれん……?」

珍しく弱弱しい声音で最後の一縷を藁に縋る気持ちのロキはそう訊いた。真剣な眼差しでフィン達の状態をくまなく調べて訊ねた。

「ロキから見てフィン達の石化はどんな感じになった?」

「どこの子供かは知らんけど、こう目からピカアツって光つたのを

見た途端に石になってしもうたんや」

「目から光……邪眼の類か」

「それって魔法なん？」

訊いたことが無い単語に問うロキに肯定と頷きながら説明する、

「邪眼つてのは対象を石にするモンスターが目玉や能力を差して言う。まあ、ぶっちゃけ言えば魔法や異能、呪いの類だな」

「それで、石になったフィン達は？まだうちの刻んだ『恩恵』が消えたらんから不思議でしやあないんや」

「なら、文字通り生きているぞ。石化は対象の動きを封じるか封印する呪いのようなものでな。その呪いを解けば元通りになる」

右手に黒と紫が入り乱れた、血のように真っ赤な宝玉がある籠手を魔力で具現化して「久々に使うな」と思いつつ———フィンの石像に触れた。

「こんな風にな」

籠手を装着した手で触れてから一拍遅れて、ビシツと石に亀裂が入った。その個所を中心に石が蜘蛛の巣の如く罅割れて全身にまで行きわたると呪いの石化から解き放たれたフィンが生身の姿で立ち尽くす。

「フ、フィッソッ！」

「……ロキ？いや、僕は石化にされていたんじゃ」

「全く、言った傍からやられるなんて阿呆か」

「イツセー？そうか、君が助けてくれたんだね」

ガレスの石化の呪いも解除してフィン同様に救いだす一誠を見ながら状況を把握した。主力の二人の復活に団員達は声を挙げて喜び、ロキと一緒に取り囲んだ。

「悪いけど解除してやれるのはお前らだけな。なんかフレイヤを捕まえに行ったらしいし。二人を石化にしたんならオツタルも危ういだろうから」

「……ロキ」

「構わへん。まだ生きておるなら優先的に連れ去られたリヴェリア達を連れ戻して来て欲しい！」

「とはいっても石化を長い間しておくのは危険だ。魂が何時までも肉体に定着していると限らないから」

「フィン、ガレス。ソツコーで救いに行くんや！あとはうちらが何とかする！」

と、そう言うわけだからよろしく。フィンの指摘に二人の腕を掴んで背中から魔法の翼を生やし、中央広場セントラルパークにある摩天楼施設『バベルの塔』の最上階まで飛翔した。そして三人が目にした光景は——一誠の予想通り、何かを掴みかからんとしている石像と化したオツタルが静寂の雰囲気醸し出していた。流星のフィンとガレスは目を丸くせずにはいられなかった。オラリオの冒険者で唯一Lv.7を誇る武人の敗北を目の当たりにすることなど絶対にあり得ないのだから。「オツタルまでやられただなんて……イツセー、彼等の事何か知っているかい？」

「会ったこともない奴だが、心当たりはある。俺の知り合いじゃないと言わせてもらうけどな」

「お主が住んでおった異世界でもこんなことできるのか？」

「うん、できるぞ」

恐ろしい世界だ、気持ちを揃って抱く二人の心情を知らないまま、大きく割られている壁張りの硝子を潜ってオツタルの石化の呪いを二人と同じやり方で解除する。解放された猪人ポアズの獣人は足元に石の破片を落しながらガレスとフィン、一誠がいる様子を視界に入れ呪いを解いたことだけ教えられた。すると、彼は一誠に向け短く体を曲げて頭を垂らした。

「……感謝する」

「フレイヤ・ファミリア」の団長からの感謝の言葉はとても軽くない。ましてや頭も下げての感謝の言葉だ。生涯誰かにそうすることは主神以外しないだろうオツタルの言動から改めて訊かれた。

「フレイヤ様がどこぞの痴れ者の手によって浚われた。奴らの居場所を知っているなら教えてもらおう」

「生憎、僕等も仲間を連れ去られているんだ。君のように石にされてね」

「じゃから儂等もお主と同じなんじゃよ」

三人とも居場所は知らない。ただ一人、ジツと南方へ目を向ける一誠を除いて。それに疑問視するオツタルが問いだたす。

「お前は知らないのか」

「フレイヤの気は感じられないから分からないが……彼女とリヴェリア達と一緒に見つけることはできそうだな」

「どこにいるのか、もう突き止めたのかい？」

確信したような一誠の言葉に真剣な眼差しを向けるフィンとガレス。オツタルもどうなのだと無言の視線を送ると唐突に三人は尋ねられた。

「南の方角で他派閥はあるか？」

「フレイヤ・ファミリア」の他だと「ガネーシヤ・ファミリア」に「イシュタル・ファミリア」、他にも様々な「ファミリア」があるよ」

「んじゃあ……そのどこかの「ファミリア」の中にリヴェリア達はあるな。あいつらの気を感じられる」

「なんじゃと？ 気というなにかで見つける事が出来るのか。しかもここから」

「論より証拠、一見に如かずと言うことで南に行こう」

三人の足場を魔方阵で用意し、壁張りの窓ガラスから数百Mもある塔から飛び降りる一誠に続き、足場を利用して降りるフィン達も数十秒で広場に降り立った。そして先に駆け出している一誠の隣まで走り肩を並べて南に向かう最中。得物を持っていないオツタルの真横に展開した魔方阵から武器の柄が飛び出してきた。

『アダマンダイト』製の太剣だ、受け取れ」

説明を受け無言で手にするオツタルが更に速度を上げて一誠達を追い越す。Lv. 7の足の速さは伊達ではない。全力で跳躍した彼はあつという間に姿が小さくなるほど移動しておっかなびつくりで届いているか分からないが叫び散らした。

「ちよっ、どこの「ファミリア」にいるのか分からないのに勝手に行くな！」

「いや、多分他の団員達を呼びに行ったと思うよ」

「あやつのホームも南方にあるからの。儂等はリヴェリア達を捕らえている【ファミリア】のところに行こう。辿り着いたら居場所を何らかの方法で伝えればよい」

ガレスの提案でそうする一誠達も速度を上げて駆ける。その途中、騒ぎに乗じて街に混乱と混沌を齎す闇派閥イルヴイスと遭遇し、フィンを指名する謎の女団員を完璧に無視する。

「つて、いいのかよ？俺一人でも大丈夫だぞ」

「ここは申し訳ないけど【ガネーシャ・ファミリア】に任せるよ」

「街の治安も蔑にできんが、昔から付き合いのある頭でつかちなエルフを取り戻さんとな」

そう言いながら辿り着いた場所は、閑古鳥が鳴いてる様な戸締りしている店ばかり歓楽街で構える【ファミリア】のホーム。周辺一帯で間違いなく最も巨大な建物——宮殿だ。広大な砂漠にそびえる王宮を彷彿させるほどの威容。金に輝く外装はとにかく豪華だった。円形の前庭を通って宮殿に近づけば、正面の大扉の上に見えるのは、他派閥ファミリアのエンブレム。履紗ヴェールを被り顔の上半分を隠す裸体の女性……娼婦が刻まれた徽章を見て、フィンは目を丸くする。

「まさか、【イシユタル・ファミリア】のホームだとは……」

「え、それって……フリユネがいる派閥ってことだよな」

「奴と出くわしたら儂が相手をしてやるから安心せい」

嫌そうな顔をありありと浮かべる一誠に「オツタルにもここであると教えんと」と催促した。後ろで魔方阵を展開し、天を指す光柱を発した。これでオツタル達にも気付き、ここを目指しにやってくるだろうと意図を察して称賛する。

「君の魔法は本当に便利だね」

「それで儂等は何度も驚かされ助けられたことか」

気を取り直してホームを見上げる。

「さて、イツセー。皆がいるところはどこだい。上かな」

「それともこの歓楽街のどこかか？」

二人からの質問に対し指で示す。宮殿の——下に。

冒険譚19

地下へ通ずる場所を知るアマゾネスを探す三人。白昼堂々と他派閥のホームの中に侵入して玄関ホールに足を踏み入れた。

「誰もいないようだね」

「いないなら誘き寄せればいいだけだ」

適当な場所へ気弾を放っては破壊活動を始め出す一誠。そうしていれば騒ぎを駆け付けてきた大勢のアマゾネス達が獲物を三人に突き付けて取り囲んだ。

「ロキ・ファミリア」!?何しに来た!」

「単刀直入で言うよ。この派閥にいる三人組の男達がどこにいるのかを」

「っ……言えるか!」

「そうか。じゃあ、お前らの命日だな。このホーム諸共。喋ってくれらるまで破壊の限りを尽くさせてもらおう」

フィンの乞いを拒絶したアマゾネスの言葉は、他のアマゾネスの心意であることを認識して幾重の魔方陣を展開した一誠の魔法攻撃によるフルバースト。アマゾネスにも当ててホームの全てを蹂躪し尽くさんとする男を止めようとするアマゾネス達。が、容赦のない拳と蹴りは確実に相手の骨を砕く勢いで返り討ちにしていく。

「何の騒ぎだっ!」

褐色肌の女神が玄関ホールに現れ、彼女の横の壁に魔法がぶつかったことで騒ぎの原因を察した。見下ろせば【ロキ・ファミリア】の幹部二人がいて女神は引きつった顔をした。

「ロキの眷族……抗争をしに来たというのかっ」

「神イシュタル。三人組の男がここにしていることが分かっている。僕達の仲間を連れ去り、神フレイヤも拉致した。後に【フレイヤ・ファミリア】がここに攻め込んでくるだろう。あなたを捕まえるために」

「っ——」

「彼女達を連れ去った三人の居場所を、地下に通ずる場所を教えてください。さもなければ、このホームを壊滅させてまで僕たちは探すつもり

だ」

フィンの話は冗談でもからかいでもない。隣にいる男が魔力で天井にめがけて砲撃を行い、それから魔王ごとくの破壊活動を繰り返した。どんどん破壊されていくホームにイシユタルは堪え切れず叫び散らした。

「止めろ、教えるっ！奴らの居場所を教えるから私のホームをこれ以上破壊しないでくれ！」

【イシユタル・ファミリア】に隠し扉が存在していた。そこを通過して地下への階段を下ると階段の終点から道なりに進むと、そこは一階の玄関ホールと同様というおうかという広大な地下空間が広がっていた。柱廊のごとく林立する太く長い柱。一〇M以上もの遥か頭上の天井を支える他、柱には怪しい紫光を放つ魔石灯が不規則に括りつけられていた。大規模の地下空間……そこに三つの巨大なキングサイズのベッドと、一人残らず生まれたままの格好で乳房の先端と下腹部にハートを模した入れ墨の様なものを付けられている女性達がいた。皆、三人の男達によって捕まりここへ連れ去られたという共通点を持っている。中にはフレイヤ以外の女神達までいる。特に名を挙げれば——デメテル、ヘファイストスである。

入れ墨は魔法か呪いの類か定かではないがそれを施されて以来、本人の意思とは関係なく理性が失いかげそうな断続的に感じさせられる抗えない快感に苛まれ、同性しか見せていない裸体を無理矢理好きでも無い男達に晒されて屈辱と羞恥で顔が紅潮に染まっている。そんな彼女等にいやらしい笑みを浮かべ、全裸となって女達の体を一人一人いやらしい手つきで触ったり、揉んだり、舐めたりとしていくがお楽しみは最後に取っておこうと純潔は奪わなかった。しかし卑劣な物を幾人かの少女の口に銜えさせて、出した物を吐くことも飲み込

むことも許さず放置。女神達には乳房から始め、腹部、背中、臀部、太股を触れ肌触りを堪能する。それを見ている女性達は悲哀と憤怒の形相で見つめることしかできない。動きを封じられ、満足に声も発することもできなくされているのだ。ただ、見ているだけしかできない現状の中には涙を流す女性団員がいた。そしてその後、男達に選ばれた女性達はそれぞれベッドの脇に立たせられ強姦を見せつけられる。「あのフレイヤの身体をこの手で好き放題できるなんて夢みたいだぜ！」

「こっちはこっちで驚きだぜ？なんたつてこの世界には存在しないはずのアリサがいるんだからな。調教のし甲斐がある！」

「へへへっ！巨乳じゃなかったのは残念だったけど、結構綺麗な形で中々大きいじゃないか？どうだ、触れられるだけでかなり気持ちいい刺激が全身に伝わるだろ？そういう魔法をお前達に掛けてあるから感じている筈だぜ。しかも快樂と快感を共感できる魔法だ」

男達はそれぞれ選んだ女をベッドに寝かせ女体蹂躪し始める。ハイエルフの女性の肩がビクビクと震え、顔が更に真っ赤に染まって発汗を流し——翡翠の長髪を激しく揺らすほど一際大きく背中を仰け反らせる。涙を流し心の中で少年の顔を思い浮かべ助けを求める幼女達。睨みだけで人を殺しかねない程の殺意と殺気を向ける美の女神。

「ははっ、俺のテクで気持ち良くなったようだな。男冥利尽きるぜ」

「はあ……この滑々感は堪らない。元の世界じゃ一発で逮捕されるがこの世界はそんなことないから嬉しいこの上ない」

「こんなことができるなんて死んでよかったぜ！」

男達は嬉しそうに下品で笑う。そんな中、ハイエルフは鼻息を荒げ、絶対に屈しないと言う強い意志を込めた瞳を細め睨みつける。その睨みに「そうでなくっちゃな」と好戦的に笑みを浮かべ、ズボンを一気に脱いで下半身丸出し状態となった。ベッドの脇に立たされる女性達は絶句で見開き、そして青褪めた。

「受け入れる準備は整えた次は、俺のコレでイキ狂くなって自分から腰を振るまで快樂漬けにしてやる」

「よーし、どっちが早く満足させれるか競争だ！」

「うひひひっ、お互い気持ちよくなるうぜえ？」

ソレを見せつけられた彼女等はここで嫌悪感を覚え、絶世の美貌の顔を歪めた。認めていなければ好きでもない男を受け入れるぐらいなら舌を噛んで自害したいぐらい嫌悪する。自害も出来ない、反抗も出来ない状態の彼女等をいいことに男は彼女の純潔を破らんと下半身を動かした——その時だった。凄まじい衝撃と震動がこの空間まで轟いた。男や女性達は条件反射で天井へと意識を向けた。

「なんだ？この音」

「まさか、誰かがここを襲撃して来たんじゃないだろうな」

「おいおい、そんなことしたら相手はただじゃ済まさないぜ？ま、そんなこと俺達に何の関係もないがな」

今は己の性欲を優先だとさらに下半身を押しした。体の中に入ってくる異物感に女性達は酷く嫌悪し、これから飽きるまで侵される絶望の運命に打ちひしがれる。

「見つけたぞ」

四人目の男の声が地下空間に浸透して一同の耳に届いた。まさか、と信じられない思いで男達はこの空間の出入り口の方へ視線を向けた。彼等の眼は可視化するほど濃い魔力のオーラを纏う真紅の長髪、右眼を覆う漆黒の眼帯を付けた金眼の少年が広大な地下に入ってくる様子を視界に入れる。彼の左眼は全裸の女性と、ベッドでこれから行為を及ぼうとしている丸裸の男と覆いかぶされている女性を見渡して状況を把握する。

「予想以上の女を捕まえてハーレム気取りか？男として羨ましい限りだ。知り合いの女神達までいるしな」

ニコリと笑うが目は全然笑っていないかった。おまけに魔力を纏うオーラが更に濃くなつて一誠を包み込んでいく。たった一人、されど一人。どうやって隠し扉を見抜いて降りてきたのかそれはどうでもいい。自分達のお楽しみを邪魔する輩は誰であろうと容赦しないのが彼等の決まり。

「おいおい、勇ましく乗り込んできたのは良いけどよ。俺達のバック

にいるのは誰なのか分かってるのか?」

「【イシユタル・ファミリア】なんだろう?今更つまらないこと言うなよ」

「こいつ馬鹿じゃね?」

「ああ、一人でノコノコと現れてな。おい、お前。【ロキ・ファミリア】の連中の間抜けな姿を見たか?」

一人の男が目から怪しい光を煌めかせた。その光を見つめてみると、足から感覚が無くなっていく。視線を下に落とすと足が石化してあつという間に太股まで石化が進んだ。

「残念無念ってな。助けに来て負けちゃ話しにならねえわな。そこでじつくり見ているといいよ。大切な仲間達が俺の股間でいやらしく喘いで絶頂する瞬間をさ」

成す術もなく、石化は首まで進んで少年は真っ直ぐ男を睨んだまま石像と化した。あまりにも呆気ないやり取りに、興醒めだと意識をこれから犯して体を蹂躪する予定の彼女へ戻す。

バキツ、と石化の呪いが破られた。

「はっ?」

己の魔法が破られた。それがとても信じられなく、鳩に豆鉄砲を食らったような面持ちの男は目を丸くする。首の関節を鳴らしながら淡々と言う一誠の顔は三人を嘲笑していた。

「俺の知り合いの魔法使いの方がよっぽど強力な魔法を放つ上にこの程度の魔法、何度受けても絶対に効かない」

「「ツ?!」」

男達は少年へ向ける意識を敵とみなして全裸のまま臨戦態勢の構えを取った。同じ転生者、それは間違いないだろうと「どんな特典なんだ」という謎と疑問を抱いて詠唱破棄した魔法を解き放った。

迸る雷。どんな能力を使ったか知らないがこの雷系統の魔法で見極めてやる、そう考えてはなったその魔法は少年に牙を剥いて襲い直撃する。直撃しても——歩く足を止めない。

「(魔法抵抗力か?)」

だったら物理的な攻撃だ、間接的な攻撃ならダメージを与えられるだ

ろう。空気中の水分を瞬く間に凍結させ、数多の螺旋状に展開する氷槍を台風の様に戻しながら放った。見た事のない魔法に興味も関心の微塵も持たない少年は、前に進みながら横薙ぎに振るった。次の瞬間。全ての氷槍が一瞬にして蒸発した。

「(な、なんだとっ・・・!?)」

愕然と極限まで目を見開いた男。一体、何の能力で魔法を打ち消したのか理解に苦しんでいると、

「全然だな。無限の魔力と見聞したことの無いアニメの魔法は」

「なっ・・・」

己の特典を看破された。他の二人もどうということだと警戒する眼差しは虚空から発現した金色の杖が、金色の光に包まれ美しい女性と化して一誠の後ろに佇む光景を目の当たりにする。杖が絶世の美女になった!?愕然とする三人を他所に。

「メリア、皆を頼んだ」

「お任せを、我が主」

パチンと指を鳴らしたら、男達が連れ去った女性達がフツと虚空に消え、皆メリアの傍に現れた。動かされた彼女達も奪い返された彼等も揃って驚いた。

「なっ、て、てめえっ!」

「お前も転生者かよふざけるな!」

「俺達の女を返せ!」

飛び掛かる三人。うち一人は肉弾戦に持ちかけ、もう二人は援護と魔法攻撃を繰り出す。虚空から出現する数多の刀剣類が射出、無尽蔵の魔力の弾丸が一斉に向かってくるのに一誠を掴みかかる男から異様な余裕を見せつける。

「——我は無限と夢幻の神の龍也」

『『——我が宿りし覇と王道をも降す唯一無二の龍よ、汝じが赴くままに至れ』』

突然紡ぎ出す謳。右眼の眼帯を外しながら謳う一誠の玲瓏に紡ぐ謳をこの場にいる全員が耳にする。【並行詠唱】!?と魔導士なら気付く一誠の行動を男達は気付くはずがなかった。単純に口を止めれば

「ヒッッ!?!」

その叫びを聞いた、一誠の全てを知る者からすれば『キレている』と揃って言うだろう。比喩抜きで両眼から怒りで煌めく眼光を放ちながら、怒りの大咆哮を上げる。その大声量は地下空間全体を響き地上に轟かせるほどであった。

眼を限界まで見開き揃って上半身を仰け反った男達に腕を引く仕草をみると、ブレるほどの速さで後方にいる男の懐に飛び込み、頬に拳を突き刺して顔を粉砕。殴り飛ばされた男はそのまま壁と激突するまでに別の男は手から生やす光刃に両腕両足を一閃だけで切断され蹴り飛ばされ、最後の男は見えない壁の効果が無効化された状態で股間を潰され、目も潰され、零距离からの魔力の砲撃で地下空間の深奥まで吹き飛んだ。

「おい、どうした。不死身じゃなかったのか？」

嘲笑する一誠の問い掛けに男達の身体の傷とダメージを癒す回復力で示した。起き上がって集い肩を並べる彼等が一誠を見る目が畏怖の念が籠っていた。

「お、教えろよ……お前、一体何者なんだよ……どんな特典を……」

「俺を倒せたら教えてやるよ雑魚共」

「ふ、ふざけるな！俺達は雑魚なんかじゃねえ！最強の力を持っている世界最強の人間だぞ!」

「殺す、殺してやるよお前!」

威風堂々とした王のような気高く雰囲気醸し出し、金髪に赤眼、装飾が凝った黄金の鎧を身に纏っている出で立ちの男の背後の空間から再び数多の刀剣類が顔を出したところで嘆息する一誠。放たれる数々の武器の前に腕を薙ぎ払って魔力で流れを操作、床に突き刺さるよう軌道を逸らし無効化して飛び掛かる。空間から刀剣類を放つ男に殴り掛る一誠を察して白髪の男が前に飛び出す。が、相手が誰であれやることは変わりないと拳を前に突き出し——見えない壁に阻まれた。

「通じねえな！おい、やれ!」

「おうよっ！」

動きを止めたその一瞬を魔法が襲いかかった。凍てつく嵐が発生して味方ごと渦に呑み込む。時間にして数十秒後、治まる嵐の中にいた一誠は氷漬けとなっていた。大して白髪シロカミの男の周囲だけが凍りついているだけ余裕の態度で佇んでいた。これで勝った、と男達は目の前の一誠の状態——突然燃えだして氷解する光景を見るまでは疑わなかった。氷の牢獄から抜け出した男は背中から炎翼、臀部から尾羽を生やして纏う炎で地下空間を照らした。

「っ、このっ！」

魔法がダメならこれならどうだ！と白髪シロカミの男が掴みかかる。無防備な相手の首を掴み、締める気かと思えば一誠の体が四散した。その瞬間を見ていたリヴェリア達は絶望とショックで悲哀の色を顔に浮かべるがメリアだけは表情を変えず視線を宙に回る首へ送る。

「ご安心を皆さま。我が主は負けておりません」

その言葉を待っていたかのように四散した身体が炎と化して一ヶ所に集まると『再生』を始める。目を疑わずにはいられない。殺したと思ったら殺せず、今度は確実に殺したかと思えば——奴はまだ死んでいない。なんだ、こいつは？何なんだ、あいつの能力は!?炎が人の形となり再生して身体が元通りになるや否や、また嘆息する一誠。

「つまらない。極東で戦った転生者の方がまだ楽しかった」

「なっ、俺達以外にも転生者がいるのか!？」

「井の中の蛙のお前等に言ったところで、どうなる？これから死ぬかもしれない時に他の事考える余裕があるのか」

「ふざけるなよっ、不死身の俺達に死なんて絶対ありえない！」

金髪キンカミの男が亜空間から手にする武器を持ってそれを上段に構えた時だった。剣身に光が集い、魔力が高まるのを魔導士やエルフ、一誠は感じ取った。

「このエクスカリバーでてめえを殺して見せる！」

「……メリア」

畜力チャージし始める男の言動に彼女へ話しかける。何を言いたいのか手に取るように分かり、防壁の結界を張ってみせたことで一誠の憂いを解

消させた。

「くらええええええええっ！エクスカリアバアアアアアアア！」

溜め終え振り下ろした剣から放たれる極光の斬撃波が柱を呑み込み、薙ぎ倒しながら標的へ鋭く向かう。微動だにせず、迫りくる斬撃の波を前に佇み敢えて自ら受け入れるように攻撃を食らった一誠が光に呑み込まれてしまった。声を出せるならば名前を呼びながら叫んでいただろうアイズ達の目の前でだ。それでも――。

「我が主はあのような者達に負ける事はありません」

安心させる言葉で語り掛けるメリアだけは微笑だ。過ぎ去った極光の斬撃波。崩壊した何本もの柱が床に倒れ込み、キングサイズのベッドも原形を残さず消え去っていた。これだけなら魔導士達が放つ魔法に劣らない威力だ。最高の必殺技を繰り出してこれで生き残れるはずが無い。

「なん、で………」

金髪の男の目が動揺の色を浮かべ、畏怖の念と戦慄で顔が引き攣り歪む。ザツザツザと近づいて歩いてくる足音を立たせ、立ち籠る煙に浮かぶ人影のシルエットに男は慄いて言う。

「なんで、今の一撃で死なねえんだよっ……!? てめえはああああああああああつ！」

無傷の姿を晒す、魔力のオーラに包まれながら陽炎のように揺らめかせる一誠。威風堂々とした威厳のある風格を醸し出し、三人と対峙する彼は短く述べた。

「今度は俺の番だ」

あれが、自分に秘匿していた理由なの？ヘファイストスに秘密を明かさなかったイツセーの底しれない実力に瞠目した目が眷族の戦いぶりから離せないでいた。こうして全裸で立っていることよりも目の前の戦闘の方が意識してしまい、金髪の男に対して亜空間から見た事もなくこの世の物で作られた物ではない大剣を手にして斬り掛る彼を凝視する。数多の刀剣類を空間から放たれようと一閃だけで全て吹き飛ばし、恐れで顔を歪める敵と剣撃を交える。しかし、一度刃

を交えた先から大剣の一撃に堪え切れず砕け散る金髪の男の武器。二人の仲間が加勢に入ろうとする動きを見せる。背後から攻撃を仕掛ける彼らには振り返って目を輝かせただけで終わらせた——敵の二人が身体を硬直したまま床に落ちてても動かなかった。

「お前らっ！ぐあっ!？」

動かない仲間疑問をさせる暇も与えないイツセーは私でも目を見張る剣技を見せつける。駆け出しの冒険者とは思えない俊敏で鋭く、『技』と『駆け引き』を繰り返し続けられ相手は防戦一方、不思議な力を使ってもあの子の前では無意味のように無効化されるばかり。そうして戦い続けているあの子の顔はいつしかつまらないと書いてあるほど浮かんだ

「魔剣想像」

床に突き刺しながら単語を述べた瞬間。男の足元から槍や長剣、ハルバード斧槍等の長物の武器が飛び出し黄金の鎧を貫き、肉体も貫きながら男を宙に浮かせた。

「ぎゃ、ぎゃああああああああああっ!？」

床から武器が飛び出してくるなんて……………。

「(イツセー……………あなた、一体何者なの?)」

はっと意識を失っていたかのように覚醒した男の目の前では、長物の武器に突き刺され宙にいる凄惨な仲間がいた。

「不死身だから痛みはないと思っただがな。なんだ、あるのか。それも都合だ」

「お、お前……………っ!」

また地面から槍が飛び出して宙にいる男に突き刺さる。得物の柄に滴る紅い液体は床に広がって血の池を作っていく様を見せつけられ目が揺れる。

「お前等、生易しい死を迎えられると思うなよ」

全身から発する闇のオーラに包まれ出す。頭に角と紋様状の二対四枚の翼を生やし、臀部に黒い尾、両腕が黒い異形の手と化した一誠がまた姿を変えた。

「来いよ不死身。お前等の傲慢な幻想をブチ殺してやるからよ」

また姿が変わった。今度はとても禍々しい雰囲気を醸し出す悪魔のような姿に。私達ですら見たことが無いアレは異世界の能力なのか？無詠唱で強力な魔法を放ち続ける敵に悠然と近寄るイツセーは、自ら攻撃を当たりに向かってしている挙動を示し——男の魔法が奴に当たる直前で虚空に消える。言葉通り本当に消えるのだ。掻き消えて。もしやあの姿は魔法や魔力を無効化にするのか？だとすれば……イツセーの敵ではないことを意味する。

「何で当たらない、何で通じない、何で効かないんだっ!?無限の魔力が何で、なんでだよ!!!」

魔法を主力とする奴にとって天敵だ。後退りながら枯渇する気配を感じさせない魔力を打ち続け、多種多様な魔法を放とうがイツセーの前で虚空に消える。不意に腕の闇が蠢きだす。闇に意思が宿っているかのようにどんどん膨れ上がり、この地下空間の天井まで届きそうなほど両腕が巨大化した。それだけではない。イツセーの背後にも竜のような鎌首と頭部が具現化して男を睨みつける。まるで、イツセーが黒竜の姿をしているように錯覚してしまう。

「覚悟は、できてるな?」

「ヒッ——」

睨みつけたのは蛇もとい竜で睨まれたのはゴブリンもとい蛙といったか。唯一の魔法が通じず、凄まじいプレッシャーを放つ出で立ちで眼光を鋭く睨まれれば恐れを抱くのは無理もない。——一歩踏み込んだ瞬間、駆け出しの冒険者ではできない跳躍力で一気に迫る。闇の異形の手と竜の顔だけみれば獲物を襲い喰いかからんとするような光景だ。

「来るな……来るな、嫌だ死にたくないっ、絶対に死にたくない!」

顔から完全に不敵の笑みと余裕が剥がれ落ちて、代わりに恐怖で泣きじゃくる子供のように歪めていた男の足元に魔方陣が展開した。だが、奴の次の行動をイツセーは見逃さない。双眸を妖しく煌めかす

と男の魔方陣が甲高い音を立てて砕け散った。それが信じられないと奴の顔は驚愕と絶望の色で染まり切った。そして……。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!」

「あ、あああああつ、あああああああああああああつ!!」

奴はイツセーの体に纏う闇に呑み込まれた。実際に喰われたわけではないはずだ。予想した私の目の前で闇が霧散し、仰向けで倒れている男を冷たい眼差しで見下ろすイツセーの姿を目にする。

「さて……残るのはお前一人となった。神から得た特典とやらはどうも大したことが無いようだし少々拍子抜けだ。まあ、しようがないか？俺みたいに殺伐とした世界で生まれたわけじゃないんだろうお前らつて」

覚醒した白髪頭に赤目の男は放心した。何時の間にか仲間が倒されている光景をいきなり見せつけられて平常心ではいられない。気付かないうちに何が遭った？何が起きたのか？理解できず苦しむ男に近づき対峙する。それに対して天使化——更に限界突破して青白い天使と化した一誠は遠い目で語り掛ける。

「転生してこの世界に来て、最強の力を得て万能感に浸って……他の人間達をテメーの身勝手な欲望でどうこうしていいわけじゃねえんだよ」

双眸が眦を裂いて怒りの青白い炎を燃やし、全身から迸る青白い雷が弾け、周囲の柱を破壊し荒れ狂う魔力で地下空間が埋め尽くしている。それと同時に伴う力の圧力と一誠から感じる威圧で男の精神は今にでも途切れそうで心が折れそうになる。

「——覚悟はできてるだろうな」

魂の色が変わった。力強く輝く青白い魂だけでなくあの子から感じる有り得ない力——神アルカナムの力。私は今日、この瞬間を見て産まれて初めて驚いたと自負するわ。理由を言わずとも解るでしょう？下界の子供が【天使】テ・シーオの姿で神アルカナムの力を放出しているのよ。下界の子供じや有り得ない異常な事。ロキ、あなたはあの子の力を知っているのかし

ら？知っていたとすればあなたに嫉妬して心から悔しいと思うわ。だって、私の目ですら見抜けなかったあの子の才能を知ってて隠し続けられたのだから。

「覚悟だと・・・黙れっ！」

子供の背中から三対六枚の純白な翼を生やしだした。だけど、ただそれだけ。イツセーのように凄まじい力を感じられない。ただ生やしただけなのかと思えば宙に浮いて、目を私達に向けて来る。

「女共を守りながら戦えるか！」

「——俺を前に他の事できるのか？」

翼を羽ばたかせ、青白い光と成って子供に接近する。私達に何かしようとした子供の背後に回ってそう言うイツセーは無造作に純白の翼を引き千切って奪い取った後、その場で身体を回転しながら振り下ろした足で下へと蹴り落とした。

「ぐ、ぐうううっ、この、超電磁砲を食らいやがれ！」

裸の状態の子供が一体どこに隠し持っていたのか分からない手コインを取り出し、眼前に降り立った相手に照準を定めてバチバチと電気を纏い迸らせると弾いた。一筋の橙色の光がイツセーに迫る。馬鹿みたいに真正面からしか飛び掛かってくる相手にかわせる筈がないと高を括ったのか分からないけれどその考えは裏切られた。手刀でコインを床に叩き落とす芸当を見せつけた。あれだけ早い飛び道具を難なく払い落してバガンツ！と音を立てて穿って出来た穴がその証拠として痕を残し、子供に大きく口を開けた間抜けな面を晒した。でも、そうしていられる時間は短かった。イツセーが殴り掛かった。

「うわっ!？」

条件反射で身体を縮める子供にあの子の拳が当たらなかった。あれは本当に厄介、見えない壁に阻まれてオツタルも近づけず魔法を使う子供に隙を突かれて石にされたのだから。イツセーにあの不思議な力をどうやって突破するのかしら？

「は、はははっ！ど、どうだ、この力の前では絶対どんな攻撃でも全部反射するんだよ！お前の自慢の攻撃も全部反射してやる！」

「——それは物理的な攻撃のみだろ？」

そう言いながらまた殴り掛った。何か策があるのか分からない。子供の方は絶対的有利な状況に浸っているのか余裕の笑みを浮かべ、イツセーに掴みかかった。二人の手は交差しもう少して顔に触れそうなどころで……全て反射する能力を持っている子供が信じられない事にお腹を殴られた。鈍い衝撃音、両目を限界まで剥いて全身を硬直した子供は自身に何が起きたのか理解できない顔でイツセーを見た。

「な、何でっ……何がっ!？」

また殴られる。今度は信じられないものを見る目で視線を送るが、鋭いアツパーを貰って地面から少し足が宙に浮いた間に鳩尾に一発、そして体を捻って右足の蹴りを食らって——それで終わる筈もなかった。

「ま——」

待ってくれ、と制止の呼びかけを発しようとした子供の気持ちは受け入れてくれなかった。すぐに次の行動を取れなかった。枝のように骨を折る打撃で吹き飛ばされたから。それでも終わらない。光の軌跡を残し先回して突き出した拳に殴られ吹っ飛ぶ。それからも男は宙で殴られ続けられ、時に鋭利な刃物と化した翼で切り刻まれたりもして柱やに血で赤く染め続ける。そうして繰り返していると子供の周囲を青白い光の帯が幾重にも覆い尽くしてしまった。その時間は数十秒も続いた。二人の姿を見えるようになった時は、全身が目も当てれない程に赤く染まっていながらも、傷が治っていく男の胸倉を掴む少年が宙に浮いたままの姿勢だった。

「し、死、ぬ……死ん……じ……う……」

「不死身なんだろ。死ぬことは絶対じゃない。が、能力を封じられたら本当にそうだろうか？」

傷が治ってもダメージは少なからず残っている他、意識が朦朧としている。それでもイツセーは攻撃の手を緩めない。もう一人の子供に近づき、掴み上げ、串刺しにされている子供に近寄っては二人を天井に向かって放り投た。そして手を掲げ青白い魔力光を集束した。

「己が不死身になったことを後悔して——神の力を味わえ」

どこまでも冷たく淡々と言ったのを最後に青白い魔力を放った。その威力は「イシユタル・ファミリア」の宮殿からドンツ!!と凄まじい轟音とともに巨大な青白い光柱が天へ穿つように衝き上がった。立ち昇るほどの威力であつて何層以上の岩盤を貫いて物語らせ逆行する大瀑布の様に、天空に突き刺さる光柱はオラリオ中の神々や人類がその目で確りと焼き付けているでしょう。今の私達にはとてもどうでもよく気にしていられないけれど。それに打ち抜いた天井から静かに降り注ぐ太陽光に照らされ包まれるイツセーは、まるで天から祝福の光の輝きを受けているように錯覚する。私はこつちに来てくれるまで美しい【天使^{デ・シーオ}】の姿のあの子に目を奪われ魅入った。子供や神々を魅了する私が胸の高鳴りをして逆に魅了させてしまうなんて……イツセー、あなたはとても罪深い子供になつてしまつたわよ？

「アイズ、アリサ、リリア。遅れて悪かつた」

メリアに守られている幼女へ寄る。髪に手を触れると、乳房の先端と下半身のハートの紋様が音を立てて碎け散った。ようやく己の意思で動けるようになった体で最初に取った行動は、青白い【天使^{デ・シーオ}】の少年の胸に飛び込んで抱き付いた。

「イツセー、イツセー……ッ」

「ひっく、ひっく、ひっく……!!」

「悪かつた。本当に悪かつた」

少女の身体を翼で支えながら包み込みつつ髪を触れる。次は彼女の番だと翡翠の長髪と同色の瞳のエルフの女性の頭に触れた瞬間。紋様が消え去つて、自由になつた体は一誠の胸に倒れ込む。

「……すまない、イツセー」

「謝るのは俺の方だ。俺もお前達の傍にいてやれたらこんな目に遭わずに済んでいた」

「……それでも、助けに来てくれたのだから感謝する。他の娘達にも助けてやってくれ」

「そのつもりだから安心してくれ」

翼で持ち上げながら包み込み、フレイヤを始めとして彼女達の体にある忌まわしき呪印の解除を試みる。

「美し過ぎるのも考えものだなフレイヤ」

「ええ、そうね」

皮肉気に言う一誠の胸の中に身体を預け、翼に包まれるその心地よさは美神を微笑ませるほどよかったらしい。抱擁はすぐに終わらして呪いを解く作業に戻ったその最中。エルフの少女の呪印を消した直後、今まで我慢していた嘔吐感がようやくと解放された安堵感からその場で唾液と胃液、白い凝固の塊を吐き出してであろうことか助けてもらった少年の衣服に掛けてしまった事故が発生した。全員の呪印を解除した後は、人数分の羽を翼から抜き取って女性達の胸元にくつつくと、青白い外フーデットローブ 套と変化して肌を隠した。と同時に男達が落ちて来た以外にもこの地下空間にフィンやガレス、オツタル達が現れた。

「フレイヤ様」

オツタルを筆頭に戦闘復帰した「フレイヤ・ファミリア」の団員達がフレイヤの前に跪く。その忠誠心に対してフレイヤは少しお冠で眷族達を見る目がちよつと厳しい。

「ちよつと遅かったわね」

「・・・」

「私の体、穢されちゃったわ」

ここで何があったのか、オツタル達は想像し難くなく重苦しい空気を醸し出し沈黙。中には己の不甲斐なさで凄まじい怒りを覚え、奥歯を噛みしめ手から血を流すほど握りしめる悔恨と怒気の気配を滲ましているのが分かる。

「見張りありがとう」

「問題なかったよ。というか、あれからアマゾネス達が消極的だったしね」

「うむ、途中あのフリユネ・ジャミールまでやってきて戦いを仕掛けて来るかと思えば、何かを察して薄気味悪い笑みを浮かべて去ったほど

じゃ」

地下に邪魔が入らないようアマゾネス達を見張っていた二人。予想より苦勞はしてないと言われ、なにそれ？仲間意識が殆どないんだな。と全裸で気を失っている男達の未来は真っ暗だろうと他人事のように思ったところである事を思い出した。

「イシュタルは？」

「歓楽街を襲撃し始めたオツタル達が真っ先に捕まえに行ってたよ。まあ、地上に戻れば拘束されていると思う」

「そうか。あーこの後の処理は大変そうだな」

「そろはそうとお主、なんじゃその姿は」

「まあ、あれだ。本来の力つてことでよろしく」

その後——「フレイヤ・ファミリア」が「イシュタル・ファミリア」に襲撃、抗争が勃発した。直ぐに主神が制止の声を振り撒き、「ガネーシャ・ファミリア」やギルド側の「ファミリア」達の介入によって戦いの戦火は鎮火する。それから石化していた「ロキ・ファミリア」他の団員達も呪いが解除されたことで復活を果たす。

そして、都市二大派閥と街への襲撃を起こした「イシュタル・ファミリア」の主神と三人の男達（能力を封印されている）は咎人扱いで多くの主神達と眷族に囲まれていた。

「よお、イシュタル。自分、フレイヤならいざ知らずこちらにまで好き勝手にしてくれたんや。天界に送還されてもええっちゅう覚悟の上で喧嘩売ってきたその度胸は買つてやるで」

糸目がちな瞳が怒りで見開き、その手には神の体に致命傷を与えんとするナイフが握られていた。ギルドからは膨大な罰則と罰金を科せられた他、ロキとフレイヤの本拠地ホムの修繕費全額請け負い、閻派閥イルザイスに対する鎮圧活動は「イシュタル・ファミリア」も強制的に参加も科せられた。だが、それだけでロキ達の心は納得できない。

「流石にうちは許す気はあらへんでイシュタル。自分の子供等がうちの可愛い子供に欲望のまま蹂躪しようとしてくれようとおったらしいし？訊けば可愛いアイズたん達まで手に掛けようとしたなんて

もー絶対に許さんわっ！」

「そ、それは私の指示ではないっ、本当だ信じてくれっ！それにあの連中には私だって——」

「じゃかあしいっ！関係あるうが無かろうが自分のせいでいらん被害と傷を負わせられた子供の心と体は、これから一生う背負っていくことにされたんやで！全部非が無いとほざくんなら、その顔を八つ裂きにして二度と表に出れへんようにしたろうかああんっ!」

イシユタルから短い悲鳴が漏れる。ロキの怒りは留まる事を知らないまま怒声が褐色肌の美神に槍の如く突き刺さり責められる。これでは話が進まないと雰囲気を感じ取り、第三者が介入しない限り夕方まで続きそうな怒りぐらいだ。誰もがそこまで付き合いたくもないのが心情。

「（おいフィン、どうにかしてくれないか？）」

「（ンー……あそこまで怒ったロキは初めてだから僕等が止められるかどうか分からない）」

「（……あの場にロキがなくて良かったかも。言葉で伝えるより現場に居合わせたら今の三倍は怒っていたかもしれない）」

「（そうか……イツセー？）」

徐に転生者三人を縛る鎖を掴み、神々の輪から抜け出した一誠は極東の転生者を呼んで会話を聞かれないように防音の結界を張って、彼等に問いただした。

「さてとお前等を生かしているのは他でもない。この世界にどうやって来たのか聞かせてもらおうか？」

「……そんなこと聞いてどうする。お前も俺達と同じ転生者なんだろ」

「こいつはお前等と一緒に転生者なんだがな。俺は別に死んで神に転生されたわけでもない。生きたまま別の世界に放り込まれたんだよ」

三人の目が極東の転生者に向けられる。肩を並んで立っているのは彼の味方側であると行動で伝えさせている。

「お前、特典に何を望んだんだ？」

「とある戦闘民族の体質と全ての技を使えるように頼んだ」

「ああ、あのアニメと漫画のか。何でそんな馬鹿みたいに殴り合う前提のもんを望んだんだよお前」

「格好良いからに決まってるだろ。そーいうお前等は何なんだよ。明らかにアニメキャラの顔をしてる奴もいるし中二病かよ」

「中二病じゃねえよっ！」

転生者同士の話が花を咲かせ、あーだこーだと会話が弾む。だが、スパンツと三人の頭を叩いて話を中断させた。

「お前等、話を楽しんでるが状況は最悪のままだったことを忘れちゃいないよな？もう一度聞くが、どうやってこの世界に来たのか教えろ」

「教えろってその転生者と同じだろ。元の世界で死んだと思えば神と名乗るジジイにもう一度人生を送らせてやるって言われたんだ」

「爺……？俺は胸が無い女神だったぞ」

「はっ？俺はネットで検索したら何時の間にかここに來てたぞ」

それぞれ異なっている事を知り、不思議そうに顔を見合わせた。極東の転生者は「なんそりゃ？」と小首を傾げる。

「ネットはともかく、その爺と女神はこの世界の神々だったか分かるか？名前は何だった？」

「……な、名前は聞いてない」

「あ、名乗ってた。確か、爺はクロノスって言ってた。この世界の神かどうかかわからないけどよ」

クロノス……ギリシア神話で『時』を司る神。ここで異世界と異世界を通じることができる可能性が拳がり、後でロキ達に訊ねようと思ったところで。結界を解いた。

「情報提供ご苦労さん。さて——と」

徐に跪き、鋭く男の胸に突き刺す。絶句する四人を他所に胸から腕を引き抜いて光る塊を取り出したら、男の胸は血を流すことも痛みを与えないまま何事もなかったかのように穴が閉じる。この男は何をしたんだ。その塊は何だと念が籠った視線を向け開きだす口から発せられる言葉に耳を傾ける。

「お前等の力だけは確かに常識を逸脱した力だ。このまま封印してお

いてフリユネや男娼に犯しても悪くないがロキの様に俺も許す気はない。故にお前等の魂を預かせてもらおう」

光る塊に握力を込めると、抜き取られた男が激痛に襲われて悲鳴を上げた。

残りの二人の胸に突き刺して魂だけ抜き取って意識だけは残すその芸当は常識を覆して逸脱している。

「能力は封印しないでいるが……お前等、また自分勝手に強引で俺の仲間や知り合い、家族の女を犯そうとしたら——わかるな？」

弱みもとい魂を握られ痛みで絶叫を上げる三人。極東の転生者も自分もドラゴンの逆鱗に触れていたら、三人の様になっていたのかと戦慄と安堵感の気持ち同居した顔で冷や汗を掻いたところ、背後から近づいて青白い外フーデットローブ 套から手を伸ばし、少年の肩に置いたハイエルフが開口一番に言った。

「イツセー、頼みがある。どうか聞いてくれるか」
「ん？」

その日の夜——。

『幽玄の白天城』に招かれた「ロキ・ファミリア」の女性団員達が十人十色の感想を述べながら入って行く。リヴェリアが一誠に頼みごとをしたことは——。崩壊した本拠地ホムの復興までの同居、彼女達の傷心を少しでも癒してやりたい想いで一誠の家に招く許可を貰うことだった。具体的に彼女の頼みごとを知らされておらず、ただ扉を開けて欲しいとだけ願われたのでその通りを試してみたら。

「……俺の家は、とうとう宿泊施設か何かになってしまったか……」
覇気がない声音で言葉を零す一誠は何とも言えない気持ちを抱いて、彼女達を背後から見つめる。真隣に立つハイエルフは「すまない」と申し訳ない念を込めて謝罪の言葉を吐露する。

「まー、ゴブニユに直してもらっただけでも一カ月かそれ以上掛るらしいからその間、よろしゅうなイツセー」

「ロキ、何でお前も泊る気満々でいるんだっ。おい、そのフレイヤと

オツタル——と知らない女達。その荷物は何なんだよ！俺は泊らす許可をした覚えはないぞっ!?バベルの塔で泊れよ！」

もう泣きそうになってる一誠の身の回りは騒がしくなりつつあった。食事も何時もの十数倍も作らなければいけない羽目になり、泣く泣く作っては彼女達の舌に「なにコレ、凄く美味しいっ！」と太鼓判を打たせた。

夕餉の時間の終わりを迎えたら次は風呂の時間。初めてこの城の浴場に入る彼女等は圧倒された。限られた時間の中での入浴とそれなりに広い湯船と対照的に、ここは交代する仲間のことを気にせず心行くまでのんびりと入浴を楽しめる。湯船は一つだけでなく、多種多様な源泉と多種多様の形をした湯船を目の当たりにして開いた口が塞がらなかった。

「り、リヴェリア様……ここは本当に浴場なのですか？噂に聞く女神の神聖浴場のような……」

「ああ、30人入浴してもまだ余裕のある程広い。時間も昼夜問わず気にせず入っても構わないのだ」

そう言われては、その通りに入りたくなる団員達は各々と湯船の中に体を沈ませ、今でも記憶に残るいやらしく触れられた男の手の感触を忘れたいが為に何時もより長く体を洗い続けた。

対して女湯の隣にある男湯はオツタル一人だけ。もう一人の男、一誠はというと。

「……女神揃って何用だ？」

ロキ、ヘファイストス、フレイヤが部屋に訪れていた。膝の上に金属製の板を載せて弄っている少年は手を止めて三柱の神へ左眼を向ける。まだ風呂に入らず眷族達が先に入っている間に今回の事件を解決に導いた一人の少年に話を求めたい思いの前に気になることをぶつけた。

「それ、何なん？」

「空飛ぶ絨毯と同じく飛べる金属製の板を作っているところ」

「また凄いの創ろうとしているわこの子……」

「ふふ、良いじゃない。凄ければ凄いいほど私は好きよ」

カチャカチャと完成させようと手を動かしながら用件を促す彼にロキが代表として言い放った。

「イツセー、あんな自分勝手に喧嘩売ってくる子供は今後も現れると思うんか？」

「断言はできないが、可能性は高い方だと思う。あんな奴らをいち早く見つけて対処できればいいんだけど三人から見えてどうだった？」

「他の子供と大して変わらん気配やったな。うちとフレイヤの子供を倒す力を持っているなんてどうなっているんやって話や」

「その謎はギルドが聞き出している筈だ。それを俺達も聞いたところで変わらないと思うけど」

ならばどうするか？ 結局のところは知ると知らないとの差が違うだけで対して何も変わらない。無名だったり下級冒険者なのに有り得ない程強いと言う情報が入らない限り見つけることは困難に等しい。神から見ても大して変わらない子供として「ファミリア」に知らず知らず入団させてしまえばとんでもないことが起きかねない。「イシユタル・ファミリア」のように爆弾を抱えて自爆でもしたら笑えない話だ。

「今回みたいに第一級冒険者が破られるなんてことがあったらヤバいだろうな」

「それってイツセーよりも強いのおるかもしれんつちゆうことか？」

「人じゃなくて能力次第で俺もオツタルも死ぬかもしれないってことだよ。物理的な戦闘系の能力の他に、裏から相手を洗脳して操ったりされたらいくらロキ達でも気づけない。認識阻害なんて能力を使われたら透明人間になれるようなもんで見つかりっこない」

能力は無限にある。魔法もスキルもそうだ。フィン達が行使している魔法とスキルは無限にある中でその一つでしかない。人の性格にも相性の良し悪しあれば能力同士の相性の良し悪しだってある。

「ああ、そうだ。天界にクロノスって神様いるか？」

「クロノスって・・・あの？」

「いるんだ？どんな神なんだ？」

女神達は一度、顔を見合わせると「「変な神」」フレイヤまで言わ

せるほどクロノスは変神のようだった。「一人でよーわからんこと言つとる」とロキ、「何時も不気味に笑っていたわ」とフレイヤ、「以下同文」とヘファイストスが答え、どうしてクロノスの名を知っているのか聞こうと口開き掛けた時、部屋の扉を開け放ち顔を覗きこんでくる椿が彼女達に向かつて話しかけた。

「ここにいたか主神様達。手前らは出たから風呂に入るといい」
「そう、分かったわ」

眷族からの促しに素直に受け入れ、この場を後にしようとして動き出す。

「イツセーも作るのはいいけれど風呂に入りなさい？」

「後でこの部屋の風呂に入るから問題ない」

「あら、私も一緒に入ってもいいかしら？ 隅々まで洗ってあげるわ」

銀髪女神が首根っこを掴まれて鍛冶神に連行される姿に爆笑する無乳女神が扉を閉まるまで見送った後、製作する作業を開始した。その集中力は皆が寝静まっても完成に至るまで続き——深い吐息。

「……よし、ようやく完成した」

「そうか。それはよかったな」

「ああ——って、リリア？ それに、と……誰だっけ」

何時の間にか部屋に入ってから来て真後ろに佇んでいた女性の存在に初めて気づいた風に反応した。助けた一人のエルフの少女であることは分かっている者の名前は知らない彼にハイエルフ王族のリヴェリアが紹介する。

「アリシア・フォレストライト。見ての通り種族はエルフだ。お前が一度ダンジョンで助けた娘でもあるぞ」

「ああそっか、そう言えば見覚えがある。俺はイツセー。【ロキ・ファミリア】にいた時は全然他の団員と交流もしてなかったけど、何でここに？」

「お前に感謝と謝罪がしたいそうだ」

「謝罪？」 自分に対して何かしたかそんな覚えはないと首を傾げるが、彼女は申し訳なきようにポツリと言った。

「その、貴方の服を汚してしまったことを謝罪に……」

「・・・ああ、あの時か。いや、あれはどうしようもなかった。吐かずにはいられなかっただろうし、責められる理由は無いです。お前は犠牲者だったんだからな」

「ですが、助けに来てくれた者に対してあまりにも・・・それにあの時もまだ助けてくれたお礼もしていません」

「あの時は当然のことをしたままだから気にするな。それに俺の服なんかよりも、お前の心と体の方が心配だって。冒険者以前にリリア達と同じ一人の女だ」

完成した作品を机に置いて立ち上がり、アリシアと対面する。

「エルフは潔癖を気にする方なんだろう？それなのに無理矢理好きでもない知らない男に穢されて何とも思わない筈がない。服なんていくらでも代えが利く、が、心と体はそうじゃない。一生経験した事實は死ぬまで付き纏う。これからも冒険者として生きるお前の方が辛いんだ」

だから、と一誠は助けるのが遅かったことに対しての謝罪をした。頭を垂らして深く申し訳なかったって伝えた。

「助けに遅れてごめん。フィンとの連絡で俺もいれば助けられたのに相手は闇派閥イルヴァイスだと思ってた。そんな傲慢な考えをしてたからお前達の心に一生消えない傷と記憶を残してしまったんだ。だからごめん、許して欲しいとは言わない」

自分が一番非があるのだと告げる少年を困惑気味に見下ろすアリシア。何時までも下げる頭を見つめ、意を決したように伸ばした手で頬に添え、優しく上げる。

「貴方はとても真つ直ぐな方なのです。感謝されるべきなのに非を認め贖罪すら臨む。团长と同じ純粋で真つ直ぐ・・・」

エルフが妖精の様に綺麗だと言われる理由、綺麗な笑みを浮かべて真つ直ぐ瞳を金眼に向けるアリシア。

「私が貴方に責める言葉も殴る拳もありません。それでも申し訳なきを覚えていらっしやるなら罰とお願ひがあります」

「何だ？」

「私はお前じゃなくてアリシアと呼ばれます。元【ロキ・ファミリ

ア」の団員なら、おこがましいですが私達は仲間の筈」

いきなり名前で呼ばれたくないだろうと、失礼ながらお前呼ばわりしていた一誠はそう求められた。素直に彼女の願いを聞き受ける。

「アリシア」

「……はい」

これで良き関係を築けるだろうと見守っていたリヴェリアは優しい眼差しで見守っていた時、エルフの少女は体を揺すった。

「あの、それともう一つ……あの青白い天使になって貰えませんか？」

何でまた？と思いつつも力を解放、覚醒して望まれた姿になってみれば「翼で私達を隠して下さい」と促されその通りにし、お互い翼に包まれた。二人だけの空間が出来上がりぶつかり合う視線の中でエルフの少女は青白い光に照らされる顔に朱を散らばせた。

「これからする罰（＝お願い）は、リヴェリア様に見られたくありませんので」

「うん？」

何されるんだ自分は——と受け入れる準備をする前に首の後ろまで華奢な両腕が回され、アリシアの整った顔が零距离まで近づいた。

「私と——口付を交わして下さい。あの男のモノで穢されたこの口を【天使^{テ・シーオ}】の姿の貴方の唇で上書きして欲しい」

おぞましく汚らわしいモノを無理矢理、心から慕う異性に捧げる筈だったファーストキスを穢されたその口唇で少年の唇に重ねた。あの感触を紛らしたい、あの嫌な味を忘れない、穢れた唇を「この人になら」と思う男の唇で上塗りにもらいたい一心でしたキスは、後に一誠の鍛えられた口付の技法によってその考えは霞んでいくのだった。

「あ、ありがとうございます……っ」

顔を赤らめてリヴェリアの横をそそくさと通り、「あ、あんなに、す、凄いなんてっ」と初心な反応を窺わせながら退室した。

「……何をしていた」

「本人に聞いてくれ」

彼女の名誉の為にと敢えて教えないが、綺麗な柳眉を寄せて腕を組む姿勢で無言の威圧を放ってくるハイエルフの服装が違うことを指摘する。

「その服、婚儀に着るドレス・・・正装みたいで綺麗だな」

あからさまな苦しいはぐらかし等通用する筈も無い相手は「……ああ」と口を開く。王族^{ハイエルフ}としてでなくても寝間着にしては綺麗過ぎるものであった。豪華にちりばめられた宝石は無いものの意匠が凝っていて体や腕を通し、紐で結ぶスタイルのワンピース型。繊細な生地で編みあげられている純白には金色の刺繍で十字架を模して縫ってあり、紐解けば十字架が真つ二つに分かれる出で立ちとなっている。まるで今まで硬く守り抜いていた何かを破棄する背徳を表現して作り上げられているかのようだった。

「王族^{わたし}の里の故郷から飛び出す際、世界を旅する私に必要なと思っていたのだがな」

「？」

「この服はな、イツセー。お前の言うとおりに、王族^{ハイエルフ}同士が婚儀を結ぶ為に着る服と同時に相手に心と体を晒して全てを差し出すという意味が担っている。この儀をせず同族異種族間わず体を重ねる行為、異性に体を触れられたら王族^{ハイエルフ}としての婚儀はできず、異端なエルフとして全てのエルフ族から忌み嫌われる存在となる。誇りと掟を軽んじた恥知らずの卑しいエルフである」と

リヴェリアは転生者に体を触れられ、純潔を奪われそうになった。その時点で自分是否が応でも卑しいエルフとなってしまうのだと言外する。

「故郷から飛び出して肩書など捨てたつもりでいたが、やはり私はどこにいても王族^{ハイエルフ}として同族に接せられている。だからこそ、いずれ今回のことで私の身に起きた事は同族に知れ渡るだろう。同族か認められた者しか触れさせない肌はアリシアと同じく穢れたも当然と言える」

「……………」

「お前が気にすることでは無いイツセー。今話したことは王族や同族としか肌を重ねない者達の意見と認識だ。私自身は心と純潔を守ってくれたお前に深く感謝をしている。もしも、認めても無く好意を寄せて心から抱いてもいない男に捧げるぐらいなら、私はお前に全てを捧げたい」

申し訳なさそうにバツ悪い面持ちで顔を曇らせる彼に真つ直ぐ論じて、前の紐を解きながら衝撃的なことを言いだすリヴェリア。

「リ、リリア・・・？」

「お前が異世界のモンスターであろうと関係ない。イツセーという個の存在として私の心と体、純潔を捧げる。だからお前も私の想いに応えて欲しい。こんな堅物で悪いがな」

女性として自分は魅力は無いとどこか思い込んでいたハイエルフは自嘲的な笑みを浮かべながら正装の紐を全て解き、改めて一誠に己の全てを晒した。

「・・・俺はモンスターなんだぞ。モンスターに抱かれて間違っって子供ができたらどうするんだ」

「育てるさ。お前の様に逞しく立派にな」

「お前は俺がモンスターの姿でも体を重ねたいと思うのか」

「それはお前次第だ。どんな方法で私の体をお前のだけの物にするか任せる。私はイツセーのことが好きになってしまったのだからな」

全裸のまま歩み寄って自分の頭一つ分高くなった少年を抱きしめ、口を耳に寄せた。

「——頼む、私の体に染みついたあの男共の感触をお前の全てでリヴェリアと言う一人の女の心を救ってくれ」

そう願った彼女の視界は反転して、天蓋付きのベッドに寝かされたと気付いた時は、自分を覆い被さる少年の体と目がぶつかっていた。誰かに押し倒される初めての経験を実感するよりも力強い眼差しで見下ろす一誠の顔が更に寄ってくる。鼻先と鼻先が擦れる一度止まり口開く。

「止めてくれて言っても俺が満足するまで止める気はないぞ」

「最初は優しくな。私はこういうことをするのは初めてだ」

「分かっているよ、俺以外触れられても感じないよう徹底的に俺だけの女にしてやる」

「ふふっ、どれだけ私の体をお前色に穢してくれるのだ？」

期待と喜色、緊張と不安が混濁した翡翠の双眸で少年を見つめながら首の後ろへ腕を回して引き寄せる。二つの影は静かに一つとなつた以降、愛を濃厚に貪る行為を朝になるまで行われた。

冒険譚20

地下迷宮都市『オラリオ』の二大最強派閥の襲撃から翌日が経った。これを好機と闇派閥イルヴァイスの暴徒が昨日から日夜関係なく続き、本拠地ホームが無くなっても鎮圧に精を出す【ロキ・ファミリア】と【フレイヤ・ファミリア】の団員達。鎮圧活動後の後始末は全て【イシュタル・ファミリア】に押し付ける事が全面的に多くなつた他、転生者達の身勝手な暴挙で街にも被害を出したことで他の【ファミリア】より肩身狭い思い生活を送る。ギルドも面倒極まりない強制依頼ミッションを発行するので下の【ファミリア】は過酷に極まってる。

「イツセーちゃん。はい、林檎パイよ」

特権を大いに活用して食べ物で釣り、食べる際に可愛らしい姿になる食事上の少年を膝の上に乗せてホッコリ。豊穡を司る女神デメテルの朝からの来訪で一日が始まる。

「珍しいわね。朝から訊ねてくるなんてこの子に頼みごと?」

「私を助けてくれたお礼と、前から定期的に頼まれていた食材を持ってきたの。特に最近イツセーちゃんの家、たくさんロキの子供が泊り出したでしょう?だからその分、予想以上速く食材の在庫が無くなり掛けているって聞いたの」

「んぐつ、だから野菜だけじゃなく肉の方にも集めてもらうように【デメテル・ファミリア】には『冒険者依頼クエスト』で頼んで持って来てもらったんだ」

「そ、そう……」

何時の間に二人の間でそんなやり取りをしていたのだろうか。デメテルの腕に嵌められている金色の装飾品、ヘアアイス達と同種類マジックアイテムの魔道具をチラリと視界に入れる。

「ありがとうデメテル」

「可愛いイツセーちゃんの頼みならいっぱい聞いちゃうわ。それにさっきも言ったけれど私を助けてくれたあなたには本当に感謝しているわ。ありがとう」

「……感謝されるのは良いんだけど、この姿で可愛くないと否定

しても説得力が無いことを自覚する俺は複雑極まりない」

でしようね、と林檎パイを食べる行為を止めない一誠に「可愛いわ」と慈愛に満ちた銀瞳の美神と一緒に思いながら見つめる。もう直ぐこの生活も終わりを迎える。他派閥に転属する一誠の家に元主神であろうと理由もなく居候しては迷惑掛るだろう。名残惜しいが近々、椿と荷物の身支度しなくてはいけない。

「その前に……言わなくちゃいけないわね」

鍛冶神としてなくこの時だけ一人の女として一誠に伝えたいことがあった。

「んー、今日も育っているなー。こっちはもう少しか？」

【デメテル・ファミアリア】に門の前で報酬を渡して見送ってから城に戻らず、敷地で育てている原料アイテムや果物等フルーツの冒険者達にとって道具の素材として使われる材料や宝石樹の実を採取してバックパックに詰め込んでいく。商人や商業系の【ファミアリア】に売り出そうと動いている時であった。湖の中心部から浮かびあがる様に酒好きの主神と【ロキ・ファミアリア】の女性団員達が姿を見せた。湖の乙女達のようにどろきの趣味で勧誘された目麗しい女性や少女達を尻目で見ながら思いついて……。い——。

「イツセー、何してるの?」

「採取?」

湖から跳躍して背中から魔法の翼を展開、一誠の傍に寄ったアイズとアリサに話しかけられる。

「売りに行こうと集めているところだ。そっちは?」

「壊れた【ファミアリア】の本拠地ホームに顔を出しに行くの。色々しなくちゃいけないから……」

「手伝いに行くの」

男性団員達だけ任せてはいけないと静養中の彼女達に副団長が発破を掛けて動かしたのだろう。

「久しぶりに戻るからお前等にとってはある意味里帰りみたいなもんだな」

「私はイツセーの家の方が好きだよ？」

「ん、私も」

「ロキには言うなよ？多分泣くと思うから」

他派閥の団員の個人の家が好ましいと知った主神は複雑極まりないだろう。苦笑いして綺麗な髪を撫でる少年の手は心地よいと身を委ねる幼女二人。

「アイズたくん、アリスたくん行くぞー！」

「ほら、呼んでるぞ」

「うん……」

「またね、イツセー」

名残惜しそうに一誠から離れ、ロキ達の所へ戻り森の奥へ進む彼女等に一拍遅れて準備を整えた一誠も後を追うように続いて、敷地から廃墟だらけの区画へと出た。

「いらつしやいませ」

本拠と混合した純潔な白一色の石材で造られた建物には、「ホームディア
ケヒト・ファミリア」を表す光玉と薬草のエンブレムが飾られている。
主に回復薬や冒険者にとって役立つ物を製作している商業系の「ポーションファミ
リア」。訪問しに来た冒険者を出迎えた少女は精緻な人形、という
言葉が真つ先に浮かぶ。一五〇〇に届かない小柄な体がその印象に
拍車を掛けていた。下げられた頭からさらりと零れる細い長髪は白
銀の色で、大きな双眸には儚げな長い睫毛がかかっている。服装は白
を基調とした、どこか治療師を思わせる「ファミリア」の制服だ。ア
ミッド・テアサナーレ。「ヒューマンディア
ンケヒト・ファミリア」に所属する団
員だ。

「本日のご用件は？」

「アイテム原材料を売りに来た」

真紅の長髪に右眼を覆う眼帯、金色の垂直のスリット状の瞳の少年は少女の問いにバックパックを掲げながら答える。一カ月に一度、こ
うして育て売り出すまで保管していた原材料やダンジョンのモンス
ターの『ドロップアイテム』も含めて複数の商人や商業系「ファミリ

ア」に売り出す。そうして資金を確保している手段の一つを定期的にしているのである。なのでどれだけ軍資金が減ろうと一誠にとつては痛くも痒くもないのだ。

「かしこまりました。では、商談室でのご案内致します」

ロビーを隔離する個室へ手で指しながら言い、少年と小鞆ポーチを持って共に移動。空いている状態の商談室に入って、ガチャリと鍵を閉めた後。

「イツセーさん、またお会いしたかったです」

「相変わらず綺麗な銀髪で抱きしめたくなる小ささだ」

「……まだ成長期ですから体はもつと高く伸びます」

実際に抱き締めず、微笑ましく言うが少女の方は今の身長を気にしている様子でちよつと不貞腐れた。今まで蓄えてきた一部の素材アイテムと原材料の鑑定を臨んだ。一対一で商談するための個室はそれなりに広いが必要のない物を置いていないからか、少し狭く感じる空間の中で商談が始まる。彼女の前で蓋を開け、慣れた手つきでバックパックから様々なダンジョンの宝物を取り出して卓テーブルの上に置きだす。『カモドスの泉』と『カモドスの皮膜』、『白樹ホワイト・リーフの葉』、『一角獣ユニコーンの角』、『マーメイドの生き血』……』

滅多に市場に出回らない希少のアイテムの材料をポンポンと出される驚嘆の息を漏らし品定めをするアミッドの瞳は真摯に輝かせる。卓テーブルに置ききれない程大量に出されても鑑定に勤しむ。

「全て——の金額で買い取らせていただきます。よろしいでしょうか」

「半額で取引しても【ファミリア】の私財は大丈夫なのかと思うほどの値段だな」

「当【ディアンケヒト・ファミリア】は他の【ファミリア】の冒険者達に最良して貰っておりますのでご心配はありません」

商談は程なくして終わり、後は買い取る同額の金と引き替えにアイテムを渡すだけ——。

「アミッド」

「はい……」

——の、前にアミッドは立ち上がった一誠に近寄り、二人の間の密事の時間が始まるうとしてしている。ソファーに座る異性の膝の上に跨り、対面の形で白い制服に包まれている可愛らしい臀部を下ろして落ち着く。男の胸に白磁のような頬を小柄な体と一緒に寄せると規則正しく鳴る心臓の鼓動を感じ、異性に身を寄せるなど彼しかしないだろうアミッドは無意識に笑みを零し出会った当初を思い出す。他の冒険者と同じように原材料アイテムを売りに来た一人として見受けたまではないが、希少性の高い物ばかり目の前に出された時は酷く動揺した。慌てて団長と主神ディアンケヒトも交えさせたが、総額は当時の「ディアンケヒト・フアミリア」の全財産を上回る程だった。その為、喉から手が出るほど欲しい品々の前に全力で必死に買い取り金額の交渉の舌戦を広げた。本来の買い取り価格の値段を極力下げて格安で手に入れる——彼等の意図を読んだ上で提案した。

——ここで売る度に彼女をアミッド一日貸してくれるなら半額で換金してもいい。

少年のその提案に主神と団長は怪訝な思いを抱いたが、邪な気持ちを抱いて言っているわけではないと身の潔白を伝え、治療師ヒーラーの技術を学びたい好奇心を主神に向けた言葉でようやく説き伏せた。

それから交流を始め、他の冒険者とどこか違うと次第に理解し、触れ合う度に訪問してこない日はあの冒険者はどこで何をしているのだろうかと思う日々が多くなった。そして極めつけは——買い物帰りの最中、昨日の転生者達の目に留まって慰み者として捕まり、連れ去られた。全裸で立たされこれから無理強いに犯される運命に悲観している時に目の前の少年に助けられ、アミッドの瞳は、圧倒的な力で、転生者達を倒し退けたその強さと青白い天使の姿、そして安心させる人懐っこく浮かべる笑みを映して淡い恋慕の念を抱いたのだ。「貴方が好きという想いを抱くぐらいなら、主神ディアンケヒト様も許してくれるでしょう」

密かに彼を慕っている想いは誰にも打ち明けていない。こうして回復薬類ポーションを製作の技術を教える約束を守りながら少年の要求に従って誰にも邪魔されない一カ月に一度だけの密会を過ごす。

「イツセーさん、今日は外のお店で教えます。よろしいでしょうか？」
「分かった」

外で食事をしながら回復アイテムの製作技術を教えるIIデートという公使混合の気持ちで少年を誘う少女の楽しい時間は始まったばかりだった。

「誰かに教えると言うのは楽しいなんて知りませんでした。相手がイツセーさん、あなただからですよね？」

アミッドからの教授を終えたその後、西のメインストリートの人気がない深い路地裏にある日当たりが悪く軽くジメジメした場所にポツと建つ一軒家に足を運んだ。その建物には五体満足の人の身体を模した【ファミリア】のエンブレムが、看板のように飾られていた。木製で両開きの扉を開け放ち、店内に侵入する。

「失礼しまーす」

薄暗い店内に入ると一人の犬シアンスロープ人の少女が戸棚の中身を物色していた。彼女は来訪者の存在に気付き、半分瞼の下りた瞳を向けてくる。

「いらっしやい」

あまり抑揚のない声音とその眠たげな表情もあって寝起きのようにも見えてしまう。尻尾の生えたスカートに、半袖の上衣を着ている。来訪者が一誠であると知ると獣の尻尾をパタパタと喜びを表現する様に振るい始めた。

「久し振りナーザ」

「ようやく来てくれた。寂しかったよイツセーさん。今日は何を持って来てくれた？」

「前と変わらないかな。それで変わった道具アイテムとかある？」

「イツセーさんは【ミアハ・ファミリア】の店に来る度、何で普通のじゃない変わった商品を求めているのか時々分からない時がある」

心底そう思っているようで眠たげな顔に呆れが浮かんでいるが「人体模型のような看板を掛けられたら、ただの店じゃないって思うのが当然じゃないのかな」と心中語ってることを知る由もないナーザ。

エリスイス。変わった商品を作ってくれるかもしれないという期待で「ミアハ・ファミリア」に物資の提供をしている一誠であった。

「お客の要望^{オーダー}を応えるのが商業系「ファミリア」の義務だと思う」

「当然の様に言うけれど、お客に変な物を売らないようち」

「じゃあ、真つ当な薬。体力と魔力を同時に回復できる回復薬^{ポーション}も無い？」

「……新商品になり得ることを軽く言うね。でも、材料が無いと作れないのがどこも同じだよ」

しかしその後、主神ミアハの耳にも二人の会話の内容が入って「デュアル・ポーション」「二属性回復薬か、作ってみる価値はあるではないか？」と新たな製品を作り出し、後の世の「ミアハ・ファミリア」の人気商品として、とある少年の起点に利かせた言伝も相まって最大「ファミリア」が買い占めてとある初老の神を悔しがらせたのだった。

「それと、ナーアザに贈り物があるんだ」

長細い木箱をどこからともなく出して、彼女に手渡す。中身は何なのか「開けていい？」と気になつて聞き、首肯されるとぱかつと蓋を開けて中身を見た。白銀に輝く鎖に繋がれた青い宝石のネックレス。一見、綺麗な装飾品に見えるが宝石を凝視して見ると、海を結晶と化した宝石に閉じ込められている白く輝く光が無数に動いているのがわかる。

「これ、なに？」

「お守りだ。これから上級冒険者になつて中層へ進出するかもしれないナーアザに死んで欲しくはないと真心を込めて作った。効果は保障するよ」

ネックレスを手に取り、ナーアザの首に真つ直ぐ彼女の顔を見ながら付けてやった。

「ん、似合う」

「……ありがとう」

気恥ずかしそうに尻尾を丸め、顔を赤らめる少女は感謝の念をぶつけた。他派閥の団員なのに乙女心をくすぐるのが上手い、女の扱いに長けているほど複数も付き合っているのかなあとナーアザは背中を

見せて店を後にしようとする少年を見ながら感想を抱いた。

「さて、次はキリト達の方に行くか」

「ミアハ・ファミリア」のホームの前で直接空間に干渉して『ダイダロス通り』の場所の空間に穴を繋げた矢先に——廃墟を取り囲む冒険者達が臨戦態勢で緊迫してる光景が目飛び込んできた。

「……何事？」

冒険者を見れば、【群衆の主】ことガネーシャの派閥の団員であることが把握できる。当然いつの間にかいる一誠の存在にも気付き警戒が籠った視線と武器の矛先が向けられる。

「貴様つ、一体どこから現れた！」

「えつと、これ、どういう状況？というか、俺は「ヘファイストス・ファミリア」の冒険者だから怪しい者じゃないぞ」

鍛冶神の眷族と名乗る不審な人物に胡散臭そうに眼を細める。周囲の団員達も疑わしいと分かりやすく顔に出ている。本当かどうか問い詰めようと武器をさらに突き付け尋問を始めようとしたところで第三者が介入に入ってきた。

「その冒険者は「ヘファイストス・ファミリア」の者だ。傷付けたら彼の【ファミリア】の反感を買う。武器を収めろ」

藍色の髪はうなじの位置で切られた短^{ショートヘア}髪に、整った伶俐な顔立ち。手足は長く、同世代の少女達と比べても高い身長を誇っている。戦闘は肉弾戦を主眼に置いているようで長い手足に拳^{メタルフィスト}装と金属靴^{メタルブーツ}を装着している。そして手には身の丈を超える三つ叉の槍を握っていた。【ガネーシャ・ファミリア】の団長・シャクティ・ヴァルマ。飯をたかりにくる主神ガネーシャに侍従している彼女の事はもはやお互い名乗り合う必要が無いほど顔を突き合わせている。

「しかし団長。この周辺一帯は我々が封鎖しているにも拘らず、突然何も無い空間から出てきたのですよ」

「そう言う魔法なのだろう。何をしにここへ来たのか分からないがこの者は信用できる。何せ私達の主神がよく飯をたかりに行くほど美味な料理を作る冒険者だからな」

「……ガネーシャ様がよく外出なされているのは食事をしにですか」

身内でも不思議がっていたのか、団長の言うことは嘘ではないと信頼する目で主神の行動の理由に納得したようので武器を収めた。

「……もう話は終わったか？」

「ああ、一応な。だが、今度はお前の番だ。どうしてここにいる？今の状況を知らないのか」

「ん」

首肯する。武装した物々しい集団がどうして知り合いのホームを囲っているのか、ガネーシャとアルテミスは一度極東料理を食べに来た際に顔を合わせていた。一時の食事仲間に対してこの対応はどういうことなのか説明を求めたところ。

「昨日の【イシユタル・ファミリア】の暴挙は覚えてるな」

「すぐに忘れられるものじゃないんだけど、それと【アルテミス・ファミリア】とどういう関係が？」

「あの騒ぎの中で【アルテミス・ファミリア】が治安維持と住民の救助活動をしていた。それだけなら私達もありがたいことなのだが……」

彼女がこの後どう言おうとしているのか、嫌な予感を覚えたと同時にわかってしまった。

「ヒューマンでも亜^{デミ・ヒューマン}人でもない、獣人ですらない。顔や体がモンス

ターみたいな異形の姿をしている者達を目撃してな。流石に無視できず引き渡しの要求をしたのだが、拒まれ話しに応じてくれず戦闘に発展してしまい、何人か確保しているのだがまだ確保していない者達があの中にいるのだ」

「……」

頭が痛い話しどころではない。——一体何を考えているんだあの異邦人達は!?!と心から叫びたいが今の状況ではできず、「そうなんだ」と何とも言えない気持ちでそれしか答えれなかった。

「そして現在見ての通りガネーシャの命で他の異形の者達も連行しようとしているところだ。先に捕まえホームの牢屋に閉じ込めている

彼等は、モンスターとは思えないほど大人しく流暢に言葉を話し、信じ難い言葉を口にするが主神様の前で虚言をしていないところ事実の様でな。話し合いができるなら事を穏便に済ませれると思ってるのだが」

「話し合いに応じず、引き籠つてこう着状態つてわけね」

「相手が闇派閥イルヴァイスであれば簡単に押し入ることが可能なのだがな」

扱いに困っていると発言するシャクティ。団員達も見た目はモンスターとそれを匿う「ファミリア」に何時まで待機すればいい？攻め込まないのか？そんな気配も醸し出しているところを彼女も感じ取っている様子だった。

「で、尋問した連中の話しは信じているのか？」

「全て鵜呑みにすることはできない。それでも嘘を吐いている感じではないし何よりガネーシャがな」

『他の者達も皆に内緒で我々が保護しよう！』

「——という感じで他の「ファミリア」やギルドに対して秘密裏にこうして行動をしている」

こいつら、破天荒な主神で色々と苦勞しているのか……。同情を禁じ得ない一誠の心情を察してシャクティは「いつもの事だよ」と力なく口にする。この状況を理解した。強引な手段もできず長らく膠着状態が続いている。穏便に事を進ませたいシャクティであるが異邦人達は彼女等の言葉をすぐに信用できない。その上、仲間を捕らえられているのだから話し合いに応じたら自分達も捕まえるつもりなのだろうと恐れ、籠城している。そこへタイミング悪く一誠が来てしまったのだ。

「それって昨日からずっと？」

「そうだ」

よく他の団員達はシビレを切らさないでいるな。「ガネーシャ・ファミリア」の団員達の質は思った以上に高く忍耐力もあるようだ。

「話が逸れたがお前は どうしてここに来た？」

「あー、「アルテミス・ファミリア」に用があつて来たんだよ。その異形達のことだな」

「……知っていたのか」

「【ロキ・ファミリア】の一部の幹部達も知ってるぞ」

最大派閥も黙認している事実にならず驚いたが顔に出さなかった。だが、顔見知りならもしかしたらと提案を持ちかけた。

「お前から説得できるか？」

「あいつらの身の安全は？一応、連中は訳ありなんだけど」

「できる限り保証する。さつきも言ったがこの一件はギルドにも打ち明けていない。閥派閥の潜伏地イルサイスを探る名目で動いている」

ギルドに目を付けられていないならなんとかなるか。と思いながら了承した。奇異な視線を集めながら廃教会の方へ足を運び、扉の前に近づくと無造作に開け放った――。

「死ねええええええっ！」

「殺気と敵意丸出しの気配で隠れても意味ないだろ」

金色の爆発頭に赤目の少年が天井から奇襲を仕掛けたが、ワンパンであっさりと返り討ちにしてみせた。教会の奥まで殴り飛ばされた仲間を物陰に隠れていたキリト達が目を丸くした後、出入り口に立つ一誠を見て瞠目する。

「キリト、色々と言いたいことがあるがこの際後回しだ。異形の連中を引き渡してもらおうか。身の安全の保証はされている以上、籠城をしなくてもいい」

その一言で全員信じられないと顔に驚愕の色を浮かべる。中には異論を唱える者もいる。

「待ちなよ！常闇達が捕まっているのに身の安全なんて僕等が信じると思うのかい!？」

「まだ道具を完成していないのに勝手に捕まる真似をしたお前等が起こした事だろう。バカなのか？」

「バ、バカって僕は困っている人達を助けようと……！」

「はあ、見た目がモンスターの相手に助けられれば恐がれるのがオチだってこと分かんなかったのか。キリト達から言われていないのか、この世界はどういう世界なのか」

一誠の周囲の空間から数多の鎖が飛び出し、問答無用に異形の異邦

人達だけ狙って捕縛した。

「相手は俺の顔が利く主神の【ファミリア】だ。お前等を殺すような事は絶対にないから安心して出て来い」

「縛っておきながら安心しろって無理な話いつ!？」

「何時までも抵抗するお前等が悪い」

「ま、待って兵藤君！皆を連れて行かないで！」

ズルズルと引きずられる仲間を放っておくことも見捨てる事も出来ない他の異邦人達が動き出して——彼等彼女等も縛り、道連れの形で【ガネーシャ・ファミリア】の団員達の前に連行された。

「はい、連れてきたぞ」

「問題なくか？」

「一応、問題なく。あ、鎖はこのままにしてくれ。奇妙な能力を封じている鎖だから」

肯定するシャクティの指示に従う団員達が動き出す。大小様々な亜麻袋に喚いたり抵抗したりする異邦人達の中に入れて上に荷台に乗せる。更に動いているところを見せないように蓋で隠して連れていくと言う徹底したやり方に少し驚嘆する。「ガネーシャ・ファミリア」が引き上がるまで見送り続け、完全にこの場から遠ざかったのを探知したところでキリト達が尋ねてきた。

「いいのか……？あいつらを引き渡して」

「お前がもうすこし団長として強く説得してくれれば、こんな面倒な事にならなかつたと思うが？」

「人を助けたいと言う気持ちの強さが強くてな……人として確かに見過ごせなくて」

「それが人の甘きなんだろうな。だから後先考えず行動をした結果がこれだキリト」

ゴソつとポケットから装飾品を掴み取り、キリトの手の中に置いた。今更これが姿を変える道具なのだと伝え一誠も『ダイダロス通り』を後にした。『幽玄の白天城』へ戻りに建物の上から移動して西のメインストリートへ向かう。今のところ襲撃されている気配を感じない街の大通りに降り立ち、目的の場所へ——。

「あの——」

足を前に運んでいる途中、自分に向けられた言葉であると認識して振り返った。誰だと思った左眼は、エルフの少女と赤髪の少女——

「アストレア・ファミリア」の眷族達であると気付く。

「ん、もう大丈夫なのか？昨日の今日なのに」

『暗黒期』の真っ只中で何時までも落ち込んだり気落ちしている暇ないわよ」

「そうか、強いなお前達の心は。それで、どうしたんだ？」

「あなたの姿を見かけたので……この後、時間はありますか？」

「家に帰るつもりだ」

「じゃあ、家の上がらせてくれない？あなたとは一度ゆっくり話をしたいと思っていたところなのよね」

予定を教えたら二人から同行を求められた。特に断る理由はないと了承した二人の少女は思い出したように自己紹介を始め出した。

「そう言えば碌に紹介もしてなかったわね。私はアリーゼ・ローヴェルよ。【アストレア・ファミリア】の団長を務めてるわ」

「リユー・リオンです」

「もう知っているだろうけどイッセーだ」

手を伸ばしあつて握手を交わす一誠とアリーゼ。続いてリユーにも握手を求めたが一步退いた彼女から手を伸ばされず申し訳なさそうに顔を曇らせた。

「すみません。私は他者との肌の接触は安易にできないのです」

「俺、警戒されてる？てか、不可抗力とはいえ、二人の裸を見ちやつたしされて突然か」

「い、いえ、そんなことありませんっ。あなたは私達を助け尊厳も守ってくれた恩人です。ですが、私から他者と肌を接触することが難しく……」

「なるほど、ほら」

自分から触れないならこっちから触つてやる、と無造作に手を出して年下のエルフの少女の手を取り、優しく包み込むように握り締めた。突然の触れ合いに肩が跳ね上がり、空色の瞳は瞠目——次に純

粹に肌と肌の接触を試みた一誠の手を何時までも払い除けない自分に驚く。感嘆するアリーゼ。

「ん、どうやら問題なさそうだなリユー。それじゃ行くうか」

「へえ、あなたやるじゃない。私以外リユーと手を握れたのはあなたが始めてよ」

「それは光栄だ。しかしこんな華奢な手で冒険者を生業するなんて大したもんだ」

握られたままの状態で、アリーゼからも手を握られて今の自分の心境と気持ちと向かい合う暇もなく『幽玄の白天城』へ向かいだした。まるで自分のことを友人のような扱いをしてリユーは更に当惑する。

「それを言うならあなたの作る料理は本当に美味しいわよ。冒険者で料理を作るなんて珍しくないけれど、今まで食べた事が無いばかりで今じゃイツセーの料理を食べる事が楽しみの一つになっちゃったわ。あ、主神様は今夜も食ベに行く気だからよろしくね？」

俺は料理人と勘違いしていないか？とアリーゼに何か言いたげな面持ちをしたら「申し訳ございません」とリユーが謝罪の言葉を述べた。その意味は自分達も今夜たかりにやってくる意味も含まれていたのだが、当の本人はそれを気付かない。

「……あ、あの」

リユーは不意にこう口を滑らした。

「あなたにお礼がしたい。私にできる事なら何でも言って下さい」

「お礼？……じゃあ、翼の手入れの手伝いをしてもらおうかな」

「「ゴクゴクゴクゴクツ……」」

その日の夜――。椿がビールなる新酒を飲み仲間（ロキ、ガレスを始め）に軽く口滑らしたことで食事だけでなく酒までたかるようになった。

「かあつー！この喉越しにこの切れ味、たまらんっ！エールじゃ絶対に味わえへんでこれっ！」

「ドワーフの火酒より強くないんじやが、ロキの言うとおりましたまらん味じやな」

「であろうであろう？このビールは真に美味しいのだ。冷えた硝子杯ジョッキが琥珀色の酒を更に美味しくさせてくれる！だから――」

揃って空のジョッキを突き付ける三人の目線の先には真紅の少年がいた。

「「イッセー、ビール追加」」

「だから俺は料理人じゃないってなんべん言わせんだてめえらっ!？」

「そう言いつつ料理の追加を作るイッセーはその手の人になっているよ」

パン粉と卵で付けて油で揚げた肉や魚のフライ、小麦粉と水、マヨネーズで付けて揚げる野菜や魚介類を別々の皿に盛り付けて持つてくる言動の一誠は、に苦笑いするフィンからの指摘を受ける。

「料理の技術が向上する『スキル』も発現しちゃうほどだものね」

サクツと出来たてのトウモロコシとクリームが入ったコロツケの未知の味の美味しさに食べて頬を僅かに綻ばせるヘファイストスの極東から輸出してもらった魚介類のフライは極東組の神々とアスファイ、野菜はデメテルとディオニユス、肉はガレスと椿を中心に平らげられていく。油も極力抜き取った揚げ物はソースや醤油、マヨネーズ等の調味料やソースを付けながらご飯と食べると更に彼らの食欲が後押しした。

「いやー、モグ、本当に、モグモグ、んぐつ、イッセー君の料理は、モグモグモグ、美味しい物ばかりだね」

食べるか喋るかどっちかしろよという雰囲気醸し出しても、気づいていないのか気づいていても気にしないでいるのか分からないままヘルメスは食べ続ける口と喋る口を止めない。

「イッセー君、やっぱり店を構えてくれない？オレ、毎日通っちゃうからさー」

「ふふ、そうね。働くあなたの姿を見てみたい」

「せやせや、もっと色んな料理食いたいわ」

何でそんなことを俺がしなくちゃいけないんだ、と呆れながら神の願いを拒絶するだろう。そんな予想が出来るほど付き合いは短くないと自負する彼等彼女等の考えは、裏切られるとは思いもしなかつ

た。

「……そうだな。いつまでもたかりに来られるとこつちも考えなきやいけないな。食費はタダじゃないんだし」

半ば投げやりに答えたそれは、一同の手を止めさせ視線を一身に集めるほど効果が秘めており、奇異の視線で向けるロキ達は「本気か？」と聞かずにいられない。

「えっと、イツセー君……本当に？」

「毎度毎度そう望んでいるんだろ。さつきも言ったように食費はタダじゃないんだ。この先ずつとたかりられると俺の金が皆が食べている料理と一緒に全部食べられて無くなる一方なんだけど？」

稼いだ金は必要なこと以外使わない主義であるが、必要だと思った事にはとことん使う。食費＝食材や調味料を買い占めるその金も決して安くはない。指摘を受け言及され何も気にせず未知の料理をたかりに毎週、特定の神や人問わず最高四日も訪れる神々や眷族達からバツ悪そうな呻き声が聞こえた。

「すまない、イツセー」

「謝って済むならギルドや【ガネーシャ・ファミリア】と【アストレア・ファミリア】はいらぬぞフィン。ああ、そう言えばその二つの派閥の主神と眷族がここにいたっけな」

都市の治安と規律を守る正義の旗を掲げる【ファミリア】へ皮肉の言葉を送り、体を硬直、委縮させる効果は抜群だった。

「と、神々から熱い要望に応えようと思うが——今さら冗談なんて言うなよ。言ったら無断で葡萄酒を飲まれた次に怒るからな」

『ハ、ハイ……』

こうして、何とも言えない理由で異世界で異世界の料理を作る異世界食堂が爆誕するのであった。誰もが心待ちにしていた——とは言えない者達は密かに何人かいる。その内の二人が自分の主神を不満げに睨みつけている。

「え、なんやアイズたんアリサたん……すっごく不機嫌そうな顔で睨んで……母親説明してくれへん？」

「誰が母親だ……イツセーと過ごす時間が更に他で割かれてしまっ

て、構ってくれなくなる。その作った原因がロキだからだろう……二人とも、言いたいことがあると言った方が良い。スツキリするぞ」「ロキ、すごく大嫌い」「ロキ、大嫌いだよ」

この日、精神的に一柱の女神が死んでしまったが、周囲の神と眷族達は関係ないと蚊帳の外まで意識を置いた後。「家から近い西沿いのメインストリートにしない？場所も確保するわ」と珍しくバベルの塔へ帰り際に言う美神が何故か張り切っていたことに、一誠は首肯も否定もせずただ疑問符を浮かべて首を捻る。そしてその後、翼の手入れの手伝いをしてもらう約束の時間を迎えたのだが。

「薄々思っていたけど、やっぱりこうなったか」

アリーゼとリユーにお願いした事は主神の耳にも入ったことで、先に風呂に入り待っていると正義と秩序を司る女神アストレアまで裸体にタオルを巻いて入ってきた。

「ごめん、やっぱり主神様に隠し通せなかったわ」

「いや、秘密にすることもないから気にするな」

リユーも謝罪した。きつと黙っていられなかったのは彼女かもしれないと何となく察した一誠にアストレアが話しかけた。

「私の大切な眷族達を救いだしてくれたのに二人だけお礼をさせるのは、主神の私が何もしないわけにはまいりませんし許せません。私も二人と共にあなたの望みを何でも叶えるつもりです」

「女神とは言え、男相手に何でもすると言うのはダメだぞ」

「本気ですよ。眷族を助けただけでなく、結果や経緯がどうであれ彼女達の純潔や尊厳を守ってくれたあなたの行いは軽くないのです」

マジだ、本気と書いて本気で言っている。冗談もふざけてもからかってもない。アストレアの目から窺える強い意志が心から言っているのだと一誠に伝える。

「——私の体を求めるならそれでも——イタツ」

女神の頭に手刀を叩きこんで黙らす。

「女神の体を好き勝手にできるほど安くないだろうが。アリーゼ達を助けて身体を求めるぐらいなら——俺を異性として愛してくれる、

神じゃなくて一人の女のアストレアとしたい」

金色の翼を背中から生やしながら言う一誠に不意打ちを食らったアストレアはどきりとしてしまう。初めて見る【天使】テ・シーオの象徴の翼を間近で目の当たりにし言葉も失う。

「……あなたは、本当に下界の子供なのですか？」

「他派閥に内部事情を教えるのは規則違反ルールだろ？」

尤もな事を言われてそれ以上は何も言えず、一瞬押し黙ってはまた尋ねた。

「なら……ヘファイストスは何か知っているのですか？」

「何一つも知らない。いや、教えていない。俺の抱えている問題は他者に教える事が出来ない深い事情だ」

「それは一体……」

「知らない方が幸せだって言う時もある。話しは以上、そろそろ手伝ってもらおうか」

話しを半ば強引に打ち切って翼の手入れを催促する。椅子に腰を下ろし鏡越しで後ろにいる三人に向かって指示する。

「そこに置いてあるボディソープでタオルに付け泡立て、翼に優しく押しつけながら梳かす感じで洗ってくれ。俺は内側を洗うから」

「……わかりました」

これ以上の詮索はできなくされた。自分達の事を信用・信頼していない。あるいは本当に抱えている秘密を教えたくない。そのどちらか、両方かそれを断定することができないアストレア達は――。

「えつと、タオルってどこ？」

「身体に巻いているのがあるだろう」

「……えつ？」

全裸になって翼の手入れをする羽目になって恥ずかしい思いをするのであった。

「……」

三人に手入れをしてもらってからその二週間後。フレイヤに誘われて付いていくと西のメインストリートに構えていた筈の建物が3、

4軒分も更地となった場所の前に辿り着いた。意味深で綺麗な笑みの美神に初めて戦慄を覚えたのは余談である。

「こ、ここにいた人達は……?」

「正式な取引とお願いしてそれ相応のお金で買い取ったの」

絶対、魅了したな。と魅了された家を追わされた人達に対して物凄く申し訳ないと罪悪感と謝罪の念を深めた。これはもう絶対に後が退けられない、と頭の後ろで汗を浮かべ直ぐに準備に取り掛かり完成したその店は、『暗黒期』のオラリオに良くも悪くも神や冒険者、民衆達から注目と関心を寄せて大いに賑やかせたのだった。

「イツセー、一人で大丈夫なのか?」「ゴブニュ・ファミリア」に依頼した方が早いぞ」

自室で店の設計図を描き込み始める一誠を後ろから覗きこみ、フレイヤとの交わした話を教えられたリヴェリアはそう提案をしてみたが否と返ってきた。

「異世界の魔法や力を以ってすればお茶の子さいさいだ。それに他人に創らせるよりは自分で創りたいんだ。俺の想像した通りの店になるからな。それが終わって完成したら食材集めと食材を寄付してくれる商人と【ファミリア】の恩恵を確保しなくちゃな」

「お前一人で働くのか?」

「異世界の料理を主に作るんだぞ?俺以上に作れるやつはこの世界にいない。俺以下だったら心当たりがあるがまずは俺一人でやるつもりだ」

「……私達も手伝ってやろうって言ったらどうする」

「三人のウェイトレス姿、ロキが興奮して暴走しかねないのとリリアは副団長でアイズとアリスはいずれ幹部位にまで成長する。【ファミリア】から脱退しない限り、休み以外の仕事の途中で抜けだされるのは少し困る。働く店員が充実していない時は特にだ」

「……そうか」

申し出を断れ、正論と論破もされて少し残念そうなりヴェリア。一誠もできれば一緒に働いてもらいたいと思うが【ロキ・ファミリア】は

他派閥だ。同棲をしても本拠地ホームと変わらない生活を送れているが、それ以外の事まで同じ時間を割いてしてしまえば彼女の立場や仕事等に支障が出る可能性がある。迷惑を掛けたくないが為に正論で断つた。

「確かに料理の腕前と荒事の対処ができる冒険者のような料理人は欲しいと思うが、そんな人間そうそういないだろう」

だが「ヘファイストス・ファミリア」に所属して、ついに一年目が経ってさらに店が完成した数週間後——恰幅の良いドワーフの女性を始め、転生者達から助けた女性達が店に上がり込まれ、半ば強引な押し掛けで共に店を切り盛りすることになるのを一誠はまだ気付かない。

冒険譚 21

「ガネーシャ・ファミリア」が身柄を拘束し、数日に渡って事情聴取・尋問を受けた異邦人等ヒーロー組から様々な情報を得た。聴取に関わったガネーシャやシャクティは、やはり信じられない気持と驚きで胸がいつぱいになる。

「……異世界から来た者達とは。ガネーシャ、神のあなたは異世界の存在は認知していたか」

「ガネーシャ、全然知らない。だが、あの子達の言葉に嘘はない。事実だけを述べているぞシャクティ」

全員の尋問を終えて休憩中のシャクティの胸の内は戸惑いの色で渦巻いている。ガネーシャは神として少年少女達の必死の身の潔白の訴えに重く考えている様子で腕を組み、眷族にそう言い返す。

「あの子達だけではない。アルテミスの眷族全員が異世界から来たとはガネーシャ超驚きだ」

「では、あの話も事実だと言うのか」

事情聴取をしている際、他にお前達のような存在はいるのかと尋ねた時。何人も同じ人物の名を告げたのである。

——兵藤一誠、この世界じゃイツセーって名乗っているあいつも異世界から来たやつだ。

——兵藤はただの人間じゃないんだよ！外見は人間に見えても実際は人間じゃなくてドラゴンなんだぜ！

「……」

シャクティの言いたいことを察し、静かに頷いた。

「本当だ」

「……そうか」

何故だか一誠の秘密を知っても動揺していない自分に不思議で堪らなかった。ガネーシャが度々ごちそうを食べに足を運び、愚痴を漏らしながらも食事を用意してくれる姿を何度も見てきたからなのか、とても人の皮を被ったモンスターの様には全然見えないだからか？

「ヘファイストスの子供の話しを聞いても嘘か本当なのか分からない

でいる時があった。下界の子供ならば俺達神々の前では嘘を言えないのに不思議だと思っていた。それがあの子達の話しを聞いて不思議と言う謎がスッキリするほど解消した」

「モンスターだから、か、ガネーシャ」

「うむ。ガネーシャもそう思う。だから不思議だ。ヘファイストスの子供は俺達神々と人類を欺いていながら、今日まで大人しくしている理由は何なのか気になってしょうがない」

主神の発した言葉にシャクティは達観した風に悟った。

「確かめに行くのか」

「勿論！人とモンスターの融和を築けるかもしれない機会かもしれないからな！」

こうなった主神はもう誰にも止められない。警戒は怠らないが、異世界から来たモンスター……どれほどの力を持っているのか、自分達やこの世界の敵になり得るか確かに確かめに行かねばならない事は理解する。

「異世界から来た者達の扱いはどうする」

「無罪放免！解放してよし！ただし、夜中だな！」

「……団員達を納得させる理由と説得はするのだぞ」

「任せろ！」

親指を立ててサムズアップ、ニカツと笑って輝く綺麗な白い歯を見せて言う主神に溜息を吐く麗人の団長。それから迅速な行動でヘファイストスの下へ訊ね、『幽玄の白天城』に入れるよう許可を貰ってから一誠の家にあがった。

「神ガネーシャと【象神の杖】アンクラーシャがくるそうだな」

「聞いてたか」

「あれだけ声が大きければ聞かまいとしても嫌でも聞こえる」

魔道具製作工房で何かを作り掛けている城の主を左右から、斜め後ろから眺め少女達は興味津々な目で組み立てられる黒い物体を見ながらハイエルフの話しを耳にする。そして好奇心で訊ねた。

「イツセー、これはなに？」

「魔法を放つ飛び道具を作っている。遠くからでも無詠唱で魔法攻撃

ができるようになる」

「??？」

どんな道具が出来て魔法攻撃ができるのか想像が固まらず浮かべないアイズの頭上に疑問符がたくさん浮かぶ。分かりやすく教えようと一誠は指を鉄砲に見立てて構え、指先から魔力を集束させ壁に向かって放った。

「今の見た感じを道具でもできるように作ってる」

「それならそんな道具を作らずともイツセーならばできるのだろう？」

「俺じゃなくて他の皆が出来るようにするんだよ。回復魔法が無い冒險者かもしれないけど、様々な魔法効果を付与する攻撃もこれで行ったらかなり便利だと俺は思うな」

ガチャンと組み終えたそれはL字が横にして作られた漆黒で鉄製のものだった。もしもこれをキリト達に見せたら弓使いのシノンが真っ先に反応する代物——銃である。が、リヴェリア達からすれば変わった形の道具だと認識する。これで魔法を放つ事が出来るのか？と疑問視をする彼女達にある物の存在を見せつける。先が尖って楕円形の形をした多種多彩な色の小さな物が机の引き出しから無造作に取り出された。

「これは精製した魔法石に魔法を籠めた弾丸だ。これを媒体にして魔法が発動する仕組みになっている」

「それが、今さっき見せてくれたようになるのか」

「そう言うこと。でも、これは命中精度が求められるから外したら無駄撃ちになる。弾も数に限りがあるから打つ時は気をつけなきゃ駄目だし、弾の装填をする時だって無防備になる」

使いどころが試される物を作ったそれは果たして戦闘に役立つか、使い手次第。実際にそれを見る時は——案外遠くなかった。それは何時になるか分からないが、立ち上がる一誠が使う姿を見てみたいのも事実。

「来たな」

来訪者ガネーシャとシャクティをリビングキッチンに招きながら挨拶を交わす。昼食前に来たのでまだ料理を作らない一誠は用件を訊ねた。麗人の表情が何時になく真剣で、真意を追究するように何かを探る目付きをしていた。——もしや、と心中ある予想をして先に質問をした。

「[アルテミス・ファミリア]の団員達から何か聞けたようだな。言っておくが俺はあいつらとは無関係だ」

「無関係とは思えない程、お前の事を詳しく教えてくれた。それがすべて嘘だと言いたいのか？」

「ああ、あいつらは俺と別の男と被せているだけなんだよ。だからあいつらが俺の事を何を知っているようにと親しい感じでいようと俺は——」

シャクティは一誠の話しを遮る。リヴェリア達の間を見開かせるとんでもない言葉を口にして。

「人の皮を被った、異世界から来たドラゴン……兵藤一誠と言う名前が真名なのだろう」

「「っ!？」」

「……ガネーシャ」

「すまないがロキの子供達よ。事実なのだな？」

神まで口に出され、一誠の秘密を明かしているのかまだ幼いアイズとアリサは思わず少年の方へ視線で乞うてしまった。沈黙を貫くりヴェリアもシャクティに肯定として受け取られ「そうなのだな」と認めさせてしまった。

「イツセー、いや……兵藤一誠と呼ぼうか。どうしてモンスターが人の姿でいられ、私達に襲いかからないでいた？何か理由でもあるのか？それとも……私達を懐柔してから襲うつもりだったのか？」

「へフアイストスの子供よ、どうか質問に答えてほしい」

返事を、返答を求める二人を見続けきつと胸の内は穏やかではないかもしれない一誠を見つめるハイエルフと幼女達は成り行きを見守

るしかできない。場合によっては自分達も介入する心掛けと姿勢でいて。

「……………」

静寂を保ってしばらく経った。一誠の上半身が倒れてテーブルにゴンと頭をぶつけながらうつ伏せになる。奇異な視線を感じながらも深い溜息、「はあ……………」と諦観と達観、嘆息が籠った声を吐露した途端。

「あいつらの誰かが俺まで告げ口したのか……………最悪、最悪だ。口止めしとけばよかったな。こうも簡単に俺の秘密が知らないところで明るみになるなんて……………面倒事にならないよう隠し続けてきたのに人の苦勞も知らないのかよあいつら……………あああ……………もう……………」

ゴリゴリと首だけ動かして憂鬱気に愚痴を零し始める。こんな一誠見た事もないと若干引いてしまう五人。心なしか暗くなっただけだろうか？

「……………本当なのだ。人の皮を被っていると云うのは」

「……………はあ、ああ……………そうだよ、そうだからなに？何か不都合なのかお前等にとって」

「さっきの質問に答えてくれ」

ぴたりと動きを止めてゆつくりと顔を上げて見える表情は面倒極まりないとかめつ面だった。

「俺はモンスターだぞ。真偽を断定できないガネーシャが俺の嘘を見抜けると思えないな」

「少なくとも私はお前の事を信用している」

「モンスターだと知る以前の事だろそれって。その目、まるで俺の正体を教えたリヴェリア達みたいだ」

「……………【ロキ・ファミリア】も知っていたのだな」

三人にも目を向ける麗人にハイエルフは首肯する。

「ああ、この世界のモンスターではないからな。こちらから手を出さない限りは無害なモンスターだ。それどころか私達に対して有益にもなっている。できればまた【ファミリア】に戻って来てほしいぐら

いにな」

「正気なのか……？バレたらこの都市に居場所がなくなるぞ」
「ギルドが最大派閥をオラリオから追放するだけでも？仮に「ファミリア」が解散になろうとロキとフィンにガレス、この場にいる私達だけいれば問題ない。イツセーの実力は【わうじゃ猛者】を凌駕する力を持っているのだからな。深層、未到達領域なぞあつさり踏破することも容易い。寧ろイツセーの存在はギルドにとっても有益であることだと思うがな」

「んっ」

一誠を絶賛するリヴェリアに「その通りだ」と頷くアイズとアリサに目を丸くし、信じられないとシヤクティは一誠に視線を向ける。

【わうじゃ猛者】を凌駕するモンスターだと？」

「俺からも少し訂正と補正させてもらうけどよ。俺はモンスターに転生した元人間だからな？それとシヤクティの質問に答えるなら、襲う理由がないからだ。敵対することも敵視することがなければ意味のない事はしない主義なんだよ」

「も、元人間？モンスターに転生……？」

「なんだ、あいつらはそこまで言っただけだったのかよ。説明不足で俺を疑わせる言い方をしやがって迷惑な事だな」

本当にその話は聞いていなかったようで大きく口を開けて驚いて固まるガネーシヤに言葉を失うシヤクティ。

「ガネーシヤ……超驚き」

「付け加えて言うぞ。俺がこの世界に来る前、元々住んでいた世界はロキやヘファイストス、ガネーシヤと同じ名前を持つ神々がいる世界だ」

「な、なんだとおおおおおおおおッ!？」

椅子を倒す勢いで立ち上がった男神。ロキもこの話題で食いついてきたが、ガネーシヤもロキ以上に食いついた。興奮のあまり、行儀悪くテーブルに乗り出して一誠の前まで四つん這いで近づく。

「異世界のガネーシヤはどんなガネーシヤ!？」

【わうじゃ群衆の主】って見た目が象の神様だ。格好は……まあ、似て

る方だな」

それとテーブルに乗るな。と意味を籠めてガネーシャの額にデコピンして吹き飛ばし、「どはっ!」床に落とす一誠の挙動を目の当たりにしても誰も男神を心配する者はいなかった。

「で、理由を教えたがどうなんだ感想は」

麗人はこれまでの言動を考慮し、考え・・・考え・・・悩み、答えた。

「まだ半信半疑だ」

「当然のことだな」

「だが、お前の作る料理は私が知るモンスターでは作れないのも確かだ」

「元人間だから作れるんでね」

「お前を討伐しようとしたら、逆にこちらが滅ぼされかねないのか?」

「いんや、オラリオから出て行く。それで安心するだろ?」

「・・・モンスターになれるか?」

お安い御用だと、立ち上がり人の形を崩してガネーシャとシャクティの前で真紅の龍となってみせた。眼前で本性を露わにするドラゴンに驚愕しつつ椅子から腰を上げ、一誠に近づく。姿はもはやモンスターそのもの。ジツと大人しくしている姿でも警戒してスツと腕を伸ばし、異形の腕に触れてみた。生気を感じさせる温もりが手の平に伝わり、もう片方の手も異世界のドラゴンの体を確かめるように触れ始める。

「本当に、竜そのものなのだな。ここまでモンスターの体に触れる事が出来たのは初めてだ」

「そりゃ俺しかできないだろ。というか、お前よりガネーシャの方がよっぽど触って来ているんだけど」

その言葉に顔を上げた麗人の目には、何時の間にかドラゴンの背に乗っているガネーシャの姿。もう少し警戒と躊躇をしてほしいと心から言いたいところだが、この男神に何を言ってもダメであることを悟ってしまう。

「・・・少し飛ぶ。乗れシャクティ」

「はっ！」

ガネーシャを背に載せたままりビングキツチンを後にしようとする手に掛けて開ける一誠に唾然と見つめる。一拍のうちに慌てて追いかけて——玄関の扉の間から外へ出て翼を羽ばたかせたドラゴンが宙に浮きだすところを、全力で乗った直後に敷地内を勢いよく飛翔する。

「おおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！！！」

「——ッ!?!」

背中から振り落とされないようにしているのか、それとも落とさないようなにかしているのか分からないが巨大な森の中をスイスイと敷地内を何週も飛び続けた。モンスターの背中に乗って飛ぶ事になるなど冒険者として、一人の人間として絶対でない事だと思っていた麗人は、この日を持って常識を覆された一人になった。

「——とまあ、こんな感じで体験させてみたがどうだった？」

「超・最・高！」

「……驚かされた」

「ん、ありがとう。これで俺は無害なドラゴンだってわかってくれて嬉しい限りだ」

ホームへ戻る二人を見送り、今回の件は他の皆に内緒と言うことで約束してくれた。

「ヘファイストスの子供よ。これからもこのガネーシャと仲良くしてくれ！そして次の【改宗】コンバージョンは是非とも【ガネーシャ・ファミリア】で！」

「俺自身がそれを決めるわけじゃないんだが……ま、そうならよろしくな」

「そうなればお前の事をもっと知ることができるのだな……少し不安だが、お前を知る機会だと思う」

「お互いに、な。あ、あいつらを解放してくれると助かる」

勿論今夜そうするつもりだと、ガネーシャが不思議な姿勢ポーズをしてからシャクティを引き連れて去って行った。

「よかったなイツセー。あの二人に受け入れられて」

「まだ全面的に信用と信頼されているわけじゃないだろうけど、取り敢えずは安心できた」

安堵で撫で下ろす気分に戻る暇もなくホームの中へと戻りながら扉を閉める。

「——まだ不安の種は残っているがな」

【アルテミス・ファミリア】の異邦人達が簡単に一誠の秘密を明かしたことに杞憂しているのだろうか。一瞬だけ厳しい顔と目となった少年を横から窺え、寄り添うように隣を歩く。

「できる限りの事を尽くしてお前を守ってみせる。ロキとフィンに頼み込んでな」

「ロキはどうでもいいけどフィンに申し訳ないって」

「お前には大きな貸しと恩がある。それを返せないようではあいつの野望以前に【勇者】^{ブレイバー}の二つ名が廃るだろうさ」

そうか、と相槌を打つと「ああ」と返される。真紅と翡翠の長髪を背中に流しながら歩く二人を出迎える金と銀の幼い少女達を見て自然と微笑んでしまう。——そしてその日の夜。深夜になってようやく解放された異邦人達もキリト達の下へ帰って来られ人安心し、手渡される装飾品を見て異形の異邦人達も別の意味で不安が解消されたの日から堂々と街中を歩けるようになったのであった。だが……少なからず知らずの内に一誠の反感を買ってしまったのは知る由もなかった。

「(だが、それは建前だ。一人の女として愛しい男のために守りたいのだ。イツセー、愛するお前をな)」

「イツセー、クリスマスするでー!」

話しは唐突に始まる。気温が急激に下がり吐く息が真っ白、肌に突きささる冷たい空気、身や骨が凍えそうになる季節、冬になって半月がたった頃……ダンジョンでから戻ってきた一行にロキが出迎えながら開口一番で一誠にそう話しかけた。

「クリスマス?この世界にもそんな催しの概念があるんだな」

「ほー、異世界にもクリスマスが流行っておるんやなー?」

「で？本音は俺の料理なんだろう？特にこの季節しか作れない様な酒のつまみになるやつ」

「うちの気持ちを分かってくれるイツセーは大好きや！当然、あるんやろお〜？」

なくはないが、神聖なイベントを建前にして不純な動機で作るのは些か気が滅入る。

「そんな暇ないだろ。イルヴァイス闇派閥がまだ街のどこかで潜んでいるだろうし、その抗争で住民が被害に遭って恐怖で怯えたり住む家を失くして路上に彷徨っている人間もいるんだ。そつちの対策を優先するべきだろ」

「うぐっ……」

「それにロキのホームもまだ崩壊したままだ。団員達が寒い中復興作業をしているのに主神だけ楽しい思いをしていいわけ？」

反省した様子で縮こまる最大派閥の主神に溜息を吐くりヴェリア。「ということでも却下」とトドメの言葉で刺してホームの中に入る一誠から離れ、アリサがロキに乞うた。

「『ステイタス』の更新して」

アリサ・イリーニチア・アミエーラ

L v. 2

力：C 6 2 3 ↓ 6 3 0

耐久：D 5 0 2 ↓ 5 1 1

器用：E 4 3 2 ↓ 4 3 7

敏捷：E 4 2 1 ↓ 4 2 5

魔力：I 0

「……」

『力』アビリティをCにしなければならぬ条件は達していた。あの剣を振るえるようになった喜びは今も覚えている半面。今の『ステイタス』の結果を写した羊皮紙に厳しい目付きで「(低過ぎるっ……)」と焦燥に似た何とも言えない気持ちを抱き、『基本アビリティ』の数

値、すなわち熟練度の限界値は999。これが種族としてのアリサの上限。「ロキ・ファミリア」に入団してちようど三年を迎えようとしている冬。アリサは、壁に直面していた。そんな中でロキが今気付いた風に声を出した。

「そうそうアリサたん。初のスキルが発現したで？」

「え、スキル？」

【異龍一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・結ばれ相思相愛の丈によりさらに効果向上。

銀目が固まるアリサを見てスキルの内容がアレな故にロキは、内心複雑であるも、変態親父セクハラおやじのような相貌を崩した笑みを浮かべる。新しいおもちゃを手に入れた子供のように全力で淡い恋心を暴露された幼女をからかうために。

「アリサたくん、こくんなスキルが発現するほどイツセーのこと好きなんやなあ〜？」

「っ!?!?!」

「あ、待って。恥ずかしいからってうちを殴ろうとせんといてやつ!?!」
ぎゃああああっ!という悲鳴が防音が整っている部屋から表で待っているアイズの耳に間で漏れる事はなかった。

「こ、これは……………」

「？」

【禁断の憧憬一途】

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果持続。
- ・人の道から外れ禁忌を犯し続ける限り効果持続。また懸想の丈により効果向上。

「（これは絶対に表に出しちやいかんやつやつ!?）」

速攻でそう思わずにはいられなかった。モンスター、とりわけ半人半蛇^{ミミア}など人型の異形種に欲情する以上性癖である『怪物趣味』。人類側では最大級の蔑称とされ、忌避されている。つまりこのスキル【禁断の憧憬一途】は——人が怪物に恋した意味を表しているのだ。アイズが一誠に人として間違っている恋をしている。スキルに発現するほど、一誠を好きになっていくアイズ。しかし幸い少女は二つ目のスキルの事をまだ気づいていない。ならば、彼女が墓に入るまでこの禁忌すべきスキルの事は隠し通す必要がある。フィン達にも語る事は許されない自分だけが抱えるべき幼女の秘密を。

「どうしたの?」

「い、いや何でもあらへんで?ただアイズたんのアビリティイが目を見張るほど凄く成長しているから驚いただけや」

嘘は言っていない。実際に「ステータス」を写した羊皮紙に——二つ目のスキルを消去して見せつけると、アイズは驚きと歓喜の色を顔に浮かべ急いで服を着だす。一誠に結果を報告したいのか嬉しそうに部屋から飛び出していく様を、とんでもないスキルが発現しなかったら素直に喜べたロキだった。

「はあ……この調子じゃ他の子供もアイズたんみたいなどんでもないスキルを発現しそやで」

「……むう」

冷蔵庫の扉を開けっぱなしで中身を食い入るよう見つめている一誠がいた。困った様に眉根を寄せて、食事を作る前に足りない食材を記していくとますます眉間に皺が寄る一方だった。

「参ったな……この世界じゃ手に入らない食材と調味料ばかり予想以上早く底が尽きかけている。ロキんとこの女性団員達が来て一気に減りが加速したか。まあ、明日はあの日だから手に入らない物や無くなり掛けた物を中心に、前以ってアノ代価として頼んで用意してもらってるから大丈夫だけど……」

「——あの日って何?」

む？と横に視線を向ける視界に小さな小女達が立っていた。「どした？」と訊いてみると相手は「プリン」と短く答えた。冷蔵庫の前に突っ立っている一誠はそのデザートを取り出して手渡す。

「イツセー、あの日って何？」

「まあ……一言で言えば食材を調達する日の事だよ。一ヶ月に一度だけしか頼めれない貴重な日だ」

「食材？お店じゃ買えない物？」

「そうだな。特に異世界でしか手に入らない食材と調味料ばかりだ。アイズ達の好きな料理もそれに含まれてる。それらが無くなると流石に俺も作れなくなる。嫌だろ？」

うん、と心から頷いた。もしかしたらプリンを作る為に必要な食材と調味料が含まれているかもしれない。それが無くて作れなくなると思うと、二度と食べれない寂しさと残念さで軽くシヨックを受けること間違いなしだ。そう思いながら、焦げ茶色のソースごと卵色をしたプリンをスプーンで沈めつつ掬い取ってパクつと甘さと仄かな苦みを楽しむ。

「それってどこにあるの？」

「うーん……どうせ信じてくれないだろうから言わない」

「信じるっ」

「いや、信じてくれなかつただろ。——月に食堂があるって話をした時にさ」

翌朝——。アイズとアリサは自然体で動く一誠をずっと見続けていつ月へ向かうのか観察したが、意外とあっさり皆の前で出掛けること告げたので行動に移った。あの空の果てにある月までどうやって行くのか何となく想像できるが、この機を逃してなるものかと二人は皆の前でそう言った。

「イツセー、月に行くの。私も行く」

「連れてって」

「……お、お前等」

皆の前でどうしてそれを言うんだ。——ほら、何かあると好奇心と興味津々で目を向けたり意味深に笑みを浮かべたりしている連中

がいるじゃないか。

「イツセー？自分、うちに内緒でどこか楽しいところに行こうとしているんのかあ〜？」

「私に隠れて何をしようとしているのかしらね？」

「是非とも根掘り葉掘り教えてもらおうじゃない」

三柱の女神達が追究しながら眷族に指示を出して取り囲ませる。このままでは本当に質問攻めを受けて『間に合わなくなる』。それだけは絶対にあってはならない。

「……リリア、アイズ、アリサ——アリシアだけ連れてく。いな、文句は言わせない。こっちも時間通りに行かないといけないんだ。だからこれ以上俺をこの場に留まらせる気ならば、二度とお前等に料理も作らせないしこの城から追い出すぞ。別に俺は遊びで行くわけじゃないんだからな」

「「「「「」」」」」」

マジで言っている眼をしていて、ロキ達は息を呑んだ。誰も異論も問えず直ぐに身支度しろと一誠に言われた四人はバックパックを収納したカードを持参する少年の下へ集う。青白い方ではない金色の天使と化した一誠。金眼から蒼色の眼、金色の長髪になって頭上に輪っかが浮かび上がり、背中から六対十二枚の金色の翼が生える。その姿に見惚れている間、四人の体を包み込んで翼を羽ばたき空へと凄まじい速度で飛翔した一誠。数十秒であつという間にオラリオが小さく見えるほどまで上昇した。四人はその光景を見つめ続けている内に、とうとう見えなくなるところまで飛ぶ一誠が顔を向けている先へ視線を向ける。空飛ぶ鳥や有翼モンスターよりも高く、雲より高く、高く、高くどこまでも飛んで、昇り続け、ついには大気圏へ突入し、その奥にはどこまでも食らい暗黒の世界が見えた。

「え、夜……？」

「違う、これから突入する場所は宇宙と言う空間だ」

「宇宙……？」

「極論的に言うと、神でも住めない死を齎す俺でも息苦しい空間」

五人を包む淡い金色の光の膜。これで四人に齎す死を守ると言う

意味が込められ、膜から出れば命の保証はできないとも言外している。大気圏内を突破しついにリヴェリア、アイズ、アリサとアリシアは全人類初の宇宙空間へ侵入した。

「見てみる、これが迷宮都市オラリオがある世界の全貌だ」

振り返り彼女達を見させる光景は殆ど青い海で埋め尽くされている青い球状の星の姿。その大きさと地上と思しき茶色や緑、雲と思しき様々な形をしている白い綿のようなもの。明るいところがあれば闇に支配されたかのように暗い影に覆われた大陸と海域が見える。しかし、その闇に負けないとポツポツと光が鮮明に輝いている。

「すごい……」

「これが、私達が生まれ育ち、生きていた世界の本当の姿……」

「丸くて青い世界……」

「綺麗だ……」

「絶景だろ？ここへ何度来ても見飽きない」

しかし、一誠にとって四人を連れていく場所はここではない。ここは通過点でしかない為、直ぐに振り返ってモンスターの最後の末路として残る灰燼と化したそれが膨大な量で固められたような灰色の球体へ飛んで行く。暗い空間の中を時間かけて目的の月に辿り着き、月面の地面を踏みしめる一誠。四人も歩けるように光の膜を更に広げてから降ろす。

「イツセー、ここが月？」

「そ、この灰色の塊がそうなんだ。夜に浮かぶ月は太陽の光を反対側から照らされることで幻想的に光っているように見えるんだ。実際、月に来てみればこんな感じだよ」

「……あんなに綺麗な月がまるでモンスターの灰で固められたような感じだなんて、少し残念です」

月に辿り着き、次は食材の調達。それが目的でここまで来たことを彼女達は忘れていない。けどやはり、こんな灰色の塊の場所に一誠が望むような物はあるとは思えない、その気持ちますます強くなって足を前に運ぶ少年についていく。己が生まれた地球を見ながらそれなりに歩くと、一行は奇異な物を発見した。

「……なに、あれ？」

「あれが、俺が月に一度だけ必要な食料や調味料等を調達できる場所だ」

「あの、扉が？」

人が住めない宇宙空間に浮かぶ月面にポツンと静かに五人を出迎えるように佇んでいる扉があった。櫛の木で作られた黒い扉に年代物の真鍮の取っ手、招き猫のみたいに右前足を上げた猫の絵が描かれ、アリシアを除いてリヴェリア達が見たことがある読めない文字で書かれた看板に結ばれた紐を銜えているそんな猫の絵。——本当に月に扉があった。一誠の言っていた事は嘘ではなかった。そんな思いを浮かべて猫の扉を見つめている彼女達に確認の問いを投げられた。

「入る前に言っとくけど、俺は扉の向こうで一日過ごすことになってる。その間皆は暇な思いをさせるがそれでも一緒に来るか？」

「私達でも手伝えることがあれば手伝いますよ」

「ああ、そうだな」

「うん」

「うーん……まあ、取り敢えず入ろうか」

真鍮の取っ手を掴み黒い扉を開けた瞬間。チリンチリンと来訪者が来た事を知らせる鈴の音が鳴り響く。

「おはようございまーす」

「おう、おはよう坊主。ん？その嬢ちゃん達は誰だ」

最初に一誠を出迎えたのは白髪頭に白い髭を生やす初老の男性だった。年老いても未だに活発な気配を醸し出し、リヴェリア達を視界に入れて不思議に訊ねた。

「俺が今住んでいる異世界の住民で、今日だけ連れて来たんだ。店の邪魔しないから居させてくれるか？」

「客として飯を食うなら別に構わないぜ」

「よかった。それと今日は俺の給料日だけど、用意できてる？何分こつちの世界じゃ手に入らない物が多くてさ」

「今日もしっかり働いてくれれば渡してやるよ。坊主が働く報酬の代

わりにうちで色んな物を用意する約束だからな」

話しからして、一誠はこの店の中で食材や調味料を調達している風な感じであった。しかし、月に扉があつて扉の向こうにどうしてこんな初老の男と何かの店のような空間があるのだろうか？興味深々で、怪訝な思いで周囲を見渡していた皆に一誠が話しかけた。

「ここは洋食のねこやつて料理を出す店だ」

「料理店？月にどうして料理店なんて……」

「ぶっちゃけ、俺達は異世界に来ているんだ」

「異世界？異世界って……もしかして貴方の世界の？」

「いや、残念ながらそう思つて異世界の外を軽く見て回つてみたんだけど俺の世界じゃなかった。俺の世界じゃなかったけれど嬉しい事に同じ食材と調味料等があつたからさ、この店の店主に頼んでこの異世界の食堂で働く代わりに給金じゃなくて料理に使う必要なものを可能な限り用意してもらつて契約をしているんだ」

自分の服を掴んで、バツと一瞬で服を脱ぎ払うとあつという間にこの店の制服を着こんだ一誠。出で立ちは執事が着こなしていそうな燕尾服。長い髪は一つに結んで眼帯も外し濡羽色の瞳を晒している。女性達は初めて見るその姿に目を奪われてた。

「俺と孫が相手をしている客達の世界とはまた別の世界から入つて来て、更に坊主が別の世界から来たドラゴンだつて訊かされた時は珍しい事もあるんだなつて思つたぜ」

「え、イツセーの事知つているんですか？」

「おう、坊主と交流してもう二年も経つてるぜ嬢ちゃん」

二年、つまり一誠が「ロキ・ファミリア」に入団した当初からと言う事になる。その時のアリシアは一誠のこと等、名前すら耳にした事が無かつた。半年間、ダンジョンに籠つていたと言う時期があつたが、もしかするとその半年間の間にこの食堂を知つたのかもしれない。

「イツセー、ここで働くの？」

「唯一、元の世界と同じ必要な物を調達できる店だからな。働いて手に入れないと店も続かないどころかたかりにくる連中に作る料理が

作れない」

「異世界食堂って店を構えるつもりなんだろう？どうなんだ？上手くないきそうか？」

短くない付き合いの二人だ。異世界同士の情報ぐらい教え合って状況を把握している。異世界で異世界の料理を振る舞おうとしている一誠に問うた初老の男性へ朗らかで答えた。

「俺の店に毎日足を運んでくれる客は既に確保しているさ」

「成程な。洋食のねこやも坊主がいる今の世界で二号店として構えたら繁盛間違い無しってわけか」

「その時はライバル店となるなあ」

「フツ、負けないぜ坊主？」

不敵に笑みを浮かべ合う二人。一誠の正体を知った上で親しげに接する初老の男性——山方大樹はある種、一誠にとってまたかけがえない友人の一人として数えられている。

「あの、異世界の人。私を見て何とも思わないのですか？ヒューマンではないのですが」

一誠の事に関しては何かが広い人間、もしくは外見が人型だから大して気にしないでいるのかもしれない初老の男性に人間より尖ってる耳の事を言外して訊いてみると。

「あん？うちは一週間に一度、特別な客にだけ料理を振る舞っている店でもあるんだ。嬢ちゃんみたいな人間じゃない相手にも飯を出してるぜ」

「……イッサー。どういうことだ」

「まあ、直ぐに分かるよ。それじゃ、俺も食材確保の為に頑張って仕事をしようかな」

「キツチリと働かねーと給料やらねーからな坊主」

「喜んで働かせてもらうよ店主」

結局四人は異世界の食堂で働きだす一誠を手伝う暇も無くただただ一日見守ることしかできない。その理由は三十分も経たずに起きた。扉の内側に掛けられた鈴が鳴り響いた。すかさず一誠が来客を対応する。

「いらつしやい」

「うむ、また世話になるぞ」

「注文は先にライスとツケモノ、それからテリヤキチキンにセイシユで？」

「ああ、頼む」

「かしこまりました」

最初にやってきた客はガタイが良い男だった。黒い着物を着こなして、修羅場を何度も潜り抜けた証として感じる気配は、冒険者として生きているアイズとアリシアが「この人強い」と率直的な感想を抱かせた。腰に佩いている刀と男を見比べて剣士の人かなと興味が湧くアイズだった。

「む？」

卓の席に座って直ぐ、向けられる純粹な好奇心の眼差しを察知した男はアイズに目を向けた。男もアイズの目を見て、何かを感じ取ったのか感心した風に口角を上げた。

（あの者の連れか？まだ幼子であるにも拘らず中々どうして、強い光を宿しておるな）

「アイズに興味あるのかタツゴロウさん」

ライスとツケモノ、そして味噌汁を持ってきた一誠が彼の前に置きながらそう聞くと、素直に頷いた。

「俺が今住んでいる異世界の子供で剣士なんだ。今、鍛えている最中で遠くない未来、かなり強い存在になると踏んでいる」

「お主もその若さで弟子を取ったか」

「弟子にしたつもりはないんだけどな。でも、タツゴロウさんの弟子と一度剣を交えさせたいね」

「ふん、私の弟子は簡単に負けはせんぞ」

「うちのアイズも簡単に負けはしないぞ」

好戦的に眼から放つ火花が散る睨み合いはそこそこ終わってフツと笑みを零す。それぞれの時間に戻り、タツゴロウと言う男は食事をすする。

檜の木の扉が鳴り響く鈴の音と共に開き出す。次には言ってきた

のはローブを着こんだ初老の男性だった。白い髪に白い髭、杖のような物を持って一誠の案内でタツゴロウの隣に座り注文した。

「ビールとロースカツじゃ」

「かしこまりました」

その初老の男性から感じる魔力も凄まじいとリヴェリアとアリシアは察した。冒険者でもないのに、神の恩恵を受けてもいないのにどうして人間が魔力を有しているのか、異世界とはこういう人達が当たり前のようにいるのだろうか？

「のう、テリヤキ。あの子供とエルフは何じや」

「イツセーの連れらしいぞロースカツ」

「ほう、となると儂等の世界とは別の世界の者と言うことか。異世界にもエルフがおるようじゃな」

聞こえてくる会話はとても気になるものだった。この世界にもエルフがいる？なら、この店にエルフがやってくるのだろうか？アリシアはそう考えているとまた誰かが店に入ってきた。今度は言ってきた客はヘルメスみたいな軽装の旅人服を着こんだ初老の男性であった。その傍には可愛らしい幼女が佇んでいた。

「いらっしやいませ」

「おう、来たぜ！早速だがイツセー、何時ものを頼むのとあの魔道具マジックアイテムとやらは中々便利だったぞ。色んな所にスイスイと飛んで行けて未開の大陸まで行けてしまったからな」

「それは凄いな。後で冒険の話聞かせてくれ。それと、また新しいの持ってきたから鑑定した上で買ってくれるか？」

「わかった。後で見せてくれよ。お前が良いものを持つてくるから孫娘を連れてきてくれてその通りにしたんだからな」

その男もまたテリヤキとロースカツを頼んだ男達の方へ旧友と久しく会ったかのように、拳手をしながら近づいて座り出した。一誠はカウンターの奥へと消え、酒と料理を運んでタツゴロウの前に置いたそれは、リヴェリア達が食べた事のあるテリヤキチキンや一誠が作ったビール。

「「かんぱいっ！」」

仲良く酒を交わし合い、飲み始める三人。一週間に一度だけ特別な客を招くと言う話を聞いたが、この店に来る客は一体どんな人達なのか——四度目に開き出した扉の向こうから入ってくる客を視界に入れた四人の目は、驚きで限界まで見開いた。

「来たぞ店主！注文は何時を通りカツドンだ！直ぐに持ってきてくれ！今日も腹一杯食うからな！」

異様な風体の男であった——。首から上が獅子の姿をしており、全身に獣毛が生えたその男は、傷だらけで筋肉が浮き出た身体を見せつけるように薄着で、歴戦の傷がついた巨大な鋼の剣を背負っている。一見してもアイズ達の世界でも獣がそのまま人の体格でどこかの大陸に住んでいると言う話は無い。その男は、生まれ落ちた時からとある強い加護を得たある一族である。

「なんだ、奴は一体……」

デミ・ヒューマン
「亜人、ですか……？」

「モンスター……？」

「……(固)」

どっちも違うと苦笑いで一誠は否定するだろう。さらに遅れて入ってきた者も驚きだった。一言で表すなら、ダンジョンで出現する^{リザードマン}蜥蜴人そのものだった。二Mはある鍛え抜かれ、筋肉が発達した肢体。青みを帯びた緑の堅い鱗が生えた皮には、あちこち治りきった傷の痕が刻まれている。リザードマンは一誠を見やるや口を開く。

『オムライス。オオモリ。オムレツ、三コ、モチカエリ』

「かしこまりました。空いている席へご自由に座ってください」
『ム』

見間違う筈も無いモンスターまでこの店の料理を食べにくる異様な空間に、もしも得物を持って来ていたら臨戦態勢を取っていたかもしれない。パクパクと口を開閉するアリシアに凍結する金眼のアイズ、言葉を失うリヴェリアとアリサ。どちらも椅子を二つ分使って腰を下ろし、注文した料理をひたすら静かに待ち続けるその姿勢に食

入るように見てしまう。しばらくして、一誠が作ったことがある料理が次々と出され、異世界の人間やモンスターらしき者達は目を輝かせ、箸やスプーン、フォーク等を手にして開けた口の中へ頬張るように入れる。感想は「美味しい！」の一言だった。

そして間もなく鈴の音を鳴り響かせながら異世界からいろんな客達が入ってくる。中には幼子連れの初老の男性もやってきて、その子供が一誠に微笑みながら話しかけられると、恥ずかしがっているのか顔を赤くして俯いた。

「して、コロッケの作り方は——」

「ああ、それは——」

「ふむ、挽いた肉も入れると更に——」

「他にもダンシヤクの実を使った料理があつてこれも美味しい——」

「ふむふむ——」

何やら初老の男性から話しかけられそれに応じると初老の人は熱心に聞き逃しはしないとメモをし出す。一誠はそうして来客してきた者達に対応して料理を運び、たまに話し相手として異世界の事をちよくちよく聞き出している。オラリオで構えている店と何ら変わらない風景を見つづ二人は昼時まで店の隅にひっそりと座り続けた。

「悪いな。ずっと退屈だったろ」

「いえ、寧ろこの店は一体何なのか気になって仕方ありませんでした……。お仕事の方は？」

「俺は休憩だから、食材を使わせてもらつて賄いを作った。皆の分もあるぞ」

出来たての料理を持って来てリヴェリア達がいる席に座り配る。

「イツセー、ここは一体何なのだ。明らかにモンスターまで美味しそうにオムライスとかカツ丼とか食べている」

彼女の疑問に「俺達にとつて少しややこしい話になるけどな」とことう答える。

「この店は洋食のねこやって食堂だけど、俺達が入ってきたあの扉には異世界に繋げる魔法が施されているんだ」

櫛の扉に五つの視線が向けられる時。新たな客が入ってくる際、扉の向こう側は別の場所の風景が一瞬だけ見えた。五人が月まで来て扉を潜った場所とは異なっている場所だ。

「つまり、あの人達も私達が住んでいる世界とは違う別の世界から来ている人達なのですか？」

「そういうことだ。それとあのリザードマンとか獅子男のことは、異世界では魔族という種族なんだってさ。他にも様々な種族もいるそう
だ」

「……モンスターじゃないんだ」

「モンスターっぽいけどモンスターじゃないからなアイズ」

もしも魔物がダンジョンにでも現れたら嬉々として切り捨てそうな少女を、やんわりと訂正しつつ食事を交えながら自分の知る限りの事を打ち明ける。アリシアの前では言えないことを隠しつつ。二年前、月まで来て異世界を調べていた時に偶然見つけた扉は、異世界と繋げている異世界の洋食屋であることを知り、この店で働く代わりに一月働いた分の給金で望んだものを集めてくれる契約を交わしたことを。一週間に一度、ロキ達に秘密でこの二年間、そうしていたことも。

「おーい、そろそろ帰るから魔導具を見せてくれ」
マジックアイテム

話しをしていると旅人の格好をした男がこちらに声を掛けた。立ち上がってカードからバックバックを召喚。それを担いでテーブルを囲んで食事をしている男達に近寄る。

「今日の道具はなんだ？」

「孫がいるなら何らかの形でもその日の姿を残したいよな？」

「ああ、俺のサラは絵画に閉じ込めても目が痛くない程可愛いからな
！」

「何を言うメンチカツ、公国で一番の愛らしさを誇っているこの儂の孫娘が一番に決まっておろう？」

親バカなところを發揮して、言い合いも始めた。仲裁する「お祖父ちゃん、何を言ってるのよ！喧嘩しないの！」「あの、お祖父様、恥ずかしいですっ」孫娘達を恥ずかしがらせた。それを微笑ましげに笑

い、一誠しか作れない作品を教える。

「時間を掛けて絵に残すより手軽に出来る道具を持ってきた。その名もカメラだ」

「「カメラ?」」

何処からともなく二つの羊皮紙を取り出して、テーブルの上に置く。そして何時も首に下げてるロキのカメラと同じ魔導具マジックアイテムの性能を見せつけんと、二人の孫娘にカメラを向けてシャッター押す。その後羊皮紙にレンズを向けて撮った少女達姿を投影する。

「おおっ」

「羊皮紙に色鮮やかで孫娘達の絵が絵画のように……」

「ほう、儂等の世界にない魔法じゃな」

『ロースカツ』を食べてた初老の男性も感嘆の息を漏らし、興味深げに羊皮紙を見つめる。その他にも遠距離でも連絡ができる腕輪や永久保存が可能なカードのデツキ等々、バックパックから取り出しては見せつける。

「ふむふむ、異世界の道具を作る技術は達者の様だな。実際に扱い方を見せてもらうと中々便利のようだ」

「俺のお勧めはこの腕輪だけど、どうだウィリアムさん?買ってくれる?」

「勿論、全部まとめて買ってやろうじゃないか。ゴールド家の家宝として大切に使用してもらうぜ。値段はそうだな、どこでも連絡ができるって優れ物だから金貨100枚でいいか?」

「十円の千倍、日本円にして一枚一万で軽く計算すと百万ってわけだから……んー、異世界じゃ腕輪一つで数百万も価値なんだよなーこれ。作った本人としては大赤字もいいところだけど、ま、その値段でいいかな」

難色を浮かべるも一誠は用意して来た魔導具マジックアイテムをメンチカツを頼んだ男性に金貨百枚で交渉成立する。それを見ていたコロツケの初老の男性はどこか物欲しそうな面持ちで口を開いた。

「その道具、儂にも売ってくれぬか?」

「ん?まだあるからいいけど、誰と話をするんだ?」

「何、遠くから離れていても会話ができるのであれば孫娘と話もできると思うと欲しくなってしまうのではな」

「ああ、そういうこと。だったら丁度顔見せ合ったことだし、二人の孫娘とこれからも会話ができるようにしてやろうか？」

その提案に『コロツケ』と『メンチカツ』はどちらからでもなく顔を見合わせた。

「だ、そうだがメンチカツよ。構わぬか？何分、儂の孫娘アーデルハイドは友がいない故に会話だけでも楽しませてやりたい」

「話し相手がいなきゃこの腕輪の効果は発揮できないしな」

『メンチカツ』が了承したのを聞くと、早速とばかり腕輪に登録を済ませる最中。思いだしたように付け加える。

「ああ、そうそう。この腕輪は通信意外にも、登録した相手の場所にまで転移できる能力もあるんだ。事前に今いる場所を登録すれば、何時でも何処でも登録した場所に行き来できるから試してみてほしいな」

「便利過ぎるではないかっ!？」

「ほう……つまり、異世界食堂の扉がある場所に登録すれば……」

「ふむ、苦労せず移動できるわけか」

『テリヤキ』と『ロースカツ』の人達が腕輪の力の真髄を見抜いた様子で、自分達も購入の要望を口にしたのであった。そんな祖父や大人達を見ていた二人の幼女は必然的に言葉を交わす。

「……アーデルハイドって言うんだってね？私はサラって言うけど、これから話し相手になるそうだね」

「は、はい。よろしくお願いしますサラさん」

「呼び捨てで良いわよアーデルハイド」

「分かったわ、サラ」

笑みを浮かべ合い、確りと友好を結ぶ握手を交わした二人に一誠から贈物を受け取った。十四枚のカード、それぞれ七枚ずつ配られる。その理由を教えられると片や感謝の言葉を述べ、片やほんのりと顔を紅潮させ感謝の念を言葉にしながら頭を垂らした。腕輪の扱い方を教え、彼等は満足した顔で扉を開け自分達の世界へ戻って行く。その後、後の洋食のねこや、異世界食堂に異世界からやって来た客は、好物の

料理を食べまた自分の世界or住みかへと帰って行く繰り返しをしていると、時計の針は何時の間にか午後夜の時間帯にまで回っていた。

「さて、坊主。そろそろお前さんの給料を渡しておこうか」

「ん、待ってました」

「おいバカ孫。これから来る最後の客に粗相のないようにな」

「バカ孫は余計だよ爺ちゃん！」

キッチンにもう一人誰かがいたのか、直ぐに声が返ってきた。一誠は店主と一緒にキッチンの方へと赴き、いなくなつて少し経つた頃に扉が開きだした。

「二一！二一」

入ってきた客は、女王の品格とその気配を醸し出す女性だった。赤いドレスを身に纏い、その髪は燃え盛る炎のように赤く輝き、その肌は磨き抜かれた銅の色をしている。年の頃はまさに女の盛りといったところ。そして、炎のような赤い瞳の中で縦に割れた黄金の瞳孔と、耳の上辺りから生えた、真紅の立派な二本の角が女の正体を如実に表していた。

(……イッセーと同じ、ドラゴン、なのかな)

(魔族の類であることは間違いないようだな)

女性はまだ年若い青年の店員と一言二言の会話のやり取りをした後、席に座つて注文した料理が来るまで待機した。一瞬、アイズ達の方へ赤い双眸を向けたが一瞥、直ぐに顔を逸らして待つ姿勢に入つた。

「さーてお前等。貰うものは貰つたから帰るぞ」

少しして戻ってきた一誠が四人に声を掛けた。元の世界に戻つて早く夕食を作つてやろうと心情の少年を知らずとも促しの言葉に応じて立ち上がる彼女達。魔物の女性の傍に通り、扉へ近づくと――

「なんじゃ、もう帰るのか」

不意に女性が声を掛けてきた。

「ああ、連れがいるからな。飯を作らなきゃならんし」

「六柱のうちの一柱の妾の誘いよりもその耳長と小娘を優先するとい
うわけか」

「俺が何時までもここにいたら二人は帰れないだろう。その誘いはま
た七日後にな」

「そうやって誘いを断ってははぐらかし続けるお主を許す妾の懐の広
さと寛大に感謝せよ？妾の体に傷跡をつけた責任を必ずしてもらう
故に」

その言葉を最後に聞き、五人は扉を潜って月へ戻った。暗黒の世界
に存在する青い地球が見受けられる場所へ。皆が出ると櫛の扉が虚空
に消えた瞬間を見て見開く。まるで今までいた場所が夢か幻だった
かのように消えてなくなり、触れようとしても何もなければ手に感触
が無く空ぶって終わる。

「イツセー、あの魔物と知り合いなの？」

異世界の地球に戻る最中。アイズが一誠の腕の中で疑問をぶつけ
る。リヴェリア達も気になっている様子で視線を少年の顔に向けて
耳を傾けていた。

「一度だけ喧嘩をしてな。それ以来何かと誘ってくるようになったん
だ」

「喧嘩したのですか？どんな理由で？」

「喧嘩と言っても一方的な逆恨み、いや、横取りされた腹いせ……
食べ物の恨み的な感じで攻撃されて仕方なく応戦したんだ。異世界
で」

「あの、その後は……？」

「うん、彼女の正体は異世界で神として崇められている六柱のうちの
一柱のドラゴンだったんだけどさ。まあ、強くて強くて楽しかった
よ。最後は武器で斬ったり殴り飛ばしたりして圧勝したけどな」

それから七日後になるまで軽く焦りながら異世界に暮らしていた。
と朗らかに語る。二年前、そんなことがあっていたなんて露も知らな
かった四人にとって新事実を聞かされ、目を丸くするのだった。

「強いつて階層主より強かったのですか？」

「普通に強い。吐く炎もヘルハウンドより熱いし、性格は好戦的であ

の洋食のねこやに来る度に勝負の誘いをするようになったしな」

「誘いって、勝負だったんだ……」

この世界では得られないドラゴン同士の激しい戦闘。久しぶりに感じた戦いはまたしてみたいと言う気持ちが無いと言えば嘘になる。一誠は七日後、魔法で創り出した分身体を残して異世界に行ってみるも悪くはないかもしれないと口唇を薄く釣り上げた。その後、月で何をしていたのかロキ達にも伝わって震撼させるほど驚愕したのは言うまでもない。

「異世界に繋がっている扉に」

「イツセーと同じ料理を作る店があつて」

「さらには別の異世界に繋がっていて、ヒューマンや魔物が飯を食べにくるじゃと?」

「……信じられない。嘘を言っていないのは分かるけどそれでも信じられない話よ」

「ふむう……何とも言えん……」

「ふふつ、未知が溢れているのは下界だけじゃなく世界の外側にも未知が溢れているなんてね。興味が湧いたわ」

冒険譚22

「ふう、ようやく完成だ」

この世界風に則り他の商店と同じ石造。二階建てで奥行きのある建物は、西のメインストリートで構えてる他の酒場の中で一番大きく程広く建てられている。4軒分の敷地をフルに活用して創った店は比喩抜きで広い。店の看板には大きく日本語で『異世界食堂』と掛けられている。

「大きいのだな」

「三階建ても考えたけど止めた。掃除すんの面倒だしそこまで来るとは思えない」

「私は来ると思うよ?」

「手前も同感だ」

「あんな美味しい料理は貴方しか作れないものだしね」

一誠だけじゃなく同棲組も見上げて店の出来栄えに感嘆する。ただ、日本語で書かれた感じの文字は読めないらしく、五人揃って「何て書いてあるんだ?」と言われたぐらい分からなかったようだ。共通語コイネーの文字とは異なる文字は異世界から来たキリト達や転生者達ぐらいしか読めない。逆に読めることができるのは次元を超えた訳ありの者達だけなのだ。読めた上で自分に直接訪ねてくる人物は別世界から来た人間だと直ぐに認識できる。

「イツセー、陳列窓ショーウィンドウもあるがそこも店なのか?」

店の出入り口の左側、他に窓口があり何かを販売する為の陳列窓ショーウィンドウが設けられている。椿がそれに右眼を向けながら指摘すると、一誠が「ああ」と首肯する。

「パンのみを販売する場所だ。どれ選んでも三個まで六十ヴァリスだ」

「……商売になるのか?」

「その分、他は割高にしてある。一番高いのは予約制でしか食べれない最高六千ヴァリスのオードブルって料理だ。肉と野菜、魚や穀物といった食材をたくさん詰め込んだ数人分もある料理で主に家族が食

べるものなんだよ」

「そのオードブルって、私達でも食べた事のない味付けが施された料理もあるのかしら?」

無言で首肯する眷族の仕草に「食べたみたい」と食欲が湧き上がる。どれだけ食べても重さは変わらない超越存在デウスデアの体質は羨ましいと女性達から羨望されている故に後で予約しようと心に決めた。

「さて、店の方は終わったし残りは調理器具と食材や調味料の調達だな」

「私も手伝っていい?」

「報酬は?」

「コロッケ」

「それぐらいなら私もできよう。報酬はシーフードフライを頼んでいいか?」

「手前もするぞ!カレーを食べたい!」

「オムライスが食べたい」

「……私も手伝えたらよかったのだけれど」

鍛冶女神は惜しくも仕事があるので参加できない。少し羨ましげに眷族達へ視線を送り、それぞれ分かれて行動を開始した。その様子を少し離れた建物の屋根から見えていたヘルメスとアスファイ。心待ちにしていたと口端を吊り上げ浮かべた笑みのまま護衛兼付き添いの眷族の少女に話しかける。

「今夜もあの子の家で食べようかアスファイ」

「私に聞く必要ないでしょう。最初からそのつもりだったヘルメス様」

「ははは、そーいうアスファイも食べたい料理あるだろ?このヘルメスもそうさ。さて、他の神連中に教えに行こうかな。あの子の店が完成したってね」

翻る様に屋根からいなくなったと思えば空飛ぶ絨毯に乗ってどこかへ行く一柱と眷族。またいつもの神と眷族を集めて何時ものように食事を楽しむ。何時しかこれが習慣であるかのように日常となっていて数少ない楽しみの一つと数えている優男神は、羽付きの鴈広帽

しを添えながら絨毯を飛ばす。

「イツセー君は本当に不思議な魅力を持っているな」

「はい?」

「いや、独り言さ。ただ、今日はあの子が改コンバージョン宗をする日だ。オレの【ファミリア】に来てくれると嬉しいなあー」

絶対に面倒事を押しつけられて、苦労させられるから来て欲しくない半面、その苦労を分けられそうな相手が欲しいと思っっているアスフィの心は複雑だった。

「その願いどおりになってしまえば、神ロキや神フレイヤ辺りが潰しに来そうですがね」

「おいおい、怖いことを言うなよアスフィ。——本気でそうしかねないからあの二人は」

「そうですね。晴れて私も自由の身となつてあの子の傍で生きるのも悪くないでしょう。今までお世話になりましたヘルメス様」

「ハハハ、冗談が上手いなあゝ……本当そう思っていたりするのかな?」

苦笑いする主神に「さて、どうでしょう」と言い返した——数時間後。

「さて、集まった神々からすれば今日は待ち望んだちよつとしたイベントをする日だ。ヘファイストスには世話になったけれど契約通り、俺は【ヘファイストス・ファミリア】から脱退して他の派閥に入団する。ヘファイストス、団長。色々ありがとうな」

あつという間に夜。『幽玄の白天城』の中では完璧に宴状態で酒や料理がたんまりと用意されている空間の中、改めて一誠は視線を一身に集めながら鍛冶神と団長に感謝の言葉を述べた。彼女等は眷族と仲間の言葉を受け取って微笑む。楽しい一年間、驚かせられた一年間があつという間に迎えたこの日が来てしまった事にちよつぴり残念そうに思いながら。

「どういたしましたして。貴方の技術は鍛冶師ミスミスにとって大きな改革になる

かもしれないけれど、結局椿は貴方の技術を盗めなかったわね」

「代わりに大いに料理をごちそうになったぞ！」

鍛冶師^{スミス}としてどうなんだ？と思う発言であるが誰も突っ込まない。

「そしてこの度、神々から厚い要望で俺は『異世界食堂』という店を開くことにした。今後からはあの店でも食べに来てくれ。普段作らない料理も作るからじゃんじゃん金を落としてくれよ」

「それは楽しみだね、実に！」

「はい、ありがとうヘルメス。それじゃ、長話と無駄話は省略させてもらって——俺イツセーこと次の派閥を決めるイベントを始める！」

展開した魔方陣から様々な「ファミリア」の名が書かれたルーレットが出現したその瞬間。きらりと目を光らせた神々が、いたような気がした。ルーレットを見て今回投手する女神は前回当主した女神に訪ねた。

「ロキ、前回もこれで私の派閥で決まったの？」

「せやでファイたん。今回はファイたんがダーツをするやから——うちのところに当てるように頼んだで」

なに、この緊張感^{プレッシャー}は……。期待の眼差しを向ける男神から女神、更には他派閥の眷族までもが鍛冶神に注目する。

「……因みにイツセー。外しちゃったらやり直しだったりするの？」

「いや？一発に一度だけだから、^{コンバージョン}改宗はせず所属はそのまま」

「うおいイツセー!?それうち初耳なんやけど!何でファイたん時にだけ言うんや!?!」

「え?普通そうだろ。カジノのルーレットだってやり直しはできないじゃん。それに言ったのは聞かれたからで、聞かなかったロキの不注意に過ぎない。でも、あからさまに外したらもう一回やり直しだから」

前回そんな設定はなかった!と異論を唱えるロキに一蹴する一誠はそれでもヘファイストスに注意する。無論、そんなことするつもりはないと名残惜しくも真面目に決めることを示し真摯な面持ちでルーレットの前に立ち、ダーツの矢を受け取って構える。

「それじゃ、ルーレット開始！」

豪快に回し始まる円盤。高まる緊張感の空気、一年に一度だけの決め合いがこの瞬間で全て掛っている。皆の視線が一身に背中に向けられている気配を感じ取りながら静かに矢を持つ手を掲げた。回り続ける円盤に文字は眷族でなければ見れない中でへファイストスは左眼をスツと細め、凜々しい面持ちで——矢を放った。回る円盤に真っ直ぐ飛来するその様に思わず立ち上がりて見守る神がいる中、矢はルーレットに当たると掻き消えた。一体矢はどここの派閥に当たったのだろうか……注目の的は一誠の手で止められ全員で確認すると……。

「次の改 コンバージョン 宗先は——「ガネーシャ・ファミア」！」

「ガネーシャGETだぜええええええええええええええええええつ！」

吼えるガネーシャ。対象的に残念がる神や悔しがる神がちらほらというが「また来年がある」と次の機会まで虎視眈々と待つ姿勢の神々とうざったいほど狂喜のガネーシャとの温度差は激しい。

「さあ、一緒に子供達を笑顔にしようではないか！」

「うーん、このテンションの神とこれから付き合うんだなあ……」

「大丈夫だ。直ぐに慣れる」

「ハハハ……その言葉に妙に説得力というか長く連れ添った者の言葉は違うな」

シャクテイの悟った言葉に感情が籠ってない笑いをしてしまう一誠は、不意に視界に入るオツタルへ視線を向けた。

「来年、フレイヤの派閥に入団したら真っ先に手合わせを試みたい
な」

何を言っているのだ、と一誠を知らない者の反応は間違っていない。だが、知っている者はそのま逆である。ただただ無情で一誠を見下ろす猪人の武人は底知れぬ実力を見抜いて、自分を無力化した転生者相手に打ち負かした一誠の力を、フレイヤを救いだした者を認め、こう言い返した。

「——最弱。もしものその時が迎えるならば、望み通り手合わせをしてやる。逃げることは許さん」

「——最強と勝負できる機会を捨てるなんてできないよ」

戦意の光を煌めかせて真紅のオーラを迸らせる。オツタルからも戦^{プレッシャー}意と威圧を膨れ上がらせ対抗心を剥き出しにする。それを心から歓喜する銀髪の女神は頬を紅潮させ、恍惚の表情で一誠を見つめた。あの光景が最強の冒険者と真正面からぶつかって死の間際で散らす子供達の火花の最中、どんな変化を齎すのか魂を色として見る女神でも予測はできない。否、それがいいのだ。神の想像を超える実証が目の前で見れるのであれば、見なければ神ではない。

（ああ、楽しみ過ぎるっ。でも、お楽しみは最後にしなくちゃ勿体無いわ）

最初はガネーシヤに譲るとしよう。来年自分の眷族となるならば、少年をたっぷりと濃厚に愛情と色情を捧げればいい。一年前、自分に啖呵切ってみせた彼の少年の言うとおりに……。

（貴方を全力で手に入れてみせるわ、期待していてね私のイツセー？）
オツタルとの睨み合いを終わらせて戦意を消す。それからへファイストスに寄っていく。

「へファイストス」

「なに？」

「今まで世話になった。故にこれをそのお礼として受け取ってくれ。
【へファイストス・ファミリア】に所属してから打ち続けてきた作品の中で最高傑作の一品だ」

亜空間から二振りの剣を取り出す。鞘は紅と金色で意匠を凝らして長剣を収まっている一振りだけ、鍛冶神に丁寧到手渡し受け取らせる。少年に聞かず、主神として鍛冶神として長剣の出来栄えを確認しようとする。鞘から剣身をシャツと抜き放った。剣身は穢れを知らない輝白に菱形の赤、黄、青、緑、の魔法石が埋め込まれている。柄の部分は色違いで白色と紅色で意匠が施されていて、手に持っているだけで不思議な力を感じる。

「え……貴方、これっ……」

『鍛冶』と『神秘』を併せ持つ俺しかできない芸当だ。俺も魔剣を打てることがわかったからそれに『神秘』のスキルも加えて『全力』で

打つてようやく納得の一品ができたのがそれなんだ」

人懐っこい笑みを浮かべる彼は分かっているのだろうか。鍛冶師スミスの者であれば一目で瞠目する。――神へファイストスが打つ作品と同等の、絶句させるほどの代物であると。現に団長の椿が大きく右眼を見開いて固まっていた。我に返ると自分も直で触れてみたいと二人に近づき、最高傑作に触れる。

「……これが、そうか」

「え、椿……?」

「く、くくく……っ！生きている内によもや拝める日が来るとは。しかも上級鍛冶師ハイ・スミスにすらなってもおらん輩に先を越される何とも痛快なことよな」

自嘲的な笑みを零したと思えば、隻眼の紅目を団長が認める神の領域に至った武器を作った少年へ鋭い眼差しを向ける。睨み付けるように見つめてくる椿は見た事無いと左眼を丸くする。決して敵意や殺意、怒り等の感じはせず純粹に負けず嫌いなソレに近かったような気がすると感じた。

「イツセー。手前はこれからもお前の家に住まわせてもらうぞ。この作品を見てしまつては「へファイストス・ファミリア」の団長の地位など放り捨ててお主に追いつくことに専念したくなるものだ」

と、そう言い残して「早速取りかかろう」等と言つてリビングギツチンを後にして言つてしまった椿をキョトンと見送ることしかできなかった少年の名を鍛冶神が呼ぶ。

「イツセー、まさかここまで辿り着くとは正直思わなかつたわ。『神秘』のスキルもあれば私の領域かみに届くのかしら。それとも貴方だから……?」

「神の領域……?」

自覚が無いのね、とそれが怖いと溜息を吐く彼女は周囲の蚊帳の外の外の神々と眷族達を放つておいて困った様に笑みを浮かべる。

「貴方は『全力』で鍛冶をすれば、私が立っている領域に届いて肩を並べる程の技術なの。生まれて初めてのことよ。子供が私の領域に踏み込んでくるなんて……だから凄く嬉しい」

潤いに満ちた左目と紅潮する頬を晒す鍛冶神は大事そうに長剣を胸に抱える。譲ってくれるなら宝物として保管しよう。そして去る彼の後に団員達に見せびらかそう。きっと信じないだろう、無名の鍛冶師が己の領域に踏み込むに相応しい武器を打ったのだと言われ、でも頑なに納得せず直接確かめようとするかもしれない。しかし、「へファイストス・ファミア」の方針で他人の技術を見ることも盗むことも禁じている。結局信じてもらえない団員達にどうしようもないと悟る。

「でも、何で一振りだけ？その剣は？」

「これは双剣のつもりで打ったんだ。そっちは紅月、こっちは白陽。兄弟、雌雄、夫婦の剣みたいに離れても絆が繋がっていると証をあげたかったんだ」

理由を聞くとますます鍛冶女神の顔を赤らめさせた。それはつまり、エンゲージ・リング 婚約指輪。神々が言う、『プロポーズ』なのだ。知ってか知らずか定かではないが、純粹に繋がっている絆の証として具現化、創りだして雌の剣を女性に、雄の剣を男性の手に分けた少年に――。

「(イツセーの奴は知ってて渡しおったと思うか?)」

「(完全に純粹からしているだけだと思っよ。「離れていても絆は繋がっている」と口にもしてしたのだからね)」

「(せ、せややな?こんな人前で堂々とあんなことするとは思えへん)」
「(.....)」

「(.....) (なに、何でリヴェリアから魔力が見え隠れしてる??) (.....) (.....) 絶世の美しさを誇るハイエルフに戸惑う古くから付き合っている三人。理性で堪えているが漏れる魔力はそれでも隠し切れてなかった。どこか危うさを窺わせる彼女に主神は耳打ちする。

「(イツセーのスキルは神々にも影響を及ぼすもんや。無意識、無自覚であろうがなからうが色ボケ女神のように周囲を魅了してしまう。未だって無自覚でしているもんだから落ち着いてやりヴェリア)」
「(.....) (.....) (.....) (.....) (.....)」

それから宴会が始まって異世界の料理を舌鼓、好みの料理をたらぶく食って満足したり未知の味の料理を食べて感動する、酒の飲み比べ

が始まる等と賑やかな光景を静かに見守りながら腹が満たした程度で食べた一誠は——そつといなくなつて部屋に戻つた。薄暗い部屋に明かりを灯して本棚に足を運ぶと一冊の本を取り出した。

『魔法は先天系と後天系の二つに大別することができる。先天系は言わずもがな対象の素質、種族の根底に関わるものを指す。古より魔法種族はその潜在的長所から修行・儀式による魔法の早期習得が見込め、属性には偏りが見られる分、総じて強力かつ規模の高い効果が多い』

ページをめくる。

『後天系は『神の恩恵』を媒介にして芽吹く可能性、自己実現である。規則性は皆無、無限の岐路がそこにはある。【経験値】に依るところが大きい』

ページをめくる。

『魔法とは興味である。後天系にこと限つて言えばこの要素は肝要だ。何事にも関心を抱き、認め、憎み、憧れ、崇め、誓い、渴望するか。引き鉄は常に己の中に介在する。『神の恩恵』は常に己の心を白日のもとに抉り出す』

【絵】が現れた。顔がある。目がある。鼻がある。口がある。耳がある。人の顔だ。真つ黒の筆跡で編まれ描写された、瞼の閉じた人の顔。紋章の絵。

『欲するなら問え。欲するなら砕け。欲するなら刮目せよ。虚偽を許さない醜悪な鏡はここに用意した』

——違う。【兵藤一誠の顔】だ。額から上が存在しない一誠の顔面体、

——違う。【仮面】だ。一誠のもう一つの顔。一誠の知らない、もう一人の本心。

『じゃあ、始めようか』

瞼が開いた。自分自身の声が聞こえた。文字で綴られた隻眼の瞳が自分自身を射抜く。短文で形成された小さな唇が言葉を紡ぐ。

『俺にとって魔法って何だ？』

一握りの人間が持つ奇跡と偶然の神秘だろうな。

ページをめくる。

『俺にとって魔法は？』

力だ。強い力。森羅万象、天変地異ですら起こすことが可能な絶対的な力であり奇跡でもあるし天災でもある。異常現象イレギュラーでもある。

ページをめくる。

『俺にとって魔法はどんなものだ？』

決まってる——。奇跡と人では予想できない異常イレギュラーの塊だ。人間だけじゃなく、人間でもない種族ですら当然のように扱えるそんな夢みたいな現象だ。

『魔法に何を求める？』

俺が会いたい、俺を会いたい人のもとへ。

俺を待つ家族、待たせている家族のもとへ。

互いが想い焦がれる程の憧憬の如く、その気持ちを応える繋がりを感じたい。

どれだけ遠い次元と時空を超えた場所でも皆が顔を笑みで浮かべて、直接出迎えてくれることができる。

皆の前で。皆の隣で。

俺と一緒に今まで生きてきた皆とまた——。

『それは過去？それとも現在？それとも未来か？』

——全部に決まってる。

どっちも俺にとっては大切な時を刻んできた。かけがえのない大切な現実をどっちか一つに選べと言われても俺は両方だと両腕を広げて言い切り、両腕で抱えて大事だと言い張る。

『我儘だなあ。そして強欲だ』

そうだな。

『だが、それがお前だ』

本の中の自分自身いっせは、最後に微笑んだ。そしてすぐに、一誠の意識は暗転した。魔導書グリモアを読んだ末に……机に突っ伏して眠りに入った。背中の「ステイタス」に初めて浮かぶ魔法の名前と呪文を知らずに。

「——ん……？寝てたか」

眠りから覚め身体を起こすと視界の端に誰かが立っていた事に気付いた。振り向くとエルフの少女が手を伸ばそうとしていた仕草の姿勢で固まっていた。寝ていた一誠を起こそうとしていたのだろうか、どうした？と視線で訊ねると「何時の間にかいなくなっていたので」と返された。

「部屋にいるのかと思い、勝手ながら入ってしまいましたところイツセーさんが寝ていらしたので」

「ああ……改コンバージョン宗をする前にグリモア魔導書を読んでおこうと思ってな」
「グリモア魔導書……っ!？」

絶句する彼女を他所に「風呂に入ってくる」と言い残し、着替えを持って風呂場へ向かった一誠の背中を見つめるアリシア。真紅の長髪を揺らしながら浴室へ入って行った彼を見送ると、奇天烈ガラクタと化した分厚い本を一瞥し手持無沙汰になってしまい出てくるまで何もすることも無くなった。何気なく少女は部屋の中を見渡す。豪華な天蓋付きのベッド以外至って普通の家具しかない一つ、棚に収まっている数多の本が視界に入り、勝手ながら読ませてもらうおうと近づき手を伸ばす。薄い本から分厚い本まであり、長く読めれる分厚い本を棚から取り出して開いて見ると絶句した。

「こ、これって……魔導書グリモアっ?」

一度読めば魔法を強制的に発現できる書の価値を知っているが故に瞠目して声が震えた。まだ全部読み終えていないなく幸い効能は残っている。バンツ!と焦燥で本を閉じて棚に戻しつつ恐れ戦くように呟く。

「まさか、全部同じ物ではないですよね?」

この場に一誠がいたら「そんなことはない」と言うだろう。が、読み終わった一冊も含め十冊ぐらいあると言われれば驚倒する自信はあるアリシアは恐る恐ると別の本を手にして——途中で取れなかった。不思議そうに取れない本を調べてみて、巧妙に作られた本に似た何かだと分かり、「何でこんな本を?」と思いながら途中までしか引けなかったその本を押して、更に奥まで押し込んでしまつて作動させ

てしまった。沈む棚は足場となりその向こうから金色の輝きを発する口を開く空間が少女を出迎え、言葉を奪った。

「す、凄い……」

見た事のない膨大なヴァリスおかねの量の山。一生懸けても自分では稼げれない額であることは嫌でも分からされる中には化け物の宝までもがあった。上層から深層、ありふれたものから希少価値のあるドロップアイテムを始め、金属や鉱石、原材料として扱われている植物やダンジョンの中で採れる植物まであったり陳列窓の棚の中に収納されている。まるでここは金庫というより保管庫みたいだと思わせる。ただのヒューマンではないことはあの事件から知っていたが、眼前の財宝を目の当たりにしてますます不思議と疑問が――。

「何をしている」「っ！」

聞き覚えの声体が跳ね上がらせ、意識と共に視線を振り向かせた。片目を瞑って困った子を見る親のようにアリスアの背後に立つリヴェリアやアイズ、アリサ、ヘファイストスに椿までもがいた。

「リ、リヴェリア様」

「知らなかったとはいえ、無断で開けてしまったか」

「知っていたのですか？」

「一年もこの城に同居させて貰っているのだ。からくりの一つや二つは知ってくる」

出る、と催促し金庫から少女を出ていくのを確認した後。足場と なっている棚を更に押し込むと棚が金庫へ穴を塞ぐように上昇し、元の本棚として戻った。

「当然だが、この事は他の団員に他言無用だ」

「は、はい……あの、リヴェリア様達はどうしてここに？」

「お前とあいつが戻って来ないから様子を見に来た。それと神ヘファイストスが聞きたい事があるそうで話を窺いにな。だが、お前は何故ここにいる。女一人、しかも夜中に男の部屋にいるとは些か無謀備ではないか。一応、あいつも男だぞ」

王族で副団長を務めている彼女の言葉に籠った意味深な意図を察

し、翼の中で口付けをした記憶が鮮明に思い出してほんのりと朱を染めた。あの口付けより先の行為・・・あれ以上の行為の知識は心得ている少女は、男と女が暗い部屋で何するか分からんでもないだろ、とも暗に言われ「あ、あの人はあのヒューマン達とは違いますっ」と言い返したその反応にハイエルフは訝しく訪ねた。

「アリシア・・・まさかだと思いが惚れてしまったか？」
「っ・・・!?!」

——硬直

否定の文字が頭に浮かばず、拒絶の言葉が喉の奥につつかえて出ず、押し黙るアリシアが沈黙を肯定としてリヴェリアにそう認識させた。

「存外、あやつは人気者であるようだな主神様よ」

「・・・ええ、そうみたいだけれど貴女もあの子のこと、どう思っているの」

「うむ、鍛冶師として手前の良き好敵手であり良き相棒。それは間違いない」

ずっと共に同居していた眷族の気持ちも改めて知ろうと訊ねてみた。が、神の領域に届いた鍛冶師の評価は勿論だが鍛冶神からすればそういうことを知りたいわけではない。純粹に異性としてどう思っているか直接訊いて——。

「好敵手として、他の鍛冶師の男共より気に入っている半面、良い男だと思っっている。ずっと隣で鍛冶をしている内に心地よさも感じたのも、今の生活の楽しさも手放したくない。そう感じて過ごしていたら何時の間にか手前は、あの至高の武器を作った男に無縁だと思っただけの感情を覚えたのも否定はしない」

まさかの恋敵の登場に左眼を丸くして「ここからイツセーの臭いがする」と極東の女神達の登場で更に混沌と化していくのを湯に浸かっているのんびりと翼を伸ばして入っている少年は気づかない。

一誠の浴場は逆さまの凸型だ。全身を伸ばせ、肩まで浸かるほど底は深く広い。男湯と女湯より狭い造りだが満足している。仰向けの状態で水面に浮かんでいる。今日一日張り詰めていた神経や手足の

先まで凝り固まった疲労感が湯の中へ溶けていくような、そんな至福の時間を好む。何時までもこうしていたい欲求が悪魔に囁かれる耳の反対側で妥協してはダメだと天使が抑制する幻聴等、お湯の中まで浸かっている耳に届きやしない。因みに出っ張っている部分の風呂は個の湯船で四方形の部分は流れるプールのようにゆつたりと渦巻き、流動体の動きをして一誠の全身を流していく。

「……………？」

不意に――。

閉じた瞼に広がっていた白い光が遮られ、一誠の顔が影に覆われる。不自然な暗闇に怪訝で瞼を開けた途端……。

生まれたままの姿の女神が両手を広げて水面に浮かんでいる一誠に向かって落ちてくる瞬間だった。

「……………はっ？」

ヘアアイストス達が風呂場に入ってきたと同時に水飛沫を飛ばす水柱が小規模に生じた。一体何をすれば水柱ができるのか理解ができず、静寂が再び迎えた最中。流れる湯から気砲が湧き、二つ分の真紅と黒髪の頭が浮かび上がった。

「ぶはっ、イザナミ、いきなり何をするんだよッ！てか、何で風呂にいる!？」

「イツセーがいなくなっていて、風呂にいると分かったら一緒に入ろうと思った……………だめ？」

「……………フリーダムな女神だな――って、何で揃いも揃って皆もいるんだよ」

風呂場にいる異性達の存在にも気づき、湯に浸かったまま意識と視線を向ける。翼で局部を隠しながらあからさまなお約束の反応をすると、当然の否定の返しをするリヴェリア達は、それでも神々の眷族となり神々から与えられた恩恵によつて、常人よりも五感が敏感になり強化したその一つ、視力が自然と肩まで浸かっている少年の体を――。

「変態」

『違う（違います）』

入浴を中断される形で風呂から出て、着替えた少年は水気がある自分の髪を拭きながら部屋に來訪してきた女神と女性陣に囲まれる中で問うた。

「待て、何時の間にフレイヤまでいる」

「貴方と寝に來たのよ？」

美の女神、フレイヤと当たり前のようにいるオツタルへ。物凄く困った面持ちでリヴェリアへ何か言いたげな視線を送るがどうすることもできないと静かに首を横に振られ、肩を落とし渋々とヘファイストスに訪ねた。

「こんな夜中に男の部屋に來て一体何なんだ？」

「覚えてない？貴方の秘密を気が向いたら教えてくれるって。今日がその一年経った日だから教えて欲しいの」

ヘファイストスと椿はその目的でいると伝え、リヴェリアとアイズは二人の同伴、アリシアは私的に話しをしたくしている。アマテラスとイザナミは徐々に接したいと言う理由でこっそり本拠地ホーランドから抜け出した様子。

「ソナナコトイッタツケ？」

「イツセー、あからさま過ぎるぞ」

声音も不自然過ぎる、と呆れた風に息を吐くハイエルフだけじゃなく皆もそう感じていた。秘匿し続ける秘密とは何なのか、この場にいる殆どが知っている中でヘファイストスと椿、空気を読んで訊く姿勢のアリシア達はジツと件の少年へ視線を注ぐ時。

「・・・知らない方が幸せだって時もある。今の関係を自分から壊すようなものだから話したくないが？」

左眼から窺える真剣な眼差し。ふざけた秘密ではないことはリヴェリアとアイズ、アリサにアマテラスとイザナミは知っている。でも、知らない鍛冶神とその眷族の団長はそれでも、と気持ちを込めて口を開いた。

「貴方と私達の関係が壊れるほど、貴方の過去はとんでもないの？それがあの「ステイタス」の謎と関係しているのかしら？」

「過去じゃない。俺という存在自体が知られたくないという本音だ。さつきも言ったように知らなければ良かったと、知らない方が幸せだって思うほどだぞ俺の秘密は。特にヘファイストスとアシアの心と精神的に深く衝撃を与える。だから——生半可な気持ちと覚悟でいるなら絶対に教えない。それでも聞きたいというなら、これから見聞させる事の後、受け入れたくないと思つたら二度と俺の前に現れないことを約束しろ」

その方がお互いの為になる。と床に広がる魔法円マジックサークルが展開した。それは何の意味を成しているのか分からない彼女達は瞠目する最中、視界が真紅の光に塗られて意識が遠のいていく感覚を覚え・・・リヴェリアとアイズとアリスは二度目の侵入、その他は初めて訪れた——青い空の彼方や大海原、大草原に広大な森が一望できる一誠の心の中。一同は周囲の景色を見渡す。

「……は……?」

「ん、俺の深層心理の世界。ぶっちゃけ、俺の心の中に皆の精神体だけ引つ張って招いたんだ。ここは現実世界ではないからここで何しようが何がようが現世に何ら影響は及ばない。勿論、自分の体もな」
一柱の女神は目を輝かせていたが気にせずヘファイストスの要望に応じ始める。皆の前に立ち眼前で天使化となつて説明を述べる為に口を開きだす。

「まず最初に。俺は見ての通りヒューマンじゃない。【天使】テ・シーオの姿になつているが、この姿になれる特殊な力を持っているから変身できるんだ」

「ヒューマンでも【天使】テ・シーオでもないなら・・・貴方は一体何者なのですか?」

素朴なアシアの質問を彼の少年は淡々と言い返す。

「異世界から来た化け物だよ。他の奴らと同様、異世界から来た存在。最上級冒険者を圧倒する力を持っている連中と変わらない存在だ。俺を除いてな」

「・・・異世界? イッセー、貴方、何を言つてるの? それが貴方やロキが私に打ち明けなかつた秘密なの?」

「ああ、そうだって言いたいけどそれも含まれている秘密の要素。ただの異世界から来た存在だったら気兼ねなく言えるんだが、言っただろう？俺はヒューマンじゃないって」

そう意味深に言った時だった。草原が地鳴りで震え、空からは無数の巨影に太陽光を遮られどちらもこの場に近づき、ソレ等が現れた。凶暴で獰猛そうな顔、全身に綺麗な金色の体、三つ首の化け物、巨人、蛇の様な巨体、体が樹木、蒼い巨軀、羽ばたかせる白黒の翼——。

姿や形は様々であるもののどれも凄まじい威プレッシャー圧モンスターレックスと迷宮の孤王より誇る巨体、無情で鉄仮面を被っている如くのおツタルでさえ、錆色の瞳を丸くした。「ロキ・ファミリア」の団員以外の神々と眷族達の開いた口が塞がらなかつた。自分達を取り囲むようにして現れ、化け物からあり得ない理知的な眼差しを向けてくる化け物達の他にもう一人、

「俺は——俺達は——異世界から来たドラゴンだ」

右眼の眼帯を外した途端、全身から発する真紅の光に包まれた少年の体は人間の殻を破り、他の化け物とは変わらない全長百Mは優にある巨大な真紅の龍、化け物と化して真の姿を晒した。モンスターだと既に知っているアマテラスとイザナミであるが、ここまで巨体を誇っていた一誠を見た事無いと愕然の心境で目を見開いた。

『これが、お前等が知りたがっていた俺の秘密だ。これで満足したか』
「——」

秘密の真相は、ヒューマンの皮を被ったモンスターであること。あまりにも衝撃的な事実だった。誰もが予想すら浮かべることができない一誠が抱えていた秘密を知って、慕っていた女神やエルフからすれば夢であれば覚めて欲しいと願うばかりだった。しかし、他にも疑問するべき事がある。椿がそれに口にする。

「リヴェリア、お主等は何故動揺しない？」

「我々は既に知っているからだ」

眼前のモンスター達や本来の姿で秘密を明かした一誠にうんともすんともせず様子を見守る風に眺めている都市最強魔導師と小さな剣士の幼女達。驚かない方が不思議で不自然だ。都市最大派閥の眷族として絶対に反応するべき者が——知っていた？ヘファイスト

スはようやく合点したとばかり、あの時のロキや一誠の言動を理解した。

「そう言うこと、ね。ロキが言い辛そうだったのは貴方がモンスターだったから」

『この世界のモンスターは人類の天敵。モンスターの俺が正体を晒してこの世界で生きていられる筈がないだろう？だから元人間として、冒険者になって元の世界に帰るその日まで正体を隠したまま生きることにしたんだ』

「……元人間？貴方が？」

『ん、そうだ。俺は以前、仮死状態で死に掛けた時にとあるドラゴン達に助けてもらってドラゴンの肉体の一部に俺の魂を定着させたんだ。その結果こうして生き長らえつつもモンスターの体で過ごしている』
金眼を輝かせ、ヘファイストス達に……小さな濡羽色の幼女が巨大な真紅のドラゴンと共同で仮死状態のまだ幼かった一誠をドラゴンとして復活させたその当時の記憶を見せた。

「これが……今の貴方の成り立ち」

『アマテラスやイザナミにイザナギはここまで知っていなかったが、モンスターでありながら俺という存在を受け入れてくれている。ロキとフィン、ガレスも俺の過去を教えている』

「お主が異世界から来た元人間でモンスター……では、何故ダンジョンのモンスターのようにな手前らを襲わん？」

『俺がこの世界の人類と神々に襲う理由、あると思うか？椿、そんなこととして俺に何の得がある？あろうがなかろうが必要じゃなかったり興味のないことをする主義じゃないんだよ』

呆れが籠った溜息を吐きながら言い返す。間も置かずフレイヤが銀瞳を上に向けつつ話しかける。

「貴方の世界はどんな世界なのかしら？」

『同姓——ってわけじゃないが、俺達の世界は神々が存在している。フレイヤ、お前やヘファイストス達と同じ名前の神々がな。フレイツて男神もこの世界にいるだろう？オーデインもだ』

「……子供達が知らない筈の名前を知った風に言われるとは思いません

なかったわ。じゃあ、貴方の世界の私はどんな感じなのかしら」

『人間の魂を色として見ていて、愛と情欲を司る女神、ロキと交流もあつて鷹の羽衣を貸していたって聞いたことがあるな』

ほほ、自分と変わりない異世界の自分フレイヤに心底興味が湧いた。所有物の名前まで出されて無反応でいられる筈がない。

『因みにオツタル。お前は同じ名前の獣の猪でフレイヤに飼われていたぞ。後はたくさんの猫に台車を引かせてもいたっけ？四人の小人族バルムと肉体的な関係もあるって神話で書かれていたな』

その語られる話しの中には自分の眷族達まで関わっていた。ヘアイストスも気になって訊ねてみるも、名と司るものも同じであるが性別までは同じではないことを知り、凄まじい衝撃を受けた鍛冶神は半ば放心する。

『まあ、俺の世界の話はおいおい今度するとして』

ドラゴンからあつという間に人の姿に戻る一誠は指を弾き鳴らしたと思えば、目の前がグニヤリと歪み意識が朦朧とする中、薄暗い部屋の中にいる自分の体でいた事に気づく頃には、

「人間の皮を被ったドラゴンと、これからも交流する気、あるのか？ ないなら金輪際、俺と関わるのは止めておけ。お前等が不快な想いをするだけだかな」

淡々とそう言う一誠の顔を視界に入れていた。少年の心から離され現実世界に戻ってきた彼女等は、更に言い続けられる。

「だけど、俺が今まで言動してきたことは心から本音だと言わせてもらう。モンスターの体でも心は生まれてからずっと人間なんだからな」

来る者は拒まず去る者は追わず、と相手の気持ちを尊重する一誠の話に耳を傾けていた彼女達は心の整理をして、自分の気持ちを向き合つてどうしたいか答えを出してから訊ねた。ヘアイストスはりヴェリアに問う。

「ナイン・ヘル九魔姫」、貴女はイツセーのことどう思っているのかしら？」

神の前では嘘を吐けない。リヴェリアは鍛冶神からの問いに嘘を吐かず答えた。

「ロキ達ともこれからずっと交流していきたいと思っている。異世界から来たモンスターだとしても我々やオラリオの害にならないなら、無理に討伐する必要も無いとも思っている神へファイストス」

「……質問を変えるわ。【ロキ・ファミリア】の副団長が本拠地ホームから離れて私の眷族の家に【剣姫】と【焰姫】一緒に同棲するほど、彼のこと異性としてどう思っているのかしら？」

「……」

ドストレートに追及され、一瞬の躊躇をするハイエルフ。皆の前で自分の恋心を曝すような真似はしたくない。神からの問い詰めに対してできれば隠し通したかった答えを目を瞑って溜息を吐いた。困った女神だと。

「愛している」

「っ……」

嘘は吐いていない。具体的に問い詰めずとも彼女は本心で言っている。異世界のモンスターに好意を寄せているのだと聞いた本神が信じられないものを見る目で左眼を丸くした。

「私もこの感情をモンスターに向けるべきではないと自覚している。だが、あいつはダンジョンのモンスターでは無い。そう認識してイツセーといると我々を驚かせ、楽しませ、美味しい料理を作ってくれる人間と変わらない言動ばかりをする。とても我々人類と神々が忌避するモンスターとは思えない日々を暮らし、あの事件の時。本気で私達の為に怒って救ってくれたのだ。『スキル』の影響もあるだろうが、私は……イツセーのことが好きになってしまった。愛しているのだ神へファイストスよ」

素直に現在抱えている感情を、想いを告白するリヴェリアがへファイストスから言葉を失わせた。ハイエルフの告白にエルフの少女は戸惑いの色を顔に浮かべて一誠を訊ねた。

「モンスターなのに私達を助けたのはどうしてですか。リヴェリア様の為ですか？」

「いや、違う。単純に二年も過ごした仲間だったからこそ助けた。何より極東で体験したからな。オラリオでも似たような事は起きるか

もしれないと思っていたけど、実際に起きてリヴェリア達が巻き込まれた。だから皆を助けた。それだけだ」

アリシアからの質問に答えている一誠も真摯に本音で語り、だから、と断言した。

「これは正義感じゃない。個人的な信念だ。この先もあーいう連中がオラリオに現れるかもしれない。またリリア達があんな酷い目に遭わない保証はない、異変が起きたり感じたりでもしたら全力で対処してそいつを潰す」

「どうしてそこまで……?」

「昔の俺と被ってしまっただよ。モンスターになる前の俺は凄く弱かったから、周りから良く虐められていた。理不尽なまにな。だから理不尽な目に遭っている、運命で生かされている奴はどうしても放っておけなくなるんだよ。アリシア、お前も好きでもない男に犯されそうになって嫌だっただろう?それが見るのが嫌なだけさ」

背中からドラゴンの翼、臀部辺りにモンスターの尾を生やして額からも角を生やす。

「俺がこの体になってモンスターに転生してから運命という奴を抗うようになった。逆に言えば逃げてるんだよな、弱い俺を置き去りにして。それが良いのか悪いのか今でもわからない。だけど、後悔はしてないのも事実。大切な仲間を助けることができるんだからな」

ヘファイストス、椿にアリシアと呼んだ。

「こんな俺でもまだ交流をしてくれるのか?」

その問いを唇に転がし、顔からどこか不安と寂しさが滲んで浮かんでいた。口を閉ざして二人の答えを待っている少年を見つめ、しばらく考えた末に最初にヘファイストスが言った。

「イツセー、教えて。あの時、私に告白したあの言葉に嘘偽りはない?」

「ない」

間も置かず、直ぐに答えた。だが、直ぐに返されて本心が読めず適当に言われたような気もしてヘファイストスは満足しなかった。言葉だけなら誰だって言えるのだから。

「言葉じゃなくて行動で示して欲しいわ」

二人だけの秘密の続きを、再現させようと魂胆の主神に怪訝な目で見つめる。

「見た筈だぞ。俺のもう一つの姿、ヘファイストスの傷の方が可愛いと思われるほどの恐い顔を。なのに行動で示せって何を考えている？」

「貴方だって自分のこと醜い顔だと言った割には、正体がモンスターであつて別に醜く思えなかつたわ。そして、私が知っているモンスターは神の領域まで踏み込むことを許される武具を打つことはできない」

鍛冶神の手は伸びてそつと額の角を添えた。手の平に伝わる温もりは、自分が知っているものと同じだ。モンスターに転生した人間等、聞いただけでは信じられない事実。こうしてその証拠と証明たる実物が存在しているからには受け入れざるを得ないヘファイストスは確かめるように角を触れる。

「異世界のモンスターの角つて、ダンジョンのモンスターと変わらないのね」

「それ、訂正してくれないか？俺に肉体の一部をくれたドラゴンは、俺の世界じゃあ神や最強のドラゴンを上回る『アポカリユプス・ドラゴン真なる赤龍神帝』グレートレッドつてドラゴンなんだぞ」

偉大なる龍をダンジョンのモンスターと一緒にするなど不快で眉根を寄せる一誠からの発言で、ヘファイストスを始め、神々から眷族達まで驚いた雰囲気醸し出した。

「……そう、なの？」

「俺の記憶で見ただろ。真紅の龍、あのドラゴンがそうなんだよ。それと濡羽色の幼女もドラゴンで無限の体現者、無限の魔力を有するウロボロス・ドラゴン『無限の龍神』オーフィスつて俺と同じ人の姿をしたドラゴンだ。彼女の力も俺の中に宿っているから、俺自身高性能ハイスペックなんだよ。それをダンジョンのモンスター何かと一緒にされたくないし、俺に体と力をくれたドラゴン達に侮辱しているようなもんだ」

半目で鍛冶神を見据えて命を救ってくれた恩人もとい恩龍への侮

辱は許さないと視線に籠めて訴えた。世界が違えれど、同じモンスターといえど格まで同列扱いされて黙ってはいられない少年から感じる有無を言わせない威圧は、主神に息を吞ませた。

「ついでに言うけれど、アリサの剣とあの二振りの剣。俺の角で打つたやつだからな」

「えっ!？」

体の一部から作製した剣。それを教えられるとおっかなびつくりをする。そんなことして体は大丈夫なのかと気持ちが過り、今さっきまで触れていた角から手を離してしまう。

「角を?でも、生えているけれど……」

「細胞レベル的に治癒能力を爆発的に活性化、集中させれば生やせるんだよ」

徐に角を触れて握ったその手は、自分の意思でボギツと鈍い音を鳴らして折った。角の中まで通っていた血管からドラゴンの血を噴き出して真紅の色とは違う真っ赤な色を一誠の髪に染めていく最中、折れた角の表面が盛り上がりつつ折られる前の角に再生した。改めて一誠という存在を思い知らされる一同。

「……自己再生。本当にモンスターなのね。痛くないの?」

「とある諸事情で痛覚が鈍くなったんだ。こう、針に刺された痛みが感じる程度にな」

折った角を椿に投げ渡した。

「俺の体はグレートレッドの肉体の一部そのもの。だから異世界に存在する全ての神より強いドラゴンの角でもある。その大きさなら短剣ぐらいは作れる筈だ」

異世界の偉大なドラゴンの角を素材として与えられた椿。手に収まる熱が籠った角の重さは意外と少しだけ重たかった。その重さこそが異世界のモンスターの貴重な代物だと表しているような感じを覚える隻眼の少女は手の中の角を見た後、この素材をくれた少年へ「よいのか?」と気持ちを込めた視線を送る。

「餞別の意味で上げたから遠慮しなくていい」

「……できればこれより巨大な角が欲しいところなのだが」

「椿、あなたねえ……」

眷族が零す失礼極まりない不満に鍛冶神は額に手を当てて呆れる。贈物に文句、ケチを付けるなど例え気を許した相手だとして言っていないことと悪いことぐらいある。なので、黒髪に向かってお仕置きとばかり叩いて角を奪うように手にすると、一誠へ放り投げた。

「いらないそうだから返すわイツセー」

「待て主神様、手前はいらぬ等一言もいっておらんぞ！」

「贈物に不満を持つようならいらないでしょ。ましてや今日までこの家に住まわせてくれた相手にケチを言う口はこの口かしら？」

ムニツ、と椿の頬を摘んで引つ張るヘファイストス。それから二人の言い合いが始まり、結局答えはアリシアしか聞けなかった。

「リヴェリア様が、貴方のことを慕っています。信頼とそれ相應の行動を示さない限り絶対には有り得ない事です。ですから私も、貴方の事を信用をします。……それに」

小振りで潤った唇を指先で触れた。

「モンスターだと教えられて確かに衝撃を受けました。でも、それは決して悪い意味では無く純粹で……貴方を忌み嫌うような気持は抱けません」

「ん、そっか。受け入れてくれるだけでも嬉しい。ありがとうな」

心から純粹に感謝を籠めた上で微笑んだ一誠から発する言葉に、まさか感謝されるとは思っていなかったようでエルフの少女は目を丸くして面を食らった直後、頬に朱が差した。それから「明日の店の準備がある」と訴えられた女神達、正体を明かしてから数分後。一人を残して全員自室に戻り夢の中へ旅立って行ったかと思いきや。闇に紛れて鍛冶神が一誠の部屋の扉を開けて入ってきた――。

「で、私に見て欲しいわけね？貴方の魔法を」

「ん、お願い」

通信でヘファイストスを自室に招き「グリモア魔導書を読んだ結果を知りたい、そう乞うた一誠は言うが早いかベッドの上で上着を脱いで背中を晒す。改コンバージョン宗をする前に「ステイタス」の更新を求め鍛冶神は納得した。改めて背中に刻まれている交差する二つの鎚と山の

『フアールナ神の恩恵』にイコル神血を走らせロツク施錠からアンロツク解錠する。そして更新する【ステイタス】に紅眼の隻眼に入る魔法名に——溜息を吐いた。

「イツセー、貴方。魔法も異常ってどういうことよ」「というど？」

「簡潔に言わせてもらおうと、貴方の魔法は……」

へファイストスは口で説明した。

『ネオ・ワールド・ドア』

・移動系魔法。

・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来の異なる望む世界へ行き来できる。

・強い憧憬である程、成功率上昇。

「……」

「と、言うわけで。貴方の魔法は想いの丈によって発動の成功率が左右される感じなのよ」

随分と難しい魔法であるということへファイストスと一誠は認識した。だが、それさえ乗り越えれば異世界から来た者達を元の世界に帰し帰ることができるようになる。つまりは、一誠自身も帰れるということだ。しかし、それ以前に問題が一つあった。

「魔力数値に依存する……今の俺の魔力アビリティの能力値って……」
「……『0』ね」

「——無理じゃんっ！ 羨喜びさせる魔法じゃんかっ！」

嘆く一誠はまだ知らされていない。戦闘時のみ本来の【ステイタス】へと真価を発揮するスキルがあることを。

暗い影を落とし凄く落ち込む少年をロキも教えなかつた件のスキルを教えるべきか悩むが、新たに発動した魔法も教えた後で決めようと思ひ、励ますつもりで豊かな胸に抱きしめた。

「それでも、帰れる術を手に入れただけでも喜びなさい。まだまだ貴方には時間が残されている。魔力もこれから増やせばいいだけよ」

「へファイストス……」

ね？と真紅の頭髪を撫でる鍛冶神の胸に埋もれる形にいる少年は、

温もりと女神の体臭に包まれながらコクリと頷いた。それを満足げに微笑んだ彼女は一誠の意志で、横に寝転ばされた。体を重ね合ったまま女神の胸が潰れながらも形を変えて少年に服越し感じさせる弾力と温かさ、二人きりという状況に高鳴る心臓の鼓動を。

「それはそうとヘファイストス」

唐突に口を開く一誠。

「今度は俺から訊かせてもらうぞ。俺の正体を知って事故でした口付を思い返した心境をな」

「……気にしてるの？」

「能天気で生活していると思ってるなら心外だな。知らずに人の皮を被ったモンスターとキスして良い感情を抱いている筈がない。この世界の常識と概念を考慮すれば、俺の正体を知ったからには心境だって変わっているはずだ」

この世界は人類とモンスターは天敵同士、千年も死闘を繰り広げ、血肉に飢えたモンスターから自分の全てを奪われまいと神から与えられる恩恵の力と使命を受け、命を賭してモンスターの地上の進出を完全に食い止めてからも今日まで野望と名声、富を求め戦っている人類だ。そんな人間の味方の神からすればモンスターは敵当然だ。全て理解している上で一誠は訊ねた。真剣な眼差しを紅眼の女神へ送り返事を待つ。

「……」

ヘファイストスは、一mも金眼から逸らさず少年の顔を下から伸ばす両手で包むようにして添えた。

「貴方は異世界から来たモンスターに転生した元人間よ。今さら手の平を返す真似なんかしないわ。ただのモンスターが私と肩を並べる武器を打てるわけがないし、貴方をモンスターだと分かっても、とてもそういう目で見れないわ」

——だから安心して、と優しい微笑みを浮かべだす。

「イツセーの過去を知れて安心したわ。モンスターとキスした事実を再認識した時は物凄く驚いたけれど、不快感は無かった。だから——」

顔を包んでいた左手をそつと右眼の眼帯を外し、開きだす濡羽色の瞳を晒させた。とつても真つ黒い瞳だ。まるで眼球が無い眼窩の小さな穴を覗きこんでいるような感じを醸し出す。

「イツセー。あの時、私に告白してくれた言葉……嘘偽りないならもう一度言ってくれませんか？言葉だけじゃなく行動もしてほしい」

彼女の左の紅眼が途端に濡れたように潤いだす。期待と微かな不安を窺わせる女神と称されるほど美しい顔に曇らせる一点、天界にいた頃の彼女に神々から『醜顔』と嘲笑され侮られてきた。鍛冶女神の美貌と神の力を封印していても至高の武器を打つその技術に惚れ込んで、好意を言葉にして告白した眷族達を皆、凍り付かせたほどの『醜顔』を——一誠は彼女の要望に応じた。鍛冶神の右眼の眼帯を取り外し、隠された『醜顔』を愛おしげに優しく触れながら温かい眼差しで言い続ける。

「凍りつかせるようなお前の顔を見ても鉄の熱は、こんな程度で冷めることは絶対に無い」

「他の先輩鍛冶師達が鍛冶神や女神、主神としてでなく一人の女のヘファイストスから避けるなら俺が貰う」

心から真剣に一言一句違わず行った少年にヘファイストスも応じる。

「——永遠を生きる私達にまわりつかれたって、損をするだけよ？家庭なんてものも作れないわ」

ヘファイストスもあの時の言葉を繰り返す様に口にして一風変わった愛の告白を綴る。それはさながら永遠の愛の誓いをするかのように。

「永遠に好きでいてくれるなら大歓迎だ。作れないなら作れるようにすればいいさ」

「——本当に、私を貰ってくれるの？本気で……言ってくれてるの？」

ああ、この先の言葉を聞いてしまったら自分は……。高鳴る心臓の動悸が激しくうるさい。これから言われる言葉を受け入れてしまったら、見つめてくる少年の前だけ何億年も女神として生きたく

た自分はただの女になってしまいうだろう。そんな自分が信じられない、鍛冶を司る女神でいられなくなるかもしれない不安と恐れに戸惑う鍛冶神に向けられた一言が。

「本気で言っている。毎日お前がしつこいって思うぐらい愛するよ」

「——ツツツ」

熱せられた鉄に振り下ろした鎚で散る火花のように、彼女から不安要素を全て取り除いてくれた。否、これからもヘファイストスを愛する度に取り除き形を整えながらやがて、熱く燃え盛る二人が作った金で買うことも値段を付けれない大切なものを完成させるだろう。

「（ああ、もう……ダメね……この子がモンスターだろうともう関係なくなっちゃう）」

この子を好きになる。あの絶世の美女、ハイエルフもこうして好きになってしまった時、こんな気持ちを抱いたのだろうか？定かではないが、胸が歓喜で高鳴り熱く紅潮した顔で少年を見つめ、彼女もあの時言えなかった返事をようやく口にした。

「……好きよ、イツセー。貴方に他の女神や他の子が慕われても負けないぐらい好き」

「ようやく聞けた、嬉しいよ俺は。でも、ヘファイストスには悪いが俺は求められたら全力で応じるから他にも愛おしい女を作るつもりだ。それでもいいか？」

「独占できないのはもう分かり切ってるつもりよ。だけど、私のことを毎日愛してくれるなら構わないわ」

「言っただろう。毎日お前がしつこいって思うぐらい愛するって。——だから今日からヘファイストスの心と体を俺だけしか感じられないようにする」

「……言つとくけれど、私は初めてよ。その、色々と……」
「分かってる。だからこそ、俺だけを感じてくれヘファイストス。これから先ずっとお前が愛する者だけを求めてくれ。俺の愛しい女神様」

「——っ」

この瞬間、ヘファイストスの中で何かが変わった。後に彼女は少年

一つとなつて寒さに負けない熱い夜を過ごし美しい嬌声を上げる。

——扉の隙間から覗く紅眼が見ていた事に鍛冶神は気づかず。

「——ズルいぞ主神様。手前も交ぜさせてもらうか！」

「っ、っば、貴女……っ!？」

短い間だが【ガネーシャ・ファミリア】に入った。6年々。

冒険譚Ⅰ

【ヘファイストス・ファミリア】から脱退して一日目、今年は【ガネーシャ・ファミリア】の眷族として貢献する日々が始まった早朝——。一誠は朝食の準備を済ませて一息を吐く暇も無いまま西浴いに建てた店の下準備に取り掛かる。店を切り盛りしなくてはならない。

「——さて、店を構えるからにはオラリオ一繁盛する店を目指すぞ。他の店が赤字で潰れようがお構いなしだ」

パン生地をコネながら言う一誠が立つ調理場では、魔法で具現化した一誠の分身体達も開店時間前まで下準備に取り掛っていた。

「おはようっ！我が料理上手な子供よ！」

「俺の第一印象はそれなのね……おはよう主神と団長」

シヨーウインドウ
陳列窓に手作りパンやサンドウィッチ、コロツケや揚げ物等を並べている最中に男神と麗人の少女がやってきた。日焼けしたような褐色

肌筋骨隆々、象頭の仮面を被った男神ガネーシャに近接戦闘を視野に入れた拳メタルファIST装と金属靴メタルブーツを装着しているヒューマンの少女に挨拶の言葉を送る少年。大通りに民衆やこれからダンジョンへ赴こうとする冒険者達が穏やかに行き来する時間と迫っていた時、一年間だけ

【ガネーシャ・ファミリア】の団員となる者へ足を運んだ様子で——

まだ食べた事のない未知の料理を販売している件の少年を見に来た。

「そう！俺がガネーシャだっ！」

「知ってるよ」

異口同音で返す。今日からこのテンションの高い男神の眷族かと、この者も苦勞をするだろうなど、少年と女団長は似た気持ちを抱いていたことを知らない。

「改めて名乗ろう。私は【ガネーシャ・ファミリア】団長シャクティ・ヴァルマだ。一年間だけの付き合いとなるがよろしく頼む」

「ん、よろしく。何か買つてく？作りたてだから温かくて美味しいぞ」「食べる！朝食を抜いてきたからガネーシャお腹ペコペコ！」

高らかに断言した男神の真意に「マジか？」「ああ、そうだ」と「全部二つずつ買うゾウ！」と注文する主神を他所に言葉を交わし合う。販売の為に創られた料理の種類は軽く十種類超えている。どれを限定に買うかではなく纏めて全部味わいたいと大人買いをする主神の要望に陳列窓からパンとサンドウィッチ、揚げ物を取り出し、幾つかの横長の箱に詰めつつ支払ってもらう代金を口にする。支払いはシヤクテイがしてくれた。

「立って食べるのもなんだから、そこにある階段を上って屋根に設けた椅子に座って食べてくれ・・・ってもう食べてるし」

「うんまーいっ！」

歓喜で声を上げる男神の口の中に収まっているのは、細かく刻んだ玉葱と肉をパン粉と卵で包むように付けて、高温の油で揚げ、甘辛いソースをたっぷり染み込ませたものと、肉だけ飽きさせない為に千切りしたシャキシャキと噛む度に口の中で鳴るキャベツを挟んだパンの一品。まだガネーシャが食べた事のないサンドウィッチは口の中で溢れ出る肉汁を堪能しながら咀嚼する。二口目も豪快に食べてゴクリと胃の中へ送ったその口は既に持っていた次のサンドウィッチを捕捉していた。女団長もまだ食べた事のない一品を味を堪能して、微笑んだ。

「へえ、笑うと綺麗だな団長。作った甲斐があるってもんだ」

カウンターで頬杖をしながら食べる様子を見ていた時に初めて見た彼女の笑みは、一枚の絵画に収めても邪魔にならない美しさだった。感想を漏らした一誠の言葉に知る由も無く無言で食べる女団長。

「——あかんっ！先にガネーシャの奴に一番乗りを奪われてもた！しかももう何か食つとるしいっ！」

空気を裂く訊き慣れた関西弁の女と騒々しい気配が近づいてくる。更に別の方角から優男神と異国の王子風の男神、極東の神々や蜂蜜色の豊かな髪と豊満な双丘を揺らす女神、正義と秩序を司る女神と眷族——何時もの顔が揃って集まった頃にはへファイストスとフレイ

ヤも様子を見に来た。

「……足りるか?」

あまりにも数に陳列窓ショーウィンドウの中の品はあつという間に完売される不安が過つた。偏つたメンバーでは無く、他の客にも食べてもらいたい方の一誠の気持ちなど彼等彼女等は知る由も無い。

オラリオ南西、交易所付近。最大構成員数を誇る「ガネーシャ・ファミリア」が構えられていた。主神ガネーシャと女団長シャクティ・ヴァルマと共にだだっ広い敷地の草原にある煉瓦造りのホームへ足を運んだ。一時的とはいえ「ガネーシャ・ファミリア」の一員として過ごす一誠の存在感を主張する必要がある!と暑苦しく力説されたので、それに応じた現在。門番が立っている正門を潜る際シャクティが買ってきた手土産をガネーシャが渡してから通り中に入る。

「存外に広いんだな。意外と遊園地も作れそうだ」

「遊園地?」

「子供から大人まで大人気の巨大な娯楽施設の名前。遊園地が完成したらオラリオはもつと賑やかになるかもしれないな」

「その話、もつと詳しく教えてもらおうゾウ!」

三人は煉瓦の本拠地ホームの玄関に足を踏み入る。初めて中に入った一誠は外も広ければ中も広い建物の中を見渡す。造る当初の敷地の問題もあつて「ロキ・ファミリア」の縦に伸ばした様な感じとは違い、5人が横に並んで通る事ができる横幅と三階まで上階する階段が最初に出迎え、軽く見渡せば何人かまばらに上階の廊下や目の前を通る団員達を目にする。見た事のないヒューマンが主神と団長と一緒にいる時点で「ああ、こいつも今日から主神様に苦勞する奴か」などと温かい眼差しや憐れみが籠つた視線を揃つて向けて素通りしていく。

「……何か、歓迎されているような雰囲気じゃないな?」

「お前が思っているようなものではないと弁解させてもらう」

団員達の心情を察した女団長は「気にするな」とガネーシャの神室へ促す。数多の扉を横切り、象頭が描かれている他の扉より一際大きい扉へ直行してその部屋の中に入ると、圧倒された。壁の至るところ

に飾っている同じ象頭仮面。寝具や家具等あるものの、それ以上に^{ストック}予備のつもりだろうが、あまりにも異質な雰囲気醸し出している部屋を入ることに躊躇するが、入らねばならない。シャクティが扉を閉めて、ガネーシャは主神専用の椅子に座り仮の眷族隣に来た少年と顔を向ける。

「ようこそ【ガネーシャ・ファミリア】へ！俺がこの【ファミリア】の主神ガネーシャだっ！新たな眷族が増えてガネーシャ、超・感激！以上、俺からの歓迎の言葉は終わりだ！」

「……」

このテンションについていけないと思ったのは生まれて初めてかもしれない。シャクティへ視線を向け、「よくこの神と長い付き合いができるな」と称賛が籠った視線に彼女は「慣れは怖いものだぞ」と視線で返してきた。

「今日から一年間だけの間だが、俺の子供としていっぱい料理を作ってくれよ！無論、^{イルヴァイス}闇派閥の鎮圧と街の秩序と治安活動もしてもらおう。下級冒険者の子供でもやれることはたくさんあるからな」

「前者はともかく、後者は役に立たせてもらおうよ主神」

「うむ、頼んだぞ。ではさっそく俺の神の^{ファルナ}恩恵を刻む！」

何時でも何所でも改^{コンバートジョン}宗を可能とした半脱退状態の鍛冶神の恩恵^{ヘファイストス}が刻んだ背中を晒す。見られても困るほど重要視していない一誠のあっさりとした行動に少し面を食らう他所に【ステイタス】が視界に入った。

イツセー

【ステイタス】

L v ・ 1

力 : I O

耐久 : I O

器用 : I O

敏捷 : I O

魔力 : I O

『魔法』

『ネオ・ワールド・ドア』

- ・ 移動系魔法。
- ・ 継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来の異なる望む世界へ行き来できる。
- ・ 強い憧憬である程、成功率上昇。

『スキル』

『異常不明』 イレギュラー・アンノウン

戦闘時のみ発動。階位^{レベル}、『基本能力^{アビリティ}』が反映・真価を発揮し、全能力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想が続く限り効果維持。
- ・ 懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・ 魅了する。
- ・ 異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・ 神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理^{クッキング}・マスター^{・シエフ}・理想達人』

- ・ 調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。

・補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『神秘希少』 ウルトラ・レア

- ・道具アイテムの作製時、発展アビリティ『神秘』の一時発現する。
- ・一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

「ロキ・ファミリア」から「ヘファイストス・ファミリア」。この二年で発現した前代未聞の希少レアスキルがガネーシャの前に暴かれた。彼の者の成長の証ともいえるそのスキルを目の当たりにし、面白いほど開いた口が塞がらない象神に、女団長シャクティは不思議そうに心の中で小首を傾げた。少年の秘密の一部を知ったところで本拠地ホームの中を案内を始める。大食堂、物置、金庫、トイレ、大浴場、団長シャクティの部屋等見て回り、一通り「ガネーシャ・ファミリア」の本拠地ホームの中を把握したところで一誠の存在も少なからず周知された。

「やっぱ、ロキの家と違って広さも構造も異なるな。でも、ガネーシャの部屋を見たらこの本拠地ホーム自体も何時かは象の姿をしたもんになるんじゃないかって不安が過るんだけど」

「むむっーそれは明暗な発想ではないか！よしっ、何時か俺を象った家を作り変えてみようかな！」

「……止めてくれガネーシャ。団員達が泣き崩れる」

数年後、「ガネーシャ・ファミリア」はとんでもない本拠地ホームの中で過ごすことになるが、今だまだ誰も知る由も無く、シャクティの頭痛がそんなほど力なき制止を気にしない風に「早速新たなマイホームを考えてくる、俺はガネーシャだからな！」と楽しそうに笑いながら、二人から離れて走り去って行く。

「何時もこんな感じなのか？」

「他の騒がしい団員も加わると更に混沌と化する」

「へえ、ロキやヘアアイスとスところじゃあ感じられなかった騒がしさがここにあったか」

その混沌とやらを体験してみたいな、と何も知らず呑気に言うと思わず出る欠伸は抑えられなかった。

朝早くから朝食作りく店の商品作りまでしたからか、まだ少し眠り足りなさそうな隣人に尋ねる。

「寝不足か」

「何十食分の朝食を作らなくなきやいけなくなった上に店の事もあるからな。どこか昼寝する快適な場所ってある?」

そんな場所は実在しない、と現在はまだ寒い冬の季節。外で昼寝などしたら体に悪影響だと首を横に振って否定する女団長に「あつそ」と気にした様子も無く相槌を打った。

「じゃあ、外の敷地に少し寝ているわ。日も出てるし」

「なに?」

「………本当に寝るとは」

【ガネーシャ・ファミリア】の敷地内の青い草原——牧草で埋め尽くされているその場所で太陽の光を浴びるように仰向けでスヤスヤと夢の中へ旅立った少年を見下ろし、少し呆れるシャクティ。体を染み渡らせるような肌寒さを覚えつつも眠っている者から離れようとはしない。誰かがこの場に残っていないければ、自分とガネーシャしか知らないこの者の弁解はできない。仕方なくと腰を下ろして直ぐ傍で座り起きるまで待つことにした。

「(………不思議な男だ)」

一誠に対する率直な印象の感想はそれだった。出会いの始まりは『バベル』の次に高い建造物が忽然と姿を現した時からだ。誰が住みついているのか、はたまたは闇派閥イルヴィスの隠れ家かその調査を主神として行った時にこの少年が現れたその日から、主神が提供された未知の料理の味にいたく気に入る、他の派閥の主神と眷族と交じって何度もたかりに行くようになった。神同士が交流することには別段不思議も珍しくも無いが、毎日のように出向いて同じ卓テーブルを囲んで食す光景はや

はり珍しいの一言。それをそうさせている中心に立つ男がこのイツセーという者。下級冒険者であるが、作る料理の品々は神々の舌を唸らせ胃袋を驚掴みにするほど虜にさせる腕前の持ち主。実力は不明だが、怒った時の威圧感プレッシャーは尋常ではなかった。「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者である団長とドワーフが真剣な面持ちで下級冒険者を宥めようとした様子の記憶はまだ鮮明に残っている。

「……こうして寝ている姿でも人と変わりないのだな」

そして一誠が異世界から来たモンスターに転生した元人間であることが発覚する。そんな存在の危険度を知るために改めて近づいても、自分が知る殺戮と破壊衝動に駆られるモンスターではない事を教えられた。彼の最大派閥「ロキ・ファミリア」も全面的に信用と信頼を寄せるほど派閥に貢献していたからか、リヴェリアが副団長としてとんでもない発言を述べるぐらいだ。きつと小人族バルウムの団長も同じことを言うのだろうか。

「……」

とそう思いながら何気なく前髪を触れるとくすぐったそうに、それでいてどこか嬉しそうに微笑んでくれる少年を胸の奥からこそばゆくも、じんわりと温かな気持ち湧いてきたシャクティの唇が小さく緩んだ。純粹で純真、寝ている時だけは争いとは無縁な土地や場所でも暮らしている子供のようなのだなど、思いを浮かべた。そして日頃ガネーシャの為に料理を作ってくれた感謝の意を込めてあることをする。

「おい、姉者はどこだ?」

赤髪を伸ばした褐色肌の少女——アマゾネスが団員に訪ねた。腰には曲刀シメターを鞘に納めず二振り佩いている。局部を隠す衣服意外は肌の露出が多い。卑猥で艶やかな姿の女性が歩いていけば異性は初心な反応で顔を紅潮させるか、鼻の下を伸ばす。のだが、このアマゾネスは女団長と姉妹の契りを強引に交わした話は「ガネーシャ・ファミリア」の間では有名なのだ。

「団長ですか?そーいえば新しく入ってきたっぽい男と敷地の方へ向

かう姿を見たつて話が……」

「敷地?……分かった」

何で敷地に行くのか理解できない。そもそも何故新米の団員と二人きりで……。と、シャクテイが今いる場所へ足を向かわせ赴く彼女は——眼前に繰り広げられている光景に、信じられないものを見る目とあんぐりと開いた口が閉じないまま思考を硬直させた。「な……」

——【ガネーシャ・ファミア】団長が、シャクテイ・ヴァルマが

——見知らぬ男に膝枕をして赤髪を撫でている!

——誰だ、あの男はっ!?

「あ、姉者……」

自他問わず団員達が尊敬している女団長の太股で寝ている少年。新米の団員が何故あそこまでされて、団長もまたまんざらでもなさそうな雰囲気醸し出しているのかアマゾネスの少女には理解不能、混乱した。が、長年団長を支え付き添ってきた者として、ぽつと出の者にまだ自分でもされても無いことをしてもらっている事実を認知するとあまりいい感情を抱けれない。凶々しい、おこがましい、何様なのだ、立場を弁えろ、ふつつつと湧き上がる怒りを理性が抑えられない程半ば暴走に拍車を掛る。

「あ、いたいた。イルタさん、ちよつと話が……」

更に間が悪いことに、まだ若い少年団員がアマゾネスに訊ねて来てしまい今彼女が視線を送っている方へ釣られて視界に入れた途端。ぎよつとおっかなびつくり目に目を丸くした。

「だ、団長が……団長が見知らぬ男に膝枕をしてるうううううううううううううううううううう!?!」

ありのままのことを本拠地^{ホー}まで聞こえるほどの大絶叫して、シャクテイの肩を跳ね上がらせた。女団長は藍色の髪を揺らしながら後方へ振り返り、二人の団員達の存在を視認してようやく気付いた。

「シャクティ団長、誰ですかそいつ！何で親しげに膝枕なんてしているんですかつ、もしかしてあれですか、二人は恋人、付き合っている関係なんですかッ一体何時の間に愛し合う関係になっていたんですかつ！まさか、今日入団しに来たのは正式に団長と付き合う為——！」

「黙れイブリツ!？」

鋭く横薙ぎに振られた裏拳が少年の腹部を捉え「ごふっ!？」と言葉通り黙らせたその後、荒い息を吐きながらシャクティに問いだすアマゾネス。

「教えてくれ、姉者。そいつと姉者は、付き合っていて膝枕をしているのか」

もしもそうだったら、少年を切り刻んで殺して自分も死んでやるとんでもないことを決意しているアマゾネスを露も知らず女団長は目をパチクリする。

「私とイツセーは、男女の関係でもなければ付き合ってもいない」

「な、なら何で膝枕をして……！まさか、その男が姉者に強要を……っ」

「いや、これは私が勝手にしていることだ。いつもガネーシャが世話になっっているからな」

ガネーシャ主神が世話になっっている？怪訝な気持ち直ぐに思考を過らせたが、ふと思いつく理由を思いついた。一週間に一度か二度、多い時は三度も夜中に外出するようになった団長とガネーシャ。どこに行っていたのかと訊ねた時もあり、「夕食をしに行ってきただけだ」としか返されるばかり。具体的に教えてもらえなかったがようやく何とかだが、分かった気がした。

「そのヒューマンの男は、姉者と主神と関わりがあるのだということか」

「ああ。ガネーシャがこの者の作る料理にいたく気に入って、今朝も早く開店したばかりの店に足を運んで食べに行っただけだ」

その度に私も付き添って行き、一緒に食べさせてもらっていると言葉を足して一、二度だけの交流ではないことも暗に伝えた。イルタは

訝しい目で眠る少年を見下ろす。

「こいつの作る料理は姉者も気に入っているのか？」

「そうだな。同じ食材を使って作る料理でも、作る者が違うとこうまで違いの差が出るのかと驚かされているばかりで、あまりにも美味しさに私もガナーシャもイツセーの料理を気に入っている。お前も食べればきつと驚くさ」

フツと柔和に笑う女団長は珍しいとイルタと少年団員は心中そう気持ちを抱いた。

「だから、私もイツセーの料理を食べさせてもらっている一人としてささやかな感謝として膝を貸しているに過ぎない。それ以上の感情も無ければそれ以下もない。お前達を統率をする者として色恋沙汰で腑抜けた真似はしないから安心しろ」

「つ……」

自分達の勘違いに羞恥を覚える。決してシャクテイが誰かと付き合うことは許さないわけではない。だが、尊敬する団長に相応しい者ではないと納得できないだけだ。どこの馬の骨とも知らないぽつとでの男が「シャクテイと俺は付き合っている恋人だからそこんとこヨロシク！」等と戯言を言われたらどうなると思う？「ガナーシャ・ファミリア」は内部崩壊寸前の言い争いの喧騒、揉め合いを起こしたに違いない。主に義姉妹の契りを交わした女戦士アマソネスイルタ・ファアーナが筆頭に認めないだろう。

「さつきも言ったが、今朝早くから店を開いたイツセーは睡眠不足だ。今だけは静かに寝かせておいてくれまいか」

「……それに姉者が付き合う必要はないだろう」

「私なりの感謝の意だ。それともお前が代わりにしてくれるか？」

「誰がそんな男に膝を貸すか！というか、オラリオが『暗黒期』だって言うのに呑気に寝てあまつさえ姉者の膝を貸していることすら気付いていないこいつは起こした方が良い！」

言うが早いか、無防備に晒している一誠の胸倉を掴んでシャクテイの制止の声を聞かず——もしもこの場に「ロキ・ファミリア」幹部デミ・ヒューマンの亜人や幼女がいたら全力で止めに掛っていただろう事をした。

「おい、起きろー！」

頬を叩き、激しく揺さぶる。寝ている暇があればさつきと街の警邏でもして闇派閥イルヴァイスの暴徒の破壊活動の抑止力にでもなつて自派閥ファミリアの貢献をしろ！の思いで荒い起こし方で叩き起こす。

——それが完全に間違いであることを気付きもしないで。

叩かれる頬から伝わる衝撃と何度も揺さぶられる震動、眠る者からすれば不快と左眼を薄ら明けて、唾を飛ばす勢いで何か叫んでいる女に一言。

「五月蠅い」

顔面に一発、拳を叩きこんで黙らせる。

その後彼女は吹っ飛び——本拠地ホームの壁を突き破って中へ消えた。

「——っ!?!」

自分達と同じ上級冒険者が、下級冒険者の一撃で吹っ飛んだ。一拍遅れて壊れた壁の音とその異変に気付いた団員達が騒ぎ出す気配を感じ取れる。愕然の面持ちのシャクテイと少年団員の他所に静かになつたことをいいことに、また地面に横たわり意識を深い闇の中へと委ねるように落とそうとした。

「——てめえええええええええっ！」

「待てイルタッ！」

突き破つた壁から飛び出した、曲刀シミターを手に怒り狂う女戦士アマゾンネス。憤怒で眦を裂き、眠りに着こうとする相手に上級冒険者として相応の敏捷を發揮する。

「……また、五月蠅い」

「手を出すなイツセー！」

面倒臭そうに顔を顰めてムクリと起き上がった一誠も、敵意と怒りを察知して両手から光刃を伸ばし飛び掛かる。シャクテイが止めに入る前に二人はもう衝突した。曲刀シミターと光刃がぶつかり鏢迫り合いつる次の瞬間。突き放たれた蹴りがイルタの体をくの字に折らせた。その蹴りは重く、全身を硬直させるだけの威力が誇っていた。その瞬間を逃さず、トンと軽く跳躍、宙で一回転をしながら伸ばした足を晒す背中へ振り下ろした打撃で地面に蹴り平伏させた。サマーソルト

である。

「がつ!？」

「……………痺れてろ」

褐色肌の背中を強く踏みつけるその足から雷が放たれた。稲光で周囲が太陽光とは違う色で照らされ、雷鳴がイルタの悲鳴ともならない声を掻き消すほど轟く。二人の戦闘は一分も満たずにして終わりを迎えた。一誠に踏みつけられながら雷を食らったイルタは手足を伸ばしたまま身動き一つもせず、気を失ったのか起き上がろうともしない。対して一誠は五月蠅い元凶が静まったことに半ば意識が眠ったまま満足げに微笑むことなく本拠地ホームから現れる武装した集団に顔を向けて響めていた。

「イルタさんがやられてるっ!？」

「誰だアイツ、闇派閥イルヴァイスか他の他派閥の団員か!」

「まさか俺達【ガネーシャ・ファミリア】に抗争を仕掛けに来たんじゃないだろうなっ」

不味い——! 団員達に勘違いから生じる疑惑を抱かせてはならない。事が事であるから今来たばかりの団員達は何も知らない。知っているのは自分と少年団員シヤクテイ、イルタに不安だが一誠だけだ。敵ではない事を直ぐにでも教えなければいけない。そう思ってから後れを取ったシヤクテイはまた後れを取った。

「ガネーシャが来たあああああああああああああああああああっ!」

『主神ツ様!?!』

緊迫感が張り詰めたこの空気を完全に無視・ブチ破る声と暑苦しい存在感を存分に周囲の団員達から意識を一身に集める「とうっ!」と走りながら跳躍して団員達と一誠の間に陣取る主神の登場で。

「イツセー、何をしていた? 家が壊れているぞ」

「……………人が眠っている時にこのアマゾネスが五月蠅かったから殴った」

簡潔に事情を説明すると、更にガネーシャに問われた。

「まだ眠い?」

「……………眠い」

覇気のない声に瞼が閉じかかって、体もフラフラと揺れている。先程の戦闘中に見せたキレのある動きを見せた同一人物とは思えない程に眠たそうに答えると、ガネーシヤは光る白い歯を見せつけ、笑った。

「じゃあ、壊れた所を直したら寝て良し！」

「「「ちよ、ガネーシヤ様!」「」」」

絶句する団員一同から「何言ってるんだアンタっ!?!」と叫ばれるも、本神の考えと姿勢は変わらない。ガネーシヤは決定を翻そうとしない。お咎めなく、やることをやったら許すと言われた一誠は、指をパチンと鳴らしながら弾き壊れた壁と本^{ホーム}抛の中も魔法で修復、元に戻して完全に直し終えれば、そこまで眠いのか倒したイルタの傍で寝転がって今度こそ眠りについたのだった。

「シヤ、シヤクテイ団長……あいつ、一体何なんですか……」

「……下級冒険者の料理人としか分からない」

「か、駆け出しの冒険者!?!」

人間の皮を被ったモンスターなど口が裂けても言えない初日早々、一誠は色々とやらかしてしまった。その代わり、上級冒険者を圧倒する実力を有していることも片鱗だけだが見せてもらい、即戦力になることだけは理解したシヤクテイ。

「(困ったものだ……さて、これからどうなることやら)」

茜色の空を焦がす夕日が西の空の彼方へ沈み、代わりに蒼い宵闇に染まる夜空の中で照らす月が浮かび上がる。夜天に蓋されたオラリオの姿は闇に支配され、夜道でも歩く民衆達を照らす加工された魔石の光で街灯がともる。仕事を終えた労働者が、ダンジョンから無事戻ってきた冒険者達が、今日も一日の締めくくりとばかりにオラリオ中に構えている酒場へと足を運ぶ。

「おい、何だあの店」

「何だ、どの店じゃ」

「うん?」

ダンジョンから戻ってきた他派閥同士の冒険者の三人組も酒場で

一日の終わりを締めくくべく西沿いのメインストリートに構えられている酒場へと足を運んでいた時だった。少し離れた先で自己主張する光が灯っていた。一人の冒険者がその光に気付き、相方の冒険者達もその光に視認した。

「これ見よがしに光っておる店があるな。あれも酒場か？」

「あんなところに酒場なんぞあったか？」

「でも、今まさに神が入って行ってるから店みたいだぜ」

デウスデア超越存在の気配を発する神が従者を引き連れて見覚えのない店の中へと入って行く。三人はどうする？と顔を見合わせ、言葉を交わし合う。

「ちよって行ってくるか？」

「オレは何時もの酒場で構わないんじゃないかな」

「酒を一杯だけ飲んでそれからまた行けばいいだろ」

何時も通う酒場の常連客として、顔を出す日課に「たまには」と気持ちでこれから行こうとした酒場を素通りし、『異世界食堂』と書かれた看板が灯るその店の中に入る。石造りで建てられた店の扉は黒い檜の木に窓は硝子製。店の奥が覗ける風になっているが男達は気にせず扉を開けて中に入る。

チリンチリン。

来訪客が来た合図として扉の内側に仕掛けられた、鈴の音が鳴り響く。

「何だこの酒、本当にエールなのか！」

「おい若造、このハンバーグとやらを三つお代りだ！今度はライス大盛り！」

「カツ丼もう一杯じゃ！」

ヒューマン、デミ・ヒューマン亜人、神々が交じって酒と料理を楽しんでいる。その光景はどの酒場でも同じことだ。だが、三人組の男の中に犬シアンスローブ人の獣人が嗅いで恍惚とした表情を浮かべた。

「美味そうな匂いがするなあ……」

「おい、酒を飲むだけじゃぞ」

「他の店と同じエールだったら直ぐに出るって」

獣人の男にドワーフの中年の男が忘れるなど指摘して、それを宥める風に苦笑いするヒューマンの三人組に料理を運び客に提供する若過ぎる店主から声を掛けられた。

「いらつしやい、適当に空いている席へ座ってくれ」

「ああ、だったらまずこの店の酒を三人分だ」

「あいよ、少々お待ちを」

酒だけ頼んで直ぐに何時もの酒場へ向かうつもりの三人は、外の寒さが感じられないほど暖かい店内の中を歩き、奥行きの場所、窓際の席を占領する。

「おつ、この椅子は柔らかいな」

木製の椅子で座って料理を食べている客として、腰に伝わる柔らかい座席は初めてだ。高級な椅子にでも座らない限り味わえない感覚にヒューマンの男は感嘆の息を零した。

「さてと、この店のメニューはなんだろうな」

「見てもしょうがないじゃろ」

「おいおい、見るだけならタダだろ?」

獣人とヒューマンの男性は興味深々、好奇心でたった一冊だけ横に立てられた何気に分厚いメニュー表を開き内容を確認する。それぞれ肉と魚、野菜、麺、揚げ物、酒、甘い物、デザート、香辛料を使った料理のメニューが絵と共に使われている食材や軽く作る過程を記されている。メニューの多い事とどれも食べた事のない料理で味への興味と好奇心が湧き、思わずゴクリと溜まった唾を飲み込んだ。

「おまたせしました。ビール三つ」

取っ手まで硝子の大きな杯ジョッキを片手で三つも持ってきた店主に、綺麗な琥珀色の酒を見た三人は一瞬だけ見惚れた。目の前に置かれる酒はぷちぷちと音を立てる泡から匂う独特の香りも今まで飲んできたエールと異なっていることも察した。

「……飲もうか」

「飲んだら出るぞ。よいな」

「ああ、他のエールと同じだったらの話だがな」

それぞれ手を伸ばし取っ手に触れるとキンキンに冷えられていることを知り、「酒を冷やして美味しいのか」と杯を傾け、泡ジョッキごと口に含みビールをぐびり、ぐびり、ぐびり……。

「二——ぷはあっ！二」

ビールを一息に飲み干した三人が同時に溜息を吐く。途中で一息入れることを忘れ、喉越し、キレ、ビールの独特の苦みに夢中になってしまう程、完杯した。

「な、何だこの酒……今日まで飲んできたエールとは比べ物にならないくらい美味過ぎるぞっ」

「ダンジョンで疲れて火照った体が染み渡る様に涼しくなって気持ちがいいなこれは」

あまりの美味さで笑い合う二人は飲んでから沈黙しているドワーフへ顔を向ける。飲み慣れているエールであれば直ぐに他の店へ行く決まりなのだが、もう一人の友人も美味しそうに飲み干したのだ。結果は分かり切っている。

「この店の酒は他の店の酒と同じだったか？ん〜？」

「俺とこいつの舌だけじゃ味の違いが分からないからお前の意見も訊きたいぜ。どうだったんだ。ん〜？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて獣人とヒューマンから話しかけてくる。そんな時だった。

「ほい、ビール追加だ」

ガチャンと音を鳴らして、若い店主が再びビールを持ってきた。頼んでも無いのに何でだ？と疑問に満ちた六つの視線に店主は朗らかに言う。

「当店は今日開店したばかりでな。この店に始めて飲食しに来た客にサービスと今日から三日間だけ、この店一番の酒を無料で提供しているんだ。無論、飯代はキッチリ払ってもらうけどこの酒は俺からの奢りだ。また飲みたくなったら注文してくれよ」

何て気前のいい配慮なのだ！しかも今日から三日間酒は飲み放題！飲兵衛達からすれば、目を輝かせて遠慮なく浴びるほど酒を飲める

この店のサービスにヒューマンと獣人は歓喜で顔を輝かせた。

「タダ酒飲んで直ぐ別の店に鞍替えするってのは失礼だな！」

「ああ！ちゃんと飯も食って金を払ってこそこの店への礼儀ってものだよな！」

またドワーフへ視線を送り「お前はどうかなんだ？」と意見を求める。それに乗じて店主も不敵の笑みを浮かべる。それが気に食わんとかめっ面なドワーフは今も尚沈黙を貫く。

「酒に合うつまみもタダで提供しているんだけどなあ」

皿に持った緑色の野菜の数々が獣人とヒューマン、ドワーフの前に置かれる。

「塩漬したり茹でたりした野菜だ。この野菜、エンドウ豆は中身を外側から押し出す様にして食べながら酒と飲むとまた格別だ」

それだけ言って注文を求める別の客へと足を運ぶ店主。残された三人は置かれた野菜を一瞥して言葉を交わし合う。

「なあ、何時までもムツツリしてないで食べようぜ？」

「そうだそうだ。それでもいらないうてなら俺が飲むぜ」

無遠慮に伸ばす手はドワーフの分の酒に捉えていた。が、獣人に取られそうになったその酒の取っ手はゴツゴツとした大きな手の中に握られ、蓄えられた髭を濡らしながら耳に届くぐらい喉を鳴らす飲みっぷりの良い様子を見せるドワーフの口の中に酒が消えていく。

「ぶはっ！——これはオレの酒じゃ、勝手に飲むんでは無いわ！」

ドワーフらしく頑固な性格で素直になれない相棒に男達は苦笑いを浮かべ合い、改めてつまみを食べ、他のメニューの品を注文する姿勢に入った。そんな客達の真上の階層、二階では一階の喧騒を訊きながら食事をしていた何時ものメンバー達がいた。

「好評のようで何よりやなあー。明日は朝から店を開くそうなんみたいやけど、自分構わん？」

仮眷族としての働きはできなくなるという意味合いを籠めて訊かれたガネーシヤは腕を組んで言い返した。

「ぶっちゃけ、今日子供達と揉め事起こした。ほとぼりが冷めるまでは構わん」

「なに？ガネーシャの子供とイツセーが何をしたのよ？」

「うむ、詳しい事は分らんが寝ているところを邪魔されたとかで、俺の子供と喧嘩したのだ」

「二（（ああ・・・してしまったのか））」

「どこの誰だか知らないが、それは絶対にしてはならないことだと【ロキ・ファミア】最古参の幹部達は遠い目で心を一つにした。

「しかもイルタ——下級冒険者なのに上級冒険者の超・有能な俺の子供を倒すとはガネーシャ超ビックリである」

コンバージョン

改 宗を果たした上で、【ステイタス】を見た話振りからして正体まではまだ知られてない様子。ロキ、ヘアイストス、フレイヤ、極東三大主神のイザナギ、イザナミ、アマテラスしか知られてない秘密は絶対に口外してはならない共通の規則ルールと協定が結ばれている。それを知らない男神女神達は不思議なことだと感想で片づける。

「イツセー君が上級冒険者を倒すって・・・まるでフレイヤ様とロキを襲ったイシュタルの子供みたいだなあー」

「ヘルメス？『私のイツセー』はイシュタルの子供と同じだと言いたいのかしら？」

「ハハハ、フレイヤ様。オレは実力の事を言っているだけだぜ？だからその殺意を消して欲しいかなあー」

一先ず有り得ない強さの話はフレイヤの機転(?)で終わり、また別の話が湧く。事の発端はロキだ。

「せやーちよい早いんやけどイツセーが【ランクアップ】した時の二つ名、予約として決めへん？」

「本当に早いわね。【ランクアップ】するか分からないのに考えても意味無いんじゃない？」

「でも、想像だけでもいいなら決めたいわね。頼んだ料理が持つてくるまでの間の暇つぶしになるわ」

「私のようにあまり交流していないあの子の印象って料理が上手なこどぐらいしか浮かばないのだが？」

それぞれそう口にしながらも、好き勝手に頭の中で浮かんだ名を口外する。

「ロイヤラス【道化の玩具】！これで決定やろ！」

「あらロキ、ヴァナディース・オーズ【美神の伴侶】しかないじゃない？」

「スミス・ツインヘッド……【鍛冶師の双頭】」

「うーん【魔導の錬金術師】かな？ イッセー君が作るマジックアイテム魔導具は一級品だからね」

「【天照の従者】！」

「ガブリエル【蒼熾天使】……これがいい」

「私は【愛玩狐】がいいわ。だって可愛いものお」

「【象神の料理番長】だあああああつ！」

やんややんやと盛り上がる仮の神会。デナトウスそれに介入できない眷族達、フィン達はただ見守り、そして見てしまった。どこから話を聞いていたのか分からないこの店の店主が、目が死んだ無表情の面持ちで運んでこようとした料理を持ったまま案山子のように立っていた。皆、頬が引き曇るか、嫌な汗が浮かべて様子を窺っていると静かに下の階へ消えて行ってしまいうので責任感が強い者が筆頭に若干焦燥に駆られて何人か立ち上がって呼び止めに行っただのであった。

「酷過ぎる二つ名で行く気が……（ボソツ）」

「気を落とさないでくれ」

「後でヘルメス様にはキツク言っておきます。ですからどうか気をしっかりとってください」

「すまない。本気で言っているわけではない……はずだ」

そして直ぐ見つかるところで傍に料理を置き、膝を抱えて意気消沈の店主を何とか励まそうとするが、しばらく立ち直らず数分も時間を要した。

冒険譚2

「おはよう、イツセー！」

「主神様、昨日の今日でまた来たんだな」

「無論、お前の料理を食べにな！それにお前と交流を深めるために毎日顔を出すぞ！」

開店前の『異世界食堂』に現れるガネーシャとシャクティ。朝っぱから騒がしくてどこか暑苦しい男神は「立ち話もなんだから」と店内に招かれる。無人のホールの中を歩き、カウンターへ足を運んでそこに腰を下ろす。

「すまないイツセー」

「殆ど準備は済んでいたから別に構わない。というか昨日は悪かったな。もうあそこで寝ないようにする」

「私も最後までイルタを止め切れなかった。すまないな」

イルタと言われてあのアマゾネスの事だと察したところでガネーシャが話しに介入する。

「さてイツセー。異世界のガネーシャのことを是非とも教えてくれな
いか？」

「そう言われても、ガネーシャおじさんのことはあまり知らないぞ？」
「知っているだけでも構わん。ガネーシャ、超気になる。あと異世界のことも教えてほしい」

それでもいいなら、と一誠は二人に自分が知っている【群衆の主】ガネーシャのことを教え始めた。その後は自分が住んでいた世界の情勢を語り始める。

北西と西のメインストリート、冒険者通りに無所属^{フリー}や冒険者、商業の人達が多く往来するようになった時間帯。ダンジョンに向かう冒険者達は道具^{アイテム}の補充を兼ねて道具屋に買い求めながらある店の看板を目にする。

「…………あの文字、間違いないよね」

「見間違える方がおかしいわ。『異世界食堂』って…………異世界か

ら来た誰かが店を構えているはずだわ」

日本語で書かれた看板の文字を読める者しか理解できないその意味。歩く途中でデカデカと建物と一体化している大きな看板が自己主張している。そんな物は珍しいと注意を引くために作られたことを住民達は知る由もない。

「ちよつと、入ってみない？」

「そうね。新しい異世界から来た人かもしれないし」

少女達もどんな人が店を構えているのか、興味と好奇心でホームに戻る前に寄り道する。共通語コイネーで『営業中』と書かれて掛けられている櫺の扉を開け放ち中に入ると、来訪者を知らせるベルが店内に奏でる。一目で中を見渡せば、まばらであるが客はいる。皆、目を丸くしながら美味しそうに食べてお代りを求める声を上げる。それに応じる店主——真紅の長髪を揺らす眼帯を付けた少年が二人の前に現れる。

「え、えっ?」

「あ、いらつしやい。アスナとシノン」

「何であなた……ここで働いているの」

「俺の店だから働いているに過ぎない。食べに来たのならカウンターの方へ座ってくれ。そうじゃないなら退出してくれ」

注文を受けに行く店主の姿を固まって瞠目する少女達。一拍ののちに後から来た客の存在で言われた通りにカウンターへと向かい、既に座っている神と麗人の女性団員の隣に座りこむのだが。

「む、お前達は『アルテミス・ファミリア』の子供だな?」

「え、あ。ガネーシャ様……ですよね?」

「そう、俺はガネーシャだ!」

「ガネーシャ、店の中では静かに。イツセーに怒られるぞ」

麗人の団員に諭されて静かになる主神を目の当たりにして少女達は何とも言えない気持ちになった。まさか、異世界から来たヒーロー組の少年少女達を連行した派閥の主神と団員がいるとは——彼の少年は故意でここに座らせたのか?と考えてしまうがガネーシャの隣に座る麗人の女性、シャクテイの横目で見える眼差しに少し緊張す

る。

「あの……あの子達を解放してくれてありがとうございます」
「元より解放するつもりだった。その上、イツセーにも言われたからな」

「そうなんですか。えつと、彼はどうしてこの店を……?」
「簡単に言えば、ガネーシャを含めあいつの料理を食べに集う神々に『店を構えないのか』と何度も言われて応じたのだ。本音は何度も異世界の料理をたかりにこられ、食材や食費が無くなる一方だ、と言われてしまったがな」

当時の事を思い出しながら語るシャクティ。自分達の知らないところで他派閥の神々が一誠の料理を食べに集まっていたとは知らなかったアスナ達は「ああ、そいつの言うとおりだ」と言う声に反応する。

「何度も食べに来られちゃこっちも大変なんだ。二人は知らないだろうけど、『ロキ・ファミリア』の女性団員達は、療養の目的で俺の家に居候しているんだ。更に貴重な食材が減って苦労しているんだ色々」と

「ぞ、そうだったんだ……」

「ついでに、お前達の事もガネーシャと団長にバレてるぞ。異世界から来た人間だって、尋問を受けた連中がバラしてくれやがったからな」

「っ!?!」

それは聞いていない。彼等彼女等がそんなことを言っていたなんて一言も。愕然の面持ちで丸くした眼の意味はガネーシャ達に悟らせて「安心しろ」と声を掛けられた。

「お前達は何度も私達と協力してくれている『ファミリア』の団員達だ。例え訳ありであろうと私達は信用しているお前達に対してどうこうする気はない」

「あ、ありがとうございます……助かります」

「だが、誰にも悟られず生き続ける。私達がお前達を助けるにも今回で初めて最後だと思え」

「……わかったわ」

心から感謝して亜麻色の髪を揺らしながら頭を垂らす。シヤクティの立場を言外する言葉の意味を汲み取ってシノンもコクリと頷く。話しは一区切りついた機会を待っていた店主は二人に注文を求めめる。

「それで、何か注文は決まったか？」

「あ、えっと異世界の料理ってどんなのあるのかな」

「メニュー表を見れば一発で分かるぞ」

促されてテーブルの隅に立てられている分厚いメニュー表を手取る。めくれば様々な料理名や飲料物、甘い物が記された絵と文字がびっしりと四つの目に飛び込んだ。

「す、すごい……」

「お酒まで売ってるの？未成年なのに扱っていいわけ？」

「この世界に法律と年齢制限などないんだよ。酒なんて15歳の子供でも飲むって聞くしな」

「異世界の年齢制限って低過ぎる……」

「そうなのか？」

「俺達の世界じゃ酒は二十歳になってからじゃないとダメなんだ」

異世界の法律の違いにお互い驚いた風に声を漏らす。二人は酒を頼むことはなく、手頃な料理を注文して食べれば店主の料理の腕に驚嘆と感嘆する。

「ご馳走様、本当に君は男の子にしておくのが勿体無いほど料理が上手で美味しいね」

「女として色々と刺激するぐらいにね」

「褒め言葉として受け取らせてもらうぞ。ああそれと、キリト達にもこの店の事言うだろうが全員で来るなよ」

店に訪れる前提で言う店主に不思議そうに視線を送るアスナとシノン。どうしてなの？と思う彼女等に答えながら店内を見渡す店主。「一気に五十人以上来られると店の席が半分以上埋まって他の客が座れなくなるからだ。それでも来る気なら予約じゃないと入れない二階にもらうぞ」

「あ、二階は予約制なんだね。色々と考えて君は本当に凄いよ」

「ぶつちやけ、店なんて構える気はさらさらなかったけどな。どこぞの神々が何度も言うもんだからしようがなくなんだよ」

「何気にあなたって苦労しているのね」

「ん、苦労しています。店員だつて今のところ俺一人だしな」

それでよく店を切り盛りできる店主に感嘆の念を抱かずにはいられない。ふと、アスナは質問した。

「ねえ、アルバイトを募集しているの？」

「いや、してない。取り敢えず今は一人で十分だからな」

「じゃあ、こうしている間に誰が料理を作っているわけ？」

シノンの問いにガネーシャとシャクティも「どうなんだ」的な視線を送る。店主はふむ、と息を漏らし四人を手招く。先導する少年について行きキッチンの中へ案内されれば――。分身体の店主達が広い調理場を独占して腕や手を動かし、料理を作っている光景を目の当たりにされる。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「こんな感じで俺自身が料理を作っているんだ」

一人で十分、と言った店主の言葉の意味を驚愕と共に理解し人材とコストを完全に0なこの店は、表も裏も色々と凄かったことをアスナとシノンは解らされたのであった。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「魔法で実態を持つ分身体を増やしているんだ。雑用から戦闘まで何でも役に立つぞ」

「に、忍者みたい」

「うん、的を得ているぞアスナ。実際に分身体でも魔法が使えるし実力的にも俺と大差変わらないから強いぞ。な、皆？」

店主が話しかけると分身体達が「「「「ウエイツ」「「「「と一斉にこつちに向いて声を上げるのでシノンは素っ頓狂に驚く。

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」」」

「分身体にも意思があるからな。だから大抵の事なら俺一人で全部できちゃうんだよ」

朗らかにそう言うが、それがどれだけ凄いことなのか本人は理解しているのだろうか。四人は驚愕と混乱の最中で立ち尽くし、少しでも手伝ってあげようかなと思つたアスナの気持ちが萎縮してしまった。

「ああ、それと」

店主が徐に告白した。

「俺も分身体だからオリジナルはここにはいないぞ？」

「……えっ？」

場所が変わって――。

「風の噂でそういう食堂がこの近くにあると伺つたことがありますが、まさか貴方のお店だとは思いませんでした」

清楚な白一色の石材で作られた建物、治療と製菓を主に活動している【デイアンケヒト・ファミリア】。個室の中で月に一度の商談をしていたアイズより年上だがその容姿は、精緻な人形、と彷彿させるまだ幼くも美しい少女から、徐々に己の店の知名度は高まっていることを知り、オリジナル――一誠はいそいそとバックパックから人気のデザートを取り出して銀色の匙と彼女の前に置きだす。

「これは？」

「プリンというデザートだ。このデザートの味を知った客がこれだけを食べに来て、あつという間に完売させてくれる程大人気となりうるだろう一品だよ」

食べてみ、と促されヒューマンの少女、アミッド・テアナサーレはよく冷えた器を手にし、蓋を取ると卵と牛乳・砂糖で作られた卵色の表面が最初に目に飛び込んだ。樽程度でしか聞いておらず実物は見たことのないのでどんな味なのか、匙でプリンの表面に沈ませ掬い上げるとフルリと揺れた。嗅いでみるとほんのり甘くて良い香りがする。デザートらしいものであると認識しながら瑞々しい唇の中に差しこんでプリンの味を確かめようとしたその瞬間。

「――っ！」

大きな銀色の双眸が見開き、今まで食べたデザートでも味わったことのない味と触感に思わず硬直する。

「器の底にあるソースと食べるとまた美味しくなるぞ」

アマミッドの心境を察してか、そう説明されて匙を器の底まで沈めて救うと焦げ茶色のソースがプリンと一緒にくつついて取れた。これと一緒に食べると美味しいと教えられ、静かに口に運ぶと舌の上に広がる、プリンだけが持つ濃厚な卵と牛乳の風味を含んだ甘みに滑らかな食感と、茶色いソースの少しだけ苦みを含んだハツキリとした甘さ。そのソースの味がプリンだけ食べた時と違いさらに味を引き締める。この、圧倒的な組み合わせに……。

「美味しいっ！……あ、すみませんっ」

精緻な人形のような少女の顔に満面の花が咲き、意外と出た大きい称賛の声。だが、直ぐに我に返って朱を頬に浮かべながら謝罪するも少年は生温かい眼差しを送った。

「アマミッドも女の子だっってこと知れただけで嬉しいな。凄く可愛かったよ今の笑った顔」

「わ、忘れてください……」

羞恥で懇願する少女へ笑顔全開で「無理」と朗らかに言う。

「まあ、そのプリンも含めて他の酒場や料理店に負けない美味しい料理と酒を提供している。もしよかったらアマミッドも店に顔を出してくれ」

「分かりました。時間が空いた時に必ずお伺いいたします」

「ん、待ってるよアマミッド」

人懐っこい笑みを浮かべ——新たな客を確保、これで店の評判はまた広まると、頬を紅潮させる少女の淡い恋心を知らず下種な考えをしていた。それからもう一つの【ファミリア】にいる知り合いへ足を運び、アマミッドと同じようにプリンを食べさせれば、垂れていた獣耳がピンつと立ち、美味であることを証明する、尻尾をユラユラと揺れた。

「これ、うちの商品に出していいですか？」

「……その耳と尻尾を毎日触らせてくれるなら五個ぐらい」

「——三十個」

「……そこまで客が来るのか？二十五個」

「イツセーさんの商品を広告等にすれば今より客足が増えるの間違い

無しだよ。二十三個」

抑揚のない声音は、何時もと変わらないように見えるが確信を以って言っていた【ミアハ・ファミリア】の団員、ナーザ・エリスイス。今年で十一歳になる十歳の少女。

「実際、ナーザが食べたい数は？」

「……二十個」

「そんなに食べたなら腹が壊れるのと、この店で売るなら必要不可欠の冷えた冷凍器が無いと直ぐ腐るから十七個」

そんな商談の譲れない駆け引きのやり取りを繰り返し尤もな事と的を得た指摘をして、受けて――。

「その冷凍器を俺が作ってやる上で十五個」

獣耳がピクリと動いた。食材を扱うのに確かに必要な冷凍器。大ききによつて値段は変わり、彼女の今の手持ちでは何十個もデザートを保存できる冷凍器を購入するのに少々心許ない。

「……分かりました。それで構わないです」

「ん、商談成立」

無償で保存が可能な道具も用意してくれる。これ以上の駆け引きはできないと判断し、ナーザが先に折れた。

「それじゃ、早速前払いとして触れさせてくれないか？」

「……優しくしてくださいね」

「大丈夫。優しく……撫でるから」

数日後、ナーザが所属する【ミアハ・ファミリア】にプリンなる甘い食べ物が発売されるようになる。そのデザートを食べた客は虜になり、本来販売されている店より少し安い値段なので安さと美味しさに必然的に買い求めてくる。結果的に評判は高まり、道具店というより甘い食べ物を売っている店があると認識されがちになるのはナーザ達【ミアハ・ファミリア】は遠くない未来、ちよつと考えものだなあーと感じるようになるのである。そして何故かプリンを補充される度に眠たげな犬シアンスロープ人の少女は熱でもあるのか何時も顔を赤くしていた。

余談であるが。売れ残ったプリンがあると、誰が食べるか水面下で

けん制と争いが勃発して主神が眷族達を宥めるようになった。

更に別の話であるが。商売敵に人気が出始め、とある初老の主神は悔しさと嫉妬で精緻な人形を彷彿させる女性団員に人気の秘訣を探らせたことで、とある少年が関わっていることが判明し、言葉にせずとも女の本能で犬シアンスローブ人は己の恋敵であると悟り。

「ナアーザ様。私はこのプリンを作る人をよく存じ上げております」

「……そうなんだ。でも、それがなに」

「あの人の膝の上で座るととても温かくて心地が良いのですが、それも存じておられますか？」

「……あの人は私の耳と尻尾に夢中だよ？」

二人の少女はこの瞬間お互いを恋敵ライバルの好敵手と認識し合った。

「絶対に負けない」

「(負ける気ないよ)」

西沿いのメインストリートにある食堂の知名度は少しずつ高まってきた。特にエールとは思えない程の味わいが楽しめ酒好きの飲兵衛達は最近飲んだ酒の中で一番美味しい酒だと声を揃えて言う。見目麗しいウエイトレスはいなくてもそれに補う料理と酒が客達に満足感を与える。今日も噂や人伝で耳にした神、冒険者、一般人が半ば興味と好奇心、冷やかしに訪れてくる。

「ここが、美味しい酒があるって言う酒場か？」

「おう、熱くなった体で飲むとまた格別なんじゃ。飲んだ瞬間、喉越しに苦味と伴った酒の味、それでシュワシュワと弾けるあの刺激ある快感がまた堪らん」

「酒にうるさいお前がそこまで言うのであれば間違いはないだろう」

二人組のドワーフが占領している一つの席。片方は以前この食堂の酒の味を知ったドワーフ。もう一人のドワーフは硝子職人として熱い炉の前に立ち、室温が熱で高まった室内で日々硝子に関する物を作り続けている。今日この食堂に来たのは目の前の同胞に誘われたからである。

「今日はオレの奢りじゃ、何でも好きな飯を食え」

「気前が良いではないか。しかし、初めて来たこの店の料理……見たことも聞いたことも食べたことの無いものばかりで迷うわい」

少々分厚いメニューを開いてどの料理にしようか眉根を寄せて決めあぐねるドワーフ。こういった客は大半で、いざ食べると物凄く美味しいと感想を抱き、また食べに来ようと気持ちにさせるのがこの店の店主の料理の腕前なのだ。相席する誘ったドワーフの反応に初めて来た時の己と同じだと、懐かしみと一日の長であると見せしめに丁度料理を器用に複数持つて横切る若い店主に無遠慮な言葉遣いで呼び止めた。

「若造！ビール二つと枝豆、それと唐揚げも二人前じゃ！」
「……おい、唐揚げとは何だ？」

自分より先に注文をした同胞への質問は店主が応じる。

「鳥の太股の部分を油で二度揚げした肉料理だ。味付けは塩と胡椒、隠し味は秘密だがこの店の酒に合う一品だよ」

「肉か。だったらこいつの注文通りで持ってきてくれ」

「あいよ。他の客の注文を優先にしてもらうから、少々時間が掛るその御了承してくれ」

二十も満たない若い店主は一回りも二回りも歳を重ねたドワーフに対して臆せず、腰まで伸びた真紅の髪をなびかせて移動する。その姿を見送るドワーフは訊ねた。

「あの小僧がこの店の店主か？」

「そうじゃ。一人で店を構えて作ってこの人気じゃ」

「ほお、それは大したもんじゃな」

見渡せばそれは嘘ではないと証明している。現在は昼時だからか、それを差っぴいても二階建ての食堂の一階の席はほぼ満席まで席を陣取っている老若男女のヒューマン、小人族、犬人、狼人、虎人、ヒューマン、カウズ、キャット、ビートル、ホアズ 兎人、牛人、猫人、猪人、アマゾネス、ドワーフ、エルフと言った他種族の冒険者から一般人、神威を放っている神も集ってこの店の料理に舌鼓を打って味を楽しんでいる様子を窺わす。耳を傾ければ酒や料理のお代りの要求、食べている料理に対しての感想、世間話などが聞こえる中。二階へ上る階段を目にした。

「確かに賑わっているが、二階もそうなのか？」

「二階は予約制のようじゃぞ。普段俺等のような客は一階こゝで食べる」
「そうなのか」

一体どんな客が予約するのか気にしたが、考えても硝子職人の己は気にしてもしようがないと心の中で被りを振って考えを止めてから数分も経った頃。金色の酒と揚げたてでジュウジュウと音が鳴る大量に盛られている、焦げ茶色の塊に緑色の野菜を運んできた店主がやってきた。

「お待たせしました。ビールと唐揚げに枝豆だ。レモンを絞って掛けると唐揚げの味がさっぱりして更に美味しく感じるようになるから良かったらどうぞ」

待ってました！と言わんばかりに冒険者のドワーフは大振りな一個を、手にしたフォークで突き刺す。硝子職人のドワーフも見よう見真似でフォークで指すと、それだけでカラリと揚がった衣からジワリと肉汁が溢れてきた。二人のドワーフはそのまま、口に運ぶ。大きな口の中にまるまると入れて噛んだ瞬間、外はサクツと、中はふんわり溢れ出て来る肉汁は濃厚で、今まで食べてきた鶏肉何かの旨味をあっさり凌駕するほどの旨味を余すことも無く含んでいることが分かった。

「(うおおおおっ!?!なんだこれは、本当に鶏肉なのかっ)」

目の前の同胞を見ると美味そうに黄金色の酒を喉を鳴らすほど美味そうに飲んでいた。何故か後れを取ってはならないと気がして、冷えた杯ジョッキの取っ手を手にし唐揚げを食べ終えたその口の中へ流し込んだ。

「(むうっ!これは・・・合う!)」

そしてこのビールとやらの酒は、今日まで飲んできた醸造酒エールでは味わえない喉越しとキレ味であった。無論、ドワーフの火酒や蜂蜜酒のよりアルコール度は強くないが、これほどまで酒と肉が合う組み合わせは出会ったことが無い。硝子職人のドワーフは感動した。

「ほれ、この枝豆も塩っ気が利いて美味いぞ」

不意に二つの皿の内の一つを差し出してきた同胞に不思議と首を

傾げる。

「お前の分ではないのか？」

「飲み仲間のお前さんにも味の良さを知って貰いたくて頼んだに過ぎんわい」

「む、そうだったか。それじゃありがたく」

その枝豆も酒に合うと知り、それから海の幸の食材を揚げたシーフードフライやオラリオでは見掛けない生魚の刺身など頼んでは食べて、至福の時を楽しみここへ招いてくれた同胞への感謝の念を向け、またこの店に夜も来ようと胸に秘めた。

「(こりや良い店を知ったな。他の仲間にも声を掛けてみるかの。しかし・・・)」

一つだけ気になることがある。

「のう、この店の名前は何じや？看板があるのじやが文字が読めなかった」

「むう？ああ、あのヘンテコな文字は『異世界食堂』って読むらしいぞ。何でも極東の文字だとか」

「ほほう、かの東の最果てに存在する極東の国の文字じやったか」

こうして人から人へと伝わり、『異世界食堂』の知名度が徐々に増えて行く。例え客として紛れこむイルヴァイス闇派閥の構成員でも足を運ぶほどに。

「へえ、ここがそうなんだ。確かに日本語で書かれてるな『異世界食堂』って」

「でしょ？さ、早く入りませしょ？」

【アルテミス・ファミリア】の団長と団員達が『異世界食堂』にやってきた時刻は夜。予約をしていない為、ヒーロー組は留守を任せられ主神と外食を赴いた。アスナとシノンの先導で再びやってくると、朝とは違って客は大勢いて飲食していた。客達が食べている料理を見てキリト達が色めき立つ中、店主が笑顔で出迎えた。

「いらっしやい、早速来たな」

「うん、今夜はキリト君達だけ連れてきたけど席空いている？」

「勿論だ。奥行きに向かえば空いているぞ」

店主自ら十数人分も空いている席へ導く。それから注文を求める際はボタンを押す様に教えられると離れた。分厚いメニュー表を手にとつて選ぶキリト達は声を上げた。

「ビールツ、ビールがあるぜっ！この世界に来て早二年目で懐かしの酒が飲めるのかあ、くうううっ！」

「何気に割高だが、この世界なら直ぐに稼げれるから金に困る事は無い。大方冒険者向けなんだろうよ」

「おお、本当に色々とあるな。つてソバやうどんも作っているのかこの店は」

「うくん……色んな調味料があるからこそ作れるんだよね絶対。どこで手に入れていいのか今度教えてもらおうかな」

懐かしみながらも今直ぐ食べたいの見物や料理を決め、店主を呼んでは注文を頼む。そしてものの数分でキリト達の前に異世界の料理が運び込まれた。

「おまたせ、腹いっぱい食べてくれ」

「！！「おおおくくく！かんぱーい！！」」

大人達はビールを片手にジョッキをぶつけ合つてこの日まで生きてきた自分に祝う。未成年達もジュースを片手に大人達と同じ行動をして盛り上がる。黄金色の酒の上で泡立つ白い泡を口にし、喉を鳴らすほど飲みっぷりがいい様子のあと、一気に息を吐いて多幸感極まった表情を浮かべた。

「うめえ〜！今まで飲んできたエールじゃなくて俺達が知っている酒の味だあー！」

「お前、よくここまで完璧に再現できたな。まだキリト達と同じぐらいの歳なんだろう？異世界から来た俺達からすれば絶対にできない事の筈なんだがな」

「作り方さえ解ればできるぞ、造酒」

「……お前、チートすぎんだろ」

同じ苦勞を体験している者同士とは思えない店主の行動力に若干ヒクキリト。それでも目の前に置かれた料理は文句なしの美味しさであつて、何時も料理を作ってくれるアスナ達女性陣に申し訳ない

が、夕飯はこの店で食べたいと心が動いてしまった。

「よし、今日はじゃんじゃん飲んで腹いっぱい食べるぞー！」

「クラインさん、羽目を外し過ぎないようにしてくださいよっ」

「ねえ、お持ち帰り用の料理ってないのかしらね？ ケーキとかさ」

「聞いてみない事にはわからないねえー。後で聞こっか？」

「ん、美味しい」

皆幸せそうに食事を楽しむその笑顔浮かべる意味は他の客達と変わらず、料理を提供する側はほっこりと気持ちが温かくなる。する気などなかったがいざ始めると「まあ、結果オーライ？」的な気分になっていたところ来客が店内に入ってきた。

「しっかしキリの字よく。おめー、同じ男として負けてんじゃねーのか？」

アルコールを大量の摂取して酔いが回って真つ赤な顔でキリトに絡む赤髪に極東の侍風の鎧を着こむ青年に「何がだ」と言いたげに見返す黒い剣士。

「強さはともかくこうして自分で店を構えて美味しい飯や酒を作れるってんだ。男として技能の一つや二つ備えた方がいいんじゃないかってことさ」

「俺は別にそんなこと気にした事がないんだが。ていうか、それを言うならクラインだつてそうだろうが」

「俺のことなんてどうでもいいだろ。問題は、お前がアスナちゃんの彼氏として負けてないところを見せなきゃ格好悪いんじゃないかって話だよ」

そう言われてキリトの中の小さなプライドが刺激され「料理なら人並みぐらいできる…….」と思う」と言ってみたら。

「お兄ちゃん、簡単なパスタしか作れないのに見栄を張るのはカッコ悪いと思うよ」

「そうね…….昔交代制で食事を作った時なんてエギルさんを中心だったわよねキリト君達って」

「それ以外、外食だもんねー？」

「で、でもキリトさんはおにぎりやサンドウィッチを…….」

「シリカ、それは料理とは言い辛いと思うのだけれど」

ささやかな擁護をされても殆どがキリトの料理の腕前を辛口でそれほど期待されていないと面と向かって言われた少年はへこたれ、追加を持ってきた店主からも憐れな者を見る目で言われる。

「……めっちゃ否定されてんなお前」

「……」

事実であるから周りから突き刺さる言葉の威力は強かった。キリトは言葉の槍に刺さったまま頭を垂らし沈黙してしまい、言い返す言葉すら皆無に等しい。

店の戸締まりをし、食材の補充を済ませ遅い夕食も済ませて自室に籠る。魔導書で発現した魔法を初めて試す臨みの一誠は明かりもつけず暗い空間の中を佇み、精神統一する。憧憬の度合いによつて成功率が左右される魔法な故に十数年間過ごした世界を想い、己を慕う者達の顔を鮮明に強く浮かべ——力強く発する。

「ネオ・ワールド・ドア」

心から想いを込めた無詠唱の呪文が短くも紡いだ。眼帯を外した右眼も虚空に向かって真剣な眼差しで凝視。思い浮かべるは己の帰りを待ち続ける家族達——。

呪文の言葉を口唇に転がしてから一拍遅れた時、眼前に楕円形の光の鏡らしき物が具現化した。扉じゃないのか？と不思議に思うも水晶のようにきらきら光る小さな粒子で構成したそれが次第に映すのは——不意に濡羽色の右眼に異変が起きた。

「……」

濡羽色の片目だけが突然、別の景色を映し出した。暗く鏡のような物を見つめているそんな光景も。この現象は良く知っている。この現象が共通して出来るのはただ一人だけ。濡羽色の長髪を揺らして、己の右眼を通して鏡が映している場所へ急いで駆ける。その場所は——黙々と食事をしている数多の者達がいるリビングキッチンだ。キョロキョロと両の目を周囲に向け、何かを探している様子の幼女に声が掛けられた。

「どうしました、オーフィス様？」

長い銀髪を結び、琥珀の双眸を向けてくるメイド服姿の女性にオーフィスと呼ばれた幼女は口を開いた。誰も驚きで目を見開く言葉を口にして。

「私の右眼、イツセーの右眼と繋がった」

「っ！」

『……っ!?!』

オーフィスの言葉に嘘偽る悪意は微塵も感じなかった。冗談を言うような幼女ではないことも認知している。

彼女の言うことは本当だとばかり、不思議なことに幼女の右眼から涙が浮かび頬を伝って零れ落ちだした。悲しみも喜びも顔に出していないにも拘らずだ。——もしかすると、と一縷の想いを継るようにメイドは訊ねた。

「……オーフィス様、あのお方はこの世界に」

「いない、でも、我と繋がってるのは確か。鏡のような物で我等を見る」

「鏡、ですか」

リビングキッチンには鏡も、それになるような物は無い。なら、どうやって見ているのかと推測すれば魔法か魔導具マジックアイテムで介していると思うのが妥当かもしれない。

「……イツセー、何か書き始めた」

「分かりますか?」

「ん、私の目で良く視える。——『リーラ、皆。お前達の姿だけでもようやく見れた。異世界の魔法でそっちの世界に繋がっているけど、あまり維持してられる時間は少ない。オーフィスの目で介して言葉の代わりに文字で伝えてるから尚更だ。オーフィスには伝書鳩的な感じで皆に伝えさせてもらっているようだからごめん?』」

我は気にしない、といった風に首を横に振る。

『俺がいる今の世界は地下迷宮都市オラリオっていうダンジョンがある場所に住んでいる。モンスターと人類が天敵同士でフレイヤお姉ちゃんやロキ兄さん、ガネーシャおじさん達と同じ名前の神々もいるわけなんだけど、人間臭すぎて神として敬えないのが心境だ。ロキ

なんて女性で何故か関西弁で語るし、酒好きで女好きと極まる』

——そんな神、こつちにもいるような気がする。と誰も突っ込めずにいっていると、一誠からの状況報告は約一分ぐらい続いた。その間、苦笑いと驚き、感嘆の反応を繰り返す一同。

『それと驚いた事に俺と同じ境遇の人間もいた。別の世界で死んで神の力で甦った転生者って特殊な人間もいる。もしかすればお前等も俺がいる世界に来れる可能性がある。その方法は分からないけれど、もしお前達も来てくれたら俺は——』

不意に、オーフィスの口が不自然に止まり皆は不思議そうな雰囲気纏う。

「繋がりが途切れた」

その一言で皆は悟った。魔法の効果が切れたのだと。だが、それでも久しぶりに自分達の中心たる人物の生存が明らかになったことで胸を撫で下ろす気分になる。

「一誠君……元気で良かった。ね、ヴァーリ？」

「ああ……欲を言えば姿を見たかった。オーフィスだけが見れるのは正直羨ましいのだがね」

「我也イッセーの顔は見れない」

「ねえ、また繋げてきた時には魔法的な力で精神だけでも喚べれない？」

ドラゴン・ゲート
「龍 門ですね……ヴァーリ様とクロウ・クルワツハ様、オーフィス様だけでは足りませんね」

「他の龍王にも力を借りましょ？事情を説明すれば分かって貰える筈だわ」

やることが決まれば彼女達の行動は迅速だった。直ぐに通信式魔方阵でとある者達へ連絡を取り始めて準備を整えだす矢先にオーフィスが「あつ」と漏らした。

「また繋がった」

『えっ、もうっ!?!』

ホームステイな少年の気持ちを見誤ったかもしれない面々であった。——しかも、今度は少し状況が違った。濡羽色も右眼に真紅の

魔方陣が浮かび上がり、そこから鮮やかな赤い光で何かが投影され始めた。立体映像が徐々に目の前で作られていき――。

『……おおう、やってみるもんだな』

生身の肉体ではなくとも、オフィスの右眼から立体映像として現れた一誠が自身の体を確認しながら状況を把握、成功したと朗らかに笑みを浮かべた。

「い、一誠君……？ど、どうやって……？？」

『オフィスの目と繋がっているならさ。もしかしたら意識だけでも行けないかなーって試しに精神体だけで来てみました』

「じよ、常識破りも良いところよ貴方……こつちが今、それをしようと思ったところなのにそつちがそれをするなんて」

愕然の面持ちや絶句、中には不敵に笑みを浮かべて半分透明な一誠を久しぶりに見つめる。

『よくイレギュラーって呼ばれてるからこんなこともできなきゃ』

形はどうあれ、時空と次元を超えて生身でなくとも元の世界に帰ってきた。それが何よりも本人は嬉しくて堪らなかった様子のように嬉しそうに笑みを浮かべる。

『みんな久しぶり』

「っ……」

まだ、「ただいま」は言えない。皆と三年振りに会えて「久しぶり」の言葉を選んで発した。一誠も彼女等もお互い「ただいま」「お帰り」と言う日はまだまだ先にある。

『立体映像だから、触れられないのは非常に残念極まり無いよ。リーラ、皆も』

片手をオフィスの頭に触れようと動かすと、スツと濡れ羽色の頭に沈んでしまう。しかし、それでも幼女は目を細めて何かを感じ取っている様子だった。

「触れずとも私達は一誠様のお姿とお声を聞いて嬉しいですよ」

『……同感だけど、やっぱりな。っと、もう魔法の効果が切れるか』

立体映像の一誠の足から消失していく。言葉通り、魔法の持続時間

の限界が迫ったのだ。彼女達との別れの時間が迎え、リーラは寂しげに残念そうに漏らす。

「お早いのですね……」

『異世界の魔力の能力値が0だから魔法を発動できる時間は短い。本来の魔力でだったらそつちの世界に帰れたかもしれないけど、まだまだ先のようなだ』

糠喜びさせて悪い、と申し訳なさそうに謝罪の念を顔に出して謝る一誠を非難する理由は無い。と慈愛に満ちた目で見送るリーラ。

「それでも私達は、貴方の帰りを何時までもお待ちしております」

その言葉を聞いて満足そうに微笑み、両手を伸ばす。その意図を察して彼女も両腕を伸ばせば包むように手と手が重なる。すると、手の平から伝わる何かに琥珀の双眸が少し見開いた。

『ああ、待っていてくれ。今俺がいる世界とそつちの世界と行き来できる魔法を編み出して帰ってみせる——』

最後まで言えずにとうとう消えてしまった一誠。オフィスの右眼に浮かんでいた魔方陣も消失して、場は静まり返る。幻だったのかと思うほど、今起きた現実を否定する要素は無いと喜びを噛み締め、友人同士話し合い顔を見合わせ笑みを浮かべ合う他所に胸元に両手を添えて……立体映像から渡される筈も無い温もりを堪能する。

「……」

精神対が戻り、目蓋を開ける。懐かしの家族達の姿を見られて心は――。

「魔法、つかってどうだった?」

「うおっ!」

薄暗い部屋の中にベッドの縁に腰を下ろして話しかけてきたヘアイストスの存在に不意打ちを食らって驚かされた。

「いたのか」

「ええ、返答もしないから寝てるのかと思ってみたのだけれど、光の鏡みたいなのを前に立って集中している貴方を見て、邪魔をしちや悪いと待ってたわ」

気を遣ってくれたことに感謝と謝罪の念を抱き、結果を告げる。

「異世界にいる家族と話ができた」

「本当？ 凄いいじゃない。家族の人達も喜んでくれたでしょ？」

「ん、これだけでも奇跡的なことだ。あとは魔力を増やしてどうにか異世界と繋げたい。が、俺には絶望的だ」

肩を落として落胆と嘆く。一誠はドラゴンでリヴェリアからオツタルを凌駕する力を秘めているとも言われているほど実力は高い。深層のモンスターを倒しても熟練度やアビリティは不変で成長する兆しが無い。ヘファイストスは知っている。もしかすると未来永劫、「ランクアップ」することがないまま生き続ける恐れの可能性が高い事を。それでも神として、女として他派閥の団員になっても彼を支える事を厭わない鍛冶女神は立ち上がって真正面から抱きしめた。

「絶望的でも微かな希望があるなら頑張りなさい」

「……………ん、そうする」

励まされ、顔を上げると右眼に漆黒の眼帯を付けた紅眼の女性の顔が視界に入る。互いが眼帯を見せつけ合い二人だけの雰囲気醸し出し始め、どちらからでもなく距離を縮め……………唇を重ねあった。ただ触れ合うだけのキスでも胸が多幸感で膨らみ、動悸が激しくドキドキと高鳴るほど緊張と興奮をしている。紅髪と同じ紅潮する顔で愛おしい少年を見上げながら首の後ろに腕を回し、身体を押し付けつつ熱く息を吐く鍛冶神の顔は熱く潤った目と共に一柱の女神でも「ファミリア」の主神でもない、一人の雌おんなのソレを浮かべていた。

「イツセー……………今日も……………」

ベッドに引き寄せられ押し倒される。密着してきた身体は熱でもあるかと思うぐらい熱かった。心なしか甘い匂いも強く感じてきた。

「……………シよ？」

「ん、わかった。でも……………」

「……………今日もするのであれば手前らも参加するぞ！」

彼女等の甘い雰囲気ムードが眷族の金槌でブチ壊された。当然のように部屋に入ってきた椿……………に連れて来られた形の様子のリヴェリアがベッドの上で体を重ね合っている様子を見てどこか冷め

た口調で話しかけた。

「何をしてる」

「魔法の事で慰められながら押し倒されていた」

「……魔法？」

「異世界に行き来できる魔法を得ただけで、魔力0だから望んだ通りはならない結果に嘆いていた」

嘘ではない、と伝えたかったリヴェリアにヘファイストスを抱えながら起き上って背中を見せつけた。ハイエルフはその翡翠の双眸で「ステイタス」を確認すれば、異常な魔法が新たに発現していることを認め、認知した。

「0でも魔法は発動する。めげずに明日でも唱えてみるべきだ」

「ん、ヘファイストスにも慰められていたところだ。それと二人は何でここに？」

「お主の部屋に主神様がこんな夜更けに入っていく理由など一つしかあるまい？ 故にリヴェリアもお主の事を好いておるから手前が気を利かして共に夜を過ごそうと魂胆よ」

違ったか？ と問いかけに苦笑を浮かべ「魔法を発動していた最中にやってきたから何とも言えない」と返事する一誠だった。

「でもヘファイストスは『そのつもり』だったようだから、俺も今そうしようと思ひ掛けたところだったけど」

「ふむ、結局は手前の考え通りか？」

「イツセーお前……」

椿と神ヘファイストスに手を出していたのかと少なからず衝撃を受けたハイエルフに手が伸びる。何時の間にかベッドから離れ、目の前に立っていた愛する少年に腰と頭の後ろに腕を回されて抱きしめられた。

「せつかくだ。リヴェリアも一緒に夜を過ごそう」

「なっ、いや、私は……待てイツセー……んっ」

抵抗はするが、愛撫と優しく情熱的な口付を向けられる視線に感じながらされ続け、時折「大丈夫、恥ずかしいのは皆同じ」「リヴェリアも今日も俺から離れない気持ちをさせる」等と甘い言葉で尖った耳

に囁かれ、何時しか耳先まで紅潮して初心な少女のように震える。

「それとも、もう俺と愛し合うのは嫌になつたか？」

「——っ」

その問いはズル過ぎる、と心中で漏らし今まで伸ばさなかつた腕を少年の首に回し始める。今度は自ら一誠の唇に唇で深く重ねると舌が彼女の舌に絡みついてきて、その舌を愛おしげに熱を孕んだ翡翠の瞳を潤わせ自分の意思で応じ絡める。

「馬鹿者、誰が嫌になるか。私はお前が必要なのだ。これからも私を愛してもらいたい」

「ん、よかつた。だったら今夜は今まで以上の愛し方でリヴェリアを愛して可愛がるよ」

「……っ」

ヒョイツと横抱きに抱え、ヘアアイスがいるベッドへと寄つて傍に置いて、半ば置いてけぼりな椿も呼んで川の字に並べさせたその後。三人は奮闘する一誠の情熱的な愛によって嬌声を上げ続け、その身と心は一色に染まつた。

「り、リヴェリア様があんな姿を、あんな声を、あんな表情を……っ」

出遅れた顔を赤くしているエルフの少女が覗いていたことなど露も知らずに。

冒険譚3

身体が起床する時間帯を覚え、意識を覚醒させた。寝ぼけ眼で上半身が裸のまま、両腕や体の上から心地の好い体温と柔肌を覚えて視界を変えれば、全裸で寄り添い、覆い被さるように全身を密着させて目を開けている三人の美女達が映り込んだ。

「おはよう・・・いい朝ね」

「アレだけシタというのに・・・お主の熱は冷めるところか昨日より更に硬く高まつて高揚しておる。火傷してしまいそうだ」

「・・・三人でも足りないのかお前は」

朗らかに微笑むヘファイストス。男の熱を直で感じ蕩けた顔の熱で浮かれたように潤っている目をして、そう言う椿の発言を聞き凄さを通り越して呆れるリヴェリアに顔を寄せて唇を重ね始めた。鍛冶師の裸体を触れる手は下半身に伸び、覆い被さっている最上級鍛冶師マスターミスに体を動かして快楽を与え始める。のちに三人から熱い吐息と艶やかな嬌声が聞こえ、爛れた朝を迎えるのに時間はかからなかった。

「・・・」

今年で十一歳になるアイズ・ヴァレンシユタインは物凄く張り切っていた。その理由は久しぶりに一誠との模擬戦ができる故に誘われたその瞬間、顔を輝かせて満面の笑顔で二つ返事で領いた記憶がまだ新しい。そんな少女の奮闘ぶりを見ようと神や眷族達が『幽玄の白天城』の最下層、トレーニングルームの安全な観戦席から見守る。対峙する当の二人は五Mも離れた位置で己の武器を構えてその時を待つ。頭上に浮かぶ四角い大きなブロック状の四面に数字が浮かび秒読みをしていて、カウントが0になった矢先に金髪をなびかせて少年へ駆ける金眼の少女が先に動いた。一瞬でモンスターを切り捨てる斬撃が魔力で具現化した光の剣に軽く受け止められ、強く押し返された瞬間に飛んでくる光の斬撃を前に、膝を折って後ろへ上半身を倒し直ぐ真上で通り過ぎる斬撃から紙一重でかわして見せた少女の視界に入る、幾重の斬撃が飽きもせず馬鹿の一つ覚えのように放たれる。

背中が発光し出し、三対六枚の翼が生えだした。観戦席から「アイズたんマジ【天使】テ・シールやあつ！」と狂喜の声が聞こえたが少女の耳は完全に無視して、数多の斬撃を飛びながら回避するか受け流しつつ宙から一誠へ肉薄仕掛る。鬼気迫るその気迫と無謀な突撃に度胸ある行動は、あつという間に距離を縮め懐に飛び込めることができた。

「――」

ニツ、と不敵の笑みを浮かべた一誠。全身を一瞬で『熾天使変化』セラフ・プロモーション、天使と化して迎え撃った。開始早々の本気モードの一誠に嬉しさと自分も本気を出さんと「母の風よ」エアリエル！と攻防一体の風魔法を発動し、風の鎧で身を守る少女の意図に、ひとつの翼の切っ先に雷が宿り、その翼を動かし稲妻の如く風の鎧という壁を抵抗も感じさせず突き貫く。その瞬間を直視した金眼は大きく見開きながら顔を逸らし、金髪を数本が宙に舞った程の犠牲でかわせた。自分の魔法は当たらない限り通用しないと悟るや否や、他の翼まで槍のように突き、剣のように振り下ろしてきた一誠に柄を両手で持つて苛烈な攻撃を一瞬の気の緩みを許さない一方的な防戦を強いられる。不意に翼の攻撃が不自然なまでに止むとアイズの周囲に光球がポツポツと虚空から浮かび上がる。それが何の意味を成すのか定かではないが、本能的に立ち止まっていたら負けると全力で後退したその瞬間。光球から閃光が放たれた。初見の攻撃をかわした少女に感嘆の息を漏らしながらも閃光で攻撃する少年に外野から「あんなこともできるのかよ」「異世界の魔法は何でもアリか」などと驚嘆と愕然が漏れる。

「これはどうだ」
「っ!？」

バンと床に手を叩き付けたその一拍後。足元が震動を起こし、ついには朱色の光がフィールドから天井まで伸びる数多の灼熱の炎柱が突き破りながら続々とランドダムでアイズの方へと迫った。その現象は異なるも都市最強の魔導師の魔法と似ていた事に「ロキ・ファミリア」の幹部達は目を丸くする。迫りくる炎の魔法攻撃を避ける為、負けじと下から山の噴火の如く飛び出す炎柱が出ていない空間へ全力

で身を飛びこませる。前へ前へと進み、直ぐ傍で発生する嘖きだす炎で朱色に照らされつつも一誠へ駆けだす――。

「ヘル・ファイアーウォール」

横薙ぎに振るった一誠から生じる巨大で長大な炎の壁。壁や天井まで伸びて少年を守るのではなく少女へ押し迫る炎の壁は驀進する。逃げ道は無い窮地に立たされ、圧倒的な魔法の力を見せつけられるように半ば立ち尽くす。ただの冒険者であれば、降参するか死を連想して泣き叫ぶか逃げ出すかもしれない。だが、金髪金眼の少女は短剣の柄を強く握り締め、「^{エアリエル}母の風よ」と呟いた。

フィールドの半ばまで迫っている炎の壁を見送る縦に分かれた金眼の瞳孔。この程度も超えないようではまだまだ先の話だと、二重目の炎の壁を生じたその瞬間――ふと感じる膨れ上がった魔力。二つ目の炎の壁の一点に凝視する。下から上昇する炎の動きが他の炎の動きと変わっていないが、しばらく経つと突然揺らめきに異変が生じた矢先に風に包まれた少女が顔中に汗を浮かべつつも飛び出してきた。見に纏う風で炎の残滓を散らばせつつ、短剣を真っ直ぐ前に構えてながら全身で息をするアイズの前に一瞬で迫って、腹部に拳を突き刺して宙へ殴り飛ばす追い打ちを掛ける。疲れ切ったところを狙った行動は、妥協も甘えも女子供であろうが容赦しないと意味合いが込められたいた。

爆発的な脚力で宙を蹴り突貫する勢いで懐に飛び込み光剣を振り下ろす。攻撃してくる相手に負けじと眦を裂き、奥歯を強く噛み締め応戦しながら必死に剣を振るも、隙を見せた相手に少年は妥協を許さない。巧みに剣に剣を添えて素早く弾く感じで上へ持ち上げられた少女へ槍の如く鋭い蹴りを小柄な体に突く。金眼を限界まで見開き、幼い体の許容範囲を軽く超えた痛みは激痛と共に内臓までダメージを与え、胃液と交じって出た血を口から吐き出しながらも、タダではやられまいとか飛ばされまいと一誠の脚衣を小さな手で掴んだまま魔法を解き放った。

「^{エアリエル}母の風よ！」

全力全開の一矢報う攻防一体の風が少女から嘖き上がり、愛剣に纏う嵐が零距离にいる相手へと目掛けて突き出した。両手の光剣を交差して防御態勢に構えるがアイズを守る小規模の嵐に切り刻まれながら弾かれるように吹き飛ばされた。が、直ぐに床に足を着いてアイズから数Mの距離で踏ん張って止まる。全身に刻まれた痕が残り、切り傷から軽く血を流す程度で一誠は大して深いダメージを受けていないことを窺わせる。そこからアイズへ声を掛ける。

「まだいけるか？」

「まだ、いける、よっ……！」

「わかった。続けるぞ」

立っているのがやつとのような己より小さい少女。でも、金の双眸を覗き込めばまだ死んでいない戦意の光が宿っており、顔はこの瞬間を待ち遠しかったの表しとして笑みを浮かんでいた。だから彼女の気持ちを尊重して、亜空間から取り出す十字架型の盾を装備して更に怒涛の攻撃を仕掛け始める。

どれだけ傷を負って床に血反吐を撒き散らして何度も倒れようと、無様な姿を晒しても何度立ち上がって己の限界を超えるまで戦い続ける目も当てられない模擬戦中、不意にロキが口にした。

「なあ、フィン達も戦ったらLv. 7の夢じゃあらへん？」

「試す価値は十分あると思うけど。全力の命懸けの戦いになるよ」

「【おうじや猛者】を始め他の第一級冒険者が束になっても、勝ち負け関係なくしてもお互いタダでは済まないだろう」

相手が最強の冒険者達であつたら一誠も本気にならざるを得ないだろう。アイズとしている模擬戦以上の戦いを繰り広げる筈だ。それにあの【テ・シーオ天使】の姿になった時の一誠の力は未だに未知数。モンスターとしての強さもまだ知らない。

「儂は戦つてみたいのお。軽くフィンとあやつが手合わせをして以来、異世界のモンスターだと知ってからどのぐらい通用するのか興味が出たわ」

一人、好戦的な意見を漏らすドワーフの老兵。機会があれば戦う意思を伺わせる手のひらに握り拳を突き付けたガレスの瞳にとうとう

少女が床に倒れ伏せた様子が映った。

「む、終わったようじゃな。今回は前回よりも長かった方か」

「店を構えてからあの子と過ごす時間が減ってしまったからだろう」

アイズは直ぐに傷と体力を回復して貰って立ち上がったことでお互い頭を垂らし礼をし合う。模擬戦が終わった二人を労いにフィールドへ降りるロキ達。

「今回も凄かったやで。またアイズさんの「ステイタス」もかなり伸びたんとちやう？」

「手応えは感じた筈だ。アイズの全力の模擬戦をする度に力を増してきているぞロキ。この調子でいけばもう10年以内に第一級冒険者になる可能性が高い」

「ほー、それは経験上で言っとるん？」

「当たり前。俺も16の歳でこの強さを得たんだからな」

金眼を見上げてくる少女に頭を撫でながら「その時こそが俺に本気を出させる戦いができるだろうよ」と期待が籠った言葉を述べ微笑んだ。誰もその本気の一誠と戦ったことが無い。ならば、本気になった一誠はどのぐらい強いのか、気になるのは当然であろうか。

「イツセー、本気を出したお主はどのぐらい強い？」

「ドラゴンになったら軽く山を消し飛ばす」

「・・・おお、そうか」

階層主でもできぬことをやってのけると朗らかに言われた椿の頬が若干引き攣った。モンスターとしての力、異世界で培った実力は軽くそれをこなすことができる一誠が過ぎした人生は波乱万丈で濃厚なのである。

「まさかと思うが・・・お主の中のドラゴン達もそれが可能か？」

「片手で数えるぐらいしかないかな？ま、無意味に山を壊すことはしないよ」

「する気が無くてもそうして欲しいわ」

加えて封印されているドラゴン達が人間界に放たれればたちまち世界は壊滅する。一匹一匹が階層主を上回る力を有しているのだから、第一級冒険者が束で掛らないと戦えないそれほどまで凄まじい怪

物なのだ。間近で見た一柱としてヘファイストスは小さく溜息を吐いた。

「なんなら、異世界のドラゴンと戦ってみるか？」

「む、可能なのか？」

「この空間なら問題ないのと、俺がいる限り勝手なことはさせないから大丈夫だ」

「どうする？」と訊ねられたフィン達は冒険者として仲間と視線で相談し合い、頷き合った。

「分かった。貴重な体験をさせてもらうよ」

「階層主との違いを知る良い機会じゃ。異世界のモンスターの強さを見せてもらうぞ」

「了解。なら準備をするかな。ああ、それと。別に殺しても構わないぞ。殺しても死なないタフなドラゴン達ばかりだから」

「どれだけ化け物なのだ異世界のモンスターは」

観戦席へ一誠は戻る。これから始まる戦いは対人同士の模擬戦の方が可愛らしいと思うほどの死闘が繰り広げられる。彼等に戦いに巻き込まれないよう一誠も観戦席で防壁を張るのだった。

「オツタル、貴方も戦ってみなさい」

「はっ」

フレイヤの命で最強の冒険者も参加する。三人の武器は全てデュランダル不壊属性。並みの武器では直ぐに壊れて戦えなくなると大剣と槍、斧を貸し与えられた。右眼の眼帯を外し、濡羽色の瞳を晒し深緑色のマジックサークル魔法円を展開した。それと同じ幾何学的な円陣が空間にも大きく発現して深緑色を発する高潮して一瞬の閃光を迸った光からその姿を現す一匹の怪物。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ!!!』

巨人型のドラゴン。肌黒い鱗に覆われた巨躯、ドラゴンらしく翼と尾を生やして銀色の双眸にキラキラと戦意と殺意、狂気と狂喜が混ざった色を浮かべて、頬を嬉々として釣り上げている。そして一誠に話しかける怪物。

『おい兵藤一誠、俺を出したからには戦っていいんだろ?』

「勿論。これからお前が戦う相手は潰れても問題ない。最悪、手加減してても間違つて殺したらしょうがないぐらい相手をしてやってくれ」

『グハハハハッ！ああ、間違つて殺しちゃったら仕方がないよな？ならよ、手加減せず殺し合いをさせてもらうぜ！』

最初からする気が無いことを哄笑しながら己の相手を見据える銀の双眸は愉悦に細めた。

「……理知を備え取るモンスターはともかく、異世界のモンスターから感じるこの迫力と威圧は階層主とは比べ物にならないぐらい凌駕しているね。親指が震えてるよ」

「儂もじゃ。武者震いがするわい」

「……」

第二戦目の模擬戦はそれから始まり、第一級冒険者と異世界の怪物ドラゴンの戦いは激しいものであったと、一誠はフィールドで攻防を繰り広げる冒険者とモンスターの戦いが終わるまで見守つた。絶対に壊れない武器を片手に振るおうとも、滅んだドラゴンの中で最硬の鱗とグレンデル本人の狂気なまでのタフさの前では骨が折れる戦いであった。「何て鱗じゃわいつ。不壊属性デュランダの武器の方が悲鳴を上げとる感じがしてならんわ」

「ああいうモンスターは目を潰してから倒すのが定石セオリーなんだけれど、潰したところでどうにもならないかもしれないのと、有効的な攻撃をしてくることを理解している知能を持っている。厄介だね……」
「これが、理知を備えている異世界のドラゴンの強さと力……か」
『チッ！チヨロチヨロと動き回りやがって！』

グレンデルも中々攻撃が当たらず苛立ち始める。もしもこれが通常の階層主の戦いであれば、フィン達の勝利になっていたかもしれない。しかし、今回の相手は異世界のドラゴン。何十年も培ってきたダンジョンのモンスターや冒険者に対する戦闘経験は通じるとは思えない。しかしこの戦いで勝てば【経験値エクセリア】の糧になるのは間違いないと踏むフィン達の目の前でグレンデルが行動に出た。

『つたく、真正面から攻撃し合うこともできねえ相手との戦いは姑息

で面倒臭えな』

愚痴を零しながら全身を発光して巨人の体が見る見るうちに縮まり、やがてオツタルの頭二つ分、三Mほどの巨軀の体まで小さくなったグレンデルに三人は目を丸くする。

「君達ドラゴンは、そんなことできるのかい？」

『力のあるドラゴンはできるんじゃないのか。俺の場合は兵藤一誠に言われた戦い方だけだな。こっちのほうの小回りも利いて動きやすい分、攻撃の威力が減ってしようがないがその分殺し合いが楽しめるんで最高だと、よおっ！』

飛び掛かるグレンデルが小さくなったことでフィン達もこれならこちら側の攻撃も通ずるはずだと攻勢に出る。

「アリサ、どうだ？あれがグレンデルの強さだ」

「凄い、三人に負けてない……」

「見た目に判断してはダメってことさ。相手が人間だろうがモンスターだろうがな」

「うん、わかった」

技のフィン、剛力のガレスとオツタルの連携は身体を小さくしたグレンデルを圧倒した。だが、不壊属性デュランダルの武器では切断することはできずにいて、ただ衝撃と震動を与える鎚変わりの武器と化している。結果、刃が劣化、摩耗して潰れてしまい凄まじい防御力を持つ邪龍相手に決定打ができないまま時間終了まで続いて引き分けとなった。フィン達は無傷でグレンデルは鼻や口の端から赤い血ではない血を垂らし、目を潰されている軽傷ではない傷を負ってもピンピンして立っていた。

『チツ、もう時間切れかよ。でもま、それなりに楽しめたほうか』

『ははは、僕達相手に倒せなかったモンスターは君が初めてだよ』

『てめえらが倒している雑魚モンスターと一緒にすんじゃないやねえよチビが。本当に殺している戦いだったら鬺り殺すつもりだったのによ』

「手加減をしていたと言うのか」

『いや、殺す気満々で戦ってたぜ？グハハハハッ！またやろうぜ、血湧き肉躍る殺し合いをよッ！今度は確実に殺す、絶対にぶっ殺してや

るからよ!』

展開する深い緑色の魔方陣の光に包まれながら再戦を望む言葉を残し、三人の前からいなくなった。戦闘による緊張感が溜息と共に解き、手応えがありながらも倒せなかった事実を感慨深く噛み締める。「オツタル、異世界のドラゴンと戦ってどうだったか感想を教えてくださいるかな?」

「……………奴の異世界に行けばまだまだ高みへ至れるかもしれない」「行く事が出来るならば儂も行ってみたいもんじゃよ。じゃが、その前にダンジョンを攻略しないことには話しにならないだろう。グレンデルのような化け物が深層の更に下の階層におけるかもしれないから」

「そうだね、とガレスの言葉に同意して観客席にいる一誠へ視線を送った。

「シー、彼と過ごす日常は刺激的だ」

「ガハハツ、確かに。あやつとおると暇にならないのは同意見じゃぞフィン」

「……………」

グレンデルとの模擬戦を終え、軽く風呂に入るフィン達が出て来るまで昼食の準備を済ませた一誠は荷物を持って出かけた。空間に穴を開けて繋げた先は——【アルテミス・ファミリア】のホーム前。丁度、ホームの前で木製の長大な机を挟んで昼食中のキリト達に朗らかに口を開く。

「キリト、昼飯のところお邪魔するぞ」

「うおっ、何時の間になってどっから出て来てるんだよお前」

「家の空間から直接この空間に繋げて出てきたんだが」

「それを一言で魔法だと言いたいのは分かるぞ……………」

「話しが早くて助かる、と周囲を見渡す。

「連中は?」

「ダンジョンに行ったよ。今じゃ中層まで進出中だ」

「そうか。まあ、あれだけの人数なら下層もいけるだろ。さて、本題に

入らせてもらうぞ。シノン、魔導弓の矢を持ってきたぞ」

テーブルに多種多彩な色と大量の矢が入れられた背嚢を二つ置かれると、キリト達の意識はその矢に向けられる。

「普通の矢、じゃないんだな？」

「鍛冶の技術を持つ俺がそんなじゃそこらと同じ普通の矢を作ると思っていたのか？俺の魔法の矢は魔剣に負けない威力を誇っている。一本数万以上の価値あるんだからな」

「……押し売り、しないよな？」

とてもじゃないが、自分達の懐に総額数十万も払う金は無い。そんなことされれば断固拒否をするしかない。しかし、一誠は「しねーよ」と一蹴する間、興味深々で一本の矢を抜き取り確認する。矢尻の部分には尖った赤い結晶の様なものを取り付けられている。これに魔法が籠められているのか、赤いから炎属性なのか？どの程度の威力なのか気になって試したい気持ち湧き上がるのは必然的な気持ち故に、マイホーム自本拠の廃墟の教会へ入っては魔導弓を手に戻ってきた。

「試していいかしら？」

「当然だけど上にな」

勿論、と意味を込めた頷きをして矢を弦に番って上空に狙いを定め放った。矢は空気を裂き、どこまでも天を穿つように飛び続け、直ぐ、赤い矢尻に光が発すると炎が燃え盛り、大気を焦がしつつ燃え尽きるまで空へ伸びていった。

「すごい、これが魔法の矢っていうの？」

「お前が想像していた魔法の弓矢なのかは分からないけど、威力は申し分ない筈だ。本当なら爆発する炎の魔法の矢にしたかったけど、狭いダンジョンの中でじゃあこっちまで危ないから火の鳥をイメージして作った」

それから一誠の「お気に召したか？」と問いかけに「うん」とシノンは首を縦に振った。

「これなら階層主との戦いでも役に立てそう。ありがとうイツセー」

「どういたしましてだが、他の矢の魔法もかなり強めに作ったから仲間間に気を使って撃つてくれよ」

「うん、わかってる。それとこれからも作ってくれとありがたいんだけど……」

「二度目は現金と引き換えだ」

「甘やかすのは一度だけ、と言いながら通信式の腕輪を持ってきた亜麻袋を机に置き一つだけ取り出してキリトに投げ渡す。

「なんだこれ？」

「無線みたいなものだ。それで俺と連絡ができるぞ」

「それって結構凄くないのか？」

元の世界で言うなれば電話と同等の役割を担っている代物だ。主に機械で構成されている通信式の機器はこの異世界では到底作れない物に等しい。それをどうやってかは知らないが、一誠は作ってみせたのだ。技術力ハンパねえ、と思いを抱くキリト。

「当然、一つ数百万ヴァリスはするぞ？それを作って無償で渡す相手は俺的に公私混合で得する奴にしかない」

「それって、俺達はお前にとって得する奴ってことか」

「うん、それに俺と交流を築いても損は無いことも理解してるだろ」

「まあ、な」

色々な意味で凄い奴だと認識してるキリトは、腕輪の扱い方を教えてもらい感嘆する。

「なあイツセー。悪いけどアスナ達の方も作って貰えないか？」

「その亜麻袋の中に全員分あるぞ——いやまさか、本妻に隠れて愛人達と秘密な会話を……？」

「ちよつと待てっ、俺にまだ妻もいなければ愛人だっていないから——」

「へえ、キリト君……私以外にも愛人を作るんだ？」

言葉の綾というものは時に怖い。笑っているのに顔が黒くて笑っていないアスナを見て「あ、こいつ。死んだかな？」と心の中でニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべて楽しそうに見ていた一誠を知らないキリトは冷や汗を流した。

「い、いやアスナ。今のは別に本心で言ったわけじゃなくてイツセーに対して否定しただけなんだ」

「酷い、本心じゃないって私のこと愛していたのは本気じゃなかったんだっ！」

「それも違う、俺はこの世界で一番愛しているのはお前だけなんだアスナ。だから信じてくれ」

真剣な黒い眼差しと表情で愛の告白をされた少女。嬉しそうに柔和に微笑んで愛おしい少年の手を重ねた状態で相手の名を呟いた。

「キリト君……」

「アスナ……」

二人だけの世界を展開して、現在の季節は冬なのに温かくキリトとアスナの回りに花が咲き誇っている幻覚が見えてきた。互いの顔にしか目に入っていない二人は、何時しか顔を近づけ、目を閉じて唇を交わす――。

「「「うおっほん、ごほんっ！」」」

「っ!?!」

ことはできなかった。羞恥でバツと縮まった距離を開けて顔を反らし合うが一誠やシノン達から向けられる視線から逃れられなかった。

「なあ、こーいう二人を俗にバカップルってそっちの世界でも言われているのか?」

「えーそうよ。このお二人さん、ゲームの中でも現実世界でもこつちのこと気にもしないでイチャつくんだから、一人身のあたし達からすれば見ててたまに恥ずかしいって思う時あるわー」

「ていうか、この世界に来てからますますお兄ちゃんアスナさんって一緒にいる時間が多い気がするよ」

「ゲームじゃない限り二人は一緒にいられないことは分かっていますけど……」

「――夜中に聞こえる変な声ももうちよつと抑えて欲しいわね、ほんと」

最後のシノンの一言、覚えがあるのか。三人の少女の顔に朱が差した。しかし、それ以上に顔を紅潮させたのが当の二人であった。口をパクパクして人語を上手に発せれない二人に対して、生温かい眼差し

で話しかける一誠。

「二人きりになれる宿屋を知ってるけど、案内してやろうか？」

「ま、待って待って！変な気遣いをしないでっ!？」

「あ、それともそーいう激しい運動をしても声が漏れない防音の効果がある道具を作ってやろうか」

「後生だ。頼むからそれ以上俺達を辱めないでくれ……」

「でも、まだ若い内にデキちゃったら大変だろう。ちゃんと避妊できるようにその専用の道具と薬、後は二人だけの家を作って周りを気にせず励める家を用意しようか？したら二人は気兼ねなく子——」

「お願いだからそれ以上何も言わないでっ!？」

からかいの材料を手にした少年は、ここぞとばかりに笑いながら若い二人に羞恥心でいっぱいにさせて楽しんだ。

子供のように純粹に笑い、顔を輝かせて。それが終わった時は机に頭を突っ伏して身悶えるキリトとアスナがいた。

「あんた、顔を輝かせて楽しそうだったわね」

「ああ、めっちゃ楽しかったぞ？俺は同年代の友人って少なかったからこーい話もできなかつたし」

「そうなんですか？学校に行かなかつたのですか？」

「ある事情で高校2年になるまで行かなかつたし、学校に通つたら通つたでとある事情で中退しちゃつてな」

「一体どういう人生を過ごしたらそうなるわけ……?？」

教えれば絶対に絶句するだろう一誠の二年前までの壮絶な出来事をキリト達はまだ知る由も無かつた。

「おい、何時まで恥ずかしがっているんだキリの字。さっさと復活しろ」

「だ、誰のせいで俺達が穴があつたら入りたい思いをさせているんだ……」

「身から出た錆じゃないか？」

「……御尤もです」

「ううう……」

もうしばらく羞恥に身悶えて復帰するのに時間が掛つた二人で

あった。それから復帰して今度は一誠に質問攻めし始めた。

「イツセーの世界って魔法があるの？」

「魔法だけじゃない。一言で言えば俺の世界はファンタジーな世界だ。そっちの世界で言えばゲームの世界だろうな」

「だから魔法が使えるのね」

「まあ、俺は元々魔法を使えない人間だったけどな」

事実であるから嘘ではないその発言に疑問符を浮かべたシノン。

「魔力が無かったから？」

「まさしくその通りだ。でも、俺の母親は由緒ある魔法使いの一族の当主だったんだ。逆に父親も由緒ある武道家の当主で、俺は父親の血の方が濃かったから魔力の恩恵は受けなかった」

「……イツセーって実は凄いや家の子供だったりする？」

「父親の一族は大嫌いだけど、世界でも有名で日本じゃあ一番偉い家の子供であることは間違いない」

日本で一番偉い家？少年の世界にも日本が存在していることをさうつと言われて少なからず驚いたが、リズはそのキーワードを謎々のように解こうと考える。

「総理大臣？」

「惜しいが違う。天皇家だ」

「」

言葉を失った。そして再び一誠は爆弾発言をした。

「ついでに教えるが、俺は人間じゃないぞ。人型のドラゴンだ」

人間の肌我真紅の鱗が浮かび、背中と腰辺りに二対四枚の翼、尻尾が生えだした。顔の骨格も変わり果て、鋭利な一本の角を伸ばす蜥蜴のような顔立ちとなる。

「!!!」

「ん、やっぱり人を驚かすのは面白いな」

人間の姿に戻って意地の悪い笑みを浮かべる一誠と腰を抜かして絶句するキリト達は目を白黒する。

「とある理由でな。人間を止めてドラゴンに転生したんだ」

「転、生……?」

「そう。俺の世界では人間から別の種族に転生できる技術がある。代表的なのは悪魔と天使、墮天使だ。皆、俺の様に人間の姿をして人間と共存しているのさ。ただ、ドラゴンに転生した人間は今のところ俺だけなんだけど」

過去を懐かしみながら語り続ける。

「さつき俺の世界はファンタジーな世界だと言ったよな。その世界には魔王や神も存在しているんだ」

「ま、魔王……」

「ああ、弁解させてもらうが。悪い魔王じゃないからな？寧ろ神と友好的な魔王達で平和に人間界と交流してるし、中には家事が大好きな魔王もいるし」

「……は？」

魔王が家事をする？悪しき化身の代表格の存在が笑って料理をする姿など絶対に思い浮かべることが叶わない。間抜けな表情を晒す面々を苦笑いして話を進める。

「俺の世界に来てその魔王と直接会ってみればわかるさ。いつもその魔王の妻に足蹴りされてる光景なんて日常茶判事だしな」

「待って……私の中の魔王が砕け散りそう……」

「というかお前がモンスターだってこと、この世界じゃやばいんじゃないのか？」

「かなりヤバいな。ドラゴンの姿で街中歩いたら悲鳴を上げられること間違いなし。加えて冒険者に迫害、討伐、捕獲されるのも必然的だ」

それを聞いてしまい、シリカは恐る恐ると心配そうに訊ねた。

「……その、大丈夫ですか？私達、イツセーさんの敵に回ってしまふ冒険者ですけど」

「それ以前にお前等は別の世界から来た人間達だ。この世界の人類ではない限り、俺に対して攻撃をする意欲は強くない。逆に俺も人間に危害を加えるつもりは全くないに等しい。攻撃をされたり大切な者に手を出されない限り限定だけだな」

断言され、自分もそうしない限りはしないと断言する一誠。

「ついでに言えば、俺の正体を知っている神と冒険者はいる。まだ少

ないがかなりこの世界じゃ頼りになり得る「ファミリー」だ。どこの派閥は言えないが、何となくわかるだろう？」

「多分……. . . だけど、言わない方が良いわよね？」

「疑われたくなかったらな。だけどキリト達、お前等は貴重な存在だ。これからも交流をしていきたいからな」

「どうして私達に対してそこまで注目するの？ 特別凄い力を持っているわけじゃないわよ」

「単純だ。お前達が別の世界から来た人間だからだ。そんな貴重な存在とさらに別の世界で出会い交流ができるなんて、俺のお父さんが知ったら悔し涙を浮かべるほど凄い事なんだぞ？」

自分達は一誠にとってただ立っているだけで凄い存在だと認識されていた。過剰評価ではないかと思ってしまうが、思い返せば確かに異世界から来た人間と話ができるのは凄い貴重だ。理解はできなくもないし分からなくもないと感想を抱くシノン。

「お前等はどうなんだ。人の皮を被ったモンスターとこうして言葉を交わし、交流しているこの瞬間をどう思っている？」

「……. . . 漠然とし過ぎて曖昧な気持ちしかまだ……. . . 」

「驚いているってことだろ？ つまり、俺という存在がキリト達にとって衝撃を与えたって事だ」

「……. . . 嬉しいの？ 自分が凄い存在ってことを教えて」

「ああ、嬉しいね。別の世界から来た同じ貉の穴同士。一生巡り合う筈がない相手とこうしている事態が奇跡なんだ。だからお互いの存在が相手にとって凄いのさ。だから自分の凄さを教えて相手の凄さも知る。そのの何がいけないんだ？」

言われて彼等彼女は否定の言葉を発しなかった。こうして話を聞いているとどこか一誠は高揚感に浸っている気がする。

「例えお互い、元の世界に帰ったりこの世界で骨を埋めることになってもこの世界で過ごした出来事は一生忘れられず記憶に残る。そうだろ」

「……. . . そうだな。それだけは確か」

「私個人に言わせてもらえれば、銃が無いのはちよつと残念だけどね」

「何だ、未成年なのに銃を使うのか？」

「ゲームの中の話しよ。私、キリト達と出会う前までは——」

と、自然と自分の事を話し始めた。シノンにとって別に凄くも何ともない話なのに一誠は目を輝かせ、好奇心と興味深々の全開で耳を傾ける様子に本当におかしかったと後にキリト達は語る。

「ってなわけよ」

「なるほど、随分面白いゲームじゃないか。俺もやってみたくなったよ」

「私達の世界にすればできるわよ」

「はは、帰れたらの話しだなそれは。まあ、それがこの世界でもできるように銃を作ればいい話しか」

とんでもないことを言い出した相手にシノンは目を丸くする。

「作れるの……？精密な構造でできているのよ銃って」

「それは実弾で撃つ銃のことだろ？——俺の場合は魔法と魔力が備わった銃だ」

亜空間から黒光りする銃を取り出して自慢げに見せつける。その瞬間、椅子から立ち上がって一誠の傍に駆け寄っては銃を凝視する。

「回転式拳銃なのね……」

「目の色が完全に変わったんだけどキリト君」

「さつき言っていただろ？シノンはシューティングゲームのプレイヤーだったって」

この世界に来て銃と言う武器や概念は見聞したことが無い。だから二度と触れる事はないだろうと思っていた武器が目の前にあって、それに手を伸ばさずにはいられなくなったのだろう。

「貸して」

「はい」

凄みがきいた声で言われては、逆らえばどうなるか分からない。面倒事になるなら貸した方が賢明だと渡すと、真摯な無表情でありながら心なしが多幸感極まりない気配を窺わせながら銃を構える。回転弾倉シリンダーを装填状態にして弾を取り出して確認する。

「これ、実弾じゃないのね」

「さつきも言っただろ。魔法と魔力が備わっている銃だって。赤いのは火炎弾、黄色のは雷撃弾、水色は氷結弾、緑色は回復弾、紫色は毒の弾丸、白色は状態回復をする弾丸だ。他にも色んな魔法を籠めた弾丸があるんだ。手元がないけどな」

実弾なんか作ったら人を殺しちゃうだろ？とシノンから弾と銃を取り上げながら言う。

「それじゃ、用件は済んだから戻るわ。じゃあな」

「あ、待っ——」

穴の向こうへと潜って空間が閉じられては追いかける事はできず、虚空に手を伸ばすシノンは胸に引き寄せる。

「……銃の専用武器オーダーメイドを頼みたかった」

「えっと、凄いいいんじやないか？」

「それは、そうだけれど……でも、やっぱり欲しい物は欲しいじゃない。キリトだって黒い剣ばかり欲しがっているってアスナから聞いているわよ」

「黒の剣士様はやっぱり黒い剣じゃないとだめなんだよなあ？」

「茶化すなよクライン」

「ま、まあ、イツセーがくれた通信式の腕輪で頼んだらきつと作ってくれるんじゃないかな？」

と、アスナの思案でシノンは納得した後に発注を望んだ。

「イツセー、対物ライフル『ヘカートⅡ』作れる？」

「そんな物騒なもん作れるかッ！」

冒険譚4

「ガネーシャがきたあー！おっはよう！」

「…………おはよう、それと朝っぱらから五月蠅いつ！」

晴天に恵まれた空の下で高らかな挨拶をしてくる、本気で毎日顔を出す気なガネーシャに早くも辟易してしまいそうになる一誠。大通りを経由して通る人達が突然の大声に奇異な視線と共に振り返る中で会話が成立する。

「この自己主張の激しさから取ればガネーシャは何もないだろ」

「いや、あるぞ？このガネーシャ・マスクがあるかぎり俺はガネーシャなのである！」

「なるほど、それを取れば【群衆の主】の二つ名がなくなる、ただのガネーシャになるわけか。それの方が面白いか？」

NOOOOOOツ!?と仮面を守るように両手で押さえながら叫び出す男神の隣に佇む麗人が口を開く。

「お前は分身体か？」

「ん？本物だぞ」

「…………見分けがつかないがまあいい。店を分身体に任して私に付き合ってくれないか」

「付き合う？どこに行くんだ」

「ダンジョンだ」

「…………何故にダンジョンなのか説明してもらっても？」

「お前が気になるからな。故に知る必要がある。直ぐに支度を済ませてくれないか」

わかったよ、とシャクテイの催促に従い出掛ける準備を始める。『異世界食堂』の中に引っ込んだ店主を待つシャクテイと商品棚を覗き込みどれを食べようか選び始める男神から離れたところから窺う赤い髪の影がいることを気付かない。

「(な、なんだと姉者!?そいつのどこが気になるって言うんだ…………)」

イルタ・ファアーナその人だった。今日も朝食を摂らず出かけた主神

と団長の後を追いかけてみれば、『うまい店がある』と風の噂で聞く店に辿り着いた。そしてあろうことか二人きりでダンジョンに行く話になっていないか！奥歯を噛み締め店から武装した店主「一誠が出て来て、片腕でシャクテイに購入してもらった商品を片手に送られるガネーシヤを背にダンジョンへシャクテイと向かい始める。」

「姉者が後れを取るとは有り得ないが、ダンジョンで隙あらば襲いかかるかもしれない。あの胡散臭い奴の正体と尻尾を掴んで見せてやるっ」

監視も兼ねて一人距離を取って行動するイルタもダンジョンに向かう。

その一方、異世界で生活をする事になって早くも一カ月以上経つ異邦人ヒーロー組等は、「アルテミス・ファミリア」に入団、冒険者となって一日中地上か地下で過ごすようになり、今日も今日を生きる為に必要な金を稼ぐ為にソロかパーティーで地下迷宮へ潜っている。

現在は中層16階層。

モンスターの代表的な頭が牛で体格が人間に近い一匹の『ミノタウロス』と遭遇した一行。前衛盾役を務める数人の少年達が密集陣形をして足止め兼ねて意識を向けさせ、足が迅く技術が長けた者は隙を突いて攻撃をする。借金して買った者がいれば稼いでから買った。または一人の少女の能力で創造してもらったか手にしているその得物で、食材として加工された肉を切るのとはまた違う感触を否が応でも感じながらモンスターの命を奪う。倒した後は胸部の中心にある魔石を抽出する作業をする。人は嫌なことを慣れてしまうと段々抵抗感が無くなり、精神が否定してもやらなければいけないという考えが頭の中で浮かびしてしまう。元の世界で犯罪を取り締まり、平和と秩序を守る為に学ぶ専門学校に通っていた少年少女達にとっては酷な作業。だがしかし、異世界で生きる為にはやらねばならないのは、頭で理解しても心は納得できていない心情の彼等彼女等は今日もダンジョンのモンスターと死闘を繰り広げる。

「緑谷、休憩をしよう」

「うん、わかった。それじゃ、モンスターが出てこなくする為にも壁を破壊しなきゃね」

魔石を取り除かれ、灰燼と化したモンスターの末路に罪悪感が拭い切れないまま次の作業に移る。物理的な助力はされない代わりに知識と情報を提供してくれる。少年少女達はそれを頭に入れて探索を臨んで安全を確保し続けた。壁を破壊しても向こうからモンスターが現れることも忘れず、警戒しながらの食事をした初めて経験を経ても今も変わらず、索敵に長けた能力を発動しながら店で買った昼食用のサンドウィッチで空腹を満たす。

「切島君、体大丈夫？」

赤髪に海栗のようなツンツン頭の少年が鉄のような硬度に硬質と化した拳をぶつけ合い、丈夫さを示す。

「大丈夫だぜ。俺の『硬化』でもモンスターの武器にも耐えられることが分かったからな。だからガンガンお前等を守ってやりながら攻撃するぜ」

「俺もだ。触手の腕を合わせて盾と剣を同時に持てる」

周りに人がいないことを確認してから装飾品を外し、自前の腕と計四本の触手を生やす異形の大男の少年は周りから羨望される。

「それ、普通に戦ったら相手が攻撃し辛いよなー。もつと触手を増やしたら武器とか盾とか持てるし、案外羨ましいかも」

黄色い髪に性格が軽そうな少年の言葉を聞きながらワカメ頭にそばかすの少年が、ボールのような髪形を三つ伸ばしている小人族バルウムの背丈と変わらない少年を話しかけた。

「でもでも、峰田君の『個性』が一番役立ってるよね」

「へへん！オイラの髪にくっついていたら動けなくなるからな。皆の安全は保証するから女子達、オイラを頼っても良いぜ？」

「下心が見え見えだつてーの」

笑いと呆れ、劳いの声が飛び交い、変わらない態度と表情を見せつつ携帯食を食べる。

「他の連中、今頃どうしているんだろうな」

不意に赤髪の少年、切島が不意に吐露した。ここにいない他の仲間達の安否を気にした風に述べれば一同、相槌を打ち始める。

「俺達は元の世界に帰るまで死ねない。キリトさんの言い付けを守って五人以上のパーティーでダンジョンに潜っているだろうから大丈夫の筈だ」

「爆豪と轟が一人でも心配しても一番問題ないだろうけど、轟の『個性』上、一対複数向きだから集団で攻撃する時は大変そうだよな」

「特に爆豪の性格は敵^{ライバル}級の口の悪さだからよ。他の冒険者達と喧嘩しそうで心配だわあ」

「でも、それでもかっちゃん心配しなくても大丈夫だよ。かっちゃんだし」

事実、あまり褒められるものではない言動は自他共に認知しているので、この場にはいない友人の他者との付き合いだけが心配なのである。完全なる孤独な人生を送っても人は生きていけるものの、交流は大切だと言われずとも皆分かっているこの場にはいない少年の言動が悪かろうが嫌でも誰かが傍にいる。馴染めなかが馬が合わないだろうが関係なくだ。それを踏まえて信用——信頼をしてなければ出ない言葉を一身に向けられる視線の中で零す少年。

「えっとう？」

「それだけで片づける緑谷もある意味すげえーよな。流石幼馴染って感じで」

「見た感じ、仲悪そうなのにな。一方的に」

「あはは……」

不意に、腕に二本の触手を生やす少年が顔を後方の通路へと向け出し、何かを察知したようで口に変えた触手で伝える。

「モンスターらしき鳴き声が聞こえる。近い、数は……五匹前後か」

近いならやることは決まってくる。迫っているのであれば対応するまで。各々は徐に得物を持って立ち上がり全力で襲いかかるモンスターと死闘を臨む。

オラリオ北部に構えている【ロキ・ファミリア】の本拠地ホーの『黄昏の館』は修復作業にまだまだ時間が掛りそうであった。執務室で団を纏める者として実務的な仕事を延々と繰り返し、淡々とこなし続ける黄金色の髪、碧眼の小人族バルムムの団長はそれを目で実感しながら最後の書類に自身名を綴ってペンを置き一息吐く。碧眼を壁に掛けられている時計の大小の針が12の数字より先に進んでいる事を認知して「うん」と頷き、最近の楽しみになっっている外食を数日振りにしようと自室にある財布を取りに赴く。

等級付けされると周囲から善悪、良し悪し関係なく注目される。第一級冒険者、Lv. 6で容姿が整っていたら尚更だ。誰にでも接せられそうな穏やかで優しげな眼と雰囲気フアンを纏っていれば、応援者から話しかけられることも珍しくない。フィンはまさしくそれに該当していた。

「キヤー！フィン様よっ！」

「小さい、可愛いっ！」

「抱きしめたいっ！」

女冒険者、街娘達の視界に入るとたちまち黄色い声が湧き上がる。それを面白くない、嫉妬する男性冒険者も浮上するが当の本人は気にせず、己を囲みながらつついてくる女性達からの誘いを断わり慣れてしまった言動を繰り返しつつ西沿いの食堂へ向かう。『異世界食堂』と書かれた看板を飾っている食堂に。

檜の黒い扉にある真鍮の取っ手を手にして開け放つ。扉の向こうは昼間にも拘らず良く言えば賑やか、悪く言えば騒々しく客達が飲み食い、雑談や世間話を交わし合っていた。最大派閥の団長が来ても意識を一瞥するぐらいで気にもしない彼等彼女等を目の当たりにしていると若い店主に出迎えられる。

「繁盛しているみたいだね」

「常連客も増えてきたからお陰様でな。一階は満席だけど少し待てば直ぐ空くと思うがどうする？『うちの眷族が来とつたら二階に案内したいや』と酒好きの女神が朝から予約を貰っているが」

直ぐに誰だか悟り、辟易とした面持ちでそう伝言を述べた店主から

「在庫から酒を無くさんとする勢いで朝から飲み続けているがな」とも言われて苦笑いするしかできなかった。自由奔放で快樂主義が多い神々だ。己が楽しければ大いに騒いで他の者も巻き込んで楽しむ性格の神は珍しくも無い。

「彼女は どうしててる?」

「上に行けば分かる」

後で注文を取りに行くと言い残して仕事に戻る店主。予約しないと上がれない二階へ続く階段へ足を運び、一段一段上がって一階ほどではないが賑やかさを醸し出している客達が多数存在していた。

「よし、いい感じに集まったところで第ン何回仮神会デナトウスを始めるでえ〜!」

『イエー!』

やんやの喝さいと一緒に拍手が巻き起こる。大盛況だ。朱色の髪を後ろに結わえた女神は、大量の酒を飲んだ証として赤くした顔で、行儀悪くテーブルに足を載せて糸目がちの瞳を笑みの形に緩ませながら硝子製の杯ジョッキを片手に手を上げた。二階にいる客達の殆どが男神女神達で占めていて、昼間だと言うのに宴会状態になっていた。が、神の眷族達もちらほらと部屋の隅にいることが分かりフィンは必然的にそちらへと向かう。零細から最大の派閥の眷族達が隔離された感じ、静かな雰囲気を保ち飲食を舌鼓しているそんな者達の所に。

「フィン。お主も来たか」

「下は満席だったからね。ここも似たような感じだけど随分と賑やかだ」

「神ロキが裏で手を回していた様子で主神ガネーシヤも含め神々を集めて宴会状態に入ったばかりだ」

既にいたガレスと「今日も宴をするでえー!」「「イエーイツ!」」と叫び出す主神と男神の声が入ると短く溜息を吐きだした。色々と自由奔放な主神を持って苦労していると思うフィンやガレス、空色アクアブルーの髪、碧眼の美女の団長アスフィも同感だと静かに瞑目する。しかし、彼女達だけじゃなかった。フィンと相席する美女の前には巖のよバルウムうな巨軀を誇る、銀の美神の眷族もいて小人族は見てしまった。

「オツタル……随分と食べていたようだね」

碧眼の瞳に映り込む十皿ほど積み重なっている食器。迷宮都市唯一のLv.7の最強冒険者が食べていた証拠が残っており、指摘され沈黙を貫く武人の猪人は十一皿目の料理を食べ終えた同時に。

「注文は決まったか？」

店主が訊ねてきた。フィンはメニューを見ずに注文を頼んだ。それに便乗してアスファイ達も注文を口唇に転がして言う。客達はこの店に訪れる度に大好物の料理を頼む。何時しかその好物が二つ名のように呼ばれる日がやってくるかもしれない。それが何時になるのか神々も分からないところであるが、そんなこと気にせず今を楽しみ美味しい酒や料理を飲み食いし続ける。フィン達も例外ではなかった。店主は二階から姿を消す前に神々から注文を受け取り、ようやく一階へ戻ってキッチンに入る。毎日が戦場と化しているキッチンを数多の店主の分身達が立っていて多種多様の料理を作り続ける。出来たてで熱々の料理を盛っては載せて、客達に運び提供する最中、店内を見渡して思った。繁盛してきた店の今後の事を考慮して、一人で切り盛りするにも限界は何時しか来るかもしれない。

「……美味しいわねこの水」

好みの料理を堪能した美の女神は、飲んだ透き通って宝石のようなキラキラとした水の味にそう吐露する。ただの水ではないことを舌で感じ取り、オラリオで手に入るものなのか気になった。これを独占しているだろう店主に訊ねようと料理を運んできた件の人物に問いを投げた。

「ねえ、この水ってただの水じゃないわよね？」

「ん？ああ、ダンジョンの泉から集めて増やしているんだ。量が少ないから直ぐに無くなって希少なレアのかもしれないけど、その水で作った料理の美味しさも更にひとしおになるんだ」

「じゃあ、もしかしてビーフシチューにも？」

店主は「酒もな」と首肯する。ならば、ビーフシチューが美味しく感じるのも頷ける。店主は料理だけじゃなく使う素材にも拘っている

るから、フレイヤの舌を満足させるほどの相応しく美味な料理を作り出しているのだと。

「ふふ、用意した甲斐があったわ。これからも頑張つてね?」

「これからも美の女神の期待にこたえるよう精進させてもらうよ」

「ええ、私をずっと満足させてね?それしたらご褒美をあげちゃうわ」

褒美は林檎パイかしら?仮にそれにしたとして、何時も見ていた可愛らしい姿で目を輝かせ、愛しい程強請ってくる姿を思い浮かべる。それが現実になるとしたら狂おしい愛を注ぎたくなるのが美の女神だ。今度デメテルに会いに行こう。可愛い少年を喜ばすパイの作り方を求めに。

「.....」

シャクティ・ヴァルマは違和感をかなり覚えていた。ダンジョンに入ってから——上層のモンスターとの遭遇エンカウントが皆無に等しく出会わなかった。上層ならばこういう時もあるだろうとさほど気にしなかったが、いぎ中層に進出すると.....一匹もモンスターおろか、姿形すら見当たらない。今日に限ってこれは異常、イレギュラーだと一誠の隣に歩きながら考えていると黒曜石のような輝きを放つ首飾りが視界に入り、気になった。冒険者としての本能が。

「イツセー、お前も飾りを付けるのだな」

「うん?ああ、これか。別に飾りとして身に付けているわけじゃないんだ」

「では、どういう意味で付けているのだ」

「二種の御守りみたいなものかな。【ロキ・ファミリア】の遠征でも付けてみたけど、モンスターとの遭遇率エンカウントが0になるほど効果を発揮するんだ」

なんだと.....では、この異常現象はその首飾りの効果でモンスターが現れることも襲いかかってくることも

なくなっているのは、とたった一つの装飾品によるものだったとは思いもしなかったシャクティの目は丸くなって黒曜石の飾りに視線を送った。それほど有能過ぎる効果を発揮する装飾品.....。冒険者

ならば窮地に立たされた時や突然の怪物の宴に遭わずにいられるならば喉から手が出るほど欲しいものだ。このダンジョンの金属や鉱物、それともモンスターのドロップアイテムの類かと訊ねてみる。

「その首飾りに使っているものはダンジョンでも手に入るか？」

「いや、これは首飾りに加工したモンスターの鱗であるのは間違いないんだけど。ダンジョンじゃ絶対に手に入らないな」

「ダンジョンでは手に入らない？」

「うん、だってこの首飾りにしてる鱗は……」「ゼウス・ファミリア」と「ヘラ・ファミリア」が討伐し損ねた『黒竜』の鱗だから」

——絶句するシャクティ・ヴァルマ。瞠目したその目は信じられないと固まって迷宮の壁が樹皮で覆われた洞穴の中を立ち止まってしまった。先に進む一誠は五歩進んだところで振り返る。

「言っておくけど、黒竜を俺が倒したわけじゃないからな」

それを言われてはつと我に返って追究する。

「なら、それをどこで手に入れた」

「オラリオ外にいる商業を生業としている【ファミリア】に世界中の珍しい物を集めてもらった中で手に入った」

ダンジョンでは手に入らない理由がシャクティの中で納得し再び歩き始める。そして『大樹の迷宮』のとある広間ルームの中へと足を運んだ。

「……あれは」

「ん、今回は一発で見つけたな」

冒険者達の間では滅多にお目にかかれない宝石樹——赤や青の美しい宝石の身を宿すまさに金のなる樹——発見したシャクティが珍しくざわついたが、すぐに目付きを鋭くした。彼の樹を守る階層最強のモンスター、宝財トレジャーの番人キーパーの木 竜グリーンドラゴンの存在を視認した故に。そして、宝石樹の根元に体躯を寝かせているLv. 4に匹敵する潜在能力ポテンシャルを誇る怪物相手にたった二人だけでどうやって戦おうかと思つた矢先だった。一誠が当然のように歩き始め宝石樹に近づき始めた途端、グリーンドラゴン木 竜が何かに怯えるように体躯を身じろぎ、形だけの威嚇と咆哮を上げながら後ずさりする光景を見て間拔けな面を晒してしまうシャクティ。

「竜が怯えるなんて……あの首飾り、黒竜の鱗は本物だからなのか」

戦闘らしい戦闘は皆無であつという間に一誠個人の目的の物を手に入れる事が出来た。宝石樹の前で地面に両手を触れ、土を柔らかくし地面を盛り上げて抜き取れる様にすると亜空間から巨大なバックパックを取り出し、その中へ宝石樹を突っ込んで収納する光景も空いた口が塞がらなかった麗人。

「よし、採取終わり。戻ろうか」

「……あの竜はどうするのだ」

「目的のこと以外無駄な事はしない主義だから放っておく」

シヤクテイを引き連れ広間^{ルーム}を後にする。二人が去った後、目を瞑る木^{グリーンドラゴン} 竜は、怯えたように身じろぎを繰り返した。結局、地上に戻る際も碌に戦いもせず帰還を果たしてしまいシヤクテイや今までずっと後を付けてきたイルタも一誠の力の片鱗すら見る事は敵わず夜を迎えてしまった。

「ほう、そこまで美味しい料理を出す店があるというのだな？ 名前は何か」と言う

『『異世界食堂』でございます。今年出来上がったばかりであります。評判は好評で少なくとも冒険者達の間では知名度は高く、団員達も食べたことがあるとのこと。私も試食を兼ねて一度行ってみたく、中々美味でした。特に葡萄酒^{ワイン}を使って作るビーフシチューという料理は……」

「美味であつたと」

「はい、我が【ファミリア】の料理長として引き入れるのに十分な腕前だと自負します」

「お前が推薦するほどの者とあらば、他の神共の手に渡る前に引き込まないとならないな」

「ご案内いたします」

暗闇に支配された外から続々と来客が櫛の扉を開けて好物の酒と料理を求め足を運ぶ冒険者や神、無所属フッリの民衆達やってくる。朝より夜の方が予約しないと上がれない二階と対照的にほぼ毎日満席に近い状態を占める日は絶えない。今日もそうであった。

「若造、今日も来てやったぞ！いつもの頼む！」

「いらっしやい、自由に空いている席へ座ってくれ」

「おう、出来るだけ早く作ってくれ。俺は腹を空かせて来たんだからな。待たせたら承知せんわ」

ヒューマンと犬シアンスローブの男達が苦笑いをし、「悪いな？」と片手を上げて歩きだすドワーフの後を続く。他の注文を受け取り、厨房へと戻り作り終えてある料理を手に客達へ提供する。何時もの常連客達が来れば来ない日があり、代わりと言った感じで新しい客が思い思いにやってくる。一日の締めとして食べにくる客に店主は無駄な動きをせずスムーズに事を運び続ける。変わらない夜と変わらない店で過ごす間にも、オラリオは今日も変わらず明日を迎えんとする時間が一刻一刻と時を刻む。

「ライスと合うのはやはりカレーだろう。なんたってこの店ではカレーが一番評価が良いって聞くしな」

「何言ってるのよ。牛丼だってライスとすっごく合うんだから」

「お茶漬が一番だな。ヒューマンや獣人、ドワーフが食す野蠻的な料理より、このお茶漬は香りも味も清らかで食べやすいのが良い」
「もぐもぐ、栗ゴ飯も美味しいよー？」

「その同胞エルフ。お茶漬だけが全てではないぞ。このトーフステーキたる、肉も魚も卵も乳も使わず作り上げた逸品がライスとも合う」

「あら、ライスと食べずともそばだって美味よ？」

「メンチカツも美味しいわよー！」

「すみませーん、焼きそばをもう一つ追加お願いしまーす！」

「魚を生で食べると美味しいとは驚いたなー。盛り付けも花のように飾られ綺麗だし」

「プハーツ！ここの酒うめーっ!？」

「だろお？他にも極東でしか飲めない酒や蜂蜜酒、ドワーフの火酒ま

で増えてきているから今度はどんな酒が増えるのか楽しみなんだぜ」
「甘露ーこのプリンとやらは甘露ー！」

賑やかな雰囲気醸し出し、各々とパーティや同派閥、友人と知人に相席となつて食べる客達を尻目に料理を運び続けながら口唇を緩める。この騒がしさが店主を楽しませ、客達の笑顔を見ると心がホッコリとなる。作り提供のし甲斐があると――。

「来週は三品程、新しい料理を増やすんで来週まで楽しみに待っていてくださいーい」

『おおーっ！』

わつと湧き上がる喜色の興奮の声の最中、新たな客等がやって来て店主は慣れた対応をしに応対しに行く。

「ここが件の店か。確かに人気のようだな。先程の若いヒューマンが一人で構えているとは中々の技量の腕を持っているのか」

「はい、そうであるとお見受けております」

「さて、問題の料理の腕前を拝見せねばな」

「既に注文を頼みましたので、そろそろ来るかと」

「おまたせしました。ビーフシチューです」

そう予想したそばから頼んだ料理が運ばれてきた。皿から湯気が立ち、色鮮やかに彩る野菜やゴロリと盛られた牛肉が、肉と野菜の旨味が凝縮されたスープの中にあつた。鼻腔を刺激する下から昇ってくるように漂ってくる肉と野菜、それからいくつもの味付けが含まれた複雑なビーフシチューの香り。眷族の報告を聞き実際に目の当たりにすると芳醇な未知の香りが主神の嗅覚を刺激する。オラリオに降臨して以降、目の前に置かれた料理に対して今日まで驚いたことが無い。

「これがビーフシチューか。何とも良い香りを放つスープなのだな」

「それ故、この料理を好む神々が多いようです。話の中にはあの「フレイヤ・ファミア」の主神もそうなのだとか」

「成程な……あの美神の舌を虜にするほどのものか」

値段は一二〇〇ヴァリス。一食するだけでかなりの値段である。

どこかの高級料理店かと思うぐらい無所属フッリの一般人達が手を出せそうで安易に出せない金額だ。一回の食事で高い料理を食べるぐらいなら複数頼んで腹を満たした方が良いと賢明な判断をするのは当たり前だろう。

「では、試食といこうか」

男神はスプーンを握り、ビーフシチューのスープに沈めて掬い取って口の中へと運ぶ。味を確かめようとする口と舌で口内は嗅いだ事のない香りによって満たしていく。

「お、おお……っ。葡萄酒ワインを使うだけあつてスープだけでもこの味であるのか。実に美味であるぞ」

「はい、他にも肉と野菜も一緒に食べるとまた格別な味がするのです」「うむうむ、そうなのか……むむっ！」

実際に食べてみれば感嘆と驚嘆の息を漏らす男神。もはや疑いも迷うことも無くなった。是が非でもこの店の店主を「ファミリア」の一員に加える。主神の望みを叶えんと眷族も口にせずとも理解している。が、今はするべきではない。その時ではない。閉店間近まで虎視眈々と待つ姿勢でありながらお代りを要求する。

「毎度ありがとうございます。またのお越しをお待ちしております」

「ああ、また食いにくるぜ」

「御馳走様、また明日ね可愛い店長さん」

去る客を見送り、扉を閉じて閉店間近まで食事をする客達を確認し、二階へ上がる階段の前にあるカウンター席に座り用意してあった賄いを食べ始める。上の階からまだ人の気配を感じるがどれもこれも馴染みの者達ばかりだ。放つておいても問題は無いだろうと悟り、残りの客達が帰るまで待つばかりだ。この瞬間を虎視眈々と待つていた主神と眷族がいる事なぞ露も知らずに。

「店主」

背後から声を掛けられた。会計の催促をされたと思い、椅子ごと開店して後ろへ振り返る。

「この店のビーフシチュー、実に美味だった。私が今まで食してきた料理の中で一番と格付けする程だ」

ブロンドの髪に緑葉を備える月桂樹の冠を被ってる、一目で目の前の客は一柱の男神であると察した。傍には美少年が控えていた。ま
ず間違いはないだろう。

「それはどうも、作る甲斐があるってもんだよ。これからもこの店を
最真にしてくれると嬉しいね」

「ああ、その必要はない。私の舌を虜にするビーフシチューを毎日食
べたいと思わせたお前の料理の腕に惚れてしまった。だから、私の眷
族になって私の専属料理人にほしい」

「お断りします」

間も置かず、深々と頭を垂らして礼儀正しく拒否した店主の意を受
け付けんと男神の気持ちも変わらない。

「ふふ、断わられても私は君の料理の腕に惚れてしまったのだ。私に
この想い抱かせた責任を取ってくれなければならない。分かってく
れるまで話し合いをしようではないか」

男神は指を鳴らした。動き出す眷族。腰に穿いていた剣の柄を触
れて鈍色の剣身を除かせる。無所属フッリの人間だったら、相手がどんな冒
険者だろうと得物を見せ付け脅し、脅迫されたら緊張で戦慄する。な
のに他の客達まで立ち上がって出入り口を塞ぎ更に囲んで来られる
と従わざるを得ない筈だ。

「えーと、まだやることが残っているから誘いは断らせてもらおうよ」

「大丈夫だ。その背中に私の神の恩恵フアルナを刻むだけで直ぐに終わる。な
んなら、この場でしてもよいぞ?」

「お断りします」

再び頭を垂らして拒否する店主の言動を気にせず、己の神意を最優
先にする男神の意図を眷族達は察し数多の手を伸ばし掴みかかろう
とする。相手は一般の人間。駆け出しの冒険者相手でも力で叶う筈
も無い。実際、無抵抗で両腕を拘束され、強引に背中を晒す形に跪か
された店主は溜息を零す。

「相手の意思や意見を無視する神もいるとはな。俺、そーいう主神が

「一番嫌いなんだけど?」

「私の良さを知れば好きになっていく」

「あーそうかい。だったら一つだけ言わせてもらおうけど」

—— 後ろ、気をつけた方が良いぞ。

意味深なことを告げる店主に眉根が怪訝で寄り、後ろから何かが落ちたような鈍い音を耳が拾った。男神達は反射的に振り返ったら……二Mもある巖のような巨軀を誇る猪人ポアズの獣人が錆色の瞳を男神達に見下ろして佇んでいた。

「アポロン? その可愛い子供に何をしているのかしら?」

更に階段の上からソプラノ声。銀髪に銀瞳の美神が優雅に降りながら現れた。彼女を知る者は畏怖の念と敬愛を籠めてこう言う。「ロキ・ファミリア」と対なる最強最大派閥のもう一角の「ファミリア」の象徴する名を。

「フ、フレイヤ……」

「その子が作る料理は私のお気に入りなの。だから誰かが独占なんてしようなら、私、嫉妬しちゃって何を仕出かすか分からないわアポロン」

「せやでーアポロン。その子供は子供と神の共通財産や。誰かが独占しようとしたら、うち等が絶対に許さんわ」

朱色の髪に糸目がちの女神も小人族バルウムの団長やハイエルフの副団長にドワーフの老兵、金髪金眼の幼女と銀髪青眼の幼女を引き連れて降り薄らと朱色の瞳を覗かせた。

「ロキ、お前もいたのか……」

「当然や。うちらはこの店の常連客やで。うちらが楽しく美味しい酒や料理を飲み食いしている直ぐそこでとんでもない話をされたら黙っておれへんわ」

特にイロボケ女神がな、と頭の後ろに手を組んで愉快地笑みを浮かべるロキ。

「諦めい、自分の命が欲しいなら手を引いた方が正しいで?」

「ぬぐぐぐ……っ!」

第一級冒険者の一党が勢揃いして出方を窺っている手前、派閥も団

員も格下の自分達が悪足掻きしたところで結果は変わらない。下手なことをすれば最悪、天界に送還されるオチだ。

「ならば聞くが、この子供はどこの【ファミアリア】に所属していると言うのだ！していないのだろう！共通財産と言うのであれば誰だつて【ファミアリア】の団員にする権利はある！」

「無理矢理眷族にしようとする神の【ファミアリア】何かに入りとうないやろ普通。それ以前にしっかりとフラれとつたし」

どこぞの女神みたいになど内心付け加え、「ガネーシャ・ファミリア」に入団している事も敢えて口にしない。理由はその方があとあと面白そうだからだ。ロキの考えを読めないでいるアポロンと呼ばれた男神は正論を論破されても食い下がる。

「無乳は引つ込んでいろ！」

額に青筋を浮かべ、頬を痙攣したように引き攣った。自分のコンプレックスを刺激したのだ。嗚呼、許すまじ。

「よし、自分、天界に戻りたいんやな？その気持ちはよくわかった。フィン！侮辱罪でこのアホを槍で一発刺すんや！」

情けは掛けない。ビシツと男神に向かって指して、主神として命令を下すも。

「生憎、槍は持ってきてないよロキ」

「言つとくが、農も斧を持っておらんぞ」

「ここで魔法を放つ気はさらさらない」

「怒られる」

「うん」

締まらない女神はぐくりと肩を落とす。一体何のコント何だと呆れる店主。このまま話がつれ暴力沙汰が起きてしまえば一方的な蹂躪が目に見える。目も当てられない。ならばどうするか？

「……そこまで情熱的に俺を求めるならさあ、王道的にここはひとつ、決闘でもして決めるか？」

男神アポロンは決闘の提案を持ち上げた店主に訝しげる。

「決闘だと？戦争遊戯ウォーゲームでもしようというのか？」

「後腐れも無い方法で決めたいから。それに一応、俺は半脱退の状態

の冒険者だから戦えるぞ」

「・・・Lv. はいくつだ」

「駆け出しの冒険者だ、と言えば分かるだろ。現に寄って集れて捕まっているんだから振り解けない」

【ファミリア】同士の正式な闘争の催し。神の代理戦争として始まるとオラリオは祭りのように盛り上がる大イベント。それを提案されて何を考えているんだと疑う。

「言っとくけど、俺は弱い派閥と弱い団長の下につく気はない」

「力を示せ、ということだな？」

「見込みがあれば考えても良いってわけ」

どうする。と問われるアポロン。同じ下級冒険者、実力はほぼ変わらないと言ってもいいだろう。愛する子供に負けは無いと信じ断言する主神の考えは迷うことも無く決まった。

「よかろう。私の眷族達がお前を負かし正式に引き抜かれる準備をしておくのだな」

「・・・それで格好が付いたつもりだろうけど、食べた分の代金は払ってもらうからな？」

「わ、分かってるぞっ」

冒険譚5

『暗黒期』の真つ只中で戦争遊戯ウォーゲームが開催されようとしている。快樂主義の神々は思いもしなかつた娯楽に全力で楽しもうと待ち望んでいる。なので都市は静かに、確実に熱を帯び始めていた。迫る戦争遊戯ウォーゲーム。日に日に熱していく機運に多くの者達が声を上げ討論を交わし、酒の肴にして盛り上がる。迷宮へ潜る足が自然と少なくなつていく冒険者達、些細な物の流れにも敏感になる商人、労働に中々手が付かなくなる一般市民。路傍で遊び回る幼い子供達も街の雰囲気を感じ取り、玩具の剣を振つてあどけなく笑つては、興奮に身を委ねた。オラリオは、静かに、確実に、熱気が爆発する瞬間を待ちわびていた。

『異世界食堂』も朝から何時にも増し、常連客や新顔の客達がこぞつて顔を出して、戦争遊戯ウォーゲームに出る冒険者が件の店主とあれば、酒と料理を楽しみながら応援エールを送る声を飛ばす客達。彼等彼女等の期待に裏切るつもりはないと相槌を打ちながら来るその日まで店を開き続けたその最中、「アルテミス・ファミリア」のもとへ顔を出した。

「頼み？俺達にか？もしかして戦いに参加して欲しいとか？」

「いやいや、戦いは俺一人で十分だ。戦争遊戯ウォーゲームが終わつたその日から、しばらく俺の店で臨時の店員として働いてもらいたいんだ」

「ああ、もしも貴方が勝つたら貴方の店が有名になつてお客さんが増えるからかな？」

「理解が早くて助かる。俺が勝てば店にやってくる数の客が何時もの数倍以上だろうし、その影響は三日経とうと収まらない気がするんだ。だからウエイトレスとして働いて欲しい」

「おいおい、アスナ達女の子達だけかよ？」

「全員だ。料理も作れるなら尚のことだな。それと、当然ながら頼むからにはそれなりのお礼をする。俺の店はハードだからな。今なら出来る事なら俺ができないことじゃなかったら、何だつて叶えてみせ

るぞ。金も必要だったら報酬として出す。ただし一人の願いは一回限りだ」

目が眩む報酬に「アルテミス・ファミリア」の団員キリト達はその誘いに乗らない訳が無かった。店主がいなくなった後でも一回きりの願い事を何にしようか苦悩して、後悔のない願いを決めようとする。

「イツセー、いるか」

「うん、いるぞ」

『神秘』の希少スキルを用いて羊皮紙に幾何学的な円陣と模様レアに数字を描き、書き終えるとその完成度を確かめ、納得すると巻物のように巻いて多種多彩な色の紐で軽く閉じる——の繰り返しを何十回もすれば羊皮紙も束の山と化して何時しか素材として用意し、置き放置していることが多くなった作業部屋は何時しか積み重なった羊皮紙に足場がギリギリ残された程度まで埋め尽くしていた。そんな光景が出来上がっていたところをリヴェリアが訪れてしまった。

「イツセー……なんだこれは」

尋常じゃない羊皮紙の束の山が作業部屋を埋め尽くさんという状況に翡翠の目が丸くなった。絶世の美貌を誇るエルフが来ようと作業する手を止めない少年に用件を問いただす。

「何をしているんだ」

「巻物スクロールを作ってる」

「巻物？」

一つその巻物を手にする。広告や伝言、商人達の間にも使用されている特に物珍しいわけではない巻物。そう思い浮かべる彼女であるが、それに手を付け加える一誠が作るとなればそれはただの巻物と呼び難くなるのは必然的だ。

「ああ、魔剣より使用回数は一回だけと極端に少ない、使い捨てで使いどころが難しい。だが、それを補うように魔剣より凄まじい威力を誇る魔法を籠めて書いている」

案の定だった。そして、それが事実なればこの山積みと化している

マジックスクロール
魔法の巻物は、魔剣より威力ある魔法ばかり書かれた物だらけとなる。今さらそれを知ったりヴェリアは、心の中で恐れ戦き、そつと紐が解けないようそつと元の場所に置いて戻す。

「……攻撃の魔法だけか？」

「いや？一応千差万別に行っているつもりだ。転移や回復、罠、煙幕とか色んなの。一応分けて置いてあるから崩さないでくれよ」

「仮に販売するとしたら値段は？」

「種類によつて十万から数十万、最高は百万かな」

上級冒険者なら手が届き買える値段だった。しかし、ここで疑問が浮上する。

「こんなに作つてどうする気だ」

「備えあれば憂いなし、【アルテミス・ファミリア】に渡しておくのと【ヘルメス・ファミリア】に売り捌く」

「……なら、【ロキ・ファミリア】からもそれを買取ろう。その魔法の巻物を買えば、一度だけとはいえ臨機応変ができそうだからな」

仲間の為や遠征、ダンジョン攻略の為に買取りの意志を示すリヴェリアに「目ざといエルフだな」と言いつつも「毎度あり」と述べる。後に長期の遠征で一誠作製の魔法の巻物の威力を知ったフィン達は、「確かに魔剣以上の威力だ」「十万ヴァリスでこの威力は恐ろしいわい」と苦笑いと感嘆の反応をして大いに役立ったと報告をするのだった。

「で、俺を探しに来たんだろ？何かあった？」

「ああ、戦争遊戯の規則と日程が決まった事を教えに来たのだが」

「ふーん、そうか」

別段、気になっているわけでもなさそうに曖昧な返事だけして作業に集中する一誠を見つめるリヴェリア。

「まあ、お前にとつて兎戯に等しい事だろうな。相手が第一級冒険者でなければだれであろうと」

「否定はしない。だけど、俺の晴れ舞台となるからにはあつと驚かすような事をするつもりだ。俺が作りだした魔道具でな」

「商業の『ファミリア』や商人達がこぞって取引の交渉をしにきそうだが？」

「だろうな。一人一人話しを断るのは面倒くさいな。今だってロキんとこの女性団員達をホームが直るまでの間だけ居候させているし、それに乗じてフレイヤ達まで住み着きだして異世界の食料や調味料が減る一方で困るんだよ。本当にアリサ以外、誰と住つもりなかったのに」

愚痴を漏らし表情も険しくする一誠の言葉は嘘偽りない。なので「嫌なら断わることもできただろう？」と含みある言葉で問えば「自分の性分が憎たらしいくてしようがない」と苦虫を噛み潰したかのような面持ちとなる一誠に苦笑するリヴェリア。

「まだまだ時間は掛るがもう少しだけ面倒を見てやってくれ。そうすればすぐにでもここを引き上げさせる」

「離れるならそれはそれで何時もの賑やかが無くなってしまおうと思うなど、少し違和感と寂しさを感じるな」

「アリシアもいなくなるからか？」

「なんでそこで彼女を引き出す？まあ、そうじゃないと言えば嘘になるがな。それと、彼女だけじゃなく他の連中もここに住みたかったら家賃を払って住めばいいと思うよ」

ちよつと高いがな？と意地の悪い笑みを薄く浮かべてリヴェリアに見つめる。その目は彼女に向けられたものではなく、何かを見透かしている目付きだった。

「俺も親しくなった奴が急にいなくなるのは抵抗感があるし、良ければ傍にいて欲しい気持ちもある」

「同じエルフの私というものがいながら、同じエルフのアリシアも好きになったか？」

「ほほう、副団長が嫉妬するようになった？」

ニヤニヤと面白げに笑みを浮かべられ「茶化すな馬鹿者が」と思わず一誠から顔を逸らしてしまった、その反応こそが全てを物語らせていることをまだ気づいていない。

「俺は、俺を知って受け入れてくれた女なら、俺に心から好意を寄せ

て、慕ってくれている女は全員好きだ」

「……それは全員が全員、お前の事が好きだと言えば誰でも好きになるのか？」

「そこまで女誑しな男になることはできないな流石に。なったら元の世界の家族に殺される」

軽く青褪めながら苦笑いする一誠に、「イツセーでも恐ろしい者がいるのだな」と不思議な新鮮を覚えた。

「さっきも言っただけど俺と親しくなった奴がいなくなるのは寂しい気持ちになる。リリアもそうだろう？」

肯定と相槌を打つ。遠方に行くことになった者、死して永遠の別れで言葉を交わすことができなくなった者。様々な形で離れることが起きれば寂しくないと言えば嘘になる。リヴェリアもその一人だ。

「だから俺は親しくなった上で、俺が化け物だと知り、化け物でも受け入れ俺に好意を寄せてくれる女だけを愛おしい家族として接することになっているんだ」

「ならば、お前の世界にもその類の者達が大勢いると言うことか？」

「ん、小さい頃から二年前まで付き合いのある女達が大勢いる。ぶっちゃけ、それでも恋人として付き合っているのはまだ二人だけだ。正式に告白してないけどお互い両想いなのは十人以上いる」

少し自嘲的に「軽蔑したか？」と試すような眼差しで視線を送る少年に対し、ハイエルフの女性は無言で首を横に振った。

「お前のスキルを考慮すればそんなことだろうと思わなくはない。だが、聞くんが……お前は何人の女と肌を重ねた？」

「うわっ、それ訊くか普通」

軽くドン引きした一誠に。それでも数を教えると溜息を零すリヴェリア。道理でああなのだったのだな。と。だからこそこの言葉を送らずにはいられなかった。「女の敵め」と。そんなこと言われて心外だと一誠も叫ばずにはいられなかった。

「酷っ！俺の攻めに理性を捨てて悦んでいたりリアがそれ言うのか！」

「ばっ、大きい声で言うなっ!?!」

「言いたくもなるわっ！あの時だつてっ！」

と、不満と遺憾をぶつけようと口を開こうとした一誠に、喋られたら堪らない、その口を閉ざさんと勢いで飛び掛かり出すリヴェリア。途端に作業部屋から騒がしい音が聞こえ、あの副団長が極めて珍しく焦燥に駆られて揉み合いをする光景など、フィン達が見たらさぞかし物珍しい目付きで見えていただろう。

「——そう言えば、アイズもアリサもダンジョンに行ってるんだよな。椿の試し斬に付き合つて」

「だからなんだ」

「つまり、今城の中にいるのは俺達だけだよな？」

「っ……!!？」

崩れた巻物に囲まれながら、一誠を抑え込んで覆い被さっていたリヴェリアを逆手に取り、意味深なことを言いだした。その言葉の意図を察して直ぐに離れようとしたのだが、背中から生える翼に覆われ引き寄せられる形で密着する。互いの鼓動が分かるほどの密着具合であれば二人の顔の距離は同じぐらい近い。

「ま、待てイツセー……まさか、ここで……!!？」

「どこまで想像しているんだ？是非とも口に出して教えてくれよ」

「——っ!？」

耳先まで顔が真っ赤になり、冷静沈着で何時も凜としている副団長のハイエルフが普通の娘と変わらない反応を露わにして一誠を楽しませた。上半身を起こし、対面になるよう膝の上に載せ笑みを零す。

「はは、可愛い反応をしてくれるなりリア」

「か、からかうなっ」

「ふーん、俺がからかっていると思われていたとはな。ここで俺の本気を見せてやっても良いんだぞ」

目が本気になっていることから冗談ではないことを悟る。第一級冒険者であるにも拘らず力負けして生娘のように抗えない自分がここで抵抗しても結果は見えている。押し倒されるだけだ。

「……すまない、悪かった。だからここで本気にならないで欲しい」

「リリア？ここになきや本気を出していいように聞こえるぞ」

「こ、言葉の綾——んっ」

リヴェリアは文字通り押し倒され、目を白黒している間に何時の間にか一誠の部屋のベッドの上に寝転がらされていた。そして、自分を覆い被さるしてやったりと笑みを浮かべる男。ぷいつと赤く染めた顔で一誠の視線から逃げるように逸らすリヴェリアであるが、これからすることに拒みも否定もなかったのは……惚れた弱みだったのか、それは彼女自身しか分からないことであった。

「愛してるリリア」

「……馬鹿者」

愛の告白と共に重なる唇。愛し愛されようとした二人は独自の甘い空間を作り甘い雰囲気醸し出すのだが、腕輪の宝玉が点滅し出す瞬間を目にして全て霧散する。通信相手はフィンであり、街中で暴徒が出現した報告であった。——ので、甘い時間を邪魔した愚か者に天から無慈悲な雷を放ち、これを全滅させた一誠に敵であるが同情を禁じ得なかったと皆が思いを一つにしたのだった。そして戦争遊戯ウォーゲーム間近になっても何時も通りの日常を過ごす中で一心不乱、何かを作るのに没頭している様子が見られる。希少金属レアメタルに金槌を振るい、何度も叩き形を変えて、鼻歌交じりで完成まで作り上げていくその姿に、見かけたり見守っている者は次第に完成するソレに後で驚かされる……。

そして、あつという間に代理戦争当日を迎えたその日の早朝。最初の風景は『異世界食堂』の中から始まった。

「えつと、着替えた、よ？」

「おー、サイズも合っているようだな。皆綺麗だぞ」

「着替えたのはいいんだけどさ。これ、色々と肌が露出してるよね。特に背中と胸元が開いちちゃってるし」

「それを考案したのは俺じゃなくて【ロキ・ファミリア】の主神だから、文句はあの変態女神に言え」

「その女神が考えた制服をそのまま使う貴方も貴方もかど……」

無条件で受け入れたと思われるらしく、羞恥で頬を染めるシリ

力の一言で物凄く渋い顔になった一誠。

「……すつごくウザイ程『この制服を着せてくれへんとうちは舌噛んで天界に戻ってやるうっ！』何て泣きながら鼻水を垂らしてし
がみつかれられながら言われたら、よ……」

「あく……断わり辛いね、それ」

「……しよもない女神ね」

多彩な色で同じデザインに露出している背中や胸元、太股を魅せる
メイド服を着替えていた。ロキが考案した制服をそのまんま具現化
させて着たアスナ達は個々の魅力を増している状態で働くことにな
った。店主からの頼みと報酬を臨んで。

「さて、話はここまでにして開店時間までアスナ達には、『異世界食堂』
での仕事の流れを骨の髄まで覚えてもらう。時間が欲しいから直ぐ
に始めるぞ」

「でも貴方、試合に出るんでしょ？時間大丈夫？」

「大丈夫だ。これから俺自身を魔法で増やしてマンツーマンお前達に
指導する。上の階でキリト達にもそうしているところだからな。因
みに失敗は駄目だからな？失敗したら客の前で一曲歌ってもらうか
らそのつもりでよろしく」

ある種の罰ゲーム的な事をさせられることを知らされ「何て恥
ずかしい事をつ……!?!」と忙しく恥ずかしい思いを開店直後にす
る羽目となる「アルテミス・ファミリア」の団員達は、店主の指導と
手解きによって己の仕事の流れを覚え、賄いの朝食を食べ始め終えれ
ば一日目の仕事を迎え、『迷宮都市』オラリオは今日も晴天を迎える。
蒼穹の彼方まで広がる青い空は

神や人類、モンスターを見下ろす。そして都市が賑わいを見せてい
る。

街に臨んだ戦争遊戯当日。オラリオには尋常ではない熱気と興奮
が溜め込まれていた。

溜め込まれていた。

朝早くから全ての酒場が店を開き、街の至る所で出店が路上に展開
している。今日まで通りの壁を彩って来た無数の絵羊皮紙ポスターは悪乗り

を下神々が散々周囲に喧伝した結果だ。絵の内容は「アポロン・ファミリア」の太陽のエンブレムと、半脱状態の一誠が徽章を持っているの代わりに交差したフォークとスプーンが描かれている。今日ばかりは殆どの冒険者達が休業し、酒場に詰め寄せ観戦準備を整えている。何とか休暇を申し込んだ労働者達、一般市民も大通りや中央広場セントラルパークに出て、今か今かとその時を来るのを待ちわびていた。

『あー、あー、えーみなさん、おはようございますこんにちは。今回の戦争遊戯ウォーゲーム実況を務めさせていただきます【ガネーシャ・ファミリア】所属、喋る火炎魔法ことイブリ・アチャーでございます。二つ名は【火炎 爆炎 火炎】。以後お見知りおきを』

なんて二つ名だどこからか憐れな眩きが発せられたが本人は気付きもしない。実況を名乗る褐色の肌の少年が魔石製品の拡声器を片手に声を響かせていた。五万人もの数を収容できる都市の東部に存在する円形闘技場アンファイテアトルムの中で。

『解説は我らが主神、ガネーシャ様です！ガネーシャ様、それでは一言！』

『——俺が、ガネーシャだ！』

『はいっありがとうございましたー！』

万の数の観客の前、実況者イブリの横でガネーシャが吠える。観衆は一斉に喝采を送った。

『今回の戦争遊戯ウォーゲームは『異世界食堂』店主対【アポロン・ファミリア】、形式は一对複数！両者は既にこの闘技場コロシアムに身を置いており、私の発令で直ぐにお呼びできます！勝敗条件は至って簡単。相手の全滅、もしくは団長の戦闘不能が確認されればそこで試合終了とさせていただきます』

イブリの発言に観客は大盛り上がり、ガネーシャは嬉しそうに白い歯を覗かせてはキラリと輝かせる。

『なお、「異世界食堂」の冒険者の名前と所属している【ファミリア】は本人の要望もありまして敢えて伏せさせていただきます。ご了承ください。本人曰く、「美味しい料理と酒を作って出すのに、名前より店の名前と料理と酒の味だけ覚えてくれればいい」とのことです』

て。既に鏡えいぞうが置かれておりますので、都市中で観戦を臨む人達は観れることはできまし——』

『早く始めるぞ冒険者B！「異世界食堂」がこのガネーシャを待っているのだっ！』

『イブリです！あの——ええっと名前が浮かばない同僚じゃないんだから覚えてくださいっ！つと、お見苦しいところを見せて申し訳ないです。主神が催促するので手早く事を進めたいと思います。——

——両者、出て来て下さい！』

実況者の話を遮って催促する主神に突っ込みを入れ、仕方なくと色々と段取りを飛ばして進行を進めた。東の出入り口から「アポロン・ファミリア」団長を含め完全武装した数十名が入ってくるに對し、西の出入り口からだ一人、金属の板や腰から下げる小鞆ポーチや連なつた巻物、ホルスターを所持しているだけで一見武器らしいもの、防具らしいものを身に付けていなかった。「アポロン・ファミリア」の団長は眉根を寄せる。

「……やる気あるのか貴様」

「あるぞ？お前達を一方的に蹂躪する為の道具だけ持つて来たんだからな」

「その金属の板と巻物が我々を蹂躪するだど？」

「うん、俺は道具だけ使つて数の暴力に打ち負け、勝利する。これは決定事項だ」

おかしな話だ。と訝しむ団長の背後で嘲笑や侮蔑、小馬鹿にする面持ちや目付きで店主を見つめる団員達。相手はたったの一人——否、一人にしたこの戦争遊戯ウォーゲーム。一応、元眷族の主神としてヘファイストスはアポロンと決め合つた結果、総力戦という形式で決まつたのであつたが、勝利を確信しドヤ顔をする男神に店主を知る女神はご愁傷さまと憐れみの視線を向けていた。

『店主！さっさと始めるからさっさと勝ち負け関係なく終わらせ、ガネーシャにカツ丼を食べさせるのだ！』

『あんたはごんだけ「異世界食堂」に行きたがつてんだっ！美味しいのは同感ですけど！はい、そう言うわけで戦争遊戯ウォーゲーム——開幕です！』

やる気あるのかと問いただしたいのは神の方であった。イブリの号令と同時に店主は金属の板を足元に置き、寄って集って攻撃して来ようとする相手を前に乗って——金属の板ごと宙に浮き空を斬るように動き、飛んで見せた。これには観戦していた全ての者達は目を瞠目させた。空飛ぶ金属の板など見たことも聞いたことも無い。実際に飛んで見せているのだからあれは魔道具マジックアイテムの一種なのだろうと判断は難しくないものの、浮遊能力がある道具アイテムは始めてみたのは確かだろう。「アポロン・ファミリア」の団員達は自分達を囲むように旋回、飛ぶ店主に見るだけしかできず近寄って剣や槍等振るうことも当てることもままならない他、放たれた矢が外れて掠りもしない。たまに真正面から突っ込んでくることもあったが、嘲笑うかのように翻弄したので苛立ちは必然的に募った。

「貴様っ！正々堂々と戦え！飛んではばかりでは勝負にならないぞ！」
逃げてばかりの相手に尤もな意見だった。彼の発言に異なことだ
と思う者はいない方だが、店主はそれに応じた。

「そうだな。攻めるとしよう」

店主の手が腰に伸びる。小鞆ポーチからカードの束を取り出して一枚だけ引き「アデアット」と口唇に転がせば、黒い塊がカードから出てきた。

「あれって……」

異世界食堂で働いている最中のシノンが物欲しげな目付きで宙に具現化している鏡えいぞうに視線を注いだ。見間違いでなければあれは——

「さて……」

店主はそれを手慣れた手付きで握り眼前の団員達へ照準を合わせた。「アポロン・ファミリア」の眷族等は何なのか定かではないが、狙われているのだと雰囲気で察知した。彼等が気付こうが気付かまな
いが関係なく引き金は引かれた。黒い砲身から黒い弾が射出される。
狙いは「アポロン・ファミリア」の団員達。団長の「散れっ！」と疾呼に団員達は動き出すが、盾を持っていた団員は逃げずとも防げば問題ないと判断したのか、逃げずに防御体勢に入ったところで盾と弾が

ぶつかった。

その直後。

弾が破裂し、白色の網のようなものが弾から解放された喜びを露にするかのように盾役の団員へ広がった。目を見開き、固まる間にあっという間の時間で全身は白色の網に包まれた。

「な、なんだこれ……つく、ネバネバするし剥がれないっ。おい、誰か手伝ってくれ！」

「しようがないな」

相手は一人、しかも見守る姿勢でいるために攻撃してこなくとも警戒は怠らず手助けしにいく仲間が、その網を無造作に触れてしまったのが運の尽き。

「確かにネバネバしてるな……って、俺の手までくっついて取れなくなっちまったぞおい！」

「剣で切れ早くっ」

「駄目だ、なんだよこの網はっ。斬れないしくっついて蜘蛛の糸か何かよって——あだっ！」

二発目の弾がミイラ取りがミイラになった団員に当たり二人纏めて網に包まれて更に動けなくなった。

「さて、残りも捕まえようか」

それを見せ付けながら次の獲物に狙いを定める店主。当然、彼等は逃げるの選択肢しかない。当たれば身動きが取れなくなり、行動不能に陥ると仲間の足を引っ張る。だが、ただ一人、彼だけは逃げの選択を選ばなかった。

「——【我が名は愛、光の寵児。我が太陽にこの身を捧ぐ】！」

団長は攻勢に出た。宙にいる相手に対して詠唱を開始する。

「【我が名は罪、風の悋気。一陣の突風をこの身に呼ぶ】！」

『魔法』——起死回生の切り札。不利な白兵戦から堪らず逃れ、形勢を逆転しうる必殺の行使に踏み切った。

「【放つ火輪の一投——】」

詠唱を唱える団長の意図を察して、厚い守りの鉄壁を作る団員達に守られながら紡ぎ続ける呪文の声が止まらない。対して店主は、何も

しない。どんな魔法なのか放たれるその瞬間まで宙で旋回し続ける店主に団長は最後の呪文の詠唱を終えようとする。

「——来たれ、西方の風」!!」

不意に団長は上半身を捻った。重心は低く、左腕を下に、そして右腕が高々と上げられたその体制は——円盤投げ。高めた出力の『魔力』を右手に凝縮させながら、団長の碧眼は己を見下ろす店主を射抜き、一挙、魔法を発動させる。

「アロ・ゼフユロス」!!」

太陽光のごとく輝く、大円盤。振り抜かれた右手から日輪が、高速回転しながら驀進する。突き進んでくる大円盤を、店主は余裕で回避する。

「無駄だツ!」

しかし、その団長の叫びに導かれる様に回転する光の円盤は上空へ舞い上がり、大きな弧を描いて店主の下に進路を転ずる。金眼が丸く見開かれた。自動追尾の属性。照準した対象に命中するまで敵の魔法は消滅しない。西風を帯びて舞い戻ってきた円盤を、店主は速度を上げてフィールドの中で逃げるように飛ぶ。観戦者達は手汗握る思いで見守り、少し前のめりになる。

「何時までも逃げられると思うなよっ!」

速度が上がる。徐々に距離が縮まり、後ろを見ればすぐそこまで迫っていた事に気づくだろう。団長は口角を吊り上げた。

「その厄介なものを切り裂いてやる」

「っ!」

それは困る、と進路を上に変え、空高く昇る店主を追いかける光の円盤がついに——。

「赤華」!!」

カツ!

金属の板に届いた瞬間、円盤は眩い輝きを放ち、大爆発した。行使者の呪文に呼応し西風の火輪が爆砕する。魔力の爆裂弾に、店主の金属板は木端微塵となって物理法則に従い、逆らえない重力の最中、闘技場へと落下する。「落ちてきたところを狙え!」と命令が下され

る団員達の弓矢に狙われ、槍を構えられ、形勢逆転だと誰もが思ったことだろうか。一部の神々や眷族達は少しも思っていないことを露も知らずに勝敗は決したと皆、悟ったところで地上から十M、店主の背中から三対六枚の翼が生えだし、重力に逆らって宙に浮いた。

「な、なんだとっ!?!」

「残念無念ってな!」

網が籠められた弾が何度も放たれ、下で構えていた団員達に当たり一網打尽。粘ついた網に捕らわれて行動が制限されてしまった。遠距離、中距離の得物を持つ団員達を一掃したことで更にもう二枚のカードを手にし、

「——アデアツトッ!」

高らかに叫んだ店主の声に呼応して、眩い輝きを放つカードから十字架の盾と、地に降り立つ金属質の巨塊が喚び出された。仰天する相手や観戦者達。金属系の新種のモンスターかと彷彿させるそれは、銀を連想させる金属で形成されていた。いかなる大型級より長い腕、長い細い足。首の位置で小山のように盛り上がる頭部と、目と思しき部位。

「紹介しよう。これは人形兵ゴーレムと言って、希少金属レアメタルで作った自慢の作品だ。モンスターじゃないから安心しろ」

十字架の盾を持ちながら説明口調で語り自慢する店主は、小鞆ポーチから短杖ワンドを取り出しそれで指示を出した。当然、目の前の敵を潰す命令だ。人形兵ゴーレムは冒険者達に襲いかかる。その動きは鈍重そのものだが、希少金属レアメタルの硬度と重量によって振り回される手足は凶器かつ脅威だ。【アポロン・ファミリア】の団員達が攻めあぐね、あるいは盾ごと吹き飛ばされ、団長も舌打ちせずにはいられなかった。

「ふはははっ!俺の魔道具マジックアイテムは世界一イッ——!」

「ほざけっ!道具を頼ってばかりの貴様に私が負ける道理はない!」

「じゃあ、人形兵ゴーレムを打ち破って俺を負かせてみろ」

短杖を翳した店主に呼応して金属の戦士は体を倒すと、その背中に店主が舞い降り、十字架型の盾を溝がある金属の背中に突き刺して完全な騎乗と化した時。

「なっ——」

二本の足で動く時よりも物凄い早さと動きで団長達に肉薄仕掛る人形兵^{ゴーレム}。移動の姿が奇つ怪で彼等からすれば圧倒されているだろう。鈍重な動きが一変して俊敏な動きを見せ、「アポロン・ファミリア」の団員達を薙ぎ払い、硬度を誇る体で突進して相手を撥ね飛ばし、一人また一人と地面に平伏していく。距離を空けて弓矢で応戦する冒険者もいたが、金属の体と店主を守る盾に弾かれ、行動を不能にする網に掛って戦闘不能に陥る。

『な、何なんだあれはーッ!? 「異世界食堂」の店主の人形兵^{ゴーレム}が突然動きを変えて「アポロン・ファミリア」の団員達を薙ぎ倒していくー! 一方的に彼等が蹂躪されていくぞー!』

『ガネーシヤ、超乗ってみたい!』

驚愕と興奮の声が闘技場中に響き渡る。観戦客達も物珍しい物に驚嘆と感嘆を漏らしながら黄色の声を湧かせる最中。

「——【我が名は愛、光の寵児。我が太陽にこの身を捧ぐ!】」

再び形勢逆転のカギを握る魔法を行使しようとする団長。詠唱を紡ぐ声に耳を傾けるが目もくれず、操る人形兵^{ゴーレム}で団長の団員達に襲うことを止めない店主。己に眼中も無いと言外された気分で憤怒が湧き上がるも、防がれなかつた魔法を放つことを許した相手に、気を引き付けてくれる団員達に称賛の念を抱いて——詠唱を唱え終え、光る円盤を、

「アロ・デフユロス!」

勝利を籠めた魔法を振り抜いた。狙いは金属の巨兵ではなく店主本人。騎乗している形の相手の背中中はガラ空きだ。団長は己の魔法を走り続ける人形兵^{ゴーレム}の体の下を潜らせ、

「もらったぞー!」

股抜きした魔法の円盤が店主の背後から奇襲、肉薄して振り向いた時は既に目と鼻の先であって「赤華^{ルベレ}!」と行使者の呪文に呼応した円盤が眩い輝きを放ち、店主の目を奪った直後に大爆発を起こした。一拍遅れて不意に動きを止める金属の巨兵。それから四肢に力が抜けたように地面に沈んで二度と動くことは無かつた。あの短杖^{ワンド}が壊

れたか、それとも店主が魔法を受けて倒れたのか、爆発で生じた黒煙に包まれて結果は定かではないが。

「……」

気付けば団長を残し、ほぼ戦える者がいなくなっていた。周囲を見回し、確認した後に団長は片腕を翳し、勝利を確信した握り拳を天に向かつて突き出した。観衆達もモロに魔法を食らっては負けたも当然かもしれないと思いが口から発する歓喜極まった叫びが——黒煙から十字架型の盾を持って出てきた店主の姿に喉の奥で引つかかった。体を硬直、顔を引き攣らせる団長にせせら笑う店主の横顔は左の瞼ごと無残に焼かれていた。もはや試合中に目を開けることはできないだろう。手を腰に伸ばし今まで触れなかった革で留めていた巻物スクロールを抜き取った。

「やってくれたな。これを使うまでも無かったと思っただけけど、使う必要ができたか」

「その巻物が何の役に立つと——」

「阿呆、何事も警戒するのが冒険者だろう」

盾を地面に刺してから紐を解き、自分に向けて巻物スクロールを開いた途端、『魔法』が発動した。緑のオーラスクロールが巻物から放射して店主の全身を包み込んだ。神秘的な光の中で、店主の焼けた横顔が見る見る内に健康的な肌を取り戻し、火傷が完治した。団長は目を見開き、胸中で愕然の思いを抱いた。

「『ディアンケヒト・ファミリア』の団員達と主神ディアンケヒトも治療力ポーションが高い回復薬ではなく、巻物スクロールで自身の傷を治した店主にざわめく。治療と製薬を率いる『ファミリア』としてあの道具アイテムを作り出した者に感嘆と驚嘆の息を漏らし、精緻な人形のごとく小柄で華奢な銀髪の少女も心から称賛しながら。

「アミッドツ！『異世界食堂』で待ち伏せするぞ！」

分かりやすい主神の言動に付き従うのだった。

「へえ、巻物から魔法を発動できるなんてね」

「アイテムメイカー魔道具作製者の名がオラリオ中に知れ渡るでしょう。案外、ヘルメ

ス様が考えた二つ名はあながち言い得て妙かと」

「ははは、【魔導の錬金術師】か。子供達や神々もそんな感じを抱くかもしれないけど、まだまだ【ランクアップ】する時期じゃないだろうからお預けだね。因みにアスファイ、作れたりする?」

「無理です。が、ヘルメス様が許可してもらえらるなら彼の下で弟子入りして学び、期待に応えるような相応の魔道具マジックアイテムを作製しましょうか?」

「うーん、悩みどころだねそれは」

燃え始める巻物スクロールを捨て別のカードを手にし、一本の剣を喚び出した。柄を握り青い鞘から金色の剣身を抜き放ち、背中から魔法の翼を生やして宙に浮くと上段の構えを取って——神々しく光る粒子を集め出した。集束する粒子に剣身が金色の輝きを纏い迷宮都市オラリオの全ての住民達の目を奪う中、

「最後は派手にお前を負かしてやる。この魔剣を上回る魔法の剣、聖剣でな」

「聖剣、だと・・・っ!?!」

宙にいる相手に近寄ることも攻撃も出来ない団長は、ただただ見上げる格好で、天から恩恵を受けたかのような神聖な光を掲げた姿の店主に気圧され振り下ろされるその瞬間を迎えるまで佇んだ。

「くらえ——『約束された勝利の剣』ッ!」

眼下に立ち尽くしている相手に聖なる金色の剣を上段から振り下ろされ、決壊したダムの水のように極光の斬撃波が瞬く間に彼の視界が神々しい金色の一色で埋め尽くす。

極光聖。

『ツツ!?!』

全身に凄まじい衝撃を受け、男の絶叫が飲み込まれる。
次の瞬間。

その中心に極光で逆行する大瀑布のように、天空に突き刺さる極太の柱が立ち昇った。迷宮以外、オラリオのどこからでも肉眼で捉えるとんでもない『魔法』を神々や冒険者、一般人、老若男女問わず、光の柱を見上げた。やがて天を穿つように立ち昇った光柱の勢いは失い、徐々に消えてなくなり最後は見えなくなった頃。聖剣の威力をその身で味わった団長が地面に横たわって白目を剥き、開いた口が塞がらない体が、うんともすんとも、ぴくりとすら動かないまま十秒経過した後、聖剣を掲げる店主と同時に戦争遊戯の終わりを告げる大鐘の音が都市全体に響き渡る。

「ツツツ!!」

『試合終了おーっ！勝者は「異世界食堂」の店主ツ！とんでもない魔道具と魔剣で多勢に無勢の中で勝利をもぎ取ったあー！』

オラリオ上空に、大歓声^{ガネーシャ}が打ち上がった。湧く歓声。そして何故か主神^{ポーズ}が雄々しい姿勢をしながら店主に向かって跳躍、実況者イブリが身を乗り出し真っ赤になって加工した魔石で作られた拡声器へ叫び散らす。彼の拡声された言葉は波が轟くように、観衆と建物の群れを呑みこんだ――。

戦争遊戯は『異世界食堂』の店主の勝利で幕を閉じた。一身に浴びる拍手喝采と大歓声に両手を上げて振って応じる店主。それから人形兵の背に何故か「群衆の主」と乗って西浴いの自分の店に戻ろうとした時、何となく空を見上げどこまでも広い蒼天と白い雲を見つめ、一瞥するように視線を前に戻した。それから店に戻った店主に待っていたのは拍手喝采、大歓声だった。主に客達から称賛とねぎらいの言葉も迎えられ面を食らったが直ぐに人懐っこい笑みを浮かべる店主は勝利の余韻を浸る暇も無く仕事の持ち場に戻って客達に料理と酒を提供していく。

「いらっしやいませ、ようこそ『異世界食堂』へ」

冒険譚 6

戦争遊戯ウォーゲームの興奮が冷めやらない中、多くの者達を賑やかさせた渦中の人物は「アルテミス・ファミリア」を雇って店を切り盛りしている。今までの三倍以上にまで増えた客に表裏の慌ただしさはヒートアップし続けていた。目まぐるしく殺到する注文、絶えない来客の流れ、凄まじい勢いで減る食材と調味料に作り続けている店主達は、今日も働き続けるその最中。閉店の時間を狙っていた様々な男神女神達の勧誘スカウトや商人達からの商談を持ち掛けられ百人切りをも果たす。

「……どうしてもダメか」

「ダメ、あれは個人的に作っただけで商売まで考えてない」

ぐぬぬ、と唸る男神ディアンケヒトに澄ました顔の面持ちで商談を拒絶する店主。彼の神は最初に他の神と同じ己の券族スカウトに勧誘をしたのが始まりで、それを好としない最大派閥の主神達の妨害、脅しで諦めざるを得なかったものの、回復魔法スクリューの巻物の生産兼提供を乞うことだけは諦めが悪かった。

「俺、店で忙しいの。分かる？」

「そこを、何とかッ！作れるときだけでもよい！」

「そう言われても、そっちとは契約は結んであるし契約を重複するつもりはないぞ？」

「ならば、今の契約を解消して新たに契約を結ぶ！」

それでどうだっ！と言わんばかりに目を見開き咄嗟に思い付いた考えを、唾を飛ばす勢いで述べたディアンケヒトに半目で言い返す店主。

「……そーきたか、だったらアミッドを俺の家に住まわせてもらうぞ。あの巻物の受け渡しと治療と製薬の知識を何時でも学びたいからな」

それでどうだ、と男神の要求に自分の提案を口にした店主の視界には、彼の隣に座る当の少女が入る。つぶらな瞳が信じられないと見開いて、主神に当惑した面持ちで向ければ、ディアンケヒトも彼女に顔を向けていたのだった。

「お前の家にアミッドを住まわせるのだと」

「一時的な同居生活をしてもらうだけだ。【ファミリア】で学んだ知識をそのまま俺にも教えてもらう為にな。ディアンケヒトから彼女を引き抜くわけでもないし、俺にもそんなことできるわけも無い。その辺は安心して欲しい」

「むう……」

眷族を店主に預けるだけで求める物が得られる。医療と製薬の知識を求める店主はまだ自分と同じ駆け出しの冒険者のアミッドが今後も知識を蓄え、立派な治療師ヒーラーになると踏んでの店主の気持ちなど露も知らずのディアンケヒトの隣で首肯の声が発した。

「分かりました。私が望みであれば貴方の要求を受け入れます」

「よし、契約成立だな」

「待て待て！お前もだアミッドツ！」

アミッド・テアナサーレ自身が店主の要求を呑んだ。素っ頓狂な声を上げ、神意を聞かず勝手に決断した眷族に口を開き掛けたところで彼女が真っ直ぐ主神に目を向けて遮った。

「この方が純粹に治療と製薬の知識をお求めになられているのは私が良く知っております。月に一度の訪問が住み込みですることになっただけですディアンケヒト様」

「しかしアミッド。子供の家に一人で住まわせることが……」

「ああ、別に一人じゃないぞ。ヘファイストスを始め、ロキとフレイヤ、女神達の眷族とその他大勢の他派閥の眷族達が居候の形で住んでいるから不安要素なんて何一つない」

また素っ頓狂に「な、なんだどうっ!？」と驚きの声を上げながら見極める。嘘は——分からない。吐いているのかそうでないのか、神の前では嘘は吐けない筈なのに店主の言葉の真意が理解できない。何故、どうしてだ？店主の言葉に嘘偽りはないのか分からないディアンケヒトは信じられないものを見る目で凝視している間にも。

「俺の提案を賛成してくれないならこの話は無かった事にさせてもらう。ディアンケヒトがそう提案してきたように他の商業系の派閥や商人達から同じ話を持ちかけてくるから、商談する相手が変わるだけ

であり断わり続けるのみだ」

暗にアミツドの存在が他の商業系「ファミリア」や商人達よりディアンケヒトを優位の立ち位置にいさせているんだと目の前の男神に告げ立ち上がる店主。断わるなら構わないと風に彼等の横を通り過ぎる前に焦燥に駆られ思わずと口走った。

「わ、分かった！その提案を呑む、代わりにあの回復の魔法スックロールの巻物を――！」

「一つ50万ヴァリス」

「ぐっ……その額で買い取る」

「ん、改めて契約は成立。前の契約書を後日持って来て欲しい。契約の更新をする。アミツド、3日後まで荷物を纏めろ。迎えに行くから」

「はい、わかりました」

こうして、『幽玄の白天城』に新たな同居人が増え、3日後。アミツドをリヴェリア達に紹介させた時の反応は、精緻な人形とは掛け離れた、口をあんぐりと開けて限界まで見開いて愕然とした面持ちだったことを数年経っても皆から忘れられなかった。それから翌日の朝。今日は『異世界食堂』が休日であることを知っている金髪金目の少女から含みある視線を注いでくる目と向き合った。

「イツセー、暇？」

「ああ、やることは特に無い―――と思ったけど行きたい場所がある。ついてくるか？」

「うん、一緒に行く」

二人だけの会話の筈が興味を抱いた女神と数人の眷族達の耳に入って、どこに行くのか訪ねられる数秒前だった。

「おっ、おおおおおおおおっー!？」

真紅あかい大地のような広い背中に腰を落ち着かせ、我が物顔で空飛ぶ巨大なドラゴンと地上から離れている一行。右目をかつ開き風を受けて黒髪をなびかざる椿は、驚きと興奮が混ざった声を上げる。彼女の傍には、ロキとフィン、ガレス、リヴェリアにアイズにアリサ、フレイ

ヤとオツタル、ヘファイストスもおり空へ舞い上がっていた。一誠ドラゴンの背中に載ったことがない女神と眷族達の感想が吹く風と共に流れ、空の旅をする一行が向かう先は『空の世界』である。物凄く分厚い雲の中を突き抜け、激しく渦巻いている乱気流からロキ達を決壊で守りつつ抜け出し、広大な空の下に浮かぶ小さな島まで飛翔していくこと数十分。目的の場所『ザンクティンゼル』の島が肉眼で捉えたことで訪れたことが無い女神と眷族達は驚嘆の息。

「にわかには信じ難い……儂はまた夢でも見ておるのか。本当に島が浮いておるわい」

「夢でも幻でもない様だよガレス。僕等は未到達空域に踏み込んだ。ダンジョンがある世界を地の世界だとしてここは空の世界と言うべきか」

「目を疑うわね……」

「うふふ、素敵よイツセー。どこまで私を魅させてくれるの?」
「……」

絶壁を登るように飛び、島を臨めれる位置まで移動してからゆつくりと降下していく姿に島の住人達は嫌でも気づく。

「おおつ、トガケの仲間が遊びに来たか」

「ベイちゃんを呼んで来なくっちゃね」

「おおきいトカゲだあー!」

降り立った野原に集う住民達から賑やかさが湧き、連呼するトカケの言葉に心は雨雲となった少年に銀の美神は面白いものを見る目で口唇を小さく緩めた。幼い子供達に群がられ遊び道具を提供している。

「これはロキ様。お久しぶりですな。今日は何の用事で」

「他の島に行きたいんや。せやから別の島の方角を教えてくださいへんかなーって」

「ふむ、私達は生まれも育ちもこの島で他の島の事は良く知らないんじゃ。しかしそうじゃな……西へ行ってみたらどうかかな?」

島の長老から行く先を示してくれる。何でも「外輪山の上に登れば遠くの島々が見える」とのこと、その島は西にあると語ってくれた。

顎に手を添えていたロキはニンマリと笑みを浮かべ、西方へ向かうことを頭の中で決めた。

「決まりや、うち等は西に行ってみるで」

「道中おきをつけて。空を飛ぶ魔物も出くわすと思いますので」

「ほー、どんな魔物がおるのか見ものや。まあ、うちらには頼れる子供達がおるからぜーんぶ返り討ちや！」

と心配する要素は無いと真っ平らな胸を張って自慢する女神に「ほっほっほっ、それは心強いですな」と愉快気に笑う長老。

「イツセー、西に別の島があるつちゆうことで西に行くで！」

「ん、分かった」

真紅色の閃光に包まれながら巨大な龍へと至った一誠が差し伸べる手にロキ達は乗ろうと動いた。

その時、アイズと同じ年頃の金髪の少女が宙に浮く小さな竜を傍に声を上げたのだった――。

「イツセー、何故あの子を連れてきた？」

ザンクティンゼルから離れてただ西へ移動するドラゴンの頭部の上からリヴェリアが腕を組んで素朴な疑問をぶつけながらどこか、厳しい目付きでいた。思い返すと数分前。少女が西の島に行ってみたいと乞われ、それをあつさりとして承したのだった。長老達には日が暮れる前に送り返す口約束を交わし、許可を貰った少女は咲いた花のように笑顔で小さな竜と同行した。が、結局同行を許した一誠の意図を悟れないでいるロキ達の大半は気にせず、彼女と「オイラはトカゲじゃねー！」と叫ぶ竜と会話と交流をしている。

『当然、理由があるからだ』

「何だ？」

『言葉は交わせれど、俺達は空の世界の文字を読み書きはできない』

つまり彼女は自分達の代わりに文字を読み、書いてもらう為の案内人兼翻訳者なのである。聡明なりヴェリアは理解と納得した様子だが、それなら――と言葉を付け加える。

「何もあの子ではなくとも他の者達でも頼めば請け負ってくれただろ

う」

『そうだな。だが、大人だろうが子供だろうが結局は皆一緒だ。後は自ら同行を乞う意思があるかないのかそれだけだ』

それがまだ幼い少女だったに過ぎない。一誠は自分達に必要なものが備わっていればそれで充分だった。

『それにあのビィが他の島でも受け入れられるのかも気になっていたし、丁度いい』

「……」

同じ種族同士。空と地上の人類の反応は同じかそうでないか、リヴェリアもその言葉を聞き気になった。空の世界にも魔物と言うモンスターが蔓延っている様子だが、ビィのように共存している島もあるかもしれない。一誠にとってももしかすれば安息の地になり得る可能性があるこの世界をその目で確かめたい。と思っているのか定かではないがリヴェリアはそう認識した。

「狙っていたのか？あの少女と竜が他の島に興味を持っていることを知ってて」

『狙っていたらとんでもない策士か道化だよ。会って間もない相手の気持ちを知ることなんてできるか』

「異性と交流することで仲が深まる『スキル』を持っているにも拘らずか」

『……おい流石に怒るぞ、その物言いをされるとな』

凶悪な牙の間から灼熱の炎の残滓が零れ、リヴェリアの横へ通り過ぎて消えた。好きで具現化した『スキル』ではない。その者の本質と想いが形になって様々な影響を与え、及ぼしているのであって本人の意思ではない。リヴェリアから失礼極まりない発言を言外されたと細めた眼で怒りが籠った声音を発する。

「……すまん」

黙るかそれとも苦い思いをするか別の言動と反応をするかと思えば、怒りを買うようなことになるとは思いもしなかった王族のハイエルフは直ぐに謝罪の念を口にする。

『——今夜、覚悟しろよ』

「……………」

何故かりヴェリアは緊張の面持ちで顔を強張らせた半面、体が期待感を覚え発火したように熱くなった。もはや惚れた弱みどころか心と体が一誠から離れなくなっている所まで絆が深まっていたのであった。

数時間後——。ひたすら西に向かって飛んで行く最中、上を見れば雲、下を見ても雲と言う雲海だらけの旅の中で同行した少女と小さい竜、ジータとビィは初めて生まれ育った島から見る光景に目を輝かせている間に目的の場所が見えてきた。

『島が見えてきたぞ』

その一言で、皆頭部の方へ足を運んでその目で島の全貌を視界に入れた。雲の波の向こう、太陽が空の領域に照らす空の中に、小さな茶色の粒が見えてきた。近づくにつれ、大きな島とその周りを取り巻く小さな島々から成り立っていると判ってきた。

「本当に不思議ね。どうやって島が浮いているの？」

「しかも、うちら神々が気付かずにいたのがめっちゃ不思議やでー」

「でも、こうして実在しているのだから私達は現実を見ているのよね」
女神達が胸を不思議に膨らませて空に浮く島へ向かう。体を撫でるように感じる風が心地よいと目を細める一誠は大小の島々の上を旋回しながら高度を下げて、大きな島へと向かう最中。

『……………』

何らかの意思を持って真っ直ぐ中央の島に壁に囲まれた街のような建造物から離れた場所へ、降下する。

青い草の上に横たわっているのは、大きな青い船だった。全体が上下の二層構造になっている。何故か船の腹から左右に伸びる翼といい、尾翼、回転翼の他にも船首を覆うトカゲの頭部を思わせる飾り付けといい、なんとなく全体が竜を思わせる外観をしていた。上層の殆どを占める青い布でできた風船のような部分には、おそらく熱い空気が入るのだろう。まるで一誠の世界の「気球」という乗り物がそうであったように。だが、浮くだけなので、船としての動力は別にあるの

だろう。青い光沢のある生地で作られた上層は、太陽の光を跳ね返してまるで竜の鱗のように光っていた。一方の下層部分は水の上に浮かべる船そのものだった。形状は船首の方が細く、後方に向かってやや膨らんだ涙滴型をしている。

本来水上で動く乗り物がどうして野原に墜落した様な感じで残されているのか、地面に巨大な足跡を残しながら地鳴りを震わせつつ着地した巨大な真紅のドラゴンは不思議で堪らなかった。しかし、目の前に船にしては色々とおかしい分、珍しい物があると、つい、調べたくなる性分だった。

「イツセー、この船って何か分かる？」

『俺も初めて見る。実に興味深いから調べたい』

「船の上に何やら翼のような物があるのお。もしや飛べるのか？」

「イツセーだったらそれを可能にしてみようだよ」

滑る様にドラゴンの体から降りて地面を踏みしめるフィン達。改めて青い草の上に横たわっている船を見上げ、好奇心の眼差しを向け周囲に警戒しながら気配を探る。

「人もモンスターもいないようだね」

「残念、どんなモンスターがいるのか手前は興味あったのだがなあー。」

「武器の素材となり得るかも知れんのだ」

「ここに巨大なモンスターがおるぞ椿よ」

『ほう、だったらその小さな体を更にフィンぐらいに潰して小さくしてやろうか』

ガレスに睨みを利かせる一誠に憶することも無く鼻で笑い「やれるものやらやってみろ」と不敵に言い返した。不毛な睨み合いは程なくして終わり、その巨大な手で下層の部分の船に挟む感じで優しく掴み持ち上げようと試みた。

「——おい、俺の艇に何してやがるっ！」

久しく耳にする雷のように轟く「銃声」に、聞き慣れない発砲音に全員、船から離れた位置で立っているまだ若い少年へ顔と目、意識を向けた。

「その艇に触れるな！」

巨大な魔物を前にしても恐れず果敢に船を守ろうとする少年の意思と心の強さ。持ち上げようとした手を離し、彼の少年の方へ一歩足を前に出して上半身を倒しながら迸る一瞬の閃光が消えたと同時に人型に戻った一誠が訊ねた。

「あれはお前の船なのか？」

「……」

「おい？」

「あ、ああ、そうだ。けどその前に、お前は何なんだ。魔物なのかよ」
呆けていた少年は我に返り肯定、次に疑問をぶつけた。その疑問に對して素直に首肯する。

「まあ、魔物なのかな。元人間だけど」

「はっ？何訳の分からないことを……それより、俺の船をどうしようとした」

「ただの好奇心。何でこんな場所に船があるのと、何で船に翼や尾翼があるのか不思議で調べたかったんだ。それに——」

左眼を輝かせ、素早く少年の手に持っている得物を両手で包み込み。

「この銃、どこで手に入るんだっ!?めっちゃくちや欲しいんだけど、くれ！」

「いきなり何を言い出すんだ!?!」

ぎゃーぎゃーと勝手に賑やかな雰囲気を作り出され、ロキ達は半ば置いてけぼりにされてしまい溜息を吐いて介入するヘファイストスが動くまで一誠と少年は喧騒を練り広げていた。

「俺はイツセーって言うんだ。お前は？」

「ラカムだ。で、そいつらは？」

少年——ラカムの目は不審人物を見る様な目でロキ達に視線を注ぎ、代弁する感じで一誠は口を開く。

「俺の連れだ。あの小さなトカゲとその傍にいる少女はザンクティンゼルからお願いで連れてきた者以外、俺達は地上から来たんだ」

「地上？別の島の連中か？」

「いや、言葉通り空の下から俺達は来たんだ」

「……待て待て、笑えねえ冗談だぞ。《空の底》から来た人間なんて聞いたこともねえよ」

ラカムは信じられないと首を横に振って否定的な態度をする。信じてもらえないなら信じてくれるようにすればどうすればいい？言葉より行動で示せとよく人は言う。故に一誠はニヤリと口唇を三日月のように吊り上げた。

「じゃあ今から一緒に空に落ちて俺達の住む世界に連れてってやろうか。それで信用は得られる」

「マジで言ってるのかお前!?死ぬぞ!二度とこの島に戻って来られなくなつて!」

「本気と書いてマジだ。時間も惜しいからやろうか。信用と信頼を得られるまでな」

迅速的な行動で以って相手の首の襟を掴み、ずるずると引きずつて島の外へと行こうとし出す一誠に「こいつ本気か!?!」とラカムは激しい危機感を覚え、一先ず同感の意を示した。

「わかった、わかったからこの手を離せ!お前等が地上から来たつてことにするから!」

「するからじゃあ、俺が納得するでも思つか?」

「信じなかつた俺が悪かつた!さっきの魔物にでもなれば《瘴流域》の一つや二つ簡単に超えられるよな!」

半ばやけっぱちな発言の中で「《瘴流域》?」と気になる単語を耳に拾って立ち止まり、ラカムに何だそれとは問い掛けた。

「行ったことは無いが、この空の世界は瘴気の満ちた汚れた空間で分断されているんだ。いま俺達がいるファータグランデ空域もそうだった《瘴気流》に囲まれた空域なんだ」

「……《瘴気流》。ああ、分厚く覆われた雲の中で常に乱気流が渦巻いているあれがそうか」

解放されたラカムから「本当に《空の底》から来て何も知らずに突っ込んできたのかよ」と呆れと畏怖の念を抱いたような眩きが聞こえた。

「で、あの船は何なんだ?」

「……本当に《空の底》から来た——無言で俺の襟を掴んで空に落とそうとしないでくれ！説明ができないだろうが！」

とうとう第三者の手でラカムは守られ、彼等の要求を応じる。

「艇の名前は『グランサイファー』だ。あれは、他の空域に点在する島々へ行く為に必要不可欠な乗り物なんだ」

「『グランサイファー』が全ての船の名称か？」

「そりゃ違う。あれは昔旅人から聞いた艇の名前だ。色んな島を行き来し空の旅をする者は『騎空士』、団体が乗れば『騎空団』、騎空団が乗っている艇は『騎空艇』って呼び方がされるんだ。空に住む者なら常識なことだぜ？」

一誠はロキ、ヘファイストス、フレイヤへ「知ってたか？」と風目目で訴えると三人揃って首を横に振った。

「あれは本当に飛ぶのか？この空の世界ではそうかもしれないが、空の底……地上の世界は空飛ぶ船は無いんだ。広大な海を航海する船ならあるけど」

「へえ、お前達の世界には騎空艇がないのか？そりゃあ勿体無いぜ。艇を操縦してどこまでも空を飛んでいく体験は堪らないぜきつと？」

「じゃあ、ラカムはあの艇で体験しているわけだ？俺の艇だ！ってさつき言ってたし凄いやん」

年若いのに大人顔負けの操舵士の技術を持っていると踏んで、称賛の言葉を送った。しかし、

「え、いや、その、だな……」

指摘を受けた途端に歯切れ悪く、思わずといった感じで一誠から視線を逸らしたラカム。首を傾げる相手に言い辛そうに頬を掻きながら「実は……」と語る。

「ありやあ、まだ飛ばせないんだ。艇の修理の他にも操舵士としての技術ももうちょい必要でな」

「見栄っ張り」

「……悪かったな」

ヘソを曲げたラカムは言い返す言葉は持っておらず、事実であると態度で認めてしまった。

「んじや、今度は俺の番だ。お前等は何しにこの島に来たんだ？」

「うーん、冒険かな？俺達は冒険者なんだ」

「冒険者？」

地上の世界の常識の知識をラカムに噛み砕いて説明をして情報を共有する。地下迷宮都市オラリオ、ダンジョン、様々な人種、神等々……。

「じゃあ、あの女達は女神様ってわけなのかよ」

「そーいうわけ。で、実際に言われてから改めてみた感想は？」

「急に言われてもな……本当に女神なのか疑わしいぐらいだ。見た目はどこにでもいるヒューマンだからよ」

と、ラカムの感想に一誠は噴いた。これが他の空の世界の住人達の代表的な感想であればロキ達は神として見受けられていない、どこにでもいるただの人間であると認識されたら、神の威厳が完全に無くしたも当然だということと道理なのだ。

「あっはっはっはっ！やべえ、空の世界の人間に対しても神の威厳が感じてもらってねえーっ!?!ロキ達が神様扱いされないってもう駄目じゃん！」

両手で腹を抱えて涙目で笑う一誠の声はしつかり三柱の女神の耳に届いていた。一頻り笑った後、一誠達はラカムに艇の中の見学を乞い、許可をもらおうとアイズとアリサ、ジータを脇に抱えて一足早く艇の中へ入って徹底的に調査を始めた。

「決めたぞ、俺もこの艇のような空飛ぶ船を作る！」

「うん、私もイツセーが作った船、乗ってみたい」

「楽しみ」

「あ、あの……私もです」

「おっ、ジータもか？いいぞ。旅は道連れ世は情け。皆で乗って空を旅するのも悪くないよなー。やることは色々あるけど」

主に元の世界に送り帰せねばならない存在達を面倒臭そうに溜息を零す中、動力室を発見し記録に残す作業を始める。それから数十分後。当たり前のようにラカムに街までの案内を頼み、ジータは翻訳者として建物に掛けられた看板やメニューの文字、空の世界の硬貨の価

値等教えてもらい、角を生やした大男や小さな女のドラフ族、フィンミたく小人族パルウム並みの身長のハーヴィン族、獣人のように耳を生やしているエルーン族、地上の世界のヒューマンの出で立ちとさして変わらないヒューマンのことも教えてもらい。質屋で山ほどの金塊を売り払い、得た軍事金、大量の通貨Ⅱピルで空の世界にしか売られてない品々を大人買いを始め――。

「イツセー、イツセー！ここに空の世界の武器が売られておるぞ！ラカムが持つておった武器もある！是非是非買い占めてくれ！地上に持ち帰りたい！」

「勿論決まってるだろ。と言うことで店主。色々買うから直ぐに集めてくれ金は山ほどあるぞ！」

始終、一誠は物凄くはしゃいで街中を駆け巡った。対して物静かであるがフィン達も未知の世界の文化と空気、人々と接触して時間が許されるまで大いに堪能した。

「あはは、本当、彼と一緒にいると驚くことばかりだよ」

「全くじゃわい。リヴェリア、お主もそう思っておるじゃろうて」

「ああ・・・本当に、あいつはどこまでも私達を驚かせてくれるねえ、オツタル。イツセーは凄いわ。天界に近い場所へ連れてってくれるなんて貴方でもできないことをしたわよ？」

「フレイヤ様に見初められた者の一人として当然です」

「イツセー！うちにも何か買ってくれー！特に空の世界のお酒をたんまりやー！」

「鍛冶屋、この島にあるのかしら？」

一行はポートブリーズ群島という名の島であるということを経験した後判明するものの、今の彼等彼女等には島の名前よりも目の前の光景に夢中で気にする意識はなかった。

そして空の世界から持ち込んできた情報と物資は人知れず秘匿され、イツセーという人物と交流している「ファミリア」のみがもう一つの世界の存在が明かされ知ることになる。

冒険譚7

ダンジョン内でもんでもない事件が起きていた。18階層、モンスターが産まれない安全階層^{セーフティポイント}。その階層では冒険者達の手で築かれた街^{リヴィア}の住民は泡を食ったように驚く光景を目の当たりにした。何者かが19階層に繋がる巨大樹を伐採した痕跡が切株としてそのまま残されていたのであった。一体誰が、何の目的のために、あるいは新種のモンスターの仕業なのか街^{リヴィア}の住人のならず者や冒険者達は謎の事件に対して『リヴィアの不思議』と称し語り続くようになる。その情報は地上にも水の波紋のように伝わっていく時からしばらく経っても一体誰が何の為にしたのか未だに判明できないまま、とある男が着々と作業を進めていた。それは造形化しているものの、まだまだ完成までは時間は掛かるようだった。金属や木材で溢れた作業場に目の下が黒く染まっている一誠と作業全二百Mは超えている大型の艇。それを取り囲み組み立てられた高く木製の足場には沢山の一誠達が世話しなく動き回っていた。鋸を片手に組み立てようと木材に何度も振るい、18階層から伐採した巨大樹を切断しては工具で加工し持ち運ぶ姿はまだ誰も見られない。であるが、「ガネーシャ・ファミリア」の仮団員となつてから一度しかホームに行つたことがなく、諸事情により団員らしく活動もしないまま半年が過ぎてしまつた。

「.....」

「アポロン・ファミリア」との闘争からそれなりに日が経つた。観覧席で腰を落としワインを片手に美の女神は終始微笑を浮かべ、『幽玄の白天城』の地下室の空間に対峙している二人の男を眺めていた。彼女の周りにはいつも変わらない顔触れが揃つており、これから行われる様子を見守る姿勢で座つていた。

「オツタル、始めてちょうだい」

「はっ」

短く応え、猪人^{ポアズ}の武人は主神の神意に従がった。無骨な大剣を片手で持ち、錆色の双眸を眼前の真紅の髪の方へ向けて淡々と発する。

「最弱、我が主神のお望みに応えてもらう」

「見世物じゃないんだがなあ……まあ、最強と戦えるなら気に入る暇もないな」

宇宙に思うとさせる程の常闇に星の輝きをする宝玉が柄から剣先まで埋め込まれてあり、刃の部分は白銀を輝かせ剣身の至るところに不思議な刻印が刻まれている装飾と意匠が凝った金色の大剣を肩に置いて、カウントダウンが始まっている音に耳を澄ませば0の合図が鳴り響いた。

ふっ、と。

オツタルが一瞬で距離を縮め、大剣を横風ぎに振るっていた。瞬きした刹那に動いていた最強に驚きを隠せなかった観戦者は殆んどだったが、躊躇の無い攻撃を捉えていた左の金眼が反応していたのを目の前の武人以外気付いていない。瞬発的に横風ぎに振るった一誠の大剣が、今まで見せたことの無い速度で以て応戦する。二振りの大剣が直撃する直後には耳鳴りがしそうな程に甲高い音が地下室の空間を激しく震わせた。

「……………」

「……………」

なるほどな。剣を交えて語る侍、剣士のようにどちらでもない二人はたったの一合で相手の力量を察した。

「眼帯を外せ。これからの戦いに無粋なものだ」

「視界が半分でも戦闘力は変わらないが、そうさせてもらおうか」

剣を押し合う最中、徐に右目の眼帯を手に掛け、隠された濡れ羽色の瞳が解放された瞬間。喜色の光が宿りだした。

「ふんっ！」

罅迫り合いの状態からオツタルを弾き、押し返した。本人はさして驚くことも侮つてもおらず、タイミングを計って自ら後退したのを察したのは片手で数えるぐらいの者達だけだろう。今度は逆に一誠が姿を掻き消してオツタルの真正面から襲ったのに対して大銀塊で応じ、これを余裕で袈裟斬に叩き込んだ――。

手に伝わる肉を裂き骨を断つ感触が一切伝わらず一瞬後疑問を抱

き、その理由が一誠の残像を斬ったと知った時は、直ぐに消え失せる残像の真後ろから脚を動かしていた男の姿。

「嵐脚」

爆発的に振るった脚から鎌風が生じ、飛ぶ斬撃はオツタルの大剣の腹に衝突する。防御体勢の猪人ポアズの両腕の筋肉がメキツと血管と一緒に盛り上がり、斬り裂かんと今でも勢いが衰えていない斬撃を、白い天井へ押し上げたその瞬間を狙い奇襲の拳圧で攻撃したが、僅か三Mまで滑り耐えた。第一級冒険者の四人の小人族バルウムを吹き飛ばした同等の威力を何とでもなさそうに威風堂々と佇み、問い掛けた。

「この程度か最弱」

「それはこつちの言いたい言葉だ。この程度なのか最強の実力は？」

お互い、手始めと小手調べ程度で戦っている。いたが、一誠から威圧が膨張した。その影響は空気にも及び、常人がこの場にいたら精神プレッシャーが威圧に押し潰れそうになるか潰れていたかもしれない程に、重苦しくなった。外す必要がない眼帯を外したからには、

「あつさり石にされた時のように拍子抜けをさせてくれるなよ」

「抜かせ」

その瞬間。二人がどちらからでもなく飛び出して大剣を激しく振り回し、衝撃と甲高い金属がぶつかり合う音の戦況となった。

「フィン、あやつらの腕見えておるか」

「シー、見えないね。オツタルがあそこまで戦う姿は初めて見たし、イツセーの本気は僕等は見ることが無い」

この勝負、どつちが勝ってもおかしくないと心中で呟くフィン。個人においてその強さはオラリオ一の冒険者【おうじや猛者】オツタルに異世界から来た人型ドラゴンのイツセー。二人の本気、全力の戦いを見ることができるこの機会に碧眼の双眸にしかと焼き付けようとする。お互い地面に根を生やしたように一步も引かない斬撃の嵐を纏うように大剣を縦横無尽に振るい、火花を散らし一瞬の気も許さないLv.7の領域に立つ者達の戦いが繰り広げられる。

「凄い……」

「天使にもドラゴンにも成つてもいないにも拘わらず、魔法も使わず

して……」

「持っている武器だけであそこまで、人は強くなれるものなの？」

アイズ、リヴェリア、アリサから驚嘆と感嘆、静かな高揚感が。それはフィン達も同じ心情であった。愚直に己を鍛え抜き、『技』と『駆け引き』を極め、幾多の修羅場と困難を潜り抜けた経験、そして何かを成そうとする強い意志と想いの強さが人を心身共に強くさせることを知っている者がいれば知らないものもある。ただ、目の前の戦いに目が離せない程に魅入っていた。しかし、激しい戦いは永遠に続く筈も無い。ついてこられないものが存在している。

それから一体どのぐらい時間が経ったのだろうか。二人の体力はすり減っている筈なのにその気配も表情、雰囲気を感じさせないで激しくぶつけあった武器が先に根を上げ——オツタルの大剣が限界を迎え、一誠の大剣に真つ二つにされた。自身と相手の剣の違いの差がここでハッキリと分からされた瞬間でもあった。それでも【おっしや猛者】は戦意の炎を絶やさず、武器として機能しなくなった大剣を捨てて、己の肉体を武器として飛び掛かった。

それに倣うように大剣を床に突き刺して握った拳で肉弾戦を臨もうとする一誠。二つの拳が交えていた剣のようにぶつけ合った時、衝撃波と轟音が生じたそれが二戦目の合図に等しかった。

「ぬるい、この程度か」

ブルファイト

『技』と『駆け引き』の乱打戦の最中、オツタルの指摘に怪訝な面持ちで拳を下ろした。何故そんなことを口にするのか。まだ本気すら引き出していない相手に自分は驕っていたのかと

【テ・シーオ天使】になれ。でなければ俺を倒すことはできんぞ最弱」

「やつすい挑発だな。でも、敢えて乗って後悔させてやるのも一興か」
神々しい一瞬の閃光に包まれた一誠は【テ・シーオ天使】に変身して両手に淡い白の光膜を覆う。この世界の人類では至ることは不可能な超常の力と姿で不敵の笑みを浮かべ拳を構える。

「この姿になったからには一方的な蹂躪をさせてもらう。負かしてやるよ最強」

「フレイヤ様の前で無様な敗北を晒しはしない」

どちらも今まで以上の速度で飛び掛かり、規定した時間まで相手を床に平伏せんと怒涛の乱打の闘舞が交わされる。一発一発の拳の打撃は想像以上の威力を誇っている。それを示しているのは二人から聞こえる音であった。端から見ればただ喧嘩しているように見える殴り合いは単純に凄いと思わせる半面。魂がぶつかり合い、熱せられた鉄に鎚を振るって不純物を取り除き、さらに鍛えて輝きだす大地のような不動の色と景色から変わった真紅色の魂がフレイヤの目を輝かせた。

最強と最弱の戦いは制限時間まで続き、引き分けの形で終了。武人はこの結果に納得できない雰囲気纏って淡々と問いただした。

「その姿は飾りか。何故魔法を使わなかった」

「阿呆、純粹な戦いに魔法なんて無粋以外ないだろ。最強の実力を体で体感する以外どうやって感じるんだよ」

力と力の純粹な力の勝負。武器と『技』と『駆け引き』のみで戦いを臨む者は生粋の武人のようだった。オラリオ最強の猪人^{ポアズ}は変わらない表情で己と互角以上の戦いをして見せた人型のモンスターを下ろし続ける。

「嗚呼、確かにお前は強い方だ。最強かもしれない。だけどそれは空の下の世界での意味でな。空にも世界が広がっていることが分かったからにはお前は世界最強と称されるのはまだまだ先だろうな。俺もそうだ」

地上での最強はオツタル。なら、空の世界の最強は一体誰で、大地と空の最強の者同士が衝突してどちらが勝つのか？それが判明するまで彼は真の意味で最強と呼ばれることはない。

「お互い、まだまだ高みへ行けれそうだな」

「.....」

まだ見ぬ空の世界の最強と出くわした時。その者を倒したら器の昇華は成し遂げ至れるだろうか。オツタルはモンスターの中で最強クラスに入る男を見ながら思いを馳せた。

地下室を後にして掻いた汗をシャワーで洗い流し、さっぱりして浴場から上半身裸で濡れた髪を拭きながら出ると、部屋の窓の外はすっかり日が暮れていた。オツタルとの初戦で数時間も掛けて戦っていた事に気付いて思わず苦笑した。夢中になるにも程があるだろうと。そんな一誠に待ち構えていた女神やその眷族達が部屋にいた。オツタルとの戦いに労いと称賛の言葉を掛けられるのを聞きながら相槌を軽く打つ。

「イツセー、私も強くなる」

「期待しないで待ってるよ。お前は強くなるって分かってるからな」

「イツセーよ、あの大剣をもう一度手前に見せてくれ！」

「見るだけだぞ」

大剣を魔方陣から召喚して椿やヘファイストスに見せる為、机に置いた。鍛冶を司る女神と鍛冶師スミスの性分か、異世界の武器を確かめたくして仕方が無いと好奇心旺盛で触れ始め出す。その様子を視界に入らず椅子に座って一息吐く。

「オツタルと戦ってどうだったかな？」

「素直に強いね。だけど、まだまだ俺に勝つには力が足りない。というかオツタルは手加減してたかもな」

「つまり、君も本気で戦っていなかったと？」

「相手を侮り、慢心はしない。俺も本気で戦ったよ。きつとオツタルもな。それにあそこまで戦ったのはこの世界に来る前以来だ。楽しかったのは本当だ」

拭き方が甘いとリヴェリアがタオルを手に取り、慣れた手つきで拭かれ「いや、拭かなくていいって」「駄目だ、拭き方が甘い」と会話のやり取りをしながら甲斐甲斐しく世話を積極的にされる一誠。フィンとガレスはニヤニヤと面白いものを見る目で視線を注いだ。

「それにしても、君が使っている武器は頑丈だったね。刃毀れ一つも無いなんて業物に等しい性能と耐久、切れ味だ」

「ああ、あれは本来。俺のようなドラゴンを殺す為のもんだ。通常の相手にも斬り倒せるけど、ドラゴン相手だと効果は絶大に発揮する。龍殺しの魔法的なもんが付加されているんだよ」

「ドラゴンのお主がお主を殺す武器を持ってどういうわけじゃ」

「とある人からさ、他のドラゴンから襲われるのを想定して世界で二振りしかない大剣をくれたんだ」

「ふむ、それは誰なん？」

「原始龍って言って全てのドラゴンの祖。つまりドラゴンと言う種族のモンスター^の産みの親的なドラゴンだ。産まれ方は様々であれ、俺達ドラゴンにとって原始龍は神様のような存在なんだ」

ドラゴンの神。そんなモンスターが異世界に存在、君臨していると
は同じ神でも異なる神にロキ達はまた新たに異世界の事を知った。

「ついでに言えばその大剣、封龍剣は俺以外は持てないからな樺」

「それを早く言わんかっ！道理で持ち上げることができないわけだ
！」

両手で柄を掴み、渾身の力を籠めて持ち上げようとしていたハーフ
ドワーフは肩で息をしながら食って掛かる様に叫んだ。試しにとガ
レスも挑戦して持ち上げようと片手で柄を握り締めた途端。地面に
根を張った巨大樹を持ち上げようとする常人の如く、奥歯をあらん限
りに噛み締め、眦を裂き、剛腕な筋肉が限界まで盛り上がり気合のあ
る声を上げるドワーフの力を以ってしても大剣は微動だにしなかつ
た。だからこそロキ達は目を丸くした。

「マジで？あのガレスが持ち上げれへんなんて初めてや」

「御伽話で聞かないか？選ばれた者にしか物を扱えないってやつ」

「その類なのかい。あの大剣は」

「ドラゴン、ひいては俺にしか持てない物だ」

特注専用オーダーメイドみたいな武器だとロキはそう感想を秘め、更なる疑問を問い
掛けた。

「んじやあ、あの代理戦争ウォーゲームで使った剣もそうなんか」

「あれは俺の世界の精霊が打った武器で、誰でも扱える。ただ、魔法は
放つことができるのか分からない」

「精霊ですって？貴方の世界の精霊は鍛冶もできるの？」

聞き捨てならないへファイストスの耳を疑う言葉を発した当の本
人は首肯する。

「ああ、鞘もそうだぞ。聖劍約束^{エクス}された勝利^{カリ}の劍^パは、肌身離さず持つていると不老不死になつてダメージを受け付けなくなる魔法が掛つているんだ。前、それを知らずにアイズが欲しいって言われた時は困つたがな」

と、聖劍のことで苦笑いし金眼を金髪金眼の少女に向けた時。物欲しそうな眼差しを向けられてしまった。無言で首を横に振れば、残念そうに肩を落とすそんな少女に小さく笑みを浮かべるフィンは口を開いた。

「劍と大劍は凄いことが分かった。じゃあ、君の世界の武器は他にも凄いのはあるのかな？」

よくぞ聞いてくれたと、嬉しそうに笑みを浮かべ肯定しながら口答で語り始めた。

「あるぞ、様々な伝説の道具や武器が。劍身が見えない劍に光る劍、五つの閃光を放つ槍や神の雷を帯びた鎚とか色々な」

「へえ、槍もあるのか……」

「神をも貫く絶対の槍、トゥルー・ロンギヌスつて槍もあるぞ。神様を一撃で殺すことができるんでもない槍だ」

興味深々な小人族^{バルム}に面白半分で、ひいつ!?とロキを怯えさせる言葉を述べ出す一誠。碧眼の双眸を丸くし、そんなものもあるのかと耳を傾けたフィンは思わず聞いてしまった。

「ロンギヌスの槍……イツセー、その槍は手元にあるのかい」

「残念、あの槍は所有者にしか扱えない。流星に無いよ。見様見真似なら作れるけど」

「そうなのか。所有者しか使えない武器なんて珍しいね。異世界の武器に興味湧いてきたかも」

「それは良好。何時か見せてやるよ。俺の手元にある伝説の武器をさ」

えっ、持つてるの?と言った風に皆の視線と意識は一誠に集中する。故に、持っているなら見せて欲しいと気持ち湧かない筈が無かった。だが、それを口に出すことはなくなった。外してあった一誠の腕輪の宝玉が点滅し出した。何者からの連絡を受診した反応で

あつた。腕輪を手にし、通話できる状態に繋げてみると、一人の少女が浮かび上がった。

「うん？アスナか、珍しいなどうした？」

『……ごめんなさい。今、君の家の前にいるのだけれど中に入れてもらえるかな』

本当にどうしたんだと、改めて少女の顔を見れば暗い影を顔に落としていつもの元気がどこにいったと無くなっていた。何か遭ったのかと思いいつ返事です承。

「ロキ、迎えに行つてくれないか？」

「え、何でうちなんや？」

「美女が迎えを待っているのに行きたくないのか？」

「あつ、そう言うことなら喜んで行かせてもらおうで！」

自分が行けばええやん、と嫌そうな雰囲気と声音であつたが、鶴の一言によりウキウキと喜悦の色を表情に浮かべて颯爽と扉をあけて部屋からいなくなった一柱の女神に無感情で呟く。

「チョロいなお前等の主神」

「否定しない」

フィン、ガレス、リヴェリアの異口同音の何とも言えない返事が静かに部屋に浸透し消えた。ロキの性格と言動を鑑みてもあれが主神ロキなのだと言われても仕方が無いと否定できないのだった。

ロキに迎えられ部屋に入ってきたアスナ。自室の椅子に座って差し出された紅茶を飲まず、沈黙を保って顔を俯き視線を下に落とし続けて数分が経過した。この落ち込みようは一体なんだと怪訝や不思議な気持ちで二人きり、一誠は話してくれるまで待ち続けながら何かを製作していた。

「……何も聞かないんだね」

「聞いて欲しいなら聞くが、聞かれて欲しくないなら聞く気はない。何かを抱えて苦しんでいるなら楽になる方法をしてスッキリするべきだ。決めるのはお前自身。俺はこうして新しい魔道具マジックアイテムを作っている」

「……何を作ってるの？」

そう言われ、アスナへ一瞥して間を置き口を開く。

「俺達のように別の世界から来た人間が己の欲望を満たす為に無理矢理、理不尽なことを強いる転生者って連中がこの世界に現れるようになったからな。そいつらを見極めることができるモノを作ってる」

「転生者……？」

「別の世界で死んだ人間が神の力で甦り、特典と称した何でも願い事を叶える提案を受け、第二の人生を異世界で送る連中を転生者って呼称なんだ」

その情報はアスナ達に届いていなかったのか知らなかったと、雰囲気醸し出していた。

「実際、ロキとフレイヤの家が壊れたのはその転生者の仕業だった」

「そうなんだ。大丈夫だったの……？」

「俺は問題ない。だが、神から得たチートな能力は強力で凶悪だ。自分で考えた最強の力が現実になるんだから油断もできない。この世界の人間じゃあ歯牙にも掛けることすら不可能だろうな。第一級冒険者も別の世界から着たアスナ達もな」

「そんな人達がオラリオにいるなんて。今どうしているの？」

どうでもよさそうに「あいつらの弱みを握っているから大人しい筈だ」とあつげらかに付け加えてアスナに指摘した。

「だからお前等も気をつけろよ。連中、万能感に浸って自分が最強だの、自分は凄いだの、己を過大評価している連中がいれば、狡猾で策略、表に姿を晒さず裏で暗躍している連中もいても不思議じゃない。それこそ人を洗脳、催眠、記憶の改竄や暗示、世界の常識を思いのままに変えて好き勝手に生きることにもな」

ゾツとする話だった。知らない間に自分がもし、思い出を書き換えられ相手の思うままにされキリト達との関係と思い出が滅茶苦茶に、心も己の意思ではなく相手に操られる人形となれば抗うことはできないだろう。

「良い人、いないのかな」

「全員が全員、善人でもなければ悪人でもないってだろうな。だけど、

元の世界で我欲が強く悪意ある奴が何を仕出かすか、何時仕出かすか俺達は気づく暇も無く動くに決まっている。気付いた時は既に遅かったってな」

恐い、と腕を抱きしめて身を委縮するアスナ。そうやってしまえば誰が気付いた上で助けに来てくれる希望を持てるのか自身が無い少女の耳に「だからこそ」と言う声が聞こえる。

「相手が最強の能力を得ても生きた人間だ。不死身とか不老不死とか厄介な身体能力を得ていても転生者であることを知る方法はある」

今作っているこれで分かる。辞典程の分厚い本に触れながら得意気にアスナへ笑みを浮かべた。内容はまだ秘密だと言われたが、男の笑みはどこか人を安心させる温かさを感じた。悪戯を思いついたような子供のような感じもしたが、毒気を抜かされた少女は口唇を緩める。

「悪戯っ子みたいね。その笑い方」

「人を驚かすのが好きだから、こんな笑い方をしてしまうのかもしれないんじゃないか？父親似だし」

「イツセーのお父さんか……凄いなんだよね？」

「凄いどころかあんな一族の生まれだと思えば、事実を消し去りたい程嫌いだな」

苦々しい表情に打って変わった一誠の心境を理解できないアスナ。この世界にいない自分の両親を思い浮かべ、

「両親が嫌い、じゃないんだよね？」

「嫌いになる方が不思議だ。俺が一番毛嫌いしているのは実家の、父親の一族だ」

「どうして実家が嫌いなの……？」

「嫌いなもんは嫌いなんだ。……少しは元気が出たか？」

それなりに明るく会話ができていたアスナの心は少しばかり晴れやかとなったのか、小さく頷き感謝の念を口にしたが一誠はそれ以上口に出さなかった。顔を暗く落ち込んでいた理由は分からないが一人で『幽玄の白天城』に来たことは一度も無く、この時点で二人きりで話がしたいと申し出た彼女の心境は穏やかではなかったかもしれない。

ない。仲間との関係でトラブルか、キリトとのトラブルか、それとも他の事かと推測をして自分の口から言うのを待つことそれから数分後。

「あのね、イツセーって好きな子が複数できちゃったらどうするの?」
「俺が? 相手と同じ男をじゃなくて?」

「・・・両方、かな。そんなことになったら君だったらどう決めるのかなって気になって」

「——キリトと愛人達のトラブルかあ」

もはや答えを言っているような感じがしてならない。複数の女性関係との付き合いに純粹で一途、相手を尽くし愛情深気少女であれば浮気されもすれば怒っても当然だろう。仲の良い親友と友達が横恋慕をしたら複雑な心で苦悩しつつ話し合いをする心の余裕はあるものだろう。アスナとキリトは交際している。それはもう二人の言動で認知している。故にキリトが愛人達との間に何かをしてしまった。かもしれないと一誠は憶測でそう考えて自分なりの答えを告げた。

「アスナ達の世界の結婚制度は知らないけれど、俺の世界は一夫多妻の制度なんだ。だから、俺も相手もお互い話し合って、問題無く生活を送れるなら皆で愛し合う」

「そ、そうだったんだ。イツセーの世界は凄いな・・・」

「常人の世界の人間からどう思われる世界なのか分からんがな。まあ、実際に俺は元の世界に帰れば俺を慕ってくれる家族がいる」

「それって、結婚している人達?」

「まだだ。でも、将来全員と結婚するよ。俺もあいつらもお互い必要不可欠な存在だから」

だから、早く愛しい家族達の温もりを感じたい。と、願う一誠の憧憬を知ったアスナも気持ちちはわかると首肯する。私も早く家族に顔を見せて安心させたいと。

「で、満足のいく答えだったかアスナ」

「満足を超えて驚かされたよ。君がハーレムを作っていただなんて。因みに人数はどのぐらいなのかな」

「大雑把で言えば10人以上」

「嘘つ、そ、そんなにっ?・・・イツセー、凄過ぎるよ・・・大変じゃないの?多くの女性と付き合っ」

大変・・・だったか?思い返すにも女性との付き合いで苦労したことは・・・感じたことが無い気がする。首を捻って、「争奪戦はたまに起きたし・・・入浴中に侵入してくるし、起きていたら何時の間にか一緒に寝ていたことも・・・」等々出てくる内容がアスナの思考を停止しかけさせた。

「個性的な女が多いのは確かだった。でも、そんな日常生活を過ごしていると思議と慣れて、楽しき一日になるんだ。んー、これっで神経がもうヤバイのかな?」

「ど、どうなんだろう?一緒にいて楽しいなら好きな人と過ごせて幸せなんだろうし、大丈夫だと思うよ」

「そうか。なら、そっちもそんな感じじゃないのか?」

「・・・分からないよ。一夫一妻の結婚の制度だから付き合うのも男女一組って常識だし、友達や親友でも好意を寄せるぐらいならまだましも・・・」

「えっと・・・三角関係・・・?」

「五角関係、だよ」

浮気現場を目撃したかもしれない少女は何かを堪えるように吐露した。

「何だか最近、キリト君が私によそよそしくなっ。どうしたのかなっ。思っただけれどいつもと変わらない日常と彼の言動で気にはしっ。いたけれど、ダンジョンや君のお店のお仕事で多忙に追われてたから何時しか気にすることを忘れていた頃だったの」

それは夜中の時だった。久しぶりに二人きりでデートに誘おうとキリトの部屋に訪れた扉を半ば開けた時だった。——その目で見てしまったのだ、実の妹と肌を重ねていたのを。衝撃と失意に立ち尽くす視界の端で小柄な少女もまた生まれたままの恰好で同じベッドの上に寝転がっている様子も。一体何時の間に体を重ねる関係になっ。いたのか混乱と動揺が頭の中で渦巻き、肌がぶつかり合う音、少女の嬌声から逃げるように自室に駆けこんで引き籠り夜を過ごし

た別の日——リズとキリト、アスナとキリトの妹スグハと一緒にダンジョン攻略に備えて物資の補充へと街へ買い出し時にも見てしまったらしい。共にいたリズがキリトの手と繋いで吸い込まれるように裏路地へ消えていく二人に嫌な予感がして、スグハの目を盗み、焦燥に駆られて追いかけて裏路地に身を潜らせて直ぐ、互いの体を密着させ、情熱的な口付を交わしている決定的瞬間の光景を見てしまい、絶句で立ち尽くしてしまった。

「異世界から来たあの子達や『ファミリア』の為に毎日毎日日本当の命懸けをまたすることになって、皆の気持ちにストレスで溜まっていくのかもしれないのは分かっていたつもりなの。ダンジョンの中でキリト君に守られ、助けられたことは何度もあったし好きになっちゃうのもしようがないって頭では理解しているの。でも、私の恋人が親友や友達に取られちゃっている事実を突き付けられて、私、もう心が整理できなくなってきた時に……」

夜遅くキリト、スグハ、リズ、シリカ達だけダンジョンに向かった。何でも上層の稀少モンスターを探しに行くと。でも、最近の彼は不安でしょうがなかった。シノンに相談しようと思つたもののいざ言い辛く……単独で後をつけ、不安を胸に抱えながら間違いであつてほしいと彼女の切に願つた。彼等が向かつた先は中央広場セントラルパークではなく、南部の歓楽街だつたのだ。それでも、不安と緊張で激しくなる胸の動悸を押さえながら最後まで見届けようとした結果。キリト達は、高そうな宿屋へと入って消えていった瞬間は凄まじい衝撃と虚しさに襲われた。

自分の愛は偽りだつたの？何で自分に話をせず隠れて関係が続けてるの？

そこからはもう、アスナはキリトが自分に向ける愛は何なのか分からなくなり、浮気された悲しみと怒り、裏切られた失望と絶望に虚無感で宿屋に入ってキリト達が借りた部屋を聞きだした(その時対応した店員は鬼気迫る勢いで脅された)。大股で彼等がいる部屋の扉の前に立ち——抜刀、斬つて破壊して中へ侵入したところで少年と少女達が目を見開き、顔を青褪めた。

淫靡な雰囲気を醸し出している部屋の床に散乱している脱ぎ捨てられた服、全裸の少年に群がる少女達。

決定的な浮気の現場をこれでもかと視界に入れ、自分でもこんな声が出るんだと思うほど冷たい声音で告げた。

『私に黙って浮気をするような男の子じゃないと信じてたのに……』
『ア、アスナ……！』

『キリトく……ううん、桐ヶ谷君、あなたとは別れます。金輪際話しかけないで、近づかないで顔も見たくないから。それから「アルテミス・ファミリア」も脱退させてもらいます。そうすれば私に気にせずいられて元の世界に戻るその日まで好きなだけリズ達とエツチなことをしてればいいよ』

一息で早口にもその場から逃げるように後ろから聞こえる声を無視して踵を返した。真っ直ぐホームに戻り必要な物だけ小鞆ポーチに詰め込んで、ホームにいた女神や友人達、仲間の声も振り切って家出をしたのであった。そしてこの事を話せそうな相手、気を許せる同世代かそれに近い歳の者が家を所有して暮らしている者と言えば、白羽の矢が一誠に放たれたのであった。

「こんなこと、男の子の君に話していいものじゃないのだけれど、やっぱり男の子の恋愛話を聞きたくて、ごめん、聞きたくない話で良い迷惑だったよね」

懺悔をするように声を漏らし、悲哀の色が滲んで出ている彼女の辛そうな表情を見て背中から生やす翼で頭を撫で始める。

「キリトも男だった話だ。特に迷惑だとは思ってないよ。寧ろいい弱味——もとい弄り甲斐のある話だった」

ニヤアと、邪な笑みと口の端を吊り上げた者の表情を浮かべてアスナの頬をひきつらせた。キリトと一緒にからかわれた経験があつて、それを思い出すと少し話す相手を間違えたかもしれないと後悔。

「それとまだ嫌いじゃないなら、浮気を知った上で開き直ったらどうだ」

「開き直るって……」

「アスナもあいつらもキリトが好きだったんだ。共に戦い抜いた戦

友、背中を預けられる程の信用と信頼ができる異性、築いた絆が異性として気になり次第に恋する。結局最後は愛し合う関係になるんだからしょうがないだろ」

「でも、浮気は浮気だよ……元の世界でもこの世界でも……」
納得できない、簡単に認めれないと常識人としての意見を弱弱しく言うが、呆れる一誠だった。

「当たり前だろ。勝手に他の女と体を重ねたら浮気以外何がある。お前も浮気したらショックを受けるのはキリトだ。どっちが同じことをして同じ結果になるのは火を見るより明らかだ。俺は浮気されたアスナじゃないからその胸に感じた痛みまでは理解できない。その上で問うぞ。アスナはこれからどうしたい」

「……どう、したい」

「これからどう生きたいって話だ。異世界に來てもアスナの人生はただ続くんだからな」

どんな選択を決めるのかは彼女自身なのだ。徐に立ち上がり、アスナの横に移動する。

「とりあえず、今までの鬱憤を一度発散した方が良いか。ついてこい」

「え、どこに……?」

「地下室のトレーニングルームだ」

そう言つてアスナは連れられた場所、トレーニングルームで貸し与えられた剣を手に一誠と対峙する。体を動かして頭と心の中のモヤモヤを晴らそうとするシンプルな提案に当惑したが。

「行くぞ、本気でこい」

いきなり斬り掛つて來られたら気を引き締めて応じるしかない。スキルを発動した。彼女の中でスイッチが切り替わり、戦闘モードに入るとアスナに変化も起きた。視界に映る一誠の隣にいくつものゲージと名前が浮かび上がっては、自身の身体能力も超向上した。体は羽のように軽く、腕力も数倍の力で相手を押し返した。一誠は心底不思議そうに首を傾げる。片手で数える程度でしかないが、アスナの

実力は中の下ぐらいだと把握していた。なのに、今の彼女はあっさり本来の実力を凌駕している気配を醸し出している。どうなっているんだ？と感じながらも苛烈に剣を振るい続けた。懸命に食い付く彼女も負けじと培った「技」と「駆け引き」を駆使して切り結ぶ。乱れ突きを繰り出すとかわされ、弾かれたり逸らされて己の顔を見つめながら避けた一誠の髪を数本切って宙に舞わしただけ。腕を引いてから鋭い一突を胸に向かって放った剣はあっさり甲高い音と共に弾かれ、アスナの腕が後ろへ向いた瞬間懐に飛び込まれた。突然の接近に体が対応できず後ろに下がろうとした足が床から離れ背中から倒れる姿勢になってしまった状態で振り上げられる剣に、斬られまいと背中を弓なりに反らし首の皮一枚もとい服を切られながらバックステップで一誠から距離を置く。

「やるな。今のはかわされるとは思わなかった。今までの動きより断然いいみたいだけど、まさか手を抜いていたか？」

「どうだろうね・・・？もしも手を抜いていたら君は怒る？」

「いや。俄然、お前を本気にさせたくなるだけだ」

真紅のオーラを体から迸らせ、人の皮を被っていた怪物が真の姿に変身してアスナの目を焼き付かせた。真紅の鱗に覆われた体、臀部辺りから竜の尾を生やし背中には二対四枚の翼、蜥蜴を彷彿させる頭部に鋭利な一本角。鋭く伸びている手足の爪と凶悪な牙を生え揃えているドラゴンを前にして少女は目を見開いた。いきなり視界に映る人から化け物になった瞬間を目の当たりにし絶句するなどは酷な話だ。ゲームならばともかく現実で本^{リアル}当に化け物になる人間は見たことが無い。一生忘れられない思い出として記憶に残り続けるだろう。呆然と立ち尽くしている間に、跳躍して上から迫ってくる一誠へ剣を前に掲げた直後に上段から振り下ろされた。

「うっ！」

腹部から伝わる鈍痛に全身が硬直する。視線を下に落とせば長い真紅色の尻尾が槍の如く少女の腹に突き刺していた。貫通してないものの、剣以外に攻撃される意識をしてなかった彼女の配慮が仇となった。その認識をした瞬間に体は後方へ吹き飛び床に足が着いて

全身で息をし、片手で鈍痛が生じる腹部に押さえながら息を吐く暇も与えさせない容赦のない怒涛の乱れ突きの対応に強いられる。何とか激しい突きの嵐から耐え抜き、隙を窺いながら攻めに転じ、気合の叫びを発しながら攻防を繰り返す。無我夢中で一誠の体に傷を負わせていく。

「(ここっ!)」

何時しか本気で戦うようになったアスナは一人の剣士として相手を倒さんという気持ちが強まり、眦が裂いた目は一誠の突き出した剣を凝視し、添うように自分も突き出しては重ねたところから勢いよく振り上げ剣を持つ腕が後ろに向いて直ぐに前に振り下ろすことはできないその瞬間を狙わずにはいられない。

「全力でいくよ!はああああああああつ!」

相手もそう望んでいる。ならば剣士として応じなければならぬ。紫色に輝く剣の柄を強く握り締め、一瞬だけ無防備のモンスターの体に剣を叩きこんだ。己の体に突き刺してくるその「技」は——左眼の金眼が見開いた。都合10回目の連続攻撃の後、最後の一撃の11連撃を胸部に放ったアスナ。身体中から血を流し、重傷の体にも拘わらず意思の強い光を宿す左眼が見下ろしていた一誠は口唇を笑みで作った。

「懐かしいな、その技」

「え?」

「どういうこと?疑問が胸の奥から浮上して顔を見上げようとした矢先。アスナの体に同じ「技」が放たれた。」

「マザーズ・ロザリオ」

生身の身体に重傷を負わせる技がアスナの目に入ったのを最後に、目の前は真紅の色に染まり意識が遠退いた後は真っ暗な世界が彼女を迎えた。

「.....う」

どれぐらい経ったのか分からないまま、アスナは目を開けた。体を起こして周りを見回せば傍で胡座をかいている一誠と真っ白な地下

室の中にいることが分判った。

「起きたか」

「うん……あの怪我は大丈夫？」

「あれだけ派手な攻撃した本人が気にするとはな。お互い回復している」

自分の体をまさぐり、痛みや怪我はないことを知り気絶している間に治されたのだと理解する。ただし、服はボロボロであったが。それを気にするよりも同じ技を使った一誠は真似したのか、どうして懐かしいと言ったのか気になっていた。

「イツセー。私の技が懐かしいってどういうこと？そっちの世界に同じ技を使う人がいるの？」

「ああ、いる。天真爛漫で人懐っこい後輩の女がマザーズ・ロザリオを使うんだ」

まさか、と有り得ないことであるが既に元の世界で永遠の別れをした人物像が頭の中で浮かび上がってきた。もしも己の幻想が現実になってしまったら……。緊張で動悸が五月蠅い心臓の音が嫌にも聞こえてくる中、意を決してアスナは震えそうな口唇を動かした。

「その子の名前……。何て、言うの？」

「紺野木綿季」

一際高鳴る鼓動。こんな偶然、奇跡があるのだろうか？元の世界で死んでしまった最強の剣士の少女が別の世界で存在しているなんて

「あなたの世界にはあの子が、ユウキが生きているのね……」

「……へ？」

「……会って、みたいなあ……」

遠い目で憧憬の籠った言葉を吐露した。彼女とユウキの関係は定かではないもの親しい柄なのかもしれない。しかし、会いたいのは一誠も同じで簡単に直接会うことはできない。帰郷の憧憬を抱く男も短く相槌を打つと求められた。

「ねえ、ユウキの写真とかない？」

「残念ながらアルバムの類や携帯とか全部元の世界にあるんだ」

けど、と付け加えた一誠の全身が光に包まれ……光が消えた時、アスナの傍にいた者は男から四年前まで共に暮らしていた少女になっっていた。

「幻を見せるぐらいはできるよ」

「——っ」

人懐っこい笑みを浮かべる黒みが掛った紫の長髪に赤い瞳の少女、紺野木綿季に変身した。驚きのあまり言葉を失ったが、思い出と記憶だけの少女ではなく瓜二つな少女の存在に徐々に目尻に涙を溜めて胸の奥底から湧き上がる感情が抑えきれなくなっていく。

「久しぶりだね、アスナ」

「ユウ、キ……ッ」

「つて、ボクが言ってもアスナが知ってるユウキじゃ——わぷっ」

苦笑いするユウキに抱き付くアスナ。亜麻色の髪から仄かな甘い香りが鼻腔をくすぐり、「あ、好い匂い」とほんわかな気持ちになりながら、彼女の頭と背に両腕を回してポンポンと触れる。

泣く子をあやすように抱きしめて……。

冒険譚 8

しばらくしてアスナは一誠から離れ気恥ずかしげに謝罪。幻とはいえ久しぶりに出会えた少女に嬉しくて気持ちいが抑えられなくて、キリトと別れたばかりなのに別の男に抱きついてしまった。アスナの謝罪に気にしないと風な柔らかな笑みを浮かべ、幻を解いて元の姿になった男は彼女を引き連れて地下のトレーディングルームを後にし自室に戻った。

「アスナ、どんな武器が欲しい」「え？」

「懐かしい技を見せてくれた礼だ。今まで作った武器を一つ譲る」

マザーズ・ロザリオを見せてくれたアスナの戦いに評価した。シノンのように凄いと思わせた、凄いと思った一誠は彼女が欲した打った武器を譲渡する話をした。本棚に近寄って一冊の本を動かすと隠し保管庫の入り口を解放した。隠し部屋へ入って行くその姿を追いかけて、山積みを集められているヴァリスや本棚のように立て並べられている陳列窓の中に大量の怪物の宝、ドロップアイテム、レアメタル、希少金属、宝石や金銀の装飾品、仕舞には氷漬けの多種のモンスター達までアスナの視界に飛び込んできた。

「こ、これって……」
「今日まで貯めに貯めた収集品や全財産を保管している俺個人の金庫みたいなもんだ」

この世界でしか手に入らない品々を宝として保管する場所の中を移動し武器だらけの空間へ赴く。それらは全て一誠が製作した物だが、中には購入した得物もある。空の世界で得た重火器も含まれていてアスナの目を丸くさせた。

「銃だよねこれ。オラリオのどこかに販売されているの？シノンが物凄く欲しがるよ」

「いや、多分地上には存在していないかもしれない。これを買った場所には神すら認知していなかった世界だったんだ」

「もしかして、異世界？」

知らない世界と言えば自分達の世界か、と予測して訊ねたアスナに「違う」と否定された。

「空の世界だ」

「空の世界・・・？そこってどんな世界なの？」

「遙か空の彼方、途轍もなく分厚い雲に囲まれている場所に島が浮いているんだ。そこにはヒューマンと変わりない姿をした人種がいれば頭に角や獣耳を生やしている異なる種族、魔法と剣や独自の文化も存在していて、空を飛ぶ艇も見たんだ」

当時の事を思い出しながら浮かべる笑みは、その世界に行つて楽しかったんだろう。異世界に更に世界が存在していた発見は凄い衝撃を受け、興奮を覚えただろう。話を聞いている内に空の世界へ進出してみたい欲求が湧き上がるのを自覚しながら並べられている武器を視界に入れる。どれか一つ譲つてくれる話だ。であれば、馴染みの武器が欲しいアスナは細剣レイピアを選んだ。

「ねね、どんな細剣があるのか教えてよ」

「攻撃力そのものは他の一級品装備と比べて低いが破損することのない不壊属性デユランダル、最硬精製金属の『オリハルコン』を素材にして作った特殊武装スベリオルズの細剣レイピアがあれば、属性魔法が付加されている物もある。まあ、アスナはこれがいいだろう」

鞘に収まっている一振りレイピアの細剣を手にして彼女へ突き出す。

「へフアイストスが立っている領域に足を踏み入ることが許された代物だ。俺の渾身の一品でもあり、俺の角を素材にして作った最高傑作、《神威》の切れ味も保証する」

受け取り柄を握つて鞘から抜き放てば赤より鮮やかな色をした紅色と白のツートップカラーレイピアの細剣だった。軽く振るったり突いたりしながら調子確かめる。一誠の体の一部を用いたからか、握る柄からほんのりと温もりが帯びている。不思議と思うも今まで使つていた得物より軽く、より丈夫そうなこっちの方がびつたりと手に馴染む感じで少女は薦められたこのレイピアにしようと決めた。

「《神威》、これがこの武器の名前なんだね。格好いいよ」

「いや《神威》は全体的な連作シリーズの名前だ。個としての銘は付けてないか

ら自分で決めても良いぞ」

「そうなんだ。じゃあ、そうするね」

剣身を鞘に収め、大事そうに持って用が済んだ金庫を後にしようとして足を前に運び出す。ふと、この武器を売ったらどれぐらいの値段が付くのか気になった。訊ねてみるととんでもない額を言う言葉が返ってきた。

「億越えじゃないか？」

「お、億……」

億万長者も夢じゃない武器を譲ってくれた一誠に戦慄する。その額に相応しい威力がレイピアに宿っている事を知るのは少し先の事。

「もうちよつとだけ見ていい？」

興味津々に言うアスナの乞いに了承する。先に歩く彼女について行き、質問を受ければ答え、簡単や驚嘆の息を漏らさせる。そんな中、三本の酒を発見した。驚く事に酒の中にダイヤモンドが浸かっているアスナが知っている酒とは異なっていた。これは何だろう、とショーウィンドウ陳列窓の中を覗きこむ少女が何を見ているのか悟って教えた。

「気になるか？」

「うん、お酒の中に宝石があるなんて初めて見た」

「酒の種類はウォッカ。名前は『デーヴア』。日本語に訳すと『歌姫』っていう最高級の酒なんだ。それ、俺の両親の宝物の一つでな。一つ——一億以上するんだ」

「へっ!？」

絶句してしまう程の酒の値段を聞き、バツと条件反射で離れた。もしも割ったりしたら弁償しなくてはならない。一生懸けても稼げれない一億を。それも三つもだ。

「俺の世界の酒を司る神ソーマが大人になったら両親と飲むといいつてくれたんだけど、酒が飲めない俺にはちよつと申し訳ないんだよな」

「そ、そうなんだ……」

「うん、だからもしもロキ達が勝手にこの酒を飲むことになった

ら……俺は絶対に許さないでいるんだ。ソーマの神様から貰った大切な贈り物だからな」

ディーヴァを懐かしむように見つめたのちに保管庫を後にしようとしてアスナを引き連れる最中、山積みになされているヴァリスを見て彼女は訊ねた。

「こんなにお金を貯めてるけど、なんかコツがあるの？」

「他の冒険者と変わりない方法で稼いでいるけれど、それ以外だと月に一度カジノで荒稼ぎするな」

「カ、カジノ……？」

「稼ぎ過ぎると出禁を食らうから二〇〇〇万ぐらいまでだがな。――

――一人につき」

一人につき二〇〇〇万ヴァリスを稼ぐ？引つかかる言葉を述べる少年に疑問符を浮かべ……あつ、とアスナは察した。

「もしかして、分身体にも稼がせてるの？」

「お、気付いたか？分身体達には姿を変える魔法で別人になりすまして大勝したり大負けしたりする客に扮して一緒にカジノで稼いでいるんだ」

アスナは度肝を抜かされて言葉を失った。違法行為と犯罪に手を染めているんじゃないかと思う方法でカジノから金を巻き上げて稼ぐ一誠を微妙な表情で見つめる。

「気付かれたら捕まるよ？」

「騙される方が悪いって知らないか？ま、金は腐るほどあっても困らないもんだ。必要な時は必ず使うんだかそれに備える意味で貯めておかないと――」

腕輪の宝玉が点滅した。誰かからの受信を繋げて応答すると『イ、イツセー君』と少女少女達が切羽詰まった面持ちで立体的な映像に映り出た。

『『お金を貸してっ！』』

「代価はお前等の命でな」

『鬼かお前っ!?!』

名も知らぬ少年からの突っ込みの叫びの後、「冗談だ」と宥める。

「団長はどうした団長は。何で俺に頼み込んでくるんだ」

取り敢えず理由を問いただす。納得や正当の理由であれば、それなりに出資しても構わない。後日キツチリ耳を揃えて返してもらえばそれでいい考えの一誠に告げる。

『団長はいるにはいるんだけどよ、何か物凄く暗い顔で落ち込んでるんだ。とてもじゃないけど話しが出来そうにない雰囲気を出しているし。他の先輩達にも相談してみたけれど、新しいホームの為に殆ど使ったからそんな大金はうちにないって言われたんだ』

直ぐ傍にいるアスナにも「そうなのか？」と尋ねる視線を向けると小さく頷いた。

「大金を貸して欲しい理由は？」

『実は、上鳴君と峰田君がお金を払えず帰るに帰れない状態だって連絡が来たんだよ……』

「……理由はなんだ、お前等は聞いているのか？」

『クライン先輩から女の人と遊んだりカジノをしていたらそうなたって聞かされたぜ。先輩達も繁華街にいらただけどよ、流石に払えない額だったらしくて二人を助けられないでいるんだ』

「ク、クラインさん……」

赤毛のトゲトゲ頭の少年から告げられる理由で一誠の気持ちがスーと冷めていく。まさか仲間がそんな理由で捕まっているとは思っていなかったアスナも何とも言えない気持ちになった。途轍もなくくだらない理由で金を貸さなければならぬのかと嘆息を零す。

「分かった——救いようのない馬鹿は救わない方針です。お灸を据えるいい機会だからな」

冷たく見捨てる宣言をした男は無情で非情にも通信を切った。さすがにそんなことするとは思いもしなかったアスナも目を丸くして吐露した。

「た、助けてあげないの？」

「命の危険に及ぶのであればするが、それ以外は完全に干渉しない。自分で起こした問題は自分で何とかしろって話だ」

「その問題が一人じゃあ解決できなくても？」

「・・・少し付け加えさせてもらうぞ。さつきも言ったが命の危険に及ぶ問題だったら助けはする。理不尽な目に遭っていたり【ファミリア】全体的な問題でもだ。が、個人で起こした問題にどうして俺が関わらなきゃならないんだ？一応俺は他派閥の団員だぞ」

そこまで面倒見切れないと言外する。他派閥の問題に首を突っ込んだり干渉することは殆どしないのがオラリオの常識、冒険者の暗黙の規則だ。アスナも知っている。しかし、彼等彼女等は自分達の仲間・・・・副団長として何とか助けたいのは山々だが今の少女は団長に愛を裏切られ、地位も肩書も殴り捨てて家出をしてここにいる。

「あいつ等が知っている兵藤一誠はとことん甘い様だな。それは信用と信頼が大きいからだろうけど自分の手では負えないことを他力本願、全て丸投げにする連中とよくとまあ付き合っていたな。責任転換が上手過ぎる」

「責任って、そんな・・・」

「しようとしてただろ。綺麗なお姉さん達とイチヤコラニヤンニヤンしたりカジノで負けた分の金を俺に払わそうとした時点で。自分達が招いたことを、何で俺が尻拭いして多額の金を払わないといけないんだ。あいつ等、今の自分達の立場分かっているのか？ふざけてるのか？」

グチグチと文句を言いながら軽く人差し指を振ると、何故か山積みになされているヴァリスが意思を持っていくかのように宙へ舞い上がり、百万ずつ別れてどこからともなく飛んできた亜麻袋の中に吸い込まれる感じで集まって行く。なんで？と不思議そうに思っているアスナの前で、肩下げの鞆の中に亜麻袋を詰め込み始める一誠の行動に気付いた。

「助けに、行くの？」

「あとでギャーギャーギャーと猿のように喚かれたら煩くて敵わないからな。全く、今夜の【アルテミス・ファミリア】は問題を抱えて来る日だな」

「うっ・・・」

確かにその通りだと自覚している少女は申し訳なさそうに委縮する。まさか浮気現場の近くで仲間がいて彼等も楽しんでいたとは気付かなかった。しかも問題を起こしてだ。自分達の問題を一誠に持ち込んだ認識を改めさせられ謝罪の念が抱く。

「部屋で待つてろ。何か飲食したいならそこにある冷蔵庫から出していい。それと本棚にある本の中には九冊の魔導書グリモアがある。間違っても読むなよそれだけは」

「う、うん……わかったけどグリモアってなに？」

「ん？知らないのか。魔法を一つだけ強制的に発現させる魔法の本だ。一冊一億以上するから高級品扱いされてる」

——絶対に本に触れないようにしよう。教えてくれた一誠が部屋を後にして行く後ろ姿を見て心から誓ったアスナであった。

「ですから、現金で支払うべきのものを支払ってもらわないと困ります。それができないなら日雇いして働いて返してもらおう当カジノの決まりなんですよ」

「こつちだつて体を張って商売してんだ。相手がどこの派閥だろうと払うもんを払ってくれなきゃ割が合わないんだよ。娼婦を舐めてんのかテメー等はああん？」

一方、クライン達がいる繁華街と歓楽街と接する一角にて、約束を取り入ってもらい後日返済するから仲間を返して欲しいと乞う「アルテミス・ファミリア」の主神と数名の団員達だが、黒い燕尾服を着込むカジノの店員や都市最大派閥の守衛、遊郭に住まう踊り子のような衣装を纏った褐色肌の女性達——アマゾネスの娼婦がそれぞれ上鳴と峰田を返さんと一点張りで乞いを突き飛ばしている。象頭の仮面を装着している守衛兼冒険者、「ガネーシャ・ファミリア」の団員からの助力も得られない。結局、解決方法は膨大な額を耳揃えて払う他ない。薄汚い印象を与える教師相澤と犬歯が異様に長いガタイのいい教師ブラドキングはどうしたものか、と困り果てた。

「(どうするイレイザー。このままじゃ埒が明かないぞ)」

「(分かっている。合理的な方法は一つしかないが、今の俺達にそれはで

きない)」

声を殺して苦々しい声音が零れる。法外だと思っただけの金額を払えるほど「アルテミス・ファミリア」は持っていない。時間を掛けて払えば何とかなると思っていたが、甘くはなかったしそう問屋は卸せなかった。

「で？金を持って来ているんだろうね？私の仲間の体で思う存分楽しんでんだ。それ相応の金をここに持って来ない限りあのガキは返さないよ。奴隷としてコキ使わせてもらおうからね」

最終警告だとばかり催促するアマゾネス。誰が見ても大金を持ってきていないのは明白、火を見るより明らかだ。話し合いで事が解決できるなら世界は平和で戦争なんて起らない。力と金と権力、女と欲望が渦巻いている現在『暗黒期』真つ只中の迷宮都市オラリオに生きるためには実質強さと金が必要なのだ。

「それでも返して欲しいなら実力で取り返してみるかい。受けて立つよ私等は」

腰に携えていたり、手の中に握っている得物を見せつける娼婦達アマゾネスから威圧が伝わり反射的に臨戦態勢の構えを取る団員達の所に。

「何だ、戦うなら鬱憤を晴らす意味で交ぜさせてもらおうぞ」

肩下げの大きな鞆スリットを持つ若い少年と美しい肌を覗かせる深い切り目が入った白の衣装ドレスを身に包む豊かな胸のエルフの女性が緊迫の雰囲気を一蹴する。二人のうち一人の少年の登場に「アルテミス・ファミリア」の団員が安堵で胸を撫で下ろす気分浸った。

「ひょう——」

「あ？」

「・・・イツセー」

兵藤と言いかけた団員が凄惨な形相で睨む一誠に言い直して口を噤む。そして「アポロン・ファミリア」との戦争遊戯ウォーゲームで様々な魔道具マジックアイテムを駆使してたった一人、勝利をもぎ取って見せた男が現れたアマゾネス達の纏う空気が変わる。

「『異世界食堂』の主人じゃないか」

「生で見るの初めてだ、格好いいじゃない」

「ねえ、あれ。最近娼婦になったエルフよね？」

彼女等のざわめき何かを他所に鞆の蓋を開けてジャラツと音を鳴らす亜麻袋を取り出す一誠はアマゾネス達に近づく。

「いくら払えばいい？」

「え？」

「こいつ等が引き取りに来た馬鹿共の払う金額だ。俺の知り合いでもあるから肩代わりをしに来た」

最初、なにを言われたかぽかんと間の抜けた返事と顔をしてしまうアマゾネス。肩代わりに金を用意して払いに来たと言われてようやく察した。漆黒の長髪を背中まで伸ばし、男を色香で惑わすような褐色肌に冒険者用装身具を身に纏うアマゾネスが堂々とした態度で払いに来た男に近づき鞆の中に敷き詰められている亜麻袋を一瞥し口を開く。

「本当に払いに来たようだね。何なら、お前がその体であいつが払う金と立て替えても良いんだよ？」

「好きでもない女と体を重ねるなんて御免蒙るよ。【イシユタル・ファミリア】の連中には良い思い出が無いんだ。特にあの三人の男共にはな」

「・・・ああ、あいつらね」

彼女も思うところがあるのか、一誠が指摘した男性団員達を浮かべ苦い表情を浮かべたが、それは一瞬で元の表情に戻った。

「イシユタル様も扱いに困り果てていたよ。好き勝手に豪遊して傍若無人の振る舞いで場所や昼夜問わず腰を振っていたんだからね。逆らえば力尽くで黙されるか犯されるか日常が常だったし、仕舞には主神の神室を自分達のヤリ部屋にしたんだから流石にイシユタル様はキレてたよ最初は」

「飼い馴らすことができない獣を、己の力量を読めなかった主神の自業自得だろ」

「ははっ、言うじゃないか。ま、確かにそうだろうねえ」

自分の主神を侮蔑が含んだ言葉を発せられてもアマゾネスは気にもせず、同感だと笑いも上げた。

「んで、いくらなんだ。さつさと払って馬鹿共を引き取りたいんだけど」

「せっかちなだね。もう少し会話を楽しみたいとは思わないのかい？」

「それより馬鹿共の折檻を楽しみたい方だから」

ヴァリスが詰まった亜麻袋を弄びながら金額を問いただし、彼女は「わかったよ」と本題に移った。

「片手で数え切れないぐらい、高級娼婦を指名して困って楽しんでいたからねえ。私が知る限りあんな豪快な小人族バルウムは初めてだ。私達が知らない第一級の冒険者かと思つて楽しませていたから——一千万ヴァリスを要求したよ」

「……本当に馬鹿かあいつ」

そう言いながらポンポンと迷惑料込みで上乗せし、二千万もアマゾネス達に払っていき完済を果たす男に、心なしか驚嘆の息を漏らしていた。次のカジノの店員に話しかけ、肩代わりする提案を持ちかけて払うべき金額を提示してもらおう。

「五百万ヴァリスです」

「ご迷惑をおかけしました」

謝礼としてもう五百万も上乗せして払い、こっちも完済を果たす一誠。これで双方に捕まっている二人は釈放された。カジノと守衛の【ガネーシャ・ファミリア】の団員は満足そうに帰って行くのを見届けながら一人残して去るアマゾネス等も視界に入れる。

「ところで、そのエルフはなんだい？これから楽しもうと連れてくる所なら私も交せてもらいたいね」

「ちげーよ、急に声を掛けられて断わろうと思つたところ——諸事情で身請けをしようと連れ回していたところ」

突拍子もない展開になつてこうして連れ回されているのだと知り、エルフを一瞥して口の端を吊り上げた。

「肝が据わってるね。そのエルフのこと好きなのかい？」

「いや？好きでもなければ嫌いでもない。単純な理由さ。好きでもない男と肌を重ねて金を稼ぐぐらいなら、俺の店で働いて金を稼げばいいって話さ」

「何だいその理由は。それでよくそいつは離れずにいるね。無理矢理連れ回しているのかい？」

「口説いた」

胸を張る様にいい笑みでそう言われ、もう一度エルフの方へ改めて見やると。口説かれた事実は本当であると白磁の肌の頬をほんのりと朱を染め自身で証明した。

「こんな私を、必要としてくれているこの人に、その……ゴニョゴニョ」

「……はい」

諸事情で卑しい娼婦に身を落ちてしまっても、潔癖性が強いエルフが簡単に男の言葉にコロっと心を落とされるとは思わなかった。自分が知る限り彼女は娼婦となつてからまだ日が浅い。日が浅いからこそ、エルフにとって地獄のような暮らしの中を手を伸ばし、救わんとする男の言葉はどれだけ心は救われたのか計りしれない。故にアマゾネスはこみ上げてくる笑いを堪えられなかった。下手な男より女の扱いが長けている一誠の口と手腕に素直に凄いと称賛もする。

「幸せになりな。そいつは間違いなく、いい雄だ」

「……はい」

自身も認める男を笑みで固めた顔のまま手を伸ばす。

「私はアイシャ、アイシャ・ベルカだ。『異世界食堂』の店主イツセー」
「ん、よろしく」

応じて手を伸ばす一誠と握手を交わし、交流を築いた時。解放された二人が走って来て合流する。

「よかったー、上鳴君、峰田君。無事に戻ってこれて」

「心配したわ」

「マジで焦ったぜ。カジノで遊んで負けていたらいつの間にか数百万も払わなきゃいけないよ」

「オイラなんて、おっぱいをたくさん頼んでいたら一千万払えって言われたぜ!?!おっぱいがそんなに高いのかよってびっくりしたよ」

「もう、未成年がカジノや女性の方と遊ぶなんて不謹慎ですわ!」

「アルテミス・ファミリア」のホームに戻るや否や、待機していた団員達に迎えられ安堵で胸を撫で下ろす気分に戻る上鳴と峰田は友人達と和気藹々で言葉を交わす。

「本当イツセーには感謝だな。俺達が知っている兵藤と同じで何でもできるから安心できるぜ」

「でも、何時までもこの世界にいるわけにはいかない。元の世界に戻る方法を見つけてもらって早くヒーローにならないとな」

「その為には兵藤が頑張ってもらわないと困るもんだぜ」

当然のように他力本願を示す発言された一誠へ上鳴は感謝の言葉を述べた。

「イツセー。金払ってくれてありがとうな。マジで助かったよ。今度は気を付けて遊ぶから」

「オイラもおっぱいの数を減らして楽しむぜっ」

また性懲りもしない、と周りから呆れられていることに気付いてない二人に話しかけられた当人の目は完全に据わっていた。

「それって、また払えなくなったら俺に払ってもらうつもりなのか？」

「や、もうしてもらうつもりはないけどよ。もしもまたそうになったら、頼めれないかなーなんて」

「というか、兵藤は金をたくさん持つてるんだろ？しかも店もあるんだし金なんて貯まる一方だから、ちよつとぐらい減つても困らないならオイラ達にも分けて欲しいもんだぜ」

そんな申し分に柳眉が険しく寄った彼の男の顔を見ていた者にか気付かなかつた。オールマイト達もそれに含まれていて、上鳴と峰田に話しかけようとした言葉が淡々とした口調で告げられた言葉に遮られた。

「——上鳴と峰田。お前等2人、三千万返せよな」

「……えっ」

上鳴と峰田の帰還に安堵と喜びで迎えた緑谷達が醸し出していた空気に水を差す言葉。目を見開き体と思考を硬直、停止させられた彼等彼女等から信じられないと風に言葉が零れる。

「三千万、万？」

「金を貸してくれと頼んだのはそっちだろ。しかも何に使われるかと思えば、娯楽と女と遊んで払えなくなつた支払いだった。俺の金を使つて自分達の代わりに払わせたんだ。当然、貸した金を耳揃えて返してもらおうぞ」

至極当たり前なことを言つた一誠に「ま、待つてくれっ!？」と焦燥の色が孕んだ声が掛る。

「金を返せつて、三千万なんて簡単に集めれないし返せれないつてー!」「そうだけつて、また集めればいいじゃんか!お前なら楽勝で店だつてあるんだし、直ぐに貯まるじゃん!」

異論を唱えられ、体に言い表せれない不穏な気配を纏う一誠が小首を傾げた。

「何言つてんだ?俺はいま直ぐ返して欲しいとは思つてない。簡単に集められない事を解つていながら言つていて、時間を掛けて返してもらえばそれでいいんだ。それでもできないぐらいお前等は弱いのか?」

「よ、弱くないよ。だけど三千万も稼ぐつて……」

「問題ない、『下層』や『深層』で何週間も籠つて魔石やモンスタードロップアイテム、その他諸々の物をかき集めれば優に届く金額だ。他の冒険者達もそうしているからお前等もできる。異世界特有の能力をフルに使えば楽勝だろ。元の世界よりかなり稼ぎやすい方法だしな」

楽観的にそう言う一誠にそれでも異邦人達ヒーロー組は楽観的になれない。

「そこまで俺達は行けるのかよ?地図もないのに」

「最大派閥まで成長すればギルドから地図を受け取れる。今の『アルテミス・ファミリア』は実力だけなら『下層』、あるいはギリギリ『深層』まで行けるだろうが派閥の等級ランクが低いままじゃ行けないけど既にお前らには地図を持つているから問題ないだろ」

もう持つている?どうということだと思ひながらも直ぐに気付いた様に察した。通信式の腕輪の機能に『深層』までの立体的な地図があることを思い出したのだ。

「上鳴と峰田。これ以上何か問題があるか？この間、渡した腕輪にはテレポルト機能もあるし今以上に稼ぎやすくなっているはずだ。それでも稼げないと言い抜かすか？」

お膳立ては整っている。あとは「アルテミス・ファミリア」の行動力と実力で試される。他の「ファミリア」や冒険者達、一誠と交流している者達以外優遇されている少年少女達はかなり優位に立っていることを何となくであろうと察しているか定かではないが、それで時間が掛つても返せと物申す一誠。

「言つておくけど、その腕輪を商業系の「ファミリア」や商人に売り飛ばすなよ。売ったらどうなるか……解っているな」

空間に穴を開けて、直接城を繋げる一誠のつま先がそこに向かう。そしてこの場から去り「アルテミス・ファミリア」の団員達を後にし遠ざかろうとする背中に声が掛つた。

「イ、イツセー君。一緒に冒険してくれへんの？」

「……」

掛けられたその言葉を聞き、足を止めて振り返った。見れば自分と冒険したいと言う思いが籠ってる眼差しを向けてくる少年少女達が視界に入り――。

「まさかだと思うけど。もう一人の兵藤一誠と重ねて頼っているんじゃないだろうな」

『っ!』

凶星か、と思うほどあからさまな反応をする面々に深い溜息を吐かずにはいられなかった。

「不愉快、嗚呼、実に不愉快だなそれ。お前ら全員、俺を俺として見ているんじゃないかもう一人の兵藤一誠と被せていたなんてな」

「ち、ちが——ッ」

「違う？じゃあ、何で峰田つてチビは『お前なら楽勝』なんて言葉が出てくる？この世界で四年も住んでいた俺はお前等の事なんて知らなかったのにどうして俺の実力をお前等が知っているわけなんだ？」

「だ、だって私達の世界にいるイツセー君と同じ——あつ」

「……はあ、そーいうことだよ全く。俺とそいつが同じ存在だか

ら他も同じだろうって勝手な認識をしていただけなんだよ。それを今さらようやく分かったか」

嘆かわしいと首を左右に振り心底呆れた面持ちでこう告げる。

「一応、お前等とは線を引いていたつもりだが、それでももう一人の俺と被せて、自分達は守られて当然的な感じで無意識に傲慢していたな甘ちゃん共め」

話を戻す、と上鳴と峰田へ話しかける。

「貸した金は誠心誠意で返してもらおうからな。一人じゃ出来ないなら連帯責任で皆にも手伝ってもらえ。命と体と時間を懸けてな」

ここまで辛辣な兵藤一誠は見たことが無いと少年少女達は動揺する中、「それができない限り、例えその間お前等を元の世界に帰る手段を得られても戻さないからな」と付け加えられる一同。しばしの沈黙が場を支配した中、峰田が恨めしそうに呟いた。

「……そんなにオイラ達より金が大事なのかよ。オイラ達が知っている兵藤じゃねえよ。あんなこと言う筈が無いって。嫌な奴だなこつちの兵藤は」

「峰田君っ、何てことを言うんだい！」

「いや、でも、あからさまには言わないだろ？もうちつとオブラートに言うか、次は気をつけるよ的な感じに言うと思うぞ俺等が知っている兵藤はよ」

「で、でも、二人はイツセー君からお金を借りたんや。返すのは当然——」

——そんな呟きを耳にした途端に本人の意思とは関係なく一誠の肩から肉が盛り上がり、二つのドラゴンの頭部が飛び出し、その瞋恚に燃やす瞳を持つ頭部で不満を漏らした二人にタツクルをかまして、そのまま廃教会へ突っ込みホームを粉々にした。その瞬間を見てしまい驚く【アルテミス・ファミリア】達の体が金縛りにあつたかのように体が動けなくなった。そしてもう一つの頭も出て来て、教会に突っ込んで顔を出したドラゴン達から今にも食い殺されかねない鋭く凶悪な牙を覗かせ、低い声音の言葉を発してくる。

『今、我が主に対して何と言ったかもう一度言ってみろ貴様等』

『お前達を救った者に対して言うべき言葉ではない。食い殺してやろうか』

『あなた達を知る兵藤一誠の方がいいと言うのなら、二度と主と接触しないでください』

三匹のドラゴン達の逆鱗に触れた者達へ咆哮を上げる。ドラゴンの逆鱗、その咆哮に尻餅をつく「アルテミス・ファミリア」の団員達は聞かされる。

曰く、貴様等を守る価値はもはや無い。

曰く、恩知らずの人間に主の傍に居座る資格はない。

曰く、一誠の気持ちを知らずよくもそんなことを言えたものだ、

と恐怖で怯え、顔を青褪め、気絶、涙を流す殆どの者達に告げるドラゴン達も自分達の意味とは関係なく一誠の肉体の中へ引きずり込まれていく。

「お前等、勝手に出てくるな。びっくりしただろ」

『だが主。聞こえていただろう、この人間どもは主の事を——！』

「さつき俺もそう言ったばかりだろう。所詮俺はそいつらが知っている兵藤一誠じゃないんだから言われて当然だ。でも、怒ってくれた事に関して嬉しかったよ。ありがとう」

『主……！』

何か言いたげなドラゴンであったが、肉体の中に沈んで最後まで言えずに消えたものの、亜空間に穴を潜って去る一誠を見送っても、緊張感は解けずにいた少年少女達。その後すぐ、崩壊した廃墟の教会が一人で勝手に元に戻った。

そして部屋に戻ると元娼婦のエルフが静かにアスナと席に座っているところを目にする。部屋に戻る前に軽い食事を作った料理を見せる。

「飯、食うだろ？」

「ありがとう——」

目の前に置かれるサンドウィッチを一瞥し、一誠を見たエルフは不意に食い入るように顔を覗き込むように視線を向けた。

「・・・何か、遭ったの？」

「いや？何でだ？」

「複雑そうな顔をしてる。それに何か目が寂しそう」

人を見る目があるとと言うより、相手の気持ちを読み取れることができる類か。ただ店員にしたいが為に引き取ったエルフは何かしらの才能を持っているようで、それでも何でもないとはぐらかし話を半ばあからさまに変える。

「そう言えば、自己紹介してなかったな。俺はイツセーだ。こっちはアスナ。お前は何て名前だ？」

「私は、レイラ・ユーリです」

「レイラさんね。歳は？」

「18です」

「若い」と、つい感想を述べてしまうほど女性だと思っていた元娼婦のエルフはまだ少女であった。しかし一誠とアスナと同じで色々とな大人になっている。

「つたく、好かれてもいない女とエロいことをして何が楽しいんだか。俺には理解できない」

ベッドの縁に座りそのまま後ろへ体を倒して寝転がる一誠に、空気を讀んだ上でエルフの女性と食べながらアスナも話に加わる。

「男の人って、やっぱり、そういうの・・・したいんだね」

元娼婦のエルフが首肯する。

「快樂だけを貪りたい女もいるわ、アマゾネスのようにね。どっちにしろ男も女も気持ちいい事をしたいの」

「そうだな、性的行為であろうがなからうが。それを病的に夢中になつてしまえば麻薬のように止まらなくなり歯止めが利かなくなる。苦労するのさ結局、己を自制するのって」

同意と一誠も話に加わる。だからこそ人に理性があつて暴走を抑えられているのだ。抑えるものが無くなればただの獣かそれ以下に成り果て、人として大切な物を失う結果に陥る。

「・・・イツセーも好きな人とその、スるの？」

「スるぞ。そしたらお互い愛を感じるし幸せで胸が一杯になる。アス

ナもそうだったろ」

「……うん、そうだったね。もう、シないと思うけれど」

キリトと別れたアスナにもはや縁が無い行為かもしれない。絶対と断言はできないがこれからまた出会いが訪れて愛し合う可能性もある。その考慮して曖昧に言い返して一誠を見る。

「嫉妬する女の子って、嫌われるのかな……」

「さあ、どうだろうな。そいつの事が好きだから起こる感情だし、逆に嫉妬されないなんて男として少し不安を感じると思う」

「そうね。女の子が一生懸命男の人を愛しているのに嫉妬するなんて酷な話しょ？」

二人からの意見を聞き自分の中の疑問が氷解していくように納得を示すアスナ。

「(そっか、不安しちゃうんだ。なら、あの時キリト達に抱いた怒りに嫉妬も混じっていたかもしれない)」

が、キリト達は常人にとつて許されない背徳行為を及んだ。嫉妬よりも憤怒と悲哀が彼女を支配し、関係を自ら経ち切った。「アルテミス・ファミリア」の本拠地ホーに戻る気はあるかどうか問われれば混乱していて分からない。気持ち整理出来ない故に当初の予定通りの考えを口にしてみた。

「イツセー、あの……」

「悪いけど、今二人を寝泊まりさせる部屋は無い」

自分が何を言おうとしたのか悟っていたかのように、否定された。開き掛けた口を閉ざし、付け加えた言葉を耳にする。

「俺も忙しいから直ぐには用意できない。だから増築するまで俺の部屋で寝泊まりしてもらおうぞ」

それでいいなら、と提案を持ちかけられ直ぐに言葉の意味が分からなかったが理解した時は小さく首肯した。

「ありがとう、イツセー。厳しいのに優しいんだね」

「放っておけないだけだ。厳しい優しい同情以前にな」

「ううん、優しいわ。もう穢れているこの体を必要だつて歓楽街から連れ出した貴方は」

だから、あんなに多くの他派閥の眷族達が城に住んでいる。この家の主の性分によって集ったのだろう。キリトとは違う優しさを持つ異世界から来た人型ドラゴンに柔和な笑みを慈愛が満ちた双眸で浮かべた。そして脳裏にある思いが浮かんだ。

「(もしも整理をしている間にイツセー君のこと好きになっちゃったらどうしよう？そしたらキリト君や皆に・・・ううん、もうキリト君とは別れたんだ。それに元の世界に帰る前に叶えたいことができちゃったから、あの人がそうしていたように私も好きなようにするだけだよ)」

今頃自分に謝罪をしたい一心で探しているだろう。直に一誠に連絡をするかもしれない。その時は口裏合わせてもらおう。恋人を蔑にした行動はそう簡単に許せるものじゃないから。

それから——入浴していない二人が一誠の浴場を借りて入り、一誠もまた入って濡れた長い髪を拭き取る姿を互いに見せあったことで不思議と新鮮さを覚える。周囲に長い髪を伸ばしてる男はいなかったアスナは好奇心で異性の髪を触れなくなつて、伸ばした手は髪の毛の質感を感じた。レイラもだ。

「男の子の髪ってこんなにサラサラなの？なんかズルい」

「確かに・・・エルフ以外の男の人の髪は硬かったり整っていないのが多いのに女の人のような髪よね。不公平だわ」

「そー言われてもな」

不公平を口から溢してもどうしようもない話だ。しかも乾かした髪を勝手に弄り何故かアスナと同じ髪型にされ、笑いを堪えられる。

「・・・ごめん、笑っていい？」

「いい度胸だ。その亜麻色髪を面白おかしくしてやる」

「だったら私も結びたいわ。男の子の髪を1度やってみたかったの」

突拍子もなく始まった髪の結び合いは30分ぐらいで終わり、寝間着に着替えてるアスナと元娼婦のレイラは天蓋付きでキングサイズのベッドへ。一誠は一人ハンモックで寝ようとする。

「ハンモックって、直で見るのは初めてかも。というか、ベッドに寝な

いの？なんか、悪いよ」

「俺に性的な行為で襲われたいなら一緒に寝てやるぞ。朝まで寝かさなないぜ？」

「いらつしやい、私を買い取った時点でこの体は貴方の物だから大歓迎よ？」

「わかった、後でそうしてやるよ」

と、本人がそう言うが実際その気なんて更々無いくせに、と読書中の一誠の姿をベッドから視界に入れる。同じ境遇の異性の天蓋付きのキングサイズのベッドでレイラと横になりながらアスナは悟った。淡い光で明かりが灯ってる少年の顔を見ながら木になることを思った。レイラが言っていた、目が寂しそうにしていると。

「イツセー、あつちで何か遭ったの？」

「何でそう思う？」

「レイラが言ってたようにどこか表情が暗くなっていたから、かな」

どうなの？という彼女の視線にハンモックの網に身体を寝かせてる少年から「俺の事なんかよりも自分のことを考えろ」と言い返されてしまう。でもアスナの中では何か遭ったと悟って勝手な思い込みでも居ても立ってもいられず、ベッドから降り一誠に近づく。

「？」

なんだ？と左眼を彼女へ向けた矢先、寝間着として着ている浴衣の胸倉を掴まれ、突如彼女に背負い投げのごとくベッドの方へポーンと放り投げられた。なんでこんなことされるんだ？と間抜けな面で背中からベッドに落ちると打ち合わせしたかのようにどかしていた上掛けの布団を直ぐ被せ、元娼婦のエルフが右半身を豊満な体で包み込み、すかさず布団の中に潜り左半身にしがみ付くアスナに動けなくなってしまうって検討がつかないと目をパチクリする。

「あの、アスナさん。これは一体何の真似だ？」

男女が同じベッドで寝てしまうのは誤解を招く行為だ。キリト達の二の舞にならないにはならないと心情の、ハンモックで寝ようとする一誠を察している筈のアスナ。気を遣われてる、それが少女の傷心に優しさが染み渡って感謝の念を抱く。だが、あんな事言われたまま

一人で寝ようなんて孤独でいようとする一誠を優しき少女はどうしても放っておけなかった。

「何の真似も何も、寂しそうな男の子と一緒に川の字になって寝ようと思っただけだよ」

「それにしても凄く豪快にベッドへ来させられたような気がするぞ」
「気にしちやダメ」

ベッドの布団に包まれ一誠に密着する中、アスナの鼻腔は一誠の体臭を感じた。別れたばかりなのにキリトではない男に体を押し付けるこの行為に羞恥心が無いわけではないが、別れた男とは違う安心感が心に芽生えた己を挟んで添い寝をする少女達に一度溜息を吐き、諦めた感じで瞑目、寝息を立て始め出したのだった。

「(キリト君と違う匂いだ、それに暖かい……)」

夢の中へ旅立った男の嫌ではない匂い。布団の暖かさが異性の体臭と相まって一誠に抱き締められているような感じを覚え、最悪な日を過ごした少女は心なしか安心感が心を満たされ、今日はいい夢が見られそうだと眠りにつく——ことはできなかつた。何故なら、元娼婦が服を脱いで全裸となり一誠の半身へ抱きついたからだ。

「なっ、あ、貴女……な、何を……っ?」

「子供が寂しくなった時は親が温かく包み込むようにして抱きしめてあやす。男が嫌なことや物事に対して不安になった時、女の体で気持ちを和らげ忘れさせるの。この人は前者と後者、きつと両方。だから私ができることをするの」

慈愛の心で一誠を癒そうとする彼女に感嘆し、裸になれないが賛同して密着したまま眠りに着くアスナ。

冒険譚9

元娼婦のレイラが住み着き数日が経過した。一誠が娼婦を身請けした理由、それは『異世界食堂』の店員にしたいが為に歓楽街から買ったのだ。身請けするのに歓楽街を牛耳る『夜の女王』——イシユタルから許しを貰わなければならぬ。そう簡単に行かないだろうと思いつながら直接美の女神イシユタルと対面し、エルフを引き取る了承を乞うた数日前の話し。

『好きにしろ』

『あつきりだな?』

『私はお前達が思っているほど忙しい。構っている暇もない。そのエルフ以外にも欲しい娼婦がいたら眷族以外、金を払うならば好きなかだけ私の了承を取らず引き抜け。——だから二度と私に関わるな』

『それが一番本命だろおい』

まるで厄病神か恐怖の魔神か何か、終始ずっと一誠に顔を向けず一度も視線を合わせなかったイシユタルは早々に退出してしまつて二人は拍子抜けした記憶は新しい。

問題も無く彼女を引き取ることが叶い、後顧の憂いも無く一誠は彼女を料理のスキルを叩きこむ専念ができ、新しい朝を迎えた。

「うーん、ちよつと違う。こうやってフライパンを箸と一緒に動かして焼いた卵を丸めていくんだ。やってみ」

優しく丁寧に教え込み、料理スキルを伝授せんとする一誠の姿にリヴェリア達は椅子に座つて眺めている。

「元娼婦のエルフ、の方ですかリヴェリア様」

「ああ、私達エルフは長寿種族であるから、店を受け継がせる気ではないのかもしれない」

王族の女性とエルフの少女が新しい同居人の姿を視界に入れ、「元娼婦」言う言葉にエルフの少女アリシア・フォレストライトは綺麗な柳眉を寄せた。

「仮にもそうだとしたら何故彼女なのですか?都市には一般のエルフも住んでいるのに、娼婦のエルフがなんて……」

「理由は定かではないが、同胞が自ら好んで娼婦に身を堕ちるとは考えにくい。エルフの特徴を知っているイツセーは、それを考慮して引き取ったのかも知れん」

好きでもない男と肌を重ね、情欲を貪りその対価として金銭を得る行為をする意味を指すのが娼婦。潔癖性が強いエルフからすれば忌避的な存在だ。同じ種族か認められた者にしか肌を触れさせないエルフであれば複数以上の男と寝る何て……。

「娼婦になるなんて……でも、彼は私達エルフを助けてくれた」
好きでもない男に体を捧げる。今では「イシユタル・ファミリア」に所属している転生者に純潔を奪われそうになった時に助けてくれた少年がそうしたように元娼婦のエルフにも同じ気持ちで助けたのだろうか？それとも本当にただ店の店員にする為に？

「……」

同席していた金髪金眼の少女は興味深々な目でリヴェリアに話しかけた。

「しようふって、何？」

「お前が知るにはまだ早すぎる」

教育に悪い話はしないハイエルフは頑な気持ちで教えなかったが、教えてくれないなら教えてくれそうな人に訊ねればいいと椅子から降りて、料理の指導をしている一誠のもとへ。

「イツセー、しようふって何？」

「しようふ？どっちのこと——って言ってもアイズには分からんか。まあ、一言で言えば料理を作る時にできるでんぷんって奴だ」

「でんぷん？美味しい？」

「料理を美味しくする調味料だから、余り味は期待しない方が良いぞ」
軽くアイズの期待に応える答えをした一誠に心中で称賛する。因みにそのでんぷんとやらは何だとりヴェリアも気になっていた。

「ところでイツセー。そのエルフを店員にするというならば、他の者も雇うつもりでおるのか？」

違う意味で気になっていた椿の疑問のの問いにキッチンから「ああ」と肯定の言葉が返ってきた。

「食べにくる客が増えてきたからもうそろそろウエイトレスを増やそうと思っっているんだ」

「そうであったか。しかし、どうやって集める？」

「できれば荒事に慣れた元女冒険者がいいなあーって思いながら考えてる」

野良フリーの冒険者、しかも女性となると見つけるのは困難だ。一誠の望みを叶えるそんな冒険者はオラリオにいなければオラリオの外しかいないのかもしれない。

「……じゃあ、イツセー。私も手伝えるかな？」

「アスナ？」

「一応『ファミリア』は在籍してる状態だけど、異世界の料理は作れるし腕も立つよ？」

自分を売り込みだした少女の提案に自分が望む人材と能力に当て嵌まることを認め、確認した。

「いいのか？」

「うん、居候させてもらってるから何かちよつとしたことでもしないと悪いし」

「……健気な少女に育っているようで俺は感心したぞ」

それぐらいの気概を異邦人のヒーロー組もできないのかと嘆息したのは本人だけの秘密。アスナの乞いに了承して彼女も連れながらレイラを始めて『異世界食堂』に招き、ウエイトレスとしての仕事を教えていた。女性店員専用の制服を身に包み自分に与えられた仕事の内容を真摯に店主の話を耳に傾け聞いていた時、閉じている扉を叩く音が鳴った。開店の時間はまだ先なのだがもう来たのかと二度目の叩く音と共に扉を開けて断りの言葉を掛けようとしたが、来訪者の出で立ちを見て言えなかった。恰幅のいい女性を始め、転生者から救った女性達だと認知したからだ。

「まだ開店の時間じゃないが、別の用件だと思っても？」

「話が早くて助かるよ」

女性だらけの一行を中へ招き入れ、好きな席に座らせて代表者たる女性と話しを交わす。

「もう知っているだろうけど、俺はこの店の店主だ」

「アタシはミア・グランド。前までは『豊饒の女主人』って酒場を構えていた女将でコイツらはウチの店員で娘でもあるわけだがね。【イシユタル・ファミリア】の小僧達に店をぶっ壊された揚句、娘達を攫われた。まずは礼を言わせてもらうよ。ありがとう」

ミアが頭を下げて感謝の念を店主に送ると元酒場の従業員達も倣って頭を下げる。それを少し擦ったように頭を掻き「気にするな」と返答する。

「俺が助けたい仲間と一緒にいたからな。少し悪い言い方をしてみようが、ついでに助ける事が出来たような感じだ」

「ついでに助けられたんなら御の字だよそれは。アタシさえ手出しもできず、無様に店や娘達を奪われたんだからね。どうやって助けてアタシが何者なのかも詮索はしないよ。その方がよさそうだしね」

「ああ、そうしてもらえると助かるかな。何せ俺は訳ありな者なのでね」

「そうなのかい。奇遇だね、ウチの従業員達も訳ありな子ばかりだから話し易いはずだよ」

その言葉の意図はなんなのか、アスナとレイラは疑問符を浮かべる。女性従業員達を見渡しとてもそうは見えないが何人か暗い目をしている事に気づく。

「で、世間話は終わりにして本題に入ろうか。元酒場の従業員が雁首揃えて俺の店に来た理由は？」

尋ねる一誠の問いにミアは店内を見渡しながら返答する。

「アタシ、一人でこの店を切り盛りしているそうじゃないか。しかも【アポロン・ファミリア】に打ち勝って大繁盛して大変じゃないかい？」

「まあ、大変だったのは確かだ。今は安定しながら食べにくる客が増えたのも実感してるし」

「——なら、アタシらを雇うつもりはないかい？酒場で働いていた時の料理の腕前と客の対応やならず者やゴロツキの相手は慣れているよ」

唐突に自分達を売り込み始めたミアに、探るような目付きと悟った風に見つめる店主。彼女が何者なのか全てではないがある程度察している。なので質問した。

「何でこの店に働きたいんだ？他の店でも雇ってもらえるだろうし、壊された酒場は『イシユタル・ファミリア』に請求して復興でもできるはずだ。慰謝料込みでな」

「最初はアタシもそうするつもりだったんだけどねえ、神に言われたのさ。ここで働いてみたらどうだって」

「フレイヤにか」

「なんだい、アタシのこと知っていたのかい」

否と首を横に振り、「フレイヤのところには半脱退状態の冒険者が店を構えている」という話だけを聞いたと教えて話しの続きの催促を促す。

「アタシよりも料理の腕が立ち、シル達の話じゃああの三人の男共を圧倒する強さもあるらしいしね。それに『異世界』の料理ってどんな料理なのか知りたい気持ちもあるんだよ」

「門外不出だからな？」

「男がケチケチするんじゃないよ」

「こっちはそれでウリにして商売繁盛しているんだよ。許可もなく真似して作られたら賠償金を払いに押し掛けてやる」

店主の手がミアに伸びる。少年の言葉の中に含まれた意図を察する前に、ミアの大きな手が伸ばされた手を握って握手を交わす。

「お前等が使えるようになってもコキ使うからな。最初は異世界の料理の作り方をマスターしてもらうまでは俺達が付きつきりで知識を叩きこんでやるつもりで覚悟しろ。目標は一人でも全種類作れるぐらいにな」

「この店の料理はどれだけあるんだい」

無造作に分厚い本を掴んでミア達に見せつけた。これがこの店の料理のメニュー表であると教えるように「これ全部」と短く言って手渡す。彼女達が異世界の料理の品書きをパラパラと軽く見続けた結果。色々な意味が籠った溜息が吐かれた。

「……随分と多いね。これでよく一人で店を切り盛りしていたのかと思うと驚嘆してしまうよ」

「俺には秘密があるからな。だから俺一人でも十分店を切り盛りできるわけだけど、ミア達がこの店に働くなら俺と同じ作業の速さでしてもらわないと困る。いいな?」

アスナとレイラは自分達以外にもこの店で働くことになった彼女達を迎えた瞬間を見た。席から立ち上がる店主に釣られて視線が集まり二人も呼応して立ちあがる。

「それじゃ、開店の時間が迫ってるから調理ができる従業員と料理が出来ない従業員は二手に分かれる。仕事の内容と仕方を叩き込むかな」

そう言いながら魔法で分身体を作り上げる店主にアスナを除いてレイラ達は目を丸くする。

「ふ、増えた…….?」

「魔法で自分自身を増やせるんだ」

「これがこの店の秘密の一つだよ」

しかも自分の意志で喋っているから驚きを通り越して絶句する。だが、自分を何人も増やせることができるなら確かに一人でも店を切り盛りできると納得する思いを抱きながらミア達も立ちあがった。

「最初は二人と一緒に働くのだと思ってたところ、一気に従業員が増えたし、この店のルールを教えておこう」

店主が全員に話しかけた。

「俺はこの店の『主』であり『法』でもある。誰が何を言おうと絶対だ。例え相手が神だろうが冒険者だろうがギルドだろうがいちやもんをふっかけてくるなら金だけ奪って追い出す」

「そ、それって強奪じゃないのかな……」

両腕を組んで踏ん反りがえる店主に、アスナは恐れ戦く。店主は気にしない。

「そして主人である俺は、全力でお前等を守る。最強の能力や最強の人間がこの店とお前等に手を出すなら、容赦なく潰して埋めてやる。だからお前等は安心して馬車馬のように働き、美味しい飯と酒を振る

舞って、多くの客と笑みを分かち合え。それがこの店のルールだ覚えておけよ」

——後にどんなに強い冒険者も、無法者も、悪党も、神すらも裸足で逃げ出していく怖い店になるのだがまだこの時の店主達は気付かない。逆に一度入るとそこは異世界に迷い込んでしまったような異風を醸し出す店内が見渡せる、運ばれてくる料理と酒はこの世の物とは思えない美味と美酒で客を幸せにさせる——異世界の食堂。

「分かったなお前等。今日から俺のことを店の中では店主と呼べよ。家族と接するようにな」

人懐っこい笑みを浮かべる店主にアスナやレイラ、ミア達は顔を見合わせて頷いたり微笑んだりして言った。

「よろしくね店主」

「よろしくお願ひします店主」

「今日から頼んだよ店主」

満足そうに頷く店主は調理ができる従業員達をキッチンへ引き連れる最中、ホールで働く組の従業員達の中から薄鈍色の髪を揺らす少女が声を掛けてきた。

「助けてくれた恩を一生懸命働いて返しますね店主さん」

「居候しているフレイヤとオツタルの分も働いてくれると助かるがなしル？」

彼女——シル・フローヴァも転生者に攫われ、助けられた一人でありフレイヤとオツタルと『幽玄の白天城』に居候している一人でもあるので、既に顔見知り以上の関係である。

「じゃあその分のお給金も……」

「それに見合う働きをしたら考えてやろう。前の酒場の給金はどうだったか知らないがな」

こうして『異世界食堂』に女性従業員達が働き始め、店の料理の味を占めた客達は何時ものように足を運び店内に入るといつもと違う事に気付き変化を楽しんだ。太陽が西に傾きながら沈み月が顔を出した時間帯でもだ。

「いらっしやいませ。ようこそ、『異世界食堂』へ」

丈が膝の下まであり服越しからでも分かる胸を強調している青色のワンピース、白色のフリル付きのエプロン、頭にはカチューシャ。その制服を着こなしている見目麗しのウェイトレス達に出迎えられた客達は。

「うおおおおおっ！ ついに綺麗なウェイトレスさんキタアーツ！」

「この店に通い続けて俺あ本当に良かった・・・っ！」

「——従業員にちよっかいや手を出したら、出禁にすると店主からの伝言です。ご了承くださいませお客様」

「あ、はい」

大いに喜んだのであった。ホールでは彼女等の存在が大きく、いつもの二倍程料理を提供できるようになり店主は雇ってよかったと満げに心の中で笑った。キッチンの方では相も変わらず魔法で己を増やした店主達が新しく入ってきた従業員につきっきりで異世界の料理の作り方を教えながら、忙しく料理を作り続けている。そんな従業員達と同じ制服を身に包み、休むことも無く腕を動かし料理を作り続ける亜麻色の髪の少女。腕前は作ったことがある料理であれば申し分が無いぐらい称賛に値する。

「流石だな。即戦力は物凄く助かる。ありがとうな」

自然と出た言葉に彼女アスナも照れず「どういたしまして」と相槌を打って返し、店主とアスナは肩を並べ長い一日を食材と燃え盛る火と向き合って過ごさのだった。

その頃、摩天楼施設『バベル』の中で三ヶ月に一度の神々が集う神会^{デナトウス}が行われていた。上級冒険者になった各「ファミリア」の団員達への命名式、二つ名を決め合っている真つ最中である。神々にとつて痛々しく面白い二つ名を、笑いと悲痛の悲鳴が部屋の空間に湧く中で決まっていき、全て決まり終えると部屋^{フロア}からぞろぞろと出ていく神々から『異世界食堂』の話題が出てくるのを、まだ席に座ってるロキ達の耳に入る。

「今日も今日で酷い二つ名の決め合いね」

「いつもの事やんかファイたん。それよか、アマテラス達、久しぶりや

なあー」

「そうね。極東で本拠地を構えているから仕事に追われていて、ようやく戻ってこれたわ」

極東の三大主神、イザナギ、イザナミ、アマテラスが久しく顔を出して神会デナトウスに参加していた。口の端を吊り上げ、笑みで「そうそう」と話しかけるロキは楽しげに語った。

「自分等がおらん間にイツセーは大活躍しておったぞ。今じゃオラリオに『異世界食堂』を知らん子供はおらんかもなあ」

「極東でも『異世界食堂』の話聞くようになってる」

「やっぱりそっちもそうなのね。私の方にも小耳に挟んでるわ」

「と言うより、私の子供がその話を世界中に広めてるところ」

仮面を付けてる女神が小さく挙手しながら主張。当然のように回りから言い触らし回っている彼女へ「オイッ」とツツコミや何か言いたげな視線を送る主神達は呆れた。

「アマテラス、久しぶりに」

「ええ、あの子の城に泊まりましたよ」

二柱の女神が楽しげに、雌の顔をして話していた瞬間をヘファイストスとフレイヤは見逃さなかった同時刻。

「.....」

オラリオに連なれて向かう馬車が南部の門へと向かっていった。その一台の中には息を殺しているかのように静かに座っては、頭まで被っている外フーデッドローブ 套を着ている者がいた。その者と相席してる白髪頭に眼鏡を掛ける初老の黒色の燕尾服を着ている男が重く口を開けた。

「オラリオに着きました。降りる準備はよろしいですか」

無言で肯定する人物は何も返さない。馬車の中は異様な空気を醸し出して緊張感が張っていて、老人もそれ以降口を閉ざし、馬車が停止するその時まで沈黙を保とうとした。

きゆう.....。

静まり返った空間の中だからこそハッキリと顔も隠してる人物の

腹部から可愛らしい鳴き声が聞こえた。何かに耐えるように肩を震わす人物に老人が微笑まじげに吐息を溢す。

「中に入り次第、有名な店にでも食べましよう」

その指摘だけはフードが立てに揺れた際、隠れていた髪の一房が、さらりと溢れ出た。

夜の『異世界食堂』は神々と多くの冒険者や一般人で溢れ返りそうな程に全席が人で埋まり掛かっている。見目麗しいエルフがウエイトレスをしているならば、尚更集りが絶えなくなっている時に『異世界食堂』へ足を運んできてくれた客達がやってきた。

「いらっしやいませ、『異世界食堂』へようこそ。初めての客だな？」
「今話題の店はどこだと聞けばここだと、何でもこの世の物とは思えない美味な料理を出すとか」

「期待を裏切らない料理を提供するよ。こちらへどうぞ」

店主自ら客達を一番奥の壁際の席へ案内し、座らせた。

「注文が決まったらこの鈴ベルを押して待っていてくれ」
「うむ、わかった。では早速なのだが」

客の一人、黒の燕尾服を身に包む老人が応じ、メニューを見ることが無く視線を外フレッドロープ 套で頭まで隠している人物へ一瞥して店主に注文を頼んだ。

「この店で一番の人気メニューと甘い物を頼む」

「うちの料理は全て以上も以下も無く、人気のメニューなんだが。メニューを見てくれないと期待に添う料理を出せるものが出せない」

「ならば、貴殿が一番美味しいと断言できる物でもよいから早く作って参れ。儂らは腹が減っておるのだ客を待たすな」

一方的に、そして変わった注文を要求する老人へ怪訝な表情を浮かべながらももう一人の客をジツと視界に入れ、踵を返して遠ざかった。

「ああ、待て。一刻も早く儂らを優先的に料理を持ってくるんじやぞ。よいな、あまり儂らを待たせてはならぬぞ店主」

「ならこちらからも。店の中で騒動を起こしたら、即刻店から出て」

らうのでご了承をしてくれお客様」

身なりからしてどこぞの貴族か富豪の者の従者なのか、そんな物言いをする客は開店して以来初めてであると思いなからキッチンに戻り、料理人達に向かって料理とデザートを要求、数十秒で要求した注文が用意され客の要望通り直ぐに運び込まれた。

「おまちどう、ビーフシチューとプリンアラモードだ」

「む……早いな」

「優先的に、と言ったお客様の要望に応えただけだ」

「そうか。良い心掛けである。では、この料理とデザートの詳細を教え——」

「特定の客に留まったりしている暇はないのでこれにて失礼する。知りたかったらちゃんとメニューに書かれている詳細を読んで確かめてください」

一礼し、店主を呼び掛ける客の方へと足を運ぶ。白い眉根を寄せて「儂等に対して何て無礼な」と気持ちの同意を求めようとテーブルを挟んで座っている人物へ顔を戻したその視界には。肉と野菜の旨味が凝縮されたスープ、軽く炙った後、限界まで煮込まれた肉にじつくりと長い間煮込まれた野菜を一心不乱に食している人物が映り込んだ。余ほど空腹だったのか、それともあまりにも美味しいのか、その両方か定かではないがビーフシチューを瞬く間に完食してはデザートに手を伸ばし、銀色の匙をプリンに差し込むように押し付け、掬い取る際にぷるんと柔らかい弾力を窺わせ口の中へ運ぶや否や。

「——っ」

甘さとほろ苦さが同時に堪能したようで体を硬直させたかと思えば、スプーンを持つ手はプリンアラモードをビーフシチューと同じ感じで掬い取る仕草を繰り返しつつ夢中に食べ始める。啞然と自分も食べることを忘れ見つめていた老人も我に返ったように己の料理を差し出す。

「よろしければ爺やのも食べて下さいませ」

「……」

従者の言葉に謎の人物は呼び鈴を鳴らし、店主を喚び付けた。今度

はエルフのウェイトレスが注文を受けに来た。

「はい、ご注文は何でございますでしょうか？」

袖から伸びる色白の手がビーフシチューを指し、人差し指と中指を立て、無言で注文を頼んだ。ウェイトレスはその仕草を見て首肯する。

「ビーフシチュー二人前ですね。かしこまりました」

注文を受け取ってキッチンへ赴く彼女を見送り従者からデザートだけ受け取り、ビーフシチューを返して甘いデザートの味の虜になったかのようにスプーンを点灯ライトの光で鈍く光らせる。

「美味しゅうございますか」

こくり、とフードが縦に揺れる。従者はこんな人物の様子は久しく見るとある確信を得て、訊ねた。

「まだこのオラリオの店を全て確認しておりませぬが、この店で決まりですか」

従者の問い掛けに、スプーンを持つ手が止まるもその逡巡は一瞬で肯定と首肯するフードの中に消える。決まりだと沈黙で応えた謎の人物に真摯な面持ちで胸に秘めるとある使命を果たさんと意を決して、スプーンを持つ手でビーフシチューへ伸ばす従者。

「お、おお、こ、これはっ……！！」

「ありがとうございましたー」

「今日も美味しかったよ、また明日もダンジョンで稼いだ金で食べにくるぜ」

「命を落とさない程度で稼いでくれよ。ご来店をお待ちしております」

最後の一組の客を残して去る客を見送る店主とウェイトレス。暗闇の向こうへと笑顔を浮かべながら消えていく様子を見ず、互い顔を見合わせエルフは「ふう」と溜息を零した。

「初めて働いた割にはよく頑張ったな」

「ウェイトレスって凄く疲れるのね。もうへトへト……」

「それを毎日味わう経験だ。これからも頑張ってくれ」

「頑張ったご褒美が欲しいわ。じやなきや働いてあげない」

歓楽街から引き取られた元娼婦が何を凶々しい事を、とこの場にアリシアがいたらそう言いそうな発言に店主はただ苦笑いを浮かべる。「これからも頑張ってくれたらご褒美を上げるよ」

「約束よ？」

言質は取った、とウエイトレスは嬉しそうに動き出す店主の背中を見て頬を赤らめながら笑んだ。店主が厨房に顔を出すと食器を洗っているアスナにも話しかける。

「お疲れ様。キッチンで働くの初めてなのに頑張ったよ」

「冒険者になってから体力が前より増えて、まだまだ疲れてないよ」

「神の眷族になった特権だな」

「うん、凄いね【神の恩恵】って」

朗らかに何とでもない会話をして、仕込み終えた分身達がいらない二人きりの雰囲気と空間に気付き、数日前のアレの記憶も鮮明に思いだして不思議そうな顔をする店主からバツと体ごと顔を逸らしたところでウエイトレスから声が掛った。最後の客が勘定を求めたのだろうと思つて彼女を置いて厨房から離れレジへと赴いた。

「店主、勘定を払う前に話がある。とても大切な話だ」

「食い逃げをしようって言うならそれ相応のお仕置きをするぞ。身ぐるみを剥ぐとか」

店主の指摘に「違うわ!」と怒鳴る従者はウエイトレスのエルフを一瞥し「儂等だけで話しがしたい」と申し出る。店主は彼女をこの場から遠ざけるとその言葉の裏を悟るが首を横に振った。

「今言え、こつちもまだやることがあるんだから手短かに話せ」

「そのエルフに任せればいいではないか」

「彼女は働いて間もないんだぞ。まだ分からないことが多く一人で任せれないんだ」

「これからは成すことはとても重大で極秘なのだ。余計な者達の耳にまで——」

「アスナー、ちよつと来てくれ。重大な話をするつてよー」

「人の話を聞かんかあー!?!」

結局、呼ばれたアスナも椅子に座って、従者の思い通りにならぬまま遺憾ながら話を進むことになってしまった。テーブルに膝を立てて頬杖をついている姿勢で、面倒くさいなーと雰囲気と顔を隠さない催促する店主。

「ほら、さっさと言っちゃってスッキリしな」

「それが人に対してする言動か」

「別に金を払って帰ってくれたってもいいんだ。こっちはまだやらなきゃいけない仕事がある上に疲れてるんだ。そっちの都合に合わせて話を聞いてやる姿勢でいるんだからよ」

「ぐぬぬっ……」

こちらは真面目に話をしようとしているのに店主は不真面目な態度でいるのが気に食わない従者は唸る。もう少し態度を改めよ——と口を開こうとした気配を感じたのか、従者を手で制する謎の人物。三人と従者の視線を一身に受け止めるその者は、初めて口を開く。

「爺よ。乞うているのは私達だ。彼等を責めも私達の流儀に合わせる必要はない」

「し、しかしですな……」

「これから乞おうとしている私達が誠心誠意を示さなければ、信頼は得られない」

フードに手を掛け外した。隠れていた頭髪は豊かな金髪、瞳は緑色。彫刻で整えられたかのように綺麗な顔立ちと凛々しさが店主達に印象を与えさせる。若さはアスナと店主よりも若く美男子、貴公子の一言に尽きる彼は名乗り上げた。

「私はダオス、ダオス・ラーズグリーズ・クリールフス。帝国の王位継承者最下位、百七位の王子だ。訳があつてこの世界の中心オラリオに忍び込んだ次第だ」

「なっ、わ——!?!」

従者の老人が明らかな反応、動揺と焦燥に駆られて声にならない言葉を発し、それが店主達に事実であると証明させたのも当然であった。

「帝国つて、あのオラリオと魔法の国と同じぐらい最大都市で多くの神の眷族を抱えてる国だったよな」

「その認識で大体合っている」

「ふーん、しかも最下位とはいえ王子がおつかない都市に自ら変装してまでやってくる理由は何だ？しかも料理店を営んでいる俺にさ」

あまりにも異様なことであることはアスナもレイラも理解している。わざわざ遠い国に来て直接店主に乞う理由が分からないでいる。店主も同じ気持ちで理解できない。ダオスはその疑問に応じ語り始めた。

「爺やが言ったようにこれは極秘である話だ。我が父の父親、私にとつて祖父に当たる先代の王が崩御になるのは時間の問題なのだ。そこで先代が亡くなる前にとある望みを現王にこう告げたのだ。この世の珍味、もしくは懐かしい故郷の料理を食べたいと」

「故郷の料理？」

「ああ。だが、先代の故郷はどこなのか父も私達兄弟は分かる筈もない。聞いたこともなければ父にすら話した事はないのだ。現王は先代の願望を叶えんが為に配下の者達をこの世の珍味を探せさせるのはいいが、同時にある掟も発効した」

それは、と彼は口にしたのは。

「先代を喜ばせることができた王の配下——つまり王位継承権が与えられている私達兄弟の中で一人、次期王位を継ぐ絶対の権限が約束される。理解しているだろうが私も王位を狙っている一人である。」

一区切りをして「「うん？」」と三人揃って不思議そうに反応をさせた。

「私は王位を継ぐ気はない。ただ、王位を継がない代わりにある願いを聞き受けて欲しい事があるのだ。勿論、あのお優しいお爺様が笑って喜んでくれる料理を食べさせてあげたい気持ちは嘘ではないが、私は何としても勝たねばならないのだ。私の望みを叶えるために」

「い、いけませんぞ若っ。そのようなことを申されては！貴方様は——」

「はい、従者は黙ってる」

テーブルに身を乗り出してスピッツ、と従者の額に人差し指を突き刺すと、彼は白目を剥き力なく深く座った状態で気絶した。当然ダオスは当惑する。

「気絶させただけだ。小うるさいからさ」

「今の動き、少したりとも見えなかった。もしかや冒険者か？」

「半脱状態だがな」

「……これでも爺やはL.V. 3の帝国内では指折りの実力者なのだがお前は同じかそれ以上なのか」

人は見掛けによらず、と言ったかー。

「んで、お前が俺に頼みたいことは大体理解した。先代の為に料理を振る舞えってことでいいんだろ？」

「その通りだ。こうしている間にも私の兄上達が他国から喚び寄せた料理人達の料理を先代に献上しているだろう。当然ながらだが、百以上も料理を食べるからには用意した料理は決まったその日に用意しなければならぬ」

「それって何時なんだ？お前が料理を提供する日は」

至極当然の疑問をぶつけ、ぶつけられたダオスは真摯な面持ちで「一カ月後だ」と告げる。

「だがオラリオから発つまで半月の時間がある。元々私は世界の中心、世界で唯一ダンジョンがあるこの都市ならば料理を専門とする【ファミリア】があると信じて探しに来たのだ。そうでなくても他の店にも探して決めるつもりだった」

「うん？そんな【ファミリア】がオラリオにいたっけ」

「言っただろう。信じて探しに来たと」

つまり何の情報も根拠も宛てもなくオラリオにいる神々に懸け来たダオス。無謀に等しい行動は成功の甘い果実を実らしたたのである。

「あの、その間に王位を継ぐ王子が決まる事は？」

「それはない。先代は全てを食してから決めると仰っていた」

それで誰がどの料理なのか覚えていられるのか？と疑心を抱くが

先代自身の決めた事だからダオスの従者がいるように記録を留める役割を担うものも存在しているかもしれないのと、アスナの質問にダオスは有り得ないと否定し彼女の杞憂は解消された。

「……だが、王位継承の位が高い兄上程、狙われる」

「あー、やっぱり実際にもう起きちゃったのか?」

首肯するダオス。

「表向きではそれぞれ奮闘しているものの。水面下では私達王子の間で熾烈な争いを繰り広げている様子だ。死者こそは出ていないが、先代に献上する料理を作ってもらう料理人や料理があらゆる方法で妨害行為される等、王位継承権の掟が勃発して一カ月経ってから日常茶判事になっている」

「……」

住む世界が違えば、その手の者でない限り関わることはないと思っていた話が、よもやこんな形で触れることになるなどアスナとレイラは思ってもいなくて呆然とする。

「私からの話はこれで以上だ。今度は君が私に協力してくれるかどうかなのだが」

「ん、協力してやろう」

「協力してくれるなら、私ができることであれば何でも叶える——なに?」

突拍子もなく引き受ける店主に耳を疑うダオス。アスナとレイラも本当に?と真意を確かめる目で店主へ視線注いでいた。

「引き受けてくれるのか?」

「俺の料理が求められてるなら応えるのが料理人の務めだ。相手が誰であれ料理を提供するのに理由何ぞ必要か?」

人懐っこい子供のように笑ってそう言う店主。その笑みを見てアスナ達も釣られるように笑いダオスも苦笑する。

「感謝する」

「どういたしまして。それとこれからどうするつもりなんだ?」

「念の為に他の料理店にも顔を出す。この店に決めたがオラリオで一番とは限らないからな」

「だったらもう少し服を変えた方がいいぞ。知っているか分からないけど破壊と混乱、混沌を齎そうとする闇の派閥が昼夜問わず神出鬼没で暴れ出すんだからな」

「爺やより強い者がいると?」

「確実にいると思つた方がいい」

「こりや、護衛をつけさせた方がいいかもな。と頭の中でその考えを過らせ席から立って最後の仕事に取り掛かる。」

明日の為の仕込みを終え、ダオスと従者を『幽玄の白天城』へ招き入れるとやはりと言つたか、リヴェリア等に質問攻めを受けた。正直に話すとロキ達主神はオラリオに忍び込んだダオスと従者を感じした風に、愉快そうに歓迎した。最大派閥の主神達から話しかけられ、紳士の立ち振る舞いをするダオスは従者の老人が気絶したまま応接間のソファに寝かされた。

「・・・店主、お前は一体何者なのだ。オラリオの双璧を担う主神や最大派閥と同居している以前に、他派閥同士の主神が一つ屋根の下で生活をしている等、本来はありえないことなのだが。いや、そもそもこの城は一体何なのだ?」

「諸事情でしばらくの間住まわせているだけだ。それにそう簡単に秘密は教えない——」

ガシツ、

「久しぶりね。今夜は一緒に寝ましようか」

「その前に一緒に風呂入る」

どこからともなく現れた二柱の女神に引きずられていく彼をダオスはポツリと訊ねた。

「今の女神達は・・・それに、この城の中では何時もこんな感じなのか?」

「私達はごく最近来たばかりだから何とも・・・」

実際にそうなのである為、この城で巻き起こる日常を把握しきれておらず曖昧な返事しかできないアスナと対照的にレイラは爆弾発言をする。

「それより、あの女神様も一緒に寝るって……イツセーさんの部屋で寝るのかな。そしたら夜這いができないわ」

「——夜這いができない、どういうことですか」

何時からいたのか、そして聞き捨てならないと不穏な気配を発しているもう一人のエルフのアリシアが三人に近づき、レイラに問いを投げた。二人のエルフが初めて会話が成した瞬間でもある。

「貴女、あの方に歓楽街から引き取られて卑しい身分では無くなった筈です。何故慕ってもいない殿方と肌を重ねようとしているのですか。理解できません」

「……貴女には娼婦の気持ちなど分からないでしょう」

「ええ、理解もしたくないです。純粹で潔癖なエルフなら尚更です。なのに貴女のようなエルフがいたとは今でも認め難い存在です」

本心から忌避する言葉を述べ、侮蔑の色が滲んでいる目を、察している彼女の心情を受け入れる姿勢で自嘲的な笑みを浮かべ語り始めた。

「確かに、私はもう純粹でもなければ潔癖ではない卑しいエルフですよ。でも、娼婦として身を堕ちる前までは貴女や他の同族と同じく容易く肌を触れさせなかった。しかし、この世界ひいてはこのオラリオに生きるには生きる努力をしなければならぬ。そして、世界を知らない人は言葉巧みに騙され、誰も助けてくれない人気のない闇の中で身ぐるみを剥がされ、暴力と蹂躪、凌辱の凄惨を受け、私の人生と身体は冒険者によって歓楽街へ売り飛ばされました。それでも生きるために好きでもない男性に身体を差し出す日々を暮らすしかない。私のような弱い者達は、貴方達冒険者のように強くもなければ強い者に淘汰され、食い物にされる憐れな者ばかりなのです」

「……」

「そうして身体を差し出し、股を開いて男を受け入れている間に快楽や性欲の虜になってしまった私のような他の女も少なくはない。だから、例え純粹な気持ちで歓楽街から引き取ってくれたとしても私の心と身体は今でも男を欲している卑しい熱と炎に焦がれ、求めてしま

う」

娼婦に堕ちてしまった女の末路を目の当たりにしたアリシアは口を閉ざしたまま何も言えなかった。上から目線で何か言ったところで、正論を論破しようとする相手自身が身を以って体験した暗い過去は変えようがないし覆せれない。

「身も心も綺麗なまままでいられるのは、ただ運が良かっただけよ。全員が全員、好きで娼婦になったわけではないことを最大派閥の眷族のエルフである貴方がどれだけ綺麗事を並べようと理解なんてしてくれる何て思っても無い」

「っ……」

「さっき理解もしたくないと言った貴女が私の大切な物を理不尽に奪われた気持ちなんて、分かってくれると望んでもいないわ」

歩きだすレイラに引つ張られて連れられるアスナ。アリシアの真横に通り過ぎる際——それと、と言葉を付け足す。

「私が彼に慕っていないと思っている間に、彼は誰かに取られるわよ」
女同士の話し合いに加われず、完全に置いてけぼりにされていたと思われていたダオスの姿はどこにも見当たらなかった。仕方なしに従者が寝かされている応接間で一夜過ぐそうと踵を返していたのか、既にいなくなっていた。一人残されたアリシアはレイラの過去を知りもせずエルフの性が表に出てしまつて考慮をしなかった己は傲慢ではなかったのか、と恥を堪えていた時、金髪金眼と銀髪青眼の幼女が真摯な表情で走ってきた。

「……予想通り来たわね」

「いらっしやい」

「うむ、待っていたぞ」

「……」

アマテラスとイザナミと一誠が、一誠の部屋に入るとフレイヤとヘファイストス、リヴェリアや椿が三人が来るのを待ち構えていた。夜中に何故四人がこの部屋に先回りしていたようにいるのか、女神としてでなく一人の女の本能が察した。彼女等以外に純粹に添い寝を求めに来たアイズとアリサもいたが少年は気落ちした風に発した。

「俺の意思は関係ないのか」

「久しぶりに一緒に夜を過ごしたいの。駄目？」

「これ、絶対添い寝だけじゃすまないぞ」

危機感を覚え警戒していると「あっ」とイザナミが声を上げた。袖の中に手を入れて橙色の液体が入った小さな瓶を取り出した。

「これ、お土産。ミカンを絞った飲み物。飲んで」

「オレンジジュースか？」

「オレンジ？うん、そんなところ」

それを受け取り封を開けて嗅いでみると、果実の匂いが鼻腔に突き抜ける。嘘を言ってはないと分かるや久しぶりにミカンの味がする飲み物を口にして胃の中へ飲んだ後、美味しかったと感謝の念を伝えながら一拍ののちに体に違和感を覚える。発火したように胸が熱く、下半身に熱や血が異様に集まる実感がして原因を追求する。

「……謀ったか？」

「違う。ちゃんとミカンを絞った飲み物……あっ」

何か思い出したかのように声を上げ、もう一度袖に手をつ込めばさつき飲ませた同じ瓶を取り出して困った感じにポツリと零した。

「こっちだった」

「オイ」

「そっちはその気にさせる為に持ってきた無味無臭の媚薬と精力剤、滋養剤を混ぜた物だった」

「オイッ」

「でも、今日飲ませるつもりだったから結果オーライ」

「オイッ!？」

何でもものを飲ませたんだこの女神は！と何かに耐えている気配を醸し出している険しい顔に汗が浮かび上がってきた。心なしか一誠から甘い香りがし出してくる。

「イツセー？」

苦しそうな表情を見れば誰だって心配はする。近付いてきて当惑の色を孕んだ金目を見上げてくるアイズとアリサは「アミッドを今すぐ呼んできてくれ」と頼む一誠に訳も聞かず扉を開け放って廊下を駆

け抜けていく。二人がいなくなったあと、この場にいる一堂にこう言い放つ。

「今更だけどよ、俺は普通の人間じゃないんだぞ。ドラゴンに興奮させるのは、飢えた獣が目の前の餌を理性も棄てて全力で襲い掛かるよ
うなもんだぞ」

「……それはつまり」

「今まで抑えていた理性が無い状態、凶暴化バーサーカーしてお前らを朝昼夜構わず襲ってしまう」

ただの獣と成り下がって強引に相手の意思など無視して犯す。それだけは絶対にしてはならないし己自信もそれは忌避する行為だと危惧する。そしてアイズ達がアミッドを呼んでいる間、悪い時期にアスナとレイラまでやってきてしまい。続いて治療と製薬が長けた少女がやってきたと思えばアリシアまで連れて来てしまい、熱でもあるかのように発汗してる体と荒い息を吐いてる男を一目で見ても容態を確認、理由を訊ねる間もなく一誠の下半身を見た途端、精緻な人形のような顔に朱が染まるも、残念と無念そうに首を横に振った。

「部屋に中和剤がなく、今から作るにも材料が手持ちにありません。今の状態を快調するには……その」

「今の状態でそれは相手も傷つき兼ねないから嫌なんだよ」

相手を気遣う精神力と鋼の理性がまだある内にアミッドが提示した最善策を遮って拒んだ。

「ないならダンジョンで暴れて少しでもこの高揚感を鎮めに行くしかない。最初からそうしとけばよかった」

それこそが最善策だとばかり、足元に転移式魔方陣を展開する一誠。このまま行かせれば少しは静まるかもしれないしその間アミッドが中和剤を用意できるかもしれない。それも一つの手であるとして――
――伸びた二つの手がダンジョンに行こうとする男の襟を掴み、魔方陣から引き離れた。

「なっ、おい、何のつもりだっ」

「何のつもりも一人で抱え込もうとするな」

「こう言う時こそ、助け合いをするものであろうに」

ハイエルフとハーフトワーフが呆れ顔——ほんのりと朱色に染まっているその顔でそう言うが、一誠の心情を察していなかった。

「全力で墮とせ、何時だったかそう言ったわよねあなた」

黒の薄いナイトドレスを脱ぎ捨て細かな白皙の肌で豊満な裸体で艶然に微笑む美の女神フレイヤ。回りの視線なんて気にもしないと豊かな胸を揺らし近寄る。

「最後の手段をこんな形で行うのは少々華が無いけれど、今のあなたなら有効的なのかしら」

桃色に染まっている顔から窺える色欲と火のついた痴情を解き放っている熱が孕み潤っている銀の双眸。彼女の言動を皮切りに一人、また一人と衣服を脱いだり紅潮した身体と熱で浮いたような顔をして寄ってくる。流石に一誠も焦りはするがリヴェリアと椿が更に体を寄せ、密着した状態で耳元に熱が籠った甘い声を囁いた。

「今までお前に助けられた恩はこれで返せると思っては無いが、今回ばかりお前は受け身となって私達に助けられるといい」

「誰もイツセーのことは責めません。神の悪戯に巻き込まれたと思って手前らの体に身を委ねよ」

そして、治療と製薬を生業とする他派閥の少女が意を決したように紅潮した顔で告げる。

「あ、あの……微力ながら私の体であなたの体を治療しますっ」

「元娼婦としてあなたの全て受け入れ満足させるわ」

「ちよ、ま、お前等までっ……!」

既に服を脱ぎ捨てているレイラや服を脱ぎ始める女性達を倣うようにアイズ、アリサまでも服を脱ぎ始める。

「……っ」

この手に積極的でなく一人の男に群がる女神や女性陣を、甘い香りを吸う度に頭が蕩け、理性で抑えている身体の局部が興奮したように熱く燻っているのを自覚しながら見るしかできないアスナとアリシア。事の原因の女神達も元からそのつもりだったからか、積極的に情欲を貪ろうとする姿を見せつける。

「(こ、こんな大勢でイツセーと……?)」

「(非常識、有り得ない、人として……いえ、彼は人型のモンス
ター。仁徳なんて関係ないの……?)」

止めた方が、止めさせた方がいいのではないかと常識の考えをして
躊躇する二人は「皆を抑えた後、どうやって彼を？」と疑問の考えを
浮かべてしまう。他に方法があるのではないかと思ってしまうが、淫
靡な雰囲気と一誠達の情事に目を奪われて生娘のように固まっ
てしまう。

そして鼻に入るツンとした香りまでもが――。

「……うつ!?!」

二人を興奮させるのだった。穴という穴にねつとりとした香りが
否応なく入り込んでくる。生理的に警戒するも、次第に二人の思考を
蕩けさせるように鈍らせる。そしてこの部屋に漂う淫靡な空気、目の
前に繰り広げられる情事を見て性欲が湧きあがる。何時しか自覚が
無いまま羨望、熱く蕩けた顔と潤った眼差しを向け、嬌声や水音が聞
こえた頃には彼女達が別行動を取ろうとしても既に遅かった。寧ろ、
長時間その場に居合わせ乱れ爛れた情事を見せつけられている二人
にも彼女等の手によって交ぜさせられ、神も大人も子供も関係なく一
人残らず彼を助けんが為に性欲を剥き出しにして何度も何度も体を
重ね交わり続けたのであった。

冒険譚10

早朝——目覚めた一誠の視界に入る亜麻色の髪の少女の寝顔。情事後、体の上に跨がる風に覆い被さって体を重ねたまま寝てしまった彼女の髪に手を伸ばして撫でながら思う。付き合っていた男と別れた女と程なく事故で巻き込まれた形で体を交えてしまった。別れたとはいえ、友人の女を抱いてしまったのは裏切り行為だろこれと頭を抱える思いで苦悩する他所に、未だに鎮まる気配はない性欲の昂りの炎。目覚めてから局部へ血と熱が更に高まり自己主張し始めたことで寝ていた少女が「あ……」と反応を示したあと、じわっと顔を朱に染めた様子を見て胸の奥から沸騰する性欲が一誠を突き動かした。頭を撫でていた手をアスナの背中、もう片方は括れた腰辺りに回して共に起こした。その時に熱く潤った寝ぼけ眼が開き、至近距離で一誠の顔を朝一番視界いっぱいに映り込んだ。

「ん……イツセー……?」

「……ごめん、また」

「……うん、いいよ」

顔が熱い、体も心も快感で震え、発火したように熱い中。お互い見つめあっていたら、一誠がアスナの頭の後ろに手を回し、アスナも一誠の頭の後ろに手を回しては顔を寄せ合い、互いの口を唇で塞ぎデイープなキスをした。昨夜の内にすっかり快楽に溺れ染まった頭と心、体では抵抗などする気持ちも湧かず、幸福感を覚えながら口の端しから唾液が溢れるほどにキスを交わす——。

「心の底から本当にごめんなさい」

小一時間後……服を身に包んだ女性達の前で床に頭が付くくらい「綺麗な土下座」と極東の女神達に感嘆と称賛させる土下座をする一誠の姿で朝を迎えた。誠心誠意の謝罪の念を伝える彼に誰一人女性達は責めなかった。

「大丈夫よイツセー。イザナミの悪巧みで起きた事故なんだから」

「その悪巧みで一番楽しんだのはそっちだと思う」

「うふふ、否定しないわ。今まで食べてきた男神なんかより最高だっ

た。もうこの子以外じゃあ物足りなくなっちゃったかも」

「何時もいる眷族はどうなの」

心なしか何時もより肌が艶々している女神達は満足げな雰囲気を醸し出しながら、一誠がその気に望めばまた応じて身体を差し出すかもしれないほど瞳に色欲の色が宿っていた。

「神へファイストスの言うとおりだ。顔を上げろイツセー」

「それにこの場にいる殆どの者はお主のことを慕っている。お前が気に病むことはないぞ」

「いや、あるだろう気に病むこと！まだ幼い他派閥のアミッドとアイズとアリサ、友人の彼女だったアスナに手を出したんだぞ!?アリシアだって俺の存在を受け入れてくれても身体を重ねるまでは許さないでいたはずだ！」

同じく艶々の肌で論すような言葉を述べるリヴェリアと椿であるが、顔を上げて食って掛かる一誠の中では深い後悔と愚行をした自分に激しい怒りを抱き、顔の表情が複雑で皆に申し訳ないと左目を曇らせる。

「くそう……あの転生者の三人にあれだけ言っておいて俺までするなんて……」

ゴンツと頭を床に叩き付け、凄まじい悔恨に苛まれ頭を抱え「一生の不覚」「この不祥事を償う方法は……」とブツブツ呟く一誠の横でドラゴンを殺すに長けた封龍剣が発現した魔方陣から出て来て、その柄を手にするや否や自分の首に近づけた。

「皆ゴメン、俺はこの世界で死ぬよ……」

「ま、待ちなさいっ!？」

「早まるなイツセーッ!」

「死んじゃダメ!」

「イツセー落ち着いて!」

ここまで一誠を追い詰めたのは後にも先にも彼女達だけだろう。この世界で死を以って償う等、異世界にいる家族達が知ったら「一体なにを仕出かしたらそうなる!？」と問い詰めてたかもしれない。そんなことされることも露にも思わない皆は全力で止めに掛る。

「っ!」

刹那、彼の少年の体が不自然なまでに震えた。そして、急に見たことのない光景が視界に飛び込んできた。神々しい、神秘的な輝きに包まれた空間。自分の愚行を止めに掛つてきた彼女達の姿はいない。持っていた筈の剣も消えてなくなっている。さて、ここはどこだろう？ 右も左も前も後ろも上も下も同じ景色で味気がない場所に自分のみ移動させられたような感覚もなかった。こんなこと出来そうなのは自分より格上の相手か神でしかないだろう。が、前者は有り得ない。精神を干渉する系の魔法など例えあつてもここまで何も感じさせないのは不可能だ。後者はあり得ないが下界に降り立った神々がこんなこととして何の意味があるのだろうか。

『まさか自殺行為に及ぶなんて・・・あなたは色々な意味で目が離せませんね』

虚空からソプラの声が聞こえた。誰だ？

『声だけで申し訳ございません。私の名前は神です』

・・・この世界の神か？

『違います。転生を司る神と申し上げれば思いだしてくれますか？』

転生を司る神・・・あつ、元の世界で死に掛けた時に話しかけた神か！

『覚えてくれていたようで安心しました』

心なしか嬉しそうに声音が明るいけど、俺をこの世界にトばしたのはあんただよな。

『そうです。そして並行世界の数多のあなたも今現在異世界へ活躍を促しています』

活躍と言うより俺たちの生き様を娯楽目的で異世界に送り込んでいることだけはよくわかつてるからな？ 目の前にいたら女だろうと殴り飛ばしたい気持ちでどうしようもないんだけど。

『それは遠慮させてもらいます。もう一人の兵藤一誠に私の世界の領域にカチコミをしてきて数人の神を滅ぼしてくれた経験がありますから。今でさえどんな結界も罫を張つても掻い潜つてたまに侵入してくる始末です。本当にあなたと言う存在は宇宙が誕生して以来の

イレギュラー
異常存在です』

—— ナイス、もう一人の俺！溜飲が少し下がった！

『喜ばないでください。あの時は本当に産まれて初めて肝を冷やしたのですから。もうあのような事が無いよう今ではあなたにも対して厳重に警戒しながら結界を張っていますから二度目はないです』
イレギュラー
異常存在の俺なら俺もできるとは考えないのか。

『……話しの本題に入ります』

あ、あからさまにはぐらかした。神のくせに格下の口に勝てないなんてそれでも神？

『その気になればあなたをその世界のゴブリンに転生させることも可能ですが？』

スイマセンでしたあー!!!

『その潔さは他の兵藤一誠には見当たりませんね。では、本題に入ります。あなたの自殺行為を止めたのは傍観者たる私の楽しみを失くさせないためです』

自分本位かよ。映画館に来た客気取りでないか？

『あなたにも利益が無いわけではありませんでしょう？未知の世界で見聞して体験するという喜びやダンジョン攻略等の経験は楽しくないと言えば嘘の筈です』

まあ、色々と楽しませてもらってるけどよ。いきなり俺の大好きな家族や世界から引き離されて異世界に来させられるのは誰だって困惑したり嫌がるだろ。それと他の異世界人もこの世界に来てしまった理由は十中八九、お前のせいかな？

『原因と言えば私であります。直接的ではなく間接的な意味ですがね。もう一人の兵藤一誠がいる異世界の住人がこの世界に招いてしまったのはこちら側のミスです。働き詰めの部下が寝オチで……』
オイ……？

『ま、まあ起きてしまったことは仕方がございません。お詫びとしてある条件を満たせば元の世界に戻せるように密かに設定してあります』

……それ、異世界から来た俺達にも同じだろうな。鼻負は許

さないぞ。

『はい、共通の条件です。かなり厳しいですが知りたいですか？』
元の世界に戻る、もしくはは行き来できる方法があるならば是が非でも。

『簡単な事です。その世界の人種がダンジョンの最後の階層まで踏破すれば自動的に戻る様になっています。ですが、異世界から来た者達と転生者達の協力なしです』

神レベルで長い話しになるな……俺以外の異邦人達や転生者達が帰れないじゃんか。

『そうとも限りませんよ。それ以外の独自の方法で元の世界に戻った人間がいます』

え、そうなのか？でもそいつらだけだろ。てか、それは何時の話しだ

『千年前ですね。最初の神々が下界に降臨した際に異世界から来てしまった人間が二人ほどもいました。その二人のお陰で現在のオラリオがあると言つても過言ではありません』

そうなんだ。素直に感嘆するよ。会えるなら会ってみたいけど元の世界に戻ったなら死んでるだろ。

『……まだ死んでませんよ？しかも兵藤一誠と深い関係者ですその人間達は』

……マジで？え、そんな人俺の回りに……
『案外あっさりと思ひ至るでしょう。そして納得もするかと』

まだピンとこないが……ま、帰れる方法が解つただけでもよしとしよう。俺達にはかなり厳しい条件だけどな。

『仕方がありません。世界のレベルが違う者が偉業を成し遂げようとする行為はチートであり、私好みの物語ではありませんからね』

ブレないな転生の神。じゃあ間接的な協力でもダメ？一気に目的の階層に送るとか。

『駄目です。ただでさえその手の道具を作ってしまったのに、あなた自身が協力するなど冒険者の本質が問われます。ですが、あなたが作ってる道具ならギリギリ許容範囲で認められます』

いいんだ？よっしゃ、それならあいつらの助けになるような道具を作って俺達の為に頑張ってもらおうと。

『……もつと駄々を捏ねるかと思いましたが、本当に潔いですね』
駄々を捏ねて最後の階層まで協力の許可を貰えるなら喜んでくれるけれど？もしかしたらお前を楽しませるような事が起きるかもしれないし。

『そうですか。魅力的ですが世界に干渉することはできません。あなた個人とならできますが……そう言えば、一つお聞きしても良いですか？』

なんだ？

『最近、興味を抱くようになりましたが。あなたの世界の料理はそんなに美味しいのですか？異世界の料理を人間や亜^{デミ・ヒューマン}人、神々が幸福感を顔に出して食べている様子を見て不思議を感じていました』

へ？まあ……人それぞれ？神それぞれじゃないか？というか転生を司る神達は食べる概念はないのか？

『私達は他の神、並行世界の神々と同じだったり違ったり食事を摂る必要性はないんです。その代わりに疲労が蓄積すれば睡眠を求めますが』

変わってるなー。じゃあ、試しに異世界の料理を食べてみるか？

『よろしいので？では、一日三食。毎日お願いしますね。あ、食べ終わったらちゃんと食器類は返しますのでご安心を』

あいよ。でも、どうやってそっちに届ければいい？そう言う手段、俺は知らないぞ。

『あなたの世界では神社や神棚にお供え物をする習慣がありますよね？それを応用に私が用意する神棚で祈りを捧げ送って下されば』

神通力的な感じか？でも、作るにも食材は無尽蔵じゃないぞ？現に月に一度だけ異世界から食料を調達しないと異世界の料理なんてできやしない。今じゃ大勢の居候がいるしお前に作る分も考慮するとなあ……。

『確かに、食材はダンジョンから得られる鉱石や金属、ドロップアイテムのように無尽蔵に湧きませんね』

と、こつちの意図を察して転生の神の彼女は考えてるのか声が聞こえなくなつた。というか、どこまでダンジョンのことを知っているんだ？この世界の神でもないのに他の世界に干渉してもその世界や神に何の影響もないのかきになるところだ。

『——わかりました。あなたには迷惑を掛けている事も考慮し、あなたにも特典を捧げましょう』

特典？転生者達から何度も聞く単語だな。それってどんな能力でも願えば得る物なの？

『神になること以外であれば何でもです。元の世界とこの世界と行き来できる能力ですら可能ですよ』

だったら俺が一番望んでやまないそれが良いんだけど!?

『あなたには既に元の世界と干渉できる魔法があるじゃないですか。それは欲張りですよ』

それ、俺以外の異邦人達が望んでも同じことと言えるのか？

『……では特典を捧げますよ。これならば食材の調達の問題も解消するでしょう。他にもあなたが喜ぶようなものと役立つものも与えておきます』

あからさまにはぐらかすな！と叫んだところで俺の体が光に包まれたと同時に意識が遠退いて……！

『では、明日から「五年間」お願いしますよ兵藤一誠』

その声を最後に視界がまた暗くなって……。次に視界に飛び込んできたのは剣を持つ腕を掴んで抑え込んだり、剣と俺の間に入って首を切り落とさせないようにしたり、押し倒して動きを封じるなど馬鹿な真似をさせないようにした皆の姿だった。

「馬鹿なことをするな！」

「死んで償う考えをするなんておかしいわよ！それであなたが会いたがっている家族を悲しませちゃ本末転倒でしょう！」

転生を司る神と出会っていたことをリヴェリア達気付かない。彼女達からの強い説得力に自殺を図った自分に戻ってきたことを冷静

になって大剣を持つ力を緩めた。それに彼女達はホツと安堵の息を漏らし諭す言葉を掛ける。

「イザナミの薬のせいで苦しんだあなたを助けたくてした。それは私達の意志よイツセー」

「……アリシアとアスナはどうなる」

場の空気を呼んで話しを進める方針で、自分の愚行に苛みながら訴えるような目付きで問うとハイエルフが口を開いた。懺悔を言う風

に。
「私達のせいだ。あの時冷静な判断がままならず、後先考えず興に乗って無理やりさせてしまった。だからお前が気にするなど言っても無理があるだろうが……」

リヴェリアから向けられる視線に当人達は複雑な表情を浮かべる。

「二人ともすまなかった。いかなる罰を受けても私達は文句など言わない。アリシアに至っては純潔を無理矢理散らさせたようなものだ。本当にすまない。」

「い、いえ……苦しんでるイツセーを何とかしたいと言う気持ちはありません。それに彼も私達を気遣ってくれて……」

「複雑ですが……彼等三人のように欲望のまま身体を求める行為ではありませんでしたし、あんな状態でも優しさが残っているイツセーさんに純潔を捧げる事に嫌ではなかったです。それに彼は自分が犯した行いに深い悔恨と苦しみを抱いています。あの三人と違うところを見て好感を抱いています」

昨夜の一件は許すと言外するアスナとアリシア。それでも一誠の中では自分を許さないでいて暗い影を顔に落としていたところ、アミッドが真正面から話しかけた。

「イツセーさん。私は【ディアンケヒト・ファミリア】の団員アミッド・テアナサーレではなく一人の女性としてあなたのことを慕っています。ですから、このお城にいる間は私のことをただのアミッドとして接して愛してくれると嬉しいです」

「……あの主神にバレたらどうする」

「即脱退しましょう」

躊躇いもなく断言したアミッドに度肝を抜かされた。自分の「ファミリア」に未練はないのかと思わせうほど清々しく言い切った彼女に言葉も失った。

「私とあなたの関係に気づいたら、この件について脅してディアンケヒト様は強要するでしょう。イツセーさんの回復道具は喉から手が出るほど欲しております。ですからそうさせない為に脱退しましょう。脅しても」

そこまで金にがめついのか、と初老の男神のことを思っている一誠の頬を両手で包み込むように添えるアミッド。つぶらな瞳が真っ直ぐ金眼を見据え、言葉を語り続ける。

「私は一瞬たりとも後悔していません。寧ろ幸せでした。好きな人に全てを捧げる事が出来ましたから。だから私達の為に自分を許せず後悔するなら、全力であなたを支え愛します。まだ身体は成長していませんが必ず幸せにしてみます」

白銀の少女の告白と一緒に重なる唇は、確かな気持ちを伝えるのに十分過ぎたところで金と青の目を持つ二人の少女の顔が近づいてきた。

「私も、私もイツセーのこと、すき、だよ？」

「強くなること以外したいことができたよ。私、イツセーのお嫁さんになるっ」

彼女達もアミッドに見習うよう小さな唇を少年の唇に押し付ける。そして三人が揃って告げた。

「「大好き」」

愛の言葉を向けられた。純粹無垢なまだ幼い子供の言葉は遠からず成長を果たした時でも変わらず言ってくれるか分からない。だが、一誠は知っている。体験も経験もしている。過去に出会って交流した少女達が成長しても変わらない気持ちを抱いたまま自分のことを好意を向けて来ることを。それがどれだけ嬉しい事だろうか、どれだけ救われているのか彼女達には教えない。自分だけの秘密として大切に胸に抱くのだ。この幸せで温かい気持ちを独り占めするために。

「……三人とも」

「両腕でアイズ達を抱きしめ「こんな俺を好きでいてくれてありがとう」と感謝の言葉を送ると愛しい少年の腕の中で花が咲いた様に微笑んだ少女達。

「むっ、手前だってお主のことが好きだぞイツセー。仲間外れはズルい！」

飛び掛かる椿が一誠を押し倒した。それが契機となつてヘファイストス、フレイヤ、アマテラス、イザナミから愛の言葉を送り始め一種の告白大会に発展してしまい静観するリヴェリア、呆然とするアスナとアリシア、苦笑いする一誠達を呼びにロキが来るまで続いたのは余談である。

——今日は『異世界食堂』の休店の日。事前にミア達に教えておりながら分身体達に仕込みの教え方をレイラとアスナにも伝授している間、オリジナルの一誠は騎空艇を造る造船所にいた。下部の船はほぼ形として出来上がっており、その騎空艇を飛ばす役割を担う翼も巨大なクレーンで運ばれる作業が行われている。空の世界で発見したあの騎空艇と似た船は何時しかオラリオの上空を飛ぶことになるだろう。断言する。世界が同じでありながら誰も手を伸ばしても届かない空の世界にしか造られている乗り物が今、地上でも在ろうとしている。もしも完成した暁には、ギルドが黙っておらず強制依頼^{ミツシヨウ}を発令し、量産型の騎空艇を造らせるつもりだろう。あの、ギルド長のエルフならしかねないと船と翼が結合した瞬間を目の当たりにしながら思い更けるリヴェリア達。

「……さて、これもようやく完成だな」

一人、空を駆ける大型の騎空艇の甲板に立ち周囲を見渡す。空の世界の空を駆ける船を地上の世界でも作り上げた一誠は満足げに見つめ、これまでの苦労を走馬灯の如く思い返し感傷を浸って間もなく船の中へ入り込む。最後の最終調整の仕上げに取り掛かるために。

「……そう言えばイツセー。【アポロン・ファミリア】に何も要求せずに終えたようだがよかったのか？」

ダオスと従者がオラリオのグルメを食べ回りに行って城の中は何時も通りのメンバーしかない昼食の時間帯。異世界の料理の味に舌鼓を打ち、どう作ればこんな料理ができるのかと「ロキ・ファミリア」の女性団員達から相談を受けている一誠に素朴な疑問をぶつけたリヴェリア。

「ああ、したぞ。だけどまだ駄目だった」

「まだ駄目だった？」

意味深な返事をされ鸚鵡返しをしたハイエルフに当時のことを教える。

「あの『ファミリア』に欲しい冒険者がいたんだけど、最近入団したばかりだと言われたから一年後改宗コンバージョンをする約束を取り付けた」

「お前の目に適ったその冒険者は……もしかして女か？」

「うん、そんで俺が予想していた通りの能力を持っていたから是が非でも引き抜きたかったよ。残念」

また女を増やすのかと思った矢先、一誠が欲する能力Ⅱスキルか魔法のどちらかを保有している冒険者だと認識を改めた。

「アポロン・ファミリア」にレアスキル、希少魔法レアマジックを持つ冒険者がいたと？」

「というより、個人的で一方的に知っているからこそ解ってしまっただ。彼女を信じればどんな災いでも乗り越える事が出来るからな」

名も知らぬ冒険者を絶賛する一誠にそこまで言わせる。とても珍しくリヴェリア達も興味が湧いた。加えて災いを乗り越える等と一体どういうことなのだろうか？

「さて、俺はちよつとガネーシャのところに行つて来る」

「何をしに？」

「『ステイタス』の更新をしにだよ。あの船を完成させたから新しいスキルが発現しているかもしれないし」

街に出かけようとならば私達も行くと思配を醸し出し、腰を上げた一部の少女達は残念そうに座り直した。すっかり少年に恋し自分の気持ちを素直になった彼女達。元の世界にいる家族達と同様に可愛らしいと心の中で微笑んで出かける支度をする。

「……結果、出てると良いんだがな」

イツセー

Lv. 2

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

《魔法》

『ネオ・ワールド・ドア真・異世界扉』

- ・移動系魔法。
- ・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来の異なる望む世界へ行き来できる。
- ・強い憧憬である程、成功率上昇。

(特典) 『鑑定』

- ・ありとあらゆるものの価値を見定める。

《スキル》

『イレギュラー・アンノウン異常不明』

- ・戦闘時のみ発動。レベル階位、『アビリティ基本能力』が反映・真価を發揮し、全能力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果維持。

- ・懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・魅了する。
- ・異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理 想達人』 クッキング・マスター・シエフ

- ・調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『神秘希少』 ウルトラ・レア

- ・道具アイテムの作製時、発展アビリティ『神秘』の一時発現する。
- ・一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

『運命協同体』

- ・同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。
- ・懸想の丈の度合いによって【エクセリア経験値】の分配が変動する。
- ・『運命協同体』の副次効果——懸想の丈の度合いによって良好の同恩恵を持つ以外の者も共同することで【エクセリア経験値】の分配が変動する。
- ・任意発動。
アクティブトリガー

(特典) 『異世界買物覧』

- ・ヴァリスを払うことで異世界の物資を購入可能
- ・任意発動。

「……………」

ガネーシヤの口があんぐりと開いたまま間拔けな面を晒す。ナニ、コノ特典トカ言ウ魔法トスキルハ。羊皮紙に写した自分の「ステイタス」を見た一誠も神妙な面持ちで押し黙る。神部屋の中は不自然なほど静まり返り、二人とも一言も口にせず互いの顔を見合わせた。念願の「ランクアップ」。これだけならまだ両手挙げて喜べただろうが、見聞いたことが無い魔法とスキルを見て。

「ガネーシヤ、超ビックリ」

「イツセー、超ビックリ」

お互いの心境を打ち上げながら発展アビリティ、『狩人』『幸運』『調理』のどれか——『幸運』を選んで冒険者となって四年目にしてようやくアビリティオールIのまま「ランクアップ」を果たしたのであった。そして城に戻って自分の変化を教える一誠に、リヴェリア達は何とも言えない面持ちで「まあ、それでも頑張ったじゃないか」的な労いの言葉を掛けるのであった。

そんな結果が起きてからあつという間に深夜。アスナだけ応接間に誘って重大な話を打ち明けた。

「アスナ、分かったことがあるんだけど……俺の話しを聞いてから信用するか否か決めてくれ」

自殺しようとしかけた時、自分は意識だけ別の世界に引き込まれてそこでこの世界に自分達を招いた元凶と話しを交わし、ダンジョンの最後の階層まで踏破できれば元の世界に戻れると言う方法を告げた。耳を傾けていた彼女は亜麻色の瞳を丸くして彼の少年の言葉は真実だと信用することで受け入れた。

「だけど、私達が協力してもダメなんて……それこそ何時帰れることができるのかわからないよね」

「俺だったら一年以内に踏破する自信はあるんだけど、あの傍観者気取りの神がそれを許さないんだ。俺達の存在自体がチートだからつまらないって理由でな」

「ちよつと嫌な感じだね。異世界の神様もこの世界の神様の快樂主義者みたいに私達で面白がっているなんて」

転生を司る神に対する印象は低めのアスナと諦観の一誠。どうしようもない現実はこの湧き上がる気持ちはどこにぶつけていいのやら…….と思いつつ疑問をぶつけた。

「そう言えば、最後に五年間って期間を言ってたな」

「五年間？それってお供え物を五年間すれば私達でも最後の階層まで踏破したら元の世界に戻れるってことなのかな」

「わからない。まあ、彼女にも異世界の料理を食べさせる約束をしたからには、作らんとダメだ。取り敢えず特典で貰った能力で早速試してみるよ」

「特典？」

死んだ人間が転生する際に必ず神から望めば何でも叶える魔法やスキルのようなものと説明した。教えられたアスナは信じられないと前にも教えたがやはり驚きを禁じ得ない様子で。

「それなら、元の世界に戻れる願いを叶えられるよね？」

「俺もそれを願ったら欲張りだって言われて叶えてくれず、このネットスーパーなる特典のスキルやあらゆるものを鑑定する『鑑定』の特典を貰った」

「鑑定はともかく、それって実際にどんな物なの？」

「金を払えば異世界の物資を購入できるって——ネットスーパー」

呪文を唱えた一誠の前に光る四方形が。そしてパソコンの画面のように見慣れた文字と絵が浮かび上がって思わずアスナが漏らした。

「これ、よく見るネットスーパーのサイトのままだよ？」

それには一誠も同感だと頷く。そして二人の前に浮かんでる画面に触れて検索することで分かったことがある。飲料水、食材、調味料、生活用具や調理器具など異世界で存在している物が何でも購入でき

る事を。仕舞には船や車、武器、更には飛行機までこの世界に必要な
さそうな物までもがあった。

「……………ぜってえ飛行機を買う必要ないだろ」

「うん、そうだね……………武器に関してはシノのんが欲しそうな銃も
あるけれど、この世界じゃね？」

「世界観を壊すもんは世に出しちゃいけない」

城の中だったら考えるけどな。と付け加えながら検索をし続け――
――地方の郷土料理も販売されていることを知り「へえー」と関心
の声を揃って上げる。物珍しいものもあり中にはとんでもないもの
もあった。年齢制限がされていない夜の営みに使うような薬や大人
の道具まで確認するとアスナの顔がボツと火が噴いた様に耳まで紅
潮した。

「……………買ってみるか？」

「か、買いませんっ！」

「でも、避妊具とか避妊薬は必要だろ」

そう言われると真っ赤な顔のまま俯いて、この先のことを考えたよ
うで小さく頷いたアスナであった。それから気を取り直して興味
津々で検索する一誠の横顔を見ながらアスナは提案した。

「ねね、何か買ってみてよ。これ価格がこの世界の単価になっている
みたいだからきつと買えるよ」

好奇心に撥られたアスナに促され画面を消す。自室に戻って保管
庫から金を調達する。その際、部屋にはアイズ達がいた。皆既に風呂
あがりか火照った顔に身体から甘い香りが立っている。

「何をしようとしている？」

「買い物。ネットスーパー」

もう一度呪文を唱え、サイトの画面を展開した様子を彼女達は目を
丸くして追究しようとして近づいてきた。しかし、一誠とアスナしか読み
取れない文字でこの世界の住人たる彼女等は何て書いてあるのかチ
ンブンカンブン。

「この摩訶不思議な映像で買い物をするの？」

「うん、できるみたい。するのが今日初めてだけど」

「また異^{イレギュラー}常な魔法を発現したのね……」

前回はヘフアイストス、今回はガネーシヤ。きつとあの男神も見たことのない魔法を目の当たりにしてびっくりしただろうと推測を立てながら「それと」と言葉を続ける一誠に耳を傾けた。

「俺、【ランクアップ】を果たしたよ」

『……』

静かになった彼女達を他所に、選んだ物をカートに入れて購入手続きの画面になると、『残金が不足しています。チャージしてください』と表示された下に四角い枠があつた。そこに恐る恐るヴァリスをその四角い枠に近づけると……枠の中にヴァリスがスツと吸い込まれていった。そして注文を確定させると、目の前に光の粒子が集まって徐々にその姿を現した。注文すると配送されてくるのは、この世界には存在しない段ボール箱である。懐かしい段ボール箱を開けると中にはさつき注文した物が入っていた。

「おおつ、アスナ。注文した食材がちゃんと届いたぞ！」

「すごいっ！じゃあ、さつき雑誌とか本とかあつたから今度は私のお金で買ってくれる？」

異世界から来た異邦人達だけ花が咲いた様に笑って盛り上がる。なんだろうか、この蚊帳の外に置いてけぼりにされた感じは。自分達だけ楽しげに私達の存在は忘れてないだろうか？だからこそそれが絶対に面白くないリヴェリア達は獲物を狙う猛禽類のような気配を醸し出し――。

『イツセー……』

「うん？あ……」

彼女達の表情と伝わってくる気配に「やべ」と危機感を覚えた一誠のその後……根掘り葉掘り聞きだされたのだった。

冒険譚 1-1

転生を司る神から特典を受け、一誠の食材の調達問題は解消されたも同然になった。寧ろ欲して止まなかった物資がヴァリスで払えば何時でも何所でも購入でき、本人は凄く満足していた。それに乗じてアスナも懐かしい物を購入することが出来て嬉しそうに自然と一誠の傍に寄り添い、あれやこれやと注文してぽんぽんと出て来る段ボールから取り出して盛り上がる。当然と言うか必然と言うかりヴェリア達も二人に交せてもらって異世界の買い物をしている。

「ほー、この世界とは異なる、それもイツセー達をこの世界に送り込んだ元凶の神と話しができたとはなあ」

「その結果が転生者が保有している特典を与えられ、^{ネットスーパー}異世界買物覧というものを得て私達の目の前でお金を払って買ってるのが全部、異世界の物らしいわ」

女神達が視線を来る先には、異世界の物資を購入しようとしている眷族達の姿。中には誘われたのかオツタルまで輪の中に入っていて「フレイヤに何か買ったら喜ぶんじゃないか」と少年に言われ、サイトを覗きこんでいる。

「自分の子もすつかり馴染んでおらへん？」

「ふふふ、私もあの子も無視できない子だから」

「それは同感ね」

「うん」

微笑ましいと、機会があれば自分も異世界の買い物をしてみたいと思いを胸に抱いて見守る朝で一誠達の一日が始まった――。

「どころで……アレ、なにかしら？」

ヘファイストスの紅眼の視界に入るのは、リビングキッチンの壁際に鎮座している木製で大きな神棚のような物。彼女の疑問に一同は確かにと言った感じで視線を向ける。唯一一番知っていそうな少年は――作った料理を手を持って女神達が疑問視している神棚に向かい、お供えするように置いた。そして合掌して祈りを捧げる姿勢になった時、神棚に置いた料理が光の粒子と化してパツと消え去った

後、一誠から転生の神にお供えするための行為だと教えられた女神達だった。

「おお………」

太陽が青天の真上にまで昇った時刻。「アルテミス・ファミリア」の眷族達は一部不自然なまでに静寂を醸し出してダンジョンに挑戦していた。目的は借金三千万ヴァリスの返済。『水の楽園』に存在する下へ膨大な量の水が大瀑布と化しながら落ちて行く様、『巨蒼の滝』を初めて見たヒーロー組は圧巻と圧倒され、ダンジョンの中なのにダンジョンとは思えない大自然の景色に誰もが立ち尽くして放心する。「すげえ………」

「うわー！滝だあー！」

そんな『絶景』を目の当たりにし感動した異邦人達の声が瀑布の嘶きに吸い込まれる。下へ流れ落ちる水は緑玉蒼色^{エメラルドブルー}。惚れ惚れとするほど美しい滝はここが危険なダンジョンであることすら忘れさせるほどだ。感動と同時に胸に覚えるのは震えるほどの畏怖——恐怖でもある。滝とちようと対面位置、彼等彼女等が立つ水晶の崖の真下に広がるのは大きな滝壺だ。落ちたら上級冒険者でも一溜まりもないことはもとより、目を疑ってしまうのはその滝壺からさらに瀑布が下へと続いていることだ。そう、ちょうど階段のように、『巨蒼の滝』^{グレート・フォール}は25階層の天辺より降り注いで下部の階層へ貫通しているのだ。そして滝口の直ぐ真上、階層の天井には『大樹の迷宮』の名残が——

—差し渡し五Mはある極太の木の根が放射状に延びていた。

「ケロ、私の独壇場ねここは」
「水の中にもモンスターがいるんだぜ？泳いで倒そうなんて考えは止めておきな」

「大丈夫ですよ、梅雨ちゃん『蛙』の個性を持っていて泳ぐのが誰よりも得意なんです」

「マジでか」

適材適所、もしもの時は彼女に頼ろうと思いが浮上したところで黒髪黒眼、黒い服装に黒い剣と黒一色の装備のキリトは勝手知ったる風

に、真横から伸びる水晶の橋——崖道へ歩み出した。

「つておい、キリの字先に行くなってば」

「……皆、行きましょう」

「そうだな。まったく、世話の焼く団長になってしまったなキリトの奴」

褐色肌のスキンヘッドの男性の言葉がピクツと自分達にも関係あると反応を示した三人の少女達もどこか暗い影を落としていた。そんな雰囲気を感じ飛ばさんとするヒーローがムキツと細身から筋骨隆々の体になった。

「H A H A H A H A！若い頃から失敗と苦勞するほうが成長の糧になるものさ！」

「うおっ!?!いきなり変身は驚くつて！」

「あんたの身体は一体どういう構造になってるんだろうな……」
自分達が知っているスーパーマンでもこうはならないと生のヒーローとつい比較してしまいが、色々と比べたらキリが無いとマツスルモードになったオールマイトを筆頭にヒーローを目指す生徒、少年少女達は気を入れ直し、歩き始める。今いる切り立った崖は24階層の連絡路がある最南端。正面に広がる大空洞と『グレート・フォール巨蒼の滝』はちようど階層中心に位置する。キリト達が向かう26階層の連絡路は南東。

「氣いつけるよ。壁沿いに歩くから足を踏み外して落つこちたら死ぬからな」

「こ、こえええ……」

「下を見るな、前だけ見て進め」

「は、はい」

クラインがヒーロー組の異邦人達に注意を促す。先頭に歩くキリトが行く大空洞の壁伝いに西へと向かい、先にある洞穴から崖内部にある迷宮に進入、そこから円を描くように西から北（滝の裏側）、東に向かい、階層底部にある地下連絡路を目指す。要するに時計回りに南から南東を目指す、といった具合だ。キリトを先頭にパーティは崖道を進んだ。道の幅は3Mほど。左手は壁で、右手は断崖絶壁。何人かは右側を絶対に見まいとしている。『グレート・フォール巨蒼の滝』付近の空間では

半人半鳥ハイビを始めとした鳥型のモンスターが鳴きながら空中遊泳していた。幸いこちらにはまだ気づいていないようだが――。

「オイ、こんなダラダラ行かなくても俺達は直接行けるだろうが」
「は？」

「あ、それもそうだよな」
「え？」

幾人か右側を見て下を見下ろし始める。何をしようとするのか理解に追いつけないでいるシノン達の目の前で……崖から飛び降りて、『空中に浮かんで飛び始めた』。

「か、かつちゃん！切島君！」

「緑谷ーお前も来いよー！すげード迫力の滝を間近でみれんぞー！」

そんなことしている場合じゃないよ!?と瞠目するワカメ頭にそばかすの少年の前後にいた少年少女達も二人に続けとばかり崖から飛び降りて空中遊泳をし始めた。必然的にシノン達は愕然と目を見張って開いた口が塞がらないでいる。

「ど、どうなってるのあなた達……」

「えっと、僕達の世界のイツセー君に空を飛ぶ訓練をしてくれたので」
「私達皆、空を飛ぶことができるようになっていきます」

「異世界のヒーローだからできるってわけじゃないよな……?」
「イツセーさん曰く、人なら誰しも宿している気と言うエネルギーをコントロールできれば浮くことも飛べる事も出来るとおっしゃっていますわ」

少年少女達から告げられる人間の可能性。自分達も特訓次第では鳥型モンスターと空中で交戦している少年少女達のように飛べるようになると言外され「地上に戻ったらイツセーに尋ねよう」と思いを抱いたのは必然的だった。そして先に行ってしまった少年少女達の向かった先に辿り着くと金属系のモンスターに分類カテゴライズされる『ブルークラブ』と遭遇エンカウント――。

「ちよっ!?蟹なのに前に進んで来てるっー！」

「しかも硬あつー！」

「本当に蟹なんこれ？」

皆、一番衝撃を受けるのは一緒なのだ。当時の自分と被せて心の中で何度も頷いたシノン達の気持ちを知る由もなく、異世界特有の摩訶不思議な能力で蟹型モンスターを料理してみせる。ヒーロー達の本領発揮を見せ付けられ、キリト達の出る幕は殆んど無かった。特に右半身は氷結、左半身は炎を繰り出す少年が凄まじい戦闘力を発揮した。地面を氷結させて『ブルークラブ』の動きを封じてから問題なく倒した。

「はあー、やっぱお前等はすげえーな。俺達の方が先輩なのに強さ的にはお前等が上だぜ」

「そう言われると照れるぜクライン先輩」

「だからと言って調子に乗らないこと。一瞬の油断だって命取りになるんだから。それと勝手な行動はしないでくれる？ そう言うのは一番困るし皆に迷惑が掛るの。あなた達の一つの行動で私達が死ぬかもしれないんだからね。わかったか？」

「・・・チツ」

「す、すいません・・・」

褒められる一方、身勝手な行動をした者には厳しく諭される。ダンジョンの中では何が起きようと不思議ではない。どこか傲慢なところがある少年少女達を強く律してないと大変な事が起きてしまうことを、三千万の借金を科せられたことで思い知らされているシノンは、鋭い目付きに冷たさを孕んで注意する。

「んじゃ、目的の階層まで辿り着いたんだ。こっから少数のパーティーを複数分けて探索しようぜ。オールマイト、相沢、ブラドキング、いつもの感じでいいか？」

「OKだよ」

「ああ、そうしてくれるとこちらも目が届きやすい」

「さ、お前達。いつものパーティーに組んで探索を始めるぞ」

褐色肌のスキンヘッドの男性『エギル』という人物の促しにオールマイト達は生徒を指示――。

――
大地の地震。いや、ダンジョンが起こす『揺れ』にシノン達は、一

様に動きを止める。彼等彼女等の聴覚は、それを聞き逃さなかつた。

「えっ、なにこの音……!」

「まさか、もうそんな『時期』だったのかよ!?」

「『時期』とはなんだい?」

「27階層のボスモンスターが、産まれる時期だ!」

【アルテミス・ファミリア】が焦燥に駆られている間にも、『その存在』を産み落とす。

「まずい……!」

シノン達は覚えがあつた。『巨大過ぎる何か』が産まれ落ちる、その前触れに。階層が揺らぐ震動と、その巨大な亀裂が走る音に。

「皆、レポートで撤退! 急ぎなさい!」

眼鏡を掛けた少女が叫んだ次の瞬間、27階層の『グレート・フォール巨蒼の滝』が爆発した。凄まじい水飛沫が25階層まで跳ね上がりすぐに猛烈な降雨となつて大空洞をそそぐ。最下層の大瀑布を突き破つて現れた『それは、地下の雨を浴び、発生した白い煙に包まれながら、ゆっくりと滝壺の底へ潜水した。間を置かず、驀進。凄まじい勢いで流れる大量の爆水、数百Mにも及ぶ『グレート・フォール巨蒼の滝』をまさに滝登りの如く、逆行する。』

27階層から26階層、そしてこの25階層に迫りくる不気味な巨影を見下ろし、

「離れるろおおおおおおおおおおおおおおお!?」

クラインとエギルの叫喚に、シノン達は滝口の断崖から一斉に退避した。直後、滝口が砕ける。発生した津波に誰もが呑み込まれながら、岸の奥へ流されていく。一人、また一人立ち上がり何度も咳き込みながら濡れた顔を上げると、視線の先にいたのは一匹の『竜』だった。二つの首を持つ、『双頭竜』。

「27階層、『モンスターレックス迷宮の孤王』」

キリトの啞然とする眩きを、シノンが継いで、吐き捨てた

「『アンフィス・バエナ』!」

き付けた瞬間、切っ先を前に構えていたアリサのロングブレードの突きで直接魔石を破壊して灰に変えた。この階層ではいわゆる戦士系ウォーリアーのモンスターが多く出現する。猛牛級の体格を誇る『バーバリアン』、19階層から現れる蜥蜴人リザードマンの上位種である『リザードマン・エリート』、黒曜石の体を持つ『オブシディアン・ソルジャー』……人の体と同じ構造を持った中型級以上のモンスターが、白兵戦の特化型スペンチャリストの顔触れが揃うこの階層は、アイズとアリサを徹底的に鍛える適した階層だと一誠が連れて来て二人に一对一の戦いをさせていた。余剰に現れたモンスターは瞬殺して邪魔をさせない。

「アリサ、もう一度だ」

『ハアッ！』

「！」

新たな相手役として確保され、アリサの前に蹴り飛ばされながらその大顎を開け、長い舌を打ち出してくる『バーバリアン』。ねじれ、上がった角を生やすモンスターの舌撃を長い大剣の腹で受け流し、打ち上がる悲鳴ごと斬り伏せる。その横ですかさずアイズは走り、ずんぐりとした黒石の塊である『オブシディアン・ソルジャー』を両断せんと斬り掛るが、彼のモンスターはあたかも魔除け石の如く『魔法』が効きにくい——『魔法』を減退させるのでアイズの風の魔法の威力も減退してしまい今の彼女にとっては鬼門のようなものだ。それでも倒せない相手ではない。意志の炎に燃える金の瞳の眦を吊り上げ円を描くように足を捌き、旋風のごとく、『オブシディアン・ソルジャー』を横一線に全力で斬り飛ばす。

「ほー、Lv. 2だというのに格上のモンスターを倒し退けるとは。やはり武器の質が良いのだろうか」

「まだ子供なのに凄い……」

「いやいや、アスナも子供の分類にはいるだろ？今年で20歳になるだろうが」

二人の戦いぶりを見ていたのは一誠だけでなく椿やアスナも居り、採掘目的とアイズとアリサの強化で『下層』にキリト達がいることを知らず『深層』に来ていた。

を合わせてよく掻き混ぜればできると」

「みりん？聞いたことが無い調味料だけどそれも極東にあるの？」

「ん、あるぞ。それとこれがみりんという調味料」

彼女の目の前に置く瓶の中に満たされてる透明度が薄い黄色の液体。それを興味本位で手にして蓋を開けて匂いを嗅ぐ、手の甲に一滴だけ垂らして舐めてみればあら不思議、上品でまろやかな甘みがアナキティの舌に広がってすぐに消えた。

「意外と、甘いよね……」

「だからって直で飲むなよ？体に毒だからな過剰摂取は」

「そうなの。うくん、料理も調味料も奥深い。それを知りつくしているあなたは美味しい料理が作れるのね」

「全部知っているわけじゃない。骨を齧った程度だ」

「それだけで一人で何でも作れるイツセーは凄いなと思うよ？」

横からも称賛の声を送られて「そうか」とそっけなく相槌を打った。二人の調理をする姿に若干前のめりの姿勢で見つめ、黒い尻尾を緩慢的に揺らすアナキティ。焼いた豚肉を千切りにしたキャベツやポテトサラダが盛り付けされてる皿の上に乗せる。それでようやく三、四人前ができるのだが何時も思っている考えを吐露した。

「コンロ、やっぱり増やすべきだな」

「え、店みたいにするの？」

「食べる相手が多ければ多いほど、どうしても時間が掛るからな。だからコンロを増やす、もしくは巨大なフライパンで一気に焼くとか必要になる」

「結局、通常の数倍は欲しいってことなんだね」

「なんだか、ゴメンね？」

自分達の存在で一誠に負担を掛けているのだと改めて認識する。彼女の申し訳ないと籠った謝罪に首を横に振る。

「気にするな。団長や副団長の意見は尤もだからな。心に傷を負った女をできるだけ癒して欲しいと頼まれちゃ断れんよ。俺が出来るのは敵を倒す力を振るうか、こうしてお前等に美味しい飯を振る舞うかだ」

ズイとでき上がった豚肉の生姜焼き乗せた皿をアナキティに突き付けた。

「身体の傷を癒せても傷ついた女の心までは癒せれない俺はまだまだ未熟者さ」

「そんなことないわよ。皆、この城に住んでから笑っているわ。こうして美味しい料理も食べて幸せも感じてる。あの時、本気で怒って助けに来てくれたあなたには本当に感謝してるの」

皿を受け取りながら当時のことを思いだしながら感謝の念を向ける。

「あなたは——イツセーは私達【ロキ・ファミリア】の恩人だということをお忘れしないで頂戴ね」

二枚目の皿も受け取って踵を返す猫 キャットピープル 人の後ろ姿を見ず追加を作り始める一誠に「よかったね」とアスナの微笑みが向けられる。

「誰かに感謝されるのはいい事だと思ふな」

「どうだかな、俺の正体を知っても変わらず接するか怪しいぜ」

「多分、分かってくれると思うよ。異世界から来た私達以外でも君のことを受け入れてくれる神様や他の人達がいるんだし」

何を根拠に————と思いが過つたが彼女の言葉を全否定することができない。事実、迷宮都市の二大派閥の主神と主力の団員達が自分の存在を認めて受け入れてくれた。故に自分がここにいられるのは、彼等彼女等と友好的に交流を続けているからだと自覚している。アスナの言うとおりになれば他にも自分と交流している【ファミリア】の主神と眷族もそうなる可能性がある。しかし、全員が全員じゃないだろうと自嘲的な笑みを心の中でして腕を動かそうとした時、腕輪に受信の合図の点滅が前触れもなく生じた。通信を入れてきた相手と通話する姿勢で腕輪に触れると、宝玉から浮かぶ立体的映像に初老の男性が困り果てた表情をしたまま喋り出す。

『お久しぶりでございます。あなた様の話はこちらからでも度々耳にしていますよ』

「初めて通話してきたかと思えば世間話をしてきたんじゃないだろう？ その困り果てた顔、何か遭ったな？」

『ええ、お察しの通りです。商人が冒険者に依頼を発注するのは常識でしょうが、今回頼まれたい事は少々厄介でしてな。私の眷族と知り合いの神がとある場所で捕まってしまい、助け出そうにも手が出せれないのですよ』

「成程。言いたい事は分かったけれど、その場所はどこなんだ？」

『テルスキュラ闘国、というアマゾネスのみしかいないオラリオからずっと離れた南東にある、半島の国です』

初老の男性こと男神は世界各地の情勢を調べなるべく眷族達に色んな場所へ派遣させている。危険極まりない場所や国々、秘境の地なども含まれていて今回・・・男神の眷族はテルスキュラを調べていたところ、アマゾネスに捕まる直前に報を入れてきたのだと。

「・・・テルスキュラか。確か、世界の情勢を綴ってくれた本にもそんな国のこと書いてあったな」

『ええ、そうです。本来ならば私達が助けに行くのが筋なのですが、戦闘ができる眷族が全員で払っており、彼の地まで向かうとしてもかなりの時間が掛ってしまいます。申し訳ないとございますが、オラリオの冒険者をクエスト冒険者依頼で依頼し、どうかあなた様の千差万別のマジックアイテム魔道具を駆使して助けていただけたくれないでしょうか？報酬は勿論なんでもご用意させていただきますので』

直接頼まれては事我切れない自分の性分に溜息を内心で零し、初老の神に聞きだす。

「因みに捕まった輩と神の特徴は？」

『眷族の方は知り合いの神に訊ねれば判りますが、その神は——ヘルメスです』

意外な男神の名が出て、半ば啞然とする一誠。何で、そんな所にお前までいるのかと耳を疑った。この事、アスファイ等は知っているのか気になるのは必然的であった。それよりも本当に捕まっているのならただ事でもなく他人事にもなれない話だ。

「・・・分かった。助けに行つてやるよ」

『感謝します。ではまた通信を入れる時は眷族とヘルメスが助けられている頃だと祈っております』

映像と通信は男神から切られてしまい、調理する手を止めてるアスナは何とも言えない表情を浮かべる一誠に目を向ける。

「どうしたら神まで捕まるなんて事が起きるんだ」

「イツセー、本当に助けに行くの？」

「行くしかないだろ。主神無くして【ファミリア】は存在し続けられないからな。当然、俺一人で行く。丁度したい事があったから都合がいい」

それは何？と視線で訴えるアスナの横で分身体を一人分作る。自分の代わりに夕食を作ってもらう一誠は答えずどこかへと向かおうと足を動かす。その姿に居ても経ってもいられなくなつた少女は……。

「えっと、あの、頼んでもいい？」

「オリジナルだけでも十分だと思うが……ま、好きにすればいいさ」

「ありがとう」

身に付けていたエプロンを外して分身体の一誠に手渡し、後を追うアスナを視界に入れ「愛されてるなあ」と感想を呟いた声は静かに虚空に消えた。

「一体どうするんだよアスファイ」

ヒューマン、デミ・ヒューマン 亜人達と擦れ違いながら歩く大通り。蒼い空の下

で当惑の色を表情に浮かべる犬シアンスロープ人の少女が、疲労以外にも苦悩の色を碧眼の瞳から窺える少女の名を呼んで情けない声音で訊ねるも、アスファイもどうすればいいのかこつちが聞きたいと捕まっている主神に対して酷く困っていた。事の原因は無論彼女の腕輪にヘルメスが通信を入れてきたことだ。

『——ごめんアスファイ。テルスキュラのアマゾネスに捕まっちゃった。助けに来てくれないかな？』

【ヘルメス・ファミリア】の団長を間抜け面させた、苦笑いしながら助けを乞うた主神。一拍遅れて事の重大さに絶句した記憶はまだ新しい。オラリオからずっと離れた島国に行くにしても時間が掛る。魔法の絨毯で良ければ辿り着く時間は短縮されるだろうが、その魔法の

絨毯はヘルメスが愛用してテルスキュラのところにある。仮にアマゾネスだけの国に辿り着けたとしても簡単に主神を取り戻せるか分からない。どんな理由でいつも飄々としている男神を捕まえたのか定かですらない。本当にどこまでも困らせてくれる神だと額に手を添えて深い溜息を吐いた。

「……かくなる上は、もう一度あの魔法の絨毯を製作してもらわないでしょう」

「でもよ。あれって結構時間が掛るんじゃないのか？」

「では、他に方法があるのですか。あるのであれば今直ぐ言つて下さい」

返す答えが無い犬シアンスロープ人は呻き、尾をシュンと落ち込んだ風に垂らした。現状、主神の奪還に必要な策は皆無に等しい。共にテルスキュラへ赴き手伝つてくれる上級以上の冒険者などこのオラリオにどれだけいるか……。

「イツセーは……いえ、駄目です。Lv. 以前に彼に迷惑を掛けてはいけません」

常識はずれな魔道具マジックアイテムを製作する男の顔を浮かべたのは一瞬で、上級冒険者の自分とテルスキュラへ赴く資格は足りない。何より店を構えているからにはおいそれと休業にしては収入が得られなくなる。

そして交流あつても他派閥の主神を助ける義理なんてある筈が無い——。不意に犬シアンスロープ人が立ち止まり、それに気づくまで数歩先まで進

んだ頃。怪訝で振り返って彼女の顔を視界に入れた。何故か信じられないものを見る目とあぐりと開いた口が塞がらない顔をして上を、空を見上げていた。空に何があるとアスフィも両の瞳を蒼空に向けた瞬間に、巨大な船がオラリオの上空に浮かんで無数の光を放ち翼を広げ、東南の方角へ進路を向けて飛んで行く様子と光景が視界に飛び込んできた。空飛ぶ船は下部の方が変わりない船であるが、上部の方は船を浮かせる役割を担っているドラゴンを模した何かだ。あんな巨大な船——魔道具マジックアイテムなものかも分からないが、アレを作り出せそうな者はこのオラリオできつとただ一人かもしれない。

「まさか……いえ、しかし……！」

居ても立ってもいられなくなったアスファイは犬シアンスローブ人の少女を置き去りに、足に翼を生やして空を駆ける船へ飛翔する。巨大な船の横を通り過ぎながら甲板に辿り着いた時はオラリオからだいぶ離れた頃であった。通常の船とは造りが違うのを確かめながら周囲を見渡すその目に。

「ネギは背負ってないけどカモが来たか」

「——っ！」

「丁度いい。一緒にテルスキュラに行こうかアスファイ」

甲板に佇む見慣れたこの船の舵を手動で行っている男が朗らかにアスファイを誘った。

空を大海原のように移動する船の甲板の上で一人のんびりと操舵しながら心地の良い風を受ける一誠に近づき、疑問をぶつけずにはいられないアスファイの口が開く。

「これはどういうことなのですか。この船は一体、あなたは何故テルスキュラのことを」

「こつちも知り合いの主神の眷族がアマゾネス達に捕まってるから助けて欲しいって依頼を受けたつもりが、まさかヘルメスまで捕まっているなんて思いもしなかった。どちらにしろ二人を助けなきゃいけなくなつたわけでこうしてこの騎空艇で迎えに行こうとしている最中なのさ」

「騎空艇？マジックアイテム魔道具の類の物ですか」

「ソー、何て言えばいいんだかな。この船を動かしている源は主に鉄と金属で造られた機械ドロップアイテムつていう代物なんだ。まあ、他にもダンジョンで手に入る怪物の宝ドロップアイテムも使っているが基本的に木材と鉄だけで造つた」

船は分かる。造船の技術は存在しているし、オラリオや他の国に行き来する為、海を跨いで航海しなければならぬ必要不可欠な船なのだ。しかし、海には水棲のモンスター達が海中を我が物顔で棲息し、時々ヒューマンデブ・ヒューマンや亜人デブ・ヒューマンを載せる船に襲いかかることもある危険性を伴う。だが、空を飛ぶ船を木材や鉄だけで設計図も無しに創れと言われたら、造船の技術者達はどう思うのか想像に難しくない。

「(一体何時の間に……)」

「そんな訳で今回、初の試運転を試みている最中だ。今のところ順調のようだがな。そろそろ次の段階にいつてみるか」

何を？と思った矢先に一誠の手は操舵する場所にいくつもの箱に突き刺さっている鉄の棒の一本、それを掴んで押し上げた途端。推進力の役割を担う風車のような二つの羽の他にもう一つ、木製ではなく鉄で作られた羽が回り始めてから徐々に速度が増して、風を受ける影響も強まった。風で航海する船が出す速度ではない事を水色アクアブルーの髪と純白のマントを乱しながら感じるアスフィは楽しそうに笑う一誠の声を耳に拾う。改めて船から眼下を見下ろすと、青い海面からかなり高い位置で駆けているどころか雲の上まで飛んで行こうとしているのが察した。雲の上——一体どんな光景なのだろうか？人類に翼が生えていたら自由気ままに空を飛んでいただろう。

「テルスキュラ 闘国まで時間は掛るからしばらく空の航海を楽しもう」

「……はっ」

何となくどうやって船を動かしているのか好奇心で操舵をしている一誠に近寄った。大きな操舵輪がある場所は甲板より一段高く短い階段を上る必要があった。強い風を受けながら振り飛ばされぬように気を付けその近づき男の背中を碧眼の視界に入れた。

「………」

「………」

片足に絶対に離れないと意思表示をこれでもかと両手両足、背中に得物を佩いている身体でしがみつく金髪金眼に銀髪青眼の少女がいた。自分は何かおかしなものを見ているのか、それとも疲れているのかと瞬きをしても変わらない現実がアスフィに突き付けた。少女達の方はアスフィに目を向けても意を介さず、ジツと足にしがみついたまま微動だにしないでいた。

「イツセー………」

「言いたい事はわかる。でも、何も聞かないでくれ」

「………」

意外と彼も苦勞しているのか？もしや、自分だけと思っていた者が他にもいるのか？後方から風に混じって聞こえる足音を耳にしなが

ら思ったアスフイの想像は的中した。

アマゾネスの聖地。陸の孤島、テルスキュラ 闘国。その国に生まれ、生を受けたアマゾネスの殆どは生涯生き死ぬ。蠱毒の習慣によって。

一柱の女神が降臨する以前より殺し合いという名の『儀式』を続けてきた、女戦士の国。生を受けたアマゾネス達は皆、覚えているもつとも古い記憶は、背中を焼く熱さと、己のものとも片割れのものとも知らない泣き声だ。神の恩恵。ファルナ 生まれた瞬間より、幼いアマゾネス達は女神の眷族の末席に加えられた。テルスキュラのアマゾネスは喋るよりも先に、怪物の殺し方を覚えると言う。『恩恵』によって最初から解放された潜在能力と、モンスターの子の前に放り出される最初の洗礼——振り落しは、ようやく立てるようになった稚児であろうと戦士たらしめる。事実、幼いアマゾネス達が物心ついた時に握っていたものは、母親の手ではなく身の丈ほどもある刃物の柄だった。親の顔はしらない。声も聞いたことが無い。父親も然り。生まれたばかりの少女等アマゾネスは家族なんてものを知るよりもテルスキュラの風習が、テルスキュラでは『真の戦士』こそ尊ばれると、深く濃く頭や心に植えつけられる。

女戦士の聖地では強さこそが正義であり、心理であった。強者は称賛を受け、地位と名誉を手に入れる。反対に戦いの中で散る誉れさえ受けられず敗北した弱者は、国と強者を支える労働力と化す。値を伴う闘争は『真の戦士』に到るための手段であり、階段であり、古来国の慣習だった。まさにテルスキュラはアマゾネスの本能が具現化した国であった。そして『古代』から神時代に移った後、国に現れた女神も闘争を愛していた。女神の『恩恵』が、進化していく能力が、戦いをより激化させていく。強さをもたらす彼女は唯一無二の主神として崇められ、止める存在も無く闘争と殺戮の儀式は隆盛を極めていた。

そんな男子禁制の国にももしも男が近寄り、もしも捕まれば奴隷か、種の繁栄の道具としてでなければ存在を許さない話が囁かれる。それを承知の上で近づく輩は肝が据わった豪胆な勇者か、タダの馬鹿

か。捕まれば最後、二度と闘テルスキユラ国から出る事は叶わない厄介極まりない国なのだった。

「して、ヘルメスよ。オラリオから強い猛者を連れてこきす件はどうなっておる」

「えーと、多分、俺の指示に従って準備をしているんじゃないかなー」

石造りの闘技場アリーナの中の神座。長椅子ソファに寝転がりながら一柱の女神が訊ねた。羽付きの鍰広帽子を被り橙黄色の髪の上から被り軽装の旅人服を着ている男神の髪と同色の瞳とその顔を視界に入れながら。相手の出で立ちは鮮血のごとく赤い髪、アマゾネス達、眷族達と同じ褐色の肌。その背丈はいたいけな少女そのものだが、もした骸骨を繋ぎ合せた首飾りと、牙を生やす仮面、更にその奥から覗く眼光が異質さと威光を放っている。その側には、神座の空間で男神ヘルメスを取り囲むように立ち並ぶ多くの女戦士アマゾネスが立っていた。至って居心地の悪さに極まる状況の中で乾いた作り笑いをして返答した。

「それとオレと一緒に来た子供に危害を加えてないよね？」

「お主を天界に送還するなぞ造作もないがお主の眷族、もしくはオラリオの強者をこの国に連れてくる約束を解放の条件を持ちかけてきたのじゃ。この国しか知らぬ妾達にとつて外の世界から来る強者は格好の獲物。ならば危害を加えては折角の機会が台無しになる故、お主の要望は確と守っておるから安心せよ」

「ああ、感謝するよカーリー」

安堵で胸を撫で下ろしたい気分のヘルメスはホツと息を吐いた。

「しかし、妾を満足させてくれぬ子供であつたらお主の連れの子供は解放せぬし、お主も開放をしない。神の種を受けた子供が生む子はどんな成長を遂げ、強くなるのか一興であるからな」

「ア、アハハハ……。(アスファイ、オレはお前を信じてるからね！)」

種の繁栄の道具として一生囚われの身と成りかねないぞ、とカーリーからの宣告に冷や汗を流さずにはいられなかった。眷族達の働きに縋る他ないヘルメスはお暇しようと立ち上がった。ここにいる

その時まで待つより石造りの牢屋にいた方が何倍もマシな気分になるからだ。牢獄に戻る動きを示す男神に周囲のアマゾネス達の内の二人が動き、両脇に移動して連れて行こうとする。それを紅の瞳の視界に入れながら見届けながら擦れ違おうように神座にやってきたアマゾネスが報告をした。

「カーリー様。この国に近づく船が見えました」

「ほう。その船はヘルメスが呼んだ者であるか？」

「わかりません。ですが、その船・・・信じられない事に空を飛んでこちらに近づいています」

「は?」

船が空を飛んでいる?ふざけているのか冗談を言っているのか——否、神の前で嘘を吐いていないアマゾネスはその目で見た事をそのままカーリーに告げている。真であると分かるや否やカーリーは眷族を率いて外を眺めれる場所へ赴いた。そして、その紅の目で現実を収めた。海ではなく空を航空している飛行中の船が真っ直ぐ陸の孤島に向かって来ている姿を。主神と同様、アマゾネス達も瞠目して信じられない物を見る目で目に焼き付ける。自分達の真上を通り過ぎ、広い場所へ止めようとする彼の船を目で追い、アマゾネス達自身も船を追いかけに行く。

「へえー、ここにテルスキュラか」

船橋も棧橋もない地上に着地して船から長大の足場を掛けて、降りる己らを取り囲むアマゾネスだらけの女戦士達を目の当たりにしながら興味深々で見渡す。新天地に踏み込み、突き抜けた戦力を保有する国の先住民達と接触した瞬間の喜びを浸る暇もなく、構えられ突き付けられる得物の多さに落胆の雰囲気醸し出す。

「アスファイ、全然歓迎されてないぞ」

「されないのは当然です。ここはある意味国家系【ファミリア】なのですから、不法侵入を果たした私達に歓迎する筈が無いです」

尤もな意見を述べ、警戒を払いながら船から降り立つ。一誠、アスファイ、アイズ。他にアスナやフレイヤ、オツタルまで陸の孤島テルス

キュラの地に立つ。

「なら穩便に——フレイヤ、頼んだ」

「もう、私を利用したら高くつくわよ?」

「今回の元凶のヘルメスに払わせてもらおうとするよ」

事実であるからしようがないと溜息を吐くアスフィ。一誠の頼みに応じるオラリオの美の女神フレイヤは一步前に出てアマゾネス達に銀の双眸を向けた瞬間、戦うことしか知らない闘^{テルスキュラ}国のアマゾネス達は骨の髄まで見惚れてしまった。言葉でしか知らない『傾国の美女』がいたとしても、この女神の前では霞むどころか足元に跪いて絶対の忠誠を誓ってしまう事を本能で理解してしまう。同性にも拘らず魂の抜け殻のように口を空け、頬を染め、忘我の境に入る。

「あなた達の主神に会わせてちょうだい?」

「っ!!」

アマゾネス達の間で騒ぎが波打ち、この国の言語か、一誠達が聞いても何を言っているのか一言も理解できなかった。フレイヤは「どうする?」と意味を籠めた視線を一誠に向け乞うと、闘^{アリーナ}技場に行きたいと指す意思表示をしてみると返答された。もう一度女神は言葉でなく行動で頼むとアマゾネス達はその意味を察し、一行を望む場所へと囲いながら案内をし始めたのだった。

「……あの神フレイヤにお願いさせるなんて異常です」

「でも、問題起こさずヘルメスと会えるかもしれないぞ」

「それはそうですが……」

美の女神を動かすことはどれだけ凄いのか認知していないのか、と一誠に対して少し畏怖の念を抱いた少女は主神が捕らわれているだろう晴天の下で鎮座する闘^{アリーナ}技場へ目を向け、救出の意を強める。

カーリーの神座に案内された一誠達は無事に闘^{テルスキュラ}国を統治する主神と面会を臨めた。特に捕縛される事もなく石造りの床に敷かれた赤いカーペットに銘々の姿勢で待って数分後。一つしかない出入口から待ち人ならぬ待ち女神がやってきた。隣を通り過ぎ、眼前の長椅子^{カーベット}へ足を運びそこに小振りな臀部を下ろすだけ飽き足らず小柄

な体を横たわらせた。そして一誠達を品定めする目付きで見回した。

「その女神とはお初にお目にかかる・・・妾はこのテルスキュラ闘国の主神カリーなのじゃ。お主の名は何と申す」

「フレイヤよ」

美の女神の名を聞いた途端に目の色を変え、姿勢を正しく戻して興味深々で一誠達を見る。ヘルメスを餌にして釣ったものは、世界最強と名高いオラリオ、その頂点に君臨する「フレイヤ・ファミリア」。その主神と眷族達が餌に掛ったのであれば申し分ないどころか、これから行わせる行いに心躍らせてくれる名実ともに高い相手だ。この場に噂で聞くオラリオで唯一のLv.7の冒険者や同じ派閥の眷族達であると高を括って子供のようにはしゃいだ。

「おお、彼の女神と眷族がこの辺境の地に来るとは思いもしなかった。てつきりあの男神の眷族達が協力を望んだ猛者の子供達かと思っておったわ」

「私の眷族にお願いされちゃってね。可愛い子供のお願いを聞くのが女神として当然のことよ」

仮、だけどな。と心の中で呟く一誠の心情は誰も聞こえなかった。

「それで、この国にいる男神と一緒に捕まった子供を解放してもらいたいのだけれど」

「ああ、妾を満足させてくれる相手が来てくれたからには約束を果たさんとな」

満足させる？一体何の事か分からないアスファイ以外の一行は不思議そうに小首を傾げる想いを抱いた。今さらアスファイに問いただしても遅い上にカリーリーの意を反すればヘルメスと男神の眷族は解放してくれなくなる。下手な言動はせず自然な流れで問うた。

「ヘルメスとどんな条件を交わしたんだ？」

「なんじゃ、何も聞かされておらんのか。ならば妾から教えておこうかの。あの二人を解放する代わりに条件を突き付けた。それは妾の眷族と闘争をしてもらう為じゃ」

闘争に飢えたカリーリーやアマゾネス達にとって、オラリオの神の石柱を捕らえた事は格好の生贄に等しい。ヘルメスを餌に呼び寄せた

オラリオの冒険者をカーリーの眷族達と戦わせ、負かせ続ければ労働力の奴隷か種の繁栄のための道具として利用ができるし、勝つたとしても満足できる戦いを見られるならば女神はそれで十分なのだ。

「相手は？」

「四人じゃ。そちらも何人でも構わんで。妾達に満足させる闘争を見せてくれればヘルメス達を返そう。ただし、負ければ解放はせんしお主らもこの国に捕らわれてもらう」

「そう……なら、こっちは一人で十分ね」

流し眼で隣にいる真紅の髪の男を一瞥してカーリーに対してフレイヤは微笑する。

「カーリー、きつとあなたを満足させる闘争が見られるわ」

「ほう、それは良きはからえじや。では早速、闘争をしてもらおうか」

顔に笑みを刻んで待ち遠しいそうに長椅子ソファから降りたって準備に取り掛かる闘争と血と殺戮を愛する女神カーリー。

冒険譚12

「何で俺が戦わないといけないんだよ……名実ともに名高いオツタルで充分だろ」

闘技場の戦場の門から己を戦わせるフレイヤに「本当に高くついた」と黄昏ていると、出てきた門と対なる門から四人の女戦士が現れた。砂色とクリーム色の髪を揺らしながら、アマゾネスらしく揃って露出度が激しい独特の衣装を身に纏い、手には曲刀を握っている。

「……………」

「……………」

相手はたったの一人。しかもヒューマン。銀色の髪のアマゾネスの一人が同胞にこの国特有の言語で喋り掛けながら歩み寄ってくる。理解できなくても「私が相手をするから手を出すな」的なものだろう。双眸から強い眼光を窺わせ、何時でも対応できるスキの無い動きで一誠のところまで近付いてきた。対して無防備で銀髪のアマゾネスが目と鼻の先まで見ていた一誠も歩み始め、双方が距離を限りなく縮めて肩と肩が軽く接触した瞬間だった。

それが闘争の合図だとばかりにアマゾネスの戦士が横風ぎに鈍色の軌跡の斬撃を降るつた。

「オツタル。あのアマゾネス達の強さはどのぐらいかしら」

闘技場の上から戦場を見下ろすフレイヤ達。二人が引き寄せられる風に歩んでいる最中に銀の美の女神は武人の従者に、オツタルに訪ねた。答えられる数字や強さの表しの位を聞いたところで結果は見え透いているが、彼女にとって重要なのは魂の輝きと戦う姿が己の眼に適ったかどうかだ。

「Lv. 5、第一級冒険者かとフレイヤ様」

「そう、オラリオの他に強い勢力を保有する国の名に恥じないわね。でも……………」

アマゾネスが至近距離から一誠に斬撃を振るつた瞬間をその銀の双眸で見守りながらクスツと微笑を溢した。

「驚くでしょうね。無名の子供が私の自慢の子供と同等以上の実力で

戦うなんて、皆信じるのも難しい。でも、この戦いでカーリーは思っている。今戦っているあの子はただの子供じゃなく、ましてやただの子供じゃないことを」

片腕のみでアマゾネスの斬撃を受け止めた一誠を見ながら、カーリーと同じく自分も闘争の行く末を見守りながら戦場で巻き起こる光景を見下ろす。

「ツーン」

人の腕一本で、第一級冒険者並の一撃を受け止めたヒューマンに驚きを隠せない。肉体が鋼のような硬度を有していなければ、防具を装備してない体でどうやって受け止めることができようか。腕が駄目なら人体の急所はどうだと、狙いを定めて突き付けた湾曲刀は、突き出された掌手で粉碎された。砕け散る刃の破片が宙に舞う光景を見る間もなく一誠は動く。

「言葉が通じるか判らないけど、壊されたところをみて驚くのは止めておけ、スキができるぞ」

刃を受け止めた腕が掻き消えた一瞬を見たアマゾネス。思考が一瞬だけ停止し、体に次の命令信号を送り動かす前に意識をかる正拳突きを食らい、頬骨が碎ける感触を最後。三人のアマゾネスの横を通りすぎ戦場の壁に激突、壊しながらぶっ飛んだ。

「.....」

壁の穴の奥へ消えた同胞に目を向けるアマゾネス達。気に掛ける時間はあつという間でアマゾネスを殴り飛ばした男へ振り返る。そして、相手は自分達と同等かそれ以上の実力者であると認識を改め、今度は三人一斉に飛び掛かった。

「嵐脚」

爆発的な脚力で鎌風を起こし、飛ぶ斬撃が名も知らぬアマゾネス達へ襲いかかる。無詠唱の魔法の類かと思極めながら軽々と避けて、曲刀で三方向から斬り掛った直前に一誠の姿は掻き消えて、脚力のみで宙を蹴り、何もない虚空を移動する。見た事のない技法にアイズ達は目を丸くせずにはいらなかった。一誠は宙から鎌風を起こす爆発的な脚力で足を振るった。上空からの攻撃では、浮遊力を取得して

いないアマゾネス達にとって避け続け、逃げ惑う他なかった。得物を投げ放つても宙を蹴って移動し軽々と避けられて当たらない。

今度はこつちの番だと拳を構え戦場^{アリーナ}へ放たれた矢のごとく、真紅の長髪をなびかせて一切の躊躇もない落下してくる相手からかわすアマゾネス達だが、地面に突き刺さった拳を中心に亀裂が生じた直後に地面が激しく割れ、穿ち、小規模の地震も起こしてアマゾネスの戦士達を分断させた。

——化け物かッ！

第一級の力を有しているとはいえ、ここまで激しく地面を抉るほどの力はない。相手のLv. は知らないが自分達と同等かそれ以上だと推測し、不安定な足場と化した地面に足へ力を籠めた時だった。崩壊した戦場^{アリーナ}の下から——地面の下から銀髪の女戦士の両の足首を両の手で掴んだ。

「ッ!？」

まさかの地中からの奇襲に目を見開く。そして、悲鳴を上げる暇もなく一気に地面へ引きずり込まれてしまった。

結わえた砂色の髪を腰まで伸ばしたアマゾネスは、半身の半長髪^{セミロング}の同胞の女性の元へ合流し、爬虫類を彷彿させる粘りついた視線で警戒を払いながら獲物を探し続ける。瓦礫の山と化した戦場^{アリーナ}は大小様々に地面が盛り上がったたり抉れたりして、人一人が隠れる広さ^{スペース}はたくさんある。互いが見れる距離で岩の上から探したり、微かな音すら聞き逃さないと耳を傾けつつ息を潜めている男の姿を探す。

静寂に包まれながら通り過ぎた女の背後。物音たたさず岩の表面から一誠が素足で出てきた。その左眼は獲物を狙う猛禽類の光を、狩猟の眼差しをしていて女戦士の背後から狙っているのが窺える。それから静かに手から光刃を伸ばし、攻撃を仕掛けようと構えた——上から襲ってくる蹴り、こちらへ振り返りながら曲刀^{シキター}を横薙ぎに振るってきた二人の女戦士の攻撃を片腕と光刃で防いだ。

一息の間を吐かさず腕で防いでいた足を掴み、目の前の女戦士へ叩きつけようと振るつたが仲間意識は皆無なのか、かわして懐に飛びこ

んでくる。足を掴んでいた手を離して突き出す曲刀シミタイを右肘と右膝で挟み、砕く芸当を見せた一誠に頭蓋を粉碎しそうな勢いの蹴りを放つて、同時にもう一本の得物を振るってくる同時攻撃。空気を切り裂き、相手を襲わんとするその動きはまるで蛇のようだった。繰り返される足を最小限の動きでかわし、得物は突きだした拳で粉碎。すぐさま振り上げた足が死神の鎌を彷彿する勢いで攻撃した。

目を張る蹴り技アマゾンネスに女戦士は片手で防ごうと顔の前に構えたその行動は無下にされた。勢いのあつた蹴りが不意にぶつかる直前留められ、何時まで経つても襲つてこない。一拍の時間の空白が彼女に疑問を抱かせ——彼の男を視界に入れた目が、眼前に見せつけられる手の平から光ったかと思えば、アマゾンネスが極光の一撃に吞まれ、誰にも止められず止まらないまま闘技場の壁まで突貫したのであった。

「さて、残りは一人……」

外の景色が見えるほどの大穴が空いた闘技場を一瞥して、未だ戦闘可能な半長髪セミロングのアマゾンネスへ目を向ける。黒い紗幕を口元に巻き、顔の下半分を隠している女戦士が紗幕に隠れた口で何かを呟いた時、右手が黒紫の光膜に覆われる。華々しい想像イメージを持たれがちの『魔法』の心象を覆すほどに、その光の膜は粘度に富み、蠕動ぜんどうを繰り返し、禍々しかった。

「(うわー、あれ・・・闇についていうより毒だよなきつと)」

推測して毒や呪いに対して若干苦手意識をしてしまう。過去、そういった類のものに一誠は散々苦しめられたのだ。左眼を細め、飛び掛かってくる女に一誠も毒に警戒しながら飛びかかる。

フレイヤ達と対なる位置から闘争を見ているカーリーはアマゾンネスの右手のみかわす男の動きに眷族の魔法は何なのか察したのだらうと、笑みを作った。最後の一人は厄介な魔法を保有している故、そう簡単には負かすことはできないと思っていた時。女戦士アマゾンネス達の復活と復帰を視界に入れながらまだ終わらぬ闘争に胸を弾ませる。

再戦を臨む三人のアマゾンネスが一齐に襲い掛かり激しい乱舞を繰り広げるようになった。八本の手足、十六の攻撃に応戦するのは

乱打戦。^{ブルファイト} 休む間もなく両手と片足のみで戦いわたる一誠の姿にフレイヤ達は驚嘆を禁じ得ない。銀の双眸に映る魂の輝きは真紅色。それが戦い続けていると力強く輝きが最高潮に達しようとしていた。

「オオオオオオオッ!!!」

名も知らぬアマゾネス達へ叫んだ。大気を震わせ、闘技場全体的に響き渡る大咆哮は観戦しているカーリー達やフレイヤ達の肌にビリビリと刺激を与えた。四人の女戦士も例外ではなく、鼓膜が破けそうな程の音量と人間として、生物的本能が激しく危険を訴えた。だが、『真の戦士』に成るために蠱毒の壺の中でモンスターや同胞を喰らい生き続けてきた自分達は誰であろうと臆して負けるわけにはいかな
い――。

「ん、折れないか。流石だ。俺の店に働いてほしい人材だ」

何を言っている。共通語の言葉が通じないこの国のアマゾネスにとって理解し難く、理解しようとは思わないまま肉薄した。

「でも、そろそろまどろっこしくなってきたから……倒しに掛からせてもらう」

膨れ上がる威圧感。何か仕掛けて来るつもりだと本能で悟り、阻止しようとするように荒れた戦場^{アリーナ}を駆ける。しかし、一歩遅く眩い閃光を全身から放つ一誠に思わず足を止めてあまりにも光量に腕で目を守る風に翳して遮る。目眩まし――と何も知らないカーリー達はフレイヤの考え通りになる。収まり始める光はやがて消失し、光に包まれていた一誠の姿が露になると【天使^{デ・シーオ}】に変貌していた。

「……ッ!?」

絶句するアマゾネス達。今まで拳や脚を交えていた相手の姿がヒューマンではなくなった。魔法の影響?それともあれが真の姿? 当惑する彼女達の心境を露にも知らない神聖な姿の男は虚空に消え、虚空から四人の背後から現れ、一人を翼で包む感じで拘束、もう一人は斬り付け、残りの二人は殴り飛ばした。

「……ッ」

カーリーも目を疑い、上半身を前のめりにして一誠の姿を食い入る風に凝視する。次にフレイヤの方へ紅の瞳を向けると、美の女神はこ

ちらに視線を向けてくるのを分かっていたように闘争と血と殺戮を愛する女神を見据えていていた。そして、意味ありげに微笑した時。逆流する極太の極光の柱が二つの視線を遮り闘技場の上空へと衝く勢いで伸びていく――。

程なくして闘争は終幕し、それぞれ合流しながら神座の間に戻った。それまではいいのだが。一誠の身の回りに異変が起きた。

「……フレイヤ、説明してくれ。どうしてこうなるのかを。俺は一体何をしたというんだ」

「戦ったからじゃないかしらね」

モテモテじゃない――一誠を取り囲む恋する乙女こと四人のアマゾネスを見ながら他人事のように言う美の女神に辟易の思いで「戦って負かしてコレってどういうことなんだよ」と溜息を吐いた。他に大切な宝物を取られた子供のような悲しみと嫉妬の気持ちを抱くアイズとアリサに「イツセーって無自覚に女の人を……」と当惑や若干ジエラシーを覚えるアスナ。そして、目の前から

「……やってくれたなフレイヤの子供よ」

「完全に俺は不可抗力！戦わせたカーリーとフレイヤが悪い！」

食って掛かる一誠に親の仇を見る様な目でカーリーは盛大に唇を尖らせる。「彼奴等もアマゾネス雌であつたか」とか「これでは使い物にならない」とか「恋する乙女とかもう……」とか「四人全員がこうなってしまう以上お互いがお互いに闘う理由がない……」とか「お先真つ暗じゃ」などとブツブツ死んだ魚の目で独り言を呟く。

「頭領候補がこれではテルスキュラ闘国はもう終わりかもしれない……ああ妾の楽園が……」

「なに絶望しているのか知らないけれどよ。さっさとヘルメスと一緒に捕まっている他派閥の眷族を解放しろよ。それとも他のアマゾネス達も戦ってやろうか」

「それだけは断じてやらん。したら最後、こ奴らのように全員使い物にならなくなるのじゃ」

危機を感じて二度目の闘争は避ける意思表示をしたところでこの

場に入ってくる一人の男神と男。

「あれ、イツセー君とフレイヤ様？ここにいてことはアスフィとオレを助けるために……」

「ヘルメスはついで。俺個人はそつちの男を依頼で助けに来た方だ」
「アハハ……ま、ついででも助けてくれたから感謝感激だよ。ここで一生暮らさなきゃいけなくなるところだったからね」

その不安は杞憂で終わったからか、ホツと安堵で胸を撫で下ろすヘルメスは当然のようにアスフィの傍により「迷惑を掛けないでください」「あだー！」とやりとりをして折檻を食らった他所に商神の眷族は一誠へ謝罪と感謝の言葉をしていた。これで取り返すものは取り返したことで、一誠達はここに長居をする理由は無くなった。

「それじゃカーリー。私達は帰るわ」

「もう二度と来るな」

「あら、釣れないわね。それなら、使い物にならなくなったっていうあなたの子供を私が貰っていいかしら？」

ヒクツとカーリーの頬が痙攣した。外の世界から獲物を呼び寄せただけの餌が、よもや釣り人が乗る船ごと喰らう大魚を釣るとは誰が思うか。女戦士達の方へ目を向ければ主神の事など構いなしに一人の男の体に身を寄せて雌の顔を浮かべていた。あれがこの闘国テルスキユラに生まれ最凶で最狂の女戦士アマソネスが浮かべる貌か、と目を疑う光景である。女神の視線に気づく一人のアマソネスが徐に共通語コイネーではない言語で口を開いた。

——カーリー、この雄が欲しい。どうにかして手に入れられないか。

——お主らがその男に負けた時点で妾に引き留める術はないのじゃ。

カーリー自身もアマソネスの言語で語り、話しに応じると落胆した仕草をする女。すっかり恋する乙女にまでなり下がってしまった女戦士に己が望む闘争と血を見る事は叶うまいと悟らずにはいられない

い。……ならば。

「条件がある」

「なにかしら」

「妾の子供の中にちと情けをくれてやって手放したアマゾネスがおる。もしもそやつらがお主らの前に現れたのであれば、頃合いを見て戦わせてほしい。そしてその結果を妾に教えてくれ」

二柱の女神の間で交わされる口約。銀の瞳をカーリーから逸らし、一誠の方へ向けると、アスファイと何やら真剣な面持ちで「翻訳できる魔道具マジックアイテムの製作を手伝ってくれないか?」とか「わかりました、協力しましょう」などと自分達の話聞いてその気なのか、そうではなくても共通語コイネーで語らない種族が他にいる事を知って必要になると思っているのか話し合っていた。美の女神は視線をそのまま変えずカーリーに言う。

「それは私じゃなくてあの子に頼みなさい」

「む、何でじゃ。お主の子であろう」

「カーリー、私は一言もこの子の主神とは言っていないわよ?」

フレイヤの爆弾発言にカーリーの顔は盛大に間抜け面を晒した。

「……嘘じゃろ」

「背中、見てみる?」

指を鳴らし、オツタルを動かすフレイヤ。一誠に迫る巨影に「え、なに?」と不思議そうにしていたら、問答無用で男の上着を剥ぎ取られ、カーリーに見せつけては驚かさせた美の女神だった。

その後、騎空艇に戻り全員が乗り込んだ事を確認しながら地上から浮き出す艇を見送る「カーリー・ファミリア」。改めてみてもどうやって巨大な物質を浮かしているのか理解に苦しむものの、目の前の現実を受け入れずにはいられない。

「イツセー君、イツセー君!この船、本当に浮いているよ!オレの

「ファミリア」にも一隻欲しい!」

「バツ、何を言っているのですかヘルメス様っ!」

「値段は億越えだぞ。どんな小さいサイズでも。止めておけ。このぐ

らしいのサイズだったら1000億だし」

「た、高過ぎるよイツセー君っ」

テルスキュラ

闘国から遠ざかる船は空の彼方へと突き進み、商神の眷族を送る旅が始まった。その眷族は甲板から下を見て愕然の面持ちで目も見開いていた。これから送り届けに行く他派閥の主神もどんな表情で驚くのか楽しみだと思っていた時に腕輪の宝玉が点滅した。舵輪から片手だけ離して通信を繋げると、その初老の男神の顔が浮かび上がった。

『こんばんわ、私の眷族は助け出せましたか？』

「ああ、いまそっちに向かうところだけど合流する場所はどこにすればいい」

『でしたら、分かりやすくオラリオにでもしましょうか。我々は今、商いをするために交易所にいます。空飛ぶ船のことで話が持ちきりですよ？』

「だろいな。んじゃ、直ぐにオラリオに戻るから待っててくれ」

『かしこまりました』

映像と共に通信が切られても目的の行く先は世界の中心、地下迷宮都市オラリオであることは分かっている。舵を切る手の迷いはなく、大海原の上で自分達が帰る場所へまで壮大な姿で向かう騎空艇――

「あ、そう言えば名前付けてなかったな……」

赤い衣の巨大な艇――頭の中で想像した異世界の竜を思い浮かべ、やはりこの名だろうと口元を緩めた。

「グレートレッド。今日からお前はグレートレッドだ」

「ねえリユー。空飛ぶ船の事どう思う？」

すっかり暗くなつたオラリオの街に満月が夜天を照らす中で赤髪が特徴の女冒険者から話しかけられたエルフの女冒険者は「どうと」と返事をした。高い屋根の上から大空やオラリオの街並み、大通りを見下ろすために腰を下ろしていた二人も騎空艇の存在を知っていた。実際にこの目で空に浮いてどこかへと飛んで行つた巨大船を

見てしまったのだ。一体どこから急に現れたのか定かではないが実在している物に疑いの余地はない。

「多分、もしかしたらただけどあんな物作れそうなのってイツセーじやないかなって」

「……」

「常識外れな精神と行動力ができる人間に限られる。【天使】^{デ・シーオ}の姿になれるイツセーだったらもしかしてって思ってるんだあ」

「そうですか」

当人が聞いていたら「事実だけどなんか失礼な言い方だな」と複雑な表情を浮かべさせる発言だったが、この場にリユー以外に誰もおらず思った事を言い続けられた。

「この間の戦争遊戯^{ウォーゲーム}も魔道具^{マジックアイテム}だけで勝っちゃったし、空も飛んでたわ。——あれも道具で飛べるなら欲しいわね」

「アリーゼ、それが本音では」

若干呆れツツコミを入れた。高い所と風が好きなアリーゼの気持ちを分からなくはないのだが、本当に彼の者は信用してもいいのか疑惑が胸中に生じる。空飛ぶ船を作った者の気持ちなど理解し難く、何の目的で作ったのかもわからない。あれからどこに行ってしまったのか今となっては探し様が無いのだが、また戻ってくるような事があれば正義と秩序を司る女神の眷族として取り調べをする必要がある。そう——いま空の向こうから巨大な姿を晒す船を……

「……戻ってきましたね」

「そうね」

目を瞬きし、幻ではないことを視認した後。顔を見合わせて頷き合っている、バツと立ち上がって風のように屋根から屋根へ、建物から建物へと飛び乗りながら移動し南部へ駆けだしていく【アストレア・ファミリア】の眷族達。

交易所にいる商人達と積み荷を巨影で覆う騎空艇の登場に騒然と化する。一人残らず意識と視線を我が物顔で集める船底の横から空飛ぶ絨毯が数人を載せて地上に降下していき、「よつと」と一人の男が

一人早く降り立った。

「えーと、おいどこにいるんだ？」

手を額に添えて誰かを探し求めている男の問いに、ここまで連れられた別の男も周囲を見渡し探し始めた。絨毯から降り立つ少女と男神に女神、獣人の武人の姿を一目見て商人達は察した心情を他所に複数の人々の足が、彼の者達の所へ近づいた。

「お待ちしておりましたイツセー殿」

神威を感じさせる初老の男性が複数のヒューマンと亜^{デミ・ヒューマン}人を引き連れて話しかけた。男神の登場に絨毯から男が降りて、一誠にお辞儀をし、彼の男神の方へと合流を果たす。

「あの国からよくぞ助けてくれました。心からお礼を申し上げます」

「もう二度とあの国に近づけさせんなよな、まったく……」

「ええ、以後気を付けます。それでこの度の報酬ですが……」

「次の依頼を無償で請け負ってくれるだけで良い。もしくはそっちで任せるよ」

あつさりとそれだけで済まず相手を初老の主神はニコリと笑みを浮かべ、恭しく頭を垂らして受け入れた。

「どんな依頼でも完璧に応えてましよう。しかし、あの船……まさか私達より先に完成させるとは驚かされました」

「ふっふっふ……凄いだろ。で、そっちの方はどうなんだ」

「まだ時間は掛りますが、きつと完成させて二号として名乗り上げてみせますよ」

「その時は一緒に世界を飛び回ってみたいもんだな」

故に待っている、とほくそ笑む一誠に男神も首肯し、もう一度感謝の言葉を述べて商人の男神とその眷族達は野次馬の中へと進み消えていく姿を視線から外して魔法の絨毯に乗り込んだ矢先。「いたー！」と女の叫び声が交易所に響き、どこからともなく聞こえた声の主を探そうと見回す一堂の中で「あそこだ！」と商人は腕を伸ばして明後日の方から、屋根から飛び降りてくる二人組の女冒険者を指した。そして揃って一誠の前に降り立ち、口を開いた。

「ほらやっぱり、私の言った通りでしょ」

「ええ、そうですね」

「お前等……」

不思議そうになんでここに？と思ったら赤髪アカの女冒険者リィに肩を掴まれる。逃げたら許さないとばかりの握力が籠められていたのは当人達しか知らない。

「根掘り葉掘り、色々詳しく聞かせてもらおうからね」

「……」

「そして、私を載せて飛ばしなさい」

「それが絶対に本音だろ」

相棒のエルフは申し訳ないと静かに頭を垂らした。それから船を『幽玄の白天城』に収容。後に「アストレア・ファミリア」の一室でアストレアも同伴の事情聴取——腹が空いたので、この手の定番のカツ丼を作って皆で食べながらオラリオの外で何をしていたのか打ち明けた。

「ご馳走様。やっぱりあなたの作る料理は美味しいわねー」

「どういたしましてだけど、理解して納得してくれたかよ」

「主神様も交えてしたからには納得しないわけにはいかないわ。でも、ギルドに手続きもしないで勝手に出たら駄目じゃない」

「状況が状況だからしょうがないだろ。そっちだって外でアストレアが捕まったら律儀に手続きをしてから助けに行くのか？」

それは……と言いつつ辛そうに口籠るアリーゼから明確な返事はしてこなかった。そうしている間に主神が天界にでも送還されたら堪ったものではない。それはアストレアに限らずオラリオに永住する全ての神々にも当て嵌まる事態である。

「規律に反している事については反省しているけれど、後悔はしない。ギルドだってオラリオから神がいなくなるのは軽視してないだろうし、全部が全部、規律を則つてから助けるんじゃないやあ遅い時だつてあるしき。やっぱり友人が困っているなら助けたいのが心情だ」

騎空艇についての事情聴取は無事に終え、ギルドには「アストレア・ファミリア」が説明するとのことと釈放された。ただし使用は極力控えるように嚴重注意されたが本人は気にしなかった。

そこはギルド本部の真下に存在する。幾千年も人類から忘れ去られたような年月を感じさせる石造りで囲まれているその空間は、暗闇に四角を描く四炬の松明だけが四つの赤く燃える火に囲まれている祭壇の中心に存在する石の玉座——神座に座る神物の姿も照らす。神物の眼下にはギルド員が着こなす黒スーツと同じ制服を身に包み込んでいるが、長らく権力と地位を得てから豪遊や豪華な食事などしていた末に、肥満体になってしまった腹部にスーツが悲鳴を上げ今にもはち切れそうに肥えた中年のエルフから報告を聞き終え、祈祷の間と彷彿するさせる空間を後にする姿を見送った。

「フェルズ」

重々しく発する声音に応じるは、影と同化していたかのように暗闇から現れる黒衣の人物。『祈祷の間』の前に近寄り神物に仮面で隠された顔を上げる。

「話は聞いた。『ガネーシャ・ファミリア』の眷族の道具は興味深いと思っていたが、今回は逸脱している」

グローブを嵌めた手を顎に添えて思案する仕草をした。

「空を飛ぶ船、騎空艇とやらを作った冒険者は独自の店も構えているそうだが、どうする」

黒衣の者から問いを受け、神物は一際弾ける松明の灯りに照らされる威厳に満ちた顔と蒼い瞳に一瞬たりとも色を変えず答えた。

「私の神意に関わらなければ、オスマン達に一存する」

「もし関わることになれば？」

「監視の目を放ち、その者の心意を見極める」

その言葉に呼応するかのようにバチツと松明が弾け火の粉が舞った。

テルスキユラ
闘国からヘルメス達を救出してから丸三日が経った。アマゾネスの言語を共通語として会話を成立させる魔導具を、『神秘』のスキルを保有している二人で試行錯誤、何度も失敗を繰り返して、オラリオにこっそりと拉致したカーリーの協力のもと、遂に翻訳の機能が備

わった冒険者用装飾品アックセサリーを完成させたのであった。

「ようやく完成しましたね」

『神秘』持ちの俺達でも苦勞したな。悪いなアスファイ」

「いえ、今回はイツセーに迷惑を掛けましたから何かお礼をしなくてはと思つていましたのでこれぐらいは」

協力させられたカーリーは既に戻されていない。二人が作り上げた翻訳機能がある装飾品アックセサリーは耳に掛ける小さな飾り物だ。女性の横顔を模したレリーフのように意匠と装飾が凝った金の耳飾りで一誠とアスファイは共同で完成させた魔導具マジックアイテムを見下ろし、やりきったとほくそ笑む。

「また二人で作りましたよ」

「ん、そうしよう」

達成感を浸りながら作業部屋から出る二人を待ち構える——南国の島にいる様な風景。白い砂浜に波打つ青い海、晴天の空から降り注ぐ熱い太陽の日差し。一誠とアスファイが今までいた作業部屋は私生活に必要な物が完備された白亜の宮殿のような城である。この風景とこの光景に目を疑う思いで一誠に問い掛けた。

「本当にここで過ごした時間と外の世界の時間の流れが違うんですか？」

「ああ、三日も過ごしたから外の世界は半日どころか一時間も経つちやいない。たったの三分だし、どーしても時間が欲しい時は大抵この中で過ごしていることが多いんだ俺は」

「凄く好都合で便利な物ですね。私も時間が欲しい時もあります」

「なんならこの空間——『自由フリーダム・タイム・バカンス・ルームで有意義な時間の空間』に来れる様に繋げておこうか？何時でも出入りができるようにここで一日過ごしたら外の世界は一分の時しか進んでいないように」

二人だけの秘密の作業部屋——とまではいかないだろうが、主神の我儘や強引に付き合わされる日々を過ごして堪った鬱憤を晴らすのに誰の目も届かない場所はどうしても欲しい時はある。その好意に心から感謝をして頼んだ。

「しかし、ここはある意味今後の事を考えるとどこかの派閥の所有地

となるのでは？」

「ないない。これは個人的に作り上げた物だし、誰が何を言おうと俺が作った物を他派閥の眷族と一緒に利用したところで問題にもならないさ。お互い合意の上でしたんだってな」

当然——と人差し指を立てながら外の世界へ戻る魔方陣の元へ歩みながら付け加える。

「そう、合意の上であれば何だっても問題ないのさ」

四本の足が光り輝く魔方陣の中に踏み込むと二人の体は光に包まれていき、一条の光と成つて外へ転移をした。

一誠の寝室にある南国の島を閉じ込めたようなバスケットボール程の大きさのスノードームがある。それから光が迸ったかと思えば、二人の人間が飛び出してきて現れたのだった。アスファイはまず壁に掛けられている時計の針を確認し、本当に半日すら立っていない事実を認知し、一誠はこの場にいる四人のアマゾネスに……。

「あ、イツセイ君！た、助けて！」

「このお姉さん達は何なんだ、マジで恐いんだけどよ！」

——アマゾネスによつて叩き伏せられ、戦慄している少年少女達に助けを乞われた。何で自分達が数分間いなくなっただけでこうなるのだろうか……。トラブルメイカーの天才か何かか？と呆れ果てて言葉も出ず溜息を吐かずにはいられなかった。背中まで結わえた砂色のアマゾネスがしなやかな細腕一本で軽々と峰田の首を片手で吊り上げて握り締めていたのだった。対して首を掴まれ、命すら驚掴みされている上で宙を浮く足をもがくように揺らし、息を吸い込もうと喉を笛のように鳴らしている。皮膚に噛みつく指を必死に引き剥がそうとしていた姿はどこか滑稽で息を呑む光景である。「何しでこうなつたんだ」と吐息を零し、アマゾネスに手を離せと籠めて左眼を鋭く威圧と力強い眼力で睨みつける。

「……！」

爬虫類なんて生易しいものではない化け物の睨みにアマゾネスの身体が身震いした。小人族バルウムのような体格の少年を掴む手を緩め放し、一誠に対する畏怖の念と己より強い雄の威厳をされては、雌として従

う他ない。他の三人のアマゾネス達も似たような反応をしていた。異性に対して向ける優しい眼差しではない。全てを蹂躪する力と相手の意を抑え込む暴力的な意思と強い光が孕んだ眼差しだ。それ以上事を大きくしたら許さないと一誠の気持ち伝わった結果、その目を見ただけでアマゾネス達は惚れた弱みどころか、本能的に雄に従順な雌となつて大人しくなつた。

「それで、なんでここにいるんだお前達は？」

「え、あ、うん。お金を返しに来たんだ」

この城に招いた覚えも上がること許した覚えもないヒーロー組の異邦人達の存在に深い疑問を抱いて、訪ねた一誠に少なくない数のヴァリスを詰め込んだ亜麻袋を手渡してくるワカメ頭にそばかすの少年。峰田と上鳴の借金の返済に協力してるからこそ、二人だけでは稼げない額をダンジョンから稼いで来たのだろう。ちゃんと誠心誠意を以て返済する姿勢に満足するのだが、肝心の当の二人の内の一人が床に倒れていては色々と駄目ではないか。

「大方、峰田が飛び掛かつたんだろ。馬鹿じゃないか」

「ご、ごめん……」

「俺に謝つてもしょうがない。こいつ等に不用意に近づくなよ。言葉が通じないんだから」

峰田を始め、負傷した面々を放つておいて一誠とアスファイは耳飾りを彼女等に渡しては、耳に嵌めるようにジェスチャーする。その通りにし、女性の横顔の耳飾りを装着した様子を見て二人も耳に同じ物を付けて徐に口開く。

「言葉が分かるか？」

短く話しかけたその声に女戦士達は信じられないような目をしたが、コクリと頷いた。

「——ああ、分かる。この耳飾りは凄い物なのだな」

自身の耳にもアマゾネスの言語で話し掛けられても共通語コイネーに変換、翻訳している耳飾りの機能によって何を言っているのか把握できていた。

「分かるなら結構。だけど、この道具がいらなくなる生活ができるよ

うにこれから共通語コイネーの読み書きを覚えてもらうからな。その後は俺の仕事に手伝ってもらおう。これは決定事項だ、異論は認めない」

アルガナ・カリフ、バーチェ・カリフ、ベルナス・ラーゼ、エルネア・ラーゼ。改コンバージョン宗が可能な状態でありながら『幽玄の白天城』に住む一人と成った。しかも全員、Lv. 5という強さを保有している。オラリオにいる神々からすれば宝の持ち腐れと揶揄しそうなことであるが、一誠にとつて知ったことではないと一蹴するかもしれないがそれよりも……。

「あ、あの……イツセー君」

「ん？ああ、まだいたんだな。で、なんだ」

「えっと、凄いお城なんだね私ビックリしたよ」

「お前等の世界にいる兵藤一誠も同じような物があるだろ。驚くなんて今更だと思いが？」

『フリーダムタイム・バカンス・ルーム』のことだと察してぐうの音も出ないほど認めてしまう、異邦人のヒーロー達。変な溝が出来てから一誠はともかく少女少女達は何とも言えない気まずさでいつもの調子と話しかけ辛さにしどろもどろしてしまう。

「それで、俺の家に上がり込んだのはお前らだけか？キリト達はいるか」

「え、う、ううん。僕達だけだよ。あと、アスナ先輩、ここにいたんだね。他の先輩達が心配していたんだ」

「今まで音信不通で悪いと思っっていると思うぞアスナは。ま、まだまだ気持ちの整理が出来るまでこの城に居座り続けるだろう」

「アルテミス・ファミリア」が団長と副団長の仲違いしていることはとつくに知られているだろうと悟った風に述べる一誠を艶がある長い黒髪をポニーテールにしてる少女が言い辛そうに尋ねた。

「二人の関係をどうにか戻せませんか？」

「助けを求めるならしなくはないが、求めて来ない限りは二人の問題だ。下手に首を突っ込むのは止めておけ。ややこしくなるだけだ」

「でも、団長がずっと落ち込んで……」

「黙って浮気した方が悪いんだ。自覚しているんだから落ち込むのは

当たり前。というか、他派閥の団員の恋愛事情にどうして俺まで関わらせようとするお前等の意図が読めない。阿呆なのかお前等？」

自分達が知る兵藤一誠とは思えない厳しい面だけが出て来る。取りつく島もなくもないが取りつく島は断崖絶壁みたく上陸が厳しい。「個人の問題に他者の助けを求められてないのに自己満足で助けようとするな。お前等は他人を心配することよりも自分を心配することを忘れるな。ていうかキリトのことは放っておけ、その内自力で立ち上がる」

「本当にそう思ってるの？ 厳しいよイツセー君」

「女のお前らには解らないだろうよ。逆に男なら少なからず理解できると思うがな」

あれ、もしかして認められてる？ と淡い期待を抱く少年達は一誠に対する印象が柔らかく――。

「女遊びと豪遊に溺れて大失敗、大火傷した馬鹿共は一生女心なんて分かるはずないだろうがな」

極一部の少年だけは滅茶苦茶厳しかったのは変わらないことを突き付けられたのであった。

同時刻――。

ヘアアイストスのもとに一通の手紙が届いた。元眷族の主神としてなのか、ある者から直接渡されたその手紙の内容を、綴られてる文字を追いかけていく内に鍛冶神は重い息を吐いた。

「取引？」

夕餉の準備中に話を持ち掛けられ怪訝に「何の？」と風に左眼を向ける。料理ができる女性陣と大量の食材を加工し、煮込んでいたり焼いたり炙ったりして忙しい雰囲気醸し出しているキッチン。「ヘアアイストス・ファミリア」の支店に届けられた手紙をヘアアイストスから受け取り、調理していた手を止めて読み何て書かれているか簡略的に零した。

「商會が騎空艇の取引をしたいわけか」

何て愚かなことか。と手紙を気で具現化した炎で灰にして調理に

戻る男にへフアイストスは「いいの?」と彼の心情を読んだ上で問う。取引をする気が無い事を察しながら。

「新たに造船するならともかく、俺の騎空艇を取引の商品にしたなんて話しても無駄だ。ギルドですら払えそうにない額の価値があるんだからな」

ほくそ笑む一誠は自信に満ちた声音で、取引に応じる気はないと語る。

「仮にギルドからも似たようなお願いをされても?」

「ぶつちやけ、あれは趣味で作ったようなもんだし、これ以上作る気はさらさらないんだよね」

しゅ、趣味……度肝を抜かされた思いで言葉を失ってしまった鍛冶神。趣味でこの世で一つしかない巨大な船を作った本人の精神は理解できない。ただの阿呆かそれとも歴史に名を残す異邦人か、そんなことを考えていると目の前に突きだされる皿に盛られた料理が視界に飛び込んでくる。どうということ?と紅の瞳を元眷族に視線で訊ねれば、持てと催促する手の仕草が答えた。

「暇なら手伝ってくれ。俺は相手が親だろうと神であろうとコキ使う主義だからな」

「……わかったわ」

彼の隣に立てば色々と気を付けなければならない。何てバチ当たりなど言われようと一誠には常識も概念も通用しないことをへフアイストス達は知っている。何故なら——彼は異世界から来た人型ドラゴンなのだから。

「神様も手伝わせるって……」

「アスナ、この世界にいる神は神であって神じゃない。人間臭い神なんだ」

親しい者ですら入れない——『フリーダムタイム・パカンス・ルーム』の中

でたった一人、異世界にいる家族達と会話を臨む一誠は互いの世界の情報や近況の報告をし合うことがここで行っている。濡羽色の長髪に同色の瞳、ゴスロリを着ている幼女の瞳から立体映像として立ち元

気な姿を見せて安心させることも兼ねて。数多の視線を向けられながら嬉々として語り続けていく内に話す内容が打ち止めとなった。

『——とまあ、俺からの話しはこれで終わりだ』

「かしこまりました。随分と楽しんでお過ごしのご様子みたいで安心しました」

長い銀髪を背中まで結わえた琥珀の双眸のメイド服を身に包む女性は、報告を聞きながら記録として書き残した書類から目を離して柔和に微笑んだ。

『そつちはどうなんだ？』

「はい。前回一誠様が現れてから皆様の調子は戻りつつあります。本当にお戻りになられた時は、お覚悟をしてください」

『・・・嬉しいのに何故か死を連想してしまうのは俺の気のせいだろうか』

気のせいでございます、と優しい声音で語るが周囲の家族達の目には妖しくて獰猛な輝きを孕ませていた。

「二二(帰ってきたらタダじゃ済まないから・・・)」

言葉にせず視線でそう語っていることを悟ったのは長い付き合いをしてきた故か、否が応でも伝わってくる。元の世界に戻った瞬間。天国のような地獄、地獄のような天国を同時に身を以って味わうことになることも。

若干戦慄、畏怖の念を感じているとこの場に複数の魔方陣が出現した。それはとても見慣れた色と紋様のこの場に転移してくる魔法円の陣で、発する光とともに魔方陣の数だけ人物がその姿を顕現した。

「よお、久しぶりじゃねえーか」

「お久しぶりです兵藤一誠君」

「本当に異世界からどんな形でも戻って来ていたのね」

三人の男女が旧友のように接し、三者三様笑みを浮かべながら話し掛け——目の前で一誠が消えた。どういふことだと微妙な雰囲気の中、メイドに問わずにはいられなくなつて黒髪に金のメッシュを入

れた悪風な中年の男が「…………おい」と口を開き、訊ねられたメイドは淡々と答えた。

「時間切れでございます」

「時間切れだとおっ!?ちよつと待て、折角感動の再会にとちよつと格好いい登場をしてみたらギャグ漫画染みた感じになるんだよー」

「誰もあなた様の登場シーン等お求めになられておりません」

『——まあ、来てくれたんだからもう一度話をしに来るがな』

辛辣なメイドの言葉に凹みそうな中年男性の後ろから一誠が再び幼女の瞳を介して現れた。

『久しぶり、アザゼルのおじさんとミカエルのお兄さんにルシファーのお姉さん』

「話しは窺っておりますよ。そちらの世界に同名の神々がいるそうで」

「同名の魔王とか悪魔とかいないのかしら？」

聖なる神々しさを醸し出している金髪に碧眼の男と紅色の長髪と同色の瞳の女性は改めて再会の言葉を口にする。魔王と悪魔は存在しないと首を横に振って否定しながらアザゼルと呼んだ中年の男性に目を向ける。

『アザゼルのおじさん。そっちで何か進展とかあった？』

「お前の常識破りな言動振りに見習って俺も開発か発明したら、異世界の一つや二つ行き来できるモンを作れたかもしれないが、まだ進展とまで呼べるほど程遠いよ」

肩を竦め、「寧ろお前の方がそういうモンを作れそうな気がするがな」と皮肉めいた事を言う。

「今でも三大勢力と神々、式森家の間で異世界にどうやって干渉できるか議論を唱え合っているところなんだがよ。お前とオフィスの目がその鍵と成っているのは事実なんだ。その目でこつちの世界に戻ってこれねーのか？」

『できたらとつくにしていたさ。今だって異世界の魔法で出来ている状況だし、こうしている間に俺とオフィスの目を介して何かできないのかアザゼルのおじさん』

「……お前、頭冴えてるんじゃないのか？」

それをヒントに後日。様々な実験を繰り返し、遠くない未来ある現象を引き起こしてみせるのであった。

「ガネーシャ・ファミア」の眷族になって半年が過ぎた。季節の移り変わりが肌で実感していくのが感じとれても、『バベル』へ赴く冒険者達はダンジョンへ向かって消えていく頃、一誠達は騎空艇に乗り込んで『空の世界』へ旅立っていた。今回の旅も自分と同じでヘファイストス達が好奇心を抱くだろうと目的の島に行く前にザンクティンゼルへ寄った。岩壁を横通り、躍り出るように島の上空を飛翔して青い草の野原に降下する。住民達は既に集まっていて甲板から降りてくる者達を待ち受けていた。一誠達が姿を現すと歓迎の雰囲気醸し出した。ザンクティンゼルの住民達と再会を果たして金髪の少女と空飛ぶトカゲが――。

「オイラはトカゲじゃねー!」

ツツコミを入れながら人垣から現れた一人と一匹を迎え、二度目の空の旅を共にするのであった。初めて乗る騎空艇に金髪の少女ジータは目を輝かせ、アイズとアリサと共に船を探検を臨んで甲板からいなくなつた時を見計らつたようにアスナが話しかけてきた。

「あの子とあのモンスターは？」

「ジータという少女にビイっていう竜だ。空の世界はモンスターと共存ができる環境があるらしい。だから俺も安心して正体を明かしても問題ない」

「そうなんだ。でも、どうしてあの子も連れてきたの？」

「約束をしたからな。騎空艇を完成させたら乗せるって。それと空の世界の文字は読めないから翻訳してもらおうつもりなんだ」

「え、空の世界の文字って共通語コイネーじゃないの？」

「じゃなきゃ、ジータを連れて来ないの意味を籠めて操舵を操りながら頷く。「今も勉強中だ」と告げ小さな存在は一誠達にとって頼り甲斐がある大きな存在であった。」

「これから初めて行く灼熱の島――砂塵が覆う鋼の国、バルツ公国

とやらだけでなく、この世界にいる限り俺達はジータとビーが必要不可欠な存在だ。文字の読み書きが覚えるまでの間だけだな」

「そっか。だけど初めて行く島にこの船を置く場所なんてわかるの？」

「わからん、探せばその内棧橋みたいなもんが見つかるだろ。これもまた冒険の醍醐味ってやつだ」

不安が無い旅はない。不安を抱えながら目的地に向かう最中、様々な障害と出会いと別れ新たな冒険が待っている。それが楽しみだとアスナに伝えながら騎空艇の速度を上げた。それから一誠の行動力に半ば翻弄されるアイズ達はバルツ公国で新たな巡り合いと出会いをし、一生忘れられない記憶を残し過ぎたのであった。

冒険譚 13

「ヘファイストス・ファミリア」の支店に椿の手伝いもあって実務はほどこおりなく進めていた。団員達が打ち上げた作品の売上金と予約、補充する素材の点検諸々目に通ず鍛冶神の背後から差し込んでくる太陽の光は晴天の証であった。それでも室内に冷気が滲むように入ってくるので暖炉に火を点けて整った環境の中で筆を走らせる。

「主神様よ、今度はどの『ファミリア』になるのかの」

「藪から棒にどうしたのよ」

「決まっておろう。また手前らの『ファミリア』に成り、再び常識を超えた作品を打ってもらいたいのだ。最近あやつは、マジックアイテム魔道具やら店の事やらで武器を打っておらんではないか。手前は少し不満である」

鍛冶師としての性か今の生活に満喫してなくはないが個人的に不満を抱いていた様子に紅髪紅眼の主神は息を吐いた。

「あの子にはやるのがたくさんあるのよ。そのおかげで私達はまた新しい作品の可能性を見出したじゃない。空の世界で手に入れた武器は真に興奮を覚えたわよ私は。まだまだ神匠と称されるのは早かったかしらね」

「天界で主神様は神々にどう呼ばれておろうと、手前の二つ名は大いに不満だ。モンスターの名前のようだな」

書類の束を執務の机に置いて腕を組む椿は不貞腐れていた。当時、常識神としてもっと無難な二つ名を得たかったヘファイストスは一日の長と数、権力と地位の前に成す術もなく椿にとって不名誉な命名が決まってしまう時は申し訳ないと謝った頃が懐かしい。

「なら、『ランクアップ』するよう頑張りなさい。今ならマシな二つ名を付けられるようにできるから」

「そういうことならばイツセーとダンジョンに参るとするかの」

楽しみだと口角を吊り上げるハーフトワーフの団長に短い応援の言葉を送りながら仕事を没頭する。一年後になればこの場にいない

男の次の「ファミリア」の改コンバージョン宗先が決める催しが始まる故に、ちよつぱり期待する鍛冶の女神の仕事中にノックの音が聞こえた。

——『中層』17階層。

テルスキュラからやってきたアマゾネス達の腕試しが行われていた。四人だけで潜在能力ポテンシャルLV.4の『迷宮の孤王』を相手取っている様子を一誠達は四人の邪魔をさせないよう湧いてくるモンスター達の駆逐を専念しながら見ていた。

「フィン、複数の第一級冒険者が格下の階層主を倒すのはイジメに見えるぞ」

「ン、僕個人に言わせてもらえば君と戦うのに第一級冒険者は100人いても足りないぐらいだよ。オツタル位の実力者だって精々その数倍が欲しいぐらいだ」

「ん、俺から言わせれば全然足りないと自負させてもらう」

体勢を崩し地面に倒した所から乱撃ラッシュ。視界を奪い、極太の足から独楽のように回りながら切り刻み、体術で巨軀の体にダメージを与え、一誠からの願いで『魔石』の直接破壊をせず二組の姉妹は救援の要請を乞わず自分達だけで十分以上経った頃に階層主ゴライアスを倒してみせたのだった。

「強いね彼女達。彼女達のような強い者が「ファミリア」に入ってくれば今後の『遠征』が順調だろうに」

「フィン、強い男に惚れる性らしいからお前を惚れるアマゾネスが現れたら苦労するんじゃないか？」

「ふむ・・・妙に現実味ある言葉を言うではないか」

「フレイバー【勇者】と称されてる者が女に追いかけられる姿など想像もできないが。アマゾネスを入団させるなら覚悟しなければならぬぞフィン」

ドワーフの老兵ガレスと都市最強魔導師のリヴェリアも話に加わり、何故か親指が震えたのは気のせいだと素知らぬ顔で苦笑いするフィンが振るう槍の餌食となったモンスターが最後に、死屍累々と化した空間に立っているのは一誠達冒険者のみ。ゴライアスから魔石とドロップアイテムを回収したアルガナ達が戻り手渡してくる。

「手応えが無い。もっと強い獲物はいないのか」

「大丈夫、後は中層の更に下にいる階層主がいる。お前等と同じLv.は5だ」

「そうか、ここは色んな獲物がいて楽しいな」

長い舌で唇を舐めて好戦的な光を瞳に宿すアルガナ。二人が流暢に話し合っているのだが、共通語コイネーに翻訳している耳飾りを付けているから会話が成立しているものの、フィン達はちんぷんかんぷんだった。それでも一気に『下層』まで移動して『アンフィス・バエナ』の出現を待つ。

「そういや、『改宗』コンバージョンの状態でも【ステイタス】に経験値や熟練度エクセリアつて貯まる?」

「いや、あくまでスキルや魔法、諸能力が変わらず発揮できるだけだ。

改宗コンバージョンの状態は一時的に停滞してどこかの派閥に入らない限りは成長できないんだ」

「逆にお前のように一年毎他の【ファミリア】に異動するほうが珍しいんじゃない。特別理由が無い限り普通はその【ファミリア】に居続けるのが当たり前じゃ」

フィンへの尋ねにガレスも話に加わって珍道中まっしぐらな事をしていいる一誠を認識させる。目の前でこの階層に来た冒険者を圧倒させる緑玉蒼水エメラルドグリーンの大瀑布は海の彼方から来た強さと狩りだけしか知らないアマゾネス達でさえも驚嘆させた。

「そうか、じゃあアルガナ達はフィン達にとって宝の持ち腐れ?」

「ああ、Lv. 5の実力者がどの【ファミリア】にも属さずにいるなんてオラリオじや絶対に取り得ないことだよ?」

そうさせているのはどうやら君が原因らしいけれど、と意味深に付け加えるフィンの指摘に別の考えをしていて思考の海に飛び込んで没頭した。不自然な静かさに皆は視線を一人に注いで言動を待つことと一分。一誠はアルガナ達四人へ視線を向け、とんでもないことを言いだした。

「——【ステイタス】、作ってみようかな」

「……………」

神のなせる業を作る……………だと?

「〜♪」

四人の第一級冒険者が危うげな死闘を繰り広げ、フィン達のフオローも加わって『アンフィス・バエナ』の討伐に成功した。次は自分達だけで倒してみせると意気地を示した後は転移魔方陣で『幽玄の白天城』に戻り次第、転生の神にお供えをした次は工房に籠り出す。作業している少年の邪魔にならないよう斜め後ろ、真横、机を挟んで見学と称した視線を一誠の手の中で弄ばれてる薄い金色のプレートに落とす。その側には赤い液体が入っている瓶が二つ置かれている。それを見てリヴェリアは気にした風に作業している者に話しかけた。

「この赤い液体は血か？」

「うん、神血だ」

「なっ……」

神々の血が目の前に置かれていることを瞠目するほど絶句したハielルフ。一体どの神から採取したのか。神の血を献血する行為はギルドでも禁止しているほどだ。仮にも神々の神血をもとに作製した道具は非合法として扱われる。

「お前……どこでこれを手に入れた……」

「ロキとガネーシャに頼んだ」

「ロキと神ガネーシャにだど？ 一体何時、神血を……」

「千年もののワインの対価にしちゃ、ブランデーと仮面で俺が済ませると思っただかりリア？」

——あの時か……

他の神々や自分達に内密で、二柱の神の贈り物に大変不満を持った一誠が絶対に物では変えられない物を後で要求したのだろう。それが神々の血だ。千年熟成したワインに匹敵する物は、異世界から来た一誠にとつて異界の神の血なのだった。要求された側の女神と男神は戸惑ったものの今後のことを考えた故に受け入れ、後日溜めた血を渡したのだと推測した。

「イツセー、とんでもない要求をしたな……お前が恐ろしく思ったのは今日が初めてだが、誰もが耳を疑うような物を本当に作れるの

か？擬似的に神の恩恵ファルナを作製するなど聞いたことが無い」

「宝の持ち腐れにしたくないからな。主神無しでも『ランクアップ』ができるならあの四人も御の字だろう。それに作り上げられるかどうかは俺の技術次第だ。これは紛れもなく神の御業だ、不老不死を与える『賢者の石』並のな」

瓶を手に取り中から一滴だけプレートに垂らし、『神秘希少ウルトラ・レア』のスキルを全力全開で発揮する。幾重の魔方陣を展開して神の血を宿したプレートに魔方陣を刻んでいく――。

「若、そろそろお戻りにならねば日が暮れます」

「まだ見回ってない店があるのだが仕方ない」

ダオス達がオラリオに来てから今日も美味しい酒を出す店や見聞したことがない料理を出す店、変わった店、ならず者やゴロツキが屯するような店まで訪れて飲食し続けた。が、許された時間は気付けば短いと思うほど過ぎようとしていた。西に沈みかける朱色に染まった太陽と空が蒼色に移り変わろうとしている時間帯、ダオスと老従者は西と北西の方角へ体を向け帰路に着こうとする。

「如何致します。やはりあの店主に決めますか」

「第一候補としては考えてる。が、まだ時間が残っている限りはもう少し他の店を見て回りたい」

「畏まりました。では今夜の食事場は……」

『異世界食堂』だ。あの店はまだまだ食べたことが無い異世界の料理があるのだからな」

王子と従者が食へに行く場所は他の客も、足を運び今日一日の締めとして異世界の料理と酒を堪能しに、空腹を訴える腹の虫を抱えながら向かっていることを二人は気にしない。

そんな中、今年になって一誠、アイズ、アリサが『ランクアップ』を果たしたことでロキとガネーシャは三ヶ月に一度行われる神々の会合、暇を持て余した老若男女の神々がこぞって出席し、名ばかりの諮問機関こと『神会デネットゥス』が開催されようとしていた。

「それじゃ、進行役は私でよろしくね？」

「「「ハーイツ！」」」」

柔和に微笑む銀女神に男神の大半が異論なんてあるか、寧ろある方がおかしい、と笑顔で認めた『デナトウス神会』の進行役に異論を唱える神は約一名。

「つて、どうしてさんざんデナトウス神会に参加するどころか司会進行役も興味無いと言い抜かした色ボケが仕切るんや！己、オキニの子供の二つ名を優先的に決定的にするためやなっ!？」

「あら、誰のことを言ってるのかしら。私には身に覚えがないわ。ねっ、そうでしょう皆？」

「「「それでえーす」」」」

反論するロキに何時もより心なしか顔が楽しげに微笑んでるフレイヤを見て、男神達は今までの三倍は色めき立っている。もう、あの笑みを見たらご飯が三杯おかず無しで食べれるアレの男神を多く味方に付けた美神を止められる神は一柱も存在しない。

「「「……イツセー、ごめんささい。止められないわ」

「あら、ヘフアイストス。イツセーちゃんは「ランクアップ」したの？」

懺悔のごとく吐露した鍛冶神の隣に、たまたまいた蜂蜜色でウェーブが掛った女神の耳に入ってしまったがそれどころではない。今回司会進行役を買って出たフレイヤがし切っていく。まずは都市内外の情報交換を主にした定例報告会。

「ハイハーイー！まずは俺から。誰も知ってるあの空飛ぶ巨大な船の所有者が分かったぜい！なんと異世界食堂の店主だったー！あとついでに今絶賛、商人達がこぞつて船の売買を求めているそうでーす」

「「「なにー!？」」」

「あの子供が……」

「やべえ、オラわくわくしてきた！」

「あの船欲しいイー！」

「面白い道具アイテムを作るし美味しい飯と酒も振る舞える上にあれつて……」

「ぐふふ、イケナイ子だなあ……これはあれだよね？あれしかな
いよね？」

「お、おい！フレイヤ様の満面の笑みからかつてない殺気迸オーラっているから変な考えはよせ!？」

「ヒイイイイ!？」

「ごめんよ、話しの腰を折るようで悪いんだけど、変な話、最近うちの子供の「ステイタス」が初期化しちゃう奇妙な出来事があった。何か知らない?」

「あ、俺んどこもだ」「私の子供も」「なんだ他にも怪奇現象があったのか」

「何それ?」「しるわけねー」「恩恵がバクるなんて有り得ないですー」「じゃあ今度は俺の真面目な話を聞け。王国ラキアがまたオラリオに攻め込む準備をしているらしい」

「ほんと突然だな」

「まーた軍神かよ」

「前回も返り討ちに遭ったつてのにこりねー男神だな」

「王国の子供達がたまに憐れに思う」

ふざけた内容から真剣な話まで、円卓の上で行き交う話題は忙しいなく、二転三転していく。弛緩した空気はそのまま、神達は各々の話しを好き勝手に喋っては他の意見に噛みついて行った。中には目の前に置かれた『料理』に夢中で話しに加わらない神もいる。そんな收拾などとてもではないがつきそうもなかったが——「わかったわ」とソプラノ声を発する司会の声に周囲の声は嘘のように静まり返った。「皆の話しを纏めれば、「ステイタス」の初期化の怪奇現象に王国ラキアの進撃、この二つを気にするべきね。オラリオ侵攻についてはウラノスのことだから、独自に王国ラキアの情報を把握していると思うけれど、ここにいる皆の「ファミリア」は招集掛けられるかもしれないから、頑張りましよ?」

『はいっー!』

フレイヤは提供された情報を簡潔にまとめ、要点だけを抽出していった。神会デナトウズはオラリオの主要な「ファミリア」の主神が集まるだけに、注目度の高い情報を伝達する役割も持っている。

その後もフレイヤは粛々とその場を進めていき、もうあらかた話題

が出尽くしたことを確認すると……彼女は一拍あけて、ニコリと口を緩めた。

「それじゃあ、皆お待ちかねの命名式をしましょう?」

フレイヤのその発言を皮きりに、それまで口を閉ざしていた数名の神が一気に顔色を変えた。

それ以外の他方、ニマア、と。

デナトウス 神会常連である一部の神々が、これみよがしにゲスな笑みを作った。うたげ 悲劇の始まりである。因みに——デナトウス 神会を開催している会場は都市中央に位置する摩天楼バベル、その地上三十階、一つの階を丸々使った大広間の中央にぽつんと置かれている巨大な円卓を囲んでこうしてただの駄弁ホットや最新の情報の共有をし、また意見を交わすのだが今回の催しは一風変わった。

老若男女の神々が現在開催している場所は……『異世界食堂』の二階である。ので、密かにその様子デナトウスと神会の光景を覗き見しようと店主の計らいで、店の中は各テーブルに置かれた大きな水晶玉に映し出される神々の会合を観覧できるように設置されている。その席に座る客達は物静かに食べる事も忘れ、また食べながら音声有りの水晶玉へ目を向け続けていた。従業員達も注文されるまで見物状態だ。

「お前さんそんなでもないことを考えたもんだねえ」
「許可も貰ってあるから覗き見ができるってもんさ」

Lv. 2、上級冒険者になった眷族達の命名式が始まる瞬間を誰よりも真剣な眼差しで見つめる店主にミアは苦笑しつつ自分も水晶玉に目を通す。見ていると始まった命名式にぎらりと眼を煌めかせて、
「店主が本気な眼マジをしてる」と他の従業員達を戦慄させる。

「さーて、トップバッターは……お、アマテラスの子供か」
「黒髪に黒眼、極東の子供は皆可愛い子でいいなー」

「一応、言っておくわ。変な二つ名を付けたら潰しに掛るつもりだから。総勢三百人の眷族でね」

「二「あ、はい」」

極東で増やし続けてきた団員達は伊達ではない。今では最大団員数を誇る「ガネーシャ・ファミリア」をあっさり超えた「アマテラス・

ファミリア」と「イザナギ・ファミリア」、「イザナミ・ファミリア」の三柱の存在はかなりデカイ。古くから神会デナトウスの常連だろうと武力と兵力の数には最大派閥以外敵わない故に格下の「ファミリア」は逆らえない。

「えつと、じゃあ．．．．【黒雛】はどうか？まだ幼さが抜け切れてない印象だ。後々成長する意味で．．．．」

「無難ね。それで結構よ」

『痛恨の名』を頂戴せずにいられる方法は、最大派閥ほど大きい「ファミリア」であることや他の神々に多額の賄賂で回避するからだ。極東の三柱の「ファミリア」の規模は最大派閥として数えられているのでそうすることができ、アマテラスは無難な二つ名を得られて内心ほっとした。続いてイザナギとイザナミの番に回って太陽神と同じ方法で無難な称号を獲得する。だが、そうすることができない発展途上の「ファミリア」の主神達は『痛恨の名』が続々と大量生産され、悶絶する神がいれば頭を両手で抱え慟哭を散らす神もいるし、血涙を流して打ちひしがれる神がいたらその逆、性根の悪い特定の神達が、酸欠に陥りかねない笑いの衝動を得たいが為に、子供達に畏敬さえ抱かれてある二つ名を連発して新参者の神騷りをする。絶叫してはバタバタと崩れ落ちていく者達と、ゲラゲラと笑い声を上げる者達、両極端の陣営を見て、一階にいる従業員や客達は「うわあ．．．．」とドン引きする。

「さてさて次！あ、アルテミスの子供が複数！」

「ほほう、これはこれは．．．．」

「決め甲斐がありますなあ．．．．」

性根の悪い神々にロックオンされた最初の生贄は．．．．キリトだった。

「特徴は黒髪に黒眼、剣を武器にしているか」

「黒尽くし．．．．黒い剣士？」

「なんか普通だなあ」

「黒い剣と呼んで黒剣！」

「それ武器の名前じゃん。黒騎士も中々捨てがたいと思うぜ？」

「真つ黒黒助！」

「黒から離れようぜ」

「黒から離れたら何が残るって話なんだけど」

「悩むな……いまいちピンとこない」

考えに考えて、キリトの二つ名はあーだーこーだと考えた二つ名が行き交い、無難な二つ名であるようただひたすら願うアルテミスの気持ちなぞ露にも思わず、気にせず最終的に決まった称号は。

『——決定。冒険者キリト、称号は【終焉の漆黒剣士】ラスト・オブ・ダークソードマン』

「……ひ、酷過ぎる」

テーブルに平伏す女神を見てしまう眷族の女性は物凄く同情を覚え、店主も他人事ではないと無言で彼女の肩に手を置いて慰めたが、シリカの二つ名は【萌え萌え子】マスコット、シノンは【絶対必中少女】エース・ヒロイン、クラインが【燃える暁の零落侍】バーニング・ラスト・ファイター等と……。

「み、皆の称号が……」

「……お前もいずれ、とんでもない二つ名を……な」

「っ……！」

悟った目で店主に指摘されて肩を震わせるアスナ。恥ずかしい二つ名で街中や同業者達から当然のように言われる日々を思い浮かべるだけで穴があつたら入りたい衝動に駆られる。無論、それは彼女だけ思っていないかった。

「よし、残る冒険者は……ガネーシャの眷族、そしてこの異世界食堂の店主や！」

「……待ってましたあ！」「……」

ロキの言葉に期待の新人の出番で神々が湧いた中、顔つきを変えた一部の神々がこれだけは譲れないというオーラを醸し出す。フレイヤも笑みが一層増した。

「それじゃ、決めましようか？私は【美神の伴侶】ヴァナディース・オーズだけれどね」

異議ありとフレイヤの二つ名を覆せんと我先と既に決めている二つ名を口にする神々が出現する。

「【道化の玩具】ロイザラス！これ以外あらへんでえっ！」

「あの子の為に無難な二つ名として【鍛冶師の双頭】スミス・ツインヘッド」
「お願いできない

？」

「【魔導の錬金術師】で頼むよ。彼が作る魔導具は常識を覆していることを皆知っているんだからさ」

「【天照の従者】！」

「【蒼熾天使】」

「私は【愛玩狐】が絶対いいわよ」

「【象神の料理番長】だあああああつー！」

「【神々達の料理人】に決まってるあー！」

フレイヤの思惑に反して男神達が異口同音で店主の二つ名を挙げたことで命名式は混沌と化した。騒がしい二階に対して一階まで聞こえる神々の喧騒に客達は、厨房で燃え尽きたように真っ白になった店主に対する同情が芽生えたのは言うまでもない。

「【終焉の漆黒剣士】……？」

「な、なんですか【萌え萌え子】って……」

「私は【絶対必中少女】？まあ、呼び名だけ聞けばマシな方かしらね」

「チョイ待て！俺の二つ名が【燃える暁の零落侍】って落ち武者みたいなイメージじゃんかっ！？」

「ごめんなさいっ！」

「イツセーの二つ名が……保留だと？」

「なんか、神全員がこれでない駄目だとお互い譲らなくて……結局決まらなかった」

「私達自身も滅多にない事例だから珍しいと思ってるわよ」

「もう、せっかく私好みの二つ名が決まると思ったのに……」

「阿呆言え、そんな簡単に決まると思うたら大間違いや。快樂主義の神連中を侮ったなフレイヤ」

「【残念……】」

帰ってきた主神から恥ずかしい『痛恨の名』で呼ばれるようになった二つ名の報告を聞き、神と同様身悶える様な気持になったのは言うまでもない。

「それはそうとアイズさんの二つ名は変わらず【剣姫】、アリサさんは【煌銀炎姫】にしといたから！」

「……興味無い」

「……炎姫？」

無難で格好いい二つ名で今後呼ばれようと二人はさほど興味が無い。あるとすれば強さと仲間、慕っている一誠のことだろう。

冒険譚 14

オラリオに満月の月光が照らしている日の夜。一人の影が自室から抜け出して城の中を歩き、明かりもつけずに外へ繋がる玄関の扉まで歩くとできるだけ静かに開け放って外に出た。摩天楼バベルの次に高い断崖絶壁の上にある城から地上に星があるかのように暗闇に包まれたオラリオの街中に魔石灯の光が見える範囲で散らばって無数に灯っていた。その光景を感傷に浸って視線を注いで見下ろしていると後ろから声を掛けられた。

「帝国と違ってあんまり綺麗な光じゃないだろ。見るのは夜空にした方がお勧めだ。目の保養になるぞ」

城から浴衣姿に素足の出で立ちで影に言葉を飛ばす影に「そうかと短く相槌を打つ。

「目の保養とならば、お前は十分過ぎるほど綺麗な花々に囲まれているな」

「俺にはもつたいたい過ぎる綺麗な花だらけさ。それにそれを言うならお前も国に戻れば一人や二人ぐらいいるんだろ?」

「妹や姉なら大勢いるが、お前のように慕ってくれる女性はいないのさ。自分で探すこともままならないのだから」

「そうかい、それは今後苦労しそうだな」

影の隣に立ち、一緒にオラリオの街並みを眺める。天を衝くほどの塔以外は特に何の変哲もない外壁に囲まれた街。あともう少し日が経てば帝国に戻るだろう影、ダオスのことを思つて話す。

「こっちは何時でも行ける準備は済ませてあるぞ」

「わかった。だったら明日の朝にでも出発しよう」

「移動手段はこっちで確保しているがいいな?」

「ああ、元からそうしてもらおう予定だったから手間が省けた」

きつと空飛ぶ船で馬車を乗せて向かうのだろうとダオスは悟っている。そして乗り心地はどんなものか密かに楽しみにして一誠と一緒に城へと戻る。

翌日の朝。オラリオから発つ一台の馬車があった。それが帝国か

ら来た物であると誰も知ることなく、太古地上に進出するモンスターを食い止めるために建造された外壁から遠ざかっていく。何事もなく港町がある方角へと進んでいく馬車を門番達が見送る最中、突然夜になったと錯覚するほど影ができて暗くなった現象を体験する。これから冒険者になるために、商売をするためオラリオに入ろうと長蛇の列を成してゐる者達も同じ体験をする。その原因が何か、空を見上げれば一目瞭然。巨大な船底が見える空飛ぶ船がオラリオから出てきて真つ直ぐどこかへ向かおうと過ぎていく光景を目の当たりにした。そしてオラリオから発した馬車の上にも通り過ぎる最中、船底から円形の光が放たれ、船の下にいる馬と馬車を丸ごと光に包み込むと、船へ浮上して吸い込まれていく。

馬が居座れるよう用意された馬小屋風の空間に馬車が出現した。そこに一誠が待ち構えていて出てくるよう促しの言葉を掛けた矢先、馬車からダオスと老従者が出てきた途端に。

「貴様っ、これは何の真似だ！」

「こつちの方が速いから載せたんだよ」

「そういうことだ爺や。怒らないでほしい」

従者が怒り心頭で食って掛かったものの、ダオスの制止の言葉に不承不承静かにした。睨み付けることだけは止めなかったが一誠は気にせず、馬車から馬を離して牧草と水がある定位置に居させる。

「さて、上に行こうか」

先導する一誠の背中を追いかけ、階段を何度も上がり通路に足を運び三人を迎える扉に手を掛けた。

「……………」

一歩足を踏み入れれば甲板に出る。広い木製の床に涙的状の縁、船に乗っているなら当然の光景が目にする。ただ、上を見上げたら見慣れている青い空ではなく船を浮上させ、翼や尾羽がある巨大な何か船と一体化しており、そこに行ける階段もあった。さらに甲板から下を覗きむと見慣れた青い大海原——からどんどん離れて上昇、空の上へいこうとしているのがわかった。

「帝国までどのぐらいかかるか分からないけど、まあ、数日も経てば着

くと思うよこの速度だったら」

「普通の船より速いのだな」

「そりゃあ空飛んでいるから」

空の下で飛ぶ巨大な船の存在を後に帝国は知り、オラリオの技術力はそのままで高いのかと警戒するがそんな危機感をされているとはオラリオも一誠も知る由もない。

「いらつしやいませ、ようこそ『異世界食堂』へ」

一誠が帝国に向かっていている間でも朝から店を開き、飲食しに来た客達に酒と料理を提供する店の中で西のメインストリートに住む無所属の民間人や「ファミリア」はいなくなってきた。予約しか入れない二階と違って一階はほぼ満席に近くまで埋まってホールの従業員達はかなり忙しそうに動き回っている。オーダーを受けたりされたり、出来上がった料理を客の許へ運び、食べ終えて空になった食器を厨房へ運んだり――。

「あ――」

積み過ぎた皿をバランス崩して客の目の前で床に落としそうになった従業員を目に入れるや否や、光の速度を超える速さで皿が落ちる前に全て拾い上げ、従業員を腕の中に収めたその一瞬は客として食べに来た冒険者の目でも捉えることはできなかつた。

「一気に持って行こうとするな。危ないだろ」

「……は、はいニヤ」

キャットピープル

猫 人の獣耳ごと頭をポンと触れてオーダーを受けに行く店主。たまに見られるこの瞬間を速過ぎて分からないが「物凄く速い動きで落ちた皿を拾い上げた」という認識で、おおーと感嘆と驚嘆の息を漏らし拍手もされることもしばしば。一方厨房では大量の注文をされて調理に忙しい料理人達。その傍には異世界の料理の作り方を教える分身体の店主達がピツタリ寄り添って働きながら知識を伝授している。

「店主、味見してくれないかい」

「ん……もう少し酸味が強くても構わないぞ。薄い味が好きな客

がいれば濃い味が好きな客もいるから」

「あいよ」

「よし、焼き上がる前に次の調理を素早く終わらせるんだ。客を五分もまたしちや駄目だぞ」

「は、はいっ」

「火力が強い、それじゃ食材が焦げて身がボロボロになるぞ」

「ご、ごめんなさいー！」

こんな感じの状態が日常茶飯事と化して店主の指導の下、元『豊饒の女主人』の従業員達の腕が更に高まって料理を提供する『異世界食堂』は今日も平常運転していた。そして、また客が入ってきた知らせが鳴る鈴で従業員達を知らせる。

「いら——」

「金が無いつてどういうアルかあー！」

ドンガラガツシャアアアアアアアアアアアアンツ!!!

外から聞こえる怒れる少女の声ののち、何かが櫂の扉が粉碎してシルに決河の勢いで迫る。絶句で瞳を凍結したように見開いたまま固まり、驚きで身体が硬直して避ける暇もない彼女の前に高速で立つ店主が吹っ飛んできた何かを振り上げた足で床に叩きつけて沈めたが、扉の破片までは自身の手で対処できず客達の方に展開した防壁の魔方阵で防いだ。

「シル、怪我ないか」

「は、はい大丈夫です」

「ん、ならいい。が、人の店のもんをブチ壊した連中にはそれ相応の罰を与えなきやなあ……」

ぐえ、と潰れた蛙のように店主の足に踏まれている謎の少年を冷たい視線で見下ろし、一瞥して扉の方へ鋭く睨みつけた先には……。

髪はサーモンピンク色でロング、右側の頭部に髪留め。肌は色白で瞳が薄青、服装は流水紋が入った白いをチャイナ服風にあつらえたものを着用しているクールで大人の色気を感じさせる大きな番傘を持った美女。

長い茶髪に白いリボンでサイドテールに群青色のつぶらな瞳、白と青を基調したロングスカートの出で立ちで柄がピンク、先端が赤い寶石のようなものとそれを囲むような黄色いフレームで構成されている杖を持つ女性。

長い黒髪をポニーテールに括り、へそが見えるように裾結びしたTシャツに片方の裾を根元までぶった切ったジーンズ、腰のウエスタンベルトには鍔が無い刀を差している女性。

「……………」

三人目の女性を見た時の店主の顔は愕然したものの、最後に黒髪に黒い瞳、胸部に軽装の胸当てを装備している黒一色の服装以外、どこか…………彼の少年と容姿が似ていることで不思議と疑問符を浮かべた。まあいい、重要なのは…………。

「お前等、連帯責任として扉の修理代を払ってもらおうか。この店で働くことだな」

「……えっ?」

満面の良い笑顔で足元にいる少年も含め、五人は『異世界食堂』の新たな労働力、もとい店員に強制的にさせられたのは帝国に向かつている最中のオリジナルにも知られて一人、邪な笑みを浮かべたので王子と従者に不気味がられたのは言うまでもない。店主の店の扉を壊し客達に迷惑と被害をこうむった五人は、慰謝料と修理費という借金返済までの労働を命じられた。その額、五千万ヴァリス。が、当然常識から考えればその額は絶対にあり得ない。しかし、ただの扉と客達に払う慰謝料にしては法外すぎる! そうアル! という悲鳴と抗議は、ゴツツツ! と拳骨一発で振じ伏せられた。

「ここは冒険者が集う迷宮都市だぞ? 正当な規則も法律だって役に立たないどころか存在もしない。そしてこの店では店主の俺の言うことは絶対なのさ。つまりここじゃ俺が『法』だ。俺が白と言ったなら黒かろうが白になる」

「……………」

あまりにも横暴な、と抗議の視線で睨みつけるが店主は吹く風の如く気にせずにスラスラと言葉を述べる。

「それともなにか？人様に迷惑を掛けて、物を壊して言葉一つで済ませるほどお前等は偉いのか？それか、自己中心的で粗暴で乱暴で横暴、性格がクズな女共かなにかか？」

指をぱちんと弾くと恰幅の良い従業員がどすどすと店主の後ろから現れる。

「俺はどつちでも構わないが、壊した扉とここにいる俺達の大切な客達に迷惑を掛けた以上、それ相応の働きで応えるのが人として当たり前なのと筋じやないか？」

自分の言葉に何か異論があるなら言ってみろと不敵な笑みを浮かべて尋ねる店主を相手に、法外な請求以外ぐうの音も出ない正論を言われても逃げたらその瞬間、自分達は最低人間として認識される間違いなしだ。悔しげに、諦観した風な顔と雰囲気を纏う四人の女性達を見て満足げにミアに指示を下す。

「今日は皿洗いと野菜の皮むきを中心に馬車馬の如くよろしく。制服は後日だ」

「その坊主はどうするんだい」

「顔を見た感じ、中々整っているからホールで働かせるとしようかな」「人手が充実するのはいいことだね」

床に平伏す男と強制労働として働かされる四人の女性を前に「そうだな」と朗らかで笑う二人に逆らう者はこの店にいなかった。同時に店主を怒らすような真似をしたら色々と恐ろしい目に遭うと、この日食べに来た客達の間で暗黙のルールが出来上がったのは店主もミア達を知る由もない。

——と、予想外で急展開な出来事がオラリオに起きていながらも騎空艇を飛ばしてしばしの空の旅をし続けること数日。一行は遂に帝国が統治する領土に辿り着いた。広大な野原に山々から流れ出る蛇行する蛇のような細い川、進むにつれ点々と存在する町や村、里の他、農村や農園に家畜を育てている牧場などが見受けられるようになって、騎空艇が向かう先に帝都が待ち受けている。

「……なに、空飛ぶ巨大な船が近づいているだど？」

帝国領の王城内に敵船と思しき巨大な船の接近で慌ただしい。ざわめく重臣達を尻目に現王は報告しに来た兵士に向かって馬鹿馬鹿しいと訝しげな目で視線を送る。帝国の王らしく金髪の頭にちりばめた宝石の王冠、豪遊した者の証として贅肉が付いた頬と小太りな腹を包み込む服装も豪華であるが少し窮屈そうに張り詰めていた。現王の隣には妙齡の絶世の美女も座っており、更に隣には男神が愉快そうに口の橋を吊り上げて現王の言葉を繋ぐ風に兵士に話しかけた。

「相手は帝国と敵対する国か？」

「まだ分かり兼ねます。何分相手は空にあります故、情報が未だに収集できておりませぬ」

「だったらどんな方法でもいいから船にいる者に合図を送れ。できる限り城の外で降りるようにな。その船にいるのはどんなやつなのか定かじやない。もしかしたら大量のモンスターを積んだ敵の攻撃かもしれないからよ」

それはそれで最近暇な主神^{おれ}としては良い暇つぶしになるがな、と内心そう思いながら帝国の主神として指示を下すところ、王の間に新たな兵が報告をしにやってきた。

「報告をいたします。帝都の検問前にて浮遊する巨大船が着陸、そのあと王位継承者百七位の王子であらされるダオス、ダオス・ラーズグリーズ・クリールフス様が帰還されました」

「ほう？」

件の未知数な船から親族が乗っていたという事実には王達は別の意味でざわめき色めきたった。主神は現王に尋ねた。

「お前の最後の子供は酔狂な事にオラリオへ行つてたんだよな？空飛ぶ船に乗って来たつと言うことは最近のオラリオは空を制する技術があるということになるな」

「そ、そうなりますな主神様よ。（我が子め、驚かせてくれたが上手く事を運べば乗ってきた船を……）」

「よし、ちよつくらこの目で見えてくるぜ。ここに居ても退屈だからな」

「——はっ？」

野心的な計画を考えていた王が嬉しそうにスキップしながら王の

間を後にする姿に一同、ぽかんと開いた口が閉じず我に返った時は焦燥に駆られて慌ただしく動き始めた。

「おー、絶景絶景！オラリオ並みに広いじゃないか。風景も綺麗だし観光名所っぽい建物があるみたいだな」

船首の上に乗ってそこから帝国の街並みを眺める一誠と四人の女戦士アルガナたちは待機をダオスに命じられ、何もすることなくただ眺める他やることなく退屈そうであったが、初めて訪れた外国の地に興味はあった様子の彼女達も一緒に帝国を眺めていた。

「私達はこの後どうする、何時まで待てばいい」

「しばらくここでダオスに呼ばれるまでは待たされて暇と言えば暇になるから……お前等も特訓をしながら暇を潰してみるか？」

「闘争か？」

「違う。『恩恵』で、『ステイタス』で強くなる以外にも人が強くなれる可能性をさらに引き出す特訓だ」

ベルナス・エーゼとエルネア・エーゼと交わす中で『真の戦士』を目指す四人にとって興味津々と好奇心にさせる一誠の言葉。アルガナ・カリフ、バーチエ・カリフも含めベルナスとエルネアが揃って視線を送った。

「『恩恵』と『ステイタス』以外で強くなれる方法があるのか？」

「かなーり地味な特訓だけど、極めたら確実にこの特訓を受けた自分と受けなかった自分と比べ物にならないぐらい四人にとって利益があるし強くなるのは保証するよ。こんな風にな」

手から光刃を、もう一つの手から無数の気の塊を具現化してみせて弄び、さらに明後日の空の方へ手を掲げると極太の気のエネルギー砲が放たれた。

「……」

そしてその場で宙に浮いてアルガナ達の周りを軽く動いて元の位置に降り立つ。

「今見せたのは魔法やスキルによるものじゃない。人なら誰しも宿している生命エネルギー、気つてやつをコントロールできれば手から放出したり、刃に具現化したり、宙に浮いたりすることも可能だ。既に

アイズとアリサ、小さい二人の子供が宙に浮くことができるようになってる——けど、四人も試しにやってみる気はある？あ、答えなくていいや。物凄く目が輝いてやる気があるのはわかったから」

特訓次第で魔法を凌駕する攻撃や人の領域、強さの壁を超える技法を得られるならばやって損はないと判断——否、惚れた雄と同じ技法を得れば『真の戦士』に近づけるどころか一誠と言う雄が立つ領域にも近づけるといふ期待で目を輝かせ興奮を覚えた女戦士^{アマゾンネス}達は少年を捕まえて甲板に降り立って早く教えろと急かす。

「——おーい！誰か乗っていないかあー!?」

下から声が聞こえて五人は顔を見合わせた。誰だと縁に近づいて揃って見下ろすと、クリーム色のロングストレートに黄色い瞳の中年の——この国に住む男神である者が衛兵に囲まれながら船と一誠を見上げて立っているところを確認した。

「お、いたいた。オラリオの冒険者達かお前等？」

「ああ、この国の王子に現王の祖父に料理を振る舞ってくれと頼まれて来たんだ」

「と言うことは料理人だな？随分凄いい船を持っているんだな」

「趣味で作った」

なんじゃそら！と目を見開いて愕然とする男神の前で軽やかに降り立つ一誠は自己紹介する。

「オラリオで『異世界食堂』って店を構えている冒険者イツセーだ。所属している派閥は秘密ってことで」

「冒険者が料理人って……まあ、こつちも似たような子供はいるけど異世界食堂ってことは異世界の料理を作れるって意味でいいんだな？」

「そうだ。おかげで店は毎日繁盛で大忙しの時にダオス王子から頼まれてね。空飛ぶ船、『騎空艇』で来たんだけどまだ料理を提供する番ではないらしいからここで待っているんだ」

なるほど聞いた限りでは筋は通る——神を前にして嘘を言っているのかそうでないのか見極めれないことに不思議であるが。

「確かにダオスの番はまだ先だ。それでお前達はここで待っていて退

「屈じゃないのか？」

「船を持って来たんだ。見張りも付けず中に入る以前に取り調べられてそれどころじゃないのは火を見るより明らかだ」

「意外と先を見据えてるんだな。じゃあこっちで船を見張りに——」

「出会って間もない見知らずの【ファミリア】に大切な船を任せられると？」

ニコリと笑って男神の提案を「遠慮する」と拒否され苦笑いの男神は徐に両手を上げた。船の管理は一誠達がする方針で決まり話しが進む。

「なあなあ、異世界の料理って実際どんなの？食べてみたいんだけど」「ダオスの番はまだ先なんだろう？いいのか他の王子の番を無視して」「それとこれは別の話した。食べるのは現王の親父だから俺が王子が連れてきた料理を先に味見しても問題ないって話しさ」

男神の乞いから視線を腕に落として腕輪の機能の一つ、時計の時間を確認すると昼の時間に迫っていることを確認する。徐に視線をアルガナ達へ見上げた。

「昼飯、何が食べたい？」

その問いに彼女達は即座に答えた。「「カルビ丼！」「」と。しかしテルスキュラ国で生まれ育ったアマゾネス達の言語を、帝国の者達が翻訳できるともなく言葉の意味が理解できないと首を捻った。

「……………何て言ったんだ？」

「カルビ丼って牛の肉を使った料理を希望してきた」

「牛の肉を使う料理……………ステーキか何かか？」

「違う。まあ、食べてみればわかるよ。ついでに衛兵達の方も作ってやるから味を堪能してくれ」

そう言って跳躍して甲板に戻る一誠を見送る男神達。その後、思ったよりも早く大きな亜麻袋や食器、調理道具や様々な物を持ってアルガナ達と飛び降りて来た一誠に「もう出来上がったのか？」と尋ねたが否と答えられた。

「目の前で作ってやろうと思ったんだ。見えないところで毒物何かを

入れられているんじゃないかって疑われたくないからさ」

「俺達に信用を得ようと言うことか。良い心がけだ」

目の前で仕度する一誠達を見守る。特典スキルのネットスーパーを行使してヴアリスをチャージ、望んだ商品を購入した際に虚空から現れる段ボール箱から取り出し、アルガナ達の手によって用意された簡易式調理場で料理を作り始めること十数分――。

地面の上にブルーシートを引いてそこに男神達を座らせ、みそ汁と食後用の氷が浮いた硝子の杯に入れられた茶と共にその料理を置く。その料理に使われる食器は、ただ1つの大きな碗のみ。そこに盛られているのは白い米と鮮やかな色の野菜……。そして、しっかりと味付けされて焼かれた牛の肉。それこそがこの『カルビ丼』であった。「はい、おまたせ。これがカルビ丼だ」

「おお……。これがカルビ丼とやらか、何とも食欲をそそらせる香りを立たせる」

好奇心で碗を持ち上げる。料理が冷めぬよう、程よく温められた碗がほんのりと男神の掌に熱を、腕に重さを返してくる。碗の下にたっぷりと盛られた白い米が見えなくなるほど置かれた具。鮮やかな橙色をした、かすかな甘みを持つ人参。茹で上げられてなお濃い緑の色を残したホウレン草。透き通った白く細長い、極東の米。そして白い種のようなもの、白ゴマが振りかけられ、味付けの汁で茶色く染まった肉。

次にそっと顔の前に近づけて、軽く息を吸う。

整った鼻に吸い込まれた香りは、炊きたての米の甘い香りと、焼きたての香ばしい肉の香、そして甘じょっぱくて刺激的な味付け汁の香。その3つが交じり合った香りに、喉の奥……。胃の腑がかすかに鳴くのを感じる。

「それじゃ、いただきます」

一誠が食事の前の作法をするとアマゾネス達も做って同じ仕草をした瞬間、彼女らだけ男神達に渡された器の数倍大きい碗を持っては獲物の肉を貪る獣のように豪快に食べ始める。帝国にもアマゾネスはいなくないが、戦闘に特化した女戦士の食事シーンは見たことが無

い男神達にとってこれが彼女等アマソネスの食べ方かと若干圧倒される。食べた方から見るとかなり下品な彼女等に倣うわけではないが男神達もはカルビ丼を食べ始める。まずは汁のたっぷり染み込んだ肉を持ち上げ、小鳥が木の実をついばむように、少しだけ口に含んで歯で直に噛み千切る。

「おほっ、この味に食感は……！」

舌の上に広がるのは、柔らかな肉の含む肉汁と、かすかに歯ごたえのある脂身の味。帝国の宮殿で出される、燻製されたベーコンやスライスされたハム、ステーキ類の肉では味わえないそれらが口の中にあふれ出し、口の中は肉一色に染まる。そしてそれを支え、味を芸術の域にまで高めているのが、その肉の味付けに使われている汁。

それは果物の甘さと、かすかな香辛料の辛さ、魚醤に似ているが確かに違う、男神の知識には無い塩気、そしてそれらに混ぜられた何かの種の油を含んだ香ばしさ。それらが全部交じり合った複雑な汁の、単品で食べれば強すぎる味が、肉汁と脂をたっぷりと含んだ肉とは暴力的なまでに相性が良い。肉だけでも食べれば美味だと頷かずにはいられない。

「(だが、この肉だけでカルビ丼の本番ではないのだろう！)」

だが、ここで気を抜いてはいけない。肉だけではない。肉だけでは、カルビ丼は完成しない。1度動き出してしまった以上、もはや男神に戸惑いは微塵も無い。彼は更なる未知の味を楽しむため、碗にフォークを差し込む。そしてそのまま……肉を持ち上げたことであらわになった米を一口だけ取り、口に放り込む！

「——ツツツ！」

もはや、頭のなかにすら言葉は浮かばない。口の中にふわりと広がる、帝国、それも王宮では食べたことが無い甘い米の香と味。柔らかく炊けた米が、口の中を蹂躪する肉と交じり合っていく。

「う、美味いっ！」

誇張でも何でも無い。心から思った言葉が男神の口唇を震わせながら発した。この瞬間男神は『異世界食堂』に通い詰める客と何ら変わりない者となる。

味覚だけではない。甘辛い匂いを、色鮮やかな野菜と肉と米の対比を、手のひらから伝わる碗の熱さを、そしてなにより胃袋から沸きあがる食欲を楽しみながら、男神は目の前の料理をゆっくりと少しずつ平らげていく。肉を、米を食う。服を汚さぬよう、慎重に。口直しにそれぞれ薄い塩で味付けされた濃い緑の味がするホウレン草を、かすかに甘い人参を、心地よい歯ごたえがある米を口にしていく。それ自体は非常に薄い味しかない……それが米と肉という暴力的な組み合わせの味を新鮮に楽しませるための、この上ない口直しになる。次に、野菜と共に肉を、米を食う。完成された肉と米に、新たに野菜の味が加わることで、カルビ丼はまた違う味わいを魅せる。肉汁と味付けの汁に歯ごたえの良い野菜の食感。それがまた、たまらないうい。そして何口かカルビ丼を食したところで、海草が浮いた味噌汁を一口、器から直にすすする。その、カルビ丼とは違う味が舌を休ませ……気分を新たにしたことと更にカルビ丼を食べ続ける原動力となる。同時に悟る。アマゾネス達の食いつぶりは、ただ食べ方が下品に見えただけだ。実際はこのカルビ丼とやらの味の虜になって心底から美味しく食べていたのだと。となれば自分はなんて勿体無いことをしたのだろうか……!!

「お代りを頼めるか!」

「ング、あいよ。衛兵達もどうやらお代りを所望しているようだし」

む?と今更ながら眷族の方へ顔を向ければ、口の周りを茶色く汚しては米粒を付けたままおらずと腕を持って一斉に一誠へお代りの意志を示していた事に気付いた。因みにアルガナ達も同様である。

「ふっふっふっ、帝国の主神と眷族達の反応を見る限り、この国でも俺の店は繁盛しそうだな」

「異世界の味は知れば誰であろうと虜になってしまふ。お前、オラリオから帝国に鞍替えする気はないか? 宮殿の総料理長になつてもらいたい」

皆の要望に応じるために新たにカルビ丼を作り始める一誠は朗らかに笑って否定した。

「あはは、無理無理。そんなことになれば俺の店に通い詰めている

「ファミリア」が総出で帝国を潰してでも奪いに来るぞ。特に最大派閥の主神と眷族達が」

「ぐっ……交渉は、無理か……」

世界で唯一存在するダンジョンに集まる神と冒険者。その質と数は帝国を上回り、本当に攻め入れられたら帝国は壊滅的な被害を被ると悟り、物凄く肩を落として落胆する男神——に一縷の希望の光が差す。

「でも、帝国のことを教えてくれたらとある方法で何時でも俺の店に来られるようにしてやってもいいぞ?」

「なに、それは本当にできるのか!？」

「それが出来る許可と場所の提供、後はこっちが指定した人数を守ってくれば」

どうする?と尋ねられるその問いに帝国の主神は、頭の中で思考をフル回転させリスクとデメリット等——考えず私利私欲で二言で答えた。

「いいだろう、この俺が特別に許可を下す!お前の好きな場所を見繕ってやる!」

「じゃあ城の中で」

「む、城の中か……普段使われていない場所でもいいか?」

「アンタらがバレずに食べに来られるならな、広さがあればどこでもいい」

トントン拍子で決まる交渉に衛兵達は止めることはできない。否、衛兵でありながら主神の暴走に便乗すれば異世界の料理を楽しめると私欲を優先的に何も聞かなかった事にしようと言う腹でいた。

「話している内に出来上がったぞ」

「おおっ!」

こんな感じでダオスの番が来るまで男神達は朝昼晩問わず騎空艇に尋ねては、異世界の料理を密かに衛兵達と共に舌鼓して堪能し……帝国の主神の計らいで夜間、城の中を密かに入れさせては『異世界食堂』と繋げる作業をさせたのであった。

冒険譚15

一誠達が帝国の外壁に居着いてとある日の朝。

「主神様！朝食の支度が整いましたというのに今日もどちらへ向かうのです！」

「俺の勝手だろう！ええい、主神の俺に逆らうな！」

「二」その通りだ、そこを通してもらいたい。我等の朝食の為に！」「二」
「四銃士のアンタらも揃ってどこへ行くこうとしてんだアアアアアアアアアアアア！」

そんな騒がしい朝を迎えた帝国の宮殿内では、最近の主神と彼の男神を護衛する衛兵達の奇行に王達はいつもの日常として受け入れ始め数日目。最初は懸念して兵を使って情報を集めてみたらあつさり理由が解って拍子抜けした記憶がまだ真新しい。空飛ぶ船の持ち主、ダオスが連れてきた料理人の料理にいたく気に入った様子で食へに行くこと以外は普段通りなのだがいざ食事の時間になると立ち塞がる近衛兵や従者、メイドの制止を振り切って衛兵と共に外へ向かいだしていく暴挙。

「……ダオスよ」

「はい」

「お前が連れてきた料理人は主神様が夢中になるほど美味しい料理を作れることはもうわかってるが、主神様の暴走はどうか止められないのか」

呆れ顔で「お前が招いた料理人なのだから責任持って何とかしろ」と言外する小太りな王の発言に聡明な判断で進言した。ある意味、ダオスはこの言葉を待っていたとばかり直ぐに動いた。

「であれば父上。私の独断で任せてもらえれば直ぐにでも主神の暴走を抑えてみましょう。不祥事な事があれば責任は全て私が負います」
「ああ、よかろう。これで宮殿内は静かになるなら何しても構わん」

言質は取った、と朝食の途中で席から立ち老執事とともに主神の後を追いかけるダオス。廊下に立ち並ぶ従者や近衛兵の横を通り過ぎながら生を受けてから十数年、カツカツと足音を立てて壁と柱が一体

化している通路を歩く彼の隣で極力声を殺して従者が話しかけた。

「若、まさかとは思いますが……それだけはいけませんぞ」
「では、他に方法があると言うのか爺や。主神を縛って部屋に軟禁などしたら私の立場が危うくなるだけだ。かと言って説得して自重する神ではないことをお前が一番知っているだろう?」

自分がこれからする言動を敏感に察した老従者に言い返して沈黙させた。

「主神の暴走はあの店主が原因だ。ならば、方法は一つしかあるまい爺や」

ダオスを止めることは敵わないと悟った従者の口からもう言葉は出なくなつた。誰が悪いのかと挙げれば皆が悪いとしか言えないかもしれない。快樂主義の神が見たことも聞いたこともない『未知』を直面したら全力全開で楽しむ習性がある。そうなれば眷族総出でなければ止められない神の行動力は凄まじいの一言に尽きる。ならばどうすればいいのかと悩むのが眷族達の仕事なのだ。

「(イツセー、大人しくしていてくれると助かるのだが……)」
ただ料理を振る舞ってくれるだけなら問題ないと片付く。が、その懸念は現実のものとなつてしまった。

城を出て街中を進み直ぐ城壁にある門を潜つてすぐ騎空艇の方へ歩み寄つた足が途中で不自然に止めた。

「……っ」

頬が痙攣する。目の前の大惨事を目の当たりにして。騎空艇の直ぐ横で積み重なっている黒い山は人であり周囲の地面には無数のクレーターが。この数日間、ここで何が遭つたのか語る必要は無いに等しい。こんなこと仕出かした元凶は呑気に主神と衛兵達と朝食を摂っている。

「あ、ダオス」

二人の存在に気付きながらも食事を止めない一誠達。米神に指を添えて彼等の精神に疑いながら問いただす。

「あの人の山はなんだ……」

「何か夜間に人の船に忍び込んで来ては襲いかかって来たんだよ。目

的は俺達の暗殺をして騎空艇を奪うことみたいだっただ。かるーく拷問したらお前の親族の差し金みたいだし?」

「……」

「で、こんなことは主神も知っているけど野放しにさせてるから」

いや、そこは野放しにしているものじゃないだろうと突っ込み掛けるダオスに笑いかける主神が話しかけてきた。

「お前が心配することじゃないってことよダオス。こいつらに喧嘩を吹っ掛けた王位継承権のある子供にはそれをはく奪しとくから。あ、よかつたな?これでライバルが減ったぞ」

「そんなことすれば宮殿内に歪が……」

帝国の今後の未来を考慮して言うが「今更だろ?料理人を探す旅の途中、殺しはしませんが探せない程の重傷を負わせられたり有名な料理人、その手の料理が達人な料理人が昼夜問わず襲われて重傷、もしくは行方不明になっている時点で」と他人事のように言う男神にダオスは何も言えなくなった。

「だからお前等は何時まで経つても子供なんだよ。年齢の意味じゃねえーぜ?考えと心構えの意味でだ。ま、楽しいことが大好きな俺からすれば切磋琢磨?ライバルを蹴り落とす競い合いを見られるなら何をしようと勝手だ」

「……私達家族はあなたにとって玩具のようなものですか」

「阿呆、俺がそんな残忍な性格な神だと思うか?子供のじゃれ合いを見て楽しむ親的な感じだよ」

目の前で殺し合いが発展しても笑って見届けそうな神だなと若干白い目で見ると一誠。ふと、素朴な疑問を浮かんだ。

「王子同士の争いなんて気にしない風な事を言うのに、どうしてダオスを鼻屑するような王位継承権をはく奪までするんだよ?」

「俺の楽しみを奪う奴は許せないだけだ!」

「……どこかの誰だか知らないが私欲で権利を奪われるなんて憐れだ」

要はダオスが連れてきた料理人に怪我でもしたら楽しみにしている料理が食べれなくなるという、主神の私利私欲な欲望の理由で剥奪

される。ダオスと一誠は男神の考えを悟り、不憫でならないと口にしてしまうほど同情した。

「ま、こいつは料理人なのに冒険者だから暗殺者アサシンに対して負けず思いの他強かったのが意外だったけど」

「俺はじゃない。この四人は第一級の実力者だ」

「ぶほっ!？」

あ、主神は知らなかったつけと食後の茶を啜っていた男神が驚きのあまり嘔いて、汚い虹色が出来た瞬間を他人事のように見つめるダオス。そして咳き込む神を他所に用件を思い出して本題に入る。

「イツセー、既に襲われている後でもうしわけないが、私の番になるまでは宮殿で住んでくれないか」

「その心は?」

「毎日お前の料理を食べに暴走する主神を抑えるためだ。これは現王からの勅命、そして私に全て一任してくれた。どうか私と一緒に居てくれると物凄く助かる」

「ふーん、じゃあ中に入れるなら帝国の街中を観光していいよな?」

「主神が暴走しないなら構わない」

王子の乞いに了承する。その後、騎空艇を奪われないよう防壁の境界を張り準備を整えると一誠達一行は初めて帝国の中へ入るのだった。

帝国の都市の朝は活気的で賑やかに騒然を醸し出している。この国で主神の眷族になると当然ながら位の呼び方は冒険者ではなく、Lv. 1で『兵士』、Lv. 2だと『騎士』、3だと『上級騎士ナイトメア』、Lv. 4が『最上級騎士』、そしてLv. 5にもなれば帝国内最強の称号『聖騎士』と位が得られる。故に神の眷族こと騎士達の力によって帝国は敵国の侵攻を防ぎ、属国化に伴う戦争で他の国に侵攻して領土を今でも増やし拡大を続けている。が、王位継承権の時期になると王の厳命で全軍を呼び戻して守護に全力であたらされる。一度中に入ると警邏中の兵士達がどこに居ても見掛けて厳しい目付きで怪しい者がいないか探し回っている様子を何度も見掛ける。

「それでは主神様、あなたは城に戻って大人しくしてください」

「絶対に昼飯になったら連れて来いよ！じゃなきやまた暴走するからな！それと念の為に俺の衛兵を二人護衛させておくからな？」

絶対だぞ！本当に絶対だぞ！絶対だからな！と去りながら何度もうざったいほど振り返って釘を刺す主神の姿に帝国の民達は奇異な視線を向ける様は何とも居た堪れなかった。特に王子であるダオスが。

「自分の欲望に忠実なのはわかるけど、あそこまでなのか？オラリオの神々と大して変わらないな」

「……何も聞かないでくれ」

恥ずかしいところを見せてしまった、と羞恥で身体を打ち震える王子が気を取り直すまで少しだけ時間が掛った。それから一誠達を色々な場所に案内する商店街や武具店に魔法店、珍しいことに古い屋まであつて一誠の関心を引き寄せた。他にも帝国の観光名所たる神を崇める為に建造された教会、都市の中心に長大な塔の天辺に巨大な金色の大鐘楼グランドベルが帝国のどこからいても見れる。そして何より都市の中で一番大きくて壮大、尊厳がある建物は帝国の領土内で唯一存在する城であつた。都市の街並みを見下ろせることが可能な城の作りは「ロキ・ファミア」、【フレイヤ・ファミア】、【ガネーシャ・ファミア】のホームを足したように縦も横も高く広く、円形状の城壁と繋がって作られているのが分かる。そして城の背後には断崖絶壁の城より巨大な山が存在する。更にその先には広大な海が広がっており、背後から都市内に侵入しようとするならば断崖絶壁に配置されている兵士達と相手をしなくてはならない。後にそれを知ることになるがダオス達の案内で観光気分浸っていたところであつたが……どこの国にも闇や膿が付きものである事を知る。不意にあるものを見て足を止める。左目に映る光景はみすぼらしくボロボロで清潔ではない、服装を身に包み薄汚れた少年の首に鎖が繋がった状態で荷物を運ばされ、遅ければ肥え太った商人が持つ鞭で叩かれる姿を見て、目が細まる。

「……イッセー」

ダオスが腕を掴んで半ば強引に歩かせる。そのまま謝罪の念を言

葉にして向けた。

「嫌な物を見せてしまつてすまない」

「ああ、本当だな。楽しい気分がすっかりなくなった。この国にも奴隷商人が存在するんだな」

「国が大きくなるにつれ治安も安定しにくくなる。闇商人のような情の無い者達とつて大きく成長した国は入りやすく、闇に紛れば行動しやすい。気付けば何時の間にか悪が潜んでいたなど当たり前のようにいることもザラにある」

王子の発する言葉に従者たちが静まり返る。周囲の民衆の賑やかな声に包まれようと帝国の闇の存在で異様な雰囲気によつて一誠達は馴染めなくなつてダオスの言葉を耳に傾ける。その最中、周囲の目をごまかす幻と防音の結界を張つた。話しが長引きそうな気配を感じ取つた故に。

「そう言えば、お前には教えていかなかったな。私が王位継承よりも果たしたいことがあると」

「ああ、言つてたな」

「お前のことだからもう察したかと思う。お前の料理で次の王に選ばれた際、私は戦争を止めさせ都市の治安を全面的に力を注いでこの国から闇と膿を取り除くことを現王、父上に進言するつもりだ」

「確固たる強い意志と決意が孕んだ瞳を一誠に振り返りながら覗かせる。」

「それならお前が王になつても同じことができるんじゃないのか？」

「……いや、それでは意味がない。私が王になつてそれが叶つたとしてもそれは私の代までだ。だから祖父から課せられた王位継承で得られるもう一つの方に懸ける」

「それは何だ？と目で催促すれば彼から発する懸け事とは……」

「代々帝国の王とは、王を引退しても現王より権力が強い。だから時期王を求めることもできればそれ以外の願いも叶えてくれる決まりが昔からある。それを利用して私は自分の願いを叶えるつもりである。その為にはお前の料理の腕が必要なんだ」

「……この従者はそれを否定的っぽかったけどそれでもか？」

初めて店で訪れた時のことを思い出す一誠の指摘に老従者はポツリと己の意を打ち明けた。

「若の王位継承順位は一〇七位の最下位。現実的に王位を即位するなど夢物語に等しい若は、他の兄君の嘲笑と侮蔑の対象とされ暴力すら振られる毎日を幼少から過ごしていたのだ」

その時からダオスの従者として共に過ごしていたのだろう。当時のことを思いだした様子で皺くちやな手を悔しげに固く握りしめてダオスを諭す風に乞うた。

「ですから他の兄君達を見返す意味でも、若が望む願いの為にも王位を狙う他ないと私は何度も申し上げますっ」

「……最後に産まれたのは運が悪いともう割り切っている。だからあの苦痛の生活でも堪え切れたのはお前の存在が常にいたからなんだ爺や」

「わ、若……っ!」

「それに私が王になれば兄上達は快く思わず、私を暗殺してまで王座を篡奪した場合……その後のことまで考えているのか爺よ」

絶句する老従者の目が見開いた。二人の衛兵も一誠もダオスが予測する未来を悟って、何とも言えない気持ちで顔を顰める。ダオスを暗殺した後は——混沌カオスしかない。現実的になつてしまえば宮殿の中での話では無くなり、最悪国が散り散りに裂けて王子達の派閥争い、兄弟同士の殺し合いが発展してしまう。

「他の兄上達もそうだが、私の周りに敵が多過ぎる。私の願いが王位を得ても叶えようと直ぐに篡奪されては意味が無いのだ。だからこそもう一つの方法で懸けると私は決めている」

「お、おおっ、おおおっ……」

救いようが無い、ダオスの現状に憂いて慟哭する老従者。幼い頃から辛い目に遭って、その過去を清算する意味で王位を狙って欲しい老従者にとってこれほど悲しいことはないのだろう。二人の衛兵に無言で慰められ、場の雰囲気はブルーになつてしまつた中、一誠は質問した。

「……で、仮にもお前の願いが叶つたとして結局王位を決める方

はどうなるんだ？」

「現王が引退した時にまた王位継承を決める。これも過去に何度もあったことだから問題ない」

「帝国の歴史はすげーなおい。じゃあもう一つ、お前はその後どうするんだ。もしかすると狙われるぞ。王位を継ぐことも篡奪もままならなくなったお前のこと今以上快くならなくなるだろ？」

「その時はその時だ。例えば私が帝国からいなくなっても帝国は存在し続ける」

肩を竦めて達観した意を示すダオスの気持ちを理解した。そして不謹慎であるがダオスは自分と同類であることを知って決意を固めた。

「(こいつを勝たせるためには俺の料理がカギ、か・・・面白い。こう言う真剣勝負は嫌いじゃないな)」

だが、その前にやることがあると衛兵に質問をした。情報が集まり次第、夜に決行する一誠を知ったとしてもこの場で人の皮を被ったドラゴンを止める者は誰一人存在しない。

その日の帝国は虫一匹の鳴き声も野良犬や野良猫の気配もない夜を迎えた。時計の針は深夜の時刻を刺している。そんな中まだ建物中で起きては獣のように我欲を忠実に動いている悪しき者達がいた。深夜の警邏をする兵士達が例えいようとこの広い都市の中をピンポイントに見つける愚か、賄賂を渡して味方に付けて好き勝手に悪行三昧を楽しむ知恵を働かせる。そうして帝国の都市の中で生活を続ける彼等は、今夜も無理矢理強引に人の尊厳を奪ったり日頃のストレス発散として傷めつけたり、豪華な料理や酒に溺れて変わらない一日を過ごす——はずだった。

とある奴隷商人の屋敷の中では人身売買用に戦争で家を失くし、親を亡くし様々な理由で部下に集めさせるか捕らえた後、こうして死ぬまで全裸にして飾りのように壁際に立たせて楽しむ趣向の持ち主の商人。

「ぐひひひ・・・今宵もこうしてお前等を肴にして飲む酒は美味い

でおじやる」

「———そうか、それが最後の晩餐で構わないな？」

「なっ———!?!」

己の真後ろに気配を殺して佇んでいる者へ振り返ろうとしたその首に鋭く伸びた手に驚掴みされた。そして鈍重な肉塊の体を持ち上げ出す剛力———虚空から姿を表す仮面を被ってる【天使】テ・シーオの者に目が見開く。

「今まで他人の尊厳を理不尽に奪ってきた報いを今度はお前がされる番だ」

「き、貴様っ、は、放せっ!わ、儂を誰だと心得ているのじゃ!?!この帝国を陰から支える大商人———!」

「俺には無関係な話だ」

ぐつと握力を籠めた途端、迸る電撃が商人の体に襲い汚い悲鳴を上げながら失神し床に倒れ伏す。そしてその光景を突然見せられた女性達は【天使】テ・シーオの者へ視線を送る。

「あなたは……神様の使徒様ですか……?」

「ただの偽善者さ。それよりも他に捕まっている人間はいるか？」

「え、はいっ。この屋敷には慰み者として捕らえられている人達がたくさんいます」

「わかった。そいつらも助けよう。そしたらお前達は晴れて自由の身だ」

『———っ』

そう言いながら商人の頭を掴み記憶を読み取る。他の闇商人や奴隷商人と繋がりが分かれば窓の外へと放り投げ、屋敷内をくまなく探し、強姦をしている男を発見次第一撃で倒して女性を救いだす作業を何度も行い、最後は貯め込んでいた商人の財産を全て奪い取る。

『アルガナ、バーチエ、ベルナス、エルネア。そっちはどうだ?』

「———ああ、順調だ」

別々に行動して四人のアマゾネス達の傍に仮面を被ってる【天使】テ・シーオがいて、皆標的の館や屋敷に侵入して襲撃していた。通信式

魔方陣がそんな彼女等の耳元で発現し状況を伝える。

「商人が雇った野良の冒険者もいたが潰して構わなかったか？」

『殺してなきや何しても構わないさ。引き続き襲撃してくれ』

「わかった」

通信が切れると無防備な背中から剣を振り下ろしてくるならず者に、裏拳で殴り飛ばす。そして満月を背に立って自分を恐れる目で見つめる頬が赤黒くなっている男に舌なめずりする。

「この道具のお陰で外界そとのエモノが何を言っているのかわかる」

耳を覆う飾りを触れながら嗜虐心を剥き出しにするアルガナに、狙われたエモノは情けなく命乞いをする。それが彼女の嗜虐心を刺激させるだけだと言うことを弱い獲物は知る由もない。

「イツセーは死んでなければ何しても良いと言った。——だから、オマエいい鳴き声をあげろ」

何を言っているか理解できずとも爬虫類の瞳を思わせるその目から感じる獰猛さに、恐怖で顔を皺くちやに歪める弱いエモノは……振り下ろされた拳打で伝わる激痛に伴う悲鳴を夜空にあげたのだ。た。

バーチエが襲っている屋敷に捕らえられている奴隷達を解放していく中で意外な人種がいた。視線を向けていれば檻の中で互いを抱きしめ合う二人のアマゾネスが警戒心剥きだして睨みつけてくる。気が強いようで格上の存在である彼女に威嚇する様はバーチエに好奇心を抱かせた。

「——」
話しかけようとして思い出す。彼女等はテルスキユラ闘国出身のアマゾネスでは無いことを。とある双子のアマゾネスが外界に出て行ってから数年は経っているが、目の前にいる同族はいずれ戦いを申し込む同族では無い。つまりはアマゾネスの言語を話したところで彼女達は分からないのだ。どうしたものかと考えて……自分の翻訳機能の耳飾りを手にして檻の中に入れた。これを渡してどうするのかと怪訝な目付きで見つめるアマゾネスにジェスチャーで耳を付けると伝えた。バーチエの慣れない伝え方が何とか片割れのアマゾネスに意

凶を察してもらえて耳に押さえつけると一方的な会話だがようやく話を通じると口を開く。

「私達はお前達奴隷を解放しに来た」

何を言っているのか分からないアマゾネスと耳飾りで翻訳されて言葉の意味を理解できて驚くアマゾネスの差は歴然だったが、自分達を助けてくれるのだと説明をしてくれたようで信じられないものを見る目でバーチエを見つめる。

「助けた後はお前達の自由」

織の鉄格子を掴むと、第一級冒険者の力に恥じない腕力と握力で強引に広げて人一人分は余裕で抜けだせる空間を作った。そして出ろと顎でしゃくつたところで「天使」がバーチエに近づいた。

ベルナスとエルネアも同様に闇商人や奴隷商人を襲いかかって文字通り潰し終え奴隷達を解放し終えた。それから五人は捕まえた者達を連行して合流を果たすと木で組み上げた十字架に張り付けセントラルパーク中央広場に突き刺しては「私達は闇商人と奴隷商人です。人身売買にも手を出し人の道を誤りました」と共通語で書いた立て札も立てて騎空艇に戻り一夜を過ごす。その翌朝、帝国の中心地の広場に悪人達が張り付けされた状態で民衆や衛兵達に発見され、後に悪事を働いていたことを何かに恐れながら自供して正式に捕まったのであった。さらには騎空艇が忽然と姿を消していたが一誠だけは城にいた。昨夜何かしたのかとダオスに問い詰められても答えに応じないので中八九、原因はこいつだろうと高を括って帝国の為にやってくれた恩義でお咎めなしにするしかなかった。

「.....」

腰まで伸びた長い白髪に白い服装の老人が老いたとは思えないピント背筋を伸ばした姿勢で帝都を見下ろしていた。どこか寂しげに黄昏ているようにも見えていたが扉を叩く音で窓から視線を外して入室の許可を了承する。

「失礼します。今夜の食事のことでお伺いに参りました」

「今夜はダーネスの番であるな」

「はっ、その予定の筈でしたが……ダーネス様がお招きになられた料理人が謎の失踪をしてしまい、代わりにと思いギャミック様がお招きした料理人も……不良の事故で料理が作れずになりました、三日後に控えていますダオス様がお連れしました料理人の料理を食してもらおうと言う変更を」

「……またか、これで何日目だ？孫達は相手を陥れることだけは長けて他はてんで駄目ではないか」

不満げに白い眉の根を寄せて顔を顰める老人に報告しに来た執事は「心中お察します」と相槌を打つ。しかしどれだけ老人が愚痴を言っても事態は変わらない。

「もうよい、であれば今宵はダオスの料理人に作ってもらうがその料理人はどこだ」

「はっ、主神様の暴走を抑える為にダオス様が既にこの宮殿の中に招いております」

外の世界の情報が耳に入ってくることはあまりなく、隠居生活として残りの余生を籠の中の鳥の如くこの部屋に閉じ込められ随分長い老人は、主神の暴走の原因も知らないでいたために問うた。

「何故主神が暴走したのだ？」

「何でもダオス様がお連れした料理人の料理に夢中になったご様子で、帝都に到着して以来ずっと主神様は専属料理人達が作る料理を食べずに四銃士を引き連れ帝都の外まで出向いたからです」

安易に外へ出向く男神を止めようとして動く城の者達と騒動を起こし暴走……その原因が料理人の料理で宮殿の中でその料理を作れば暴走は止まる……ということか。

「主神の言動はいつものことだが、何かに執着して行動するのは久しいな。して、その料理人はどこから来た者だ」

「迷宮都市オラリオからです」

「あのダンジョンがある都市からだ？よく戻って来られたものだな」

心から感心した老人は長く伸びた髭を擦り、何か考え事をする仕草をすると頷きだした。

「興味が湧いた。ダオスとその料理人をここに召喚するのだ」

「二介の料理人もですか？」

「あの快樂主義の神が夢中にさせる料理を作る料理人だ。この宮殿に仕える料理人ではできないことだぞ？」

「・・・分かりました。では直ぐにお呼びいたしましょう」

恭しく一礼した後、部屋を後にして二人を呼びに行った執事を見送り再度窓の外へ視線を送った。

「・・・もう儂の寿命はそう長くない。最後ぐらいは懐かしい料理を食べてみたいものだな」

ダオスの計らいによって用意された部屋で待っていると見知らぬ執事が入って来て「前王が謁見を求めている」と同行を求められた。従えばダオスもいて共に前王、現王の父親にして王子達の祖父の許へ赴いた。

「お前、何か呼び出されることをしたか？」

「それはこちらのセリフだと言わせてもらいたいが、大方お前の料理を興味持ったのかもしれない」

「まだ食べさせても無いのか？俺のこと知らないはずなんだが」

「その筈だが・・・どういうことだ？」

二人の前を先導する執事に素朴な疑問をぶつけたら淡々とした口調で答えてくれた。

「ダーネス様とギャミック様がお連れした二名の料理人が不良の事故に遭い、結果三日後に控えておりましたダオス様が今夜、前王様に料理をお出しいただくことになられたご報告をする際に主神様のことをで・・・」

「・・・私が連れてきた料理人の話しをして興味を持ったということか」

執事の言葉を紡ぐ風に言う「左様です」と短く返事をされ、そういうことかと納得した二人。一誠も質問した。

「事故に遭った料理人はどうなってるんだ？」

「手厚く介護をしておりますが、行方を暗ました料理人は現在でも捜

索中です。ですのであなたもお気を付けてください。王位継承の時期になると表面化では静かで平穏の中、穏便に事が進んでいるように見えてる半面。水面下では王子同士の派閥争いで阿鼻叫喚、地獄絵図を繰り広げておりますので」

「んじゃあ、何時だったか襲いかかってきた暗殺者を仕向けてきたのは王子達の中じゃ当たり前なのね。それにしても料理人だけ襲って王子を狙わないのはどうしてだ？そっちの方が効率がいいと思うんだが」

「それは主神様の計らいだ。全ての王子達が何らかの理由でも揃わなければ王位を継承できない緘口令を敷いた。時期帝国の帝王の座を手にしたい兄上達は、自ら棒を振るうわけにもいかず別の方法で妨害することになっている」

血の争いが絶えない帝国の内情に深い溜息を吐いた。王位に就いたら欲望や野望のまま好き勝手に国をどうこうすることができる王子達に飼い殺しされるだろう住民達が不憫でならない。帝国の未来は何だか危ういなと他人事のように思っている間に執事の足が黒い木製の扉の前に止めた。

「(こちらでございませう)」

「ああ」

執事が扉の横に立ち沈黙を貫きだす。ダオスが一誠に一瞥して扉にノックをする。

「前王様、ダオスでございませう」

『入れ』

入室の許可を貰い扉を開ける王子に続いて入り、質素な部屋が二人を出迎えた。必要最低限に用意された家具しかない部屋の主は一言で言えば、魔法を極めんとした年老いた魔法使いの印象が強い老人が二人に黒い目を向けて立っていた。

「お久しぶりでございませう。前王様」

「よせダオス。昔のように儂のことをお爺ちゃんと呼んでも構わん。儂に会いに来た孫は今のところお前が初めてだからな。儂は実に嬉しいのだよ」

好々爺のようで真っ直ぐダオスの前に寄って抱きしめれば若き王子も抱きしめ返し抱擁を交わす。そして一誠には品定めするような目付きで見つめだす。

「……ほう、ダオスが連れてきた料理人はどんな者かと思えば随分と若いな」

「私がオラリオに訪れ彼の店に入ると殆ど一人で切り盛りしております」

「ふむ、技量が高いと見た。してお前の料理は一体どんな物を作るのだ？あの破天荒な神が昼夜問わず都市から抜け出してまで食べに行くほど美味しいのだと話は聞いている」

破天荒な神と認識だけは同感だと心中同意して語る。

「初めまして、『異世界食堂』という店を営んでいる店主のイツセーでございます。俺が作る料理は異世界に来たような誰も味わったことが無い料理や酒を振る舞います」

礼儀正しく王族がするような作法をして見せた一誠にダオスは驚いた様子で目を見開いた。そして前王の目が細まる。

「異世界の料理だと……」

「はい……?」

答えてすぐ、前王から感じる鬼気迫る雰囲気不思議そうな面持で見つめる。ダオスも一誠が失礼なことを無自覚でしたのかと身構えそうになって成り行きを見守る姿勢でいた時、前王が静かに口を開いた。

「……異世界の料理……ふふ、ふははっ、ふははははー」

「……」

突然笑い出す。ぽかんと二人揃ってキョトンとした顔で腹を抱えて笑う前王に視界に入れ続けるしかできなかつた。程なくして尻目に涙を溜めて落ち着きを取り戻した老王は笑みを浮かべながら言った。

「異世界の料理ならば今直ぐ作ってもらおうか店主イツセー」

「は？今直ぐ？」

「今直ぐだ！そして作ってもらうのは——カレー！無論、作れまい

「と言うなよ?」

「教えた覚えのない異世界の料理を注文した不敵に笑む老王に一誠は目を見開かずにはいられなかった。更に驚きの連続が止まらない。

「昼はカレーにして夜は牛丼、いや麻婆豆腐、いやいや生姜焼きも惜しい。むう……この際だ。腹に入れられるだけ食い尽くしてみせよう!」

後にダオスが語る。「あんなにはしゃいだお爺ちゃんは始めてみた」と。

老王の押しに負ける形で昼食はカレーを作った。出来上がった食欲をそそる数多の香辛料を使って感じる香りを鼻を大きくして吸い込み、多幸感極まると顔が綻んで手にしたスプーンでルーとホカホカの米と一緒に掬い口に入れた途端に。

「グスツ……!」

涙を流す大袈裟な反応に一誠とダオス、突然のごとく食べに来た男神と衛兵達は言葉を失った。若干ドン引きだ。泣く事かと口に出したいが老王の

「美味しい、カレーがこんなに美味いく感じる……ああ、懐かしの料理を食べれて僕は幸せだあ」

「そ、そうか。それはよかったな」

うめえ、うめえよおと泣きながらカレーを食べ尽くすとお代わりを所望する老王。なんとも言えない気分でご飯とルーを皿に盛って返すとまた泣きながら食べるのでダオスは聞かずにはいられない。

「それが故郷の料理ですか?」

「うむ、僕の故郷の料理を作れる者がいたとは驚きだ。イツセーと言ったか。よく孫の頼みを受け入れ帝国まで来てくれたな。お前の行動力があつたこそ念願の故郷の料理を食べれた、感謝する」

頭を垂らす老王に首を横に振る。

『『異世界食堂』の料理を食べたいと言われたらどこでも出張するさ』『ふふつ、己を誇示せず敢えて店の料理と主張するか。謙遜してない辺り、腕に自信があるのだと暗に言っているな?』

「さて、それはどうかな？」

フフフフ、と初対面の筈なのに何故か良好な関係を築いた一誠と老王だけが何か通するものがあるのやもしれない。それが何なのかダオスにはさっぱり理解できず、感動で涙を流しながら食べる老王と共に昼食をする。

「——さて、不良の事故で作れない料理人を連れてきた王位継承権利がある子供達を除いて今日ようやく終わったが、お前の中でもう決まってるか？」

その後、食べ終えて食器を片づけに部屋を後にした二人を見送って男神が尋ねると老王は頷いた。

「発表は早い方がいい。故に今夜決行する」

「気が早えな。三日後でも構わないんだぜ？」

「ダオスの番で終えた時点で遅いも早いも関係ない。そして今回、帝国の膿を燻り出すことが出来たからには早急に動かねばならない」

「おーおー、自分の身内だったのに容赦ねえのな。帝国に混乱が齎すことがないよう祈るかね」

神が誰に祈るのかと、対して深く気にしていないような笑みを浮かべる男神に呆れた顔を下に落として満腹になった腹を擦る。寿命が尽きかけていたところ、老王の切なる願いが叶った事にもはやこの世に未練はないと口元を緩めた。

冒険譚 16

王女を除く全ての王子達が緊急招集を掛けられた。帝国、男神の象徴の徽章シンボルを服のどこかにある制服を身に包み、王に敬意を表す姿勢で腰を落とし静かに時を待った。年長者は最大で三十代、最年少は十五歳とかなり歳の差が離れている兄弟、異母兄弟が数十人以上いる。さらにそこに王女も含めると百は優に超えるのだから現王の精力は絶倫であると物語らせる。そんな彼等の傍には騎士ナイトから聖騎士パラディンの階級の兵達が顔を揃えて王子達や王の護衛として彼等も招集を受けたのである。王座の間に走る緊張感と静寂。現王と王妃、男神が座る目の前で老王が威風堂々と佇み「面を上げよ」と言う。

「我が孫達よ。老い先が短い儂の我儘を聞き受けて感謝する。孫達の働きで世界中の料理を——半分も満たぬが味わうことができた」

内心嘲笑、悔恨が渦巻く王子達の顔を視界に入れながら淡々と話しを紡ぐ老王は、長い話しをせず本題に入った。

「ではこれより、お前達が連れてきた料理人のどの料理が美味であったか発表する」

呼ばれる者は不敵に笑みを浮かべるか真っ直ぐ老王の言葉を待つ、呼ばれぬ者は悔しげに顔を顰めるか諦観して耳を傾ける。騎士達も次期王は誰かと注目して意識する。未来の帝国の舵を切り、繁栄を齎す重大な義務を課せられる半面——強欲、欲望のままに豪遊ができて王の権力を思いのまま振るえ、死ぬまで帝国を生かすも殺すもその王位を継ぐ応じ次第となる危険性も伴う。この場にいる全員がそれを認知し、承知の上で次期王を決まる瞬間を待つて見守る……。

老王の口唇が動く。

「迷宮都市オラリオで構える『異世界食堂』の料理、カレーである」

カレー？なんだそれは？しかも、誰があんな場所まで行ったのかと王子達の顔は怪訝に顰めたが、老王の言葉を遮る無粋な真似はしない。

「カレーは実に美味であった。『異世界食堂』と名を掲げるに相応しく異世界の料理を食べたような錯覚を覚えさせ、今まで食してきた料理

と一線越えていた。よって儂はカレーを作る料理人を連れて来た者を次期王に任命する」

ただ一人除いて、オラリオにまで向かっていない王子達の内心は疑心で渦巻いていた。オラリオを筆頭に帝国と魔法^{アルテナ}大国、他少数であるがLv・3以上の団員を保有する大国が存在しているものの、オラリオは警戒する都市だ。敵地に忍び込むような真似はしたくないのが本心でもある。しかし、各国の料理人を捕まえて帝国に連れていくにはどうしてもそうしなければならない。もしも帝国のスパイが捕まえられれば帝国の情勢が明るみになり、弱みを握られてもおかしくないリスクを覚悟して次期王位を決めるこの前老王の望みを叶えんと躍りになっていったのだ。それを一番危険な都市オラリオに向かった王子はどこの誰だ———と思つた矢先。

「王位継承順位百七位のダオス・ラーズグリーズ・クリールフス。前に」

どよめく王子達の視線を一身に集めながら立ち上がるダオス。王達に続くレッドカーペットを踏んで真っ直ぐ近寄る。

「お前が連れてきた料理人は帝国の総料理長を凌駕する腕前を持っていた。よくオラリオから招いた。その勇気と行動力も称賛に値するぞ」

「ありがとうございます」

「———ま、待つてください！」

一人の王子が待ったを掛けて立ち上がった。

「僕達より王位継承が一番低いそいつが、オラリオに行けるはずが無い！あんな粗暴で汚らわしい冒険者がいる都市の店が出す料理なんて僕が連れてきた料理人よりも美味いとは思えません！」

「そいつは間違いないぜ？お前達の主神、この俺が直でその料理人と話しをし、飯も食ってきた。ありやあ本当に美味しかったぞ。こいつが泣くほどにな」

反論する王子を愉快そうに笑みを作つて証人もとい証神として助け船を出す男神。神まで口出すということはダオスが本当にオラリオに向かい、カレーとやらを作る料理人を連れて来て老王を認めさせ

たのは事実であるということになる。

「はあ……あのカルビ丼ってやつも美味かったよなあ。な、四銃士諸君よ」

「二はっ！また食べたいです！二」

恍惚と顔を蕩けさせる男神に周りから厳しい目と視線を向けられようと、本人達は気にもせず清々しい顔で同意したのでますます信憑性が高まる。

「し、信じられない！まさか、ダオスが主神様と前王を脅して王位を手に入れようとしているんじゃない！」

「おいおい、そんな馬鹿な真似を俺達に堂々としたら即刻剥奪しているっての。というか、できるわけが無い」

「そんなの、オラリオの薄汚い冒険者を雇ってすれば……！」

未だに認めようとし無い王子の言葉に同意する王子が現れれば、目立った動きをせずに否定的な目をして同意する王子達も始めて抗議の異を唱える。老王と現王は王子達の言動に眉根を寄せ、男神は呆れた風に溜息を吐いた。この事態をどう收拾するか決めあぐね、困惑していた時——。さも当然のように扉を開けて真紅の長髪に右眼に眼帯を付けた隻眼の青年がヒョコつと顔を出した。

「えつと……まだ終わってないみたいで？」

「二「誰だお前（貴様）っ！二」」

綺麗に異口同音で突っ込む王子達に眼を瞬かせるダオスと老王。これ見よがしと深い笑みを浮かべた男神が立ち上がって「飯が出来たんだな？」と話しかけたのであった。

「あーうん、直ぐに終わるって思ってたからもう作り終えてる。ビーフシチューだ」

「むっ、ビーフシチューだと！」

老王があからさまに反応して顔を輝かした。王子一同、あんな前王は見たことないと目を丸くする。その反応を見て男神の頭の上に豆電球が光った。

「飯をここに運んで来てくれ。大至急だ」

「えっ、いいのか？王位継承の方は？」

「ダオスが王など認めねえって抗議されてそれどころじゃねえんだわ」

肩を竦める男神から視線をダオスに変えてみれば肯定と言葉が飛んできた。青年は了承して一度扉を占めた。

そしてすぐに人の胴ほどある鍋と大量に盛られてる野菜や皿、スプーンやフォークを台車に乗せて運んできた。

「はい、持って来て正解だったか」

「はよう、はよう食べさせろ儂のビーフシチューをつ」

もう老王はお預けされた子犬のように見えて仕方が無いダオスも、ごく自然に便乗して配られるビーフシチューを手にする。現王や王子達が見ている手前で彼等は当たり前前のようにその場で食べ始め……。

「はっはっはっ！スープやシチューなら飽きるほど食べて飲んできたが、このビーフシチューはまた格別に美味しいなあ」

「おおお……懐かしい味がまた……」

「前王、皆が見ている前で泣かないでください」

寸胴鍋から芳醇な香りが漂い、王達の鼻の中に通るとゴクリと喉が動いた。それを知ってか知らずか、二人前のビーフシチューをよそつてもらい、王と王妃に持って行くダオス。

「父上と母上も試食してみてください」

「……わかった」

毒味はする必要が無い。目の前で泣きながら食べる前王を見て疑えと言うのが無理である。スプーンを持ってビーフシチューのスープと煮込んだ牛肉ごと救い上げて一緒に口の中へ入れた。

「——なんだ、この料理は……」

絶句する王、目を丸くする王妃。このビーフシチューとは、今まで食してきたスープとは段違いな美味が詰まっていた。ナイフで切り取って口の中で噛み切るように食べるのが当たり前の牛肉が、口の中で噛み締めるとあっさり崩れてビーフシチューの味と共に肉の味が舌全体に広がる。

「どうですか父上。このビーフシチューはオラリオにいる二大派閥の

一つ、「フレイヤ・ファミリア」の主神が好んで食している物なのです」「なんと……これが、噂に聞く美の女神が好む料理なのか」「それだけではありません。私はオラリオに半月ほど住み、彼の店を通い詰めて分かったことがあります。『異世界食堂』は冒険者だけでなく多くの神々をも虜にする異世界の料理がまだ多くあり、ビーフシチューはその一つに過ぎないことを」

それらの料理を作っているのが彼——『異世界食堂』の店主、イツセーなのだ。ダオスは告げる。

「そして父上、私は王位を継ぐつもりはございません。代わりに自国や領の治安を今より更に力を入れて良き国にしてほしいのです。他国に侵攻して、戦争をする度に戦災で犠牲に遭った人々や路上生活ストリートチルドレンの者達に救いの手を伸ばしてあげて下さい」

「……それがお前の願いなのかダオスよ。お前が王になればできることだと分かった上で言っているのか」

「私が王位に継いだとしてもそれは一時にしかできません。ですから直接父上に進言し、戦争を止めてもらい帝国の闇と膿を完全撤廃、他国のことより自国の領民に視野をいれてもらいたいと思っています」

王の前に跪き頭を垂らして切に願った。

「お願いいたします父上」

「……」

前王に乞わず、現王の自分に乞う息子に難色を顔に浮かべる。属国化を望んで戦争を仕掛けている王にとっては素直に首を縦に振ることはできない。であるが、せつかく夢物語から現実になった王位継承の権利を返上してまで国を想うダオスの真意を無碍にできない。結果を楽しみにニヤニヤと笑みを浮かべる男神、現王の答えを待つ老王、隣で見守る王妃の視線を受けながらダオスに対して結論を述べた。

「お前の真意は理解した。だが、戦争は止めるつもりなどない。これは私自ら決定したことだ。前王に言われようと帝国の繁栄と栄光を更に得る為にな」

「……」

押し黙るダオス。王位を返上してまで叶えなかった自分の願いすら現王に届かず、背後から聞こえる嘲笑と侮蔑の声が聞こえようと湧き上がる感情を押し殺して自分の結果を受け入れた。

「戦争は止めない。だが、お前の願いは聞き受けようダオスよ」
「っ!?!」

再度、ダオスの願いは叶えないと言葉の後に現王が他の望みなら聞き届ける言葉を述べた。瞠目する目で現王を、父親を見つめる彼に王はビーフシチューを食べつくした皿を見せつけた。

「王位を得ることよりも国を一番に思っているお前に、この料理を巡り合わせたお前に褒美を与えねば、後で親父にどやされそうであるからな」

父親としての顔をした王を見たのは何時だったか、拒絶されたと思っていたダオスを驚かし、王座から立ち上がる王は王子達に問うた。

「王位を得る為に水面下で醜い派閥争いをしていただろうお前達よりは国を想う心があったダオスに、蔑む言葉や嘲笑は不要だ。それでもダオスの願いと私の決定に異論があるなら遠慮なく抗議するがいい。昨夜——闇商人と奴隷商人が何者かに襲撃され一網打尽、背後関係を洗い浚い吐いてもらえば……お前達の中に連中と繋がっている者がいるとわかっていないからな」

王子と奴隷商人、闇商人と繋がりがあつたことを発覚した。その事実を突き付けられた彼等は内心や顔に酷く動揺、焦燥、嫌な汗を浮かべてバレた後のことを思っつか身体を不自然に震わす王子も現れた。

「帝国に巢食う闇と膿の完全撤廃、ああ、それは確かに必要であるな。私の威厳と帝国の威光を穢す不必要な要素は全て排除せねばならん」

自分の保身と国の為と公私混合を同時に言い述べた王の言葉に堪え切れなくなった王子が王の膝元で懇願した。

「ち、父上! 違うのです、私は卑しい商人ども繋がりにてございませぬ!」

「ならば堂々としていればよい。お前の行動は自ら関係を持っていることを認めているようなものであるぞ」

「誤解です！私は身の潔白を証明するために……イリージス、レイギア、アルゴル、レイネス、他にもあの連中と繋がっている王子がいると報告を！」

「「オカマ、貴様っ!?!」」

「……主神様」

「あー、うん。そいつは嘘だし今否定した連中も嘘は言っていないぜ」

神の前では嘘をつけない。自ら暴露したと自覚した王子達は、苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ怒りと敵意の炎を孕んで現王に進言した王子を睨みつけ、最後の苦しい言い訳をするのだが。

「今名が拳がった王子達を取り敢えず捕縛し牢屋に入れろ」

『ハッ！』

溜め息吐く王の命で、待機していた騎士達が剣や槍を構えて王子達を取り囲む。自供した王子すらも取り押さえられて王座の間から追い出される形で牢屋へ連れられた後も残っている王子達に告げる。

「お前達もこのあと全員主神様の前で白か黒かハッキリとさせる。もしも身を隠したり帝都から逃亡した者は帝国中に指名手配として懸賞金も付ける。生死問わずでな」

関係を持った者とそうでない者の反応と態度が一目瞭然なのは改めて無視した。が、こんな結末は認められないと自棄になった王子が王に近づく。

「どうか、どうかご慈悲を父上！」

と演技をしながら袖の中に隠していた凶刃を取り出して――。

「くたばりやがれクソデブ親父！」

「お前がな」

真後ろから頭を掴まれ床に叩き伏せられた王子に電撃が迸る。そうした青年は呆れた風に息を零す。

「演技をするならもっと上手くなってからにしろ。見え見えなんだよお前の行動の一連が」

黒焦げになった王子をまだいる衛兵の足元へ放り投げダオスに声を掛ける。

「願いが叶ってよかったなダオス」

「お前のお陰で願いは全部ではないがそれでも叶った。ありがとう
イツセー」

「どういたしまして。それじゃ、俺の役目は果たせたってことでオラ
リオに返らせてもらおうよ」

一誠の言葉に名残惜しそうに見つめるダオス。しかし、何時までも
帝国にいられるほど一誠は自由ではない。残念に思うが仕方がない
と最後に乞うた。

「最後に、私の願いを叶えてくれるか」

「今度はなんだ？」

「なに、とても簡単だ。手間も掛からない。……私の、その、ゆ、
友人になってくれないか」

面と向かって言うのが恥ずかしい様子で、初めて誰かにそう言った
のか照れ臭そうに顔を反らし、頬に朱が散らばった。それがとても
初々しくて、笑みを浮かべたまま頷いた。

「いいぞ、ダオス。改めてよろしくな」

「……ああ、よろしく」

友情の印としてお互い握手を交わした。微笑ましいその光景を見
せる二人に王妃は満足げに頷き、そして現王が話に割り込んできた。
「待て、オラリオに戻らずこの帝国に店を構えてればよい」

いい雰囲気を霧散させる一言で、場は「何言い出すんだこの王は」と
呆れムードになってしまった。男神と老王は物凄く空気読めよと言
いたげな視線を送るも王は目の前の利益に夢中で気付かない。

「却下。俺には俺の居場所があるのさ。というか、主神から聞いてな
いか？俺の店の常連客となっている神々が無理強いに帝国にいさせ
られている俺を取り戻さんと攻めて来るぞ」

それは痒くない脅しに大胆不敵で言う。

「そんなコケ脅しなど私には通用せんわ！者共、この料理人を捕らえ
よ。今日からこの者の料理を思う存分食べるためにな！」

え、本気かよ？と騎士達が仲間同士と顔を見合わせ、困った風に躊
躇して戸惑いの他所に一誠は気にせず扉へ歩き始めた。

「パラディアよっ！ジークフリートよっ！」

行かせまい——！扉と一誠の間に滑り込むよう移動した白銀の甲冑を着込む空色の髪をオールバックにしてる中年の男性と紫色の長髪に黒一色の甲冑を身に包むの女性が立ち塞がった。

「そやつらは帝国で唯一、Lv. 5の騎士！ただの料理人のお前では赤子当然よっ！」

吼える王に同情の眼差しを送る聖騎士^{パラディン}二人。王の命を従わなくてはならない義務故に拉致軟禁するような真似は騎士して本意ではないが、それでも忠義を示さなければいけない。脅しのために鞘から抜き放った剣で突き付けた。

「……なんか、デジャブを感じるよ」

何時だったか、どこかの「ファミリア」の主神もこんな感じで無理強いでも手元に置かんとしていたことを思いだした。あの時は常連客の神々と眷族がいたから事を穏便に済ませれたが今回はできない。

「二回しか言わない。そこをどいてくれ」

「……すまないが、それはできない相談だ」

「理不尽だと思っても仕方が無いけれど、言うことを聞いてほしい」
自分達も心底遺憾ながらな、と聖騎士^{パラディン}達は述べる。だったら従わなければいいだけじゃね？と思うがそうもいかないのが帝国なのだ。
——二度目の乞いを口にする。

「オラリオに俺の帰りを待つ人達がいるんだ。だから帰らなきゃいけない、そこをどいて」

「……」

沈黙を貫く二人と申し訳なきような面持ちで取り囲む四銃士と騎士達。彼等の心情を察して汲み取り、最後乞うた。

「今から五秒間数える。その間そこをどかなければ、この城を滅茶苦茶にする。——お前等の好きな戦争をしてやるぞ」

左目が大きく見開き、瞳孔が更に細くなり一誠から凄まじい威圧が放たれる。とてもただの料理人が感じさせる威圧ではないと騎士達は凍結したように固まる瞳でたじろいだ。

「5——」

カウントダウンが始まった。

「お前達、武器を収めそこをどくのだ！私の友人に無礼だぞ！」

ダオスが包囲網を敷く騎士達に叫ぶが効果は薄く、ならば力づくで動いた彼に危険だからと騎士達に羽交い締めされ引き離される。

「4——」
猶予があるうちにそこをどいて欲しいと睨みつける一誠に対してLv. 5の二人の騎士は脅しでなく未知の相手と認識を改めて臨戦態勢に入った。だが、この場にいる全員は気付きもしないことが起きている。

「3——」
満月の夜の帝都上空に巨大な船が接近していることをそして甲板から真つ直ぐ城へ決河する勢いで飛びだす四つの影。

「2——」
その先は王座の間を隔てる壁。褐色肌の拳と足を突き出し分厚い壁を粉碎、突破。

「1——」
中に侵入しても勢いは止まらない。そこでようやく壁が壊された音を拾った王達は一誠から意識を逸らし、亀裂が入った壁へ目を向けたと同時に。

「0——」
壁をブチ破る四人のアマゾネスが騎士達に近接格闘で攻撃を仕掛けた。突然の奇襲に騎士達は対応に遅れ、王座の間はあつという間に阿鼻叫喚に包まれた。これには王達は腰を抜かして驚くしかない。

「自業自得で滅茶苦茶になった原因は誰なのか、よく考えて後悔しろよ帝国」

誰に向かって言ってるのか定かではないその言葉の後、パラディアの腹部に拳をねじり込んで天井へ打ち上げた瞬間に斬り掛ってくるジークフリートの手を掴み引き寄せて顔を近づけた。至近距離で異性と見つめ合う動揺が目に見えかぶ——が。天井から落ちてきながら剣を突き付ける聖騎士に向かって放り投げられ、腕に集束する光が巨大な拳と化して突き上げられた。さながら巨人の拳に殴られたよるうな感覚とダメージを全身に味わいながら天井を突き破りながら霞

む意識の中、最後に見たのが帝国の月夜だったことを女騎士は覚えて意識を落とした。

「な、なあっ……!?!」

帝国最強の二人が破られた衝撃の光景に王は腰を抜かして尻餅をつく。ダオス、他の王子達、騎士達も目を見開き身体を硬直して動きを止めている間。誰も攻撃してこないことを見渡しながら確認し、アルガナ達が空けた穴の方へ歩いて行こうとしたがダオスに振り返る。「ダオス、またオラリオに会い。何時でも歓迎する」

「……お前、本当に只者ではないな」

「ああそうだ。俺は——異世界から来た人間でもあるからな」

それを告げ老王に一瞥をくれると、彼の王は静かに笑みと共に口の端を吊り上げていた。意味深に一瞬だけ視線が交じったが直ぐ視線を壁の穴の方へ向けて歩き始める。

「王様、被害はこれだけで済んで運がいいぞ。俺の知り合いの「ファミリア」が俺を助けに帝国に攻め込んでこれ以上の被害と損害がきつと出ていたんだからな。だから——オラリオに喧嘩を売るような真似はしない方が賢明だぜ?」

最後にその言葉を残して城の傍に停船している騎空艇に乗り込む。後に来るアルガナ達の足場を魔方阵で用意しながら指を弾く。壊れた個所が一人で勝手に元通りに修復していく様を最後まで見ず船を動かして帝都から遠ざかる。

「はははっ！完璧に負けたなお前等、やっぱオラリオはつえーわ」

「わ、笑いごとではないぞ主神様！私達に喧嘩を売ってきたあの者の捕縛を……!」

「空の上にいる相手にどうやって捕まえるつもりだ。また城を壊されたらお前の責任だぞ」

「……ああ、また会いに行く。必ずな」

「……なあ、故郷に送り返しに行ったんだよな?」

「お前の言うとおりにな」

「じゃあ、何で思っていたのより減っていないんだ？商人達から強奪した金も渡して人並みの生活ができるはずだぞ」

騎空艇に戻って直ぐ、違和感を察した一誠。甲板から空や地上を見下ろす少女から大人の女性を見てアルガナに疑問をぶつけた。商人達に囚われていた奴隷達を助けたその日に船を飛ばして彼女達の故郷を点々と向かって送り返しに分身体とアルガナ達に任せていたのだが、本人が言ったように予想したよりも船に残っている人数が多かったのだ。

「元々孤児で身寄りが無い奴がいたら、色んな理由により自力で生きることができない奴。そして助けてくれた私達に恩を返したいがためについて行きたいと願う奴がいた」

アルガナが明後日の方へ視線を向けた。一誠も釣られて左目を向けると、アマゾネスの少女達に付き纏われてるバーチエが困ったように眉根を寄せていた。

「……懐かれてる？」

「助けられてか妙な憧れを抱いたようだ、あの同族はバーチエに。で、あいつらをどうするんだ。オラリオに連れていくのか？」

「取り敢えずそうする他ないな、他に宛がないんだし。身寄りが無い奴は戦いに無縁な人や場所に住まわせる。俺達に恩を返したいと言う奴は、俺の店に働くか冒険者になつてもらおうかだ」

都市に戻ったら色んな「ファミリア」に求めなきやいけないな、等と思いつつももう一つ。あることを考えた一誠やアルガナ達を乗せる騎空艇の船底に巨大な魔方陣が展開され、光に包まれば一瞬で帝国の領土から姿を消した。そしてその後、オラリオの上空にガレオン級以上の船が光と共に出現。『幽玄の白天城』に帰還すればリヴェリア達が総出で出迎え——一誠達の後ろから現れる女性達を見て半眼。

「……イッセー、帝国でまた女を集めたのか」

「奴隷達を助けただけだし。これからこいつらを引き取ってきてくれる【ファミリア】を探すんだ」

「うちは大歓迎やで！皆レベルが高い上に選り取り見取りなんて幸せ

やー！」

うへへえっ！とエロ親父の顔を、弛緩を緩めて下品な笑みを浮かべるロキに帝国から連れてきた女性達全員が非難の眼差しを向けたり恐れて一誠達の後ろに隠れたりと否定的な態度をされた。それが不思議で首を傾げる女神に淡々と教える。

「ロキ、皆帝国で闇商人や奴隷商人達に酷い目を遭っていたんだ。リリア達のような」

だから下品な考えや下心で勧誘するのは止めろ、と注意してもロキの第一印象は良くない方で認識されてしまったので後の祭りである。彼女達が帝国でどういう生き方をしていたのか、そう言われて察したへフアイストスは尋ねた。

「引き取ってくれそうな『ファミリア』、主神に宛てがあるの？」

「ん、戦いとは無縁の『デメテル・ファミリア』に頼んでみようとは思っている。全員無理だったら俺の店の従業員になってもらうさ。助けてくれた俺達に恩を返したいって人もいるんだ」

「本当に、あなたは最後までやり通す責任感はあるのね」

「理不尽な運命に強いられる奴を見ると放っておくことができない性質なんだ。我ながら甘いと思っているよ。偽善者だとな」

苦笑する一誠を見て、アリシアが頭を振り振る。

「違います。そんなあなただからこそ悪夢から助けられた人は皆、感謝しているんです。だから自分を貶めるような真似を、しないでください」

怒った風に諭すエルフの少女にハイエルフの女性も首肯する。

「お前はまた、見ず知らずの者を損得関係なく救ってみせた。その行いは誰もが認める立派なことだ」

「はは、世辞でも褒めても何も出ないぞ」

「……世辞では無いのだが」

どこか不満げに呟くりヴェリアだったが、当の本人は皆を城に入れる動きを始めていた。彼女達を何時までも立たせるわけにはいいかないと扉を開けて中に入る。

「念の為に俺の分身体を何人も残して置いたんだけど、俺のいない間

に何かあったか？」

「闇派閥イルヴァイスの襲撃以外は殆ど平和そのものだった。お前が新しく雇った者達の様子を見てみたが問題ないようだった」

「二人、大食いな奴だけだな。あれじゃ一カ月分の給金の三分の一しか店の修理代を払えないぞ。後は殆ど食費だ」

故にあの女は実質タダ働きだと言わずにいられなかった一誠だった。分身体もそれを指摘してみたところ、猛抗議して来たのでいったら食う飯を減らせばいいと言ったところ。

「この店の料理が美味しいから無理アル！」

呆れて何とも言えない半面、異世界の料理は美味いと称賛されたので一杯分だけは無料にしたことを本人以外知らない。

冒険譚17

帝国からオラリオに戻って来て翌朝。デメテルを開店前の店に待ち合わせして二階で相談の話しを持ちかけた。彼の国から連れてきた身寄りのない者達を引き取ってくれないかと。急な増員で「ファミリア」に迷惑するだろうかと頭を下げて頼みこんだ青年に豊かな蜂蜜色の髪を持つ豊饒の女神は柔和に微笑んだ。

「わかったわ。イツセーちゃんが連れてきた子は皆引き取ってあげるわね？農作の経験がある子もいるなら【ファミリア】としても大歓迎だわ」

「頼んだ手前、本当にいいのか？いきなり人員が増えてホームも窮屈になると思うけど」

「農作を作るのに人手はどれだけでも困らないの。逆に農作の量や畑を耕す作業を増やそうとすれば、その分の作業をする子供がいなくて手が回らなくなっちゃうのよ。だから私の【麦の館】はガネーシヤのところ程じゃないけれど大きいし、使われていない部屋だってまだまだたくさんある状態でね？何時でも子供の受け入れは可能なの」

だからその話は喜んで受け入れると言うデメテルの話は、安堵で胸を撫で下ろす気分浸らせる一誠を安心させた。そんな彼にもう一言。

「それにそれだけが理由じゃないんでしょう？」

「……なんのことだ？」

「ロキやフレイヤ、他の神々じゃなくて直接私に引き取ってほしい何て言うことは、極力探索系の【ファミリア】……命懸けの戦いから遠ざけたいのよね？その子達の安全な生活を第一に考えてるから」

こちらの考えを看破され否定も肯定もせず苦笑いを浮かべてしまった。

「相手の考え、心を読めるのか神って」

「そこまで神は完璧じゃないわよ？その子達の身の事情を教えてくださいた上で考えついた答えを言っただけだから」

「それはそうだ。いきなり正体不明の帝国の人間を引き受けてくれっ

て言う方が難しいんだ。だから事情を説明した上で頼まなきや無理だろ。デメテルだつて怪しい人間を「ファミリア」に入れたくないはずだ」

相手の信用を得る為には腹の内を明かさなければ得られないその真情で、デメテルに語つたら。

「そうね。でも、イツセーちゃんはそう言う子供を私だけじゃなくロキ達にも事情も無しで任せないでしょう?」

「……心から疑わず信頼されてないか?もう少し疑つても良いと思ふんだけど」

疑心暗鬼なんて言葉を知らないようなデメテルの言葉に少しだけ不安を覚えた。すると、徐に女神は立ち上がり一誠の横に立つと優しく腕を首に回して来て胸の中に引き寄せた。

「あなたには私達には言えない秘密を抱えていることは何となくわかつてるわ。それが何かまでは分からないけれど、それでもイツセーちゃんと接してどんな子なのかは知っているつもりよ?」

「……」

「私達の為に助けてくれた以前に、あんなに美味しい料理を作る子が悪い子じゃないわ。だからあなたという子供を疑わない。ロキやフレイヤ、ヘファイストスも他の神々を毎日笑わせる子供は滅多にいないんだから尚更ね?」

母性が詰まった胸に埋まったまま、心底から信頼されていることにムズ痒さと複雑な気持ちで胸中で渦巻く。自分の本当の事、真の正体を教えたなら無条件で受け入れるはずがない。ロキを始めフィン達、ヘファイストス達ですら最初は驚いて警戒の念を抱いていたほどだ。己はモンスターだからだ。故にデメテルの優しさに居た堪れない思いが湧いてしまった。

「それと……ヘファイストス達と毎日のように愛し合っているみたいだし、ね?」

ギクツ!と身体が自分の意志とは無関係に硬直した。その話は一休どこから漏れたのだと恐る恐る顔を上げてデメテルの顔を窺うと……。

「フレイヤがね？私がこの店で食べにくる日だけ嬉しそうな顔で教えてくれるのよ。アルテミスと一緒にだった時もあったわ。その時の彼女の顔は顔が真っ赤で訊いてて恥ずかしそうにしていたわ」

こつちも滅茶苦茶恥ずかしいんだけどっ!?と目を見開いて顔を真っ赤にし出した一誠に「可愛い」と思ったデメテルの口は止まらない。

「ヘフアイストス達と一度に複数愛し合うなんて……イツセーちゃんって可愛い子なのに随分とワイルドなのね？」

「……っ」

「……そこに私も加わったら、どうなっちゃうのかしら？とても興味があるのだけれど……」

さりげなくムギュツと胸に押し付ける力を籠めるデメテルは顔を近づけて囁いた。

「今夜私も……あなたを感じさせてちょうだい、ね？」

熱い吐息と共に吐露したデメテルの顔は今まで見たことが無い女のソレを浮かべていた。そしてその日の夜には、一誠と同衾する女がもう一人増えたのは別の話。

デメテルと一時別れ『幽玄の白天城』に戻り、奴隷だった彼女達の中から女神で戦いとは無縁な農作物を主に育て売買する「ファミアア」に入って新たな生活をした者だけを選抜して【麦の館】へ案内をした。それを済ませると一誠達に恩を返したいと願う者には『異世界食堂』という料理を作る店の従業員として働いてもらうことに。ミア達に事情すればすんなりと受け入れられ、分身体の一誠達に仕事の仕方を教える。

「従業員を集める天才じゃないかい。この調子でどんどん連れてきな」

「勿論そのつもりだ」

こうして思い描いた消去方法で彼女達に生きる目的を与えた。これで懸念も無くなった———と思ったのだが。

「この四人だけか。残ったのは？」

「強い希望でな。さて、どうしたものか」

一誠とリヴエリア、ロキ達がいるリビングキッチンでテーブルを挟んで座る四人の女性達。内二人は女戦士^{アマゾンネス}。バーチエや一誠に懐いてるので離れて暮らす気はないと断言されている。

「レイネル・ヴァーネ」

「レギン・イルヴィーナだ」

雰囲気を読んだのか名を告げたアマゾンネス達。ならばと質問を試みた。

「二人は一緒に捕まっていたようだけどどうしてなんだ？」

「盗賊のクソ親父に売られたんだ」

「私はお母さんに捨てられたところを、知らない人に拾ってくれたらまた知らない人に連れられて」

どちらも親に恵まれず闇商人の玩具として二重の意味で買われたのだろう。同じ牢屋に入れたのは幼いながらも容姿が整っていて将来美しくなるその姿を眺める為だったか定かではないが、結局は碌でもないことは変わらない。

「で、二人は俺達と離れたくないのは？」

「格好いい同じ種族の人に憧れたから！」

「レギンと同じで、あとあなたが綺麗だったから」

レギンが紫の瞳と一緒に顔を輝かせ、レイネルも憧れを見る目でバーチエを見た後は一誠を見つめポツと顔を赤らめた。二人の理由が解り、疑問を抱いた。

「俺、綺麗か？」

「それはもう、男じゃなくて女だったらお姉さまと呼びたいぐらいに！」

隣の少女に負けないぐらい黒曜石のような黒い瞳を輝かせながら力説するレイネルの発言で、物凄く何とも言えない表情を浮かべた。「だから力強いバーチエお姉さまとあなたの傍にいたいので離れたくないの」

「その通り！それで私達このオラリオで強くなる！」

「うんレギン！」

一緒に捕まっただけからか、もしも逃げ出したらどこで何しようかなど

話し合っていたかもしれない。仲の良い二人の話は一先ず終わりにして次の少女に自己紹介をさせた。背中まで伸びた長い金髪に澄んだ青い瞳がジツと一誠を見つめている彼女に。

「フィリラ・アークライト・ロライヤル。元「レティシア・ファミリア」の団長を務めています。L v. は2です」

意外な事に元冒険者であった彼女をロキ達はローレイイを見る目を変えた。

「自分、レティシアの子供やったんか。でも元つちゅーことは……」
「主神様は天界に送還されました。攻め込んできた帝国の騎士達によつて」

「そっか……あの女神は面白いやつだったのになあ」

残念そうに漏らすロキは天井を見上げるが、その視線は遙か上、天界にいるだろう女神の顔を思い浮かべてどこか黄昏ていたように見えなくはなかった。

「それで自分。その後は帝国の騎士に捕まったつちゅーわけやな？」

「はい、騎士を動かしていた王子によつて奴隷商人に預けられる形で捕まっておりました。将来自分が帝国の王になった暁に妻として娶るためにだと」

だから一切、商人達に犯されることもなくただ捕まっていただけだと語るフィリイはまた一誠に視線を戻す。

「質問をいいですか？」

「ああ、さつきから聞きたそうだったからな。何でも聞いてくれ」

「あなたは何をしに帝国へ？わざわざ私達を助けに来たとは到底思えません」

「そうだな。街中で奴隷を見掛けなかったらお前等を助けることは無かつただろう」

ダオスの、王子達の王位継承の手伝いをしていたことを大雑把に教えた。

「で、戦争を止めたいダオスの願いは叶わなかったが、路上生活のこストーリーチャルドレンととか帝都の治安とかの願いは叶ったと同時に悪行に手を染めてい

たっぽい王子達は捕まった」

「……そうでしたか。あなたとその王子の活躍で……皆の無念が晴れ、主神様も安心できたかもしれない」

彼女にとつて良い朗報だったようで綺麗な微笑みを浮かべ、立ち上がって一誠に深々と頭を垂らした。

「誠にありがとうございます。あなたに助けられた恩は主神様から頂いた二つ名、「剣の乙女」の名に懸けて私の全てを捧げ、共に歩むことをここに誓います」

以上、フィリラの話だった。そして最後の一人は獣人、それも丸みが帯びた獣耳に白い尾を臀部から生やす瞼を閉じてる少女だ。なんの種族か分からないのでロキに尋ねてみると。

「虎^{ワータイガー}人ちやうんかな？しかし、ここまで真つ白な虎^{ワータイガー}人は初めて見たで」

「そうね。でも……あなた、目が見えないの？」

同意しながら獣人の少女がずっと目を瞑ったままにいる故に、ヘアイストスは問うと首肯で返された。

「はい、昔から目が見えません。ですけど、不思議と人の気配は感じられますので目が見えなくてもどこに建物があるのかも大体は把握できます」

それ、ある意味凄くね？と驚いた風に左眼を丸くした一誠にアイズが訊いてきた。

「目を瞑っててもどうやって見れるの？」

「長年光と景色を見ずに生活をしてきたから色々肌で感じ取れるようになってるんだ。因みにアイズとアリサに教えてる気でもそれができるが、あの獣人の子は産まれてからずっとそうしてきていたからある意味、二人より凄いぞ。強さとは別の話でな」

それでも彼女は鍛えれば強くなれる素質はあると、今後の成長が楽しみな一誠は質問をした。

「自力で生活が出来ない奴隷がいるってのは訊いている。その上で尋ねるけどどうして俺達に恩を返したいんだ？」

「……冷たい空間の中、弱弱い人の気配しか感じられない時に

大きくて温かく、そして強い気配を感じました。それを感じたのは初めてで、あなたに触れるとその温かさに体と心が包まれとても安心しましたから」

そう感想を述べる獣人の少女の言葉に何故かロキ以外の女神と女性陣は納得した風に頷き始めた。この妙な空気に不思議と疑問で同感と同意した彼女達に首を傾げた。

「なんだアイズ達」

「ん、イツセーに抱きしめられると温かくて安心する」

「それが私達も分かっているんだよ？」

「そうだな……」

「そうですね」

「ええ」

「うむ」

「うふふ、分かっているのね」

「なんやねんアイズたん達？」

ロキも不思議がるが理解できないのとハブられているような感じで少々面白くないと唇を尖らす。獣人の少女の気持ちを知り、その言葉を懐かしむように遠い目をした。

「それが理由か」

「はい。どうかお傍に居させてください。私にできることなら何でも致します。この身をあなたに捧げ子作り——」

「それ以上は言わせないからな？」

どうやらまた帝国に戻ってこの獣人の少女を捕らえた商人とその関係者を血祭りする必要があるな、と怒気のオーラを発して危ない思考をしていた一誠は満面の笑みで遮って強引に話を変えた。

「お前の歳は幾つなんだ？」

「えっと、わかりません。あ、名前はラトラ・ハクコです」

名乗り忘れた少女は虎人^{ワイルダイガー}、ラトラ・ハクコと自分の名を打ち明けたところで一誠は初めて『鑑定』の魔法を発動した。

ラトラ・ハクコ

年齢11歳

種族 ワータイガー
虎人

と——ラトラの前で発現した立体映像、「ステータス」のような物が虚空に表示されるように浮かび上がった。文字は共通語コイネである。一誠だけ見られる物かと思ったが、目を丸くするリヴェリア達の反応を察するに他者でも見れるようだった。

「……………あの？」

「ああ、話の途中だったな。わかったよ。そばにいてくれラトラ。強くなりたいたらどこかの【ファミリア】を探す。それでいいな？」

「神の眷族になる事ですよ？ イツセー様はこの【ファミリア】にいるのです？」

「今は【ガネーシャ・ファミリア】って派閥だけど、俺は一年毎【ファミリア】を変えているんだ」

特定の【ファミリア】にはないと告げられ疑問どころか不思議にも思わず、ラトラは素直な気持ちで言った。

「楽しそうですね」

「色んな神のこと解るからな」

さてと、と立ち上がる一誠はラトラを宙に浮かせて自分の傍に移動させた。何をするのかと【天使デ・シール】の姿になった彼の者にリヴェリア、アイズ、アリサはデジャヴを覚えたその時。十二枚の翼がラトラの全身を包み込み翼から神秘的な光が漏れる。その数十秒ののちに翼が解かれ、ラトラの変わりない姿がまた見られた。

「……………イツセー様？」

「目、開けてみな」

「……………はい」

素直にゆつくりと瞼を開けた。閉じていた少女の眼は血のように真っ赤な赤よりも濃い深紅。生気の光を宿し眼を信じられないものを見て動揺するように揺れ動く。それでも目に映る全てに認識、暗い世界が全てだったラトラの世界観が引っくり返され、いきなり光の世界に飛び込んでしまった双眸が凍結したように固まっては、一誠を見上げた。ラトラの視界に映る彼の顔は悪戯つ子が悪戯を成功した笑みを浮かべていたのだった。

本格的に新たな道具アイテムの作製に入ろうと『自由フリーダムで有意義な時間の空間タイム・バカンス・ルーム』の中に入る。この中に入れる者は自分を除いて一人だけ、最近はこの道具アイテムを利用していなかったため彼女とは顔を会わせていない。今日はいるか城の中を歩いてみると――

自分の部屋のように書類の束を机に積み重ねて事務処理をしていた。一誠の存在を気付かないまま筆を走らせ判を押し続ける彼女に茶でも出そうかとキッチンに向かう。

「ヘルメス・ファミリア」団長アスファイ・アル・アンドロメダがこの特殊な空間を愛用してそれなりに長い。飄々としてオラリオの外に出向くことが多いので主神としての仕事はせず、無茶苦茶な要望もアスファイに押し付けることが常である故、彼女の心労は耐えないものの卒がなく全てをこなす力量は高い。今日も仕事を押し付けられて処理するはめになったが、時間の流れを変える都合な空間の中で仕事をしようになつてからゆとりの時間が得られるようになった。

「ふう……」

筆を置き、書類の処理や整理が終えて一息つく。そんな彼女を労う相手はいないが、自分以外誰もいないのは事務室でも同じだ。だが、この空間の中では主神や仲間達のことを忘れて過ごせるのとは違う。絶えない心労を抱えてるアスファイはこのあとが癒しの時間だ。今日はホームから持ってきたティーセットと『異世界食堂』で最近、販売するようになったデザートを――。

「終わったようだな」

事務室と化した部屋に一誠が入ってきた。しかも持参してきた物も持つてきてだ。

「イ、イツセイさんッ。いらしていたんですか？」

「俺も集中して作りたいものができたからな」

紅茶とデザートを目の前に置く執事のような振る舞いをされ、戸惑うアスファイは顔を一誠に見上げる。

「うちの店のデザート買って来てくれてありがとうございますどうぞございますお姫様」
「ど、どうも……」

内心、どきりと胸が高鳴ったことを一誠にバレないかドキドキする。この『自由フリーダムで有意義タイムな時間バカンスの空間ルーム』の持ち主であり提供者が振る舞う仕草は様になっていた。

「仕事の方は終わったか？」

「え、ええ……あ、自分の部屋のように使ってすみません」

「全部じゃないんだから気にするな。仕舞いには自分の部屋にしてもいいんだけど？そしたら皆に内緒でアスファイという可愛い女の子と会えるからな」

恥ずかしげもなく真正面からそう言われて照れて羞恥心を覚えるアスファイは、華奢な両手でカップを持ち口唇に寄せて直ぐ飲めるように調整されてる温かな紅茶を飲んだ。

「そ、それで今度はどんな道具アイテムを作るのですか？」

「ああ、『ステータスプレート』だ。要は「ステータス」の簡易版を作ろうと思ってる」

「【ステータス】……を？」

神の御業である「ステータス」を高が人間が、それも自作で作るですって……？耳を疑うことを言う者に信じられないと見つめる彼女の心情を察して「俺も完成するとは思ってない」と述べた。

「材料はあるけど問題は【ステータス】を手ごろなプレートにする方法が難題なんだ。作る目的は能力ステータスを封印された状態でも、改コンバージョン宗の状態で【経験値エクセリア】が得れて【ランクアップ】ができるようにするためだ」

「それは……もしも完成したら神々の存在を無に帰すとしてもないものではないですか？」

「それはない。作るにしても数に限りがあるし、改コンバージョン宗ヲをする際は『ステータスプレート』に施錠ロックを施せば背中に刻まれた『神の恩恵ファールナ』が正常に変動する。また、どっちも改コンバージョン宗ヲをすれば身分証明書にもなるから便利になる反面、能力ステータスがそのまま反映してしまうから速攻で魔力やスキルもバレるデメリットが高いけど」

まあ、そこは神が細工してもらおうしかないと朗らかに語る一誠は——とんでもないこと言っている自覚があるのかとアスフィは思わずにはいられない。そんなもの、世に出てしまえば神々の存在意義を転覆させる禁忌の道具アイテムになりかねない可能性をこの人は考慮していないのか？

「イツセーさん……それはあまり作らない方がいいかと思えます」
「アスフィの言いたいことは分かる。神々の存在意義と価値が無くなりかねないってことだろう？」

「それを承知の上で作ると？」

「そうだ。そしてこれを世に出すにしても精々15枚前後だろう。最近、俺の回りに改宗コンバージョン状態の眷族や無所属フリーの連中が集まるようになったからな。そいつらの為にする」

必要なくなったら直ぐ破棄するつもりだ。とアスフィの後顧の憂いを解消させる言葉にまだ胸につつかえる不安が残るが、一誠も完成したら周りにどんな影響を及ぼすか承知でいることを少なからず安心した。

「それじゃ、俺は作製に入るけどアスフィは俺に気にせずのんびりしていてくれ」

「はい、お言葉に甘えます」

自分に背を向けていなくなる異性を空色アクアブルーの瞳が最後まで見届けた。同時に道具製作者アイテムメイカーとして自分を置いて前へ前へと進んでいくような錯覚を覚え、負けられないと少女は握り拳を作った。

【ガネーシャ・ファミリア】に入団して初めての夏季。ジリジリと憎たらしいぐらい顔を出す太陽が大地に日光を照らし、闇派閥イルヴィスの襲撃以外は変わらない日を迎えるオラリオに住む神々や民衆達に猛暑と言う自然の猛威を与え続けた。

「おはよう、俺がガネーシャだアツ！」

「……こんな暑い日でも暑苦しい自己主張はしないでほしいかな」
筋骨隆々の褐色の肌が更に日焼けで真黒になるんじゃないかと思わせる男神の身体は不変。赤外線や日焼けなど気にも留めない神の

体は人類からすれば羨ましい体質である。汗を流していないあたり真つ直ぐ開店前の『異世界食堂』に来たのだろうガネーシャがシャクティと一緒に来たのは何か用があるのだろうか、と店の中から陳列窓ショーウィンドウに揚げ物やパンを棚に収納する店主は中に招いた。すると、肌が焼けるような暑さとむわつとした暑苦しい熱気が一変して、店の中はひんやりと熱した体温が冷えていく感覚が心地良さを覚えながら感じた。それがとても新鮮で女団長は見慣れた店内を見渡す。

「……驚いた、涼しいのだな」

「あれ、ホームとか店の中は涼しくする魔石製品はないのか？」

「発火装置や冷凍装置ならいざ知らず、広い空間の中を冷やす装置は作られていない。この店にはそう言うのはあるのか？」

「異世界の魔法で」

その一言で片付く魔法の言葉で無言になったシャクティとガネーシャは2階へ案内されると席に腰を下ろした。

「で、見ての通り店は準備中だけど今日はどうしたんだ？」

「ああ、ガネーシャがお前に訊きたいことがあるそうだ」

それはどんなものか、ガネーシャから聞かされるまで何も分からない二人は聞く耳を立てる。

「イツセー、異世界にはどんな祭りがある？」

「祭り？結構あるぞ。住む国が違えば多種多様で多彩な祭りがあるけど同じ国でも住む地域によって祭りも違うんだ」

「そうなのか。ガネーシャ、物凄く興味津々！」

「そうか？俺の住んでいた日本、ここじゃあ極東だな。火薬の塊を夜空に打ち上げて破裂する火花を祭りに来た人達を魅せる『花火大会』って祭りがあったよ」

店主の元の世界の祭りの内容を聞き「火薬？花火大会？」と聞き慣れない単語にシャクティの口から鸚鵡返し鹦鹉返しが漏れた。

「火薬ってのは、火薬と金属の粉末を混ぜて包んだ物で火を付けたら爆発する材料だ」

「爆発するとは……そんな物使って大丈夫なのか？」

「空に打ち上げれば地上に落ちる前に焼失するから問題ない」

論より証拠、と亜空間からパソコンを取り出しては記録してあった祭りの映像を二人に見せつけた。真つ暗な街中、見慣れない屋台で売買されている料理の品々、娯楽、夜中に響く力強く叩かれる太鼓の純音と笛の音色に音頭。それを楽しむ人々の顔が連なっている屋台から発する照明灯や街灯で照らされていた。それから祭りの最後のシメとして一瞬の轟音と笛のような音が聞こえた一拍ののち、闇を照らす満開の火花が広大にバツと広がったと同時に凄まじく鈍い轟音が生じた後、儚く火花が燃焼しながら散って闇夜に消えた——と思つたら今度は数え切れない数の大小様々な大きさに形、多彩な色の火花が轟音と共に蒼い空を照らし続け観客達を盛り上げさせた——。

「これが、異世界の催しイベントの『花火大会』だ。理解してくれたか？」

そう尋ねる店主だったが、花火大会の印象と派手さに半ば言葉を失ったガネーシャとシャクテイから返事はなかった。声を掛けず呆然としていた二人を見ていると唐突に我に返った。

「はっ！物凄く綺麗だった……」

「異世界にとつては『未知』だもんな」

「……これが極東でも行われているのか？」

「アマテラス達に聞かないことには断言できないな」

分かってくれたようでないによりだとパソコンを亜空間に仕舞い、ガネーシャが異世界の祭りを知って何を仕出かすかは本神次第であるが……。

「イツセー、これ、この世界でもできないか？」

「祭り自体は難しいぞ。こう言う人の楽しみを邪魔するのが悪の定番だ。闇派閥イルヴァイスがまだ存在している限り、闇夜に紛れて暴れ出すのが火を見るより明らかだ。ただ、花火だけはできなくない」

「そうか、そうか！では、『ガネーシャ・ファミリア』総出で花火大会を実践してみせるぞ！」

「でも、アマテラスの国でもやってなかったらどうするつもりだ？」

「その時はイツセーの出番だ！」

他力本願の象神に深い溜息を吐いた店主を、悟った目で見つめる麗人の団長は労いの言葉を心の中で送った。オラリオの街や人々の活

気を向上させようとするガネーシャの行動は早かった。まずは東のメインストリートで構える極東の三柱の神々の本拠地へ面談約束もなしに飛びこんだ。毎度『異世界食堂』で顔を合わせる神同士なので直ぐに面会が出来て用件を言った。

「オラリオでも花火大会をしたいのだが！」

「花火大会？ごめんなさい、それはできない」

「何故だ？人員なら超・優秀なガネーシャの団員で補うぞ」

「花火大会をするにもまずその花火を作る為の技師が極東にいる。そしてその技師が作った花火玉に数が限りがある。今年も極東ではこの夏の時期の夜で花火を打ち上げるからオラリオに回す花火玉は無い」

と、アマテラスの否定の理由に肩を落としたガネーシャ。しかし、他にも極東から来た神が二柱――。

「イザナミとイザナギのところに行っても同じ結果よガネーシャ」

他の極東の神へ尋ねようとするだろうと予測した言葉をぶつけられてますます残念がるところ、今度はアマテラスが尋ねた。

「ガネーシャ、極東の夏の風物詩のこと。どうして知っていたの？馬鹿にするわけではないけど極東の情勢なんて目も耳も向けない快樂主義ばかりのオラリオの神々が、なんでなの？」

「イツセーから訊いた！」

胸を張ってドヤ顔――をする意味はあるのかシャクティは理解できなかったが、アマテラスは納得した面持ちで頷いた。

「異世界の花火大会・・・ちよつと興味が湧いた」

そして、何時の間にかイザナミがいた事に気配すら感じなかった三人が驚いたのは直ぐだった。

「有言実行・・・とは本当にこの事だな」

アマテラスに尋ね、オラリオで花火大会はできないと言われ再び『異世界食堂』へ訪問した象神の他力本願の命によって特典のスキル『ネットスパー』で大人から子供でも遊べる玩具花火を購入するた

めに数えるのが億劫になるほどのヴァリスをチャージをし続けた結果。周囲には玩具花火が大量に山積みされていた。当然、その奇行に興味を抱かないはずが無いロキ達は手に持って好奇心な眼差しで眺めている。

「これ、なんなんイツセー？」

「ガネーシヤがどうしても花火がしたいって言うから買っているんだよ」

「……花火？」

かくかくしかじかとガネーシヤ達に教えた花火の説明を省略して教える。

「ほー夏の季節しか遊べないもんか。で、これを夜でするんやな？」

「火を点けるだけで昼夜問わず出来るけど、綺麗な花火を見たいなら夜が一番だ」

「これ、きれいになるの？」

アリサの世界では花火という概念や存在はなかった。一体火を点けただけでどんな風に綺麗になるのか想像が出来ない。子供らしく相応に好奇心に撥られた少女は純粹無垢な目で見つめると、買い続ける当の本人は肯定した。

「綺麗だぞ。見れる時間は短くてあつという間に終わっちゃうけどな。儂く散ると言う印象が強いものだこれは」

玩具花火の為に用意したヴァリスを使い果たし終えたところで、一誠は無造作に封を開け出した。中身を取り出して一つ一つ同じ種類の玩具花火を床に並べながら置き始める。それを見て手が空いているロキ達も見習って手伝い始める。

「それで、今日するのか？」

「うんや、数日後にしたい。ミア達もやらせたいからさ」

本人もそう言つて有言実行を果たす。ガネーシヤの提案から数日後。『異世界食堂』は何時も通りの休業をしてあつという間に夜を迎えた。ミア達やヘルメス達を西と北西の間の区画にある場所に誘い

——小さな花火大会を始めた。地面に火が灯してある数多の蠟燭を用意しながら玩具花火で遊ぶ際に気を付ける注意事項を伝える。

それが終われば皆は各々と手持ち玩具花火を手にして・・・火に点火すると。火薬を練り込んだ紙がシュバツと音を立てて引火、鼻にくる火薬の臭いを空気中に漂わせながら綺麗な火花が迸った。

「わっ、わっ！」

「おおー！これが、花火って奴なんだねー」

「綺麗ね、見てて飽きないかもしれないけれど・・・」

「あ、消えちゃった」

「儂く散る・・・まさしくその通りであるな」

大人組は純粋な気持ちで感嘆しながら玩具花火を見て童心を思いますが。まだ子供組は好奇心と遊び心が高まって次の玩具花火に手を出す。神々は異世界の玩具に手に取れて楽しげにはしゃぐ。

「イツセー、凄く懐かしいね」

「ガネーシヤの提案があろうがなからうが何時かやっていたと思うけど、ああ、本当に懐かしい。元の世界じゃ片手で数えるぐらいしかなかったからな」

「私もかも。だから、元の世界のことをこの瞬間だけ忘れられる時間ができるなんてちよつと驚いているよ」

人に向けないよう花火を楽しむこの世界の住人達を眺めながら自分達も片手で花火をする二人。異世界から来たアリサでさえ、青い目を大きく開けてアイズと楽しんでいる。視線を変えてミア達の様子を見ればニヤーニヤーと騒ぐ猫キャットピール人や朗らかに表情を緩めて楽しむヒューマンの少女達。ミアも静かな雰囲気纏いながらも年下の従業員達を見守っているその表情は母親みたいであった。

「イツセー、イツセー。この丸いのはなんなん？」

長さ数Cの玩具花火を手にして説明を求めるロキの声に反応する。

「それは爆竹って花火で、火を付けて地面に置いておくと破裂音を立たせるんだ」

「なるほど、それじゃ、点火！」

そして地面に置いて数秒後。爆竹が導火線によって結びつけられており火が火薬が詰まっている爆竹に引火すると連続して爆発を始め、皆を驚かせた。獣人の少女達は耳をピンと立てて長い尾を天に伸

ばして驚く瞬間を見てほっこりする一誠だった。

「び、びつくりしたあ……」

「これ、相手を驚かす遊びにも使われてるから快樂主義の神々にとってはこれ以上のない遊び道具にもなるからな」

「ほほう……これは売れば儲けそうだねえ？」

「長期間の保存は無理だからなヘルメス」

それでも欲しいとさりげなく集め始める優男の男神に、女団長は呆れ顔で溜息を吐いた。続いて別の玩具花火の説明を求められた。

「この黒い円盤は？」

「蛇花火だ」

地面に置いてもらい、表面に火を点けたらあら不思議。表面が蛇のように燃えカスがぐにやぐにやと伸びて冒険者達を警戒させた。

「モンスター？」

「違うし」

奇妙な玩具花火もあると知って更に盛りあがりかヒートアップする。

「これは何？」

「それはクラッカーだ。主に祝い事によく使われているんだ。その紐を思いつきり引つ張れば破裂音がするぞ。あ、できれば一斉にやった方がいい」

言われて試しに引つ張ってみるヘアリストス達の手でクラッカーはパンツ！と破裂して筒からは紙テープや紙吹雪が飛び出した。またその音に聴覚がいい人種は驚いたのは言うまでもない。

「意外と、音が大きいのね」

「これよりももっとド派手に大きい花火はあるぞ？流石に今日は無理だけど」

だが、このクラッカーの音に味を占めた神が祝い事をする度に事前で一誠に用意してもらおう未来があるのだが、まだ誰もその事を知る由もない中、ロケット花火を並べる一誠に興味津々な一同。

「よし、花火の醍醐味と言えばこれだろ。ガネーシヤ」

「む？火を点ければよいのだな？」

「そ、できる限り連続で」

何時から用意していたのか分からない松明を手渡して、斜め上に組み立てられた木製の置き場にロケット花火を並べた本人によつて象神が動く。指示通り立て続けに導火線に火をつけた瞬間だった。玩具花火が一人で勝手に射出するように夜空へ跳び出した後、暗闇の向こうから小さな爆発音が聞こえた。しかも連続で飛びだす光景は心に興奮を覚えさせるのに十分過ぎた。

「おー！おー！なんやそれ、めっちゃ楽しそうでええやんか！」

「まるで魔法を放つたみたいに飛んで行くねー。オレもやってみたくなつたよ」

娯楽や快楽を求める神々がこぞつて自分も自分もと主張する。それを見越していたのか「はいよ」と準備が良い一誠は既にセットしたロケット花火を提供する。

「あ、ガネーシャ。飛んで行った花火の回収今直ぐ行って。そう遠くまで行ってないからすぐ見つかるはず」

「わかつた！では行ってくるゾウ！」

と、ゴミの回収を神自らさせる一誠は——邪な笑みを浮かべて口々に松明を渡す。

「ロキ、ゴー」

「え、大丈夫なん？」

「当たっても火傷する程度だ」

この人、神に花火を当てさせる気だ！と一同の心が一致したところでロキがロケット花火の導火線に火を点け……。発射させた。暗闇の向こうにいるガネーシャに向かって飛翔する花火達。それを氣付いて振り返った男神から絶叫の悲鳴が響いたのは必然的だった。その阿呆な様子にツボが入ったようで「あつひやひやひやひやっ！」と笑うロキ、そして何かを悟つたヘルメスは一誠の目を見てニヤリと口唇を三日月の形に刻んだ。

「笑っているところだけどロキ？お前もゴミを取りに行けよな」

「……イツセー？まさかとは思うんやけれど、うちにもガネーシャみたくせんへんな？」

「酷いなロキ。俺がそんなことすると思うのか？信頼されていないなんて俺は悲しいよ」

残念そうに溜息吐く一誠からふざけた調子も意味深な笑みすらない。本当に落胆した雰囲気纏うのでロキは今までの一誠に対する感謝と恩を考慮して一言謝って、ガネーシヤの後を追うようにゴミと化した玩具花火を撮りに行かせた。その途中、やはり不安だとちらりと背後を確認するロキの目は、自分を見送る一誠達や花火を楽しむ面々が視界に入る。追い打ちを掛けるような真似は無いとホッと安心して信頼もして前に振り返ったその数秒後――。

「イツセー、おんどれえっ！しないで言うんたやないかあああああああああああああああつー！」

ガネーシヤの二の舞になつたのであつた。爆発音と女神の悲鳴を聞き、ヘルメスはもう爆笑で腹を抱えた。一誠もこの時だけは声を出して笑い、リヴェリア達に新鮮さを覚えさせた。であるが二度あることは三度もあると極東の諺がここで発揮する。

「――次はヘルメスだからな？点けるのはアスフィだ」

「え、えつと・・・オレも取りに行けと言うんだね？」

「さっさと行ってくださいヘルメス様」

もう隠そうとはせずに松明を持ってセットされたロケット花火の前に立つアスフィ。顔を引き攣らせるヘルメスは遠慮するよと苦笑いで否定の言葉を言ったのだが、彼の背後に現れる二つの影がそうはさせなかった。

「おうヘルメス？自分だけ無事で済むなんて思っていないんやろうなあ？」

「ヘルメス、ゴーだ」

優男神の肩を掴んでいい笑顔を浮かべる女神と男神。逃がしはしないと三列に並べられている花火を見て橙黄色の目が凍結した。

「因みに、ロケット花火は三倍増やすからゴミ取り頑張つてな？」

「ハ、ハハ、ハハハハ・・・」

数秒後・・・一人の男神は大量の花火に襲いかかられて「アーツ!?」と悲鳴を上げた。そんな様子を見て今までの鬱憤が何故か消えて

いくアスファイ自身が晴れ晴れとした表情で見守った。

「これでしばらく良い夢が見れる夜を過ごせそうです」

「それはよかったな」

そんなこんなな花火大会も大勢ですれば数があつという間に減つていき、最後の一種類の玩具花火で終わりの幕が閉じようとした。筒状の玩具花火だ。それはアマテラスがよく知る物の小型版である。

「最後は取っておいた打ち上げ花火だ。今度は皆で点けてくれ」

「打ち上げ花火……こんな小さな物が本当に空にまで飛ぶのか？」

「百聞は一見に如かずだ。やれば分かる」

イザナギの疑問を催促で流されて一人一人渡された蠟燭で、間隔的に置かれた最後の花火の導火線に火を点火する。最後まで導火線が燃え尽きるその瞬間まで見守り……。筒から飛び出す何かが夜空に消えたあと、三柱の極東の神が知っているような大規模な打ち上げ花火とは違うも、小さくても一生懸命に闇夜の空に咲く火花が次々と咲き誇ってロキ達を魅入らせた。その様子にアスナと目を合わせて頷き合う。

「たーまやー！」

異邦人達は夏の風物詩を満喫した。それでもまだまだ夏季は続く。

冒険譚 18

小さな花火大会をして、一部の神だけ楽しいも苦い思い出を作った皆々。また近い内にやろうと神の提案に賛同する者は多々であったため。

「じゃあ、今度は極東で行う花火大会に参加してみない？」

「アマテラス・ファミリア」と「イザナギ・ファミリア」と「イザナミ・ファミリア」。三国同盟になって初めての合同花火大会だ。今までしてきた、そして前回よりも派手な物となるのは間違いない」

「去年はそれぞれの国で行ったから今回が初めてだよ」

と、極東の神々からの誘いに誰一人拒みも否定する神も人もいなかった。

「行き来は騎空艇に乗れば問題ないな」

そして極東までの移動方法の確保は万全だった。ならばと心待ちにしてそれぞれ自分のホームに戻って一夜を過ごした記憶はまだ鮮明に残っている中でアマテラスから話を掛けられた。

「イツセー、あなたにしかできないことがあるの。これは極東と私達三国が本当に何時までも手を取り合って未来に生きる為に必要な政策があなたと言うカギが必要になってしまったの。——物凄く複雑だけど」

その意味がなんなのか分からないまま数日が過ぎて、一誠はとある日にアマテラスから呼ばれて東のメインストリートへ足を運ぶ。三柱のホームは三つの派閥が一つの囲いの中で共同に使っている巨大なホームである。だが、それはギルドの目を欺くためのカモフラージュに過ぎない。ホームとしての機能は確かに働いているが、三柱は基本的に極東で過ごしている事が多いのだ。眷族達には器を鍛える意味も兼ねてダンジョンに挑ませており、オラリオでしか手に入らない無限の物資や素材を極東に持ち帰って新たな資源としてから三国は、利益が向上し国力も高まり人々の手にもオラリオで作られた物が流通するようになっていいる。それができるようになったのは一誠の手で作りに出した——^{ゲイト}門によるものだ。四方の五十Mもある扉に囲

まれた城の中に入入りする木製の扉の向こうは極東にある城と変わらない石塚の上に建造された極東風の城。の、中に門ゲートが存在する。それも三つだ。西に一つ、東に一つ、南に一つと赤い大きな鳥居を潜ろうとする空間に同じ鳥居がある極東と繋がっているのだ。これさえなければ極東とオラリオの流通が遮断され、長い航海をしなければならぬ船でしかなくなる手痛いことになるのだがしばらくはならぬだろう。

「おはよう」

「おはようイッセー」

門の前に立つアマテラスと言葉を交わし、早速とばかり城の中に招かれた。ホームも一誠が用意したので構造は把握している。坂の土台を上って二つ目の門を潜り数百人の眷族達が寝泊まりする居住区がある城へ運ぶ足はまだ止まらない。

「眷族があんまり見掛けないな？」

「戦争の他にも自分を鍛えられる場所があれば自ずと向かってしまうものなのよ」

「そういえばアマテラス達の派閥ラックの等級ってどのぐらいなんだ？」

「ギルドに聞いたら私はBでイザナギとイザナミはAらしいわ。第一級と第二級の將軍を抱えている二人にとっては当然の等級ラックでしょうけど」

因みに極東の神の眷族達に称されている名前は冒険者の位ラックに例えると『足軽』、『將軍』、『大将』、『大將軍』、『侍』である。だが知略、魔法に長けた兵士は『軍師』という別枠カテゴリーの部類ラックに『將軍』と同等の発言力が得られる。

眷族達の居住区を囲む三重塔が三つ、それぞれアマテラスやイザナギ、イザナミが寝泊まりする塔でもあるが大抵は一誠の城で寝付くので生活感はそのほどない。その塔がある真下の石塚と極東と繋がっている鳥居が存在しており、見下ろせばアマテラスが統治する国にある鳥居から出入りする眷族が視認できた。

「あなたの魔法で国は活気的よ？」

「それは重畳だ」

三重塔の中に入り、玄関に足を踏み入れると二つの下駄や草履が並んであった。この中に誰がいるのかもはや見当がついている一誠は特に何も聞かず靴を脱いで上がる。アマテラスと階段を上って二階の居間にある襖を開け放った矢先。仮面を被っている黒髪の女神が一誠に向かつて胸に飛びこんできたのであった。

「待ってた」

「音で分かったのか」

「ううん、匂いで」

「犬か」

胸の中に納まる女神にもう一人の女神と異口同音で指摘した。腕に抱き付いたままのイザナミと茶菓子が置かれている台の前に正座して待っていたイザナギの近くまで寄って円形の形で腰を落とす。

「うん？なんで俺のところだけアップルパイ？」

「大好物でしょ？」

「うん、そうだけどちよつと意外に思ったただけだ」

話しの前に好物を手にして食べ——一瞬で体を小さくし狐耳と九つの尾を生やすシヨタ狐一誠になって直ぐイザナミの膝の上に乗せられて抱きしめられる早技にアマテラスは溜息を吐く。

「本当に狐人ルナルになれるのねイツセーって」

「そう言えば教えてなかったか？」

「ええ、デメテルからあなたの可愛らしさを自慢げに語ってくれて初めて知った。異世界にも狐人ルナルはいるのかしら？」

「いることはいる。だが、そう言う呼び名では無いことを一誠は改めて異世界の違いを教える。」

「狐人ルナルじゃなくて、俺の世界じゃあ妖と狐と書いて妖狐って呼ばれている妖怪の種族がいるんだ」

「妖怪とはなんだ？」

「妖力っていう力を持ったモンスターと思ってくれ。人とは違う人外で異形の存在。それが妖怪だ」

自分達と同じ名と神格の神がいる異世界の情勢をまた一つ知れたことに知識と情報として覚えておく三柱。だが、これから話したいこ

ととは違い、逸れてしまった話を戻して本題に入った。

「そちらの世界の狐人ルナルの呼び方が違うことは分かったが、話しをした
いのはそれでは無い」

「まあ、わかっている。何か知らないけど俺が極東の未来のカギつての
はどういうこと?」

それしか聞かされてないから分からんと述べる小狐に続けてイザ
ナギが口を開く。

「二人の男に私達は手の平踊らされ、アマテラスの国が壊滅の運命に
辿り掛けた。それを變えて救ったお前はアマテラスの国では英雄扱
い、そして三国同盟の切っ掛けにもなった重要な人物でもある」

「そんな認識されているのはムズ痒いんだけど? なし崩しに救っ
ちやつたしさ」

「お前がそうであろうと国の間では結果が全てだ。だからお前は極東
では偉業を成した英雄的な存在故に——同盟を結んでからある日、
三国会議で浮上したのだ」

重大な事だと正座した状態で腕を組み黒い眼を、頭を撫でられてい
る一誠に向けて視線を注ぐ。

「土地と貴族の位を与えられた英雄は誰とも契りを結ばないのかと
な」

「.....はい?」

契りとは、誰かと結ばれる＝結婚のことか? 俺が? と耳を疑う他所
にアマテラスが口唇を動かした。

「貴族は皆、国の政略結婚や地位が同等、もしくはそれ以下かそれ以上
の相手と必ず誰かと結ばなければならないの。子孫を残す意味でも
国に貢献をする為にも。これ、あなたが極東の英雄になってから色ん
なところから『自分の娘を是非嫁に!』って乞いの書状が届くように
なった議題なの」

それは知らなかったと寝に耳に水な一誠はイザナギとイザナミに
もそうなのかと目を向けると首肯された。

「私の国でもそう言う話題がする」

「それがどうしたのだと突っぱねようと、国の沽券に関わる問題だと

言われたら無視できなくなるのだ」

神々でも一誠の存在は扱いに困っている様子でイザナギの眉根が寄っていた。アマテラスとイザナミは本人の意見を聞きたいと視線を送り続けている。その視線にちよつと居心地悪く感じ質問した。

「貴族の位つて俺はどのぐらいなんだ？と言うか今さら何だけど三人の国に王……天皇の人間はいないのか？」

「イザナギを捕まえたかったから私の思い通りにするには子供の王なんて必要なかった」

「私はイザナミから解放されたいが為に自ら指揮をしていた」

「私はいたのだけれど、親子揃って病死して血がそこで絶えてしまい私が国を統括するようになったのよ」

イザナギとイザナミの理由はまともではなかった。アマテラスはいたが王家の血が絶えたから自分で統治することに決めたと理由で納得した。

「王のいない国って意外と大丈夫なんだな」

「「本当に意外に」」

三柱も認めてしまう国の柱の存在の有無。まあ、神と言う大黒柱よりも頼れる神柱が国の支えとなっているから問題にもならなかったのだろうと自己完結した一誠はさらに質問をした。

「話を戻すけど俺って何の位なんだ？貴族の位を授与するって言われただけで自分の地位が解ってないんだけど」

「あなたの地位は定まってるのが本音。三国の危機を救った英雄でもいきなり天皇なんて与えたら国の重臣達は流石に黙ってないから。いわばあの場の凌ぎに言っただけで特に決めてないの」

「うん、天皇は元の世界で十分だからそこまでの位階はいらないな」

「え、イツセーって元の世界じゃあ天皇の子供なの？」

「そうだけど？まあ、俺はある理由で除外されてるから天皇家の子供じゃなくなってるんだよ」

「また意外な事実が……」

また話が脱線しそうになって改めて真剣に話を進める。

「未だに位階を明快してないままのあなたのことは、世間ではとても

高い地位ではないかと思われているわ。そんな人とお近づきになれば嫁を出した家は安泰と出世が叶うから、下から上の者達はどうしてもね」

「欲望的な考えをする者もいれば三国のことを思っている者もいるがな。三国の同盟をより強固にし、地盤を更に固める意味も兼ねてだ」
「だから、私達の国から一人だけ選んであなたと婚約させる方針で話を定めている」

話の筋が読めてきたところで「え？」と小さく漏らす。イザナミの言う言葉が真であれば、三国からそれぞれ一人、選出した三人の女性と婚約して三国の結びを堅いものにしたと言われ、きよとんとしてしまおう。

「俺が結婚？三人の国の地盤を強固にするためにか？」

「「そう」」

アマテラスが一誠しかできないことと言われた意味がようやく理解し、九つの尾が不自然にピタツと固まる。何故自分が？モンスターである己がこの世界の人間と結婚しないといけない？理解できない、理解不能、この三柱は一体何を考えてるのかと疑心暗鬼になっているところアマテラスが話しの補足をする。

「三国の為に政略結婚をしてほしいと言うのは嘘じゃないけれど、あなたのことを考慮して私達が選んだ子はまだ幼い子供よ」

「実際に結婚なんてしなくても良い。あくまでフリ」

「私達の国の民達を確実に安心させる証が必要だ。お前はただロキ達と同じようにお前の城に住まわせるだけで成立する話なのだこの一件は」

ただ一緒に住んでもらうだけで周りは納得する。そしてまだ幼い子供は将来大人になって何時しか子宝が恵まれたら三国の未来の安定が約束されたも当然、と重臣や民達をそう認識させようとしている三柱の考えに理解し安堵で胸を撫で下ろす。幼い子供を選出した意味は直ぐに子供を作らせない為の配慮、自分がモンスターであることを何も知らずに嫁がされた女性からすれば悪夢のようなもの故に、長い目を見る意味も兼ね何時か一誠の正体を知った上で信用と信頼を

し恋仲になることを願ってのことだろう。

「……あー、うん、三人のこと正気の沙汰じゃないって思ったけど俺のことも配慮してくれていたんだな」

「寧ろあなたと他の誰かが結婚なんて私が認めない」

その言葉は本気だと伝わってくる強い意志は本物だった。のでイザナギが呆れた風な面持ちになった。

「他派閥の眷族となったこやつと神が結ばれるなど夢物語だ。それ以前にお前等は自分の歳を考えろ。一体何億歳だと思っている」

「……イザナギ？久しぶりに追いまわしてあげよつか？ねえ？ねえ？」

「面白そうね。私も参加するわ」

着物の袖から刃物を忍びの如く手にして青褪めて怯える男神に見せつける。口は災いの元ということわざがあるのだがイザナギは知らないのか？と思いつながら助け船を出す。

「で、その幼い子供は俺と住むことを受け入れてくれているのか？強制は駄目だぞ」

「勿論、私達も強制は好まないわ。確りと順を踏んで直接その子と会ってきて話をしたわ」

「あなたの魔法で何時でも親の元に帰れると教えてある。実際オラリオと極東が行き来できることを証明してある」

「その親もそれならと安心し、子の判断に委ねた結果。お前と一緒に住んでみたいと望んだ」

お互い同意の上の判断ならば何も言えなくなった一誠はコクリと頷いた。

「分かったよ……本当に結婚なんてしなくて一緒に住むだけで三人の国がよくなるなら構わないよ。でも、ロキ達に説明をしてくれよ」

「ええ、勿論。あと訂正をしたことがあるわ」

訂正？何が？どこを？と不思議そうに目を向ける一誠に向かってアマテラスは強く言い放った。

「例え絶望的なまでに歳を取っても身体は十代です！」

「うんうん」

「……………」

よっぽどイザナギに歳のことを指摘されて遺憾に思っていたのか、若さを主張してきた。イザナミもそうだそうだと言わんばかりに頷く。これには言った男神も言われた一誠も何とも言えない微妙な表情を浮かべてしまう。ツツコンなら最後だと喉から出そうな言葉を必死に堪え、ただ相槌を打つだけで反応する他なかった子供の狐耳がピコンと奮い立った。何かを察知した仕草をした一誠は「どうしたの？」とイザナミから声を掛けられた。

「店の方で何か遭った」

「揉め事？」

「うんや……………商會が尋ねてきた」

——『異世界食堂』。

朝から大勢の客がやってきて商売繁盛、とまではいかないが『異世界食堂』を鼻負してくれる無所属フッリの人やダンジョン探索を休んで朝っぱから酒を飲む冒険者、他の店にない冷房が効いた涼しい空間にのんびりと過ごそうとする神々が二階の席を占領して食事を楽しんでいった。そんな客達を視認する店の主人である一誠、そしてアスナ達店員の手で、『異世界食堂』は今日も切り盛りされていく中、新たな客が開け放つ扉の向こうから熱い日差しと熱気を背負って涼しい空間に入ってきた。

「うわ、なにここ、涼しい……………」

「おっ、いらっしやい。久しぶりだな」

「久しぶりー。今日もお邪魔させてもらうよ？」

口元を隠す赤い防寒着マフラーを暑苦しい夏の真っ只中でも巻く耳裏に茶髪を上げて耳を晒すヒューマンの少女が朗らかに片手を上げて店主と仲よさげに言葉を交わす。その手は打撃を重視した、手甲に金属板が縫い付けられている革の指抜き手袋グローブを装着していて、軽装重視をしているからか腹を露出し豊かな胸を完全に隠しておらず谷間と下乳を見せている。それが嘆かわしいとあからさまに嘆息する

「もーすこし服装を気にしたらどうなんだ？せつかくの可愛さが台無しじゃないか」

「うっさい、あんたは私のお母さんか」

「違うぞお父さんだ！俺のことお父さんと呼びなさい」

「どう見てもお父さんの年齢じゃないでしょ」

気に掛けてくる店主に少しだけ小うるさいと思いつつも、それほどのじゃれ合いをして来てくれているのだと知ったのは自然に店主のことを思った時で、少しだけ心が和まされていることを覚えた時は笑った。

「いつものお願いね」

「あいよ、好きな席に座ってくれ」

周りに人がおらず人の視線が届かない席を選んで腰を落とす。店に入る前から外にいて太陽の日光に肌を焼かれて熱かった体温が、気持ちいいほど心地良く冷えていく未知の感覚に新鮮さを覚える。

「はあ……涼しいなあ……」

長居をすると体が冷えそうになるが日照った体には心地良過ぎてだらけてしまいたい。実際、隣に誰もいないことを言い事に横長椅子のように長い椅子へ身体を横にし、ひんやりと冷たい心地良さに目を瞑って堪能する。

「……………」

「おい」

「ひゃんっ!？」

臍を出している腹に冷たい水を垂らされ、条件反射で驚いて起き上がる少女。しかも変な声を出してしまった自覚をして顔を真っ赤にし、自分を起こして羞恥心をさせた店主に睨みつけたが出来立てほやほやの料理を持って来ていた。

「無防備に寝てたら襲われるぞ。あと、ここは宿屋じゃないから寝ない」と

「うっ……」

正論を言われて何も言い返せないことが悔しくて、やっぱり睨んで無言の抗議を訴える少女をどこ吹く風のように料理を目の前に置く。

「温かい内にメンチカツ定食を食べてくれないとこっちが困るんだけどな？」

指摘する少女の正面の、一際大きな皿に盛られているのは、プツプツと音を立てる、大人の拳ほどの大きな茶色の塊が2つ。すぐ近くには4つ切りにした果物と何やら白いソースが絡められた温野菜とパスタの和え物、そして細く切られた葉野菜が生そのまま添えられている。別の皿に盛られているのは、パンが2つ。近くに添えてあるのはバター。そして器に盛られているのは刻んだ玉葱と細切りにした燻製肉がたつぷりと入ったスープ。湯気立つ白い米もありそれを見て、それらから発つ香りに鼻腔が刺激された。

キュルルルル……

朝から何も食べていなかったのか少女の腹の虫が鳴る。その音に思わず顔を赤らめる少女に店主はにやりと笑い、言った。

「店の料理を食べにくるために朝食を抜いてくれてありがとうな」

「ち、ちがつ……くないけど……」

「ははは、それじゃ頃合いになつたらお代りを持つてくるからな？」

きつと歳はそう離れていないだろう店主を、もしも兄がいたらこんな感じなのだろうかと去り際に撫でられた頭を触れながらこそばゆい思いを抱き、空腹には勝てない少女はまずはスープから手に取った。涼しい中で食べる温かなスープは玉葱の甘みと燻製肉の旨みが、それしか入っていないように見えるそのスープは無数の、様々な野菜や肉の旨みを含んだスープをゆつくりと味わいながら飲み干し、一息吐く。次にパン。千切ると思った以上に柔らかくバターも付けて食べると十二分に甘くて美味しい。いよいよ最後はメインディッシュとばかりのメンチカツ。ナイフとフォークを持って茶色い塊に向ける。サクリと音を立てて、ナイフが入り、切り口からじゅわりと肉汁が溢れる。断面を見るに、細かく刻んだ肉を使った料理のようだということが一目見て分かる。食べる前にレモン汁とソースを掛けていざ実食。

「んんんんんんん」

口の中に広がるのは、たつぷりとした肉汁。それが軽い食感の衣と

混ざり合い、口の中でほどけていく。塩と胡椒が利いた、けれど決して利き過ぎていない絶妙な加減の肉。さらに複雑な旨みを持つソースと、さっぱりとした酸味のあるレモンがサッパリとした後味を残して満足感を与える。そしてそれをご飯と一緒に食べると更に食欲がそそられると言う不思議なことに少女は空腹を訴えた腹の中にどんな好物のメンチカツを収めていく。

「はいよ、メンチカツだ」

頃合いを見てお代りを用意してきた店主に、口の中に残っているメンチカツを咀嚼しながら目で感謝の念を訴え新しいメンチカツに手を伸ばして自分の前に引き寄せる。

「(久々に食べるメンチカツは最高っ。少し疲れてきた仕事の憂鬱が吹き飛んじやっっていくよこれ)」

生きる為に仕事をする少女。だがもしも、その仕事が本当に嫌になった時はどうしようかと考えが過ったが・・・止めよう。今はこの至福の一時を堪能するこそが大切だ、と心の中で被りを振って口直しと水を飲んでからメンチカツを食べるのだった。

「いらっしやい」

入ってきたのは『異世界食堂』を開店して以来初めての客だった。豪勢な服を身に包み両の手指十本すべてに宝石の指輪を光らせているところから見ると、商人か何かだろう長身で顔に皺がある初老の男性と対照的に体格が低く小太りで口髭を蓄えている男と店の中を見渡す。

「ふむ、ここが噂の『異世界食堂』で間違いないのですね？」

「どんな噂か知らないけど、その通りだ」

「そうですか。それにしても随分と心地の良い涼しさですね」

「炎天下の外から来た客にとって天国のような感じだろうか？」

「確かに、では、私達にも料理を出してもらいましょうか」

それじゃこちらへ、と二人を案内して席に座らせた。品書きが書かれてる分厚いメニュー表を教え、呼ぶ時の呼び鈴を説明を終えると去ろうとした。

「ああ、待ちたまえ。私達にビールを二つ、そしてビーフシチューも二

つ頼みますよ」

初めて来た客だと認識しているのだが、誰かから聞いたのか直ぐに注文してきた初老の男性に振り返って会釈する。

「かしこまりました。それじゃ少々お待ち下さい」

そう言つて三分以内に注文した料理を持つてきた店主は、キンキンに冷えたビールと温かいビーフシチューを二人の前に置く。

「速いのですね」

「お客が少ない分、一人の客に提供する時間が短縮できるんだ。夜はこうもいかないだろうけどね」

では、ごゆつくりと去る店主を見送つた二人はビールを手にして硝子の縁に口唇を近づけて飲み始める。火照つた体に冷たい酒を流しこんでいくと感嘆の息を漏らし、ビーフシチューにも手を出して食べてみると二人の舌を唸らせた。

「神々が毎日のように足を運ぶ店の噂と評判は名実と共に本当のようですねゴミアン」

「は、そうですね。この店は中々のものであると私目も思いまするバツカスホーム様」

昼時になる前にメンチカツを食べに来た少女は昼食用のメンチカツサンドを購入して店を後にした後、『異世界食堂』に足を運ぶ客達が増えて店主達の動きも活発的になってきた。新メニュー、かき氷を目的に食べに来る客が後を絶たない。

「ほらとつと氷を削れ。待っている客がいるんだぞ」

「うおおおおおおおっ！後で私もたらふく食わせるアルよー！」

「ごはんと卵でな」

「かき氷アルーッ！」

似非中国人の美女をこき使う店主。店の裏に設置してある巨大なかき氷機の中に入れた十人分の器に削つた氷を積もるまで回し続けさせる光景を見た彼女の連れの少年は絶句していた。

「よく働かせているな……」

「お前の命が懸っているからな」

「じよ、冗談だよな……?」

「さあ？ お前も他の連中と同じ転生者だし、警戒に越したことが無いからな」

正体を看破されて動揺する少年の隣で氷が積もった皿を取り換え、また氷を削らせる。

「ほ、他にもいるのか？ 転生者が」

「ああ、いるぞ。確認しただけで五人はいた。お前を含めてだと6人か。で、お前の連れは何なんだ？ 特典とやらでハーレムを望んだのか？」

そこまで知っているのかと目を丸くする少年は隠しても無駄かもしれないと達観した風に自ら口を割った。

「……俺の中で一番強そうで好きな女のアニメキャラを選んだんだよ」

「アニメキャラクターか。だとしたら不思議だな。アニメの世界から飛び出して来たようなもんだったら、どうして自分の世界のことを気にしないでいられるんだ？」

「最初から俺と一緒にいたことに記憶を改竄したんだよ。だから少したりとも何に対して疑いもしないんだ」

「お前、いくら架空の女キャラクターだからってそんなことするとは人としてサイテーだな。クズだわ」

ブタを見る目で店主に言われて、うぐっ!? と少年の良心に言葉の槍が突き刺さった。

「大体、この世界で何しようと思っただけの特典にしたんだよ？ ハーレムか、ハーレムなんだな？」

「ぼ、冒険が出来る世界に転生させるって言うから好きなキャラクターと冒険がしたかっただけなんだっ」

と言いつくすように物申すが、後に想像していた冒険できる世界では無かったため、無一文の状態で放り出された少年と女性達は途方に暮れ……似非中国人が空腹と怒りで少年を殴り飛ばした先が『異世界食堂』なのだと言った。

「てか、神楽って女の腹はブラックホール並みか？ 暴食する女と冒険なんてよくできると思っていたな」

「食事生活を考慮して神には食欲を抑えてもらおうように願ったんだぞあれでも……」

それなりに考えて神に願って二度目の人生を送ろうとしたつもりだが、自分の予想と想像を反することが多く襲われて対処に困っていた少年は、店主に拾われて運が良かったかもしれない。

冒険譚 19

朝から店を開いてあつという間に夜を迎えた。夏の夜は朝と違って暑くは無くなっても熱気が冷めず暑苦しさだけは感じさせる。そんな時に大人達がエールを飲んで喉を潤わせるのが定番なのだ。今年になって開店した『異世界食堂』のビールの真骨頂が発揮することを客達は知ることになる。

「アツハツハツハツ！」

「暑い日に飲むビールが何時にも増して美味いわいっ！」

「そんなビールと一緒に肉も食べるとまた格別だ！」

ほぼ満席の状態をさせている客達の喧騒は、何時にも増して喜色の声も高まっているのが聞いていて分かる。そんな中、夏季限定の催しイベントをすることになっていた。『時間制限以内に激辛カレー完食チャレンジ！』である。暑いには熱い物、辛い物という定番を異世界でもしてみようと店主の計らいでチャレンジに成功したら一日料理無料券という客達にとつて嬉しい報酬が用意され――。

「ぐっ、が、か、からああああああああああああっ!!」

「うっ、ぐっ、ぐほ、げほっ……!!」

十食分だけ作ってみたら十人が挑戦して、たった一人だけ食べきつて見せた催しイベントは大盛り上がり。因みに食べきつたチャレンジヤーは、「ロキ・ファミリア」の老兵のドワーフ、ガレス・ランドロックであった。チャレンジに失敗した挑戦者達は直ぐに水やかき氷を頼んで口の中を冷やす行為に入る。

「お主、もう少しだけ辛さを抑えてみたらどうじゃ。流石に儂でさえ辛かったわい」

「簡単にクリアされたら面白くない」

顔中の肌には汗を浮かべるガレスすら辛過ぎると言わしめる激辛カレー。それが後に『あの第一級冒険者のドワーフの記録を超えれば真の漢男の証』と誰かが吹聴したようで、厳つい顔をした冒険者やならず者、ゴロツキ、はては面白半分イルヴイイスで参加する神々や闇派閥イルヴイイスに所属している者すら挑戦を申し込んでくるようになったのである。催しイベントを肴

にして食べる客がいれば応援する客もいればそれを楽しむ客もいる。とても『暗黒期』の真つ只中のオラリオに住んでいる者とは思えない賑やかさを醸し出して楽しんでいる客達を見てミアは店主に話しかけた。

「客達に笑って飯を食べてもらう場所としてはアタシらより上手いよお前さんは」

「上手いも下手もないってミア。誰でもできることを俺もしているだけだ」

「ふん、同じ店を持っていた者として嫌味すら聞こえないのが不思議だよ」

どずどすと足踏みを立てて注文を受け取りに行くミアと入って来た客の対応をする店主。

「お、いらつしやい。久しぶりだな」

「ええ、久しぶり」

フードを被ってる黒髪に黒眼の猫キヤットピープル 人の少女。食べに来る時は必ずと言っていいほど夜になってから顔を出す獣人の少女は、フラツと現れれば間を空けて来る。まるで猫のような気まぐれな性格を持ち合せているようで店主は嬉しそうに微笑んで――。

「その耳と尻尾を触らせてくれないか？」

「うら若き乙女の体の一部を触るなら毒殺される覚悟を持ってね♪」

「よし、それでいいぞ」

「ちよ、本気で触りに来るニヤー!？」

軽く飛びかかる店主に悲鳴を上げる猫キヤットピープル 人の少女は本気で殺すわけにもいかず狭い場所で猫のように軽やかに交わし続ける――じやれ合いを程々にして席に案内する。

「この変態店主。毎度毎度、来る度に耳と尻尾を触ろうとしないでくれる?いくら私の魅力にあてられたからって……」

「いや、お前自身じゃなくて単純に耳と尻尾を触りたいだけで魅力とかそんななのは二の次だから」

「ぶっ殺してー」

奇しくもメンチカツを食べていた少女と同じ席に案内された

猫 人の少女は、半目で店主を睨みながら物騒な事を言う。ふと、店内を歩き来する女性客が視界に入る。

「久しぶりに来たからだけど、何時の間にか新しい店員がいるのね」

「ああ、ちよつとした用事で帝国に行つてな。その時に連れて来たんだ」

フードの中の猫耳がピクと動いた。

「ふーん、帝国で何をしに行つて来たのかしら？」

「料理人として依頼されたんだ。料理を作つてほしいってな。で、注文は何時ものか？」

話をあからさまに終わらされたが、大したことではないだろうと少女は何時頼む注文にして店主を遠ざけさせた。久方ぶりに来た『異世界食堂』の店内を見渡す必要もないぐらい相も変わらず繁盛している様子だった。そこに大勢の人々の笑顔が浮かんでいて、一人物静かに座っている自分はかなり浮いていることを自覚しながら笑い声と場の賑やかさを料理が来るまでの暇つぶしと耳を立ててしばらく経った。

生の魚独特の、鮮やかな赤い色の生魚の薄切りの上にスライスされた生の玉葱が乗せられた料理。それが彼女が注文した料理だった。

「魚のカルパッチョだ。それじゃあごゆっくり」

その料理の名前を言いながら持つてきた店主の言葉を聞きながら、少女は眼前に置かれるその料理に期待で目が釘付けになっていた。

オラリオで生魚を料理に出す店は殆どないに等しい。せいぜい焼くか煮るかだ。初めてこの店に訪れ、魚料理を何となく眺めて見つけた未知の料理であるそれは、とても好奇心を覚えたほどだ。試しに注文をして実食した時の自分を思いだしながら店主が去ると同時に、早速とばかりに食べ始める。フォークで魚の切り身突き刺し、持ち上げる。鮮やかな赤い色が黒の目に移り、少女は思わずごくりと唾を飲む。

そして・・・口に運ぶ。

「んんんんんん」

その魚には、旨みが凝縮されていた。噛み締めるたびに、旨みがあ

ふれ出す。それがこの料理の味付けに使われている汁の独特の塩気とまだ熟していない果物の酸味。単品で食べると味が強すぎる玉葱の辛味と混ざり合い、調和する。しょっぱくて、少し酸っぱくて、しゃきしゃきとして辛く……。それらをすべて包み込む魚の旨みが口の中に広がる。新鮮なだけでなく、血抜きや切り分けといった技術まで磨かれていることを感じる、魚の切り身。それはただ魚を切っただけと言うには余りに洗練された……。一つの料理と呼ぶに相応しい味であった。もはや少女に言葉は無い。むさぼるようにカルパッチョを食べていく。玉葱の辛味と上にかけられた汁の酸味、そして魚そのものが持つ旨み。それが彼女の手を一瞬も止めさせようとしな。瞬く間に皿は空になり、すぐさま店主を呼ぶ。

「店主、次はシーフードフライを頼みたいわ。タルタルソースは多めでね」

「あいよ、直ぐに用意してくるよ可愛い黒猫ちゃん」

微笑ましげに笑う店主が踵を返して背中を見せて去る。何気なく少女の黒眼は店主の臀部に向けて視線を送ると残念そうに嘆息する。その理由が……。

「勿体無いニヤァ。あと7、8歳若かったらいいお尻ニヤァのニヤァ……」

変わった性癖を零す猫^{キャットピープル} 人の少女の声は他の客達の喧騒の声に消え、聞こえなかったにも拘らずブルリと未知の悪寒を覚えた店主がその正体を気付くはずもなく、素朴な疑問を抱きながら仕事に専念するのであった。

夜はまだ長い。去る客と入れ違いで食べに来た客と入れ替わって閉店時間まで料理を振る舞う店主達。猫^{キャットピープル} 人の少女も腹いっぱい食べて、笑顔で店を後に暗闇に溶け込むようにして店を後にした。それからしばらく時が経った頃。二人組の客が入ってきた。

「いらっしやい、おや、朝来たお客さんだな」

その日に二度も三度も食べに来る客はさほど珍しくない。寧ろ何度も食べに来てくれることは店の評価を高くしてくれて鼻負してくれるという意味合いもある。店主が歓迎したのは豪勢な服を着こみ

両手の十本の指に宝石の指輪を光らせる長身の初老の男性と体格が低く小太りの取り巻きみたいな男性だ。もう一度食べに来たのだと思つて二人分の席に案内しようと思つた店主だったが、呼び止められた。

「今回は食べに来たのではないのです。商談をしに来ました」

「商談？生憎うちは上手い料理と酒を振る舞う酒場みたいなもんだ。そう言う話はお断りしているんだけどな」

「まあ聞きなさい。私はこの店とあなたの料理の腕前に大変気に入りました。なのでバツカスホーフ商会がこの店ごと買い取ることをにしました」

他の客達にも聞こえる程度の声量で店を買い取ると言いだすバツカスホーフの言葉で盛り上がっていた場が不自然なほどピタリと静まり返り、二人の会話に聞き耳を立てる客達。成り行きを見守る様子なのが気配で感じとれる店主は態度を変えず疑問をぶつけた。

「商会が店を買い取るってよくすることなのか？」

「ええ、商会が己の利益になると思つたものは何でも。それがたとえ個人の冒険者だろうと『ファミリア』だろうともね。そして私が『バツカスホーフ商会』の利益になると思つたのがこの『異世界食堂』ですよ」

「ふーん、商人の世界は疎いからよくわからんが。要は商会の稼ぎになると感じたもの全て手中に収めたいってことでいいんだな？」

「概ね間違つておりませんよ。ゴミアン」

意味深に催促された小太りの男性は懐から羊皮紙を取り出してバツと見せつけるように開いた。

「都市経済を支える各巨大商会の証文と署名を筆頭にギルドの長、ロイマン殿からも承認の許可をもらつております」

それが本物であると証拠に蠟で押された判と名前が記されていたその羊皮紙に、客達からざわめきが立つ。立場的に有利で何者にも邪魔されない為に用意した交渉道具を手にしている商会、バツカスホーフは優越感を浸つてマジマジとゴミアンの手の中にある許可書を見ている店主を見下ろす。

「——で？」

「……はい？」

「で、これがあるから店を買い取れるって何でそう言い切れるんだ？」
本当に理解が出来ないと頭を搔く店主に、目を丸くして間抜けな面を晒すバツカスホーフの隣でゴミアンが唾を飛ばす勢いで言いだす。
「分からののか！つまりギルド長もこの店を買い取れることを認めてい
ると言うのだ！これは正式に、だ！例え最大派閥の主神でも口出しが
できないぐらい強い権力が発揮しているのだぞ！」

「いや、まあそれはそうなんだろうけどさ？その認定証みたいな物は、
何が何でも買いたい物を買えるようにできる許可書なんだろう？でも、
買われる側、売られる側が否定したら商談は成立しないじゃないのか
？」

「馬鹿か貴様、これは相手の意見も関係無しに買い取る前提で話が決
定している！お前がどれだけ否定しようと絶対に覆せないのだ！」

「うわあ、流石世界で唯一あるダンジョンがある都市オラリオだな。
規律も法律もなければ何でもし放題かあー」

苦笑いする店主、次の瞬間。左目が凍える様な冷たいものを孕んで
二人を見つめた。

「悪いけどその効力があろうとなかろうと、俺はこの店を手放す気は
ないんでその話は無かったことにしてくれ」

「手放せとは言っておりません。何の後ろ盾もないこの店とあなた達
従業員を丸ごと『バツカスホーフ商会』が買い取るだけですよ」

「いや、後ろ盾なんて必要ないぐらい充実しているんだけど……」
「ほう、巨大商会以外にどなたがこの店の後ろ盾になっておられます
かな？是非とも知りたいものですね」

店主は言い訳をしている、この店にそんな後ろ盾になるものは存在
していない、確認できていないのだから。事前に調査している故にニ
ヤニヤと嘲笑う事を隠さないバツカスホーフの背後の扉が場の空気
をかき乱す様にして、鈴の音を鳴らしながら開け放たれ、誰かが入っ
てきた。

「おお、まだやっておられましたかよかったですよかったです。イツセー殿、お

久しぶりでございます」

「あ、誰かと思えばあんたか」

テルスキュラ

闘国から一人の眷族を救ってほしいと願った商業系の主神、初老の男性が数人のお供を連れて突然やってきた。バツカスホーフは怪訝な目付きでその主神を目にした途端、ギョツと驚いた風に見開いた。

「ふむ？おや、そこにいるのは巨大商会の『バツカスホーフ商会』の者ですね」

「あ、あなたは……【ヴァベルー・ファミリア】の主神……何故ここにおられるのです」

「オラリオで商売をしに戻りに来たのでしてね。その間、いつも私達の商会に鼻屑してくださるイツセー殿の店で食事をも思ったままで。して……何か話をしていたようで私めも一枚噛ませていただけますかな？」

ニコニコと笑う主神にさつきまでの優越感はどこに行つたのやら、顔を引き攣って狼狽しているバツカスホーフは何も答えず代わりに店主が説明した。

「俺達と店を買い取りに来た、以上」

「ほほう。そういうことでしたか。ですが、それは無理な相談では無いですかな？」

どういうことだ？バツカスホーフのように絶対的な効果を発揮する物がないのに、この初老の主神はそれを上回る何かがある、もしくは持っているのだろうかと首を傾げた店主を半ば蚊帳の外に置く二人の商人の会話が始まった。

「な、何故ですか？私は他の巨大商会とギルド長の許しを得てこの店を買い取る権限がございますよ。いくらあなたでも口出しはできないはずですよ」

「なるほど。確かにその権限ならあなたの行動を指図することはできないでしょう。ですが、それでも無理だと言わせてもらいますよ」
「どうしてですか！」

叫ぶバツカスホーフと笑顔を崩さない初老の主神。店主も従業員

「というか、それを知らなかった店主って大物なのか大馬鹿なのか……」

ざわめき、色めき立つ客達の中に失礼なことを言われた気がするがそれどころではない。この展開は世直しをする為に身分の高い老人が悪行を繰り返す悪代官を成敗した後、正体を明かすアレみたいなの……と他人事のように変な事を考えていた。バツカスホーフはその証文が本物であると理解して冷や汗を顔に浮かべた。

「そういうことでイツセー殿。他の巨大商会やギルド長の許しを得ようと、横暴な取り引きをしようとする商会にはその上から圧力を掛け買い取りはさせません。そんなこと許せば他の三大商会の主神達がせっかくのお気に入りのお店を奪われて大層残念がりますからね」

「え、来てたの？その主神達が何時の間にか」

「はい、食べに来ていらしたそうですよ。なので出遅れた私からすれば悔しい限りですよ」

本当に残念がっているのか笑みを固めている主神を見ても分からない店主だが、分かったことはただ一つ。『異世界食堂』は突然現れた三大商会の「ファミリア」に救われたということだ。

『バツカスホーフ商会』。そういうことですのでこの店の買い取りは私達三大商会の権力を以って認めることはできない。『異世界食堂』は皆が楽しむ場所です。利益にしか目が無い格下の商会の者が決して手を出してはいけませんよ。私を含め他の三大商会も虎視眈々と狙っているこの店をね」

薄らと糸目がちな目が見開いて、鋭い白金の眼光を煌めかせた。神威も開放する初老の主神にバツカスホーフは戦慄する。名実ともに格上の商会と神に逆らえず、店主へ顔を向け悔しげに奥歯を噛み締める音を立てて「行きますよゴミアン！」と負け犬がしつぽを巻いて逃げる様を彷彿させ、店を後にした。ヴァベルの登場で逆転劇を目の当たりにした一同は言葉も失い。

「では店主。邪魔者がいなくなったので何か食べさせてください」

二人を見送って視線を店主に戻し、朗らかに微笑む好好爺な初老の神に戻った彼に苦笑いするしかなかった。

『バツカスホーフ商会』が『異世界食堂』からいなくなつて数時間後。閉店時間が過ぎてもロキ達がまだ店に居て、主神ヴァベル達も席に座つたまま女神達と会合する。

「ヴァベルーかあ、随分と久し振りやな。自分、イツセーと直接契約をしとつたとは知らんかつたで」

「ええ、イツセー殿からは大変素晴らしい魔法道具を提供してくれますから、私達も張り切つて依頼人の要望に応えていますよ。特に魔法の絨毯や何処にいても連絡ができる腕輪、あれは本当に商人の者からすれば喉から手を出してでも欲しい素晴らしい物」

お陰様で他の三大商会【ファミリア】を出し抜くことが出来ました
と、言いながらプリンを食べるヴァベルーと眷族達。

「イツセー殿。このプリン、商売すれば儲けますよ。特に貴族に向けてです」

「オイコラ、イツセーを商人にしようとするなや」

「ある意味、俺も商人みたいなものだけどロキ？というか、【ロキ・ファミリア】や【フレイヤ・ファミリア】は三大商会と繋がってないのか？最大同士なんだからおかしくないんだけど」

「普通にそこらへんの商人と売買するだけでも十分や。どえらい三大商会と契約するまでもなくな」

「商会の問題を持ち込まれるのは面倒なのよね」

「心外ですね。私達は問題を他者に押し付けない主義ですよ……甘くて美味しいですね」

二つ目のプリンに手を伸ばしてパクリと食べるヴァベルーを一瞥してヘルメスに左眼を向ける。

「俺は一応【ガネーシャ・ファミリア】の団員だけど、あのまま買い取られたらそこんどこどうなつた？」

「巨大商会と繋がりを持っていたら【ファミリア】にとつて悪くない話になつたよ。ダンジョンから持ち帰ったドロップアイテムを鼻屑して他の商人より高く買い取ってくれるからね。ただ、店を買われたら商会の言いなりだつたかな？」

良くも悪くもあつたかも、と言うヘルメスに首を縦に振って理解した。ロキが唸る。

「にしてもロイマンのやつはうちの楽しみを奪おうとしおって、どう思うフレイヤ」

「そうね。それだけはいただけなかつたわ。ロキ、ストライキでもしようかしら？」

「ギルドに困らせる意味では面白そうやな」

「ガネーシヤも子供を休ませる意味で賛成だつ！」

イルヴィス
闇派閥を鎮圧する主力がストライキなど起こした瞬間、ギルド長が泡を食って倒れるかもしれない、そういう想像がしてしまうのはおかしいなとかと考えてしまう店主は、一言漏らす。

「これで厄介ごとが済んでくれたらいいんだけどな」

「商人は執念深いですよイツセー殿」

「だよな。さりげなく虎視眈々と狙っているって言われたばかりだもんな」

「当然でございます。知っているかどうかは知りませんが、オラリオ中で『異世界食堂』の噂が持ちきりですよ？興味を持ちったり、冷やかに来たり、この店の常連客が他の人達に声をかけている結果。閑古鳥が鳴いた様に客の足が途絶えた店は少なくありませんよ？」

うわ、そうなのか。と誰かが短く言った。半年で他の店に影響を与えるほど『異世界食堂』が注目を浴びているのだと改めて知った店主と従業員達。

「三大商会はこの店に手を出すのか？」

「バツカスホーフみたいに自分の懐に抱えるより、友好的に接してあわよくば後ろ盾になった方が色々都合なのですよ」

「その後ろ盾が最大派閥や他の派閥の主神と冒険者達なんだけどな」

自慢でもあり信用と信頼できる「ファミリア」等は店主の最大の攻撃でもあり防御みたいなものだ。『異世界食堂』に手を出すなら懇意で足を運んでくれる者達も容赦しないだろうと誇らしくあるのだが、ヴァベルは首を振った。

「それだけではまだ弱いですよイツセー殿。ギルドと商会が結託した

ら最大派閥といえど強く出れません。故にあなた様も商会の協力が必須となります。他の商會に狙われながら店を構え続けるなら尚更ですよ」

そう指摘する初老の神ヴァベルはニコリと口唇を緩めながら物申す。

「ですが、あなたは様は三大商會の一角の後ろ盾がごございます。ご安心を他の商人達に『異世界食堂』に手を出すなど伝えておきますので」

オラリオのとある一角に『バツカスホーフ商會』の館があった。自分自信の城に戻ったバツカスホーフは苛立ちを隠さず意匠が凝った背凭れと肘掛けの椅子に座り込んで、『ヴァベル商會』め……！』と忌々しげに発した。

「あの店が三大商會と繋がっているとは聞いていませんよゴミアン！ どういうことですか、しっかりあの店主の周辺を調べていたのではありませんか？！」

「も、申し訳ございませんっ。私も『ヴァベル・ファミリア』の主神の顔は見たことがなく……」

「チツ……！」

見ていたなら主に報告していた。と暗に言外するゴミアンに舌打ちして用意されたグラスに入れず葡萄酒ワインを乱暴に飲み、机に叩き付けた。

「多額の金を使つてまでギルドの豚から認定証を発行したというのに、金をドブに捨てたようなものですよっ！」

腹立たしいこの上にないと憤怒の形相を浮かべ、怒りで腹の虫がおさまらない商人が落ち着くまで嵐が過ぎるのを待つしかない小太りの従者は恐る恐ると問うた。

「恐れ入りながら申し上げます、バツカスホーフ様。確かにあの店の料理は今まで食したことが無い美味でしたが、そこまで御執心するのはどうしてでしょうか……？」

「フン、何もあの店だけを執着しているではありませんよ。私が料

理店を手中に収めたいのは利益の為です。現在オラリオは『暗黒期』混沌と破壊を謳う闇派閥イルヴァイスが存在している間に今後のことを見据えて動いているだけですから」

「今後と言うと、闇派閥イルヴァイスがオラリオからいなくなったあと、ですか？」
「ええ、そうなればオラリオは生まれ変わることでしょう。そして生まれ変わる新たなオラリオの秩序を作るのは我々、商会です」

未来を見据えて行動に移っているバツカスホーフの意図を察し、感激する気持ちでゴミアンは握り拳を作って言った。

『暗黒期』で物価が低い今の内に、『バツカスホーフ商会』の地盤をさらに強固、下準備を整えて生まれ変わったオラリオで更なる利益を得よう！」

「そのとおりです流石はゴミアン。故に、手始めに私の目に適った料理店を手中に収めたいのですよ。『異世界食堂』はその内の一つ。邪魔が入りましたが諦めたわけではありません。他の店を買い占めるだけです。私の崇高な考えを賛同する商会は他にもいますし今もこうしている間に動いていることでしょう」

「流石です主様！ いずれ『バツカスホーフ商会』が三大商会と称されるのも時間の問題ですなあ！」

不敵に笑むゴミアンに邪な三日月の笑みを浮かべるバツカスホーフの首が頷く。

「いずれ落ちぶれて倒れる闇派閥イルヴァイスの愚者共から利益など感じません。私達は常に勝ち組でなければいけませんよ。いいですねゴミアン」

「はっ、まさしくその通りでございます。しかし、三大商会の後ろ盾を持つているあの店は如何致しますか？」

「店の価値をあらゆる方法で落としていきますよ。価値のない物を何時までも抱えるほど商人は善人ではありませんからね。ですからゴミアン、あの店主を陥れる為にあなたも動いてもらいますよ」

「ははーっ」

深々と頭を垂らす従者に商人は暗い闇を瞳に孕ませて、『異世界食堂』に対する意趣返しを考え始めるのだった。

冒険譚 20

夏バテ——熱中症になって「ディアンケヒト・ファミリア」に運ばれてくる患者を手当てするアミッド。患者の殆どが無所属の一般人の子供だ。治療と製薬を重視する「ファミリア」であって、病を患った無所属の一般人に頼られることは珍しくない。だが、中には金銭がなく払えない家族がいる。そういう者がやってくれば、払えない者に薬は与えない！と情のない神ではないため、子供だけは無料に配布している故、高い人気を誇っている。しかし、何か対策をしなくてはならないのは事実である。こういう時、あの人ならどうするのだろうか。と異世界から来た男の顔を思い浮かべながら治療を施す同時刻。『幽玄の白天城』にフィンとガレスがやってきていた。

「休みのところお邪魔するよイツセー」

得物の長槍を片手に、フィリアとアスナに髪を弄られながらリヴェリアが隣に座りアイズとアリサを膝の上に乗せ、ラトラを対面座位で股の間に座らせている状況を視認した。

「随分とモテモテじゃないか」

「そーでもない。さつき言い合いをしてようやく落ち着かせていたところなんだからな」

「なんじゃ、アイズとアリサが珍しく喧嘩をしおったのか」

そうじゃない、とラトラの頭を撫でると幼い剣士たちが自分も撫でてほしいと頭を突き出す。二人の頭を撫でると獣人の幼女が一誠の胸辺りに頭を擦りつけて来る。

「いや、ラトラに触発されて、な」

「ラトラ？」

白い髪と赤い瞳、獣耳と尾を生やす虎人の少女を知らない二人は、ラトラの顔を見ると感嘆の息を漏らす。

「白い虎人は初めて見るね。目も赤いことも加味してだ」

「オラリオにはまずおらんのお」

「帝国から引き取ったから当然だろうな。それで、ラトラが隙あらば傍にいたり俺の膝の上に座ったり、俺のいない間布団の中に潜ったり

とアイズとアリサが羨ましがることをし続けるもんだから」

羨ましさと嫉妬の限界がついに突破して二対一の言い合いが勃発。それどころか。

「武器を持たない二人に思わず殴つてな。一撃で黙らしちゃったし、流石に俺も見かねて仲裁した」

「……二人を一撃で？ 『恩恵』^{ファルナ}を受けたのかい？」

可愛い顔をしているからロキが喜んで入団していてもおかしくないだろうと、予想して尋ねたら一誠は真顔でこう言い返した。

「受けてない。素でだ」

「……お主ではあるまいし有り得ん話じゃ」

異世界から来た者は素で上級冒険者異常に強い。そう言う認識をしているガレスは、この世界で生まれた獣人を見て信じなかった。予想通りの反応をするドワーフにそう思うよな？ と思いつながらラトラを見下ろし指示した。

「ちよつとあの髭のおじちゃんにもパンチしてくれるか？」

「儂のことか」

「ふふ、君以外誰もいないよこの場に」

一誠から降りてガレスの前に近づく。自分より縦も横も大きいドワーフを見たのは初めてなラトラは赤い目を確りと焼き付けて、「あの、いいですか？」と乞うた。

「おう、力いっぱい殴つてよいぞ」

「はい、では……」

身体で受け止める姿勢のガレスにラトラは大きな身体を——別の何かを見ていることを察したフィンバルウムは小人族並みの華奢な腕を突き出し、小さな拳がダンジョンで鍛え第一級まで器を昇華して得た頑丈な肉体に突き刺さった瞬間を見た。

「ぬうっ!？」

そしてガレスが極限まで目を見開き、苦痛が混じった呻きを漏らした。床に跪かないが明らかにダメージが入った反応を示し、フィンは心底不思議そうにキョトンとした顔で碧眼を老兵のドワーフに向けた。

「ガレス? どうしたんだい」

「・・・・・・フィン、お前も受けてみる。そうすればわかる」

言葉で伝えるより実感した方が早いガレスの言い分に、何時の間にか目の前にいたラトラの打撃を試しに身体で受けてみた直後。限界まで碧眼を見開いてガレスと同じ反応を窺わせた。

『恩恵』を受けてない少女の攻撃がこれだって・・・・・・? どういうことだいいッサー」

「お主の仕業か?」

直接的なダメージは皆無に等しい。だが、殴られると例え難い痛みが襲いかかって不思議で堪らない。鳩に豆鉄砲を食らったような、狐につままれたようなフィンとガレスはこの異常の究明を追究した。一誠は自分が知っていることだけを打ち明けた。

「ラトラは生まれてからずっと目が見えない状態で生きていたらしくてな。だから見えない状態でも相手の気配や建物の気配も感じ取れるらしくて、試しに俺も殴ってもらったら二人と同じ痛みを感じたんだよ」

「つまり、どういうことなのじゃ?」

「気配を感じるってことは、人間誰しもある気を感じ取れる、気の流れもわかるってことさ。ラトラは相手の気を、生命力のエネルギーを直接攻撃してダメージを与えている。それが例え難い痛みの原因だ」

口で説明しても分からないだろうと気で作った塊を具現化してラトラの前に浮かせた。それを殴ってみると目で催促された少女は拳を握って気の塊にパンチすると、見ていて分かるほど気の塊が激しく吹っ飛んで壁に穴を開けてみせた。

「・・・・・・」

「今見て分かると思うけど、フィンとガレスが痛みを覚えた原因はアレなわけだ」

幼い上に打撃の威力は微笑ましいほどない。その代わりに生命エネルギーに直接攻撃する威力はそれをカバーするように高い。全て理解したわけではないが、冒険者として確実に強くなったらラトラは今以上の脅威となるに違いないのは確かである。だからこそ上級冒

険者のアイズとアリサが一撃で倒された。

「理解したか？」

「……なんとなくじやが、お主もできるのか？」

「やってみせようか？」

「いや、遠慮しておくよ。君のその笑みを見た途端に指が震えだしたからね」

警戒、危険の信号代わりに何時もフィンに伝えてきた疼いた親指を指摘して苦笑しながら拒絶をして本題に移る。

「リヴェリアから聞いたのだけど、異世界の買い物ができるようになったんだってね？」

「そうだけど、なんだ、お前等も異世界の物を買いたい口なのか？」

「うむ、異世界の酒も買えるならば買ってみたいのじや」

槍を持つフィンと対照的にバックパックを二つ持っているだけのガレスが床に置いた。

「それ、もしかしくなくても俺が作った魔法荷物袋？」

「そうじや。一千万ほど金を持つてきておる」

異世界の酒を大量に買い込む気にいるガレスに、これから金を使い切るまで付き合わせられる数十秒後の自分の未来を想像して、床一面酒瓶や缶が酒で埋め尽くす光景が簡単に思い浮かべてしまう。

「一千万分の酒、一人で飲む気か？」

「ロキの分もあるわい」

「それでも二人だけで飲める量じゃないって……まあいいや『ネットスーパー』」

椅子から立ち上がったフィン達の目の前で特典スキルを発動、虚空にネットスーパーのサイトを展開した。初見の二人やフィリア達は目を丸くして好奇心に攪られ興味を抱いた。

「ほう、これが『異世界買物覧』とやらか。文字の方は何て書いておるのか分からんがな」

「それになんだか買える物は豊富そうだね。リヴェリアが言った通りだ」

横から覗きこむ小人族とドワーフに挟まれながら酒覧のサイトを

表示する。酒豪のドワーフが歓喜と驚嘆の声を漏らした。

「おおー！異世界の酒はこんな種類があるのじゃな！イッセー、何て言う酒があるのか説明してくれるか」

「俺、酒の事なんて全然疎い——と言いたいところだけど『鑑定』ができるからわかったよ。で、どれを買うんだ」

「無論、酒を買えるだけ買うわい」

「じゃあ、上から順に買いこもうか。それと保存方法は涼しいところじゃないと駄目だぞ」

酒を全て二本ずつ指定してカートに入れる。そうすること三十分以上経過したところで……。

「ガレス、全部は無理みたいだ。これ以上買うと一千万を超えるぞ」

「むっ、思いの他高いんじゃない異世界の酒は」

カートに入れ続けた酒の値段を計算し続けてきた一誠から金銭不足を告げられる

「作られる酒は国によって酒造方法が異なるんだ。異世界に存在する国の数は大小合わせて190以上だ」

「ひゃ、190じゃとっ?」

瞠目するガレスが持つて来た金を全てチャージすること十数分。そして注文を確定すると段ボール箱が虚空に集束する光の粒子から出て来る。その数は床を埋め尽くすほどだ。呆気に取られる一誠達は段ボールの数に圧倒され静寂が訪れた。

「やっぱり、買い過ぎだろ」

「むう、異世界の酒は儂の思った以上にあるとは知らなかったわ。しかもまだ買えていない酒もあるのだからな」

「ガレスの全財産を使い果たしても異世界の酒は買えないのかいイッセー?」

「無理だな。一本で五千万以上の酒もあるから」

「そこまで高い酒があると知ってしまったら興味が湧いてしまうぞい」

けれど持ってきた資金は全て使い果たし、購入した酒はロキとガレスの分に分けながらそれぞれのバックパックに詰めていく。その間、

ガレスに一本一本『鑑定』して酒の詳細を説明する。

「どれもこれも聞いたことが無い名前じゃが、異世界にもウイスキーやウオツカ、ワインにビール、極東の酒までもあるんじゃない」

「同じ種類の酒でも味のキレや深さ、甘さやアルコールの強弱の違いは千差万別だ。お前等に飲まれた俺が持っていた熟成された葡萄酒^{ワイン}も存在するしな」

「イツセー、意地悪しないでやってくれ」

リヴェリアからの意味深な指摘に無言で肩を竦める。それからネットスーパーを閉じようとしたら、今度はフィンが異世界の物資を見てみたいという願いで眺めさせることになった。

「へえ、薬まであるんだね。もしかしたら一人で『ディアンケヒト・ファミリア』みたいに治療専用の店を構えられるんじゃないかい？」
「無理だ。酔い止めの薬ぐらい売ることができそうだけど」

と、一誠の背中にぴよんと張り付くラトラに意識を変えざるを得なかった。当然ながらやきもちを焼く二人も負けじと胡坐を掻いていた男の足に乗ってひつつく。それが何とも微笑ましい少女の行動にフィンは優しい目でアイズを見つめた。

「君がアイズと一緒に『ロキ・ファミリア』に入団し、それから交流するようになって今年で四年目だね」

「アリサもそうだけど、あの時のアイズと今のアイズと比べて全然変わったな」

「その変化の原因はイツセーと言う男だよ。強さ以外、他に目を向けず意識すらしようとしなかった一人の少女の感情と心を変えたんだからね」

女の子の扱いが長けてるからかな？とからかいが含んだ言葉に何も言い返さない一誠は、アイズの頭を撫でる。

「さて、ガレスの用件が終わったことだから今度は僕からもお願いをするかな。イツセー、今度の『遠征』にまた僕達と同行してもらいたい。料理人としてね」

「久々に誘ってきたな」

前回【ロキ・ファミリア】の『遠征』に付き合ったのは去年の一度

だけ。それ以降は誘いに来なかったため珍しいと意味で口にした一誠に朗らかに述べるフィン。

「店を構えたり空の旅をしたり、遠出したりしていた君が腰を落ち着く機会を窺っていたからね。やはり、こちらで作る料理と君が作る料理の味と美味しさは別格だ。作ってもらっている彼等彼女等には悪いけれどね」

「そいつらを料理の発展アビリティを習得させた方が「ファミリア」のためだ」

「君が料理を指導してくれば発現するかもね。もしくは君がまた【ロキ・ファミリア】に来てくれればロキも両手を挙げて喜ぶと思うよ？」

あの親父女神に喜ばれてもなーと微妙な気持ちを抱いてしまうのは仕方が無いだろうか？と思いつながら同行することを受け入れた。

「ま、異世界の料理を食べたいってんなら請け負うよ」

「ありがとう。団員達も何時も以上気合を入れてくれそうだ。今回も『中層』まで進むつもりだからよろしく頼むよ？」

「あいよ」

『遠征』の話し合いは程なくして終わり、次はある質問を問われた。

「そう言えばイツセー。『ネットスーパ』のスキルを得る前はどうかやって食材を確保していたのかな？異世界の食材や調味料はこの世界にない物だつてあるはずだけど」

「あー……一カ月に一度、月から調達している」

「月……?」

フィン達に月に何があつてそこで異世界の食材や調味料を得ていることを教える。当然ながら興味を持った二人は「行けるなら是非とも行ってみたい」と願われて——ついでに彼女達も連れていくかと思ひ立った。

一週間後になる明日に。

「——それじゃ、準備いいな？」

あつという間に翌日。今回はリヴェリア、アイズ、アリサ、アリシアを連れて行かず。代わりに『幽玄の白天城』に居座っている三人の

女神にオツタル、フィン、アスナも連れて行く一誠は天使化となつて六人を翼に包んで一気に地上から離れて空へと上昇する。皆、初めての成層圏を侵入し朝なのに夜と思わせる宇宙空間に進出。結界を張つて全力速力で月へと向かう。宇宙空間に走る光の軌跡がどんどん月に向かい——クレーターを作りながら辿り着くのだった。

「到着」

「……ここが月なんだね」

「そしてあれが俺達がいる地球だ」

「綺麗だわ……」

灰色の地面を踏みながら青い星を眺める。神々すら世界の外側から見たことが無い、地球の全貌を始めて目の当たりにして魅入つて何時までも動こうとはしなかった。

「オラリオがある世界がこんなにデカくて綺麗なんやなあ……子供もうちら神も地球からすればちっぽけな存在なんやっと思わせるわ」

「そうね……」

「もう、ズルいわ。こんなの見せられて嫉妬せずにはいられないじゃない」

壮大な世界の美しさを目に焼き付けた後は一誠が向かう檜の木の扉へ赴く。一誠を除いて一同は、目を疑う。

「月に、猫の扉……?」

『洋食のねこや』つて店の扉だ。この扉の向こうに異世界の店に繋がっているんだ」

「異世界と繋がっているの?でも、どうしてここにそんな扉が……?」

「さあ、それは俺も知らない。きつと作った本人もこうなることは思ひもしないでいると思うよ。誰だか知らないけど」

真鍮の取っ手を握つて開け放つ先は——どこか『異世界食堂』と似た雰囲気醸し出している空間が一行を出迎えた。

「店主、おはよう」

「おー、おはようさんつて……今度は誰を連れて来たんだ?」

白い髪に白い髭を生やす初老で恰幅の良い男性が厨房から出て来るや否や、ロキ達を興味深そうに見つめる。

「この三人の女性は俺の世界にいる神様なんだ」

「か、神様か……どえらい人を連れてきたな坊主」

「まあな。それと彼女、アスナは俺と同じ別の世界から来た異世界の人間なんだよ」

「おつ、坊主が言つてた嬢ちゃんだな？俺はこの『洋食のねこや』の店主だ。異世界の人間同士よろしくな」

「は、はいっ。こちらこそ今日はお世話になります。何もお手伝いすることはできませんけれど」

好々爺らしい笑みを浮かべ「気にすんな」と一行を受け入れる店主。「前々から坊主からまた連れて来るかもしれないって言つてたからな。今度はどんな異世界の人間を連れて来るのか待っててもいたんだ」

執事服を身に包んでいた、髪をポニーテールに結び上げて一誠を見て何時の間に着替えたのだろうか？と別の考えをしつつ、初めて見る一誠の制服姿に女性陣は新鮮さを覚える。

「できればフレイヤ。極力『魅了』を抑えてくれ。飯を食べるところじゃなくなるからさ」

「善処するわ。それで、あなたはここで一日働くのね？」

「暇になると思うけれど、まあ、そこは我慢してくれ」

ロキ達はそれぞれ二組となって席に座り、それから一誠の働く姿を見物する。

『フィン』sied

彼がここで働き始めて数十分後、最初の客が入ってきた。無精髭を生やし黒髪をイツセーのように結び上げた腰には刀を佩いている男性だ。僕等のことを一瞥して接客をするイツセーに一言二言尋ねて何かを知った時の彼の顔は興味を持った者の目をしていた。そして彼が注文しただろう料理、僕達も何度も食べたことがある異世界の料理『テリヤキ』が運ばれて目の前に置かれると同時に美味しそうに食す彼を見たらまた扉が開いた。

『へフアイストス』sied

真正正銘の異世界の店に居座っていたら白い髪と髭を伸ばした子供、杖を持ったお爺さんが入ってきた。出迎えたイツセーが注文を受け取ったら『テリヤキ』を食べてる子供の隣の席に座り、また私達のことを一瞥した。私達神が放っている神威を気付いてるのかそうでないのかわからないけれど、ここは食事をする店だから騒ぎを起こさない暗黙のルールがあるのでしよう。しばらく待っていると『ロースカツ』と『ビール』が運ばれて来て、それを美味しそうに食べ始める子供の姿を見て、何度もこの店を通っている常連客なのだと悟った。

『オツタル』sied

また誰かが入ってきた。フレイヤ様の傍でその者を見たらヒューマンでも亜^{デミ・ヒューマン}人ですらなかつた。高らかにこの異世界の料理店の店主に向かって『カツ丼』を頼んだ者は、獅子の顔をした二Mもある人型のモンスターだった。歴戦の猛者だと言うことを癒えた古傷に鍛えられた肉体から窺える。この店は理知を備えてるモンスターにも料理を出すようだ。俺が知っている料理店ではその逆なのだがな。

『アスナ』sied

あの人？モンスターじゃなさそうだけどモンスターなのかな。二つも椅子を使って座り出す獅子頭のお客さんの前に程なくして『カツ丼』が運ばれて来て、待ってましたとばかり手にとって一気に口の中に掻き込んでいく姿は人と変わりない食事の姿だったよ。圧倒されている私の耳に来訪者が来た合図の鈴の音が鳴りだして、今度はどんな人が来るのかと思ったら——木の器を三つ持ったりザードマンだった。う、嘘……？

『ロキ』sied

うおおおーいつ!?ここ、なんちゅー店なんや!?普通にモンスターまで入ってきおって飯を注文するほうも驚きなりに料理を提供するこの店も驚き満載やで！オラリオじゃ絶対にありえへん光景がうちの前で繰り広げて蜥蜴のモンスターが頼んだ『オムライス』を持ってくるイツセーから受け取ったら、それを器用にスプーンで食べ始めるシニールにうちは言葉を失ってあんぐりと開いた口がしばらく塞

がらなかったわ……。

『フレイヤ』sied

この店で見学して数時間が経過したわ。昼食用の料理を運んで来てくれたイツセーと食事をしたのだけれど、ロキ達は皆彼に質問をし続けたわ。そしたら凄いことを聞いちやったの。

「この店は俺達が来た異世界とは異なる世界とまた繋がっているんだ。これからもあの扉から異世界の人間やモンスター、魔物が食べにやってくるぞ。この店じゃこんなこと一週間に一度になれば日常茶判事だ」

モンスターでは無く魔物。魔物と子供と共存している異世界。剣と魔法も存在していて神として崇められている六柱の竜が世界の頂点に君臨している。モンスターの竜が世界から神として崇められている事実を知って同じ神の私達はとても信じられなかったけれど……誰も来なくなった夜にその一柱の竜がやってきた。

『???』sied

……なんじゃあやつらは。特に三人、人間ではありえない神格を感じる。よもやあの者がいる世界の神か？もしもそうであったらどうしてここにとと思うが、妾が気にすることでもない。優先的に気にすべきは二つ。妾を誘惑して止まぬ『ビーフシチュー』、そして妾を笑いながら倒した異世界の竜。何度も妾の再戦を拒み、ようやく再戦が出来たと思えば圧倒的な火力で魔法に敗北。己、何千何万も生き続けている妾が百年も満たず生きている若い竜に負けているなど屈辱極まりない。仕舞には一柱だけ除き他の六柱の竜に悟られて奴のことを興味を抱かれた。ええい、煩いったらこの上ない連中だった。これも全て妾を負かすあいつのせいじゃ！今度は妾がああ若造の竜がいる世界に乗り込んで再戦を望むべきだろうか……！

「よーし、帰ろうか」

一週間に一度の務めを果たした一誠は皆を誘う。『ビーフシチュー』を食べていた竜からの誘いを断って店主と別れを告げ元の世

界に戻る。月から見る地球は暗闇に覆われていて、強く光っている場所。国や都市、町村、里がある場所だと見受けられた。

「で、どうだった？特に女神ズ」

「フツーにモンスターが飯を食う姿を見ることになるなんて想像もし取らんかったわ！」

「絶対に忘れられない記憶だわ」

「そうね。この事を誰かに教えても信じてもらえないでしょうからアマテラス達の間だけ教えましょうか」

女神達の感想を聞き、一誠の翼に包まれて地球に戻る一行。神も認知していない月に異世界に繋がる扉があることを後に語り継がれようと確かめる術はたった一人しかできないため、作り話だと笑われることは多いだろう。それでも月まで来てその扉を潜った眷族と女神達は気にしない。だって事実を体験したのだから。

冒険譚 21

『フリーダム・バカンスルーム』で『ステータスプレート』の作製に入って何度目でもどれぐらい時間を過ごしていたのか分からない程没頭して一誠の横顔を窺えば口元がっつり上がったところを見受けれる。

「意外と作れるもんなんだな」

「……本当に完成したのですか」

作業部屋に入ってきた空色の髪と碧眼の少女に相槌を打つ。彼女が横から確認すると五枚の銀色の手の平サイズのプレートがあつた。どれもプレート一面に魔方陣が刻まれていて将来道具製作者となる彼女の瞳は好奇心の光を放っていた。

「あとは改宗コンバージョンの状態の神の眷族の血をこのプレートに垂らせれば発揮する」

「『ステータス』がそのまま反映するとして……もしも『ステータスプレート』が誰かの目に見られるのでは？」

「そこも抜かりなく細工してあるよ。問題は俺の想像通りに出来上がっているかだ」

「そうでなかったら……?」

「わからん」

そうですか、ときっぱりと言われて何とも言えない気持ちとなったアスファイは一枚手に取って見て確認してみた。特に変わった材質のプレートではなく、表面に刻まれた幾重の魔方陣だけが特徴的だった。魔法の知識は自慢にもならないぐらい低く、単純に見ても理解できない。ならばも魔術師メイジ、あるいは魔法、『魔導』を極めた者ならば理解できるかもしれない。

「イツセーは上級冒険者になりましたよね。『魔導』の発展アビリティを持っているのですか?」

『魔導』? いや、『幸運』だ」

「……『幸運』、ですか?」

聞き覚えが無いという反応をされて不思議そうに小首を傾げる。

『幸運』の発展アビリティを発現している冒険者っていないのか?」

「私自身も冒険者となつてまだ日が浅いので何とも言えません
が……たぶん、いないかと。もしよければ教えてくださいか？
その『幸運』の効果のことを」

「別にいいぞ。隠すことでもないし」

「ステイタス」は冒険者の個人情報と同等の意味がある。その一部を
あつけらかんに教えるその行為は認められた者以外してはならないが、一
誠にとつて「ステイタス」は重要視してない故、アスフィに教えたの
だった。

「単純に運気が上がるだけ、ですか。もしかするとドロップするアイ
テムの確率が上がるのかもしれませんが。そう言うことならば少し、
羨ましいアビリティです」

「あと『神秘』と『幸運』で物凄い道具アイテムが作れたりしてな」

「今、まさに完成したところですがね」

「ごもつとも、と朗らかに微笑む一誠。

「そんなことを話していたら運気が上がる道具アイテムを作りたくなつてきた
な。よし、今すぐ作ろうつと」

「もしも完成したら値段は数百万ヴァリスはくだらないですよ」

手伝います、と自分から助手となつて『幸運』の道具アイテムの作製に入る
アスフィと一誠。それが後にとある少女を救うことになるがまだ誰
も知らなかった。

「——と、言うわけでアルガナ達の『ステータスプレート』が完成し
ましたーそれと『幸運』の道具もだ」

「マジで作つたんのか自分」

「しかも未確認の発展アビリティを付加してる道具まで作つたなん
て……」

「やっぱり凄いわ私のイツセーは」

誰が誰のイツセーだ、と心中フレイヤにツツコミを入れる複数の者
達と対照的にアルガナとバーチエ、ベルナスとエルネアにフィリアの
『ステータスプレート』が手に渡りまじまじと見つめている。

「これを持つてると経験値エクセリアが前と変わらずに得られるのか？」

「ただ持つてるだけじゃダメだ。そのプレートに血を垂らせば小型の

恩恵^{フアルナ}として初めて完成する。それが一番苦労したところだ」

五本の針を渡すと各々と人差し指の腹に針を刺して血を出す。言われた通り垂らすとプレートに刻まれた魔方陣が反応して輝き始める。すると五人は目は怪訝な面持ちとなった。

「どうだ？初めての試みだけどんな感じになった？」

「依然と変わらない」「ステイタス」が浮かび上がった——だけでも凄いのだが、他にも奇妙な項目が出てる」

「奇妙な項目？……『鑑定』」

エルネアの指摘にどんな物なのかプレートを見せてもらおうと。

『ステータスプレート』

・ 疑似『神の恩恵』^{フアルナ}

・ 『ステータスプレート』の所有者しか以下の効果が発動しない。

・ 【^{エクセリア}経験値】とLv、全アビリティの熟練度は改^{コンバージョン}宗後でも連動する。

エルネア・レーゼ

【ステイタス】

Lv・5

力 : A 8 1 7

耐久 : B 7 1 2

器用 : A 8 3 7

敏捷 : C 7 9 9

魔力 : I 0

《魔法》

《スキル》

???

???

《エクストラスキル》

『異龍の恩恵』

- ・早熟する。
- ・全アビリティの熟練度が超高補正。
- ・異龍の眷族となり続けることで効果維持。
- ・異龍の眷族となり続けることで効果向上。

「ツツツ!？」

なに、《エクストラスキル》って……!スキルの効果はともかく俺の想像を超えてる……。他の四人のプレートも見ると『異龍の恩恵』というエクストラスキルが発現していて、ロキ達にも試しに見せると言葉を失うほどに絶句した。

「イツセーの眷族って……」

「一体どーなってんのや……」

「不思議ね。でも《エクストラスキル》って初めて聞いたわ。『ステータスプレート』だからかしら」

女神達も驚きを隠せない新作の魔導具^{マジックアイテム}。話についてこれてないアスナ達にも教えると信じられないと目を丸くする。中には羨望の眼差しを向ける少女達もいた。

「ま、まあ……。しばらくそれを持って探索に励んでくれアルガナ達。どこかの『ファミリア』に入りたいならそのプラカードに施錠^{ロック}しないといけないけど」

「しないまま改^{コンバージョン}宗した場合はどうなるのかしら?」

『ステータス・プレート』とは全くの別の恩恵だ。正常に恩恵が働くと思うけど、無難に片方の恩恵を封印した方がいいかもしれない。あくまでもそれは主神がいなくても経験値^{エクセリア}が得られる為に作ったんだ。エクストラスキルまで発現するとは思いついたし、もしかすると作った本人の俺自身でも把握できない無限の可能性を秘めているかもしれない」

色々と驚きな結果を知ったが、恩恵を封印されてるフィリア、改^{コンバージョン}宗状態のアルガナ達にとって虎に翼がついたものだ。この『ス

「テータスプレート』を作った者に感謝をして何時か主神を得れるその日まで大切に保管する——」。保管？フィリアは素朴な疑問をぶつめた。

「あの、これはずっと持つてないといけないのですか？」

「そうだな。持つてないなら俺が何か作つてやろうかつて……バーチエ、胸の谷間に挟んでも零れ落ちるぞ。アルガナ、エルネアとベルナスもその手があったかと真似するな」

「うむ、そうであるな。胸で挟むのはやはりイツセーの——」

「椿、それ以上は言わせないわよ」

「でも、イツセー様の大きくて長い、太くて逞しいアレを完全に包みこめるのはデメテル様だけですよねえ。しかも凄い乱れ方でしたし……」

「こ、言葉をじ、自重してくださいっ!? 朝からなんて卑猥な発言するのですか! やっぱりあなたは同じエルフとは思えません!」

ガハツと吐血したロキが崩れ落ちた他所に、豊満な胸の持ち主にしかできない事をされて一部の女性は大胆な行為を見て顔中に朱を染める。さらに一気に女性達が色の話を中心に騒ぎ始め、思いつきだけでも穴があれば入りたい衝動に駆られるほど恥ずかしい会話がヒトアツプする。しかし、事実は変えようがない。互いが同意すればこれからも行われる行為は善悪、道徳か背徳かわからないが、後悔しなければ全てよし——この場にいる一同の気持ち次第であろう。愛欲と愛情の有無に左右されようがされまいが、本人達が望み後悔しない生活を今後も続くのだと思うとアスナは。

「(状況は違うけれど……リス達はキリト君のこと、キリト君もリス達のこと好きだから……)」

複数の異性と関係を築いた元彼氏の男を思い浮かべ、身を以って体験と経験して彼の心境を考慮し、心に罪悪感が巣食うように湧き上がった。だが、今さら寄りを戻る事も戻そうとする気があるかどうか問われれば悩む。裏切りは裏切りなのだ。そう簡単に許してしまえば心も尻も軽い女だと思われてしまう。それだけは絶対に思われたくない——故にアスナは行動に出ようと思った。久方ぶりにホー

ムへ戻ってみようと。

「そう言うわけで俺も同行して欲しかったんだな」

「うん、ごめんね。……それとその銃はどうして持ってきたの？」
「シノンに見せびらかす為だ」

地上の迷宮こと『ダイダロス通り』の入り組んだ迷路のごとき道の中を歩き、アスナから理由を知って決着を付けようとする心意気を悟る。乞われた一誠は見届け人としてか一人では不安だからか定かではないが、そう言う事なら今さら踵を返して引き返すことはしないと隣の少女の歩調を合わせて廃墟と化した教会に向かう。何週間以上も帰らなかった家の帰路に迷う事も無く程なくして辿り着いた「アルテミス・ファミリア」の本拠地ホトムの外見は何ら変わっておらず二人を鎮座して出迎えた。現時刻は昼過ぎ、食事の場として設けられた木製の椅子やテーブルにキリト達の姿は見当たらない。アスナの不在の中でも街に繰り出して買い物か、ダンジョンに出向いて稼いでいるか、教会の中にいるか理由は限られているが二人は歩みを止めない。それから意を決したように扉を開け放とうと中に入ろうとした、その時だった。

「アスナ？」

背後から声。アスナに向け放たれたその声の元へ揃って振り返ると、眼鏡を掛けた冷静クールな雰囲気フレイムを纏い黒のボーイッシュの髪の少女が目を丸くして亜麻色の髪の少女を凍結したようにその目で凝視していた。

「シノのん……」

「久しぶりね……」

「……うん」

アスナの隣に立つ一誠と交互に見て、理由を悟るや安堵で胸を撫で下ろす感じで息を漏らし、木製の椅子に座れと招き手で促し三人は腰を落ち着かせて話をする姿勢にはいる。

「俺からも聞いていいか？アスナがいなくなつたあと、どうなつたんだ？」

「最悪なまでとはいかないけれど、『アルテミス・ファミリア』の状況は良いとは言えないわ」

「キリトが主に原因で?」

「……そうね大半は」

キリトの浮気が発覚したその日から派閥の空気は変わったとシノンには告げる。バツ悪そうに顔を曇らせるアスナの隣で一誠とシノンは言葉を交わし続けた。

「私は今、この教会で一人住んでいる状況よ。アスナ、貴女が何も知らずに帰ってくる日を待つてね」

「他の皆は別の本拠地ホムに移り住んだからか?」

「ええ、今まで稼いできたお金やあなたのお店を手伝った報酬、それに生活費としてくれたあのお金と合わせて、新しい家ホムを得たのよ。だからあの日からいなくなったアスナは知らないだろうし、誰かがこの教会にいたくちやならなかった。それを私が請け負ったのよ」

一誠とアスナは確かに知らなかった事だとシノンの話しに真摯で耳を傾けた。その場所も知らない、彼女の言うとおりのアスナの帰りを待ち続けていたからここで鉢合わせをしたのだと悟るのに難しくはなかった。

「なら、シノンも皆がいるホームに帰れるんだな?」

「そうね。で、聞いたわよ。アスナに浮気していた事をバレて別れを告げられたって。アスナ、本当にキリトと別れるつもりなの?」

「……」

「キリト、あいつアスナに見限られて以来。最初こそは死んだ魚のような目で死んだ人間のように部屋に閉じこもって落ち込んでたけどさ、クライン達やリズ達在必死に慰めて何とか気力だけは取り戻した代わりに、何かを忘れたい一身で危険な冒険を繰り返したり、リズ達と同じ部屋にしてからあまり外に出なくなっちゃってるしさ」

今のあの家、というよりはどこか陰りがある暗い雰囲気ファミリアの中で長居はしたくない、と付け加えたシノンの綺麗な柳眉は八の字に寄った。左眼でアスナの顔の表情を盗みをしてみれば、顔に影が落ちて暗くなっていた。そんな彼女に警告とシノンは告げる。

「だからアスナ。もしも別れるつもりでキリトに会いたいならお勧めはできないわよ。完全とは言えないけれど前よりマシな感じで立ち直ってきてるから。今のあなた達を会わせたらキリトがまた落ちるところまで落ち込むと思うし」

「……気まずい、どころじやないよなそれって」

「ええ、予想できないから会うのは賛成できないわ。女に別れを告げられた男ってどんな感じなのか知らないし。イツセー、同じ男なら分かるのかしら?」

「知らん。生きる気力を取り戻したならまだ望みはあるんじゃないのか?」

背中に背負っていた銃をシノンの前に置いては残念そうに息を漏らす。

「せっかく面白い話を聞かせようと思ったのにな。会えないんじゃない?」

「……これ、どこで手に入れたの?イツセーが造ったの?」

「いや、買ったんだ。分厚い雲に囲まれた空の果てに存在するもう一つの世界でさ」

瞠目するシノンの手は了承も得ず銃を生き活きと触れては、人の話を聞いているのか怪しい程に水を得た魚のように彼女の目が輝いているのを一誠とアスナは窺わずとも認知した。

「目の色が完全に変わったんだけどアスナさん」

「もう知っているでしょ?」

この世界に来て銃と言う武器や概念は見聞したことが無い。だから二度と触れる事はないだろうと思っていた武器が目の前であって、それに手を伸ばさずにはいられなくなったのだろう。真摯な無表情でありながら心なしか多幸感極まりない気配を窺わせながら銃を構える。ライフル型の銃の扱いに長けているのか、以前物騒な武器を作ってほしいと言った本人の持ち方が様になっていた。

「キリトが浮気をして以来、今でもクライン達は変わらずいつも通りに接するけれどアスナがいなくなってから前のような感じじゃなくなってるのも事実。キリトの隣にいたアスナがいなくなると、その開

いた穴を埋めるようにリズ達がいるようになった。彼女達も気にしている節もあるし負い目を感じているみたい。心配しなくても放っておけばその内に調子を戻るわよと言っているのだけれど」

「……キリト君の事、嫌いになっちゃった？」

シノンもキリトを慕っている節がある。アスナはそれを理解した上で訊ねると彼女は肩を竦めた。

「別に。男って浮気しちゃうときもあるんでしょ」

「俺を見ながらそれを言うの止めてくれないか？俺の世界は一夫多妻制だから浮気云々は語れないから」

「へえ、そうなんだ。世界が違えば世界観も本当に違うんだね」

「まあ、それに関しては同感だがな。俺を慕ってくれる女は一人残らず愛する信念はある。こんな化け物の俺を心から好きだと愛を注いでくれる女が傍に居てくれると嬉しいからな」

元の世界に一誠を慕う女性がいる事は知っている二人。だからこそ蔑む言葉も罵る言葉も発する真似はしない。それでもシノンは言う。限度を覚えろと。

「どれだけハーレムを作るのか知らないけれど程々にしなさいよ。それと、まだ聞いてなかったけどアスナ。貴女は「ファミリア」から脱退するの？」

「……」

皆には会えなかったが、現在の「アルテミス・ファミリア」の現状や状況を知り得る事が出来たアスナ。「ファミリア」の脱退をして一誠と同棲生活を送るのかと意味合いが含んだシノンの問い掛けに対して苦悩の色を顔に浮かべた。しかし、口を閉ざして自分の中で考えを至るまでの時間はそう長くはなかった。

「……うん、私はしたいことができちゃったから」

「したいって？」

キリトと顔を会わせたくないが為に脱退するのだと思っていたのか、予想が外れたシノンだけじゃなく一誠の瞳は真意を求めていた。アスナに追及するシノンの耳に聞こえた返事は。

「イツセーの世界に行きたいの。彼の世界には——ユウキが生きて

いるの」

だから、シノのん達と元の世界にはまだ帰れない。と理由を述べる少女に目を見開かずにはいられなかった。キリト達の世界に存在していた少女の存在と名がこの世界で聞く事になろうとはシノンも露にも思わなかった。

「ユウキが、別の世界にもいるの？本当に？」

証拠とばかり一誠はユウキの姿に魔法で変身した。シノンから見ても見間違いの認識は有り得ない程、己が知るユウキと酷似していたのだった。

「私、ユウキと約束したの。違う世界でもまた会おうって。彼の世界にいるあの子との約束を果たす為にイツセー君の世界に行きたい」
「.....」

アスナの心情を知り、その決意は自分が良しとせず説得をしても揺らがないかもしれない。ならば、彼女は問題なく元の世界に戻って来られるのか、と黒い眼を元の姿に戻った一誠に向ける。

「仮に私達が先に元の世界に帰ったとして、後からアスナはちゃんと帰って来られる？」

「.....分らないとしか言えない。まだ別の世界と確実に行き来できる術を得てないからな。無責任や期待を抱かせる答えは言えない」

自分が不甲斐ないばかりに申し訳ない、と二人に謝罪の念を伝えながら息を一つ零したらやんわりとしたフォローを受けた。

「気にしないで、私達は何時か元の世界に帰れるのならばそれでいいから」

「うん、今の私達はイツセーしか頼れないからね」

「ん？神様だから何とかしてくるって言わなかったか？総意だったんだろ」

二人から寄せられる期待感に疑問をぶつけてみれば、「私、現実主義者だから」「は、ははは.....」と違う反応と答えを返された。もはやこの世界の神に期待をしなくなったようだった。

「そ、そういえばイツセーの世界には凄いゲームとかないのかな？V

RMMOみたいなのがある？」

「ゲーム、ねえ……。『レーティングゲーム』しか思いつかないな」

二人揃って『レーティングゲーム』？と鸚鵡返しした。当然の反応だと具体的な説明を語り始める。

「元々は悪魔が天使と墮天使相手に世界の覇権を巡って三大勢力戦争をした折に激減した数と種を補いつつ戦力を増強する目的で——」

「あなた、本当に一体どういう世界から来たのよ」

話の腰すら入ってない時に遮られ、「最初から教えなきや駄目か」と内心溜息を吐き、言い改めて自分の世界の事を打ち明け始める。聞けば聞くほど、ゲームの域を逸したものでアスナとシノンを感嘆の息を漏らさせた。

「人が役割を担っている駒として相手と戦うゲーム：・何だか凄いな」
「悪魔の眷族になると悪魔に転生するどころか半永久的に生きれる様になることも驚いたわ」

二人の感想を耳にし、この世界で見せることはないだろう代物を亜空間から取り出してテーブルの上に置きます。

「転生したらしたで光属性や聖なる力が秘めた道具や武器に滅法弱いデメリット付きだけだな」

取りだしたそれはアタッシュケースであった。アスナとシノンの意識と好奇心を釣ったまま開けると、赤いクッションに包まれている17のチェスの駒とランプのカードが収まっていた。

「これは？」

「悪魔に転生する悪魔の駒イーヴィルピースと天使に転生することができるカードだ」

「え、転生って悪魔だけじゃないの？天使もなれるんだ？」

「ああ、天界に住む神と天使達が悪魔の技術を元に転生天使になれるよう編み出したんだ。この駒とカードは魔王と神から貰ったもんなんだ。因みに天使に転生した場合。欲望に負けると天使から墮天使に堕ちてしまうデメリットもあるんだ」

「空想上の種族にもやっぱり弱点があるのね」

興味を抱いた様子で「触っても？」とシノンの訊ねに「胸に当てな

ければ」と一誠から了承を貰いそれぞれ駒とカードを手にし、探る様に眺め出した。アスナはアタツシユケースのチエスの駒を視界に入れたら、ある疑問が浮上した。

「ねえ、チエスって16個なのにどうしてもう一つあるの？」

「それは『変異の駒』の分だ」

その駒を摘み取って説明口調で語る。

「悪魔に転生する駒にも上限があるんだ。転生する際に一つだけ済むこともあれば一つ以上、複数の駒を用いなければ転生できないこともある。その場合、この駒一つで複数以上の価値が宿っている変異の駒が必要になる」

「そんな設定もあるんだ。じゃあ、イツセー君の場合って……」
「ん、『変異の駒』が必要になるな。『王』だったら問題はないだろうが、『女王』、『僧侶』、『騎士』、『戦車』、『歩兵』の駒は確実に許容オーバーする。もしもアスナとシノンも転生する際に必要な駒の数は一つで十分だろうな」

奥深い『レーティングゲーム』の設定。まるで神の代理戦争、戦争遊戯みたいだなあーとアスナは更に問い掛けた。

「悪魔と天使に転生できるなら……イツセー君みたいにドラゴンに転生とかできるの？」

「いや、ドラゴンを宿すだけならともかく。正真正銘のドラゴンに転生できる技術はまだ元の世界に居た頃でもなかった。例外を除いてだけ」

眼前の少女達に翳した手の平の上で一瞬の閃光が迸り、一つの杯が光から具現化した。

「神をも滅ぼす可能性を秘めた神器、『神滅具』の十七種の内の一つ『幽世の聖杯』。この杯は生物の命の理を覆す力——驚異的な再生、治癒力や死者を甦らせたり、種族の弱点を克服や強化、そして別の種族に転生する力を秘めている。これでドラゴンに転生する事もできるぞ」

「っ!?!」

とんでもない代物を見せつけられながら説明を受けたアスナ達は

瞠目しないでいられた。これ一つで生命の理を覆すことができる杯なんてと。もしも快樂主義の神々が聞けば、外見も恥も殴り捨てて全力で奪いに掛るかもしれない可能性は大いにある。

「でも、こいつにもデメリットがある。乱用すれば使用者の精神が汚染され、やがて廃人にもなりかねないんだ」

「・・・イツセー、あなたでも？」

「多分な。でも、それは一度に百人や千人級の死者を甦らせたりしたらの話だ。滅多に使わんよ」

心なしが安堵で胸を撫で下ろすアスナ。便利なモノにはデメリットやリスクが付き物。万世界共通である事を判りながら好奇心が覚えて、一誠にある事を訊ねる。

「その杯で転生したら、元の種族に転生できちゃうの？」

「生命の情報があれば何度でも可能だ。アスナ、興味があるのか？」

「うん、ドラゴンの君でも私達と何ら変わらない人の姿だしもしかしたら魔法が使えるかなーって」

「できるぞ。この世界の魔法に縛られず俺みたいにバンバン魔法を使えるが、転生した種族のデメリット付きだ」

そうなんだ、と首肯するアスナ。シノンの中で「まさか」と考えが浮上した時、彼女の口から――。

「じゃあ、私も転生してみたい」

「・・・マジで？」

「うん、マジ」

心なしが期待に満ちた亜麻色の瞳にキラキラと輝いている。逡巡してしまいう一誠にシノンも訊ねた。

「聞くけれど、どれだけ転生できるの？」

「えーと、悪魔に天使、堕天使、ドラゴンに人間だろ。他は吸血鬼やエルフ、猫？^{キャットヒール}って見た目は猫人族の妖怪と狐の妖怪、エルフとドワーフ、人魚にその他諸々」

「ファンタジー的な種族ばかりね・・・妖怪もいるなんて嘘みたい」「別の世界から来たシノン達にとっては当然だろうな。ああ、さっき言った種族の中で魔法が使えないのもあるから。妖怪に関しては妖

術だし・・・アスナ、因みに聞くけど何に転生したいんだ？」

「妥当な種族であってほしいと一誠の心知らずのアスナは転生できる種族を心の中で復唱しながら考え、口にした。

「エルフって魔法を使える？」

「使えるけど、天使じゃないんだな」

「欲望に負けちゃうと墮天使になっちゃうんでしょ？」

「なるけど弱点は他の種族と違ってないぞ」

「あ、そうなんだ。でもやっぱりエルフが良いかな」

「お願い、とジツと視線を向けてくる彼女に止める理由はないとばかり『セフィロト・グラール幽世の聖杯』の能力を発動した。杯が輝きだせばアスナの全身も呼応して光に包まれ・・・耳が細長く変化した程度で変わらない出で立ちで一誠とシノンに見守られた。

「終わり」

「え、もう?」

「何に期待していたのか分からないけど、耳触れてみ」

指摘を受け、そつと片手で耳を触れてみると人の耳より異様に長く尖っていた事に気付き、用意周到で前から突き出される鏡の中の自分はエルフ特有の耳になっていた事に気づく。

「耳が長い・・・」

「加えて身体の中から不思議な感覚があるはずだ。それが魔法の源と魔力。練習すれば魔法を使えるようにもなるさ」

「両手を握ったり開いたりして新たな己の実感を、人の理を超えた事を確かめる風に行っている少女に安堵で息を吐きながら一誠は言う。

「正直、ドラゴンに転生したいって言われたら断ったところだったぞ。この世界の人類の敵は俺一人で十分だからよ」

——正しい選択を選んだアスナ。選ぶ気は無かろうが安心した。心中で語る一誠の心情に二人は気付かなかったが、それでも構わないと男は小さく笑みを浮かべた。左眼をシノンにアスナから変える。「シノンもこの世界にいる間だけ別の種族に転生してみるか?その後すぐに戻すからさ」

「そう言われシノンは——時間を置いて気持ちをお口にしました。」

それからの三人は廃墟の教会、『ダイダロス通り』を後にし「アルテミス・フアミリア」の本拠地^{ホーム}へ足を運ぶシノンの家は、今まで貯えきた金で購入した小さいながらも豪邸であった。彼女の帰還に迎ええるのは鉄の柵の扉で、そこにキリト達以外にも新たに入団した駆け出しの団員らしき二人が扉を守護していた。近付いてくる彼女等に呼応して開けられ、潜り真つ直ぐ豪邸の中へ入っては真つ直ぐ主神の神室へ足を運ぶ。別の世界から来て三年目で豪邸を得たキリト達の努力は並ではないことを悟るのに難しくない。どこまで成長をするのか見守りたい半面、今の少年少女達の関係の不安定に懸念するが心構えと時間が解決するであろうと主神の部屋に辿り着きながら思い馳せた。アスナとシノンが部屋の中に入っていき、一誠は当然のように改^{コンバーション}宗^{バウジョン}が終わるまで壁に背中を預けて待つ。

アスナの登場に主神アルテミスは久しぶりの再会に喜んだ。しかし、彼女がエルフに転生していた事も含めて「フアミリア」を脱退したい願いを乞われて驚かずにはいられなかった。

「……アスナ、脱退したい程「フアミリア」が嫌になった？」
「嫌ではありません。でも、元の世界に帰る前にしたいことができたんです。脱退したからと言ってシノのん達との絆は断ち切ったとも思っています。主神様の恩も忘れません」

意思が堅い少女の目も真剣な眼差しをしており、冗談やふざけ、嘘を言っているのではないとアルテミスは察した。何を彼女にそこまで駆り立てたのか定かではないが、決める前に女神として聞きたいことがあった。

「元の世界に帰るよりもその強い憧憬^{おもい}を抱く理由は何？」

「交わした約束を果たす為です。遠い場所で生きている友達と再会する約束を」

「キリト達と一緒にではなく個人的に？」

肯定した。神の前では人類は嘘をつけない。彼女は嘘を言っていない。正直に願望を叶えたいアスナの憧憬は言葉としてアルテミスに伝えたのだ。キリト達を眷族にしてから元の世界に帰るこそが第

一の望みである事を知っている故に、その望みよりも優先することができた切っ掛けは何なのか分からない。だがしかし、真摯に思いをぶつけてくるアスナを無下にすることは女神としてできない。

「改コンバージョン宗をする前に更新をするわ。背中を見せて」

「……ありがとうございます」

謝罪と感謝を籠めた念を示し、上衣を脱いでアルテミスに背中を晒す。針を人差し指に刺して出てくる神血イコルを媒介にし、「ステイタス」の更新の作業に入る。

「……」

部屋の外で待つ事しばらくして、待ち人が扉を開けて出てきた。顔の表情を窺うと問題無く脱退の儀式は終えた様子だったので一誠は話しかけた。

「終わったか？」

「うん。終わったよ」

神室を後にしたシノンも現れ、二人を交互に見る。

「アスナはこれで【アルテミス・ファミリア】の眷族じゃなくなったけど、ずっと友達だからね。イツセー、彼女の事よろしく頼むわよ」

「シノのん……」

「なんならシノンも来ても構わないぞ。色んな銃があるし使い放題だ」

「……とても魅力的な提案だけれど、私までいなくなったらクライン達に負担が掛るだろうから遠慮するわ。逆に譲ってくれない？」

「気が向いたらそうしてやるよ」

朗らかに笑って言う一誠に「期待しているわよ」と柔和に笑むシノンの目が——あるものを視界に入れた途端に凍結したように固まった。その小さな違和感に気付く一誠も彼女の黒い眼が映している何かがある方へ振り返り、釣られてアスナも静かにゆっくりと振り替えた先に——。

「……アスナ」

黒髪黒眼の少年キリトと三人の少女が複雑極まりない面持ちと当

惑の目でアスナを見ていた。

「(シノンさん。これは……)」

「(成り行きを見守りましょう)」

ある意味修羅場が起きてもおかしくない何とも言えない空気となった一堂がいる場。シノンが言った成り行きを見守る姿勢で蚊帳の外に立ち、息を殺し様子を窺う。

「……………」

「……………」

どちらも口を開こうとも喋ろうともせず数十秒が経過した。

「ア、アスナさん！」

小柄な体から発するシリカの悲痛の叫び。頭を垂らして謝罪の念を全身から伝える少女を視界に入れた。

「ご、ごめんなさいっ……アスナさんからキリトさんを奪うつもりじゃ……………」

「…………アスナ、ごめんなさい。許して欲しいとは言わない。けど、この異世界にきてあたし達……………」

「お兄ちゃんのことますます好きになっちゃって……それに、元の世界じゃないから日本の常識や結婚の法律や制度なんて通用しないと判っちゃうと……………」

異世界故に抑えられていた理性の歯止めが利かなくなり、同じ異性を慕う者同士が結託して半ば強引でありながらも自分達の思いを身体も一緒に伝えてしまったのだと、キリト自身もこの世界なら皆を幸せにできるとアスナに相談することを疎かにしてしまいがら三人の思いを受け止め続けたのである。

「……………」

彼女達の懺悔の言葉に耳を傾けていても無言を貫く。亜麻色の瞳には怒りも悲しみも宿っていない。純粹に他者を見つめる瞳だった。そして目線がキリトに変わったことに本人も気づく。

「キリト君、三人を幸せにできるの？私に隠れて浮気していた君が」

「アスナ……………」

「できるの？できないの？」

話を逸らすことは許さない、自分の問いだけを答えろと暗に訴えるその目を見るキリトは何時の日か再会して話し合う時が来たら、自分の気持ちをぶつけようと待ち望んだこの瞬間を台無しにしないとキリツと真剣な眼差しでこう言った。

「スグハ達だけじゃない、アスナお前が許してくれるなら俺はお前も幸せにしたいんだ」

「……………」

「今までお前に隠れて三人と浮気していたことは全面的に俺が悪い。お前を裏切つて本当にごめんアスナ。まだ俺を許して【ファミリア】に帰つて来てくれるなら……………」

徐に一誠の手を徐に華奢な手が掴み取った。

「……………」

そして——自身の胸に抱き寄せてキリトにアピールをする。

「桐ヶ谷君、紹介するね。私の新しい恋人、兵藤一誠よ」

「……っ!?!」

「……………え?」

「……………アスナ?」

三者三様、アスナの突然の告白に驚きを隠せなかった。

「イツセーの城に住んでからずっと悩んで考えた。彼を通じて君の気持ちを考えて『仕方が無い、しょうがないんじゃないのか』って気持ちが浮かんでくるの。私も人の事言えなくなっちゃったから」

最後の一言で一誠の胸に罪悪感と言うロンギヌスの槍が突き刺さった。「本当にゴメン」と暗い顔で謝罪する一誠に彼女は「気にしないで」と返答する。

「人の事言えないって……………どういう意味なんだ……………?」

「そのまんまの意味だよ桐ヶ谷君。でも、先に浮気をした君に対して後ろめたさも罪悪感も覚えなかった。神様の悪戯で巻き込まれて思ってるから。ね?だから君も被害者側なんだから謝る必要はないよ」

アスナが何を言いたいのかわかり、言われて罪悪感を抱いていた一誠はそれでもキリトに顔を合わせれないとバツ悪そうにしていた。

「今さつき正式に【ファミリア】を脱退しました桐ヶ谷君。これで私に気にせず三人と幸せになつてください」

自分の思いを否定されるよりも「ファミリア」を脱退したアスナに驚きを隠せなかったキリトとスグハ達。もう彼女の中での真意はすでに定まっていたのだ。

「そんな、アスナさん……」

「ま、待ってよっ。【ファミリア】を脱退したって、それにイツセーと付き合ってるって」

「イツセーさん、どういうことなんですか？まさか私達のせいで心に傷つけてしまったアスナさんを……」

動揺、困惑するキリト達。シノンも一誠と付き合っていると言うアスナの発言で「説明しろ」という眼差しを向け、一誠は付き合つてないと首を横に振る。全力で。その時、階段を急いで駆け上る足音がしてきた。

「アスナさんが帰って来たんだって!？」

「って、イツセーまでいるぞ?！」

ヒーロー組の異邦人達が六人を挟む形で現れた。この複雑な状況にも拘らず気付かずに。どうするんだコレ、とアスナの言動でキリト達との関係が良くも悪くもなってしまう。

「私、元の世界に帰らずイツセーの世界に行く理由が出来たの。だから【ファミリア】を脱退したの」

「別に脱退することでもないじゃない！それに一緒に元の世界に帰らないってどうしてなのよ。私達がキリトを奪ったから嫌いになっちゃったってこと?！」

「違うの。イツセーの世界に会いたい人がいたの。だから私は——あの子との約束を守るために異世界に行く」

「あの子との約束を守るためって、イツセーの世界に一体誰が……」
キリトの当惑する顔から眼を逸らし一誠に視線を送る。その視線の意味を察して目を瞑る一誠の全身が一瞬の光に包まれ——黒みがかかった紫の長髪に赤い瞳、童顔が抜けきつてない小柄な少女へと変身した。

「「っ!?」」

四人の目は信じられないものを見た。限界まで眼を丸くして目の前の少女に釘付けとなるがヒーロー組の異邦人達は誰だ? 的に小首を傾げる。これは当人達しか知らない人であり蚊帳の外に置いてかれても仕方が無いことだった。

「ユウ、キ……?」

「うん、そうだよキリト。この姿の女の子がボクの世界に生きているんだ」

「嘘、だってあの子は死んじゃって……」

「並行世界、パラレルワールドは似て異なる世界がたくさんあるんだ。ボクと同じ姿をした人がそんな世界のどこかにいる可能性も君達は否定できるのかい?」

「で、でも。ユウキさんと同じ姿をしているだけかもしれないですよ?」

シリカのその指摘にアスナは首を横に振って更に否定した。

「イツセーの世界にいるユウキも『マザーズ・ロザリオ』を使えるわ」「っ……」

「私達が知っている、私達を知っている最強の剣士でもなくても、私達が知っている最強の剣士の技を使える。私はそれだけでも十分過ぎるほど嬉しい。だから私は約束を果たすためにイツセーの世界に行きたいの」

「私は必ずもう一度あなたと出会う。どこか違う場所、違う世界で絶対にまた巡り合うからその時に教えてね。ユウキが見つけたものって」

だから皆とは一緒に元の世界には帰らないと、言い告げるアスナに何も言えなくなつた四人は口を閉ざしてしまふ。その瞬間が決別の意を示した行動のようにシノンは一誠もろとも転移式魔方陣でいなくなるアスナに対して思わずにはいられなかつた。『幽玄の白天城』に転移を果たした矢先に彼女の胸の中に抱きしめられた。淡々とキリト達に別れを一方に告げたアスナの気丈は二人きりになるや否や、脆くなって悲しみに嗚咽を漏らした。別れを言う方も言われる方も心が痛み傷つく。本当は別れたくなかつた筈だ。それでも、アスナの

気持ちに何か拍車が掛って止まるに止まれなかった。結果、悲しみの結末を迎えてしまった。

「……ごめんね、君のこと付き合っても無いのに付き合ってるって言っちゃって」

「気にしないで。ボクは誰かに恨みや怒りを向けられようが気にしないよ」

「……もう、真似しなくてもいいよ?」

「アスナが泣き止むまでこの姿でいるよ」

そう言っ手を取り、城の中へと歩いて行くユウキの姿をした一誠に連れられるアスナは心から感謝の念を抱いた。

冒険譚22

「アルテミス・ファミリア」を脱退してからアスナは本格的に『異世界食堂』のキッチンやホールの仕事を取り組、レイラとシル、帝国から連れてきたフィリラ達と看板娘として働き常連客達の間で知名度が高くなってくるだろうと予測するその日。

「イツセー、アスナがエルフとはどういうことだ。ヒューマンであつただろう」

帰ってくるなり男はリヴェリアを筆頭に同居or同棲しているアイズ達に囲まれながら自問を受けていた。その理由はヒューマンの女性が何時の間にかエルフに成っていた事だ。事情を知って今の今まで様子見と見守ってきたが、今日「アルテミス・ファミリア」に行つてとんぼ返りをした女性の姿を見て気になってしまった。故に問いただせば一誠が原因であることが明らかとなったのだ。

「また異世界の力なのか」

「ぶつちやけさういうこと」

「どんな方法でヒューマンからエルフになれるのだ」

「生命の理を覆す力で異種族に転生してやったんだ。今のアスナは俺の世界のエルフとして生きている。だから半永久的に生き永らえる生命力と魔法の魔力を得た」

そんなことができていたのか。半ば愕然の気持ちで正座を強いられて一誠を見下ろす翡翠の瞳は、更に何か言えと眼差しが催促する。雰囲気ですれを察し、心配そうに視線を送ってくるアスナを一瞥して白状する。

「情報があればどんな種族でも別の種族に何度でも転生することができる能力を保有しているんだ。だから、俺の世界のエルフの情報をアスナの人間としての情報を上書きして元人間のエルフに転生したんだ」

「そんな便利な能力もあつたのね。じゃあ、子供が神に転生できたりするのかしら?」

「それはしたことがないからわからないな。しようとも思わないし」

興味深々に耳を傾けているフレイヤから質問は終わり、椿が腰に両手を添えながら前屈みになって訊ね掛けた。

「お主の世界の種族に手前らが転生したら見た目は変わるのか？」

「マーメイドみたいな魔物、モンスター以外だったら変わらなない。ただ、転生した種族の能力が付加するぐらいだ。分かりやすく言えば、異世界の魔力を得て詠唱を唱えずバンバン魔法を放つ事が出来る。アスナにも説明したぞ」

「ふむ。ならば手前がお主の世界のドワーフに転生したら魔法は得られるというわけか。実に興味深い話であるな」

「だろうな。というか、ドワーフは魔法使えないぞと告げると、足を崩して立ち上がる。」

「理由は教えたぞ。他に無いなら解散だ」

「待て待て、もう少し詳しく話を聞かせて欲しい。他にどんな種族に転生できる？ 転生して魔法以外に何が得られる？」

「更なる質問攻めに億劫そうに溜息を吐いて、アスナとシノンに説明した話を復唱するように説明口調で告げる。語られる異種族と転生した際のメリットとデメリットを聞き逃さないと耳を集中して静かに聞き取りヴェリア等は次第に興味深く感じた。」

「異世界のエルフとなった彼女はお前のように「ステイタス」に左右されず、魔法を放てる……か」

「練習しなきゃ使えるもんも使えないがな。だけど、アスナが魔法を放てるようになれば、合体技の魔法ができるな。それが今後の楽しみだ」

「合体技——冒険者にとって馴染みの無い共同作業の事を差す。異世界では当たり前のようにしているのかとアイズは好奇心で訪ねずにはいられなかった。」

「合体技って、強いのか？」

「二本の枝より束の枝の方が折れにくいように、合体技は複数以上力を合わせさせたもんだ。弱いはずがない」

それを聞いてアイズの中で合体技を編み出した欲望が沸き上がった。頭の中でも二人で強大な弧王モンスターレックスの怪物を挑み最後に風の魔法

だが、その超馬鹿がこれからここに来ることを一誠は知らなかった。

「ほうほう、ほうほう、ほうほう……」

筋骨隆々のフクロウがそこにいると思うほど相槌だけを打っては用意した料理、ピザを食べる男神がいた。麗人の少女も無言で肉と野菜のピザを食べて耳を傾ける。二人ともパソコンの画面に映る映像を見ながらだ。時々キラんと眼を輝かせる主神に嫌な予感を覚えたが特に何も言わない方が不安で堪らないものの、オラリオで祭りを行うには無理がある物ばかりの祭りだ。焼けたチーズの癖のある味とトッピングに乗せた食材の味を楽しみながら食べ続けるアイズ達と昼食の時を過ごす――。

「……………」

「……………」

パソコンから顔を上げて己を見つめだすガネーシャの視線に気づき視線がぶつかり合う。片方は意味深に白い歯を覗かせてキラリと輝かせた対象的に片方は顔を物凄く顰めだす。

「イツセー、祭りをやろう」

「だが断る」

いたよ、超馬鹿がと内心ガネーシャに対して呆れ果て熱く語り冷たく否定する言葉のキャッチボールが繰り始め出す。

「不安と恐怖で怯える子供達に元気付ける為にもやはり祭りをするべきだとガネーシャは思うー！」

「その祭りをブチ壊すイルヴァイス闇派閥にどう対処するんだ。ギルドの了承だつて必要だと思っぞ」

「悪に屈しない姿勢を見せることでイルヴァイス闇派閥も手出しすることは難しいと思うー！」

「祭りをすることで賑やかになるのは確かだけど、その賑やかさに紛れて襲撃が起きたとしても続ける気か？死人が出る祭りなんて誰も参加したがるないだろ」

大体だ、とガネーシャに聞いたです。

「どんな祭りをしたいと言いつ出すんだ主神様よ」

「喧嘩祭りだ！」

「阿呆かつ!？」

「どはアツ!？」

思わず気弾をガネーシヤにぶつけてしまい吹っ飛ばしてしまったが気にしてられない。椅子を押し倒して立ち上がる一誠はビシツと男神に指を突き付ける。

「よりによって喧嘩祭りかよ。何となくこの世界の快樂主義の神々が好きだろうなあと思ってた祭りをよりにもよってお前が選ぶか！」

「その通り！」

「威張るな！」

もう一度主神に気弾をぶつける一誠に冷や汗を浮かべるロキは恐る恐ると質問をする。ガネーシヤがしたい喧嘩祭りとは何かと知るために。

「喧嘩祭りってなんなん？」

「……はあ、この世界に山車あるか？」

「山車はあるで？それがどうしたん？」

「あるのかい。まあ、喧嘩祭りってのは山車の他に神輿、行燈、山車、太鼓台等でぶつかり合うように行う祭りの総称だ。喧嘩をしているように見えることから『喧嘩祭り』と称されている」

指を弾いてロキ達にも見させる為に立体映像型の魔方陣を展開、喧嘩祭りをしている光景の映像を見せる。昼夜問わず行われてるソレは上半身が裸で自分より大きなものを担いで歩く大勢の男達が熱狂、暑苦しい肉声で音頭をしながら歩き、相手の山車を見つけるや否や、全力でぶつかりあう。例えば担ぐ人がぶつかっても屋台がぶつかって壊れようと相手に押し負けんという意思と姿勢を窺わせながら張り合う熱気が画面越しでも伝わってくる。

異世界はこんな神ですら考えもしない祭りをしているのかと興味津々で見つめるロキ達女神やリヴェリア達冒険者達。

「闇派閥イルヴィスがいる時期にこれをしたいなんで阿呆だろ。絶対に狙われるって」

「悪に屈しない姿勢も大事って言うことはわかるんだよね？」

「そりゃあそうだ。俺だって何でもかんでも否定しているわけじゃない。俺は何時だって最悪な状況を想定した上で考慮しているんだ。祭りをするなどとは言わない。それをするのはまだ早いってことだ」

「そうなんだね。闇派閥イルヴィイスがいなくなったらでも遅くないか」

「ん、どっかの神がクリスマスをしたいななんて言いだすからな。せめて目の前の問題を解決してからやれってことだ」

その間、一誠とアスナの異邦人の会話がされた。ガネーシャの考えを分かっている上で一誠は問題視を指摘しているのである。その意図を悟りオラリオの事を思っ言っている男に一度笑みを浮かべたが次に心配そうに尋ねた。

「大丈夫なの？ファイリアさん達に異世界のことを教えていないんですよ。アルガナさん達だって」

「別に俺達が異世界から来た存在だって言ったところで、特に何も変わらない。俺達の認識を改めて変わらない日常を過ごすだけだ。問題なのは俺の正体だけだ」

人の皮を被っているモンスターと一緒に生活をしている等、死んでも言えない秘密だ。アスナもそれを分かっている。それに比べて異世界のことを教えても痛くも痒くもない。あまり言い触らすことでもないがそれでもマシなほうであるのだ。

「……じゃあ、私達が異世界から来たってこと教えても大丈夫なんだね」

「安易に言い触らさないよう釘刺す必要があるがな」

そこでガネーシャが話に介入してきては「どうしても、駄目かイツセー」かと懇願する乞いにバツサリと切り捨てる。

「闇派閥イルヴィイスの問題が解決しない限りは絶対にダメだ。大体、山車を揃えるのに時間も金も掛るんだぞ？時間はともかく金はどうするんだ」

「【ファミリア】の資金から買う！既に俺はそれで買って一つあるゾウ！」

「……………団長」

「……………何も言うな。その憐れみの眼差しを向けるな」

……………もはや語るまい。

「——絶対、兵藤が悪い！」

一方【アルテミス・ファミリア】のホームのリビングキッチンでは、副団長の脱退について疑問したヒーロー組の異邦人達がどうしてそうなったのか議論が飛び交う間もなく一誠が悪いと浮上した。

「あんにやろうがモテ過ぎるのが悪いんだ！」

「いや、それが絶対お前の本音だろ峰田。自分がモテないからって」

「上鳴、目の前でモテモテの男を見て何とも思わないのかよおっ!?」

「思わなくねえだろ。あーくそ、俺もモテてえよー！」

「だろ！きつと兵藤が寝取ったに違いないんだ！魔法とか使つてよ！」

いや、それこそ絶対に有り得ないと自分達が知る兵藤一誠と比較……できない。この世界に存在する兵藤一誠と似て異なる者だと当人も主張している故にわからないのだ。

「峰田、あまりそう言う話はするな。このことは本人達の問題でもう解決した話しだろ」

「轟君の言うとおりだ！仲間とは言え付き合っている人達の恋愛事情に僕達が首を突っ込む必要が無い！」

紅白の髪に黒と空アクアブルー色のオツドアイ、顔に火傷のある少年、轟焦凍の意見に尤もだと黒髪に眼鏡を掛けた気真面目が歩いていると体現している少年の飯田天哉に諭され悔しげに顔を顰める。

「それよりも俺達は次の階層に攻略することに専念するべきだ。二人の借金をいち早く返済するためにもな」

「前よりも住み心地が良くなったけど問題はまだ残ってるもんな」

「うぐっ」

何気に肩身が狭い思いをしている様子の二人。その話になると特に峰田は強く出れない。

「しっかし、全然俺達の【ステイタス】は伸びねえーよなあー？」

「【ランクアップ】した団長達の【ステイタス】と比べて全然低いよねー。もっと強いモンスターと戦わないと駄目なのかな？」

「それでも駄目だったら絶望的ね。イツセーちゃんでも【ランクアップ】ができたんだから望みはあると思うけれど……」

何かコツでもあるのかな?と思わずにはいられず、茶色の髪をサイドテールに結んだ少女、拳藤一佳は腕輪を操作しながらこつそりと気配を殺して部屋から出た。通信を入れて少し経つと、宝玉から立体映像の画面が飛び出して一誠の顔が浮かび出した。

『どうした、珍しく通信をしてくるなんてな』

「えっと、イツセイさんに教えてほしいことがあるんですけど」

『俺が知っていることなら教えるぞ』

こうして普通に会話をしているだけで自分が知っている兵藤一誠とどうしても被ってしまふ。当の本人は自分ではない自分と話されて嫌がる傾向があるのだが……。

「[ランクアップ]する秘訣とかありますか?皆の「ステイタス」、中々伸びなくて……」

『……喧嘩売ってるなら買うぞ?』

ど、どうして!?!と喧嘩腰に入る一誠に困惑してしまう少女だった。何か怒らせるような発言をしたのかと困ったように疑問を抱いていると一誠から尋ねられた。

『お前、元の世界でゲームしたか。RPGでも何でもいい』

「えっと、ちょっとだけなら」

『ならLv. を上げるにつれて弊害になる理由を考えないのか?』

Lv. 上げの弊害とは……それが何なのか改めて考えても思い浮かべない一佳は同性と数人で使っている自室の中に入りながら「わかりません」と答えると一誠が指摘した。

『99レベルのキャラクターがモンスターの中で雑魚扱いされているスライムやゴブリンを倒したとして、経験値がどれぐらい手に入ると思う?』

「雑魚扱いされているモンスターから手に入る経験値……1〜10までですか?」

『まあ、そんな感じだろ。でだ、99レベルのキャラクターが100レベルになるために必要な経験値が……100万だとしたらどう思う?』

「い、いくらなんでもそれは低過ぎます……」

『雑魚のモンスターをいくら倒しても経験値の数値的にスズメの涙以下だ。それは「ステイタス」も同じ原理だ』

そこまで言われてはつと全てを理解して悟った。

「私達が強過ぎてあまり成長しないんですか？」

『ようやく理解したか。点数を点けるなら69点だったぞ。もつと色々考えるべきだお前等は』

ぐうの音も出ない少女は自省の念に駆られた。単純に生きるだけでは駄目なのだと暗に言われながら耳に入る一誠の言葉に驚いを隠せなかった。

『言つとくけどな。俺なんてずっと強過ぎるあまりに「ステイタス」の熟練度は10だったんだぞ！』

「.....物凄くすみませんでした」

口には言わないが、己が知る一誠は最強のヒーローを凌駕するほど強い。だったら自分達より成長していないこともどうして考えられなかったのだろうか。一誠の言うとおり色々と考えて生きなければならぬ。無知は時に自他を殺してしまいかねない。

『L.V. 1のまま「深層」のモンスターを百匹も千匹も倒しても全然「ランクアップ」するどころか、全部のアビリティの能力が0のままこれほど絶望感を覚えたことは三度目だからな!?!お前、そんな俺の気持ちに分かるか!』

「.....」

『ようやく「ランクアップ」したところで潜在値が0のままL.V. 2になっても意味が無いんだよ.....くそう、またあの絶望感の中を生きなければならぬのか.....』

何だか踏んではいけない地雷、触れてはいけない何かを触れてしまった感がヒシヒシと伝わって来て申し訳ないと思いつつながら通信を切った。取り敢えず、一誠から得た情報は役だった。自分達はこの世界にとってあまりにも強く『中層』のモンスター相手では簡単に倒し過ぎて成長する兆しが見えないのだ。だとすれば.....。

『「深層」のモンスターと階層主相手にじゃないとこのままなのか』

そう呟いた瞬間に腕輪の宝玉が点滅した。通信を受信すると相手

は一誠だった。

『「深層」にチャレンジするつもりなら、52階層から下の階層は絶対に行くな』

「えっ、何ですか？」

『もうそこから常識なダンジョンじゃなくなる。58階層から階層を無視して狙い撃ちするドラゴンがいるからだ』

そんなこと、もしも本当だったら防ぐ自信が無い。地面の下から狙い撃ちしてくる砲撃を見た瞬間に死ぬと思うと背筋が凍る感じを覚えてた。

「イツセーさんでも、危険ですか？」

『別に？下から狙い撃ちをして空いた穴から直接58階層まで落ちていけばかなり楽だ』

「……やっぱりどの兵藤一誠もあつさりと常識を無視する程に強過ぎる！」

『言いたいのはそれだけだ、じゃあ——』

「あ、ま、待ってくださいっ」

通信を切ろうとする一誠に慌てて引き留める一佳の口から次に出た言葉は「……」。

「ちよ、直接体験しないとやっぱり緊張感と言うか危機感が感じられないので、そ、その……52階層に連れてってもらえませんか？」

暗に一誠と冒険をしたいと言う願いだ。口に出た言葉は嘘ではない。腕輪の転送式機能でも行ける階層は37階層までだ。確かに『深層』まで行けるのだがその先は何故か登録されていないのだ。明らかに何らかの意図で細工されているのがわかる。それ以上先まで行く必要が無い、もしくは他の理由があるのかと一度は勘繰ったことがある。だから知りたい。強過ぎる自分達でも一誠が釘を刺すほどどれぐらい危険があるのかを。

『……お前、死にたいのか？』

「死ぬ気はありません。それに私は元の世界にいる一誠さんに気の抜い方を教えてもらってますので足手纏いにはなりません」

『……へえ?』

あ、初めて興味を抱いてくれたような声を漏らした。そんな気がする一佳に不敵の笑みを小さいながらも浮かべだした。

『いいだろう。お前等の実力は気になっていたところだし、見せてもらおうか』

「い、いいんですか?」

『ただし、お前一人だけバベルの塔の前に来い。もしも他の連中もついて来たらこの話は無しだ』

通信を切られた後、誰もいないことを確認したのちに「よしっ!」と拳を握ってガッツポーズ。二人きりでダンジョンの探索。初めてこの世界の一誠と共に行動する機会が巡って嬉しいあまりに感動してしまうが待たせるわけにもいかず急いで出かける準備を仕度する。そう、誰にも覚られては駄目なのだ。絶対に――。

ガチャ。

「……………」

「……………」

開かれた扉の先に四人の少女がジイーと意味深に一佳へ眼差しを向ける。物凄く何か言いたそうな顔をされて薄らと肌に汗を浮かべて流す一佳は苦笑いをして尋ねた。

「もしかして、聞いてた?」

おかつぱ頭の少女が耳朶の先にあるプラグを見せつけながら他の少女三人と一緒に頷いた。

「じゃあ、一人しか行けないことも聞いているなら……………今回だけ見逃して?」

「……………」

一縷の望みすら即答で消されてしまい、これで二人きりの探索は断念せざるを得ないことに泣く泣く一誠に報告する一佳だった。――協定に従って。

『……………ごめんなさいイツセイさん、そういうことですので行けません』

僅か数分で交わした約束が果たされることもなく、断わりの通信を

入れてきた少女の残念極まりない顔の表情と共に告げられて物凄く呆れ顔でこう言った。

「バレるの早過ぎだ」

通信を切って溜息を吐く男の隣にアスナがいてのんびりとティータイムを楽しんでいた。円卓を取り囲むようにロキ達も同席していたので話は筒抜けだ。

「えっと、もしかしくなくても中止になった？」

「盗み聞きをされていたかもしれないな。バレたくない話だったら周囲を警戒するべきだったのによ」

「だったら皆と一緒に行けばいいのに」

「52階層だぞ？あいつらでも多分死ぬぞ」

「守ってあげないの？」

「自分の身は自分で守れだ」

ネット・スーパーで購入した茶菓子をモグモグと食べる。どら焼き、まんじゅう、菓子パン等の盛り合わせは女性に好評だった。特にまだ幼い子供のアイズとアリサ、ラトラ、レイネルとレギンが眼を輝かしてもきゅもきゅと頬が膨らむほどに口の中に溜めこんで食べる姿は微笑ましい限りだ。

「異世界にお菓子のような甘いパンがあるなんてね。とても美味しいわ」

「美の女神に称賛されるなんて作った人達も幸せだな」

「自分も作れへんのかあ？」

「食材があるから作ろうと思えば作れるよ。本当、『異世界買物覧』^{ネットスーパー}様様だ。おかげで一カ月に一度まで待たずに食材を確保できるんだからな」

「もうお前は冒険者では無く生粋の料理人だな」

「料理を作るのは好きだけど冒険する方がもつと好きだからな。それはそうと二人のホームはどこまで修復しているんだ？」

二大派閥の主神に尋ねると似たような答えが帰ってきた。

「途中まで直っているんやけど途中で改修しとるんや。イツセーのように男女別に入れるよう浴場を二つにするためにな」

「まだ三分の二未満ね。形にはなっているのだけれど全焼されちゃったから」

まだまだ完全に修復していないと告げる二柱の女神達から状態を把握し「そっか」と相槌を打つ。

「一番早いのはイツセーが異世界の魔法で直してくれたらええんやけどなあー?」

「俺はそこまでお人好しじゃないし。自分達でできることは自分達でやれよな。これ以上俺に貸しや借りを作ったら何時まで経つても返せないぞ」

「だ、そうだロキ。あまりイツセーを頼り過ぎるのもよくない。現状我々の我儘を聞いてくれているのだからこれ以上の願いは神として傲慢ではないか?」

リヴェリアの言葉でしゅんと自省する風に身体を小さくするロキ。それが効いたようでそれ以上何も言わなくなったが食べる行為だけは止めない。

「しかし、『アルテミス・ファミリア』を脱退するとは……よいのか?イツセーと同様に元の世界に帰りたい筈では?」

「元の世界に帰る気持ちは消えたわけではありません。でも、イツセーの世界に行きたい思いが強かっただけです」

アスナの瞳を見ても決意は揺るがない事を窺えた。それがいつになるか分からないが、異世界のエルフに転生したアスナなら例え千年後でも生き続けられる生命力を得ている。流星にそこまで長くオラリオにいいのか分からないが、己の憧憬を抱いて生き続けるのみだと亜麻色の髪の女性はそう胸に抱く。

「そうか、となれば彼女の『ステイタスプレート』を作るのかイツセー?」

「ダンジョンに探索する気があるならな」

「うん、するよ。だからお願いね?」

あいや、と軽く相槌を打つ男に白い髪に赤い瞳の虎人^{ワータイガー}、ラトラが乞うた。

「イツセー様、私も欲しいです」

「あれは【ファミリア】を脱退した冒険者だけに持たせる物だぞ？最初から『ステータスプレート』を持たせて【ランクアップ】したら『どうやって「恩恵」無しで【ランクアップ】できるんだ!』って神々や他の冒険者が詰め寄ってくるだろうから駄目だ」

冒険者に成りたかったら神の眷族になる他ない。そう言外する一誠に「あう……」と丸みが帯びてる耳をぺたんと伏せ、力なく尾が垂れるという残念な気持ちを露わにしたラトラヘアスナが問うた。「どうして欲しいと言ったの？」

「イツセー様の眷族になりたいからです」

「俺は神じゃないからな？」

「神様では無くても強くなってイツセー様の背中を守りたい」

赤い瞳を真っ直ぐ一誠を見つめる顔に同性として少女の懸想おもいを氣付いてしまう。

この子は一誠と言う異性に恋しているのだと。

「ムグムグ……ゴクツ、私も『ステータスプレート』欲しい！」

「私ものですっ」

「ん、私も」

「私も」

「レイネルとレギンはともかくアイズとアリサは絶対駄目だからな。ロキの【ファミリア】に入っている時点で不要な物です」

ちやつかり便乗するもガーン！とショックを受ける金髪銀髪の少女達から意識を外しアマゾネスの二人までもが強請る始末に困ったもんだと思っているとフレイヤの助け船が出された。ラトラ達に対する助け船だ。

「イツセー、もう三人ぐらいいいんじゃない？」

「神の存在価値を危ぶむものだぞ？アルガナ達がどこかの神の眷族になるまでの応急処置として作ったって言ったよな」

「でも、肝心のあの子達はどこの【ファミリア】に入ろうとする気がないようにみえるわよ？」

……言われてみれば、そういう気がしなくもない。今現在当の四人は腕輪の機能で『深層』に転移してモンスターを蹂躪しに行く

と言っていたほどだ。

「作ったら作ったで、後のことを考えるとギルドがなあー」

「そのギルドも別に完璧に私達神や子供達のこと把握していないから穴なんていくらでもあるわよ?」

「神じゃないのに疑似『ファミリア』を結成していいわけ?」

「それはそれで面白みがあるわね」

何か企んでいるよこの美の女神。半目で綺麗な微笑みを浮かべる銀髪銀眼の女神に視線を送ると、あからさまに頬に散らばった朱を見せつけてきた。

「んと、イツセー?もう一度聞きたいけど『ステイタス』が重複したら問題あるのかな?」

「・・・改^{コンバージョン}宗^{コンバージョン}後でも『ステイタス』が連動するって俺の予想を超える結果が刻まれていたからな。そこは何とも言えない。だけどどこかの『ファミリア』の恩恵と『異龍の恩恵』が同時だとうなるか分からないのが現状だ。だから安全面を考慮してプレートの方に施錠する必要がある。そうすれば片方に何の影響も及ばないだろうし『ステイタスプレート』で培ったアビリティの熟練度や^{エクセルリア}経験値は背中に刻まれてる神の恩恵に連動する」

予想を超えたが狙い通りだと自負する一誠の隣で何か考え込み始めるアスナ。

「・・・うーん」

「なんだ」

「ねえ、試しにアイズちゃん達にも作ってみてくれない?」

何故?と疑問符を浮かべる。既に『恩恵』を受けている冒険者には不要の長物だろうと一誠は言うがアスナの考えはこうだ。

「連動するなら多分問題ないと思うよ」

「その理由は?」

「だって別物なんでしょう?直接二つの『恩恵』が重なっているわけじゃないんだし改^{コンバージョン}宗^{コンバージョン}後でも連動するなら、する前にも連動しているかもしれないよ?」

むっ、とアスナの持論にその可能性はあるかと考慮する。異常が起

こらないよう考えていたのだが、何でもかんでも試さず否定するのも駄目だと……思いながらやはりとこう言う。

「ファミリア」に属してないラトラ達をどこかに入団させるべきじゃないか？ さつきも言ったけど『恩恵』無しで「ランクアップ」する人間なんておかしいしよ」

「そうだね……イツセーが「ファミリア」のリーダーになっていいってギルドの人達が許してくれるなら問題ないと思うんだけど」

「ああ、それが一番ベストだな」

それ、なんとかできないかなー？ とロキとフレイヤに眼を向けると困ったように苦笑いされた。

「イツセー、それはうちらでも無理な話やで。逆に『ステータスプレート』の存在を知られたら廃止する命令が来るかもしれへんわ」

「主神がない【ファミリア】は【ファミリア】じゃないわ。この世界は太古からそういう概念と常識で定まっているのだから」

最大派閥でも無理な相談であった。結局ラトラ達は——【ロキ・ファミリア】に入団した上で試しに『ステータスプレート』を渡すことに決まったのだった。

冒険譚23

久しぶりに空の旅へ行こうと一誠の提案でロキ達は揃って領いから数時間が経過した。その際、『騎空艇』には空の世界には欠かせない翻訳者のジータとビイを乗せ、さらにポートブリーズ群島にいる青年も迎えてから出発した。

初めてこの世界に訪れたラトラ達は見飽きた様子を見せず甲板から空を眺め続けている。時々珍しい何かを見つけた時は指して指摘したり声を挙げたりして興奮しっぱなしだった。四人の新鮮で圧巻の体験をしている間に船を動かす一誠の傍で道案内を頼まれた青年ラカムは報酬として己が求める部品を提供するという話で請け負ったわけだが……灼熱の島フレイメル島へ一気に転移してから次の島へと移動する一誠達に呆然と立ち尽くしていた。

「おい、ラカム。こっちでいいんだな？」

「あ、ああ……アウギユステ列島の方角は間違っていないぜ。と言うか、本当に地上でも創りやがったんだなお前。しかもグランサイファーより二倍大きいもんをよ」

「写させてくれた設計図が役に立ったからな。と言うか本当なのか？空の世界にも海があるなんて」

聞いただけじゃとても信じられないって風に言う一誠に笑いながらラカムは「あるぞー。絶対に驚くからな」と上を見上げた。視界の中央を占める濃い青は騎空艇グレートブルーの気囊と呼ばれる部分。木製の骨で支えられた青い布の巨大な風船で、熱い空気を入れることで艇全体を空へと浮かべている。下から見上げると大きな卵型に見える。

「なあ、なんだかグランサイファーを真似て作ってるよなこれ」

「少し違うのは大きさと推進力の羽の数だな。名前はグレートブルー偉大な青だけだ」

「グレートブルーか。いい名前じゃねえか」

朗らかに笑って褒めるラカムに小さく笑む一誠の二人によってアウギユステという島の空路へ進み続けることしばらく経った時だった。少し色の薄くなった青い空の中に、濃い青い色の円盤がぼつんと浮かんでいるのが見えた。あれが目指す島だろうか。小さな水溜りのように見えるリヴェリア達はそんな感想を抱いた。

「ラカム、あれが？」

「ああ。あれが、アウギユステ列島の主島だ。まだちよつと遠いな。で、感想はどうよ？」

「空の上に海ってどんな感じかと思っただけど、ああいう感じかーだな」「おいおい、つまらねえーな。地上の海の方がもつと凄いつてののか？」「知ってるか？地上の世界の殆どは海に覆われているんだぜ？」

あんぐりと開いたラカムの横で更に速度を上げて目的の島に向かう。そして近付くにつれ驚いたことに、アウギユステの青い円盤は中央が抜けたドーナツ型をしていた。こうして近づいて見れば判る。眺め下ろした島の向こうの空が穴の向こうに見えていた。

「ラカムはアウギユステに行ったことがあるんだよな？こうして道案内もできているわけだし」

「あー、そうだな。ちいせえ頃にポート・ブリーズから出てガロンゾまでは行ったんだが、十年ちよつとぐらい前のことだからなあ」

「ガロンゾって？」

「騎空艇の整備を生業とする連中が住民の大半を占める島だぜ」

そんな島もあるんだなと感嘆し、その島にも行ってみたいという欲求が湧いたのは必然的だった一誠にニヤリと口角を吊り上げたラカムが報酬の話をしてきた。

「報酬は船の部品で頼むぜ？」

「今直ぐ用意はできないけど約束する。今回はガロンゾまで旅する予定じゃないからさ」

「ガロンゾじゃなくてもバルツでも構わないんだぜ？」

「そうか。じゃあ、帰りはバルツに寄っていくか」

そんな話をしている内にアウギユステの本島が次第に大きく見えってくる。近づくと、島の形は円盤というよりも角ばっていて、実際に

は東西南北に角のある菱形に近いと判った。しかも、中央の部分が抜け落ちていて、その向こうの空が見えている。平べったいビスケットをくり抜いたような形だ。更にまだ離れているから判りにくいのが、アウギステの浮島の大地は同じ平面上は存在しない。北側が最も高く、左回りに下っている。螺旋階段のようにだ。そんな大地の頂上から水が噴き出ているらしく、空の世界でどうやって水が湧き出ているのか不思議で堪らない地上に住んでいる神々と人類はとても好奇心を擽られていた。

「で、どこに降りればいいんだ？」

一誠がラカムに尋ねた。が……。

「あー……すまん、そこまではわかんねえんだわ」

「おい」

「大丈夫大丈夫、通信装置を作動しとけば管制官と連絡で来て誘導してくれっからよ。勿論、それも作ってあるんだよな？」

それは当然だ。設計図通りにしながらオリジナル、アレンジを加えながら完成したグレートブルーだと言いたげに専用のレバーを跳ね上げた。すると、管制官らしき声が聞こえてきた。その対応はラカムに任せてもらい大型船であることを告げてもらうとアウギステの首都、ミザレアがあるという島の東側へと一誠は舵を切る。

騎空艇を東側の島に飛ばして十数分が経った。一行を乗せる艇は、停船ができるよう島から空へと突き出している数多の栈橋がある場所へ辿り着いた。中型以上の騎空艇の底はお椀のように丸くなっているのです、そのまま地上に降りると横倒しになってしまうのだ。だから栈橋は、騎空艇の気囊の空気を抜かず宙を漂わせたまま接舷できるようになっている。グレートブルーも飛んでいるままの状態で騎空艇専用の港に身を寄せた。

「よし、到着」

「中々の操縦だな。今度俺も操縦させてくれよ」

「帰りにな。で、これからどうすればいいんだ？」

「港の管制塔で騎空艇の名前と持ち主、お前の名前だな。それと島に来た目的を書いて停艇料を払うだけだ。そういや、お前って読み書き

できるのか」

「無理だ」

胸張って言うなって、と呆れ顔のラカムは一誠を連れて手続きの手伝いに付き合うのだった。必要な事が全て終わると一行は水の都と呼んでも過言ではない首都ミザレアに足を運ぶ。

その街は水の上に建っていた。街の近くまで海が迫っている、というよりも、街全体がもうすっかり海に浸かってしまっているよう。水面から直に建物が生えているように見える——街道の先白い石を積み上げて造られた首都ミザレアの街並みが見えてきた一行の口から感嘆と驚嘆の息を漏れた。

「これは……すごいな」

リヴェリアが感嘆の声を上げる。街道から続く大きな橋を渡った先に街の入り口が見えるのだが、その門柱からして水没してしまっている。白い石で敷き詰めて造られた地面に膝をついて水の中にある建造物を見つけたアイズが声を上げた。

「イツセー、水の中にも建物があるよ」

「そうか。だったらこの街全体は昔水没した街の上で更に新しく街を作ったんだろうな」

「ほー、そうなんや？ イツセー、よーわかるな？」

「俺の世界にもこういう街はあるんだよ。アスナの方は？」

「行ったことが無いけれど水上で街や家が作られている国はあるよ」

異世界組の二人の世界にも存在する水の都。違いはあるだろう、それでも共通しているところは確かにある。だとすれば……。

「水上で生活する人達の主な移動方法は平底船ゴンドラだね」

「あら、馬はいないのかしら？」

「水没した街の上に新しく石だけで造ったんだぞ？ 周りを見て分かると思うが馬車が通れるような構造ではないし、馬の代わりに海や水の上を移動できる船の方が効率的にいいんだ」

アスナの言葉に珍しく素朴な疑問をぶつけたフレイヤに水上生活における己が知っている情報を教える。手に持っているバックパックを担ぐとアスナ達に向かっていった。

「それじゃ、俺はラカムと交易所がある場所に行くよ。金を換金しにな。その間皆は自由に観光してくれ」

「ご飯は？」

「この世界の金が入ったら直ぐに皆と合流する。そしたらこの街の料理を食べよう。アルガナ、バーチエ、ベルナス、エルネア。分かっているだろうけど周りの人間に手出しは禁止だからな」

「手を出してきたら？」

「腕の骨一本だけ許す」

わかった、と指示に従うアルガナ達に「本当に大丈夫か……」と不安を覚えるが、この綺麗な街にならず者やゴロツキがいるとは思えないので一先ずは監視の目を向けるだけにしようと思心に決めるリヴェリアだった。

「んじゃ、一時解散。終わったら腕輪に一齐に通信するからそれまで他の人に迷惑を掛けないよう観光を楽しんでくれ」

その一言で一同は各々と動き出してミザレアの街中へと進んでいなくなるが……視線を下に落とすと。

「……うん、案の定こうなるか」

アイズ、アリサ、ラトラ、ジータ（ビィ）の子供組十竜にアスナは一誠と一緒に行く方針で定まっていた。何となくこうなるだろうと思っていたことが的中した一誠は心中苦笑して共に交易所へと向かう。

当然ながら一誠達はどこに交易所があるのかわからない。必然的にミザレアに住んでいる空の住民達に尋ねながら赴くしかない。そうし続けて十数人目で目的の場所に辿り着いたのだった。

「水満ちる島だけあって魚介類が売られてる……というか、空に浮いているのに魚がいるってどういうことなんだ？」

「本当に不思議だね。どうしてなんだろう」

「おーい、何悩んで考えてるのか知らないけど、目的を忘れちゃいねーか？」

見たことのない海産物を目の当たりにして足を停めて見てしまつて二人に催促するラカム。それは忘れていないと青年へ振り返つ

ては一瞥して、交易商人が集う市場の中を歩き始める。賑やかな商人達の声を耳にしながら、地上の世界には見掛けない空の世界の種族の商いを生業にしてる姿を見ながら買い取ってくれそうな商人を探していると――。

「いらつしやいいらつしやーい、よろず屋シエロちゃんによろずです。旅に必要な道具の手配から、仕事の仲介、騎空士の斡旋まで、よろず屋シエロちゃんにおまかせー」

幼い子供に何故かダジャレが聞こえてくる。しかし『よろず屋』という単語にふらつと惹かれてしまい、子供のような伸長が特徴のハーヴィン族の女性の前にきてしまった。

「よろず屋って言ったな？」

「はい、言いましたよー。何かご希望はありますでしょうか？」

「買い取りをして欲しいんだけどできるか？」

バックパックに売りたい商品があると示すように見せ付ける一誠に、少し困った風にシエロカルテは言葉を濁した。

「申し訳ございませーん。よろず屋シエロちゃんは騎空士や騎空艇、仕事の斡旋を主にしているので商品の買い取りはしてないんですよー」

「そうか」

「あ、でもでもお客さんが売って欲しい物を私が仲介してですね、買い取ってくれる人を探すことは出来ますよー？」

依頼料はそこから貰えれば大丈夫ですと、と営業スマイルで提案するシエロカルテにその手でいくか、と考えた一誠は頷いた。

「売りたい種類はたくさんあるけど問題ないか？」

「ではでは売りたい商品を見せてください」

バックパックから地上の世界から持ってきた品々を目を丸くするシエロカルテの前に出し続ける。中には武器まで取り出すので尚更である。

「お客さん、その鞆はどうなってるのですかー？」

「これは大きさによって入れられる物が変わるけど、重さは変わらない、食材を保存しても腐食しない便利な魔法の鞆だ」

「ほうほう……それは大変興味深い物ですねー?」

円らな目が商人の目となったシエロカルテを内心ニヤリとほくそ笑み、自慢の道具の売り込みを始めるのだった。

晴天に恵まれた空の世界で新たな島の観光を楽しもうとしている一誠達の一方、地上の世界では不穏な気配が漂っていた。密かに、そして徐々に囁かれてる悪神の代行者たる闇派閥イルヴァイスの使徒が動き出し始めたのだ。

「闇派閥イルヴァイスがダンジョンの中で不審な動きがあり、か」

その雰囲気や気配、もしくは言伝や口伝、風の噂で広まっている闇派閥イルヴァイスの情報を団員達と「ロキ・ファミリア」のホームを改修しているフィンの口から出たその言葉を拾った老兵ドワーフも同意するように声を掛けた。

「奴等が何を企んでおるのか分からんのは重々承知の上じやろ」

「まあ、ね。親指も疼いてないからまだ問題ないと判断していいかもしれない。だけど、ダンジョンの中で不審な動きつてのは気になるけれどね」

「モンスターを乱獲なんてこと闇派閥イルヴァイスがするはずもないじやろうし」
「地上に持ち運んで混沌を齎す意味では可能性ありだね」

もしもフィンの言葉を聞いていた闇派閥イルヴァイスの使徒がいたら「その手があつたかつ!」と嬉々として主神に報告しに行つていただろう。冗談でも言うべきでは無かろうそれはと背筋に薄ら寒い感覚を覚えたガレスはホームを見上げた。

「形になってきおつたがまだまだ掛りそうじやな。修繕費は全額【イシユタル・ファミリア】が払うことになっているもの」
「完璧に治るまでは人の手で加えないといけないからね。これも傲慢をせず初心に戻るって意味だと他の団員達にとっていいことなのかなガレス?」

「真に皮肉なことじやがな」

その一方、『異世界食堂』では。一部、重い雰囲気醸し出して自棄酒をしている客が一人、その客の周りには仲間と思しき四人の男女が慰めていた。『異世界食堂』が開店して以来初めての客であっても店

主達はお節介だろうとさりげなく首を突っ込んでみた。

「どうしましたか？」

「……いや、なんでもないよ」

「この店は笑って酒を飲んで食べる場所だ。そんな大切な物を失ったような雰囲気を出されちゃこちらにも気にするぞ。気にするなと言われる方が無理がある」

注文された料理や酒を置きながら話してみろと催促の言葉をぶつけた。店主の言葉に仲間の男が落ち込んでいる男を一瞥、少し言い辛そうにだが話を打ち明けた。

「こいつ、Lv. 4の冒険者だったんだ」

「第二級か……だったってのは？」

「それが、『ステイタス』が『ファミリア』に入ったばかりの冒険者みたいにLv. 1でアビリティもIに成っていて、発現していた発展アビリティもスキルも綺麗さっぱり消失してたんだ」

「『ステイタス』の初期化？そんなことがあり得るのかと不思議を通り越して疑問を抱き、更に語り続ける男の話に耳を傾ける。

「主神様もかなり驚いたんだ。神々の『恩恵』にこんな異常バグが生じるなんて絶対に有り得ないってよ。でも、実際にこいつは第二級から駆け出しの頃のLv. 1に下がった事実は今でも変わらないし、原因も不明なんだ」

「元のLv. 1に戻れる見込みも皆無ってことか……」

「ああ、俺達は十年前から冒険者やっていて、こいつはLv. 4になったのも最近なんだ。それが突然の『ステイタス』の異常でLv. 1に戻るなんてよ……」

話しの渦中の男と同じで自分の事のように落ち込み、悔しがり言い表せない怒りで歯を噛み締める男の仲間。

「それってどうやって気付いたんですか？」

『下層』に行く途中に遭遇したミノタウロスとの戦闘中だったな……動きにキレがなかったし、愛用の大剣を重たそうに持っていて、ふざけてるのかと思ってたんだがこいつは戦闘でそんなことする奴じゃないし不思議に思ったんだ」

結局ミノタウロスは仲間が倒し、本人の無自覚な体の異常は度々18階層の街リヴィラまで続いて、やはり何かおかしい！と本人の訴えで一度地上に引き返し、「ディアンケヒト・ファミリア」に体の異常を確かめてもらったものの、これといった状態異常は見られず、最後は主神に「ステイタス」を見てもらって……【ステイタス】の初期化、異常バグが発覚したのだと男は言葉を紡ぐ。

「それが今朝のことだからな……主神様もこいつ自身も【ステイタス】の初期化の原因はわからないし、【ステイタス】がこれじゃあ、また一からレベルを上げなきゃならないわけなんだよ」

「それは……誰でも落ち込むな……他の冒険者のスキルや魔法だとは？」

「そりゃ思ってたさ！でも、今日までずっと一緒にいて誰かに襲われたことはなかったよ！地上でもダンジョンでも、だからそれはあり得ないんだ！」

拳をテーブルに叩きつけながら声を張る男の話に、シルと顔を見合わせて残る可能性を挙げて聞いてみた。

「一昨日はダンジョンに行きましたか？」

「行ったぞ。その日一日は今朝みたいな異常はなかったし誰にも襲われなかった」

「じゃあ、皆さん以外に誰かと接触したりとかは？」

「誰かと接触……」

男の仲間は向かいに座っている女に確かめる風に目を向け、記憶を引き出した結果……頭に思い浮かんだ。誰かと接触した時の事を。落ち込んでいた男が吐露した。

「……俺の肩を触ってきた男がいた」

「男が？それは何時だ？」

「……今朝だ、気さくさに声をかけながら『頑張れよ』って肩を触れて街に去っていった」

男は俯いたまま「そういえば、あの時から体の異変が」「まさか、あの男が」とぶつぶつ呟き始めたと思えば、鬼気迫る怖い形相で立ち上がり、仲間をおいて駆け出し店から出ていってしまった。焦燥に駆ら

れて女も追い掛け、男も細かな支払いをする暇もないと机にヴァリスが詰まった亜麻袋を置いて追い掛け始めた。

サイドテールに結った長い茶髪を緩慢的に揺らしながら歩く異世界に来て今年で一年目を迎える拳藤一佳は、大通りに散策をして女冒険者や無所属フッソリの一般人を中心に聞き込みしていた。毎日単純に生きるだけでは駄目だと指摘を受けてから探索以外にも目を向ける大切さがあると仲の良い女友達を誘って出歩いている。同性、異性から話し掛けられる者達は不思議に思いながらも、誰とも隔てなく接する明るさと性格的な言動に警戒をすることもなく質問されたら直ぐに返答する。

「闇派閥イルヴァイスがダンジョンで不審な動きをしてるって噂なら知ってるがなあ」

「最近西の通りに小さな花屋に可愛らしい女の子の小人族バルウムが働くようになってたわ」

「噂だったらあれだろ、『異世界食堂』！あそこの飯と酒は美味くてたまらねえんだ！」

「うっふくんっ、そうねえ〜オラリオの噂なんてきな臭いばかりだから。最近、年齢15歳以下の男の子のお尻を見て笑う不気味な猫キャットピートル人が見掛けるとか話も一度だけ聞くこともあるわあ〜」

「この辺りを張っていれば何時かフィン様に会えるって噂なの。忙しいからごめんなさい」

「ああ？噂だあ〜？そうだなあー今から俺の部屋に来て全裸になりやがれ。そうすりゃ教えてやっても——ぐはっ!?!」

「俺の知り合いから聞いた話なんだけどな。またどこかの「ファミリア」の冒険者が闇討ちされたってよ。『暗黒期』のオラリオの今じゃあ珍しくはないことだけど怖え話だよな。嬢ちゃん達も夜道に歩くときは気を付けな」

「正義の冒険者が悪い人達を倒したところ見たよ！俺も早く大きくなって正義の冒険者になりたいっ！」

様々な噂を聞き、情報を収集すると色々と知ってくることもある。

一部、少女達の体を要求する者もいたが一撃でノされた。それから暑い日差しを受けながらでの活動で露出している肌に汗が浮かび、服の中でもびっしりと濡れた状態で小休憩としてわざわざ『異世界食堂』へ足を運んだ。夏季の時季だろうと熱気に負けず露店を構える商人達や無所属フリーの人達を視界に入れながら横切り、目的の店があるメイנסトリートに足を踏み入れると。店の出入り口の脇を陣取る大きく開いたパラソルと一体化してる席に座っている、いかにも優しい人とは見えないゴロツキやならず者達がビールやかき氷、料理を美味しそうに食べている光景を目の当たりにする。外で食べないといけないくらい中は満席状態なのか?と思いつながら近づいて櫛の木の扉を開けて中に入ったら、ワイワイガヤガヤと店内の雰囲気は客達の喧騒で賑やかになっていた。

「あ、いらつしやいませ」

鈍色の髪と同色の瞳を持つ少女がにこやかに笑みを浮かべながら出迎えに来た。

「何名様ですか?」

「五人です」

「かしこまりました。では、こちらへ」

奥行きの方へ案内する従業員について行くと一佳達全員が座れる席が丁度空いていた。冷房が効いた店の中で食べる食事は久しく、腰を落ち着いて食べられる幸せはまさしく地獄に仏に等しい。こんな店を自分で造り上げた店主はやはり凄いと内心驚嘆の息を漏らしながらメニューが綴られた分厚い本を手に取りページを開く。

「ここかつ、『異世界食堂』・・・儂が求める料理を作るあの料理人がいる店は!」

「はっはっはー、よーやくこれたぜ!今までお預けされた分食べるぞ!なあお前達?」

「はっ!」

「お爺ちゃん、主神。お前達も静かにしてくれ。物凄く注目を浴びてるから」

暑い中でも外フリーデットローブ 套を身に包む格好をしている客達も入ってきた。

オラリオでは見掛けないその人物達は、帝国では知る人ぞ知る王子と前王に主神、三人を護衛する四人の近衛兵達である。

「いらつしやいませ、ようこそ『異世界食堂』へ」

「うむ！ さあ早く席に案内をしてくれぬか。儂はこの日を待っていたのだ」

「申し訳ございません。ただいま席は満席中として、別々の席に座っていたかどうかといけないのですが」

「構わん！」

「でしたらこちらへどうぞ。なのはさん、残りのお客さんの案内をして」

「わかったよ」

栗毛のサイドテーブルに結った少女も動く。別々の席に案内をされる彼等は食べ終え食器が片付けられて、無人の席となった一佳達の席へ案内される。

「少し訪ねていいか」

「はい」

「イツセー……店主は見掛けませんが今日は休みなのか？」

見知らぬ男が口にした人物名に反射的に耳を傾ける、隣に座っていた一佳達。

「ただいま店主は休憩中として」

「そうか。休憩中ならばしょうがない」

「お会いしたのであればそれとなくお伝えしますね？」

「ああ、ダオスと言ってくれば判る筈だ。頼む」

かしこまりましたと従業員が微笑みながら請け負い、ダオスから離れたところで神威を放つ男が好奇心で店内を見渡す。

「ダオス、お前がここで店主を見つけた店なのだな」

「はい、最初に食べたのがビーフシチューとプリンアラモードです」

「プリン！ おお、確かにあるぞ！ 他にカツ丼やそば、かき氷！ どれもこれも懐かしい故郷の物ばかりだなあ……！」

「おめー、絶対にもう十年ぐらいしぶとく生き続けられるだろ。というか、どんだけこいつを夢中にさせるんだ故郷の飯は」

老人のはしやぎように主神の顔は呆れの色が浮かび、生き甲斐を見つけて生き生きとする老人を見たことがないと物珍しいと思うダオス達。身内の多幸福感、歓喜を極まった言動に邪魔はする気ないが幾人かの視線を集めていることに察し、ダオスは前王を宥めに入る。彼等の一連の話を聞き、彼等もこの店の常連客であると認識する一佳等もメニューをどれにしようかと悩み注文が決まったら従業員を喚び出す呼鈴の役割を担うボタンを押そうとしたところで、女性従業員――が伝えたのだろう店主自ら呼ぶ前にやってきた。

「久しぶりだなダオス」

「ああ、お互い息災のようだなによりだ」

世界で唯一の友である店主との再会に心から喜びの微笑みを浮かべたダオス。立って握手を求めると店主が笑みを浮かべて手を握り締め合って応じた。

「それで、注文は決まったか？」

「せっかく再会した友人と少しぐらい語ってはくれないのか？」

「俺もそうしたいところだけどな。他の客が俺のことを見ているから」

チラリと一佳達へ尻目で見られて、当人達はドギマギする。ダオスも改めて彼女達の存在を認識し、店主と知り合いなのかと興味津々に視線を向ける。踵を返して少女達から決まったメニューを問い掛ける店主。

「注文は？」

「え、えと……」

真紅の長髪を一つに結び、眼帯を外していた店主の顔はやはりもう一人の少年と被って見えてしまう錯覚を覚えながら一人一人食べた料理の注文をし終えれば、ダオス達の方へ振り返って同じ言葉を口にする。

「注文は？」

と――いつもの日常といつもの光景を繰り返す一日の最後の締めくくりを迎えるのだが今回は一味違った。一カ月に一度、従業員にとって心待ちにしているものがある。『異世界食堂』の話だけでは無

い。どの店も職も労働者にとって一カ月分の労力に相応の対価を得る日がやってきたのだ。

「それじゃ、今月分の給金を配るぞー」

無人となった店の中でミア達従業員が席に着いて配られる給金を待っていた。膨らんだ亜麻袋を積み上げた席の隣に立つ店主から名指しをされ、立ち上がって近づき給金を受け渡される。

「はいよシル」

「ふふつ、ありがとうございます♪」

ホクホク顔で受け取るシルのあとは猫キャットピープル人の少女が。

「お疲れアーニヤ、これからも頑張って働いてくれ」

そう言いながら猫耳ごと頭に触られて「……ニヤア〜」と擦つたそうに身動きする少女に温かい眼差しを向ける店主(他の猫キャットピープル人の少女達にもした)。

「ほいミア」

「ありがたく貰うよ」

他の従業員より二回り大きい亜麻袋を片手で受け取り、アスナ、レイラも続いて受け取ったら最後は異邦人達だ。

「他の従業員と違って借金の返済のために何割か減ったからそのつもりでな」

その額、一〇〇〇〇〇ヴァリス。

「え……?」

「なんだ、不満か?」

小さくも信じられないと風に吐露した異邦人の少年に話し掛ける店主。少年はそうじゃないと首を横に振って今の心境を口にした。

「てつきり全額返済に宛がわれてるのかと思っただ」

「借金の返済の他にもお前らが一月飲食した費用も引いてそれだ。――

だから神樂何ぎ食費で殆どないに等しい」

その額、一五〇〇〇ヴァリスである。他の誰よりも少なく、神樂の手の中にある亜麻袋は他のと比べれば小さく寂しさを醸しだしている。受け取った当人も沈黙して心なしかしよんぼりしていた。

「いらぬなら、全額返済に宛てるが?」

「い、いや、喜んで貰うから！」

「ちっ」

「いや、そこで舌打ちはどうよ………?」

二人のやり取りはそこままで終わり、次は短めな報告会を始める。「明日から二日間は休みだが、最近妙な事が冒険者の間で起きてるから気を付けること。今回俺から言えることはこれぐらいだな。ミア達は何かあるか?」

「特にこれといった話はないよ」

皆を代表に言うミアのあとにそれぞれ解散。店主ことイツセー、シルは城へ。ミア達は離れの宿屋へと戻りに行く。

「今日も大繁盛でしたねえー。店主……イツセーさんの料理を食べにこられる方が多いです」

「それを足してアスナ達美少女美女を見に来る客もいるしな」

「うふふ、私達だけでなく店主……イツセーさんを会いに来られる女性客もいますよ?」

「うん? そうなのか」

「はい、中には男性の方が熱い視線を………」

「ん、聞かなかったことにするよ」

蒼い宵闇に咲く可憐な花達と帰路に急ぐ。ミア達とは違い少し歩いていかないといけないのだ。だが、別にそうせずとも転移の魔法で戻れば簡単なことなのに今回はそれをせず、のんびりと歩いて戻る一誠に疑問も疑わずついでに行くシル。明日から二日間は休み、ゆとりの時間を得たその日はどう過ごすかという思いをして不意に口にした。

「イツセーさん、皆さんの方はどうですか?」

「………思いつきり楽しんでるな」

分身の一誠の目を繋げて状況を把握するオリジナルの一誠がそう答えた。彼女達が空の世界へ向かったことはシルも知っている。数日は戻って来ないこともだ。

「空の世界、って本当に島が浮いているんですか?あまり想像が出来ないんですけど………」

「ああ、本当に浮いているぞ島が。明日辺りにでもシルも連れて行ってやろうか？」

提案する一誠に目を丸くしたのちに肯定と笑みを浮かべて「はいっ」と微笑んだ。ならば明日は分身体と合流しに行かねばならないな、と次の島はどんどころかと——考えは音もなく建物の屋根から飛び掛かってきた影を察知するまでは止めなかった。シルを押し倒しながら石畳みへ倒れ込み、奇襲してきた影からかわす一誠は警戒しながら不思議に思った。どうして自分に襲いかかるのだろうか。

「いきなりなんだ？」

影の全容を左眼で視認する。顔がバレないようにするための工夫のつもりか、仮面を被っている黒髪の165cm程の身長の方が一誠と対峙する。

「ち、完全にスキをついたと思ったんだけどなあ」

「………？」

「ま、いいや。何時も通りの事を済ませば終わりだからな」

何のことだか分からない。意味不明であれば一誠もやることはただ一つ。相手にするだけ面倒だから転移式魔方陣でさっさと帰るという選択肢だ。

戦いらしい戦いもしないで逃げられた仮面の男は、しばし呆けたがその後悔しげに舌打ちして闇夜に溶け込むようになくなった。

冒険譚 24

引き続きラカムの案内の元で次の島へ向かっている一行は一人の女性の特訓の様子を興味津々だったり暇潰しとして視線を向けてるという一日から始まった。

「それじゃ、魔力操作の基礎を始めようか。俺のことは先生と呼ぶように」

「はい、先生」

教師役は一誠、生徒はアスナ。見学者は多数。二人のやり取り注目するを数多の視線を気にせず、異世界の魔法の扱い方の伝授がされようとしているアスナは期待に満ちた双眸を語ろうとする一誠に真っ直ぐ見詰めて聞く姿勢でいる。

「まずはこんな感じで身体中に宿っている魔力を一カ所に集める訓練をしよう」

真紅色の魔力の塊を掌から浮かべて見せる一誠。そこで当然のごとくアスナが質問した。

「それって感覚的にできるものなの？」

「そうだな。全身で魔力を感じ取って一カ所に集めるイメージをする、という感覚をひたすら慣れる必要があるんだ」

アスナの両手を掴み自身の逞しい胸に押し当てさせる一誠。

「今から体に魔力を巡らせるから感じ取ってくれ。あ、目を瞑ってな」「え？触って判るものなの？」

そう言ったのちに、両の掌から伝わる温かい何かが一誠の内側に流れている気がしたアスナ。これが魔力？と何となくながら感じ取れた大きくて温かい何かの塊をもっと感じようと、瞑目したところで声を掛けられた。

「分かったか」

「うんと……流れる川を触ったような感じがしたかな。それにそれが大きくて温かくも感じた」

「ん、なんとなくてもわかるなら後は今の感覚を忘れずに特訓あるのみだ」

「イメージも大切なんだよね」

「勿論」と首肯する一誠に試しと魔力の操作を始め出すアスナ。私もやってみたいと幼い少女を筆頭に一誠の魔力を感じ取ろうとする。

「ん．．．これがイツセーの魔力？」

「この感覚を参考にすれば魔力を持つ者でも、本来の魔法とは異なる魔法を．．．．．」

「温かい．．．．．」

「．．．．．」

異世界の魔力を通じて、介して何やら掴み掛けているリヴェリア達は手から魔力を出そうとするアスナの真似をして次の島に着くまで各々は独自の特訓をし始めるのだった。当然のごとくアスナ達は四苦八苦した。詠唱の有無問わず、自身の意思で魔力を外部に具現化しようという考えも概念すらなかったことだ。オラリオ最強の魔導士のリヴェリアすら魔法は詠唱の有無問わず放つものだと疑わずにいた故に、自由自在に詠唱無しで魔力を放出する操作は出来ない。出来るまでは数日、数週間も時間を費やすかもしれないと思つた一誠は教えた日に出来る筈がないと必然として予想した。の、はずだが――

「で、出てきた!」

「コツさえ掴めば案外簡単にできるものなのだな」

「おー」

水色、翡翠、そして緑の魔力の小さな塊を手に浮かべて目を皿にした一誠を滅茶苦茶驚かせたのであった。

「適正．．．．．いや、この場合は感覚的に覚えることが長けた天才だからか、という他ないのか」

「．．．．．私、できない」

「私もです．．．．．」

アリサとラトラが心底残念がっていた。魔力が乏しい、もしくは魔力を有していないものではできない話だ。だが、そんな二人にも地上に戻ればある本を読めば可能になると一誠は朗らかに言った。

「魔法を得られる魔導書^{グリモア}つて本を後で読ませてあげるさ。そうすれば

二人にも魔力を手に入れられるぞ」

「!」

態度を一変して目を輝かせた二人の頭を撫でたあと、金髪の少女にあることをしてみせた。

「それが出来たというならば、アイズ。俺からある技法を伝授しよう」
「技法?」

「ああ、『感卦法』という相反する力を融合させる技法だ。今のお前ならそれを挑戦できる」

右手に気、左手に魔力の塊を出してそれを一つに合わせ重ねるように融合させていくと、相反する力の塊が光り輝き始める。

『感卦法』

そしてそれが成功すると一誠の全身は淡い光に包まれるのだった。初めて皆に見させたその技法を発動した男はすらすらと説明口調で紡ぐ。

「これを発動することができれば肉体強化・速度・物理防御・魔法防御・鼓舞・耐熱・耐寒・対毒その他諸々オマケ付きの究極技法だ。ただし相反する力を融合させることで身の内と外に凄まじい力を纏う高難度技法だから習得するのは極めて難しいようだ」

「その口振りでは、お前はあつという間にできたのか?」

「ん、子供の頃にな。魔力と気を合わせたらどうなるんだろう? つて好奇心と興味本位で試したら何かできちゃったんだよな。で、だったら他の人も他者同士でもできるのか試してもらったんだけど意外と成功できた人は少なかつたんだ。できた人はいたことはいただけど」

訊いてきたリヴェリアに昔を思い出しながら語る一誠は不意にアイズとアリサを交互に見る。

「アリサ、気の塊を出してくれるか?」

「んっ」

気であれば特訓した末に出せるようになってるので、アリサは右手に気をだした。

「アイズは左手に魔力を出してくれるか?」

「んっ」

言われた通りにそうすると一誠から「氣と魔力をくつつけ合ってみろ」と促され、その通りにした瞬間だった。バシンツと音が弾け二人の氣と魔力が掻き消えてしまった。

「やっぱダメか」

『感卦法』とやらも何かコツがあるのではないのか？」

「んっ、そのコツも感覚的みたいなもんだからなあ。だから俺から指導できるのはここまでなんだわ」

「じゃあ、イツセーが二人がしたみたいにしてみたら？」

「それで例え成功したとしても俺がいなくてできないんじや意味が無い。だからこれは一人で習得する他ないんだ」

判り切った結果であろうともしかしたらという可能性を考慮して試したが失敗に終わって、リヴェリアからの指摘に首を横に振る一誠はアスナの提案でも拒否する。

「数年後、第一級冒険者になったアイズが『感卦法』を発動した状態で模擬戦をしたら、本当にいい勝負が出来そうな気がするし」

そう言われてしまえば少女は俄然とやる気を出して『感卦法』の習得に精を出して励んだ。アスナ達も魔力の扱い方を学ぶ他、氣のコントロールを教えてもらうアルガナ達やラトラ達。賑やかになってきた甲板に艇の操縦を任されているラカムは「楽しそうだなあー」とポツリと感想を漏らす。

「そっぴいやお前え、どうして次の島を指名したんだ？行ったことが無いんだろ？」

「いや、この空の世界に初めて来た島がそこなんだ。その島を拠点として他の島に行ってたしな」

「ザンクティンゼル、ポート・ブリーズ、フレイメル、アウギユステ以外だったらどこでも行っているってか」

「どこでもないさ。点々と色んな島を巡って旅をしてきたけど途中で止めた」

何でだ？と視線を送るラカムの目は一誠が見つめる先を見て、納得した面持ちになった。アイズ達の存在だ。それだけで旅を止めた理

由は十分である。

「で、なんでまた——なんだ？」

次に行く島の名を口にしたラカムにまだまだ空の彼方に浮いているが肉眼では捉えていない島のことを、遠い目をしながら理由を述べる。

「二カ月程度、俺のこと師事を乞うた学生がいてな。別れる際に数年後にまた会おうって」

そう言っただけしばらく時間が経ち、空の中を突き進むグレートブルーに初めての襲撃が遭った。一番早く気付いたのが必然の如く一誠だった。

「おっ、あれがいるということとはもう少しで島に辿り着くな」

空の彼方へ見つめていた一誠が何かを見つけたようだがアスナの目ではまだ何も映らないでいる。傍にいるアイズ達も小首を傾げる。

「何かいるの？もしかしてモンスター？」

「ああ、まだずっと先だけどこつちに一匹向かって来ているな」

アイズ達にとって初めての空の世界のモンスターとの遭遇。エンカウンター どん

なモンスターが来るのだろうか？と期待感と高揚感で皆、早くも武器を手にとって構えだした（主にアイズとアリサ、アルガナ達アマゾネス）。ドラゴンの恩恵なのか、それとも一誠だからかわからないがやはり驚嘆の息が漏れるアスナ。まだ見ぬモンスターがいるだろう前方に目を見続け、風で亜麻色の髪をたなびかせていた時——ようやく肉眼で捉えることが出来た。近づいてきたソレは、肩口から左右に広がる蝙蝠のような大きな二枚の羽を広げていた。翅の先には巨大な爪が付いている。その爪で牛くらいは掴めそうだ。蜥蜴のような身体をしていて、鱗でびっしりと覆われていた。太陽が昇りきっていて光を浴びて全身が淡い緑色に輝いている。太い二本の後ろ脚と、ひれのように広がった尾を持っていた。

「こいつは……」

「《ワイバーン》だ」

「ワイバーンだと？私を知るアレは紫紺色の飛竜だが……空の世界の飛竜は緑色なのだ。しかもかなり大きい」

「因みに魔石は無い魔物だから急所を狙わない限り倒せないぞ」

最後の言葉は誰に向かって言っているのか——リヴェリアは既に悟っていた。その翡翠の瞳には背中から魔法の翼を生やし、甲板から飛び出して飛翔する目を爛々と輝かす幼い二人の少女がワイバーンへ向かっていく姿が映ったからだ。自ら飛び込んできた獲物に速度を上げて尖った牙の並ぶ口を上下に開き、鱗と同じ色の舌を覗かせて食らわんとする姿勢に入った。そしてどちらを先に噛み砕かんと猛禽類の双眸が泳いだところ——姿が掻き消えた獲物を見失った直後にワイバーンの全身に斬光を残す軌跡が走り、鎌首が胴体から離れた。

「ん、意外と硬くない」

「倒せるね」

肉片と化したワイバーンを見下ろし、手応えの感想を述べながら騎空艇へ舞い戻る。出迎える一誠達。

「初めての空のモンスターはどうだった」

「大丈夫。戦えるよ」

「うん、戦えるよイッセー」

「そうか。次はアルガナ達にも戦わさせてくれ。お前らに出番を取られたから不満がつてるからさ」

そうなのかと女戦士アマゾンネスに顔を向けると彼女等の顔はいつもと変わらない表情だが、曲刀を持つ手が離そうとはしなかった。そして、アイズとアリサに向ける目は少々鋭かった。獲物を横取りされたその心情は表情に出さないが目が訴えていたのだ。それを察する二人は目を泳がして逸らす。

「えと、ところでイッセー。アルビオンって島に行ったことがあるんだよね？ 実際、どんな島なのかな？」

アスナの問いで意識はその問いの返答に変わっては一誠の口から告げられる。

「アルビオンは『騎士の矜持を育む街』でな、故に士官学校がある。だからこれから向かう島には騎士の見習いの学生達が多くいるんだ」

へーとアスナがそう息を漏らし、リヴェリアの中では学区みたいな

ものかと印象を抱いていた。他はチンプンカンプンのようで頭上に「？」を浮かべた。

「アイズ達にも分かるように言えば、上級冒険者並みの実力者になるまで修行する島だよ」

「『「そうなんだ」』』』」

『『神の恩恵』無しでここまで育つのか。一体どうやったならそこまで実力を身につく?』』』」

珍しく興味を抱いたのかアルガナが訊いてきた。「答えたら絶対にやりかねないぞこいつら」と苦笑いしながら返答する。

「街中にモンスターが徘徊しているんだ」

えっ!?!と信じられない言葉を耳にした面々は更に話しの続きを催促、促す声と目を向けたがまた何かを見つめる目付きとなった一誠に訊くことは叶わなかった。

「もう少しでさつきよりも数が多い有翼のモンスターと接触する。戦闘態勢。アルガナ達、思う存分暴れろ」

アルビオンの外縁に佇む二人の少女が吹く風に髪をたなびかせながら空を見上げる。大型の騎空艇に群がる有翼の魔物達を屠る赤い光線が甲板から止む気配なく放たれている光景を視界に入る。小さな影もいくつか宙を舞い翼竜や有翼の魔物を蹂躪しては空の底へと落としていた。

「お姉さま」

「ああ、きつとあの艇に違いないだろう。あの人は騎空艇を手に入れたのだな」

「ふふふつ、あれから自分の騎空艇をお持ちになられるなんて凄いですわ」

「凄くなったのはあれだけか?」

ブロンドヘアーに同色の瞳、凜として整った顔立ちの少女の挑発染みたその問いに「まさか」と金髪紅瞳の少女はくすりと綺麗な微笑みをした。

「私達の凄さもお見えにしないで、この時をどれだけ待ち遠しく焦がれていたのかわかりませんわ」

「その通りだ。では、迎えに行こうか」

「はい、参りましょう」

魔物の群れを撃退しつつ高度を落として島の外壁と同じ高さになった頃。ワイバーン達が去ってゆく。グランブルーは速度を落とし、島へそろそろと近寄っていった。グレートブルーは島にぶつかりそうな位置まで近づいて、浮いているだけの飛行へと移行する。

「主機関部の動力炉を停止する。浮遊状態へと遷移つと」

「屋内にも同じもんを作っているのに甲板にも作る意味あんのか？」

「うん？その日の気分次第で操縦するんだ」

「おい」と操作卓を弄りながらラカムからのツツコミを貰う。島の地の上にぴたりと艇が停止した。炉の立てる音が徐々に小さくなって止まる。全員、今か今かと甲板から島へ視線を落として待ち構えているその間に艇が勝手に空へと漂い出ていかないよう、巨大な鋼鉄の錨を幾つも艇の底から思いっきり下へ落として更に高度を下げる。地上から二Mほどまで低く降下してから一言。

「先に行つていいぞ」

一誠が言つて、アイズ達は甲板から渡り橋を踏んでアルビオンの地を、未到達の空の世界の島の地を踏んだ。

「ここが、アルビオン……」

「風がとても気持ちいい」

「そうだね。なんだか安心できるよ」

彼方に聳える城を見つけるや否や、渡り橋を踏んで降りてくる一誠にあれは何だと尋ねた。

「あれはアルビオン城だ。ここアルビオンは空に浮かぶ城塞そのものなんだ。中央に位置するアルビオン城と、それを取り囲む市街地しか存在しない。それらが丸ごと、ひと塊で空を飛んでいる」

「もしかしてアルビオンって小さい島だったりする？」

「多分な。さて、これからアルビオンの市街地に向かうぞ。何時も通

り皆で自由行動だ。案内役は俺と俺の分身体で構わないな？」

「ああ、そうしてほしい。こうも大人数で集団行動をすれば街の人も邪魔になりかねないだろうからな。それで食事はどこにするのだ？」

ふむ、と浅く思考を巡らせて自分で作るかどこかの店で食べるか——考える仕草をする。

「そう、だな……。久々にあの店で食べようかな？ だけど、まだ残っているのかわからないな」

「お兄様！」

背後から掛けられた声に一同は振り返る。こちらに駆け寄ってくる制服姿の少女が二人、一人は顔色を明るくして笑みを浮かべ、もう一人は真っ直ぐ誰かを見つめて肩を並べて走ってくる。

「誰？」

「お兄様って……」

もしかしなくても、と皆の心の中で思い浮かんだ人物が——皆から離れて前に歩き出す。

「カタリナ、ヴィーラ！」

「お兄様あつ！」

金髪紅瞳の少女が歓喜極まった様子で跳躍し……。一誠の胸の中に飛び込んだ。胸の中で抱き止めながらその場で駒のように数回ほど回りながら髪もたなびかせる。それから止まって二人は笑みを浮かべ合って視線を絡め合う。

「久し振りだなヴィーラ。随分と大きく綺麗に成長したようだな」

「お兄様こそ、あの時よりも素敵になられておりますわ」

「久しぶりだなカタリナ。お前もヴィーラに劣らず綺麗さが磨きかかって成長したか。実力も以前より上がってるようだしな」

「お久しぶりですイツセイさん。はい、ヴィーラ共々以前より大分力を身に付けたかと思っています」

ブロンドヘアの少女を抱擁すると、気恥しそうで頬が主に染まるも嬉しそうに微笑む。釣られて笑み今度は二人同時に抱きしめなが

らポンポンと頭を触れる。

『……………』

親しげに触れ合い、話し合う三人を無言で見つめることしかできないアイズ達。一度訪れた際に出会ったのだろうと察するものの、やはり女か、誰なのか教えてくれないかなーと言う雰囲気は無自覚に醸し出したことでビィが一誠に尋ねる。

「なあなあ、イツセー。この嬢ちゃん達、誰だ？」

ビィの問いに、ヴィーラは一誠の横から飛ぶ小さな魔物を見つめた。すると見られたビィから小さな悲鳴が上がった。少女の紅い目から感情の色と光が消え失せていて、暗い顔と共に笑みを浮かべて言葉を発さず口唇だけを動かした。読唇術の心得がある者がいたらとても信じられない発言だった。

——お兄様との感動の再会に水を差して邪魔する爬虫類もどきが、切り刻んで殺して魔物の餌にして差し上げましょうか……………。

冷たく殺意すら孕んだ紅瞳で何を籠めて口唇のみ動かし言葉を発したのかわからないアスナ達。リヴェリアは若干ヴィーラを視る目を険しくし、危ない思考の持ち主だと認識した。

「ヴィーラ、殺意を消せ。綺麗なお前には似合わないぞ」

「……………」

一誠にバレないよう気を配っていたつもりだったのだろうが、当の本人にはあつきり看破され顔の表情が一瞬だけ強張り、ヴィーラはバツ悪そうにながら兄と慕う者へ謝罪の言葉を述べた。一誠は彼女達の方へ振り返り二人の紹介をする。

「彼女達は現士官学校に在籍している俺の一時だけ師事した関係だな。名前は——」

「カタリナ・アリゼだ」

「……………ヴィーラ・リーリエです」

話の流れに従って名を名乗る二人。カタリナとヴィーラが一誠に師として仰いだ？となればアイズとアリサは——……………。

「先に俺が師として鍛えたのがこの二人で、その後がアイズとアリサだから姉妹弟子の関係だな」

「姉妹弟子……この子達が……」

何とでもなさげに述べた一誠の言葉にカタリナは瞳を自分より年下の少女に向けた。アイズとアリサも興味津々でヴィーラとカタリナを見上げる。

「ん、そうだ。あと数年も経てば剣の達人まで成長するだろうと踏んでいるぐらい、成長が早くてな」

「地上の世界……神々が人々に与える恩恵で、ですよね」

空の世界に住む人間達を知る由もないはずの情報をお口にされた。一誠が教えたのだろう神の恩恵を知っているならば話は早い。

「私達と変わらない姿をしているのだなイツセーさん。少々違うところもあるようだが」

「その気持ちは地上から来た俺達と同じだカタリナ。お互いの世界に存在しない種族が生きているんだからさ。物凄く興味津々だ」

「ふふ、お兄様は初めて出会った時と同じ子供のように好奇心旺盛ですわね」

左手を頬に当て、溜息のような吐息をついたヴィーラ。その目は愛らしいという淡い想いが宿っていることをアスナとリヴェリアは気付いた。先程冷たい殺意を向けていた少女とは思えないギャップだ。

「イツセー？さっきからお兄様と呼ばれているけれど……兄妹じゃないんだよね？」

アスナが恐る恐るとヴィーラを見つめながら訊いた。いや、流石に顔立ちがまるで似てないのだから、それはさすがにないだろう。案の定、ヴィーラが首を横に振った。

「残念ながら、その通りです」

「ヴィーラは純粹に俺のことを兄のように接してくるんだ。カタリナには姉として慕って呼んでいる」

さてと、と話を区切る一誠は二人に促しの言葉を掛けた。

「俺達は市街地に観光をするが二人は学校の方は？」

「イツセーさんが狙ってやってきたのかと思うほど今日は休日の日なのだよ。だから私とヴィーラはイツセーさんとずっと一緒にいられるぞ？約束通り私達と稽古もして欲しいものだが」

「それなら昼食後でも構わないか？この世界の文字を理解できない仲間を連れてきたからさ今回は俺の手料理で食べる予定なんだ」

「まあ、お兄様の手料理なんて楽しみですわ」

嬉しそうに笑みを浮かべて一誠の腕に腕を絡めては寄り添うように密着した。

「うー……！」

「……」

大切な宝物を取られた子供のように羨望の眼差しを送るアイズとアリサだが、久しぶりに再会した師匠と弟子というならばそういう認識をすることでぐつと我慢する。そんな二人を対象的にリヴェリアはアスナにある指摘の言葉を投げかけた。

「気付いているか、アスナ」

リヴェリアがぼそりと言った。

「ええと？」

「あのヴィーラというヒューマンの視線だ」

「あ、はい」

最初は何に対してなのか分からず当惑したが、二言目で察してそれは気付いているとばかりと肯定した。彼女の目はカタリナと一誠しか見ていなかった。周りのアスナ達をまるで影法師か何かのように思っているみたいだった。見えてはいるのだろうが、視てはいない。

先程の態度を考慮すれば彼女は一誠とカタリナだけを認識し、他は路傍に転がっている石に等しいのかもしれない。会話と対応は成立するものの、どこか……他人に対する認識が根本的に低く関心がない気がする。

ヴィーラの瞳にはカタリナと一誠だけしか入っていないのだとアスナとリヴェリアは既に認識していた。露骨ではないのに注意して観察するとアスナの中である事が思い浮かぶ。

「ヤ、ヤンデレな子なんだね……」

「……ヤンデレ？」

アルビオンは他の浮島とは違う特徴がある。ふつうの浮島ならば、

土の固まりである起伏のある大地がまず見えてくる。その広がっている大地の上の殆どは森だったり丘だったり山だったり湖だったり、まれに海だったりする。つまりし今の上にはたいたい大自然が広がっているのだ。建物の立ち並ぶ街は、自然の中にぽつぽつと点在しているものだ。ザンクティンゼルのように。

しかしアルビオンは違う。まず指摘するところは切りだした石の壁で島の外側がぐるりと覆われていることだ。その外周を覆う壁の内側に、丸く築かれた更なる城壁があり、外壁と内壁の間に狭い緑の平野がある。平野には畑や林があるのが見て取れる。そして内壁のなか、島の大部分に当たる円形に切り取られた大地へと目を凝らせば、四角い建物が互いに押し合うようにして立ち並んでいた。

それは街だ。中央には、高い塔を戴く大きな城が聳えていた。島の真ん中に城があり、その周りに同心円状に城下町が存在しているのだ。城塞は、城下町を囲むように築かれており、その外にようやく狭い平地があつて、さらに外がもう島の外周になっているのだ。城と街。それらで島の大部分が占められていた。故に『城砦都市』と呼ばれる所以である。

一行は未だアルビオンの城下町に行かず騎空艇の中で昼食を摂った。異世界の紅茶を提供すればヴィーラは絶賛し、カタリナも笑みを浮かべて妹分の少女とアルビオンで過ごした三年間の出来事を語り掛ける。

「ヴィーラ、勉強の方はどうなんだ？」

「正直、退屈ですわ。先生方の講義は予想以上に凡庸でして聞いていてもつまらないのです。ですからお兄様、少しばかり私と講義を交わしてくれませんか？異世界の魔法の話もまた聞きたいですわ」

「いいぞ。さて、どこからどんな話をしようかな」

「ふふ……」

軽い話に物凄く深い話しを始めて聞いて直ぐに理解に苦しむ者が続出する。リヴェリアも静かに思考を放棄して食事に専念するほどだった。そして程なく昼食を終え一時のゆとりの時間を過ごした後、は艇の傍で模擬戦だった。

二人が携帯している剣を複製し、その武器と——【天使】テ・シューホ化の姿で対峙する。一人、恍惚とした表情を浮かべ熱い吐息を漏らしていたが二振りの剣を構えた一誠に呼応して真剣な面持ちとなる。いくぞ、と脚に力を籠めた瞬間。地を蹴って二人へ跳びかかる。

同時にカタリナとヴィーラも一誠へ跳びかかって四本の剣が火花を散らす鏢迫り合いをしたのは数秒後だ。数度剣撃を切り結び、押し退け合いすぎさま距離を取ると二つの剣に神々しく光る白と電気が迸りながら黄色く染まっていく、一誠の得物を見て二人もそれぞれ手元に剣を寄せたり天を突くように剣を掲げると——剣身に鏢まで水色と赤紫に染まっていった。

「いくぞヴィーラ」

「ええ、お姉さま」

待ち構える相手に華奢な脚を動かして、左右へ大きく広げた六対十二枚の翼から雷を纏う光の弾丸を数多に放つ一誠の攻撃をさばきながら懐に飛び込まんと肉薄仕掛る。ある程度まで距離を縮めてきた少女達に薄く笑みを浮かべ、雷光の攻撃を止め、全身に雷を纏い迸らせながら自ら距離を縮めた。

「ぐっ!?!」

振り下ろされた剣に下から振り上げた同じ素材で製作された剣が剣とぶつかり、大人と子供、男女の腕力の差で押し負けて表情を険しくするカタリナが地面に膝をついた。その間にヴィーラが踊るように身体を駆使し、幾度も剣を振るい何度も彼女の一撃一撃を難なく片手で防いで金属同士の甲高い音を鳴らす。

「どうしたカタリナ。お前の剣技はこの程度では無いだろうか?」

「もちろん、だっ!」

受け止める力を故意で緩め、上からの圧力が籠っていた剣身がそのままカタリナに落ちてくる直前。柄を強く握り締め直し剣身を斜め横にずらし、自分の身を裂く剣の軌道を逸らす。がら空きの胴体がブロンドヘアーと同色の瞳に飛び込んだ。攻め立てるなら今だ、と思いを籠めた剣の切っ先を振るおうとした腕が硬直する。

顎下から凄まじい衝撃が襲って来て視界がブレた。第三者のアイ

ズ達から見れば、一誠が膝蹴りをカタリナの顎に食らわしたのが視界に入つて、あつ、と言う声をあげた。仰け反る身体、持ち直した剣で横薙ぎに振られ胴体に叩き込まれた矢先、体に纏っていた雷が彼女にも伝わって雷撃が襲った。同時に片手で対応していた剣はもう一本増え、ヴィーラは間もなく雷撃のダメージを受けカタリナ同様に地に平伏した。

「……まだまだだな私達は。歯牙もかけさせてくれないとあらば尚更にな」

「それでも確かに強くなつてるさ。カタリナに一本取られかけたし、ヴィーラには三年前より情熱的な攻撃だった。鋭く、一瞬の油断もできなくなつてきている。未来の騎士として成長している」

「ありがとうございます」

回復魔法を施しながら感想を述べ、カタリナの顎に手を添えて淡い光を当てて癒している最中。ジツとブロンドヘアの少女の顔を見て不意に声を零した。

「見ない間に成長するもんなんだな人つて」

「うむ？」

「ん、なに。髪が短かった頃のカタリナと思ひ比べていただけだ」

「そうですね。当時のお姉さまも凛々しくて素敵ですが、背中まで髪が伸びたお姉さまもまた凛々しくて素敵ですわ」

微笑みながら同意するヴィーラにも言われ、こそばゆさを覚えたか頬をポリポリと搔いてどこか照れ臭そうだった。

「そうなる数年後はもつと凛々しさが磨きかかつて美しい女性として成長するよな」

「ええ、間違いなく。ですが、お姉さまの美しさに惑わされて付き纏う変な害虫が現れると思うとヴィーラはとても心配ですわ」

「そうだなー。その男のせいでカタリナの人生が台無しにされたと思うと目も当てられないな。カタリナを崇拜する女性だけの騎士団つてのは結成できないのかヴィーラ？ そうすればブ男やモブ男達が簡単に近づいて来られないだろ」

「とても魅力的な提案ですわ。何時か必ず実現してみせましょう」

羞恥でいっぱいな当人の前でアレコレと楽しげに語り合い、「ふ、二人共。もう、その話は止めてくれ」と言われるまで続いたのだった。「さて、そろそろアルビオンの市街地へ観光しに行く前にカタリナ。今年で卒業するんだろ？」

「ああ、そうだ。そしたら何処かの島に渡り、その島の軍に入るか騎空艇に乗り込んで弱き民を護るために戦いたい」

「騎空艇、騎空士か？ だったら心当たりあるぞお前が良ければの話だな」

そう言つて金髪の少女ジータと操舵士のラカムにそれぞれ指した。

「あの女の子ジータって言うんだけどいつか島から飛び出て空の世界を旅するのが夢だ。そんであの男ラカムには修理中だけど自分の艇を持つている。カタリナの夢に入れても良いなら仲間に加えることをお勧めするぞ」

「そうなのか……」

「ま、顔合わせはできたんだ。後のことはカタリナ自身が決めるんだな」

二つの手を穴が開いた空間に突っ込んで何かを取り出した仕草をする。穴から腕を引き抜いて掴んでいた物を二人に向けて突き出す。

「受け取れ」

それは二振りの剣だった。青と赤の魔法石が柄の部分に埋め込まれており、その魔法石と同色の剣が少女達の手の中に収まる。

「イツセーさん……この剣は……?」

「俺が打った剣だ。使い手の元素属性が大幅に強化されるようにした上で鍛冶の神様からお墨付きをもらっている。カタリナの卒業祝いとしての贈り物とヴィーラへの贈り物だ。気に入るかどうかわからないがいらぬなら処分しても構わない」

何時の間にそんな武器を作っていたのだろうかと思議で堪らない一行の気持ちを露知らず、与えられた二人は感嘆の息を漏らし、鞘も受け取って剣を腰に佩き、ようやく一誠等はアルビオンの観光をしに行くのだった。

冒険譚 25

その日は不吉な予感の前触れを醸し出すような暗雲が太陽光を遮った曇り空だった。天候は崩れ、一雨来そうな灰色の雲ばかりが漂い、空を覆う様を地上からも見てわかる。人の憂鬱な気分を表すかのような天気の下で今日も過ごすオラリオでは……ちよつとした騒動が一人の男を中心に起きたのだった。

西側のメインストリートの路地裏の先で店舗兼本拠ホームを構えている「ファミリア」があった。

「……………」

二十歳も満たない獣人の少女が真剣な表情で一人、作業部屋で何かの薬品らしき硝子製の瓶の中にある液体を見つめていた。自作した道具アイテムの精度はそれほど高くないが、それに補う強い思いが込められていた。これをあの人に飲んで欲しいとために作り上げた少女はキュツと蓋したところで来訪者が呼ぶ声を獣耳が拾った。ただの来訪者では無い。主神の男神や同派閥の男性の先輩以外それなりに付き合いが長い最近気になる来訪者だ。作業部屋を後にして一つしかない出入り口の方へと赴き、いつも通りのやり取りをしたら完成したばかりの作品を渡そうと考えた。

そして……………」

「……………ナアーザよ。その子は誰なのだ？」

「……………イツセー、です」

「あう〜」

物凄く困り顔で生まれたばかりの赤子を腕の中に抱える少女に相談される未来は直ぐであった。

「……………とんでもないことをしてくれたな」

ミアハ、そしてナアーザは『異世界食堂』へ訪ねるや否や、赤子を一瞥してから開口一番に分身体店の店主が顔に手を当てて困惑の色を顔に浮かべられた。その後、まだ店を開く前の時間帯故に従業員達は開店の準備に忙しそうに動き回っている一階で二人から事の経緯を

事情聴取。本当に困った風に溜息を漏らした。

「すまない、聞いてもよいか。どうしてそなたがここにいる？この赤子はイツセーだとナーザから聞いているのだが」

「俺はオリジナル——赤子になったイツセーの魔法で作られた分身体だ。オリジナルの身に何があるうと魔力の塊であるこの体はちよつとやそつとじゃあ消えたりしないんだ。ただし、この体を維持していられるのもそう長くないんだ。それまで二人はオリジナルの俺を元の体に戻す薬の製作をしてもらいたい」

「そなたに迷惑を掛けた以上勿論そうする。ナーザが使用した素材を元に「ファミア」総出で完成しよう」

「頼んだぞ？本当に頼むぞ？オリジナルがこのまま戻らなくならない未来なんて結果になったら・・・ミアハを天界に送還して「ファミア」を潰すからな？ロキとフレイヤに頼んで」

「全力でやらせてもらおう！」

ミアハとナーザはすぐさま行動に出た。出て行った二人に置いていかれた赤子の一誠は店主の腕の中で呑気にスヤスヤと寝ている。身の危険すら感じない赤子にこの時ばかりは自分自身に呆れる他ない。しかし、ミアハ達が薬を完成するまで何が何でも守らなければならない。

「・・・で、何時まで盗み聞きしているつもりだ」

さつきから店主の死角の位置で姿を隠し、気配を殺そうとしているがバレバレな従業員達に向かって別の意味で呆れながらそう指摘すると、ギクツと気配が震えた。もう一度溜息吐く店主。

「さつきと働け！今日の賄いと今月分の給金、無しにするぞ！」

シルを筆頭に従業員達は蜘蛛の子が散る様にして動き出す。が、二人ほど店主に近づき腕の中の赤子を一瞥して話しかける。

「その赤ちゃん・・・イツセー様なのですか？」

「・・・ああ、信じたくないけどな」

「あなただっただらなとかできないの？」

「無理だ。オリジナルの身体能力と魔力だけ引き継いでいる俺達分身体じゃどうすることもできないんだ」

意外な欠点を知ったアスナとレイラ。特にアスナは本来の力を発揮できないある意味今の分身体の店主は魔力しか持たない魔法使いみたいだと印象を抱いた。であれば、赤子になってしまったオリジナルはしばらくこのままの姿……。

「う〜？」

目を覚ました赤子がジツと三人を不思議そうに見上げて見つめる。その視線と愛らしい姿にアスナとレイラの母性が刺激された。抱きしめたい、可愛がりたいと言う思いが二人の背中を押して突き動かす。

「ね、ねえ……イッセー。その、抱かせてもらっていいかな？」

「あの、私も……」

明らかに好奇心に撥られると見受けられる。赤子が元の体に戻るまでの間……女性を中心に騒ぎになるのは火を見るより明らかになるだろうと分身体の店主はふかい溜息を吐いたのであった。

「休憩中だったらいい」

『異世界食堂』の常連客達は奇異的な眼差しを店主が動く度に送る。店主自身は何ら変わりなく注文された料理を運んだり客達からの注文を受けたりしている。その姿も変わらない。変わらないが……背中に背負っている赤子は誰なんだ？と客一同はそう思わずにはいられなかった。もしや店主の子供か？と勘繰る者も少なくない。聞きたいが訊きにくい。否、訊ねようとする姿勢の客達がいたら、何も聞くなどという笑顔と共に圧力のオーラが向けられて誰一人畏怖して聞けないでいるのだ。赤子の方は客達へつぶらな瞳を好奇心でキラキラと輝かせていた。自分に意識を向けていると分かったエルフの女性客は小さく手を振ると、赤子は「うー！」と小さな手を一生懸命振るって笑顔を浮かべて応じる姿に、ボツと尖った耳先まで紅潮しては「ヤバイ、か、可愛い……っ」と肩を震わせる。その余波で他の客達の顔は優しげで温かな眼差しを向け始める。

「アンタも意外と苦労することあるんだねえ……」

「何しめじみとして言ってくれやがるんだ。おい、その優しい目付き

で俺を見るな。俺が俺自身をお守をするなんて微妙なんだぞ」

厨房の裏にある奥行きの高い部屋で休憩中にて、ミアと数人の従業員達が店主に近づき交代制で赤子を抱く。特に獣人の従業員の耳と尻尾が気に入ったのか、触れると天使の微笑み如く可愛らしく笑って彼女達の顔を紅くさせる。

「でも大丈夫なのかい。あの赤ん坊はアンタ自身なんだろう？」

「しばらく様子を見るしかない。こんな経験は生まれて初めてだから慎重にいかないと。【ミアハ・ファミリア】が何とかしてもらおう他なしな」

何とかならなくなったら俺はこの世から消える。と付け加えて言
い事の重大を醸し出させる。

「【ディアンケヒト・ファミリア】にも頼んでみたらどうだい」

「呪いの類ではないんだが……まあ、一応頼んでみる」

「そうしな。じやなきや一体誰が元に戻らなくなってしまっ
て赤ん坊になった店主を育てるんだって話だよ」

「……自分色に染めることが出来て自分好みに育てられると知
たら、ロキ達は争奪戦をしかねないか」

「……同情するよ」

杞憂する分身体の店主に憐れとミアは直接何もせず見守る姿勢で構える。そして……オリジナルの一誠が赤子になったことでその影響が他にも及んでいることを知った。『幽玄の白天城』が再び堂々と都市に姿を見せていたのだった。そのことを客達の会話で知り、ますます楽観的にいられなくなった分身体は協力者を仰いだ。

「……なるほど、事情は概ねわかりました。協力しましょう」

「……」

「すまん。マジで助かる」

【ヘルメス・ファミリア】からアスファイ・アル・アンドロメダ。【ディアンケヒト・ファミリア】からアミッド・テアナサーレに声を掛けて事情を説明し快く協力の申し出を受け入れてくれた。腕の中に眠る赤子が一誠だと、その理由を説明して納得の一言で理解し、事の大変さは彼女達にも伝わった。因みに現在いる場所は【ディアンケヒト・

ファミリア」の施設奥の商談部屋だ。

「しかし、薬品を飲み赤子になるとは【ミアハ・ファミリア】も変わった作品を作りましたね」

「本人曰く栄養が摂れるポーションを作ったつもりだったらしいけど、分身体の俺自身も驚きの結果だ」

「確かに、試飲も怠ったのが原因でしょうが。その薬をさらに調整・改良したら若返りの薬が出来上がるかもしれないですね」

そういう見解もできるアスフィにやはり複雑極まりない分身体は、先程から無言を貫いているアミッドに話しかけた。

「アミッド、さつきから黙ってるけどそんなに気になるのか？」

「あ、すみません……はい、とても……」

「……診査、してくれるか？」

暗に抱いてみるかという提案と共に一誠を差しだすと、華奢な細い腕がアミッドから伸びて受け取ろうとすると健康的な赤子並みに体重の重さで、両の腕がプルプルと震える。見かねたアスフィが下から支えて二人の膝まで引き寄せた。

「うっ」

つぶらな瞳がパチクリと開く。視界に飛び込んできた二人の少女の顔を見て、「あく♪」と精一杯小さな手を伸ばす。そんな赤子に敵わない人はいないだろう。二人も例から零れず人差し指を出して近づけると、小さくて温かい手に握り締められてほっこりとした優しい顔つきになった。

「……可愛いですね」

「……はい、イツセーさんが赤ちゃんだった頃はこんな風だったんですね」

「……何でだ。事は緊急事態なのに気恥しい思いをしなくちゃいけないんだ？」

その後、主神ディアンケヒトに断りを貰い二人を連れて【ミアハ・ファミリア】のホームへと赴き、二人の協力も加えて本格的な作業を始めてもらった。必要な素材があれば惜しみなく提供すると伝え残してホームを後にし、路地裏から出た直後……。

「む、そこにいるのは俺の【象神の料理番長】ではないか！」

高らかに二つ名を言ってくる男神とその眷族達一行と鉢合わせした。南部のメインストリートでホームを構える【ガネーシャ・ファミリア】達が総出でなくても十人以上はいてどうしてこの場にいるのだろうかと疑問符を浮かべる。

「ガネーシャ？というか、俺の二つ名は決まってないのにその名前を言っているのか？」

「今のお前はこのガネーシャの眷族！誰が文句を言おうと関係なく言わせてもらうことにした！」

「あ、そう……。それで、偶然出会ったんだよな？珍しく団長以外の団員を引き連れてさ」

「ある意味偶然、しかし必然だ！お前のホームがまた忽然と見えるようになったのでな。ギルドから【強制任務】^{ミッシェン}が敷かれる前に【ガネーシャ・ファミリア】が動くことにした！何せお前は俺の眷族だからな！」

ギルドがもう一度『幽玄の白天城』の搜索の依頼を各【ファミリア】に発令するかもしれない。そうガネーシャは考えてシヤクテイ等を引き連れてここに来たのだと納得した分身の一誠。一々変な姿勢^{ポーズ}をして説明するのはこの際目を瞑ろう。自分の為に動いてくれた主に感謝の念をするのが当然なのだから。

「だが、お前は変わった様子ではないようだが何が遭ったのだ？」
「ん」

ガネーシャ達に背負っている赤子の存在を示す。最初はキョトンとして、次第に分身体と赤子を交互に見比べ「えっ？」と漏らした。「俺は店で働いているイツセーの魔法で作られた分身の方だ。で、この赤子がイツセーなんだ。薬を飲んで赤子まで若返ってしまったんだよ」

「……マジで？」

「ああ、大マジだ。今、【ミアハ・ファミリア】と【ヘルメス・ファミリア】に【ディアンケヒト・ファミリア】に協力を要請して元に戻る薬を製作してもらっているところだ。真実を知りたいなら【ミアハ・

ファミリア」のホームに行ってくれ」

ガネーシヤの眷族の一人が裏を取りに路地裏へ向かった。それからしばらくすると戻って来て真であるという報が届く。頷くシヤクティは更に問いかけた。

「あのホームを隠していた本人がそんな姿では流石に隠す物も隠せなくなるのだな。ではお前は？」

「俺自身は魔力の塊だ。しばらくはこうして居て立っていられるが、極力魔法も使いたくない。消費した傍から消えてしまう期日が早まるからな」

「お前自身が何とかできないのか」

「できたらとつくにしているさ」

お手上げ状態だと肩を竦める分身体に「それもそうか」と納得する麗人の団長の傍から離れ、ガネーシヤが近づいてきた。

「ほほう、イツセーの赤ん坊だった頃はこんなに可愛いのだな」

「今眠っているんだから騒ぐなよ」

「では触る」

「それも駄目だ」

そんなことをしていると、北西の『冒険者通り』に更に冒険者達が集まってきた。とは言っても……。

「おや、イツセー？それに神ガネーシヤ達もどうしてここに？」

「ホームがまた見えて何か遭ったと思っただけで来てみたら……」

「あら？その可愛い赤ちゃんはどうしたの？」

馴染みある「ファミリア」の主神や団員達が集まって来ては不思議そうに分身体達へ視線を送る。

結果、落ち着いた場所でまた説明をしなくてはならなくなった。

『幽玄の白天城』の中で一誠が赤子になった経緯を説明すると皆驚きを露わにして、フワフワモコモコの寝台に寝かされて一誠に視線を向ける。そこにはフィン達が囲んで見下ろし、見守っている姿があった。今は熟睡している様子で周りの視線を気にせず夢の中へ旅立っている。

「はあ……」

「フレイヤが物凄くうつとりしちやっているけれど大丈夫なの？」

「平常運転や。気にしてもしよーもないで。それよりもこれからどうするん？」

「どうもこうも俺が何もできなきや製薬してくれているミアハ達に任せるしかない。それより、このホームの警備をしてくれるって？」

「ガネーシャ・ファミリア」だけでなく、「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」も団員達を連れて来ていた。目的は異変の調査と警備。異変の方は分身体の店主から説明を受けて問題ない。問題ないが、未だに元に戻る気配のない当人が赤子のままではホームを隠すことが出来ない。ロキとフレイヤは意味深に顔を見合わせて頷き合うと今後、一誠が復調まではホームを守る団員を派遣すると申し出たのだ。それには分身体もありがたかった。金属の^ゴ人形兵^レで近辺に配置しようかと考えていたが信頼する「ファミリア」にも守ってくれると安心できる。

「せや、ここは一つうちらに甘えてもらおうで？赤ん坊になつてしまおう
たイツセーすら護れへんようじゃあうちらは最大派閥の名折れやし、
フィン達も「ファミリア」総出で守るはずや」

「第二級の子供達にしてもらうから安心してね？」

「そういうことだったたら私も【ファミリア】で打った武器を提供しま
しようかしら。第二等級でよければだけど」

「俺達も負けておれんぞシヤクテイ！」

「わかつてるよ。こちらも団員を派遣する」

「じゃあ、私もロキ達の子供の為に炊き出ししてあげましょうかしら」
と、思ったが……過剰に団員達を近辺に配置したら「何かと
んでもない物を隠しているんじゃない？」と疑われかねないのではないかと
と安心から心配してしまった。

「交代制で頼むぞ」

任された、と揃って頷く男神と女神達。当神達も元からそうするつ
もりだったようで直ぐにローテンションの決め合いを始めた、その時
だった。ロキの腕輪に通信を受信した。宝玉に触れて相手と通信状

態できるようにするとガレスの顔が映像に映り出した。

『ロキ！すまぬそちらにあの転生者三人が入り込んでしもうたわ！』

「は、はあっ!？」

『警告をしたが無視され一戦を交えた後に突破されてしまい、今追いかけておる！』

なんやてっ!?!と素っ頓狂に驚愕するロキを始め、フレイヤとヘファイストスは目を細める。デメテルとアストレアは分身体を見つめた。「……興味本位で乗り込んできたか。悪いがオリジナルの代わりに大切なものを手出すようなら容赦する気はない」

席から立ち上がって行動する分身体にフィン達は顔を見合わせ、得物を片手に追従する動きをする。

単なる好奇心だった。突如バベルの塔の次に高い建造物が見えるようになってあそこに何があるのだろうかとうと向かうと複数の派閥がその建造物を守るように立っていた。中には自分達が負かした団員達がいる。近づくと臨戦態勢の構えをされ警告してきたが、羽虫を払うように薙ぎ払い巨大な壁を破壊して突破してみると自然豊かで巨大な木々が群生していた。追いかけてくる連中を無視して前方へ進むとダンジョン原産の植物等に囲まれてる直径一〇〇Mの湖がある広い空間に辿り着いた。

「おい、アレ見ろよ。宝石が実になってるぜ」

「もしかしなくても売れば儲かるな」

「成程、連中が守っていた理由は金になる物を育てていたからか」

ならば一見葉っぱや木の実しか見えない物らも売れば高く買い取ってくれるだろうと一人はガレス達の相手を、残りの二人は採取を始めた。現在の「イシユタル・ファミア」は火の車どころか山火事状態だ。二大派閥のホームの修理費に迷惑を受けた「ファミア」から謝礼と慰謝料に膨大な金額を要求、私財を貯め込んでいた宝物庫や個神的な宝物を全て没収され来る日も来る日も金を集める日々を過ごす羽目になっている。転生者三人もそうだ。恩恵を受けてから休む暇もなく働かされ、転移の魔法で都合のいい便利な魔法として酷使

されている。三人の転生者を中心に『深層』へ進出し、ウダイオスも攻略してみせているから尚更だ。だからこそか、神の特典で最強や無敵に等しい力を得た者として馬車馬のごとく扱われ、こき使われるのが堪らなく嫌になってくる。神に対する忠誠心や恩義など一欠けらもない彼等からすれば宿屋の主人程度の認識だ。律儀に従う理由もなければ守る理由もない。ので、三人は企てた。オラリオから離れて好き勝手に生きてみよう。その為には軍資金や物資が必要になるので準備を始めていたのだ。自分達の魂を奪って恐喝する男は特に何も言つてこないして来ない。彼の男の知り合いや仲間の女に手を出さなければ放置するのだと分かってきたのは何時だったか。それを逆手に動けば自分達は晴れて自由の身、という認識をして行動に移った。

「おい、まだか？ いい加減相手にするのが面倒になってきたぞ！」

「あともーちよつと！」

「というか、あいつらをこっから追い出して俺達だけの箱庭にしね？」
巨大な大木をへし折つてガレス達を妨害したり、風をベクトルして嵐に変換、それを冒険者達に向けて攻撃して吹き飛ばす。それらを掻い潜る冒険者——殺気を転生者に向け獲物に殺意を孕ませるフレイヤの第一級の眷族達が雪辱を晴らさんと襲いかかる。

「はははっ！ どうしたどうした、前と変わらず全然お前等の武器は当たらず通用しねえし成長してねえな！」

「——君以外はどうかやら通用するようだけどね」

「あ？」

静かに囁かれるように発された声の主へ振り返った転生者。金目になる物を採取していた二人の転生者達も声がした方へ振り向く。聳え立つ断崖絶壁から降りてくる黄金色の髪に碧眼の小人族パルツムと錆色の短髪から猪耳を生やし岩のような身体を持つ、二Mを超す獣人がそれぞれ二人の前に降り立った瞬間。応戦する間もなく槍と大剣による見えない一撃で地に平伏された。不死の体にどれだけ死にいたる傷を負おうと直ぐに再生する。ならば意識を狩るだけなら簡単に倒せるぞ、と教えてくれた男の言うとおりの方法で対処した。

「前は確かに君達に負けたのは事実で否定しないけど、成長していないのはお互い様じゃないかな？」

「……てめえらっ」

「ここから直ぐに去ると言うならこれ以上僕等から何もしないよ。そうしたほうがいいとお勧めもする」

オツタルが無造作に二人を掴み健在の転生者の方へ放り投げた。

「ここは君達を倒した男が住んでいる。荒らされた庭のことは僕等から説得しよう。だから去った方が君達の身の為になるよ？」

「俺達を倒した男だと……」

脳裏に浮かぶ真紅の長髪に隻眼の男。思い出ただけで湯が沸騰した風に怒りがこみ上げ、二人が降りてきた崖の上を睨みつける。

「——君達の命を握り潰されて死にたいなら構わないけどね」

最終警告として告げるフィン。転生者もそれを察して奥歯を噛み締め、弱みを握られた者の行動はとも從順だ。気絶した仲間を掴んで「何時か必ず殺してやる！」と捨て台詞を言い残して空へと飛んで行った。その様子を見届けるフィンは安堵で胸を撫で下ろす気分になり、浸り上にいる主神達に報告を入れる。

「そうか。よくやったで」

問題は解決したと下から報告を受けるロキ。まさか転生者がここに乗り込んでくるとは予想外だったと誰もが思い、赤子になった一誠はリヴェリアを筆頭として武装した女性団員達に囲まれて守られていた。

「だ、そうやで？」

「……壊されたところはそのままだな。森の方は伐採する他ない」

「あー、どんまい」

転生者が暴れた爪痕は浅くない。後処理が待っている分身体に他人事ではいられないロキは同情する。同じ目に遭った神として気持ち解るのだから。

庭の爪痕の処理をし終えて夜を迎えた。その間に一つだけ分かったことがある。分身体でも特典を発動できることだ。これはありがたい、ものすごくありがたかった。早速粉ミルクやら哺乳瓶やら必

要なもの全て購入して本格的に育てるつもりはないが飢餓の心配をなくした。

「「「「.....」」」」

適度な温度のミルクを瓶に入れて赤子になった一誠に与えようとする。何故か数多の視線が突き刺さる。なんだ、と無言で見返せば代表者アイズが口を開いた。

「やりたい」

「世話を？」

「んっ」

精一杯腕を伸ばす少女から目を離しアリサ達を見やると、「とても興味があります」といった好奇心と興味津々の眼差しを向けてくる。

お前等もか.....。

「.....ほら」

己の膝にポンと触れ座れと促せば、分身体の膝の上に薄い臀部を乗せるアイズは仕方を教わりつつ支えられながら赤子にミルクを与える行為を体験することが出来た。己の腕の中で一生懸命ミルクを飲む赤子の姿、アイズ・ヴァレンシユタイン今年で10歳になる少女は、生後不明の赤子の可愛らしさに顔を輝かす。胸がキュンキュンとしてしようがない。母性がこれでもかと擦られた。

「あ、あの。私もあげてみたいっ」

「イツセー、私もしてみたいな」

アイズだけじゃなかった。アリサ達も目を爛々と輝かせて乞うてくるが、赤子の方はミルクを飲みほして小さなげつぶをした。誰が見てももうお代りはいらないと満腹感の表情を浮かべた。

「腹いっぱいようだ」

「.....アイズ、ズルいよ」

「薬が完成するまではオリジナルはこの姿だ。あげる機会が訪れるから我慢しろ」

羨望の眼差しをしますアリサを宥め、今度は風呂だなど思い立って腰を上げた瞬間。一々反応する女性達。

「お風呂？」

アスナの一言で、アイズ達だけでなく一部の女神と男神を除いて妖しい光を目から輝かす。これは……面倒な事が起きる前兆だと分身は悟ってしまった。

翌朝——誰がミルクをあげるかジャンケン大会で勝利をもぎ取ったアリシア。母親みたいに慈愛で満ちた表情をしてロキにからかわれ赤面するエルフの少女で始まり朝を迎えた。

「本当に大丈夫なんだな？」

「任せて。育児のやり方を載っている本もあるからそれを参考にして育てるから」

「……まるでアスナの子供みたいなのを言うな」

自覚のない誤解を招く言い方をする本人と他数名の強い希望で世話を任せることにした分身体。指摘を受けたアスナは顔を赤くしながらも「ミアハ・ファミリア」に顔を出してから店へ向かう男を見送る。そして、城からいなくなった途端アスナは走り出してリビングキッチンに入るや否や、皆に構われてる赤子へ話しかけた。

「イツセーちゃん、今日はお姉さん達と一緒に遊びましょうね？」

「あうー」

アスナの腕の中に渡る赤子はずっしりと確かな重みを感じさせた。何時か自分も新たな生命を産みだした時の重みはこんな感じなのだろうかと思いつつ優しい笑みを浮かべる。アスナだけでない。一人残らず女性達の腕の中に渡りほっこりと温かな気持ちをさせた。特にフレイヤが抱えた時などオツタルですら見たことが無い心の底から優しく柔らかい笑みを浮かべた。彼女の瞳に映る一誠の魂の色はダイヤモンドのような輝きを放っていた、それも透明度の高い輝きを。彼だからか、それとも他の赤ん坊もそうなのか分からないがやはり美の女神を夢中にし虜にさせている者は、もしかしたら後にも先にもこの子だけだろう。断言する。こうしてさり気無く『魅了』を放つても赤子は一瞬でも自分に魅入る様子は無い。

「ふふ、可愛いわ」

可愛い、確かに誰もがそう思うだろう。——七つの夜明けを無意味に重ねてしまったまでは。

冒険譚26

交代制でお世話をするにも『家に引き籠るばかりでは赤子を育てる環境としてはあまりよくない』と、そう綴られていたのでまだ夏の暑さが残っている外へと外出をすることにした。その際、誰が一緒に出かけるのか決め合ったところ。

「アイズとアリサ、ラトラ達は勉強会だ」

「ダンジョンに行ってくる」

「手前もしばらく工房に籠らんといかん」

「はあ、こういう時に限って永久社長として仕事があるから構ってられないわね」

「うちはホームに戻るで」

「バベルに行ってくるわ。何か遭ったら直ぐに塔の最上階まで来なさいね?」

イツセーのお世話ー、と五人の少女達がハイエルフに引きずられて勉強部屋へと連行される。フィリアも従う。女戦士達はダンジョン、レイラは『異世界食堂』へ。アスナを残し所用だったり仕事だったり都合があつて一誠の世話を断念せざるを得ない同居人達を見送り……自分以外残っている者と言えば「ロキ・ファミリア」の女性団員達だけだ。その内の一人、エルフの少女に目が合った。

「付き合わせてごめんね」

「いえ、城に居ても何もせずにはいますから」

「こういう時こそ少しでも手助けができるなら私達も動かないと駄目ですからね」

アリシア・フォレストライト、アナキティ・オータム。エルフと

猫^{キャットピール}人を両脇に固めて外出をするアスナ。一誠は暑い日差しを遮るベビーカーに入れられてる。ガラガラと車輪を石畳の上に転がし、ベ

ビーカーを動かしながら移動するアスナに声を掛けられた獣人と^{デミ・ヒュマン}巫人は懇意で同伴して、『冒険者通り』を歩いている。目的は買い物だ。

「本当にこの赤ちゃんがあの人とは思えないなあ……」

「ええ、とても信じられませんが、イツセーさんが虚言をする人ではないですし」

歩きながら横から覗き込む四つの目からの視線は赤子のつぶらな瞳の視線とぶつかり、やはりとても一誠が赤ん坊になってこの可愛らしさなんて目を疑う。そのままの姿勢で歩いたら転けそうになって姿勢を正す。

「でも、神様達が確認したんだよね？」

「はい、リヴェリア様も確認した上で仰りました。刻まれた『恩恵』の真名は間違いなくイツセーさんだと」

『恩恵』で証明したから疑えないけれどやっぱりねえ……」

ギャップが凄すぎる。とアナキティがそう言いたいのをアスナは察した。実際アスナも感じているのだこの激しいギャップに。

「昔のイツセーを知らないから戸惑うのも無理はないかもね」

「そうですね」

「というか、そんな人オラリオにいるのかしら？」

素朴な疑問を吐露した黒髪黒眼の黒^{キヤットヒール}猫で不意に脳裏で浮かぶは自分と同じ異邦人達の顔。だが、彼等彼女等にそんな話を持ちかけられる立場では無い。知りたいが今は目の前の問題を解決することに専念するべきだ、と心の中で被りを振って気を取り直した彼女の目の前から……」

「あつ……」

思いを馳せていた異邦人の者達とばったりと遭遇してしまった。そして視線が下へ落ちてベビーカーの中にいる赤ん坊を見てまたアスナに視線を戻して……」

「……アスナさん、子供を産んだのですか……」

「ち、違うのっ！この子は私の子じゃないわよ！」

「じゃあ、誰の子ですか？イツセーさんと一体誰の、ですか？」

彼女達の中で既に新郎の男性は確定していた。というか、あの人以上誰がいるの？的な質問に対してアスナの横からアナキティが口出しした。

「あなたは一体誰なの？」

「『アルテミス・ファミリア』の拳藤一佳と言います」

「そう、私は『ロキ・ファミリア』の眷族アナキティ・オータム。アスナの前の派閥の人達だったのね。ここにいてるってことは、道具アイテムを買いに？」

「はい、近々私達は『下層』に向かう予定です」

「……大丈夫なの？」

アスナの心配の理由は様々だ。異世界の能力を人前でおいそれと発揮できないことと、もしも正体がバレた時はオラリオ中の人間に忌避されかねないこと。一佳はアスナの心配の意図を察したかそうでないか定かではないが自信に満ちた表情で頷いた。

「大丈夫です。私達は弱くないですから」

「弱くないってあなた達はLv. 1なんでしょ？ 駆け出しの冒険者が『下層』なんて無理だわ」

「大丈夫、大丈夫。私達これでも何度も『下層』に行き来しているんだからさ。どんなモンスターだろうと人だろうと皆で協力すれば勝てるんだから」

駆け出しの冒険者が『下層』のモンスター相手に協力して倒す？ それこそ無理だ。Lv. 1の冒険者がミノタウロスを倒した話すら聞いたことが無いのだ。無謀だ。命を落とすしに行くようなものだ。アスナを促すアナキティ。

「止めた方がいいんじゃないの？ 彼女達、死ぬわよ」

「……えっと、そうだね」

言い辛い。とても言い辛い。言葉を濁しチラリと一佳に視線を送った。何とかしてくれないかな？ その視線の意図を悟り、この場から離れるのが鉄則とばかり行動を再開しようと口を開こうとしたが、ポニーテールで豊かな体の少女が訊いてくる。

「話を戻させてもらいますがアスナさん。その赤ちゃんはどうしたのですか？」

「うっ……」

話しの流れから遣り過ごせそうだと思っていたがそう問屋が卸せなかったようだ。今度はアリシアとアナキティの方へ視線を送ると

判断を任せるといった雰囲気醸し出される。ので、アスナは彼女達限定ということとで他の者達に教えないことを条件に釘を刺してから説明する。

「実は……」

教えられた話の内容とその事実には、数秒後……『冒険者通り』から驚きの悲鳴と驚愕の絶叫が響いたのは言うまでも無かった。

「ふえええええん……っ!」

赤子を驚かせて泣くほどに。ギョツとアスナ達は慌てて泣き止むように慰めながらちよっぴり彼女達へ非難の眼差しを送る。申し訳なきように謝罪の言葉を発する一佳によって他の少女達は近くの道具屋の中へと連れて行かれた。

「ひっく、ひっく……」

「よしよし、たかいたかい。驚かせちゃってごめんねー。ほら、黒猫のお姉ちゃんがいるよー?」

「それ、私?」

「この場にあなた以外誰がいるのかと」

唯一、私のこと?と足を止めて顔をアスナに向けていたが黒猫の少女が一人いて、赤ん坊を視界に入れた瞬間。———そのお尻を見た途端に胸がキュンと甘くときめいた。そして……いつの間にか。

「えっ?」

「なっ」

「へっ?」

猫のようにしなやかに駆け出しては、アスナ達の懐に飛び込み己の存在を気付かれたときには赤子を腕の中に納めていた。自分でもこんな白昼堂々と何をしてかしているのだろうかと思いつつも———一度走り出したら止まらない何かのように黒猫の少女も歯止めが聞かなくなっていた。

「責任をもって大切に育てるニャー!」

呆然と赤子の誘拐者が去る姿を見つめて直ぐ、あぁっ!?!と叫び散らした。当然ながら三人は全力で追い掛ける。ベビーカーをカードの中に収納して少し遅れるアリシアは走りながら腕輪の機能の『一斉

通信』を連絡する相手のみに伝えた。

「イツセーさんが可愛らしさのあまりに拐われましたっ！」

一拍遅れてリヴェリア達から驚きの絶叫がされる。

「ロキ、ここを離れるけど構わないかな」

「構わへんで。ここぞこそイツセーに借りを返すチャンスや、いつて
きい」

「よもや闇派閥イルヴァイスの仕業ではなからうな」

「ガレス面白い冗談を言うじゃないか」

「イツセーッ！」

「取り返す！」

「絶対にです！」

「……緊急事態か」

「行くぞシヤクテイ！イツセーを取り返しにいつ！」

「分かってる」

赤子を搔つ攫った猫キャットピープルの人。全力で大通りを駆け抜けては裏路地に入り、猫の如く軽やかに建物の屋根に乗って追手を撒こうとする。

「待ちなさい！その子を返して！」

「ニャーハハハ！返して欲しければミャーを捕まえてみるニャー！」

おっと、口調が……」

「速いつ……！」

「上級冒険者ですか……！」

一瞬たりとも目を離せない追いかけっこ。街の住民達の驚愕を浴びながら、自分の逃げ足に追いつけまいと翻弄しながら優越感に浸る。人を壁として利用し、時には使うつもりなかった罫トラップ——道具アイテム道具を駆使する。そうすることで徐々にだが追跡者達が見失う回数が多くなる。そしてついに黒キャットピープル猫は三人から振り切ってみせた。真剣な表情に焦燥の色を滲ませている三人の女性達の気配が、隠れてい

る建物の影から遠ざかっていくのを察知する。

「(今思い出せばあの亜麻色のヒューマン、『異世界食堂』の従業員だったニャー)」

これは少々、選択を間違えたかもしれない。あの店の料理を食べに行き辛くなつた。だが、後悔はしていない。食べに行けなくなるのは残念だが、それ以上の喜ばしいことが得たのだから。

「うー?」

「ニャは」

黒猫を見上げて見つめる生まれたての赤ん坊の尻を擦り、その肌触りと弾力と感触を堪能する。ニユッフ、間違はなく至高の尻だニャ。今まで掴み取ってきた勝利の数倍の達成感を浸り恍惚の表情を浮かべた。背を預けていた壁から離れ歩き始める。楽しみは宿の中でもたつぷりと味わおうと口に刻む笑みと共に人気のない裏路地を経由して戻ろうとする。育児の方は……何とかなるニャ等と軽い気持ちでスキップするその足が不意に止めた。

「あの」

「(ニャ?)」

真つ赤な瞳が己を見上げていた。具体的に述べると穢れを知らない純白の髪を伸ばし、頭と臀部辺りには獣耳と尾を生やしている獣人の子供が可愛らしい服装とは似つかわしくない日当たりが悪くジメジメとしたこの場所にいることが最初に疑問を抱いた。

「その赤ちゃん、可愛いです。抱かせてください」

唐突にそう言ってくる少女を他所に黒猫は警戒する。なぜ、気配を悟らせずに自分の傍ミヤに来られた? その一言に尽きる。ただの街娘フリだろうが、相手に気付かせずに近づける?

それ以前に足運びが静かすぎる。足音が一つも聞こえなかったのだ。黒猫が赤子を堪能して気を緩んだ最中に来ていたから気付かなかったから? それとも外見とは裏腹に彼女は凄腕の実力者? 前者か後者か黒猫は決め兼ねるが、怪しまれない為にニコリと笑う。

「いいけど、お父さんとお母さんはどこにいるのかな。子供がこんな場所一人いたら怖い人に痛くされちゃうわよ?」

「……私、お父さんとお母さんの顔を見たことが無いです。物心がついたとき、奴隷商人の牢屋の中に居ましたから」

「えっと……ごめんなさい」

「あ、気にしないでください。今私は幸せなんです。私を牢屋から出してくれた人の傍で生きていますから」

過酷な生活の中で生きていた少女の話聞き同情してしまった。きっと正義と秩序を司る「ファミリア」に助けられてその庇護下で生活をしているのだろう。例を挙げれば「アストレア・ファミリア」と「ガネーシャ・ファミリア」であるが……。

「あー」

赤子が少女の背後で揺れる尾に興味を抱いた。獣人の少女は背伸びして両腕を伸ばし受け取る姿勢に入った。黒猫は純粹無垢な少女の目を窺うように覗き込み、敵意も邪な考えも無い相手だと分かりながらやんわりと拒絶した。何時までもこの場に留まったら追って見つかる可能性がある故に。

「ごめんね？私そろそろ帰らなくちゃいけないの」

「あう、ちよつとだけでも……」

「んー、また今度会ったら抱かせてあげる。約束するわ」

踵を返して薄暗い路地裏の奥へと足を前に動かす。コツコツと足音を立たせて遠ざかっていく背中。残念そうな視線を受け止めながら黒い猫耳が拾った。

「……残念です——返してくれるなら穩便に済ませれる、とりヴェリアさんが仰ってくれましたのに」

「っ!？」

バツと獣人の少女へ振り返った同時に黒猫の真上、遙か上空から決河の勢いで落ちてくる小さな影が二つ。その気配を気付いた時は、既に自分と目と鼻の先だった。

「その子を返す」

「返してもらおうー」

目が本気^{マジ}だった。しかもその二人、驚くことに巷で噂になっている【ロキ・ファミリア】の団員で背中から翼を生やしているではないか。

悟った、悟ってしまった。まだ追いかけてこは始まったばかりだと。今度の追っては空飛ぶ相手としなくてはならないのだと。

「そ、そんなのありかニャー!?!」

全力疾走。路地裏から表通りに出て人混みに紛れて逃走を開始する。だが、空飛ぶ追跡者から逃げ伸びるのは最初の追ってより困難を極める。トラップ アイテム罠や道具を使いたいが仕事の支障が出るので断念せざるを得ない状況の中で。

「——いたっ!」

最初の追手とも遭遇してしまい、黒猫は意地でも逃げ切つてやると変なプライドを見せて大通りの中を走り続ける。できるだけ人が混雑しているメインストリートにだ。空からの追手は想定外であるが、無関係な住民に紛れこめば安易に武器を振るえない他、地上からの追手より対処しやすい。急接近してくるならば身を低くして回避すれば肉壁という人垣によって接近をけん制でき、阻んでくれる。その結果、空飛ぶ天使もとい追跡者達は黒猫を捉えてもただ追うだけしかできずにいた。油断はできないがそれでもまだ何とかなれるレベルニャ、と心に余裕が出来て最後に大通りの中で煙幕を使った。突然発生する黒煙に住民達の混乱と動揺を背後に直ぐ近くの路地裏へと掛け込んだ。そして直ぐに別の道へと向かわず、積み重なっている木箱の蓋を開けて底を足でぶち抜いては中に入って身を隠す。猫耳に聞こえてくる老若男女の騒然の声はしばらくすると、煙幕が晴れたからかざわめきの声が少なくなり何時しか止んで元の日常に戻った。追手もあの状況の中では本命を見つけることは出来まいと高を括つてほくそ笑む。

「(さて、そろそろ出るかニャ)」

何時までも赤子と窮屈な場所にいるのはよろしくない。さつさと家に帰って赤子の尻を堪能しようと思蓋を開けて上半身を出した。

「やあ」

背後から黄金色の髪に碧眼の小人族バルウムが朗らかに話しかけてきた。今度は誰!?!と思いなながら振り返った瞬間、顔色が絶望したと青く染まった。

「ブ、【勇者】、フィン・デイルムナ……」

「用件を言わせてもらおうよ。君が抱えている赤子を返して欲しい。狙った理由はわからないけれど、僕達にとって大切な赤子なんだ。素直に返してくれるなら見逃すよ」

「……」
「どうかな？と提案をしてくる小人族バルウムの背後には老兵ドワーフが斧を携えて佇んでいて、条件反射で背後に尻目で視線を向けると同時に槍の切っ先を突き付けられ、ぶわっと身体中が発汗した。凄まじく嫌な意味で。腰の尻尾が黒猫の心情を露わすように震える。」

「……」

藍色の短髪に伶俐に整った女性、シャクティの顔は無表情を貫いていた。黒猫は完全に窮地に立たされた。自分の命か赤子か、天秤を傾け優先するべきはどれなのかもはや明白だ。

「うー」

その時、黒猫の腕の中の赤子が槍の切っ先を掴もうと身を乗り出した。そうはさせまいとシャクティが届かぬようにずらしたがそれでも追いかけてようとして掴みかかってしまい、身動き出来ぬ黒猫の腕から零れ落ちてしまう。すかさず槍を手放した手で赤子の体をキヤツチするシャクティに苦笑いするフィン。

「やれやれ、目が離せないね」

「……第一級冒険者の貴方が出張るほど取り返したいなんて、一体誰の子なわけ？」

「誰の子供でもないよ。強いて言えば、この子は若返りの薬を誤って飲んでしまった僕達の友人なのさ」

それだけ言い残して黒猫から背を向けて離れだす。シャクティもフィンと一緒に行動を移す。

「——もう一度見掛けた時は、お前を捕まえる」

去り際に冷たい声音で語り掛けられて背筋がゾツとする。肩越しから己を見つめる赤子と路地裏から出て行くまで視線を合わせていたが、格上の冒険者達がいなくなると緊張の糸が解けたように木箱の中でへたり込んだ。「い、生きた心地しなかつたニヤ……」と感想を呟いて。

そんな事件が起きてから、三つの「ファミリア」が協同で若返りの薬を反転させる薬の製作をしてあつという間に七日が経った。目の下に隈を作り深い疲労が濃く顔に浮かんでいて貫徹しているのが一目で分かるほど作業に徹していた。だが、結果は好ましくない。途中から分身も加わって製薬を臨んだが無情にも時間が過ぎてしまった。「ミアハ・ファミリア」の団員達の殆どがグロッキー状態だ。アミッドもアスフィも襲いかかる睡魔に精神力のみで耐えているがそれも限界に近い。

「……どんな素材を使っても芳しくない結果で終わるか」

「……いつそのこと反転では無く、成長を早める薬にしますか」

「……それですと、もしも薬の効果が切れた時また元に戻りかねません。記憶も正常に戻るのかも怪しいです」

「……ナーザが製薬したあれも時間制で効果が切れると思うか？」

「……判り兼ねます」

分身体達は『自由フリーダムで有意義バカンスルームな空間』の中で一カ月以上過ゴしていた。休みも入れ仮眠もしているが作業をしている時間の方が圧倒的に長く多い。

「イツセーの方に変化は？」

「変わらん。相手がオリジナルだろうと呑気に可愛がられて流石にイラついてきてるぞ」

「ふ、不可抗力ですから仕方ありません。それに、誰かに世話をしてもらわないと生きていけませんし」

解っている、と溜息を吐いて自分の手を見つめた。二人も何気なく視線を向けるとおかしなことに気づく。手が透けているようにも見えるのだ。いや、薄らとだが透けているのではなく消えかかっていると言いつ直した方がしっくりくるだろう。疲労困憊の色を浮かべる目が丸くなる。

「ま、まさか……」

「ああ、魔力切れだ」

「そんな……っ」

静かに砂漠で遭遇する蜃気楼のように音もなく消え始める分身。自嘲的な笑みを浮かべ、アミッドとアスフィの頭に手を置いた。

「悪いな。こんな面倒事を付き合ってくれて。元に戻ったオリジナルに何かお礼でも要求しろ」

「イツセーさんっ……!」

分身は最後に魔力を振り絞ってそれを小さな結晶と化してアミッドの手の平に置いた。それをしたことであっという間に顔の半分まで消えてしまう分身は「後は頼んだ」と言い残して完全にこの世からいなくなってしまった。残された魔力の結晶、燃える様な赤い炎よりも鮮やかな真紅の塊だけが未だに残り、それが自分の不甲斐なさを突き付けられた感じが堪らないアミッドは結晶を握り締め顔を俯いた。

「……必ず、あなたの想いを叶えてみせます」
「……」

強く決意を胸に秘める少女達。同時に夜になっても戻って来ない分身のことは店から戻ってきたアミッドやシルから報告を受け、アスナ達は赤子の一誠ばかり構っていた自分達に恥を覚えた。

「最後の頼みの綱もいなくなっちゃったのね……」

「魔法大国アルテナに頼んで薬を作ってもらおうっちゃ一案もあるんやけど」

「頼んでどうにかなるのか怪しいけれど、可能性があることは全部するべきね」

三柱の女神達の会話を耳にしながら、アミッドは遺品ともいえる真紅の魔力の結晶を取り出した。

『後は頼んだ』とそう言い残しイツセーさんが遺してくれた物です。調べたところ魔力の結晶です」

「魔石ではないんやな」

摘んで上に掲げて眺めるロキ。鮮やかな赤の宝石のような結晶は光に照らすと真紅に彩ってきらりと輝いた。すると「あー!」と一誠が声を上げた。一同が視線を向けるとリヴェリアの腕の中にいる一誠が物欲しそうに腕を伸ばしていた。珍しく反応を示す赤子にロキは結晶を持った手を大きく動かす。つぶらな瞳と手は釣られるよう

に追いかけて動く。何度も何度も、上に放り投げると目と手も追いかける。

「うー!」

「……ほしいん?」

「うー!」

どうしても欲しいと泣きそうな表情を浮かべるので、リヴェリアが動きロキによるとそれに伴い暴れ出して魔力の結晶へ伸ばす手が空ぶつても掴もうとする。なにがそこまで駆り立てるのか分からないが、ロキは一誠に結晶を近づけると小さな両の手がその結晶を掴み取った。

「あうー……」

そして……「あ」「えっ」と皆の前で魔力の結晶を口の中に入れゴクンと異物を飲み込んだ。当然ながら場は騒然と化す。

「ちよ、ちよっ!? イッセーちゃん!」

「リヴェリア、今直ぐ吐かせるんやあつ!」

焦燥に駆られる女性陣。が、それよりも驚くべき事が起きた。赤子から真紅の魔力のオーラが具現化して包み込み始めたあと、胸から赤い宝玉が抜け出てきた。皆が驚きで目を皿のように見開いていると宝玉が一瞬の閃光を迸らせロキ達の視界を奪う間に人の姿へと形成していき……。

「……我が主も大概だな。よもや赤子に若返ることになるとは」
紫色の髪に血のように赤い双眸の青年が神妙な顔つきで溜息を吐いた。知っている者がいれば知らぬ者もいる。前者は突然の登場で驚き、後者は警戒する目で見つめる。

「お前は……ゾラードと言ったか。何故今頃出てきた?」

「その質問を今ここで答えてもよいのか。俺はどちらでも構わないが」

ハツとリヴェリアは悟りまだ一誠の正体を見知らぬ者達がいる状況の中で、独断で秘密を教えるような発言はできない。ゾラードの問いに彼女だけでなくロキ達も察し口を閉ざした。

「懸命だ。黙って見ている」

赤子の頭を無造作に掴んだ。だが、何も起きない。変化する気配も感じない。不発か？と訝しむ視線をゾラードに向ける一同を他所に彼の者は一拍して息を吐露する。

「成程、薬でこんな姿になったのか。ならば俺の力では直接どうにもすることもできんな」

「うおいつ！自信満々で黙って見ていると言っておいて自分もお手上げやと!？」

「黙っていると言ったのだ。俺自身が解決するなど一言もいったか」

不遜な態度で物申すゾラードに屁理屈や！と言いたげな目で睨みつけるロキの隣から質問をするヘファイストス。

「じゃあ、イツセーはもう元の姿に戻ることはできないの？」

「薬の影響なら外部から何をしようと思理だろう。ならば内部から薬の効果を消す他ない」

「……………どういうこと？」

「そのままの意味だ。水を持ってこい」

突然の命令に当惑や困惑するアスナ達だが、誰よりも早く動いたラトラがコップ一杯の水を持ってきた。

「はい」

「ああ」

受け取るゾラードは手に魔力を籠めて水に浸透していき、透明な水は魔力が宿りとてもではないが飲めそうにない紫色へと変色した。まさか……………と嫌な想像をしてしまう何人かの考えが現実となつてしまった。

「これを飲ませろ」

「……………紫色やで？」

「当然だ、俺の力を籠めたからな。飲ませれば薬の効果は消えて元に戻るはずだ」

「その保証は？」

「知らん。試せばわかることだ。拒むというならお前達が何か解決策があると思って任せるが、実際はどうなのだ」

そう言われると解決策も手段も無いロキ達は口を閉ざして沈黙。

またラトラが動きだして今度は哺乳瓶を持ってきた。この中に入れて飲ませてほしいと意図を察してゾラードは受け取ると移し替えた。それからズイッと突き出す哺乳瓶にリヴェリアの綺麗な翡翠の柳眉が険しく寄った。見た目が悪い、毒でも入っているとしか思えない色の水を赤子、それも一誠に飲ませて身体に悪影響が及ばないとは限らない。かなり抵抗を覚えてしまうがこの場にいる全員がゾラードに敵わないことだけは悟っている。目の前の男は——人の皮を被った異世界のドラゴンだから。

「飲ませろ。断るなら俺がやる」

「……」

ゾラードの中では決定的なことだろう。拒めば飲まされ、受け入れれば飲ませる。この二つの選択以外選べるものは無いのだ。険しい表情のまま哺乳瓶を受け取るとご飯の時間？と手を伸ばす赤子に飲ませることを躊躇ってしまう。

「……色だけはどうにかできないのか」

「俺の魔力だ。どうすることもできない。それに人間の言葉には良薬は口に苦しと言う諺があるではないか」

言いたいことは分かる。だが、これは苦いどころでは無いレベルだとツツコミたいハイエルフの腕の中で哺乳瓶を手にとった赤子に意識を向けざるを得ない。

「うっ……」

チュパチュパと魔力の液体を飲み始める赤子に物凄く心配そうに見つめるアスナ達。飲み始めて段々美味しくない味だと可愛い顔に皺が寄り険しくなったところで哺乳瓶から自主的に口から遠ざけてぐずり始める。

「ふええええん……えええええんっ……」

「——おいっ」

「……」

責める様な睨みつきは一つだけでは無い。泣きだす赤子になんて物を飲ませるんだと抗議や怒り、ゴミを見る眼差しの視線を送るアスナ達も許すまじと気持ちでいっぱいだった。それでもゾラードは完

壁に無視して様子を見守る姿勢で赤子へ視線を向けていた時だった。突如全身を発光し出す一誠。皆が緊張の面持ちで固唾を呑んで見守っている間、光に包まれて次第に光は縦に伸びながら大きく変化する、赤子の姿はどこにも見当たらず最後に見た一週間前と変わらない姿の一誠が消失した光のところに佇んでいた。それから一言。

「……………ん？何でゾラードがいるんだ？」

「主よ。今度から興味本位で変な物を飲んでくれるなよ」

「え？……………あ……………全然記憶にないな。すまん、迷惑を掛けたのは絶対だろ」

「俺より他の者達がそのようだったぞ。俺もいましたがた出て来たばかりなのでな。主が赤子になった間のこと記憶でしか知らないのだ」
「……………俺、赤ん坊になってたわけ？うわ……………すっげー恥ずかしい思いをしたつと」

「アミッドが抱き付いてきた。どうした？と見下ろすと「良かったです」と吐露した。」

「イツセーさんが元に戻って嬉しいです。分身体のイツセーさんもイツセーさんを元に戻そうとして頑張ったのですが、力及ばず消えてしまいました。ですから本当に……………」

「ん……………ごめん、アミッド。マジで迷惑を掛けた。後で俺が出ることだったなら可能な限りお礼をするよ」

「はい……………分身体のイツセーさんもお礼を要求しとけと言っておりました」

「流石俺だな、と未来を見据えて消えた分身体に苦笑するとアイズ達も抱き付いて来て……………」

「もうちよつとだけ、赤ん坊のイツセーと戯れたかったわ」

「何言ってるのよフレイヤ……………気持ちは分からなくないけれど」

「ぐふふ、面白写真をたくさん撮ったからうちはこれはこれで満足やで？」

「おい、その女神。何を言っているんだ何を……………」

その後、多大な迷惑を掛けたとして「ダイアンケヒト・ファミリア」と「ヘルメス・ファミリア」に御礼として一億ヴァリスを敬譲した。二

人を酷使したことに謝罪の念も伝えたことで片方は気にしなくていいよーとほくほくした顔で受け入れ、もう片方は二度とするなよと言いつつも膨大なヴァリスに目が釘付けで目がヴァリスになっていた。そして【ミアハ・ファミリア】にも。

「……よ、よいのか？そなたに迷惑を掛けた方だというのに」
「誠心誠意を示してくれたから許す。そんでしばらくは活動を休止するんだろ？その分の稼ぎだって減るんだからこれは感謝の印として受け取ってくれ」

一億の金額を与えた。眷族達は驚くも自分達は頑張った甲斐があつたんだなと達成感が顔に浮かんで喜んでいた。

「……ごめんなさい」

「今度は主神達と一緒に作るようにな？」

「……はい」

ナアーザからの謝罪も快く受け入れ、これで元の日常に戻ったかと思えばフィンからの通信で知ることになった。

27階層で有力派閥のパーティが闇派閥イルヴァイスに奇襲を受ける可能性が高いと。

冒険譚 27

ダンジョンの中で不穏な動きをしているという噂がオラリオ中に広まった頃。ギルド参加の最大派閥を筆頭に有力派閥が共同で捜索しに行くことが決定した。その日の内に第二級から上級冒険者のパーティが編成され、ダンジョンに潜ってから一日と数時間が経過した。一方地上で待機していたフィンが今回の闇派閥イルヴェイスの漏洩の意図を考え察した。毘だど。今頃『下層』域まで進出している時だろう。自分が助けにいけば間に合うのは確実だ。一度踏破した階層ならば昼夜問わず、何時でも何処でも行き来できる腕輪の魔法で今すぐ駆け付ける自信がある。だが、これは相手の戦力を大いに削る好機チャンスでもある故にフィンは——卑劣な罠に嵌まっただろう彼等彼女等を見捨てる方針で「フレイヤ・ファミリア」と「ガネーシヤ・ファミリア」を引き連れ闇派閥イルヴェイスの本拠ホームへ強襲をかけに行く。個人的に非情な考え方だが、本気で切り捨てるつもりは毛頭もない。腕輪の宝玉を触れて操作し、とある男に通信を試みた。

「ダンジョンの中にいるパーティを助けてほしい？」

『ああ。昨日の今日、赤ん坊からようやく戻った君には悪いけれど手伝ってくれないかな』

「……その話はしないでくれるか。俺の一生の恥でもあって黒歴史なんだ」

ロキに見せられた写真の数々。ご飯を食べさせられたり抱かれていたり、共に風呂に入っていたら寝ていたり……etc。羞恥で顔を真っ赤にし部屋に籠って頭を抱えて一夜を過ごした翌日の今日、今だ部屋に籠っていた時にフィンからの連絡が届いたわけだが。今だ立ち直れそうにない一誠だった。

『あはは、彼女達にはいい刺激だったと思うけれど？何時か自分の子供を持ったらどんな風に育てるか、をね』

「わかった。次はフィンの番でいいな？フィンを応援する女共に説明して育ててもらおうから、安心して可愛がられる。可愛い女の子用の服

を着させた状態でな。あ、ガレスがいいか？」

『すまない、許して欲しい』

本気で頭を下げる最大派閥の頭首を画面越しで睨みつける中、頭を上げた小人族バルウムの碧眼の双眸は真剣な眼差しをしていた。そんな表情をする己を受け入れた小さな戦友の頼みに、断るなど後味が悪いので聞き受けた男は引き籠っていた部屋から出る。扉を開けた先には小さな少女達が背に預けて両足を抱えて座っていて、出てきた男と目が合うと立ち上がって近づいてきた。

『水の都』に転移して救助をされるはずの有力パーティの集団は『異常事態』イレギュラーに襲われていた。転生者ならばこう思うだろう。原作通りなら数多の犠牲者が出るイベントの筈だと。だが、転生者の事前の知識や情報とは異なる出来事が25階層で起きていた。一日費やして『下層』に来た直後のこと。仮面で顔を隠すたった一人の謎の男に襲撃を受け半数が負傷でそれ以外が無傷という結果になった。男の攻撃は素手喧嘩ステゴロ。肉弾戦で挑んでくるも露出している顔や手足、胸部や腹部を触れてくるだけで八割戦闘らしい戦闘ではなく場をかき乱された程度だ。

「何だ貴様っ！闇派閥イルヴァイスの仲間かつ！」

「違う、変態よ！私の胸を触ってきたもの！」

「私もお尻を触られたわ！」

「変態仮面かつ！」

不名誉な二つ名を頂戴した謎の仮面男。静かにパーティ等へ突き付けた手の平から魔力の塊が発現した次の瞬間。27階層から数百Mの高さの絶壁から轟く爆発と衝撃波によって十数人ほど、緑玉蒼色エメラルドブルーの大瀑布の前に落ちて滝壺へと吸い込まれていった。崖から落ちてしまった仲間へ意識を向ける余裕が無く、黒煙に包まれたパーティは視界を遮る黒煙の中で立ち往生、平伏している間に謎の仮面男が『下層』から離れていく事を気付かない。やがて黒煙が晴れて状況を把握すると仲間と仮面の男がないことに気付くと、前者の捜索を慌てて探しに行く。

——それが救助隊がこの階層に来る前に起きた数時間前の出来事であった。

突如として25階層に全身に真紅の龍を模した鎧を着込んだ一誠を始め、バックパックを背負う他種族の少女と女性達が転移魔方陣で正規ルートを無視してやってきた。

「ん？ここで戦闘があったみたいだな」

「どうしてわかるの？」

「地面を見てみる。ここで休息リストしているなら焚火の跡があってもおかしくない。なのに広範囲で焦げてる。それにところどころ武器が散乱しているし魔力の残滓を感じる」

指摘する一誠が徐に顔を『大樹の洞窟』の名残を窺わせる根が張っている天井を見上げ、耳を澄ませる。大瀑布の轟く音が耳朶を刺激し殆どその音で占めさせる中、かすかだが聞こえてくる……怒号と悲鳴。

「アイズ達は正規ルートから全速力で走りながら先行しているパーティを助け出しに行ってくれ。おそらくまだこの階層にいる。俺とフィリア、レイネルとレギンにラトラは俺と一緒に来い。通信をした状態で搜索するぞ」

魔法の絨毯をレイネルが背負っているバックパックから取り出し、その上にフィリア達が乗りだす。

「イツセー」

何かを憂う表情を窺わせるアスナが口を開いた。

「何か、嫌な予感がするの。胸騒ぎがして……」

「お前しか感じないってことは、お前の中で想像したくもない最悪なことなのかもしれない」

分身体を一人作って先に走っていかせる他所で、左の手に金色の宝玉がある真紅の籠手から『Booster!』という音声が何度も発し、アスナとアイズ、アリサに触れて譲渡する。

「……力が？」

「漲ってくる……？」

「三人の『ステイタス』の能力値を倍加にした。アルガナ達ほどでなく

ても速く走れるだろ」

凄いと目を丸くする彼女達を背に絶壁から一人だけ飛び降りた。一拍遅れて正規ルートへ駆け出すアイス達と別れて崖から凄まじい勢いで降下するフィリア達。

光が揺らめく水面からザパツと何かが飛びだす音が不自然に生じる。大瀑布の音に包まれながら水に濡れた体で滝壺と接する岸を目指す影。水中に沈んでいる脚に力を入れて水面を掻き分けて進み浅瀬に近づくと片手で水面から上半身を引き上げる。その勢いで腰も引き上げると影は——水面に浮かぶ目を閉じた冒険者の体を一生懸命岸の上に引きずり上げた。しかも冒険者は一人だけでは無かった。ヒューマンの男性と女性が引き上げられて三人目だ。彼等彼女等は25階層から落ちてきた冒険者であると影は知らない。だが、目の前で沈んでいる冒険者を見て放っておけず、できる限りのことをしようと行動をした。その間、水棲のモンスターに襲われているところを何度も見てこの行動が意味を成さなくてもと思いつながら必死に救助した。

その岸の傍には緑玉蒼色エメラルドブルーの水を直下させる大瀑布。この階層に降りる時、彼方から一望する雄大な水の流れは見惚れるほど美しく映るが、距離が五十Mにも満たないこの場所から仰ぐ滝は、とてつもない怪物に見える。何ものよりも、巨大で恐ろしいと。矮小な自分を見下ろす大自然の敵に震え上がってしまうだろう。

不意にその滝を見ていた影は、肩に触れられる感触を覚えて身体を跳ね上がらした。この場に助け出した冒険者以外誰もいないはずなのに、気配を悟らせず触れられる距離まで近づいてきた何ものかに恐る恐ると顔だけ後ろへ振り返れば……。

「モンスターが人を助けるなんてな。だが、お前のお陰でこいつらはまだ助けられる。ありがとうな」

全身を紅い鎧で身に包んだ冒険者から感謝の言葉を向けられた。その後すぐ、四方形の布の上に乗っている数人の冒険者達が降りて来て信じられないものを見て目を丸くしていた。影——モンスター

の身体は硬直して動けない、否。動かすことが出来ないでいた。

「他にこの辺りに冒険者はいるか？もしくは沈んでいるか？俺の言葉、人の言葉が解るか？解るなら頷いてくれ、解らないなら首を横に振ってくれ」

モンスターは他のモンスターに襲われている光景を脳裏に思いだし、首を横に振った。冒険者は少しだけ沈黙し岸に引き上げられた三人の冒険者を見つめ直ぐに目の前のモンスターに視線を戻す。

「助けてくれてありがとうな。このお礼は近い内にする。またここに来るからできれば顔を出してくれ」

静かに肩から離れる手を無意識に追ってしまい、布の上に冒険者が冒険者達の手によって乗せられると彼等彼女等も乗り出し、モンスターから離れて浮遊する。

先行した分身体は全速力でルートの隅々をくまなく行つては搜索し、途中エンカウントしたモンスターを擦れ違い様に斬り捨て25階層を走破、26階層の正規ルートをくまなく走り続けていた時だった。近づいてくる人の足を察知して立ち止まって程なくすると一人の冒険者と遭遇した。

「……お前」

濡羽色の長い髪に赤緋の瞳のエルフの少女、店を構える前はいつも食事をたかりに来ていた男神の眷族だと認識、マスクの部分を外して顔を晒すとエルフは目を丸くして足を止めた。身なりはボロボロだ。純白の戦闘衣バトルクロスに返り血か自身の血か深紅に染まって引き裂かれ、引き千切れてボロ雑巾を着ているかのようだった。

「ディオニユソスの眷族だったな。まさか、お前等のパーティが罠に嵌まっているのか？」

「なぜ、あなたが……」

「フィン・ディムナからお前等の救援を依頼されてきた。他のパーティももうすぐここに――」

エルフは分身体の説明を最期まで聞かず腕を掴むと必死の叫びで懇願した。

「頼む！仲間を、皆を助けてくれ！闇派閥の罠に——！！」

「まだ、生きているか？」

「わからない、だが、今ならまだ……！！」

「わかった、なら行くぞ」

話す時間も惜しいとエルフの少女を横抱きに抱え、全速力でダンジョンの中を掛け走った。彼女がどれだけ悲鳴を上げようがお構いなしにだ。

一誠等と一時別れ正規ルートから搜索するアイス達は指示通りに『下層』域の中を駆けだしていた。が、上級冒険者と第一級冒険者の脚力の差がここで出てしまい、このままではとアスナは指摘した。

「アルガナさん達は先に行ってください！私達も直ぐに追いつきます！」

女戦士達は言葉も首肯もせず、あつという間に彼女達を取り残すほどの足の速さを見せて先行することで応じた。アルガナ達は腕輪を操作する。『下層』の地図の立体映像を展開し、生命反応がある人間達がいる広域へと向かう最中、彼女達の耳にも聞こえてくる絶叫。ベルネアが腕輪に向かって一誠と話しており状況を説明している。

「先に27階層に向かうそうだ」

「合流する場所はそこか」

あいつ一人でも絶対に対処できるだろう。と溜息を吐きたい思いが駆られたものの、惚れた弱みの女は男の為に動かねば女として廃れるかもしれない。そう思った時だった。洞窟中に訊き慣れた男の怒声と驚きが籠った叫びがきつとアスナ達まで聞こえるほど迷宮中に轟いた。ここまで張り叫ぶのは極めて珍しいとアルガナ達は不思議に思っただけで走る速度を更に上げたのだった。

「(———どうして、こうなった?)」

黒い剣の斬撃を大口開けて迫ってくるモンスターに当てて返り血を浴びながら自問自答する。第一陣として露払いも兼ねて先行した自分達が、何故この事態に陥ってしまったと？

進んで来て、密集して固まっている冒険者達を吹っ飛ばした。誰もがこの状況に危機感を覚えた最中、更なる追撃と口内からブレス攻撃を放つモーシヨンを見せる階層主の背後——真紅の小さな龍が現れた。

「何やってんだお前等あああああああああああああああああああああああつ！」

魔法の絨毯で一気に正規から外れたルートで目的の階層へ向かう一行。その間、蘇生を試みて三人中一人だけ、男の冒険者だけが肺に溜まった水を吐き出しながら咳き込み、死の淵から意識を取り戻した。

「お、お前等は………?」

「【ロキ・ファミア】のフィン・ディムナからお前達の救助の依頼を受けた冒険者だ」

「そう、なのか……俺達以外のパーティは………?」

他の冒険者は見ていない、と首を横に振る一誠に絶望と悔恨の色を顔に浮かべて俯いた冒険者。気持ちを察するが色々と訊きたい故に質問を口にする。

「どうしてあんな場所にいたんだ?」

「あんな場所?……そうだ俺達、変態仮面に魔法で吹っ飛ばされて……」

変態仮面?なんだそれは?とツツコミたいところだが謎の者に襲撃を受けた際に魔法で崖から落ちたのだろうと推測が出来た。男性冒険者は一誠達に頭を下げる。感謝の念を身体全体と言葉にして。

「助けてくれてありがとう。あのまま救助されなかったら今頃死んでいた」

「どういたしまして」

冒険者に更に問いを投げる。それで、規模はどのぐらいでダンジョンに向かったんだ?と。

「70人強だ。数が多いからパーティを二つにして、俺達は第二陣として露払いしてくれる先陣したパーティの後からイルヴァイス闇派閥を探そうとしたんだ。だけどさつきも説明した通り変態仮面に襲撃を受けて」

「その変態仮面はなんなのか理解に苦しむけど、先陣したパーティはまだ無事として第二陣のパーティのお前達は全員死んでないと思うがどうだ？」

「多分、そうだと思う。俺以外何人も崖から落ちたのは最後に見ただと全員つて程数が多くなかった」

「だとしたら見失った仲間を探しにまだこの階層にいるだろう。もしくは強制任務通りに事を進めているかもな」

男性冒険者から事情聴取をし、状況を把握していく一誠達。オラリオの冒険者となつてまだ日が浅いフィリア達も真剣で大切な事だと耳を傾けて聞いていると声を掛けられた。

「今の話を聞いたな？ 要点だけ選んで復唱してくれ」

「はい、パーティの人数は七十人強です。二つのパーティに分けて先行了したパーティの後を続く筈でしたが」

「仮面をつけた謎の男に襲撃され崖に落ちたパーティの人達は少なくともなく」

「えっと、だけど私達はそのパーティを助ける為にここにきて」

「まだこの階層にいる他のパーティを助けに行くんだよね？」

その通りだと頷いて、四人の頭を優しく撫でると擦ったように顔を綻ばせる。緊迫の雰囲気はどこいったとばかりほのぼのとした空間を醸し出す五人に口出しできない男の冒険者。視界の端に映るパーティのメンバーは未だ目を開けないでいる姿に顔を曇らせるその表情を見ないフリをして、目的の階層へ絨毯を飛ばし続けて数分後。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

27階層に着くや否や階層主である『アンフェイス・バエナ双頭の白竜』が出現し、『下層』

中のモンスター達が先陣したパーティであると思しき冒険者達に――
――モンスター達が牙を剥き、食らわんとしている相手を見て間拔けな声を漏らしてしまった。数多の怪物の波に呑み込まれつつある冒険者達の中には『アルテミス・ファミリア』の団員達の姿もあって、必死の抵抗をしていた。モンスターに向かって氷結や炎、爆発、打撃、閃光、影や雷、様々な異能を駆使して戦うも血塗れ、重症、焦燥、……。
「なにやっつてんだお前等はあああああああああああああああああ

「あああつ！」

怒声を張り叫ぶ一誠は首に下げていた黒曜石のような竜の鱗を取り出して全力で投げた。27階層の地面に落ちた直後。モンスターどころか『アンフィス・バエナ』ですら身体を強張らせ、緊張した面持ちで竜の鱗を中心にザザツと十M以上も距離を取り後ずさった。その間、喰われていた冒険者を放り出されて一誠にとって『最悪なシナリオ』にならずによかったと心底安堵した。

「まったく先陣のパーティーってどこの誰のことかと思えば……キリト達、お前らだったとはな。アスナの予感が的中したと言えるな」「イツセー……」

「被害状況は？ああ、この鱗がある限りモンスター共は近づいて来られないから安心しろ。『階層主』にも効果ある」

掴み取る鱗をもう一度首にかけて黒髪黒眼の剣士に声を掛けた。邪魔するモンスターは今のところいないがシビレを切らして再び襲いかかるかもしれないと予想した矢先にアンフィス・バエナが27階層の主として臆してはならないと咆哮を上げて双頭の口から高圧力で放つ水のブレスの攻撃をする姿勢に入った時、26階層に繋ぐ連絡路から飛び掛かる一つの影が階層主に飛び掛かり、蹴り飛ばした。壁に激突した彼のモンスターに容赦なく手の平から作り出した風を放ってズバズバと輪切りに切り裂いて命を狩った。地に沈む双頭の白竜を目の当たりにするパーティーは愕然とする。不意打ちとはいえ階層主を倒す実力者……エルフの少女を抱える分身体の登場に言葉を失った。

「で——被害状況は？なんでお前らまで参加しているのかも説明してくれるんだろうなあ？」

怒っている、確実に怒っている。「何で自分から危険で面倒事に首突っ込んでいるんだああん？」的に。鎧で顔が見えないが絶対に笑っていない目で顔が笑っている……っ！

「そ、それは……教えるけどいまはモンスター達を……っ」

無言でそのモンスター達に指す一誠に釣られてキリト達は目を追って……一方的にモンスターの蹂躪するアルガナ達の姿にま

た言葉を失った。

「三度目だ、説明、してくれるんだろうな？」

『……………はい』

地上に伝わる迷宮内の状況報告。闇派閥イルヴァイスの本拠地の強襲を仕掛けている【勇者】フレイバーは傍らにいるドワーフとハイエルフにも伝える。

「ガレス、リヴェリア。杞憂はどうやら去ったようだ」

「被害は？」

「全滅こそは免れたが、それでも六割、七割強つてところかな」

「それでも救えた命はあった、か。お前の行動で何とかなつたわけだなフィン」

「僕よりも彼がそうしてくれた。彼という大きな頼もしい存在があつたからこそ最悪なシナリオにならなかつたんだ」

「では、我等も本腰を入れるとしようか」

「おう、あやつに負けておられんわ」

被害と状況の報告を終えた一誠。有力パーティを取り囲んでいたモンスターの掃討もあらかた屠り冒険者の遺体を並べて集める作業に入っている。

「【アルテミス・ファミリア】を残してほぼ全滅つてどうということなんだ。いくらなんでも不自然なぐらい酷い状況だぞ」

「ええ、あなたの言うとおりよ。ほぼ無傷の第二陣のパーティが駆けつけてくれたのにあつさりモンスターの数の暴力に呑み込まれて更に状況が悪化したの」

「そんなにあつさりだったか？まさか駆け出しの冒険者だけのパーティでこの階層まで来たんじゃないし」

「わからないわ。わからないけれど、本当に助けに行くにも私達も手がいつぱいっばいで……………見殺しする形で見ているしかできなかったわ」

それは自分の仲間もそうだったと説明するシノンはクラインへ流し目で見つめた。同じ世界から来た仲間がモンスターに喰われ、目も当てられない凄惨な姿に成り果てている遺体に涙を流している。

ヒーロー組の異邦人もそうだ。階層主のタツクルで当たりどころが悪かったり、吹っ飛ばされて口を開けて待っていたモンスターの中に飛び込んでしまった結果として何も言わぬ肉塊と化していた。程なくして合流したアスナ達と鮮血が染み込んだ赤黒い灰の海から数え切れない数の死体を集め、揃えられて内心辟易する一誠に怪訝な眼差しを送るシノン。

「……………何をするつもりなの、遺体を集めて」

「意味のある事だ」

その前に内にいる頼もしい家族を見えない場所で召喚をし、一誠は行動に移した。鎧を解いて【天使】テ・シエオと化するその姿に息を呑む。魔法——いや、ここまで神秘的な姿になる摩訶不思議な力を行使する一誠を始めてみる面々は凍ったように目を凍結させ成り行きを見守る。

「コレをしたら俺は動けなくなる。帰りは頼んだぞ」

「何を言ってるの、あなた……………?」

返されない言葉。返すのは行動。虚空から出現する金色の錫杖を手にして六枚の翼と輪後光を輝かせる。巧みに振り回して地面に突き刺した神々しく光を放つ杖と呼応して、十二枚の翼も光り——数多の遺体と共に一誠から放たれる、地面に広がる金色の魔法円マジックサークル魔法円と異世界の『奇跡』の魔法の輝き。金色の魔力光は巨大で一条の光柱となって『水の都』を照らし天へと昇る。

「……………」

四炬の松明の灯によって忘れ去られた石の神座に腰を下ろす老神の蒼い瞳が静かに閉じ悟った風に漏らした。

「また、奇跡を起こすか」

27階層を照らす光柱はやがて消失した。その中心に立っていた男は、最後の魔力を振り絞って杖を展開した金色の魔法円マジックサークルに置く、杖が一瞬の閃光と共に豊かな金髪で美しい女性に変貌した。それを見届け、全て終えたとはかり——翼が霧散し、輪っかが虚空に消えて髪と目の色は戻って……………地面に倒れる一誠の体を寸前で傍に

いたシノンが慌てて腕で受け止めた。そして驚く。仲間の遺体が元に戻っていて時間が経つと目を開けて一人、また一人と眠気が覚めない眼で身体を起こす。そしてそんな様子を見て仲間達が胸の奥から湧き上がる感情を抑えきれず行動に出た。

「お、お前らああああああっ！」

「うわああああああっ！」

「よかった、本当によかったよ……！」

「奇跡だ、俺は……いま、奇跡を見てしまった……！」

仲間の復活に涙を流し、感動して力強く抱きしめる。その様子を見ていたアイズ達はシノンに地面の上を根転がされた一誠の傍により、安否を確かめる。

「イツセー、大丈夫……？」

「おー、去年と同じだ。また一週間ぐらい、寝込みの状態だ」

「ん、安心して。絶対に守るから」

「あはは、小さな姫様に守られるのも案外悪くないか」

よいしょつと小さな女の子達に魔法の絨毯の上に載せられる一誠。それから彼女達はひと塊となって腕輪の機能を使い、この場から一気に地上へ転移しようとする際に声を掛けられた。

「イツセー、ありがとう」

「あの連中と約束した手前だ。俺は約束を守ったに過ぎない」

発現した魔法マジックサークル円の光に包まれ、光と化して目の前で消える一行を見送るシノン達。多大な恩を受けた彼等彼女等は、今だけは感動の喜びを分かち合い涙を流す――。

27階層の事件後、ベッドの上で見事に指一つも動かさない状態の一誠は物静かに二日も過ごした。死んだ冒険者を一度だけ大勢復活させた代償は魔力と体力、精神力など全て消費し、まな板の上の鯛となっている。その間、アイズ達は甲斐甲斐しく一誠の世話をして看病をする。暇や時間が空いた時は一人は必ず傍にいたり時には添い寝をして共に時間を過ごす。騒々しく二日もガネーシヤが見舞いに来るのが少々五月蠅いが。三日目を迎えた朝、未だに快調していない一

誠に来客が訪れた。【ディオニュソス・ファミアリア】の主神と濡羽色の髪に赤緋の瞳のエルフの少女だ。

「やあ、息災・・・というわけでもなさそうだね」

「死者を甦らせた反動だ。あともう数日はこの調子だ」

「ああ、きつとそうなのだろう。何も代償も無しに子供を甦らすほどこの世界は甘くない」

それでも凄く驚いているんだろう。教えて欲しいと言われても教える気はない。余計なことを言っただけで面倒事を起こしたくもないと思っていた一誠に、ディオニュソスは顔を真面目な表情のまま金髪を揺らしながら頭を垂らしだす。

「私の大切な子供達を救い、甦らせてくれたことに深く感謝している。君は【デュオニュソス・ファミアリア】の恩人だ。この恩は絶対に忘れない。忘れてはならない現実だ」

エルフの少女も頭を下げて、深い感謝の念を送ってくる。二人の感謝を受け入れ現況を訊く。

「二つ聞きたい。死者が復活したことであいつらの主神はどう受け止めている?」

「現実を受け入れている。実際、甦らず死んでしまった子供も少なくない。君に感謝をしたいと店に訪れる冒険者もいるみたいだが、私からも何か礼をしたい。私ができることなら何でもしたいが・・・」

礼、ね。と己が望むことは頭に浮かばず保留してくれと頼むとディオニュソスは快く了承した。男神とエルフの少女が去って一時間後、「ガネーシヤが見舞いに来たぞおつ!」と大声が聞こえた時には眉間に皺を寄せる一誠だった。



回復に専念する一誠の知らないところ、臨時の『神会』デイトゥスが開催された。場所は『異世界食堂』の二階だ。店長の不在の中でも店は切り盛りしており、ミア達だけでも経営できるぐらい異世界の料理を作れるようになっていたため、店主は安心して任せられるようになっていた。神々達は深刻な面持ちを顔に浮かべていた。27階層で起きた『27階層の悪夢と奇跡』と後に冒険者や神々達の間で記憶に残る事

件であるがそれよりも重視するべき事案が発表された。テーブルに肘をつけて両の指を口の前で合わせてロキは静かに口を開いた。

「集団規模で『ステイタス』の初期化が確認された、ちゅーわけか」

三日前の27階層で起きた事件の後。神々は甦った冒険者の状態を確認するべく「ステイタス」を調べたところ、殆どの冒険者の「ステイタス」がLv. 1にアビリティが10と初期化されていた。スキルも魔法も消えて無くなっていった事に驚きを隠せず、有力パーティとして集った眷族達の主神達はこの異常な現象を重く受け止め、情報の提供と共有を目的に最大派閥から中堅の派閥の主神に声を掛けて集わせた。

「ほらみろ！お前達だって俺の子供のように「ステイタス」のバグが起きたじゃないか！」

「やはりこれは何ものかによる人為的な現象としか……」

「人為的な現象って本気で言ってるのかよ?」

「読み書きはともかく私達の『恩恵』ファルナは神々わたしたちにしか扱えないものだ。子供達が直接『恩恵』ファルナをどうこうできるとは思えない」

「じゃあ、今回27階層に行った私の子供達の「ステイタス」の初期化の異常現象をどう説明がつくのかお前は言えるのか!?お前も同じ目に遭ってまだそんなこと言えるのか!」

喧騒する『神会』デナトウス。情報の共有はできてもまだ信じられない神々と被害に遭った神々が二つに分かれる最中、冷静沈着で静観の姿勢の神々は極一部。

「確かに神連中こいつらの言うとおり、普通の子供がうちの『恩恵』を直接どうこうできるとは思え変。それこそ未確認のスキルや魔法が原因やったら話は別やけど)」

「(普通じゃない子供……私とロキ、フレイヤは一人だけ知ってる)」

「(でも、あの子じゃないわ。だとすればもう一つの可能性は……)」
三柱の女神が示し合せたように視線を交わし以心伝心の如く同じ考えを頭に浮かべた。

「(新たな転生者がこのオラリオにいる)」

それから直ぐ、褐色肌の美の女神に視線が集まったことで当の女神は肩を震わせる。疑惑を掛けられていると察したのか、若干顔を青褪めて首を横に振る。この場にはいない極東の三柱の神を除いて唯一、転生者という爆弾を抱えている神はイシユタルぐらいしか判明していない。だが、名声と地位、富が失う事件を起こしてからすつかり大人しくしている女神がまた騒動を起こすだろうか？本神も私では無い！と必死に否定している辺りは、まあ、そうなのだろうと白として判断する。

「（取り敢えず、話しを進まさんと埒があかん）」

ロキは賭けに出た。ある意味これから告げる内容は一誠にも疑惑されかねないのだが、これ以上の騒ぎは無意味だと口を開いた。

「よし一回黙れ」

手を叩いて場を沈ませる朱色の髪の女神に呼応してピタリと神々は喧騒を収めた。逆らえば最大派閥に潰される恐ろしいさが待っている故に。

「今年になって『ステイタス』の初期化の異常現象。古代から星の数の程の子供達に与えたうちの『恩恵』を直接どうこうできる理由は未だに判明できへんが、仮面をつけた謎の男が原因であることぐらいは皆も察しておるやろ。実際その仮面の子供を見た子供は嘘を言っておらん子供がおるし、手掛かりはそれしかない。後で人相書きしてもらってギルドにブラックリストに載せてもらう方針でええな？」

「『異議なし』」

「それともう一つ」

イツセー、悪いなと思いつつもロキは告げた。

「ここ数年、オラリオだけじゃなくこの世界に奇妙な子供がいることがわかってきたんや。そいつらはな？生死問わずチートな能力を持つてこの世界とは違う世界から子供が来るんや。死んだ子供は違う世界の神によって甦った転生者って名乗るやつで、生きたまま異世界に来た子供は異邦人と言うんや。既に独自で調べたら転生者と異邦人は合わせて五十人以上も居ることが判明した」

どよめく神々。異世界の神々によってチートな能力を得てから甦

り、異世界から生きてそのまま異世界に来てしまう子供がこの世界にいるという事実—— 『未知』に興奮する神は少なくなかった。

「もしも今回の一件、そいつらの仕業なら個神的に辻褄が合うと思っておる。なんせ、転生者を名乗る子供は異世界の神に頼めば何でも望む能力を得られる話しや。それこそ不死身や不老不死、最強の攻撃や無限の魔力つちゆうチートや。そんな能力を得た子供は好き放題やりたい放題、何でもし放題や。最悪、うちら神々の敵になりかへんや。—— 去年みたいになあ？」

誰かとは言わないが、顔を強張らせる女神の一柱に鼻で笑い、神々に続けて警告する。

「異邦人は温厚的な子供が特徴や。あまり目立たず静かに暮らし元の世界に帰る目的でおる。せやから異邦人を見つけたとしてもちよつかい出すのは止めたほうがええで、藪を突いたら出てくるのは蛇じゃなくてドラゴンかもしれへんからな」

「はいはい！その異邦人は今もこのオラリオにいる!？」

「おるでー。少なくとも教える気はあらへんけどな」

教えたらいツセーに何を言われるか分かったもんじやあらへんと内心、ドキドキするロキだった。

「この一件、異世界から来た転生者もしくは異邦人の仕業なら氣いつけるんやな。連中は第一級冒険者を凌ぐ能力や実力を持っていてもおかしくあらへんから」

臨時の神会デナトウは幕を下ろし数人の神々を残して解散した。下から聞こえる客達の声を耳にしながらロキに怪訝な眼差しを送るへファイストスは責める様な口調で尋ねた。

「ロキ、一体どういうつもりなの？あの子の立場を危うくさせる事を言うなんて」

「考えなしで言わへんでファイたんうちは。神連中に認識させることが必要やったんや」

「する必要あるのかしら？」

「いざって時にうちらが庇う時があるかもしれへんや。既にうちらが目を点けていたと分かればおいそれと手出しも口出しもできひんや

ろ？」

「お前の考えは理解した。だが、最初に目を着けられるのはイツセーなのだが？」

自分から正体を明かしているこの『異世界食堂』の店主のことを指して言っているガネーシヤに押し黙ってしまうロキ。無言の視線も向けられ居た堪れなくなった女神はもってもらいたいことを言って話を進める。

「ステイタス」の初期化の異常はフィン達にも及ぶかもしれへん。イツセーにも今回のことを教えて助言をしてもらうんやけど」

「……もう他人事ではいられない、そう言いたいよね」

「もしも私の子供達にも初期化されちゃったら流石に困るし、いいんじゃないかしら？」

「では、このガネーシヤも訊いた後に直ぐに仮面の子供を探そう！」
「——その役目、オレにも任せてもらえないかなあ？」

密会中の神々の会話に静かに入り込んできた神が一柱現れた。羽付きの鍔広帽しを橙黄色の髪の上から被り軽装の旅人服を身に包む優男神、ヘルメスが扉の奥から姿を見せた。それにはロキが隠しもせず舌打ちする。

「自分、いい趣味しとるんやないか。盗み聞きするとはなあ」

「あはは、あんな興味深い話しをされちゃーね？無論、オレだけじゃないよ。」

意味深に言うヘルメスの背後から、ディオニュソスやデメテルも二階の空間にやってきて顔に手を当ててしまうロキ。

「デメテルはともかく、ディオニュソス。自分もかいな」

「すまない。だが、突然ロキが異世界から来た子供の話をするのだから何かあると踏んだのだ。私の子供も「ステイタス」の初期化の異常現象に遭ったからね」

「……ロキ、やっぱり失敗したんじゃないかしら？」

呆れる左の紅眼の視線にたじろぐロキの前にディオニュソスが立つ。

「ロキ、そしてヘファイストス達も何か共有の秘密を抱えているのだ

な？特にあの子、イツセーのことに。ただの子供が子供を甦らすことはまず不可能だ。だとすればロキが言った通りの転生者、もしくは異邦人と言う存在に当て嵌まるのだがどうだ？」

「ぐっ……」

「——もしや、今回の一連の騒動はあの子ではないのだろうか？」

「それは違う」

問い詰められるロキに突き付けられた問いは、フレイヤ、デメテル、ガネーシヤが間も置かず否定した。

「それは違うわディオニュソス。だってイツセーちゃんは優しい子だもの」

「ただの子供では無いことは認めるわ。でも、もしもあの子が今回の原因だったらわざわざ死んだ子を甦らすと思うのかしら？」

「そしてオラリオに貢献している！何の理由も無しに他の冒険者に危害を加えるなどイツセーは一度もしたことがないぞ！」

「オレもフレイヤ様達を支持するよディオニュソス。彼は実に面白い子だからね。しかも異世界から来たという子供なら尚更だ。『未知』で溢れている子は俺達娯楽と快楽に飢えた神々にとって宝箱だからさ」

一誠を庇うフレイヤ達の神意を真つ直ぐ向けられる男神はしばしの沈黙を肩を竦めることで破った。

「わかっている。ただ鎌をかけたただけだ。念には念を持って確かめさせてもらった。私の子供を甦らせてくれたのだからね」

「もう、ディオニュソス……酷い神ひとね」

「だけど、これだけは聞かせて欲しい。あの子は転生者か？それとも異邦人？」

ロキが明かした、「異邦人や」と。一誠の秘密を知らなかったデメテルとヘルメスは特に反応を見せず自然体で受け入れた。ディオニュソスも驚いた様子もせず好奇心の光を瞳に孕ませて訊く。

「そうか。異邦人ならば死者蘇生の能力を持っていてもおかしくないかな？できればもう少し彼のことを詳しく教えて欲しいものだけだね」

「これ以上は無理や。イツセーが異邦人やつてこともギリギリバラしてもええ範囲なんやで。ほんま、これ以上バラしたら……」

バラしたら？と小首を傾げるヘルメスの気持ちはデメテルとディオニュソスの気持ちでもあった。緊張で顔を強張らせるロキは言い辛そうに呟いた。

「イツセーから信頼と信用を失つて、城から追い出された揚句、アイズたんとアリサさんに嫌われる毎日を過ごす羽目になるかもしれへんのや」

「……確かに、私も嫌だわそれだけは」

「そうね、私もそれだけは避けたいわ」

「ガネーシヤもだ」

他派閥の子供から嫌われようと派閥全体からすればそれほど痛くも痒くもない事だが、一誠の秘密を知った上で信頼と信用を掴み取った神々からすれば手放したくない人材だ。異世界から来た存在だと加味しても、ここまで神々を楽しませてくれる子供はそうはいないと断言しても良い。

「例え、【ファミリア】が解散せざるを得ないことになってもイツセーを裏切りたくない心情なんや」

「脅されているのかい？」

「逆よ？私達はあの子のことを好きだから裏切りたくないの」

「うむ！俺も大好きだぞ！この肉体で抱擁してやりたいぐらいに！」

「それだけはやめなさいガネーシヤ。敬遠されるわよ」

「うふふ、イツセーちゃんは可愛い姿で抱きしめるとこっちが嬉しくなっちゃうの」

「ほうほう、そのぐらいの話だったら大丈夫なら聞かせて欲しいな？勿論この店の料理を食べながらだ」

ヘルメスの提案にロキ達は自分達の判断で一誠のことを教え始める。特に人間ではなくモンスターであることを頑なに喋らずそれ以外のことを。

「……で、ロキ？俺が異世界から来たつてことを独断で話したんだな？俺がそんな存在だと匂わせる話も神々にしたんだな」

「え、えーと、なあ〜?」

「話した、んだな?」

寝室でベッドの中にいる城の主を守らんとする人型のドラゴン、現世に召喚されたアジ・ダハーカに囲まれながら問いただされるロキ。憐れな女神に差し伸べる救いの手は皆無であり、彼等から発する威圧と鋭い眼差しにすっかり怯えて……。極東風の謝罪をして場を乗り切ろうとする。そんな中朗らかに顔を上げると言われ、恐る恐る上げると。

「ロキ」

「な、なんや……。?」

「一週間アイズ達から嫌いと言われるのと一週間酒を飲まずにいるの、どっちがいいかな?」

優しい顔で死刑宣告を受けた。一誠の部屋から情けない悲鳴が聞こえるが、部屋の外で待っているアイズ達には「自業自得」として片付けられた。その後、結局は三日間だけアイズ達から冷たい眼差しで朝昼晩「嫌い」と言われ飲酒も禁じられる羽目となり、四日目を迎えた朝、「燃えたで、うち、燃え尽きたで……。」「と真っ白に燃え尽きた主神を見掛けたハイエルフの女性は溜息を吐いた。

そんなロキと時を同じくしてギルドは謎の仮面の者を
ブ
ラ
ッ
ク
リス
ト
要注意人物一覧に載せ、事の重大さと今後も冒険者に対する被害の増加を考慮して……。一億という莫大な賞金が課せられた。迷宮都市オラリオにとって冒険者は必要不可欠な存在だ。無限の資源と怪物の宝の収入が著しく減るといふ最悪な事態だけは避けたい。そして……。

「ステイタス」の初期化の異常現象。もしも「ステイタス」そのものを奪い糧とする能力だったら、今まで冒険者達から奪ってきた糧を大雑把に計算すると……。第一級の実力にまで強くなっているはずだ。そうなれば相手は最終的に同じ第一級冒険者、フィン達を狙うだろう」

とある男の助言を参考にロキ達はギルドにそう申告した結果、第二級冒険者の外出を控える強制任務が発令された。だが、その日の内に

第二級以上の冒険者がいる「ファミリア」のホームが襲撃された。相手はやはり仮面の男であると襲われた冒険者と主神にギルドのは危険視せざるを得なかった。単独でホームに強襲して第二級や他の冒険者達の「ステイタス」を初期化、奪うのでは謹慎の意味が無い。ではどうする？と頭を抱えるギルドを露知らず「ロキ・ファミリア」と「フレイヤ・ファミリア」、「ガネーシャ・ファミリア」の他、他派閥の第二級以上の冒険者達は緊急招集で『幽玄の白天城』の敷地に集められていた。『異世界食堂』の一部の従業員でもある。

「あははー……今度は避難施設か俺の家は？」

「すまん、ここしか完全に安全な場所はないんや」

「見えないホームまで襲撃されないとはい思いうけれど、念には念をね」

「仮にここにいると見破られるとしても、流星に第二級以上の子供達がここまで集まると仮面の者も襲うことを躊躇するんじゃないかしら」

避難場所として最大派閥の主神によって優先的に保護する眷族だけを集め、一誠の城の中に招いた。ギルドにとつても最後の防波堤ともなりうる戦力の減少は避けたいはずだ、とロキ達は手に取るように分かっていた。そして二日後、一誠の復活と伴い相手が転生者、異邦人であると分かる魔道具マジックアイテムをアスファイと共に連日連夜製作にフリーダム・バカンスルームフリーダム・バカンスルームの中で精を出す。

「……貴方が考えた作品はどれもこれも私の常識を軽く超越する物ばかりですね。今回ののは一度は考えはしますが作る気はないものでしたが」

「事態が事態だ。これ以上無害だろうと実質被害に遭っている冒険者を増やしちや駄目だからな」

「オラリオは下級冒険者か上級冒険者だけしかない恐れがあるということですね」

「俺ら上級冒険者はまだ安心できるけど、今後のこと考えるとな」

水晶の円盤にカリカリと微細に削りを入れてアスファイが製作したフレームの型に確り嵌めるとそれは眼鏡の魔道具マジックアイテムとなった。試作品として作ってこれで何個目かと思うほど数多に作って数えるのも億

劫な二人。『神秘』のレアスキルとアビリティを保有する二人がその眼鏡を見つめ、アスファイが眼鏡を変えて掛け直し一誠に視線を向ける。

「どうだ？」

「・・・相手の「ステイタス」を盗み見をするようで抵抗がありませんが、完璧ですイッサー」

内心色々和一誠のスキルと魔法をツツコミたい衝動に駆られる彼女から朗報の言葉を貰い、一誠も作製した眼鏡を掛けてみるとアスファイの「ステイタス」が眼鏡越しで立体映像と化して表示した。これには一誠も満足げに頷いた。

「よし、これで十分だな。次は追跡が可能な道具を作ろう」

「まだ、他にも作るのですか？」

「寧ろそれが本命だ。この眼鏡は探知として扱う。もしも仮面の男がこの眼鏡の機能を知ってしまったら完全に姿を暗ます可能性があるからな。これを装着した冒険者全員にも連動して居場所が分かるようにする必要があるんだ」

眼鏡だけじゃなく仮面やバイザー型も作らなきゃな、と吐露する一誠の思考を感嘆するがまだまだ苦労の連続は続くのですねと静かに息を吐いた。

冒険譚 28

謎の仮面の男が危険人物ブラックリスト一覧に載せられ、東西南北のメインストリート中に一億ヴァリスの懸賞金が懸けられた貼り紙がこれでもかと張られている推定のレベルは記されていないが、一億ヴァリスを狙う徒党が我先にと動いて草の根をわけて探す勢いを見せる。この手の相手はならず者やゴロツキ、冒険者だけでなく賞金稼ぎや暗殺者を雇う商人すら狙っている。当然ながらお尋ね者の相手は尻尾を掴ませない。最初からいない存在のように。

だが、ある日こと。

「おい、お前ッ！黒髪の野郎！」

人の執念は時に凄まじい結果を発揮する。怒気と敵意を剥き出しにするは、「ステイタス」の初期化の異常現象で第二級から下級冒険者に成り下がってしまった『異世界食堂』で物凄く落ち込んでいた男性冒険者だった。他に彼の「ファミリア」とおぼしき集団もいて男の行く道を阻む黒髪の男は平然とした態度で立ち止まり対峙する。

「お前だろう、俺の「ステイタス」を奪ったのは！」

「突然なんの言い掛かりだよ。俺はどこにでもいる至って力のない一般市民だぜ」

「忘れたとは言わせないぞ。お前が俺に話し掛けながら触れてきた時から「ステイタス」がおかしくなったんだからな！」

「知らねえよ。その「ステイタス」の調子がたまたまおかしくなったんじゃないかねの？」

「また嘘ついたな」

男性冒険者の「ファミリア」の仲間から出てきた主神が男の真意を否定した。手にしている眼鏡を掛け男を見やるやニヤニヤと愉快げに笑みを浮かべたした。

「ほおーお前がそうなんだな。異世界から来た転生者という子供は。眉睡で半信半疑だったが本当にこの街にいるとは」

「はあ？転生者？なんのことだよ」

「惚けても無駄だ。この眼鏡はな？相手の情報をこれを通して見るこ

とが出来る魔道具マジックアイテムでな。お前ら異世界から来た転生者や異邦人の子供を探し出すのにうってつけなんだよ武宮光司くん？」

「っ……」

真名を言われた男の表情が始めての変化した。それが肯定と受け取るのに十分だった。さらに深まる笑みを刻み、カラーボールを手にして掲げた男神に呼応して団員達もカラーボールを手に持つて構える。

「あの転生者に当てろおー！当てたら一億ヴァリスは俺達のものだあー！」

「「「オオオオオオオオオオオオオツ!!」」」

「はっ？なんでこの世界にカラーボールなんてあるんだよっ。というか、捕まえる気よりも当てる気の方が強いのは何でだよ!?!」

バベルの塔――。

「おっ、例の転生者を見つけたようだ」

「意外に早く発見できたのね」

ヘルメスとヘファイストスの眩きで神々の眼の色が変わった。『第一回転生者を発見せよINカラーボール投げ大会！』と段幕と会場として設けられたバベルの塔の三十階にて神々は集っている時、件の転生者を発見したことでカラーボールが街中に投げ放たれる瞬間を円卓の真ん中に置かれた水晶から射影して浮かぶ四方形の立体映像に映った現場の把握を臨むロキ、フレイヤ、ヘファイストス、ガネーシャや『祭イベント』に不参加な神々がこれを観戦する。

「しっかしイツセーもとんでもないことを考えるもんや。まさかオラリオ中の「ファミアリア」を巻き込んでいけ好かない子供を見つけ出そうなんてなあ」

「まるで祭だね。一億なんて大金が、ただボールを当てただけで手に入るから「ファミアリア」もやる気十分」

「闇派閥イルヴァイスも力を失い、戦力も殆どないから今回のような事が出来ることだけど、あの子の行動力は天上知らずね」

逃げてても逃げててもその先には他派閥の主神と団員達と鉢合わせし、

また逃走を図る転生者。完璧に追われる者として逃走を繰り返す様子をよもやバベルの塔からも見られているとは露にも思っていないだろう。

「でも、オラリオから逃げられるじゃないかしら？もしくはダンジョンの中とか」

「ダンジョンの出入り口は一つしかなく、そこには第一級冒険者達が完全に待ち構えてる。オラリオの外へ行こうとするならば、イツセー君が何とかするって言ってたけど」

「ま、逃げ場はないっちゅうことや。うちらはこの祭を楽しませてもらうだけや」

精々逃げ回ればええ、と邪に目と口元が笑うロキの言葉に同意と他派閥の神々は無言で肯定する。

「いたぞー！こっちだあー！」

「あの時の恨み、今ここで晴らすー！」
「待てー！」

メロスのように走り続ける男。路地裏に逃げ込もうが物陰に身を潜めようが、自分の縄張りだと言わんばかりにゴロツキやならず者達が待ち構えていて「見つけたぞ一億うっ！」と彼等からにも追いかけられ、数で武器する上に執念深さ、執拗に追いかけてくる追跡者等の気迫に舌打ちし息を整える暇も無く足を速く動かす。

北で逃走劇を繰り返し、仕方なく東へ駆けだして大通りに入ると、目の前から極東製の鎧、甲冑と槍や刀を装備した武士達が襲いかかってきた。応戦する男に大通りや路地裏、抜け目や隙間すらあつという間に埋め尽くして逃げ場も隠れ場も失い発見され東方にいる間ずっと追いかけて回された。

地上の迷宮『ダイダロス通り』へ向かえば、無所属フッリの一般市民がカラーボールを大量に用意して構えていて、建物がカラーに変色しようとお構いなしに走り抜ける男に投げる。非力な人間のチリも積もれば山となる如く集った力は——男の足に奇跡の確立で当たった。喜ぶ一般市民を無視して人気のない場所で立て籠って息を整え、「ここなら見つける奴らはいないだろう」と言った傍から「ここにいる

ぞおっ！」と眼鏡を掛けた主神を筆頭に冒険者達が現れては追いかけ
てきた。結局男の安息の場所は東になく南へ南下する。

「南のメインストリートに向かった！」

「聞こえたな南にいる連中！黒髪に黒い目の若いヒューマンが変態仮
面だ、捕まえろおっ！」

しかも深追いはせず、追いかける区画を分担している様子で足を止
めて仲間知らせる連携も備えているではないか。南方の区画に入
るや否や、褐色肌の悍婦の集団が待ち構えていた。捕縛具や鞭、湾曲
刀を携えて。

「ああ、聞こえたよ。こっちも少くない数で仲間の「ステイタス」の
初期化が露見した手前、主神様は大層怒り狂ってたからね。やられた
らやり返させてもらうよ」

「ちっ、捕まえれるなら捕まえてみるよビッチどもが！」

艶のある黒い長髪のアマゾネスを筆頭に己の前に立ち塞がる全て
の敵に容赦なく逃げの選択から攻撃の選択に切り替える男。そこに
—— 三人の転生者も強襲し歓楽街と繁華街全体を巻き込んだ戦闘
が勃発した。

「っ・・・同類か丁度いい、お前等の特典を貰うぜ！」

「ぎけんなっ！お前を捕まえりや魂を取り戻せるんだ！大人しく捕ま
れ！」

「相手に触れなければ「ステイタス」や特典を奪われないって情報も
貰っているからな！」

「余裕で捕まえてやらあ！」

空間から飛び出す数多の得物や金の鎖に火炎球、全ての力のベクト
ルを反射する能力を駆使して男を追い詰める彼らこそが本命だった。
転生者同士の戦闘は数度程交え、流星に分が悪いと判断したか全速力
で南のメインストリートから遠ざかる勢いの逃走を図った。

「オラリオ中の「ファミリア」が俺を狙っているのかよ！くそ、だっ
たらほとぼり冷めるまでオラリオここから離れておくかっ」

走りながら南方の巨大市壁を見上げ、そう決断した男は建物の屋根
の上に飛び乗って何度も跳躍し壁へ目指す。そして一際大きく跳躍

して市壁を越えんと臨みオラリオの広大な野原を視界に入れたと同時に、音も無く忽然と目と鼻の先に現れた真紅の龍を彷彿させるフルプレート全身型鎧。

「っ!?!」

上半身を捻り、下半身を動かし鋭く振り払われる足の蹴りをする相手に反応する暇も無く男は決河の勢いで蹴り飛ばされ、南のメインストリートから中央広場セントラルパークにまで錐揉みしながら石畳の地面に激突、何度も跳ね返って広場の噴水を壊してようやく落ち着いた男。全身ずぶ濡れの状態で起き上がり、己を蹴り飛ばした鎧の者に怒りと敵意の炎を孕ませたその目は驚愕の色に一変した。

第一級冒険者オールメンバーに何時の間にか囲まれていた。しかも全員、眼鏡やバイザーを顔や目に装着して自分の何かを見透かそうとしている視線がヒシヒシ伝わってくる。

「やはり転生者の仕業だったみたいだね。しかも他の冒険者から「ステイタス」やスキルや魔法を奪って糧にしている、って仮説も間違いないようだ」

「そうだとしてもどれだけ「ステイタス」を奪ったんじや。Lv. 5の上アベリテイに全能力値がオールSSSSじゃと?」

「所属している「ファミリア」はないのが不思議であるが、ここまでは」
武器をあらゆる方から突き付けられる。常人ならば圧倒的な実力者に囲まれるだけで降伏する、だが、男の目に諦めの色は微塵も染まっていなかった。顔を俯いて悔しげに呪詛の如く漏らし、水に向かつて何度も拳を突き刺して敗者の癩癩だと彼等はそう認識した瞬間。

「ちくしょう!」

振り被った拳が噴水を破砕、弾ける膨大な水で一瞬だけ第一級冒険者達の視界を遮った。反射的に勢いよく突き付ける得物の切っ先からは肉の感触が伝わらず「あそこだ!」と言う声に反応して目で追えば、広場から西のメインストリートへ走り出していた男の背中が視界に映った。あの瞬間から都市最強の冒険者達の包囲網から抜け出した逃げ足は凄いと感嘆してしまうフィンだった。

「追うかフィン」

「ン、あつちには彼がいるから問題ないと思うよ。僕等はダンジョンに入らないようここを守るだけだ」

何かを悟った目で自分達の役割を最後まで勤めようと踵返してバベルの方へと戻る。

男は西のメインストリートの『冒険者通り』の中を掛け抜けていく。北と東と南とは違い、追いかけてくるのはならず者とゴロツキのみ。冒険者が隠れている気配すら感じられず疑問に思い浮かべながらもここならばと路地裏に移動して奥へと向かい、バベルの塔の次に高い建造物の方へと無自覚に進んでいく。そして、人々から忘れ去られた廃墟の区画に足を踏み入れた瞬間。

「よお随分と疲労困憊のようだな。主に精神的に」

真紅の長髪に右眼に眼帯を付けた男が廃墟の教会の屋根の上から声を飛ばした。眼帯の男に苛立ちで睨みつけ「お前か」と零した。以前取り逃がした男だと思いだして上から目線で見下ろしてくる相手を見上げて啖呵を切る。

「てめえの仕業か。俺を追い詰めて捕まえようなんざそうはいかねえぞ！」

「俺の仕業か否かと答えれば、是だ。けどお前の自業自得だろ？冒険者達から【ステイタス】を奪い続ければ遅かれ早かれこうなっていたさ」

肩を竦める男を見ていた男の足元の周囲の空間が水の波紋のように揺れ、そこから金色の鎖が飛び出して脚に絡み縛りつけた。もがく男の体に幾重の鎖が飛び出して全身に雁字搦めしていく。戦いらしい事もせず一方的に糞虫みたいな感じで縛られて地面に横たわった。「こんのおっ!?なんだ、この能力！お前の特典にこんな力は表示していなかったぞ！」

「それは【ステイタス】だけ見ているからだろ？俺の場合は【ステイタス】以外でも色んな能力があるんだ。お前等転生者からすれば隠しチートかもしれないな」

屋根から飛び降りて男の前に飛び降りた時……人ではなく二

対四枚の翼を生やしたドラゴンと化して正体を明かした。鎖に縛られて身動きできない男を掴みあげ視線を合わせるように顔を近づけた。

「な、はっ……?」

『この状態の俺をもう一度見てみる。俺とお前が見ているモノの違いがわかるかもしれない』

半ば放心する中でも男は目の前の存在に信じられないと、今までしてきたことを同じように行い……次第に顔が引き攣って青褪め、口唇が震えだした。

「な、何なんだよお前……何者なんだよっ、なんだよ、この異常な【ステイタス】はよっ!」

『さあな。お前等転生者が見た物は全て現実だとしか言えない』

俺自身は全く変わらな【ステイタス】しか見れないと嘆息し、男を掴む腕力が発揮する。

『取り敢えず、気絶でもしとけ』

「はっ?」

下から唸り上げるように振り上げた腕は——そのまま男の頭を地面に叩き込んだ。



ズルズルと中央広場セントラルパークに続く大通りに引きずられる男は広場に待ち構えていたフィン等のもとへぼいっと放り投げられた。

「手こずった様子はなさそうだね」

「そつちは逃げられたようだな? 第一級冒険者が揃いも揃って何してんだよサボったのか?」

「ハハハ、返す言葉も無いよ。で、訊くけどイツセー。何とかなるかな?」

フィンの言葉の意味、今まで奪われ続けた冒険者達の【ステイタス】を元に戻せないか。問われた男は難しい表情を浮かべ言い返す。

「形ある物ならともかく、神フェルナの恩恵を直接どうこうできるのは神だけだ。俺ができる領分を越えてる。こいつを殺したら元に戻るっていうなら話は別だけど」

どうする？と問い返されたフィンは一先ず何故か気を失っている男を起こす選択をした。壊れた噴水に顔を押し付け、水責めする一誠に制止の言葉を掛けた時は意識を取り戻したのだが。

「こ、殺す気かてめえっ!？」

「最悪、モンスターへの餌にして殺す気だけど質問に答えろ」

「はっ、どうせ奪った『ステイタス』を返せれるかって聞きたいんだろ？無理だな。奪ってきた力は俺の『ステイタス』の糧となって蓄積しているんだ。今更返還なんてできねえよ」

案の定予想通りの返事をされて、これじゃ俺もお手上げだとフィンに肩を竦める仕草をした一誠。

「となれば、奪われた冒険者達はまた零から這い上がってもらわうしかないってことか」

「申し訳ないけど僕等には直接どうすることもできない」

「はははっーぎまーねえーなガボボボボボツ!？」

生意気な男に容赦なく、今度は魔力で水を集めて巨大な塊と化になるとその中へ男を押し込んで水責めをする。

「フィン、第一級冒険者でどのぐらい長く水中にいられる？」

「水の適性のあるスキルや発展アビリティがある者となない者の差の違いはでるけど、まあ僕でも軽く三十分以上は潜れるよ」

「ん、じゃあ雷撃と熱も加えるか」

右手に炎、左手に雷を纏わせ水の中に突っ込む。雷で水の中が電導し、炎で急激に熱せられて高温度の熱湯となった中は男を苦しませるのに十分過ぎた。流石にこれはと苦しんでいる男に憐れと思いつインがやんわりと宥めた。

「…………イッサー、やり過ぎじゃないかい。彼、死ぬよ」

「今まで十数年も冒険者してきた血と汗と時間と労力を一気に奪われた連中は、こいつを殺したいほど恨み憎んでいるはずだぞ？これはまだ可愛い方で序の口だ」

そう言いつつ男を顔だけ水球から出した。

「もう一度聞けど、本当に元に戻すことはできないんだな？」

「で、できない…………できないから、頼む…………助け…………」

「シー、駄目」

水の中に押し戻して再び地獄のような激痛を味わわされる。目を見開くフィンにの隣で淡々と述べ――。

「お前は奪っちゃいけないものを奪ってきたんだ。フィン、簡単に許したらそいつらの心は晴れないだろ？」

朗らかに笑う一誠。が、左眼は笑っておらず怒りの炎を燃やしている。

「――だから苦しめ、それがお前の一番の罰だ」

『――ツツツ!!!』

炎と雷の威力を更に三倍与えた矢先、目をかっと開き水中で絶叫を上げようと聞こえない。そして熱湯と雷の水球は瞬く間に凍りつき、巨大な氷塊となって広場に鎮座する。広場は静まり返り、一誠の所業に誰一人口を開けず閉ざしたまま見つめることしかできないでいた。寧ろ今まで抱かなかった畏怖の念をこの瞬間、抱いてしまった。

「お主、殺したか……」

「仮死状態にただけだ。死んで無いから心配するな。碎けば解放されるし生き返る。でもこんな奴、殺しても別に構わないけどな。俺、こういう奴は嫌いだし」

始めて知る一誠の嫌いな人物。だから過酷なほど痛みを与えたのかと察したが、やり過ぎだと思うのは自分だけだろうかとフィンはそう考えた。

「それで、こいつはどうする？腐っても第一級だけど閉じ込める空間あるのか？」

「いや、多分ないよ。そもそも第一級冒険者の犯罪した者を捕まえたことは今まで一度も無いんだからね」

『『恩恵』無しで第一級だぞ、大丈夫なのか？』

「イツセー、君が何とかできないかい？」

「このまま地下牢に置いておけば無難じゃね？」

「それは……少し彼に同情してしまうね」

解放してやってほしいと目で言われ、渋々デコピンで粉碎する。氷塊から解放した男の胸にすかさず突き刺しては、三人の転生者のよう

に魂を抜き取って握り締め、精神的ダメージを与え起こされた男は絶叫する。

「おい」

「ひっ!?!」

「また何かやらかしたその瞬間は……わかつてるな?」

魂に爪を立てて握り締めると男の体に激痛が走り「わがっだ、わがりまじだ!二度どじまぜんがらもう止めてくださいお願いしますー」と泣きながら完全に屈服した姿勢を見せる男。あの強気な態度はどこへいったのやら、子供のよう泣きじゃくって心が折れているようにも見えて、それが人の成せる業なのかととても信じられなかった。

「……お主、容赦ないの」

「徹底的にやらないとまたツケあがるか、調子に乗るからな。こういう転生者がまだオラリオにいるかもしれないと思うと辟易もんだぞガレス」

返す直前で魂に魔方陣を刻み込んだ。男は安堵で胸を撫で下ろすよりもこの場から、一誠から一刻も早く離れたい一心で泣きながら駆けつけてきたギルド員に手錠をされどこかへ素直に連れ去られていった。

「今彼の魂に何をしたんだい」

「また悪事をしたその瞬間。体の内側から爆発するように仕込んだ。救いようのない馬鹿はもうどうしようもないって意味でな」

そんなこと知らない彼の転生者は、ゾツとするような爆弾を抱えて一生を過ごすのだろう。フィンはこの時の一誠に畏怖の念を抱かずにはいられなかった。自分の嫌いな人物に対して徹底的に懲らしめる性があるようだと思った。

【ステイタス】初期化の異常現象の原因で元凶たる犯罪者は捕らえられ、冒険者達の間で緊張の糸が緩みホッと安堵した。しかし、初期化された冒険者達の【ステイタス】は元に戻すことは叶わず主に被害に遭った第一級冒険者以外の者達は落ちぶれたりまた前向きに励もうと、様々だった。そして今回の元凶の転生者を捕まえた一誠に一億の賞金を貰い受けたが、カラーボールを当てた『ダイダロス通り』の

無所属のヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人達に全てでできるだけ均等に報酬として分け与えたのだった。その行いが「ガネーシャ・ファミリア」の名声に直結して「ファミリア」とオラリオ、ギルドに功績を残したのだった。

「本当にあの額のヴァリスを与えたのだな」

「俺は一度決めたことは最後までやり遂げるほうだからな」

「そうなんだね。あとイツセー、なんだか嬉しそうな感じがするんだけど何かあったの？」

自然体でいるつもりだろうとそれなりに傍らで過ごしてきた異性からすれば、些細な変化でも敏感に感じ取れた。亜麻色の髪的女性から指摘されて否定せず首肯した。

「ああ、人知れず褒章を貰ったからな」

「褒章？一体誰から？」

「あの転生者の男、今まで色んな冒険者から「ステイタス」を奪って蓄積した結果、全能力値^{アベリテイ}オールSSSだったんだ。——それを俺が見逃すと思うか？」

「……まさか、奪ったのか？」

翡翠の柳眉を寄せるハイエルフ。転生者と同じことをしたと思いきや、詰める目線で一誠を見るが首を横に振られた。

「いや、コピー、「ステイタス」を複製させてもらった。色々と調べたり試したりした結果でな。あいつの「ステイタス」は異世界風の「ステイタス」だから俺の力でも可能だったよ。で、あいつの特典は『ステイタステイカー』って言って、触れた対象の「ステイタス」を奪う能力だった。俺の予想通りだけどな」

金色の『ステイタスプレート』を取り出して見せつけると、二人の目は絶句で丸くなった。

「複製して得た俺の「ステイタス」だ」

イツセー

L v . 2

力：I O ↓ S S S 1 3 4 9

耐久：I O ↓ S S S 1 3 0 1

器用：I0↓SSS1322
敏捷：I0↓SSS1389
魔力：I0↓SSS1379
幸運：I

《魔法》

ネオ・ワールド・ドア
『真・異世界扉』

- ・移動系魔法。
- ・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来や異なる世界へ行き来できる。
- ・強い憧憬である程、成功率上昇。

(特典) 『鑑定』

- ・ありとあらゆるものの価値を見定める。

《スキル》

イレギュラー・アンソウン
『異常不明』

- ・戦闘時のみ発動。階位^{レベル}、『基本能力』^{アビリティ}が反映・真価を發揮し、全能力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果維持。
- ・懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・魅了する。
- ・異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続

けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理・魔法・シエフ 料理・魔法達人』

- ・調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・作製した武器の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『ウルトラ・レア 神秘希少』

- ・道具の作製時、発展アビリティ『神秘』の一時発現する。
- ・一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

『運命協同体』

- ・同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。
- ・懸想の丈の度合いによって【エクセリア経験値】の分配が変動する。
- ・『運命協同体』の副次効果——懸想の丈の度合いによって良好の同恩恵を持つ以外の者も共同することで【エクセリア経験値】の分配が変動する。
- ・アクティブトリガー任意発動。

(特典) 『ネットスーパー 異世界買物覧』

- ・ヴァリスを払うことで異世界の物資を購入可能アクティブトリガー
- ・任意発動。

(特典) 『ステイタステイカー』

- ・対象の【ステイタス】を奪う。

- ・奪った「ステイタス」の全てが上書き・蓄積し糧となる。
- ・アクティブトリガー任意発動。

この事実のリヴェリアは心底驚き、言葉を失った。

「す、すごい……アビリティがSSSなんて」

「俺が欲しかった魔力もこれだ。この数値なら……今度こそ元の世界と繋がられるかもしれないんだ」

「あつー！」

魔法『ネオ・ワールド・ドリア真・異世界扉』は移動系魔法。継続時間と大きさは魔力数値

に依存、憧憬によつて過去・現在・未来の異なる望む世界へ行き来できる。強い憧憬である程、成功率上昇。それが唯一無二の一誠が元の世界に帰れる手段。今まで鏡越しでしか見られず、精神体を飛ばして異世界にいる龍の目を介して一時的に会えるが生身の体で戻れた試しは皆無。魔力の数値をあげれば魔法の精度が高まるのだと予想し、今日、SSSという規格外な数値を手に入れた。これなら十分、生身の体でも元の世界に行けるかもしれない——そう確信する一誠は自然体でいても、嬉しさが身体から醸しだしていたようでアスナがそれを感じとつたのだろう。

「だから、リヴェリアとアスナ。俺の世界に行き来できたなら一緒に来てくれるか？」

「うん、勿論だよ」

「完全な未知の世界。ロキ達と同じ名を持つ神々がいる世界だ。行けるならば是が非でも。お前と共に行こう」

前向きに一誠からの誘いを受け入れ、領く二人に微笑み、魔法の詠唱を紡ぎ始める——。

「んじやあ早速あいつらで実験しようかな」

「あいつら、で……？」

「もしかしてあの子達？」

思い当たる人物達を思い浮かべ、問うアスナに無言で首肯する一誠は腕輪に触れて通信を繋げた。程無くして、緊張の面持ちをしている少女の顔が立体映像に映った。

『あ、あの……なんですか？』

「今から会えるか？お前等しかできないことだから協力してもらいたい」

『私達にしかできないこと？』

「ん、そうだ。今暇ならお前だけ今すぐ来てほしいがどうだ？」

一誠からの提案に少女、一佳は何度も首を振って首肯した。

『わかりました、直ぐに行きます。場所はイツセーさんの家でいいですわ？』

「ああ、そうだ」

待つててください。と言いつつ残り通信を切る前の一佳のテンションは心なしが高かった気がしなくもない。

「嬉しいのかな、イツセーのお手伝いができて」

「知らん」

「身も蓋もない感想を言うな」

十数分後、茶髪のサイドテールに軽装の戦闘衣バトルクロスを身に包んだ一佳、ついできた様子のシノンがやって来た。

「シノンも来たんだな。矢を買うか？」

「異世界の買い物してみたいわね」

「……アスナさん？」

いつの間にかそんな話を己の知らぬところでしていたのかな？と生暖かい目——プレッシャーを向けられるアスナは苦笑いをしたあと「ごめんなさい」と頭を垂らした。

「大丈夫よ、今のところ私と彼女しか知られてないから」

「え？えつと、何の話でしょうか……？」

「……まあいい、減るもんじやない話だ。それよりも俺に付き合ってもらおうぞ拳藤一佳」

「え、あ、はい、何をすればいいですか？」

緊張の面持ちで尋ねる。変なことじゃなければいいけど、と思いつながらもどこか期待する自分がいることに気づかない一佳は促された。「目を閉じた状態で元の世界のことを強く思い浮かべてくれ。それがお前にしてもらいたいことだ」

「それだけ、ですか？いったい何のために？」

「お前らには言っていないことだけど、異世界に繋げる魔法を覚えてるんだ」

「それって、イツセイさんの世界でも？」

「その通りだ。でも、その魔法に必要な魔力が全然無くてな。発動はできても一方的に見ることしか出来ないでいたんだが、その問題も解消したからまず最初は拳藤一佳達の世界にも繋げる事が出来るのか試したい話なんだよ」

それは、是非とも協力しなくてはいけないことだと力強く首肯する一佳。もしも成功したら皆で元の世界に帰れるのだ。協力して成功する。その強い意気込みで望む少女に見つめ自然体で両腕を伸ばす。添えるように伸ばした手を一佳の頭を掴み額と額を重ねる。鼻先がくつつきそうなほど至近距離で見つめ合う両者。

「始めるぞ。強く頭の中にイメージを思い浮かべるんだ」

「は、はい……っ」

真面目に取り組もうとする一誠と対極的に、乙女心が高なつて紅潮する顔で肯定する一佳の二人の足元に魔方陣が展開した。瞑目する男を見て一佳は一拍遅れて目を瞑って元の世界の記憶を思い起こす。

「イメージは、何でもいい。思い出のある場所か家族でも友人でも誰でも構わない。お前と言う存在が異世界の存在を証明している時点で、お前が浮かべたものが俺の頭の中にダイレクトに入って来てその記憶をもとに魔法で繋げる。できるかどうかは賭けに等しいがやる価値はある」

「はい」

強く思い浮かぶことが大事……そう考えたら学校で共に過ごしていたあの人の顔がスツと強く浮かび上がり、会いたいという想いが自然と強く高まった。

「(俺自身かよ……まあいいや)ネオ・ワールド・ドア」

拳藤一佳の強い憧憬を糧に魔法を発動した。

異世界の某所、UとAの英文字が重なったように作られている巨大な建造物があった。その建物はヒーローを育成する機関の施設でも

あり、優秀なヒーローを輩出させる名門校だった。だったという過去形で語られる理由は一年前、たった一人を残して二クラスしかないヒーロー科の生徒四十名と三名の教師が謎の失踪、神隠しに遭い、犯罪者の誘拐事件ではないかと、学校側の防衛セキュリティの認識、親御からの強い追及と世間からの嵐のような批判と風あたりに信用と信頼が失い、かつての栄光や名声は形骸化しつつあるのだった。それでも、まだ希望の一縷の光の筋が残されている。皆を連れ戻す使命を託された一人の少年に。

「やあ、身体の調子はどうだいつて訊きたいけど、あんまり好きそうじゃないみたいだね」

「・・・最近ほとんど寝てないからな。もう今は朝も深夜も変わらなくなってきたところだ」

ネズミのような白い毛並みを持つ小動物が人語を操り、歴代の者しか座ってはいけない椅子に腰を落として目の前の女性教員の隣に立つ少年と会話を交わした。ぼさぼさの髪に目の下に浮かぶ隈の濃さは尋常じゃなく少し顔色も悪い。規則正しい生活を送っていないと一目で分かっってしまう。

「すまない。全面的に押し付けてしまった」

「俺しかできないことで。適材適所、気にしないでくれ」

「でも、ちゃんとした食生活と睡眠を摂らないと駄目だよ。でないと君が倒れてしまう」

「一秒たりとも、無駄にはできない状況だ。この学校の風評も今じゃガタ落ちだろ。全てを取り戻すにはあいつらを探し出して見つけなきゃならないんだ」

信念を感じさせる言葉につぶらな瞳を閉じ、心の中で申し訳ないと謝罪の念を抱く。他人の為、学校の為に解決と言う出口が見えない闇の中で試行錯誤し続ける少年の労力は計り知れない。

「だとしても、それをできる可能性をもつ君自身が倒れたら本末転倒だ。非力な私達のせいで非常に申し訳ないと思っっている。でも、休まなきゃいけない時は休まなきゃダメなんだ。だから校長として言わせてもらうよ。今日ぐらいは何もせずゆっくり休みなさい」

「……」

「いいね」

「……わかった」

少年は観念した風に瞑目した。澁々とした表情でこの場に留まる理由がなくなつて踵を返すその足が、不意に停止して壁の方へ振り向いて信じられないと見開いた目を向ける少年。女性教員と校長は不思議そうに壁の方へ見るが、何も無い。

「どうしたんだい？」

「……ありえない」

「え、なに？」

何かに気付いた様子であるが本人にしか分からないことにチンプンカンプンな二人。具体的に教えて欲しいと思つて口を開いた次の瞬間。壁に光が大きく楕円形に集束し……形成していった。

「これは、君が？」

「俺じゃない。俺じゃないけど……どういうことだ」

「私達には判らないわ、どういうことなのか教えてちょうだい」

「……俺も知りたいところだ」

やがて光の鏡として完成し、鏡の向こうから五人の人影のシルエットが浮かび上がる。警戒する少年と女性の目の前でシルエットは次第に鏡の向こうにいる者達の姿を鮮明に表し、絶句。

「……」

少年は写し鏡で自分を見る感覚を覚えた。何故なら鏡の中にもう一人の自分、身長が伸びている己を視界に入れた故に三人の女性の中から「一誠さん！」と呼ばれるまで思考が停止していた。

「……一佳？」

「はい、お久しぶりです！あ、校長先生にミッドナイト先生！」

「まさか、拳藤君かい？今どこにいるんだい？」

「私達は異世界にいます。皆も無事に生きていますよ」

椅子から降りて鏡の前に立つ校長。動物の手で鏡に触れるが、硬い感触が手の平に伝わる。ミッドナイトと呼ばれた女性も触れるが結果は同じであった。

「そこから出られないの?」

「えっと、駄目みたいです。一誠さん、あ、異世界にいるイツセーさんの魔法でやつとのように」

「もう一人の、彼……?」

——もう一人の兵藤一誠を見つめ、まだ少年の兵藤一誠と交互に見る。別の世界にいる同じ人物を二人も見ることになるとは誰も思いもしなかったことだ。兵藤一誠は驚いた表情のまま一誠に話しかけた。

「俺と同じ境遇の真っ只中にいるのか」

「ああ、こっちは四年も住んでいるぞ」

「こっちは二年だ」

「へえ……並行世界の時間の流れが違うんだな。ていうか、凄い顔だぞお前。髪がボサボサだし」

「五月蠅い、一佳達を探そうと必死に模索していたんだ。それよりも一佳達を守ってくれているのか?」

「守ってないぞ。こいつら一度ダンジョンで勝手に死んだしな」

はっ!?!と目を見開く兵藤一誠だったが、自分ならばその後どうするかを直ぐに察した。傍にいる二人は酷く他の者達の安否を確かめる問いをしているものの、一誠に完全にスルーされている。

「というか、お前、ネズミが普通に立って喋っているの気にしないのかよ」

「いや、この世界はそういう世界だから。一佳達から何も聞いていないのか?」

「こいつらは俺をお前に被せて接してくるんだぞ?俺を俺として見ない相手と接するなんて嫌だわ」

「……やっぱり俺だな。それは俺も同感だ」

「はは、だろうな」

共感している場合じゃないでしょ!とツツコミを入れるミッドナイトは訊き出した。

「ねえ、同じ兵藤一誠ならその世界からこっちの世界にどうにか繋げられないの?」

「それを、俺が何もしていないと思っっているのか？」

「……まだ、できないってことなのね」

「異世界の魔法でようやくここまでできるようになったんだ。本来なら、この鏡を通じて行き来できるはずなんだが……十分魔力値もあるのに、なんでかなあ……」

そう言いながら拳を腰の後ろまで引き、正拳突きを鏡にブチ当てた。本来なら割れるはずの鏡は鈍い轟音を鳴らすだけでビクともしない結果で終わった。

「ち、割れないのか。魔法にしちやおかしなことだ」

「……なあ、オーフィスの目あるんだよな？」

「ん？そりやお前だから……成程もしかすると試す価値があるな」

二人だけしか分からない会話の内容に理解できず、見守ることしかできない一同。徐に右眼の眼帯を外し、鏡を背に振り返る二人の兵藤一誠が濡羽色の眼を開眼したら、同じ顔の眉根が寄った。

「駄目か」

「駄目だな。目を介して相手の視線で見られるならと思っただけど」

「いい案だと感じたんだが、この鏡がそれすらも邪魔するか。まさかあの女神が邪魔しているんじゃないだろうな」

「有り得る話しだと思うぞ。今でもどこかで見ていると思うし」

「いつか、シバいてやりたいな」

揃ってため息を吐き、後に振り返った兵藤一誠は乞うた。

「なあ、オールマイト達にも後でいいから会わせてくれないか？」

「あいつらに変な期待を抱いてももらいたくないんだけど？何時なんだーって催促されるのも億劫しいし」

「そっちの世界にいるお前だけが頼りなんだから仕方が無いだろ？立場が逆だったら同じだぞ」

「はあ……わかったよ。十分後でいいか？」

と、予定を聞くところで校長が口出しした。

「いや、一時間後にしてくれるかな？拳藤君達の親御さんをここに招いて彼女達の無事な姿を見せたい」

「一時間後か。で、場所は？こつちから特定の場所に魔法を発動することはできない。というか、俺がそつちの世界の事なんて知らないからできない。ここに魔法が発現したのは拳藤一佳がもう一人の俺のことを強く想い浮かべたからなんだけど」

「一佳……」

「う、ううう……」

さらっと少女を羞恥させる言葉を述べられて兵藤一誠は生温かい目で見つめ、拳藤一佳は顔から火が出そうなほど耳まで赤く染まった。

「一つ聞いていいか。一佳達に手を出してないだろうな？」

「好きでもない女に手を出すほど俺は最低じゃない」

隣で同じ兵藤一誠とは言え、呆れながら好きじゃないと言われると乙女心は複雑で、拳藤一佳は顔にも複雑な表情を浮かべた。それを非難として窘める兵藤一誠。

「お前、俺なんだからもう少し言葉に気をつけろよ。俺が一佳達のことを好きじゃないって言っているようなもんだぞ」

「こいつが俺をお前だと勘違いさせてもいいわけ？」

「……物凄く複雑だ」

自分だけど自分じゃない兵藤一誠に好意を向けられていると思うと、口にしたように複雑極まりない。鏡の中の自分は拳藤一佳に話しかけた。

「おい拳藤一佳。もう一人の俺に何か言うことはあるか？」

「えっ？」

「さつきから何も言っていないからな。言いたいことがないなら鏡を消すぞ？」

一時間も魔法を発動し続けるのは面倒だと言いたげな一誠は一佳に促す。少し当惑するが言いたいことがあると真つ直ぐ兵藤一誠に視線を送った。

冒険譚 29

極東で暗躍した転生者、欲望の赴くままに動いていた転生者、架空キヤラクターを望んだ転生者、冒険者達から「ステイタス」を奪い続けた転生者。その他、別の転生者や憑依者の活動情報が転生を司るミカルに届き溜息を吐かせた。

「こつとも高くない確率で出会ってしまうものですか？いえ、転生する先を提供しているのは我々ですが殆どがあの者に……」

報告書を片手に食事を勧める。今日は焼き魚に味噌汁、たくあん、白飯、程良く焼かれたベーコンやウインナーにスクランブルエッグとフルーツヨーグルト。食べることを必要しない彼女は異世界の料理の味を占めて楽しみの一つとなった今日まで欠かさず完食してきた。一番美味しいと思ったのはフルーツヨーグルトである。食べ終えた食器を送り返す際に紙に書いて強請った時は何時だったか、毎日強請った料理が用意され幸せを噛み締める。甘みと酸味の相性が抜群で……。気が付くと中身が空っぽになって少々残念そうに漏らした。

「あ、もうなくなっちゃいました。次は、昼食の時ですか……少し待ち遠しいです」

食べ終えた食器を神棚に置いて「ごちそうさまでした」と合掌と同時に送り返した。ミカルの一日はこれで始まるのである。

「さて、今日も何百何千と転生を待つ人間の処理を頑張りましょう」
送り返された食器を手に神棚から離れ、洗い出す男。彼もまたこれが締め括りだとばかり一日が始まる。肌寒くなってきた季節の移り変わりを肌で感じ取りながら……。あいつを呼びだして、模擬戦の相手にでもなってもらおうかな？極東の転生者に背筋が凍るような寒気を覚えさせた。

「て、手加減……してくれよ？」

「それじゃ意味が無いだろ？」

——強制的に呼び出された極東の転生者、名は大和大輔。指の関

節を鳴らして不敵の笑みを浮かべる一誠にすっかり逃げ腰になっている。ギャラリーは何時も通りのメンバーに加え、極東の三柱もいた。カウントダウンも始まっており、三分間の模擬戦が始まろうとしていた。

「そう言えばお前、「ランクアップ」したのか？」

「え？ああ、いや。全然する気配なんてないぞ」

「成程、それでもこのオラリオで冒険者として真面目に生きているのはお前ぐらいか」

「他の転生者の事なんて知らないが、犯罪者紛いな事をしているのか」「お前もその枠に入るからな？」

事実である為に否定できず押し黙った時、カウントダウンが0となり一誠が不敵な物言いを口にした。

「久々にお前と戦えるんだ。直ぐに負けてくれるなよ？」

全身から突起物、ミサイルのような物を生やす。それを見て、大輔は目と一緒に口元を引き攣らせた。

「……お前、本当に人間じゃねーな……っ！」

「褒め言葉として受け取る。代わりにこれをくらえ」

突起物が放たれ、追尾性を見せる動きで飛翔する。しかも放った傍から装填される銃弾のようにまた生えて撃ち出される。瞠目するも飛んでくるミサイルもどきに殴って暴発させる。「あ、意外といけるんだな」と自信がいたらマシンガンのように気の弾をお返しとばかりはなつてミサイルを撃ち落とし始めた。

「直ぐに対応するか。んじゃあ、これは？」

突起物を消した代わりに自身の影を広げた一誠。その影から数多の黒い異形が生まれ出て来て、あつという間にトレーニングルームの半分がモンスタ―と見紛う異形で覆い尽くした。ギャラリーからも驚きと動揺の気配を醸し出し、大輔も信じられないと呟いた。

「な、なんだその化け物ども……」

『アナリアレイション・メイカー魔獣創造』っていう能力で産み出した魔獣、まあ……この世界で例えるならモンスタ―か」

「じ、人工的にモンスタ―を作れるのか!？」

「おう、階層主級からそれを超えるモンスターもだ」

その証明と一誠の背後から全長五十Mは優にある巨大な人型から昆虫、鳥類、爬虫類や魚類の魔獣を創造し大輔を愕然させた。

「というこで、頑張れ。頑張ったらカルビ丼を作ってやるよ」

「ちよ——これ無理いつ!?!」

心の底から悲鳴を上げる。闘気を纏って宙に浮いて逃げようとするれば風の鎌や黒い水鉄砲、超音波に火炎球で追撃され、トドメは巨人の目から放つビームで直撃する大輔が落ちると小型の魔獣達に寄って集れて数の暴力に「うぎやああああ!」と屈する姿を見てギャラリィは。

「あかん、絶対にあかん……イツセーを怒らせたらオラリオどころか世界が壊滅するわっ」

「あ、あんなこともできるのね……あの子の世界ってどれだけ凄いのよ……」

「私達、運が良かったのよね……?」

フレイヤ以外、完璧にドン引きしていた。逆に眷族達は腕試ししてみたいという気持ちを抱いていた。我慢できずにアイスとアリサが飛び出し、異形の魔獣達を屠ることで倒す対象に加われて襲われる。それを嬉しそうに斬り伏せていき、やがて悪ノリとしてフィン達も参加して共に戦い始めた。倒した傍から霧のように霧散する魔獣達は三分の一も消失することで一誠を煽るガレス。

「ほれイツセー、どんどんモンスターを作れ!もういなくなってしまうぞい!」

「やってくれるな。じゃあ、こいつだ」

筋骨隆々の人型魔獣を創造しガレスに仕掛けさせた。待ち構える老兵のドワーフは硬く握り締めた拳を殴りかかる魔獣の拳と突き合わせ、自分と同等の力を持つことが分かると口の橋を吊り上げてニイツと笑った。

フィンとオツタルにも五体の巨大な魔獣と戦わされ、言葉通りの階層主を上回る強さを感じ取り、割と全力で戦っているのが分かる。そんな中、魚類型の魔獣はアルガナ達に倒され次の獲物に向かって飛び

かかっていた姿に負けてはいられないと果敢に挑んだ。そんな様子を見て楽しくなってきた一誠も魔獣を産み続け、彼等彼女等が満足するまで戦わせ続けた。その結果、当然か必然なのかフィリアを筆頭にまだ駆け出しのレギンやレイネル、ラトラが「ランクアップ」をし魔獣を相手でも経験値が溜まるものだと分かったアイズとアリサはダンジョンよりも一誠が創造する魔獣の方が簡易に挑めれて強くなれると強請るようになった。

全ての魔獣を倒しきりトレーニングルームを後にやり遂げた、という満足感を顔に出す少女達にどっしりとした昼食とデザートを振る舞った後、デメテルの来訪を受けた。リビングキッチンで出迎え挨拶を交わす。

「こんにちはイツセーちゃん」

「こんにちは。今日はどうした？頼んでいる食材の調達の日はまだ先だと思うけど」

「イツセーちゃんが異邦人だって知ってからもっと知りたくなっちゃったの。だから私と色んな話をしましょ？」

持参したバスケットの中から大量のアップルパイの香り、それを嗅がせるデメテルに拒絶する理由はない。あつという間にシヨタ狐化になって、女神の膝の上で好物の物を食べながら異世界のことについて話を交えた。自分が住んでいた世界にはデメテル達と同じ名を持つ神々が存在していると教えられた時は驚嘆の息を漏らし、ロキ達同様に同じ名を持つ神の事を知りたがる反応を示した。

「バーチェお姉さま、稽古付けてください！」

「今日もお願いします！」

「・・・離れてくれ」

扉の向こうから二つの活発的な声と困った様な声音を漏らす声が聞こえてきた。姿が見えずとも二人のアマゾネスの少女に懐かれたアマゾネスが対応に困っていることが手に取るように分かる。遠のく声はここから離れてどこかに行ったのだろう。

「ふふ、イツセーちゃんに救われたあの子達も元氣そうね」

「デメテルの所にいる元奴隷達は？」

「元気にしているわ。まだどこか距離感を掴めていない子もいるけれど、皆と一緒に野菜を育てているから慣れてくれると思うの」

「そうか、そのまま幸せになってくれれば万々歳だな」

「ええ、そうね」

ムギユツと抱きしめられて豊饒の女神の名に相応しい豊かな体に包まれるように埋もれ、頭の上から重量感がある柔らかい二つの物の存在感をこれでもかと狐耳が潰れて感じる一誠だった。

「ところでイツセーちゃん。あなたの世界でどんな風に農業しているのか分かるかしら？」

「栽培や野菜の育て方はこの世界と変わらないぞ？ただ、育てる為に必要な肥料がたくさんある」

「肥料って自然の土や動物性の肥料だけじゃないの？」

意外そうに小首を傾げる豊穡の女神に肯定と言いつ返す。

「肥料の種類ごとに野菜を分けて育てるんだ。土に遭わない植物は育たず、実っても熟成せず枯れることもあるだろ？だから俺の世界の古代の人達は、どうやったらより品質の高い動植物が育てられる土になるのか、その研究を何百年もしてその研究を現代まで引き継がれた結果、農場には欠かせない肥料が完成したんだ」

「土を研究する・・・イツセーちゃんの世界の子供はとても勉強熱心なのね。私達じゃ考えつかない事をしているなんて、異世界の子供と会話をしない限り知ることが無かったわ」

「ダンジョンの中で植物が育つ理由も気になるけどな」

因みに、敷地内に育ててるダンジョン原産の植物や採取用の原料はダンジョンの土で育てている。通常の土でも育つことが判明しているが、どうせならばと敢えて迷宮の土で育てている。

「その異世界で研究した肥料や土はイツセーちゃんでもこの世界で作れる？」

「やー、ちよつと難しいかな。買えるけど」

「買える・・・？」

キョトンと鸚鵡返しをしたデメテルの抱擁から離れて、トテテとリビングキッチンを後にどこかへ行つた一誠を見送ること数分後。

ガラガラと荷台に大量のヴァリスを積んで運んで戻ってきた、元の身長に戻した男がそのお金で何をするのだろうか？と興味深そうに見つめたら。「ネットスーパー」と言う魔法の呪文のような言葉を口にし、立体的な映像が一誠の前で浮かびあがった。

「あら、魔法？」

「いんや、ロキから聞いただろ？転生者が異世界の神から最強やチートな能力を貰うって話し。俺も異世界の神から異世界の買い物ができる能力を貰ったんだよ」

「そうなの。でも、イツセーちゃんも強い力が欲しかったんじゃない？」

「最強の力や能力よりも元の世界と行き来できる力が欲しかった」

切実な願いを漏らしながらポチポチと肥料となる土を販売しているサイトを表示し、購入する物を選ぶとヴァリスをチャージする。その様子を見てデメテルはもつと近くで見ようと寄り添ってきた。

「異世界の買い物ってどんな物が買えるのかしら？」

「雑貨や生活用品、武器や飲料水に多種多彩で多様な食材、乗り物とかぶつちやけ金で買える物何でもだ」

「お金さえあれば何でも買えるって、物凄く便利じゃない？」

「逆になかったら極めて不便だ。金の亡者にだけはなりたくないな」

「ねえ、異世界の野菜の種とか株とかあるかしら？」

「あるぞ、何が欲しい？」

その専用のサイトに切り替えてデメテル自身に選ばせる。異世界の食材と成り得る種を見て目を輝かす彼女はこの世界にない物にか選び、不足したヴァリスを更にチャージし購入すると虚空に集束する光から複数の段ボールが床に落ちてきた。見慣れぬ柔らかい箱を手にして開ける一誠の手には購入した種や肥料が出てきた。

「ほい、デメテル」

「本当に買えちゃうのね……イツセーちゃん、もしかして凄い能力を貰ったんじゃない？」

「金が無いと何も買うことはできないけど、村を作ることができそうだな」

ヴァリスを入れていた箱の底から中型のバックを取り出し、購入した物をその中に次々と入れていく。入れていく、入れていく。流石に聞かすにはいられなかったデメテル。

「まだ入るの？」

「ん？ああ、デメテルは知らないんだっけ。これは俺特製のマジックバックだ。収納する物量を無制限にして重量もこのバックの重さにしかならない魔道マジックアイテム具なんだよ」

「……それ、物凄いものだってイツセイちゃんわかってる？」

自覚している。故に密かにサポーター殺しと自称していると心の中で呟き全てを入れ終わるとデメテルにバックをつき出す。

「はいよ。試したら結果を教えてください」

「分かったわ。後でお金も返すわね？」

「いや、そつちで試していい結果だったら俺もそうするつもりだ。それを利用して元を取るつもりだから気にしないで返さなくていいよ」
「それじゃ駄目よ。大切なお金を使わせちゃったんだから。それでもお金がいらないなら他で返すわね？」

蜂蜜色の瞳が潤い、頬を紅潮させて「他で返すわね」という部分だけ妙に熱っぽい声音で述べたデメテル。とある日の深夜、複数の女性や女神達に混じって男と激しい情事を耽る豊満な身体の女神がいるのだが、まだ日が高いために誰も彼女の神意を気付く者はいなかった。

その頃。アスナは買い物に街へ繰り出していた。腰に佩いている神の領域に足を踏み込んだ者が作り上げたレイピアを携えて南西の交易所で品々を物色中である。食材やダンジョンの資源にモンスターのドロップアイテムなど様々な品が販売されていて、初めて交易所がある区画に訪れた者はい物珍しさに目移りするだろう。しかし、異世界の日本から来た異邦人のアスナには少し物足りなかった。活気を見せる物売りの人達、食材の売り込みも文句は無いが売る物の種類の少なさと似たような物が多い点に。脳裏に多い浮かぶ男のスキルだったらショッピングセンターができるのになあ、と相手を困ら

せる考えかもしれないと微笑する。そもそも実現できたとしてこの世界に永住することは無いだろう。その時のことを考慮すれば余計な事をせず誰でもできる事だけして生きていければいい、きつと彼の男もそう考えているはずだ。そう結論する亜麻色の髪の女性は特に目ぼしい物は無かった、と踵を返して来た道に足を運び西のメインストーリートへ向かう。

「あ、アスナさん」

その途中。ばったりと異邦人達と遭遇した。ヒーロー組の拳藤一佳達だ。

「皆、買い物？」

「はい、イツセーさんに助けてもらったお礼をしたくて」

「ああ、成程。でも、彼は気にしないタイプだよ？」

「元の世界にいる一誠さんと同じ、って言ったら不貞腐れそうですけど判っている上でどうしてもしたいんです」

苦笑いする少女に相槌を打ち「内緒にしておくね」と悪戯つ子のような笑みを浮かべた。年上の大人の女性がそんな表情をすると不思議と絵になつて同性でも少し見惚れてしまった拳藤一佳。

「あの、それですね……今さらですけど、アスナさんとイツセーさんは同棲しているんですよね？」

「ど、同棲……同居、いや、居候も似たようなもんだし、どうなんでしょう？えっとそれで？」

「ええっと、この世界のイツセーさんの好きな物ってなんですか？」

そう尋ねられて思い浮かぶは……シヨタ狐化になつて嬉しそうに尻尾を振って食べる姿の一誠。もはや見慣れた姿であるが、可愛いものは可愛い。今度自分の膝の上に乗せてみたいと思いつながら教えた。

「アップルパイだよ」

「アップルパイですか？」

不思議そうに首を傾げる感じで訊き返した少女に知らないの？と思いつながら問い返した。

「あれ、違うの？」

「いえ、私達の世界にいた一誠さんは特に好きな物は挙げなかったの
で。ちよつと意外だと思つてました」

「そつか、私が知つているのはそれぐらいだから後は頑張つてね？」

はい、と答える彼女等。するとポニーテールに結んだ髪少女が尋
ねてきた。

「イツセーさんは大丈夫なんですか？あの時、死んだ人達を甦らせて
倒れました」

「うん、もう大丈夫だよ。あれから一週間寝込みの状態だったけれど
今は何時も通り元気にしているよ」

「そうですか。やはり、話に聞いていた通りなんですのね……」

安堵で胸を撫で下ろす、ではなく何か知つていて不安や心配をして
いる様子にアスナは気になった。

「やつぱり、何かあるの？」

「私達は……直接見たわけではありませんが話しならお伺いして
います。一誠さんが起こす奇跡は全てを代償するハイリスクが伴つ
ています」

知つた、知つてしまった。死者を甦らせ復活を促す代償は思つてい
た以上に高く軽くないことを。瞠目する亜麻色の瞳は、少女から聞い
たハイリスクの内容を耳にして凍結したように固まった。

「甦らせた人の相応の命と引き換えに……?」

ダダダダダダダッ……!!

「イツセーッ！」

「淑女が廊下は走つてはいけません！」

「あ、ごめんなさい」

つて、違う違うと炉の中で燃え盛る炎と向き合い熱せられた金属に
鋭く振るう一誠を見つめる。勢いよく不純物を取り除く作業を延々
と繰り返し、真面目な面持ちで金属に息吹を叩きこむその姿に言葉を
失いかける。

「走つてくるほど急用が入ったか？」

「……一佳ちゃん達から聞いたの。死者を甦らす代償のことを」

「そうか」

あつけらかんとそれだけ返す。今更それがどうしたと言わんばかりに入口に立つ女性を見ず、今だけは職人のように手を止めず形を変えて整えていく。

「どうして、自分の命を削ってまで甦らそうとするの？」

「そう言う能力だから仕方が無いだろう？それにあの力はアスナ達の世界にとって奇跡でもあり禁忌でもあるはずだ。何の代償も無しに……」

「答えて」

真剣な話をしている、と彼女の顔を見ずとも雰囲気伝わってくる。困ったものだと思いを吐いてカアン、カアン、カアン、と鉄と金属が奏でる音を止めずに言い返した。

「そう言う能力だから仕方が無い、それが前提だ。アスナ、もしもキリト達が死んでお前の手で甦らす事が出来るならどうする」

「……」

「当然、するだろう？大切な人、大切な仲間、大切な家族、理由は何でもいい。とにかくそういう術が手元にあるなら命を懸けてまで甦らしたいと」

俺もそうだと、語る彼の男の左目はどこか遠かった。

「目の前で大切な人が殺されたらそうしたくもなる」

「……そんなことが遭ったの？」

「ああ、俺でも無理なほどに肉片も残さずに殺されて消された。そしてそんなことした奴を殺すために復讐者となって俺の邪魔をする仲間だった連中と敵対した」

息を呑む気配を感じ取り自嘲的な笑みを浮かべる。

「意外だろ？俺が復讐に走るなんて」

「……復讐は、できたの？」

「半分できて半分できなかった。俺が思っていた復讐はできなかったけど、殺すことはできたよ」

「そう、なんだ……」

だからだ、だからなのだ。

「その時の俺とどうしても被って見えてしまうんだ。目の前で死んでいる人間にもしも大切な仲間や恋人、家族がいるなら甦らしてハッピーエンドになってもraitたいと。ま、自己満足、エゴ、身勝手な偽善者の考えだ」

苦笑を浮かべる一誠の隣でアスナが近づいてきた。作業の邪魔をする気配はなく、物静かに見下ろすだけで佇んだ。

「一佳ちゃん達の友達や私の仲間を甦らせた理由は？」

「何時か元の世界に帰るんだ。俺もあいつらもこの世界で死んでいられない」

「他の異邦人や転生者達も？」

「元の世界に戻りたい意思がないなら俺から何もしない、余計なお節介だろ。寧ろ今までの転生者は殺しても問題ない連中だ。世の為、人の為になる」

「じゃあ、なんでそうしないの？」

「気に入らない奴を見る度に殺す危ない殺人鬼になってほしいのかアスナさん？」

バツ悪そうに謝るアスナ。

「二縷の温情だ。あいつらも二度目の人生をこの世界で送っているんだからな。大人しく平穩に暮らすんだたら何もしないし言わない。だけど、それと真逆な行為をして俺の知り合いや仲間、大切な家族に手を出すつもりなら殺す」

「ちよつと、矛盾している？」

「そうだな。している。俺も非情に成り切れていない。もしも非情を貫いて相手を殺すことがあれば、それは俺が完全にブチ切れた時だけだな」

故に、アスナに告げた。

「俺は人を殺した経験がある。それも二度もな。多分、拳藤一佳達も知っているだろうよ。あの時の行動に俺は後悔も反省もしない。復讐心に駆られて誰かに利用されたとしてもどうでもよかつたからな。だから……」

金眼に宿る炎は黒く燻っていた。

「俺は人を殺すことを躊躇わない。それで周りの皆が俺から離れようと構わない。この世界じゃ俺は孤独に生きなきゃいけない筈だったんだからな」

「……仮に君がそうして皆がそうすると思うの？」

溜息を吐くことでアスナの問いを返した。

「はあ……今更思わないよ。出会い方や第一印象次第で俺はオリオにいたくどこか違う場所に行ってただろうな」

でなきや、アリサを始め色んな人々と出会うことはなかったしアイズ達は転生者の三人に人生を奪われていた。と思わずにはいられない。アスナ達もいずれその魔の手に伸びていた筈だと思いつながら吐露する。

「恵まれているんだなあ……こんな化け物の俺でもさ」

「……うん、君は恵まれてるよ」

横で膝を折って座りながら言うアスナの声音は優しかった。

「この世界にとって君は生き辛いかもしれないけれど、ちゃんと誠心誠意で接すれば分かってくれる人がいるんだって証明しているんだから恵まれているよ」

「そう言うアスナもな。最初から仲間とこの世界にたんだからそんなに不安じゃなかったろ？」

「どうやって明日も生きようかぐらいは不安だったよ？そこはアルテミス様のお陰で何とかなっただけだね」

「……俺の場合、何時の間にかバベルの塔の前に立ってて呆然と立っていたら、ロキに声を掛けられたのが始まりだったな」

「あ、私達もそうだったんだよ？」

初めて異世界に来たその日の経緯の話をした二人は自然と会話の花を咲かせ、笑みを零す。不意に右眼の眼帯に触れてきた。

「どうして眼帯を付けてるの？右眼は義眼じゃないんでしょ？前から不思議に思ってたんだけど」

「これは俺自身の目ではないんだ。別のドラゴンの目なんだ。そのおかげでそのドラゴンの目と通じてな、地球の反対側にいても目と目が介して別の景色が見えてしまうんだ」

「二台のテレビを同時に見るような感覚？」

その例えは何だかなあーと微妙な気持ちとなつて苦笑しながら首肯する。

「常時そんな感じで目を閉じない限り少し不便なんだよ。だからこうして眼帯を付けている」

「もしかして、この世界でもそうなの？」

「いや、別にそうじゃない。この世界なら外しても構わないんだけど、別に外さなくても問題ないから敢えて付けているんだ」

ふーんと相槌を打つや否や、手を伸ばして来て一誠の眼帯を取り外した。そして濡羽色の右眼が開眼した。

「私的にはこっちのほうがいいと思うよ？」

「そうか？」

「うん、これからその顔でいてみてよ。もっと広い世界が見えるよ。」

いや、もう随分と広い世界を見ていますと言いたげな目をして「？」と小首を傾げるアスナは気付かない。その仕草は可愛かったと内緒にして。

「[ネオ・ワールド・ドア]」

心から想いを込めた無詠唱の呪文が短くも紡いだ。眼帯を外された右眼も虚空に向かって真剣な眼差しで凝視。思い浮かべるは己の帰りを待ち続ける家族達――。

呪文の言葉を口唇に転がしてから一拍遅れた時、眼前に楕円形の光の鏡らしき物が具現化した。初めて見る一誠の魔法に扉？と不思議に思うも水晶のようにきらきら光る小さな粒子で構成したそれが次第に映すのは――こことは違う別の部屋の中だった。

「ここが、イツセーの世界？」

「の、俺の家の中だ。見た目は前回と変わらない感じだけど……」
元世界の話しをしていたら試したくなつた一誠はその日の夜。魔法を発動した。そして拳藤一佳達の世界と同じように繋がった先はこの部屋とは違う別の景色の空間。恐る恐ると鏡に触れようと手を伸ばした時だった。黒いゴスロリの服に乳房に黒いテープをバッテ

「ているんだ」と驚嘆するアスナの声が聞こえてくるがその眩きを返す言葉は無く静かに消えた。

「ユウキに、会えるの?」

「俺もこの魔法を得てからまだ一度も会ってないけどな」

それでも彼女が目の前からいなくなっただということは、そういうことなのだろう。異世界のユウキに会う、それがアスナの強い憧憬である。

「そう言えばアスナ、ユウキと会うことに関してはこれで達成するけどキリト達と一緒に元の世界に帰るのか?」

あつ、と思いだしたように吐露した。異世界に行かずともこうして会えるならば一誠の言う通り願望は叶うのだ。それに指摘され気付いたら、複雑そうな表情を浮かべてどうしようかと苦悩の色を浮かべだし、自問自答しても答えが見つからなかったか助けを求める様な眼差しで訊ねた。

「……イツセーは、私はどうした方がいいと思う?」

「俺が望んだことを言つてアスナはその通りにするのか?」

「……わからない」

「なら、自分の気持ちを整理して決まったら行動するべきだな」

ポンポンと亜麻色の髪の毛の頭に優しく手を乗せる一誠。俺から言えることはそれぐらいだ、と意味合いを籠めてリーラが戻ってくるまで待つこと十数分。見慣れた魔方陣がオフィスの後ろに発現して、二人の女性が出てきた。

「お待たせして申し訳ございませんでした」

「いや、連れて来てくれてありがとう」

「え、えっ?先輩?」

「おう、まだそっちに行けないけれど久しぶりだな」

紫色が強い黒髪の長髪に童顔が抜けて大人の顔立ちとなっている百六十cm程の身長女性が赤い目を丸くした。次第に歓喜にその目を輝かして声を弾ませた。

「うわあ先輩、久しぶりだね!異世界に行つて何だかまた身長が大きくなった?」

「自分じゃあまり実感してないけどな。俺よりもユウキの方が成長しているだろ。最後に見たときよりも綺麗になってるじゃん」

「えへへー、ボクも成長しているんだよ先輩？」

照れくさそうに人懐っこく笑みを浮かべるユウキという女性を一目見てからアスナは言葉を忘れたように見続けた。忘れられない顔とその声はまさしく自分が知っているかつて最強の剣士と称されていた少女と同じだと。胸の奥から沸き上がる抑えきれないこの感情がとても温かく、とても懐かしみさを……頬に伝う雫が下に落ちる。

「先輩、この人は誰なんですか？先輩の彼女？」

「俺がいるこの異世界とはまた別の異世界から来た異邦人だ。名前は結城明日奈」

「あ、名字がボクの名前と一緒にだ！よろしくねアスナさん！」

「う、うん……よろしくねユウキ」

「あれ、泣いてるの？ボク、変なこと言っちゃった？」

「ち、違うの……」

否定しても自分では抑えきれない感情が涙として出てしまう。潤った瞳が頬を濡らす涙を流してしまい、当惑するユウキの前で中々止まらなかった。

「先輩、どうしちゃったの？」

「アスナの世界にな。お前と似ている友人がいたんだよ。それでも一度会いたって願いが叶って泣いてるのさ」

ボクと似てる人かあ……。感慨深く呟き、だから泣いてるのかと納得した面持ちでアスナを見つめるユウキ。

「ユウキ、しばらくアスナと話し相手になつてくれるか？俺はリーラとオーフィスから話を聞きたいから」

「うん、いいよ。それじゃアスナさん。君のことを教えてよ。ボクのこと教えるからさ」

「私のこと、アスナで呼んでいいよ……」

「じゃあボクのことユウキって呼んでねアスナ」

「……うんっ」

アスナの憧憬がいま叶った。背中の【ステイタス】が熱く感じ始めたが些細なことだと、時間が許される限りユウキと会話を紡ぎ続けた。

「ありがとう、イツセー……あの子と会わせてくれて」

「これで思い残すことなく帰れるか？」

「……ねえ、私の我儘、聞いてくれる？」

「俺に出来ることなら」

「……私も、あなたの世界に連れてって」

「俺の世界に来ずとも、この世界で何時でもあいつと会えるぞ」

「ユウキと出会って欲が出ちゃったの。今度は直接お話がしたい」

「人間らしい欲深きことだな」

「……やっぱり、もとの世界に帰った方がいいのかな」

「いや、お前の人生はお前のものだアスナ。それ相応の覚悟があるなら行動することも人ってもんじゃないか？」

「行動する覚悟……それが人」

「ドラゴンの俺が言えた義理じゃないが、皆それぞれ自分で行動しているんだ。アスナも好きに行動してみろ」

「……うん、分かった」

冒険譚30

秋の季節の移り変わりが目立ってきた頃。四度目の冬の到来を迎える一誠。『異世界食堂』のメニューにも冬季限定の料理が始め、冷たい空気と寒気の風に充てられ身を縮めて震える客達が足を運び、体が温まる店内の整った暖房や体の奥から温まる料理を堪能し、ホッと一息吐く。

「これひとつで温まることが出来る魔道具マジックアイテムを無料に提供しまーす。ただし、一週間しか使えないのでまた使いたいなら持参してきてください。取り換えは有料で百五十ヴァリスでーす」

加工した魔宝石を湯たんぽに内蔵した道具を百個、笑顔と共に配る店主に零細派閥の団員や無所属フリーの一般市民が中心に集まって一人ひとつとして受け取っていくことで全て無くなった。後に使用者から絶賛の評価を受け、他の消費者も是非と自分達にもと更に生産しなければならぬ事態になったが、幼い子供達が寒さに震えることが無くなったと、子連れの家族が笑みを浮かんで話しかけられてはやる気が漲るものであった。そのおかげでオラリオの三分の一の住民達の手には湯たんぽが配給され、寒さで凍える事は無くなった結果に感謝の言葉を送られるようになった。

「……突然だけどアスナ、雪遊びしたことがある？」

「え？あるけどどうしたの？」

「無性にやりたくなってる」

と、いうことで――。

「集めてみました、膨大な量の雪を！」

イエーイー！と一人はしゃぐ一誠の前に複数の他派閥の主神と眷属達が勢ぞろいして集まっていた。白銀の世界が何時の間にか城の中に敷き詰められていて、ロキ達は雪の野原の上に立って周りの雪を見て不思議そうな眼差しを送る。

「イツセー君、これ、どこから持って来たんだい？」

「59階層から下の階層中から」

「……何時の間にそこまで潜っていたのだお前は」

「もうイツセーだけで全ての階層を突破できるじゃろうて。それで、儂等をこんな雪だらけの場所に集めて何をしようか？」

「当然、雪遊びをする為さ。異世界風の雪遊びを皆に教えようかなーって」

因みにアルガナ達は興味無いと拒否された、少し落胆する色を顔に浮かべながら苦笑いする一誠は雪に手について魔力操作で雪壁を作っていく横幅二M高さ一M程の壁が盛り上がって形成していく。それを複数、壁同士が対峙するように出来上がる姿にアスナが悟った。

「雪合戦！」

『雪合戦？』

「そ、アスナ正解だ。雪で固めて丸めた塊を投げ合うのが雪遊びの一つなんだ。そこで新たにルールを加える」

壁の後ろに巨大な雪の塊が作られては、本神と見紛うほど精度の高いロキの顔が完成した。

「お、あれうちの顔やな」

「まあ、あれを相手チームより速く壊すことで勝利と言う条件だ」

身の丈を超えるほどの雪玉を作っていた一誠が、それをロキの顔に本気でぶつけて粉碎してみせた。壊されたロキは何とも言えない面持ちで黙ってしまいが、神も楽しめれる遊びだと分かってもらったところで新たに、今度はミノタウロスとアルミラージの顔を作って用意した。

「って、モンスターを作るんなら最初から作ればええやないか。何でうちのを壊したん」

「意趣返しだ」

「なんのや!？」

そんなこんなで始まった雪合戦。思いの外、熱が入って相手に当てても良いと説明するとロキは執拗にフレイヤを狙うものの、それら全て絶壁のごとくオツタルが軽くないなしつづけた。相手の像を破壊しながら相手を妨害する雪合戦。歳甲斐が無くフィンとガレスも楽しんでいた。

「オツタルー」

ゴロゴロと巨大な雪玉を作りながら近寄る一誠の意図を察し、無言で両手で持ち上げた。対するロキ達の方でもガレスも分身体の一誠が作った巨大雪玉を持つて構えていた。オラリオ一、二を誇る腕力を有する冒険者達の一瞬の睨み合いは雪玉を投げることで終わった。どちらが勝ったかそれはさておき、寒い中遊んだあとは温まる料理、甘くて美味しい料理を食べて神と団員達は揃って暖まったのだった。

「アスナ」

「はい？」

リヴェリアがアスナに声を掛けた。何だろうと翡翠の瞳と絶世の美として女神の嫉妬を買われていたその容姿の顔を見ながら耳にした。

「お前とイツセーの世界は共通点があると思って訊くが、お前達の世界では冬の時季になると何かしらの催しはあるのか？」

「催し、イベントですか？ありますよ。クリスマス・イヴとかクリスマスが代表的ですね」

「そうなのか。ロキが毎年この時期になるとクリスマスとやらをやり出すのだが、異世界にも同じことをするのか」

「私達の世界のクリスマスにはちゃんとした理由があるんですよ。ちよっと話が難しくて詳しい事は判りませんが、多分、イツセーなら知っていると思いますよ」

と、言うわけで二人は直接一誠に訊ねた。『異世界買物覧』^{ネットスーパー}で何か購入している仕草をしながら問われた質問を答えた。

「クリスマスはイエス・キリストって人の降誕を記念する日だな。そう言う日であることを俺とアスナが住んでいた極東にまで広まったんだ。ま、極東の人間達は大してそんなこと気にせずそういう日は家族か恋人同士の家で最後の一年を過ごすことが日常であり常識と認識されてる。多分、この世界とは大して変わらんぞ」

「意外と普通に答えたね。それと私達の世界と殆ど変らないんだ」

「ファンタジー世界であることを除いてな」

「それを言ったらVRMMORPGが無いじゃないイッセーの世界には」

「こっちはリアルファンタジー世界だ。ゲームよりも迫力も興奮もけた違いだぞ？神々だって伝説の武器だって存在するんだし」

「うーん、それを言われると私達の世界は負けちゃうなあ」

「ついでに技術だって負けないぞ。UFOや巨大なロボット実現してを作っちゃう凄い人もいるんだから」

「待って、どうやったらUFOを作っちゃうの!?まさかUMAまでいないよね!?!」

「河童が普通にいるんだし……いるんじゃないか？見たことないけど」

「か、河童って本当にいるんだ……逆に見てみたくなかったかも」

「あ、座敷童子もいるぞ」

「それは絶対に見てみたいっ」

完全に話が脱線している。と夢中になって話を二人の意識を変えさせる為、あからさまな咳をしたリヴェリアで気付き話を戻し手続きに入る。

「それでそんなこと聞きたいなんてどうしたんだ？」

「アスナから意味のあるクリスマスだとか教えられてな。お前の方が詳しいということでも聞きに来たのだ。それで、さつきから何を購入しようとしているのだ」

「闇派閥が激減したらしいからな。この機にクリスマスでもしようと思ってるんだ。勿論店でも開催する予定だ」

その為の道具を片っ端から選んで買おうとしているところ、と聞いた二人は息を漏らした。前回はやらないと言ったが、今回はする一誠がヴァリスをチャージし、カートに入れていた商品を全て購入すると数多の段ボール箱が虚空から落ち続ける。

「これ全部、か?」

「殆ど装飾品だ。後は前日に飾り付けするだけだから倉庫行きだな」

『「異世界買物覧」って本当に何でもあるんだね。イッセーのためにあるようなものだよ」

どうせなら元の世界と行き来できる魔法かスキルの方がよかつたよ。切実に……と言葉を心の底から想いを籠めて述べた。それは同意とアスナも「そうだね」と相槌を打った。

「クリスマスをするなら、プレゼントも用意しないといけないね」「プレゼント？神が言うのと贈り物とやらか。何故そうするのだ？」

「俺達の世界では老若問わず、相手にプレゼントする風習があるんだ。特に子供は欲しい物を大抵手に入る一大イベントの一つで毎年楽しみにしているほどだな」

「そうだったねー。私もお父さんに色々とおねだりしたよ、イツセーは？」

懐かしいと昔の事を思い出す彼女の一言で、寂しげに笑みを浮かべ遠い目をしだした。何故、そんな表情をするのだろうか。一誠の過去を知らない二人は不思議で堪らなかつた。楽しいイベントに一体どんな風に過ごしていたのか？

「ま、アイズ達子供を中心にプレゼントする必要があるのは確かだな。だけどあいつら、一体何が欲しいのかさっぱりわからん。子供らしい生活なんざしていかないわけだし」

「そ、そうだね……」

強くなるために冒険者として生きている。自分達が知っているような子供の生活とは完璧に無縁な光景を繰り返し、常識人としてアスナも同意してしまう。

「……………」

ここはやはり、といった二人からの視線を受けたリヴェリアはその視線の意図を察し沈黙で肯定として返す。自分達、特に一誠が直接何が欲しいかと聞いてしまえば何かくれるのだと期待させる。期待させるだけならともかく相手に確定させてしまつては意味が無い。驚かせて喜ばせるからこそ意味があるのだ。一誠とアスナが知っているクリスマスプレゼントとは、そういうものである。話を聞き終えた二人は一誠から離れ。

「家族でクリスマスを過ごすのだな。それは何時もの日常と変わりないのでは？」

「雰囲気では何か盛り上がりませんか？楽しいと思えばその日は何だか特別だと人は感じるんですよ」

「成程、気持ち次第か。やはり、異世界の話は興味深い……それで、恋人同士はどうやって過ごすのさ？」

「二人きりで祝ったり、一緒に過ごしたりします。中には恋人の家に泊ったりして夜を過ごすんです」

「相手の家に泊って夜を過ごして何をやるのさ？家の中でも祝うのか？」

「え、えつと……色々です」

照れくさそうに最後の質問だけは曖昧に答えてしまいが、リヴェリアは更なる質問を迫った。

「その恋人が一番喜びそうな物とは一体何か分かるか？」

「大抵は相手が欲しがっていた物ですけど、無欲な人はやっぱり一緒に過ごす時間もありません。あんまり主張しない人もいれば……愛し合って過ごす人もいます」

最後に述べた言葉はアスナとリヴェリアの間で共通の意識をしてしまった。そうか、とそれだけ呟いて教えてくれたアスナに感謝の念を送ると、歩く歩調を早めて背中に流れ落ちるように翡翠の長髪を揺らしながらどこかへ行った。

それからあつという間にクリスマス・イヴの日を迎えた。

間隔的に間を空けて天井を支える様に立てられ、城の奥にまで続いている玄関ホールで複数の「ファミリア」が集っていた。その柱に煌びやかに飾り付けされた空間の中で一際大きく主張する樹に様々な装飾品が飾り付けされていて、皆を見下ろす様に鎮座しているその中心にして『幽玄の白天城』に同居、居候、同棲している神々や眷族達が各々と立っていた。運び込まれている数多の各テーブルには『異世界食堂』の従業員達によって次々と作り出されており、それを見て神同士や眷族同士で和気藹々と賑やかさも醸し出していた。

「何とも美しい料理があるのね。まだ食べたことが無い見たことのない物ばかりだわ」

「今回は特別の日だからってイツセーが大盤振る舞いしとるんや。主に料理の腕やけど」

「そのイツセーはどこにいるのかしら?」

「ああ、他の「ファミリア」を誘いに行っておるんや」

役者を揃いに街へ出向いている一誠を待っている間、柱の奥から現れるミア達の手によって料理は追加されていく。その付近にフレイヤがいて柔和に話しかけられた。

「ミア、すっかりあの子の下で板が付いたわね。どう?あの子と一緒に働いて楽しいかしら?」

「どの口を言っているんだい。突然あたしらの前に現れたと思えばあの坊主の店で働けと促した神がさ」

「あら、私は別に強制したわけじゃないわよ?無一文となってしまうたあなた達に働き先を教えてあげただけ」

それからのことは関与していない私は知らないわと付け加えて言う銀の美女神に、半目で見返したあと踵を返して何も言わず従業員達とまた柱の奥へと引つ込んだ時。玄関の扉が鈍重の音を立たせながら開き、外から大勢の人影が入ってきた。

「どうぞ、中に入って入って」

「すまぬな。パーティに誘ってくれて感謝する」

「おや、もう準備が出来上がっているようだ。私達が最後なのかな?」

「あらー、何だか綺麗な飾り付けまでされてるじゃない」

「私までお誘いの声を掛けてください、誠にありがとうございます
イツセー殿」

「素敵なおパーティになりそうですね」

「私達まで誘ってくれてとても感謝します」

「むむつ、美味しそうな料理が盛り沢山!ガネーシヤ、腹いっぱい食べるぞー!」

「イツセー君に感謝しないとなあー」

「わ、何だか凄い」

「樹に飾りがされてる?」

「何の意味があるのか理解できん」

これまで一誠と交流してきた眷族とその主神達がゾロゾロと今回は特別にと土足で玄関ホールに上がり、ロキ達と合流を果たして数々の異世界料理の前に立っては、軽く百人以上がホールに立って少なくとも数でクリスマスを称したパーティの開催を待った。

そしてその時が来た。

「よし、全ての料理も出しつくして主役も全員揃ったことで俺ことイツセー主催でクリスマス会を始める!」と言っても単なる立食パーティみたいになるけどそこは気にせず、異世界の料理を楽しみながら今日という日を無事に過ごせた自分に祝して大いに楽しもう!」

ホール中に響く一誠の宣言で、あつという間に雰囲気爆発したように盛り上がり、どこからともなく聞こえてくるクリスマスソングに包まれながら異世界料理の味を舌鼓、主神同士集って会話をして楽しんでたりする。

「イツセー、アミッドちゃんは?」

「あの主神が許してくれなかった。ちつ、融通の利かない金の亡神め」「え、えつと・・・また来年する時にまた誘おう?」

「おい、アスナー久々に一緒に食べようぜー!」

クラインが声を上げてアスナーに近づき、誘いの言葉を掛けられて一誠を見てしまうが「たまには」と誘いを受けると言外で言われて、逡巡したのちに首肯して【アルテミス・ファミリア】がいる方へと足を運んだ。

「おい、イツセー、ちよいええー?」

「酒臭っ!」

喋るだけで吐く口臭から酒の香りという一誠にとって毒に等しいそれを、酒瓶片手で持って来て話しかけてくるロキ。一步二歩距離を置いて若干顰め面で「何だ」と言い返す。一体この短時間でどれだけの酒を飲んだのだろうかと思いつながら。

「イツセーの世界のクリスマスはただ飲み食いするだけなん?いつものパーティとは何ら変わらへんで」

「パーティは大体そんなもんだろ。それともロキの方で何か準備でもしてくれたのか?」

「いやー、うちはイツセーが突然何かしてくれるんやろうなーと思つて期待して待つておるでー？」

首に下げたカメラを持ち、写真を撮り始めに離れたロキを見送ると濡羽色と金色のオッドアイにサーモンピンクの髪がコソコソとテールブルの影に動いているのが目に留まり、誰が何をしているのか直ぐに悟つてスツと細まる目で気配を殺し動く。

「おい、なにサボつて食べてるんだお前？」

「ぐああああああつ！あ、頭が握り潰されるアルー!!？」

ガシツ、と口に頬張つていた肉まんを零して悲鳴を上げる女性の頭を掴みアイアンクロー。

「いい度胸だな。俺の店で仕事をほつたからしにしたらどうなるのか、その身に刻んでやるためにちようき——躰をするか」

「待つアルー！いま調教つて言おうとしたな!?!つておい、頭を離せつ、私をどこに連れていくアルか！」

某漫画では化け物並みの戦闘力を発揮するが、本気で抵抗しようとしても一誠の拘束からビクともせずズルズルと引きずられて柱の向こうへと連れていかれた直後。女性らしかぬ汚い絶叫がクリスマスソングを一瞬だけ掻き消したのだが、何をしたのか何をされたのか気にしたらダメだと暗黙の規則ルールが瞬時で一同の中で作られた。例えば赤い液体で濡れた顔や両手のまま帰ってきた一誠を見ても誰一人話にすら触れようとしなかった。

立食パーティーならぬクリスマス会は程なくして次のステージに入った。

「それじゃ、そろそろ皆が料理を思う存分楽しんでくれたようだから——アレでもしようか」

一誠のアレという漏らした単語に何の事だか分からない者と察した者の反応が二つに分かれた。そろそろ一年が経つこの時期。これから何をするのか理解した主神達はニマアと笑みを浮かべ、揃つて象頭の仮面をつけた男神に視線を向け出す。

「イツセー、なにをするの？」

「一年に一度のちよつとしたイベントだ」

指を弾いて呼応する魔方陣からダーツの的が出て来てアスナ達は頭に疑問符を浮かべる。良く見れば的には神々の「ファミリア」の名が書かれてあった。

「俺は一年に一度違う【ファミリア】に改宗コンバージョンをしているんだ。その決め方がダーツで、するのが主神なんだ」

「か、変わった決め方をするんだね。イツセーがしないの?」

「俺がしたら百発百中だぞ。それじゃつまらないしゲーム的な感覚の意味も含めて神にやらせているんだよ。と言うことでガネーシャ、あの的に向かつて投げてください」

促す一誠から小さな矢を渡され定位置に立つガネーシャに声援もとい「自分の【ファミリア】に当てろ」という無言の威圧プレッシャーが向けられる。

「今までは最大派閥だったから今度はフレイヤのところか、それとも違う派閥か。俺自身も少し楽しみにしている」

「まさに神様頼みだね」

「その通りだ。さて、ガネーシャ用意はいいな?」

「OKだ!」

「それじゃ、ルーレットスタート!」

豪快に回す。ぐるぐると回るルーレットを見据え静かに腕を後ろへ、投げる構えを取るガネーシャを見守るギャラリー。自分のところに、というガネーシャへの期待感が高まっていくにつれ手汗握る気持ちとなって静観する姿勢を保って……。

「ガネツシャアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!」

叫びながら豪快に矢を投げ放った。真つ直ぐ空気を裂きながら的に飛んで行って、刺さった確かな音が聞こえたと同時に矢が消えたように見えなくなった。期待感がさらに膨らみ、スツと一誠の手で止められたルーレットを凝視する主神達。ガネーシャの手によって刺さった的はある【ファミリア】のところ止まっていた。確認する一誠の口で明らかになった。

「次の【ファミリア】は……【フレイヤ・ファミリア】!」

「ふふふ……ようやく私の番ね。ガネーシャ、ありがとう」

四年目は「フレイヤ・ファミア」であった。朗らかに笑う美の女神は徐に一誠に近づき華奢な手で頬を包み込んだ。

「イツセー、私の眷族になるからには私のお願いを叶えてちょうだいね？」

「できる限り、無茶な要求じゃない限りな。少しでもしたら即見限るぞ」

「あら、つれないわね。ねえ、オツタル」

女神の呼びかけに錆色の瞳が真紅の長髪に濡羽色と金色の瞳の男を見下ろす。

「フレイヤ様の神意に従え」

「できないことはできないとはつきり言うぞって伝えただけだ。それとも冒険者らしく力尽くで従わせるか？何時ぞやの勝負、まだ決着ついていないしな」

挑発染みた発言を述べられるオツタル。決着がついていないという単語にピクリと反応したのを傍にいたフレイヤは見逃さず、楽しみに微笑みを浮かべた。

「勝負を仕掛けてくるなら受けて立つからな。時と場所を選んでくれた上でな」

「……その言葉、忘れるな」

「勿論だ。それじゃ、話を变えるけどガネーシャ、お世話になった……覚えはあんまりないけど俺からの贈り物だ」

「おおっ！」

展開した魔方陣から丸めた状態の魔法の絨毯を贈呈されたガネーシャは喜びの声を上げた。さつそく広げてみると、ロキ達が持つ絨毯より二回り大きく、「ガネーシャ・ファミア」の徽章が刺繍エンブレムされていて男神は嬉しそうに口元を笑んだ。

「ありがとうイツセー、ガネーシャ大感激だ！」

「どういたしまして。それで団長にはこれをだ」

「私にもか？」

不思議そうに思いながらも手渡される贈り物を受け取る。それは銀色の光沢を輝かせる赤と黄の宝玉がある拳メタルフィスト装と金属靴メタルブーツに藍色の

宝石の首飾りだった。自分の戦闘スタイルを注視した武具なら分かるが首飾りは何故だ？と首を傾げた。

「とにかく身に付けて試してくれ、そうすればすぐに意味が分かる」
「・・・わかった」

取り敢えず試しに装着する。何気にサイズがピッタリで違和感なく嵌めることができ不思議に思うが、最後に首飾りを身に付けると指摘を受けた。

「右の籠手は炎獅子、左は雷虎って名前で装着者の念や意思次第で魔法を放つたり纏つたりできる俺特製の武具だ」

「纏うとは・・・？」

「こんな感じ」

炎を纏う一誠、雷を纏う一誠、二つの属性を同時に纏う一誠を見てそれが出来るのかと半信半疑で念じてみると、両手にそれぞれ炎と雷が発生して装着者に痛みも与えることなく何時までも纏い続ける。

「・・・お前はこんな物も作れるのか？」

「物作りは好きだからな。今度は全身に雷を纏って軽く跳んでみてくれ」

指示通りに全身に雷を纏い始める。首飾りの藍色の宝石が黄色に変色し、その宝石を中心に全身に広がっていくのを確認したシャクティは軽く足に力を入れて床を蹴った直後。一瞬で玄関の扉まで移動した己に驚き動きを止めた。

「ん、完璧だな。今度は炎も纏ってみてくれ」

「・・・」

「そうそう、で、雷を纏う炎の塊を放つ想像しながら手を突き出してみてくれ」

炎と雷が同時に纏えば一誠から促される女団長。その想像をしながら壁に向かって手を突き出したら、想像した通りに雷を纏う火炎球が手の平から飛び出して石壁に当たって焦がす現実に半ば呆然としてしまった。

「・・・イツセー？貴方、とんでもない物を作ったわね。あれ、この世界の武具とは言えないわよ」

「うむ、魔剣の類でもあれば手前でも作れんぞ」

呆れを通り越して何も言えない、と感じて鍛冶最大派閥の主神と团长から言われる男は「そうか？」と小首を傾げる。銀の光沢を発する拳メタルフィスト装を見つめるシャクティ。新たな武器と力を得てまだ実感や馴染むのに時間は掛るが、これを贈ってくれた一誠に感謝の念を抱いた。

クリスマスパーティーは参加した皆の記憶に楽しさを刻んで幕を下ろした。それから入浴し、寝るだけだがアイズとアリサ、ラトラにレギン、レイネルが一誠の部屋に呼び出されて贈り物をされた。

「本来クリスマスは相手に贈り物をあげたりもらったりすることもあるんだけど、今回はお前達にだけ贈り物を渡す」

それぞれの手に渡ったのは武器や装飾品だった。ラトラはシャクティと同じ武装であるのとアリサにはあのロングブレードであった。

「イツセー、これ、いいの？」

「あれからだいぶ成長したからな。武器の扱いにも慣れてきたところだし遠慮なく使ってくれ」

「うんっ……!」

一度は取り上げられた武器が再び与えられて嬉しく笑みを浮かべるアリサの隣にいるアイズは、新しい剣を見つめていた。青い宝玉が柄に埋め込まれている細剣を。

「アイズはそろそろ違う剣で戦っても良いころ合いだと思っとな。所有者の魔法の威力を増幅させる絶対に壊れない武器だ。武器自体の威力は少し落ちるがそれをカバーするのがアイズの魔法」

「……私、まだ最初にくれたあの剣で戦いたい」

「ん、それでも構わない。気が向いたらでいいから使ってくれ。二つの剣を持って戦うのもいいからな」

「ん、ありがとう」

「イツセー様。私のはあの女の方と同じ物ですか？」

「ラトラは肉弾戦が合っていると思っとな」

「ねえねえ、私達のはー?」

「腕輪を嵌めてその曲刀を投げると戻って来いと思えば戻ってくるぞ」

「それって物凄く便利！一々拾いに行かず、相手の後ろから狙って攻撃できる！」

「前者はともかく後者の発想が直ぐ思い浮かべたおレイネルに拍手を送りたいな」

「え、えへへ……」

「でも、そう言うことが出来るのはその武器だけだからな。壊れることは無いけどなくさないように」

はいと返事をする幼い女戦士達やアイズ達を部屋から出して扉を閉じた。明かりが灯っている机の元へ寄り椅子に腰を下ろす一誠は目の前の一冊の本を手にして今日の出来事を綴る。その数分後、扉にノックがされた。後ろに目を向け、立ち上がって扉を開けに足を運んでドアノブを掴み開け放つ。

「イツセー、いいか？」

夜の訪問者はリヴェリアだった。普段の寝巻の姿で了承した一誠の部屋に入り閉じられた扉から離れてベッドの縁に腰を下ろした。

「アイズ達はどうかだった？」

「アリサ達は喜んでくれたよ。アイズは意外にもまだあの剣を使ったいってちよつと遠慮気味だった」

「初めてお前から貰ったものだ。直ぐに手放す気持ちはないのだろうさ」

金髪金眼の少女の反応を思いだしながら「そんな感じだったんだろうな」と小さく口元を緩め彼女の隣に腰を下ろす。肩を並べて座る男女に静寂な雰囲気が漂うこともなくハイエルフが口を開く。

「来年もクリスマスをするのか？」

「俺がそうしなくてもロキ辺りが催促してくると思うぞ？一番楽しんでいたのはあいつだと思っただけ物凄く酒臭くてしようがなかった。クリスマスだけは禁酒にしようかな」

「そうしたら必ずロキは抗議するぞ。酒を出せと」

「だよなー。何でこの世界のロキはあそこまで酒が好きなのか不思議

でしようがないぞ」

後ろに身体を倒して寝転がる一誠の言葉に、「異世界のロキと違うのだな」と関心を抱いたリヴェリアの翡翠の双眸は男を捉える。

「お前がいると皆が笑う。皆、幸せや楽しさを感じている。不思議だなお前と言う男は」

「俺は俺で普通になっているだけなんだが……ま、常識外れだとは自覚しているけど」

「ああ、お前に常識など通用しないのだろう。元の世界でも変わらな
いのか」

「ソ、元の世界でも俺以上常識外れで異常な人はたくさんいるからな。俺はまだ可愛い方だと思いたい」

上には上がいる、と言外されてどんな人物達なのだろうかと気になるところだが、一誠しか知らないその者達を思っても分かるはずもない。スツと寝転がる一誠が起き上がったと思えばリヴェリアに微笑んで話しかけた。

「来年もよろしく頼むなりヴェリア」

「ああ、こちらこそよろしく頼む」

振り返る彼女は一誠に微笑み返し、男の手を重ねたら静かに肩を寄せて……唇を自ら押し付けるように重ねた。ただ触れ合うだけの優しいキスを自分からしたりヴェリアは、ほんのりと頬に朱を染めて言葉を発する。

「アスナから聞いた、クリスマス夜の夜は恋人同士が愛し合って過ごすのだと……だから今夜は……」

お前と愛し合いたい、と口に言ったりヴェリアは濡羽色と金色のオッドアイの男の顔が視界にいっぱいになった。彼から口付けをされたら、口唇に柔らかく温かい唇で重ねられた瞬間に気付いた時には笑みを浮かべていた。

「照れながらそう言ってくれるリヴェリアは凄く可愛いよ」

「馬鹿者、私は可愛いなど言われる年齢では……んっ」

「年齢は関係ないだろ？ 思った事を口にするのが人として当然だ」

頬に手を触れられ、長い耳を擦られて身体がピクツと震える反応を

示した。それが何時も傍で見してきた王族ハイエルフのもう一つの一面、自分しか知らない彼女の仕草に愛おしさを感じる。

「だからもつと、俺の傍だけ、俺と二人つきりだけ綺麗と冷静と厳しい合間にも可愛いところのリヴェエリアを見せてくれるか？」

二人しかいない中で愛が籠った優しく甘い言葉の魔法が、リヴェエリアの耳から頭の中まで支配していくように入っていた。

「……お前の前だと常に冷静で『大木の心』も構えてる私の心は脆くなって『女』にされる……なのにそれが堪らなく心地が良さを感じる私がいて、幸せすら感じてしまう」

徐にリヴェエリアはベッドから立ち上がって一誠の前に立つと静かに寝間着に手を掛けて脱ぎ始めた。その様子を静かに見守る一誠が見ている手前で寝間着と下着を全て取り払った女神と見紛う姿をハイエルフは己の全てを見せつける。何度も見せて身体を重ねた回数
は片手では数え切れないほど許してきた。しかし、今夜は特別な夜――

「……お前に対する贈り物は、私の心と体だ。どうか受け取ってくれ」

「……嬉しいなりヴェエリア。最高の贈り物だ」

一糸纏わぬ身体を晒す絶世の美と着やせする豊かな体を心から称賛し、立ち上がって優しく包み込むように抱きしめる一誠。

「だったら俺が望んだ時……昼夜問わず場所も時間も問わずリヴェエリアを求めるからな、覚悟しろよ」

「……人目が無い場所なら」

困ったように目を逸らすハイエルフに苦笑を浮かべ、頬を指で添えて目を合わせた。交わる視線が距離を縮めてそのあと唇を重ねてベッドに倒れてからは女性の荒い息使いと水音、後に肌が激しくぶつかり合うのと激しい喘ぎ声の協奏が聞こえるようになった。

「……リ、リヴェエリア様とあの人が、い、何時も以上に……っ」
「う、うん………凄いね（本当に、凄い………私もあんな風にな、
だったの？）」

「出遅れちゃったわね」

「というか、こんなことしている私達って……」

「野暮な事を主神様よ」

「はあっ……見ていたら疼いてきちゃいました……」

覗きをする女神や女性達がいることにリヴェリアは気付かず、与えられ続ける快樂に夢中になって貪り、一瞬たりとも一誠から離れようとせず夜を過ごした。

短い間だが「フレイヤ・ファミリア」に入った。5年
了。

冒険譚Ⅰ

『暗黒期』のオラリオも新たに生まれ変わろうとしていた。イルヴィース闇派閥最
後の砦「ルドラ・ファミリア」を残し他の邪神の「ファミリア」は殆
ど天界に送還され、壊滅的狀態。もはや混沌と闇を齎す時代は時間の
問題だろう。街中の市民達が活気づけ明日も生きやすくなっている
姿が一目見て分かる。そこへ都市外から何も知らずに野望を抱く者、
一稼ぎしようとする者、冒険者に憧れる者がオラリオにやって来る。

「うわあーっ、でっかい白い塔があるっ！壁もすっごい大きい！」
「そうね。流石に『世界の中心』と呼ばれているだけあって伊達じやな
さそうね」

白亜の巨塔のみならず、目の前で見上げた都市の巨大市壁に圧倒さ
れた二人の幼いアマゾネスがいた。まるで田舎から都市に来た人の
反応を隠そうともせず驚嘆や感嘆をした。ここには様々な人種や
神々が集う、世界で唯一存在する未知で溢れモンスターが巣くうダン
ジョンもある。

「ダンジョンの中はどうなってるんだろうね！どんなモンスターがい
るんだろうね！」

「はしやがないの、中に入れば分かることですよ。それよりもまずす
ることがあるの忘れないでよね」

天真爛漫に笑う少女を相手にする少女の容姿はそっくりだった。
仲の良さも相まって「ああ、双子か」と認識するのもそう難しくなかつ
た。

「それじゃ、乗り込むわよ」

「うん！」

意気揚々とこれから自分達のようにダンジョンを挑もうとする無
所属フリーの者達や荷車を操る馬で引っ張って移動する商会の人達

と交ざって検問を受けに臨んだ——が。何故か門前払いを食らってしまった。しかもオラリオに入るには数日以上もの時間を要した。何でも都市外の『恩恵持ち』は他国他都市の密偵を防ぐため厳しく取り締まられているらしく、『第二級冒険者』に相当する双子姉妹が、主神と「ファミリア」もなしに現れてはオラリオといえど面食らうだろう。都市に入るに当たって、ギルドは条件を提示した。それは必ず都市内の「ファミリア」に入団すること。Lv. 3の戦力をみすみす逃すことを嫌い、首輪を嵌めようという魂胆だった。『中に入るのは容易く外に出るのは困難を極める』。そのように説明された少女達は『面倒で窮屈な場所』と印象を抱いても提示されたその条件を呑みようやく都市に入った。

「都市外から来た第三級冒険者のアマゾネスか」

「うん、知らなかったかい？」

「店の中でも噂話としては聞いていたぐらいだな。なんだ、会いに行くのか？ラトラ達だけじゃ足りないか？」

「どの「ファミリア」もどれだけ団員を抱えてもまだ足りない方だからね。まあ、君が正式に入団してくればその数もあつという間に解消するのだけれど？」

「今はお試し期間と言うことでもうしばらくどこかに腰を落ち着かせることは無いな」

やんわりと断られるフィンと一誠、その傍にガレスやリヴェリア、ロキ、アイズにアリス——アルガナ達とほぼ全員、都市外から来たアマゾネスを見に空飛ぶ魔法の絨毯で移動する。

「都市外から来たアマゾネスはいなくないだろうけど、そこまで高い実力だと……アルガナ、どう思う？」

「特徴も一致している。あの二人に間違いない」

爬虫類のような鋭い瞳に宿す光が強く、獲物を見つけたような獣と彷彿させる獰猛な笑みを浮かべだした。バーチエも静かに戦意を高めながら期待に満ちた目をしていた。一誠が抑えていないと今にも飛び出して先に言ってしまうかねない気配を隠さずにいるこのアマゾネス達に心の中で溜息を吐く。

「お前等は戦うなよ。カーリーとの約束を果たすにはまだまだ実力が足りないんだからな」

「鍛えてやるのもか」

「あいつらが是と答えるなら構わない。嫌なら駄目だ」

安宿の前に多くの冒険者が寄つてたかつてまだ幼い双子のアマゾネスに戦いを挑んでいた。

規則は魔法の使用禁止、武器無しオンリー、武具の装着は認められている。

自分達の「ファミリア」こそがくと果敢に挑む冒険者達は数分後、全身くまなく打撲痕を付けられ、体を守る鎧は小さな拳や足で粉碎される。小さな第三級冒険者並の力を有する子供に蹂躪される冒険者は後を絶たず、それでも機会チャンスはあると窺う冒険者も減らない。対して双子のアマゾネス。数多の冒険者を連日相手しても自分達の目に適う「ファミリア」が現れない。『世界の中心』、世界で唯一ダンジョンがあるオラリオの冒険者と両手で数えるのも億劫しそうなほど倒しては冷める一方。オラリオで腕試しをする為にやってきたのに、仲間となる者達は皆弱くて弱い相手をしてばかりでいる。

(どいつもこいつも弱え奴ばかり)

オラリオの冒険者といえど、こんなものかと退屈し掛けた時だった。

「——リヤガ・ル・ジータ……デイ・ヒリユテ」

「!」

一部のアマゾネスしか分からない言語が聞こえた。条件反射で反応する二人の前に空飛ぶ布が降りて来て、乗っているヒューマンと亜デミ・ヒューマン人に獣人、アマゾネス、神を視界に入れ……………。

「久しぶりだな、テイオネ」

「……………」

「なんで、テメエらがここにいやがるんだっ!」

「えーっ!」

同郷の者同士しか示さない反応をする双子のアマゾネスは敵意を

剥き出したり心底驚いた。自分達の記憶が正しいならばここから遙か東、東南の海と断崖絶壁に囲まれた陸の孤島……アマゾネスしかない国にいるはずだ。何故、この地に、既に自分達より先回したように都市オラリオにいる!?と共通の思いを抱いた。

「答えろ、何でここにいる!カーリーから連れ戻せって言われたのか!」

「カーリーは関係ない。今の私達は「ファミリア」から脱退しているからな」

「そんな話を信じられるか!アイツがそんなこと許すはずが無いし嘘をつくならもつとマシな嘘をつけ!」

「お前が信じようが信じまいが、私達がここにいる時点で証明している」

交わされる言葉は鬨テルスキュラ 国出身のアマゾネスしか分からない言語。他のギャラリーが聞いていても何を言っているのか理解できないでいる。極一部、共通語コイネーではない言語を翻訳する道具アイテムを耳に装着している一部を除いて。

「あれから強くなつたようだな。またお前達を鍛えてやろうか」

「誰が!もうここはあの国じゃねえんだ、お前達の思い通りになんてなるか!」

「はい、この二人に手出しするなよアルガナとバーチエ。話もここままでだ」

龍を彷彿させる鎧を全身で着込んだ一誠が話を打ち切った。誰だコイツ、と睨みつけたら黄金色の髪を揺らす小人族バルウムや老兵ドワーフ、翡翠の髪のハイエルフが二人の前に立った。自分達が次の挑戦者とばかり見つめてくる。

「なあ、思いつきり弱い者いじめじゃねえスナ?Lv. 的に年齢的にも。【勇者】フレイバーの肩書に相応しくないぞこれ」

「そ、そうだね……そんな気がしなくもないかな」

「ハハハ、そう言われると少し困ってしまうけれど、彼女達がここで力を振るうなら上に立つ者として気にしていられなくなるよ」

そしてその後、フィンとガレスが彼女等に勝負を挑み「ロキ・ファ

「ミア」に引き込むことが出来たと同時に、アマゾネスの少女に淡い恋心が芽吹いたのを一誠とアスナだけが感じとった。

「……フィン、頑張れよ」
「？」

悟った目で応援されても何の事だか分からないフィン。数年後、その意味がようやく理解した時は既に遅く。恋に爆走するアマゾネスに振り回される日々を過ごしていたのであった。

「私レギンよ」

「レイネルだよ」

「あたしはティオナでこっちがティオネだよ」

同じ派閥に同じ年のアマゾネスがいたことに驚き半面嬉しく思いつつアルガナ達がいなことにティオネと紹介されたアマゾネスは安堵で溜息を吐いた。

「今思えば、ホームの方はどうなんだ？」

「おう、ようやく住める具合に間で復興しておるぞ。そろそろお主のところにいる団員達も引き上げさせようと考えておるところじゃ」

「そうか。よーやく宿泊施設めいた感じは無くなるか。前は避難場所扱いされたからな」

「お主のところは何かと便利じゃからな。待て、その鋏を持って近づくなつ。便利扱いして悪かった、悪かったから近づくでは無い!？」

「ロキ・ファミリア」に新たな団員を確保したその日、歓迎会が行われ例外なく『異世界食堂』の料理に胃袋を掴まれた。

「フレイヤ・ファミリア」のホーム『戦いの野』も住めれるようにまで修復でき、完璧に直るのも時間の問題であった。フレイヤの団員達が作業をしている時に一人の獣人がバベルの塔の最上階に訪れ、壁張りの硝子の外を眺めてる銀髪の女神の背後から問い掛けた。女神は背凭れがある椅子に腰を下ろしていた。横に移動せずその場で跪いた姿勢で口を開く。

「フレイヤ様」

「どうしたのかしらアレン？」

「お訊きしたいことがあります」

「ふふつ、貴方から直接私に物事を尋ねてくるなんて珍しいわ」

獣人に振り返らずクスクスと楽しげに笑う声が聞こえてくる。そんな主神に静かな口調で問い出す。

「フレイヤ・ファミリア」に入団した者について教えてください」

「あら、何か気になることも？」

「・・・何故、あの男が「ファミリア」に入団していたのか教えてくださいたく」

「ふふつ、どの子かしら？」

わかっているのに敢えて問い返す意地の悪い崇拜する女神に
猫キャットピール 人のアレンは、奥歯を噛み締める音を殺しながら告げた。

『『異世界食堂』の店主、あの男が「フレイヤ・ファミリア」の一員と
しているのかを」

「不満？アレン」

「・・・」

「貴方達が気にすることのほどでもないわ。私達のホームに居座ること
もなければ、貴方達の仲間になろうとはしないわよ。勿論、貴方達
の目に入らない」

「では、何故入団を・・・」

「私があの子を欲しかったから、よ」

その言葉だけ声音が異様に熱が籠っていた。アレンもそれに察し
て此方に振り返らない主神の背後で顔をしかめた。

「それにしてもアレン、貴方は悪い子ね。バベルに私がいるときは誰
も来てはダメよってオツタルから聞かなかったのかしら？」

「処罰は受け入れます。しかし、あの男は信用できません」

「それはどうして？あなたに何か悪い事でもしたの？」

「奴は異世界から来たという異邦人。素性も得体も知らぬ輩が「ファミリア」の団員の一人だという事実は既に他の者達にも広まって疑問
視をしている団員も少なくないです。——フレイヤ様を穢した転
生者の同類ではないかと」

ここに訪れた理由は絶対それを言いに来たのね、と困った風に小さく息を吐いた。

「もしも同類だったらどうするつもり？ オツタルでさえ手も足も、歯牙にも掛けれなかったあの転生者達よりさらに凌駕して私を救ってくれた子に、あなた達は恩を仇で返すのかしら？」

「……あの男はオツタルより強いと」

「さあ、全力で戦わせないと分からないわ。見てみたい気持ちはあるけれど」

既に一度、二人は戦ったがフレイヤは確信している。一誠はまだ強さを出しきってなければ隠している。転生者との戦いを直で見たらこそ断言できる。

「あなた達より強い事だけは知っているわ」

「……」

「アレン、気に入らないなら構わないわ。でも、不用意に傷つけたり怒りを買うことは絶対にしちゃダメよ。あの子は私の特別な子、だから」

いいわね？ 女神から忠告を受けた獣人は静かに彼女から背を向けて離れた。部屋を後にし、静かな雰囲気醸し出す美の女神フレイヤは口唇を転がす風に動かした。

「もういいわよ？」

椅子に座っていた彼女の膝の上、虚空から姿を現すシヨタ狐と化している一誠。ピコピコと動かす狐耳を愛おしげに見つめ、優しく頭を撫でられる男は溜息を吐きたい衝動に駆られた。

「オツタル以外の連中と仲良くなれそうにないな」

「残念ね、こんなに可愛いのに」

「可愛いは余計だ」

虚空からバスケットが出て来た。その中身を、アップルパイを取り出してモクモクと食べ始める。林檎の甘みとパイの生地柔らかさに美味しいと目を輝かし、尾を揺らす幼い子供の姿の一誠にフレイヤは微笑んだ。ようやく自分の眷族となる年となった。銀髪の美の女神はこの機に他の眷族達以上に熱を入れて己の虜にしようと色々画策を張り巡らしたその反面。食べ終えても大人しく抱かれています。小さな男の耳の肌触りを堪能しながら見つめて興味を湧かした。勝敗関

係なく心行くまで戦う二人はどんな風なのだろうと。

——なので。

「ようやく準備が出来たぞ」

オツタルと戦う場を設けたと言ってはばからない一誠にリビンググキッチンで待っていたギャラリーが反応した。

「何時ものトレーニングルームにするの？」

「主神様が全力で戦うところを見てみたいと言いつつもんだから、俺が全力で戦える専用のステージを作ってた。今回はそこでだ」

「専用のステージも作れるって、自分、どんだけ凄いや」

「？何言ってるんだ。俺の世界じゃあ魔法や魔力があつて異空間を構築できる知識があれば誰だって作れるぞ」

暗に俺は別に凄いつてわけじゃないと言われたロキ達は何とも言えない、神妙な顔つきとなった。

「イツセー、それをできない私達からすれば凄い事なのだぞ」

「当然だろ。異世界が違うんだ。寧ろこの世界の魔法は遅れているというか、詠唱しないと発動できない使い辛い魔法ばかりだ。魔力だけが魔方阵だけで魔法を行使できるようにならなきゃ一人前にすらならないんだ俺の世界だと」

「……私達はイツセーの世界からすれば半人前なのか」

手厳しい言葉を頂戴したオラリオ最強の魔導士、心なしか嘆息して落胆した。古参の仲間から苦笑されて慰められる。アイズも剣士として自分ほどの程度なのか訊くと。

「まだわからないな。15、16歳ぐらい成長したら比べる事が出来る。精進しろよ」

「うん」

「じゃあ、オツタルはあなたの世界でどのぐらいの強さを誇っているのかしら？」

「上から数えて……四桁——千から千百かな。俺の世界の神も含めた数字でだ」

低い——思った以上に低くフィン達冒険者達の間で驚嘆の息が漏れた。そこまでレベルの差が違うのかと思わずにはいられない。

先行く一誠の後を追いかけて地下のトレーニングルームに足を運ぶ。辿り着くとアスナが不思議そうに訊ねた。

「えっ、ここ？」

「観戦場所としてここが一番だ。オツタル、もう準備はいいんだな？」
「構わん」

デュランダル
不壊属性製の得物を背中に背負っているオツタルは無骨で短く言う。首肯する一誠は床に魔方陣を展開して先に消えていく。続いてその魔方陣に足を踏み入れるオツタルも消えるとトレーニングルームの観戦席の目の前で四方形の立体的な映像が大きくパツと発現した。映像に映る光景は無人のオラリオである。

「・・・オラリオか」

「そ、人っ子一人、虫一匹すら存在しない魔法で複製したオラリオさ。ただし、目に映る全ては本物と大して変わらない上にバベルの下に潜ろうとしてもダンジョンが無い」

セントラルパーク
中央広場のど真ん中に対峙する二人。初めて訪れる異世界の技術が詰まった空間に周囲を見渡すオツタルの猪耳に更に説明の言葉が拾う。

「オラリオから外は存在しない。ここは鳥籠の中だと思ってくれ」

「フレイヤ様がいる世界には戻れるだろうな」

「当たり前。じゃなきゃ俺もここに閉じ込められるぞ。ついでにどれだけ建物を破壊しようか問題ない。この空間は使い捨ての戦場だ。普段周りに気を配って抑えている力を思いっきり解放できる場所として最高だろうっ」

ニツと好戦的な笑みを浮かべ空間に開けた穴から封龍剣を掴み取って構える。同感だと無言で肯定して大剣を構えるオツタル。

「あと、俺達からじゃ見聞できないがフレイヤ達から俺達の姿と声は一方的に見聞できる。他に質問あるか？」
「ない」

そっか、と相槌を打ってバベルの塔に振り返る。何をするのかと見守るオツタルの前で腕に膂力を籠め横薙ぎに大剣をふるって一閃。

斬撃の軌跡が刻まれたその直後、ズツと巨塔が斜め下にずれだし、はつきりと結果が見えた時……。バベルの塔が真つ二つになつて長大な建造物が街に倒れて地震で生じる地響きや轟音、土煙が二人の闘いの合図だとばかりに一誠がオツタルへ斬り掛つた。

「バ、バベルを斬り倒しおつた……。！」

「オツタルもできるか怪しい芸当だよね」

「壊すだけならできるじゃろ……。！」

「本当にあの複製のオラリオの中で安心したぞ」

観戦席で始まつた闘いをその目に焼き付けるロキ達。ぶつかり合う金属の音や打撃音、咆哮の叫びすら映像から聞こえて迫力も伝わって圧倒されることしばしば。戦闘開始からどちらも押されておらず、戦い渡っている。

「イツセーが消えおつた、おつ、背後から奇襲！」

「ソー、音もなくそうした彼の攻撃を見ずに防ぎながら攻撃に転じたね」

「あ、吹っ飛ばされた」

「【おうじゃ猛者】も勝手に吹っ飛ばされおつたぞ。何された？」

「凄^い数の氷だ！」

「それを真正面から切り伏せるか」

「今度は斬撃のぶつけ合い！まるで二つの嵐がぶつかり合っているようだわ」

石畳の地面に刻まれていく斬撃の跡。どちらも大剣に関わらず折れた木の枝のように軽々と振るい打ち合う迎撃。打ち合う度に激しい衝撃と散る夥しい火花が絶えず、どちらも剣戟の協奏と舞を始めてから一步もその場から動かず繰り広げ続けること一分間。

「聞かせろ」

「うん？」

「これほどの実力と剣技を兼ね備えるお前はどのようにして異世界で強くなったか」

純粹な興味を口にしながら斬り付ける腕を止めない猪人ポアズの武人の

質問に、懐かしみを含めて笑みを浮かべながら口唇を動かした。

「世界中を冒険して、そこにしかない強者や神と勝負したり師として仰いだり、自然にも相手にして愚直に修行して己を鍛えた。自分より強い相手やモンスターとも戦い何度も敗北も重ね、十年近くそうして生き続けた。まだ俺が五、六の時からそうしてきたよ」

「お前にそうさせる理由は何だ」

「そこまで教える気はないな。知りたいなら、俺を倒してみろ最強」
「.....」

次の瞬間。肩の筋肉を隆起させ、大剣の柄を両手で握り締めだす。そして、一誠の大剣に今まで以上の力で弾いて胴体をがら空きにする。

「——っ」
かつと双眼を驚愕で見開いた一誠に襲う大銀塊の斬撃。ロキ達からもあつ！と言わしめるその瞬間を、もう片方の手から闘気で具現化した光刃で防ぎながら街中へ決河の如く吸い込まれていき、何度も建物を粉碎しながら吹っ飛んだ、その直後。雷を纏う炎が蛇のように胴体の長い龍と変貌しながら街の方から現れてオツタルに牙を剥いた。その数、七つ。巨大過ぎる炎雷の化け物に咆哮を上げて大一閃。数匹纏めて切り裂いた。残りは灼熱の炎を吐くもかわされて叩き斬られ一匹残らず地面に形を残したまままた斬り捨てられた頃、戻ってきた一誠が口にする。

「そこについて大丈夫か？」

「っ！」

意味深な発言の矢先に瞬時で動いたオツタルが立っていた地面から八つ目の炎雷の龍が飛び出した。斬りおとされた七つの龍を吸収して膨れ上がった龍が大口開けて一人の冒険者を呑み込まんと襲いかかる。それすら立ち向かい斬ろうとするオツタルにそうはさせまいと一誠が斬りかかる。自分ごと呑み込まれようとお構いなしに。いや、自分からそうなろうとしている事に胡乱な気持ちを抱いた。

「俺に炎は通用しないんだ」

武人の心情を見透かした言葉と至近距離で全身から雷を迸る一誠

の一撃で全身が一瞬だけ硬直。その一瞬で十分だとばかり炎雷龍が一誠ごとオツタルを真上から襲いかかった。炎柱が地面に突き刺さった風に見せ、二人を中心に周囲へ濁流する炎が広がって街を呑みこむ。ロキ達もその光景に言葉を失い息を呑む。それから二人の姿が見えず、どうなったと気掛かりになったところでフィンが指摘した。

「……………凄まじいね」

「へ？」

「あの二人、あの中でまだ戦い続けてるよ」

未だに燃え盛る雷を纏う炎柱の中で揺らめく二つの影を注視したフィン。そんなまさか、と目を張るロキ達にその柱から飛び出す影が街の方へと消えていく光景を見せた。それを追いかける影——嬉々として笑んでいる背中に炎翼を生やす一誠。

「す、凄い……………」

「本当に本気で戦っておるのかあやつは。まだまだ余裕そうに見えるわい」

「少なくとも、あの姿になった彼は本気で戦っていると思うわ」

ヘアアイストスがそう言う。フレイヤも同意と微笑みながら頷く。上着が燃えカスになって半裸のオツタルが追ってきた一誠に対して袈裟切りで見舞う。初めて一撃が入った。肉体を切り裂く——違和感を覚えた時オツタルの背中に斬撃が当てられた。

「そろそろ、異世界で得た能力を見せてやろう」

振り返り様に振るった横薙ぎの斬撃が受け止められ、鏝迫り合いをしながらオツタルは見た。身体に刻まれたはずの傷が炎と化して再生していく瞬間を瞠目する。

「不死鳥フェニックスの能力、精神力を削って不死身に近い再生の能力だ。どんな攻撃だろうと傷だろうと直ぐに俺は再生する」

「……………」

斬り結ぶ斬撃の最中、一誠の大剣が上に弾き飛ばされずかさず大剣を叩きこむ——その瞬間だった。

「——『追憶の鏡』」

一誠の前に装飾された巨大な鏡が出現する。オツタルの斬撃波勢を止めずにその鏡を粉碎する。

ズオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオンッ!

「……ッ!?!」

割れた鏡から波動が生まれ、未知の力がオツタルを襲った。瞠目した表情を浮かべたまま、オツタルは鮮血を辺り一面に噴出させていた。

「この鏡は破壊された時、衝撃を倍にして相手に返す能力だ。自分の一撃を自分自身で味わった感想はどうだオツタル? 結構クるだろ。俺もそうだったよ」

「……お前のその力は、一体何だ」

「神の器、と書いて『セイクリッド・ギア神器』って一人の神が産み出した力の産物。人間や人間の血を流す異種族に一つだけ宿っている摩訶不思議な能力。『フル神の恩恵』とは異なる技術の結晶だ」

「『セイクリッド・ギア神器』……お前はそれを一つしかないものを複数持っているのか」

「俺は他の人間達と違って異常でな。お前の言うとおり複数持っている。ただし、殆ど複製することができる能力で得た能力が多い。――

――それを全部、お前は見ることでできるかな? まあ、俺達の主神様は俺達の全力の戦いを見たいとお望みだ。それを叶えてやるのが眷族の務めだ。オツタル、俺の全力に応えてくれるか?」

一誠からの問い掛けにオツタルは武器を構えることで答えた。――

――こい、と。その応じに濡羽色と金色のオッドアイに歓喜の光を孕ませて……謳った。

「――我は無限と夢幻の神の龍也」

『『』――我が宿りし覇と王道をも降す唯一無二の龍よ、汝じが赴くままに至れ』』

突然紡ぎ出す謳。一誠の玲瓏に紡ぐ謳をオツタルと観戦席にいるロキ達全員が耳にする。

「――濡羽色の無限の神よ」

全身から奔流と化して迸る真紅色の極大オーラが、一誠の全身を包

み込んでいく。

『』——赫赫たる夢幻の神よ』』

身体に宿るドラゴン達も詠唱を唱え、真紅のオーラに入り乱れながら迸る無限を体現する黒きオーラが、さらに一誠を覆っていく……。

『』——際涯を超越する無垢な無限の希望と純粋な不滅の夢を抱く全ての運命さだめを降す我らが真の禁を見届けよ』』

身体から迸り覆う真紅と漆黒の濃厚なオーラは身体に纏わりつき、上衣が堪え切れず弾け散って何か体が浮かびあがる。

そして一誠達は、最後の一節を謳った——。

『』——原始の理で以って我らが無夢を解き放たん』』

呪文を謳い終わった時、真紅と濡羽色の龍を象った入れ墨が全身に浮かんでいた。真紅の髪も濡羽色と交ざっていながら入り乱れている。

「……魔法か」

「否、俺の世界の最強のドラゴンの力を振るうために必要な呪文だ。

——龍神化のな」

虚空に伸ばした手に目指して飛翔して来た封龍剣。それを地面に突き刺して腰を低く拳を構えて臨戦態勢を取った。

「全神経を全力で張り巡らせる。一瞬で戦いが終わる」

「……」

「行くぞ」

後ろに更に拳を下げて、オツタルに目掛けて正拳突きをした。ここにもし、ヒーロー組の異邦人達がいたら気付いただろう。もう一人の一誠に鍛えられたという実証がされるのだから。しかし、ここにいる彼等彼女等の言葉を耳に傾けることはできず使い捨ての戦場の中で虚空に向かって突き出した一誠の拳。ただそれだけ——と認識し掛けたオツタルの全身が、トラックと衝突したような凄まじい衝撃に襲われ、視界がブレ、脳が直接殴られたような感覚を覚えながら決河の如く粉碎する建物ごと後方へ吹っ飛ぶ。その勢いは数百、数千まで続いて一誠が突き出した拳の軌道上から扇状に広がって建物が木端微塵と化する。

「んなーっ!？」

「つ、突き出した拳だけで街の一部が吹っ飛んだ……」

「ガレス、今の一撃……耐え切れる？」

「……自信が無いわい。というか、何をしたんじゃあの男は」

「衝撃波、としか思えないかな」

「衝撃波だと？」

「イツセー、凄い……!」

「あれが、彼の全力……」

「ふふ、ふふふっ……凄い、凄いわイツセー……ッ」

見晴らしが少しよくなった戦場に立つ男。ここがもし現実の世界で打つたらどれだけ人の犠牲者が出ていたのだろうかと考えたくもない災害と見紛う人災の痕跡。きつとロキ達も驚いているだろうなあーと思つてから数十秒……オツタルの姿が一向に見えない。不思議に思い背中から二対四枚の龍の翼を生やして空から探してみると、一部の瓦礫がガラリと動き出しそこからオツタルが出てきた。

「なんだ、気絶でもしていたのか」

「……していない」

「吹っ飛ばされてから数十秒経ったぞ？直ぐ来るもんだと思つていただけど何してた」

「……」

問いに応じずどこかに吹っ飛ばされた得物がなくても己の肉体で戦いを臨む彼の男に応じて、再び全力の戦いを繰り始めたのだった。

その後、勝敗の結果はどうであれフレイヤの望みを十分に叶えた二人。戦いを見ていたフィン達冒険者は劳いの言葉と拍手で出迎えたがらも、一誠に対する畏怖の念をちよっぴり抱く半面。次は自分達もしようとして勝負を臨んだ。

冒険譚2

オツタルと一誠の全力の戦闘から強さに飢えるアイズ達。異世界同士の強者がぶつかり合った光景が今でも瞼の裏に焼き付き、とても印象に残ったのだろう自分もあんな風に強くなりたい、もつと強くなりたいという想いの憧憬が少女達の中で焦がれるようになり、一誠に隙あらば模擬戦を乞う。低い確率でオツタルから勝負を申し込まれることしばしば。あの戦いの一件で味を占めたのか、全力で戦える場も求めてくる。

「ところでイツセー、オツタルさんと戦ってもまだ何か能力を隠しているの?」

「藪から棒になんだアスナ。隠しているというよりもあつさり倒してしまうから使わないようにしているだけだ」

「例えばどういう能力?」

「一定時間が経つ毎に能力が二倍に倍増していったり、一定時間が経つ毎に相手の力を半減したり、触れただけで相手の魔力や体力を全て奪い取ったりとか……その他色々だ」

「チ、チートやで。何、能力が二倍に増え続けるって、相手の力が半減するってトンデモない能力やん!」

「うん、だからいずれ神すら屠れる能力だから使わないんだよ。この世界でもしも使う相手がいたとしたらそれこそ神か、転生者ぐらいだな」

「そんな凄い能力を以ってしてもお前は元の世界で最強では無いのだな?」

「うん、どうしても上には上がいるんだよ。だから強くなる甲斐があるってものさ。この世界じゃ俺より強い存在はいるかどうか怪しいけれど、できるだけ目立たないように戦い方を工夫しているしな」

思いつきり目立っているのを気付かないのか? 的な雰囲気醸し出す中、当の本人は全然気づかないでいた。ふと、思い出した風に口キは一誠へ言葉を向けた。

「あーせや、転生者って聞いて思い出したんやけどな。ギルドから

『強制任務』^{ミッシン}が来てな。異邦人または転生者がいるなら探し出してギルドに連れてこいっちゆうんや」

「ロキが俺達の存在を匂わせたのが原因だろうな。で？管理しようなんて思っていないだろうなギルドは」

「したいんと思っておるんちゃう？軽く第一級冒険者を凌ぐ異世界の神の特典をもつとる子供がおれば誰だって手元に置きたいもんやし」

「ロキもか？」

「うちはイツセーだけおれば他はいらへんわ！」

「私もよ？」

「以下同文」

「うわー、俺、人気者だなー」

と、朝食中の話だった。横長のテーブルで早朝から人数分の料理を多く作り用意した一誠の手作り料理を舌鼓ながら一日の朝のシーンを送る。

「それで、俺は出頭した方が？ギルドに信用と信頼を得るために」

「うーん、あのロイマンがイツセーに対して何をしようと考えておるのかさっぱり分からへんからなあ」

「でも、イツセーに対して敵対するのは現実的じゃないでしょ」

「しかもその背後には私達がいるもの。本当に何かしようとするなら黙っていないわよ？」

フフフ、と冷笑を浮かべるフレイヤ。頼れるが少し不安を感じる。

異邦人、アスナとアリサに一瞥して考える仕草をする。ギルドに行けば、オラリオの真の王に会えるのではないかと画策する男の考えは誰一人気付かない。

大神殿、いや万神殿^{バンテオン}へ手土産を持ってギルド本部に足を運ぶ。擦れ違うヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人達から「あ、店主だ」「店主、今日も食べに行くからな！」等と声を掛けられたり注目されたりした。西のメインストーリーでは一誠を知らない者は十人中三人か四人ぐらいかもしれない。知名度が上がっている証拠だとほくそ笑み、目的の場所の中に入り直つ直ぐ受付嬢、己の担当アドバイザーに近づきながら声を掛

けた。

「ローズ」

「っ！」

目を丸くする赤い長髪に狼の耳をピンと立てる狼ウエアウルフ人の女性。にこやかに見せのデザートを持参して来た箱を掲げる男に胡乱気な眼差しを送った。

「何でしょうか、毎年取っ替え引っ替えしている冒険者様」

「棘のある言い方をするなよ。別に入った【ファミリア】で一生を過ごせってわけじゃないだろ？」

「節度を持ちなさいってことよ節度を！このオラリオで毎年のように他派閥に改コンバージョン宗をしている冒険者はあなたぐらいなのよ！」

「その何が悪いんだ？オラリオに貢献しているのに」

「常識的に余程の理由や事情じゃない限りそうポンポンと【ファミリア】を替えないのー！」

そう言いながらローズはロビーに出て来て一誠に怒る風に声を強く張り上げ、ギルド本部に設けられた小さな一室に向かう。そして、扉を閉め鍵も施錠して完璧に外と隔離するとテーブルに置かれているデザートとティーセットの前に腰を下ろし……。

「全く、何であなたはどこかの派閥に腰を落ち着かせないのよ」

ぶつくさと言いながらカップに手を付けて紅茶を飲み始めた。

「全く、何で持ってくるデザートはこんなに美味しいのよ」

「それ、文句じゃないからな」

指摘を受けて「うっさい」と言い返し、極東でしか採れない栗をふんだんに使ったケーキを食べ、獣耳と尻尾が美味しいと彼女の心情を表す様に揺れ動く。うん、見てほっこりする。

「食べたことのない甘みだね。これ、何を使ってるの？」

「極東で採れる栗って言う木の実みたいなものだ」

「へえ、極東の……それって保存できる？」

「できなくはないけど、やっぱり早く加工して料理することがお勧めだな」

「じゃあ、この黄金色の甘くて柔らかいデザートは？」

「それはサツマイモで作れるぞ」

仕事の合間でデザートを食べるギルド職員。後に鼻が利く同僚や上司に「何を食べていた」と追及されるのだが今の彼女と一誠は知る由もなく全てを食べ終えた時のローズ。ご満悦な表情を浮かべ淹れてくれる紅茶に手を伸ばす。

「ふうー、あなたの店のデザートは美味しいわね」

「そりゃあ異世界風のデザートだから」

「……………異世界、ね」

カップに口唇を含みながら担当の冒険者兼店主を視界に入れる。

「主神から聞いたんだけどギルドは異邦人や転生者を探しているらしいな。どうしてだ？」

「デナトウス神会で挙がった情報が正しいなら世界中に存在しているのでしょ？特に転生者は異世界の神に望めば第一級冒険者をも凌ぐ能力を与えられる。その恩恵を受けた人間が悠々自適に世界各地で生きるとなると、帝国や魔法アルテナ大国を始めとした大国に敵対している国や同盟国、他の国の手中に収まっている可能性もある」

「ギルドはそれを危惧してオラリオも見つけ次第確保するって？戦力増強と攻め入られないように」

「ええ、ギルド長はその考えをしているわ。既に一人、牢にいる転生者の人間は今後の為に活用するつもりのようなだわ」

ギルドの手に余る存在なのに大丈夫なのか？と怪訝な気持ちを抱いたのを察したか、ローズは溜息を吐いた。

『恩恵』も無しで第一級冒険者にまで他の冒険者達から「ステイタス」を奪い続けた犯罪者でも、利用しない手は無いつてのよギルド長は「どこかの【ファミアリア】に入団させるつもりか？」

「検討中。仮にそうなったら最大派閥に宛がわれるでしょうね。手綱を握れるのは同じ第一級冒険者なのだから」

あいつらにとってはた迷惑な事この上ないだろう。そう思った一誠はローズに真顔で問われた。

「……………あなたも、転生者なのかしら？酔狂な事に『異世界食堂』って店を構えているのだし、あからさまに自分のことを教えているよう

なものよ?」

「ははは、俺は転生者じゃないよローズ。けど、何となくだけど察しているんじゃないか?」

アスファイと作製した相手を鑑定する眼鏡を取り出し、ローズに渡せばそれを掛けて一誠を見つめると物凄く溜息を吐いた。

「……………はあ、何で私の担当冒険者がとんでもない人間だったのよ……………」

「料理のできる男は優良物件だぞ。一生遊んで暮らせたり幸せにすることもできるからな」

「未婚の女にとつて魅力的過ぎる条件ね」

「じゃあ俺と付き合ってみる?」

「真剣に言っているなら数秒だけ考えておくわ」

あつさりとかわされ、一誠もそれ以上言わずティーセットを片づけた後、用は済んだと立ち上がった。狼^{ウエアウルフ}人の女性に背を向け個室の扉を開けようとした手が「待ちなさい」と掛けられた声に反応して止まった。

「あなたのこと、ギルド長に教えても大丈夫なの?」

「どうして異邦人や転生者を探すのかその理由を知りたかっただけだからな。ローズの判断に任せるが、ギルドから信用と信頼を得たいのが本音だ」

「そう、なら、悪いようにしないわ」

「したら、お前のその耳と尻尾を触らせてくれ。何時も触りたいな—と思っっていたんだよ」

子供っぽく笑みを浮かべた一誠を直視したローズの顔がかつと何故か赤くなつて「へ、変態!」と叫んだ。

そしてその後『異世界食堂』の店主、「フレイヤ・ファミリア」の団員の一人が異邦人だという事がローズからの報告で知ったギルド長ロイマンはその日の内に……………ギルドに召喚した。

「……………」

ギルド本部最上階、重厚な樫の両開きの扉を潜つて間もなく豪華な絨毯を始め、壺や絵画、天鷲絨張りの長椅子や雪花石膏を用いた魔石

灯など、贅を極めた品々や調度品がそこかしこに配置されている空間に侵入した。一礼をして室内の真ん中を進んでいく一誠は、威風堂々とではなくのんびりとした態度で部屋の主の元へ足を運ぶ。

「俺を呼んだ理由はなんだギルド長？」

「ふん、私の前で平然と傲岸不遜な態度を取れるのは背後に強力なバックがいるからか」

「元々こういう感じだから気にしないでくれ。作法もちゃんとしただろ？」

「異邦人は何を考えておるかわからん。作法も相手の警戒を抱かさん為なのだろう」

「目上の相手に対して敬う姿勢をするのが当然じゃないのか？」

「私に対する言葉の口調にどこが敬っているのか問い詰めようか異邦人」

未知の相手に対して傲岸不遜の態度を取る度胸と肝が据わっているギルド長に、薄く笑う。これがもし、自分の真の正体を明かしたらまだ態度を変えられるのか興味が湧くが……悪手だと気持ちえを切り替えた。

「フィンやオツタルもあんたに敬った事があるのか？」

「うるさいっ、本題に入るぞ」

完璧にあからさまに話をはぐらかしたギルド長。

「貴様は自分が異邦人だということを認めておるのだな」

「無駄な諍いや騒動、争いを避けるために隠していたけどな」

「この世界に来た目的はなんだ」

「ない。異邦人達は例外もなく突然この世界に来てしまった。元の世界に帰る方法を、いま俺が模索している最中だよ」

「異世界で死んだ人間が異世界の神に恩恵を与えられる情報は聞いている。実際はどうなのだ」

「異邦人の俺が知るわけないだろ？それを直で体験した奴しか分からない事だ。だけど、与えられた恩恵は本物だ。第一級冒険者を凌ぐ能力を完璧に自分のものにしたらオツタル達もタダではすまないだろう」

一方的な質問攻めに答え続ける。ロイマンにとってやはり危険視する答えだったのか肉がついた顔に皺が生まれた。

「貴様の作った魔道具^{マジックアイテム}でオラリオに入ろうとする異邦人や転生者を探し出せるが、未だ連中が入ったという報告は無い」

「それでも俺達異邦人や転生者は他にもこの世界のどこかにいるはずだ。ま、オラリオに来てもらわれると面倒極まりない。一々相手にしなくちゃいけないだからな」

「ならば、オラリオにいる異邦人と転生者の人数と居場所を教えろ」

「教えるだけならともかく、接触するのは止めておいた方が身のためだ。人差し指だけでギルド長を洗脳することも不可能じゃないんだ俺達は。気付けば己の地位と権力が奪われた状態で路頭に彷徨わされているってこともあるんだからな」

ぐつと顔を顰める。脅し、それとも警告のつもりか。一誠の言葉に緊張の色を浮かべ、薄らと出てきた汗を流す。

「ま、洗脳をする能力は今のところ俺と一人の転生者しかできないから対処はできるだろ」

「貴様はオラリオやギルドの味方か」

「一応そのつもりだが？オラリオやギルドに貢献している。都市外から新たな資源を見つけているしな」

「新たな資源だと？」

おつ、食いついたなと予想通りの反応にほくそ笑む一誠は『空の世界』の存在を明かした。話に耳を傾けていたロイマンの顔は真剣そのもの。あの巨大な騎空艇でしか行けない世界で何があつたのか教えられる。

「とまあ、神でも未確認だった世界が空の彼方に存在していたわけだ。凄かったよ、興奮で胸が弾んだ」

「……本当なのだろうな」

「ロキやヘファイストス、フレイヤも同伴しているから嘘ついてない」

ギルド長にとつてとんでもない爆弾発言をポロリと零した。かっ開く緑色の瞳は愕然の感情を露わにするほど顔にも浮かんでいた。

「き、貴様！無断で他派閥の主神をオラリオから連れ出すでは無い!？」

あの船がオラリオから出ていく度にそうしていたのか！」

「その時は俺が所属していた時だったんだし、他派閥ではなかったけど？それと正式に外出の申請の書類の手続きもしているんだから問題ないでしょ」

「屁理屈を言うのではない！最大派閥の主神に何があつたらどうする気だ！」

「あれー？第一級冒険者の護衛を信用してないのかー？ギルドの長ともあろうものがさー？」

顔を真つ赤にした豚のようにプギーツと子豚のように喚くロイマンに対し、一誠はニヤニヤと邪な笑みを浮かべからかう。

「話が脱線しているから戻さない？」

「誰がそうさせていると思うんだ！」

ややあつて落ち着きを取り戻したロイマン。荒い息を整えながら遺憾ながら話を戻した。

「今後も異邦人や転生者が現れるのだな」

「断言はできないが、可能性は大ありだ」

「ならば、その者達がオラリオに害を成すことが起きたら貴様で対処しろ。転生者を相手にできるのは異邦人、その逆も然りなのだろうか
らな」

冒険者が解決できないなら異邦人、もしくは転生者達のお前達の方で何とかしろと言外するロイマンに短く溜息を吐いた。

「目に映らない限り手出しはできないぞ。『ステイタス』の初期化という異常現象が発覚するまで俺も気付かないでいたんだからな。それと生殺与奪の権をくれると嬉しいな」

「殺すでは無い！何としてでも生け取りにするのだ！」

「全員は無理だ。ギルドが懐柔できると思っているのか？特に己の欲望や野望に爆走する輩は、現実的な話で命を握らないと大人しくしない。モンスターより性質悪いぞ」

あともう一つと人差し指を立てる。

「今後、俺個人の行動を全て目を瞑るなら今後もオラリオに貢献をしてやる。異世界の知識でオラリオを発展する約束もする」

「異世界の知識だと？そんなもの何の役に立つのだ」

「快樂主義者の神々を大いに喜ばせることはできるぞ？まあ、その為には広い場所や敷地が必要になるけどな」

例えばこれ、とネットスーパーを展開してロイマンに異世界の乗り物を見せつける。ロイマンは胡乱な眼差しで海を航海する鉄の船と空飛ぶ鉄の塊に馬より速い鉄の乗り物の説明を聞いたびに唸る声を漏らす。

「この世界には無い乗り物が異世界に存在する。更にはこれ、巨大な娯楽施設もあるんだ。これらをオラリオに実現させれば知名度が今の何倍にも高まり発展も向上すると思うんだ」

「むむむっ……」

「ただし、莫大な資金が必要だ。ま、こつちで貯めるからギルドから税金を出す必要はない。悪くない話だと思うけど？」

「管理費と維持費はどうするのだ」

「それはオラリオから出してくれ。これらはあくまでオラリオの物だからな」

建設費は一誠個人、それ以外は全てオラリオが担う。長い目を見て考えるロイマン。オラリオの発展の事を考えればかなり旨い話でもあるが、話しが旨過ぎて裏があるのではと勘繰ってしまう。懸念して悩んでいる子豚もといギルド長に足元に魔方陣を展開して去り際に述べた。

「駄目なら別にいいぞ。それじゃ、またな」

ロイマンの了承も無しに消えていく一誠。その後、極東の三柱の神にある話をつけた。

「オラリオと極東と行き来できる高速の乗り物？」

「まだ予定の段階だけど、どう？」

「もしも現実的な話になるなら、船より何度も早く海を跨いで行けるな」

「実際、どんな感じなの？」

「じゃあ、極東で試しにしていいか？」

「ええ、できるなら」

あつさりと前向きに受け入れてくれた結果、極東で機関車の活用の効果を試してみた。アマテラス達の首都と首都を線路で繋げてネットスーパーで寝泊まりが出来る列車をアマテラス達が割り勘して購入した。

「線路は全部最硬金属製オリハルコンつて、とんでもないよイツセー」

「今後何十年何百年も使い続けるからには一番丈夫にしないとイケない一つだからな」

「それをあつさり作ってしまうイツセーは凄過ぎるよ?」

「俺の能力はこういう時の為にあるもんだ。しっかし、まさか機関車を購入することになるとはなあ」

一週間——極東で機関車が運行できるよう地盤を固め、三国を繋げるために必要な道標ルートを確保して今日、機関車を線路の上に設置して全てを整えたところをアスナと話していた。

「本当に必要になる物だから載っていたんじゃないのかな」

「戦闘機も必要か?」

「えつと、多分、念には念をだと思うよ……」

「イツセー、何しとるんや。早く乗るんやー!」

車両の窓から顔を出すロキからの催促で二人も乗り出し、先頭車両の運転室に足を運んだ。

「ところでイツセー。ずっとこの機関車を弄っていたようだけど何していたの?」

「ネットスーパーで購入した、蒸気機関車の欠点は分かるか?」

いきなり尋ねられるアスナは直ぐに答えれなかった。答えることはできなかつた。専門知識もなければどんな構造で機関車はできて成り立っているのかすらも十全も把握していない故にわからないのだ。それを小馬鹿にせず同感だと話を進める一誠。

「まあ、俺も全部は知っていないけど一般的に大変だなーと思うのが機関車を動かすのに欠かせない燃料、石炭を投入する作業だ。だから、それを失くすためにあることをした」

レバーを前に押し上げ、天井からぶら下がっている紐を引っ張ると蒸気が凄いい音とともに噴出する。

「魔法と科学を融合させた機関車にしてみた」

ロキ達がいる車両では、感嘆の息を漏らし早く進む光景を目の当たりにしながら眺めて楽しんでいた。ゴオオオオオオと猛スピードで進む音が耳に入り「イザナギ・ファミリア」の首都へ突き進む機関車の試運転に神々は終始外を見つめていた。

「馬より速いって、本当なのね」

「うむ、半日もせずに我々の国に辿り着くだろうな」

「これ・・・極東全土にも配置したらもつと極東を発展できると思う」「確かにね。でも、それを可能にするためにはイツセーの力が必要不可欠だわ」

「惜しいが流石に全土は無理だろう。もつと別の手段を考えるべきだ」

「・・・来年、イツセーが私かアマテラス、イザナギの眷族になったらそうしよう」

イザナミの提案に異論はない、と寧ろ同意と揃って頷く極東の男神と女神。それから二十分弱でイザナギの都市に辿り着いた。直接中に入らず、城下町を取り囲む市壁から少し離れた場所で設けた屋根と待合室がある駅の横を通り過ぎてそのままイザナミの都市へ直行する。

「これがイツセーの世界で毎日動いてる乗り物・・・」

「技術に関しては完璧にこの世界が遅れとるなあー」

「凄いわね、異世界の乗り物とそれを作る子供達は。一体これを作るのにどれだけの時間と労力を尽き込んだのかしら」

三十分後、イザナミの国境を越えてそのまま都市外に設けた駅すら通り越して一気にアマテラスの国にある駅へ二十分も掛けて戻る機関車。初めての試運転にしては上出来だと一誠は評価し、腐食や老朽化を防ぐ異世界の魔法を念入りに籠めたので五百年ぐらいは可動できる、とアマテラス達から絶賛されてオラリオで感謝の品を大量に送られた。物色すると壺からある海の生き物が出てきた。

「おお、蛸！たこ焼きが作れるな！」

「なんや？美味いん？」

「多分、ロキの大好物になるかもしれない食べ物だ」

「その、いかにもモンスターの子供のような気持ち悪い生き物が……？」

「美味しいですよ？足を生で食べたり、下処理すれば刺身や唐揚げ、サラダにだってできます」

「な、生で食べるだと……お前達異邦人はとんでもない食事の習慣を持っているのか……」

「日本（極東）じゃあ昔からの食べ方だから」

論より証拠もとい実食調理された蛸を恐る恐る食べたロキ達。口に入れた途端、想像以上の美味しさに物凄く驚き、たこ焼きに至ってはロキが大絶賛した。運命と出会えた瞬間を感じたと言うぐらいに。「……蛸って意外と食べれたのね」

「見た目がアレで食べずに海に捨てるものであるからな。間違つて一緒に送ってしまったかと思つたのだが」

「うん、美味しい……」

アマテラス、イザナギ、イザナミすら驚嘆していた。というか、蛸、食べれないものだと思われていた事に一誠とアスナは心底不思議がった。後に『異世界食堂』にだけ蛸料理のメニューが加わり、試しに食べた壮年のエルフが蛸料理に夢中になるほど虜になったのは別の話。

その日の夜。ふと、アスナが素朴な疑問を吐露した。

「他の冒険者や一般の人達のお風呂ってどんな感じ？」

それは入浴中の時だった。三十人は軽く入れる広大な空間に一つ一つ効能が違う湯の浴槽は片手では数え切れないほどある女性専用の大浴場。並々と張られた湯船が湯気と共に揺れ動く光景はこの上なく魅惑的だ。湯口から新たなお湯が音が立てて流れ込んでくる。奥の出入り口に向かえばオラリオを一望できる露天風呂もあり、何人かの女性はそこで見渡しながら入ることを日課にしていた。

「えっと、突然どうしたの？」

「うんと、【アルテミス・ファミリア】にいた時は公共のシャワーだけ

で体を洗っていたから他の皆はどんなお風呂なのかなって気になっちゃって」

アスナの傍にはエルフのアリシアとレイラ、キャットピープル猫 人のアナキティ、ヒューマンのフィリラが全身に温かい湯で抱きしめられている感覚を堪能しながら素朴な疑問をぶつけた。最初に応えたのは元娼婦のレイラ。

「私は娼館に備えられていたお風呂で体を清めていましたわ」「どんなお風呂だった？」

「そうですね。それほど広くなく、三人ほどしか入れない木製の湯船でした。「ロキ・ファミリア」のお風呂はどうですか？」

アナキティに話しの矛先が向けられ、何気なく女風呂の中を見渡す。

「私達のお風呂は、まあ、このお城のお風呂よりかなり小さい感じだったわ。それでも十五人程度は湯船に入れる大きさだったね」

「ホームが壊された今、ロキがこのお風呂を真似て増設するみたいですが。実際まだ入れる状態では無いので現状どんな風になっているのかまだ知りません」

「私の場合、水やお湯で濡らしたタオルで身体を拭いていました。ですからこの城に住まわせてもらって以来、あの方に深い感謝の念でいっぱいです」

成程、派閥ごとお風呂事情はこうも違いが出るのか。疑問は興味へと変わって更に質問をした。

「じゃあ、他の人達はお風呂ってどうしているのかわかる？」

「流石にそこまでは。基本派閥同士は干渉しないで生活をしているからね」

「ですけど、冒険者と違って無所属フリップの人達が住む家に浴場はあまりありません。宿屋でも高いお金を払う宿屋じゃないとないと聞きます」「……そうですね。身体を重ねる時の殿方の体は不衛生で多かったですわ。だから先に身体を洗ってもらうか一緒に洗いながら——」

元娼婦の卑猥で淫靡な発言によってお湯の温もりとは違う熱がアスナ達の顔を赤く染め、アリシアからバシヤっとお湯を掛けられ会話

を遮られた。

「入浴中に何て卑猥な事を言うのですかあなたは!？」

「経験した事実を言ったまでよ?」

「それを言う必要などありません!」

口を開けば言い合いをする二人のエルフをアスナとフィリアがまあまあと抑え窘める。

「えっと、話を戻すね? オラリオでお風呂があるのってそんなにないんだね?」

「知っているわけでは無いので何とも言えません」

「そっか、じゃあ、ここのお風呂は規格外なんだよね?」

「二「はい、そのとおり」」

声を揃えて断言する。この広大な浴場を造った当の本人は、自室の風呂でのんびりと入っているだろう。

「そう言えば、リヴェリアさんは何時も一緒に入らないよね?」

「あのお方は王族^{ハイエルフ}です。エルフ族の私達にとって王族は尊敬と敬意をする対象で、共に入ることになれば付きつきりにお世話をします」

あ、それをあまり好まないから時間を置いて一人で入るのかな? と思いついたアスナの傍で。

「きつと今頃イツセー様と入っていらっしやるかもしれませぬ」

「へっ!？」

レイラの爆弾発言でアナキティが素っ頓狂な声を上げた。その後すぐ、アリシアが彼女に食ってかかりまた言い争いをするのが御愛嬌。

「——って、話を少ししてたんだよ」

「……異世界のお風呂事情は意外と寂しいんだな。湯を沸かすこともできない住民は水に濡らした布で身体を拭くってことなんだろ」

何かの設計図を描いている一誠の傍らで興味津々に眺めるアスナとの会話が静かな部屋の中で交わされる。

「神々しか入ることが許されない『神聖浴場』ってのがあるしなあ」

「え、そう言う銭湯みたいな施設があるの?」

「あるぞ。試しに覗いてみたら一般的な銭湯なんかよりも造りが豪華

だった」

軽く、犯罪をしてない？脳裏に過った思考がアスナにそう思わせただけは無理もない。神々しか入れない場所をどうやってか無断で覗き込んだのだ。不法侵入というキーワードがありありと浮かぶ。

「……………女神様が入っているお風呂も覗いた？」

「使用されていない時間帯に忍び込んで覗いた」

女神が入っている時に覗きなんてする筈が無いだろ？的な視線を送られ、そうなんだけど、そうなんだけれどと元の世界の法律や犯罪は異世界には通じないからって……………頭の中でグルグルと悩み葛藤するアスナを一瞥して設計図に視線を戻した。

「銭湯、必要かもしれないな」

ポツリと呟いたその小さな声は確かに聞こえた。まさか、と思つて亜麻色の髪の女性は訊く。

「作るの？それともネットスーパーで？」

「無論、一から作る。でも、今じゃない。海を駆け渡る列車を造りたいからな」

「海列車……………何だかファンタジ的な乗り物だね」

「アスナ、ここはファンタジ的な世界だぞ？」

あ、そうだったね。今更ながら自分達はどんな異世界にいるのか改めて認識し、指摘されて微笑を浮かべる。

「ところでイツセー。お風呂は何時も一人で入るの？男湯もあるのに」

「男湯があるのはオツタルに入ってもらうために作っただけだし。俺は基本この部屋の風呂で入る。突然風呂に侵入して来て入られることもあるがな」

「……………一番多い人は？」

「アイズとアリサ、その次はアルガナ達、その次がフレイヤ。たまにヘアアイスとスヤリヴェリアも来るな。レイラも」

殆ど、一誠と肌を重ねたメンバーであったことに言葉を失った。しかも向こうが無断で部屋に押し入り、風呂に自らの意志で入ってくるのだから一誠も断わり辛いのもかもしれない。ただ、本当に入るだけだ

ろうか？

「い、一緒にお風呂に入るだけだよね？」

「……気になるなら、アスナも毎日俺の風呂に入ってみるか？」
冗談で言われようと純粋な彼女の顔は耳まで真っ赤に染まった。
恋人同士でもないのに異性と混浴なんてと、大人になっても成長して豊かに育った双丘を無自覚なのか挟む仕草をして身動きする可愛らしい恥じらいをする。その間、二人の間で何とも言えない静寂が訪れたがそれを破る様にラトラが部屋に入ってきたのだった。虎のキヤラクターがプリントされたパジャマを着こみ腕に抱える枕を持参して。

その数ヶ月後——オラリオと極東を繋ぐ海の線路の上を走る鉄の乗り物によつて極東産の輸入品がより多く運ばれるようになり、オラリオで極東出身の人々の姿が見かけるようになる。港街メレンに停泊する海列車を海を駆ける乗り物としてもその物珍しさに一目見たいが為、外国から訪れる人々は増加し港街は異様な賑やかさを醸し出した。

冒険譚3

騒動は突然起きるものだ。何気ない平穩、平和に前触れもなく宣言も宣言すら事前に発さずにだ。それはオラリオの東西南北にある門で起きた。

「通つてよし、次！」

毎日、毎朝、毎夜と迷宮都市が建国して以来、何千何万という人間が訪れる定番の行事が古代から繰り返されてきた。長蛇の列を作り都市の中に入るまで待たされるなど日常茶判事。その都度、諍いを起こして喧嘩する待ち人は付き物だ。

「次！……ん？」

検問していた警備兵に冒険者が掛けている眼鏡を見て反応をした。その眼鏡には『鑑定』の機能がついた魔道具^{マジックアイテム}。二度もオラリオで転生者による事件が起きて以来、誰でも相手の情報を見れる道具^{アイテム}が元「ガネーシヤ・ファミリア」の団員の手によつて作り出された。現在、「ガネーシヤ・ファミリア」や他派閥の主神が主に使用して外からくる転生者や異邦人、何時の間にか忍び込んでいた転生者や異邦人を見つけ出す精を出している。見つけ次第で他の派閥やギルドに知らせる規則^{ルール}が生まれたのは必然であるが、冒険者向きの転生者であつたら勧誘する腹の神々が多いだろう。例えばんでもない爆弾を抱え込むことになろうと「ファミリア」のパワーバランスが一気に変える存在なのだから。

そして警備兵が門を潜ろうとする都市外から来た人間を見て目付きが怪訝になった。

転生者「光輝勇」 16歳 称号 勇者

L v . 2

力：H 120

器用：H 111

耐久：H109

敏捷：H100

魔力：H128

『エクストラスキル』 聖魔剣術、
『特典』 獲得経験値倍加、ニコボ、ナデボ 魅了、無限魔法、鑑定。

——転生者、オラリオに現る！

「て、転生者が来たぞおっ！」

その報が瞬く間にオラリオ中に広がり、冒険者は緊張で顔を強張るが娯楽に飢えた快樂主義の神々は大いに沸いた。

「やっぱり、現れたか転生者」

『鑑定』の眼鏡を通して店の奥で把握した『異世界食堂』の店主は困った顔で溜息を吐いた。店内でもその話が入って来て真偽を確かめたら真だったため、物凄く面倒臭そうに吐露する。

「店主、どんな奴なんだ？」

「笑えるぞ。勇者だ」

「……勇者って、あの勇者か？いくら神やモンスター、剣や魔法があるファンタジーだからってこの世界に魔王や魔族、悪魔なんているのか？」

怪訝な面持ちで訊く転生者に肩を竦めて言い返す。

「さあな。でも、何を考えて称号に勇者なんてしたのか理解し難いな。

一人相撲ならぬ一人勇者か（笑）。滑稽だな」

眼鏡を渡して店に働く転生者にも見せると、まだ直接見えない転生者の情報に微妙な面持ちとなった。

「明らかに狙ってるなコレ」

「だろ？今回の転生者は人か獣か、どっちかな？」

「あー……獣だったら？」

「羨になつてない獣は調教、人に害を成す猛獣は処理。それ以外ないだろ？」

ですよねー、と転生者は遠くにいる同類に憐れみを禁じ得なかった。願わくば正しい行いをして生きていてほしいと祈る。

「ほら、話はここまでにしてさっさとピザ作りに集中だ。時間は待つてくれないんだからな」

「お、おう……にしても、料理店に働くことになるなんてな……おかげで衣食住に困ることは無くなったけどよ」

「あのブラックホールを仲間にした時点でお前の運命は決まっていたようなもんだ」

「さいですか……」

「(おおっ、俺、すげー人気じゃんかっ！)」

転生者は浮かれていた。検問していた警備員が悲鳴染みた叫びをすると押し寄せてくる津波のように老若の男神がこぞって押し寄せてきて、「自分の【ファミリア】に是非！」という勧誘の嵐の渦中に引きずり込まれた。ここまで自分を必要としてくれ、注目してくれる気分は満更ではない。寧ろ心地いい。この世界に転生して、これまでゲーム的感觉でモンスターを倒し、人々を救い、町娘や貴族の娘を虜にした地方から「勇者」と名乗ってきた。そうして過ごしているとファンタジーならではのダンジョン。強い冒険者がそこに存在しているというところで、遠いところから腕試しやオラリオで偉業を果たさんと野望を抱いてやってきた転生者は心を弾ませた。のだが、既に入りたい【ファミリア】は選定していた転生者は自分を取り巻く神々を置いて……浮遊魔法で北へ飛んでいった。

「へえ、僕達の【ファミリア】に入りたいと」

「俺がいたところでも一大【ファミリア】の噂話があつてな。たがら俺の実力なら申し分ないと思うんだ」

【ロキ・ファミリア】の首領フィン・ディムナとの面会して己を売り込む転生者。最大派閥のホーム、増築中なのか何故か建設して不思議に思いながらも門番の前に降り立つと武器を突き付けられた記憶がまだ新しい中、彼の小人族バルサムの側にはドワーフの戦士、絶世の美貌のハイエルフが肩を揃えて光輝を確かめるような眼差しを送り、臨戦態

勢をしていた。

「随分と自分の実力に自信があるんだね。その尊厳溢れる鎧と盾、剣を装備しているからかな？」

「これはとある人に貰ったものなんだ。特にこの剣のおかげで色んなモンスターを倒して来たからな。ダンジョンのモンスターにも通用するはずさ」

筋は通っている。独自の繁殖でモンスターは数を増やすに伴い、ダンジョンのモンスターと比べて強さが低下している。冒険者でなくても倒せるレベルにまでだ。彼の少年の言う言葉が真ならそうなのだろう。改めて碧眼を出で立ちを見つめる。細部にまで裝飾が施され、白と蒼と金を基調に彩られた白銀の全身甲冑、まるで神話の騎士が身に着けていそうな豪華な鎧だ。風に煽られてバタバタとはためくだろうマントは空を思わせる群青色、内側にはまるで夜空を切り抜いたような煌めきがマントの中に見え、星空のよう。背中には精緻なデザインで裝飾された大きな逆三角形の大きな盾を担ぎ、背中の腰元には神々しい程の存在感を放つ大きな剣を掲げている。剣を鞘から抜き放てば、薄い蒼色の光を湛えた両刃が、日の光に当てられ美しい輝きを放つ。刀身の長さは優に百センチを超えるだろう、幅も結構あり見た目にはかなりの重量感だ。フィンがいる正眼に構えて、自慢げに上段から一気に振り下ろす。

「最大派閥のここなら俺の活躍もあるだろうし、皆の力になれると思うんだ。だから入れてくれよ」

「うん、断わらせてもらおうよ」

「それじゃ、これから——は？」

自信に満ちた態度で入団の了承を得たものばかりと思っていた光輝は目を丸くした。・・・何故だ？と。

「人に武器を向けながら【ファミリア】に入れると言う態度は戴けないね。君のその行為は傲慢を表しているよ？そして現在僕達のホームは修復中で今新しく団員を入団する募集はしていない。悪いけれど他を当たってほしい」

チヨンチヨンと大剣の切っ先を触れながら拒絶する理由を述べた。

「何より君は——転生者だ。異世界の神から恩恵を受け最初から最強の人間の君と、弱者から強さの高みを目指す冒険者の僕等の気持ちと心構えが違う。今の君からは自分がいれば何だつて解決できるという慢心の念が伝わってくるよ。その慢心や傲慢が僕の大切な仲間を死なせることがあれば、君はどう責任を取ってくれるんだい？」

静かに動き出すドワーフが光輝の後ろに回り込み、脇の下を掴み持ち上げ立たせる。まるで小さき団長の意図を察した風に動いた古参の仲間を見ながら耳を傾けるハイエルフ。

「以上が僕の気持ちだ。お引き取り願うよ。僕達の「ファミア」は危険な爆弾を抱えるほど容量は持っていない」

筒型のバックパックを背負い『黄昏の館』（修復中）に近づく店主。「ロキ・ファミア」から予約されたピザを届けに足を運び、目と鼻の先まで距離を縮めると、目的の建物の出入り口から全身甲冑を着こんだ少年が「俺を受け入れなかった事を後悔してもしらないからな！」と捨て台詞を言って空へ飛んで行った。

「ちわー、『異世界食堂』です。予約のピザを届けに来たぞー」

声を上げて存在を主張する店主に黄金色の髪を揺らし歓迎する碧眼の小人族。

入団を拒否された光輝はもう一つの最大派閥、「フレイヤ・ファミア」に入団の申し出をしに南へ向かった。

「去れ」

「なっ」

岩のような身体を持つ、二Mを超す大男に出会い頭に門前払いを食らう。それが気に食わないと食って掛かる。

「何でだ！」

「お前を受け入れるか否か決める決定権は俺にない」

「主神か？ だったら直ぐにここに呼んでくれよ」

そう言うことだったら開口一番に拒絶されて仕方が無い。納得はできないが主神に直接会えば———と思っていた転生者は「フレイヤ・ファミア」団長の猪人、オツタルの次の言葉で怪訝な表情となった。

「ここにいない」

「は？じゃあ、どこにいるんだよ」

「あの方の居場所を貴様に教える義理は無い。もう一度言う、去れ」

半ば一方的にフィンと違って話しにならない発言をする大男に苛立ちの感情が芽生えた。相手が自分のことを知らないことを加味しても、本気を出せばどの「ファミリア」だって引つ張りダコな勢いで勧誘するはずだ。

「俺はここまで来るまで勇者と名乗って来たんだぞ、それでも拒むと
言うのか」

「……どこでどんな呼ばれ方をしようと、貴様はオラリオで【勇者】
を名乗る男ほどの者ではない」

「んだとっ?!俺が本気を出せばフィン・デイルムナだって余裕で倒せる
力があるんだぞ、欲しくないのかそんな強い人間を!」

「ならば、貴様を受け入れる【ファミリア】は中堅か零細派閥だけだと
知れ」

踵を返して大きな背中を見せながら遠ざかっていく獣人に奥歯を
噛み締めて憤怒で睨みつける。何故、二大最大派閥に入団を拒否され
る?!しかも言う事に欠いて格下の派閥のみしか入れないとはどうい
うことなのだ!ふざけるな、自分は神から最高の能力と装備を得た人
間なのだぞ。それを教えないと理解できないのかこの街の冒険者は
!

「ふざけるな、俺の力を知らないくせに決めつけやがって!ここで
前と勝負したつても良いんだぞ!」

吠える相手に関心も寄せなくなつたオツタル。その背中から武器
を抜き放つて構える転生者に足を停めて尻目で言葉を投げた。

「それ以上境界線を踏み入るならば相応の対応をする」

「境界線だ?何の境界線だよ。俺を認めない、受け入れないなら実力
を見せるしかないだろうが」

真上に掲げた剣身に雷が纏い迸り出す。戦意を見せる相手に錆色
の双眼が細まり、振り返ったオツタルの目に転生者の背後に立つこの
場にいないはずの女神が映って内心疑問と驚きの感情を抱いた。

「オツタル、これは一体どういう状況なのかしら？」

ソプラノの声が緊迫した空気を緩和した。

「私のホームがまた滅茶苦茶に壊されちゃうのかしら？それは困るわね」

美しい声音に反応せざるを得ない、猪人^{ポアズ}の獣人が送る視線の先に振り返る転生者。黒の薄いナイトドレスに包まれた、細身でありながら豊満な体つき。温かい太陽の光を浴びて一層神々しさを帯びるきめ細かな白皙の肌。腰まで届こうかという銀の長髪は、氷の結晶を散りばめたかのように輝いていた。そして、両の腕の中に収まっている狐耳と九つの尾を生やす、今も尚何かを夢中で食べている幼子。

「フレイヤ様……………」

「フレイヤ、だって……………」

人の子だけ限らず男神、モンスターすら『魅了』してしまう絶対の『美』をもつ美の女神の降臨。戦意がなくなつたと剣身に纏っていた雷が治まり剣を下ろす光輝。

「あなたがフレイヤか……………話に聞いていたのと想像していた以上の美しさだ」

「ありがとう。だけどあなた、私のホームを巻き込んでオツタルと戦おうとしたのかしら？」

「そ、それは……………こいつが俺を入団させてくれないから実力を見せようとしただけで決して」

「でも、結果的に、私の許可なく、私のホームで戦おうとした事実は変わらないわよね？そんな野蛮な子は、私の『ファミリア』に必要ない。欲しくもないわ」

所々主張し且つ主神本神すら入団の拒絶の意を示し、示された少年は心底愕然として目を皿にして開いた口が塞がらない。

「な、何でだよ!?納得できねえよ!どうして最大派閥は俺を拒絶をするんだよ!」

「あなたを『ファミリア』に入れるのは私達神の気持ち、気分次第なの。だからあなたはいらないわ。帰ってちょうだい」

狐の幼子の頭を撫でながら二度目の拒絶の意を示したフレイヤ。

己を受け入れない女神の心情に理解に苦しみ、呆然と立ち尽くす者へ
武人は無骨に告げた。

「フレイヤ様に見初めれなかった時点でどう足掻こうと結果は変わら
ない。去れ」

「~~~~~」

勇者たる己が二度も拒絶をされた。絶対な力を見せつけられれば、その
力を振るって人々を助けて感謝され、求愛や求婚もされ、『王道的な勇
者』に相応しい環境が——オラリオになかった。

「お、俺は勇者なんだぞ……っ。勇者の力は絶対なんだ……
！」

「自惚れるな。力に絶対はない」

「だったら、証明してやろうか。主神がいる目の前でよ！」

振り上げた剣の瞬間。妖しい光が背後から一瞬の煌めきと共に発
したと思えば、光輝の体が停止したようにピクリとも身動きが出来な
くなった。

「——はい、アウト。傲慢で慢心な勇者は俺達が知っている勇者と
違うな」

「っ!」

オツタルに向けていた体の後ろから呆れの声音が聞こえてきた。
誰だ、何時の間にと疑問と焦燥の念が顔に滲みでている光輝へ向けて
オツタルに告げた。

「そいつの鎧は物理無効化と魔法無効化が備わっている。流石にオツ
タルでも完全防備されたら倒しきることはできなかつたな。ただ、単
純な話。脱がせば別だけどな？」

「どうしてこの装備の能力を看破した!?どこの誰だ、己を見破った者
は！」

「ま、他の転生者と比べてグレーだ。話し程度は通じるがどうする？」

「その辺に置きましょ?欲しい神がいたらあげちゃえばいいわ」

「それじゃ……っ。っ。っ。っ。っ。っ。俺を下ろしてくれよ」

「だーめ、オツタル。適当な道の真ん中に置いて来てちようだい」

自分を差し置いて話が進む。全身が動けないままオツタルの肩に

担がれ、主神の命に従ってどこかへと連れていかれる。その際、フレイヤに抱えられている幼子と目線があった。

——頑張れよ、エセ勇者様（笑み）

——て、てめえっ!?

邪な笑みと手を振る幼子が身体の異常の原因であることを知ったが既に遅しだった。その後の勇者光輝は大通りのど真ん中で小一時間も格好をつけた姿勢のまま置かれ、神々の争奪戦に巻き込まれて以降とある男神の手中に収まり『恩恵』を刻まれた。

「転生者つちゅーいけ好かない子供は似たような奴しかおらんのかいな。チートな力を得たらハイテンションってええ迷惑やで」

グチグチと新たな転生者に対して良い感情を持つてないロキが顔を顰めて酒を飲む。それに付き合うフレイヤも「そうね」とグラスに注がれたワインを飲む。夕餉を終えた現在、テーブルに数本の酒瓶を置いて一誠の手作りのつまみを食べながら女神同士の会話の席に自然と加わる一誠にもロキは話しかける。

「イツセーの言うとおりにオラリオの外から転生者が来よったわ。今後もこんなのが続くんなら辟易するで」

「因みにだが、見目麗しい女が転生者だったら？」

「可愛い女の子に罪は無い！」

「それで中身が男だったらどうするよ」

「え、そんなのアリなん？」

お前みたいな感じじゃないか、的な眼差しを向けてもロキは疑問符を頭に浮かべる。フレイヤは察したようでクスツと笑みを零した。

「そう言えば、あの転生者の子を引き取ったのはアポロンだったわよ？」

「あー、あの神の目に適ったんだなきつと。そう言えばこの世界のアポロンってどんな感じなんだ？」

「天界にいた頃は目に適った女神を求婚しまくっていたわ。その都度断わられてばかりだから【悲愛】^{フェルス}なんて渾名をつけられているほどよ」

「それで色恋沙汰に話題が尽きない奴やっちゃわーってイツセー、物

凄く残念そうに落ち込んでどないしたんや」

肩を落としてこの世界の狩人を司る男神の性格に「この世界の神々は俺にとつて残酷だ」と暗い顔で呟いて、その意図を悟ったロキが食つて掛かる。

「うちのどこが駄目なんや!」

「親父女好き酒好き無乳」

「最後は絶対悪口やろ自分!?そつちの世界にもうちみたいな性格の神がおるやろ!」

「いるさ、ああ否定しない。でもな、皆凄い神なんだぞ!性格に難があつても神らしい神々しさと実力があつて綺麗だったり格好いい神様がいっぱいなんだ!ロキ達からそう言う凄いところがあんまりないから神だと見受けれないんだよ!一人の男と女として接しちゃう方だわつ!」

「……ちよつと、複雑だわ」

異世界の神の方が凄過ぎてこの世界の神は見劣つてしまう。神なのに一人の男と女として接せられると神の威厳はどうなるだろう。黙つて聞いていたヘアァイストスは困つた表情を浮かべ、吐露した。

「イツセー、転生者を加えた【ファミア】は他の【ファミア】とのパワーバランスは変わるのよね」

「一人だけ異常なほどに突出してしまうけどな。全体的より個人の力がバランスを崩す。それが今後どうなるか俺にもわからん」

「イシユタルんとこの子供はどうなるんや?」

「もう経験しただろ?」

二大派閥を凌駕してみせた三人の転生者。一人いれば他の派閥を圧倒し、複数人であれば最大派閥をも上回る。指摘を受けたロキやフレイヤは当時を思い出して押し黙る。

「争い事や諍いを好まない転生者は無難な生き方をする。逆にそうでないなら異常な強さと凄さを見せつける」

「イツセーはどつちもそうよね。ちよつと後者よりだけど」

「……これでも大人しい方だからな?」

念を押す男に三柱の女神は苦笑を浮かべる。やることなすこと想

像を超えることをするから神々の目に留まってしまふ。皆異邦人のこの男に夢中なのだ。

「最初はうちと出会ってからもう五年目かあ」

「その次はヘファイストス、ガネーシヤ、今はフレイヤだ」

「ただの駆け出しの冒険者が最上級鍛冶師と同じぐらい一品の作品を作るんだから目を疑ったわ」

「私は一目惚れに近かったわ」

五年前からの出会いを思い出す四人。怒喜哀楽、驚愕と感動……今日まで日々を過ごしてきたことを脳裏に浮かべお互い目を合わせたらどちらからでもなく笑みを浮かべた。

「『今年もよろしく』」

冒険譚4

「ガネーシャが超キタアアアツて、どわっ!？」

とある日の朝食が終わった頃を見計らったように騒々しく現れた象神を歓迎したのは、鈍色を煌めかせる数多の包丁による投擲。風を切る音と共にガネーシャの真横を通り過ぎ、廊下の壁の方へ突き刺さる。

「次はその仮面だ」

「心の底からごめんさい」

キッチンに立つドラゴンの怒りを買うことは絶対にしてはならない。包丁が矢のごとく降ってくるぞ。そんな変な暗黙のルールが出来た瞬間であった。その場で瞬時に土下座をする【ガネーシャ・ファミリア】の主神の背後から麗人の女団長もリビングキッチンに入ってきた。

「シヤクテイ、何の用？」

「いつぞやの祭の話をしに来たのだ。理由は分かるな」

「あーイルヴィイス閻派閥も邪神も倒れる寸前もいいところだからしたいって?」
「今なら出来る筈だと聞かなくてな」

困った色を顔に浮かべて言う「その通り!」と立ち上がるシヤクテイの主神ガネーシャに振り回されるその苦労に同情の念を覚えた。
「したいのって喧嘩祭だよな? 本当にしたいのか?」

「勿論だ!」

逞しい胸板を張って断定する男神。今なら確かに憂いもなく出来るだろう。ガネーシャもそれを分かって、というより居ても立っても入られず、やりたい!と子供のようににはしゃいで懇願しに来たのだろうか。

「……わかった。今年中に見してみようか」

「何時するのだ!」

「俺の今の私財が心許ないから、ダンジョンやカジノで荒稼ぎしてくる。万全に期したらやるよ」

今すぐではないのが残念そうに肩を落とすも、今年必ずするという

言質をとったのでガネーシヤは満足そうに帰っていった。

「イツセー、本当にするの?」

「言ったからにはするさ。さて、効率よく金を集めに『深層』へ行かないとな」

「何階層だ」

リヴェリアの問いに天井を見上げ、そうだなあと想いを馳せる。

「59階層から下だな。あそこらへんの階層なら十数年もドロップアイテムも地上に出回ってないから」

ガタリと席を動かす音が聞こえた。見ずとも誰が立ったか手に取るように分かる。だからこそこの言葉を送る一誠だった。

「アイズ、アリサ。今回だけは駄目だからな? L.V. 的にも身体的にもまだ早すぎる」

「っ!」

「イツセーが言わずとも私も許さないぞ二人とも」

厳しくハイエルフからも言われ、特に一誠から許可を貰えなかったシヨックが大きく肩を落として落ち込む二人の少女。そこまで行きたかったのかと微苦笑を浮かべるアスナは訊いた。

「59階層ってどんな階層なの?」

「ぶつちやけ、めつちやくちや寒い『氷河の領域』だ。至る所に氷河湖の水流が流れ、歩いた感じ進みづらく、極寒の冷気が襲ってくる。そんな階層等の中を探検したらどこの「ファミリア」の冒険者か知らんが幾つか氷漬けの遺体があったしな」

「そ、そんな場所なんだ。でも、君は大丈夫だったの?」

「・・・小さい頃、極寒の環境の中でサバイバルをさせられた経験があるからな」

幼少期の一誠はどんな生活を過ごしていたのだ!?と遠い目で語られてアスナ達は愕然を禁じ得なかった。

「アイズとアリサ、そんな場所だからお前等は絶対に連れていけない。どうしても言うなら気と魔力の融合の技法『感卦法』を会得するんだ。できるようになればどんな環境の中でもいられるようになるからな」

説得を受け、諦めたが逆に異世界の技法を身に付ける意欲の炎を燃え上がらす金髪と銀髪の少女。受け入れた彼女達を見る一誠に八つの眼差しの気配を感じる。自分達なら問題ないだろうと言いたげな目がヒシヒシと突き刺さる。

『氷河の領域』

転移式魔方陣で一気にワープしたヒューマンと四人のアマゾネス。その瞬間、肌に突きささる極寒の冷気が襲ってきた。非公式で一誠達は個人で59階層に進出した瞬間でもあったが。

「……」

極寒とは無縁な環境の中を過ごしてきたアマゾネス達からすれば、サラマンダーウィル火精霊の護布を着こんでも露出している肌や素足から伝わる冷たさに顔が陰しく顰めた。

「大丈夫か？」

「……何とか」

「無理だったら先に帰っても構わないからな」

そう言つて歩き出す一誠に続くアルガナ達。五人の傍にはどこに流れ落ちるか分からない氷河の水流が穏やかに流れている。58階層と繋ぐ連絡路から陸地で続くが、歩く五人には常に動きを凍てつかせる寒気の風が吹いてくる。前を歩く一誠の歩調は変わらず足を前に出し続けると小高い丘を視界に入れそこへ向かう。ついていくアルガナ達も丘の先まで足を運んで進み、何かを見つめて立ち止まる一誠の後ろから眼前の光景を目に焼き付ける。

雪国に住まないと決して一生見られない光景だった。夥しい大小の白い塊が広大な緑玉エメラルドブルー蒼色の湖に浮かんでいて、更にその奥には白銀の世界に幾つもの雪山があった。湖は円を描く陸地に囲まれているが、陸を侵食せんと湖から水流が木の枝のように分かれて至る所に流れているのが分かる。白銀の大陸にも川が流れていた。その方角へ一誠は指す。

「60階層に行くにはあの山の向こうにある氷の洞窟に向かわなきゃいけない。今いるここより確実に寒いから鎧を着てもらおうぞ」

鎧？どこにそんな物があると思っっているアルガナ達の目の前で一誠が五人に増え、魔法で作られた分身体の一誠達が全身を真紅の光の奔流と化して四人に近づく。彼女達の出で立ちが変わった。身体を覆う真紅の鎧、同色の拳メタルファイスト、装メタルブーツに金属靴メタルブーツを装着していると、ころ以外褐色の肌を晒したままだ。

「……これは、一体」

「その疑問はこの探索が終わってから答える。それよりもその鎧を着ていたら寒さは感じなくなっただろ？」

「ああ、不思議にだ」

「なら問題ないな。それじゃ、早速行こう」

再び動き出す一誠から分身体が二桁、三桁も分裂して意思を持っていくかのような動きを見せて色んな場所、至る場所へ駆けだして行く。未だ見たことがなかった一誠の力を見て、神妙な面持ちとなるアルガナ達。底が計り知れないと湖を沿って歩く彼女達の横、湖の水面が激しく水飛沫を立たせた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

楕円形の体の頭部に長大な一本の角を生やし湖の色に溶け込んで待ち構えていたのだろう、エメラルドブルー緑玉蒼色の巨体を駆使し鋭利な角で貫かんとする巨大な魚類型のモンスターが湖から飛び掛かってきた。59階層に来て初の遭遇エンカウント、アルガナ達は意気揚々と得物を手に――。

「戦うな！走れ！」

疾呼する一誠。どういうことだと怪訝になるが先に走っていく男の姿に追いかける。飛び出してきたモンスターの角が、彼女達がいた場所に突き刺さり……。身体を捻って回転をすると地中へ潜って消えた。水の中に住む生物としては見慣れない光景だった為四人は軽く驚く。

「今のモンスターは湖だけじゃなく地中からも飛び出して『群れ』で襲ってくる。一匹を相手にしていたら五匹以上がああ巨体でどこからでも飛び出してくるぞ」

「何匹出てきたところで殺せばいい」

「うん、それは俺も同意だけども」

河の領域』を相手に半日以上過ぎした。

「それで、この結果なのか……」

「シー【ゼウス・ファミリア】が見たというモンスターの特徴が一致するね。しかも怪物の^{モンスター・パーティ}の宴並の数が常時いるとなると厳しい戦いに強いられるのか」

「たった半日でこの数のモンスターを屠ったことも加えて圧倒されるわい」

大きな山が三つ以上積み重なって、アルガナ達と魔石の採取の作業を繰り返す一誠の回りは夥しい量の灰で床が埋め尽くしていく他、大量の怪物の宝が山のように積み重なっていく。トレーニングルームでその作業をしていた五人の様子をリヴェリア達が見に来て啞然とした。全ての作業を終えると荷物を纏めてギルドに直行する。大型のバックパックを背に歩き、大神殿……いや万神殿^{バンテオン}へ赴く。前庭を通って白柱で作られたそのギルド本部へと足を踏み入れる。鑑定と換金をしてもらう際、ギルド本部は震撼した。十数年振りの『氷河の領域』に棲息するモンスターのドロップアイテムが大量に一人の異邦人によって持って来られた。当然ながら一誠は問い詰められる。

「ちよ、ちよつとあんた、これ、どうしたのよ!」

「仲間と59階層に行ってきた」

「はあっ!?【フレイヤ・ファミリア】が何時、長期の『遠征』に行つて来たわけ!」

「いや、俺と四人の仲間とだけ」

「そんな冗談がギルドに通じるはずが無いでしょう!」

「俺、異邦人」

がくりと肩を落として頭を垂らす。その一言で全てを悟ったギルド員の赤髪の狼^{ウエアウルフ}人の女性はギルド長にも呼び出され、担当冒険者に強制任務を与えるよう指示を下された。

59階層以降の下の階層の資源の採取のクエストを。

「……ギルド長が見逃すはずが無いな」

「やっぱり?」

「私達や【フレイヤ・ファミリア】でもおいそれと行けない階層だ?そ

れを簡単にあつさりと行き来できるお前が異常過ぎるの一言だ」

「元の世界じゃよくイレギュラーだつて言われてるからな」

ギルドから自室に戻った一誠の大量の亜麻袋を積んだ山に手を置いて触れる。59階層で得たドロップアイテムや魔石、原料アイテムとなる植物、金属や鉱石、『氷河の領域』の中で唯一食せる食べ物の込みで——総額数千万ヴァリス。あまりにも希少性が高く入手も困難だということでこの値段となった。帰宅した一誠にリヴェリアとフレイヤ達は戦果はどうだったのだと気になり部屋まで訪れていた。

「たったの一回で数千万も稼ぐか。凄まじいなイツセー」

「これでもまだまだ足りないけどな。異世界の買い物は何かと金が掛る」

「神輿つてもものを買うの?」

「ああ、数が必要だしな。だから軽く一億は超える。その他にも色々と買いたいからまだまだ足りないんだ。今でも俺の分身体達が59階層以降の下の階層にまで進出して金になる物を集め続けているしな」

リヴェリア、軽くドン引きする。こうして戻ってきているのにまだ自分達の知らないところで集め続けているのかと、思いながら素朴な疑問をぶつけた。

「今思えば、お前の魔法で増える分身体の強さはどのぐらいだ?」

「魔法と身体能力以外は俺とほぼ変わらないぞ。だからオツタルにも簡単には負けない」

「ふふ、イツセー一人だけで【ファミアリア】ができちやうわね」

オツタルと同等、あるいはそれ以上の強さを持つ一誠の分身体が百人も二百人も……そう思うだけで一誠は一人でオラリオ最強の疑似【ファミアリア】を構成で来てしまう、そんな存在だとフレイヤは愉しげに小さく笑った。

「分身体達が戻ってきたらアスファイとアミッドにも見せて使えそうな物を試行錯誤、新しい作品を作ってみようかな」

???階層——。

『水河の領域』の階層を超えて分身体達は未知の世界を醸し出しているとある階層に足を踏み入れた。

「この階層は異様だな」

「ああ、同感だ。他の階層と何かが違う」

「とうか、見た目は自然豊かなのは分かるが……嫌な気配を感じる」

それでも襲いかかるモンスター達を蹂躪し、カジノでも荒稼ぎをして一ヶ月間も繰り返した一誠は五億も軽く稼いだのだった。そして軍資金が整ったところで神輿を購入した。

「なあ、今更だけど神輿も買えるネットスーパーって……」

「気にしちや、ダメだと思うよ」

「気にしたら負けか」

二人の目の前に片手では数え切れない大小様々の神輿が床に鎮座している。目の前で購入された物を見つめるロキ達も感嘆の息を漏らし好奇心を擽られた。山車とは別の神輿を始めてみてとても興味津々であった。

「この神輿って普通の神輿じゃないわよね？これ紙でできてるみたいだし」

「組み立てた骨組みに和紙を張って形にする神輿でな、某県の祭りです使われてる夜高行燈っていう行灯の神輿だ。これも喧嘩祭にも使われてるぞ」

「ほーそんなんや？で、なんや人の姿のもんがあるんやけど、もしかすると他の形にもできたりするん？」

「出来なくはないけど？なんだ、リクエストでもあるのか」

あるで、とロキは一誠にオーダーを頼むと了承と頷いてくれた。

「了解、この世界らしい神輿に作り変えてやるよ」

「イツセー、私の分もよろしくね？」

「できれば私のもお願い」

フレイヤとヘファイストスも祭りに参加する意思があったことに意外であった。が、断る理由もなく二人の乞いも受け入れた一誠を他所に大小様々で数が多い神輿を見渡すアスナ。作り変えると言った

男の言葉に素朴の疑問が浮上した。

「でも、作り変えるってどうやるの？ やっぱ魔法？」

「人海戦術。俺一人でできるはずもないからいつも通り分身と一緒に作るさ」

「じゃあ、私も手伝っても良い？」

「ああ、手伝ってくれるなら嬉しいな」

手伝う意思を示したアスナによって、それが水の波紋の如くアイズ達も手伝いという思いを駆らせた。早速作業に取り掛かる『幽玄の白天城』に住みついている同居、居候、同棲している者達。【ロキ・ファミリア】の女性団員達の手も借りて行われるのだった。

「リリア」

「む？」

こつちの来いと手を招く一誠に呼ばれ近寄る。作業している皆から離れ、部屋の外にまで出るとリヴェリアへ振り返った。

「60階層から下まで進んだことは知ってるよな」

「ああ、お前が話してくれたからな」

「ん、迷宮の常識が通用しない階層だったけど。魔石の色って紫紺だよな？」

冒険者であれば誰だって当然のように知っている魔石のことを問われ、不思議に思いながら肯定するリヴェリアにポケットから一つの魔石を取り出して彼女に手渡す。

「……なんだ、これは、これも魔石なのか？」

綺麗な翡翠の柳眉が怪訝に響め、翡翠の双眸は手の中にある小石大の魔石は、中心が極彩色、残る部分は紫紺色と見たことのない輝きを放っているそれを見つめる。これを回収した男へ目を上げて問い掛けた。

「どのモンスターからこんなものが」

「極彩色の大きな芋虫と胴体が蛇で頭部が花みたいで触手もあるモンスターだった。芋虫の方は大変だったみたいだ。倒した瞬間、破裂して腐食液を撒き散らすらしい。蛇みたいなモンスターはかなり打たれ強く、魔法に敏感に反応する。で、階層主らしいモンスターと一戦

したんだけど……逃げられた」

「逃げられた？階層主が、逃げただと？」

階層主が逃げるという行動をする話は見聞したことが無い。壁に背中を預け濡羽色と金色のオツドアイは真剣な眼差しをして脳裏で浮かぶ当時のことを思い出す。

「ゼウス・ファミア」が59階層から下まで進んだ当時にあんなモンスターがいたかどうか分からないけど、ここ十数年でダンジョンで何かが起きているかもしれないな」

「それを、これをギルドには？」

話してもないし渡してもいない、と風に首を横に振る一誠。

「リリアにしか教えていない。その極彩色の魔石のことを知っているかと思つて訊いた」

「私もこの魔石を手にしたのは初めてだ。フィン達もその筈だから教えても構わないか？」

「隠すほどでもないから」

了承を貰わず遠慮するなど微笑する一誠はハイエルフの頬に手を添えて触れる。そのあと頬に添えられる手を重ねて手から伝わるその温もりを感じる彼女を見て微笑する。

「可愛いなそういう仕草をしてくれるリリア」

「年上の女を捕まえて可愛いと言うな。もう私はそう言われる年頃の女ではないのだ」

「それがいいんじゃないか。捕まえて言う相手がいるのは男として嬉しいんだからさ」

「……馬鹿者」

そう言うリヴェリアは、照れている時か恥ずかしている時なのだど知っている一誠はますます優しく優雅な眼差しで見つめる対象的に絶世の美貌のハイエルフは目を逸らした。

——その翡翠の目がこちらを覗き見している同族と女性、少女達と目が合つて……。

「——間もなく、焰は放たれる」

羞恥と不敬な行動をした仲間に対し、魔法を放たんと魔力を練り出

したハイエルフを止めに掛る一誠だった。城の中が業火の炎で溢れ返るなど溜まったものではない故に。止められた彼女はそれでも治まるはずもなく、勉強をする容量を三倍にも増やし、同棲している最上級鍛冶師には数日間も酒を抜くという罰を与えた。

「え、えと……これって……」

「アスナとアリシアとレイラに対する罰は俺に任されたから、それにした」

アルミラージの毛皮で作られた服の恰好を着せられた。頭にウサ耳のカチューシャに顔と首以外の肌が隠れてある意味着ぐるみの出で立ちであった。そんな恰好をさせられたアスナとアリシアは酷く困惑していたが当の一誠は顔を輝かせてた。

「三日間外に出る時も寝る時もその恰好だからな？」

「ええええええええええええええええっ!?!」

「あと、俺が望んだら直ぐに奉仕すること。……ふふふっ、ふわふわでもここだ」

「あ、イッセー様に何時も以上構ってもらえとなるとなんだか約得です」

性的な意味でなく、獣の毛皮の感触と肌触りを堪能するために作った一誠。体を小さくしてレイラの胸に抱きつけば、嬉しそうにほっこりとした表情を浮かべたエルフの少女。

「そ、外でもこの恰好で……!?!」

「で、出れるわけが無いよ……!?!」

羞恥心でいっぱいになり、こんな恥ずかしい恰好をさせる一誠にちよつぱり恨めしいと顔を赤くして非難の目で睨む――が、涼しい顔で言い返された。

「覗き見た結果だと思うぞ。――いつも人の情事を覗いているどこかの誰かさん達なのな」

ギクツ!と肩を震わせるその反応と顔に冷や汗を浮かべ、動揺の色も出ずエルフの少女と亜麻色の髪的女性。ジト目で睨んで返す一誠からトドメの一言。

「そのこと、リリアに教えてやろうか？」

教えたら、教えられたら彼女は絶対に今まで経験したことが無いまほう説教をするに違いない。気付かれていないと思つていい事に何度も一誠の情事を隠れて覗いていた結果がこの程度である。まだ、一誠の方が優しいのだと肝に銘じて揃つて頭を下げた。

「せ、誠心誠意で精一杯ご奉仕をさせていただきます．．．．つ」
その後の三日間、それぞれ一日中も一誠と過ごすことになった。夜は抱きしめながら添い寝することで満足させる。そんな三日間を過ごした一誠の肌は女性よりも潤つて至極満足げに絶えない笑みを浮かべ続けた。レイラは一日独占したような結果で嬉しそうであつたが、逆にアスナ達は少し疲れの色を浮かべ恥ずかしい思いをしアイズとアリサ、ラトラから羨望の眼差しを向けられた。故に、三人の姿をしていれば一誠に構ってもらえる、と触発を受けてアイズ達もアルミラージやニードルラビットを全て狩りつくす勢いで毛皮を入手、それを独自の方法で服にしてもらい寝る前の男の部屋に入つてお披露目をする。

「可愛い．．．．」

「．．．」

しばらくドラゴンは三匹の子兎を可愛がりつつ夜は共に寝た。結果的に目論見通りになつて心から歓喜した少女達であつた。

冒険譚5

極東の木々に桃色の花々が満開に咲き誇り、温かな気候に包まれる春の時季を迎えたことを知らせる。穏やかな風が桜を揺らし散る花弁が宙に舞う、紅い絢爛の着物を身に包むしやうじよ獣人はその様子を都へ向かう馬車の駕籠から翠の双眸に映して見ている。

「桜、今年も綺麗に咲き誇っているわね」

少女と同席していた着物姿の女神に話しかけられた。緊張気味に肯定すると安心させる笑みを浮かべ話を続けた。

「桜が好きなら、これからあなたが暮らすオラリオでも用意するわ。洋服も食事もね」

「あ、ありがとうございますアムテラス様。あ、あの……ご質問をしてもいいでしょうか」

何かしら？と応じる女神アムテラスにおずおずと問う。これから少女はまだ十五も歳も満たずに見ず知らずの男に嫁ぐことになっている。父親が仕えている主神と今まで過ごしていた家をとある幼い友人達と別れを告げる暇もなく後に、少女は都へ向かう最中であつた。

「私が嫁ぐ殿方はどんなお方なのでしょう？」

「タケミカツチ達と数日間だけれど共に過ごしていたこともあるわ。そして優しく温かくて、とても強い極東の、私の命の恩人」

私の大好きな子供、と心の中で付け加える女神。

「あとそうね。ルナル狐人にもなれるわ」

「狐人ルナルになれる、ですか？」

「事情がある子供でもあるの。でも、貴方を不幸にしない。寧ろ、暇も退屈も感じさせないほど楽しくて充実した生活が送れるはずよ？あと、これが一番重要。彼の作る料理は物凄く美味しいの。甘い菓子だって作れちゃうんだから」

最後の部分が一番力が籠っていた。半ば圧倒された少女は「そ、そうですね」としか返すことができずにいて、アムテラスはコホンと咳をして冷静になった。

「だけど、私達の都合で貴方の生活を変えてしまうことは変わらないわ。ごめんなさい」

「い、いえっ。また故郷に帰れるなら私は気にしません女神様」

「ええ、それも安心して頂戴。貴方や私から伝えれば帰郷することもできるから。そして今までの身分や家族と気にせずお友達とも遊んでもいいわ」

その言葉で花のように笑い、金色の尾を揺らす少女。女神も乗せる馬車は大勢の護衛に守られながら都へ進み、オラリオへ転移する赤い鳥居へと目指す。

そのオラリオでは、またしても騒動の前兆が臭わせていた。去年の『アポロン・ファミア』との戦争遊戯^{ウォーゲーム}で勝利した一誠はアポロンの眷族を要求したが改^{コンバージョン}宗できる期間では無かったため、一年後に先延ばした。そして一年後の今年、去年の約束を果たしてもらったために「アポロン・ファミア」のホームへと訪れた。だが、男神の眷族に「主神は不在だ。改めて来い」と門前払いを食らい渋々——ではなく今度は主神を連れて戻ってきたことでアポロンとの面会が叶った。

「さて、約束の期間だアポロン。眷族を引き抜きに来たぞ」

「.....」

「彼女を渡してもらおうか」

勝利者として当然の要求。相手は従うのが道理。押し黙るブロンドの髪を生やす男神に何時までも答えを待ち続ける一誠も再度問うた。

「今さら他の要求にしてくれと言っても聞かないからな。負けたのはそっちで勝ったのはこっちだ。もしも神が約束事を反故するなら、ギルドに訴えるから」

「.....」

「もう約束の一年は経ったからにはもう先延ばしにはしない。これは決定事項だ異論は認めない」

それでも押し黙る。流石に訝しむ一誠であったが、何かを考えていようと結果は変わらない。催促の声を掛けようと口を開いた。

「俺の大切な仲間を渡さないぞ」

一誠の考えを遮る男の声が聞こえたと思えば、開けられる扉の向こうから全身甲冑を着こむ少年が入ってきた。後ろ姿、銀の長髪の女神を見た瞬間、

「っ、フレイヤ……ここに何の用だっ」

「私は彼の付添よ？去年、アポロンの子供達に勝利したこの子の主神だからついてきただけ」

「この俺を受け入れず仲間を引き抜きに来ただと？ふざけるな！そんなこと俺が許さないぞ！」

怒る眷族——転生者にして自称勇者に関心を捨てたフレイヤは密着する風に一誠に寄り添い、今度は美の女神も目の前の男神に話しかけた。

「アポロン、この子の言うことを利かないならあなたの『ファミリア』を潰すわよ？それから貴方の子供を引き抜くのもアリだから」

絶対的な地位と名声、組織の勢力を有する女神の発言で瞳が揺れたアポロンを見つめる二人。四つの眼差しで見つめられる男神……ようやく口を開いた、と思えば。

『『異世界食堂』の店主、もう一度ゲームをしてくれ』

「……」

何を言うかと思えば……二人は冷めた目付きでアポロンを見つめる。

「その理由は？まーさか、チートな眷族を手に入れたから『あ、今ならイケるんじゃないかね？』的な考えで言ってるんじゃないだろうな？」

「もしもそうだったら今すぐ潰してあげるわ」

ゴゴゴゴゴゴ、と重圧の擬音が聞こえそうなくらい威圧を発する二人。それでも頑なに乞う男神に対して話にならないと呆れる——不意にあることを思いつき、一誠はニイと良からぬことを企む悪者のような笑みを浮かべだした。

「アポロン、提案がある。それを飲むならリベンジを叶えてやる」

その提案を口に出た内容の意図は……オラリオを巻き込む戦争遊戯であることをフレイヤとアポロンはまだ知る由もなかった。

「んで？うちやイロボケ女神に頼みたいって何や？」

「ん、他の神々を集めて神会デナトウスを開いてもらいたい」

「臨時の？何でまたなんや？」

「またアポロンとゲームをするからだ」

朱色の目が開き「は？」と耳を疑ったような反応をしてフレイヤに目を向ける。「彼が言っていることは本当よ」と言う美の女神の言葉に胡乱な目で二人を見つめる。

「なんでアポロンとまたゲームするんや？去年自分、勝ったんやないか」

「負けた神がリベンジがしたいって頑なに言うんだから仕方が無いだろ」

「あの阿呆神、イツセーが本気も出さずに勝ったと言うのにまだわかっておらへんのか？」

「ぶっちゃけ、転生者を眷族にしたから前のようにはならないって感じじゃね？」

ある意味納得できる理由でアホらしい、と深い溜息を吐いたロキにその気持ちは分かると一誠は頷いた。

「で、当然アポロンとこの転生者には勝つんやろうな？」

「個人的に当然。だけど、俺が考えているゲームはオラリオを巻き込むゲームだから五分と五分かな？」

「何やて？イツセー、一体何を考えておるんや？」

「それは俺の店でいつものように神会デナトウスをしてくれれば教えてやるよ」

だからお願いな。と腕輪の宝玉が点滅したのを目を見ると二人を残してどこかへ行ってしまったため、ロキとフレイヤは顔を見合わせて首を傾げる。

巨大な木々と青と白の水晶クリスタルの道標を背後に立ち、巨大な石壁の壁を開けていた一誠の濡羽色と金色のオッドアイは、廃墟の教会を始め人が寄りつかない寂れた区画の風景を目にするだけじゃなく、三柱の男神と女神、小さな三人の獣人の少女達も視界に映る。目を見開き呆然とした表情に開いた口が塞がらないでいるその反応に微笑む一誠は口を開いた。

「初めまして、俺の名前はイツセー。今日からお前達と一緒に生活を

するがよろしくな?」

「は、初めまして……つ、わ、私はサンジヨウノ・春姫と申します。よ、よろしくお願いいたしますっ」

「ウチはナナジヨウノ・ユエル!」

「ウ、ウチはキュウジヨウノ・ソシエ。よ、よろしゅうお頼申します……」

挨拶すれば金髪に翠色の瞳の獣人、濡羽色の髪に紅い瞳の獣人、水色がかかった銀髪に青い瞳の獣人の少女達も挨拶を交わしてくる。身長的に三人の中で年上なのがユエルとソシエ、年下は春姫なのが一目で分かる。そして三人には共通点が一つだけあった。狐耳と尻尾を生やしていることだ。

「三人共狐人なんだな。てつきりヒューマンかと思った」

「世界中探しても狐人の種族は極東にしか存在していないことを知らないのか?」

「特別な意味も含めて選抜したのが私達に仕える貴族の少女」

「それに貴方の人柄ならこの子達と直ぐに仲良くなれるでしょ?」

アマテラスが袖からアップルパイを取り出し、一誠の真上に高く放り投げた瞬間。獲物を狙う獣と化して好物へ目掛けて跳躍し、掴み取って春姫達の前に降りた頃には狐耳と九つの狐の尾を生やす小さな一誠になっていた。

「え、えええええええつ!」

「め、女神様が仰ってた通りになつて……」

驚くクロエとソシエに啞然と呟く春姫。「でしょ?」とアマテラスは微笑みながらシヨタ狐化した男に近づいて頭を撫でる。

「これから貴方達と住むこの子は私達の想像を超える秘密を抱えているの。狐人になれるのだからその秘密と関わりがあるわ。でも、貴方達に直接害があることじゃないから安心して頂戴ね」

諭す風に述べる女神の言葉に三人の狐人はコクリと頷き、九尾の狐人に寄った。

「ほへえ……尻尾が九本もあるんでお伽噺に出てくる九尾様みたいや」

「う、うん、そうやね。わ、本当に尻尾なんや……温かい」
「……九尾様」

興味津々、好奇心を目に宿してアップルパイに夢中な男を見つめ触れる春姫達。本来一本しかないはずの獣人、それも狐人ルナールが九本も生やすお伽噺や童話のような話が現実的になって前代未聞な存在が目の前にいる。関心が惹かないと言うのは無理な話であり、政略結婚という名の形でこの男の嫁として嫁ぎ生活をする三人はこれからも驚きの連続と色鮮やかな世界を見ることになるだろう。その後、アマテラス達がロキ達に春姫達の同棲する理由を語っている間に一誠も三人の狐人ルナールの存在を教え回る。それが終わると一誠は料理を作って食べさせると……。

「な、なんやこれ！家で今まで食べたことがない味と美味しさや！」

「お米でこんな美味しい料理が作れるなんて……」

「あ、あの……お代りしてもいいですか？」

例外なく胃袋を掴まれ、一誠に対する緊張感は一気に瓦解して打ち解けたのであった。ちやつかり飯を集る極東の神々もお代りをしていて四人の様子を満足すると帰っていった。その後、春姫、ユエル、ソシエの狐人ルナールの新たな『幽玄の白天城』の住人としてオラリオが暗くなって迎えた夜の時間帯は歓迎会が行われた。

「三人共、どうだった？」

「めっちゃ楽しかった！故郷の家じゃあ貴族らしく優雅で慎ましい立ち振る舞いをしなさいって、散々おとおかんに言われかてつまらなかつたんや。ここじゃ、気軽に自由にしてもええんやろ？」

「縛るような事はしない。ただ、ここオラリオは故郷より恐い人間が多いから気をつけてくれ。出かける時、できれば誰かと一緒に行動してくれ」

「は、はい。わかりました」

一誠の自室で夜を過ごすことになった三人。寝る前に会話を交わして良好な関係を築こうと極東でどんな生活をしていたのか、住んでいた場所はどんな場所なのか、話し合っていた。聞けば聞くほど異世界の極東は元の世界の極東と違い現代風ではなく、科学や食文化がま

だ発展していない古代風の時代であることが分かってきた。心なしか、話す時がぎこちなく緊張しているのが見受けられる春姫とソシエ。「イツセー様は普段何をしていたらっしゃるのですか?」

春姫からの質問に「料理屋と冒険者」をしていると応えたと三人共不思議そうにキョトンとした。

「料理屋と冒険者?なんで?」

「オラリオはダンジョンがある。それぐらいは知っているだろう?前者はともかく後者は冒険者になるのは必然だ」

「でも、冒険者なのに料理屋をするのは?」

「俺の料理、美味しかっただろ?それがロキ達神々の舌でも喜んでもらったけど、毎度のように料理を作る店で働かないかって言われてな。仕方なく料理屋もすることにしたんだ。そのおかげでこの辺りじゃ俺と俺の店を知らない人はいなくなるほど有名になったよ」

「そ、そうだったんですか……」

もしかして苦勞している人なのかな、と翠の瞳に乗せて見つめる金髪の獣人の少女の頭に手を置かれた。

「お前達は国の為に俺の嫁としてここに連れて来られたが、本当に結婚せずともただ一緒に住むだけでいい」

「えっ、そうなん?」

「好きでも嫌いでもない、ましてや見知らぬ男と結婚しろと言われて素直にしたいか?」

「うーん、確かにそれはちよつと嫌やかもしれへん」

「だろ?俺も見知らぬ女と結婚しろと言われれば嫌さ。だからその辺のことはアマテラスも考慮している。基本的にユエル達は自由に生きていて構わない。ただ俺の妻である肩書だけは、アマテラス達の同盟の為に意識してくれ。極東に戻ればお前達は俺の妻として扱われるからな」

「え、えつと……この都市にいる間は普段道理に過ごして、極東に戻る時はイツセー様と結婚していることにしはるんですか?」

「そう言うことだソシエ。だから俺のことを好きにならずともいいからこのオラリオで自由に生活をしてくれ。それだけでアマテラス達

の助けになる」

「なんやようわからへんけれど、本当に結婚せずともええんならちよつと安心したわ」

安堵で胸を撫で下ろし苦笑を浮かべるユエル。

「旦那様の部屋に誘われた時は初夜を過ごすんかと思つて緊張してたんやけど、話を聞いてホツとしたわ。な、ソシエと春姫」

「う、うん……イザナミ様とイツセー様はとても優しゆうて安心した」

「アマテラス様もイツセー様のことを教えて下さいました。とても優しい殿方であると。だから信じて欲しいと。本当にイツセー様は私達のことを思つてくださっていることに優しさを感じました」

ソシエと春姫も緊張がほぐれた様子で柔らかな笑みを浮かべた。釣られて笑む一誠はユエルとソシエの頭にも撫でながら耳を触れると擦ったそうに身じろがれた。

「あはは、旦那様擦りたいでっ」

「ん、ふふっ……」

春姫も耳を触れて擦られて笑い声を小さく漏らす。一頻り暗い部屋の中で笑い声が発する。その後、金色の羽毛に体を沈めて寝息が立った頃を見計らい、静かに扉が開き小さな影が三つ部屋に忍び込んでは金色の羽毛に眠る少女達に交ざつて寝転がった。

『異世界食堂』

翌朝の昼時。ロキとフレイヤからの召集でオラリオに永住する上級冒険者の眷族を持つ神々が応じた。西方の区画では誰もが知っている料理店の二階を独占して臨時の『神会』デナトウスが開催されようとしていた。皆、二大派閥から何を離すのか期待と愉快そうに同席して口を開くのを待った。

「うし、時間も迫つたところで話をするで。今回自分等に呼んだのは他でもない。とある派閥同士が戦争遊戯ウォーゲームをおっぱじめようとする話や」

『——ッ!!!』

娯楽に飢えた神々が歓喜の声を上げた。久々の祭りだと盛り上が

り、話しを催促する声も上がるとロキは淡々と進行を進める。

「相手は「フレイヤ・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」や」

ロキの言葉で盛り上がっていた場合はピタリと静まり返った。え、何その出来勝負？と銀髪の女神にブロードの男神を交互に視線を配る神々の中、羽付きの鍔広帽して橙黄色の髪を隠す優男神が質問と声を漏らした。

「ロキ？フレイヤ様とアポロンがどうしてゲームをすることになったんだい？ゲームをせずとも勝敗は火を見るより明らかだぜ」

「しようがないやん。そのド阿呆がリベンジをしたいってちゅーから」

「リベンジ？・・・ああ、そーいうことか」

狩人を司る神がリベンジする相手がいるとすれば、ただ一人しかない。その人物は今「フレイヤ・ファミリア」に所属していてアポロンがフレイヤに闘争を臨む理由も適っている。だが、それでも理解できない。

「フレイヤ様、よくアポロンとゲームをする気があつたんだね。貴方なら断わると思つていたんだが？」

「私は許しただけよ。本当にアポロン達と戦いたがっているのは、あの子よ」

「・・・え？」

本神はその気が無かった。なのに眷族の為に許したと言う話に優男神は不思議そうに女神を見つめたところで、この店の店主が何時の間にか主神の背後に立っていた。

「そう言うわけだヘルメス。「アポロン・ファミリア」からのリベンジを受け入れたのは俺が考案したゲームなら受けて立つと言つたんだ」
「それはどういふことなんだい？それに君が考案したゲームつて・・・」

「俺が考えているゲームは、オラリオ、ひいては他の「ファミリア」を巻き込んで行かうゲームだ」

二階にいる神々全員が揃って店主に目を向ける。自分達もゲームに参加させるだど？そんなことが可能なのかと興味が惹かれた神々

は彼の男に注視する。

「フレイヤ・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」。さつきヘルメスが言っていた通りゲームなんてせずとも勝敗は決している。だから、不平等を平等に且つ他の「ファミリア」も巻き込むゲームを考えた。その名は——『運動会』」

「う、運動会……?」

一柱の神が聞いたことのない単語に目を瞬きする。演説をする風に店主は神々へ説明する。

「既に俺のことを察している神はいるだろう。俺自身も転生者と同じ異世界から来た存在であり、異邦人なんだ。だから異世界のイベントの催しを戦争遊戯ウォーゲームに取り組ませてもらうことにした。大人から子供、神ですら参加できるゲームをな」

『か、神すら参加できるゲーム……だどつ?』

震撼する神達。手汗を握るほど期待感が一気に膨張して店主を見つめる意識が増した。

「それはどんなゲームなんや?運動会に關しておるんやろ?」

「勿論だ。運動会とは集団で二チームに分かれて主に身体能力で競い合うのが催しイベントの醍醐味だ。そして戦力差が離れているなら平等に、指定されたL v. 以下の冒険者のみ競い合わせれば勝敗は五分五分になる。当然、神と冒険者と競い合わせても意味が無いから神同士が競い合ってもらおう。そうすればいくらフレイヤの眷族でも圧倒することとはできないだろ?」

「そうね……オツタル達が前線に出ることを禁じられるなら、アポロンの子供に勝てるとは限らないわ。貴方の世界の催しイベント、面白い事を考えてしているのね?」

ソプラノ声で美しく微笑む美の女神に恭しく「褒め言葉として受け取らせてもらう」と頭を垂らす店主。

「運動会は一年に一度だけ行われる。だから今年、今回のゲームで運動会をした後は来年までしない。故に神々も全力で楽しめるゲームは今回限り。で、どうだ?「アポロン・ファミリア」のリベンジで行うゲームは運動会で構わないか?」

『オツケー!』

親指を立ててほぼ満場一致で戦争遊戯ウォーゲームは運動会に決まった。皆、自分達も直接祭りに参加できるならばが非でも参加しよう!という魂胆で了承した。神々の心理も掌握した一誠の手腕にロキとフレイヤは感嘆し、ヘルメス達は驚嘆する。

「ゲームをするのは二週間後にさせてもらう。オラリオの南部の外でするからフレイヤとアポロン、どっちの仲間となるかは中央広場セントラルパークに設置した二つの箱の中に自分の派閥の名前を書いて入れてくれ。で、運動会に参加出来るのは神会デナトウスに参加資格がある派閥のみ。指定するLv. は3以下で人数は・・・そうだな、初めてするから十五人までにしよう。十の派閥が集まれば百五十人も集まるわけだしそれで十分盛り上がる」

後もう一つ、店主は付け加える。

「同意の上であれば他派閥同士が運動会に乗じて、負かした【ファミリア】何でも一つだけ命令を下す罰ゲームも加えるか」

『……………』

それを聞いた瞬間の神々の目が妖しく煌めいた。平等で戦えて集団で勝てば負かした【ファミリア】に命令ができる。勝敗は五分五分だが比較的安全な勝負が臨める。何て素晴らしい設定システムなのだろうと店主に感謝しながら疼く足を抑える。

「それじゃ、そろそろ運動会の会場となるステージを用意しないといけないから……………ロキ、締めくくりよろしく」

「ほな、解散!」

最後まで一人の冒険者が仕切るのはアレだからと考えでロキに頼んでもらい、臨時の神会デナトウスを締め括らせてもらえば、ワッ!と神々が疼く足を解放して我先へと一階へ続く出入り口へと駆け出して消えていく。二階にまだ残っているのはいつもの神メンバーである。

「なあなあ、ほんまにうちらも参加できるんやろうなあ?」

「できないなら言わないさ。ところでロキ、お前はフレイヤの味方になるのか?」

「ぐふふ、そりゃ聞くのは野暮やろ?ゲーム当日までは内緒や」

意地の悪い笑みを浮かべはぐらかす朱色の髪に糸目の元主神。つられて店主も笑いだす。その意味は……。

「ま、運動会が終わった後はアレも準備できてるだろうからやるけどな」

「イツセー君、まだ他にやろうとしているんだい？オレにも教えておくれよ」

「なに、運動会の後はオラリオを巻き込んだ祭りをするだけさ」

な？と象頭の仮面を被っている男神へ意味深に目を向ける店主に無言でニカツと白い歯を覗かせた。二人の様子を見逃さなかった女神達は「ああ、そういうこと」と納得するが何も知らない神は疑問符を浮かべるのみ。それから店主は一週間後の運動会の準備に忙しさに追われ、ギルドや他派閥、商会の協力を仰ぎ事を順調に進めた結果……あつという間に一週間後となった。

冒険譚 6

『迷宮都市』オラリオは今日も晴天を迎える。蒼穹の彼方まで広がる青い空は

神や人類、モンスターを見下ろす。そして都市が賑わいを見せている。

待ちに臨んだ戦争遊戯^{ウォーゲーム}当日。オラリオには尋常ではない熱気と興奮が溜め込まれていた。

朝早くから全ての酒場が店を開き、街の至る所で出店が路上に展開している。今日まで通りの壁を彩って来た無数の絵羊皮紙^{ポスター}は悪乗りをした神々が散々周囲に喧伝^{けんでん}した結果だ。絵の内容は「アポロン・ファミリア」の太陽のエンブレムと、「フレイヤ・ファミリア」の戦乙女の側面像^{プロフィール}が描かれている。

今日ばかりは殆どの冒険者達が休業し、酒場に詰め寄せ観戦準備を整えている。何とか休暇を申し込んだ労働者達、一般市民も大通りやセントラルパーク^{セントラルパーク}中央広場に出て、今か今かとその時を来るのを待ちわびていた。

『第一回！チキチキ、戦争遊戯^{ウォーゲーム}IN運動会を始めるぞおっつ!!』

対してオラリオの外では数多くの者達が集っている。皆、観戦・待機場として設けられた巨大な赤と白の階段状の席にフレイヤとアポロンの味方となる派閥が座っていた。一番高い席には背凭れのある席がひとつだけあり、そこには当の女神と男神が皆のチームの代表、王として座っている。そして宣言する一誠は、二つの待機場の間に設けた木造の台座と大きな塊に覆う布と、亜麻色の髪と瞳の女性の隣で仁王立ちして運動会の進行役の務めを果たしている。

『運動会の実況と解説はこの俺、異世界から来た異邦人のイツセーだ、皆よろしく！そしてゲストはこの人』

『異世界から来た異邦人のアスナです。皆さん、よろしく願いします！』

オラリオでも都市の外でも人々は色めき立つ。

『既にオラリオの観戦者達には俺の魔法で色んな場所にどんな角度からでも映像を配置、展開している。思う存分楽しんでほしい！』

『それよりもイツセー、私達が異邦人だつてこと本当に教えちやつてもいいの?』

『ぶっちゃけ、この運動会で俺が色んな異常現象をしまくるからバレル。それにどっかの女神が異邦人や転生者のこと教えたからもう隠すのも面倒くさくなつた。てなわけで此度の戦争遊戯ウオーゲームを軽く説明をする!』

区切りを付けて、説明口調で一誠は語り続ける。

『運動会とは異邦人たる俺達や転生者達がいた世界——神々からすれば違う世界、つまり異世界では当然のように行われている集団で競い合う催しイベントだ!競い合う方法は至つて単純。日々ダンジョンや仕事で鍛えた体、身体能力のみ相手と勝負し勝敗を決める訳だが、今回の戦争遊戯ウオーゲームは今までの戦争遊戯ウオーゲームとは一味も二味も違い過ぎる異例中の異例。それは——神も戦争遊戯ウオーゲームに参加できることだ!』

なんせ身体能力で競うのだから、武器やら鎧やらそんな物騒な物を身に付けず面白可笑しく誰でも楽しめる。一誠の言葉に神々は大いに沸く。

『それでは、勝敗を決める方法を説明しよう。午前と午後とそれぞれ十一の試練——競技を分けて行う。最終戦の午後までより今まで競技で勝利し得た点数が高い方が勝利となる』

勝利の内容を告げる一誠の口は止まらない。

『さて、今回の運動会は「フレイヤ・ファミリア」と「アポロン・ファミリア」の派閥同士の決闘が行われるのは説明しなくてもいいよな?そんな女神と男神の味方となる他派閥達の活躍によって勝敗が決まる。因みに両派閥の味方に成つた派閥は神会デナトウスに参加できる派閥のみ。さらに今回はあくまで身体能力で相手チームと競い合う。一部の競技を除いて武器や魔法、異能や特典などの行使は一切厳禁。もしもそれらと妨害や悪意ある行いもすればその派閥は強制失格、退場とさせ——【イシユタル・ファミリア】の団長と参加できなかったアマゾネス達と二人つきりにするからそのつもりで』

どこからか「ゲゲゲゲツ」と不気味な声が聞こえてくるのは気のせいだといこの場にいる全員が心中一致した。

者は細く白いラインが描かれたランニングコースのところにいる、今回参加できず冒険者依頼クエストで協力してもらっている冒険者達のところまで足を運んでくれ』

『定番な競技だね。走る距離は五十メートル走?』

『や、百メートル走だ』

因みに協力しているその冒険者は誰かと言えば……。

「Lv. 1の冒険者は僕の元へ来てくれ」

「Lv. 2の冒険者は儂のところに来るんじや」

「Lv. 3の冒険者はこちらに来てい」

「神はこちらであるぞ」

———「ロキ・ファミリア」の第一級冒険者であった。しかも最上級鍛冶師マスターミスまでいる。参加する冒険者達はたじたじになった。

「つて、うおおーい!? 何時の間にか見掛けへんと思つたら自分等イツセーに手伝わされとつたんかい!」

立ち上がってツツコミを入れるロキ……赤の陣地、「アポロン・ファミリア」のチームにいる女神の叫びが眷族の三人の耳まで届く、が。

「すまない。魅力的な報酬を用意されたらね」

「今後の【ファミリア】の為を思えばの」

「故に今の私達は第一級冒険者や【ロキ・ファミリア】の幹部の者ではない」

「『ただのアルバイトの者だ』」

臨時アルバイトと共通語コイネが書かれた腕章を見せつける古参の幹部の姿や紅髪紅眼の女神へ大きく手を振る隻眼の女性。

「主神様よ、手前の報酬は深層のドロップアイテムであるぞ! しつかりと働いて見せるから主神も頑張ってくれ!」

愕然と叫び何とも言えない心境となる主神達。他派閥の者からは有名な冒険者を捕まえて働かせる一誠に驚きを禁じ得なかった。

『あ、言い忘れてた。徒競走は男女別で走ってもらう。女性同士も走ってもらうからきがねなく参加してくれ』

八割男、二割女と圧倒的に運動会に可憐な花が少ない。参加してい

る【イシユタル・ファミリア】ぐらいしか女冒険者を連れてきていない。他にいとすれば女神達だろう。続々とフィン達の元へ集う徒競走をする者達。整列の準備ができれば、ギルド員の女性が空に向かって掲げた銃で始まりの合図として空砲を鳴らす。同時に駆け出す駆け出しの冒険者達。一番になった冒険者はチームに貢献し、優秀な功績を残した喜びを噛み締めた。Lv. 1の競争が終わると実況の一誠がとあることを言いだす。

『ただいまのLv. 1の冒険者が走った中で一位でありながら更に速くゴールをした者を発表する！——アポロンチームの【ゴンザレス・ファミリア】のイディア！頑張った賞を授与する！』

えっ!?と目を見開き呆然とした表情を浮かべる冒険者へフィンが称賛の言葉と共に装飾と意匠が凝った金のメダルを渡しにやってきた。一番になっても一番の中で一番速く走った者こそが唯一の勝者であると悟って落ち込み、妬む駆け出しの冒険者達。因みにイディアの主神は「よくやったー！」と狂喜していた。

『続いてはLv. 2の冒険者の徒競走！』

その中にアポロンチームとして参加している【ロキ・ファミリア】に所属しているフィリアが交ざっていた。

「派閥の為に勝利せねばなりませんが……」

しかし、何やら葛藤している様子だった。自分の番になると真剣な表情で駆け出し、二位を勝ち取った。続いてLv. 3の徒競走では。

「ベートオツ！絶対に一位の一番になるんやでえー！精一杯応援してるからなあー！」

「……うるせえ」

頭上に獣耳、腰から尻尾を生やす獣人の少年が辟易した気持ちを声に出して呟き、順番が来ると駆け出した。そして堂々の一番の一位を勝ち取った。ロキの眷族にあんな獣人はいなかったはず、と新たな眷族で未来の幹部になり得るだろうと思いつながらアイズの走りを見守った。……四位と言う結果を。これには不思議に思い、通信を入れた。

「どうした？何で四位なんだ？」

『あまり、やる気が出ない』

「やる気が出ない？」

『ロキがイツセーの味方じゃない方を選んだから』

あー、そういうことかあ……。敵手となった自分^{イツセー}を慕う少女達はアポロンに優勝させることに抵抗を感じているのだろう。何時も世話になっっている相手に恩を仇で返すような真似をしているのではないかと不安も覚えているようだ。

「アイズ、今日ばかりは俺のこと気にせず頑張ってくれ。俺からのお願いだ」

『……気にせず？』

「運動会も真剣勝負をするものだ。俺のことを気にして負け続けるなら、そんなんじやあお前の望みも叶えないぞ」

『……』

「わかったな？」

『……わかった』

渋々といった感じで受け入れたアイズ。どんな形でも勝負は勝敗で決する。今回の相手は人と神、武器は剣や防具、魔法では無く身体能力。何事も勝負とあれば勝つ気でなければいけない。アイズがそれを失くしていた。師としてそれはダメだと諭し、勝負に励んでもらうのであった。例えフレイヤが負けてアポロンにどんな命令を言うてくるのかわからなくてもだ。次は神の番。その時、二柱の神のやり取りがあった。

「……イザナギ」

「な、なんだ？」

「一位じゃなかったら、承知しない」

一柱の男神が着物の袖の中から女神に鈍色の何かを見せ付けられ顔が青ざめる。首が取れんばかりに頷いたあと、全力疾走で一位の一番をもぎ取った。何億年も逃走劇を繰り返した神達の嬉しくもない身に付いた身体能力の賜物であろう。

「ふう、走るのって慣れないわね（ヘフアイストス、三位）」

「それでも速かったじゃない（アマテラス一位）」

「イザナミほどじゃないわよ。その着物姿に極東の履き物でよく速く走れるわね」

「頑張ったらご褒美をもらうことにしてあるから」

「……それ、本人から了承貰ってるの？」

「事前に」

何時の間にそんな約束を交わしていたのか、自分達より接触する機会が少ない分、知恵が回ったのだろうかとちよっぴり羨ましかったへファイストスであった。程なくして第一回目の競技は終わりを迎え、結果が発表される。

『より多く一位を獲得したチームが徒競走の勝利だ』

『それじゃ今から発表します。……勝利したチームは、アポロンチームです！おめでとうございます！』

おおっー！と換気の雄叫びをあげるアポロンチーム。まだ始めただけだからとフレイヤチームは鳴りを潜めていた。

『初戦はアポロンチームか。これからも勝ち続けるかどうかは神でもわからないな』

『そうだね。勝負は予想外なことも起きるから次はどんな競技をするのか楽しみだよ』

『と、ゲストからの期待の言葉をもらったところで次行ってみようか、二回目の競技へ！』

虚空から発現した三対六枚の翼に輪後光の金色の錫杖を手にして床に突く。すると二人の目の前に集束した光から、十数本の大剣と巨大な樽が二つが出てきた。

『……？』

『……？』

『……？』

場はシン……と静まり返る。樽と大剣で何をするのか神と冒険者、観戦客の一同の頭上に疑問符が浮かんで理解できていない。その中で極一部、「あれってもしかして？」ととある異邦人と転生者が何となくであるが察した様子を窺わせる。

『……イツセー、あれって樽だよ？あれでどんな競技をするの

？』

異邦人のアスナもどんな事するのかチンプンカンプンで問いの言葉を投げたら、四方形の立体映像が空中に投影されて皆の意識はそちらの方へ向きながら耳にする。

『説明しよう。まず神が樽の中に入って待機、その後は十数本の大剣を手にした敵の冒険者が樽に突き刺して神を飛ばす。それが第二の競技の内容でその名も「神さま危機一髪」！』

それ、〇〇危機一髪だろ。と言う心の突っ込みは一誠には聞こえない。

『因みに、大剣の刃は潰してあるから殺傷能力は無く、実際に神を貫くことは無いので安心してくれ。ただし飛ばされるのが決定した神は罰ゲームを与える。これを三回行うから各チームから三人の神と十五人の冒険者を選んで樽のところに集まってくれ』

数分後――。

「ガネーシャ登場！」

ガネーシャを始めモブ神が二名に対し、アポロンやモブ神が二名それぞれ十五人の冒険者を率いて集まった。

『集まったな。それじゃ、樽の中に入れてくれ』

勝手に扉の如く開く樽へ、ガネーシャとモブ神が中に入ると顔だけしか出ていない状態で扉が閉まり出す。そしてガシヤツと樽の表面が横にスライドして大剣を突き刺すための溝が出てきた。

『フレイヤとアポロンチームの冒険者は敵の神のところへ移動し、大剣を持って』

ゾロゾロと入れ替わり樽の中にいる神を囲みながら大剣を手にした。

『では、こちらで合図をしますので合図が出る度に一人ずつ好きな穴に突き刺してください。ですが、選ぶ時間はたったの十秒です。その間に選んでくださいね』

アスナの後ろで組み立てた木の台の上に大きな太鼓を用意していた一誠がドドン！と勢いよくバチを振って叩いた。

『それでは一人目の冒険者の方、指す場所を選んでください！』

アスナの開始宣言と共に鳴りだす太鼓。叩かれて出る音のリズムに合わせて剣を持った冒険者は樽の周りを歩き、どこに刺そうか狙う。十秒後、一際大きく叩かれて鳴る音。

『十秒経ちました。刺してください!』

宣言を受けて大剣を樽に刺す冒険者達。刺されるガネーシヤ達はビクツと緊張して身構えるが飛ばされる気配は何時まで経ってもこなかった。次で次の刺客の番に回る。二回目——太鼓のリズムに合わせて刺す場所を定め、アスナが刺す促しの言葉を掛けた。その言葉に応じて刺す冒険者達だが、神達は飛ばなかった。続いて三回目、セーフ。四回目、五回目、六回目——。そして、七本目の大剣が樽に突き刺さった時であった。

「どわあああああああああああああああつ!?!」

樽から勢いよく放り出される形で空へと飛ばされた、アポロンチームの神に追撃とばかり樽から光の玉が飛び出して直撃するや否や爆発した。と言っても風船が破裂したような音を鳴らす程度だ。ぶつかった神の体に怪我は無い。が、煤に塗れたような黒い顔と髪が毬藻のように大きなアフロと化した。落ちてくる神に対してどこからともなく現れるフィンが乗ってきた魔法の絨毯で受け止めて地上に下ろす。

『最初に飛ばされたのはアポロンチームの神!勝者はフレイヤチームの神ガネーシヤ!』

と、宣言する一誠に誰も応えなかった。皆、髪がアフロと化した髪に凝視している。神を飛ばした冒険者が笑いを堪え切れず噴いた。怪訝になる神は何故笑われるのだと疑問を抱くが、その理由を知った時の反応は……。

「な、なんじやこりやあああああああああつ!?!」

『アッハッハッハッハッハッ!!』

その反応を見て神だけじゃなく冒険者も大笑いを始めた。耳を澄ませばオラリオからも笑い声が聞こえてくる。

『罰ゲームって、アフロだったんだ……』

『単なる罰ゲームのつもりだったんだけど、意外とウケがいいな』

何も知らなかったアスナや実行した一誠はこの世界にアフロというヘアースタイルが無い事を知らない。

『ああ、それとそのアフロという髪型は運動会が終わるまでは取れないからそのつもりで』

「な、なんだってー!？」

そんなこんなで「神さま危機一髪」の競技は進行して魔法で樽を激しくシャツフルの後、二人目の神が樽の中に入り飛ばされれば、神がアフロと化する罰ゲームを受けながら滞りなくフレイヤチームの勝利で競技を終えた。

『フレイヤチームが一勝一敗、アポロンチームも一勝一敗と一進一退だね』

『まだまだ始まったばかりだ。どんどん色んな競技をしていくぞ。第三回目の競技を始める』

指を弾いたその音が会場に響く。一拍後、地面が揺れ出して冒険者達が眉を訝しげに曲げ、警戒心が強い犬のように周囲を見回し始める。この現象を地震というにはあまりにもお粗末な揺れは、彼等に不穏なものを覚えさせる。そして、二チームの観戦席の背後、地面が膨張したように盛り上がって何かが出てきた。神や冒険者達は目を見開く、自分達を覆う巨影に。

『次の競技は——全員参加の騎馬戦IN旗取り合戦!』

『き、騎馬戦に旗取り合戦って……それ以前にあの建造物は?』
『土で作った城だ。てなわけでルールを説明しよう』

空中に投影される立体映像と共に説明口調で語り始める。

『まず騎馬戦とは、馬となる土台の三人が前に一人、後ろに二人が立つ。後ろの二人が左右の腕を交差し合って前騎馬の肩に手を乗せ、前騎馬から伸ばされる手を後騎馬の二人が残りの手と繋ぎ、騎手となる一人が交差した腕を跨り、前と後ろの騎馬が繋いだ手に足を乗せて立つ。以下の説明通りにすれば四人一組の人馬一体が完成する』

『最後に旗取り合戦。あの土で作られた城のどこかに旗がある。どちらか先にその旗を奪取できればチームの勝利だ。ただし騎手が相手にこれから配る鉢巻きを奪われた場合は即失格となり退場してもら

う。なお、四人一組の騎馬が出来ない場合は数を合わせて三人一組、二人一組の騎馬を作ってもらおう。その仕方も教えるので各自チームの冒険者と神は相談し合ってパーティを組んでくれ』

さらに付け加えられる。

『最後にもう一つ。騎馬からの攻撃や妨害は厳禁であるが、騎手が騎手に騎馬から落としたり取っ組み合いするのはアリだ。例えそれで陣形が崩れても組み直しても構わないがその邪魔をしてはならない、その瞬間を狙って鉢巻きを取るのも無しだ。もしもこれらを破れば、『イシユタル・ファミアリア』のアマゾネス、フリユネ・ジャミールによって強制的に退場させられる』

忠告する一誠の言葉を受けて会場の場に現れるおかつぱ頭に褐色肌の肉塊の巨女。彼女を知る者、知らない者は揃って戦慄して恐れ戦く。

『説明は以上だ。アスナ、何か感想はあるか?』

『騎馬戦で旗取り合戦だなんて、凄い事を考えるねイツセイ』

『運動会らしいだろ? それじゃ各チーム。三十分の間に誰と組むか、味方と戦法を相談したり城の中に入って調べたりしてくれ』

「ほー、広々としとるなあ〜」

三十分間の間に城の中を調べるロキ達は一階に足を踏み入れた。上階へ向かうための坂があるだけで他を見回しても不要な置物は一切無い。さらに上へ進むと一階と同じ広さの空間、三階も変わらないが中央に棒とそれに巻かれてる旗があった。

「ふむ、これは坂の前で待ち構えておるのが無難かもしれへんわ。アリシアはどう思うん?」

「見た感じだと、下から攻め込む騎手の鉢巻きを取ろうとするとどうしても前のめりになってしまい、引きずり込まれて騎馬から落とされかねないです。ならば無理に戦わず足止めをすれば下から攻め込む敵騎馬の攻勢を削ぐことが出来るはずです」

時間稼ぎが効率的な方法ではないか? とアリシア・フォレストライトの提案に考える仕草をするロキ達。

「いけいけいけえー！」

「城の旗を狙えッ！」

雄叫びを上げ、騎手同士が取っ組み合いを始めた。直接城へ目指そうとする騎馬もいれば、それを阻む騎馬もいる。場は瞬く間に阿鼻叫喚とまではいかなくても歴とした戦場と化した。飛び交う怒号の中、鉢巻きを取られた一組は落胆しながら戦場から離脱する光景が繰り返す時に城の前で静観していた三柱の神とその眷族が静かに動き出した。

「うん？おわっ！」

高速で駆け抜ける無数の騎馬に騎馬が足を停める。あまりにも速く動く騎馬に目を丸くしていると、凄い勢いで突っ込んでくるもう騎馬達が続くように駆けて来ては、続々と戦場を馬のように高速で動く騎馬達に敵も味方も驚愕する。

「走り続けるのだっ！」

「私達はただそれだけでいい」

「皆、頑張っつて」

「「「「はっ！」」」」

戦場を高速で駆け抜ける者達は、アマテラスとイザナギにイザナミが率いる眷族達であった。全員、第3級冒険者のみで構成された上に――二年前まで戦争をしていた兵士達だ。下手な第3級の、Lv.3の冒険者にも劣らず入り乱れた密集状態の中で戦い抜けてきた勇者達でもある。世界で唯一存在するダンジョンで強くなる冒険者に対して、モンスターよりも対人戦に長けて抜きんでいる彼等にとつては停まって見えるも当然だ。

「くそっ、何て足の速いやつらなんだ!？」

「まるで追いつけれねえっ！」

当たり前だ、当然だろうとアマテラス達や極東の神々の眷族達は胸を張って言える。飽きるほど足並みを揃えて戦争をしに歩いたり走ったりしてきたのだ。仲間との速度や動きを合わせることなど造作もない。故に集団行動に関しては極東から来た「ファミリア」等が秀でている。だからこそ敵の動きを制し、攪乱や意識を集めている

と。

「今だ、足が浮いた敵に掛れえっー！」

「超・有能がガネーシャの子供も突撃だあっー！」

他の騎馬達が猛烈な勢いの攻めに転じた。士気の高さも若干フレイヤチームの方が高い。アポロンチームの騎馬へ雪崩れ込む勢いを見せる攻勢に観戦者達は驚嘆の息を漏らす。取っ組み合いをしている騎馬がいたら味方の騎馬が横から襲いかかろうと接近するところを敵の味方がそれを阻止、あるいは奇襲して鉢巻きを奪う。一気に戦場は激しい抗争と五月蠅いほどの喧騒を醸し出す。燃え盛る烈火の炎呑み込まれ、このまま押し切られて城にまで攻め入れられるかと予想はされたが、戦場では予想外な出来事は良く起きる。

「いけえい、ベートツ！」

一人の狼ウエアウルフの背に負ぶさっている女神が戦況を打破せんと疾呼した。たった一人だけ騎馬よりも速く動き城の中へと駆けていくアポロンチームの姿にフレイヤチームの騎馬は止めようとするが殆ど一人で走っているような相手に追いつけるはずもなく城の侵入を許してしまった。しかし、それを相手が想定していないはずがない。城の中はアポロンチームの城と同じ構造で出来上がっているが、上階へ続く坂に五組の騎馬が配置されていた。

「チツ、おいどーするんだ」

「無視していけれへん？」

「あの狭い中をどうやっていけっつーんだよ」

人が三列に並んで通れるほどの通路の坂をギツチリと詰めて守りを固めている。高さも騎手の頭とギリギリ届きそうで届かない程だ。そんな密集形態で道を塞ぐ相手にどう行くか考えている内に外から敵が入って来て取り囲まれる。四面楚歌の状態となった様子をロキは見渡し、逃げ場を探す。

「……ふむ、ベート。ちよーつとして欲しい事があるんやけど」

「あ？」

獸耳に口を寄せて話すその内容に、少年の目は怪訝になった。

「おい、そんなことしていいのかよ」

「多分、問題ないはずや。それよか、それをできるかどうかベート次第やで。自分、負けるんのは嫌いやろ？」

少年のピクツと目元が震えた。相手を刺激する言葉を送る主神の神意を読めない、読む気もしない狼ウエアウルフは無言で『天井』を見上げた。その仕草に周囲の騎馬と騎手達は訝しむが、逃げ場もないこの状況下で何もできることなどあるはずがない。そう断言して全員で襲いかかった次の瞬間。腰を落として脚に力を貯め込み——跳躍した彼の獣人に「は？」目を点にした騎手達。上は天井しかない。ぶつかって落ちるだけだと思った考えが粉碎された。

「オラアアアアアアアアアアッ！」

雄叫びと共に片足を振り上げて放った蹴りが天井をブチ破り、二階へ移動する破天荒な行動をして見せた狼ウエアウルフ人に城の中も見えていた一誠とアスナは素で素つ頓狂に声を上げた。

『イ、イツセー、あれって、アリなの？』

『……普通あんな行動は騎馬がするようなもんじゃないぞ』

『それじゃ……失格？』

『いや、攻撃した対象は天井。穴を開けて移動したに過ぎないから失格じゃない』

と、言う話を聞きしてやったりと笑みを浮かべるロキの狡猾と狡賢さに『やつてくれた』と一誠を呆れさせた。下から天井Ⅱ床を破って上がってきた二人を迎える者は二階の空間に誰もいなかった。厳密には一階から二階へ続いている連絡路の坂に五組の騎馬がいる。が、破天荒な行動をした二人に未だ啞然としているのか、直ぐに追い掛けるにいて悠々と三階に繋ぐ坂に上り切ったロキ達を出迎えたのは……。

「あら、騒がしいと思ったらロキ達だったのね？」

城の外の戦場にいなかった城の王ことフレイヤと女神の眷族達、数組の騎馬が待ち構えていた。ただし、旗の傍にいるフレイヤ自身は四つん這いになってる一人の眷族の背中に臀部を乗せて優雅に座っていた。どこぞのSMプレイの女王様かとロキが異世界の知識を持っていたら突っ込んでいただろう。

「おい、自分。イツセーの話を聞いてらんかったんか。なんで騎馬を組んで待つとらんのかい」

「だって、ずつとしていたら疲れちゃうんだもの」

「うおいーイツセー、聞こえておるか見ておるんやったら注意せい！」
競技が始まってからずつと騎馬を組んでいなかった事実を悟った。ルールに反するのではないかと虚空に向かって叫ぶロキの前に小さな魔方陣が出現した。

『言われずとも何度も注意していたよ。ちゃんと騎馬を組んでいきや失格にするって』

「で?」

『旗を取るなら取れ。それが答えだ』

ガクリと頭を垂らす。始めっからこの競技に参加していなかった【フレイヤ・ファミリア】にロキは心底呆れ果てた。皆、彼女の手の平に勝手に踊っているだけに過ぎなかったことを突き付けられてすっかり無気力になった、そんな彼女に一誠は一言補足する。

『だけどロキ』

「あん?」

『——フレイヤを騎手とした騎馬は失格だが、他の連中は失格にしてないからな?』

ザツ、とフレイヤ達の騎馬を除いた他の騎馬達が揃って旗を守らんとする動きを見せてキョトンとした顔をする。

「ど、どういうことなんや?色ボケ女神が失格なら眷族も軒並みに失格にならへんのか?」

『それは思い違いというやつだロキ。騎馬戦は集団戦でありながら個の戦いだ。フレイヤの騎馬は失格だけど同眷族の騎馬まで失格扱いにはならない。もしもロキの考え通りになるなら、わざわざ城の旗を取れなんて勝利条件にしない』

それだとロキの鉢巻きが奪われたらお前の眷族も軒並みに失格になるぞ?と説明をされて顔の表情が凍りついたように固まるロキ。下から上がってきた騎馬にも囲まれながらも半ば啞然としていた。

『俺は言ったぞ?旗を取るなら取れて。未だ競技は終わっていない』

んだから最後まで頑張れ』

「ふふふ……ロキ、貴方はイツセーの考えを読んでも気付いてもらえなかったようね？」

それはお前もそうだろうと、魔方陣から突っ込みを入れられてもどこ吹く風の如く。単独で孤立無援な状況の中で自滅したロキの後、三柱の極東の神が戦場を掻き乱し、犠牲を出しながらも多くの相手を地に落として城に攻め込み、旗を強奪したことでフレイヤチームの勝利となった。

フレイヤチーム二勝一敗アポロンチーム一勝二敗

冒険譚7

『さあさあ、各チームから熱気が高まってきたところで次の競技もしてみようか。第四回目の競技は——棒倒し!』

『棒倒しってなに?』

『あれ、アスナはしたことがない?』

『うん、運動会でも競技になかったよ?』

『ならば説明しよう。棒倒しとは、名前の通り棒を倒すだけの競技だ。ただし棒を支えるのは人であり棒を倒すのも人でなければならぬ。故に相手の棒を倒すには妨害されることは必須で戦略も必要になる。それと棒を倒しに行く際、相手の妨害をしたりされたりする際、素手喧嘩ステゴロは厳禁だ。相手の体を掴んで地面に抑えたり棒から引き離すだけの行為に徹底すること。不可抗力でも駄目だ。それらが発覚したら【イシユタル・ファミア】の第一級冒険者が取り押さえに行かせるから気を付けるんだぞ』

ということで棒倒しは冒険者のみで行い、各Lv.ごと分けて進行するぞ。ガレスさん、棒を持ってきてくれー!と司会も担う一誠の声を聞き付けたドワーフの戦士は、それなりに太い丸太を二本も肩に担いで現れる。フレイヤチームとアポロンチームの客席の前に置くと来た道に戻っていなくなつた。

『それでは、最初はLv.1の冒険者達は丸太のところへ集まって五分間作戦を考えてくれ』

その促しに駆け出しの冒険者達が降りてくる。そして丸太を立ててどうやって防ぐかどうかやって攻めに行くか、同派閥の冒険者や他派閥の冒険者同士で話を交わすうちに時間となり、試合の開始の銅鑼が鳴らされた。

『少人数だけ棒の守備として残して、他の人達は棒を倒しに行く。棒倒しってこんな感じなの?』

『基本的にはな。後、見ての通りどうしても人数の差が出て相手より少ない中でどう攻めていくかも決め手にもなる』

絶えない喧騒の最中で少なくとも数の冒険者達が取っ組み合いを

始め、相手の棒を倒さんという鬼気迫る勢いで走り続けるがどちらも激しい攻防を繰り広げる光景を窺わせる。

『棒倒しって試合というより何だか戦場だね』

『そうだな』

武器を持たせたら何の躊躇もなく相手を傷付けるために振るっていただろう。だが、運動会は宙に舞う血を見ることのない健全な試合と勝負をするものだ。それがオラリオ、ひいては世界にも知るだろう。冒険者同士がする闘争では無いのにと闘争らしい勝負があると。

『あ、アポロンチームの棒に取り付いた!』

『おー、存外早かったな。だが、一人でどうこうできるはずもない』

棒を支えていた守備の冒険者が棒に取り付く相手の体を引きずり落として引き離れた。そしてすぐさま数人に取り押さえられて身動きが取れなくなる。何時しかフレイヤチームの冒険者の大半が地面に押さえつけられてしまい、棒を守備している冒険者を残しアポロンチームの攻勢の勢いは止まらず——フレイヤチームの守備の者をたった一人にして、何かに弾かれた風に他の守備の者は攻勢と出て迫りだした。アポロンチームの冒険者の手をかわしつつ仲間を抑えつけてる敵を弾き飛ばしながら棒へと迫り今度は片手では数え切れない人数で取り付いた。それからすぐに勝敗は決した。

『第一回戦はフレイヤチームの勝利!』

『一発逆転、形勢逆転をしたか。だが、まだもう二戦ある。このままフレイヤチームが勝てばアポロンチームは敗北する。逆に粘り強くフレイヤチームから勝利をもぎ取れば三回戦で決着がつく。さてはて、どちらに勝利の女神——勝利の運命に導かれるだろうか?』

続けて第二戦が始まり最初の試合で見た流れを学んだ上級冒険者達は無鉄砲に動くのではなく、連携も組み入れた動きをして棒を押し倒した。フレイヤチームの棒を。一勝一敗の戦果となり、三回目の勝負をすることになった。Lv. 3である冒険者達の戦いは圧巻であった。今までの棒倒しをしていた冒険者など見戯に等しいぐらい猛火を纏って激しい競い合いを繰り広げた。

『す、凄い……』

オオオオオツ!!!』

雄叫びをあげながら縄を持つ手を強く握り締めながら立ち上がり、相手を引きずらんと引つ張り始める。奥歯を噛み締め腰を低く落とし足を地面に縫うように踏みしめ、全身に力と血管が浮かび上がるほど腕を酷使する。どちらかが勝利を引つ張られるか?それとも縄が先に引き千切れるか?観戦者の市民や参加できなかった神や冒険者は手汗を握る思いで綱引きの結果を注視し見守り続けること一分、三分、五分も時間が過ぎて行つた。何時まで引つ張り合うんだ?期待感を胸に膨らませていた気持ちにじれつたさを覚えた頃——縄と共にフレイヤチームが引つ張られ始めた。焦燥を覚えたフレイヤチームは縄を引つ張り返し引き戻すに対し、アポロンチームが更に引き戻した勢いのまま後ろへ下がっていく光景が視界に映り込み、誰が見ようところの結果は明らかになつた。

『第五回目の競技の勝者はアポロンチームです!これでフレイヤチームは二勝三敗、アポロンチームは三勝二敗です!』

『お疲れ様!さあ続いて午前の部、最後の競技を行う——その前にちよつとトイレ』

『え?あ、うん、いつてらっしゃい』

席を外す男が一分弱で錫杖を持ちながら戻ってきた。皆が客席に戻つたのを見計らい、金色の錫杖を床に小突くその直後。運動会にオラリオの市壁と同じ高さの壁が地面から現れた。壁の中の出入り口として口を大きく開けているガネーシャ象がある他、壁の中にはバベルの塔を彷彿させる塔の建造物が聳え立っていた。

『第六回目の競技は——時間制限ありの迷宮脱走だ!』

『え、それって運動会と関係があるの?』

『いや?全く関係ない。ただし、あの壁の中には様々な仕掛けを施してある中で勝利条件として迷宮から脱走してもらおう』

『今度の競技は何だか普通だけど、普通の迷宮じゃないんだよね?』

『それはこれからあの迷宮の中に入る——神々に実証してもらおうことで分かるさアスナ。それじゃ、全ての神々はあのガネーシャの口の中に入れてくれ』

フレイヤチームとアポロンチームの神々はどこか神妙な顔つきでガネーシャの口の中へ入っていく。暗い中を進む距離は直ぐ石造りの空間の中に足を踏み入れた男神と女神達。下へ続く階段のみしかなく、必然的に階下へ降りる足を運ぶのだった。石造りで石柱と一体化している螺旋階段を降り続けていく最中に一誠の声がどこからともなく聞こえてくる。

『神々の行動は全て映像に映し出されている。迷宮から一人でも脱出しない限りは終わらないので頑張つて脱出口を探してくれ。その間、脱出の糸口となる宝や自他の行動を妨害する罠や道具がある。それを駆使して先に脱出した神が勝者だ。なお、塔から出るための入り口は複数あり各自好きな入り口から出て迷宮に挑んでくれ』

「なあ、味方同士で組んでもええんか？」

『構わない。そして時間以内に迷宮から脱出してもらおうその時間は三十分だ』

長い階段を折り続けて行くうちに外から漏れる光の出入り口が十以上あるホールに辿り着いた。その頃には一誠の声が途絶える。神々達はそれぞれ好きな出入り口へ足を向けて歩き外へと出て迷宮に挑むのだった。

『さあさあ今神々が塔から出てきた。それぞれ違う方角へ進むこの迷宮には、さつきも言ったけど様々な仕掛けがある。果たしてどの神が先に脱出できるか——ここで選抜して賭けてみようか！もしも最初に出てきた神を賭けていた冒険者には賞金十万ヴァリスを与えるぞ！敵も味方も関係なく神を選んで賞金を狙え冒険者達！』

『ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!!!』

盛り上がる冒険者達に一柱ずつ神の名を挙げて選んでもらい、アスナが記入する。そうしている間に迷宮内では早速動きがあった。

「お、あんなところに宝箱があるじゃないか」

とある一柱の神が赤と黄色の箱を見つけた。脱出の糸口になる箱かもしれないと近づき、鍵が掛ってないことを知るや否や開け放つ。箱の中身を覗く目は瞬きをした。

「巻物？」

綺麗な紙で巻かれたそれを手にし、それを掴み取って——巻き者と繋がっていた紐を引っ張った途端。真上から銀のタライが落ちて来て神の頭と直撃した。「あだっ!」と地味に感じる痛覚に悶える神の姿は、オラリオに残っている神々を爆笑させた。

『タ、タライって……』

『あれはまだ兎戯に等しい。まだまだこれからだよ罫の真価は』

何とも言えない女性の隣で悪戯小僧の笑みを浮かべる男のみが知っている罫の数々は……神々の腹をねじれ切れそうなほど笑わせるのであった。

とある神は罫に引っ掛かり突然問題を出されて答えられず、壁からパイが飛び出て来て顔面にぶつけられた。

とある神は先に大きな宝箱を見つけた神を押し退けて先に開け放つと、飛び出て来た数人の漢女の男娼に捕らえられ引きずり込まれてア——ッ!?

とある神はお仕置きのカードを見つけて発動してしまい、顔すら覆う全身黒いタイツの者達に抑えつけられ電気あんまの刑を処された。とある神は黒い箱を見つけて開けようとしたが、嫌な予感でもしたのか開けずに踵を返そうとしたものの「何で開けないんだよ!」と怒りながら箱が一人で神に噛みついた。

とある神は箱からアヒルの着ぐるみを見つけて反応に困っていたら、全身黒いタイツ姿の者達に強制的で着せられてそのまま脱出を臨まされる（股間にもアヒルの首がある着ぐるみで）。

『か、神様がごんごん災難に……』

『その分、オラリオの中にいる神々も大爆笑』

同情の眼差しを送る彼女の隣で嬉々として笑む男がいた。さらに神々に災難な罫に襲われて被害が続出する中で一柱の神も箱を見つけた。恐る恐ると開けてみれば……大量の食べ物があつた。

「パイ?なんでこの中にあるんだ?」

林檎をふんだんに使ったパイの山に怪訝で小首を傾げる。同時の一柱の女神も中型の箱を見つけて開けてみた。

「……」

——九つの尾と獸耳を生やす小さな子供と目が合った

「……イッサー?」

見つけた女神、アマテラスが心底不思議そうな目付きで子供を見つめる。どうしてこの中にいるのか分からないが箱から出して抱えてみようとしたが、ぴよんと箱から飛び出して彼女から離れていく子供にどうしようかと悩んで出した結論は、追いかけることにした。

『え? イッサー? え、じゃあ、こっちにいるイッサーは?』

迷宮内にいる子供を知っている者からすれば疑問が浮かぶことであるが、当の本人は何も語らず静観の姿勢を崩さない。

尻尾を揺らしながら走る子供は追いかける女神の速力に合わせて走り続け、とある行き止まりで一部だけ白い壁を何の躊躇もなくすり抜けて行った。ぎよつと目を丸くする彼女は足を止め恐る恐る白い壁に手を添えると、表面が水の波紋のように生じ、手が壁の中に沈んでいく。まさかと思ってそのまま進むと別の通路へ出られた。振り返って白い壁をもう一度触ればまださっきの通路へ戻れることがわかり、察した。

「(この白い壁が他にあるとすれば脱出の糸口になるかも)」

子狐の姿はもう見当たらない。この壁の存在を教える役割をしていたのかもしれない。まさに幸運だ。女神は白い壁を探し始める。

その一方、橙黄色の神と瞳の男神も宝箱を見つけ何が入っているかなーと開けると濡羽色の獸耳と長髪、赤眼に黒い獸の尻尾を生やしている狐人の少女と目線が合った。

「おや? 君は一体?」

「ほいこれ」

「え?」

「ウチを見つけた神様にコレを渡すよう旦那様に言われとるんよ」

何かの断片的な地図を手渡されキョトンとする男神の横を通り過ぎ、「ほな、頑張つてやー」と言葉を残してどこかへ行ってしまった。最初から最後までわけがわからないままになってしまったが、この迷宮の地図らしきものを受け取ったからには有効的に活用しない手はない。半分しか描かれていないということはもう半分の地図、それを

持っている者が箱の中にいるのだろう。ヘルメスはそう確信し箱を探す精を出し始めた。

「……………」

褐色肌の全身に金銀の装飾品を身に付ける美の女神は箱の中にいた金色の長髪に翠の瞳の狐人ルナルと見つめていた。まだ幼いもその美貌と、ありふれた種族の中で希少な魔法種族マジックユーザーに一片の興味を持った。

「お前、どここの「ファミリア」のものだ？」

「わ、私はイツセー様にと、嫁いでいる身です。神様の眷族になっておりません」

思いつきり舌打ちした。あの男の関係者とあらばこの少女に手を出した事がバレた時、自分の身がどうなるか分かったものではない。既に自滅の経験をしたからには余計なことはせず大人しくするのが最善だ。

「あ、あの、これを……………」

おずおずと半分しか描かれてない地図を手渡され、渡した獣人の少女は箱から出て女神にぺこりと頭を下げどこかへと行っていないなくなった。

「……………地図か」

ならば、もう一枚の地図を探す必要がある。仮に既に持っていた相手が男神であれば奪い取るまでだ。褐色肌の美の女神は踵を返して男神や地図を探し始める――。

「おや、イシュタルじゃないか」

――旅人用の軽装束を身に包む男神とばったり出会い、その男神が女神の手にある地図を一瞥した瞬間を見逃さない。内心ほくそ笑み、女神は問答無用で……………」

「イシュタル、君が持っているそれって」

「来い」

「え？イシュタル？ちよ、オレをどこに連れて――」

その後、アーーーーーッ!?と男神の悲鳴が聞こえた。そんな悲鳴から直ぐ、女神が二枚の地図を手にしてそれを合わせると――
――迷宮の脱出口がある道標ルートを把握したのだった。それから彼女の行

動は真つ直ぐ脱出口へ向かう。その場所はあるうことか塔であった。そして——出口を見つけた女神イシユタルは堂々と迷宮から抜け出したのであった。

『アポロンチームの美の女神、イシユタル様が脱出——！』

『これでフレイヤチームは二勝四敗、アポロンチームは四勝二敗と勝敗の差がちよつとだけ離されていますがまだまだ午後の部がありませんので頑張つて優勝を目指してください！』

『それじゃ、午前の部の競技はこれにて終了！午後の部は一時間後に行う。それまで休息したり昼食を摂ったりして自由にしていってくれ。話しは以上、一時解散！』

フレイヤチームとアポロンチームの各「ファミリア」はオラリオの中に戻る。一誠達も昼食を摂る為に『幽玄の白天城』へ戻りに向かった。

あつという間に一時間後。

『英気を養った「ファミリア」等が戻ってきたところで運動会も午後の部、終盤戦に入ります！』

『今のところアポロンチームが優勢だが、フレイヤチームがこのまま負け越しになるとは思えないな』

『そうだね。どっちもやる気がみなぎっている感じがするよ』

『なら、その活力を競技で発揮してもらおうか。これを使ってな』

席の後ろから長い棒を取り出した。その棒でどんな競技をするのだろうかと思議、気になる一同に説明する。

『この棒で相手を叩き落とし、最後まで生き残ったチームが勝利だ』

神々しい光を放つ錫杖を地面に突き立てた。運動会の会場が一気に水で溢れだし、同時に隆起する地面が八角形に形作りつつ四百Mのステージと化す。さらにステージの中に枝分かれした足場が水中から浮上して完成した。

『今度は冒険者全員で争つてもらおう！尚、水中に叩き落とすのはあくまでもこの棒だけだ。そして制限時間は三十分までと他にも様々な仕掛けもあり用意もするが、手足や素手喧嘩、魔法をした者には失

格とペナルティを与えるからそのつもりで。さらに叩き落とされた者は三回まで復活を許し、落とされた者がステージに上がる瞬間を狙ってもいけない！水上戦のルールは以上だがゲストのアスナさん、何か質問はあるか？』

『三回まで落ちてもいいってさ、私達から落ちた人の回数がわからないんじゃない？』

『あの水に一回落ちたら全身が青色に染まり、二回目に落ちたら黄色、三回も落ちたら赤色に染まるようにしてある』

『……まるで信号機だよ。だけど、そんなに汚れたら洗い落とすのが大変じゃない？』

『水をぶっかければ落ちるぞ？』

『……時々、イツセーって凄過ぎて何とも言えない時があるわ』
神妙な顔つきで言うアスナの言葉に一誠を知る神や冒険者達は、同感だと首を揃えて縦に振って頷いたのであった。

『因みに、乾かす時ってどうやるの？』

『俺の魔法でだ。と、そういうことだから冒険者達全員、武器となる棒はアルバイトのフィン達から受け取ってステージに上がってくれ』

大量の棒を積んだ台車を引つ張って持ってくるフィン達。意気揚々と冒険者達は客席から降りてステージに向かい、棒を受け取りながら土の階段を上りそれぞれの陣地に移動して待機する。

『それじゃ準備が整い次第始めるぞ』

『皆さーん頑張ってください！』

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!アスナさーんッ！』

『……アスナの声援でやる気がヒートアップしたな。今の大半は「異世界食堂」の常連客で独身だと断言できるぞ』

『ア、アハハハ……』

言われてみれば顔馴染みの客がステージに何人もいて、変な気を起こさないよう気を付けようと思ったアスナであった。いざ競技が始まるとフレイヤチームの大半の男性冒険者が火の玉如く雄叫びをあげながら駆けて、豪快に振るって相手を足場から落としてみせたのだった。最初に落ちた冒険者達の全身は青く染まっていた。一回目だ

という証が本人で示すその姿に神々は爆笑する。

『さてさて始まった水上戦！八角形の水上に木の枝のように分かれている足場の上で、冒険者同士が棒のみで水へ落とす競技！うーん、俺もしたくなるほど大盛り上がりしているな！』

『そういえば、イツセーって参加しないの？』

『無論したいさ。だけど、誰が競技の準備をするんだって話になってしまっただよ』

『あ、そうだったね』

一回落ちた人はまた落ちて二回目の証として黄色く染まる。両チームの冒険者が何時しか青かったり黄色かったりする姿が増えていく。そろそろ頃合いかと一誠が錫杖を振るった。

『仕掛けを用意する！まずはこいつだ！』

八角形ステージの内の四角形の部分の足場に開く穴が四つ。その穴の中から巨大な鉄製の筒、大砲と砲台の傍に四つの手回し車が現れる。

『手で回す装置を使えば大筒に水が送られ、最大にまで溜めたら一気に相手チームに放射する仕掛けだ。大筒本体も向きの調整を変えることができ、当てることが出来たら落とす証の色に染まるぞ！』

ザワツ！と冒険者達からどよめきが生じたのは一瞬だった。眼の色を変えて砲台に群がって手回し車を回し始めると、砲身から砲口に水の塊が集まり出してはどんどん大きくなっていく。その光景を見た冒険者達の気持ちが高ぶり、巻き添えは食らいたくないと思ひ逃げるか、相手の砲撃を邪魔しようと思ひ砲台に向かって敵を水へ叩き落としていく。そして最初に水の砲弾を溜めたのがアポロンチームだった。

『撃てえっ！』

ボンツ！と大きな水の塊が放たれ、弧を描いてフレイヤチームの冒険者が一ヶ所になって集まっている砲弾へ向かった。直撃は避けたいと遠ざかるフレイヤチームの冒険者だが。

『相殺しろっ！』

『おうよ！』

一歩遅れながらもフレイヤチームの砲台からも水の塊を撃ち出し

て、飛んでくる水の塊にぶつけて相殺する。こんな使い方もあるのかと驚嘆する者は少なくなかった。再装填とばかり手回し車を動かす冒険者達。その間にも砲台や相手チームの冒険者に殺到する冒険者同士。飛び交う水の塊に直撃するかギリギリかわしたり、味方や敵を盾代わりにするなど苛烈を極まる勝負となってきた。因みに、三回も落ちて全身が赤く染まった冒険者は一誠の指示で水の中で移動し、外へと出れる階段を上って離れる際、アルバイトのフィン達から水をぶっかけられて真つ赤だった全身の汚れを落としてもらい、一誠の魔法で服をあつという間に乾かす。それを繰り返す回数がどんどん増え続けてから十数分後、ステージの中にいる二チームの冒険者達の数が疎らになってきた。

『それじゃ、第二の仕掛けも発動するかな』

パチンと指を弾く音が小気味に鳴った時、水がうねり始めたかと思えば渦を巻き始め出した。これはどういう意味なのだろうかと疑問符を浮かべていた残存している冒険者達へ声が飛んできた。

『時間制限、もしくは相手の全滅まで水中に落とされ渦巻きに巻き込まれた冒険者は即失格とする。落とされないうよう相手を落とすし続ける』

その言葉を聞き、ワツと奮闘する冒険者。殆どステージに残っているのはLv. 3の冒険者達。第二級冒険者としての戦いぶりを見せつけその後アポロンチームの勝利として決着がついた。

『フレイヤチーム二勝五敗、アポロンチーム五勝二敗。あと競技が四つも残っているからフレイヤチームは次の競技から一度も負けてはならない厳しい戦いに強いられたか』

『逆にアポロンチームがあと一勝でもすれば優勝ってことだよな?』
『そうだ。いやー、ここまでフレイヤチームが劣勢になるとは予想外だ。このまま敗北するかフレイヤチーム! このまま勝利の凱旋をするかアポロンチーム! 泣いても笑ってももしかしたら最後の第七回目の競技を始める! 今度は神のみの競技だ!』

まだ取り壊されてい^{マジックサークル}ない水上のステージの上空に発現する魔法円から大量の巻物^{スクロール}が出て来た。

『次の競技の名前は借りもの競走！一つだけ手に取った巻物に記された借りものをオラリオから探し出し、借りたらここへ戻ってくる。そして今回の競技の勝敗は、アルバイトのフィンに認められた先着五名、先に借りものを借りて戻ってきた同じチームの神が三人以上認められればその時点で終了する』

『イツセー、巻物にどんな借りものを書いたの？』

『一言だけ言えばオラリオにあるもの全般だ。あーそれと、巻物は全員がオラリオに入ってから開けるように。そして他の神の巻物と交換は禁止。他の【ファミリア】や同派閥の団員の協力の要請も禁止。これらを破ったチームの神は問答無用で敗けにするからな。あくまで一人で借りてくること。それじゃ、借りもの競争、始め！』

えっ？と唐突に始めまった。程なくして我先へと客席から降りては水のステージへ駆け出し、落ちてる巻物を手に掴みオラリオへ走り出していく。そして市壁の門を潜ったあと全員が揃ってから巻物を開いた途端。何故か阿鼻叫喚が神々から生じるも、四方八方に散らばって借りるものを借りに駆け出していく。そんな様子に応援する市民や冒険者達の声に包まれながら奔走する神々。遠くにあるが直ぐに手に入れる者、近くにあるが中々手に入らない者と入手に困難している神々の誰も直ぐにオラリオから戻ってくることはなかった。因みに一誠と交流ある神々が手にした巻物に綴られていた借りるものの一覧はこうである。

ロキ・ソーマの酒（完成品）。

フレイヤ・カジノのチップ（一万ヴァリス相当）。

ヘファイストス・水着。

ガネーシャ・動物

ヘルメス・星の欠片スターチップ（十枚）。

ディオニュソス・可愛い子。

アマテラス・書物（十冊分）。

イザナギ・恐ろしいもの（人・神でも可）。

イザナミ・枕。

「ソーマの酒!?!しかも完成品ってなんちゅうもんを借りさせるんや

「イツセー！」

「ここからじゃあちよつと遠いわね」

「これ、持っている人の方が少ないでしょ」

「ようし、今直ぐ捕まえてくるゾウ！」

「ハハハ、これを持ってている派閥を探さなきゃいけないなあ」

「ふむ、可愛い子か……」

「ホームに戻らなくちゃ」

「恐ろしいもの……（チラ）」

「なに、イザナギ？」

始まった借りもの競走。誰が早く戻ってくるのだろうかと誰も知ることではないが、早くも動きがあった。

『おつと？早速オラリオから戻ってきた神が現れたな。審査員のフィンさん。お願いします』

「神ディオニュソス。貴方が借りてきたものとは何だい？」

「うむ、可愛い子だ」

巻物も確認してフィンの視点で審査する。一般市民で可憐な少女が可愛いかそうでないか軽く確認した後、頷いた。

「合格だ」

『審査の結果、フレイヤチームのディオニュソス合格！』

「君のお陰で一番乗りが出来た。ありがとう。このお礼は必ずしよう」

「い、いえっ！神様のお役に立てたなら安心しました」

『と、先に借り物を終わらせた男神の後を続けとばかり戻ってきた神が登場——』

「私が恐ろしいって、どういうことなのイザナギ」

「し、仕方がないであるとおおおお!?お前のそういうところが恐ろしいのだからああああああっ!」

鈍色を煌めかせる両手に刃物を袖から取り出して幾度も無く投擲する極東の女神、彼女に追いかけられる極東の男神の凶に客席に待機していた冒険者達がほぼ口を閉ざしたりドン引きした。

「し、審査を頼むうっ?!内容は恐ろしいものだあつ！」

捕まったら八つ裂きにされかねない勢いで逃げ惑うイザナギと落ち着いて話しが出来ず、フィンは一誠に求めた。

「イツセー、これはどう判断していいのか僕も少し戸惑うけど」

『あー、巻物を手にした神が恐ろしいものだと思うものだから……うん、客席にいる冒険者達の反応を見て決めよう』

結果、イザナギの借りものは認められた。

『さあ、あつという間にフレイヤチームの神が借りものを終えました。あと一人フレイヤチームが終えたら即時勝利となります。アポロンチームはこのまま一人も来ず戦わずして負けるでしょうか！』

実況するアスナを他所にオラリオに戻っている神々は、必死で借りものを求めて奔走中。次は誰でどんな借りものを持つてくるのかわからない一同は今か今かと待つ。そして借りもの競争が始まって数分後、アポロンチームの神が二人も戻ってきて、無事に合格をもらってフレイヤチームは後がなくなった。内心ハラハラドキドキの一誠であったが、一柱のフレイヤチームが戻ってきて合格を受け、安堵のため息を小さく吐いた。

『借りもの競争終了ー！オラリオに出向いた神々は今すぐ戻ってきてください！』

その時間は十数分も掛かり、全員が戻って席に着けば直ぐに第九回目の競技が始まった。

『次の競技はダルマ落とし！』

発現する二つの魔方陣がから巨大な木の円盤状の塊が十二も積み重なられた物が二つでてきた。

『ダルマ落としとは、単純に言えば下から木の塊をこれから誰かが乗った状態でこの巨大な槌で打ち抜き続けてもらおう。まあ、実際に俺がやってみせよう。アスナ、上に乗ってくれ』

十二段目の木の塊の上にアスナを乗って貰うと、下から木の塊を横薙ぎに木の槌を振るっては、最後に二つ同時に打ち抜くこと十一回。木の円盤を打ち抜く度にダルマに乗っているアスナは危うげに乗っていたが、何とか落ちずに最後まで乗っていられた。

『見ての通り、こんな風に槌で打ち抜いて一番上にいる者や他の木の

塊を途中で崩さずここまで打ち抜いたチームの勝利となる。ダルマ落としに必要なのは力と器用、そして上に乗る者と息の合った動き——。この三つが勝つ要素だ』

冒険者や神々が一誠の解説に耳を傾け好奇の色を瞳に宿す。

『そうだな。この上に乗って貫うのは神にして、木の塊を打ち抜くのを冒険者にしようか。キツチリ三回勝負で神を最後まで落とさなかったチームが勝利だ。それじゃ、力と器用が秀でている冒険者は参加が決まった神と来てくれ。参加者は神三人、眷族三人』

『神様が落ちちやったらどうするの?』

『ちやんと考えてあるさ。——フリユネ・ジャミールさんが優しく受け止めるからさ』

二Mを超える、巨漢ならぬ褐色肌の巨女の登場に場は同情と憐れみの眼差しと雰囲気にで静まり返った。

フレイヤチームからモブ神三柱とヘファイストスの眷族、L v. 3の団員。

アポロンからモブ神三柱とL v. 3の団員。

両チームから選抜された選手は積み重なっている達磨に近づき、一誠の魔法で神が一番上の達磨に乗せられると始まった。叩かれる銅鑼の音の合図で思いっきりフルスイングして下の木の円盤を打ち抜く。打ち抜かれたそれは十数Mまで吹っ飛び一段無くなった間を埋めるかのようにまだ残っている十個の達磨が落ちると、重心が少しずれてしまったが神も姿勢を低くして落ちないように踏ん張った。続けて繰り返し返すと二人の冒険者は最後の一つまで打ち抜いて引き分けの形で終えてしまった。

『引き分けになっちゃったけど、どうするの?』

『それじゃあ達磨を数段増やしてもう一度やってもらおうか。それでも引き分けだったら次に繰り返しだ』

達磨の数十五個増加。二度目の勝負が始まって一回目と同じように一段目の木の塊を打ち抜くと、上の達磨が一回目より重心がずれて冒険者は難易度が増したことに慎重を期するようになった。

『ああ、言い忘れたがずれた達磨を整えたり触れたりするのは禁止だ』

からな。上にいる神もそうしようとして動いたら落ちただなんてヘマな真似はしたくないだろう?』

禁止事項を伝えられようが冒険者達は二回、三回も打ち抜いた。それに伴い上の達磨が少しずつずれて斜めに傾いて益々打ち辛くなった結果を残したまま一振るいしたことで、神を乗せた達磨の段層が大きく傾いて下の段を残して倒れた。

『あーっと、アポロンチームの達磨が倒れた!この瞬間フレイヤチームが一勝!』

落ちた神はフリユネの腕に受け止めてくれたので怪我はないのだが、モンスターののようなカエル顔の彼女を見て、フリユネの二つ名を知っている神は襲われかねない緊張感で心から安心できないでいたのだった。

『続けて二回目を行う。最初は十段から始めるが、また引き分けになったら十五段に増やす。それじゃ、始めてくれ』

促される冒険者は積み重なってる数Mの高さの達磨を見上げる視線を一瞥し、振り抜く姿勢を構え確りと地面を踏みしめて捻る上半身に籠めていた力を解き放った。

二回目の達磨落としての結果は、十段では流行り引き分けとなつてしまい達磨を十五段に増やしてやり直した。そしてアポロンチーム側が耐え抜いたことで勝利をもぎ取った。続いて三回目の達磨落として——最初から十五段にして行った。泣いても笑ってもフレイヤチームはこれが最後。勝敗は彼の冒険者の手に委ねられて……若干緊張気味で銅鑼の音と共に鎚を振るった。

『あ』

その都度五回。ぐらりと達磨が横に傾き、神はフリユネの腕の中に収まった。思わずと静まり返った場を引き裂くような熱い実況が結果を教える。

『——フレイヤチームが勝利いつ!多大なプレッシャーを負いながらも見事チームに貢献したあっ!』

『凄い、おめでとうございますっ!』

『』『』『うおおおおおおおおおっ!』『』『』

極一部の神と冒険者を除いて拍手喝さいをする神々と冒険者。照れくさそうに後頭部に手をやってペコペコと頭を下げる冒険者に金のメダルが授与された。

『これでフレイヤチームは四勝五敗、アポロンチームは五勝四敗という結果だね』

『十回目の競技でフレイヤチームが勝ったら最後の競技は本当にラスト勝負だ』

『最後の競技はイツセーも出るんでしょ？どんな競技をするのかな？』

『フッフ、それはフレイヤチームが勝ったらの話だアスナ。では、第十回目の競技を始める！競技の内容は——ダンスゲーム！』

虚空に立方的な四方形の魔方陣が浮かび、地面にも幾何学的な四方形の陣が赤と白に分かれて浮かぶ。

『全員参加のダンスゲーム！目の前の映像に映る俺達の動きに合わせてながら得点を競い合う！一人でもダンスができなかったり、ダンスをせず棒立ちしていたら得点が減り続けてチームの足を引っ張るぞ！』
『ダンスって……えええええつ!?イ、イツセー、ま、まさかこのために……!?!』

何故かアスナが顔を赤面して絶句していた。物凄く恥ずかしそうにうろたえてもいたが、二人を除いて皆はちんぷんかんぷんだった。
『それじゃ全員、それぞれ赤と白のダンスホールと化しているステージに入ってくれ。前列は神、中間はLv. 3、その後列にはLv. 2と1の順で位置についてほしい。踊る一人一人のスペースは入れば直ぐにわかるから』

そう言われて客席から降り、赤白の魔方陣に入ると四方形に走る光の筋と上下左右の矢印、神や冒険者の目線に合うように立方的な四角形の魔方陣が浮かび上がる。一同がそれぞれ好きな場所で立ち、全員が位置につくと目の前の魔方陣に『異世界食堂』の店員達が制服姿で映り出した。

『十分間、これから踊る俺達の動きを真似して覚えたら始める。確りと目に焼き付け体に覚え込ませることでチームの貢献すること』

きるぞ』

『ううう……は、恥ずかしいっ、恥ずかしいよお……』
自分の踊りを見られる羞恥心で耳まで顔を紅潮してしまっていたアスナの隣に座る一誠は涼しげな顔で前を見据えていた。

そしてそれから十分後——。

『十分経過した。それでは第十回目の競技を始める!』

両チームを囲むように結界を展開、闇夜のように暗くなったそのあと。一同の目の前にライトアップされた一誠がスタンバイしていた。『ミュージックスタート!』

虚空に浮かぶ立体的映像に『異世界食堂』の従業員達を映す他、流れてくる音楽や0と得点数が表示された。映像の中にいる従業員達が踊り出すと神々と冒険者達も踊り出して点数を稼ぎ始める。

『さあ恥ずかしながらずいぶん点数を稼いでチームの勝利に貢献しよう!特に腰に手を当てて格好付けてるベート・ローガ!協調性のない人には——秘密をバラしちゃうぞ!』

「はっ……そんな脅しに俺が通用するかよ」

『ほほう?じゃあ、これを見ても、まだ言えるのか?』

彼の獣人の者にだけ見せられるあるものを視界に飛び込むや否や、目を見開き「なっ!」と絶句で開いた口が塞がらなくなった。

『いいのかな?一匹狼、孤狼のどこかの誰かさんの秘密が公になって。特にロキに知られたらあつという間にオラリオ中に広まるぞ?それが嫌なら——踊れ』

「ぶっ殺す、てめえ、何時か必ず絶対にぶっ殺す……!」

弱味と秘密を掌握された狼は恨めしい目付きで一誠を睨みつつ大雑把でありながら踊り出す。そんなやり取りに「あのベートを……」
「シー、意外だね」「あやつに弱味を握らせるもんがあるとはのお」とある古参の亜人デミューマンの三人が本当に意外そうに見つめていてベートの秘密に興味を持った。

聞き慣れない音楽と派手な演出、多彩な色のライトが暗闇に支配された空間を照らす。踊りなどした事が無い、相手から視線や目線向けられながら——羞恥を抱いて出来ないのだが、目の前で一番目

立っている一誠が一堂の意識と目を奪っているため、例え下手でも変な踊りでも周りから見られずいられる環境でなら踊れる。そうして得点が増えていく様子を見ながら選手達は最後まで踊り続けた。

『さあ、もう間もなくダンスはファイナーレを迎える！現状の得点で優勢なフレイヤチーム、劣勢なアポロンチーム！最後の踊りを完璧に揃えて踊ったチームには＋1000点！揃えて踊らないと通常の得点だ。皆、息と心と体を合わせて踊れ！』

一発逆転のチャンスが巡ってきた。両チームの心と気持ちは一つになるが身体はそうではなかった。逆転のチャンスを活かさずどのチームも1000点を得ることは叶わなかった。

『残念！フレイヤチームとアポロンチーム失敗！そしてこの瞬間、両チームが得点を稼いだのは——フレイヤチーム700、541点！アポロンチームは659、159点！』

『勝利したチームは、フレイヤチームです！』

暗闇の空間がガラス細工のように割れ、太陽光が勝利の祝福をするかのようにフレイヤ達を照らす。歓喜と落胆の二つの感情がハッキリと分かるほど反応を示す両チームに畳み掛ける声。

『さらに両チームの中で一番得点を稼いだのは……〔セバスチャン・ファミア〕の女性冒険者フィール・レウル！オール満点だ！頑張った賞で百万ヴァリスを授与する！』

リヴェリアから金賞のメダルを首に掛けられて感動極まる女冒険者。

『他並びに同じ得点を叩きだした十の「ファミア」にも後日、頑張った賞百万ヴァリスを授与するので首を長くして待っていてくれ』

『結構多いんだね。いくら予行練習してるからっていきなり満点なんて』

『一言で言えば冒険者だからな。事前に分かれば難なくこなせるもんさ。それでも苦手なものもあるだろうがな』

どちらも十戦五勝五敗という引き分けの数字に。怒涛の勢いで勝利を手に入れたフレイヤチーム。アポロンチームと並んで振り出しに戻った様なもの。残りの競技は一つのみで最後の競技はどんなも

のなのか——一誠は最後の競技を告げた。

『フレイヤチームが劣勢だった戦況を連戦連勝したことで最後の競技も無駄に済んだ。いや、本当に感謝するよ。まさかフレイヤチームがこのまま負けるのかと内心ひやひやしてたからさ』

苦笑を浮かべる男は——瞳に戦意の光を孕ませ、高らかに言いながら杖を地面に突いた。

『最後の競技の内容は——運だめし、ルーレットで決めるぞ！』

発現した魔方陣から巨大なルーレットが出てきたが、一誠達が見慣れているものとは少し違っていた。ルーレットの円盤の端に豆電球がありその意味を察した者は異邦人と転生者のみ。

『それじゃ、スイッチをアスナさんに押ししてもらおうか』

『わかりました。それじゃ押すね？——スタート！』

どこからともなく取り出した赤いスイッチを手にある一誠に促されるアスナの手は、ポチツと押した瞬間、ルーレットにある豆電球が回る様に点々と光りながら動き出した。最後の競技がこのルーレットで決まるという結末に会場は静まり返り、どんな競技のところか光が止まるのか見守る神々と冒険者達。そうして程なくすると動きまわる光の速度が減速してやがて鈍くなり最後は……とある競技の場所に停止した。その結果を一誠は告げる。

『——最後の競技は、一対一の真剣勝負！両チームから代表の冒険者を一人だけ選抜して戦わせる！』

『そしてこれで全ての決着が付き運動会は終わります！皆さん、結果がどうであれこれが最後の勝負です！頑張って応援しましょう！』

アスナも締め括りとゲストとして場を盛り上げる。

『さあ、フレイヤチームとアポロンチームの王ことフレイヤとアポロン、自分のチームから冒険者を一人選んでくれ』

二柱の神を促す言葉はそれぞれ一人の冒険者の名を告げさせた。一柱は当然のように、そしてもう一柱は信じられない人物の名を。

『私のチームからは転生者の光輝勇だ』

『私のチームからは……イツセー、あなたにするわ』

『えっ？』

冒険譚 8

『えーと、フレイヤ。自分のチームの冒険者から選べって言ったよな？』

「ええ、言ったわ。でも、今回の運動会に連れてきた私の券属には貴方も含まれているわ。少し強引なのだけれど、貴方も私のチームの一人として参加していることにならないかしら？」

フレイヤの指摘に思わず押し黙った。今回は参加者の名簿（ルール）を作成していなかった。それは自分の不備であることで、運動会の規則（ルール）の穴をついた美の女神に異を唱えることは強くできない。

『今の今まで司会や実況、解説に徹していた俺が最後に参加していいか断言できない。アポロンが了承するなら構わないぞ』

決定権を与えられた男神へ視線が一斉に向けられた。どうなんだ？的な意味が籠められた眼差しを四方八方から一身に浴びる当神は腕を組み、賛否を述べた。

「いいだろう。認めてやる。ただし、我々が勝利した暁には……分かっていようだろうなフレイヤ」

「ふふふ、認めてくれてありがとう。でも、勝負の勝敗は最後まで見なくちゃ分からないわアポロン」

アポロンが認可したことで一誠は転生者と勝負をすることが決定した。何とも言えない気分になるが、やるからには勝利の二文字を青い空に掲げる所存で勝負を臨む――。

『それでは、イツセーの代わりに進行役を務めます。イツセー、一対一のルールはどうする？』

「相手を戦闘不能、もしくは降参させる。そして、命を奪う行為をしたら即敗北だ」

『わかりました。それでは、両者戦う準備は良いですか？』

一人だけ解説・実況をする席に座るアスナの目の前、フレイヤチームとアポロンチームの巨大観客席の前に佇み対峙する一誠と光輝。片や全身型甲冑を着込む転生者の勇者と対極的に、腰にポーチを佩いているだけの異邦人。完全武装と一件無防備な二人がどんな戦いを

繰り広げるのだろうかと期待感を抱く神々と冒険者に一般市民の心情を露程も気にしない当人達。

「お前、異世界から来た異邦人だってな。どんな世界から来たのか分からないけど勇者の俺には勝てないと思え」

「.....」

相手にするのも面倒なので億劫そうな面持で見返し、アスナに視線を配って短く首を縦に振ってみせた。それに呼応して彼女は静かに空へ伸ばす感じで挙手した。

『本当の意味で最後の真剣勝負、第十一回目の競技、一対一——開始です！』

銅鑼の音はガレスが強く響かせた。一気に熱気が湧く会場のど真ん中で瞬時にポーチからカードの束を取り出し、直視せずに一誠は金属のゴーレムを召喚した。かつて「アポロン・ファミリア」を苦しめた魔道具マジックアイテムの一つ、それでけしかけさせる一誠に光輝は兜の中でほくそ笑み——水平線に大剣を振った。一体のゴーレムが、金属の塊が弾かれることもなくサクツと斬ることが出来て、まるでバターのよう
に真つ二つに斬り裂かれ地面に轟沈する。

「.....うそお」

「ふつ、この剣はな万物を斬り捨てることができる勇者の剣なんだ。どんな硬い金属だろうと全て斬れるのさ」

鈍重な動きをするゴーレム達の懐に飛び込んだり、盾で防いだり、敢えて鎧で受け止めて確実に一体一体斬り捨てていく光輝に啞然と驚愕、驚嘆に感嘆と様々な感情を出しては観客から熱狂を湧かせる。この事実には「アポロン・ファミリア」は拳を固く握り締め、勝利の確信を強く持ち、自分達がどう足掻いても傷すらつけられなかったゴーレムを易々と斬り捨てたことで光輝を応援する声に熱が籠った。

「.....」

カードからグレネードランチャーを召喚、その銃の引き金を引くと銃身から黒い塊が飛び出した。それに対して大きな盾で受け止めて防ぐ姿勢——ではなく、ぶつかる直前、盾の前で見えない壁のような物に阻まれると一誠の方へ跳ね返ってきた。それを片手で受け止

め、胡乱気な眼差しで光輝へ視線を注いだ。

「この盾は全ての攻撃を反射する能力、効果があるのさ。だから君の攻撃は全て通用しない」

盾は反射、剣は万物を斬る魔法剣、甲冑は魔法と物理攻撃を無効化。神からすれば「チートの塊じゃないか!」と異口同音で突っ込むだろう。実際口にしたり心の中で突っ込んでいたのは二人が知る由もない。

「わかったか? 俺の前では全てが無力なんだ。勇者の称号は伊達じゃないのさ」

前回の代理戦争^{ウォーゲーム}ではゴーレムとグレネードランチャーで主に戦った者としては、完膚なきまで通用せずに敗北は必須と現実を突き付けられたはずだ。だが、優越感に浸る転生者の顔が無表情で見つめる一誠を知る冒険者や神々は知っている。彼の者の力は一割とも真価を發揮していないと。

「……はあ」

「?」

徐に溜息を吐いた相手を不思議そうに視線を注ぐ。

「転生者ってのは神から得た特典を自慢したい口で、そう言う人種ばかりなのか? 空っぽな強さを自慢げに語られても、何の感情も気持ちも湧かない日が来るとは思わなかったなよ」

「負け惜しみか? 俺に勝てないからって相手を蔑むなんて最低だな」
「何言っている? ただの独り言だ」

カードを二枚手にして召喚する。一見、見た目を判断するならばそれは細長い蒼と紅の棒みたいな板だった。その金属の板を見て鼻で笑い嘲笑する光輝。

「おいおい、そんな板で勇者の俺に勝てると思うのかよ」

「これは板なんかじゃないぞ」

二枚の板が鳥の翼のように折り畳まれていた状態から大きく広がった。その形は——扇だ。しかも鋭利な刀がずらりと備わっている。ますます自分に敵うはずが無い武器だと優越感に浸り大胆的な発言をする。

「扇なんかで勝てるはずもないのにな。こうしよう、一分間俺は無防備にいるからお前はその間好きにだけ攻撃していい。勇者としての慈悲だ。ありがたく攻撃をしてもいいぜ」

「……ほう、一分間無防備なんだな？絶対に途中から反撃なんてしないよな？」

「勇者に二言はない。どうせ勝つのは俺だからな。何もできずに敗北するのは恥ずかしくて嫌だろ？」

言質は取った。二人の頭上にキューブ型の時計が具現化してカウントを始めた。

「それじゃ、ありがたくさせてもらうぜ。反撃も避けることも防ぐなよ？」

そう言う一誠の全身が光に包まれると変化が起きた。今まで着ていた服が紅と蒼、金にと意匠が凝った絢爛な着物に替わっただけでなく、頭に狐の耳に臀部辺りに九つの狐の尾が生えて狐人^{ルナール}と化した。それに呼応して扇が紅と蒼の炎を纏い、一誠は戦闘態勢に入った。

「……は？」

呆ける光輝。何だ、あの姿は。何だ、あの変化は。尽きない疑問の渦に飲み込まれ掛けていた勇者の耳にどこからともなく音楽が流れ出した。更に当惑する光輝の目の前で音に合わせて静かに扇や全身を駆使して踊り出す一誠。蒼と紅の炎を纏う扇は舞うように動かされるたびに火の粉を散らし、舞いを没頭する一誠の踊りの飾りとして鮮やかに彩って見る者全て魅入らせるのに一役買っていた。

「イツセーって舞いもできたのね……」

「うん、驚いた。そしてそれ以上に綺麗な踊り……」

「異世界の舞いか……」

極東の神々も目が釘付けで舞う一誠の姿を見続けた。このままずっと踊りを見ていると構わないと気持ちも湧きあがるが、蒼と紅の火の粉を纏う舞いは唐突に戦の舞いと化した。回転しながら振るう扇から炎の斬撃が光輝に向かって飛翔して直撃した。魔法無効化・物理無効化の鎧が、何の無効化もせずにダメージを与えた。鎧にもその証と傷痕を残している。その事実を受け入れる前に光輝が驚く間も

なく炎の斬撃が何度も放たれる。横薙ぎに、袈裟切りに、下段から上段から振り回す度に扇から突風のような飛ぶ炎の斬撃の攻撃に堪らず盾を構え、炎の斬撃を跳ね返した瞬間、一誠の目付きが鋭く光輝を射抜くように睨んだ。約束の時間までまだ数十秒も残っているのに防御の構えをしたことで、蛇もといドラゴンに睨まれた人間のように光輝は体を萎縮した。

徐に一誠は二つの扇を真上に放り投げた。皆の視線を奪い集めるその行動にどんな意味があるのか見届ける一同。扇同士が空中でぶつかると扇が一枚の羽のように一人でバラバラになって、地面に落ちる直前に蒼と紅の炎が動物に、狐の姿に形作り一つ一つ刃物と化した刀に近い形状の曲剣を銜えて降り立った。扇をそうして手元に何も無いはずの一誠の手には新たな扇を二つ装備して舞い続ける。その踊りと今も尚奏でる音楽に呼応して炎狐達は光輝に一本の牙を剥ける。前方から襲いかかる攻撃に対して盾で跳ね返せば問題ないが、左右に後方、上からの攻撃には同時に対処できない。回避しようにも回避した先には既に数匹の炎狐がいて攻撃を受けてしまう。隙を見せた矢先から炎の斬撃を食らい鎧に傷を付け続けられる。

「こ、このおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ!!!」

翻弄され蹂躪されている勇者の自分に苛立ちと一誠の執拗な攻撃に憤怒が籠った叫びを撒き散らした。天に向かって大剣を掲げた刹那、天空から聖なる稲妻が落雷して大剣に籠った。転生者の本領発揮、特典の真価を見せつける光輝は高らかに叫ぶ。

「食らえ、全てを超えた究極の剣技【ギガスラッシュー!】」

回転しながら横薙ぎに振るった大剣から聖なる稲妻の斬撃波が放たれた。その攻撃だけならLv. 5の冒険者すら倒される威力が宿っているのかもしれない。しかし、例えそうであっても一誠は屈しない。否、いつもと変わらぬ感じで前に進み続ける。どんな最強の攻撃だろうと全て真正面から受け止め、その上で更に超えるためにだ。その場で激しく回り続けるに伴い、二つの色の炎が入り乱れながら台風のごとく螺旋状と化していき、炎狐達はその渦の中に飛び込んで――

「こいつで斬った」

柄しか見えない剣を見せつける。否、目を凝らしてみれば薄らと硝子よりも透明度が高過ぎる剣身が、魔力のオーラに包まれて見える。「ケルト神話に出てくる『ルー』」って英雄の者が持っていたフラガラツハという伝説の武器でな。この剣の一撃はどんな鎧で受け止めることが不可能な効果を持っている。故にお前の鎧なんて斬ることなんざ容易いのさ」

「英雄の、武器だと・・・？異邦人のお前がどうしてそんな凄い武器を持っているんだ。勇者でも英雄でもない、お前が、いや、そんな物がこの世に存在するはずが無い、ここは異世界なんだぞっ！」

「勝手に何とでも思っただけで捉えている。現に起きた事実は変わりないし鎧を失った時点でお前の負けは決定なんだからな」

ユラリと動く炎孤。体を守る鎧が無い今、光輝の防御力は盾だけとなり最後の盾すら完封すれば無力に等しい。

「ふざけるなっ！」

現実を認めんと籠った叫びを放ちながら斬り掛って来た。

「ふざけるなふざけるなふざけるな！神から貰った装備が斬られるはずも破られるはずもないんだ！勇者でもない英雄ですらない人間が、俺が負けるはずが無いんだ！」

痲癩を起した子供のように喚き、大雑把に大剣を振るう光輝を尾で絡め取った扇で防ぐ。

「俺は勇者なんだぞおおおおおっ！」

「うるさい」

扇で大剣を挟み、振るえなくなった隙に右のストレートパンチが相手の顔面に直撃した。その一撃で鼻の骨が砕け鼻血を出して激痛で顔を歪める光輝に淡々と述べる。

「勇者勇者勇者って、お前は勇者に何を夢見ているんだ？そんなもんだの周りから呼ばれるだけの飾りという名の肩書に過ぎないし、お前程度が勇者なら他の冒険者も皆勇者だな。人類の天敵モンスターと毎日毎日死闘を繰り返して何千何万も葬っているんだから」

それと、と付け加える。硬く握り締めた拳を構えて。

「お前が勇者なら、俺は英雄になってやるよ。ただし異端の英雄にだな」

そう言つて鋭く、深く鳩尾に殴つて拳を突き刺し相手の膝を地面に跪かせた。そのあと片足を空高く伸ばして勢いよく振り下ろすかかと落としを、光輝の後頭部に炸裂。同時に音楽が止まつて一誠は炎弧を掻き消し光輝の様子を見るまでもなくアスナに向かって頷いた。

『……最後の競技、一対一の勝負の勝利したのは……フレイヤチームのイツセーです!』

結果は火を見るよりも明らかだ。一誠に対する勝利宣言が発せられてフレイヤチームから歓声、アポロンチームは残念そうに溜息。だが、両チームは楽しい思いをしたのは共通しているだろう。敗北した神々と眷族達は心なしに「まあ楽しかったな」と微笑を浮かべていたので【アポロン・ファミリア】以外の【ファミリア】は深く悔しがつてもいなかった。



『さて、最後はイツセーが勝つたことで戦争戦争はフレイヤチームの勝利で終了!皆、お疲れ様です!』

『そして優勝したチームには賞金一億ヴァリスの授与!後で分けて配るからフレイヤチームに参加した【ファミリア】は首を長くして待っていてくれ。頑張つた賞を得た冒険者達も同様だ』

イヨツシャー!と喜ぶ声がちらほらとし、期待を孕んだ目でその時を待つ姿勢の派閥等を意識から外して進行を続ける。

『それでは、優勝したフレイヤチームの代表フレイヤ、アポロンチームの代表のアポロンに勝者としての命令を』

「ええ、何でもいいのよね?」

『何でもアリだ。煮ても良いし焼いても良いし好きにしてくれ。食べば不味いだろうけどな』

え、食べる気?と一誠を見ると「例えだ」と目で言われ、そうだよねとアスナは苦笑する。そんな二人の前で二柱の男神が対峙していて、フレイヤは勝者として敗者に命令を下す。

「それじゃあアポロン、貴方選ばせてあげるわ。私の子との約束を

守るか天界に送還されるか。どちらがいいかしら?」

「ぐ……」

「ここまで盛大にやって負けた貴方には拒否権はないわ。これ以上ごねるようなら天界に送還してあげるわ」

微笑を浮かべる美の女神。苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべるアポロンは……肩を落として首を項垂れた。

「……わかった、要求を飲もう」

後日、一誠の下に儂げな印象を窺わせる少女がおずおずとやってきた。今はまだやって来ないがそれでもようやく約束事は果たされて満足げに微笑む一誠である。

『さあ、この瞬間に運動会は終了! だけど、まだお祭りは終わらないぞ! 今現在オラリオでは祭が開催されていて、今日から二日間大いに騒ぎ酒を飲み飯を食べて楽しく過ごそうじゃないか! さらに各「ファミリア」には神輿や山車で用いる「喧嘩祭り」というものをもってもらう。詳細は全て伝えてあるガネーシャに訊くように。ということでは任せるぞ元主神様』

「任されたあつ!」

意気揚々と会場の席から立ち上がって己の存在を主張する象神。後に彼の男神に群がる神々は後を絶たず、暑苦しく声を張り上げて説明するガネーシャの指示に従い行動に移るのだった。本神も待ちに待った祭りとして大いに楽しむだろう。

「はあー、よーやく終わったあー」

『幽玄の白天城』に戻りリビングキッチンに座る一誠へ労う言葉を掛けるアスナの他、この城に住む神々や冒険者、一誠と交流のある神々と冒険者が続々と入って来ては好きな席に座りだす。

「お疲れ様イツセー君、いやー、異世界の楽しいイベントが出来てオレも大いに楽しんだよ。また来年もしたいなー」

「俺が率先でしないと碌な運動会もできないだろ。俺が介入せず出来る方法をしなくちゃなあー」

「イツセーも運動会に参加したら全部自分の勝ちになるやんか」

「L.V. だけなら参加は可能だろ?」

「だったら次は儂等も参加できる勝負を考えて欲しいわい」

「第一級冒険者が参加できる競技なんて片手で数えるよりも少ないって。ぶっちゃけオツタルに力勝負して勝てるのかガレス？」

「むう……」

「厳しいだろうな。やはり我々Lv. 5以上の者は参加できないか」

「フィン達が出来る運動会の競技と言えば障害物競争や綱引き、騎馬戦とか……うーん、思った以上に少ないなあ」

レイラから飲み物を貰って飲みながら苦笑する。強過ぎるのも考えものだと己もそうであると自覚しての自嘲的な笑みを浮かべると、フィンから問われた。

「イツセー、最後に使っていた武器は本当に英雄の武器なんだね？」

「ああ、実際に実在している武器だ」

鞆に収まっている状態のフラガラツハを亜空間から取り出して見せつけた。すると勝手に鞆から抜け出て一誠の周りを飛び回り続ける。

「こういう武器は他にもいくつか持っているけど、主に使っているのはエクスカリバーだからな。あんまり他の武器は使わない。というか使うまでもない」

「エ、エクスカリバー……本当にイツセーの世界はファンタジーなんだね。確か騎士王アーサーが使っていた武器だと言う程度でしか知らないんだけど」

「その認識で間違っていないぞ。ついでにそのアーサーの末裔と二人の妹がいるし」

「え、ええええええええっ!?!」

素っ頓狂に声を挙げるアスナに一誠以外の一同は不思議そうに二人を交互に見比べた。ヘファイストスは訊ねた。

「どういうこと? そのアーサーって子供が末裔なのは凄いことなの?」

「太古の昔に偉業を成し遂げ、太古から後世まで記録に残り、遙か数千年後にまで伝え知られるほど有名な人物なんだ。その人物の末裔もしくは子孫が永い時を過ぎても英雄の血を引く者がだったら、アスナ

の反応も尤もだろうか？」

「ほー、なるほどねー。じゃあ、オラリオが出来るまでの間にモンスターと死闘を繰り返り広げた太古の英雄達の血を受け継ぐ子供もいたらそれも凄いつてことなんだね？」

「当然。偉業を遂げた昔の偉人の子孫や末裔は無視できないとても貴重な存在だ。そう言う存在こそが俗に勇者・英雄と呼ばれるんだ。何も成し遂げずに中身が空っぽで勇者・英雄を語る奴はただの道化だ」
アスナを除き一同を見回す一誠はこう聞く。

「言っておくけど、俺の世界の神もそんな感じで太古から今現在まで神話に残しているほど有名だ。ロキ達はこの世界で何か一つでも地上に己の存在を知らしめる話しの一つや二つあるか？」

「そ、それは……」

「ないんだろう？だからロキ達を神として敬うことも崇めることも見る事も出来ない一番の要因だ」

神の存在が千年前、地上に（娯楽目的で）降臨して以降。近所のお隣さんのように地上で当然の様に永住し続ける神々をこの世界で一番複雑に思っているのはきつと一誠だけかもしれない。特に人間臭すぎて本当に神なのかと疑問も抱いたほどだ。一誠の世界でもおいそれと神々は姿を現さないし地上にも理由もなく天界・神界から降りて来ない。

「えっと……なんかごめんなさい？」

「何故に疑問形で謝る。謝っても意味ないぞ。今さら何だからその分、一人の男女として接するからな」

「それはそれで、ちよつと複雑だわやつぱり……」

綺麗な柳眉を困った風に寄せるヘファイストス。神として見受けられてくれない男の心情を知ってフレイヤ以外困惑の色を浮かべている他所に椿が近づいて来て浮き続けるフラガラツハの柄を掴んで手に持つ。

「ふむ、剣身、あるいは刀身が無いのかと思えばあるのだな。薄らとてあるが剣身の形が見えるし触れば確りと感触がある。これがイツセーの世界の伝説の武器……主神様ですら打てるかわからぬな

これは」

しみじみと観察をしている最上級鍛冶師マスタースミスに金髪金眼の少女が近づき、好奇心の光を瞳に宿して自分も触れてみたいと強請りだす時に春姫、ユエルにソシエが傍に寄ってきた。

「なあなあ旦那様の踊りめっちゃ綺麗やったわ！あの踊り、どこで習ったん？」

「あれは元々とある一族が極東の神々に捧げる為の舞いなんだ。その舞いを密かに幼馴染達が教えてくれたから舞えるように頑張ったのさ」

「とある一族って旦那様は狐人ルナールじゃないんやろ？ほな、旦那様は凄く偉い家の人なん？」

「ぶつちやけて言うけどな。運動会にでも何度も言ったが俺は異邦人、異世界から来た存在でな。舞いは元の世界で覚えたんだ」

ほへーと驚嘆の色を顔に出すユエルとの話しで、異世界の舞いだと知ったアマテラス達が興味津々だと話に加わってくる。

「それはお前の世界にいる私達であるな？では、お前も舞いをするのか？」

「いや、舞いは女性だけがして極東の神々を魅させて信仰と一緒に舞いを捧げるんだ。極東に住む者としてアマテラス達極東の神々に信仰を捧げる対象だからな。因みに男の場合は楽器を奏でる役割ださうだ」

「そうなのね。じゃあ、その舞いをした貴方はもしかして私達の為に舞いを捧げたようなものかしら？」

「そのつもりはなかったけれどそうなるな、異例中の異例だけど」
「……………なんでだろう、物凄く嬉しい自分がいる」

その日からアマテラス、イザナギ、イザナミは極東で自分達神々に対して捧げる為の舞いを眷族達に要求するようになり、数年経てば毎年決まった時期に極東では神々に捧げる舞いが行われる催しがあると風の噂で聞くようになったのであった。

「旦那様旦那様、なんや舞いって楽しそうやからウチも舞いを踊ってみたい！そんでブワーって炎を出してみたいわ！」

「舞いはともかく、ブワーって炎を出すことはできないぞ。あの炎は妖力でしているんだからな」

「妖力？ 旦那様は『妖術師』『妖術使い』なん？」

ソシエが目を丸くして訊くが否と首を横に振る。

「俺の世界の狐人^{ルナル}だけじゃなく妖怪という種族全般が妖力を持っているんだ。俺の場合は俺の体の中に狐人^{ルナル}の魂が宿っているから九尾の狐の姿になれるわけなんだよ」

「た、魂が宿っているのですか……？」

翠の瞳が皿のように開いては丸くし、狐耳をピンと立てて信じられないと訊き返す春姫。ユエルもソシエも同じ気持ちなのか目をパチクリと瞬いた。

「相手の魂を人間や物に封じ込める力や技術に魔法が異世界にあるからな。そうでなくても自力で自分の寄り代と成り得る器に憑依することもできるようだ。俺の中にいる狐人^{ルナル}は後者、俺に憑依している形で生きながらえている」

「だ、大丈夫なの？ そ、その、憑依って幽霊に憑かれちゃうんじゃない……」

顔を蒼白しているアスナがとても珍しいと思いつつ苦笑して問題ないと告げる。

「大丈夫だ。俺の体を操って何かをされたことは一度もないし関係は至って良好だ。その気になれば俺から抜け出て自由に動くことだってできるんだしな」

「ひっ!?」

「……アスナ、もしかして幽霊的な物が苦手なのか？ そう思わずにはいられないぐらい彼女の反応がわかりやすかった。

「話は戻すとして、そんなわけだから妖力は使えるわけで、ユエル達は妖力がないから炎は出せないよ」

「なんやー、ウチも旦那様みたいに炎を出して戦ってみたいー」

物凄く不満げに頬を膨らまして駄々をこねるユエルにソシエと春姫は困惑する。仮とはいえ嫁いできた少女が戦いたいと言う発言を述べた事にイザナミが尋ねた。

「ユエル、冒険者になりたいの？」

「んーというか、極東の為に旦那様のお嫁さんと嫁いでから新しい場所でも楽しくてええんやけど、やっぱり故郷と同じで家に引き籠るほうが多くて暇なんや神様」

「……そう、イツセー。どうしようつか」

「唐突に俺に振らないでくれるか？それだったらいザナミの眷族にするか俺の店で働いてもらうかになるぞ。勿論ソシエと春姫もな。今の生活にどこか退屈だったり暇だったり、刺激を求めるなら自分で行動をするんだ。いいな？」

コクリと頷くまだ一回りも幼い妻たちに微笑して優しく頭を撫でる。やりたいことは自分で見つける、また他の者と相談しあつて探す催促をしたことで三人は遠くない未来、立派な女性として恥ずかしくない人生を送ることだろう。と、思っていた一誠に後日——三人から冒険者登録をしたと報を受けて「へ？」と間の抜けた声を出してしまったのはまだ知らないのであった。

「イツセー、そろそろ私達も祭りに参加しない？」

「ああ、そうだな。ガネーシャ辺りが張りきって盛り上げているだろうし出店の料理をたらふく食べるかな」

「お店の方もお休みだからミアさん達も楽しんでくれていると良いね」

柔和に微笑むアスナに同感と頷き返し、立ち上がって街に繰り出そうと動き出す一誠に続く一同。

その数時間後のその日の夜。空が暗くなろうと祭りの喧騒は絶えず、今夜の主役とばかり山車や神輿を動かしてぶつけあう各派閥達の怒号や熱狂に一般市民達は大盛り上がりをしていて、その様子を見ていた異邦人達も感慨深く故郷の事を思い出し、懐かしみながら祭りを楽しむのだった。

冒険譚9

「アポロン・ファミリア」との『戦争遊戯』という名の『運動』の激戦を乗り越え、他派閥同士でありながら深まった絆、少数であるが予想もしていなかった新たなスキルと魔法の発現、そして勝利した派閥に新たに入団を申し込む無所属の一般人。『運動会』を経て様々な結果が浮き出て来て、主神と冒険者達は次回もやるならばもう一度是非とも参加しようと思待ちした。

「お前が求めていた冒険者、この者達なのか？」

気の強そうな短髪吊り目の少女や長髪で垂れ目のあどけない雰囲気でも十五も満たないだろう少女は、現在立たされている周りからの視線を向けられる状況下に、委縮して一誠の後ろに隠れる風に立っていた。この城に連れてきた張本人の男は、二人の頭に優しく触れながら手を置きながら首肯すると椿が顎に手をやり、腰を折って前屈みになりながら少女達を見つめる。

「外見だけで判断させてもらえば、特にまだ何かできそうだとは思えんのだがな」

「この前言っただろう？俺だけが知っているからこそわかるんだって」

「異世界の知識とやらか。して、この者達が一体何が出来ると言うのだ？」

「この黒髪の子カサンドラ・イリオンは予知夢ができる」

当然のように述べる。が、周りの反応は物凄く薄く、「なんだそれは？」的な目を向けられ微妙な雰囲気を作りヴェリア達は醸し出す。ただ一人、カサンドラは目を丸くして一誠を見上げる反応を示した。

「予知夢ってなに？」

「未来で何が起きるのか夢の中で分かる能力だ」

アイズの問いに答える一誠の言葉を聞き、そうなの？とアリサは不思議そうにカサンドラへ視線を向ける。

「……イッセー、夢で見たものが現実になるとは限らんぞ」

「ああ、ある意味その通りだなりりア。でも、自分達にとってよくない

事が事前に分かれば対処はできるだろう?」

「確かにそうだが、本当に予知をできるのかこの少女が」

「俺だから分かること何だつてば。別にカサンドラの能力を全面的に信用も信頼もしなくていいけど、俺は今後のことを思えば彼女の能力が必要になるんだ」

何かを見据えている一誠の発言に皆は何とも言えなくなり、それ以上は口にせずカサンドラ・イリオンという少女を迎え入れたのであった。

「さてカサンドラ、そしてダフネ・ラウロス。【ファミリア】から抜けたお前はこれからどうしたい?まだ冒険者を続けたいならある物を渡すけど、特になんなら俺の店の手伝いをしてくれないか?」

「お店、ですか・・・?」

『『異世界食堂』つて店で働いているんだ。この辺りじゃ名前ぐらいは聞いたことあると思うけど』

「食べたことはないけど、知ってるよ」

と、提案をされた少女カサンドラとダフネはしばらく考えさせてほしいという答えた。後に与えられた部屋の改装の手伝いをし、その日の夜の歓迎会のパーティで出された料理を食べては。

「~~~~~!」

【アポロン・ファミリア】で食べていた食事を一線越えた美味に驚嘆と感嘆をしたのは必然的だった。そんなこんなで二人も共に生活をする事になって数日後・・・【ロキ・ファミリア】のホームがほぼ復興し終えたことで女性団員達が『幽玄の白天城』から離れる日が迫った。

【ロキ・ファミリア】の女性団員達が貸し与えられた横長の部屋の空間に人数分の寝具や机、必要な家具が揃えられている部屋にリヴェリアは入る。本拠地^{ホム}からある知らせが入ったので誰かいまいかと確認をしに来たところ。椅子に座って机と対峙して読書をしているエルフの少女を見つけ、「アリシア」と呼んだ。

「リヴェリア様?」

「他の者達は外出しているのにお前だけはあまり出掛けないでいな」

「特に出掛ける理由も無いので……あの、それで何か？」

「ああ、フィンから連絡が入った。お前達も何となく気付いているか察していると思うが、近日中に私達の家が復興する。荷物を纏めて何時でも帰れるようにしておけ」

当然のように告げられた帰郷の話し。死ぬまで『幽玄の白天城』で生活を送る筈も無い事を理解しているが、やはり突然言われて少なからず驚きの反応をしてしまう。

「あれからもう二年……ようやくですね。分かりました。他の皆にもお伝えします」

「頼む。ではな」

それだけを伝えに来た王族のハイエルフは直ぐに部屋からいなくなりアリシアを一人にさせた。パタンと閉まった扉を見つめて、静かに息を吐いた。

「もう、この生活も終わりなのですね」

切っ掛けは口に出せない程酷いものであるが、破壊されたホームの修復に目処が立つまで元同僚の家に居候を兼ねた療養生活は一年以上にも及んだ。『黄昏の館』とはやはり異なり、最初は戸惑ったものの今では我が家当然の様に住みついて短くない。作られる料理は美味しいし、風呂も時間に気にせず自由に入れる。最大派閥となれば色々と気を使わなければならない為、この家は何も縛られない生活を送れるからか少々羨ましいと思う時もあった。思わなかつたと言えば嘘になる。であるからこの『幽玄の白天城』を第二の「ロキ・ファミリア」の本拠地に――。

「……………」

有り得ない考えだ、と頭を振ってその思考を消した後、立ち上がる。彼に会いに行こう。尊敬するかのハイエルフから伝えられているだろうと知らせて感謝の言葉を送ろう。とその意識を浮かべて彼女も部屋を後にする。

広く複雑で、隠し階段があれば隠し扉も存在する城の中で特定の人物を探し出す行為は骨が折れるもの。であるが、いような場所を先に探そうとするのは当たり前なことだと人は疑わない。アリシアもその類に零れないエルフだったが、案外早く探し人を発見したのであった。

天から温かな日差し、美しい金色の十二枚の翼を生やして太陽光に照らしている男が、自室のテラスに寝転がって瞑目していた。上着を脱いで半裸の状態。無駄な肉のない鍛え抜かれた体を晒し、太陽から降り注ぐ日差しを吸収しているのか、翼が金色に煌めく発光現象を起こしており、真紅色だった髪も金色に変色、発光現象を起こしている翼のように光っていた。そんな状態と状況に居合わせたアリシアは見惚れてしまい、しばらく立ち往生していたが足音を立てさせない気配りをしつつ近寄った。更に寄ると宝石のようにキラキラと輝く金色の光の光量が強くなった気がする。そして、器用なことに寝ていることにも気付いた。

多忙で目まぐるしい日常を日々送る中での唯一のゆとりの時間を日光浴と睡眠で費やしている男。寝ているなら起こすのは悪いと思いなながらも、好奇心に擦られた心に反応した思いは手を動かさせた。その手が触れたのは翼の羽毛だ。手の平で梳かす感じに撫でてみれば確かな感触と心地のいい温もり、そして直で触れてみて分かる不思議な力の気配。クローゼットの中に仕舞われているこの羽で作られた外フーデッドローブ 套はまだ消える気配も無い。それを着こんで寝ている女性団員達はちらほらという。どうして着ているのかと問われた返答に対して、「夢見が悪い時はこれを着ると何故か心が穏やかになつて安心して寝れる」と小耳に挟んだことがある。

分からなくもない。自分もそうなのだから。そつと翼から手を離して眠る男の顔を覗きこむ。右眼の奥を隠す漆黒の眼帯が印象的に抱かせるその秘密を知っている。彼はこの世界にとって特別である半面、人類の敵として見做される存在にもなりうる危うい立ち位置にいる。故に自他共に複雑な気持ちを抱いているのだ。

それから視界は異性の唇に入る。途端に初めて情事を交えた記憶が脳裏に浮かび、顔が熱くなったのを覚える。あれ以来、情事をしていない。理由は様々だが、やはり付き合っても無ければ伴侶でもない異性と易々と情事を交えることは理由も無い限りしないのが当然。アリシアもその考えを尊く重んじて思っている。

しかし、いざしてみれば想像を遥かに超えていた。優しく、幸せな気分が浸れる神聖なものだと信じて疑わなかった行為が……あんなに情熱的なほどまで激しく、幸せを通り越して甘美な快感の波が押し寄せ思考を蕩けさせるまでされるとは露にも思わなかった。あれが本来の何時か子を成すための行いなのだと言われても直ぐに認めることはできない。高潔で清潔、同じエルフや認めた者にしか肌を触れさせない、成熟していないエルフであれば仕方が無いことかもしれない。

「……………」

不意にエルフの少女の顔が周囲を警戒するように忙しく回る。自分達以外に誰もいないか、肉眼で確認したらジツと眠る男を見つめたと思えば……………。

「懐かしいな、この感じ」

目覚めた男の目は、翼の上で己の直ぐ横に寝転がって寝息を立てているアリシアに向けて微笑ましげに見つめる。元の世界にいる家族達も好きあらばそうしていたり、求められたりした記憶がある。懐かしの記憶を想い耽る時間はそう長くなかった。綺麗なエルフの少女の寝顔をしばし眺めたら彼女をどうせならばと、腹の上に夢の中へ旅立っている少女を載せて翼を広げたまま再び寝に入り出す。

その後、異性の体の上で寝かされている状態で目が覚めた少女の顔は耳先まで熱を帯びた紅潮で染めて、離れようとしても何時の間にか翼に包まれて離れることはできず――。

「……………ズルい」

「……………」

「い、いえ、これは自分からではないのですっ!?!」

悪戦苦闘していると六人の少女達に見つかって苦しい言い訳をする羽目に。が、それが煩わしいと眉根を寄せる寝ぼけ眼の男の手が静かに動き、アリシアの後頭部をガシツと掴みだしたかと思えば。目を見開くエルフに何時だった時のヘファイストスと同じ――。

「五月蠅い」

「っ――!?!」

「!?!?!?!?!」

口で相手の口を塞いで黙らした。相手が静かになるまで蹂躪し、顔から火が噴き出そうなほど真っ赤になるアリシアなど気にも留めず、瞳を限界まで見開く少女達の存在に気づかず淡々と永遠に続くかと思ふ深い口付を一方的にする男。

(あ、またっ……あの時の抗えない快感が……!?!)

蹂躪する舌で執拗にアリシアの口内が犯され、全身に駆け巡る快樂の稲妻が脳髓まで激しく刺激するに伴い身体を震わせてしまう。深く重なり合う口からは淫らな水音が、時折見える交じり合う赤い舌と口の端から零れる唾液が、エルフの少女の蕩けて潤っている瞳と顔を見てアイズ達の心は熱く何度も高鳴る。

「~~~~~っ!!」

そうしてされるがままだった途端に、激しく体が弾けるように一際震え、唇が重なったまま少女は絶頂した。

荒く鼻で息をしながらまだ口内を犯す舌の動きに敏感に感じてしまい、数回ほど彼女は絶頂を繰り返した。その後一誠は己の睡眠を妨害する者を完全に口で沈黙させれば、何事も無かったように寝息を立て始める。対して息が絶え絶え、耳先まで紅潮した顔に浮かぶ汗、熱に浮かれたように瞳は潤い口の端は唾液を垂らすアリシア。キツと眠る男に睨みつけ呪詛の如く呟いた。

「い、一方的にシて、寝るなんて……せ……責任を取ってもらいますよっ」

体が沸騰したように熱く、下半身が熱で疼く感じを覚えながら蕩けた顔で心から決意した。貞女の唇を許しも無く奪った男に自分が許

すまで尽くしてもらおうと。羨望の眼差しを向ける瞳をジト目でア
リシアにポツリと抱いた気持ちの本音として吐露する。

「「やっぱり、ズルい」」

「ズ、ズルくなんかありませんっ！」

「だ、旦那様の接吻、見ててすごかった……ま、まだドキドキす
る……」

「はうう……」

「なんや気持ちよさそうなんやけれど、そんなに旦那様の接吻はよ
かったん？うちもしてみたいわー」

「だ、駄目です！」

「……煩い」

——ループ

『異世界食堂』も平常運転で日中ずっと足を運んでくれる客が絶えな
い。開店して以来訪れてくれる常連客達、それ以降でも食べに来てく
れる客も常連客として昼夜問わず友人・知人・恋人・派閥ぐるみで店
主達に迎ええられる、そんなある日のことだった。

「イツセー、お願いがあるんだけど」

改まって何かを乞うアスナに相槌して返す男は、次に怪訝で眉根を
寄せた。

「拳藤ちゃん達が、城に遊びに行きたいって言われたんだけど」

「は？」

何言っているんだ？と言いたげな目を向けられ、困惑の色を顔に浮
かべる亜麻色の髪の女性は「駄目かな」と遠慮気味に言い……。

「……何人来るんだ？」

「えっと、ヒーロー組の女の子とシノのん」

「……その程度ならいい。が、アスナとシノンが見張ってくれよ。
作業の邪魔されたくないから」

「うん、わかってる。ありがとうね」

心なしか安心した表情で感謝するアスナは早速了承を貰った報告
をする。一誠はさっさと作業に入るべく専用の部屋へと赴いていた。
と言っても鍛冶をする為の工房では無い。自室に戻り机の上に装飾

品のように飾ってある水晶に近づいて触れると、水晶から発する光に包まれて一誠がいなくなった。

十数分後。城の主が了承したことで友人と仲間を城に招くアスナは、重厚そうな扉を開け放ちシノン達を迎え入れた。

「いらっしやい、皆」

「久しぶりアスナ、お邪魔するわ」

「うん。さ、中に入って入って」

「二二「お邪魔します」二二」

玄関ホールという名の神殿のような厳かな雰囲気を保つ空間の中、アスナの促しに靴を脱いで城の中へ上がる女性達。片手で数える程度でしか入ったことが無い白亜の城の中を視界に入れながら亜麻色の髪を背中に流す女性の後に続き、リビングキッチンに寄らずまっすぐ彼女の自室へを案内された。必要な家具や寝具などが揃えられていて、得物である細剣をベッドの脇に鞘ごと掛ける。

「へえ、結構広いのね。他の部屋と同じなの？」

「神ロキの女性眷族達が共同で使っている部屋以外は大体一緒だよ。後は一つの部屋を一緒に使ったりしている人もいるけれどね」

「そんな部屋とこの城を作ったイツセーさんはやっぱり凄いんですけど、他の人は？」

「ダンジョンに潜ったり、ホームに戻ったりと自分の用事で皆行動していないの。イツセーもそうだよ」

「じゃあこの城にはアスナしかないの？」

「そうだよ。だから私はお留守番みたいなものだから」

事前に用意していた飲料水や菓子などを、皆が座る席が無いので腰を落として床に座るシノン達の前に置く。

それらを見て、ヒーロー組の異邦人達は懐かしげに眼を輝かせ色めき立つ。早速とばかり小さな女子会が行われ、互いの近況の報告も交える。

「それでね、私達、もう深層のおつきな骸骨のモンスターも倒して40階層にまで進んだんだよ」

「それって階層主の『ウダイオス』だよ？凄いやない」

「かなり骨が折れたけどね。増え続けるアンデッドモンスターを相手にしながら、階層主を相手にしなくちゃならないなんて物凄く大変だったわ。アスナは相手したことがある？」

「したことがないなあ……ここ最近、お店のお手伝いをしたりオラリオの外に冒険したりしてダンジョンに潜って無いの」

それでも腕が鈍らないよう『幽玄の白天城』の日課のような模擬戦を毎日のようにしている。一誠と相手をしていると必然的に全力で相手をさせられ、こつちがボロボロになってしまっけどねと心中で苦笑いするアスナだった。

「じゃあ、アスナさん。今度一緒に行きましょうよ」

「うん、機会があったらね」

軽く了承するアスナに嬉しそうに元同じ派閥の副団長とまた冒険が出来る日を心待ちにして笑顔を浮かべる少女達。

「あの、ところで、イツセイさんはどうですか？元の世界に戻るようには……」

「やっぱり困難極まりないみたいだよ」

アスナの元の世界にも繋げ懐かしい自身の部屋を見ながら、見られながら異世界と繋げる鏡で穴を開けようと四苦八苦する一誠の横顔を見て、そう感想を吐露する。

「そうですか……流石にイツセイさんでも直ぐには無理ですよね」

「そつちはどうなの？」

「手も足も出せない心情です」

魔法の知識もなければ魔力など皆無に等しい彼女達にとって酷な事だろう。だからどうしても、一誠を頼ってしまいがちになってしまっている。苦笑いする拳藤を始め、シヨンボリと落ち込む少女達に同情するアスナ。その気持ちはよくわかると同感もする。

「それでアスナ。貴方イツセイと付き合っただうなの？」

「え？」

唐突に聞かれる一誠との関係に、キョトンとした面持ちでシノンに振り向くその後、自分が一誠と付き合っていると言ったことを思い出し、言いづらそうに「あ、うん」と返す。

「私のことを大切にしてくれてるよ」

「そう、順調そうで何よりね。それと、魔法の矢が尽きちゃったの。彼に頼める？」

「うん、頼んでおくれ」

微笑んで了承する。魔法の矢が尽きるほど彼女が活躍したことなのだろう。それはどれも感嘆してキリト達の力になっているシノンに称賛しつつ心の中で感謝の念を抱く。自分の代わりに皆を守ってくれている彼女に対して。そう思いながら弓使いの女性を見つめていると扉にノックの音が鳴った。アスナは直ぐに扉を開け腰を上げて近寄った。ドアノブを手にして開け放つと、部屋の前に一誠が立っていた。

「どうしたの？」

「ああ、仕事の件で軽く教えておこうと思ってな。近日、バレンタインだろ？だからそれに向けて初めてバレンタインデーをするつもりだ」

「あ、そうなの？じゃあ、チョコレートを用意しなくちゃ——」

「もうしてある。だからアスナにも近い内にして欲しい事がある。頼めるか」

断る理由もなく首を縦に振って頷くアスナに「ありがとう、邪魔した」と述べて離れようとする一誠に、シノンから頼まれていたことを反射的に伝えると。

「工房に予備がある。好きなだけ取ってけ」

と、それだけシノンを一瞥してどこかへ去っていった。アスナと一誠の会話のやり取りを聞いていた拳藤達は立ち上がり、その工房へいく姿勢でアスナの背中に近づいた。

「うわあ、ここがイツセイさんの工房……」

「剣、槍、斧、弓！」

「リズさんの工房と一味違いますね」

「好きなだけ取って行って、こんなに作っていたの」

案内してもらった一誠と椿の工房。灼熱の炎が籠っていない炉は静寂に包まれて暗く、使われている鍛冶の道具等も今は使われておら

ず炉の傍に鎮座している。そして二人の鍛冶師によって生まれた武器や防具等は壁に掛けられていたり、籠の中に入れっぱなしだったり、誰かに使われることも無くそこに在るだけの形になっている。お目当ての矢を見つけるや否や、限度を超えないよう大量に駕籠から抜き取って集めるシノンに手伝う拳藤達。

「彼って何でも出来ちゃうわね。逆にヒかない？」

「思ったことが無いかも。出来ないことだってあるって聞いたこともあるし、『人間、やろうと思えば案外何でもできるもんだ』って言われたよ」

「それだけ聞いて不思議と力のある言葉と思ってしまうわね」

「うん、だから私も鍛冶は何たるか教えてやると体験されちゃって……物凄く大変だったよ」

おかげで鍛冶師達が作品と心から真剣に向き合う大変さと苦労を知ったアスナだった。ゲームとは違う製作する作業の過程を、厳しく接する一誠を思い出しつつ遠い目をする。「あの真剣な顔はまさしく職人そのものだったよ」と感想を述べる友人にシノンは短く相槌を打って工房の中を一瞥する。何かを探しているような目付きで見回す彼女を見つめていれば、ポツリと吐露した。少し残念そうにだ。

「流石にここに銃火器ってないのね」

「イツセーの部屋の隠し部屋になら置いてあるわ。……流石に独断で無断に見せられないけれど」

「ごめんなさいね。それはそうと、バレンタインデーをするなんて何を考えているのかしら？」

「うーん、この世界には無い風習だからじゃないかな」

アスナ達がこの世界に来てから日本に風習がないことを知ってからも、できる範囲の風習を独自にしてきた。バレンティンもそのひとつである。それを一誠は大々的なのか分からないが『異世界食堂』で甘くも切ないあのイベントをするつもりなのだからアスナも従業員としてしなければならぬ。

「カカオ……イツセーに頼めば安く手に入るかしら？」

「お願いしてみる？」

「ええ、お願いするわ」

渡す相手は既に決まっている。拳藤達も脳裏にとある男を思い浮かべるが複雑な気持ちを抱く。渡したい相手だが、彼は自分達を知る同一人物ではない。渡されて困る顔をされたらこちらも当惑してしまう。

「部屋に戻りましょう？」

「そうね。でもこれ、後で請求されない？」

「えっと、聞いてみるね」

少女達の心情を他所にアスナとシノンが部屋に戻ろうとしていた。その背中を追いかけて後に続きながら彼に渡してもよいのか苦悩するのだった。そしてその日の内にオラリオ中にとあるチラシが張られてあり、民衆達はそれを見て関心や興味を抱くのがあった。

「イツセー、バレンタインって、なに？」

当然の如くアイズ達も興味津々だった。東西南北に張り出されているバレンタインデーのチラシを見て、自分の知らない知識を持っている者に尋ねて全容を明らかにしようとした。話しかけた。

「チョコレートで女が普段お世話になっている人や、好きな人、恋人に感謝したり相手に好きだと言う憧憬や想いを籠めて渡すんだ。でも、女同士でも構わない。感謝を籠めてな。だからアイズの場合はロキヤリリア、他の皆にチョコレートをあげてもいいんだぞ？。な、アスナ」

「うん、バレンタインってそう言うものなんだよ。その後、ホワイトデーといって女の人から送られた男の人が今度は女性に贈り物をする日もあるんだよ？」

「参考に訊くが、アスナの場合は何を貰った？」

「装飾品だったよ。イツセーは何をあげたの？」

「似たようなもんだな。装飾品や本とか色んなの」

と、話を聞いたアイズ達はチョコレートを作りたいと乞い、『ネットスーパー』で食材を大量購入をし、皆に渡すためのチョコレート作りを一誠やアスナに教わりながら励んだのであった。

「……………」

フィルヴィス・シャリアが立つキッチンには自作したチョコが置かれていた。『異世界食堂』がバレンタインデーなる催しを始めようとしている事を切っ掛けに、濡羽色の長髪に赤緋の瞳のエルフの少女は感謝を籠めて作り上げたのだった。料理はそこそこできる程度なので、料理上手な年上の先輩に教わりながら後は渡すだけなのだが、異性に何かを送り物をしたことは一度もなく、妙な気恥しさと緊張がじんわりと湧き上がる水のようにそんな気持ちが増してきた。

「渡すだけだ。そう、仲間を助けてくれたお礼をするだけだ。簡単な事であるし別に他意はない。私は純粹にこれを……」

と、一人百面相をしそうな勢いで思考の海に飛び込んで……。生温かい眼差しをキッチンの出入り口から盗み見している主神と仲間が向けていることを、気付かないまま立ち尽くしていた。傍から見れば恋する乙女のような仕草だったと

「……喜んで、くれるかな」

ナアーザ・エリスイスもバレンタインデーに向けてチョコ作りを励んでいた。主神のミアハを始め、男性の先輩団員の分も女性団員達と一緒に渡そうと用意している時に、一つだけナアーザにとって特別なチョコを別に作っていた。いつも優しく抱きしめて心地の良い温もりを感じさせてくれるあの人に、と想いを馳せながら尻尾を緩慢的に揺らし完成を臨む。

そして――。

「いらっしやいらっしやーい！ 今日一日だけ『異世界食堂』限定で行うバレンタインの日です！」

バレンタイン当日。『異世界食堂』から物凄く甘い匂いを漂わせ、主に甘党の客達を花の蜜の香りで引き寄せる。店の前には『普段お世話になっている、片思い、両想いの男性限定にチョコをあげよう！ 好きな男性に告白しながらあげるのもよし！ 異世界食堂が始めるバレンタインデー！』と書かれたチラシが張られてある。今回のバレンタインデーが開催されることを事前に知っている男女は興味本位で足を運び、バレンタインデーは何たるか説明を求めて分かると、恋人同士や一人身の女性が主にバレンタインの為に用意したチョコを購入す

る。そして女性が羞恥心だったり決意を秘めた想いで、意中の男性や仲間、同僚、お世話になつている男性へチョコを渡す姿を西区で見られるようになった。

当然ながら、そんな店の動きを察知した神々は何もしないはずが無かった。主に女性団員がいる派閥の主神は面白半分、チョコを強請る。逆に女性団員がいなく貰えない男神や男性達は、

「いらつしやいませ！手作りチョコを男性の方限定、無料で配布いたしまーす！」

「欲しい男性の方は列に並んでください」

「ニヤー達からの贈り物だニヤツ。ありがたく受け取るがいいニヤー！」

手の平サイズの菱形チョコを店の前で見目麗しい女性や少女達から貰い受けるのだった。本命から貰えず、女性から貰えずにいた男性達にとってささやかなオアシスだ。初めて女性から貰えた者は例えそれでも、何とも堪え難い感動に身体を打ち震わせ、歓喜極まつたり狂喜の乱舞をしたりする。

「……好きな人に」

「チョコを……」

「あげる……バレンタイン」

男には無料に配るに對して女は販売用に作られた様々な形の、意匠や装飾が凝った割と値段が安めなチョコを買うように決められている。共通語コイナーで『貴方のことを愛しています』『私と付き合ってください』『貴方の傍にいたいです』『チョコの甘さのように淡い恋をしています』等等男性に送る女性の気持ちや代わりにチョコが伝えると言う珍しい品に中々勇気が出せない女性にとってはありがたいことでもあつたか、ほんのりと顔を赤くしながら「こ、これをください」と可愛い反応を見せながら購入する消費者を見ては、同じ女性として「頑張ってください」と応援する従業員。知人や友人、仲間などの面々も顔を出して来て男性の為に購入する。そんなこんなでオラリオ中が仄かな甘い匂いで漂う日となつたのだった。

「ん、皆の頑張りのお陰でチョコレートは完売！……正直、結構

残ると思つてただけだな」

「俺も同感だ。ま、残つたら残つたで神楽に食べさせれば問題ないけどさ。よくやろうとしたよなバレンタインデー」

「異世界には無い概念と風習だからな。ちよつぴり狙つてやってみたがウケは良かった。また来年もしよう」

オラリオの空が西に沈みつつある夕焼けで朱に染まり尽くす時間帯、『異世界食堂』の前では『チョコレートは完売致しました!』と看板が掛けられている。それでも店は営業を続け、客達からの注文に応じたり料理を運びまわったり大量の食器の洗浄という格闘を変わらず繰り返すのである。

「そうして繰り返してこの世界にもバレンタインデーの風習を植え付けるんだね」

「ここはどんな店なのか分からないわけ無いだろう?」

そう、ここは『異世界食堂』。異世界の料理をもてなす店であるとアスナ達は分かり切っている。無言で二人は領き注文の呼び付けされると散つて対応しに行く仕事の最中に客が入ってきた。

「いらつしやいませ!お、『ミアハ・ファミリア』。総勢で来るとは珍しい」

「うむ、今夜はここで食べることにしたのだ。世話になるが空いている席はあるかな?」

「生憎、御覧の通り満席に近い状態だ。屋上だったら直ぐに用意できるけどいいか?」

「屋上?そのような場所があつたとは知らなかった」

「予約制でしか入れない二階と違つてな。懇意で交流している『ファミリア』じゃなきや解放しづらなんだよ。ほら、屋内と違つて屋外だから食い逃げされるしや」

納得の理由であると相槌を打つように頷くミアハ。常連客でも簡単には通せない場所だ。冒険者ならば屋上から別の建物の屋根へ跳び移つて食い逃げすることも容易い。故に何時も解放していない場所を解放して利用を承諾すると言うことは、店主の中ではその客を信頼しているというのと道理なのだ。

「レイラ、少しいなくなるぞ」

「話しは窺っています。いつてらっしゃいませ」

忙しい中でも店主の会話に耳を傾けていたエルフの女性は、恭しくミアハ達を屋上へ案内するために店を後にする男の背中を見送った。明るい店内と対極するような真つ暗な外に出て店の右の路地に入ろうとすると、とある派閥の主神とエルフの少女や団員等と鉢合わせした。

「あ、デュオニユソスと何時ぞやのエルフ」

「こうして会うのは久しぶりだね。それにミアハも。今夜は子供達と食事かな？」

「久しいな。デュオニユソスも食べに来たのだな？」

「この店のビーフシチューの味が恋しくなったのでな。それと、もう一つ別件があつて来たのだ」

「そうか、ならばともに食べやしないか？丁度席に案内してくれているところなのだ」

主神同士の会話を聞きながら路地へ足を運ぶと屋上へ繋がる階段が柵で出入りできないように閉ざされてる。が、簡単に開けられるようになっていたので、直ぐに金属音を鳴らしながら屋上へ上っていく店主達が辿り着いた場所は、一階と二階と同じ数のテーブルと椅子に夜天を眺められる空間。屋上と地上を行き来する階段の他には四角い箱状の建造物があり、店の中に入ったりするための扉もある。更には中心に位置する場所には鉄棒が突き刺さっている。現時刻は夜なので屋上の扉の壁に備わっているスイッチを押すと、鉄棒の先端が傘のように広がって、暗闇を掻き消す様に各テーブルに向けて明るく照らす魔石灯が淡く発光する。

「おお、こんな仕掛けがあつたとは」

「普段使わないから皆知らないのさ。この場所を利用させたのは皆が初めてだし」

「ロキやフレイヤですらもか？」

「あの二人は誰よりも早く正式で事前に予約するからここには来ないのさ」

自分達が初めて利用を許された場所だと感嘆しつつも席に座る主神達。

「店の中と違ってな。手間が掛るけどメニューが決まったらこの扉の横にある黒いスイッチを押してくれ」

「それが君を呼び出すものなのだな？わかった」

「それじゃ、ごゆっくりと寛いでくれ」

指を弾く店主に呼応して各テーブルに座ったミアはやデユオニユソス達の目の前に、発現した魔方陣から発する光と共に分厚いメニュー本が出てきた。それを見ず扉を開けて中に入っていないくなる店主に――。

「ああ、ちよつと待ってくれ。彼女が君に渡す物がある」

制するデユオニユソスに振り返り小首を傾げる店主。何故か緊張の面持ちで異国の王子風な主神に背中を押される形によって、濡羽色の長髪に赤緋の瞳のエルフの少女が店主に近づいた。

「・・・・・・・・」

いざ実行を臨もうとするとあと一歩のところまで勇気が出ず、羞恥と緊張でほんのりと頬を染めては顔を俯いて立ち尽くしてしまう。優しく生温かな眼差しと共に『頑張れ』とエールを送る主神と団員達から見れば、後ろに回してる両手にはピンクの箱を持っているエルフの少女の姿が視界に入る。

「・・・・・・・・」

程なくして意を決した風に顔を俯いたまま、無言で両手だけを店主に向けて突き出したことで箱の存在が明るみになった。同時に^{シアンスローフ}犬の少女は察した。あのエルフは、自分と同じ目的でここに来たのだと。とある銀髪で、精緻な人形、という言葉が真っ先に浮かぶ少女と同じぐらい店主に関しては負けたくないと言う負けん気が発揮して彼女も動いた。

「ん、ナアーザ？」

いつもモフモフさせてくれている獣人の少女が近づくと条件反射で反応する。己の目の前まで寄って来たと思えば、可愛らしいリボンに綺麗な包みで包装された四角い箱を両手で突き出してきた。

「これを……貴方の為に作りました。今日は、バレンタインだったから」

「おっ、そうなのか。嬉しいな。この世界で初めて誰かに貰ったよ」

「そうなの……?」

「朝から今まで忙しいから誰かから貰ったことは無くてな。うん、そっか、二人から同時とは嬉しいな」

微笑みながらナーザとフィルヴィスから箱を受け取り、頭を撫でられる獣人は目を細めて嬉しそうに尾も揺らし、エルフの少女は耳先まで紅潮した。二人から貰ったチョコを大事そうに持つて屋上からいなくなつた店主の後、隣にいるエルフこいがたき（そういう認識している）へ目を向けた。

「お前にも負けないから」

「え……?」

ジーと意味深に見つめてくる他派閥の眷族の少女に当惑してしまふ。が、こうして二人の少女の目的は達成されたのだつた。

余談であるが、店が終わり城に戻るや否やアイス達から一斉にチョコを貰いその日の夕食は貰った男だけがチョコということになつたのであつた。

冒険譚10

バンテン
万神殿に58階層以上のドロップアイテムとその他諸々にデザート
持参で赴いた。赤い髪の狼ウエアウルフ人の女性アドバイザーⅡ受付嬢と雑談を
交わしに冒険者や無所属フリップの市民達と擦れ違いながら目的地のフロア
に足を踏み入れれば、黒い肌にスキンヘッドのガタイがいい男性の背
後を発見した。その男と担当アドバイザーらしき職員と話し込んで
いる様子を隣に立てば見受けれる。

「ローズ」

「はいはい、個室で相談聞くから待つてなさい」

デザートが入ってる小箱へ一瞥する瞬間を逃さない。心中これを
餌にモフモフできないかと不穏な事を考えてる男の隣に立っていた
褐色肌のスキンヘッド男が踵返す際に一誠の存在に気付いた。

「お前……イッセーだったな」

「うん?……あー、エギルだったつけ?」

おひさ、と軽く挨拶を交わす。【アルテミス・ファミリア】に所属し
ていたアスナと同じ派閥で異世界から来た異邦人エギル。エギルは
一誠に近づき話しかけた。

「お前はよくギルドに顔を出すのか?」

「たまに情報収集目的で。そっちは?」

「今回は個人的な目的で来たんだ。……アスナは元気にしてるか
?」

してるぞ、と伝えると優しい顔つきで微笑んだエギルの口から「そ
うか」と漏れた。

「アスナがいない日常を過ごすことになってからキリトは落ち込んで
いたんだが、最近は立ち直って探索に精を出している。そっちも問題
ないなら安心した。これからもよろしく頼むな」

「任された。それで、訊ねていいなら個人的な目的ってなんだ?」

「ああ、この世界でも自営業……商売できないかかって思ってたよ。
空いている敷地の場所を探してたんだ」

「自営業……?」

至極不思議そうにエギルを見つめながら小首を傾げる。冒険者としての風格を醸し出しながら自分の店を作ろうとしている。この異世界で自営業をしようとする彼の真意を図ろうと尋ねる。

「元の世界じゃ自営業を？」

「ちよつとした喫茶店をな。軍資金も貯まってきたから小さくても店を持ちたくなつたんだ」

「でも最後は店を閉じるんだろ？後腐れない店にした方が良いぞ。俺みたいに後継者を集めて店を継がせるみたいにな」

「お前はもう後継者を育ててるのか。俺より若いってのに凄いな・・・イッセル、この後時間はあるか？」

「担当アドバイザーと話をしたら用事はないな」

それがどうしたと目で訴える一誠に首を満足げに頷くエギルは年下の男の肩に手を置いた。

「だったら異世界で商売してるお前と相談がしたい。よろしく頼むぜ」

何故そうなる？と遠ざかっていくガタイのいい背中を見送る一誠のところにはローズがやってきた。

小一時間後、エギルと合流をして自身の店の屋上にて相談をし合う事に。従業員ですらあまり立ち入らない場所は二人きりになるに適しているので円卓を挟んで腰を落ち着かせる二人は顔を付き合いだす。

「場所はいくつか目星がついているんだが元の世界、異世界風の商売をしてみたい」

「商売って実際どんな感じの何だ？料理店？道具屋？武器屋？」

「喫茶店兼道具屋にしようと思ってる」

喫茶店はともかく道具屋は厳しくないか？目新しい商品じゃなきゃ買収取ってくれないぞ。と感想を抱く一誠の心情を露も知らずエギルは語り掛けてくる。耳を傾けて相槌を打って己の感想を零した。

「まずエギルがすることはオラリオ中にある喫茶店Ⅱ料理を出す店の調査と道具屋でどんな道具が売られているのか情報を集める事だと

思う」

「ようは下見か？」

「異世界風にするならまず異世界の商品を知る必要がある。そんなあつちにはない代物がこつちにあるような商品を扱う店にしなきゃ、他の店と同じ変わらさず埋もれてしまう。異世界で商人として商店を開くなら目新しさを求められるんだ。実際、自己主張激しい『異世界食堂』って店を構えたその日に、様々な客が冷やかしに来たり興味本位で足を運んでくれたことで成功したんだからな」

「なるほどな。例を挙げればこの世界の酒は、日本人にとつちやあ馴染みあるビールってもんが無いからあつという間に流行ったよな」

自己完結し納得したエギルは「わかった。参考になったぜ」と席を立ちこれから行動に移るべく、礼を言いながらこの場から後にした。今後エギルがどんな店を構えるかは本人次第、完成したら顔を出しに行こうと一誠も屋上を後にする。それからの一誠は城に戻って作業室にて物作りに励んでいた。床に腰を落として正座をしたまま、上半身を揺らしながら両腕を前後に動かす。ゴリゴリとカチャカチャと一心不乱に手を止めず何かしらの素材を粉末になるまで砕き、磨り潰す作業を没頭する。そんな様子をアミッド・テアサナーレは見ている。彼に製薬の作業を住み込みで教える代わりに彼しか製作できない商品を定期的に『デイアンケヒト・フアミリア』に提供する契約を結んでから短くない月日が経過した。回復薬、ポーション、ハイ・ポーション、エリクサー、その他様々な作品を教わりながら学び己の糧とした一誠の手腕に舌を巻いた日が懐かしい。そして現在、目の前の意中の男は新たな薬を零から産み出そうとしているのだ。

「質問をいいですか？ 一体、何を作っていますか？」

「ん、一時的に能力値をアビリティ倍増するための薬を作ってる」

「……それは、一度は考えてしまう薬ですね。魔法ならば出来るでしょうが、薬品となると時間や費用、人材と労力が計りしれませんが」

「ぶつちやけ、元の世界でそういう薬の作り方は教わってるから作るうと思えば作れるんだ。この世界に同じ素材があればの話だけだな」

どこまで完璧超人ぶりを見せつけてくれるのだろうかと思いがながら、異世界の製薬には物凄く興味がある。ので、アミッドは質問を繰り返した。

「あなたの世界ではこの世界に存在する神々と同じ名の神々がいると窺っています」

「ああ、だから医療や製薬を司るミアハとデリアンケヒトを筆頭に他の神々の直伝で作れるのさ」

「異世界のミアハ様と主神様……どんな神様でしたか？」

そう質問を受け、作業していた手を止めた一誠が懐かしむ感じで遠い目をして語り出した。

「んと、見た目の若さ的だったら同じかな。性格は基本的に他者を重んじ、世界の医療機関を支えている医神として存在している。だけど、話を聞く限り何だか張り合っているみたいなんだよな。そんなところ見たこと無いんだけどさ」

アミッドに見守られながら再び作業に取り込む。一部の素材以外は殆どこの世界でも手に入り物ばかりだが、治療師の目は一部以外の素材を注視した。

「鮮やかな赤い角に、何かの液体が複数……」

異世界でしか得られない何かなのだろうと推測して、それが量産できないか調べてみたい好奇心が湧くアミッドの前でそれらも調査に使用します。そして……

「よし、久しぶりに作ったけど完成だ」

赤い液体が入れられているフラスコを持って満足げに漏らす。一緒にそれを見ている精緻な人形のような少女も感嘆の念を抱き、訊いた。

「どの能力値を上昇させる薬ですか？」

「力の方だ。飲めば攻撃の威力が増すんだけど、更にこれを改良すれば数倍も増すことも可能になるんだ」

「まだ、改良の余地があるのですか……？」

「というか、もう改良した。さつき赤い液体があっただろ？それが改良する前の薬だったんだよ」

何時の間にも、と思いながらもその改良した薬の効果を治療師ヒーラーとして知りたい少女は、試飲を乞うと手を触れられて手の甲の上一滴だけ垂らし乗せてくれた。その手を触れられた際、心臓がドキリと高鳴ったのだが当の本人にしか知らない事象であるため、男は知る由もない。垂らされた一滴を見下ろすアミッドは舌で舐め取る。

「っ……!」

身体の奥底から湧き上がる、例え難い何かが華奢な少女を当惑させる。今まで感じたことが無い薬の効果に目を丸くするそんな反応を示す彼女に見守っていた彼は問うた。

「どうだ？ 凄く力が湧くだろ？」

「は、はい……体験したことがありませんでしたので動揺してしまいました」

「誰だって未体験な事をしたら動揺するものさ。二度も三度も同じことを繰り返せばそれなくなる」

一滴だけでこの効果ならば、全てを身体に取り入れたらどうなってしまうのだろうか……。この高揚感、ある意味これは麻薬に等しいものだ。これの効果を知った冒険者達が他者を傷付けても欲してしまうのではないかと懸念も抱いてしまうアミッドの心情を察したかどうかは定かではないが。

「さつきも言ったけどこの世界にも同じ素材があれば作れるものだ。でも、その素材の中で異世界でしか得られない物もあるから安易に生産・量産はできない」

「これが最初で最後の薬ということなのですか？」

「そういうことだ」

力の能力値アビリティを一時的に倍増させる薬はこの一つのみとしてこれ以上は作れないと断言する。心なしか安堵で胸を撫で下ろす気分になるアミッド。

「でも、この薬を素材にした道具だけは作ろうと思ってる」

「どんな物を、と聞いても？」

「さあ、そこが考えどころなんだよ。だから今度「ヘルメス・ファミリア」の団長と話し合ってみるつもりだ」

道具を片づけ始める。手伝うアミツドの協力で直ぐに終わり最後に残った赤い薬を手にして作業部屋を後にする。

「今日はお店の方は？」

「俺は休みだ。副店長のミアに任せてあるから店の方は大丈夫だ。もう俺がいなくても異世界の料理は作れるし、あいつらだけでも運営もできるようにまで成長した。うん、重畳だ」

嬉しそうに微笑む男のその横顔を歩きながら隣で見上げるアミツド。本当に好ましく思っているのだと見て察して精緻な人形のような顔に薄らと笑みが浮かぶ。

「将来、新しいお店も構えますか？」

「もしもそうするつもりなら、次は飲食店じゃない方針でしようかな」
「では、製薬と治療を生業とする店でもしますか？」

「止めておけ、ミアハとディアンケヒトの店を潰しかねない事をするぞ俺」

苦笑する一誠なら『異世界食堂』のように商売繁盛をするかもしれない。二つの派閥を潰しかねないというのはどうやって商売をするのか分からないが……。

「(……もしも本当に潰れたら、責任を取って私を引き取ってもらいましょうか)」

後に聖女の二つ名がつけられる少女らしかぬ考えをした。

「お手伝いいたします」

「ははは……本気で？」

「冗談は言いません」

真顔で言われて物凄く反応に困ってしまった一誠。本気でその手の店を構えてしまえば、無自覚で他の医療系「ファミリア」を潰してしまいかねない言動をしてしまう恐れがある。自分がそこまで有能とは思えないが、現状を鑑みるに人気店になるだろう。そうなれば後の店を任せられる人材を確保しなくてはならない。もしもいるとすれば隣にいる少女だろう。

「……イッセーさん」

自室に戻るや否や、華奢で小柄な少女にベッドまで押し付けられて

縁に座らされれば、対面になる形で両脚に跨って小ぶりの臀部を乗せて座ってきた。積極的に甘えに来たのかと思ったら、男を見上げるつぶらな瞳の奥に情欲の炎が宿っていた。両脚を確りと一誠の腰に絡みつくように回し、身体を押しつけながら密着するアミッドの身体は服越しでも発火しそうな勢いで熱くなっていた。

「今この城には私達以外誰もいません……ですから貴方を癒し、私を癒して、愛し合いたいです。この貧相な体で申し訳ないのですが、イツセイさんを満足なされるまで一人のアミッドという女として貴方と交えたい」

「壊れるぞ」

「貴方に壊されるなら本望です」

また真顔で断言され、近づけてくるアミッドの顔を視界に収めながら心中で苦笑いをしつつ彼女の唇と自分の唇を重ね合せて、口づけを交わした先から——男女の性を貪り合う時間が始まった。

「(え、う、嘘……)」

城に戻り、一誠に用があつて部屋に訪れた黒髪の猫キャットピール人の少女が隙間が開いていた扉から覗きこんだ瞬間。昼間つから爛れた時間と共に情事を貪る大人と子供の姿を見てしまい、部屋から漂う鼻や肌に纏わりつく淫臭で自分の意思とは無関係に発情してしまった。心ではこの場から離れようとする強い意思で臨むが、淫靡な匂いで思考が鈍くなってしまう頭では身体が意思に反してその真逆な行動を取って……。

「アツ——♡」

性欲を貪る龍によって、全裸で横たわってる銀髪の少女の隣で同じく、全裸で艶やかな矯正を上げ続ける雌猫が濡羽色の瞳に♡を浮かべるほどに快樂の虜になっていたのだった。

「えっと、すまない」

「……いえ、貴方は恩人ですから、あの転生者達に奪われるよりはよかったです。そ、それに、こういう事は無縁だと思っていたので貴方と経験が出来て……とても、いえ、凄く気持ちよかったです」

数時間後。先にダウンしてしまったアミッドを寝かせて以降、濡羽色の髪の猫キャットヒール人のアナキティ・オータムことアキと一誠は行為に耽っていた。もはや彼女の全身は知らないところは無いと過言ではない程に見て触れた。現在はお互い男女が折り重なるように密着して、男の逞しい胸板で獣人の少女の双丘は肌の弾力と柔らかさを感じさせながら潰れている。そしてそう言う彼女の言葉に……下腹部の、それも体内で感じる火傷しそうなぐらい熱く、硬く、大きな存在感に骨の髄まで征服され尽くした獣人の少女の身体は敏感に反応する。

「んっ、まだ、元気なんですネ……」

「節操が無くて悪い。まだ心身共に満足してないんだ」

「げ、元気ですね……私の体が保てないかも……」

起き上がり、下腹部に刻まれてる紋様を触れるアキに一誠も上半身を起こす。真剣な表情で彼女に向けて発する。

「責任は必ず取る」

「責任……彼女も大丈夫なのですか？一応、他派閥同士の恋愛関係は諍いを起こしてしまいかねないのですけど」

「アミッドに関しては互いの秘密として主神と『ファミリア』に隠している。というか、アミッドと関係を結んだのって事故だったんだよな」

申し訳なさそうに吐露する男の顔は少し曇っていた。アキからすれば情事の最中のアミッドの表情はとても恍惚で幸せそうに見えていた。

「あなたと彼女は、付き合っているのですか？」

「表沙汰に、公にできないがそのつもりでいるよ。でも、お前も言ったように他派閥同士の恋愛は難しいからな。だからここでしかアミッドと私的な理由で接する事が出来ない」

周囲の目を欺くためにこうして目の届かないところで関係を続けていくことを、初めて知ったアキは「やっぱり大変なんだな」と感想を抱き、自分も一誠と付き合うためにはこの城でならなければならぬのかな？とも思ったところで……。

「えっと、あの……アミッド・テアサナーレは公認してくれるん

ですか？その、あなたが私に対する責任を取ると言う意味で」

「ああ、それは大丈夫。誠心誠意で俺が言うからアナキティは安心して何時も通りに過ごしてくれ」

横恋慕、までとはいかないが複数の女性と関係を結んで男が無事でいられる話しは極端に少ない。不義で不純な気持ちで異性と交遊したとあらば尚更である。彼がそこまで言うのであれば、信頼して任せようと思ったところで耳を触れて来た。

「もう一度言うけどこんな事になってしまった手前責任は取る。だからできればアナキティも俺の傍に居てくれ。必ず幸せにするから」

——真つ直ぐ、瞳を向けてくる男の真剣な言葉に息を呑むアキ。異性から告白された経験は無く、どう返そうか言葉を選ぶ前に尾が無意識にシユルつと一誠の腕に絡まった。それから無言で見つめ合う二人の間に訪れる沈黙。それから二人はどうしたのかは、当事人しか分からないことである。

「……アキも手籠めにしたとはな」

「手籠めとは酷い言い様だ。場の流れでそうなってしまったんだ」

「私達の事は？」

「いや、まだだ」

自室に入ってきたハイエルフが目当たりにした、全裸で天蓋付きのキングベッドで眠りに着く少女達と事が終えた男が二人に挟まれながら本を読んでいる姿の光景。また一人一誠の虜になったとそう思わずにはいられない、アキの寝顔を見て心中で溜息を吐くりヴェリアは用件を口にした。

「私達のホームが間もなく完成できる。その直前に彼女達を引き取ることが決定した」

「となると、フレイヤのホームもそんな感じかな。そうか、もう一年以上も経ったのか」

「お前が私達を救わなかったら、その一年以上……いや、死ぬまで一生奴らの奴隷として身を墮としていただろう。このオラリオもすら、乗っ取られて支配されていた」

全ての原因は異世界の神の仕業だけだな。と、辟易しながら答え

る。

「話が少しずれた。そういうわけであるため、『ロキ・ファミリア』からお前に対して最大の敬意と恩を報いたいのだが、して欲しい事があるならば我らのできる限りのことをしよう」

「……いや、俺が困った時にだけ助けてくれるならそれで構わないよ。今直ぐしてもらいたいことがあるかなんて、思いつかないし」至極尤もな事を言ったつもりの一誠に絶世の美貌を持つハイエルフの顔は、特に困った顔や戸惑いの色が浮かばずただ「そうか」と相槌を打った。

「お前は欲が無いのだな」

「失礼な。人並みぐらいはあるぞ。最大派閥に借りを作つたとあらば、全身全霊・全力で俺の指示に従ってもらうんだからな」

「無茶な命令だけはしてくれるなよ。一応、派閥としての立場があるのだから」

元派閥の団員として分かつてるよ、と苦笑する一誠。そんな日が来るとは思えないが、使えるものは使おうという精神でいた男の隣に寝ていた黒猫の少女がムクリと起き上がった。

「んっ……あ、何時の間にか寝て……つ!?」

リヴェリアの存在を目の当たりにした矢先、ビシリと石化の呪詛カースを掛けられたかのように身体が硬直した。決してバレたくない現場を押さえられて、一糸纏わぬ姿すら見られて赤面したり青褪めたり顔色がコロコロと変わって思考が混乱し掛けている同派閥の団員に冷静沈着で話しかけた。

「落ち着け、アキ。事情は聞いた。お前に咎も怒りを向ける事もない」「え?へ?そ、それはどういう……」

「事情はどうであれ、お前も少なからずイツセーを慕っているか好んでいるから本気も全力も抵抗せず身体を重ねたのだろう」

指摘されて異論を言い返せず、沈黙してしまうアキ。不意に『お前も』という単語が頭に過り恐る恐ると見つめて尋ねた。

「もしかして貴女も……」

「ああ、私達が助けられたあの日からイツセーを心から慕っている。

お前のように身体を重ね続けてくる。これからもそうするつもりだ」
「っ!？」

「当然ながら私だけじゃない。イツセーを慕う者達皆もだ」

必然的にアキは言葉を失った。自分の知らないところで一誠は数多の女性と関係を結んでいた事に。ただ、アイズやアリスは「ファミリア」に入団した時から慕っていた事は知っていたが、アミツドのようにまだ幼い少女と……。

「アキ、イツセーを責めてくれるなよ。この者はあろうことか自決しようとしたのだからな」

「へっ?」

「……言うな」

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべる男の横顔は、事実なのだ。アキにそう受け取らせた。何故?と戸惑う少女にリヴェリアは淡々と告げる。

「まだ幼いアイズ達に手を出してしまった事情はあるのだが、それでも自分を許せずに死んで償おうとしたのだ。故に責任感はとても強く、深い罪悪感を覚えた結果とんでもない行動を取った」

「そ、そうなんですか……」

「だからこそ、我々はイツセーを愛しているのだがな。【ファミリア】、立場、地位など全て関係なく、な」

優しい顔を浮かべたハイエルフの女性は己が生涯、同族でもないヒューマンと歩む未来を見据えている。これからも共に歩めば未知の世界を見せてくれ、その時の喜びを分かち合って感動と楽しみも共有し、生きていくだろうと。信望が厚いリヴェリアにそこまで言わせる男の人徳と魅力。アキは知らないがスキルに具現化するほど一誠は周囲を引き寄せる不思議な力を持ち、魅了させるのだ。アキもその一人と成って現在に至った。

「お前もそうなるだろう。イツセーと身体を重ねた以上は、簡単に心と体は離れられなくなる。これからも閨事をしたのなら、夜この部屋を訪れると良いだろう」

「なっ……!」

まさかの王族からの情事の誘いに度肝を抜かれ、顔を紅潮させる黒猫の少女だが、アキも仲間入りだと周知されると周りの皆に誘われたり、連れられたりして一誠との情事を重ねる日々を過ごすことになる。

「そう言うならリリア」

魔法でリヴェリアを引き寄せてると胸の中に抱きしめ、長い耳元で囁く。

「今度はお前としたい」

その意味を口にせずとも悟ったハイエルフは二人を貪ってもまだまだ元気が有り余っている困った男だと思いつつ、女として求めてくれる男に嬉しく感じている自分も惚れた弱みだから困ったものだと心の中で苦笑い。

「……加減はするのだぞ」

これぐらいは言っても自他共に無駄であろうと建前を作るリヴェリアだった。



「誰か俺の【ファミリア】に入りませんかーっ!? 入ってくれませんかーっ!?」

「その君、俺の【ファミリア】に入らないか? 可愛い子が君を待っているぜ?」

「おい、この子供に声を掛けたのは俺だぞ!」

「私の方が数秒早かった。故にこの子供は私と話をする」

自分の派閥、【ファミリア】の勢力を増強、拡大に精を出す神々。迷宮都市オラリオに富と名声を求め、異性にモテたいと冒険者に無所属の志望の者達が足を運んでくる流行の時期が訪れた為に弱小や零細の【ファミリア】の主神達はこの機を逃さんばかりに手当たり次第初めてオラリオの門を潜った人々に声を掛けまくる。

「……やっぱり、神とは思えない」

「は、ははは……」

そんな神々を目を細めて呆れる、買い出しの帰り中の店主とアスナ。神の言動は路上で歩行人に誘い掛けるキャッチャーの言動と何

ら変わりない故に改めるまでもなく神々に対して抱いている印象は、『人間味溢れてる神もどき』。

「神様達は一生懸命だね」

「自らの足で行動するのは正解だと思うけど、誘われる方は相手の事知らないから直ぐに入団する気持ちは躊躇してしまうがな」

実際に声を掛けられた者の中には遠慮気味に断って去っていつてしまっている。まだ自分に合う派閥を探るか、冒険者になるつもりはないからか。

「ファミリア」のプロフィールみたいなのがあればいいのにね」

「その「ファミリア」の情報が他の「ファミリア」に漏洩する恐れがあるから出来ないって。なのにオラリオで一番団員数を誇ってるガネーシャが凄いいんだよな」

「そうだね」

どこからか「俺がガネーシャだあつー」と暑苦しく野太い声が聞こえてくる。今日もあの神は元気だなあーと感慨深く思っている一誠の耳に「あつ」とアスナの呟く声を拾った。その理由は彼の者も察している。店の前で誰かを待っているかのように佇んでいる黒いスーツ姿の男性がいた。一目でその人物はギルド員の者だと気づき、裏から入らずそのままギルド員の者の方へと歩み寄ったら二人の存在に気付いてお辞儀した。

「異世界の店主、イツセー様。至急ギルド本部にお越しいただけませんか」

「ギルド長が呼んでいるのか?」

「はい、左様です」

俺に何の用だか、とギルド員の申し出に肯定する一誠は一旦食材を置き、ミアに事情を軽く説明し終えた後にギルド員と共にギルド本部へと赴いた。

「——人が仕事している時に急な呼び出しとはなんだ? つまらない話だったらお断りだぞ」

ギルドの長の執務室の扉を開け放って開口一番にそう宣言する一誠に、今の地位と権力を得てから贅を尽くして豪華な食事と豪遊を繰

り返した代償に、エルフとは思えない体型になった肥え太った身体のギルド長は鼻を鳴らした。

「お前にとつてつまらなくともこちらは大変重要な話だ」

「重要ねえ．．．話の内容は？」

「単刀直入に言う。近日オラリオに他国から大使がやってくる。その際、お前には大使達に料理を振る舞ってもらいたいのだ」

「そいつは依頼か？そうじゃなきや他の料理店の店長達に振る舞ってもらえ」

「そうはいかんのだからお前に頼んでいるのだ。これはギルドからの正式な依頼でもあり強制依頼ミッシェンでもある。大使達に演出も兼ねてあの空飛ぶ船も使つて料理を作つてほしいのだ」

示威行為も目的に入れているロイマンの意図を悟り、この世界で立つた一隻しかない船で食事会を設けたいとは．．．．．この先もそうする腹かもしれないギルド長に心の中で溜息を吐き提示する。

「必ず成功させる代わりに、報酬は思いのままだったらいいぞ」

「．．．．無茶な報酬は呑めんからな」

言質は取り依頼を引き受けたからには、一誠はロイマンの求める結果を出すつもりで準備を整え始める。各国から大使達がやってくる当日になれば、中央広場セントラルパークに停泊させて出迎える騎空艇の存在に大使達を驚かせる。そして大使達を乗せた騎空艇は、本領発揮として空に浮かびオラリオの上空をゆっくりと飛び続ける。近年のオラリオはこんな物までも作れるのかと愕然している姿の大使達にロイマンは満足げに笑みを浮かべ、船内へ入る出入り口の扉から従業員達が運んでくる料理の食事を促す。これもまた絶品で、大使の地位でも味わったことのない料理である事にギルド長との会談話は滞りなく進み、この船を是非我が国にもと声が上がった時は申し訳なさそうにやんわりと断る。どれだけ一生遊んで暮らせる金を積んでも『趣味』で作った以上、これ以上は作らないと断られるだけですぞと。残念がる大使達だったがロイマンの手にその設計図がある事を知ったらどうなることやら。それから数十分後、会談は纏まり問題なく終えたことから今回の演出は大成功と言う結果に一誠はギルド本部のギルド長の執務

室に足を運び、ロイマンに報酬を求めた。
「——主神がいない、派閥の設立の許可を貰う」

冒険譚11

「——以上が報告です、神ウラノス」

肥満体形のエルフが、軽く上半身を曲げてながら言う。ギルド本部最奥『祈祷の間』。管理期間最高責任者、ギルド長ロイマン・マルティールの直訴を聞くウラノスは、淡々と言葉を返した。

「わかった。その案件はこちらで預かる。下がってよい」

「はっ」

四炬の松明だけが閉ざされた暗闇の中にいる、千年以上も人や世界から忘れ去られたような石造りの神座に座る巨軀の老神を照らす。ギルド本部の最奥の祭壇でダンジョンに神威Ⅱ『祈祷』を捧げている老神の前に跪き、ロイマンはその太った体を回転させる。溜まった腹の肉を揺らしながら、一階へと繋がる長い階段を上がっていった。それからすぐ、彼と入れ替わる様に——。

「フェルズ」

——気配を立っていた全身を黒いローブで身に包む黒衣の者が薄闇の奥から進み出る。古の祭壇の前にウラノスの言葉を聞く姿勢で佇む。

「主神無き派閥の設立、どう思う」

「『フレイヤ・ファミア』の異邦人イツセーの考える事は理解し難い。毎年他派閥に改^{コンバージョン}宗する変わり者だと思っていた。彼の望みを叶えたとして、神の恩恵無しで一つの派閥として機能ができるのか？」

千年前に展開での生活が飽きて不条理と不完全な下界を娯楽目的で降臨した神々が、人類に神の恩恵^{ファウルナ}を与えて以降、それから世界の常識として神の眷族として恩恵を受けるのが当たり前と成っている現在。主神無しで派閥を作りたいと考える人や冒険者は絶対に存在しないと思っていた。いるとも露にも思わないでいた。

「そんな彼のもとに改^{コンバージョン}宗状態の冒険者が集まるとも考えにくい。そもそもそんな冒険者はこのオラリオに何人いるのかすらわからない。ウラノス、貴方の考えは怎うなのだ？」

「相手は異世界から来た異邦人。私達の常識を覆す何かを秘めている

のは明らかだ。ロイマンの話ではギルドの味方であるとも言う」

「認めると言うのかい？」

「【ファミリア】に収まる器ではないとしたら、自由にさせるべきかもしれん。ギルドの傘下としてオラリオに定住するのであれば一つぐらいは構わない。——異邦人の力は、私達にとって必要かもしれない」

店に働いている店主の下に一通の手紙が届けられ、主神無きの【ファミリア】の結成を認めると内容を見ることがになったのは近日であった。しかし、結成には条件が幾つもあったが店主はそれをあつさり条件を満たして正式に自分だけの【ファミリア】を成立する事になった。

「えつと、L.V. 1以上の団員を最低十人以上に他派閥から認可の証とするシンボル徽章を五つ以上。毎月ギルドに支払う税金は百万ヴァリス。オラリオに貢献する事。異邦人、転生者の問題事の解決は積極的にする事。以下の条件を全て満たせば異例の主神無き【ファミリア】の結成を認める……」

「普通の条件だな」

音読したりヴェリアの声に関心なさげに吐露する男。その場に居る三柱の女神は興味深げで彼の者に視線を送りまた常識はずれな事を仕出かしたと半ば呆れるのはロキとヘファイストス。

「二体全体、どーしたらギルドからそんな手紙が届くんや。のうイツセー？」

「ハツハツハツ、拒否される前提でふざけて言ってみたら……こんな手紙が届いちやったみたいだ」

「もう、ふざけて言うもんじゃないわよ。それでも主神無き【ファミリア】を結成出来ちゃうのも大概だわ」

「二人で【ファミリア】ができちゃうって話が、本当に現実的になるなんてね……」

未来予知をしたわけでもないのに、その気になればイツセーは自分の【ファミリア】を旗揚げする事が出来る。構成員も希少で一級だ。

「本当に【ファミリア】を結成するの？」

「認可証を貰ったからには何時でも結成できる。まだ、しないほうだけれど何時か必ずしようかな」

「そんな時はもう自分をうちの【ファミリア】に入ってくれへんようになるなあ」

毎年恒例の一年間の主神の眷族になる催しもしなくなることを残念がるロキにこんな言葉が送られる。

「【ファミリア】の徽章シンボルを貸してくれるんだったら、ロキ達の仮の団員として力は貸すぞ」

「あら、じゃあイツセーは皆の眷族ってことになるのかしら？」

「後見人として他派閥の徽章シンボルを借してくれなきゃダメなんだからな。そう言う解釈もありんじゃないか？」

ピンとあくどい考えがロキの脳裏に浮かび上がって、にんまりと邪な笑みを浮かべた。

「ほな、イツセーが作ったファイたんも認める至高の武器をうちの子供達にタダで提供してくれるんやな！」

「ちよつと、あの子の話通りなら私の仮の団員としてなるんでしょ。主神としてそれは許せないわよ。何割か払ってもらわなきゃ」

「何でや！うちの仮眷族になるんやから主神の言う事は絶対やで！」

「その言葉は私の方にも当て嵌まるのだけれど？あの子の鍛冶の技術を最初に目を付けたのはこっちなんだし、そう簡単に至高の武器を手渡するような真似は私が許さないわ」

女神同士が言い合い、衝突する事態になるとは思いもしなかった。困った顔で頬を引つ掻き、不仲になりかねない彼女等の制裁をどうしようかと模索した時に思い至った。

「ロキ、ヘファイストスの言う事も一理あるけど力を貸すことは嘘じゃない。だから限定的ならヘファイストスもいいだろ？」

「……どういこと？」

「日常茶判事じゃなくて、絶対に譲れない戦い、深層の階層主戦の時だけ使ってもらおう。勿論、フィン達専用の武器で戦い終えたら回収する。それぐらいの配慮はいいじゃないか？」

その提案に二柱の女神は顔を見合わせ、それなら……的な雰

困気を醸し出し、不穏な空気は静かに和らいだ。納得してくれた女神達に溜息を吐く。リヴェリアから労いの籠った目線に、美しく微笑みを浮かべるフレイヤ。

「女の扱い方が上手いわねイツセー」

「いや、今のはそういう感じじゃないだろ」

所変わって東方面にある極東風の城、主神の自室の和を基調とした部屋の中、金色の長髪を横にズラし穢れを知らない華奢な身体の背中が、紅い着物をはだけさせてもらっている狐人ルナールの少女、春姫の後ろに女神が『恩恵』を授ける最中だ。獣人の少女は主神と夫の力になりたいと淡い思いを言葉にして告げたことで「アマテラス・ファミリア」の一員になる事に決断した。

「それじゃ、刻むわね？ 後でイツセーから不思議なカードを貰いなさい。それもあなたの役に立つものだから」

「はい」

同時刻でイザナギとイザナミもユエルとソシエに『恩恵』を刻まれようとしているが春姫は知らず、アマテラスの恩恵を授けてもらった。太陽を彷彿する徽章シンボルが少女の背中に浮かび能力値ステータスも発現したところで気付く。彼女の魔法に発現した

「ウチデノコツチ、それが春姫の魔法？」

「そう、それも多分誰もが誘拐してまで手中にしたいかもしれない希少レアの魔法よ」

三人共が極東の三柱の眷族になったことを教えに来てくれた。春姫に発現した魔法も含めて。その内容は確かに誰もが欲しがるように魔法だった。

「一時的に対象を【ランクアップ】する魔法か。確かにそれは漏洩してしまつたらヤバいな」

「味方にしたらこれ以上はない起死回生の魔法ね」

肯定と頷く。狐人ルナールの三人娘はアマテラス達の前に正座して一誠に目を向けている視線と合わせ、指を弾くと柵から三冊の本が勝手に抜け出して春姫達の前に。

「魔法を発現しなかったユエルとソシエも潜在能力を知りたい。是非

「これと呼んでくれ」

「これは？」

「一回限りの使い捨ての、強制的に魔法を発動する魔導書グリモアって言う本だ。これを三人に渡す」

可能性を見出そうとする一誠の意図を察しないまま、少女達を宙に浮く紅と黒、銀の本をそれぞれ手にして掴み取る。将来、その本を読み終えた三人に発現した魔法が一誠達の力となったのはまだ先の話。「春姫、試しに魔法を俺に掛けてみてくれないか？」

「は、はい」

始めて魔法を行使する春姫は緊張気味に答えて立ち上がる。

「——大きくなれ」

目を瞑り詠唱を始める春姫の姿に、アマテラスは静かに見守り視線を注ぐ。

「其の力に其の器。数多の財に数多の願い。鐘の音が告げるその時まで、どうか栄華と幻想を」

何かを差し出す様に両手を胸の前に突き出し、狐人ルナールの少女は玉音の声音を奏でていく。

「——大きくなれ」

一人の少女に注目する神々と男と少女達。初めて見る冒険者に多大な変化を齎す『階位昇華レベル・ブースト』。その魔法を一誠に捧ぐ意志を強く抱き初めての詠唱を謳い続ける春姫。

「九妖を宿す御身のためにこの心体、魂魄を、捧げる。神に賜いしこの金光。鎚へと至り土へと還り、どうか貴方へ祝福を」

紡がれる呪文は真っ直ぐ、男のもとに送られていく。そして詠唱が完成に近づき、伴なつて薄い霧状の『魔力』、光雲が生まれた一誠の頭上に、魔法マジックサークル円と見紛う紋様の渦が出現する全てを受け入れる姿勢の彼が真上を仰ぐと、形作られるのは巨大な光の柱——否、柄のない光の鎚だ。降り注ぐ温かな光。男が視線を下げた先で、少女は、真っ直ぐ翠の瞳を向けていた。

「——大きくなあれ」

次の瞬間、少女の唇から魔法名が紡がれる。

「ウチデノコツチ」

燦然と輝く光鎚が落ち、一誠の全身を包み込んだ。光の奔流が彼にもたらすものは、身体と心を奮い立たせる活力、そして純粋な『力』。閃光は走り抜け、一誠に夥しい光粒が付与される。魔法を発動した少女は少し息を荒く吐き、疲労の色を窺わせる。精神疲弊マインドダウン、その一歩手前の状態だ。

「おお．．．．力が湧いてくる」

「今のイツセーはレベル3、『ランクアップ』する前の己とは違う筈だ」「となると、この状態で魔法をしたらどうなるかな。いや、そうする前に全力を出そう」

その後は試しに——自分の世界に魔法で繋げてみようかと心中で臨む一誠。皆の前で無限の力を解放する呪文を唱え、神の力を纏う青白い天使と化した。

「さあ、結果はどうなる事やら」

——別世界にいるもう一人の兵藤一誠がいる空間に楕円形の光の鏡が具現化した。見覚えのある現象に注視していれば、鏡合わせしたように自分の姿をした顔に入れ墨がある男が姿で立っていた。何をするつもりなのだと言いつつ警戒していたら鏡に触れ——魔力を流し込んだ。そうしているもう一人の己を見ていると鏡の表面が水の波紋を起こして、手が抜けてきた。鏡に阻まれて通れなかったはずなのに何故だと瞠目したが、こちらの世界に異世界から腕が出てきたと言うならば、と思ったところで兵藤一誠はすぐさま鏡に向かって駆け出してその手を掴んだ。

「イ、イツセーが二人．．．．っ?」

「どうなっている．．．．」

「．．．．」

異世界から更に別の異世界へ引き込まれた兵藤一誠はもう一人の自分から一瞥して周りの部屋を見回す。

「ここが、異世界か」

「俺の部屋の中だがな。馴染みのある家具ばかりで新鮮さなんて感じないだろ？ま、外に出れば嫌でも感じるさ。何か質問はあるか？」

「じゃあ、あの人達は？」

一誠の問いに率直な質問をする兵藤一誠。

「男がイザナギ、仮面を付けてるのはイザナミ、最後に彼女はアマテラス。全員神だ」

「……」

嘘だろ、と感想が最初に出てきた。その込められた意味は……。

「存在感は確かに人じゃないのは判るけど、神の力が感じない」

「神々は天界での暮らしが飽きたから下界と下界に住む人類を娯楽の対象にしている。もうその姿はぶっちゃけ、神とは思えないほどだからな。因みにこの世界のロキは無乳の関西弁の女神だぞ」

「嘘だあああああああああああああああつ!？」

一誠が神に対して思った事と同じであった。え、そこ心から驚くところ？とアマテラス達は目を丸くする。それから兵藤一誠にこの世界の全てと、ヒーロー組の彼等彼女等の近況を告げる。

「上鳴、峰田……何してんだよ……」

異世界で友人が借金している等と露にも思わなかった兵藤一誠は嘆息と嘆きの籠った呆れの溜め息を吐いた。

「もう返済し終えたか？」

「稼ぎやすいように手助けはしているが、まだまだだ」

「そうか、あいつらでもダンジョンのモンスターを相手に頑張ってるなら安心だ」

兵藤一誠の視線は春姫達にも向けられる。

「妖狐がいるんだな」

「この世界じゃ狐人ルナルって呼ぶんだよ」

「へえ、ルナルか。お前の家族だよな？」

「ああ、手、出すなよ。俺の大切な嫁なんだからな」

「俺には一佳達がいるからするか」

俺の大切な嫁と春姫達は耳をピンと立てて聞き、ほんのりと頬を朱に染める。

「それはそうと、元の世界に送れるのかお前の魔法で」

「ブーストの効果は切れたけど、多分いけると思う」

春姫の魔法は兵藤一誠に説明をしている最中、天使化を解くと少しして一誠に付与された光粒が消えた。行くとすれば異世界に繋げる魔法は発動当時の効果はなくなっているだろう。

「また試してみるがその前にお前は会いに行くんだろ」

「当然だ。一緒に行ってくれるか？」

断る理由はない一誠は首肯して、アマテラス達と別れて街に向かった。

「へえ……」

異世界の人類と冒険者達の都市の街並み感慨深く、都会に初めて来た田舎の人間みたく周囲を見回す兵藤一誠の隣に歩く一誠は鎧を着込んでいる。擦れ違うヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人等を視界に入れつつ一誠の先導の下についていく。

「この世界もファンタステックとはな……」

「しかもフワフワモコモコもいる」

「いい世界だ！」

同じ存在故に好みも共通。好色の目を向ける兵藤一誠の気持ちも分かるので話も合う。

「俺も冒険者になりてえー」

「止めておけ、この世界は俺達にとっていちゃいけないせかいだ」

そんな感じで東の方で構えてる「アルテミス・ファミリア」の本拠に辿り着き扉を強く叩く。そしてしばらくした頃に内側から扉が開きだした。

「はい、って……」

「よう、久し振りだな。えと、ワカメ頭」

緑谷出久です、と初めて一誠に名前を教えたそばかすの少年は横にいるもう一人の兵藤一誠を見て目をパチクリする。魔法で作った若い一誠の分身なのかなと、思い込んで一誠に訪ねた。

「今日はどうしたんですか？」

「こいつをお前らに会わせに来たんだよ。まさか、わからないのか？」

「え?」

そう言われてキョトンとする緑谷はまた兵藤一誠に顔を向ける。注視し続けても解らないと表情を浮かべた少年に呆れの溜め息を吐いた。

「お前らの世界から来たもう一人の俺だぞ」

「……え」

まさかと絶句で見開く目が自分達が知っている兵藤一誠を改めて見直す緑谷の肩に手が置かれる。

「——俺のこと判らないとはなあ……。あの地獄の修行をして判らせる必要があるようだ。なあ、オールマイトマニアの緑谷出久君?」

「ひよ、兵藤くうくうくうくうくうん!」

その日の夜の『幽玄の白天城』では、一誠の計らいで交流ある「ファミリア」や「アルテミス・ファミリア」の主神とその団員達を誘い、皆の前で異世界から引き込んだ兵藤一誠を「アルテミス・ファミリア」に出会わせた事から始めた。知る人が知る「イツセーがもう一人?分身?」と思うだろうが一誠と兵藤一誠は同一人物であり別人であることを本人達や緑谷以外誰も知らない。

「拳藤一佳」

「は、はい?」

こつちに来いと名指しして呼びつける一誠。少女は少し緊張の面持ちで歩み二人の一誠の前に佇んだ。すると一誠が二人から遠ざかって見守る姿勢に何故か入ったので当惑する時、目の前の兵藤一誠が拳藤一佳の頬に手を伸ばして添えた。

「……これが夢だったら物凄く落ち込むところだけど、現実なんだな」

「え……?」

「——こうしてお前を触れ合うのは三年振りになるのか。会いたかったぞ一佳」

「っ!」

この世界にいる一誠には絶対言う筈がない言葉。名前を呼んで抱きしめるこの一誠は……自分達が知っている兵藤一誠であると悟った。

「一誠さん、ですか……?」

「そうでなきや一体誰なんだ? 最高の最初の弟子の拳藤一佳」

もう一人の兵藤一誠が心から笑って、緑谷達の方へ顔を向けた。

「おい爆豪。この世界の人達にヒーロー名みたくヴィラン級のボンバーマンな発言してないだろうな」

「誰がボンバーマンだコラッ!!!……てめえ、兵藤か」

条件反射で言い返した瞬間、何か違和感を覚えた少年が確かめる風に問うた。自分にそんな風に言う男はこの世界にいた一誠ではなく話しかけてきた兵藤一誠が自分達が知る本当の一誠なのかと。

「おうよ、自力じゃないがお前等を会いに俺もこの世界に来てやったぞ。相沢先生、お義父さん、ブラド先生。久しぶりだな」

「ああ……ようやく来てくれたか」

「H A H A H A ツ! 久しぶりだね我が息子一誠よ! 物凄く会いたかったぜ!」

「お前がこの世界に来たというならば俺達も元の世界に帰れるのだな?」

「さあ、それはこの世界にいる俺に訊いてくれ」

肩を竦め大人達から四人の少女に意識を変える。

「お茶子、見ない間にまたふつくらししたか? どうせこの世界でも餅を食っていたんだろ。後で触らせてくれ」

「も、もうっ、うちは太っておらんよっ! 餅も食べてへんし!」

「耳朗、久しぶりだ。三年前より身長が高くなったな。綺麗にもなってる」

「……久しぶり」

「百もそうだ。前よりも強くなっているみたいだな。この世界がそうさせているのか」

「ええ、おかげさまで一誠さんを驚かすぐらい強くなっていますわ」

「茨、無病息災で安心した。お前も他の皆も異世界でどう過ごしてい

るのか不安でしよすがなかつたよ」

「ご心配をおかけしました。でも、あなたとまた再会したこの奇跡は偶然ではありません」

等等どう話していた兵藤一誠は、ワツとヒーロー組の異邦人達に飛び掛かれた。

「兵藤おおおおおおおおおおおっ!!!」

「俺達が知っている兵藤だあああああああ!?!?!」

「うおおおおおおおおおっ!?!」

あつという間に取り囲まれてもみくちやされる兵藤一誠。そんな光景を唾然と見つめるアスナ達は一誠に視線を向ける。

「あのイツセーって、もしかなくても……」

「ああ、あいつらの世界にいたもう一人の俺ごと兵藤一誠だ。俺の魔法はとある魔法と全力でやれば異世界と行き来できるようになった、かもしれない」

「かもしれないってことは、まだ確定ではないのだな」

リヴェリアも話に加わって来て一誠に首を頷かせる。

「まだ一回しか成功していないからな。断言できて確信が持てるようにこれから何度も試す。そうなれば俺達は元の世界に戻れてこの世界にも来れるようになる」

「そうなんだね……あはは、あの子達物凄く喜んではいやいでいるよ……」

「ふんっ、俺と大違いだな。やっぱりあいつらはあいつがいいってことなんだよ」

満面の笑顔を浮かべるヒーロー組の異邦人達と笑い合う兵藤一誠。それが何とも面白くないと不貞腐れる一誠は顔を顰めると……

「私達はお前が一番いいと思ってるぞ」

「んっ!」

「手前もそうだ。この世界でお前と言う男と出会えたから今の手前がいるのだからな」

「そうだね。貴方に助けられた人、貴方のことが好きな人、貴方と過ごした人が、貴方を誰よりも知っているわよイツセー」

リヴェリア、アイズ、アリサ、椿、アスナがそう声を掛けながら微笑みを向ける。レイラ、ラトラ、アミッド、春姫、ユエル、ソシエ、アリシア、アナキティ、フィリア、アルガナ、バーチエ、ベルナス、エルネア、レギン、レイネル、カサンドラ、ダフネもその通りだと視線を一誠に送る、その視線を一身に浴びる男は彼女達の心情を汲んで口端を上げた。再会の喜びを浸ってる彼等彼女等と兵藤一誠を見つめて数分後のことだった。椿がポツリと呟いた。

「二人のイツセーはどっちが強いのだ？」

和気藹々とした雰囲気静寂に包まれ無意識に二人の兵藤一誠は互いを見つめ合う。

「どっちもどっちだよな。俺なんだし」

「力も能力も同じなんだから解り切った結果を求められてもなあ……」

興味もなさげにそう語る当人達だが、

「そんなの決まってるだろ。オイラ達の兵藤の方が一番強いんだ」

「こつちのイツセーが一番」

心底から信用と信頼を預けている外野が自分達の兵藤一誠こそが強いとそうのたまう。無論、意地の張り合いが発展してもおかしくないのだが。

「面倒だから俺達は戦う気はないからな。でもよ」

「そんなに知りたかったら、お前らの体で俺達の強さを知ってもらう必要があるがな」

ゴキリと指の関節を鳴らす一誠が視界に入れる峰田が顔を蒼白する。

「だ、そうだ峰田。体験して来い」

「死ぬに決まってるんだろオツ!?あの兵藤はお前より容赦ないんだ!」

「容赦ないってお前と上鳴が借金したこともか?それは自業自得だろ。つーか、そのことについて後で話し合うからな覚えておけよ」

と言う事だと兵藤一誠は締めくくった。

「ありがとうな。俺もしばらくこの世界に住んでみるけどその間頼めるか」

「問題ないけど、バレるなよ？バラすなよ？」

「分かってる。ダンジョンにモンスターに冒険者、このキーワードだけで理解しているつもりだ」

緑谷達と共に城を後にした。見送った一誠はリヴェリア達の意識を自分に向けさせ視線を一身に集める。

「そんなわけで、俺は異世界と異世界に繋げる魔法を一度だけ成功を果たした」

「そうか、お前も元の世界に帰れるのだな」

「また試してみないことには解らないがな。だが、もしもモノにしてできたなら俺は一度元の世界に帰らせてもらう。そしてまたこの世界に戻る。まだまだ未知の世界をこの目で見てないからな」

そう皆に伝えた時に城を後にしたはずの緑谷達が焦燥の色を浮かべて戻ってきて開口一番に叫んだ。

「兵藤君が消えちゃった！」

「……は？」

事情を教えてもらって直ぐに、消えた兵藤一誠を搜索した結果……。緑谷達の世界で落ち込んでいるもう一人の己の姿を見て何とも言えなくなってしまった。

「おいおい……」

「お願い、もう一度兵藤君を連れて来てくれないかな」

「してもいいけど、また同じことになると思うぞ？というか、今更思っただけだ。同じ世界に同じ人物が二人いちゃいけないんだっただけだ、どうということ？」

「小難しい話だけど、説明するのは面倒臭いが……その世界の歴史を大きく変えることは悪影響に繋がる可能性があるってことだ。タイムパラドックスを起こすとな」

ヒーロー組の多くは何の事だかさっぱり分からないと言った風に怪訝な面持になる。

「歴史は、人間が実際に起こした過去の出来事の集大成。自分達が知っている過去じゃなくなってしまうえば良くも悪くも世界にも影響が出る。だから歴史を変える行為は危険なんだよ。例えば自分自身や

身近な人達が何の影響も出ずともだ」

そう言われても実感しない緑谷達。事の重大さも理解に苦しむ少年少女の顔がハッキリと浮かぶ。説明しても解らないようじゃあ時間を無駄に使うだけだと一誠は話の内容を切り替えた。

「ようやく世界と繋げる可能性が浮上したところだが、まだお前等を元の世界に帰らすのは早いと思う」

「はっ?」

「今日まで世話になった主神アルテミスを路頭に彷徨わせる気か? お前等やキリト達全員が元の世界に帰れば、団員が一人もない零細派閥になってしまうんだ。お前等、恩を仇で返すのがヒーローの義務なのか?」

故に、と一誠は一つ提示した。

「アルテミスに恩を返すために、自分達の主神が困らないようにお前等の代わりに団員を四十人以上、「ファミリア」の財産三千万ヴァリスを用意しろ。それが出来ない限り何年経とうと元の世界に帰らせない。キリト達も同様だからな」

冒険譚 12

「!?」

不思議な夢を見た黒髪の少女カサンドラ。一誠が信用に預ける『予知夢』が発動したことで、彼の身に何か大局を迎えるような起きると分かり教えに向かった。

「.....」

元の世界に戻されたが兵藤一誠を異世界に連れてくることが成功してから翌日。早速異世界へ繋げる魔法の詠唱を唱える。一誠が繋げようとしている異世界は緑谷達の世界だ。魔法【ネオ・ワールド・ドア】は継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来の異なる望む世界へ行き来できる。つまり過去に緑谷達がこの世界に来た時期、二年前に帳尻合わせて元の世界に帰そうと考えた。何度も緑谷達が異世界へ来た時期を探し当てる繰り返しをしてその瞬間を見つけることが出来た。これならばどれだけこの世界にしようとして過去の世界に戻せば、後はもう一人の兵藤一誠に任せるだけだ、と魔法を消したところで扉を叩く音が鳴った。

「イツセー、入るよ?」

亜麻色の髪の女性ことアスナがそう言って入ってきた。何か用かと顔を向ける男に彼女は口唇を動かす。

「何かしてた?」

「緑谷達が来た時期の世界を見つけたところだ。過去に連中を戻せば学生生活も問題なく送れるだろうよ」

後はあいつらがアルテミスのために恩を返すまで待つだけだ、と言ってはばからない一誠の言葉に「あの子達は苦勞の連続だね」と微笑を浮かべるアスナは一つ提案を述べた。

「もう一人のイツセーをこの世界に連れてこれたなら、君も元の世界に帰れるんじゃないかな?」

「可能性はある。が、その為には春姫の魔法が必要だ」

春姫ちゃんの魔法? 獣人の少女の魔法を知らない彼女に「一時的に【ランクアップ】する魔法だ」と噛み砕いて教える一誠の話を聞き目を

丸くして驚嘆する。

「それって、凄くない？」

「ダンジョンの中では起死回生の魔法だ。野心を抱いている冒険者だったら誰もが誘拐してでも欲しがる。だから春姫の魔法はアマテラスとイザナギ、イザナミと俺にユエルとソシエだけしか知られていない。フィン達に教えても問題ないけど一応な」

そんな話を切りだしてきたアスナの意図を読もうと彼女の目を真っ直ぐ見て問うた。

「俺の世界に行ってみたいのか？」

「できたら、と思ってるよ。できるなら家族に会って安心させた方が良いと思うし」

「ユウキにも会えるもんな」

アスナが憧憬を抱いている目的の人物の名を出せば、彼女の顔に苦い笑みが浮かぶ。一誠が元の世界に行けるならば自分も会いたい人も会えるから、早くそうして欲しいと思っっているのを勘繰られてしまった。催促、促しに来たように感じられたのをアスナはちよつと申し訳なきそうに居心地が悪くなった。

「えっと、ユウキの事もそうだけど私は……」

「分かってるよ。お互い同じ世界で会いたい人がいる。だから会いたい気持ちは分かっているつもりだ」

「うん……ごめんね？変な風に思わせちゃって」

「ていうか、アスナに限った話じゃないぞ。俺達が異世界に行こうとしたら他の連中も自分達も連れていけ！って言いそうだからなあ」

それ以前にリヴェリアやアイス、アリサには自分の世界に連れていく口約束もしている手前。十中八九他の神々や冒険者もついてくること間違いないだろう。「あー」とアスナもこの世界の神々の個性を知っているつもりでそんな想像は浮かべるのに難しくなかった。

「興味持っていたもんね。特にガネーシヤ様が」

「目を離しちゃいけないのは間違はなくあの五月蠅い神だ。ぜってえー自己主張のし過ぎで不神者扱いされるからな」

「うん……」

連れていくとしたら嚴重な注意をしておかなければ。と二人は思わずそう考えた気持ちの一つになったのを露にも知らない。

「今日はイツセー休みだからどこにも行かないの？」

「うんや、『水の都』に行く予定だ」

「アイテムを取りに？」

「あのモンスターに会いに行く。ま、会ったところで逃げられてしまおうだろうから餌を釣って接触するつもりだ」

一緒に来るか？と誘う男に女は首をひとつ頷いた。アスナが仕度をしに部屋へ戻りにこの場を後にしたところで、入れ違うようにカサンドラが入ってきた。

「お、カサンドラ。初めて入ってきたな。どうした？」

「あ、あの……夢を見ました。それを教えに……」

おずおずと己の見た夢を信じると言ってくれた者に打ち明けて来た少女を真摯に聞く姿勢として視線を合うように跪いた。そして彼女から告げられる夢の内容はとある階層でエルフの身に惨劇が起きるものだった。

「何時来ても凄い滝だね。ナイアガラの滝みたいだよ」

仕度を整えた一誠とアスナは25階層に赴いていた。『水の都』に足を踏み入れ感想を述べる女性を横抱きに抱えて何の躊躇もなく轟然と音を奏でる、莫大な量の緑玉蒼色の水の滝、『巨蒼の滝』と共に崖から落ちて、滝壺から更に瀑布が下へと続いているところへ落下しつつ襲ってくる半人半鳥や歌人鳥といった有翼モンスター等を一蹴。あつという間に水晶の岸边、水晶の谷、水晶の崖と全て蒼水晶で形作られている場所へと降り立った。唯一の植物は青白い花卉を落とす蒼桜だ。

その場所で背負っていたバックパックから大量の木材と調理器具、調味料に魚を取り出して二人は調理を始め出した。簡易式の折り畳みの台を設置し捌いた魚を調味料で味付け、アルミホイルの中に包んだら口から吐いた火炎で燃え盛る焚火の中に放り込む。捌いた魚の一つ、切り身に塩・胡椒を振って少し置き水気を拭き取る。そのあと小麦粉を薄く付けたら熱したフライパンの上に置いて焼く。それら

が終わるとまだ残っている魚を『オリハルコン』、不壊武器デユランダの材料にもなる、超硬金属アダマントを超えた最硬精製金属マスタート・インゴットの串で刺して焚火の周囲の水晶に突き刺した。この光景を見た冒険者がいたら愕然とし、『世界最硬の超希少金属』を串に製作した一誠に鍛冶師スミス達は悲鳴と罵声を上げるだろう。しかも調理器具も全てダンジョン用に超希少金属で製作したのだから尚更だ。事実、『ロキ・ファミリア』の遠征で付き添った際にも使ったので知ったフィン達は微妙な面持ちになったほどだ。そんな代物で調理した魚達は「上手に焼きましたー」と幻聴と共に出来上がった。香ばしい食欲をそそる匂いを漂わせるそれらを皿に盛って水辺の近くに置きだした。そして使った道具を片付けて静かに去る。自分が何時までもいたら『彼女』が出て来れないからだ。大瀑布の轟音だけが支配する水晶の場にその後、完全に人が無くなったところで揺れる水面から一つの影が現れた。一見人影のように見えるが、下半身へ視線をずらせばすりとした魚の尾鰭がついていた。モンスターだ。モンスターは置かれた魚の料理に目を落とし、周囲に誰もいないか確認した後、串焼きされた魚を手にしてかぶりついた。

暖かな料理を口にして喜色満面の笑みを浮かべる異形は、美味しいと下半身の尾鰭をバタバタと動かした。モンスターに人類の料理の味なんて解る筈がないと思われてる筈だが、その常識を覆された瞬間をこっそりと水晶の崖から見守っていた一誠が口元を緩めてた。全てを食べ終えるまで観察という名目で見守っていたが、そう問屋は卸してはくれなかった。突然、『水の都』全体が激震するほどの大爆発の音が生じた。一誠は瞳を見開かせ、眼下にいたモンスターは肩を跳ね上がらせて水中へと逃げ込んでしまった（完食の後）。立った一度きりの爆発かと思えば、断続的な連鎖で爆発の音が聞こえてくる。このダンジョンの中で何が？と思つた矢先に——ダンジョンが、哭いた。

「な、なに……?」

怪物モンスターを産む亀裂音ではない。異常事態イレギュラーを巻き起こす地震まえばれでもない。

比喩ではなく、哭いている。とてつもない無機的な高音域。まるで引き絞った銀の弦に刃を走らせたかのような、鼓膜を貫く甲高い音響。もしも女性が、世界そのものに匹敵するほど大きくなったら上げるような、そんな声域ソプラノの音。本能が真つ赤に明滅するほど、それは確かに、途轍もない迷宮なにかが『哭く声』だった。だったが、不自然なまでにその哭く声音が止んだ。嵐の前触れの様に。一誠の中でその感じが不穏と嫌な予感が湧きあがって探知したところ。見知った気を持つ者達と見知らぬ者達が『水の都』の奥深くにいる事が解り、この爆発は人為的な原因であると推測して直ぐにアスナと行動を移した。しかし、先の爆発の影響とその余波でか水晶の壁面が吹き飛んでいて、床も爆ぜて、天井が落盤していて、秩序を失った水流が氾濫してした。ここまで爆発の影響が及んでいたのかと消去法として魔力の砲撃を行い、壁や床に貫通してできた穴から移動する。見知った気を感じさせる者達のところに辿り着いたのは手間取った故に数分も掛ってしまった。その数分間の間で目の前の地獄絵図が出来上がってしまった。た。

見た事が無いモンスターがその爪で赤髪の女冒険者の肢体を貫ぬき、血濡れの妖精エルフが空色の瞳を涙で濡らして叫んでいた。水晶の広間ルームを一瞬で一瞥する。既に肉塊となり果てた女冒険者と一人の獣人を残して死んでいる男の冒険者達が血の池に沈んでいてその元凶を起こしたモンスターが目の前にいる。

「——っ」

何時死んでもおかしくない死と隣り合わせの冒険者。冒険者はそれを同意の上でモンスターの巣窟に冒険をしているのだから同情はするつもりはない。ただ、目の前で知り合いが殺され殺されかけているのに黙って見過ごすほど薄情者ではなかった。寧ろもつと速く駆けつけられていたらだったと悔やみ、

「おおおおおおおおおおおおおおおおおっ
!!!!!!」

「!?」

「!!」

全身を纏う雷の速度で未知のモンスターの眼前に飛び込み殴り飛

ばした。水晶の壁面を破砕しながら激突した怪物とそうさせた存在を睽目するエルフの女性は口にした。

「イツセー……さん……さん……？」

「まだ絶望するな、リユー」

「!？」

「まだ悲観に打ち震えるな。まだこの惨劇に嘆くな」

希望を見出させるような言葉を紡ぎ続ける分身体。エルフの女性、リユー・リオンは胸の奥が熱い何かに満たされる。それは何なのかまだ理解できないが。

「まだ希望は残っている。お前の仲間を甦らせることができるんだからな」

「っ……」

「だから少しだけ待っている。——直ぐに終わらせる」

絶望の暗雲を切り裂く暖かな希望の光が彼女に降り注いだことは確かだった。アスナにリユーを任せて前方を睥睨すると、がらりと水晶の破片を落とす未知のモンスター。顔の頬だったと思しき部分は大きく砕けていて、二つ空いた眼窩の一つと広がっていた。全貌は水晶の灯りによって照らされて確認できる。59階層以上の更に下の深層まで進出している一誠でも知らないモンスターの体軀は、細く、巨大だった。二腕二足。腕はその巨軀に似合わないほど、不気味なほど細長い。同じく細長い脚の構造は逆関節となっていた。驚くべき事に肉は無いに等しく、骨ばった体を覆うのは一見装甲よろいにも見える『殻』で、不思議な紫紺の輝きを薄らと纏っている。腰から伸びるのは四Mはある硬質な尾だ。複雑な突起が備わる頭部も獣の骸骨そのもので、殴られて砕け散って繋がった眼窩も含めその奥に宿るのは血の如き真紅の光だった。分身体の髪と似て異なる色濃く、毒々しい。『鎧を纏った恐竜の化石』。形容するとしたら、そのような全貌。それは無数のモンスターが棲息するダンジョンの中でも、明らかな『異種』であった。全てを貫かんとする最も異彩を放つのは牙と見紛うような足の『爪』。六本ある細い指先で、大きさの釣り合いが取れないそれは、深紫の輝きを湛えている。その足爪で体高三Mの大型級の体を起

こして『敵』を睥睨する。

「……やっぱりギルドに載っているモンスターの凶鑑にはないモンスターだな。新種か？」

「気を付けてください。あのモンスターは魔法を跳ね返します！ 貴方の、異世界の魔法ですら通用するかわかりません！」

「へえ、興味深いな。だったら試してやる」

前方に手を掲げ集束、軽く圧縮した魔力を放った。真紅の魔力が炸裂する寸前、無言で相對する未知のモンスターは、紫紺の『殻』に包まれた体を発光させた。直後。分身体の体に、魔力の塊が跳ね返された。

「面白〜」

己の魔力を横薙ぎに振るった腕で明後日の方角へ弾き、爆発して舞う水晶の破片を尻目に笑みを浮かべる。今も薄らと発光する敵の装甲殻。鋭く禍々しい怪物の『殻』は、魔力弾が接触したと思われる腹部に波紋を広げながら、傷一つついていなかった。それ故に物珍しさと興味津々で口端を吊り上げた。

「そーいう自慢や自負する能力を打ち破りたくなるんだよな」

幾重の魔方陣が水晶の広間ルーム中に発現していく。そして一つの魔方陣から撃ち出される火炎球に再び『殻』を発光させた。当然の結果として跳ね返すが別の方角から魔法が放たれる。足元にも浮かび上がる魔方陣。

「さーて、その自慢の『魔法反射マジック・リフレクション』。どこまで跳ね返せれるか実験といこうか」

永続的に放たれる魔力の砲撃。魔法を反射するにしても限度がある筈だと踏んでいる。絶え間もなく魔法を放ち続ければ反射はし切れないことを認知している。どの世界にでも完璧や絶対など存在しないのだから。

『!?!?』

反射しても反射しきれない。全身を抑えつける足元の魔法陣の重圧に縛られ、身動きが取れない。反射しても己を取り囲む別の魔方陣が防いで敵に直撃する事はない。永遠に続くかと思われる魔力の砲

撃を浴びるモンスターは産まれてから初めて戸惑った。更に威力が増した砲撃を全身で実感し、とうとう地面に押し潰される形で平伏したモンスターの前に分身体が立った。

「また出会う時は、今度はゆっくりと戦ってみたいもんだな」

そうも言われてられない状況であるので化石のような頭部に手を触れて氷の中に閉じ込めた。殆ど戦いにもならない結果で勝ってリユーを救った後に、様々な準備を整えてから「アストレア・ファミリア」の団員アリーゼ達の蘇生を始めた――。

「で――これが魔法を反射するモンスターなんだね」

城の中で未知のモンスターをフィン達に見せつける。何か知っていないかと思つて問うたがフィンとオツタルは揃つて見聞したことが無いと言う。

「アストレア・ファミリア」をほぼ全滅にしたモンスター、魔法を反射するこの『殻』もイツセーの魔法ですら跳ね返す。潜在能力はLv.4から5に匹敵するかもしれないね」

「リユーの話によれば、このモンスター意外と速いそうだぞ。しかも魔石が無いときた」

「魔石が無いだと？そんなモンスターは聞いたことが無い」

リヴェリアが怪訝な目で氷の中のモンスターを見つめる。骨と『殻』のみのモンスターにでも魔石があってもおかしくない。モンスターの核は魔石なのだからその核がなければモンスターは活動できないのが常識だ。伸ばしている顎髭を擦るガレスもにわかになんか信じ難いとした思いを顔に出す。

「実際に調べてみるか？」

「どうやって？」

「臨戦態勢をしておけよ。一応、死んでいると思うけどな」

モンスターを氷漬けにしたその氷を魔法の炎で溶かし始める一誠にフィン達は構える。氷が完全に溶けだしても未知のモンスターは動く気配はない。念のために虚空から鎖を出して四肢を縛ろうとした瞬間。眼窩の奥の真紅の瞳が瞼を開いた様に見えだし、足爪を一誠

に突き出した。不意を突いた奇襲の一撃のつもりだったが、足爪の先を掴んで防がれて失敗に終えてしまう。

「とんでもない生命力だな。やっぱり生きてたか」

『——ハア』

バツとあつという間に距離を置いて対峙する敵にフィン達は目を張る。その動き、その俊敏さは今まで狩ってきたモンスター達と一線を超え、凌駕している。

「フィン達でも手に余るか？」

「ノー、戦って見ない事には何ともね」

「じゃ、倒していいからやってみてくれ」

「いいじやろう。リヴェリアを頼んだぞい」

素手喧嘩であるが、負ける気はしない第一級冒険者の二人と参戦する気のおツタルが敵へと飛び掛かった。

——結論を言おう。圧勝過ぎた。

「このモンスター、かなり速かったけれど防御力が極端すぎるほど低いわい」

「牙と足、尻尾さえ気を付ければ攻略可能だ」

「二人に同感だよイツセー」

原形をあまり留めておらず、三人によって粉々に砕かれて倒された未知のモンスター。ドロップアイテムと思しき『殻』がそのまま残っていたが、フィン達からすれば一人でも倒し退けれる程度だった。

「第二級冒険者以下の者達にとって厄災か……魔法が通用しないのでは私一人であつたら厳しい戦いになっていただろう」

「そうになると、その冒険者にとって絶望、破壊者……」

「勝手に名付けさせてもらうなら、さしずめ【ジャガーノート】ってところかな？」

リヴェリアの推測に一誠の指摘からフィンは未知のモンスターの事をそう呼称した。

「まあ、こいつが何であれ好いドロップアイテムを手に入れた。魔法を反射する『殻』を用いて防具でも作ろうかな」

嬉々として紫紺の『殻』を回収し始める一誠の背中からガレスはリクエストを求めた。

「であればもしもの為に盾を作ってくれぬか？」

「盾の素材は不壊属性オリハルコンにするつもりだけど？」

「お前、またとんでもないもんを作る気でいたのか……」

全魔導師に対する最強の盾を作る気満々の男に止めることはできない。『殻』を回収して工房に保管した後、在る部屋へと向かう。その部屋の中には女神アストレアとリユーに甦ったアリーゼ達「アストレア・ファミリア」の団員、そしてベッドの中で横たわってるもう一人の自分オリジナルと傍にいるアスナ。

「オリジナル、ドロップアイテムは工房に置いといたからな」

「おう、ありがとうな」

フィン達と一緒にいた一誠が音もなく消失して残された一誠が息を吐く。

「イツセー、また一週間も寝込む生活をするんだね」

「しゃーないだろ。そういう対価なんだから。それを気にするなって言ってるのにこの「ファミリア」は……」

「神アストレア達が？」

自分達がいけない間に何を話し合っていたのだろうか、辟易している男に小首を傾げ不思議そうに目を向ける。アスナが代弁する形で口を開いた。

「イツセーが命を削って甦らせたから、神アストレアとリユーが、団員と友人を甦らせてくれた恩を返すために「アストレア・ファミリア」総意で全てを捧げ一生尽くすって」

なるほど……一派閥の総意の覚悟を大袈裟だと思つて拒んでいる一誠に、既に固めた意思を変えない意固地アストレア達にほとほと困っていると。

「必要がないって言っているんだ。そんなことするぐらいならオラリオの平和と治安を守ってほしいって言っているぐらいだぞ」

「それだけで私の子供の命を甦らせ「ファミリア」を救ってくれた恩は返しきれるとは思えません」

「お前等が律儀で義理堅いってのはもう分かったから。『ありがとう』の一言を貰えば十分なんだよこっちは」

「貴方が満足しても私達が満足しません。できないのです。貴方は二度も【アストレア・ファミリア】を助けてくれた恩人なのだからそれ相応のお礼がしたいのです」

平行線ばかりが続き「これが現状なんです」と言いたげなアスナにフィンとガレス、リヴェリアはどうしたものかと話にすら加われず、完全に蚊帳の外、外野側として立たされている自分達は何のフォロームでできずにいたところで、扉が開く音が鳴った。

「……………」

アマテラスと仮面を付けたイザナミにフレイヤが顔だけを出してイザナミが手を招く仕草をする。自分の事か？とアストレアが自身に指させば、首肯する極東の女神へ近寄ると部屋から連れ出されて一分後。

「後日、また改めて伺います」

それだけを言い残してアストレアはアリーゼ達と帰ってしまった。急な態度に胡乱気となるが一先ず話しが保留となったので落ち着く事が出来た。

「どうしたんだろうね？」

「神の考える事は分からないのが常識だからな」

「ハ、ハハハ……………」

少し辛辣な神へ送る言葉にアスナは苦笑いするしかなかった。同感と心中で思ったフィン達だったが一誠とアスナは知る由もなく、死者を蘇生して寝込んでからあつという間に六日目が過ぎた深夜。今まで身体を重ねてきた女神や女性達が一糸纏わぬ姿で男に迫り、アスナやアリシア、アナキティはともかく——ラトラ、フィリラ、六人の女戦士^{アマソネス}、春姫、ユエルにソシエ、カサンドラ、ダフネ、【アストレア・ファミリア】までも巻きこもうとしていることに目を大きく見開かせる。何故彼女達までここにいと主神に問い詰めて、そうこうしている内にイザナミが何やら怪しげなお香を立て始めた。同時にアマテラスが液体が入った瓶を取り出しそれを含むと、アルガナ達に身体を

拘束された一誠に口移しをした。

「イザナギが持つてきた媚薬&精力剤よ。前回の五倍の効能があるそうだから……全力で私達を久しぶりに抱いてね」

「因みに、私達全員それ飲んだ」

「あ、阿呆かあああああああああああつ!?!」

自分の意思と反して全身が昂るだけでなく、お香もただのお香ではないようで彼女達の目が熱で浮いた様に潤い頬を紅潮していた。二の舞にならないよう警戒していたつもりが、理性が千切れてあっさりとまだ幼いラトラ達まで手を出す始末。そして「アストレア・ファミリア」の主神と一部の女性団員達の純潔を奪いながら、優しくその身に甘美で地獄のような天国の快感を骨の髄まで覚え染み込ませたのだった。数時間後、死屍累々とは異なる凄まじい情事後が周囲に散らばって晒している最中でも、未だに体力がある者は一誠と身体を重ねて艶やかな表情で激しく快楽を貪っていた。

「……………アスナ、アリシア、アナキティ。またごめん」

「……………私達つて流れやすいんだね……………」

「……………もう吹っ切れるしかないでしょう」

「……………うん、そうだよね……………」

今の今まで立って見ていただけの女性や少女達も交じり、結局一誠だけ残して全員が体力を使い切って深い眠りに落ちたのだが、こんなことになってしまった原因——最後の闇派閥イルヴァイスの砦……「ルドラ・ファミリア」に八つ当たりに行こうと決意した。有言実行——その日、一人の男が数多の魔道具マジックアイテムを駆使して一つの「ファミリア」を壊滅にした。それだけ飽き足らず彼の組織に関与し者や関係を持った者等を探し出して捕らえ続けた。全て捕らえ終えるとギルド本部の前に『闇派閥イルヴァイスと関わりある愉快な仲間達』と書かれた立て札を設置して城に戻った。その中に癒着していたギルドの職員もいたことでギルドは驚きを隠せなかった。だが生きのまま捕縛したとはいえ敵に与する商人、冒険者、更にギルドの職員まで手を出した一誠に罰せられずにはいられない身となってしまうた。恨みを覚えた様々な者達から懸賞金を掛けられてしまっているのだ。都市の秩序安寧ギルドに自分達

と協力して来た異邦人に組織として最低限で最大限の体裁を繕う為に、冒険者の地位を剥奪し要注意人物一覧にも登録する等処理を行った。その際、赤髪の狼ウエアウルフ人の職員と豪遊して肥え太ったエルフのギルド長が頭を抱えている事を当の本人は知らない。

「ん？俺が指名手配されてた？」

何十人も女を抱いた二日後。『異世界食堂』で働いていた時に、一人の客から恐る恐ると情報を教えてくれた。

「あ、ああ・・・びつくりしたぜ。最初見間違いかと思ったけどよ紛れもなく店主の似顔絵だったし懸賞金も掛けられていたんだ。何かの間違いだとギルドの職員に尋ねたら事実だって言われてよ。店主、何したんだよ？」

「さあ、悪事を働いた覚えはないんだがな・・・」

「だ、だよな？店主が大量殺人でもしないかぎりあんな高い懸賞金なんて掛けられねえよ」

心底身に覚えが無いと答えると、ホツと安堵で笑みを浮かべる客の一言が気になって店主は注文を受けて作った料理を置きながら訊く。

「俺、いくらだったんだ？」

「八千万ヴアリス」

「あらま、意外と高額だな。今なら俺を捕まえたらその金額を手に入られるぞお客さん」

挑発する笑みを浮かべながら指摘の言葉を送られる客は、千切れんばかりに首を横に振って否定する意思を示す。

「まあ、そんな事になっているとしたらこの店を閉店するしかないか。要注意人物一覧ブラックリストに載って指名手配されている輩の料理なんて恐ろしくて食べたもんじゃないだろうし」

その一言は店主の言葉が聞こえた客達だけ反応して、嘘だろう、本当にする気かと目を見開いて彼の真紅の長髪の男へ一斉に目を向けた。中には信じられないと席を立ち上がって驚いている客もいた。

「冗談じゃろ店主！この店の料理を食べなくなるんならば、ワシは一体何を生き甲斐に生きればええんじゃ!？」

「そうだぞ。仮に店主が悪人であろうと料理にも罪が無い」

「きつと何かの手違いだから気にせずお店を開き続けてちょうだい！」

「食えたもんじやないなんて思っ
てないぞ！滅茶苦茶美味い飯じやないか！」

「考え直せ店主！俺達の胃袋の為にい！」

『異世界食堂』がなくなつちやたら他の店で食う料理が不味く感じ
てしようがなくなるじやないかよ！」

悪人でもいいから店を閉じるな！という常連客の意見も聞こえ始め、「え、悪人でもいいのかよ」と店主を当惑させた。そのせいか奥の席に座っていた客達へも伝播してしまい、声援を送られてしまいますます騒ぎの收拾がつかなくなつてしまひ——。

「失礼しますよ店主」

何時ぞやの商人と小姓が現れた。だが、客達は店主に夢中で二人の存在に気づかず店主もそれどころではないと気付かず、数分間蚊帳の外に立たされたことで。

「私を無視するとは言い度胸です
ねこの犯罪者の男が！」

『あああつ！今なん言つたピ——があつ！』

『そのタマ潰したろうかアアンツ！』

店主を犯罪者呼ばわりをしたことで鬼の形相を浮かべる客達の威圧と睨みに圧倒された。あ、ようやく收拾できそうだとこの好機を逃さず店主は話に応じた。

「飯でも食べに来たのか？」

「ふ、ふんつ、違いますよ。要注
意人物一覽ブラックリストに載つた貴方向けの面白い催しの参加の誘いに来た
だけです」

「催しの誘い？」

なんだそれ、とゴミアンが持っていた羊皮紙をバツと見せつけてきた。それに記された内容が……一言で言えば料理大会であった。何も顧みず闇派閥イルヴィスの残り滓を潰して犯罪者となつた貴方にも『バツカスホーフ商会』主催の料理大会の誘いをしに来たのですよ。都市にようやく平和が訪れた記念に一つ、オラリオを巻き込んだ楽しい催しでもしようかと私自ら事案をしたのです。オラリオの中でどの料理

が美味であるか決める大会をね」

『「異世界食堂」に決まってるだろ。何考えてんだよ?』

「外野は黙っていなさい! どうしますか店主。勿論、料理店を構える店の主として参加しますよねえ? 何よりこの私の誘いを断ればこの店と店主の風評はガタ落ちの一途を送ることになりますよ? 何せあなたは犯罪者ですからねえ」

くくく、といやらしい笑みを浮かべ軽く脅しめいた言葉を述べる。相手に弱味が出来てそれを握っている自分の優位の優越感を浸れているからだ。これを機にオラリオ三大商会の一つ「ヴァベル・ファミリア」の後ろ盾があるこの店をちよっかいを掛けられるのだから楽しいに決まっている。もしも料理大会に参加したら――。

「一つ聞くが、仮に『異世界食堂』が優勝したり敗北したらお前の商会の傘下に入るなんてことはないよな?」

「っ……」

「沈黙は是と受け取らせてもらおう」

却下だ、と参加を断る店主がバツカスホーフの大会の裏を見抜いた。まさか、こうも早く己の画策を気付かれるとは思ひもしなかった。彼は拳を握り張り叫ぶ。

「要注意人物一覧ブラックリストに載っている貴方にこのオラリオに居場所なんてどこにもありませんよ! 八千万の高額の懸賞金を狙い欲する輩はいくらでもいるのですからね!」

「お前もその一人なのかな?」

「ふんっ、危険を冒してまで大金を得たいとは思いませんよ! 私は安全で効率よく利益を得る方が性に合うのですから!」

精々その背中が刺されないことを気を付けるのですね! とマントを翻して小姓と店を後にしたバツケスホーフ。

「よし、本当にそんな大会をするなら『異世界食堂』も参加してみようかな」

『えっ?』

誘いを拒んだ手前なのに手の平を返すような発言をした店主に誰もが目を丸くする、

「店主、本当に参加する気なのか？さつき言ってた事が本当だったら」「ないない、ここにいる全員に露見されてしまったからにはそうすることはできないさ。仮にもしも本当にそうするきでいたら、三大商会や「フレイヤ・ファミリア」や他の「ファミリア」が黙っちゃいない」それに、と店主は微笑んで述べた。

「この店を支持してくれるお前等客達がいてこそ『異世界食堂』があるようなもんさ。食べに来てくれて本当に感謝してるよ」

『で、店主……っ』

ジーン……と感動を覚える客達は絶対この店と店主を見捨てないぞ、と決意を胸に秘めた。

「さあさあ、席に座って食事の続きをしてくれ。せっかく作った料理が不味くなるじゃないか」

店主の催促を受け客達は笑って席に着き、ざわめきと喧騒が満ちた店の風景に戻ったことで店員達も仕事を再開する。

冒険譚13

「ロキ・ファミリア」のホーム『黄昏の館』の修復が完全に終わり、静養で『幽玄の白天城』に住んでいたロキの女性団員達が身支度を整え始める。この城に住み慣れてしまい名残惜しそうに会話を交わし合う団員達。アリシアとアナキティもそうしている時に部屋に入ってきたリヴェリアから指名された。何だろうと部屋の廊下に出た時に訊ねられた。

「お前達が良ければこの城に留まっても構わない」

「え？元のホームに住まわなくてもいいって事ですかリヴェリア様」

「イツセーはその気になればこの城から直接ホームに異世界の魔法で繋げることができるからな。逆も然りだ。お前達の意味次第でイツセーに頼むつもりだが」

そんなこともできるのか、知らなかった二人は顔を見合わせてまた視線をリヴェリアに戻した。

「この事ロキには？」

「まだ言っていないが、あのロキの事だ。イツセーに恩を感じている限りお前達がこの城に住みたいと言えば強く反対はしないだろう」

「リヴェリア様はこれからもずっとこの城に住み続けるおつもりですか？」

「ああ、最初はアイズだけを住まわせまいと一緒に同居をさせてもらっていたが今では、な」

身体を重ね合うほど深い絆、愛し合う関係となっているリヴェリアは「ファミリア」の雑務や『遠征』ではない限りこの城に居座っている事が多い。夜となれば毎日愛と快楽を貪り合うほどに。

「どうする。これは強制的ではないから遠慮しても構わないがお前達の気持ち次第だ」

「……なら、私は残りたいと思います。彼には色々と、その、責任を取ってほしいですから」

「あはは、すっかり骨抜きされちゃってるねアリシア。リヴェリア、可能だったら私もこの城に住んでみたいと思ってた。料理もお風呂も

こっちのほう为好過ぎて、アリシアと同じでイツセーには責任を取ってほしいから」

「ふっ、ああ、それについては私も同感だ」

一誠の知らないところで新たな同棲が増えた。そして女性団員達が二人を残して城の主に一人一人感謝の言葉を送ってロキと一緒に北の方へと向かって——擦れ違うようにして荷物を抱える女性の一団が現れた。

「[アストレア・ファミリア]？」

「急に押し掛けるような形ですが、私達も貴方の城に住むことに決めました。どうか今後ともよろしくお願いします」

「.....」

「また.....私達を愛して下さいね」

一難去つてまた一難みたいな感じで『幽玄の白天城』に新たな一団が同棲をしに来た。それを後で知ったとある女神達は羨望するが、『ファミリア』を抜け出して住めれないので残念がっていたのは別の話。

.....
.....

「依頼？また？」

『賞金稼ぎ』の生業をしているルノア・ファウスト（十七歳）は辟易に似た呆れさを隠さず漏らした。

「何でか知らないけど『異世界食堂』の店主が暴れ回って、闇派閥イルヴァイスの残り滓も壊滅したんでしょう？勢力争いなんて終わったんじゃないの？」

ルノアがいるのは場末も場末の酒場であった。路地裏の地下の階段をもぐった先、薄暗い店内で軽く見渡せばいかにもといったデミ・ヒューマン亜人達が密談を交わしている。『依頼』を受け取る時、何時もこの酒場を利用していた。『異世界食堂』とは比べるまでもないあまり良いたとは言えない酒を飲んで（メンチカツもないし※これ重要）。

「その『異世界食堂』の店主が、今度の標的だ」

愛用している口元を隠す防寒着を巻いた彼女の対面にいるのは商人の男だった。『賞金稼ぎ』を生業にしている裏の界限で『黒拳』なんて呼ばれてる私にこの商人はルノアの力に目を付けてからというもの、他の客の仲介までこなして依頼を持つてくるありがた迷惑な取引先だ。

「はあ？冗談よしてよ。相手がどこの「ファミリア」に所属しているのかわからないわけないでしょ。こつちが殺されるつての」

その意義の声を無視して商人は、前金が詰まった小袋を卓上に置いた。

「奴の今回の騒動で、我々の息がかかった配下にも被害が及んでいる。ひいては、我らブルーノ商会が闇派閥と繋がっていた事もバレたかも知れん。明るみになる前に、必ず消せ」

「あつ、ちよつと……！」

言い含めるように告げ、返事を待たず、椅子から立ち上がる。依頼人が酒場から出ていった後、重い溜息をついた。

「……そりや、報酬がもらえるなら誰でも仕留めてやる、つて言うたけどさ。よりにもよつてあの店主かあ……二重の意味でやり辛いなあ……」

店主本人と店主のバックにいる派閥に手を出したくない意味で。憂鬱に暮れるルノアは腕っ節の強さだけでここまでやってきた。手っ取り早い生計の為に、賞金首どもを張り倒しては勝ち続けてきた。だが、彼女はそろそろ疲れていた。

「オラリオの冒険者、ちよつと強過ぎるよ……」

この迷宮都市の冒険者達は、ある一定の境界を超えると、桁違いに強くなる。依頼の達成率ほぼ十割のルノアでも、第二級以上の冒険者相手は苦戦が必須であった。第一級冒険者などそれこそ速攻で断る脅威度である。まさしく、オラリオは人外魔境であった。来る日も来る日も戦いの毎日。死ぬ気となって標的を撃破すれば、余計にな広まり、依頼が舞い込んでくる悪循環。神経は日に日にすり減っていく。最初気に入っていたこの酒場の蜂蜜酒も、今ではすっかり美味しく感

じなくなってしまうた。

「あく。もう何か疲れたし、どつかに身を落ち着けたいなあ。カツコ良くなくていいから、気を使ってくれる亭主とか見つけて、狭い家でゴロゴロして……」

ルノア・ファウスト（十七歳）。枯れた発言をするうら若きヒューマンの少女は、天井を見上げながらこぼした。

「賞金稼ぎ、もう止めようかなあ」

……
……
……

「やっと来た。人を待たせて今度はどんな依頼なのよ。てか、今月で何人目？」

蒼い夜空に浮かぶ満月の光は闇に包まれたオラリオを照らす中、忘れ去られた鐘楼の、もう鳴ることのない大鐘が天井からぶら下がり、静謐な月光がアーチからそそがれている。とある『依頼』を受け取る時、指定する待合場所の一つだった。その場所には二人の男女が密談を交わしていた。

目を隠すフード——獣人の種族の象徴たる耳を隠すことによつて二つの山ができているものの、夜風でフードがぱさつとあおられて——黒い猫耳が表になる。落ち合う場所に指定の時間が過ぎてからやってきた相手に対して少々機嫌が斜めとなつて不満げに顔を顰めた。遅れてきた相手と対峙しているのは、とある商会の男ドワーフだった。何かと敵が多く、同時に欲深くもあり、金の臭いを嗅ぎ取っては依頼を持ち寄ってくる取引先である。

「まあ、見合つた報酬さえ用意してくれば、仕事はこなすけど」

「ああ、勿論だ。今回暗殺を頼みたいのは、あの『異世界食堂』の店主だ」

ぴくつ、と猫耳が動いた。

「何であの店主に？なんて聞くのは野暮よね」

「ああ。今やあいつも一級のお尋ね者だ。首に掛けられている懸賞金

は八千万。この額の賞金額なんてそうはいねえ。他の奴に出し抜かれる前に俺達が頂くんのだ」

「もう情報とか集めてるんでしょ。だったら教えるか私によこして」

その小振りな唇が邪で薄ら寒い三日月を描く。

「そ、そうか。お前がそう言ってくれると信じてた。じゃあ『黒猫』、賞金は山分けってことで——」

「前金は四〇〇〇万。報酬金の取り分は、こっちが七割」

男の言葉を遮って、ぴしゃりと叩きつける。ドワーフの商人はにわかにはうろたえた。せめてと報酬金の取り分を訂正したが相手は頑として譲らない。暗殺者の脅しで結局、取り分の変更は叶わず『異世界食堂』の店主の情報が載っている羊皮紙を押し付けて逃げる様に彼女から立ち去った。

「……ちよろいもんニヤ〜」

一人になった後、口調をがらりと変えた少女は、盛大に嘆息した。「歯ごたえがなさ過ぎて興ざめニヤア……いつそ依頼を持ち帰ってくれた方がよかつたのにニヤ。でもなあ……」

彼女は暗殺の腕だけでここまでのし上がってきた。生業が生業だ。舐められぬよう営業用の仮面まで被って、闇の仕事に身を投じてきた。だが、彼女はいいよ疲れていた。

「今回の依頼の報酬金がいんだけど、迷宮都市で暗殺なんてもう割に合わないニヤ〜。せつかく稼いだ金も、次の前準備でほとんど消し飛ぶニヤ〜」

暗殺の達成率はほぼ十割の少女にとっても、オラリオの冒険者は強過ぎる。念入りに暗殺の準備をするだけで報酬がかき消えるほどに。一度、第二級冒険者を仕留めてしまったのが運の尽き。増えていく依頼は難題ばかりで、苦勞して墓標を築き上げる度に、すぐに新たな棺を要求される。毛繕いを怠っていなかった自慢の尻尾の毛並みも、今ではすっかり荒れてしまっている。

「あく。もう美少年を侍らせた優雅な生活を送りたいニヤ〜。おへそやお尻を撫で回して、胸をキュンキュンさせながらこの世の極楽を満喫したいニヤ〜」

——クロエ・ロロ。この時十七歳。

欲にまみれたうら若き猫^{キャット・ビープル} 人の少女は、月夜を仰ぎながら呟いた。
「暗殺業、廃業しようかニヤア……………」

前金が詰まった小袋を片手に場末の酒場を後にしたルノアはすっかり暗くなつた街中を歩き、現在借りている集合^{アパート}自宅に戻つた。

「はあく……………」

場所は都市北西部、第七区画。都市を囲う巨大市壁が眼前にある、都市の隅つこに家賃八〇〇〇ヴァリスの潜伏先に彼女がいた。三階建ての集合^{アパート}自宅は市壁のせいで日当たりがないに等しく、石造り故に夜はかなり冷える。が、立地条件によつて人は寄り付かないのと集合^{アパート}自宅の入居者はよっぽど金がないものか、脛に傷持つ者くらいしかいないこの物件にルノアは気に入っていた。若い一人少女がこんな場所の部屋を借りたいと申し出を受けたドワーフの親父^{オナー}からも『家賃を払えば詮索しない』と言外し、静かな部屋を借りることができた。時折、隣の部屋から独り言と思しき不気味な笑い声が聞こえてきた時は嘆息したが……………。

「標的は私より下だけど……………ある意味、今までより難易度が高すぎかも……………」

一部屋のみの石部屋の木製の扉を開ける。中は粗末な木卓^{ベッド}の寢台、魔石灯など必要最低限の調度品しか置かれていない。特筆するとなれば部屋の隅にまとめた仕事用の一張羅——武装の拳具や戦^{バトル}闘衣、後はお手製の打撃^{サント}練習用具^{バック}だ。自ら購入した魔石製品の発火装置で鍋を沸かし、ホットミルクを作つたルノアは、木製の椅子をギシリと鳴らして腰かけた。

「どうすつかなー」

潜伏先は分かつてる。だが、今まで通つていた店の料理を作る店主を殺すことになる日が来るとは思いもせず、結局前金を受け取つてしまったからには依頼を果たすしかない。不用意に親しんでしまった相手をこの赤黒く染まった拳で殴り殺して……………。そう思うと辟易する思いで溜息が出てしまうであつた。

「……打ち込みして気を晴らす」

「このもやもやを晴らすとルノアは椅子から腰を上げて部屋の隅にある物へと近づく。」

「ニヤ」【フレイヤ・ファミリア】の情報なんて見るまでもなく化け物だニヤ……」

「うわーこんな【ファミリア】を敵に回したくねー、とクロエは呟いた。下着姿で寝台ベッドに寝転がりながら枕元に広げている【ファミリア】の詳細と店主本人に関する人物情報プロフィールを見た結果である。彼女が住んでいる一人部屋ベッドのみの石部屋は、無駄に豪華な絨毯や天蓋付きの寝台ベッド、シャンデリア型の魔石灯、更には暖炉型の魔石灯製品など贅を尽くすがごとく改造カスタマイズされている。まさしくクロエだけの城と化しており、ともすれば趣味の悪い内装は無駄遣いの権化と言えた。金をかけているだけあって部屋は快適そのものだが……時折、隣室から聞こえてくる殴打音のような鈍い音だけが悩みの種である。寝台ベッドに頬杖を尽き、黒の高級下着ランジェリーから猫の尻尾をニョロニョロと揺らしながら、クロエは見下ろしている羊皮紙に溜息を吹きかける。

「あの店主が何で恨みを買われるような事をしたのニヤ……? こういうの正義の【ファミリア】だったら話しは分かるんだけど」

「流れやすい自分の、ただの八つ当たりでこうなつたとは自他ともに思いもしなかつた事態である。」

「店主の戦闘スタイルは魔道具《マジック・アイテム》を行使する冒険者……まるでミヤミみたいな戦闘方法スタイルニヤ」

「真正面から直接戦わず勝利する戦法は同感するクロエからすれば親近感が湧いたと口元を緩めました。」

「ニヤけど、ミヤの方が上手に相手を仕留められるニヤ」

そしてLv.も、とニユフフと邪笑するクロエは自身の強さに直接標的と対峙するまで今も疑わなかつた。一頻り余裕を浸つていた猫キャットピールの少女は仰向けとなり、魔石灯の光にほっそりとした己の手をかざした。

「この暗殺稼業を廃業するためにも店主には悪いけれど有終の美でも飾らせてもらおうニヤ」

「(ギルドの要注意人物一覧にも載っているお尋ね者が、相も変わらず働いているなんて何を考えているんだろう)」

そもそも彼の店主の現在の状況をギルドは把握しているのか？逃げる素振りも隠れるどころか、どうぞ捕まえられるなら捕まえてくれと言わんばかりに店の中で動きまわっているではないか。もしや、自分がお尋ね者になっている事を知らない？と思つた時だった。乱暴に扉が開け放たれ、無遠慮にドカドカと入ってきたならず者やゴロツキの男達。武器を所持しているところから冒険者に身を置いている者達だと見受けれる。丁度ルノアがいる席は窓際だったので、外にも彼等の仲間と思しき大勢の輩が下種な笑みを浮かべて佇んでいた。「ひやははっ！八千万ヴァリスのお尋ね者が呑気に働いているぜえッ！」

「おい、この店がためえの血で汚したくなかつたら表に出な！」
「その首い、俺達が貰いに来たぜえ？」

高額の賞金を目当てに白昼堂々と襲撃しに来た粗暴な輩に、ルノアは店主の言動を見守るつもりだったが。ガタリと直ぐ傍に座つていた強面の大柄な男ヒューマンが立ち上がった時、隆起する腕を構えるドワーフ、長い双剣の柄を触れる妖精種エルフ、獲物を狩るような鋭い眼差しで睨みつける狼人ウエアウルフ……一階にいる大半の客達が立ち上がり出した。

「店主、ちよつくら外に行つて来ていいか？なあに、直ぐに戻つてくるからよ」

「ちと外が騒がしくなると思うんじやが気にせんでよいぞい」

そう言つて店主の返事を待たず客達が賞金を目当てに来た輩を外へと吹き飛ばした後、西区画のメインストリートに乱闘が勃発した。そんな光景を唾然と見ていたルノアは開いた口が塞がらなくなつて数分後。晴れやかな顔で店内に戻つて来た客達が先程まで戦いをしてきたとは思えない態度で何事もなく食事を再開し始めた。

「(……ナニコレ)」

路上にまた目を向けねばならず者達の姿は見当たらず、戦闘の痕跡すら残さない客達に畏怖の念すら覚えてしまった。後でさりげなく客の一人に質問したら「自分達のお気に入りの店の周囲に汚物を放

置するなんて有り得ないだろう？」と朗らかに答えられた。対象の首ターゲットを狙った時の自分を思い浮かべ、彼等の二の舞になり兼ねないと悟ってしまいますます依頼を遂行しようかと躊躇してしまつたルノアだった。

「・・・何、今の」

同じく、昼下がり。

飛脚に扮して酒場に入ろうとした目前で客達がならず者達をコテパンにノした後、極力関わりたくない藍色の短髪の女性冒険者を始めとある「ファミリア」の冒険者達が流れる水の如く店主を狙つた輩を捕縛してどこかへと連れ去っていった。まるで最初から打ち合わせしていたかのような連携にクロエは、その光景を目の当たりにして当惑した。放心し掛けた意識という紐を締め直して酒場の裏口から潜入を果たす。

「すいませーん、ギルドからお手紙をお届けに参りましたー」

「はい」

とクロエの声に応じたのが・・・彼女の暗殺対象ターゲットの店主だった。対応しに来たのが標的の男だとは思ってもせず、自分の事バレやしないかと不安と緊張、無防備に近づいてくる相手に今ここで仕留めるかと葛藤に似た迷いをした。

「ギルドからの手紙か？」

「そうです。これを」

どうやら己クロエを気付いていないようで、受け取つた手紙をその場で読み始める店主が記されている文字を目で視認していく姿勢は数秒で終わった。

「確かに受け取つた。お疲れ様」

「確かにお届けました。ではこれで」

ここは手を出さず大人しく退こうと思つた矢先に目の前から声をかけられた。

「この後は暇か？」

「え？えっと、この後は休憩に入りますが・・・」

「じゃあ、せっかくだからうちの店で飯を食べないか？」

突然の食事の誘いに当惑するも、やんわりと遠慮して断る。すると残念そうに肩を落とした店主。

「そっか、残念だな。新作の魚料理の味見もして欲しかったんだが」
「(新作の魚料理・・・ゴクリ)」

この店の魚料理はクロエの舌を唸らせるほど絶品でもあり、その新作とあらば興味がないはずがなかった。しかもまだ誰も口にしていないものであれば尚更だ。

「じゃあ、最後に両手をこうしてくれないか？」

「は？はあ・・・」

怪訝に何かを持つような姿勢で両手の平を揃えるクロエの手に、店主は彼女の帽子をサツと頭から取って両手に置くと、帽子で隠れていた黒い猫耳へ素早く伸ばした。そして喜色満面の笑みで優しく触れ出した。

「ツ!!」

「うーん、やっぱり触り心地がいいなあクロエの耳って」

——最初から気付かれていた!?というか、気付いていて自分の耳に触れるために気付いていない振りをしていたのかニヤ!?と無遠慮に耳を触りながら片方の耳に息を吹きかけられ、未知の感覚の信号が送られて来てゾクゾクと背筋が震え、腰が砕けそうになったところでようやくクロエは動き出す。

「ニヤ、ニヤッー!!!」

逃げる際に手を振り上げて直ぐ顔を真っ赤にしながら裏口を後にした。走り去っていく黒猫を見送る店主の背後から、店主を呼びに来た鈍色の髪と瞳の女性店員シルが不思議そうに裏口に繋がる通路から顔を出した。

「店主さん？何かありましたか？」

「ああ、せっかく捕まえた猫に逃げられちゃったよ」

「あらあら、顔に引っ掻き傷ができちゃってますね。可愛かったのですか?」

「そうだなあ、うちの店の看板猫になってほしかった」

心底残念そうに引っ掻き傷を残す店主に微笑ましげに笑うシルは、

彼の手を掴んで保健室へと連れて行った。

「ぜ、絶対に暗殺してやるニャ……ッ！」

宿屋に戻って高級なベッドに身体を沈ませた一匹の黒猫が、猫耳を押さえて自分に恥を搔かせた暗殺の対象の顔を持ち浮かべる。が、しかし眠った際に本物の動物の猫の様に耳や尻尾だけ飽き足らず全身まで愛撫する店主とされる側の己の夢を見てしまうという逆効果が起きる事をまだ気づかない。

冒険譚14

夕日が西部の市壁の奥に沈んでいく。巨大市壁に囲まれたオラリオは日暮れの訪れが早い。四年ほど前から迷宮都市に身を置いているルノアは、それがわかるようになっていた。茜色に染まる西のメイストリート。迷宮帰りの冒険者、仕事を終えた労働者、多くの者達が従来する通りの中で、ルノアは足を止めて『異世界食堂』を眺めていた。彼女の目が映すのは、働いている店主だった。他の店員や客達が家族の様に打ち解けて笑い合う様子は『異世界食堂』という名の店が一種の「ファミリア」のように見えてくる。

「(楽しそうにしているなあ……)」

店内にいる店主は視線に気が付いたのか、こちらに振り向く。窓越しに眼差しを絡めていたルノアは防寒着を口元まで上げ、立ち止まっていた足を動かし、雑踏とともにその場を離れた。

「(お尋ね者なのに、知ってか知らずか……皆に愛されているんだね)」

大通りを行くルノアは、店主に羨望を抱いた事に気がついてしまった。

「家族、同僚、「ファミリア」……全部、私には縁がなかったなあ」
夕暮れの空を見上げながら、独白を落とす。揺らめく人波の中で、たった独り切りでいる自分の立場が、過去の記憶を喚起させ――。

「あら……ルノア？」

一柱の神物と出くわして喚起させることはできなかつた。ふわふわとした長い蜂蜜色。ルノアでは到底及ばない双丘の持ち主。優しげな垂れ目が今は軽い驚きに染まっている。彼女の側には護衛らしき気眷族が控えている。雑踏の中でばったりと出会った相手の名を、ルノアも驚きながら呟いた。

「デメテル様……」

豊穰を司り郊外で野菜や麦、果物を育てオラリオに流通して貢献している「デメテル・ファミリア」の主神、女神が驚きから嬉しそうに目元を緩めて微笑んだ。

「驚いたわ。まさかこんな所で会うなんて」

「私もですよ」

「ふふつ、久しぶりに貴方の顔を見れて安心してもつとお腹が空いちちゃったわ。ルノア、一緒にご飯を食べましょ？」

デメテルの厚意を断ろうとするが、柔和な笑みに押し切られてしまう。このまま彼女の、オラリオ北部に存在する「デメテル・ファミリア」本拠『麦の館』へ行くことになるだろうと思っただけの考えとは違う行動を取るデメテル。ルノアが来た道に進みだして、あろうことが真つ直ぐ『異世界食堂』に赴いたのだ。これにはルノアは別の意味で驚くが今更後戻りはできず中に入ってしまう。

「いらつしやい。ん？珍しい組み合わせだな。デメテルとルノアが一緒なんて」

「あら、ルノアのこと知っていたのね？実はこの子、私の眷族なの」

「へえ、そいつは知らなくて意外な関係だ。ま、立ち話もんだから席に座っていてくれ」

「あのね？そのことについてお願いがあるの。私達だけ予約したのだけれど、ルノアの分の席も用意できないかしら」

出迎えたのが店主で二階を予約していたデメテルはルノアの分の席も乞う。店主は背中に手を回し薄い板を手にして何かを確認しながら口を開く。

「デメテル達が食べる席は座席だったな。席は余裕があるし同じ『ファミリア』の眷族なら問題ない。いいぞ」

「ありがとう」

「どういたしました。そしていらつしやい。ようこそ『異世界食堂』へ」

ルノアと食卓を囲える事が可能となり二階へ足を運ぶ三人。扉が無い空間に入れば既に見知った者も含め、神々や冒険者、労働者、中には貴族までもがいて異世界の料理を食べながら雑談を交わしていた。ぽつかりとあからさまに空席の場所には「デメテル・ファミリア」と書かれた立て札があり、予約した者達の専用の席として扱われてもいた。その席に座ると早速デメテルはルノアに話しかけた。

「この店にはよく来るの?」

「え、ええ、時々ですよ」

「私も一週間に二度か三度ぐらいは来るわ。ここのお店が出す野菜は『デメテル・ファミア』が育てた物だから、あの子がどんな風に私達が育てた麦や野菜、果物を異世界の料理で美味しく作ってくれるのか楽しみの一つなのよ」

直接「デメテル・ファミア」と契約しているとも教えられてまた驚き目を丸くするルノアだった。当人達がそこまで繋がっていたとは露も知らず、少女の反応に柔和で笑むデメテルは眷族と一緒に分厚いメニューの本を開きだす。

「あつ、新しいメニューがあるわ。今日はこれと……あとこれにしましょう」

一つのテーブルにメニューの本は二つ。一冊では複数の客がゆつくりと選べないことから改めてもう一冊増やした。その置き場所がテーブルが壁際の席なら壁の中に、そうでない席は横長の椅子の収納箱の中。本を一度押し込めば出てくる仕組みの収納式である。ルノアは護衛の眷族が選び終えてから決め始める。

「(やっぱり、メンチカツにしようかな)」

一週間に一度この店に来る時は必ず好みの料理を食べるルノア。他の料理も食べてみてが、やはりお気に入り料理の方が一番だと選ぶのがメンチカツだ。三人共、亜麻色の髪の店員を呼んでそれぞれ注文をした後は雑談を交わす。数分後、女性店員達がデメテル達が注文した料理を運んできた。

「お待ちせしました。それではごゆっくりお食べください」

二階を後にする彼女達を他所にナイフとフォークを手にしてそれぞれ料理を切り分けて食べ始める。

「うくん……っ、美味しっ!」

「本当にね。このテリーヌって料理、野菜本来の甘みを凝縮している。異世界にこんな料理があるなんて凄いわ」

「はい、私もそう思います」

新たな発見に喜ぶ豊饒の女神の笑みに眷族とルノアは釣られて笑

む。やっぱりこの店の料理は美味しいと同じ料理を頼むデメテルとルノアは完食後、また新たな調理を注文して腹を満たす。外が蒼夜に色褪せた頃には皿が数枚重なっていたほど食べた三人は解散の空気を醸し出して席に立ち、会計を済ませてそれぞれホームに戻ろうとしたのだったが、背中を向けるルノアにデメテルが話しかけた。

「ルノアの『お仕事』は、まだ忙しいの？」

「……うん、まだ一つ今までより大変で大きな仕事が残ってる。でもこれで。最後にしようかなって思ってるんだ。何だか、疲れてきちゃって」

デメテルはルノアが何をしているのか聞いてきた事はない。いや気付いていないはずはないのだ。しかし、時折こうして穏やかなひと時を与えてくれる。子を労わる慈愛の瞳で。デメテルがいなかったら、悪循環の生業をし続ける少女の精神はとづくに潰れていたかもしれない。それほどここ最近疲れを感じているのである。

『お仕事』を止めた後は、どうするの？」

「……」

「ねえ、ルノア？もしよかったら……私達と麦や野菜、果物を作らない？とても大変だけど、すごくやりがいがあるのよ？」

微笑みかけてくるデメテルの顔を、ルノアはぼうつと眺めた。【デメテル・ファミリア】にこのまま籍を置いてしまおうか、と思った事は実はある。デメテルはルノアが今まで会ってきた神々の中で一番の神格者だったし、彼女を慕う団員達も気さくさだった。こんな帰る場所があつたら幸せだろう、と感じられるほどに。だが、ルノアはそうしなかった。

「ありがとう、デメテル様……でも私は、できないや」

「ルノア……」

「私がそういうのやったら、いけないと思う」

ルノアは目線の高さまで手を上げ、手の甲を眺める。

「デメテル様は今まで能力ステイタスを見てるから、気付いていると思うけどさ……私、物騒な仕事してるんだよね。人を殴って、たくさん血を浴びて……私の手って、すっごく汚れてるんだ」

ルノアの賞金首狩りバウンティハンターの異名は『黒拳』。その謂れは黒の拳具をしようしているから、などというものではない。肉を破き、骨を砕き、大量の血を浴びたことで赤黒く染まった拳——それを見て裏の者達が口にするようになった恐怖の渾名である。人を殴り過ぎて変色した黒い手、血に汚れた己の拳を、ルノアは幻視する。

「麦も、野菜も、果物だって、大事に育てて誰かに食べてもらうんでしょ？ 沢山の人に喜んでもらうんでしょ？……私の手がそこに関わっちゃ、うん、やっぱり不味いよ」

自嘲風に苦笑いするルノアが『黒拳』である自分とデメテル達が関わっているのと知れたら風評に関わると思って「デメテル・ファミリア」と距離を置こうとしている。いや置いている。デメテルと出会ってから彼女が支持する派閥——ギルド傘下の「ファミリア」を狙う依頼は受けないようにしていたが、今回は受けてしまつてそんなこと他の者にとつて知った事ではないだろう。都市の混迷に拍車掛けた傭兵も同然の賞金稼ぎなど、悪感情を抱かれて然るべきだ。

「ごめん、デメテル様。私やっぱり行くよ。一緒にこの店で食べられて楽しかった」

「ルノア、私達は……」

「大丈夫だつて。本当に、これで仕事から足を洗うつもりだから」

背中を向けて再び歩き出すルノアは、悲しげな表情をするデメテルに精一杯の笑みを見せる。デメテルを心配させていることが心苦しかった。いつそ最後の依頼なんて放り出せばいいのかもしれない。自分を心配してくれている女神が親しげに接していた店主を殺さなければならぬからだ。放り出せば誰もが不幸にはならないのに。だが、ルノアはそれをしようとしなかった。恐らくこれは、今まで行ってきた賞金稼ぎの自分と決別するための儀式であり、はじめであり、自身への罰だ。どんな理由で生きたまま『悪』の残り滓と繋がりに、関係者全員を捕らえたのにお尋ね者となった良心の店主の血を、またこの拳で汚さなければならぬ。ある意味初めて血を被っていない、罪を犯していない者を殺す。それも親しい人を殺める自分への罰。一生消えることのない事実と自分の手で消した感触と記憶が永遠に

付き纏うだろう。自嘲の笑みを一瞬こぼしたルノアは、この場からの去り際、強がってデメテルに笑いかけた。

「それに、つるむんだったらデメテル様達じゃなくて、私みたいな馬鹿な連中とかがいいんだ」

星の海が魔石灯の光に負けまいと輝いている。夜も眠らないオラリオは中々星が見えにくい。四年ほど前から迷宮都市に居座るクロエは、それがわかるようになっていた。

「(楽しそうにしているニヤ〜・・・)」

蒼然とした闇に包まれる西のメインストリート。月明かりに照らし出される建物の屋上から、クロエは『異世界食堂』を眺めていた。彼女が見下ろすのは、獣人の客を出迎える店主だった。獣耳を触れようとするが客に笑って断れて残念ながら店の中へ招いた。

「(ミャーの耳と尻尾以外でも触れようとしているのかあの店主……！)」

一週間に一度、夜に訪れたら必ず迎えてくる店主が毎度飽き足らず耳と尻尾を触れてくるのは自分^{ミャー}だけかと思っていたのにつ、と何故か不満を覚え微かな嫉妬も抱くクロエ。今日は、今夜はその日であるが何だかあの光景を見たからでは訪れることが癪に障る感じがして、今夜は別の店で食べようかと思つたところ、

「んニャ?」

一柱の神物を発見した。頭の後ろでひつつめている髪は茶色。端正かつ精悍な横顔は美丈夫と呼ぶに相応しい。上着を脱いだ上半身半裸姿で、ややもすれば『海の男』という言葉が想起される。でなければとある異なる世界では『露出狂男』、『変態』と周りから指さされながら言われる。その側では数人の手伝いの眷族が雑談を交わしていた。

「(あれは・・・)・・・ニャハア」

予定変更、彼等がこのメインストリートに足を運んで来たのは理由がある筈。どんな理由にせよクロエはこの機を逃すまいと邪笑を浮かべた。次には建物から飛び降り出し、件の神物目掛けて飛び付く。

「ぐおっ!? な、なんだ! って……げっ、クロエ・ロロ!」

手伝いの眷族達が驚く中、背後から抱き着かれた男神はクロエの名を呟き、顔を引き攣らせる。建物の屋上で雑踏ざつとつするメインストリートの中から偶然見つけ出した相手の名を、クロエも怪しく微笑みながら読んだ。

「久しぶりニヤ、ニョルズ様。元気してたニヤ?」

「お前なあ……いきなり飛び付くやつがあるか。驚いただろうが。あと危ないから止めるよな」

「ニヤハ、こんなところでニョルズ様と会うなんて思わなかったから」

男神ニョルズ。「ニョルズ・ファミリア」の主神にして漁を司る一柱。彼が運営する派閥も当然。漁の「ファミリア」。港街メレンと隣接する大汽水湖ロ(だいきすいこ)を始め、大海に繰り出しては漁業を行っている。「ニョルズ・ファミリア」が捕える新鮮な海産物はオラリオにも出荷され、大農業を営む「デメテル・ファミリア」と同様、迷宮都市の食糧事情の中でも大きな重要度ウエイトを占めているのだ。今日も眷族達と一緒に魚介類を売りに、港街メレンからオラリオへ足を運んでいるようだが。

「でも、こんなところにまで美味しそうな魚を持ってきているニヤ? 繁華街に何時も持つて行くのに」

『『異世界食堂』の店主と直接契約を交わしているな。料理に使う魚介類を出荷しに運んできているんだ』

「へえー、意外ニヤ。何時の間にミヤの知らない内に裏で通じていたニヤんて」

「裏で通じていたって、人聞きの悪い言い方をするな」

「ふくん? ミヤの言葉はあながち間違っつていニヤいと思うけれど?」

ニヤニヤと邪笑を浮かべるクロエの言葉が何故かニョルズに効き目があり、

「出荷したらこの店で飯を食べるつもりだ。お前も一緒にどうだ」

「ニヤハツ、ミヤの好物を他人のお金で食べられるならいつもの何倍も美味しくニヤるから大歓迎ニヤ」

嬉しそうに尻尾をくねらせ、ニョルズ達が出荷をし終えたあとに『異世界食堂』の中へと入店するクロエに影が覆う。

天井に張り付いていた影が、音もなく落下した。

「ふっふっふっ、待っていたぞ黒猫。建物の上にはいたから何時来てくれるかなってスタンバツていた甲斐があったもんだ」

「フニャアアアアアツ!」

暗殺者の己に気取られず真上からの奇襲によって抱きしめられ、耳を触られるクロエが悲鳴を上げる姿にニョルズ達は瞠目した。

「あー店主、そろそろその辺にした方が良さと思うぞ。というか、お前ら二人って仲が良いんだな」

「仲良くない! 一方的に触ってくる変態ニャー!」

「失礼な。純粹にクロエだから触りたいんだ」

「開き直るところ!」

「本当なら尻尾の毛並みを手や頬で楽しみながら毛繕いもしたいんだぞ?」

「やっぱり変態ニャー! 露出狂してるニョルズ様みたいこいつも変態だニャー!」

「一緒にするな!」

騒々しくギャーギャー!と叫び散らす三人のやりとりを他の客達は、気にせずとその光景を肴にして食事を楽しむ。程なくして予約制の二階へ上り、「ニョルズ・ファミリア」専用の席へ腰を落ち着かせる。「にしても、お前が店主と知り合いつてことはこの店に何度も来ているってことなんだな」

「この店の魚料理は美味しいからニャ」

「そのおかげでこっちは繁盛させてもらっているんがな。契約金として漁師^{ロット}達が数年働かなくても遊んで暮らせるかなりの額を貰ったし好い事尽くめだ」

どのぐらいの契約金を貰ったのだろうか? そういうニョルズが珍しく思ったクロエは訊ねてみたところ、尻尾が逆立つほどピンと伸びた。

「一億だ」

「はっ？嘘でしょ？」

「いや、嘘じゃないからな？その代わりこの店が望む魚介類をピンからキリまで最優先で揃えなきゃいけない契約しているから大変でもあるんだ」

分厚いメニューの本を手にしてページを開くと何を頼もうか眷族と決め合うニョルズ。半ば多額の契約金を一括で支払っただろう店主に対してクロエは阿呆だろ、と呆れながら放心する。男神に催促されて黒猫もメニューの本を見ず好物の品を頼もうとする姿勢になった。店員を呼ぶボタンを押して数秒後、店主が二階に上がってきた。

「店主、注文を頼む」

「はいよ。注文は？」

店主の問いかけにニョルズが最初に口にする。

「お好み焼きを頼む。シーフード。鰹節は多めで」

「（おこのみ・・・やきぎ？）」

そんな料理あつたつかニヤ？と内心小首傾げるクロエ。眷族達もお好み焼きとやらを注文し出し、彼女だけはカルパッチョを注文する。

「お好み焼きって何ニヤ？」

「教えるより実際に見た方が早い。本にも載ってるぞ？見たことが無いのか？」

流し読みで殆どのメニューを見ていないクロエは好物の料理ばかり頼む故に他は気にしていなかった。誰かと一緒に来て食べたことが殆どない彼女にとつて今夜は新鮮な一時を過ごすことになるとは思いつかなかっただろう。相手が気になるものを食べようとするれば興味を持つのは人の性。

「ないニヤ。ミャーはカルパッチョ一筋だから他の料理は食べないニヤ」

「ああ、カルパッチョか。あれも美味しいよな。あの料理に使うソースが魚の旨みを引き立ててるし、俺達が漁で捕まえた魚を美味しく作ってくれているのがまた嬉しい」

この店がその代表格の一つだと風に屈託のない笑みを浮かべるニョルズ。そうかニャーと軽く相槌を打って男神だけでなく眷族達とも話し相手にして会話を交わしていると、嗅いだことが無い香ばしい匂いがしてきた。

「はいよ。お待ちせしました。お好み焼きとカルパッチョだ」

「おお。来た来た」

数人の店員が熱い鉄の皿に盛られたそれから立ち昇る香ばしい匂いに、ニョルズと眷族達は思わず顔を綻ばせる。出来立てのお好み焼きは冷めぬように熱せられた黒い鉄の皿の上で、微かにジュウジュウと音を立てている。小麦と淡い緑の玉菜を混ぜ合わせ、それに山芋などの様々な材料を加えて焼かれたお好み焼き。淡い黄色と緑が混ざり合うその上は、たつぷりと真つ黒なソースで染め上げられた後、黄色みを帯びた白いマヨネーズ格子模様が描かれ、一見すると鉋で削られた木くずのようにしか見えぬものがひらひらと熱に煽られて、ほんのりと海の香りを漂わせながら踊る。そしてその上に薄ら色づくようにかけられたのは、濃い緑の海藻の粉、青海苔。それらが交じり合い、お好み焼きに鮮やかな色を加えている。そして、匂い。鉄の皿の熱さが加わって立ち上る、お好み焼きから滴り落ちて焼かれて焦げたソースの匂いがニョルズ達の胃袋を刺激する。

「……これがお好み焼き?」

「そうだ。美味いぞお?」

空腹に耐えかねてナイフとフォークを手に取り、カルパッチョを頼んだクロエを除いてニョルズ達はお好み焼きを切り分ける。切った隙間から上に塗られたソースが鉄板の上に落ち、微かに焦げる匂いがする。その匂いすら楽しみながら、切り分けるのが終わるとほぼ同時に早速食べ始める。

「うん、相変わらず美味しいなシーフードのお好み焼きは。このお好み焼きの主役はソースの匂いに負けない鯉節だろうな」

「主神様、ぶたたまのお好み焼きもイケますよ」

「これをお土産にして他の皆にも食べさせましょう」

眷族達からも好評のお好み焼き。そんなに美味しいのか。魚料理

に関してならばカルパッチョが一番だと主張したいクロエだったが、お好み焼きに興味津々な眼差しを向ける黒猫の視線に気づき、男神は食べるか?と誘う。

「ミャーの好感を得るために餌付けしたいのニャ?」

「そういう事を言うならやらん!」

冗談冗談とヘソを曲げそうな男神に軽く謝って、切り分けた一つのお好み焼きを貰い、猫舌なクロエは念入りに冷ましてから食べた瞬間。口の中がソースの味で広がり、小振りなエビとイカ、他の魚介類の旨みを堪能しお好み焼きの独特の生地と感触を初めて知ったクロエは。

「(め、滅茶苦茶美味しいニャー!)」

瞳を丸くして尻尾を天井に向かって伸ばすその反応をニョルズは微笑む。お好み焼きの美味さを知る者がまた増えたことと、一緒に食事をして笑い合うこの一時を楽しんで笑う。

「ニョルズ様、それ全部譲ってくれニャー」

「自分で頼め!」

.....

「はあーご馳走様ニャ。お好み焼きもまあまあ美味しかったことも知れて満足満足♪」

「まあまあ美味しいと言った割には二回も食ったよな」

おかげで手持ちの金はすっかり寒くなってしまったニョルズの心情を、満腹になった腹を擦りながら口内から微かなソースの香りを吐くクロエは露も知らない。

「で、ニョルズ様。先に眷族を帰らせておいてミャーと話しがした
いってなんニャ?」

のんびりと歩を進めるニョルズとクロエ。男神の眷族達はお土産を持って先に港街^{メレン}へ戻りに行った。それはニョルズの計らいでクロエと話をする為に。あまり聞かれてはならない内容故に。

「なあ.....お前、疲れてるだろ?」

「……………」

クロエの胸の内をニョルズが見抜いた。男神の横で歩く黒猫は蒼夜の空に浮かぶ満月を見上げた。

「(こんな)時世だから、しようがないニヤ」

「お前さえよけりや、俺の【ファミリア】に来るか？」

歩きを止めたクロエは、振り返るニョルズを誤魔化す様にニヤリと笑う。

「なんニヤ？美しいミャーの虜になって、欲しくなっちゃったニヤ？」

「ああ、そうだな、そういうことでもいい。お前みたいな可愛い女手がいれば、漁師^{ロッド}達も喜ぶだろう」

クロエのいじりにもニョルズは苦笑で応じ、案じた眼差しで見つめてきた。ニョルズは、いい神だ。イケメンで、身長が高く、子供思い。善良な神格者だ。自分の生業を知っておきながら誰にもバラしていないし、文句を言いつつクロエの我儘を無茶ぶりに付き合ってくれる。まるでクロエに束の間の息抜きを与えるように。クロエは黙った後、これまでとは趣の異なった、ほのかな笑みを、肩を竦めながら作った。

「止めておくニヤ。今更人殺しを止めた猫が、魚に夢中になって改心なんて……………なんか滑稽ニヤ」

「……………そうか」

それは本心だった。ニョルズの提案は正直嬉しかったが、何か違うような気がした。

「それに、【ファミリア】もそうだけど……………仲間とか、友達とか、よくわからないのニヤ」

それも、本心。暗殺家業をするようになったクロエの曰くつきの原因である最初の【ファミリア】の時から横の交流が無かった独りぼっちの野良猫は、群れの中に入る術を知らない。人の命を奪うより、そちらの方がずっと難しいことのようにクロエは思えた。

「最初から仲のいい奴なんているもんか。むしろ、ぶつかり合っただけが本番だ。大声で叫びあって、殴り合ってもいい」

「神様がよく言う、夕日の下で喧嘩する、ってやつニヤ?」

肯定するニョルズ。この場に二人の話を聞いていた一誠やアスナ、転生者達がいたら「何でそういうの知っているんだろう?」と思われるていただろう。

「殴り合つてミヤアのこの美しい顔に傷がついたらどうするニヤ。ニョルズ様、責任とつてくれるニヤ?」

実際にそんなこととして人と仲良くなれるなら負傷する覚悟の上でやらなければならぬ。男ならともかく女がそうしたら、傷者にされた女の責任を一体誰がとつてくれるのだろうか?自分にそう提示したニョルズに意味深な笑みを見せる問うクロエに、ニョルズは真顔で言い返した。

「いやいや、そこは自己責任だろ」

「けしかけたのに責任取らないなんて酷い神様ニヤ」

「そういうやり方もあるって言ってるだけだろ!」

不貞腐れて溜息を吐く黒猫。

「(……喧嘩なんてわからないニヤ。今まで殺し合いばかりで生きるか死ぬかの二択しか行つてこなかったのにこんなミヤアに喧嘩つて……)」

それとは別にクロエはふと思ったことを、言葉にした。

「でも、そうニヤ……思いつきり喧嘩して、殺し合つて……それでもミヤアと軽口が叩き合えるんだつたら……気軽そうでもいいのニヤ」

胸に抱く思いはそれぞれ。しかし、邂逅の時は迫っていた。

「いつになったら店主を仕留めるのだ。依頼を預けて何日経っていると思ってる」

「うるさいな、わかってるってば」

クライアント
依頼人に呼び出されたルノアはせっつかかれていた。場末も場末な酒場で睨み返しながら、用意していた言葉を差し出す。

「先に言っておくけど、私、この仕事から足を洗うから、あんた等ブルーノ商会も、今後関わらないって約束して」

「……今更、堅気に戻れると思ってるのか」

「思つてないよ。でもけじめをつけなきゃ、何も始まらないでしょ」
苦虫を噛み潰したような顔をする商会の男ヒューマンに、きつぱりと言いつ返す。

「心配しなくても、この依頼はやり遂げる。いつも通り私が仕留めるのを待つていればいい」

マフラー防寒着を引き上げるルノアは、鋭い眼差しで告げた。

「明日の夜、仕掛ける」

『黒拳』が『異世界食堂』の店主を狙っているらしい！何でも明日にでも仕掛けるって……どうする！」

「ん、時機タイミングが悪いわね」

忘れ去られた鐘楼で、慌てふためく依頼人クライアントの声が響く。呼び出されたクロエは、仕事用の口調を纏いながら間延びした声を出した。

「獲物でさえも取り合うなんて……本当に疲れるご時世」

「なに暢気なこと言つてんだ！こつちも早く仕掛けねえと、先を越されるぞー！」

ドワーフの依頼人クライアントの声を右から左に流しながら、クロエは目深に被ったフードを揺らす。クロエは自分が何故こうも疲れているのか、とつくにわかつている。オラリオが、この都市が暗く淀んでいたからだ。多くの闇に触れてきたクロエが、今まで見てきたどの国、どの都市よりも『悪意』が渦巻き、混沌を生み出していた。

「……でも、それも終わり」

他ならない店主の手によつて。オラリオは生まれ変わる。クロエもそう感じていた。

「そんな店主を始末する羽目になるなんて……どうも嫌な仕事よね」

「お、おいつ!?」

「大丈夫よ。仕事は仕事、前金を受け取った以上、依頼は投げ出さない」

まるで本気で焦るようになり乱す依頼人クライアントに、自分は専門プロであると言ひ含める。それに、理由はなんであれ店主の存在は悔恨を残す。彼を恨む者が何時かまた悪意の矛を運んでくるかもしれない。ならば、今

の内に消し去るのもまた未来のためだ。そんな風に建前で武装したクロエは、覚悟を決めた。

「明日の夜、仕掛けるわ」

店主Ⅱ一誠が店の休日、ミアに店を任せてふらりと59階層の氷壁に覆われている空洞内にて拳を打ちつけ、広範囲に粉碎して鉱石あるいは金属の採掘という名の豪快な作業をしていた時だった。瓦礫の中から硬質な水晶の塊を手に入れる事が出来た。透明度の高い水色で中心に霜柱の様に白銀の輝きを放っているその純度を確かめた後にバックパックの中に放り込む。その作業を数時間も繰り返したことでとある動物の四次元ポケットのごとくバックパックの中は鉱石や金属でいっぱいになった。それらをギルドに持ち運ぶ事もなく鍛冶最大「ファミリア」の主神へと持参しに赴く。

「はいよへファイストス。注文の品々だ」

「ありがとう。冒険者の地位を剥奪されてるのに悪いわね」

「地位が剥奪されていようがなかろうが、どちらにしろダンジョンに行くから気にしないでくれ。ギルドの厄介事が無くなって精々してるし」

中身を確認するへファイストスの手には『氷河の領域』の階層でしか手に入らないアイテムが握られ、左眼は鍛冶師としての目付きとなつて純度を確かめた。

「純度が高いわねそれに見た事もない……『電露』とでも名付けようかしら」

「名前は大切だけど実際はどうでもよくないか？俺じゃなきや滅多に市場に出回らないもんだから」

「だったらロキやフレイヤの冒険者でも簡単に深層に行ける道具を作つてあげたら？」

「何時かな。で、早速その試作を作るか？」

ええ、と肯定する鍛冶女神は本棚に近づき一冊の本を動かした時。一拍遅れて横にずれた本棚の向こうには工房が在った。『電露』が詰まってるバックパックを手にして工房へ入る女神に続いて入れば本棚が元の位置に戻る。

「せっかくだからイツセー。採掘してくれたお礼に必要なはなしでしようけれど、その鉱石で貴方の武器を打ってあげるわ。どんな武器が良いかしら?」

「じゃあ片手直剣のをお願いしようかな」

「わかったわ。それじゃサポートをお願いするわね?」

鎧を持つヘファイストスに長い真紅の髪を一つに結びあげる一誠。隠れていた首のうなじが晒して男なのに何故か色気を感じて鍛冶女神は一瞬見惚れてしまう。

「ん?」

「な、何でもないわ」

見惚れていた事を悟られたくないと言業の準備に取り掛かる。手伝う一誠も鍛冶神が直々に打つ作品に興味津々で、一体どんな物が出来るのか期待に胸が膨らむ。

が——『異世界食堂』でまたしてもハプニングが舞い込んできたことを一誠は気付かないでいた。

「犯罪者イツセー! お前が犯した罪を償わせるためにこの勇者が直々に成敗しに来てやったぞ!」

一誠に直してもらった全身型鎧の姿で「アポロン・ファミリア」自称『勇者』光輝勇が扉を蹴破りながら大剣を片手で店内に向かって叫び散らす。一階にいる客達が一斉に光輝へ視線を向け目元を細める。食べに来たのではなく店主を狙う者であればその者は客ではなく敵として認識する一同。光輝が望む返事をする者は存在せず、店主の不在中の対応を同じ転生者の男、海童剛が応じた。

「悪いけど店主はいないぜ転生者」

「隠しているわけじゃないだろうな? 匿っついていようが無駄だぞ」

「いやいや、うちの店主に負けたお前こそ今更突つかかってもいいこと無いぞ。今ならまだ間に合うから大人しく帰っておけ、な?」

「あの時は油断しただけだ。今の俺なら勝てるさ」

「はあ……その自信は一体どこから来るんだ? お前の対処方法は店主から教えられているんだぞ」

「だからなんだ、お前も勇者の俺に勝てるって?」

見るからに強者の風格も感じない海童剛に鼻で笑い、大剣の切っ先を突き付ける。おおう、と自分を斬り兼ねない武器に一步下がって距離を置く。

「ここにいないならどこにいるのか教えてもらおうか」

「いや、それこそ知らないから帰ってくれって話だよ」

それで素直に帰るような性格ではない光輝は兜の中で目を細め、店内を見渡すと空いている席を見つめるや否やそこへ真っ直ぐ赴いてドカツと座り出した。

「ならこの店の料理を食べて待つことにする」

「は?」

「ふん、俺も勇者の前は日本人だからな。懐かしい料理を食べようが文句はないだろう。今から俺は客だからな」

扉を蹴り飛ばして客と踏ん反りがえる相手に海童はミアへ目を向けた。店主の次に偉い彼女の決定で次の行動が取れる故に目で指示を仰いだ。今までの成り行きを見守っていて、太い腕を組んで息を一つ零す彼女はこう言った。

「壊した扉は『ファミリア』に弁償代を払ってもらおうよ」

「勝手にしろ」

一悶着も起きずその日は店主が当然のように戻る事もなく、光輝は懐かしい故郷の料理を食べるだけで帰ってしまった。その後、直に「アポロン・ファミリア」に出向いたミアの迫力に負けて弁償金を払う主神と団長。対して店で起きた報告を聞いた頃には、一誠とヘファイストスは美しい水色の水晶が剣に形変わったかのように氷属性が付加した武器を完成させていた。白銀のように切っ先から柄まで煌めき、青い薔薇の装飾も施した一振りの剣を眺めながら訊いた。

「そんな事が遭ったのか」

「うん、一時はどうなるかと思ったけれどね」

仕事を終えて城に戻ったアスナは転生者が来た事を知らせに一誠の部屋に訪れた。一週間に二度、情事をしない日が定められている。今日はその日であるが、一誠から誘われたら本人の気持ち次第で身体を交えることを許されている。そんなルールを考えたのは他でもな

いりヴェリアだった。毎日は流石に墮落する生活を送り兼ねないので自制は必要だと彼の男を慕う者達の間で取り決めたことである。その結果か、誘われようと色仕掛けをしたりその気にさせようとあからさまな言動をする女性達が後を絶たない。これでは意味が無いではないか、と提案した王族は米神ハイエルフに指を添えて呆れるしかなかった。「最近別の意味で俺は人気者になってきたなあ」

「物騒な応援者ばかりだけどね？」

だな、と肯定する。人気過ぎるのも考えもの故、大しくしていても向こうが放っておいてくれない現状、時が過ぎるのを待つ他ない。その内己の事を気にしなくなるだろうと高を括るが、そう問屋は卸せないのが世の中であった。

「アスナも元の世界じゃ人気者だったか？」

「ううん、そうでもなかったよ？」

「そうなのか？まだ未成年だった頃のアスナの容姿は整っていたんだから、ラブレーターかバレンタインデーを貰っていいそうなのに」

「そういうの縁が無かったよ。逆に聞くけどイツセーはどうだったの」

「言っただろ。とある事情で高校を中退したって。貰う暇もなかったよ」

あ、そうだった。と思いでして、今年バレンタインデーをしたことを脳裏に浮かべて問うた。

「じゃあ、私達からチョコを貰ったのが元の世界も含めて初めてだったんだね」

「ああ、かなり嬉しかったんだけど……人気者は辛いというのを始めて実感したよ」

「ふふっ」

一生懸命チョコを貪っていた時の一誠を思い出して笑みを零す。男も女もモテたい気持ちは共通だが、度が過ぎた人気は時にその者を苦難させる。一誠はまさにソレであったのでその意味の深さを体感したのであった。

「ところで、海列車の方はどうなってるの？」

「作業は捗っている方だ。今はこつから極東まで繋げる線路をどうやって海面に浮かすかが課題となってる」

「重いと列車と一緒に沈んじゃうんからね。魔法で何とかならないの？」

「死者を蘇生する事が出来る俺でも魔法は万能じゃないからな。一時的ならともかく半永久的となると話が違ってくる」

魔法という単語がアスナの口から出て一誠も質問した。

「アスナも魔法の鍛錬の方はどうなんだ？」

「頑張ってるよ？ 魔力操作して炎とか氷とか変換できるようにしてるし」

「で、魔法を使えるようになった感想は？」

「凄く楽しいっ」

目を輝かす女性の反応はそれだけで十分わかるほどイキイキしていることが分かった。魔法と無縁な世界に住んで一度は思う魔法を使ってみたいという願いが叶った人間はアスナのように喜び、はしゃぐだろう。実際彼女は見て欲しいあまりに両の手の平にバスケットボールほどの火炎球を作り出した。

「ほら、こうしても全然熱くないんだよ？ 不思議だよね」

「魔力を持つ人間の体から抽出したもんだからな。自分の力に身体が負傷するのはコントロールが出来ていない証拠だ。アスナはコントロールできているからこそ熱さを感じてないんだ」

「そうなんだ。じゃあ、食べられる？」

「止めなさい。一部を除いてそれはできないから」

その一部が出来るなんて凄くない？と思うアスナの火炎球に手を伸ばす一誠が、炎の塊を瞬く間に氷の塊に変質させた。

「えっ!？」

「相手の魔力を上回る魔力ですればこうなるのさ。今のアスナの魔力は10だとして今した俺の魔力は11〜15ぐらいだ。ほら、その氷から今度は炎に変換させてみな」

と、何気に魔法の指南を受けるアスナは疑問を抱く事もなくその通りに従い、その日の夜は魔法のノウハウを学ぶアスナとそれを教える

一誠という図が出来て、一瞬ですら甘い空間や一時を過ごすこともなく没頭した。結果、彼女の魔法の知識がUPしたのは言うまでもなかった。

「……何時か、魔法少女リリカル・アスナが誕生するのかなあ」
「そ、そんな恥ずかしいことはないよ!？」

「そっか？今の内に振付も考えた方が……こう、リリカルリリカルって言いながら魔法の杖をクルルンって」

「考えなくていいから！そんなことにもならないしならないからね！絶対につ！というかもう私はそんな年齢じゃないよ!？」

猛烈に否定する亜麻色の髪の女性は顔を羞恥で真っ赤にし、抗議するのだが相手は素で真っ直ぐ彼女の瞳を向けながら告げた。

「俺の知り合いに魔法少女のコスプレをしてる、何千年も生きている女性悪魔や魔法少女に夢見る筋骨隆々のミルたんって男がいるぞ」

脱帽するアスナ。

「……君の世界って人外魔境か何かなの……?？」

「ある意味その通りかもな。その知り合いの関係の俺も大概だし」

何時か必ず一誠の世界に行く時、そういう人達と出会わない事をアスナは密かに願った。

冒険譚15

「……………」

店員達と店内の清掃と食材のチェックや調理の下準備、サンドウィッチの用意で忙しく動いていた、早朝の空は雲っていた。灰色の雲が空全体を今にも塞ごうとしており、不穏な雲行きを醸し出している。

「ん……………視られているな……………」

ここ数日、店主は見知った者からの『視線』を感じていた。それは当初、敵意や害意の気配が含まれておらず——例えるところか脱力するような視線で——店主も問題ないだろうと判断していたのだが、ここに来て、はつきりと意思が察せられるようになった。すなわち、殺意。

「(やっぱり、あいつらも仕掛けてくるのか。——新たな労働力が確保できそうだ)」

命を狙ってくるならばそれ相応の覚悟がある者と認知した店主はほくそ笑む。

「……………店主」

この店で働く転生者の特典によって具現化した女性、神埼火織が真剣な表情で近づいてきた。

「何者かがこちらを視ているようですが構わないのですか」

「ん？意外だな、感じたのか神埼も」

「私は——……………いえ、なんでもございません」

何か言おうとした口が不自然に閉じた。自分の事を教えようともしたのか、だが、何かに引っ掛かって言えなくなったようだ。特典の影響による弊害か、と推測して話を続ける。

「あいつらの事は気にするな。多分、どうやら俺の首にかけられた賞金を狙っていた一人だったみたいだし」

「事前に対処はするべきだと思いますが」

「証拠もないのか？仮に俺がしたらいきなり襲ってきた犯罪者として捕まるぞ」

そう言われると何も言えなくなる神崎に考えていたことを口にした。

「襲撃してきたら何の憂いもなくこの店の労働力として働かせるつもりだ。手を出すなよ」

「犯罪者を雇うのですか？」

「最初から人間は賞金首狩りとか暗殺者なわけないだろ？その人間の生まれた場所の環境がそうさせたに過ぎない。だから相手を思いやる心があれば雇うさ。そうでなくても人一人の命を狙ってくる輩でも俺が気に入ったら雇う」

神崎の肩を掴んで店主に背中を向けさせるように身体の向きを返す。

「ほらほら、一分一秒たりとも時間を無駄にしたらダメだ。時間は待ってくれないんだからさっさと準備をする」

「わ、わかりました。わかりましたから背中を押ししないでください」

ぐいぐいと押され仕事に戻される神崎。彼女を仕事に戻した店主は窓の外へ一瞥。きつと近い内に仕掛けてくるだろうと、不敵の笑みを浮かべる。

「覚悟しろよ？」

——夜。

「今日はご苦労様。何時も店の為に頑張つて働いている皆にご褒美として今夜は臨時休店だ。明日の為にゆっくり体を休んでいてくれ」

いつもより数時間も早い閉店に突然の店長からの報告にアスナやレイラ、転生者組は驚くもアーニヤ達は『ヒヤッホー！』とエプロンを頭上に放り投げた。普段から重労働に虐げられている店員達は、ひよんなことで転がり込んできた臨時休店に歓喜したのだ。彼女達は早速とばかり離れの食堂でパーティーを開き、思い思いに好きな物を食べては飲む。猫キャットレィブル人の料理人達が手がけることで卓上には店の看板料理が並び、そして散々酔っぱらったアーニヤ達は食堂で雑魚寝と相成った。

「まったく、この馬鹿娘どもときたら忙しないよ」

「ま、一年に一度ぐらいはこんな感じの息抜きは必要さ」

「息抜きねえ……」

雑魚寝してる店員達を呆れ、全てを許容した店主へ怪訝な目で視線を向けたミア。

「あんたを嗅ぎ回ってる連中がこそこそし始めたからなんじゃないのかい。あたしらにまで迷惑をかけたり巻き込まないようにするためにさ」

「なら、俺の言いたいことは分かっているんだろうな？」

踵を返して食堂を後にしようとする店主の背中から声が掛けられる。

「終わったらさっさと戻ってきな。明日は休みなんだ、二人でのんびりと話でもしながら飲み食いしようじゃないか」

「ああ、わかったよ。ただ、その際もう二人増やすつもりだからそのつもりでな」

ミアへそう言い返して食堂から出た途端、アスナ達と鉢合わせした。

「誰かが襲ってくるの？」

「さあ、今夜か明日か、明後日かわからないが釣れるなら釣っておいてさっさと片付けるに越したことじゃない。アスナ達は城に戻っていきな」

「俺達は？」

「ミア達の護衛を頼んだ。有り得ないだろうけど念には念をな。この離れにも魔法を施しておく」

指を弾きながらアスナ達に指示を出し、手を出すことも助けも不要と付け加えて離れを後に真っ直ぐ『異世界食堂』へと足を運んだ。厨房に入り巨大な冷蔵庫の扉を開けて食材のチェックを始め出す店主。そのあとはミアと食事をする為のつまみようを作ろうとして調理を始めた。

「……」

トントンと包丁で食材を切るリズムが何時しか眠気を誘う子守唄的な感じに、店主は安らかな睡魔に包まれる。調理中にいかんと首を振って粘りつくような眠気を振り払う。調理に神経を研ぎ澄ませて

集中、素早く作業を進める。たとえ甘い香りが、厨房内に充満しようと途中で手を止めることはせず没頭する。そして——料理を完成させた事に一息ついた店主は満足げな顔をして床に仰向けで倒れて雑魚寝をする。

厨房に音もなく侵入する影、目深に被られた黒のフードに、身軽さを重視した戦闘衣バトル・クロス、編み上げのブーツ。細い尻尾をくねらせ、フードに二つの山を作る猫キャットヒール 人の暗殺者は、店主の側に近づき、眠っていることを確認してその小振りな唇を動かす。

「何時まで経つてもお香の効き目が無いんだから冷や冷やしたわ。てか、どこまで料理に情熱持っているのよ。完成するまで意地でも眠らない意思が感じちゃったし」

右手に握られている暗剣を構え、店主の首を突き刺そうとする姿勢で自嘲的な笑みを浮かべだす。

「恨みなんてないけれど、誰かに恨みを買った貴方が悪いってことで……今まで美味しい料理を振る舞ってくれてありがとう。——さようなら」

少し寂しげな表情を浮かべて別れの言葉を送りながら暗剣を持つ手に力を入れる、その直前。眠りについていて店主の瞼がパチリと開いた。

「っ!?!」
ニヤアと悪戯が成功した悪戯っ子のように笑みを浮かべだす店主。自分を誘いだす演技だったと理解した刹那に飛び引いて瞠目した目のまま叫んだ。

『眠りの香』が効いてないの!?!香の効果で数時間は目が覚めない筈なのに!」
「この甘い香りの事か? いや、確かに眠りに掛りそうだったが……いま俺達がいる場所はどこだと思っっているんだ?」

逆に問われて「は?」と訝しむ暗殺者。だからなんだと臨戦態勢のまま思った時に何かに気付いた。——自分がまいた香が薄く消えかかっていることに。

「ここは料理を作るキッチン、厨房だ。食べに来た客の為に料理を振る舞うために作った際に漂う『様々な匂いや煙の対策』は当たり前なんだぞ」

そう、店主の言葉通りに厨房内は匂いや煙に対する設備がある。今さつき店主が作っていた料理も作る際に必ず『換気扇』という名の物がフル稼働している真つ最中。暗殺者がまいた香すら、空気の換気の為に外へと吸われて厨房内は相も変わらずクリーンな状態で保つてるのである。

「私が香を使う事を想定して……」

「いや？直接襲いかかって来るもんだと思っていたんだがな。ただの偶然に過ぎないさ。そっちが香を使おうとしてこっちが料理の為に空気の換気をしていた。偶然が重なってこんな結果になったんだろうさ」

失敗した、と軽く舌打ちをして暗殺者はほううと吐息をつく。

「これで、暗殺は失敗……」

何時の間にか暗剣とは別の握っていた武器を、そつと手放す。自然の摂理に従って落下するナイフ。店主がそれを目で追った直後——暗殺者は落ちてきたナイフの柄を、ブーツで蹴り飛ばした。

「ここからは、力尽く、ね」

飛来するナイフを店主はとっさに傍にあつたまな板を両手で持つて防ぐ。その隙に乘じ、駆け出した暗殺者は懐から取り出した煙玉を床に叩きつけた。目くらましである。

「戯れよ」

煙幕に紛れ、ささやかな歌が響いた。

「(詠唱か)」

耳で拾ったのは僅かな呪文。恐らくは超短文詠唱。何が来る？視界を塞がれた店主のワクワク感が跳ね上がる。本来ならば別の意味で戦場と呼ばれる厨房、頭に鍋、左手にまな板と右手にフライパンを装備し出す不格好な店主。

「——シッ！」

「(……)」

煙を破り、後方より斬りかかれる。何時の間に背後に回ったのか暗殺者が突撃してきた。条件反射で後ろへ振り返りまな板とフライパンで防ぐ構えをした刹那。黒い影が再び店主の背後より襲いかかった。

ザシユ——ッ！

無防備な背が凶刃にかかった。敵の得物、その刀身は淡い紫の色に染まっていた。斬られた店主は前方にいた暗殺者が霞みのように掻き消えた様子を直面から一拍、がくりと膝をついた。

「……毒か」

不自然な熱を発する背中の状態の予想を店主は悟った。

「この暗剣、《バイオレット》って言うの、可愛いでしょう？ 沢山の『毒』を吸わせてきた、私の特製^{スペシャル}」

「……」

「今日吸わせたのは……『毒^{ポイズン・ウエルミス}妖 蛭の毒液』」

とある貴重な『ドロップアイテム』の名に、店主は無表情となる。^{アビリティ}耐異常を貫通し、少量でも上級冒険者を苦しめる『劇毒』だ。無論、放っておけば死に至る。

「特效薬なんて持ってないでしょう？ 持っていたとしても、使わせないけど」

ナイフを振り鳴らす暗殺者の背後より、またもう一人の暗殺者が現れ、クスクスと笑う。増えた暗殺者から気を感じず魔力のみしか感じられないところ『幻影』の類の魔法だろうと推測する店主。眠りの香、毒、幻影。暗殺者の暗殺方は元の世界にいる知り合いの暗殺者とやり方が違うなど、懐かしむ。そしてこう言う。

「お前、そんなのんびりしているけどさ。俺の知り合いの暗殺者だったらとつくに標的の命を飼っているぞ。のんびりし過ぎだ」

「へえ……暗殺者の知り合いがいたなんて知らなかったわ。それにその言い方、まるで私の暗殺はトロいみたいじゃない？」

「実際あくびが出るほど遅い。数え切れない数の人間を葬ってきただろうが、刀一本で瞬時に相手を葬るあいつの方が断然速い」

元の世界にいる食いしんぼう暗殺者を思い出しながら、かつて共に

戦った時の姿と目の前の暗殺者との動きを比べた発言は、相手のプライドに刺激を与えるものだった。

「どこの暗殺者か知らないけれど、自分の立場わかってる？Lv. 2の貴方の「ステイタス」程度じゃ『劇毒』に堪え切れずもがき苦しみ血反吐を吐いて死ぬ運命はもう決まってるの」

「……ああ、そうだろうな」

立ち上がる店主の動作を一瞬たりとも目から離さず見逃さない。ジリジリと後退し出す標的はこの場を脱しようとしているのが丸わかりだ。煙幕も稼働している換気扇によつて外へと排出されて厨房内が見えやすくなっている。

「だけどその運命、覆させてもらうぜ」

「特效薬がなく、毒に犯されて、格上の相手に命を狙われているこの状況からどうやって?」

店主の装備は調理道具のみ。戦闘用の道具を所持していないのは明白。外に飛び出して助けを乞おうと直ぐには駆け付けず、誰も争い事や面倒事は巻き込まれたくまい、とお人好しの者以外は手助けはしてくれないだろう。嘲笑する暗殺者はさっさと殺すことに決めた。そんなことされたら面倒だし同業者が何時来るか分かったものではない故に。店主へ近寄る際、つまみ用として作られていた魚料理が視界の隅に入り、暗殺を終えたら二度とこの店の料理を口にできない気持ちになり、最後の晚餐として店主から目を離さずつまみぐいした。「ん、美味しい………んんっ!?!」

その刹那。暗殺者の全身が細胞レベルまで激しい刺激に襲われた。全身が落雷に受けたような衝撃と共に腰が砕けそうになった。そこは暗殺者の意地で持ち堪えたが、身体が急に熱くなって思考が蕩けて鈍く、まるで大量の酒を飲んで酔っ払う感覚だと自分の状態の異常を認知する。

「あーあー、それ、食っちゃったか。どこまで魚に夢中なんだ?ま、そこが可愛くていいんだけどな」

「な、何を入れたの………つ。まさか、毒………!?!」

「料理店の長が毒物を混入するか。ただ、猫キャットピープル人に効果抜群の専用の

物を入れてみた」

それが何なのか暗殺者は理解に苦しんだ。そして、どうしてそんな物を作ったんだと問いただきたい思いが店主に通じた。

「うちの従業員の猫 キヤットピープル 人に食わせて、酔っぱらったところを狙って耳と尻尾を触るためだから」

「こ、この……ド変態め……っ!」

「ふははは、モフモフするためなら何でもしてみせるのが俺なのさ。」

——形勢逆転かなこれは?」

劇毒に犯されているのに平然とした態度で逆に暗殺者へと近づくと店主。耐異常は身体に影響する類の物に対して耐性、耐久力が発揮するものだが、ソレに上回る異常や生物の本能を呼び起こす類の物には効果は薄い。今の暗殺者は猫 キヤットピープル 人の本能を呼び起こされ、十全の戦いが出来なくなってしまうって苦虫を噛み潰したような表情を浮かべた。

「さあ……優しく愛なでてやろう。俺の命を狙ってきたんだ。死ぬ覚悟があるからにはそれ相応の覚悟もあるんだろう?」

つまりは、覚悟があるものには何をしてもOK!と捉えている店主。この瞬間、暗殺者へ両手を伸ばし邪笑みを浮かべる今の店主は、犯罪者極まりない言動をしているのだがそれを指摘する者は二人以外誰も存在しなかった。

「くっ……」

葬る筈が貞操を奪われかねない状況に陥る暗殺者。つまみ食いなんてしなければこんなことにならなかったのにと自分を責め恨んだ。

——美味し過ぎるからいけないんだとも。近づいてくる店主に暗殺者は今の状態では相手が格下であろうとヘマをする恐れがあると可能性を考慮し、一時撤退でも——と思った瞬間。壁を殴る音が店主と暗殺者の耳朶に触れた。揃ってなんだこの音は?と思っただが、壁は壊れることなく静寂を取り戻して少し経った時に裏口から姿を現す第三者の少女 ヒューマン。何故か涙目で片手を労わる様に片手を触れている。

「店主、殺る前に聞いていい。何この店の壁、木造だと思っただけ殴ったら『オリハルコン』の壁じゃない。おかげで拳が痛くてしょうがないよ

！」

「当たり前じゃん。この店を零から作ったのは俺自身だぞ？この店の壁や天井、骨組や支柱等は全部『オリハルコン』でその上に木材を使って覆うように被せているんだ。これ、俺以外の従業員は殆ど知らない構造なんだけどな」

希少な金属の塊の店だと知って暗殺者と少女は愕然としながらも「この店主、阿呆の極まりだ！（ニヤー）」と店主に対する思いが一致した。

「で、まさかお前も俺の命を？」

「・・・悪いね。これが私の仕事だし最後の仕事でもあるんだ。だから店主、あんたを仕留めさせてもらうよ」

首に巻かれた防寒着、肩や胸を守る軽装、そして拳に装着された革の指抜き手袋^{グローブ}。栗色の髪をなびかせ、ヒューマンの少女は店主と相対する。

「・・・まさか、本当に『黒拳』が来るなんて」

「そういうあんたは『黒猫』？じゃあ、^{ダブル・バウンティ}標的重複だ」

暗殺者に嘆息されるヒューマンの少女はそちらへ視線を向け、淡々と受け答えた。

「獲物が被った場合は早いもん勝ち・・・それがうちの掟。どっちが仕留めても恨みつこなしね」

「ええいつ。噂に違わぬ筋肉脳め・・・！」

忌々しそうに吐き捨てる暗殺者から視線を切り、少女は店主に向き直る。

「そういうわけだから、ごめんね。覚悟してね」

「謝るぐらいなら狙わないでくれる？」

「無理、だって私は賞金^{バウンティハンター}首稼ぎだから」

そしてもう一人の方は暗殺者。『黒猫』と『黒拳』と二つ名持ちの少女達を前に、店主が新鮮さと共に場違いな実感を抱いた。暗殺者はともかく賞金稼ぎに狙われる身、すっかり自分も賞金首なのだ。同時に『黒拳』も『黒猫』も、数年早く出会っていたら自分に近い同世代の少女だっただろうなど、不思議な感覚も味わった。

「構えなよ。問答無用で襲いかかるの、あんまり好きじゃないから」
「……」

両の拳をぶつけ、臨戦態勢に移る『黒拳』に、店主は思った。その言動はおよそ賞金稼ぎに似つかわしくないなど。そして久しく拳を武器にする者と出会い、徐に被っていた鍋を取って拳を構える臨戦態勢に移る店主。

「へえ？店主って道具を使って戦う冒険者だって思っていたんだけど。もしかして肉弾戦も得意？」

「どつちかかってと言うとそうだな。あの戦い方は敢えてそういう戦いをする冒険者だと思わせる一環だったんだ。俺は異邦人だから余計な注目は浴びたくないからさ」

「そつか。でも、死ぬ羽目になるなんて運が無いね」

「そうとも限らないさ。俺は割と運が良い方なんだ。今日なんて、お前等と本当の意味で腹を割って話せる機会が得たんだからな」

つまり、出会った時から自分達の生業を気付いていたと言外された。二人は目を丸くしながらも今日まで笑って客として迎え入れ、美味しい料理を振る舞ってくれた店主に少し罪悪感を覚えた。

「取り敢えず、ここじゃなんだから外へ出ようか」

踵返して厨房を後にする店主の行動を二人は追従し、それぞれ切り直しと配置ポジションにつく。人気のない闇夜に覆われたオラリオのメインストリートのと真ん中に店主と『黒拳』——ルノアが改めて相対する。

戦いの合図も無しで間もなく、正面の少女の腰が沈み、店主も地を蹴った。

「うらあつー」

互いに突っ込み、拳撃と拳撃が直撃する。今までこの生業で標的を殴り殺してきた経験から、ルノアは店主の拳を砕く自信は揺るぎなかった。が、

「っ!？」

まるで鋼鉄の塊を殴ったような鈍痛が拳から伝わった。その原因たる店主の握った拳が黒く染まっていて、『スキル』か『魔法』の類か

と推測したルノアに店主はこう答えた。

「お前の二つ名を奪うようで悪いなルノア」

握り締めるもう片方の拳も黒く染まり出す。腕を引いて殴る姿勢の店主の言動に本能が危険信号を発してルノアに警告する。しかし、何時の間にか強く足を踏まれて居て――。

「俺は相手が女であろうと殴る主義だ。命を狙ってくる相手だったら尚更な」

戦いに関して紳士を捨て、相手を倒す気構えの店主は躊躇なくルノアが反応できない速度の拳撃を放った。顔面に直撃して鼻骨が砕けた感触と共に鼻血を流す顔が激痛で顰めるも拳を突き出すルノア。その拳を腕で往なす。瞬時で頬を殴る。押さえられているもう片方の振り上げた横薙ぎの足の蹴りに対して敢えて首で受け止めた。

「おーおー。脳筋どもは単純でいいニヤ」

交戦する店主とルノアを、暗殺者――クロエは上った建物の屋根から見下ろしていた。熱血など馬鹿な連中がすることである。漁夫の利を狙うクロエは嘲笑をこぼしながら、店主と『黒拳』、両者の動きが鈍化するのを待っていた。

「二人ともミャーが横槍するのはよそくしてるだろうけど……無駄ニヤ。ネチネチ外から攻撃して、美味しいところをさらってやるのニヤ」

ゲスな笑みを浮かべ、指の間に三本の投げナイフを取り出すしばらくクロエ達以外の部外者は介入してこない。近隣の住民は物騒な争音を聞き付けているだろうが、悪党どもが起こす騒動に慣れきってしまっている彼等は避難を優先させるだろう。ギルドと他の冒険者が急いで駆けつけてくる頃には店主は死んでいる。それまで邪魔者はいない。自分の独壇場だとクロエは唇を吊り上げた。が、

「ニヤ?。」

店主が自分の方へ手を開いた状態で突き出してきた。放出系の『魔法』でも放つつもりか?と回避するために腰を上げた瞬間。自分の意思に反して身体が突然見えない何かに引っ張られて店主の方へと引き寄せられる。原因は不明。ただ、店主へ引き寄せられる状態で取り

出していた投げナイフを全弾投擲する。せめての牽制の投擲があたり指の間で受け止められたのを見届けず、店主の足元に煙玉を炸裂させる。

「——【戯れよ】！」

すかさず、詠唱。煙に包まれるクロエの左右に、光の粒子群が渦を為す。

「フェレス・クルス」

刹那、にたいの『幻影』が音もなく出現した。

「フェレス・クルス」。術者と同等の幻影体ミラーージュを生み出す超短文型の幻影魔法。上限は二体。実態無き幻影体ミラーージュは攻撃も防御もできないものの、クロエの意のままに動く。この『魔法』を持ってクロエは陽動・攪乱・奇襲——暗殺のあらゆる主管に活用してきた。

「（引き寄せられているなら逆にこの煙の中で幻影体ミラーージュに気を取られているうちに、刺す!）」

真つ向から戦闘が不得手なクロエの必勝法。煙幕に紛れて幻影達を先に店主の方へと向かわせ隙が出来たところを狙う腹の彼女の目と鼻の先、煙幕を突き破る様にして現れた手が幻影体ミラーージュを完全に無視して本物の首を掴む。首を掴んでくる相手の腕を暗剣で切り裂くも、そのまま力強く引つ張られ自分が張った煙幕の中から栗毛の髪が視界にドアップしたと頃には。

ゴツンツ

「~~~~~!!!!!!」

二つの額が、頭がぶつけ合う事態になった。

「いったあ~~~~~!!?」

「ツニヤアツ~~~~~!!?」

二人仲良く揃って石畳のメインストリートで頭を抑えて激しい痛みで蹲る。

「こ、この石頭……っ。何て頭をしているんだニヤっ！本当に脳筋できているのニヤか!?ミヤアの頭が潰れちゃったかと思つたニヤ!」

「それはごつちのセリフだよ！どうして私の頭とぶつかるような事に

なるんだよ！今初めて知ったけど猫キャットピーパー 人のクセに飛び降りるの下手なんじゃないの!？」

「下手じゃニヤい！店主に引き寄せられたからだニヤ！『黒拳』こそ何時まで案山子のようになっていたからぶつけられたニヤいか！」

「足を踏まれて逃げれなかったんだよ！この馬鹿猫！」

「ニヤんだとこの脳筋女！」

煙幕の中で顔を突き出し合い、言い合いを始める二人だったが標的を前に喧嘩など自分の死に繋がると思いつて一先ず休戦。同時にまた二人の頭が音もなく気配を消していた店主に掴まれては、お互いの頭をぶつけられる。

「い、一度ならず………っ」

「に、二度までするなんて………っ」

許せんっ、と涙目で店主へ見上げた時には、手刀の構えをしていた店主が手を振り下ろすところをだった。ルノアとクロエは左右に飛び退いて回避したら二人がいた地面に斬撃がどこまでも走ってメインストリートに深い溝を残す。

「………」

この威力、この技………Lv. 2の冒険者が出来る所業ではない事を悟り、恐る恐ると店主へ問う。

「あんだ、Lv. は2の上級冒険者なんだよね………？」

「ああ、正式の記録はそうだ。【ステイタス】もそうだ」

「Lv. 4のミャー達を相手にしてまだ生き残っている時点で不自然過ぎるニヤ」

「不自然なのは当然だろうな。俺はLv. 云々関係なく強いから。オラリオで唯一Lv. 7の冒険者とタメ張れるほど強いからな」

大切なことなので二度言った店主に絶句する。

「い、いやいや。嘘でしょ？いくらなんでも話を誇張し過ぎ」

「そうニヤ。見栄を張るなんて恥かくだけニヤ」

上級冒険者が最強の冒険者とタメ張れる等ありはしない。第二級冒険者であると主張するルノア達でさえも第一級冒険者には敵わないのだから尚更である。だが、店主は邪な笑みと不敵な笑みが混ざっ

た嘲笑をこぼした。

「そうか、信じてくれないなら証明してやるしかないな。その身でよ」
次の瞬間。メインストリートを囲む幾重の魔法円マジックサークルが発現した。ギョツと周囲の『魔法』に瞠目するルノアとクロエは背中を合わせて身構える。そして店主は一言告げる。

「お前等は襲う相手を間違えた」

彼女達の懐に飛び込んだ店主がクロエを殴り飛ばしたあと、ルノアの腰に蹴りを入れて飛ばす。地面に何度か跳ね上がって痛みに堪えながら体勢を整えた黒猫の真上から店主が拳を突き出して来て、間一髪横へかわしたがメインストリートが激しくクレーターを作るどころか粉碎、破碎してのける彼の標的の威力にゾツと慄く。あんなもの人体で受けたら間違いない骨折だけで済まない重傷を負う未来が待っている。確信した彼女へ数多の火炎球が展開された真紅の魔方阵から無詠唱で放たれ、回避に専念する。その余波がルノアにも巻き込み焦燥に駆られて逃げ惑う。追尾性の魔法なのか逃げても追従する火炎球に混じって店主が飛び掛かってきた。真紅の龍を彷彿させる全身型鎧フルプレートで身に包んで。

「異世界で培った俺の強さを味わえ」

そこから先の戦いは戦いとは呼べず一方的な蹂躪の始まりに過ぎなかった。まず最初にルノアの拳撃が鎧をブチ破れずも防寒着マフラーをなびかせながら果敢に攻めかかる。

「(何こいつの鎧。私の拳で壊れないってどんだけなのよっ)」

そして何時の間に鎧なんて着たのか疑問が過るが、Lv. に似つかない殺人的なパンチを繰り出す店主の拳撃を紙一重でかわすだけでも精一杯なルノアは追い詰められていた。何度も耳元で拳の風圧音が聞こえ、後方から猫の悲鳴が聞こえてくるが気にする余裕も暇もない。

「あんだ、一体何者なんだ!」

「異邦人の料理店の店長だ」

「嘘つけよ!」

いや、あながち間違っていないんだけど。と心中呟く店主だが相手は

信じてくれなかった。ま、いいや。とあつきりどうでもよくなった店主はルノアの足元に魔方陣を展開しては、彼女を真上へと跳ね飛ばした。突然の事で目を白黒し、身体が思うように動かせれない空中でしばし重力の鎖から解き放たれたところに店主が目の前に現れる。殴る姿勢の敵に両腕を交差して防御の姿勢にはいるが、ガシツとルノアの足が掴まれると勢いよく店主と下へ落ちて背中を地面に激しく叩きつけられた同時に雷と炎の魔法を食らわされた。

「がっああああああああっ!!?」

炎雷に包まれたあの『黒拳』がやられた。その時点で店主のLv.は4かそれ以上のものだと推測したクロエは、こんな強いなんて聞いていない!と依頼人へ悲鳴と罵声が混じった叫びを心中でした。しかも毒妖蛭の毒の影響は全く見受けられないではないか!

「(猫の皮どころか、何かの化けの皮を剥がして本当の実力で戦っているとしたら……)」

相手がギルド公認で正式なLv.の位であろうとこうして実際に戦って第二級冒険者並の実力を有する自分達と戦って無事で済む第三級冒険者など存在するはずが無い。有り得なさすぎるのだ。クロエは店主の底しれない何かをようやく感じて依頼人に聞いたですつもりも兼ねてこの場から撤退の念を抱き、煙幕を張った。自他共に視界を遮るこの煙に乗じてこの場から逃げ――。

「逃げられるとも思ったか?」

四方八方から計十二人の真紅の鎧の店主が同時にクロエを取り囲む。突如現れた同じ店主等はまるで、己の十八番の魔法と酷似していたため素っ頓狂に張り叫んだ。

「幻影体!」

「違うぞ。全員、実体を持っている分身体だ。強さは俺と遜色ない」

最後に現れた店主がクロエの疑問を打ち明けた。オリジナルの店主も含め分身体の店主達は思い思いに動作したり邪笑を浮かべたり、じりじりと迫る。

「て、店主……っ!おミャー、一体何者なのニャ……!」

「異世界食堂の店主だ」

「それだけで納得する筈がないニヤァー！」

「俺の事なんざどうでもいいだろう？今は自分の身を心配した方が良
いぞ」

口角を吊り上げてゲスな笑みをする店主を、クロエは悪寒を感じて
堪らなくなった。

「——死ぬ覚悟できてるだろうから、殺されても文句はないな？」

火炎球を具現化する一同。その大きさは五M級でクロエの体を
すっぽり入るだろう燃え盛る炎の塊を見せつけられて、クロエは全力
で行動を取った。店主達の輪から跳躍して明後日の暗闇の方へ向か
い、闇に紛れて逃げるつもりが再び体が自分の意思に反して引つ張ら
れる。尻目で後ろを見た時、視界が顔を照らす迫る火炎球を捉えたの
を最後に全身が炎に包まれた。

「あつ、あああああああああああああつ?!」

激痛で悲鳴を上げ、炎を消そうと地面に転がり続ける。でも消えな
い。消える感じがしない。熱い、熱いつ、熱いつ！服が燃え、肌が焼
け、肉が焦げる腕を店主へ伸ばし救いを乞う。

「熱い………た、助けっ………!」

「どんな相手を殺してきたか知らないけど、命乞いをした人間を一人
でも見逃したか？それに俺を暗殺しに来たやつが命乞いなんて惨め
だな」

「因果応報。その報いを受け入れろ」

その言葉がクロエの耳朵に触れた瞬間。走馬灯が脳裏に過り、他人
事のように空笑いする。自分の人生は確かにロクでもなく最後まで
真つ当な生き方をしなかったなど。自分を看取る店主の眼差しを手
放す意識の中、最後まで見つめた。

「………」

店主を残して倒れ伏すルノアとクロエ。戦いを終わらせたことで
周囲に張っていた魔方陣を解き、分身体も消して鎧も解除する。魔法
で寄せた改めて二人を一瞥する。店主の魔法を食らって尚——ま
だ生きている。服は燃えて産まれたままの姿でただ意識を失ってい

るだけなのだ。重度の火傷を負っているがそれでも店主は命までは奪わなかった。

「おい、起きろ」

で、鬼畜なことに気付くとして『氷河の領域』の階層と直接繋げて極寒の水を素っ裸の二人にぶっかけた。

「つくつく!!?」

余りにも冷たさで瞬時に意識を取り戻して目を開けては起き上がる二人だった。

「寒っ、冷たっ!?!え、何で私裸なの!?!」

「というか、何でミヤーは生きて・・・?死んだんじゃ・・・」

羞恥と疑問が混濁して動揺する二人の前に店主は跪いて視線を合わせる。

「ああ、一度お前等を殺した。だから暗殺者の『黒猫』とか賞金^{パウンイテハンター}首狩りの『黒拳』とかなんていう奴もう死んだ。今のお前等はその姿の様にただのルノア・ファウストとクロエ・ロロって少女だ」

「・・・」

「人を殺す生業はもうお終いだ。これからはお前等の好物の料理を毎日振る舞ってやるからよ。俺の家族になれ」

と、心からそう言っつては子供の様に笑う店主。ルノアは両腕で局部を隠しながら怪訝に訊ねた。

「『フレイヤ・ファミア』に入れてこと?」

「いや?俺の側にいてくれて意味だ。『ファミア』とかは無関係だ」

「店主を殺そうとした暗殺者を侍らせたなんて何を考えているんだニヤ」

「二人の実力は十分わかったし、俺の店に働いてもらいたいんだ。それを含めてお前等の事は好きなんだよ。友達としても異性としてもよ」

なっ、と突然の告白に硬直する。殺し合った仲なのに、店主が自分達に好意を抱いていたとは露も知らなかったルノアとクロエは瞠目する。

「ミャーのこと友達って……何時からそんな関係になったニャ。ミャーはなつた覚えはないニャ」

「軽口叩けて気を許しあっている仲だったらそれはもう友達みたいなもんだらう？ルノアだって人の店で何度も居眠りするんだし居心地が良いんだろ？」

「それは……まあ、そうだけど」

なら、いいじゃんそれでと相好を崩す店主。

「これからよろしくな二人とも」

「二え、働くのもう決定事項？」

「当然だ。この店の店主が直々にお前等を倒したからには俺の言う事を聞いてもらわないと、死んでもらうしかないんだけど？命を狙ってくる輩を放っておくほど俺は甘くないし」

死にたいならまた殺すけど。と気で具現化した剣を突き付ける男に少女達はぐうの音も出ず降参の雰囲気を醸し出す。

「——はははっ！いい塩梅に互いを潰し合ってるな！」

と、そこで。店主達以外の第三者の声が、メインストリートに響き渡った。

「なんだ……？？」

店主が辺りを見回すと、ぞろぞろと無数のゴロツキ達が路地裏や向こうのメインストリートから姿を現した。それぞれの手には、剣や棍棒などの武器が握られている。

「ブルーノ商会……？？どういうこと店主は私に任せるって話でしょ？全裸のままであるがルノアは鋭い目付きで、ゴロツキ達を従えるヒューマンの男を睨んだ。その側には卑しい笑みを浮かべるドワーフもいる。

「あのドワーフ……ミャーに依頼を持ちかけた依頼人クライアントニャ」

クロエが目を細め。店主達もこの状況を段々と察し始めた。

「そっか、そういうことね……つまり最初から、店主だけじゃなく私達を……」

「その通り！『黒拳』と『黒猫』、お前達も私達にとって既に邪魔な存在だ！」

ヒューマンの商人——ブルーノ商会の幹部は笑いながら肯定した。

『『異世界食堂』の店主とお前達を戦わせ、弱ったところを討ち取る……それがこの依頼の全貌だ！』

店主の標的ダブル・バウンティ重複も手の内の出来事だったというわけだ。背後で繋がっている商会同士が同じ情報を提供し、ルノアとクロエを誘導した上で、店主抹殺の決行日まで重ね合わせたのである。

「闇派閥は倒れた！他ならない店主、お前のおかげで！これより街は、オラリオは生まれ変わるだろう！」

多くの者達が予感しているように、商人の幹部も同じ未来を口にし、なお向上を続ける。

「そして生まれ変わる新たなオラリオの秩序を作るのは我々、商会だ！その時にお前達のような無所属フッリの傭兵崩れが、不穏分子がいるのは不味いのだよ!!」

商会幹部はここまで事が運んでうまくいった喜びで夢うちようてん中となってご高説を並べた。私利私欲を満たす商人の欲望を垣間見せながら、目を向き続ける。

「もとより、我々と闇派閥イルヴァイスの関係を知る者達を捨て置くことなどできん！やれ、お前達！」

手を伸ばし、男は周囲の荒くれ者達に命令を下す。傷だらけの全裸で可憐な少女二人に舌なめずりしながら、ゴロツキ達が包囲網を狭め始める。だが、

「はあ……くだらしない」

「もうド三流過ぎて、ニヤ……」

ルノアとクロエは、盛大な溜息をつけて脱力した。

「こんなしよーもない企みに利用された自分が一番、頭にくるよ……」

「しようがないのニヤ、ミヤーは今後の進退について悩んでいたから……」

遠い目をするクロエ達の頭に手を置いて撫でだす店主はとても嘲笑う顔で言葉を送った。

「き、貴様を直ぐにでもギルドに報告してやる！『異世界食堂』の店主は化けの皮を被ってるモンスターだとな！」

前者はともかく後者は困るなあと思って止めを刺すつもりで一歩前に前進した時。

「——あら、それは困るわ」

ソプラノ声が蒼夜のどこからともなく聞こえ出した。同時に一同を取り囲むようにして人影が建物の屋根からだったり路地裏からだったりして多数現れる。

「私の大切な眷族を捕まえてモンスターなんてギルドに言いがかりを付けられると困っちゃうわ」

巖のような巨軀を誇る猪人ポアズを従わせ現れるは下界の全てを美の虜にさせかねない美の化身にして美の女神、銀髪をなびかせ黒いナイトドレスで豊満な身を包むフレイヤ。店主は怪訝になった。

「……なんでいんの？」

「何時まで経っても帰って来ない子を迎えに来ただけよ？」

「迎えに、ねえ……来る必要もなさそうな連中も誘ってか」

店主に近寄る精緻な人形と紛うほど小柄で丸い瞳の銀髪の少女が傷の手当てを始め出した。

「取り敢えず、この先はこちらで任せてもらおう」

「状況を把握しているのかシャクテイ？」

藍色の髪の麗人の冒険者が商会幹部らを団員達にひっ捕らえさせるので店主は不思議に思った。今の今までこの場にいなかった者が善悪を判別できるのかと小首を傾げる。シャクテイの首が肯定と頷いた。

「途中まで話を聞いていた」

「来ていたなら早く出て来て欲しかったもんだ」

「すまないな……この者達はどうする」

シャクテイがルノアとクロエへ視線を向ける。店主の命を狙った輩と見越しての発言で、特にクロエを見る目が厳しかった。視られている当の黒猫は尻尾を委縮させてどこか震えているようにも見えないくもない。店主はそんな猫とヒューマンの少女に近づいて優しく翼

で寄せる。

「あー、こいつ等は俺の店で働くことになった新人だ。俺の戦いに巻き込まれてこうなったんだよ。気にするな」

「店主……」

無理な話しだと承知の上で語る店主に女団長は息をこぼした。

「……そうか。なら、私は何も見ていない。この場で起きたことも、店主を狙っていた輩も……何も、な」

一拍遅れて店主は感謝の言葉を述べた。その後、速やかに行動を移された。店主、『黒拳』、『黒猫』を陥れようとしたブルーノ商会の幹部達はその日の内にギルドに連行された。ついでにブルーノ商会そのものも。全て「ガネーシャ・ファミリア」の仕業である。電光石火の勢いでブルーノ商会に乗り込み背後バックにいた「ファミリア」ごと壊滅させた彼の「ファミリア」の活躍振りは、数年先の未来でも語り草となることになる——。それ以前に関わっていた三人の人物を秘匿されるが当人達は気にすることはなく翌日を迎える。

「今日から新たに働くことになった元暗殺者と元賞金稼ぎの二人だ」

「ちよ、そんな事紹介しなくていいニヤ！」

「そ、そうだよ！逆に怯えちゃうってば！」

「問題ないぞ。皆神経が凶太いから受け入れる方だから。な、何か問題でもあるか？」

「「「ありませーん！」「」」」

「「ええー……」」

「なんだい、ここはオラリオだよ？店を構えるからには荒事や面倒事の対処や度胸が無いんじや働けないのが常識なんだよ。人殺しをした新人が入ったぐらいで怯えるような娘は一人もいないようには」

豪快にミアも何の問題なく二人を迎え入れる。ルノアとクロエは『異世界食堂』のウエイトレスの制服を身に包んだ出で立ちで働くことになった。店主の思惑通りになってホクホク顔をしている。

「ふふふつ、これで何時でも好きなかだけクロエの耳と尻尾を触れるなあ」

「フニヤツ!？」

クロエの黒い髪のを撫でてご満悦の店主。撫でられる本人は羞恥で顔を赤らめるも抵抗せずどこか心地よさそうに「ニヤ〜……………」と鳴いて尾を揺らす。

「ニヤー!ズルいニヤ、ミヤーも撫でて欲しいのニヤー!」

キャットビープル

猫 人のアーニヤが主張して求めれば、獣人の少女達も撫でて欲しいと乞う。店主は歓喜の色を顔に浮かべてよしよし、よしよしと満面の笑みで撫でる。

「……………ねえ、店主ってこんな感じなの？」

「ええ、獣人の耳と尻尾の感触が好きみたいなんです。隙あらば触つてますよ」

「男でも？」

「老若男女問わずです」

問うた従業員のエルフからの返答にそうなんだ、とルノアは認知した。

「メイは体がちっこいから抱き心地がいいなあ〜♪」

「あう、店主、くすぐったいニヤ〜」

こんな店主だから店員達も笑って働けるのだろうか。こんな店主だからこの店は居心地が良いのだろうか。獣人の店員やヒューマン、デミ・ヒューマン 亜 人の店員達とも戯れだし、最後はルノア。

「ルノア、よろしくな」

「……………うん、よろしくね店主」

抱擁を交わす二人。その際、耳元で囁かれる。

「異性として好きなのは冗談じゃないからな？」

「っ!？」

冒険譚 16

ギルド本部の真下に築き上げられた地下神殿には何物にも音は届かない。四炬の松明に照らされてる『祈祷の間』で、二人の男神が相對していた。床に敷き詰められた石板。天井は高く、暗闇に塞がれており、壁の石材からは積み重ねられた年月を感じさせる。まるで忘れ去られた『古代』の神殿のようだ。

「久しいな、ガネーシャ」

「そう、何を隠そう俺が【群衆の主】ガネーシャである！」

一人は象頭の仮面を顔に装着している肌が健康的に焼けたような褐色の男神【ガネーシャ・ファミリア】の主神ガネーシャ。もう一人は巨大な石造の玉座——神座に凝然ぎようぜんと腰かけている老人。二Mを超す身体は逞しく、迫力も、存在感も、そして発散される神威も通常の神々とは大きく異なる。纏っているローブ、フードから覗くのは長く伸びた白髪と白髭だ。肘掛けに太い両腕を置いたままビクリとも身じろぎをしない。彫像のように、支配者の様に、彼はそこにただ在り続けている。巍然たる不動の王——ギルドの『真の王』は、ガネーシャと正対する。

「俺をこの場に招いたのはどういう事なのだウラノス」

「私の神威に協力してもらいたい故に呼んだのだ。オラリオに永住している神々の中で私の神威の協力を不可欠な男神を」

協力とは何のことだと疑問を抱くガネーシャにウラノスは個神的に抱えてるものを打ち明けた。

「人類モンスターと怪物との融和を、共存を図るためだ」

「な……」

ウラノスの発言に、ガネーシャは仮面の中で目を見開き空いた口が塞がらないほど驚愕を見せた。老人は表情を小揺るぎもさせず、男神の視線を受け止める。

「ウラノス……自分が何を言っているのか、わかっているのか。ダンジョンのモンスターと人類の子供が融和も共存もできる筈が無い」

「理解している。だが、お前が思っているモンスターとは異なる」
「異なるモンスター……?」

不意に脳裏に異世界のモンスターの姿が過った。まさか、あの子供の事か?とギルドにバレていたのかと警戒する。

「ダンジョンに理知を備えるモンスターが存在している。それも本能のままに襲いかかるのではなく、人との対話を望んでいるモンスターだ。私は意思を備え、それを伝える術を持ち、理性と宿している彼等の事を『異端児』と呼称している」

『異端児』……」

そんな信じられないようなモンスターがダンジョンに存在していたとは、眷族達もきつと知らぬことであろう。今の今まで目撃も発見も挙がらなかったモンスターの存在がこのような形で明かされるとはガネーシヤも露にも思わなかった。

「……信じられん、というのが今の気持ちだ。その様なモンスターは本当にいるのかすら信用できん。それも口だけ語られては協力も難しい」

首を横に振りながら率直な思いを口にした。千年前から人類の天敵として存在していたモンスターが何故今頃人類と融和を、共存を求めめるのか理解し難い。それを手助けしようとしているのがオラリオを創設した張本神なのだからますます理解に苦しむ――。

「わかった、ならば別の機会の時に会わせよう」

突如、ウラノスがとんでもないことを言いだした。会わせる?モンスターをここに連れてくると言うのか?

「できるのか、地上にモンスターを連れてくることなどすればオラリオは騒ぎになるぞ」

「問題ない」

断言され、話しは以上だと醸し出す雰囲気を感じ取る男神は地上に繋がる階段ではなく、暗闇の方へと足を運び出す途中で止まった。

「ウラノス、その時に一人だけ子供を連れて来ていいか」

「お前の子供か」

「元がつく。今はフレイヤの子供であるからな」

「信用を寄せられる子供であるのか」

蒼い双眸が真っ直ぐ見つめる。ガネーシヤはその視線を真っ直ぐ受け止めながら断言した。

「できる。なぜならばその子供は——異邦の者であるからな」

『異世界食堂』にルノアとクロエという新人が働くようになってから六日目の朝を迎えた。二人も『幽玄の白天城』に住み着いてからというもの生活も一変し、驚嘆を漏らし歓喜を抱く。

「え、何ここ？あ、あれって打撃練習用具？私以外にも持っているなんて意外だ」

「ここは肉体を鍛えるためのトレーニングルーム。平たく言えば肉体強化向上専用の部屋だ。最後の一言を返させてもらおうと俺のセリフだからな？この世界にもサンドバックがあるなんて驚いたし」

城の地下施設のプールと隣接するように存在しているトレーニングルームに案内されたルノア。見たことのない用具が所々に鎮座していて、中には大きな鉄の円盤までもがあった。あれはなんだろうと指を突き付けて訊ねた。

「あのおっきな円盤は何？」

「ダンベルと言って腕力を鍛えるための道具だ。同じ重さのを鉄の棒に差し込んで、立ったり寝転んでしながら何度も腕を酷使するぐらい持ち上げるんだよ」

実際にどんなやり方なのか見せつけ、ルノアにも体験させれば「こんな感じか」と感想を漏らした。

「それにしてもこの城を作ったって店主……じゃないイッセーって本当に異邦人、異世界から来た人なんだね。こんなの神様でもなきやできないよきつと」

「俺が知ってる神々は娯楽に飢えた、神あるまじき振る舞いをするような神じゃないがな」

「それってデメテル様も神として否定しているの？」

「豊穰を司るデメテルだから否定しない。俺が主に否定している神は人間臭すぎる神だ」

なにそれ？と疑問を浮かべるルノアに踵を返してトレーニングルームを後にし、一拍遅れて共に上階へ繋がる階段を共に彼女の新しい生活はこの城から始まるのだった。

「この城での生活はどうだ？」

「前に住んでいたと頃よりは天と地の差だよ。変な声がないしお風呂も自由に入れて、さっきの部屋も楽しみだし水泳施設プールもあって……イッサーの手料理も食べれる。もう前の生活には戻りたくないね」

「感謝感激してくれたようだなによりだ」

「それもあるけど、一番驚いたのが他所の「ファミリア」が一緒に住んでいるとか有り得なかつたんだけど」

他派閥同士は個人ならともかく基本的に接触は不干渉が常識である。だが、この城には「フレイヤ・ファミリア」、「ヘファイストス・ファミリア」の主神が当然の様に住み着くだけじゃなく、「ロキ・ファミリア」の団員を始め複数の「ファミリア」の元や現冒険者達が住んでいるのでルノアとクロエは度肝を抜かされた記憶はまだ新しい。

「元々は『異世界食堂』が出来る前から、複数の「ファミリア」の主神と団員が俺の料理を食べるために集まってきたのが始まりなんだよ」

「あー、イッサーの料理って珍しくて美味しいから？」

「そう、一週間同じ神か別の神が集りに来なかった日はない程にな。仕舞には店を構えてくれ、そしたら食べに行くって催促もされたから店を立ちあげたんだよ」

だと言うのに、直接集りに来るんだから店を構える意味ねーしと毒つき愚痴の一誠。意外な『異世界食堂』誕生の理由がそんなことだったとは、と神に振る舞われし者の姿は万国共通なんだなーと少し憐れに思えたルノアであった。

「デメテルも集りに来た神だからな」

「え、それこそ意外だよ。デメテル様もここに来たことがあるんだ」

「今でもあるぞ。ビールを作るためには麦が必要だし、作物も店や生

活にも不可欠だから」

直接この店の店主と契約をしている話を思い出し納得。ルノアはそのビールを作っている場所を見たいと乞い、連れてってもらえば天井や床、壁際までびっしりと覆うように設けられている管や巨大な金属の箱に筒だらけの部屋を見て圧倒した。

「す、すごっ！ビールってこんな大掛かりで作っていたの!？」

「これを作るのに苦労した……うん？」

中を歩いていた時に一誠が不意に足を止めた。それに伴いルノアもそうして眼前に——酔いどれ状態の椿・コルブランドと【ロキ・ファミリア】の主神ロキがビールを出す蛇口のところを占拠して飲んでた。無断でだ。

「くうく！出荷する前のビールは飲み放題で美味しいく！」

「出来立ては早く食べる方が美味しいというが、これは早く飲む方が良いだな神ロキ」

「せやせや、そんで冷蔵庫からちよろまかしたおつまみと一緒に飲食するビールは格別やで！」

「イツセーにバレたら謝れば問題なからう。美味そうであつたからついつつまんでしまったと」

ほう……ビールの事は黙るつもりなのか？無表情の一誠の存在を知らず、バレていないことをいいことに酒盛りを続ける飲兵衛共。ルノアはこの状況に困惑してどうすればよいのかと立ち尽くすが一歩前に足を出そうとする隣の男を見た。前に出した足はわざと大きな音を立たせて存在を主張する。

「——」

肩を跳ね上がらせる飲兵衛達は恐る恐ると背後にいる存在へ振り向き、視界に入れた途端に血の気が引いた様に赤らめていた顔が真っ青に染まった。

『他』派閥のモンが何勝手に無断で俺に黙って店の酒を飲んでいるんだ？ん？なあ、おい」

黒く染まった両手の指の関節をボキボキ鳴らしては炎雷を纏う。

「お前達の酒だつてちゃんと用意してるのに。なあ、一度ならず二度

までも勝手に俺の酒を飲まれちゃあさ。俺、この怒りをどう表しているんだろう？土下座して謝れても許す気は全然ないんだよ」

思わず一步二歩後退りして助けを乞う視線なんて気にしていられず、初めて見る一誠の怒りに声を失うルノア。椿とロキに近づいた龍影に覆われて……。

「——最期の晩餐は済んだな？」

それから二人の身に何が起きたのか、現場にいた元『黒拳』の少女は後に声明してくれた。

「あの人と殺し合いをしたというのに、助けられた自分が運に恵まれていたことを始めて痛感しました。え、あの二人は今どうしているって？……思い出すだけでも恐ろしいですよ。泣いても許しを乞うてもあの人は……笑いながら罰を与えたのですから」

二人への粛清もといお仕置きを終えたその日の内にもう一人も尋ねる。扉に叩いて音を鳴らし、訪問者の存在を主張する。「ちよつと待つて欲しいニャー」と声が聞こえれば待ち、入ってもいいと了承を得たら、無遠慮に扉を開けて中に入る部屋は豪華な絨毯や天蓋付きのベッド、シャンデリア型の魔石灯、更には暖炉型の魔石製品、調度品などの贅を尽くすが如く、この城に移り住む際に全ての所持品を持ってきた元『黒猫』だけの城になっていた。当の猫は下着姿でベッドに寝転がって優雅に葡萄を食べていた。

「って、店主もといイッセーかニャ。うら若き乙女の下着姿のミャーを堂々と見てきたって皆に言い触らしてやるニャ」

「返事を聞いてから入ったからにはそつちの対応が悪いってことだな」

クロエのもとへ寄りベッドの上に乗り出す。胡坐を描いて果物が盛られた皿に手を伸ばして葡萄を一つ摘む。

「この城に移り住んで慣れてきたか？」

「もう前の生活より断然こつちの方がいいニャ。ミャーが望んでいた家と環境が揃っているここなら飼ひ猫になってもいいのニャ。ただ一つ不満があるニャ」

「不満……？」

黒猫はビシツと一誠に指した。

「おミヤー、好物のアップルパイを食べる時に小さい子供になるニヤらずつとそうして欲しいニヤ。そしたらミヤーが可愛がってやるのに」

「……シヨタコンかお前」

「可愛い男児シヨタを舐めるニヤ！あの柔らかいお尻はミヤーの癒しであり宝ニヤー！」

性癖がねじ曲がってるクロエに物凄く呆れて深い溜息を吐く。こいつから世界中の子供に毒牙、魔の手から護らなければいけないかもしれないと、思う反面。

「子供が好きなら暗殺者じゃなくて保育士になりやいいものを……」
「ニヤ？保育士？」

何それ？と訊いてくるクロエに噛み砕いて教える一誠だった。

「この世界じゃ学区って学問を教えるモンがあるらしいな？保育士ってのはその一種だよ。親から幼児を朝から夕方まで預かって物事を教えたり半日親の代わりに世話をする施設で働く人のこと」

「へえ……それって異邦から来た、イツセーの生まれた世界にはそういう職業があるんだ」

「歴史や文化、科学や研究に技術、外国の事とか経済……挙げればキリがない専門職はたくさんあるんだよ」

それだけ働かないといけない職業があるなんて面倒臭そうニヤー。と内心で語る感想中に保育士という職業の内容にちよつぱり興味が湧いた。

「ミヤーでもその保育士になれるかニヤ？」

「元の世界じゃ保育士になるために必要な知識と資格を求められるんだが、この世界……このオラリオじゃあその知識と資格はないから難しいかな。俺、そういう育成に関する偉い人じゃないし。ただやろうと思えばできるぞ。ただ一緒に過こして物事を教えるだけなんだからな」

「その物事って何を教えればいいニヤ？」

「金銭的の計算や国語……きつと学区みたいに変わらないことを

すればいいさ」

預かる子供の人数が多いなら人を雇えば問題ない、とも教える一誠の話を聞き黒い尾を揺らす仕草は興味があると表している。

「保育士、保育士か……ミャーのためにあるような職業だニャー」
「天職だと思えば金を貯めておいて準備するんだな。応援だけはしておく」

「えー、一人じゃ大変ニャ。イツセー、お金を集めるぐらいは手伝って欲しいニャ。店主なんだから従業員のお願いを聞くのも店主として努めなきゃいけないニャ」

「ほお、金銭面の援助ねえ……」

不意に一誠は黒い尾へ手を伸ばしだす。

「クロエ、ここ数日不思議なことが起きてるんだ」

「不思議な事？」

「俺が売買のために育てているダンジョンの道具アイテムの素材・原料や希少な植物、宝石樹の実とかあるのを知ってるだろ？」

ピクツと尾が不自然に揺らめく。

「毎日それらの育ち具合や数のチェックをしている作業をしているからわかるんだが。何故か数が少ないんだよ。特に希少な宝石の実や水晶クリスタル・ドロップ餡餡がな」

「……」

「昨日の今日まで確認した数が急に無くなるなんておかし過ぎるからさ、原因の究明のために人形兵ゴレムに内蔵してた記録映像を調べたんだ」

尾を優しく包むようにして触れる手は徐々に力を籠める。寝転がって背中背中の肌を見せているクロエの顔は窺えないが、妙に張り詰めている雰囲気雰囲気を醸し出していた。

「その結果、夜に紛れて『デュフフフ、お宝の山だニャーン』とほくそ笑む猫一匹が採取していることもわかった」

「へ、へえ……この城に迷い込んだ猫にでも採取されてたニャ？」

それはあり得ないと断言する。

「俺達がいるこの城を含めてこの場所はな？魔法で空間を弄って作り上げた場所なんだ。具体的に説明すれば自分の姿を映す鏡の中に存

在する筈が無いものがあるって感じだ」

身体を動かし、クロエの背後から覆いかぶさる一誠。男の体重ごと押し掛かれた途端に肩を震える黒猫。獣耳の側で囁く風に言葉を紡ぐ。

「だから外から侵入なんてことはこの世界の魔導師や魔術師でも絶対に不可能なんだよ。お前達に渡した腕輪でしか鏡の世界に入れないんだからさ」

今は外されている腕輪は柵の上に置かれている。

「人形兵ゴレム以外にも「アストレア・ファミリア」にも協力してここ数日毎朝毎夜、庭園の監視を務めてくれた。彼女達もその瞬間と犯人を確認した後、お互い犯人を照らし合わせたことで真犯人が浮上したんだ」
「……」

「まだ売られてなければどこかに隠されていると思うんだけど、クロエは知らないか？その犯人の事も含めて」

「し、知っていたらどうするニャ……？」
「一緒に犯人を捕らえて誠心誠意に謝ってほしいと思っている。ま、ちよつとした罰も与えるつもりだけどな」

背中越しで伝わる心臓の激しい鼓動、動悸。

「男だったら髪を禿げに剃ってパンツ一丁でオラリオを一周させる。女だったら二度と悪戯が出来ないように説教と一週間、恥ずかしい恰好で俺の店の掃除を一人でさせる罰をさせる」

男の方は尊厳がなくされ女の方は重労働。罰の内容にクロエの顔は緊張の面持ちとなった。

「でさ、クロエは何も知らないんだよな？丹精込めて育てた宝石の実クリスタル・ドロップと水クリスタル・ドロップ晶クリスタル・ドロップ飴クリスタル・ドロップ。あ、でも水クリスタル・ドロップ晶クリスタル・ドロップ飴クリスタル・ドロップはもう食べられているかもしれないな。一瓶で軽く数万ヴァリスもするアレ。盗まれた宝石の実なんて合計で数百万はするし」

押し黙る黒猫からの返答は無し。上半身を動かし彼女の横顔を覗き横目で男の顔を見た瞬間。鳶色の瞳が恐怖で滲んだ。ハイライトが消えたオツドアイの瞳と暗い顔の一誠と目が合って。

「クロエ・ロロ。盗んだのがお前だってことはもうわかっているんだ。これだけ言つてもまだシラを切るつもりか」
「っ！」

「誠心誠意で謝つて返してくれば初犯として許そうと思つたけど、頑なに隠し通そうとするその姿勢はいただけないから……罰を与えるぞ。店の掃除じゃない——快樂の地獄のな」

確定宣告を口にする一誠が無断で酒を飲んだ飲兵衛と同様にクロエにも罰を与えたのであった。好都合にも嬌声を発するクロエの部屋の前には誰も通らず、貞操以外は奪われた少女は怒りも恨みを抱くどころか、地獄の甘い快樂を植え付けられて二度と一誠の物を盗まないことを快樂の波に呑み込まれながら誓つたのだった。

その部屋には大勢の一誠の分身体達が騎空艇を作つていたように金属と木材を加工して組み上げていた。海の濃度の高い塩分や海水で錆びることのない金属で何千、何万、何千万の線路を作り繋いでいく側に蒸気機関の外車船パドルシツプも構築していた。異世界の蒸気機関車を解体して、一つ一つの部品を折れない・砕けない・変形しない・錆ない最硬金属オリハルコン製に模して造り加工する。鋸を振るい叩く度に金属同士がぶつかる甲高く不協和音が響き渡り、『ネットスーパ』で買い揃えた工具や器具を駆使してどんどん海列車の完成に近づけていく光景を。「いやはや……また相も変わらず驚く光景であるな」

海列車作りの現在進行形の様子を見に来た椿達の目に入る。騎空艇の誕生の瞬間も立ち会つた事がある神と冒険者以外初めて眼前の光景を見る面々は目を丸くして驚きを顔に浮かべた。

「「「……」」」

「「「イツセー様がいつぱいですっ」」」

「どれが本物の旦那様なのか分からんわあ。ソシエ、わかる？」
「わ、わからんよユエルちゃん……」

「私達と殺し合った時は全然本気も全力でも無かつたわけね」

「ミャー達、トンデもない相手を殺そうとしていたのかニヤ……」
「イザナギ、イザナミ。本当に海列車を作ろうとしているわあの子」

「完成が楽しみだな。極東が今より他の島や国と交流が増え発展・豊かになるに違いない」

「……極東全土にも作ってほしいな。そうしてくれたら本当の意味で極東は繋がりを得れるから」

邪魔をしないなら見学をしてもいいと了承を得ている一同は各々と動いて傍に立つ。やんややんやと同じ顔と声で作業に没頭している分身の中からオリジナルの本人を見つけることは困難を極める。列車よりもどれが本物なのか探し当てようとする気が強い彼女達の中で、ラトラが嗅ぎ慣れた匂いをする一人を特定して傍に佇む。

「イツセー様、見つけました」

「なんだ、俺を探す遊戯でもしてたのか？」

「たくさんのイツセー様がいますから」

柔和に微笑む少女に穏やかな気持ちとなつて白い髪の上の手を置いて撫でる。撫でる手の温もりが心地良く目を細めてずっと撫でてもらいたいと思う気持ちを抱くも、アイズとアリサが直ぐに駆けつけて来て残念がった。

「イツセー、コレ何時できるの？」

「この中であれば後数年ぐらいだろうな。列車を走らせる線路って道を海に繋げなきゃいけないし、ちゃんとその線路で列車が走れるか試さなきゃいけない。やることは多い」

この中で？という事なのだと言を傾げた。しかし、わからずとも慕っている者の役に立ちたいと願い出た。

「手伝うよっ」

「ん、気持ちだけは受け取るよ。これは『鍛冶』のスキルが無いと作れない乗り物だからな」

アイズとアリサが揃って残念そうに肩を落とす。好きな人の手伝いをして喜んでもらいたいが必要な技術スキルがないと手伝えない故に。少女達が一ヶ所に集まっていることからアスナと大和も話をする為に近づく。

「お前、列車なんて作れるのか？」

「専門の技師じゃないんだぞ俺は？零から見様見真似で作るしかない

んだよ。好都合にも列車の設計図も『ネットスーパー』で買ったからそれを見ながら組み立ててるし」

「もう、『ネットスーパー』って何でもアリな感じになって来てるね。でも、港街メレンから極東にまで列車を走らせるのってギルドは知ってるの？」

「いや、知らん」

おい、と大和からのツツコミを気にせず作業をする手を動かす。「オラリオが発展することならば文句は言わないだろ。船じゃなくて海の上を走る列車なら時間もかなり短縮できるし、列車なんて珍しい乗り物を見に、乗車する体験を求めて港街ももつと賑やかになる。そのことを漁を司り漁を生業としている「ニョルズ・ファミア」にも教えたら全面的に協力をするって姿勢になってくれた」

何時の間にそんな話を……。自分達の知らないところで独自に動いている男に言葉も出ないアスナと大和。魚介類の出荷をしてくれてる関係だけかと思えば他にもあったことに軽く驚いた。

「列車ってあとどれぐらいで完成するの？」

「この中だつたら数年後だと思ってる。陸じゃなく海だからな。初めての挑戦だから色々とすることがたくさんある」

「完成したら新しいスキルが発現するかもしれないな」

「だいたいな」

それから数時間後、作業を止めて夕食を食べ終わった後に街へ繰り出す。同行者はアスナ。護衛としてアルガナ、バーチエ、ベルナス、エルネアの第一級冒険者の女戦士アマソネスがついてきた。

「……何故に？」

「君を一人にしたら危なっかしいから。私達の知らないところで何かしてるし、賞金が懸けられているんだから狙われている立場をもっと気にするべきだよ」

「お前は俺の母親か」

呆れで肩を落とす。それにしてもよくアルガナ達まで引つ張って来れたなと訊けばアスナは答えた。

「お店の料理を奢る約束をしたの」

そうなんだと四人に目を向け真意を訊ねれば舌で唇を舐める仕草をする。ああ、カルビ丼だろうなと彼女の給料は半分以下になるかもしれない予想をして南方のメインストリートへ向かう。

「どこに行くの？」

「…… 歓楽街だ。新たな従業員の発掘と唾を付けにな」

「レイラさんみたいなエルフがいたら？」

「すぐ身請けするぞ勿論。ただ、歓楽街を牛耳る『イシユタル・ファミリア』には転生者が三人いる。そいつらには絶対気を付けろよ。傍若無人で女を犯すことを躊躇しない強姦者共だからな」

特徴と転生者特有の特典の情報を五人に教え、絶対に関わるなど釘を刺す。見たことのない転生者達の話を聞かされたアスナの顔は強張り、出会わないよう気を付けようと決意する。夜という蓋がオラリオを真つ暗にしているメインストリートはまだ人通りがあり、ダンジョンから戻ってきた冒険者、労働から解放された者、娯楽を求め夜歩きする神が闊歩していた。それらに混じって歩く六人は真つ直ぐ目的のメインストリートへ足を運ぶ。

立ち並ぶ石造の娼館、抑えられた魔石灯の光、そして四方から聞こえてくる女の黄色い声に——甘ったるい嬌声。ステイタス 恩恵によって強化された聴覚が、耳を澄まなくても建物や路上の隅から漏れるなまめかし声を拾ってしまう。一誠やアルガナ達は気にしてない風にしていくが、嫌でも艶やかな声と肌と肌がぶつかって鳴る水音でアスナは羞恥で顔を朱に染める初さを見せる。

「あら、『異世界食堂』の店主じゃない！どう？今夜私と——ひッ!？」

「……」

第一級のアマゾネス四人からの睨みに肉欲の宴を誘わんとした娼婦の女性が怯え、脱兎の如くいなくなった。

「…… ある意味、アルガナ達が俺の防衛線になってるなこりゃ」

「あ、あははは…… 何時も誘われてるの？」

「まあ、立ってるだけで軽く十人は声を掛けられる。さつきみたいに俺は知名度が高いから」

「「あらくん、イイ男がいる——ぐべらあッ!？」」

「こういうのも含めてな」

ベルナスに殴られて吹っ飛んだ『男娼』の存在に言葉を失う。老若男女問わず仲良くなるというスキルはこういうことにも発揮するようだった。

「来ないだろうけどアスナも一人でここに来るなよ？女が好きな女だっているんだから」

歓楽街は危険地域と認識するアスナ。そして複雑な場所でもある。ここでかつての恋人の浮気現場を目の当たりにしたのだから尚更いい場所と思えない。

「えっと、どうやって探すの？従業員にしたいって人を」

「そこら中に立っているし話しかけてくるから手間が省くし、指名待ちの娼婦を覗いたり、後は知り合いのアマゾネスに聞くかだな」

知り合いのアマゾネス？自分の知らない人物の顔はアスナの中で謎に包まれて誰なのか見当もつかないまま、娼婦を物色する一誠の横を歩き続ける。その頃、神々は神の集まりの催し、三ヶ月に一度の『神会』デナトウスに参加していた。男神は紳士の服や普段着のまま、女神もドレスで身に包み女の神として見目麗しい姿で雑談を交わす。

「何時も顔を合わすメンバーだから久しぶりという新鮮さの感覚はないわね」

「せやなあ、その原因がイツセーヤから自然とうちらは顔を出し合うしな」

「それだけじゃなくて私達はイツセーちゃんの魅力に引き寄せられているからだと思うわ」

「それもスキルの影響でしょうね」

各々と円卓の席に座って神会を臨む。その姿勢から感じる何かが醸し出して……………。

「今日こそは……………」

『(あの子の二つ名を…………)』

未だに無名の冒険者の渾名を付けるためにいつもよりやる気を漲らせていた。それからお互いが得ている情報の提示、異世界から来た異邦人と転生者の目撃情報を始めたがどの神も見当たらなかったと

皆無であった。

「(ん？そーいえば、ガネーシャのやつはおらん)」

ロキが何時も騒がしい男神の不在に気付き、とても珍しいことだと思いつながら不思議と首を傾げた。その当のガネーシャは——とある路地裏の場所で待ち人と合流を果たしていた。

「遅れて悪い、待たせた」

「どうしたのだ？」

「アスナ達までもついてきてさ。分身体と入れ替わるのに少し苦勞したんだ。俺だけ話があるって言うんだから他の連中まで連れてきちゃまずい話しなんだろ」

一誠が困った風に顔をしながら暗闇からガネーシャと合流してその直後。地面が口を開きだした。

「………隠し階段？」

「話しはこの階段を下りた先でしたい」

どこに繋がっているのか分かっている風に一誠を導くガネーシャ。階段を下りた先は狭い一本道の通路のみで二人とも黙って歩き続け、頭の上に都市の簡単な地図を広げ、主要な建物と街路の位置を計算し、一誠は大人しくついていく。そして——ややあって薄闇が支配する、開けた空間に繋がっている僅かな階段を上った先に辿り着いた。そこは石造りの広間だった。壁際の暗がりの奥から現れる形となった一誠は、周囲を見回す。自分達を通ってきた通路を除けば、唯一の出入り口らしきものは上へと続く階段のみしかなく、この場所が地下である事を一誠は察する。そして、広間の中心。唯一の光源である四炬の松明が据えられた祭壇に、『彼』はいた。ガネーシャに導かれるまま祭壇の正面に移動した一誠はその者と正対する。

「………神」

自然と目が真摯になり、今までであった神々の雰囲気と存在感異なる祭壇に腰掛ける男神を見上げる。男神は蒼い双眸をガネーシャに向け問う。

「信用できる異邦の子供はその者か」

「うむ！『異世界食堂』の店主であり元俺の子供のイツセーだ！」

「……危険人物一覧に載せられた異邦の者か」

「……ギルドの真の王……ウラノスか」

お互い目を向け合い、視線を絡み合わせる。一誠はここへ招いたガネーシヤに視線を変えた。

「ガネーシヤ、本題はなんだ？」

「俺もウラノスからある話を打診されていてな。お前ならば共に話を聞いても問題ないと思いつつたのだ」

「ぜってー面倒極まりないことだろそれ。俺まで巻き込まないでくれよやることあるのにさあ……」

一体何の話を聞かされるのか辟易の思いで深い溜息を吐いた時に、ウラノスが座っている祭壇の裏から黒衣のローブで身体を包み隠す人物と——赤い帽子を被ったゴブリンが現れた。珍妙過ぎる組み合わせの登場に二人は目を点にする。

「誰だ？そして何でゴブリンがいる？ガネーシヤ、知っていたのか？」
「ガネーシヤも知らない！」

ダンジョンのゴブリンであるならば破壊衝動で冒険者を襲いかかる筈。なのに理性ある眼差しを二人に向けるどころか近づいて来て、お辞儀をしてきた。

「お会いできて光栄です、私はレットと申します」

「っ!？」

流暢に語るダンジョンのモンスター。対面して人語を操られては目を背けることはできなくなった。ガネーシヤはウラノスへ見上げる。

「このモンスターが『異端児』なのか、ウラノス」

「流暢に喋れる者、喋れない者、たどたどしい者はいるが『異端児』は以前も話した通りに理知を備えているモンスターだ。こうして挨拶も交わすことができ、人類と対話を望めることができる」

「……」

ガネーシヤは物凄く唸った。その隣で一誠はレットと名乗ったゴブリンの身体を触っては持ち上げ、心底不思議そうに首を傾げる。

「不思議過ぎるなあ……どうしてこの世界のモンスターが喋れる

んだ?」

「分かりません。マザーから産まれた時から喋れました」

「マザー?」

「ダンジョンの事です」

ダンジョンに小さな変化が起きている?あの魔石のなかった【ジャガーノート】のような感じで全冒険者や神々が認知されていない変化が。

「ミスター。マリイと会ったことがあるのですね」

唐突に誰かとレットが名も知らぬ誰かの事を挙げた。

「マリイ?」

「マリイ。マーメイドのモンスターです。ミスターから彼女の匂いがします」

「え、あのモンスターも『異端児』だったわけ?」

意外な事実の話に目を丸くし、はあーと驚嘆の息を漏らす。するとウラノスから問われる。

「知らずに『異端児』と接触していたか」

「接触というか……魚料理を食べさせてたんだ。離れた場所からこっそり見ながら」

「ミスターでしたか!マリイは笑いながら教えてくれましたよ。たまに美味しい物を作ってくれてくれる人間がいると」

交流あったのねお前等。ダンジョンの中はやっぱ狭いようだが。レットと一誠のやり取りを見守るウラノスはガネーシャが連れてきた信用ある異邦人としてまた尋ねた。

「異邦の子供よ。お前の視点から感じた上で問いたい。この世界の人類とモンスターは共に共存はできるか」

「共存?え、なに?そうしたいのかギルドの真の王は」

「神意は既に定まっている」

本気だと言外する彼の老神にレットをひよいっと抱えながら唸る。

「世界が違うからなあ……俺の世界じゃあモンスターを使役する魔物使って人間が存在するんだけど、人類の天敵と共存はまた千年ぐらい懸けないと難しいと思うぞ」

「魔物使い……モンスターを使役する方法はあるのか」

「モンスターと契約を結ぶ儀式を行えば出来るぞ。ただ、この世界のモンスターに通用するかわからない」

一誠の異世界の話に興味を持ち出すウラノスに続き黒衣の人物も話に加わる。

「君の世界にもモンスターが存在しているのか。ではダンジョンもあるのかな」

「モンスターもいるしダンジョンもある。それと同名の神々もいるぞ。ウラノス、ガイアとクロノスつて神様はいるよな？」

蒼い瞳を丸くする。その反応だけで彼は驚いていると察する黒衣の人物と不敵に笑む一誠。

「……興味がある。もう少し君の世界の話を聞かせてもらえるかな」

「別にいいけどそれはまた別の機会です。本題は『異端児』の人類と共存の話だろ」

ここに連れて来られた理由は何となく理解できた。ガネーシャがどういう思惑で誘ったのかはわからないが、異世界から来た者としての意見を言っただけで欲しいのかもしれない。

「地上ではまずかなり難しい。当然今の今まで天敵のモンスターが手の平を返して仲良くなりたくないなんて、人語で語って言ったら恐怖の象徴は払拭できない。存在意義を示して努力する他ないな」

ただ、と付け足す。

「空の世界だったら数は少ないけど共存はできるかもしれないぞ」

「空の、世界？」

「俺の船、空飛ぶ船の事は知っている前提で言わせてもらう。遙か空の彼方に、分厚い雲の先に空に浮いている大陸と見紛う島が多く浮かんでいるんだ。そこにも見たことが無いモンスターも棲息しているけど、とある島では一匹だけ人間達と共存しているモンスターがいるんだ。その島なら多分問題ないと思うぞ」

明かされるもう一つの世界。ウラノス、黒衣の人物は勿論、その世界に行ったことが無いガネーシャは言葉を失う。

「その様な世界は本当に存在しているのか？そもそも神々は知っている世界であるのか？」

「ロキ達にも確認したけど知らないようだぞ」

「何、本当に神ロキ達も連れて行ったのか」

ロイマンから全て包み無く伝えられている様子。ゴブリンのレットを下ろしてガネーシヤに話しかける。

「今度久しぶりに行くつもりだからガネーシヤも連れてってやるよ」

「楽しみにしてるぞ！」

ギルドの真の王の前でオラリオから一柱の神を連れ出そうとする発言を堂々と言った。それを楽しみにする神も神だが止まる気配はない。

「異邦の子よ」

祭壇から厳かな声が発せられる。

「空の世界ではモンスターと共存をしている島があるといったな。それは確かか」

「ロキ達も認知している」

「ロキ以外にどの神が知っている」

「ヘファイストス、フレイヤ。そんで三人の一部の幹部の団員だな。

他には他派閥の冒険者も大勢」

「そ、そんなにオラリオの外へ連れ出していたのか」

黒衣の人物の反応に、言っとくけど正式な外出の手続きをしてからだかな。と誤解を招かないように付け足す。

『『異世界食堂』の店主イツセー。その島へレット達を連れていけるか？』

「んー、ロキ達に無断で船に乗せることは難しいな。乗せないで一人だけどこかへ行こうとすれば質問攻めされる。ただ、ウラノスの神意ってやつを教えられたら乗せやすくなると思う。それがだめなら別の方法だ」

「別の方法？」

「ん、この場所から違う場所へ移動できるテレポルト転移装置を作って直接行ってもらう」

愕然の気配を醸し出す黒衣の人物。そんな代物、本当に作れて現実の物になれば人々の交流は今よりも盛んになるに違いない。

「作れるのか。その夢のような魔道具マジックアイテムを」

「今は極東と港街メレンを行き来する、海の上を走る海列車って乗り物を作ってる最中だから直ぐには作れない」

「待て、色々と待ってくれ・・・船とは異なる乗り物を作ってるだど？君の世界ではそんな乗り物はあるのか？」

「無いけど俺の世界じゃあ、下界から冥界に行くための乗り物は存在してるんだ」

「め、冥界・・・？黒衣の人物が狼狽える。常識を超える話をさらって言われて半ばついていけなくなってきた。」

「冥界、冥府が存在しているというのか・・・」

「うん、存在してる。そこに冥府の神ハーデスがいるぞ」

「ウラノス、我々は何だかともない者と接触しているようだぞ。黒衣の人物の心中は疲弊に似たような脱力感を覚え、もはや言葉を失った。」

「って、俺が話しに加わると脱線するな。ガネーシャ、ウラノスの協力をするのか？」

「・・・ウラノスの神威には少なからず理解したつもりだ。理知を備えるモンスターを見た時は驚いたが、それと比べるならお前の方がよっぽど驚かさされたと思うぞ」

「ニツと白い歯を見せる笑みを浮かべるガネーシャ。」

「どういうことだ？」

「理性を宿しているモンスターより、目の前の異邦人の方が凄いと？同名の神々が存在する異世界だからか？思わず放心から抜けた黒衣の人物が訊くと、ガネーシャが「真の姿を見せてやれ」と一誠に促しの言葉を送った。呆れ顔になる男は溜息を吐いた後に、全身が真紅の魔力のオーラに包まれ身体の骨格が変わり、やがて人の姿から真紅の鱗に覆われた巨大な身体と鼻先に鋭利な一本の角を生やすドラゴンと化した。」

「なっ・・・!?!」

「!!」

黒衣の人物が絶句し、ウラノスは蒼い瞳を限界まで見開き、レットは尻餅をついた。ガネーシャ以外、人がモンスターの姿になるなど誰が思う事だろうか？完璧に人の皮を被ったモンスターが正体を明かした。彼の象神の言った通り、理知を備えるモンスターよりも突如モンスターになった人間の方が驚かされるのであった。

「モ、モンスターだと……!?君は一体、何者なのだ!？」

『俺の世界じゃあ、力のあるドラゴンは人の姿に化けることができる。俺自身もドラゴンなのさ。』
「元」人間だけだな』

「元、人間!?!——神ガネーシャ、知っていたのか。この事を!」
問われた男神は力強く頷く。

『ガネーシャだけじゃなく、ロキとフレイヤにヘファイストス、この三柱の一部の団員の他にアマテラス、イザナギとイザナミ。他派閥の一部の冒険者も俺の正体を知っている』

「な、なんだとっ……」

今日で何度目の驚きなのだろうと思う。今の今までオラリオに怪物が人の姿で我が物顔で生活していたとは……!」

『まったく、俺の正体を知る者を増やしたくないんだがな。後々面倒なんだし』

「ウラノスは信用に足りる男神だイツセー。俺が保証する」

『保証以前よりも、怪物と人類を共存させる酔狂な神なんだ。信用や信頼よりも話しの判りそうな神だとは分かったつもりだ』

元の人の姿に戻ると黒衣の人物はその場で座りこんでしまった。

「は、ははは……参ったな……異世界とは我々の常識なんて関係ないのか。話に聞く転生者達の世界もきつと凄まじいのだろうな」

「いや、あいつらは魔法も剣も存在しない世界らしいぞ。連中は単に異世界の神から最強や無敵の能力を与えられただけの存在だ。別に凄くないぞ」

肩を竦め呆れが籠った息をこぼす。万能、全能感に浸ってハイになった馬鹿な連中だと侮蔑の意味も込めて思う反面、能力次第では厄

介な相手でもあると警戒しているのだ。

「……イッサーと言ったな」

ウラノスに目を向ける。

「世界が違えどお前もまたモンスター。お前がモンスターでありながらどう過ごしてきた」

「モンスターに転生する前は物凄く弱くてな。あ、俺の世界じゃ神が人類に『恩恵』なんてもんを与えないんだ。だから人類は素で身体能力や魔法、剣術など自力で鍛えて強くなるしかなくてさ。俺もその類に零れず世界中で両親と旅をしながら強くなった」

「お前がモンスターであるという事は気付かないのか？」

「一般の人間はまず気付かない。でも、力ある人間や超越した存在などには気付かれる。それでも敵対しなければ比較的に安全な暮らしが出来る」

「世界はお前を受け入れているのか」

「善し悪し関係なく世界の一部として受け入れられている。ただし、普通の一般人には刺激に強過ぎるがな」

質問を繰り返す老神に淡々と答える。そしてウラノスはまた問うた。

「モンスターに転生したと言ったな。どうやって転生したのか教えてもらえるか」

「魂だけを取り出して人間の体をベースにしたモンスターの身体の一部に魂を定着させた」

「そんなこともできるのか、君の世界では……」

「ま、他には半永久的に生きることができる天使と悪魔に転生する道具もあるしな」

「まさか……不老不死の概念もあるのか。では、賢者の石も存在しているのか？」

「魔術師、魔法使いの間じゃあ有名なアイテムだな。その石を使用した者は永遠の命か不老不死を得られるって話だ」

世界が違えど同じ物が存在していることに驚嘆する黒衣の人物。

「お前の本名はイッサーであるか」

「その名前は俺の渾名みたいなもんでな。この世界に合わせてその名で通している。元の世界じゃ——兵藤一誠つと両親のから名を付けてくれた」

そう名乗った時、ウラノスの口唇から「ヒョウドウ……」と言葉が出てきた。

「ヒョウドウ、か……」
「なに？」

「懐かしい名前を聞いた。もはや千年の時を経てまたその名を聞くことになるとはな」

「……あれ？どつかで似たような話を聞いた気がする……」
デジャブを覚えた一誠はウラノスに尋ねた。

「千年前に兵藤つて名乗った人間がいたのか？」

「ああ、私の数少ない眷族の一人だった。あの子供の傍には確か……シキモリと名乗った魔導士メイジもいた」

頬が痙攣する。まさか、まさかなあ……？

「地上に蔓延るモンスター達を一蹴し、詠唱の有無で全てを消し去った強力な魔法を放ちオラリオの創設を共にしてきた。だが、オラリオの完成と同時に世界へと旅立ってから一度も会っていない」

「……それって、兵藤誠と式森一香つて名前じゃなかったか？」
ウラノスの顔が驚愕の色に染まる。何故、その名を知っているのだとも雰囲気醸し出していた。

「はあ……年齢は教えてくれなかったけれど、あ……あの転生の神の意味深な言葉の意味がようやく合点した」

「イツセー、何を納得しておるのだ？」

「ああ、だってその二人。俺の両親だもんよ。ウラノス、兵藤誠と式森一香は元の世界に戻っていて結婚して俺を産んでくれたんだよ」

「……その話は、真か？」

嘘じゃない、と一誠は分身体と二人の姿に変身した。

「どうだ？」

「……私の記憶が正しければ、かつての眷族だった面影が残っている。そうか、お前があの子……」

悠久の時間を越えてウラノスは眷族の子と巡り合い、久しく感じなかつた気持ちが湧いた。

「……あれ、「ファミリア」の団員が子供を産んだらその子供はその「ファミリア」の団員なんだよな？」

「そうだが？」

「じゃあ、俺の家族は「ファミリア」を脱退してないなら俺は「ウラノス・ファミリア」の団員となんだよな？」

あ、とガネーシャは気付き一誠の指摘は正論だと唸る。

「ウラノス、彼の言い分についてどうなのだ？」

「既に天界へ召されたのだと彼等に与えた『恩恵』は感じない。だが、別の世界で生きて『恩恵』が残っているならば私の眷族の子である認識は間違っていない」

だが、と言葉を続ける。

「今の私は武力を持つことを許されない立場にある。フェルズのような協力者の関係であれば問題ない」

黒衣の人物、フェルズを一瞥し一誠の顔を見つめる。

「あの二人の子、イツセーよ。私の神威に協力してくれるか」

一誠に対する認識を改め協力を求める。乞われた当人はうーん、と考えて条件を要求した。

「俺のやること全てギルドの公認、黙認してくれるなら」

「よかろう」

ガネーシャと一誠が『祈祷の間』を後にし、レットをダンジョンに送り返す黒衣の人物もいなくなって一人になったウラノス。暗闇に塞がれた天井を見上げる視線はもつと遠い何かを見据えていた。

「数奇な出会いをまたするとは。お前達の子を相見えたこれは定められた運命か」

——後日、ブラックリスト危険人物一覧から一誠の名が消えたことを知った面々は揃って首をかしげた。

「イツセー、何かしたの？」

「え、フレイヤ達が何かしたんじゃないのか。圧力掛けたとか」
「覚えはないわ」

ますますギルドの対応に疑惑して真意を図りかねたのであった。

冒険譚 17

初夏を迎え段々と日差しが強くなってオラリオに夏季が訪れたある日の事。帝国の——ラーズグリーズは困った事に直面している。いつものように朝起きて朝食を済ませ、軽く鍛錬をして掻いた汗を浴場で流しそのあとは読書を。太陽が真上に上り切った昼食頃になると——。

「あなた、いつもいつも主神とお爺様にお爺様に四銃士の方々とどこで何なさっておられるのですか」

「ラーズ？ 私達に何を隠しているのか教えてもらうまでこの部屋から出さないわよ」

姉に問い詰められて秘事を暴かれようとされていた。ラーズはこの二人の姉とそれほど接した記憶はなく、ただ自分より先に生まれた存在としか認識しておらず淡々と返した。

「私がどこで何をしようと思っただと自由だと思っただと？」

「今までずっと引き籠って部屋から滅多に出ないお爺様が、『まだまだ死ぬわけにはいかん！』と庭園で自分の体を鍛え初め、主神様は毎日姿を消して城の者達は慌てて探し回る。その度にお爺様や貴方、四銃士の姿も見かけなくなるのだから私達も少なからず怪しいと思っただの」

「確かに貴方が誰とどこで何をしようと思っただと自由。私達も自由にしてあるわ。だから何時も行っている場所へそこへ連れて行きなさい。」

——さもなくば他の姉や妹達に変な噂を言い触らすわよ」

逆に言えば自分達以外興味を持っていないという事を言外する。時間は有限、あの主神達は今頃己が来るのを秘密の場所で待っているはずだと、扉の外から成り行きを見守ってる老従者へ視線を投げた。「……わかりました。案内しますがその格好では他の者に注目的になります。せめて控えめで 涼しい服を着てください」

「結構よ」

「いやよ、何故わざわざその様な物を着なければならぬの？」

帝国の姫として高価な宝石の装飾を身につけ、綺麗なドレスで身に

包む。帝国の王族としての振る舞いを体も表してる。そんな出で立ちであの都市へ向かえばどうぞ私達を攫って下さいと言っているようなものなのだ。これからどこへ向かうとしているのか分かれれば引き下がってくれるだろうかと苦悩する。仕方なしと二人の姉も連れていくことにし、ある場所へと赴く。その場所へ辿り着いた時には既に前王と主神、二人の護衛の四銃士が待っていた。

「なんだ、そいつらも連れてくのかラーズ」

「主神様？え、ここで何をしたいらっしゃるのです？」

「知らずについてきたのか？飯だよ、飯を食べに行くのさ」

一同がいる場所は——数え切れない酒樽が保管されている薄暗い酒蔵。主神しか飲めないある意味宝物庫の様な何百年も熟成された酒が鎮座してる場所に来ることになるとは露にも思わなかった。この酒蔵は主神の了承無しで入ることは許されていない唯一の空間。酒蔵の扉をその主神に入る許しを得てもないのに開けたラーズに瞠目した二人は、中に誰かがいたことも含めて驚愕と疑問が混ざった顔を浮かべた。

「食事をしに行くって、ここ、酒蔵ですが……」

「当たり前だ。お前等、ここが酒蔵以外何に見えるってんだ」

「では、何故ここに……」

「ここじゃなきゃ行けないからだよ」

石材で組み上げられた壁に手を触れて神威を解き放つ帝国の主神。男神の神威に呼応して大きな魔方陣が浮かび上がって、円陣の部分の石材がフツと消えだす。ポツカリと空いた穴の中に主神達は当然のように潜っていく。穴の向こうに何が待ち受けているのか分からず、姫達は先行くラーズの背中を不安になりながら後を追いかける。

足があつという間の穴から出て踏み込んだ場所はどこかの古びた教会の中だった。帝国にない筈なの協会が、どうして酒蔵から出たらこの場所に？不思議と疑問で怪訝と訝しむ二人の姫は自分達の心情を梅雨も気にせず木製の扉を開けて出ていく主神達についていく。一度外へ出たら、ますますここは帝国の町並みではないことが否が応でも突き付けられる。永年人々から忘れ去られた協会や神殿の跡地

から抜ければ天を衝くまでの巨大な白亜の塔が見えるどころか、どこかの大通りに路地裏から出た。

「こ、こ、こ……どうだい？」

「帝国じゃない、のは確か……」

唾然とヒューマン、デミ・ヒューマン 亜人、獣人といった人種達が暑い日射しを受けながら大通りを歩いていく姿と見慣れた城下町と違う光景を目に焼き付ける。逆にこの暑い中、ドレスで身に包む自分達へ奇異的な視線を向けられるようになるのは時間の問題だった。

「あ、暑い……っ」

「こ、こんな暑い中を歩かされるなんて、聞いていないわラーズっ」

「涼しい服を着てくださいと言ったじゃないですか。それに直ぐに辿り着きますから我慢してください」

帝国の姫君故にあまり歩かない為、自国より強い暑さで荒立ちが募り一体どこまで姉たる自分達を歩かせるのかこの異母姉弟は！と化粧を施した顔に汗を受かべながら睨み付ける。その時、後ろから大通りの雑音が走ってくる音と混じる。それを耳にしても警戒する事もない姫達は華奢な胴体に野太い腕が回され、荷物のように抱えられたと自覚したときにはラーズ達と数M離れていた。姫の自分を誰がと顔を見上げたら、ゴロツキの獣人がゲスの笑みを浮かべていた——顔に誰かの手によって鷲掴みされた。そして獣人が地面に押し倒されかけた際に亜麻色の髪の女性が自分を男の腕から奪うように放してもらって胸の中に抱きとめられた。

「アスナ」

「うん、大丈夫。傷はないみたい」

誘拐犯を捕らえた男と救ってくれた女。一体誰なのだろうとラーズ達が駆けてくる姿を視界に入れながら見つめる。

「イツセー！」

「お、ラーズか。街中で会うのは珍しいな。でももしかしなくても知り合い？」

「ああ、異母姉弟だ。助けてくれてありがとう」

「おいおい、上級冒険者が4人もいてゴロツキ相手に出し抜かれると

は何て様だ？ここがどこだか忘れたわけじゃないだろう」

イツセー？この男と親しく語るラーズは知り合い？

「ラーズ、この殿方とどういう関係なの？」

「数少ない友人です。帝国の次期王を決める際に私の力を貸してくれた料理人でもあります」

「そうそう、それからラーズ達は俺の店に食べに来てくれるようになったもんな。ご贖罪にどうもありがとうございます。持ちべきものはやっぱり友だな」

大人と子供、歳の差があるにもかかわらずそんなのお構いなしと肩を組むイツセーと言う男にラーズは口元を緩めた。

「料理人……では、何時もラーズ達が城から姿を消していたのは」

「ん、うちの店の料理を食べに来ていたからだな。今現在のよう到这里、冒険者が集まる迷宮都市オラリオに」

オ、オラリオツ!?二人の姫は初めて、帝国が危険視している敵国にいることに気付き愕然とする。

「ラ、ラーズツ。一体どういう事なのですか！敵国と繋がっているなんてお父様が知っていたら……!」

「知っているぞ？何せあいつの分も買っておいて俺達の行動を黙認させているからな。立場が立場だから帝国から抜け出せねえもんで土産を買っているのさ俺達は」

「……主神様の自由奔放には毎度振り回されますわ」

「あー、うん、気持ちは分からなくないぞ」

「アハハ、快樂主義の神様が多いもんね。えっと、こんな炎天下の外より店の中に入りましょう？イツセー、席って空いてるかな？」

アスナの促しにラーズ達は本来の目的に意識を戻し、一誠は首を横に振る。

「大体この時間帯はほぼ埋まつてる。予約だつて何週間も待たなきゃいけないんだからな。となればこいつらを屋上で食べてもらう他ないぞ。ちゃんと居座れる環境は整っているがな。ラーズ、屋上でいいか？」

「この日差しの中で食べると言うのか？」

「百聞は一見に如かず。屋上に来てくれればわかるさ」

捕らえた男を明後日の方へ思いきり蹴り飛ばす暴挙をしてから歩き出す一誠とアスナ。途中で「そうだ」と声をこぼす一誠が不意に止まって亜空間から二本の白い日傘を取り出して開くと二人の姫にそれを手渡した。

「日除けになる道具だ」

いきなりの事で戸惑うが、いざ手にして持ってみると気温は変わらないものの、肌をじりじりと焼く灼熱の太陽光が遮断されて幾分か涼しくなった。

「あ、これいい。鬱陶しい太陽の日差しが無くなったわ」

「うん、これがあれば平気」

そして王族としてその傘を使う姿は様になっていて、二人が帝国内で傘を広げて歩く姿を見た他の姉妹や貴族達の娘達の間で流行ブームとなり、帝国から途方もなく離れてるオラリオに傘の注文がするようになったのをこの時誰も知らない。

「よいしょっと」

一誠がラーズ達を『異世界食堂』の屋上に招いて、設置されているテーブルに突き刺さった棒を傘の要領で広げれば、日差しを遮るだけでなく傘の中にあつた加工された魔石から冷気が発生してラーズ達に清涼感を感じさせた。

「おー、こいつは涼しいな。これなら屋上でも食べていいな」

「この歯車を回して冷気の強弱の調整もできる。寒かったら止めてもいいからな」

「わかった」

「それじゃ、メニューが決まったら呼んでくださいね」

屋上から昇降設備エレベーターで店内へ降りる二人を見送ってから分厚い本を手にしてメニューを決め合い始める。姫達はラーズ等の様子を見つめる。

「今日は暑いから冷たい料理がいいなあ〜」

「冷たい料理と言えばそばとうどんに限るぞ！かき氷もまた美味しい！だが儂は冷やし中華を頼む！」

「かき氷……種類もあるし悩むな」

弟や主神達は何時もお忍びでこんな風に食事をしに来ていたのだろうか、こんなはしゃぐ前王は見たこともない姫達。彼等の胃袋を掴み虜にして止まない何かがこの店にあり、笑顔にさせるのだろう。弟の微笑む顔を初めて見たかもしれないとも感じる姫達は甘くて冷たいものをラーズに任せて頼んでもらう。

「お待たせしました」

パフェとプリンアラモードというデザートが目の前に置かれた。帝国では見たことが無いデザートの類だった。見た目の美しさと新鮮さに好奇心が芽生えて銀色のスプーンを手に実食し——その瞬間。二人の姫の目が限界まで見開いた。

「なにこれ、何時も食べてる高級のお菓子やデザートの比じゃないぐらい美味しくて甘い！」

「冷たくて美味しいです……！」

「喜んでくれて何よりです。ついでにこの店はデザートを持ち帰ることも可能ですか？」

「勿論、持ち帰るに決まってる！」

——というか、あの料理人を帝国に持ち帰れないの？そしたら毎日こんな美味しいデザートを食べれるのに。

——いえ、無理です諦めてください。連れ戻されるついでに帝国が滅ぼされかねませんので。

——せめて一カ月ぐらいは専属の料理人になってほしいです。

——諦めてください。

等と彼女達を魅了した後でも、他のデザートも食べられるだけ食べて満足感を抱かせるだけでなく、この日を境にラーズ達と変わらぬ『異世界食堂』の常連客となることを決意した。

その決意の強さを表すとしてデザートの味を占めた……後日。帝国も夏季の真っ只中にラーズの部屋の扉が勢いよく入室の許可も無しに開け放たれた。

「ラーズ、今日もあの店に行きましょう。まだまだ食べたい物があるのですからね」

「さあ早くさっさと仕度して！主神様にはあの場所に行ってもらって
いるのだから私達も向かうわよ！」

そう言う彼女達は姫らしい宝石を散りばめたドレスの恰好ではな
く、軽装で動きやすいワンピースと傘という出で立ち。弟は姉達の変
化に心中で苦笑する。料理は人の心を変える魔法が掛かっているの
かもしれないと、身支度をし始める。姉達を変えた『異世界食堂』へ
向かうために。

.....

【ヘルメス・ファミリア】の執務室で事務作業の準備をしていた。主神
によって増やされる仕事を主に片付けなければならぬことが今日
も山積みで辟易する思いをしながらそれらを一纏めに鞆の中へ入れ
る。仕度を整えた少女は手をスノードームに触れて、何時ものように
利用しに入ってしまった。

穏やかな気候、時折吹く心地のいい風。少し離れた先に白亜の城が
アスファイを出迎えるかのように鎮座していて、その城へ向かいなが
降りたままの跳ね橋の上を歩き通り過ぎる。扉のない吹き通りばか
りの城内の中を進み途中、真紅の長髪を背中に流す男が作業部屋にい
ることに気付いき声を掛けた。

「こんにちはイツセイさん」

「アスファイか。久しぶり。また仕事を押し付けられた？」

「ええ、当の本人はどこかへと行方を悟らせず姿を暗ました」

溜息をこぼす。

「久しぶりに何かを作っているんですね」

「触発した感じにな。【ガネーシャ・ファミリア】が今年から始める催
しのこと知ってるだろ」

『モンスターファイリア
「怪物祭」、でしたか』

「ギルドも面白い事を考えるよな。でもモンスターを調教するなん
て、そんなことできるのか？捕まえることができる前提で」

「不可能ではありませんよ。ただ、捕まえるだけならともかく調教す

る際に辺り冒険者の力量を求められるのが必須でしょう。ギルドの考えには色々疑問を感じますが」

会話を交わしながらも手を止めない一誠の隣に寄り横から覗きこむ。手の平サイズの球状の内部に何かを細工しているのが目に入る。一体これはなんだろう？

「何を作っているのですか？」

「言っただろ？触発されたって。モンスターを捕まえて調教することが出来るなら、道具アイテムを使って捕まえられないかなって考えたんだ」

既に一誠の席の脇には完成しているの球状の道具アイテムが顔を出すほど亜麻袋の中に入れられている。机の上にも同じ物が作られている物も含めて六個あった。

「これはモンスターを捕獲し自分の代わりに相手と戦わせるボール。その名も『怪物捕獲球』だ」

「……それこそ、可能なのですか？道具で捕獲するなんて」

「初めての試みだ。失敗はするかもしれない。だけど、失敗の原因が分かればもつと完成に近づける。失敗を前提に作るのが俺なのさ」

六個目のボールも完成したのか蓋を閉じて真ん中のボタンを押すと、手の平サイズだった大きさがその半分以下になった。他のボールも大きさを小さくして纏めて掴んでボールを装着させる専用のベルトに嵌めれば腰を上げて立つ。

「よし、これから試しに行ってくる。アスフィはどうする？」

「本当に道具アイテムでも捕まえられる可能性があるなら見てみたいですよ」

仕事を放り出して結果を求める。興味と好奇心に駆られる少女の同行を了承する男は共にダンジョンへ向かう。バックパックを背負う一誠は手始めとしてダンジョンの一階のゴブリンから試みるため、正規ルートから外れた別ルートへ。散策してすぐ後ろ姿の二匹のゴブリンを見つけた。すかさずベルトからボールを外して手の平サイズの大きさに変えて投げた。弧を描いて真っ直ぐ飛ぶ様子を二人が見守る最中、実験が成功するか否かゴブリンの後頭部にぶつかったボールが一人で上下に口を開くそこから赤い光線が放たれる。その光線を浴びたモンスターは吸い込まれるようにボールの中に消えて

行ってまた一人でボールが閉じる。片方のゴブリンが消えたことに目を見開いて驚いている間にも、抵抗しているのかボールが中心のスィッチに赤い光が帯びながら揺れる。

「……………」

数秒後、中心のスィッチに帯びていた赤い光が無くなると同時にボールの揺れが止まった。それから時間を置いて更に様子を見てから確信した。

「成功したようですね。おめでとうございます」

「一先ずありがとう。だけど、俺が求めている『怪物捕獲球』モンスターボールの性能はあれだけじゃない」

手を突き出して魔力でボールを引き寄せて回収する一誠は、捕まえたゴブリンを解放するように目の前を出した。

「どうするのですか？」

「実験だ」

跪いてバックパツクから捕まえたモンスターに餌付けする目的で用意したコロツケを取り出し、ゴブリンに突き付けた。対してゴブリンは命知らずで魔の巣窟に挑む酔狂な人間——天敵に警戒するも見せびらかされる人間の食べ物の匂いに湧きあがる食欲に負けて、おぼろげとコロツケを手にして口にした途端。眼を大きく見開いて一心不乱に食べ始め出す。

「おお、美味しいようだな？もう一個食べるか？」

『ギャギャッ！』

意思疎通ができる？とまた出したコロツケに反応して嬉しそうに受け取って食べるゴブリンに、アスフィは啞然とする。さらに五個も食べて満腹したゴブリンは美味しいものを食べさせてくれた一誠に懐き始め、頭を撫でられても嫌がる素振りはない様子に開発者は握り拳を作った。

「まだ改良する必要はあるみたいだが、これも成功だな」

「一体、その道具アイテムに何を仕掛けたのですか……………」

「モンスターの破壊や殺戮の衝動を封印した」

「…………ただそれだけで、こころも懐くのですか。ダンジョンのモン

スターが」

「警戒したところ見ただろ？俺は力による調教で従わせるんじゃない。でもっと別の方法の手段で——」

『シヤアツ！』

もう一匹のゴブリンがアスファイに答えていた一誠に飛び掛かってきた。短剣を構えだす少女を手で制止する男の目の前で餌付けされたゴブリンが同族に飛び掛かって守った。

『ギャツ!!』

『ギイツ!?!』

モンスター同士が戦っている光景に満足げで笑む一誠と呆然と言葉を失ったアスファイ。道具アイテムでモンスターを支配とは別の形で人間を融和を遂げた。

「さて、最低でもミノタウロスぐらいまでは成功したいな」

「まさかと思いますが、階層主も捕まえる気は……ないですよね？」

「捕まえられるかどうかはこれから実験しないとわからないだろ？」

ま、今のこのボールじゃ無理かもしれないがな。と襲いかかってきたゴブリンを倒して傷ついた一誠のゴブリンは回復役ポーションで癒されてからボールの中に戻された。

「まだ付き合うかアスファイ？」

「ええ、貴方の作品の限界を見させてもらいます」

もしも『怪物捕獲球』モンスターボールがオラリオに普及され冒険者以外の『調教師』テイマーが多くなり、オラリオ内で人類と怪物が共に歩く未来があるかもしれない。そんな有り得ない考えを振り払うように頭を被りを振って目的の中層へと向かう男の後を追った。

後日、【ガネーシヤ・ファミリア】に訪れ『怪物捕獲球』モンスターボールの性能を教え、捕まえたゴブリンと仲のいいところをも見せ怪物祭モンスターファイアに使えないかと検討をしたところ。

「イツセー、この球を一万個作ってくれ！」

「一万個は勘弁してくれ」

これは使える！と大絶賛した元主神の無茶ぶりの要求を丁寧に

断った。同席している藍色の髪の子隊長はボールを値札見するような目で手に持つ。

「この小さな物でモンスターを捕まえることも含めてこれでモンスターと融和を図れるのか」

「破壊と殺戮の衝動を封印しただけで直ぐに友達感覚にはならない。モンスターの警戒心を解くことで初めて絆を築くことができるのさ。調教よりは平和的だろ?」

「確かに平和的だろうが……団員達がモンスターと友好的な態度を取れるとは限らんぞ」

「モンスターも生きているんだからペット的な感覚で育てるようにしたらいいんじゃない?」

人類の天敵を犬猫のように扱えとは……。

「このボールほどの階層のモンスターまで捕まえることができるのだ イッセーよ」

「今日は中層のモンスターを全破してみた。ミノタウロスもある程度の体力を削ってから捕まえることが出来たよ」

「体力を消耗させてから捕まえることが肝か」

首肯するボールの開発者は言い続ける。

「そ、そうすれば捕まえやすい。だから怪物祭モンスターフィリアの際に行く調教の催しの後はモンスターを捕まえる催しと飼い主と仲睦ましくなる瞬間を観客に見せてほしい。そうすればこの道具とそれを成せる業ができる【ガネーシャ・ファミリア】の印象も深まると思うんだ」

「……ガネーシャから聞かされた理知を備えるモンスター『異端児』とやらの布石の為にもなるからか」

——お、知ってたのか?——知ってるのは私だけだがな。とシャクティも彼のモンスターの存在を明かされていたことに初めて知った一誠は問われた。

「お前は自分の主神に教えたのか?」

「ぶっちゃけ、俺の正体を知っている神と冒険者だけに『異端児』ゼノスがいることは教えた。ウラノスの神威までは教えてないけど」

「ああ、多分それが賢明な判断だとガネーシャは思う。で、ロキ達の反

応はどうだったのだ？」

『え、そんなモンスタターがダンジョンにいるの？』って対して驚きもしなかったぞ」

「お前と言う存在がいるからだろう。ガネーシャに教えられたモンスタターと比べれば、お前のことより驚くものは他にないからな」

そう言うシャクティの言葉に苦笑して「フレイヤ達も似た事を言われた」と述べ、「だろうな」と彼女に相槌を打たせた。

「でも、俺の事と同じぐらい二人が驚く事はまだ他にも二つぐらいあるけどな」

「……因みに、それはなんだ？」

「うーん、知りたいなら何時か実際に連れてってやろうか？どっちもオラリオの外に存在する場所だから」

と、提案を試してみれば「行ってみたい！」と間も置かず乞い出すガネーシャにシャクティは溜息を吐いた。こうなったガネーシャはもう誰にも止められず、団員達を振り回すことは必ずと言っていいほどだ。止められるならば止めてほしいと心情の思いが一つな団員達は——空の世界へ旅立つ主神と団長を見送ることしかできない。

夏の時季、太陽の陽射しが地上を照らして人類と怪物を焦がす彷彿させる熱が籠った日のこと。アスナが不意に思ったことを口にした。

「そう言えば、イツセーの誕生日って何時なの？」

朝食時、その一言で一同は不自然なまでに静まり返った。問われた本人も「は？」と彼女を見返す。

「藪から棒にどした？」

「何となくなんだけど、ほら、この世界は異世界だから産まれた日や誕生日を祝う風習は無いみたいだし、それにつられて私達も誕生日を祝うことしてないじゃない？」

確かに、とアスナとアリサに己はこの世界に来てからというものの誕生日なんて気にしてなかった。そもそも自分等の誕生日を知っている者はこの世界に存在しない。アスナの場合はキリト達が知っているだろう。異世界に来るまでは自分も含めて元の世界で祝福されていたのだから。

「まあ、してないな。てか、してほしいなんて言えるか？」

「あ、うーん、言いづらいかも。自分で言つて恥ずかしいし……」
「だろ。知っていたらしていたが、この世界にカレンダーなんてものは無いし。な、アリサ」

「うん」

異邦人だけの会話にアイズ達異邦人は耳を傾ける。

「それで、貴方の誕生日はいつなの？」

「へファイストス？お前も気になるのか」

「気にならない方がおかしいでしょ。貴方と私は……」

そこまで言いかけて紡ぐはずの言葉が恥ずかしいのか顔を赤らめて一誠から目を逸らした。

「貴方と私は……？」

「へファイストス、貴方と私は……何かしら？」

アストレア、フレイヤの女神が鍛冶神に問う。二柱共に、彼女の心情を解つててからかっているわけで、へファイストスは髪と同じくらい真っ赤になった顔を全力で明後日の方へ向いた。

「ふふ、へファイストス。あの時と同じ反応をしてるわよ？」

「あの時と？」

「ええ、そうよ。貴方がガネーシャの眷族になってからしばらく経った頃に神会で——」

「フレイヤッ！」

「うむ、手前も言わせてもらえばその頃と同じ時であるか。仕事に手が付けられないほど、年甲斐もなく乙女のようにイツセーに告白された事を手前に何度も聞かされたものよ。『イツセーがね、イツセーがねっ?』と」

「そうなのね。ねえ、他にもどんなことを言つたのかしら？」

「あ、あの……もうその辺にしておいた方が。へファイストス様
が羞恥心のあまりに泣きそうに」

当の女神を見てフォローするアスナの指摘に「泣いてないわっ」と否定するへファイストスであるが、もう火が顔から吹き出そうな程に赤くなって尻目に涙を溜めてた。

「……ヘファイストス」

そんな元主神に慈愛と暖かな目で見詰める一誠の一言。

「可愛いな」

「~~~~~ッ!!!」

羞恥心が爆発した。悲鳴にならない奇声を上げるより脱兎のごとくこの場からいなくなった。

「もう、フレイヤ様とアストレア様もイツセーもからかつちやダメじゃない!」

「俺は本音で言ったぞ?」

「本音だから達が悪いよ……」

深い溜め息を吐いて、どうして話が脱線してしまうのだろうかと疲れに似た脱力を覚える。

「まあ、俺の誕生日の話だっけ?確かあと一カ月後だったような気がするな。そんでアスナは誕生日は九月三十日だったな?」

「えっ、教えたっけ?」

記憶にない事に己が忘れただけかと思っただが「能力で調べた」と述べる一誠に納得の一言。

「アリサは冬の時期だった。アリサ、まだ早いけど欲しいプレゼントはあるか?」

「……」

話を振られて悩む。突然欲しい物はあるかと言われて悩む。

「欲しい物じゃないものでもいい?」

「して欲しい、したいことでもあるのか?」

「うん……えと、大きくなったらイツセーのお嫁さんになりたい」
「!!!」

!!!
アリサの憧憬に一同は反応した。しかもそれにつられてユエルが爆弾の如くの発言をこぼす。

「うちらは旦那様と結婚しているようなもんやし、主神様と故郷の為に別のお願いをするっちゆうなら……子宝なんやかなあ?」

「だ、旦那様とこの、この、子供……っ」

「ユ、ユエルちゃんっ。それはまだ、早ない……っ!」

狐人の少女等がボツと真つ赤にした顔で狼狽、初な反応をするに對して、獲物を狙う猛禽類の目を一誠へ向ける女戦士達の視線が強い。

「こ、子供……」

未来の予想図を描くアリシアとアナキティ。自分達も子を得た時にはその傍には誰がいるのかを、自然と一誠に目線が向いた自分に氣恥ずかしくなった。

「アリサ、その願いはお前が大人になってからもう一度するべきだ」

「うん、16歳になったらお嫁さんになれるんだよね。知ってるよ」

「イツセー、君なの？」

「言つた覚えはないからな。アリサ、それ誰から教えてもらったんだ？」
「ロキ」

疑われるも否定し、素直に問うたことを言う少女の口から出た神物にリヴェリアと共にまだ教えなくていい事を、と困らされた。さらにアリサは純粹無垢な瞳で言った。

「おっぱいが大きくなったらイツセーは喜ぶってことも教えてくれたよ」

「あ、あんのおクソ駄女神がああああああああああああッ!」

「……すまないイツセー。今直ぐにでもロキを折檻する」

絶対に面白味とからかいを含めて教えたのだと悟り、各々をおっかなびつくりさせるほど怒り狂い魔力を迸らせる一誠に、心底申し訳なさそうに謝罪と主神に対する問答無用のお仕置きを心掛けるリヴェリア。

「ふふ、イツセーって大きな胸が好きなのね。残念だけど私よりデメテルの方が大きいわよ？」

「違う！俺は俺の全部を心から受け入れてくれる女が好きだ！胸の大ききさんざいでもいいんだよ！ついでに言うけど墮落した顔や体型の女が嫌いだからな！」

「あ、初めてイツセーの好きじゃない女の人の特徴を聞いた」

フレイヤの指摘に好みのタイプと嫌いなタイプを宣言したことで初な少女や女性達を照れさせ、墮落な身体にならないよう肝に銘じたのだった。迸る魔力を収め冷静な態度でアリサを諭す。

「だからアリサ。大きくなくても俺は喜ぶ以前にお前の事を好きだつて思っているから、ロキに教えられたことは全部忘れろ。からかわれているだけなんだからな。いいな」

「……うん。私も好きだからね」

嬉しそうに朱で染まった顔で笑うアリサから、求めていたものとは違う返事が返ってきたことに少し不安を覚えるものの、ロキに対する体裁をしなくてはという気持ちが強かった。

「むう、イツセー。私もイツセーのことが好きだよ」

「分かっているよアイス。お前の想いは凄く伝わってる。俺も好きだぞ」

「んっー」

椅子から降りて真っ直ぐ向かう少女は男と対面するように膝の上に載って浮かべる満面の笑みを見せる。その綺麗な金髪を梳かす感じで撫でると目を細めて心地良さそうになる、そんな少女の幸せを。

「私も好きですイツセー様」

アイスと一誠の間を無理矢理割り込んで乗り出してきたラトラによって邪魔される。当然ながらアイズはプリプリと怒りですが、慣れた手つきで二人をそれぞれ膝の上に跨らせて喧嘩も言い合いも自分の目の前でさせない宥める。

「流石に慣れてますね」

「どっちでも俺の膝に座ろうとすればこんな感じだからな」

口唇を緩めるフィリアからすれば、慕う兄を奪い合う小さな妹達のような感じに見えていた。とても微笑ましいと慈愛すら思える、そんな食事の朝から皆の一日が始まった。

同時刻。保有する団員数と派閥の階位ランクは中堅のトップクラスに食い込んでいる「アルテミス・ファミリア」。朝食は白米、味噌汁、焼き魚にベーコンエッグと「デメテル・ファミリア」生産のサラダにデザート。シンプルなメニューに食卓を囲む面々は各々と雑談を交わしながら食事をしていた。その輪の中に遅れて姿を見せた男性と三人の女性。女性のために椅子をずらして座りやすくする気遣いを

した。

「おはようございます。キリトさん、スグハさん、シリカさん、リズさん」

四人が座った席に配膳をする拳藤一佳と麗日お茶子。二人にお礼を述べながら受け取った男性キリトは申し訳なさそうにする。

「ごめんな」

「気にしないでください。キリトさん達は上階ですから気を付けて階段を降りなきやならんし」

「こう言う時、あいつの転移の魔法がありや便利なのにな」

「あー確かにな」

あいつの魔法と単語に少年少女達の脳裏にはとある男の後ろ姿が浮かぶ。が、それは叶わぬ事だと考えを頭の隅に追いやった。ただ一人、弓使いアーチャーの女性は神妙な表情を浮かべる。

「やっぱり、一階の部屋を使ってる私達と交換しませんか？」

「うむ。三人の身体を考慮すればそうしたほうがいいだろう。皆、今日は団長達の部屋の交換を頑張ろう！」

「ちよ、その気持ちは嬉しいが——」

「キリト団長。三人の身体を心配るならそうしたほうがいいって」

「ええ、そうですね。先輩や団長達が何を言おうと決めた事です。なにより——」

一部を除いて面々の視線はスグハ達の身体、大きく膨らんでいる腹部へと向く。その膨らみは過剰な脂肪や贅肉とは違う新たな生命を抱えてる状態のそれだった。

「もう少しで誕生する赤ちゃんの為に、負担を減らすことは当たり前前ですわ」

「.....」

「よし、食べ終わったら直ぐに取りかかろうぜ。オイラはスグハ先輩の部屋を——」

「ウチ等がするから峰田は上鳴と借金の返済でもしてろ」

邪な下心が顔に浮かぶほど変態染みた形相の小人に制裁を加える黒髪のおかつぱ頭の少女。

「じゃあ、新たな仲間の勧誘とダンジョンでお金の稼ぎに団長達の部屋の引越しの手伝いをする者達の班を決めようではないか」

「はい、オールマイト!」

食事を終えた一同はそれぞれの班を作って目的のために行動を開始する。その最中、キリトに話しかけ彼の部屋まで足を運んで二人きりになるシノンが口を開いた。

「ねえ、三人の事をアスナに教えなくてもいいわけ?」

「……教えるよ。だけど今は――」

「今は……まだ早い?それともその時じゃない?それじゃ何時伝えるのよ貴方。またアスナに隠し事をするわけじゃないでしょうね」

腕を組んで呆れの色を目に滲ませて目の前の男を見つめる。

「【ファミリア】を脱退してもアスナは私達の仲間でしょ。ちゃんと教えるべき事を教えないでどうするのよあんた」

「仲間……でも、俺はアスナに……」

「自業自得でしょうが」

フラれたことをバツサリと言い捨てられて気落ちするキリト。

「それに元の世界に戻ったらどうするのよ?重婚なんてできないわよキリト」

「分かってる。三人を養う努力はするつもりだ」

「できるの?私としてはイツセーの世界に移住する事をお薦めするわよ。一夫多妻制で私達の世界に存在する似て異なる国も文化もあるから住みやすいと思うわ」

アスナが憧憬を抱いている、かつての似て異なる友がいる一誠の世界。どうして彼女が薦めるのか不思議で堪らないキリト。彼女なりに考えでもあるのだろうかと耳を傾けながら会話を続ける。

「仮にそうしたとして、シノンやクライン達はどうするんだ?」

「さあ、クライン達は元の世界に戻るかもしれないわね。私は正直悩んでいるところ。元の世界に戻るか、この世界に留まり続けるか、イツセーの世界に行ってみるのも悪くないかもしれないって。元の世界じゃ得られない剣と魔法を扱える世界だからね。世界や日本の法律なんて存在しないある種、生きやすい環境だわ」

「……」

「あの人達、オールマイト達はヒーローになる夢があるから帰るでしょ？じゃあ、私達も今後の事も考えなきゃいけない。キリト、そこるところ考えてた？」

一応、考えてたつもりだ。と答えたキリト。淡白な相槌を打つシンからこう言われた。

「イツセー、アスナを介して元の世界へ帰れるように出来てるわよ」「っ……」

「私からお願いで私達がいなくなった後の状況を探ってもらったの。案の定、行方不明扱いされてるわ」

自分の知らぬところでやりとりしていたシンノンからの事実を聞かされ、少なからず自分達がいけない世界のことには察していたつもりであつたのか、驚きはしなかった。

「俺達の世界に繋がれたなら、ユイは……」

「コンタクトはできなかったみたいよ。というか、この世界に連れて来られないでしょ。その上、あんたとアスナのこと話せるの？」

ぐうの音も出さず口を閉ざす。言えない、言えるわけがない。シヨックを受けるのは確実にあの子なのだから。しかも悲しむに決まっているのだ。自分達の事を本当の家族のように慕ってくれているのに、自分の不祥事でアスナと別れているなんて、言い辛いどころではない。

「それでもいいなら頼んでみたら？ちよつとの間なら帰れると思うわよ。元の世界において来てしまった家族なんだから迎えに行くのもいいと思うし」

肯定も否定の言葉も出さず、苦悩するキリト。シンノンは彼に背を向けて部屋の扉を開ける。

「私はアスナの様子を見に行つてくるわ」

「……シンノン、スグハたちの事は……」

「遅かれ早かれ隠し事はバレるわよ浮気者」

出ていく間際にそう言い残されてしまう。わかっている、わかっているが……キリトの中で不安と緊張が募り始め、頭を抱える思

いでベッドの縁に座りこんで肩を落とす。

.....

「へえ、キリトパパになるんだな。そいつはオメデタだな。な、アスナ」

トントンカン、トントンカン。ワイワイ、ガヤガヤ。トントンカン、トントンカン。

「うん.....そうだね」

海列車を作っている作業場に【ファミリア】の内情を伝えるシノンの話を聞き、感嘆の一誠と感情が籠ってない声を漏らすアスナ。不穏な気配を発する女剣士から数多の分身体と完成に励む列車へ視線を向けるシノンは圧倒された風に述べた。

「ねえ、今度は列車を作ってるわけ？」

「ああ、今度は海の上を走る列車を作ろうとしているんだよ」

「.....あなたは本当に何でもアリなのね」

「ファンタジーの世界だから何でもアリだろ？」

そう言われてしまえばお終いである。

「その勢いで実弾と魔法の弾が撃てる銃も作ってほしいところね」

「まだ言うか。実在しているけどさ造らんど」

「じゃあ買わせてよ。空の世界とやらに売ってるんでしょ？」

「空の世界の通貨はヴァリスじゃなくてルピだぞ。シノンさん、ルピの通貨はお持ちですかね？」

「.....貴方のお店にアルバイトしたら譲ってくれない？」

む？と動かしていた作業の手が止まりシノンへ振り返った。

【ファミリア】の方はどうするんだ？」

「借金返済のためにだと言えば文句は言わないでしょ」

「キリト達とダンジョンに行く時のタイミングは？」

「リズ達が妊娠しててキリトは三人の傍にいる事が多いから、ヒーローの子供達が主体として稼いでるの。私も手伝うけれど殆ど出番なし。エギルは自分の店の準備をしていて、クラインはゲーム仲間と

組んでダンジョンの探索」

つまり、手が空いている方が多いのだと言外する。シノンに向けていた視線をアスナに変えて質問。

「シノンの料理の腕前は？」

「一般的な家庭料理だったら大丈夫だよ」

「そっか。容姿も整っているしうちの店にいないクールビューティー。客受けもいい感じになりそうだな」

「それ、褒めてる？」

物凄く褒めてる。と真顔で言われてちよっぴり照れる。

「んじや、これを作る片手間にシノンの制服を作るか」

「作るって、あんた私の身長とかサイズとか分かるの？」

「目測でとつくに把握している」

とつきに自分の身体を抱きしめて身構えるシノンを気にせず作業を再開する一誠。

「……目測でわかるなんて、変態でしょ」

「お前の服を剥いで調べるよりは断然マシだと思うんだがな。ていうか、どっちみち誰かに計ってもらって知るんだから知られる方はあんまり変わらんぞ」

それはそうだが、目測で自分のスリーサイズを知られるということはあるに、あまりいい感じではない。全裸を見られているようなもので恥ずかしい以上に嫌悪を抱いてしまいかねない。好きでもない男に裸を見られるのと道理だ。

「制服が出来たら呼ぶ。そしたら働き方を教えるからな」

「欲しい銃が手に入るまでどのぐらいかかる？」

「数カ月は掛ると思っただ方が良いな。ぶっちゃけ一年ぐらいは働いて欲しい」

「わかったわ。それと後で貴方の銃を見せてちょうだい」

「今は手が離せない。アスナ、代わりにあそこへ連れてってくれないか？」

わかった、と了承して亜麻色の髪を揺らしながらシノンを連れて作業場を後に、一誠の部屋へと向かう。その間、二人の間に静寂で包ま

れどちらからも話をせず黙々とした雰囲気のまま辿り着く。部屋の中に入り本棚の中の一冊を動かして宝物庫の入り口を開ける。そして目の前の光景に驚く。

「す、凄い……」

「でしょ？ 私も驚いたわ」

山積みのヴァリスに数多の宝石に氷漬けされたモンスターや階層主の数々。そして普通から希少な怪物の宝が保管されてる陳列窓。今日まで打った武器が置かれた台を通り過ぎながら見回す彼女等は、目的の空の世界で得た下界にない銃の武器のところへ。シノンはその銃を見て見る目を変えて触れるのであった。

「……ねえ、シノン。三人は幸せそうだった？」

妊娠してる女性達の事を問う。彼に浮気されて怒りと悲しみで衝動的に駆られ別れても彼女達と関係を続け妊娠させた。中途半端な気持ちでいたのではないことが何となくわかり、最後まで責任を持つつもりだろう元彼に愛されている彼女達は幸せなのかと思った。シノンは真つ直ぐアスナに向いて小さく頷く。

「妊娠したって知ってキリトに受け入れられた時の彼女達は泣いて喜んでたわ。今でも幸せにして子供を産むつもりでいるよ」

「……そっか」

空虚のように相槌した言葉に力が宿ってなかった。それがシノンに追究させた。アスナの代わりにキリトの隣には三人の女性達がいる。何とも思っていないわけがないと触れていた銃を置いて訊く。

「アスナは本当にこのままでいいの？ 今ならよりを戻せるんじゃない？」

「ううん、もうそんな気はしないの。シリカちゃんたちが妊娠したって聞いて安心した自分も知っちゃったし、彼も守るべき人が出来たから私の事なんて考える暇はないでしょ」

「……もし、戻って来て欲しいと願っていたらアスナはどうする？」

「戻らないよ。今の生活が前より刺激的で充実してる。それになにより……」

はにかむ笑顔を浮かべるアスナ。この世界で初めて見る心からのその笑顔の意味は……。

「一緒にいる人が違うだけで世界の色と景色が違う。こんな素敵なおとを知っちゃったら戻れなくなるよ」

とても幸せなのだと言っている彼女の笑顔を見て、ならばもう何も言うまいと話を打ち切る。

「シノン——あなたは彼のこと、桐ヶ谷君のこと好きなんですよ？」
「さあ、どうなんでしょうね」

逆に自分の事を聞かされるようになった。はぐらかす風に述べつつ銃の選定をする目と手を動かす。

「もし、イツセーの事が好きになったら言ってね。協力するから」

「いやいや……協力的って、アスナが彼のこと好きなら頑張りなきやダメでしょ」

「ふふ、そうかもしれないね。そうだったら前より手強過ぎるライバルが多いや」

「……頑張りなさいね」

「頑張るよ。でも、さっき言った事は本当だからね。きっとシノンもイツセーの事が好きになると確信してるから」

何故こうも自分とイツセーをくつつけたがるのかわからない。ただ、密かに抱いていたキリトに対する感情が薄れていることは確かだ。女を捨てるつもりはないが、一体どういうつもりなのだろうか？

「何でそんなこと言うの？」

「だって、これから一緒に働く仲間だけど店の若い子達はイツセーのこと好きなんだよ？」

だからシノンも好きになる可能性があるかと断定されて「そんなまさか」と有り得ないの一言で片づける。

「（私がイツセーの事をね……悪い奴に捕まって助けられるヒロインじゃあるまいし）」

自嘲する風に心中で語る彼女の目に対物ライフルが留まる。やはり手に入れるならこれだろうと前から狙っていた銃のために頑張りうと決意する。

「アスナ、これが欲しいわ」

「じゃあイツセーに伝えておくね」

後に『異世界食堂』に新たな従業員が加わり、クールビューティな見た目に笑顔を浮かべる女性が客層の間で密かに人気となり、彼女を目当てに訪れる足が増えることをまだこの時になるまで誰も知らない。

港街メレンに異様な活気が醸し出している。海外からオラリオに輸入される物資を運ぶ商船や商売や冒険者になるべく船に乗ってきた者達や観光目的で訪れた者達等が——メレンから揺れる海面にどこかへと繋がっている線路に固定されている列車を好奇心な視線を向ける。漁を司る神ニヨルズと「ニヨルズ・ファミリア」の協力もあつて極東まで線路を繋げることが出来て、場所の提供も感謝して列車の運転の試みをする。甲高くなる音と同時に煙突から噴き出す煙。見たことのない光景に驚く面々を他所にシユツシユツシユツシユと鉄の歯車が線路をつかんで動きだし、最初はゆっくりとメレンから離れ海の上を移動する奇怪な乗り物はやがて……地上で走る馬車よりもゆっくりと海を航海する船よりも速い速度で海を駆ける姿にニヨルズ達は興奮した。この日の試運転で一時間も掛けて無事にアマテラス達が待つていた極東の港まで辿り着いたことで異世界で初の海上を駆ける列車の誕生する。三柱の神々に称えられ、幼い妻達からも笑顔で称賛を受け極東の英雄は偉業を成したと知れ渡るの思いの外早かった。そしてまた港町メレンへ出発する列車にアマテラス達が乗車し、列車を乗る希望者達と共に海を渡った。——海を渡す乗り物『海列車』の存在は同盟国や敵国にまで知れ渡り、後に海外の国から海列車の開通の依頼や提案が持ちかけてくるようになるがそれは別の話。「さーて、海列車は完成した。次は銭湯だな」

留まる事を知らない一誠は次に前から決めていた銭湯の建造も手を出し始める。オラリオを上空から下見し使われていない建物、廃墟、人気のない場所をマークしてそれらに出入り口に定めてから本題の銭湯を設ける場所を探す。が……これといった場所が見当た

らずどこかないかと散々探し回って見て回ったりして……。

「いい場所が無いか私に調べてほしいってわけね」

土地の管理も担っているギルドに何時ものように相談をしにやってきた。一度は危険人物フラックリスト一覧に乗せられて担当からはずされた赤髪ウエテアルフの狼人であったが、何故か剥奪された冒険者の地位の復権とブラツクリストからの除外をされたことで元の鞆に収まる。ローズは何故わざわざリストから取り下げたギルド長の考えが理解できなかった。が、またこうして美味しいデザートを持ってきてくれる日が戻ってくるならば問うまいと考えた。

「んー、美味いっ」

「喜んでくれて何よりだ」

デザートを食べ終えるまで待つ相手から用意された紅茶も飲み舌全体に広がる味は心地が良い。仕事をしているのに、この休日のように飲食できる一時は至福の時だった。ローズが紙皿を残してデザートを食べきれば本題に入り土地関連の資料の本を開く。

「どんな土地を望んでいるの?」

「できればバベルの塔並の使われてない敷地があるといいな」

「と、とんでもないものを要求するわね。そんな土地、あるのかギルドも把握していないかもしれないわよ。一体、その土地で何を建てるつもりなわけ?」

「うん、誰でも平等に風呂が入れる建物だ」

お風呂? 首を捻って神々しか入れない神聖な入浴場みたいなものかと思に至る。更に一誠から聞きこみをして感嘆の息を吐露する。

「異世界にはそんなお風呂の施設があるのね。それをオラリオにも建てたいと」

「ダンジョンから帰ってくる冒険者が清潔な状態で明日を過ごすとは限らないだろ」

「まあ、確かに……」

心当たりがあるのか小さく頷くローズ。同意を得てだからこそ、とそのぐらゐの土地が必要だと言う。

「風呂が無い【ファミリア】や風呂に入れない一般市民の為に思えば銭

湯ぐらいはあってもいいんじゃないかって思ってたよ。ようやく一段落したから銭湯も造ろうって考えてたんだ」

銭湯の設計図を担当アドバイザーに見てもらい驚愕させる。

「大規模すぎる・・・流石にこれだけの銭湯を造るための土地は今のオラリオにないと思うわ」

「使われていない建物を取り壊してでもか？」

「ないと思うわ。東西南北のそれぞれの区画はホールケーキのように八つに分かれてるでしょ？貴方が求めている土地の規模は八つの内の一部だから、既に入居している人を退かない限りは不可能ね」

断言されて残念そうに息を吐く。地上にないなら地下で造るしかないかと懸念する。

「はあく無理かあゝ」

「無理ねこればかりわ」

身体を折って机に上半身を預ける感じで倒して溜息を吐く。今回ばかりは諦めなさい、と男の頭にポンポンと慰めるローズ。

「・・・あつ」

「え？」

不意に上半身を起こして彼女に申す。

「神しか入れない神聖浴場。男神の使用率は低いんだよな？」

「ええ、話を聞けばそうね。女神の方が多いわ」

「だったら、その神聖浴場を改装と増築していいか？」

は？と目を丸くする。しかし、改装と増築という言葉に目の前の男はとんでもないことを考えているのではないかと察する。

「あんた、まさか神聖浴場を銭湯にするわけじゃないわよね？」

「そのまさかだ。ないなら最初からある物で使えばいい。うん、これだったら神聖浴場を残したまま銭湯が造れるよローズ」

早速準備に取り掛かる、相談ありがとう。と食器やゴミを片付けて転移式魔方陣で介しローズの目の前からいなくなった一誠に愕然を通り越して放心してしまった。

「——てなわけでき、神聖浴場の使用をしばらく止めてくれないかロイマン？」

「いきなり現れてなにを言いだすか!?!そんなことできる筈がないだろう!何を考えておるのだお前は!」

「ただ俺の手で改装と増築をさせていただけなんだ。目的は冒険者や一般市民でも公共として入れるようにするため。それに利用者を含めて神々もこれまで通りに使用料金を払って入ってもらうけど、少なくとも神聖浴場と銭湯を合わせた新しい浴場で得た税は倍になるだろうしギルドに支払うから良いだろ?」

一応ギルドの管理下の浴場のため、改装と増築の許可を得るためにギルド長のところへ赴いた一誠に、その提案を受けたロイマンは突然の入浴の禁止の乞いに否定する。が、倍の税を得られると言う話に胡乱気な目で見返す。

「銭湯というのは浴場の一種か」

「そ、異世界で存在する公共の浴場だ。他にも金銭を払って風呂に入るだけでなく宿泊や食事も提供する浴場の施設も存在するんだ」

「それなら高級宿泊にでも存在している。不要な物ではないのか」

「高級だからこそ金が無い消費者達は利用できないだろう?ま、俺が造ろうとしているのは神だけじゃなくて他の住民達でも入浴ができる浴場だ。宿泊以前に食事の提供は人員が不足してるからできないから無理だけど」

それが解消できたらできると言外する異邦人の言葉にギルド長は思考の海に飛び込んだ。オラリオの発展に繋がるか否かを重視し、問いただす口を開く。

「その銭湯とやらはどのぐらいの期間で完成する」

「一カ月以内は必ず完成してみせる」

「……よし、お前の言葉を信じてこちらから事前に規制の通知をしておく。一カ月以内に必ず完成してみせるのだぞ。よいな」

「了解。それじゃ、規制したら店に知らせておいてくれ。直ぐに取りかかるから」

そう言い残して消えていなくなる一誠を見送るロイマンも、神聖浴場の使用の規制の準備に取り掛かりオラリオの発展のために動き出す。そしてそれは数日後に発効されて神々の間で使用を一時禁じら

れた浴場に首を捻り、女神達は自分達のホームで入浴をすることになって、時々ギルドに神聖浴場の事を問い合わせをしにやってくる。ところがしばしば。そんなことした原因である男は金色の杖を光らせ眼前の浴場に向けて閃光を放つ。見る見るうちに光に包まれてる建造物は形を大きく変えていき、本来の姿が影の形もなくなった。

「イツセーがまたとんでもないことをしようとしてる」

「それがイツセーじゃないのかしら？」

「てか、杖からピカって光ったもんが神聖浴場の形を変えたで？どんな魔法なんや」

銭湯を造りに行ってくる。その一言でフレイヤ達は興味津々となりどんな風に造るのか見学をしに来ていた。途中、酒を買いに街に歩いていったロキと出くわして合流する形で共に見学をすることとなったが、創造の力で神聖浴場を銭湯に創り変えていく光景に何度も驚きと感嘆の息を漏らす一同であった。そしてそれを半月も繰り返してようやく神聖浴場改め『異世界銭湯』という名の浴場が完成した。新しく変わった、冒険者や労働者でも気軽に入れる浴場だと話しや噂を聞き足を運ぶ住民達は神々も交えて向かう。その際、東西南北に設置された老人でも通える『異世界銭湯』に直接繋がっている魔法の入り口がある。し切りで入り口と出口が別れてる赤い鳥居ゲイトから恐る恐る入ってみれば、バベルの塔の広間とほぼ同じの空間の壁際にはそ東西南北に位置してる赤い鳥居ゲイトがあり、そこから現れる利用者が見受けれる。一度中を見渡すと共通語コイネーで青い幟に『男湯』、赤い幟に『女湯』と書かれそれぞれの入り口に飾れてあった。その横には受付をしている男女がいて、冒険者達だけ装備の預かりをしている。

「——ふむ、ここがイツセーが新しく造り変えた神の浴場じゃな？農等でも入れる様にするとは面白い事を考える」

「そうだね。他の冒険者や労働者達も利用しようとしているし成功してるようだ。それじゃリヴェリア、ここでしばらくお別れだ」

「ああ、お互いの事は気にせず堪能してみよう」

一誠の手で完成した銭湯という浴場を利用してみる【ロキ・ファミリア】。だが、最大派閥の主神は——

「セクハラ行為をする客は入浴禁止だ。それでも行きたいなら男湯に行け」

「なんでや!?!うちは女神やぞ、リヴェリア達と一緒に女湯に入りたいんやー!」

「入浴を楽しみリヴェリア達や他の客に迷惑をかけないと俺に誓えるのかじゃあ?もしも破ったらお前のホームを修復が不可能なほどに壊すぞ。誓えるならば入っていいがどうする」

少し離れた場所で『異世界銭湯』の店主に出禁されかねている。事前にリヴェリア達から入浴中でもいやらしい手つきでセクハラをしてくると訊いている故に、せっかく造った銭湯の評判の秩序が乱れる原因になると思つての規制。しかし、せっかく造り直したホームがまた壊されかねないことになって女性団員達は心からそうならないよう心掛けてロキを制するために動く。

「．．．．．イツセー、こちらで責任以つてロキを監視する。私達も他の客にも迷惑を掛けさせないからホームを壊さないで欲しい」

「しっかりと監視をしますので安心して下さい」

「私達の主神が変態で申し訳ございません」

「そうか．．．．．じゃあ、入っていいぞロキ。くれぐれも俺との誓いを破らないことを心掛けろよ」

「何か納得いかへんで!?!」

はいはい、さっさと行きましようと彼女等に連れられるロキ。フィン達男性団員も男湯へと向かう。神は五百ヴァリス。大人は三百五十ヴァリス。十一歳から十六歳の中人は百二十ヴァリス。0歳から十歳の小人は無料という料金の規制で利用者から代金を貰つて入浴してもらっている。その結果、神聖浴場であった時に得た料金より数倍の金の三分の一がギルドの税として支払われた。これにはロイマンも唸り異世界の知識は馬鹿に出来ないと思ひながら税を収めた。

．．．．．
．．．．．
．．．．．

「ねえ、イツセーって一日どれぐらいお金を稼いでいるの?」

「ん？なんでだ？」

「料理店の他に銭湯と海列車も作って収入を得ているんでしょ？それだけでどれぐらい稼いでいるのかなって」

とある日の昼食作りの最中にアスナから素朴な疑問を投げられた。別段気にしていなかったことを答えねばならず、頭の中で大雑把に計算をする。

「数十万ぐらいか」

「えっ、それだけ？」

「出費が多いからな。異世界の調味料と食材に銭湯は洗剤の類のストックを三桁も半月に一度は必要だ。海列車だって極東しか開通してないし【ニョルズ・ファミア】に管理を任せてるからそれほど稼いでいるわけじゃない。だから主な収入源はダンジョンとカジノなんだ」

予想していた金額よりも少なく、そして事情を理解し自営業って大変なんだなと感想を抱く。

「一日の収入源は、な？年間は数百万だから」

「あ、そうだよ。流石に一年間で数十万っておかしいと思ったよ」
「元の世界より滅茶苦茶稼ぎやすい環境だ。稼げる時は稼がないと」

素早く魚の身と骨を切り分ける手早さはアスナの目では捉えきれない。料理のスキルの効果で更に技術が後押しをしている。あつという間にフレイヤ達の方、お代りも含めて捌き終えた魚を甘辛風のタレに漬けて込んで焼き上げる。

「料理スキルを得てから凄く速くなったね」

「熟練度は上がらないがな。アスナの【ステータス】の方はどうなんだ？」

「うんとね、器用アピリテイの熟練度がCになってるよ。ほぼ毎日料理を作っているからかな」

己にほぼ無縁な成長を遂げてるアスナと違い、今でも『ステータスプレート』や背中に刻まれてる【ステータス】の各能力値アピリテイの熟練度はオールI。聞いておいて虚しくなって調理の速度が遅くなる。

「だ、大丈夫だよ。イツセーだつて絶対に強くなるつて」

「相手から【ステータス】を奪うことでしか成長しないのか？」

「あう……」

そんな成長は本人も望んでいないことで、自力での成長は絶望に等しい彼に慰めようとした彼女は気落ちする。

「オツタルさんと戦ってもダメだったの……?」

「ダメだった」

オラリオで唯一のLv. 7の冒険者相手にも成長の兆しはなかった。

「やっぱり、元の世界にいるあいつらとの戦いでしか成長しないんだろうな」

そう確信の声を発しながら、調理を終えた料理を皿に盛り付けて席に座つてテーブルを囲む主神や同居人へと持ち運ぶ。不意に、通信型の腕輪の宝玉が点滅を繰り返した。ロキ達の誰かはわからないが受信モードになると宝玉から立体的な映像に初老の男性こと男神ヴァベルの顔が映り出す。

『こんにちはイツセー殿。お時間はよろしいですか？』

『こんにちは。相談事かヴァベル?』

『はい、是非とも貴方の騎空艇で連れて行つて欲しい場所がございます。何分、そこはオラリオから最も離れた場所でありまして。魔法の絨毯では少々そこまでつく間の生活が困難でして』

聞き耳を立てるフレイヤ達は「どこなのかしら?」と首を捻る。

『行きたい場所つてどんなところ?』

『ええ、風の噂で世にも珍しい商品がオークションに出荷される事を耳にしましてね。一体どんなものなのか大変興味あります。それがあるのは——世界中から他種族が様々な理由で集められ奴隷として日夜売買を繰り返している「奴隷国家」。そこに行きたいのです』

その場所を聞いた瞬間、一誠の顔から感情が消え失せた。その表情を始めてみる面々は緊張の面持ちで息を飲んだ。

薄暗い石材で造られた牢屋の数々。その中には捕獲されたモンスターの他にも様々な人種がある見せ物の為に隔離されていた。柵の外から漏れる月光に照らされた人影の両腕には頑丈な手錠が嵌められていて、両脚にも鎖と繋がっている鉄球で行動を封じられている。その者を出で立ちには華奢な体つきであるが、絶えない生傷が多く豊満な胸を隠す紐で結ぶボロの布と薄汚れた下着のみだった。月の光で見える血のように真っ赤な髪を分けて生えている人種では有り得ない二本の角。猫のように縦に割れた瞳はこの世の全てに怒っているようにどす黒い炎を孕ませている。

「.....あともう少し」

冒険譚 18

「ヴァベルー・ファミリア」を奴隷国家へ連れて行くことを約束した一誠は何かに取り憑かれたようで金を集めるようになった。出発日までに集めて稼いだ額は貯蓄していたのも含めて十億を超えた。慕う男の異変にその莫大な金を一体何に使うのか、これから向かう国と深く関係していることを彼女達は何となくでも察した。そして出発日——オラリオの外で停泊させた船に乗り込むヴァベルー達を迎える一誠。渡り橋を仕舞って騎空艇を浮かせ、目的地に向けて飛ばす。

『奴隷国家』

世界中から人種や物資を集め神すら奴隷にする世界で危険な国の一つ。この世の全てを我がものにせんと各国のパイプを持ち、コネや人脈を築きあげながら強奪や略奪が盛で治安は最悪な国でもあった。その国に訪れた者等には一定の賄賂を寄付しなければ相手が誰であれ誘拐・拉致して身代金を要求するどころか気分次第で莫大な金額を求め、支払う事が出来なければ一家諸共その家や土地すら奪われる。その所業は闇派閥イルヴィスの方が可愛く思えるほどだ。人は彼の国の事を犯罪都市、悪の巣窟と呼ぶ。自ら好んでその国に入ろうとする者は精神がおかしい以外何者ではない。そう——奴隷国家の上空を通過する巨大な蒼い騎空艇に乗っている者達も只者ではない。空飛ぶ船を見上げる全ての者達は外壁の外へと降下していく様を立ち尽くしながら視線を向け続ける。

地面に船底を着陸させて停止させる。甲板から渡り橋を降ろして船から降り立つ「ヴァベルー・ファミリア」と一誠。物資を乗せた荷台を降ろす。

「ここが奴隷国家か？外壁がオラリオ並みに高いな」

「私も初めて来ましたが、中は大変危険な場所とか。イツセー殿お気を付けてください」

「それはごっちのセリフだ。中に入ったら敵だらけだぞ？「ファミリア」総出でも数の暴力で負けるのがオチだ」

「いざという時はこの腕輪の転移して逃げますよ」

先に検問へ向かう商業系の派閥の主神達を見送り、騎空艇を奪いに
来る輩や火矢に対する防壁の結界を張り巡らせ、遅れてヴァベルー等
の後を追う。

「あんたら、初めて入ろうとしている奴らだな？そういう奴らには一
人頭につき十万を支払ってもらおうことになってるんだ」

「十万ですか。随分と高い入国料ですね」

「ここがどこなのかわからないできたわけじゃないだろう？ほら、
さっさと払うもんを払ってくれねえと不法侵入者としてとっ捕まえ
て身ぐるみを剥がさせてもらおうぜ？」

有り得ない程のぼったくりの入国料を吹っ掛けてくる検問の兵と、
この国の洗礼を早速受けるヴァベルーの後ろから魔法で兵に催眠を
掛けた。料金を一割程度に払ってもらおうようこの国から出るまで暗
示を施し、何とか中に入ることが出来た。

「イツセー殿、助かりました」

「なんのことだ？」

「ふふ、何となくですよ。では、お互い目的が達成するまで別れましよ
う」

「オークションをする場所は分かるのか？」

人海戦術で探し回ってみます。とその辺りの人間に聞き込みをし
ながら向かうのだろう。辿り着いたら教えてもらおうと思いい、ヴァベ
ルー達と違う方へと歩き始める。そして、人避けの結界を張って数十
人の分身を作っては更に別人に変身してもらい一人ずつ百万ヴァ
リスを手渡す。それを十億も超えた金が無くなるまで何度も繰り返
し、手元に一億だけ残しておいて分身達にはあることをしてもらっ
たために行動させた。眼鏡をかけた一誠もそうして行動する。

奴隷国家の中心は巨大なサーカス団が設けるような天幕がある。
そこから中心として円形の外壁に囲まれてる国は治安が悪いのに環
境整備だけが何故か整っている。国の住民達は全て奴隷の血を受け
継いでいる。奴隷として連れて来られた者達が一生をここで過ごさ
れ、絶望の中で子供を産まされる。そして産まれた子にこの国の常識
を植え付けられてまともな倫理観が育たず成長してしまい、常識人か

ら見てすれば吐き気を催すほどの嫌悪感を抱かせる。

「いらつしやいいらつしやーい、今日の肉奴隷は仕入れたばかりの新鮮で活きが良いのぼつかだよー!」

「こつちにはエルフの上玉だらけだ。まだ身体は新品だらけで使い古すなら今のうちだぜー!」

「希少な種族を取り揃えたうちも目玉商品が多いよー!」

人権?なにそれ美味しいのか?と奴隷国家の住民達が声を揃えて言いそうな奴隷達の扱い方に心中反吐が出そうなほどに嫌悪を抱く。檻の中に何人も閉じ込めている店もあれば、店の中で囚人のように吊り下げられている他種族に、見せびらかす様に全裸で股を広がせられているエルフを売買している店もある。スツとそんな軒並みに並んでいる店が視れる位置に止まって口を開きだす。

「……こんな光景を拝むことになった感想はどうよ」

虚空に話しかけるその言葉は一誠の耳に返答の言葉が聞こえてきた。眼鏡の硝子にはオラリオに置いてきたフレイヤ達にも一誠が見ている物全てを映す仕組みとなっていて、その映像を見ている彼女達の顔は一人残らず顔を顰めていた。

『……世界にこんな国があるなんて』

「奴隷国家ってそういうもんだろ。だから来るなど言っただよ。お前等が生で見たら発狂せずとも住民達に怒りをぶつけていただろうよ。連れて来なくて正解だったよ」

『何故そのようなことを言うのですか?! 同胞があのような辱めを公然の場で晒されているなんて、とても許しがたいです!! 彼女達を助ける……いえ、この腕輪で今すぐそちらに向かいます!』

「来るな。」

『なっ、何故です!?!』

「感情的になつたら助けられることが助けられなくなる。『大木の心』はどうした。冷静になれ」

怒れるアリスアを諭す言葉に納得ができず、一誠に食って掛かる。

『これが、冷静にいられるわけがないでしょうつ。貴方は人の心が無いのですか、目の前で私達の同族や他の種族が人として扱われていな

「い光景を見て何とも思わないのですかっ！」

「……」

『いえ、貴方は人間ではなかったですね……だから目の前の酷い光景を見ても何とも思っていないんですね。人の心を持っていたら冷静にいられるはずが——』

「アリシア……お前は俺のことを能天気な奴だと思っているとは知らなかったな」

アリシアの怒りの叫びよりも怒気が孕んだ言葉を発する男に息を飲む気配を醸し出すアスナ達。

「お前達をこの場に連れてきたら奴隷の対象として捕まえに来る輩が出てくる。そんなこと予想できるなら最初から連れて来れる筈がないだろ」

『イツセー……』

「ああ、そうさ。人間じゃない俺だからこそこーいうのが一番適しているのさ。お前等はそこで俺の帰りを待っているだけでいい。緊急事態が起きたらすぐに連絡をしてくれ」

眼鏡の映像を、アスナ達との繋がりを消したところで視界に一誠の分身体が奴隷達を大人買いする様子が確認できた。その店の主は万々歳と奴隷達の首に購入者の証として鎖付きの首輪を嵌め、分身体に手渡し代金を受け取る。全裸で晒されているエルフの奴隷達も分身体が買い取られていく様を見て止めていた足を動かす。

「……ほう、あの男の目」

他の建物と一際違う立派な建物の窓から鳶色の目が鋭く、どこかへと歩いていく真紅の長髪の男を値札見する。

「この国の者ではないな。中々どうして……ふふ、久々に商人の血が騒いできた」

その人物は騒ぎ出す血に従って従者と共に街へ繰り出す仕度をはじめ。

「いたいた、ヴァベルー」

「おや、これはイツセー殿」

「オークション会場の場所は？」

「ええ、この国の闘技場の地下にあると分かったところですよ。あの巨大な天幕のところですよ」

荷台を引く初老の男神と眷族達を見つけて、丁度オークション会場へ向かおうと、今いる場所からでも見える真紅の天幕へ指す。

「俺もオークションに興味がある。同席していいか？」

「勿論ですとも。ここまで連れて来て下さった貴方に拒む理由はございません」

寧ろ勧めようかと思ったところですよと朗らかに言うヴァベルは、更に情報を打ち明けた。

「そうそう、聞き込みした時に興味深い話も耳にしましたよ。何でも闘技場には無敗の人間とモンスターのハーフがいるそうです」

「人間とモンスターのハーフ……?」

「下界の可能性なんでしょうかね。悪魔の所業が現実的にするとは、やはりこの国は危ないところですよ」

そんな場所に連れていけと乞うたのはお前だとツツコミ、ヴァベルを苦笑させた。

「そう言う奴がいるんだな興味深い。会えないかな？」

「行ってみますかな?オークションは夜に行う予定みたいです。参加希望を記入しに行つてからでも遅くはないですよ」

「じゃあ、そうしよう」

そうと決まれば一行は天幕の方へ向かい、オークションの受付をする場所を探し求めてみたものの。

「申し訳ございませんがオークションは会員制でして、会員の者ではないお客様にはお通し出来ません」

「会員制?どうすれば私共も会員になれますか?」

「この国の法律で一定の数の奴隷を購入していただきます。同時にその際に得られる奴隷国の商人の名刺を提示していただければこちらで会員制の証したるカードを発行出来ます。また、一度会員になれば検問の者に見せれば料金は無料で素通りでき、何時でもこの国に滞在が出来るようになります」

理知的で眼鏡をかけたヒューマンの受け付けに門前払いを受けて

しまった。人身売買を好まないヴァベル達は奴隷を一人も買っていない。当然ながらオークションに参加資格の証のカードを得ることは出来ない。困ったと眉値を寄せて、奴隷国まで連れてきてくれた隣に立つ男に申し訳ないと謝罪しようと話し掛ける口を開いた時。

「これか？商人の名刺って」

無造作にポケットから二つの束の名刺を受け付けのヒューマンへ提出した。受け付けは軽く驚きながらその名刺と数を確認して肯定と頷いた。見守るヴァベル達の視線を気にせず一定の数の奴隷を購入した時に得る名刺を偽造であるか否か調べること数分。

「は、はい。間違いございません」

「じゃあ、俺達は参加資格があるってことで発行してくれるか？」

「かしこまりました。では、此方に名前を記入してください。【ファミリア】の眷族の者であればお忘れなく記入欄にも書いてください」

一誠の手腕によってヴァベル達は滞りなく参加資格のカードを手に入れることができた。

「イツセー殿。いつの間に奴隷を購入していたのですか？離れた時間はそう長くはなかった筈ですが」

「丁度人員が必要になったから手当たり次第買い占めたのさ。働き手を増やしたかったしな」

オークションの会員制カードを大事そうに懐へしまう。受け付けから開催時間も聞きこの場から離れる直前に誘いの言葉を受けた。

「イツセー様。あなた様だけに特別な奴隷の紹介を差し上げましょう」

「特別な奴隷？」

「はい、奴隷国では会員制に必要な一定の数よりも数多くの奴隷を購入された方のみだけ案内をする決まりがございます。市街で販売されている奴隷達より一線を越えるレベルの高い奴隷を仕入れている場所がございます。もし興味があるならばご案内致します」

答えを待つ姿勢の相手からヴァベルに目で問い、無言で頷く男神から視線を戻し受け付けの誘いを受けた。

「ではこちらに」

天幕の中へと二人が消えていなくなる。その直ぐに鼓膜が破かばかりの熱狂的な歓声が聞こえてきた。目の前に聳え立つ五十Mの石材の壁と階段が二人を出迎え、壁の向こうから大勢の声が聞こえてくる。

「あれは闘技場か？」

「その通りです。今まさに奇跡的な瞬間を目の当たりにしようとしているところでしょうね。なんせ千勝もすれば晴れて自由のみになれる剣闘隷が闘っておりますので」

「千勝？それは凄いな。一体どんな奴なのか興味深い」

「直ぐにお分かりになりますよ。観戦するならば尚更のこと」

石材の壁際に沿って歩き続けて行くヒューマンの背中をついていきながら奴隷国の歴史を覚えてもらった。それをメモに記していると天幕から外へ出た。方角は北でも奴隷達を売買している店が軒並みに連なっており、分身体達が買い占めているところを目撃する。

「この国は奴隷が多いよな。どうやって集めてるんだ？」

「近隣の村や町に襲撃して若者を攫い、時には犯罪組織ファミリアを雇って我々の代わりに手が出せない者達を攫ってもらっておりますよ」

「それでここまで国を発展してきたのか。根性あるな」

「お褒めの言葉ありがとうございます。主神様もお喜びなるでしょう」

「その主神ってどんな神様なんだ？」

「そうですねえ、一言で申せば……変神ですね」

「……どこの国でもそういう神はいるんだな」

そういう神は万国共通ですよ。とどこか疲れた顔色を浮かべだす。このヒューマンは苦労人かと奴隷国では多分珍しいと思う豪華な豪邸の建物へと向かっていく。門兵に門を開けて貰って入っていく二人に檜の木の扉の前に他ず向二人の番兵に開けて潜ると、奴隷国の中にあるとは思えない立派な作りが視界いっぱい広がる。

「他の奴隷と一線越えるレベルだからか、この建物だけが別の世界に来たような感覚を覚えるぞ」

「ふふ、ここへ招かれた者達の中でその様な感想を述べる者は貴方が初めてですよ」

「へえ、そうなんだ。でも当然だろうけど、ここに来たその人達って買っているんだよな？」

「いえ、残念ながら皆様は一目見ただけで委縮してしまい、取引をすることもなくお帰りになるばかりでして」

とても困っております、と苦笑いするヒューマンに首を捻る。富豪の者達が萎縮するとは一体どんな奴隷がいるのか、不思議に思い興味を抱く。上階へ進み、二階の通路のところでヒューマンが立ち止まる。

「ここで過ごしておられる奴隷達は皆一級品であると自負しています。この階と三階には奴隷達の部屋であり檻がございますのでどうぞ気が済むまでご覧ください」

そう促されては見るしかないかと右から見ることにする。まず最初に檻の中を窺う――。

「.....っ」

威圧、否これは.....神威。目の前にいる女性は女神であることが一目瞭然である。こちらを見る目が厳しく、全力で警戒する獣のように神威で威嚇している。そんな女神の存在に目を丸くして凄く驚く一誠は、指を鳴らして檻の中のテーブルにプリンを魔法のように出した。目の前に突然現れたデザートに今度は女神が目丸くしたところで隣の檻に移動する。中にいるのはこれもまた女神だったが、椅子に座ったまま何かに悲しみ憂いている表情を浮かべてこちらに目を向けようとしめない。更に隣の檻に移動した矢先、ナイフとフォークが飛んできた。あぶなっ!?!と片手の指で受け止めて長い銀髪に赤い瞳のエルフが意外な物を見る目で一誠を見ていた。

「投擲の扱いが上手いな。料理は得意か？」
「.....」

警戒して答えてくれず、四人目の奴隷を見つめる。その檻には頭に二本の角、背中に翼と臀部辺りに尻尾を生やしているが両手足が壁と繋がっている頑丈な鎖に縛られていて他の奴隷達より自由が効かな

いでいる。なんだこの奴隷はとヒューマンの方へ戻って詳細を求めた。

「四つ目の檻の奴隷はなんだ？」

「ああ、あの奴隷の事ですか。世にも珍しくその数は狐人ルナールよりも少ない希少な種族であり世界から忌避されている種族、竜人ドラゴニユートです。

亜デミ・ヒューマン人の類に入りますが、見た目がモンスターのような姿をしており性格は好戦的かつ凶暴。同族以外とは相成れないこともあって他の種族からモンスターの成り損ない等と忌み嫌われています」

「何でそんな種族を奴隷に？」

「たまに好色家の者もいるのですよ。俗に『怪物趣味』ってやつです」

そう言う事かと納得し、まだ買われていないのは性格と見た目で買う側が委縮して手に入れようとしないのだろう。ならば、今の内に買う手以外ないだろう。あの種族は物凄く傍に置きたい。この世界で初めて親近感が沸いた種族なのだから。右の通路は竜人ドラゴニユートがいる檻で最後だったため次は左の檻の中にいる奴隷達を見始める——前にまた質問をする。

「何時までも売れ残った奴隷はどうするんだ？」

「この奴隷達は一級品ですので売れるまで面倒を見ますが、市街の奴隷達は廃棄処分をされます。またこの国に連れて来られた奴隷達に病や怪我をしていたら、治療費の方が高くてしまいですし、治療するぐらいなら安くしても売って利益にした方がよいですから。それでも売れないようであれば処分するしかありませんから」

「……つまり廃棄処分の烙印された奴隷達を買おうとしたら無料ってことなのか？」

「ええ、その通りです。まあ、その様な奴隷を引き取る物好きな人はおりませんかね」

言質は取ったと分身体達全員に今の話を共有して、廃棄処分される奴隷の引き取りを行ってもらおう。それからこの奴隷達を確認し、三階にも向かって直接見てみてヒューマンに話しかけた。

「本当に一級品の奴隷達ばかりだな。ただ、女神すら奴隷にするなんて罰あたりだぜ」

「女神様ほど絶世の美貌を持っていませんからね。主神様は女神様達に目を付けたのはいいのですが、私達人間は神を奴隷のように扱う事は恐ろしくてできませんから」

「だったら奴隷にしなきゃいいのに」

「そうしたいのは山々なのですが、主神様の方針に逆らえませんがよければかりは」

大変だなーどこの神の眷族も、と他人事としてそんな感想を胸中に抱く一誠は素朴な疑問もぶつけた。

「この奴隷を仮に全員買うと言ったらどれぐらいの金額になるんだ？」

「はい、合計五億六千八百万になります」

「高っ!?!」

「……………手持ちのじゃあ全然足りない。」

「え、市街の奴隷達の価格の平均はどのぐらい?」

「エルフは五十万、ハイエルフは百万、獣人は種族によって十万から三十万と価格が変動いたします。ありふれているヒューマンは家柄や気品、顔の容姿と身体付き次第で数万から百万です」

「なるほど、大体奴隷を買った時と同じ値段だな。おしいな、買いたいんだけど今手持ちがない。日を改めさせてくれるか?」

「かしこまりました。では、またこちらにいらっしやる時はこれを持参して門の者達に見せてください」

ヒューマンの名前が施されたプラチナカードを手に入れた一誠は首肯して豪邸を後にする。真っ直ぐ寄り道せずにヴァベルーのところへと合流する。男神にどんな奴隷達がいたのか教えると糸目が見開いた。

「よもや、神々を奴隷に捕まえていたとは……………それに希少な種族もいたとは驚きです」

「全員を買い取りたいが、今直ぐとは行かないな。一度オラリオに戻って資金の調達をしなくちゃならん」

念には念をと、今でも分身体達が深層でドロップアイテムを掻き集めさせたことが正解だった事を思い安堵で息を吐いた。

「船でオラリオに戻りますか？」

「いんや、魔法で戻る」

詠唱を唱えようと口を開いたその時だった。

「ほう、お前達は彼のオラリオから来た者だったとはな。これは良い意味で予想外と言えよう」

二人の話が聞こえたのか、オラリオの単語を言いながら不敵な感じ
で近づいてくるメイド服で身に包む従者を引き連れるその人物は、獐
猛な獅子を思わせる女だった。その美貌は凄みを感じさせ、一誠やア
スナ達の世界で言うマフィアの女ボスを彷彿とさせる。右手の人差
指には、黄金製の指輪をはめている。いわゆる印台リングだ。印台の
部分には家系の象徴なのか、その紋章が刻まれている。ゆるかな
ウエーブを描く髪は、淡い金色。別命輝白金^{オーロレヒアンコ}。左右の耳たぶには、
黒十字を象った装飾品^{ピアス}を吊り下げている。グレーのスーツを端正に
着こなしているが、その肉体の曲線美は隠しようがなく、モデルも顔
負けのプロモーションである。見るからに悩ましいが、その眼光が鋭
過ぎるため、あまり色香は感じられない。一睨みされただけで、人は
全身が縮み上がってしまいそうな気がした。

「何か用か？」

「無論だ。この国の者ではない珍しい外国人が来たとあらば興味が沸
く。特にお前の眼を一目見た時からな」

謎の美女は己の名を明かす。

「遠路はるばる、このクズの国へようこそ。吾輩はフランチェスカ・マ
キャベリだ」

にこりともせず、そう言う彼女の口から『クズの国』と聞くこと
になって面を食らった一誠に淡々と指摘する。

「なんだ、私がこの国の事を蔑むとは思わなかったか？」

「いや、完全に素で言われたから本当にそう思っているんだなって感
じた」

「拉致・誘拐・人身売買・人権剥奪などこの国に入れば息を吸うように
当たり前なことなのだ。後ろ盾も身寄りもなく、観光気分で来た者達
はそれこそ彼等にとって格好の獲物だ」

鳶色の瞳が流し目で横を見る。彼女の意味深な言葉に釣られて周囲を見れば、ゴロツキや荒くれ者達がナイフや鈍器、棍棒以外にも拘束具も用いて自分達の事を囲んできた。

「さて、どうする？」

彼女が仕掛けたことなのか、それとも彼女の言うとおりのことなのか判断できかねるが、少なくとも彼女はこの状況を楽しみながら自分を試す腹でいるかもしれない。そう思うと辟易してしまう一誠は溜息を吐いた。

「はあ……どこにいても平穩で過ごせれないのか俺の人生は」

「ここは、私の眷族達にお任せ下さいイツセー殿。ここまで連れてきたお礼に露払いしましょう」

「じゃあ、よろしく頼むわ」

「ええ。ではスケさん、カクさん、お前達も懲らしめてやりなさい」

あつ、どつかの時代劇で聞いたことがあるセリフだと思わせた一誠にヴァベルーは眷族を命令する。男神が連れてきた眷族は十人程度だが、第三級冒険者並みの実力を有しておりゴロツキ相手に苦もせず撃退してみせた。

「ふむ、流石にオラリオの冒険者は強いのだな」

「じゃなきゃ日頃からモンスターと死闘を繰り返してないって」

「なるほどな。この国にない物が海外に存在するのも確か。空を飛ぶ船もまた然り。あれは是非とも欲しいものだな」

ゼツテーやらねえよ。と心中で零す一誠を露知らずのマキャベリは、程なくして片付けられたゴロツキ達にこう言う。

「ご苦労だった。約束通り報酬は予定の場所に置いてやる。去るがいい」

「へ、へい姐さん……」

蜘蛛の子のように散らばっていなくなるゴロツキ達を使って試したフランチェスカ・マキャベリという今まで見たことがない人物に、新鮮さを覚えながらどこか気が抜けない相手だと印象を覚えた。

「随分と慕われているんだな」

「なに、ただのパシリだ。金さえ払えば誰にでも尻尾を振るう野良犬

共はこれぐらいが丁度良い」

「ほんと、素で言うんだから驚きを通り越して感嘆してしまうよその性格に」

「ええ、同じ商人として彼女ほどの商人は見たことがないぐらいにです」

「……うん？商人？ヴァベルーの口から彼女を知った風な言葉が出て来て知ってるのかと顔を向けた。

「彼女、商人なのか？」

「商売を生業にしていると商人達の間で色々と噂を耳にするのですよ。若くして一代で富を築き上げた凄腕のヒューマンがいると。その名前が彼女の名前と一致したのです」

「吾輩の名がオラリオにも届いていたとはとても光栄なことだ」

「真実であると認める当人に目を丸くする一誠は言葉を失った。

「だが、この国で商売をするのに飽き飽きしているところだ」

「おや、何故ですか？貴方ほどの手腕の持ち主ならこの国の商人達を掌握できそうだと思いますが。」

「もうとづくにしたぞ。故に刺激がなさすぎるのだよ。やることは人間を買い売るかの二択だけだ。ここを拠点にしたまではないが、一日二日で新鮮さがなくなつたよ。あるのはつまらん退屈な日々を過ごす時間のみ。だが、そこへ空飛ぶ船がやってきた。あれを見て久々に商人としての血が騒ぎ、お前を見てまた血が騒いだ。ここで動かなければ一生後悔することになるやもしれんと本能に突き動かされた」
鋭い眼光を向けるマキャベリの瑞々しい口唇が小さく吊り上がった。

「あの船はお前達の物なのだろう？是非とも吾輩達も船に乗せてオラリオに連れて行って欲しい」

「はっ？」

「吾輩は商人であるからな。新天地で商売をしたいのだよ。それとも駄目か？」

「いや、駄目というか。いきなりそう言われて当惑していただけ。ヴァベルーと目を合わせあつてどうする？とアイコンタクトをする。」

「俺は別にいいんだけど、商人のヴァベルー達はどうよ？」

「(彼女の手腕は本物ですからな。イツセー殿の力になるかもしれないよ)」

「うむ、吾輩の力が必要なら惜しみなく貸してやってもいい」

「読まれていた!？」

「だが、貸す代わりに条件がある」

「条件?」

「先程も言ったが、吾輩は刺激や新鮮さが欲している。吾輩にそれを満たすことが出来るならばお前の後ろ盾になってもやろう」

刺激と新鮮、ねえ……オラリオにしか手に入らない物を提供すれば満足してくれるのか? 思考の海に飛び込んで悩む一誠を引き上げるヴァベルーの声。

「イツセー殿、あのプリンならば可能ではないでしょうか」

「プリン? あれで商売ができるのかよ?」

「彼女は個人的に刺激と新鮮を求めているのです。つまり、この世にたった一つしかない物を提示すれば満足してもらええると思いますよ。商人の勘ですがね」

三大商会の商業系「ファミリア」の主神のアドバイスに天啓を得た気分になった一誠は、早速プリンを亜空間から取り出してきよとんとしたマキャベリに渡す。

「む? なんだこれは?」

「俺の故郷のデザートだ」

「デザート……吾輩を満足させるものとは思えんが」

銀色の匙を手にしてプリンに沈ませながら掬い取って、ほろ苦さと甘さを一緒に口の中に入れた瞬間。彼女は硬直した。

「……お嬢様?」

恐る恐ると案山子のように何時までも立ち尽くす主にメイドは訊ねた。目の前で毒物を渡すような者ではないだろうが、一体己の主に何を食べさせたのか? 警戒するメイドに、ようやく動き出し食べかけのプリンをズイッと突き出すマキャベリ。

「……ヴィットーリア、お前も食べてみるがいい」

「はっ?」

主の突然の命にメイドのヴィットーリア面を食らうが、マキャベリの姿勢は変わらず食べろと言う気配を醸し出されて主の命に従う形で受け取り、キャラメルの部分ごと卵色のプリンを掬い取って口に含んで味わった刹那。マキャベリと同じ反応をする。そして思わず出た一言。

「味わったことがない美味しさです」
「であろう」

主も認める美味のデザートにヴィットーリアは瞳に爛々と輝く光を孕ませる。メイドとして一誠に対する譲れない何かが芽生えだし、勝手に好敵手として認識し出す。

「くくくつ、こいつは傑作だ。今まで食してきた料理は何だったんだと思うほど、この小さなデザートで吾輩の欲求が満たされてしまった。否、これを商品化にできるならば吾輩の手腕で——ブツブツ」
「マジか、ヴァベルの言った通りになったよ」
「ふふ、商人の勘は馬鹿に出来ないでしょう?」

独り言を言いだし始めるマキャベリの反応を察するに満足させられたのはわかるが、言う事はヴァベルと同じであった。

「——ヴィットーリア。直ぐに荷物の仕度をする。あの家を引き払うぞ」

「は、承知いたしました」

と言って二人が一誠達から踵を返して立ち去った。何だかとんでもない人を味方に付けたなあと感想を抱く一誠もようやく資金の調達に動き出す。

超特急で資金を調達した一誠は日を改めない内に豪邸に足を運んだ。対応するヒューマンは面を食らいながらも高級な奴隷を買う大切な客として迎え入れ、どの奴隷を買うか訊ねた矢先。大量に入れてパンパンな亜麻袋をドサリトヒューマンの目の前に置かれた。

「全部で六億。この金でここにいる奴隷達を全部買いたい」

「ろ、六億……っ!?!」

「一ヴァリスも数え間違っていないと思うが、確かめるか？」

「た、確かめさせてもらいます！お、おいお前達も手伝え！」

あつという間にやんややんやと騒がしくなった。豪邸の中でしばらく待ちぼうけされる一誠は竜ドラゴニユート人の奴隷へ会いに向かった。

「よ、お前。帰る場所はあるのか？」

「……」

「あるなら帰れるぞ、お前達を全員俺が買い取ったから晴れて自由の身だ」

「……？」

純粹無垢で笑う男に初めて竜ドラゴニユート人は顔を向けた。

「……故郷に、戻れる？」

「おう、自力で戻れるならそれに越したことじゃないが」

どうだ？と問われるも何かに憂う竜ドラゴニユート人は頭を垂らした。

「……無理だ。故郷を飛びだしてきて今更戻れない。それにこの姿の私を迎えてくれる場所もない」

「ほー、なら好都合だ。俺んどこに來い。そんで家族にならないか？」

大きく目を見開く竜ドラゴニユート人。自分を家族にならないかと信じられない誘いに思考が停止し掛けた。

「家族、だと……」

「おうよ。お前の全てを受け入れる。というか、お前が欲しいんだ」

「なっ……!？」

「俺の名前はイツセーだ、よろしくな」

絶句する竜ドラゴニユート人を気さくさに自己紹介。そして自由の身になると他の奴隷達にもヒューマンに呼ばれるまで話しかけながら教えていった。

「お待たせしました。確かに六億がございました。ご確認をさせてもらいますが、イツセー様は全ての高級奴隷をお買い上げになられるのですね？」

「ああ、足りるなら全員だ」

「ありがとうございます。では、直ぐに奴隷達を集めさせます。ああ、それとこちらがお釣りでございます」

だいぶ少なくなったヴァリスが入った亜麻袋を返すヒューマンから受け取り、その際一言。

「そうそう、ここに来る際に占い師に占ってもらったんだけど。どうやらこの国とてつもない闇が近い内に覆うそうだ」

「闇、ですか？」

「厄災の前兆だって言われたが、胡散臭くてな。一応主神に伝えておいてくれるか？あんたも俺に騙されたと思ってしばらくこの国から離れた方がいいと思う。できる限り早くな」

と話しかけられたヒューマンの目に光が無くなって一誠の言う事に「分かりました。国から離れます」と素直に従う。暗示をかけられたことすら本人すら気付かず、一誠達が国を去った後に私財を纏めて奴隷国から離れた近隣の国へと出発したのだった。そして買い取った奴隷達を騎空艇へ連れていく。

「しばらくここで待っていてくれ」

「こ、これは……」

船の甲板や船内には自分達と同じ奴隷に墮とされた者達が大勢いた。複数の分身体の一誠が温かいパンやスープに果物を提供して奴隷達に配っているその中には、かつての女神の眷族もいて涙の再会を果たす。信じられない目の前の光景を唾然と竜ドラゴニュート人は口を開いて聞いた。

「お前……こんなに奴隷を集めて何をする気だ」

「ただの自己満足」

また増える奴隷達を迎えながら奴隷国へと足を運び出す。そして暗闇が支配する時間帯になった時、ヴァベルー達とオークションを参加しに会場へ。真紅の赤い天幕には王侯貴族や商人に大富豪の参加者が参列していて続々と中へ入っていく。全員が奴隷を買った経歴を持つ者達であることが明白でそこに一誠等も交じって中に入る。天幕の中のどこでやるのかと気にして前に進んでいくと闘技場の壁に地下へ通ずる入り口が。前列に倣って地下へ入って直ぐに階段状の席と舞台がある空間に辿り着いた。その時、参加資格のカードを提示する催促をされて見せると番号が書かれた札を渡される。

これを見せながら入札額を言うのだろう。一番後列の席に腰を落として座りながらその時を待つ。

「時にイツセー殿。お手持ちはいかほどに？」

「奴隷を買いこんでもまだまだ二億ぐらいは残ってるな」

「ほっほっほっ。流石ですな。私は一億ほど奮発して用意しましたよ」

参加客達が全員席に座った頃を見計らって舞台に一人の老紳士が現れて一礼する。

「——本日はお忙しい中、お集まりいただきありがとうございます。ごうございます。今宵集まった皆様に良い品々と巡り合いがあらんことを邪神様にお祈りいたします」

演技めいた言動をして老紳士は進行を続ける。

「まずは、最初の出品物をご紹介しますよう」

老紳士の声に応じ、ゴゴゴ……と、機会仕掛けを思わせる異音が響く。ヴァベルーと不思議に思ったのもつかの間、舞台の床面に空いた穴から、巨大な物体がせり上がってきた。真つ先に目に付いたのは、壮麗な台座だった。おそらく大理石だろう。その上に設置された「なにか」は、まだベールで覆われている。と、老紳士が芝居がかかった仕草で、ベールを颯爽と剥ぎ取った。

『——おおっ……！』

途端、参加者達がどよめいた。

「こちらはかつて芸術を追究する『ファミリア』によって描かれた一品の一つ。伝説の芸術家レイオナ・ホールド団長が降臨せし神々と我々人類、そして天界と下界をテーマにした『天地ジン』です」

その名の通り、人類にとって未開の世界、天界から降臨してくる神々を地上に住まう人類が見上げて上げた両手で迎え入れる姿勢の絵画だった。

「ほう、あの『ファミリア』の団長が遺した作品の一つとこんな場所で目にするようになるとは……」

「知っているのか？」

「ええ。彼の『ファミリア』が描く作品はとても有名でして。中でも先

程名を挙げられた団長が描く絵画は人類と神の二つのシリーズがござい、とても希少価値は高いのです」

ヴァベルーの説明を聞いている間にも、周囲からは「百万!」「二百万!」「五百万!」と、入札の声上がり始めた。

「——一千万!」

異世界の有名の芸術家の作品も収集品コレクションに加えようと一誠も入札の声を挙げた。魔法や能力で確認しても偽物ではないことを確認した上でだ。

.....

熱に浮かされているように入札額を叫ぶ客達とは対照的に、老紳士は冷徹にオークションを進めていく。時折、薄く微笑む表情を浮かべつつ。新たな出品物が披露されるたび、ヴァベルーは目を見張った。「むむ、あれは盗難にあったと訊く国宝級の貴重品ですね」、「あの作品一つで広大な土地を買えますな」と言って悩ましげに溜息を洩らすのだ。三大商会の一角の主神だけあって、ヴァベルーは確かな審美感を持っているようだ。ヴァベルーが強く反応した出品物ほど高値で取引されているので、一誠は感心した。

「そう言えば、望みの品ってなんだ?」

「私も名前までは聞いておりませんが、何でもこの世のものではない一品だとしか」

「この世のものではない一品、か.....」

何だろうな」とヴァベルーの望む一品は何なのか首を捻る。

「吾輩も興味深いな」

「お前もか?.....何でここにいる」

席の後ろから女性の声が聞こえるが、独特な自称の呼び方をする者は一人しか知ったばかりで振り返るとマキャベリとヴィットーリアがヴァベルーの眷族達と並んで立っていた。

「商人の吾輩がオークションに顔を出さない方がおかしいであろう」「本音は?」

「お前達を探していた。オラリオに向かう準備をと問えたのだが肝心のお前達が見つからず、どこで油を売っていたのかと思えばオークションに参加していたとはな」

マキャベリの言葉に耳を傾けながら目の前のオークションに意識する。

「それでは、次にまいりましょうか。これなるは、この世界を探し回つても誰が製作したか、何時どこで出回っていたのかも判らぬ共通語やコイネー神聖文字ヒエログリフですら解読できない一冊の書物——好色家の方は是非とも入札してください」

老紳士が紹介したのは、一冊の書物。であるが……。

「は……?」
一誠はその書物を身に覚えがある。というかお世話になったことはないが一般的によく知っている物だった。

「——完成度の高いあられもない姿の絶世の美女達が絵画に閉じ込められたものでございます」

所謂、エロ本であつた。老紳士の手によって広げられたその本の中身は瑞々しい裸体を惜しみなく笑顔と共に晒す美女達が様々な姿勢ポーズで撮られていた。それを見た(男性)客達は。

『うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!!』

「五百万!」「七百万!」「八百万!」「おのれ、九百九十万でどうじや!」「なんの、こっちは一千万を支払うぞ!」

と、今までにない熱狂的な興奮で入札額を叫び出した。

「……この世のものではない、つてアレの事かよ……」
「イツセー殿はあの書物の事をご存じで?」

「一応、俺異邦人だから」

「なるほど、まさしくあれは異世界の代物と言うわけですか?それが本当ならば確かにこの世のものではない代物」

目をきらりと輝かせるヴァブルーに「待て、早まるなアレを買おうとするな!」と説得が虚しくも「三千万!」とどの客達の入札額よりも高額で購入してしまった。肩を残念そうに落とす一誠にマキャベリは不思議そうにしていた。

「女の裸が描かれた絵画など珍しくないのだが、客達は何を興奮しているのだ？」

「……男の性、ってしか言えない」

後に、オークション会場で起きたことを仲の良い異邦人だけの集まりで話題にしたら、「はっ!? エロ本で三千万!?!」「どんだけこの世界の連中はエロ本に夢中なんだよ!」「あ、ありえない……」と愕然したのは別の話。

「ふふ、どういう物が想像し難かったですが、これは良い買い物をしましたねえ」

「そうか……それはよかったな」

何とも言えず、異世界ではありふれたものだがこの世界ではかなり希少な物に違いない。本神が後悔もなく満足しているならばこれ以上何も言うまいと、嬉しそうにエロ本に頬擦りする男神からそつと視線を逸らす一行は——天幕から出ず、闘技場の席に座っていた。

「まだ船に行かぬのか？」

「闘いを見たいんだ。そつちは見飽きた物だろうけど俺達は初めて見るから見てみたいわけ」

「オラリオには剣闘奴隷はいないのか？」

「いないし」

六万人も収容できる闘技場にはほぼ満員で席がなくなり、それでも見たいと言う客達は席じゃないところで立ったり座ったりして観戦の姿勢に入る。皆、これから始まる死闘を今か今かと待ち望んで顔に血みどろの闘いを娯楽として楽しむ狂気が滲んで浮かべていた。

「千勝すれば晴れて自由の身になれる剣闘奴隷はどういう奴か楽しみだ。そいつは神の眷族なのか？」

「そうだ。しかもその眷族の神は娯楽で人間にモンスターの子を孕ませたのはこの国で有名な話だ。今まで何十人もいたが現在まで生き残っているのはたったの一人。身内同士を殺し合わせたりモンスターと戦わせたりしてきた結果だ」

……テルスキュラ 闘国と殆ど変らんじゃん。

『ワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

突如大歓声を挙げる客達。闘いが始まろうとしている。話を中断して戦場へ向ける視線の視界には上に開きだす闘技場の鉄格子の奥から人影が現れる。真つ赤な長い髪を揺らし、手には鉄の塊を彷彿させる金棒を地面に引きずりながら歩くその人物は頭から二本の角を生やしていた。

「あれが今いる最後の剣闘奴隷。ヒューマンとオーガのハーフの混血種」

「あいつが……」

好奇心で注視する。服装は豊かな胸を覆うボロ切れの布のシャツに下着だけ。既にこの姿に慣れているよりも瞳に強い憎悪の炎を宿している。他の観客達は彼女のことを自分達の飢えた娯楽を満たすための見せ物としか見ていたいからか、何かを憎んでいることを気付いていない。

「——さあ、今日も血が流れ敗者には死を、勝者には栄誉が称えられる闘いの始まりをしようではないか！」

完成の中で『神威』を放ちながら叫ぶ声。観客達が静まり返り、その声に耳を傾ける。

「今宵も集まった者達はとても幸運に恵まれている。なぜならばこの一戦で勝利をすれば俺の眷族は今までの奴隷達では叶えなかった一千回目の勝利を達成すると言う偉業を成し遂げるのだ」

芝居がかかった風に述べるその者は奴隷国を統治する男神だった。顔中に醜悪な入れ墨が施されており、上半身は裸で腰から下は金色の布で履いている。数人の踊り子の服を着させて侍らせている姿は国を統治している者と何ら変わりなかった。

「神か」

「そうですね。天界では見掛けなかった神です。はて、一体なんて名前なんでしようねえ」

ヴァベルーでも知らない神。鑑定しても知らぬ名の神だったので一誠も小首を傾げる。

「そして今回は趣向を変えてみようと思っている。今日、この国にオラリオから来た「ファミリア」がいると報告があつてな。日々モンズ

そこまで気付く訳ないだろう、と一誠の言葉が聞こえたならば全員そうツツコミをしていたらろう。

「おいおい！オラリオの冒険者はその程度か？面白味がねえ闘いにしてくれるなよ。もつと俺達を楽しませる無様な戦い方をしてくれ！」
「横暴な事を言ってくれな。こつちは戦う理由もなく戦わされている身なんだぞ？冒険者らしく報酬がないとやる気が出ないって。このまま彼女に勝たせてもいいんだぜ」

嘲笑する奴隷神に言い返す一誠。

「報酬が欲しいってか？なら、そいつに勝ったら俺の権限で何でも叶えてやろうじゃねーか」

「神に二言はないな？」

「絶対に有り得ねえことだからな。有り得ないことをしてくれるなら子供の願いを叶えてやるよ」

絶対的な自信で以って断言する神にしてやったりと笑みを浮かべ、言質も取ったことで始めて臨戦態勢に入った。

「んなら、やる気が出た。——行くぞ」

「.....」

『ソードベース
『魔剣創造』！』

一誠の目の前の地面から武器が顔を出しながら奴隷へ迫る。彼女や奴隷神、観客達が目を見開き驚きの色をありありと浮かばせる。迫る武器に振るう金棒で木端微塵に砕き続け、投擲してくる槍にも打ち落とす。

「初見だつてのにやるじゃん。なら、これはどうよ」

地面に両手を付いて地面を盛り上がらせ、大きく隆起して竜の顔に形作りながら襲わせる。奴隷は大顎を開ける土竜から跳躍して回避、そのまま土の身体の上を駆けて直接一誠に仕掛ける。

「甘こぞー」

一誠を中心に盛り上がる土から八つの土竜が飛び出して来て食らわんとする勢いで向かう。奴隷は目に強い光を宿して豪快に金棒を振り下ろす。

「おおおおおおおおおおおっ！」

大粉碎。土竜達の顔を粉々に土塊に還して勢いを殺さず金棒を投げ放った。黒く染める両腕をクロスして飛来する金棒から後ろへ跳躍しながら腕にぶつかる衝撃を削ぎつつ吹っ飛ぶ。

「はっー」

途中体勢を整えて衝撃波を放ち奴隷を吹き飛ばす。その隙をついて地面に刺さった金棒まで移動しては掴み取り、お返しとばかり跳躍した状態から投げ放つ。その威力は彼女の比ではなく闘技場を揺らすほどのクレーターができた。その衝撃で更に壁まで吹っ飛ぶ奴隷。

「鬼に金棒……んー言葉通りの強さだな」

「っ……」

「ほれ、どんどんいくぞ」

両手を突き出して気の弾丸を放出する。真っ直ぐ向かってくる攻撃に対して真正面から交わり、弾き、相手の懐に飛び込もうと近づく。

「その度胸。最高じゃん」

放出を止めて肉弾戦に持ち込む。互いの拳が互いの顔にめり込み、そのまま殴り合いが勃発する。次に足も加わり全身も駆使して舞いのように闘武が始まる。殴打の激しい連撃ラッシュで音が闘技場に響き渡り、観客達の歓声を浴びながら凄まじい肉弾戦を繰り広げる。

「(なんだ、こいつは)」

始めて抱く疑問。

「(なんでこいつは死ぬかもしれない時に笑っていられる)」

死闘は子供の児戯ではない。生きるか死ぬかの選択肢しかない過酷なものなのだ。相手はそれを知っているにも拘らずどうして笑うのか理解できない奴隷の中で疑問が湧き続ける。

「不思議そうだな？」

「！」

「ま、命懸けの闘いに楽しむ方がおかしいだろうがな。でも、俺は楽しいで。お前みたいな強い存在と戦えることに喜びを覚えているからな」

この化け物の自分と戦えて喜ぶ？理解に苦しみ眉根を寄せる奴隷の両足が地面から浮いた。体勢を崩されたと思った矢先に一誠の手

の平が目の前で突き付けられる。一瞬の閃光。全身を襲う衝撃が壁にぶつかるまで止まらなかった。全身からの苦痛の悲鳴を無視して男を睨みつける顔に衝撃波が襲う。それからも続く攻撃に、歯を噛み締め目に見えない衝撃波を受けながら一歩ずつ前進する。彼女が進んだところは顔に滴る血で落としていた。負けない、負けてたまるものか。ここで負けてしまえばこれまでの事が全て無意味になる。そんなことは何があっても絶対に許されない——気持ちか胸中で強まったところで、視界の端に己の得物が入る。武器さえ手に入れれば何とか戦い直せれると、一瞬だけ止んだ攻撃の瞬間を狙ってクレターを中心突き刺さってる金棒へ駆けて手にする。

「………っ」

そして———相手を見上げた時、光に包まれながら頭上に金色のわっか、真紅の髪から金髪へ、濡羽色と金色のオッドアイが翠と蒼に変色し背中に金色の六対十二枚の翼を生やす一誠が手を挙げて雷を放つ準備をしていた。

「お前は………一体何者なんだっ………」

「ただの異邦人さ」

刹那。奴隷に目掛けて雷が稲光を発しながら落雷する。その瞬間、勝敗は決し。

「ヴィットーリア」

「はい」

「あの者を吾輩の傍に置く」

「それは商人としてですか」

「いや、本能的にそうしろと吾輩を催促させる。アレは見逃してはならないとな」

厄介な相手に目を付けられてしまった事まで一誠は気付かないでいた。

「さて………」

白目を剥いて気絶している奴隷の傍に寄り、抱きかかえ奴隷神へ見上げる。

「俺の勝ちだが、俺の望みを叶えてくれるよな神様？」

「ぐっ……」

「今更嘘だと言ったらよ。自分がどーなるか、わかってるな？」

奴隷神の周囲に光の槍が発現して突き付ける。約束を反故した瞬間に己は退屈な天界へ送還されてしまう事実を嫌でも分からされ、害虫を噛み潰したような顔を浮かべ折れる。

「……何が、望みだ」

「二つある。一つは奴隷国の人身売買と奴隷制度の完全撤廃だ」
「んなっ!？」

国の存在価値とも言える奴隷制度を根本的から壊される。長い年月を費やしてここまで築き上げた奴隷国から奴隷制度を奪われては人身売買もできず、利益も格段に落ちる。自分の楽しみを奪う相手に怒りの形相で食って掛かる奴隷神。

「そんなこと——!」

「できないならこの国を住民ごと消滅させる。——こいつらでな」

巨大な黒い魔方陣が出現し、そこから三つ首の黒い龍が咆哮を上げながら登場する。また虚空から黒い魔方陣から胴体が蛇の黒い龍が天幕を突き破って奴隷国中にその姿を見せる他、発現する深緑の魔方陣からは巨人型で浅黒い肌のドラゴンが狂気と戦意をギラギラと銀瞳に孕ませて現れる。当然、観客達は恐怖に陥って悲鳴を上げる。

『我が主の言う事を全て従う事だなこの世界の神よ。主は怒らせると恐ろしいぞ?』

『オ、オレは人間どもを喰うっ、喰いたいっ!なあ、喰っていいよなあ?』

『グハハハハッ!今直ぐにでもぶっ殺し回ってもいいんだぜえっ!』
久々のシャバだからなあっ!』

『というわけで、俺のお願いを聞いてくれるよな?天界に還りたいっ
て言うなら喜んで手伝うぜ』

スツと挙手する主に三頭龍は奴隷神に向かって魔力を集束する。
青褪める神はその場で情けなく大声を張り叫ぶ。

「わ、わかった!お前の言うとおりに奴隷制度を撤廃する!捕らえていた奴隷達も解放すると約束する!」

「二言は？」

「ない！信じてくれっ！」

ならいい、と三頭龍に魔力を消させる。

「そんなじゃもう一つの願いは——この奴隷は俺が貰う」

「な、何だと……」

「文句ある？」

「い、いや問題ない！」

機嫌を損なわせれば巨大な化け物たちを暴れさせかねない相手に下手に出て、屈服する形で従う奴隷神。

「それとこれはお願いじゃないけど……たまにこの国に来るつもりだ。その時、また奴隷が一人でもいたらこの国、滅ぼしちゃうからよろしくな。ああ、だから逃亡するなよ？したらしたでどこまでも追いかけて続けるからな」

ニコリと笑みとは裏腹に恐ろしいことを言われて意識が遠のき気を失いかける奴隷神。そして一生後悔する。自分は何て相手をけしかけてしまったのだと。

氣を失ってから数十分後。剣闘奴隷が意識を取り戻す。身体を起こして直ぐに違和感を覚えた。冷たい石材の檻ではなく、清潔で柔らかい布の上に横たわっていた。さらに自分と同じ奴隷の身である者達が大勢いて、寝台と寝台の間に置かれた卓の上の鍋からスープを掬い取って食べていた。

「目が覚めたか」

「……」

ドラゴニユート 竜 人の奴隷が話しかけてきた。

「気分はどうだ」

「……ここは、どこだ」

「お前が敗北した男が住んでいる場所。迷宮都市オラリオにあるあの男の家の中だ」

奴隷国ではない？何故自分はその主神の元から離れている？耳を疑い、ドラゴニユート 竜 人から氣を失っている間の事を全て教えてもらおう乞いをし

た。

「あの男は奴隷国にいた殆どの奴隷を引き取って一度オラリオに戻ったのだ。しかも信じられないことに奴隷達の故郷に帰すつもりでいる」

「……」

「身寄りのない奴隷は衣食住の提供され仕事も与えられる。これほど好都合過ぎることに警戒してしまうが、あの男は私達を全力で尽くす姿勢でいるからどうすることもできん。それとお前の事は知らん。あの男に直接聞くと言い」

ズイツと突き出される肉と野菜がたくさんあるスープが入った器。スプーンと受け取って口に含むと心身共に温かさが染み込む。剣闘奴隷として生きていた頃の食事はパンと干し肉に冷たいスープのみだった。始めて温かい料理を食べた剣闘奴隷は無言で食べ続けた。

「……美味しい」

「ああ、そうだな」

スープを器に入れて食べる竜人^{ドラゴンニュート}。肉と野菜の旨みが凝縮されたスープの味を堪能しながら腹が満腹になるまで分けあいながら食べ続けた。

奴隷達を複数の部屋に居させて保護した一誠はロキ達と話をしていた。今後の事も含めてだ。

「自分、とんでもないことをしてかしたなあー。異世界のドラゴンで脅すなんてそら、従わずにおれへんって」

「従わせた方が平和的だろ？ 最悪、奴隷国を滅ぼすつもりだったんだからな」

「……やっぱイツセーって恐ろしゅうわ」

「容赦する気ないから。無断で酒を飲むどこかの女神のようにな」

あの時の事を掘り起こされて気まずい顔をするロキは目が据わっている一誠から視線を逸らす。

「にしても、子供にモンスターの子供を孕ませたその神は異常過ぎるわ」

「へフアイストスさん……?」

「あ、イツセーは違うからね? その、何時か誰かと子供を作ったって問題は……」

「……」

この世界にとつて問題は有りまくりだと神は知っている。故に言い辛そうに同意の言葉を発しないのだ。嘆かわしげに溜息を吐きだす一誠は頬杖をしながらこぼす。

「はあく……やっぱり、恋愛しない方が良いのかな……子供も作らない方が相手の為になるなら尚更か」

「そ、それは……っ」

「ほいほい、暗い話しはやめい。今は目の前の事を話そうや」

「ん、そうね」

手を叩きながら不穏になり掛けた空気を消すロキの計らいに乗じるフレイヤ。一誠の正体を知らないアストレイアだが、コクリと頷いて話を進めることを望む。

「自分、あの竜ドラゴニユート人とヒューマンとモンスタードラゴニユートデミ・ヒューマンのハーフをどうする気なんや」

「当然、この城に住まわせる。身寄りのない奴隷達にも衣食住を提供しながら俺の店に働いてもらうさ」

「引き取るのは構わないけれど、大丈夫なの? あの子達、見た目はモンスターだからオラリオの子供達に受け入れ難いと思うわよ」

「ハーフの方はともかく、竜人は亜人として存在を受け入れられてるんだろ? ただ種が少ないだけで、見掛けないだけなのに」

「初めて見るからこそ最初は受け入れ辛いと思います」

「だったら慣れてもらうまでだ」

気持ちを変えない強い意志を窺わせられ、一誠達がどう転ぶか見守るしかできない女神達。ならば一任する他なく自由にさせて、間違つた道に進まないよう神々も手助けするべきであろう。話しは終わりと立ち上がって部屋を後にした。出て直ぐの廊下にバツ悪そうにして顔を暗くしているアリシアが佇んでいたが、一瞥もせず、目もくれず真つ直ぐ歩き続ける。

「——別に謝る必要なんてないからな」
「……」

「俺は化け物だ。お前の言うとおりの人の心なんて気付かない内にもうないかもしれない。だから相手に同情なんて感じないが——それでも理不尽な目に遭っている奴は助ける。絶対にな」

何も返さないアリシアから遠ざかり、通路に誰もいなくなった中で彼女はこぼした。

「ごめんなさい……」



奴隷国から戻りオラリオで奴隷の送還の時間が始まるまで数日後。身だしなみを整えある物を渡され、奴隷として捕まえられてから久しく帰れる瞬間を、待っていた彼女達にその時が訪れた。

「それじゃ、目を瞑って自分の家を強く頭の中で思い浮かべて」

「は、はい」

相手の思念を具現化する魔法マジックサークル円の中に一誠と奴隷の少女が佇み、言われた通りにそうすると男の額と重ねられ肩が震える。

「集中」

「は、はいっ」

一誠の頭に彼女の故郷の光景が浮かんで移動系の魔法の詠唱を紡ぐ。二人の横に光の扉が発現し、魔法が成功すると扉の向こう側は彼女の故郷が見える。目を開けて久しぶりの我が家に至極感動して涙を浮かべる。

「アスナ」

「うん」

分身体と一緒にアスナは彼女を連れて扉の向こう側へと潜って送り出す。

「あの家がそうなのね？」

「はいっ……」

少女を挟んで集落に向かう途中で一人の子供と目が合い、二人の真ん中の少女を見た途端に声を張り上げた。

「お姉ちゃんだ！皆、お姉ちゃんが帰ってきたよ！」

幼くもハッキリとした大声を発して集落の大人達を集める。少しして、両親とおぼしき中年の男女が歓喜の声を上げて、少女のもとへ駆け寄る。泣く声が聞こえてきた。

「お父ちゃん、お母ちゃんっ……！」

抱擁しあつて涙を流す。大人や子供達もよかつたよかつたと歓迎して笑顔を浮かべてた。その中、老人が近づいてきた。

「どこの者かは存じませぬが、集落の娘を送りいただきありがとうございます
ございます」

「いや、無事に送り帰せただけでよかつたよ」

「もしよければお名前をお聞かせて下さいませ。直ぐに感謝の印として宴の準備を致しますゆえに」

「それは嬉しいが、まだ彼女の他にも奴隷として捕まつた者達を送り返さなければならぬ。宴は彼女のためにしてくれ」

「おお……っ。では、この集落から連れ去られた娘達もそちらにいるのですか!？」

目を見開き継る勢いで聞いてくる老人に「まだいるのか」と答えに困つた分身体は可能性だかと返した。

「集落の名前を教えてください。他の奴隷に訪ねてみる」

老人から集落の名前を聞き出し、一度戻つて奴隷達全員から集落の出身者を探しだす。その結果、数名の若い少女や女性が名乗り出た故郷へ連れていくと男性や子供達が彼女達の姿を見て浮かべる涙を拭かずに抱き締めた。

「これで全員か？」

「はい、全員ですっ。ありがとうございます。真にありがとうございます
ますっ」

是非とも宴に参加してくださいまし！と乞われるも、やんわりと遠慮して両手を挙げて集落全員に見送られながら城の中に戻つた。

「帰れるんだ……」

「う、うう……！」

今まで見守っていた奴隷達が希望を見いだしてるところで、アスナと分身体が戻ってきて少女達へお辞儀をした。無事に帰せたのだと

悟り光の扉を閉ざす。

「これで解つてくれたか？ 何とか全員の故郷へ送り帰せず。今日中に出来るか分からないが必ずお前達の帰りを待つ場所へ送る」

「皆、彼のこと信じてあげて？ 皆の味方だから安心して笑顔を浮かべて帰つてちょうだいね」

『は、はいっ……』

そしてそれから何時間も何百回も奴隷達を故郷へ送り返し続ける度に肉親、知人等に感謝の言葉を受けるが王族や貴族からは「娘を拐つた痴れ者めがっ！」「天誅でござる！」「その首を置いて死ねえツ！」と娘の言葉や制止を無視して処刑されかけた。中には娘と婚約をさせようとする子煩悩の親もいた。

「しようがないとはいえ、殺されかけられるとは」

「お、驚いたわ……」

そしてよろしくない事態にも起きた。それはエルフの故郷の森へ送った時だった。同族以外が侵入してきた者達に弓矢を放たれ、話し合いどころではなかった。

「待つてください！ 私達は捕まってしまうていた彼女を送りに来ただけですよ！」

「ならば失せろ！ その者はもはやこの森に立ち入ることは許されない。薄汚い人間達に穢されたエルフを受け入れてや我々や森までもが穢れる！」

「そんな、彼女は穢れてなんてありません！ それに貴方達は彼女を助けようとしたのですか!?!」

「この森から連れ去られた時点で我々は諦めた。同じく他にも連れ去られた同族も生死問わずにだ。穢れた世界に行けばエルフは皆穢れるのだからな」

互いの価値観との違いで故郷に戻ることを断念して、エルフの少女は泣く泣く城の中へ戻った。二人も至極残念がって戻ろうとした時。「……同族を助けた恩は忘れない。どうか彼女を、我が姉をよろしく頼む」

弓矢を持つエルフ達が黙祷を捧げる風に二人へ頭を垂らした。彼

等の心情を汲み取って任せてほしいと念を籠めて領き城に戻った。他、奴隷目的で連れ去られた女性以外が皆殺しにされた村、食料困難で口減らしや貧困で売り飛ばされた経緯を持つ奴隷もいて受け入れてくれず、三分の二程度でしか自分の故郷に帰れなかった結果で終わってしまった。しかし、その中で稀に——故郷へ戻らず恩返しを目的で残る奴隷もいた。

「貴方様の行いを拝見させていただきました。奴隷達を救い故郷へ見返りも求めず送り返すその姿勢……感服いたしました」

「感服って、出会い頭にナイフとフォークを投げてきた奴が言う言葉か？」

「そ、それについてはこちらに非があると……奴隷として捕らえてからこの身とこの心を下賤な輩に捧げたくない防衛処置と申しますか……もうしわけございません」

バツ悪そうな顔をして謝罪する銀色の髪とルビーのように赤い瞳の女性。彼女の番となっても頑なに話があると言って他の奴隷に順番を譲り今に至る。

「もしかなくても俺以外の人間にもそうしてた？」

「はい、私の投擲を受け止めたのは貴方様が初めてです」

「もしかして神の眷族だったりして？」

「元眷族でしたね。色々と離せない事情で脱退していたために数の暴力で捕まりました」

淡々と答えていく女性の奴隷国にいた経緯を知り「はー」と感嘆に似た息を漏らしたアスナ。

「えつと、貴方はどこかの王国か貴族の人ですか？凄く綺麗で気品も感じますし」

「いえ、家事妖精でございます」

「シルキー？」

「シルキー!?!」

聞いたことがない単語に首を捻るアスナと驚きで目を張る一誠の反応の違いに、アスナは質問した。

「知ってるの？シルキーってなに？」

「家事全般が得意、甘い物が大好き、悪戯好きの三拍子が揃った妖精だ。神話にも載っていて気に入った家や家具に憑く妖精なんだけど……こっちの世界にもシルキーがいるのか」

「何の事だか分かり兼ねますが、概ね当たっております。魔法種族マジックユーザーでもありますので魔法も少々心得がございます」

「変わらんのね。甘党なところは。」

「あの、憑くって幽霊みたいな言い方なんだけど？まさか、ゆ、幽霊……じゃないよね？」

「俺の世界を基準に言っているだけだ。俺も実際シルキーを見たのは初めてだし、目の前の彼女は幽霊じゃないのは確かだ」

「その通りです。なんなら深夜に貴方様の寝室に忍び込んで幽霊のように驚かしましょうか……?」

シルキーのからかいにアスナは一誠の腕に抱きついて怯える。本当に幽霊が苦手なんだなーと色々柔らかい感触を堪能しつつ思いを抱く。

「で、帰る故郷があっても戻る気がないのは？」

「貴方の人柄を垣間見て思いました。奴隷国にいた殆どの奴隷達を救い、不可能を可能にした貴方は尊敬に値する人であると。故に……」

その場で跪き頭を垂らす。その姿勢は相手に敬意を払い、そして誓いを立てるようなものであった。

「奴隷だった私を買った貴方様は私のご主人様です。どうかこの城にいさせてくださいませ」

「ご主人様って……自分の立場はどんな感じに思っているんだ？」「メイド、もしくはこの身体が蹂躪される肉奴隷・性奴隷と言ったところでしょうか」

真顔で淡々と述べるシルキーに度肝を抜かされるアスナの横で一誠が不穏な動きをし始め出す。

「ストップストップイッサー！そのハリセンで叩こうとしない！冗談で言っているつもりだと思うから！」

「？私は冗談を言いません。百人以上の奴隷を買い占めた鬼畜野郎、と最初は思っていましたので」

「……アスナ、俺は鬼畜野郎だつてよ」

羽交い締めされてアスナに制されて、シルキーの発言でどこからもなく取り出したハリセンを構えるが自分の印象が最低だったために物凄く落ち込んで、アスナに慰められた。

「……とにかく、お前を奴隷としてでもお前の主にしたくて買ったわけじゃないんだからな。肉奴隷も性奴隷も、だつ」

「では、行く場所も返る場所もない私を放り出しますか？」

「そんなことするか。寧ろ逆の提案だ。俺達と一緒に住むかオラリオで住むかの選択を与える。衣食住の保証を約束するし、困りごとがあつたら助けるし相談も応じる。お前はとうしたい」

「先ほど申し上げたばかりです。この城に住まわせてください。私の人生を買った貴方様は私の主です。貴方様の為に一生を尽くしたい所存でございます。これは心から思っている嘘偽りではない私の本心なのです」

強く伝わるシルキーからの想いは本物であつた。揺るぎない決意と強い想いに一誠は呆れる息を吐いてから言葉を送る。

「俺の事一生尽くす。その言葉は真か？」

「真でございます」

「……俺に対して絶望と恐怖を抱いたとしても離れない保証は？」

「ありません。私を信じてもらうほかございません」

「……」

信じてほしい、か。ならば信じるに値する者か試すのもアリだろう。幾重の防音式の魔方陣を展開した一誠は真の姿を晒し出す。人の皮と肉を脱ぎ捨て天井近くまで大きく真紅の身体のドラゴンと成ってシルキーに咆哮する。

『オオオオオオオオオオオッ!!!』

「っ!?!」

アスナはまさか己の正体を明かすとは思ひもせず、シルキーは主として迎え入れる人間がモンスターだった事に絶句する。似て異なる気持ちの二人だが確かな違いはあつた。一誠はシルキーに対して殺気と殺意を叩きつける。絶望と恐怖を抱かせるつもりで本心を聞き

だすために。

『本当の俺は人類の敵だ。この爪がお前の柔らかい体を引き裂き、この牙がお前の血肉を咀嚼する。そんなモンスターをお前は主にしたいか?』

「………」

『止めておけ、そうすることを勧めるぞ。それにメイドは間に合っている。これ以上入らん』

特に銀髪のメイドはな、とシルキーを拒絶する。

『衣食住の保証はさつきも言ったように安心しろ。それからオラリオでどう生きおうとお前の自由だ』

魔方陣を消して人型に戻り返事を聞かずさつきと部屋を後にし出す男に、シルキーへ不安げに一瞥をくれて追うようにしてアスナもいなくなれば、一人だけ残されたシルキーはただただその場で佇むことしかできなかつた。

「………イツセー、あんなこと言っているの?」

「一緒に住むだけならまだマシも、俺に仕えるメイドとして住むなら話は別だ。いずれ俺の秘密を知って後悔するぐらいなら早い段階で遠ざけた方がいい」

それに嘘を言ったつもりはないとも付け加える。

「はっ、そう思うと俺と言う存在は案外不吉極まりない存在だな」

「………皆、そう思わないよ」

「皆が皆そうじゃないのは承知の上だ。だが、俺の存在を忌避する連中の方が多いのは確かだ。オラリオならば尚更な」

否定しきれず口を閉ざす。人類の天敵と誰が仲良く暮らしてみたいだろうか?人間がゴキブリを嫌うように人類はモンスターを忌み嫌う。そうしないのは心を通わせ互いを認め合ったことができただけだ。そうする前にシルキーを遠ざけようとしてる一誠の心情を、アスナは何とも言えない面持ちで複雑そうに思いながら見つめる。

デミ・ヒューマン

竜 人とヒューマンとオーガの混血種、

ハイブリット

ヒュームオーガ

鬼 人がいる部屋へと訪れた。

持ちかける話は共生である。

「……ここはあの国ではない以上、私は生きる理由がない。私の様な化け物が生きていていい筈がないのだからな」

「ふーん、そう言う？お前はまだマシだと断言するんだがな。人間の血が半分流れているだけでもまだ人の心つてもんがあるんだし。てか、俺の目の前でそんなこと言うな。怒るぞ」

「このモンスターの角を見て、私を恐れる者がいないとでも？」

「ん（龍化する一誠）」

「なっ!？」

「——っ!？」

「イツセーは人型のモンスターなの。だから二人の気持ちも凄く解つてくれるはずだよ？」

硬直する二人に向かつて一誠のフォローをするアスナ。人型のモンスター？そんな名のモンスターは聞いたことがないと同じ感想を抱く二人に凶悪な牙を覗かせる笑みを口の端を吊り上げてした。

『俺はこの世界とは違う別の世界から来た存在だ。だから人の姿にもなれる』

「別の世界って、なんだそれは？わけがわからん」

『おいおい説明しよう』

元の姿に戻っても竜ドラゴニユート人のように頭に角、背中に二対四枚の翼に臀部辺りに尻尾を生やす。またもや絶句する二人。

「俺はドラゴンだからな。ドラゴニユートの様な姿にもなれる」

「私の同族、ではないのだな」

「違うな。親近感が沸くけど俺はドラゴンだ。ドラゴニユートじゃない。……アスナ、今日から人間じゃなくてドラゴニユートって設定でいけね？」

「多分、無理があるよ。そうなるってならなんとかいけそうかも」
だよなあ……ちよつぱり残念がつて角や翼等を隠す様に仕舞う。

「ま、こんな俺だから俺の正体を知っている奴限定なら二人の事を受け入れてくれる。このアスナもその一人だ」

「よろしくね」

「……化け物を見て何とも思わないのか」

「うーん、襲ってくる化け物だったらどうしようもないけれど、ちゃんと言葉を話せて心も通じれるのだったら恐くとも何ともないわ」

お化けが怖いらしいけどな?とからかう一誠にアスナは「もうっ!」とぷりぷりと怒る。

「兎にも角にも二人は行く宛ても帰る場所もないなら俺と一緒に住もう」

「対価はあるのか……?」

「料理を作って客に食べさせる店に働いてもらうか、冒険者として生きるかの選択だけだな。うちは働かざる者食うべからず。食べたいなら働いてもらう方針だから二人にもそうしてもらおう。他の元奴隷達もそうだ」

「わかった……私はお前に敗北した身だ。命令に従う」

「あーもう、そーいうのも無し!俺達は対等で、相手の願いを応じるって関係で友情や恋愛、絆を築きあげることが重視してもらおう。いいな!」

決定事項と言わんばかりに二人へ言葉を投げる。色々と疑問があり理解しかねることばかりだが肯定と首を縦に振る二人に――。

「さて、早速だが二人には可愛らしくなってもらわんといかんなあ……?」

「……え?」

「そうだね。うんと可愛くなくてもらおつか」

一誠は鬼人、アスナは竜人ドラゴンユートにじりじりと近づき迫る。何か異様は気迫を感じて止まない彼女達は後ずさる。

「背中の翼は店の中じや邪魔になるから魔法の道具で消して、全身の生傷も消さんきゃな」

「そしたら角にリボンを付けて見るのもいいかもね」

「は……?」

逃げ場がない状況で壁まで追い詰められた二人は、良い笑みを浮かべる目の前の二人から伸ばされる手に掴まれあの手この手で施されるのだった。

.....

『異世界食堂』にまた新たな従業員が増えた。それを知らず入ってきた常連客達は、むはっー！と鼻息を荒くして嬉しそうに認知する。

「い、いらつしやい、ませ.....」

「いらつしやいました！ねえ、君は新人だね？何て名前何だい？名前を教えてくださいよ」

「だ、誰がお前なんかに——」

「おいおいお客さん。うちの新人にそんな興奮したまま話しかけたら殴り飛ばされるぞ。何を隠そう彼女はLv. 5の冒険者なんだからさ。お客さんの顔がトマトの様に潰れちゃうが、いいのか？」

魔道具で翼を消して、角と尻尾を残す竜ドラゴニユート人と共に角に可愛らしい

リボンを付けられ、制服を着せかえられた鬼ヒュームオーガ人は羞恥でプルプルと顔を赤くして肩を震わす。名を知ろうとした客は店主に危なっかしい事を言われてはさすがごと大人しく席に座った。

「こら、笑顔で出迎えをしなきゃ」

「そんなこと、今まで殺す殺される生活をしてきた私に無理なことだっ」

「無理でもなんでも、笑える仕草が出来るぐらいはしろ。お前は人間なんだから」

「っ.....こんな私を捕まえて人間呼ばわりするか」

「するね。——だからお前等も滅茶苦茶に愛するつもりだから覚悟しろよ？」

揃って火が顔から噴き出そうな勢いで真っ赤になった。恥ずかしいあまりにキツと店主へ睨みつける。が、他の客の対応をしに行っていたために空振りに終わる。出入り口の前で佇み客を出迎える役割を与えられてからもう三日が経つ。人間と怪物のハーフであろうと関係ないぐらい店にミアやシル達従業員に笑って迎えられ、店に働かされ、竜ドラゴニユート人共々食べにやってくる客達には「俺達の知らない種族か」と思われてさほど毛がない尻尾や頭の角を見ても気にされず従業員

員の一人として認知される。

「(・・・奴隷国とは大違い過ぎて戸惑ってしまう)」

「(オラリオの人間って・・・)」

そんな表から裏に視点を変えれば、そこにいる筈がない者が交ざって調理をしていた。その者は「店主、このハンバーグの作り方を教えてください」乞う。

「マキャベリの傍にいないかいいのか」

「しばらくお暇をいただいております。貴方の店の料理を全て完璧に作り上げる腕を磨くまでは働かせてもらいます」

奴隷国から共にやってきた商人の従者が異世界の料理をマスターしようと奮闘中だった。主の為に未知の料理と未開拓の味を全て吸収して食べてもらおうが為に。

「言っておくけどよ。この料理は全部俺の故郷のものだが、まだまだお前が知らない故郷の料理はこの数倍はあるからな？」

「・・・なんですって」

「それも知りたいなら一生懸命店の為に貢献するんだな。そしたらレシピを教える」

「わかりました。是非ともそのレシピを頂戴いたしましょう」

ま、この世界にも同じ食材や調味料があればの話になってしまいがな。心中ペロリと舌を出して嘘は言っていないが全部作れるかは定かじやないとヴィットーリアにほくそ笑む店主。元奴隷のエルフ達も制服で身に包みレイラの指導の下で仕事を励んでいる様も見ながら店主も仕事をする。

「店主さん」

そんな時にシルが裏から厨房に入って来て手にしていた手紙を手渡してきた。手紙に綴られた文字を目で追いながら呼んで行く連れに店主の顔は難しい感じになった。

「面倒事が起きた・・・」

「何て書かれてあるんですか？」

「大雑把に言えばギルドからの依頼だ。海を渡す列車を地上にも作れってさ」

趣味で作っただけの列車を量産など面倒極まりないだけ。手紙を手の中で塵一つも残さず燃やし見なかったことにする店主に見守るシル。

「しばらくはのんびりと過ごしたい気分だから他の事はする気ない。お断りだ」

「大丈夫ですか？ギルドの依頼を断っちゃって」

「ギルドの事よりもシルの方が重要さ」

シルへウインクする店主に嬉しく感じて柔らかな笑みを浮かべ、両手を後ろに組んで髪と同色の瞳を上目づかいする。

「じゃあ、私達のこと大切にしてくださいね？そしたらもつと店主さんの事が皆好きになりますから」

「勿論だとも。俺もお前等の事が好きだぜ？」

二人の話を耳にするシェフたちは調理しながら口唇を緩めて微笑む。自他共に慕って良好な関係と楽しい対話ができるのはきつと、自分達が知る限りこの店以外ないかもしれない。だから心地がいいこの店や店主が好きなのだ。

——そんな忙しくて疲労困憊にまで働く店も終わりがあり最後の客が帰っていくと、従業員達は店仕舞いをする準備に取り掛かりそれぞれ帰路につく。ただしどちらも最終的に帰る場所は同じであるが。

「ただいまー」

一部の者にしか入ることが出来ない、許されない『幽玄の白天城』に戻った店主こと一誠達。自分達の帰宅した挨拶の言葉で伝えると、昇り竜の彫刻が施された長大円柱が、等間隔に並んでいる玄関の奥からメイド服で身に包む銀色の髪に赤い瞳の女性が出迎えにやってきた。「お帰りなさいませ」

一誠達にお辞儀をするのは元奴隷のシルキー。モンスターに仕えるか否かの云々はともかく、この城に住みたいと言う彼女の願いを聞き受けた。今後毎日出迎えてくれるメイドが出来たことに、元の世界にいる最愛のメイドに教えたらどんな反応をするのだろうかと少し緊張する。

冒険譚 19

バベルの塔の最上階から街を一望する美神のフレイヤ。可愛らしい九つの狐の尾と耳を生やし林檎のパイをハムハムする幼子を抱き締めながら銀瞳の視線を街へ落としている。下界の人類の魂を色として見分け、己の目に適う子供や目的のために動く子供の姿を見ることが日課ではないが、娯楽に飢えた神々の一柱として下界の住人たる人類の生き様を見ているだけに過ぎない。不意に、下から声が投げられた。

「毎日毎日、見下ろしていて飽きないのか？」

「神が人類を見て見飽きたことがないわ」

「ふーん、こつちの世界じゃあ人間を創造したのは神だけど。この世界の人間を創造したのはやっぱり神だったりする？」

「不思議な事を訊くのね。とても新鮮な質問だわ」

クスと笑みをこぼす女神は肯定する。異世界から来た異邦人との会話も眷族になってから最近の楽しみの一つに増えた。逆にこちらから質問をするほど未知で詰まった異世界は興味が尽きない。

「今更だけど、貴方の世界にもダンジョンがあるならバベルの塔もあるのかしら？」

「あるぞ。ただ、その塔を創って神に近づかんとしたその国の人間達の行いで神の怒りに触れて壊されたけどな」

「あら、そうなの」

因みにそれがこれだ、と元の世界のバベルの塔を立体的な映像を映す魔方陣で見せ、フレイヤから感嘆の息を漏らさせた。

「小さいのね」

「壊されたからな」

銀瞳の視線は次々と異世界の観光名所や建造物を映して見せてくれる魔方陣に変え、銀の女神の好奇心を惹かせる。

「ねえ、この大きな女の銅像は何かしら。何の意味があるの？」

「自由の女神か？それはその国の象徴として建造されたんだ」

「国の象徴・・・このオラリオの象徴がバベルの塔のように？」

「ん、そんな感じだ。それに『ファミリア』だって神の象徴の徽章もあるんだからさして珍しいほどじゃない。他にも象徴を人形にしたり絵にしたりしてるしな」

亜空間から林檎のパイを取り出してパクつとかぶりつく子供の話を聞き、神妙な面持ちと成ったフレイヤ。人や神を銅像にして形に残すことは言われた通りに珍しくない。空を飛ぶ魔法の絨毯にも「ファミリア」の徽章が施されてるし、本当に珍しくない。ないが……。「変わってるわね」

神々の「ファミリア」の徽章シンボルで証を作ろうと考えたのは太古の人類。人類の考えることに神は新鮮さを感じて他にも色々魅力的で魅かれているのだろう。でなければ下界に永住しようとは考えないし思いを抱かないはずだ。時に神々の想像を超えることもするから尚更なのだ。

そう——異世界という未知の宝箱から飛び出してきたこの子のように。

「ふふ、何時かこの世界にいる私フレイヤと出会ったらどうなるのかしらね」

バタコンバタコン、ガツシユガツシユと音が鳴る一室に覗き込むとその手の専門職業の者しか分からないことをしている一誠がいた。城の中の作業部屋のもう一つの部屋の中で大量の布に囲まれた大きな織機を操りつつ鼻歌をしている。形成されていく大きな布には横顔の戦乙女が三分の一まで出来上がっており、まだまだ完成は程遠いが滞りなく作業は進んでいる時、音を聞きつけて入ってきたアイズとアリサ。見たことがない大きな道具を使って何かを作っている様子に興味津々で傍によって宙に浮いてまで作業の様子を見る。

「イツセー、何を作ってるの?」

「魔法の絨毯さ。こうやって一本の糸で何枚回も積み重ねていくように織って作っていく滅茶苦茶地味で根気が物凄くいる作業なんだ」

糸と糸の間に数種類の色が染まってる糸を通して織っていく作業は自分達でもできそうだ、と認識してしまう。

「やってみたい」

「やりたいのか？でも、これを使うなら身体が小さいからできないぞ」
であるが、作業をいったん中止しては二人に小さな織り機を用意した。準備をしてやって織り方をアイズ達の手を掴んで実際に学ばせた。そうしてそれぞれ織る作業が始まり、誰かが呼びびに来るまで戦闘以外でも没頭して創りつづけたのだった。その成果として数日後、リヴェリアの手に上質な絹で織られた服が手渡された。

「これは……？」

「俺の隣でアイズとアリサが織ったものだ。途中で飽きて放りだすかと思っただがな。中々どうして以外にも最後までやり遂げたよあの二人」

「お前の真似をしたかったからだろうな。だが、何故私に？」

「自分達の為に使ってみろって言ったら『リヴェリアにあげる』と言ってな。布だけ手渡されてもアレだから仕立て屋に頼んで作っても良かった」

服を広げれば純白でシルク製の物であった。それを確認した途端にリヴェリアの柳眉が困ったように寄った。

「作ってもらったのは嬉しい。だが、これは、少々……」

「ああ、デザインは仕立て屋の人』とある王国の姫の為にこの世で一つしかないドレスの物で頼む』とお願いしたんだ」

胸元と背中が露出しているその服は仕立て屋の手も加えられており、衣装と装飾が凝っていた。しかも、少々豪華さと派手やかさが強く印象付けさせているため、リヴェリアでなくても他のエルフ達でも気難しそうな顔をして着たがらないかもしれない。現にリヴェリアもこの服を見て躊躇している。

「やっぱ、リリアに着てもらうのは難しいよな。一目で『あ、これあいつの性格と合わん服だ』って思ったほどだし」

申し訳なく「困るもんを見せて悪かった」と謝って、何か言おうと口を開きかけた王族から服を手に魔方阵を介して自室に持ち去る。そして、あの二人の労力を無駄にさせないため作り直すかと設計に手を掛ける。その時、入室の許可を得たシルキーが入ってきた。

「お仕事ですか？」

「うんや、アイズとアリサが織った布のドレスの再設計。二人のプレゼントが合わなかったから作り直すためにな」

十人以上は軽く雑魚寝しても寝られる寝台にシルクのドレスへシルキーの目が留まり、それに手にした途端に不自然な静寂を纏った。異様な静けさを醸し出すメイドに振り返り「どした？」と訊ねてみたら。

「……私はこの城に居させている身であります」

「うん？うん」

「メイドとして働く私にも報酬を約束していただいてもらっております」

「働かず者食うべからずだからな」

だからどうした、とドレスを熱心に注視する彼女の様子を見てふと思いついた。

「それ、欲しいわけ？」

こくん、とシルキーは頷く。そう言えば己が知っているシルキーの伝承には灰色か白のシルクのドレスを着ていたっけと思いつかべる。現在の彼女は奴隷国で買った時から変わらない黒いメイド服だ。この世界のシルキーも同じとは思えなかったが、シルクのドレスを欲する欲求を見るからに同じなのかもしれない。

「モンスターからの贈り物でもいいなら、数日以内に報酬とは別に送ってやるよ。それはやれないが」

「……貴方様は自分の事を蔑むのは何故ですか」

「いや、人の皮を完璧に被っているモンスターってのは事実で蔑んでいるわけじゃない。お前の気持ち次第さ。言っておくがこれも試しているわけじゃない」

モンスターが作る物を欲しいかと問われたシルキーは何か言いたげな目をするが、試しているわけではないが本質を問われていることを認識してこくん、と頷いた。

「わかった。お前に見合うドレスを用意する。初めての贈り物だから気合を入れさせてもらうとするよ」

こくんこくん、とシルキーは頷き微かに口唇を緩めて期待に胸を膨

らませる。

「そう言えば、甘い物・・・デザートは好きか？」

「大好物です」

聞かれて以降、金銭と一緒に異世界の甘い物を報酬に加えられたシ
ルキーは、至極幸せそうな表情を自室で浮かべて頬張るところを一誠
に覗き見されるが気付くこともなくデザートを堪能する。

.....

「あーさぶさぶ、大量大量。皆お疲れさん」

ある日のこと。玄関ホールの間がぽっかりと開く穴の向こうか
ら極寒の冷気と共に一人のヒューマンと四人の女戦士^{アマゾネス}が潜ってきた。
採取と狩りを終えて地上に戻ってきた五人はそれぞれ別行動をして
離れる。男のヒューマン、一誠は採取したドロップアイテムの選別を
するために自室に戻る。アマゾネス達は冷えた身体を温めに浴場へ
と直交する。

「今日も大量に手に入ったからな。最近は金の出費が激し過ぎたから
まーた貯めんといかんし」

いや、後悔はしてないけどな。と独り言を呟きながらバックバック
から入れに入れ込んだ収穫の品々を一つ一つ、中には雑に扱えない物
も丁寧に取り出して選別する。そうして床中が『深層』のドロップア
イテムだらけになった時間に、腕輪の宝玉が点滅を繰り返す。誰だ？
と思いつつながら作業を中断して通話状態にすると、精緻な人形を彷彿さ
せる銀色の髪の少女^{ヒューマン}の姿が立体的に映り出す。

「アミッドか。どうした」

『ご相談事がございました。今お時間は大丈夫でしょうか？』

「59階層の『深層』から戻って来たばかりだから大丈夫だ」

ギルドの調査で回復役^{ポーション}の調査にも使えることが判明した物を見せ
つける。見たことのない希少な植物^{レア}を目にしてアミッドの大きくつ
ぶらな瞳がその植物へ凝視するほど興味津々だった。

「相談って何だ？」

『ディアンケヒト様が新たな回復道具アイテムをお求めにならまして』

「巻物の量産？」

『いえ、それとは別の代物です』

新しい回復道具アイテムを求められてしまったアミッドは、一誠に応じることはできないかと尋ねてきたことを察して、彼女に申し訳ないが首を横に振った。

「契約は巻物スクロールを【ディアンケヒト・ファミリア】に提供すること。それ以外のもんを要求するのは契約に反するぞ。本神は分かっているんだったら？」

『承知の上です。ディアンケヒト様曰く「儂の要求を応じてくれるならばそれ相応の対価を払ってやる」とのことです』

「じゃあ、アミッドを正式に【ファミリア】から脱退させたら何でも応じてやると吹っ掛けてみる。それで諦めるはずだ」

『……本当によろしいので？』

「お前をダシにして使うようで悪いが、ディアンケヒトがそれ相応の対価を払うって言ったんだ。俺はお前を望むよアミッド」

と——アミッドとの話し合いで決まった要求を主神に伝わると。ホームから「ぬわあにいいいいいいっ!？」と驚きと怒気が孕んだ叫びが聞こえて、利用しようとした冒険者達を驚かせた。

「何を馬鹿なことを要求するのだあの小僧めがっ!そんなのこの儂が許すわけがないだろう!」

「ディアンケヒト様を諦めさせる要求です。あの方は本気ではありませんせん」

「ぐっ……契約の方は」

「無理かと。新たに商品をお望みならば契約の改新せねばなりません。その際イツセイさんの要求も変わります」

それが今回の要求は私です。とディアンケヒトの肩を落とさせる魔法の言葉に等しかった。ぐうの音もでなくなってきた主神に真っ直ぐつばらな瞳を向けるアミッド。

「私を手放すか利益を選ぶかの選択ですディアンケヒト様。どちらもイツセイさんから得られる利益は【ファミリア】の為になります」

「ぬぬぬっ……おのれ、神の足元を見おって……！」
「(契約という鎖に縛られるところいうしがらみに囚われるのですね。イツセーさんはこれをわかってて契約にしたのでしよう。勉強になります)」

思惑通りになったことを一誠はアミッドから聞くまで知る由もなく、ドロップアイテムを換金しにはなくとある商人に半分ほど提供していた。

「ほれ、お望み通り『深層』のドロップアイテムだ」

「うむ、協力に感謝する」

バックパックを手渡すヴィットリーアの隣に立つマキャベリが感謝の言葉を短く述べる。場所は南区画の市井の端っこ。

「まったく、こればかりは骨が折れそうだったぞ。『深層』のアイテムを全て百個も集めてくれって言われたときはよ」

「それでも我輩の望みを叶えてくれたのだろうか？」

「まだ幾つかの希少^{レア}のアイテムは揃えられない。出現するのが稀なもんだから一朝一夕は無理がある。それでも十個ぐらいは手に入れるから勘弁な」

「問題ない。これだけあれば売買はできる」

一体どこで売買するのか？訪ねてもまだ決めていないと言われて場所取りも満足にできていないようだった。

「お前の協力を必要と感じたら直ぐに求めるつもりだ。それまでは我輩の好きにさせてもらう」

「平和的にやれよー」

踵を返すマキャベリとヴィットリーア。一誠は離れ去って行った二人の背中を見送り今度こそギルトへ赴くのだったが。背後からドドドドツ！と音がして来て振り返った直後に。

「イツセー見つけたあああああゾウツ！」

ドアップで象頭の仮面を被った男が一誠の腹部にタックルをかましてきた。ごふっ!?!と肺から酸素を吐き出して男と共にメインストリートに倒れ込む。周囲の驚愕と絶句の気配や奇異の視線を気にする暇もなく、

「いきなりなにするんだあっ!？」

龍の雷が落ちて炸裂する。

「……で、何か用かガネーシャ」

元主神の男神を正座させて、申し訳なきそうにしている眷族とも相對して問いただす。大通りの往来のところまで神が土下座をしている様は様々な視線と注目を集めているが、一誠の一睨みで野次馬達は恐れをなして歩き始めた。

「イツセー、今は暇か」

「これからギルドに換金しに行くところだ。それが終われば時間は空く」

「では、俺の相談を聞いて欲しい!」

また相談か、今度は何だ?と心中で吐露しガネーシャの乞いに了承する一誠は本当に今度こそギルドへ赴いた。

目的の場所の大理石の床を踏みヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人に獣人の冒険者達が冒険者依頼の受注や完了して報酬を受け取るソロやパーティ、受付嬢を難破する冒険者を見渡しながら、相も変わらずだなここと心の中で思いつつ換金をしてもらう。

「ローズー」

「はいはい、換金ね?」

「今日は半分だから直ぐに終わるぞ」

「あら、珍しいわね。調子が出なかったわけ?」

「知り合いの商人にもう半分を渡した。希少な59階層と更に下の階層のドロップアイテムが売られていれば商人達は黙ってはいられない」

今はまだ市井は慌ただしくないだろうが、とバックパックを渡しながら担当アドバイザーに話しかける。

「その商人のバックは『フレイヤ・ファミリア』が?」

「俺個人さ」

時間を掛けて換金してもらった総額数千万ヴァリスはバックパックの中に入れてくれたローズから受け取り、次は「ガネーシャ・ファミリア」のホームへと転移式魔方陣でジャンプして向かう。

「ガネーシヤ、いる?」

直ぐ目の前に魔法^{マジックサークル}円から現れた男に門番達は面を食らった。見覚えのある顔に一人の門番がホームの中へと消えてゆき、そして一誠はホームを見て目を丸くする。

「なあ、ホームを改装してるのか?」

「ああ……またガネーシヤ様のわけわからんノリで……【ファミリア】の全財産をはたいて突然改装し出したんだ」

「……今度、うちの店に来な。酒をサービスしてやつから」

哀愁を漂わせる門番に同情してしまう。そして親身に愚痴も聞いてやっていたら、ほどなくして――。

「待っていたぞ、イツセー!」

「二度は食らわん!」

飛び掛かってくる元主神に対して拳骨を食らわす。主神に対するその暴挙に何故か門番達はちよっぴり晴れやかな顔をしていた。仕舞には一誠がホームの事で小言を言えば門番達はうんうんと頷く始末。そして男神の首根っこを掴んで改装中のホームへと向かう一誠だった。

「それで相談事って何だ」

ガネーシヤの自室で話を窺う。不気味を醸し出す象頭の仮面がずらりと壁に掛けられた部屋は居心地が悪くも話を聞く姿勢の一誠に乞うた元主神は一度頷く。

「最近のお前は海列車と言う物を作ったり、子供達でも入れる銭湯と言う物も作ったな」

「そうだな」

「では、次は子供達の為になる物――何時だったか教えてもらった遊園地も創ってほしい!」

「いや、無理」

理由は分かった。そして直ぐに拒絶。ガネーシヤはショックを受けた。

「何故に!?!」

「単純な理由。遊園地に必要な敷地がオラリオにない。市壁外だった

ら問題ないけどオラリオからかなり遠くなる。そこまで足を運ぶことなんてできるわけないだろ？中に入るのは簡単で外に出るのが困難なオラリオなんだしさ」

「むう……」

「それで、遊園地を維持する費用は掛るし点検作業も毎日しなくちゃならない。流石に無理があるぞ」

諦める、と言わんばかりに首を横に振る。が、それで諦めるガネーシャではなかったことを一誠は知らなくて、ズイッと象頭を近づけられる。

「地上にもあの列車でオラリオから遊園地に子供達を送れば問題は解決すると思う」

「む」

「点検作業はギルドと連携して俺の子供達がする。無論、お前から点検の仕方を教えてもらってな」

ズイズイと顔を近づけてくるガネーシャ。そして象の鼻の部分が一誠の頬に突きささる。

「無理だとはガネーシャは思わんゾウ？」

「……」

沈黙を貫く異邦人に象鼻を突き刺したままジッと視線を送り続ける。だが、不意にそれを止めた。

「それとは別にイツセー、頼みがある」

「今度はなんだよ……」

「お前は子供達を甦らせる力があるのだな」

そう発するガネーシャから真剣さが醸し出していた。こんなガネーシャはふざけたノリもしないことは察している一誠も気を取り直して首肯する。

「全員は無理だ。ドラゴンの寿命でも直ぐに尽きてしまう。一人当たり大体百年の寿命は消費すると個人的な結論を出している」

「分かっている。俺の頼みを聞いてくれるならただ一人だけだ。その子供は俺の元眷族であり、シャクテイの妹なのだ」

シャクテイの妹。そんな存在がいたのかと知らなかった一誠は興

味を抱いた。そして死因はダンジョンか、闇派閥との抗争の際かだろうと推測する。

「遺骨はあるか？」

「あるが……掘り起こすのか」

「しなきやまとも呼吸できない地中で窒息死だぞ」

それでもいいならしてやる、とガネーシャに難しい顔をさせてしばらくした頃。意を決したのか立ち上がって一誠だけを都市の南東の区画にある、数え切れない墓石が並ぶ共同墓地へと連れて行った。

——そして『幽玄の白天城』がまた忽然と姿を露わになった直前に、天に衝く光の柱が南東から見えたと言う目撃情報が多発し、後に【ガネーシャ・ファミリア】のホームに一人の少女と男神が戻ってきた。その少女に見覚えある団員達は目を限界まで見開く中、藍色の髪の毛の顔から冷静の仮面が剥がされ愕然の表情をありありと浮かべていた。

「ア、アーデイ……？」

「お姉ちゃん……」

亡き唯一無二の家族の復活に、復活した姉妹はそつと近づき抱擁を交わす。互いが伝わる温もりは本物であり現実なのだ実感した時。シャクテイの目から涙があふれ出た。

「見えますか、主？」

「おー、見えてるよ」

どこかの建物の屋根からその様子を見ていた一誠と召喚された人型ドラゴンは、ガネーシャ達に気付かれずに人知れず静かに『幽玄の白天城』へと帰っていった。

「また、誰かを甦らしたのですね」

一週間の寝たつきり状態に【アストレア・ファミリア】以来久しくなった者へ話しかけるリユー・リオン。その傍には女神アストレアや団長アリーゼや極東の出身の女性団員が佇む。甲斐甲斐しく兎の林檎をシルキーが一誠の口元に運んで食べさせるといふ世話をしている。

「ガネーシャに頼まれたからな」

「神ガネーシャに……?」

「シヤクテイの妹を甦らしてくれって頼まれちゃしないわけにはいかんよ」

「「っ!?!」」

アリーゼ達も知っている者であったのか、酷く驚いて目を瞠目させた。

「彼女を本当に!?」

「俺が嘘をつくとでも?」

「い、いえ……。ただ、驚いただけで決して……」

「ま、もう終わったことだから今は回復に専念する他ない。近い内にガネーシャ達が来るだろうしそんな時でも——」

そう言いかけた一誠の言葉を遮る『ガネーシャがきたぞおおおとおおおおおっ!』と雄叫びに似た五月蠅い叫び声が聞こえてきた。眉根を寄せて五月蠅そうに顔も顰める男に「本当に来たわね」とアリーゼは思わず言った。

「頼んだ」

「かしくまりました」

具体的な事を言われずとも既に察してるシルキーは部屋を後にする。

「ねえ、そう言えば彼女の名前ってなに? 自己紹介されたけれど名前は聞いてないのよね」

「ああ、シルヴィー・ホワイトって名前さ」

ドドドドドツ!と凄まじい音が近づいてくるのが誰の耳でも拾う。そして勢いよく開け放たれる扉からガネーシャが高らかに叫ぼうとしたところ。

「ガネーシャ、叫ぶな」

「ぐおっ!?!」

背後からシヤクテイの蹴りでできずに終わった。主神に対してそんなことしているところは初めて見た一誠やアリーゼ達は目を丸くし、入ってくる彼女と藍色の髪を揺らす少女を見る。「ア、ア

「デイ……」と信じられないものを見る目で呟くりユーに少女アー
デイはぺこりと頭を下げた。

「イツセー……ガネーシャの我儘で寿命を削らせてしまった。す
まない……」

「気にすんな。もう何時もの事だ」

「いや、駄目だ。人の寿命はもう戻らないのだ。私はお前に感謝をし
てもし切れない恩を受けた。だから私もそれ相応の、それ以上の恩で
返したい」

あつ、この流れ……。一誠やアストレア達もデジャブを覚え、
女神達は思いだして頬に朱を染めた。これ以上はダメだと焦り、断る
言葉を発する。

「いや、だから、気——」

「気にするな。問題ない。大丈夫など言ったら……毎日ガネーシャ
に起こしに行かせる」

「それだけは勘弁!？」

色々朝は準備が忙しい。そして毎朝女神や女性達と日夜共にし
ているので起床の際はアレなので……。同居人以外来られたら果
てしなくマズイ。正義の剣と翼を司る女神やその眷族達も同じ気持
ちか心中穏やかではなかった。

「……具体的にどんな風に恩を返すつもりだ。ガネーシャから聞
いただろうけど一人一人数らす際に百年ぐらいの寿命を削ってるかも
しれないんだ。半端な恩を返すつもりなら、返さないでそのまま何時
も通りの生活をしてくれればこつちとしては問題ない。妹を甦らせ
たのはガネーシャの願いの他に俺のエゴだ。家族を甦らせてくれと
頼んだ覚えのないお前からすれば、俺が勝手にしたことなんだから言
葉通り気にするなだ」

何とか説得、諭す試みをする。これ以上は問題ある。しかもシヤク
テイ相手は問題があり過ぎる。立場的にも、彼女を慕う団員達が反論
する。

「……勝手に」

「ああ、そうだ。俺の勝手にしたことだから——」

「……私も勝手にすればお前も気にしないと言う事と道理だな」
嫌な、予感しか感じさせないシヤクティの発言。瞳を見れば確固たる決意の眼差しをしていた。冷や汗が止まらないのは何故だろうと指先すら動かせれない一誠の胸中では不安でいっぱいになった。

「ならば……その寿命の分、いや、一生を懸けて——勝手に私はお前の妻と成る」

……

今、彼女は何と言った？場の空気が静まり返り沈黙がしばらく続く。我に返るのはやはり一誠だった。

「……妻？夫？誰と誰が？」

「私が妻でお前が夫だ」

「……なっ……」

アストレア達が絶句する。

「待て、待て待て……恋愛はともかく他派閥で結婚はできないはずだろう。それにガネーシヤは放っておいて団員達がそれを許すはずが……」

「団員達の事は既にお前がアーデイを異世界の力で甦イルタらせたと伝えてある。死者を、アーデイを甦イルタらしたその偉業を認めずにいれば、恩を抱いている私に対する信用をしていないことにもなるからな」

それに、と付け加える。

「また【ガネーシヤ・ファミリア】に入団してくれれば晴れて結婚はできる。違うか」

「違、わないっ……」

尤もなことを言われて否定する材料を持ってなく、肯定してしまう。だが、まだ材料がある。

「お前、俺に対して好意を抱いてないのに恩を返すだけで妻になるなんてそんなの嫌だぞ」

「……確かにそうかもしれない。私も立場が逆になったら拒絶をしていただろう」

「だったら——」

「それでも、一度決めた女の覚悟をお前は勝手に踏み躪る最低の男に

成り下がるか？」

「なっ、くっ……それは卑怯過ぎるだろうが……」

苦虫を噛み潰したかのような表情を浮かべ、助けを求めるようにアーデイにも話しかける。

「見知らぬ男と姉が結ばれるより見知った男と結ばれてほしいとは思わないかシャクテイの妹」

「お姉ちゃんの覚悟は本物です。私を甦らせた貴方には他の人より感謝をされていて、お姉ちゃんを応援したいです」

「……」

「それに……お姉ちゃんの気持ちは私も同じです。感謝の言葉だけでは軽過ぎます。貴方の命の分、精一杯頑張らせてもらいますっ」

「ジーザス、お前もか！」

胸の前で両の拳を握り張り張りきる妹にもはやこの場に味方がいないと絶望する他ない。

「ガネーシャ、お前から——」

「俺は一切に構わんど。寧ろそうなつてくれればお前は我が「ガネーシャ・ファミリア」の超・優秀な一員になり、何時でも好きなだけ異世界の料理を食べられる。万々歳だ！」

当てにすらならない元主神にもう目が死んでしまった。

シャクテイ・ヴァルマとアーデイ・ヴァルマ。

原作では二度と再会することがなかった姉妹の仲睦ましい姿はホーム内や市井でも見掛けるようになる。

冒険譚 20

最近の姉者がおかしい、そう思ったのはつい最近の事。アマゾネスのイルタ・ファーマは尊敬に値するヒューマンの女性の異変を敏感に察知した。何がおかしいのかと幾つか挙げてみれば、

「アーデイ、そちらはできたか」

「できたよお姉ちゃん。早速届けに行こう？」

ガネーシヤの宿命により死に別れた姉妹は時間を与えられ、しばらくの間冒険者活動を休止させられている。それは問題ない。寧ろそうするべきだと勧めるのだが、ここ最近どこかへ出かける二人に疑問を抱くようになった。特に——ダンジョンに向かうわけでもないのに弁当を作るのは何故だ？と。いや、得物は所持しているが鋭い矛と対象的に何時もの凜々しさがなく優しい表情を浮かべている。その表情は妹に向けている。うん、それは当然のことだと一人納得するイルタの耳に「届けに行く」と言う話を拾った。どこへ？一体誰に？

「旦那様。あーんだ」

「普通に食べさせてくれ……頼むから」

「いえいえ、布団が汚れますからこれが丁度いいですよ」

シャクテイとアーデイの膝の上に頭を乗せられて親鳥がひな鳥に餌を与える図が出来る。まな板の上の鯛の状態として指先も動かさない程に全身の力が入らず、なされるままの一誠。ベッドの上で二人の膝枕を受けながら食べさせられるのは羞恥以外何ものではなかった。

「「うー！」」

「あんなシャクテイは初めてみました……」

「恋は人を変えるって本当なのね」

お世話をした少女達はその役割を取られて悔しさと羨望の眼差しを、麗人の冒険者を知る冒険者達はその変わり様に衝撃を受けた。

「旦那様の世話をするんは妻のウチらの務めやー！」

とユエルが自分達妻の存在を主張して、立場など関係なく妻という肩書を持つ者同士ライバルの好敵手同士の闘い（物理的ではなく）が勃発しかけた。それが出来なかった理由は。

「我が主の傍で言い争わないでもらえますか」

「絶対安静をしている患者の傍で騒がないでください」

「以下同文です」

金髪の美女（人型ドラゴン）と銀髪の二人のヒューマンに強く釘を刺されていたからであった。

「つて、貴方は誰？」

「メリアと申します。滅多にお姿を見せることはできませんが私は我が主の味方でございます。以後お見知りおきを」

彼女の存在を始めて知った面々。一体何時の間にか誰も気づかず警戒心もいじめてしまった。

「付け加えると、彼女も俺と同じ世界から来た家族だ」

「異世界の、イツセーの家族……？」

「唯一、俺が元の世界でどう生きていたのか全て知っている一人とも言えるな」

「はい、幼い頃の主はとても可愛らしく、可愛らしい女の子も服を着せられたこともあることも知っております」

「それは言わなくていい話しだからなメリアアアアアアアアアアアアアアアアッ！」

あ、本当なんだ。と普段叫ばない一誠の反応に是と認識したアイズ達の興味と好奇心が確実にメリアに向いた。特に女装をさせられたと言う話しは凄く興味津々だ。

「女の子のイツセー？」

「アイズ、それは誤解を招くから口に出すな」

「イツセー、私達の服着る？」

「そんな趣味じゃないんだアリサ！」

メリアの登場で一誠が泣きそうになる。物珍しい安静中の彼の反応に背中を押されるような感じですがますます好奇心が沸いた。

「異世界の話、とても興味あります」

「そうね。イツセーの恥ずかしい話しも聞けそうだわ」

「……アリーゼ、知ったらお前の『初めて』をシヤクテイに教えるからな」

初めて？何のだ？と不思議そうに赤髪の女冒険者へシヤクテイは視線を来ると、髪と同じぐらい顔が真っ赤になっていた正義と剣の女神の眷族。

「初めての話とはなんだ？」

「な、なんでもないわっ！」

これで自分の恥ずかしい過去を知られずに済んだ。未然に防いだ一誠の心中の不安が払拭されて晴れやかと成った。

「知りたいですか？主の恥ずかしい話しを」

「……遠慮するわ。それ以外の話でお願い」

「かしこまりました」

「……俺は寝る」

そう言つて三秒で静かな寝息を立てる一誠にシヤクテイとアデーは軽く目を丸くした。人（ドラゴン）ってこんなに早く寝付けれるものだったのかと。寝た己の主を他所にメリアは思い出話でも語ろうとした矢先、耳元に小型の魔方陣が浮かび上がってそれに意識を向けたのは十数秒だった。話の内容を聞くその顔は真摯になった。

「シヤクテイ・ヴァルマ」

「なんだ」

「神ガネーシヤが懇意でこの城の警護をしてる貴方の団員が、三人の転生者達の前に破られて侵入を許したそうです」

それは、アリーゼ達にとつても無視できない報告であった。メリアからの報告で真剣な表情を浮かべそつと一誠から離れ得物を手に取るシヤクテイ。

「わかった。私が奴等を止めよう」

「シヤクテイ、私達も行くわ」

奴等と戦った経験があり少しぐらいは以前より善戦できるはずとアリーゼの動きに——メリアは制する。

「また主の手を煩わせるつもりですか」

「っ！」

「せめて第一級冒険者になってから転生者と戦って下さい。いえ、そうでなくとも自ら獣に喰らわれに行く貴方達に勝てる見込みなど皆無です。また、凌辱されたいのですか？」

「あ、あの時は何も知らなかったから……」

「知っていいよといまいと、転生者に勝てませんよ。何より転生者達是不死身の能力を得ている。どうやって殺しても殺すことが出来ない者達を殺すのですか？あの時の主達との戦いを見て何も学んでいませんでしたか？」

そう問われ、何も答えられないアリーゼ達。「だが」と横から話に介入するシャクテイ

「肝心のイツセーが身動き取れない状況だ。誰かが行かねばやつらの好き勝手にされるぞ」

「ご安心を。既に我が主は先手を打っております」

再び『幽玄の白天城』の敷地内に侵入をする転生者達。ここにあの忌々しい男がいるとわかってから『準備』をしてきた。それが整ってこの時をようやく訪れたことで、リベンジを果たしに100Mはある長大な石壁を守る【ガネーシャ・ファミリア】の団員達を一蹴して壁も突破。威風堂々と余裕を持って進む先に——彼等の道を塞ぐ巨大な樹の幹が幾重にも重なって形を成してドラゴンの形をした枯れ樹が出迎えた。

「なんだ、この前になかったぞこんな樹」

「俺達の邪魔をする為なんじゃねーの？」

「だとしたら随分とお粗末だな。なあ——勇者。お前もそう思うだろう？」

振り返る白髪に赤い目の男の視界に、全身を鎧で身に包む【アポロン・ファミリア】に所属する転生者が肯定の意を示す様に大剣を構えた。

「俺達の邪魔なものは全て切り裂いてやる」

「いいね。流石は勇者の名を名乗るだけあるぜ」

勇者を囃したてる。彼等と接触は『運動会』からしばらく経った頃。共に辛酸を飲まされたあの男にリベンジをしないかと誘われた時、最初は疑心暗鬼であったものの同じ転生者であることを打ち明ければ二つ返事で応じた。己以外にも転生者が、あの男に敗れた同士がいることに親近感が湧いて何度か交流を交わしてきた。

「斬って斬りまくって薪にしてやる」

『——薪ですか。私はそこまで枯れていませんがね』

「薪が何を言って——・・・？」

不意に自分は誰と喋っていた？と疑問を抱いた。三人の転生者も怪訝な表情を浮かべ周囲を見回す。人の気配は感じられない。どこだ？勇ましく勇者は叫ぶ。

「どこのどいつだ、姿を見せろ！」

『既に目の前に居りますよ』

枯れた樹木だと思っていたものが、くぼんだ部分が赤い光を宿して口と思われる部位が、大きく裂ける。転生者達は異様な生物を目の当たりにして瞠目する。

『初めまして異界の神により能力を与えられ甦りし転生者達。私はインソムニアック・ドラゴン「宝樹の護封龍」ラードウンと申します・・・以後、お見知りおきを』

樹木だと思われていたものがドラゴンと名乗り、告げる。

『この先に用があるならば私と遊んでからにしてみらいましょうか』

「遊ぶだど？たかが樹に何が出来るってんだ？」

『私は主に結界、障壁など担当しております・・・こんな風にできますよ』

四人をまるっと結界のようなものが包み込む。まるで巨大なシャボン玉の中にすっぽり入ってしまったように。ラードウンはどす黒いオーラを放ちながら、眼光を赤く赤く輝かせて転生者達を睨んでいた。

「なんだこれ？こんな程度で俺達を止めたつもりか？」

結界に攻撃を繰り返す四人。だが、万物を斬る剣で結界に切り裂いても直ぐに修復。無限の魔法でもびくともせず、亜空間から射出した

武器でも貫くことは叶わず、自慢で最強の能力でも突破できず当惑するだけだった。

『この程度で止められている貴方達はそれほど脅威ではないですな』

「てめえ、こっから出せや！」

『自力で突破して下さいな。貴方達を倒した彼はこの程度の結界など拳一つで破壊できますよ？』

「っ……グルってことか。はは、いいこと知ったぜ。化けもんを飼っているって事をギルドに教えてやったらあいつはオラリオにいられなくなるな！」

不敵な笑みを浮かべる転生者にほくそ笑むラードウン。その結界から突破しない限りそれは叶わないですがね、と石壁ごと防音式の結界を張り出す。

『さて、このまま餓死させるまで閉じ込めてもよいのですが。それでは少々つまらないのでゲームをしましょう』

そう言った直後に転生者達を包んでいた結界が消失して、代わりに庭園に結界が張られラードウンの真上に大きな立体的な砂時計が浮かび上がる。

『三分の間、私を倒してごらん下さい。できたら先へ進むことを許しますよ』

ゲームのルールを説明され、舐められてる、挑発をされると受け取った転生者達は不敵と侮蔑した。

「ただ守るだけしか取り柄がない化け物の運命はもう決まってるぜ。てめえ、最強の俺達に殺されるって運命なんだよ」

『イツセーに敗北と言う屈辱と辛酸を飲まされた時点で、最強ではなくなっただけでは？』

「黙れ！たかが樹のくせに知った風な口を開くな！」

知ってるから開くのですがね。心中吐露するラードウンに四人の転生者達は飛びかかり、城からメリアの魔法でその様子を窺うアリーゼ達は緊張の面持ちで戦いの結果を見守った。

三分後。指定された時間が経って過ぎたことでラードウンのゲームは終わった。結果は、樹木のドラゴンを倒すことは叶わずただ時間

が過ぎてしまった転生者達の敗北。勇者は万物を切り裂く剣を封印されて本来の威力・効力が発揮できず、他の三人は再び結界に閉じ込められてそのままラードウンに傷ひとつも付けることはできなかった。砂時計は完全に下へ落ちきったのを見計らい、転生者等へ言葉を向ける。

『終了です。呆気ないですな。神から能力を与えられたにも拘わらずその程度でイツセーに挑もうとは拍子抜けもいいところ』

「うるせえっ!!今までは本気でも全力でもなかったただけだ!今すぐにもてめえを殺してやるよ!」

『ゲームは終わりました。他のドラゴンの中で攻撃力が無い私を倒せないようでは、他のドラゴン達にも倒すことは不可能です』

「なに?他にもドラゴンがいるのかよっ……!」

その時、呻く転生者とラードウンの間に黒い魔方陣が三つ発現して三人の男達が現れ、その中の一人の光で黒い髪が紫色の発光現象を起こす男がラードウンを見上げる。

「ラードウン、交代だ。いいな」

『ええ、勿論です。後はお好きなように』

『無論だ。主から了承を得ている。丁度いいだろう』

「久しぶりの闘いだ。楽しませてもらおうか」

転生者達と対峙しかつ、その身を迸るどす黒い魔力で包まれながら本来の姿……ドラゴンへと姿になった。ジロリと絶望と恐怖の塊に睨まれて委縮、逃げ腰になる転生者達。

「な、なんなんだよお前ら。いや、どうしてオラリオにこんな化け物が普通にいるんだよっ……!?!」

『知ったところで貴様等には無意味なことだ』

『アジ・ダハーカ、こいつ等に話しかけることすら無駄だ。我が主の為に——さっさとこいつ等を滅ぼすぞ』

「アジ・ダハーカ……?ま、まさか……邪龍のアジ・ダハーカか!?!」

金ぴかの鎧を着込んでいる金髪に赤い目の転生者が絶望の色を顔に染めて戦慄する。異世界でも己の存在を認識している事実を知り、

三頭龍の口角が吊り上がった。

『いかにも、俺は「ディアボリズム・サウザンド・ドラゴン魔源」の「禁龍」アジ・ダハーカ。異世界から来

た我が主イツセーに仕えし忠実な邪龍最強の一角でもある故に——
—貴様等の存在をここで消す』

『あいつの温情で生かされているにも拘らず、二度も襲撃して来たのだ。仏の顔も三度までと言うが、俺達は仏ではなくドラゴンなのでな』

『逃げることも許しを乞うても貴様等を殺すがな』

黒い広大な魔方陣がアジ・ダハーカを中心に広がり——自称勇者とラードウンを残してドラゴンと転生者達はいなくなった。何故自分だけが取り残されたのか不思議でたまらず間抜けな面を鎧の中でする。表情が見えずとも身体から疑問の気配を醸し出している転生者にラードウンは指摘する。

『あなたは「まだ」話を通じる転生者です。イツセーにはあなただけは生かすようにとお願いされておりますからね』

「なんで、そんなことをする……」

『他の転生者よりまだマシなだけですよ。イツセーが最も嫌うのは……自分の大切なものを手を出す人間と理不尽に人権を奪うものです』

三体と三人は18階層の安全階層セーフティポイントに転移した直後に戦闘が始まった。モンスターが産まれない階層は他のダンジョンの階層と違って穏やかで楽園のように思われたが、三体の異世界のドラゴン達の存在にそれがブチ壊された。ドラゴン達は闘いのオーラを全身から滲ませた。その迫力は、熱となつて周囲の草原を燃え盛らせてはあつという間に火の海と化した。

「だ、大丈夫だ……俺達は絶対に死なない不死身の人間だっ」

「ああ、その上俺達はそれぞれ最強の能力を持っている。相手が例え誰であろうと負けることはない」

「直ぐに片付けたら加勢をする。いいな」

転生者達はそれぞれドラゴンと対峙して攻撃を開始する。某アニメに出るキャラクターの姿と能力を望み得た金髪に赤い目、金の鎧を

着込んだ転生者は、肩に突起物のようなものが二つある他、背中と肩、腕や太ももにも赤黒い輪後光が二重にあつて体は尾と繋がっており、四対八枚の翼は黒が赤に浸食された感じで入り混じっていた。手首と足の甲に鋭利な刃物状な物が生えていて、頭部に鋭い一本の角にも赤黒い二つの輪後光がある。胸に妖しく光る赤い宝玉のようなものがあるドラゴンへ空間に生じる水の波紋から数多の刀剣類を召喚、それを弾丸のように放つ。それらに対して周囲の空間から鎖を放ち迫りくる武器を拘束して防ぐは『魔煌カオス・ブレイカー・ドラゴンの絶禍龍』ネメシス。

『この程度か』

「舐めるなァッ！」

どんどん武器を射出して攻撃をするが意思を持つて空間から出てくる鎖に弾かれるか、巻き付かれるか、防がれるかでネメシスに一度も攻撃が当たらず。弧を描いて資格からの攻撃も全て鎖で守られて、ならば自身の手で攻撃してやるとある剣をしたがネメシスの鎖に武器ごと身体を巻き付かれて動きを封じられた。

『能力は確かに強いかも知れんが、お前自身はさほど脅威ではないな。ラードウンの言うとおりに拍子抜けもいいところだ』

「く、くそっ！な、何で能力が使えない!?!」

『俺の鎖は相手の力・能力を封印する。お前達転生者の特典とやらは能力なのだろう？ならば俺の力の特性も発揮すると言うわけだ。今のお前は自慢の能力を振るえないただの人間に成り下がった』

鎖を断ち切ろうと武器の召喚が出来ずに当惑する転生者にとって無慈悲な発言を下される。

『あの時、イツセーがお前達と戦う際にもそうすることはできていた。何故しなかったかわかるか？戦い方を知らず、特典と言う能力を得て慢心していたお前達に使うまでもなかったのだよ』

転生者の四肢に鎖が巻き付く。自分の身に置かれた状況に顔が焦燥の色で染まり切つて瞳にも恐怖の色が滲み出た。

『神すら封じることができるとこの俺に、お前達転生者に倒されるわけもない』

「ま、待ってくれ。まさか、俺を殺すんじゃないよな……？俺を

風と雷を自身に纏い、疾風迅雷の如くアジ・ダハーカの懐に飛び込み零距离から魔法の砲撃を放った。巨大なドラゴンを飲み込み、18階層の岩盤を貫く威力に——邪龍は平然と受け止めてニヤリと嘲笑う。

『俺が知る最強の魔法使いの方がよっぽど威力がある』

「なっ……」

攻撃を止めて啞然とする転生者は彼のドラゴンを見つめる。漆黒の身体に傷が癒えていく。あれだけ近い距離から撃った魔法の攻撃が通じていないことに驚きを隠せなかった。

『所詮は魔法使いですらなかった人間だ。神や魔法、人間以外の種族など存在しなかった世界からたまたま魔力を得たに過ぎないお前に魔法の深淵、真髄、真理、理など理解するはずもない』

目を妖しく輝かせるアジ・ダハーカを見た転生者の額に禍々しい輝きを放つ、魔方阵が描かれたが転生者は気付かずに魔法を放とうとした姿勢のまま数秒固まった。

「……は？」

『お前の自慢の魔法を封印した。封印を解除しない限り一生魔法は使えん』

「んなっ……!?!」

愉快気に嘲笑する邪龍の言葉で慌てだす。転生者の主な攻撃は魔法だ。それを奪われてしまえば不死身の人間という化け物に成り下がる。

「ふ、ふぎけるなっ!?!封印を解きやがれよ、卑怯だろっ!」

『そんな発言を口にするとはくだらん。戦いに卑怯など通用しない。全て己が実力で勝敗を決めるものだ』

こんな風にな、と展開していた魔方阵の様相が変わる。古代魔術文字、禁止されている言語、それらが魔方阵の紋様に浮かんで、危険な色を発し始める。魔方阵時代が歪みだし、バチバチと電流を走らせていった。そこから吐き出されたのは——ドクロを形作る紫色の炎、呪詛に塗れた突風、暗黒色の雷、血の涙を流す呪われた聖母、見つめられるだけで命を奪いかねない一つ目の巨人等々……禁止級の

属性、召喚、呪い、この世の全ての不吉を体現した魔法が、転生者に向かつていく。

『さらばだ。もう二度と会う事もないだろう』

アジ・ダハー内の攻撃が転生者に着地する。

「——アッ?!?!」

声にならない悲鳴は直ぐに聞こえなくなり、核弾頭が落ちたような大爆発と人やモンスターが立ち入ることが出来ない環境を変えてしまった。爆発で生じる突風が街にも届き影響を与えるが、住人達は三頭龍の結界で守られて無事であった。だが、不死身の転生者は骨の欠片一つも残すことも許されずにこの世から消滅する。そして最後の転生者は——『幻想喰龍』ゾラードの凶悪な能力に悪戦苦闘を強いられてる。横目で仲間が呆気なく倒されて次は己の番だと絶望に押し潰されかけていた。

「く、くそつたれがあつー!」

禍々しいオーラを身に纏いそれに触れた物が全て消滅する。気流を操って嵐を起こしてぶつけようとしても効かず、太陽の陽の代わりとなっている18階層の天蓋の青と水色の水晶群を落とし、巨大な塊で圧殺しようとしても消滅していく一方で無意味。転生者の攻撃を全く無意味にさせられ歯牙にも掛けられない。

『そろそろ終わらせよう。何時までも貴様と遊んでいるつもりはない』

宣言通り、禍々しいオーラを消失して代わりに無効化のドームを生させた。あの凶悪極まりない上に厄介なオーラが無くなった。今ならあの化け物を倒せると能力を使って一気に肉薄仕掛ろうとする転生者——唾然で目が凍結する。

「な、なんで能力が発動しない——」

その疑問が解消する事は永遠になかった。フツと自身を覆う影に気付いて見上げた時は巨大な拳が目と鼻の先まで迫り目の前が真っ暗になった。地面が激しく隆起して18階層を震わせる。同時にドームを消して消滅の力で直径五十Mの地面を穿ち消し去った。

「「「.....つ」」」」

転生者が死にこの世からいなくなった瞬間までメリアの魔法で映しだしていた映像を見ていたアリーゼ達は息を飲んだ。アレが――異世界のドラゴンの強さ。転生者ですら敵わぬドラゴンの力を目の当たりにして恐怖を覚えた。

「御覧の通り、我等は簡単に転生者などに後れは取りませんよ」

「……貴方も、ドラゴンなの？」

「はい、そうです。万物を創造する能力を有しておりますが、あのドラゴン達には負けますね」

「貴方とあのモンスター達とイツセーさんは……一体どういう関係なのですか」

「家族ですよ。愛おしい愛おしい我が主は元の世界にいる家族達にも愛され、幸せになるべきお方。全てを魅了し全てを愛するお方……だからあのアジ・ダハーカ達も主の為に戦っております。無論私も戦います」

綺麗に笑うメリアに対して言葉を失う面々。

「ですが……主の心を傷付ける者には先程の転生者達のように痛い目を遭っていただきますがね」

冷笑する彼女にゾツと背筋に冷たい滴が流れたのを感じた。一誠を傷付ければドラゴンの逆鱗に触れると道理なのだと知り、印象が変わり兼ねなかった。

「……ま、そういうわけだ」

眠っていた筈の男が瞑目したまま口を開きだした。空色の瞳を見開き振り返る。

「っ、イツセー、さん……」

「普段ドラゴン達は俺の中に宿っている。つまり俺は人類にとってモンスターを宿している恐怖の塊みたいなもんさ。そして俺自身も化け物。そんな奴と一緒に住みたくとも居たくもないなら出てつても構わない。他の仲間にも教えてもいいし俺に対して嫌悪を抱くようなら二度と関わらない。アイズ達もそうだからな」

だが、と言葉を続ける。

「もしも俺の全てを受け入れてくれるなら、お前等の事全力で好きに

なるがな」

アイズとアリサ、ラトラが布団の中に潜り出しそのまま一誠の傍にまで移動しては顔だけ出して寄りそう。春姫とユエルにソシエは夫がモンスターである衝撃が抜けきれないものの、受け入れる気持ちを抱いた。アリーゼ達はしばらく無言で佇むが訊ねた。

「貴方のこと知っている神や冒険者はいる？」

「ロキにヘファイストス、ガネーシヤにフレイヤ。それにアマテラスとイザナギにイザナミ。あとはフィンとガレスにこの城に住んでいるアイズ達が殆どだな。知らない奴も交じってるけど」

「……貴方を受け入れている、と言う事なのですね？」

「ん、そういうことだ」

それを訊いて驚きを禁じ得なかったが、一誠を受け入れている神と冒険者がいることに心のどこか安堵したのを覚え、この場を後に主神の女神の元へと訪れ他の仲間も全員集めて一誠の秘密を打ち明けた。

「……そうですか」

「どうするアストレア様？」

「変わりはありませんよ。私達は二度もあの子に救ってもらいました。あの子供がモンスターでも、私達が迫害も危害をする理由など一つもない。私達を知るモンスターは命を削ってまで助けてくれますか？」

「それは……」

「彼を否定したら彼の産みの親に顔向けが出来ない。モンスターである事実が浮上したところで、私達は恩を仇で返す【ファミリア】ですか？」

沈黙する団員達を見回しアストレアは彼女達の心情を察し優しく述べる。

「もしも彼を否定するならば構いません。この【ファミリア】にも居たくないならば脱退も咎めません。私は一人になっても貴方達を救った恩に報いるためにイツセーの傍にいます。……当の本人はそんなことする必要はないと言われますがね」

確かな決意と気持ちさを皆に伝えて示す女神に団員達は困惑する気

配を醸し出す。

「私は貴方達に助けられている立場です。貴方達を助けた彼に恩を返しても不思議ではないはず」

「アストレア様……」

「彼に好意を抱けと言いません。イツセーも私達を強制や縛る事を好みませんから私達【アストレア・ファミリア】はこれまで通りオラリオの平和と秩序を守りましょう。イツセーに対する言動は個々の自由です。いいですね」

主神の言葉にアリーゼ達は「はい」と答えて応じる。

冒険譚 21

巨大な三体のモンスターが18階層に出現。どこかの冒険者と戦っていた模様だがモンスターの勝利で幕を下ろしたのか、光と共に消え去ったと街の住民達からの報告によりギルドは慌ただしく各冒険者に調査の派遣をした。目的の安全階層セーフティポイントに辿り着いた調査隊の視界に飛び込むその光景は凄惨に等しい。『リヴィラの街』をも覆う呪われた暗黒の世界が漂っていた。17階層と18階層が繋がる連絡路を出た瞬間。調査隊が『毒気』によって倒れて調査は困難に強いるほど、アジ・ダハーカの禁術の魔法が今も尚濃く充満していたのだ。軒並みに自然は腐敗して死に、モンスター達も例外なく息絶えて生物が住めない死の毒の領域と化した。まだ安静中の男にその情報が行き届いた時には盛大に溜息を吐いたのは言うまでもない。そんな『死の毒』は一週間経っても消えることなく数多の冒険者の探索活動に二の足を踏ませる。このまま永遠に17階層までしか探索できないのかと冒険者達の憂いは一人の男の活躍によって杞憂に終わる。青白い十二枚の翼を持つ【天使テ・シーオ】が死の毒の領域に現れ、神の力の波動を放ち毒を打ち消して行く――。

「――毒は消しておいた。これで冒険者達も活動を再開できるはずだ」

「ご苦労だった」

「んや、身内に任せた俺の責任だわ。後始末をするのは当然だ」

四炬の松明のみしか光源がないギルドの地下神殿、『祈祷の間』にて報告をする一誠にギルドの真の王が凝然とした態度で蒼い瞳を眷族の子に見下ろし見つめる。

「今後異世界のドラゴンの召喚を控えてもらう」

「不測の事態じゃない限りはそうするつもりだ。普段は俺の中においてもらっているけど、俺が動けない代わりにこいつ等に守ってもらわないと危ないからよ」

「ドラゴンがドラゴンを宿す。それも異世界では可能なのか」

「そんなことしてるのは俺ぐらいだけだな。他は魂の状態で封印され

ているのさ」

「そうか、と異世界の可能性を知るウラノスは言伝を口にする。

『異端児』がお前と接触を望んでいる」

「へえ、そうなんだ。どの階層に行けば会える？」

「案内役としてフェルズに任せる」

「わかった、と首肯する。次は何時会いに行くべきかと思つたが直ぐに移ろうと決めた。思い立ったが吉日だからなと理由を頭の中で思い、今日の夜にした。『祈祷の間』を後にし、『異端児』と会いに行くけど興味あつて見てみたい奴はいるか？」とその日の夜に誘いの言葉を懸けてみれば、一誠と共に行きたいという感じの理由で十人以上が挙手する。そこでリユーが質問した。

「ゼノスとは誰ですか？」

「最近発覚したことだけど、理性と理知を備えるモンスターだ。ぶつちやけ人語を話せる異端児のモンスターってこと」

「……そんなモンスターがいるなんて信じられません」

「信じるか信じられないかは自由だ。俺は誘いに乗った奴しか連れて行かないからな」

「アイズとアリサにラトラ、リヴェリアも加わる。アスナもついてくる。春姫とユエルにソシエ、レギンにレイネルやカサンドラ。この目で確かめるとアリーゼとリユー、輝夜までも誘いに乗った。シャクティにも誘いの言葉を掛けてみればアリーゼ達と同じ理由で参加する。」

「それで、何時行くの？」

「思い立ったら吉日。つまり今直ぐだ」

『今直ぐ!』』

「転移の魔法で目的地の目の前に行けるから問題はない」

「あ、なるほど。と納得する者や唾然とした表情を浮かべる者の反応が分かれた。それから夕餉の時間が過ぎて念のために得物を所持して会いに行く者だけ玄関先に集う。そこで腕輪の機能で転移してきたシャクティと妹のアーデイと合流を果たして扉を開け蒼夜に染まった外へ出たところで、全身を隠す謎の漆黒のローブの者がそこに

佇んでいた。

「……何者だ」

「俺達の案内役だ。見た目は物凄く怪しいが敵じゃないのも含め——俺の正体も知ってる」

「お前……私達以外にも教えていたのか。あの者の素性がわからないというのに」

「素性は分からなくても……あいつ一言で言えばギルド側のもんなんだ」

ギルド側の者？ますます訝しむリヴェリアの胡乱な視線を受け止める黒衣の者は両手に嵌めた漆黒の手袋グローブからキリキリと音を立てながら、約五M、距離を置いて一誠達と相對した。その異様な姿と見た目でアスナの瞳が揺れて一誠の背後に隠れてきゅつと服を掴み、少しでも恐怖を紛らわせたい思いでその姿勢を保つ。

「イツセー様……あのの方は」

珍しくラトラが動揺の色を瞳目した瞳に浮かべていた。相手の気の気配を感じ取る術を持っている彼女だからこそ、一誠を除いて彼女しか分からないことがある。

「取り敢えず、今抱えている疑問は後で解消するとしてよろしくな」

「ああ、こちらこそ」

黒衣の人物が喋りアスナが小さく悲鳴を漏らす。音もなく近づいてくる謎の者に臨戦態勢や警戒するリヴェリア達だが、一誠が手で制するので警戒だけはする。

「で、どの階層に行けばいいんだ？」

「この階層の、この位置に」

とある階層の地図を懐から取り出す黒衣の人物が指定する場所に一目見て頷き、足元に転移式魔方陣を発生させて一誠は一同と共に目的の階層へ一気にジャンプする。

……
……
……
……

目的地に辿り着いた一行。場所を見渡せば空間は長方形の広間で

ある。幅は十M以上あり、頭上の高さも同様だ。天井と壁は樹皮で形作られており、ここは18階層から下の中層であることを認知する冒険者達。本来暗い筈のダンジョンの中を壁や天井に生えて発光する青光苔アカリゴケに覆われている。広間の中には草の緑と小輪の白からなる美しい花畑が、一面というわけではないものの随所に広がっていた。しかし、それよりも目を引くのが、

「石英」

食糧庫パントリーが近いせいか、緑玉石エメラルドを連想させる濃緑の石英クォーツが広間の至るところから生えていた。一誠も来たことのある場所でもある。樹皮の天井や壁面、床を破って生える大小様々な石英クォーツを見て、この階層に来たことがない春姫を始めとした者達からも感嘆の息が漏れた。視界正面、広間の奥の壁際には多くの石英クォーツ——群晶クラスターがまるで小さな氷山パントリーの様に形成されている。この広間以外にも食糧庫周辺域は石英クォーツに浸食された地形が多い。

「こつちだ」

黒衣の人物が動きだしその行動を目で追うと階層の奥、あの壁を覆う群晶クラスターの一角に近づくのを察した。広間最奥にある壮麗な石英クォーツの塊。生え渡る濃緑水晶の柱の前で黒衣の人物の足は止まる。一見して何の変哲もない石英畑クォーツにも見えるが……一箇所、発光の弱い水晶がある。

「これを壊してくれ」

その水晶に指す黒衣の人物からそう言われ、一誠は打ち壊す。ガシャンッ、という硝子の塊が砕けるような甲高い音を撒き散らし、石英クォーツはばらばらに砕け、そして塞がれていた穴が露出した。

「これは……」

隠れていた樹穴にリヴェリアの翡翠の瞳が驚きで見開く。自己修復するダンジョンの中でも、砕かれた石英クォーツは通常より速い速度で復元が始まっていた見る見るうちに元の形に直っていく濃緑水晶を跨ぎ、一誠達は素早く身を滑り込ませる。飛び散った石英クォーツの破片が地面に転がる薄暗い樹洞は、間も無く一口が閉ざされた。斜路状スロープとなっている樹洞の奥を進む一行。樹洞の中は狭いモンスターが産まれる気配

もない。苔が繁茂していない天井や壁には小さな石英がところどころ伸び、洞窟内をぼんやりと照らしている。先頭を進むフェルズに、真後ろにいる一誠が魔力による発光する玉を複数も浮かばせながら、一行は樹洞を下っていた。

「……泉」

坂を下りきった先には、清冽な青い泉があった。大きさは奥行き横幅、深さともに五Mといったところで、池とも呼べる程度のものだ。石英の光源が乏しい暗い空間に、一誠は魔光を周囲に巡らせ、辺りを照らし出すと。

「先に君一人だけ先に進んでくれ」

「進む?」

「この泉の向こうに」

手袋が指す泉。一誠はまさか、と思い黒衣の人物に顔を向ければ意味深に頷かれた。

「……本当、ダンジョンって未知が溢れて面白いな」

笑みを浮かべた一誠が息を大きく吸ってから泉の中へ飛び込んでいった。冷たい泉水の感触、視界が利く澄んだ水底。そして奥へと続く横穴。水底に点々と生えた石英が穴の先へ導くように光を発している。一誠自身や上乘せする形の恩恵によつて常人より遙かに息が続く中、横穴の突き入りまで来た一誠は、柔らかな緑光が差し込む真上を仰いだ。水底を蹴り、一気に浮上する。

「——ふはっ」

水面に顔を出す一誠の視界に飛び込んでくるのは、樹洞から様変わりした鍾乳洞に似た洞窟だった。黒い岩盤で構成されており、天井や壁から生えている石英の光だけは変わらない。そして一誠は、薄闇が蔓延る新たな道——奥へと伸びる岩盤の通路を見つめた。

「……『未開拓領域』ってやつか」

今もギルドに蓄えられているダンジョンの地図情報。冒険者達に公開され階層攻略の手助けとなっているそれは、『古代』の探索者達も含めた過去の先人の足跡であり功績である。彼等は何の情報もないまま命を賭して正規ルートを含めた各階層を開拓し、地図作成を行つて

きたのだ。まさしく『偉業』である。だが、そんな中でも先人たちの手が及んでいない地底エリアが存在する。計り知ることのできない深く広すぎるダンジョンの全貌。人類の到達階層が増えていく一方で置き去りにされた横の広がり。あるいは、今日に到るまで誰も発見することのできなかつた、正真正銘の未開の地。

『未開拓領域』。

文字通り、前人未到の領域だ。地図に記されていない行路——
「ロキ・ファミリア」や「フレイヤ・ファミリア」でさえ足を踏み入れている地底エリアに、一誠は感嘆する。

「見落としがあつたつてことか流石に。今度、もう一回隅々まで調べて回ってみよう」

暗闇でも目が利く一誠はそれでも後からやつてくるだろうアイシャ達の為、複数の魔光をこの場に展開して深淵に繋がっているかのような暗闇の穴へと静かに歩み始めた。何が自分を待ち受けるのか、どんなモンスターが襲ってくるのか、初見の迷宮ダンジョン・ギミックの陥穽イレギュラー、異常事態が存在すれば、一瞬で全滅すらありうる。純然たる『未知』。踏み出される一步が新たな『未知』を切り開いていく。先人達と同じように。やがて、『未開拓領域』の奥へ奥へ進む一誠の目の前に細い通路が終わりを迎えた。

「暗っ」

そして開けている。閉塞感からの解放、圧倒的な空間の広がり。恐らく特大の広間だ。同時に完璧な闇が支配している。きつと魔石灯の光でも深奥や細部まで届かないだろう。——さらには。

「ふーん………？」

いる。何かがいる。気と気配を探知したら数十もの数とその分の視線の主が。今この暗闇のどこかから息を潜め、完璧に気配を絶ち、自分を見つめている。それでも警戒や緊張感など全く顔に出さず、逆に寧ろ喜ぶ一誠は魔光を発現して視線の元へと灯した。

「………！」

その瞬間、双眸を丸くした。

『グルルルッ………！』

『オオオオオオ……!!』

『ヒエアアアアツ……!!』

リザードマン 蜥蜴人、翼をはためかせ宙に滞空する半人半鳥^{ハイビイ}。種族が異なるモンスター達の間で共通しているのは、一誠が目を丸くするのは、曲刀^{シミター}や手斧、鎧と盾を装備していることだ。

「武装した……モンスター……」

ハイビイ 半人半鳥の他にも頭上を舞う石竜に鷲獅子、地を這うのは半人半蛇^{ラミア}、アルミラージュ^{アルミラージュ}、獣蛮族^{フォモール}、戦影^{ウォーシャドウ}、人蜘蛛^{アラクネ}、一角獣^{ユニコーン}……『上層』『中層』『下層』『深層』、あらゆる階層域から集まった多種族のモンスターの群れ。地上の闘技場^{コロシアム}が収まるうかという特大の広間の中に浮かぶ眼光の数々に一誠はこんな光景は初めて見たと驚きで開いた口が塞がらない。

「……俺をどうしてここに一人で行かせたのか何となくわかったな」

武装したモンスターと戦う気分は何とも言えない新鮮さを覚える。

「この中にゴブリンのレットはいるか?」

そんな問いかけをする一誠の言葉に呼応する一体の赤い帽子を被ったゴブリンが武装したモンスターの中から前に出てきた。

「お久しぶりです。ミスター・イツセー」

「お、いたな。つてことはこいつ等がお仲間の『異端児』か?」

「はい、そうです」

嬉しそうに笑う小怪物^{ゴブリン}のレットと再会の握手を交わし会話を成立する相手こそ、自分達が接触を望んでいたものだと分かり……

『異端児』^{ゼノス}達は警戒心を解いた。蜥蜴人^{リザードマン}が近づき、そして口を開く。

「お前がレットが言っていた、異世界の人型ドラゴンってモンスターなんだな?」

「……普通に話しかけると驚きとを通り越して新鮮さを感じるぜ」

「ハハハ、オイラだけじゃなくて他の連中もフェルズから聞いた話しの人物と会ってみたくて楽しみに待っていたんだぜい?」

フェルズ、という名前の知らない人物はおそらくあの黒衣の人物の

事なのだろう。人語を流暢に操る^{リザードマン}蜥蜴人にそうか、と頷くと。

「なあなあ、お前がモンスターになるところをオイラ達に見せてくれねえか？」

「それで信用してくれるなら」

次の瞬間。真紅が一誠を包みだし、次に姿を現したのは——逆関節の二本脚、二対四枚の翼、真紅のドラゴンとして一誠は眼前のモンスター達の前に真の姿を晒す。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオツ！』

『『『『つ?!』』』』』

眼前の存在が自分達と同じ存在——いや、明らかに異なっている姿に成った時、変貌して凄まじい咆哮に伴い衝撃波でモンスター達は広間の奥まで吹っ飛ばされたのを見て「あ、ごめん」と軽く謝って元の姿に戻る。

『大丈夫か?』

「び、びつくりしたぜい……っ。レットやフェルズから聞いた話じゃあ信じられなかったけど、本当にお前はモンスター何だな……！」

『一応な』

モンスターに変貌した一誠に近づく^{ゼノス}異端児等は、臭いを嗅いだりペタペタと触れたり、一角兎が背中から登って頭部に乗り出す。^{アルミライジ}

「冒険者の魔法とかじゃねーんだな?」

『真正正銘の自身の身体だ』

更に身体を巨大化にして^{ゼノス}異端児達を圧倒させた。皆、口をあんぐりと開けて愕然した。

「で、でかっ!」

『もっと大きくなるんだが、ここは狭いからこれ以上は無理だな』

「どんだけ大きくなるんだお前えっ!」

頭部の兎がオロオロと当惑。光に包まれた真紅のドラゴンが元の人形に戻った際には頭の上で器用に乗る形になったところで背後から遅れてやってくるアスナ達へ視線を向ける。黒衣の人物と共に未開拓領域に足を踏み入れた彼女達は絶句する。『上層』から『深層』、種

族がバラバラなモンスター達が冒険者の自分達を相対しても襲ってこないどころか、警戒はしても興味深く見つめてくる。

「イツセー、そのモンスター達がお前が言う異端児なのか……?」

「ん、そうだ。アスナ、これ可愛いぞ」

アルミラージ一角兎を頭から下ろし彼女に近づいて手渡す。兎を手渡された感覚で自然と受け取ってしまい目と目が合う。

「えっと……」

『キュー……』

赤いつぶらな瞳がアスナを見上げて見つめる。頭の角を除けば兎そのものだ。しかし、人類の天敵のモンスターだ。いくら見た目が可愛くて小さかろうとモンスターはモンスター。人類と相成れない存在だ。が、異世界から来た異邦人としてこの世界の人類との認識の違いをアスナがここで発揮する。

「可愛い」

身体を撫でてモフモフ感を堪能するアスナは微笑みをアルミラージ一角兎に向けた。すると、長い耳を揺らしていたアルミラージ一角兎は『キュー!』と可愛く鳴き彼女の頬を舐める。己を受け入れた人間に嬉しいのだと甘えだした。

「アリサ、そのワンワンも可愛がってやれ!」

「うんっ」

『ガウツ!』

いつの間にか一誠に捕まっていた黒ヘルハウンド犬がアリサに撫でられる。ここをこーして、こうやってだなーとレクチャーを受けその通りに撫でていると、気持ちよさげに目を細める黒ヘルハウンド犬が横たわり腹を見せては、「もつと、もつと撫でてください」とアピールする。その姿はまさしく犬そのものだったのでアスナはモンスターとは思えない仕草に笑って、アルミラージ一角兎を抱えながらアリサと一緒に撫で始める。

「……あの三人、自然体過ぎるではないか。こちらが逡巡しているというのに」

「元々この世界とは違う別世界から来た者達だ。認識の違いで態度も言動も違ってくるのだろう」

ハッキリとこの世界と別世界の住人達の差異を明らかにする態度をしている一誠達だった。シャクティとリヴェリアは何とも言えない神妙な面持ちで『異端児』とわいわいと握手を交わし言葉を交わす彼らの様子をただただ見ていることしかできなかった。

「おーい、お前等。せっかく貴重な体験を目前にしてるんだからお前等も体験しとけ。てか、俺を受け入れてこいつ等は受け入れ辛いかな？」

「お前は別の世界のモンスターである以前に私達と付き合いが……」
「リリア、まだ教えてない連中もいるんですけど……」

しまった、と珍しくリヴェリアが動揺する。一誠の事をモンスターだと知らない者はラトラとレギンにレイネルやカサンドラ。他アーデイであるが、リヴェリアからすれば春姫にユエルとソシエ、[アストレア・ファミリア]も含める。

「イツセー様が……」

「え、イツセーってモンスター？」

「うそ……」

「……」

軽く衝撃を受ける少女達。ラトラ達の反応に己の失態で自分の秘密を、何時か明かすだろう順序を狂わせてしまい一誠に対する疑心暗鬼を生ませてしまったものだ。すまない、イツセー。と心中で謝罪する王族ハイエルフに一誠は真っ直ぐアイズに向けて発する。

「アイズ」

手招きする。なんだろう？と歩み寄る少女の前で人から龍に姿を変える。一誠の行動に瞳を丸くして三Mの距離で足を止めてしまった。

「俺はモンスターだが、こんな姿の俺でもお前は好きでいてくれるのか？」

「……あの時も言った。イツセーはモンスターだけど、私はイツセーが好き、だよ」

「……ありがとうな」

龍の、異形の手で金髪の頭を撫でられても少女は嫌がることもなく

受け入れる。

「ズルい、私もイツセーの事が好きなのに！」

遅れて駆けては軽い身のこなしで跳躍するアリサは、一誠の背中に乗って占領する。アイズと共に視線をラトラ達へ向け。

「イツセーはあげない」

とドヤ顔で断言する二人にムカツ！ときた虎ワライガー人が眦を裂いて叫んだ。

「勝った気にならないください。イツセー様がモンスターであろうと私の気持ちは変わりません！」

駆け出してアリサの頭上を越えては鎌首に腕を巻き付けて胸に飛び込むラトラ。

「なんや、ウチらが負けてる気がしてあらへんで……妻のウチらを差し置いてどう思うユエルと春姫」

「え、えつと……」

「……」

妻（仮）の肩書を持つ獣人の少女達が初めてモンスターとして姿を見せる一誠に動揺してもユエルは、主神から前以って「秘密がある」と教えられているためか、それがモンスターであることを知っても不思議と変わらない態度で二人に尋ねたのだった。

「ユエル、俺がモンスターで何とも思わないのか？」

「そりゃ、旦那様がモンスターなんて仰天するほどびっくりしたわ。今も驚いてるし」

でもな、と言葉を紡ぐ。

「旦那様は旦那様なんやろ？」

率直的な感想を述べられた。そんなことを言うユエルにオツドアイの双眸を丸くした後には苦笑を浮かべた。

「（はははっ、そんなこと言う奴がまだいるんだな）」

自分を受け入れる少女やまだ当惑している少女等を見つめ、今度腹を割って話し合いをしようと決めた。今は『ゼノス異端児』の件を優先する。

次の瞬間——わっつ!!と。

春姫達の体が飛び上がるほどの大音声がルーム広間を満たした。何時の

間にか一誠達を見守っていたモンスター達が、歓声を上げている。拍手する赤帽子小怪物、地面に降り立ちはしやぐ少女の半人半鳥ハイビイ、緩慢な動きで諸手を上げる獣蛮族フオモール、アスナの腕から離れてぴよんぴよんと跳ね回る一角兎アルミラーシ——喝采が止まらない。まるで人との親交を——
「記念すべき一步を喜ぶように湧きたった。」

「お前等、灯りをつけろ！」

モンスター達が歓喜する中、蜥蜴人リザードマンが大きな声で号令を放つ。
黒犬ヘルハウンドなどそそくさと動く一部のモンスターが、岩の影に隠してあった魔石灯を引っ張りだし、口や爪を器用に使って点灯させる。

「モンスターが、魔石灯を……」

ヒューマンが作り出した魔石製品を使いこなす怪物達に、リヴェリアは己の目を疑った。更に半人半鳥達が被せていた厚布を取り払い、随所で隠していた石英クォーツの塊をあらわにする。鍾乳洞に似た特大の広間ルームは、たちまち農緑の光に照らし出された。

「——木 竜だと」
グリーンドラゴン

「こんなやつもいたのか……」

現在地である広間ルームの出入り口付近より遠方、石英クォーツの柱のもとに寝そべっていたのは全長十M以上の竜だった。全身に走る古い傷痕、老君のような静かな瞳が紡いで来た年月を感じさせる。緑眼を細めながらこちらを見守っている存在に、リヴェリアとシヤクティは目を疑った。

「地上のお片、挨拶させてください！」『ウウ……』「ワタシモー」

喋れる者、喋れない者、発音がたどたどしい者、多くのモンスターが一誠達の後ろに距離を置いて立っていたリヴェリア達の前へ集まっていった。第一級冒険者でも理知を備え敵意もなく近づかれるモンスター達にかなり動揺するのであった。

「ミス。握手をお願いします」

「み、ミス……?」

「アナタと、握手できて、トテモ嬉しいです」

「う、うん……」

「ワタシ、ラウラ、ヨロシクネ」

「よ、よろしくお願いします……」

『……………』

「……………」

ミスと呼ぶ赤帽子レッドキャップの小怪物を始め、無言で巨手を差しだしてくる大型級の獣蛮族フォモールまで代わる代わる握手を求めてきた。歌人鳥セイレーンや半人半鳥ハービレイ、冒険者達に近寄ろうとしないでいる一角獣ユニコーン、石竜ガーゴイル、人蜘蛛アラクネ以外……………握手を交わしていく姿を見て黒衣の人物が静かに動く。「君という緩衝材の存在のおかげでリド達と触れ合うことができるか」

『それでも抵抗感はありません。それとフェルズって名前なんだな？』

黒衣の人物は「紹介が遅れてすまなかった」と謝罪して、被っていたフードを手袋グローブで掴み取り、剥ぎ取った。

「……………」

一誠、アスナ、アイズ、アリサ、ラトラ、が同時に時を止める。そこあるべき瞳がなかった。真っ黒な空洞、がらんだような眼窩が空いている。そこにあるべき皮がなかった。生え揃えた歯が、骨格が剥き出しになっている。そこにあるべき顔が、存在しなかった。

「『スパルトイ』……………?』」

「ひうつ!?!」

『……………マジでか』

まさしく目の前に存在するのは白骨化した頭蓋骨だった。目も鼻も耳も髪も存在しない。そのおぞましい死の象徴は紛れもなく人ならざる者の証だ。アイズとアリサが『深層』に棲息する骸骨のモンスター『スパルトイ』の名を、一誠は眼を限界まで見開き、戦慄するアスナの悲鳴を拾った。眼前の髑髏、フェルズは緩慢な動きで顔を横に振った。

「生憎モンスターではない。元人間だ」

「も、元人間って……………一体、どういう……………!?!」

一誠と同じ元人間というフェルズに一アスナは啞然として頭の中が疑問で支配されている。顔に浮かぶ動揺は隠せない。頭部は勿論、

首の皮や肉、喉そのものが存在しないにもかかわらず、顎骨の奥から生まれる声音は今日すら喚起してきた。動転する一誠達の疑問に、リザードマン 蜥蜴人が答えた。

「フェルズは『賢者』さ。すげーメイガス魔術師なんだ」

「『賢者』……?」

フェルズの事を知らないアスナが発した言葉に人型に戻った一誠も疑問を漏らした。

「フェルズって凄い魔術師だったのか?」

「異世界から来たイツセー、君には知らないことだろう。私は過去、永遠の命を発現させる魔道具マジックアイテム『賢者の石』を生成したことがある」

「うわ——それは凄いな」

「イツセー、賢者の石って、あの賢者の石?」

アスナに問われて、肯定と頷く。

「俺の世界でも魔術師が存在している。だから魔法に関する道具もあるから『賢者の石』なんて伝説の代物も知らない方がおかしいんだよ。常識的な知識の一つだからな。でも、アスナの世界でも認知されていたんだな」

「うん……だけど、どうして賢者の石を完成できた人が骸骨に? 永遠の命が得られる筈じゃあ? 教えたら絶対に後世まで有名な人として偉人の一人と数えられ語られると思うけれど」

「——石を、『賢者の石』を神に報告したら、目の前で叩きつけられ破壊されたどうしようもない魔術師メイガスだったからな」

一誠とアスナの気持ちが一気に冷めた。やっぱり、神というのはどうしようもない奴等だなと再認識した。

「……なんて声を掛けたらいいか」

「気にしないでくれ。もう過去の話だ。話を戻すが、リド達のことを説明しよう。イツセー以外の者達は知っているかどうかかわからないが改めて教えさせてほしい」

本題に入ろうとするフェルズは『異端児』ゼノス達を集め、一誠はリヴェリア達を集めて話しを聞く姿勢に入る。

「理知を備えるモンスター……リド達と私が接触したのは、十五

年、いや十六年ほど前のことか」

当時、ウラノスと深い繋がりがあつた〔ファミリア〕の冒険者達が彼等を捕獲した。派閥内には徹底した緘口令が敷かれ、リド達の情報がおラリオに出回るとは防げた。彼の〔ファミリア〕は消滅し、現在はもう存在しない。そしてウラノスの神意に従い、以降フェルズが使者として彼等と関係を持つようになる。地上側との接触の開始だ。「リド達の話聞いた我々は彼等を『異端児』と呼称し、同盟の共同体が作られた」

「共同体、ですか？」

「ああ。ダンジョン内で生まれた『異端児』を保護する、彼等の言う同胞達による組織だ」

アスナにフェルズが返答し、リザードマン 蜥蜴人が言葉を引き継ぐ。

「こういう未開拓領域しよに居座つては移動してるんだ。新しい同胞がないか探しながらよ」

活動の中心は大体『下層』域が中心だとそこまで述べると、何かを考えていた一誠が疑問を挟む。

「この広まつてモンスターは産まれないのか？」

「お、気付いていたのか、イツセー」

リザードマン 蜥蜴人は濃緑の石英クオーツが生える広間を見渡した。

「こんな場所……イツセー達が安全階層セーフティポイントと呼んでるところが、他にもいくつがあるんだ」

「マジで？」

「冒険者達にも勿論見つかつてねえ。オレっち達は『隠れ里』って呼んでる」

喫驚する一誠達を他所に、『異端児』は説明続けた。自分達しか知り得ない『未開拓領域』——『異端児の隠れ里』を駆使し、拠点とすることで、中層域から深層域まで移動して、同胞探しを行っている。まさに、モンスター達による共同体、『旅団』だ。

「今いる『異端児』が五十体ほど……増減を繰り返しているが、その中でもリドやレイ、グロスが『異端児』の最初期からの構成員だ」「リドとレイとグロス？」

後に^{リザードマン}蜥蜴人と^{セイレーン}歌人鳥に^{ガールゴイル}石竜のことだと説明された。

『^{ゼノス}異端児』の集団……フェルズとウラノスはリド達を知っているけどギルド全体は知らないんだな?」

「そうだ。知られたら間違いなく非難の嵐が殺到するだろう。オラリオを創設したウラノスといえどもな」

「それでも、今の立場を覆す危険を承知の上で今まで接触、協力してきたんだよな?そこまですてお前等は何を考えて、リド達は何を望み、求めている?」

何も知らないアスナ達の為に改めて聞かせたい為に質問をした。モンスターとの共存はできなくないと自分が言った言葉とフェルズとウラノスりの会話のやり取りを、思いだしながら。あの一件で一誠達はここまで案内され、リド達と会合の機会を与えられたのだから。「リド達は人と『^{ゼノス}異端児』との共存を望んでいる。私達はそれを手伝う一縷の架け橋だ」

『なっ……』

怪物が人類と地上で共存を謳う。一誠以外の面々の表情は驚きの一色で滲み浮かんでいた。そんな、馬鹿な話はあるかと喉の奥からその言葉が出そうになるもの、既に異なるが共存をして愛し合っている自分達は否定や拒絶の言葉を放つことができなかつた。頭で否定しても心では肯定も否定もできず何とも歯痒く苦悩に似た葛藤を覚える。

「もしかして、俺達は期待されているのか?」

と思いがりもいところな発言をフェルズに向けたら、

「——ああ」

ハッキリと頷いたフェルズ。

「イツセー、君の話を聞いて確信した。オラリオに存在する住人達とは根本的に違うと。異世界から、異種族と共存していた君だからこそ、難しいが出来ると言う言葉が出てきたんだろう。だからこそ、初めて会わせたレットを抵抗も無しに触れることができたんだろう」

白骨化した手を被せているであろう手袋^{グローブ}を外し、本当に白い骨の手を覗かせたフェルズが一誠に握手を求めた。

「私達と協力して欲しい。君の力が必要だ。彼等の夢——地上進出を叶えるために」

「……」

その手を無言で見つめ、頭の中で今後の事を考えた上で……あつさりとフェルズの手を掴み、握手に応じた。

「了解了解。未到達階層を突破するより、やり甲斐と楽しそうだ。『ファミリア』としては無理だけど、個人的には喜んで協力しよう」

満面の笑みを浮かべる一誠。

「——ああ、よろしく頼む」

顔の表情が分からないが、きつと嬉しく笑んでいるだろうフェルズ。

「イツセー、少し質問をいいか」

改まった風にフェルズは手袋を嵌めながら一誠に尋ねた。

「君達が騎空艇で向かう『空の世界』にも『異端児』のようなモンスターは存在しているか？」

「観光旅行気分で島をいくつか訪れているが、一匹だけ確認している。しかも小さな島であるけどその島に住む住人達との関係は良好で一緒に住んでるし」

そんなこと教えてもよいのかという視線が一誠に集中するが当の本人は問題ないと受け流し、ざわめく『異端児』達を見守る。

「いるのか……空の世界にも。それに共存もしているとは驚きだ。地上と空の世界の違いだからか」

「あ、あの地上のお方！そこに私達を連れていけませんでしょうか!?」

半人半鳥が目をキラキラ輝かせて乞うてきた。予想通りの反応だと一誠は力強く頷いた。

「船には載せられないが、別の方法なら連れていける」

その返答にすかさずフェルズが疑問をぶつけた。

「どうやってだ？船でなければ辿りつけない世界だと思っている。それに今の君は忙しい筈では？」

「まあ、今は大丈夫だ。後日直接連れてってやるよ。オラリオから遠

く離れた場所の地上に出て来て貰ってな。それとも明朝にでもなつたら行きたいか？」

と訊けば『異端児』達はそんなことができるのか!と驚くも憧れの地上に行けるならば是非ともと言う思いで頷いたり鳴いたりした。上々な反応を一瞥してシャクテイにも誘いの言葉を放った。前々から連れて行こうかと誘いの約束をしていたのでこの機に連れていくべきだろうと思つて。

「シャクテイ、お前も来るか？」

「ああ……そうさせてもらう。だが、大丈夫なのかそんなことをして」

「大丈夫さ。俺はできないことを口にしない主義だ。期待を裏切る真似は絶対にしない」

不敵の笑みを浮かべ、一誠はフェルズ達と約束を交わしてアスナ達と共に未開拓領域を後にした。

「なあ、フェルズ……本当にオレっち達は地上に出られて空の世界にいる『異端児』がいる島で人間達と仲良くできっかな」

「イツセーを介してであれば可能だと私は信じているよ」

「ああ、そうだな。オレっちも信じてみよう」

……
……
……

オラリオから遙か遠く、人里がない場所。空が薄らと白みを帯びて明るく成り掛けている明朝の時間。空の世界に行く影の者達が集っていた。まだ眠っている時間帯の為に多くの者達は眠たげに眼をしょぼしょぼしている。

「ん……頃合いか」

そう呟く真紅の長髪の男の目の前に空間がポツカリと穴が開いて、どこかの濃緑色に照らされてる洞窟と繋がり穴の向こうからゾロゾロと大小・様々な種族のモンスターが地上の地面を踏みしめながら出

「L.V. に関係なく強い理由が分からされたわ。だけどそれ以上に……私達は空だけの世界に行ける。私の大好きな空にイツーが連れて行ってくれる。それが溜まらず嬉しいわ」

何時か空を飛んでみたいと言っていた知己アリーゼの言葉を思い出し、空へ目指す巨大な真紅龍に目を向けて、そうですと相槌を打った。しばらく空の旅が続いた後、ドラゴンが分厚い雲を見つけてそこへ速度を上げて自身を覆う結界を張った直後に飛び込んだ。とても暗く何も見えない中、まるで奈落の底にいるのではないかと光源すらない雲の中をどんどん進む龍と一緒に眼前を見続ける。暗闇だらけの雲の中は分厚く崖のように聳え立って一行を取り囲む。何時しか自分達を押し潰すんじゃないかと思うほど錯覚してしまいそうになるが、不意に景色が一変する。一誠が雲を突き抜け、再び蒼穹の空へと飛び出したのだ。そして薄らと最初は石ころのように見えただけは段々近づくにつれ大きく、空に浮かぶ島として見受けられるようになった。初めて空の世界に来た神と冒険者、モンスター達は愕然で眼を見開く。空に島が浮かんでいるなど見たことも聞いたこともない。既に経験した者は未経験者の反応を見て懐かしむような目で見てた。崖の横を飛び、越えれば自然の森に草原の中に小さな村が皆の視界に入る。当然、空を見上げれば巨大な怪物がいることを村の人々は気付き手の空にいてる者だけ出迎えにやってくる。

「空の世界に子供がいるなんて……」
「うちらも驚いたでー？今はすっかり馴染んでしもうたわ」

ゆつくりと草原に降り立ち、手の平から全員を下ろす。そして人型に戻る一誠のもとに村の住民や翼を生やす小さなモンスターが。

「おおいー！久しぶりだなあー！」

「お久しぶりです、皆さん！」

「おう、久しぶりだなビィとジータ。しばらく見ない間、ジータだけは大きくなったな。ビィはまだトカゲみたいだな」

「オイラはトカゲじゃねー！」

何時もの調子で交流するその光景を「アストレア・ファミリア」は言葉を失い、空の世界にいる理知を備えるモンスターを見た『異端児』

は物凄く凝視する。

「なあおい。今日は騎空艇で来なくてモンスターを連れてきたのかよ」

「今回は理由があつてな。お前と同じ人の言葉が分かるモンスターを連れて来たんだ。仲良くしてくれれば友達になつてくれるぞ」

「地上の世界のモンスターですか？ 凄いい、こんなにたくさんいるんですねー！」

感激するジータの様子を見て小怪物のレットゴブリンを呼び、対峙させる。

「こいつはゴブリンのレットつて言うんだ」

「え、地上の世界のゴブリンはこんなに可愛いんですか？」

「見た目、全然違うだろ？」

はい、と素直に頷き手を差し出す。

「私、ジータつて言うの。よろしくね。こっちはビィ、私の友達」

「よろしくなー！」

「レットと申します。こちらこそ、よろしくお願いします」

双方握手を交わして親交を築いた。

「手の空いている人は地上のモンスターと接して下さい。手伝ってほしい人は遠慮なく声を掛けてください」

一誠を介して空の世界の、島の住民達はジータと地上のモンスターの様子を見てビィのように受け入れて『異端児ゼノス』に話しかけて言葉を交わそうとし出す。結果を言えば、ビィの仲間が遊びに来たという感覚であつさりと歓迎された。小さなモンスター達は子供と遊び始め、中型のモンスターは作業の手伝いへ、大型は子供達に遊ばれる。

「・・・地上では困難を極まるはずのものが、ここでは普通にできちゃってる」

「ま、この村にはモンスターなんて殆どいない田舎みたいなものだ。モンスターは危険だとわかってているが、友好的なモンスターだったらビィを介して接すればあんな感じだわ」

何とも言えないフェルズから背を向け、さてと、と一誠はジータに話しかける。

「今日は他の島に行かないが、代わりに稽古でもしてやろうか？」

「はい、お願いします！」

木製の剣を手渡されてやる気が満ちた声と顔のジータは、金髪をなびかせながら体力が続く限り稽古をしてもらった。その途中、自分もしたいと参加するアイズ達ともして何時しか乱戦に勃発。魔法まで交えて防壁を張った結界の中でやらねばならない事態になつてしまった。

その日の夜は——宴会になつた。人と怪物が輪を組んで飲食を楽しみ、歌人鳥^{セイレン}が奏でる歌に村の人々は耳を傾けて魅了する。歌うモンスターに『異端児』側が村の人達を踊りに誘つて楽しげに舞うとどこからともなく笑い声が聞こえるようになり、人と怪物の友愛が空の世界で果たされた瞬間をフェルズはジツと見守り続けた。

「……彼等にとつてここが楽園なのだな」

「地上でもかなり長い目を見ればいつしかこんな光景を見れるようになるさ」

「ああ……そうかもしれない。だが、今はこの光景をウラノスにも見せたかつたな」

「できるぞ？」と指を弾き真上の空間に穴を作り、ギルドの地下神殿に直接繋がれた。ロキ達に気付かれずにウラノスも観覧させる。『異端児』達がどの場所の村にいるのかわからないが、人間と友愛を築いているところを目の当たりにして蒼い瞳がジツと果たしたかつた神意の先の光景をフェルズのように見守つた。

「イツセー、何時かここに件の転移の装置を作ってもらえないだろうか。リド達が喜ぶ」

「今直ぐじゃなければ必ず作つてやるよ。そんな物を作れば冒険者も生存率が高まるだろうしな」

それが後に、冒険者達にとつてとてもありがたい必要不可欠な道具^{アイテム}として重宝されるようになるのだった。

冒険譚22

『フリーダム・バカンスルーム』を利用してアスフィは、一心不乱に作業をしている一誠を見つけた。一体何時間作っていたのか男の肩まで積み木のように積み上げられた何かが出来上がっていて手元の物が完成したのか雑に放り投げて積み上がっている物の一部としてカラッと音が鳴った。

「……イツセイさん？」

「なんだ」

「その山の様な物は何ですか？」

「危機一髪緊急脱出棒」

名前のセンスはともかく、名前からしてまた冒険者向きの道具を作っているようだった。

「どうやって使う物なんですか？」

「折るだけでダンジョンから地上まで脱出できる」

それは便利ですね、と口にせずにはいられなかった。男の傍により、完成したと思われる棒を手にする。緑色の棒の表面に刻印が施されており、これを折るだけで地上に一気に戻れるならば手頃だと感嘆の念を抱く。

『怪物捕獲球』の方はもうよろしいので？」

「うんや、よろしくない。【ガネーシャ・ファミリア】から大量発注された。千個もな」

「お、多いですね……」

「だから人海戦術、魔法で作った分身体で作ってもらっている最中だ」それは別の作業部屋で今現在もしている、と教えられた。百人も作り出したので一人十個も作り上げれば直ぐにノルマは達成できる。その前に必要な材料と道具を揃えるのがひと苦労だったと心中溜息をこぼす。

「アスフィは？事務的な作業をする感じじゃなさそうだな」

「ええ、新たな魔道具の発想が思い立ったので作業をしに、あと自分の時間が少々欲しくて」

主神の無茶ぶりに振り回されて心労が絶えないご様子の美姫にちよつぱり同情する一誠だった。

「自分の時間ってことは、ここで寝るつもりでもいるってことでいいか？」

「え？はい、そうですね。それも視野に入れてはいますが」

どうして？と不思議そうに思うアスフィに一誠は立ち上がった数時間座りっぱなしで間接という関節を鳴らして身体もほぐした後は少女がある場所へと案内した。

「ここ数日ここに籠りっぱなしだから俺も眠たくてな。どうせなら一緒に寝ようぜ」

「へっ!？」

ただ一緒に寝るだけなら主神や団員達と経験はしてるために抵抗は感じないが、他派閥の団員で二人きりという環境は体験したことなく、素っ頓狂に驚いてしまった。断ろうと口を開いたところで寝室に入っていたのでできず、一誠に引っ張られる形で天蓋付きのベッドに横たわらされた。

「あ、あの・・・まだ眠るのは大丈夫なので」

「一人だけ寝るのは少々人肌が恋しくなってしまうんだ。悪いけど少しだけ付き合ってくれ」

他の景色と遮断する幕でベッドの中心にいる二人の視界が真っ暗になった直後。横や天井が満天の星屑のように輝きを見せてアスフィの視線を奪った。まるで外で野宿しているような感覚を覚え、

「綺麗」とこぼした。

「だろ？力を入れて作った魔道具だ」マジックアイテム

「このベッドもそうだったのですか？」

それは驚きだ。一体どこまで自分の発想を上回り常識はずれな物を作り続けるんだろうかと、自分の体を抱きしめ眼鏡を外されてから顔を胸に押し付けられてしまい彼女の思考が完全に停止した。

「んじゃ、しばらくおやすみ」

「~~~~~」

羞恥心で顔が熱く真っ赤になったのを自覚する。周りが暗くて相

手に己の顔を見られずに良かったと思うも、誰かに抱きしめられながら寝られるのは両親以外初めての体験で、これでは寝るに寝られず、抜けるに抜けられないとしばらく緊張と羞恥で苛まれ——ることではなく、一分後経った頃にはアスフィも眼を瞑って一誠の足に両足を絡めて夢の中へ旅立ったのだった。

『危機一髪緊急脱出棒』という道具が『異世界食堂』のみに販売されるようになった。飲食店に奇妙な物が売られ始めた頃には常連客達は揃って首を捻った。

「店主、この棒は何だ？」

「名前の通りの棒だ。ダンジョンのどの階層からでも棒を折るだけで地上に戻る、俺の新しい魔道具だよ」

「おいおい、そんな便利な道具が本当に作れたのか？ただ便利そうな名前だけの棒を売ってるだけじゃないのかよ？」

「何度も実験した上で完成品を販売してるんだ。気になるなら試しに使ってみるか？」

結果は見えてる、と不敵に試させる店主から怪訝な顔で受け取り……後日冒険者は『キラアアント』の群れに囲まれた自分を仲間に見捨てられ、とうとう窮地に立たされた時に渡された棒を思い出した。頼れるのはこれだけだと手にして、人生の全てを棒に懸けて折った。次の瞬間、シユンツ！とキラアアントの群れとダンジョンの景色が中央広場に一変して、自分のみに起きた変化に信じられないと折った棒を見つめた。まさに九死に一生を得たのだと実感したのはその後すぐ。

「こいつはすげえ……この棒に俺は救われたんだっ」

店主ありがとうーっ！と心から感謝の叫びをした。そんな体験談を聞いた他の冒険者達は「そんな都合がいいことがあるかよ」と鼻で笑い、「なら、試してみろ」と店主から例の棒を渡され、実際に冷やかすつもりで試してみたらあら不思議。ダンジョンから一気に地上へ戻れました！信じられなかった気持ち信じられるようになって、この棒があればどんな窮地に立たされたとしても生きて脱出できると、『危機一髪緊急脱出棒』を買い求める声が増えていくようになった。あの

最大派閥や巨大派閥も大量にその棒が購入され、他の冒険者相手にも販売されるようになってからか、冒険者の死亡率がぐんと低くなつたことを誰も知らないが、結果が良ければ全て良しであった。

新たな収入源を得るようになってから生憎天候に恵まれなかつたとある天気の日。雷雲や豪雨で店に訪れる客足がぱったりと途切れ、てしまい、例外なく『異世界食堂』も暇を持って余していた。

「うーん、こりや臨時休業するしかないな」

「ここまで客が来ないなんて珍しいもんさね」

表に出て外の様子を見る店主とミアを他所に裏の方では従業員達がキッチンから離れ、休憩場でボードゲームやトランプ、雑談などをしてのんびりと寛いでいた。もうしばらく様子を見てみようと思ふと裏に赴く。どこの店もそんな状態であれば冒険者も今回ばかりは探索活動を休まざる終えなく、理由もなければ外へ出向かない中。

「……なんでこうなるんだ」

暇を持って余す神々が『幽玄の白天城』に集合してワイワイと朝から酒盛りをしていた。団員達を背後に立たせて自分達は賑やかに騒いで楽しんでるのに、酒気の匂いが漂うリビングキッチンに顔を顰めて渋々料理を作っている最中に卓を囲む神々から声がかかった。

「ほれイツセー。じゃんじゃん酒とつまみを用意するんやー！今日は思う存分——！」

「人ん家を一体何だと思ってるんだ……？朝っぱから酒盛りしてよお、一体誰が片付けると思っている……あ……あ……？」

「ヒツ!？」

ドラゴンの睨みに怯え気持ちまで委縮してしまう。

「こっちはやりたいことがあるのに酒盛りに付き合わされて……店ですればいいだろうが店で。今でも開いて客を待っているんだぞ」「えっと、ほら？外は凄い雨だし……」

「んじゃ、酒盛りに飲食した料金をこの場で払ってもらおうか？現金一括払いだ。今使ってる食材や酒はタダじゃないんだからな」

「マジでっ!？」

嫌なら帰れ、と睥睨する一誠にフレイヤを除くロキ達は泣く泣く支払う。

「つて、何でフレイヤから金取らないんや」

「主神だから」

「当然でしょう？ 私の子なんだから」

二人の言い分に何か納得できへん！と不満なロキに気にせず空になった食器類を片す。腕輪の能力で自分のホームに転移できるから雨に濡れることはないが、神の天敵は「退屈な時間」故に遊べて楽しめる場所があると知れば子供のように全力で来たがる。一誠の城がまさにソレなのでロキ達は今帰ってもホームの中は退屈なだけでまだ帰りたくないのだった。

「ところでなにをやりたかったのかしら？」

「退屈そうにしている春姫達と遊んでやろうと思っていたんだよ」

「具体的には？」

そう指摘を受けるとしばらく悩み……元の世界で何時も暇だった時に何をしていたのかを思い出して決めた。

「旦那様、これなんなん？」

春姫、ユエル、ソシエ、アイズとアリサにラトラ、そしてカサンドラを自室に呼んだ。彼女等は壁際に黒く薄っぺらく見える板のような物を大きな台の上に乗せ、その前に跪いて何かをしている一誠に不思議そうに見ていた。

「これはテレビって言うんだ」

「てれび？」

「そうだなー。何て言えばいいだろうか。この中にありとあらゆる映像を映す魔道具マジックアイテムみたいなものだ。ま、口で言ってもピンとこないしわからないだろう？ 見て感覚的にわかってくれ」

よもや『ネットスパー』でテレビやビデオ、DVDを買う事になろうとは思いつかなかった自分にこの特典を頼っているなど転生の神に感謝する。次の食事は少し豪華にしてやろうと思いつながら準備をする。

「翻訳の道具を持って来てるな？」

「は、はい。でもどうして必要なんですか？」

「これから聞く言葉は異世界の言葉だ。だからお前等が異世界の言葉をわかるかどうか怪しいんだ」

「そうなんだ」

最初は付けずに見てもらおう事になっている。それから皆に理解できたか聞いてわかるならばそのまま、わからないなら付けてもらって見聞してもらうしかない。まさかこんなところでも活用するとは思ってもせずアルガナ達の存在に感謝した。

「それじゃ、始めるぞ」

準備を整えた一誠はテレビから離れて床に座っている少女達の後ろに座り、リモコンで電源を入れてアイズ達にテレビとはなんたるかを示した。暗かった画面が光を灯し、色鮮やかな絵画と共に音楽が聞こえます。そして物語の主人公達が意思を持って自由に動き出し、アイズ達に生活の一部始終を見せた。

「な、なんやこれー!？」

「す、すごい……これが、テレビ……」

獣人の少女達は耳と尻尾をピーンと立て、興奮気味でテレビに釘付け。ヒューマンの少女達もテレビから眼が離れないといった感じで凝視していた。

「で、何て言っているかわかるか？」

「「「「わからない」」」」」

だよなー、と思つて翻訳の道具をつけてもらつて改めて最初から見てもらえば、「あ、わかる!」との声が漏れた。翻訳道具、役に立っている。それからこの物語を見て春姫がポツリと呟いた。

「まるで雪白姫様の話と似てる……」

「ふーん?俺の世界じゃあ、これは白雪姫つて童話の話だ。他の童話やお釈迦をテレビの中の映像として見れるように俺の世界では作っているんだ」

期待に満ちた翡翠の瞳を向けてくる幼き少女に頷いた。

「旦那様の世界の童話……で、では……他にも見られますか?お釈迦や童話のお話を」

「ああ、あるぞ」

「わあー」

尻尾を振って感動の声を上げる春姫に「春姫、ちよつと黙っててや」と真剣にテレビを見ているユエルから注意された。ごめんなさいと謝ってテレビに向き直り静かに観覧する姿勢に戻る。一誠も懐かしむ目で静かにテレビを見続ける。

——数十分後。

童話の話はハッピーエンドで終わりを迎え、全部見終えた少女達の反応は凄く高評価だった。見て読む話ではなく、音楽や肉声も聞いて見る話の方がとても新鮮だったと。特に狐人^{ルナール}の少女達は楽しんでた

「旦那様、他にもこういうもんはあるん？」

「他のも見たいか？」

「はい、見たいですっ」

「んじゃあ、次はお椀ぐらいの大きさの人間が鬼を倒す物語りでも見るか」

「わあ、その物語知っております！旦那様の世界の他の童話やお釈迦のビデオ、もつと見てみたいです！」

それからというもの、休憩を挟みながらも一同はテレビの前に独占をして、ずっとビデオやDVDを見て知っている物語りと異なるが、それを比較しながらも楽しんだのだった。

—+—+—+—

ずっと雨で結局いつもの常連客すら殆どこなく、閑古鳥が鳴く一歩手前で店は閉店の時間を迎えた。雨の中でも来てくれた客達には世界の道具、傘の使い方や注意を教えつつ提供した。感嘆の息をもらし、雨粒が傘に当たって鳴る音を聞きながら帰る客を見送る。厨房の方へ振り向き、作りおきしていた食材やスープに懸念する。

「作った料理が思いの外、残っちゃったな。特にスープが勿体ない」

「そこは神楽の出番だ。あいつの腹はブラックホールだからあつという間に完食してくれる」

「残飯にするつもりはないけど、まあ、今日も頼りにさせてもらおうか

な」

残った料理が神楽の腹の中に収まる光景はもう見慣れた。都合のいい残飯処理係の存在にはありがたく、これからも頼りにさせてもらうつもりで片付けに入る。

カランカランっ！

「失礼しますよ店主」

営業時間が終わった直後に招かざる客がやってきた。雨具を身に包み滴り落ちる雫が床を濡らして堂々と佇む『バツカスホーフ商会』。「客じゃないなら今すぐにでも帰ってもらえるか。もう閉店なんだからよ」

「三大商会の後ろ盾がある者の態度は大きいですね。相手を見下せてさぞ楽しいでしょう？ 私などの一商会の相手をする暇もないと言っているのですからね」

「そんな性格だから何時までも自分の商会が停滞気味なんだよ。しかもここ最近、どこぞの馬の骨も知らないたった一人の商人に随分と苦戦中だって聞いたぞ。俺なんか構っている暇があれば自分の商会を守った方がいいんじゃないか？」

店主しか手に入らない超希少な品々を抱え、商人としての手腕に今まで蓄えていた財力は、巨大商会を食らいつく勢いで勢力や他の商会や商人達を手中に納めているのがマキャベリなのだ。まあ、マキャベリも店主の協力なしでは短期間で自分の商会を大きく立ち上げることは出来なかったかも知れない。

「ふんっ！ あんな女にひざまずく甘い蜜を啜るだけしか能がない弱小商会などいなくても、私には何の影響もないですよ」

それよりも、とバツカスホーフは話題を変える。

「件の話は考えたくらましましたかねえ？」

「件の？・・・ああ、料理対決のことか」

今思い出したとばかりな反応をする。あれ、本気でするつもりだったのかと首を捻った。

「ええ、そうです。こちらは大会に出場する選手の選別を整えました。後はここ西区の料理人だけが参加の出場待ちなのですよ」

「その出場する参加資格は何なんだ？」

「この私自ら見初めた料理人だけが参加を認めています。つまり店主も参加の資格はあるということなのですよ」

「こんな男に見初められるのは嫌だなー。と嫌な顔を心の中で浮かべる。」

「大会のルール、というか審査は？」

「気になるなら参加をすることですなえ」

「意地悪く、焦らして大会の参加を催促する商人の『駆け引き』に呆れで肩をすくめる店主。」

「あつそ、じゃあ興味ないから参加しない。じゃあな」

踵返す店主に面を食らって、バツカスホーフは焦燥感に駆られて言ってしまった。

「審査には人、神、そしてギルド長によつて四つの区画から選り抜きされた料理人の料理をどれが一番の美味であるか決めます！」

「その審査する人と神は誰なんだ？まさか、多額の金を積ませた自分の思い通りにしてもらおう連中じゃないだろうな」

不正な審査は認められない。その一点を協調かつ、したらお前の商會を潰すぞと無言の睨みと威圧、更には二人の会話を聞いていたミア達も目を細め、「こいつならやりかねない」と警戒している。バツカスホーフは頬を痙攣させて、戦くも言う。

「店主は知っているかわかりませんが、オラリオ外で美食を主に活動する【ファミリア】が存在します。その【ファミリア】に審査をしてみらう予定なんです。既にコンタクトを取ってこちらに来てもらっている最中ですよ」

「そいつらは何時ここに？」

「随分と前から頼みましたからね。三日後にはたどり着くでしょう。それからその日の内に料理対決を始めますよ」

「接点はあるが、金に釣られるような【ファミリア】ではないかもしれない。ただ、本当に実在している派閥なのか、成りすましている派閥なのかもしれない考慮をしながら「勝者には何を約束される？」と店主が尋ねると。」

「オラリオ一の名声、これだけですよ？」

くくく、と笑うバツカスホーフは凄く怪しいと警戒する。

「そうか、なら、参加してやってもいい」

「そうですか。それはよか——」

不敵に笑み、言質を取って満足そうに言いかけた時。店主の影から八ツ俣の大蛇がヌツと出てきてバツカスホーフの体に絡み付き牙を見せ付ける。何故店主の影から蛇が出てくるのか疑問と焦りで混乱する暇もなく怯えきる。他の従業員達は見えないのか、店主が顔を近づけているだけしか目に入っていない様子だった。

「だが、一瞬でも不正が発覚したら……どうなるかわかってるだろうなあ？」

「ヒツ……!?!」

至近距離で縦に割れた瞳孔に睨まれ、低い声で念を押される。

「いいな？」

「わ、わかりましたっ……!」

蛇から解放され、この場から早く逃げたい一心でバツカスホーフは店主に背中を向けて走り去った。残された従業員達は向き合う。

「店主、いいのかい？企んでる顔だったよあの商人」

「別にいいさ。何を企んでるかは知らないが、俺には頼れる家族がいるから問題はない」

自分達のことだと口に言わずとも分かり、従業員達は笑みを浮かべる。

「もしも優勝したらお客さんがいっぱいきますね」

「しよーじき、名声なんて興味ない。でも、この店とお前らと頂点に立ってみるのも悪くないと思ってる」

「ニアー！・ミヤー達の料理の実力をみせてやるニャアー！」

「おミヤーじゃなくて店主とメイ達の実力を求められているニャ。アーニヤが作った料理でしたら直ぐに負けてお仕舞いになるニャア」

アーニヤの勇ましい発言に、呆れ混じりのため息と一緒にクロエがぼやくので、ニアにおうー！と食って掛かり二匹の猫がニャアーニャアー！と五月蠅く喧騒を醸し出す。

「それでどんな料理を作るんだい」

「さあ、ルールが分からんから作りかねるな。一応、どんな料理でも作れるよう整えておこう」

キャットピープル
猫 人のメイを抱き締めながら猫耳を弄くりつつそう言う店主。

「頑張りましょう店主」

「ああ、そうだな」

料理対決に臨む『異世界食堂』はその日まで変わらない日々を暮らす。そして、数日後その日がやってきた。東西南北、それぞれの区画に在る料理店や酒場の中で選り抜きされた四人の料理人達が待つ店へと審査員や今回の催しの開催者と足を運んでいた。

「美食神様、わざわざ自ら出向かずとも料理人に料理を運んで貰えればよいのではないのですか？」

「私の拘りというやつさ。料理人が構える店を見て料理を客の顔を見ながら食べたいのだ」

遠方からやってきた「ファミリア」。『バツカスホーフ商会』から以来の形で誘われ、オラリオの料理はどんなものか見定める意味も含めて応じた、軽装の旅人服に顴広帽子の格好で長い黒髪を一つに結った男神の隣に侍従しているヒューマンの男性。ロイマンの指摘に美食神は自分の気持ちをぶつける。

「時にギルド長、お前の中でどの料理人が期待できる？」

「そうですね。今話題なのは、オラリオで有名なのは『異世界食堂』と言う店の店主かと。私も食べたことにはないですが、異世界の料理を振る舞う店なのです」

「……異世界の料理」

どんな料理を作る料理人なのか想像がつかない。異世界の料理の未知の味もどんなものなのか好奇心がわく。

「なら、最後の楽しみとしてその店は最後にしておこう。まずは東で一番の美味という料理店からだ」

「わかりました。ではご案内いたしますよ。こちらですよ」

バツカスホーフの案内で東から北、南と順に店へ足を運びそこで食事をする。承認が選抜した料理人の店はどれも高級食材を扱う高級

だ。

「いや、異世界の料理を食べてみたい」

「な……」

「先ほど戦っていた者達の中には店の中に戻っていった。きっと客達なのだろう。店のために戦うということはそれほどあの店を愛しているという証拠だ。これは中々どうして……」

微笑みを浮かべる美食神は眷属を引き連れて『異世界食堂』へ足を運んだ。一拍遅れてギルド長も続き、残されたバツカスホーフは苦い顔を浮かべた後で歩き出す。

「いらっしやいませー!」

先の争いがなかったように、冷房が効いた環境の中で酒と料理を飲食して笑みを浮かべる客達の喧騒とどこからか聞こえてくる音楽に従業員の笑顔に出迎えられた。今まで訪れた高級店にはなかった光景だ。

「ここが『異世界食堂』かな?」

「はい、そうです。とっても美味しいお料理とお酒をお出しできますよ」

「では私達が座れる席へ案内してほしい」

かしこまりました、と四人が座れる席へ案内する従業員は奥の席へ座らせると分厚い本のメニューを教えて離れた。

「随分と分厚い本だ……これがメニューだと?」

「どれだけの料理が詰まって……」

開いてメニューを見てみると、料理の名前と使っている食材と調味料等が記されていた。調理法は書かれていなかったがこれはこれで目を惹かせるものがある。美食を生業とする「ファミリア」にとってこれはとても金には代えられない貴重な情報でもあったのだ。なんだこれは、著作物侵害をされてもいいのかこの店は?」

「主神様。私達はどうかやらとんでもないものと巡り合ったようです」

「そのようだな……この店で一番人気の料理はどれなのか気になるところだ」

そんな呟きをこぼした男神の声に隣の席に座っていた客達が話し

かけてきた。

「この店で一番美味しい飯は暑い夏でも食欲をそそらせるカレーだぜ！」

「カレーはカレーでもハヤシライスも美味しいわよ」

「野菜カレーも美味しいぞ。肉を好まない者にとって素晴らしい料理だ」

「魚介をふんだんに使ったカレーもね！」

これがお薦め！と言ってくる客達に耳を傾けたところで別の席に座っていた客達が異を唱える声も聞こえた。

「何を言っている。こんな暑い日だからこそ冷たい料理が一番美味しいじゃないか。特にこの冷やし中華は今の季節にピッタリな料理だぞ」

「蕎麦も絶品だ！」

「素麺もまた美味しいわあ」

そこで便乗するようにして挙手する別の客達。

「冷たい料理ならばデザートも忘れないでくださいな。ただ冷たいだけじゃなくて甘かったり甘酸っぱさも暑い夏を乗り越えるために糖分も必要だとこのメニューの本に書かれてありますからね」

「同意！このプリンという甘露こそが甘さの真骨頂と言えよう！」

「あら、それがデザートの様みたいな風に言わないでくれるかしら？見てこの宝石が詰まったようなパフェを。見た目も味もプリンアラモードには後れを取ってないわよ」

「食べ歩きができるクレープも美味しいです」

なんの！と立ち上がって高々と料理を掲げる客も声を上げた。

「食べ歩きができるこのハンバーガーこそ何度食べようと飽きさせない絶妙な味わいで素晴らしい！」

「ソースを濃い目の焼きそばを挟んだパンも美味しいがな」

「それならカツサンドのほうがいいぜ。なんとたつてボリューム感がハンパなくてすぐに腹が膨れるんだからたまらんぜ」

「エビカツサンドもいいですけどね」

と、自分の好みの料理がこの店の一番という話が、自分の好みの料

理を自賛する話に変わった上に他の客達にまで伝播してしまい、いつしか激しい主張やこれだけは譲れないと客同士が睨み合いして一触即発の状況となってしまった。半ば蚊帳の外に置いてけぼりにされた男神達はこの状況に啞然としてしまい、成り行きを見守る姿勢になるほかなかった時だった。

「店中で迷惑行為をする客は一生出禁にするぞ!!!」

「「「「「「「「「「」」」」」」」」」

店主の鶴の一声で客達が一斉に座ったり黙り込んだりした。お気に入りのお店が入れなくなるなど生殺しのどころではない。入れなくなってしまうた店の前を通るたびに後悔の念が抱いて泣きたくなりそうになる。その未来を想像するまでもないと出禁の回避に全力で専念する客達だったのだ。

「気持ちにはわかるが、それは自分の中に仕舞って食事を楽しんでくれると俺は嬉しい。それでも美味しいんだとわかってほしいならば、お互い食べさせ合うことが大切だ。その方がもっと美味しく感じて新たな出会いが巡り合うかもしれないぞ」

大人しくなった客達に向かつて提案をする店主の言葉に、その手があったかと自分の好みの料理の味を知ってもらいたい客達が自発的に行動を移した結果。試食会が始まってそれに美食神達も交ぜさせてもらって試食をするのであった。

「.....」

異世界の料理の数々を試食し、他の高級店にはなかった『分け合い』というものを美食神と眷属は目線で会話をし、ギルド長とバツカスホーフへ近づく。

「バツカスホーフよ。審査は終わった。私達はこの『異世界食堂』こそがオラリオで一番の店だと認定させてもらおう」

「な、何故ですか。確かにこの店も美味であることは認めておりますが決して高級な食材を扱っているような店ではありませんよ」

「高級な店、高級な食材、高級な料理.....お前が案内してくれた三つの店とこの店の違いや決定的にないものがある。——分け合
いだ」

分け合い……？理解に苦しむ商人の顔は困惑の色で滲み浮かんでいた。

「私達は美食を、未知なる味を求め探求する活動をしている他、料理を振舞って分け合うこともしている」

周囲の客達を見回しながら言葉を紡ぐ。

「ここは美味な料理以外にも大切なものを持っている。だから私達はこの店に決めさせてもらう。ギルド長はどうだ」

訳が分からない、意味が分からないと信じられない面持ちの商人から視線をギルド長に向ける美食神。

「……今まで食べたことがない料理と未知の味は確かに美味であります。今まで食べてきた料理と比較しても新鮮と斬新的な意味でも『異世界食堂』が群を抜いていることは確かですな」

自分で頼んだ高い料理の味を堪能しているロイマンも認める。

「ですが、個人的に申させてもらいますと……もう少し静かに食べたと思いますな」

「ははは、それは仕方がない。私達は大騒ぎしながら食べることが好きであるからな。故に今の『異世界食堂』は楽しいと思わせてくれてとても心地がいいのだ」

「そうですね。楽しんでいただけで何よりです」

満一致でオラリオで一番美味しい料理を作る店は密かに『異世界食堂』という事が決定した。

「店主、おめでとう。この『異世界食堂』がオラリオ中の料理店の中で一位に認められた。美食を生業とする【ファミリア】の主神の名に懸けてこの決定は絶対だ」

「ありがとう。胸を張ってこれからも料理を振舞い続けるよ」

男神と握手を交わしロイマンから認定の賞状を受け取り——
バツカスホーフには不敵に物申す。

「なんだか悔しそうな顔をしているなあ？」

「……なんのことですかね」

「どうせ何か企んでいたんだろう？それが思い通りにならず心底苦虫を噛み潰したように苦い思いをしてるんじゃないかね？」

ホーフ商会から異世界食堂を襲う依頼を持ち掛けられた』と調べがついた。バツカスホーフ、お前も取り調べするために一時拘束させてもらおう」

「なっ……」

「ああ、小性の者達も全員引つ捕らえてある。残りはお前だけだ」

速やかに【ガネーシャ・ファミリア】に捕らえられたバツカスホーフ。後に数々の強引な取り引きや恐喝、脅しをして利益を得ていたことが明らかとなり、悪事を働いた商人として改め拘束されたことで、『バツカスホーフ商会』は建物や私財等が押収される寸前、虎視眈々と目を光らせていたマキヤベリに全てを奪われ『バツカスホーフ商会』の代わりとなる『マキヤベリ商会』として頭角を表した。

「マキヤベリ……お前えげつないな」

「商人の戦いは相手に隙を見せたら負けなのだ」

「だけど、よく全部手中に納めたな？押収されるはずだったろ」

「建物を直接我輩の名義で購入をすれば後は相続など気にせずとも手に入るものである」

「俺の世界じゃ面倒な相続権の手続きをしなくちゃいけないんだがな。本当、この世界は色々と楽だわ」

冒険譚 23

北東区画の本屋の中で新古の薬学の論文を見つけると購入する。新作の道具アイテムの開発の参考となるものを片手に店員のもとへと赴き本を購入する。買い終えると鞆の中に本を仕舞ってから本屋を後に北西のメインストリートへ向かう一誠の足が中央広場セントラルパークに差し掛かったところまでとある男神を見付けた。

「え、いい、いいんですか?」

「構わぬ。試作品ポーションの回復薬であるが、効果は高いと自負する。そなたの美しい顔に傷痕が残ってしまうと思えば心が痛くなる故、万が一の為にこれを持って傷を治すといい。怪我をしたらすぐに使うのだ」

美しい目鼻立ち。身長の高い青年の容姿は貴公子そのもの。ヒューマンとも亜デミ・ヒューマン人とも一味異なつた気品みたいなものが着ている灰色のローブの内から滲み出ている。その並外れた容姿と、何より身にまとう独特の雰囲気と共に出てくる言葉が女性冒険者の頬を赤らめさせる。

「タダで商品を上げるなんて、同じ商売をしている身としては安易にできない行為だと思ふよ」

「ん?おお、イツセーではないか!」

どこかへと去っていく女性冒険者から声を掛けられたほうへ振り返り、群青色の髪を揺らしながら破顔一笑してくる男神ミアハ。

「久しぶり。最近店に顔を出してこないから天界に送還でもされたのかと思つたよ」

「ふははっ、それはすまなかつたな。今は新しい新薬の開発で忙しいところなのだ近々食べに行かせてもらおう」

道具屋を営む「ファミリア」の新商品に興味津々で「へえ、どんなの?」と尋ねる一誠に隠すまでもないとミアハは口を滑らしてくれた。

「うむ、以前そなたがナーザに言った体力と精神力マインドを同時に回復する二属性回復薬デュアル・ポーションをな」

「ああ、あれ?本当に作ろうとしていたんだ」

「ありふれた回復薬や高等回復薬、万能薬が世に作られている中でイツセーが発想した二属性回復薬は今までにない新薬だ。開発せずにはいられないのではな」

しかし、その薬の材料や製法を模索している最中で四苦八苦しているとも教えてくれる。

「材料か。それはダンジョンで手に入るもんか？」

「いや、素材はダンジョンだけではないのだよイツセー。オラリオの外にも素材となりうる可能性が秘めてる。私達はたまに外へ赴き素材の採取をするときがあるのだ」

「へえ、それは知らなかったな。でも、モンスターもいるのに大丈夫なのか？」

「問題ない。大昔から繁殖を繰り返してきた地上のモンスター達の魔石は殆どない」

魔石が殆どない？初めて知った事実にどうということなのか教えてもらう。理由はこうだった。母胎を離れたモンスターは、本能に従い、己が種族を繁栄させるため子孫を残していった。群体への特化は個体としての力の衰退である。もともと個体としての能力を突き詰められていたモンスター達は、繁殖の方法を核にあたる『魔石』を削り子に分け与えることで補った。長い年月を経てモンスターが体内に宿す『魔石』の規模は縮小していき、その力は地上に進出した先祖より著しく低いものとなっている。

「なるほど、勉強になったよ。あとモンスターってどうやって繁栄してるんだ？」

「卵を産むのだ」

「卵？人間が食っても大丈夫なのか？」

「わからぬ。試したことがないからな。試す機会があればやってみるといい」

いろいろと教えてくれたミアハは一誠と別れ、揺れる群青色の髪と遠ざかる背中を神秘的な面持ちで見つめた後にフツと虚空に消える一誠は行動に出た。

『セオロの密林』。

オラリオからまつすぐ東に進んだ先に連なつたアルヴ山脈、その麓に広がる大森林だ。森を構成する樹木は総じて樹高がさまざま、幹も太い。野花や苔を始めとした植物も隆盛も顕著で、緑の王国なんて言葉が頭の中に浮かぶ森に虚空から一誠が現れた。次に密林の中に足を踏み入れる。モンスター^{モンスター}の気配に意識を配りつつも、森林の中の素材に使いそうな植物を見定めながら森の奥に進んでいくと、ぽつかりと開けた広々とした窪地を発見した。

「……いるな」

窪地の中に怪物がいることを探知して認識すると、『ネットスパー』で数十匹ほどの丸々太つた死んだ豚を購入する。全て尻から腹にかけて裂き、臍物を全て取り出しては腹の中を洗い出すと野太い鉄製の串に刺した。それらを魔法で持ち上げた状態のまま、魔力の火炎でこんがり焼いていくこと数分後。

『ウウウ……』

窪地の奥から他高さ五Mはある紅色の肉食恐竜、『ブラッドサウルス』が大粒の唾液をばたばたとこぼしながら歩いてきた。目の前の山積みのごちそうに目が眩み、空腹の欲求に逆らえず大顎を開いて豚の丸焼きを食べ始めた。——その隙にこつそりと窪地へ移動する。木々の生えていない空間には至るところに数十からなる『卵』の一塊があり、まさにこの場がモンスターの巣であることが知れた。せっせとモンスターの『卵』を乱獲するために魔道具^{マジックアイテム}のバックパックを亜空間から取り出して『卵』を詰めていく。十個ほど残して改めて一誠はブラッドサウルスの方を見やる。餌に夢中になつている三匹のブラッドサウルス。増えていた。伴つて己の餌を横取りする不屈き怪物に怒り、牙を剥いて同族であろうと同胞であろうと喧嘩し始める。そんな光景を見て他にもあのモンスターがいるなら、と新たな卵の採取のために怒りの咆哮を上げる肉食恐竜を他所に探し出す一誠であった。

その成果として——五十個以上の『卵』を手に入れた。

「……イツセー、これはもしかなくともモンスターの『卵』であるか？」

それらを意気揚々にオラリオへ持ち帰って「ミアハ・ファミア」の本拠地『青の薬舗』に届けた。ちょうどホームにいたミアハに『卵』を見せて啞然とさせた。どうしてこんな物を持ってきたのだろうかと思っているからだろう。

「『卵』は栄養満点だし、体力回復の回復薬にも作れるだろう?」

「確かに、その通りかもしれないが精神力を回復させる素材もなければ作れぬぞ?」

「それは『上層』から怪物の宝を集めまくって試行錯誤するしかない」
不意にミアハは素朴な疑問をぶつけた。

「手伝ってくれるのか?」

「元の世界にもない新薬だから興味あるんだー。完成したら独自でも作りたいしさらに改良してみたい」

「そうか。では、これからはそなたに冒険者依頼として請け負ってもらいたいがいいな?」

OK!と握り拳に親指だけを立てて了承する一誠はまたすぐに行動に出た。言葉通り最初は『上層』のモンスターを狩り尽くす勢いで倒してドロップアイテムを入手する。その最中で希少種の超稀な大量発生を出くわし、数十枚のドロップアイテムを入手できたのはまさしく幸運だった。

「『ブルー・パピリオの翅』がこんなにたくさん・・・イツセーさん、凄く運がいいんだね」

「ふむ、この翅ならば試してみる価値がある。完成できるやもしれぬな。ありがとうイツセー」

大量の青い翅を見て犬シアンスロープ人の尻尾がぶんぶんと揺れている。触りたいという欲求に負けてぎゅっと抱きしめ、獣人の少女の垂れた耳を触れたり尻尾をモフモフして一誠に感謝の念を伝えるミアハ。

「取り合えず手始めにやってみようぜ。『調査』の発展アビリティはなけれど、『神秘』の発展アビリティが一時的に発現できるから役に立てると思う」

「それは凄いいではないか。よし、それでは新薬の開発を試みよう」

「頑張らしましょう。ミアハ様、イツセーさん」

こうして二属性回復薬デュアル・ポーションの開発に手を出す。「ミアハ・ファミリア」と一誠。アミッドから調合のノウハウを教えてもらっているので製薬作業をする他にミアハ達の助手を務めた。『青の薬舗』の中はとても世話しなくバタバタと動き回ったり何度も失敗したがめげずに試行錯誤して有限の時間は刻々と過ぎていく……」

「……完成だ」

感無量とこぼすミアハの顔に汗が浮かぶ。ナアーザや他の団員達も疲れ切った体で達成感を覚えて喜び数十本の試験管の中の濃紺の液体を見る。窓の外は朱色の光が差し込んで二属性回復薬デュアル・ポーションを照らす。時刻は既に夕方であることをミアハ達は気にせずに新薬に目を向けていた。微笑を浮かべて一誠はミアハに話しかけた。

「はー完成したな。お疲れ様」

「そなたの協力もあってこそ完成したものだ」

「大々的に宣伝をしたら注文が殺到するだろうな。頑張れよ」

「素材が足りなくなったらまた頼まれてくれるか。ああ、お礼の報酬がまだであつたな。受け取ってくれ」

新薬を二十本もくれた。思ったより多い報酬に首をひねる。

「こんなにかいのか?」

「新薬の発想から素材の収集までイッセーがしてくれたのだ。これでもまだ足りぬものであるが、今後ともイッセーには我が「ファミリア」の顧客として優先的に鼻負させてもらおう」

ありがたいことを言ってくれたミアハに感謝の言葉を述べ、新薬を大切に持って城へと帰宅した。

その後の「ミアハ・ファミリア」は新薬二属性回復薬デュアル・ポーションを販売したことで、今までにない回復薬ポーションとしても目新しさと効能に冒険者達はこぞって『青の薬舗』に赴き買い求めるようになった。あの「ロキ・ファミリア」からも注目されることでさらに二属性回復薬デュアル・ポーションを買い求める声と足が増え、知名度と共に人気が鰻上りである。

「二属性回復薬だとおおおおおおおっ!?おのれえい、ミアハのくせにいいいいっ!!」

「イツセーさんが絡んでいる可能性があります……教えたら面倒なことになりそうですね)」

商売敵の新薬の反響に悔し混じりで地団太を踏む主神を見ながら神妙な思いで察するアミッドだったが――さらにその^{デュアル・ポーション}二属性回復薬を改良された回復薬が^{ポーション}一誠の手によって作られたことは知らなかった。

「アミッドオツ！今すぐにミアハから^{デュアル・ポーション}二属性回復薬のレシピを調べに行くぞっ！」

「かしこまりました」

それが叶わぬことだろうとせずにはいられない主神に侍従して『青の薬舗』へ向かうアミッド。

「ミィ〜アア〜ハア〜！^{デュアル・ポーション}二属性回復薬のレシピを教えるのだ！代わりに金はいくらでも払ってやるぞっ！極貧「ファミリア」は金が欲しいだろうからなあっ！」

「うむ、断らせてもらおう」

「何いっ〜〜〜?!」

清々しい微笑と共に拒否されて信じられないと驚くデイアンケヒトを、何を当たり前なことをと呆れる犬^{シアンスローフ}人の少女は精緻な人形と彷彿させる銀髪につぶらな瞳のヒューマンの少女と目があった。

「……………(ドヤア)」

「……………」

今夜はイツセーさんに甘えよう。この獣人が癩癩を起すほどいっぱい甘えてやる。そう決意したアミッドは勝ち誇った顔をするナアーザに対して小さく口端を緩めた。

夕日に照らされて染まつてる完全に直り改築した「ロキ・ファミリア」の『黄昏の館』の中を素足で歩く女戦士の少女^{アマソネス}。目的の部屋へ真っ直ぐ歩いて辿り着いた部屋の扉を開けて開口一番。

「ねえ、アイズ達がいる場所に行きたいんだけどー」

「——で？俺の了承なしに勝手に連れてきてしまったわけなんだな
【勇者】さん？」
「すまないイツセー。それと僕の頭を拳で挟みながらねじるのはやめてもらえないかな。地味に痛いんだ」

「無断で独断でした罰だ。あと十分、この髪が抜けるまでは続ける」

金色の翼で黄金色の髪バルウムの小人族の両手足に巻き付けて逃がさない体勢で罰する。事の発端は「ミアハ・ファミリア」から戻ってきた時には珍しくフィンがいたことだった。リヴェリアに直接話をしに来たのかと思ったら、テルスキユラ闘国出身の双子——の片割れの妹がアイズ達に会いたいと懇願したからだ。フィン自身はリヴェリアと『遠征』の件で話をするつもりだったために共にやってきたままではよかつたが、城の主の了承もなく連れてきたのが本人は許せなかつた模様。今現在双子のアマゾネスは一誠の部屋にあるテレビで童話の物語を観覧中であつた。何故、ここにいいのかと言えば春姫達も同じアマゾネスのレギンとレイネルが面白い物を見せてあげると言い出したからだった。それが何かわからない双子はついていく形で、すっかり操作に慣れた少女達が自分達で準備してティオナとティオネにビデオの素晴らしさをアピールしたのだ。訪問していたフィンから二人がいることを知り、無断と独断で城に招いたことで今に至る。

「ところで、アイズ達が見ているあれは何だい？」

「テレビと言つてな。家の中でも自由に外の様子や劇場、お釈迦や童話の話を見聞できる道具だ。異世界の道具でもある」

「神々が『戦争遊戯』ウォーゲームの際に『神の力』アルカナムで発現する鏡の映像のようなものかな？」

「大体あっている。それが家庭用として作られたものだ」

聡明なフィンは直ぐにテレビの活用を悟り感嘆の息を漏らす。もつと手軽に持ち歩いて便利に扱えるようになれば、様々な使い道ができて日常生活にも大いに影響を与えるだろうと。

「遠い国の風景や光景も見られることもできるのかな」

「単一じゃ無理だな。特殊な道具や方法でなきや遠方の全てを映すこ

とはできない」

「それでも君の世界ではそれすら可能にしている。異世界の技術は本当に凄まじいね」

世界が違えど凄いと感じるのはお互い様じゃないか？と思う一誠に開放されたフィンから不思議がられた。

「それにしても異世界の言語だからかな。言葉の内容が理解できないのにアイズ達は熱心に見聞しているけどわかるのかい？」

「翻訳道具を付けてようやく理解できている」

予備のその道具をフィンの耳に押し当てると、納得した言葉がこぼれた。

「なるほど、この道具を使わない限りわからないね」

「俺の世界に来たらこれは必ず必要になるな」

「君から発する言葉は共通語^{コイネー}だけど、君の世界の言葉は異なる言葉を発するんだね」

因みに異世界の言語は数十各国とその分の地域によって違いがあり、全ての外国語を覚えることができるのはほんの一握りだけだ。と教えると碧眼の瞳を丸くしたフィン。テレビの方は、凝視している少女達の目に映る物語の終幕の時間が訪れ画面が真っ暗になると、張っていた気が吐く息と一緒に緩めた。「どうだった？」「そう尋ねられた言葉はティオナとティオネだとアイズ達は察して、二人に向けられる複数の視線の中でティオナは凄く目を輝かせた。

「すっごく楽しかった!!!見て読むのも楽しいけど、見て聞くのももっと楽しいっ！」

純粹な感想を言い満面の笑顔はとても眩しく、「ああ、常連がまた増えるか」と止めることができなだらうと諦めの境地で溜息を吐いたところで足下から声がかかる。

「イツセー、申し訳ないけど今夜は」

「……わかったよ」

本当は嫌だけどな。とかったるそうな顔でぼやかれて苦笑いするフィンだった。

その日の夜はロキ達も交えての夕餉の時間を過ごした。今夜の料

理は『異世界食堂』にも作られていない真新しい異世界の料理だった。釜戸から白い塊を取り出して皆の前に出した。

「……………なんやこれ、食べ物なんか？」

「堅い、わね」

齧って食べるもの？胡乱な眼差し、怪訝な面持ちで真っ白な塊のみしかないそれから一斉に視線を一誠に向ける。説明を求められている雰囲気を朗らかに笑みを浮かべながら悟って言う男。

「そいつは塩釜焼っていう調理方法でな。メレンゲと塩を混ぜた物で魚を包み釜戸で焼き上げた塩釜だ。その調理法で塩窯の中に閉じ込められている魚の旨味を凝縮させる。食べるときは割ってから食べるんだけどな」

パチンと指を弾いて鳴らすと堅い塩の塊が一人で勝手に罅が生じて割れだした。中からは立派な極東の魚、鯛が姿を現す。

「魚の中には葉野菜と根菜を敷き詰めている。それらが魚の出汁を吸って、上品な味わいになっているはずだ」

「ニョルズ辺りが食いつきそうな魚の調理法やなあー」

「でもこれ、塩辛くないの？」

ヘアアイストスからの指摘に「食べればわかる。それにパンと一緒に食べても美味しいぞ」と断定する一誠の言葉でようやくフォークとナイフを手にして魚を切り分ければ、確かに腹の中に葉野菜と根菜が詰まっていた。白身をフォークで刺して食べてみると……………。

「ん、塩辛くない……………けれど、表面の皮はさすがにしよっぱいわね」

「だからパンと一緒に食べるのね……………確かに、上品な味わいだわ。初めて食べるわ」

「今は夏の時期だから南国果物フルーツの飲み物も作ってあるから舌もさっぱりするぞ」

「トロピカルジュース！」

唯一その飲み物を知っているアスナが歓喜の声を出した。自作の飲み物を飲んだ少女達や双子のアマゾネスは未知の味に目を丸くして、他の者と変わらぬ反応とおかわりを求めた……………。

「シー、ここまで美味しい料理を作るイツセーが【ロキ・ファミリア】に入団してくれると嬉しいな。個人的に君の料理を毎日食べたいし」
「おいおい、毎日って主婦じゃあるまいし」

「あはは、僕が女性だったらイツセーの料理の腕に惚れていたかもしれないね」

お互い冗談で言ったが一部の者の心が「イツセーとフィンが結婚!？」と穏やかではなかった。

「あ、あの団長っ。団長は料理が上手な女性が好みなんですか？」

「うん？うーん、まあ、料理は上手で毎日相手の健康を気遣ってくれる淑女な女性だったら好きかもしれないね」

テイオネの質問にそう答えるフィンであるが、懸念する一誠だった。ぶつちやけ、アマゾネスが繊細な料理を作れるのか？と。

「……フィン、もしもの仮定の話であるが。今のイツセーが小人族バルウムの女性だったらどうする」

「リヴェリアからそんなことを聞かれる日が来るとは思わなかったよ。でも、そうだね。僕の野望のために結婚を申し込んでいたかもしれない。——全力でね」

「……勘弁してくれ」

そんなことを言い出すものだから肩の力が脱力して複雑極まらない表情を浮かべる。微妙におかしな雰囲気となってしまったが、皆々の舌と腹を満足させた鯛の塩釜焼はあつという間に完食。それでもまだ食べたりない物には……。

「なんじゃこれは？」

「カップラーメン」

カップラーメンを提供した。三分経てば食べられると教え、実際に指定された時間を迎えて直ぐに食べてみれば。

「むむっ……これは、美味いつ。今まで食ったことがある同じ麺とは思えんわい。おかわりじゃイツセー！」

「んー？そんなに美味いん？うちも興味わいたわ。イツセー、うちにも一個や」

この日を境に、『幽玄の白天城』内でカップラーメンのブームが起こ

り、料理が作れない者達は自分でカップラーメンを食べることで腹を満たすようになった。そしてそれは『異世界食堂』にまで表に出るようになり、ただお湯を注いで三分待つだけですぐに食べられるという手軽な調理法に労働者や冒険者達はこぞって購入しにやってくるのをまだこの時の一誠は知る由もなかった。

「カップラーメン、だと・・・!!?」

「あー、この二人もそうだったな」

「懐かしいからね。でも、売っても大丈夫? ラーメンを食べたいって人がいるかもしれないよ?」

「転生者と異邦人しか知らないもんをこの世界の人類と神々が知ると思えるか?」

「敢えてそれは教えない限り誰も知る由もないことだ、と言外する一誠の意図を察して何も言わないアスナは余計なことを言っちゃだめだと暗に言われた気がしたのであった。

冒険譚 24

四季がはつきりとわかる極東では森や草が秋模様に移り変わっていた。秋季しか実らない食材や魚介類が盛んに増え、冬を迎える前に保存食を備蓄する作業が行われる。対してオラリオでは残暑が残っている時でも変わらない活気で市井が盛り上がり、歩く市民に声を掛け商売をする商人やダンジョンに赴く冒険者の姿が見受けられる。魔石製品や武具を作る労働者と鍛冶師スミスも何時にも増して作業が増えて忙しなく手を動かすことが多い中、ローズは溜息を吐く程度に少々困りごとを抱えていた。目の前の——ウエアウルフ狼人の青年が原因で。

今日もギルド本部は喧騒が絶えない。白大理石の広いロビーには冒険者が行き交うことで息苦しさすらあり、彼らの背なり腰なりに携行された剣や盾がちやがちゃと留め具と擦れ合う金属音を奏でている。エルフならば杖や弓矢、ドワーフなら斧や槌など、多くの亜人デミ・ヒューマンからなる集団はそれぞれの種族に合った武器や防具を装着していた。冒険者達が向かう先の多くは案内板や巨大掲示板、そして受付嬢が待機している窓口前だ。

「おはようございます、冒険者様」

「はい、その件につきましては——」

「ダンジョン内での取得物は見つけられた方に権利が発生する前提きまりがありますので、紛失物の行方はあまり期待をなさらないほうが……」
長台カウンターに並ぶ受付嬢達は、自分の正面にずらりと伸びる冒険者の列を各々対応していた。凛とした態度の彼女達にもやはり種族の統一はない。ヒューマンもいれば犬シアンスローブ人、猫キャットピブル人、エルフもいる。共通していることがあるとすれば、それはどの受付嬢も容姿が整っているという事だ。

ギルドの受付嬢は例外なく、奇麗所が選ばれる。

ギルド本部の中でも窓口は冒険者が最初に訪れる場所であり、応対する受付嬢が彼らにとってギルドへの第一印象を占めるといっていい

い。冒険者が抱くギルドの好感度は多かれ少なかれ迷宮探索——ひいては『魔石』の回収——の貢献度に反映されるため、受付嬢の抜擢には物腰や器量は言うまでもないが、特に容姿を優先される傾向があった。

よって自然に、多くが野獣のような強面の冒険者達に笑みを送るのは、美女あるいは美少女と言って差し支えない見目麗しい者となる。「冒険者依頼の遂行を確認しました。お疲れ様です。依頼人にはギルドから依頼達成の連絡をしておきます」

獣人、狼人であるローズも、そんなギルドの受付嬢の一人だ。背中にまで伸ばしている赤髪に、黄色の瞳。制服を盛り上げる豊かな胸に反して華奢な体つきに括れた腰とスラリとした脚。臀部あたりから生えている赤色の尻尾の毛並みは毎日欠かさず手入れをしている証拠。ギルド仲介の冒険者依頼をこなしたまだ若い冒険者達に、彼女は保管されてあった依頼人からの報酬を受け渡す。

「それでは、こちらが報酬となります。お受け取りください」
差し出された道具箱を受け取ってお辞儀をするローズを目もくれず喜びを分かち合う冒険者達を見送るのも束の間、すぐに次の順番の者に対応する。

「よっ」
朗らかに手を挙げて接触してきた冒険者を見てローズの仕事口調が幾分が砕けた。

「ようこそギルドへ。今日は何用かしら？」
「……………ロイマンに呼び出し食らった」

それが証拠だとばかり、ギルドから送られた蠟印付きの手紙を差し出される際、面倒極まりない表情を浮かんだのをローズは同情もしなかった。封を開けて中身を確認した後、意地の悪い笑みを浮かべた。「苦労様。ギルド長に呼ばれるほど悪いことでもしたのかしら？ 貴方は前科があるしねえ？」

「案外、どこかの獣人と仲睦まじくティータイムをしていたのがバレたかもしれないな」

からかいがからかいで返されて言葉を返す暇もなくそつと小声で

言われた。

「また昼頃に来るが、いらぬなら持つてこないけど？今日はまだ店にも出してない新作のデザートなんだが」

「……今は無理だから、時間を改めていつも通り『相談』してあげるわ」

暗にデザートを持つて来いと言う担当アドバイザーに苦笑を浮かべて、彼女から離れてギルド長のところへと足を運ぶのを見送る時。無意識に尻尾を緩慢的に揺らしていたのだが、本人は気づかず第三者から「あ、ローズ嬉しそう」と見受けていたのであった。故にそのネタにされることがしばしばある。特に昼時にだ。

「ねえねえ、ローズさんってやっぱり狙っているんですかー？」

「は？何よいきなり」

すっかり波のように押し寄せてきた冒険者達の数は引き、陽光が差し込むロビーはわずかな平穏を得ていた。滞りなく冒険者の要件を消化した受け付け嬢達が両手を上げて体を伸ばしている中、ローズは後輩の女性同僚に声をかけられる。

「だって、いつもあの冒険者もとい『異世界食堂』の店主が来るとローズさんって嬉しそうですし」

「嬉しそうってそんなわけないじゃない。毎度毎度飽きもせず相談してくるし、それに付き合う私も大変でしかないんだけど」

「(ぶっきらぼうに言っているけど、まんざらでもなさそうに尻尾は揺れてるのになあ……)」

普段は揺れないものが、話題にただけで揺れている。それが無意識なのだから本人も気づくことはない。数人ほど集まりだした中で一人の受付嬢が唐突に発言した。

「じゃー、私、あの冒険者を本格的に狙っちゃおうかなー」

「はー」

可愛らしいヒューマンの受付嬢がそんなこと言うもんだから、信じられないものを見る目でローズは素で反応した。

「何？あいつのこと好きだったりしてるわけ？」

「好きって程ではないんですけど、私達の間で割と人気者なんです

よ？彼氏にしたい男！と言えば小っちゃくて可愛くて強いナンバーワンのフィン・デイルナには劣りますすけれど」

何故か、ムツと面白くなくなった。

「高身長で料理上手に長い目で考えれば将来は有望の可能性アリ、収入も安定してるだろうし」

それはまあ、同意見ではある。

「何よりあの冒険者は、誰でも隔てなく接せられる雰囲気を纏って、畏敬や畏怖の念を感じさせない安心感があるからまたいいんですよねえー」

それもわかる。「フレイヤ・ファミリア」の団員一人でも最初は近寄り難く、関わればロクでもないことが起きたり遭ったりするのだと、冒険者達の間で共通の意識をされている。「ロキ・ファミリア」や他の最大派閥も似たような認識をしていることを受付嬢達も察している。だが、店を構えて料理を振舞っている姿を見てしまうと彼の美女神の「ファミリア」の団員だとわかっていても、その認識が薄れてしまい料理上手の店主という意識が強まる。

「……ん？ねえ、あの店に行つたことがあるの？」

「え？ローズさんは行つたことがないんですか？」

彼女の話ぶりに、まるで間近で見たことがある風に聞こえるので尋ねると、逆に流行に遅れてる人を見る目で言われてしまった。

「私達はもうとっくに行きましたよ？ねっ？」

「うん、とつても料理が美味しかったよね。働いている店主って格好いいし、他の冒険者達にも人気があるし」

「付き合うなら料理の技術スキルを持つている人に限るよねー」

笑みを浮かべ合い「今日も行くっか」とローズから離れる行つた組と置いてけぼりにされるまだ行つてない独りボッチの差があらさまに出来上がって、ローズの心境は複雑極まりなかった。

「……何よ、自分達の方が知つているみたいな感じは。私の方があいつと付き合いが長いってのに」

カウンター面白くない、実に面白くない。今日はやけ食いでもしてやろう、と長台の窓口で彼の男が来るまで待機する姿勢で佇む。程なくし

て………。

「よう、ローズ」

「いらっしやいませ冒険者様。ご用件は何でしょうか」

「今日こそは俺と一緒に食事しようぜ。いい店を知っているんだ」

「ご用がないのでしたらお引き取りください」

即答で誘いを断る。相手はローズと同じ種族の獣人。黒髪に灰色のギラついた瞳を持つ男の第三級冒険者。担当の冒険者ではないが彼女のこと目を付けてからギルドに訪れる度に誘いの言葉をかけるようになった。毎度断るローズも相手が下心全開で誘っているのだと分かっているのだから断っているもの、諦めが悪く誘う頻度が増えたりしている。

「なあー、一度ぐらいいいだろ？同じ狼ウエアウルフ人なんだから話が合うって」

「種族が同じだから話が合うなんて限らないでしょ。第一、私は貴方に興味がないわ」

「俺のこと知ってもらえてないから興味がないだけだ。知ってほしいからこうして何度も誘っているんじゃないか」

もう何度この会話のやり取りをしてきたことやら。いい加減に諦めるか帰ってほしいものだ。あからさまに溜息を吐いても男の狼ウエアウルフ人は気にせず自分本位の話をしながら誘う言葉を絶えず辟易しているローズに言い続けた。自分に話しかける暇があれば冒険しに行けばいいのにと気怠そうな佇まいを直すことなく——より顔を逸らして面倒臭そうにしながら獣耳を伏せて聞き流す。

「ローズ、俺は——」

ふと狼ウエアウルフ人の嗅覚が敏感に嗅ぎ取った。伏せていた耳が立ち直り何時もこの匂いを発する冒険者が近くにいるのだと本能で気づき、顔を前に戻す。彼女の反応にようやく自分を意識してくれるようになったかとお口端を吊り上げたが。

「やっと来たわね」

「……は？」

己以外に向ける言葉を言う狙っている雌狼に怪訝な表情となる。だが、自分の背後に立つ気配を察して振り返ると、自分の頭一つ分高

い真紅の長髪に濡羽色と金色のオッドアイのヒューマンの男が律義に後ろで待つていたのだった。

「〔フレイヤ・ファミリア〕……『異世界食堂』の……!?」
美神の眷族で神々や他派閥の冒険者に愛されてる店の店主。何でここにいるんだ、と疑問は直ぐに解消される。

「相談したいことがあるんだが……改めてきたほうがいいか？」
「改めないでいいわよ。ただ口説くだけで時間を費やす暇な冒険者を相手にするよりも、あんたの担当アドバイザーとして相手にしたほうが合理的だわ」

ここで初めてローズは小さく笑う。どれだけ話しかけても笑いかけてもらえず何時も仏頂面で適当に扱われる自分との対応の違いとその差が浮き彫りになった。何が彼女をそうさせている、自尊心が傷つけられたのと彼女に笑みを浮かばせた男に対する嫉妬心が怒りをこみ上げさせる。窓口から出ようとするローズから「先に個室で待つてなさい」と言われた男はその通りに広間の隅にある個室へと足を運ぶ。

「おい、待て」
狼ウエアウルフ人が歩き出す男の肩を掴み引き留めた。

「お前、ローズの何だよ。あいつは俺が先に狙っていた女だぞつ、後からしゃしゃり出てきたヒューマン風情が横から割り込んでくんじゃねえよつ」

「……?ちゃんとして後ろに立って並んで待つていたぞ?」

「そういう意味じゃねえよつ!」

吼える。言葉の真意を理解できていないのか!と苛立ちから歯を剥き出しにして睥睨する彼に男は素で言う。

「俺とローズは恋仲の関係じゃないし、別にお前が狙っているようがいまいが、これからも相談してもらおうつもりだ。お前の邪魔はする気はない」

ただ——と色違いの瞳が灰色の瞳を覗き込むほど至近距離に近づき、威圧も放って気圧した。

「自分本位の気持ちは相手に押し付けるだけの恋愛をして、ローズを

困らせているなら邪魔させてもらう」

「っ……」

真っ直ぐ覗き込んでくる強い意思が宿っている瞳から本気が伝わってくる。一瞬押し黙った狼ウエアウルフ人は負けじと睨み返して言い返す。

「俺の邪魔したらどうなるか、わかって言ってるんだろなあ。最大派閥の野郎でも容赦しねえぞ」

「構わないぞ。【ファミアリア】云々関係なく俺はローズの幸せを守りたいだけだからな」

真紅の長髪を揺らしながら踵を返して個室へ赴く男の背中をジッと睨む狼ウエアウルフ人の男。筆記用具と書類を携帯するローズと途中で合流するところも見て、奥歯を噛みしめる。

「なんか話をしていたわけ？」

「勘違いされてただけだ。ローズの何なんだーってな」

防臭の結界を張ってローズのために用意した『異世界食堂』の料理をカードから召喚して共に食事をする。

「ローズは口説かれることがあるんだな。初めて知ったよ」

「数年前からずっとよ。何度も断つてもしつこく誘ってくるもんだからいい迷惑だわ」

フォークでステーキを抑えながら肉を切るナイフを動かすローズ。切り分ければ口に運び、肉の旨味とソースの上品な味わいにピリツとくる黒胡椒の辛味を舌全体で堪能し、幸せそうに顔の表情を緩める。さっきまで仏頂面していた顔が嘘だったように喜色満面に変わって彼女の心も穏やかになった。

「これ、凄く美味しいっ。初めてこんな肉を食べたわ」

「店で一番高い一品でもあるからな。喜んでくれて何よりだ」

「そうなのね。今でも繁盛しているわけ？」

「もう何人か人員を増やしたいと思うほど繁盛しすぎて忙しい。だからローズ、受付嬢辞めてうちの店で働いてくれないか？店の賄は出るし給料弾むからさ」

さらりと引き抜きの誘いを受けてちよっぴり心が揺らいだ。試しに何気なく現在の給金を教えて、『異世界食堂』で得られる一人頭の給

金を教えてもらおうと。

「ローズの3倍だ」

「さ、3倍……っ!？」

「でも、賄は給金から引かせてもらっているから食べる料理によって大体2倍か1.5倍ぐらい多いか。店主の俺は給料なんて少ないしな」

店主なのに給料がない？素朴な疑問がぼろっと口からこぼれる。

「なんであんたの給料は少ないわけ？」

「消費した調味料や食材の購入で殆ど費やすからだ。店の金は調理器具と店の修繕費用にと使わず貯蓄しているんだよ」

そういう事情もあるのか自営業のする人の苦労や大変さ、悩みを垣間見たような気がしたローズ。そして誘いの話は断った。

「ものすごく魅力的な提案だけど、滅茶苦茶大変そうだから遠慮するわ。体力が保たないかもしれないのが主な理由」

「……残念。そういう理由だったら他の受付嬢も断られるか。ギルドの受付嬢は全員見目麗しいからほしい人材なんだけどなあ」

肩を落とし頭を垂らすぐらい心底残念がる。——とんでもないことを言う。全員を引き抜かれたらロイマンが泡を食う程に慌てふためく想像が容易に脳裏に思い浮かぶ。あ、なんか笑える……。とローズは笑いを堪えながら提案する。

「歓楽街の娼婦を身請けしたらどう？」

「店に欲しい娼婦はいない」

「アマゾネスは？」

「無理。「イシユタル・ファミリア」の眷族ばかりだから」
それもそっか、とポテトを食べながら他の案を考える。

「一般の人達を募集したら？」

「んー、やっぱりそうなるか」
ただし、荒事を対処できる従業員も欲しいので易々と募集ができない心情を抱えているのだった。

「あ、そう言えばギルド長とどんな話をしていたの？」

「単なる催促の話だった。オラリオを終点として他の国々と海列車の

ように行き来できるようにしろって。前にもそんな手紙を送られたけど放棄してたんだ。それを直で断つたんだがオラリオの発展のために作れって言い返されたわ」

面倒臭そうにふかーい溜息を吐いた。海列車、港街メレンと極東を歩き来する鉄の乗り物の話はギルドにも届いていて「ニヨルズ・ファミリア」が管理している。港街にもギルド支部がありそこから通じてギルド本部は海列車をギルドの管理下に置きたく漁を司る男神と交渉しているが、極東の神々からも拒否されて管理できずのままにいる。

「結局は引き受けたの？」

「列車一つ製造につき二億ヴァリス払えって要求したら、苦虫を噛み潰したかのような表情で呑んでくれやがったよ。拒否してくれる前提で言つたつもりがやらなきゃいけない羽目になった」

五億にしておけばよかった、と感想の言葉を耳にしてにそうすればギルド長も諦め作らずに済んだのだろうと察しながらデザートを用意してもらった。

「またかなり苦労して作るんでしょ？ 大変ね」

「いや、今度は創造の魔法で製造するから苦労はしない。一度創つたものだったらゼロからじゃなくて完成の状態で製造できるんだ」

「……異世界の魔法？」

「そんなところだ」

カードから皿に盛られたアップルパイを召喚、手に取って頬張る直後に体を小さくして狐耳と九つの尾を生やす子供になった一誠の瞬間を見て目を見開いた。

「な、なによそれっ？」

「ん？ あーローズは知らなかったっけ。好物のものを食べるときは大抵この姿で食べるんだ。その方がより食べる量が増えるからな」

これも魔法みたいなもんだ、と朗らかに言われてもローズは愕然から抜けれずしばし呆ける。好物のアップルパイを食べる幸せが体で表す。尾が緩慢的に揺らし、獣耳はピクピクと動く。飾り物ではなく本物であることを認識してローズはテーブルから身を乗り出す姿勢から腕を伸ばし、サワつと耳を触れた。温もりを感じる。そして肌触

りの良い感触が指から伝わり、触れられている本人は気にせず食べ続けてる。——そして気づけば、いつの間にかローズは幼子の獣人を膝の上に乗せては尻尾をモフモフしていたことに自覚した。数本の尾を纏めて顔を挟むように抱えて毛並みの感触を堪能していた自分を尻目で見ると子供の視線とぶつかり合う。

「（あー、私ったら何あんなことをしてしまったんだろ）」

共に食事をして数時間後、ローズは一人帰路についていた。ギルド本部が面している北西のメインストリートを横断し、オラリオの北地区に向かう。北地区にはギルドの関係者も多く住まう高級住宅街が存在し、受付嬢達専用の集合住宅も建っている。ギルドは職員のためにも、ローズが進む街路は穏やかであった。大通りと比べて人通りは少ないものの、道の端で連なる酒場からは温かな光と笑い声が漏れ出ている。魔石街灯が支配された通りは明るく、奥の方まではつきりと視界が利いた。その道中に自分らしくないことを無意識にしていたことに対して呆れる反面、不思議に感じていた。今までこの職に就いてから、あんなことをしたことはない。もしかして仕事の影響で飢えている？

「いやいや、だからと言ってモフモフをしていた理由にならないでしょ」

等と頭では自問自答して「ありえない」で自己完結し、かつ心のどこかで何らかの欲求不満かもしれないと軽く落ち込む。私はシヨタコンではないと密かに否定ながら。

「……?」

ふと、ローズは視線を感じ、後ろを見る。石畳が敷き詰められた街路には、特にローズを見る者はいなかった。知り合いがいるわけでもなく、彼女は気のせいかと前を向く。そして、歩みを再開させ、ほどなくすると。

「……!」

謎の視線が再び首筋を襲った。間違いない。確実に視られている。

呼吸を一瞬奪われたローズは己の心臓を律し、しばらく歩いた後、勢いよく振り返った。黄色の瞳に映る、真つ直ぐ伸びた街路。歩き慣れた帰路の光景の中で、素早く脇道に飛び込む黒い影があった。次に蒼夜を照らす満月を背に建物の屋根の上に現れたその人物は外フレッド套ロープを纏っており、こちらを見つめてくる。ぞっつ、とローズの背に冷たいものが走った。

「っ………！」

早足になって帰り道を急ぐ。混乱に陥りかける中、自信の住居を指した。街路を行く人々は数えるほどしかない。周囲の酒場は賑やかな喧騒を振りまいてくれるものの、魔石等の光だけが照らす帰り道は酷く心細かった。

「(付いてくる——!?)」

何者かの視線は一向に剥がれない。執拗にローズの後を迫ってくる。やがて高級住宅街に繋がる瀟洒な通りに出た。等間隔で街灯が立つこの道は人氣が全くなく、そしてそれを見越していたのかのように、一気に怪し気配が膨れ上がる。気付けば、ローズは走り出していた。鞆を片手に抱え込みながら無我夢中で石畳を蹴り、無限にも感じられた距離を超え、集合住宅の門前へ辿り着く。敷地内に急いで入り、柱に手をつきながら、息を切らしたまま振り返ると、そこにはこつちを見下ろす不審人物が屋根の上にあった。激しい動悸と恐怖心を抱えたまま、ローズは住宅の中に入って自室に飛び込み、自身が狙われている事実にはベッドの布団の中に隠れ、はみ出てる尾を震わせる。何故、自分が追いかけることに？ 訳がわからない疑問のせいでその日は一睡もできず翌日を迎えてしまった。

「先輩、目の下が凄いですけど大丈夫ですか？」

「……ただの二日酔いよ」

気丈に振る舞うも、顔に出てる時点で周囲から何か遭ったのだと悟ってしまった。気にかける言葉にも何でもないと言われ、逆に何かを忘れる、気を紛らすよう仕事に専念するその姿に同僚達は何とも言えない表情を浮かべて仕事に手を伸ばすしかできなかった。

「よう、ローズ」

また、性懲りもなく口説きに来た狼ウエアウルフ人の男が来た。と認識するローズは目を合わすどころか長大カウンターから離れて裏へと引つ込もうとする。

「おいおい、待てよ。人の顔を見るなり逃げるなんて受付嬢のする態度じゃないだろ」

ローズの腕を掴み行かせまいと引き留める行為をされて奥へ行けず、嫌そうな顔を隠さないと振り返り仕事口調で応対する。

「そのようにお見えになられたのでしたら申し訳ございません。書類の仕事に手を取ろうとしていたので、冒険者様のお気持ちを害するつもりはございませんでした」

「何時もの態度じゃない時点で明らかに俺を避けようとしてることはわかってんだよ。とにかく、ダンジョンの探索のことで相談があるんだ」

「でしたら担当の者にご相談ください。当冒険者様の担当のアドバイザーは私ではありませんので」

営業スマイルで拒否する。しかし、握られてる腕に握力が増した。「放してくれない？私、仕事があるんだから」

「冒険者の求めを全うするのがギルドの義務なんだろ。だったら俺の相談にも受けてもらわないと困るんだがなあ？」

「こんな朝っぱらから自分の意見を押し付けてるあんたのおかげで、後ろで順番待ちしてる冒険者達の方が迷惑がってるわよ」

事実、修羅場を潜ってきた冒険者の表情が険しく狼ウエアウルフ人の男を睨む風に見ていた。

「知るかよ。他んどこに行けばいいだけだろ。どうせ、よわつちい冒険者共が楽に冒険できる冒険者依頼クエストを受けに来ただけだろうからな」
「……何だと」

怒気を孕んだ声を発するヒューマンの冒険者。知らぬ冒険者から中傷されるいわれはなく、黙認し続けてきた彼は反応を示した。

「もういっぺん言ってみろ。誰が弱いだと？お前は俺より強いのか？」

「はっ、当然だ。俺はLv. 3の上級冒険者だぜ？どうせお前は俺よ

り下か駆け出しの雑魚冒険者だろ」

「——俺は【ガネーシャ・ファミリア】の団員でLv. 4だが、どつちが雑魚だか表に出て教えてやろうか」

格上の相手を喧嘩売った狼^{ウエアウルフ}人。しかも相手は最大派閥にして秩序と平和を守ってきた【ファミリア】。一瞬押し黙るものの、尻尾巻いて逃げるような性格ではない狼^{ウエアウルフ}人は牙を剥いて眦を裂き殴りかかろうとしたその拳の腕を軽く掴み取られた。

「はいはい、ギルドの中で喧嘩はぐい法度だぞ」

いつの間にか二人の間に立って朗らかに制する真紅の長髪の男に。

「で——？お前はローズに迷惑をかけたのか？好いている女をそんなことするもんじゃないだろ」

ギリギリと握力を強めながら狼^{ウエアウルフ}人に話しかける。その目はとても厳しく、ガネーシャの眷族が本能的にこの男は何かやばいと察知して静観の姿勢に入った。

「恋愛の『れ』の文字も知らない男が女を蔑ろにするんじゃないやねえよ。女は男の道具じゃない。そこ、わかっているのかお前は？」

「俺に説教——ぐっ!？」

掴まれてる腕から嫌な音が鳴った。骨にまで圧力がかかって悲鳴を上げたのだ。更にこれ以上の圧力がかかったら握り潰されるほど碎けてしまう恐れがある。否、確実にだ。

「素直に去るかこの腕が二度と使え物にならなくするか、選べ」

押し付けられる選択に屈辱極まりない表情を、凄まじく響める顔に浮かび上がらせた狼^{ウエアウルフ}人は【ガネーシャ・ファミリア】の団員からも睨みを利かさされ、分が悪いと判断したのか「離しやがれっ！」と掴まれている腕を振り払って一誠の手を解くと大股でズンズンと広い口ビーを後にする。その際、灰色の双眸をギロリと一誠にへ睨んだ。

「ちっ!」

舌打ちして今度こそいなくなった。ちよつとした騒動が解決したことで場の雰囲気はいつもの賑やかさと調子に戻り、受付嬢達もほつと安堵した。

「で、何か遭ったんだな」

個室に入るなりその質問に、ローズは目を張ってしまった。彼の要件に了承した彼女は代役の職員に窓口を離れることを告げ、準備を済ませてから面談用ボックスの中に入った瞬間だった。

「昨日の今日で体調を崩すほどのことなんだから、誰から見てもわかるぞ」

どちらも席に座らないまま話し合い、目の下の隈のことを指摘されて何も言えず口を閉ざすローズ。「あの狼^{ウエアウルフ}人か？」と問われると違うと首を横に振った。

「なら、余計なお節介かもしれないけど話してくれるか？いつも相談や話を聞いてもらっているから今度は俺に頼ってほしいし甘えてほしい」

と口にした彼の言葉は、不安に襲われ心が弱っているせいなのかわからないが、その優しい心遣いに、胸がほんの少し、甘く疼く。気づかぬ内に唇を綻ばせたローズは、己の立場を一瞬忘れ、つい一誠に甘えてしまった。

「昨日のことなんだけど……」

ことの内容を打ち明けると、一誠は真剣に耳を傾けてローズを見つめた。全て話し終えたらローズはぼんやりと一誠の顔を眺める。もし、だ。もし一誠が帰り道についてきてくれたならどれだけ心が救われることだろうか。そんな風に僅かばかり考えて、何を馬鹿な、とすぐに頭を振る。自分本意で浅ましいその思考を呆れの溜息がこぼれる。

「ごめん、今言ったこと——」

「俺の個人的な家にしばらく住んでみるか？」

「忘れ……え？」

今、なんていったこの男は……？

「ギルド本部が面している北西のメインストリートには俺の店がある。更には少し離れたところに俺の個人的な家が構えてあるから帰りは俺の店に寄ってくれば一緒に帰れる」

彼の家に住む？つまりそれは同居？

「待って、神フレイヤはそんなこと許してくれるわけが……」

「ああ、別に問題ないよ。だってうちの主神と団長以外にも【アストレア・ファミリア】が同居している他にも【ロキ・ファミリア】の団員と神へファイストスと団長の椿・コルブランドをはじめ、他派閥の団員や改コンバージョン宗状態のもと神の眷族と一緒に住んでいるから今更一人や二人増えても変わらないんだ」

——今、とんでもない事実を知ってしまった！

「……他派閥同士の関わり合いは不干渉のはずでしょ。なのに、どうして他の【ファミリア】と一緒に暮らしているわけ。どうしたらそんなことになっちゃうのよっ」

「まあ……色々あって、本当、色々とな……」

前代未聞なことを人知れずしていた一誠に驚きを通り越して突っ込みどころが多すぎる。本人は言葉を濁すほど言い辛そうに後頭部を掻いた。溜息を吐く思いに駈られるローズは改めて考えた。同じ地区の場に信頼できる人がいてさらに頼りにできる冒険者が大勢集まる場所でもあった。北西だったら帰路に慣れた道と違ってメインストリートに歩いている人々は大勢いる。もしもまた追いかけるようなことが起きてもすぐに助けを乞うことができる。——悪くない。

「ねえ、本当に大丈夫？ギルドの職員が個人的な家だろうと【フレイヤ・ファミリア】のホームの中に入って」

「あの城はその【フレイヤ・ファミリア】とは全く異なる家なんだ。俺、異邦人だろ？眷族だけど団員じゃないのもあるし、自分の家の中で住むほうが何かと都合がいいんだよ」

だからお前が来ても何ら問題ない。断言されて狼ウエアウルフ人の尾は緩慢的に揺れた。自分が済んでも問題ないなら……じゃあ、と。口にした。

「私の問題が解決するまでの間、お世話になるわね？」

「どうぞどうぞ。寧ろそのまま居ついてもいいぞ。そしたらうちの店に働いて……」

「それは無理よ」

まだ諦めていなかったのかと残念がる男の反応を見て苦笑を浮か

べる。

「無理、わかったわね？」

「二度も言わずとも……」

太陽が市壁の奥に消え、夕闇が徐々に顔を出していく。普段通り受付嬢として窓口に座っていたローズは、迎えに来た一誠を確認して、席を立った。こっそりと、二人の間だけで視線を交わし合う。

「それじゃ、先にかかるわね」

「はい、お疲れ様です」

職員たちと一言二言やり取りしながら荷物を纏める。

「お待たせ」

「ん、それじゃ一度ローズの住んでいるところに行くか」

「着替えがないといろいろと不便だからね。……頼んだわよ」

「了解」

本部の裏口から出てすぐのところに着いた男と合流し、ローズは出発する。あの話し合いの後、ローズは一誠の城に匿うことにしてもらった。別の場所で住むために着替えや必要な物を持ち運ばなければいけないので帰路に着く。いつもとは異なり、側にいる他人の足音に自分の足音を重ねる。茜色に染まる街はダンジョンから帰ってきた冒険者達で騒がしかった。街路は数ある酒場を吟味している、デミ・ヒューマン 巫人達で溢れ、往来が激しい。ローズと一誠は他者と肩がぶつからないように人込みを縫っていく。

「まさか、こうなるとは思わなかったなあ」

大きなものではないが、すぐ隣にいる一誠を意識してしまう。期限を定めていないとはいえ、これから毎日一誠と寝食共にすると思うと、体がくすぐったくなる。謎の追跡者の存在も忘れてはいけなのだが、二人並んで歩くお互いの距離を無視できない。他人からはどう見えているのかと、周囲の視線も少々気になりつつ。ちらっと、初めて通る道を物珍しげに眺めている一誠の横顔を、ローズはこっそり窺った。

「おっ、店主じゃねーか。こんなところで会うなんて珍しいな」

見知らぬ強面のヒューマンの男に突然話しかけられた。誰、と聞くまでもなく『異世界食堂』の常連客であることを認識する。すぐにローズの存在に気付くと、ニヤリと露骨にいやらしい笑みを浮かべ小指を立てた。

「綺麗な女じゃんか。もしかして店主のコレか？ 同じ髪の色だし似合っていると思うぜ？」

「はっはっはっ、嬉しいことを言ってくれるな。生憎残念だけどそうじゃないんだよ。俺の担当アドバイザーで彼女の家まで送っているところなんだよ」

と、朗らかに現状を教えたと男は羨望の眼差しを一誠に向け始めた。

「ギルドの受付嬢かつ。くうくう！そこまでしてやれるほど仲がいいなんて羨ましすぎるだろ！店主、俺も受付嬢のエリカちゃんと仲良くになりたい！どうやったら良好な関係を築けられるか教えてくれ！」

「んー、食事を誘うんじゃないかと数日おきにデザートを送ってみたらどうだ？ 甘い物が好きな女性が多いからデザートのことを詳しく知っていると、男なのに意外に知っていると思われる。まず相手に興味を持たせるのがコツだ。それで同じ趣味だったらさらに話が盛り上がることも間違いなしだ」

「なるほど・・・俺もエリカちゃんも甘いデザートは大好物だからいい手かもしれない、参考になったぜ店主。じゃな！」

女性との駆け引きを伝授する。強面の顔の冒険者なのに甘い物が好物とは逆に意外過ぎる。そして熟練の経験者のようにアドバイスした一誠の話にはものすごく心当たりがある。

「それ、私にも同じ手でしているわけ？」

「相手がデザートが好きだったら、の前提の話だ。俺だって最初はローズがデザートが好きなのか知るはずがないだろう？」

確かにそうであるが。妙に女に慣れているので疑心暗鬼になりがちなローズは疑わしいと一誠を見つめる。

「心外だ。大体、ローズを狙っているならとつくの昔に口説いて玉砕されているって」

「……まあ、あんたは女遊びをするような感じじゃないもんね」
「俺の名前に誠実の文字が入っているからな。そんなことは断じてしないさ」

ただ、女ばかり集まって勘違いされるだろうけど。と心中付け加える。

「誠実？どこに？」

漢字という異世界の文字を知らないローズの反応には仕方がないと説明口調で教えた。

「イツセーって名前は元の世界で愛称として呼ばれていた名前だ。俺の本名の真名は兵藤一誠ってんだ。一誠って名前の文字に誠実の誠がある」

どこからともなく取り出した、一誠の本名の漢字に共通語コイネーを書いたプラカードを見せる。

「……変な、字ね。これが異世界の文字？」

「漢字という文字の一種だ。文字を簡略的にかつ意味も込めて古代の人達が考えたものなんだよ。逆にこの世界の共通語コイネーと神聖文字ヒエログリフだって異邦人からすれば変な字だぞ」

「お互い認識の違いの差があるってことね」

当然のように首肯する。もしも異世界でも共通している文字があつたならば異邦人の一誠達は驚きを禁じ得なかつただろう。逆もしかりである。

「どうして本名で登録しなかつたの？」

「特に理由はない。それにギルドは冒険者になつてくれるなら誰だつて、何だつていいんだろう？」

そう言われてしまえばギルドの職員とつては終わりである。ここは迷宮都市オラリオ。ダンジョンに一獲千金を求める無法者や脛に傷持つ者が来ることなどしよつちゆうだ。そして『ギルド』も迷宮を攻略しうる彼らを歓迎する。それが迷宮都市の規則ルール。ローズは一誠が暗にそういうことを言っているのをわかつた。だから肯定として異論を言わない。

「じゃあ……まだ何か隠している秘密とか、ある？」

彼女のその一言に、進めていた足を停めて一歩遅れて立ち止まるローズを見据えて口を開いた。

「ああ、ある。異世界から来た者として抱えている秘密がバレたら、全人類に忌避されること間違いなしだ。逆に神々は大喜びで煽るだろうな」

真つ直ぐ、真剣な眼差しで茜色の光に照らされながら断定・断言した。本人も認める隠している秘密の真相をローズは知らない。だが、それを知る権利は今の彼女にない。

「……そう」

全人類。その中に自分も含まれている風に言われた気がして、何とも言えない気持ちになった。

「秘密がバレちゃったら、私にも嫌われたくない？」

「さあ、どうだろうな。嫌われてもしようがないと理由だし受け入れる他ないよ。例え、お互い両思いだったとしてもだ」

苦笑に混じった自嘲するような薄笑いをする。彼は自分の立場を理解して秘密を抱えたままこの世界で生きている。何だかそれは、酷く切なく思いで元の世界に帰れずにいる一誠を胸が締め付けられる感じをローズは覚えた。

「神フレイヤ達にも教えていない？」

「いや、知っているよ。てか、吐かされたり自分から教えていたりしている。拒絶される覚悟で明かしたが受け入れられているよ。それがどれだけ気持ちが悪くなっていくかあいつらは気づいていないだろうけどな」

受け入れられている……そうか、そうなのか。

「あなたの秘密、私にもいつか教えてちょうだいね」

「えー、拒絶されそうだから言いたくないなー。今の関係がとても楽しいんだから」

停めていた歩みを再開させてローズの肩を触れて体を前に回しては背中を押し出す。今の関係が楽しい、全人類に忌避される秘密をローズに明かしたくない故に歩きを催促する一誠。刹那、後方へ視線を向け……直ぐに前に振り向き直す。

「?..どうしたの?..」

「うんや、何でもない」

——ずっと視られていたことを悟らせない一誠をローズは気づかないまま、最初気になっていた互いの肩の距離を自然に受け入れて一緒に肩を並べて帰路に着く。

冒険譚25

「ねえ、先輩。最近何かあったんですか？」

「……なに？」

二日後の朝。仕事の途中、隣から投げかけられた後輩の言葉に、ローズは不思議そうに反応した。

「何だかいつもより雰囲気が違うんで」

「雰囲気って、何よ。私はいつも通りよ」

「そうですかー？何だか『異世界食堂』の店主の人と相談に乗った後の先輩みたいな感じなんですけど。今日はまだ来てないのに不思議だなーって」

それは、デザートを食べている時の自分のことだと言われてぶつきらぼうに「気のせいよ」と言い返す。

「そんなんですか。じゃあ、いいことでもありました？」

ピタツと体が停止した。身に覚えがある。ローズは現在、『幽玄の白天城』に匿われてる。新たな入居者かとフレイヤ達に勘違いされぬよう、説明されて住まわせてもらっている。最初、初めて訪れた一誠の城の中には驚きっぱなことが多く、女性だらけの居候や同居人に無所属の第一級冒険者の存在を内密にと釘を刺されたこと以外、振舞われる『異世界食堂』の酒と料理に王宮のような大浴場、ふかふかの寝台……今までの生活を一変させる出来事に彼女は大満足してた。そしてギルドまで送り迎えてくれる頼りな存在もあってローズの心に余裕以上の気持ちから醸し出していたのかもしれない。現状の変化と後輩の返答に窮していると、後輩は何か気付いたように「あ」と前を向いた。

「先輩、また来てますよ。狼ウエアウルフ人の冒険者」

「……」

後輩の視線を辿ると、確かにロビーの奥に狼ウエアウルフ人の冒険者がいた。彼は無言で口を閉ざしながらローズのことだけ見つめていたかと思うと、すぐに踵を返す。普段なら飽きずに口説きに話しかけてくるのだが……出入り口に遠ざかる背中を、ローズは不思議そうに見

やった。

「帰りましたね。珍しく何も話しかけないで」

「いい加減諦めたんでしょ。清々したわ」

仕事が捗り、滞りなくできると自己完結して先程の話題を蒸し返さ
れ後輩に纏わりつかれる中、ローズは彼が去った方向を眺めた。

「それで、モンスターをモフモフしてたらさらにモンスターの群れに
囲まれちゃって、モフモフをもっと楽しめたよ」

「貴方ねえ、そんなことしていたら死ぬわよ」

その日の夜。これまでのようにローズは一誠を伴って帰宅の道に
ついていた。時間は既に遅い。長引いた仕事でいつもより遅れても
待っていてくれた一誠は、今日ダンジョンであったことを話し、ロー
ズは呆れながら相槌を打つ。一誠と行動を共にするようになって、怪
しい人影は一度も目にしていない。一誠が少しの異変すら何も言わ
ないが、気づいているのか気づいていないのか分かり兼ねる。

「ねえ、私を追いかけている不審者はいる？」

「いや、わからん。あからさまに探す仕草をしていたらあつちも気づ
いて逃げてしまうからな。気付かないふりをして機を窺っているぐ
らいだ」

そうだったのか。だから何も告げずに一緒に帰ってくれているこ
とを知るローズは、感謝の念を抱いた。

「ずっとこのままってわけにもいかないし……何とかしなくちゃ
ね」

自分のせいで一誠を面倒事に巻き込むのは忍びない。今の関係と
状況は一時的なものにとどめなくてはならないと、ローズは会話と並
行しながら考える。

「(私はこいつのこと、どう思ってるんだろう)」

ふと、今の時間を手放すことに寂しさを感じている自分も見つけ、
ローズは戸惑いながら自問する。朝に遭った後輩の一幕も思い出し、
胸の内へと目を向けた。ローズにとって一誠は……他の受付嬢
達や冒険者達とさほど変わらない仕事柄の関係。それ以上でも以下

でもない。そこに異性の感情が介する隙間はない筈だ。自分の好みは……なんだろう？と首をひねる。逆にこの冒険者兼店主はどんな娘が好みだろうか？

「ね、あんたはどんな女の子が好きなの？」

「藪から棒に何だ？ギルドは冒険者相手に好みも調べるのか？」

「いや、ただの個人的な興味本位としか……」

「だったらローズはどんな男が好きなのかって聞いたなら教えてくれるか？」

今まで意識したことがないことに答えろと言われると返す言葉に苦悩する。自分でもわからない、と言ったらそこでこの会話は終了するだろう。ジーと返事を待つ一誠の視線が少々居心地が悪く、これだったらな—的な直感で述べた。

「氣遣つてくれる優しくして収入が安定的な料理が上手の男、かな」

「ふ—ん、それだけなら高級料理店の料理人に限られるな」

率直に感想を言われて自分もその通りだと自覚する。

「はは、残念。うちは別に高級料理店じゃないからローズの好みに当てはまらない」

「なに？あんたも私のことを狙っていたわけ？」

「氣が強いのと心が強くて、俺のことを心底慕ってくれる女が好きなんだな。あと無条件で俺の全てを受け入れてくれる女が好みだからな」

さらっと好みを教えてくれた。そうか、そういう女が好きなのかこの男は……。自分のことを狙っていたのかは明確に言わなかったが、まあいい。

「私の好みは別に嘘じゃない。料理上手なのはあくまで理想的に言った程度。私の知り合いにそんな男がこの男以外にいないんだからね」

しかし、何故そこに格好良くして強い男を含めなかったのか後々疑問を抱いたのはこの時までローズは何とも思わなかった。荒事が絶えないこのオラリオ。強さが備わっていなければ何事にも対処ができないのにどうしてだろうと、ギルドの受付嬢として働く職員として

不思議に思えたのだった。

そして翌日。『幽玄の白天城』に匿ってもらって四日目になる頃。状況に、一誠の一言で変化が訪れた。

「お、強い視線を感じる。それも殺気立ってるなあー」
「え？」

夕刻、これまで通りギルド本部の裏口で待ち合わせ、街路を進んでいた時だ。真っ直ぐ前に顔を向けたままローズに告げた。

「間違い、ないの？」

「ああ。．．．ローズ、ちよつとだけ試させてくれるか？恋人のよ
うに腰に手を回す感じな」

協力を乞われ、それで相手を燻りだす彼の真意を理解して少し緊張するが小さく頷く。自然に腰へ手が回されて一誠との距離が一気に縮まり、ローズが必然的に密着しながら歩かされる姿勢になった。次の瞬間、自分にまで背筋が嫌な冷や汗を流すほどの悪寒を覚え、反射的に一誠の服をきゅつと掴んだ。

「感じたな？」

「え、ええ．．．これから、どうするの？」

「何時もの調子で帰るだけさ」

そう、何時もの感じで北西と西の区画に挟まれた、世間から忘れ去られ人気がなく無人の廃墟しかない『幽玄の白天城』が構えている場所へ足を進める。そして廃墟の教会の前に進んだところで黒い影が建物の屋根の上に現れた。姿を現した不審者へ視線を見上げる一誠に釣られてローズも追うように屋根の上にいる不審者を見たとき、目を丸くした。

「あ、あんた——」

フリーデッドローフ

ウエテウルフ

外 套を纏う狼 人の男は、ローズのことが目に入っていないのか、憤怒の形相の顔にしながら一誠を睨み付ける。

「テメエ、いい加減にしろよ．．．。人の女をちよつかいだしやがって．．．！」

「先にちよつかい出したのはお前だろう。それにローズはお前の女

じゃない。大体その恰好は何だ？明らかに自分の正体を周囲に気付かれようになっているのが教えているようなもんだし」

「うるせえっ……ここでお前を殺してやる、その後ローズは『俺達』がいただく！」

俺達？その言葉を明確するかのように二人を取り囲むように狼ウエアウルフ人が多い獣人族だけで構成された集団にならず者や荒くれ者達が現れた。

「お前の存在のおかげでこっちは思うように事が進まなくなってたんだ。いい加減目障りなんだよお前は」

「……つまりローズのことは最初から自分の女にするつもりはなかったってことか？」

「いや？するつもりだったぜ？ただし、その後は味見したら娼婦として売るつもりだったがな。中古品は俺の好みじゃなからよ」

ゾツとする話だ。自分はそんな危ない目になっていたとは思ってもなかった。もしも追い回された次の日、一誠の城に匿われ、一緒に帰ってくれないでいたら彼らの手によって拉致されて狼ウエアウルフ人の男の言う通りのことになっていたに違いない。

「……はあ、温情をかけた俺が馬鹿だったわけだ。他人の恋路を邪魔しないよう気を付けたんだがな」

自信に呆れる一誠は、周囲の集団を見回し耳元に小型の魔方陣を展開した。

「よう、当然話しかけて悪いけどイツセーだ。精力溢れてどうしようもない男共に囲まれてさ、いるか？……お前の好み？お前の好みは知らんけど、上級冒険者が二、三人いて容姿は俺でもまあまあイケてる感じだな。場所？西区と北西区に挟まれた廃墟の通りだ。……んじゃ、出来る限り無傷で無力化しておくから」

誰かに助けを乞うたとしか聞こえない一誠にローズはただ見つめることしかできない。狼ウエアウルフ人の男は自分より格下の相手にこの数を以てして手間取る相手ではないと高を括り嘲笑う。

「誰に助けを呼んだところで、助けに来た奴がここに来た頃にはお前の死体しか見当たらねえよ」

を防ぎ、剣戟を結び合う。

「……………」

初めて目の当たりにする冒険者同士の戦い。一攫千金、名声と地位、欲望を野望を抱いて世界で唯一ダンジョンがあるオラリオにやってきて冒険者になる人々を出迎えるギルドと受付嬢。その後はアドバイザーとして冒険者と接するがここまで間近で人と人の戦いをローズは一度たりとも見たことがない。手に取る武器を何の思いで相手に振るうのか、何のために武器を振るうのか本人達次第。

「この、死ねっ！」

双剣を激しく振るって攻め立てる。

「まだまだだな」

余裕を以て光刃は受け止めたり逸らしたりして防御を専念する。二人の攻防は三分も経たずに続かれる。延々と繰り広げる戦いは体力の限界まで終わらないと感じたローズだったが、状況が一変した。

「ん、来たな」

雷の魔法攻撃を不自然なまでに止んだ。ローズに張った結界も解かれ、周囲の景色はもはや廃墟から破壊しつくされて何も残っていない状態。一誠が狼ウエアウルフ人から顔を逸らす行為を、隙を見せた相手の首を狙う剣が刃と化した金色の翼に両断。間も置かず三枚の翼で股間、鳩尾、眉間に打撃を与え動きを鈍らせた隙に、また股間に打撃を与えた。

「がああああっ!?!」

想像を絶する激痛に体を丸めて悶絶する。だが、痛みに堪える暇すら与えられず足を包まれて空中に吊るされた。あれでは手も足も出ずどうしようもないとローズは思ったところで、巨大な影が三人の前に姿を現した。

「——ゲゲゲッ！来てやったよお〜！異世界人〜！」

「なっ……………」

「は……………?」

二Mを超える、巨漢ならぬ巨女。狩猟着に似た赤黒の衣装から覗く褐色肌の短い腕と短い脚は比喻抜きで筋肉の塊だった。身の丈もさることながら横幅も太いずんぐりとした体型で、手足と胴体との釣り

合いがおかしい。極めつけは、その大きな顔。黒髪のおかつぱ頭で、ギョロギョロ蠢く目玉と横に裂けた口唇は、ウエアウルフ狼人を見た瞬間に欠けた月のようにニンマリと笑みを浮かべた。

「ゲゲゲッ、お前が言っていた男はこの男かあ〜?」

「おう、そうだ。中々整った顔だろ?」

「確かに悪くない顔立ちだねえ〜。わざわざこんなところにまで来た甲斐があつたつてもんさあ〜。で、他にもいるんだらうイイ男は、どこにいるんだあい?」

問う彼女、「イシユタル・ファミリア」の団長、第一級冒険者のフリユネ・ジャミールに応じて指先をくいと動かす仕草をすれば、至る所から瓦礫の中に気絶していた獣人達やならず者達が浮かび上がって彼女の前に献上品扱いで置かれる。

「こいつらだ。どうだ?」

「ゲゲゲエ……この雄を含めて四人は貰っておく。た〜つぷりと可愛がるからねえ〜」

「お、おい!? テメエ、俺に何をするつもりだ!」

「お前、こいつのこと知らないのか? アマゾネスだぞ。アマゾネスが気に入った男に何をするのか、一つしかないじゃん」

身の危険を覚えだした狼人ウエアウルフの男は、一誠の意味深な言葉に顔を青褪めた。逃げなければ骨の髄まで喰われると必死な形相でもがき始めた。その様子を一瞥してフリユネが望んだ男達とそうでない男達を別々に縄で纏めて結びあげた。

「なあ、男娼んとこへついでにこいつらも連れてつてくれるか? 後はそつちの好きにしてくれていいからさ。てか、そうするつもりだったろうしいいだろ?」

「ちっ、面倒な事を押し付けてくれるじゃないよお〜」

「は、放せつ。俺を放せえつ! お前、俺にこんなこととして(ガシッ)タダで済むと(ムチュ〜ッ)——!?!?……(ガクリ)」

そう言いつつも気に入った三人の男達といらないと云った男達の本体を別々に纏めて縛っている縄を掴み取って背負う彼女は、暴れる狼人ウエアウルフを受け取って物理的に(接吻で)黙らせ、踵を返して鈍い足音を

立たせながら去って行った。残された二人は壊れる前の廃墟の建物が一人で魔法のように戻っていく中で佇む。

「…………あの冒険者に任せて大丈夫なの」

「ま、牙を抜かれてしばらくは大人しくなるのは間違いない」

フリユネに捕らえられた男達の運命は既に決まった。それからの彼等はどうなったのかは二人の知る由もない。犯罪者の末路など決まっているのも当然なのだ。

例え——遊郭で男娼が増えようと。

例え——幽鬼のように大通りを歩く廃人と化した冒険者がいようと周囲は気にすることなどない。

「これでローズは安全を確保された。元の生活に戻れんぞ」

「そう、そう思えるとホツとしたわ。今までありがとうね。何かお礼をしたいところだけど」

安堵で胸を撫で下ろす気分のローズは迷惑をかけたことに関する感謝と謝罪も含めて言った発言は、一誠の瞳を妖しく輝かせた。

「じゃあ、これから毎日その尻尾と耳を触らせて?」

「え?」

「ずっと前から触りたかったんだ。でも、無理強いに触れたら嫌われるから触らないでいたけど。そういう事なら触れさせてくれ、毎日だ」

期待に満ちた目を向けられながら要求する。ローズはこれに動揺する、困惑する。

「そ、そんなんでいいわけ?てか、毎日流石に嫌よっ」

「じゃあ、お互いの同意の時でもいいだろ?」

「そ、それでも…………私の耳と尻尾は体の一部だし、ほ、他に何かないの?」

「ない」

真顔で即答された!どうしよう、どうしようと目を泳がせ思考がぐるぐると渦巻くように悩み、考えている間に一誠がローズの背中に腕を回して胸の中に引き寄せた。

「ただ、あるとすれば…………お前の心だな」

耳元で囁かれたその言葉と距離感に彼女の心臓の動悸が激しくなった。別の望みのお札を言われて顔が酷く熱くなっていることを自覚するローズは、緊張と羞恥で言葉を発せれずにいる中、一誠は笑み彼女の頬を片手で包み込むように添えた。

「貰わせてもらうぞ、お前の心を」

「——っ」

TAKÉ 2

真顔で即答された！どうしよう、どうしようと目を泳がせ思考がぐるぐると渦巻くように悩み、考えている間に一誠がシヨタ狐と化していて、ローズの足に縋り付いてうるうるると潤った瞳で見上げて言った。

「ローズおねーちゃん、触らせてー……？」

純粹で無垢に、切なそうに寂しそうに「お願い」と求められた。彼の美女神ですら魅了された「お願い」をローズが抗える道理はない。髪の色よりも深く赤く染まった顔になり、見えない何かに彼女の胸をズキューンツ！と撃ち抜かれ、体が仰け反り茜色の空を見上げた瞬間自分自身を悟った。

「(ああ……私の好みって……)」

安定した収入に料理上手の男。そして強くて格好いい上に——シヨタにもなれる特別な男だったのだと。

冒険譚 26

「あの、店主さん」

「何だ」

「常日頃から思っていたのですけど。どうしてメイ達の耳や尻尾を触れたがるんですか？」

休憩中のとある日の事。店の奥にある従業員専用の休憩室で、獣人の従業員の耳と尻尾を愛でている店主へ素朴な疑問が送られた。薄鈍色の瞳には狼人の従業員の耳を触れて堪能している様子が映り込み、触れられている獣人の少女等は身体を微弱に震わせて恍惚とした表情を浮かべていた。

「純粹に触りたいと思うから、じゃ理由にならないか？」

「うーん、それだけなら可愛い野良猫を触ってもいいんじゃないかって思いますけど」

「……それは無理だ」

「おや？とシルは動物に好かれない方なのかと思い、言い続ける店主の言葉に耳を傾ける。心なしか影のある顔の彼。

「近づこうとするだけで逃げられる始末。抱えて持ってきてくれるならば、俺に近づきたくないと暴れ出し、俺が触れた瞬間に白目を剥いて気絶された時は凄くショックだったなあ……」

「(好かれないどころか、嫌われるレベルを超えた何かだ……)」
話を聞いてまるで猫達の反応は恐怖の大魔王か何かと出会ったような感じだと、だから小動物に触れられないなら獣人の耳と尻尾を触れて楽しむしかない」とシルは何となくそう思った。

「それって犬と猫だけの話ですか？」

「いろんな動物を触れてみて分かった。どーやら俺より身の丈よりデカイ動物なら怖がらないでくれる。馬並みかそれ以上のな」

「それって殆どの動物に触れないんじゃないじゃあ……」

「問題ない。モンスターなら触り放題だ」

あ、そっちはアリなんだ。

「じゃあ、メイ達の中で触り心地がいいのは誰ですか？」

「うーん、悩む質問だなー。触り心地というより、抱きしめる心地がいいのはメイだな。また抱きしめたら上手に甘えてくるルーナ（おつとりとしたおさげの猫人の名前）。頭撫でると気持ちよさげに照れる表情が可愛いアルサ（狼人）とか皆、それぞれ違う反応をしてくれるから決めかねるよ」

「なるほどー。じゃあ、店主さんは皆にメロメロなんですね」

「フハハ、俺から離れてしまったらその日は落ち込みそうなほどにな」
ほうほう、そうなんだーとシルの中の悪魔が意地の悪い笑みを浮かべた。ちよつとした意地悪を試してみたくなり店主に言ってみる。

「じゃあ、店主さんはメイ達とは違って私の事はメロメロにならないですね？ 獣人じゃない私は耳も尻尾もないんですから．．．．．」

よよよ．．．．．と悲しみながら泣くふりを試してみた。さあ、この後の店主はどんな言動をするのか、どんな反応を見せてくれるのだろうかと好奇心の目でチラツツと窺ってみた。

「．．．．．」

店主は徐にシルの耳元に口を寄せて極力本人にしか聞こえない小さな声で囁いた。その言葉をしっかりと聞いたシルはと言うと．．．．．

「．．．．．っ」

胸の鼓動が五月蠅いほど高鳴り、何故だか顔が火照っているかのようになつて熱くなつた．．．．．。その原因は、この理由は何なのか．．．．．シルは見つめてくる店主から目を逸らすことで精一杯にて考える余裕はなかった。逆に店主は彼女の反応に心中してやったりとほくそ笑む。己が困るところを見て楽しむ腹だったのだろうかと思ひ、こう言い返したのだ。

『シルの事がメロメロになつてた時は、逆にお前が俺の事メロメロになつている頃だ。というか、シルに耳と尻尾をつけていたら自分はどうなるか想像してみろ』

と、シルは．．．．．温かい眼差しと優しい顔で身体を撫でられ、気持ちよく触れられてもつとしてほしいと店主に甘える自分を想像してしまい、今に至る。

と——休憩中の店主達のもとに海童剛が入ってきた。その目は真つ直ぐ店主のみに向けていることにシル達女性従業員達は気づいていなかった。

「店主、その様子じゃあまだ伝わっていないようだな」

「何かあったか？」

「ああ、また異邦人がオラリオにやってきたぞ」

その一言で穏やかな休憩に緊張感が走ったのは言うまでもない。

一世に一度はあるかないかの超希少な魔法『異世界転移召喚』が発覚した。魔導士の団員の主神は早速その魔導士に行使を催促することで、この世界ではない者達が召喚されてしまった。稀少魔法レアマジックの方は、一度きりの魔法だったのか「ステイタス」の欄から消失していてこれ以降『異世界転移召喚』の魔法は発現することはなかった。

『ようこそ、異世界から招かれし勇者達よ！どうかこの世界から人類の天敵であるモンスターを使役する魔王を倒してくれ！（嘘）』

芝居がかかった風に言い、主神は動揺、困惑、当惑する面々に長々と説明をした。その最中、自分達は元の世界に帰れるのかと訊ねられると。

『あー、うん、多分魔王を倒したら帰れるんじゃないかね？俺、神だけど下界にいる間は神アルカナムの力を使えないんだわ』

と、召喚された者達の目から反らしながら言い、異邦人達の数人は神の態度に今後を悟り……絶望した。

『取り合えず、君達には俺と一緒にモンスターの巣窟、ダンジョンがある迷宮都市オラリオに向かってもらう。そこで来るべき魔王討伐までレベルを上げてくれっ！』

と、神の決定に現状からどうすることもできず異邦人達は背中に【神聖文字ヒエログリフ】を刻まれ神の眷族となった。そしてそれからオラリオに向けて旅立った現在。ようやく辿り着いた目的地の門を潜ろうとしたところで、門兵が【ガネーシャ・ファミリア】に『異邦人の集団がやって来ました！』と報告。その直ぐ後に『異世界食堂』にも伝えら

れたのであった。

「既に眷族となってる異邦人達か。特徴なのは男と女の服が同じ……」

「もしかして、学生の子達なのかな？海童君、その人達は若かった？」
「俺も話を聞いたばかりだから分からない。だけど、かなりの人数でやってきたそうだな」

異邦人の店主、アスナ、海童が集い話を纏めて予想を立てる。

「しかし、集団で異世界に来たつてのはまるで勇者召喚みたいな展開だな」

「何だそれ？」

「勇者召喚つて？」

何か知った風な口振り言い出した海童に疑問をぶつけた。

「そのままの意味だ。召喚された連中は魔王から世界を救ってくれよだの、人類を守ってほしい！だの、異世界の魔法で異世界の人間達をランダムで召喚するんだよ、そう言う小説じゃさ。当然、世界を救った後なんて元の世界に帰れる保証はないのが常に当たり前だ。中には自分の世界に帰れたり帰る小説もあるけどな」

意味深な海童の話から聞いた二人は顔を見合せた。二人はそういう小説は読んだことはない故、海童の知識と情報はとてもタメになった。

「となると、その話の前者にあたるか。新たな異邦人達は」

「だと思っぜ。俺達もそうだけど」

「うーん、魔王を倒してくれて頼まれてもこの世界に魔王なんていないし……ちよつと可哀想。どうする？」

憐れみで同情するアスナ。店主に今後の対応を進言して問う。店主はその問いに対してもキツパリと言った。

「しばらくは放置だ。遠くない日の内にこの店にくるだろうから話は直接聞こう」

「俺もそれに賛成だ。新しい異邦人達もこのオラリオの厳しさを知るべきだからな。甘やかすのは好くない」

何故かどや顔を浮かべる海童。店主は何言ってるんだコイツと呆

れた目でツツコミをした。

「お前の場合は一番最初にこの店の厳しさとミアに拳骨を叩き込まれたらだろ」

「ぐっ……」

「ぷっ、ふふぷっ！」

もつともその通りで言い返せない海童をおかしく笑うアスナ。新たな異邦人達に対する対応は放置ということで決まり、交流ある「ファミリア」にもそう伝えられた。

「今頃はギルドで冒険者登録をしている頃かな？」

「きつとそうだろうが、それが別に重要じゃないだろう。異邦人の俺達に限らず神々すら必要不可欠な衣食住がないんだからな」

「外から来て直ぐに集団で住める場所なんてあるのか？ マンション、アパート的な家は見掛けなかったけどよ」

「あるわけない。異世界組の俺達が現代で生まれた頃にはとつくの昔に建てられていたものが多かったんだ。それに比べ中堅以上の「ファミリア」が拠点としているホームがあつた場所には何らかの建造物があつたはずだ。それをどうやって取り潰したのか知る筈もないし、外から来た異邦人達はいきなりそういうことができるわけもない」

——だから俺達はそういう苦労をせずに恵まれた立場だ。店主が最後に述べた言葉を海童とアスナは他人事のように聞かず頷き、「あっ」と不意に漏らした店主をきよんとした顔で見つめた。どうしたんだ？ 的な目で見ていた二人の前で口の端を吊り上げていやらしい笑みを浮かべる店主が何か閃いた。

「くくく……予想外だつたが大勢の人材を確保できるな。そいつらのこれからの私生活は火を見るより明らかだからな」

「(あっ、これは何か企んでるな)」

短く無い付き合いであるので店主が『人材』という単語を発した時点で何かする気だと察して悟る。だが、それは相手にとって悪くない話なのも解っていた。

異世界に召喚されてから不便の連続だ。まずは衣が不足である。現代人として生まれ育った異邦人達は満足に清潔な服に洗うどころか洗濯機や洗剤がないのでそれができず、身に着たままの生活を強いられている。次は食。貯えがあつたとはいえ、異世界召喚した者達の数は二十数人。オラリオから離れた場所で拠点を構えてた神と「ファミリア」には貯えがあつたとはいえ、突然降って湧いて大所帯となつてしまい貯えはあつという間に底を突いた。冒険者となつた今では五人一組でダンジョンの探索を臨み一日かけて二五〇〇〇ヴァリスを稼いでいるが、ぜいたくな食事を控え、露店で販売されている「じやが丸くん」というジャガイモを主とする揚げ物を始め質素な食事生活を送っている。しかし、現代人にとつてそれだけで必要な栄養分を補うことなどできるはずもなく、いつ体調不良の者が出てもおかしくない状況である。最後は住である。これには異邦人（女性等）の大半が不満を挙げた。オラリオに来て街中を探索する際に見つけた『異世界銭湯』という元の世界にもある公共浴場。異世界にもあることが驚きであつたが、異邦人達にとつては身体を清められることだけでも大変ありがたかつた。しかし、二十人以上の人数が収まる住宅街はなく最初は野宿、二日目から誰も立ち入っていない建造物の中で野宿にて仮のホームとして過ごすようになった。雨を凌げれる場所だけ見つかっただけでもよかつたのだが、布団はなく床に直で寝るか毛布にくるまって寝るかの寝心地が悪い睡眠法では不満も募る。

『ちよつと神様！いつまでこんな生活をしなくちゃならないの!？』

『もうこんな生活は嫌！寝起きで汗が気持ち悪いし髪も肌も荒れちゃつて、食事だつて毎日毎日同じものばかり!』

『レベルだつて中々上がらないし、何時になったら魔王を倒せれるレベルになるんですか？魔王のレベルつてどのぐらいなのかも神様は知っているのですか?』

積もつた不満は時々爆発して神を非難する。その度に神は曖昧な返答をして適当に言い訳をして団長達と何処かへと行ってしまふ。

——その光景をこのオラリオに来て何度も見てきた南雲ハジメは他人事のように視界に入れていた。朝食として昨日買ってきたじや

が丸くんと味気のないパンを食べる。

「南雲君、おはよう！今日も頑張ろうね」

モソモソと物静かに食事をしている少年に近づき、わざわざその隣に座りながら挨拶をしてくる美少女に居心地が悪くなる。ニコニコと微笑んで自分と同じ物を美味しそうに食べるその姿に目を逸らせば、今度は怒気と殺意が孕んだ同じくこの世界に召喚された少年少女達からの視線が向けられる。慌てて目線を下に落として顔を俯いたら隣の美少女がハジメの仕草に不思議そうに口を開いた。

「どうしたの？どこか具合が悪いの？」

「い、いや大丈夫だよ白崎さん」

美少女Ⅱ白崎香織さん、この負の視線の嵐に気付いてほしい！と願っても当の彼女は純粹無垢な眼差しを向けてくるだけで周囲の雰囲気気付くことはなかった。元の世界では学校で二大女神と言われ男女問わず絶大な人気を誇る途轍もない美少女だ。腰まで届く長く艶やかな黒髪、少し垂れ気味の大きな瞳はひどく優しげだ。スツと通った鼻梁に小ぶりの鼻、そして薄い桜色の唇が完璧な配置で並んでいる。いつも微笑の絶えない彼女は、非常に面倒見がよく責任感も強いため学年を問わずよく頼られる。それを嫌な顔一つせず真摯に受け止めるのだから高校生とは思えない懐の深さだ。そんな彼女は共に異世界に召喚されても一切変わらず、仮称『魔王討伐』の為にダンジョンの探索に日々励んでいる。逆にハジメはこの世界に魔王なんて存在せず、何の目的であるの神は冒険者が集まる迷宮都市オラリオに自分達を連れて来たのか疑問を抱いていた。明日を生きるためにはこの世界の通貨が必要なわけでゲームでも雑魚扱いされるゴブリンを何とか二匹か三匹、身体から魔力を気持ち悪い思いをしながら手にして金に換金し終えた後、情報収取に励む——つもりが、見知らぬ人にあれこれ尋ねる度胸はハジメにはなかった。

「ね、南雲君。今日はどうするの？」

「う、うん・・・今日もオラリオを探索してみよ。『異世界銭湯』なんて公共浴場が発見したから他にも何かあるかもしれないし」

「そっか！あの銭湯を見つけたのが南雲君だったから私、凄い！って

思ったよ。皆も喜んでいたからさ」

会話が成り立ち嬉しそうな表情と尊敬の眼差しを向ける香織が眩しくて目が向けられない。なぜ彼女が元の世界でもこの世界でも自分に積極的に関わって接してくるのだろうか、ハジメは今でも内心理解に苦しんでいた。

「香織、南雲君。おはよう。」

「香織、また彼の世話を焼いているのか？ 全く、本当に香織は優しいな」

「全くだぜ、そんなやる気ないヤツにやあ何を言っても無駄と思うけどなあ」

朝食を済ませたのか三人の男女が二人に近寄ってきた。その中で唯一朝の挨拶をした女子の名前は『八重樫雫』。香織の親友だ。ポニーテールにした長い黒髪がトレードマークである。切れ長の目は鋭く、しかしその奥には柔らかさも感じられるため、冷たいというよりカッコイイという印象を与える。百七十二センチメートルという女子にしては高い身長と引き締まった体、凛とした雰囲気は侍を彷彿とさせる。事実、元の世界の彼女の実家は八重樫流という剣術道場を営んでおり、雫自身、小学生の頃から剣道の大会で負けなしという猛者である。現代に現れた美少女剣士として雑誌の取材を受けることもしばしばあり、熱狂的なファンがいるらしい。後輩の女子生徒から熱を孕んだ瞳で「お姉さま」と慕われて頬を引き攣らせている光景はよく目撃されている。次に、些か臭いセリフで香織に声を掛けたのが『天之河光輝』。いかにも勇者っぽいキラキラネームの彼は、容姿端麗、成績優秀、スポーツ万能の完璧超人だ。サラサラの茶髪と優しい瞳、百八十センチメートル近い高身長に細身ながら引き締まった体。誰にでも優しく、正義感も強い（思い込みが激しい）。小学生の頃から八重樫道場に通う門下生で、雫と同じく全国クラスの猛者だ。雫とは幼馴染である。ダース単位で惚れている女子生徒がいるそうだが、いつも一緒にいる雫や香織に気後れして告白に至っていない子は多いらしい。それでも月二回以上は学校に関係なく告白を受けるといふのだから筋金入りのモテ男だ。最後に投げやり気味な言動の男

子生徒は『坂上龍太郎』といい、光輝の親友だ。短く刈り上げた髪に鋭さと陽気さを合わせたような瞳、百九十センチメートルの身長に熊の如き大柄な体格、見た目に反さず細かいことは気にしない脳筋タイプである。龍太郎は努力とか熱血とか根性とかそういうのが大好きな人間。それに反しているのかハジメのことは嫌いらしい。現に今も、ハジメを一瞥した後フンツと鼻で笑い興味ないとばかりに無視している。

「おはよう、八重樫さん、天之河君、坂上君……」

雫達に挨拶を返し、苦笑いするハジメ。「てめえ、なに勝手に八重樫さんと話してんだ？ アア!？」という言葉より明瞭な視線がグサグサ刺さる。雫も香織に負けないくらい人気が高い。

「南雲、いつまでも香織の優しさに甘えるのはどうかと思うよ。香織だって君に構ってばかりはいられないんだから」

光輝がハジメに忠告する。光輝の目にもやはり、ハジメは香織の厚意を無下にする不真面目な者として映っているようだ。

「？ 光輝くん、なに言ってるの？ 私は、私が南雲くんと話したいから話してるだけだよ？」

ざわつと廃墟の中が騒がしくなる。男子達はギリツと歯を鳴らし呪い殺さんばかりにハジメを睨み、中には人気のない場所にハジメを連れて行く場所の検討を始めている。

「え？……ああ、ホント、香織は優しいよな」

どうやら光輝の中で香織の発言はハジメに気を遣ったと解釈されたようだ。完璧超人なのだが、そのせいかわずか自分の正しさを疑わなさ過ぎるといふ欠点があり、そこが厄介なんだよなあ〜とハジメは現実逃避気味に教室の窓から青空を眺めた。

「……ごめんなさいね？ 二人共悪気はないのだけど……」

この場で最も人間関係や各人の心情を把握している雫が、こつそりハジメに謝罪する。ハジメはやはり「仕方ない」と肩を竦めて苦笑いするのであった。

「ねね、南雲君。今日も探索するなら私もついていってもいい？」
「え？」

「ほら、この街の土地勘がないと迷子になってここに帰ってこれなくなるでしょ？それに新しい発見もあるかもしれないし『異世界銭湯』を作った人と会えるかも」

正論だ。何一つ間違っていない。ただ、針のむしろ状態のハジメの心境を気づかない香織は悪くないがせめて気付いてほしいと懇願せずにはいらなかった。

「香織、魔王討伐にやる気がない南雲と町を探索する時間を費やす余裕はないよ。今日も僕らとダンジョンに探索して地上に出ないようモンスターを倒さなきゃ」

「?でも、他の冒険者の人達もいるんだからモンスターは地上に出てこれないよ?」

「彼らも血と汗を流して頑張っているのはわかってる。だけど彼等だけではモンスターの地上進出を抑え切られるか怪しいんだ。僕達勇者が彼ら以上に頑張らないと魔王によって世界は征服されるに違いないんだ」

もし、この場に他の冒険者が聞いていたら「駆け出しのてめえに情けを掛けられるほど俺達はひ弱じゃねえよ!」と罵声を発していたに違いない。それ以前に勇者は中古である。この世界で召喚された理由が『世界を救う勇者』など陳腐な話を信じる方がおかしいのだからハジメの疑問は正しい。

「ま、土地勘がない私達にとって確かにそれも大切ね。そろそろ新しい服も買いたいし服屋があるなら直ぐにでも見つけてほしい心情だわ。この世界に銭湯があるだけでも救いなんだし」

「本当にあの銭湯を作ったのは誰だろうな。あの文字、完璧に漢字だったよな。他の文字はこの世界の文字で全然わからねえしよ」

「.....まあ、そういうわけだから僕は町中を探索するよ」

腰を上げて一刻も早くこの場から離れたい一心のハジメは四人から距離を置いて廃墟を後にする。が、しかし香織がそう問屋を下ろさなかった。「あ、待って南雲君。私も行くよ!」とハジメを追いかけたのである。

「か、香織!」

「好きにさせなさいよ。モンスターばかりかまかけて他を蔑ろにするのだからよくないわ」

「けっ、だからってあのやる気のなさはどうかと思うぜ俺は」

呼び止めようとする天之河光輝を制する雫の言葉に腕を組んで廃墟を後にしたハジメを不快に抱く龍太郎。三者三様の反応を示す三人はダンジョン探索の準備に取り掛かった。

「〜♪」

「.....」

両手を後ろに回して手を組み、今にでも鼻歌をしそうならい上機嫌な香織が微笑んでハジメの隣を歩く。何がそんなに嬉しいのかハジメはわからず、結局一人で探索することを諦めて香織の好きにさせることにするしかなかった。というか、香織だけの話に限らず誰かに対して強気でいたことは殆どない。いつも腰が低く面倒事は避け、周りから馬鹿にされても愛想笑いして余計な諍いを起こさないよう努めてきた。なので何時ものように下手に出ず受け流す姿勢で探索に臨むハジメであつたが――。

「あ、南雲君。あのお店、お花を売ってるんだね」

「南雲君、あの人達凄く綺麗だね。てっ、あ、あんなに肌を露出してる女性がいるよ.....!」

「南雲君南雲君、見てアレ!」

キヤツキヤツと香織は初めて見るものに対して一々はしやぎ、物静かに探索したいハジメは物凄く周囲から視線を集めている香織に対し恥ずかしい思いをしていた。もう少し静かにしてほしいと彼女に言えるはずもなく、ただ短く相槌を打つ言葉を言うだけしか返せないでいて。

「まさか、こんな感じが一日も.....?」

ゾツとするどころか、羞恥心で精神がどうにかなってしまいそうだと耳まで顔を赤くする。こんなことなら雫達に香織を任せてもらえばよかったと後の祭りに浸り、横から顔を覗き込んでくる香織と目が合っぴつくりする。

「わっ!?!」

「あつ、ごめん。驚かせちゃった？」

「え、あ、大丈夫、僕も大きい声を出しちゃってごめんね」

「ううん、気にしてないよ。それよりほら、色んなところに行こ？服屋さんも見つけなきや雫ちゃん達も困っちゃうからさ」

始終笑みを絶やさずハジメと接する香織。それが堪らず気恥ずかしくなるハジメは無言で頷き、若干観光気分で探索するのだった。

片や子供のようににはしゃぎ、片や恥ずかしそうにしている若い男女が当てもなく天を衝くほど高く建造された白亜の摩天楼施設を目印に様々な建物やヒューマンと亜^{デミ・ヒューマン}人に獣人の人達を見ながら歩き続けた。仮の廃墟ホームがある東区から南へ進み、その途中市場を見つければ交易が盛んな場所を特定すると二人は感嘆の息を吐いた。市場には日用品から食材、道具やら怪しい物までも商人達の手によつて販売されていて、それを買いにやってくる消費者等が集まってメインストリートは賑やかさを醸し出していた。

「凄いねっ。こんなにくさんの物が売られてるよっ」

「うん、そうだね。僕もここまで来たことがなかったから大発見したよ」

「やっぱり町中の探索も大切だね。じゃないとこういうところを見つけることはできなかつたもん」

くすくすと笑う香織に釣られてハジメも小さく笑う。これではまるで探検ごっこをしている子供みたいだなーと思つても実際は似たようなものであるのご愛敬。市場に服があるか探してみたら、結果はあつた。ただし下着や靴下の類は無くそれも含めてどこにあるのかとハジメが尋ねたところ、北区に行けばあると情報を得た。

「北区だって！」

「北の方角ってことだね。行ってみよ」

「うん！」

新たな目的地へ向かいながら南から西へと進み、冒険者通りに足を踏み入れる。大勢の冒険者がダンジョンの探索の為に道具や武器の調達をし、また西のメインストリートにある酒場で食べに集まる。その場所を初めて訪れた二人は冒険者達が身に包んでいる装備を見た

り、行列を作っている人達を視界に入れたり陳列窓の中に並べられてる道具を眺めたりして見て回った。そしてついに大きな看板を見て目を丸くした。

「な、南雲君っ……！あの文字って……」

「間違いない……漢字だ。しかも……」

その看板に『異世界食堂』と書かれた文字を見つけ、感動を覚えた。二人の四つの眼は、出入り口がある扉の横で列を作っている消費者達を映した。

「焼きそばパンを十個くださいー」

「カツサンドをくれい！十五個じゃー！」

「ホットドックを七個！」

「フルーツミックスを九個」

——現代人として馴染みある名前が入る耳を最初は疑ってしまった。だが、実際に歩きながら食べる客が持つその手の物を見てしまったら疑う余地はなくなった。さらには……ぐうぐうと腹の虫が鳴いた。

「南雲君……お金ってどのぐらいある？」

「八〇〇程度……白崎さんは」

「えっとお恥ずかしながら私も一緒だよ」

合わせて一六〇〇ヴァリスの所持金を持つ二人は再度鳴る腹に手を添え、顔を見合わせると開け放たれた店の扉から出てくる客達が纏う食欲をそそる匂いを嗅いだ途端に。動いた。まだ昼時でもないが朝食があれだけでは食べたりない二人が空腹に、食欲に負けてしまうのは仕方がないだろう。気付けば店の中に入っていた。

「いらっしやいませ、異世界食堂にようこそ！」

栗毛の長髪の美女が出迎えた。この店の制服で身に包んでいるが隠しきれないスタイルで彼女の魅力を引き立たせている。ハジメは女性店員に凝視する直前、背筋が凍るような悪寒を感じて咄嗟に香織の方へ向いた。何故か満面の笑みを浮かべていた香織がハジメを見ていたが、その理由を知るのは目の前の女性だけだった。

「二名様だけですか？」

「え、は、はひっ」

——思いつきり舌を噛んだ。すつごく恥ずかしいっ！

「では、席にご案内いたしますね」

店員に案内される形でついて行き、空いているテーブル席に座る二人は店員から辞典のような分厚いメニューから選んで、ボタンを押して店員を呼ぶ説明を受けた。その通りにメニュー本を開いてみると、ハジメと香織がよく知る料理がずらりと載っていた。この世界の文字で書かれていて読めないが、どんな料理なのか一目瞭然で決めるのに迷いはなかった。

「な、南雲君っ！」

「う、うん……！」

異世界に召喚されて久しく食べる懐かしい料理を早く食べよう！それが二人の心境で選んだら瞬時に店員を呼んだ。直ぐに来たのは真紅の長髪の男性だった。

「ご注文はお決まりで？」

「僕はこれとこれで！」

「私はこれとこれを！」

「ハハッ、かしこまりました。それが好きなんだなお客様？これから御鼻屑にして通つてくれると店長として嬉しい限りだ」

て、店長!?身長は高いけどまだ十代に見える相手に驚く二人を他所に店長は離れて行った。少しして視線を絡み合わせるハジメと香織は吐露する。

「あんな人がこの店の店長だなんて……」

『『異世界銭湯』と『異世界食堂』の名前が似てるし、偶然じゃないと思う』

「あの人が関わっているのかな？もしそうだったら色々聞きたいね」

首肯する。仮に香織の言う通りだったら是が非でも協力を得たい。

この世界の事、魔王の事、色々だ。

「おまたせしました。ハンバーグステーキとライス大盛り、エビピラフにホットケーキだ」

「えっ？」

頼んで一分ほどだろうか。台車を押して運んできた店長と料理の出来上がった速さに目を丸くする。こんなに早く料理ができるものだったかと目の前に出来立ての料理を見ながら不思議に思っている。レシートを置かれて店長は別の客の方へ対応しに行った。

「とりあえず、食べよ？」

「う、うん」

この世界に来て初めてまともな食事を口にできる。いざ実食とフオークとスプーンを手にして食べた瞬間。

「……………(泣)」

感謝の言葉しか浮かべなかった。じゃが丸くと質素な食事生活だけをしばらく送ってきた二人からすればこの店は仏のような場所だ。無言で食べ続け、一心不乱に味を噛みしめて段々減っていく料理に寂しさを覚えていきながら完食する。

「ううう……………美味しかったよ」

「そうだね。本当に美味しかったね……………」

「もう、魔王討伐なんかよりもこの美味しい料理の為に頑張りたいって思っちゃった……………」

「僕もそうだよ……………これならダンジョンの探索も頑張れる気がするよ」

戦いや争いごとは好まないハジメでも己をやる気にさせるためのものがあるなら吝かではない。ハジメの話を聞いて香織の表情は明るくなった。

「じゃ、じゃあつ。明日私と一緒にダンジョンに行こうよ！この美味しい料理を食べるためにお金を稼いでさー」

ずいっとテーブルから身を乗り出して自分の提案の同意を求める香織に少し仰け反って「それは……………」と逡巡してしまう。一先ず返答を後にしてもらい（ヘタレ？何とでも言っただけだよ）会計をすることに。二人合わせてお代は足りたのでなけなしの金で払えたことに内心安堵した。

「またのぐ利用をお待ちにしてるよ」

朗らかに送り迎えしてくれる店主にこそばゆい気持ちとなってそのまま去ろうとした考えを留めた。

「あ、あの。尋ねてもいいですか?」

「おう、なんだ」

「この店の名前は『異世界食堂』って言うんですよね?どうして、そんな名前にしたんですか?」

ハジメの質問に対して、珍しいのかジツとハジメを見つめ香織にも視線を向け「なるほどな」と吐露した。

「この世界にはない料理を提供しているからだ。お前らにとって馴染みのある料理だったろ?」

自分達にとって馴染みのある料理?意味深な発言だ。まるで自分達のこと知っているような言い方を言う店主から語られた。

「初めまして。新たにこの異世界、ひいては迷宮都市オラリオに来た異邦人の少年少女。俺もまた別の世界から来た異邦人なのさ」

「!!」

自分達以外にも異世界から来た異邦人がいる。ハジメと香織は凄く驚き同じ境遇者の存在に信用の眼差しを向けるようになった。

「あなたも異世界から来た人!」

「そうだ。この風体だけど日本人だ。実家は京都」

「そ、それじゃあ私達と同じ世界から来た人何ですか?」

「いや、違うだろうな。俺はお前らの世界とは違う世界から来たんだ。所謂並行世界、パラレルワールドってやつだ。俺の世界には同名の神々やファンタジーの生物や種族がいるからな」

別の世界!?そんな世界が自分達とこの世界の他にも存在していたのかと新事実に愕然。ますます色々と聞き込みをしないといけなくなった二人は追求する口を開きかけた。

「おっと、色々知りたいだろうが俺は仕事だ。話はまた今度にしてくれるか」

「あ、そうでしたね……じゃあ、一つだけいいですか?服屋さんって北区の中の辺りにありますか?私達、この世界に来てからこの制服だけで生活をしてるので洗濯もままならないんです」

それぐらいなら、と二人の目の前で腕に嵌めていた宝玉がある腕輪を触れて、宝玉から立体的な映像を展開。名前の欄から一つだけ選び通信状態にすると直ぐに相手と繋がった。

『おー？なんやイツセーから連絡してくるんなんて珍しいやん』

「可愛い異邦人の女の子が服屋を探している。暇なら案内してやってくれないか？」

『なんやてっ!?どこにおんねん、その可愛い子供は!』

「俺の店の前だ。直ぐに来てくれないと肉食の狼達に連れ去られるぞ」

『今行くでっ!!!』

了承を得たので通信を切った。当の二人はきよとんとしていたので説明する。

「俺の代わりに案内人と呼んでおいた。そいつから色々聞くといい」

「どんな人ですか？関西弁を言う女性の声が聞こえましたけど」

「ああ、今来る奴は……このオラリオに存在する数ある「ファミリア」の中で最強の一角の「ファミリア」の主神ロキって女神だ」

全力疾走してきた朱色の髪に糸目の女神が語り終えたところでタイミングよく現れた。

「うはー！んはー！この子やな、可愛い異邦人の子供っちゅーのは!」

香織に向けて鼻息を荒く顔が変態親父的で卑猥なアレを浮かべるのでハジメは引いた。これが女神が浮かべる顔なのかと信じられないぐらいに。

「嘘は言っていないだろ？それじゃ、後は頼んだ」

「任せておきいっ！責任もって可愛いがるでえっ!」

可愛がるって何をするの!?人選ミスをしたんじゃないかこの人は!と言いたげな目で店主を見ていると店の中に引っ込んでしまっていた。ロキはハジメの心情を露知らず嬉々として先導するために動き出す。

「ほんじゃ早速服屋に案内したるで!」

「はい、よろしくお願いします!」

「よ、よろしくお願いします」

最強の【ファミリア】の主神直々に案内をしてもらう幸運に、感謝と当惑。であるが、この瞬間を無駄にできないと香織と一緒に山ほど聞きたいことを訊ねて、逆に尋ねられると素直に答える。

「はー、そら、災難やつちやなあー。色々と苦労してるんやろ？うちらも最初はそうやったで」

「そうなんですか。ところで魔王ってどこにいるんですか？」

「魔王？なんやそれ、この下界にそんなもんおらんで」

「え、でも、神様が魔王討伐の為にここでレベルをあげるようなことを……」

「おらんおらん、魔王なんておらんわ。自分ら、主神に騙されているもとい遊ばれておるで？」

い、いない!?魔王の存在を信じていた香織の目は限界まで見開き、ハジメに至ってはやっぱりなーと達観した遠い目でロキの言葉を受け入れていた。

「じゃ、じゃあ……私達は何のために元の世界から召喚されて……」

「遊戯ゲームのつもりやろ。うちら神々はな。神々が住んでる天界に生きる事が飽きて人類が生きているこの下界で刺激を求めて移り住んでいるんや。ちゃんとした理由やどーしようもない理由等を抱えてなー」

「ロキ様は、どういった理由でこの世界に……?」

「勿論、娯楽と刺激を求めて天界から降りて来たんや！今じゃオラリオの二大派閥の一角として居座っておるんやけどな」

二大派閥の一角？あの店主はそんなこと言っていなかった気がする」と口を開いた。

「ロキ様の【ファミリア】の他に強い【ファミリア】があるんですか？」

「あるで、色ボケ……【フレイヤ・ファミリア】っちゅー派閥や。自分らさつきうちを呼んだ店主がおったろ？あの店主はその【フレイヤ・ファミリア】の眷族やで」

「そ、そうなんですか？え、でも何でお店を……?」

「ぐふふ、そら、うち以外の神々がイツセーの作る料理の虜になったん

や。せやから毎日何時でも食べられるよう店を構えんのかー？つて催促したら、あの通りやで」

「ファミリア」って冒険者になってダンジョンの探索活動だけするんじゃないんですね」

「他にも色々とその「ファミリア」の活動があるで？武器や防具を作る生産系の「ファミリア」、製薬と治療を主に活動する「ファミリア」に野菜や魚介を育てたり獲ったりする「ファミリア」もあるんや」

はーと感嘆の息を漏らし、ここにメモ用紙があったら記録に残していただろう。ロキの話を実剣に聞き、耳を傾けていながら北区へ目指す。

——そして夕刻。

ロキの案内によつて服屋の場所を把握でき、最大派閥の主神との関係も築き上げたことは喜ばしいことだった。最後にロキから最後に派閥同士の付き合いの注意を教えられ、困ったときはあの店主に頼れと言われてロキと別れた二人は真っ直ぐ足を運んだ。

「いらつしゃ——なんだ、また食いたくなつたのか」

数時間ぶりで二度目の来訪者にそういう出迎えた店主。しかし、今の手持ちではじゃが丸くんを買う程でしかないため今日はこの店で食べることはできない、非常に残念に思いながらも懇願した。

「お仕事もお忙しい中申し訳ございません。お願いしたいことがあります」

「お願いね、言ってみろ」

「私達のホームに来てもらえませんか？私と南雲君の他にもこの世界に来た友達がたくさんいて、まだこの世界のことを知らないんです」

「つまり、俺が知っていることすべてお前らに教えろつて事か？」

「困ったときは店主に頼れつてロキ様に言われました。とても頼りになる人だつて」

……あの駄神、面倒事を押し付けたな。あとでチョークスリーパーをかけてやるとお仕置きを考えながら、別の事も考えて心の中でほくそ笑む。

「いいだろう。噂の異邦人はどういふ奴だったのか興味はあつた。だ

が、今は無理だ。仕事だから。なんなら臨時のアルバイトでもするか？報酬は金じゃなくて賄になるが」

「賄って、このお店の料理を食べられるってことですかっ？」

「その通りだ。二人には即席のウェイター、ウェイトレスをしよう。料理を運ぶ先には番号が記されてるから迷わず提供できるはずだ」

「どうする？」と問われて二人が口から答えるよりも先に腹の虫がぐうぐうと答えた。

「はっ、まずは飯からにしろって事か？」

「ち、ちが——！」

「はいはい、言い訳は店の中だな。腹を空かせては戦もできぬというし、食った分の代金はしつかり働いて返してもらおうぜ」

いつの間にか二人の背後に立ち、店の中へと押し入れた後。「ついに男の後輩ができたか……」、「可愛い！」と『異世界食堂』の制服で身に包んだハジメと香織を見てはしゃぐ従業員達。

「臨時に働いてもらうことにした。海童とアスナ、悪いがこいつらの指導を任すぞ」

「うん、わかったよ」

「何だか新鮮な気分だなー」

任された二人は嫌な顔をすらすらず、握手を交わして直ぐに仕事をしながら指導を行う。ハジメはしどろもどろとしていて対応は遅く当惑していたが、香織は適応力が非常に高いのか直ぐに慣れてアスナから太鼓判を打たれた。このまま働いてもらえば遠くないうちに戦力となりうるだろうかと、ミアと眺めた。

「また人材を見つけたのかと思えば臨時とはね」

「何時か正式に雇いたいもんだよ。今はお試し期間ってやつさ」

ハジメ達は臨時のアルバイトをするようになってその日、三時間も働かされた。店主から休憩の言葉ももらい、休憩場で疲れた体をソファーに寝かせて深い溜息を吐いた。

「っ、疲れたね……」

「仕事って、こんなに疲れるものなのか……」

まだ学生の身分の二人にとって初めての経験故に空腹も相まってこれ以上動くことはできなかった。

「お疲れさん。賄を食べる時間だぞー。悪いけどお前らの好物は知らんから、朝食食べたもんと一緒にさせてもらったからな」

「！」

空腹が二人を後押しするほど突き動かす。故郷の料理を食べるだけの意欲はまだ残っていたのか、身体を起こして料理を持ってきた店主から受け取り、合掌して直ぐに食べだす。

「美味しい、美味しいね！」

「うん、うん……！」

腹を満たし、体力もそれなりに回復したらまたキツイ仕事をする。それでも、任されたことを投げ出すことはせずに最後まで頑張った二人を称賛する店主であった。そんな二人は『異世界食堂』が閉店する21:00まで働かされたのである。

「よし、皆お疲れさん！さっさと片付けて帰るぞー」

『はい！』

『ニャー！』

約二名、疲労困憊で声を上げずにいたが店主達は気にせず最後の仕事を臨む。

「南雲、白崎。どうだ、初めて仕事をした感想は」

「二つ、疲れました……」

「だろうな。特に南雲は悲鳴を言いそうな顔で必死に働いていたもんな。ま、そんな二人には臨時の報酬をくれてやろう」

と言つて、床に座り込んでいる二人に三つの亜麻袋を手渡す。ジャラつと音と硬い感触が伝わり、何だろうと袋の口を開いてみると、大口から見える光景は……金貨金貨金貨金貨。数え切れない代償の金貨が、狭苦しいと言わんばかりに袋の中でひしめき合っていた。凄く眩しい金色の煌めきの光が二人の顔を照らす。その意味は何なのか店主から告げられた。

「臨時に数時間も働いた報酬額だ」

「でも、正式に雇われた訳でもないのに。こんなに貰うなんて申し訳

「ないですよ」

「そんなの元の世界でも同じだろ？それとこの世界に元の世界の常識は通用しない。俺らを縛る法律もなければこの世界に生きる限りはそれなりに自由なのさ。ただ、元の世界と違って不便と不条理、理不尽が多いがな」

それに——と女性従業員の一人、アスナが店主の言葉を繋げるように話しかけた。

「この世界に来て、オラリオに来たばかりでお金は全然ないんでしょ？あの制服も随分汚れていたし清潔な服を着なくちゃ何時か病気になるっちゃって大変だしね」

「ていうか、数時間も働いた割には随分と多くね？」

海童の指摘に「へ？」とハジメは間の抜けた声を漏らした。海童が見る先は三つ目の金貨が詰まった亜麻袋だ。あれも二人の報酬に含まれているのだと思われるようで店主は否定した。

「あれはこいつらの『ファミリア』用の資金だ」

「おいおい、無償で他派閥に金を渡すつてのかよ。お人好しどころか変人だぞ」

やれやれと肩をすくめるそんな転生者に店主は邪のないにつこりと笑みを浮かべた。

「その変人に庇護を受けているのはどこのどいつなのか自覚しているんだろうな？店から放り出してブラックホール並みの食欲と胃を持つ仲間を何時まで維持してられるのか試してもいいんだぜ？」

「店主は俺の神様だぜ！これからも店主とこの店の為に精一杯働いて貢献するから——見捨てないでくれえっ!？」

本気で継り付き店主に許しを請う海童に行き場所も頼る場所も『異世界食堂』以外に他は無い。ここから離れてしまえば確実に金銭が一カ月以内に底をつき、仲間の一人によって餓死させられる運命は目に見えている。それだけは嫌で避けたい転生者はこれからもこの店から離れないで暮らしていくことになるであろう。仲間にする選択を誤ったと後悔しながら……。

「資金を渡す理由は、こいつらを死なせないため以外他にない。あい

つらと同じでな」

「あいつら……?」

「ん、言っただけだったな。彼女、結城明日奈は見た目はエルフだけど元は彼女の友達十数人も日本が存在する別の世界から来た人間なんだ。この世界に来たばかりのお前らにとっては先輩にあたる存在だ」

「私達以外にも、日本がある別の世界から来ている人がいるなんて……じゃあ、その人も?」

黒髪が特徴として香織は尋ねた。

「こいつは特殊なケースでな。海童も別の世界から来た人間だけど、自分の世界で死んだら神様の力によって復活して異世界で第二の人生を送る——転生者っていう類の存在だ。それと異邦人と転生者のことはもうオラリオに知れ渡っているから娯楽に飢えてる神々にとっては未知の存在。新しい玩具をもらえた子供のように全力ではしゃいでくるから自分達で何とかしろよ」

「は、はあ……神様って変な神様しかいないんですか?」

「一部を除いていないな。真面な神格者と出会えただけでも自分は幸運だと思っても過言じゃないほどにな」

真顔で断言する店主がそこまで言わすほどなのか神は、と海童とアスナが苦笑いするのも事実なのだろう。

反応に困ったハジメに香織を含め転生者として海童は訊いた。

「ところでよ。お前らはどうやってこの世界に来たんだ?」

「はい。私達は魔王討伐の為に召喚されました」

香織が答えた瞬間。店主達が思考を停止した。三人の反応に不安を覚えて恐る恐ると逆に尋ねた。

「あの、この世界に魔王っているんじゃないんですか?」

「……(フルフル)」

口で答えず首を横に振って否定する形で応えた。

「魔王討伐って……まーた、新しいケースが増えたな」

「召喚ってことは魔法で?」

「俺、この手の小説を読んだことがあるぞ」

三者三様の反応を伺わせ、最後に海童の発言で「じゃあ、教えて」

と店主とアスナは話の続きを促した。

「お前らの状況と召喚された理由を考慮するとあかんタイプの異世界召喚だろうな。召喚者のいいようにコキ使われて飼い殺しされるパターンかもしれないぞ」

海童から衝撃的な話を聞き「か、飼い殺し……!?」とショックを受ける。もしもそうなら、自分達は本当に召喚した張本神にいいように使われるだけの生き方をしなくてはならないのだ。愕然を禁じ得ないのは当然であろう。

「因みに存在するはずがない魔王を討伐するためにどうしてオラリオに来たんだ？」

「魔王討伐の為にレベルを上げるって、ロキ様にも言いましたけどロキ様もゲームのつもりでと……」

「うん、お前らは良い神格者に恵まれなかったっていう事実はよくわかった。お前ら、レベルを上げるってのは滅茶苦茶厳しい条件でなきゃだめだぞ。それをしないでいると軽く五年もかかるなんて話は珍しくない」

「ゴ、五年!？」

魔王討伐は嘘で、レベルも軽く五年は掛かるという真実に開いた口が塞がらないハジメに香織。数年かけてまでレベルを上げていたら、自分達が歳を取る時には一体レベルはどこまで上がっているのか想像ができない。

「その上、階層を踏破するたびにモンスターも強くなる。中には階層主、正式名称は迷宮の孤王、モンスターレックスっていうボスモンスターとも戦わなくちゃいけない時もある。ダンジョンの中で冒険者が全滅なんてこれも珍しくない話だ。夢も野望も抱いていない人間が入るべき場所じゃない」

「ベテランの冒険者でも死ぬときは死んじゃうからね」

「俺は行ったことはないけど、俺みたいに地上で働いて生きるのも選択の一つだぜ」

色々と聞かされ、言われて頭が混乱しっぱなしで理解に追い付けない。やはりダンジョンは危険な場所なのだとはジメは改めて思い知

らされ、唾を飲んだ。

「店主さんは最強の『ファミリア』の眷族だって聞きました。店主さんはどのぐらいダンジョンの中を潜っていますか?」

「階層踏破で言えば、60階層以上は進んでいるぞ。ここ十数年前以降から誰も足を踏み入れていない深層の階層だ」

「60階層のモンスターって強いんですか?」

「俺からすれば弱いけど、数が厄介だなー。当然のように百匹も二百匹も一斉に襲い掛かってくるもんだから数の暴力に圧倒される。しかもペンギンだったり熊だったり鳥だったりするぞ」

「・・・神楽の飯にならないかなそいつら」

「ならないよ海童君。モンスターだもん」

「———そうだぞ。試しに調理しても食べなかつた。鳥のモンスターでも不味すぎる。」

「———食ったのか!?食ったのかよ!」

「———もう、店主の行動は非常識極まりないよ……………」

「……………」

三人の話を纏めて香織とハジメは神に騙されたことだけは理解した。しかし、理解したところで現状が変わるわけではない。これから自分達はどう生きればいいのか乞うた。

「店主さん。僕達はこれからどう生きればいいんですか?倒すはずの魔王がいらないんじゃない意味もないですし」

「強くなる意味がないなんて、ないぞお前」

「えっ?」

「敵はモンスターだけじゃない。他の『ファミリア』も敵だ。敵対する『ファミリア』の冒険者かもしれない。私も私利私欲的な理由で白崎を奪われたり、目の前で強姦凌辱をされたらお前はただ黙って見ているだけではないだろうか?」

「ジツと濡羽色と金色のオッドアイに見つめられ、ハジメは店主の纏う雰囲気呑まれて言葉を発せない。」

「自分の大切な人を守る強さをあつたら、敵を倒せるだけの強さがあつたら、何て考えをした時点じゃもう遅すぎるぞ。この世界、ひい

てこのオラリオは実力主義の格差が最も見受けられる。強くなりた
いなら『技』と『駆け引き』を磨きあげ、ダンジョンで命を懸けた死
闘を毎日繰り返し返せ。いいな」

「.....」

返事をするどころか、顔を若干俯かせて目を泳がせ命がけの戦いに
恐れ、それを毎日やれと言われて逡巡するハジメの態度に——イ
ラっと。

「返事はどうした！一生惨めで情けなく弱いままでいたいのか南雲ハ
ジメッ！だったらその根性を俺が叩き直すぞっ!？」

「は、はいっ！頑張りますっ!」

店主に激を受け喝を貰って条件反射か立ち上がって直立不動とな
り、「違う、サーイエツサーだ！お前はそれしかいうことを許さないか
らな、いいな!」「サーイエツサー!」とおかしな展開になったところ
でお開きとなった。

「イツセー、急にどうしたの？いきなり怒鳴って」

「ふん、あいつの意気地のなさにイラついただけだ。下手でいれば全
てが万事解決、全部平和に終わってくれてるって感じだったからな。
あーいう奴は見ていてムカつく。一度も抵抗をしたことがないんだ
ろうな」

「そうなんだ.....。もしかして昔の自分と.....?」

そう聞かれると黙ってしまう店主を見て、是だと受け取った。店主
の過去を知る一人として寄り添い自分より大きな男の手を掴んで
握った。

「大丈夫だよきつと.....。あの子も大切な子ができたらきつと、
強くなるうって思うよ」

「だといいがな」

その一方、ハジメと香織は遅い帰還だったために周りから（ほぼ香
織だけ）に心配されたが、臨時で働いて得た「ファミリア」の資金を
皆に見せ主神に献上する直前に言った。

「神様、この世界に魔王がいるなんて嘘なんですな」

「香織?いきなりどうしたの?」

突然主神に対して問いたただす友人に不思議で訊いた時、雫へ振り返って真つ直ぐ言い返した。

「南雲君と町を探索しながら訊いたんだよ。魔王っていますかって。そしたらオラリオで一番強い「ファミリア」の神様から魔王は存在しないって教えてもらったの。私達のレベルを上げるのだから五年も掛かることもあるんだって」

『なっ!?!』

他の者達も知らない事実を知ったところで少年少女達は主神に殺到して問いただし始める。逃がさないよう、逃げられないように取り囲み誹謗中傷の嵐の中心に立たせた。それを見ている二人の下に天之河光輝達三人組が近づいてきた。

「香織、南雲君。さっきの話は本当なのか。魔王がいないことだ」

「うん、そうだよ。あの神様だけ知って他の神様が知らないなんておかしいでしょ?」

「信じられない。神様が嘘をつくなんて僕は信じられない」

「その情報源は別の神様だけなの?」

「違うよ。私達と同じこの世界で生きている異世界から来た人からも聞いたよ」

「は?俺達以外にも元の世界から来た人間がいるつてののか?」

「えっと、話がややこしいけど。僕達が住んでいた世界とは全く異なる別の世界の、異世界から来た人達だったんだよ」

ハジメの補足の言葉に香織もうんうんと首を縦に振って肯定する姿に、龍太郎は理解に苦しむと眉根を寄せてハジメを胡乱気に見る。何を言ってるんだこいつは的な相手を呆れた目も込めて向けて。雫は龍太郎の心情を代弁するかのように話しかける。

「南雲君、その説明は今の私達にはちよつと難しいわ」

「え?ああ、そうだね。実際に会ったのは僕達だけだし、また明日になったら連れてくるべきかな」

「うん、そうしよう南雲君。私達よりこの世界で長く住んでいるから皆にも紹介して説明してもらいたいからね」

微笑む香織がそう言い、そうしてもらえば助かると雫が思ったとこ

ろでふと、気付いた。

「二人とも何だか嬉しいことでもあったの？特に南雲君からは雰囲気
が違うんだけど」

「あーそうだ、雫ちゃん。あの『異世界銭湯』を作った人と会ってきた
んだよ！私達があつた異世界の人って言うのはその人の事で、『異世
界食堂』って私達の世界の料理を主に作ってるお店の店長さんのとこ
ろで働いていたの。料理もすっごく美味しかった！」

「うん、魔王がいないならあの故郷の料理を食べるために頑張りたい
なつて僕も思つたんだ」

—— 異世界の料理とな？

「…… 香織、南雲君。その店ってまだ開いているの？」

「もうお店閉じちゃったよ？ 開店時間は朝の9時だつて。サンド
ウィッチも販売してたね南雲君」

「ハムカツサンドに卵サンド、カツサンドや焼きそばパンも他にも
色々と売つてて大人気だったよ。お店の中だとそれ以上の豊富な料
理があるんだ。僕が食べたハンバーグとか、白崎さんが食べたエビピ
ラフとホットケーキとかね」

「マ、マジなのか南雲っ……！」

雫と龍太郎の様子がおかしい。どうしたんだろう？と二人して首
をかしげていると、雫は香織の肩を、龍太郎はハジメの肩を掴んで顔
をズイツと寄せた。

「香織、私もその店に連れて行ってくれない？」

「南雲、俺もその店に連れて行ってくれ」

この瞬間。もしもこの場に店主がいたら、ニヤリとほくそ笑みして
やったりと思つていただろう。乞われた二人は拒む理由はないと明
日、『異世界食堂』に案内することにした。

「蕎麦…… 天ぷら…… 煮物……」

「肉…… 唐揚げ…… ラーメン」

遠い目で天井を見上げ、ぶつぶつと呟く二人と神が自分達に嘘をつ
いた事実混乱して頭を抱えている天之河。神に詰め寄ってギャー
ギャーと騒ぐ少年少女達を必死に抑えようとする涙目の小さな少女。

軽くカオス化していたが、ハジメと香織は明日を楽しみに寝る支度をしていたので気づかなかつた。気づいてたとしても関わろうとはしなかつた。

冒険譚 27

翌日の朝——開口一番で結果を言おう。ハジメ達の「ファミリア」は空中分解、解散状態となった。主に主神に対して信用と信頼が奈落の底まで下落して、悪い神だと印象を抱いてしまった。どれだけ神を嫌っても少年少女達は主神から離れることはできない。その理由をまだ知っていない。知っていても結果は変わらないことも。

「これから、私達は何を生甲斐にして生きていけばいいの……」
「元の世界に帰れねえのかよ……」

「パパ、ママ……」

「最悪だ……」

「魔王何てはじめっからいないんじゃないんだ」

「俺達はここで無意味に死ぬんだな……」

魔王討伐のため——自分達は勇者か選ばれし者達だからと信じていた、それを信じていた精神が脆く崩れ去ってパニック状態に陥ることもなくとことん落ち込む方向性で最悪の事態にだけはならなかった。廃墟の中で膝を抱え落ち込み、もはややる気を失って起きていても寝転がったままの少年少女達に光は無かった。元の世界では皆を先導していたリーダーシップ的な存在、天之河と言えば……そのカリスマ性を発揮できず皆を支えずにいて壁際に座り込み未だ神に騙された事実を引きずっていた。

大黒柱と言えるべき主神は、面白半分で語った嘘がばれて焦るどころか、皆の様子を見ておかしそうにゲラゲラと笑っていた。それを咎める小さな少女がいたが、神の心に届かず空ぶる。

「……………おいおい、不味いってこれ」

「そうね……………光輝ですら落ち込んで私達じゃあどうしようもないわね。何か手を打たないと」

「……………」

廃墟の中が重苦しく暗く、生きた屍の状態となってる学生達の光景を見て受けいれられる状況ではなかった。雫の言う通り、早急な対応を求められどうするべきか思考の海に飛び込んだ。香織は自分が皆

の前であんなことを言ったからこんな状況になったのだと責任を感じて落ち込んだ。香織の側にいたハジメもこの状況をどうすればいいんだろうと自分なりに考えた。

「おい、お前らしつかりしやがれ！何時まで落ち込んでいたってしょうがねえだろうがっ！」

龍太郎の叱咤の言葉でも学生達は無反応。頼みの綱の天之河すらあの落ち込み様だ。雫でも無理なら自分の責任だと思って皆にかける言葉がだせない。ハジメも自分では皆を元気つけることもできないこの悪循環。

「どうしよう………」

香織の呟きに顔を俯くハジメ。この状況をどうにかすることができるのはこの場にいない。なら、知り合いに頼む……。

「っ！」

一人、いた。頼れと神にも言われたあの人物が。脳裏に男の顔が浮かび出した瞬間にハジメは踵を返した。

「南雲君？」

「店主さんと呼んでくる」

「あっ！」

香織も察して「私も行く！」と言い出して何も分からないでいる雫と龍太郎を置いて西区へハジメと向かう。少しでも早く辿り着く思いで走り、『異世界食堂』の出入り口の扉を勢いよく開け放った。

「店主さん！お願いしたいことがあります！」

「……早速トラブルを背負ってきたのか」

料理を両手に、頭の上にも料理を持つてる状態の店主が出入り口から聞こえてくる少年少女の乞いの声に面倒臭そうに溜息を零した。客の一人が不思議そうに口を開いた。

「何だ店主。厄介ごとか？」

「さあーな。厄介ごとかどうか、聞いてみないとわからん」

注文した客に料理を置いて、ミアに一時店を任して二人の下へ近づく。

「今度はなんだ」

「あの、皆を元気づけて欲しいんです」

「……はあ？」

なんだそれは、心底意味が解らないといった面持ちで店主は二人を見下ろす。

「腹減って元気がないのか？」

「えっと、それは——」

二人は皆が凄く落ち込んでしまった経緯を店主に伝えた。その上で自分達ではどうすることもできなかったから店主に頼ってきたのだと。話を聞いた店主は呆れ混じりのふかーい溜息を吐いてハジメと香織の頭を——。

「アホ」

鈍い音になるほど殴る(拳骨)。当然、生まれてから今まで感じたことがないぐらいの痛みに悶絶する二人は頭を抱えながらその場で膝を折って蹲る。

「そうなった原因はお前らが機を見誤ったせいなのは自覚しているんだろうな」

「は、はい……」

涙声で答える痛みが晴れない二人。ならばよし、とこれからどうするか考え……適格者を選定した。

「(今までの借りをまだ返してもらってないな。ここで一つぐらいは返してもらいますか)」

そうと決まれば即断即決、即行動に移す店主だった。まだ若干痛みが晴れない二人を引き連れて、まずは自分の目で状態を把握しに案内してもらったことにした。

場所は東区の人気のない廃墟。昔は立派な建物であった如く石造りで形はまだ残っていたが、交戦でもしたのか今では素人では修復が不可能なほど天井や壁にいくつも大きな穴が開いていた。それで風通しがいい訳でなく、暑苦しさ、熱気が籠って廃墟の中は異様な臭いが微かにする。

「……カオス」

そして何より、外は晴天だというのに風穴から差し込む光に負けな

いぐらい、どんよりとした暗い闇が動く意欲すら無くなって学生達から醸し出されていた。店主は今まで出会った異邦人と転生者と異なってるこの状況、状態に啞然としてしまった。

「こいつら、全員お前らの何なの？」

「クラスメートです。あと私達の先生が一人います」

「どいつだ？」

「——おい、そいつは誰だ」

店主を招くためにいなくなった二人に龍太郎と雫が寄ってきた。ハジメは直ぐに答えた。

「この人は『異世界食堂』ってお店の店長さんだよ。僕達が住んでいた違う別の世界から来た異世界の人でもあるんだ」

「この人が……?」

『異世界食堂』の……」

訝しい目で店主を見つめる。真紅の長髪、濡羽色と金色のオツドアイ、高身長、鍛え上げられた身体。外見だけでは日本人とは思えない男性だ。それが自分達とは違う異世界から来た異邦人？

「で、お前らの担任はどいつだ？」

「雫ちゃん。見当たらないようだけどどこか行っちゃったの？」

「ええ、皆が落ち込んだままで何も食べていないから元気づけようつと一人で」

「一人で？土地勘もないのに?……絶対に迷子になるぞ」

また面倒が増えたと嘆きそうになる店主は「連れ戻してこい」と指摘する。

「この町にはならず者やゴロツキが腐るほどいる。そいつらに絡まれたら助からないぞ」

「嘘!?!」

「二応、オラリオの秩序と平和を守る【ファミリア】は存在しているが、その【ファミリア】の団員達は俺ですらお前らの担任の顔すら知らない。だから、お前らが連れ戻してこい今すぐ」

「で、でも、どこに行ったのか私達だって……それに香織や南雲君よりまだこの町に慣れていないから」

雫の言い分に溜息を吐き、店主は徐にグイッと雫を一瞬で荷物のように脇で抱える。

「こいつを借りるぞ」

「え？」

「は？」

そのまま外へ出て一気に数メートル離れた先の建物の屋根の方へ跳躍する。一拍遅れて少女の悲鳴が聞こえてきて三人は啞然とした風に感想を述べた。

「雫ちゃんが悲鳴を上げてる」

「何なんだよアイツ……」

「大丈夫かな……」

南雲達の担任を探し求め東区を回った。脇に抱えられてる雫から訊き出した特徴に当てはまる人物は路地裏でも見当たらず、南区の方へ移動する。

「……あなた、冒険者なの？」

「そうだが？」

「じゃあ、あなたみたいな冒険者っているの？」

「俺と他の冒険者と比べたら連中が可哀想だ。俺は冒険者になる前から元々強いから」

「どういうこと？」と疑問を抱くよりも視界が次々と急に変わり続けてそれどころではない。人を軽々と抱え素早く動く彼の者の身体能力は異常すぎる。冒険者は強くなればこんなことができるのかと考えた。

「異世界から来たって、本当？」

「だとしたら？」

「今のあなたのレベルってどのぐらい？」

「2だ」

自分達よりたった1レベルだけの差。数字だけで判断すればまだ弱いレベルのはずしかし、冒険者のレベルは数年かけてようやく上がるという話を聞いたばかりだ。それはどうしてなのかと抱えられながら訊いたら。

「よくある話だが、ゲームしたことは？」

「……ないわ」

「そうか。ま、ゲームだけに限った話じゃないがな。必要な技術を完璧に人が自分の物にするためには何事も経験が必要だろ。要は俺達冒険者の背中に刻まれた神の恩恵こと『ファルナ』に経験値『エクセリア』ってのが必要でゴブリンやコボルト程度のモンスターを千匹も倒しても直ぐにレベルが上がるわけない。だからレベルの「ランクアップ」は時間がかかるんだよ。元から強い俺でも三年は掛かった」「もつと早い冒険者はいる？」

「ああ、一年だ。今じゃあLv. 3だぞ」

早っ——！と雫が衝撃を受けた矢先に店主の動きが止まった。どうしたのかと店主を見上げようとした視線が大通りに留まり視界に映るは——数人のならず者に絡まれてる子供の女の子。

「あ、愛子先生！」

「……どいつだ？」

「あの男達に連絡まれている人よ！」

どう見ても未成年にしか見えない人が『担任』なのだ雫は店主に言う。店主は違う世界でもあんなのがいるのかと他人事のように思いながら建物から彼女の担任の後ろに降り立った。

「先生！」

「え、八重樫さんどうしてここにいますか？」

「どうしても何も土地勘のない場所で一人だけ歩くのが危険だったこの人が……」

雫が店主を視界に入れたときは既に複数の男達の姿は背を向けて走って行つてるところを見送った瞬間だった。いかにもならず者がゴロツキの風貌だった男達なのに、なぜ走って逃げてしまったのだろうか。

「何を、したの」

「別に手も出してないぞ。ただ、目をつけられると酷い目に遭うってことをさっきの連中は知っているだけだ。いい判断だったよ」

それが何なのか雫は理解できない。場の雰囲気も元に戻り、野次馬

達も穏便に事が済ませたから問題なくなつたと足を動かし始める。

「八重樫さん、この人は……?」

「南雲君と白崎さんが連れて来た、異邦人の方です。話によれば私達と違う世界から来た異世界の人だとか」

「異世界の人、ですか? 私達がいた世界ではなく?」

「じゃあ、質問させてもらうが。そっちに神々は実在しているか?」

突然の質問に女の子、百五十センチ程の低身長に童顔、ボブカットの髪が特徴の愛子は目を瞬きする。

「神様は実在していませんよ」

「俺の世界じゃあ実在している。これだけでお互いの世界の違いは判る」

「そ、そうなんですか。では、貴方はどうしてこの世界にいるのですか?」

「突拍子もない話だが、いつの間にかここにいたとしか言えない。どんな方法で来たのかすら俺自身もわからない。だからしょうがなくオラリオに住んでいる」

何の理由も事情も目的もなく、しょうがなく生きていると述べる店主に対して二人は何とも言えない気持ちとなった。店主の話は続く。

「俺の事よりこの担任の話がしたい。落ち込んでる連中の為に食い物を買いに来たつて? でも金は? 外見だけ判断させてもらえばとても戦いに向いていそうにないが」

「教師として恥ずかしく情けない話ですが生徒達がちよつとずつ分けてくれていました。ですからそのお金で生徒の皆の為に美味しい物を食べさせたくて」

「キッチンもないのにどうやって料理を作る気でいたんだ? もしかして途中で気づいてまだ買っていなかったのか?」

「あう……」

愛子から答えは返ってこなかった。寧ろそれが是だとシユンと落ち込んでしまった。

「この世界のキッチンってどんな風なのかしら」

「さあな。俺も他派閥のキッチンは見たことがないから何とも言えな

い。俺自身が作ったキッチンには火の調整ができる魔法だからな」

「……魔法ってそんなことできるの?」

「この世界で唯一、俺だからこそできる芸当だ。だから美味しい料理も作れるわけだよ」

グウゥ……。

おかしな音が聞こえだした。発信源の方へ顔を向けると雫の方であって当人も自覚したのか気恥ずかしそうに頬が朱に染まっていた。

「飯、食ってないのか?」

「じゃ、じゃが丸くんって言う揚げ物なら……数個だけ」

また腹部から空腹だーと腹の虫が鳴って雫を恥ずかしがらせた。

「現代人の人間があれだけで満足するはずがないだろ。はあく……しようがね、落ち込んでる連中の分も飯作ってやるか」

呆れて何とも言えないと頭を掻く。そんなことをしてもらえるのかと、申し訳なきように愛子が店主を見上げつつ謝罪する。

「ごめんなさい。見ず知らずの私達のために……」

「ギルドから押し付けられた仕事のようなもんだよ。異世界から来た連中にはある程度の援助や助力をしなきゃならないからな」

「もしかして、他にも私達やあなたみたいな人達がいるの?」

「いるぞ。知り合っただけで五十人ぐらいは」

意外と多い人数だった。香織達も知っていることなのかと疑問を浮かんだが、それよりもするべきことがある。

「私も料理を手伝うわ」

「作れるのか?」

「人並みには」

「因みに好物の食べ物?」

「和風の物なら」

「んじゃ、俺の店に来て問題ないか。主にエルフに大人気のうどんとそば、てんぷらに煮物。あるからな」

それを聞いて、三度目の腹の虫が鳴ったのは別の話。そして雫の協力は断り愛子を廃墟へ連れて行ってもらい『異世界食堂』ではなく本城で準備に取り掛かった。

「本当に料理を作ってくれるのかなー」

「何で見ず知らずの俺達のために……」

「じゃあ、あなたはいらないのね。たくさんお金が稼げれるまでじゃが丸くんだけ食べてなさい」

冷めた雫の言葉に若干焦燥に駆られて弁解する龍太郎の話を耳に入れながら朝から落ち込んで現在昼時になっても一向に動こうとしないクラスメート達を見つめるハジメ。

「あれ、四人いない？」

「え、誰の事？」

香織でも人数が減っていることに気付かなかった。ハジメは何となくそう思っていたが、改めて人数を確かめ、誰がいないのか明白にする。

「檜山君、斎藤君、近藤君、中野君……うん、四人がいない」

「あ？あいつらなら昨日からいなくなっていたぞ」

「えええ!?坂上君、どうしてそれを先生に報告しなかったんですかあつ!?!」

大事な生徒が異世界の町でいなくなった!と大騒ぎする愛子に龍太郎は頭を掻いて「すみません」と謝罪する。

「町の探索かダンジョンの探索かのどっちかでしょ。放っておいても帰ってくるんじゃない?」

「八重樫さんも、それでも戻ってこなかったらどうするんですか!そんな軽く言わないでくださいよ!」

「あ、はい、すみません……」

不謹慎な発言で自分まで怒られてしまう雫も素直に謝る。

「もうこうなったら先生が探しに行きます!」

「ちよ、先生がまた町に行ったら知らない男の人に絡まれるだけですよ!?!」

「またあの人に迷惑が掛かりますよ。えっと、もう掛けちゃってますけれどっ」

生徒を探しに町へ赴こうとする愛子をハジメと香織が必死に抑える。暗い雰囲気場で場が沈んでいるというのに、ギャーギャーと喧騒を

起こすハジメ達が生きる意欲を失っていない証でもあった。

「——ここだな？」

と、不意に廃墟の出入り口に人影が浮かび上がった。誰だと五人が出入り口へ顔を向けた途端。

「俺がガネーシャだあああああああああつ！」

「「誰っ?!」」

鍛え上げられた筋骨隆々の身体の肌は褐色、象の仮面を被った謎の男の登場にハジメ達の気持ちは一つとなった。何故この場所に謎の男が現れたのか見当もつかない、理解ができず頭の中が混乱する一方。藍色の髪的女性と少女の二人が男の背後から現れた。

「突然の訪問に、騒がしくしてすまない。私は「ガネーシャ・ファミリア」の団長シャクテイ・ヴァルマ。こちらは私の妹のアーデイ・ヴァルマだ。そしてこの男神は私達の主神ガネーシャだ」

「よろしく! ついでに俺がガネーシャだつ！」

「ガネーシャ様、少し黙ってて」

アーデイに窘められシユンと落ち込む風に黙って静かになった。なんだ、この人達とはと唾然としていると。

「私達はイツセー、いや、『異世界食堂』の店主に頼まれてここにやってきた。君たち異邦人の話を聞いてな」

「店主さんが、私達に？」

「個人的に私達は彼に恩がある。なので彼の手伝いをしに来たのだが、まだのようだな」

何の手伝いを? と思いを抱いた矢先にまた訪問者が現れた。

「やあ、シャクテイ」

「フィンか」

黄金色の髪に碧眼の瞳、子供のような小さな体形に身の丈を超える槍を携えた小人族バルウムがシャクテイと朗らかに言葉を交わす背後には、腕が丸太のように太く筋骨隆々にまで鍛え抜かれた肉体に髭を蓄えている老将のドワーフと美しい緑色の長髪を伸ばす緑色を基調とした魔法衣で身に包む絶世の美女のハイエルフもやってきた。

「子供……? それにあなた達は……?」

「僕はフィン・デイルナ。【ロキ・ファミリア】の団長を務めている者だ。君達異邦人のことをイツセーから聞かされて話をしに来たんだ」
「【ロキ・ファミリア】、ロキ様の眷族、団長!? まだ子供なのに凄
い……」

「あはは、まだオラリオに来て日が浅いから小人族バルウムのこと知らないのかな? 小人族バルウムの身長は僕みたいに低くて冒険者になると老化が遅れて若く見えるんだ。これでも僕は三十代だよ」

嘘っ!? とハジメと香織の目が引ん剥いたほど驚いた。昨日の今日でロキの【ファミリア】の団長と出会うとは思いもしなかった。話をしに来たと言っていたが、一体何の話をしに来たのだろうか。

「質問を良いでしょうか? フィンさんのレベルはいくつですか?」

「僕を含め、この二人も第一級冒険者。Lv. 6だよ。ほぼ同期で数十年かけてここまで【ランクアップ】した」

「す、数十年で……」

「イツセーから何も聞いていないのかい?」

イツセーと言われても誰の事だか皆、ピンとこないで首をかしげる。シャクティが五人の反応をフィンに代弁する。

「まだ碌に名乗っていないようだ。店主と言えばすぐにわかったぞ」

「ああ、そういうことか。これから否が応でも彼らと交流をすることになるだろうから、僕達が言うまでもないかな?」

「そうだな。我々はここに来た目的を果たすだけだ」

自分に与えられた役目を全うする姿勢でいるシャクティの発言の後、真紅の魔方陣が誰もいない空間に発現して、カッ! と光つたと同時に店主と銀髪のメイドが横長のテーブルに大釜と二つの寸胴鍋に、何十皿と数え切れないスプーンを用意した状態で現れた。

「ん、いいタイミング」

「店主さん! いま、魔方陣らしきものところから……?」

「そういう知識はあるのか南雲は? その通りだ。魔方陣で家から直接ここまで転移したんだよ。作ってきた料理等を一緒に持ってくるために」

寸胴鍋の蓋を開けた時、鍋から湯気が食欲をそそる香りと共に立ち

昇ってハジメ達の鼻腔を刺激する。

「こ、この匂いはあ……っ!?」

「おう、カレーを作ってきた。こっちはフルーツヨーグルトだ」

激しく動揺する龍太郎の目は鍋に釘付け。思わず生唾を飲み込み近づいて鍋の中を覗き込むと、茶色いルーや人参、玉ねぎ、ジャガイモ、肉の塊が大量にあった。そして——ぐうぐう!と鳴り出す。龍太郎の腹から盛大に。

「イツセー様、始めましょうか?」

「おう、ガネーシャ」

「任されたっ!ガネーシャも食べたい!」

「店で食べ」

大釜から純白の米粒を盛った大皿をシルヴィから店主が受け取り、鍋からルーを掬ってご飯にかける。そしてアーデイがお椀にフルーツヨーグルトを入れると用意したスプーンとお盆を持ったガネーシャがそれらを受け取っては龍太郎に白い歯を覗かせる笑みと共に手渡した。

「ガネーシャ印のカレーだ!元氣いっぱい食うんだぞ!」

「俺が作ったんですけどねー?」

まずはお前が食べとばかり受け取らされ、その場で腰を下ろした龍太郎は皿とスプーンを手にして恐る恐るとカレーライスを食べた瞬間。目から大量の(涙じゃねえ、これは汗だっ!)滴が決壊したダムのように溢れ出た。

「うめえ……カレーだ、カレーの味だあ、超うめええええええええええええっ!」

一心不乱にカレーを貪る龍太郎の他、雫もカレーを食べて幸せそうな表情を浮かべる。

「美味しい……間違いなくカレーの味だわ。『異世界食堂』って名前も伊達じゃないのね」

「でしよー雫ちゃん!店主さんのお店に行けばもっというんな料理が食べれるよ!」

「僕もあのお店のおかげでダンジョンに行く気になった、かもしれな

い」

「そこは自信もって断言しろ南雲。返事は」

サーイエツサー!と条件反射で返事をさせられた南雲も香織と一緒にカレーを食べ幸せな気分になる。

「ほら、先生も」

「あの、先に生徒の皆に配ってください」

「お前が食べてる間にそうするつもりだ」

「さあ、食べるのだ可愛い子供よ!」

こ、子供ではありません!と抗議をぶつけてもお盆を受け取らせられ、渋々と食べ始めるも次第に無言で食べるので愛子も空腹だったのだろう。五人が食べてる間に配膳は幅広くなった。ガネーシヤが大声で「子供達よカレーが食べられるぞー!」十八番の喧騒を發揮。
『……………』

絶望するほど落ち込んでいるというのに喧しいほど騒いでいる何者かに睥睨する学生達の一人にカレーを突き出されると目を瞬きする。

「よく噛んで美味しく食べるんだゾウ!」

強引に手渡され最初は理解に追い付けなかったが、食欲をそそる臭いの現実突き付けられ「カレー?」と自問自答し、スプーンを取ってカレーを食べた直後。目から涙が出てきた。そんな生徒が一人、また一人と増えてゆき、全員がカレーを食べた頃にはお代わりを所望する声が上がった。皿だけだったりお盆ごと持ってきたりしてリヴェリアとガレスの働きによって騒動は起こさずお代わりにも支障は出なかった。

「ひっく……ひっく……ひっく……っ」

「美味しい、この世界で食べてきた物の中で一番うめえ……………」

「うわああああんっ……………」

泣き出す学生、嗚咽するクラスメート達を見て南雲達は心底安堵した。落ち込んでいた皆が息を吹き返してよかったと食べている様子の光景を何時までも見守った。

「ふむ、イツセーの料理は魔法でも掛かっているかのように若造共が

生氣を取り戻したわい」

「フハハハッ！異世界の料理はオラリオで一番のお墨付きをもらったからな！」

「こういう慰め方もあるのだな。勉強になる」

寸胴鍋の中にあつたルーは残りもご飯と共に少なくなり、結局ガネーシヤの腹の中に納まるのであつた。それでもまだ残つたのでこの場にはない学生達のために盛り付けてカードの中に保存する。それを愛子に渡して扱い方を教えた。

「さーと、腹いっぱいになつて元気出た学生諸君！これからオラリオで最強派閥の一角、「ロキ・ファミリア」の団長からお前らに話をするからよく聞くんぞぞ！」

積み重ねた木箱の上に立ち、見上げてくる学生達を見下ろすフィン。

「異世界から来た異邦人の君達にとって今回の出来事は不幸でしかないだろう。元の世界にいる家族達と生き別れをすることとなりこの世界の地で骨を埋める結果になつてしまったからだ」

しかし、とフィンはあるて厳しく鼓舞を打つ。

「だからといって生きる氣力を失つてはならない。君達はまだ生きている限り生きる義務を果たさなければならぬ。元の世界に帰れない絶望を背負いながらも今日まで生きている異邦人は君達の他にもこのオラリオに存在している。君達に料理を提供した彼もまた、異世界から来た君達と同じ境遇の一人だ」

店主の説明を軽く触れる。学生達は同じ境遇者の存在に意識を高める。

「彼がこの世界に来たのは五年も前だ。君達のように右も左もわからず、帰る場所、行く宛ても頼れる者も存在しない彼にとってこの異世界で必死に生きているんだ。君達同様、元の世界に帰れない絶望感を抱いてだ」

『!!』

「君達も彼のようになれとは言わない。彼も君達自身もこの世界で必死に生きることを足掻いて前に進む他に道がないからだ。故に僕は

君達に対して憐みも同情もしない。何故ならば君達は今の苦境を乗り越える強かきがあると信じているからね」

学生達を見渡ししながら自信に満ちた声音で言うフィンの言葉を、少女達は呆けているかのように耳をずっと傾けていた。

「絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち勝て！それが今の君達がする生きる義務だ！」

木箱に槍の石突きで突きながら強く猛々しく言うフィンに呼応して店主も復唱する。絶望に屈するなど、絶望に立ち向かえと、絶望に負けるなど、絶望に打ち勝てと。

「南雲、復唱！」

「え、えええええっ!？」

「返事が違う！」

「サ、サーイエツサー！ぜ、絶望に屈するな……」

声が小さい！と叱咤を受けた南雲。大声を出すなんて恥ずかしくてできない、と羞恥心に屈しかけたときに香織が息を吸って声を吐き出した。

「絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち勝て！それが今の私達がする生きる義務だ！」

可憐な少女の口から強く凛々しい声音と言葉が出てきてハジメや学生達は目を丸くする。

「絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち勝て！それが今の私達がする生きる義務だ！」

八重樫雫も香織に言い出すと。

「絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち勝て！それが今の俺達がする生きる義務だ！」

坂上竜太郎も続いて叫ぶ。この瞬間、ハジメは自分が言わなきやこの場がおかしくなってしまうと悟ってもやはり応援団のように叫ぶ行為は躊躇してしまった。しかし、ハジメの心情を読んだわけでもないのに香織が優しく手を掴んだ。

「大丈夫だよ」

一人じゃない、皆がいると何時も浮かべるニコニコとした笑顔から

そう言われた気がした。励まされる自分にぐつと唇を噛みしめ、店主から静かに見つめられ、雫と龍太郎からも見られていていながら時間が停止したかのようにやけに耳に聞こえる己の心臓の動悸が五月蠅いほど激しく高鳴り——はつと息を吐いた。

「ぜ、絶望に屈するな……」

これじゃ駄目だと己を叱咤する。

「絶望に立ち向かえ……」

全然駄目だ……！

「絶望に負けるな……」

まだ足りない……！

「絶望に打ち勝てっ」

次こそ……！

「それが今の僕達がする生きる義務だ！」

最後——大きく息を吸ったハジメは生まれてきて初めて大声で叫んだ。

「絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち勝て！それが今の僕達がする生きる義務だ！」

『——っ』

あのハジメが、大声で言った。あのハジメができて自分達ができな
いなんてあり得ない、あのハジメがして自分達がしないなんて恥ずか
しい、等と他の学生達の胸中に燃え盛る炎が宿り負けん気を発した。

「二」絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打
ち勝て！それが今の俺達がする生きる義務だ！「二」

「二」絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打
ち勝て！それが今の私達がする生きる義務だ！「二」

「二」絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打
ち勝て！それが今の僕達がする生きる義務だ！「二」

『絶望に屈するな！絶望に立ち向かえ！絶望に負けるな！絶望に打ち
勝て！それが今の自分達がする生きる義務だ！』

拳を振り上げ、己を奮い立たせ復唱する彼等彼女等の光景を見て店主達は満足そうに頷いたり薄く微笑んだ。フインは木箱に思いつきり槍を突き刺してハジメ達の発生を止めさせた。

「今の君達は最初に君達を見た時と比べるまでもなく勇気を奮い立たせている。絶望から立ち上がったそんな君達に対して僕は敬意の念を抱き尊敬した」

ハジメ達に向かって深く頭を垂らす。

「これから何事に対して屈さず、負けずに生き抜いてくれ。きっとそれが君達自身の最高の強さとなり誇れるものになると僕は断言する。それでももしも迷いがあつたり自分一人ではできない困難とぶつかってしまったら、直ぐ側にいる君達の友人と助け合つて乗り越えるんだ。いいね」

『はいっ！』

気合の入った返事が異口同音でされ、フインは自分の役目は終わったと木箱から降り立ち、店主はその木箱を拳で壊して——中に詰まっていた亜麻袋を手にとった。

「紹介は送れたが、俺は『異世界食堂』っていう店を構えているイツセー、本名は兵藤一誠と言う。同じこの世界に来た異邦人の先輩としてお前達に対してある程度の援助をしてやる。他は自分達の力で解決しろ。それでもダメなら俺のところに来て助けを求めろ」

亜麻袋を学生の一人に向かって優しく放り投げる。受け取った瞬間にずっしりとした重みが手に伝わった学生は目を見張った。

「その袋の中には日本円で言う百万円相当の額が詰まつてる。それで武器や防具を買うなり、服や下着を買うなり、日用品を買うなりして自分で必要な全てを買い揃えろ」

「そ、そんなにくれるのかよ？その金、どっから……」

「家に戻ればまだ数億の金が残っている。百万なんて額は俺からすればただの小銭程度だ」

「……私達からすれば大金に変わりないというのに、それを小銭扱いって」

「元の世界と違って冒険者として稼げば即時即当の時給だ。魔石やモ

ンスターのドロップアイテム、ダンジョンの中で採取できるアイテムをギルドに換金したり商人相手に上手くさばいて売り払えば数百万は軽く稼げれるんだ。小銭扱いは当然だろ。ただし、それ相応の命の危険性はかなりあるがな」

そうなのか、と何となく理解した学生達の間で少なからずざわめきが生じる。それらをパンツ！と手を叩いて意識を一つにさせてから話を続ける店主。

「これから渡す百万はお前達の所持金となる。が、今後は自分達で生きるために稼げ。ダンジョンで稼ぐか、オラリオに存在する店で働くか、商売に自信があるなら商人として生きるのも悪くない」

「因みに、今言った事の殆どイツセーがしているよ」

「うむ、こやつで作る飯は美味いからの。『異世界食堂』は毎日商売繁盛だわい」

「自分に見合った生き方をしろとイツセーは言っている。「ファミリア」はダンジョンの探索だけが全てではないからな。寿命を全うしないなら無理せずダンジョンに行かず、職業を手付けて働いた方が賢明でもある。イツセーは仕事を紹介や用意することもできるので尋ねると言い」

フィン、ガレス、リヴェリアがそう話をし、店主がまたいう。

「まずはオラリオの町をできるだけ幅広く探索しろ。ただし、この町にはゴロツキやならず者といった悪者もいるから纏まった人数で各々動け。ある程度土地勘を身についたら彼女、エルフの言う通り自分に見合った生き方を模索しろ」

「質問、いいですか？」

一人の女子生徒が小さく挙手して疑問をぶつけた。

「この世界は日本の法律や概念は通用しないんですか？」

「全然しないな。でも、犯してはならない犯罪をしてみましたらギルドに属する【ファミリア】に逮捕される。その【ファミリア】、この【ガネーシャ・ファミリア】が主にな」

「俺がガネーシャである！」

奇妙な姿勢ポーズをしながら名乗る男神を無視する。

「それと結婚制度もオラリオにない感じだよな？」

「ン、そうだね。複数の女性を侍らしている「ファミリア」の男性冒險者もいなくないだろうし、オラリオの住民は一夫一妻の意識が強いだけで一夫多妻制をしてはならないわけじゃない」

「とまあ、恋愛も自由ってわけだな。結婚式何て……するのかがガネーシャ？」

「開催する式場は無いが、祝杯はするぞ！「ファミリア」内でな！それと同じ派閥内で子供ができたとしても周囲に受け入れられるだけで難しいことは一切切しない！」

そうみたいだぞ、と女子生徒の質問に対して答えた。女子生徒も満足したのか感謝のお辞儀をした。

「お前らの中で片想いをしている、特に女子は一人の男と複数同時に結婚しても問題ないわけだ。ライバルがいたとしても相手がその気でなくても既成事実さえ握れば勝ち組も当然だ。だから女子達、頑張って恋愛をしろよ？」

返事はない。ただ、女子達の目が鋭くなったり怪しい光を孕ましたり意中の男子をチラチラと見たりする反応と変化で店主に返事の代わりとして窺わした。

「……イツセー、今の言葉、そっくり自分の首を絞めてる事を気づいているかな」

「ああ……理解している上で言った」

「わかっておるなら言わんでもよかろうに」

「言いたかったから仕方ないじゃんか」

藍色の髪的女性がジッと店主を見つめているのをフィンとガレスは気づいていながら目を向けない。ある意味店主の自爆だから、していることを自覚しているから他人としての姿勢に入る。

「そういうえば、この中で団長……代表者は誰だ。担当の先生か？」

「え？は、はい。生徒達の代表は私ですが、生徒の中の生徒の代表では天之河光輝君が代表格なんです」

「天之河光輝？」

フィン達もむっ？と反応した。名前の部分にとある転生者と同じ

名前であることを考え付いた故に。学生達の中から一人の男子生徒が前に出てきて店主と相對する。

「僕が天之河光輝だ」

「お前か……なら聞こうか。お前達は魔王討伐の為に召喚されたことは南雲と白崎から訊いた。その時自分の立場はどう解釈していた？」

「勇者だと思っていた」

……マタユウシヤカヨ。

「今もそう思っているのか？」

「……魔王がいないことを聞いて、神に騙されたと知って気付いて流石に思っていない」

安心した！凄く安心した！店主の杞憂は去ってよかったと安堵した。

「だが、世界中に人類を脅かすモンスターが跋扈していることだけは事実だった。僕はそれが許せない。だからこれからもダンジョンに潜って地上に進出しないよう他の冒険者達とモンスターを食い止める気だ」

……あれ？妙な意識をしてないかこいつ？

「勘違いしてないか？」

「勘違い？」

「お前、オラリオの歴史を知らないでいるな？」

「歴史？」

心底不思議そうに首をかしげる天之河光輝へ嘆息する。

「モンスターの地上進出は千年前の神代の時代——古代の時、ダンジョンの穴を防いでオラリオが完成されて以降、新たに地上に出たモンスターは例外を除いて一匹もないぞ。天界から下界に降臨した老神ウラノスの神の力でモンスター達を抑え込んでいるから俺達冒険者はダンジョンの中に入れるんだ」

「なっ……!？」

「お前やお前らの助力無くてもモンスターは出てこないし、他の冒険者もそういう理由で助けは求めない。だからお前の考えていること

は殆どの外れなんだよ。オラリオの外にいるモンスターは確かに人々を脅かしているがな」

自分の思い込みが違っていたことを思い知らされ半ば放心しかける。討伐するべき魔王の存在は無く、地上に進出しようとするモンスターは既に神の力で抑えられていてするまでもなく、自分の勝手な思い込みは殆ど外れてる事実を天之河光輝の首が残念そう。残念そうに力なく項垂れる。

「この無知なお馬鹿もそうだがお前達も何も知らな過ぎる。そんなじゃこの世界に生きていけないぞ。オラリオの当然の常識を身につけろ」

「常識って、誰から教わればいいんだ？」

「ギルドの受付嬢に聞けばいい。俺よりも彼女達の方が知識や情報が豊富だ。俺も何度も聞きに行っているぞ」

彼でも頼ってるギルド。ならば行く以外手はないと何人か積極的に情報を集める気持ちを固めたところで愛子が口を開いた。

「兵藤さん、でしたら生徒達と一緒に暮らせる建物も受け付けてくれますか？」

「物件の相談もOKだ。ただ、数人ならともかく二十数人となると大きい家はたぶんないと思うぞ」

「あうう……そうですか……この中に何時までも住んでいたら生徒達が体調をいつ崩してもおかしくないのですよ」

しよんぼりと落ち込む愛子や落胆する生徒達の顔に影が差した。

——それを不謹慎ながら店主はほくそ笑んだ。無論、フィン達は「あ、何か企んでいるな？」と心境を抱いたのは言うまでもない。店主は、常識という器に収まらない存在だ。既に異邦人達の存在を知って何か考えていたに違いないと断言できるのだ。短くない長い付き合いをしていれば深意はわからずとも予測はできる。

「だーが、一カ所だけこの場にいる全員が清潔の場所で暮らせる物件を知っているぞ」

「え？えっ!?!ど、どこですかそこ!?!教えてください!」

「教えるが、まだ住めるように設備が整ってないしその空間もない状

態だ。でも、他の物件よりはまだ天と地のさほどマシだ。それでもか？」

「それって後から自分達で住めれる様にすればいいってことよね？」
「その通りだ。まあ、俺がした方が数日以内で終わるぞ。そこでもいいなら住まわせてやってもいい。ただ条件付きだ」

条件付き、と加えられて訝しむ雫。良からぬ条件だったら愛子を説得して断る腹で尋ねた。

「条件ってなに？」

「働かず者は食うべからず。つまりその物件は客が利用する場所であつと人手が足りないんだ」

客が利用する物件、という特徴の答えを瞬時に導き出して雫はさらにその奥の店主の深意を口に出していた。

「その足りない人手を私達で補う、つまり住み込みで働けつて言いたいよね」

「中々鋭いな、その通りだ。それと聞きたいけど、お前達はこれからも冒険者として生きるつもりか？」

「え？」

不思議そうな顔をして声を口から漏らした雫は、冒険者以外に生き方なんてあるのかと目で店主を視界に入れる。ハジメと香織は知っているがまだその話は皆に伝えていないことを完璧に忘れていた。

「本当に無知だな。異世界に來たならまずは情報収集をするのは当然だろ。神の「ファミリア」はな、活動方針がダンジョンの探索以外にもあるんだよ。それこそ農業、漁業、鍛冶、治療と製薬と言った生業を主に活動してる「ファミリア」がな。鍛冶と漁業を活動している「ファミリア」はダンジョンの中に探索することもあるし、海の中のモンスターと戦うこともあるから強くなっても損はない。農業と製薬は基本的に命を懸けた戦いとはほぼ無縁で人の役に立つ物を生産してる」

ほかーんとそんな話は今初めて知ったばかりだと反応を窺わせる異邦人達に小さく嘆息する。

「冒険はするなどは言わないが、お前らを召喚して騙した神にこれ以

上付き合う義理は無いんじゃないのか？」

「そうかもしれないけれどよ、俺達はその神の眷族だぜ？簡単に抜けないんじゃないのか？」

「確かに簡単じゃない。眷族から脱退したいなら一年間待つて改宗コンバージョンをしてもらうか、神を天界に送還する他ない」

「改宗？天界に送還？なにそれ？」

——コンバージョン 改宗とは、別の「ファミリア」に転属すること。

——天界とは神々が住んでいる別の世界であること。

——送還とはこの世界をゲームの盤上として自分達がプレイヤーの感覚で生きている神々は、死に至るほどの致命傷を受けると神々が住んでいた元の世界に、天界に戻る設定になっている。下界で敗北した神々は二度と地上に、この世界に戻ってくることはできない。それが送還だ

と三つの用語を説明した店主はガネーシャへ目を向けた。男神は「む？」と何か話しかけてくるのかと思っただけだった。

「——試しにそのガネーシャで試そうか？天界に送還されるところは目を奪われる光景そのものだからする価値はあるぞ？」

「——ノオオオオオオオオツ！」

朗らかに軽い口調でこの場にいる男神を試そうとする店主に全力で拒む男神。無論冗談で言っているのは——。

「ガネーシャを送還したら責任を取って死ぬまで養ってもらおうとするかアーデイ」

「そうだね。イツセイさんは料理が作れるから良い旦那さんになれるしね」

「H A H A H A！大丈夫だ、俺が本当にそんなことするはずがないだろうー？（汗）お前らも冗談が上手いなーもう！」

本気なのは言うまでもなかった。

「ま、まあ脱退できたら他の「ファミリア」に入団できるし、無所属のまま一般人として生きることできる。お前らはこのままずっと冒険者として生きるか？それとも別の道に歩んで生きるか？」

「……今は何とも決められません。今は生きることと精一杯なので」

そうだろうな、と愛子の答えにそれ以上は追及しなかったが、店主はハジメ達の中で一生冒険者として生きていくのか迷いが生じたのを察した。

「なあ、レベル上げるのがかなり苦労するって聞いたんだが、効率的にどうやってすればレベルは上がるんだ？」

今まで黙っていた龍太郎からの疑問に知っている情報を公開する。

「他の冒険者と何ら変わりないことをするだけだ。ダンジョンの中で冒険をする。加えて己の限界を突破する、自分より強大なモンスター、格上の冒険者と相手に戦って経験値を得ていく。これだけだ」

「俺達より強いモンスター……」

「まだ駆け出しのお前達が上層域で命を落とすほどの相手と言えば、初心者殺しの『キラーアント』に11階層と12階層に出現する大型モンスター『インファント・ドラゴン』だな。仮にそいつに勝っても【ランクアップ】はしないだろうがな」

「ド、ドラゴン!?ドラゴンがいるんですか!？」

架空生物であり生物の中で最強として君臨しているモンスターの名前が出た瞬間にハジメはおっかなびっくりした。いや、ダンジョンがあるならドラゴンだっている可能性はある。ただ、思いの外浅い階層にドラゴンがいるとはハジメを始め他の学生達は知る由もないゆえに驚きは禁じ得なかった。

「レアなモンスターだから出会う確率は高くない方だが、見付けてしまったなら戦いを避けて逃げるのが懸命だ。命がいらぬなら死に行け」

見も蓋もないことを……と思うが、ドラゴンに挑戦するクラスメートがいらないとは限らない。店主はそう予想して忠告をしたのだ。

「そのドラゴンを倒したら有名になるのか？」

「なんねーよ。噂されたいなら中層にいるミノタウロスを一人で倒せ。死ぬがな」

「ミノタウロスって、あの顔が牛の化け物？」

「その化け物だ。貧相な装備で初心者が挑んだら即全滅だ。13層か

ら下の階層には絶対にお前らだけで行くなよ。いいな」

こくりと頷くハジメと香織に一部の学生達に「それで結局」と話を戻した。

「住む先はどうする？できれば俺として『異世界銭湯』に住んでサービ
ス営業をしてほしいんだけど」

「え、『異世界銭湯』に住む!？」

ざわっ!とざわめきがたった。

「ん、知らない奴は多いだろうけど『異世界銭湯』を改築と改装したのは俺なんだよ。でも人手が足りないから料理の提供ができない。だから料理も提供できるようになったら稼げた売上金はお前らの報酬に繋がる。この事を説明しなかったのは、お前達が総意で住み込みで働くか働かないか左右される話なんだよ」

事情があつたんだと後頭部に手を回して搔き出す店主。別の女子生徒が質問を口にした。

「あのー、私達料理を作る子はいると思いますがけど兵藤さんのようにうまく作れるかどうかかわかりませんよ?」

「そこは問題じゃない。異世界の料理を作れるかどうかが大事なんだ。無論味は凄く大事だけど即戦力になれる人材が必要なんだ。だからお前達に働いてほしいのさ」

「因みにどんな料理を提供するつもりなんですか?」

「カレーライス、焼きそば、ラーメン、餃子、チャーハン、フライドポテト、唐揚げ、枝豆、サラダ。飲み物はビールにペットボトル類の各種のジュースだ」

意外と少ない? 『異世界食堂』で食べた時に見た大辞典ぐらい分厚いメニュー表より思いつきり少ない。

「兵藤さん、お店にあるメニューとは結構少ないですね」

「そりやそうだ。アレを全部作るには作る料理の腕が高いコックじゃないと覚えきれないし作り切れない。だからよく健康ランドにありそうな料理だけを出すんだよ」

「そういうわけなんですか。でも、ラーメンってすごく大変ですよ。スープを作るために出汁をとか」

「スープの方はしばらくこっちで用意する。使用する麺もな。でもしばらくたったらお前達自身の手で作ってもらおうぞ」

作れるのか、ラーメンを。店主の料理のレパートリーが豊富過ぎて圧巻する。しかし、あの銭湯の中で暮らせるなら毎日贅沢な風呂に入れるのも悪くないかもしれない。この環境が悪い生活からおさらばできるなら、労働も受け入れよう。

「どうだ？あの銭湯に働けば無料で何時でも我が物顔で風呂に入れるが、脱衣所や浴室などの掃除はかなり手間がかかるその分、暮らしは快適になるぞ」

「そのお、神様抜きでその話を受けていいんでしょうか？」

「眷族がいなきや【ファミリア】は成り立たない。寧ろ今の条件を飲んだら神は喜ぶと思うぞ。苦勞せず優雅な生活ができる場所を手に入るんだからな」

そうなのかなあー？と思われても店主にとってその主神の事はオマケ程度でしか思っていなかった。重要なのはこの異邦人達の生活の保障なのだ。適当で快樂主義の主神に任せるのは少々不安であるからして、何時の様に放っておけない性質が發揮してしまったわけである。

「まあ、それが『異世界銭湯』で働くのがどーしても嫌なら、三つ目の選択肢だな」

「三つ目？二つ目じゃないんですか？」

「二つ目はこの廃墟にこれからも変わらず住み続けるかだ。二つ目はさつき言ったとおりに住み込みで『異世界銭湯』に働くで、三つ目は――」

三つ目の指を立てたあと、店主は人差し指だけ立てて床に指す。

「この廃墟をリフォームして住むかだ」

「リフォーム、ですか？」

「全員が寝れるぐらい広い場所だ。風穴のところは防いで他は掃除すれば奇麗になって住めれる」

指をパチンと弾いた店主が魔法を発動させた。風穴の部分が映像を巻き戻しているかのように穴の空間に石が敷き詰められ塞いでい

き、ポケットから金属の棒の先端に青色の球状の飾りがついた棒付きの飴玉にも見えるそれを取り出した。

「全員、一旦外に出ろ」

何で？と思うもフィン達が外へ出る催促をするのでハジメ達は疑惑が晴れないまま廃墟を後にした。

自分以外の皆がいなくなったところで何かの道具を真上に掲げて「奇麗になれ」と金属球が一瞬光り、廃墟の空間全体に広がった。一瞬のことでフィン達も何をし出したのか理解できなかつた次の瞬間。廃墟の中から吹き荒れる風が飛び出してきた。風が収まった頃になると「入ってきていいぞ」と声がかかったので入ってみれば、汚れていた床や壁、天井が一瞬の光と共に奇麗になって本来あるべき姿に変わっていた。

「す、凄い！中が綺麗になってるっ！」

「な、何でなの？」

「うーんと、ああ、制服が一番汚れてる男子ちよつとこい」

近づいてくる男子にも「奇麗になれ」と言いながら着ている制服に軽く押し当てると制服は一瞬だけ光に包まれたと思えば、目でも見て分かるぐらい黒ずんでいた汗で黄ばんで汚れていた白い服が新品同様に綺麗になった。当の男子と服がきれいになった瞬間を目の当たりにした面々は目を丸くした。

「イツセー、新しい魔道具マジックアイテムだね？」

「名前は『クリーンナップ』。異世界から来た俺達にとって洗濯は道具を使って衣類を洗っていたからな。それをこの世界風の便利な道具で清潔にできないかって思って作つてな。これを使つてからうちの従業員達は『皿洗いが楽になったー！』と大絶賛だ」

ふふん、と自慢げに語りドヤ顔を浮かべる店主。それをもう一本、今度は赤いのもポケットから取り出して香織に放り投げた。

「それで服を清潔にしとけ、くれてやるよ」

「あ、ありがとうございますー！」

早速使い始める香織に女子達が自分も自分もと殺到する。瞬く間に綺麗になった服を喜び、逆に使つてみたいとはしゃぐ姿に釣られて

男子学生達も使い始め出す。

「『クリーンナップ』か。買うとしたらいくらぐらいなのだ？」

「あの道具自体が『最硬精製金属』^{オリハルコン}で製作したから100万ヴァリスだ」

「実用的なのはわかったが、希少な金属で何てことを……」

「でも、半永久的に使えるなら凄く便利だよ？『ファミリア』に一本は欲しいかもしれない」

嘆くシヤクテイと「取れない染みだつて悩まずに済む」と合理的な考えを持つアーディは主神に乞うた。

「ガネーシヤ様、一本買ってください」

「わかった！イッセー、それを買うゾウ！」

「ふむ、汚れだけでなく臭いも綺麗になるならお得ではないかフィン？」

「ふふ、ロキの酒臭さも綺麗になるなら買って損はないかな？」

「性格までは綺麗にならないからなー？」

「今更ロキの性格が真面になつてしまえば団員達が混乱する」

フィン達も『クリーンナップ』を3本も購入することになった。ガネーシヤは五本。計八百万の金が目の前で行われた売買によつて動いたのをハジメは見てしまった。程なくして制服を綺麗にした学生達の顔は心なしか明るくなったところで素朴な疑問がぶつけられた。「リフォーム工事つてこの世界にそういう専門の人達がいるのですか？」

「さあ、いつも俺が直接手をかけて改築改装してたからわからん。フィン、ホームの修復の際には誰を頼んだ？」

「『ゴブニュ・ファミリア』に依頼したよ。でも、異世界風の建物を求めてるなら君の方が適任かな？」

「だ、そうだがお前らは俺と『ゴブニュ・ファミリア』。どつちに頼む？無論、この中でこれからも住む前提で決めろ」

住み込みで銭湯に働くか、この建物を本格的に自分達のホームにする選択肢を愛子達に提示した。異邦人一同は目を合わせ顔も見合わせ、どつちを選ぶかざわめき立つ。

「工事にかかる費用については？」

「『ゴブニュ・ファミリア』に頼んだ場合はわからないが、俺に頼むならお前らが出す金額によってオーダー通りに作ってみる。ま、軽く一千万は掛かると思え」

一千万……。これからの生活費として一人百万を受け取ったばかりだ。十数人が全額支払えば足りなくもない。もしも金を使いたくなければ銭湯で住み込みして働くか……。そう考えた学生達は相談し合った。

「ねえ、仮に住み込みで働くとして他に働ける店ってあるの？」

「あるにはあるが、その望みが叶った時に元の世界の感覚でどんな仕事をしたいか言ってみろ」

「花屋とか料理店とか、あと事務的な？」

「なるほどな。冒険者活動以外で他の生業ができるのか答えればできるぞ。神々だつてバイトしてるぐらいだからな。でも、本格的に仕事をしたいなら『ファミリア』を脱退しなくちゃならない時もあるぞ。理由はさつき言った」

そこで異邦人達一同の頭上に疑問符が浮かんだ。

「神様の眷族って本当に脱退できるの？」

「できるぞ。てか、『ファミリア』自体が神々にとって娯楽の一つに過ぎない。眷族を集め、地位や名声に富を高め他派閥と戦争をして最強の派閥へ昇り詰めるのが神々の求める刺激。俺達異邦人からすればRPGだな。だからもしも団員が脱退したいなら抜け出せるけど、神に脱退を拒絶されたら抜け出せないことがある」

「お願いしたら直ぐ脱退できる？」

「今すぐは無理だ。眷族になったら次の改コンバージョン宗まで一年間待たなきゃダメなんだ。一つだけ例外があるがな」

例外がある？何だそれはと聞かずにはいられない。教えてほしいと願えば店主は淡々と告げた。

「これもさつき言ったとおりに神に致命傷を与えて天界に送還させることだ。そうすれば主神の存在なしでは『ファミリア』は成り立たず、解散を余儀なくされる」

「神に致命傷つて、攻撃するって事？そんなバチあたりなことを……」

「そういう状況だったら、皆するぞするの!？」

「とにかく、一年間は今の主神と一緒に住んでみる。途中、もう嫌気がさしたら俺に言えばいい」

「言ったとして、どうしてくれるの?」

「……具体的に言ってほしいのか?」

意味深な笑みを浮かべる店主にハジメと香織は首を横に振った。知らない方が幸せという時もある。聞かない方がいいと店主の顔を見て遠慮した。

「先生、お前の答えは決まったか?」

愛子は皆を代表者として頷いた。店主は彼女から語られる言葉を静かに耳を傾け、わかったと頷いた。

冒険譚 28

店主の提示した2つの選択の1つを選んだハジメ達は、快樂主義者の主神と一年間過ゴスすることも継続する方針で臨んだ。改コンバレーション宗するかどうかはまだ決めかねる、と来年になったら改めて考えるという気持ちで翌日を迎えた。

「店主さん！おはようございます」

「…………おはよう。昨日の今日で今度はなんだそんな大勢で」

「食べに来ました！」

「なら客だな。いらっしやいませ。自由に好きな席に着け。ただし他の客達に迷惑をかけるなよ」

9時から開店の『異世界食堂』で朝食を食べに来たハジメ達を迎えた店主達。期待で胸を膨らませて各々好きな席で座り、少年少女達は大辞典並みの厚さのメニューの本を開いて感動の声を湧かす、朝から雪崩れ込んできた二十数人分の料理を作らなければいけなくなったシェフ達は、目まぐるしい忙しさに追われる朝を送ることになった。そんな中、また客が入ってきた。褐色肌のスキンヘッドの大男が。

「へえ、また異邦人達が来たのか。しかも学生の集団とはな」

「しかも理由が魔王討伐のために勇者召喚されたらしい」

「魔王討伐っておいおい…………いるわけねーよな？」

「いたらいたで、ファンタジーらしさが濃い世界になつて俺は楽しそうだと思うけどな」

その客、桐ヶ谷和人の仲間の一人エギルと席に座ってハジメ達と出会った経緯を語りエギルは興味津々で耳を傾けた。その話が終わると店主は本題を追求する。

「今日はどうしたんだ？あの時自分の店を持つって話を聞いてから随分と日が経ったけど」

「ああ、その話をしに来たんだ。もう少しで店が完成しそうでな。完成したら最初の客としてキリト達の他に前達も誘いたくてよ」

「俺達って、数人か？全員か？あれからこっちも同棲同居人がかなり増えたぞ？」

「そうなのか？うーん、じゃあお前とアスナ、アリサって子だけ来てくれねーか？」

「元々アスナも誘う気でいたんだろ？わかった。じゃあ俺も他の何人か声を掛けさせてもらうぞ」

誘いに乗った店主も誰かを誘う了承を得て朗らかに去るエギルを見送ってすぐにアスナから話しかけられる。

「エギルさんと何を話してたの？」

「自分だけの店を完成できたら来てくれって誘いだ。アスナも来てほしいってよ」

「そうなんだ。エギルさんはこの世界でもやっぱりお店を作ったんだね」

「やっぱり？元の世界にもあるって聞いたけど」

「エギルさんはゲームの世界にでもお店を作ってるんだよ。だからエギルさんらしいなあーって」

自営業が好きらしい同じ境遇者を称賛するアスナだからこそわかるらしい。どんな店なのか店主もアスナも知らないので来訪する時間が楽しみで期待する。

「そういえばさ、あの子達って異邦人なんだよね？」

「それがどうした？」

「転生者じゃないから凄い能力を持っていないんだよねーって思っさ」

「ああ、流石にそれは無い」

一度ほぼ全員を視る機会があったので忘れずに確認し、把握した店主の口から否定の言葉が出てきた。本人も口にした通り予想通りの答えに受け入れたところで耳にした。

「転生者じゃないから神の特典で得た最強の能力、チートはないが……全員、スキルはあった」

「え、全員にスキル？」

「ん、スキルの方がチート気味だ。連中は知ってるかどうかは知らん

が、俺達や周りをどうこうするような悪意を持っていないし放置している」

危険はないと言いなからアスナにも向かって「アスナとキリト達と同じだな、異邦人なのに未知のスキルを持つてるところは」と同類扱いをする。

「久々に俺と勝負しようかアスナ」

「うーん、手加減してくれるならね？」

「善処する。アスナが俺を楽しませてくれるならな」

逆にそれはやる気を出すのではないかと不安を覚えるが、剣士としての性がアスナの気持ちを抑らせる。勝負だけでなく久々に冒険もしてみたいと思いを抱くと、それを店主が心を読んだようにダンジョンにも行こうと誘いアスナは首を振った。

「ごちそうさまでした。とても美味しかったです」

ハジメ達が代金を支払い満足感を超える幸福感が表情に浮かんで晴れやかな気分のまま店を後にしていく。作る側もそんな顔をしてくれるなら料理人冥利が尽きるの一言だ。雫からも一言ちようだいする。

「また食べに来ても？」

「好きだけ来い。金を払って食べるものはたとえ悪人でも食べさせるのがこの店の信条だ」

だが、店に迷惑をかけるなら話は別だと相手の良し悪し関係なく料理を提供する店主の考えを聞き、出る前に雫は質問を投げた。

「今使ってる武器だけど、これからもモンスターと戦うならギルドから支給された武器以外使いたいの。正直、貰った武器じゃ心持たないから」

「武器屋の場所を知りたいって？」

「ええ、教えてくれる？」

「教えるも何も、武器屋はこの冒険者通りを歩けば冒険者が必要な道具を売ってる店はあるし、バベルの塔の四階から七階にも武器屋はあるぞ。冒険者なら当然の常識だ」

情報収取を怠ったから知らないんだ。と呆れた目で見られて雫は

思わず視線を逸らした。数日とはいえハジメに情報を集めさせてる間、自分達は魔王討伐を目標としてダンジョンの中で探索していた。どっちも大切な事だが常識なことを教える相手側からすれば呆れることだった。

「武器を主に生産しているのは【ヘファイストス・ファミリア】と【ゴブニユ・ファミリア】だ。他にも知りたいならギルドの受付嬢に教えてもらえ」

「ありがとう、わかったわ。それじゃ」

得た情報をもとに雫はきつと探索組の仲間と武器を買いに行くだろう。それ以上の事は放置する予定だった店主にアスナから一言。

「あの子、バベルの塔の中のエレベータの操作方法、知ってたっけ？」

「……アスナはどうやって知った？」

「近くの人に教えてもらったよ。店主、ちゃんと教えないとあの子達が困るよ?」

無責任、と言う言葉が店主の頭にのし掛かりある程度の助力をする言った手前、教えたからには最後まで責任を持たなければならぬ。結局はくく。

「この台座の上に乗って操作すると上階に向かうんだ」

白亜の巨塔バベルの中。バベルの一階はいわば玄関みたいなもので、主要な公共施設は二階から。三階まで上ってギルドにもある換金所を壁際の一角に見つけつつ、店主に案内されてるハジメ達は広間の中心へと赴く。いくつも存在している円形の台座、その一つを指して説明するそれは、硝子とはまた違う透明な壁が取り付けられていて、まるでグラスみたいだと見たままの感想を抱く。備え付けの装置の操作を数人教えて何組かグループに分けて他の台座で移動する店主の指示に、必然か当然か、雫が女子と男子を分けて乗ることを催促した。その催促に誰も異を唱えず各グループそれぞれ昇降設備ことエレベータの台座に移動、教わった学生が操作するとどの台座も地面から離れて、浮遊。他の台座で乗ってる彼等彼女等から驚きと感嘆の声が聞こえてきた。

「電気もないのにどうやって浮いているんだ？」

「分からないが、異世界の文明ってやつだろう」

それだけで何でもそうだろうと自己完結する学生達の考えに心の中で苦笑い。ほどなくして、ハジメの四階に到着する。少しして他の台座で乗っていた皆が集まる。

「お目当ての店はまだ上の階なんだが、せっかくだから冷やかしながら見てみよう。どんな武器や防具があるのか見てみたいだろ？各々自由に見てこい。他の人に迷惑をかけずにな」

自分のタイミングで戻ってこいとお達しが送られて学生達は自由に行動を開始する。

「香織、僕と……」

「南雲君、一緒に見て回ろっ」

「え、いや、僕は……」

「どんな武器と防具があるのか楽しみだねー」

天之河光輝の誘いが空ぶる。ハジメの手首を掴んで引つ張る香織に伸ばした手は虚しくも触れることはなく、停止したように動かなくなった。

「んー、もしかしてあいつに気があるのか？」

「香織は元の世界の学校の間じゃあアイドル的な存在だがらね。性格も人柄も容姿も良いから。対して光輝も成績優秀で顔もかなりイケメンでしょ？カリスマ性も高くあるから他の学校の女子からもモテモテよ」

「必然的な組み合わせゆえに回りは当然だと思われてるか。でも実際はそうじゃないと」

「南雲君の事が好きなのよ香織は」

うっすらとだが、そんな感じはしていた。雫から香織の片想いの相手を教えられて確信した。

「外見より内面的に好かれたか」

「どうしてそんなことがわかるの？」

「男も女も外見の他にも好きになることがあるだろ。南雲は内面的な何か、俺達の知らないところで白崎しか知らないことをして積極的に接せられてる。そんなところだろ」

黒い瞳を店主の顔を覗きこむように見上げる。自分達と交流してまだ三日も経っていないのに南雲と白崎のことをよく知ってる風な感じで言う。不思議な人だどつい尋ねてしまった。

「相手の心を読む魔法でもかけたの？」

「できたら便利だな。そしたらからかって弄れる」

この人にそんな魔法がなくて安心した雫は、いつものメンバー（天之河光輝と坂上龍太郎）と武器や防具を見て回ろうと足を動かす。

ざつと見ただけでも武器・防具の店がそこかしこを埋め尽くしている。元の世界には存在しない店が売っている装備品を見て学生達は興奮しながら観ていく。

「あの一、二このお店の名前って何ですか？何かの名前が看板に書いてあるんですけど読めなくて」

二人組の一人の女子から訊かれ、看板のロゴタイプ of 文字を翻訳して教えたついでに告げる。

「この四階から八階のテナントは全部【ヘファイストス・ファミリア】のものだから覚えておけよ」

「【ヘファイストス・ファミリア】が全部？というか、どんな派閥でしたっけ？」

「武器や防具を作る鍛冶を生業としてる【ファミリア】だ。【ヘファイストス・ファミリア】が作る装備品は一級品で値段は軽く一千万円も超える」

「た、高っ!?!え、私達そんなにお金は無いですよ!?!」

借金してでも買えってこと!?!と緊張感を抱く女子。もう一人の女子も不安げにそうなのかと店主を見つめるので「アホか」と一蹴する。

「ちゃんと初心者用の武器や鎧を売っている場所はある。今は【ヘファイストス・ファミリア】が作ってる装備品はどういうものなのかをお前達の目で見えて知ってほしいだけだ。今のお前らに一級品の装備何て宝の持ち腐れもいいところだ」

「き、厳しいですね。そりゃあ今の私達は弱いから事実なんですけど」「お前らの為に言ってるんだ。辛辣な事を言おうが厳しいことを指摘

しようが、平和ボケしている世界から来たお前達がいるこの世界は常に死と隣り合わせしているんだよ。ダンジョンの中だろうが地上だろうが常に心の中で周囲を警戒しろ。突然同じ冒険者に襲われても珍しくないだからな」

店主からの言葉を彼女達だけじゃなく側にいた学生達も耳にして、元の世界と違ってもつとも色濃く危険な世界だと教えられた自分達は命懸けの日々を送ることを改めて突き付けられて、唾を飲み込む。「さあ、あともう少ししたら上の階に行くぞ。そしたら自分達に合う武器や鎧を買うように」

はい、と返事をする学生達は観光気分であちこち動き回って店に入らず陳列窓から眺めたり、店の中に入って直接見たり触れたりして「へファイストス・ファミリア」の高級ブランド品を知っていく。その後、店主からの呼び声に集い目的地、バベルの八階へ移動を始める。今度も魔石昇降器エレベーターに乗り込み、時間をかけて上階へと昇っていった。

「はい、到着」

制止した魔石昇降器エレベーターの主導のドアを開けると、先ほどの四回と同じような光景がハジメ達を出迎えた。剣、槍、斧、槌、刀、弓矢、盾、鎧、その他防具……様々な種類の武器の専門店が、広いフロアに展開されている。そして何より四階の時と違って客の数……冒険者の姿が多い。

「さっきの四階にもあった「へファイストス・ファミリア」みたいな高級ブランド、自分達には到底買えるとは思えなかっただろ？」

ハジメ達一同は素直に肯定する。

「実はそうでもないんだこれが。ま、百聞は一見に如かず！また自分達の目で見ても確かめてこい。このフロアに構えてる店から武器や防具を自分で選んで買ってほしいからな」

今度は購入の許可を得てまた見て回りだす異邦人達。すると自分達でも買える値段で販売されていることを知り、冒険をする学生達は感嘆と驚嘆の息を吐き、念も抱いて剣や盾、鎧を手にして盛り上がる最中。質問を受けた。

「魔法の杖ってここにもあるんですか？」

「それは魔導士専門店にある。魔法を習得してないと魔法の杖なんて持つても意味ないからな」

「どうやって魔法は覚えられますかー!?」

「そりゃあ運次第だな。それか一億円以上する魔法の本を買って習得する他ないからどっちみち、故意的で魔法を得るのは相当難しい」

——まあ、質問してきた学生に魔法はあるようだがな。

店主も足を運び何を買おうとしているのか見たり、自分に合う物を選定してほしいと頼まれたり、悩んでいる者に声を掛けたり、相談に乗ったりするなど時間をかけて、選ばせたことで自分だけの装備を異邦人達は手に入れた。

「よーし、全員でなくとも皆買ったな? 装備が売ってる場所も把握したことで次行くぞ」

次とな?

「次ってどこですかー?」

「決まってるだろ? 冒険者にとっておなじみの道具、回復薬ポーションが売ってる場所だ」

『おおおー!』

ゲームでもよく出てくる道具アイテムの存在に男子生徒達は感動に似た興奮を声に出した。武器や鎧を買って次は体力や魔力を回復するために必要な物、それは回復薬アイテム!

「同時に病気や怪我など治療してくれる病院的な治療院にも案内する。場所が分かれば自分達だけでも行けるだろ。それじゃ、先にバベルの一階に戻ってるから皆も降りて来いよ」

足元に展開した魔方阵から発する光に包まれながら一瞬で消えた店主。それには驚くもハジメ達は言われた通りに魔石昇降器エレベーターに乗って一階へと降りるのだった。全員が一階に辿り着いた頃には店主が佇んで待っていた。皆が揃ったところで北西のメインストリートへ赴く店主の背中を追いかける。

目的の場所、そこは「ファミリア」が経営している巨大な建物に辿り着いた。清潔な白一色の石材で作られた建物には、「ディアンケヒト・ファミリア」を表す光玉と薬草のエンブレムが飾られている。

「いらっしやいませ」

「よっ」

ハジメ達を出迎えた少女に、店主が気さくに小さく手を上げる。ヒューマンである彼女の容姿は、精緻な人形、という言葉が真っ先に浮かぶ。まだ一五〇Cに満たない小柄な体がその印象に拍車をかけていた。下げられた頭からさらりと零れる細い長髪は白銀の色で、大き目な双眸には儂げな長い睫毛がかかっている。服装は白を基調とした、どこか治療師を思わせる「ファミリア」の制服で身に包むアミッド・テアサナーレ。

「ちっちゃっ」

「可愛いっ」

彼女を初めて見るハジメ達から黄色い声が沸き上がる。店主と一緒に来たという事は関係があるのだろうと近づいてきた彼に口を開いた。

「イツセー様、彼らは？」

「別の世界から勇者召喚で来てしまった異邦人達だ。今、色々と教えてるところだ」

「当「ファミリア」にお越しいただいたのはそういうことですか」

「そういうわけだが、買い物をしに来たのも事実だ。二十数本の^{エリクサー}万能薬を頼めれるか？」

「かしこまりました。少々お待ちくださいませ」

そう言ってアミッドは他の団員に注文の品を用意してもらい店主と売買のやり取りを交わす。

「二人一本エリクサーを取れ。一本単価は五十万円はくだらない道具^{アイテム}だから間違っても落とすなよ？」

ひえっと短い悲鳴が聞こえたが一人一人^{エリクサー}万能薬を受け取らせていく。全員の手に受け渡るとアミッドに手を振りこの場から離れる。

「次は道具屋だ」

目的の店は西のメインストリートを外れた少し深い路地裏にある。日当たりが悪く軽くじめじめした場所にぽつんと建つ一軒家には、五体満足の人の身体を模した「ファミリア」のエンブレムが、看板のよ

うに飾られていた。

「……アレ、もしかしなくても人体模型とか？」

「もしかしなくてもそれっぽいだろ？」

両開きの木扉を限界まで開けて入ると、先客の冒険者が男神と商品の売買をしていた。問題もなく商品を買った冒険者が店主達の横を通り過ぎ、入れ替わる感じでカウンターにいる男神へ話しかけた。

「おお、久しいなイツセー。それにその者達は？」

「異世界から来た新しい異邦人だ。ミアハのホームに案内をしに来たんだ」

「そうであったか。ならば是非とも我が「ファミリア」の商品を買っていつてほしい」

「そうさせるつもりだ。デュアル・ポーションはあるか？」

「すまぬがもう在庫がなくなっている。新たに生産をしなければならぬのでな」

それは残念。と思いながらもハジメ達に回復薬と高等回復薬を買うよう促す。初めて買った回復薬ポーションを好奇心や興味津々で眺め、どんな味なんだろうねー等と他愛のない雑談を沸かす異邦人達。

「うむ、新たな顧客が増えると思うと嬉しい限りであるな」

「頑張れよ。ところでナーザは？」

「皆と一緒にダンジョンへ行っている。『ブルー・パピリオ』の翅を集めにな」

「残念。モフモフしたかったがまた今度だな」

「また待つておるぞ」

ミアハのホーム『青の薬舗』を後にしメインストリートへと戻る。

「一通り必要な買い物を揃えたところで一旦お前らのホームに戻ろうか。何時までも荷物を持って歩くのはしんどいだろ。ああ、買った武器は装備するように」

はーいと上がる声を聞き直ぐ東へ足を運ぶ。それから荷物を置くと交易がある南へ向かい、そこでも買い物をさせて時間が許す限りオラリオの町を案内した。そんな時だった。

「なあ、冒険者つていやあ依頼を引き受けることもあるんだよな？」

「あるがどうした」

「必要な物は全部買ったんだから冒険者として何でもいいからクエストをしてみたいんだ。いいだろ?」

軽薄な笑みを浮かべて乞う男子学生に止める理由は無い。ただし店主からすればまだ大事なことを教えていない。人として大切に大事なこと、それは――。

「やるのは自由だがよ。お前、この世界の文字の読み書き分かっている上で言っているんだらうな?」

ピタツとクエストをしたい男子以外の面々の足も止まって、不自然な空気が漂い始めた。その空気は店主も感じ取り半目で言い始める。

「お前らがまず一番しなくちゃならないのはこの世界の文字の読み書きの練習だとは思わないかね? 読むことも書くこともできないなんて――人として恥ずかしくないかね?」

あからさまに嘲笑う店主に何一つ言えないハジメ達は言われるままであった。故に何故異世界に来てまでしなくちゃならないのか、ということ強いられるのだった。

「ホームに戻ったら読み書きをマスターするための勉強会を始めるぞ。拒否権は絶対がないから覚悟しろよ」

えええー!と不満の声が上がった瞬間に店主の鋭い眼光の睨みで黙らされる。物凄い怖い目つきで。

「碌に英語もマスターできてないってのに、この世界で読み書きもせずに生きていけると思ってたのか? 恥ずかしい思いをするのは自分だつてことをわからないみたいだなおい。何となくの軽い気持ちで生きるぐらいなら原始人からやり直せ。その方がお前らはお似合いだぞ」

辛辣な言葉を貰い、それでもぐうの音も出ない異邦人達一同。店主の言い分は尤もなのでハジメ達はホームに戻って勉強会を開くことになった。

「……あれ? 僕達のホームじゃない?」

「俺のホームです。必要な道具を揃える間に勉強が嫌で逃げ出しかねないからな」

東へ向かわず西と北西の間にある区画へ直行する店主に素朴な疑問を抱いた。店主のホーム。最強派閥にして最大派閥の「フレイヤ・ファミリア」のホーム。一体どんなホームなのか、好奇心と興味が芽生えてついていく。だが、店主のホームがある区画に足を踏みいるとそこに広がる光景は人気がない寂れた廃墟しかない。立派な建物らしき建造物は見当たらない。長い間、誰からも忘れ去られた静寂な雰囲気を感じて、ここが本当にホームがあるのかと怪訝する。

「兵藤さん、どこにホームがあるんですか？」

「もう目の前にあるぞ」

「目の前って……何も無いですよ」

人もいなければ活気な喧騒も聞こえない。廃墟以外何も無いこの場所に店主のホームがあるという。他の学生達も訝し気な心情で佇む中、四人の嘲笑う声が聞こえてきた。

「おいおい、聞いたか？何にもないのに家が目の前にあるってよ」

「ヤベエ薬でキメてるんだらうぜ。おーコワ。異世界でもマ・ヤ・クがあるのか」

「ぎゃははっ！そうじゃなきゃ見栄張っているだけだつて。おーい、頼れるカツコイイお兄さんになりたいからって謙虚しなくていいですよー！」

「ダツセー！やべ、チョー笑える！」

ゲラゲラとあからさまに馬鹿にする発言をされてもどこ吹く風のように、店主は虚空に向かって呪文を紡いだ後にそれは開いた。鈍重の音が空気を震わせ、廃墟の通りの空間がゆっくりと左右に両開き寂れた廃墟とは無縁の大森林を窺わせる。

「俺のホームはあの中にある」

いくぞ、と一言だけ告げて大森林へ足を運んでいく店主の背中に視線を送るハジメ達も数歩遅れて恐る恐ると追いかける。別世界みたいな空間の中に入ると、空気が美味しいと感じるほど澄んでいた。まるで自然の中にいるみたいだと思わせながら地面に根を生やしている木々の傍、地面の至る所、歩いていると白水晶と青水晶を見つけて、ハジメ達を感嘆の念を抱かせた。

「兵藤さん、あの水晶って綺麗ですね」

「白水晶と青水晶っていう名前の水晶だ。ダンジョンの18階層に生えていて、持ち帰ると換金もできる」

「水晶って売れるんですか?」

「ああ、それ以外にも壁を掘れば金属や鉱石が出てくるし、食用の果実があつたり回復薬の原料となる道具アイテムがある」

まだ知らなかった知識がさらっと出てきて頭の中でメモする。冒険の先輩から色々学ぶことが多いな、と感想を浮かべながらしばらく歩いてみると、一〇〇Mはある広い湖に辿り着いた。さらに湖の奥には店主の庭園があつて数体の金属兵ゴーレムがゆつくりとした動作で管理の仕事をしている。

「金属の塊が動いている……. . . モンスターですか?」

「違う。あれはゴーレムだ。俺が自立起動型用に魔法で動かしている」

「じゃあ、あの場所って何でしょう?」

「俺の庭園だ。あそこに生えている木や草は皆ダンジョンから持ってきて人工的に育てているんだ。中には希少価値のある植物もあるから売買すれば高い値段で取引してくれる」

店主は一体のゴーレムに指示を出して宝石樹から宝石の実を採取してもらい、それをハジメ達に見せつける。

「奇麗……. . .!」

「すげー、これってもしかしなくても宝なのか?」

「そうだな。冒険者からすれば宝に等しい。この実を見つけたら幸運ものだ。こういう金にもなりうる物が18階層以降から存在する。お前らがそこまで行けるぐらい成長したら、探してみるのも悪くないぞ」

再び歩みを始めて、湖の上に発光する道で進み、円形に光る場所で店主一人だけ佇む。湖の上に歩く異常な行為を見せつけられて、驚いた少年少女達は足を揃って止めていたので動かないでいたのだった。「その光る道の上に歩けば落ちやしないよ」

思いつきり踏むと音が聞こえる。ちゃんとした足場があるとわか

り認識したところで天之河光輝が先に光道へ足を踏み入り店主の下へ近寄った。

「大丈夫だ！俺でも歩くことができるから皆も安心してくれ！」

そういうことなら、と龍太郎と雫を始め、ハジメや香織も光道に歩き他の学生達も緊張の面持ちで続き、円形の光る足場に最後の一人まで集うと音もなく店主達が乗っている足場が降下する。どんどん降下してようやく止まったと思えば白亜の神殿が皆を出迎えた。その中には光り輝く『幽玄の白天城』に繋がる転移式魔方陣が起動している。

転移式魔方陣を介して、黄金の大鐘楼に出迎える形で聳え立つ崖の上に建っている城に転移した。

ハジメ達は初めてオラリオの全貌を見下ろすことができ驚嘆の域を漏らす。ダンジョンの穴を塞いでるバベルの塔がある中心に町が広がり都市を囲む円形の外壁。自分達がいる場所はバベルの塔の次に高いのだと知った時は店主に催促の言葉が聞こえてきた時だった。

店主が向かおうとしてる家は白亜の城だった。外国の宮殿や城に直接行ったことがないハジメ達からすれば、初めての経験で緊張気味に巨大な黄金の大鐘楼を見ながら横切る。

「ここが兵藤さんの家……」

「俺個人の家だ」

「【ファミリア】のホームじゃなくて？」

「そうだ。こっちの方が何かと都合がいいからな」

靴は脱げよ、と大きな扉を開けながら言ってる店主。半円形の玄関の前に靴を脱いですぐ横の壁際の靴箱に入れる店主を見習ってハジメ達もそうする。入りきれなかったら男子と女子の靴を別々に脱いでもらい上がってもらう。直ぐ眼前には玄関から奥の廊下にまで間隔的に間を空けて、地上から一〇〇Mの天井を支える様に立てられ並んでる白柱があった。床は大理石でひんやりと冷たい。新鮮味を感じながら周囲を見回しつつ先行く店主の後を追いかける。ふと、廊

下の奥から一人の女性が歩いてきた。

「む、イツセー。お主、今日は当番ではなかったのか？その者達は？」
「オラリオに新しく来た異邦人だ。共通語コイネーの読み書きすらできないから教えるために連れて来た」

今まで工房にいたのか、顔にうっすらと汗が浮かべ片手に武器を持っていて、左目に眼帯をつけた褐色肌の女性が豊満な胸をサラシで窮屈に巻いた出で立ちで店主こと一誠と会話を交わす。

「兵藤さん。その人は？」

「ヘファイストス・ファミリア」の団長、椿・コルブランド。俺のホームに居候もとい同居している一人だ」

「あの凄い武器を作ってる人達の団長!？」

何のことだかわからない椿の目の前で驚く香織に理由を尋ねると「さつきバベルの塔の中に行った」と直ぐに納得する答えが返ってきた。

「手前からすればイツセーの方が手前より凄いのだがな」

「え、何ですか？」

「イツセーは手前から鍛冶師スミスとは異なる異世界の鍛冶の技術を振るい武器を打つ。手前らはその技術を間近で見ても真似は出来ん。鍛冶師スミスの常識を悉くあつさりと超えるものばかりを作り神の領域に立っている」

「元の世界にいる鍛冶を司る神からすればまだまだ半人前って言われるがな。あの神が一番厳しいんだよ」

じゃあな、とハジメ達を引き連れて歩き出して椿の横を通り過ぎるまでもなく、まだ使われていない広い空間の部屋へと入っていった。全員が中に入ると指を弾き、久々に見る学校の机と椅子が人数分も虚空から出てきた異邦人達を驚かせた。

「じゃあ座れ。読み書きの授業を始めるぞ」

いつの間にか数十冊のノートと大量の筆記用具を用意していた一誠は、前の列にそれらを置いて使う分だけを取って貰い後ろに配る指示をする。全員の手元に全てが揃うと勉強会が始まる。日本語と共通語コイネーが混合した五十音を記したプリントとそれを書く練習するた

めのノートが五冊。

「この世界の文字が翻訳されていてとても読み書きしやすいです」

「私語厳禁。これから一時間は黙って書いてもらうぞ。その後はテストだ。合格点は七十五点以上。それを下回った奴がいたら全員連帯責任としてダンジョンの探索を禁止、一週間は補習をしてもらう。当然勉強詰めだ」

げっ!?!と嫌な反応を示す生徒達はプレッシャーを覚えてしまい、指定された点数より下回らないよう必死に声を出さず読み書きの練習をする意思を強く固めた。

「おいおいふざけんな! 何で一週間も異世界に来てまで補習しなきゃならねえんだよ!」

檜山という男子が立ち上がって異議を唱える。

「嫌か?」

「勉強なんてしなくても俺達は生きていけるんだ。金ならダンジョンから稼げばいいし、食いもんだってその辺の店に行けば食える。何が悲しくて勉強しなくちゃならねえんだって話だよ」

「他の異邦人も独学でこの世界の文字を読み書きして言語を身につけているの!? 郷に入れば郷に従えという諺を知らないわけがないだろう。ここは平和ボケしているお前達の世界じゃない。必要な知識や常識を得ていない明日すら生きていけないお前達のために教えているんだ」

「はっ、もうてめえから教わることなんて何一つないぜ。なあ、お前らもそう思うだろ?」

他のクラスメートにも声を掛けて呼応を求めると数人が頷き、他は黙って何も言わない。一誠からも質問をする。

「自分独自の考えで、必要なことは全て教えてもらって手助けはいらさない、自分達だけで生きていけると思った奴は立ち上がってくれ」
朗らかに気さくさに言って促す一誠の言葉に、一拍遅れて席から立ち上がる檜山も含めて四人。

「四人だけか?・・・なら、机と椅子はいらないな」

プリントやノート、筆記用具だけ残して机と椅子のみが消失した。

床に落ちるそれらを当人達と彼らの側にいた少年少女達は目を丸くする。

「それじゃ、授業開始」

『……え?』

至極不思議でたまらない彼等彼女等の疑問に一誠は応じた。

「その四人は床に這いつくばってでも勉強はしてもらおう。してくれなくてもいいが、お前達のせいで一週間の補修は確実に他の連中がする羽目になる。俺は一度言ったことを妥協せずやり遂げる性質だから、お前達には読み書きは絶対にしてもらう。それだけだ」

「な、なんだよそれ。おい、椅子と机を出せよ!」

「まじめに勉強を取り組まない奴に不必要なものだろ?それに床に座っても勉強はできる。やることは変わらない」

「ふざけんじゃねえよ!」

激昂して買ったばかりの剣を鞘から抜き放って構える。それだけで場は悲鳴に包まれ巻き込まれないよう立ち上がって壁際に避難する学生達の中で天之河光輝が叫ぶ。

「やめろ!彼は俺達の恩人達なんだぞ、恩を仇で返す真似は許さないぞ!」

「うるせえ!俺はさつきから上から物を言うこいつには気に食わねえんだよ!」

「で、その剣を構えてどうするきだ?」

態度や表情を一切変えないその余裕でいる一誠を癩に触ったのか怒気を孕んだ声音で仲間にも声を掛けた。

檜山等四人は剣や槍を構えて四方から攻め立てようと姿勢に入る。「死にたくなかったら今の内だぜ。土下座をして散々偉ぶって悪かったって謝るならよお」

「小悪党的なセリフを吐くんだな。久々に見聞したよそういう連中を」

「誰が小悪党だ!おら、さつきと土下座をしろや!」

「武器を構えて攻撃してくるどころか、相手を謝らせるだけに使うとか……. 嘆かわしいなもう」

「ああ!?死にてえのか!」

「逆に聞こうか。人を殺すことができるのか?」

「何言ってるんだ?この世界は俺達がいた世界じゃないんだ。そんなことできるに決まって——」

次の瞬間。四人に限らずハジメ達にも襲う重く冷たくて精神が押し潰され心臓が握り潰される感覚。

恐怖が、死が、その発信源が一誠から放たれていて、今まで見たことがない冷ややかな目をしていた。

「……俺に構えてるその武器は俺を殺す意思があり、お前らはそうする気であると受け取っていいんだな?」

「な、なんだよ……それが、何だっつてんだよ……っ」

「そうする相手とそうされる相手がそういう状況になったら、これから起こる事は何なのか、わからないなら『最期』に教えようか」

徐に突き付けてくる槍を掴み上げ、あっさりと奪って檜山の仲間の一人の脇腹を躊躇なく突き刺した。

「……え?」

直ぐに別の一人の太ももに突き刺した。三人目は肩を貫き最後に檜山には腹部を貫いた。その時間は刹那。体が穿たれたことに痛みが脳の神経に届くまで一拍遅れて一秒は掛かり、気付いた瞬間に四人は苦痛で顔を歪み激痛で涙を流した。

「ぎゃあああああああつ!」

「い、いでえつ!いでえええええええええ!」

「た、助けて、誰か助けてくれよおつ!」

「血、血が、血がああああああつ!」

床に転がり喚き散らしながら血を流す四人を、それを躊躇もなくした一誠に戦々恐々するハジメ達。途端に変わった修羅場の中でやはり一誠は涼しい顔で指示した。

「エリクサーで傷口に掛ける。体に穴が開いた傷でも直ぐに治る」

数人がハツと我に返って慌てて取り出した万能薬エリクサーで傷を治そうとする光景を見ながら口を開く。

「お前らは運がいい。去年までこのオラリオはイルヴァイス閻派閥というテロリス

トがいた頃の暗黒期に来ていたら否が応でも殺し合いに巻き込まれていたんだからな。だけど今はそのテロリストはもう壊滅しているからオラリオは新しく生まれ変わり平和になろうとしている」

「だからって、檜山達を傷つける意味はあるのかよ!？」

非難する目で叫ぶ龍太郎に淡々と語る。

「ある」

「なっ!？」

「こいつらは殺す意思があって武器を構えた。そういう状況は地上でもダンジョンでも冒険者同士がよくする。その状況になるのは「ファミリア」同士の抗争だったり個人的な私情で襲うことだったりする。こいつらの場合は後者の方だ。殺されようとする側は死にたくないから抵抗する。当然の行為だ」

それとも何か?と皆に質問する。

「お前らに殺意を抱いて殺そうとする輩が目の前にも、お前らは無抵抗で無意味に殺されたいのか?」

『っ!？』

絶句する一同。肯定しまえば一誠がした行為も認めることとなり、自分達の考えが間違っていることになる。それを自覚した以降でも一誠が何をもって四人を攻撃したのかも語る言葉を聞き続ける。

「言つとくが、話し合いで解決なんてできないぞ。本気であろうがなかろうが、一度刃を交えれば決着がつくまで死闘は続く。死にたくなかったら抗え。死にたくなかったら強くなれ。それがこのオラリオで生き残り、生き抜くために必要な方法の一つだ。お前らの先輩の他の異邦人達もそうして生きている」

『.....』

「甘い考えは捨てる。この世界はお前達の世界より過酷だ。常に死と隣り合わせの中で生きなきゃならない故に強くなれ少年少女達」

パチンと指を弾いた一誠の目の前にハジメ達の姿が消え去った。荷物も勉強するはずだった読み書き用の道具も全て。

「お主も手厳しい言動をするなあ」

椿が出入り口のところまで不意に話しかけてきた。悲鳴を聞いて来

たのだろうが彼女は特に焦った様子はなかった。相手が一誠ならば最悪な事態だけはしないだろうと信賴している故だ。椿に振り返り、肩をすくめる。

「あれぐらいが丁度いいだろ。この世界の事何にも知らない世間知らずの連中にはいい気付け薬にはなった筈だ」

「恐れるあまりに何もできなかったらどうする？」

「人間の成長は馬鹿にできないぞ椿」

「それはドラゴンになってからそう思っている一誠の考えか？」

「ああ、そうだ」

薄く笑って片付け始める。椿も暇故に手伝うと手を貸してもらって作業を進める一方、ハジメ達は自分達がいらない間に改築・改装を施されていたホームの中でその日は静かに過ごした。

冒険譚 29

ギルドがある大神殿バンテンの最上階にあるギルド長の執務室に呼び出しを食らった一誠は至極面倒極まりない顔を隠さず、一代で肥え太った身体、とても見目麗しい種族とは思えない醜態を晒しているロイマンと相対していた。大方催促をするためなんだろうと思いつつ「呼び出しの要件はなんだ？」

「呼んだのは他でもない。列車のことだ。まだ完成に至っておらぬのか？」

「あれの製造は手間暇と時間が掛かるんだよ。それにあんたが繋げた場所はどうか一つや二つだけじゃないんだから、どれぐらい必要なのかその詳細だつて知らないんだけど？」

「む……できるだけ多く頼んでほしい」

「正確な数を言ってくれて話だよ。それにオラリオ外の国や都市のある場所や距離も知らない。列車を作ったとして走らせる場所も確保しなくちゃいけないんだぞ？ 何でもかんでも俺に任せるような他力本願は勘弁してくれ」

詳細を求む一誠から追及され、ロイマンは席から立って棚に納まっている一枚の大きい紙を手を取った。随分と大きいと思う一誠の後ろの床に広げたそれは地図だった。

「地図か。それは正確な物なのか？」

「距離まではわからん。だが、古代の冒険者達が地上に跋扈していたモンスターを駆逐する際に地図マップ化したものから、近代まで情報を一つに纏めた彼らの努力の結晶だ。これは百年前までのものだが信用はできる」

「なるほど。なら俺も信用して作業を進めよう。で、この地図に載っている国や都市用に造れってわけ？」

「帝国や魔法国アルテナのような同盟国ではないところには繋げる必要はない」

「おや？ と異世界から来た者として不思議な事を言うんだなと感じて質問した。」

「何でだ？ラキア王国のようにあからさまに敵対しているわけじゃないんだろ？」

「奴らをオラリオに招いて内側から襲撃されては敵わんからだ。お前も知つての通り世界で唯一のダンジョンから魔石を得ているこのオラリオにとつては、他国と比べれば優位な立場で——」

オラリオと他国との立場の関係とその需要を長々と説明したが、一誠は真摯に耳を傾ける。まだ己が知らない知識や情報をロイマンが教授してくれるので聞かないわけにはいかない。

「と、いうわけだ。理解したか」

「理解した上で言わせてもらうけど、やっぱり繋げね？オラリオの発展にもつながるのに」

理解できん、という眉根を寄せるロイマン。わざわざ危険を冒してまでオラリオに敵国の人間を招く必要はどこにあるのかと思つた。が、異世界から来た一誠にとって繋げる意味はあるのだとその理由を知りたくなつた。

「何故だ。異世界では敵対している国と繋げる意味があるのか」

「国の発展のためだ。俺が生まれた世界では確かに世界を巻き込んだ戦争は何度もしていたが、今では互いの国の長達が手を結んで二度と戦争を起こさない為に同盟や連盟の協定を築き上げた。そのおかげでその国にはない物が流れ込んでその国に住む人間達は未踏の地のことを知りたいと、憧れを持って自分の国から飛び出して違う国に向かうようになった」

一誠もかつては敵国だった国と交流はどれだけ大切かその必要性を長々と語り、ロイマンは耳を傾けた。

「と、まあ、そんな感じで国同士の関係は大切なんだ。ロイマンもこのオラリオを更に発展させたいなら、頭の中の片隅でもいいから考慮してくれ。取り合えずオラリオと同盟を結んでいる国だけ列車を走らせる」

「……わかった。そうしてくれ」

敵国と交流する必要性を一誠の話で改まって思考の海に飛び込むロイマン。その間一誠は執務室を後にして扉を閉めた途端に黒衣の

ローブの者が現れた。

「うおっ、びっくりした」

「すまない。しかし、君でも驚くのだな」

「人の気がない奴を探すのは骨が折れる。うちの幽霊が怖い仲間だったら悲鳴を上げてるぞ」

「そうか。できるだけそうならないよう努めよう。それよりウラノスが呼んでいる」

今度は真の方が。先に行くフェルズを追いかけ、ギルドの職員達に見つからないよう気配を殺して地下の『祈祷の間』へ進む。床に敷き詰められた石板。天井は高く、暗闇に塞がれており、壁の石材からは積み重ねられた年月を感じさせる。まるで忘れ去られた『古代』の神殿のようだ。四巨の松明でしか灯りをともしていないその中で石造りの神座に座ってる老神と久しく会った。

「久しいな、イツセー」

「久しぶり、ウラノス」

かつての眷族の子と再会の言葉は短めで終わり、呼んだ理由を述べる。

「いくつか聞きたいことがある」

「なんだ？」

「数カ月前にダンジョンに異変が起きたことは知ってるか」

「……あー、もしかして新種のモンスターのことか？」

話を察した一誠に肯定と重々しく頷くウラノス。それなら知っているが、知らないと言味な返事でした。

「階層を越えて揺れるほどの爆発が起きたまでは知っている。あの魔石のないモンスター『ジャガーノート』の出現は多分、過度なダンジョンの破壊に呼応して生まれ落ちたんだと思ってるけど」

「直接戦ったか」

「戦った。で、フィンとガレスにオツタルにも戦わせたら問題なく倒せた。ああ、これが例のモンスターの姿だ」

魔方阵からジャガーノートの全貌を立体的な映像として見せつけた。

「装甲を展開すると俺の魔法でも反射して弾き返し、今まで屠ってきたモンスターの中でも俊敏で第二級冒険者達が気を抜いたり隙を見せたら爪と牙、尾で殺される」

「……ダンジョンがそんなモンスターを生み出すとは、今までになかった例だ」

「また過度な階層破壊をしたらいつが出てくるか、それとも別のモンスターが出てくるのか不明だ」

「その場に居合わせた『ファミリア』は？」

「アストレア・ファミリア」と闇派閥のイルヴィス「ルドラ・ファミリア」

見えなかったジャガーノートの事の顛末を知り得ることができた。映像を消す一誠にもう一つ告げた。

「空の世界に繋げる件についてはどうだ」

「問題ない。装置はもうすぐ完成するけど、あの『未到達領域』はこれからも冒険者に発見されないでいるとは思えないから少し懸念するが」

「何故だ？リド達はそのあたりは万全な態勢で警戒しながらダンジョンの中を徘徊しているが」

「冒険者だから、だよフェルズ。何事も挑戦をするのが本職だろ？あの中層の石英クォーツだって金の足しにもなるんだからそこを破壊したらバレル。そしたら『未到達領域』に設置した装置も見つかる。まあ、リド達だけしか使えないよう作ってるから問題はないけど」

冒険者の行動の可能性を考慮している一誠の懸念の話がわからないうフェルズではなかった。フェルズもその可能性は考えていなかったわけではない。細心の注意を払ってでもリド達は冒険者と相対し、交戦を何度もしてきた。一誠の考えもそれに当てはまり顎グロリフの部分に手袋をつけた手を触れて考える。

「それでも今日か明日か見つかる話じゃないから一応大丈夫だと思う。その装置を作るにあたって他の装置も作ろうと思ってるし、目を逸らすことはできるだろ」

「どんな装置何だい？」

「各階層ごとに地上へ戻る転移装置」

固まるフェルズ。ロキ達からすれば「まーたとんでもない物を作るうとしてる」と感想を言うだろう。

「ウラノス。他に聞きたいことは？」

「オラリオ外から来た異邦人達のことだ」

「もう接触してる。ある程度の援助はしたから今放置中だ。今頃冒険中じゃないか？」

床を見下ろすその目は、更に下のダンジョンの中を見据える。そこで何百人の冒険者がモンスターと死闘を繰り広げ、生き残ったり死んでいたりしているだろう。ハジメ達が生きるか死ぬかどう転ぶのか神すらわからない。

「わかった。もう帰っていい」

「ん、また聞きたいことがあったら呼んでくれよ」

地上に繋がる出入り口へと踵返す一誠を見つめる蒼い瞳。その隣にかつての眷族の後ろ姿が浮かび上がり、薄く口元を緩ませるウラノスをフェルズは見た。

「ウラノス。彼の親の、貴方の眷族はどういう冒険者だった？」

「我々の常識を上回り、毎日楽しそうに笑っていた。そして神々を楽しませた」

「神ロキ達も彼と交流を続けている辺り……親子なのだろうかウラノス」

「ああ、その通りなのだろう。叶うならばあの者達と一緒にいるところを見てみたい」

叶わない願いでもそう思ってもいいだろう。そんなウラノスの願いは——思いもしなかった出来事が起きて叶い、一部の者達を中心に大騒ぎした。

ギルド本部を出てそのまま東区へ向かい、三つの城がある「ファミリア」へ足を運ぶ。門番をしている兵に出迎えられ既に伝えられているからか中を通されて赤い鳥居に集まる神々や眷族達と合流した。

「遅いでイツセー。ロイマンと何を話ししとったん？」

「ロキは女神なのはどうして見た目は男神なのか笑いながら話して

た」

「絶対にそれは嘘や！うちは騙されへんで！」

「はいはい、イツセー。ロキをからかわないの。早く極東に行きましょ？」

何時ものメンバーで、何時ものように交流をして秋の季節しか入手でない極東の食材を求め集まった。『異世界食堂』が閉店する日を狙ってミア達も一泊二日の慰安旅行という目的で同行する。

「そうだな。アマテラス、イザナギとイザナミ。極東では今の季節で美味しい料理って？」

「猪や鹿の肉をふんだんに使った料理だな。絶品であるぞ」

「魚も美味だよイツセー」

「松茸やタケノコのご飯も美味しいわ」

「——よし、『異世界食堂』の季節限定のメニューはそれだな」

と、笑顔でそういう一誠に釣られて海童は顔を明るくした。

「松茸が食べられるのか。異世界最高じゃないか！」

「鯛も食べられるぞ。ああ、俺は大和太輔だ」

「おっ、異邦人か？俺は海童剛だ」

異邦人であり転生者同士が軽く握手を交わした。友好的に会話をする間もなく皆は赤い鳥居へと進んで消えていった。そして——アマテラスが続べる都城に転移した。

「よおし、二年ぶりの極東だ。思い切って秋の食材を手に入れるぞ。」

『異世界食堂』、頑張るぞー！

『はい（ニヤ）！』

「ガネーシャの超・有能なシャクティとアーデイも頑張るのだゾウ！」

「何を張り合っているのだガネーシャ」

「でもでも、極東何て初めてきたね！」

「憂鬱です。まさか故郷に戻るとは思わなかったですわ」

「輝夜は極東出身だからね」

「あの狐人達もそうでしたね。それと【単眼の巨師】も」

「春姫、ソシエ。久しぶりに帰ってきたなー。ここじゃ旦那様とは結婚したことにはせなあかん話やで？」

「だ、旦那様とけ、けけけ結婚……っ」

「ほう……」

「主神様よ。極東では珍しい金属や鉱石が手に入るそうぞ」

「どっからそういう話が出てくるの？まあ、実際にそうならどうい
ものか興味はあるのだけれど」

「極東かあく。一度来てみたかったんだよね。なあ、アスフィ。極東
の服を着てイツセー君を誘惑してくれないか？」

「なに馬鹿なことを言っているのですかヘルメス様」

「ヘルメスの言い分には道理があるな。フィルヴィス、アウラ。お前
達の着物姿を見てみたい」

「わ、私にそのような物を着ても似合うはずが……」

「そうです。フィルヴィスの言う通りです」

各【ファミリア】の主神や団員達が思い思いに口にしながらアマテ
ラスについていく最中。一誠の悪戯心が笑った。

「郷に入れば郷に従え。ということ、極東にいる間は極東の服で行
動しようかな——全員で」

「任せて、直ぐに用意してあげるわ」

「うん、ありがとうアマテラス」

ちよっ!?!と一部の団員達が驚く他所にアマテラスは眷族の一人に
着物の準備の手配をしてもらい一誠の要望を叶えた。その後……
一同は着替えを強いられて極東の服で活動するのだった。その時の
写真も当然撮っていて一誠とロキは笑みを浮かべた。

「ロキロキ、着物姿で面白い遊びがあるんだけど知りたいか？」

「ほー？一体どんなのや？」

「そりゃもう、ロキが一番喜びそうな遊びだ」

面白半分でその遊びをロキに伝授。途端にグヘツと女神が笑っ
てはいけない下品な顔を浮かべ、ロキの女性眷族のみに限らず他派閥
の女性団員達に悪寒が走ったのを一誠は知らない。実際、ロキが教え
られた遊びをしたのかどうかは別の話である。

極東に来てその日。アマテラスの居城で一泊することにして目的

の食材を山や川から採り終えると自由行動が発令され、ロキ達は思い思い夕方になつても極東の町を観光してる。その間でも一人、二年前に寝泊まりした部屋で日記を書いていた。程なくして終わると日記を閉じてバックパックの中に仕舞う。

「——イザナミの団員の諜報部隊か？俺の監視をしているのか？」

誰もいない部屋の中で語りかける言葉に一誠しか感じられない気配が揺れたのを察知した。

「ちよいつと姿を見せてくれないか？できないならそのままでもいいけど」

声を掛けられた相手からの返事はなかった。興味本位で見てみただけの提案で無理強いはしない気持ちの一誠に応えるかのように天井の板の一部が外され、部屋の中に二人が入ってきた。黒い布や狐の面で顔を隠しているヒューマンかと思ったら、獣耳に黒と白の獣の尻尾を腰から生やしていて、その尾は——ルナール狐人のものだと気づいた。

「狐人か。ヒューマンかと思つてたよ」

「何時でも影からイザナミ様をお守りする私達は、諜報と暗殺、時には戦闘に特化した魔法とスキルがございます」

「L v. は……5か？」

「ご明察です。我らは共に冒険者で言う第一級でございます」

顔を隠していた面と布を取り払う。長い黒髪に赤い瞳の狐人ルナールと女性と白い短髪に青い瞳の狐人の女性の顔が露になる。

「イザナギと戦争を繰り広げていたから諜報部隊もそれ相応の修羅場を潜ってきたわけか」

「ええ、そうですね。しかし、私達の気配をよくお気づきですわね。私達がイザナミ様の眷族であることも含めて」

「隙を見せても警戒はしているもんさ。お前達のご事は二年前にイザナミとここの天井にいただろ？憶えていたよ」

「随分と前からまだ憶えていたとは……」

白髪の獣人が目を丸くする。直接顔を合わせたわけでもないのにイザナミと秘密裏に天井裏で身を潜めていた時からずっと憶えてい

てくれていた。その記憶力には驚愕と同時に称賛に値する。

「で、答えてほしいんだけどさ。どうしてここにいるんだ？」

「不要な事かと思いますが、貴方様は一国を救い、二国の戦争を調停させて三国を同盟させた重要人物です。私達は貴方様の護衛をイザナミ様から請け負っております」

「そういうわけか。理由はわかったよ。神命だろうと護衛してくれてありがとう」

「いえ、これも任務ですわ。この極東にいる間は何なりとお声をおかけくださいませ」

ほほう……何なりとお声をおかけくださいませと？一誠の目が妖しく煌めき、この瞬間欲望に忠実になった。

「じゃあ、早速お願いしていいか？」

「何でしょう？」

「——その耳と尻尾を、モフモフさせてくれ」

「……はい？」

二時間後……二人の獣人が一人の男の手によつて撫でられ熱が籠った荒い息を吐き、顔は紅潮、潤っている瞳と共に意識は朧気が快楽で染まり切った精神と全身がピクピクと震えて骨抜きにされていた。四つ這いの状態で臀部を突き出す男に屈服している姿勢でされるがままになっている彼女達は。

「はっ、はっ、はあ……み、耳とし、尻尾をさ、触られてるだけなのに、んくっ、な……なんでえ……」

「んはっ、はあ、はあ……こ、心まで蕩けられて……うんっ……ひゃんっ!?!」

まだまだ触ってみたいと伸ばされた一誠の手によつて尻尾を愛でられ、撫でられ、幸せそうな表情を浮かべる一誠に与えられた時間が許す限り、二人は瞳にハートマークを浮かべ嬌声を上げながらずつと撫でられ続ける。そう……。

「……見方が卑猥なのに、実際していることはそうでないってどういうこと」

呼びに来たアマテラスに見つかるまでは。

「イツセー、その二人は誰ですか」

「イザナミの眷族。俺の護衛にとわざわざ寄りこしてくれていたようだ」

「同盟しているとはいえ、勝手に人のホームに侵入されるのは困るわ」
「今回ばかりは許してやってくれ。それで、ここに来たってことは」

ここに理由を察する一誠にアマテラスは首肯する。ならば、と骨の髄まで蕩けてる二人を瞬時に敷いた布団の上に寝かせて部屋を後にする。

「彼女達は一応、大丈夫ですか？」

「回復したら帰るだろ」

「どれぐらいあんなことをしていたのです」

「んー二時間ぐらい？」

であれば、イザナミの眷族があんな蕩けて全身に力が入っていないのは頷ける。一誠の愛撫は幸せ以上に強い快樂を得てしまい、誰もがもっと強請って求めてしまう。それが二時間ともなればどれだけ心を蕩けられて快樂を与えられていただろうか。

「……貴方にとって全ての女性の獣人は手籠めするのにわけないわね」

「仮にそうしたら何時でもモフモフできるな。ある種の楽園だ」

悟った風に感想を述べる女神に男も感想を口にする。本当に獣人の耳と尻尾が好きだなーと思いつながら一緒に廊下を歩く。その時の二人の獣人が漏らした声を聞き逃していた。

「……か、加賀……私、決めましたわ……」

「き……奇遇だな。私も……あることを考えた」

「でしたら……イザナミ様に進言しましょう」

「同感だ……」

……
……
……

「おお、極東にもてんぷらがあるのかー！」

目の前に置かれた料理の数々に海童は目を輝かせる。秋の季節し

か出せない料理を惜しみなく提供してくれたアマテラスの好意を感謝する間もなく爆食いするエセ中国人の神楽を筆頭に他の面々も肩を並べて夕餉の時間を楽しむ。

「デカイ魚ニャー！」

「美味しいのニャー！」

見たこともない美味しく調理された状態の魚の味に魅了するアーニャ達。初めての海外旅行を満喫して始終顔は笑みで絶えず浮かんでいる『異世界食堂』の従業員達は、何時までも楽しんでいたいと思うが明日になればオラリオに戻らなければならぬ。他の主神と券族達もそうであるが、明日一杯時間を使って楽しむ方針だ。

「フレイヤ、極東の料理も悪くないだろ」

「ええ、初めてたべるものばかりだけれど、高級な料理も美味しいし、見た目もとても新鮮なものばかりでお酒も美味しいわ」

「そう言ってくれるとこちらも嬉しく思うわよ」

極東の料理の称賛をもらって微笑むアマテラス。夕食の場はワイワイと騒ぎ、一部飲み比べ勝負が勃発。それを肴に、それに釣られて他の神々も交ざり騒ぐ。券族達から呆れられつつも当人達もそんな状況の中を過ごす。

「イツセー」

その時、アマテラスが近づいてきて話がしたいと皆から離れた部屋の隅に移動。

「狙ったのか分からないけれど、明日が丁度三国が同盟を結んだ日なのよ」

「そうしたつもりはないが、何かの催しでもするのか？」

「ええ、そのつもり。だけど去年はしてなくてこれからもそうしていくわけにもいかない。だから異世界の知識を伝授してくれない？大切な日、重大な記念日に極東らしい催しをしたい」

遅れてイザナギとイザナミも寄ってきてアマテラスの話の内容に同意する。

「んー、まだ何も決めてないし準備もしてないんだろ？」

「うん、そうだよ」

「……うーん……じゃあ、来年からは朝と夜の二回、同盟した事を祝う記念日にしよう」

「一日中祭りでもするべきなのか？」

「それは朝から夕方までな。夜は別の事をする」

「どんなことする。と、問われるとこれから考えると答えるしか言えなかった。ので、早々に部屋に戻りどんな催しをしようか、かつて映像を保存したパソコンから検索する。

「……んー」

どれもこれも似たような事をするばかりの映像に悩む。探して探して、様々な映像を見て決めかねては……ゴロリと背中を後ろに倒し、天井を見上げる姿勢の仰向けになったら、天井に二人の狐人^{ルナル}、顔を覗きこむアイズとアリサとラトラ。アスナに海堂に大和と目が合い一瞬だけ硬直した。

「どうした？」

「イツセーだけいなくなったから気になった」

「懐かしい物で使って、何を見てるんだ？」

それぞれ無駄な事を言わず聞かずに尋ねられて寝転がったまま質問に答える。

「明日がアマテラスとイザナギとイザナミが同盟を結んだ日だから、異世界の知識を貸してくれって頼まれた」

「ああ、記念日ってわけか。それなら祭りにでもすればいいじゃんか」
「それだけならとつくにしている。けど、アマテラス達は異世界で記念日の日にどんな催しをするのかそれを実践したがってるんだ。イザナギとイザナミが長らく戦争をして、アマテラスの国も含む三国が戦争をしそうになった日なんだからな。な、大和」

極東で起きた大事件の黒幕だった転生者に声をかけ、大和は苦い顔を浮かべた。その理由は一誠を除いてこの中で知っているのはアイズとアリサだけ。

「戦争が終わった日を祝う催し……黙祷？」

「できれば死んだ人の魂を形にして、祈りを捧げたい。それをパソコンから探してたんだが見つからなくてな」

と、一誠の悩みを聞いた異邦人達はそんな催しはあつたかと三人も悩みだす。その間にアイズとアリサがパソコンを興味本意で弄りだす。

「キャンプファイア？」

「何で宿泊学習の定番のアレを、と思ったが悪くないな」

「昔、家族とした提燈みたいなのを川に流すアレは？」

「おー、灯笼流しのことだな。それもいいな」

「うーん、ロマンチックなことしちやダメだよね？」

「それはどんな感じのさ？」

最後にアスナの提案は何なのか訊いた矢先。テレビで見たことがあるが名前が思い出せないアスナの視界に、アイズとアリサがパソコンを何もわからないまま操作をしている際、とある動画が飛び込んできた。

「それっ！」

「ん？……ああ——ナイスだ、アスナ。これはアマテラス達も満足してくれる」

ヒントを与えてくれた幼い少女達の頭を撫で、上にいる二人の獣人に向かつてお願いした。

「明日の同盟記念日に行う催しが決まった、とイザナミ達に伝えてくれないか？」

「わかりました」

『え、誰っ!？』

今初めて気づいたと驚くアスナ達。気配すら感じなかったようで、開けていた天井の板を蓋するように戻してから主神の下へ戻っていった。

「い、今の人達誰だったの？」

「イザナミの諜報部隊」

「スパイってことかよ。そんな部隊がいたなんて知らなかったぞ」

「知られたら意味がないだろ」

「そりやそうだろうけど、敵かと思ってびっくりしたぜ」

「……私はこの部屋に入った時から上から人の気配を感じてまし

た」

え、そうなの!?!とラトラの発言でまたアスナ達は驚く態度に呆れ混じりの息を吐いた一誠は決定事項を述べた。

「……・気い抜きすぎだぞお前ら。帰ったら揃って修業コースを始めようか」

「うげっ!?!」

「あ、あははは……」

「え、俺もなのか?」

絶望する者、諦観する者、当惑する者。三者三様の反応をしても考へは変えない一誠は明日の準備に取り掛かった。その日の夜から一誠の姿は見えず、翌朝になっても現れず事情を知らないロキ達は疑問符を浮かべた。しかし、アマテラスとイザナギとイザナミは一誠の指示に従って行動を起こしていた。

——三国同盟記念日——

東、西、南に存在する極東最大で三大派閥が続べる国が一人の英雄の調停によつて戦争が終結、同盟を結んだことに対する祝いが二年の時を経てから初めて行われる催しが各国に発令した。開催時間は夜となりアマテラス達の都の民達は主神達から告げられる催しの内容を確と耳に入れた。

「イツセー君がまた何かしようとしているなこれは」

「もしもそうなら、一体何を仕出かすんか楽しみやでー」

「ガネーシャ、超楽しみダツ!」

オラリオから来た神々は予想して期待で胸を膨らませる間、時間はやがて過ぎていく中で——城の中で待っていたアマテラスの前に一誠が忽然と姿を現した。

「準備はできた?」

「膨大な数だったがな。はあ……・なんとかできたよ。すつごく手が疲れた」

「お疲れ様。早速なのだけれどそれは一体何なのか教えてくれるかしら」

領いて詳細を伝える。話だけでは何とも言えないが、異世界でも行われている行事だということでの機に自分達もその行事を取り組もうと決するのであった。

「アマテラス、この都周辺に川はあるか？」

「川？あるけれど何をするつもりなの？」

「単純な事だ。提燈を川や海に流す。死者の魂を弔う意味を兼ねてだ」

「……本当に異世界は不思議なことをするのね。でも、死んだ子供達の魂を弔うその敬う気持ちは尊敬に値するわ」

その話を同時にイザナギとイザナミのところにいる分身体の一誠から聞かされ、二柱の神達も称賛に価した。それからすぐに準備が始まった。一誠が一人で何千何万も作った天灯や灯籠をアマテラス達は眷族達の手で都に住む民や他の地方の村人にまで配り、合図が鳴ったら同時に始める姿勢に入った。

——その時間帯を極東の民達は迎えた。地平線に沈んだ太陽と入れ替わる月が暗くなつた蒼夜に浮かんだ夜。都から灯りが消え、代わりに数え切れない数の灯が都を一層明るく照らす。

「時間だな……よし、力いっぱい『鳴らせ』！」

『はいっ！』

とある場所の村に複数の松明の灯りで照らされる黄金の大鐘楼の鐘の傍に立つ一誠が村人達の協力のもと、鳴らした。とてもとても美しい鈍重でありながら極東中を鳴り響く鐘の音。

カラアー……ン！カラアー……ン！カラアー……ン！カラアー……ン！

その鐘の音は歌声にも聞こえ、この地でなくなつた死者たちに対する鎮魂歌^{レクイエム}。そして、二度と戦争は起きない『約束の鐘』。その鐘の音に一誠は密かに言葉を託した。天界に召された星の数ほどの死者たちに届ける歌に、誇り高い言葉を託した。

「——輪廻の交差点でまた会おう——」

鳴り響く鐘の音が聞こえた三つの都——。

「さあ、合図が鳴った！皆、天灯を空へ！今まで死んでいった者達の魂を弔う！三国はこれから手を取り合つて極東を善き国にすると約束を先に死んでしまった者達に伝えるために！」

アマテラスの発令によつて眷族達が次々と号令を告げて、周囲の者達に天灯を手放すよう促す。

一斉に紙袋の中で燃え続けている火が熱気球となつて、人の手から離れた天灯はどんどん夜空の向こうへと浮かんで、飛んで、上昇していく様を……ロキ達は目を見開いて見惚れた。夜空を染めんばかりの朱色が地上をも照らす幻想的な光景を両目でしっかりと目に焼き付ける。

「凄い……！！！」

「ええ、何て幻想的な光景でしょうか……」

「うわぁ……っ！」

「こんなに綺麗なの初めて見た……」

「うおおおおおおおおおおおっ！！！」

神々が感動し、何時までも夜空を見上げ続ける中でアスナは祈つた。美しく鳴り響く鐘の音を聞きながら死んでいった死者の魂が無事に成仏できるようにと。

「ん、大成功みたいだな」

「っ、イツセー」

いつの間にか傍に立っていた一誠に振り返り、朱色に染まった顔で優しい笑顔を浮かべた。

「よかつたね。灯籠流しの方は？」

「絶景だったよ。まるで龍の身体のように流れて行っている」

「キャンプファイアは？」

「ボツにした」

あれは特に意味があるとは思えん。と夜空に消えていく天灯を見上げる。

「奇麗だな。実際見るのはこれで二度目だ」

「私は初めてだよ。だからイツセーにはとつても感謝してる。こんな素敵な光景を見せてくれて」

「俺も作った甲斐があつたよ。ただ、一つ懸念していることがある」
途端に疲れた顔をし出す一誠に不思議と「え？」と漏らしたアスナ。
何か不都合なことがあるのかと思つたら。

「ガネーシヤが・・・」

「イツセー！オラリオでもやってみたい！いや、絶対にやるゾウ！」
「つて、こう言い出すんだもんなあつ！」

あー・・・そういうこと。自棄になつた一誠をそうさせるガネーシヤが望まないはずがなかつた。

と、他人事のように感想を抱いたアスナの目の前で、しつこく強請ってくるガネーシヤに対応を強いられてる一誠にアマテラスが寄つてきた。

「天灯と灯籠流しの事。教えてくれて本当にありがとう。今日からこの二つは極東の行事にするわ。来年もまたするつもりだから、それまでとても楽しみ」

「そう言ってくれると俺も頑張つた甲斐があつた。天灯と灯籠の作り方の詳細は後で書いて渡すよ」

「ええ、ありがとう」

綺麗に笑うアマテラス。一誠も笑つて天灯が消えゆくまで何時までも見上げ続けた後、三国同盟記念日は無事に成功したのであつた。ロキ達も凄く感動したと褒めちぎり、オラリオでも見てみたいとガネーシヤの気持ちを後押しするかのような言葉を頂戴した一誠は、フレイヤの願い（しないと改コンバージョン宗は許さない※脅迫）で物凄く面倒臭い顔で文句を言いながらも、また何万個も作る羽目になつたおかげで――
――新たなスキルが発現した。

イツセー

L v. 2

力：SSSS1349

耐久：SSSS1301

器用：SSSS1322↓SSSS1323

敏捷：SSSS1389

魔力：SSS1379

幸運：I

《魔法》

『ネオ・ワールド・ドア真・異世界扉』

- ・移動系魔法。
- ・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来や異なる世界へ行き来できる。
- ・強い憧憬である程、成功率上昇。

(特典) 『鑑定』

- ・ありとあらゆるものの価値を見定める。

《スキル》

『イレギュラー・アンソウン異常不明』

- ・戦闘時のみ発動。レベル階位、『アビリティ基本能力』が反映・真価を發揮し、全能力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果維持。
- ・懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・魅了する。
- ・異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理 理想達人』 クッキング・マスター・シエフ

- ・調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『神秘希少』 ウルトラ・レア

- ・道具の作製時、発展アビリティ『神秘』が一時発現する。
- ・一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

『幻想』

- ・道具アイテムの作製時、発展アビリティ『幻想』が一時発現する。
- ・発展アビリティ『幻想』の発現時、道具アイテムに関わる全ての発展アビリティ・スキルが発現・併合する。

『運命協同体』

- ・同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。
- ・懸想の丈の度合いによって【経験値エクセリア】の分配が変動する。
- ・『運命協同体』の副次効果——懸想の丈の度合いによって良好の同恩恵を持つ以外の者も共同することで【経験値エクセリア】の分配が変動する。
- ・任意発動。
アクティブトリガー

(特典) 『異世界買物覧』 ネットスーパー

- ・ヴァリスを払うことで異世界の物資を購入可能

・ アクティブトリガー
任意発動。

(特典) 『ステイタステイカー』

・ 対象の「ステイタス」を奪う。

・ 奪った「ステイタス」の全てを上書き・蓄積し糧となる。
アクティブトリガー

・ 任意発動。

「……あんだだけ作ってたっただけ……(泣き)」

「気の毒にね」

冒険譚30

「スキル『幻想』の効果……ヤバ過ぎだろ」

「道具アイテムに関わる全てのアビリティとスキルが発現・併合するって聞いたことがないわ。そもそも道具アイテムに関するアビリティとスキルって、どれだけあるのかすらギルドも把握していないはずよ」

「そうだよなー。大体似たり寄ったりなもんだろうなー。発現の方はともかく併合ってどういうことだ？ 上位互換、下位互換のアビリティとスキルがあるのか……うーん」

「悩んでも仕方ないから試しに作ってみたらどう？」

「そうしてみるか。案外神にも効果がある化粧品とか作れたりして」

「私達是不変よ？ 見た目は全然変わらないわ」

「じゃあ何で年を取った神様がいるんだよ？ あれ、最初からそうなの？」

「知らないわ。いつの間にかいたもの」

「その辺、どうやって神々が誕生したのかその謎も明かしてみたいな。フレイってフレイヤの双子の兄がいるはずなのに」

「……フレイが私の兄ですって？ 冗談でしょ？」

「俺の世界じゃそうだぞ。ああ、二人の父親は海神ニョルズだ……」

「オツタル、フレイヤが固まってるぞ。初めてじゃないか？ (パシヤ)」
「お前がフレイヤ様をそうさせることを言ったからだ」

と、そんなこんな話をした末に一誠は新しいスキル（発展アビリティ）の効果を試そうと道具アイテムづくりに精を出した途端に。

「Oh……」

——一誠はとんでもない物を作ってしまった。それを見せにギルド本部——地下の『祈祷の間』に訪れてかつての『賢者』を驚きで絶叫させた。

「間違いないのかフェルズ」

「ま、間違えるものか……数百年ぶりに見たが紛れもなく私の目の前で神に壊された物だ……！ イッセー、君は『神秘』を極め

たというのか!？」

「極めたんじゃないなくて『幻想』っていう発展アビリティを一時発現できるスキルを得たんだ」

「げ、『幻想』……? 詳しく内容を教えてくれないか?」

カクカクシカシカで……。ウラノスにも聞こえるようフェルズに『幻想』のスキルの内容を明かす。

「道具アイテムの作製時、道具アイテムに関わる全ての発展アビリティとスキルが発現・併合する……。私の肉体が腐り落ちる前の時代だった時でもそんなスキルは存在も聞いたこともない。ウラノス、貴方から聞いてどういう解釈ができる?」

「おそらく『神秘』の上位互換のスキルだろう。道具アイテムを作るに関するすべてを掌握する希少レア中の希少レアスキル。イッサー、発現した原因は自覚しているか」

「十中八九、極東で幻想的な物を見せる道具を十万個近く作ったせいだ」

「と、途方に暮れる数を作ったのだな……。だが、そのぐらいの数ではないと『神秘』は極めれないし、同時にその数の『幻想的』という道具を作ったから発現した、か。納得のいく理由だ。それ以外発現の方法は思い浮かばない」

彼の『賢者』のお墨付きをもらい一誠も納得する。手の中にあるコレは、永久保管しなくちゃだめだろうなーと懐に仕舞う。報告も間違い確認は終えたので二人に別れ『幽玄の白天城』へ戻り、今度は武器を作ってみようと工房に籠った。

「……イッサー、あなた、これ……なんなの」

「あれー?」

『全力』で製作した武器はどうやらヘアアイストスを戦かせてしまうものだったらしい。前は無かった『幻想』のスキルは武器にも反映を及ぼす物らしい。続いて——製薬エリクサーを作ってみようと思えばあらゆる原料や素材を、万能薬エリクサーを作る気持ちでふんだんに使って製作したら鑑定の結果。

『幻黎げんれいの雫』・服用した者の身体の損傷を復元。また持病・不治の病も

完治。

「……なんでやねん」

同じ素材や原料で製薬したら異なる物を作ってしまった。本人は万能薬エリクサーを作る気でいたのになんで？と首を傾げた。『幻想』の中に、いや『幻想』自体が作り手の技術を高め、道具アイテムを昇華する秘めたものがあるのかと。浮かぶ疑問は更に疑問が溢れ、考えても仕方がない——『ディアンケヒト・ファミリア』の治療院に訪問した。入っただけで損傷している身体を治すことができる薬が完成した、と知らせたら精緻な人形を彷彿させ、大きな双眸が愕然で冷静さを塗り潰した。『ディアンケヒト・ファミリア』でさえ、身体を損傷した部分を再生させる技術はまだない。それを先に薬で治すと言われてしまえばアミッドでなくても誰でも驚くことだった。

結局のところ、『幻想』のスキルについて分かったことは。作る道具アイテムは全て己の予想を超える規格外な道具アイテムに出来上がってしまう事だけだ。だがしかし、その規格外は一誠にとって悪くなかった。『幻想』のスキルを大いに活用してこの世界に己の証を遺すのも悪くはないと考え付いた。

「ははは……作る意欲が沸いて来たなあー」

先に空の世界と繋げる転移装置だ。その後は列車……まあ、創造の力を振るえばあつという間に出来上がるか。一誠は城に戻りながらどんなものを作ろうかと笑みを浮かべながら考えた。

不意に、目に留まった。『異世界食堂』の前に佇む黒髪黒瞳の若い少年が黒髪黒瞳の少女がいて、逡巡する様子を窺える。またかと辟易の思いを顔に滲ませると二人の若者と目が合い、近寄ってこられた。

「兵藤さん、お願いがありますー」

「だが断る」

「即答!?あの、話だけでも聞いてください」

お願いしますと懇願されても突き放せばいいのだが、そうしない自分には甘々なあと呆れながら話だけならと『異世界食堂』の屋上で聞くことにした。

「屋上もあつたなんて」

「普段は使わないから知らないのは当然だ。俺に頼みたいことってなんだ。ホームの一件は済んだら？」

「はい、おかげさまで毎日お風呂に入れたり安眠ができるようになりました。でも、一部の皆がエアコンや扇風機が欲しいなあと欲求を言ってたぐらいです」

「俺に不満をぶつけに来ただけか？ だったらいい提案を言ってやろうか。暑苦しいってんなら全裸になって外で寝れば涼しくなるぞ」

不快そうに細めた目が鋭い眼光を放って二人を縮み込ませた。

「す、すみません……不満を言いに来たのではなくて戦い方を教えてほしいんです」

「戦い方？ そんなの他の冒険者だって自力で身につけていることだぞ。それに基本は他派閥同士の冒険者は干渉しないのが暗黙のルール。懇意の【ファミリア】じゃない限り相手に師を仰ぐことは普通はできない」

「懇意、仲良しってことですか？」

「その通りだ。で、俺とお前達異邦人達は別に仲良しでも何でもない。お前達の衣食住を援助をするだけだ。もうそれも終わったから後は勝手に生活をすればいい。それなのにこれ以上俺に頼み込むという事は、それ相応の理由があるかメリットがある話があるからだな」

世の中の厳しさも教えてやらんとダメなのかと頭の隅に考え前に座る二人を見つめる。戦い方を教えてほしい。純粹に強くなりたいたからかそれとも別の理由があるのか、まずはそれを聞き出したい一誠は訊ねた。

「戦い方を知ってどうしたい」

「強くなりたいたいです」

「強くなりたいたい理由は？ 強くなって何がしたい？ いや——強さの果てに何を望む」

強者として弱者に強さを求める理由を問うその質問に、四つの瞳は当惑する。

「ただ強くなりたいたって言うんなら、やはり戦う術は自分達で身につける。所詮は平和ボケした世界から騙されて召喚された程度のお前

達だ。強くなりたいたいなんて、軽い気持ちで言っているだけなんだろう」
ハジメと香織は否定できない。戦い方を知りたかったのは純粹に強くなりたいたいだけだからだった。一誠に納得させる理由を持ち合わせていない二人には師を仰ぐ事は叶わない。

「それに、師匠にする相手が俺にするのは止めておけ」

「な、何ですか・・・?」

「俺の修業は軽く三途の川を見るぐらい死ぬ思いをするからだ。それに女子供でも容赦なく殴る。それでもいいっていうんなら、試験をしてやってもいい」

「どうだ。と尋ねられたハジメは振り向く香織と目が合い、向き直る。」

「兵藤さんのLv. は2でしたよね」

「ああ、お前ら下級冒険者の上のランク、第三級冒険者だ」

「・・・あの、それって強さは変わるんですか?」

恐る恐ると実力の差を伺うハジメの態度にスツと目を細めた。その仕草に自分は何かいけない質問でもしたのかと緊張したが、当の一誠は煮え湯を飲まされた「ステータス」が不変だった頃を思い出して顔を顰めただけだった。

「他の下級冒険者と第三級冒険者の実力。それは、『ランクアップ』した影響はデカいからな。それを実感するのは己自身。それと『ステータス』の各基本アビリティが高ければ高いほどに身体能力が上がる。五階建てのビルをあっさり飛び越えるぐらいにな」

「え、ビルを飛び越える!?!」

そんな超人的なこと実現できるのかとおっかなびつくりな香織は驚嘆の念も抱く。今はまだそんなことできそうな気はしないが、今後の成長次第ではそれが可能になるのだと示唆する一誠に強くなってみたいという気持ちが湧いてきた。ただそれでも一誠に納得させる想いとは程遠いが。

「基本アビリティってどうやって上がるんですか?」

「継続は力なり、だ。トレーニングをしても上がるし、モンスターと戦ってれば自ずと相応に上がるし、対人戦でも効果はある。要は身体

を激しく死に物狂いで動かせば上がる寸法だ。これは他の冒険者達も同じことをして成長し続けている方法だ。ついでに常識的な知識でもあるけど、知ってたか？」

「受付の人から聞いてい、一応……」

ならばよし、とひとつ頷く。

「で、試験を受けるのか？ 受けないのか？」

「試験ってどんなことするんですか？」

「取り合えずは戦うぞ。試験の合格条件は秘密だがな」

「戦って勝てば合格ってわけじゃ、ないですよ？」

「——なあ、俺の質問に先に答えてくれないかなあ？ これ以上無駄話はする気ないからよお？」

質問ばかりするハジメ達にドスのきいた低い声音を発し、この二人からのこれ以上の質問攻めに付き合いたくなく事を進めると条件反射で「し、します」と答えさせた。

「じゃあ、俺の城でするから行くぞ」

「お城で、ですか？」

「トレーニングルームがあるからな」

三人の足元に転移式魔方陣が展開して一拍遅れて下から発する輝きに気付いたときは、別の場所に転移していた。『幽玄の白天城』の扉の前にだ。一瞬で別の場所に立っている自分達の状況に啞然としていると、扉を開いて中に入る一誠から意識を呼び戻され、焦燥に駆られてついていく。そうしていると途中で二人は見慣れない少女達と出会った。部屋の扉を開けて出てきた金髪金眼、銀髪青眼のヒューマンの少女達の他、虎^{ワイルド}人の少女、三人の狐人^{ルナール}の少女、二人のアマゾネスの少女、黒髪黒眼のヒューマンの少女等。

「こ、子供？」

「同棲や同居している家族達だ」

「イツセー、誰？」

「新しい異邦人だ。これからこいつらを鍛えるかどうか試すからトレーニングに行くところだ」

「見に行つていいですか？」

「いざぞ」

何だか子供達まで見学することになって、何故か別の部屋に入って行ったと思えばまだ幼い子供が持つには早い武器を持ってきた。――え？

「兵藤さん、この子達って一体……」

「ロキ・ファミリア」を始めとする他派閥に所属している団員達だ。

「ファミリア」に入団していない者もいるけどそれでも元冒険者だ」

「こ、こんな小っちゃい子供達が冒険者!? あ、危なくないんですか?」

「大人も子供もダンジョンに行けば平等に危険性はある。冒険者になるのに、神の眷族になるのに年齢は関係ないぞ」

また初めて聞く自分達の知らない情報がさらりと出た。啞然とする二人にさらなる衝撃が突き付けられた。

「ついでにこの年でお前らよりは強いからな。駆け出しでも経験はお前らより上だし、第三級や第二級冒険者だし」

「え、ええええええええええええええええつ!?!」

どうみても小学生のような少女達だ。それでも彼女達より体が成長している自分達より強いと言われ最初は信じられなかった。だが、今のお前らには関係のないことだという様に歩くことをせかさされてトレーニングルームへと赴く。地下へつながる階段を降り続けて辿り着いた白い空間の。観戦する場の席があつて、そこから眺める少女達の視線を二対一の形で相対する三人が集めていた。

「それじゃ、試験を始めるぞ。かかってこい」

かかってこい。戦い方は自由だと暗に告げる一誠からは二人が攻撃してくることを待つ姿勢に入った。対してハジメと香織はここで当惑する。対人相手に攻撃は皆無。相手を傷つける行為は元の世界では犯罪。そういう世界から異世界に来て環境が一変し、冒険者同士が衝突すれば相手を傷つける行為は当たり前前なこの世界にまだ馴染めていない故に、戸惑いの色を浮かべた。

「どうした、何時まで経っても攻撃してこないと相手は倒せないぞ」

「あ、あの、でも、僕達が持つてるのは本物の武器ですよ」

「それがどうかした。だからどうした。木刀でもモンスターは倒せる

が本物の武器だからって相手を攻撃することに躊躇する理由はないだろ」

「で、でも兵藤さんは武器が無いのに攻撃なんて」

武器を持っていない相手に攻撃なんてできない。なんて甘い考えをするんだな、と思いつながら観覧席にいるアリサに乞うた。

「アリサ、剣を貸してくれ」

「はいっ！」

ブンツ！と横風ぎに放り投げられた剣は駒のように回転しながら一誠の真上まで飛ぶ。手を伸ばして、柄を握り手中に納める剣は炎を燃え盛らせ纏う。

「剣が、燃えてるっ!？」

「そういう剣だからな。これなら問題ないだろ」

「やっぱり、兵藤さんと戦う……」

行くぞ、と香織の声を遮ってアリサの剣を持ったまま近づいていく一誠。

「武器を構えろ」

「っ！」

「案山子のように突っ立っていたら弓兵のいい的だぞ。どうぞ好きなだけ当ててくださいみたいにな」

そう言った時には、既に二人との距離は目と鼻の先まで詰めていた。それに対して溜め息を吐く一誠は徐に拳を握り締める。

「だからそんなお前達にこの言葉を送ろう——阿呆か」

刹那。ハジメと香織の顔を殴った。

「……」

空が朱色に染まりし時刻。顔や体がボロボロなハジメと香織は落ち込むように気が沈黙していた。試験中、一誠は手加減すらしなかった。否、手加減以前に自分達の方が手も足も出なかったのだ。自分達より強いからではなく、自分達がただ相對しただけで人間を傷つけ殺す意識が高まり、それに邪魔されて思うように動けず、終始一誠に呆れ果てられてしまい、殴るだけ殴って蹴るだけ蹴って帰された。全身

打撲、顔に青あざや腫れができていて誰から見ても完全敗北してきた冒険者だと見受けられる。今日の敗北を身に染みませるために敢えて治療は施さなかった。なので、必然的に、当然ながらホームに戻ってきた二人の酷いありさまを見て、天之河光輝を筆頭に雫達が目を丸くする。

「香織！酷い顔じゃないか!? 一体誰が君を傷つけたんだ!」

「ちよつと、南雲君も心配してあげなさいよ。でも、本当にどうしたの? 強いモンスター相手に負けちゃったの?」

「上層にそんな強いモンスターはいないって話じゃないのかよ」

二人の傷の手当てに動き出す女子達に囲まれながら事情聴取を受ける二人は、何でもない、気にしないでとはぐらかすもそれぞれ男子と女子、坂上龍太郎や八重樫雫が念入りな追及をしてようやく口を開いた。一誠に戦い方を教えてもらった時にできた傷なのだ。

「あの男……! よくも俺の香織の顔に傷を……!」

「香織はあなたの者じゃないでしょ」

「許せない! こうなったらあの男に香織を謝らせて二度と近づかさないうよう説得しなくちゃだめだ!」

「そうだそうだ! 俺達で白崎さんの味わった痛みを思い知らせてやろう! あの野郎許せねえ!」

天之河光輝のご立派な宣言に殆ど男子達が呼応して決起する。一部の男子は「戦い方を教えてもらったから」という部分を聞いて、合意の上でできた傷だと冷静に判断できていた。しかし、それ以外の男子達は一誠許すまじ! と怒りの炎を燃え上がらせて武器を手取る。

「ちよつと龍太郎。光輝を力尽くでも止めなさいよ」

「そうしたところで収まる奴かよ?」

「あーもうっ、人の話を聞かない奴は面倒臭いわね!」

一誠がいるであろう『異世界食堂』へ駆け出す集団を目にして雫は追いかける。誰かが止めに行かなければ最悪な事態になり兼ねないのだ。異世界に来て友人の言動で尻拭いするようなことをしなくちゃならないとは、とどこかの苦労人を彷彿させる。

であるからして、『異世界食堂』に雪崩れ込み一誠こと店主を見つけ

るや否や「香織の痛みを思い知れ！」と顔面にパンチを食らわしたのが天之河光輝達の運の尽きだった。——盛り上がったいた場が不自然なまでに静まり返ったことを天之河光輝は気づかない。

「……おい、そいつはあいつらから事情を聞いた上で仕事の邪魔をするだけじゃなく攻撃したんだな」

「香織に謝れ！そして二度と彼女に近づかないことを約束するなら許してやる！」

「人の話を聞いちゃいけないのか。言っとくけどよ、あいつらから戦い方を教えてくれて頼まれたから鍛えたに過ぎない。お友達が傷ついたから怒るのはわかるが、これは同意の上だ」

「同意の上だったら女の子の、香織の顔に傷つけていい道理じゃないはずだ！」

「傷が残るほどの怪我じゃない。問題はないだろ。それにあの二人から甘さを取り除き教える必要があった。冒険者は過酷で残酷で、死と隣り合わせの厳しい職業だとな」

話は終わりだ、と踵を返して見せつける背中で語る店主に、まだ納得していない天之河光輝は手を伸ばして店主を振り返らせると「まだ話は終わってない！」と叫ぶ。

「一緒に来い、香織の前で謝ってもらう！」

「だが断る。今は仕事だからな。それとも、俺をこの店から強引に連れ出すか？」

「お前を一人ぐらい連れ出すことなんて、俺の仲間達と一緒にならできろぞ」

ガタツ、ガタツ、ガタツ、ガタツ。

「お前、見くびってるな。俺達のことを」

「何を言ってる。L.V.は知らないが俺達と同じ下級冒険者だろ」

「……はあ、周りを見てみる」

怪訝に眉根を寄せる。周りを見ろとは、自分の意識を他に向けさせる言い訳かと思いきその手は乗らないと思つた天之河光輝の後ろから「お、おい」と不安げなクラスメートの声が耳に届いた。

「な、何だよこいつら……」

「なに？」

その言葉で始めて天之河光輝は周囲に目を向けた途端に、その瞳は凍結した感じで固まった。『異世界食堂』の客達の大半が立ち上がって天之河光輝達を睨みつけていた。更には女性従業員達も加わって店主の後ろに佇んでいた。

「ここにいる客達や従業員も含めて冒険者だったり元冒険者ばかりしかいない。この店の料理を出す長の俺がお前らに強引に連れ出されることになれば、皆の様子を見てわかるよな？」

次の行動次第で店主を救わんと彼らは動き出すだろう。それも天之河光輝なぞ一瞬で張り倒すことなど造作もない。それを証明するかのように彼らの中には武器を手にして「おかしな真似をしたら、わかってるだろうな？」と無言の圧力と睨みで語っている。

「それで、そうした瞬間にお前らやここにいない他の連中も二度とこの店に出入りできなくなる」

『なっ!?!』

「お前らのことは覚えたから、例え変装してでも店からつまみ出して料理を食べさせない。それでもいいなら、二度と故郷の料理を食べられない代償にして連れ出してもいいぞ。ま、そんなことしたらお前らを罵詈雑言、誹謗中傷の嵐の渦中に立たされるだろうな。せつかくの生き甲斐をお前ら自身の手で握り潰したんだから当然だ」

さあ、どうする。と問いかける店主に天之河光輝を除く男子達は酷く狼狽する。友のためか自分のためか、天之河光輝の行動で運命が決定する瞬間を男子達は緊張の面持ちで見守るしかできない。当の少年は運命の決断を口にした。

「そんな脅しが俺に通用するとも思っているなら大間違いだ!」

「ふざけたこと言っているんじゃないわよおおおおおっ!」

「ぐはあっ!?!」

今の今まで姿を見せなかった少女、八重樫雫が天之河光輝の首に手刀（かなり強め）を叩き込んで床にひれ伏させた。

「ごめんなさい!この馬鹿が本っ当にとんでもなくご迷惑をおかけしました!直ぐに連れ帰るからどうかさっきの話は聞かなかつたこと

にしてください！」

店主や他の面々に何度も頭を下げて謝罪する彼女に、毒気を抜かされた気分で場の空気は心なしか和らいだ。そして、友人の為に謝り続ける彼女を見て「苦労人か？」と何となく感じ取った。

「この馬鹿ッ！あの人は私達にとって恩人でしょう！それを仇で返すなんて何考えてるのよ！危うく私達はこれからずっとあの店で二度と食べれなくなるところだったわ！」

「だ、だが雫。香織に傷をつけたあの男を……！」

「香織本人も言ってたでしょう。戦い方を学んだからできた傷だつて。あの子も傷つく覚悟で教えを乞うたのだから光輝がしゃべる必要はないのよ」

説教モードの雫。中々納得せず一誠に思うところがあるようで「香織が、香織を、香織に」と口を開くたびに彼女の名を出す天之河光輝に苛立ちが募る。

「香織は、恩を仇で返すような男は嫌いだって元の世界で聞いたわよ」「なっ……」

「まさしく今のあなたよ光輝。香織のためだと勝手に思い込んで周りを巻き込んで、更に周囲の人達を迷惑かけさせる今の貴方を香織はどう思うでしょうね。軽蔑？失望？それとも——嫌悪かもしれないわね」

友人をダシに使うように悪いと思いつながらもこれが有効的なのだと自覚する。実際にほら、天之河光輝は真つ青な顔をしている。

「そ、そんな香織が俺を……」

「私は知らないからね。香織に嫌われようとあなたが仕出かした事なのだから自業自得よ」

ガクリと頭を垂らし肩を落として深く落ち込む天之河光輝。これですしは大人しくなってくれるとありがたいと思いつながら、ガシツと天之河光輝の襟を掴んで「ご迷惑をおかけしました！」と最後に謝罪して他の男子達も引き連れて店を後にしようとした雫は神妙な面持ちで別のことを考えてた。一誠に戦い方を学ぶ。先人から経験を学ぶという発想はこの世界に来て考えていなかった。戦い方を教えて

もらえるなら他のことも教えてくれるのではないかと予測し、自分もできないかと――。

「あの、こんな状況で何ですが。私にも香織や南雲君のように戦い方を教えてください」

「……。ジーザス、お前もか」

乞うた。そして約束をもぎ取り心中ガッツポーズ。今度こそ他の男子達も引き連れて店を後にした、妙に足取りが軽い雫を見送るその後。すぐ元の雰囲気に戻って客と従業員達はそれぞれ行動を再開する。

……。
……。
……。

約束の日になりハジメと香織も連れて再び『幽玄の白天城』にやってきた雫。初めて訪れるトレーニングルームを見回し目の前に佇む男を見据える目をもとに戻す。連れて来たハジメと香織は観戦席で待機中。

「準備はいいか」

「ええ、よろしくお願いします」

バベルの塔内に買った刀を構える雫に対して、自然体で立つ一誠。武器は勿論拳だが、雫は怪訝になった。得物を持たず戦うつもりなのかと聞かすにはいられなかった。

「武器を持たないの?」

「それを言う時点で相手の力量を読んでいない証拠だ。俺は素手でも戦える。それともあの二人のように武器を持ってもらわないと戦えないか?」

「……。できればそうしてほしいわ」

雫も武器を持った戦いを臨む。仕方がないかと手から光る刃を具現して三人に見せびらかす。

「これでいいだろ」

「それ、どういう原理で……?」

「説明するのがめんどい。とにかく、戦おう」

色々と言いたいことがあるのだが、本来の目的を忘れず、全力で取り組もうとする雫を見守るハジメと香織は息を呑む。一体どんな戦いになるのか想像もつかない。雫のこと知る香織はLv. 2の一誠相手にどう戦うのか、勝てるのだろうかと不安な表情で見つめ、友の安否を祈る。クラスメートとして知るハジメは女の顔を容赦なく殴る一誠は雫の顔も殴るだろう、と悟りながら真っ直ぐ二人を視界に入れないながら心の中で彼女を応援する。

「——いきますっ！」

「ん」

地を蹴って駆ける。距離を縮めたと同時に横薙ぎに振るつた一撃はあつさり光刃に弾き返され、雫の顔面に拳が突き刺さる。吹っ飛んだ身体は床に転がりながらも体勢を立て直し、直ぐに構え直す。

「っ・・・女の子の顔面を躊躇なく殴るなんて、香織の顔もこんな風にしたわけね」

「それでもすぐに立ち上がって構えた。大した精神力だ。これは少し期待できそうかな？」

「期待に応えるよう、頑張って見せるわよっ」

再び斬りかかり切り結び始める。どれだけ振るっても軽くないなされ、軽く弾かれ返され、軽く塞がれ、防がれるたびに顔面を殴られる。今まで培った剣道で磨いた技術と経験、雫の汗と苦勞の結晶が十全に発揮して尽く粉碎されていく。嘲笑うかのように八重樫流の技が通用せず殴られる。しかも、相手が一步も動いていない不動の佇みを崩せないでいるのだった。

「しっ！はっ！せいっ！ふっ！」

空気を裂く鋭い音と、それに同調した短い呼気。それらの音が響く度に、刀と光刃がぶつかる。攻める雫の猛攻をあしらい防ぐ一誠。時折その動きが剣道に通ずるものがあることを感じ始めたときに距離を置いて乱れた息を整える。

「兵藤さんは剣道をしたことがあるのですか？」

「骨を齧った程度だ。それ以外は全部実戦で培った。そういうお前は？」

「実家は剣術道場だから幼いころからずっと剣術を磨いて来た」

「なるほど、道理で動きもスジもいいわけだ」

一誠も気になったところがあつたようで、その理由を聞いて納得した面持ちから真摯な面持ちとなった。

「でも、この世界にいる間はその流派を捨てなきやだめだな」

「なんで、どういうことなの」

「相手がただの人間じゃなくて神の眷族、そしてモンスターだからだ。通用しないとはいわないが、この世界で強くなっていけば自ずとお前自身も気付く。元の世界のレベルとこの世界のレベルの差、さらに個々に強さをな。それを痛感するほど思い知らされるのはお前だ」

ここで初めて一誠から動きを見せた。攻撃してくる気配を察知して受けの姿勢でいた矢先、雫の刀がパキンと軽い音を立てて折れた。

「っ——!?!」

「この世界は、こういうことが当たり前のようにできる世界だ」

刹那、雫の真後ろに一瞬で移動していた。一拍遅れて後ろにいる男へ振り返った少女の身体に斬撃が走って深い傷を負った。観戦席から「雫ちゃん!」と悲鳴が聞こえてくるが、当人は相手に意識を向けていて返事をする意識はしなかった。膝を折って自身から流れ出る血に濡れた手を見下ろす雫に話しかける。

「どうだ、初めて受けた痛みの感想は」

「これが現実……と言えば満足かしら」

「ああ、その通りだ。そしてそれが当たり前な世界から俺は生まれ育ち、俺もこの世界に来た」

ポケットから意匠が凝った小瓶を取り出して雫の前に近づき、無造作に口へ突っ込んで飲ませる。目を白黒しながら口に流し込まれる何かを胃の中へ送り、飲み干すと咳き込みながら恨めしそうに一誠を見上げる。

「な、何を飲ませたの」

「万能薬を改良した回復薬」ポーション
エリクサー

となると、傷を治してくれたのかと体を見れば服が十字の形に切り取られていて、感じていた痛みはいつの間になくなっていった。なく

なっていたのだが服が血で汚れてるならまだいいが、豊かに育った証の胸の谷間や臍などが切れ目から見えてしまっていてバツチリ一誠は見ていた。

「ああ、服直さんとな」

羞恥心が爆発する直前に一誠が指を弾くと、雫の服が光った。斬られてた服があつという間に元通りになって雫の目は丸くなった。

「またこれ、あなたの力は一体なんなの？」

「俺の世界の魔法だ」

「私達もそんな魔法を使えるの？」

「無理」

即答ね。しかし、簡単に使えるものではないだろうと思ひ。

「人間から別の種族にならん限り無理だから」

「そんなこと、そんな方法あるの？」

「あるぞ？」

「……一誠の話を聞いて別の事を興味を抱いた。え、あるの？
「ま、お前らには関係のない話だ。それよりも壊した刀を弁償してやるよ」

「え、いいわ。勝負だったのだから」

「あんなの、別に勝負でも何でもないぞ。ただのじゃれ合いに過ぎないし」

軽く弱い奴と言われた気がしてならなかった。

「だが、お前みたいな剣道道場の者がいるとなると馬鹿にできないな。中々どうしてだつてな」

「それって、私のこと認めたってこと？」

「俺の実家も長く古い歴史がある道場みたいなものでな。お前の太刀筋と実家の連中と比較したら、お前の方が清々しくて綺麗だった」

ふつ、と不敵に笑む男は雫に目を向け真剣味が孕んだ言葉を送った。

「そのまま、真っ直ぐ突き進めまだ未熟な若人。そうすれば間違った道に踏み外すこともなく強さの果てにたどり着くだろう」

「……強さの果て」

「そうだ。そして、新しい武器を送ってやるよ。今のお前には不相応な第一級の武器だ」

そういい出す一誠は、三人を工房へ案内した。ここは鍛冶職人の仕事場だと、教えられたときは感嘆の息を漏らした。真紅の長髪をひとつに結び上げて、上半身裸になった際には香織が顔を赤らめた。炉の前に陣取る風に座り出す一誠は鎚を手にして構えた。

「兵藤さん。何をするんですか?」

「武器を作る。だから話しかけるなよ。集中ができないからな」

それつきり、言葉通りに武器を作り出す一誠の様子を見守ることしかできなかつた。真つ直ぐ熱せられた金属に鎚を降り下ろし続けるその集中力に息をすることを忘れてしまいそうになるほど目を奪われ、鍛冶職人の仕事の風景を目の当たりにしている三人はしっかりと目に焼き付ける。

「格好いいね……………」

「うん……………」

「……………」

カアン、カアンと鳴る音が工房の同階中に響き、その音に引き寄せられ増える見学者。武器が完成した頃には外は朱色に照らされて地平線に沈みかけようとしていた。刀身を柄に差し込み抜けないよう杭で打ち、紐を結んで仕上げに手を加えると研ぎ澄ませていた意識を吐く息と共に柔らかくして、完成した武器を見定める。刃の切っ先から柄にまで真つ黒な刀に刃の部分から緋色が紋様のように広がっていた。それ以外は無骨で何の変哲もなく、意匠や装飾が凝ったわけでもない。であるが単純シンプルにして——極致。

「イツセー、それは……………っ!」

戦く椿は目を丸くする。彼女しかその刀の真価を見抜けないことをハジメや香織に雫を始め、アイズ達に分かるはずがなかつた。完成した刀を誰もいない空間に向かって、上段の構えを取った時。黒い刀に宇宙のような星屑が浮かび上がり、緋色が太陽のように輝く。さながらそれは月と太陽が同時に具現したようなものだった。まるで『幻想』のように。それを気にすることもなく一誠は鋭く振り下ろした。

次の瞬間。炎を纏う黒い無数の刃が刀から放たれ、壁を文字通り斬つた後でも切り口に炎が燃え盛り続けた。今まで見たことがない武器の威力を目の当たりにした一同はただただ啞然としていた。今の技を人間相手に向けられたら重傷どころでは済まされない。

「(ははっ、『幻想』のスキル。ここまですはな)」

作つた当人も内心びっくりしていた。しかし、元の世界の化け物達と比べればまだまだ赤子に等しいよなあーと苦笑する。

「八重樫、今度はお前がやってみろ」

「は、はい」

素人でも扱えるか振るわせて見せるため、雫に手渡す。一誠に見做って誰もいない空間へ振るってみたら……刀身に星屑が消えて無数の刃は発生しなかった。

「……え？」

「今、本気でやらなかっただろ。気持ちも真剣じゃなかったな。もう一回やれ」

真剣で本気に振り下ろせ、と今さつき振るつた自分は軽い気持ちだったと指摘された雫は、気持ちを改めて真剣な気持ちで先ほどの無数に飛ぶ刃を想像して、放った。放たれ——なかった。

「ど、どうして……？」

「んー？椿、振ってくれ」

「おう、さつきから触れたくてうずうずしておつたところだ」

嬉々として黒刀を雫から受け取り思いつきり降つたら、雫出せなかった黒刃が三つ飛び出した。

「おおっ！出せたぞ！」

「純粹に実力不足なだけか？そんな風に打つた覚えはないんだが」

打つた本人も謎だと首を傾げたものの、これはこれで良しか？と黒刀に名を刻んだ。

「銘は『黒炎鳳蝶』。断言させてもらうよ。この刀はこの世界中に存在する武器の中で最強の一振りの一つだとな。だが、その真価を發揮できるかはお前次第だ八重樫」

「私がまだ弱いから、兵藤さん達みたいに刀の力を振るえないんです

ね」

「どうやらそのようだな。俺ですら把握してなかったことだが、これはこれでありだな。最初から己の力量を上回る最強の武器を使ったら使い手自身が成長できにくくなるからな」

「ふむ、そういう考えをするお主だからこそ振るっても飛ぶ刃が出なかったのでは？」

多分そうだろう、と椿から受け取った刀の能力をもう一つ教える。

「さっきの技以外にももう一つ技がある名前を付けるなら安直に『影渡り』だ」

『影渡り』ですか？」

見てろ、とそう言った瞬間に一誠は自分の影の中に沈み、ハジメ達の影から出たり入ったりと実証を試みせる。

「この刀の所有者のみしか扱えない技でもあるから、八重樫でもこれができるはずだ。影の中に入るイメージをすれば可能になる」

実際に雫にもやらせてみると、飛ぶ斬撃の技が繰り出せなかったのに影の中に沈んで香織の真後ろから現れたことで初めて『影渡り』を体感で来た。

「で、できた……」

「イツセー、やはりお主は異常だぞ。あんな剣、魔剣の類から完全に逸脱して完璧に別物の武器であるぞ」

「異常の体現者、か。面白いな」

雫から返してもらって最後の一仕事として、刀身に一誠の名と雫の名や椿に「ヘファイストス・ファミリア」のブランドの名の「Hφαίστος」の名前を金字で刻んでもらった。その後即席の衣装が凝った金と黒の鞘を作って刀を納めて手渡す。

「これでお前の物だ。大切に扱えよ」

「はい、ありがとうございます。あの、もしも壊れたら……」

「それはあり得ない。最硬精製金属オリハルコンとヒイロカネに魔力の伝達がいりミスリルを素材にして作ったから切れ味が落ちるにしても壊れたり折れたりすることは滅多にない」

オリハルコンは聞いたことがある。ヒイロカネだってそうだ。

ミスリルはわからないが、とても貴重な金属を使ったことは否が応でもわかってしまう。

「この世界にオリハルコンやヒイロカネがあるの？」

「見せてやろうか」

素材を保管する倉庫へ入って二つの金属を持ってきた。それをハジメと香織に雫は感嘆の息を漏らしながら見つめる。

「ゲームや冒険ものの小説に出てくる実物の金属だ。この説明は前にもしたが、これらの金属の他にも色んな金属や鉱石なんかはダンジョンの壁を掘れば出てくる。ただし、闇雲に掘っても直ぐに掘り当てられないから凄く地味な作業になるぞ」

「兵藤さんでも簡単には見つからないんですね？」

話を聞いたら当然であり一誠自身も骨が折れる作業であったはずだと思っただけで聞いたら、返ってきた言葉は――。

「うんや？俺は壁を拳で粉碎するから見つけられるぞ」

「……………粉碎？」

後日。どういった場所に壁から金属と鉱石が出てくるのか上層で探してもらった時に、一誠が壁一面を拳で殴って粉碎した際には三人の思考が停止したのは言うまでもなかった。

「……………兵藤さん、他の冒険者もそんなことできるんでしょうか」
「できるぞ。ただし第一級、L.V. 5の冒険者ぐらいにならないとな。」

それに規模によって家一軒ぐらい素手や蹴りで普通に潰せる」

「(冒険者、恐るべしっ！)」

自分達もそんなことができうる可能性を秘めていることを気づかないハジメ達は慄いたのであった。

冒険譚 31

冷酷なまでに心身、骨の髄まで凍らせる冷たい緑玉蒼色の水の中は水棲のモンスターが優雅に泳いでいた。酔狂な命知らずの侵入者がやってくることはない自分達の水の領域に、間違つてでも入ってきたのならば容赦なく蹂躪してみせる自信はあった。一度も水の領域に侵されたことは一度もない。これからもそうだろうというモンスター達はその思考すらせず、泳いでいた。

『』
巨大な黒い影。真っ直ぐ水の底へと向かっている。同胞？同族？

——否、この本能から告げる感覚はどれも否定した。あれは、敵だ。近くにいたそのモンスターは遠くにいる同族に呼び掛けをした。モンスターから発する超音波的な声は水中の至るところにまで広がり、警告を受けた他の水棲のモンスター達は敵がいる場所へと急行する。そして、巨大な黒い影を見つけ己の牙や爪で侵入者を葬ろうと襲い掛かった。

『……』
三つの鎌首が蠢く。迫り来るモンスターを認識して眼光を妖しく煌めかせた。

陸上は女戦士達アマゾンネス四人がいた。集団で襲ってくるモンスターを身が凍てつく冷気の中で戦い続け、浮かぶ汗は忽ち凍りついて肌からこぼれ落ちる。真っ白な雪にモンスターの大量の血で広く赤く染まり灰燼と化して灰が積もっていくほど彼女達は長い間、死闘を繰り広げていることを窺わせた。だが、一方的な地獄絵図を作り上げようと、波のように押し寄せてくる数百のモンスターの群集は絶えなく増え続け終わりが感じられない。女戦士達の体力は無限ではない。いつか無尽蔵に襲ってくる怪物達の波に飲み込まれて地獄絵図の一部と化するだろうとも彼女達は最後まで戦い続ける意思を、得物でモンスターを屠る勢いを衰えさせないことで示した。

——水面に影が揺らめく。

ザッパアアアアアンツ！と緑玉蒼色の水柱の大瀑布が生じて水中から巨大な何か飛び出したソレはモンスター群れに錐揉みしながら落ちた。落ちてきた巨大な何かの全容を把握する四人はまた水面から現れた存在に気付き、警戒して振り返る。

「はあく冷たかったあつー！」

全身ずぶ濡れの男が全身から水を蒸発しているために起こる煙を発しながら、手の中にあるかなり膨らんだ網を引きずってモンスターの死骸で成り立った地獄絵図を視界に入れながら四人と合流する。

「かなり殺^やつてみたいだな。身体の調子はどうだ」

「慣れてきたがこの寒さは厄介だ」

「この寒さに耐性がある人間はそうそういないさベルナス」

「その網の中は何が入っている？水中に潜ったのは無駄ではなかったようだな」

「冷たい思いをしてまで頑張った甲斐はあったよエルネア。それに、あのモンスターも引つ張り上げた」

全長30メートルはあるだろう水棲モンスターは、いまでも足掻くようにしたばたと跳ねている。その動きで地面から振動が伝わるのでまだ生きているのだと四人に認識させた。

「どうして殺さない」

「あのモンスターの生態と詳細をギルドに教えるために生け捕りした。最後は氷漬けにするけど」

まだ探索活動は続ける方針の男は四人のアマゾネスを引き連れて別の場所へと足を運びだす。たった五人だけの『深層』60階層。この世界でチートな魔法で誰にも到達されていない階層に転移しての探索を繰り返したある日の境にして、アルガナとバーチェ、エルネアとベルナスのLv. が「ランクアップ」を果たした結果が、身に覚えのないファンファーレの音色と共に『ステータスプレート』に表示された。その報せは瞬く間に『幽玄の白天城』の中で広がった。

『ステータスプレート』は本当に本物ね。「ランクアップ」を自動的に行われてるからまさに主神いらすの道具だわ」

「ようやく発揮できてくれて嬉しいもんだ。アルガナ達の頑張りが実

らせたようなものだ」

軽いプチパーティーをして「ランクアップ」を果たした四人を祝う。

「それに比べて俺は……ふ……ふふふ」

「まあ軽く落ち込み始めおった」

「貴方は前代未聞のスキルを連続で発現してるのだからいいじゃない」

「そうだぜイツセイ君。うちのアスファイでも持っていないスキルばかりで羨ましいぐらいだよ」

呆れながら宥められる。他の面子からもその通りだと慰めて褒めちぎる。回りから色んな言葉を受け立ち直る一誠の気を窺って別の話を変えた。

「彼女達がレベル6になったけど、君は『ファミリア』を結成しないのかい？」

「冗談で言ってみた程度だからしなくてもいいかなって感じなんだが」

フィンから今となってはいつでもよくなってきた話を掘り起こされて、今の自分の気持ちを告げると神々が反応した。

「そんならうちの眷族になる話はどうなるんやー」

「仮、仮だから」

「仮でも貴方一人でオラリオにいる第3級冒険者の子供達よりも稀少なスキルや発展アビリティを数多く保有してるし」

「そのレベルで第1級冒険者、私のオツタルと同等以上の強さだし」

「……何よりも異世界の料理を作れるから仮でも大歓迎」

「……、最後が絶対神々にとって重要性が高いだろ。」

「じゃあ、今年最後にする恒例のアレ、もうしなくていいんだな？皆の仮の眷族になるんだから」

「うーん……。まだオレのところに来てくれてないからそれはそれで困るかな？」

「そうね。私の子供になってくれたら極東で色々してもらいたいことがあるし」

「……独占して可愛がられない」

まだ順番が回ってきてない派閥の主神達の言葉に、もう一度来てほしいと言う気持ちが沸いた主神達も恒例のアレを無しにするのは勿体無い気がしてきたので心の内で続けてもらおうと決めた。

「いまはまだ、私の子供よ？」

今までの会話の最中、ずつと美の女神の膝の上でシヨタ狐になつて一誠を可愛がっていた。周囲からの羨望に眼差しがとても心地よく、これでもかと優越感を浸って終始ご満悦であった。

「それに私へのプレゼントも楽しみにしているわ」

「それについてはもう準備してある。なんなら今欲しいか？」

「そうね……。くれるなら欲しいけれど、お楽しみは取っておくわ」

まだいらなと言いなながら狐の耳を触れながら頭を撫でる。銀瞳の視界に映る一誠の魂の景色は今日も美の女神フレイヤを魅了していた。デメテルから好物を受け取り、もきゅもきゅと幸せオーラを発散させて皆を和ませ^{萌え}せる一誠をできればこのまま独占したいフレイヤの気持ちは、神々だけ限らず城にいる冒険者達も似たような気持ちを抱いていたの言うまでもない。

こんな可愛らしい小動物？がLv. 云々関係なくオツタルと対等以上に戦い渡れるとは見た目だけ判断されれば誰も信じてはくれないだろう。それでも事実であることは変わりない。

「そういえば、ガネーシャ。前に渡した怪物捕獲玉^{モンスターボール}の調子はどうだ？」

聞き覚えのない単語を聞いた者は首を傾げ、知っている者は耳を傾ける。ウラノスの神意を協力する者同士しか知らない話しかけられた言葉の深意を察してガネーシャは白い歯を覗かせた。

『『中層』のモンスターまで捕まえられるぞ！そして今は怪物^{モンスターファイリア}祭に向けて準備中だ！』

「んんん？イッセー、もしかしてガネーシャに協力しとるんか？」

「手軽にモンスターをGET、捕まえられる道具を作って提供した」

何時だったか^{デナトウス}神会で決まった祭りの催しに一誠も関わっていたことをガネーシャとシャクティ以外の面々は初めて知って、「またいつの間に」と的な雰囲気醸し出す。ヘファイストスが質問した。

「ガネーシャが主催する祭りって確か今年中に行われるのよね？」

「その通り！子供達を驚かせるために猛特訓中だゾウ！」

その本番の準備も着々と進めていて、秋の終わり頃には開催する予定だとも言う【群衆の主】の話聞き、一誠は思ったことを口にした。「年に一度の祭りだ。『異世界食堂』も稼ぎ時となりそうだから忙しくなりそうだな」

「ふふ、頑張ってるね？」

頭の後ろから主神の声援を受ける。程なくしてプチパーティーは終幕してお開きとなった時には、雑魚寝するほど酔い潰れた神々を空いている部屋に放り込ませ、付き添いの団員達も空いている部屋で寝泊まらせることになった。今日は部屋に誰も来ない日。夜這いがされない夜を過ごす一誠は一人、鍛冶をするための工房とは別の作業部屋へ足を運んで夜明け前まで籠った。そこで何を作っていたのか、誰も知らない。

数日後――。

「ウラノス、リド達から報せが来たよ。イツセーが超長距離転移装置を隠れ家と空の世界の島と設置したそうだ」

「彼らは行き来できたか」

「ああ、出来てるようだ。リド達は大いに喜んでるよ。貴方の神意を確約してくれた彼はもう私を超えたと言っても過言ではない」

「そうか。……フェルズ、イツセーに報酬を用意してくれるか」
「了解した。直ぐに取り掛ろう」

東区画の保管庫セーフポイントにあるノームの貸し出し金庫の鍵をギルドから呼び出しを食らって、ローズから三つも受け取った一誠は首を傾げた。

「何の鍵だ？」

「ノームの貸し出し金庫の鍵よ。今まで知らなかったの？」

「名前程度は知ってたけど、金庫何て利用したことがないからわからなかった。でも、なんで俺に金庫の鍵が渡されるんだ？」

「私だって知らないわよ。ギルド長から突然これを貴方に渡せって言われただけなんだから」

ギルド長、ロイマンからの指示だと？と疑問が浮かんだがローズの

話の深意を考えてみれば、ギルドに対して何もしていない自分はロイマンに金銭的な物を要求していない。そしてこの時期で渡されるようなことをしたことは……。そこまで考えて至った結論は、ロイマンを動かすことができる唯一の存在が見えた時点で察した。「ウラノスか。別に報酬なんて望んでいなかったが、ありがたくもらい受けるよ」

ギルドを後にして貸し出し金庫がある東区画の保管庫セーフポイントに足を運んでみると、いくつもある小さな金庫の三つに、鍵は確かにはまった。687番、688番、689番の隣あつた金庫を開けてみれば……。中にぎつしりと詰まっていたのは、億は優に届く赤青緑紫に輝くたくさんユニコーンの貴石に、金銀の指輪、装飾された一角獣の角、そして数冊の魔導書グリモアだった。光り輝く小さな宝物庫に、一誠は苦笑する。ウラノスの神意は真に冗談ではないことも示唆しているのだから。金庫からすべての宝を取り出して亜空間に収納すると、再びギルドに足を運びだした。ロイマンから頼まれた件の報告をするために。



「ロキ・ファミリア」古参の亜デミ・ヒューマン人の三人、フィンとリヴェリアにガレスは次の『長期遠征』の準備に取り掛かっていた。アイズ達もその準備に駆り出され、滞りなくどんな大きなものでもたった一つだけ収納できるカードを沢山使つて遠征日まで整えていた。

「フィン、明日の遠征まで準備は終わる予定だ」

「わかった。終わり次第団員の皆に休憩を取らせてくれ」

「次はいよいよ『深層』域じゃな。27階層における『アンフィス・バナ』も予定通りなら討伐せねばならぬが」

一つの懸念を浮上させるガレスだが、どんなモンスターでも倒そうと勇ましく果敢に、凶暴で獰猛な若手の団員達が恐れ戦くはずがないじやろうなど、一抹の不安すら払拭する味方に心配は無用であると杞憂に終わらせる。

「のう、イツセーも誘うつもりか？」

「シー、誘いたいところだけど仮にも『フレイヤ・ファミリア』の一員の彼を神フレイヤは貸してくれることは難しいかもしれないよ？」

「本人でなくとも、分身体のイツセーならば可能ではないか」

リヴェリアの抜け穴の指摘に口元を小さく微笑を浮かべたフィンは名案だと頷いた。本人と変わりない言動をし、数日間も自立起動できるチートな魔法で構築した分身体ならばフレイヤも否は言わないだろう。

「その手でいこう」

「儂も賛成じゃ。あやつもそれならば力を貸してくれるじゃろうし、異世界の美味しい飯を食べれるわい」

「お前は一週間に何度も食べに行っているだろう」

「そう言うリヴェリアは毎日食べているじゃないか」

二人からの突っ込みを貰ってしまい、事実なのでぐうの音も出ない。反応に困らされてしまったハイエルフの彼女に畳みかける言葉が放たれた。

「リヴェリア。彼とはどうだい」

「なんのことだ」

「イツセーと同棲してもう三年だ。親交も深くなっているだろうし、彼なら君を友情以上の憧憬おもいを抱かせているんじゃないかと思ってるんだ。ロキすら認知していない、君とイツセーの男女の関係とかね」

「アイズとアリサは言わずもがな。後から入団してきたラトラ達もそうじゃ。幼子のあ奴らはイツセーに好かれても不思議ではないが、堅物で融通が利かんお主を魅了したのか興味あるわい」

ニヤリと興味津々でいやらしく笑うガレスも話に加わって問いたです。二人から一誠との関係を訊き出され、リヴェリアは困ったように綺麗な翡翠の柳眉を眉間と一緒にしわを寄せる。

「他派閥同士の恋愛はできないことをわかってるだろう」

「あのシャクティが派閥に入ってきたら即結婚するつもりでいる。今結婚できなくても、子供を産めなくても恋愛ぐらいは寛容されるんじゃないかな？」

「フィン、その言葉そっくりそのままお主にも当てはまるぞ。他派閥からお前を慕っている女性冒険者が多いのじゃからな」

否定できないフィンは苦笑いする。野望の為に周囲から向けられる好意はフィンにとって安易で無碍にできないが、不要な物だ。できる限り断っているがそれでも強くて格好いい、可愛い小人族バルウムの【勇者】の応援者は中々減らない。

「……そう言えばあやつが自分の【ファミリア】を作った際には、徽章エンブレムを貸してくれる【ファミリア】の仮の団員になるようなことを言っておったな？」

「それがどうしたんだい？」

既に周知の話は今更何か遭るのかと相槌を打ったフィンの碧眼の双眸は、蓄えた髭を触れながら思い至った考えを口から吐いたガレスを見つめた。

「イツセーのやつ、【ガネーシャ・ファミリア】の仮の団員となったらシャクテイと結婚をするかもしれんのではないか？」

「……」

——あり得なくない可能性を浮上した瞬間にフィン達の間になんな空気が漂い始めた。

「……いや、正式な団員ではない限り婚姻を結ぶことはできないはずだ」

「じゃがの、主神と団員達が全員認めてしまうようなことが起きてしまえば正式でなくてもなってしまうのではないのか」

「シー……少し、そこどころ考えなくてはいけないかもしれないね。そうなってしまうえば彼は【ガネーシャ・ファミリア】側に関係と立場が寄ってしまったって僕らや他の派閥との立ち位置がズレてしまっうかねない」

「そういう事なら既に遅いかもしれんぞ。極東から来た三人の狐人ルナールは神アマテラス達の眷族。仮とはいえイツセーと婚姻を結んでいる」

最初は否定したが最後は肯定してしまう自分がとても複雑な気分になった。リヴェリアの言葉通り既に立ち位置が変化している状態が成っている。派閥の首領として少々好ましくないと真剣な眼差しで翡翠の瞳に視線をぶつけた。

「彼を中心に【ロキ・ファミリア】を始め複数の派閥が集まって良好な

関係となつてはいるが、出来ればイツセーをこちら側に寄つてもらいたいのが本音だね。転生者一人で派閥内のパワーバランスを崩してしまふ程だ。それはイツセーもそうだ」

「主神なき【ファミリー】の件は儂等にとって好ましいことなのじゃないフィン」

「彼自身も己は爆弾であることを自覚している。だとしても、彼の力や能力はとても強力であるからできる限り独占に近い状態に持ち込みたい。きつと他の神々もそう思っているよ」

虎視眈々と狙っている派閥は多いとフィンは断言する。であるからしてリヴェリアに願を送った。

「幸い、彼を慕う女性は【ロキ・ファミリア】が多い。彼と結婚出来るならば僕達の有利になるだろうね」

「フィン、さつきから私を見て言っているが……何を言いたい」「君とイツセーが結婚してくれるなら【ロキ・ファミリア】は安泰だと思つてる」

勿論、強制ではないよ？と付け加えてもリヴェリアから見てフィンは本気で言っているように見受けられる。困つたものだとは思つても、そういう気もなければ肌を触れさせないし身体も重ねていない。

「私のことよりもお前の野望がいつ達成するかが気になるがな。嫁の候補だつて未だ見つかつていないのだ。現時点でお前に相応の同族と言えば【アストレア・ファミリア】の小人族バルウムの者だと思つているがどうだ」

「……彼女は何と言うか、押しが強いというか、我欲が強いというか……」

「まだ苦手意識が残つておつたのか」

その昔、何度かフィンとライラは顔を見合わせたことがあるも、ライラの性格と言動を知つてしまつてから自分とは相性が悪いとさりげなく接触を避けてきた。オラリオに存在する女性冒険者の小人族バルウムの中でLv.3は極めて少なく希少と言つてもいいぐらいである。小人族が冒険者を生業として生きているのは迷宮都市で極僅かですれこそ上級冒険者は一人握りしかないのだ。これ以上のないフィ

ンの嫁候補としてリヴェリアとガレスは一目置いていたのだが、当の首領が避けてしまつては何時まで経つても嫁候補は見つからない関の山だ。

「勿体ないのう。あの小人族バルウム以外の上級女冒険者は儂は知らん」

「現時点では彼女が小人族バルウムの女性冒険者の中で頂点に立っている。相手もまんざらではなさそうだったが」

「すまない。どうしても彼女以外の同族の女性の冒険者を探してみたいんだ」

ライラを嫁候補から外し、他の同族の女性を探す固い意志を曲げないフィンだった。

「であれば、イツセーの奴に協力してもらうのはどうじゃ」

「彼に？」

「異世界のやり方でお主の嫁を探す方法をしてもらうんじやよ」

「そんなやり方、あるのか？」

胡乱気にガレスの提案を疑惑したが、本当にあるのか聞いて見ればわかることだと言い返されたフィンとリヴェリアは顔を見合わせて助言を求める意を決意した。腕輪の宝玉を触れて一誠と通信状態にして、繋がったらフィンの嫁候補を探す方法はあるかと尋ねてみた。一誠は逆に尋ねた。

『どんな人が好みなんだ？』

「僕と同族で資格と、後は最低限の人格さえあることが好ましい」

『資格ってのは？』

「勇気だよ」

『強さは無関係か？』

「そうだね。心に強い勇気があるなら」

『冒険者限定で？』

「うん、その通りだよ」

それ以降、考える一誠を六つの眼差しが見守る最中。やはりできないかと思つた矢先に一誠は口を開いた。

『勇気を示す方法を任せてくれるなら、できるぞ？』

「できるのかい？結構難しいことだと思つていたんだけど」

『今すぐは無理だけどな。合理的に見つけ出すなら——運動会が一番だろう?』

一誠の言わんことを三人は察した。あの身体能力重視の運動会ならば、どんな競技だって神々や冒険者に認められ臨んで行うだろう。しかもそれを用意するのが異邦人の一誠だ。フィンは期待の眼差しを向けた。

「来年の運動会だね。頼まれてくれるかい?」

『頼まれよう。人知れず相手を見極めながら探したほうが穏便的だろうしな』

「うん、やっぱり君は頼りになれるね。これからもよろしく頼むよ」

そこまで考えていた相手に称賛する。こうして話している時、たまに一誠に対してできないことなんて無いんじゃないかと思う時があるが、相談相手として自分は間違っていないなかったと嬉しく思った。

『だけど、そういう奴なら「アストレア・ファミリア」のライラって小人族バルウムがいるんだけど?』

「……彼女にはこの話を教えなくてくれるかな。それと僕のことも聞かないでほしい。切に頼む」

やはりフィンの嫁候補にはライラが挙がってしまうのは仕方がなかった。リヴェリアとガレスが思っていたように一誠も似た共感を抱いていた。

「ところでお主、今何をしておるんじや」

『ロイマンに頼まれて創造した陸上用の列車をこれから動かそうとしているところ』

「二(またとんでもない物を作っているのか)三」

後日、オラリオの外に数十メートルの横長の鉄の塊が鎮座していた。馬車の荷台より数倍大きい連結している客席は自由席と予約席と分けられており設備は全席意匠が凝ったものになっている。外見は白亜色の楕円形もとい芋虫を彷彿させる形だ。

「随分と大きいな。初めて見るが、これがお前の世界にも存在するか」

驚嘆の息を漏らし、馬も引かず鉄の塊が動く姿は想像できない口イ

マンは操縦席に足を運ぶ一誠についていく。何やら腕輪に話しかけていたがそんなことよりもロイマンの眼は列車に釘付けでいた。

「長さは大体そうだが、商人が持ち運んでくるだろう荷物を大量に収納できるように作ってあるから大きさは違うな。コレの一回りは小さい」

「この列車に車輪がないぞ。これで走れるのか」

「浮遊して飛ぶように走るものだ。だけど、これから向かう同盟国まで色々と下調べしなくちゃならないからあくまでこの列車は試験的に動かすだけだ。それにロイマンも付き合ってもらうぞ。突然この列車が来たら相手が驚いて警戒するんだからさ。それと列車に乗る際に必要な決まりも考えなくちゃならないし」

カンカンと前車両の操縦席に続く階段を踏んで上っていく。扉を開けて二人が中へ入って少しして列車全体に駆動音が聞こえ、地上からIMも浮くと最初はゆっくり、それから徐々に速度が上がって次には猛スピードでオラリオからかけ離れていく。

数年後、オラリオから他国と行き来する鉄の塊の姿が見受けられ、人はそれを『異世界の乗り物』と認識するようになった。

冒険譚32

東西南北に列車を設置してロイマンと様々な規則を試行錯誤しながら決めていき、「ヘルメス・ファミリア」にも協力を要請して、列車が走る空から道標ルートや地図マップを作ってもらうこと一カ月が過ぎた。オラリオを中心に真新しい地図マップが出来上がり、列車は作成した地図をもとに快走することができるようになった。他の地域も時間をかけて地図マップを作成する予定だそうだがそこまでやる気なく、ロイマンから報酬金を受け取って『幽玄の白天城』に保管する。詰み終えた黄金色に輝くヴァリス通貨の山を少しばかり感傷深く見惚れた視線と意識を逸らして部屋に戻ろうと踵を返した瞬間。視界に真っ白な空間の光景が飛び込んできた。

「.....?」

なんだ、ここは？刹那に変わった光景を不思議そうに見回す一誠の目の前に一人の女性の声が聞こえた。

『お久しぶりですね兵藤一誠』

「転生の神ミカル？」

己を異世界に招いた元凶の異界の女神が登場した。前回自殺しようとした時に突然現れ、供え物をするようになってから一度も姿も声も見聞しなかった相手が今度は何の用だと怪訝する。

「供え物は欠かさずしてるが口に合わなかったか？」

『寧ろ次の食事は何なのか楽しむ日課になっていますよ。食欲がなくなると味覚を楽しめませんから』

「じゃあ、どうして俺の前に現れた？とても重要な要件を報せに来た感じじゃないし、元の世界に戻すつもりもないんだろ」

『どちらもそうですね。あなたと転生者たちの衝突は興味深く楽しませてもらっています。これからも期待しておりますよ？』

傍迷惑なことだ、と心情を顔に出して顰める一誠に気にせず本題とばかりミカルは話し始めた。

『今年の冬に一時ですがあなたの世界から家族と招いて差し上げましょうと思っています』

「一時だけかよ。でもま、直接会わせてくれるなら感謝するけど、誰なのかは教えてくれるのか」

『それはまだ内緒ですよ。私からのささやかなプレゼントです』
サンタ気取りか。

『そしてもう一つ。貴方に挑戦していただきたいことがございます』
「挑戦？大抵のことなら多分クリアしそうなんだけど」

『ええ、そちらの「世界」ではそうでしょう』

嫌な単語が聞こえ、これから言い出すだろうミカルの言葉に警戒心を否が応でも覚えてしまった。まさか、まさかなあ？と耳を傾けた時だった。

『——え？な、なんで貴方がここにっ？あ、ちよっ!』

「……?」

誰かが割り込んできた声を漏らすミカルに小首をかしげるとすぐに声が聞こえた。

『おー、別の異世界の俺か。初めまして、それとも久しぶりか？俺は—

——兵藤一誠だ』

「……はっ?」

男の声……兵藤一誠と名乗った者が一誠を放心させかけた。

『お前も異世界にトばされた憐れな奴だな。ま、俺もまたそうだったけどなあー。はっはっはー!』

「……別の俺、兵藤一誠?」

『おう。見た目はは三十過ぎたイケイケのワイルドな中年男だぜ。

あ、実年齢は聞かないでくれよ?』

自分で何を言ってるんだと思うが、兵藤一誠の言葉や口調はどこか父親みたいな感じがする。

『いま転生の女神ミカルの領域に久々に来てみたんだが、なーんか結界やら罫やら妨害が張り巡らされてたけど、和樹達と協力し限界突破してみたぜイエーイ!おい、和樹も話してみろ。パワレルワールドの俺だぜ?』

『わかったわかった。やあ、こんにちは。僕は式森和樹だ。君の世界の式森和樹と同じ魔法使いだよ』

「は、初めまして……転生の女神は？」

『ちよつとばかり大人しくさせてるよ。中々面白い事になつてたから邪魔はされたくないからな。てなわけで、そっちに行つてみるか？』

……行つてみる？ミカルの焦りの悲鳴が聞こえるが止まる気配を感じないようだ。だつて、目の前で空間が渦巻きながら歪み、開いた穴から四人の男女が出てきた。一人は真紅の長髪に金色の双眸で聞いた通り中年の男性。もう一人は和樹を成長させたような中年の男性。さらに二人の女性はというと――。

「グレートレッドにオーフィス……」

兵藤一誠と同じ髪の色と瞳を持つ紅のドレスで身に包む女性に、一誠が知っているオーフィスと変わりない姿をしている幼女だった。一誠は目を張つて驚いた。

「どうやら元気そうであるな。初めて会つた頃よりは大分いい顔つきだ」

「……俺、会つたことがあつたっけ？」

「憶えていなかったか。それも無理もないか？リーラが死んで大暴れしていた時にお前を止めた張本人達なんだがな」

随分と昔のことと、嫌なことを思い出させてくれる。が、一誠はその時の記憶は全然なく、気付いた時には曹操達と一緒にいた頃だった。

「んまあ、過去のことはこの際置いといて。こうしてまたお前と出会えたことは嬉しく思うぜ」

「俺も……別の世界のもう一人の俺と出会えて驚嘆の念を覚える」

「んでもって、現在異世界でスローライフ中つてところか？どんな世界なんだ？」

「世界で唯一ダンジョンがある世界だ。神々の眷族になつて冒険者としてダンジョンを探索する」

「冒険者！ははっ、懐かしい響きだなあー。昔を思い出すよ。ガイアに魔獣の森に放り込まれたところとかさ」

「壮絶な修行をしてたんだ。俺は世界中旅して神々や伝説の存在に師

として仰ぎ、修業してきたんだけど」

「何だよそれ!?滅茶苦茶楽しそうじゃんか!」

互いにどんな修行をしてどんな人と巡り合ったのか昔話の会話を花を咲かせる。別世界の和樹達も時折会話に交ざって質問したり問われたり、相槌を打って白い空間の中で時間を過ごす。

「はー、聞いている限りじゃ本当に同じ『兵藤一誠』でも人生は違ってるな。この分じゃ、他のパワレルワールドの『兵藤一誠』は俺達よりも過酷な人生を過ごしてるな」

「だと思っけど、なんで転生の女神に会おうと思っただけだ?」

「ただの気まぐれだ。久しぶりに会いたくなってな。それだけだ」

そんな目の前の兵藤一誠を警戒していた転生の女神は、鎖に縛られていて寝転がっている。

「それがお前と再会することになるなんて夢にも思わなかった。この出会いは偶然であり必然だろうな。で、今ならお前を元の世界に連れて帰すことはできるけどどうする?」

「.....」

突然そう言われて答えに悩む。確かに彼ならば可能だろう。ただし自分だけならだ。他の世界から来たアスナ達の世界に送り返すことは難しいかもしれない。だから自分だけ元の世界に帰るなんて.....。

「いや、いい」

「いいのか?元の世界に帰る方法があるのか?」

「一応、色々な世界に繋げる魔法を得てる。一度だけ異世界からもう一人の『兵藤一誠』と接触できたから」

「ほおー?そいつは興味深い魔法だな。でもそうか。お前がそう言うなら頑張ってもらおうか」

朗らかに笑う兵藤一誠だったが、両の拳が気と魔力を帯びはじめた。それを気づかない筈がない一誠は目を瞬きする。

「なら、次元と時空を超えて相対した俺達兵藤一誠同士を記念していっちょ勝負しようぜ」

「.....」

拳を握って構える一誠の姿勢は兵藤一誠と戦う意思を示す。一誠も興味以前に一度勝負してみたかった気持ちで現実となり、己より成長した自分と戦いもし勝てたならば「ランクアップ」は間違いなしだろうと——次の絶望が垣間見えても二の次だと瞳孔を鋭くさせ戦意をたぎらせる。

「——最初から全力で行くぜ！」

嬉々としてそう宣言した兵藤一誠は身体から迸る魔力を奔流と化すると、オーフィスとグレートレッドも濡羽色と真紅の魔力を体から迸らせた。

「我、夢幻と龍神の子の者なり」

「我、夢幻を司る真龍『真なる赤龍神帝アポカリユプス・ドラゴン』グレートレッド」

「我、無限を司る龍神『無限の龍神ウロボロス・ドラゴン』オーフィス」

「我は無限を認め、夢幻の力で我は汝を誘い」

「我は夢幻を認め、無限の力で我は汝を葬り」

「我らは認めし者と共に生く——」

「我らは認めし者と共に歩む——」

2人の呪文のような言葉の後にもう一人も呪文を唱えた。

「我は夢幻を司る真龍と無限を司る龍神に認められし者。」

我は愛すべき真龍と龍神と共に我等は真なる神の龍と成り——」

「我等の力で全ての敵を倒そう。そして我等の力で汝等を救済しよう——」

ドラゴン・オブ・ドラゴン
「D× D !!!」

眩い閃光が三人から弾け、一誠の視界を真っ白に塗られる。視界が回復した頃に目をゆっくりと開くと——。立派な角が生えた頭部、胸に龍の顔と思われるものが有り、特に胸の龍の顔は意思を持っているかのように金と黒の瞳を輝かせる。瞳は、垂直のスリット状に黒と金のオッドアイになっていて、腰にまで伸びた真紅が黒色と入り乱れ

た髪になっていた。

「どうだ、これが俺達の力の結晶だ。今度はお前の全力を見せてくれよ」

兵藤一誠からの挑発のような言葉を受けそれに応じて、濡羽色と金色のオツドアイに眼光を鋭く放って玲瓏に謳った。

「——我は無限と夢幻の神の龍也」

『『』——我が宿りし覇と王道をも降す唯一無二の龍よ、汝じが赴くままに至れ』』

紡ぎ出す謳。一誠の玲瓏に紡ぐ謳を兵藤一誠と式森和樹は耳にする。

「——濡羽色の無限の神よ」

全身から奔流と化して迸る真紅色の極大オーラが、一誠の全身を包み込んでいく。

『『』——赫赫たる夢幻の神よ』』

身体に宿るドラゴン達も詠唱を唱え、真紅のオーラに入り乱れながら迸る無限を体現する黒きオーラが、さらに一誠を覆っていく……。

『『』——際涯を超越する無垢な無限の希望と純粋な不滅の夢を抱く全ての運命さだめを降す我らが真の禁を見届けよ』』

そして身体から迸る真紅と漆黒の濃厚なオーラが身体に纏わりつき、入れ墨が肌に浮かび上がっていく。背中に十二枚の真紅と漆黒の色が入り交じった翼と臀部辺りに同じ色の尾が生えていく。

そして一誠達は、最後の一節を謳った——。

『『』——原始の理で以って我らが無夢を解き放たん』』

呪文を謳い終わった時、真紅と濡羽色の龍を象った入れ墨が全身に浮かんでいた。真紅の髪も濡羽色と交ざっていながら入り乱れている。

「それが、お前の全力か。でも鎧を纏わないのはなんでだ？」

「あんたを参考にしたんだ」

きよとんとした顔で「俺を？」と小首をかしげた兵藤一誠。

「パワレルワールドの兵藤一誠達もきつとドラゴンの力を鎧にして具現化している。なら、それに倣う道理もなくオーフィスの力を鎧にせ

ず俺自身の身体に無限の力を解放することにした」

その結果――。

「この状態なら他の神セイクリッド・ギア器ロンギヌスや神滅具の能力を振るえ且つ無限にまで力を昇華させることができる」

鎧に具現化しても確かな強さを得られるだろう。だが、その身に宿す豊富な能力が振るえないのであれば意味がない。一誠はそこを重視して他の能力も扱える方法をオーフィスと共に試行錯誤して編み出したのであった。その考えをしてこなかった兵藤一誠は珍獣を見る目つきで感嘆と驚嘆の入り混じった息と共に言葉を口にした。

「……なるほど、一度でも考えたことがなかったな。流石パワレルワールドだ。だとすればお前のようなパワレルワールドの兵藤一誠もきつというはずだろう。こりゃあ俺もうかうかしてられないな」

「ははっ、ライバルが自分自身にまで増えちゃったね一誠」

面白そうに朗らかに式森和樹が微笑んで口を開いた。「そういうお前もパワレルワールドのお前自身に超えられてるかもしれないぞ」と兵藤一誠は言い返した。

「ま、俺の想像を超えたことをしてくれたからには期待せずともいい勝負ができそうだ。――さ、やるぜ？」

「ん、やろう」

そう言う二人は動揺せず観戦の姿勢で保つ和樹の視界から消失した。寧ろ、二人の姿を探そうとする気がないのだ。迅過ぎて探しようがないぐらいに。

「女神様、貴女から見て二人を見つけられますか」

「……それよりもこの鎖を解いてくださらないのですか」

「ははは、それは無理ですね。僕が解こうにも魔力を持つ者が触れた途端、連鎖的に触れた対象にも束縛するんですから」

魔力や魔法の武器にすら反応しますよ？と加えられて解放はできないと突き付けられた事実に諦め、虚空を見つめるミカル。

「見えませんね」

「そうですね。爆音や空間が歪みだしているところしか目や耳に

入らないですし一誠を相手にできてるあの子も中々成長しているんですね。いやー、凄く凄く。戦闘が好きなのヴァーリ達がこの場にいたら居ても立ってもいられないはずだ」

「この空間はあの方の世界と私達の領域の境目に作った特別な空間です。だから冷や冷やしますけれど?」

「そうなんですか。因みに、この空間の強度と云えば?」

え?と呟いた女神の耳に嫌な音が聞こえるようになった。まるで氷の大地に罅が入った鈍くそれでいて乾いた音が。

「忘れたんですか?彼らは世界で最強のドラゴンの力の塊ですよ?そんな力が激しく衝突したらこの空間だって影響が生じないなんておかしい話ですよ」

「どれだけ神の力でも作った領域なんて崩す。身をもつて経験したはずですがね?ああ、止めてくれと言われてもできませんから。戦闘音で周囲からの音は掻き消されるので」

打ち上げられて咲いた花火の爆音を間近で聞いたような音が今もなおも空間中に響いて、防音の結界を張っているからこそ会話が成り立っている。そして白い空間に罅だけじゃなく裂け目までもが目に見えて増えてゆき、激しい揺れまでもが発生した。事の重大をようやく察し蒼白の顔でミカルは叫びながら乞うた。

「な、何とか止める方法はないんですか!?このままでは世界にまで影響が出ます!」

「うーん、あの二人を異世界にこの空間から追い出すのと、一誠とあの子の世界にいる女性を連れてきて止めてもらうの、あなたからしてどっちが好ましいですか?時間的に」

「兵藤一誠がいる異世界に追い出しましょう」

間も無く決めては白い空間に歪んでる部分へ穿ってほしいと頼まれた和樹は魔力の砲撃でそうする。ぽっかり空いた空間の向こうには見慣れない景色が見えた。

オラリオ中に轟く爆音を聞こえたとき、誰もが身体を跳ね上がらせ周囲や空を見回した。どよめきやざわめきが一般市民や冒険者達の間で生じて、近辺に異常がないと判断したら首を傾げながら動き出し始める。

「——和樹の奴、一体何の真似だよ」

「——オラリオに戻された？」

ただし、一部を除いて。中央広場セントラルパークに異空間から追い出された二人は勝負する雰囲気ではなくなつて——はなかつた。

「ま、いいや。続きをしようぜ」

「はっ?」

兵藤一誠の戦意は消えてなかつた。周りの人間や建物に迷惑を掛けない程度で勝負をする臨みな彼に信じられないと唾然しながらも応戦して激しい衝突の音を轟かせた。

「まだ聞こえてくるね」

「一体何が起きとる? モンスターが地上に現れておらんし、真昼間から花火を上げとるわけでもない」

「ロキ・ファミリア」の『黄昏の館』からフィン達が出てきて原因不明の轟く音の調査を調べようと出たが、拳がってくる報告はやはり原因はわからないの一つの共通だった。地上には一切の影響は及んでいないが空から絶えなく轟音が聞こえてくるのであれば、何かしらの原因があると親指に目を落として予想する。

「親指が震えていない」

「となると……もしかするとじゃな」

「ああ、イツセーが関わってる可能性があるね」

バベルの最上階でも謎の音を耳にしている美の女神が壁張りのガラスから外の様子を見ていた。一瞬だけ真紅の髪を持つ子供が二人もいて見えた。それぞれの魂は本物で一つの魂は自分を魅了してやまないものだったが、もう一つの魂は真紅と黒に銀色が混ざった見た

ことのない魂だった。

「……なにかしらね」

直ぐに姿が消えてから耳の鼓膜を破らんとする轟音が聞こえてくるようになって、音の原因は彼ら二人にあると知ってる銀髪の女神はオラリオを眺める。

音の原因を探ろうと建物の上に立って探る「アストレア・ファミリア」。見えない何かを探してもどうしようもないが、現在進行形で鳴り止まない爆音に対して怪訝になっていた。

「アリーゼ、そちらで何かわかりましたか？」

「わからないわ。【ガネーシャ・ファミリア】も動き出しているけれど、私達と同じみたいで判明できてない」

大通りで武器を所持して調査活動をしている最大派閥の団員達の姿を見受けているアリーゼ。言葉の通り辺りを見回して拡散していきながら何かを探し回っているようだが、リユー達と同じで難航しているようだった。結局何もわからず聞いているしかできないのかと苦い思いをした次の瞬間。空が紅色に染まった。弾かれるように空を見上げると、真紅の極太の光が遙か上空でぶつかりあって鏢迫り合っているように押し合っていたのだった。しかも広域の空間で歪が生じていて、その影響か地上に揺れが起きている。何だあれは!?!と目を大きく見開いて丸くしては驚愕する。何時までもぶつかり合う光はやがてもう一方の光を膨れながら押し返しながら飲み込んで貫いた。何かが終わったと思った矢先に真紅の軌跡が凄まじい速度で真っ直ぐオラリオの中心に落ちた。

「リユーー!」

「ええ、行きましょう」

その場所は何人たりとも侵入を許せない状態になっていた。近づけば戦闘による緊張感に耐え切れず意識を失って気絶する者が続出して、それを避けるために遠ざかれば円を描くように直径十Mから見守るしかできないでいた。その直径十Mの中心は子供のよう殴り合いをしているが、その密度は濃く、そして過激な勝負を繰り広げて

いた。数多の冒険者が、数多くの「ファミリア」が、神々がそんな戦いを見ていた。遅れてやってきたアイス達もまたその光景を視界に入れた。

「イツセーが二人……?」

「でも、姿が違う」

どういうことなのだど理解できず何時でも乱入ができる姿勢で身構える。あり得ないが、もしもという可能性がある。

「さっすがに強いなお前！魔法合戦は俺が勝ったがな！」

「そつちはグレートレッドとオーフィスが直接協力してるんだから当然だろ！」

「はっはっはっ！お前に力を貸す二人がいないからって寂しがらなつて！」

「うるせえおっさん！」

「まだおっさんじゃないわあああああつ！」

殴り殴られる激しい乱打戦ブルファイトがさらに過激さを増す。もはや冒険者の戦いの常識の域を超え逸脱したものだつたことを観戦者達は頭の隅で何となく感じたときに、体に突き刺す筈だった拳から不意に鳴る音が不意に止まった。その理由は兵藤一誠が深い笑みを浮かべ、一誠の拳を受け流した片方の手ともう片方の手の中には龍殺しの剣を握っていた。「次は剣術勝負としよう」と言うかのように戦い方を変え、上段から降られる剣に亜空間から取り出した同じ大剣で受け止めて、弾き返して後退する。そして、二人が虚空に消えた代わりに甲高い音が鳴り響く。第一級冒険者ですら視界に入らない超スピードの剣戟。それに伴い二人の血と思われる赤い液体と斬撃が広場に刻まれていき冒険者達の中から短い悲鳴が聞こえた。

二———二

刹那。何時までも続き終わりは何時なのか定かでなかった二人が姿を見せた時は、互いに背を向け合っただ剣を持ったまま時間が停止したように固まっていた。

とうとう決着がついたのかと息を呑み緊張して、二人を見守る冒険者や住民達は次の動作を待った。そして少しして、龍殺しの大剣に斬

られた傷が体に刻まれ迸る大量の血を流した敗者が、一誠が大剣を杖代わりにして跪いた。

「「「「.....」」」」

一誠を知るフィン達にとって一誠が敗れる光景を見ることになった結果に驚きを隠せなかった。誰に対しても負けることはないだろうと思っていた想いの気持ちに反して凄まじいショックを覚えた。だが、勝負はこれで終わりではなかった。兵藤一誠が音もなく一誠の背後に立って大剣を構えた。まだ戦いを止めないのか!?!と絶句する周囲の気持ちなど露知らずな彼の者は容赦なく振るった瞬間。影から一人の少女が飛び出してきた。

「おっと、誰だ?」

黒い軌跡が走る直前、少女を蹴り飛ばさんとする左足を薙ぎ払った。当然ながらその蹴りを防ぐことも避けることもできない少女は、致命傷を負った一誠に抱き寄せられ片腕で受け止めて守られた。少女を守った青年に心の中で称賛しながら続きをしようとした矢先に二人の少女にまたしても遮られた。

「させない!」

「やらせない!」

「うん、邪魔だ」

闘気で金髪と銀髪の二人の少女を弾くと藍色の髪の麗人が、赤髪のヒューマンとエルフの少女が懐に飛び込んでくるも一撃で薙ぎ払い圧倒する。その動作で風圧も発生して周囲に佇んでいた野次馬にも吹き飛ばす影響を及ぼせた。

「この場にいる全員が束で襲っても俺には勝てんよ。邪魔しないでくれ」

「もう勝敗が決しているというのにかい」

「どこの誰だか知らないが、こいつの底力をお前らの天秤で決めつけるなよ?まだ決着がついていないし、こいつの目はまだ死んじやないからな」

第一級冒険者の登場に対してもマイペースな対応をする兵藤一誠は、解除したことでグレートレッドとオーフィスが現世に姿を現し

た。遅れて和樹も空から降りて立ち並ぶ。

「邪魔するなら。容赦しないぞって言いたいところだがそろそろ元の世界に帰らせてもらおうわ。こんな状況じゃ戦いを楽しむにも楽しめないし」

「君は別の世界から来た者なのかい」

「その通りだ。んじゃ、この続きはお前が元の世界に帰ったらしよ
ぜ兵藤一誠」

別れの言葉を告げる兵藤一誠。虚空から出現した金色の錫杖を手にして聞き覚えのない呪文を呟き始め、虚空に向かって突き出した次の瞬間だった。四人の眼前の空間一面に光が発現して、広がる光の向こうを覗けばどこかの部屋の中の光景が見えてそこに向かっていく兵藤一誠達。

「次はお前がグレートレッドとオーフィスの力を得た状態でやりたいもんだよ」

「……次は負けない。絶対、絶対にだ」

「おう、それでこそ俺だぜ。じゃあな、また会おう兵藤一誠！」
手を挙げてヒラヒラと動かしながら言葉を交わす兵藤一誠は、光の穴の向こうに入ると緩やかに閉じていく空間の中でこの場からいなくなつた。残された一誠達は幻でも見ていたかのような気分になるが、現実であると受け止めて血を流し過ぎて気を失いかけた男に意識を集中する。

兵藤一誠が元の世界に帰って小一時間経過しても、受けた傷は中々塞がらず新薬を投与したが龍殺しの武器の威力は想像を絶するほど高かく、一誠の身体に深い傷跡を残すことようやく完治した。それは万能薬でも傷を塞げず、一誠が開発した新薬でようやく治ったほど、あの龍殺しの大剣の効果は凄まじい物だったと物語らせるに十分過ぎた。『幽玄の白天城』に戻ってもらったアミツドの出張治療により横たわる一誠は包帯で巻かれた体に手を置いて溜息を吐いた。

「彼は別の世界から君なんだね？」

「ああ、そうだ。今回ばかりは俺の完敗だ。ありやチートだろ。最強

のドラゴンの力を具現化した鎧を纏われちや攻撃が通じねえもんよ。幸い俺も最強のドラゴンの力を解放できる術があったから通用できたけど、なかつたら絶対に勝てなかつたわ」

本人がそう認めるのだから敗北したのだと見舞いに来たフィン達は静かに受け入れた。そして同じ兵藤一誠同士の戦いを見て、自分達はまだまだ一誠の足元にも見えていない位置にいるのだと改めて認識させられた。

「これからも無敗だと思っていた君が目の前で負けちやう姿を見ることになるなんてね」

「ははは、俺自身も新鮮だよ。久々に敗北を味わったんだからな。だからこそまだまだ俺は強くなれると、強くなることを頑張れるんだよな」

心配そうに見つめるアイズとアリサに目を向け、手を伸ばすと二人も手を動かして繋いだ。一誠の手から感じる力はとても薄く、今にも握っていないければ落ちてしまいそうなほど弱弱しかった。アイズとアリサは大切そうに一誠の手を包み込むように握る。

「お前らも頑張つて強くなれよ。そしたら俺も負けていられず強くなつていられるからな」

「強くなつたら、褒めてくれる?」

「おー、これでもかかってぐらい褒めてやるよ」

「ん、わかった。頑張るっ」

一誠に褒めてもらいたく強くなる原動力は愛故にだろうと何人ががそう思っていた。そう思った一人のアスナが尋ねた。

「イツセー、大丈夫?何か作ろつか?」

「頼む。十人前以上作ってくれるとありがたい」

「わかった。たくさん作ってくるね」

部屋を後にするアスナ一人だけでは作る量は大変だろうと手伝いに買って出て何人も後を追う。まだ残っている面々から労いの言葉や力になれなかったことに対する謝罪の言葉を送って会話を交わした。ふと一誠は「あ、アミッド。『ステータスプレート』を取ってこないか?」と言い出す。アミッドは快く従つて一誠の服からプレート

を取り出そうとする。

「『ステイタス』の確認か？」

「あれだけ全力で戦ったからには伸びてるだろうなって」

「してなかったし、増えていてもたったの1だったら悲しいわね？」

「仮にそうだったら俺はロキと自棄酒してやる！」

「イツセー、お酒飲めないんじゃないの？」

「梅酒ぐらいなら大丈夫だ」と口に出さずアミツドから『ステータスプ

レート』を受け取って確認すると……「あつ」と零した。

「『ランクアップ』してた」

「あら、そうだったの？他に何か発現した？」

「……んと、あー、また希少なもんが発現したぞ。スキルに

龍殺龍者と発展アビリティに『絆』と『狩人』に『魅了』だ」

まーたギルドでもすら登録されていない能力を発現させたよこいつ的な視線を無意識に向けてしまうフィン達に、一誠は気づいていなかった。

「『絆』と『魅了』についてどう予測できる？」

「何とも言えないわね。絆は文字通り相手と絆を深めることで成り立つでしょうし、魅了も同じでしょうね。ただ、それを選んで貴方に得するとは思えないわ」

「そもそもどっちも既にイツセーと私達の間で深い絆で結ばれてるし魅了されてるわ」

「『狩人』は一度倒したモンスターに対して効力が発揮するものだ」

発現した発展アビリティを選ばないにしてもさほど問題はないと頂戴して、選ばないのもありなのかと考える一誠はプレートを見つめ……意を決して操作する。

「発現したからには何かの縁だろう。『絆』に選ぶ」

「『魅了』じゃないのね？」

「既に魅了されてるんだろ？だから絆にする。ただ、本当にこれを選んでどうなるかわからないけどな」

「きつと他者との絆を深めやすくするためかもしれないよ？魅了も相手を魅了しやすくするためだと思うしね。これまで君の言動を鑑み

るに考慮すればさ」

うーん、否定できない。魅了に関しては『魅了成就』のスキルがあるからそれにブーストが掛かるだろうと思った。だがしかし、この時一誠は『絆』の真価を気づかなかった。ただ相手と絆を深める程度だろうと考えていたが、実際は他にもあったのだ。

『絆』の効果は——絆の丈と数の分、共闘して絆を結んだ相手の経験値やアビリティを飛躍的に成長を促す。そして副次効果として絆を結んでいない者からの魔法や能力及び魅了チャームの類は利かないという神々すら把握できなかった効果だったのだ。

イツセー

L v. 3

力：I 0

耐久：I 0

器用：I 0

敏捷：I 0

魔力：I 0

幸運：I

絆：I

《魔法》

『真・異世界扉』
ネオ・ワールド・ドア

・移動系魔法。

・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来や異なる世界へ行き来できる。

・強い憧憬である程、成功率上昇。

(特典) 『鑑定』

・ありとあらゆるもの価値を見定める。

《スキル》

『イレギュラー・アンソウン
異常不明』

・ 戦闘時のみ発動。階位^{レベル}、『基本能力』^{アビリティ}が反映・真価を発揮し、全能力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・ 早熟する。
- ・ 懸想が続く限り効果維持。
- ・ 懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・ 魅了する。
- ・ 異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。
- ・ 神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『クッキング・マスター・シエフ
料理理想達人』

- ・ 調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・ 補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・ 鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・ 作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『ウルトラ・レア
神秘希少』

- ・ 道具アイテムの作製時、発展アビリティ『神秘』が一時発現する。
- ・ 一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

『幻想』

- ・ 道具アイテムの作製時、発展アビリティ『幻想』が一時発現する。
- ・ 発展アビリティ『幻想』の発現時、道具アイテムに関わる全てのアビリティ・スキルが発現・併合する。

『運命協同体』

- ・ 同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。
- ・ 懸想の丈の度合いによって【経験値エクセリア】の分配が変動する。
- ・ 『運命協同体』の副次効果——懸想の丈の度合いによって良好の同恩恵を持つ以外の者も共同することで【経験値エクセリア】の分配が変動する。
- ・ 任意発動アクティブトリガー。

ドラゴン・スレイヤー 龍殺龍者

- ・ 竜種に対する攻撃力の超域強化。
- ・ 戦闘の意欲の丈によって効果が向上。
- ・ 任意発動アクティブトリガー。

(特典) 『ネットスーパー 異世界買物覧』

- ・ ヴァリスを払うことで異世界の物資を購入可能
- ・ 任意発動アクティブトリガー。

(特典) 『ステイタステイカー』

- ・ 対象の【ステイタス】を奪う。
- ・ 奪った【ステイタス】の全てを上書き・蓄積し糧となる。
- ・ 任意発動アクティブトリガー。

「……あ、ああああああああつ!? 魔力値が0に戻っちゃ駄目じゃないか!」

「あつ、そう言えば貴方の魔法……魔力値が依存するものだったわね。ということは……」

「また振出しに戻ったわけね？」

「いや、まだ終わらん！あいつからまた「ステイタス」をコピーすれば元通りになる！」

「何度も簡単にコピーできるものなのですか？」

「同じ物はコピーできないが初期化リセットされたからにはできるぞ」

「シー、【ステイタス】をコピーできるその能力がロキ達に言わせればチートってことなんだろうね」

冒険譚33

オラリオは異様な活気を醸し出していた。大通りで出店や露店を構える商人達が軒並みに並び目の前で素通りする住民や冒険者、神々に声を掛け商売繁盛を臨む。変わらぬ冒険をしにダンジョンへ、白塔バベルに向かう冒険者やこれから仕事だと労働者が仕事場に赴いたりしている者がいれば、逆に今年から初めて行われるある祭りを楽しもうとするオラリオの住民達が各メインストーリーに溢れ雑踏する。その影響でどの店も大忙しだ。『異世界食堂』も例外ではなく、朝から押し寄せてくる客達に天手古舞で料理を作ったり運んだりして目が回りそうなほど多忙を極めている。

『怪物祭』
モンスターフェア

【ガネーシャ・ファミリア】主催のモンスターを観衆の目の前で戦い捕獲、モンスター同士の対戦を見させるサーカスのようなものが始まるうとしていた。

『さあ、いよいよ初めて行われる「怪物祭」！観衆の皆様到我々冒険者がどのようにモンスターと戦いを繰り広げているのかどうか自分の目で見てご覧下さいませ！』

ガネーシャの団員が魔石拡声器で進行役を務め、その隣に不思議な姿勢ポーズを繰り返す象神が『俺がガネーシャだ！』とそれだけしか言わないので半ば放っておく形で進行していく団員A（イブリ）。まず最初に始まったのはモンスターの捕獲だった。コロシアムの地面から檻の中に閉じ込められているニードルラビットが出てくると調教師テイマーも現れ対峙する。役者が揃うと檻の扉が解放され、敵を殺さんとニードルラビットが冒険者の調教師テイマーに襲い掛かった。角で突き刺そうとする外見は可愛らしいモンスターの突撃を軽やかな動きで避け体力を削るために素手喧嘩ステゴロで攻撃する。

「はっ！」

ドカツ！

『キュ、キュー……』

何度か攻撃を繰り返し動きが鈍くなった様子を見計らい、調教師テイマーは

腰のベルトにくっつけていた小さな赤白のボールを手に取り、ボタンを押して大きさを手の平サイズにする。それを真つ直ぐニードルラビットに目掛けて当てるとボールが開いて、迸る赤い閃光に包まれたニードルラビットがボールの中に光となって消えて行ったのだった。モンスターがいなくなり残されたボールが一人勝手にゆらゆらと動く様子を一同見守る。そして動きが止まり微動だにしなくなったら調教師テイマーの手の中に収まりモンスターを捕まえた証として観衆に掲げた。

『お見事！無事モンスターを捕獲することに成功しました！』

おおー！と拍手喝采と歓声が沸き上がった。モンスターを捕まえる不思議なボールを使って調教するのだろうと認識をした観衆達のために次のモンスターを用意した。再び檻と共に現れたのは大型のモンスターの『インファント・ドラゴン』。檻から解放された竜種のモンスターは冒険者に襲い掛かった。これには勝てないと脱兎のごとく退場した調教師テイマーと入れ替わるように現れた藍色の髪の麗人がドラゴンと対峙する。

『続いては我らが「ガネーシャ・ファミリア」の団長がお見せになります！では、始めてください！』

「.....」

彼女もまた腰のベルトにくっつけて一つのボールを手に取り、手の平サイズにまで大きくすると予め捕獲していたモンスターを出した。ボールから放出する赤い光と共に現れたモンスターは『中層』域で出現するモンスター『グリフォン』だった。馬具の手綱や鎧が装着した姿でインファント・ドラゴンを威嚇し臨戦態勢の構えをした。藍色の髪の麗人はグリフォンの背にまたがり、手綱を手にとってモンスターと一緒にインファント・ドラゴンに戦いを挑んだ。

『クアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ!!!』

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオッ!』

冒険者と怪物モンスターが共闘して怪物モンスターと戦う。そんな前代未聞の展開を目の前で繰り広げられて観衆達から湧き上がる歓声が沈黙した。静かに見守られる中でインファント・ドラゴンの背中から鋭い前脚の爪で

裂き攻撃をする。空からの攻撃に成す術もなくインファント・ドラゴンはあつという間に瀕死の状態となつて倒れ伏した。まだ虫の息のモンスターに対し、調教師テイマーがニードルラビットを捕獲したようにボールを投げて当てては放つ赤い光でボールの中に捕えた。地上に降り立ち、よくやったとグリフォンを撫でながら『異世界食堂』印のモンスター用の餌を与えて労う。そんな彼女達の前に挑戦者が現れた。「やい、その女！俺とモンスターバトルをしてもらおうじゃないか！」

「……何者だ？」

「俺は通りすがりのしがなテイマーい調教師！立派なグリフォンを捕まえてるようだが俺のモンスターの方が強いことをここで証明してやるぜ！」

赤白の帽子をかぶり、戦闘衣バトルクロスで身に包む謎の冒険者が現れた。試合の形式は三対三の勝負。シンプルな勝負に藍色の髪の麗人の冒険者は了承して尋常に勝負をした。

「いけ、ブラック！」

挑戦者が選んだモンスターはヘルハウンド。遠吠えをして戦意を窺わせる相手に対して藍色の髪の麗人が選んだモンスターはミノタウロス。勝負の開始の合図はない状態で試合が始まった。力と防御が特化したミノタウロスに対して俊敏が強みのヘルハウンド。調教師テイマー同士がモンスターを駆使して戦う様は観衆達に異様な興奮を覚えさせた。

「突進だ！」

「焼き尽くせブラック、火炎攻撃！」

『ガルルアアアアア！』

『ブモオオオオオオッ！』

角を突き出す低い姿勢で怒涛の勢いで迫るミノタウロスと冒険者達の防具を溶かす火炎を吐くヘルハウンド。挑戦者の視界は真っ赤な景色で塗り潰されミノタウロスの姿が隠れた。黒焦げになっているだろうと勝利を確信した束の間、炎から二本の角が飛び出し瞋恚に燃える鋭い眼光を放つ怪物モンスターがヘルハウンドを捉えた。あの炎の中でまだ生きていたことに酷く瞠目して焦燥に駆られて口を開いた。

「ッ！ブラ——！」

次の行動の指示を発しようとした挑戦者より、ミノタウロスの拳がヘルハウンドの横っ腹に突き刺さって殴り飛ばされた方が早かった。

『ガ、ガウ……』

「ブ、ブラックウウッ！！」

『ブオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！』

戦闘不能に陥り倒れた敵に勝利の雄たけびを上げるミノタウロス。それに呼応して観衆も歓声に沸く中でモンスター達をボールの中に戻す二人は次なるモンスターを選んだ。藍色の髪の麗人がリザードマン、挑戦者はバトルボア。

「いけ、攻撃だ！」

「防いで勢いを殺せ！」

盾を構えるリザードマンは防御の姿勢で迎え撃とうとする。土煙を置き去りにしながら駆けるバトルボアは、リザードマンに突進攻撃を仕掛けると思ったら横に素通りした。待ち構えていたモンスターは不思議そうに眼を瞬きして走り続ける猪の化け物を目で追う。

「何の真似だ？」

「最大の攻撃力を発揮するためだ！ボア君、ミドルキック！」

バトルボアは最大速度を維持して今度こそリザードマンに突進攻撃を仕掛けた。……ニドルキック？猪のようなモンスターが何を仕出かすかわからないが、盾で防ぎ勢いを殺いだら剣技で倒そうと考えていた藍色の髪の麗人の思考は、途中で跳躍したバトルボアが後ろ脚で盾ごとリザードマンを蹴りつけ吹っ飛ばしたことで停止した。

『ガ、ガ……』

闘技場の壁にまで吹っ飛ぶ蹴りの威力は思いの他高かった。震える身体を持ち直そうとする相手に猛追をかけたバトルボアの猪突猛进が炸裂した。リザードマンは地にひれ伏して戦闘不能。挑戦者は初めての一勝を得て喜び、パートナーのモンスターと喜び合う。次はいよいよ最後の勝負。

「いっつで勝利を得る」

藍色の髪の麗人が繰り出したモンスターはグリフォン。対して挑

戦者は。

「こいつが俺の最後でとっておきのモンスターだ。いけ、ヴィーリ！」
人型の上半身と蛇に酷似した下半身を持つ、女体竜尾のモンスターを繰り出した。

『中層』の希少種^{レアモンスター}を出してくるとは。ただ者ではないな」

「へっ、一流の調教師^{テイマー}になるためにはこのぐらいは当然だぜ！」

この勝負で勝敗は決する。一瞬の油断もできず負けられない戦いを二人の調教師^{テイマー}は睨み合いながら勝利の為に自分のモンスターに命じた。

「空に舞い上がれ！」

「前脚の爪に気をつけろ！グリフォンを引きずりおろせ！」

『クアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！』

『アアアアアアアアアアアアアアアッ！』

最後の勝負に熱狂的な活気がヒートアップして、盛り上がる観衆の歓声に包まれながら戦う二人の調教師^{テイマー}とモンスター達。その日の勝敗はどうなったかは観衆達の間で渡り草となって伝わっていく。

.....

「て、まあこんな感じで盛り上げたよ。住民や冒険者達の受けは上々だったと思う」

「モンスターを使役して戦わせるところは調教師^{テイマー}とは変わりないが、まさかグリフォンの背に乗って戦わせるとは驚かされたよ」

「だろう？力で従わせるよりも結ばれてる絆があるところを見せたかった。ま、そんなの観衆達が気付かないだろうけどな。でもさ、人乗せる事ができる有翼のモンスターに乗ってオラリオ外に飛んで行けるようになったら話題絶賛間違いなしだとは思わないか？」

「確かに.....そうやって繰り返せばモンスターと人類が共に共存できる可能性があるという事が知られていくわけだな」

ギルドの地下神殿ごと『祈祷の間』で黒衣で身に包むフェルズと一誠が石造りの神座に腰を落としてるギルドの真の王の老神に聞こえ

る声量で言葉を交わし合う。一誠の常識と考えは異常であり覆す故、下界の常識と真逆な非日常的な神意を定めてるウラノスからすれば貴重な会話が蒼い瞳が見下ろす先で繰り広げている。

「今は【ガネーシャ・ファミリア】の眷族でしかできない行為だが、モンスターをパートナーとして飼育できる環境にまで発展させたいな。それに伴い色々と問題が起こるだろうがな」

「事は簡単ではないからね。神ガネーシャや彼の神の団員達には頑張ってもらおう他ない」

「さっきの話だけど、オラリオ外に向けてグリフォンを飛ばせないか？もしくはグリフォンの背中に乗ってオラリオ内で起きた問題を解決していくことも。俺の世界じゃとある国でグリフォン隊って部隊が存在して、国内や国外の事件解決に活動していたんだよ」

「それはギルドが嚴重に検証しなくてはならないだろう。他に何かないかい？」

「モンスターの飼育に関する試験に合格したらギルドや【ガネーシャ・ファミリア】から飼育の許可書みたいなのを発行してもらえば、住民達でもモンスターを飼うことができる」

「大型モンスターでもか？」

「それは流石に中堅以上の【ファミリア】じゃないと駄目ですよ。それ以前にそんなモンスターを飼うつもりはないだろうし。だからもしも、住民達でも小さなモンスターを飼ってみたい声があったらギルドと共同で試んで欲しい。すでにその話はガネーシャに言っていてそれとなく町中に羊皮紙^{ホスター}を張ってもらっている。【ガネーシャ・ファミリア】に入って一緒に怪物^{モンスター}のことを知っていないかかってさ」

あくまでそれは【ガネーシャ・ファミリア】の入団希望にも認識されるようなことであるが、神の真意に気付く者はいないだろう。モンスターと融和の道を歩もう！等と。

話すべきことは全て話し終えたので『祈祷の間』を後にする人物を見送る二人。

「彼の行動力には圧巻される。もしかすると千年先まで待たずとも近年の内に貴方の神意が現実になるのではないか？」

「イツセーがこの世界に留まっていられる限りの話だ。私の眷族と同様、いつの間にか元の世界に戻ってしまうかもしれない」

フードの奥に隠れてる頭蓋骨を神座にいる老神へ見上げながら自分の気持ちを吐露する。

「それは彼の望みだろうが、私はそれが残念に思えてならないよ。彼のような存在はこの先もう現れないだろうからね」

「ああ、その通りだ」

故に惜しいと考えるウラノスは否定しない。だからまだこの世界にいる限り、できないこと以外なら全面的に協力を惜しまない。元の世界にいる眷族の子供であるからだけでなく、己に協力してくれる貴重な存在としてでもだ。



ギルドを後にしてヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人の冒険者達が良く足を運ぶ冒険者通りに闊歩する一人となった。一度そのメインストリートに歩けば特徴的な真紅の長髪を目にした面々が朗らかに「おー、店主」「こんにちは店主」「店主、また食べに行きますのでよろしくね」と話しかけられる人気ぶりが発生する。冒険者としての知名度よりも料理人としての知名度の方が圧倒的に高いことはどうなんだろうかと複雑な思いを心中で苦笑いしながら返事をしたり相槌を打ったりするのだった。現在進行形、営業している自分の店を前に素通りして新作でも作ろうかと北西と西に挟まれた区画に戻ろうと意識が覆された。

「イツセー」

「その声はアスフィか」

耳にかけてる銀の^{フレイム}枠の眼鏡が特徴の理知に富んだ碧眼と一房だけ白く染まっている水色の^{アクアブルー}髪の彼女、「ヘルメス・ファミリア」団長アスフィ・アル・アンドロメダが白いマントを羽織った姿で一誠を話しかけた。

「今日はヘルメスはいないんだな」

「付き添いは別の者に任せておりますからね。今日は偶然あなたをお

見掛けしたのですが、近々話したいことがございましたから丁度良かったです」

「頼みごとか？」

「はいその通りなのですが、ここで話をするよりもどこかのお店でもいいでしょうか？」

いいぞ、と了承する一誠を案内するアスフィは脳内で過る店を思い出しながら足を進める。

「遺跡探索の協力？」

プライベートル用に楽しめるために設けられた高級料理店の個室。軽食な料理を注文したところで、アスフィから聞かされた内容をオウム返して復唱した。

「オラリオ外のか？」

「はい。それも果てしなく遠い場所にあります」

「それ、どうやって知ったんだ？」

「情報通な商人に頼んで集めてもらってます。貴方がよく知る三大商人の一人に」

「俺を介して知り合ったっけな」

「ええ、依頼料は高かったですけど信用に値できる仕事をします。イツセー、砂しかない世界をご存じですか？」

「砂漠のことか？」と答えると小さく頷くアスフィは、異様に疲れた顔を途端に浮かべて話を切り出した。

「その砂しかない世界に作ったのかわからない建造物があるところで聞いたのかわからない、デマやガセではないかという噂話を耳にしたヘルメス様が貴方の協力を求めていらして……」

「あー、わかった。アスフィ、お前が一番苦労されたことだけは同情できないうがその気持ちを和らげたいと思ってるぞ」

「……ありがとうございます」

あまりにも不憫な彼女、ヘルメスを協力することを暗に告げたことでアスフィは申し訳なさそうに頭を垂らした。

「砂漠の建造物ねえ……俺の想像通りだとすれば、あれなんだよ

な」

「わかるのですか？」

「あくまで想像だ。俺の世界にも砂漠の世界に太古の時代で造られた建造物があるんだ。もしもそれだったら、まず入り口を見つけてるのが大変なんだ。で、そこに行くのにアスファイ達は何人行く気でいるんだ？」

「私とヘルメス様、そして犬人族シアンスローフのルルネです」

獣人という単語に目を輝かせる。『幽玄の白天城』にはいない種族のモフモフが堪能できるという想いでやる気が漲ってきた一誠の中で報酬は決まった。

「準備ができ次第、お互い連絡しよう」

「はい、よろしくお願いします。報酬は何が良いでしょうか？」

「ヘルメスの気が済んだ時に報酬をもらおうとするよ。楽しみだなー、この世界の砂漠に行くのは初めてだから」

まだ見たことも行ったことがない未知の場所に高揚感を抱いて、運ばれてくる料理を前にしてもこの世界の砂漠地帯はどんな風なのか想像していた。

そして出発日当日。オラリオから空飛ぶ巨体な船に乗船している冒険者と神々も長い空の旅に参加。

燦燦と照らす太陽光の熱が地上を焼き尽くさんばかりに高い気温を発生させていた。呼吸するも暑苦しく、肌の水分が無くなり荒れるほど乾きかねないぐらい熱くなって、ジリジリと焦がす太陽の光と伴う熱で人間の体力を奪う砂漠地帯。大自然とは真逆と言ってもいいほど草木何一つない砂だらけの世界には、砂漠に適した動物やモンスター、太古から住んでいる先住民だけ存在している。一誠やアスナ、転生者が知る砂漠とは朝から夕方までは灼熱の太陽と気温で、夜以降は寒い気温に変わる気候の特有があるのだが……。

「この世界でも変わらないんだなー。ただ……気温50度って、夜になるとマイナス0度以上って何だよ」

甲板の操舵を握る一誠の視界内に神々の姿はなく、冒険者達も目的地に着いた途端に船内へ避難するほど殆どいない。初めての砂漠の厳しさを体験して、体感したことがない暑さに参ってしまったのだ。「暑くないのですか……?」

「小さい頃、砂漠のど真ん中に一年間だけ過ごしたことがあってな。こんな暑さは久しぶりだけどまだ大丈夫みたいだ」

汗一つ浮かべていない男に対して額に汗で水色アクアブルーの前髪を張り付けている少女。この対極的な違いの差は暑さに慣れてるかそうでないかの決定的な違いで、彼女の精神が削がれているのをこの熱中においてられた苦しい表情を見れば一目瞭然であった。

「中に入ってくればいいのに」

「いえ……こちらからお願いでこの暑さの中で運んでくれているというのに、あなた一人だけ残すなんて……」

「律義すぎるんじゃないか。何時か過労か心労で倒れるぞ」

そんな彼女、アスフィの頭上に防熱の結界と冷風を送る魔方陣を張ってやった一誠の気づかずに目を丸くする。無詠唱どころか魔方陣を展開したそぶりを一瞬たりとも見えなかった、見せなかった事に対して異世界の魔法を驚いた。

「この魔法は、いつの間に……」

「倒られたら困るからな」

「……ありがとうございます。しかし、あなたも自分にもしないんですか?」

「しない」

操縦している最中でも風が吹いてくる。ただし、熱が孕んだ熱風だ。真正面から受けても熱を感じなくなったアスフィと違って、真紅の長髪が風にさらわれてなびかせる一誠は防熱対策をしてないので直接受けてるのだ。心配するな、気にするなと風体で操縦する立ち姿は頼もしく見えるが、時と場所によってそうじゃなくなる時がある。今がまさにそれだ。アスフィは本当に大丈夫なのかと腕を伸ばして、触れた途端。人の体温とは思えないほど熱が宿っていたことを指先で感じた。

「ほ、本当に大丈夫なのですか!?体が物凄く熱いですよ!」

「耐熱のフライパンが直接火に当てたら火傷するぐらい熱くなるだろ」

「あなたの身体は鉄ですかッ!馬鹿なのですかッ!」

馬鹿つてひでえー、とこぼす男の背中に寄り添ってせめて冷風だけでも感じさせたいアスフィの行動は一誠を不思議がらせる。

「何してんだ?」

「私に施してくれた魔法をあなたにも感じさせるためにしています」

「一人分しか効果がないのに背中にいられても涼しくもなんともないぞ。——せめて真正面から抱きしめてくれないと効果もないし」

くすぐられた悪戯心が、アスフィが後ろにいて顔を窺えないことをいいことに邪な笑みを浮かべる一誠は、そう言った。本当にするかどうか試す言葉を送って反応を窺う楽しみさを浸つていようとしたら、無言で舵輪に伸ばしている両腕の間に入り込んで一誠の視界はアクアブルー水色でいっぱいになった。

「これで、いいでしょうか」

「ん、さつきよりは気持ちよくなってきた」

さり気なく冷風を発生する魔方陣を大きくして涼む。その間、目的地にたどり着くまでアスフィは一瞬たりとも一誠を見上げなかった。

「?—!」

「.....」

「.....?」

「.....」

「!—」

数匹の生物の背にまたがる人影が騎空艇を目撃していた。その後すぐに踵を返して去った。自分達の崇める『神』の下へ戻るために。

砂漠のど真ん中に高さ百五十Mの四角錐状の巨石が築き上げられていた。そしてそれを中心にして円形に幅広くある石造りの建物も

『天然の巨大な岩の地盤』の上に設けられて一つの国として成り立たせていた。

「空飛ぶ奇怪な物を見たか？」

「はっ、とても信じられない光景でした。最初は蜃気楼に見せられた夢幻かと目を疑いましたがあれはまさしく本当に空を飛んでいたのです」

間隔等に天井を支える石柱がある謁見の間石造りの神座で腕を組み訝しむ。褐色の肌で隼の顔の仮面を被った男神は、眷族の虚言のよきな言葉は嘘ではないために頭を悩ませる。何故そんなものがこの砂漠の領域しいては己の領地に現れたのだと、問題を抱えている時に招かざる客の対応をしなくてはならないのである。

「その奇怪な物は今どこに向かっている」

「方向を変えてなければ、古代遺跡に進んでいるかと」

「……あそこか。だとすれば他の神連中も奇怪な物を見つけている頃だろうか」

ならばこれからどうすべきか模索する男神は結論に至ると立ち上がる。

「目的は不明だが、遺跡に向かっているというなら我らも動くぞ。奇怪な物が無人で動いているはずがない。誰かがいるならば調べる必要がある」

「お——運がいいな。あれかな？」

暑くて強い日差しを受け続け二時間が過ぎた頃にそれを見つけた。ヘルメスでもどこにあるのかわからないという曖昧な場所に、金字塔の建造物が肉眼で捉える距離まで近づくと船内にいる全員に向けて「目的の建造物を見つけたぞ。もう少しで着くから準備を整えておけよ」と拡声器で告げる。十数分後、百五十Mも高さがある三角形で石造りの金字塔、ピラミッドの脇に着陸して渡橋を甲板から降ろす。何時でも降りれる準備が整ったがまだ誰も甲板に現れず、少し待っていると火精霊サラマンダー・ウールの護符で頭まで身に包む神々と眷族達が漸く現れた。

「うへえ……めつちやくちや暑苦しいい」

「サラマンダー・ウール火精霊の護符を着けていても息をするたびに体の中が熱くなるよ……イツセー君。船の中にもいいかい？」

「どこにいても一緒だぞ。騎空艇を停止させるから中まで伝わってこの暑さは伝わってくるぞ。あの金字塔の中に入れば外にいるよりは大分マシになる」

「……この世界にも存在するんだね。ピラミッド」

フード付きの外套を身に包んでる女性が感慨深げに石造りの建造物を見上げる。初めて実物を間近で見ることになった彼女の感想の言葉に釣られて他二人の男性達も似た心境を抱いてピラミッドを見つめる。

「元の世界だったら、ここはエジプトだよな」

「ピラミッドがあるのにスフィンクスの石像がないな。あつたらちよつと観光気分になれたんだが」

続々と甲板から降りてピラミッドの石の階段に足を踏み入る。

「さて、不十分な情報でここまで来たけどさ。入口を見つけないことには探索出来ないよなあ」

「そこはイツセー君の魔法の力でお願ひするよ」

「……報酬は高くつくからな？」

分裂する一誠達が散らばって上から下まで入口を忍者のごとく移動して探り出す。その間、魔方陣を展開してピラミッドの立体図を浮かべ待つこと数十秒。一誠の耳元に展開した小型の魔方陣から入口の発見の報告を受け、立体図にその場所の座標を特定すれば移動を開始する。

「この中って何があるのか判る？」

「俺の知る限りじゃあ太古の王族の墓とか王の間みたいなものしかないぞ。宝なんて無いし、逆にこのピラミッドはこの砂漠の地に住む人間達にとっては神聖なものでもある」

「それって、無断で近付いたらダメだし入ってもダメってことだよね……？」

「ここを管理している人がいたらの話だ」

ピラミッドの裏側に回り、入口の所に待機していた分身体の一誠がいる方へ赴き、洞穴のような入口を視認するとヘルメス達を先頭に探索を開始する前に。

「あ、そうだ」

「どうしたんだい？」

「もしかすると罠があると思うから下手に壁に触れたりしない方がいいぞ。それと足元にも注意してくれ」

よくある冒険アドベンチャーのお馴染みな設定のひとつを挙げた。冒険者達は当然とばかり静かに気を引き締めた。

「あーそう言うのも気を付けなきゃならないのか」

「そうだな。でも、俺達はただの人間じゃないから気を付けてれば大丈夫だろ」

転生者二人組が朗らかにそう言った。絶対に罠があるとは限らないので、一誠も警戒しながら中に入ることを催促した。入り口から入ると直ぐ階段があり上る。先頭はアスフィとルルネ。中間は一誠とアスナにアイズとアリサとラトラ、後方は海童剛と大和大輔、ヘルメスとロキの他アマゾネス六人。間隔を開けて上る階段の横幅は大人五人が横に並べて歩ける広さで、天井は石造りの天壁で塞がっている。

「ルルネ、地図化を忘れずに」

「はいよー」

腰の小鞆ポーチから羊皮紙と筆を取りでして上に進む階段の構図を書き記していく。

「へえー、そう言う技術があるのか便利だな」

「ええ、ダンジョンでは必要のないものですがね」

「いやいや、『上層』『中層』だったらそうだけど、『深層』域はギルドが保有してる『深層』の地図は完成されてないから、ルルネのような地図化ができる冒険者は需要が高いだろ？彼女を『深層』に連れて地図化を完成させたら儲かると思うけどな」

何かめっちゃくちゃ高い評価をされちゃってるー!?!とルルネの心は動揺しっぱなしだった。

「それだけでルルネを高く評価するのは何故ですか？」

「何故って普通に役立つ技術スキルを得ているからだけど？」

それ以外何があるんだと、言い返されると少し困り顔を浮かべるアスフィは答え辛そうに「そうですか」と相槌を打った。二人の話にアスナも質問した。

「イツセーって女の人を褒める時って能力がある人だけ？」

「純粹に思ったことを言ってるだけだ。例えばアスナを褒めるところを挙げれば三十分は軽いぞ？言ってみようか」

「い、いいよ言わなくてっ」

「そうか。逆に俺だったら——アイズ、アリサ、ラトラ。俺の凄いと
ころは？」

小さい三人の女の子達に話しかけたら直ぐに返ってきた言葉が予想通りだった。

「強い」

「料理上手」

「格好いいです」

「って、これだけで済む」

苦笑いするしかできないアスナ。本人は不満ではなさそうだが、十秒も満たずな三人から聞いた褒め方にそれだけで終わらすのは少し寂しいじゃないかなって労いの言葉をかけようとした時、アスフィ達の足が止まった。

「……行き止まりです」

「なぬ？」

「本当だよ。この先は天井に塞がってて進めないよ」

アスフィとルルネが頭上の天井を触れてもびくりともせず、行き止まりであることを示す。前の壁面ではなく真上の天井にこれ以上の移動が阻んでいることを。ならこの道はフェイント、無駄に作られたものか何か仕掛けがあるのかと勘繰る。

「他に入り口は無かった。だとすれば隠された入り口でもあるのか？」

後ろから追従してくるロキ達も足止めをすることになり、一度外に

出てみないかと意見が挙がる。確かにここにも仕方がないと降りるよう促しの言葉を発しようとして口を開きかけた矢先……口キが壁に凭れるためにすぐ横の壁の一部に触れ、腕が沈んだ。その瞬間を、瞳を凍結させたアスナがしっかりと見ていた。刹那。天井や床、壁が激しく揺らぎ始め、塞いでいた天井が開き階段の段差が板のように滑りやすく斜めになった。そして、後ろから持ち上げるように角度が変わる階段に姿勢を崩されるだけでなく流れ出てくる膨大な水が流れ込んできた。

「う、嘘だろおっ!？」

「どわあっ!」

後方にいた大和太輔達が最初に飲み込まれ、続いて一誠達も巻き込まれる形で濁流と化した水と一緒にどこかへと流れ出た先は奈落の底を彷彿させる程の真つ暗な闇であるが、闇の中に紛れてる夥しい石槍の群集がズラリと生えていた。太古の時代にこのピラミッドに侵入し、罘を作動してしまったと思しき人骨が大量にあった。落ちる最中、落とし穴全体に魔方阵が浮かび上がった。程なくして全ての水が流れ落ちると魔方阵の上には濡れ状態の一同がいた。

「し、死ぬかと思っただけ……!」

「罘を作動しないと進めないってなんて鬼畜な!」

悲鳴が聞こえたり文句が聞こえたりするが、全員己が無事であることだけが何よりも実感して安堵している。

「ヘルメス、これからどうする」

「うーん、一度キミの船に戻って着替えてまた挑戦したらさっきのようには罘を作動しないとダメなら、このまま進んだほうがいいかなって思うけど?」

「なら、服を乾かすか」

足場となってる魔方阵が光り輝き、一同の服から水蒸気となつてあつという間に水気が無くなって乾いた。靴と靴下まで乾いたから大輔と剛の転生者から呆れが籠った一言を送られた。

「お前、転生者でもないのに本当チート過ぎる」

「魔法・魔術に関して俺より凄い人なんて元の世界に帰ればいくらで

もいるぞ」

「そうなのですか。それは凄いとしか言えませんが、先に進める入り口を探しませんか?」

アスファイの指摘に改めて行動を開始するまでもなく直ぐ入り口は見つけた。あの大量の水がどこに排水されたのか気になって下に降りてみると人が通れそうな入り口の空間を発見できたからだ。念のために上の方も調べてみたら何も無い上に、水と一緒に放り込まれた外に繋がっていた通路は閉じられていた。

「こりゃ、下の方に行かないと進めれないか」

「そうみたいだね。行ってみよ?」

というわけで、下の通路へと進んでみる一行はその後数々の罠に陥るのであった。

——スカラベの大群。

ヘルメスが罠のスイッチを押し、通路の奥から黒光りする昆虫の大群を呼び寄せた。

「ガチで人食い虫の罠に引っ掛かるかよ!?!店主、炎の魔法で焼き払え!」

「こんな狭い通路で炎を使ったら酸素がなくなるだろ!てか、俺が知ってるスカラベってフンコロガシという和名が充てられて紹介された虫だったんだが?」

「フンコロガシ!?!現在進行形襲い掛かってくるあの虫はどうみても人間に危害を加える気満々だぞ!?!」

——落とし穴。

大和大輔が急に姿を消したのを同じ後方にいたヘルメス達が直ぐ一誠達に声を掛けた。

「おーい、大丈夫か?」

「へ、ヘルプミー!」

——大岩。

螺旋を描く通路を歩いていた時に突如空間いっぱい回転して大岩と衝突するも、一誠や大和の手を出さずともアルガナ、バーチエ、ベルナスやエルネアが買って出た。

「並の人間だったら押し潰されて死ぬオチだけど」

「アルガナ達が殴ったり蹴ったりしてくれてるからそんなオチのフラグの旗はこっちから折ってる」

「お姉さま達凄い！」

「ガンバレー！」

——圧縮。

何の変哲もない何かの通過点の部屋に入ると出入り口が閉じて、振動と共に迫る天井と壁。

「天井と壁が迫ってくる!?!」

「ん、粉碎」

「上は店主で横はおつかないアマゾネス達。何だろうこの安心感は……」

——宝物。

地下に進む一行が石造りの隙間から差し込む太陽の光に当てられて照らされる見たことがない五Mもあるダイヤモンドを発見した。

「アスファイ、あそこに宝があるよ！しかも巨大なダイヤモンド！」

「あれはあからさまな罠が仕掛けられてるだろうから触れたら負けだ。ほら行くぞ」

「うんうん、持ったらピラミッドが崩壊というベタな仕掛けだろうしな」

「そ、そんなく（ドナドナ）」

——弓矢。

壁の穴から飛び出す無慈悲な矢を掻い潜らなければいけない場ではなく、氷の世界と化した。

「まあ、これは壁に氷を張ってれば問題なく進めれる寸法よ」
「罨としての意味を無くすお前って奴は……」

——火責め。

床中から燃え盛る火を見て、空腹もしてきたことだからと周りの皆を圧倒させる食事の支度をし始め出す一誠だった。使う意外の火を魔方陣で防ぎ、石の土台に金網を乗せては肉と野菜を置いて焼き上げるその姿に突っ込みを入れる大輔。

「うおい、こんなところで焼き肉パーティしてていいのかよ！」

「腹減ったんだからしようがないだろ？ いらなら食わなくていいぞ。特上カルビなのに残念だ」

「いただくよ！」

——木乃伊。

かなりの年月を経てボロボロな棺桶が軒並みに保管されている場に足を踏み入れてしまった者達に、棺桶から現れる包帯だらけの木乃伊が襲い掛かった。

『『アアアアアア………ッ』』

「モンスター？ それとも本物か？」

「どっちでもいいから早く倒そうよ！」

——巨大振り子のナイフ。

風を切る音共に止まらない巨大なナイフの振り子を前にしても、問題ないとばかり掠りもせず前へ進む幼い子供達。

「アイズちゃんとアリサちゃんにラトラちゃん。余裕で刃物の潜ってるけど冷や冷やすよ……」

「ラトラの尻尾が切断されるようなことが起きたら俺アこのピラミッドを粉碎してやるぞ（真顔）」

——再びスカラベの大群。

「またでたあー!?!」

「さつきと違って物量が桁違いだ。そろそろゴールが近いかな？」
炎嵐を巻き起こして一瞬にしてスカラベを焼失させる。

???

石造りで敷き詰められていると思われたピラミッドの中、東京ドームの一個分の広さの中心部に宮殿が鎮座していた。何でこんなところに宮殿が？と思うも調べてみないことにはわからないという雰囲気です。一本道に進み侵入する。

「当り前だけど、人が住んでいる気配はないな」

「この大きな宮殿だけしかないってこと？」

肯定と頷く一誠。

「ピラミッドに入ってからモンスターらしきモンスターと遭遇していないし、砂漠に住んでいた人間達が完成させてからどうしていたのかはわからないけど、少なくとも日常生活に使われていた道具が無かつたら一度もこの宮殿に住んでいないことが明らかになる。ま、とりあえず調べてみよう。それが終わればヘルメスからの依頼は達成だ」

手分けして見て回ることにした一行は、何かを見つけたら直ぐに連絡し合うことにして散らばる。無人の石造りの宮殿の隅から隅まで歩き回り、気になるものがないか調べていくと一つだけあった。高さ二M、幅一Mほどの板状の石が八枚。円を描くように配置されていた。場所は小高い階段の上に石造りの椅子がある空間の中心。

「これって、ストーンサークル？」

「それしか見えないが、何でまたこんなところに？」

「何かの意味があるんじゃないか？」

「その意味ってなんだよ？」

うーん、と異邦人と転生者組が揃って首を傾げ悩む。

「あのでっかいダイヤと関係あったりしないか？ゲーム的だと必要な道具を揃えないとシナリオが進まないことってよくあるんだけど」

「仮にそうだとすると、このストーンサークルとどういう関連性がある？」

「謎だなあ」

「うーん……」

悩む彼等彼女等が分からないのであればヘルメス達も解らないので、他にも何かないか調べることにしていた中。ラトラが興味本位でストーンサークルの石板の一つを触れてみた。すると板が沈んだ。罨かとはつと飛び上がって一誠にしがみついてもうんともすんともしない。

「ラトラ、今押したのか？」

「は、はい。罨かと思いましたけど何も起きませんでした」

彼女の言葉を基に改めて一誠も踏んでみると、一つだけでは何も起きず今度は両足で踏んでみても結果は変わらなかった。ラトラを抱えながら「ふむ」と思案顔で予測する。

「二つ二つだけじゃ作動しないなら、八枚全部踏まないとダメってことか？」

「罨だろ」

「でも、やってみる価値はあると思うよ？もしも宮殿かピラミッドが崩壊する罨だったらここからイツセーの魔法で脱出すればいいし」

警戒する大輔と剛に「それもそうか」と結論付けさせて、一誠は皆を呼ぶ。全員が戻ってきたところで一誠達は両足をストーンサークルに乗せてタイミングを合わせて踏んで押した瞬間。石座があるところが重音を鳴らしながら沈んでいく。

「まだ続きがあるって事か」

石座の方へ向かおうとストーンサークルから足をどけた矢先、石座がまた重音を鳴らしながら元の高さに戻っていく光景に、「踏み続けないと作動しない系かよ！」と剛の突っ込みの言葉が口から飛び出した。

「あのダイヤってこのための物だったりするのか……?」

まあ、必要はないけどな。四体分の分身体を作って自分達の代わりに踏み続けてもらって、石座のところへ向かい見つけた地下に続く隠し階段を伝って降りていく。のだが、直ぐに石造りの扉と相對して押し開くと――。

黄金の山が皆を出迎えるような展開は無かった。真つ暗な空間に魔法で灯りを確保して見渡す。

「何も無い？いや、何か刻まれてるな」

隠し部屋の中心部に近づき、皆で見下ろすと床に刻まれているそれは魔方阵のようなものであると認識する。

「魔方阵？ストーンサークルといいなんでこんなものが……」

そう言いながら触れた途端。一誠の手に反応しだした刻まれた魔方阵が光を放ち、光の中から人影が二つ浮かび上がった。一人は十代後半の黒髪に黒めの若い男ともう一人は同年代と思しき亜麻色の髪の女。その二人がしてやったりとした悪戯っ子の笑みを浮かべ口を開いた。

『おめでどう！数々の罠を突破した冒険者達よ！褒美に金銀財宝ぎつぐぎく黄金の山をプレゼント———としたいところだがそんなものはこの中にはない。ハイ残念でしたー！』

『でも私達が全力で遊び気分で創った二つ目のダンジョンを攻略した貴方達は凄いと思ってるわ。もし途中で見かけたダイヤモンドを手にしたらピラミッドを中心に直径五十Kの大爆発が起きてたからねー』

ゾツと顔を蒼ざめる一同は、本当にあのダイヤを手に入れなくてよかったと心底安堵で胸を撫で下ろした。

『このピラミッドを攻略した皆さんにあのダイヤをお譲りするのがせめての報酬よ。この魔方阵に触れた魔力の持ち主が大爆発を起こすための罠を解除したから安心して持ち帰っても大丈夫よ』

『因みに何でこんなピラミッドのダンジョンを作ったのか理由は秘密だぜ。教えたらつまらないもんね』

別に興味ないことだがダイヤの件に関してはそれならば貰い受けようと思う。

『さて、長々と語るの好きじゃないから色々教えておいてやるぜ。信じるかどうかはお前達次第だ。まずは一つ、この世界にはもう一つの世界がある。その世界は「空」にある』

「ほー」

『もしも空の世界に行けたらダイヤを割って私達が集めた「空図」というものを頼りに空の果てに進んでみるといいわ。とつても楽しい冒険になるから』

『二つ目は世界で唯一と思われたダンジョンが——実はもう一つ存在していたことだ』

「は？」

『その二つ目の、というよりもダンジョンの「深奥層」の先、100層目のところに下へ続く階段を見つけてね？彼と挑戦して全階層を踏破したら別の場所に出られたのよ。多分地球の裏側じゃないかしら。流石の神々も地球の裏側まで見えないと思うしモンスターがどこから出てきたのかもわかっていないと思うわ』

『でも安心してくれ。彼女の魔法で二つ目のダンジョンの入り口は永久的に封印されてるからモンスターの地上への進出は食い止められてる』

ヘルメスとロキへ一斉に視線が向けられその視線を一身に浴びることになった二柱の神は「そんな事実知らない」と激しく首を横に振った。

『しっかし100層目から下は本当に地獄だったぜ。打撃が効かないモンスターがいれば魔法も効かないモンスターもいたし、なによりダンジョンを生み出した——あいつも手強かったし』

『流石に倒しきれず逃げられちゃったしね。今となってはいい思い出ね』

またヘルメスとロキに視線が向けられ認知を否定するそぶりを見せる。

『さて最後の三つ目は——彼女が編み出した魔法、異世界へ繋げる次元と時空の魔法だ。それを君らにも伝授しよう。ただし、その異世界は俺達が生まれ育った世界だから侵略仕様ならば撃退するつもりだから覚悟しろよ？』

『この魔法はかなり膨大な魔力が必要として安易に扱ってはいけない危険な物よ。それでも欲するならば手を伸ばしてちょうだい』

魔方陣の中にいる少女が手を伸ばしてくる。一人を除いて皆が一

人の男に視線を送ると、彼女の手を一誠は握ったらバチツ！と音が鳴り、本人しか分からない感覚が伝わった。

『受け取ってくれたかしら？何分この状態で魔法を伝授する方法を實現させるのに苦労したから、問題なく与えられていてくれたら安心するわ』

『俺達がそつちの世界から去って何千何万年も経ってるか分からないが、ずっと待っているぜ』

『ああ、それとこれは個人的なお願いだけど聞いてくれるかしら？もしもオラリオに行くなら私達の主神ウラノスに「座りっぱなしは身体によくはないからたまには動かないとだめよ」って伝えてね』

『それじゃ、異世界でまた会おう！さらばっ！』

役目を果たした二人は消失する魔方陣の輝きと共に消え去った。

「ウラノスの子供ってことは千年も前にいた眷族ってことになるんやけど。どないしてこんな地の果てにいたんやろうか？」

「さあーね。でも、あの神の眷族と対面することになるなんて驚き半面不思議な気持ちになったよ」

「……イッサー」

ロキとヘルメスの会話を脇にアスフィの目は己の手を見つめる一誠へ見つめる。一誠はそうして口元を薄く緩めて微笑んでいるように見えるので彼女も不思議に感じた。

「どうしたのですか？」

「俺もあの二人の姿を見て嬉しいと思ったただだよ。おまけに制限付きの魔法じゃなくて無制限の魔法を受け取れたから来てよかった」

真上にかざした一誠の手に巨大なダイヤモンドが虚空からパツと出てきて手中に収めた。

「さて、ヘルメス。今回の探検はこれで終わりか？」

「ああ、付き合ってくれてありがとうね。それと報酬の件なんだがその宝石を君に譲るってことでいいかな？」

「ん、そうしてくれるとありがたい。この中身は騎空艇がないとダメだからな。それじゃ、地上に戻ろう」

と、そう言った一誠の目の前に床の魔方陣が再び輝き出して一人の

少女の姿だけが浮かび上がった。

『言い忘れてた！最後にこの映像が消えたら地下の水脈が飛び出してくる仕掛けをしているから三分以内に脱出してね！地上に戻るための転移魔方陣を用意するから！逃げ遅れることになったらピラミッドごと空に吹っ飛ばされて粉々になるから気を付けて！』

・・・はっ？

彼女が呆ける一行を目の前に姿を消した途端。宣言通りピラミッド全体が激しく揺れ出し始めたので度肝を抜かされる。

同時刻。ピラミッドの外では四方から砂漠に永住する神々の眷族達が集っていた。定着している奇怪な乗り物を調べたいが光る膜に阻まれて侵入はできず、ピラミッドの中にも入ろうにも過去の経験上で眷族を無駄死にさせるわけにもいかず手をこまねいていた。そうして立ち往生してしばらく流れる時に身を任せているしかできなかった時に地震が発生して砂漠が揺れる。

「何だ、この揺れは・・・！！」

「神よ、この場から離れた方がよろしいかと！」

「そうしよう。全軍、急ぎ反転して撤退だ！」

震度が少ない場所へ全速力で駆ける一柱に呼応して他の神々も全力でピラミッドから後退する最中。船がゆっくりと浮上し始めて空へと逃げるように地上から遠ざかる光景は啞然ものだったが、それ以上のことが起こった。さらに激しく揺れ出すピラミッドが最高潮に達した地鳴りの後、逆流する水の柱の大瀑布によって空へと打ち上げられた。全員大きく目を張って明後日の方へ真つ逆さまに落ちる巨大な石造りの建造物の光景を見ながら、顔や体を濡らす液体は水であることを認識する余裕もなく何時までも呆然と立ち尽くした。

——数年後。ピラミッドがあった場所は他のオアシスよりも見たことがないほど広大な湖の塊として出来上がっていて、海まで続く川となりその湖の周辺を囲むように立ち並ぶ家々に住む人達の間で、湖を生み出した空飛ぶ船のことを『水神の船』と呼び湖は『水神湖』と

名付けたことを一誠達は再び訪れるまで知る由もなかった。

冒険譚34

白い息が吐くようになった季節になった最後の年。今年一年を思い返せば様々な出来事があったり、したりした日を気付けばもう昔のごとく過ぎていた。過ぎたことはもう後戻りはできなく、前に向いて進むしかできない中で人々は何を思っただけで生き続けているのだろうか、らしくない考えを浮かべながら武人のような猪人^{ポアズ}の獣人が振るう銀塊の大剣に鏡合わせのように大剣を降るって叩きつけた。

「何を考えている」

「今年過ごした一年を思い返していた」

いまこの闘いに不要な意識をするなどばかりにオツタルからの激しい攻撃を察して心中で苦笑いし、仕切り直しと一誠も皆が見ている手前で床を陥没させるぐらい踏み出して、オツタル相手に全力を以て攻撃をする。

「あの二人、絶対化け物ニヤ」

クロエの呟きは誰もが一度思ったことなので同感だと、心の内で肯定する。レプリカのオラリオの戦場フィールドの中で建物が壊れても足場が粉碎しても二人の闘いに邪魔なものはおらず、相手だけを集中的に戦い続けられる。

「ねえアスナ。イツセーって今全力で戦ってるわけ？」

ルノアの質問に対して少し考える仕草をする。

「私から見てもそうだと思うよ。でも、イツセーって魔法を使ったり天使になること以外、私達が見たことがない色々な異世界の能力を持つてるって話だったから……」

「どんだけ強いんだよ……」

「ニヤ……イツセーだけは逆らっちゃダメってわけかニヤ。いや、ミア母ちゃんも逆らえないけれども」

戦慄ものだったようで心なしか畏怖の念を抱いた二人と対極的に。戦闘凶のアルガナ達四人を始め、アイズやアリサにラトラが真剣な眼差しで戦いを見ている。強さに憧れてる人とそうではない人の態度がこうもはっきりと分かってしまうとは……アスナもどちらか

たとえば一誠達寄りだ。

それから数時間も戦い続けた二人は、勝負を次回に持ち越しとしてレプリカのオラリオのフィールドを後にした。出迎える面々は労いの声を送り解散する。

「今回も凄いとしか言えない戦いだっただよ」

「お互い対人戦に慣れてるから直ぐに決着はつかないさ」

自室に直行して天蓋付きの寝台にダイブする。彼に続けー！とばかりアイズとアリサにラトラもベットに飛び込——むことは叶わず勉強をするためリヴェリアに連れて行かれるドナドナ感を見せられた。アスナもベットの縁に腰を下ろした。

「もう今年で最後だね」

「あつという間だよな。今年も中々刺激的な一年間だったし、来年はどんな出来事が起きるのか分かりやしない」

「人生ってそういうものだよ？」

「俺は龍だけど」

そうだったね、と真紅の髪を触れるアスナ。

「キミって誰かに甘えたりしないの？」

「何を唐突に？」

「だって、皆に頼られて期待に応えようと頑張っているばかりしか見たことがないから。逆に言う私達に頼ってくれているのってあんまりないし。ううん、それは私達の力不足だからできないかもしれないけどさ」

そう言われると全否定はできない部分があり肯定でもある。

「んー、店のことに関して頼ってる方だけど。基本、俺の一日の行動って店で働いているかダンジョンに籠ってるかだろう？」

「その合間にアイズちゃん達と模擬戦したり物を作ったりしてるよね」

「そ、だから皆を頼るのって実際殆どないって言うかできないわけだ」
頼る機会がないだけで頼りにならないわけではない、そう述べる一

誠にジツと見つめるアスナ。物理的に頼れないならば精神的な甘えはできないのかと考えた。

「誰かに甘えることも大事だよ？」

「俺的に甘えているつもりだが、アスナにとって甘え方ってどうな感じだ」

「んと……じゃあ、失礼するね？」

寝転がってる一誠の頭を持ち上げて、その下に自分の太股を差し込んで下ろすアスナは膝枕を実践した。上から顔を覗き込むアスナの慈愛に満ちた瞳と合い、これが彼女の甘え方なのか？と疑問符を浮かべてれば頬に両手で包み込むように触れられた。

「……イッサー、キミって不思議な人だよね」

「？」

「毎日一緒にいるとキミを中心に楽しい日々が過ごせれる。イッサーが凄いから皆も影響されて好きになっていく。同じ男の子なのだろうして違うんだろうね」

誰かと比較するアスナに否定の言葉を送る。

「同じだよ」

「え？」

「一緒にいて楽しく過ごせれて好きになっていくのは男も女も関係ない。人柄がそうさせるんだ」

一誠からも手を伸ばし、アスナの頬を触れて包み込む風に添える。「俺だってアスナの人柄に触れて好きになってる」

当然俺だけじゃないと付け加える。皆が皆、相手の人柄を知って好きになっていく。でも、人の人柄によって好みは違うかもしれないから好きになるかはどうか本人次第なのだ。肝心なのは相手と己を知ってもらうことが前提であろう。一誠の発言に軽く目を丸くしたアスナだったが、小さく笑って言い返した。

「ありがとう。私もイッサーの人柄に触れてから好きになってるよ」

「そっか……なら、この際はつきりさせるべきだろうな」

上半身を起こしながらアスナと向き合い真っ直ぐ彼女の瞳を見つめる。

「イザナミのおかげでアスナに手を出してしまっただけからお互い妙な立ち位置の関係にいる。だけどこのままじゃないから筋を通すためにも言わせてくれ。——アスナ、俺と結婚を前提に付き合ってくれないか」

まさかの告白に驚きの色を浮かべる。一誠は傷心を抱いているアスナとは肉体関係になるつもりはなかったのに手を出してしまった罪悪感と自己嫌悪をずっと抱いていた。アスナはキリト達の目の前で一誠のことを恋人宣言をしてしまった手前、あれから随分と時が過ぎたので今更そうではないと言い辛い思いをしていた。故に、どちらも最初はそうするつもりはなかったのに、そういう結果になってからというもの曖昧な関係を構築してしまっただけでズルズルと今日まで生活を過ごしていた。だから、言葉通り筋を通すために一誠はアスナに告白した。

「.....」

真正面から告白を受けることになってしまったアスナと言うと、一誠の言うことは一理あると思っっている。関係を一度ハッキリしなければならぬとダメだと思っただけはある。だからこそ口を開く。

「結婚を前提に、イツセーは私と結婚したいの？元の世界にいる女の人達やアイズちゃん達がいるのに」

「今は他の皆のことよりもアスナだけを想っている」

不覚にも胸がドキリと高鳴ってしまった。

「ユウキと直接会いたいアスナの憧憬を叶える。だけどそれからアスナは元の世界に帰るのか、このオラリオに留まるのか、俺の世界に住むかはまだ知らないし聞いてもない。だからもしも元の世界に強い想いや念を抱いて帰るつもりでいるなら諦めるけど、この世界と俺の世界に生きるというなら俺はアスナとこの曖昧な関係じゃなくて、正式に交際して結婚したいと思っっている」

自分の想いを打ち明けてからアスナの答えを待つ一誠が纏う静寂な雰囲気を感じながら、アスナも意見を言う。

「私のどこを好きになったの？」

「前にも言ったが、俺の全てを知った上で好きになってくれる女が好きだ。今のアスナは俺自身がどういう存在なのか知ってて慕ってくれている。だから好きになった」

「それって全員がそうだったらイツセーはその人達全員に結婚をしたってことだよな？」

「そうなるかもしれない。だけど、そうはならないとも言える。こんな俺でも残虐な一面もあるからその瞬間を目の当たりにしたら恐れられるかもしれないから」

ドラゴン故に暴力的な事もあると言う。

「——実際、そんなところを家族に見られたら許せない相手の為に泣かれてしまったし」

一体どうしたらそんなことになるのかと思わずにはいられなかったが、無闇に暴力を振るわない一誠は事情があつてそうして家族に止められたのだろうとアスナは思った。

「それにこの世界に住む人間が簡単にモンスターを受け入れるとは思っていない。正体を明かしたらフィン達に警戒されたし、アイズは裏切り者を見る目で非難されたほどだ。『モンスターが私の気持ちを知らないくせに！』ってな」

「アイズちゃんが……」

一誠にべつたりな金髪金眼の少女が過去にそんなこと言っていたとは信じられなかった。

「あの頃のアイズは強さを求めるあまり、自分の身体を顧みないでいた。骨と皮しかない生きた殺戮機械人形のようにモンスターを蹂躪していたようだったからな」

「直接傍にいなかったの？」

「その頃の俺はこの世界を調べまわっていたからな。この城もその際に用意してた」

しかし、それから腹を割って勝負しようとダンジョンに向かったらイルヴィス闇派閥に所属する男神の邪魔が入り、勝負は有耶無耶となってしまうが和解できたともアスナに教えた。

「その時から俺を慕ってくれるようになった。だから俺の正体を知っ

て慕ってくれる女は全員と限らないんだよ」

「じゃあ、もう一人のキミを知ってるあの子達ってどうやって仲良く
なったのかな」

「知るか」

一刀両断の如く間も置かず言い返した。しかも真顔でだ。これに
はアスナも気になるところがあり訊ねた。

「……………嫌いじゃ、ないんだよね？」

「仕方がないとはいえ、俺を俺として見てくれない奴等なんて知るか」
「えっと、どういうことなの？」

「そのままの意味だ」と言つて溜息を吐く一誠は、告白をするような雰
囲気ではなくなつたと感じて残念さを醸し出す。

「……………やっぱり、さっきの告白は聞かなかつたことにしてくれ」
「え……………？」

「虫のいい話だつたと思うようになった。数年間一緒に住んで俺のこ
とを受け入れてくれたから嬉しくて思い上がった気がしたからだ。
その程度で軽く受け入れるわけがないからな」

突然、急に告白の話を止めて打ち切つた相手に呆然と見てしまふ。
なんでそんなことを言い出すのか一誠の心情を計り知れない。自分
が軽率な事を言つたから拗ねたのか？それとも別の理由で？もしか
して言つたとおりに思つたからなのか？

「……………」

だが、例えそうだとしても一度告白しておいて、やっぱりいいやつ
て手の平を返す子供じみた発言にはアスナも思うところがある。

「筋を通したかつたんじゃないの？なのに急に拗ねて告白をなかつた
ことにするなんて、意外とイツセーって子供っぽいところがあつたん
だね」

「……………拗ねたくなるもんさ。アスナはされたことはないだろ。自
分自身を見てくれていると思つていたら実際違つてて、相手は他の何
かと重ねて見ていることを。そうされた方はとても寂しいことなん
だぜ」

——ヒーロー組の異邦人達のことを差して言っている。確かに

そうだった。彼等彼女等はこの世界にいる一誠ではなく、もう一人の一誠と同じだからという認識で接していた。知りもしない同じ相手として認知されながら笑顔で話しかけられる側は困惑するのは当たり前なのだ。その困惑はやがて相手が見てくれない虚無と空虚を感じて寂しさを覚える。アスナは目の前の男が嫌で拗ねているのだと知って自分達はそうじゃないと気持ちの念を言葉に乗せて伝える。

「でも、私達はキミという証だけは知っているよ。もう一人のキミじゃなくて、この世界にいる兵藤一誠っていう素敵な男の人を」

「……ああ、わかってるよ。心底からそれは嬉しく思ってる」

「——だったら」

パシツと一誠の頬を触れて自分の目と顔を覗き込ませる。他の何も視界に映らせないようにしながら言う。

「最後まで口にしたことを貫き通しなさい。私が知っているイツセーは約束を違わず守る人。そんなイツセーをずっと見てきて、傍にいた私に告白して何がダメなの？私の返事を聞く前になかったことにするなんて男らしくないわ。まるで嫌われたり断られるのが怖がつているみたいだよ」

「……」

眼が逸らせれない状態で再度の告白を改めて催促するアスナとされる一誠。互い喋らず無言の静寂が場を支配する最中で亜空間からあるものを取り出したことでアスナの意識を変えさせた。

「花……」

「俺の元の世界、冥界にだけ咲いている珍しい花だ。水と季節や気温で咲く花じゃなくてな。この花は少々特殊で深い愛情を持つ者でないと咲かない、咲けば永遠の愛が結ばれる曰く付きの花なんだ」

「……深い愛情で咲く花……」

まだ蕾のままの二輪の花を、それを一緒に鉢の部分を持って互いの顔を見合う。絡み合う視線のまま見つめ合う中で一誠はもう一度アスナに告白した。

「アスナ、これからもずっと俺の傍にいてほしい。この世界でも違う

世界でも、どこまでもずっと一緒に」

「はい……こんな私でよければ喜んで。私もずっとキミの傍に生きていたい。」

好き、大好き、愛しているという言葉は不要とばかり愛の言葉よりも永遠に添い合う言葉を選んだ後。どちらからでもなく自分の意志で顔を近づけ合い、唇を重ね——蕾の花を咲かせ、花の祝福を得た二人。それに気付いたときは二人は顔を離れた直後だった。

「わっ、咲いたよイツセー！」

「愛の告白したことで花が俺達の想いへ愛に呼応して咲いたんだよ。言っただろ？深い愛情で咲く花だって」

「……素敵、ロマンチックな花がキミの世界にあるなんて。この世界にもないかな？」

「時間が空いたら探してみよう。もしかしたらダンジョンの中にあるかもしれないしな」

花のように奇麗で、太陽のように明るく笑う彼女に釣られて微笑む。花をテーブルの方へ魔法で移動させた後、アスナを抱きしめてベッドに寝転がる。

「これで本当の意味でアスナは俺と付き合うことになったな」

「うん、あの時は変な誤解をさせちゃうことを言っちゃってごめんね？」

「いいき、嘘から真になったんだ。これから愛し合えばいい」

「うん……好き、大好きだよイツセー」

そう言い合いながらキスをして、深く熱く水音を鳴らすぐらい舌を絡め合う。アスナの腕が一誠の背中に回すと一誠も抱きしめ返しながら身体を動かし、アスナの両足の間に差し込んで自分の上に乗せる。その状態で鼻で呼吸しつつデーパーキスを数分も続けた。そして二人が止めると口と口に愛液の糸が出来上がって卑猥さを醸し出した。

「……アスナ、今夜からは遠慮せずに愛すからな。覚悟してくれ」

「うん……私をたくさん愛してね。たとえイツセーの子供ができても産むから」

「……対抗心？」

「ふふ、さあ、どうなんだろうね？……ん」

意味深に微笑むアスナが今度は自分から一誠に口付けして愛を育むのだった。



正式にアスナと交際を結んだ関係以外生活に変化はないまま迎えた一誠の五度目の改宗^{コンバージョン}。ロキ、ヘファイストス、ガネーシャ、フレイヤの眷族となり次はこの「ファミリア」になるか神々と冒険者達は関心を持って休日の日の『異世界食堂』に集い、振舞われる酒や料理を飲食しながら時を待つ。

「今年こそは……」

「ガネーシャの眷族再び……」

「……」

「色ボケ女神の一投が掛かっているなんて癪やけど……」

尋常じゃない気迫を潜める主神達の気持ちはわからないわけがない眷族達も似た気持ちを抱きながら待っていた時。都度四度もした主神に対する贈り物をする一誠がフレイヤに近づいた。

「二年間、世話になった……感じはしないが楽しくはあった。オツタルとの勝負はこれからもしたいがな。これからも城に居座るのか？」

「そうするつもりよ？ヘファイストスやアストレアが住んでいるのに私だけダメなんてないわよね？」

「飽きるまで住むつもりなら何も言わないよ。さて、これがフレイヤ用の魔法の絨毯だ」

バツと広げる絨毯の中心は始終が施された「フレイヤ・ファミリア」^{エンブレム}の徽章。絨毯は彼女の銀髪と同じ銀糸で編まれていて意匠もかなり凝っていた。大きさはガネーシャの絨毯よりもさらに数倍大きいものであった。

「ふふ、ありがとう。大切に使用してもらわね？」

「使う機会があるといいんだがな。それでこれは俺個人の贈り物だ」

展開した魔方陣の光から一本の宝石と見紛う瓶を取り出した。その瞬間、それを見たことがあるアスナは目を張った。あれは大切なお酒のはずじゃと思っていると、フレイヤの銀瞳も丸くして一誠の手の中にある物を注視した。

「割れやすいから丁寧に」

「イツセー……これは何なの？」

「ダイヤモンドで濾過した世界一の酒、ウオツカだ。俺の世界で値段をつけるで一億と二千万が付く」

ボトルには大量のダイヤが装飾されているが、中にも大量のダイヤの宝石が敷き詰められていて酒を好む愛好家の者からすればこの酒は普通の酒ではないと察知するだろう。

「しかもそれ、元の世界にいるソーマに両親が頼んで作ってもらったから値段は付けられないほど希少の酒だ。大切に飲んでくれよ」

「……ええ、そうさせてもらうわ」

フレイヤの予想を超越した贈り物にそれしか言えずにいた。値段が付けられない異世界の男神ソーマが作った酒を贈られるとは想像でしかなかった。ましてやボトル自体も宝石なのだから他の酒と異なる未知の酒、ウオツカはどんな味なのだろうと激しく興味を駆り立たされた。

「イ、イツセー！うちにもアレを飲みたいんやけど!？」

「フレイヤに土下座する勢いで懇願すれば？あ、フレイヤ。飲むなら部屋でしてくれ。ロキが五月蠅いから」

「ズルいー！うちにも異世界のソーマの酒欲しいい〜！」

数秒後——駄々をこねる見苦しい女神は強制的かつ物理的に黙らせた。頭から大きなたんこぶを作って気を失った彼女をそうさせた男を見て一同は押し黙った。

「他に欲しい奴、いるなら手を挙げてくれ」

——容赦なく神に手を上げる男を目の当たりにして己の欲を晒す者はいない。静まり返って静寂な雰囲気の中にした張本人は、誰もいないことを確認して事を進める。

「それじゃ毎度恒例の改^{コンバージョン}宗ダーツを始めようか」

「二」「待ってましたあ！」「三」

ワツと盛り上がる神々達。各【ファミリア】の名が書かれたルーレット台が用意されるとフレイヤは一M距離を取って立つ。一誠からダーツの矢を受け取り周囲から向けられる視線を感じながら構える。

「始める前に一つ。今回からルーレットの中心には無所属眷族^{フリ}つてのを加えた。ここに当たったら俺は主神なき【ファミリア】を結成するつもりだからよろしくな」

大きくもなく小さくもなく「無」という共通語^{コイネー}で書かれた的^的が加えられていることを認知した。事前に伝えられた内容に誰もが異論を唱えず沈黙で是と了承したのだった。

「準備はいいかな？」

「構わないわ」

「ん、では、回すぞ。それ！」

思いつきり回るルーレット。どこの【ファミリア】の名前なのか見つけるのは困難な時にフレイヤはまだ投げない。回るルーレットがゆっくりと遅くなった頃によくやく美の女神は腕を動かしてダーツの矢を一投した。

刺さった。

その瞬間を見届けた神々と冒険者。中には立ち上がって結果を見んがためにガン見する神もいれば、手に汗握る思いで冷静の姿勢でルーレットへ視線を向ける。一誠の手がルーレットに触れて止めることで各【ファミリア】の名前が皆の視界に入り、ダーツの矢がどこに刺さったのかようやく視認できる――。

「次の【ファミリア】は……ん？……あれま」

「あら」

直ぐ確認できた一誠とフレイヤが意外そうに声を漏らした理由は。中心ギリギリのところ^{中心}でダーツの矢が刺さってる。もう少しずれていれば【ディオニュソス・ファミリア】の的に刺さっていただろうが結果は――。

「無所属の【ファミリア】を結成することが決まっちゃったな」

「この場合はおめでとう、と言えはいいのかしら？」

「んー称賛されるようなことでもないし、多分言わなくてもいいと思う」

という事だと場に在る神々に乞うた一誠。

「フレイヤが投げたダーツの矢が見ての通り主神無き無所属の【ファミリア】を結成することになった。でもギルドからの条件で、結成するためには後見人として皆から徽章エンブレムを貸してもらわなきゃいけない。故に貸してほしいけど、貸してくれる【ファミリア】には仮の団員として【ファミリア】に貢献することを約束するよ」

「という事は、来年からイツセー君はもう他の【ファミリア】に所属することはしなくなるんだね？残念だよー」

「まあ、期限付きよりは仮の眷族だから協力は惜しまないよ。手に負えないことやふざけたこと以外は」

——後日。各派閥から徽章エンブレムを貸してもらったことをギルドに報告し、指定された条件、税金一〇〇万ヴァリスと団員の数も満たしたことも伝えたとギルドは主神無き派閥の結成を公認——ただし追及された。

「貴様、よりにもよって何だこの名簿に乗っている者達は！」

ダン！とロイマンは提出された団員達の名簿が記された羊皮紙を叩く。それは自分を含め十人の団員を集めた際に一誠自ら記入した者達の名前だ。

団長 イツセー L v. 3
種族 アマソネス 女戦士アルガナ・カリフ L v. 6
種族 アマソネス 女戦士バーチェ・カリフ L v. 6
種族 アマソネス 女戦士ベルナス・ベーゼ L v. 6
種族 アマソネス 女戦士エルネア・ベーゼ L v. 6
種族 ヒューマン アスナ・ユウキ L v. 2
種族 ヒューマン カサンドラ・イリオン L v. 1
種族 ヒューマン ダフネ・ラウロス

「悪いな、お前達にも頭数合わせに冒険者登録してもらって」

「もとより私はこっちの方が性分だ。給仕など私には似合わない」「いやいや、お前も人気者だからな？これからもよろしく頼むよ」

種族 ヒューマン フレア・フローラ L.V. 5

種族 ドラゴニウト 竜人族 キリユー・ドラゴニア L.V. 1

種族 シルキー 妖精種 シルヴィ・ホワイト L.V. 1

ヒューマンとモンスターのオーガの混血種——もともと名前がなかった彼女にフレア・フローラという名を与えた。ドラゴニウト 竜人族の彼女、キリユー・ドラゴニアも協力してもらい頭数に加え、シルヴィ・ホワイトも加えるがそこで丁度頭打ちとなった。これで結成できると踏んでいたのだが、ロイマンから身に覚えのない第一級冒険者の連なった名前に異議を申し立てた。

「二体いつの間にギルドが知らない第一級の者達が五人も抱えておつたのだ！どこにも所属させず！」

「俺の言動は全て公認と黙認の手筈だったはずだが？」

事実を突き付けられぐうの音も出ないロイマンを黙らせ、用件は終わったとギルドを後にする。帰り道、アリーゼとリユーと大通りで鉢合わせし、建物の屋根の上に腰を下ろして空を見上げながら結果を教えた。

「そっか。おめでとうと言うね。これからも他に入ってくれる人っているの？」

「探してはみるが、簡単に見つかりはしないだろ。俺の知り合いの大体が【ファミリア】に入ってるんだからな」

赤髪のヒューマンの少女とエルフの少女もその梓だと言外の指摘を受け、二人も誰かいないかと悩む。しかし、いくら悩んだところで誰一人思い当たる人物はいなかった。

「私達が入ってあげましょうか？」

「アストレアに申し訳ないって。二人は【ファミリア】の主力を担ってるんだから戦力が落ちるぞ」

「それは確かに……うーん」

「それに——俺の【ファミリア】に入ったら遠慮なく身体を重ねちゃ

うかもしれないぜ？」

意味深に笑う一誠の一言で二人の顔は耳まであつという間に赤く染まって羞恥心を呼び起こされた。

「あ、えっと、そ、それは……」

「個人的に一夜限りの関係はしたくないからな。肉体関係になつてしまった以上は二人も愛したいよ」

「あ、愛す……！」

うわー、反応が初々しいなーと二人にトドメの魔法を放った。

「今夜は誰も来ない日だからさ。二人とも、部屋に来てくれ。待つてるよ」

「~~~~~っ!!! (ボンッ!)」

居ても立つてもいられないほど羞恥が爆発して、一誠を残して屋根から飛び降りどこかへと二人が行くのを一誠は邪な笑い方をしながら見送った。本当に来てくれるならば大歓迎するが、来ないならそれでもいい。一誠からの夜のお誘いは強制ではないからだ。

短い間だが色んな「ファミリア」の仮団員として入った。4年ぐ。

冒険譚35

——ラキア王国軍、出兵。

その報せは近隣諸国に瞬く間に伝わった。重厚な甲冑を纏う兵士、鎧を装着された何百何千という馬、曇天の下で鈍い輝きを放つ何万という長槍・国境沿いを進軍する武装した大行列が、多くの商人、旅人達によって目撃されたのである。

ラキア王国。

大陸西部に位置する君主制国家。被治者の数は六十万を超過と言われ、王都には巨大な王城と城下町が存在する。緑豊かで肥沃な大地を有するこの区には、いわゆる『軍事国家』という野蛮な側面を持っていた。全ては君主である筈の王の上に君臨する、一柱の神の神意によるものだ。

『軍神アレス』。

事実上の一国の頂点であり、国を統べる男神。とどのつまり、ラキア王国の正体とは数ある派閥の中でも最大の規模と最大の繁雑さを持つ、国家系「ファミリア」である。兵士、軍人は全て『神の恩恵』を授かった眷族、戦闘員であり、産業を営み国を支える民は非戦闘員と言える。唯一無二の主神アレスの王権神授によって歴代の王——派閥の団長——も選ばれてきた。アレスと僅かな団員から始まった小さな「ファミリア」は、長い時間と苦勞を経て建国するまで至り、歴史ある王国として存続しているのだ。好戦的な神の意志によって王国は遙か昔日より幾度となく戦争を繰り返してきた。今回の出軍も戦好きな主神の手によって引き起こされたというのが周辺各国、他都市のもっぱらの見解であった。行軍する兵士のその数、三万。とある『魔剣』の恩恵によりかつて不敗神話さえ誇っていた軍隊が向かう先は、大陸西部から更に西へ進んだ、大陸の片隅。世界に一つしか存在しない壮大なダンジョンを保有し、今日では『世界の中心』とまで

言われ発展した迷宮都市、オラリオである。巨大な市壁と天を衝く白亜の巨塔を目指し、近付いていく何万の軍靴の音。重厚な鎧に身を包んだ豪傑のエンブレム、紅の軍旗がはためく。西進を続け押し寄せてくる大群はオラリオ周辺地域でもとうとう観測された。突然のラキア王国侵攻に対し、彼の迷宮都市は――。

「ロキ、あの無所属の【ファミリア】は結成できたようだよ」

「おー？十人揃えたんやな。ていうか、何気にこちら最大派閥並みの強さやな。人数は中堅のちよい下ぐらいとはいえイツセー一人だけで何十人何百人分以上の強さやし」

「そうだね。強さだけなら僕達最大派閥並みと思っても間違いじゃない。だけでも彼が更に団員を増やすことを望んでいるなら、僕はアイズ達の誰かを彼の【ファミリア】に入れさせたいんだがどうかな？」

「自分は誰を候補に入れとるんや？」

「そうだね。出来うる限りこちら側に引き寄せたいから有力な者が好ましい。イツセーを慕う者全員かな？他の【ファミリア】の牽制にも兼ねてさ」

「ちよつ、それ言うたら片手で数えきれんへんで？流石にそれはなあ……」

「ロキ、彼の【ファミリア】は主神が存在しない。派閥の問題絡みは無いし、僕達に協力をしてくれる」

「そりやイツセーも言つとったけど。うちの【ファミリア】の戦力も落ちるんやで？」

「事実その通りだね。でも、彼は戦力を独占するような者じゃないことを解ってるはずだ」

「んー、そうなんけどな。フィン、こつちからアイズたん達を送って何が得られるんや？」

「他の【ファミリア】より有力になることは間違いないと踏んでいる。そして彼の傍に置けば彼女達は飛躍的に成長を遂げる。と、ここまで建前的な話だけどロキ。――アイズ達を止められる自信、あるか

い？」

「……もしかして、そーいうことなん？」

何かを察したロキの一言の直後。二人がいる執務室の扉が少し開き、隙間から数人の少女達が顔半分だけ出して、訴えるような眼差しをする。ロキの頬が引き曇る。

「そう言うことだよ。イツセーの派閥に入りたいと僕やガレス、リヴェリアに何度も懇願してくるんだ。だが、僕らが勝手に決めていいことじゃないからね」

「……そ、そうやな」

「それにこれ以上のはぐらかしや説得は厳しくなる。今度はロキが彼女達をよろしく頼むよ。暴走をさせず嫌われないように頑張ってくれ」

ちよっ——!?!と執務室を去るフィン^①は手を伸ばすロキを置き去りに入ってきたアイズ達と入れ替わりながら扉を閉めた。

「フィン、結果はどうなると思う」

「ン、粘った方が勝ちかな？」

「イツセー絡みになるとあやつらは異様な力を発揮しおるわい」

そうだね。と執務室から聞こえる情けない声に苦笑を浮かべるフィンと揃って壁際にいたガレスとリヴェリアは溜め息を吐いた。神の眷族の問題は主神に押しつ——ではなく解決してもらおうと三人は決定権を有してるロキに全て丸投げした。【ロキ・ファミリアは今日も平穩だった。

「……」

ところ変わって中央広場^{セントラルパーク}。二人の男女が白亜の巨塔を唾然として

見上げる目は凍結したように固まり思考も停止しかけていた。この二人も突然異世界に来たことに驚いた——わけではない。

「もしかなくても……あの塔って『バベル』？」

「だとしたら俺達は『また』来てしまったのか？」

二人はオラリオを知っていたからだ。

——ギルド地下『祈祷の間』。

「!?」

蒼い瞳が限界まで見開いて何かに弾かれるようにして立ち上がった老神。彼の男神の様子がおかしいと黒衣で身に包むフェルズは声を投げかけた。

「どうした、ウラノス？」

「……私の刻んだ恩恵を感じる」

「なに? どういうことだ？」

「——私の眷族の気配が感じるようになったのだ」

ウラノスの言葉の意味が分からず当惑の雰囲気醸し出すフェルズは何といえよいか迷う末、沈黙を貫いた。

「「出陣」」

一方その頃。集団戦闘が長けた三つの「ファミリア」のみで初めて異国の地にて戦争を臨もうと行軍を始めていた。その数の総計は本拠地からも呼び寄せたのも含め九万。更に上空では空飛ぶ船も追従する動きを示していた。その数は五つ。

軍馬の嘶きが轟く。直ぐに続くのは草原を蹴りつける激しい馬蹄の音だった。オラリオから真東に三〇Kに進んだ大平原。軍旗をためかせる無数の騎馬が驀進する。戦場の華ともいえる騎兵隊。甲冑で身を固める騎士と鎧を装備した軍馬は進路上のあらゆるものを蹴散らし粉碎する。それは多大な突破力を秘めた戦場の大槍に相違ない。槍袞の如く前方に構えられた馬上槍ランスが日差しを反射し銀の輝きを放つ。戦場で遭遇すれば歩兵が一樣に恐怖する、そんな無敵の騎兵隊は——愕然していた。鉄兜の下で目を見開いている騎士たちの視線の先、空に浮かぶ巨大な船が我が物顔で飛んでいるのである。

木造の船の上に大きな翼。船を浮かすための気球袋を備えて後部の羽根プロペラによって水平に飛行している姿はドラゴンを彷彿させる。

飛行する謎の巨大船に目を奪われていると、船から何かが落とされ

た。騎士達はそれが何なのか確認する間もなく、落ちて来た物が地面とぶつかった瞬間にブワツ！と半球状の風魔法が炸裂して騎士達を吹き飛ばした。

『うあああああああああああああああああああああああああああ
ああッ!』

瞬く間に混乱と化する戦場。他四隻の船からも同じものが落とされ騎馬の軍隊は成す術もなく陣形を乱れに乱れ、その隙を逃さんとはかり第一陣の敵兵の強襲によって一網打尽にされていく。騎兵隊前部が崩壊したことで後方から続く軍馬も勢いの止まった先方に次々と衝突し、転倒を繰り返していった。瞬く間に部隊総崩れとなる戦場に、空の上から投下する一誠達（分身体も含む）は、揃って意地の悪い笑みを浮かべる。

「……私達は運が良かったのだろうか。敵対していたらあんなものまで駆り出されて戦場は滅茶苦茶にされていたらどうかな」

「しかも巨大モンスターにもなれるのだから滅茶苦茶どころじゃないわ」

「全滅は免れない」

一誠と極東の兵士達が暴れまわる大平原から離れた広野、絶叫が引つ切り無しに飛び交う主戦場。一誠特注品の望遠鏡で戦場の様子を把握するために使い、三柱が覗き込めば攻め寄せてきた総勢三万の王国軍^{ラキア}に対し、第一陣の三万が迎撃し捕縛していくのが視界に入る。「丘の上に恐らく弓兵を担う兵士がいると思うが?」

「私の忍に向かわせている。イツセーの通信の腕輪は本当便利」

「本当ね。伝令を待たず直接腕輪から聞くことができたり作戦を伝えたりできるから……あ、イザナミの子供が丘を制圧したみたいね」

「丁度その報告を受けたところ」

三つの徽章^{エンブレム}の団旗が風にたなびく本営もといこの神営の中、第二級の兵士数名の近衛兵を付かせ安全な場所から各部隊長に腕輪で報告を受けたり指示をいくつも飛ばして戦場を動かしていた。進行してきた敵国軍に対して、オラリオは仕方なしに応戦。管理^ギ機関^ドの命令

——強制任務ミッションが発令され、都市に属する特定の「ファミリア」はこれの迎撃に当たっていた。初っ端から数に物を言わせる総攻撃を仕掛けてきた敵に、ひとまず団結して対応することになったオラリオ仮連合は真紅の髪の一人の男の提案によって決行されたのだった。

『ある意味冒険者よりも対人戦に秀でて慣れている極東の神々と俺だけ任せれば問題ないっしょ。過剰に戦力をオラリオから出すのもアレだから、他の最大派閥と冒険者はオラリオの守備を兼ねて待機することでよろしく』

ギルドはこれに無条件で受け入れ、更には極東にも抱えている眷族達を召喚する三柱の神々に圧倒された。

「しかし、私達だけで戦争に対応させられるとはな」

「適材適所と言われるでしょうけどね。でも私達が協同で戦争をするなんて思いもしなかったわ。イツセーはこれを狙っていたのかしら」
「可能性はある。そして、協同で戦争している私達が一国相手に負けるなんて——」

「絶対はない」

うおおおおおおおおおおおおおおおおつ!!!と叫び声の本陣にまで聞こえ、眷族達の活躍が目と耳で見聞しているアマテラス達は、笑みを浮かべた。

だが——一行は気づかなかつた。オラリオに途轍もない化け物が大暴れしていたことを。

「……なんて輝きを放っているの」

バベルの最上階から、フレイヤはその銀瞳で二人組の魂の色を捉えていた。色というより輝きで魂を表しているのであつた。眩しいほどではないが強く優しい光を放っている。今まで様々な魂を見てきた中で唯一一誠以外信じられない魂を見ることになるのはフレイヤ自身も驚いた。ジツと無遠慮にその魂を見ていたら——彼女の視線に気づいたのか二人が顔を見上げた。次の瞬間。虚空に消えだして姿を暗ました二人は、女神の目の前に佇んでいた。壁張りのガラスを触れ、粉碎して中に侵入する。

「こんにちは美しい女神よ。もしかして、フレイヤという名前かな?」
「ええ、その通りよ。貴方達は異世界から来た異邦人、それとも転生者かしら?」

「転生者っていうのは何なのか分からないけれど、異世界から来たものであることは間違いないね。——この世界は二度目なのだけだ」

「(二度目……?) それで、私に何か用かしら?」

背後に控えている武人の獣人が前に出てきてフレイヤを庇う立ち位置に入る。従者、眷族の姿を一目見て男は不敵の笑みを浮かべた。

「そいつ、強いな? ちよつくら俺と勝負してくれないか?」

「この子と勝負できるほど貴方は強いのかしら。転生者でもない限り倒すことはできないわよ?」

「ああ、強いぜ? —— 一香」

「しようがないわね。ちよつとだけよ?」

一香と呼ばれた女性が外へ出て浮かぶと、フレイヤが虚空に消えた矢先に一香の隣にいて脇で抱えられていたのだった。その姿を見てオツタルは目の前の男を敵としてみなし、腕の筋肉を盛り上げた。

「フレイヤ様を解放しろ」

「俺と一勝負して勝ったら解放してやるよ。ただし、負けたら天界に送還しちまうかもよ?」

「———させん」

モンスターや人体、壁を粉碎する一撃の拳を突き出したオツタルに男も拳を突き出して、完全に受け止めた。同時にオツタルの目を丸くさせた。相手の力量を察してしまったのだ。全力で振るった拳がちつとも動かずちつとも押し込めない鏝迫り合いのような状況で男がオツタルを見定めた。

「んー、Lv. 7か? 何だ、その程度なのか今のオラリオの冒険者は」
「貴様………何者だ」

「知りたかったら全力で殺すつもりで掛かってきな」

挑発する男に横薙ぎで足を振るう。男の横顔に迫った直後に姿勢を低くしてかわしながら足を払って体勢を崩したオツタルに手を伸

ばし、脚を掴むと外へと放り投げた。空中に踊り出されたオツタルの目の前に接近する男。足場がなく踏ん張り切れなくても迎撃する動きをする前に姿を消しては背後に現れた。

「遅いぜ?」

鋭い蹴りがオツタルを突き上げ、直後に上に回り込んだ男が組んだ両手で振り下ろしてオツタルを殴って突き落とす。武人のような猪人の獣人が反応すらできない速度で動く男によって空中でパチンコのように弾かれ続けられる様は、フレイヤを愕然とさせた。

「転生者でもないのにオツタルを……」

「その転生者つてどれだけ強いのかわからないけど、私達は神々と真っ向から勝負できるほど強いから、どんな冒険者でも負けることはないわ」

「あなた達は一体、何者なの……」

「ふふ、それはまだ秘密」

おらあつ!と気合声と共にオツタルを北へと蹴り飛ばす。だが、あまりにも強力な蹴りだったため、どこまでも飛んで行きとある「ファミリア」に突っ込んだ。

「な、なんやあー!?!」

庭園へと駆け付けるロキ達。何かが落ちてきた凄まじい音の発信源の原因を確認するべく行動した結果、巖のような巨軀の大男が打撲による傷だらけの姿でクレーターを作った地面から起き上がった。武器を取りに一拍遅れて現れたフィン達がオツタルの姿を見て真剣な眼差しで問うた。

「オツタル、敵かい。相手は転生者か」

「いや、異邦人だ」

「君がそこまで傷を負わせる相手ならば、イツセー並の強さかそれ以上なんだらうね」

これは本腰を入れなくちゃ駄目のようだと言った空から舞い降りてきたフレイヤを抱えたままの二人組。

「おっと、他人のホームを壊しちゃったか。後で直さなきゃな」

「一体何が目的でオツタルと戦っているのか教えてくれるかな」

「純粋な闘争だけだ。相手を全力出させるために主神を捕まえさせてもらっているぜ」

「悪意は無しか。話し合いの余地がありそうだがここで戦いを止めてくれることは？」

「残念、まだ止める気はない。しかし小人族バルウムなのに強いな？そこにいるドワーフも——」

母なる風よ！と魔法名を発し、男に斬りかかる金髪金眼の少女の攻防の風魔法を突き破る拳一つで殴り飛ばす。風魔法は解除され人壁となってる仲間達にぶつかっていきながら吹っ飛んだ。

「風の魔法か？特別珍しくもまだ全然強力なもんじゃないな。彼女の魔法の方がとびつきり強いぜ？」

飛び掛かってきた狼ウエアウルフ 人の少年は彼女を狙って足を突き出す。あら？と軽く手を動かして魔方阵を展開。強烈な雷の魔法を放って狼ウエアウルフ 人の少年を食らわせ感電、麻痺状態に陥らせるだけ飽き足らず手足を氷結した。明後日の方から放たれる矢に対して女性は直せず見ずに小さな動作でかわす。

「無詠唱で魔方阵を発動した、だと？」

「ちよ、それも含めて今の容赦のない魔法ってまるでイツセーみたいやんか！」

オラリオにいない男と同じ魔法に驚きを禁じ得なかった翡翠の長髪ハイエルフの言葉にロキが思い当たる人物の名を挙げた途端、二人の反応が打って変わった。

「イツセー……ですって？」

「もしかして、真紅の長い髪に黒と金色のオツドアイの男の名前か？」
「……だとしたらお前達に何の関係がある」

是と答えたような言い方をするリヴェリアに二人は、歓喜を表現するかのよう^にに闘気と魔力を激しく迸らせた。

「そうか、そうか！あいつがいる世界だったのか！」

「いきなりこの世界に来てわからなかったけれど、あの子がいるならよかつたわ！——」
「どうやら、あの子は東の方にいるみたいだから行

きましよ」

既に居場所を把握していた二人を驚き、そうはさせるかとフィン達は取り囲んだ。

「彼との関係はわからないけど、行かせはしないよ」

「ここで大人しくしてもらうぞい」

「そういうことだ。今度は我々全員で全力を以て相手になろう」

「イツセーのところにはっ」

「行かせない!」

「負けませんっ」

ホームの屋根のからは弓兵が構え何時でも放てる姿勢でいる他、武器を二人に向けて臨戦態勢に入る一同に二人はほくそ笑む。

「いや、戦う必要はなくなっただ」

「なに?」

「向こうから来てくれたみたいだから」

その言葉が事実であるように「ロキ・ファミリア」のホームの上空に発現した真紅の魔方陣から巨大な騎空艇が出てきた。あの船に乗っているのは誰なのかフィン達は悟り。

「おいおい、あの船って……!」

「騎空艇!?まさかあの子、『空の世界』へ……!」

二人の男女も何故か驚愕の面持ちで目を見張ったところで船から物凄い勢いで降りて来た——真紅の髪の男が目前の二人を一目見た瞬間、開口一番に言った。

「ええええええええええええつ!?な、何で二人がこの世界にいるんだよ。父さんと母さん!」

『……え?』

『は……?』

お、親子おとおおおとおおおおおおおおおおおおおッ!?

「はっはっはっ、そう!何を隠そう俺の名前は兵藤誠。一誠の実の父親だ!」

「私は兵藤一香。一誠の母親よ」

フレイヤを解放した後二人は、誠と一香は名を名乗った。ほぼ放心しているロキ達は停止した思考を取り戻すのに数秒かかり、一誠に問い詰めた。

「イツセー、これはどういうことなんや!? 自分のおとんとおかんがこの世界にいるなんて知らなかったんかい!」

「こつちが知りたいわっ! いや、そう臭わせる話はされたけれどまさかこの二人だとは……………」

「色々と聞きたいことがあるが一先ず教えてくれ。本当にお前の両親なのか」

「真正正銘、俺の肉親だよ。俺の生みの親だよ。ロキから連絡を受けて速攻で戦争を終わらせて一足戻ってみれば二人だとは思ってもしなかった。で、オツタル。父さんに負かされそうだったみたいだな」

「……………負けてなどいない」

「いやいや、俺でもまだ勝てない相手にオツタルが勝てるわけないじゃん?」

「シー、やっぱりキミの両親もただものじゃなかったってことなんだね」

「そりやそうだろ。それ以前にこの二人、千年前にもこの世界に来たことあるみたいだしな」

問い詰めて話していくうちに最後までなくてもない話が一誠から聞かされた。

「千年前ってイツセー。まだオラリオがなかった古代の時代やで? そんなわけある筈が……………」

「へえー、そこまで知っていたのか一誠。流石俺の息子だな。もしかしてウラノスと会ってたりしてたか?」

「会っていたも何も、それ以外にも二人のことを知ったよ。特にあの砂漠のピラミッドとかさ!」

「嘘! 一誠、あそこまで行ったの? というか、攻略しちやったわけ? さすが私の息子ね! まさか実の息子に誠と作り上げたピラミッドの迷宮を攻略するなんて夢みたいだわ!」

な、なんですと……………?

「待て、ちょっと待て、色々待ってほしいんやけど！何自分ら、まさか本当にウラノスの眷族やったんか？あのピラミッドで見た若い子供達の映像は自分等なん!？」

「ああ、随分と若かっただろ？どうやら一誠は俺達だということを感じたようだがな」

「お主ら、本当に千年も生きておるのか？流石にそれはあり得んじやろ」

「俺と一香の一族の先祖は半永久的に生き続ける種族だったからな。その血はもう殆どないと言つてもいいぐらい薄まっているが、寿命は継続してるみたいなんだ。だから千年なんて怪我や病気で死なない限りは軽く生きていられるのさ」

所で一誠、と話を振ってくる誠は上を指す。

「お前、あの騎空艇はどうしたんだ？」

「知っているんだやっぱり。俺も空の世界に行ってるんだよ。まさか空図という物を必要な航海もとい航空だとは思わなかったけど」

「あれを作り出すとは凄いことだぞ？空の世界しかない技術を良くも手に入ったもんだ」

息子の頭を触れて撫でる誠。数年ぶりに再会した一誠の成長を間近で見れなかったのは残念だがそれ以上に嬉しくもあった。

「ねえ、イツセー。貴方の家族がウラノスの眷族ならば必然的に貴方もウラノスの眷族・団員にならないのかしら？」

「あーせや、てかそれも含めてイツセーは知ってたん？」

「ん、知ってた」

知ってたんかい！と秘事を抱えていた一誠にツツコミを入れたロキに一香は訊ねた。

「そう言えばあなたは何て名前の女神？」

「うちはロキやで」

「・・・ロキ？」

「ロキだった？」

自分が知っているロキと脳裏で比べ、彼女の身体を品定めする視線で見つめ、いやいやと否定する。

「胸のない女神がロキって嘘でしょ？」

「ははは、冗談が上手いなー。もしかして女装趣味の男神とかじゃないのか？ペったんこな胸を隠せばそう見えなくもないからさ」

「……フィン、ガレス、リヴェリア、こいつらをぶっ潰してくれへん？割と本気で」

曠恚の炎を見開いた糸目の瞳から窺わせつつ涙目なロキの神令に三人は拒絶の意を示した。

「いや、無理だよ。彼のご両親に攻撃だなんて」

「千年前の古代の生き残りとあらば生きた英雄じゃしのお」

「それ以前に力量は私達の遙か上だ。勝てる見込みもない」

「そうそう、Lv. 7や6なんて千年前には珍しくないぐらい大勢いたぜ？最高Lv. の保有者は14だったからな」

「——因みにそのLv. が私達なのだけだね♪」

ロキとフレイヤ、フィン達は沈黙した。オラリオで唯一、世界で唯一Lv. 7という数字を叩き出していたオツタルだけが歴史上おいてたつた一人のみかと思っていたことが、蓋を開ければそうではなかったと事実を突き付けられた。地上に進出し跋扈していたモンスタ―達がどれだけ強くどれだけ溢れ出したのか定かではないが、それ相応の冒険をしてきたということなのだろう。だからオツタルを凌駕する実力を秘めているのだ。

「あ、でも、今なら「ランクアップ」してると思うから15か？」

「恩恵も健在だから徐々に更新してもらいましょ？」

また、強さの高みへ到達しようとしていた。

「……イツセーだけが規格外の範疇を超えたイレギュラーかと思ったんやけどなあ」

「俺はあの二人の子供だぞ？」

「そう、色々と納得しちゃうわね」

否、そうしないと精神的に疲れるので鵜呑みしてでも納得したほうが楽と、

一誠を拉致るように連れ去る二人を見送る。

ギルドに案内してもらい、堂々と職員ひいてはロイマンしか入れな

い地下の祭壇へと進むと、四巨の松明の灯りで光源を保っている空間の中に入る老神が口を開いた。

「……久しいな。本当に生きていたとは驚きだ」

「おお、ウラノス。千年ぶりだなあつ！全然変わっちゃいないんだな」

「お久しぶりウラノス」

千年ぶりに再会を果たした主神と眷族、そしてその輪に加わってる子供は闇の奥から現れたフェルズに詳細を教え驚かせた。

「キミの家族とは……異世界と行き来できる術を得ているのか？」

「わからない。でも、俺的には嬉しいことだよ」

……
……

兵藤誠と兵藤一香の異世界来訪から数時間が経ち、ラキア王国軍との戦争の後始末も終えたアマテラス達も戻り、一誠と交流ある神々と冒険者は朗らかに挨拶を交わしそして神々に対して二人は驚きを禁じ得なかった。立食パーティが開催される中で異様な緊張感を顔に浮かべる数名がいて、一誠は話しかけてみると。

「イツセー、挨拶したほうがいいよね？私達、その、交際しているんだし」

「女神とはいえ貴方のご両親なのだから……」

「……うむ」

「ん、した方がいいだろうけど今はしないでくれ。ぜってー暴走や混乱が起きるから」

アスナとヘファイストス、リヴェリアの気持ちを汲んで場を後程設けようと考えを伝える一誠に感謝した。が、その時だった。藍色の髪の毛の麗人の女性が誠と一香に向かって足を運び接近した。

「イツセーのご両親、どうかお願いがある」

「なんだ？この世界にいる間ならいいぞ？」

「——私達と一誠の結婚を認めてほしい。ただそれだけだ」

一瞬で場がぎわめき出して、三人の話の会話に注視する一同の中、

「やばいつ!?」と危機感を覚えた一誠が瞬時に二人の前に現れたものの。

「父さんと母さん、その話は待——」

「息子のことが好きなのか?」

「恋愛はまだ疎いですが、私の妹を蘇らせてくれた恩を深く感じています。これからイツセーと恋愛を育み私の一生を彼の為に捧ぎたい」
「恩を感じて息子と結婚ねえ……貴女、息子のことどこまで知ってるのかしら? いえ、あの子の全てを受け入れている上でなのかしら?」

シヤクティは真剣な面持ちで肯定と首を縦に振った。

「少なくとも短く無い交流をしている。同じ派閥の者だった時もあった末に彼の秘密を知った。驚きはしたが受け入れている。イツセーの人を引き寄せる魅力を受けた一人として」

「……」

シヤクティの話の聞き、誠と一香はお互いチラツと視線を交え口を開いた。

「千年後のオラリオの結婚制度はどうなってる?」

「他派閥同士では産んだ子供がどちらの派閥になるかによって争いが起きる。なので恋愛は同派閥の団員か無所属フの者達としかできない」
「恋愛はできるって事か。じゃあ、一誠。今のお前はどこの派閥に入っている?」

「……無所属フだ。主神無き「ファミリア」を結成がギルドに公認されてるからが集まり次第俺の「ファミリア」が結成できるよ」

嫌な予感しかない感じを覚えながら教える。言う二人は至極不思議そうな面持ちで尋ねた。

「主神がない「ファミリア」って「ステイタス」の更新とかはどうするんだ? 神がいてこそ「ファミリア」だぞ」

「ステータスプレート」っていう神の更新要らずな魔道具マジックアイテムを作ったんだ。自動的に「ステイタス」が更新できるから——」

「ちよ、待ちなさい一誠。それって結構凄い物じゃないの!? 今持っているなら見せてちょうだい!」

魔法使いとして無視できない道具を要求する母親の気迫にちよつぱり押しきれながら自分の『ステータスプレート』を見せると、誠と一緒に確認して驚いた。

「なに、このスキルの異様さと数・・・あ、発展アビリティに『幸運』があるのね。『絆』ってのは初めて見るけれど」

「マジでこのプレート一枚で『ステータス』として成り立っているのかよ」

「・・・・・・・・・・」

「あるなら欲しい。アザゼルに自慢するから！」

絶対貸してもらえず躍起になって『ステータスプレート』を作りそうだなあの人はと思いつつも後で渡すことを口約束で交わす。

「んで、一香。どうするよ」

「そうねえ・・・・・・・・恩情から恋愛が発展する話もあるし・・・・・・・・なにより一誠にとって気が抜けないこの世界で受け入れてくれる女の子ならね？」

あつ（察し）と二人の結論を悟った一誠の目は遠くなった。

「シャクティちゃんだったね？今の一誠はフリーだから、結婚については反対しないわ。寧ろ結婚して息子を幸せにしてくれるならこちらとして願ったり叶ったりよ？」

「蘇らせたって事は一誠。死者蘇生の魔法を使ったんだな？彼女はお前の失った寿命の分、一生を捧げる強い意志で結婚を申し出てるなら、女の覚悟を蔑ろにしちゃ駄目だぜ？」

「・・・・・・・・」

覆せない決定に項垂れる一誠と対極的に、歓喜の雄たけびを上げるガネーシャと明るい笑顔で喜ぶアーデイに安堵で胸を撫で下ろすシャクティ——に「だけど」と付け加えた言葉が投げ掛けられた。

「一番最初に結婚してもらうのはキミじゃない。その後になるな」

「これだけは譲れないわ。それでもいいなら結婚は承諾するけどいいかしら？」

「・・・・・・・・順番は拘ってないので問題ないが、イツセーは誰と最初に結婚を？」

「それは勿論、幼い頃から一誠を見守り愛し続けてきた元の世界にいる女達さ」

「特に彼女が先じゃないなんてあり得ないからね」

これは決定事項、異論は認めないとばかり断言、断定するので一体誰のことだろうとアスナを除いて一同疑問符を浮かべた。

「一誠、元の世界に繋げて見なさい。それができる魔法があるのなら可能でしょ？」

「発動はできるけど元の世界を映すだけしかできない状況なんだよ。別の異世界だったら行き来できるんだけどさ」

「じゃあ私も手伝ってあげるわ。多分、それなら可能でしょ」

ということで一誠は春姫の魔法の恩恵を受け、龍神化の呪文を唱えた後に魔法を発動した。光の異世界に繋がる鏡が虚空に浮かび、一誠が見慣れた景色を映す鏡に触れて通れないことを証明すると一香はその鏡に触れて魔方陣を展開した。

「うん？外部から別の強い力が流れてくるわね……これが邪魔しているのかしら」

世界一の魔法使いの名は伊達ではなかった。ちよちよいのちよいつと幾重の魔方陣を鏡の周囲に展開して、何か模索し続けて一分ぐらいすると一息ついた。

「これでよし、と。じゃ、ちよつと待ってて」

足元に魔方陣を展開すると一香は鏡の向こうへと転移して何処かへと行った。異世界の景色を始めてみるアスナを除く面々は鏡の向こうを覗き一香が戻ってくるのを待っていると、彼女は鏡の前に展開したままの魔方陣から出てきて戻ってきた。ただし彼女一人だけじゃなかった。長い銀髪を一本に結び白磁の肌の顔に琥珀の双眸。服装は白いブラウスと胸元に赤いリボンを結んだ膝下まで丈のある紺碧色のジャンパースカートに、その上から眺めのサロンエプロン。もう一人は濡羽色の長髪と同色の瞳に服装は黒のゴスロリで身に包み力ボチャパンツを穿いて胸に×印の黒テープで張るという出で立ちの幼女。

「

一際高鳴る胸の鼓動。二人の姿を視界に入れる瞳は凍結し目の前の現実には嘘じやないのかと、夢幻を見せつけられているのではないかと、目を奪われたまま硬直していると彼女達が静かに動いた。

「今度は、直であなた様を触れることができます」

華奢な手が一誠の頬に手を添え、慈しみが宿った優しい眼差しをして柔らかに微笑む彼女は一つになる風に寄り添う。一誠の手はそんな彼女の背中に回し、二人は互いの体温を感じることで時空と次元を超えてまで成就する愛を実感する。

「ようやくまた貴方のお傍に居られることをリーラ・シャルンホルストは魂から嬉しゅうございます」

「・・・俺もだよ、リーラ」

「イツセー、我も」

濡羽色の髪の少女がぴよんと一誠の胸に抱き着き、受け止めると幼女はすりすりと猫のように甘える仕草をする。

「我、イツセーの傍にいと約束した。これ、絶対」

「忘れてなんかないよオーフィス。久しぶり」

「ん」

完璧に三人だけの世界の空間が出来上がって、誰一人その空間に介入できないでいた。否、しない方が多かつた。再会したかつた元の世界にいる家族とようやく触れ合うことができる一誠の邪魔をしたくないのと、もしも邪魔したら一誠に嫌われかねない恐れがある故に。家族の感動の再会に温かく見守っていた時、ふと一誠の『ステータスプレート』を見た一香は次にぎよつと目を見開いた。『ステータスプレート』が新たなスキルを発現・更新していたからだ。

イツセー

L v. 3

力：∞

耐久：∞

器用：∞

敏捷：∞

魔力：∞

幸運：∞

絆：∞

《魔法》

『ネオ・ワールド・ドア真・異世界扉』

- ・移動系魔法。
- ・継続時間と大きさは魔力数値に依存、憧憬によって過去・現在・未来や異なる世界へ行き来できる。
- ・強い憧憬である程、成功率上昇。

(特典) 『鑑定』

- ・ありとあらゆるものの価値を見定める。

《スキル》

『イレギュラー・アンノウン異常不明』

- ・戦闘時のみ発動。階位^{レベル}、『アビリティ基本能力』が反映・真価を發揮し、全力の超高補正する。

『恋愛一途』

- ・早熟する。
- ・懸想が続く限り効果維持。
- ・懸想の丈と異性との相思相愛の情を続けることで効果向上。

『魅了成就』

- ・魅了する。
- ・異性と同性、特定の者と交流し続ける限り効果維持。

・ 神・老若男女、人種問わず関係が良好、異性と触れ合い魅了し続けることで効果上昇。

『三技一体』

以下の三つのスキルが一つとしてそれぞれの発動条件が満たされると一時発現する。

『料理 想達人』 クッキング・マスター・シエフ

- ・ 調理道具の装備時、発展アビリティ『料理』の一時発現。
- ・ 補正効果は『器用』と『敏捷』のアビリティ数値に依存する。

『神伝鍛冶』

- ・ 鍛冶道具の装備時、発展アビリティ『鍛冶』の一時発現。
- ・ 作製した武具の品質の向上は『器用』アビリティ値に依存する。

『神秘希少』 ウルトラ・レア

- ・ 道具の作製時、発展アビリティ『神秘』の一時発現する。
- ・ 一定以上の道具アイテムの製作時、スキル『幻想』が発現する。

『幻想』

- ・ 道具アイテムの作製時、発展アビリティ『幻想』が一時発現する。
- ・ 発展アビリティ『幻想』の発現時、道具アイテムに関わる全ての発展アビリティ・スキルが発現・併合する。

『運命協同体』

- ・ 同恩恵を持つ者のみ効果を発揮。
- ・ 懸想の丈の度合いによって【エクセリア経験値】の分配が変動する。
- ・ 『運命協同体』の副次効果——懸想の丈の度合いによって良好の同恩恵を持つ以外の者も共同することで【エクセリア経験値】の分配が変動する。
アクティブトリガー
- ・ 任意発動。

ドラゴン・スレイヤ
龍殺龍者

- ・ 竜種に対する攻撃力の超域強化。
 - ・ 戦闘の意欲の丈によって効果が向上。
アクティブトリガー
- 任意発動。

『無限想絆想愛』

- ・ 絆・恋愛が成就する。
 - ・ 成就した恋愛の丈によって効果無限大。
 - ・ 効果が持続する限り全能力値アビリティが限界突破、∞に固定。
- 『無限想絆想愛』の副次効果——相思相愛の他恩恵、無所属フリーの対象が眷族となる。「ステイタス」の効力持続、自動的になる。

(特典) 『異世界買物覧』
ネットスーパー

- ・ ヴァリスを払うことで異世界の物資を購入可能
アクティブトリガー
- ・ 任意発動。

(特典) 『ステイタステイカー』

- ・ 対象の「ステイタス」を奪う。
- ・ 奪った「ステイタス」の全てが上書き・蓄積し糧となる。
アクティブトリガー
- ・ 任意発動。

思わず、「な、なにこれ!？」と叫んでしまったので皆の意識は一香に集まる。

「母さん、どうした? って……もしかしなくてもまたスキルが発現したのか。もしそうだったら今年で三つ……。……。……。」

(固)

母親から『ステータスプレート』を取って確認した一誠も不自然なまで動きを止めた。

「な、なんだこれえええええええええええええええええええええええええええええ!?!」

あの一誠までも叫ぶほどのスキル。神々は好奇に撥られて近寄り

『ステータスプレート』を覗き込んだら一人残らず目を丸くした。

「な、何なんやねんコレはっ!?有り得へんで絶対につ!」

「待って、コレ、どうなってるの……?」

「うーん、不思議な現象だね」

「ガネーシヤ、ハイパービツクリ」

「……」

「これは……」

「どういうことなのかしら……?」

【神聖文字】を解読できない面々は理解に苦しみ、逆に解る者、特にリヴェリアは翡翠の目を見開いて開いた口が塞がらずにいた。これに神々は何て言っつてよいものかと口を揃えて閉じた。そんな仕草をするロキ達と同様に一誠も何も言えず、動揺を隠しきれない面々にフィン達は首をかしげる。

「どうしたんだい?とんでもないスキルが発現したのかな?」

「私が教える」

「ちよ、待つんやアイズたん——!」

焦燥に駆られて金髪金眼の少女を制止するために動くが、一步遅く新スキルの内容を皆に伝えられてしまった。

そして、アイズが口にしたことで一誠の新たなスキルの内容を知った相思相愛の椿達は……。

「む?つまり手前はイツセーの眷族になっておるといのか主神様よ?」

「「やった!」」

「ふふ、冒険者ではない私でもイツセー様の眷族に……嬉しいわ」

「私、も……?」

「……」

「私達はどうなっているんだらうねレイネル」

「分からないわよレギン」

「イツセーさんの新しいスキルは凄いの一言ですね」

不思議に思う者、喜ぶ者、現実を受け入れる者と反応が分かれる。

「はっ、まさか!?カモン、アイズたん達いッ!」

「……椿、いらっしやい」

「シャクテイ、アーデイ。お前達も確かめるぞ！」

「アスファイ、念のためにね」

主神達は女性団員のみを呼んで借りた小部屋で「ステイタス」の更新を始め出して数秒後——ロキの悲鳴が聞こえた。しばらくして戻ってきた主神の顔は安堵だったり落ち込んでいたり表情を浮かべていた。

「ア、アイズたん達がうちの眷族じゃなくなっておった……！」
「椿もよ。『改宗』コンバージョンをしてたわけじゃないのに突然過ぎて不思議だわ」

「アスファイに授けた『恩恵』が変わってなかった……ちよつと安心」

「シャクテイ達は問題ない！ガネーシャ安心半面、変わっていないかったことにガネーシャ不思議」

「フィルヴィス達の恩恵に異常はなかった」

「春姫の恩恵が変わってたわ」

「ソシエも同様」

「ユエルも同じくだ」

「アリーゼ達の中で輝夜だけでした」

どう声を掛けてよいか悩む一誠。不可抗力とは言え、ロキ達から戦力を奪った事には変わらない。派閥に入っていない、コンバージョン『改宗』をしていないアルガナ達は別だが物凄く申し訳ないと思った時、不意にある事が思い浮かんだ。

『改宗』コンバージョンはできないのか？」

「試したけれど、できなかつたわ。一年後まで待たなきゃダメみたい」
「てことは……アマミツドの恩恵も変わっている他、まだ確認していない奴や交流している無所属フッリの連中も俺の眷族になつて可能性が……？」

「多分、あり得るわよそれ」

へフアイストスの肯定の言葉にがくりと肩を落とし頭を垂らす。それからすぐアイズ達に申し訳なきように言葉をかける。

「俺の眷族になってしまったからにはアイズ達。一年間だけ俺の眷族として我慢してくれるか？」

現派閥を変えようとも思わないでいただろうに、迷惑を掛けてしまったことに申し訳なく思つての言葉であつたが、アイズ達は特に気にしてゐる風な感じではなかつた。というか、むしろその逆だ。

「私、イツセーの眷族のままでもいい」

「私も」

「……自動的に更新するのであれば、毎度ロキに舐め回すような視線といやらしい手つきで触れられずに済むと思えばありがたい。アイズ達と同感だな」

「確かに……」

「ええ……」

被害者の女性団員からの拒絶の言葉を貰いガーン?!と凄まじいショックを受けて涙流すロキだつた。同情の言葉も慰めの言葉も掛けてやれないほど、身から出た錆のような普段の行いを鑑みれば自業自得の感じであつた。

「一誠様、どういうことでしょうか？」

「単純にセクハラされるのが嫌なだけだ。あの朱色の髪の女神はロキでな。性格はエロオヤジだから隙あらば、それこそ女の胸や肌を触りまくる」

「こちらの世界のロキ様は女性でしたか……しかも変態とは。私達の世界のロキ様が知つたら大層嘆くことになられるでしょうね」

まったくだと同感する。

「イツセー、シャクティとアーデイの恩恵が変わつてないのはどういうことなのだろうか。イツセーの妻となる意思があるというのに」

「相思相愛じゃなきゃダメって事だろ。俺が恩で妻になることを拒んでるから。勿論嫌つてるわけじゃないからな」

「むむむ……」

いや、むむむって悩むところじゃないだろと内心突っ込む一誠の方に、シャクティが手を乗せてきた。

「なら、私の事を好きになる様に努力をすればよいのだな。そうすれ

ば相思相愛になるといふことだ」

「……もう、好きにしてくれ」

親公認となつてしまつた以上、否定や拒む気力はもはやないと投げやりになる。

「……話が見えないのですが、何故一誠様が結婚をすることとなつておられるのでしょうか？」

眼差しが絶対零度のリーラに冷や汗を浮かびそうになる。複数人以上の恋愛は寛大だが、自分の知らないところで結婚をすることは一誠を愛する一人の女として、納得できる説明をしてもらわないとダメなリーラであつた。

「彼女の親族、妹を蘇らせた恩で消費した寿命の分、一生をかけて俺の妻になるため結婚を臨んでいる。拒んでいるが諦めてもらえないどころかリーラと結婚した後でならつて父さんと母さんが認めちまつたんだよ」

「……そういうことでしたか」

誠と一香に対して呆れ混じりの溜息を吐き、一誠に話しかけた。

「もしや、私が一誠様のところに連れられたのは一誠様と結婚をするためなのでしょうか？」

「ええ、その通りよりーラ」

一香が肯定の言葉を述べた。

「本当なら他の子達も誘つて結婚をしてもらいたいけれど、皆それぞれ仕事をしてるし家の事情で直ぐにこの世界には誘えないしね」

「でも、急に結婚なんてこのオラリオには式場なんてないよ」

「あら、式場がなくなつて場の雰囲気があればどこだつてできるわよ？」

軽く指を弾いた一香によつて一誠とリーラの服装が一変した。黒いタキシードと純白のドレスに早変わりした自分達の服装に目を丸くして、神々や冒険者達も瞠目した。

「さーて、始めようか。二人の婚儀を！」

皆の心情を気にせず我の道を突き進む誠の一言で土壇場で突拍子もなく始まつてしまつた結婚式。もつと雰囲気が欲しかった、と思わ

ずにはいられないがこの二人に何を言っても一度決めたことを猪突猛進の如く突っ走って聞き受けてくれないだろう。そんな思いが一致して溜息をこぼす一誠とリーラは仕方なしと素直に祝福されることにした。仮初の婚儀だろうと、片方が一夜限りの合瀬でいなくなるだろうと・・・この瞬間を大切にしなければならぬ。

「愛している、リーラ」

「私も愛しております、我が主、一誠様」

冒険譚36

四人は婚儀が終わるや否や光と化して一誠達の目の前で消え、元の世界に送還された。——しかし、得るものはあつた。転生神でも抗えない∞の魔力で安易に異世界へゲートを繋げられるようになった。無論、元の世界でも。その事実を目の当たりにした一誠達この世界に来てしまった異邦人は喜ぶ間も無く素朴な疑問をぶつけられた。

「帰っちゃうの?」

アイズの一言により一斉に一誠へ視線が集まりだす。誰よりも元の世界に帰ることを望んでいた男はとうとうその手段を確定したのだ。いつ帰っても問題はないが、残された者達は不安と寂しさ、悲しみを抱いて生きていかなければならない。

「まだ帰らないよ。アイズ、それにアリサを鍛えなくてもいいぐらい強くしない限りはな。そういう約束だったろ?」

「.....うん」

「だから約束をほっぽって、他の異邦人達を差し置いて先に帰るつもりはない。異世界に繋げる魔法を得た俺の役目や義務みたいなものだからな。まだまだこの世界にいる。安心してくれ」

金髪の頭に手を置いて撫でる一誠に抱き着いて小さく頷く。絶対に帰ってほしくないと意思表示をする少女を慈愛を込めて微笑みながら表情を変える。

「さて、明日は調べなきやならんな。フレイヤ、ちよつと協力してくれるか?」

「何をするつもりなのかしら?」

「アイズ達が不可抗力コンバージョンで改宗コンバージョンしちゃった以上、アマッドや店の連中が俺のスキルで改宗コンバージョンしている可能性がある。主神としてその弁明をしてもらいたい」

「私を緩衝材にしたいのね。高くつくわよ?」

「可愛いまだ眷族の願いを叶えるのも主神の務めだろ?」

「可愛い、ね.....じゃあ私の望みを叶えられるなら手伝ってあげるわよ」

近づいてソプラの声を殺し一誠の耳元で何かを囁く。——露骨に一誠が顔を顰めた。

「それ、なのか……?」

「一度してほしかったから丁度いい機会よ。簡単でしょ?」

「……男としての尊厳が危ぶまれるなあ」

しかし、穩便に事を済ませるには神の存在が必要だ。フレイヤの要求を呑み翌日「ディアンケヒト・ファミリア」へアミッドと一緒に訪れ、要件を言う。

「なんだ、儂に何か用か。フレイヤがここに来るとは……まさか、儂のアミッドを!」

「ある意味当たっているわディアンケヒト。だけど、ちよつと特殊な事情があるの。話を聞いてくれないかしら」

「特殊な事情だと?」

実は——と背中に刻まれた恩恵を、『無限想絆想愛』^{ファルナ}を見せつけその効果を教えると案の定といったか、顎が外れたように大きく開いた口が塞がらず目を見開いて思考を停止したディアンケヒト。

「……ア、アミッドよ。お前、【フレイヤ・ファミリア】^{コンバージョン}に改宗をしたのか」

「それを確かめたいからここに来たのよ。もしもそうじゃなかったら御の字でしょ?」

フレイヤの一言でアミッドを連れてどこかへと行ってしまったディアンケヒトを待つこと数分後。絶望と怒気を孕んで男神が戻ってきた。

「どうだったかしら?」

「……儂の眷族ではなくなっておった。改宗^{コンバージョン}しようにもできなかった」

「そう、じゃあ一年後まで待たなきゃならないわね?それと、この子を責めないであげてちょうだい。希少スキルの効果でそうになってしまったのだからお互い不可抗力でしょ?それに貴方と私も直接^{コンバージョン}改宗をしたのではないのだから責められるいわれはないわ」

ぐぬぬぬっ……!と齒を噛みしめんばかり納得はできない

と一誠へ睨みつける。

「小僧、儂に黙って隠れてアミツドと関係を結んでいたとはどういう了見だ。貴様を信用してこそアミツドを預けたというのに！」

「一緒に住んでいると自然とそうなってしまうんだ。というか、俺の背中に刻まれた「ステイタス」もそれに関するスキルを見ただろ？ 恋愛ぐらいは許してくれると助かる」

「ならーんっ！ 儂からアミツドを奪い、膨大な利益をかすめ取られては我が「ファミリア」の損失は計り知れんだぞ!? 貴様、その膨大な損失を支払うことができるのか!？」

不可抗力とは言えども大事な眷族を一人引き抜かれたようなものだ。「ファミリア」の主神として憤慨するほど許すまじき！と損害賠償請求を訴えるディアンケヒトに一誠は訊いた。

「膨大な損失ってどのぐらいなんだ？」

「は?」

「アミツドを失うことで毎年「ファミリア」の利益の損失はどれぐらいなのかと質問しているんだけど。教えてくれるなら今回の件、慰謝料として払うよ」

「……」

一瞬何を言っているのだこの者はと思ったが、もう一度確認するように訊き返されて呆けるも自分の中でアミツドを失う利益はいかほどかと思の海に飛び込んだ。

「……億はくだらん」

「億? 本当にこの「ファミリア」は毎年億以上の利益を得ているのか? 万能薬^{エリックサー}一本で五〇〇〇〇〇ヴァリスする他、「ディアンケヒト・ファミリア」の技術を駆使した数千万もする商品があると知ってるけどさ」「儂を信用できないのか!」

「言葉だけじゃ神でも信用できない。結果を見せてくれないと。というわけで帳簿を見せてくれない?」

朗らかに手を差し伸べて提示を求める一誠に誰が帳簿を見せるものか!と一蹴しかけたディアンケヒトの後ろから応じたのが――
紙の束を持ってきたアミツドだった。

「どうぞ、ご確認を」

「アミッドオツ!？」

勝手に帳簿を渡す白銀のヒューマンの少女に信じられないものを見る目が酷く見開いていた。フレイヤと一緒に帳簿に記されている毎年の利益の額を確認する男の顔は怪訝になった。

「数千万の利益は得ているみたいだけど、毎年一億以上ではないんだな。ぼったくろうとしたのか」

「ディアンケヒト?嘘ついたのね?」

「ディアンケヒト様……」

一誠に嘘を吐き、騙そうとした。ジロリと睥睨する男と冷たい微笑を浮かべる銀髪の女神、虚言を述べた主神に二人へ申し訳ございませんと頭を垂らす治療師ヒールの少女。居た堪れなくなった初老の男神は苦し紛れに言い返した。

「ぐっ、わ、儂の中ではアミッドの価値は一〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇ヴァリス以上なのだっ!ぼったくりではない正規の価値だ!」

「ふーん、そう……人を値段で価値を神が決めつけるんだ」

冷たい眼差しでディアンケヒトを道端の石ころを見る目で視線を送る。

「そんな神と付き合う義理はないかもな。今日を以って契約を破棄させてもらうよ」

「なっ、破棄だとおっ!?今月の巻物の納品はまだであるぞ!」

「勿論納品はする。破棄するのはその後だ。——迷惑料の一〇〇〇

〇〇〇〇〇ヴァリスも一緒に最後の納品にするがな」

踵を返して言う一誠。フレイヤもこの場を後にしようと思わず付いて行く。後ろでディアンケヒトの声が聞こえるが無視して次の場所へ足を運ぶ。西のメインストリートを外れた少し深い裏路地に本拠地を構えている「ミアハ・ファミリア」にも訪れた。日当たりが悪く軽くじめじめした場所にポツンよ建つ一軒家には、五体満足の人を模した「ファミリア」のエンブレムが、看板のように飾られている。その場所に数人の冒険者達が列を作っていた。彼等は皆、画期的な体力と魔力を同時に回復できる回復薬ポーションやプリンを購入していく様子を

何度も繰り返し見ていくとようやく最後尾の自分達の番となり、男神ミアハと獣人の少女のナアーザと対面を果たせた。

「イツセー、それにフレイヤ？二人揃って我が「ファミリア」に何か？」
「んと、実は……」

ディアンケヒトと同じ説明をして確かめてもらう。最初は怪訝な気持ちで奥の部屋へナアーザを連れて行って数分後、ミアハが当惑した顔を顔に浮かべて戻ってきた。

「ナアーザが私の眷族ではなくなっていた。一体どういうことなのだろうか？」

「やっぱりそうだったか。それは俺のスキルのせいなんだ」
「スキル？」

ミアハに「ステイタス」を確認してもらったところ、酷く驚かれた。
「これは……こんなスキルが存在するということなのか？これも下界の可能性というのか？」

「今回については不可抗力でも申し訳なく思ってる。一年後改宗コンバージョンができるまでナアーザを今まで通りに傍にいさせてくれないか？」

「構わないがひとつ訊いてもよいか。ナアーザは一体誰の眷族になっておるのだ？」

「多分、十中八九俺の眷族になってると思う。主神が存在しない「ファミリア」を結成したから」

「主神が存在しない「ファミリア」？神の存在は冒険者の子供達にとつて必要不可欠な存在であるはずだが」

その疑問を自作した『ステータスプレート』を見せて説明する。そのプレートにはミアハも興味津々であり驚くべきものであった。

「イツセー、神の存在意義を揺るがすものを作ってしまったのだな」
「そう思うよなやっぱり。まあ、これがあるからこそ主神がいなくても

も「ファミリア」を結成できるわけで、ナアーザは俺のスキルによって自動で勝手に改宗コンバージョンしてしまったんだ。ごめん」

「謝る必要はない。寧ろ教えてくれてよかった。そなたに非がないこともわかったし責めるつもりもない」

謝意を受け止めるミアハに感謝の言葉を述べ、要件は終えたと『青

の薬舗』を後にする一誠とフレイヤ。二人を見送るまでずっと黙っていたナーザが口を開いた。

「ミアハ様、私はあの人の眷族になっているのですか？」

「うむ、そのようだ。我々の恩恵があそこまで発揮するとは驚く半面、そなたとイツセーが相思相愛であつたとは意外であつた」

「……っ」

顔が果実のように赤くなったのを知覚して俯く己の眷族の頭に優しく手を置いた。そして優しい笑みを浮かべるミアハはこう言葉をかけた。

「私はそなたとイツセーをずっと見守るつもりだ。今ならば隠していた自分の想いを打ち明けてもよいだろう。今のそなたは私の眷族ではなくなつてしまつているが、イツセーに憧憬を抱いているのであれば応援するぞナーザよ」

主神公認の恋愛の了承を得てしまった。後日、ディアンケヒトに一〇〇〇〇〇〇〇億ヴァリスではなく三〇〇〇〇〇〇〇億ヴァリスも慰謝料として用意し、最後の納品も送り正式にアミッドを眷族として迎え入れた。さらに『幽玄の白天城』に一人の獣人が加わつた。

「……なんでお前がここにいる」

「私は契約でイツセー様に回復薬ポーションの製薬の技術の教授をするために居候をさせてもらつているのです。——数年前からずっと」

「っ!？」

「ですが、今の私はイツセー様の眷族です。『同期』の一人としてよろしく願いますナーザ様」

「……お前には絶対負けない」

「ええ、こちらも負けるつもりは毛頭もございません」

バチバチと見えない雷が二人の眼から迸り火花を散らす恋敵ライバルとしても増え、『幽玄の白天城』はますます賑やかさを盛り上げるようになった。その様子を見守る様に見ていた一誠に質問が投げ掛けられた。

「イツセー、昨日のラキア王国の神アレス達の処遇はどうしたのだ」

「ああ、二度とオラリオに喧嘩を吹っ掛けないように半ば強引に同盟を結ばせた。その際、ラキア王国に所属しているクロツゾっていう貴族と王族の一人を人質としてオラリオに住まわせている」

「ギルドはそれを認めているのか？」

「そのギルドの公認であり黙認されているんだよ俺の言動は。ギルドの真の王の認可も得ているから認めてもらわなくても構わない」

何とも横暴なと思うもこれからも何度も飽きずに進行してくるならば、どのみち終止符を打つにはいつかどうにかしなければならぬ。結果的にそれは遅かれ早かれなのでオラリオはある意味ラキアに迷惑を被ることはなくなっただろう。リヴェリアはそう思慮しながら話に出てきた貴族のことを口にする。

「クロツゾとはあの魔剣鍛冶師の一族であったな」

「そ、全員へファイアストスの眷族にしてもらった。で、王族の一人は何故か冒険者になることが念願だったようで俺を介してガネーシャンとここに入団してもらった」

「その王族の者は変わっているな。冒険者になりたがっていたとは」
「なんか、苦労人ぽかったんだよ。自由気ままに生きて冒険をする冒険者達が羨ましかつたみたいでさ。オラリオに連行する俺に何度も感謝の言葉を言ってくられたときは戸惑ったよ」

喜ばれることは何一つしていないはずが、捕虜の一人は逆に諸手を上げて大喜びする。そんな光景を脳裏に再生して浮かべる一誠は息を吐く。

「んじや、俺はギルドに行ってくる」

「例の件でか」

「ん、人数も十分すぎるほど集まったしロイマンも納得してくれるだろう」

改めて再度、今度こそはロイマンに主神なき無所属の「ファミリア」結成の認可を貰った。団員の名前の項目を見て頭を抱えられたが印を押してもらい晴れて一誠は自分だけの「ファミリア」を得たのだった。その事実がギルド内に直ぐ伝わり職員達は心底から不思議がった。

「神様無しでどうやって【ファミリア】を作れる？」

の疑問が一致する。ローズもそんな疑問を抱く一人であり何時ものように茶菓子を持参、相談という名目でやってきた一誠に問い質した。

「ねえ、どういうことなの。主神がいない【ファミリア】って。いないんじゃない？無所属扱いされて【ファミリア】にならないし、実力があっても絶対にそんな派閥は認められないわよ」

「教えてもいいけど、誰にも言わないと誓えるか。ロイマンには口止めされてるから」

「……ヤバいわけ？」

「ヤバくはない。単にあまり広められたくないだけだ。オラリオに情報が漏洩したら面倒だからさ」

危険ではないなら、大丈夫だろう。もしもの時はまたこの男に……という気持ちを胸の内に隠しながら首を縦に振って肯定するローズの前に一枚のプレートを置かれた。何これと怪訝な目つきで確認した次の瞬間。プレートに記されてる「ステイタス」の意味を悟り大きく目を見開いた。

「ちよ、これどういうことなのよっ!？」

「見ての通りそのままだ。そういうのを製作しているんだよ。だから神がいなくても【ファミリア】は成り立つ」

「そ、それも含めてこのでたらめな能力値アビリティとスキルの数は何なの!？提示されてると全然違うじゃない!」

「いや、お前……自分でもおつかないものをそのまま打ち明かすことできるか？」

——できるわけがない。何も考えずそんなことは明かすなんて躊躇もする。神妙な顔で淡々と固まるローズに指を立てながら話しかけ続ける。

「ギルドにはこんな異常な塊をおいそれと教えるなんてできない。俺が転生者なんて勘違いされるかもしれないし、何より神々と冒険者達が色々な意味で騒ぎ出すに決まっている」

肯定する他ない。余計な騒ぎを起こしても意味がないし面倒事な

どしたくもない。ならばどうするべきなのかはローズも思いついてしまう。敢えて偽装工作をする他ないと。

「……そうね。判断は間違つてないと思うわ」「そうだと思いたいのが心情だ」

プレートをと元に戻し仕舞いながら吐露すると、「そうだ」と思い出しように口を開き出した。

「実践するのはまだ先だけど『異世界食堂』で新しいことをする予定だ。ローズも利用してくれると嬉しいな」

「なに？店で作つた料理を持ってきてくれたりするわけ？」

「んー、仮にそうだと言つたら？」

「無理でしょそんなの、と言いたいところなのだけれどあなたの奇抜な考えはいつも成功しているからできるのでしようね」

そんな物言いに苦笑いする一誠はローズの尻尾をモフると手の甲をつねられた。

「変態」

「モフモフできるなら変態呼ばわりされても構わないな」

「どうせ他の獣人の女の尻尾も触れてるんでしょ」

「老若男女問わずだが？尻尾や耳が触れられるなら誰だつて触るぞ。ギルドの職員でもな」

「——危険人物一覧に載せるわ」

半分本気で半分冗談で言うローズにまた苦笑する一誠はごそりとポケットに手をつ突っ込んだ。

「それは困るな。しようがない、なら——心残りがないように俺は変態の極致を至るしかないじゃないか」

ジャキンツ！と指の間に挟む毛並みを整えるための小道具を見せてつけられ、顔を強張らせるローズは数十分後——同じ女性職員達から羨望の声をかけられるほど綺麗で艶やかな髪と尻尾を手入れされてしまった。当の本人は顔を真っ赤にしてとても気恥ずかしがっていたが。

「ローズ、またあの異世界の冒険者に可愛がられたのですね」

「か、かわつ!?ち、違うわよ！」

薄い紫の長髪のエルフの女性職員からの指摘を受け食って掛かるが周囲の女性職員達から黄色い声上がる。

「ローズローズ、私にもあの人を紹介してよ。今のあなたの髪と尻尾、同じ獣人としてとっても綺麗で羨ましいわ」

「それにいつもいつも甘い匂いをするけど、デザートをご馳走されるんでしょ？ずるいわっ」

「くっ、何故あの時の私は断ってしまった……！」

今や上級冒険者の仲間入りの期待の星、異世界から来た異邦人でもあり『異世界食堂』と異世界の料理を振舞う店主。そしてオラリオに多大な貢献をしている人物としてもギルドでも彼の者の話は絶えない。付き合いたい、恋人にしたいランキングで不動のトップを誇っているフィンに匹敵する人気ぶりであることをフィンを始め一誠も知る由ないでいるが。

「お前たち、何を騒いでいる。仕事中だぞ！」

騒ぎを聞きつけやってきた犬シアンスロープ人の青年の厳しい叱咤に体を硬直し、蜘蛛の子が散る様に慌てて自分の持ち場に戻る。ローズも当然その一人であったが、ふとその青年を見て違和感を覚えた。

「班長、聞いていいですか」

「なんだ」

「妙に髪と尻尾が手入れされているんですね。彼女ができたんですか」

獣人は己の体の一部でもある尻尾の手入れを欠かさない。手入れをしない獣人もいるがローズの上司にあたる犬シアンスロープ人の青年は手入れをする方なのだろう。それだけならば別段気にしないが、手入れの入念さが異様に違う気がした。なんというか、自分の尻尾のようにフワフワして綺麗すぎるのだ。上司は潔癖な獣人だっけと内心小首を傾げると彼はローズの臀部あたりから生えてる尻尾の手入れぐらいを見て、何かを察したのか不自然なほどまで視線を逸らした。

「仕事に関係のないことだ。持ち場に戻れ」

「……」

話を半ば強引に切り上げ、ローズに尻尾を見せながら持ち場に戻る

上司を「まさか……ね」と脳裏に真紅の髪の方が一瞬過つたが、そんなことはないだろうと否定して仕事に戻った。

ギルドから帰り道の途中、白昼堂々と血走った目で大通りに歩いてきた一誠に赤髪のアマゾネスが襲いかかろうとしているようとは露知らずに。

爽やかな朝を迎えた「ガネーシャ・ファミリア」は最近うきうきと入団したばかりの団員の紹介を経てまだ日が浅い時、爆弾の導火線に火がつけられた。朝早くからガネーシャの暑苦しい声を聞いて今日も変わらない一日を過ごすつもりでいた団員達は耳にした。

「ガネーシャの超・有能な子供達よ！俺から報告があるゾウ！」

どうせ突拍子のないことを言うかしよとするとする報告なのだろうと思いつつも主神からの神言に耳を傾けた。

「我らの団長、シャクティと妹のアーディは無所属【ファミリア】の団長兼『異世界食堂』の店主イツセーと婚儀をすることになった！皆、二人を心から祝福してほしい！」

……朝から何を言
い出すんだこの主神は？
『……』

団員達一同は無言でガネーシャを取り囲み、揃って笑みを浮かべる。ただし、怒りのマークを付けながらだった。

『朝から冗談なことを言わないでください！』

「いや、本当だ」

当の本人が肯定の発言を投下したことで導火線についていた火が爆弾に着火。

「私たちはイツセーと結婚をする事に決めている。彼が命を代償に妹を蘇らせてくれた恩を報いるために」

「派閥同士の問題も起きない。今の彼はどこにも派閥に入っていない状態だから結婚をしても争いは起きないし、生まれる子供は我々の【ファミリア】の人間となる」

「ガネーシャも私の心意を許してくれている。お前たちは反対するか

もしれないが私の意志は変わらないことを知ってほしい」

着火した爆弾は何ものにも爆発を止めることができない。驚愕と悲鳴が混じった絶叫が「ガネーシャ・ファミリア」のホームから木霊がするほど発せられた。どこぞの馬の骨——ではないが自分達の知らぬ間に団長が恋愛をしていたという認識が芽生えたところで問い詰めるのは必然的だった。

「団長、あの男と付き合っていたというのですか!？」

「いや、一度たりとも合瀬などしていません」

「ならなんで結婚をすることになったんですか！」

「私がしたいからだ」

「そんな理由で!?!もつと相手のことを知るために恋愛もしないでいきなり結婚だなんて!」

「結婚した後でも知ることはできる」

ダメだこの人、相手のことが心底から惚れてるんじゃないやなくて、極端すぎる!相手とこうすればいいという考えでしか頭じゃないんだ!

「団長、相手は団長と結婚をする気ですか」

「ああ、ご両親から許可を貰っている」

そこに新郎の意志が組まれていなかったことに何人氣付いただろうか。質問をした女性団員は気づいた一人として頭を抱えだす。

「教えてください、あの男のどこが好きになったんですか」

「好き……か。特にないな」

「なっ……」

啞然するしかない。好きでもないならなんでそこまで結婚をする気にいるのか。婚期を逃したくないから?それとも弱味でも握られる?信じられないものを見るとシャクテイが淡々と述べた。

「正直、私自身は恋愛に疎いと知覚している。だが、側にいたい。何故か知らないがあの男を目にするといつも視線が追いかけてしまう。それが興味深々だからか好意だかはわからないが、気になる男だという点は間違いない。そしてイツセーは女性を不幸にしない。私はそこを信頼して結婚をする事に決めたのだ」

皆に断言する姿勢と言葉は真つ直ぐで団員達は言葉を喉の奥に仕舞い口を閉ざした。真つ直ぐな瞳で見られて真摯に言われてしまえば反対の意を述べるのもし辛くなる。

「彼を信用している私にお前達は信用できないならば、私はそこまで信用に足りない者だと仕方がないがな」

その一言で殆どの団員が何も言えなくなり、シヤクテイに説き伏せられてしまった。

——が、シヤクテイを心底から尊敬している一部の団員が剣呑な雰囲気で彼女の話の途中からいなくなっていたことに誰も気付かなかった。その結果……。

ギルドを後にして中央広場セントラルパークに進み北西へ足を運んだ冒険者通りの往来のなかで真紅の長髪の男に襲撃を仕掛けようとは露にも思わなかっただろう。

背後から斬りかかってきた相手に対して素の手刀で防ぐ。耐久のアビリティの数値∞は人体にここまで影響を及ぼすのかと内心呆れを通り越し感嘆する。振り返りざまにもう片方の手で相手の手首を掴み引き寄せ、得物を防いだ手で首を鷲掴みにして石畳の地面に叩きつける。その直後に得物を振るう冒険者達の一撃を体で受け止めながら言う。

「そんなに殺気立って攻撃してくるなら……返り討ちに遭い殺されても仕方がないな？」

ローズと同じ赤い髪に日焼けしたような褐色の肌を晒す戦闘民族アマゾンネスの女戦士と数人の象神の徽章エンブレムを身につけてる冒険者へ語り掛ければアマゾンネスが張り叫んだ。

「異世界人、姉者から手を引け！」

「姉者？」

「シヤクテイ団長のことだ」と教えられると理解して……アマゾンネスを解放するや否や疲れ切った顔をして肩を落とす。

「お前らは知らないだろうがなあ……俺だってシヤクテイと結婚

なんてする気もなければしたくもなかったんだよ」

「だったらー！」

「口で言って止まる主神か？」

「……」

何かを言おうとする彼女に言葉を遮るとぐうの音も出さなくなつた。あの男神は神格者であるが、暑苦しく騒がしく突拍子もなく何かを仕出かす。そして眷族を振り回し面倒事も起こす面倒臭い神でもあることを一誠よりよく知っているので言い返せない。

「凄く強い決意で結婚を臨むシャクティをお前らは口で止められたか？ いや、ここにいてことは直接俺を説得するつもりでいたんだろうが、俺はお前らと同じ否定してた側だったんだぞ」

「……」

「シャクティは妹を蘇らせた代償に削った命の分を償いの意味を兼ねて結婚をしようとしている。俺はそれはしなくていいと、そんな償いの為に結婚はしたくないとはつきり拒絶した。——だというのは強い決意と意思を抱いている女を蔑ろにするのかなんて言われたら、お前からできると言えるのか？」

……とうとう彼等は意気消沈してしまう。

「言っておくけどあいつのことは嫌いじゃないからな。問題なのはあいつの気持ちだ。結婚する理由が償いなんて他の連中だったらどうするのかわからないけど、俺はそういうのは嫌なんだからな」

「もっと強く否定すれば……」

「そうなるの実力行使になるぞ。それはお前らが許される行為なのかよ。」

「ぐ……」

「切り切った勝負をして結婚を白紙にしようなんて平等じゃないし、シャクティを強姦してもして恨まれる真似もしたくもない。だとして話し合いで決め合うしかないはずなのにこつちが説き伏せられてしまう。……俺に拒否権なんてなかったかもしれないよ」

深い溜息を吐いて踵を返す。

「もうこうなつた以上はどうしようもない。シヤクテイを全力で愛して幸せにするしかないんだからな」

「そんなこと、お前にできるのか……」

「できないできないの問題じゃない。しなくちやならないんだ絶対に。それが結婚する人たちの思い合いだろうが」

そう言い残して去ろうとする一誠の足を停めさせる制止の声。何だと思ひながら振り返ると、彼女はいつの間にかお互いの鼻先がぶつかりそうなぐらい距離を詰めて睨みつけてきた。

「私はお前の事を知らない。お前が本当に姉者を不幸にせず幸せにできるのか確かめない限り信用もしない、認めもしないぞ」

「認めないならお前があゝの二人を説得して結婚を白紙にしてくれるのか？」

「それができたらこんなこと言わない！……お前、姉者と暮らすつもりなのか」

「俺はこの世界で誰かと結婚なんてしたことがないから結婚生活はわからない。【ファミリア】の団員と無所属ムソルの人間が結婚したらどうなるかこつちが訊きたい」

逆に訊き返されてアマゾネスは口を一文字にし、他の団員達も口を閉ざす仕草に首を傾げた。

「知らないのか揃いも揃つて？最大派閥なのに誰一人結婚してる団員はいないのか？」

沈黙は是なり。黙り込む彼らに呆れ混じりの息を吐く。

「……冒険者って生涯独身を貫く方が珍しくないのか？」

「そんなこと私が知るか！」

「んじやあ聞くなよ。俺も知らないんだから。ていうか、仮にシヤクテイが俺のホームに住み着くことになったらなんだってんだ？」

「言つただろ。確かめない限り信用できないってよ。お前が姉者を幸せにできるかどうか調べてやる」

怪訝に「どうやってだ」と問うと彼女は胸を張って当然のように言った。

「お前のホームにしばらく居座らせてもらう。拒否権はないからな」

「——いや、拒否させてもらうから。正義の味方の派閥がそんな傍若無人みたいなこと許されると思ってるわけ？」

「だったらお前が【ガネーシャ・ファミリア】のホームに——」

「お前、ガネーシャの暴走を更に拍車かけたいのか」

「ガネーシャが何だって？」

噂をしてれば何とやら、一誠の真後ろから象頭の仮面をつけた浅黒い肌に取り締まり鍛えられた長身の体、黒い髪 of 男神。そして藍色の髪 of 麗人のヒューマンを引き連れて一誠達の珍しい組み合わせに不思議そうな目で認知してた。

「イルタ、どうしてここにいる？」

「あ、姉者……」

「それにどうして武器を手をしている」

イルタと呼ばれた赤髪の女戦士はその指摘に思わず背中に隠してしまい、その怪しい仕草でシャクティに疑惑を抱かせてしまった。彼女の瞳は一誠の上衣が刃物で切られたような裂け目を捉え厳しく目を細めた。

「イツセーに攻撃したのか」

「そ、それは……っ」

シャクティの問い詰める眼差しと口調。見られては不味い場面のところ居合わせてしまい心底居心地が悪そうにイルタは顔色を悪くさせる。

「まさかだとは思いますが、私とイツセーの婚儀を反対するためにイツセーに襲い掛かったのではあるまいな」

「……」

「——イルタ」

事態の追求しかかるシャクティはイルタに迫る。もしも己の言葉が正しかったらイルタの行いは逆恨み、副団長でありながら理性を抑えれず暴走したならば厳しい罰を与えなければならない。

「ん」

一誠の前に出たところで片を叩かれる。振り返り一誠を見ると、大通りの脇へガネーシャ諸共連れられるとかくかくしかじかと説明を

聞かされた。曰く、話しかけられシャクテイとの結婚について話し合っていると一誠の思い付きで∞の耐久を確かめさせてもらったとのこと。服の傷はその試しでできたことだから悪意や怒りによる攻撃の意でできたものではないとも。だが、納得するシャクテイではなかった。ガネーシャは腕を組んで黙って二人の会話のやり取りを見守ってる。

「庇っているのか」

「いや、庇う必要あるか？ 仮にあいつが怒って攻撃されても見ての通り、傷一つもつけられないから問題ないし」

「そういう問題ではない。私の仲間がお前に攻撃したこと自体大きな過ちを犯したのだぞ」

「そこはお互いの気持ちの問題だ。お前が大きな過ちだろうと俺にとっては些細な問題だ。少しも気にしていない」

だが、と言う彼女の口を人差し指で触れて優しく抑える。これ以上の話の平行線は無意味だと察し諭す風に言葉を紡ぐ。

「全員が全員、お前の為に思って結婚を賛成するはずがない。心底から尊敬しているお前の為にどこぞの馬の骨ともわからない相手に話しかけて知らなくちゃ納得もできないだろ？ あいつらはまさにその類だ。ガネーシャの眷族に悪意を持つ奴はいると思ってるのかお前は？」

「……それは」

「ないなら信用して黙認してくれ。あまり大事に発展するようならこつちから遠慮なく言わせてもらう。ガネーシャ、それでいいな」

「うむ、イツセーがそう言うならば俺もそうしよう。だが、本当にいいのか。イルタを許して」

「個人的な逆恨みだったら軽くお仕置きをするつもりだったがな。訳を聞いて許す許さない以前に俺は気にしないでいるつもりだ。それでも納得できないならシャクテイに貸しひとつだ。借りを返してもらうぞ？」

シャクテイはそれでひとまずだが貸しを作ることで納得してもらい、イルタ達に対する咎めもない方向で問題は収拾した。三人は立ち

留まってるイルタ達の下へ戻る。

「イルタ、ホームに戻れ」

「姉者……処罰は」

「……お前たちに対する咎めはない。何より私はお前がイツセーに襲ったところを見ていない。ならば当事者の元【ガネーシャ・ファミリア】の団員だった者の話を信用して、お前達も信用することにした。それが団長の務めでもある」

絶句するしかない。攻撃したのは事実なのにシヤクテイは言い包められたのではないかと疑ってしまいう程だ。自分達を鼻屑している？それともイツセーが説得した？どうして自分なんかのために？分らず苦悩するイルタは呼ばれた。次の瞬間、ゴンツ！と拳骨を貰った。

「~~~~~っ!?!」

「だが、どんな事情でも私の家族の恩人に攻撃の意を示しただけでも赦されない行いだ。これはその些細な体罰だ。しっかりその痛みを感じて自室で自粛しろ」

「あ、姉者……っ」

「まったく世話が焼けるのはガネーシャだけで十分すぎるというのに、義妹まで世話を焼かされるとは」

尻目に涙を溜めるイルタにこの場を去る催促をし、自分は一誠に振り返って彼の手を握り絞める。

「では行こうか」

「は？どこに？」

「適当に色んな場所を歩こう。神の言葉で言うデートをしよう。何せ私は恋愛には疎いから夫婦らしいことすらわからない。お前に手取り足取り教えてもらわねばな。ああ、結婚後はどこに住まうか話し合うのもいいだろうな」

「頑張れシヤクテイ！そのままイツセーのハートをゲットしてこい！」

「ふざけたこと言うなっ！後でその仮面を割に行くからな！」

親指を立ててサムズアップ、煌めく白い歯を笑みで覗かせるガネー

シヤにそう言いながらシヤクテイとどこかへ歩いて行っていく一誠。
朱色に空が染まる時間帯でホームに戻ってきたシヤクテイの顔は
仄かだが終始微笑みを浮かべ、妹のアーデイに今日のデートの報告を
兼ねてアドバイス、妹にも一誠とデートをさせる腹で語った。

妙な疲労感を知覚しながら見えざるホームに戻った。女性であり
ながらも色恋沙汰が無縁だった麗人とのデートはエスコートをする
ことになり、お互い見知った大通りや店に通い買い物もした。その
際、元の世界にいる家族達ともデートしたことがなかったなど思い返
してしまった。今回の件をリヴェリア達に知らされたらきつと――
――と白亜の城の重厚感がある扉を開けて中に入り、靴を脱いで自室へ
一直線に進む。部屋に入るとテレビアニメ（童話・昔話・お釈迦の類）
に夢中なヒューマンや獣人の少女たちがいた。最近入団したばかり
のアミッドとナーザーも一緒に見ていたので微笑ましかった。

再生されてる映像が終わるまで一緒に見ようとベットに腰を下ろ
すと、^{ナーザー}犬人族がテレビから視線を反らした。反れた視線は一誠に直視
し、腰をあげてベットにいる一誠へ近づけば尻尾を生やす臀部を胡座
を掻いてる脚に落とし対面する形で落ち着いた。

「……………(ナデナデ)」

「……………♪」

優しく頭を撫でられ、感じる手の温もりだけでは満足せず一誠の胸
に顔を押し付けてグリグリと擦り付けつつ埋める。甘えてくる子犬
と彷彿され手を動かしナーザーの背中に沿って川の流れの如く付け
根から尻尾を触れると、少女の体がピクツと震えた。まだ幼い少女に
早すぎる快樂が脊髄に走り、包み込むように両手で触れられると一誠
の服を握り絞めしがみつく姿勢で快感の甘美な刺激を知覚しながら
感じ取る。その刺激を絶え間なく感じさせられれば瞳が濡れ顔が紅
潮して色欲に染められた蕩けている女の貌となり、身体が異様に火
照って下腹部が熱で疼く。

一誠の愛情が籠められた愛撫にナーザーはもう心も体も魅了、虜に
なっていた。心酔とまではなっていないが主神や仲間の次に大切な

存在として少女の心の中に居座っている。埋めていた顔を胸から離して一誠の顔を見上げようとしたら左右の視界の端に金と銀の綺麗な髪が映り込む。そして背後からもナアーザの肩が捕まれ、一誠から遠ざけられると別の銀髪が自分の特等席(?)を奪い苦笑しながら三人の頭を撫でる一誠の構図に、尻尾を逆立ててナアーザの負けん気が発動した。

「——ところでアミッド、聞きたいことがあるんだが」

「はい何でしょうか？」

一誠の争奪戦が勃発から少しして金色の羽毛の絨毯の上で穏やかな寝顔を窺わせるアイズ達。逞しい腕や膝を枕代わりにして寝るテレビを見ていた春姫達。寝転がる一誠からの質問に相槌を打つアミッドは男の腹の上に覆い被さるように横たわっている。

「製薬以外何もすることがなくなつたから、他に何かしたいことはないか？」

「そうですね……特に現状は不満などありませんが。他に何かしたいことと問われると……【ディアンケヒト・ファミリア】にいた頃と同じ環境で働いてみたいです」

「そういうことだったらあの男神に話をつけてやろうか？多分、以前のように治療院に働かせてくれると思うぞ」

と言ってみる一誠の提案に神妙な顔で思考の海に飛び込むアミッド。同じ環境の中で働きたいならそうする方が一番いいだろう。しかし、完全に一誠の派閥の団員となっている意識をみると、その一番が本当にいいのかと思ひ改めてしまった。考えが決まったら顔を上げて一誠の顔まで近寄るとつぶらな瞳を覗かせる。

「……イツセー様。私たち無所属フッリの【ファミリア】の活動内容はお決まりでしたか？」

「活動内容か。んー、商業兼冒険者か？他の派閥と代わり映えのないことしてるつもりだが」

「代わり映えのないことしつつ他の【ファミリア】とは逸脱したことをなさっていることをお気づきで？」

まさかのツツコミに苦笑する。

「まあ、そういうことしてる。もしくはする。それか個々で自由度が高い活動をする内容かな。それで、決まったか？」

「個々の自由……では、私が独自の治療院を持つとするのも自由でしょうか？」

「ああ、自由だ。俺のように自己責任でならな。何事もやるなら責任を持たなきゃいけないし持つ必要もあるぞ？」

承知の上ですと返してアミッドの中であることをしようと方針を定めた。定めたからには、やるからにはどうしても必要なことができてしまう。その為には……。

「イツセー様、私に力をお貸してくれませんか」

「決まったんだな？」

「はい。私も無所属【ファミリア】らしくイツセー様専属の治療師として、自由に活動してみます」

そう言うアミッドの額と額を合わせると、一誠は破顔一笑し釣られてアミッドも笑った。そうしてすぐ一誠は訊いた。「人員は？」と。一人で何かするつもりはないだろうと思慮しての質問にアミッドはこう答えた。

「既に決めております。カサンドラ様とナアーザ様です」

「カサンドラはともかくナアーザか。ナアーザが一方的にお前の事よく思っていない節があるが」

「問題ございません。ライバルなだけですから」

何のライバルかは敢えて聞かない。一誠は既に悟っているからだった。アメジストの円らかな瞳が距離を縮めた。

「今ここで、イツセー様と一つになつてるところをお見せしたらきつとナアーザ様は悔しがるでしょうか？」

「聞かなくても絶対に負けん気を起こすって」

「そうなればまたイツセー様を慕う女性が増えますね」

「幸せ過ぎて皆を愛する加減ができなくなるな」

「私がそれを臨んでいると仰ったら？」

「うーん、昼夜問わず場所も問わず皆を襲いそうで自分が怖い」

「大丈夫です。——私はいつでもどこでも歓迎いたします。あ、お

「仕事中や人前はお恥ずかしいので……」

可愛らしく朱を差して蚊が鳴いたように小さく吐露する少女を意味深な笑みを浮かべて、耳元で囁いた。

「アミッド、知らないだろう？愛し合う人は相手が仕事中だろうと人前だろうと、悪戯目的であつたり背徳感を感じたりするために物陰で愛し合うこともするんだぜ？」

「——っ」

「そうしてまたいつもと違う快樂や快感を人は得るんだよアミッド。」
果実のように紅潮して壊れたオルゴールのように「あうあうあう……」と動揺や照れが入り混じった声を漏らした少女は、実際にそんなことされる想像をして体を火照らせてしまった。

夕食後。一誠のもとに訪れたアミッドは回復薬ポーションに必要な素材と製薬に欠かせない道具、その他諸々を要求したのだった。本格的に治療師ヒーラーとしての活動をする気で、彼女が望む物を残らず準備してもらい受け取ったのは翌日だ。一誠はその際に尋ねた。

「自分の店は持たないのか？」

「出来れば望ましいのですが、現時点で場所を確保できるのはかなり難しいと思います」

「あー、そうだよな。俺なんて探す暇もなく手に入っちゃったから、その大変さはまだわからないな。仮にどこが一番好ましいか？」

「……そうですね」

顎に手をやって活動するために一番好ましい場所を選定するアミッドは考え込んだ。重軽傷の患者がすぐに駆けつけ診られる場所はどこなのかを。少しして決まった結論が口にされた。

「バベルの中でしようか」

「治療師ヒーラーにとって理想的で合理的な場所だことで」

「ですが、あの場所にはギルドと契約しているバベルの治療師ヒーラーがおりますから、私の出番はないでしょう」

「ん？そんなのいたんだ？」

知らなかった事実にあみッドから意外そうな目で見られた。

「はい、他派閥の治療師ヒーラーがギルドに雇われる形でバベルに控えています。異常事態イレギュラーに遭った冒険者達が戻ってきてすぐに治療できるよう」

「となると、あみッドが活動するべきってダンジョンの中になるか?」「かもしれないんですが、私の手の届く範囲でしか患者を治せないことに歯がゆい思いをします」

「ダンジョンの中は広すぎるから探しようもないしな。うーん、ダンジョンの1階、階段の直ぐ側だったらどうだ?あそこなら冒険者達が必ず足を運んでくるから直ぐに診られると思うぞ」

天啓を得たように納得した風に首肯した。しかし、提案した本人は少し思うところがあつたようで悩んでる顔で声を投げた。

「だけど、明るくない場所だ。治療するために場所を問わないのは当然だが、あみッドには明るい場所であってほしいもんだがな」

「お気遣いありがとうございますイッセー様。しかし、私は治療師ヒーラーです。明暗に問われず患者を救うことができるならば場所など些細な問題です」

「ん、そうか。あみッドが構わないなら何も言わんよ。もしも冒険者通りで治療院を構えるなら、ミアハとディアンケトと商売敵になりそうだったが」

「ディアンケト様がご迷惑をおかけに来そうですので西区の方は断念していました」

確かに元眷族に要求してきそうだよなあ……と感慨深く思慮する。となれば一誠はあることを提案する。

「あみッド、ダンジョンの1階層もそうだが、18階層にも店を建ててやろうか?」

「いいんですか?」

「ああ、特に18階層には俺もあることをしたくてな。丁度いいかなと思ってる」

どんなことをしようとしているのかまだ教えてもらえないが、きつと自分の想像を超えるようなことを当たり前のようにする気なのだろう

う。そんな予感がするアミッドはお願いしますと首肯した。

その日の冒険活動は休み、店も非番の日が重なった穏やかな気候の日。ダンジョンへ早速下見に行こうとメインストリートに足を運んだ。

「おつ、店主。今日は非番なのか？」

「ごんにちは、店主。また食べに行きますよ」

声を掛けてくるヒューマンや亜^{デミ・ヒューマン}人達に相槌を打って擦れ違っていく。西と西南までは『異世界食堂』の店主として知名度が高くなつたことを実感し、今度はどんな方法で店を盛り上げようと考えた。あれもいい、これもいいな、と。頭の中で考えを張り巡らしながら誰かと擦れ違った。

「やあイツセー」

店主ではなく名指しで呼ぶ者は誰かと振り返ったら、異国の王子と思わせる服装を身に包む金髪の男神デュオニユソスと護衛の団員が視界に入る。

「ディオニユソスカ。久しぶり」

「久しぶりだね。今日は一人なのかい？」

「ちよつとダンジョンの下見にな。まあ、直ぐに終わることだけど」

「つまり、それほど急ぎではないということだね。では、ここで会ったのも何かの縁だ。私のホームに来ないかな？」

他派閥の団員を誘う他派閥の主神の神威に首をかしげる。

「行つてもいいのか？」

「構わないさ。君には感謝しきれない恩があるからね。それにゆっくり話もしたかったのも事実だ。君の為に料理を振舞うよ。『異世界食堂』の料理には劣るがね」

「おー、そう言う意味ではディオニユソスが初めてだ。あ、盛大にしなくていいからな。そっちの「ファミリア」で食べてるような食事でないぞ。あと、ワインは飲めない。俺、飲み過ぎると記憶が飛ぶほど大惨事を起こすみたいだから」

「前者は解った。後者は一体何をしでかすのか気になるところだが、そう言うなら【ファミリア】のために提供を控えさせてもらおう。少し残念であるが」

甘いマスクで微笑むディオニュソスはイツセーを連れ南東へ足を運び足す。護衛の団員には一足早く戻って貰い準備をしていく間に会話の花を咲かせる。辿り着くと立派な館がイツセーの視界に入り込む。男神に誘われる形で中に入り、見つけた団員に椅子とテーブルを外へ設ける指示を出す。時間もかからず館の敷地内の庭に円卓とそれを囲む二つの椅子が用意されて座る二人。

「こうして直接二人で話すのは二度目か。あの27階層の、フィルヴィス達を救ってくれたことは本当に感謝している」

「あの時は本当に偶然だった。フィルヴィスは運が良かったまでさ」

「蘇らせた私の子供達の恩もある。何かお礼をさせてくれないか？」

「そっちのことができることでもいいさ。秘蔵のワインをくれるなら美味しいビーフシチューを作れるし」

大切な団員達の命と比べるまでもないと快く了承した男神。目の前の子供は欲深く自身の【ファミリア】や団員にまで要求してこないのは、己なりにイツセーという人格を把握している。

「私の一番のお気に入りワインを用意しよう。昔、ロキが飲んだという千年もののワイン程でもないかもしれないがね」

「豊穡とブドウ酒、酩酊の神であるディオニュソスのお気に入りワインの方がいいと思うけどな」

口にしたイツセーの単語に不思議そうな目で向けるようになった。

「それは君の世界にいる私と同名の神のことかな？」

「ん、そうだ」

「なるほど。では、こうして話し合う機会を無駄にしないため君の世界の私のことを詳しく教えてくれまいか？異世界の神々のことは私も知りたかったところだ」

「別にいいけど、色々と衝撃的な内容も含まれてるから凹まないでくれるなよ」

語ることは吝かではない。寧ろ嬉々とディオニュソスの反応を見

ながら口を開いたのだった。語る最中。運ばれる料理を食べながら、長々と教えられた。ディオニュソスはもう一柱の自分を知って、自分のことのように受け入れニヒルに笑った。

「異世界のディオニュソスも私と同じなところがあるか。新鮮さや親近感を覚えるな」

「誰かを殺させたところもか？」

「ふっ、子供達の前でその答えは控えさせてもらう」

「じゃ、オリュンポスの座を譲ってくれたヘステイアには？」

「尊い存在として感謝しきれない」

「ぶっちゃけ。この世界のヘステイアってどういう女神？」

「神々からはロリ神、ロリ巨乳、グータラ駄女神と言われて……イッセー、君の方が物凄くシヨックを受けているようだが大丈夫かい。絶望を目の当たりにした顔になっているぞ」

それはこの世界のヘステイアに絶望した瞬間だったからだ。

「……俺の知っているヘステイア姉さんが、ロリ巨乳の神、グータラ駄女神……ふ、ふふふ……ふふふっ」

「えと……あの、ディオニュソス様」

「今のイッセーに話しかけない方がいいかもしれない。少し声をかけないでいよう」

何が可笑しいのか不気味に笑い出すイッセーに声を掛けようとした料理を運んできてくれた女性団員達やフィルヴィスを宥めるディオニュソス。しばらくして気を取り戻したイッセーは溜め息を吐いた。

「……色々知りたくない事実だけど、オリュンポスの一柱の座を譲り渡した事に関してはディオニュソスと同じ尊い行いだと思っている」

「ああ、彼女は素晴らしい神だよ。それをわかってきている君に心から嬉しく思っている」

「俺の世界にいるヘステイアのお姉さんに聞いたからなー。大切な席を譲ってよかったの？って。そしたら『私なんかより彼の方が立派だから』って教えてくれたんだ。彼女の言葉通り、ディオニュソスは立

派な神だからヘステイアのお姉さんの言葉は正しかった」

この世界のヘステイアとディオニュソスのことは気になつてもいた。と口にし、それがわかった一誠は口元を緩めた。

「この世界の神は神として見受けられないけれど、行動次第で神々は尊い存在だと認識している」

「それは、どうしてですか？」

「娯楽の為に天界から降臨してきた理由だからだ」

フィルヴィスの問いに真顔で断言した。何と言えばいいのか神妙な面持ちになつた彼女の主神は「そちらの神々は下界に降りないのか」と尋ねた。

「降りてくるぞ。だから神話があつて人類から畏敬と畏怖、敬意を受け崇められているんだ。だからディオニュソス達しか知らない神々の名前と関係性、その昔起こした事も知っているんだよ俺は」

「とても不思議だ。出会つてもいないのに、神々が仕出かしたことを直接目の当たりも聞いてもいないのに一体どうやって？」

「語り継いでいるからさ。歴史や口伝に書物なので人の目や耳に知らせられていく。それが何千何万何億年も後世にも伝えられてな」

「……語り継がれる」

ディオニュソスは晴天を仰ぐ。悠久の時を経ても語り、語られる人の想いは受け継がれることは並大抵のことではない。決して忘れてはならない、絶やしてはならないことをどんな方法でも後世に遺そうとする人の意志を男神は強く尊く思えた。

「私達神々と君の世界の神々の違いが、分かつた気がするよ。我々は人類に崇められる位置に在るべき存在だともね」

「今更だろ。崇められてなければフィルヴィス達から尊敬されてないし」

「それは、誇つてもよいことなのかな？」

「お互い愛し愛される神と団員、それでじゅーぶん、答えになつてるよ」

不敵に笑う一誠の答えに傍らにいる己の団員達へ目を向け、ディオニュソスも微笑んだ。

「——これからも私の為に力を貸してくれ。愛しい眷族よ」

「二はい、ディオニュソス様」二」

フィルヴィス達が真つ直ぐな声で返事した。ほんと、愛されているな——と感想を思いながら最後の一口も食べきったのだった。

「本当に秘蔵のワインでよいかい？君がした偉業はワインだけで済まされることではないのだが」

「じゃあ、仮に人一人分を甦らすのに百年分の命を代償に甦らしたんだ。復活した『ディオニュソス・ファミリア』の団員達の命の分に見合うお礼をしろ——って言ったら、ディオニュソスはどうやってお礼をするんだ？」

「子供の復活に百年分の命……？イツセー、その話が本当だとすると君の寿命はとづくに無くなっているのではないのか？」

「俺、半永久的な不老長寿だから千年や一万年分の命ぐらい削っても全然平気なわけ」

あつけらかんと述べられてディオニュソス達は啞然の面持ちで言葉を失った。とても嘘を言っているような感じがしない。何よりフィルヴィスの目の前で死者を蘇らせ、ディオニュソスも死者を仮に甦らすことができるならば代償なしでできるものではないと思っ
ている。

「不老長寿、エルフみたいな種族だと？」

「純粋な人間だよ。ただ、不老長寿なのは極一部の一族の人間だけだから一族全体ではないんだよこれが」

「異世界特有の未知、か……本当に我々の常識を上回ることが多く存在しているのだな」

驚嘆の念を言葉にして漏らし、保留にしていたお礼は数百年以上の命の対価に見合うものではないといけなくなった。それこそ、「アストレア・ファミリア」やシャクティと妹のアーデイ等が一生を捧げるつもりでなければならぬほどだ。ディオニュソスはどうしたものかと悩み問うた。

「イツセーの削った命に見合うものとは参考に聞かせてもらえないかな」

「俺に一生を捧げ奉仕する、か？俺もよくわからないどころか、そんなことしなくてもいいって言っているのにあいつらは……」

苦い顔をし出して憂う一誠の反応にもしやと察した。自分達と同じ境遇になった者がいるのだろうかとかと口を開いた。

「……他の子供達にも命を削って蘇らせたのか？」

「ああ、アストレアとガネーシャの団員達をな。理由の詳細は省かせてもらうけどアストレアの方は俺に一生や全てを捧げる姿勢でいて、『ガネーシャ・ファミリア』の団長は妹を甦らしたら削った命の対価として俺と結婚をするつもりでいる。実質押し掛け女房だぞ」

「……私達の知らないところでそんなことが。よほど君に感謝をしていると見受けれる。ガネーシャの子供に至っては責任感が強い故にそうするつもりでいるのだろう」

と、率直に思ったことを口にするディオニュソスに微妙な顔で言い返した。

「感謝のお礼に恋愛や交際に好意を高々と飛び越えていきなり結婚しようと言われたんだぞ？それは嫌だと言ったら、女の覚悟をないがしろにする最低の男に成り下がるのか？って釘も刺されて反論も異論もできなくさせられて……はあ」

「まあ、今は無所属フリーの派閥だ。恋愛や交際、結婚はできるだろう？」

「できるけどよ、やっぱりなあ……」

頭を抱え先を憂う一誠を、こればかりはディオニュソス達は同情を禁じ得ない。

「元の世界にいる結婚した彼女に申し訳がないのか？」

「もう終わったことだけど、一度元の世界に戻って他の家族達と結婚をしたかったのが本音だ」

「ふむ、いわゆるハーレムか。複数の花々を囲い愛するのは悪いことではないよイツセー」

甘い微笑でそう言った瞬間にディオニュソスを見る目が厳しくなった眷族達。それを目の前で見てしまっただけで言わぬが吉と判断して見えて見ぬ振りをするのだった。

「しかし、君の命の対価に対して……私の子供達の一生を捧げる

ことで成立するというわけか」

「だからそれが嫌で秘蔵のワインで良いって言っているんだ。フィルヴィス、仮にお前が死んで蘇ったとしたら。俺に感謝こそすれど一生や全てを捧げたくないだろ？」

「それは……」

「俺はそうしてもらうつもりで命を削ってまで甦らそうとしているんじゃないんだ。勝手にそうしたいからそうしたいだけだ。感謝の言葉だけで充分なのさ俺は」

「だが、膨大な金でも命を買うことができないようにワインで数百年分の命を賄うことなどできるはずがないも道理だ。勝手にしたからと言ってもそれではあまりにもお粗末すぎる。自分の命を軽んじているつもりかい？」

「命に軽重何て考える必要があるのか？ いつか死ぬ運命さだめなのに」

諭すディオニュソスに真正面から言い切る一誠。

「俺はフィルヴィスに必死で乞われたからお前の団員を甦らせたただけだ。そうしたからお前達は満場一致で大喜びをした。そして俺に感謝をした。今更ながら命の事で云々語ってもしょうがないだろう？ お前らはただ、今を生きることだけ考えて死ぬまで未来を突き進めばいいだけだ」

「ああ、でも。またお前らの誰かが死んだらもう復活はしないからな。そこまで俺はお人好しじゃないんで自力で生にしがみつき抗えよ」と付け加える一誠の言葉を受け止めて男神は頷く。

「わかった。だが、これからも良き関係を築いてくれるかな」

「勿論。こちらからもお願いする。まだまだ色々聞かせてもらおうよディオニュソス」

そう言葉を残して音もなく一誠は——フィルヴィス等に邪眼の能力を発動して停止した。それを見たディオニュソスは目を張った。「イツセー……」

「言っただろ？ まだまだ色々聞かせてもらうって。こっからがフィルヴィス達には聞かせれない話題になるからな」

全てを見透かすような眼差しを哀愁の色も滲ませてディオニュソ

スにこう言った。

「ディオニュソス。——この世界で狂乱の宴、オルギアをしようとしないでくれよ」

「っ!？」

「お前の眷族は、フィルヴィス達はお前にとって巫女マイナス……いや、複数形で言うとなイナデスカ。彼女たちは贄でもなければお前の生贄でもないんだからな」

淡々と述べる一誠に対してディオニュソスは沈黙した。いつもの貴公子然とした表情が消え失せ、顔を俯かせるその仕草は一誠に寂しがらせた。

「闇派閥イルヴィスが失せて訪れた平和の中で、真に賢しい悪は静かに闇の中に潜んでいる。今現在オラリオに存在する不安要素はお前だからなディオニュソス」

「……不安要素だなんて心外だイツセー。私は自分で言っただが善き神格者で通っているのだが？」

俯いた顔を上げて苦笑するような乾いた笑い声を漏らす男神に、首を横に振って一誠にとつて決定的な言葉を口にする。

「そいつは無理があるよ。だってディオニュソスの魂は、醜悪な程に真つ黒な色をしているんだから」

「……っ?」

次に意識が戻ると妙な違和感を覚えたフィルヴィス。一瞬、一誠の眼が妖しく輝いたと思えばその先の記憶が全くない。既に一誠もないし空席を前に座ってる主神が、虚空を見つめてる。

「ディオニュソス様、彼は……」

「帰ったよ。君達が気付かないほど空気のように消えて」

「……ディオニュソス様。彼に対する恩返しは……」

「己の全てと一生を捧げたいと思うならば、私は止めはしない。イツセーのホームには他派閥の主神や団員達が住んでいるのだから我々

でも許されるはずだ。だからお前達の好きにするがいい。お前達の行動が彼に対する恩返しに繋がるなら私は全力で応援するつもりだからね」

「大丈夫なのでしょうか？他派閥同士に問題が起きないとは限らないかと」

「ならば、お試し期間としてイツセーのホームに泊まってみるといい。そうだな……フィルヴィス。お前が問題ないか確かめてくるんだ」

赤緋の瞳が瞠目した。なぜ自分が？と疑問がありありと顔に浮かびディオニユソスに少女の心情を読み取られた上でこう言われた。

「私達の中で彼と接しているのは私の他にお前だけなのだフィルヴィス。イツセーに警戒されずしばらく共にいられる適格者はお前しかない」

「しかし、私一人では……」

「ふむ、心細かいか。ではアウラも同伴させよう。それで彼の下でしばらく暮らしてみるがいい」

まさかの「ファミリア」から離れてあのホームに移住せよと命じられるとは思ってもせず、半ば「ファミリア」脱退扱いを受けたフィルヴィスの声は低かった。

「……私の一生を、この身の全てを彼に捧げろとおっしゃるのですか」

「それは彼が一番望んでいないことを今日知ったばかりだろうフィルヴィス？しかし、彼に深い恩を感じているならば行動で返すべきだ。無論、我々も微力ながら恩を返すつもりでいく」

真摯な面持ちでフィルヴィスから一瞥した視線は周囲の団員達にも見回しつつ言葉を発する。

「彼から受けた命の恩は決して私達は無駄にしてはならない。彼はお前達の命の恩人だ。故に我々は彼に対する恩を行動で返さなければ、胸を張って明日を生きずにいる誇りのない下賤な輩に成り下がるのだ。お前達はそれでよいのか」

主神の言葉を受け団員達の顔が凜々しく真剣な表情を浮かべた。

フィルヴィスも27階層で一誠が起こした奇跡を忘れてはエルフの矜持に関わると気持ちを入れ替えた。忘れたら最後、自分は誇り高きエルフではなくなる。そして彼に顔を向けることができな穢れた心の持ち主となる。

「(あの姿を……決して忘れてはならない)」

——後日。

「この度、私達もこのホームに住まわせていただきたく参りました
フィルヴィス・シャリアです。不束者ですがどうかよろしく願います」

「アウラ・モーリエルです。フィルヴィス共々よろしく願います
ます」

『幽玄の白天城』に新たな居候が増えたのであった。家主曰く……
どうしてこうなつたつと頭を抱えるのだがそれは別の話。

その日の深夜……誰一人いないキッチンにガラツと開けた戸
棚の奥へ手の中突つ込んだ影がいた。戸棚から取り出した大きな
容器を見てほくそ笑む影は、それをコップや空の食器も一緒に持つて
キッチンを後にする。

「おや、イツセー様」

出て直ぐに、深夜だというのに城の中を歩いている極東の寝間着、
白装束で身に包んでいる輝夜が目を細めてにつこりと薄く笑った。

「こんな夜更けに何をしておられているのですか？」

「その言葉、そつくりそのまま返すぞ」

「ふふふつ、今宵もまた殿方の肌の温もりをと思ひまして」
妖しく淫靡な雰囲気纏いし少女の黒い双眸は男の手の中にある
ものを見て興味を持った。

「それは一体なんでしょうか？何かを浸しているように見受けられま
す」

「梅を漬けた酒だ」

「梅の、お酒……？梅をそんな風に漬けてお酒を作るのでしょう
か？」

「知らないのか？」

意外だなと思いつながら「飲んでみるか？」と一誠の誘いを受ける輝夜は首を縦に振った。

「【単眼キョウロブスの巨師】には声を？」

「掛けたらこの酒が飲み干されてしまうから誘わねえ。これは俺の秘蔵の酒みたいなもんだからな。本来は一人でのんびりと飲むつもりでいたんだがな」

「それ以前に、イツセー様はお酒は飲めないのだとお聞きしておりますが？」

「絶対つてわけじゃない。泥酔するほど飲まなきゃ大丈夫なんだ。ま、それも気を付けながらだけだな」

自室の部屋に戻らず玄関の方へと赴く。辿り着けば扉を開けてそのまま裸足で外へ出ると、蒼夜に浮かぶ満月が放つ月光が黄金の大鐘楼を照らしていて、二人は近くの芝生の上で肩を並べて腰を落としたりした。

「んー、月見酒をするに丁度いい」

空の食器の上にネットスーパで購入したおつまみを広げて用意していく。見たことのない食べ物に興味津々な輝夜は、一つ摘まんで食べるとカリコリと乾いた音と知らない味に目を丸くする。

「とても、不思議な味……美味しい」

「肴のつまみに欠かせないぐらい、元の世界じゃあ評判の一品だ」

梅の酒、梅酒を漬けてる容器の蓋を外して、数個の梅と酒をコップに移し替えて輝夜に手渡す。

「……(コクコク)」

コップの縁に口唇をつけてゆっくりと味わうように飲んでいく彼女は、途中で息をぶはつと漏らす。

「甘い……これがお酒とは思えないほど甘いです」

「氷を作る際に砂糖も混ぜて凍らせた氷砂糖が甘く感じさせているんだ。これが美味しくなるまでは三カ月も漬けなきゃならん」

「途方もないほど時間は掛かりますのね。この梅はどうするのです？」

「食べるんだ。甘くておいしいぞ」

コップから取り出した梅をひよいつと口の中に放り込み、噛み砕いて食べる一誠の表情はとても美味しそうだった。輝夜も見習う風に漬けた梅を口の中に入れ食べてみる。噛むごとにアルコールのくらくらするような風味と氷砂糖の甘くて優しい味が一緒になってこれだけでも梅酒を食べている気分浸らせる。

「美味しい、甘いつ。オラリオでこんな甘いお酒を飲めるなんて想像もしませんでした」

「さらにお湯もいれると体が温かくなる」

空気中の水分を集めて魔力で温めたそれをコップの中に入れてから改めて飲むと、二人の口から熱い吐息が零れた。

「はあく……満月を見ながら美味しい酒を飲み美味いままを食べる。中々どうして風習があるなあ」

「そうですねあ……」

神楽が正座していた足を崩して胡坐を掻いた。ちよつぱり酒で赤くなった顔のまま一誠にしな垂れる姿勢で飲食を続けた。

「殿方とこうして肩を並べて酒を飲む日が来ようとは夢にも思わなんだ。あの訳の分からないモンスターに殺されて私の人生はもうお終いだと思っていたからなあ……」

口調がガラリと変わり今までの淑女、『大和撫子』のような言動から一変した。それでも一誠は何も変わらずに接する。

「はは、でも、今は生きてるから終わりじゃないぜ？」

「くふふ、私の命は貴方様の命で蘇った……つまりこの命は貴方様の物と道理であるな」

「どういう通理なのかわからないが、輝夜は輝夜だよ。あの夜空に輝く満月のように綺麗な少女は俺の隣にいる」

ほんのりと一誠も顔を赤らめていた。酔っているからなのか、キザなセリフを言っただけだからなのかかわからないが、その言葉で輝夜の心は甘く震え一瞬押し黙った。

「その睦言ような口説きは他の女性にも言っているのだから？女神様すら虜にしあれだけ多くの女性を交えているのだから」

「俺は普段女に対して滅多に言わないぞ。輝夜に対して言ったのは、その滅多に言わない睦言だ」

また押し黙る。誤魔化すように梅酒を飲み、身体が火照ると白装束を半ばだけ解いて外で下着姿になる。この場にリユーやアリシアがいたら卒倒していただろう。が、生憎ほろ酔いな一誠しかいないので窘める者はいない。

「外で下着姿になったら風邪ひくぞー」

「だったら、貴方の温もりで私の身体を温めてくれればいい」

満月の下で一誠の足の間に割り込み露出した体を押し付ける輝夜は、そつと包み込むように抱きしめられた。己を触れてくるその手にゾクツと体が震え、両腕と両足を品なく男の身体に強く抱きしめ、距離が縮まった顔はどちらからでもなく唇を重ね快樂を貪るそれ以降、一つに重なった影は中々離れず外で夜を過ごした。

冒険譚37

ディオニユソスの懇意でエルフの少女達と同居をすることになった。皆はいつものことだろうと軽く歓迎してたが、一誠の心中は懸念を抱いてた。何せ貴公子然とした男神と話をした昨日の今日のことだ。何のつもりで、どんな思いで二人を寄こしたかはわからないが一誠も軽く受け入れてしばらく過ぎた頃。一誠は黙々とある作業に没頭をしていた。鼻歌をしながら楽し気に手を動かし組み立てていくその光景は見慣れているが、今度は何を作り出そうとしているのか興味津々なリヴェリア達であった。唯一、それがなんなのか察するアスナは感嘆の息を漏らし静かに傍観してたら声をかけられた。

「ヘルメスを呼んでくれないか」

「来たよイツセーくん！オレに何か頼み事があるのかな？」

飄々とした言動をする橙黄色の髪から羽付きの唾広帽子を外し喜色に満ちた瞳で、己を呼び出した一誠に訊くと肯定と頷かれた。傍には何やら敷物で何かを隠すようにかぶせていた。それも二つだ。

「一番初めに体験してもらいたいことがあつてな。今年の運動会で競うための物をさ」

「ほうほう体験をねえ。それは一体どういうものなんだい？」

「これだ」

ヘルメスの促しで一誠は敷物を手に取って取り払った。かぶされていたのは光沢を発する黒い車輪が二輪と四輪がある乗り物だった。一目でそれは乗り物であることを察したヘルメスでも深く理解はできないでいた。車輪があるなら馬車や荷車なのだが、これは物を運ぶための物ではなく人が乗るためにあるためのものだ。見たことのない形の乗り物に好奇心な視線で調べながら訊く男神。

「これは、乗り物かな？」

「そう。これを神であるヘルメスに試しで乗って貰って感想を教えてください。ほしいんだ」

「俺を介して他の神々にも受けがいいか調べたいのかイツセーくん。でもどこで走らせるんだい？」

「専用の空間を用意してある。そこからだな」

一誠とヘルメスがいる空間に出入り口の他に出入り口があり乗り物を置いて二人は向かう。潜ると景色が一変した。キラキラと輝く星屑の空間の中に巨大で長大なコースに一誠が作り出した乗り物が数多に用意されている。その傍には二人を待つていたかのように上級冒険者達が佇んでいて、姿を見せたら乗り物に跨り乗り始めた。

「ここが走る場かい？あの乗り物といいたまた何とも凄いものを作ったんだね……」

「中々だろう？」

ヘルメスは二輪、一誠は四輪の乗り物に乗ってスタンバイすると眼前に立体的な映像が大きく浮かび上がり皆に運転の仕方を教え始めた。他にコースにはスピードアップやアイテムの類もあることが補足説明され、全員が理解するまで三度も同じ説明が繰り返されたところでいよいよスタート開始のカウントダウンの秒読みが始まり、数字が0になると全員が一斉にスタートダッシュを始めた。風圧による抵抗感は一切感じないレース。絶対に放せないハンドルを握り一緒に走る競争者とコースを進みあつという間に、コース上に浮かんでいく虹色で疑問符がある箱を見つけた。それに触れた者や触れられなかった者の違いは、設定されたアイテムの使用ができるかできないかである。ヘルメスはアイテムを得れたので走行の邪魔にならない程度の大きさの立体的な映像に浮かぶ、ランダムで決まったアイテムを右のハンドルにある赤いボタンを押す。

するとバイクを取り囲むように具現化した亀の甲羅——ではなく100cほどの一角兎^{ニードルラビット}。攻撃アイテムを展開して直ぐに目の前に走る男神に向けて発射。滑り出すように駆け、鋭い角で後ろから突き刺して男神を真上に吹っ飛ばしたその隙に上位に食い込み先へ進むのだった。中盤になるとコースは何度もリングを描いてあんな場所を走れるのか、途中で落ちないのかと不安を抱いた皆を他所に一誠が誰よりも一番前に出ては率先してリングのコースを走り切つて見せ

たので他の者達も続いて走り抜く途中、一番後ろから巨大な黒い物体がライバル達を吹っ飛ばしながら突き進んできた。

一番前にまで躍り出て上位に食い込んで見せたのは大笑のロキだった。上位争いが予想したが不意に一誠が速度を落として順位を譲る行為に出た。何でだ？と思つた矢先にロキや他上位六人の頭上から光の柱が落ちて数秒間走行不能に陥つた。五位以下の者達は入れ替わるように前に出て終盤に入った。そこは星降る危険地帯であつた。幻想的な☆がコースに落ちて小規模の爆発を生じ周囲を巻き込む。落ちてくる際に影が生まれるので、その影のところに走らなければ当たらないことを知るがそれは二週目以降の時に気付く。初見の皆はそれに気付かず何度も星とぶつかつて順位の入替わりが凄まじく激しかった。そしてようやく最初のスタート地点に戻つたところで二週目に突入するのだつた。その後も多種多彩なアイテムを駆使してレースを競い皆、激しく勝ちに行きながらも楽しんだ。

「勝ちました！・（1位ラトラ）」

「はっはっは！いやー楽しいねこれは！・（2位ヘルメス）」

「うん、中々熱い戦いであつたよ（3位フィン）」

以上の三人がトップとなりレースは終わった。他は悔しがつたり残念がつたりしながらも今回の体験には大いに楽しめた様子だった。ヘルメスに近づき感想を求める一誠。

「どうだったヘルメス。他の神々にも受けは好きそうか？」

「好きそうも何も、娯楽に飢えてる神々からすれば金を払ってでもやりたいレースだったよ！君の世界にはこういう勝負もあるんだね！ところであの乗り物は何て名前だい？」

「レーシングカートと言う。俺の世界じゃあレースにアイテムは使わない。けどここは異世界だ。異世界風にアレンジしたり俺なりのオリジナルにしてみた」

「そうかい。いやーそれにしても本当に楽しかった。いつそオラリオの名物にしてみないかい？きつと大儲けができるぜ？」

「ガネーシャも賛成だ！異世界の遊びは子供達を笑顔にしてくれること間違いなし！」

そうするための設備と場所が限られるので一誠は笑顔でこう言い出した。

「そこまで本気にしてほしいなら、『異世界食堂』を閉店しなくちゃならないけど。ああ、そうなたら愛用してくれる神々や冒険者達が二人に憎悪するだろう。自分達の楽しみを潰してくれやがって！つてな。特にロキとフレイヤ辺りが筆頭に『ファミリア』を潰すかもな。それでもいいならしてやるよ？」

「ごめんなさい、今の話は聞かなかったことにしてください」

揃って綺麗に頭を下げだすヘルメスとガネーシャ。

「あーでも、レーシングカートだけ。外に走らせることってできないのかな？運動会にこれを取り込むならできるじゃないのかい」

「できなくはないけど、あまりお勧めはできないかな。これとは別の乗り物だったら行けない場所以外だつたらどこでも走ることはできるが」

「それがあるなら、それをオレに売ってくれないかな！」

「うーん、まあ、自分用だつたら構わないけど。異世界の乗り物と俺が作るの、どっちがいい？」

「勿論、イツセー君のお手製が良いね」

「ガネーシャも欲しいゾウ！」

さり気なくガネーシャも便乗して二人とも大型の乗り物を欲したので数日後に叶えたのだが、ガネーシャはオラリオ内で動かすことは難しいので殆ど『ファミリア』内で異世界の乗り物として飾るが関の山だった。ヘルメスは頻繁にオラリオ外へ出ることはないので『ファミリア』内の置物に。

そうなることをまだ知らない一誠達はもう一度コースを走る事にして大いにレースを楽しんだその日の夜。一日の疲労感を全て蕩けさせる一糸まとわぬ姿で湯に浸かるフィルヴィスとアウラ。『幽玄の白天城』に住み着いて驚いた一つの浴場の中で「ふう」と一息零して湯の温かさを全身で感じる。

「今日も何もできませんでしたね」

「ああ、というか。私たちが何する事など一つもなかった。ここ一週間の彼の行動を観察して分かったことは」

ひとつ、休み以外のほとんどは『異世界食堂』に働いている。

ふたつ、休みはアイズ達の特訓の付き合いかダンジョンの探索。それ以外は何かの製作の作業を没頭する。

「これだけだな」

『異世界食堂』は働けないですし、特訓については完全に私たちが弱く指導される側です。……彼女達は良くもあの地獄のような容赦のない指導を屈しませんね」

湯の中にいるというのにアウラの顔は少々顔色が悪かった。個人の自由の意思を尊重に一誠が休みの日であれば模擬戦や特訓を乞うことができるので、強くありたいアイズ達は一誠に鍛えてもらい実力を高めていく。が、その模擬戦や特訓は予想以上にシビアで、参加したフィルヴィス達はあっさりと疲労困憊になった自分達を、死体に鞭を打つ一誠に畏怖の念を抱いたのであった。

「ダンジョン以外で、死ぬかと思いましたが……」

「……そうだな。手加減を一切されずの一撃は死ぬな」

そしていったい何度も吐いたか分からない等と遠い目をして、これからも何度もこの城にいる限りそうなるだろうなと諦め混じりの吐息をする。ディオニユソスの神命も後押しして恩返しを果たしたいが、中々その機会が訪れずただ時が過ぎていくだけだった。しかも消費した命の分まで恩を返すとは何をすれば、どれだけすればいいのか後々になって二人に苦悩させることになった。一誠が命の危険に晒された時？否、その機会は殆どない。二人は知らないが第一級冒険者くらいの相手ではないと文字通り瞬殺されて歯牙にもかけれない強さを有している。

ならばどうする？のぼせそうになりながら思慮していて気付かなかった。ここ女性専用の大浴場に他の女性達も入ってきたことを。苦悩の面持ちでいるエルフの少女達を見かねて同種族の女性が声をかけた。

「どうしましたか」

金髪に空^{アクアブルー}色の瞳、尖った耳に華奢な裸体をバスタオルで隠して尋ねたのは「アストレア・ファミリア」の眷族、【疾風】リユー・リオン。「アストレア・ファミリア」……………」

「何か悩み事なら聞きましょう」

同じエルフとして悩みを聞きできうるなら何かに苛まれている者から解放してあげたい気持ちで同じ湯船に足を入れて体を沈める。フィルヴィスとアウラはそんな彼女が、他派閥がどうしてここにいるのか脳裏で一誠が言っていたことを思いだし、遠慮気味で問うた。

「あの、どうして他派閥のあなた方がこの城に住んでいるのですか？^{フリー・ファミリア}無所属派閥になる前はイツセーは各【ファミリア】を転々と変えてはその眷族になっていて、派閥同士の接触は基本的に不干渉の筈でした」

「それは……………」

答え辛そうに視線を水面打つ湯に落とし、水鏡で映る自身の顔を見ながら事情を説明した。

「私たち【アストレア・ファミリア】は彼に多大な恩を抱いています。それも二度も」

「二度？」

「この世界には転生者と言う異世界から来た者達がいるそうなので。知っていましたか？」

「話だけは、彼も転生者だと？」

「違います。イツセーは生きたままま異世界に来てしまった者、異邦人という類の存在です。転生者は元の世界で一度死に、その世界や異世界の神に再び甦らせてもらいこの世界の【神の恩恵^{ファールナ}】を、第一級冒険者をも越える超越の能力を得て異世界に転生する。それが転生者です」

第一級冒険者を越える能力を得る、それが転生者だということを改めて認識と知覚したところで転生者と彼女達とどういう関係か？抱く疑問の二人にリユーは語った。

「【アストレア・ファミリア】はたった三人の転生者によって敗北し、この身を慰み者として穢されかけました」

「っ!?!」

「私たちだけではない。無関係の者達にまで拉致して己の欲望の捌け口として私たちの尊厳や誇り、人権を踏み躪り犯そうとした。あの王族や最大派閥の美の女神もそうされかけた」

「王族まで!?!と驚きを隠せなかった二人は目を皿のように見開き呆然と口を開いたまま固まった。そんな話は一度だって風の噂ですら聞き及んでいなかった者としては寝に耳に水な話だ。驚くなど言う方が無理があるだろう。リユーはその時のことを思い出しながら視線を上を細める。」

「だが、全てを理不尽に奪われる直前に彼がやってきてくれた」

「イツセーさん、ですわね」

「ええ、そして私達が手も足も出せなかった三人を相手に異邦人としての力を解放して全てを凌駕して打破したのです。私達のために怒り、転生者に激怒したあの時の彼は——世界で一番、神よりも強かったかもしれない」

「……」

「助け出された私達は、彼に感謝をし恩義の為に懇意の関係を築きました。……殆ど異世界の料理をたかる形で」

「ああ、何となくわかる。自分達の主神も一時期、異世界の料理をたかりに来たことがあるのだから。他人事ではないと無言で貫かれ気まずい雰囲気は三人の間で漂うもわざとらしくコホンと咳をするリユーが話を続けた。」

「二度目は私達と敵対していた最後の闇派閥の砦であった【ルドラ・ファミリア】との交戦でした。ダンジョンの中で追い詰め、あと一歩のところまで私だけ残して全滅と言う異常事態が起きました」

「それは、怪物の祭り?」

「リユーはその答えを否と言えなかった。実際アレはそんな生易しいものではない。全てを蹂躪する冷酷無比の破壊者は並みの冒険者では無条理に命を狩られるだけ。肯定も否定もしない、沈黙を貫く彼女に二人は追及しなかった。辛かった過去をほじくり返す真似はエルフが抱く矜持に反する故に。」

「その時も彼がやつてきてくれたのですか？」

「……ええ、そうです。申した通り私以外の者達は死に、仲間を失って怒りと悲しみに暮れさせる暇も与えず言ってくれました」

『まだ絶望するな、リユー』

『まだ悲観に打ち震えるな。まだこの惨劇に嘆くな』

『まだ希望は残っている。お前の仲間を甦らせることができるんだからな』

『だから少しだけ待っている。——直ぐに終わらせる』

と、自分に語り掛けてくれた励ましは本当に現実となりその日から【アストレア・ファミリア】は変わったのだとリユーは言った。

「これが二度目の救われた話です。後に彼が己の命を代償に仲間たちを蘇らせたことを知り、恩返しをしたい私達に女神イザナギ様が助言をアストレア様に告げたようです」

「それは一体……どんな方法なのですか」

「……そ、それはっ」

一番知りたかった情報が、自分達と同じ恩返しを思っていた者からの話に真摯な眼差しを向ける。

——しかし、何故カリユの顔が耳まで真っ赤に染めて物凄く恥じらってはとも言えないと顔を俯く。どうしたのだろうかと見てたら後ろから影が現れた。

「私達の身体をイツセーに差し出すのが唯一出来る最上の謝礼だと、仰ったそうです」

「っ！」

突然聞こえてくる声。振り返れば目を細めて二人を見下ろすタオルを片手に輝夜が佇んでいた。

「私達の魂はあの方の魂を得て甦ったもの。ならば、女が命の次に大切な貞操、処女——この身体で捧げるのが当然ではなくて？」

「輝夜……余計なことをこの二人に言うな」

「余計なこととは心外です。このお二人が何の目的であの方の傍に在ろうとしているのか知ろうと来てみれば、潔癖症のポンコツエルフが教えないから代わりに教えたまで」

アウラの隣に足を入れて湯船に浸かる輝夜の口はさらに開き続ける。

「失った寿命は戻らない。死期を早めた結果にしてしまった彼に私たちがしてあげられることは限られております。恋慕の云々はともかく、命がけで救ってくれたイツセーに恩以上のことをして返すのが道理ではないですか？」

掛けられた指摘の言葉にリユーは口を閉ざし押し黙る。さらに輝夜は畳みかけるように言い出す。

「命を懸けた恩返しは想像以上に難しい。私たちも彼に命を懸けて恩返しをしようにもイツセーは私たちの力など必要なまでに強すぎる。共に冒険をしようにも彼はたった一人であつさりとモンスターを一蹴し階層を踏破してしまふ。『異世界食堂』で働くことも吝かではございませんが、それはそれで恩返しになるのかわからない」

輝夜は湯の中で下腹部に手を触れる。

「ですからイツセーが喜ぶ恩返しをする他ございません。イザナミ様が言う恩返しを」

「じ、自分の体を差し出す……っ」

顔を赤くして輝夜が言った恩返しを復唱する。フィルヴィスの眩きの言葉を耳にしてより一層に顔を赤くするリユーは体を縮こませる。初めて身体を預け肌を重ねた夜を鮮明に思い出しながら。

「あ、あの方もそれを望んでいたのですか……」

「いいえ、『勝手にしたことだから気にするな』と言われました。お二人にもそう言われたかお聞きしているかどうかわかりませんが、イツセーは恩着せがましい方ではございませんし、私たちを一人の女として尊重してくださいますから……イツセーを慕う方々と共ぼ——協力し合ってその気にさせて昂らせ、気持ちよくなってもらいました」

いま、共謀って言うおうとしなかったかこのヒューマンは。

「その気にさせたって、望んでもないのにどうやって……」

「媚薬と精力剤で」

「び、びっ……せ、せいっ……!」

湯が沸騰したように一気に顔を紅潮したフィルヴィスとアウラ。うら若き少女達には強い刺激的な言葉で思考が停止し掛けた。

「ふふふつ、本当にあの時のイツセーは凄かったです。何十回も身体を重ねても体力も精も衰え知らずで私たちが性欲の虜になるのは時間もかかりませんでした。そこにいるエルフだつて彼に求められたら普段は絶対に出さない喘ぎ声を——」

「——!!!」

もう聞くに堪えないと湯船から出ようと立ち上がつて飛び出そうとしたが途中、何もないとところで転んだ醜態を見せたりユーに輝夜は心底呆れ、フィルヴィスとアウラは呆然として視界に入れていた。

「まったく、この程度で動揺して……だからお前はポンコツエルフと言われるのだ」

「ポ、ポンコツではありませんっ……!」

「ポンコツであろう。媚薬と精力剤の効き目が絶大で欲望と性欲に忠実になつてもおかしくないあの方は鋼の理性で以つて紳士的に求めたというのに、お前はたったの一度の交わりで誰よりも早く気を失つたではないか」

「そ、それは……!」

「気を失つたお前をイツセーは気を遣つてそれ以降は求めなかった。それなのに情けないと思わないのか」

口調が変わつた輝夜の言い分にぐうの音も出ないのは自覚しているからこそであつて、当人も気にしていたようであつた。輝夜は言葉を続けた。

「それつきりお前とアリーゼや他の者達もイツセーの尊重に甘えて身体を交えようとしな。——たかが処女を捧げた一回きりで彼が私達のために削つた命の代償を、恩を返したと思つていいのか？ 相手が良い思いをさせてやればそれで十分と？」

鋭い眼付きで、冷然とした口調で。

「——ぶあゝくかゝくめえゝゝ。私独自の考えだがそんなので足りる筈もなからう。アストレア様は今でもイツセーに対する深い感謝と私達の為に毎夜身体を重ねているのだ。私もそうだ。本来死ん

でいるはずだったこの命を甦らせてくれたあの方には深い感謝と共に憧憬を抱いている。だから惜しまず嬉々としてこの身を捧げておるのだ」

その口調のままフィルヴィスとアウラへ向けられた。

「どんな目的でイツセーに近づいたのかわからないが、生半可な気持ちで恩返しするなら自分の「ファミア」に戻ることを薦める。命懸けの恩返しはそんな軽薄に返せれないのだからな」

「……………」

「この城にいる殆どの女性や女神はイツセーを慕い身体を重ねている。そうでもなく恩を返したいがどうやって返そうか苦悩し、己の命の次に大切なものですら捧げれないポンコツ精神では恩返しなど到底無理な話だ」

お前達もポンコツエルフと同じだとフィルヴィスとアウラは自分たちにも指摘された気がして微妙な面持ちとなった。最後に言い残しながら輝夜は湯船から立ち上がり見下ろしながら告げた。

「……………」もしも捧げる覚悟ができたならば、ご協力は惜しみません。あのお方に救われた者同士ですから」

一方、同時刻。「アルテミス・ファミア」ではリビングキッチンにヒーロー組の異邦人達が集っていた。若干空気が緊張で張り詰めていて皆の顔は焦燥の色が滲み浮かんでいる。異世界に来て今年で三年目。元の世界では自分達は今頃高校三年生と進級しているはずの次期であつて、このまま来年も過ごすことになれば己の夢も叶えなくなる。異世界に戻る術はある。が——三〇〇〇万ヴァリスと四十人の団員の確保の条件を異世界を行き来できるすべを有している一誠から突き付けられている。ヴァリスの方は問題なく貯蓄できている。問題は団員の方だ。冒険者、ひいては「ファミア」に入ってくる無所属フッリの一般市民の勧誘は至難の業なのだ。今日まで集まったのはまだ十人も満たない。

「……………」どうしよう」

「どうするも何も、俺達の代わりとなる人を集めなきゃあいつは絶対

に帰してくれないだろ」

「でもよ、ここまで人を集めるのが難しいなんて……」

「冒険者は命と隣り合わせの職業なのです。誰もが死にたくないことをしたがるらないのも無理はありませんわ」

「不人気ではないんだらうけど、もつと簡単に集まるものかと思つてたぜ」

「うーん……何がダメで足りんのかなあ……」

自分達に何か足りないものでもあるのか。それが何かわからない面々は苦惱、唸り声を漏らし勧誘の成功を必死に考えるが頭の中から妙案は出てこない。

「——あー！あの野郎、オイラ達の気持ちを知っているはずなのに悪魔のような意地悪をしやがって！」

「意地悪って、そんなことないと思うよ峰田君。元の世界にいる兵藤君だって帰りがっているのは僕達も知っているでしょ？」

「うむ、今の俺達は兵藤君と同じ状況だ。この世界にいる彼だってそうだろうし責めてはダメだ峰田君」

「だったら元の世界に帰れる魔法を手に入れたら帰らないはずがねえよ！オイラ達の事なんて二の次で自分だけ先に元の世界に帰つてたかもしれないえよ絶対にさ！」

「それは否定できないけどよ、あいつまだこの世界にいるんだぜ？きつと俺達が人を集めるまで待つていてくれると思うぜ」

「そうだな。俺たちを元の世界に帰す約束をしている以上はこの世界に留まるつもりでいると思う」

「一緒にしたら怒られるけど、約束は絶対に守るところはやっぱり一誠さんと同じだよね」

拳藤の一言にほほ全員が肯定や首肯する。一誠の事で怒り・文句・疑心などが浮上するも何だかんだで元の世界にいる同一人物と考慮して落ち着く生徒達を見守る大人達は静かに語っていた。

「……一度、話をしてみるか」

「玉砕される前提で頼むのかイレイザー」

「このまま合理的ではないだけだ。こいつらの可能性を潰したくもな

いからな」

「では私も行こう！」

「オールマイトは来ないでください。ややこしくなりますから」

一蹴されて落ち込むオールマイトの姿を見ずやや気落ちしている生徒達の姿を見つめる相澤。

「キリトにも手伝ってもらおうか」



「ダメだ」

一蹴された。翌朝城に赴いて出会い頭ではないもの、煮えたぎる巨釜の中にある液体をミスリル製の道具で掻き混ぜている様子を見ながら要件を言おうと口を開きかけた瞬間、一誠が有無も言わず遮って拒絶をした。

「……何も言っていないが」

「大方言いそうなことはわかっている。元の世界に帰らしてくれ、だろ」
相澤を見据えながらの指摘に本人は口を閉ざし見つめ返す他できなかった。

「指定した団員の数はまだまだ届いていない。四十人以上という人数が一気に減れば「アルテミス・ファミリア」の戦力は激減するのは火を見るより明らかだ。しかも異世界独自の異能を持っているから実力は個々によって第二級冒険者ぐらいかそれ以下。そんなお前らがいなくなれば「ファミリア」の立場と地位に落ち目になるのはわかり切っている。せめてお前らの代わりとなる人数ぐらいは集めないとなからずアルテミスは大変だ」

「理屈も道理もお前の言う通りだ。しかし、あいつらはまだ子供で生徒だ」

「俺も元はそうだったが？キリトもそうだった。——だからなんだ」

と呆れ混じりの吐息をする一誠は淡々と述べる。

「俺だって夢を抱いていた。キリトもその筈だ。だけど俺達は元の世

界に戻る術はまだなかった。今は昔と違って別の世界に繋げることができるようになったが、俺はお前からよりも先にキリト達を元の世界戻すことを決めている。そのつもりだったけど……」

また溜息を吐いて相澤から視線を切り上げて、キリトに視線を向けた。

「三人も孕ますなんて想定外な事をされたから困ったもんだよ浮気男」

「……」

気まずそうに眼を泳がせる黒髪黒目の黒の剣士。

「キリト、お前達は元の世界に戻るつもりか？これだけは教えてくれ。元の世界に行くなら二度とこの世界に戻れないんだからよ」

「……俺だけは決められない。一度皆と相談しないとわからないんだ」

「元の世界に帰れるのに相談しなくちゃならないのか？ま、エギルはこの世界で店を構えるようだからさすがに手放せないか」

「……すまない」

「本当だよ。俺も早く元の世界に帰りたいんだからな」

「帰っていないのか？」

「お前らの誰かに文句を言われそうだから帰ってねえよ」

神妙な顔で一誠を見つめる相澤。実際一人の生徒、峰田がそう文句を言っていたので自分が肯定すれば心底呆れるか辟易されていたかもしれないなかった。

「律義なんだなお前は」

「そんな性分だよ。もつと冷たくて薄情な性格だったらお前らの事情何て知らないって切り捨て先に帰っていたのに。それができないからこうしてこの世界に居続けているんだからな。俺も甘ちゃんだつてことだろうな」

そのおかげで自分達はこうしていられているので感謝の念を抱いている。

「本当にダメなのか？あいつらも必死に生きて頑張っているんだが」

「その程度、どこの世界の人間や動物に異種族だって同じだ。それと

もあいつらが特別なのか？神よりも？」

「……………そういうわけじゃ」

「そうじゃないなら鼻肩するな。他に元の世界に帰りたい連中はいくらでもいるんだからな」

床に置いてある調合用の素材等を魔法で宙に浮かせ、巨釜の中へ投入しさらに掻き混ぜていくと液体が黄金色の輝きを発するようになり、それが完成としてなのか高級そうな空き瓶の中へ次々と注入していく。相澤はそれが気になり訊ねた。

「……………さつきから何を作っているんだ？」

「回復薬。^{ポーション}うちのフリーの治療師^{ヒーラー}に渡す商品だ」

「そんなこともできるのか」

「やり方がわかればできる。問題は完成した作り手の物の品質が問われるけどな」

そう言うだけで自分から何も言おうとしない一誠。キリトは困り顔に、相澤は黙り込み本当にどうすれば話を通してくれるのか苦悩している、全ての瓶に蓋をして箱に入れ終えてバックパックに詰め込んだところで三人がいる部屋に「一誠」と顔を出した——アスナ。

「……………」

「……………」

相手の顔を見合わせる形となったアスナとキリト。久しぶりの再会した瞬間に微妙な空気が漂い始め、口を閉ざしているアスナへ「どうした」と一誠が声を投げた。

「あ、うん。一佳ちゃんがキミに話がしたいって」

「愛の告白だったら断るって言っておいてくれ」

「あ、あははは……………それ以外だったらいんだね？」

「……………まあ、なんとかなーくだが、要件はこいつらと同じだろうな。一応目的を聞いてくれるか」

え？と相澤とキリトに視線を送るアスナ。何の話をしていたのかアスナは知る由もないので、二人を丁寧に戻ってもらった後は入れ替わるように一佳がやってきて。

「……………」

恐縮そうに身体を委縮して言い辛そうな彼女の顔をリビングキッチンに招き入れたアスナと一誠。今の彼女がいつ言い出すのかわからず、事前に訊いてもらったアスナから聞くことになった。

「今年で高校三年生になってしまった一佳ちゃん達は異世界に戻って学校生活に戻りたいんだって」

「ふーん、ま、そんなことだろうと思ったがな。——ダメだ」

「……………」

拒否されて肩を震わせる一佳。

「アルテミスに対する恩を返すまでは何年かかろうと帰さないと言ったよな。ヒーローになる奴が恩返しもせずさっさと自分の世界に帰るのか？はっ、そんなんで本当に心からヒーローになれて、胸張って顔を上げられるのかよ？」

「……………そ、それは」

「俺が一方的に恩返しをしろと言ってもアルテミスは感謝の言葉だけで済ませて恩返しはしなくていいというかもしれないがな、最低限の礼儀をするのは当然じゃないのか？キリト達に拾ってもらい屋根ある下で衣食住ができるようになったのは「アルテミス・ファミリア」が在ったからこそだ。お前たちがこの世界に来てしまっただけの翌日。無知のまま街中を彷徨っていたら冒険者に襲われ、神々から悪戯に娯楽的な意味で見世物に晒され、ギルドからは各「ファミリア」に討伐か捕縛の命令をされていただろう」

オッドアイの奥に宿る絶対零度の冷たさから滲み出ている眼差しが一佳を見据え、冷淡的に発する言葉を口にするために一誠は口を開いた。

「お前らの感謝は言葉だけで済ませるほど軽薄なのか？だったら俺はヒーローになってもお前らがヒーローであることを心底から認めれない、受け入れれないな。俺個人の気持ちだがな」

「—————」

「それでもいいなら帰してやってもいい。ただし条件付きだ。たかが一人の感想程度でお前らが恩知らずでいられる厚顔無恥を称賛してな」

辛辣な言葉に条件付きが課せられた。話を黙って聞いていたアスナは素朴な疑問として訊ねた。

「条件って……?一佳ちゃん達ができること?」

「いや、できないな。俺しかできないことだ。——こいつらの世界にいるもう一人の俺を元の世界に帰す」

「えっ……!?!」

「何を驚いてる?異世界に行き来できる術を得ている俺は異世界にいる俺とも会うんだ。元の世界にいる家族と会いたいのも知っているはずだ。だから俺自身の手で送り返す。この機を逃せばもう一人の俺はもう元の世界に帰れないかもしれないんだ」

心底から不思議そうに首を傾げられた。一佳は初めて狼狽した。もう一人の一誠を元に帰すのが条件。ヒーロー組はもう一人の一誠が異世界から来たという事実は周知である。それが叶うならば応援するとも決めている。だが、己の心がそれを……。

「(一誠さんが、元の世界に帰って二度と会えない……)」

「数十年から百年しか生きられない人間の寿命は気が付けばあつという間だ。人間を止めない限りもう一人の俺はいつか必ず孤独感を襲われ苛まれる。それは俺もそうだ」

「……」

「これは他人事じゃないから言っているんだ。あいつの幸せを思っているんなら、お前は二つの選択を突き付けられる。——永遠の別れをして夢を叶えるか、夢を捨て一緒にもう一人の俺と元の世界に行くかだ。できれば俺は後者を選んでほしいもんだがな」

「悩む時間は与える。その時間はお前らが決めろ」と一佳に言葉を投げて転移式魔方陣でホームへ転送した一誠は、広いリビングキッチンにアスナとだけになった状況で問うた。

「アスナ、今の会話を聞いてどう思った」

「……かなり厳しいことを言うなって。あの子達の気持ちを知っているから余計にそう感じたよ」

「それが正論かどうかは決め兼ねてるが、俺は言った言葉を訂正もしないし後悔もしない。ではないとこつちまで躊躇して悩み、確固たる

判断ができないし前にも進めない。元の世界で何度も教わって体験も経験もしたから」

「ファミリア」のホームに戻された一佳は皆に今までの話を伝え、どうするか顔を暗くしたり曇らして苦惱してしまう。

「兵藤を元の世界に帰すのは反対じゃない。あいつは帰ることを望んでいるのは俺たちも知っている」

「それができるのはこの世界にいる兵藤だけだから、二度とないチャンスだって意味でもあるよな」

「オイラたちを元の世界に帰すのがそれぐらいなら、賛成だぜ！」

「ただ——厚顔無恥で恩知らずなヒーローだと言われっぱなしなのはな……」

「確かにな。しかも同じ顔の兵藤を見てるとあいつじゃないのに、顔を会わせると未だ言われて、思われている気がするな」

帰りたいが好き勝手に言われたままなのは癪だ、と難しい顔をする面々を他所に五人の少女たちは複雑極まりない心境だった。夢を取るか愛を取るか。突き付けられた究極の選択に元の世界に帰るよりも難しく考え込んでいる彼女等を同じ世界の仲間たちは気づくことはなかった。

冒険譚38

暖かな気候に恵まれてオラリオの永住民達は過ごしやすい環境のなかで雑踏を繰り返し、仕事や探索に精を出す。ヒューマンや獣人、デミ・ヒューマン亜人達が醸し出す賑やかな喧騒が生じている大通りの前、開店直前のミーティングをしている『異世界食堂』でも。

「今回バーベキューを二日間食べ放題にしよう」

「食べ放題って大丈夫ですか？バーベキューもメニューには載ってない初めての料理ですし、食材ばかり減って損をしちゃう感じなんですが」

「寧ろ真新しくてどこの店でもしてない設定だ。他の店では出来ないことをして客で客を呼んでもらうのが目的で利益なんて二の次だ」

「で、食べ放題にするにしたらどのくらいの値段をするんだい」

「一五〇〇ヴァリス。大食いの客だったらご褒美だろ。一定の値段でいくらでも食べられるからな」

「そうアルよ。私も今だけ客になって腹一杯食ってやるアル！だから店主、今日は休ませてもらうネ」

「お前は絶対に駄目だ。絶対割に合わん稼ぎになって大赤字になるのが目に見えている。ということでは皆にはバーベキューの仕込みを頑張ってもらうこともあるからよろしくな。客達にも案内する際に伝えてくれ。ミーティングは以上だ。早速取り掛かるぞお前ら、扉を開けろー！」

『はいー！』

元気のいい返事をする店員たちが自分の持ち場に移動し、ベルを鳴らして扉を開け放った。直ぐに朝から料理を食べにやってきた客達にウェイトレス達は歓迎の笑顔で口を開いた。

「二二「いらっしやいませ、ようこそ『異世界食堂』へ！」「二二」

——異世界食堂。本日、特別メニュー『バーベキュー』を販売。一五〇〇ヴァリスでお好みの肉や野菜や魚が食べ放題。

そんな企画を立てた日、異世界食堂の客は爆発的に増え、やはりと言ったか店内はバーベキューの声ばかりが挙がって一種の祭り状態になった。

「おまたせしました。バーベキューです」

エルフで構成した五人の男女の客達の下へ運ばれたバーベキューはこんがりと焼かれた野菜串だった。肉を好まず主食は野菜や穀物を好む彼らの前に置かれた野菜串は、一口食べると焦げた醤油と野菜の甘みが口の中に広がり、野菜なのにジューシー、肉厚で食べ応えがある。

「美味いっ・・・焼いた野菜がこんなに美味しいとは新鮮であるな」

「こんなにおいしいのはきつとこの醤油なのでしようね」

「醤油、この調味料を故郷に持っていきたいものだ」

「このメニューを見れば醤油は極東で生産されているそうだが・・・手に入れてみるか」

「ええ、メレンから直接海列車で行けますからね。絶対に行きましよう」

別の席では海の幸と野菜の串焼きを頼んで食べている一般の四大家族がおり上からホタテ、トウモロコシ、タコの足、エリンギそして丸まった大ぶりのエビ。海の幸と夏から秋にかけて特に美味しくなる野菜を交互に刺して、醤油だけをつけて焼いたものを口の中で広がる味と風味に目を細めて堪能していた。最初に口に飛び込んでくるのは、醤油を塗られ焼かれた貝の味。普段、衣をつけてあげて出すことが多いそれは、醤油をつけて焼いても美味だった。噛みしめるたびに貝がほぐれ、旨味をたっぷり含んだ汁が家族達の口の中に広がっていく。大ぶりの貝はそれだけでも十分ご馳走である。串焼きはまだまだ終わりではない。トウモロコシの甘さに、タコの歯ごたえ、醤油がしみ込んだキノコに、最後の締めに来るエビ。海の幸と野菜を交互に味わわせるそれは、醤油のシンプルな味付けであるがゆえに素材の味を存分に味わうことができるものであった。

「くそつたれ！何でこの店の肉はこんなにも美味いんだよつ。それに

白飯も欲しくなってくる」

「同感じゃな。この串焼きの肉に塗られたソースが堪らん」

「やべえ、やべえよ。もう他の店の肉料理を食べても美味しく無く感じてしまう悪魔の料理だこれは」

常連客のヒューマン、獣人、ドワーフの男三人も串焼き食べ放題にして肉尽くしの串焼きを頬張ってる。かぶりついた瞬間、三人はそのソースの美味しさを感じ取った。甘くて、辛くて、酸っぱい。三種類の味を同時に含んだ……強い味のソース。その味が口いっぱいに広がる。その強いソースが染み込んだ肉は……牛の肉。丁寧に店主が下ごしらえしたことで柔らかなそれは、同時に強い肉の味を持つ肉汁をたっぷり含んでいてソースにも負けていない。さらに、肉と肉の間に挟まれた野菜は、玉ねぎとジャガイモ。あえて十分に火を通さずに辛みと歯ごたえを残した玉ねぎは、口の中で小気味よい音を立ててソースの味を中和し、一旦茹でてから食べやすいサイズに切った皮付きのジャガイモは、口の中で崩れる。それらはどちらも肉の余韻を一旦消し去って……二つ目、三つ目の肉を美味しく食べる用意を整える。おかげで濃い味付けにもかかわらず美味しく食べられて、飽きさせない肉の串焼きに三人は満足した。

「店主、串焼きを持ち帰りにできないかってお客さんの声が殺到してますが」

「今日は無理だ。明日だったら可能だと客達とアスナ達にも伝えてくれ」

「ニヤニヤニヤ！店主、肉も野菜も魚の在庫が半分も切ったニヤ！」

「午前の食べ放題の時間が終わったら野菜を買いに行ってくれ。肉と魚は俺がもつ」

裏側では数人の店主（と分身体）が別室で固まってせつせと串に食材を突き刺し、醤油を塗ってどんどん焼いていく。焼くことで立つ煙が換気扇に吸い込まれ外へと流れ、オラリオの一角で嗅いだことがない匂いに敏感な獣人を始め、その匂いに釣られて『異世界食堂』に集まっていた。

「……この香りは醤油……？」

「んな、串焼き食べ放題、だつてっ……!?」

異邦人と転生者の鼻にも届き、彼等もまた飢えた獣のように店の元へ足を動かす。

串焼き食べ放題の時差間隔インターバルの合間に足りなくなった食材の補充を済ませ、一区切りついて休憩を済ませた店主達は午後の食べ放題の時間になるとまた忙しく働き始める。その直前に来訪客が現れた。

「すいません、失礼いたします。イツセー殿はおられますかな?」

「ヴァベルー?」

初老の糸目の男神が眷族に扉を開けてもらい入ってきた。何か用かと出迎え話しかける店主の口が開く。

「どうした、遠出の話でも?」

「ええ、そうです。また連れて行ってほしい場所がありました」

前回は奴隷都市だったな、と思慮して懇意している商業系「ファミリア」の協力要請に快く受け入れた。

「今度はどこに行きたいんだ?」

「真北の方にですね。世界各地に飛び回っている眷族の一人から興味深い話を聞きましたね。何でも夜が訪れない一年中日光に照らされている地域がありました、そこには珍しいものが豊富だとか」

「具体的には?」

「日光を蓄えた草木に花々、砂鉄や鉱石とダンジョンにはない物がたくさんあります。もしかすると回復薬ポーションの材料になる素材もあるかもしれない。ですがそれだけではございません」

勿体ぶる風に口を開くヴァベルーの話に耳を傾けながら興味を持つ店主は目で催促をする。

「連れて行ってほしい場所は大きな虹色の実を生やす木があるそうです。私はそれを是非とも手に入れたいですよ」

「虹色の実? 食えるのか?」

「その実から漂う芳醇な香りがモンスターを引き寄せる効果があるように、人間が口にしたことはないと聞いております。実がなる時期に大量のモンスターが出没し商人たちがその身を欲しさに冒険者を雇

うそうなのですが、未だ誰一人手に入れた商人はいないのだとか」

ヴァベルーからの具体的な話も聞いてますます興味を抱き、是非ともそれらを手に入れた意欲も湧いた店主はほくそ笑む。

「わかった。そこに連れて行ってやろう。急ぎの要件か？」

「いえいえ、時間が空いた時にお声をかけてくださいればいいです。イツセー殿の騎空艇でなければ安全な旅路がままなりませんからね。是非とも我が「ヴァベルー・ファミリア」にも一隻欲しいくらいですよ」

「はっはっはっ、お友達価格で販売してやってもいいぞ？かなーりお高い値段だな」

「その話はまた後日。ゆつくりと語り合いましょう。では、お忙しい中に押し掛けて申し訳ございませんでした」

一礼して店を去る男神を店主は手を振って見送る。扉が閉まって鈴が鳴り止まった頃を見計らうようにアスナから問われた。

「またあの神様を連れて行くの？」

「ああ、今度は物騒なところじゃなさそうだからな。だから今回は皆も連れて行くつもりだ」

「真北って言ってたよね。まさか、北極？」

地上にも身も凍える銀世界が存在しているかもしれないが、果たして北極に向かえば見つかるのだろうか？実際に探してみないことにはわからない場所を想像しながら串焼き食べ放題の時間を迎えた。その日と翌日の串焼き食べ放題の期間の間、色々な客が足を運んできてもらったことで『異世界食堂』の利益は開店以来初めての大赤字となったが、その分ますます『異世界食堂』の料理の美味しさがオラリオ中に知れ渡る。また同じ串焼きを出店にしている商売人達の間では、ソースの味の組み合わせの研究を盛んに行われるようになった。

その場所に名前がない。その地域には人もモンスターも住み着いておらず。理由は年がら年中夜にならない場所で暮らすのは適していないからだ。燦々と日光が差すので植物は環境に適した育ち方を

し、独特的な成長を遂げる。

「イツセー様。見てください。この花卉、太陽のように輝いています。好い香りもさせてますよ」

「光っているのに眩しくないのは、淡く優しい輝きをしているんだなきつと。こんな花が存在していたとは……持つて帰つて観察と研究をしたいな」

「新しい製薬や調査も試せます。一緒にしましょう」

【無所属派閥】フリー・ファミリア 総出で夜が来ない場所にやって来た。「ヴァベル・ファミリア」の案内のもとで辿り着いた場所に騎空艇を停泊させ、思い思いに採取を開始した。その面子の中には「ヘルメス・ファミリア」も混じっていた。

「いやー、こんな場所も下界に存在していたなんてね。誘つてくれありがとう」

「アスファイの慧眼も欲しかったからな。了承してくれてこっちとしても嬉しいよ」

「なに、オレとイツセーくんの仲じゃないか。君が遠出に行くことはオレたちにとつてイイことが起きるからね」

それがこれだ、と摘まんでる虹色に輝く一枚の鳥の羽根を見せたヘルメスは、にんまりとした笑みを浮かべた。

「これは幻の鳥の羽根だ。体は虹色で、空に虹がかかると稀に現れる鳥の名前は虹鳥と言つてね。発見した者は幸福者となり、幸せを呼ぶ羽根を手に入れたら運が高くなるつて言い伝えがあるんだ」

「……その鳥つて、あれのことか？」

さつきからいる話題の虹色の鳥達を指したら、ヘルメスは驚きながら首を縦に振つた。記念に幻の鳥の存在の証拠として写真に収める。そして時間を停止させる邪眼を発動して鳥たちを捕まえてヘルメスとありがたみの念を込めて触れた。

「このまま捕まえられるけど、したら不幸になる？」

「そつとしておいた方が賢明かもね」

停止の効果を解除すれば虹鳥が羽ばたき、数枚の羽根を落として空へと飛んでいった。その羽根を回収して大事そうに瓶の中に保管す

る。ヘルメスも帽子に羽根をつけて被り直す。

「あの幻の鳥の生息地ってこの辺りっぽいな」

「おや、どうしてそう思えるんだい？」

不思議に尋ねるヘルメスに口で答えず、物珍しきで両腕いっぱい虹色の羽根を抱えてアイズ、アリサ、ラトラ、カサンドラ、レイネル、レギンがやってきた。

「ああ、なるほどね。これは信憑性が高いや」

「だろ？」

『？』

アイズ達に船の中に保管するように頼み、ヘルメスとも別れて森の中を歩いていくとニャーニャーと猫の声が聞こえてくる。その声の方へ行ってみると、『異世界食堂』の従業員——アーニャとクロエが虹色の蜂の大群に追われていた。

「何やってんだ」

「あ、イツセイさん」

「シル、あれはなんだ？」

「見ての通りなんですけど、アーニャとクロエが地面から生えてる綺麗で大きな塊に近づいたらたくさんの蜂が飛び出してきて……」

困惑した表情を浮かべ、こうしている間にも蜂に追いかけてられる二人を見つめる。

「どうにかありませんか？」

「警戒心のない奴等だ」

悲鳴を上げ続ける二人を騎空艇に転移してやると、標的を見失った蜂がしばらくはその場で蠢くように留まるが、自分達の巣へと戻っていった。

「にしても、さっきの蜂の体の色……虹色だったな」

「え？そう言えばそうでしたね」

「鳥の体も同じだったし……うーん、もしかするとアレか？」

ある予想を思慮しながらも自分の名前を呼び助けを乞う狐人の三人の少女達の背後から迫ってくる蜂の群れを見て、今度は蜂だけをどこかへ飛ばした。

「地面に生えてる綺麗な塊があつたか？」

「え、どうして知ってはるんです？」

「三人と同じ目に遭つた二人がいたから」

抱き着いて顔を腹部に埋める春姫の頭を撫でながら説明し、腕輪の通信で蜂の巣に近づかないように報せる。

「そうなんや？なんや、甘い匂いがするから気になつてしもうたんよ」

「蜂の種類によつて蜂蜜が採れるからな。多分、虹色の蜂の巣には蜂蜜がたっぷりあるんだらう。三人を追い掛け回したのは外敵の排除に巣の破壊と蓄えた蜜を奪わせないためかもしれない」

「蜂蜜……」

ソシエが思いつめた表情で吐露した。言つた自分も別の種類の蜂の蜜の味を知りたくなり、ユエルに場所を教えてもらう。そこへ行つてみると一誠にシルも付いて行くと示せば、ユエル達も一誠となら大丈夫だろうと信じて案内を買つて出た。一行は深奥へと足を踏み入れ蜂の巣を探して数分後――。

「あれか？」

「あれですね」

「あれや、しかも、こちらが見たよりもえらくぎょうさんおるで……」

「あわわ……」

「はうう……」

茂みから気配を殺して顔だけだし、開けた場所で蜂の巣を発見した。ただ、その巣はルビーの宝石のような色をしていて太陽光を反射して光沢が帯びている。まるで宝石の塊だと彷彿させるそれは見た目も硬そうであった。その巣を蜂たちは取り囲む風にして人を委縮させる羽音を激しく鳴らして、何かに警戒や威嚇をしている感じが伝わってくる。

「皆はどこまで進んだ？」

「アーニヤとクロエはあの巣と三歩手前で。あ、あの巣とは違う場所です」

「うちらはごつからちよつと移動しただけで襲われたんや」

気配を殺して近づけられた実力の差の違いだろうか？だが、やはり警

戒心が強いから外敵の存在に気付いて襲ったのだろう。一誠は鑑定を行った。

『虹蜂 かなり警戒心が強い昆虫で巣に近づく外敵には容赦なく群れで襲い竜種をも殺す猛毒で毒殺する』

『虹蜂巣 女王と働き虹蜂の特殊な体液で築かれた巣。太陽の光を浴びることで宝石のように硬質と化して外敵から蜜と女王蜂を守る役割と果たしている。巣は加工すれば宝石としても扱われ、蜜は虹色の実の花の蜜を採取し加工されているが古の時代から何者にも口にされていけない幻の蜜』

・・・竜種を殺す猛毒持ちの毒蜂だった。

「お前ら、あの蜂に刺されたか？」

「まさか、やばかったりします？」

「魔法で調べたら、竜種を殺す猛毒を持つてる蜂だった」

シル達の顔が一層に真っ青になった。であるが誰も刺されていないと首を横に振って伝える。

「ならいいんだけど、念のために飲んどけ」

幻黎の雫、秘薬を取り出して春姫達に手渡す。遅効性の毒でもあつたら危険極まりない。持病と不治の病すら治すから解毒の効果も十分発揮するだろうと考える一誠にシルが口を開いた。

「これからどうします？」

「勿論採取する」

「ほ、ホンマかいなっ？ 旦那様、いくらなんでも危険やでそれ」

「大丈夫だ。まずはあの蜂の群れを眠らせるから」

秘薬を呑んだユエルから危険性を考慮する言葉を貰うが一誠は口にしたからにはやり遂げない時が済まない性質であるため、蜂の巣の上空に真紅の魔方陣を展開する。白い煙が噴射して蜂達が煙幕の中に消えてしまったから一分後、煙が晴れた頃にはすべての蜂が地面に落ちていて、一誠が近づいても起き上がって襲ってくる気配がしない。

「さてさて・・・ん、中にもいるな。地面の中にも巣があるのか。ああ、女王蜂だな？ で、これが幻の蜂蜜と・・・」

何やらぶつぶつと言いながら巣を手刀で真つ二つに割いては何かをし始める一誠、その姿をハラハラして見守るしか出来ないでいたシルたちは恐る恐ると茂みから出て近づいた。地面に落ちている蜂を踏まないようにして近寄ると瓶に採取した蜂蜜の層を入れていた。

「よし、採取終わり」

真つ二つに割いた巣をくつつけ直し、修復。瓶に蓋をすれば早足で巣から離れる一誠にシル達もついていく。十分に距離を取ったら足を停め瓶の中身を皆で改めて見る。六角形の穴がズラリと並んでいて巣穴と蜜は綺麗な金色だった。

「これだけしか採れなかったのですか？」

「いや、あの巣から半分だけ採った」

「どうして半分だけ？」

「全部取ってしまったら蜂の餌がなくなって餓死してしまうからだ。蜂蜜は蜂の餌でもあり飛ぶための栄養源でもあるし、定期的に蜂蜜を手に入れたいなら蜂の分も残したほうが良いんだよ」

養蜂を知らないシルたちにとって新しい知識と情報であって新鮮な感じを覚えた。この人は何でも知っているんだなと感嘆の念を抱き尋ねるシル。

「イツセーさんは何でも知っているんですね」

「経験や体験したことがあるものなら大抵な。この方法も元の世界で体験したことがあったからわかるんだよ」

「他にも蜂の巣があるみたいだし、探して見つけたらやり方を教えるからやってみろ。オラリオじゃあ経験できないことだからな——」と告げる一誠によって四人は人生で初めての蜂蜜採りをさせられたが、心なしか楽しそうにしていた。

『イツセー殿、よろしいでしょうか』

腕輪に通信が入り、繋げた矢先に立体的な映像からヴァベルーの顔が浮かんで尋ねられた。

「ああ、いいぞ。こっちは幻の蜂蜜を手に入れたところだ。虹色の実の花の蜜のだけ」

『おお、流石ですイツセー殿。私でも知らない素材を手に入れていら

したのですな』

「そつちは何か見つけたか？」

『虹色の実は未だ発見に至りませんが、私の眷族から報告がございまして。この森に大勢の人間が武装した状態で侵入していると』

虹色の実の捕獲の依頼をされた者達かと悟り直ぐに指示する。

『後を追ってるか？』

『ええ、現在進行中で尾行をしてもらってますよ。イツセー殿はどうしますか？』

『皆に報告して一旦艇に戻る』

『かしこまりました』

通信を切ったヴァベルの後に「ヴァベル・ファミリア」とシル、春姫、ユエル、ソシエ以外の全員へ一誠通信してこの森に自分達以外の武装した人間を見つけたと報せた。

「クロエ、隠密に長けたお前にそいつらの尾行をしてくれるか？会話のやりとりも聞こえるなら随一その報告もしてくれ」

『しようがないニャー。虹色の実のデザートを食べさせろよニャ』

『だけど、ここまで船の上から見てたけれど町も国もなかったよね？』

『どこから来たかはわからぬが長期「遠征」で来たのだろう。昔から虹色の実の存在を知っている人間ならばどの時期に実るか認知している筈だ』

『リヴェリア様の言う通りだと思えますが、大勢の集団がここまで来るほど虹色の実は貴重なのでしょうか？』

『誰一人口にしたことがないって話ですし、珍しい物が目の前に手の届く距離にあるなら欲しがるのも無理はないかと』

『手前は今、見たことのない鉱石を手に入れておるところだ！ははは、大量大量！』

『私も手伝わされているけどさ、本当にこんなところに鉱石があるなんてよくわかるわねって感心したわよ』

一部、ウハウハで高揚していたがそれ以外は一誠の指示に従う姿勢で「自分達はどうするべきか」と話し合った。

『イツセーさん、私達は騎空艇に戻ったほうがいいでしょうか？』

「いや、夕方になるまで自由に散策してくれ。それでも戻っても構わない。俺も一旦戻る。ああ、椿。掘り過ぎて中で生き埋めになるなよ」

『うむー』

話を伝え終えたところで通信を切った矢先に蜂蜜の採取を終えたシル達がある方へ目を向けていた。彼女達の視界には武装している一団が武器を構えながら接近してきていて、一誠に寄り添う。銀色の全身型鎧を着こんだ一人の人物が声をかけてきた。

「質問に答えてもらおうか。お前達は何者だ」

「まず自分から名乗るのが礼儀じゃないのか？そつちから名乗らないならこつちも名乗る義理もない」

「……我々はアスタール国に雇われた傭兵だ」

傭兵……しかも声からして女性だった。名前は明かそうとしないが一誠もしないならこちらも名を告げず話を進めることに。

「アスタール国……？知らない国の名前だな。俺達は迷宮都市オラリオから来た者だ」

「迷宮都市オラリオ……世界の中心で世界で唯一ダンジョンがあるあの？」

遙か真北にまでオラリオの存在が知られているとは意外に思いつつ質問を繰り返した。

「傭兵って事は虹色の実を手に入れてくる依頼でもされたか？もしもそうなら俺達もそうなんだ」

「……オラリオにまであの実の話が伝わっているとはな」

「世界各地に飛び回っている商人から聞いてここまで来たんだが、お前らより詳細は知らないんだ。知ってたら教えてくれるか？その代わりに虹色の実を捕獲する手伝いでもするよ」

女性傭兵が押し黙り一誠の周りに目を配る。ヒューマンの若い少女と見たことのない獣人の少女達、五人の足元には猛毒を持っている筈の蜂が地面に転がっていて宝石のように硬いはずの巣が真つ二つに切られていた。

「お前達が毒蜂を無力化したのか」

「魔法で眠らせているけどな。しばらくしたら目が覚めるからここを通るなら今の内だぞ。俺達も直ぐに離れる」

巢を元通りにくつつけ繋ぎ直して蜂蜜を採取した瓶をシル達が抱えて、一誠の次の行動を待つ姿勢になった。傭兵は後ろに控えていた傭兵たちに目を配りひとつ頷くとこの場から通り過ぎようと急ぎ足で駆けだし始めた。女性傭兵が一誠達のもとへ寄る。

「先ほどの協力の話は嘘ではないだろうな」

「同じ物を狙っている立場としてはアレだけど、俺達がこの蜂達を無力化にしなきゃ戦う羽目になってたんだろ？」

「ああ、そうだ。その対策も我々はしてきた。が、いい意味で誤算が起きて予定より早く進めることができる」

「虹色の実がある場所には蜂がいるところに通らないといけないのか？」

「そうでもない。迂回すれば済む話で私達がここに来たのは偶然に過ぎない」

「あらそう、と思いながら虹色の実の情報を聞き出そうとしたが傭兵の足が動き始めた。」

「協力はともかく目的の物を奪い合う者同士ならば親切に教えてやることはできん。私達傭兵『銀色の獅子』団の未来がかかっているのだからな」

「ふーん、じゃあ勝手に尾行させてもらうよ。またな」

後を追いかけてもしなければ振り返らず前へ進む一誠はシル達を引き連れながら、女性傭兵とすれ違いざまにそう言いこの場を後にする。

「……アスタール国の傭兵集団か。神がない国でダンジョンがない代わりに冒険者のように傭兵がパーティを組んで依頼を受けている感じかな」

「それで生活ができるん？」

「実際にああやって装備を整えて万全を期し、依頼に臨んでいるみただからできているんだろうな。全体はどうなのかはわからないけど」

「旦那様、あの人達を追いかけはるん？」

「ついていくのですか？」

「夕方になったら行動をする。空の上からついていくぞ」

そのためには騎空艇に戻る必要がある。五人はのんびりと歩きながらここまで運んでくれた騎空艇へと足を運ぶ。

騎空艇に戻ったらここにも山積みになっている傭兵達がいたことを知った。艇の守り番をしていた金属製の人形兵ゴレムが対処してくれたことを察し、渡場しを歩いて甲板に乗り船内の様子を確かめる。入られた形跡もなく、安全が確認したところで夕方になるまで艇の中の自室で待つていようとしたらシル達が乞うた。

「イツセーさん。蜂蜜を試食してみたいなーなんて」

「……………」

春姫とユエル、ソシエも無言でシルに同調するかのように視線を送る。四人の言動に一誠は口の前に人差し指を立てた。

「んー皆には内緒だぞ？」

悪戯っ子な笑みを浮かべた一誠にシル達も笑って頷き、最初に毒味役として一誠が蜂の巣と蜜を瓶から取り出して実食したのだった。

「……………」

よく味わい、甘さの濃度を認識する。固唾を飲んで見つめる四人の視線を感じながら天を仰ぐ仕草をして動かなくなった。不安になり恐る恐ると訊いた。

「ど、どうですか？」

「……………幻の蜜と言われるだけあって、例えようがない甘い味だ。というか、あまりの甘い美味しさに幸せすぎて顔がにやけてしまいそうになる」

そこまで絶賛する一誠の蜂蜜の評価にシル達も期待に胸を膨らませて試食してみたのだった。反応は、思わず天を仰ぐほど美味であり口端の緩みが止まらず淑女として、なっってはならない淫らかな笑みを浮かべてしまった。

「……………なんちゅーだらしない顔をするんだお前ら」

「は、恥ずかしいですっ」

「う、うううう……！」

「見んといてや！今のうちの顔を！もう、お嫁に行けれへんやんかあ！」

「ユエル、お前は俺の嫁だろ……って、四人とも髪の毛が」

えっ？と一誠に指摘されて互いの髪の毛を見た瞬間、絶句で目を見開いた。——一誠も含めて皆の髪の毛が虹色の光に染まるように帯だしたのだ。

「春姫ちゃん達の髪の毛が虹色につ！」

「シルはんの髪もです」

「イツセー様の髪も……」

「な、なんでこんなことに？」

原因は一つしかない。既に明白な理由を告げた。

「蜂蜜の効果だろうな。あの虹色蜂の身体も蜜を餌にしてるから虹色になってるんだらう」

「じゃ、じゃあ、私達も身体が虹色になってしまうん？」

「摂取の量による一時的な現象だと信じる他ない。兎に角、この蜂蜜の過剰な摂取は厳禁。薬も飲み過ぎるとかえって毒になると一緒だ」

「そ、そうですね……」

虹色の髪など目立ちすぎて恥ずかしい思いをするのは目に見えてある。シルや春姫達は今の自分達の髪を他者に見せられるものではないと、困惑したところで予感が浮上した。

「旦那様。もしかすると虹色の実も食べるとこうなるんかな……？」

「俺もそう思っていたところだ。モンスターを引き寄せる香りを放つと聞くし、その引き寄せられたモンスターも虹色の実を食べているとしたら、身体が虹色になってもおかしくはないかも」

「あ、あり得ますね。うーん、でもこの辺りでモンスターは見掛けませんでしたよっ」

「……じゃなくて、もっと遠いところにいるのかもしれないな」

それはそれで問題はないが食べる時がどうなってしまうのかが問題だ。少ない摂取で髪の色が変わってしまうぐらいなのだから、食べるのは考えものだ。

「えーと、イツセーさん。変なことを聞いてもいいですか？」

思慮していた時にシルが声を投げてきた。何だか言い辛そうに顔を赤らめて一誠へ視線を送る彼女は体を揺する。

「イツセーさんから好い匂いがしますよ」

「匂い……？スン……そうか？」

「あ、本当や。ずっと嗅いでいたい気分になるで」

「はう……」

自分で体の匂いを嗅いでも分からず、対照的に春姫達まで顔を赤らめて一誠の体に顔を近づけ、スンスンと匂いを嗅ぐ仕草をし出す。

「……どうなってるんだ？」

首筋に顔を埋めてくるシルの吐息にこそばゆく感じながらも、何となく頭を撫でたり春姫達の耳と尻尾をモフリまくる。皆が帰ってくるまでか四人の精神状態が正常になるまでは。

「あつはつはつはっ！なるほど、そういう事情があつて髪の色が虹色になつてたのか」

「なつているというより虹色に光っていたつてのが正解だよ」

笑つて納得するヘルメス。皆が戻ってきた頃には虹色の光が失つてシル達も正気？を取り戻し、今ではさつきまでの自分の行いに羞恥心を覚え、耳まで顔を紅潮、身体を微動だにせず固まっている。現在の船内の食堂の大広間でクロエや「ヴァベル・ファミリア」を除いて全員が終結、採取した成果を教え合っていた。中でも一誠達の髪を虹色に光らせた蜂蜜に強い注目を浴びたのだった。

「不思議な蜂蜜ですね。彼女達の奇異的な行動に関しても試食した蜂蜜に関係しているのでしょうか？」

「俺もそう推測してるけど、蜂蜜にそんな効果があるなんてなあ」

「誰にも口にしたことがない幻の蜂蜜なんだろう？それじゃあ知らない

くて当然だぜイツセー君。実際、味の方はどうなんだい？」

「幻の蜜と呼ばれる所以があるからこそ美味だったよ。味の詳細は例え難くて口では言えないな。試食会はオラリオに戻ってからしよう」

そして皆が淫らでだらしない顔をした瞬間を撮影する気満々で、心中悪魔的な笑みを浮かべていた一誠を誰一人気付くことはなかった。

その後傭兵たちの後を追いかけ始める。現在の時刻は夕暮れであるにもかかわらず、太陽が地平線の向こうに沈む気配を感じさせない現象に一行は驚嘆の念を漏らした。空の上から見ても肉眼で目視できる範囲では微かな朱色も見えず不思議でいっぱいであった。騎空艇を操作する一誠の腕輪にはクロエとヴァベルーと通信状態にしたまま報告をし合い情報を交わし合う。

『イツセー、虹色の実の在処は曖昧だけどわかったニヤ』

「そうか。他には何か気になることはあるか？」

『うーん、他にもいくつか雇われた傭兵たちの集団がいるみたいだし、かなり綿密に作戦を練ってる感じの話ししかないニヤ。それとずっと動きを見てたら初めてな感じじゃなかったニヤ。行軍の速度が速かったし』

『一度や二度だけではなさそうですね。虹色の実を手に入れようとする念入りさと執念を覚えます』

挑戦をしては失敗を繰り返してきたのだろうか？実になる周期はどのぐらいなのかは定かではないが、各傭兵たちの連携を重視した作戦が後に始まろうとしているのだろう。

「虹色の実はまだ実っているかわかるか？」

『まだみたいらしいニヤ。でもニヤンか連中は雨が降るまで移動を続ける様子ニヤ。今はもうテントを張り始めてるけど』

『もう夜の時間帯になろうとしているからでしょうな。睡眠をとって明日に備えるつもりなのでしよう』

「だろうけど、雨……ね。ここ雨が降るのか。だとすると虹がかかる場所に虹色の実が見つかるのかもな」

『ちよ、ミャーが言おうとしたことをさらつと言わないでニヤー！』

この推測が正しければクロエ達を回収しなければならない。合流地点まで来てもらうよう言うとう通信を切り、その日は船の中を真っ暗にして一日を過ごした。そうしなければ夜の時間帯なのに朝陽が地上を照らし続けるので体感時間が狂ってしまうからだ。

——翌朝。

自然の恵みの雨はやってくる感じがしない晴天を迎えた一行。今日も各々と動き珍しい花々や幻の蜂蜜を採取、傭兵集団の活動の監視をしつつ一日を過ごした。

——二日目。

昨日と変わらない朝日を全身で浴びながら騎空艇で場所を変えながら活動する。

——三日目。

雲行きが少しも妖しくなく太陽が顔を出し続ける今日も虹色の実を見つけることは叶わなかった。なので暇潰しとばかり騎空艇の甲板で参加をする者だけ模擬戦をして時間を過ごした。

——四日目。

『異世界食堂』の従業員達は仕事に戻るためオラリオへ帰還。

——五日目。

傭兵集団の動きに変化はなく、度々移動を始めては野生動物を狩って食事にありついていった。一誠達はそれ以上の料理を作って食事していたことを傭兵達は知る由もなかった。

——六日目。

ここまで遠出で長く粘ったのは今回が初めてで流石に怪しく感じ始める。傭兵集団の存在も未だあるので虹色の実の出現まではまだまだ粘り強く待つ必要があるのだろうと、一行も根気を見せて滞在した。

「.....ん？」

分身体達に探索を任せて船番していると、明後日の方角から黒い霧のような物が見えてくるようになった。それは何かなのか遠視ができる一誠にとって直ぐにわかり口端を吊り上げた。

——七日目。

激しい風と雨に見舞われて張っていたテントが吹き飛ばされ、縄で固定していた物資も吹き飛ばされそうになっていた。野営をしている傭兵達も全身がずぶ濡れになりながらもこの暴風雨に耐えなければならず、木にしがみつかないと吹き飛ばされそうになる自身を必死に耐えていた。

「皆、無事かあっ！返事をしろおっー！」

声を張り上げて安否の確認を取る彼女の言葉は風にかき消されて誰一人からも返答は来ない。もしも聞こえて返そうとしてもこの暴風雨の中で相手に伝わっているのかさえわからない。それでも自分の声を届いていることを願って何度も張り叫んだ。

——刹那。暴風雨がピタリと止んだ。

全身の力を駆使して木にしがみついていると暴風に吹き飛ばされそうになっていたというのに、不自然なまでに雨風の猛威が止まった。何でだという抱いていた疑問は朗らかに聞こえる男の声でさらに混乱した。

「いやー、すげー嵐だな」

「っ!？」

木が離れて声がした方へ目を向けると、真紅の長髪に濡羽色と金のオッドアイの青年がちつとも雨に濡れていないでそこに立っていた。

「大丈夫か？」

「お前……どうしてここにいる」

「お節介をしに来た。一緒に来てくれるなら屋根のある場所で雨が止むまで過ごせるけど」

どうだ？というその提案に怪訝な気持ちを抱いている時、木の陰から傭兵達が姿を見せ女性傭兵に近づいた。仲間の無事を確認して安堵を覚え、男へ振り返る。

「この不自然な現象はお前の仕業か」

「ああ、上を見ればわかると思うよ」

警戒しながら顔を上げて視界に映る光の膜が、今も聞こえてくる嵐の風音以外すべてを防いでいるのが把握できた。アスタール国に神

はおらず、迷宮都市オラリオに住む者が、神の眷族の者が成せる業なのかと半ば啞然としてしまう。

「で、どうだ？こんなところで一日中いるよりは屋根のある場所にいる方がいいと思うよ」

「……私達に甘言で誑かし、妙な真似をする気だろう」

「そんなことはしない、って口で言っても信用してくれないよな。とりあえず、俺がいるところを見に来てくれるだけでもありがたい。お前らの世話はうちの女性団員に頼んでもらうが、相談してくれるも構わない」

男の提案に訝しみつつも「危険な環境の中でいるよりは」——と仲間と相談し合った結果、男の提案に乗ることにした。

夜が訪れない森に暗雲が立ち込め、雨雲と化すると降り注ぐ豪雨が騎空艇を覆う光の膜のような結界に叩きつけ襲う。風も凄まじく暴風雨にもなつて空気を震えさせた。

「本当に雨が降った」

「これで虹が出て虹色の実が実るって話だけど、実際はどうなのでしょう」

「ん、イツセーも半信半疑みたいだから雨が止んで晴れないことにはわからないかも」

「虹色の実はどんな味がするんだろう。楽しみだね」

「だな。早く食べてみたいよ」

「旦那様が言うにはゼリーにした方が美味しいと思うって言ったで」

「楽しみ。ね、春姫ちゃん」

「はい。イツセー様のお料理は全て美味しいですから」

それは激しく同意・同感！と感想を抱く少女達。城に戻ってダンジョンの探索をできるも、一誠と一緒に時間を過ごしたい少女達は騎空艇の中で雨が止むのを一誠の部屋で待つ。

「本当に雨が降りましたねリヴェリア様」

「イツセーでも本当に雨が降るのかと不思議がっていたからな。あい

つがそうであれば私も降るか降らないか断言をすることもできない」

「雨が止めば虹が出て空から虹色の実を探す予定みたいだけど、実つて木から実るんでしょ？見つかるのかな」

「その実の匂いにモンスター共が引き寄せられるという話である。手前らは地上からモンスター共を追いかけ探すのかもしれない」

アリシア、リヴェリア、アナキティ、椿が食堂で外の悪天候を見聞しながら明日か明後日の話をしながら不意に思った。

「イツセーは？城に戻っているの？」

朝顔を出してから見ていない男のことを思い出したアナキティの素朴な疑問をリヴェリアが解消した。

「いや『お節介をしに行ってくる』と外へ出て行った」

「あー」

「くくく、あいわかった。であれば手前らも勝手にしてやればイツセーにとって気が利くと助かるかもしれないな」

一誠の性格を鑑みて察して口から何とも言えない声を発し、一笑して立ち上がった椿の言葉にリヴェリア達も立ち上がり持て余す時間しかなかった唯一出来ることに自ら行動した。

木々が薙ぎそうになる暴風を全身に襲われながらも真っ暗な森の奥から現れる一誠。その背後には接触した女性傭兵と十二人の傭兵達が暴風雨に打たれながら付いて行き、光の膜に包まれるこの森にある筈がないの存在に動揺する。

「船、だと？こんなところに何でこんなものが」

「まあ、疑問は最もだけどとりあえず中に入れ。軟な体はしていないから風邪などひくか！と言いつつさうだろうけど、人の体は完璧じゃないんだ。いざつてときに十全の力も発揮できないんじゃないかみたいだろ？」

甲板から掛けられてる渡橋に足を乗せて歩いていく一誠に数歩遅れて傭兵達も船に乗り込むと、自分達が知っている船の形状と異なっているのが最初に目に飛び込み、次には大量のバスタオルを運んできてくれたリヴェリア達の姿を視界に入れた。

「頼んでもいないのに、気が利くな。ありがとう」

「伊達にイツセーと一緒にいないからな。これぐらいはわかってしま
うものだ」

「でも流石に料理は作っていないんだろ」

「うむ、手前は作る専門ではなく食べる専門である！」

胸張って言うな。と椿に呆れて突っ込む一誠は後ろにいる傭兵達
に親指で差した。

「一先ず風呂に入れてやってくれ。その間作ってくるから」

「あ、お風呂のご用意もしております。アキはいま温かい料理を作っ
ているので」

「なんだ、作ってくれているのか。本当に気が利くな」

アリシアの頭を撫で傭兵達のことを任せて船内へ入る一誠。一連
の様子を見て女性傭兵はリヴェリアに質問をした。

「お前達とあの男の関係は……?」

「私達の団長だ」

「そして手前らの——」

余計なことを言う前兆だとリヴェリアとアリシアが椿の口を手で
防いで止めた。

「二通り身体を拭いてもらってから浴場に案内をする。異論はない
な」

「どうしてそこまでしてくれる。虹色の実が目的なら私達は邪魔な存
在の筈だ」

「こちらにも分けてくれるならば問題はない。そしてこうして助力を
し、情報を提供してもらおう。私達の団長はその意味も兼ねてお節介を
焼いていると思うのだ。何分、私達はお前達より虹色の実のことをよ
く知らないのではな」

理由は理解した。納得もできる。アスタール国にとって虹色の実
のことは公にしてはならないわけでもない。依頼の達成がもつと効
率よく合理的になるならば……

「わかった。あの男に助けられたようなものだからな。それぐらいの
情報なら惜しまず打ち明けよう」

「感謝する」

お互い手を出して握手を交わし合う。その後、傭兵達は柔らかいタオルで体を拭き船内にある浴場へと案内された。濡れた服は乾燥機の中へ投入し、乾くまでは温かい湯に浸かって疲れを癒す。船の中に浴場があるなんて信じられない話だが現実を受け入れる他ない傭兵達は、長旅と嵐に見舞われて久方ぶりの束の間の休息を堪能するのであった。

乾燥機で乾かした衣類を身に纏い食事に鎧は不要だと指摘を受けて、リヴェリアに案内された場所で傭兵達を出迎えたのは温かな料理を並べられている食堂だった。具材がたっぷりな豚汁と甘口のカレーにサラダ、フルーツヨーグルトという傭兵達にとって見たことがない料理ばかりが振舞われた。それらを作ったアナキティと一誠が当然食堂にいた。

「好きな席に座っていいぞ。お代わりもたくさん用意してあるから遠慮なく食べてくれ」

促しの言葉をかけられ少し躊躇しながらも席に座って各々と食べ始めた傭兵達は、カレーを口にした途端硬直した。そして次の瞬間。口の中に広がる数多のスパイスが彼女達の食欲を爆発させたかのように、未知の味と傭兵になってから質素な料理が当たり前になって忘れかけてた食べる料理の楽しみが思い出し、一心不乱に食べ始め出したのだった。

「何だこれ、美味しい美味すぎる!?!」

「この具材が多い汁物も今まで食べてきた人生の中で一番だわっ」

「ああ、美味しいい〜!」

「あの、この料理をお代わりください!」

あつという間に傭兵達の胃袋を鷲掴みにした異世界の料理にリヴェリア達は達観した目で見つめた。かつての自分達を見る感じで遠目になって。

一人平均的に二皿もお代わりして、さらに何回もお代わりをした傭兵達は幸福な満面の笑みを浮かべしばらく休憩すると用意された柔

らかい歯ブラシと歯磨き粉を手渡され歯を磨く催促をされた。使用して絶賛の感想を述べ是非欲しいと求めてた傭兵達は女性傭兵に叱咤された。

「仲間がすまないことを言った」

「いや、元々使い捨ての物だから持つて行つてもらつてもらうつもりだったんだ。逆に自分から欲しがるとは思わなかったけどな」

「オラリオにはあんなものや料理が普通にあるのか？」

「いんや、俺んとこの派閥……パーティにしか使われてないし料理に関しては俺の故郷のだから独占状態で店を構えて料理を振舞つてるんだ」

リーダー格の女性傭兵と話をし、そう言えばと思つて自己紹介をした。

「名乗り遅れたけど俺はイツセー。【フリー・ファミリア無所属派閥】の団長を務めている。よろしく」

『銀色の獅子』団の団長、エレオノーラ・ブリュンヒルデだ」

銀髪に赤い瞳に抜群のプロモーションを誇る女性と握手を交わし合い、早速とばかり一誠は虹色の実のことを訊き出した。

「アスタール国は虹色の実のことは知っているんだよな？」

「ああ、何時からなのかはわからないが一年に一度は私達傭兵や傭兵崩れに国から依頼される」

「王族か貴族に？」

「王族だ。商人からも依頼を出される。しかし、何度依頼を受けても虹色の実に群がるモンスターは毎年変わらないどころか年々増加し続け、モンスターがいなくなった頃には虹色の実を探しても見つからないのが当たり前だ」

「お前達傭兵でも見たことがないのか虹色の実を」

「虹色の実が実るのはこの嵐が過ぎ去つてからで、空に浮かぶ虹の先に実があるという話だ。だから嵐が来る前に依頼を引き受けた傭兵達はこの森の中に入り、虹が出てくるまで待たなければならない。毎年私達はそうやって虹色の実を探してはいるんだが、中々上手くいかない。運が良くないようだ」

何てシビアな依頼を受けるんだか、と感想を心中で独白し外の嵐を横目で見て尋ねる。

「あの嵐が過ぎるのって明日か？」

「明後日の二日後だ」

「……二日間も嵐の中にいるって凄い精神力と忍耐力だな」

「数少ない稼ぎ時の一つだ。成功すれば報酬は約束されたものも当然だからな」

「でも、毎年手に入れないでいるのに王族もよく毎年諦めず依頼を出すんだな」

「王族は欲深いからな。虹色に実る果実がある信憑性が高ければ調査し、本当ならば手に入れるまで何度も依頼をする」

王侯貴族らしい執念深さだったことに何とも言えない。傭兵達の誰も虹色の果実を見たことがないと言うなら、一誠も見つけることが簡単では行かなくなった。

「なあ、モンスターって体は虹色なのか？」

「何を言っている？そんな色のモンスターはいないぞ。いるとすれば虹蜂ぐらいだ」

「そうか」

奇妙な安堵感を覚えてしまいエレオノーラの整った容姿を見一瞥して麦茶を口にする。

「傭兵稼業ってどんな感じなんだ？」

「どんな感じと言われてもな。一人か複数で依頼を請け負い、達成すれば金品を貰う程度だ」

「依頼って毎日よくあるものなのか？」

「殆どはモンスター退治が主だ。国外にも町があるからモンスターの侵入もある。傭兵は町に被害が出ないよう城の衛兵の扱いをされるが依頼は依頼だ。金を貰えれば文句は言えない。他は国内の国民から少ない依頼料で手伝わされたり雑務をさせられたりすることもある。迷宮都市オラリオはどうなのだ」

「オラリオにはダンジョンがあるからな。迷宮の中には無限の宝や素材や資材が眠っているのを商人達はそれを求めて冒険者に依頼をし

たり、冒険者がそれを商人に高く買い取ってもらおうとする」

お互い住んでいる国と都市をの情報を共有し合い、会話を弾ませる。知れば知るほど住んでいる環境が異なっていることをわかり、感嘆や羨望の声漏れることしばしば。

「なあ、今回も依頼が失敗したらお前らはどう過ごすんだ？」

「今回も失敗して無一文無に戻るだけだ」

「それぐらい金をかけているのか。前金とかは？」

「国から前金は支払われない。実物を見せない限り絶対に報酬も出さないから私達傭兵にとって骨折損だ」

それでも稼ぎ時の一つだから手を出さずにはいられない傭兵の悲しい習慣かもしれない。勝手な気持ちだろうと話を聞いてしまったら、彼女達のために虹色の実を手に入れなければならなくなった。

冒険譚39

嵐が過ぎ去るのを二日間も待ったことで皆が待望していた巨大な虹が空に現れてしばし一同はその美しさに目を奪われた。虹の出現からしばらくしてどこからともなく、モンスターの鳴き声が聞こえてきた。

「情報通りモンスターも来たな。よし、俺達も行くぞ。空を飛べるアイズ達は船から降りてモンスターを追いながら先導してくれ」

すぐさま騎空艇を稼働させて空からモンスターの行く先を追いかける。森林の上から見え隠れするモンスターの走行に目を配らせるアイズ達は先頭に位置して一誠達を先導する。何かを目指して駆ける怪物達に便乗して飛び続けると有翼のモンスターまで明後日の方角から飛んできて、さらに地上のモンスターと同じ方角へ向かっていくのを視認する。

「ふ、船が浮かんで、飛んで……っ!?!」

傭兵達が可哀想なほど自分の中の常識に逸脱した現実には、甲板から近づかず、震えて緊張と恐怖に半ば混乱しかかって仲間同士と身体を寄せ合い座り込んだり、柱にしがみついたりして気持ちを落ち着かせようとしてた。

「えつと、中に入りますか?」

「け、結構だ。わ、私は大丈夫だ気にするなっ」

どう見ても大丈夫そうに見えないな。一誠の横に陣取って座り込むエレオノーラも仲間と同じな彼女の言動に思わずにはいられずアスナは、傍に立って話をして恐怖を紛らわせようとするのだった。

空に黒く細長いのが蠢きながらどこかへ飛んで行く様の正体、有翼のモンスターを追いかけること数十分。朝日に照らされて出来ている虹の先まで辿り着いた。

「イツセー、大きな虹色の実があった!」

大きな?戻ってきたアイズの言葉に首をかしげ、甲板から下へ覗き込むアスナ達もその目で確かめ認知した。

地上から数Mの樹木にヤシのようにいくつも虹色の実が生えていた。場所は緑が一切ない荒れた地。その木に群がるモンスターの数はダンジョンではお目にかかれない膨大さで、既にいくつか地上に落とされていてモンスターに虹色の実を食べられていたが、他の同胞や同族同士による争いが地上を埋め尽くす中でどこもかしこも見受けられ、まだ落とされていない実にも有翼のモンスターに張り付かれ、食べられているも地上と同じくモンスター同士の虹の実の争奪戦をしていたのだった。中には竜種もいる。

「あれが虹色の実・・・ここまでくればさすがに香りが凄いな」
「いや、感心してる場合じゃないって！もうお目当ての果実が食べられてるじゃん、イツセー！」

オラリオから再び騎空艇に戻ってきたルノアの焦りの叫びが操舵のところにいる一誠の耳に届く。

「わかってる。ここまで来たからには絶対に捕獲する。実に群がるモンスターをどかして騎空艇に運んだら直ぐに離れるぞ」

「全部採るの？」

「全部だ、といたいところだけど三個だけ残しておこう。もしかしたら実の中にあるかもしれない種がまたここで芽吹いて虹色の実を実ってくれるかもしれない」

それに一個や二個で満足できるか、と言いたげな一誠が騎空艇の高度を下げてから地上へ飛び下り、すべてを切り刻む嵐を召喚して虹色の実を群がるモンスターを蹂躪し始めた。傍目から見ても凄い勢いで嵐に巻き込まれて舞い上がり、数を減らしていく様子を見ながらリヴェリアは指示を出した。

「私達は虹色の実に取り付いてるモンスターの駆除だ。これ以上食わせてはならない。空を飛べる者、魔法や長距離の攻撃ができる者は騎空艇に近づくとモンスターを迎撃するのだ」

二手に分かれて得物を片手に騎空艇から飛び下りて実に張り付いているモンスターを一掃し始める。片や魔法の詠唱を始め、唯一対物ライフルで射撃するシノンは大型のモンスターを撃ち貫く。地面に着弾すると魔法が発動してさらに周囲のモンスターも小規模に巻き込

む実弾は特注品の魔法の弾。今回が初めて使用する対物ライフルの使い心地に満足しているようで口元を緩めている。

「いいわねこれ」

「す、凄いです。弓、ではないですよね？」

「ええ、そうよ。銃っていう名前の武器で弓矢より速く、もつと遠くに攻撃が当たるの」

「イツセー様がお創りになられた物なのですか？」

「違うわ。でも……案外あいつなら作れそうな気もしいわね」

「はい、イツセー様は凄いですから」

非戦闘員の春姫を始め、魔法による砲撃型の魔導士も騎空艇に待機し且つ周囲の状況を把握して異常を発見次第報告を任されている。他、有翼のモンスターとの接近を警戒、迎撃してもらったためでもあるが彼女より適した存在がいた。風と炎を纏い、得物にも進む二人の少女が黒い影の中に突っ込み引き裂くようにして飛び回り、確実に数を減らしていた。

「アイズ、あれをやる！」

「ん、わかった」

肩を並べて虹色の実へ向かう有翼モンスターへ属性付加の剣に魔力を込めて振り下ろす。

「凄まじいな。二人の実力とイツセーの武器の能力がそうさせるか」

空に横向きで発生する嵐に炎が付与すれば業火の嵐と化して大半の有翼のモンスターを呑み込み一瞬で灰化にしてみせた二人の戦果に、リヴェリアは称賛の念を抱いた。

「そうですね。でも、地上の方がよっぽどおっかないですけど」

魔法の矢を番い地上へ放って一気に数匹を屠るアリシアは、暴れまわる様に荒れ狂いながら動きモンスターを蹂躪している一誠の魔法に畏怖の念を覚えてた。今ではもう虹色の実に張り付いているモンスターはおらず、一種の防衛線を敷いている一誠達が最後の一匹まで狩り尽くす勢いで攻め込んでいた。その間、エレオノーラ達『銀色の獅子』団や『異世界食堂』の皆が巨大な虹色の実を捕獲して騎空艇の甲板へ持ち運ぶ。

「ルオオオオオッ！」

そこへ運よく猛攻から免れ、目当てのエレオノーラ達が樹木から探ろうとしている果実へ狙う有翼のモンスターが突っ込んできた。当然彼女達も気付き、迎撃態勢に構えた。が、狙いは虹色の実であって邪魔する彼女達を諸共巻き込んで樹木の大きな葉から突き飛ばした。すぐさまアリシアが樹木にまで傷つけない普通の矢で有翼のモンスターの頭を貫いたが、地面に落ちようとしている彼女等を助けるまではどうすることもできない。頭から落ちていくエレオノーラを誰も間に合わず、見張った目で潰れる瞬間をスローモーションで見ると敵わずにいたところ。

金色の翼が彼女達を全員受け止めて死から救って見せた。

「これは……?」

柔らかい何かを認知して己を受け止めた物を確かめながら目を動かすと、一誠の背中から伸びていることが分かった。あの男はヒューマンではなかったのか?という疑問が湧くが、助けられた事実と今は考える時ではないことを思慮して仲間たちと共に虹色の実の捕獲に臨んだ。

指定した数を残し他全てが載せられたことを確認したりヴェリアは、腕輪で地上にいる一誠達に告げさせ引き下らせる。虹色の樹を伝って騎空艇へ戻る一誠達。直ぐにこの場から離れようとする、未だ森の奥から後続として現れたモンスターの群れが残された虹色の実がある樹に群がった。

「どれだけモンスターを夢中にさせるのですかこの実は」

離れて行きながら遠巻きで彼の様子を見ていたアスファイが唾然としつつ騎空艇の甲板にあるオパールのように七色に輝いている、あちこち食べられた虹の実を見て唾然とする。その実から芳醇な甘い香りが発生して唾を飲む何人かがジツと凝視していた。

「アスファイ、この実を何かしらのアイテムに作れるんじゃないか?」

「モンスターを誘引させるものならば可能でしょうね。既存している肉罠トラップより効果がありますし」

「だよな。それに……ミア、これの果実酒作ったら儲かるんじゃない？」

「そういうんだっいたらこっちに寄こしな。あたしがとびつきり美味い酒に作ってやるよ」

「俺も作ってみたいから勿論だ。それにある神にも頼んでみようかな」

「一体誰？という視線を皆が送るも、言った本人は答えずエレオノーラに声をかけた。

「見ての通りかなり状態が悪いけど大丈夫なのか？」

「捕獲すら極めて難しかった虹色の実を初めて手に入れたのだ。状態の良し悪しを王族や商人が言うなら分けてもらうつもりの全てをお前達に譲る」

「いいのか？」

「いいんだ。お前達のおかげで手に入ったようなものだし、私達は殆ど何もしていないからな」

エレオノーラの気持ちを汲んで頷き、魔法のカードで虹色の実を収納する。そしてヴァベルーに近づく。

「ヴァベルー、実はどのぐらい欲しい？」

「一つだけで十分ですよ。何せ大きくて私達共では何個も捌けそうにございませんから。それに幻の虹色の実の用途をこれからイツセー殿に試してもらいます」

「ヴァベルーのお目にかかるとすれば酒しか思いつかないんだがな」

「果実ですからデザートや飲み物にもなるかと。楽しみにしておりますイツセー殿」

苦笑いする他ない一誠自身もそれらを試行錯誤して試さなければならぬ。失敗を繰り返して初めて成功例が挙がるのだから無駄にしないよう注意せねばいけなくなるわけで、ヴァベルーに期待されていることからそれに応じようと臨む一誠はアスタール国へ騎空艇を進めるのであった。

アスタール国。オラリオから遙か彼方の北方にある古代から神時

代——現代まで栄えている国。神時代に時代が変化しても国は変わらず今日まで不動を貫き存在し続けたが、アスタール国を知っているのは彼の国の周辺の町村か数日もかかる遠いいくつかの小国や大国のみ。それ以外となると完全に関知されておらず、存在すら知られていないある意味では人跡未踏で前人未到の国だった。

「——面を上げ」

『銀色の獅子』団達がアスタール国の傭兵として虹色の実の発見から今日まで誰もなし得なかった虹色の実の捕獲を、その実ごと荷台に乗せ城下町中で見せびらかしながら訪れた。誰も見たこともなく嗅いだことがない甘い匂いを発するその実を本物として受け入れ彼女達を讃える現国王。

国へ戻った彼女達を見送った一行は不可視の魔法の結界を張って、国から離れた草原のところで停泊させていた騎空艇の甲板で用意した椅子に座ってテーブルを挟んで待っていた。

「お待ちせ、完成したぞー！」

快晴な言葉と共に一誠が艇の中から台車を押しながら魔法で宙に浮かせたクロシユで被せた皿を運んできた。一同は待つてましたと意識を向け、自分の目の前に置かれた皿やスプーンを視界に入れた。「初めて見た食材だからゼリーにしてみた。見てびっくりするぞ開けてみてくれ」

一斉に手を動かしクロシユから皿をどかし——目を皿のように見開いた。白い皿の上にプリンのような形をした七色のゼリーは果肉から加工されたためか、果汁が蒸発して小さな虹ができていた。

「な、何これ……ゼリーに虹が目の前でできてるんだけど、魔法でしているの?」

「魔法の演出だと思われるのはしょうがないけど、正真正銘その虹色の実のゼリーから出ているんだ。作った俺でも驚いたぐらいだぞ」

「凄いです……虹を見ながら食べるなんて初めての経験です」

「実の温度は5℃に保っている。時間が経つにつれに温度が上がり味も変化すると思うぞ」

「冷たくないの?」

「一年中太陽の光を浴びた地面だから植物も温かったのは認知したただろ？まあ、憶測を説明するより早く食べよう。皆の頑張りでようやく手に入れたんだからな。——いただきます」

『いただきます』とそれが食べる合図であったかのように、皆はスプーンを取り出しゼリーを掬い取る際にプリンのように柔らかく金のような重さを感じ取った。そしてゼリーを食べた瞬間。全員の口の中で——七回も七つの味が変わるという体験したことがない味わい方をしたのだった。

「は、はっはっは・・・ははははは！何だこれ、超面白れえー！」

「っ——！！お、美味しい！」

「しかも何かの味かはわからないけれど、全部甘くてまるで味のデザートねっ」

「数種類の味を楽しめる料理は元の世界にもあるのだけれどこれは・・・」

「比じゃないってことは確かだ。初めてだぞこんなデザートは」

異邦人と転生者が味わったことがないデザートに驚きを隠せなかった。リヴェリア達も言葉を失う程の美味であることを窺わせ、一誠はヴァベルーに絶賛した。

「ヴァベルーありがとうな！『ヴァベルー・ファミリア』の情報のおかげでこんなデザートを作ってしまったよ！」

「いえいえ、こちらこそ貴重な体験をさせてもらって感謝したいぐらいですよイツセー殿。あなた様のおかげで私達は更に幅広く情報を得られたのですからね。そして虹色の実の加工にはかなり期待を持てることを確信しました。果実酒もきつと私の想像を越える一品となるに違いない！」

「だ、そうだミア。オラリオに戻ったら早速酒作だ！」

「あいよ。こんな前代未聞なデザートを食べたからには挑戦しないわけがないよ」

「人工的に栽培できる挑戦もしなくちゃな。これは試す価値があり過ぎる」

「できるのか？種があったのか？」

「あつたよ。だからこそ挑戦してみたいんだ。庭園とダンジョンの中でどう育ちが違ってくるのか試したくなる」

嬉々としてそう語る一誠に誰一人否定しなかった。逆に手伝おうという気も湧いて共に栽培して成功を果たしたくなったのだ。こんな、太陽のように笑う男と一緒に喜ぶために……。

それからしばらくして、『銀色の獅子』団が騎空艇がある平原にやってきた。甲板からその姿を確認して不可視の結界を解き、上がったもらうとエレオノーラは一誠に頭を下げた。

「あなた達の協力のおかげで王に虹色の実を届けることができた。深く感謝申し上げます」

「それはお互いさまだ。俺達も虹色の実を加工して食べたら面白い体験ができた」

「食べたのですか？味は、どうでしたか？」

「口で語るより直接食べたほうがわかる。皆の分も作って用意しておいたから食べてくれよ」

人数分のゼリーを用意して待っていた一誠の催促に恐縮しながら果汁で虹が浮かぶゼリーの前に座り、エレオノーラ達も実食した。次の瞬間、身体を震わせる。

「……………これが虹色の実の味っ」

「あの実をそのまま食べたほうが良いかなって思ってデザートにしてみたんだ。それが成功して皆も美味しく食べてくれた。フルーツの王様の称号に相応しいと思わないか？」

「思わない方がおかしい。この実を捕獲するためにどれだけの苦勞をしてどれだけの被害が遭ったか。ああ、納得のいく味だ……………」

七度も変わる七つの甘い味に感動して尻目に涙を浮かべた。他の傭兵達も今日までの苦勞が報われたようでゆっくりと噛みしめ完食を果たした。

「結果はどうだった？」

「献上できた。お前達をさすらいの旅団に協力してもらった後に去って行ってしまったと報告をした」

「律義だな。事実とは言え、自分達の手柄にしないのか」

「虚偽を言うつもりはない。私達はお前達と出会えたことが運が良かったのだ。来年からは我々だけでも対処ができるようにしてみせる」

できるのか?と訊くとエレオノーラが一誠に苦笑する。

「無理だろうな。あの数のモンスターを既存している私達傭兵だけでは到底どうすることもできない」

「……お前達はこれからどうする?褒賞は貰ったんだろ」

「一生、とまではいかないがしばらくは遊んで暮らせる大金は貰った」

すると、エレオノーラ達が立ち上がって腰に下げていたその褒賞金を差し出すように突き出した。

「我々からのお礼として受け取ってはくれないか?」

「いや、何言っているんだよ。それはお前達の物だ。あの実を手に入れただけでこっちは儲けたもんだからその褒賞金は受け取れないぞ。それにアスタール国とオラリオの通貨が違うから使えないぞ」

やんわりと拒否されてしまい困惑の表情を浮かべるエレオノーラ。であるが、一誠も困ったように息を吐いた。

「律義な奴からの恩返しとか感謝とかこっちは腹いっぱい破裂しそうだよ」

「そうなのか……?」

「ああ、そうだよ。だけど、そうだな……くれるなら貰う。いいか?」

「あ、ああ勿論んだ」

急に手のひらを返したように感謝の印を受け取りだす一誠。全員から貰うと——今度はエレオノーラ達に全部手渡した。どういうことだ、と怪訝な顔つきで一誠を見ると不敵な笑みを浮かべていたのだった。

「お前らは傭兵だよな?」

「は?そうだがそれがなんだ?」

「なら、金を払ったらしばらくは雇い主の傍にいてくれるんだよな?」
まさか、と一誠の発言にエレオノーラは言葉の深意を察し、信じら

れないものを見る目で瞠目した。彼女の反応に気付いたかとほくそ笑む一誠は口を開いた。

「今手渡したのは、俺がお前達を雇いたいから払った金だ。全員、俺の元で働いてもらうぞ?」

「私達を雇うなんて……何を考えているんだ」

「不満か?雇う理由なんて大したことじゃない。——人材確保と護衛に虹色の実の栽培の手伝いをしてもらうためだ。俺の【無所属派閥】フリー・ファミリアの傘下としてな」

「イツセー、すつごく顔を輝かせてる」

「傭兵と言えど地上のモンスターと戦える実力があるからな。そこに目を付けたのだろう」

「あざといなおい。『異世界食堂』の従業員をあんな方法で増やすなんて」

「イツセーさんの人を集める方法って普通だと感じるのに、断られたことってないですよ?」

「私達が見ている前でじゃあそうだね。まあ、断られたことはあるでしょうけど」

「仲間が増えたって事で認識するべきですね」

と、身内からそんな話声が聞こえたかどうかはわからない一誠は決定事項だとばかり騎空艇を稼働させ、一気に転移魔法でオラリオに戻ったのだった。

その日、アスタール国から戻った【無所属派閥】フリー・ファミリアは各々と城の中へ戻り、エレオノーラ達を案内したり【ヘルメス・ファミリア】と【ヴァール・ファミリア】と別れたりして一区切りついた。早速とばかり虹色の実の種を庭園に植え、ダンジョンの18階層にも植え終わると虹色の実を収納したカードを持ってある場所へ向かった。

「こんにちはー!」

来訪の声を上げて存在を示す一誠が立っている場所とはある【ファミリア】のホームの前。ここに求めている主神がいるはずだが、誰一人

として扉を開けて出迎えてくれる気配もなければ、中には冒険者の気配も感じない。もぬけの殻なのかと思ってしまう。留守かと思いき直そうとした一誠の横から朗らかに声を掛けてきた。

「お、イツセーやん。奇遇やな」

「ロキ? どうしてここに?」

【ロキ・ファミリア】の主神にして女神の彼女が手を挙げて近寄ってきた。一誠の問いにロキは当然のように言い切った。

「そら自分、ソーマに用があるんや。酒を貰いに来たんやで。イツセーは?」

「俺もその男神に依頼をしに来たんだ。にしても意外、ロキはソーマと面識があつたんだな。まあ、納得できるけど」

「いや、ないで?」

「ない?」

おかしな話だときよとんとロキを見つめる。酒を貰いに来たんやと言うのだから、酒狂いなロキが顔を会わせるのは初めてだという。それなのに酒を求めに来た? と。

「ソーマア! うちや、結婚してくれー!」

「アホか!」

と、目の前で突然叫び出す女神にツツコミを入れる一誠だった。次の瞬間、どうして大通りで漫才をしなくちやならないんだと苦悩している一誠を他所に、無人のホームにシカトされたからか、腹立ってる様子で同等と不法侵入をしてみせるロキに頭を抱えて、元主神が問題を起こさないよう見張る必要があると自己完結、ロキの後を追うのだった。

「ロキ、無粋な家捜しは止めろよな。フィン達に言いつけるからな」

「分かっとなるって。にしても子供のひとつこ一人もおらんやん、ここ
の【ファミリア】は」

「総出でダンジョンに行くほどの事が起きてるんじゃないか」

部屋という部屋をしらみ潰しに探していくロキについていく。このホームに目的の神物がいないならば出直すしかなく、結局ホーム中を探し回って見つからず最後に庭園があるか、そこにいなければ改め

て訪問をすることになり外へ出て庭園を探すと、在った。

庭園と畑を耕している神物が。二人はその男神に近付く。

「よお」

「こんにちは」

「……いらっしやい」

挨拶は交わした。一誠は目的の神に依頼を乞うた。

「神ソーマ。ある果実を使った酒を作って欲しいんだけど」

「……」

耕している手が止まり二人の方へ振り返ったソーマ。体格は中背。青年の神だ。体の線は細くどこか繊細そうな印象が見受けられる。ゆったりとしたローブに似た服は、袖や裾の辺りが土色に薄汚れている。全くまとめられていないぼさぼさの髪と長い前髪でソーマの目が目視出来ないが、明らかに畑に向けていた意識をこちらに向けたのは確かだった。

「どんな果実なのか見せてほしい」

「んと、これだ」

一枚のカードを取り出し、召喚する。モンスターに齧られた生々しい跡が全体にある粗悪品と見られて仕方がない虹色の実を。状態が悪くても果実から香る甘い匂いは健在でロキとソーマの鼻にも嗅ぐわせる。

「これなんや？大きくて好い匂いするんやな」

「遙か北方に野生している虹色の実だ。大量のモンスターを誘引させるほどの香りを放つこの実を酒に造ってほしい」

「ちよ、まてい！それってここオラリオにもモンスターが押し寄せてくるんちゃうんか!？」

「その時はその時で責任を以って駆逐するつもりだ。で、神ソーマ。依頼引き受けてくれるか？」

再度問うその言葉にソーマは「わかった」と軽く了承した。

「ああ、あそここの蜂蜜も酒に造ってほしい。全部出来上がったら『異世界食堂』に来てくれるか？」

『『異世界食堂』……お前は異邦人の者か。ならば異世界の酒はあ

るか」

「異世界の神ソーマの酒もあるよ」

どんな反応を示すか見たくと言うと距離を縮めてきたソーマが「飲ませてくれるか」と頼み込んできた。

「依頼を完遂した後ならいいよ」

「わかった。費用はどれぐらい出せる」

「一億で充分だろ？」

あつけらかに述べるので「ぶっ?!?!」と吹くロキ。用意周到に莫大な金を軽く現物としてカードから召喚しソーマに亜麻袋の中身を見せつけた。

「任せたよ。満足のいく酒ができるのを待ってる」

「期待は裏切らない。直ぐに始めよう」

収納できるカードの詳細を説明して虹色の実と蜂蜜、一億ヴァリスを収納してから手渡しついでとばかりにロキの話しを聞いてもらえないかと言う。

「用件は？」

「ずばり、本物の酒^{ソーマ}を恵んでほしいんや、この通り！」

あのロキが誠心誠意を込めて腰を折ってお願いしだした。物珍しい光景を一瞥してソーマの答えはどうなのかと見やれば。真摯な眼差しで言った。「だが断る」と。その際、強い意志を見せ一誠に不思議さを感じさせた。ロキから憤怒の気配を醸し出していたが宥めてやってから紆余曲折あって「ファミリア」のことについて訊き出すことができた。そして一誠は一言言う。

「神ソーマ。ずさんな「ファミリア」の管理をこれからもしていると、そのうち必ずギルドから運営自粛とか罰則^{ペナルティ}を受けるぞ。思うがままに酒が作れなくなるのは確実だ」

「……ならどうすればいい」

そんな未来、事態が現実になることが嫌なのか打開策を求めたソーマ。

「団員達と酒を作る日々を送ればいいんじゃないか？探索系じゃなく生産系「ファミリア」として」

「それは無理だ。子供達に稼いでもらわないと作れなくなる。酒造は金が掛かる」

それは承知の上だ、と一誠も言い返して提案を挙げた。

「今まで作ってきた酒を商人相手に売ればいいんじゃないか？異世界の商売のやり方をやらせてくれば、神ソーマの酒が有名になれば商人達から依頼の発注をしてくるようになるかもしれない」

「……異世界のやり方で私の酒が本当に今より売られるようになるのか」

疑心暗鬼は払拭できずとも興味はあるようで、問うソーマに首肯する。

「今すぐじゃないが、全の力を駆使すれば必ず売れるようになる。そうなったら一番大変なのは酒を作る神ソーマ達だ。返答は酒を完成してからでいいよ。この提案は強制じゃないし純粹に「ソーマ・ファミリア」にはこれから酒造を依頼したい思いで言っている。個人的には今のずさんな「ファミリア」の管理でギルドから罰則ペナルティを受けてほしくない。だから——主神のあんたに「ファミリア」と団員達の管理の改善してほしいと願っている」

それだけ言い残してロキをこの場に残して去ろうとするとロキも追従するように、一誠の背中続く。中庭に残されたソーマは何を考えているのか神のロキでも分からないことで、今後「ソーマ・ファミリア」が改善するかは主神次第であった。

「イツセー、何でソーマにお節介したん？」

「そういう風に聞こえたんなら間違いでもないけれど、純粹にこれからも依頼をしたいのに運営を自粛されたら依頼することちが困るからだよ。店の為にあの男神に今の状態の「ファミリア」を危ぶませる匂いを嗅がせた」

帰り道、素朴な疑問をぶつけるロキに素直な気持ち言葉を言葉にして言った一誠に、朱色の髪を首と一緒に横に傾けた。自分が知るこの男の本心はまだ何かを隠しているんじゃないのかと、再度訊ねた。

「そんだけか？」

「ん？他に何かあるんだ？兎も角、あの虹色の実の酒を試飲してもら

うからな。ちゃんとした感想を言ってくれよ。店に出すんだから」

「うはっ、それは楽しみや！てか、自分が飲まんかいな」

「神の舌を信用することにした」

何だか初めて頼られた気がして、新鮮な気分で嬉しくてたまらず、誠の背中に飛び乗ってはそのまま大通りを歩きまわせたのであった。

冒険譚40

北方に冒険をしてきて二日が経過した。【無所属派閥】フリー・ファミリアの活動は目を見張るようなことはしておらず、他の【ファミリア】と軒並みに変わらない日々を送った。そんな中で一誠の専属メイドとして仕え『幽玄の白天城』に住んでいるシルヴィー・ホワイトから質問を受けた。【無所属派閥】と称されるのは何故なのですか?と。特に拘りはないと答え、同じ席でティータイムをしているアスナも話に加わってきた。

「ねえ、思ってたんだけどイツセーの派閥だから【イツセー・ファミリア】にしないんだ?」

「アスナさん。俺でも羞恥心はあるのですけど?仮に【アスナ・ファミリア】って名前にされた時の感想を聞かせてくれるか?」

「……ごめん、恥ずかしい」

人名で派閥を呼称される想像は容易く、照れと羞恥が入り混じってあまり呼ばれたくないことは誰でもあることだろう。アスナもそうされるのは抵抗感があり同感した。

「でも、フリーって自由って意味だけれど無所属って思われるのもちよつとね」

「主神がいらないから無所属なんだがな。いたらその神の派閥になるだろう?神の恩恵無しで集う俺達にそれっぽい名前が浮かばないんだよな。エレオノーラ達『銀色の獅子』みたいに」

「異世界に関することは?」とシルヴィーから指摘を受けても首を横に振る。

「団員達が全員、異邦人が転生者だったら考えられるけど期間限定なんだ。元の世界に送り帰してしまうから」

「うーん……このお城の名前みたいには?」

「……名は体で表す言葉があるのは知ってるよな?実際にこの城はその通りに表しているけれど、俺達を全体的にまとめてどんな名前で体を表せばいいのか分からないのが心情なんだ」

「イツセー様を愛する派閥名にすれば？」

「断固反対。一番呼ばれたくないソレだよ」

「ハ、ハハハ……私もちよつとそれは困るというか凄く恥ずかしいというか……」

イツセー様至上主義者派閥——とちよつとそんな名前が脳裏に過つたシルヴィーに二人から拒否されたが、提案した本人も本気ではないので口を閉ざした。溜め息をアスナは吐いてから苦笑をうかべる。

「無難、かもしれないんだね」

「無難が一番だと思ってくれ。快樂主義の神々が冒険者にイタイ二つ名を考えるぐらいなら」と

「うん、わかった。フリーって意味は異世界から来た異邦人と転生者ぐらい知らないもんね」

「や、神々も神語として知っているそうだぞ。中には外国の言葉の挨拶も含まれてる」

「何で神様達が私達の世界の外国の言葉を言えるんだろう」

「俺の中の七不思議の一つとして数えてる」

確かに不思議な事の一つだとまた同感するアスナ。結局はこれからも名前を変えずにいこうと話し合いは終わった。特別格好いい名前じゃなくても普通、もしくは恥ずかしくない無難な名前であればいい。それでも変えたほうが良いと団員達が考えているならば変える方針でいる。

「でも、転生者達が好きそうな名前は直ぐに思い浮かぶけどな」

「どんな？」

「唯我独尊天上天下」

「納得」と苦笑するアスナ。立ち上がる一誠に呼応し、ティータイムは終わりにしてシルヴィーに片づけを任せてもらい立ち上がり一緒にリビングキッチンを後にする。

「そういうえば虹色の実をお酒にする話は？」

「話をつけた。いつ完成するか分からないけど完成が楽しみだ。俺は飲めないけどな」

「本当にお酒がダメなんだねイツセーって」

「梅酒なら飲めれるぞ。てか、それしか飲む気がない。あれは甘いから美味しいんだ」

意外な話を聞かされ興味を持ち、今度飲ませて欲しいと一誠に約束を取り着けたアスナはこの後はどう過ごすか訊いた。

「私は部屋にいるけどイツセーは？」

「今年の運動会に向けて準備をするつもりだ」

「うんと、私も手伝ってあげようか？」

「結構大掛かりな事は多い。でも……そうだな。事務的な事、途中ででもいいから頼めれるか？」

仕事——『異世界食堂』以外にも手伝わせてくれる作業はアスナが思っていたより過酷だったのは余談である。それでも一緒に何かをすることが嬉しいと一誠に作業部屋へ向かった。

「春姫ちゃん、危ないっ」

『ギャギャギャッ!』

「こんつ!?!あ、あうあうつ!?!」

「こらー!春姫に何するんやっ!」

上層域にて狐人ルナールの三人が三匹のゴブリンと出会い一人一殺の方法で戦うのだが、未だ戦うに慣れてない春姫がゴブリンに蹴られて転んでしまったところを嘲笑いながら踏まれる。ソシエは二つの曲刀で戦いながら春姫を警告したが遅く、同胞を虐めるモンスターに怒りゴブリンの胸の魔石を破壊、灰塵と化にしたら春姫の援護に回った。

「大丈夫?春姫ちゃん」

「あう……申し訳ございません」

「ええんよ。無事ならそれで」

気落ちする春姫を救い慰めるユエルにソシエ。弱いでも油断はするな。一誠の戦いの心構えを教えられてる三人はゴブリンやコボルトを中心に狩りを続けて戦い慣れを臨むが、得意不得意がやはりあった。

「やつぱり、春姫ちゃんは妖術使うんし後衛からうちらを……」

「ユエルちゃん、春姫ちゃんの妖術は人前で使うのはあかんって旦那様が言うよ」

「あ、せやったね」

一時的でも階位昇華で「ランクアップ」する希少魔法。起死回生の魔法の一つとしてどの「ファミリア」から欲しがらる垂涎すいゑんものであることを、アマテラスと一誠は悟って使用をするときは極力気を付けるように釘を刺している。春姫達もそれに従い、ダンジョン内での使用は気を配って行っている。

「戦えるお二人が羨ましいです。私は何時も足手まといでになってしまいますから」

「そんなことあらへんよ。春姫しかできへんことがあるようにウチらしかできないことがあるんや。春姫のこと邪魔だとは少しも思っておらへんで？」

「足手まといでなんて言わんと言ってや。春姫ちゃんも苦手なことを一生懸命頑張ってるの、私達や旦那様も知っとるよ」

「ユエルちゃん、ソシエちゃん……」

励ます二人に哀愁漂わせてた春姫は、気持ち奮い起たせてぎゅつと短剣の柄を握り締めた。非力な自分を何度も気にかけて励ます少女達に感謝と申し訳なさでもっと頑張ろうと思いを胸に、翠の瞳に力強い決意の意思を籠めた。

「が、頑張る！旦那様の為にも他の皆さんのためにも！」

「うん、一緒に頑張ろう」

おーっ！と拳を突き上げてやる気をみなぎらせる狐人の少女達。そんな彼女等を見守り生暖かい視線を送る者が一人いたことを気付かなかったが、懸命にモンスターを倒そうと心意気で活動を再開した。

ドラゴニウト 竜人族。オラリオでもあまり認知されていない亜人の一つ。知る者は彼の亜人の特徴を挙げると好戦的で野蛮、凶暴であると言い、外見的にモンスターの翼を生やす種族故に他の亜人等から、認められたい以外や同胞でなければ肌を触れさせないエルフ以上に忌避され

ているとも言っ。

『グオオオオオオオオオオッ!?!』

上層の10階にてインファント・ドラゴンと遭遇した。

キリユー・ドラゴニアは、戦闘を始めるや否や好戦的に声を上げながら飛び出し、上からの強襲を仕掛けた。鋭利な双剣で背中を切り刻みながら、顔が髪の色のように血で汚れても狂喜に笑み、その深紅色に輝く双眸と眼光は鋭く、ギラギラと戦意と殺気に満ちていた。

「……………理性が吹っ飛んでいるなありや」

「フィンの魔法の類と似ている。あれは判断力を著しく低下させるがキリユーは……………理性を放棄しているのかもしれない」

彼女の戦いぶりを見ていた二人から懸念の言葉が出てくる。とても駆け出しの冒険者とは思えない精神状態に絶世の美女のハイエルフ、リヴェリアは憶測を挙げた。

「スキルよる影響か」

「ん」

問われた一誠は首肯する。背中から降りながら横腹に剣を突き付け切り裂き、あろうことか体内に潜り込んで攻撃する彼女を、絶叫の咆哮を上げる竜種のモンスターを見守りながら語る。

「【本能喚起】。好戦欲に伴う理性低下。攻撃をする度、全アビリティ能力が超高補正。

【竜の逆鱗】。怒りの丈、もしくはは損傷を負う度に『力』が超絶効果上昇」

「……………アイズにそのスキルが発現しないで安心した。昔のあの子のためにあるようなスキルだそれは」

「今はもう大丈夫だろ?」

「お前という存在のおかげでな」

胴体が真つ二つになったインファント・ドラゴンが地に沈んだ。一拍遅れて身体が灰燼と化して宙に舞う灰の中でキリユーが佇むので二人は近寄る。

「キリユー、お疲れ」

「……………っ!」

話しかける一誠に鋭い深紅の眼光を煌めかせ、腕を動かし剣を振るって攻撃をしてきた。味方への攻撃に難なく驚掴みにして血塗れのキリユーに汚れても構わないばかりに抱きしめて背中を優しく触れる。

「大丈夫、息を吸って冷静になれ」

「フー……ッ！フー……ッフー……ッフー……」

荒い深呼吸は徐々に治まっていきやがてリヴェリアから見ると、深紅色の瞳が金色に戻って知性の光を宿したのが見受けられる。それが理性を取り戻した表れでキリユーが口を開いた。

「……すまない」

「大丈夫そうだな」

「ああ……また攻撃をしてしまった」

「意識はあるだけマシだ。意識を集中して低下する理性を維持するよう努力できればいい」

キリユーの頭を撫でながら労いの言葉を送り、彼女の服や肌の汚れを魔法で綺麗にする。体力回復のポーションを手渡し飲ませる。

「お前は私に何を求めているかたまに分からなくなる」

「生き甲斐が無いお前を勿体ないからな」

「私が勿体ない……。周りの人間と接するができない私がか」

「できてるだろ。じやなきや、店で接客なんてできない」

「そういう意味ではない。戦いの中での話だ。さっきのように私はお前を攻撃した。自分の意思と関係なくだ。だから私は、私達竜人族ドラゴニックはこの姿も相まって太古から人間達に忌避され忌み嫌われている」

鳥のように、蝙蝠のように翼を背中に折り畳む。人間や獣人デミ・ヒューマンに亜人が持つていない体の一部だから他の人種から忌避されているのかもしれない。

「お前の一族はどれ程の数があるのだ？」

「私の一族、いや部族は親兄弟親戚も含めて100人前後。さらに多くの他部族がいて離れ離れで密かに暮らしている」

数が少ないって言われている理由は見た人がその一つの部族だけだったからかもしれないな。

と感想を抱く一誠は質問を繰り返した。

「その髪の色は他の部族とキリユートの部族も同じか？」

「そうではないな。他の部族の中にはヒューマンを浚って種の繁栄を維持しているし、部族同士の交流で子供を産む。この髪は父と母の血を受け継いだ証だ」

「忌み嫌われている理由の一つが今さらつと言ったなおい。でも、尚更不思議だな。キリユーがその部族から離れるなんて。閉鎖的な村とかじゃない限り外の世界に出ようと考へはないかと思うけど」

首をかしげる素朴な疑問はリヴェリアも同感で、話してくれるなら伺う姿勢でいる。キリユーは少し躊躇する様子を見せるが語ってくれた。

「……ドラゴニユート 竜人族にはある掟がある。それは長老達のみ伝えられる伝承のようなもので、翼を有する者は後に竜と化して周囲を滅ぼす。故に成人後は部族から追放する形で放逐される」

「竜と化する？」

「ああ、お前が竜のモンスターになることを差しているのかもしれないな。私を含め、翼を有した同族が生まれたのは数十年振りだそう。だからお前がモンスターに姿を変えたときは驚いた。あの伝承は本当なのかと」

「だが、イツセーは異邦人の者だ。お前達の伝承と似ているがドラゴニユート 竜人族ではない」

リヴェリアの指摘にコクリと頷くキリユー。

「信じられない話だが、その話は本当なんだろう。しかし、それでも伝承は馬鹿にできない。たまに思うのだ、お前が私達一族の祖先ではないかと」

「何故に俺がお前らの祖先にならなきゃならないんだ」

「自分でも何でだかわからないが、直感的に思っている。会ったことはないが長老達を纏める最長老は千年前の太古から生きている者だと聞く」

「その者は神か？」

「いや同族だ。しかもまだ見た目が若いとか」

リヴェリアが一誠を意味深に見つめるも、一誠自身は腕を組んで悩ましげに眉根を寄せた。

「キリユール達の寿命ってどのぐらいだ？」

「わからない。私の親は百年以上は生きているらしいが、実際本当かどうか定かじやないもの……私は六十年以上生きているから本当なんだろうと思っではいる」

「はっ？」

またさらつとんでもないことを瑞々しい口唇から言うキリユール。リヴェリアの口から間が抜けた声が漏れる。「嘘ではないぞ」と彼女の発言にもう一度、真意を求める目で一誠を見ると首肯する仕草を視界に映る。

虚言を語る者ではないため、真実でも衝撃的な事実であるから驚きは禁じ得なかった。

「ファンタジーな話には長命種の亜人なんて珍しくないが、それはエルフやドワーフに吸血鬼、竜の血を引く竜人とドラゴニウトと同一視されていないマイナー的な種族だ。小説によつては同一視されるけど、長命の種族だったりじやなかったりするがこの世界のドラゴニウトはそうなんだな」

「……イッセー」

「ん？」

「何を思い更けているのかわからないが、キリユールの尾を触れるのは止めてやれ。今にでも崩れ落ちそうになっている」

おお？と今気づいたとキリユールを見れば、紅潮した顔で一誠を睨みつけながら身体を震わせていた。両手には彼女の赤い尾を持っていて肌触りを堪能していた様子だった。

「ごめん、無意識に触ってみたいだわ。——改めて触っていい？」

「もう触るなつ。言つとくが、これが竜人^{ドラゴニウト}族同士だったら相手の尻尾を触る行為は求婚の意味なんだぞ。そ、それを知らずにいきなり触れてきてはあ、あんな触り方をするなんて……っ！」

ぱつと尻尾を一誠の手から離して真っ赤な顔で言うので、どんな触り方をしたんだ俺は？リヴェリアにそう意味を込めた眼差しを向け

ると呆れた風に息を吐かれた。

「キリユー、諦めた方がいい。イツセーの手にかければ女の心を盗むのに訳がないのだからな」

「リリア、盗むってのは心外なんだけど」

「ではなんだ」

「欲張りな龍なもので、綺麗な宝石を集めて独占しているだけだ」

「ほう、ではその宝石を狙う輩がいたら？」

「魂までそいつを塵すら残さず燃やし尽くすよ」

龍の翼を生やして二人を包み込んで、汚い獣声を上げながら現れたオークへ向かって口から劫火の炎を放った。あつという間に巨大な体を炎が包み込み、灰燼すらならず焼失するモンスターを見てキリユーは愕然とする。

「こんな風いだ」

「……独占欲が強いドラゴンから宝石を奪われることはないようだな」

「当然だ。奪われたら世界の果てでも追いかけて見つけて取り戻す。キリユー、お前もその一つだからな」

「っ……」

面と面を向ってはつきり言われて緊張感に似た気持ちで息を呑む。この男なら絶対にやりかねない強い意思が念で伝わり、本気を感じたからだ。

「さて、話はここまでにして次行こうか」

「……ああ」

モンスターを倒して強さを得るため、キリユー・ドラゴニアは双剣を手を取った。

「いらっしやいませ、ようこそ『異世界食堂』へ！」

店内に入ってきた客達に満面のスマイルで迎える女性店員たち。『異世界食堂』に働いてから数年経ち、多忙に追われながらも足を運んでくれた人達のために料理を作り、笑顔と共に提供する。時には雑談を交わして交流を築き、また鼻唄してくれるように最高のおもてなし

を心掛ける。

「はあく……朝早くから客が来て大変ニヤ〜」

「そうニヤ〜……夜になると酒や飯に植えた冒険者共が押し寄せ
てきて……はあく、憂鬱ニヤア」

「あ、こら、その猫匹。店主やミア母さんがいないからってサボるな
よ」

今日は初めて店の大黒柱と言えるべきの二人の存在がない珍しい日。店員達だけ切り盛りをすることになって長台カウンターでだれている猫キャットピエール人のアーニヤとクロエ、それを注意するヒューマンのルノアの会話は聞き慣れたもので、シルやレイラ等は構わず盆に乗せたお好み焼きと牛丼を運んでいく。

「団体のお客様が入りまーす」

入り口で新しい客を案内するのは、栗毛の髪を揺らすアスナだ。従業員の中では異世界から来た異邦人の女性であり、看板娘でもある。ヒューマンながら整った顔だちは勿論のこと、愛想がなく取っ付きにくいフレア・フローラ異なり、分け隔てなく接する振る舞いが純朴な町娘として男性客の間で人気を博している。したたかで物怖じしない彼女の笑顔の前では、荒々しい冒険者もついつい顔もだらしくさせてしまうほどだ。

不在の店の主人である店主と副店主のミア、そしてアスナ達店員の手で、『異世界食堂』は今日も切り盛りされていく。

「いただきますー！」

団体の若い者達が注文した料理が届いたら直ぐに食べ始める。好みはバラバラで朝から贅沢に値段が高い料理を頼んだ客もいればそうでもない客がいたり、

「あのすみません。俺の頼んだ料理がまだ届いていませんが」

「え？あ、す、すみませんっ。ただいまご用意してきます。えと、ご注文は何でしょうか？」

「……牛丼です」

全員分を運んだつもりがたった一人を除いてまだであったことに気づかなかつた。後に「人数を確かめたのにいつの間にも一人増えた」

とその日に起きた出来事を報告書に記されて読んだ店主とミアは、客と店員の数え間違い、確認不足と結論を出した。今後同じミスをしてないように店主が店の改造を視野に入れた。

「困ったわね。一日に一回はこの店で食べる日課になっちゃっているわ」

「そう？私的には嬉しい困った感じなんだけどな」

「白崎に同感だぜ。学生の俺達が昼からこんな贅沢に飯を食べられる機会はそうそうにないんだからな」

「だがあまり悠長にしていられない。俺達は冒険者をしながら元の世界に帰る方法を探さなければいけないんだ」

「.....」

ハジメは本当にその方法がこの世界にあるのか、と疑問を押し黙って口にせず代わりにカレーハンバーグを食べ続けた。その気持ちは他のクラスメート達も抱いているが、暗黙の了承のごとく誰も具体的な追及の発言をしない。

「いらっしやいませ、お、自称転生勇者、光輝勇じゃん」

「自称と言うな！俺は勇者の存在だぞ！」

「はいはい勇者勇者。席に案内すつから静かにしてろよ」

細部にまで装飾が施され、白と蒼と金を基調に彩られた白銀の全身甲冑、まるで神話の騎士が身に着けていそうな豪華な鎧だ。風に煽られてバタバタとはためくだろうマントは空を思わせる群青色、内側にはまるで夜空を切り抜いたような煌めきがマントの中に見え、星空のよう。背中には精緻なデザインで装飾された大きな逆三角形の大きな盾を担ぎ、背中の腰元には神々しい程の存在感を放つ大きな剣を提げている男、光輝勇が店にやってきた。

勇者と言う単語に反応する天之河光輝。ハジメ達も口に料理を運ぼうとする手を止めて彼の者へ意識と視線を向けた。店の中で一番浮いている装備を着こみ、マントを揺らしながら移動して案内された席に座る。

「.....おい」

「なんだ？」

「この店はまだラーメンはないのか」

光輝勇の発言は異邦人と転生者のみしか知り得ない料理。ラーメン!?!と聞いておっかなびつくりをしたハジメ達は、この人も異邦人の人かと思っていたら、問われた海童は肩をすくめた。

「まだ未定のようなだけ。だからカップラーメンがあるんじゃないか」「ち、使えない奴だ」

「店主をデイスるならお前が作れって。ま、俺同様にラーメンなんて作れないだろうけどよ。で、注文は？」

「鰻重」と答えた客に含みのある笑みを浮かべて離れていった店員。

「……俺達と同じ異世界から来た人なのかもしれない」

「勇者と名乗っているみたいけど、どうしてなのかしら」

「わからないが、もしかすると俺達みたいに神に騙されているのだとしたら放っておけないな」

「でも、そうじゃなかったら……あ、あのっ」

直ぐ傍を通りかかったアスナを呼び止める香織。

「何かな？追加の注文？」

「えと、あの凄い鎧を着ている人って……」

「ああ、あの人は光輝勇って名前の転生者なの」

「転生者。確か、死んだ人が神様にチートの能力を貰って甦った人」

ハジメの言葉に首肯するアスナ。

「うん、そうだよ。彼は勇者として甦っているみたいだよ」

「何で勇者に？」

「憧れていたからじゃないかな？でも今は神の派閥の冒険者として生きていくから、他派閥同士の干渉は控えてね。実力的に君達より強いことは確かだから」

忠告を残して仕事に戻る栗毛の店員の後ろ姿を見送って顔を見合わせる四人。勇者に相応しい願いを神に頼んだ転生者、という認識をして他派閥の冒険者として干渉はあまりしないことを心掛けることにした。

「でも、ラーメンか……食いてえーな」

「作らないのはカップラーメンがあるから我慢しなさいってことなのかな？」

「理由はあの男しかわからないが」

「異世界でも日本の料理が食べられるだけ私達は幸運に恵まれているわよ。あまり贅沢は言えないわ」

「うん、そうだね。自分で作れるなら自分で作って食べろって言われそうだよ」

それは確かに、と香織や雫が同感と相槌を打った。

「できれば、ダンジョンの中でもこの料理を食べたいわね」

「二二激しく同意」

雫が吐露した発言は天之河光輝や坂上龍太郎も同意と口にした。その願望が後日叶うことになるとはこの日、四人は思いもしないでいたのだった。

キリユーとダンジョン探索を終えて地上に戻り、空が朱色に染まった時間帯に城の庭園へ戻った時、三人は目を疑った。地上から数Mの樹木にヤシのようにいくつも虹色の実が生えていたそれは、明らかに以上の成長を遂げていたのだ。それも成熟した証とばかり芳醇な甘い香りを発して漂わせている。

「……なんだと」

「種を植えて三日しか経っていないはずだ。あれは直ぐに成長する植物なのか？」

「……驚いたな。取り合えず、あの実から香る匂いも発してるから直ぐに採取しよう。モンスターが来る可能性がある」

数個の虹色の実を採って城の中へと保管した。その後、デメテルへ通信を入れて虹色の実の事で確認したところ。

『まだ芽も出ていないわよ？』

「そうか。変なこと聞いてごめん」

『もしかして、そっちはもう成長したの？』

「てか、実も成っていて驚いた」

続いてダンジョンの中で植えて、成長記録を頼んでいた『銀色の獅

子』団にも通信を入れたところ。今日の報告はまだだったので聞いたら。

『実ってはいないが樹木になるほど成長しているぞ。ダンジョンは地上の植物の成長を速める事が出来るのだな。驚いた』

「……どういうことだ？」

「神デメテルの農場の所に植えた種はまだ、ダンジョンの方は樹木になるほど成長を遂げ、ここの庭園では三日で実った。イツセー、あの種に水を与えただけなのだろう？」

三つの異なる結果にリヴェリアの問い掛けでこの三日の間はどうしてきたかを思い返す。思い当たることがあった。

「……それと異世界の栄養剤を毎日三回はあげてた」

「……それだな」

いや、でも最後に与えた時でも芽が出ていなかったぞ？流石に異世界の栄養剤にここまでの効果があるなんて考えにくい。

では、何かの切っ掛けで急成長を遂げた？

んー……わからん。この辺りの土や植物はダンジョンから持ってきた物だから関係あるとは……。

……その栄養剤とやら以外にも庭園に撒かれていたり挿されている栄養剤があるが、その関係は？

「……」

キリユーの一言でもよ々と異世界の栄養剤とダンジョン内の食糧庫バントリーから採取できる液体を調査して、また虹色の実の種を植えて三日与え続け実験したところ。

「育った」

「育ったな」

三日で、目の前で急成長した虹色の実を見て啞然としたのは記憶に新しい。そのお陰でストックが確保できマキヤベリに商品としてゼリーを提供した矢先に。

「イツセー、この実の商品をもっと増量できまいか。王公貴族に高い値打ちで売れるぞこれは」

目新しい商品を見つけ、瞳をキラキラ輝かせた。結果——あるこ

とを考えたついた。

「考えたことがなかったな。異世界の道具とこの世界の道具を合わせた調査・開発なんて」

「したら色んな凄いものが出来ちゃう？」

「試してみないことにはな。一先ず作ってみようかな。出来そうなものから。さて何を作ろうか……?」

後に様々な物を作りあげてみせたイツセーの名が忽ち有名となり、触発された一人の少女が密かにライブル視をした。

冒険譚 41

充滿する虹色の実の香りの中、抽出した果汁を加工したことで一誠の手によって新たな道具が完成した。

『虹色の実の香水』

使用者から老若男女問わず一時的に魅了する効果がある。

鑑定の結果が出たことでそのことをヴァベルーやマキャベリに香水の販売を提案し、結果を待つことしばらくして。どちらも婚期を逃した者が香水を使用したら結婚ができたと驚きの報告が届いた。

「いやはや、イツセー殿が作る道具は凄まじいですね。おかげで我が「ファミリア」の知名度が高まりましたよ」

「それは上々だが、香水の効果は効果だから心配だな」

「そのところは確と説明してるから気に掛けることはない。これで中毒になろうとこちらは注意の説明をした上で売買を成立させている。それでも過度な使用で問題を起こした使用した者の責任だ」

責任は一切請け負わないと商人らしい発言。まさにその通りなのだか、まさか身近な見知った顔の者達が香水で問題を起こすとはこの時の一誠は思いもしなかった。

「ところでマキャベリ、香水をあの「ファミリア」に買わせただら？ 反応はどうだったよ」

「そうするように頼まれたからな。直に会い取引をした際の女神はこの香水の香りを気に入ったようだ。香りを堪能していたぞ。ゼリーも然りだ」

「ん、評価が高いなら問題ないな。ありがとうマキャベリ」

「構わないさ。刺激ある商品を大手の相手に売買することができた。商人としてそれがどれだけ楽しめたかお前も少しは分かるだろ？ やはり、お前についた判断は間違っていなかった。ここは刺激が溢れている」

楽しげに口端を釣り上げて笑むマキャベリは次に訪ねた。

「あれから月日が経ったが、奴隷国家の方はどうなのだ。一人でも奴隷がいたら滅ぼすのだろ？」

「当然するぞ。まあ、俺が全員奴隷を買ってからの奴隷制度を撤廃以降、後から連れてこられた奴隷達が来てな。直接監視させた密偵に顔を真っ青にした神がすごい勢いで猶予を欲しいと言ってきたんだ」「猶予を与えたのか？」

「ああ。新たに連れてこられた奴隷達はよほどの事情じゃない限り故郷に送り返してる。こうしている今も監視しているが、もう二度ぐらい奴隷が来たら滅ぼすとも告げてる」

「国一つを滅ぼすと恐ろしいまで自然に言うイツセーにマキャベリの心は一瞬たりとも揺らぐ、ただ「そうか」と答えた。

「では、もう一つの国も滅ぶ運命が待っているだろうな」

「奴隷国家のような国か？」

「彼の国と深い懇意関係がある国があつてな。まだ奴隷国家の方がマシだと思われる国だ。その国は噂によれば奴隷国家よりも人権がなく、性欲の処理道具として生かされる女で溢れている——奉仕国家と世界最悪の国の一つが存在する」

「つて——そんな国があると噂として聞いたんだが、どう思うよ」

大和大輔、海童剛、光輝勇、結城明日奈と異邦人のみ食事会で告げられた会話の内容に四人とも顔を顰めた。場所は閉店後の異世界食堂。それぞれ好きな料理を作り上げ、食事を交えながらそれぞれ雑談を始めていた。自分の世界のこと、相手の世界のことを打ち明けつつ親睦を深める食事をしてると小一時間が経過した。

「え、マジでそんな国あるのかよ？」

「……年がら年中、エロいことをしてる国なんて頭腐るだろ。なあ、自称勇者」

「自称と言うな！ふん、そんな国があると言っただけだからなんだ。自分から首を突っ込む気にいるのかお前は」

「奴隷の人を無理やり酷いことをしているなら助きたい気持ちだけで、ね」

「当惑、動揺、無関心と様々な反応を示す男女達に思案した表情でどうするか——と思いつける。」

「奴隷の国もあったし、エロ本を三千万も買う存在もいるし、まさか奉仕国家って性欲の国もあるとは日本人の俺らからすれば信じられないもんだしなあ」

「二」・・・「三」

「ん？なんだ人の顔を凝視して」

「いま、なんつった？エロ本が三千万？嘘だろ？」

にわかに信じがたいと大輔が事実を確認する風に口を開いたが、ため息を吐いた一誠が事実だと肯定した。

「いや、本当だ。何故か異世界のエロ本が闇のオークションで競り落とされた」

「嘘だろ!?どんだけエロ本が好きなんだこの世界の人は!?」

「なあ、何冊でその値段で？」

「一冊だ」

「一冊で、だと・・・」

「あ、あり得ない・・・」

異邦人たちが激しく動揺した。その気持ちはよくわかると思いつつぽつりと吐露した。

「オラリオにもエロ本を売ったら、バカ売れしそうだな」

「待て、待て待てっ。売れるどころか売れないだろ。異世界にエロ本なんて存在しないんだぞ」

「転生者特有の特典で俺も異世界の神から特典を貰った。ネットスーパーって、異世界の物資をこの世界の通貨で購入できる便利な特典だ」

「二」なん、だどっ・・・!?!」

「イツセー、絶対にそんな本を売っちゃだめだよ？売ったら軽蔑するから」

鬼気迫る最愛の女性から絶対零度の冷ややかな眼差しを受けても肩をすくめる余裕を窺わせる一誠に、愕然する転生者達は雷を直撃したような衝撃を受けて、それぞれ異なる反応を示した。

「あ、だからカップラーメンが売り出すようになったのか！教えてくれなかったからようやく納得できた！」

「そういうこと。よく気付いたな」

「じゃあ、漫画も買えるのかっ」

「買えるけど、お互い違う世界の人間だから同じ漫画があるとは思えないぞ?」

「ゲームは……」

「雷や電撃の概念があっても電気と言う概念はこの世界にはない」

ふと、アスナが電気のことと語り始めた。

「そう言えばそうだね。この世界は加工した魔石で灯りを付けたり蠟燭や松明とかで夜や暗闇を明るくしてるしさ」

「異世界、それもファンタジーらしいけど個人的に懸念してるんだよな。もしもダンジョンに限界があってダンジョンとしての機能が失ったらこのオラリオの存在意義や魔石のない生活はどうしていくんだろうかって」

「ダンジョンに限界があるのか?」

大和が素朴な疑問として訊く隣で海童が口を開いた。

「異世界転生ものの小説の中じゃ、ダンジョンを生み出すコア、核があってそれを破壊すればダンジョンの機能が停止して、その後はただの豊富な資源がある洞窟と化する話があるぞ」

「そうなのか?じゃあ、この世界のダンジョンもそのコアつつう物があるとしたらギルドはどうするんだろうな」

「ダンジョンあってこそこの迷宮都市だ。敢えて破壊せずに保有するだろうよ。自分から利益を捨てるような行いだぜ?」

「ふん、とんでもない話だな。利益のために見て見ぬふりをする選択をしなければならぬとはな。悪徳業者のような手口だぞ」

光輝勇の発言に「はははっ!ギルドが悪徳業者か、面白い発想だな」と笑いながら感想を言う一誠だった。

「神々は『ダンジョンは生きている』と言うぐらいだ。最大で1000層、もしくはそれ以上下の階層に何かがある情報は得ているから間違いないが、千年経っても最大派閥ですら60階層まで辿り着いていない現状だ。資源とモンスターを量産し続けているそのエネルギーは一体どこから抽出して生み出しているのか、それを知っているのは恐

「らく千年以上前から存在している神々だけだ」

「じゃあ、この世界がモンスターで溢れ出したのは神の仕業？」

「ありえなくない話だろう？神は神の姿を模して最初の人間達を作り、動植物も想像した。大地、海、自然、善悪に他にも色々だ。モンスターを作ることすら朝飯前の筈だ。そんなこととした理由は定かじゃないけどな」

「まあ、俺が知っている小説の話でもそういう設定の話はあるな」

海童が肯定したことで光輝勇の眉根が寄った。

「神は一体何をしたいんだ」

「人間より読めない超常の存在だ。考えても無駄だ」

「一番有名なのはギリシャ神話のゼウスだけど。この世界にもいるんだよな？」

「オラリオからとつくの昔に追放されたらしいぞ。まあ、ヘルメスが居場所を知っていいそうだけだな」

「その理由は？」

「大雑把で言えば、ヘルメスはゼウスの小間使いみたいな関係だから突然クシャミをしだす男神がいたがこの時の五人は知る由もなかった。」

「会ったことは？」

「俺はないな。できれば、筋骨隆々の初老の神でいてほしいな」

「何故にそんな願望を言い出す」

「俺の世界じゃあ——こんな感じだから」

席に立って一誠の世界のゼウスの姿を魔法で模して姿を変えた。アスナ達は驚きながらも興味的な意味でその姿をマジマジと見つめた。

「イツセーの世界のゼウスってそんな感じなんだね」

「その通りだ。ポセイドンもこんな感じだ」

「また筋肉ムキムキの神様かよ……じゃあ、死神ハーデスは？」

《フアフアファ、こうだ》

「骸骨かよ!?!しかも、コエー！迫力と貫禄がある！」

「……魔王もいるのか？」

その質問に元の姿に戻りながら「いるぞ」と答える。

「悪魔の社会は貴族社会でな。魔王を頂点に大王、大公さらにその下の順に階級で位付けされている」

「魔王ってやつぱり有名なサタン？」

「違う、ルシファー、ベルゼブブ、アスモデウス、レヴィアタン、フォーベシイだ」

うーん？と海童が唸り声をあげた。

「フォーベシイは聞いたことがないな。悪魔関連の知識は詳しくないからだろうけど。それ以外の魔王は男か？それとも女？」

「女の悪魔だよ。因みにその人達は二代目の悪魔だ」

「二代目？つまり初代魔王の子供ってことか。じゃあ、フォーベシイって魔王は？」

「初代の方だ。俺と同じ年の双子の娘がいて馬鹿親だったよ」

「……魔王が馬鹿親。この瞬間、自分達が知る魔王の銅像に疑惑がかかった転生者たちだった。」

「魔王って怖くないのか？」

「全然？昔、修行するために悪魔がいる冥界に住んで魔王達に師と仰いだことがある」

「はあっ!?なんだその話は！魔王に鍛えられたってそんな小説でもない展開が実際していたのかよ！」

海童が食って掛かるようにして驚きで叫ぶに対して、もはや慣れた感じでアスナが遠い目で静かに語り出した。

「イツセーは元の世界じゃ私達の常識の及ばない人生を過ごしてきたみたいだから、一々驚いたらキリがないよ」

「……一度死んで異世界に転生する体験をした俺らよりも想像を絶する人生を送ってきたってことか」

「……にわかに信じたくない話だ」

転生者組を驚かす一誠の人生談は何時か聞かされる羽目になり、アスナの言う通りにしなければならぬ時が来るとはまだ露にも思わなかった三人だった。

「ま、まあリアルファンタジーの世界も凄いつてのはわかった。個人

的に一番興味が引かれたのはアスナさんの世界だ。何、その自由度の高いVRMMOのRPGの話は。物スゲーしたいんだけど！リアルでもモンスタースタートルできるゲームなんて信じられないぐらい羨ましいー！」

「はははっ、そうかな？」

「俺も体験したいぐらい興味がある方だ。他の三人の世界は至って平穩な世界だから興味惹かれても仕方がないだろうな」

「イツセーの世界には負けるよ？」

苦笑するアスナに笑みで返す一誠。

「何時かアスナの世界に行ってみたいものだな」

「いや、元の世界に帰れないだろ？」

大和からの突っ込みに事実を言い返した。

「俺、異世界と行き来できる魔法を得ているから帰れなくないぞ。まだ一度も元の世界に帰ったことがないから成功するか怪しいけどな」
「二なん、だと……!!!」

食事会を解散して直ぐに城へ戻らず南区へ向かった。人材確保の目的で魅惑的な娼婦達を見て回る一誠の隣はアスナもいた。娼婦が跋扈している姿には羞恥心を覚えて手を握って、腕を胸に抱き締め離れないようにぴったりと歩いて顔を染めている。

「無理して来なくてもいいのに。何時もの人材確保の下見だぞ」

「それでも、あなたと二人きりで過ごす時間は限られてるから」

「……………今日は帰らず宿で宿泊するか？」

その言葉の深意を理解したときにアスナの顔は一気にカァーと紅潮した。耳まで染める彼女の顔に触れると熱が出てるのではないかというぐらい熱かった。そのまま顎に指で触れて軽く持ち上げると、アスナの目と目が合った瞬間に二人だけの空間ができた。

「どうするっ？」

「……………」

コクン、と赤くしたまま首肯した彼女に唇を重ねて直ぐに顔を離し、腰に手を回して二人は歓楽街の中へと足を進めた時に燃えるよう

な赤い髪の男を見つけたつぶらな瞳が歓喜の色を孕ませ――。

「いたあー！ イッセー！」

「？」

聞き慣れない明るい少女の声を耳にした二人が誰だと思った瞬間。一誠の後ろから勢いがついた飛び掛かりで接近したその気配を感じないはずがなく、振り返り様に腕を突き出して褐色肌の少女の顔面を驚掴みにした。

「……誰だ？」

「知り合いじゃないの？」

「いや、全然違う。歓楽街に知り合いにこんな子供いないし」

「いたたっ！ 歪む、顔が歪むー！」

ジタバタする幼い少女はどう見てもアマゾネスでアイシヤではない知らないアマゾネス。アスナから「取り合えず放して話を聞いてみよ？」と情けを頂戴されたので解放された。成熟した肢体には遠い、細い褐色の体。胸もまだ膨らみかけもいとところだ。衣装は短い胴着チヨッキにこれまた際どい腰布など、他のアマゾネスと比べてまだ被覆面識はあるもののやはり露出が激しい。臍も丸出した。その姿を見つ一つ一誠は伸ばして結わえられている黒い髪の頭を押さえ悶絶する相手に首をかしげながら訪ねた。

「で、誰だお前？」

「ひどーいっ！ 忘れちゃったの!?! 私のこと殴ったのに覚えてないの!?!」

「俺が殴った……?アマゾネスを殴った事なんて……。あ、あつたな三年前。二大派閥の襲撃事件」

アマゾネス、ひいては「イシユタル・ファミリア」にカチコミした時のことを思いだした。殴られたと主張するアマゾネスの少女のことはまったく覚えていなかったたので、記憶にすら残っていないかった。三年前と言う一誠の言葉にアスナも思い出して、二人の接点の辻褄が合うことに納得した。

「うんっ、そうそうー！ 思い出してくれた!?!」

目をキラキラと輝かせる少女は頻りに頷く。「イシユタル・ファミ

リア」に所属していた三人の転生者達による拉致・強姦の行いに肅正をする際、他派閥のホームの中で暴れ回った時に一戦交えたアマゾネスの中にいたのだろう。目の前の少女のことなど全然覚えてすらいらない男に……。

「レナ！私、レナ・タリー！今度は忘れないでね、イツセー！」

琥珀色が近いオレンジパール橙真珠のごとき双眸を細めるレナは、どこにでもいる少女のように明るく笑う。

「それで結局は挨拶をしに来たのか？」

「それもそうだけど、ここに来てるってことは誰かを買いかたつてこどでしょ？」

「『異世界食堂』の店員を増やすためにな」

「え、そつち？娼婦と気持ちいいことするためにじゃなくて？」

「そういうつもりでできたわけじゃないから」

「なんだー、もし可愛いアマゾネスと探してるなら私が相手になってあげたかったなあー」

まだ小学生ほどの年齢かもしれない小柄な少女の発言は、アスナをどきまぎさせた。

「え、えと、あなたはその男の人と……」

「してないよ？だって、ホームでイツセーと会って、私、変わっちゃったの。もう一目見た瞬間から、じゅわ、って体が熱くなったぐらいに！」

アマゾネスは、強い『男』に惹かれる。アマゾネスは、自分を打ち負かした『雄』に心を奪われる。女種族の厄介な性を覚えている一誠は、頬を引きつらせた。顔も名前も覚えていなかったアマゾネスを惚れさせていたなんてと。

「それでね？一撃をもらったあの時、感じたの……『あ、運命だ……』、って。だからイツセーと再会するまで他の男とシていなくてずっと『処女』のままなんだよ？」

一誠は確かにこの時『悪い予感』を味わった。アスナはこの時、次の展開を『悟り』を覚えた。

「……順番がおかしくなっちゃったけど、告白させて！イツセー

！」

次の瞬間、がばつとレナは両腕を広げて跳躍する。

「イツセー、好きー！子供作ろうー！」

抱き着こうとする少女に、気づけば、一誠はアスナの栗毛の髪と背中を見ていた。

「だ、だめだよ！」

「えー何でー？」

「まだ子供なのに、こ、子供を作ろうって早すぎるよ！」

「確かにまだ子供を産めない身体だけど、私とイツセーの恋愛を邪魔してほしくないかなー」

子を叱る親のような風景が目の前で繰り広げる。

「というか、あなたは誰だっけ？冒険者みたいだけどイツセーのなに？関係は？」

「未来を誓い合った仲だ」

レナの質問に対してちらりと後ろへ振り向いたアスナと目が合い、一誠の公言でアスナが勝手に恥ずかしげに視線を下に落とした。それが照れも含まれていることを手に取るように分かり、彼女の肩に手を置いて後ろから抱きしめながらレナを見る。

「街中でこういうこともする仲だ。悪いけどお前の告白は受け止められない。酷いようだが諦め——」

「ダメダメ、イツセーの女には私になる予定なんだから！！絶対に負けないよ、譲れない！」

言葉を遮るレナの意志の強い恋する乙女の決意。まいったな、と困って眉根を寄せる一誠から指摘を受けた。

「個人的に【イシユタル・ファミリア】の眷族と一線を置いて接したいんだ。その線を乗り越えて来られると困るんだが」

「じゃあ、【イシユタル・ファミリア】じゃなきゃいいんだね？」

「簡単に抜けないだろ」

「イツセーの子供を産むためなら頑張るよ！」

双眸に何かの炎を燃やし出し、「早速イシユタル様にお願いくる！」と言い残して二人から離れ人混みの中へと消えていったレナを

呆然と見送った。

「……アルガナさん達やレギンちゃん達と違うタイプの娘だね」
「あのやる気に満ちた目を持った奴は大抵諦めが悪い……どうすっかなあ」

「一応、派閥から脱退するまで保留する形でいいんじゃないかな」
彼女からの提案にそうだな、と同意して改めて歩み始めた二人も人混みの中へ消えていった。

「♪♪♪♪♪」

「なんだい、随分とご機嫌じゃないか」

「あ、アイシャ！うん、さつきイツセーと子供を作る約束をしてきたんだよ」

「また娼婦の身請けの下見をしに来ていただけだろ？お前の話はどうせ一方的で本気にしちやいないよあの男は」

「だったら本気にさせるまでだよ！だから邪魔しないでねアイシャ」
「さて、どうしようかね。あんな活きの良い男を見つけたら放っておくなんて他の連中もするはずがないよ」

「むーっ！こうなったら急いでイシユタル様にお願いしに行かなくちやー！」

「何を願いに行くつもり——ってもう行きやがった……」

『異世界食堂』定休日の時、従業員を全員、『幽玄の白天城』のリビン
グキツチンに招集した一誠は新たに決めたシステムを報告しようと
口を開いた。

『異世界食堂』を開いて三年以上経った。ここでそろそろ新しい挑戦
を試みたいと思いたいんだが、そのための必要な改善策を皆で考えた
い」

「それは何ですか？」

「うん、デリバリーサービス……俺達の料理を直接依頼した人の

ところに運ぶ配達をする、ということをやってみたいと思う」

新しい内容に一誠以外の一同は様々な反応で思い思いの考えを打ち明けた。

「配達つて、それは難しくないか？このオラリオの地図はどこに誰が住んでいるのか事細かに記されていないぞ？」

「ギルドから大まかなオラリオの地図を貰って、ここ数年間海童が言うようにどこに誰が住んでどこに何が建っているのかすらも事細かに調査して書き留めてあるよ。ダイダロス通りも網羅した」

「というか、そこら辺の住民登録を疎かにしているギルドの職務怠慢で、個人的に必要なことだったとはいえ俺が尻拭いをさせられた感じがハンパなかったがな、と長いいため息を吐いた一誠の愚痴が止まらなかった。

「あの豚エルフ、網羅した地図を見せたらなんて言ったと思う。ここまで細かく書く必要があるのか？だ。だったらお前はオラリオの全容を頭に叩き込んであるのか・・・どこに誰が住んで、オラリオの総人口すら把握できていない豚エルフにイラツときたぜ」

「お、落ち着いて落ち着いてイツセー」

「お前がかなり苦労したことは悟ったからその負のオーラを抑えろ。部屋中が嫌な音を立ててるから」

周りから宥められて落ち着きを取り戻す。改めて話を進める上でメアが挙手した。

「料理を入れる容器はどうするニヤ？それに食べ終えたら店まで持つてこさせるのニヤ？」

「その容器を返品する専用の魔道具マジックアイテムの箱も作るさ」

「今の人数でそれができるのかい？朝からパン作りをして朝清掃や料理の仕込みと色々と他に手を回す余裕がないと思うんだけどね」

「注文票と容器の回収は店が雇った責任感ある無所属フツの人達にしてもらう。俺達はさつきも言ったように何時ものごとく作ってあげればいい」

「他に質問は？」と尋ねる一誠にアスナとクロエが挙手しながら訊いた。

「話を聞いて思ったんだけど、その感じだとデリバリーをするお店と
言うより弁当屋風な感じだよね？」

「ああ、アスナの言うとおりだ。実際これからしようとしているのは
弁当屋みたいなものだ。でも、配達をする視野も入れているから疑問
を抱かなくていいぞ。クロエは？」

「不祥事が起きた時の対策はどうするニヤ？具体的に売上金をちよろ
まかされたり、支払いを踏み倒す客がいたら？」

「一度でもしたら店のブラックリストに載せ、二度と注文も店の敷地
に跨がせはしない方向で。勿論雇ったフリーの従業員と客どっちも
だ。ああ、注文した客が本人じゃなくて代理だった場合は、注文票と
一緒に書かせる証明書を見せてもらってから渡してくれるようにし
なくちやな」

「ふーん、もう考えているんだね。それなら問題点なんてないんじや
ない？」

ルノアの楽観的な言い分から少しして「一つだけある」と一誠本人
が否定した。デリバリーサービスをするに大切に重要なことがまだ
解決していないことだ。

「常連客以外の人間が『異世界食堂』の料理のメニューを知らない。そ
れを店に入らず知る術がまだなわけでデリバリーサービス、配達をす
るには適わない。それを解決するための策を皆からの意見で考えた
い」

と、珍しく一誠から乞われて従業員達はうーんうーんと頭をひねつ
て思考の海に飛び込んだ。

「選ぶ時間のゆとりも欲しいわよね」

「行列もできるよね。待たされなくてすぐに注文できる環境や状
況……」

「異邦人の俺達からすれば連絡一つでできたんだが、この世界は連絡
手段はないから無理なわけで」

「その場でゆつくりと選べて注文ができる場所や方法を前提に考えな
いと」

「そんなところあるかどうか……」

悩み続けた一同。知らない人でも簡単に知ることが出来る場所や方法を考えた結論は。

「坊主、異世界銭湯の中にも料理を作る予定だった件がまだ保留だったろう。あそこだったらデリバリーサービスつたのをできるんじゃないのかい？東西南北から異世界銭湯に行ける路もあるんだしね」

ミアの言葉で思い返された件の計画を実行する切っ掛けとして至った。

一ヶ月後、異世界銭湯で週に一度『異世界食堂』が弁当屋Ⅱデリバリーサービスを始め、

仕事場やダンジョン内でも好きな料理を味わえるようになって利用するものは後を絶たない。

ギルドの職員達も例外ではなくギルド長ロイマンのもとに、店主の付き添いで異世界食堂が雇ったエルフの配達員から届けられた黒い大きめな箱があった。小さな宝玉付きで蓋を開けると最初に温かな白い粒々の米が詰められており、米が入れられた一段の箱を取り出せば、二段重ねの箱には蓋が無くなったことで解放された湯気と、熱で発するソースの香りにステーキ肉の焼ける音。ロイマンは鈍色のナイフとフォークを手に取り、静かに食事を楽しむ頃。

『異世界食堂』もとんでもないことを始めたね。料理を配達してくれるなんて」

「週に一度だけなのは残念だけど、この日を楽しみに待って仕事を頑張れるね」

「今までだったら休憩時間を利用して店に行って戻って往復するだけだけど、配達をしてくれるなら行かずに時間を気にせずに食べられるから嬉しすぎるわ」

「んー、美味しいっ」

受付嬢達の間でも好評な『異世界食堂』の弁当。行かなければ食べれない料理を弁当にして運ぶとは、オラリオに点在する酒場や料理店の常識を逸脱している。この結果、中々行けずにいて食べれなかった者達もこれならば食べられると気持ちで異世界銭湯に運ぶ足が多くなり、一日百件以上の注文が殺到して、料理を作る専念をすることは

変わらないと言った店主の言葉通りであった。

「本当にやったわねイツセー」

事前に新しい事をすると言えられていたローズも直で店主から受け取った弁当で、昼時に食べながらそう言い零した。何となく他の受付嬢を視界に入れる。銀色の長い髪に紫色が帯びているエルフの同僚受付嬢が、『氷の妖精』などと言われている原因である普段は無表情の顔が、注文した弁当を食べて驚きの色を浮かべていた様子に驚嘆した。

「ソフイ、どう美味しいでしょう異世界の料理って」

「ええ、正直驚くべき味です。酒場の料理など、と高を括っていた自分が恥ずかしいです」

ならばこれからは印象を改めざるを得ないだろうと、優越感を覚えるローズは食べ終えた弁当の中にフォークとナイフを入れ、蓋した箱にある宝玉を指先で軽く押す。すると、宝玉が光り輝いては箱が光となってローズの前に音もなく消えてなくなった。

「捨てることもなく、返しに行かず済ませる魔道具^{マジックアイテム}、ね。才能の無駄遣いじゃないかと思われても仕方がない便利すぎる物を作って、盗まれないのかしら」

「ニヤー！次から次へと忙しすぎるニヤー!?!」

猫の悲鳴が聞こえる『異世界食堂』の調理場。食べ終えた空の箱が虚空から現れては積み重なった空箱に落ちていく隣で洗う従業員の気持ちは、他の従業員の心を代弁していた。

同じ料理を作るだけだと言うのに、今まで作ってきた量より数倍で、壁に張られてる注文票が山のようにまだ大量に残っている分を作らなければならない。

辟易するオラリオ中からの注文に料理人であるアスナ達の顔に汗や疲労が浮かんでいるのは、今までにない多忙であることが物語っている。

「はっはっは、本当に忙しいなあー。まさかここまで繁盛するとは予想外だったわ」

「まだ笑えるぐらい余裕があるんなら、もつと忙しそうにしていな」
「疲れているんだったら休んでいて良いぞ？穴埋めは出来るからな」
「はん、甘く見るんじゃないよ。こちとら疲れてさえもないんだ、坊主に体力負けなんかしないよ」

軽口を叩く第一級冒険者と店主の手は、変わらない速度で次々と弁当を作っていく。完成した弁当は『異世界銭湯』に繋がっている大型の鏡の魔道具マジックアイテムで運ばれて客のところへ届けられる。

「お待ちせしました！182番のお客様、カウンターまでお越しくださいませ！」

「早いな、まだ一分も経ってもいないぜ。待たずに済んでいいんだが、ちやんと作ってあるんだろうな？」

「大丈夫です。丁寧に美味しく作られておりますから」

スマイル営業を忘れずに弁当箱を手渡す従業員。隣を見れば大勢の客達から注文票と代金を受け取っている従業員がいて、これまでの注文票を別の従業員が束ね、鏡の魔道具マジックアイテムを経由して持って行った。顔を前に戻すと待機中の客達と同じ長台にずらりと並べられた辞典のように分厚いメニューの本の前に腰を下ろして座っている二百人余りの人達の光景を眺める。

「(予想はしてたけど、予想以上にお客さんがくるんだね……)」
それほど『異世界食堂』の知名度が高いのだということなのだが、ここまで肌で実感したことはなかった。薄鈍色の瞳は彼等彼女等の客達を一瞥して、店内に戻ろうとした際は近づいてくる顔見知りの黒髪黒目の男性の姿を捉えた。

「いらっしやいませ、ご注文は？」

「……店主を呼んでくれるか？大事な話があると言って欲しい」
「申し訳ございません。店主はただいま手が離せないなので、伝言として伝えますね。よろしいですか？」

「ああ、それでもいい。お願いするよ」

男性は注文をせず伝言だけ残して去っていった。この言葉の意味を理解できたのは店主、アスナ、シノンだけだった。

「決まったようだな」

「そうみたいね。イツセー、あの子達の願いを叶えたらどうする？」
「あいつらがどうするかで決まる。さて、その一人のシノン。お前は
帰るか？それともこの世界に残るのか？お前の気持ちを教えてくれ」
「……私はい」

冒険譚42

次の『異世界食堂』の休日の日に一誠は「アルテミス・ファミリア」のホームに足を踏み入れた。そのヒューマンの脇を固めるのは、栗毛の長髪のエルフのアスナと黒髪に眼鏡をかけたヒューマンのシノン。三人が訪れると出迎えたのは団長のキリトだった。

「よ、元氣そうだな」

「ああ、そつちもな。デリバリーなんて異世界でもやれるもんなんだな。最初に訊いた時は驚いたぞ」

「普通は無理なんだけど、意外と何とかやっつけている」
「そうか」

挨拶と雑談はそこそこ終わらせて中へ招かれる。真つ直ぐ皆で食べる食堂に案内されれば、何とも言えない表情の異邦人、ヒーローを志していた緑谷達が座っていた。エギルとクライン達も同席していたが、シノン以外の女性：スグハ、シリカ、リズがいなかった。食堂の空間に入ると開口一番——一誠は問うた。

「それじゃ、聞かせてもらおうか。お前達の総意の答えを」

異世界にいるもう一人の一誠を元の世界に帰す、厚顔無恥で元の世界に帰るか——問われた代表者、小汚い印象的な無精髭の教師相澤が答えた。

「元の世界に帰る気持ちは変わらない」

「そいつは自分達だけ恩を返さず厚顔無恥で帰るってことなんだな？」

「ヒーローとして俺達より先にこの世界にいるお前やキリト達に申し訳ないが、その通りだ」

相澤の答えに視線をキリト等へ動かした。シノン以外の三人の女性がいなのが気になるも予想はできる。

「順番的にお前らが最初だ。もうこの世界に五年もいるんだし、キリト達も元の世界に帰った方がいい時期だけど」

「……」

直ぐには答えず、しばらく間を開けて思考の海、この五年間の日々

を思い返しているかのように口を閉ざしていたキリト。返ってくる答えに待っているとキリトの口が開いた。

「俺達は元の世界に帰る」

「そうか」

当然の答えだと思った矢先にキリトの発言は、一誠の予想を裏切らせた。

「だけど、すぐにこの世界に戻る。俺達は、俺とスグハ、シリカにリズはこの世界で生きることにした」

「……え？」

「エギルは元の世界に帰るつもりだ」

キリトの言葉にアスナが異を唱えた。

「どうして帰らないの？クラインさん達は？」

「あーこつちの世界の方が生活しやすくてよ。俺達もこの世界に生きることにしたんだ。ぶっちゃけ、戻っても仕事解雇されてるだろうしどうせならってな」

「……本音をぶっちゃけて言えば？」

「可愛いアマゾネスちゃんとの出会いを失いたくないって、なに言わすんだお前！」

勝手に暴露したクラインを呆れと苦笑が同居した心境を抱くアスナ。

「エギルさんは」

「俺の帰りを待ってる女がいるからな。この世界に連れて一緒に店を切り盛りしてみたいが、異世界なんてとんでもねえ新天地じゃ不安に押し潰されそうだ」

「一応、誘ってみたら？」

「してみるさ。一応な」

駄目だったらそのまま永遠の別れ際にキリト達を見送ることになるだろうとアスナは悟り、キリトに目を向けた。

「キリトは三人の妻の事か」

「ここだったら法律も世間も気にせず暮らせるからな。……それでお前に頼みがある」

「とんぼ返りをする理由か？」

「ああ、一度お前の世界に連れて行ってほしい」

話が見えず、一度小首をかしげる。

「それはなんでまた？」

「お前の世界はファンタジーなんだろう？魔法があるなら錬金術も存在している可能性を信じて言うが、アンドロイド、ロボットの開発も作れる人はいるか？」

「いるけどそれが元の世界と何の関係がある？」

「元の世界に人工知能、俺達の仲間、家族がいるんだ。だからお前の世界の技術を頼りに一人の存在にしてあげたい」

人工知能？アスナに説明を求める視線をぶつけると、複雑な面持ちで語ってくれた。

「ユイちゃんって私達の事を家族のように接してくれる娘なの。コンピュータ、ネットワーク内でしか活動できない人工知能んだけど、彼はユイちゃんをあなたの世界の技術でこの世界でも過ごせるようにしたいってことだよ」

「……家族ねえ。今の二人の関係を知らないでいるユイって人工知能にどう説明するんだ？」

「……正直に話す」と少し表情を暗くするキリトに「……当たり前だよ」と悲し気に言うアスナ。また一誠が訊く。

「仲直りしてって言われたら、二人はどうするわけ」

沈黙する。これは難儀な展開になることを察して溜息を吐く。

「キリトの件に関しては了承しよう。ただし、帰れたらの話だ。いいな」

「……頼む」

話が一段落したところで早速とばかりに拳藤一佳の協力を求める。しかし、彼女だけでなく緑谷達が当惑した。

「え、もうっ？」

「は？この世界にやり残したことがあるのか？」

「え、えと……帰る支度とかキリトさん達に挨拶とか……色々」

歯切れが悪く言う。今すぐ帰ることになろうとは思わなかったよ
うで下準備を済ませていなかったことから、一誠から威圧感が放たれ
た。

「——一時間以内に全部終わらせろ。それ以上過ぎたら帰るチャン
スはないと思え」

ドスの利いた低い声とドラゴンの睨みでヒーロー組達は脱兎のご
とく動き出し準備を始めた。

「イ、イツセー……脅しちゃだめだよ」

「何時でもすぐに帰れる準備を怠った馬鹿共が悪い。ああ……そう言
えばキリト、子供は生まれたのか？あの三人がこの場に居ないし」

何気ない風に尋ねられてアスナを一瞥した後キリトは頷いた。

「無事に出産したよ。三人共男の子だ」

「それはよかった。後で出産祝いに子育てに必要な道具を一式数年分
プレゼントしなくちゃな」

「……助かる」

「教育には気を付けろよ。浮気とか不貞行為を覚えさせるなよキリト
パパ」

「……」

ぐうの音も出ないキリトは沈黙してしまった。親の血を受け継い
だ子供もそうならない確証はない故、教育に気を使わなければならな
い苦労は必然的なのである。

「しかし、エギルは不確定だが——シノンも含めて皆異世界に残
るなんてな」

「イツセー、お前はどうするんだよ？」

「勿論帰るよクライン。ただ、俺は長い時間を掛けて異世界と異世界
を繋げる。この世界と元の世界と行き来するためにな。できるかど
うかは、元の世界にいる神々と検討してみる」

一時間後——。

「前回のよう思い浮かべろ」

「は、はい」

ヒーロー組達の支度や別れの挨拶を済ませたことで、展開する魔方

陣の中で額を合わせる。拳藤一佳の想いを糧に魔法を発動する。彼女が思い浮かべるは、元の世界の風景に家族に学校……そしてもう一人の兵藤一誠。それらがある異世界に呪文を唱える一誠の言葉が耳にしながら強く強く憧憬を抱いていると、額から伝わっていた感触が無くなり。

「今回も問題なくだな」

虚空に輝く光は楕円形の鏡のように発現して、中心は拳藤一佳が思い浮かべていた景色が映していた。内心の一誠はここまでは問題ないが、この向こうに行けるかどうかと一抹の不安や緊張感で思いながら手を動かして自身の魔法を触れた。

景色の向こう側へ手が何の抵抗もなく突き進み腕、肘、肩まで水の中に入れたような浸透していく身体に一誠は初めて緑谷達の世界へ——足を踏み込んだ。

「ははっ、別の世界に来てしまったよおい」

UとAが合体した形の施設の前に乾いた笑い声を零し、後ろへ振り返ると「アルテミス・ファミリア」の異邦人達が続々と一誠の魔法を潜って出てきた。

「か、帰ってこれた……っ」

「ああ、二年振りだ……っ！」

『~~~~っ!!』

この世界の異邦人達が歓喜が極まり、全身を震わせた後に全力で喜びの声を上げた。その音量は大きく心の奥底から喜んでいることが聞いて解る。お互い抱きしめ合い、嬉し涙を流し感動を分かち合う姿に一誠は息を吐く。アスナとシノンのご苦労様と肩に手を置いて叩いたり微笑んで労った。

「約束守れて良かったね、イツセー」

「これで心置きなくあなたも元の世界に帰れるわけね

「そうだと思いたいな」

眼前の喜々の光景を眺めていた一誠にドラゴンの気配を感じ取った。それは静かに現れ、横へ顔を向け視界に映ったオツドアイに一誠

と瓜二つの人物が佇んでいた。アスナ達も視認した。

「もう一人のイツセー……」

「これで二度目だけれど、まだ信じられないわね」

分身体ではなくオリジナル。並行世界、パラレルワールドのもう一人の兵藤一誠が現実だとしても信じ難く受け入れ難い事実。ポケットに手を入れてもう一人の自分に近づくと一誠。

「また会ったな」

「そうだなと言いたいが、どうして直ぐにあいつらをこの世界に送らなかったのか聞かせろ」

「あいつらがいなくなった分、戦力が激減するんだ。【ファミリア】としてそれはとんでもないことだからあいつらを拾った先輩達と主神に恩返しをさせていた。ヒーローを目指すならそれぐらいしてからじゃないと駄目だろ」

「……ここにいるのは、それが終えたわけか」

「全然。四十人の代わりに団員を集めず急かされた。恩を返さず厚顔無恥でヒーローになるんだとよ」

「どう思うよ、と訊かれたもう一人の兵藤一誠の口から溜息を吐いた。目は少年少女達を非難していた。

「……満足に恩も返せなかったのか。それでよくこれから復学して立派なヒーローになれると思っっているんだな。恩返しを舐めているのかお前ら」

「……っ」

グサツ！と自分達が知っている兵藤一誠にまで侮蔑の言葉を送られてヒーロー組達は顔に影を落とし、奈落の底にまで酷く落ち込むその様子についてきたキリト達は「うわぁ……」と漏らした。

「……こいつはドラゴンの修行で甘い考えをなくす必要があるな」

『ひっ!』

そんな一言でガチで怯える彼等彼女等に同情しない一誠は「程々にしておけよー」と言いながらポケットから一枚のカードを取り出した。

「なんだこれ？」

『ステータスプレート』と言つてな。主神いらずでこれが「ステータス」の代わりになる俺が作った新しい道具だ」

「ああ、教えてもらった【ファミリア】のだな。で、なんでこれを俺に？」

「お前の血をこれに登録して俺の【ステータス】をコピーしろ。異世界に行き来できる魔法が得られる」

一誠の話を聞いて目を見開く。直ぐにその通りに『ステータスプレート』に血を垂らして登録、次に兵藤一誠は一誠から全てのアビリティやスキルに魔法をコピーして自分の力として得た。

『異世界扉』ワールド・ドア・・・!」

「これでお前も元の世界に戻れるな」

「・・・ああ、ありがとう。お前も帰るんだろ？」

「そのつもりだ。だから、遊びに来るなら歓迎するぜ」

「それはこっちもだ。お互いまた会える日まで息災でいよう」

二人の兵藤一誠が固く握り締めあい不敵に笑みを浮かべた。その笑みのまま兵藤一誠は緑谷達へ向け、怒りのオーラを迸らせる。

「さて? 帰ってきた喜びも束の間も浸る暇もないぞお前ら。今すぐトレーニングルームで鍛えてやる」

「ちよ、待ってくれ兵藤!?! 俺達の帰還を先生達や親に伝える方が先だつて!」

「黙らっしやい! そんなの二週間後でもできるわ! ヒーローが恩返しもできずに人を助けれると思ってるのかああん!?! どうせ軽い挨拶の言葉だけで済ませて万事解決! と気持ちでいるんだろ、俺はそういうのが許せないんだよ!」

「あ、あっちも兵藤もおっかないけどこっちも同じだあ!?!」

「に、逃げるぞ!」

悲鳴を上げる少年少女だけでなく、矛先は大人にも向けられた。

「その教師三人組も、ヒーロー兼教師以前に大人としてこいつらの指導が生温いんじゃないか? 連帯責任としてあんたらもシゴクからな」

「・・・拒否権は!」

「あると思うか？（ニコリ）」

結果。兵藤一誠から放たれた数多の鎖が一同を縛り上げ、抗議と悲鳴を上げてても一切合切も意を返さずどこかへ連行して行つた。啞然と見送っていた一誠達は直ぐにオラリオには戻らず。

「……………ねえ、イツセーもあんな感じになつちやう？」

「なるな。だって俺だもん」

「指導の鬼ね。で、これからどうする？」

「勿論、観光しようぜ。この世界の通貨はないけど」

観光をしに行つた。そして普通の姿の自分達が知る人間がいれば、異形の姿をした人類を目撃した瞬間の一行は心底から目を見張つて愕然や驚愕しつぱなしで終始過ごし、ヴィランによる事件に巻き込まれると。

「え、兵藤一誠。何故君がここにいるんだい」

「あ、世界を救つた英雄じゃん！」

「巨大隕石を破壊した雄英の！」

「サインしてー！」

あつという間に騒がれ野次馬に取り込まれてしまい、一行は静かに観光できまいとオラリオへ急遽戻つた。

残念ながらも元の世界に帰れた彼等彼女等の祝福を祝い、二度と異世界に訪れることはないよう願うばかり。

「そうか。彼等は戻つたんだね」

「あいつらが異形の姿でいるのも納得もした。そういう世界なんだつてなつて思わされたよ。しかももう一人の兵藤一誠の知名度高かつた」

「お主もそうじゃろうて」

「やることなすこと派手だからな。目立ってしようがないだろう」

【ロキ・ファミリア】のホームに訪れ、異世界に帰還した者達の話を入れさせる。事務の仕事をしながら話を聞くフィンの目の前で一誠とガレスは将棋をして、見学しているリヴェリア。

「後はキリト達ともう一組の異邦人達だけだね」

「そうだなと思いたいが、またこの世界に異邦人が転生者が来そうな

予感がしてしようがないよ」

「今のところギルドからその報告はないが杞憂ではないか？」

「杞憂でも何でも、既にオラリオにおけるしの。これで打ち止めと思わんほうが気分的に楽じゃろ」

ガレスの考えに同意と首肯しながら駒を進ませる。盤にパチと音を鳴らし相手への攻めやけん制をしつつ王将を攻め落としかかる。

「キリト達はこれからこの世界に？」

「そのつもりようだ。元の世界よりこの世界の方が過ごしやすいのが決定打だ」

「過ごし難いのかお前達の世界は」

「自由があまりないのが確かだな。細かな規則や大まかなルールがその国に住む人類を束縛している。便利な道具は豊富で遊戯も豊富だから退屈ではないな。それに比べてこの世界は自由があつて金も稼ぎやすい分、退屈で便利なものは少ない」

「ふむ、儂等のような種族がおるといふのに聞くと差異があるようじゃな。それで、いつ戻るんじゃない？」

元の世界の帰還を問われ次の一手を王将の近くにパチと置く一誠。

「——もう一組の異邦人達の誰かが『ランクアップ』を果たして、運動会参加資格を得られたらあいつらの主神に改宗コンバージョンを申し込む。真正面から正式に全員を解放しなくちゃな。そうじゃないと俺や相手に対する成立や正当性が成り立たない」

異世界で過ごして六年目の春。ついに一誠は帰りを待つ家族がいる世界へ帰る決断を下した。その話は瞬く間に交流ある「ファミリア」の主神や団員達の耳に届く。

「シャクティ、アーデイ、俺達も行くぞ！異世界のガネーシヤを会いに！」

「異世界かあ、どんなところなんだろうね」

「イツセーみたいな存在がいる前提で考えた方がいいだろう」

「アスファイ、未知の世界へロマンを求めるよ」

「止めても無駄だということだけはわかっています」

「主神様よ。手前等も行くのだろうか？手前は楽しみだ」

「わかっているわよ。私も興味あるのだから」

「ふふ、イツセーは私を愉しませるのが本当に上手ね。オツタル、時期が来たらアレン達を連れていくわよ」

「は」

「イザナギ、イザナミ。当然行くわよね？」

「勿論」

「行かないわけがないだろう。異世界の極東を見てみたいのだからな」

それぞれ様々な思惑を抱いて今か今かと待ち続ける。全てはもう一組の異邦人達の集団に懸かっていると過言ではない。少年少女達に何年掛かろうと期待する神々にそんなこと思われているとは知らない当人達は……。

「せいっー」

鋭い一閃が気合の声と共に走り11階層にいる大型モンスターであるオークの胴体を切り裂いた。同胞を屠った人間の後ろから陰で覆いつつ掲げた天然武器庫ネイチャーウエポンの棍棒を振り下ろした。

後方へ振り返らず横に軽く跳躍、一拍遅れて地面に叩きつけられた棍棒の音の後に艶やかな黒いポニーテールをたなびかせ、両手で柄を強く握り締めたまま横風ぎに黒い刀を勢いよく振るい、鋭く体を回す。刀身がオークの身体をバターのように切り込み、両手から抵抗感を感じないままでつぷりと肥えた腹部を振り抜いてみせた。

戦闘終了後、二体の大型モンスターを倒した少女は刀を振るい濡れた血を払ってから鞆に納める。

命を懸けた戦いの終わりに一息つく間もなく少女へ称賛の声が送ってくる方へ振り返ると四人の男女の仲間が。

「すごい、雫ちゃん。あんな大きいモンスターをあつさり倒しちゃった！」

「ああ、武器の切れ味も未だ落ちていないし凄いな」

「へっ、俺等も負けていられないぜ。おい南雲、お前もやる気出したんならもつと積極的に戦えよ？」

「う、うん頑張るよ」

仲間達からの労いの言葉を受けながら八重樫雫は腰に佩いた刀を触れる。今のところ手入れを欠かさずとも刃こぼれ一つもない漆黒の刀は無類の威力を誇っている。しかし、あの飛ぶ刃を出せるまでの実力までには至っておれず自身を戒めるように、もつと精進せねばという気持ちが少女をさらに向上心を高ませた。

「オーダーメイドの武器か。ちよつと憧れるな。俺もどこかの鍛冶師に籠手を作ってもらおうか」

「それってどのぐらい値段がするんだろう？あ、オーダーメイドの意味で」

「ギルドの人に訊くのが一番だろう。香織もオーダーメイドの武器が欲しいのかい？」

「白崎さんはあれから魔法を発現したし、新しい杖だよな」

香織が持つてる得物は駆け出しの冒険者が扱うようなスタツフだった。魔法は回復系で前衛から後衛に配置が換わり、傷ついた仲間を詠唱して唱えるようになってまだ日が浅いところ。

「うーん、まだこの杖で頑張るよ。相談はしたいけど」

「……香織、あの男に頼らなくても」

「光輝がそんなことと言える立場じゃないでしょ。あの人に謝つてすらないんだからあんたは、『異世界食堂』のブラックリストに載せられて出禁扱いされているじゃない」

多くの客人や従業員達の目の前で拳を上げたことで、ブラックリストの掲示板に顔写真を張られて雫の言う通り『異世界食堂』に出禁の烙印を押されてしまった。その事実を知って以降、天之河光輝は『異世界食堂』の敷地に入れず、サンドウィッチかデリバリーだけ故郷の料理を食べる事しかできないでいた。出禁を認定したのは大多数の

「店主に謝罪するまでは許さん！」と店主の料理の腕に惚れている多くの客達の総意で決まった。

「イツセーさんが決めたのかな？」

「怒っているなら多分そうかもね。話を聞いたときは、光輝君がイツセーさんを殴るなんて最初吃驚したよ。……たくさんのお金やホーム、落ち込んでいた皆の事を親切してくれた人を殴るなんて……恩を仇で返すなんて最低だからね」

片想いの女の子からの非難の言葉よって、見えない何か少年のハートに深く突き刺さり、酷く落ち込む暇もなく近くで地面から再沸リポップしたモンスターに囲まれて臨戦態勢の構えを取った。

ロキのホーム『黄昏の館』を後に街中を歩いていると腕輪に通信が入り『異世界食堂』にある男神が訪問をしてきた、と報告を受けた。大切そうに一本の瓶を持ってと。一誠はその男神のもとへ会いに訪れ『幽玄の白天城』へ案内し、ロキとフレイヤに試飲を頼んだ。

「これがあの虹色の実の酒かあゝ」

「どんな味がするのかしら」

興味深々とグラスに注がれた酒。酒を造った男神ソーマはワインとして酒造した結果、少し口に含んだ女神二人の様子を窺うと……顔がほんのりと染めた。

「どうだ？」

「い、今まで飲んだことがない味のワインやで……」

「とても美味しいわ。でも、すぐに酔いが回ってくるわね……」
アルコールが高いのだろうもう二人は目が潤い顔が蕩け、今にでもテーブルに突っ伏しそうだったので商品として店に出せない、お蔵入りだと決定した。

「このワインは店に出せそうにもない。でも酒造してくれてありがとうな。さて、今度は異世界のソーマの酒だ」

キッチンに足を運び、クリスタルガラスとグラスを手にして持ってきた。ガラスの瓶にはダイヤモンドがあり、一誠はそれをグラスに少量注ぎソーマに渡す。

「……………」

静かに異世界の酒神の酒をゆつくりと口の中を含み、舌全体で味わおうとした様子のソーマの眼は前髪の奥で隠れた双眸が見開いた。

「どうだ？自分が作る酒と比べて」

「……………感謝する」

感想は感謝の言葉のみ。ソーマは大量に生産した残りの虹の实のワインを一誠に手渡し、報酬を受け取ってホームに帰って行った。後に椿やガレスにミアも試飲してもらおうと。

「美味い！これはドワーフの新しい酒の誕生だ！」

「本当にワインとは思えんわいこれは」

「坊主、これを出すならドワーフ専用にした方がいいよ。酒の耐性がない客が酔い潰れるからね」

顔を赤く酔いが回っているにも拘らず水のように飲み、好評だったのでミアの提案通りに『異世界食堂』のメニュー本にドワーフ専用の酒を加えた。興味を示したドワーフの客達は虹色の実のワインを飲み、大変美味であると感想を述べた。とある葡萄酒を好む甘い美貌の顔の男神も飲んで一杯で酔い潰れそうになったとか。

「——と、店で売ったらそんな感じでドワーフ専用になってしまった」

「情報提供感謝しますイツセー殿。では、私達もドワーフ中心に売り捌くとしましょう」

交易の場で商人の生業をしてる老神にも情報を提供。男神もソーマにワインの製造依頼をしに向かった。これで虹の实の件は終わつたとようやく一息ついた。城に戻ろうと交易所を後に踵返した時、腕輪の宝玉が点滅した。

「あ、イツセーさん」

「どうしたシル。それに、珍しい客がいるな」

『異世界食堂』に足を運び、連絡してきた女性店員のシルが薄鈍色の瞳に安堵の色を浮かべた。待ち合わせを裏口に指定された一誠が辿り着くと、シル以外にも褐色肌の女性、アマゾネスの戦闘娼婦の顔を見るなり不思議そうに首をかしげた。

「本当にその腕輪で呼んだね。便利な道具じゃないか」

「俺に用つてことでいいんだな？アイシャ」

「ああ、ちよいつと聞きたいことがあるんだ」

立ち話もなんだから、ということ屋上へ移動して設置されている席で話を聞くことにした。

「俺が知っていることなら話すが聞きたい事つて？」

「最近、イシユタル様から妙な匂いがするんだ。香水の類かもしれないが」

「あ、それが原因で何か困りごと？」

「困つてるわけじゃない。娼婦や戦鬪娼婦^{パルベラ}達がイシユタル様が使つて香水の出所を探り始めたんだ。あそこまで人を魅了させるような香りをすれば、女としても使いたくなるのはおかしくないだろ？」

納得できる理由に亜空間からストックとして作り置きしていた虹色の実の香水を一つアイシャの前に取り出した。

「これが欲しいわけか」

「……お前が作った物だったとはね」

よもや目の前の男が香水を作っていたとは露程も思わなかったアイシャは軽く目を張った。

「面白い果実を手に入れたからな。この香水ならマキャベリっていう商人が扱つてるぞ。探して売れ切つてなければまだ手に入れるかもしれないぜ」

「タダではくれないのかい？私との仲じゃないかい」

「どんな仲だよ」と香水を仕舞つて席から腰を上げる。

「香水の出所も教えたから用件はこれで終わりだな。帰らせてもらおうぞ」

「用事でもあるのかい」

「これでも忙しい身でな。運動会の準備をしなくちゃならないんだ」

じゃあな、と別れの挨拶を短めに言つてアイシャの目の前で音もなくフツと消え去つた一誠。

取り残された後のアイシャもマキャベリという商人を探し求め、その人物と香水を見つけると直ぐに購入した。独占をせず同じ仲間に

も伝えると香水を売ってる商人の事が伝播していつて、忽ち香水は完
売。一誠に発注を頼むマキヤベリは楽し気であった。

冒険譚43

「イツセー、いる？」

ノックもせず無遠慮で扉を開ける。部屋の中を見回して探し人がおらず、外のバルコニーに淡い光が発していることに気づくまで留守でないのかと思っていたもの、光の方へ近づいてみると柔らかい芝生の上に寝転がり、【天使】^{デ・シエロ}の姿をして日光浴をしながら眠っている男がいた。

どうして翼を出して寝るのか意味は分からない。用件は急ぎではないので起こさずとも後でも構わない。そのつもりでいたが、膝を折って無防備に寝顔を晒す一誠を見下ろす好奇心に動いた。

「顔が整っている男って、寝顔も綺麗なんだ」

男の寝顔よりも今まで殺してきた標的の死に顔を多く見てきた。苦痛、怒り、恨み、憎しみ・・・殺され、殺した者に対して浮かぶ負の顔を。それに比べて一誠の寝顔には一切それらが浮かんでおらず、穏やかな表情だ。

「呑気に寝てるなあ・・・」

つんつんと一誠の頬をつついて、今寝込みを襲われたら簡単に死ぬんじゃないかと何となく思いながら翼に目をやった。とても綺麗な黄金の翼。触れれば鳥の羽毛のごとく柔らかく、手の平から感じる太陽の暖かさ、気になって嗅いでみると安心させる優しい匂いが……

「……………」

気付いた時は、一誠の隣で翼の上に寝転がって睡魔に襲われていた状態だった。そして最後にこっちに顔を向けて慈愛に満ちた目と微笑みを向けてくる一誠を見た。

誰かに暖かく優しく抱きしめられる感覚は初めてで恥ずかしさや照れも覚えたが、それ以上に幸せを覚えた。たまにはこういうのも悪くないかなと目の前が真っ暗になる最中に過った思いを残し、ルノアは眠ったのだった。

三時間後――。

「ルノア、俺になんか用事でもあった？」

目覚めたルノアは、ベッドの上で背後から一誠に抱きしめられながら話しかけられた。どうしてこんなことになっているのだろうか、しばらく放してもらえない気配を感じて寝る前に尋ねた目的を打ち明けた。

「去年してたバレンタインデーって、今年もするの？」

「するとも。今年も完売なるかわからないが、残ったら残ったで皆でチョコパーティをすればいいからな」

「残った量によるけれどしばらく甘いものは食べたくなくなるよねそれ」

「そうだなあ……皆から貰った十個以上のチョコを一人で食べた俺はその年、チョコを食べなかつたし」

「実体験をした話を聞かされて何とも言えない気持ちになつてしまつたが、それは手作りか店の商品なのか問うてみたルノアに「手作りだ」と返答された。

「人気者じゃん」

「贅沢な悩みだが人気者は辛いぞ？」

「本当に贅沢だね」と苦笑しながら微笑む器用な笑い方をする一誠へそう言うルノア。『異世界食堂』に働くまでそんな縁がなかつた自分とは大違いだと思つていたら、手の甲に大きな手が重ねられた。

「ルノア、今の暮らしにどう思つてる？」

「どうって……」

去年からこの城に暮らし始めて以来、血みどろが纏う生活はしなくなり裕福な生活を送れている。一誠と出会う前の暮らしとは比べるまでもなく幸せであることは確かだ。比較して今まで縁がなかつた自分が当たり前のように今では得ていることに本心から伝えた。

「幸せだよ本当に。家族、同僚、【ファミリア】……賞金首狩りバウンディハンターを

していた頃は縁がないと感じてたのに、今じゃ昔そんなこと考えていたなんて不思議なぐらいこの城の中で家族のように、店じゃあ同僚達と忙しく働いて、おかしな【ファミリア】の団員として生活している自分が幸せを感じてるよ。こんな血で汚してきた手の私なのに」

「なりふり構わず生きるためだつたんだ。褒められるようなことでは

なくとも、お前を強くしてくれた糧であることは否定しちやいけ
ない」

間を置かずルノアの感想を聞いた上で彼女の手を優しく包み込む
ように握り締める一誠は、紡ぐように言い続ける。

「お前の人生を知った風には言えないが、血で汚れているっというん
なら俺だってそうだ」

「元の世界で、イツセーも誰かを殺したの？」

「実の兄をな」

「っ……」

吃驚したように目を丸くして振り返った視線の先で、一誠は微苦笑
を浮かべていた。

「だから兄弟をこの手で殺した汚い手だと思われても仕方がない。そ
れでも俺を受け入れてくれた家族がいた。そしてルノア、お前もお前
を受け入れてくれていている皆がいる。血で汚れた手だろうと、人を殺し
て得た金で過ごしてきた人生だろうと、気にしない奴がいれば受け入
れてくれる奴がいて、笑って一緒に生きようとしてくれるそんな家
族、同僚、【ファミリア】がな」

「……あんたもそうだったの？」

「もう解ってるだろ？」

密着する密度がさらに増してルノアの指の間に指を差し込んで手
を重ねる。気恥ずかしくなってきた彼女だが、その手を持ちもう片方
の手はルノアの頬を優しく添えて振り返らせた一誠は、真っ直ぐ彼女
の瞳を覗き込むように見て言った。

「お前の事が好きだから一緒にいるんだろうが」

「——っ」

そして同時にルノアの唇に唇を重ねた——。突然の事で肩
を震わせ、体を硬直してしまった彼女をベッドに押し倒し耳まで紅潮
したルノアを見下ろす。

「イ、イツセー……ッ!？」

「俺は言ったぞ、異性として好きだと。だから男の部屋に入ってきた
お前が無防備過ぎるのが悪い」

「なッ、んんッ……!」

もう一度唇を押し付けられるどころか、口の中に舌を入れられ舌を絡めながら唾液を飲まされ全身が発火したように熱くなった感覚に当惑する。それでも舌を蛇の交尾のように絡んで舐めることを止めない一誠に、力強く押さえつけられていないのに抵抗ができないルノアは目尻に雫を溜め、熱で浮かれたように瞳を潤わせて手を重ねたままの一誠の手を強く握り返し、絶え間なく感じる快樂の渦に呑み込まれていった。

「はあっ、はあっ、はあっ……イツセー……」

「幸せにする必ずだ。だから俺の傍にいてくれよルノア」

十分以上も口と口を繋ぐ粘液の糸が出来上がるほど絡め合った二人の顔がゆつくりと離れ、息絶え絶えなルノアに乞う一誠に。

「強姦紛いに人の初めてを奪ったんだから当然でしょ……っ」

顔を赤らめながら恨めしそうに責任を取ってもらおう約束を交わし、それに嬉しそうに笑う一誠は上半身を起こしながらルノアを引っ張り上げ、自分の太ももの上に乗せては膝枕をしてやった。

「……このまま私を襲うんじゃないの？」

「キスまでは問答無用だが、それ以上の行為はルノアが許さない限りは手を出さないし襲うつもりもない。——襲われること期待したか？」

押し黙る。肯定も否定もせず頭を撫でられ始めても一誠の質問に沈黙で貫いた。

「沈黙は是と捉えるけどいいのか？」

「好きに解釈すればいいよ」

「そうさせてもらおうよ。ああ、プリン食べるか？虹の実のゼリーも冷蔵庫にあるぞ」

「……食べる」

ふてくされた風に言い返したルノアに、冷蔵庫から魔法でデザートを取り出し雛に餌を与える感じで食べさせ始める最中。一誠はある事を告げルノアを絶句させた。

——しばらくして、ベッドに二人の姿がおらず脱衣場で二人分の

衣服が脱ぎ捨てられていては、浴場で二人が何をしていたかは本人達しか知らない事である。

二Mは優に超える巖のような巨軀を誇る大男が、大剣を背負い音を立たさない足踏みで進み大理石の空間の中を突き進んでいた。数多の城の住人達の部屋の扉を通り抜け、目的の人物がカアン！カアン！カアン！と激しく鉄を叩いている工房へと足を動かして扉のない出入り口へ巨体を潜らせた。

飛び散る不純物としての火花。叩かれるたびに増す強度。十人規模の同じ顔をした者達が一心不乱に大きな剣に向かって振り下ろす鎚。轟轟と炉の中で燃え盛る炎は龍の息吹。

「珍しいな。どうしたー？」

「鍛錬に付き合え」

「これ出来上がってからでいいか？今いいところなんだよ。ウダイオスのドロップアイテムの黒剣を金属属性アダマスで利用して加熱、疑似精製金属化ゴットさせ鍛錬を施しているところなんだ」

『ウダイオスの黒剣』。そのドロップアイテムの名を知らないオツタルの猪の耳がピクリと動いた。

「その剣を手に入れる方法はなんだ」

「少人数か一人で半殺しにしてから出現する」

「得物を手にしたウダイオスの戦闘力は」

「試しに食らってみたら？オツタル。無事じゃ済まないかもしれないけど——よし、ようやく完成だ」

そう言いながら籠った熱を張った水の中に突き入れ冷やす。ジュワツと湯気が昇って人が触れられる温度にまで覚めると持ち上げられたそれは、朱色の菱形の魔法石に黒曜石のようにどこまでも暗い漆黒の大剣。二Mを超えるオツタルの身の丈にも迫ろうかという巨大な武器。一誠のスキル『幻想』の効果も付加され「ヘファイストス・ファミリア」、【ゴブニュ・ファミリア】といった鍛冶派閥が作る通常の武器とは異なる武器として完成された。

その剣を見てオツタルは目を細め立ち上がって、肩に黒剣を担ぐ男を見つめると一誠が口元を緩ませた。

「ウオダイスの次産間隔インターバルも過ぎてる。また手に入れるつもりで行くけどオツタルはどうする？いるか？」

「……その武器の性能を知ってからに決める」

「俺が作り上げたんだ。確実に普通じゃないぞ？」

地下のトレーニングルームへと足を運ぼうとする一誠だったが、オツタルから静止の声で呼び止められ振り返る。

「ダンジョンでする」

「ダンジョンで？何階層でするんだ」

オツタルは望む階層で鍛錬する気になり、一誠の問いにこう答えた。

「37階層だ」

「ほうほう？物のついでに階層主を倒してドロップアイテムを手に入る魂胆かな？てか、フレイヤは承諾してるのか？」

「受理してくれた。問題ない」

「じゃあ、俺も支度するか。ちょっと待っててくれ」

そんなこんなでオツタルに付き合う形となった。準備を済ませた一誠は腕輪や転移式魔方陣で行かずオツタルと肩を並んで街中を歩き、白亜の巨塔の摩天楼施設パベルの方へと歩き進んだその時、ダンジョンへ向かう武人の獣人の動向を見つめていた複数の影がいたことに誰も気づかなかった。

二人は駆け足で大樹の迷宮の中を疾走して階層を下り続けた。一誠の首に下げた黒鱗の首飾りの効果でモンスターの襲撃はなく、スムーズに走り続けていく最中。

姿が見えない一定の距離から一誠が感じ取った気配を、細めた目で置いていく後方へ振り向いた。誰もいない通路の先から追跡者の存在がいるとは露ほど知らずだったオツタルは、振り向いてきた一誠に不思議そうに問い掛けた。

「何だ」

「何でも無い。もうちょい速度上げるぞ」

更に走る速度が加速してオツタルを置いていく一誠。あつという間に置いて行かれることなくオツタルも速度を上げて追従するまま、25階層に辿り着いても止まらず、迷宮最大の瀑布『巨蒼の滝』グレート・フォールを横目に三層分一誠は断崖絶壁から飛び降り、オツタルは駆け下りた後、28階層への連絡路を進もうとした二人は、その『気配』に、無言で背後を振り向く。『巨蒼の滝』グレート・フォールの終着点である27階層の滝壺、その周囲の岸に立つ二人の前に現れるのは——一振りの銀槍を携えた猫人キャットピールだった。

「アレン……」

彼だけではない。

完全武装した小人族バルウムの4つ子が、黒妖精ダーク・エルフが、白妖精ホワイト・エルフが広い岸の中で二人を囲む。

「……フレイヤ様の伝令か？」

「寝惚けてるんじゃないやねえ、オツタル」

地上で何かあつたのかと言外に問うと、オツタルがアレンと呼んだ猫人キャットピールの男は静かな口調で否定した。じゃあ何だ？という話になると一誠は思いながら、アレンの両の瞳は、戦意に満ちていたことを認知した。

「ク、ククク……磨き抜かれし剣こそ世界が望む楽園ならば、我々もまた世界の一部に至るまで……」

「え……なに？」

理解に苦しむ一誠に意識すると『戦い合つて極め合うのが「ファミリア」リア』暗黙の了解と言うなら、それは我々第一級冒険者にも当てはまります』と告げる黒妖精ダーク・エルフからも剣呑な雰囲気纏っている。この場に現れたオツタルの仲間が戦意を隠さずいる理由はオツタル自身が理解していた。

「待て。せめて後にしろ。今は……」

「黙れよ、オツタル。あの方の眷族である以上、僕達もいつまでもお前の下で甘んじるわけにはいかない。我慢ならない。お前を倒して、お前を超える」

口を開いたオツタルの言葉を断ち切るのは砂色のを被った小人族バルウムの一人、後に一誠が知る4つ子の長男の名はアルフリッグ。Lv.7の立場で見下ろすオツタルが気に食わないと、弟達も言葉を続ける。
「スカすな猪」

「お前ちようどいい経験血の塊だから」

「エクセリうめー」

「……………」

そつと静かに一誠は無関係、赤の他人を装うかのようにオツタルだけ残し先に踵返して進もうとした。

「どこに行くのですか異世界人イツセー」

ホワイト・エルフ白妖精からの指摘に至極不思議で振り返った。

「え？オツタルに用があるんなら関係なくね？」

「優先度は確かにオツタルの方が高い。ですが、貴方を前にして我々は見逃すことはしません」

え……………と巖のような巨躯の武人に恨めしい視線を向けた。俺まで巻き込むんじゃねーよ猪野郎と。

「どんな目的でオツタルとダンジョンにいるのか、聞くつもりはありませんが」

「あの方の寵愛を受けてるお前が気に食わない」

「オツタル同様にな」

「調子のるな」

「倒す」

「……………」

面倒な、と顔を顰める一誠。アレンがそんな一誠にも戦意で満ちた瞳を向けた。

「潰してやる」

完璧に倒す対象として見据えられてしまつて、辟易に溜息を吐いてオツタルに問う。

「無視できない？」

「無理だ。倒すしかない」

背囊をその場に落としたオツタルは、それだけ言い構えた。そんな

彼に見倅いつつ握り拳を作った。——ふと、ある事を思い浮かんだ。

「オツタル、まさかだと思いがこの機に乗じてお前まで俺に挑んでくるわけないよな？」

「……」

問われたオツタルの答えは、沈黙して少しの間考え込んでから無言で一誠に振り返り得物を構えた。一誠は酷く愕然とした。

「俺の味方が一人もいない!？」

「味方になった覚えはない」

「……あー、はっ、そうかい」

苦笑を浮かべた次の瞬間。一誠から凄烈な威圧が解き放たれ、オツタル達第一級冒険者達の肌に緊張の刺激が刺さった。強者としての威厳と圧倒的なプレッシャーに、オツタル達は怯むどころか戦意を高揚させて得物を持って応戦の構えを取った。

「来い、俺はそこらの転生者と違って強いぜ？」

ボアズ 猪人、キヤットビープル 猫人、ホワイト・エルフ 白妖精、ダーク・エルフ 黒妖精、バルウム 小人族は、一斉に飛び掛かった。

「くそが!!」

アレンの盛大な痛罵が激しい剣劇の中で交わる。首に跳んでくる銀槍を、一誠は再加工したウダイオスの黒剣で難なく弾き飛ばした。27階層の滝壺には『穴』が開いていた。『巨蒼の滝』グレート・フォールの真横をブチ抜き、内部の迷宮部に続く巨大な『穴』が。『魔法』の余波で貫通したその穴を経由し、第三級と第一級冒険者達の戦場は巨大な広間に移っていた。水晶でできた広い丘を水流が囲み、生え渡る群晶クラスターがきらめく。常人では追えないほどの高速移動を行う九つの影が、結晶の中クリスタルを行き交じっては反射する。一誠達を獲物と勘違いした哀れなモンスター達は、その戦場に立ち入っただけで弾け飛ぶか、八つ裂きにされた。

「……ぬんっ!」

水流に囲まれた広い丘、いや『島』の真ん中で、オツタルや一誠は攻防の応酬を繰り返していた。

キャットピープル

猫 人が残像を残すほどの速度で槍の雨を降らし、既に改変魔法を用意で戦王と化した黒妖精ダーク・エルフが鮮烈な斬撃をもって丘を断ち切り、四つ子の小人族バルウムがこの世に二つとない連携をもって四方八方から間断ない攻撃を繰り返して来る。異邦人と猪人ポアズの武人は第一級冒険者達による怒涛の猛襲に晒されていた。しかし、苛立ちを隠せないのは攻め続けているアレン達の方だ。わずかな斜線しか見えないほどの銀槍を片腕の手甲の実で弾き飛ばし、破格の威力を秘める黒剣を黒剣の一振りで相殺し、前後左右から同時に放たれた四つの得物を返す黒剣と大剣でそれぞれ背中合わせで半円を描いて全てを叩き落す。はつきりとアレン達の顔が歪んだ。その岩のような素肌にかすり傷の類はあれど、武人の肉体に依然として致命傷は与えれず、掠り傷一つすらない異邦人。一振りの得物をもって立ち回るオツタルと一誠に、殺意を漲らせるアレンが一気に飛び出す。

「軽すぎる。もっと飯を食え、アレン」

「そうだそうだ。オツタルみたいになりたかったら『異世界食堂』の飯が一番だ」

「誰が脳筋になるか死ねッ！」

受け止めた槍ごとアレンの身体を羽のように吹き飛ばす。宙を飛ぶ猫キャットピープル 人の青年は激昂しながら空中で身体をひねり、水晶の柱に着壁、表面に罅を刻んだかと思うとそのまま超速の矢となった。空間ごと貫く凄まじき突貫を、身をよじって回避したオツタルの傍にいた一誠が展開した魔法陣から巨大な身体が細長い雷の龍を召喚してアレンを攻撃した。空中で回避することは敵わずアレンは雷の龍に呑み込まれる。

「無詠唱、いえ詠唱すらせず魔法を放つとはっ」

「俺の世界じゃこんな当たり前のようにできるし」

一誠と相手をし黒剣と長刀ロンバイナで鏢迫り合いをしていた白妖精ホワイト・エルフと話をしているとき傍で。

「防ぐなー」「弾くなー」「不意打ちの意味とはー」「その筋肉で時空を捻じ曲げるなー」「捻じ曲げてはいない」

等とオツタルと四つ子の会話が聞こえる。たまらず指摘を入れる。

「いや、できるだろ？捻じ曲げるの」

「……できるのか？」

「「できるのか!」」

至極不思議そうに首をかしげる異邦人にオツタルは聞き返し、四つ子の小人族達はツツコミした。

地を這う獣のごとく。攻撃すら届かない低い位置から連携攻撃を仕掛けてくる四兄弟に、オツタルは腰を低く落として全て対処してのけた。

「低い視点乘りに頼り過ぎだ。上も取れ。でなければ活きん」

「助言とは余裕だな」

「舐めてかかるか、オツタル!」

「そうではない。ただ、上背を伸ばすだけでも戦略の幅は広がる」

「「お前今全世界の小人族を敵に回したからな?」」

「……すまん」

目から光を消し、かつてないほどの殺意を帯びる四つ子に、オツタルは素直に謝った。

「なあオツタル、オツタル。今の発言フィンにも言ってもいい?絶対にこやかな顔とは裏腹な殺意で漲った攻撃をしてくると思うんだ」

「言うな」

想像しやすかったか先ほどの謝罪より間も置かず直ぐに言い返した。

「【永久に滅ぼせ、魔の剣威をもって】」

その直後、横手から超短文詠唱が響き渡った。

「【バーン・ダイーン!】」

突き出された黒妖精の右腕から炎の咆哮が放たれる。射程は超短距離、その代わり効果範囲内にいる数多の敵を根こそぎ吹き飛ばす威力特化の爆炎魔法。足元に展開された黒の魔法円によって更に威力が増幅された紅蓮の輝きに——一誠は深い笑みを浮かべて身をもってその威力を全身で味わった。その威力を味わった瞬間に爆炎の中から飛び出し黒妖精の顔面を突き出した手で鷲掴みにした。

「っ!」

「火力が足りない」

片腕で掴んだまま振り回して円窪地クレイターを生むほどの力で陸に叩きつけ、そして水晶の破片が巻き上げられる。無数の欠片によって視界が遮られ、一誠が目を眇めた一瞬後、白妖精ホワイト・エルフと雷の龍の威力に耐えきったアレンが隙を見逃さず攻めかかった。

「ツ!!」

不意に攻めを不自然に中断した。そんな二人にどうした?と首をかしげる思いでいた一誠にアレンが化け物を見る目と顔を歪め発した。

「てめえその顔は何だツ……!!」

「顔?」

黒妖精ダーク・エルフから手を放し、後ろに回した手にはどこから取り出したか分からない手鏡でもって顔を確認する。先ほどの爆炎魔法の影響か——顔半分の皮膚も破れて隠れていた真紅の鱗が見えていた。濡れ羽色のドラゴンの瞳と鋭い牙が露になっていた。人間の眼と違って、眼力は凄まじい。

「……あー」

他人事のように気のない声を漏らし周囲を見渡す。戦闘音が不自然すぎるぐらい止み、オツタルとアレンを除き一誠を見る六人は愕然で瞳孔が開くほど目を丸くし信じられないものを見ている目で思考を停止しかけていた。

「異世界人イツセー、貴方はモンスターなのですか?」

「……さて、どうだろうな?」

手で皮膚が破れた顔半分を覆い、拭うように動かすと人間の肌が元通り直り真紅の鱗を隠した。それを見て白妖精ホワイト・エルフが眼鏡を触れながら淡々と述べる。

「人間の皮を被ったモンスターだとしたら、貴方は我々人類を欺いていることになりますね。オツタル、彼の正体を知っていましたねか。フレイヤ様も認知しているのですか」

「どうなんだ、教えやがれオツタル!」

アレンもオツタルへ追求し黒妖精ダーク・エルフと四兄弟バルウムの小人族も耳を傾け

る。静かに佇み事実を隠しているオツタルに複数の視線が向けられる中。

「ああ、俺もフレイヤ様も全て容認している」

「「「「「「「「「「「「」」」」」」」」」」」」

「だから敢えて言う。それがどうかしたか」

なにっ！と食って掛かりそうな不穏な雰囲気におツタルは言い続けた。

「イツセーはこの世界のモンスターではない。異なる世界から来た異邦人として見初めたフレイヤ様は、深い信用と信頼で寵愛を与えて続けている」

「モンスターに寵愛だど？ふぎけるのも大概にしろ！化け物は化け物だろうが！異世界から来ただなんだのと狂った妄言をほざいている糞な野郎にてめえはずつと何もしないでいたのかつ!？」

「フレイヤ様の神意に逆らう理由などない」

短く当然のように言い返す。苦虫を噛み潰したかのような苦い面持ちのアレン。牙を剥き睨んだだけで人を殺せればという睥睨で一誠に向けて銀槍をギリツと握る。

「オツタル、てめえとフレイヤ様以外知る者はいらぬのか」

「【イシユタル・ファミリア】を除く最大派閥。【ロキ・ファミリア】と

【ガネーシャ・ファミア】の一部の幹部以外他にもいる」

「……彼等と神々も周知だったとは。何も知らなかった我々が間抜けに思わされる」

「異界から来たモンスターか」

「人類に化けるモンスターだとは」

「モンスターでも第三級冒険者にまでなれるのか」

「それ以前に僕達第一級冒険者と渡り合ってる時点で強さの基準が破綻してる」

「異なる世界から来訪しせし異形の輩の真の強さを知る好機。これから真の姿に顕現する異邦の異形を倒し、オツタルをも倒す」

相手が誰であれ闘いは続行する姿勢の彼等に苦笑する一誠。

「それが望みならまだオツタルともしない闘いをしてやるよ」

凄い速度で真紅のオーラを覆いながら落とす。オツタル達の逃げ場はない。仮に直撃を免れても第二次災害、第三次災害が直ぐに襲い掛かってくるだろう。

そして――。

一誠が顔から27階層の地盤を穿ち、ダンジョンに激しい震動を轟かせ、超広大な大穴を作りながら勢いが止まらないまま『中層』、『下層』、『深層』の階層の地盤を貫きながら降っていく。それに巻き込まれるオツタル達も奈落の底へと吸い込まれて消えていった。

――ダンジョンが、哭いた。

「――」

「これは……？」

怪物怪物を産む亀裂音ではない。異常事態を巻き起こす地震でもない。比喻ではなく、哭いている。とてつもない無機的な高音域。まるで引き絞った銀の弦に刃を走らせたかのような、鼓膜を貫く甲高い音響。もしも女性が、世界そのものに匹敵するほど大きくなったら上げるような、そんな声域の音。本能が真っ赤に明滅するほど、それは確かに、途轍もない迷宮のなにかが『哭く声』だった。だったが、どこまでも落ちていくオツタル達は不自然なまでにその哭く声音が止んだ予測不明な現象に怪訝そうに眉間を寄せた。

59階層――『氷河の領域』

天井が崩壊間もなく真紅のドラゴンが飛び出した。体勢を変えてゆっくりと着地するその目の前で八つ分の影が遅れて落ちてきた。白銀の世界が広がる空間の階層に初めて訪れたオツタル達は、冷たくて白い雪景色に目を奪われがちで。肌に突き刺さる極寒の冷気に眉間にしわを寄せる。

「……」

『59階層、「氷河の領域」だ。ここなら思う存分に暴れられる』

そう言いながら何十人分の分身を作り上げ、天井の大穴へ飛んでいき上層の異変、異常事態の対処へと動かしだした。

『第一級冒険者をも凍てつかせる冷気の空間の中で、どこまで動けれ

るだろうな？ま、直ぐに暖まるだろ。これから激しい運動をするんだからなあ』

一誠の隣に深緑の魔法円マジックサークルが発現。それが何なのかオツタルだけしか分からない事態に目を細めアレン達に警告した。

「気を付ける」

「オツタル、一体何にだ」

「奴は複数の異世界のドラゴンを宿している」

「何を言っている。モンスターがモンスターを宿すなんてあり得るはずが——」

光り輝く魔法円マジックサークルが更に強く最高潮に達すると眩い閃光を放つ——

『グッハッハッハッハアツ!!!久しぶりだな猪野郎オツ！あん時の続きをしようぜ!!!』

哄笑を上げながら戦意の光をギラギラと銀の双眸に孕ませ、口端を吊り上げる。浅黒い鱗に覆われた巨人型のドラゴン、グレンデルがオツタルに話しかけた。

『前回と同じだグレンデル。今回は俺も交ざらせてもらうが思う存分に戦え。頃合いになったら止めるがな』

『他のチビ共もぶっ殺していいんだな？いいよな？』

『できるなら、な。ついでに頭の中の片隅に手加減というものを思い出してくれ』

『はっ、無理だなー！』

新たなモンスターの登場にアレン達は言葉を失いかける暇もなく、一誠とグレンデルの猛攻に晒される。

慣れていない環境と初見のモンスターとの戦闘でオツタル達は、それでも善戦していた。

「ぬんっ！」

「くそがっ！」

「硬いっ！」

「動きにくい！」

「モンスターの動きではない！」

「厄介極まりない！」

「魔法もあまり効果がないとは……！」

「異界のドラゴンこれほどとは……！」

しかし、一誠とグレンデルを倒すまでには至らず……隙を見せたら見逃さず一誠が巨体でありながら鋭く素早く、曲芸のように動き問答無用で物理攻撃を繰り返される。グレンデルの最硬の鱗の前では第一等級武装も斬れず刃毀れるか弾かれ、魔法すら効果が無い。

『チツ、滅茶苦茶速い上にちよろちよろと鼠のように動き回って！』

『しょうがねえだろ小回りが利くんだから、なっ！』

口腔から魔力の塊を放ち、オツタル達にかわされながら遙か奥に聳える標高が高い雪山を貫き、真紅の一瞬の閃光後に大爆発。その衝撃波は戦場として戦っている一同の方にまで押し寄せて襲い掛かった。

「っ、山が消滅した!？」

「なんて威力だ……！」

直撃すれば間違いなく自分達も消滅する破壊力を有する一誠に危険度が高まるばかり。今まで屠ってきたモンスターとは逸脱した異世界のモンスターに、アレン達第一級冒険者が総出で襲っても倒せない相手にぎりつと歯軋り奥歯を悔しげに噛みしめた。

『今のは牽制だから』

ストレッチ

本命は———と言いかけた一誠の視界に、白い煙を立ち昇らせる大量の何かがここに迫ってきているのを映り込んだので不自然に言葉を止めた。

『勝負は一旦中止だ』

『あ?』

『この階層のモンスターが来ている』

一誠が向いている視線の先にオツタル達も肉眼で捉え、グレンデルは喜々と笑んだ。大小様々で中には階層主並みの巨大なモンスターも多く駆けて来ている。全てオツタル達にとっては所見のモンスターである。

『うほっ！大量じゃねえか！鬨り殺し甲斐があるぜッ！』

『全部Lv. 5であれだからな。——もしかするとオツタル達も倒し続けたら「ランクアップ」するかもな』

足を前に運びズシン！と鈍重な足踏みの音を鳴らしながら進む一誠にグレンデル。

『まあ、そんな簡単にさせるわけがないがな？』

『邪魔するなよ？したら纏めて殺すからな。グハハハハハッ！』

オツタル達を放置し、何百という数の群れのモンスターに優先する二体のドラゴンの背中を見送って黙って——。

「やるぞ」

いられるほど素直ではないし従う義理もない上に、言われるまでもないと各々勝手に動き『深層』のモンスターに群れに接敵して攻撃を始める。

『よーし、纏めて殺してやる！ぶっ殺してやるぜ特に猪野郎！』

『止めてやれ』

それから半日も無尽蔵に湧く59階層のモンスターやオツタル達との闘争を繰り返した。時間が経つにつれ被弾、ダメージが負い負傷するオツタル達を巻き込む攻撃を躊躇なくする二体のドラゴン達。

「それで、結局イツセーを倒せず勝てずに皆して「ランクアップ」を果たしたのね？」

オツタルとアレン、ダーク・エルフ 黒妖精、ホワイト・エルフ 白妖精を除いて、四つ子のパルウム 小人族達

が更なる器の昇華を果たした話がオラリオ中に知れ渡った夜。そのことをオツタルと一誠に向けて話しかけるフレイヤ。美の女神の自室で——何故か『幽玄の白天城』内でアレンが四つ這いで女神の椅子代わりにされていることをツツコミたくて仕方がない。

「悔しがってただけだな。下級の冒険者と異世界のモンスター相手に第一級冒険者が倒せなかったんだから。今回の一件、何気に俺のおかげ？って感じだし」

「ふふ、そうね。貴方が関わりと何でも予想異常なことが起きることは知っていたつもりだけど、改めてそれが本当にすごいって思っちゃうわ」

「そうかい。……でき、どーしてその猫キヤットピール人を椅子代わりに？

「ご褒美のつもり？」

そういう趣味があったのかと理解に苦しむ表情を、眉根を寄せて聞くと微笑を浮かべながら否定した。

「違うわ。お仕置きのももりよ？だって、イツセーに手を出してはダメよって私のお願いを無視したのだから」

「どうせだったらオツタルを座らせればいいのに。あ、俺だったら耳と尻尾を触れたいな」

何気なく願望も混ぜて言ってみると椅子代わりにされているアレから不穏な雰囲気醸し出してきた。肉付きのいい太ももに杖のように肘を立てて両掌に顎を乗せた姿勢で二人に銀の瞳を向けながら、本題を追求した。

「それで、わざわざダンジョンの中で戦いに赴いた理由は他にもあるんじゃない？」

「それはオツタルの要望でな」

「オツタル？」

「ウダイオスのドロップアイテムを手に入れたく」

「へえ、手に入れたの？」

「はい。今はイツセーに預けています」

肯定し後で数億ヴァリスをふんだくるとも宣言した一誠に、くすつと口元を緩めて笑う女神は次いである事を要求した。

「そう言えばイツセー。ここ最近、空の世界には行っていないわね？久しぶりに行ってみたいのだけれど。まだ行ったことがない島や美味い料理やお酒を知りたいわ」

「ああ、そう言われると本当にしばらく行ってなかったな。また今度行くでしょうか」

次はどんな場所かなーと楽しみに考えていけばフレイヤも同感の言葉を述べた。

「ふふ、楽しみにしているわ。仮の眷族とはいえども私の想いを応え夢中にさせる。他の子とは大違いね」

「お褒めの言葉恐悦至極と言わせたいか？でもって後者の言葉に対しては、自由奔放の女神の心配をするのも眷族の思いやりだと思うぞ」

「あら、貴方も私を鳥籠に閉じ込めて自由を奪って満足したいのね？」
「や、無理だろ。鳥籠に閉じ込めていたのは美しい鳥じゃなくて、風だ
風。鳥籠の隙間から抜け出てどこへでも自由で誰にも止めることが
適わない、自由な美の神風だ。だから止められないだったら祈るか思
うしかできないから口で言うしかないんだよ。な？」

呆れた風にフレイヤはそういう存在だと断言してから視線でオツ
タルに同意を求める。不意にアレンから腰を上げて「下がってちよう
だい」と言い出すフレイヤ。二人はそれに従おうと足を動かした矢
先。

「イツセーはこのまま残ってちようだい。まだ話がしたいから」
「はっ」

「.....」

一誠を傍に置きたい思いでか主神の神命に従い身を起こしたアレ
ンと共々退出した。残された二人は、片方から一方的に抱擁を受け
た。当然抱きしめる側はフレイヤ。

「今の言葉、元の世界にいる私に対しての感想？」

「この世界のフレイヤに対してだ。ずっと側で見えてきたからわかって
くる。オツタル達もそうさ」

「きつとそうね。けれど、直接口にしたのは貴方が初めてよ。だから
心の底から嬉しかった」

「これからも楽しませ、喜ばしてみせるよ。まあ可能な限りな？」

優しい手つきで銀色の長髪を梳かすように撫でながらフレイヤの
瞳を真つ直ぐ見つめて言う。女神も笑い返し艶やかに一誠の手を引
いて天蓋付きのベッドへと誘う。

あれからその後の「フレイヤ・ファミリア」の幹部達との鬪戦以降、
関係が少し変わった。今まで接触をしてこなかったオツタルを除く
第一級冒険者達が店に訪れるようになったり、オツタルを介して再挑
戦を申し込んできたりと一誠は何とも言えない気持ちで一笑了した。

「ほらオツタル。お望みの専用武装^{オーダーメイド}」

「感謝する」

工房で初代の漆黒の大剣と変わらない武器を作り上げた一誠から受け取り補足を付け足された。

「最初に作ったのと同じ魔力・魔法を吸収・斬るに特化した」

「吸収……?」

「吸収した魔力は大剣の宝玉に蓄積^{チャージ}して、最大三つも溜まるとウダイオスの必殺の攻撃の真似事ができるようになる。まあ、自身の魔力やモンスターの魔石でも吸収して放てるけどな」

見てみるか?と誘いに頷くオツタルとトレーニングルームで実験する。大量の案山子を用意してその前に黒大剣を振りかぶる。真紅の魔力のオーラが黒大剣に纏うと宝玉が吸収し燃え盛る星のごとく輝きを発し——それに呼応して一誠は腕の筋肉を盛り上げ柄を握る握力を更に強く剣を力強く薙ぎ払った。注ぎ込まれた大量の『魔力』の爆発、そして一誠^{ドラゴン}の膂力。その二つが組み合わさった波光の斬撃に、案山子等は黒大剣の威力によつて全て弾け飛んだ。

「とまあ、こんな感じの必殺技をできる大剣だ。理解した?ウダイオスの本来の必殺技より縮小して威力も落ちてるけど、階層主以下のモンスターなら大抵一発で屠れるだろ。お前らしい武器だ。壊してくれるなよ?」

とんでもない武器を作り上げたことを後に知った神鍛冶と隻眼の最上鍛冶師のハーフドワーフから、深いため息を吐かれたのは別の話。更にフレイヤから『覇黒^{はこく}』という銘の名を頂戴したオツタルの鬼に金棒的なチート具合を知るフィンとガレスから専用武装^{オーダーメイド}の発注されるのであった。

冒険譚44

騎空艇『グレートブルー』を操縦して空の旅を、ヘルメスの水先案内で一誠は目的の場所へと目指していた。風にたなびかれて後ろ髪を引かれる感じで揺らめく中、金髪翠眼の獣人の少女が操縦席に近づいてきた。前後に動かせるUの字の席の前に立つ一誠の後ろには、真紅の髪をたなびかせ大きい背中その後ろ姿を静かに見つめる複数の少女達が座っている。その席に加わるために端から座る少女。舵輪を握りまだまだ見えない目的地を見据えてる男の後ろ姿を見ながら雑談とはいえ会話の花を咲かせる。

一行の目的地である場所に辿り着いたのは一週間以上の時が過ぎた頃だった。果てしない遙か彼の地に存在する場所へ着いた時——
—古代の王国の遺跡が静かに迎え、かつて誇っていただろう栄華はなく王も民もない忘れ去られた過去が現代に取り残されたままの姿で保っていた。

「遺跡の調査、じゃない？」

「ああ、俺の目的はこの王国にある物を手に入れるためだ」

バラバラに活動することを提案し、多くの女性や少女達には調べた中で目ぼしい物が見つけたなら回収することも告げた少し後、城下町の中で聳え立つ王宮のような建造物に直行した。ついていくヘルメスとアスファイからそれは何だという思いを抱いていると、王宮へ進む道を閉ざす鉄製の巨大な門に阻まれた。触れて押し出すとゆっくと久方ぶりに開かれただろう門から鈍重の音が鳴る。

「それは一体何だい？」

「千年前、ここで過ごした若い頃の俺の両親が残したっていう物をだ」
「何故、それがここにあると？」

「あの日、当の二人に教えられたからだ」

——一誠、俺達が造ったピラミッドを攻略したならもう一つ行くべき場所があるぞ

——千年前、一時期私達が過ごした場所の思い出にね。

——思い出の場所……？

——今もその場所が残っているかわからないが、残っているなら
確実にある筈だ。それを手に入れる資格はお前にある。

——絶対に見つけてね。貴方がこの世界に来たのは決して偶然
ではない。きつと必ずこの世界にいる意味がある。

この前教えられた誠と一香から受け継がされた想いを果たすため
に来たのだと暗に語る一誠。両親が残したという思い出の物を探し
取りに来たと知ったヘルメス、アスフィの二人も古代の遺産に興味が
沸く。

「それはどこにあるのかも教えられたのですか？」

「いや、全然」

「え、それじゃどんな物かもわからないんじゃないかい？」

「いや、正確に言うところにあるか教えられたけどそのどこにどこへ
置いたのか教えてくれなかった。自分で探し出せつてことなんだろ
うな」

そこがここだと、とある古びた部屋の扉の前に足を止め、軽く扉を
押し出せば簡単に開いた。中は静寂の雰囲気にも包まれた石造りの空
間の部屋。朽ち果てた物が永い年月を窺わせ六つの足音だけが一際
耳に入る。

「……ピラミッドの時とそうだが、ここにも魔方阵を残していた
のか」

そして直ぐに足元の石の床に千年も経つても消えていなかった魔
方阵を見つめ、きつとこれがそうなのだろうと一瞥して周囲にも見回
し、本棚の中にある数多の本を視界に入れると近づいて一冊取り出
す。

「……」

パラパラとページをめくり全てが『日本語』で綴られた日誌を流し
読みで目を通し、直ぐに閉じた。ヘルメスとアスフィに目を向け告げ
る。

「この本棚と魔方陣の床を持ち帰る」

「貴方の両親が残した物はそれだと？」

「どうやらそのようだ。装丁は見ての通りボロボロだけど中は異世界の文字で書かれてるから間違いない」

「後で翻訳して聞かせておくれよイツセー君。千年前の話なんてとても貴重だからね」

わかった、と頷き両親が残した古代の遺産をすべて回収し数時間後はオラリオへ帰還した。

——その日の夜。『幽玄の白天城』の中で交流ある神々と冒険者を誘い、古代の王国の遺跡から手に入れた魔方陣の確認をするための場を設け食事会も兼ねて一誠は魔方陣に触れて魔力を流し込んだ。魔力に反応する魔方陣に光が走り、全体に強い閃光を迸らせるとピラミッドで見た若い二人の男女が立体的映像として浮かび上がった。

『この魔方陣を見つけた者へ、初めまして俺は兵藤誠っていう者だ。こっちは未来の妻にして最高の魔法使いでもある式森一香。この魔方陣の映像は彼女の魔法で未来のために残そうと思ひ、今この映像を見ている者達へメッセージと未来の人類へ送る喜劇の英雄達の船である「始まりの英雄」の物語を』

それは——異世界から突如現れた二人の男女と滑稽な道化の少年の出会いから始まり、血の繋がりが無いハーフエルフの少女と英雄を集う人類の最後の楽園へ英雄にならんがために赴く。

道中、魔物に襲われる女性を格好よく助けようとしたが滑稽なこと
に一人の狼ウエアウルフ人の青年に自分諸共助けられた。そして同じ目的の場所へ向かうと知れば半ば図々しく同行する。

人類の楽園と呼ばれた王都へ辿り着いた際、金髪に澄んだ水色の瞳の絶世の美女と出会う。

その後、十人の英雄を決める戦いが始まり無事に勇敢なドワーフ、吟遊詩人のエルフ、孤高の狼ウエアウルフ人共々四人は仮初の英雄として勝ち残った。

しかし、人類最後の楽園とは裏腹に王の闇の謀略によって巻き込ま

れていることをこの時の彼等彼女等は知る由もなかった。

道化の少年、アルゴノウトは異世界人の二人と出会った少女アリアを振り回しながら王都の城下町を散策。しかし、アリアを狙う兵士たちと英雄を決める戦いに勝ち残ったアマゾネスによって連れ去られた。

未来を視えるという占い師の少女と出会い、運命の相手がすぐ現れると告げられる。ますます謎が多く王都にも疑問を抱くが他国からの侵略に迎撃するため選ばれた英雄達は戦場に身を投じる。王都が誇る人類の最後の楽園を守護者ミノス將軍を筆頭に数多の兵士と共に。

戦場は他国の兵士の他、血肉に飢えた魔物の横やりで選ばれた英雄を除き味方の兵士は死屍累々殆ど死に絶えた中、戦場から離れたある場所で英雄達は見てしまった。

人類の最後の楽園の守護者にして將軍の正体を――。

鈍い光沢を発する雷の紋章の兜を壊し、攻め入った兵士達を巨大な斧で残滅、殺し、そして人間を食らうミノタウロスこそがミノス將軍という事実を知ってしまった。

更にはアリアが王の娘にして姫――ミノタウロスに支える生贄という事実を占い師オルナから知ったアルゴノウトは姫を救わんと果敢に動くも王の奸計に兵士は騙され妹の決死の行動により、逃れ共に過ぎた仲間達の助けも甲斐があつて這う々の体で逃げようと城下町では騙されている民衆にも追われ、とうとう兵士に追い詰められ諦めかけた時に占い師の少女や赤髪の鍛冶師の青年に助けられた。

奇妙なパーティのまま力なきアルゴノウトが力を得るため、精霊を探すことになった。精霊を助け血の恩恵で救われた青年の導きにより雷の大精霊と契約を果たし力を得た。

舞台は王都に代わりアルゴノウトの妹の公開処刑が行われようとしていた。それはアルゴノウトを誘き出す罠でもあり、王都と王の真実を確実に闇に葬るための計略であった。

そこへ――処刑台に現れた、王都の武器庫から頂戴した装備で身に纏うアルゴノウト。

誰一人として味方する者がいない場に現れた滑稽な道化に嘲笑する王。しかしながらアルゴノウトのミノス將軍の死とアリア姫の救出と力の権能を受け継いだことを、道化を演じるアルゴノウトの独壇場によって妹の処刑諸共うやむやにし姫の救出を——『英雄の時代』を切り拓くための人類の一步を誓った。

ミノタウロスが現れた場に赴く英雄候補達。共に人工の迷宮ラビリンスへ足を踏み入れた。中は英雄達を阻む兵士達と女戦士アマゾネスに残りの選ばれた英雄の二人が待ち構え、アルゴノウト等を襲撃した。

——異世界人の二人の無双によって殆んど敵は返り討ちに遭い、英雄候補達は生贄の姫の下へ向かう。無事に間に合いミノタウロスから救ったアルゴノウトは六人の英雄達に見守られながら一騎打ちで挑む。

だが、精霊の力は代償なくして振るえるものではなかった。

身体に迸る雷で肉体はボロボロに魂をも削り、ついには視力も失った。それでもアルゴノウトは諦めなかった。周りからの声援を受け、オルナの笑顔——そして最後にアリアと共に精霊の剣でミノタウロスをととう討ち果たした。

その後の英雄候補達は真の英雄として民衆達から帰還を祝福されアルゴノウトの妹ファイナ、狼ウエアウルフ人のユーリ、ドワーフのガムルス、エルフのリユールウを改めウィーシエ、後の語り部オルナ。余談であるがテルスキュア出身の女戦士アマゾネスのエルミナ改めてウィーガ。

それから彼等彼女等は『英雄神話』の中心としてモンスターを輩出する大穴へと数多の人類に発破かけ次の冒険へと臨んだところで映像は途切れた。代わりに再び若い男女が浮かび上がった。

『どうだったかな？ 未来の人々達。この映像を見て感想を聞かせてほしいが生憎俺達はそれを聞くことができなから残念だ』

『私達の友達の子孫や末裔、もしくは魂を受け継ぐ人が見ていたら嬉しいわ。皆の先祖は悲劇と絶望の時代の中でも逞しく生きていたことを知って貰えるからね』

『因みにこの映像は永久保存版として残している。また見たかったら魔力を流せば大丈夫だ』

『それと私達の部屋にある本棚には、友達の日誌や精霊の剣を封じた本もあるからよかったらそれも受け取ってね。もしも使うならこの映像を見て分かっているとと思うけれど、変態な精霊のジジイだけど強力なのは確かだから。うん』

最後は何とも言えないが、最後に未来の人類に向けてアルゴノウト達から直々のメッセージを聞くことに。一誠達は彼らの言葉を胸に留め、古代の偉人達の言葉を忘れないと決意の思いを胸に抱いた。

『それじゃあ、そろそろ俺達は冒険に行ってくるぜ！』

『さくつとモンスターが排出する場所に向かいながら喜劇を繰り広げてね！』

『それじゃさようなら！』

今度こそ映像はそこで途絶え、静まり返ったりリビングキッチン。古代の冒険を見た一誠は心が震え、精神が高揚していることを自覚しながらも笑いが堪え切れなかった。純粹無垢な子供のように笑顔を浮かべた後……皆に背を向けてどこかへと行こうとするので尋ねられた。

「どこに行くの？」

「トレーニングルームだ」

そう言葉を残してリビングキッチンからいなくなった一誠を誰も止めなかった。否、それどころかアイズとアリサが続いて追いかけて、Lv. 6の女戦士^{アルガナ}達が瞳に戦意の光を孕ませ立ち上がると。

「オツタル、久々に一勝負どうかな？」

「あの映像を見て何とも思えんような男ではなからう」

「……………」

フィン、ガレス、オツタルも立ち上がってトレーニングルームへ向かおうとした。

『……………』

神々は古代の戦いの熱に当てられたと悟り静かに笑みを浮かべた。他にもトレーニングルームへ行こうとする者達を見送って。そんな彼等はトレーニングルームで激しい闘争を繰り広げていた。

「なあ、お前らあつ！」

激戦の中、始終笑みを浮かべ踊るように武器を振るい、拳と足を振るいながら叫ぶ一誠に耳を傾ける。

「最高だな始まりの英雄は、アルゴノウトは！滑稽な道化なのに喜劇で周囲の皆を笑顔にしてみせる！道化を演じれない俺からすれば最高の偉人だ憧れるぜ、ははははっ！」

だから、だからと笑顔で宣言した。

「俺はモンスターだけど、この世界で英雄になってみせる。アルゴノウトのようにな！この世界に来て初めてできた目標だ！」

元の世界に帰るのは目標ではなく必然。一誠は心から強く純粹にそう想いを抱いて抱いて——新たなスキルを発現してみせたのだった。

【英雄憧憬】

アルゴノウト

アクティブアクション

・能動的行動に対するチャージ実行権。

今年で12歳を迎えるアイズは更新した「ステイタス」のプレートを確認して貰っていた。十六歳まで第一級冒険者の実力になれる、と断言した一誠を見上げて答えを求める視線を向けていたら話し掛けられた。

「この六年で第二級冒険者になったか。予想通り強くなったなアイズ」

「まだまだ強くなれる？イッセーが言っていた十六歳になったらイッセーみたいな強さになれる？」

「俺と同じなのは流石に無理だ。俺は異邦人でありドラゴンだからよ。でも、これかも強く思えば必ずなれる。アイズが積み上げてきた結果は絶対に裏切らせない」

「んー」

「ん、わかったなら早速模擬戦をしようか。昔のアイズと比べると中々戦い渡れるようになってきたから嬉しいよ」

「んっー」

強さだけじゃなく身長も成長して、まだ幼かった頃のアイズを懐かしくなるも少し寂しい一誠の横顔を「お父さんだ」「父親だな」とリビ

ングキッチンにいた女性達からそんな感想を向けられていたのを本人は気づかなかった。

「アイズちゃん、もう第二級冒険者なんだね」

「あの子は七歳の頃から冒険者になった。青少年や青年、成人した者達より時間は多く誰よりも強さを望んでいたことも付け加えると当然の結果かもしれぬな」

「イツセーも十年近く修行していたという話だったから五歳か六歳の頃……」

「そうなるな。いずれにしろ、第一級冒険者程の強さを身につけるには十年かそれ以上の歳月を有することは明らかだ」

途方もない話だと他人事ではない話をリヴェリアと交え、自分達とは比較にならない人生を歩んできた者達に対する感嘆の念を抱く。

「今年もバレンタインとやらをするのか？」

「するみたいですよ。だけドイツセー、またたくさんチョコを食べることになりそうだなー」

「その日に食べなければならぬだろう。食べるのに苦労するのならば、大きさと形をもう少し小さくするべきか」

「そうですね。皆にも伝えます」

アスナの言葉にリヴェリアも頷き、二人は各々動き皆に伝えていった。イツセーに送る今年のバレンタインのチョコは小さくするべきだと。

二度目のバレンタインデー。その流行は『異世界食堂』が主催するという故にオラリオ中に風習として根付き広まりつつあった

「近日『異世界食堂』でバレンタインデーをしまーす！男性の方は無料でチョコをあげます！意中の異性に手作りチョコを渡したい女性の方は『異世界食堂』でチョコ作りの応募を募集しています！作りたい女性は是非名簿にサインをお願いします！ただし募集は今日の夕方まででーすー！」

『異世界食堂』の女性従業員達が二組になり片や宣伝、片やチラシ配りをして歩き回り広告していった。それが人から人へとさらに水の波

紋のように伝播していつて、冒険者や一般市民の女性達が『異世界食堂』へと足を運び特別な自分だけのチョコ作りをしたく名簿にサインするのであった。

「なあ店主。今回は最初から作ったチョコレートを売らないのか？」

海童の質問に店主は肯定した。

「ああ、前回同様今年も同じ商品が完売するとは限らないし、本来だったら女性が想いを込めた手作りチョコの方が受けもいいだろ」

「食材の費用や参加費も取らずなんて、赤字じゃね？」

「おいおい、金で愛を買えるのか海童？」

「……女にモテる男の言葉は違うなあ」

人望と言え人望と。二人しかいない男の会話は応募してきた女性達の和気藹々な声に埋もれた。

「雫ちゃんっ、雫ちゃんっ。知ってる？バレンタインデーをやるんだってっ」

「聞いたわよ。まさか異世界でバレンタインデーの風習を広めているとは驚きだったわ」

「うん、私もびっくりしたよ。でね、雫ちゃんはどうする？無料でチョコ作りができるみたいだよ？」

異邦人の二人の少女、白崎香織と八重樫雫の耳にもバレンタインデーの話題は入っていて、親友に尋ねた香織は期待に満ち合眼差しを向けていた。その深意は一緒にチョコ作りをしない？ということを観察する雫は微苦笑を浮かべ、首肯した。

「異世界でチョコ作り、ね。私も作って渡そうかしら。香織は南雲君に、でしょ？」

「うん！雫ちゃんは？光輝君と龍太郎君に？」

「龍太郎はともかく光輝にチョコをあげなくても、他のクラスメートの女子達があげるでしょうから必要ないわよ」

学校の時だっかなかなりもらっているんだから、と結果を悟っている雫が誰に渡すか消去法で脳裏にクラスメートの男子の顔を浮かべた

途端——不穏な雰囲気を纏いだした。

「……まさか南雲君に?」

「香織!? 目からハイライトが消えてるっ。そんな暗い顔をしなくても私は——!」

ふと、脳裏に浮かぶ恩人の顔の名を呟いた。

「イツセーさんにお礼のチョコでもあげるから邪魔しないって」

「あつ、そうだね。あの人のおかげで不便な生活をしなくなったから、私もそうしよつと」

不穏な雰囲気が晴れて可愛い笑顔をする雫。同意を得られてホッと胸を撫で下ろす心中の雫は香織に引つ張られながら『異世界食堂』へと足を運んだ。

「うわ、意外というわね。お店って今日は確かお休みの筈だったわよね」

「それだけ告白したい人がいるってことだよ」

長蛇の列を作り店の仲間で並ぶ女性達。中で参加名簿にサインして店から出てくる女性達を見ながら最後尾へと向かえば、同じクラスメートの女子が先に並んでいることを知り目的は一緒なのだろうと察する。

「あ、ここだ!」

明るい少女の声が並んでいた香織と雫の横を通り過ぎ後ろに並ぶ幼いアマゾネスの少女。成熟した肢体には遠い、細い褐色の体。胸もまだ膨らみかけもいところだ。衣装は短い胴着チヨッキにこれまた際どい腰布など、琥珀色が近い橙真珠橙真珠オレンジパールのごとき双眸の彼女の出で立ちに二人はぎよつと目を丸くした。殆んど水着のような格好で幼くも瑞々しい裸体をこれでもかと思せつける、まだ彼女の事を知らない二人からすれば恥かしくないの!?と羞恥心を覚えさせられる対象だ。

「うん? なーに?」

「えつと、恥ずかしくないの? その恰好」

「全然? アマゾネスは皆こんな格好をしてるよ?」

「アマゾネス……?」

聞いたことがない単語だと首をひねる香織は、種族の事だろうかと

熱い視線を店主へ向け、媚びるような仕草をする。

「私、貴方の子供を作りに——」

「神楽、この馬鹿を冷凍庫にぶち込んで。凍ったら主神のところに放り投げる。終わったら高いデザート一品だけ食わしてやる」

「わかったアル」

「わー！待って待って、ふざけてないけど真面目に言うから!」

テーブルにしがみついて掴みかかる神楽に必死で抵抗するレナ。それが何とも言えない光景にシルが助け舟を出した。

「一応、話だけでも聞いてはどうですか?」

「単刀直入に言えば済む話なんだよ。この頭がお花畑のこいつがそれをしないのが悪い」

「俺が知っているアマゾネスってこんな感じじゃないような気がする……」

知識と現実の差に戸惑う海童の言葉を聞き流し、神楽をレナの背後に立たせて再度改めて問い詰める。「余計なことを言わず本題を言え。じゃないと本当に冷凍庫にぶち込むぞ」と脅して釘差して。レナはここに来た目的を小振りな口唇から言葉にして告げた。

「イツセーと別れてからイシユタル様に何度もお願いしてね? イツセーに迷惑させないために【ファミリア】からやっと脱退してきたんだよ」

「はあ、本気か」

「うん、マジもマジ! だからこれで晴れてイツセーと子供を——じゃなくて傍に居られるようになったから引き取って欲しいなつて!」

一瞬、般若の顔をしてレナの発言を遮らせ、言い改めさせた店主の顔を見た従業員は冷や汗をかいた。

——だつてすつごく怖いんだもん。

「……はあ、別に脱退しろ何て一言も言っていないし望んでもいなかっただがな」

「まさか本当に脱退しちゃうなんてね……。どうする? イツセー」
心底呆れるも彼女の行動力にレナと出会った場に居たアスナ共々

感嘆する。薄々だがこの後の結果は決して酷いことではないことを察するアスナは決断を求めたら。

「……………しようがないだろ。俺の周囲で起きた事は責任持たないと駄目だ」

「じゃあ——！」

「ただし」

歓喜で顔を明るくするレナに入団の条件を突き付けた。

「最初はこの店に貢献をしてもらうために働かせるからな。お前の行動力を買って主神がいらない【フリー・ファミリア】に入団させるがその前の試験だと思ってくれ」

「フリー・ファミリア」？え、イツセーって【フレイヤ・ファミリア】じゃないの？主神がいらない【ファミリア】って何なの？」

「ああ、公にしていけないから知る筈がないか。その辺は追々説明するよ。ま、そんなわけでよろしく」

「え、う、うん。よろしくね」

微妙な顔で店主から伸ばされた手を思わず掴んで握手を交わす。そんなこんなで『異世界食堂』に新たな従業員が増えたことに店主はにこりと笑う。

「……………今の会話のやり取りってさ」

「絶対労働力を増やすための口車を乗せるものニヤ」

「絶対に断らせないためだよね」

「あくどい、あくどいニヤ。ミャー達の店主は」

ヒソヒソと事の成り行きを見守っていた女性従業員達の間で声を殺して囁く言葉の会話を、しっかり耳に届いている店主はぐりんと首だけを後ろに回した。

「今俺に対して言った四人？三カ月給料の減額に加え、通常の三倍働かされるか素直に土下座して謝るか今すぐ選べ」

「「ごめんなさい（ニヤ）！」」」

後者を選びその場で土下座して謝罪した四人と店主の力の関係にレナはうわーとヒク。

「シル、レナをウエイトレスにする。指導してやれ」

「わかりました。よろしくねレナちゃん」

「うん、よろしくね！ちなみに聞くけどイツセーを狙ってる女の人ってこの中にいたりする？」

「レナ？仕事に関係する話か？うん？」

「あ、ごめんなさい。聞かなかったことにしてください」

恐怖を刷り込みされ始めたレナに同情や憐みの眼差しを送られるようになる。それでも笑い溢れるようになるだろうと誰もがわかっていて、レナを歓迎した。

そしてバレンタインデー前日。旧『豊穣の女主人』の建物と離れを利用して、数多の女性客達と甘い甘い世界で一つの自分だけの特別なチョコレートを作り出しては当日、見目麗しく可愛い女性店員達からのささやかなプレゼントを求め集まる男達と、意中の異性に手作りチョコを渡しながら告白する女性達がオラリオ各地で見受けれるようになった中で。

「俺に？」

「はい、最初に助けてもらいお世話になったお礼です」

「これからお世話になると思うので、義理ですけどお礼チョコとして受け取ってください」

香織と雫から義理チョコ兼お礼チョコを渡され、渡してくる二人に意外と思いながら受け取る。

「律儀だな。ありがたくもらうよ」

「来年もバレンタインデーをするんですか？」

「元の世界の風習をこの世界にでもやってみたいからな。他にもするぞ運動会とか」

「運動会?!」とおっかなびっくりする二人に詳細を教える。

「まあ、それに参加するためには【ファミリア】に上級冒険者がいなくちゃダメなんだがな。お前らも参加したいなら【ランクアップ】する必要がある」

「それってギルドが中心にするんですか？」

「いや、俺だ。今までは【ファミリア】同士の決闘は神の代理戦争、冒険者同士が戦う『戦争遊戯』ウォーゲームでしていたが。平等な戦いをするため

に俺が神々も参加できる運動会を提案したことが切っ掛けで去年からするようになった。因みにバレンタインも去年からだ」

「一体どんな状況でそんな展開になったのか不思議を通り越して凄いなと思うわ。でも、準備とかどうするの？」

「俺一人でやっている。もう殆んど下準備は終えて後は運動会をする——夏の日を待つだけだ」

異世界で行われる運動会。果たして自分達が知る運動会か、それとも予想外な運動会になるか気になる二人は夏の日まで上級冒険者になれたら参加してみたいという思いが芽吹く。

「個人的にはお前達にも参加してほしいと願ってるよ」

「どうしてですか？」

「他の皆には秘密だ。いいな？誰にも言うなよ。親しい友人でも教師や他のクラスメートには絶対に言うな」

何故か念を押され釘を刺されたが、話してくれるならば約束を守るために秘密にすると頷くと一誠が——。

「俺は他の異世界へ行き来できる魔法を使える。つまり元の世界に帰れたりお前達の世界へ送ることもできる」

「っ!？」

二人にとって衝撃的な事実を教えた。

冒険譚45

レナ・タリーが新たに『異世界食堂』の従業員として働き始めるようになって、天真爛漫に笑い活発的に動くアマゾネスの少女に男性客達は目の保養となりますます賑やかとなった。最初は四苦八苦したものの、今では慣れてきて小柄な体でもあつて客達の間でマスコットと化しているレナを、たまに様子を見に訪れる「イシユタル・ファミリア」の団員達がからかいながら食べにくることもある。

「おいレナ。コレとコレ、あとコレに酒を頼むよ」

「もー！ちよつとは遠慮してよー！」

「レナー、あたしらの注文も頼むぜー」

「この店の肉料理はうめー。あ、レナお代かわり」

「お代わりー！」

「もう待ってってえー!?!」

「すつかりレナちゃんも馴染んできてますね」

お世話係を任命された者として立派に働いている後輩の仕事姿に嬉しそうに笑むシルに返す店主。

「上々だろ。一人増えれば客足も増える。レナを目的にあまり見かけないアマゾネスの客も来るようになったし」

「もしかして、最初から狙ってました?」

「狙ってできるようなもんじゃないさ」

打算があつて引き取ったわけじゃないと思いつつ否定して、シルと目まぐるしく忙しそうに仕事をこなすレナを見守るとポツリと吐露する。

「子供か・・・もしも仮の話だけどシルと俺の子供はどんな感じになるだろうな」

「——っ」

カアアアアと耳まで紅潮するシルが客の方へ歩く店主の背を向いて目を見開いた。

「(て、店主さんっ。それはどういう、どういう意味なんですかつ?!?)」

そんな言動や素振り、意識をしなかった男が突然の仮想の話をしだされて、酷く動揺するシルは置いてけぼりにされ一人悶々と心が落ち着かず、その日はちよつとしたミスを何度もし「店主さんのバカー！」と心中で叫びながらミアに叱られてしまったのだった。

来客を告げるベルが開け放たれた扉と同時に鳴り響き、二人組のホワイト・エルフ、ダーク・エルフ、バルウムの白妖精と黒妖精が入ってきて、追従するように四人組の小人族も来店すると。丁度手が空いた店主が出迎えた。

「いらっしやい。ようこそ『異世界食堂』へ」

「シルちゃん、今日はどうしたの？珍しく仕事のミスが目立ってたよ」
「聞いてくださいよアスナさん。実は店主さんが」

休憩が被った二人は、シルは店主に言われたことをアスナに教え同情を誘うとしたが、アスナに近づく女性店員。

「どうしたの」

「シノのん。んと、シルちゃんがね？」

シノンにもシルの話の話を聞いてもらおうとして説明をしてもらったところ。シノンはこう言い返した。

「仮って言ったんだから別に動揺することでもないでしょう。店主だって本気で言ったわけでもないでしょうし。寧ろ、貴方が店主のこ
と好きだから動揺したんじゃないの？」

「——ッ」

「(あ、凶星?)」

吃驚したように固まった顔は徐々に赤みが耳まで帯び、アスナはその様子を見て悟った。目の前の彼女も恋する乙女であると。

「ふうん、本当に好きなのね」

「ち、ちがッ……!」

「顔が熱いことを自覚してるでしょ？それに別に店主のこと好きか嫌いかなんて珍しい話でもないのだし、隠そうとしている方がおかしく見えるわよ」

「うん、自分の気持ちを隠さずに店主と接してみたら？」

何故か恋バナに発展。シルはこの急展開、状況に慌てふためいて否

定しようとして二人には「今更だよ」とばかり反応される。

「で、どんなところがいいの?」

「えっと、何のこと……」

「好きになったところよ」

「私も気になるなあ?」

この二人に聞いたのがやぶ蛇だったかもしれない。笑顔で尋ねるアスナに、黒い瞳を向けてくるシノンの二人はこの後も根掘り葉掘りシルから聞き出し、終始コイバナで休憩時間を過ごした。

また店主に対して心中で叫ぶシルを露ほども知らない店主は帝国からの客人達を出迎えていたが、何やら深刻そうな友人に小首をかしげた。

「……墳墓?」

一先ずアスナ達がいる休憩室へ案内して訳を聞いたところ、ラーズグリーズから奇妙な話を聞かされることになるとは。

「それがどうかしたか? 帝国の領土内にあるなら不思議じゃないだろう」

「いや、不自然すぎるのだ。侵略と侵攻を繰り返してきた帝国が通ってきた道にある筈がない物がいつの間にか存在していたのだ。しかも草原にだ」

「草原に墳墓……奇妙なことだな。調べたのか?」

首を横に振るラーズグリーズ。

「現王は墳墓を調べる時間も兵士も渋ってオラリオの冒険者に探索させることをした」

「……俺なわけか」

帝国とオラリオを行き来できる術を得ているラーズグリーズに白羽の矢が立ったのだろう。帝国が誇る一級の騎士をあつかりと倒した店主に、探索させた方が効率的だと現王の食えない判断に辟易する。

「理解してくれたようで助かる」

心底申し訳なきように、現王に対して思うところがあるように顔を顰めている友を「苦労してんな」と労いつつ依頼内容を復唱する。

「帝国内の墳墓の調査をすればいいんだな？全容が明らかになったら現王はどうするつもりだ？」

「何もなければ放置するかもしれないが、帝国に仇なすものであったら潰しにかかるだろうな」

「そんな感じか。で、報酬は墳墓の中で発見した物全てでいいな？」

「構わない。私に依頼を命じた王からは判断を任されているからな」

墳墓に莫大な財産が眠っているとは限らないと、共通の認識をした上での会話に店主は帝国からの依頼を引き受けることにした。

帝国から離れた東南。町村が複数ある所に満月の月光に照らされながら巨大な空飛ぶ船が通り過ぎる。その艇は真つ直ぐ目的地へと飛んでいく。

その場所は帝国領土内に突如として現れたという大墳墓。

周囲は六メートルもの高さの厚い壁に守られ、正門と後門の二つの入り口を持つ。正門横にはまだ新しそうなログハウスのような家が建っている。内部の下生えは短く刈り込まれ、綺麗なイメージを持つが、その一方で墓地内の巨木はその枝をたらし、陰鬱とした雰囲気がかもしだしていた。

墓石も整列してなく、魔女の歯のように突き出した乱雑さが、下生えの刈り込み具合と相まって強烈な違和感を生み出している。その一方で天使や女神といった細かな彫刻の施されたものも多く見られ、一つの芸術品として評価しても良い箇所もところどころある。

そして墓所内には東西南北の四箇所にそこそこの大きさの霊廟を構え、中央に巨大な霊廟があった。

中央の巨大な霊廟の周囲は、十メートルほどの鎧を着た戦士像が八体取り囲んでいた。敷地内に動く者の影は一切無し。

それが上空から眺めてきた、大墳墓の地上部分の情景である。墳墓上空から三百メートル離れたところで、遠目に観察を行いながら、もたらされた情報に一誠は興味津々と疑問に尽きた。

生じた疑問は、何でこんなところに地下墳墓があるのだろうかである。

確かに書面上の調査でも奇怪なものは感じていた。しかし、もう少し隠してあったり、木の伐採跡があつたりしたなら理解できたのだ。しかし到着し周囲を見渡せば平野しかない場所だ。墳墓を築くのはあまりにも不向きな場所過ぎる。

まず単純な墓としての利用性を考えるなら、人里から離れたこんな場所にこれほど立派なものを築くのは奇妙な話だ。あまりにも不便すぎるのだから。では死者を祀る場ではなく、故人の為にした業績を後世に伝えるモニュメントとしての目的となると理解できなくも無いが、帝国でも知り得ず名もない墳墓に関してまるで伝わっていないことが違和感を覚えさせた。さらにモニュメントとしてなら、地表部分に墓石が無数にあるというのが理解できない。

「.....」

しかし、そんな墳墓のことよりもある事に注視していた。注意深く観察していると墳墓の中、更に地下と思しき地中深くから感じる隠しきれない——禍々しい数多の気配に双眸を細める。

.....何かいるな。

玉座の間——。

壁の基調は白。そこに金を基本とした細工が施されている。天井から吊り下げられた複数の豪華なシャンデリアは七色の宝石で作られ、幻想的な輝きを放っていた。壁にはいくつもの大きな旗が天井から床まで垂れ下がっている。金と銀をふんだんに使ったような部屋の最奥——突き当たりには、数十段階を昇った位置に真紅の布に大きく描かれた何かのギルド印がかけられていた。その前に一つの巨大な水晶から切り出された椅子がおかれていた。

それこそ——玉座である。

それに座る存在は確かにいる。金と紫で縁取りされた豪華な漆黒のローブを纏った人物だ。とはいえ普通の人間ではない。ひからびた死体を髭鬚とさせる、骨にわずかばかりの皮膚がついたような姿。空っぽな眼窟の中には赤黒い光が揺らめいていた。

「空を飛ぶ船か」

「はい、恐らく船を動かす者はおりますでしょうが如何致しますか」

玉座に座る者へ報告を告げる跪いている者は。身長は二メートルほどもあり、肌は光沢のある赤。刈り揃えられた漆黒の髪は濡れたような輝きを持つていた。赤い瞳は理的に輝き、無数の邪悪な陰謀を組み立てているのが手に取るように分かった。こめかみの辺りから鋭い、ヤギを思わせる角が頭頂部に向けて伸びており、腰から生えた尻尾が彼が人ではないことを表していた。黒い手袋をはめた手で一本の王錫を握り、真紅の豪華なローブにそのしなやかな身を包む姿はどこかの王を彷彿とさせる威厳に満ちていた。

「ふむ、こちらに対する動きはどうだ」

「静観、もしくは警戒か様子見でしょう。愚かに土足で侵入せず一定の距離を保ち空中におります故」

「なるほどな。未だ去ろうとしていないのは我々と接触を試んでいるやもしれんか」

骨の手で顎に触れて思考の海に潜る仕草をする異形の存在は。

「(突然また状況が変わってしまったし、ここがどこなのか調べる必要があるしね。それにしても空飛ぶ船か。前いた世界やユグドラシルにもなかった乗り物だな。この世界の技術はかなり発展しているのだろうか?)」

穏やかな口調で考え込んで天井を見上げ、空にいる未知の存在を見据えたその後は視線を戻し、目の前の者へ命を下した。

「デミウルゴス。空にいる者と交渉して友好的にここまで連れてこい。交渉の際は相手の言い分を殆ど聞いても構わない。しかし戦闘行為は極力避ける。よいな」

「はっ。かしこまりました」

立ち上がって玉座の間を後にするデミウルゴスと呼ばれた者の後ろ姿を見ながら異形の王は心中で吐露する。

「(まずは様子見をしようか)」

墳墓の上空から魔方陣で観察をしていた一誠が乗っている騎空艇にデミウルゴスが近づく。船底から窺う騎空艇の大きさは百Mを優

に超え、何を動力にして動いているのだろうかとかと知的好奇心に擦られつつ船の甲板に乗り込み降り立って直ぐ辺りを見回し――。

「ようやく来てくれたか。待ってたぜ」

自分の真後ろから、肩に載せられた手と共に声を掛けられた。デミウルゴスは顔に出さないが内心絶句していた。自分が誰かに後ろを取られるとは考えられない事態である。

「・・・それにしてもやっぱりといつかかなんといつか、人間じゃないんだな。背中に翼に腰には尻尾、顔は異形だし」

「取り敢えず私は君に対して敵対をするつもりはないよ。私は我が至高の御方がナザリック地下大墳墓へご招待を承っている」

「ナザリック地下大墳墓・・・」

墳墓に名があるとは――否、調べた結果把握した名と同じであるので一誠の中である予想が確定した。

「お前達は異世界から来た存在だと認識してもいいんだな。お前自身もこの世界ではお前みたいな存在はいないしよ」

「ほう・・・それは興味深い話だね。是非ともその先の話も我が目の前に言って欲しいね」

「それが目的なんだろ？こつちもお前達の情勢を知りたいから腹の探り合い無で語り合いたいものだ」

肩から手を放し、デミウルゴスが一誠の方へ振り返ると力強い眼差しを向けてくる人間からの言葉に感嘆の念を抱いた。ヒントもなしにこちらが望むものを看破して豪胆な物言いをする男に。

「因みにここは帝国の領土内だから」

「帝国？ここはバハルス帝国の領土かね？」

「バハルス？いや、そんな名前の帝国じゃないよ。まあ、至高の御身という者と会って知っていること全部教えるさ」

未知の存在との邂逅を果たした一誠はデミウルゴスの案内の元、ダンジョンの数階層分もある玉座の間へ案内されることになった。

「よくぞ来られた名も知らぬ人間よ」

「・・・」

案内された広間にて一誠は圧倒されていた。玉座に座る存在やそ

の両隣に立ち並ぶ統一性のない姿形をした面々や今いる玉座の間も含めてすべてに。この異世界に来て色々なものを見てきた中で一位と二位に争う驚きの出来事であるが、心は高揚感で震え口唇は笑みで浮かべ瞳は純粹無垢の子供のような期待の光を孕ませていた。

「どうした？とても嬉しそうな顔をしているではないか」

「嬉しいに決まっているさ。今度はどんな存在が現れたのかと思えば予想を遥かに超えた凄い存在だったんだ。この世界の神々より迫力もあるし、俺が神に求めていたもの全てが目の前にあるんだからな」
「ほう、神がいるのかこの世界には」

「そっちの世界には神はいないのか？えっと、名前はどっちだ？モモンガ・・・アインズ・ウール・ゴウン？」

と名前を尋ねた矢先に「無礼な！」と叱咤の声が飛んできた。艶のある腰まで伸びた漆黒の髪から山羊のような二本の角を生やす、金色の眼の女性だ。純白のドレスを身に包み一對の漆黒の翼を持つ不思議な存在へ視線を送る。

「礼儀知らずで愚かな過当種族の分際で、アインズ様の名を呼び捨てにするなど万死に値する！」

「あ、アインズの方なんだな。ありがとう」

「なッ!？」

一誠から朗らかに感謝の言葉を述べられ怒り心頭で今にも飛び掛かろうとする女性を、玉座に座るアインズ・ウール・ゴウンが幾つも嵌めた指輪の手で制した。

「よせ！アルベド。最初に名乗らなかった私が悪い」

「それを言う俺も名乗らなかった。これでは一方的に知ってしまうばかりで不公平だな」

「では、改めて名乗ろう。私はこのナザリック地下大墳墓の主アインズ・ウール・ゴウン魔導王だ」

「——イッセル、正式名称は兵藤一誠。生まれは日本だ」

互いが自己紹介をし、アインズは一誠の自己紹介に復唱した。

「日本だと・・・？」

「そ、俺も元の世界からこの世界にきた異邦人で日本人なんだ。今年

で六年目になるな」

「……先程、教えてもない私の名を正確に言った理由は何だ」
「鑑定能力だ。情報収集は怠れなく集めるのが常識だからさ」

「私に悟られず魔法かスキルを使っていたとはな。お前はどのような存在だ？」

「冒険者だ。第三級のな」

自慢するわけもなく言う。「第三級？高いの低いの？」「微妙な位でありんすね」「人間の間ではまあまあの実力なのでしょう」とこの世界の常識を知らない存在等が疑問をぶつけあう中、アインズからも問いを投げてきた。

「その位はどれぐらいの強さに当てはまるのだ」

「ピラミッド式で言うとは一番下から二つ三つだ。ようやくミノタウロスを倒せれるレベルって言えば納得できる？」

「そうか。ではこの世界にはモンスターはいるのか？」

「いるよ。世界で唯一のダンジョンもある。ま、アインズ達からすれば『深層』のモンスターですら雑魚だろうよ」

「お前、またアインズ様を呼び捨て——！」

「……この世界にいる限り赤の他人の俺からすればアインズに対して敬意も畏怖も値しない。同じ別の世界から来た者同士として同じ立場で話し合いをさせてもらう。だというのに——二度も横から口出してそんなに主の邪魔をしたいのか？」

睨みつけてくる一誠をアルベドは憤慨、しかし指摘されたアインズ様の邪魔することは許されないことにより、以降のアルベドは苦虫を噛み潰したような顔で握り拳を作り奥歯を噛みしめて怒りを堪える。

「で、様を付けた方がいいわけ？」

「いや付けなくてよい。お前の言う通り、この世界は我々がいた世界ではない。身内ならともかく他の者達にこちらの流儀を押し付ける真似はする気ない」

「当然だけど失礼のない言動はさせてもらうよ。お互いにな」

「ああ、そうだな。では、話の続きだ。この世界は——」

アインズからの山のような質問に一つ一つ答えていき、一誠からの

質問にはアインズも丁寧に教えては情報を共有する。相槌を打っては疑問と興味ある話だと追究し納得して二人は己が知識を許される時間まで明かしていった。

「兵藤一誠。そちらの情報是我々にとって莫大な財宝と同等の知識として得れた。感謝するぞ」

「こつちもアインズ達の事も知れたし感謝するよ。やー、住んでいる世界が違えば様々な意味で違ってくるもんだな。やっぱりこういう出会いができる楽しくていいな」

「我々も異世界から来た異邦人の出会いは貴重だ。今後とも交流を築き友好的な関係が続けていきたい」

「願ったり叶ったりだ。困りごとや聞きたいことがあれば相談してくれ。それで、今後のナザリックはこの世界でどう過ごすか考えているんだ？」

その問いに知恵ある者達は一誠の真意を探り主のアインズの返答にも耳を傾ける。

「しばらくは情報を集めることに決めている。それが終わり次第元の世界に帰還する方法を探してみるつもりだ」

「なるほど。しばらくはこの世界でエンジョイするのも悪くないよな。かくいう俺も異世界で楽しくエンジョイしている真つ最中だし」

「元の世界に帰る方法を探さないのか」

「もう見つけているからいつでも帰れるから問題ない」

さらつとカミングアウトした本人へアインズの眼窩の奥の妖しい光が強まった。

「それはどうやって見つけたのか教えてもらえるかな？」

「この世界の魔法で発現したんだ」

「つまり、この世界の神の眷族の魔法ということか」

一誠に頷かれ自分達では到底異世界の魔法を会得することができない結果に黙り込んだ。期待した分の反動はそれ相応でこの世界でしばらく生活を強いられる状況となった故で。

「アインズ様、彼との会話のご許可をお許し願いますか」

「許そう」

「ありがとうございます。兵藤一誠、その魔法は我々のために使う気はないかね？もしくは条件があるのか聞かせてほしい」

「前者の答えは勿論使うつもりだ。後者の答えは無い、だ。ただちよつと問題がある」

問題とは？とデミウルゴスが訊き返すと人差し指を床に差す一誠にアインズ達は疑問符を頭に浮かべる。

「俺の異世界転移魔法は個しか送ることができない。流石にこのナザリック地下大墳墓ごと元の世界へ送ることは不可能なんだ。だから皆の思い出があるだろうナザリックをこの世界に置いて捨てていかない駄目だ」

「何だどつ!!!」

愕然と玉座から勢いよく立ち上がってしまったぐらいアインズにとつて信じられない話だ。このナザリック地下大墳墓を捨てるだと、そんなことでできるはずがないだろう！と彼の想いは控えている者達も同じ気持ちで、吃驚した表情で激しく動揺していた。

「どうしても無理かね」

「絶対に無理。試した結果は変わりない。逆に魔導王と名乗るのだからそっちが何か解決策はないのかアインズ」

「現状ナザリック地下大墳墓を丸ごと移動させる術がない」

嘆息の声が漏れる。そこまで面倒見る気はないと首を横に振る一誠。

「じゃあ無理」

項垂れるアインズ・ウール・ゴウンに配下の者達は憐みと心配な眼差しを向ける。帰るだけならまだましも、墳墓もとなると話がかわる。どうしようもないこと、どうすることもできないことを駄々こねられてもできないことはできないのだと一誠は言外して言う。

「デミウルゴス、他に訊きたいことは？」

「この世界の神でもどうにかならないかね」

「それも無理だなー。話を聞いていただろ？神は力を封印しているんだ。神頼みは無駄だ」

「そうか。では私からは以上だよ」

「アインズは？」

「私もない。．．．いや、一つ聞いてもよいか」

玉座に腰を落ち着かせるアインズからの質問は何だろうと話の続きに意識を向ける。

「あの空飛ぶ艇はどこで造られている？かなりの技術がある国で違くないだろうからな」

「騎空艇って名前であの艇は俺が造った」

「お前は冒険者なのだろう。職人の真似事もできるのか？」

できる、と自信満々に胸を張ってドヤ顔を見せつける。

「空を飛ぶ騎空艇を始め、高速で地上を駆ける列車や武器、マジックアイテムとか作成できるぞ」

冒険者って何だっけ．．．と心中で吐露するアインズ。

「聞く限りお前はとても優秀なのだ。その能力を神の眷族として――」

「ああ、今の俺は神の眷族になってないぞ。フリーの冒険者だ」

「どういうことだ？神の眷族にならないければ冒険者になれない話だったろう」

訊いた話の中で知ったこの世界の常識の一つを再確認するアインズは、フリーの冒険者でいられる理由を問う。一誠は隠さずに説明する。

『ステータスプレート』って物を作った。それに自分の血を垂らして登録すれば神の恩恵と同じ効果が発現して自動的にステータスが更新される。だから神がいなくても他の冒険者と同じく成長、強さが昇華していけるのさ」

「それは実に素晴らしい物なのだ。だから言葉通りフリーの冒険者ということか」

神の理から外れた存在として興味を抱く。

「ならば兵藤一誠。その能力をこの私のために使うつもりはないか」
「全然ない」

にっこりと満面の笑みで間も置かずに拒絶の言葉を送ったと同じ時に幾人の配下から不穏な雰囲気漂う。

「同じ穴の貉のよしみとして相談や協力はすれど、誰かに仕えるつもりはない。それ以前にお互いの元の世界に帰るんだ、なのにアイنزの下で生きるなんて論外だろ」

「それもそうか。いや、すまなかつたな。私は珍しい物や強者をコレクター気分で手元に置く性分だな。つい勧誘してしまった」

「おいおい、人を物扱いにしてくれるなって。人権って大切だぞ」

苦笑を浮かべ、そして思わずといった感じで耳に入る嘲笑の声。

「下等種の人間ごときに人権なんてないも当然ではありんせんでしょうに」

白蟻染みた肌を身に包んだボールガウンやフィンガーレスグローブで露出させず、長い銀の髪と真紅の瞳を持った非常に端正な面立ちをしている少女へ——不信任を抱く。

「……アイنز、俺からも質問だ。魔導王と名乗る者として人間に対してどの程度に思っている?」
「……」

真つ直ぐ、そして真剣なオッドアイの眼差しに——お前の言い分次第でこの先の未来が分かれるぞ、と念が籠った。アイنزはナザリック地下大墳墓の主として答え、自分の質問に「そうか」とそれだけ言つて空間に広げた穴から宝玉付きの腕輪を取り出す。宙に浮かせてデミウルゴスへと送る。

「その腕輪は俺が造つた通信手段だ。もしも相談したいことがあればそれを使って連絡してくれ」

「とても貴重なものではないのか?」

「確かに一部の交流ある人間や神にしか作つてないからありふれた物でもないが。それでもこの世界で気楽に訊ける相手の一人や二人は欲しいだろ?」

「そうだな。このままお前を帰しても違う世界から来た我々は右も左もわからぬし、この世界でもまた情報を集めながら一から国を創るのも時間と労力を費やすことになる」

建国する気だこの魔導王は、と今後に懸念する一誠の心中を露知らないアイنزはデミウルゴスに血のように赤い宝石の指輪を手渡し、

それを持ってデミウルゴスが近づいてきた。

「これは？」

「リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンというマジックアイテムだ。本来は私のメンバーしか所持を許されないものでありナザリック地下大墳墓内しか使えない物だが、それを持っている限り私との繋がりがある証としてお前に授ける」

「へえ、そうなんだ。あ、こんな感じか」

何?と思ったところで一誠が目の前で消えてしまい、空白の数秒間は思考が停止した。そして、ちよつと待てええいつ!?!と叫ぶアインズが配下の者達に一誠の搜索を命じたのは言うまでもないが、それでもしばらく経つても見つからずナザリック地下大墳墓に働くメイドや召喚されたスケルトンを用意しても発見は敵わず——最終的に搜索はデミウルゴスが受け取った腕輪の宝玉が光るまで続いた。

「アインズ様。あの人間はもう艇に戻って帰ると」

「そうか。ならばいい。ところでデミウルゴス。お前から兵藤一誠に關してどう思う」

「利用する価値は十分にあるかと。私達がいた世界へ戻せる魔法も使えます故に。この世界のマジックアイテムも造れるという能力も捨て置けないでしょう」

「そうだな。では、今後のナザリック地下大墳墓は奴の情報を中心にこの世界の仕組みを調べるところでしょう。それが終わり次第行ってみるか

——地下迷宮都市オラリオにな」

「——異世界から魔王が現れた」

「えっ?魔王?」

「いや、冗談だろ?」

「俺が冗談を言うわけないことぐらいは分かっているはずだが?」

「仮に本当だとして、その魔王に勝てるか？」

「調べたらロクでもない魔法ばかり行使できるからなあ。即死魔法とか記憶操作に精神に関する魔法に爆発魔法や属性魔法に……もう挙げててもキリがない数十種の魔法を見た瞬間、『あつ、こいつやべえ』の一言に尽きた。まだ転生者の方が可愛げがある。本人は魔導王と称しているがな」

「ぶっ！ま、魔導王って……！」

「イツセー、肝心な話を聞いてないよ。その、イツセーは倒せるの？」「魔法を封じれば問題ない。要は初見殺しをすればいいだけ。あの魔王は異邦人だったら分かる話、ゲームのキャラクターで異世界転移してしまった存在だしな」

「マジでっ!?それじゃ転生者よりも強いって言われても当然だよなあ……因みにLv.は？」

「カンスト1000レベル」

「ひゃ、1000うっ!?」

「しかも今日出会った配下も同じレベルだから面倒極まりない。でも、ゲームで培ったステータスと経験はリアルで強くなっている俺達冒険者が簡単に蹂躪されるとは思っていないぞ」

「でも不安だよ。魔王達は基本的に人類の絶対悪だから異世界の魔王も実際、どうなの？」

「聞いてきた。元の世界にいた頃は世界征服をしていて城一つ乗っ取ってた。この世界でも建国しようとしてるし、もう世界征服をしようとならば警戒せずにいられないだろう」

「イツセー、貴方の異世界転移魔法で送り返せれないの？」

「大墳墓を捨て置けないらしいから無理だ」

「墳墓、え、墓？魔王が住む所にしては……」

「ゲーム時代で手に入れた墳墓だ。中の構造は迷宮のようで階層は調べた限り10階層までだ」

「意外と少ないな」

「その分、トラップが鬼畜だぞ？家探しをしたらそのうちの一つを移動してしまっ……」

「しまつて……?」

「……黒い台所の悪魔で埋め尽くされた部屋に転移した。体中這いずり回されて何とも耐え難い体験したときはそれはもう……ふ、ふふふふ……」

「「ひっ……!」」

「虹蜂の蜜をたっぷり掛けた虹色の実を餌にして難を逃れたけど、今頃虹色の身体になってカラフルボールみたく目が痛いほど輝いているだろうな」

「……確かに蜂蜜を摂取してあれだからな。ちよつとした意趣返しをしたことになるか」

「黒いGがレインボーGつて……」

「とにかく、魔王軍がオラリオに何時来てもおかしくない。連中は人類を下等種として見下しているから基本的に仲良くなるうとは思っていないしなれない。だからお前らは最大限まで警戒しているだけでいい。冒険者のレベルとゲームのレベルの違いがどこまで差があるのかまだわからないから、言われずとも喧嘩売るような真似だけはするなよ」

「誰もおつかない奴と好き好んで話しかけることもしないと思っぜ。でも現存する武器で倒せれるのか不安だな。自称勇者の神の武器もどうなんだ?」

「通用してくれないと意味ないだろ。何のための勇者何だつて話だ。にしても嘘から誠になってしまったな」

「どういうこと?」

「集団転移してきた学生達の主神が妄言のことだ」

「あ」

「でもま、今の連中にとって今更な話だろ?魔王がいなくて話で決まってるんだから」

「だから教えても意味がない。相手は死を超越した存在と謂われてるが、この世に生を持った時点で死ねないなんてあり得ないんだよ。不死も不老不死も能力次第だったりその固定概念を覆されることをさすればな」

「それができないから強いんじゃない？」

「そうだな。でも、できるなら話は別だろ？今後現れる転生者に死を越えた能力を願わないとは限らないから」

「うーん、人の願いは様々だからそんなこと願う奴がいるのかわからないな」

「だな。皆自分の欲望に忠実だから」

「その代表的な神に欲望を叶えた奴が目の前にいるんだけど？」

「いやー、はっはっはっ！」

「二人共、多分イツセーは褒めてないよ」

「ま、馬鹿にはしないさ。欲望もあつて人間なんだからな。さて、俺は未来の分岐点の一つに進んでしまった時のために武器を作ってくるよ」

「それって……」

「ありえなくない話だ。オラリオを乗っ取って支配しないという保証は接触した俺だから分かる」

「ないとは限らないんだからな。」

冒険譚46

「ミアハー頼み事ってなんだ？」

『青の薬舗』から連絡が入り訪れた一誠を出迎えた群青色の長髪を伸ばす男神。

「うむ、モンスターの卵の収集を頼みたい。【ロキ・ファミリア】からの依頼でデュアル・ポーション二属性回復薬の大量生産をしたいが現在、在庫が尽きてしまいい作るにも素材も底がついてしまったのだ。報酬は完成したデュアル・ポーション二属性回復薬でどうだろうか」

「ん、いいぞ。うちもそのポーションの需要が高いからな。直ぐに取り掛かろう」

「すまない。待っているぞ」

軽く冒険者依頼を受託した一誠はセオル樹林に向かうべく準備を始めた。

『ルオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！』

「ちよつとー!?あれをどうにかしてよおおおっ！」

「無駄口言つてないで走り続けろっ！ジャイアントトードより凶悪なモンスターに喰われたくないだろうがあーっ!?!」

「ならば私の爆裂魔法で吹っ飛ばしましょう！」

「お前を背負って逃げられるわけないだろうっ!?!そこらじゅうにモンスターがいるんだぞー！」

「では、私が囹につー！」

「喰われるのがオチだ！ちくししようっ、どこなんだよここはっ!?!何でこんなところにいるんだよー！」

一人の少年と二人の少女に一人の女性がセオルの森林の中を迷走していた。四人を喰らわんと唾液を滴しながら大きな顎を開けて全力で追いかけて、必死に逃げ惑う四人は見知らぬ森から抜け出したい気持ちなのだ、森の外の道は一切分かっていないまま走り続けた。

『ルオオオオオオオオッ！』

「あうっ！」

「あつ、めぐみんっ！」

トンガリ帽子を被った赤い服を着ている少女が、横から現れた二匹目のブラッドサウルスにマントを噛み付かれて地面から足が浮き、宙吊りたなった少女は今にでも喰われそうになった。

「た、助けてくださあーいっ!? 食べられちゃいますーっ！」

「どうしようっ、ねえ、どうしようっ!? まだ程よく肥えてないめぐみんだから、食べられたら満足できず次は私達の番よ！」

「ちくしょうっ、こんなことになるならもつと豪華な料理で贅沢させて肥らせていたのに！」

「お前達、めぐみんになんて事を言うんだ!? はあああああつ！」

ブラッドサウルスに向かって飛びかかり、金髪のポニーテールに碧眼の女性が振り上げる剣が勢いよく振り下ろされる直後、最初に四人を追いかけていたブラッドサウルスが獲物を横取りされた怒りでタツクルしたので、狙いをスカした女性はそのまま巨大な足に踏まれてしまった。

「ダクネスウウウウウツツ！」

「うおおおおおいっ！」

絶叫を上げる残された二人の頭にべちやりと生暖かい粘液が降り注いだ。嫌な予感を覚えた二人がゆっくりと後ろへ振り返ったら、三匹目のブラッドサウルスが涎を垂らしながら見下ろしていたのだった。

『グルルルルルルツ……』

「わ、私を食べても美味しくないわよ? ほら、こ、こっちのヒキニートが一番美味しいわよっ? 毎日自堕落な生活をしていたからお腹に脂身が乗っててきつと美味しいと思うのっ」

「おま、この駄女神! 俺を売ろうとしても次はお前も喰われることを分かってて言ってるのかっ！」

「はっ!? カ、カズマさあん! どうかしてよおおおおおっ! 私死にたくないいいいいっ！」

「だあー! 抱き着くな、俺が逃げられないだろう!？」

「酷い！私を置いて逃げるなんてそうはさせないわよ！」

泣きじやくりながら縋り付く水色の髪に同色の瞳、青い衣服を身に包み桃色の羽衣を着飾る少女を引き剥がそうとする緑色の肩掛けに軽装の出で立ちの少年。揉み合いと言いい合いをしている獲物に向かつて大きく顎を開けて襲い掛かるブラッドサウルスであった。

『グオオオオオオオッ！』

「ぎゃあああああつ!？」

「いやあああああつ!？」

抱き合つて迫りくる捕食者に襲われ悲鳴を上げる二人の声に駆け付ける、何か大きなものが開いた口の中に投げられて入った。

『………ッ』

思わず口を閉ざして咀嚼するモンスター。そしてその後、芳醇で食欲をそそらせる香りが森の奥から嗅ぎ取れると二人から意識を変えて餌へ向かつて地響きを鳴らしながら歩き始めた。その様子を硬直して見ていた二人は目を丸くする。

「た、助かったの………?！」

「何故か知らないがそうみたいだな………あ、めぐみんとダクネス！」

「——この二人の事か?！」

唾液塗れの少女と恍惚の表情を浮かべる女性の傍らに立つ、大きいバックパックを背負っている長身の真紅の長髪、濡れ羽色と金色のオッドアイの男性が声を掛けた。

「あ、あんたは………?！」

「さっきのモンスターの卵を採取に来ていた。遠くから聞えてくる騒ぎに駆け付けてみれば喰われかけていた少女をいたもんで助けた。あと、こっちは踏まれていたのにかなり丈夫だな?普通潰れたトマトになるんだが」

「ああ、そいつは硬さと力だけが取り柄のクルセイダーだからな」

「………クルセイダー?！」

なんだそれは?と言いたげに首を傾げる男にカズマと呼ばれた少年も、うん?と疑問を浮かんだ。

「取り敢えず自己紹介でもしないか？俺はイツセーだ」

「あ、どうも。カズマです。こっちはアクア。で、粘液塗れのはめぐみんで変態な顔をしているのがダクネス」

「カズマ……？変なこと訊くが、出身地はどこだ？」

「どうしてそんなこと聞くんだろうとカズマは質問に答えた。

「日本だけだ」

「……お前、日本人か。しかも他の三人を見た感じ、どうも異世界から来たようだな？」

「異世界ですって？じゃあ、ここはどんな世界だつて言うの？」

「世界で唯一、一つだけしかないダンジョンがあり世界中にモンスターが跋扈している魔法と剣の世界、としか言えないな。迷宮都市オラリオって名前は？」

「知らないと首を横に振るカズマとアクア。

「逆に訊くけど、アクセルの街って知らないか？」

「知らないな」

「マジか……クエストの最中にいきなり光に襲われたと思ったらこの森の中にいたんだよ俺達は。どうなっているんだ？」

「異世界に転移させられたんだろ。俺もそうなんだよ。他にもこの世界に転移した人間や転生者もいるし」

「マジかよーじゃあ、あんたの日本の名前って」

兵藤一誠だ。と答えるイツセーにカズマは更に質問をしようとしたがモンスターの唸り声が聞こえてきた。

「話はオラリオに戻ってからにしようか」

「オラリオってどのあたりにあるんだ？」

「馬車だと半日も掛かるぞ」

「ちよつとー、半日もこんな気持ち悪いままで歩かなきゃいけないわけ？私、嫌なんですけどー」

アクアの不躰な言い分に頭を抱えるカズマ。次の瞬間、「なら綺麗にしてやるよ」と言うイツセーは指を弾き、魔方陣を展開すると四人の身体の汚れが光に包まれ綺麗になっていった。

「うお、もしかして魔法か？綺麗になった」

「へえ便利じゃない。濡らしてから乾かす手間もなくていいわ」

「俺の故郷の世界のな。俺が住んでいた世界もファンタジーで神々や魔王もいるんだ」

「そつちも魔王がいるのか。俺も転生した異世界にも魔王がいるんだ」

「親近感が湧いたカズマに一誠も話に乗る。」

「そうなのか。じゃあ、冒険は好きか?」

「大好きです」

口端を吊り上げるイツセーがカズマと握手を交わした。

「ウェルカムだカズマ。この世界も冒険ができるぞ。ただしこの世界には魔王はいないが快樂主義の神々が地上に降臨している。主に人間臭い神らしくない神ばかりだ」

「あーそうなのか。でもこつちも似たようなもんだぜ。酒を飲んで酔っ払って道端でゲロ吐いてはお調子者で借金を作るわ人に迷惑をかけるわで、もうほんと駄女神なんだよ」

「こつちも酒好きの女神がいて料理に使う酒を勝手に飲まれたことがあるわ。もうその女神に対して駄女神って言ってしまおう」

「本当に勝手な事されると困ったもんだよな。無関係なのにこつちにまで飛び火が来るとき、その尻拭いやら後処理に追われてよ」

「もうな、怒っても怒ってもキリがないって感じだよな。一度痛い目に遭わないと絶対分かってくれないアレだ」

「分かるわー。こつちの気持ちを知らないでよくトラブルを起こすんだようちの駄女神は」

あーだこーだと駄目な女神の駄目なところのトークを繰り広げていてカズマは気付かないでいた。拳に神聖な力を宿して暗い顔でこちらを殴ってこようとしているのを。

「ねえ、ヒキニート」

「誰がヒキニートっておい!その拳を仕舞え!」

「そうだぞ、命の恩人を殴るなんて神の風上も置けないぞ。駄女神」

「ゴットブローツ!!!」

怒りの右の正拳[!]突きが放たれる。慌てるカズマの隣で一誠が右手

を突き出してアクアの拳を掴み止めた。

「ん？異世界の神の力ってこんなものか？弱いな」

「違うわよ！人間界に降りちゃって本来の神の力が殆んど失っちゃったのよー」

「それでも神の力が振るえるのか。チートじゃん。だけど生憎、この世界にはゴースト系のモンスターはいないぞ。スケルトンはいるけど」

「私の浄化の力で倒してやるわよそんな雑魚なんて」

「異世界同士のモンスターの強さは異なるから、断言できないなあ……とりあえず、これに乗れ」

バックパックから魔法の絨毯を取り出して開くと、宙に浮きだす敷物の上に乗る一誠。空を飛ぶ絨毯にカズマ達は凄く興味津々で感嘆の念を抱いた。

「すげえ、魔法の絨毯だ」

「ほほう、これは凄いですね。是非とも私の専用の魔道具を作ってもらいたいものです」

「これがあれば旅や冒険も楽になるだろうな」

「いいわねこれ。私にちょうだいよ」

「稼いで買え。そんじゃ行くぞ」

オラリオへ向けて飛ばす。その頃オラリオでは……。

「あの、バニルさん……ここは一体……」

「ふむ、どうやら我輩達を知る世界ではない様子だポンコツ店主よ。我輩達にこのような真似をできるとすれば恐らく神の仕業に違いない」

「どうしてこんなことを……?」

「それが見通せば苦労はせん。ポンコツ店主、まずは情報収集だ」

「こ、ここってどこなの？私、確かめぐみんなが住んでいる家敷に向かう途中だったのに……」

「そうだね。参ったねー。どうもここはアクセルの町じゃないみたいだよ」

「あ、クリスさん！良かったです。一人じゃあ心細かったです」
「あはは、私も馴染みの顔が見れてホツとしたよ。とりあえず、聞き込みをしようか」

新たな異世界から来た者達が紛れ込んでいたのを一誠達はまだ気づいていなかった。

「ほら、あれがオラリオだ」

「おお、なんと大きい塔だ」

「我が究極奥義の爆裂魔法の練習には持って来いのものですね」

「天辺が見えないわね。一体どこまで伸びているのかしら」

「本当にな。なあイツセー。あれって何の塔だ？」

バベルの塔だと言いつ返す。高い外壁で囲まれ木造や石造りの建造物が巨大な白亜の塔に密集するように、八つに切り分けられたホールケーキのように区分しているダンジョンがある都市、オラリオに着いた一行。

「ここまで連れてきたが、お前等以外に誰かこの世界に転移させられた人はいないか？」

「分かりませんね。あの森にいたのは私達だけでしたので」

「そうか。一先ずお前らを保護する。衣食住も提供するから安心してくれ」

「すまない。感謝する」

「それとこの世界の文字の読み書きを学んでもらうしかないがいいな？」

「あー、やっぱり違う世界だと違う文字なんだな」

「ふふん、私は女神だから問題はないでしょうけどね」

一人怪しいが気にせず一誠はオラリオの上空を飛び、路地裏に構えている人体模型のような看板を飾った店の前に寄った。

「ここは？」

「とある神とその眷族の店兼ホームだ。冒険者のお馴染みの道具屋の一つだ。ミアハ、戻ったぞー」

群青色の髪で高身長、美しい目鼻立ちの青年が入店した一行を朗らかに迎えた。

「おお、イツセー。すまないな手伝わせてしまって」

「問題ない。あのポーシジョンをこっちにも回してくれれば手伝わてるさ」

「うむ、さらに改良して質のいいポーシジョンにしてみせよう。ところで彼女達は？一人、私達神に似た異なる神威を放っているな」

「異世界から来た神と冒険者パーティだ」

「そうであるか。であれば今後とも良き隣人としてよろしく頼む。私は「ミアハ・ファミリア」の主神ミアハである」

「どうも、サトウカズマです。あのこの世界の神様は働くのですか？」
「天界での生活に飽き飽きした私達神々は下界に娯楽を求め降り立つのでな。子供達のように生活をして永住する楽しみをしているのだよ」

感嘆の息を漏らして意味深にアクアへ目を向ける。いつの間にか興味津々で商品を手を取っていた。

「それ以外だと国を経営している神がいれば人類とスローライフしている神もいるぞ。神々も下界、この人間界で自由に生きているのさ」
「そんな世界もあるのかあ・・・ところで「ミアハ・ファミリア」ってのは？」

「神を中心に人間を眷族にすることで成り立つパーティの異名みたいなもんだ。神の眷族になる事で神の恩恵、ファルナッテのを与えられ背中にステータスが刻まれる。刻まれたステータスの徽章がその神の眷族の証として他の人達から認知されるようになる。そして眷族になった者は強くなれる」

他に質問はあるか？と訊く一誠に露骨に嫌そうな顔を浮かべ、アクアへ指差すカズマ。

「じゃあ、うちの駄女神の眷族にならないと冒険者になれないってことか？」

「あらあら、それじゃあ仕方ないわねカズマさん。私の眷族にならないとお金も稼げないなら、仕方ないわよねえ。ほら、この機にア

クシズ教に入信しなさいな。この、水の女神アクア様の眷族になるなら当然のことよねー?」

そんなカズマの肩に伸し掛かりながらドヤ顔を浮かべカズマをこき使うことができる優越感に浸るアクア。であったが。

「アクシズ教つてもしかして神に信仰する集まりのソレか?」

「ええ、そうよ。この世界の神々でも神を崇めるでしょ?」

「崇めはするけど、この世界の人間は神に信仰を捧げないのが殆どだ。というか、神に祈っても意味ないだろうって共通の認識だぞ。そしてお前は異世界の神だから眷族を集めることは絶対にできない。カズマ達は他の神の眷族になれるから、お前は独りぼっちになる。それでいいならカズマ達を紹介するぞ」

「そ、それは困るわ!だってカズマ達は私のパーティだもの!私を置いてどこかに行くだなんてそんなの許さないわ!」

「言つとくけど、ダンジョンの中に神は入れないからな?アクアがダンジョンの中に入ったらどうなるか分からないけど、強くないなら地上でお留守番しているかアルバイトをしているかの選択を——」

次の瞬間。アクアが一誠に縋り付いた。子供のように泣きながら駄々をこねて。

「嫌あー!そんなの嫌あ〜!私だけ置いてけぼりにして冒険するなんて、一人でお留守番やアルバイトをしてる間に私を放っておいて行かれるなんて嫌よお!ねえ、どうにかしてよ!一人は寂しいの!うわああああん、うわわわわああああん!」

こいつ、面倒くせえと心中吐露する一誠とカズマの気持ちが一致した。

「ふむ、異世界にはこのような女神もいるのだな。イツセーよ、彼女を寂しからせないよう気を使ってやって欲しい」

「はあ…….…….しょうがないなあ…….…….」

仕方なく『幽玄の白天城』に招いた。広い庭園を見てカズマ一行は驚きを隠せなかった。

「何なのだ…….…….何も無い空間からこの場所の扉が開くとは」

「魔法で隠しているのさ。この先に俺の城があるからな」

「城ですって？この森の中にあるなんて変なの」

「ここは全部庭園だぞ」

「なんと、では城はもつと先なのですか」

その先まで案内すれば広大で綺麗な泉を中心に果実や宝石を実らす木々と植物が生えていて、そこに動く金属製のゴーレムが徘徊している。

「あれってゴーレムか？」

「ああ、俺が作ったから襲ってこないぞ」

「色々な物を育てているのだな。この世界の植物なのだろうな」

「あれ全部、売れば金になるぞ」

実ってる樹木に近付き、四つ採るとカズマ達に手渡す。

「食べてみる。ダンジョンの中でしか食えない高級果実だ」

「高級?! いったきまーす!」

「おいこら! ちよつとは躊躇——!」

カズマの静止なぞ微風のごとく聞き流して齧り付いた直後。アクの目は吃驚して丸くなった後に顔が輝いた。

「うーんまーい! なにこれっ、果実なのにステーキみたいに肉の味と触感がして滴る果汁も濃厚だわ!」

「確かに、これは美味ですねっ」

「ああ、高級肉にも劣らない美味しさだ。カズマも食べてみるといいぞ」

「お前らまで、あーもうしようがねえな・・・美味い!」

「美味しさが分かってもらったところで城に向かうぞ」

どこに? と疑問符を浮かべるカズマ達の目の前で光る道が出来上がる泉の上を歩きます。その後ろに恐る恐るとついでに行き、泉の中心に立ち止まると足場が降下し始めて縦型の水族館の中にいる気分になりながら神殿がある所まで降りていく。

「あれがお城ですか？」

「違うぞ。あそこから城へ移動するんだ」

「なんでそんな面倒くさいことをするわけ？」

「遊び心だがなにか？」

「俺にはわかるよ。密かに作った自分だけの特別な何かを自慢するわけでもなく、作るなら仕掛けの一つは欲しいし完成した時の瞬間を楽しみたいだけだもんな」

「ほう、そんなこと言ってくれた転生者や転移者の日本人はお前が初めてだ。なら、この先の光景も驚いてくれるだろうな」

幾何学的な円陣の中に踏み込む一行が眩い閃光に一瞬で視界を奪われたが直ぐに別の場所へ移動した。その周辺の光景を見回すと驚嘆の息を漏らすのだった。

「ようこそ、俺の家こと『幽玄の白天城』へ」

バベルの塔の次に高い一誠の城に繋がる道に転移した。胸壁から身乗り出して眼下を見れば先ほどまで歩いていた庭園からオラリオの街を一望できる。

「おお、これは凄い。これがオラリオの街か。アクセルの町もこれくらい広いのかもしれないな」

「お前達の世界はどんなところか知りたいもんだよ。ほら、行くぞ」
催促されて足を動かす途中で巨大な黄金の大鐘楼を見て「削つて——」「削つたらあの森に置いていく」と不穏な会話のやり取りがされたが大きな白亜の城の前に辿り着いた。

「私達の屋敷より大きいですね。一人で住んでいるんですか？」

「お前達のように異世界に転移した異邦人がいれば数人の女神やその眷族、俺のパーティー仲間が同棲兼同居している。殆んど女ばかりだから気は楽だろ」

「ハーレムかよ!?!」

「お前もハーレム状態だろ？外見だけ見れば美人と美少女だ。モテない男からすれば繋がりがあるだけでも羨ましい状況だぞ」

「性格が駄目なんだ！ダクネスは攻撃が当たらずモンスターへの攻撃を受けたがるDMだしめぐみんは一日に一回しか魔法が撃てないポイントで頭のおかしい一族の娘だしアクアは馬鹿すぎて人に迷惑を掛けないと生けない全てが駄目な駄女神だし！」

無言で彼女達を見るイツセーにアクアとめぐみんは冷めた目でカズマに指を突き付けながら言う。

「そのカズマさんはヒキニートでクズでカスでゲスな言動をするわよ」

「あと女性のパンツを盗んで喜ぶ変態ですしロリコンです」

「ふふっ、私にとって全てご褒美だがな」

「……………どうしよう。初めて保護することに後悔しちやっただぞ。」

「……………悪影響にならないといいんだがな」

「……………何というか、すみません」

「お前自身も事実なわけね。言つとくけど、人の家族に不埒なことしたら……………あの森に送り返すからな？お前が喰われようが死のうが俺の知っちゃこつちやないからな」

「気を付けます」

改めて城の中へ招く。パーティができる広い玄関ホールのある間隔等に並ぶ石柱の間を通り、更に奥へ進むとL リビング・ダイニング・キッチン D Kに続く扉に近づき開けて四人も入らせる。

「そろそろ昼飯の時間になるけど食うか？」

「よろしいのですか？ではお言葉に甘えていただきます。出される料理は全部食べるのでお願いします」

「わかった。カズマ、故郷の料理を作る。何が食べたい？何でも作つてやるぞ」

「何でもかあ……………本当に何でもか？」

「時間が掛かっていいならそれも含めて何でもだ」

「じゃあ、牛丼を頼む！」

カズマのリクエストに応え牛丼を作り始める。身近な椅子に座つて出される料理を待つカズマ達。

「カズマカズマ、ぎゅうどんとは何ですか？」

「ご飯の上に牛肉が乗った状態の料理だよ。俺の遠い故郷じゃあ人気な肉料理なんだ」

「人気の料理ならさぞかし美味しいのだろう。楽しみだ」

「そうね。はーお腹が減ったわー。ねーご飯まだー？」

「いや、今始めたばかりだから」

「いや、もう完成したぞ」

四つ分のどんぶりを乗せた盆を持って来た一誠。

「朝残った味噌汁もあったから丁度いい組み合わせだな」

「味噌汁も作れるのか。本当に何でも作れるんだな」

「俺は嘘は言わん。ほれトツピング付きだ。遠慮なく食べ」

「「おおー」」

初めてみる肉料理に目が釘付けとなる。出来立てで湯気が立ちその匂いが四人の鼻を、食欲を刺激する。

そして、我慢する必要もなくスプーンを片手にどんぶりを持つたり添えて食べ始める。

「な、懐かしい味！久しぶり過ぎて手が止まらない！」

「これは美味しいです！揚げたり挟んだりする以外でこんな作り方もあるんですね！」

「実家でも様々な肉料理は食べてきたが。このぎゅうどんという肉料理の方が好みだ。・・・ふう、このスープもいい。肉の脂っこさを消してくれてまだ食べ続けられるように考えられているのだな。素晴らしいぞ」

「ジャイアントトードのから揚げだって負けてないわよ。でもまあ、認めなくともない美味しさだわね」

好評な牛丼はお替りを強請れば何度も作ってもらい、何回も食べてどんぶりが数段積み重なった果てに腹が膨れるほど大満足したのであった。

「はふう・・・とても美味しかったです。ごちそうさまでした」

「イツセー、宮廷の料理人になる美味しい料理だったぞ」

「まあー私から言わせればまだまだね」

「おい、じゃあお前はイツセーより美味しいもん作れるのかよ。お前の料理よりイツセーの料理の方が何倍も美味しいんだからできないだろ、できないんだらうこの口だけ駄女神が。できないんならイツセーに感謝しながら黙って食べこの駄女神が」

「酷い！駄女神って二回も言ったわね、言ったわね！だったらいわよ、カズマの分の料理はもう用意してあげないんだから！」

「おー上等だ。俺は今後ともイツセーの料理を食べるグータラ生活を

送ってやるぜ。違う世界に来てしまった以上、魔王討伐なんてやらなくともいいんだからな」

「ちよつと、それは困るわよ！カズマに魔王を倒してもらわないと私天界に帰れないじゃない！」

ワーワーギャーギャーと夫婦喧嘩？をする二人を一瞥してめぐみんとダクネスに尋ねた。

「アクアは女神って認識しているのか二人は？カズマはそういう風に認識してるけど」

「いえ、自称女神だと認識しています。そもそも神様は下界に降りて来ませんよ。カズマに関してはまだああ言っているだけなのかと」

「たまにあんなことを言うが、イツセーもあまり気にしないでやってくれ」

「ああ、わかった。けど、この世界の地上には当たり前のように神々はいらぞ。そこのところについては？」

「ふむ、確かミアハという神と出会った時は不思議なものを感じました。言葉では言い表せませんが、私達とは違う存在感を放っているのは確かです」

「めぐみんと同感だ。あの者が神だというなら納得のいく。きっと私が崇拝している幸運の女神エリス様もきつと女神としての威厳や風格を持っているに違いない」

つまり、今のアクアからは女神としての風格や威厳が微塵も感じられないという結論に至り、イツセーはカズマと言い争うアクアの肩に手を置いた。

「……頑張れアクア、俺はお前を応援しているぞ」

「え、なに。何で可哀想な子を見る目を私に向けるの？ねえちよつと聞いている？」

多くは語らない。どんぶりの後片付けに入るイツセーだった。

それからしばらくしてー。

「ここが風呂場だ。何時でも何度でも入っていいからな」

「結構広いじゃない。湯船の数も多いしブクブクって泡が湧き出てるし、お湯が流れてるお風呂もあるなんて面白いわ」

「木造の縁のお風呂もあるのですね」

「しかし、これだけ広くて多い湯船があるのは？些か多すぎる気がするが」

「それだけこの城に住む者が多いってことだ。男湯もこんな感じだが、この城の部屋にも風呂を備えてるから男が入るのはまずその部屋の中の風呂場で済む。泊まり込みで遊びに来る男連中以外は利用はしないし」

風呂場の次は地下の鍛冶場へと案内する。

「ここは俺の作業場の一つ、鍛冶をする場所だ」

「お前も鍛冶ができるのか。俺も鍛冶スキル持っているからちよつとした事ができるよ」

「へえ、だったら何か作ってもらおうじゃないか。俺以外にももう一人、鍛冶の達人の鍛冶師がこの城に住んでいるから拝見させてもらおうぜ」

「あんまり期待だけはするなよ？」

「興味があるだけだ。気にするな」

続いては地下施設。

「ここはプールだ。男性と女性用の水着が沢山あるからその中から選んでいつでも利用してもいいからな」

「こんなものまで作ったのか。凄すぎだろ」

「遊び心に限界はない。次は屋内で遊べる場所を案内するぞ。カズマ、バスケットしてみないか？体育館のような施設もあるんだ」

「本当に何でもアリだな!？」

その後は四人が暫く使う部屋を紹介する。

「今は何も無いが、こういう部屋が四人の部屋になる。一人一部屋でもいいし」

アクア達が女同士で一緒に寝てもいい」

「できれば個室がいいわ。用意できるかしら？」

「勿論用意しよう。家具や寝具、衣類はこれから大金を渡すからそれで買ってくれ。この世界じゃ無一文だろ」

「元の世界でも無一文で借金を抱えているがな」

「どういう生活すれば借金生活をするんだ?と心情を抱いてしま
一誠であった。他に案内しようと歩く最中。

「ところでどうやってお金を稼ぐのですか?冒険者がいるなら冒険者
ギルドもありますか?」

「あるぞ。稼ぎ方はそつちの世界と同じだと思う。クエストを受けた
り、ダンジョンの中で討伐したモンスターから得られる素材や壁の中
にある鉱石の発掘、ポーションの素材の採取を手に入れてギルドや商
人に売って稼ぐ他にも、俺のように商売するかカジノで稼ぐか、労働
で身体を張って稼ぐとか色々だな」

「か、身体を張って……!ハア……ハア……肉欲を貪る獣と
化した男達が無理矢理、私の鎧や服をはぎ取って嫌がる私の身体を性
欲を満たすまで蹂躪される……くっ、身体を好きにできても心
まで好きにできると思うなよっ……!」

「おい、そこだけ食い付いて興奮するな!イツセーが凄くドン引きし
てるから!」

DMな友人や知人、家族がいない一誠にとってその手の対応する免
疫が全くなくどう扱っていいのか困惑してしまう。

「カズマ、ダクネスの対応を教えてくださいませんか?こんなあからさまな
変態と一つ屋根の下で暮らすと他の皆にも悪影響が出かねないんだ」
「本っ当にすみません!もうこの変態の対処は自由にしていいから見
捨てないでください!」

「くっ……今日あったばかりの男に変態呼ばわりされるとは……
悪くないぞっ」

「わかった。早速そうさせてもらう。——お前はもう黙れ!」

ダクネスの顔を驚掴みにして初対面の相手に電撃を食らわす。
通常の人なら痺れて動けなくなるが。

「あつはああああああああんっ!しゅごおおおおい
いいいっ!」

「んだとっ……!?!」

黙らすつもりで放った電撃が通用——どころか顔を赤らめて快
楽を覚えるダクネスに戦慄する一誠。

「魔法の耐性が異常に高いのかこいつ……?」

「いえ、単純に変態なだけです」

「気絶するレベルの雷魔法を食らっても気絶しないのは変態だからって済まされてたまるか!?それともクルセイダーって魔法耐性が高い何かか!」

「いえ、単純に防御力が高い職業でお腹に六つも割れた腹筋の変態なだけです」

「変態を付属品のように言ってくれるなよ『い、今のをもう一度してくれイッサー!』ってお代わりを要求するなよ!」

拳骨を食わらつても痛みで快楽を得るダクネスの顔は蕩け、とても幸せそうに笑む。

「ふ、ふふふつ……カズマからは罵声にイッサーからは体罰を越えた暴力……二人に責められる生活も悪くないなつ。イッサー、至らぬ所があつたら遠慮なく暴力を振るってくれ。いや寧ろ理不尽に毎日してくれても構わないぞ!そうしてくれば私は毎日罵倒と暴力の生活を送れて幸せだ!」

「もうこいつ嫌だ!何なの変態って、変態ってこんな人種だったっけ?DMってこういうのだっけ!?そういう対処方法は知らない、教えてくれりーラ!?!」

混乱して我を失いかげ真紅の雷を迸ながら一誠が巨大な魔力を作り出す。

「お、落ち着いてくれイッサー!」

「ちよつ、あれから膨大な魔力が感じますよ!?不味いです、今すぐ逃げないと私達が死にます!」

「カ、カズマさんどうにかしてええええええええつ!?!」

「寧ろバツチコーイ!!!」

次の瞬間。城の一部から大爆発が発生した。

冒険譚 47

「……そんな理由でイツセーが混乱していたのか」

「うちの仲間が大変申し訳ございませんでした」

『幽玄の白天城』を隠す結界が大爆発と共に解かれ、城に仕えるメイド達からの緊急報告によって急遽駆け付けたリヴェリア達。そこには見知らぬ四人の男女が見るも無残な爆発の痕跡を残す、辿り着いた現場を見て絶句する。頭を抱えて「変態変態変体変態……」と目の焦点が合っておらず呪詛のごとく呟いている一誠を見てさらに信じられないものを見る目で驚愕する。アミツドの診査の末、精神的不安定な状態であることが分かり、状態異常の回復魔法＋回復薬で施し何とか落ち着きを取り戻させるため、一誠の部屋へ安静を強いられる間はカズマ達の尋問をしていた。

「この世界にやってきた転移者達であることは受け入れよう。お前達の所持品を確認させてもらえばこの世界の物ではないことが把握したからな。特にこの冒険者カードという代物を作成する技術はこの世界には存在しない。似ている物は唯一一人だけ作っているがな」

リヴェリアとシャクティがカズマ達の前に座り真摯な面持ちで取り調べをしていた。その場には片手だけでは数えきれない一誠と交流ある神々や冒険者達も見物目的で同席していた。

「あの、俺達は無実だったことで認めてくれるですよ？」

「ああ……イツセーに直接何かをしたわけでもないからな。純粹にあの男でも処理しきれないことに混乱していただけだ。お前達を保護するということも私達が拒絶も否定する権利はない」

心から安堵で胸を撫で下ろすカズマだった。もしもこれで追い出されるようなことになれば異世界で生きる術がない四人にとって地獄のような日々を送らねばならない所だ。

「だが、イツセーにあまり刺激を与えてくれるなよ。異世界から来た者達の中であの男が今現在最強の者で、我々では手も足もできず止めることも難しいのだ」

「あの膨大な魔力を鑑みても疑い様はありませんね」

めぐみんの指摘にローブと帽子、杖を考慮して魔法使いの者だと察しつりヴェリアは首肯する。

「分かるか。異世界の魔法使いの者よ」

「ええ、何せ私は紅魔族随一の天才ですからね」

「紅魔？」と鸚鵡返しをするリヴェリアに呆れた目でめぐみんへ親指を突き立てながら語り出す。

「紅魔族ってのは魔法のエキスパートで凄い上級魔法を放てる上級魔法使いの一族——何だが、変な名前を持つ頭のおかしいばかりな人間なんだよ。実際こいつの名前はめぐみんって言うし、他の紅魔族の人と違って頭がおかしいことに爆裂魔法しか使わない一日に一度しか使えず、使った後は魔力切れですぐ戦闘不能になるポンコツだ」

「おい、まるで役に立たない魔法使いのように聞こえるんだがそこらへんもっと詳しく聞こうじゃないか」

「聞こえるんじゃないかって実際そうだろうっ！もっと他の魔法を習得しろよな！」

「お断りしますよ。何せ私は爆裂魔法を極める最強の魔法使いめぐみん！どんな相手だろうと巨大な山だろうと全て我が爆裂魔法で吹き飛ばしてみせるのです！」

この瞬間、アスナは悟った。この子、中二病な娘なんだねと。

「魔力切れになるならば、体に合うか分からないが精神回復薬を飲めば回復できよう」

「なんとっ、この世界には魔力の回復を促すポジションがあるのですか!?魔法使いにとっては福音的なマジックアイテムですね！欲しいです、それはどこで手に入りますか！」

「落ち着けロリっ子！今はそんなことよりもっと大切な話をしている最中だ！」

「誰がロリですか！私なんかよりロリな者はあそこにいるではありませんか！」

アイズ、アリス、ラトラ、レギン、レイネル、春姫へ指を差すめぐみんに指摘された当人達はロリ？と理解が出来ず首を傾げる。

「話を戻しても構わないか」

「あ、すみませんでした。続けてください」

「イツセーの代理として言わせてもらうが、お前達を保護する代わりにお前達も日々何か活動をしてくれ。ダンジョンの中で探索するもよし、イツセーの店で働くのもよし、異世界で培った経験をこの世界で活かすことも何でもいい。イツセー曰く、自墮落な生活をする者は城から追放する」

うげっ、とカズマとアクアの顔が嫌そうに顔を顰めた。

「あの一、ダンジョンの中ということはやはり洞窟みたいな感じですか?」

「基本的にはそうだ。しかし、天井が高い階層もある。階層を下る度にモンスターが強さも増す他、ダンジョンの罨も冒険者に牙を剥く」「わ、罨だと……! 一体どんな卑劣な罨がるのか、是非とも知りたいな……っ」

熱で浮かれたように真っ赤な顔で興奮し出すダクネス。性癖がここで醸し出す彼女にリヴェリア達は怪訝な気持ちを抱いた。

「罨と言っても、突然ダンジョンの全ての空間から大量のモンスターが発生するようなものだ。その状況になったら即座に対応しなければ死ぬのが常識だ」

「大量のモンスターが狭い空間に発生……! 卑劣な罨にかかった私を襲い掛かって散々私を蹴ったり痛めつけたりした後は、きつとダンジョンの奥にいるだろうボスのところへ連れていかれて身動きが取れないこの私の身体を——e t c」

そこから先は聞くに堪えない内容が語られ続け、これが原因で一誠もおかしくなったのだと理解したくもないがしてしまった。

「妄想癖が激しいのだな……」

「うちの変態が本当にすみませんっ」

またアスナは悟りを開いたように遠い目で「Mな人なんだね」と心情を抱いた。そこへ一堂に会している皆がいる空間の扉が開き、大量に何か詰まった四つの亜麻袋を載せた盆を持って入ってきた四人のメイド達の先頭を歩くシルヴィー。

「この『幽玄の白天城』の主、イツセー様から伝言をお伝えしにまいり

ました。『この金で生活に必要な物を買え、手が空いているならオラリオの街を案内しつつカズマ達の買い物の手伝いをしてやってくれ』以上です。カズマ様達に援助金として五百万ヴァリスを提供いたしますので今日中に必要最低限の物を買ひ揃えることを我が主のお望みです。その後の日程は歓迎パーティーを致しますのでお楽しみにしてください」

「「ご、五百万!?!」」

無一文から小金持ちになった四人がおっかなびっくりで目を丸くする。カズマ達の前に置かれた亜麻袋の紐を解けば、金貨の金の輝きが解き放たれ四人の顔を照らす。

「シルヴィー、イツセーは落ち着いたのか?」

「はい、私達メイドとアミッド様が全力で献身的にイツセー様を癒しましたところ、精神は安定して落ち着きを取り戻しました」

「そうか、感謝する」

「いえ、ようやくメイドらしい事が出来て嬉しい限りです。他のメイド達もイツセー様のお世話が出来て喜んでおりますし」

一誠に救われた女性達の中で一誠に恩を返したいと家政婦となった者もいる。毎夜毎夜、歓楽街に足を運んで人材確保を目論んでいる一誠にとつて家政婦にすることはあまり考えていなかったが、臨時に店の方へも回せるように育成もしつつ愛情を込めて接している。

「同時にイツセー様も混乱することもあるのだと知れて新鮮でした」
「・・・そうだな」

完璧超人だと思われていた者でも完璧ではない所があった。

「ということだカズマとやら。手が空いている者にオラリオの街を案内させる。順に色々と覚えてもらうがいいな」

「お願いします。あと、イツセーにお礼を言いたいんだけど」

「私から伝えておく。日が暮れる前に買い出しに行くといい。夕食まで終わらせないとイツセーの絶品な料理を食べ損ねるぞ」

「ねえ、シユワシユワある? あ、ビールならあるって言ってたけどその酒も飲めれるのよね?」

目を輝かせて訊くアクアの言葉に今まで見守っていたロキが飲み

仲間が現れたと嬉しそうに口出した。

「おつ、自分酒が好きな口か？勿論あるでー。イツセーなら浴びるほどビールを飲ませてくれる筈や」

「浴びるほど!? こうしちゃいられないわね。ほら皆。さっさと買い物終わらせるわよ！ついでにこのお金でこの世界のお酒も買っちゃおうかしら」

「アホか！生活できる環境を整えろって言われたばかりだろ！すみませーん、誰かこの馬鹿が大切な資金を酒に替えないように見張ってもらえませんか！」

「ウチが見張ってやろうか」

「アンタから駄女神と似た何かを感じるから駄目だ。……失礼ですけど女性ですか」

「おい、今ウチのどこを見て訊いたのか説明してもらおうか自分」

そんなこんなで買い出しに出るカズマ達に付き合う面々。付き合いわない面々は解散して自由に時間を過ごす。リヴェリアとアスナは一誠の部屋へと訪れる。ノックすれば扉をメイドが開けて中に入れてくれ、数えれない人数のメイドが甲斐甲斐しく一誠の介護をしていた。というより上半身裸で天使の翼を生やす一誠が、バルコニーで日光浴をしつつメイド達に翼の手入れをさせていた。一誠の看病していたアミッドは胡坐を掻いた足の上で対面に座らされて抱きしめられながら真紅の頭を撫でている。

「……行ったようだな」

「ああ、お前の指示通りに動いている」

「イツセー、大丈夫？」

「ん、落ち着いた」

アミッドを優しく放してゆつくりと立ち上がり、面倒をかけたと念を込めてメイド達に感謝の言葉を送り抱擁を一人ずつして部屋から退室してもらった。全員、顔を赤らめていたがリヴェリア達は気にせず上着を羽織るように着る男に目を向け続ける。

「あのダクネスという者とは少々接するのは控えた方がいい。お前が混乱してしまうのも無理はないこともわかった」

「リリアはドMって概念を知らないだろうから言うが、罵りや痛みを快楽として得る性癖の一種だ。俺の魔法の攻撃でも痛みよりも快楽として感じてしまう生粋の変態だから、そんな相手をどう黙らせばいいのかわからなかったんだ」

「イツセーの魔法が通じない？それって凄くない？」

「あの性癖だから、変態だから耐えた。全力じゃなかったとはいえ、変態だけで耐えられるそんな事実は受け入れられなかったんだよ……ドMの対処方法は知らなかった俺のミスだ」

「逆に知っていたら凄いいけど、これからもこのお城に住むんでしょ？大丈夫？」

「ん……遠慮なく対処してもいいってカズマから了承を得てる。これから手加減なしでやる。接し方も俺の普段通りにする。もう混乱はしない」

なら良かった安心するアスナ。リヴェリアは更に問う。

「イツセー、あの四人のこれからの活動に何か指摘することはあるか？」

「特にはない。今はオラリオの街を慣れてもらう。頃合いを見てしばらく自由にさせておく」

「お前がそう言うならそうしよう。それと彼等の持ち物にお前が興味を持つ物があつたぞ。冒険者カードという『ステータスプレート』と似た物だった」

「異世界の『ステータスプレート』……確かに興味があるな。一度それを教えてもらって更に改良できたら……」

顔を輝かせながら職人顔となった一誠。本調子に戻った様子を見て一安心するも、またとんでもない物を作り出そうとする男に三人は見守る。

「あ、そうだイツセー。このお城を隠す結界が消えちゃって見えてるよ」

「ん？ああ、俺が混乱しちゃって制御が出来なくなったからか」

一誠が指を弾くと、魔法の結界が再び丸見えの状態だった城と外壁を隠す様は空気のように溶け込んでいった。最初からそこになかった

たように消失した長大な建造物を。

「ねえ、君って結界を斬れる魔法あるんだっけ？」

「え？ライト・オブ・セイバーならできますけど、どうしました？」

「気になる物を見つけちゃってね。それを暴いてみたくなっちゃったんだよ」

銀髪に頬に傷跡がある少女が見た消えた建造物の方へセミロングの黒髪をリボンで束ねた紅目の少女と西の方へと赴く。詳しく教えてもらえず分からないままついて行く黒髪の少女は、共に北西と西の間の廃墟しかない寂れた区画まで銀髪の少女が忙しなく目で何かを探し出す。

「確かこの辺りだったんだよね」

「何が？」

「大きな石壁に塔みたいなのがあつたでしょ？あれが蜃気楼のように消えて見えなくなったんだよ」

「そう言えば、爆発音も聞こえてましたね」

「うん、最初は何だろうと思ってただけだけどかなり遠くにいたから取って気にしなかったけど、私の視界から消えたから気になったんだ。うーん……」

彼女が消えたという建物の痕跡は見当たらず、寂れた廃墟の区画は物静かだった。古びた教会の中を探してもこれといっておかしなものはなく、銀髪の少女の中で疑問が尽きない。協会から出てあの巨大な石壁が

「ねっ、試しに魔法を使ってくれない？」

「ここですか？わかりました。ライト・オブ・セイバーツ！」

手刀の先から光の剣を具現化させて何も無い虚空に向かって振った。何もなければそれでよし、しかし逆ならどうする——？と光剣を振るう少女を見ながら考え事をしていた銀髪の少女の目の前で魔法の光剣は何かを『斬った』。

「っ!？」

城の中で寛いでいた一誠が酷く焦燥に駆られた様子で椅子を弾き飛ばしながら立ち上がった。

「イ、イツセー? どうしたの?」

「・・・・・・張った結界が消された」

「消された? この城を隠す結界は干渉を受けるのか?」

「結界だからな。城そのものを隠して守護していた。この城の外壁まで近づくと見えない壁みたいなものに触れる感覚をするんだ。以前、ヘルメスとロキが上空から侵入しようとした経験をされたから半球状の結界に張り直した。いや、それよりもこんな事できる奴がこの城を暴いた。結界破りの魔法か何かで消したんだろうが、何の目的だ?」

監視用の魔方陣を展開して外の様子を監視する。すると、目の前に現れた巨大な石壁を見上げる銀髪の少女と黒髪に紅目の少女の二人が見上げていた。

「こいつらか」

「あれ、この紅い目の娘・・・・めぐみんちゃんに似てない?」

「身に纏っているローブも加味してな。まさかだとは思うが、この者達も異世界から来たのでは?」

二人の言葉は無視できまいと調べる必要があると外壁を開け放った。

「開いたっ・・・・!」

「中に入ってこいつてことだね」

「もしかして誰かがどこかで見ているんじゃない?」

「それを調べる為に進むしかないよ」

腰に佩いていた得物を手にして慎重に進む銀髪の少女と、スタッフを両手で握り外壁の向こうの森林へ足を進める黒髪紅目の少女達。

「ほう・・・・我輩達もあの中に入ることを吉と出ているな。行くぞ店主」

「ええっ、中に何かあるのかわかりませんよ?」

「たわけ、これ以上の聞き込みは意味を無くし途方に暮れていたポン

コツ店主の今後の運命を左右する時ぞ。いいから行くぞ、もうじきあの扉が閉まってしまおうではないか」

「うん？招かれざる者が二人追加だな」

「どうするっ？」

「じゃあ、こうしてくれ」

二人が警戒しながらも自然豊かで道標として青水晶と白水晶で埋められ作られたルートに沿って歩いていく。モンスターの気配は一切感じさせない鳥の囀りと木漏れ日で幾分か警戒が和らぎ、一体ここは何なんだろうと思いつながら突き進めば、湖がある庭園の前に辿り着いた。

「果樹が生えていますね。もしかして果樹園？」

「そうかもしれない。美味しそう……」

そして実る宝石を見て職業柄欲しいと欲を抱いた時、湖を背に一つの真紅の魔方陣が発現して栗色の長髪と榛色の瞳、腰に唯一無二のレイピアを佩いたアスナと深緑の長い髪で仙姿玉質せんしぎよくしつな容姿のハイエルフのリヴェリアが最高質の魔石を備えた杖を片手に持って現れた。

「ここまで不法侵入してこられたのは三度目だな」

「不法侵入って、扉が開いたら気になって入ってしまったよ」

「結界を破ったから自動的に開いてしまう仕組みなのだ。何も知らず好奇心で私達の家の敷地に入り込んだお前達に反論も異論も許されない。——理不尽だと思われようこの世界はそういう世界だ」

「あ、あの待ってください！私達は——」

問答無用とアスナは黒髪紅眼の少女にレイピアを鋭く突き付けた。驚きで瞠目して身体が硬直した彼女を守ろうと銀髪の少女が滑り込み、ダガーで攻撃の軌道を逸らし庇った。

「随分乱暴だねっ。勝手に入った私達が悪いだろうけどさっ」

「ごめんね。でも、誰も破ったことがない結界を破った二人には警戒しなくちゃいけないの」

「好奇心が仇になっちゃったってわけだ。ごめんねゆんゆん」

「ライト・オブ・セイバー！」

横に跳ぶ銀髪の少女の後ろにいた、手刀の先から光剣を具現化して振るうゆんゆんと呼ばれた黒髪紅眼の少女。直接当てず後方へ飛び退くアスナをけん制する形で地面に切り裂いた。

「私、人に向けて魔法を撃ちたくありません。ですからどうか話を――」

「すまないがそういう訳にはいかない事情がある。お前達の力量を図るためだ」

「ある程度戦ったら分かってくれるってことかな？」

「それがこのお城の主からの要望であるからね。リヴェリアさん、魔法使いの娘をお願いしますね」

「え？ええ？」

未だ理解できずこちらに近づいてくるリヴェリアに困惑するゆんゆん。一方、離れたところでダガーとレイピアの攻防戦を繰り広げるアスナと銀髪の少女。

「その身のこなさし、戦い慣れてるんだね」

「鍛練だけは欠かしてないわ。そう言う貴女こそ、軽々と動くわね。魔法もあるんでしょ？」

突き続けられるレイピアを受け流し、見極めて回避する銀髪の少女もただの人間じゃないことを察するアスナ。鎌をかける意味で言うと、銀髪の少女が挑発に乗ったように新たな動きを見せた。

「お見通し？なら、遠慮なくっ！『バインド』！」

突きだした掌から数本の縄がアスナに向かって飛び出す。己を拘束する魔法だと察し、レイピアに魔力を帯びさせて横風に一閃。縄を斬った。

「嘘、斬られたっ?!んじゃ、『ステイール』！」

繰り出す別の魔法に警戒するアスナだったが、手の中の柄を握る感触が不意に無くなって、レイピアが手の中に無いことに驚きを隠せなかった。アスナのレイピアは銀髪の少女の手の中に収まっており、勝利を確信した不敵な笑みを浮かべている。

「降参する？」

「今のは相手の持ち物を任意で奪う魔法？」

「ふふ、どうだろうね。さ、まだ戦いを続ける？」

相手の武器を奪い戦闘は有利に引き込めた——手の中から光の剣を具現化するアスナを見るまではそう思った。

「魔力で作った剣も奪えるかな？」

「参ったねー……いいことを教えてあげるよ。さっきの『ステイール』はランダムで相手から物を奪うんだ。それは衣服や下着だってね」

「えっ？」

「丸裸にされる勇気があるなら、喜んで戦ってあげるよ。『ステイール』！」

「まっ——！」

焦燥に駆られ思わず制止の声を発するアスナから離れてゆんゆん相手に挑もうとしたリヴェリアは。

「名前はゆんゆん、出身地は紅魔の里に産まれた紅魔族、アクセルの街で冒険者家業をしている。間違いないのだな」

「は、はい……」

「それを証明するものはあるか？」

「え、えっとこれです」

「……冒険者カード。めぐみんという者を知っているか？」

「めぐみんを知っているんですか？」

「異世界から来た者として保護した。他のパーティーのメンバーもな」

ゆんゆんから情報を得る為に事情聴取をしていた。

「どうやってこの世界に？」

「わかりません。突然光に包まれたと思えばアクセルの街じゃない街中にいて、あ、クリスさんという人と情報を集めていました」

そのクリスというのが……とアスナと戦っている銀髪の少女の事だろうと横目で見たら。

アスナがスカートを片手で抑え、もう片方を攻撃の意思があると光剣を突き付ける。何故その姿勢でいるのか、彼女の黒い三角形の布を

握り締めているクリスと硬直状態になっていた。

「返してくれないかなっ」

「じゃあ、私の勝ちってことでいいね？ じゃないと、どんどん服を奪っちゃおうよお〜？」

「く・・・ううう・・・っ！ 参りました、私の負けですっ・・・！ だから早く返してっ」

涙目で羞恥により耳まで真っ赤なアスナの敗北宣言により戦闘は幕を下ろした。不憫でならない彼女に憐みを禁じ得ないリヴェリアに——高笑いする声が聞こえた。

「フハハハハハ！ 相手の衣類をはぎ取り勝利ももぎ取るその所業、正しくあの小僧に初めて盗賊スキルを覚えさせたパンツ脱がせ魔の師に相応しいな！」

「なっ、誰がパンツ脱がせ魔の師だよ！」

黒のタキシードを着て白のネクタイをした大柄な人物。半々に分かれた黒と白の仮面を被り、蒼白な顔色にウェーブのかかった顔の右半分に斜めにウェーブのかかった長い茶髪にアホ毛、茶色目の巨乳の美女。紫色を基調としたローブで身に包む出で立ちで樹木の影から姿を現した。

「お前達は何者だ？」

「初めましてだ。我輩は地獄の侯爵にしてこの世の全てを見通す大悪魔、バニルである。そしてこっちはへっぽこ店主だ」

「違います！ 酷いですバニルさん！ 私はウイズと申します」

悪魔という単語にリヴェリアは眉根を寄せた。

「悪魔だと・・・？」

「その通りだ。その小娘達と同じ世界に存在していた我輩バニルさんである。我輩達も同じ現象でこの世界に来たのだ。故に我輩の登場で興味津々に覗いている貴様らが慕っている者に用がある。異世界に繋げる魔法を得ているのだろうか？」

「っ!？」

何故それを、と二人は心中動揺した。

「フハハハ、動揺するのも無理もない。我輩は全てを見通す悪魔だ。

この世の全てを、何でも見通す悪魔であるからして——昨夜すんごく可愛がられて、今夜じゃなくても昼間からでもどこでもとてつもの気持ちいいことをしてもらいたいなど思っている男に魂まで夢中な娘達よ」

「な、なななななあっ!?!」

「——【週末の前触れよ、白き雪よ——】」

そこまで見通されちゃうの!?!と人生で一番恥かしい思いをするアスナと口封じに永久に氷漬けしようと言魔法を唱えだすリヴェリア。

「そこをどいてもらおうか。我輩達は先ほども申したように——」

「リリア、魔法を放つのは止めてくれ。今のリリアの魔法はここら一帯が氷の世界になりかねない」

上空からドラゴンの翼を生やして降下する一誠がリヴェリアを制止する。

「ほう、貴様ただの人間ではないな? 実に興味深い」

「異世界に悪魔も興味津々だ。そっちの女性も人間じゃないんだろ? んーんと……リッチーか」

「貴様も見通す力を……いや、鑑定のスキルで調べたな?」

一誠は肩を竦める。神の前で嘘は吐けないが、この悪魔の前ではそれ以上に隠し事はできないなど。

「本当に何でも見通されるのは厄介だな。で、俺の魔法で元の世界に戻してもらおうのが予定なんだろ」

「如何にもだ。しかし、我輩達のような他の人間達もいるためそ奴らから順に元の世界に帰すから我輩達は後回しにするのであろう?」

「そういうことだ。それを分かっているなら、次は交渉か? それとも悪魔らしく契約でも結ぶか?」

「我輩ら悪魔と異なる悪魔や魔王と交流ある者から契約を申し出とはな。うむ、確かに交渉を臨んでいる。契約は後程な」

足を動かしバニルは一誠に近寄る。

「貴様の権限で我輩達も保護をしてくれぬか? その代わりに我輩達は貴様の下で色々と協力をしよう」

「實力は?」

異世界の悪魔の強さを知りたい心情で問うた質問に対して、顎に手をやってバニルは説明する。

「ふむ、我輩が爆発する量産型『バニル人形』に当たれば死ぬ『バニル式殺人光線』等々、攻撃手段は備えている。相手が人間であれば我輩は負けることはない。このへっぽこ店主もリッチー故に弱くはない程度だ」

「そっちの人間の強さはわからないけど、こっちの冒険者の強さ舐めない方がいいぞ。素手で岩を砕くぐらい強くなるからな」

「ほう、世界のレベルがどうやら違うようであるな。実に興味深い。因みにこの世界に悪魔はいるかね？」

「本来の力を封印した神はこの街の至る所にいるが悪魔はいないようだぞ。異世界から来た魔王を除いて」

「フハハハ！この世界は他の異世界から様々な人種を集めるのが好きだよ。実に愉快愉快。して、我輩の申し出はいかがかな？」

バニルとウイズを交互に見比べアスナとリヴェリアを手招き、離れたところで話し合いを始めた。

「保護する前提で俺は面白いから成立してもいいけど二人は？」

「わ、私達のプライベートをバラされるのは凄く嫌っ！」

「ロキと絶対に組ませてはならない。どうにかならないかイツセー」

おおっと、バニルを忌避していらっしやるな。二人の意見に物珍しいと思いを抱く一誠も思うところがあるわけで。

「おいバニル。俺達家族の事を全て見通す言動は一切やめてくれないか？」

「それは難しい相談であるな。我輩、人間の悪感情を糧にする悪魔だな」

「悪感情？」

「我輩は絶望や恐怖の悪感情ではなく、期待を裏切られる残念の感情や羞恥と言った方の悪感情が好みである。なので、遠いかなたの地からやってきた男のこの世界の人類や神々には決して言えない秘密をバラして——」

次の瞬間。バニルの身体を手を太いドラゴンの手に変えて鷲掴む

一誠が一瞬で移動してきた。

「悪感情を糧とするならば、怒りも好みかな？ん？どうかな？」

「フハハハ！怒りの悪感情は我輩の好みではないぞ？幼い頃、実の兄に虐待され瀕死の重傷を負わされた際にドラゴンよって救われ——」

「なあ、大悪魔さん。ドラゴンの逆鱗を味わったことが無いだろう？

——味わわせてやるよ。その仮面を少しずつ消滅させながら魂も削り取って欠片になるまで痛みと恐怖と絶望の悪感情をその身に覚えさせてやる」

静かにキレた一誠の頭部が、身体が、四肢がドラゴンに変貌して口から炎の残滓を零した。背中と腰に二対四枚の翼と尾を生やし、人からドラゴンに変身した光景を目の当たりにゆんゆんとクリス、ウイズは開いた口が塞がらず目も限界に見開いた。

「ウイズ、我輩のサポートをしてくれまいか？なに簡単なことだ。この者に我輩と謝罪をするだけだ」

「……(ブンブン!)」

相方に助けを求めたバニルの言葉に背中から三頭の首の黒い龍が生え、バニルを取り囲みつつ彼女へ消滅させる魔力を集束した状態で脅す最中、涙目で否定したウイズを見て笑みで浮かべた口の端が引きつった。

『愚かで無知な異世界の悪魔よ。我が主の秘密や過去を口にした時点で貴様の命運は決まった。潔いよく受け入れろ』

「この者の内に宿る邪龍であるな？汝の主によりしく言っただけまいか」

『たかが悪魔に従う義理はない。それに、我が主と数日過ごすだけのこと。誰一人いない場所で仲を深めるいい運動をしなごらな』

「そう言うことだバニル。魔力で構築した土の体なら苦痛も疲弊も感じないから激しい運動もOKだろ？ほら、一緒に逝こうか」

いつの間にかバニルを掴む手のもう片方の手の中にスノードームが握って、二人は光を解き放つそのスノードームの中に吸い込まれ、地に落ちた。しばらくして……ウイズが口を開いた。

「あの、あのお二人は……」

「その中にいるよ。いつ戻ってくるかは……分からないけれど」
アスナが問いに答えた途端にスノードームの中で大爆発が発生して激しく揺れた。中で壮絶な運動をしているのだろうと推測して一同はしばらくその場に佇んだのだった。それから日が暮れた頃に、全身が血肉や骨に臓器がない代わりに土くれの身体が酷くボロボロ、白黒の仮面の八割以上が削れなくなっているバニルとスツキリした顔の一誠が出てきて、城に戻ってきたカズマ達のための歓迎会の準備を始めた。

「おいバニル。さっさと元の状態に修復して手伝え」

「畏まりました我が主様！このバニル、我が主様の為に齷齪あくせくと働こう！」

——一体何が起きた？ウイズは語る。

「バニルさんでなくとも力がなければ悪魔を契約できません。見た感じではバニルさんとあの方との間で契約が結ばれているわけではないようですが……不思議ですね」

「(きつとイツセーに何度も殺されかけて心が折れたからだと思う)」

一誠の強さと恐ろしさを知る者以外、二人の間で何が起きたのかも知らない者以外、理由は知り得もしない。

冒険譚48

炎と炎が意思を持ってぶつかり合いながら金属同士が衝突して火花を散らす。バサツと炎翼を羽ばたかせて空を駆ける相手に対して、赤い色の翼を羽ばたいて飛翔する者が赤い髪を激しくなびかせて肉薄仕掛ると、牽制に炎の斬撃波を放たれた。付与魔法で炎を纏う剣で果敢に切り裂き、鏢迫り合いに持ち込む。零距离での拮抗中に数え切れない数多の炎の塊が虚空から出現して二人を囲む。それが自分に対する攻撃だと悟って素早く距離を置けば逃がさないとばかりの炎弾攻撃。背後から追いかけられ振り切れない攻撃がしばらく続きセツトしていた時間制限を過ぎてしまった。

「あー、もうっ。それはいくらなんでもズルいと思うわ!」

ゆつくりと床に降りるアリーゼ・ローヴェル。対して素知らぬ顔で返すは一誠。

「これでもかなり手加減しているんだが?手加減なんてしなかったら理不尽極まりない攻撃をして完璧に負かしていたぞ」

「ぐぬっ……」

「あそこは逃げず、迎撃しながら迫ってくるんだったな。だから歯牙にも掛けないんだ」

それよりも、とあることを訊く。

「魔法の翼、慣れてきたようだな」

「ええ、ダンジョンの中じゃあ使用は限定されちゃうけど本当に凄く便利ね。気に入ったわ。空を飛べるって道具でなきゃできないもの」
新たな機動力を得てバサバサと翼を動かす、心底ご満悦なアリーゼは笑みを浮かべる。満足なら作った甲斐もあると彼女からエルフの少女へと振り返る。

「次はリユーカー?」

「はい、手加減無用でお願いします」

「手加減した方が良くと思うぞ。手ごたえを感じるだろうし」

「構いません」

空色の瞳に決意を宿して観客席の方へ行くアリーゼと入れ替わるリユーと対峙する。本人の意向に従い、手加減なしで模擬戦を開始する。開始直後、彼女の周囲に数十人の一誠の分身体が忽然と現われて囲みだす。

「………」

「ま、お前が望んだ手加減無用だ。頑張れよ？」

「ま——ぐっ!？」

素早く掴まれ床に押し付けられ……。分身体全員が一瞬の閃光を全身から迸った直後、ルームを震わす大爆発が生じた。一誠本人と観客席に爆風と衝撃波から護る防壁の魔方陣で防ぎ、一人黒コゲのエルフを残して無事に済んだ。

「え、えぐっ……。！」

「ちよ、待つて。今の何？彼が増えたと思つたら爆発したわよ!？」

「………人間爆弾と言うべきか」

席からの戦慄の声を他所にダークエルフみたいに真つ黒な身体になつてもリユーは立ち上がり、一瞬で懐に飛び込んできた男の拳で腹を殴られて壁にまで飛ばされる。更に追い打ちとばかり雷の魔法を放つて攻撃をする。三分も経たずに二人の模擬戦はあっさりと幕を閉ざす。

「あいつ、本当に強すぎよ……。！」

「Lv. 云々関係なく強いって本当ですね」

「そういう奴があいつの世界にごろごろいるのかー。アタシらの努力って何？って思っちゃまうぜ」

アリーゼ達「アストレア・ファミリア」と模擬戦を始めて数十分。散々一誠の凄さと強さを見せつけられてもうお腹いっぱいの状態。第二級の自分達でも勝てない異邦人に圧倒と圧巻。実力の差を思い知らされた。

「次ー誰だー?」

相手を待つ男の声に皆、聞こえない振りをすることにした。模擬戦を繰り返してリユーを最後に全員が一誠と相手をした。強さを理解させられた時点である男と模擬戦は遠慮したいところであるが。

「ほー、聞こえてるのに無視たあ正義と秩序の「ファミリア」がするこ
ととはな？——理解した。次はお前ら全員と手加減なしで時間無
制限の模擬戦をしてやろう」

『ちよつ、待つて——!?!』

リユーは気絶中なために退場。他全員が強制的に一誠と模擬戦を
強いられ、手加減なしの攻撃を見舞われる。悪役のように高笑いする
男と悲鳴を上げながら必死こいて抗う女性団員達の阿鼻叫喚の図が
出来上がって——。

「お、鬼……………」

「悪魔だな……………」

「イツセー、楽しそうに笑ってる」

「笑つてると言うよりも、嗤つてる……………」

アスナ達もその光景を見て一部の人間を除きドン引きする。しば
らくして一誠だけを残して死屍累々と化したアリーゼ達が出来上が
り、治療の魔法を施して解散。先にどこかへとトレーニングルームか
らいなくなる一誠に続き、アイズ達もついていき、「アストレア・ファ
ミリア」一同もこの場を後にしようと動く。

「異邦人って誰も彼も強いってわけなの？」

「えつと、多分、彼だけだと思う。イツセーは同名の神様が存在する世
界から来たから。それにあれでもまだ本気じゃないようだし」

「化け物かよ……………」

アリーゼの問いに応えるこの場に残ったアスナの話聞いて
小人族パルウムのライラは愕然とする。

「料理上手ですんごい物を作るし、L.V.云々関係なく強くて高身長
にイケメンって、どんだけだよ」

そこで意識を覚醒したリユーがライラに向かって一言。

「凄い物を作ると言えば、手先が器用なライラとは話が合うのではな
いですか？」

「おー、さくつと話し合ってみたぜ？そしたら意外に面白くて新しい
作品の発想も思いつかせてくれたんだ」

今度一緒に作る約束もしてるんだー、とシニカルに笑う同僚に静か

であるが主張する腰まで伸ばした黒い髪の少女。

「あの方の異邦の甘味も中々です。次の機会にはまた食べさせてもらえますしサンジョウノ、ナナジョウノ、キュウジョウノの者達と舞いもすることも約束してくれました」

「わお、もう皆イツセーと仲睦まじくなってるわね。リユー、貴方は？」

「それは……翼の手入れを頼まれました」

「「お風呂で？」」

ち、違いますっ！と気恥ずかしさで顔を朱に染めて否定するが、そんな反応をしてしまったので周囲はお盛んですなー、的な意味合いが籠った視線を向けられてしまう。

「あー、あいつに抱かれて一皮むけたかりユーも」

「強制ではない分、安心してらるけどね私達に対する扱い方」

「逆に自分の意思で求めれば応じるそうです。……真に快樂の快感は心地よいですよ。アストレア様は毎晩のようにイツセーと交わっていますし」

「ま、毎晩……」

神の眷族として「ファミリア」に入団してからの付き合いの長い女神が、初めて見た淫らで艶やかな表情を貞操を捧げて以降も毎晩しているのか。啞然と共にあれ以来男と身体を重ねていない一部除く女性団員達の下腹部があの時を思い出したかのように反応して疼き、熱が宿った。刻まれた快感は決して忘れられるものではない。忘れても呼び起こされるものだ。クールビューティなりユーでも羞恥心とは違う意味で顔を赤くして自然と臍辺りの腹部に手を添えた。「勿論私も共に閨を過ごしていただいています。ふふ、もはやこの身はあの殿方ではないと……」

何がでないのかと問いたしたが、輝夜の恍惚とした表情を見て何も言えなくなる。では、と極東出身の少女はアリーゼ達より早く先に進んでどこかへと向かう。そこは自室か街か定かではないが、彼女の背中を見つめる面々は少し主神に対して罪悪感を覚えた。

模擬戦からそれなりに時間が経った頃。カズマは一誠にある人物と引き合わされた。

「おー、お前が新しく来た日本人か。よろしくな新人」

「よ、よろしく」

大和大輔から朗らかに握手を求められカズマが応じる隣で話しかける一誠。

「こいつも別の世界の日本から転生してきた。海童はもう知ってるが大和は知らんだろ?」「アマテラス・ファミリア」に所属している転生者だ」

「つて、ことは何か特典を?」

「願ったぜ。主人公のアニメキャラクターの能力をな。でも、イツセーにコテンパンにブチのめされて最強の能力じゃないって思い知らされた」

自嘲的な溜息を吐かせる原因の一誠を見て、信じられないと感想を抱く。

「カズマだっけ?お前はどんな特典を願ったんだ?」

「えっと、女神です」

「……今なんて言った?」

「女神です」

思考と共に表情が硬直する大和。静かに何度も頷く海童が「気持ち分かるぞ」と言いたげだった。そして停止した思考を再稼働できた大和がカズマを詰め寄った。

「はあああ!?!女神?え、チートな能力や装備を貰える特典なのに転生させる神自身を特典で願えるもんなのか!?!そんなゲームや小説でも見たこともなければ聞いたこともないぞ!そんなのアリか、しかも女神自身も神の力を振るえるならチートを越えたチートじゃないか!」

「ところがどっこい、うちの女神はな。知力が0で幸運値も低いステータスを裏切らない言動をしてくれてよ。余計な騒ぎを起こすわ、借金を作ったり増やしたり、人のことコケにしたりブークスクスと馬鹿にしたり、酒に溺れてゲロ吐くわ、女神なのに女としての魅力が0で自分じゃあどうしようもない時に直ぐに泣きじやくつて縋つてく

るし、水の女神って自称してるのに花鳥風月ー！とかいって宴会芸の真似事したりトイレの女神様とか二つ名を呼ばれるようなことをしたり、他にも――」

「・・・わかった、もう言わなくていい。かなり苦労しているのは聞いてよくわかった。そうだよな、見た目が綺麗でも性格まで同じとは限らないよな。それなのにお前はチートな能力や装備無しで転生先の世界で苦労して頑張っているんだな。凄すぎるよカズマ、尊敬するぜ」

慰めも兼ねてカズマの肩に手を置いた大和に「ありがとうございませ」と頭を俯いてそう零すカズマ。

「何とも言えない顔合わせを済ませたところであいつにも教えないのか？」

「・・・あいつ？もしかして他にも転生者の日本人がいるのか？」

一誠に向けた海童の話に気になりカズマも一誠に訊くと首肯する仕草をした。

「ああ、自称勇者だ。そいつは一見最強で無敵に思える装備を特典として願った転生者だ」

「ならチートだよな？」

「攻撃せず装備を奪えばチートじゃなくなるんだよ。そうすれば無敵から最弱になり下がって」

刹那。一誠が振り返っては振り下ろされた剣を両手で力強く挟んで受け止めた。明らかに攻撃の行為をした相手は全身型鎧を着込んだ、光輝勇であった。

「誰が最弱だ。俺は勇者の力を得た選ばれし人間だぞ」

「悪人でもない人の背後から斬りかかるのが勇者のやる事か？今度はこの剣を壊してやろうか」

両手に血のように赤い宝玉がある紫色の籠手を光と共に装着して禍々しいオーラを帯びる。そのオーラを見て冗談ではないことを悟ったか、舌打ちをして攻撃の意思を消した。武器から手を放す一誠は籠手を嵌めたまま親指で光輝に指す。

「こいつが三人目の日本人の転生者、光輝勇だ」

「えつとども、佐藤和真です」

「……ふん。今更転生者が増えようが俺の関係のない事だ。無駄なことに付き合わされる暇などない」

マントを翻して一誠達からさっさと離れていなくなった。

「取り敢えず、このオラリオにいる転生者はこんな感じだ。本当はもう一人いるけど牢屋の中にいるから会えないが」

「一体何を仕出かしたんだ？」

「冒険者のステータスを言葉通り奪い続けた。奪われた冒険者のステータスは初期になって大変な思いをまた零から頑張っている」

「それは、何てはた迷惑な……爆裂魔法を奪われたら絶対めぐみんが落ち込む」

想像も難しくないことで現実になったらと思えば嫌な汗が額に浮かぶカズマの言葉に大和は首を傾げた。カズマのパーティーメンバーを知らない故に。

「めぐみん？何だ、その変な呼称は」

「13歳の少女の名前ですが何か」

「そ、そうか……異世界にはそういう名前の人間もいるんだな」

「因みにめぐみんだけ限らずめぐみんの一族も変な名前ばかりですが何か」

……もう何も言うまいと遠い目で思う大和だが。

「もう一人貴族の女騎士が仲間にいるんだけどそいつ、妄想癖が激しいドMだ」

「あれ、まともなパーティーの仲間がいない？」

「そのまともなじゃないパーティー仲間曰く、カズマも平気で仲間や他人の下着を奪う、クズマさん、カスマさん、ゲスマさんと言う三拍子が揃った不名誉な称号を持っているロリコンニートだそうだ」

こいつも常識的な奴じゃなかった！海堂も知らなかったようで、カズマを見る目が変わった。

「お似合いのパーティーだよお前らは」

「ちよ、そんな蔑んだ目で見ないでくれっ。事実だとしても！」

「おおー、ここが魔法使い専門のお店ですか」
「すごい……」

分身の一誠に案内されたためぐみんは目を輝かし、興奮を覚える。北西のメインストリートを曲がった路地裏の奥深く。地下への階段を下り、傷んだ木の扉を開けた先にその怪しげな店があった。室内は広く、薄暗い。天井にぶら下がったまるで火の玉のような魔石灯が、作り付けの棚に置かれた蛇や蜥蜴、蠍などといった不気味な生き物の瓶詰を照らし出している。店の奥では何かを煮詰めているのか、大きな鍋から赤い湯気が立ち上っていた。めぐみんやゆんゆんが異世界の魔法使いが通う店内を落ち着きなく見回す中、カウんターの奥にいる老婆が一誠を視認する。

「おや、久しぶりに見る顔だね」

「久しぶりだなレノア、邪魔するよ」

「今回は何の用だい。そこの小娘達のことかい」

「ああ、この二人は俺と同じ境遇で異世界から来た魔法使いだ。レノアに異世界の杖を見せに来たんだ。その感想を聞かせてくれないか？」

めぐみんへ目をやりレノアへ自身の杖を突き出してもらおうと、黒いローブに長い白髪、そして鉤鼻の店主は、その皺だらけの口を一字に結んでじつと観察する。細い人差し指を伸ばし杖や赤い宝玉に触れたりして調べる目つきでいると。

「見たこともない材質と高品質の魔宝石のような物だね。この結晶はお前の世界で何というんだい」

「マタナイトと言いますよ。しかし、この世界に魔法石という物があるのですね」

「認識の違いが浮かんでるよ。私ら魔術師メイジが製作することができ魔法力を高め魔法の威力を変動させるのが魔宝石さ。いひひ、もしこの杖を売ってくれるんなら数千万ヴァリスで買い取ろう。代わりの杖はそこにいる男に頼みな」

「だ、駄目です！売りに来たわけではありませんから！」

全力で拒絶するめぐみんに気を悪くした様子ではないレノア。

「それでレノア、この世界でもマナタイトみたいな結晶を作れるか？」
「完全に同じ物つてのは無理だね。高密度に魔力を封印するだけなら魔宝石と同じ原理で出来る筈だ」

「そう。ゆんゆん、マナタイトの使い道は杖に加えるだけか？」

「え、えっとそれだけでないですよ。魔法発動時にこのマナタイトから魔力を引き出す事で魔力の消費を肩代わりさせます。その代わり使い捨てのマジックアイテムであり、高価ですけど魔法使いの人にとっては必要なマジックアイテムです」

魔力を引き出す。そんな概念のあるアイテムが異世界で存在していることを知り、一誠は己の魔力で高密度に圧縮し始めた。突然何かを始めた男にめぐみん達はそれへ注視すること一分ぐらいが経った。

「……ん、こんな感じか？」

ころつと真紅の大星形十二面体の宝珠を手の平の中からカウンターに転がす。一誠を除く成り行きを見守っていた三人はその宝珠を見て啞然とした。

「自分の魔力でマナタイトのように作ったのですか？」

「いや、こうじゃないだろうな」

「ああ、そうだ。これは単に魔力の塊そのもの。マナタイトという鉱石が結晶で加工した物こそが魔宝石のように魔法の威力を高めてくれるだろう。この塊にはそんな効果はないよ」

「だよな。んじゃあ——複製すつか」

今度は複数の翼を生やす中心に金色の宝玉と輪後光がある錫杖を発現して、手に取る一誠がめぐみんの杖に向かって錫杖を突き付ける。宝玉が輝きマナタイトも呼応して光った。そして同じ赤い結晶が分裂して一誠の手元に収まった。

「ええっ！どういうことですかそれ、マナタイトですか!？」

「ん、この杖は無限に創造できる能力がある。一度創造した物は無限に作り出すことが可能になるからこれでマナタイトは量産ができる。さて、どうやって加えようかな」

「私にも一つ寄りつけてくれよ」

クリスとダクネスは南方の繁華街の一角に案内されていた。そこに存在する大賭博場^{カジノ・エリア}区域は複数の賭博施設からなる。諸外国、諸都市がこぞって出店した大賭博場^{カジノ}は優等宿泊施設^{ホテル}が複合したものや、砂漠に栄える楽園^{オアシス}を模倣^{もほう}した外見など、異国情緒のある建物が多い。楕円形の広場の場所には三階建て以上の建物が屹立し、南国のヤシの木が植えられている。広場の中央では驚くほど大きな噴水が、まるで巨大な海波のごとく水を吐き出している。大賭博場^{カジノ・エリア}区域の入り口、メインストリート沿いの巨大アーチ門の前で二人は感想を零した。

「建物だけでも凄い圧巻だね」

「ああ、夜に訪れていたらさぞかし煌びやかな光を帯びていただろう」
オラリオの中にいるというのにまた別世界に迷い込んでしまったような錯覚を感じてしまう二人。中までは入らずさっさと別の場所へ足を運ぶ一誠に追従する。

「ねね、今夜カジノに遊び行ってもいいかな？」

「正装の服で行かないと入れないからな」

「つまりはドレスを身に包まないといけないのか。このオラリオに貴族がいるのか？」

「オラリオの外から王侯貴族がやってくるんだ。それで長くそして大量の金をカジノに費やせばブロンズ、シルバー、ゴールドのカードが発行されて、普段は入れないカジノの中に入る権利も得られる」

話をしながらポケットからゴールドカードを取り出して見せつける。

「特にこのゴールドカードがなければ最大賭博場^{グラン・カジノ}の『エルドラド・リゾート』の中には入れない」

「グラン・カジノ……やっぱり他のカジノより凄いのか？」

「一部の冒険者や神々、『エルドラド・リゾート』のオーナーから招待される諸外国や諸都市の王侯貴族しか入れないからな。他のカジノとのレベルも大きく違ってくる。そして——そのオーナーにはきな臭い匂いが付きまわっている」

少し穏やかではない話を交えたとダクネスの表情が若干引き締まり、クリスは興味深そうにきな臭い話を更に訊こうとする。

「オーナーのきな臭いつて?」

「間接的な話だが、多くの女性を囲っているって話だ。一人や二人だけじゃすまさない、城にいる同棲や同居してる皆と同じぐらいだ」

「・・・カジノのオーナーがどうしてそこまで女の人を集めれたのか。お金でものを言わせて?」

「ん、それがギャンブルで集めたかだ。でも、今のところ被害の声は上がってないから誰も知らないしすることもできない。だが、できたならこつそりと金庫から莫大な金を手に入れたいもんだな」

うわー、悪い事を考えてる顔だーとクリスは面白そうに笑うが、対してダクネスがオーナーに己の豊かな身体を弄び尽くす想像を膨らませて興奮していた。一誠はガン無視している。

「君は調べようとはしないの?」

「オーナーがいる場所は治外法権。オラリオの権力でも通用しないから潜入がバレたら命の保証はない。——それでもいいなら、首を突っ込んでやってもいいが——どうする?」

一種の命懸けの冒険をすることになるぞと、問われるクリスはふつと小さく笑った。

その日の夕方頃、カジノへ行く選抜をするために声を掛けようとした矢先。バニルが耳打ちをしてきた。

「主よ。我輩とポンコツ店主も連れていくことを吉と出た。是非とも連れてってはくれないか?」

「カジノは悪感情で満ちてるからバニルにとっては夕食会場みたいなもんだからか?」

「フハハハ! 大変その通りであると同時に我輩の全てを見通す力を以ってすれば事が順調に進む」

「そこまで深く突っ込むつもりはないぞ。相手に動きが出なければそれでお終いだからな」

暗に動向を許す一誠が誘った『エルドラド・リゾート』行きのメンバーは調査の役割を与えられたルノア、クロエ、差し当たって万が一のことを考えてクリスとバニルを除く面々に伝える。

「ということだ。カジノ中を潜入するが動きあるまで好きに遊んでいてくれ」

「うん、わかったよ。しっかし大賭博場カジノの中でも娯楽都市サントリオ・ベガの最大賭博場グラン・カッソに行くことになるなんてね。イツセー、いつの間に第一等級ゴールドを手に入れたの？」

「ニユッフ、そんな細かいことを考えずさっさと行こうニヤ！イツセーのおかげでカジノで荒稼ぎができる！そこでミヤーはガツポガツポと大金を得て見せるのニヤ！」

ルノア等がフランチェスカ・マキャベリに用意してもらったドレスを着飾りに向かう中、シルに声を掛けた。

「オーナーは好色家のようにだ。大胆なドレスを着てもらおうようにしてくれ」

「私の目の前にも好色家がいますけどね？」

「慕ってる女を囲って幸せを満喫しているだけだから」

言い返される言葉によって照れた顔で微笑するシルを見送り――

「さてバニル。面白おかしく相手を心の底から悔しがらせ残念がらせる予定を考えようか」

「極上の悪感情を味わえるなら喜んで」

悪い笑みを浮かべる二人はよからぬ企みを考える。

冒険譚 49

世界の半分も支配する夜の闇に呼応して強く、眩く輝く迷宮都市のオラリオの一角。大賭博場^{カジノ・エリア}区域の入り口の奥で光の洪水が、メインストリート沿いの巨大アーチ門をくぐった者達を出迎える。都市で製造される魔石製品の中でも上質かつ大量の魔石灯が赤や青、紫や金色に輝き、ギルド本部の万神殿^{パンテオン}や摩天楼施設^{スカイスクレイパー}とも異なった外装の大賭博場^{カジノ}を闇に浮き上がらせる。上空から見れば、はつきりとわかることだろう。無数の警備に守られるこの大賭博場^{カジノ・エリア}区域が、常闇に包まれる迷宮都市の中でも最も明るく、不夜城のごとく煌びやかに光を放っていることを。冒険者や市民が賑わう一般区とは隔たった、オラリオの別世界である。そんな大賭博場^{カジノ・エリア}区域の中を、高価なドレスを身に包むシル、ルノアとクロエ、ウイズが先頭に多くの女性達が歩きさらにその前では一誠と——帝国の王子ダオスと主神、商人のマキャベリとヴァベルー。

「イツセー、協力は惜しまないが素性を隠さずオラリオのカジノに参加していいのか？事前に訳を説明してもくれてもオラリオに警戒を与えられるだけだと思う」

「寧ろ帝国にとって他国、他都市の商人や富豪達と接触できるいい機会だと現王も喜んで俺に協力をするためにダオス、お前を同行させてくれたわけだが。おまけに主神つきでな」

「いいじゃねえか。帝国の主神も入ればもつと信憑性が高まるぜ？」

「ええ、実に理に適うことですよイツセー殿。神はそれほどまで何事においても無視できない存在です」

「大国の主神とならば顔を覚えてもらいたい商人や経営者^{オーナー}、そして大国と繋がりを得んが為に己を売りに来る富豪達も珍しくない。帝国の若い王子よ、お前は外交という建前の小間使いをされているだけだ」

現王がそこまで考えていたのかは現王しか知らないことであるが、マキャベリの言葉に微妙な表情を浮かべたダオスを見て一誠も何だかバツ悪そうに謝罪の言葉を述べた。

「何だかごめんなさい」

「いや、気にしないでくれ。例えそうであろうと、そうさせることができるイツセーの行動力と人脈が帝国にとって無視できない存在なんだ。現王はそこに目を付けて協力を了承したのでらう」

ダオスの言葉に同感だとヴァベルは笑みを固めたまま何度も頷いた。

「イツセー殿も商人になられては？不肖、この私を手取り足取り教えて差し上げますよ」

勘弁してくれ、と返す言葉で前を向きながら会話を交わす一誠達の視線の先、広場の中でも一際目を引く建物がある。金塊を彷彿させる黄金色の外見は豪華絢爛であり、見る者の気分を高揚させる魔力があった。形だけの畏敬を表すためか、また祝福と恩恵にあやかするためか、入り口には富と成功を象徴する男神と女神の彫像が設置されている。魔石灯の輝きを放つ看板には、『黄金郷』を示す共通語コイネーが綴られていた。

『エルドラド・リゾート』。

娯楽都市サントリオ・ベガが投資・建設した、オラリオ随一の賭博施設。最大賭博場グラン・カジノへきな臭い真相を調べるべく潜入を試みる。

「おお、凄いな」

開け放たれている玄関を経て、『エルドラド・リゾート』の巨大ホールに入る。途端、目の前に広がる光景に一誠だけじゃなく他の面々も感嘆の息を漏らした。まず視界を打つのは巨大なシャンデリア型の魔石灯、次いで色と模様富人だ大絨毯、そして様々な形状のテーブルの上で行われる華やかな賭博ゲームの数々。切り札トランプ、ダイス、ルーレット。流れるようにカードが配られ、色鮮やかなダイスが宙を舞い、投げ込まれた球ボールとともにルーレットの回転盤ルーレットが勢いよく回転する。洒落た制服に身を包んだ進行役ディーラーのもと、各テーブルに集まる招待客達ゲストの姿はその華美な衣装も相まって、まるで鼻に集まる蝶のようだ。円盤状メダルの大量の賭札チップが卓上で山を築き、支払われ、配当される。テーブルの周囲では客の失意の溜息と、万雷の喝さいが引つ切りなしに飛び交っていた。大盛況の一言である。

「フワハハハハ！美味である美味である、あそこにいる獣人は次こそは勝つと全財産を叩いて勝負を出たが敗北の色が濃厚になって酷く焦っている。ああ、あそここの小さき種族は崖っぷちに立たされて今にでも頭を抱えそうに負けそうだ。うーむ、我輩のご飯製造機の悪感情を得れる場としてやはりカジノはいいな！」

「元の世界でもカジノを建設するか、働けば永遠に得られるだろうよ」「ついでにあぶく銭も稼げて一石二鳥！では我輩も換金したら行動を移させてもらおうがよろしいかな？」

「任せた。動きがあつたら順次そつちも動いてくれ。あと、あまり暴食だけはするなよ？何か遭つたら俺に伝えてくれ」

悪感情を貪りたいために相手を徹底的に負かし続けるな、と暗に告げ残し一誠も賭博^{ゲーム}を楽しむことに。

「ウイズとシル。お前達の美しさを利用してもらうことになるかもしれない。ごめん」

「気にしないでください。私は望んでイツセイさんのお手伝いをしたいのですから」

「はい、私達を保護してくれてるのですから遠慮せず仰ってください。でも、あの、このドレスは些か露出が激しいので恥ずかしいですけど」「それも含めて本当にごめん。ウイズの非常に腰が低くて気弱な性格だと合わないドレスだなとは思っている」

肩と背中、胸元の深い谷間を露出した紫色のドレスで身に包んでいくウイズ。胸元に下げる宝石のネックレスがシャンドリアの光に照らされ煌めく。己の格好が恥かしく両肘に通して撒いている長細い肩掛^{ストール}で、見事に披露してしまっている胸の谷間を隠すウイズは顔を朱に染める。

「もしものことがあれば全力で守り通す。それだけは信用してくれ」

「ええ、お願いしますねイツセイさん」

腕を突き出す一誠にその腕を掴み身体を寄せる二人と所持してきた現金を賭博^{ゲーム}用の賭札^{チップ}に交換するべくテーブルの一つに赴こうとした。

「おお、また勝った！今日もツイていますな、ギルド長殿！」

「がっはっはっはっ!!なに、日ごろの行いを見て幸運の女神が祝福してくれているのでしょうか!私は日夜、オラリオの為に身を粉にしますからな!」

大きな笑い声が、ホールの一角から聞こえてきた。

「あ、あのエルフの人、見たことがある」

「エルフの人ですか?あの、失礼ですけどドワーフの間違いじゃあ……」

真正正銘のエルフだよ、と信じられないものを見る眼差しをギルド長ロイマンマルデイルに向ける。事実上ギルド最高権力者にだ。権力と金に溺れ、墮落した彼の太った体は、容姿端麗で知られる一般のエルフと乖離している。オラリオに住まう同胞からは『ギルドの豚』の名で忌み嫌われているほどだ。ロイマンは連日この繁華街で放蕩した生活を送っているらしい。笑う度に腹に溜まった贅肉が躍るその姿は、同じエルフのリヴェリアやアリシア、レイラですら正視に耐え難いと目を明後日の方へ逸らすかもしれない。

「あれが権力と金に溺れた、墮落したエルフの末路の体現者としての姿だ。——カズマ、ヒキニートの人生を送ってもああだからな?あんな風になるなよ?」

「無理よ。だって末期だもん」

「末期じゃねえよ!俺だって体形のことぐらい気を付けるわっ」

純白のドレスを身に包むアクアに笑われ、否定するカズマは黒い服装の出で立ちで言い返す。先に現金とチップを交換すれば後方にいる皆々へ視線を送り、強い眼差しで頷くと彼女達も頷き返しチップに交換をしに蜘蛛の子が散るようにして散開、各々賭博を始め出す。異世界から来たカズマ達一行も大金を所持して楽しむのだった。

「さて、一千万ぐらい持って来たが、その半分の五百万のチップを倍に増やすかな」

チップに替えた賭博場はルーレット。見目麗しい兎人の女性が進行役で笑みを持って迎えてくれた。三人の後ろからマキャベリが近づいて口を開いた。

「ほう、大賭博の女王に挑戦するのか。これは見物だな」

「ゴールドカードを手に入れた以降、カジノに通わずいたからちよつと不安だが俺の運を信じよう」

「最初は色賭けでもしましょ？」

「きつと当たります。信じましょうっ」

右隣のウイズ、左隣のシル、後方のマキャベリの言葉に挟まれながら、一誠は赤——回転盤^{ホイール}ポケットの半分を占める最も低い配当で賭けに出た。シートに賭札^{チップ}が豪胆にも百枚置かれたのを確認すると、ヒュムバニー^{ディーラー}の進行役は慣れた手つきで回転盤^{ホイール}を回転させ、球^{ボール}を投げ入れる。見物するシル達を含めて賭札^{チップ}の追加や変更がないのを受け、進行役は賭けの打ち切りを宣言した。一誠と店側の一騎打ちだ。ダンジョンで採掘された鉱石を使用しているのか、磨き抜かれた紅玉が不可思議な光を放ちながら高速回転する回転盤^{ホイール}の上で踊る。一誠達が見守っていると、かたんつ、と音を立てて球^{ボール}は1のポケット——赤へと転がり込んだ。

「やりましたね、イチさん！」

「す、すすすごいつ！一氣に百万のお金が二百万にか、返ってきましたた・・・っ！こ、これがカジノ・・・！」

「どんどん賭けに出ていこう。これは見ていて愉快なことになりそうだ」

手元に返ってきた賭札^{チップ}を今度は更にデカイ配当で勝負をするべく、数字の縦一列に切り替える一誠は返ってきた賭札^{チップ}を全額で賭けに出た。

賭札^{チップ}二〇〇枚、横^{ダブルストレート}二列数字六つ賭け。配当六倍——的中。

「次」
賭札^{チップ}三〇〇枚、横^{ストレート}一列数字三つ賭け。配当十二倍——的中。

「次」
賭札^{チップ}五〇〇枚、線^{スプリット}上数字二つ賭け。配当十八倍。——的中。

「次」
高額賭札^{チップ}一〇〇〇枚、一点数字^{ストレート}一つ賭け。配当三十六倍。

「…………あの、本当にお賭けになるのですか？」

流石に進行役^{ディーラー}もこの額で三十六倍の賭けに勝てられたらこのカジ

「っ!？」

「よろしくな?」

優しい笑みと共に手を取り勧誘する一誠ヒュームパニーに兎デイルラー人の進行役は、胸の高鳴りを覚え、顔をほんのりと染めた。

「ほう、ナンパか?」

「違うわっ!てか、マキャベリもゲームしてくれよ」

「それは構わぬが、お前のチップで構わないか?」

「どーぞどーぞ、幾らでも持ってけ。シルとウイズも欲しいなら分けてやるぞ。現金持つてきてないんだからな」

「ふえっ!?!いい、いいんですか?じゃ、じゃあお言葉に甘えてたくさんもらいますね!」

至極嬉しそうに顔を輝かせて豊満な胸を支柱に両腕で抱えられるだけの賭札チップを掻き集めるウイズの後ろから水の神が降臨した。

「リッチーがいいなら当然私もいいわよね?」

当然のように現れてはそんなことを言い出すアクアに怪訝な視線を送る。

「おい、自分の金でやれっつったよな?」

「もうなくなっちゃったわよ」

無くなったか、それなら……。と無意識に稼いで勝ち取った賭札チップに手を伸ばさそうとした直後不自然に手が停まった。

「今なんて言った」

「負け続けてあつという間にお小遣い全部なくなっちゃった」

「なあ、まだ生活に必要な物を買ひ揃えても百万以上あつたよな?それ、全部か?」

「ええ、そうよ。だからくれるならちようだいよ。今度こそ大勝利して私は大金持ちになつてやるんだから」

事実であると呑気に手を伸ばして賭札チップを要求するアクア。思考が一瞬だけ停止しかけたが保護者を呼びつけた。

「おいカズマー!自制とか自重とか考えもしないのかこの駄女神は!?!数百万もまだあつたはずなのに普通ここで使い切るか!?!人の金を一体何だと思っているんだ!」

「申し訳ございませえええんっ！」

「あの・・・困ったことに・・・めぐみんも全部貰ったお金を使い果たしてしまいました。もう、バカッ」

「ということで分けてもらいましょうか。一気に賭けて一気に倍で勝って稼ぐのが紅魔族のやり方なのですが、全部使い果たしてしまいました」

目の前で滑りながら土下座するカズマと、非常に申し訳なさそうに薄い胸を張ってドヤ顔で物乞いをするめぐみんの隣で報告するゆんゆん。

「・・・どここの異世界でも馬鹿は万国共通なぐらいいるのかよ」

「あ、あはは・・・げ、元気出してください」

「ああ・・・この馬鹿二人は後で紐なしバンジージャンプの刑をしてやる」

「うん？なんですかそれは？」

「ちよっ!?そんなことしたら普通に死ぬわよ！」

知らない方が普通なはずなのに知っている女神は一体何なのか、カジノから帰ったら詳しくカズマから聞こうと五百万相当の賭札チップを「帰ったら覚えておけ」と不吉な言葉と共に送った。

「大変美味である」

一番得しているのはこの見通す悪魔だろう。金ではなく精神的な意味で。ふと、ダオス達の方はどうしているのかと目を配る。

「おらダオス。どんどん賭けて見ろ。帝国の底力を見せてやれ！なに、散財してもすぐにお前の友達からチップを貰いに行つてやるぜ！」

「そうならないために慎重にして、てっ、あ、何をするのですか主神様！」

「ふふふ、今夜の私は運が良いようです。ロイヤルストレートフラッシュ、私の勝ちですなギルド長」

「ぐぬうあああっ!?私の勝ち金があああああっ！」

「ニヤー！また負けたのニヤアアアアアアッ！」

「はあー、ちまちまと勝つのは性に合わないんだけど」

「やった、当たっちゃった！」

「あ、貴女様はリヴェリア様ではないですか！このような場所でお会いできるなんて光栄です！」

「すまないが静かにしてくれ。いいな」

思い思いに楽しんでいたり同族同士の会話をしていたり、退屈でいるようではない様子であった。

「イチさん、もつと稼ぎますか？」

「そうだなー。じゃ、もう一回ルーレットをやろうか」

「へっ!?え、あ、あの・・・！」

戸惑いの色を濃く浮かべ狼狽える。

「今度は一億枚で一点数字一つ賭け。配当三十六倍だ。さて、もしもまた当たったら三十六億枚となるからわくわくするなあー」

「お、お客様！当『エルドラド・リゾート』はそこまでの大金は……！」

「お客様」

慌てる彼女に冗談だと、述べようとした時に仕立てのいい黒服に身を包んだ、年配のヒューマンが一誠の下に現れた。

「^{オーナー}経営者が、ぜひお会いしたいと」

「オーナーが？じゃあ、ちよつと待ってくれ。バニル」

「既に用意したぞ主よ」

数億枚も入れられる箱を手押し車で持ってきてはせつせと入れ続ける作業を頼み、店の支配人なのか、初老のヒューマンは老紳士のように一誠達を案内していく。向かった先にいたのは、招待客に挨拶して回っている大柄なドワーフだった。

「……………っ!」

「？」

こちらに気付いた相手は、酷く驚いた表情を浮かべた。しかし、直ぐに作り笑いを浮かべて両腕を広げて自らも近付いてくる。典型的なドワーフの体型。蓄えられた髭もまさにといった具合だ。茶色の髪は前髪から全て後方へ撫でつけている。高級な黒の衣装は彼の太い手足や厚い胸板を押さえつけられず膨れていた。ともすれば彼自

身堅気ではない、用心棒の一人にも見える。

「これはこれは、あの『異世界食堂』の店主がこの大賭博で遊んでいただけにいるとは驚きました。私はテリー・セルバンティス、この『エルドラド・リゾート』の経営者を務めておる者です」

「ああ、貴方がこのカジノの経営者だったか。貴方の経営の手腕や多くの女性達を虜にした話は繁華街でも噂は聞いているよ」

「はっはっはっ。これは照れてしまいますな。私の評判がそこまで囁かれていたとは恥ずかしい限りです」

ここまで案内した支配人のヒューマンが退席していく中、テリーは右手を差し出した。その太い手に呼応して一誠も応じる。

「恥ずかしがらず誇ってもいいと思うがな。特に多くの女性を娶れることができるのは、主人の魅力が美の女神のお墨付きということだ。同じ多くの女性に従業員として働かせている俺でも羨ましい限りの一言に尽きるよ。噂によれば全員が全員、美しい歌姫のように美貌が女神顔負けだとか。さぞかし歌も人を虜にする美しいだと思つと、ぜひうちの店の看板歌手として働いてもらいたいと羨望してしまう」

「がははははっ！そこまで私の愛人達を評価していただけるとは嬉しい限りですな！ですが、そちらの女性達も中々の美貌の持ち主で私の妻達と引けを取りませんな。もしや奥さまですか？」

「そう紹介をしたところだが、俺自身も人気者で日々あの手この手と尽くして中々決めさせてくれないんだ。昨夜も……それはもうな？」

「なるほど、それは随分と……」

二人は笑みを浮かべ合いながら互いの抱えている女性の話で会話の大輪の華を咲かせる。

「おっと、ついつい話が進んでしまいましたな。『異世界食堂』の店主殿。本日はかなりツいているご様子……そこで提案なのですが、あちらの貴賓室ビッブルームに来られませんか？」

テリーはそれまでの愛想のいい笑顔とは打って変わって、商人のような笑みを浮かべる。彼が一瞥するのは櫛で作られた二人の門番が守る扉。

「ビップルーム 貴賓室、か……」

「ああ、どうかそう構えずに。要はより高額の賭博ゲームを楽しもうというわけです。最高級の奉仕サービスやあの部屋しかできない賭博ゲームは勿論、店主殿のような……すみませんがご出身をお聞きに？」

「ああ、元帝国の貴族だった。料理を作るのが趣味でいつか自分の店を持ちたいと、夢をかなえる為に貴族の地位を捨て軍資金を集める為に冒険者になっていた」

「帝国の貴族！これは驚きましたな。遠路はるばるオラリオに来ていたとは」

「実を言うと、年が離れた昔からの友人を連れて来たんだ。ちよつと待っていてくれ」

ダオスと主神を呼び求め、揃ってテリーから離れる。そして二人を見つめ、自分が帝国の貴族である証明を突き付けた。

「お初にお目にかかる。私は王位継承順位百七位の王子、ダオス・ラーズグリーズクリールフス。そしてこっちは帝国の主神です」

「おいおい、何か紹介が大雑把じゃないか？」

二人の言動に信じるほかなかったテリーは一誠を改めて貴賓室ビップルームへ招こうとしたら。

「あ、ちよつと待っていてくれるか？」

そう言つて数分も待たされ困惑気味になったテリーのもとに一誠は猫キャットピール人とヒューマンの少女、チップを大量に運ぶバニルを引き連れて苦笑いしながら戻ってきた。

「悪い悪い。このカジノに連れてきた知り合いに先に帰ってもらおうよ声を掛け回つた。何も言わずどこかへ行くと心配をかけてしまふからな」

「そうでしたか。私も配慮が足りずすみませんでしたな。ところでそのお二人は？」

「うちの店の従業員の一人だ。前々からこのカジノに行つてみたいと強請られて、自由に遊ばせていたんだ。失礼な言動をしてしまうかもしれないがどうかご了承を」

「構いません。では、改めて案内しましょう」

テリーの後に続いた一誠達は、きな臭い話題の場所へとうとう足を踏み入れるその最中、テリーにとって招かざる客達が紛れ込んだのは気付きもしない。扉を潜った先は、騒がしいホールから一転して物静かであった。照明である魔石灯の光は抑えられており薄暗い。に見劣りしないほどの広間であるが人の数とテーブルは少なく、空間を贅沢に使っていた。黒服の給仕と、華麗なドレスに身を包んだ美女達
が、客に酒を注いでいる。檜の大扉に隔たれたホールの騒音は当然のように一切聞えることはない。遮音性に優れた広間には小さな談笑の声はやけに響く。一目で高級とわかる桃花心木の卓は重厚かつ幅広い作りで、それを囲む招待客もまた外の富者と比べて仕草も身だしなみも一段階上であった。高額賭札をもとに彼らが興じているのは切札が多い。貴賓室には招待客以外にも、完璧な所作を身につけている男性給仕、そしてドレス姿の見目麗しい美女、美少女が多くいる。テリーの背中を追いかけながら彼女達の姿に瞳を細めた。

「さあ、こちらのテーブルへ」

テリーが案内したのは、カードゲームを楽しんでいる者達の席だった。都合四人。席についている亜人達はテリーと古くから知り合いなのか、気兼ねなく話しかけてくる。

「今夜も楽しませてもらっていますぞ、経営者」

「ところで、そちらの方は？」

「紹介します。今宵初めて我々共の店に來られた、彼の有名な『異世界食堂』の店主、イツセー殿です。お隣におられるのは、イツセー殿のゆかりのある者達です」

「お初にお目にかかります、皆さん」

「経営者のご厚意でこちらへ來させていただきました。よろしく願
いいたします」

笑顔で迎える招待客達に一誠とシルが解釈を済ませるとウイズも一拍遅れて解釈すると、間髪入れず男性給仕が椅子を引いた。黙って腰を下ろせば混酒を丁寧カクテルに置くエルフの少女が現れる。美しくも人形のような愛想を見せるエルフに、一誠は一瞥をしてテリーに問いかける。

「経営者、先ほどから見かける麗しい女性達が噂の美姫達で？」

「ええ、そうですとも。どうです、お気に召しましたかな？」

「勿論！見回すばかり美しい女性達ばかりで料理を振る舞う経営者として、もつと彼女達のような美姫達を欲してやまない。言葉が悪いように聞こえるが一体どうやってこれほどまでの美女を集めたのか、是非とも参考に経営者の美しいものを集める凄腕を聞かせてもらいたいものだ」

褒めちぎる一誠がそう言うと、他の者達も便乗するように話に乗ります。

「ははははっ！店主殿も羨ましがられるとは、これは経営者の手腕が本物であるということですねー」

「ええ、我々も是非ともご教授を願いたいものですな！」

テリーは笑みを浮かべながら意地悪そうに言う。

「そこまで羨望を向けられると私も鼻が高い！しかし、残念ながら教えることはできません。私だけの特権です」

「まったく、経営者は羨ましいほどズルいお人だなあ」

「ふふふ、失礼。しかし、店主殿も多くの女性を囲っているご様子ですが、まだ満足できないので？」

「人は美しいものに目がない。それは男でも女でも共通で、皆さんもその一人なのでは？」

間違いない、と招待客の一人が言うのと揃って笑い声をあげた。

「おお、彼の言葉で思い出しました！何でも遠い異邦の国から傾国の美女を娶ったのだとか！」

「どうか我々にも見せて頂きたい！」

周囲の富豪達の唱和。テリーは大笑する。

「がはははははははっ！皆さんも耳が早い！ええ、おっしゃる通り、新しい愛人として迎えたのです。せつかくですので紹介しましょう！おい！」

彼等の反応に気をよくしたのか、はたまた最初から見せる気だったのか、ドワーフの経営者は一人の青年給仕に向かって手を叩いた。給仕が恭しく礼を取った後、貴賓室の更に奥から呼び出されたのは、純

白のドレスを着たヒューマンの少女である。

「初め、まして……アンナと申します」

スカートの裾を持ち上げ、少女は自らの事をアンナと名乗った。しかし隠し切れない怯えを言動の隅々に滲ませる彼女を、一誠は若干目を細めた。

純朴そうな碧眼の白い肌、ほっそりとした顎や項、慎ましい胸の膨らみ。少女と女の間で揺れ動いている容姿は客観的に見ても可憐で美しく、女神とも張り合えることだろう。その首には他の者達と同じ首飾りがある。長い亜麻色の髪は絢爛な髪留めで結わえられており、まるで彼女の情緒を表すように微かに揺れていた。本来の明るさはきつとないだろうという一誠が思うぐらい鳴りをひそめ、長い睫毛とともに目を伏せるその姿はただただ庇護欲をそそる。同時に、男達の嗜虐心までも。見とれていた富豪達は感嘆の息をつきながら、少女の剥き出しの肩に不躰な視線を送った。

「これはまた……器量良い」

「ええ、麗しい。女神が地に賜った美とはまさにこのこと。よく見つけましたな、^{オーナー}経営者」

「実は異国の地で巡り合いましたな。きつと神のお導きだったのでしよう。この愛らしさと美しさに私めもすぐ虜になってしまったのです」

「^{オーナー}経営者、相手が美女ならすぐころつと虜にされてしまうばかりだと、既に困っている愛人達から凄惨な嫉妬を向けられてしまうんじゃないか？何時か後ろから千本のナイフを刺されてしまうぞ」

「ははは、確かに！さぞや肩身が狭い思いをしているのでは^{オーナー}経営者」
一誠の尤もらしい発言で他の富豪者達に笑われ、テリーは困ったように後ろに手を回して苦笑いする。

「店主殿の言葉に肝に銘じましょう。さてそろそろ^{ゲーム}賭博を始めましょうか。店主殿もよろしいですか？」

「ああ、新参者だが今夜の俺は相当ツいている。高額^{ゲーム}の賭博でも容赦なく勝ち続けるつもりだが、今夜だけ俺の我儘を許してくれないか？」

「おや、何でしょう？」

「ドローカーをしてみたい。そしてを降りる際には、参加料の二倍の額を払うこと。何分こちらの方なら早く進めれて終われる。俺も明日からまた仕事に追われる身、食べに来てくれる客達の為に長居はできない。すまんな」

「……そう言うことでしたら構いませんよ。しかし、それならばこちらも一つ手を加えさせていただきたい」

パチンツ、とテリーが指を弾くと、男性給仕が大量の最高額賭札を積んだ荷車を押して現れる。きらめきを発する白金のごとき輝きの山は、ウイズを感嘆の息を漏らした。

「こちらで用意した賭札でゲームをしましょう。なので店主殿にもお貸ししましょう」

「いいのか？ ホールの方で稼いだ賭札を交換すれば問題はないぞ」

「そうですね。しかし、それでは公平ではない。三億分の枚数も手元に置かれては、勝ち逃げされるのが目に見えて緊張感を伴う楽しみさが削がれてしまう。どうですか？」

「ふむ、確かにそれもそうだな。では、こちらの要望に叶えてくれた方にはそちらの要望にも応えねば」

と、微笑むテリーと四人の招待客達。しかし、その笑みの裏では暗い感情が隠されていたことに気付いたのは、意味深に口端を吊り上げるバニルだけだった。

「因みに二つほど質問はいいかな？ 一つは貸してくれる賭札で勝った場合は？」

「全て店主殿の物にして差し上げましょう。ただし、私達から手に入れた余分の賭札のみですが」

「わかった。次はあなたの後ろに控えている二人は？ 俺も冒険者の端くれ、只者ではないと感じてるが」

「彼等は私のボディガードです。何事にも全て速やかに対応してくれるとても優秀で信頼における者達です」

「おお、それは何とも頼もしい。素朴な疑問に答えてくれてありがとう。では始めましょうか」

テリーの背後に控えるヒューマンと猫^{キャットピール}の男達。この二人は一誠の目から見ても実力者であった。一誠達がいるテーブルの周りを何人者の男達を取り囲みながら配られる手札を確認するや否や、深い笑みを浮かべた一誠を見たテリー達は聞いてしまった。

「やはり、ツいてるな」

「ほう、いきなり役が揃いそうだな」

バニルが一誠の手札を見てであろうことか予測を口にしたことに、テリーも、招待客^{ゲスト}も、周りで見守る用心棒や給仕も、美姫達でさえも啞然とした。

「まだ揃ってないから何ともな。交換を^{ドロ}」

進行役^{ディーラー}に数枚渡して数枚受け取って、一瞥して伏せた。

「んじゃ、30枚上乗せだ」

「「「「！」「」」」」

大量に投入して賭けに出る一誠にテリー達は目を張った。そこまですべて勝つ自信があるのかという心境になったところで待たバニルが言い出した。

「主、ブタなのいきなりそんなに上乗せ^{レイズ}をしてもよいのか？」

「俺は逆境になればなるほど強くなるって知ってるだろ？というか人の手札を暴露するな！」

「フワハハハハ！これは失礼！しかし、なにも賭けてもない純粋な遊びであるからして、主が稼いだ賭札^{チップ}には何の損もなく三億以上の金が入るのだからよいではないか？」

「例えそうでも負けたくないっての」

朗らかに会話する二人の言動にテリーと招待客^{ゲスト}達は、ややあつて失笑した。その後全員が手役開示^{ショーダウン}をすれば、一誠の手札は本当に役が揃ってないブタであった。

「さてさて主。次はどんな手札がくるかな？」

「お前、ちつと黙ろうか！」

テリー達はこの大柄で黒い紳士服を身に包んだおかしな仮面をつけた者と、一誠の成り行きを見守りながら着々と一誠から賭札^{チップ}をかすめ取っていくのであった。

——十数分後。

「おいバナルさん？お前が一々言うもんだからチップがこんなに減つただが？」

「ふむ、確か主は今夜は運がいいと言ったような？」

「その運をお前が奪って行ってるんだよこのアホ！」

手元の三十枚も満たない賭札チップを嫌そうに危惧する一誠に心底樂し気に笑みを浮かべるバナル。この二人、相性が悪いんじゃないかと思わせるぐらいテリー達を勝たせていた。

「ははは、店主殿。不憫ですな。賭札チップが随分と減ってしまつて大丈夫ですか？」

「思つてもないことを口にしないでくれるか？これ見よがしに勝つてくれちやつてまあ」

「申し訳ない。勝てる時に勝てねば負けてしまうものですからな」

ニヤニヤと不敵な笑みを浮かべるテリーは提案を出した。

「店主殿、彼の甘言に甘えた我々もこのまま勝つのは些か申し訳ない。どうでしょう、そこにいる執事の者と代行してもらうというのは」

「賭札チップは変わらずか？」

「そこまで優遇することはできないが、少なくとも手の内を明かす真似はできなくなる。如何でしょうか」

「……言つておくけど、こいつ、反則級な程に強いぞ？いいんだな？」

真剣な面持ちで言う一誠の言葉に真意はどうであれ、自分から持ち掛けた提案に立場上で今更撤回は出来ないとテリーは首肯した。

「構いません」

「そうか。なら、おいバナル。人に迷惑をかけた分、働いて勝てよ。じゃなきやわかつてるな？」

「無論、わかつているとも」

席を立つ一誠と変わつてバナルが座る。

「では、始めようか。この不肖バナルが主の代行として務めさせていただく」

渡される切札トランプを受け取るバナルの後ろから今までの鬱憤を込める

ごく一誠もバラし始めた。

「おーいきなりフルハウスとはな。これは勝ったんじゃないか？」

「こら、バラすではない主よ。先程の仕返しか、仕方ない交換トレードを求め
る」

と言つて、三枚のカードをわざと表にして出すバニル。その数字は
7、フルハウスの役ができていた手札をあらうことか自ら捨てた。

「「「「つ………」」」」

あからさまな騙欺フラフ?にしては自ら勝負を捨てた仮面の大男に疑心
暗鬼の眼差しを向けるテリー達。自分の手役ハンドを堂々と明かす真似を
して何の意味があると。しかし同じ数字を捨てて見せた手前、信じる
他ない。

「ああ君、アルテナワインの三十年ものを頼む」

獣人の老執事が給仕を呼び止めて飲み物を求めた。

「ほう、その紳士殿は上位の同カードを三枚持っているのかね？」

「「「「つ……?!?」」」」

意味深なバニルの指摘にテリー達は不自然に硬直した。

「いや、失敬。ただの憶測であるが故気にしないで欲しい。三十年と
いう数字の単語に思わず手役ハンドはフルハウスかな?と勝手に妄想して
いるだけだ。フハハハハ!変なことを申してすまないな、紳士殿の勝
利だと把握して示し合わせたように勝負を降りようとする経営者達オーナー
よ」

身体を強張らせ、苦笑いを浮かべてバニルの言う通り獣人の老紳士
とバニル以外、勝負を降りたテリー達。

「どうやらこの老いぼれと一騎打ちのようですな。ですが、よろしい
のですか?先程交換をしていなければあなたの勝ちであったかもし
れないというのに勝負を降りずに賭けに出るとは」

「問題ない。丁度フォーカードが揃ったのでな。上乘せだ」レイズ

ニヤリと笑みを浮かべるバニルの言葉にそれはあり得ない。引つ
掛かるものか、と心中で嘲笑して続行する老紳士。

「では私も上乘せとさせて頂きましょう」

「上乘せ」レイズ

再三にわたる宣言、小揺ぎもしない男の口端が吊り上がった笑み。これには獣人の老紳士共々、嘲笑っていたテリーや他の招待客達も動きを止めた。まさか本当に——と動揺が老紳士の顔に走るが、いやハツタリだ、とすぐに考え直す。

「……よろしい、では勝負といきましょう」

獣人の老紳士が同額の賭札を出した。一同が静かに見守る中、手役が公開される。老紳士の役はバニルの予測通り、フルハウス。対してバニルは、

「フォーカード」

予告通り、四枚の『女王』を叩きつけた。

「っ!？」

テリー達が一斉に驚愕する。老紳士の役を上回る手役を見せつけられ、しばらく言葉を失った。

「こ、これは、一本取られましたな」

参加料と上乗せ分の賭札が全てバニルのもとに集められる。

引きつった笑みで取り繕っているものの、老紳士の心は穏やかではなかった。そして次の賭博が開始されたが……

「おっ、これはこれは、ストレートフラッシュじゃんか」

「……!!」

「主よ。我輩が悪かったからしばし静かにしてはくれまいか」

「はいはい、わかったよ。それと言い違えたけどただのブタだったな」

二人の会話の内容に招待客達は顔色を変えた。『一体どっちなのだ』、『まさかまた』という疑念。呈する半信半疑の様相。押し黙るテリーが様子見で勝負を下り、合図を送られた最も強い手役の招待客が勝負を仕掛ける前にバニルがブタの手役を見せながら下りた。

「(何なのだ、この二人は……)」

手の内を明かしながら賭博をする言動に戸惑いの色が若干浮かぶテリー達。一体何がしたい、という疑念に駆られるが一誠が黙る姿勢に入ってからというものの。

「ふむ、その小人族殿はストレートであるかな？」

バニルは、相手の気持ちや手役を見透かすような言動、からかいも

込めて楽し気に予告し始めた。

「ヒューマンの者は交換トローをすれば手役ハンドが成立すると思っっているか？ 残念、しても成り立たぬぞ。因みに我輩の手役ハンドはペアである。フハハハ！ さあ、我輩と勝負をする者はいないかな？」

「……お、下りる」

「わ、私もだっ」

「我輩も下りよう。この勝負は経営者オーナーの勝ちであるからな」

バニルの宣言に恐れをなし、全ての招待客ゲストが勝負を回避した。テリーの一人勝ち。そこからは止まらない。

「そんな我輩の宣言にびくびくしてる恰幅のいいヒューマンよ。我輩はスリーカードで勝負を挑む。いかがかな？ 今なら我輩に勝てるぞ？」

カードを裏のままテーブルに伏せ、自らの手役ハンドを明かしては挑発する。

「残念、フラッシュでした！」

高らかに嗤い、相手をおちよくり、心をかき乱し、

「密かに強い手役ハンドを持つていることを教えぬ方が吉と出た。実際は我輩の味方になっている者の裏切り行為であるぞ。後で謝礼としてこの賭博ゲームに勝った分の全額を譲る話を付けているからな。無論、誰がなのかは秘密であるがな？」

「「「「っ!」「」」」」

テリー達の間で緊張が走り、完全に全力で悪感情を得たいがために弄んでいるバニルの独壇場となった。

逆に——テリー達の賭札チップが最初の頃より明らかに減っている。それも確実に減らしているバニルが増やしている大量の賭札チップを、一行にも崩せないテリー達の表情は若干険しい。

「ふ、また勝ってしまった。ストレートフラッシュユ！」

「(不正イカサマか?)」

進行役ディーラーへ視線を向けると、テリーの視線の意図を察して進行役ディーラーは首を横に振り、後ろに控えている用心棒も無言のままそれに倣った。

おかしい、強過ぎる、とテリー達が心の声を一つにしていると、一

誠は心外だという風に眉根を寄せた。

「バニルが不正イカサマをしていると勘繰っていないか？」

「いい、いえ、そんなことはないですぞ。ただ、引きが強すぎると圧倒していたので」

「確かに、圧倒的に勝ち続けて少々面白味がないのも頷けるな。では、こうしよう」

バニルの手役シヨウダウン開示していない手札を一瞥して告げる。

「バニルの手札はある役が揃っている。経営者オーナー達はその役を当てれば今日稼いだこの賭札チップを全額渡す。逆に外した皆さんの賭札チップを全ていただく」

「」「」「つー！」「」「」

「ただし一人一つだけ手役ハンドを決めてもらうという簡単な内容。どうか？。もうそろそろ俺は明日の仕事のために帰らないといけない時間だからこちら辺で終わりにしたいんだが」

テリー達は思わず顔を見合わせ、そして全員が一誠の提案に乗った。

「わかりました。ですが、もしもその時はあなたの敗北ということになりますかよろしいですか？」

「ああ、当てられてしまうのではないかという緊張感ある刺激が高まって来てるよ」

わくわくと笑みを浮かべる馬鹿な男だとテリーは内心嘲笑した。

「では、私はフォーカード」

「フラッシュです」

「ストレート」

「フルハウス」

最後にテリーは「ストレートフラッシュ」と当てに来た。全員の予測を聞いてから伏せていたカードを意味深に微笑みながら開示した。同じ♠の10、J、Q、JOKER、Aの切札トランプの役を――。

「ロイヤルストレートフラッシュ」

——ガタンツ!!と獣人の老紳士が勢いよく椅子を飛ばし、腰から床に倒れこんだ。口を両手で覆う美姫達も、顔中汗を垂れ流す招待客ゲストも

その表情を驚倒一色に染めた。特殊札ワイルドカードを加えた、この日一番の最強の手役ハンド。眼球が飛び出ようかというほど見開いたテリーは、勢いよく背後に振り返る。

「ファウスト!?!」

ドワーフの凄まじい怒号に対し、呻きながら首を横に振るヒューマンの用心棒イカサマ。不正はしていないという護衛の姿に、テリーはまた驚く。

「ふふ、残念♪皆大ハズレだったな」

静かに立ち上がるバニルの後ろで一誠はテリーに告げる。

「オーナー経営者、チップ賭札の換金をお願いするよ。合計四億をな」

「っ!」

はっ!と停止しかけた思考から覚醒して慌てだした。

「ま、待ってくださいいっ。直ぐに支払える額ではない!」

「このカジノの財貨は億は優にがあると踏んでいるのだが」

「確かにその通りなのですが、一度に支払う限度額を超えて……必ず支払いますのでどうか、」

「うーん、じゃあ担保金として代わりに用意をしてくれないか?」

担保金、代わりのもの? 怪訝にそう言い出す一誠を見つめる。

「私が今すぐ担保金として用意できるものはたかが知れてますぞ」

「問題ない。それを決めるのは選ぶ俺自身だ。そうだな……支払いが完済できるまでの間は、この場にいるオーナー経営者の愛人を全員、俺の店に働かせてくれはしまいか?」

「な、なんだとっ!?!」

「それが四億の担保金だ。オーナー経営者の美姫達なら十分釣り合うからな。なに、取って食いはしない。約束するよ、支払いが完済したら一人残らず送り返そう」

いかがかな?と笑みと共に提案を述べる一誠。そしてバニルが。

「主よ。我輩よい提案があるのだが」

「何だ?」

「その金でオーナー経営者殿の愛人達を買い取ると言うのは? これほど多くの者達を集めるのに大層の額を費やして様々な手口で、手中に納めたに

違くない。いやー、無知な者達をこの場へ招いては共謀者達と罫に嵌め、敗者に祭り上げては違法な借金を課して招いた者達の娘を、借金の肩代わりとして無理矢理手籠めにしてきたのだ。また同じ手口で集めればよいことであろう？」

——サントリオ・ベガ 娯楽都市の人間ではない、そもそも、テリー・セルバンティスなどという名前ですらない別人の名を騙る、テッドという男よ。

その言葉に、ドワーフのオーナー経営者は固まり続いた断言に、男の顔色は激変した。バニルはそのドワーフの顔を見つめながら全てを見透かすような口ぶりをする。

「ふむ過去、汝はこのオラリオで違法の賭博を繰り返していた店の胴元であるな？ 本来この都市に来る予定だった不慮の事故で死んだ本物のテリー・セルバンティスに成りすまし、今まで好き放題やりたい放題していたようだな」

「……ふ、ふふ。これは、飛んだ言いがかりをつけられたものだ。何を根拠にそんなたわ言を」

「ふむ、では自身が潔白であるというならコレを使えばいい」

バニルが懐から取り出すのは、結晶の欠片と真紅の液体が詰まった小瓶。一誠はそれを見てここに来る前の時を思い返した。

「時に主よ。水色の髪に眼鏡を掛けた人間と話をさせてはくれまいか」

「何でだ？」

「彼の人間が持つとある魔道具が必要であるからな。できれば至急に手に入れたい」

「ふーん、何を考えているか分からないがお前がそう言うならいいだろ。直ぐに会す」

アスファイを呼びバニルが求めたのは『ステイタス・シーフ開錠薬』。神が眷族に刻んだ恩恵を暴くだけの道具。これを使えば神の名と一緒に刻まれた

『真名』という名の証拠が、その背に浮かび上がる筈だと、初めてみた道具の詳細をアスファイから教えてもらった。それとバニルは小瓶を突き付ける。異様な空気が貴賓室^{ビツブルーム}を支配していた。場が凍り付いたように誰も動けない。

状況に置き去りされた招待客^{ゲスト}や美姫達、店の給仕までもが何が何だか分からない顔で、対峙する仮面の音とドワーフを交互に見やっただ。平静を装おうとしているものの、これまでにない動揺の色がちらついていた。同時に、敵対者への剣呑な殺意も。

「くだらない出まかせに耳を貸すつもりなど毛頭ないが……この俺、ひいては店の沽券に関わるたわ言を吹聴して回る輩を、生きて返すわけにはいかん」

テリーが片手を上げた途端、それまで佇んでいた用心棒達が動いた。ざわつ、とどよめきが生まれ、黒服の男達が一誠達を包囲する。慌てて獣人の老紳士や小人族^{バルウム}の富豪達がテーブルから離れるのを脇目に、金で雇われている用心棒は中堅のぐとく主の意思に従った。

「えーつと、経営者^{オーナー}?俺は関係ないよな?」

「この男を連れてきた店主、お前も生きて返すことはできない。恨むなら己の不運に恨むがいい」

「……はあ、まさか、本当にこんなことになるとは」

自分まで標的され嘆く一誠。

「仕方ない、俺自身も戦うとするか。自分の命は自分で守らないとな」

真紅の長髪を金髪に染め上がり、金色の六対十二枚の翼を背中から生やすと頭上に輪っかが浮かび濡れ羽色と金色のオッドアイは蒼と翠に染まった。その様変わりした男の姿にテリーは叫んだ。

「ファウスト!ロロ!」

控えていた二人組のヒューマンと猫^{キャットピープル}の男性がテッドを守るように構え、取り囲む用心棒達に交ざる。

「その二人はあの暗黒時代で裏の人間達の界限で恐れられていたあの『黒拳』と『黒猫』だ!そしてこの場にいる用心棒達は元冒険者ばかり!少数できたお前達とは多勢に無勢だぞ!」

とある二つ名の単語が出てきて、反応するのは「え?」と漏らす一

誠以外ルノアとクロエ。ドレス姿でそれぞれ『黒拳』と『黒猫』の前まで近付いた。

「へえ、あの『黒拳』があんたなんだ？」

「ニヤハハハ、おミヤーが『黒猫』？」

「ねえ、何の冗談を言ってるわけ？」

その場でドレスを脱ぎ去っては戦う気が満々なルノアとクロエは、ドレスの下に着込んでいた戦闘衣バトル・クロスと隠していたナイフと武装の黒い拳装を装備して臨戦態勢の構えを取った。これは流石に哀れだと一誠は二人に言い渡す。

「あー、その男の『黒拳』と『黒猫』さん。今すぐ謝った方がいいぞ。目の前にいるのが裏の界限で囁かれていた本物の『黒拳』と『黒猫』だからさ」

「—————」

指の関節を鳴らすルノア、ナイフを弄ぶクロエ。どちらも暗い笑みで偽物を見つめながら尋ねる。

「ねえーイツセー。こいつらのL.V. は？」

「・・・3、上級冒険者だ」

「ミヤー達の名を騙っていた不屈き者がミヤー達より下だなんて笑っちゃうニヤ。イツセー、こいつらを好きにしてもいいニヤ？」

「してもいいが、程々にな。外見よし実力もよしだからそいつらを手に入れたい」

一誠の人材確保の欲が刺激したことを察しながら、『異世界食堂』で働かされるこの二人を自分の下に付けてコキ使える想像が浮かぶとルノアとクロエのやる気が急上昇。

「まかせてよ！イツセーの期待に応えてこいつらをブチのめした後、捕まえてやるからー！」

「ニユフフツ、絶対に逃がさないニヤー！」

とても嫌な予感を覚え、二人から思わず距離を置く偽者達。テリー改めテッドは彼らが名を偽っていた事実_に絶句。

「覚悟はできてる奴はかかってこい。—————すぐに瞬殺してやる。ああ、バニル。シル達を任せた」

「やつ、やれえ、お前等あ!？」

取り乱しながら用心棒達に一誠達を始末するよう命令する。四方から掴みかかってくる屈強な男達。一誠はそれを手も足も出さず、翼で何十人もいる用心棒達を全て一蹴しながら蹴散らしテッドに近寄る一誠。

「さて、【ガネーシャ・ファミア】に連れて行こうか」

テッドを拘束して今回の騒動の幕は早くも閉じて終わると一誠自身もルノア達も思っていた。偽者の『黒拳』を散々ブチのめし、偽物の『黒猫』をネチネチ毒で拷問して、名前を勝手に借りてた代金を徴収しようとして酷い目を合わせていた。この瞬間から上下関係を叩き込んでいることを一誠は露知らず、

「何の騒ぎだこれは？」

貴賓室奥から新たに現れた者。この状況を怪訝に見回しながらテッドを捕まえる一誠を見て目を細めた。

「……お前、転生者か？」

「あんな連中と一緒にしないでくれるか？そういうことを訊くってことはお前、転生者なんだな。こんなところに住んでいたとは。しかも、前倒した転生者と同じ顔の奴とか……ないわー」

心底から辟易する一誠の前に立つ男にシルの表情が凄く険しくなり、親の仇を見る目で睨んだ。後ろに撫でた金髪に赤い瞳、金の鎧を着込んでいる男。【イシュタル・ファミア】に所属していた三人のうち一人の転生者と瓜二つであった。

「その言い草だと、同じ特典を得た奴がこの世界に転生していたってことか。そいつと出会わなくて済んでよかったぜ」

「どうでもいい。お前は俺の敵になりうるのか？」

「そうだな……人の寝床を奪う奴は許すつもりはないが……」
続いて何か言いだそうとしていた男に向かってテッドはアンナの細い腕を掴んで叫び散らした。

「お前、こいつらの足止め、いや、殺せえっ!？」

そんな捨て台詞を言い残して貴賓室奥へと逃げ込んだ二人を片目に目の前の転生者を視界に入れる。

「戦うのか？」
「……………」

激しい足音を立てて、豪華な絨毯が敷かれた廊下をひた走る。ドワーフのテッドは、全身から大粒の汗を流しながら娘を引つ張り大賭博場の奥へ奥へと逃げ込んでいく。雇っていた用心棒の全滅。全ての手駒を失い飛び出した貴賓室。たった先刻まで賭博の楽園の王であったはずの彼が、圧倒的な力の前によって、敗走もかくやという無様な状況に追い込まれている。

「あいつら名を偽っていやがっただと！何が『黒拳』だ、何が『黒猫』だ！くそつたれめ！」

化けの皮を剥がされた男はもはや経営者然とした態度も忘れ、高い金で雇っていた二人組の用心棒に盛大な罵声を吐く。そこにいるのは素性を偽ったテリー・セルバンティスではなく、ただの一人のならず者、テッドであった。

「う、ううっ……………」

男の怒りに呼応して強く握り締められる手に、アンナの唇から呻吟の声漏れる。今も必死に抵抗しているものの、華奢な生娘の力などドワーフの怪力の前では赤子も同然であった。何度も床から足が浮きながら、人質の娘は強引に連れ去られていく。悪趣味な銅像や絵画が飾られた豪華絢爛な長廊下。美姫達に与えられた部屋の前を次々と通り過ぎ、大賭博場の裏側へ。すれ違う従業員や進行役が驚きを露にした。

「経営者、どうしたのですか!?!」

「この騒ぎは一体……………!?!」

うろたえる従業員や残りの用心棒達に碌な説明もせず、テッドは走り続ける。

「こつちだ！」

苦しむアンナを振り回しながら、裏側の複雑な道を何度も曲が

り、下へ続く長い階段を駆け下りる。大賭博場の地下階だ。遊戯を
楽しむホールのような絢爛さはない画一的な作りだが、地上の階に負
けず劣らずの広さを誇る。

「ど、どうなってる・・・!?!」

大声を張り上げ、見張りの者達に障壁を開けさせようとしたテッド
の視界に飛び込む先に、見張りの者達が全員地面に伏していて障壁が
全て開け放たれていた。

「何が起きた!?!」

「——なんだ、もう逃げるのやめたのか」

後ろから聞こえてくる声に勢いよく振り返った矢先、テッドの恰幅
のいい腹部に足が突き刺さった。

「ぐはっ!?!」

蹴り飛ばされ、吹っ飛ぶテッドの身体と共に後方へさらわれないよ
う男の手が少女の身体をさらって守った。対して長く幅広な一本道
の終点にまで吹っ飛んだテッドの身体を受け止めたのは、巨大な円形
の金庫扉。

細い腰に片腕と片翼を回され抱き寄せられたアンナが赤面する中、
一誠は背を向けるように踵を返した。

「行こう」

「え・・・でも」

「あとは【ガネーシャ・ファミリア】がやってくれる。あのドワーフの
汚い手で集められた美姫達が証言すれば、尋問は避けられない」

テッドに背を向ける一誠はうろたえるアンナを促す。亜麻色の髪
の美少女は歩み出す一誠に付いて行くが、徐に立ち止まった。

「あの・・・」

「?」

「・・・ありがとうございます」

振り向く一誠に、純白のドレスを揺らす少女は胸に両手を置く。

「見ず知らずの私のために、こんなところまで・・・本当に、ありが
とうございます」

「・・・怪我はないか?」

「えっ？あ……は、はい」

「よかった」

細い肩を今も振るわせる少女に、一誠は安心させてやるように微笑んだ。しばらく瞳を潤わせていたアンナは、はっとして顔をうつむける。不思議な反応に一誠が小首を傾げていると。

「ははは、演劇を見ている気分になっちゃうなー」

突如少女の声が虚空から聞こえたと思えば、フードを取り外して姿を現したクリスマス。

「クリスマス、証拠は集めたか？」

「目ぼしそうなものは大体ね。というか、これがないと文字も読めなかったよ」

片眼鏡モノクルを見せつけながら「凄く便利だよコレ」と称賛するクリスマスにアンナを渡す。

「なら丁度いい。彼女を地上まで送ってくれ。あのドワーフも連れてこないとならないからな」

「わかったよ。それじゃまた後でね」

クリスマスにアンナを任せ、後ろ髪を引かれる思いのアンナの心情を露知らずな一誠は、金庫扉に寄り掛かりながらふらふらと立ち上がるドワーフへ向かう姿を最後に二人は別れた。

「さて、支払ってもらおう四億と俺達に対する慰謝料込みで——全部貰おうか」

冒険譚50

「うめええええっ！久しぶりの日本料理が食べられるなんてっ！」

『エルドラド・リゾート』での一件を終わらせ、テッドに囲われていた美姫達はギルドと「ガネーシャ・ファミリア」に保護された。何故か一誠に詰め寄って赤い顔で感謝の言葉を送りながら名前と握手を求められたのは、今でも何故なんだと不思議がっている一誠は、城に連れてきたダオスと男神——転生者にご馳走を振る舞っていた。何故転生者がここにいいのか、それは転生者からの要求を呑んだからだ。

「戦うのか？」と訊いた一誠の問いに男はテッドの逃走あの後、言う事を聞く義理はないばかりと戦う意思はないと首を横に振ったのだ。

「このカジノで豪遊していただけの俺が戦う気なんてない」

「じゃあ何でこんなところにいる」

「俺が願った特典は金や宝石を生み出し黄金を操る能力だ」

一誠に向かって突き出す両手からヴァリス金貨と大小、多種多様な宝石を言葉通り生み出した。

黄金の鎧が形状を崩して細長く鞭のようになる他、刀剣類の形にまでなった。自身の能力を教える転生者は続けて言う。

「この能力に加え、オラリオじゃあ有名だって言う賞金稼ぎと暗殺者の用心棒の二人を倒してあのドワーフのオーナーに俺を売り込んだ。自由気ままな豪遊をさせてくれる奴だと見込んでな」

「別段、協力関係でもないわけ？」

「ああ、金になる木だってほうが意識が高かったみたいで、俺を用心棒にせず豪遊させてくれた。その点だけは感謝するが、悪行三昧していたことがバレてここまで事を大きくしたのか分からないが、あのドワーフが焦って逃げるくらい收拾がつかなくなってるなら、今更俺がどうこうしても意味なんてないだろ」

しかし、今の生活が出来なくなると感じてるのか残念そうに溜息を吐いた。

「てなわけ俺はお前が人質を救いに行こうとしても一切邪魔をする気はない。ただ、俺を保護してくれないか？俺も悪行なこととはしてないのに捕まりたくない」

「どうしてお前を保護しなくちゃならない？悪いことしてなければさっさとこの場から逃げればいい。お前の顔を知っているのはここにいる極一部の話だ」

「理由は、お前が俺と同じ日本人のよしみとして頼んでいる。俺の能力を知られたら俺より強い奴に攫われて、死ぬまで金を生み出す能力を酷使されそうで嫌なんだ」

理解してくれたか？という視線を送る転生者。理由としては納得のいく道理。しかし、すぐに了承していい相手ではない。

「俺もお前の能力を酷使するかもしれないぞ？」

「いや、しないだろ。異世界の料理を振る舞う店主として働く人間が金の亡者になるわけがない」

と——そんな話し合いの末に一時に保護をするか話し合うために連れてきた。ただ何人か凄く転生者を見る目が厳しく「どうして連れてきた」という訴える視線が一誠に向けられる。

「俺、ここに住む！久しぶりの日本の料理を食べながら豪遊生活を送る！」

「うちは自堕落な生活する人間を置くつもりはねえよ」

「金ならいくらでも生み出すぞ」

「肉体労働が必須だ馬鹿野郎」

「ところで、俺のこと睨んでくる視線が多い気がするんだけど」

「そりゃ、お前と同じ顔の転生者に強姦、レイプされかけたからな」

勘違いされても仕方ないという言葉を吐く一誠に顔を顰める転生者。

「倒したって言う奴はどこにいる。ちよつとシバき倒したいんだが」

「いや、物理的にはもう無理だ」

無理？何でだ？と素朴な疑問が疑問を呼び抱いた転生者の心情を悟ってか、虚空を歪ませてできた穴に手をつ込み、淡い光を放ち続

ける三つの球状の何かを閉じ込めてる大きめな鳥籠を一つ取り出して転生者の目の前に置いた。

「……なんだそれ」

不思議な物を見せられ窺う視線で鳥籠の中の光球を見ていると、光球が突然活発的に動き出して転生者に向かって鳥籠の柵にぶつかるや否や。

『おい！何でそこに俺の身体があるんだっ！それは俺の身体だ、寄せっ！』

「はっ!？」

光球が喋り出して転生者だけじゃなく一誠を除く一同がここで初めて反応を示した。疑問と驚愕の二つの色を顔に浮かべ好奇心に負けて近づいてくる。

「イツセー、今の声は……」

「元【イシュタル・ファミリア】に所属していた三人の転生者だ。肉体が滅ぼされても魂までは滅ぼされてない、生きていても言えないこんな状態で閉じ込めている」

『てめえの仕業か!』

『俺達をここから出せ!』

『こんなこととして許されると思っっているのか!』

「はっはっはっ、負け犬より可愛い生まれたての鶏の雛の鳴き声だな。その鳥籠はお前等の魂を封じているんだ。お前等の生死は俺の手に委ねられていることを忘れるなよ。ついでにお前の目の前にいる男は転生者だ」

発光する輝きが増すと籠の中で暴れ出す転生者の魂。

『同じ転生者なら助けてくれ！こいつは俺達を殺した化け物を——！』

「うるさい」

鳥籠に雷が纏う炎を放ち『や、やめぎやああ!!』と転生者の魂を苦しめる。

「お前らをまだ生かしてやっているのは俺の小さな恩情だ。本当の意味で死にたいならとある異世界の魔王にお前らをプレゼントしてや

る。それが嫌なら大人しく黙っている」

多分聞いていないんじゃないかと、すっかり大人しくなった三つの光球。

「てなわけで、こんな状態だから物理的にどうこうすることはできないから」

「わ、わかった……」

怯える風にも何度も頷き、こいつはヤバいと感じ取った転生者。海童が話に加わる。

「うちの店主に逆らうようなことをしない限り無害だぞ。俺もお前と同じ転生者だから言うが、この城に住みたいなら働きつつ豪遊すれば文句は言わないと思う」

「お前も転生者だったのか？」

「他にも転生者の知り合いがいるぞ。そこにいる女性と男も転生者だし異世界転移した日本人だ」

アスナとカズマの事を教え転生者に妥協案を示す。

「豪華な引き籠り生活をするよりも働くか冒険者していた方がお前を楽しませてくれるぞ。なんせ店主は人を楽しませることに長けてるからな」

「……」

「この城でグータラ生活をしようならば追い出されるのがオチだぞ。ま、転生者のお前ならオラリオにいる神々から勧誘の嵐に巻き込まれ衣食住には困らないだろうけどな」

どうすると尋ねられ考える仕草をして悩む転生者を見て別の方からも声が挙がった。

「さっきから聞く転生者ってのは何だ？」

帝国の主神の素朴な質問だった。簡潔に説明して目の前の転生者の特典の能力を教えると、口端を吊り上げる帝国の主神。

「そいつがいらなら帝国が引き取ってやってもいいぜ。大好きな豪遊を死ぬまで好きだけさせてやってやる」

「金を生み出す能力が欲しいからか？」

「当然だろ？それがあれば国が豊かになる。ついでにダオスの力にも

なるだろ。この坊ちゃん、最近帝国領内の路上生活ストリートチルドレンのガキ共に仕事の紹介や斡旋、お涙頂戴の物資の援助を自分の父親にも隠れてしてるんだぜ？」

ニヤニヤと意地の悪い笑みを浮かべた主神の話聞いて黙っていられたかったか、目を見開いたダオスが食って掛かった。いけない隠し事が親にバレた子供のように慌てる様を周囲に晒しながらだ。

「ど、どうしてそれを知っているんだ主神様っ！」

「はっはっはっ、神に隠し事なんてこの世界の子供として生まれた時点で絶対無理無理。全てお見通しだぜ。な、偉いだろ？そんなことしてるのは現王を含めて数多くの兄と姉妹の中でこいつだけがまるで希少動物みたいしてよ、誰にもバレてないだろうって隠れながらココソと動いているこいつを見て面白すぎだわって思いつつ暖かい眼差しで見守ってたわけだ」

「……っつっ」

主神の言うことは本当だと、俯く顔は真っ赤で身体を震わせながら押し黙っても、それは一誠の嗜虐心を刺激させるだけであった。

「ん、今度俺もその様子をませてニヤニヤしながら見させてくれね？」

(ニヤニヤ)」

「おう、いいぜ。一緒にニヤニヤしながら物陰から見守ってやろうぜ。いやー、そういうこと共感できる奴が一緒にいると更に面白味が増して楽しくなるな(ニヤニヤ)」

「来るなっ！見に来るなっ!？」

ダオスの善行が主神と一誠の遊びにされては堪らないと全力で止め掛かる。

「ところで、片手では数えきれないぐらいの人間に援助しているんだとしたら、どれだけ私財を抱えてるんだ？王族といえど莫大な富を持つてるわけないだろ」

「こいつ、賭け事の駆け引きがめっばう強くてな。帝国内の賭博カジノで荒稼ぎした金で援助しているんだ。今日も賭博カジノで大勝ちしたし、その金で援助するんだろうよ。それ以前にこの前悪事を働いてた多くのガキ共が王族としての地位をばく奪されてよ、そいつらの私財も全て国

に没収されずダオスに流されたんだ。前王のジジイの差し金でな」

「へえ、そうだったんだ」

「そういうわけで、いらぬなら貰うぜ」

「ああ、いいぞ持ってけ持ってけ。ここに住ませるよりはこいつの能力を活かせ大いに役立つ場所があるならそっちに行かせた方がいい」

豪遊できる環境ならこいつも文句は言わないだろう。という率直的な感想を込めて転生者を帝国送りに決定した。

「俺の意見は？」

「諦めろ。話に入れなかった時点でお前の処遇は決まったも当然だ。豪遊できるなら別にいいだろ」

「それはそうだが………釈然としない」

こうして帝国へ赴く三人を見送ってようやく最大賭博場の件は幕を下ろした。

「あ、そうだ。イツセー、お店であるご夫婦の娘が賭博ギャンブルで負け続けて質にしてみましたって話を聞いたの」

「穏やかな話じゃないな」

「うん、そうなっちゃったのは複数の冒険者のならず者達なんだって。結局ご夫婦の娘、アンナさんは負け続けて払えぐらいになったお金を担保代わりにされて家まで奪われちゃったんだって」

「………アンナ？」

どこかで聞いたような？

「うん、この西地区の間じゃあ、凄い評判なんだって」

「どういう意味でだ？」

「きつと美人だからじゃない？男の神様から求婚されちゃうって話だったから」

美人………アンナという娘の名前に美人………一誠の中でごく最近知ったとある少女の顔を浮かべた。

「多分、心配しなくていいと思うぞ」

「イツセー？どういうこと？」

「ん、多分だが………明日になれば分かると思う」

不思議そうに小首を傾げるアスナに、今頃「ガネーシャ・ファミリア」が何とかしてくれているだろうと思いつながらそんな言葉を送った。

翌朝――。

開店準備に追われ、裏側でも表側でも店内は賑やかな声が絶えずにいた。特に二人の少女達の声がいっつもより活が籠っているようにも気がする。

「ちよつと、まだ濡れてるじゃん！もつと力を入れて拭きなよ、こんなんじやあお客に座らさせれないってば！」

「は、はいっ！失礼しましたルノアさん！」

昨夜、強制的に新しく『異世界食堂』で働かされることになった偽者の『黒拳』と『黒猫』の二人。ルノアとクロエの下でしばらく監視下に置かれつつ、指導を受けながら先輩ウェイターの海童の後輩ウェイターとして頑張ってる姿を視野に入れて……。

「ほらほら、テキパキ ミャーの分まで働くニャ。散々ミャーの名前を騙って良いご身分でいた分、しっかり働いて返すんだニャ」

「それでアル！まったく使えない新人でアルな！」

「――おい、なにサボってるんだい？」

「今この瞬間、どっちが使えないか一目瞭然だよな？」

椅子に座ってふんぞり返っているクロエと神楽の頭や顔を鷲掴み、お仕置きを受けて酷い悲鳴の声を上げさせる店主と副店主。

「お前ら二人は人の二倍働け。先輩ならそれぐらいは余裕だよな？」

出来なきや今月の給金は三割にしてやるから」

「お、横――！」

「あ？」

「喜んで働かせていただきます！」

何時もの日常が繰り返す店内は、明日も変わらないだろう。もしかすると違うのかもしれない『異世界食堂』の扉に叩くノックの音が聞こえて、アスナが扉を開けに足を運ぶ。開く扉の向こうから無精髭を生やした中年の男と亜麻色の髪を結んだ姥桜の女性と、その女性に似た若い少女が入ってきた。

「あ、あの……こちらに店主さんはいますか？」

「おー、いるぞ。俺が店主だ」

女性の人を伺う声に店主が足を運び、少女に目線を向ければ少女が深々と亜麻色の髪を揺らしながら折る腰と共に揺らした。遅れて中年の男性と女性がお辞儀し出した。

「昨夜、娘を助けていただきありがとうございます！」

「本当にありがとうございます！」

娘、アンナが夫妻の下へ帰ってきた報告とともに感謝の言葉を言い訪れたのだと知る。朗らかに店主は言い返す。

「意図もせず偶然助けただけだ。お二人の事情を知らない上でだ」

「それでもありがとうございます。おかげで娘も家も取り戻せて安心して暮らせます」

「それは何よりだ。なら、そのお祝いに飯でも食っていくか？まだ開店してないが俺の奢りだ好きなだけ食べて行ってくれ」

「い、いやいや！そこまでして頂くことはございません。すぐに帰りますから」

「お邪魔してすみませんでした。アンナ、貴女も」

今まで黙っていたアンナが店主の前に一歩踏み出して、ジツと下から覗き込む形で上目遣いする。

「あ、あのー」

思わずと感じて大声を出すアンナは熱い眼差しを一誠に注視するぐらい向けていた。

少女の大声で反応する後ろに控えている従業員達はなんだなんだと仕事をする作業の手を止めて様子を窺う。シルはアンナの登場で店主の横に移動してきた。

「と、突然このようなことを言うのは迷惑だと重々承知しています！でも、それでも私はっ、身を挺して守ってくれた貴方が……！」

店主は、瞬きを繰り返した。アスナとシルは、きよんとしていた。アンナは、『恋する乙女』のように店主へ熱い眼差しをそそいでいた。途端、店主は悟ったように遠い目になった。

「私は、貴方に恋を……しました」

目の前で瞳を潤わせる少女が視界に映しているのは、身の危険を顧みず助けに来た天使の翼を生やした騎士^{ナイト}。目の前で娘の突然の告白^{アンナ}を聞いた夫妻は吃驚して目を見開いた。

『ええええええええつ!?!』

まさかこの店で店主が告白されるとは想像もしていなかった。様子を窺っていた女性従業員達が心の底から吃驚したその表情を驚倒一色に染めた。テッドが見初めた可憐で美しい街娘からの告白に店主は困ったような表情を浮かべた。

「……一応言うが。俺は主神がいない【ファミリア】を結成している団長的な立場だ。ギルドも公認している。だが、見ての通りこうして西地区で超有名な店の店主としてもいる。だからアンナの気持ちに尊重したいがその想いに応える暇はないかもしれない。それでもいいなら、俺の家族^{ファミリア}の一人として加わってくれ」

述べられた提案に店主を見つめつつ、意を決した目でアンナは胸の前に両手を組んで頷いた。

「はい！私は戦えませんが、料理なら作れます。貴方のお役に立って頑張ります。不束者ですが、よろしく願いますっ！」

「という事で、お二人の娘さんをうちで預かることになったがいいかな?」

問われた夫妻は、はつと我に返って条件反射的に何度も頷いた。

「え、ええっ！至らぬ所があるかもしれませんがどうぞ娘をよろしく願います！ほら、アンタも！」

「あ、ああつ。その、俺達には勿体ない娘だが、どうか幸せにしてくれ」
「ん、毎日笑顔で暮らしてもらえるよう大切にする」

傍から見れば娘を嫁に出す光景と言動に見えるのだが、アンナの告白を遠回しに答えていないことを何人氣付いたことだろうか。

冒険譚51

過ぎしやすしい暖かな気温が猛暑を振るう予兆を覚えさせるその日。二度目の運動会を開催するためのチーム選びが今年になって二度目のデナトウスの神会で行われていた。羊皮紙に「ファミリア」名と赤と白——二大最大派閥の代表者として、ロキとフレイヤのどちら側に参加するか記入してガネーシヤが持つ箱の中へと投入する。

「ねえロキ。私と賭けをしない?」

「なんや自分からそんなこと言い出すなんてよっぽど自信があるんやな?」

赤がロキ、白がフレイヤと決まっていることで記入する必要がなく手ぶらでいた時に賭けの話を、否、運動会が続くまで継続するつもりの賭けをフレイヤが隣に座るロキに提案した。

「自信じゃないわ。神でも予測できないことを楽しみたいだけよ」
「あつそ。で、何を賭けるんや」

「勿論イツセーよ?流石に私と貴女だけで勝った方が独占、何てできないでしょうけれど今年の間だけイツセーが勝った側の「ファミリア」の優先権を得るっていう」

どうかしら?と瞑目して問う。直接見ずとも結果は分かり切っているとはかり悠然とした佇まいで耳を傾けていたら、口端を吊り上げ笑みを浮かべるロキを簡単に浮かべた。実際、その通りに笑みを浮かべているロキが楽しそうに言い返した。

「ほほーう……それを聞いたら俄然勝たないといけへんなあ?前回勝ったのはフレイヤだったんやけど今度はうちが勝たせてもらうで?」

「ふふ、楽しみが増えて嬉しいわ。本当にイツセーが来てからというもの、神を殺す退屈の毒がなくなつて代わりに魅力的で素敵な彼を中心にここまで退屈させなくなったわ」

「せやな。イツセーの行動力がそうさせるんだからおもろいんや。今度は何を仕出かすかうちはワクワクしっぱなしやで」

話し合う二柱の女神達を他所にデナトウス神会は終わりを迎え、騒々しい言

動をするガネーシヤは集めた名簿を持ってバベルの塔の次に高い白亜の天城にいる真紅の髪の男の下へ駆け出していった。

「イツセー、私達は運動会に参加するの？というかできる？」

「主神がいない【ファミア】だが、運動会の主催者として担っているから参加できる。ただ、今回の運動会は通常の競技以外の種目も用意した。皆にはそれに手伝わってもらってもいいだ」

「手伝わってまた、ダンスをするの？」

「当たり前だろ？運動会の華じゃないか。俺達が中心となつて盛り上げるんだ。これ以上のない楽しいことだぜ」

「ここ最近、ガネーシヤ様が来てるのって……」

「ふふ、これ以上のない適任者だからな。色んな打ち合わせをしているんだ。そしてこれはまだ他の皆には教えていないんだけど——かくかくしかじか……」

「——え？」

大通りは、確実に熱を帯び始めていた。迫る運動会を知らせる絵羊皮紙ポスターがオラリオの至る所に張られて日に日に熱していく機運に多くの者達が声を上げ討論を交わし、酒の肴にして盛り上がる。迷宮へ潜る足が自然と少なくなつていく冒険者達、些細な物の流れにも敏感になる商人、労働に中々手が付かなくなる一般市民。路傍で遊び回る幼い子供達も街の雰囲気を感じ取り、あどけなく笑つては、興奮に身を委ねた。オラリオは、静かに、確実に、熱気が爆発する瞬間を待ちわびていた。

そして——二度目の運動会が開催する日となつた朝を迎えた。早くから全ての酒場が店を開き、街の至る所で出店が路上に展開している。今日まで通りの壁を彩つて来た無数の絵羊皮紙ポスターは一誠の要望で神々が散々周囲に喧伝けんでんした結果だ。絵の内容は赤と白で塗られた白亜の摩天楼施設バベルの塔だった。今回勝負するのは「ファミア」同士の戦いでもあるが神の代理戦争ではないため、神々や冒険者

神々と冒険者達。全員、頭や腕に赤い布を巻いての出場だ。

『紅組の代表各な神々を紹介しよう。誰もが知る人ぞ知るオラリオ最強最大派閥の一角を担う派閥、「ロキ・ファミリア」の主神ロキ、同じくオラリオで最大数の団員を保有する派閥「ガネーシャ・ファミリア」の主神ガネーシャに続き、歓楽街を支配する女王「イシュタル・ファミリア」の主神イシュタル！冒険者の武器を作り生み出す鍛冶最大派閥「ヘファイストス・ファミリア」の主神ヘファイストス！他の神々も紹介していくぞ！』

威風堂々と胸を張って歩く神々の名を全員告げ、ステージの右半分^に輝く紅色の枠へと入っては並んでいくのを見ながら次の紹介へと移る。

『続いて白組の選手達の入場！』

客席の反対側から漏れ出す白い霧を分けて大きな白旗を掲げ持つラトラの後ろから追従するフレイヤに続き、五列に並ぶ白組の神々と冒険者達。こちらにも白い布を頭や腕に巻いて登場する。

『白組の代表的な神々の紹介をしよう。最大最強派閥「ロキ・ファミリア」の対の存在「フレイヤ・ファミリア」の主神して老若男女神問わず自他共に認める美の女神フレイヤ、同じくオラリオに在籍しながら極東の西を統べる最大派閥「イザナギ・ファミリア」の主神イザナギ、東を統べる「イザナミ・ファミリア」の主神イザナミ、南を統べる「アマテラス・ファミリア」の主神アマテラス！前回の運動会を勝利した代表的な「ファミリア」が揃ったの入場だ！彼の四柱に続く神々も紹介していくぞ！』

白い光の枠に入り整列していくフレイヤ達も紅組の選手達と肩を並ぶ形でステージの前に立っていく。全ての選手が揃うと演奏は止み、楽器を片付けて退散する黒子達と入れ替わって登場するのは一誠^だだった。

『さーて、またこれだけ多く運動会に参加するとは前回の楽しみをまた味わいたい神々と冒険者達に關してもう一度説明しよう。戦争遊戯^{ウォーゲーム}IN運動会に参加するための条件はLv. 2以上の上級冒険者^{デナトウス}を保有しかつ神会に参加できる「ファミリア」だ。今回も運動会

者を十人ずつ。神も三十人。最初はLv. 1の冒険者から。走る者は細く白いラインが描かれたランニングコースのところにいる、冒険者^{クエスト}依^{スト}頼で協力してもらっている冒険者達のところまで足を運んでくれ』

「Lv. 1の冒険者は僕の元へ来てくれ」

「Lv. 2の冒険者は儂のところに来るんじや」

「Lv. 3の冒険者はこちらに來い」

「神はこちらであるぞ」

去年と同じくスタッフとしてフィンとガレスにリヴェリアと椿が神と冒険者達をコースへ誘導する。

『実況の三人。今年もどんな結果になると思う？どっちが勝つ？』

『私は白組かな？去年フレイヤ様のチームが勝ったからね』

『俺は紅組だと思ふな。海童はどうよ』

『まだ始まったばかりだから決め兼ねる。どっちも去年善戦したから今年も白熱した勝負をしてくれることを、今回は特等席から楽しみにしているからな』

そして始まる徒競走。ゴールの先には元の世界の計測機器や映像を記録する大きく立体的な機械が設置されていて、走る冒険者達がゴールの先でテープを持っている『異世界食堂』の女性店員まで走り抜けた瞬間を詳細に測る。

『ただいまのLv. 1の冒険者が走った中で一位でありながら更に速くゴールをした者を発表する！——【ゴンザレス・ファミリア】のイディア！前回の一位の走者が再び勝利をもぎ取った、頑張った賞を授与する！』

『『お〜！』』

二回連続同じ冒険者の名前とゴールまで走り抜けた記録が挙がり、ガッツポーズをする駆け出しの冒険者に頑張った賞の証としてバベルの塔を模した黄金に輝く丸いメダルが運動会のために用意された制服に身に包むレイラから手渡される。

『続いては上級冒険者の徒競走を始める。己が上級冒険者の中で一番速く走れる証明をここで見せろ！女性が危機の時に駆け付けられる格好いところを見せれるチャンスでもあるからな！アスナ、彼等に一言を』

『応援します、頑張ってください！』

「アスナさんのために頑張ります！」

『おい、今返事した冒険者はうちの常連客だよな？』

『そうなのか？』

『そうだ。だから後で体育館の裏に——』

『『この世界にそんな建物は無いからな』』

不穏な雰囲気纏う一誠にツツコミを入れられても競技は進んで、冒険者の徒競走が終われば神の徒競走に入る。参加する女神へファイストスは同じ列に並び競う良好な関係の女神に話しかけた。

「ねえ、アマテラス。フレイヤとロキが運動会に勝った方がイツセーの優先権を得る賭けをしたって聞いた？」

「知らないわ。二人して何を話しているのかと思えばそう、そういうことね」

「そういうことよ。だから、お互い負けられない戦いよね」

「意地でも、ね。フレイヤにはそんな賭けをしたことに感謝すれど私は自分のために勝つわ」

紅眼と深い蒼眼から火花が散る。一誠を愛する女として負けられない戦いが一誠の知らない所で勃発した。

『最初の徒競走の勝利チームは紅組！だが、まだまだ運動会は始まったばかりで序盤も序盤！ここから白組も勝ち越していくだろう！さあ、次の種目を発表しよう！次は——』

今年も行われる運動会は晴天の下で始まったように見えた。

運動会同時刻——。茫漠とした砂だらけの荒野にとある「ファミリア」の眷族達が砂を掻き分け、何かを探している様に掘り起こしていた。広大な砂の領域、砂漠の中でたった一つのものを探すのは極め

て困難な作業であるが、彼等は運よく見つけ出すことに成功した。必然的に皆が大喜びをする中で立った一人、そのお宝をお調子者が笑うような軽薄な笑みを浮かべながら今回の為に敢えて用意した檻の中にいるモンスターへ近寄った。神から面白い話を聞き見つけたら試すつもりでいた彼の行動に訝しい目で見つめる団員達だったが。

「……おい、あんなところに穴なんてあったか？」

「は？穴だ？」

一人の不思議な言葉に怪訝と振り返れば、奈落の底を彷彿させる巨大な穴が音も無くポツカリと虚空に開いていた。本当だ、なんだありや？と他の団員達もその穴を注視——ヌウと何か出てきた瞬間まで見ていた。

——その後、彼らの運命は絶たれたのだった。

彼等の亡骸を残し巨大な影は、砂漠の中を移動して進む。

それは少し昔の物語。それは最も新しい、偉大な伝説。——古の時代、地の底より現れし獣が、この地を滅ぼした。その体躯、夜の如く。その叫び、嵐の如く。大地は揺れ、海は哭き、空は壊れゆく。漆黒の風を引き連れし、絶望よなんと恐ろしい、禍々しい巨獣よ。訪るはとこしえとこしえの闇。救いを求める声も、星無き夜に溺れて消える。そして、約束の地より、二つの柱が立ち上がる。光輝の腕輪をはめし雄々しき男神。白き衣をまといし美しき女神雷霆（ひかり）の鬨が満ち、女王の歌が響く。立ち向かうは、導かれし神の軍勢。見るがいい。光輝の腕輪が夜を弾き、白き衣が夜を洗う。眷族の剣が突き立った時黒き巨獣は灰へと朽ちた。漆黒は払われ、世界は光を取り戻す。嗚呼、オラリオ。約束の地よ。星を育みし英雄の都よ。我らの剣が悲願の一つを打ち砕いた。嗚呼、神々よ。忘れまい、永久に刻もう。その二柱の名を——。其の名はゼウス。其の名はヘラ。称えよ、彼等が勝ち取りし世界を。受け継ぐがいい、彼等が遺した希望を——

―。それは最も新しい神話であり、英雄譚。世界に希望を齎した、偉大な日……。

「……」

とある書物に一柱の初老の男神。静けさを保っている神の部屋の中でただ一人、不意に目を通したくなつた衝動を抑えきれず一誠が開催する運動会の最中ホームの中で一冊の本で読書を始めた。綴られた文字はそれ以外なく他は未だ白紙だらけの項目のみ。それでも一柱の男神は気にせず読み終えた項目を閉じて机に置いた時だった。

三大商会の一角の【ファミリア】――【ヴァベル・ファミリア】。ヴァベルは通信を受けて眷族と対話できる状態に腕輪の宝玉を触れた。立体的に映る眷族の顔色は焦っているようで冷静ではないことを察し、訳を聞くと……。

「あの砂漠から見た事が無い超大型のモンスター、ですか？」

焦りの色が濃く浮かんでいる、腕輪から立体映像を映している眷族の顔とその報告に初老の男神はいつものスマイル顔を崩し、真剣な面持ちで対応していた。

「そこに、新たなダンジョンが？」

「わ、わかりません。ですが……あぁ！」

現地で新たな変化が起きたのか、眷族が信じられないと叫ぶ。

『ま、まさかあの方角は……！しゅ、主神様、直ぐにギルドに報告してください！巨大モンスターがそちらに、オラリオに向かっています！』

二度目の戦争遊戯IN運動会の最中。一誠の計らいで運動会の余韻としてオラリオは祭りを二日間開催することにした。爽快な晴天に恵まれてオラリオに住む全ての皆が前日の祭りが前夜祭^{イヴ}だとして、今日は本格的な祭りだと笑顔を浮かべてはしやぎ、たくさん祭りを楽しもうと大いに騒ぎ――大いに歌い――この日を称えようとする。ギルドはこれを機に乗じてこの日を『グランド・デイ』と名付けて祭りの開催をしたのだった。

その開催の合図の花火を打ち上げていた市壁にギルド員達がいた。

彼等の役目が終わったことでギルドに戻ろうと足を運ぶ中、一人のギルド員が呆けた顔で地平線の向こうを見ていた。

「おい、何してる。開催の花火を打ち終えたんだ。もう戻るぞ」

「……………あれ」

「なんだ、何を言ってる……………なっ」

胡乱気と同僚の視線の先を釣られるように向いて視界に入れると、動く山と思わせる黒く巨大な物体が見えた。まだかなり遠くにいるものの、その存在をハッキリと主張する様に窺わせてるがただの物体ではない。真黒な、不吉を彷彿させる黒い身体を動かす八本の足。その複数の足を駆使してこちらに、オラリオに接近してきているのが明らかだ。

「な、なんだあれは……………!?!」

「わからないっ、と、とにかく報告だ!急げ!」

ギルドへ駆けだす職員達を慌てさせる原因の巨大な未知の物から何か上空へ打ち上げられた後、真っ直ぐオラリオに向かった。

『さあ、次の競技を始めるぞ。続いては——ボール転がしIN障害物リレーだ!』

『え、障害物リレー?あれか?設置された障害物を乗り越えてゴールまで進むってやつ』

『ボール転がしもあれだな。巨大なボールをゴールまで転がす競技だったはず』

『経験者がいたか。大体はあってるが説明するぞ。その前にこの競技に参加する者は男性冒険者と男神と決めさせてもらう。そして競技の内容は、巨大なボールを手で転がしてゴールまで走り続けるが途中、ボールを転がすコースに待機してもらおう味方と交代してボールを転がす。それを三回も繰り返して最初にゴールにたどり着いたチームが勝利だ。そして転がすボールはこれ』

舞台の裏側から透明な巨大ボールを転がすガレスとフレア、リヴェリアにキリユ。計四つのボールが横一列に並べられた。

『アレを転がしながらのリレーか。意外と普通——』

『俺が普通な競技をやらせると思ったら大間違いだぞ?』

『え、何か仕掛けでもあるのか?』

『まーな。因みにこのボールは中にも入れる。交代する場所まで転がしたらボールの中にいた選手も入れ替わってくれ。参加する者は二人中から走って転がし外から三人ボールを押しつけて転がす。二人の神はボールの中、三人の冒険者は外からボールを転がす。ということだ。競技に出たい神は六人、冒険者は九人。ステージに集まってくれ』

紅組白組から指定された人数の神と冒険者が意気揚々と客席から降りてきた。一度ボールがあるスタート地点へ歩いて——。

ガラアン、ガラアン!!と。突如に空を震わせる、けたたましい鐘楼の鐘の音が鳴り響いた。北部の方から。何より打ち鳴らされる音の激しさが現状起きているモンスターの襲撃に負けないぐらい異常ではない。まるで、かき鳴らしている側の人達も動揺を来しているかのように。その意味はオラリオに住む者なら一生に一度は聞くか聞かないか、ギルド本部が保有する大鐘楼——緊急事態を告げる、オラリオ迷宮都市への警報だ。ギルドの方から轟くその警報に相まって一誠達を啞然とさせた。

『——緊急放送、緊急放送!オラリオにいる全【ファミリア】に告げます!オラリオに存在する、全【ファミリア】に告げます!』

ギルドからの放送にオラリオにいる全ての者達が作業の手を止め、足を止め、意識を聞えてくる放送に耳へ集中した。

『全ての者は、これよりギルド指揮下に入ってください!ギルドは、「強制任務」を発令します!』

『「強制任務」だど?』

『しかも、全【ファミリア】に……?オラリオの総戦力?何でだ?』

『作戦内容は「討伐」!現在、オラリオに接近している巨大モンスターの排除!』

『え、今!?!』

現在こちらに向かってきている巨大モンスターという事実。オラ

リオの全「ファミリア」及び一般市民達にとって信じられない内容に目を見開く。

次の瞬間、オラリオから連鎖する大爆発が轟いて聞えてきた。誰がどう聞えたってオラリオが襲撃されていることは明らかだった。拡声器越しに一誠は全員に伝えた。

『冒険者はギルドの指示に従いここへ接近してくる巨大モンスターとやらの討伐の準備！神々は安全な場所か分からないところへ迅速的な行動で避難！ほら、動け！オラリオが攻撃を受けている！』

神々と冒険者は各々と動きオラリオへ戻る最中、アイス達が一誠達のところへ駆け寄ってきて自分達はどうする？というような視線を向けてくる。

「巨大モンスターとやらを見てみよう」

立体的な魔方陣から浮かぶ映像を展開する一誠によつてオラリオを中心に見える光景や景色。全体を見回す中で一点、黒くて地を張つて動いてる蜘蛛を彷彿させる巨大な物体がオラリオに接近してきながら背中から何かを打ち出していた。それらがオラリオの至る所に落ちた後、人や建物を巻き込む大爆発が起きたところから、黒煙から姿を現す数Mの全身が金属で作られたゴーレム。身近にある物、人に向かって破壊や攻撃を始めオラリオ中が阿鼻叫喚に包まれ始める。

「これが、モンスター？」

「何か、違うね」

「モンスターというよりは……」

「ロボットぽいよな？」

異邦人、転生者しか分からない単語にこの世界の人類のアイス達は首をかしげる。

「ろぼっとつて、なに？」

『幽玄の白天城』の庭園にいるゴーレム達の親戚みたいなもんだ。俺達の元の世界の人達の中には鉄の塊を自分一人で勝手に動くように作れちゃうんだ」

「では、あれもただの鉄の塊なのか？とても信じられない話であるな。一体どうやってあの巨体が動く？」

「膨大な力のエネルギーで動いているんだろう。ただ、どーみても、これは普通じゃないだろ。明らかにこの世界で作られた物じゃない。俺でもこんな巨大な物は作った覚えはない」

あつたらあつたで、それは納得してしまう自分にもう何も言えなくなる。一同の心中だった。

「動く鉄の塊というならば、儂等だけでもことが足りるか」

「仕掛けがなければな。これだけ速い機動力は足を数本の折れば動かなくなるだろうさ」

「ンーそうだねって言ってる間に近づいてきているよ。僕達がいるのは南方だ。このロボットっていう物は北方から来ている」

フィンの言葉に北の草原の方へ目を向ければ、蜘蛛のように足を動かしてこつちに接近してくる巨大な黒い怪物。知的と理性が窺えず何が目的でオラリオに向かってくるのか不明のままだが、近づかせるわけには行かない。一先ず、一誠達も行動を開始することにした。

『幽玄の白天城』に同棲、同居、居候している皆を集め接近してくる巨大蜘蛛の事を説明した時だった。

「デストロイヤーじゃないか！」

「何でこの世界にいるのですか!? あれは私の爆裂魔法で木っ端微塵にしたはずですよ！」

「デストロイヤー? 話を聞かせてもらおうか」

すぐ目の前に謎の巨大起動蜘蛛の事を知っていた面々から事情聴取が始まった。

「えっと、俺達がいた世界に転生した昔の先輩の転生者が造ったっていう古代兵器で起動要塞なんだ」

「要塞? 搭乗できるのか」

「ああ、できる。あの巨体を動かしているのはコロナタイトっていう宝珠があるからだ。それ一つで永久機関を作れるほどの魔力が秘めている」

「是非とも欲しいアイテムだ。でも、破壊したってことは」

「暴走状態なんですよデストロイヤーは。以前、動きを封じるとコロナタイトを暴発させて自爆する危険がありましたし、コロナタイトを

取り外してもデストロイヤーの中で溜まっていた熱で焼け野原になり兼ねないことがありました。だが、しかーし！その時に私の最強の爆裂魔法で跡形もなく消し飛ばしてやりました！」

リスクもある事が判明したことで対処方法は限られた。

「永久機関を作れるアイテム……」

しかし、一誠は目を輝かせてコロナタイトを手に入れた暁にはどんな物を作ろうかと長考に入っていた。長年の付き合いからして一誠が何を考えているのか分からないわけがない数人がいた。

「あ、イツセーの欲求が……」

「今回ばかりは諦めろイツセー。そんな代物をオラリオやこの城の中に置いておくのはあまりにも危険すぎる」

「流石に欲しいと思わないで頂戴ね」

周りからの否定的な言葉に心底から残念がり、首を項垂る一誠。

「……お前らの世界の物だから、お前等に任せていいか」

「勿論ですとも、任せてください」

「ねえー、デストロイヤーを止めたら高級なお酒をいっぱい頂戴よね」

「その程度なら百本でも二百本でも用意してやるよ」

「そういうことならば我輩も手を貸すでしょう。主に何でも要求できる機会は見過ごせないのにな」

「何でも……ま、迷いますっ」

何故かやる気を出す者達も続出するが、オラリオを守るためだと任せることにした一誠に問うのはリヴェリア。

「いいのか？お前の方が確実だと信頼しているが」

「経験者に任せた方がいいし、出来ると断言したからにはやつてもらうよ。最後、詰めが甘かったら出しゃばらせてもらうが……ゆんゆん」

「は、はいっ！」

「ゆんゆんも紅魔族だったよな？得意な魔法、それと効果も教えてくれるか？」

「わ、私の魔法ですか？得意というより私も紅魔族が好んで使っているのは主にライト・オブ・セイバーです。結果でも何でも斬り裂くこ

とができます」

「だからこの城に張った結界も消したわけか。じゃあ、めぐみんの爆裂魔法と合体、融合して放つことは？」

と、訊かれ悩む仕草をしながらも可能だと言いつ返しゆんゆん。

「んじや、この二人だけでも十分そうだな。頑張ってくれ」

「ちよっ！流石に私の爆裂魔法だけでは倒せませんよ！」

「片足だけでも機動力が奪えない？」

「ウイズにも協力してもらってやっとならなからな」

カズマからの言葉に納得できた。

「とにかくできるなら頑張ってもらわないと。バックアップは任せろ」

そんなこんなで異世界からやってきて数日のカズマ達は、二度目のデストロイヤー討伐をすることになった。

準備を整え北方の壁に転移すると、門の前には多くの冒険者が集っていた。その中には第一級冒険者のフィン等の姿も交じっていて、更に前方ではその巨体をはつきりと窺わせる距離にまで接近してきているデストロイヤー。

「フィン、今から攻撃するけどいいかー？」

「イツセー？わかった、やってくれ」

了承を得たところで一誠は全身から天に衝く勢いで立ち昇る膨大な真紅の魔力を奔流と化しながら、二人に魔力を与え両手に金色の宝玉がある紅い籠手を発する魔力の光と共に装着する。

『Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!Boost!』

『transfer!』

籠手から音声が流れ倍加の能力をめぐみんとゆんゆんに譲渡する。すると、体の中から湧き上がる魔力や力に全身で感じ取れる変化に二人は驚愕するのだった。

「ち、力が漲るーっ!?これは、う、うおおおーっ！」

「こ、これって・・・っ!?!」

「俺の魔力とこの籠手の能力だ。一定時間ごとに二倍の力が倍加・増加する。今の二人の魔法はいつも以上の威力と規模を発揮するだろうさ」

「いつも以上!?では、さらに爆裂魔法の威力が高まっているということですか!」

「それは自分の目で確かめろ。ほら、もうすぐ目の前まで来ているからやってくれ」

地響きを感じさせるところまで接近してきているデストロイヤー。一誠の催促により二人は力強く魔法を解き放った。ゆんゆんが魔力を集束した左手を天に向かって振り上げ、真紅色が帯びた巨大な魔力の光剣を具現化させた。

「ハアアアア〜ツツ! 『ライト・オブ・セイバー』 ツツツ!!!」

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたまう! 覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ! 踊れ踊れ踊れ、我が力の奔流に望むは崩壊なり。並ぶ者なき崩壊なり。万象等しく灰塵に帰し、深淵より来たれ!」

幾重の爆裂魔法の円陣をライト・オブ・セイバーに重ねるめぐみん。「これが人類最大の威力の攻撃手段、これこそが究極の攻撃魔法、そしてどんな不可能を可能にする最強の魔法!——『エクスプローション』 ツツツ!」

爆裂魔法を纏ったライト・オブ・セイバーが飛び出す弾丸のごとくデストロイヤーに向かって駆けた。門前の前にいたフィン達も見たことが無い壮絶な魔法を目で追いかけて、成り行きを見守った。防壁の結果を展開するデストロイヤー。二人の融合魔法にオラリオへの進行は初めて停止した。

「はあああああああああああつ!!!」

抑え込まれそうになっているデストロイヤー。だがしかし、一向に結果を突破する気配が感じられない。

「私の時より結果が強くなってるのかしら?」

「んじゃ、二陣のアクアとウイズ。出番だ」

「は、はいっ。わかりました!」

ドラゴンの魔力を与えられたアクアが持つ杖の蕾が開き、それを両手で振り回す。

『セイクリッド・ブレイクスペル』ツツツ！』

神聖な魔力を送り前方に五つの金色の魔方陣を展開すると、杖を魔方陣に突き出してアクアは魔法を放った。めぐみんとゆんゆんの魔法でも打ち破れなかった結果に続いて衝突した。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう。覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ。『エクスプロージョン』ッ！」

ウイズが放った爆裂魔法がデストロイヤーの結界にダメ押しとばかり直撃、ここでようやく結界を破りデストロイヤー本体に届いたのだった。爆裂魔法とライト・オブ・セイバーの合体魔法がデストロイヤーを直撃、跡形もなく原型も残さず大爆発で木っ端微塵となった。

フィンの右手の親指が不自然に疼いた。何か予想外なことが起きる？そんな前兆の前触れに警戒するよう一誠達に向かって伝えようとした時だった。

——訪れる筈のそんな未来を一誠達は見事に裏切られた。結界が破壊された直後、デストロイヤーが身を低くして真上へ一気に跳躍してこつちに、オラリオに跳躍してきたのだ。

「はっ?」

「はあっ!?!」

「ちよっ!!!」

蛙のように巨体で跳躍を繰り返すその動き方に誰もが驚倒一色に染まるも、念のために防壁魔法を幾重も発現してオラリオの市壁より高く張る。

「おいカズマ、あんな動き方もするのかデストロイヤー。予想外過ぎて困るんだが」

「俺に言われても・・・」

「ちよつと、どうするのよあれ！蜘蛛のくせに蛙みたいに跳んでくる

んですけど!」

罨を張るしかないだろう。デストロイヤーの移動予測地点に広大な魔方陣を仕掛け、そしてその魔方陣の上に着地したデストロイヤーは、下から引き寄せられる引力によって動きが強制的に停止された。

「や、やったの・・・?」

「おいっ! フラグを立てるようなこと言うなよ!」

「どういうこと?」

動きを封じられたデストロイヤーの顔の部分が二つに分かれて横に開きだした。すると、その中から——見たことが無い様々な体色の巨大な蛙の群れが一斉に飛び出してきた。他にも様々なモンスターが出てきてそれにはカズマが酷く愕然した反応を窺わせた。

「ジャ、ジャイアントトード!? なんでデストロイヤーから出てくるんだよっ!」

「あの蛙の名前か? 異世界のモンスターなら強いのか? 他にも何か色んなの出てくるし」

「打撃にはめっぽう強い! でも、他は弱い。それと捕食してくるがその食べる最中は動きを止める。他は説明する余裕はないけど普通に倒せれる!」

「——だ、そうだフィン!」

下にいるフィンも聞こえているだろうと話しかける一誠に槍を掲げる仕草で返された。

「総員、目の前の敵を駆逐せよ! オラリオに近づかせるな!」

「!」 「!」 「!」 「!」 「!」 「!」 「!」 「!」 「!」 「!」

出番を窺っていた駆けだすオラリオの冒険者達。ジャイアントトード等と接戦する時間はあっという間だった。捕食せんと舌を伸ばす巨大蛙に武器を振るい、魔法を操る魔法使い。素直にすぎーと感心していたカズマの横から荒く熱っぽい息を吐くダクネスが話しかけた。

「カ、カズマ! ジャイアントトード等まで現れてしまったては討伐していかねばならない! 私も行ってくるぞ!」

「お前は蛙の粘液塗れになりたいだけだろうがっ!」 「そんなことはな

い」その興奮した顔で否定しても説得力はないからな」

「自己責任でいいだろ。あれだけデカいなら攻撃も当たるだろうし、捕食されたらされたで無視すればいい」

「お前、何気に冷たいのな」

「自分の欲望に忠実な騎士なんて人を守る事なんて心底どうでもいいって思っているだろうし、何よりこの世界の冒険者は弱くない。ダクネスがいようがいまいが戦況に影響は出ない」

行くなら勝手に行けと促しの言葉を送られたダクネス。興奮していた気持ちが冷や水に掛けられたように冷え、一誠へ真摯な顔で言い返した。

「聞捨てにならないことを。私は仲間や守るべき人々を差し置いて欲望に走る女だと決めつけるのは止めてもらおうか」

「じゃ、訊くぞ。騎士の矜持に反しない行いを、今まで見ず知らずな男相手やモンスターに興奮したことはないんだな？正義感に溢れ真つ当な騎士のお前は一度もそんなことしていないと、言い切れるんだな？言い切れるなら先の言葉を撤回して謝罪する。———どうだ？」

真剣な眼差しを向ける一誠の視線に、一瞬だけ目を泳がせてしまったダクネス。

「し、してない」

「……本当だな？嘘吐いたら酷いお仕置きをするからな」

「お、お仕置き……っ！ど、どんなお仕置きをするつもりだ……っ」
不安二割期待八割の気持ちでお仕置きの内容を知りたがってしまつたダクネスに、清々しい顔で一誠は言う。

「ん——三日間も痛覚を遮断、興奮も感じられないようにする。それからお前の記憶から父親を具現化させて『ララティーナ、可愛いな我が娘ララティーナ』と囁かせてやる」

次の瞬間、土下座をする勢いで何度も頭を下げだすダクネス。

「なっ!?そ、それだけは勘弁してください！許してください！ごめんなさい、嘘吐いてました！だから、だから———！」

———ダクネスは墓穴を掘つた。

「へえ、嘘、吐いたんだな？」

「っ!?!?!」

「お仕置きか・く・て・い・だ」

ダクネスの額に小型の魔方陣が展開して直ぐに消失した。何をされたのか当人は分からないでいるが、一誠の悪魔のような悪い笑みを見て嫌な予感を覚えた。

「これから三日間、嘔吐いたことを後悔するんだな。お前の大好きな痛覚と興奮が感じられない生活を過ごせ」

「ま、待て・・・本当に・・・!?!」

「さて、めぐみんとゆんゆん、ウイズ。もう一度魔法出来る?」

おい!?!と詰めかかってくるダクネスをジャイアントトードから少し離れた距離の位置に転移魔方陣で送った。

「すみません。もう爆裂魔法を放つだけの魔力が・・・」

「私はまだ大丈夫ですけど・・・ライト・オブ・セイバーだけでは威力が」

「イツセー、また私に魔力を下さい。今度こそデストロイヤーを吹っ飛ばしてみせます」

魔力が足りない、威力が足りない。めぐみんの乞いに応じようとした時にバニルがここに来て制止の声を述べた。

「待つがよい。不思議なことにデストロイヤーの内部に誰かがいる。再びネタ種族のネタ魔法を放てばその者諸共消えてなくなるぞ」

「誰か? デストロイヤーの主?」

「我輩の口で知るよりも主の目で確かめた方がよいと吉と出でいる」

胡乱気バニルを見てしまう。人の気配などデストロイヤーから微塵も感じられない。見通す力だからこそわかる事なのかと思いつながらも、一人でデストロイヤーの内部へと侵入を試みた。適当なところから拳一つで装甲を破壊して難なく侵入に成功した。

本当に誰かいるのか・・・立ち籠る煙が治まっていく石造りの空間の中を見回しながら歩く途中、一誠はあるものを見つけてしまった。

広く暗い空間の中に四肢が石壁に埋まった状態の全裸な美少女を。そしてその背後にある物も。

「なるほど、あれがコロナタイトか」

危険な色を輝かせる宝珠から乱れある未知のエネルギーを感じ取りながら、目の前の少女に近づくと一誠の後ろから何か落ちてきた震動が床と空気を響かせる意識を変えざるを得なかった。

「よくある展開だな。でも、俺の邪魔をしてくれるなよ」

「……誰？」

ポツリと聞こえてくる幼い声。背を向けながら答える。

「ちよつとだけ待ってろ。すぐに終わらせてそこから助けてやるから」

そう言つて敵意を向けてくる相手の懐へ飛び込み、黒く染まった拳で殴ろうと突き出した。

ジャイアントトードの討伐は程なくして終わり、魔石がないモンスター殲滅をどうしようかと検討しているフィン達の視界に映るデストロイヤーから一誠が飛び出した。

「ただいまっ」と

カズマ達は戻つた一誠を出迎え、すぐ素朴な疑問をぶつけた。

「その子は？」

「中にいた」

まだ小学生のような身長の子供が一誠の大きな服を着ている姿で降ろされた。

「これでいいんだろバニル。どこまで見通しているのかあとで教えてもらいたいところだ」

「残念であるが我輩は信託を下す神ではないので悪しからず。して、あの古代兵器をどうする？」

「そうだなー。せっかくだ、めぐみん。お前の魔法をコピーさせてもらう」

「え、なにを言っているんです？」

カズマに背負ってもらっているめぐみんの背中に触れ、唯一無二の

彼女の魔法を複製にして自身の魔法に加えた一誠は——異世界の魔法の詠唱を唱えた。

「黒より黒く闇より暗き漆黒に我が深紅の混淆を望みたもう」

めぐみんとウイズが展開した同じ魔方陣より二重に重なり広大で天を衝くように高く——」

「覚醒のとき来たれり。無謬の境界に落ちし理。無行の歪みとなりて現出せよ。『エクスプロージョン』ッ！」

開放した一誠の『爆裂魔法』の魔力がデストロイヤーに直撃の瞬間。

「あ、やべ」

加減が分からず宇宙から観測できる程の大規模な爆発を起こしてしまい、オラリオと外にいるフィン達を全力で守る障壁を張って衝撃に備え、何とかオラリオやフィン達に被害を出さず防いでデストロイヤーの討伐は成功した。

「間近でやるもんじゃないな。一瞬焦ったぞ」

「凄まじい破壊力だ。全力でやったのか？」

「いや、必要な魔力の分だけ放出した。これぐらいだったらまだ何度でも放つことができる」

手を見ながらそんな実感を口にする一誠へ赤い瞳の視線をむけられた。

冒険譚52

街の復興作業が行われ、重軽傷を負った住人達は多くも死亡者は0という結果が発表されるのはしばらく経った頃であった。運動会は当然ながら中止となつて街の復興に尽力を尽くすオラリオの住民達。運動会を楽しめれる状況ではなくなったので来年に持ち越しという知らせに神々や冒険者達はひじょーに残念がった。そして一方……。

「アレーティア・ガルデイエ・ウエスペリテイリオ・アヴァタール。それがお前の名前か」

「……うん」

金髪の美少女の事情聴取が行われていた。場所は防音の部屋で行われている。部屋の前には『事情聴取につき立ち入り禁止。破った者はバニルによつて恥ずかしいことを暴露される』と札が掛けられている。

『幽玄の白天城』に連れて帰り、何故デストロイヤーの中にいたのか、それ以前にどうしていたのかバニルの協力も加えてプロフィールに書き留める。

「どうしてあんなところに封じられていたんだ？」

「……裏切られた」

「裏切られた？誰に？それが封印された理由になつてないけど、話せるなら話してくれ」

一誠の促しに彼女は封印された理由を語り始めた。

「私、先祖返りの吸血鬼……凄いい血から持つてる……だから国の皆のために頑張った。でも……ある日……家臣の皆……お前はもう必要ないつて……おじ様……これからは自分が王だつて……私……それでもよかつた……でも、私、凄いい力あるから危険だつて……殺せないから……封印するつて……それで、あそこに……」

ポツリポツリと語る女の子の話を聞きながら一誠は呻いた。なんとまあ波乱万丈な境遇か。しかし、ところどころ気になるワードがあ

るので、湧き上がる何とも言えない複雑な気持ちを抑えながら、一誠は尋ねた。

「アレーティアは、どっかの国の王族だったのか？」

「……（コクコク）」

「殺せないってのは吸血鬼特有の再生能力があるからか？」

その問いに赤い目を見開く。

「どうして、知ってるの？」

「俺の家族にも吸血鬼が数人いるからな。吸血鬼の能力もそれなりに知っている」

「嘘……吸血鬼は他の種族とは共存をしない」

「あー、普通はな。でだ、今まで自分がどこにいたのか分かってたか？」

「……迷宮なのは分かった」

迷宮？ バニルに視線を投げ投げということなのだと訴える。

「ふむ、神の逆者の一人が創り上げた大規模な迷宮であるらしい。我輩の夢を叶えるための迷宮として実に理想的な迷宮である」

「そこまで凄いのか。神の逆者ってのは？」

「言葉通りのままよ主。そこな吸血鬼の小娘のいた世界では神を討ち滅ぼさんとする人間が複数いたらしいが、それが叶わずに神を滅ぼす者が現れることを願って、それぞれ異なる場所で創造したようだ」

デストロイヤーの中が迷宮と化していた？ しかし、それにしても規模が小さすぎて迷宮とは言えない。カズマ達の世界の古代兵器の中にいた彼女の話とは明らかにおかしすぎる。

「神の名前はわかるか？」

「エヒト……神の眷族、人類からそう呼ばれている」

「うん……取り敢えず言わせてもらう。この世界はお前が知っている世界じゃないぞ」

どうということ？ と不思議そうに首を傾げる少女に一誠は語る。

「この世界では、一つしかないんだダンジョンが。そして天界で生きることが飽き飽きした神々が娯楽と刺激を求めて人間界に永住する

ため降臨し続けている。それで吸血鬼の存在は今のところお前だけだ」

「……えっ」

「ここは世界で唯一ダンジョンがある迷宮都市オラリオ。お前も俺もこいつも、それぞれこの世界に転移されてしまった存在だ」

己も含めてバニルとアレーティアに指しながら言い続ける一誠の言葉にアレーティアの思考が停止しかけた。

「……転移って？」

「異世界に飛ばされたってことだ。俺達が住んでいた馴染みある国や世界とは全く異なり全然知らない世界の中に。ちなみにこいつは悪魔で俺はドラゴンだ」

席から立ち上がって龍化してみせてアレーティアの目を見開かせた。

「竜人族……?」

「いや、正確に言うとドラゴンに転生した元人間だ。俺の魂をドラゴンの一部の肉体で構築したこの身体に定着させてある事情で死の淵から甦ったんだ」

元の人の姿に戻って語る一誠の説明に開いた小さな口が塞がらない心境で驚嘆するアレーティア。

「魔法でもないのに人間がドラゴンに転生できるなんてすごい」

「はは、そんなこと言われたの初めてだわ。大抵驚かれる方なのにな」
「恐がられてる?」

「恐がられちゃいないが、公に教えていい話ではないのは確かだ。勿論、お前が人間ではなく吸血鬼であることもだ。この世界は人間や亜人、獣人以外の種族。それもモンスターや人間の天敵の類の存在は忌避しているから、自分の出生のことはこの城にいる人間以外、外にいる人間や神々には絶対に教えちゃダメだぞ」

「ん、わかった」

素直でよろしい、と頷いてからようやく本題に入る。

「アレーティア、この世界はお前がいた世界ではないが今後どうしたい?生活力があるなら、住む場所を探して衣食住を提供する。それか

元の世界に帰りたいか？」

「……」

首を小さく横に振る。

「元の世界に戻っても帰る場所や行く当てもない。だから、貴方の傍にいさせて。……それと、アレーティアって名前は呼ばれたくない。別の名前で呼んで欲しい」

「別の名前？なんでだ」

「前の名前は知らない……お願い」

切なげに懇願され急に別の名前を要求されるとは思いもせず、困ったように眉根を寄せて考え始める一誠は彼女の外見の特徴を参考にした。

「吸血鬼Ⅱ夜、そしてその月のように綺麗な金髪を考慮して考えると『ユエ』だろうな。この城にユエルって名前の獣人がいるが、呼ばれるたびに紛らわしい思いをさせると思うがどうだ」

「ユエ？……ユエ……ユエ……ユエ……んっ。今日からユエ。ありがとう」

「どういたしました。ああ、俺の名前はイツセーだ。よろしくな」

そんなこんなで事情聴取は終わり、表に出る三人はLDKへ戻ると。

「戻ってきましたか、さあ、私と一緒に爆裂魔法の勝負をしてもらいましょう！」

めぐみんが一誠に向かって杖を突き出し、瞳を赤く光らせ勝負を吹っ掛けてきた。対して一誠はどうでもよさげにスルーしてカズマに声を掛ける。

「おいカズマ。子供が危ない遊びの誘いをしてくるぞ。ちゃんと保護者としてきちんと躾をしとけ」

「って、おいっ！誰が誰の保護者ですか！寧ろ私がカズマの保護者的な立場でいますよー！」

「毎度毎度お前が人に迷惑を掛ける度に謝り回っている俺に感謝を感じていないどころそのポンコツアークウイザード。この口か？生意気なことを言うのはこの口なんだな？おら、歯を食いしばるように口を

閉じてろ。その口を糸で結んでやつからよ。そうすりゃあ爆裂魔法が撃てなくなつて、毎度毎度面倒な爆裂魔法の散歩に付き合わずに済むからな！」

「ごめんなさい！冗談ですつ。冗談ですから眼帯を引つ張らないでください！いきなり放されると目に当たつて痛たそうだからゆっくり、ゆっくり——あれ、この展開どこかでしたような——（バチーン！）いったつ!?目がああああつ!!」

新たな居候が加わつたことで大いぶ騒がしさ+賑やかさが増した感が強くなつた気がしなくもない。

「はい、注目。大体予想しているだろうが今日からこの城に住むことになつた新しい居候のユエだ。異世界から転移してきたみたいだから、分からないことを聞かれたら教えてやつてくれ」

『よろしく』

『よろしくね』

「よ、よろしくお願いします」

ほぼ女性しかいない大勢から挨拶を一度にされて緊張気味に返すユエ。

「因みにユエはヘファイストス達神々を除いてバニルの二番目に年上だからな。外見だけで判断するなよ」

『——』

バニルの二番目……??

「えつと……本当?身長と顔的にまだ幼いよね?」

「ユエの種族は吸血鬼だ。見た目より年上だぞ」

「吸血鬼か!そりゃ、見た目で判断して勘違いしてしまうなあ……口リ吸血鬼とか」

信じられないとユエを見る目が殆どで、その手の知識を培っている一部は本物の存在を見て好奇心に顔を輝かせる。

「なあ、吸血鬼って言えばやっぱり血を吸うのか?吸つたら眷族にしてしまえるのか?」

「吸える。眷族も増やせる。相手の血を吸いきつてから吸血鬼の血を与えれば」

「太陽の下で活動は？」

「ん、私はできる。出来ない吸血鬼もいる」

海童の質問に答えていくにつれ分かっていくユエの能力や体質。

「バニル、そつちの世界にも吸血鬼いる？」

「いるとも。能力も体質も同じであろうな。主の世界には？」

「いるぞ。能力と体質も同じだと言いたいところだが全部が全部そうじゃないだろう」

「かもしれないな。時にリッチーとヴァンパイアは仲が悪いことは知っているかな？」

「え、なにそれ？」

海童も聞こえたか一誠とハモった。そして思わずウイズを見てしまふ。

「え？あ、あの、私達がいた世界のヴァンパイアの話であって、別の世界のヴァンパイアと仲が悪いわけではないですよ？」

必死に弁明を言う彼女を見てヴァンパイアとリッチーの仲が悪いとは思えない。特にウイズの事を知る者としてはなおさらだ。なので「じゃあ、ヴァンパイアの嫌いな特徴を言ってくれるか？」と訊いてみたら。

「そうですねえ・・・弱点まみれの半端者のくせに不死の王と名乗るナルシスト。ヴァンパイアの真祖からのおこぼれをあやかった腰ぎんちやくアンデットのくせに本当の不死の王のリッチーに悪口を言ったり喧嘩を売ってくるのがムカつきますね」

あの腰の低いウイズから出る言葉とは思えない発言に軽く目を瞬きして耳を疑った。

「ユエ、彼女がヴァンパイアの、吸血鬼に対する感想に対しての気持ちと言ってくれるか？」

「言われている体質や吸血鬼の社会のことは大体本当。私の世界にもリッチーはいるけど、基本的に不干渉だったから仲がいいのかわからない。でも、私の事ならともかく昔の家臣に対して言われると思うと・・・酷く、ムカつく」

ちよつぱり不機嫌そうな顔となってしまったユエに必死に頭を下

げて謝罪の念を送るウイズ。小さい女の子に大の女が謝る奇妙な光景を見せられるとは一誠達も思いもしなかった。

「ご、ごめんなさい！ユエさんの世界のヴァンパイア達に言ったわけではありませんから！」

「しかし、世界が違えど同じ種族だから言ってるようなものだぞポンコツ店主よ」

「酷いですバニルさんっ!!!」

結果、ウイズが抱く吸血鬼に対する思いを聞いてユエはそつとウイズと線を書いて接することになった。

「俺の世界にもいるみたいだけど、リッチーは会ったことないな。ま、一先ず話はこれでお終いだ。そろつと飯の準備をしようか。時にユエ、普通に人間の食材で作った料理は食べられる？」

「んっ、食べられる。でも血の方が効率的に栄養が取れる」

「そっか。んじゃ、俺の血、吸ってみるか？元の世界にいる吸血鬼の家族の評判じゃあ至高の味だってさ」

「.....いいの？」

一誠が首肯して了承すると、膝を折って体勢を低くすればユエは一誠の首筋に歯を立てるように噛みついた。生で見る吸血鬼の吸血の光景に緊張するアスナ達。そしてドラゴンの血を吸うユエは一口吸った直後、目を見開いた。体の奥底から湧き上がる凄まじい力を経験したことが無く動揺するも、異世界の吸血鬼の間で至高と言うぐらいの美味な血の味に恍惚な表情を浮かべた。それからどれだけ吸い続けたのか分からないが、ユエの身体にも変化が起きた。百四十cmの身長が大人の体型にまで成長し、金髪が更に伸び小さかった胸が豊満に膨らんだ。逆る色気。男女の区別なく魅了する魔性の美。妖艶を体現したような大人モードのユエに目を白黒するアスナ達。

「.....ストップだユエ」

「ん、もうちよつと.....」

「流石に俺でも血が減ると困るし、自分の身体を見る。俺でも驚くことになってるから」

頭上に疑問符を浮かべる元少女は気付かぬ間に成長した自身の身

体を見下ろす。目を見開く。

「ど、どういうこと……?」

「俺の血の影響であるとか思えない。それか吸う血の量だ」

羽織る純白のローブで大事な部分は隠せているが、隠せない部分が皆の視界に飛び込んでしまう。目の前にいる一誠も例外ではなく、羞恥で顔を真っ赤に染めて「イツセーのエッチ」と言われ心外だと眉根を寄せた。

「アスナ、衣類の買い出しを任せていいか。大人用の服でも問題ない子供服のな」

「えっと、それってまた血を飲ませるの?」

「そいつは本人次第だな。俺は何時でも受けの姿勢でいるから……そこ、俺の血って身体を成長させるの? 的な好奇心で見てるな。これは吸血鬼限定しか効果が出ないんだ。人間が俺の血を飲んだらどうなるか俺すら分からないんだからな。ユエの成長も一時的な変化だと思うし数時間後、もしくは明日になれば戻っている」

「じゃあ、毎日血を吸えば何時か吸わなくてもこの身体に変身できるようにになれる?」

「自然な成長で身体を大きくしてくれ。何時か俺の身体が干物になっってしまう」

「んっ、大丈夫。加減するから安心して」

妖艶な空気を醸し出すユエを、女性達の中で一種の危機感を覚えた。自分達にはない何かを持っているそれを自覚して武器にされてしまえば、一誠を奪われかねないと女の本能が警鐘の金を鳴らしていた。

ここに来て更に新たな騒動を引っ張ってきたアクアが勢いよくバン!と扉を開け放って一誠に抗議してきた。

「ねえ! この世界の冒険者は何でジャイアントトードの良さを知らないのよ!? 頭おかしいんじゃないの!」

「いきなり何だよ? 一体何の良さなのかこの世界の人類や神々すら知らないことだぞ」

「じゃあ教えてあげるわよ。ジャイアントトードは食べられるのよ。」

唐揚げにしたらすつごく美味しいんだから！」

この世界の冒険者からすればモンスターなんて食べること自体頭がおかしいのではないかと思っても仕方がない。この千年、モンスターを食べたという人類の事例は皆無であり、モンスターの素^{ドロップアイテム}材の加工や売買が当たり前で常識なのだ。一部を除いて。

「へえ、そっちの世界のモンスターは食べられるのか」

「見た目は蛙だから食えるのかな？って気にはしてたが・・・唐揚げにして食えるのか」

一誠と海童が興味を示したことで、まさかと信じられない目で二人を見る数多の者達。

「・・・イツセー、あのおつきな蛙を調理しようなんて思っただけよね？」

声が震えてるアスナに向かって純粹無垢な目で言い返す一誠。

「興味はあるぞ。そもそも両生類の蛙って焼けば食べれるし、俺もよく焼いた蛙を食ってたから抵抗感は全くない。カズマ、アクアの言うことは本当か？」

「アクセルの街だと普通に受け入れられているぞ。作り方は分からないけど骨付きの唐揚げにしたジャイアントトードの肉はちよつと筋が多くて硬いけど、食べられないわけじゃないし味も美味しいけど。な、めぐみん、ダクネス」

「この世界に来てまだ日が浅いですが、またジャイアントトードの唐揚げが食べられるというなら嬉しいですね」

「うむ、もう食べられる機会はないだろうからな」

めぐみんやダクネスまで認めるジャイアントトードの唐揚げという料理の存在に、頷く一誠。

「同じ味にできる保証はないが、そこまで言うならその要望を応えてやるよ」

『えっ!?!』

「お、作ってくれるのか。興味あったんだよ、本を読んで本当にモンスターの肉は美味しいのかなって。俺も協力するよ」

好奇心旺盛で一誠の考えに賛同するようなことを言う海童――

と。

「あの蛙を食べるアルか？私も食べてみたかったから早く調理するアルよ」

胃袋がブラックホール並みの神楽までもが乗り気だった。なので後始末していた者達から全てのジャイアントトードを回収して、初めての食材に試行錯誤をして何度も失敗を繰り返し、神楽やアクアに味見をしてもらい異世界の唐揚げを再現すること数時間……。「これよこれ！元の世界で食べてたジャイアントトードの唐揚げよ！あなた、中々いい腕をしてるじゃない！」

「美味しいアルよ！」

「おお、再現してしまうとは凄いです」

「困難を極めてただろうに、凄いではないか」

異世界の料理の味の再現を出来て一誠と海童はよしっ！と思いでハイタッチをする。そして二人も実食。

「あー、こんな感じが」

「フライドチキンに似てるかな？確かに少し硬いけど美味しいのは確かだ」

「でしょでしょ？ほらほら、皆も食べて見なさいよ。せつかく大量に作ってもらったんだからさ」

アクアの促しの言葉に躊躇する者と興味があつて食べる者が二つに分かれ、食べた者は「こんな味か」と思いながら、特にアルガナ達アマゾネスが中心に平らげようとしていた。

~~~~~余談~~~~~

「……ジャイアントトードの肉が売られてる」

ネットスーパーの一覧表にある筈のない異世界の食材が交じって増えていた。これに困惑して何でなんだと思いつつもことになった。

運動会が中止となって数時間後、一誠達も街の復興に協力するその頃——帝国領土内にある大墳墓。

執務室にいるアインズは超距離にいる対象を映すことができる鏡で一誠達の様子を覗いていた。デストロイヤーの襲撃から討伐の瞬

間まで。

「……む」

鏡の映像の中にいるユエを救出したところの一誠が視線を感じたのかアインズの視線とぶつかった。ジツと見つめても相手からは虚空に視線を送っているだけだが、その何も無い虚空に向かつて一誠が力強く正拳突きをすると、アインズの鏡に亀裂が入った直後に割れた。飛び散る破片がアインズの方にまで届いて控えていた従者が慌てた。

「アインズ様っ」

「いや、大丈夫だ。よもや気付かれるとは思いませんがな」

情報収集目的で観察をしていたのがバレてしまった。しかし特に焦った様子を窺わせない主に女性従者、アルベドはメイドに破片を集め出させる。

「如何なさいますか」

「どういう意味だ」

「アインズ様はあの者に興味を持たれている様子ですが、我々がこの世界で情報を集める中でやはり、あの者が厄介極まりない者であることは間違いございません。アインズ様のご命令であれば始末してさしあげます」

「止せ。現状、異世界を繋げる手段を持つているのはイツセーだけだ。金の卵を産む鶏を殺して自ら利益を捨てるようなことは断じてしたくない。私は利用価値あるものを殺さない主義なのはわかっている筈だアルベドよ」

「……出過ぎた真似を申し訳ございませんでした」

分かればよい、と話を打ち切り心中で思考する。

「敵対するのは避けたいな。このナザリックをどうにか元の世界に転送できるように何とかできれば彼も何とかしてくれる話だったし」

利害関係、協力者によく思わないでいる一部の配下がまた出会ってとんでもない発言をしないように気を配らねば、等とため息を吐く。

アインズのため息に釣られるように一誠もため息を吐く事が起きていた。自分に懐いたユエの行動にアインズ達がすっかりお冠なのだ。膝の上、背中、肩のどれかを占領するように居座ろうとすればアインズ達は黙ってはいられない。

「ユエ、イツセーの身体は皆のだから独占はダメ」

「というわけで、話し合いをしようよ」

「今イツセー様は作業中です。私達が不毛な言い合いするならば、イツセー様が怒りますから」

「……んっ、わかった。でもここで」

「……」

翌日の朝。子供バージョンに戻ったユエを掴みかかり一誠から引き離そうとするアインズ達と、地面に根を伸ばした植物のごとく、脚も使って全力で一誠に引付くユエ。

「面白い光景であるな。お子様の綱引きかなにかか？」

「それはそれで和む事だが、明らかに引つ張るものが違うから椿」

「ははは、それこそ和むではないか。慕われているお前もまんざらではないのだろうか？」

まあな。とLDKの隅に設置している数量分の畳の上に胡坐を掻いて、異世界<sup>ネットスーパー</sup>買物覧で異世界の買い物していた一誠とその様子を見ているカズマにバニル。

「マジで元の世界の買い物ができるんだな。金さえあれば便利すぎるだろ」

「今ではとても重宝している。何か欲しいもんはあるか？家電製品も買えるぞ。ゲームしか使えないけど」

「ゲームかつ！やってみたいな。どんなゲームがある？」

「色々と言えないな。でも今はこつちが優先だ」

選んだポチつと商品を押し、不足しているヴァリスを画面の中へ金額分に入れ続ける。チャージし終えれば購入ボタンに指で押せば一誠達の周囲に虚空から幾つもの段ボール箱が発現する。

「なかなか便利なスキルであるな。取得できるならば小僧に取得して

もらい、便利そうな商品を店で販売できるのだが」

「前から思ってたんだけどどうしてウイズのことへツポコ店主って言うんだ？」

「商売が下手すぎるからだ。何一つ、冒険者にとって使えそうにならぬものばかり仕入れてくるのだから、常に赤字が続いて一度も黒字の利益をもたらしたことなく一度もないのだ。我輩の願望を叶えるためにへツポコ店主の下で働いているにも拘わらずだっ」

「使えないもんを作り続けるその職人との縁を切つて別の仕入れ先と変更すればいい話じゃないか」

「それについては俺もそう思うぞバニル」

一誠とカズマから尤もな指摘に唸るバニル。

「我輩とてそう提示したのだが、あのポンコツ店主は頑なに拒絶の態度を示すのだ」

「じゃあ、仕入れ先の人のところにお前が直談判しに行けば？」

「行きたいところだが、我輩の留守の間にもまたとんでもないものを仕入れて来ると思うと、おいそれと店から離れるわけには行かぬ」

「でも、結局はバニルがいてもおかしな商品を持つてくるんだろ？」

カズマの言葉は否定できないと、ため息混じりに首肯する異世界の悪魔。

「バニル、お前の能力で占い師や相談所でもすれば稼げると思うぞ」

「検討をしよう。ところで物は相談だが主よ。主は様々なマジックアイテムを作っている様子。他にもデストロイヤーから得たある物で作ろうとしているその知識を買い取らせてはもらえないか。サトウカズマの知的財産の一部を具現化したものを買取ろうとしているところなのだ」

「へえ、どんなのだ？」

「ジツポライターだ。他は炬燵」

カズマの口からでた日本人にとって馴染みある道具の名前に軽く目を丸くして、苦笑する。

「かぁー、それは盲点だったな。今度、俺も作る」

「イツセーは何を作ったんだ？」



「空飛ぶ船と海の上を走る列車。他にも色々」と

「はああああ!?!」

驚くカズマの叫び声にLDKにいた一堂がなんだなんだと振り向く。

「列車って、あの列車？海の上を走るなんて聞いたことがないぞ」

「魔法と剣の世界、ファンタジーらしい乗り物だろ。とは言っても海に線路を別の島国と繋げて走らせてるから魔法の列車ではないけど」  
「いやいや、それはそれで凄いぞ」

「物作りが趣味なものだから。今度乗せてやるよ。行き先は極東、昔の日本の江戸時代のような国だ」

「マジかつ!」

マジだと首肯する。バニルに顔を戻して話を戻す。

「俺の知識を買い取ろうとしても物にできないなら宝の持ち腐れだぞ? いいのか?」

「無論、そのようなことがない商品を限定する」

「というか、買うって金がないだろ?」

「これからカジノで稼げばどうとでもない。心配は無用であるぞ主」

その内、出禁にされるだろうなと思いつつ……まだ引つ張り合いの奮闘中のユエ達に告げる。

「まだかかるか? 服が伸びるんだが」

「二まだっ!」

……仕方ない、と徐に今日はYシャツを着ていたので前のボタンを外し、脱いだYシャツでユエの顔に押し付けた。すると大人しくなつてスーハー、スーハーと匂いを嗅ぎ始めた。

「……イッセーの匂い、それに温かい」

一誠の身体からYシャツに掴む手を変えて、頬擦りするユエ。

「アイズ達の言うこと聞けユエ」

「んっ!」

至極幸せそうに笑って頷くユエに一安心すむ間もなく、アイズ達からゴゴゴゴゴゴ、とプレッシャーを感じた。

「……なんだ」

「ズルい」

「イツセーの脱ぎ立ての服なんて誰でも欲しいに決まってるじゃん！  
ユエにだけあげるなんてズルい！」

レナの言い分はアイズ達の気持ちを代弁しているようでアイズ達  
がその通りだと頷いた。いや、あげたわけじゃないぞ。と言つても機  
嫌が治る相手ではないことを熟知しているので、嘆息と呆れ混じりの  
息を吐き。

「俺のいない間に部屋に入って持っていた服は、何時返してくれる  
んだ？」

「……」

不自然なまでに肩をビクツと震わせ、目を泳がしたり冷や汗を流し  
たりと挙動不審なアイズ達。

「たまーになくなるんだよ。特にその日着ていた服が忽然と。どうし  
てなのかは、風の噂で聞いたからもう知つていいが。何時になったら  
返してくれるのか待っているんだよ？」

「な、なんのこと？知らないよ……？」

シラを切るつもりか、ならば……ユラリと立ち上がる一誠は  
邪な笑みを浮かべる。

「今からお前らの部屋に行つて——」

『つ——（ダッ！）』

「待て！分かり易い反応をして逃げるんじゃない！」

物凄い勢いで逃げるように駆け出したアイズ達。その後ろにピツ  
タリとくつついて追う一誠。盗まれた服は後日、取り返したがまた密  
かに盗まれることになった。

## 冒険譚53

「イツセー、イツセー。今暇ですか」

「めぐみん、俺はこの世界に来てから一度も暇な時間を得た機会は殆ど記憶にないほど手足や身体、思考を動かし続けている。今現在進行形もそうだ」

「ならばその時間の中に私と爆裂魔法の勝負の時間を入れましょう。私の爆裂魔法とあなたの爆裂魔法、どちらが真の爆裂魔法を操りし者か競うのです！さあ、今すぐ私と勝負を！」

デストロイヤーの討伐の日以降、めぐみんから爆裂魔法の勝負を申し込んでくることが多くなった。ほぼ毎日忙しい一誠は何度も拒絶の言葉で返すが毎日毎日、めぐみんが勝負をしたがつて仕方ないというほど、何かに憑りつかれた様に。

「……めぐみん」

今日も一誠に勝負を吹っ掛けるめぐみんの姿にゆんゆんが寂し気に遠くから見ていた。

「おいカズマ……めぐみんをどうにかしろ。毎日毎日爆裂魔法の勝負をしましょう！って言ってくるぞ。何なんだ？そんなこととしてどういう基準で競い合えって言うんだ？」

「あいつ、爆裂魔法はロマンとか断言するぐらい夢中になっているから……きつと自分以外の爆裂魔法を撃てる相手が出来て勝負したがつているんじゃないかと思う」

「ウイズがいるだろ」

「それな。でも、何でだろうなあ。イツセーの爆裂魔法に琴線が触れたかもしれないぞ。あれだけ凄い爆裂魔法だったら120点だけ」

何を基準に点数を付けてるんだ？カズマに訊くと自分でも呆れると風で語ってくれた。

「爆音と爆発の威力だよ。めぐみんに一日一爆裂の散歩に付き合わせられ続けられて、その日の爆裂の良し悪しが分かるようになったんだ」

「……おかしな理解力を身につけるなよ」

「好きで身につけたわけじゃない」

真顔で言い切るカズマに向かってため息を吐く。

「とにかく、毎日毎日勝負を吹っ掛けてくるのは止めてくれるようにしてくれ。あいつの性格を一番熟知しているのはお前なんだから何か別の方へ意識を向けさせてくれ」

「無理です」

また真顔で即答で返すカズマに何とも言えない神妙な顔をして向ける。

「……諦めるの早すぎないか？」

「熟知しているから無理なんだよ逆に。めぐみんから爆発魔法を取ったらそりゃあまともになる奴だよ？中二病めいた言動は目を瞑ればな。だけど、一日一発爆裂魔法をしないと気が済まないあいつに、爆裂魔法に関することから気を逸らせるのが難しいかお前はちつともわかつちやいない！」

「分からないから他力本願で付き合いが長いお前に頼んでいるんだよ。俺がやるとめぐみんが怒り狂うこと間違いなさそうだし」

「お前、めぐみんに一体何をやる気だよ」

「爆裂魔法を封印する」

「……あらゆる方法でお前を殺しにかかるな」

そんな想像が容易く思い浮かべられて割と他人事ではないことを自覚して、めぐみんに忠告しようと思ったカズマ。

一誠も部屋を後にしようと思えば扉を開けた時、部屋の前で立って悩んでいますといった表情を浮かべているゆんゆんと赤い瞳から窺わせる戦意に満ちためぐみんと鉢合わせした。

「ゆんゆんじゃないか。どうした？」

「あの、えっと、な、何でもありません！」

「イツセー、私と爆裂魔法の勝負を！」

「断る。子供の遊びに付き合う暇はない。これからやりたいことがあるからな」

「お願いです、私と勝負をしてください！してくださいお願いしますー！」

縋り付く勢いで懇願してくるめぐみんの頭を掴んで押し退けようとする一誠と、後ろから羽交い絞めするカズマ。

「おいコラ！毎度毎度勝負を吹っ掛けるんじゃない！流石に迷惑だろうが！」

「あんな凄い爆裂魔法を見せてつけられて黙っていられるはずがないでしょう！私の趣味とロマンである爆裂魔法を上回る爆裂魔法に感動したのです！ナイス爆裂でした！」

「・・・ナイス爆裂？」

親指を立てて称賛の言葉お送るめぐみんにつられ一誠も親指を立てる。

「というわけで私とちよつと爆裂魔法を撃ちましょう」

「嫌だし、というか同じ紅魔族のゆんゆんと勝負をすればいいだろ」

「いえ、もうゆんゆんとは色々な勝負をして私が勝ち越していますから勝負をするまでもなく私の勝ちです」

まだ知らなかった事実を打ち明けられ、そうなのか？とゆんゆんを思わず見てしまうと、勇ましくゆんゆんはめぐみに指を突き付け出した。

「い、今はそうかもしれないけどこれからは私が勝ってライバルのあなたに勝ってみせるわよ！」

「誰がライバルですか。いい加減その自称ライバルを言うのやめてもらえますかこのボッチ」

「ぼ、ボッチじゃないし！アイズ達がお友達になってくれたんだもん！」

「それはよかったですね。ですが、元の世界に帰ったらボッチに逆戻りになるでしょ？結局は何時まで経ってもボッチのままなんですよこのボッチ」

容赦のない言葉攻めにゆんゆんが泣きそうな顔をする。なんかやるせない気持ちとなってカズマを手招きして二人から少し離れたところで声を殺す。

「お前はゆんゆんと友達じゃないのか？」

「いや、友達のつもりなただけ。ゆんゆんの場合、まだ友達じゃない

感じなんだよ」

「明確に友達だつて伝えてないからじゃないか？ただの知り合い程度  
の関係だとしてか認識されていると思うぞ。そこらへん、同じ世界に住  
む者としてフォローしてやれ」

「わかったよ」

話は終わりだどこの場から去ろうとする一誠の背中に飛びつくめ  
ぐみん。

「逃がしませんよー！さあ、私と勝負を！」

「いい加減にしつこいな!？」

「めぐみん！私の時は面倒くさがっていたのにイツセイさんにしつこ  
く勝負を申し込むのはなんでよー!?私の時にもそうしてよー！」

「決まつてるじゃないですか。全ては爆裂魔法がそうさせるのですよ  
！」

一誠の背中に張り付いて引き剥がそうとするゆんゆんに断言する  
めぐみん。カズマもめぐみんを引き剥がすのに加わった。

「お前、爆裂魔法が使える相手なら誰だつていいだろ絶対！だったら  
ウイズと勝負をして来いよ！負けたまんまでいいのか！」

「何を言っているのですか。デストロイヤーを破壊し尽くしたので私  
の勝ちです」

「こいつ、さも当然のように言い切りやがった！」

誰でもいいという発言には否定しなかつたためぐみんをだつたら…  
とゆんゆんに視線を送る。

「なあ、爆裂魔法つて紅魔族しか取得できないのか？」

「いや、一応は誰でも取得できるんだけど。それにはスキルポイント  
が必要なんだよ」

「ポイント、カズマがいた異世界の冒険者カードのシステムの一つの  
ことか？」

「そうそう、レベルが上がるごとにポイントが増えるんだ。アーク  
ウィザードなら適正職業だからポイントが少なくて他の職業より早  
く爆裂魔法以外にも上級魔法を覚えられるみたいだけど、俺だと職業  
は冒険者だからポイントの必要数がすごく必要で覚えるのに時間

が掛かる」

「その辺り今度詳しく教えてもらおうぞ。でもそうか……じゃあ、ゆんゆんも爆裂魔法を覚えればいいんじゃないのか？」

カズマとの話し合いを聞いていたゆんゆんが否定的な言葉を送った。

「爆裂魔法は紅魔族にとってネタ魔法なんです。確かに高威力と広範囲攻撃は他の魔法より凄くて強いんですけど、それに伴い消費する魔力が紅魔族の魔力でも上回ってすぐに倒れてしまいます。めぐみんを見て分かっていると思いますが一日に一回しか使えない、ド派手なネタ魔法にしかならない故に私を含めて他の紅魔族の皆も爆裂魔法を覚える気がないんです」

「マジか」

「マジです。逆にイツセーさんが異常すぎるんですよ？あれだけ規模のデカイ爆裂魔法はめぐみんでもできないですし、それを何度でもできるって言うんですから」

「今は、ですよ。いずれ私もイツセーの爆裂魔法を越えた爆裂魔法を極めて見せますからね」

「当分、満足するまでか勝つまで勝負を仕掛けてくるのだと悟り諦観の念を抱いて——ある条件を下す。」

「そこまで言うなら勝負してやるよ。ただし、敗者には罰ゲームをしてもらうからね」

「罰ゲーム、ですか？もしも負けたら何をさせるつもりなんです？」

「そうだな……俺が勝ったら一日俺の言うことを聞いてもらおうか」

「それぐらいなら構いませんよ。では、私が勝った暁には満足するまで爆裂魔法の練習に付き合ってもらいますからね。勿論、一緒に爆裂魔法を極める練習ですよ」

そんなこんなで爆裂魔法勝負をすることとなった二人はトレーニングルームの特殊な空間の中、めぐみんの爆裂魔法を撃つためだけの異空間の中で行われることとなった。空間の中はオラリオの街である。ゆんゆんとカズマも同伴して一誠とめぐみんは市壁の上に肩を

並べ立っていた。

「ゆんゆんは初めて来るよな」

「は、はい。ここってオラリオですよね？お城の中にいたのいつの間に……」

「城の中だぞ。ここは俺が作り出した使い捨ての異空間だ」

「異空間……？それってどういうことですか？」

展開した魔法陣から浮かぶスノードームを手にとって疑問を抱くゆんゆんに教える。

「このガラス玉の中に小さな家の模型があるだろ？」

「はい、ありますけどこれが？」

「異空間ってのはぶつちやけて言うとは異なる別の空間。大まかに分かり易く言えば、どうやっても俺達が入れないこのスノードームの中にいるような状況なんだ」

と、説明を受けてもあまりピンとこなかった様子ゆんゆんを見てぶつちやけた。

「めぐみんが爆裂魔法を撃つても誰も迷惑が掛からない魔法で作り上げた好都合主義な空間だ。元の世界じゃどうせ人々の迷惑や自然や地形なんて一切合切気にせず、自分の趣味や欲望を忠実に従ってポンポンと撃つた爆裂魔法で破壊し尽くし過ぎて、破壊の魔王こと頭のおかしい人外破壊魔アーク・クラッシュヤーと呼ばれていただろめぐみんにとつて好都合な空間の中」

「あ……何となくわかりました」

「おい、今の説明はどういうことなのか詳しく教えてもらおうじゃないか！それにゆんゆん、今の説明でわかるのは一体どういうことですか！」

「何言ってるんだ、事実だろ」

「は？え？待ってください、アクセルの人達の間で私はそんなアーク・クラッシュヤー人外破壊魔の異名が浸透していたのですか？カズマ、私の目を見てください。どうして私から目を逸らすのですか。理由によってはただでは済まないですよ」

口を閉ざして追究するめぐみんから顔も逸らして語ろうとしない



カズマ。

「その辺にしとけ。ほら、さっさと勝負するぞ。しなくていいなら戻るぞ」

「いえ、やりましょう。後でカズマには追究しなくてはいけなくなりましたがね」

既に遅い事だと思いが、とは口にせず天に向かって衝くように建造された白亜の摩天楼施設を指す。

「勝負内容はあの塔を中心にどれだけ街に被害を出させるか破壊の具合にしようか」

「ふっふっふっ、いいですよ。爆裂魔法の威力を見せれる素晴らしい勝負じゃないですか」

「お、おい。いくら遠くてもこつちにまで届かないか？」

「結界を張るから心配するな。お前達の身の安全は俺が守ってみせるよ」

「すげー頼りに聞こえる言葉が出てきた。めぐみんもこれぐらい頼れるような上級魔法使いだったらいいのに」

「何をーっ?!既に私は最強の爆裂魔法を操りし最強のアークウイザーじゃないですか!何が不満なんですか何が!」

「んー」

めぐみんの身体を足元から品定めする目つきで腕を組んで顎に手をやりながら見つめるカズマ。チラつとゆんゆんを見比べて一言で答えた。

「全て」

「……イツセー、勝負内容は爆裂魔法をカズマを標的にして実際食らった感想にしませんか」

赤い瞳に光が消えて暗い顔でカズマに向かって杖を突きだすめぐみんの意見に首を振って否定する。

「止めとけ、流石に死ぬだろ」

「大丈夫ですよ。身体が激しく損傷しない限りアクアが蘇生してくれますから」

「何?死者を蘇らすことが出来るのか?アクアが限定、もしくはそつ

「ちの世界では普通なのか？」

「アクアの職業はアークプリーストですが、アークプリーストは本来一度死んだ者を復活させることが出来るのはたったの一度きりです。なのに何度もカズマを蘇生してみせるのは異常なんです。元々アークプリーストとしての適性が極めて高いか超越しているのだと推測しています」

女神だからそうなんじゃないのか、と言ってもアクアを女神として認識していないめぐみんからすればそういう認識されても仕方がないのかもしれない。

「取り敢えずさつきと勝負をしよう。先攻はめぐみんからでもいいぞ」

「わかりました。では始めましょう」

爆裂魔法を放つための魔方阵を展開し、奔流と化している魔力がマナタイト製の杖の宝珠に集束する。可視化するその魔力をジツと見つめる一誠の前でめぐみんは唱えた。

『「エクスプロージョン」ッ！』

バベルの塔に突き刺さる魔力の光の直後、大輪の花を咲かせ轟音が空気を響かせた。目の前で起きた大量破壊兵器と紛う爆裂魔法でバベルの塔は崩壊まではいかなかったが修復が不可能なぐらいの破壊をしてみせた。

「マジでやらせたらめぐみんは危険人物としてギルドから認定されるだろうな」

「やっぱりそう思うか。次はイツセーだけどどうするんだ？あの破壊具合から続けてするのか？」

「そんなことはない。もう解ってるだろ？」

前を見据える一誠につられ石の足場に倒れこんだめぐみん以外バベルの塔を見つめる。修復が不可能だと認識していた破壊された部分に光が輝きだして数分も経たず自動修復を完了した。

「いくら好都合的な使い捨ての空間と言えど、何度も使えるように自動的に修復できるように魔法で設定してあるからな。これで公平な判定が出来る」

「す、凄いですね。これも異世界の魔法なんですか？」

「ああ、そうだ。だけど中には自分の世界を作り上げてこんな風な空間の中で暮らす大魔法使いもいるんだ」

「大魔法使い……あの、その大魔法使いの人達ってどのぐらい凄いかわかります？」

「んー、鼻目目させてもらえば紅魔族より魔法の使い手で、さっきのエクスプロージョンと同等かそれを凌駕する魔法を操ることが出来るぞ。特に俺の母親は世界最強の魔法使いの当主だったし、めぐみんの爆裂魔法なんて苦笑いしながら数十、数百倍のエクスプロージョンを放ってみせてくれるかもしれない。昔小島を一つ消し飛ばしたって教えてくれた事があったから」

「なん……だと……!」

驚倒の声が入るも気にせず次は俺の番だと一誠はバベルの塔に向かって手をかざし、ふと疑問を口にした。

「ゆんゆん達って魔法を使う際は詠唱は言わなくていいのか？さっきのめぐみん、魔法名しか言わなかったが」

「はい、言わなくても大丈夫ですよ。私もライト・オブ・セイバーを放つ際は魔法名しか言いません」

「普通詠唱は唱えて安定した威力を発揮するために必要な筈なんだから」

「ふっ、紅魔族きつての天才である私は詠唱なんて不要の長物。まあ、前振りは大事ってことで格好よくキメるために唱えますが」

「実際、訳が分からないけどな。中二病めいた長つたらしい呪文を唱えたり一気に省略して爆裂魔法をぶっ放すし。まあ、要はその日の気分で呪文を唱えたいってことなんだろうけど、一誠も独自の呪文を唱える魔法とかあるか？異世界にも魔法が存在しているならさ」

魔法を放つ際は特に詠唱は不要と理解したところでカズマからの質問に対して、あるぞ、と答えた。

「魔法というか、特殊能力……異能の力を解き放つための呪文がいくつか」

「……………」

「……見たいのか？」

意味深に見つめて来てはコクリ、と揃って頷く三人。別に自慢して見せる物ではないがと思いつつも上着を脱いで上半身裸になった。

「な、何で脱ぐんですかっ？」

「破けるからだ。預かってくれ」

ゆんゆんに上着を手渡し静かに呼吸をしてから、濡羽色と金色のオッドアイに眼光を鋭く放って玲瓏に謳った。

「——我は無限と夢幻の神の龍也」

『』——我が宿りし覇と王道をも降す唯一無二の龍よ、汝じが赴くままに至れ』』

紡ぎ出す謳。一誠の玲瓏に紡ぐ謳をカズマ達は耳にする。

「——濡羽色の無限の神よ」

全身から奔流と化して迸る真紅色の極大オーラが、一誠の全身を包み込んでいく。

『』——赫赫たる夢幻の神よ』』

身体に宿るドラゴン達も詠唱を唱え、真紅のオーラに入り乱れながら迸る無限を体現する黒きオーラが、さらに一誠を覆っていく……。

『』——際涯を超越する無垢な無限の希望と純粋な不滅の夢を抱く全ての運命さだめを降す我らが真の禁を見届けよ』

そして身体から迸る真紅と漆黒の濃厚なオーラが身体に纏わりつき、片や真紅、片や濡れ羽色の入れ墨が肌に浮かび上がっていく。

そして一誠達は、最後の一節を謳った——。

『』——原始の理で以って我らが無夢を解き放たん』

呪文を謳い終わった時、真紅と濡羽色の龍を象った入れ墨が全身に浮かび、真紅の髪も濡羽色と入り乱れて染まった。

「とまあ、こんな感じになる」

茫然自失のカズマ達にそう告げる一誠だったが、返事が返ってこなかった。首を傾げどうしたんだ、と感じてると。

「か、カツコイイ……ッ！」

どうやら紅魔族の琴線に触れた様子だった。それから勝負を続けてみたものの、圧倒的に一誠が勝ったのでめぐみんの敗北。約束通り

翌日の一日はメイド服を着て一誠の奉仕活動を務める最中。

「イツセー、イツセー。今日も爆裂魔法の勝負をしましょう！」

「あ、あの・・・私も同伴していいですか？」

「・・・選択誤ったかなあ」

この日から更に勝負を従って付き纏ってくるようになり、アイズ達からめぐみんの事を油断ならない相手だと認識した。

## 冒険譚54

「あのアスナさん。お伺いしてもよろしいでしょうか」

一誠は仕事でいない『幽玄の白天城』の中、静かな休暇をLDKでメイドに淹れてくれた紅茶を飲み、ネットスーパーで購入した日本の雑誌を読んで過ごしてる栗毛の長髪を伸ばす女性の横から話しかける、ウエーブのかかった顔の右半分に斜めにウエーブのかかった長い茶髪にアホ毛の女性。珍しいと何を聞いてくるのだろうと首を彼女の方へ向ける。

「いいですよ。何でしょか？」

「イツセーさんの事なんですけど……イツセーさんは人間なんですよか？」

この城に住む者達の特徴の一つは、一誠の秘密を知る者と知らない者である。ウイズはその後者なので初めて出会った時の事を思い返して悟った。

「リッチーのウイズさんなら大丈夫だと思いますけど、イツセーのことうどう思ってますか？」

「皆さんに慕われているのが率直的な印象ですね。アクア様と出合い頭にいがみ合って喧嘩をしていたバニルさんもそういうこともしなくなつたのはイツセーさんがいるからだと思ってます」

「アクアさんとバニルさんが喧嘩？」

「はい、アクア様は女神ですので悪魔を、逆にバニルさんは悪魔なので神を敵視する存在ですから」

そういう事情があったのかと感想を抱き、そういうことならば確かに喧嘩をしているところは見たことが無いと改めて気付いた。

「悪魔ってバニルさんのような人の姿をしていますか？」

「いえ、確かに人の姿をした悪魔もいますが様々な姿をした悪魔もたくさんいます。中には邪神なんて昔は存在していたとかで」

「悪魔はどこで住んでいるんですか？イツセーの世界では冥界にいるようですよ」

「バニルさん達悪魔は地獄で生きているのですよ。地上に出てくるの

は稀でして、人間が悪魔と契約するために召喚されることもありま  
す」

「悪魔が人間に召喚、契約が必要ななら代償も？」

「必要です。召喚された悪魔によって代償は変わります。バルさんの  
のような悪感情を糧とする悪魔もいるそうで」

人の考えていることや秘密を暴露にすることが悪感情になるのか  
と、あまりいい種族ではないことだけはアクアがバルに敵視してい  
る理由は何となくわかった。

「あの人の好む悪感情って何ですか？」

「期待を裏切られた残念さと羞恥心が主にですね」

「残念さ？」

「冒険者が宝箱を見つけると無視できずに開けてしまいますよね？そ  
の中身が空っぽだったら残念がる筈です」

そういう意味での類の残念さが悪感情？

「それって悪魔にとって味とか感じるのかな？何か、『美味である』と  
言われた気が……」

「悪魔にしか分からないことなので何とも……」

それもそうだと理解したいとはあまり思わないアスナは本題の答  
えを言う。

「イツセーは外見は人ですけど、ドラゴンですよ。ただ小さい頃ドラ  
ゴンに助けられてドラゴンに転生した元人間です」

「ドラゴンに転生、イツセーさんの世界では人を捨ててリッチーのよ  
うになれる方法があるんですね。なんだかとても親近感を感じま  
すっ」

「今のところドラゴンに転生した人はイツセーだけですけど、他にも  
悪魔や天使、堕天使に転生できる方法があるみたいですよ。その為の  
道具がイツセーの手元にあります。今挙げた種族に転生すれば半永  
久的な寿命も魔力も得れるみたいですよ」

「すごいっ、異世界の技術はそこまで進歩しているのですね！それが  
商品化にできればきつと素敵な商品になりますよアスナさん！」

え、商品？何を言っているのだろうこの人はと思っていると、バル

ルがウイズの背後から静かに現れ興味深そうに口を開いた。

「それを消費すれば転生できるとは何ともお手頃なアイテムであるか。実に興味深い」

「バ、バニルさん!？」

「いつの間に……」

「普通に入ったままでだ。初めて主を見てから正体が気になって仕方がないポンコツ店主が、昨夜大変主に可愛がられて甘えに甘えた異世界のエルフに転生した元人間の小娘——おっと我輩に暴露されて心底羞恥な思いをしているな？これは大変美味、ゴチであるフハハハハ！」

——この人、あんまり好きになれない！

「つて、アスナさんエルフじゃなくて元は人だったんですかバニルさん？」

「その通りだ。転生した理由は——」

「バニルさん？それ以上言ったらイツセーに言いつけますよ。きっと私の為に怒ってくれてこの前のようにまたバニルさんをボロボロに、いえ、それ以上なことをしてくれません」

笑みを浮かべる反面、有無を言わせないプレッシャーを放つアスナから怒気を感じても余裕の態度でバニルは言い続ける。

「それは勘弁してもらおうか。我輩とて主の折檻はもう受けたくないのぞな。これにて失敬！」

懐から丸い玉を取り出して床に叩きつけた矢先、大量の煙が発生してバニルの姿が見えなくなった。驚く二人も包む煙が晴れた頃にはやはりバニルがいなくなっていた。

「い、今のは……」

「多分、イツセーさんから得た知識を商品化にできた一つだと思いません。すみませんでした」

よもや、それを見せつけたくて話を誘導させたのではないだろうか？ウイズの謝罪を受け止めながら気にしないでと、紅茶を飲もうとポットに手を伸ばすが飲み切っていたことを思い出して伸ばした手を戻す。その仕草を見たウイズが買って出た。



「私がお意のままです。誰かに淹れることは慣れてますので」  
「え、すみません」

「いえいえ、このお城に住まわせてもらってますからこのぐらいは当然です。本音を言えば、時間を持て余しているのでは何かしたいと思っ  
ていたところなんですよ」

ティーポットを手に取って台所へ持っていくウイズ。慣れた手つきと仕草が窺えるので言葉通り本当なのだと感心する。

「ウイズさん、リッチーってあなたの世界では人々に受け入れられているのですか？」

「絶対とは言えませんね。私も昔は凄腕のアークウイザードとして冒険者の生業を日々に励んで生きていました。ですが、とある魔族との戦いで死ぬ運命しかなかった時に、当時敵対していたある悪魔から助言をいただきましてリッチーになったのです」

「敵対していた悪魔から……」

「変な言い方ですけど、今では命の恩人みたいな方です。そしてリッチーになつてまで生き永らえた私は生き恥を晒してでも成し遂げた  
い事がありますから感謝しているのですよ」

入れ直した紅茶をポットに注いで運んでくるウイズに素朴な質問を投げた。

「それってどんなことですか？」

「昔の冒険仲間と再会することです」

どうぞ、とカップの中に淹れるウイズに感謝の言葉を送って、飲みやすい適度な温度の紅茶をしてくれたウイズの腕前に感嘆の念を抱きながら口に含んだ――。

「ブツ！え、すっぱっ!? あ、辛くなってきたっ!」

「え？酸っぱい？辛い？そんな、紅茶自体は確かに教えられた戸棚から……失礼します。……酸っぱい！あ、辛っ!? ど、どうして〜!？」

淹れた本人ですらも困惑する事態。なぜこうなったのか、全く見当が付かない。軽く身悶える二人がいる部屋に一誠が入ってきた。

「……どうしたんだ？」

「イツセーさん、実は淹れた紅茶が酸っぱくて辛い味に……」  
「紅茶が？昨日いい紅茶を買ってきたのか？」

「ウィズさんが淹れてくれる前は美味しかったんだけど……」  
理解に苦しむ二人からの説明を聞き、ポットから直に行儀悪く口の中に紅茶を流し込んで、味わってから飲むと首を傾げる。

「これ自体は酸っぱくも辛くもないぞ？」

「へ？じゃ、じゃあ……このカップが？」

「貸してみろ」

カップを受け取ってジイーと観察する。一誠もカップで飲むと二人と同様に酸っぱさと辛さが舌に広がる。縁に擦り付けた指の腹を舐めて怪訝な表情を浮かべる。

「この場に他に誰かいたか？」

「えっと、先ほどまでにバニルさんが」

「バニル？……因みに聞くが、悪魔は呪いの類は人や物に掛けることは？」

「できませんが……あつ！」

思い当たる節があるようで目を丸くして何かに気付いた様子のウィズ。内心、やっぱりな——カップから異質な力が帯びているのを感じて問うた一誠は、赤い宝玉のある紫色の籠手の『幻想殺しの籠手』イマジン・ブレイカーでカップに触れて、異質な力を無効化した。もう一度飲み直せば美味しい紅茶の味に戻っていた。

「バニルが味を変化させる呪いをカップに掛けてたようだ。味を戻しといたぞ」

「そんなことも出来るの？悪魔の呪いって悪戯程度の呪いしか出来ないのかな」

「いえ、人を呪い殺せることはできません。ただ、バニルさんの場合は人から放つ悪感情を得たいがために、悪戯目的で呪いを振りまいたことが魔王城にいた時よくしてました」

「……後でお仕置きだな」

是非そうして欲しいと改めて元に戻った味の紅茶を飲みながら心から願うアスナであった。

「ところでイツセー、今日はお店でお仕事なんじゃ?」

「ビールの補充をしに来たんだよ。その途中で何やら酸っぱいだの辛いだのって聞こえたから」

「あ、そうなんだ。ごめんね?」

「気にするな」

「じゃーな、と一言残して製造したビール工場に向かう一誠。これだ万事解決と気を緩めてウイズも誘う言葉を述べる。

「ウイズさんも一緒にどうですか?」

「よろしいので?では、お言葉に甘えますね」

「あ、確かお菓子もあったと思いますから一緒に食べましょう」

「いいですね!ああ、他の女性と穏やかに話し合うのは久しぶりですよー」

素直に喜ぶウイズに微笑んで一緒に台所へ赴き追加のカップと菓子を用意して、その日のアスナは穏やかな時間を過ごした。

「ぶはー!美味しいわねこのお酒っ!結構高級品なんじゃないの?」

「わかるか?ウチのオキニの一つの酒なんやで。ほれ、イツセーの世界の酒のつまみも食うてみい」

「あ、お酒の味と合って美味しいわね。でも、霜降り赤ガニのおミソを酒と一緒に飲むのも絶品よ?」

「ゴクツ、聞いたことのない食べ方や。もっと詳しく教えてくれへん?」

元の世界へ帰るまで充当されたアクアの部屋の中、酒気で充満する部屋の中で昼間っから酒盛りしている二柱の水色と朱色の神の女神達。住む世界が違えど吐くほど酒が大好きな事から直ぐに意気投合、飲み仲間として毎日どちらかのホームに招いたり招かれたりしては浴びるほど飲み明かす日々を過ごしていた。

「だったら実際に食べた方が早いわ。ねえ、この世界には蟹はいるの?」

「おるにはおるんやけど、オラリオには届かんのや。極東にいかんと食べれへんなー」

「そこってどこなの？」

「海を越えた東の島国や。でも、イツセーが作った列車で数時間ぐら  
いで行けるようにしとってくれたから食べに行けるで。それかアマ  
テラス達に頼んでみるかや」

「食べられるなら頼みましょうよ！ロキ、美味しい食べ方を教えてあ  
げるからお願いね！」

真つ赤な顔で満面の笑みを浮かべながら他力本願するアクアに、未  
知の酒の飲み方に興味深々なロキは前向きで乗り気になってアマテ  
ラスに連絡をしたのだったが。

『極東の蟹は特別な日に向けて以外は獲らないからそのお願い聞けな  
いわ。イザナギ、イザナミも同様よ』

バツサリと断りの一刀両断で切り捨てられた。しかし、希望はまだ  
あると残念で項垂れた首を持ち上げた。

「せや、イツセーに頼むー！」

「どうして？」

「ぐふふ、イツセーは異世界のありとあらゆる物資を購入できるチー  
トなスキルがあるんや。毎日自分等が食べとる料理の食材や調味料  
も大半はそのスキルで買っておるんや」

「それって日本の買い物もできるってこと？」

「二ホンちゅうのは何なのか分からへんけど、イツセーの手に掛かれ  
ばできないことは何でもないんや。蟹もすぐに食べれるでアクア」

ロキがそこまで言うなら期待できると楽しみが胸の中で膨らみ、夜  
の時用意してもらおうと考えて酒瓶を手に取りジヨツキに注ごうと  
傾けた。

「あ、もうないわ」

「こつちもないで。今日はもうお開きやなー」

「えー、もつと飲みたいのに……あ、そういえばこのお城でお酒  
を造ってる工場があったわよね？あそこで飲みましょうよ」

とジヨツキを持って立ち上がって提案をしたアクアの言葉に酒気  
帯びていた真つ赤な顔が、見る見るうちに真つ青になつて焦燥に駆ら  
れたロキが待ったをかけた。しかし、ルンルン気分で先に部屋から出

て行ってしまったので止めにロキも慌てて追いかける。

「だ、駄目やーあれは黙って勝手に飲んだらイツセーが怒る！」

「いいじゃない、ちよつとぐらい。それに怒るって言ってもお小言程度でしょ？えつと・・・あ、ここだったわね」

「アクアはイツセーの怒りを知らんだけやー！イツセーと交流している神々の間でも絶対に怒らしたらダメなアレなんやーあ、待ってやアクア！」

工場専用の空間に入ってしまった、ロキの必死の制止の声を聞き流してどこで飲めれるか見たことのない設備に興味深々ながら探し回り、階段にも上がって酒を溜めているそれらしき設備のタンクを求め足を運び続けた。

「ここかしら？」

「おおーい！」

開閉できる部分があるタンクの表面に気付き、開けては中を覗き込む。視界いっぱいに映り込む金色とアルコールの臭い、これだ！と疑いもせずにジョッキで直接掬い上げて飲みだす。

「美味ーい！この世界のシユワシユワは出来たてなのが一番美味しいのねーほら、ロキも！」

「う、ウチは遠慮する。というか、イツセーが帰ってくる前に部屋に戻る？な？」

「イツセーは夜になるまで帰ってこないんでしょ？ならまだ帰ってこないから大丈夫よー」

ロキの分も掬い取ってジョッキを突き出す。ブンブンと横に振り飲まない意思を示すロキに付き合いが悪いわねーと程度に思いながらまた飲むアクアだった。

それが——何度も何度も繰り返していくうちにタンクの中が変質しているのを気付かず、途中でそれに気づいたのがジョッキの中が見事な透明度の水質だった時だ。

「あ、シユワシユワが浄化しちゃった」

「じよ、浄化？どういうこっちゃ？」

「私は水の女神なのよ。体質も含めて能力によって私が触れた物は

みーんな浄化しちゃうの。沼に入れば綺麗な水溜まりになったり、飲めないほど汚れて悪い水質や毒液だつて私に掛かれれば透き通った水にしてみせるの。欠点は紅茶やお酒、ジュースといった飲料水に指が触れちゃうとお湯やお水に変質しちゃうのが困りものね」

「――」

いま、なんて言った……？酒を水に変える……？もしもそうなら、タンクの中の酒が全部水に変質しているのでは？

「ちよ、貸してみいっ!?!」

アクアからジョッキを奪い取ってロキもタンクの中へ手を突っ込んで掬い取ってみれば……綺麗な水がたっぷりとジョッキの中に入っていた。――ヤバい、嫌な予感がしないっ!!この場にフィンがいたら親指が激しく痛くなるほど疼いていただろう。それだけ自分達が何を仕出かしたか、自覚してしまう分とんでもないことをしたのだと自覚した。

「どうしたの？ロキも飲みたくなつたならもう無理よ、浄化してしまつたもの」

「おま、アクアツ。自分、誰の酒を台無しにしたのかまだわかつておらんのかいな!?!てか、ここから早く離れるで!」

幸い、『異世界食堂』で働いている者達以外はここに来ない。酒を補充しにしか来ないためバレることはない。強引にアクアの手を掴んで引つ張り急いで工場から逃げるようにして駆け出すロキ。

――これまでの事は一誠がビールを補充しにやってくる五分前の事だつた。

そして一誠が工場に足を踏み入れ、客の為にビールの補充の作業に入った時……異変を感じ取った。大樽にビールを流し込むためにチューブを何時ものように介して注ぎ込む時に見える筈の黄金色が水のように透き通っていたのだ。これは流石に誰であれおかしいと実感する。原因の追究をとタンクのもとへ一瞬で移動して中身を確認した途端、一誠の思考に空白が生まれた。完全にタンクの中身が入れ替わったかのように水になっていたのだ。自分のいない間に誰がどうやってしたのか……兎にも角にも一誠は言わずにはいられ



提供する」

「それでも文句を言う客がいたらどうするんだい」

「そうならないよう俺から説明する。それでもミアの言うとおりに  
なったら土下座して謝るよ」

「店主さん、何もそこまで……」

「する必要があるんだよ。楽しみを減らされてしまうのは誰でも嫌な  
んだからな。管理能力が至らなかったのは事実だから文句言われて  
も仕方がない」

至らなかつたとはいえ、どうして水になっていたのか未だ不明のま  
ま。兎にも角にも、今するべきことをしなくてはならない店主はホー  
ルに出て客達全員に聞こえるようにビールの提供の制限の報告と説  
明をした。やはり当然と言うべきか、疑問や疑心を抱く客は多くいた  
ものの理解してくれた客達から納得の声が挙がり店主は申し訳なさ  
を込めて感謝の念を皆に伝えた。

「それとまた以前のように提供できるまでの間のお詫びの品は、ホー  
ムでも飲める小型のビールを送るけど……許してくれるか？」  
『寧ろ俺（私）（僕）がずっと望んで待っていた！ありがとう店主！』

イヤッホーイッ！と急にハイテンションになった客達に面を食ら  
う。対してシル達から良かったですねと労いの言葉を送り、心なしか  
ビールの注文を増やす客達の対応に追われる。

諸事情によりビールの注文の制限は、翌日店の前で置かれた掲示板  
で来店する客達に見てもらい、店内でも店員達からも一言告げられて  
了承を得るようになった。そして案の定、ビールの製造が完成する前  
に店で貯蓄していたビールが無くなり、それ以降もお詫びの品とビー  
ル缶を二ダース分入れた保冷機能の魔道具マジックアイテムを提供し続けた。

「店主、この缶ビールって小さなビールを商品にした方がいいと思う  
よ。確実に儲かる。缶ビール目当てに来る客が目立ってきてるから  
ね」

「まあ、確かに無料で酒を提供しているようなもんだしな。そうする  
よ」

ミアの提案に乗る店主に件の話もされる。



「で、犯人は分かっているのかい」

「まだわかってない。今はビールの完成に急いでいるんだ、他のことに時間を割いている暇はない。が、妙におかしな態度の奴が一人いるから目星は付いている」

「だったらさっさとケリを付けなよ」

「そうするつもりだ。．．．許す気はないんだからなあ」

オッドアイの瞳の奥で瞋恚の炎を燃やす店主の犯人捜しはまだ先であるが、その時になったら確実に酷い目に遭うのは間違いないであろう。泣いて叫んでも何度も謝罪してでも、血も涙もない恐ろしいお仕置きが待っているのだから。

## 冒険譚55

ビールが全て水になった事件は城の中にいる全員の耳に入り吃驚する。どうしてそうなったのか調べる余裕はないと一誠の話で犯人捜しは「今は」しないと声明した。

「ただし、これだけは言う。——俺は常に怒ってる。泣いて謝っても許さないし今回は相手の人権なんて無視した体罰をする。誰かに止められようとこれで皆に嫌われようと体罰はし続ける。いいな」

緊張で息を呑む。三人の転生者以来の怒りを感じ取った被害者だったリヴェリア達は目を瞑って犯人に同情する。神でも止められないドラゴンの逆鱗に触れてしまったのだから自業自得としか言いようがないのだ。

「因みに酒を水にしてしまうほどの魔法か異能の力を持った奴はこの場に居る皆の中でいないとは思っている。最近暮らし始めたカズマ達も同様だがとにかく何か分かったことがあったら教えてくれ。犯人を匿うなんてことをしたら庇ったそいつも同様の体罰をするから、変な情を抱かないように頼む」

「……………」

「……………」

翌日の朝に聞かされた一誠からの話の中、『ビールを水にしてしまう魔法か異能』という言葉に思い当たる節があるカズマとめぐみん、ダクネスは水色の髪と瞳の美少女へ視線を送ると、その美少女は一人顔を青ざめて挙動不審、百面相をしていた。

「——おい、心当たりがあるようだな。いえ」

朝食後、カズマ達はアクアの部屋に押し入ってみればベッドの上で体育座りしていたアクアがビクリと震わせた。

「はい……………あのシュワシュワを製造する工場があるじゃないですか」

「うん」

「ロキと一緒に飲んでいたらお酒を飲みつくしちゃって、でもまだ飲みたくて、出来立てのシュワシュワがある工場にロキと一緒に行った

んです」

「うん」

「ジョッキで直に掬って飲んだら凄く美味しかったので、満足するまで何度も飲んでいたら美味しいシユワシユワを浄化しちやい．．．まし．．．た」

白状したアクアの発言にカズマだけじゃなくめぐみんとダクネスも揃って頭を垂らしたため息を吐いた。

「——お前、なんてことを仕出かしたんだあつ!?あの工場は入って良いが勝手に飲むなって教えられただろうが!しかも全部浄化しちまったなんて異世界に来ててもどこまで駄女神なんだお前は!!」

「流石にこれはフォローのしようありません。何より庇ったら私達まで体罰をされます」

「わ、私は望むところだがなつ!アクア、安心しろ。お前の責任は全て私が引き受けて見せる!」

興奮した顔でアクアの身代わりに買って出ようとしたダクネスの真意を読んでの指摘をするカズマ。

「お前、また痛覚と興奮が感じなくなりたいのか?今度は三日じやなくて一年もされたら耐えられるのか?」

「．．．．．すまない。アクア、自己責任として罪を償ってくれ」

生き甲斐を失われたくないばかりに手のひらを反すダクネスにアクアの味方はこの場に誰もいなかった。

「ね、ねえ．．．私これからどうすればいい?どうなっちゃうの?あいつ怒ってるって言ってたし」

「店に使う酒を全部浄化したんだから．．．．この世界に来ててもまた借金を押し付けられるだけでもマシだと思え」

「それも嫌々!?異世界に来ててもまた借金なんて!どうにかしてよカズマさくん!」

「アホ言え!今回ばかりは俺でもどうしようもならないことなんだよ!庇うことはできないが一緒に謝れば許してもらえずとも何とか穏便に済ませるしかないだろ」

泣きじゃくって縋るアクアとは腐れ縁なので見捨てるほど冷酷で

鬼畜じゃないカズマは、アクアの手を取って引つ張る。

「ほら、何時までも隠し通せるようなことじゃないんだ。寧ろ長引けば長引くほどイツセーの怒りが収まらず他の人に迷惑が掛かるんだ。こういう時はさっさと素直に謝った方が痛い目も遭わずに済むから行くぞ」

「う、ううっ……………」

「仕方ありませんね。私も一緒に謝ります。同じパーティーメンバーですから」

「庇うことはできないが誠心誠意に謝罪することぐらいはできる」

「ごめんね……………ごめんね……………」

泣きながら謝罪と感謝の念を込めた言葉を仲間と言い、と共に一誠のところへ謝罪しに向かう。

L D Kにいた一誠の前に並んで「「ごめんなさい」「」と異口同音で同時に頭を下げながら謝罪。突然のことで一誠やアスナ達は不思議そうにカズマ達を見つめた。

「……………何だ？」

「ビールを全部水に浄化した犯人はこいつです」

アクアが犯人だと教えるカズマ。途端に一誠の目つきが鋭く、精神が押し潰されそうな威圧感を感じるようになった。カズマ一行だけじゃなくL D Kにいた他の面々も感じて冷や汗を流す。

「浄化した？…どういうことか説明しろ」

「アクアは水の女神と自称するだけあって、体の一部でも触れると何でも水やお湯に浄化してしまうんだ。それこそ温泉の源泉の成分すらも浄化してただのお湯にしてしまう」

「……………」

胡乱気な目でアクアを一瞥して椅子から立ち上がって冷蔵庫に足を運び出す。冷蔵庫から取り出したコップの中にコーラを注ぐとそれを持ってアクアに突き出した。

「これも浄化できるのか」

「はい……………」

人差し指だけコップの中に入った、掻き混ぜるようにして動かすと見る見るうちにコーラの成分が無くなっていき、黒かったコーラが透き通った水になっていった。浄化された元コーラを飲んでみると水の味しなくなかった。

「自称水を司る女神なだけあって相応の能力だな。で、何でそれを理解して酒を全部駄目にした」

「すみませんでした。お酒が飲み足りなくなつてつい、ロキと一緒にシユワシユワを飲みたくなりました」

「……ロキだと？」

眦が裂き、声音のトーンが更に低くなった。無言で話を聞いていただろウリヴェリアへ振り向き、この城にロキを召喚するように視線で促した。

「イツセー、どうか、穏便にお願いできないか」

「アクアも悪気はなかったとはいえ、大事なお酒を台無しにしたのは事実ですが」

「借金でも何でも、煮ても焼いても構わないから心ばかりの恩情をどうか」

「ご、ごめんなさい……！お願いします……！酷い事だけは勘弁してください……！」

揃って頭を垂らして懇願する四人に睨み付け、感情が消えた顔を向ける。

「……イツセー」

「黙ってくれないか」

最愛の家族の言葉を無情に切り捨て、椅子に座り直す。

「おい、浄化以外に何ができる」

「アンデッドや呪いを浄化する以外は宴会芸の披露に物を創ることができます」

「物を創るとは具体的になんだ」

「人を模した石鹸や紙パックで模型を創れたり他にも色々……はい」

アクアの神としてのスキルなのかと疑いたくなる事であるが、やり

ようによつては無駄ではないのは確か。

「……取り敢えずお前、借金な。本来提供する筈の酒を全部台無しにされたんだからな」

「……えっと、どのぐらいでしょうか」

「三千万」

と言った矢先にアクアに近づき、手を突きつけると魔方陣を展開したと思えば彼女の青い衣や下着など全て破壊して丸裸にした。突然のことで唾然としたが、素っ裸にされたことに気づいたのは数秒を要したアクア。

「きやあっ!?ちよ、なっ、何をするのよおっ!」

「黙れ、その体を使って借金を返済するのがお前の役目だ。しっかりと俺が満足するまで頑張ってもらうからな」

「ひっ!わ、私の体で卑猥なことをする気なのねっ!?この鬼!悪魔!カズマ!」

「おい、どうして俺の名前が出てくるのか説明してもらおうか?」

「それで叩くぞ。お前、全然反省していないみたいだな」

魔法でアクアを中に浮かせ、肩に担いだ状態で思いつきり鞭のように腕を振るって全力で尻をパーンツ!と音を鳴らすほど叩いたので、アクアがあまりの痛さに泣く。

「痛いっ!や、止めてお願いだから止めてよ!痛い、痛い!止め、う、うわあああんっ!わあああんっ!」

女神を泣かして一誠はどこかへ連れて行った。

「……あの、アクアはどうなってますか?」

「さっきの言葉通りになっちゃうのかわからない……」

「朝の言葉も考慮すれば、本気でしかねないが」

めぐみんの不安は更に現実的になると匂わせ、顔を強張らせる。

「止めに行つてきますっ」

居ても立ってもいられないと一誠の後を追いかけて行くめぐみん。ダクネスとカズマも顔を見合わせてめぐみんに続く。

「仲間思いなんだね……」

「そのようだな。アスナ、行くのか」

「イツセーを信じますけど、過激なことはさせないようにしてみます。自信はないですけど」

「すまない、私はロキを捕まえに行かねばならない。どうやら逃走したらしいのでな」

確信犯であるのは間違いない。頭を抱えそうになり、城を後にするリヴェリアと分かれアスナは一誠の所へ向かった。しかし、一誠の部屋にはいなかった。ならばお風呂?と思つて中に入ると立ち尽くすカズマ達の背中が視界に映り込んだ。

「どうたの・・・?イツセーとアクアさんは・・・」

「あれ・・・」

「・・・え?」

三人が見ていた先にアスナも釣られて見てしまった光景は。

「おら、全力で浄化魔法をしやがれっ!適当にしているとお前の尻に酒瓶を突っ込んでやるぞっ!」

「ピュリファイケーション!ピュリファイケーション!ピュリファイケーション!」

縁に仁王立ちする一誠が泣いているアクアを湯に浸からせた状態で何かの魔法を発動させていた。

「・・・アクアさんが何してるのかわかる?」

「アクアが得意とする浄化魔法です。ですが、ただのお湯のお風呂に浄化魔法を使わせる理由がわかりません」

「何がしたいんだろうかイツセーは」

「わからん。アクアの能力で一体何がしたいんだ?」

三者三様、一誠の考えが読めず理解に苦しんで小首を傾げる。兎に角、アクアに対して酷い事だけはしてないことはわかつて一安心するが、強制的な事をしているのは確かだ。その理由はアスナもわからないのだが。

「・・・イツセー、何してるの?アクアさんに浄化魔法を使わせて」  
「台無しにしたビールの弁償をさせている」

「ごめん、理解できないんだけど」

心底から困惑しているアスナへ振り返り、現状の経緯を説明口調で語り出した。

「アクアは異世界の女神だよな」

「え、うん。そうみたいだね」

「女神らしく神聖な魔力と浄化魔法があるよな」

「今日初めて聞いたけど、うん、そうみたいだね」

「んで、アクアは水を司る女神」

「・・・?」

それが何なの?と言いたげに苦難の色を顔に出すアスナ。一誠の意図が読めず分からないでいると一誠は言った。

「何でも浄化してしまうアクアの力は呪いや毒といった状態異常を回復させることが出来る。なら、それを手軽に携帯できる物——聖水が作れるかもしれないと憶測を立てた」

「聖水ってあの特別な水の?」

「特別な水というよりは、大雑把で言えば神を信仰する教会の使徒がよく儀式に使ったり、悪魔やアンデット退治するためにも使われる神聖な水だ。その効果のある聖水が手に入るなら色々試しに使ってみたくなっただけ」

聖水を欲する一誠の私欲でアクアに浄化魔法を使わせている。という理屈が分かった。

「聖水って浄化魔法で出来るのですか?」

「お前達の世界にいる普通の信者じゃ無理だろうけどアクアなら可能の筈だ。アクアの身体から出る出汁で出来た水は料理にも使えそうだしな。浄化された水も水質が極めて高いかもしれないし更に美味い酒が出来上がるかもしれない。——そんなわけだからもつと必死こいて浄化魔法を使えアクアアツ!」

「うううっ!完全にイッセーの私欲じゃないの!女神の私にそんな理由でコキ使うなんて罰当たりなことするんじゃないわよ!」

涙目で抗議したアクアだったが次の瞬間。一誠の怒声が風呂中に轟いた。



「ああん!?!酒を台無しにした責任はカズマ達の願いを聞いてやって、恩情で酌んでこの程度で済ましてやろうと思ってるのにその態度はなんだ!だったらいいよ、文字通りその身体を犯して犯しまくって、孕ませてやろうか?それとも俺が気が済むまでサンドバックにしてやろうか?それともお前だけ知らない土地に放り出してやろうか?なんなら一人だけ元の世界に帰るか?こっちはモンスターがいる湖のところで浄化してもらってもいいんだぞ!さあ、選べ今すぐ選べ、そしたらすぐにしてやつからよ!」

「うわあああ!ごめんなさい、一生懸命頑張ります!頑張りますからそれだけはいやあつ!」

「言っておくが、俺が満足する量はまだまだだからな。この風呂の湯が全部聖水になったら今度はプールの水にも浄化魔法を使ってもらう。それが終わったらまた何度でも聖水の生産に励んでもらうから覚悟しろよ!」

「そ、そんな!?!」

.....結論。

「戻るぞ」

「そうですね。浄化魔法をするだけで借金が返済されるなら私達の手助けは必要ないですし」

「うむ、アクアの得意分野だからな。私達はしばらく終わるまで待つとしよう」

カズマ達は心配することではないとばかりこの場から立ち去った。しばらく見守っていたアスナも問題なしと判断して引き下がる。

「.....イッサー、怒ってた?」

一誠の様子を見に行つたアスナにアイズ達は心配そうに尋ねてきた。

「うん、今日はそつとしてあげてね?今アクアさんにお仕置き中だから」

「どんなお仕置き.....?」

「とても疲れることかな?でも、酷い事じゃないから大丈夫だよ」

「ん、わかった。あとリヴェリアから伝言。『ロキが捕まらない。しば

らくかかる』って」

全力で逃げ回っているのかなあーと思いつつ伝言を受け取ったアスナはイツセーの怒りが早く収まって欲しいことを願うばかりだった。

「まったく、ロキも困ったことをしてくれる」

「本神は飲んでいないと主張していたけど、本当の事なんだろうとイツセーにとっては現場にいた犯人の一人と数えられてしまってる」  
「あ奴の怒りに応じて今度ばかりは禁酒をさせてもよいじやろう。それで万事解決になるならばな」

元も含めて「ロキ・ファミリア」古参の三人が顔を突き合いだしてロキの発見、捕縛の報が来るまで待機中だった。始めはリヴェリアからの通信を受け取ったフィンがロキに尋ね、一緒に城へ行こうと同行の話を持ち掛けた途端に、事情を知らないフィンに言葉巧みで騙して雲隠れをして以来、団員達にも手伝ってもらい目下捜索中。

「今更だが、夜になれば忍び込んで帰ってくるのではないか」

「ンー、そうなんだけど、イツセーの作ってた酒を全部女神アクアの能力で水にしてしまった現場にいたんなら、イツセーからすれば止められなかった結果で同罪にするつもりだと思うよ」

「つまり？」

「ロキには前科があるから、時間が過ぎれば過ぎるほどにイツセーの怒りが増すばかりだ。ずっと来ないなら……このホームを破壊する様を見せつけてでも来させる方法をやりかねないと僕は思う」

そこまでするか、と言いたいリヴェリアの脳裏に転生者三人との戦いが不意に過ってしまい一末の不安要素が浮上した。フィンもガレスもイツセーがそんなことするとは……と思ってから神妙な面持ちで互いの顔を見合わせた。

「全力で見つけ出そう」

「そうじゃな」

「ああ、こうなれば【ガネーシャ・ファミリア】に協力要請をしよう。オラリオは広い、一派閥だけでは全ての場所を探し出すのは骨が折れ

る」

西区——冒険者通り

「うーん？何か雰囲気がおかしいな」

街の探索の最中、建物の屋根から行き交う一般市民の人々や足を運ぶ冒険者達。盗賊の生業をしていたクリス自身の感知能力が異変を伝えていた。観察してみれば一部の冒険者達が走り回って何かを探す目つきをしていた。

「事件かな？」

路地裏に屋根から飛び降りて表の通りに出る。メインストリートに歩く一人として紛れ込み話声を盗み聞きする。

「そっちはどうだ」

「いなかった。まったく主神様はどこに行っただ」

「とにかくもつと探すぞ。ロキを見つけ次第団長のところに連れて行くんだ」

どうやら主神を探している模様だった。しかもロキときた。しかし、何でまた団員達が探し回っているのだろうか？

「もしかして、イツセーの酒を台無しにした犯人？」

まさかね、と思い改め人混みの中に紛れて探索の続きをした。

全裸な疲労困憊のアクアが全身で息をしてプールサイドでぐったりしてるすぐ傍に、一誠がプールの水を自作した魔道具マジックアイテムで吸収していた。予測通り、アクアの浄化魔法は聖水を作るほどまでの効力があり、聖水を素材にして様々な物を作ろうと脳内で試行錯誤してたところで、虫の息のアクアが絶え絶えでながら話しかけてきた。

「こ、これで借金は……なくなつた……のよね」

「は？何バカなこと言ってるの？まだに決まってるだろ。これから毎日聖水の生産に励んでしつかり借金を返済してもらうからな」

「・・・・・・・・ぐすっ」

もう心が折れそうっ・・・・・・・・！とアクアの心情を露知らずな一誠は労いの言葉を送る。

「今日はもういいぞ。お疲れ、また明日も聖水の量産をしてもらおうかな」

「ううっ・・・・・・・・シクシク」

「・・・・・・・・」

メソメソ泣く女神を見つめ、こんなのが異世界の女神として存在してる超越者なのかと疑いたくなる。無言でアクアの自室に魔方陣で送った。

「さて・・・・・・・・残りはロキだな」

フィンに連絡してロキを連れてきて欲しいと頼むが、行方を暗ましてホームからいなくなってしまうと申し訳なさそうに言い返された。額に青筋を浮かべる男の表情を見て親指が痙攣、フィンは団員総出で探していると伝えるが。

「それでも見つかったくないんなら、見つからない自信がある場所に身を潜めているんだろうな。だったらこつちにも考えがある。絶対に見つけ出してやるからなロキ」

「ううう・・・・・・・・なんでウチこんなことしとるんやろうか」

「確かにな。ロキ、そなたが急に暫く匿って欲しいと言われたときは何事だと思った。一体どういう事情でそうなったのか教えて欲しい物だ」

「すまんミアハ、今だけは何も聞かんとしてくれ・・・・・・・・あと、ウチのこと聞いてくる子供やイツセー達が尋ねて来てもいないと言ってくれや」

「喧嘩でもしたのならば素直に謝れば済む話であろう」

「喧嘩だったらミアハんとこに来ないわっ。それ以上に恐ろしいことをして・・・・・・・・いや、ウチはしておらんよ。でもなあ・・・・・・・・あああ・・・・・・・・」

何やら悩み事を抱えている様子。頭を抱えては左右に振ってブツ

ブツと何か言いだしてもミアハからすれば訳が分からず、何時まで経ってもホームからいなくなってくれる気配が感じがない時――。

ピン　ポン　パン　ポーン

という軽やかな音がオラリオ中に響き渡った直後。

『オラリオに住む皆さん、こんにちは「異世界食堂」の店主です。突然の放送に驚かせてしまったなら申し訳ございません』

「……………イツセー?」

「ヒツ!?!」

『ただいま朱色の髪に胸が男のように全くない糸目の目をした女神を探しています。見つけた方には賞金――一千万ヴアリス、一千万ヴアリスを与えます。中央広場に連れてきてくれた者にだけ賞金を授与します。なお、街中で騒動を起こした場合は【ガネーシャ・ファミリア】が介入しますのでご注意ください。女神を捕らえた者以外は素直に諦めて引き下がってください。繰り返します――ただいま朱色の髪に――』

翻訳――ロキ、何時までもオラリオの中で逃げられると思ってるなよ。さっさと顔を出さないと酷い目に遭わせてあるからな。

という幻聴が聞こえたような聞えなかったような。兎に角、この瞬間、ロキの居場所は確実に潰されて行くこうとしており、真つ青な顔で呆然と化するロキ。全てではないが何となく悟ったミアハは口を開いた。

「そなた、イツセーに何かしたのだな」

「う、ウチは直接何にもしてへん!本当や!」

「ならばどうして自分のホームから離れ、私に匿って欲しいのか理由を教えてくださいぬか」

「あの主神様、今の声明は……………あつ」

追究しようとしていたところ、ミアハの眷族が顔を出してギクリと震えるロキを発見。

「……………捕まえますか?」

「そうするのも吝かではないが、ここは素直にイツセーに直接連絡した方がよいだろう。彼に恩があるのだからな」

「ちよつ——!」

袖をめくって腕を晒せば嵌めていた金色の腕輪に触れるミアハ。しかしその時だった。『青の薬舗』に訪れた冒険者のパーティがやってきた。

「デュアル・ポーション  
二属性回復薬つてありま……」

「あつ……」

店内に朱色の髪で糸目の目、まな板のような胸の女神が店内にいた。回復薬ポーションを買い求めに来たら五千万ヴァリスの賞金を懸けられている者がいたとしたら……。

「いい、一千万ヴァリスを見つけたあー!?!」

『という経緯でロキは逃げてしまった。連絡が遅れてすまないイツセー』

「気にするな。寧ろ教えてくれた方が感謝してる」

セントラルパーク中央広場に山のように積んだヴァリス金貨を背にして椅子に座っている一誠。大金を盗ませないためにアルガナ達を配置して遠巻きで見ている面々に睨みを利かせてもらっている中、先ほどの放送で躍起になってロキを探し出すようになった者達が増えていくのが、各区画中に展開している遠見の魔方阵を介して把握しているところ。

「イツセー、こんなことして後でギルドに何か言われぬか?」

「正式に行っているつもりだが?ちゃんとオラリオに冒険者依頼クエストを発注してるしガネーシヤにも協力をしてもらっている」

「行動力がすげーよマジで」

大和が呆れ混じりで一誠に向かってそう言い、金貨の山を一瞥する。

「一人の女神のためにこんな大金、俺だったらしないぞこんなこと」

「ぶつちやけ、運動会の二番煎じの意味でのイベントを行っているだけだ。お前は参加しないのか?アマテラス達への手土産になる額だが」

「お前から得た物だったら『甘えて得た物を受け取る気はない』って言われそうだから遠慮する。それに大金は興味ないし」

「今時珍しい転生者だな」

大通りを駆けるロキ。全力疾走で必死な顔を浮かべ、背後にいる老若男女の種族の垣根を越えた集団に追いかけられ逃げていた。

「いたつ、いたぞーっ！一千万ヴァリスがー！」

「へいへいロキ様、俺と一緒にいいところに行こうぜ！」

「ロキ、是非私と一緒に！」

「待てえっー！」

飛び掛かってくる金の亡者を躲し、躲し、躲し続ける。追いかけてくる者達は減らないどころか増えていく一方。建物の上、屋根から虎視眈々と飛び移りながら狙っている神々や冒険者までいるのだから、ロキを味方にする者はオラリオに一人もいないことを悟らせる。ロキは何時までも逃げられないことを自覚してある手段に出た。

「お前等、一旦止まれえっー！」

神威を開放、神々以外はロキから放つ異様な威圧に足が竦んで止まらざるを得なかった。

「よし、止まったな。ウチを見逃してくれたモンには倍の額を払うで！ウチの名に懸けて絶対や！」

金には金をと交渉の話を持ち出すロキ。彼等彼女等からざわめきが聞こえて効果はあったが。

「倍の額ってどのぐらいですかねえ？」

「それを聞かんことには聞けない相談ですなあ」

ジリジリと詰め寄る集団はまだいた。顔を強張らせてロキは数字を提示する。

「二倍の二千万！どや！」

「……」

ピタリと音が止み、納得してくれた？と希望が見えた気がしたロキに――。

『ほほう、二千万でこの状況を覆せると思っているのか』

「――」

『俺の財力を侮っていないか？そして行動力もな。目的のためなら散

財は惜しまないことも』

絶望が希望の光を覆い隠した。

『報酬の額を変更する。一千万から——ロキを捕まえた者には——一億ヴァリスを払う。しかも「異世界食堂」一週間分の無料の権利も追加してやる。さあ、ロキ、お前の「ファミリア」が俺より上の額を払えるだけの財力がお有りならどうぞ上乗せしてもいいぞ。こっちは更にその上の額を提示してやるからな。三億でも五億でもな。フハハハハハハッ!!!』

魔王のごとき圧倒的な力で捻じ伏せて見せつけられた。ロキの甘言に惑わされた、惑わされかけた一同は最早ロキの言葉に耳を傾けない。ニヤリ、と邪な笑みを浮かべだした。

「「「「「いっち億、いっち億、ランランラン！——いっち億、いっち億、ランランラン！——」」」」」

清々しい笑みでロキにスキップしながら迫る。相手が都市最大派閥の主神？んなもんしっちゃんこっちゃんねえー！と勢いで皆仲良く肩を組んでスキップして命賭けてでも捕まえるだけの価値がある故に、ロキを追い詰める。

「ち、ちくしょうおおおおおおおっ!!!」

涙流して再び逃走劇を続けるロキはその日の一日、下界に降りてから初めて走り続けたと一誠のお仕置きを受けた後でポツリとフィンを零した。



## 冒険譚56

狸人ラクーンとヒューマンの三人組の男達が歓楽街で一人の女戦士アマゾネスに小人族パルウムのまだ幼い少女を娼婦として連れてきた。真の話は伏せて小銭稼ぎとして目的に連行した三人の思惑、心意に關心がないアマゾネスは未成熟もいところの少女を買い取って引き取った。

「.....」

自分を置いて立ち去る男達に感情の色がない目で向ける小人族パルウムを淡々と見下ろし、この淫沌の町に埋もれる娼婦の一人として、死ぬまで金で体売る日々を過ごすこれからの生活を送ることになるのは、この歓楽街に売られた時点で決まったんだと、理不尽な結果に憐れみを抱いた。

両成敗を終えた翌日の昼頃、アスフィとアミッド、ナアーザを誘いアクアの浄化魔法で至った聖水を素材にした新しい道具アイテムの製作を臨む。

「異世界の水の女神の聖水ですか。興味深い物を用意しましたね」

「今後も聖水で湖が出来上がるぐらいの量を量産してもらおうつもりだから好きだけ使えるぞ。まずは回復薬ポーションを作ってみよう。この聖水で素材に加えたら変化するか試してみたい」

「うん、わかったよイツセイさん」

「異論はごごいません。しかし、イツセイ様が作るとなると普通ではなくなってしまうがね」

それは言わないお約束だと苦笑する一誠と共に三人は仕事を分担して作業を始めた。黙々と手を動かし今までにない素材を足して出来上がった回復薬ポーションはどんな効果をもたらすのか、想像もつかないまま試作の第一号が完成した。

『セイクリッド・ポーション  
カース  
神聖回復薬』

呪詛を無効化する。

「違う・・・想像してたのと違う」

「それでしようか？」

「そもそも呪詛カースの武器か魔法を有してる冒険者がどのぐらいいるのと、敵対しない限りこの効果じゃあ使い道がないぞこれ」

「そうかもしれないませんが、まだ未確認のモンスターにもそういう類の攻撃をしてくる可能性がありますので、解呪できるアイテムは増やしておいて損はないと思いますよ」

アミッドの未来想定の話に否定することもなく、黙々と使う機会が来ないことを祈りつつもしもの為にと未来を見据えて量産を続けた。

「因みにイツセーさんが作りたかったものとは？」

「新しい状態異常に対する特效薬」

「なるほど、状態異常の中で極めて厄介な例を挙げれば、毒妖蛆ポイズン・ウエルミスですね。あのモンスターの劇毒はポイズン・ウエルミスのドロップアイテムである『体液』で作らねば完治できません。確かに一種類しかない特效薬を増やせるならば欲しいです」

アスファイも前向きに賛同する言葉を口にしては、製作の方法を変えてみようかと提案。ならば――と。

「一角獣ユニコーンの角と万能薬エリクサーを上手く調合できないかな」

「・・・さらつと言いますが素材に使えますか？」

「何事も挑戦だ。ただ、手軽に量産できない難点だから今回は使わない。ただの思い付きだし」

「その思い付きでイツセーさんは失敗しないで何度も成功しているから凄いいよね」

ナアーザの一言はアスファイ達も同感だと頷く。

「行動で失敗しない主義だからな」

「というと？」

「試作段階でだと何度も失敗しているってことだよ。俺一人よりもこうして皆でしている方が成功しやすい。一人一人の考えは個々によって違うし、何とでもない会話で天啓を得たり成功の道のヒントに気付いたりという理由でな。そういう意味では凄く助かるし頼りにしてる」

状態異常の回復薬ポーションの量産の作業に入る男の言葉で、アミッドとナアーザは気持ちを高揚、くすりと小さく微笑むアスフィだった。

「……あ、ヤバイ」

「どうしました？」

「聖水で作れそうな物がまた浮かんだ。ということ場で場所を移そうか」

思いついた物は全部作ってみたいという一誠の欲求に従い、一誠とアスフィの秘密の空間ともいえる時間の流れを任意に変えることが出来るスノードームの中で作業を始めることにした。初めて訪れたアミッドとナアーザは凄く驚き且つアスフィに羨望の眼差しをジッと送った。

「あの……なんででしょうか？」

「羨ましい」

「何に対して羨ましいがる……?」

特殊な空間の中で一日過ごせば、外の世界が過ぎる時間はたったの一秒にもその気になれば設定できる、と説明をされた二人の気持ちは——このスノードーム中にいけば時間を気にせず、一誠と好きだけ過ごせれるという甘えだった。

故に数日、数週間、数カ月間も時間が遅くした空間の中で、聖水で作る道具アイテム開発に集中して精も出した四人は幾つも開発に成功して見せたのであった。特に一誠が望んだ特効薬も完成できたので満足。後の世、それが表に販売されるようになった時、オラリオ中の人達の間で大人気の商品となり、風の噂で聞いたとある国がとうとう重い腰を上げた事をこの時の一誠達は知る由もなかった。

とある日——一日一爆裂勝負を終わらせ、めぐみんを自室へ運ぶカズマの後ろ姿を見ていた。

「はあ、威力の勝負をしても成長していないんじゃないだろ」

「すみません、めぐみんのわがままでご迷惑をおかけします」

「迷惑もそうだが素朴な疑問なのが大きい。モンスターを倒さなきやスキルポイントは得られない話なんだろう？前教えてもらいながら見

せてもらったが威力向上にポイントを振れないんだったら、同じ威力で毎度毎度勝負してくるようなもんじゃないのか」

「そうなのですか、モンスターを倒すのにダンジョンの中だとめぐみんは魔法を撃てませんから……」

狭い空間の中で自分自身の魔法により巻き込まれる危険性は高い上に、天井や床が崩れてしまう極めて危険な事にもなりかねない。誰でもあの爆裂魔法を見てすぐに悟ってしまうだろう。

「魔力の消費を……」

「失礼ですけど、めぐみんが手加減なんてすると思いますか？」

「……できない、というか絶対にしないだろうな。ただ、爆裂魔法を撃てれる空間はあるんだ。ゆんゆんの世界のダンジョンの方だつてあるだろ？」

異世界の未知のダンジョン。一つぐらいはめぐみんも活躍の場がある筈だと思っっている一誠の思考を、おさげと首を横に振って否定した。

「ダンジョンはどこも狭いと聞きます。それに私自身もダンジョンを探索したことがないので実際、あるのかわかりません」

「そうか……」

「逆に本当にめぐみんが爆裂魔法を撃てる空間はあるのですか？そこに連れて行けば、上手くモンスターを倒せそうな気がします」

「あるにはある。ただ、その空間は各階層の一部だけなんだ。自分の目で確かめるか？」

いいんですか？という赤い瞳からそんな視線を送られても一誠は前向きの首肯した。

「ただ、明日の早朝から行こう。ダンジョンは広くて階層を降りるごとに辿り着く時間も長くなる」

「わかりました。あ、準備も必要ですか？」

「いや、必要ない。テレポートで地上とダンジョンを行き来するからその日の探索を繰り返すだけだ」

話が進み翌朝、ダンジョンに行くことが決まった。ただし、一誠は二人きりで行けるとは全然思っていなかった。

その日の夜、明日のことをリヴェリア達に報告してから明日に備えて就寝。そして事前に用意していた軽食をそれぞれ自室で食べて打ち合わせした時間以内に玄関ホールで待ち合わせしたのは、当然二人だけで終わらなかつた。

「点呼を取るぞー。名前を呼ばれたら元気よく返事をするぞ。いいな。んじゃ、まずゆんゆん」

「は、はい！」

「アイズ」

「はい！」

「アリサ」

「はい！」

「ラトラ」

「はい！」

「ユエ」

「はい！」

誘った覚えのないゆんゆん以下のメンバーの四人『だけ』を見て頷く。

「しようがない、行くか」

「えっと、いいんですか？」

「こんな朝早くから起きて準備されちゃ無下な扱いはできない」

なんだかんだで甘い一誠の性格を熟知しているアイズ達も一誠と居られるならば、と行動力を発揮するのだ。新参者のユエすらこの城に住むことになったその日の夜——一誠の部屋に忍び込んで皆が寝静まった頃を見計らって添い寝を企む行動を取ったが、目の前で一人の男に群がって繰り広げる濃厚な営みをする数多の女性達に目を奪われ、そして小さな吸血鬼も次の行動を取る時間はかからなかつたほどだ。

「ということでは——」

「おい、私の存在を無視とはいいい度胸ですね」

「出発するぞ」

何か声が聞こえるが幽霊でもいるのかな？と思う程度で扉を開け

始める最中でも、謎の声が止まない。

「無視ですか、いいでしょう！私の存在が無視できないとっておきの事をしてみますよ！その目につかり焼き付けて見せ——て、あ、待ってください。割とガン無視されるとちよつとアレな気分になるのでせめて目だけでも合わせてくださいお願いします」

「ふふふ……！ここまで眼中にないとは逆にくるではないか……うんっ！」

「だから言っただろ。絶対にイツセーの迷惑を掛けるって。あからさまを通り越して清々しいぐらい俺達は空気扱いされてるじゃないか。ほら、部屋に戻って二度寝すんぞ」

「何言ってるのよ！ここで私の凄さを見せつけてあいつに——って、行っている間にとつと行つちやつてるじゃない。追いかけるわよ！」

結局いつものように振り回される羽目になる想定が難しくなく、どうかイツセーの迷惑を掛けないで欲しいと辟易な思いを抱くカズマの心情を知らないで追いかけるアクア達。

まだ太陽が顔を出していなくても一部の世界がうつすらと明るい時刻の中、早朝から起きて白亜の摩天楼施設（塔）に向かっているのは一誠達一行だけではなかった。中央広場（セントラルパーク）に移動する装備を整えた命知らずな冒険者達が、各区画から合流するようにして姿を現しダンジョンへ向かって移動していくのだった。その中の一人だとばかり足を動かす一誠達についていくゆんゆん、めぐみん、ダクネスは新鮮な気持ちを抱いた。

「こんな早朝からたくさん冒険者がダンジョンに向かうのですね。アクセルの街の冒険者とはまるで違いますよ」

「この世界のダンジョンは無限に様々なモンスターや宝が尽きないからだろうな。レベルも上がれば名声と知名度も高まる話だ」

「装備も凄いし、凄そうな冒険者達もいっぱいだわ……」

ダンジョンに繋がる巨大な穴を塞ぐように聳え立っているバベルの塔の入口へ吸い込まれていく冒険者達と交じって一誠達も序盤も

序盤の場所、『上層』一階の階層に続く螺旋階段へ足を踏み降りて行った。

「イツセー、今日はどこまで行くの?」

「一先ず18階層だ。少し早めに移動するけどな」

「どうして?」

「階層主が出てくるからだ」

ユエの質問に返す一誠の言葉でアイズとアリサの目がキラんと輝いた。

「言っておくけど、倒してもらうのはしようがなくだがめぐみんだからな」

「・・・なんで?」

思いつきり不満です!と表情を浮かべる二人に「ダンジョンのモンスターを体験させるため」だと説明する。

「ということだから、ゆんゆんはそこまで現れるモンスターの露払いを頼む。キツくなったらアイズ達にも手伝わせるから遠慮なく全力でやってくれ」

「わかりました。頑張ります」

完全な他力本願。カズマは思わずと言ってしまった。

「イツセーは何もしないのか?」

「俺は説明と案内を徹底する。というか、アイズ達が無双するだろうから俺の出番なんて皆無に等しいんだよ」

ユエ以外、既に身長はめぐみんより高くダクネスより低い程度に成長しているアイズとアリサ、ラトラ。三人の内、二人は剣、一人は両手に嵌めた赤い突起付きの籠手スパイクとこれも突起スパイク、というより爪がある金属靴メタルブーツの装備だけでダンジョン探索に赴いた。腰に佩いた日本刀に似せた片手剣を揺らしながら大丈夫なのか?と心配するカズマの気持ちはあつさりあつさりと無下に返された。

「ライト・オブ・セイバー!」

無詠唱で放つ光剣が数多のモンスターを屠り、せつせとマズマが魔石とドロップアイテムを回収していくこと片手では数えきれなくなった。普通にこの世界のモンスター相手にも通用するんだなと感

心している一誠もミネラルウォーターが入った水筒をゆんゆんに手渡す。

「順調だな」

「はい、私の魔法でも倒せると分かって最初はホツとしました」

「上級魔法がどこまで通用するのか知りたい反面、ゆんゆん一人だけの實力でもここまで降りれたことに驚嘆している。．．．が、気になる事が浮上したんだが」

「気になる事？水筒を受け取って水だと思って飲んだら、味がある水に驚きで目を丸くしているゆんゆんから意識を周囲に向ける一誠は言う。

「妙にモンスター<sup>の</sup>遭遇や出現が多い過ぎる。出る幕がないと思ったアイズ達が対処しないといけないうらい異常にな」

「えっと、ダンジョンのモンスターはこのぐらい多いのでは？」

首を横に振って違うと否定する。

「何というか、異様な興奮状態で襲ってくるのが特に気になる。このダンジョンのモンスターは殺戮と破壊衝動で支配されてるから襲ってくるのは当たり前なんだが．．．何でだろう」

カズマは知っている。その原因はよく知っていた。相手がアンデッドでもないのにモンスターが襲ってくる原因が隣にいる駄女神のせいだということ。意味深で疑心な眼差しを振り向いてアクアを送る一誠にカズマの心臓はバクバクと激しい鼓動を打ち鳴らした。「．．．やっぱり入っちゃいけないかったのか？」

その言葉は自分に向けられていること察して意味が分からないと言いつ返すアクア。

「はあ？何言っているのよ。どうしてダンジョンに私<sup>めがみ</sup>が入っちゃいけないわけ？」

「俺でも分からないオラリオの七不思議のひとつなんだよ。冒険者はともかく一般人も同然な神々が危険な魔の巣窟に入ってはいけないギルドの決まりがあるんだ」

「なあ、アクアが入っちゃダメだったのかやっぱり？この世界の神様がダンジョンに入るとモンスターが異常なまで襲ってくるとかだか



らか？」

「今は何とも言えない。まあ、対処できる範囲だから問題はないが念のために魔法だけは使うなよ。以前、悪い神がこのダンジョンの中で神の力を開放したら、異常な強さを有したモンスターが現れて大変だった。ギルドもそれに感知してブラックリスト、危険人物一覧に載せて犯罪者扱いしているから気を付けろよ」

後半は嘘だが、真実と織り交ぜて説明すれば警戒心は抱いてくれるだろうと思つてのことだった。

「捕まったら、どうなるのですか？」

「人間だったら朝日が見えない暗い檻の中に死ぬまで暮らす。神だったら心臓に短剣を突き差して天界に送還される」

めぐみんの質問に虚言で返せばジト目でアクアに釘差すカズマ。

「だつとよアクア。絶対に魔法だけは使うなよ。いいな、絶対にだ」

「わ、わかつてるわよ・・・もう、いったい私の事なんだと思つてい  
のよ」

ぶつくさ言う女神を「駄女神」と真顔で言われる。

「言つたあつ！今二人して同じことを揃つて二回分も酷いこと言つ  
たつ〜！」

「ふ、二人共あまりアクアさんのことを悪く言つちやあ・・・」

「しようがないだろ。事実なんだから」

「全くだ。嘘言つて逆に褒めたらもっととんでもない駄目なことを仕  
出かすに決まつてる」

アクアへの信頼度が低いとばかりに二人から厳しい言葉を頂戴し  
たアクアは逆切れを起こしそうになつていたが、一誠の睨みが怖くて  
へたれてしまつていたのでダクネスの後ろに隠れて盾にした。

「とにかくモンスターの状態がいつもよりおかしいこと以外は気にせ  
ず進もう」

「18階層には何があるんです？」

「ここが本当にダンジョンなのかつて言うぐらい綺麗な景色だ」

まあ、口で説明するより自分の目で見て実感してくれと言葉を残し  
歩みを再開する。カズマ達も後を追いかけて階層を降る。そして『中

層』に進出する直前に異様な数のオークと出会った。

「あ、あれはもしかや・・・オークなのか？」

「ああ、オークだ」

肥えた身体に豚頭のモンスターが両手を伸ばして襲ってくる。ダクネスが震えた声で確認を取り、肯定されるとゆんゆんが魔法を放つ前に何故かダクネスが飛び出してきて剣を構えた。

「相手がオークなら私の出番というわけだな!？」

「いや、何でだ？」

「さあ来いオークよっ！私はクルセイダーの聖騎士のダクネス！私がいる限り仲間の元へは行かせんぞ！」

『ブギツ、ブオフオオオオオツ・・・！！』

オークがその潰れた黄色い瞳で、ダクネスを射抜く。獲物を視認した豚の怪物は地響きを起こしながら木々の間を抜け、おもむろに手を伸ばす。そして、その巨腕で一本の木を——引き抜いた。迷宮の自然の一部だったはずの枯れ木は、その瞬間、武骨な棍棒へと成り変わる。『迷宮の武器庫』。ダンジョンの特性の一つ。この生きているダンジョンが、迷宮内を徘徊するモンスター達に提供する天然武器。ナイチャー・ウエボンそれらを持つオークと持たないオークが分かれダクネスに襲い——  
「かからず何故か素通りして一誠達のところへ強襲する。」

「・・・ちよつと試すか」

徐に無造作にアクアを伸ばす手で掴み、明後日の方へそう遠くない感じの距離に投げた。突然のことで受け身が取れず地面に転ぶアクアは怒りを露にする。

「ちよつとっ！いきなりなに——！」

『『ブゴオオオオオオオツツツ!!』』

「え、ちよつと・・・？何でこつちに来るのよおっ！?いやあああああっ!!!」

急にオークたちが進路を変えてアクアへ押し寄せた。逃げ惑うアクアにしか眼中にないのか一誠達を襲うモンスターは0だった。ひたすら逃げ続けるアクアに追いかけるモンスターが、地面から這い出てきては追いかける側に加わって増えていった。その光景を見て一

誠の中である確信が芽生えにつこりと笑った。

「おいカズマさん。説明してくれるんだよな？」

「……すみませんでした」

一先ず、その場で土下座をして深い謝罪の念を示すことで怒りを鎮めて欲しいと願うばかりだった。

「——はっ、ま、待て！アクアを追いかけらるなら私を追い回せっ！いや、アクア。私と代わってくれえっ！」

「……めぐみん、魔法抵抗の支援魔法を二人に掛けるから一発爆裂魔法を撃て。この広さなら問題ないだろ」

「確かにそうですが……巻き込まれないでしょうか」

「一日に三回爆裂」

「わかりました。喜んで撃とうではありませんか！行きますよおっ！」

仲間の心配より欲望を選んだめぐみんは興奮して瞳を赤く光らせた。杖をオークの群れに向けてマナタイトの宝珠に魔力を注ぎ込み、めぐみんは爆裂魔法の魔力の光を放った。

「エクスプロージョンツ!!」

大輪の火の花を咲かせ地面と空気に震動で震わせながらオーク達を消し飛ばして……。

「あっはああああああんっ！」

「うぎゃああああああっ!!」

歓喜と悲鳴をも鳴かせてみせた。その後、自然の摂理とばかりに魔力が枯渴しためぐみんは倒れた。すると報告が挙がる。

「あ、レベルが上がりました」

「おーよかったじゃんか。というか、この世界のモンスターからでも経験値的なもんが増えるんだな」

「そうみたいです。ところで、魔力の補給をお願いします」

一誠に向けてお願いするめぐみんに一つ頷いてからカズマに問う。「わかってるよ。えーとカズマ、『ドレインタッチ』ってしてみたいんだがコツとかあるか？」

「え、何でだ？できないだろ？」

違う世界の冒険者ではない一誠が異世界の特有の特殊能力を使えないはず。と思つていたら一誠はネタばらしをした。

「俺、触れた相手の魔法やスキルを任意でコピーできる能力を持つてるからだ。お前から使えそうなスキルをコピーさせてもらった」

「おま、いつの間そんなことしていたんだよ？まあ、教えるけど……」

ふと、ここで間違つた情報を教えるか？なんて考えが過つたが、後で怖い目に遭いそうだと恐ろしくなつて正しい方法を教える。

「心臓に近い部分に触れて使うと効率がいいぜ」

「じゃあ鎖骨だな」

仰向けにして躊躇なく手の平をめぐみんの鎖骨の部分に触れ、自身の魔力を送り始める。すると快感を得ているのか目を閉じて艶の入つた声を漏れ出した。

「おおお……これは凄いです。イツセーの魔力が感じますよ。体の奥底から力が湧いてくるこんな経験は初めてです……あつ、これはクセになりそうです」

「もうちよつといるか？」

「あ、お願いしますー。おおおーいい感じですよ……はっ！」

魔力の補充中、『天啓を得た』とばかり瞳を見開く。

「イツセー、イツセー、私は自分の天才さが恐ろしくなりましたよ！」

「頭のおかしさはカズマから聞いてるぞ」

「何ですとーっ!?!いえ、それよりも私に考えがあります」

何のだと一同揃つて首を傾げる。

「いいですか、私は爆裂魔法を撃つたびに直ぐに魔力がなくなつて倒れます」

「うん」

「それは爆裂魔法に使う魔力が足りないと同義なのです。わかりますよね」

「うん」

「ならば！爆裂魔法を撃つ前にイツセーが私にドレインタッチによる魔力を供給を行う最中で爆裂魔法を撃つと、魔力が足りない私に流れ

込んでくるイツセーの魔力で足りない分の魔力も補って本来の威力も発揮するに違いませんし、つまりは私は何度でも好きなだけ爆裂魔法を撃てるという考えに至りました！」

「的を得た話だと素直に感心する。だが、言い換えればそれは――」

「つまり、俺はお前の趣味を全力で堪能できる魔力タンクになれというわけだな？」

「言い方はアレですが間違つてあつはああああああああつ!？」

突如、背中に冷たい氷を入れられたような悲鳴を上げだすめぐみん。その原因はカズマは悟つた。

「いくら何でもそれは人権を無視していかないかなあー？ていうことで補給した魔力を返してもらどうぞー！」

「すみませんすみませんすみません！調子のいいことを言つてしまつたことは謝りますから魔力を吸わないでください！あ、魔力どころか体力も奪うんですよドレインタッチは！」

「体力の方は別途で回復してやるから問題はない。歩ける程度にはな」

「ま、魔力もつ、魔力も回復してくださいお願いしますっ！日に三回爆裂魔法があああああつ！」

結局、一人では歩けない体にされずに済んだが爆裂魔法を撃てる分の魔力は吸われ落ち込むアークウイザード。

「ていうかだ、マジック・ポーション精神回復薬で魔力を回復すれば？教えただろ」

「ダメです。あれは飲み過ぎると……その」

「……？」

もじもじと気恥ずかしそうに言葉を濁す少女。体に合わなかったのかと思いきや、カズマが説明した。

「魔力の回復できた経験が嬉しすぎて、調子に乗って爆裂魔法を撃つ  
|| 魔力を回復|| また爆裂魔法を撃つ || また魔力を回復するの繰り返しをしてたらトイレに行く羽目になったんだ。本人曰く危うく漏れそうだったそうだ」

「も、漏らしてなんてないですよ！それに紅魔族はトイレに何て行き

「ませんから!」

「……………そう言われると試したくなる性分なんだが? 丁度ここにマジック・ポーション精神回復薬が大量に」

「ごめんなさい、謝りますからそれを飲まさないでください。ダンジョンの中で大量に飲まされると私の中で溢れてくる膨大な何かを抑えきれないのでお願いします」

見せびらかすマジック・ポーションで土下座をしだす。最悪な事態は避けたいから回復薬ではなく直接魔力で回復したいのは当然だろう。仕方なしに一回分の爆裂魔法を撃つ魔力だけ補給する。

「一回だけだからな」

「ありがとうございます。…………あの、ところでアクアとダクネスは」

「そういえば、さつきから静かだなと一誠も若干忘れていた。二人の方へ目を向ければ。」

「…………私、この世界に来てから扱いがさらに酷くなってるんですけど」

「…………あはんっ」

一応、無事ではあったが膝を抱えて影を落としてる女神と大の字で横たわって恍惚の表情を浮かべてるクルセイダー。

「怪我はなさそうだな」

「代わりに精神的な意味で酷くなってるがな。ダクネスに至っては正常だけ」

「あれで正常かよ…………階層主との戦いで絶頂しないよな」

「…………」

「何とも言えないと口を閉ざし、二人を回収してから目的の階層までゆんゆんが奮闘して進んだその途中、三体のミノタウロスと遭遇してもゆんゆんは怯えもせず上級魔法を駆使して倒した。」

「あ、私もレベルが上がりました」

「いいな。俺もそろそろレベルを上げたい」

「今度からダンジョンに行けばいいさ。さて、そろそろ18階層も目

の前だ。気を引き締めろよ」  
18階層へ繋がる通路に進み『嘆きの巨壁』に侵入した。

## 冒険譚57

「ここが、階層主とやらが出てくる場所ですか」

洞窟の印象を残したまま広い空間の中を進む一行。どんなモンスターでも暴れるには十分すぎる大広間<sup>ルーム</sup>であるのは間違いないが、階層主の姿はどこにも見当たらない。一行が立つ大円形の入り口から広間の奥まで二〇〇Mはある。幅は一〇〇Mほどで、地面から天井までは、二〇Mに届くか届かないか。壁も、天井も、ごつごつとした岩石の塊で形成される大広間は、その左側の壁面だけ、作りが異なっていた。何者かの手によって磨き抜かれたのかと目を疑うほど、その表面は凹凸一つない。まるで大勢の石工達が手掛けたように継ぎ目が存在しない赤面は、広間の端から端まで伸びて視界一杯を打つ。美しくはある、だが何よりも不自然で異様なその壁を、見慣れないカズマ達はジツと見つめていた。

「まさかとは思うが、この壁から出てくるわけないよな?」

「そのまさかだが、ああ、言ってる傍からもう現れるぞ」

気配を察知した一誠の一言の後。バキリツ、と壁面に罅が勝手に入った。しかも巨大な亀裂が、大壁の上から下にかけて、雷のように走っていった。壁が罅割れる音は続き、バキツ、バキツ、と響きを大きくしていく。次第にそれは喘ぎ、苦しみ、嘆くような重々しい声音へと姿を変え、大広間全体を震わした。雪崩れ込むかのような音の津波に、鼓膜が悲鳴を上げている。増していく嘆きの叫喚。より大きくより深くなる何条もの亀裂。鳴動する17階層。臨界が近づき、一層強い衝撃が内側から壁を殴りつけた——次の瞬間。巨大な破砕音が、爆発した。岩の塊が弾け飛んで崩れ落ち、地に横転していく轟音。それに巻き込まれ押し潰されないう防壁の結界を張って散乱してくる巨大壁の破片を防ぐ。

そして、ズンツ、と。巨大な何かが大地に振り立ったような、一際大きな、着地音。

「.....」







起き上がろうとするゴライアスに飛び掛かり、それぞれ四肢を剣と大剣で立てなくするために両断する。

「す、すげえ……めぐみんと同じぐらいの年齢なんだろ」

「上から二番目に強い冒険者だからな。弱ったゴライアス相手なら二人だけでも倒せる」

カズマの襟を掴んで一緒にゴライアスの胸の上に飛び乗って、ここだと場所を教えて促す。動けない相手なら攻撃はしやすいと、短剣を両手で持って勢いよく魔石に突き刺すつもりで突き立てた——が、思った以上にゴライアスの体皮が硬く、短剣が突き刺さらなかった。武器の威力が足りないのかカズマ自身の力が低すぎるのか、あるいは両方か。

「……………」

「……………何だか、すみませんでした」

これには一誠も予想外だった。二人の間で何とも言えない空気が漂い、己の非力さを知られて見られたくないと顔を逸らすカズマ。

「……………明日から、筋力トレーニングなお前」

「……………うっす」

結局ダクネスがトドメを差してレベルが上がった。

17階層から侵入できる南端の洞窟から抜け出て森を越えて北上すると、まず現れるのは

水晶が散在する大草原だ。階層の中央地底に広がる青々しい野原は、晴れ渡る地下の蒼穹と

相まって壮観と言っている。草原の中心には中央樹と呼ばれる巨大樹がそびえており、

樹の根元に空いた樹洞から一誠達が20階層に行く為に通過する19階層へ向かうことができる。

北には雄大な湿地帯、南から東にかけて広がるのは緑の森林、そして西には紺碧色の湖畔と

そこに浮かぶ大島。都市の半分が収まりそうなほど圧倒的に広大な階層内には、

幻想的な水晶と神秘的な空に包まれる大自然が息づいていた。

この風光明媚な景色——地上では巡り合うことができない地下の楽園を一目見たいが為に、とある富豪は冒険者にクエスト護衛を依頼しわざわざ観光に訪れたほどだ。円形状の階層は岩の絶壁に囲まれており、ともすれば巨大な箱庭のようにも感じられる。

18階層はモンスターが生まれにくい安全階層、Lv. 2の冒険者が

初めて訪れる階層でもあり、とりわけこの階層は、別名『迷宮の楽園』アンダーリゾートとも呼ばれるほどの美しい地形が広がっていて階層の天井には、

無数の水晶が隙間なくびっしりと生え渡っていた。中心には太陽のように輝くいくつもの白水晶の塊。

そしてその周囲には優しく発光する青水晶の群れ。咲いた菊の大輪を連想させる水晶が

それぞれ光を放つことで、18階層には地下でありながら『空』が存在している。

多くの冒険者達の目を奪ってきた、ダンジョンの神秘だ。形作られたこの地下の『空』は

時の経過によって水晶の光量が落ちていき『朝』『昼』『夜』の時間帯を作り上げる。

また時間帯の変化は一定ではなく、地上とは少しずれが生じ、時差は多くなったり小さくなったりと変動していた。発光する美しい水晶は18階層の名物と過言ではないし、天井だけではなくこの階層の至るところに生えており、森や冒険者達の手によって創られた街リヴィエラにもあった。

「ここが、18階層……凄いい。ダンジョンの中なのに光や森があるじゃないか」

「本当です。岩窟やモンスターばかりなのがダンジョンである筈なのに、驚きの光景です」

「あの光だって太陽のものではないのだろうか？ただ明るく発光してい

るだけのようだが、一体どうやって光っているのか不思議だ」

「綺麗ねー。ねえ、ここってどんなところなの？」

「ここはな、この階層にもモンスターはいるけどモンスターが生まれない安全な階層こと安全階層<sup>セーフティポイント</sup>。そして目の前の楽園のような光景から別名『迷宮の楽園』<sup>アンダーリゾート</sup>とも呼ばれてるし、冒険者が築き上げた街もある」

「ダンジョンの中に街とは凄いですね。根性があります」

心の底から感心していると感嘆の息を漏らすゆんゆん。さらに追加の詳細をする。欠点の方を。

「と言っても販売している商品は地上の価格より数倍高いからな。ぼったくりの街でもあるぞ」

「それはいくら何でも横暴ではないか？何故誰も異を唱えない。ギルドは認知しているのか」

「しているぞ。そして誰も異を唱えないのは売買しなきゃいいだけの話だからだ。街に暮らす冒険者達は地上のルールに縛られるのが嫌いだから、ダンジョンの中であれば違法な売買をしてもギルドの目には届かない、無法地帯を築き日夜好き勝手にしているのさここで。だから街の冒険者は荒くれ者やならず者が多い、一応気を付けな。盗みやスリなんて当然のようにしてくるからな」

「ダンジョンのモンスターより性質悪くない？」

「悪いぞ。ああ、それと街に治療院を構えているアミッド達がいるから様子を見に行くか？更に下に行きたいなら大瀑布の滝が見える水の都にも案内するぞ」

水の都と聞いてアクアがあからさまに反応して行ってみたいと主張する。街で休憩を挟んで更に階層を降って案内する先は25階層。数時間も掛けて歩いて、歩くのが疲れたと駄々をこねるアクア、巨大な茸に扮したモンスターに襲われ吃驚するカズマ、猪型のモンスターのバトルボアに撥ねられ、数体のバグベアに集れ悦ぶダクネス、アクアの存在で大量に引き寄せるモンスターを纏めて爆裂魔法で吹き飛ばすめぐみん、爆発音を聞きつけて襲ってくるモンスターを魔力の光剣で薙ぎ払うゆんゆんと安全安心が無縁な戦闘を幾度も繰り返し、一

言述べる。

「あいつ等だけで探索したらヤバいだろな」

「二二二二二二二二二二二二」

アイズ達も同感だと揃って頷いた。

そんなこんなで、何とか目的の階層に辿り着く一行の目の前は傲然と音を奏でる、凄まじいまでの大瀑布。谷や崖を形成するのは水晶の頂。霧のごとく飛び散る水しぶきとともに空中を羽ばたく半人半鳥ハイビードや歌人鳥セイレーン。高い啼き声が高らかに響き、舞い散る羽の軌跡が開けた大空洞を横切って行く。大いなる25階層、通称『水の楽園』が、そこに存在した。

「すげえ………」

カズマ達は目の当たりにする。ダンジョンの中に存在する大自然の景色に誰もが放心する中、特に皆の目を奪うのが、視界の正面に位置する大瀑布だ。離れているとはいえどうどうという地響きにも似た音が、何百Mも離れた一行のもとにも届いて鼓膜を震わせてくる。

『巨蒼の滝』  
グレート・フォール

下層域25階層から始まる文字通り巨大な飛瀑。目算でも幅は約四百M、高さは優にその倍はあるだろう。光の反射の関係か、流れ落ちる水は緑玉蒼色エメラルドブルー。惚れ惚れとするほど美しい滝はここが危険なダンジョンであることすら忘れさせるほどだ。カズマ達に感動と同時に胸に覚えるのは震えるほどの畏怖——恐怖でもある。滝とちやうど対面位置、一行が立つ水晶の崖の真下に広がるのは大きな滝壺だ。落ちたら上級冒険者でも一溜まりもないことはもとより、目を疑ってしまうのはその滝壺からさらに瀑布が下へと続いていることだ。そう、丁度階段のように、滝は25階層から下部の階層へ貫通しているのだ。

「森の次は滝なのかよ。どうなっているんだこのダンジョンは」

「さあーな。でもま、心が躍るだろ？まさにファンタジーだ！ってな」

「そうだな。確かに目の前の光景を見たら思わずにはいられない」

「誰でもそう思うだろうな。それとだが、27階層に白い二つの頭を

持つ竜が階層主として現れるぞ。まだ現れる時期じゃないから戦うことはないから」

ホツとするカズマ。ドラゴンと戦いに来たわけじゃないから安堵で胸を撫で下ろすカズマの目の前、一誠の背中におぶさってるめぐみんが残念そうに言う。

「見て見たかったですね。まあ、私は白より黒か赤の竜が好きですけど」

「竜の色の好みなんて聞いていないから。とりあえず、記念撮影でもするか？」

「おっ、いいな。でもめぐみんは立てないが？」

「セクシーポーズ的な姿勢で寝転がせばいい」

「おい、私の扱い方を雑にしないでらおうか」

大迫力を伝える撮り方を臨む一誠は、大瀑布の滝のど真ん中でカズマ達を並ばせながらキメポーズをしてもらい今日一日の思い出として撮影した。皆で撮ったたくさんさんの写真を生涯の宝として大事に保管するゆんゆん。その写真を枕の下に置いて眠る日が日課となっていることを誰も知らない。

「おはようございますー！」

何時にも増して元気いっぱいなゆんゆんの挨拶に、LDKにいた一同も各々と返事を返す朝で一日が始まった。

東方で3つの城が組み合わされた巨大と広大を誇る「ファミリア」のホーム『大和の日輪』。世にも珍しく3つの派閥が共生共存しているのはオラリオに存在する数多の派閥の中、例外を除いて唯一この派閥だけだ。

「イザナミ・ファミリア」、【イザナギ・ファミリア】、そして【アマテラス・ファミリア】。

個の派閥だけでも冒険者を抱える最大数は【ガネーシャ・ファミリア】を凌駕する。以前までは争いを起こし、数多の死者と大量の血を出す戦争を繰り返していたが、たった一人の男のなし崩し的な行動で

解決した。その後、紆余曲折で手を取り合って永住している本国の極東の島国を発展すべく、三国同盟を結び協力をしている。

三国同盟の一つ【イザナミ・ファミリア】の城の中で、対面の形で正座している仮面を身につけている女神と獣人の四人。

「……ダメ」

女神イザナミは首を横に振る。

「何度も言わせないで、お前達は諜報部隊を総括する者達。同時にその地位だけでなく【ファミリア】から脱退したいなどと簡単には許されない。【ファミリア】の戦力的にも困る」

「……」

「あまつさえ、脱退の理由はあの子のところに住みたいなんて……私だって本音は全てを捨てて未来永劫、昼夜問わず場所も問わず愛し合ったり甘い生活してあの子の子供を作って生みたい。【ファミリア】を脱退するだけで可能にするお前達子供が心底羨ましいのに、立场上そんなことできない私もお前達と同じ思いをしている」

主神の方針や命令に逆らうな、とどこにでもいる戦力の減少やその他諸々な理由で脱退を許されないでいる眷族は世界中を探せばいいわけではない。

「お前も二人の背中を押すとは意外」

イザナミが仮面越しで見つめる先にいる狐人ルナルに向かって言う。栗色の長髪、麻呂眉に少し伏し目がちの青紫の瞳。狐を思わせる獣耳と尻尾という容姿は。どこか目の前にいる狐人ルナルと似たような容姿をしていた。赤色と紺色の着物を着こなしているが血色が少し悪いのか顔色があまり優れていない。

「申し訳ごいませぬ主神様。しかし、私はこの子達を育てた者として血で血を洗い争うことが無くなったのならば平穏で幸せな人生を過ごしてもらいたいのです」

「……私だって今は考えられる余裕が出来て、子供達の幸せを叶えたいとは思っている」

「心中お察しします……げほっ、げほっ」

「……あまり無理をするな。本国より高いオラリオの医療技術で



以前より改善したとはいえ、強力な毒はまだお前の中に巣食っている」

ふと、イザナミはそこで天井を見上げた。誰にも癒せない自身の傷を癒したあの力ならば……と。

「主神様？」

「……当てがある」

着物の袖をめくり金色の腕輪の宝珠に触れる。これから会うことになる男に連絡を入れようとしながらも、久々に会える切っ掛けを作った眷族に感謝した。

イザナミから連絡が入り、事情を聞いてすぐに駆け付けた一誠は毒に侵されてる狐人の女性を天使の翼で包み込み、毒の浄化を始めた。

そして、しばらく時間が掛かるかと思われたが、花の花弁が開くように目を閉じた女性が翼から解放され、静かに青紫色の瞳を開けてイザナミを見つめる。

「どう？」

「……不思議です。身体がすごく軽くなりました。この方は一体……」

「二人が夢中になってしまってる、三國を同盟に導いた英雄だよ」

「では、貴方が……」

誰なのか知るや否や、その場で姿勢正しく頭を垂らし出した。

「お会いしたかったですイッセー様。私は天城——この三人の忍びの師であり赤城の姉でございます」

「姉？そうか、姉妹だったんだな。姉がいたとは思わなかった」

「はい、いずれまたお会いした時にお話をしようと思われましたが、この様な機会で天城姉様の身体を侵していた毒を浄化してください感謝しています」

「どういたしました。手の届く距離にいるなら誰でも助けてやれるから困ったことがあれば何でも言ってくれ。ま、俺が出来ること限定になっちゃいます」

謙遜を含んだ苦笑いを浮かべる一誠へイザナミから「お礼をする」と言われる。振り返る一誠の目の前で手を叩く音からすぐ、控えてい

た侍女が襖を開けてから何かを持って入ってきた。

「貴方に連絡する前に用意した細やかなお礼」

イザナミの前に置かれたそれは——台の上に積まれたアップルパイの山。既に一誠の眼はそれに夢中になるほど釘付けで、イザナミが促す。

「食べていいよ?」

「わーい!頂きます!」

「……え?」

獸耳と九つの狐の尾を生やして小さな子供の姿となり、アップルパイを頬張る一誠は心底から幸せな顔をして美味しそうに食べる。そして、そんなことが出来る人物とは知らない天城達は目を疑った。

「しゅ、主神様……これは」

「この子は貴方達より、全人類より特別な存在の一人。イツセーはアップルパイを食べる時はいつもこの姿になって食べる」

「特別な存在……」

「天城の毒を浄化した力も私達にとって特別なもの。だから極東が平和になったのも、彼無くして三国が同盟を結んでいたとは考えにくい。故にイツセーの存在は極東にとって必要不可欠。その為、私に使える者達の中からより三国の同盟を固くするべく政略結婚を目的に選んだ者と嫁がせてもらった」

「正式な結婚はしていないけどな。これ重要!」

誤解して欲しくないためにアップルパイを夢中で食べていた一誠が話を補足する。

「主神様、この方は九尾様なのですか?太古に存在していたという狐人の始祖の……」

「違う、でも……実際はどう?」

イザナミも微妙に気になっていたので尋ねた。食べるのを止めて事実を伝えようと一誠は天城達の顔を見ながら言う。

「俺の中に九尾の狐……狐人の魂が宿っている。その力や特徴を受け継いでいるに過ぎないんだ」

「それは、一体どうやって……」

「うーん……イザナミ、口硬い？」

暗に、己が異世界から来た異邦人の説明をした方が混乱せずに済むと訊いた。イザナミはコクリと頷き四人に警告を促す。

「これから話すことは他言無用、漏洩は連帯責任と知れ」

「「はい」」

言質は取ったとイザナギの眷族を信用して自身がドラゴンであること以外説明した。当然ながら天城達は啞然、驚嘆、感嘆などの反応を窺わせとても興味津々に時間が許される限り一誠に質問を続けた。

「イツセー様、毒の浄化をしてくれたお礼をしたいですが、何かお望みはございますか」

「イザナミからアップルパイを貰ったからお礼は十分だぞ」

「私個人からのお礼です。私にできる事ならば何なりと……」  
「ん……じゃあ、させて？」

させて？一体何をだろうと天城が心の中で小首を傾げていると、ポケットに手をつ突っ込んですぐに抜いた手の指の間にはお手入れする小道具が挟んでいた。

「その耳と尻尾を俺の気の済むまで触らせながら手入れをさせて？」  
「——」

「それだけでいいのですか？」

天城は気付いていない。赤城と加賀が途端に顔を染めて羨望の眼差しを向けていることを。体の関係を迫るような要求をしてこない相手の要望に軽く了承する天城は知らなかった。一誠の手入れは幸せと快樂が同居していることを。

——数十分後。

「はあ……はあ……ひやつ、ま、まだ……んっ……です……あつ……  
あんっ……かつ？」

「あともう少し、ふふ、触り心地が抜群なもふもふだな……」  
「んっ、そ、そうですか……ひゃんっ」

もはやそこが性感帯ではないかと、耳や尻尾を触れて身体を小刻み

に震わせ真つ赤な顔と共に熱い艶が籠った吐息をする天城。それら以外全くかすりも触れていないというのに、甘美な快楽を得てしまっている動揺や困惑、快感が混ざった感情が天城の中で渦巻いていた。気丈でいようと声を漏らさないように気を食いしばっているが、逆にそれが触れられて感じているのだと一誠以外教えているようなものだった。

「ああ、狂おしいほどに羨ましいですね。やはりこの方に触れられたら姉様も・・・そうなのですね」

「(天城：・・・オチるか。お前も今感じている快感に逆らえずか：・・・くくく)」

「(あ、あんな天城さんの表情今まで見たことが無い：・・・なんなのだ、この男は：・・・。私にまで求められたらどうなる：・・・)」  
達観、嘲笑、動揺の三者三様の思いを胸の中で過らせ、一際身体を激しく痙攣した天城を見て赤城達も肩を震わせた。絶え絶えで熱が籠った呼吸を繰り返し、潤った瞳は涙目になってどれだけ快楽を与えられたか物語っていた。対して――。

「ふう・・・満足・・・」

テカテカと艶が顔から出ている一誠はとても幸せだと言わんばかりに満面の笑みを浮かんでいた。この二人の反応を比べて見た目だけは卑猥なことつぽいのには、実際は卑猥なことをしていない不思議な感じだなと見る人にそんな印象を与えた。

「ありがとうな。大満足したよ」

「い・・・いえ、喜んでいただけただけなのであれば何よりです・・・」  
「今度会ったらまた触らせてくれ」

耳元で囁かれ、またこの快感を味わうことになってしまえばもう正気ではられる自信がない羞恥心でより一層に顔を赤く染めた。

「――それでしたら、今度とは言わず私のを触れますか？」  
「ん・・・まだ触りたいなら私のも触ってくれても構わない」

ここぞとばかり自己主張する期待に満ちた目を向ける二人の狐人ルナルにぎよつと目を見開く狐人ルナル。

「ん？いいのか？」

「ええ、構いませんとも。姉様の妹として、私もお礼を……」  
「師である天城を苦しみから救ってくれた礼だ。存分に触れるといい。土佐——よいな」

「わ、私も……？」

約一人、巻き添えを食らい面を食らうその隙に一誠は喜々として動いた。その後、三人の狐人<sup>ルナル</sup>を喘がせては逆らえ難い甘美な快感を味わされ、また一人、一誠の手入れと称した愛撫の虜となった。更にはまた天城にも手を出して喘がす。

「はっ、はっ……二人がイツセー様に夢中になる理由はわかりました。確かにこれは、凄いんっ」

「ふ、ふふ……ひゃっ、分かっていただけで嬉しいですわ天城姉様、はあん……！」

「んっ……はあ、はあ、まだ触れられた快感の余韻で敏感に……んはっ」

「し、尻尾と耳を触れられてるだけなのに、な、何故……くうっ」

床に顔を押し付けて臀部を高くあげる姿勢で一誠に尻尾を触れられている。屈辱感よりも強い快楽や快感を覚えて貪欲的に求めて感じたり、貪欲的に感じてしまう狐人<sup>ルナル</sup>達。

「……」

物静かに眷族達が寵愛を受けている光景を見守っていたイザナミが立ち上がり、徐に着物の裾の中に手を突っ込み高級そうな瓶を取り出す。その意味を理解する時は——。

「……イザナミさん。今、何を飲ませた。この展開デジヤブを感じるんだが」

「精力増強剤と媚薬。前のより減茶苦茶物凄くて一週間も効果がある——赤城達忍びが作成した新薬」

「しゅ、主神様！なぜそのような物をこの方に使われたのですか……！」

「ふふふ……でも、効果は直ぐに出てますわ天城姉様。ああ、可哀想に今すぐ解放してあげますわ」

「お、雄々しい……まさに雄だな……」

「ま、待て．．．雄々しいと表現にしてもあれは異常すぎるではないかっ．．．!?」

いや、それよりもこの甘い匂いはなんだ．．．?」

またしてもイザナミの奸計に陥ることになるうとは．．．すっかりイザナミへの警戒心を緩んでいたところ、しかも事情を聞いて駆けつけてはこんな展開、自身のホーム内で事を起こすことはないですら慢心になっていた隙を突かれて深く、ふかーく己の慢心に呪った。

「イザナミ．．．お前はそこまで変態だったとは」

「あなたの前だけなら変態でもいい。それだけあなたのことが愛しいから」

「．．．あーもう、嬉しいと思っちゃった自分が悔しいぞちくしようつ．．．」

「ふふ、大好きイツセー」

口元を緩ませて一誠を押し倒し、眷族達がまだいるにもお構いなしに目の前で情事を貪り出す。激しく乱れる主神を目の前にして狐人達の身体にも影響が出始め、太陽が静まり空は朱色に染まる頃。五人の女達の心と身体は完全にまだまだ情欲が治まっていない発情期と化した男に屈服したのであった。そして誓ってしまった。女として絶対に譲れない熱い想いを。

## 冒険譚58

「これは驚いた。こんなところに貴方方のような人物がいたとは思いませんでした」

「お前は……確かヴァベルーと言ったな。昔は世話になったものだ」

「彼の「ファミリア」の眷族だった者にまだ覚えて頂いていたとは光栄です」

「ここに来たのは相変わらず商売か」

「ええ、そうです。私と契約している面白い子供が作る商品を売買するため」

「どんな奴だ？」

「一言では尽きませんよ。何せ、異世界からやってきた人間でありますからね」

「……異世界だと？なんだそれは？」

「気になりますかな？実力も高いですよ。単独で60階層以上踏破するほどですからね」

「それは冗談だろう」

「いえいえ、ちゃんとその証であるドロップアイテムも提供してください。貰っていますので間違いないですよ。しかも——異世界のモンスターを召喚することもできます」

「……」

「もう一度問います。気になりますかな？ここで朽ち果てるつもりなら、最期を迎える前に一目見てからでも遅くはないですよ。賭けてもいい、きっとあの子供はあなた方にとって必ずいい未来を見させてくれる」

「——【アガリス・アルヴェシンス】！」

「アストレア・ファミリア」総勢11名との模擬戦を始め数分たった途中。手や足、剣にまで炎が鎧のように纏う炎の付与魔法エンチャントを使ったアリーゼ。

対して一誠も両手に炎を纏わせ拳を繰り出す。炎の拳を作りアリーゼに向かって放つ一誠の攻撃を見て炎を纏う剣で両断する。

「フーン！」

「その程度で胸を張るなら、もっと強い方でもいいようだな」

一本だけ突き立てた人差し指の先から小さな火球がどんどん膨らみ膨張していき、やがて10Mほどの大きさにまでなるとそれを二人の間に浮かせた。そして——火球から豪雨のように火の弾丸として放出する。

「うわっ、熱!? わわっ!」

「ほらほら、さつきみたいに斬って迎撃して見せろよ。この程度で負けたらスカーレット・ハーネル【紅の正花】の名が名折れだぞ」

「異世界の魔法ってこんな事できるのー!」

「純粋な魔力ですけど何か」

「って、貴方からも攻撃してくるのですか、この炎の雨の中で!」

非常識な行動をする一誠に面を食らい振るってくる炎の剣に炎の剣で受け止め必死に打ち合うもアリーゼの頭上から降り注ぐ炎雨に打たれ顔の表情は痛苦に歪む。

「落ちてくる炎の気配を感じて見ろ。どこに落ちてくるか分かれば自然と避けて回避行動が身につくぞ」

「そうしたくてもそうさせてくれないんじゃない!?」

「戦いの中で成長するしかない。人間なら大抵何とかできるもんだぞ?」

「はい、難しい事だと思うのだけど! 熱っ!」

「これくらいのこと、俺の世界じゃ当たり前のように繰り出してくるぞ。というか、喋れる余裕があるならまだイケるな?」

前衛、中衛、後衛関係なく炎の雨が容赦なく襲い、彼女達から阿鼻叫喚の声が聞こえてくるにも拘らず攻撃の手を緩めない。接近して殴打、斬撃を与えアリーゼ達も負けじと応戦するも確実に倒されてい



く。その様子を見守る観客席にいるアスナ達。

「えげつなッ！いや、あの宙の火球をどうにかするなら壊せなくもないけどよ」

「私は無理だなー。炎の雨を長時間防ぐ自信がないや。避けながら動くのが無難だね」

「私は出来るよ？」

「アイズは風だから当然だよ」

「はい、羨ましい魔法です」

「だが、アレをまだ増やせるといふならば至難の業だな。いや、できるだろう。対抗するにも火精霊サラマンダー・ウールの護布や魔法の障壁……更にはマジックアイテムマジックアイテムも必要だろう」

「それは相手が魔導士で後衛だったらの話であろう？あ奴は完全に前衛で『魔法剣士』と異なる完全なる個。いや、それ以前に『個』自体が異常イレギュラーであるか」

「確かに……」

「彼を参考にしようとする考え自体が間違っていますね」

「しかもまだ本気すら出していないのだから」

「どれだけ強いのだ。そして、どんな世界で生まれ育ったんだあいつはと思わずにはいられないな」

「……」

「アルガナお姉様たちが凄く戦いたがってる」

「今にも飛び出して戦いに交じりたがってるね」

「旦那様、凄いわー」

「うん、それに楽しそう」

「はい」

18階層の治療院で活動しているアミッド、ナアーザ、ダフネとカサンドラ以外のメンバーが集い一誠と「アストレア・ファミリア」の戦いを観戦しつつ分析していた。しかしながら、根本的に違いがあるのでフィリアの言う通り参考は出来ない故、観戦という形で戦っている姿を眺めていたところ……不意に一誠が動きを止め宙の火球をも消した。

「ん？終わったか？」

「違う・・・誰かが連絡してきたみたい」

「誰だろうと不思議ではない」

腕輪に向かって口唇を動かす一誠を見つめてれば、観客席のところに一同に振り返る一誠が言う。

「ヴァベルーからだ。客を連れてくるから会ってくれってさ」

「お客さん？一体誰？」

「さあ、俺にも分からん。教えてくれなかったし」

トレーニングルームにいる一同は揃って不思議に思ったり首を傾げたりする。商業系「ファミリア」故、相手は商人なんじゃないかという予想や想像が浮上するも、兎にも角にも会って見なければわからない。そして、引き合わせようとするヴァベルーの意図も判らないまま数時間が過ぎ、オラリオは常闇に支配され魔石製の街灯で暗闇を引き裂くように街中の大通りを照らす時刻。

「・・・何もない空間から森？」

「私も初めて入りますので実に楽しみですよ」

「一体オラリオにどんな変化が起きているのか」

護衛に二人の眷族を引きつれ、ヴァベルーはオラリオに連れて来た客人達と一緒に開いた扉の奥から窺える一誠の庭園の中に足を動かして進む。

「ダンジョン産の水晶で淡くも光で道標を作っている他、至る所にも木々を照らしている。幻想的な印象を抱かせますね」

「本当にオラリオの中なのかと疑うほどの植物だらけだな」

「外の喧騒が聞こえなくなっている。この中は不気味なほど静寂だが、嫌いではないな」

長い光の道標に導かれながら歩み続けた先にはダンジョン産の植物が群生している庭へ辿り着き、愕然とする。

「ダンジョンの植物を地上に持ち出して育てているだとか？かつて俺達でも考えもしなかったことをしている奴がいるとはな」

「ほうほう、これは凄く興味深いです。あの方はこうして定期的に利益を稼いでいたとは・・・勉強になりますよ」

「一体どんな『ファミリア』の冒険者か……」

湖の近くまで近づくと一行に湖の中から浮かんでくるように真紅の長髪の男が現れた。驚くヴァベル達に水の上を歩いているように見せながら朗らかに話しかけた。

「ヴァベル、久しぶり。その二人が客人？」

「お久しぶりでございます。ええ、そうですとも。そして今、水の上を歩きませんでした？」

「そう見えて実際は透明の足場の上に歩いていただけだ。俺の後ろについて来れば湖に落ちないから」

「そういうことでしたか。では、案内をお願いします」

踵を返して湖の中心に戻る一誠の後を追うヴァベル。呆気に取られた客人達と眷族達は我に返って追従する。全員が中心に佇むと見えない足場が降下する。周囲は水で囲まれ白亜の神殿がある場所まで降りていく。

「何だこれは、一体どうなっている？」

「一言で言えば魔法だよ」

「……こんな魔法は聞いたことが無い。お前は冒険者なのか？」

「酒場の店主も兼ねて冒険者活動もしてるな」

「……」

何だこいつは、という気持ちが一一致した客人。ニコニコと笑むヴァベルは庭園についてあれやこれやと訊きだし始める。商魂魂に火が付いた様子だ。そして神殿がある水底に到着、真紅の長髪の男について行く形で神殿の中に展開している魔方陣の中に足を踏み込めば視界が一瞬で真っ白に染まり、次いでオラリオを一望できるバベルの塔の次に高い断崖絶壁の石造りの通路の上に立っていたことに気付く。

「……理解に苦しむ」

「ああ……私も同感だ」

驚くのも疲れてきたとばかり呟く客人達。そしてさり気無くヴァベルと朗らかに話し合う男を品定めする視線で視界に入れる。

「4、いや……5か」

「妥当だろうな」

何か勝手に勘違いされてるーと内心苦い気持ちを抱く男は白亜の城の前に鎮座している黄金の大鐘楼の横を通り過ぎ、城の門の片方だけ押し開いて客人達を招く。

「あ、靴脱いでから上がってくれ」

「……………」

やはり、おかしいと思わずにはいられなかった客人達だった。それでも言うとおりに裸足になってから城の中を進むと、途中に扉がない部屋の空間に入るとどんな客人なのか興味がある城の同居人や同棲、居候の住民達がヴァベルー達を出迎えた。

「!?!」

「!!?!」

目を見開くか丸くした者がそれぞれ女神と眷族だった。それもほんの一部——リヴェリア、オツタル、椿、フレイヤ、ヘファイストス、アストレア。

「まさか……………」

「お前は……………」

うん？知り合い？と自然と交互に二人の客人とリヴェリア達を見る何も知らない一同。二人の客人達は意外そうに口を開く。

「こんなところで知った顔の奴と会えるとは思いもしなかったな」

「そうだな。そして数年前から変わっていないようだ」

「…………知り合いっぽいけど、誰なんだ？冒険者みたいだけどリリア、オツタル」

男——一誠の問いにリヴェリアは重々し気に口を開く。

「…………男は【暴食】のザルド…………。女の方は【静寂】のアルフィア。アルフィアは神時代以降、眷族の中で最も『才能』に愛された女…………『才能の権化』にして、『災禍の』怪物…………。【静寂】のアルフィアとザルドはかつて【ゼウス・ファミリア】と【ヘラ・ファミリア】の眷族でLv.7の冒険者だった」

『っ——!?!』

【ゼウス・ファミリア】、【ヘラ・ファミリア】…………。【ロキ・ファ

「ミア」と「フレイヤ・ファミア」が都市最強派閥と名乗る前に存在していたという三大冒険者依頼の最後の一体、『黒竜』に敗れて都市から去った最強の二大派閥の冒険者。客人達の正体の事実に一誠達は吃驚して目を見開いた。

「ヴァベルー、知ってて敢えて言わなかったな？驚かすつもりで」「ふふ、ええ、その通りです」

傑物を連れてくるとは誰も予想だにできなかったことだった。顔に複数の傷がある黒い鎧で身に包む大男、灰色の長い髪に身に纏う漆黒のドレスの妙齡の女性……。彼の二人がゼウスとヘラの眷族だった最強の冒険者――。

「質問いい？主神は天界に送還されてる？」

「いや、まだ送還されていない」

「この身にまだ『ステイタス』は封印されていないことが証明している」

「そっか、じゃあどこかにいるんだな。会って見たいなー」

あんな主神を会って見たい等と言う酔狂な者が目の前にいた。

「取り敢えず立ちっぱなしもなんだし何か食べる？何が食べたい？作るぞ」

「肉を所望する」

「何でもいい」

「タダで食べられるとは嬉しいですね。私達にはチーズハンバーグをお願いします」

「ハンバーグか。んじや、ザルドもそれにするとして、何でもいいというアルフィアは肉を使わない豆腐ステーキにするか」

ハンバーグ？豆腐ステーキ？

「……聞いたこともない名だ。それは肉料理なのか？」

「ハンバーグは豚の肉を挽いたもので狐色になるまで炒めた玉ねぎ、つなぎに卵とパン粉を一緒に混ぜながら楕円形に形を整えながら空気を抜いてそれからじっくりと焼いたり煮込んだりする。豆腐ステーキ、豆腐の方は大豆、豆を原料にして作られる。大豆の搾り汁(豆乳)を凝固剤(にがり、その他)によって固めた加工食品で――」

料理の準備をしながら説明口調で語り続ける一誠。凄く興味深いと耳を傾けるザルドを見るリヴェリアとオツタルからすればとても珍しい光景だった。

「私達は座りましようか」

「.....」

「ああ」

遠慮なく背凭れがある椅子に座り込むヴァーベル達。が、ザルドは一誠がいる厨房へと足を運び邪魔にならない位置で調理中の一誠の様子を観察する目で見つめる。

「.....?」

「俺の事は気にするな」

「オツタルみたいな大男が傍に居られると気にするんだけど？それとも手伝ってくれるわけ？」

「ハンバーグとやらの作り方を教えてくれればしてやろう。俺は料理も作れるから邪魔にはならんぞ」

と、そんな風には見えない男の提案に半信半疑だが、突っ立っているよりはいいと一緒に調理をしてみようことにした。

「.....」

奇妙なことになっている目の前の光景にリヴェリアとオツタルは何とも言えず、神妙な面持ちで見ていることしかできなかった。

「マジで手慣れてるし」

「これくらいは造作もない」

「店に雇いたい人材だなー」

「酒場の店主だったな。冒険者が今時店を構えるとは珍しい事だ。俺がまだオラリオにいた頃はそんな冒険者はいなかったというのに」

「俺の料理を集りに来る神々が毎度言ってくるからな」

「それほどお前の料理は美味しいのか、期待できるな」

「その時、一番食べるのはオツタルです」

「はっ！糞ガキがか。だが、俺の二つ名の【暴食】を体現するほどの胃袋を持っているぞ。糞ガキ程度に負けはせん」

「オツタルを糞ガキ扱いする人初めて見たわー。昔のオツタルってど

んな感じだった？」

和んでいる。いや、お互い初対面の筈なのに会話を弾ませ笑いながら料理を作っている。

「オツタル、どう思う」

「……わからん」

だろうな。私もわからん。いや、一つ言えることがあるなとリヴェリアは思った。

「イツセーだから、か」

「……」

オツタルも肯定する雰囲気を生じ、楕円形に整えた肉の塊を熱したフライパンに投入した際に鳴る焼く音が耳朶に刺激させた。

「——美味しい！」

完成したチーズハンバーグと豆腐ステーキを食すヴァベルー達。ザルトが一口食べた瞬間に吼えた。

「こんな肉料理がこの世に他にもあったとは知らなかった。割ったハンバーグの断面から溢れる肉汁は食欲をそそる香ばしい香りをも発し、熱で蕩けた四種のチーズの味がハンバーグの味とよく合っている」

「この豆腐とやら、これが豆で作られたモノとは思えない美味しいさだな」

「美味しいですなあ」

「美味しく食べてくれるのは嬉しい。けど、ザルドさんや。一口で丸ごと食べないでくれ。あつという間に減ってる減ってる」

ザルドの前だけ山盛りに載せられたチーズハンバーグが本当にあつという間に、残り片手で数えるぐらいしか食べ尽くす勢いで胃の中に収めていくのを一誠はあつけらかんとした。

「む、もうなくなりそうか。では、名残惜しむことのないようゆっくり咀嚼するでしょう。ライスの大盛りのお代わりを頼む」

今度はゆっくりと味を噛み締めて堪能するザルドが食べ終えるまで、リヴェリアが呼んだようで、ロキとフィンにガレスが城の中に

入ってきてザルドとアルフィアを見て信じられなさそうに目を丸くした。

「馳走になった。実に美味だったぞ」

「本当にな。炊いといた米も神楽以外食べ尽くすとは思わなかった」

「神楽？」

山盛りのごはんはんに卵と醤油を掛けて食べてる女性に指差す。

「うちでー、二番を争う大食い」

「そうか。……お前達も来たか。久しいな勇者のガキに老けたド

ワーフ、酔いどれ女神」

「話に聞いたとおり本当にいるとはね。また再びこの地を踏みくるなんて驚いたよ」

「久しぶりじやのザルド」

「自分ら、何をしにここに戻ってきたんや？」

ロキの問いにザルドは言い返す。

「ヴァベルーの口車に乗っただけだ。ここに来ればいい未来を見せてくれると言うからな。それと異世界から来た人間と言うやつも会いに来た」

十中八九、一誠イツセーのことか、と悟る。

「いい未来って何だ？」

「さあな。俺達にもわからん。だが、異世界の人間が『氷河の領域』まで進んだ話の真意は知りたるところだ」

「ヴァベルー、どんな話をして連れてきたんだよ？」

「この二人に好奇心を待たせる話を少々。イツセー殿が召喚したモンスターのことも」

「おい」

こいつか？ザルドの意識と視線が一誠に向いた。

「お前が異世界の人間だったのか」

「他にも数人この場にいるけどな」

「異世界とは何なのだ？」

「この世界と違う世界、あるいは同じ世界だけど違いがある別の世界。俺は、この世界に存在する同じ名前の神々が存在する世界からやって



来たんだ」

訳が解らないと理解に苦しむザルド。まだ解り切っていない様子に噛み砕いて言う。

「オラリオと冒険者がいない世界から来た、たとえば何となくでも解ってくれるか」

「オラリオと冒険者がいない世界？神がいるというにか」

「モンスターと魔法と剣は存在してるよ。だから、俺が操る魔法はこの世界の魔法と大きく異なる」

属性の魔法を詠唱も名前も口に出さず、発現して形を竜に変えたり、鳥に変えたり、獣にも変えて見せる。ザルドとアルフィアは信じられないといった表情を浮かべる。リヴェリア達は自分達もそうだったと懐かしげに遠い目をした。

「理解してくれた？」

「証明した以上は受け止めるしかない。だが、異世界の魔法はその程度なのか？」

「他にも色々とあるぞ。それを教えるのは時間が掛かるけどな」

「お前が深層、俺とアルフィア……ゼウスとヘラの『ファミリア』しか踏破していない59階層を踏破できるというならレベルは5、もしくは6か7か？」

「3だ」

何てことの無さげに現在のレベルを述べる一誠。ザルドとアルフィアの耳に届いた数字に疑う。

「冗談だろ」

「いや本当だ。デタラメを言っていないぞ」

「……糞ガキか勇者の『ファミリア』の遠征、いや、そもそもお前はどこの『ファミリア』だ？」

「九、八年前は『ロキ・ファミリア』、七年前は『ヘファイストス・ファミリア』。六年前は『ガネーシャ・ファミリア』。去年は『フレイヤ・ファミリア』だったけど、今は無所属ですがなにか」

ザルドは米神を摘まみ何かに耐えるよう瞑目し、アルフィアはヴァベルーに顔を向ける。

「このような雑音が私達にとっていい未来になるとは思えんな」

「決してそんなことはございませぬよ。今後も彼と交流すれば必ずや納得してくれると、賭けてもいいですよ」

「一年ごと【ファミリア】を鞍替えし続ける精神に理解が苦しませるこいつが俺達を納得させるか……」

そこまで一誠を買うヴァベルの心情は神ゆえ解らないが、信用しているようだった。ならば、他の者はどうなのだと目をリヴェリア達に向けた。

「糞ガキ、こいつはお前にとってなんだ」

「いつか必ず倒すフレイヤ様がお見初めた男だ」

「倒す？まさか、上級冒険者相手にお前が勝てないでいるのか？」

「見た目で判断していると、足元を掬われるぞザルド。こいつはこの世界のありとあらゆる常識や概念など通用しないイレギュラーを体現している」

真っ直ぐ思っていることを語るオツタルの言葉に耳を傾けるザルドにフィン達も加わってきた。

「今持っている物差しで測るべきではないよ。この世界で得られる強さとは異なつて、彼が住んでいた異世界で得た力はオツタルも言つた通り僕達の常識を凌駕する」

「おう、こやつの事を知りたいのなら話で聞くより行動で示させた方が手っ取り早いぞザルド、アルフィアよ」

「この場に居る全員はこの者の言動で深い信用と信頼を寄せている。そして心優しさと強さもだ」

今は無所属の冒険者だが、そこまで信用と信頼されている男を気になるようになったザルドは腰を上げた。

「イツセーと言つたな。異世界特有の力を見せてもらおうか」

「それはいいけど、ザルド質問いい？初めて出会った時からすごい毒の気配を感じるんだけど、まさか毒に侵されてる？それもポイスン・ウエルミス毒妖 蛆の毒の方が可愛いぐらいの」

驚くザルドとやはり気付いていたかというフィン達の神妙な表情が浮かぶ。

「やはり、癒えておらんかったかザルドよ。ならばおぬしもそうじゃなアルファイア」

「癒えてないおらんかった？　どういうことだ？」

「イツセー、君は知らないから教える必要があるね。ザルドは三大冒険者依頼の『ベヒーモス』を討伐する際、陸の王者の肉を食らった。しかも全てを飲み、全てを溶かし、全てを殺す古の怪物の毒肉をだ」ガレスに続き、フィントリヴェリアも補足を加えながら紡ぐように語る。

「ザルドは修羅と化し一撃で敵を倒した立役者になったが見返りがありにも大きかった。喰らって取り込んだ陸の王者の肉は呪いのごとくザルドを体内から腐らせるようになり、男の身体を蝕むようになった」

「そしてアルファイアは生まれた時から『不治の病』を患っている。恩恵を得ても改善は出来ず、むしろとある悪種スキルとして発現してしまったらしい。魔法や道具アイテムを使っても決して癒えることはなかった」

二人のことを知らない殆どの者達は息を呑み、場が緊張しているかのように張り詰めた。そんな状態で今まで生きていたとは逆に信じられず、今度は一誠達の方が愕然した。特に一誠が一番驚愕していた。昔、神の毒を何度も食らった経験があるので他人事ではないのだ。

「アホかつ！　そんなえげつない毒に侵された状態で戦おうだなんて大馬鹿野郎だな！　頭の中まで毒で侵されているのかお前！」

「お、大馬鹿……」

「アミッド、ナーザ！　直ぐにこの大馬鹿の毒の解毒剤を準備するぞ！　最悪、アクアの力で試す！」

「は、はいっ！」

「大馬鹿野郎も来い！　ベヒーモスの毒のサンプルが必要なんだからな！」

有無を言わず、問答無用でザルドの鎧を掴み力尽くで引きずり出す。怒った顔の一誠の鬼気迫る勢いに圧され無抵抗のまま連れ出されるザルドと部屋を後にする三人を呆気に取られる一同は。

「あのザルドを大馬鹿野郎と言ったのは、ゼウスとヘラの派閥ファミリア以外でイツセーが初めてだろうね」

「奴も流石に気圧されておったぞ」

「私達もそうだがな」

「……あれが、そうだというのか」

アルフィアが今窺わせた一誠の言動にお前達が信用と信頼させたものなのかと言外すると、フィン達は揃って頷いた。

「えっと、多分ですけどアルフィアさんの不治の病もイツセーが治すかもしれませんよ?」

「何を馬鹿なことを言う。同じ腹から生まれた妹さえ殺した忌々しい死の病だ。決して癒えることはない」

「イツセーは異世界から来た異邦人です。異世界特有の方法で治すことが出来ると思います」

「世迷言を……」

と吐き捨てるアルフィアに真摯な眼差しを向けるリヴェリア。

「世迷言はどうか、お前の目で確かめるがいい。奴は死者をも蘇らすこともできる」

「お前の妹も、頼めば蘇らすこともできるだろう」

ザルドが一誠の手によってどこかへ連れ出されてから十数分が経過した頃だった。何となく皆で待っていると一誠達が戻ってきた。

「どうだ?」

「ベヒーモスの毒のサンプルを採取して今まで作った回復薬ポーションを俺の能力で強化したので試したら、その内の一つが少しだけ効果があつて成功した。これからも定期的に時間を掛けて飲んでもらえば、いずれ解毒できて完治するだろう」

「……ザルド」

「ああ、本当だ。俺も驚いている。お前と同じで魔法や道具アイテムを使つても決して癒えることがなかったというのに。八年前のオラリオより随分小粒が揃っているようだ」

「ということではアルフィアな。スキルに発現するほどだか

ら……そのスキルをどうにかした上ですればいいか？」

何を言い出すのだこの男は……と、怪しい者を見る目で見ていけば一誠の背後の空間から数多の鎖が生えるようになってきた。アルフィアは閉じていた目を右目が翡翠、左目が髪と同じ灰色の瞳が開いた。

「なんだ、それは」

「相手の能力を封印する能力だ。——神の恩恵、【ステイタス】も封印できるぞ？」

意思を持つているかのように鎖が動き出してアルフィアに迫る。そして——。

「あ、避けんな！っていうか、地味に初めて避けられたし！」

「そんな眉唾な能力に信用できるか」

「んだったら強引でもさせてもらおうぞ」

双眸を妖しく煌めかせた途端、時が停まったかのようにアルフィアの身体が停止した。アルフィアは意識までも停止されているようピクリとも動かなくなつた。ザルドは訊く。

「……アルフィアに何をした？」

「今のは対象の時を停める能力を使った。俺が解除しない限りは石化したように動かないぞ」

「あのヘラの眷族でさえ逆らえない能力……自分、チート過ぎるやろ!？」

「だから極力よほどでもない限り使わないようにしてんだよ。戦闘に使ったらあつけなく勝ってしまうからつまらないし」

逆に言えば使えば楽に第一級冒険者を圧倒して勝つことが出来る。誰にも抗えない無慈悲な能力の強さを見せつけられた一同は改めて一誠の実力を思い知った。

「さて今の内に済ませておくか」

そう言つて鎖をアルフィアの体に巻き付け、体の内に沈み込ませた。だが、全てではなく彼女の体内に伸びて沈んだ鎖を掴み思いつきり引つ張ると、雁字搦めで縛られた光が華奢な体から抜けて出てきた。それからアルフィアの時を停めていた能力を解除して意識を戻

す。

「一瞬、意識がなくなった感覚を感じた……私に何をした」  
「時を停めた」

「……それで、私の不治の病を治したのか」

「いや、これを飲め。俺が作った幻黎の雫って言う回復薬だ。損傷した体を還元するし不治の病をも治す特效薬。効果は抜群だぞ」

どこからともなく取り出した回復薬をアルフィアに手渡す。

「今更、回復薬を飲んで治るとは限らんと思うがな」

「そいつは何時の話をしているんだ？もう今は昔の時代じゃないんだ。時が進み未来まで時代が変わるにつれ人は進歩するもんだ。人間は日々を積み重ねて成長していくもんだぞ」

「……それは『黒竜』を打ち滅ぼすことが出来る者もいずれ現れるという意味か」

「いつそうなるか分からないけど、いずれは現れるだろうさ。人間は失敗を糧に成長して進化する生き物。そう思わないか英雄？」

手の中にある回復薬を見下ろすアルフィアに一誠は言う。

「そういうわけで飲め。それでもダメだったら他の方法でする」

「他にもあるのか」

「嘘は言わん」

飲め、と目で訴える一誠に仕方がないと風に折れたアルフィアは幻黎の雫を飲み始める。全て飲み干したアルフィアは自身しか感じられない感覚を感じ取った。

「どうだ、アルフィア」

「……にわかには信じ難い。が、確かに死の病が消えた事だけは確かだ。……本当に信じられない」

長年の痛苦からの開放感。死ぬまで決して癒えることはないだろうと悟っていた考えを覆す、信じられない出来事だっただろう。してやったりとヴァベルは二人に訊ねた。

「どうです？お二人にとって良い未来を迎えたでしょう」

「最初は何を言っているんだこの神は、と思っていたがそれが本当になるとはな」

「神は全員が全員、胡散臭い連中ばかりだからな。まともな神格者なんて一握りしかないだろう」

「それについては俺も深く同意見だ。因みにゼウスとヘラってどんな神だった？」

二人はそれに答えた。

「どうしようもない主神だったぞ。サポーターのヒューマンと女湯を覗きに行くわ、他派閥の女冒険者にセクハラするわ、訳の分からんこともする変態爺だった」

「ヘラは気性が激しい姑のような奴だったよ。何度も私の胸に手を突っ込もうとした狒々爺の好々爺を魔法で迎撃した後はチクって折檻させたことか。・・・何故聞いて落ち込みだす」

暗い表情で肩を落とす一誠。

「俺の知っているゼウスのお爺ちゃんじゃない・・・」

「何を言っているんだお前は」

「彼が産まれた世界には同名の神々が存在していることを教えたよね」

フィンが助け舟を出して説明を買って出た。

「この世界と異世界の同名のゼウスと違ってイツセーは残念がっているだけなんだ」

「ほう？では、異世界のゼウスはどんな神なのか教えてもらおうか？」

「——全知全能の神。天空を支配する天空神で、人類と神々双方の秩序を守護・支配する神々の王だっけ。それでこっちの世界のゼウスはこんな感じ」

変身の魔法で筋骨隆々の老神の姿になってみせた一誠に、異世界の神を見せてもらったことあるアスナと海童以外の面々は驚嘆と感嘆の念を抱く。そんな異世界のゼウスの姿を見てザルドは一言。

「異世界のゼウスの眷族になりたかったな・・・」

「私も聞こうか。異世界のヘラは？」

「んと、ゼウスのお爺ちゃんの姉であって、妻だよ。ヘラって意味はさ、とある国の古い古典で『貴婦人、女主人』なんだっけ。ゼウスのお爺ちゃんと同じオリュンポス十二神の一人で、神々の女王とも言

わかれて嫉妬深い性格であり、ゼウスのお爺ちゃんの浮気相手やその間の子供に苛烈な罰を科しては様々な悲劇を引き起こした。夫婦仲も良いとは言えず、ゼウスのお爺ちゃんによくケンカしているって」

さらつとこの世界のゼウスとヘラの関係が似ている部分を言う一誠に神々は興味を抱いた。

「異世界のゼウスとヘラは夫婦関係やったとはなあ……こつちじゃあ夫婦漫才をしとったけど、あながちお似合いだったんちゃうん？」  
「ヘラに殺されるわよロキ？」

「というか、天界で十二神を決めた事をどうしてイツセーが知っているのか最初は不思議だったけれど。異世界も同じなら知っていてもおかしくないわね？」

「へフアイストスもそうだよな。それとヘステイア、いやディオニュソスに十二神の席を譲っているならヘステイアは違うな。あとアポロンとアレスにデメテルとアルテミス、ヘルメスにポセイドン、アテナやアプロディーテー……アフロディーテか？」

「良く知っているわね。感心するわ。彼女の名前はアプロディーテで間違いないわよ」

元の世界じゃ常識だから。実在しているし、と当然のように言う一誠の口から出た神々の名前にアスナと海童は知識量の差は凄く開いているなーと実感した。元の姿に戻る一誠にまた訊く。

「異世界とやらにも神々がいることは分かった。ならば問おう。お前の世界の最強は誰だ？」

「ドラゴン」

「……黒竜か？」

「黒竜もいるけど、世界最強は真紅の身体ドラゴンだよ。夢幻を司るドラゴンで最強のドラゴンを負かすほど強いよ」

誇らしげに語る一誠は微笑みを浮かべた。

「襲われないのか？」

「天界のような人類が住んでいる世界とは異なる世界にしか生息していないからな。殆んど人間界にはモンスターは存在しないんだ。魔獣っていうモンスターや人類の敵みたいな異形の存在はいるけどな。」



まあ、力ある人間が対処できるから最悪な状況にはなっていないし至って平穏だぞ人間界は」

「神々がいるのに冒険者がいないのにか。どうやって強くなっているのだ？」

「冒険者と変わらないかな？体一つで自己の鍛錬、武装、魔法、技と駆け引きをして強くなっている。そして、人類に神の恩恵みたいな摩訶不思議な能力も与えられているから、それを覚醒できれば冒険者にも劣らない強さを得られるし」

つまり、一誠の世界にはその身一つで摩訶不思議な能力を授かり得ていたとしても、『神の恩恵』<sup>フアルナ</sup>をなど授からずに強者に至ることが当たり前のようにできるといふことなのか。

「・・・・・・」

何という世界。自分達の力のみで、英雄に至るまで強くなれるのか。ザルドとアルフィアは、かつて『黒竜』に敗北したあの時の光景を脳裏に過らせ、自分達とは異なる強さを持っている一誠が今、その強さを得ているならあるいは・・・・・・。

「お前に興味が沸いた。やはり、俺と勝負してもらおうか。アルフィア、お前は どうする？」

「異世界で得た強さを私にも証明してもらおう」

何故か戦う気になりだすザルドとアルフィア。しかし一誠は否定した。

「ザルドはまだ毒が残っているから駄目だ。アルフィアも病み上がりで本調子じゃないだろ。大人しく今日はもう寝ろ」

半ば強引に用意した個室にそれぞれ二人を押し込んでその日は就寝した。ヴァベルは眷族と一緒にホームへと帰路についた。

## 冒険譚59

ゼウスとヘラの眷族のザルドとアルフィアがそれぞれの部屋のベッドの上で目を覚まし、昨日の出来事を思い返して起床する。

「はい、これ」

朝食後、携帯用の銀色のプレートを二枚持っている一誠から手渡される。何だこれはと奇妙な気持ちを抱きながら受け取ると説明を受ける。

「それは『ステータスプレート』といって、これに血を垂らせば疑似的な【神の恩恵】の効果を発揮してな。それを持って冒険者活動をすれば、自動的に【ステータス】の更新がして、これがある限り無所属でも活動できるぞ」

「なんだ、その道具は。神々の存在を危うくさせるような物を作ってギルドは何も言わないのか」

「教えていないし。ま、言おうが言うまいが無所属派閥の結成は正式にギルドからも許可を貰ってるから問題はない。因みにここにいる大半はそれ持っているから」

信じられない道具を作り出していた一誠をかつてゼウスとヘラの【ファミリア】が健在だった頃と比較し……

「ヘラが知ったら、怒り狂うだろうな」

「ああ、うん。絶対そうだろう」

「そう？まあ、今いない神のことなんてどうでもいいとしてだ。二人は今日どう過ごすつもりだ？」

「逆に聞くが。お前の今日の予定は？」

俺は——と質問に答えようとした一誠の口が開きかけた時、巖のような巨躯を誇る大男と銀髪の美の女神が近寄ってきた。

「イツセー、お話良いかしら？」

「なに？」

「空の世界、何時行くのか知りたいのだけれど」

「あー、そうだな。店が休みの日、アウギユステの海でのんびりとビー

チでも楽しむか。もう夏だしな」

「確かに、あの島の海はとても綺麗だったわね。楽しみにしているわ」  
質問の答えに満足したフレイヤは微笑を浮かべ踵を返して三人から遠ざかった。一瞬だけザルドに視線を送るオツタルも主神の背中を追いかけるようにして歩き去っていく。

「空の世界？どこだそれは」

「遙か空の最果てに空に浮かぶ島々に住んでいる人類やモンスターが存在しているんだよ。そこが空の世界だ」

「どうやって空に行く。魔道具か」

「そんなところ。ま、楽しみにしてくれ。で、プレートに血を垂らしてみ」

針を渡す一誠から促され、指の腹に刺して一滴の血をプレートにつけると。二人の「ステイタス」がプレートにも浮かび上がり、「異龍の恩恵」を得た。

「本当に俺達の「ステイタス」が出来上がった」

「どうやってこれを作り上げたのだ？」

「神血イコルを素材に試行錯誤して製作した」

なんて罰当たりなことをするような冒険者だ、と思う半面納得する部分はあった。

「神も『神の恩恵』を人類に授ける際は神血イコルですから、その応用とならば納得できるな」

「……こいつが15年前いたらゼウスとヘラが黙っちゃいなかったらどうだろう」

もしもそうになったらどうなるのか想像もできないザルド。

「……15年前とは言わず、8年前にオラリオにいたら私も『黒竜』の討伐ができ、妹が同じ不治の病で死ぬこともなかっただろうな」

アルフィアの思いを汲んで一誠は苦笑する。

「俺が『黒竜』を討伐してたかもしれないな」

「見たことも対峙したこともない者が何を言うか」

「だったら、実際はどうだった？どう感じたその黒竜を見てさ」

その問いに二人は不自然に静まり返り口を重々し気に開いた。

「あれは、絶望だ」

「ゼウスとヘラの【ファミリア】の主力の冒険者が殆んど全滅。当時Lv. 8の【ゼウス・ファミリア】の団長も「ヘラ・ファミリア」のあいつも戦って死んだ。あれを倒すのは神に縋るこの時代の、神工の英雄ではダメだと実感した。何より俺達が証明してしまっただけだから」

神々をも認めさせる実力を有し、自負に満ち溢れた強者が、そんな彼等彼女等を遥かに上回る強さを、嘲笑うかのように蹂躪した『黒竜』がいともたやすく薙ぎ払った。かつて味わったことのない『蹂躪』を、実際に対峙した者だけが知る痛哭。目の前で仲間が蹂躪される様を見せつけられた二人の中で思い知ったんだろう。

「二人がそれほどの絶望を実感したなら、未来に懸けるしかないだろうな」

「未来だと・・・?」

「まだ二人の派閥が健在だった頃。今ほど、第一級冒険者はいたかどうかわからないけどさ。『黒竜』を倒す英雄が、未来の時代に現れることを信じて願うか待つしかできないだろう?」

「その間、再び『黒竜』が襲ってこないとは限らないぞ」

「神でもその予想はできないことを断言できる訳がない。その通りオリオに襲ってきたらその時はその時だ。二人が倒せない、無理だ——って相手にオツタル達が戦ってもダメだったら諦めるしかないだろう」

他人事のように言い放つ一誠を反論や異論も言わず、ザルドとアルフィアもそれは仕方ないと同調するように沈黙で肯定した。

「でもま、俺がいる間に襲ってきたら戦ってみたいな」

「異世界から来た者でも敵わないだろうよ」

「勝てないにしても負けるつもりはないぞ」

「その自信は一体何なのだ」

「世界中を旅して様々な神々からの修行をしたり、色んな怪物やドラゴンと戦った日々を過ごしたから」

「・・・こいつはどんな人生を過ごしてきたんだ?二人の気持ち

が一致した瞬間だった。

「それは何時からして来たんだ？」

「えっと、5、6歳の頃から」

「……異世界の人間は幼い頃から鍛えて強くなっているのか？」  
「や、そんなことしているのは多分一握りの奴だけだから」

誤解されそうになりかけ訂正するが、その一人握の者がいる為にながち間違つてはいないので正解でもあった。

「にしても、お前の家に複数の主神とその派閥の眷族と一緒に住んでいるのはどういふことだ。私達の時と比べて明らかにおかしい状況だ」

「あー、ヘアァイストスの場合は彼女の派閥の団長、単眼キョククロボスの巨師が俺の異世界風の鍛冶のやり方に興味を持ったからだな。その時の俺は「ヘアァイストス・ファミアリア」の眷族になつてたから」

「糞ガキの主神は？」

「転生者つて連中にホームを破壊され尽くされて、ホームの修繕が終わるまで俺の家に居候してただけけどそのまま住みつかれた。「アストレア・ファミアリア」は……あの女神が俺に恩義を感じて恩を返すために「ファミアリア」を巻き込む形で城に住むようになった」

「あの年増のエルフは？」

「リリア？いや、リヴェリアのことか？彼女は金髪金眼の少女が俺と一緒に住みたいと言いつ出したからさ、保護者として一緒に住むことになった。ロキ公認だよ」

今思えば随分と住みつかれたなーと、ため息を吐く一誠を何とも言えない感じで見つめるザルドとアルフィア。

「……お前は誰かに好かれやすい体質なのか？」

「否定はしない。実際、そんなスキルも発現しているから否定も出来ない」

「お前の言動でそうさせているのか……不思議な奴だ」

「異常な奴だーってよく言われているけどな」

もはや言われ慣れた己の体で名を表す『異常』。苦笑いする男に堂々とした挑戦の声が飛んできた。

「さあイツセー！今日も私と爆裂魔法の勝負をしようではありませんか！」

「だーかーらー、「ステイタス」が変わってないまま勝負しても意味がないって言ってるだろうが！モンスターを倒してこいっての！」

「今回は破壊ではなくカズマに審査をして勝負をする事にしましたので問題ないのです！」

二つのボタンを目のように縫い付けた黒いとんがり帽子をかぶり、黒いローブを身につける黒髪ショートに赤い瞳を持つ少女が登場する。二人の会話を聞けば魔法の勝負をしようとしているらしいのだが。

「誰だ？」

「あー……名前はめぐみん。こいつは俺が産まれた世界とはまた別の世界からこの世界に摩訶不思議な現象で来てしまった異世界の魔法使い、ウィザード、魔導士だ」

「異世界とやらは一つだけではなかったのか？」

「一つだけだと言った覚えはないぞ。実際、異世界の魔法は見て飽きることはない。寧ろ知識の糧になる。言っとくけど他にも色んな異世界からやってきた人間達は他にもいるからな？この城にもそういう人間もいるから、異世界のことが気になるなら訊いてみたらいいよ」

勝負をしましょう、さあやりましょう、今すぐしましょう！とあまりにもしつこく食って掛かる少女の頭を脇の下に持っていく、一気に腕で締め上げる。

「うるさい」

「あつ、待ってください！これは冗談抜きで痛いです！頭が締め付けられてええええええええええええ！」

「こらイツセー！めぐみんに何てことをしているんだ！——するなら私でしろおっ！」

「お前まで来るなよ！余計混沌と化するんだから！」

興奮した顔で迫ってくるダクネスに対して悲鳴を上げる。名も知らない金髪美女に小首を傾げる思いで訊くザルド。

「……今度は誰だ？」

「めぐみんと同じ世界からやってきた——ダステイネス・フォード・ララティーナって名前の変態だ」

「おい待て、人を変態扱いをするではない！それに私の名前はダクネスだ！」

「うっさいララティーナ。で、このララティーナお嬢様の唯一の特技は一撃で死に至るような攻撃じゃない限りどんな攻撃でも耐える防御。こんな風に——」

「その名前で呼ぶなあああああああんっ!!!」

ダクネスの手を掴んだ瞬間に一誠から雷撃が伝わって感電するダクネスだったが、淫らかな顔で全身から伝わる痛みを快感として興奮する。

「こんな感じで受けた攻撃の痛みが快楽に変えてしまう変態でもあるから、躊躇なく攻撃していいから。それがこいつにとって何よりの褒美らしいからさ」

「……ヘラですら関わりたくない部類かもしれないな」

「俺の主神だったら……どうなのだろうな」

そして躊躇なく一誠に蹴り飛ばされるダクネスのために怒り庇う者は——この場に居なかった。

「さて、これで静かになつたわけだが……何を話していたっけ」

「私と爆裂魔法を極める話をしましたよ」

「うん、嘘を吐くアークウィザードには魔力と体力を奪う刑に処すか。

ドレイン——」

「わーごめんなさい!?それだけは勘弁してくださいお願いしますー!」

危機感を抱き、伸びてくる手を触れさせまいと一誠の腕を掴んで押し留めるめぐみん。

「意外と力があるんだな?でも、ほら……どんどん俺の手が迫って行くぞー」

「カ、カズマ!助けてくださいー!このままではイツセーにカズマのようなことをされてしまいますー!」

「おいこら、俺のようになって一体どういふことなのか説明してもらお

うか。もれなくお前の背後から俺の『ドレインタッチ』が炸裂するぞ？」

「私に味方が!? く、迂闊でしたよつ。ここには無理矢理に魔力と体力を奪ったあと、口では言えないことをしようとするロリコンと私の下着を脱無しか取り柄がないロリコンヒキニート——」

一誠の顔から表情が消え失せた。

「……カズマー」

「おう、『ドレインタッチ』」

「うわつはあああああああつ!?」

「俺も『ドレインタッチ』」

「ちよつ! 二人同時に『ドレインタッチ』をしたらあああああああああああああつ!?」

無慈悲なお仕置きを執行する。程なくして体力と魔力を吸い尽くされためぐみんが床に倒れ、それを見下ろす二人がめぐみんの脇腹を小突くように蹴りを入れサッカーボール如く蹴る。

「おい、誰がロリコンだコラ」

「おい、誰がロリコンヒキニートだコラ」

「や、やめつ、無抵抗な人間に蹴りを、入れるなんてとんでもない、クズで鬼畜の行いを、するなんてつ」

「いたいけな少女を苛める光景に直ぐ二人を止めに入られ、めぐみんは自室に連れて行かれる。

「今何をした……?」

『ドレインタッチ』のことか? これはめぐみん達の異世界特有のスキルだ。スキルとして魔法もある方法で取得できるらしい。それについてはこのカズマから聞くといい。こいつの方が詳しいから。では、佐藤和真先生。説明をお願いします」

「はい、佐藤和真です。『ドレインタッチ』ってのは大雑把に言うとな手の身体に触れて発動すると、体力と魔力を同時に吸収したり譲渡したりすることが出来るスキルです。特に心臓に近い部分に触れてすればもつと効率的です」

「それはなんとも魔導士からすれば厄介なスキルだな。アルファイア、



「お前でも安易に接近戦はできまい？」

「『魔法』を吸収できるわけでもあるまい。近づかせることもなく迎撃すればいいだけの話だ」

問題視すらしていない発言をするアルフィアから自信がありふれていた。そんな彼女に補足を加えるのが一誠。

「因みにだが・・・『ステイル』というスキルがあつて。それは相手が所持している物をランダムで奪えることが出来るとか」

「だからどうした。魔導士の杖を奪うことが出来るというなら、私は杖を使わず魔法を使うぞ」

「いや、うちの家族の一人がそのスキルの餌食になつてさ。・・・女の服や下着も奪えるようだぞ？何度もそんなことされればさ、相手を丸裸にして戦えさせない状況にさせてしまつてこと」

それを聞いたザルドは主神が欲しがりそうな能力だと達観した。もしもそんなことが出来る眷族がいたら、喜々として使わせるのが容易に想像できてしまうあたり変態爺の主神だったなあと思つていた。

「実際に体験してみるか？」

「しなくていい。したらアルフィアの魔法が飛んでくるぞ」

「アルフィアの魔法かー。どんなの？」

「実際にその身で味わうといい」

ザルドの真意を深く読まず、アルフィアに模擬戦を申し込む一誠。軽く了承を得てもらったので地下のトレーニングルームへと赴いた。辿り着くと階段状の席から飛び降りて中心で向き合うように対峙する。

「この城にこんな広い空間があるとはな」

「大抵の模擬戦はこの場所で行うんだ。本気か全力だったら別のところでするけれど」

「ここはそうではないというのか」

「おいおい、第一級冒険者の全力はその場の周囲の風景や地形を変えてしまう強さだつてこと忘れてるのか第一級冒険者さん？」

「ああ、そうだったな。だが、異世界の魔法でもできるだろう？」

人によつちやあ小島や山を消し飛ばすぐらいは、と簡単に言うのと二

人は口を閉ざした。

「本当にできるのか。【神の恩恵】<sup>ステイタス</sup>を神から与えられないでそれほどの破壊力を、お前の世界の人類はそこまでの強さを有しているのか」

「興味があるなら何時か二人も連れて行ってやるよ。さて、何時でもいいか？ザルドも参加する気かよ？」

「構わない。お前の異世界の特有の力、強さを見せてもらう」

「俺は観戦するだけだ。直ぐに終わるのだろうか？」

「あー、直ぐではない。アルフィアのこと知りたいから色々とするつもり。——だから、まずは小手調べだ」

足元の影が異様に広がり出す。一誠の影の異常に二人はすぐに距離を置いて警戒しつつ様子を見守る。トレーニングルームを埋め尽くさんとする黒い闇が円状で広がりながら、闇影から黒い異形が続々と創造され産まれていくその光景にザルドとアルフィアは言葉を失った。

「影からモンスターだと……?」

「ダンジョンのモンスターじゃないから安心してくれ。この異形の怪物達は俺の能力で創造されているから俺の命令に従う」

「魔法、いや、異世界の能力か……」

「そ、魔石がないモンスターだけど問題なく倒せれるだろ」

全ての黒い異形の怪物達をアルフィアに喚ける。異形達は口を大きく開き、魔力の砲撃を放った。

「<sup>アタラクシア</sup>魂の平静」

対してアルフィアは片腕を前に突き出し、たったの<sup>ワン・ワード</sup>一声で迎撃、全ての魔法の砲撃を無効化した。それはとても物珍しく、一誠は興味深そうに漏らした。

「初めてだ。この世界で俺の魔法が無効化されたのは」

「その割には驚いていないようだが？」

「少なからず驚いているぞー？でも、それ以上に楽しくなりそうだとわくわくしているんだ」

「戦闘狂か」

「『未知』に興味津々なだけだ。なら、今度は物量でいこう」

咆哮を上げ爪や牙で攻撃する異形の怪物達。長文による詠唱の魔法だったら発動する間もなく数の暴力に呑み込まれて華奢な体に牙を突き付けられ、爪で引き裂かれ命を落とす。

「福音」  
ゴスペル

だが——女のワン・ワード一声で、ゴオンと鳴る鐘の音と共に異形の怪物達は見えない魔法による攻撃で衝撃波を受けたように、ことごとく葬られた。

「一撃かよ……いや、わかり切ってたことだけどやっぱ、この世界の人類も侮れないし馬鹿にできないな——」

「どうした、この程度か？お前自身はかかってこないのか？」

「まずは相手の情報を収集するのが俺の戦術なのさ。それに、この程度じゃないぞ」

今度は十五M級の巨人型の怪物を影から産み出す。

「ほう、大きなモノも出せるのか。木偶の坊でないことを期待するが」  
「……これでもまだ本気でもないぞ。言っただろ、ここは本気でも全力でもない場所だつて」

大咆哮を発する大型怪物が口から魔力の光線を放つ。極太の柱のように伸びる光線を前にしてまたワン・ワード一声。

「魂の平静」  
アタラクシア

「——それ、永続の魔法に対して効果があるのかな？」

魔法の無効化が途切れることもなく、無尽蔵のごとく、途絶えない魔力の塊を無効化し続けるアルファイアの行動を観察していた一誠の中で定まった。

「……身を纏う付与魔法エンチャントか。だとしたらこのまま攻撃を続ければそれ相応に魔力も消費するよな。魔導士の弱点の一つを攻めてみるか？」

影から再び、それも今度は四体も大型級の異形の怪物達が生まれ、アルファイアに魔力の塊を放った。

「面倒だな」

届く前に宙に舞う羽のように軽やかにかわすアルファイアに、巨体で

の質量を無視した跳躍力でアルファイアの真上から潰そうとする巨大異形が落ちてくるが、難なく避ける。

ゴスベル  
「福音」

無慈悲な魔法攻撃が炸裂し、異形の怪物達を葬ったつもりが凄まじい耐久力で原型は留まっている上に傷が、ダメージが再生、回復して何事もなかったかのようにアルファイアへ強襲を仕掛ける。

「再生の能力まで備わっていたとは……階層主よりも厄介なモンスターだな」

「実際、階層主より強いモンスターを創ったからな。まあ、ウダイオスよりは。知ってた？ウダイオス、ソロで倒すとドロップアイテムが手に入るんだけど」

「なんだと？……いや、確かに派閥ファミリアが健在だった頃はソロで倒したことが無かったな。今度、俺も倒しに行くとするか」

ところで、と異形の怪物達を見ながらザルドは言う。

「あれは、血肉があるのか？」

「あつたらどうするつもりだ？」

「異世界のモンスターの血肉を味わってみたいと思ってるな」

「……ダンジョンのモンスターって糞不味いぞ？『氷河の領域』の鳥モンスターを焼いて食べたけど食えない不味さだった。25階層の蟹も食べれなかったし」

試した経験を口にする一誠に振り向き、そしておかしそうに笑い出した。

「はははははっ！そうか、お前もモンスターを喰ったのか！俺みたいなことをする冒険者など後にも先にも俺だけだろうと断定したが、まさか他にもいたとはな！」

「いやだって、見た目が食えそうなものいるじゃん？モンスターとは言えど生物の一種だし、食べられるかなーって思うじゃん？」

「俺は万物を喰らうことで能力値ステータスに反映するから食っているに過ぎないが、純粋な気持ちでそんなことする冒険者はお前が初めてだと思うぞ。まあ、不味さは俺も認めているがな」

食に関して同じ体験した者同士の会話に花が咲き、料理に関する話

になるまで時間は掛からなかったところで……そっちのけ状態のアルファイアが二人に向かって【福音】<sup>ゴスベル</sup>を放つのも時間の問題だった。「うおっ!？」

「いったあっー!? あ、耳がキーンってする。衝撃波の魔法かと思ったら『音』かつ!」

「ザルドはともかく……Lv. 3の上級冒険者が原形を保ってる上に殆んどダメージがないのは異常だな」

「いや、耳鳴りとか色々ダメージが少なからず通じてるから。そういう風に見えていないだけだアルファイア」

「そうか、とまたしても魔法名を紡ごうとするアルファイア。否——

! 感じる——アルファイアから初めて途轍もないほどの魔力の総量が。まるで何かに閉じ込められて解放された喜びを表すように荒れ狂う風と化して。

「解いたか」

「解いた?」

何を? という一誠の気持ちを読み取った風にザルドは説明する。

「魔法無効化の付与魔法<sup>エンチャント</sup>はアルファイア自身にも影響が出ている。無効化までとはいかないが、本来の魔法の威力を著しく低下させる。今までの【福音】<sup>ゴスベル</sup>は力を封じ込められた末端に過ぎない」

『真の威力』ではない——。ザルドから教えられた情報を信じられないと感じつつアルファイアに目を向け直した矢先だった。

【福音】<sup>ゴスベル</sup>——【サタナス・ヴェーリオン】

五体の巨大異形が先ほどもまでの魔法の比ではない『真の威力』の魔法によって、再生が追い付かないほどの威力によって原形どころか完全に消し飛んだ。

「あ——俺でも食らいたくない部類だ」

「誰でもそうだろうよ」

これで終わったとばかりのアルファイアは振り返って話しかけてくる。

「倒したぞ。あれが創造できるモンスターではなからうが私でも倒せ

ることが分かった」

「まあ・・・あの程度のモンスターにてこずって倒せないようじゃ、俺の世界の強者達にも通用はしないって話だけだな」

「それは神も含まれているのか」

「当然だ」

断言され今度は一誠に攻撃を仕掛けようとする。

「ならば、その世界から来たという強者の一人であるお前自身の力も味わうとしよう」

「え？」

いつの間にかザルドは観客席に避難していた状態で【福音】<sup>ゴスベル</sup>の威力を味わうこととなった。

【福音】<sup>ゴスベル</sup>

「~~~~~っ!?!」

不意打ちも不意打ち。全身を襲う音の衝撃に身体は悲鳴を上げる——こともなく耐え抜いた。耐久の能力値<sup>アビリティ</sup>オール∞は伊達ではなかった。

「・・・これも耐え忍ぶとは驚いた」

「こんの・・・やってくれたな!」

「見せてみる、お前の力を」

「上等だよ・・・だけど、ここで勝負するのは華がない。場所を変えろぞ」

指を弾き音を鳴らすと、一誠とアルフィアの足元に魔方陣が浮かびそしてどこかへと転移して姿を消した。その後、ザルドが観覧できるための虚空に立体的な投影の映像がトレーニングルームに展開して、その映像には無人のオラリオの中央広場<sup>セントラルパーク</sup>に佇む二人が映り込んだ。

「・・・ここは、オラリオか？」

「そうだ。といつてもここが全力で戦うために作った特殊な空間だ。人類も神々もない上に使い捨てのトレーニングルーム。どれだけ建物を破壊しようが全力で戦っても問題ないから遠慮しなくてもいいぞ。戦い終わったら元の場所に戻るから安心もしてくれ」

「・・・異世界の者は何でもありなのか。都市一つを創れるとは凄

まじい魔法だ」

「ま、死者を蘇らすことも出来るからその認識は合ってるぞ。——  
じゃあ、戦<sup>ヤ</sup>ろうか」

腰を低く素手喧嘩<sup>ステゴロ</sup>の戦闘スタイルで臨もうとする一誠に無詠唱の魔法を口にしようとしたアルフィアの意識の途中——音もなく一瞬で彼女の懐に飛び込んだ時には、一誠の拳がアルフィアの腹部に突き刺し殴り飛ばした。

「福音<sup>ゴスペル</sup>」の『ゴ』という単語を口にして『ス』に繋げようとするその瞬間の時間は、俺にとっては相手の懐に飛び込む時間まで猶予がある。——無詠唱だろうと俺の世界の魔法使い達は、詠唱の有無関係なく口にせず自由に魔法を使うことが出来るぞ」

聞えちゃいないだろうけどな。次々と建物に穴を開けながら吹っ飛んでいくアルフィアに向かって言葉の口にする。

「さっきの不意打ちの仕返しだ。これでチャラなアルフィア」

片腕を突き出し、極太の魔力の砲撃を畳みかけて放った。更に直線状の建造物を呑み込みながら破壊し尽くす魔法攻撃のあと、遠くで大爆発が聞こえてくる。これで終わりか？と相手の出方を少し待っている——。

「祝福の禍根、誕生の呪い。半身喰らい我が身の原罪——禊はなく。浄化はなく。救いはなく。鳴り響く天の音色こそ私の罰。神々の喇叭、精霊の豎琴。光の旋律、すなわち罪過の烙印」

短文ではなく、長文の詠唱を紡ぐ玲瓏の音が……アルフィアの声が聞こえてくる。

「箱庭に愛されし我が運命よ——砕け散れ。私は貴様を憎んでいる」！【代償はここに。罪の証をもって万物を滅す】——【哭け、聖鐘楼】！」

魔力の臨界。ゴオオオンと鐘楼が鳴り響いた直後。

「ジェノス・アンジェラス」

刹那——アルフィアがいるであろう遠くから膨れ上がる音の魔法の嵐の攻撃が、射程範囲<sup>レンジ</sup>内の全ての建造物を文字通り粉碎しながら一誠がいるところまで迫った。

「——受けて立つ！」

深い笑みを浮かべ、かつての最強の【ファミリア】のLv. 7の眷族の魔導士の魔法の破壊力をこの身で味わい、体験・経験をするべく逃げもせず躲しもせず——自ら音の暴力に向かって飛び出した。そして——。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！」

「……」

アルフィアが放った三つ目の魔法の影響で見晴らしがよくなった瓦礫の荒野。破片と化した石や木片を踏みしめながら中央広場セントラルパークに戻るアルフィアは、一誠を探すまでもなく見つけた。

「……本当に、異常な奴だなお前は。私の最後の魔法、海リヴァイアサンの霸王に止めを刺した【ジェノス・アンジェラス】を受けたのだろう」

殆ど無傷の一誠が五体満足の身体で仁王立ちしていた。もはや、一誠の強さを認めるしかないと思えるアルフィアはある程度まで近づいた時に気付いた。一誠の右手が白く輝いている。「ステイタス」で強化された五感の一つ、聴力で聞えてくるリン、リン、という鐘チャイムの音が、ゴオン、ゴオオン、という大鐘楼グランドベルの音になり変わる。荘厳そうごんな鐘の音が、二人の間で高く鳴り響いていった。高く、遥か頭上グランドベルにまで昇る、壮大な大鐘楼の音色。

「……その音色は」

思わずと言った感じで雑音を掻き消す美しい音色に耳を傾ける。

「とある優男風の神に聞いた話なんだけど」

その中、唐突に語り掛ける一誠の言葉にも意識を向ける。

「この世界の魔法の詠唱分つて、今まで生きていた中での人生……詠唱分を含め、魔法は本人の資質、そして心に持っている思いを反映するそうだな。さっきのアルフィアの詠唱分……自分が咎人だと言っただけだ。半分喰らい我が身の原罪——もう一人の妹か弟かは知らないけど、生きているならもう一人分の才能を奪ったから、自分で罪人の烙印を押してるんだな」



「……それがどうかしたか」

「いや、俺も糞忌々しい兄に才能を奪われたから脆弱なまで同期の中で一番弱かったのかなあーって感じただけだ。そのおかげで兄弟仲間なんて最悪で俺はクズの兄に殺された経験があったからな。その時まだ5、6歳の幼少の頃だ。信じられないだろ?」

「……」

「生を受け、産まれた瞬間が呪いで才能を奪ってしまったことが罪だっていうなら、お前は謝るべきだったんじゃないのか?もうしたのかどうかわからないけどな」

「お前は自分の兄にそうさせたのか?」

アルフィアの指摘に真顔で間も置かずこう答えた。

「この手で殺したよ」

「――」

「当然だ。最初から兄弟の絆がなければお互い忌々しい感情しか抱けない。片や産まれた時から才能に恵まれているのに無能だった弟に嫉妬する兄。日頃から恵まれた才能を傲慢的になつていつでもどこでも暴力を振るわれ憎悪しか与えられなかった弟。そんな生活の中で、どうやって仲良く暮らせるのかって話だよ」

だから、と男は言い続けた。

「本当の意味で更なる力を求め悪に鞍替えした糞兄が本気で俺に殺しかかって来た時は、兄弟殺しの血と罪を犯した。一切の後悔や反省はしなかったし感じなかったから、糞兄に対してはそんな程度の存在だったのだと知った時は失笑ものだったね」

だから、と男は尋ねた。

「他の家族の才能を奪ってしまっても、俺と違ってアルフィアは愛してた?そこら辺を知りたい」

「……」

答えは沈黙で返した。が、一誠はアルフィアの返答に追求せず足に力を入れた瞬間に飛び込んだ。

懐に入り込んできた男の踏み込みが気付かず、L v. の差とは一体

何だと思いながら体術を駆使する相手の拳や足をいなしていく。

「福音」<sup>ゴスベル</sup>

射程距離が関係ない魔法を口にして発動する。不可視の魔法攻撃故に回避することは不可能に近い。だがしかし、一誠は魔法名を口にする際の口唇の動きを見て一瞬でアルフィアの背後に回り抱え出すとそのままバックドロップ。

「ぐっ!?!」

今まで経験したことが無い技を食らい、一瞬だけ意識が遠のいたが持ち前の精神力ですぐに体勢を立て直して一誠を見やるや否や、巨大な光の塊が目と鼻先まで迫っていた。

零距离——防げん——!

全身が凄まじい衝撃に襲われ後方へ吹っ飛ぶ。決河の勢いで空を駆ける身体が今度は真上に吹き飛ばされた。何が起きたと疑問と警戒するもいつの間にか自分の目の前に先回りしていた一誠が、上から足を伸ばした状態でアルフィアの腹部に叩きつけた。

「——っ!!!」

そのまま地上に落ちて地面にクレーターを作るほどの力と衝撃がアルフィアにも伝わる。しかしそれだけでなく、上空から極太で極光の白光が槍のように落ちてきて二人丸ごと呑み込むように地上を突き刺した。

「というわけで、勝ってやったぜ」

「.....」

一方的ではなくとも、アルフィアが誰かに負ける想像が出来なかったザルドは今でも信じられないでいた。アルフィア自身も殆んど自分の魔法が通用しなかったことに対する衝撃がまだ抜けきっていなかった。

「お前、本当に何者なんだ.....?あのアルフィアの魔法を食らってもピンピンしているとは」

「アルフィア並みの魔法の威力を放つ魔法使いが元の世界にいるから。他にも理由はあるけれどな」

「[ステイタス]を与えられずにか……やはり凄まじいところだが、他にも理由とは？」

自身の『ステータスプレート』を二人に見せびらかし、思考を停止させた。最初は意味が解らず一誠に聞いてしまったのだ

「色々と言いたいことはあるが……この、∞は何だ？初めて見るが」

「無限って意味だよ」

「無限……は？」

固まる二人を置いて先にトレーニングルームを後にする。半々に分かれた黒と白の道化のような仮面を被る、黒のタキシードを着て白のネクタイをした大柄な者、バニルが見通していたかの如く一誠を迎えに来た。

「我が主よ。もしも蘇らせた者がいるなら我輩が案内してやるがいかかな？」

「道案内できる訳？」

「モチのロンである。しかし、その代わりではあるがお願いがあるのだがよろしいかな？」

「内容によるけど言ってみ」

「最近、ポンコツ店主が退屈しのぎで街中を彷徨っているのだが、その際に道具店を強く興味を持ち出しこの世界でも元の世界に帰るまでの間でいいから店を持ちたいという願望が芽生えている」

そういうことかと納得の面持ちをする反面、不思議そうな反応を示す。

「自由に活動や行動をしてくれてもいいと伝えただが、どうしても直ぐに行動を移さないでいるんだ？」

「我輩が止めているからだ。元の世界ではないため、人の役に立つどころか真逆なモノ、はたまたは一体何を使うモノなのか分からない商品を仕入れてくる。故にこの世界でもポンコツを發揮されては困るのでな」

「自作は？」

「それも含めて言っているのだ」

マジか。とだとしたら目に見えている失敗をさせるつもりはない  
バナルの判断はさほど間違つてはないのか、と思いつながら……。  
「道具店に関しては、アマッドが中心のダンジョンの中で道具店兼出  
張治療院を構えているんだけど。そこで働くつてのはどうだ？」

「ふむ、ダンジョンの中で店を構えるという発想は実に興味深い。法  
外な売買をしている冒険者が築き上げた街があると聞いている」

「後半の辺に関してはバナルの独壇場だと思うけどな？」

「フハハハ！否定はしない。無法地帯の場所は実に好き放題やりたい  
放題とまさに我輩の遊び場であるな。して主よ、その店にポンコツ店  
主も働かせる口添えをしてもよろしいかな？」

「俺からじゃなくてもアマッドに直接言えば軽く了承してくれるはず  
だぞ」

では、そうさせてもらおうとバナルはこの話を打ち切り一誠をある  
場所へと案内する。二人はオラリオの外へと外出した。空飛ぶ絨毯  
を駆使して遙か遠くの場所へと向かう二人がオラリオに戻つて来た  
時——三人が増えていた。

「——メーテリア……?」  
「姉さん、久しぶり」

## 冒険譚60

メイド服を身に包み、鏡の前で身だしなみを整えるシルヴィー・ホワイトが部屋から出ると、彼女を筆頭と同じ制服の姿の女性達が個室から続々と顔を出して出てきた。

ヒューマン、獣人、デミ・ヒューマン 亜人……娼館や奴隷国家から買い取

られ『幽玄の白天城』で新たな人生を過ごしている者達ばかりで、爽やかな朝と共に住まわせてもらっている城や一誠に対する奉仕活動を勤しむ。部屋から出てきた者同士が軽く挨拶をかわしつつ？DKへ向かい城の住人、自分達の朝食を作り始める。

「そういうえば、今日は珍しくあのお方が私達よりもキッチンにいなかったわね」

「偶にそういうときもあるでしょ？ここにいなくても部屋の中で起きているんじゃないかしら」

「起きる頃にはほぼ毎日ある程度済ませてしまうから申し訳ないわ」

「今日みたいにゆっくりしてくれと申し訳なく感じることもないのだけれど」

『早く作ればお前達と話が出来たろう？』なんて言われると言いつらいニヤー」

「多忙な時間の中で私達と話がしたいのは、私達の事を疎かにせず蔑ろにもしたくないからと仰っていましたし、一人の女性として大切にされているのだと実感した時は心が温かくなりましたわ」

「というか、ここに居る殆どが好意的でしょ？これからもあの人の傍に居たいって思うぐらいに」

「何を今更。でなければ他にも与えられた選択肢を選んでこの城に住んでいないでしょ」

「私は見知らぬ土地で約束された衣食住と援助を受けても、一人暮らす不安が嫌だから、という気持ちで心から安心できる場所に身を寄せたいからここに居るのだけれど。彼のことはもちろん嫌いではないわよ」

「それ以前に嫌う理由と要素を探す方が難しくくない？」

「仕事を終わらせれば自由にさせてくれるからね。グータラ生活をさせてくれる一誠様に凄く感謝感謝」

「ふぁ．．．．．一日中寝ても小言も言わない」

「こんな人がそんな生活を送ってるというのに体形が崩れないって不思議よね」

「恨めしい．．．．．体重がほとんど変わらないのは一体なぜっ」

「体重という言葉にあれなんですけど、毎日義務付けられているあの体重計という道具は、私達女性の敵ですよ？喧嘩を売っているんじゃないかって数値を示すのですから」

「嫌でも現実を突き付けるアレに、色々と気を遣っているのにね。お菓子の量だって減らしているのに」

「量を減らしただけではダメなのでは？」

和気藹々とメイド達は話をしながらも調理をする手を止めずに朝食を作り続け、少しして『異世界食堂』の従業員達、アスナやシル達が起きてきて朝食作りの手伝いに加わり――。

『．．．．．』

「．．．．．」

朝から異常事態が発生したのを一同は微妙な顔を浮かべてしまう。

「どういうことなんですか．．．．．？」

「分からない．．．．．部屋に入ったアイズ達も原因が分からないでいる」

「演技、とかじゃないですよ？」

「演技であれば些細な悪戯として済むはずなんだが、な」

何とも言えない面持ちの顔を向け合うアスナとリヴェリアは件の人物に視線を変える。朝食を済ませてから『異世界食堂』の従業員達とメイド達を除いて．．．．．。

「もう一度聞いわね？私達の事、誰だかわからないの？」

「うん」

「ここがどこかもっ？」

「うん」

ヘファイストスが椅子に座って話しかけている者——子供に事情聴取をしているのだが、その子供は獣の耳と尻尾を除けば見知っている童顔の幼い男の子。

「自分の名前は言える？」

「兵藤一誠」

「何歳？」

「5才」

——幼い子供が、一誠が、そう名乗った。

「……どうしましょう？」

「分からない。前回のこともあるからな」

「あー……」

ナアーザが誤って試作した赤子まで退化してしまう道具アイテムで、一週間も一誠は赤子になってしまった事を思い出し、今度は子供バージョンかと思いつつリヴェリアと共に悩む。

「お姉さんは誰？」

「ヘファイストスよ」

「ヘファイストス？僕が知ってるヘファイストスのおじさんと同じ名前だね」

同性同名の神々が一誠の世界にいる話を聞いたが、同性じゃない神々の存在の一人を挙げられてヘファイストスは微妙な気持ちになるも話かけ続けた。

「じゃあ、他に何か覚えていることとかある？」

「うんと……あれ、昨日のことが思い出せない……？」

「今覚えていることとかは？それか知っていることとか言えるなら言ってみようかい」

記憶に障害が？と子供になっている一誠の不調から予測を立てて訊くヘファイストスは更に質問を求めてみる。

「えっと、お父さんとお母さんに兄ちゃんにリーラさん、オーじいちゃんゼウスのお爺ちゃんポセイドンのお爺ちゃんにハーデスのお爺ちゃん、フレイヤお姉ちゃんガネーシャさんとインドラのおじさんとシヴァのお兄さんに——」



「ごめんなさい、もう言わなくていいわ」

異世界の神々の名前を言われることを視野に入れていなかったの  
で、こんな幼い子供の頃から出会っていたとは……そして、自  
分達の事を神として受け入れ難いという理由の一端が分かった気が  
したので制止した。

「いま、さらっと神様の名前を言いましたね」

「ああ、至極当然のようにな」

二人もこれには啞然とせざるを得なかった。そこへフレイヤが興  
味津々に加わった。

「ねえ、私はフレイヤって言うの」

「フレイヤ？フレイヤお姉ちゃんと同じ名前だね」

「そうね。それで、貴方が知るフレイヤと私、どっちが綺麗かしら？」  
あ、実に人が困ることを聞いちゃったよこの女神は、と一誠の返答  
を気にしながら見守る一同に幼い一誠はこう言った。

「うんと、女の人にびしゅう？綺麗な人とか汚いとか関係ない、女の  
人の性格と行動をよく見てから判断しなさいってお母さんが言っ  
たからどっちが綺麗なのかわからないよ？」

「……」

ちよっぴり困ってる様子を見てみたく意地悪な質問をしたつもり  
が、まさかの清い教育による賜物の返事に少々吃驚した表情で言葉を  
失った。

「こ、子供とは思えない返事を……」

「幼い頃からどんな教育をしていたのか、少し分かった気がするな」  
そして同時に、ある事に気が付く。

「本当に子どもに若返ってる？今までの記憶も一緒に？」

「十中八九、そうかもしれないな。しかし、一誠が子供になってる原因が  
未だ分からず仕舞いだ。前回はゾラードの力で何とかなっているの  
だが」

ふと、リヴェリアは脳裏にある事を思い浮かべてその確認の為に自  
分も事情聴取に加わる。

「質問していいか？お前の中にはドラゴンが宿ってはいまいか？」

「……どうして知ってるの？誰にも教えていないのに」

酷く吃驚した風に瞳目した瞳は見開く一誠。この頃には自身が宿っている存在も気づいているのかと、ならば話が早いと促しの言葉を掛ける。

「そのドラゴンと会話はできるか？」

「……ちよつと待ってて、あれ、知らないドラゴンがいっぱいいる？どうして？」

知らないドラゴン？まだであったことが無い頃のドラゴンのことかと思っていれば、小さな手の甲に宝玉が浮かび上がった。

『話は聞いていた。言っておくが今の状態の兵藤一誠は演技でも何でもない。どうやら本当に若返っているようだ。俺達にもその原因はわからぬが』

「魔法の類とかは？」

『それはない。兵藤一誠が何者かに魔法を受けた痕跡は皆無だ。ずっと見ていたから間違いない』

「魔法でもなければどうにか戻すことはできないか？」

『無理だ。この頃の兵藤一誠は……あー、誰か兵藤一誠の耳を押さえてくれ。ここから先の話は聞かせれないのでな』

ドラゴンの要求にへフアイストスが自身の膝の上に一誠を載せて、両手で小さな耳を押さえるように押し付ける。不思議そうに見上げる子供の顔に母性本能が擦られるが、今はそれどころではない。

『押さえたな？話の続きだ。この頃の兵藤一誠はドラゴンに転生してない、つまりは兵藤の一族の同年代の人間に虐げられていた時期だと思う。先ほど、鏡に映る自分の髪と目の色が変わっていることに驚いていたからな。つまりは——』

「ドラゴンに転生する直前までの記憶しかない、と言いたいのか」

『そうだ。故に元の世界とこの世界で過ごした人生の記憶もないだろう』

見過ごすことはできない事実なのか、ドラゴンも協力の姿勢で対話を臨む。

『兎に角だ、ここが異世界であることを悟らせずにこの世界で過ごす

他ない。まだ幼いから元の世界に居る家族と会えない寂しさを抱えてしまうのは致し方ないが、お前達しか頼れるものはいない。極力元の世界のことを語るなよ。俺も手伝ってやる。手始めに兵藤一誠に説明をしてやる』

ヘファイストスが手をどかしてドラゴンが嘘の説明をすることになった。案の定、信じられない不安の色を顔に浮かべどうすればいいのか手の甲の宝玉に尋ねる。

『しばらくはこの城に住むしかない。元の世界に帰るまではお前の周囲にいる者達がお前を助けてくれる』

「そう、なの・・・?」

『不安になるのも無理はないがお前の父親ならこう言うだろう。どんな困難や状況でも楽しめる者こそが勝ちだな』

いや、それは無理があるだろうと誰もが思うことを一誠は悩んだ表情を浮かべながらもコクリと頷いた。

「うん・・・わかった」

え、いいの?と思うぐらい納得する一同に向かってドラゴンが一言。

『言っておくが、兵藤一誠は純粋な子供として育てられていた。もしも悪影響が及ぼす、もしくははこの者に身の危険を晒すようなことをしたら・・・元の世界の兵藤一誠の家族の怒りを買うと知れ。いいな』

「・・・ダンジョンに連れて行くことは可能か?」

『好きにしろ』

ドラゴンの怒りを買うのは絶対に回避したいがために、一誠と交流ある神々も招集した会議を開くことになった。

「前は赤子で今度は身も心も子供って、イツセーはトラブルに好かれとるんかいな」

「子供のイツセーって、見慣れてるから珍しくはないけれどどう違うの?」

「記憶も子供の頃しかなくて、この世界で過ごした記憶がなくなつて

いる状態よ。だから本当の意味で一誠は子供になっちゃっているわ。そうなった原因は不明な状況でね」

「本当の意味で子供になっっているイツセー……見てみたい」「実際、状況はどうなのだ？」

「気を遣うけれどそれほど苦労はしていないみたいよ。というより、子供の彼が可愛いから皆して積極的にお世話をしたがつているわ」

「えっと、私はアスナって言うの。よろしくね？」

「アスナお姉ちゃん？」

「お姉ちゃん……」

「私、アイズだよ」

「アリサ」

「ラトラです」

「えっと、アイズお姉ちゃんとアリサお姉ちゃんとラトラお姉ちゃんだね」

「二「お姉ちゃん……」三」

「私はリヴェリアだ」

「リヴェリア……うーん……」

「どうした？」

「エルフ、だよね？耳が凄く長い人はエルフだってお父さんとお母さんから教えてくれたから」

「ああ、私はエルフだ。しかし、それがどうした？」

「じゃあ、エルフは長生きしてるからおばあちゃん……あ、でも……顔が綺麗だからお姉さん……どっちなの？」

リヴェリアが凍結したように硬直し、子供の質問に非常に答え辛い極まらないでいた。

「……これ、同じエルフのアリシアやフィルヴィスとアウラにも悩むんじゃないかしら」

「嫌なことを言わないでアキ!」

「わ、私達は大丈夫だ」

「え、ええ……まだそこまでの年齢を積み重ねて生きていません」

「あのその言い方だと事実言えど、リヴェリア様に不敬な発言をしているのでは？」

レイラ・ユリーの一語でフィルヴィスとアウラは、はっ!?と失言に気付き恐る恐る王族ハイエルフへ視線を変えた。

「どうしたエルフ。子供の質問に答えられないほど難しいか。己の年齢を忘れていなければ簡単に言えるだろう。世間知らずの年増、癩癩持ちの『おばあちゃん』ならば尚更のこと」

「……黙れよ、アルフィア……!」

「おばあちゃん……?」

「ああ、その通りだ。決してお姉さんではないからな」

「はい、よろしくお願いします。リヴェリアおばあちゃん」

してやったりと風に幼い一誠にリヴェリアを老婆扱いにしたアルフィアだった。

「~~~~~!!!」

あのリヴェリアが感情を剥き出しになってアルフィアを睨みつける様は憤怒しているのが誰の目でも見ても明らかだった。

「リ、リヴェリア様がご乱心に!」

「い、一体どうすれば……!」

「あ、あのリヴェリア様がお怒りを……!」

その場にいるエルフ一同は激しく動揺した。崇拜、尊敬、憧憬の相手の初めて見る怒りの感情にオロオロしてしまい、どう対応をすればいいのか戸惑うしかできないのであった。

「んと、じゃあ……お姉さんも、おばあちゃんなの? 髪の毛が真っ白……あ、灰色——」

純粹な目がアルフィアを見ながら素朴な疑問を投げた一誠の目は彼女の手が掻き消えたのを見た。

ドゴオツ!

ぶつけた疑問に対して返ってきたのは拳であって一誠は反応する暇もなく床に叩きつけられた。

『ちよっ——!?!』

躊躇なく一誠と言えど幼くなってしまった子供に対する無慈悲な

暴力に全員が全員、目を限界まで見開いて思考が停止しかけるほど吃驚、驚愕、愕然した。レイラは直ぐに抱き起すと目を回して気絶している子供を見てアルフィアに叱咤した。

「ア、アルフィアさん！いくらなんでもそれは駄目です！」

「私は相手が童でも容赦はしないのでな」

「ええっ!？」

「アルフィア、お前の不治の病を治した者にそれは駄目だろ。恩を仇で返しているものだぞ。しかも今は記憶が逆行してただの幼い子供としている」

「姉さん、最低です。この子に謝って下さい」

「……」

ザルドよりもアルフィアの身内、妹……エーテリアの言葉は無視できないのか、少しばつ悪そうにして沈黙を貫くがそれがいけなかった。ずいっと距離を縮めるメーテリアが笑っていない笑みを浮かべながら。

「私を蘇らせてこれから私の子供にも会わしてくれる約束をしてくれた恩人を、悪意で言ったわけでもないのに自分が嫌だからと暴力で黙らせるなんて、流石は「ヘラ・ファミリア」の眷族の名に恥じない行動ですね。非力な私にはできないので尊敬に値しますよ」

般若だ、あそこに般若がいる！怒髪天が衝く如く怒りを見せるメーテリアは、「ヘラ・ファミリア」の眷族に恥ずかしくない怒りで【静寂】の二つ名を持つ女性を押し黙らせているではないか。

「姉さん、今も静寂が好きですか？」

「……それがどうかしたか」

「べつにどうとでもありません。静寂を得られる方法をして楽しんでもらおうかと思っただけです」

それが一体何なのか誰もわからず首を捻った。何をするつもりなのかと二人のやり取りを見守った結果。

「……」↑正座

LDKの隅っこで穴二つ開けられた大きめのオリハルコン製の箱の中に隠された状態で正座をさせられたアルフィアがいた。その上に花の花瓶が置かれている状態だ。

「思う存分に静寂を堪能してくださいね。そこでずっとです」  
「……メーテリア」

「誰が喋って良いと言いました？心の底から反省するまで黙っていないさい」

有無を言わず自分の姉にお仕置きの名ばかりとオリハルコン製の箱の中に閉じ込めるメーテリアの所業に、周囲は心からドン引きする。

「アルフィアはともかく、あいつの妹も「ヘラ・ファミリア」の眷族に恥じない事をするとはな」

「ザルドさん、知らなかったのですか？」

「怒るところは見たことが無いからな。だが、こうしてあんなところを見せられるとやはり姉妹なのだなど改めて実感する。……そもそもあのオリハルコン製の箱のようなものは何の用途の為に作られていた？」

何か、お仕置き用の物がありますか？とメーテリアからの要望で心当たりがあると主張した椿がガレスの力を借りて工房から持って来たオリハルコン製の箱だった。

「うむ、イツセーはお仕置き用の為だと言っておったぞ。確か……魔法で閉じ込めた者を心から後悔させるような魔法を施してあるとか。それは何なのか閉じ込められた者が特に嫌なお仕置きをするとかで……」

教えられたことを思い出しながら吐露する椿の話の途中、直ぐにお仕置き箱の効果が発揮した。お仕置き箱から謎の男性の声が聞こえだしたのだ。

『アルフィアちゃん……』

「この声は……ゼウスだど？」

『アルフィアちゃん……相変わらず柔らかかそうなモノをお持ちで、儂が支えてやるぞお〜い』

「何だこれは、何故変態爺の声が聞こえる。ザルド、あの神がそこにいるのか」

「いや、いない。本当だぞ」

『フオオオオオオオオオオッ！アルフィアちゃんのおっぱいいいいいい  
いいいん！』

【福音】——魔法が発動しない？」

『スーハースーハースーハー……アルフィアちゃんの下着の匂  
いはラベンダーじゃー』

【福音】、【福音】……何故発動しない……っ」

『しかも、大人の黒色じゃああああああつ！うっほおおおお  
おっ！興奮するううううう！』

【福音】、【福音】っ、【福音】！」

『見よ！アルフィアちゃんの下着を頭に被せれば儂は無敵になあああ  
あるー！』

「っ！おい、本当はそこにいるのではないのか。何かに触れられる感  
触までするぞ」

「本当にいない。いや、本当だ」

「ふぎけるなっ。でなければこんな気持ち悪い嫌悪感と雑音など感じ  
ないぞっ」

『アルフィアちゃん萌えく！アルフィアちゃん儂の下の世話をしてく  
れんかのおくアルフィアちゃんのおっぱいにターッチ！』

「止めろ、触れるな！どこに手を突っ込んでいる変態爺！」

箱の中で暴れているのか激しく叩く音が聞こえてくる。しかりオ  
リハルコン製だ。びくともしないし第一級冒険者の力でも簡単に壊  
れない強度でアルフィアを閉じ込め続ける。

『アルフィアちゃん、アルフィアちゃん、アルフィアちゃん大好き  
く超ラブリく』

「五月蠅い、黙れ！——っ!？」

「……どうした？」

「あの変態丸出しの爺の顔が蛆虫のように湧いてきているぞ！何なの  
だこの箱はっ!？」



うわ、それは嫌だなー。ゼウスを知る神と眷族は自然と顔を顰めた。

「~~~~っ！~~~~っ！！~~~~っ！！」

それからというもの、ゼウスの変態発言やアルフィアの声は動揺と絶叫、怒りの声が聞こえてくるが次第にそれも静まり返りつつあって、やがて最後は静寂になった。そして……。

「……ごめんなさい、申し訳なかった。……メーテリア、私が悪かった。この箱からどうか、どうか出してくれ……。もう堪え切れない……。あの子に謝罪をしたい。どうか、どうか……。」「もう二度と手を出しません？」

「おばさんと言われてもしない。だから、だから……」

切に懇願するアルフィアの泣きそうな声が箱から洩れる。ザルドからすれば面倒で、神経質で、暴君のごとくのアルフィアの口から聞くことになるとは思わなかった数々の発言に心から驚いた。

「……イツセーの魔道具、マジックアイテム恐るべし」

「あのヘラの眷族ですら堪え切れなかったから物だ。これがもし神に使われたとしたらどんな影響が出るのか想像が出来ないね」

「恐ろしいのお……」

フィン、リヴェリア、ガレスが各々と感想を述べながらお仕置き箱から解放され、心なしが覇気がなく疲れ切った表情をしているアルフィアを目にして恐れ戦いた。

「ごちである」

一人、とても満足そうにしていたが誰一人も気づかれはしなかったのは別の話であった。

「ふしゃーっー」

「……」

アルフィアに殴られたことで完璧に敵意、自分を苛める大人だと認識を抱いてしまい近づこうと、話しかけようとすれば、威嚇をして避けられてしまうようになってしまった、アルフィアのお仕置きから数分後のこと。LDKの隅で設けた畳の上で目を覚ました一誠が皆を

見るなり威嚇の声を上げるようになったのだ。

「ふしやーっ！しゃーっ！」

「ダメだ、完璧に警戒されてる」

「……私達にまで警戒されてしまいます」

どうしたものか……。好感度が0な相手になっちゃってしまい、どうすれば機嫌を直してもらえるか苦難に強いられることになってしまった一同は苦悩の極致に至った。女性人達に囲まれ逃げ道を封鎖されている状況故か。

「ふしやーっ！」

警戒心剥き出しにする子供にこれからどうする？どうしよう？と更なら悩みに悩まされた。

「遅れてしまつてすまない、俺がガネーシャだ！」

LDKに騒々しさと共に名を名乗りながら登場するガネーシャ。シャクティとアーデイも追従してアスナ達と挨拶を交わす。

「話は聞いたが、イツセーはまた面倒なことに巻き込まれたのか」

「そうです。今は……」

「ふしやー！」

「こんな感じで警戒されています」

どうしたらそうなるのか事情を知らないシャクティとアーデイは、距離を置いているアスナ達より前に出て近づいた。

「やっほー、イツセー君」

「……」

「本当に警戒しているんだねー」

警戒心剥き出しの子供を見てこれからどうする？どうしよう？と更なら悩みに悩まされた。

## 冒険譚 61

その時。バチバチと空間に放電が走り出す。全員、突然の異常現象に警戒して距離を取り女神を守らんと臨戦態勢の構えをして渦巻く空間を睨みつける。何が起きるか、何が出てくるかわからないまままみ続ける空間は徐々に口が開くように楕円形に広がり――。

「やった、久しぶりに成功よー!」

「よくやった、一香ー!」

空間の穴の向こう側から、誰もが信じられないと言った表情で硬直した。何故なら、元の世界に帰ってしまったはずの一誠の両親が異なる世界と世界の間の次元を繋げては、異世界にやってくるという前代未聞の偉業を成し遂げたのだから。更には二人の背後には大勢の男女が控えていた。

「おつ、よ、皆さん久しぶり!今度は息子の家族も連れて遊びに来たぜ!」

「試験的な段階だけど、これが確実にともなれば帰りを待つまでもなく行き来できるわね!」

朗らかに挨拶を交わしてくる黒髪黒目の中年の男性とウェーブが掛かった亜麻色の髪の女性二人と対極的に言葉が出ないアスナ達は、どう言い返せばいいか困っているところ。

「あ、お父さんとお母さん!」

「おー、一誠!・・・ん?一誠?」

「あら?子供の姿になってるの?懐かしいわね!」

「助けて、この人達に苛められる!」

「・・・・・・?」

そして、今の一誠の言動に疑問符を浮かべこの世界の者達に尋ねるのは時間の問題だった。

「どういうこと?」

場所を移してLDKに戻り、かくかくしかじか・・・今までの経緯を説明し、自分達も困惑しているという旨も伝え一誠の両親達も



「一誠ちやああああああああんっ！」

「一誠殿おおおおおおおおおっ！」

「ひっ！誰えっ!？」

「プライミッツ・マードー！」

「お父さん！」

「サンダーキーツクッ！」

一誠に理性を失って襲い掛かる白髪の美しい男性。その真上から白い獣が強襲して床に叩きつけながら抑え込む。筋骨隆々の男は小豆色の長髪の女性が振るう椅子に張り倒され、灰色で細長の男性はメイド服を着込んだ女性が雷を纏う足蹴りで鎮圧。一連の様子に神々と冒険者は呆然と化した。

「油断も隙もないわね本当に」

「姫！せっかくの感動の再会を邪魔しないで欲しいのだが!？」

「普通に話しかけるだけならしていないわよ。貴方、どさくさに紛れて血を吸おうとしたでしょ。それに思いつきり怖がられているから止めに入るのは当然でしょう」

「やはりこのバカだけを置いていくべきだったか」

黒い長髪に赤い瞳の身体がユエと同じぐらい小さい少女と黒い鎧を身に包む黒髪と黒目の男性が呆れ返った反応を窺わせる。

「……私達の事覚えていないみたいだけれどそれでも言わせてもらうわ。久しぶりね」

「だ、誰……?」

「私はアルトルージュ・ブリュンスタッド。彼はリイゾール・シユトラウト。この子はプライミッツ・マードー。で、これはフィナールヴラド・スヴェルテン。私達は吸血鬼よ」

「姫、私の扱いが少々雑なのは」

等と一誠を中心に騒々しい程の賑やかさの最中、十数人以上もいる女性達は一誠を囲い抱きしめたり頭を撫でたり再会の喜びも噛みしめている。

「小っちゃい頃のイツセイ君なんてすんごく懐かしい！」

「そうだね。昔を思い出すよ」

「にしても、一体どんな生活したらこんな風になったんだろうな」  
「いいではないか。とても弄り甲斐があるというものだ」

「可愛い」

「ふふふ……」

もみくちやされる一誠の姿は多くの女性達の身体で隠され見えなくなっている。永遠に終わらないと思っていた再会の光景は一番が手を叩き声を発したことで終わった。

「皆の気持ちを尊重したいところだけど、この世界の一誠の家族にも向き合わないと駄目よ？」ということで誠、お願いね？」

「任せておけ。んじゃあ、まずはお互い自己紹介！一誠のことに関する話も交えれば会話も弾むだろうからな！」

「ならば俺から名乗ろう」

象頭の仮面をつけている褐色肌で筋骨隆々の男神がそう言っ

て――変な姿勢ポーズをしながら名乗る。

「俺が、『ガネーシャ・ファミリア』の主神、ガネーシャだ！よろしくな、異世界の子供達よ！いつもイツセーの料理を食べているゾウ！」  
「ほー、いきなり神が名乗り出てくるってんならこつちも神から名乗るべきだろうな」

と言っ、浴衣姿の男性こと椅子で殴られた彼が前に出て己の名を名乗った。

「俺は天使を束ねる神の補佐を務める神王ユーストマってんだ。そんな俺の可愛い娘のリシアンスのシアだ」

「リシアンスです。どうぞ、気軽にシアって呼んでくださいっす！」

「神ちゃんの次は当然私だね。私は冥界に存在する悪魔を束ねる五大魔王の一人、フォーベシィだ。そして私の娘であるネリネちゃんとかリスちゃんだ」

「ネリネです。よろしくお願いします」

「妹のリコリスです。皆さん、よろしくねー」

青い長髪に赤い瞳。双子で姉妹故、名を教えてもらえなければ間違ってしまうほぼ顔が同じ容姿である。

「神と魔王……っ！」

異世界の神魔の存在を前に海童は感動で身体を打ち震わせる。アスナも魔王という存在にとても興味津々でフォーベシイを見つめる。「あの、仲がいいんですね？」

「おうとも！」

「私と神ちゃんは親友だからね！」

肩を組合い仲の良さをアピールする二人を見て信じられないと「神と魔王が親友？俺の知っているファンタジー小説にそんな関係の話はなかったのに・・・！」等と呟く海童がいた。

「そして一誠殿の義父になる予定だ！」

「そして一誠ちゃんの義父になる予定なのさ」

『・・・義父？』

自然とそうなる要因である三人の娘達に視線を送ると、照れた顔で微笑んでいた。

「私達の世界は一夫多妻制つすからね」

「一誠様を慕う女性は多いですけど」

「うんうん、皆仲良しだし結婚しても何も問題もないもんねー」

・・・皆？目の前にいる女性達全員が・・・一誠と結婚を望んでいる？

「・・・」

異世界人達が自分達の恋敵だと知るや否や、アイズとアリサにラトラが揃って前に出た。

「イツセーは渡さない！」

「負けません！」

「せやせや、ウチとソシエと春姫が旦那様と仮とはいえ結婚しとるんや。負けらへんわ！」

「そうだそうだー！イツセーの子供を産む予定だから邪魔しないでよー！」

「ユ、ユエルちゃん・・・」

「あ、あの、仲良くした方が・・・」

『・・・結婚？』

聞捨てにならない、どういふことなのかと説明の要求の気配を醸し

出す異世界の女性達。彼女達の心情を読み取った風にアマテラス達が口を開いた。

「私アマテラスと彼女イザナミに彼イザナギの国と同盟を結んでいませ」

「イツセーは滅ぼされかけた一国を救い、私とイザナミの二国の戦争を止め、三国の同盟まで結ばせた極東の英雄故に」

「極東の更なる繁栄の為に貴族となったイツセーには、仮とはいえ極東の民を納得させるために結婚をさせることにした」

「そしていずれば、私達もイツセーと結婚を望んでいる」

女神も一誠を慕う事実<sup>に</sup>互いが互いを恋敵として認知した瞬間だった。

「むむむっ、イツセー君と小さい頃からの幼馴染としては負けられない展開ね！」

「私は小さい頃からイツセーの弟子！」

「ほう、一誠が育成をしているのか。さぞかし強いのだろうか？」

「愛する気持ちも負けない！」

「ははは、面白いなあー。その喧嘩、お姉さんが買ってもいいぞ？」

濡れ羽色の長髪に赤い瞳、黒い着物に上掛けを羽織っている女性が戦意の光を双眸に孕ませた途端。アルガナ、バーチエ、ベルナス、エルネアが彼女の戦意に感じ取り呼応するかのよう<sup>に</sup>、敵意と殺気を解き放った。

「おっ？なんだ、やるか？」

一誠と関わりある者達だから弱い奴じゃないだろうと、そんな感想で女戦士<sup>アマゾンネス</sup>に対して挑発をする。見るからに強敵と見定めたアルガナ達は、今にも飛び掛からんとする姿勢だったが――。

「はいはい、百代ちゃん。勝負事は後にしなさい。幼い息子の前ではしたくないわよ？今のこの子は一番純粋無垢だった頃なのだから、悪影響を与える言動は控えてちょうだい」

「・・・すみません、一香さん」

一香の微笑む顔に直ぐ謝罪する挑発した百代。長い白髭を生やし杖を持つ袴で身に包む老人が溜息つく。





も出ないでいた。

「てな感じでだ。百代ちゃん、どうだ？するか？こいつみたいな怨霊を宿せば、身体に負荷が掛かって精神的にも肉体的にも鍛えられるぜ。解放したら宿す前の己の数倍は強くなるからオススメだ。ま、精神力が弱いと魂を喰われて肉体を乗っ取られたしまいに異形と化するけどな」

「御遠慮させてくださいー！」

土下座してまで全力で否定する彼女に誰もが心中で慰めた。

「そうか。残念だな。……一誠にも試しに怨霊を宿しているんだがな。今のところ、大人しくしているみたいだし」

「……え？」

「え？」

聞捨てにならないことを言う誠にはほぼ全員の視線が一人の男に向けたのだった。彼の言葉に同意をするのは――。

『ああ、いるな。俺達を恐れて隅っこで縮こまっているが』

一誠の身体に浮かぶ宝玉から発するドラゴンの声だった。おいおいと苦笑いする誠に呆れるドラゴン。

『己の子に何てことをしているのだお前は』

「強い子に育てるためだ。何、幼い頃から宿していたが魂を喰らわれないよう一香の魔法で保護していたから怨霊も手も足も出せないし、牙もかけれもできなかったさ」

だからと言って、非常識じゃないかと思うも誰一人異を唱えることはできなかった。今更責めても意味がないと悟ったからだ。

「さてと、それじゃあせつかくの異世界だ。帰るまで思い思いに堪能しようじゃないか」

はーい！と返事をする異世界から来た一誠の家族達。オラリオの案内を求められるアスナ達はこの機に交流を交わすのだった。

「お前達何者だ！……は——！おい聞いて——！」

ギルド本部の真下に築き上げられた地下神殿に四炬の松明に照らされてる『祈祷の間』に続く通路を通る二人の男女が、騒がしく何か

言いながら肥え太ったエルフの静止を振り切っては石造りの玉座に腰を落としている老神に向かつて挨拶の言葉を送ったのだった。

「ウラノス、久しぶり。また会いに来たぞ」

「やはりお前達か。元の世界とこの世界を行き来できるようになったのか」

「大昔の事を思い出してね。貴方も相変わらず座りっぱなしのようで体は大丈夫なの?」

「気にすることでもない」

朗らかに言葉を交わす両者に蚊帳の外へ立たされるギルド長ロイマンであったが、ウラノスに問わずにはいられなかった。

「ウラノス様。この者達とはどういう・・・」

「かつて、古代の時からオラリオの創設に協力してくれた異世界から来訪した私の眷族だ。今では私の恩恵を刻まれたまま元の世界に帰って行ったが故に半脱退状態にいる。そして、『異世界食堂』の店主の実際の両親だ」

「な・・・!」

「アスナ、久しぶりだね!」

「うん、久しぶりユウキ。まさか、こんな形でまた会えるなんて驚いたわ」

「それはボクも同じだよ。一香さんが先輩がいる世界に行ける魔法が出来たって話を聞いたときは驚いたもん。実際に異世界へ繋がれたらやっぱり一香さんは世界一の魔法使いだよ」

再会の喜びとして抱擁を交わす二人は笑顔を浮かべ見つめ合う。一誠の世界に行ってユウキと会う予定が驚きの展開で叶ったアスナは、この瞬間の時間を優先することにした。後のことは後で考えようと。

「ねえ、アスナ。この世界のこと教えてくれない?」

「いいよ。ユウキに会わせたい人達もいるから」

絶対驚くだろうな、と頭の中で友人達の顔を浮かべながら街中を歩いていく。

猫の耳と二又の尾を生やす異世界からやってきた獣人と思しき長い黒髪に金色の瞳、黒い着物で身に包む女性と長い白髪に金色の瞳で白い着物を着ている女性に興味を持ったアナキティ。そしてクロエも気になつて話しかけた。

「異世界にも猫 キャットピープル 人がいるニヤ?」

「猫 キャットピープル 人? 何それ?」

「獣人の一種のことよ。ほら、同じ猫の耳と尻尾を生やしてるでしょ」  
自分の頭に生えている猫の耳を指摘しながら動かすアナキティを見て、二人組の女性は把握した。

「この世界ではそういう種族のことをそんな呼称で呼ばれてるのね。でも、私達は違うわよ」

「私達の世界では、私達は妖怪と言う人間とは異なる存在で猫又という種族です。更に猫又の中でも希少な猫?と呼ばれている存在です」  
「ま、人間じゃない種族だと認識してくれればいいわ。ところでさ、二人はイツセーとどういう関係?」

と自分達が興味を持ったように二人も興味を持って訪ねて来た。肉体関係を持つている者——等と言えず、仲間や雇われ店員だと答えた。

リヴェリア、アリシア、レイラ、フィルヴィス、アウラは思わず一部の局部を見つめてしまった。理由は異世界にもいる三人の内の二人のエルフが、同じエルフとは到底思えない女神にも劣らない完璧な形状の豊満な双丘を持っていたからだ。

「ま、負けました……」

「……(己の身体と比べて絶望)」

「エルフ、ですよね……?」

「……」

スタイル抜群すぎるのに女神と紛う美貌を誇る異世界のエルフの女性達に絶望感を抱く。一誠の家族にこんなエルフがいるとは聞いていない!と思うも、周囲から王族 ハイエルフ としての美貌を称賛され続けた

リヴェリアすら美しいと認めるほどだ。そんな五人の視線の意図を察した二人は恥ずかし気に困った顔をした。

「まったく、異世界でもこんな反応をさせるなんてやっぱり二人の胸はパーフェクトバストなのね」

綺麗な金の長髪を腰まで流すが二人と比べて豊満ではない胸の膨らみを持つもう一人のエルフの女性がやや呆れ気味でそう口にしたのだった。

「ねえ貴女……イツセーの血を飲んでる？彼の血の残り香の臭いがするわ」

向こうから声を掛けられたユエ。確か名前はアルトルージュ・ブリュンスタッドと言う異世界の吸血鬼。

「私もこの世界とは違う別の世界の吸血鬼。イツセーの血は熟成した濃厚な味でとても美味だから」

「別の世界の吸血鬼……興味あるわね。同じ吸血鬼として色々知りたいわ」

「ん、私も興味ある」

「ならお話をしましょうか。もう一人同じ吸血鬼の子もいるからその子も一緒にね？」

砂色の色合いが強いブロンドを一本に束ねた女性に目を向けながら言うアルトルージュ。彼女も吸血鬼なのかと察するユエはその女性とも交えて言葉を交わす。

「人間、神、魔王、天使、悪魔、エルフ、妖怪、吸血鬼……異世界ってこの世界に負けないほどファンタジーか」

聞き耳を立てて異世界からやってきた者達を観察する海童は、感慨深く現状に身を委ねて成り行きを見守っていて眺めていた。全員が美女や美男の容姿であり一誠を慕っていると思えば凄いなーと見回していれば。背筋にゾクツと悪寒が走った。

「……………」

「……………」

同じ銀髪で同じ美を司る女神——。口を閉ざして相手を見つめる彼女達のその眼差しは——品定めをしているものだった。ロキ達も相手は誰なのか言わずともわかる気配と美貌から悟り——このあと起こるだろう展開にワクワクする反面、不安を覚えてしまう。

「イツセー、おいで？」

「フレイヤおねーちゃんなーに？」

リーラにお世話されていた一誠を呼びつけ、トコトコと純粹無垢に足元まで近づくと子供を抱きかかえだす。それは相手に自分達の中を見せつけるように銀髪の女神は……小さな子供の唇に己の唇を押し付けるように重ねたのだった。

『あーっ!?!』